ウランティア・ブック

URANTIA
FOUNDATION

®ウランティア財団の登録商標

ウランティア財団
イリノイ州シカゴ

本書のセクション

論文の題名

(UF-JPN-001-2018-1)

ウランティア・ブック

URANTIA
FOUNDATION

®ウランティア財団の登録商標

ウランティア財団
イリノイ州シカゴ

本書のセクション

論文の題名

文章識別番号：UF-JPN-001-2018-1

Urantia Foundation
533 W. Diversey Parkway
Chicago, Il 60614
電話番号：+1-773-525-3319
ウェブサイト：https://www.urantia.org/
メール：urantia@urantia.org

ウランティア・ブックは、2018年にウランティア財団が最初に出版しました。
本書のデザインと表紙：© 2015 Urantia Foundation. All rights reserved.
ウランティア・ブックの翻訳版は以下の言語で提供されています。
ブルガリア語：*Книгата Уранция*
デンマーク語：*Urantia Bogen*
オランダ語：*Het Urantia Boek*
エストニア語：*Urantia raamat*
フィンランド語：*Urantia-kirja*
フランス語：*Le Livre d'Urantia*
ドイツ語：*Das Urantia Buch*
ハンガリー語：*Az Urantia könyv*
イタリア語：*Il Libro di Urantia*
韓国語：유란시아 서
リトアニア語：*Urantijos Knyga*
ポーランド語：*Księga Urantii*
ポルトガル語：*O Livro de Urântia*
ルーマニア語：*Cartea Urantia*
ロシア語：*Книга Уранции*
スペイン語：*El libro de Urantia*
スウェーデン語：*Urantiaboken*

無料オンラインコース：https://new.ubis.urantia.org
ウランティア・ブックの研究グループを探す：https://www.urantiastudygroup.org/

Urantia(ウランティア)と ◎ は、ウランティア財団の商標、サービスマーク、および会員マークです

ウランティア・ブック

序文

0:0.1 (1.1) それがあなたの世界の名前であるユランチアの人間の心には　神、神性、および神格のような用語の意味に関連して多大の混乱がある。人間は、これらの数多くの名称により明示される神性人格の関係性においてより混乱し、また確信がない。かくも多くの思考上の混乱に関わるこの概念上の貧困さゆえに、私は、オーヴォントンの真理の啓示者部隊がユランチアの英語への翻訳を認可されたそれらの論文で使用されるかもしれないように、特定の言語記号に置かれるべき意味の説明においてこの導入声明文を定式化するよう指示を受けた。

0:0.2 (1.2) 宇宙についての意識を拡大し、崇高な認識を強化する我々の努力において拡大された概念と高度の真理を提示することは、領域の限定的言語の使用において制約される我々とり非常に難しい。しかし、我々への命令は、英語の言語記号の使用により我々の意味を伝えるためのあらゆる努力をするようにと我々に諭している。我々は、そのような新概念が部分的に伝えたり、あるい

は、多少の意味の歪曲を伝ようとも、英語での何らの専門用語も見いだせない場合に限り、新用語を紹介するように指示されている。

0:0.3 (1.3) これらの論文を精読するかもしれないすべての人間にとっての容易な理解と混乱防止を願って、我々は、神格、宇宙現実の物質、意味、価値に関わるある特定の関連概念への言及の際に採用されるはずの数多くの英単語に結びつけられるべき意味の概略をこの冒頭論述で示すことが賢明であると考える。

0:0.4 (1.4) しかし、用語の定義と限界を有するこの序文の作成にあたっては、その後の提示の際のこれらの用語の使用法を予測する必要がある。したがって、この序文は、それ自体で完結された論述ではない。それは、この目的のためにユランチアに送られたオーヴォントンの一委員会により作成されてきた神格と宇宙の中の宇宙にかかわる付属的論文を読むであろう人々を補佐するために考案された単なる最終指針にすぎない。

0:0.5 (1.5) あなたの世界、すなわちユランチアは、ネバドンの地方宇宙を包括する数多くの類似する生息惑星の1つ

である.類似の創造と同様にこの宇宙は、その首都ユヴァーサから我々の委員会がくるオーヴォントンの超宇宙を構成しているのである。オーヴォントンは、神性の完全性を有する決して始まることのない、決して終わることのない創造物を旋回する時間と空間の進化の７超宇宙の１つである—ハヴォーナの中央宇宙。この永遠かつ中央の宇宙の中心には、楽園の静止した小島、つまり無限の地理上の中心と永遠の神の居住域がある。

0:0.6 (1.6) 我々は、中央の、神性の宇宙と結びついて進化する７超宇宙を通常壮大な宇宙と呼ぶ。これらは、現在はまとまった居住の創造物である。それらはすべてが、主たる宇宙の一部であり、また、無生息だが流動している外空間の宇宙を取り巻いている。

I. 神格と神性

0:1.1 (2.1) 宇宙の中の宇宙は、宇宙の現実、心の意味、および精霊価値のさまざまの段階における神格活動の現象を提示する。だが、これらの奉仕のすべて—個人的であるか、またはそうでない—は、神らしく調整される。

0:1.2 (2.2) 神格は神として人格化可能であり、前人格と超人格は、多くの点で人には完全に分かりやすいわけではない。神格は、現実のすべての超物質段階の統一の質—実際の、または潜在の—により特徴づけられる。そして、この統一の質は、創造物には神性を神格として理解されるのが最善である。

0:1.3 (2.3) 神格は、人格、前人格、超人格段階で機能する。総合的神格は、次の7段階において機能を果たす。

0:1.4 (2.4) 1. 静的—自己充足的で自立自存の神格。

0:1.5 (2.5) 2. 潜在的—自己動機づけで、自己目的をもつ神格。

0:1.6 (2.6) 3. 結合的—自己的人格化と神々しく兄弟のような神格。

0:1.7 (2.7) 4. 創造的—自己分配的で神々しく啓示された神格。

0:1.8 (2.8) 5. 進化的—自己発展的、かつ創造物に結びつける神格。

0:1.9 (2.9) 6. 崇高的—自己経験的、かつ被創造物-創造者統一の神格。時として神格の崇高者に指定される壮大な宇宙の時空の統括管理者として創造物に結びつける最初の段階において機能する神格。

0:1.10 (2.10) 7. 究極的—自己映出で時空超越の神格。神格は、全能、全知、遍在である。主たる宇宙の有能な総括管理者と準絶対支持者として神性の統一表現の第2段階において機能する神格。この準絶対の主たる宇宙における機能は、壮大な宇宙への神格の聖職活動と比較し、宇宙の総括管理と高度の生計に等しく、時として神格の究極性と呼ばれる。

0:1.11 (2.11) 現実の有限段階は、被創造物の生命と時空の制限により特徴づけられる。有限の現実には、結末がないかもしれないが、始まりは常にある。—それらは創造される。崇高性の神格段階は、有限生存との関連における機能として発想されるかもしれない。

0:1.12 (2.12) 現実の準絶対段階は、始まり、あるいは終わりのない事物と生物とにより、そして、時間と空間の超越により特徴づけられる。準絶対者は創造されない。それ

らは結果として生じる。—それらは単純に存在する。究極性の神格段階は、準絶対の現実と関連する機能を内包している。主たる宇宙のいかなる部分であろうとも、時間と空間を超えようとも、そのような準絶対の現象は、神格の究極性の一行為なのである。

0:1.13 (2.13) 絶対段階には、始まりがなく、終わりがなく、時間がなく、また空間がない。楽園には、時間と空間は存在しない。楽園の時空状態は絶対である。この段階は、実存的には楽園神格による三位一体到達であるが、神格の統一的表現のこの第3段階は、経験的に完全に統一されるというわけではない。神格の絶対段階が、いつでも、どこでも、いかように機能しようとも、楽園-絶対の価値と意味は、明白なのである。

0:1.14 (3.1) 神格は, 永遠なる息子のように、実存的であるかもしれない。崇高なるもののように、経験的であるかもしれない。七重の神のように、結合的であるかもしれない。楽園三位一体のように、不分割であるかもしれない。

0:1.15 (3.2) 神格は、神性であるものすべての源である。神格は、特徴的には不変的に神性であるのだが、神性であるものすべてが、神格と連携し合い、神格との何らかの統一局面— 精霊的、心的、人格的、 —に達しようとする傾向はあるものの、必ずしも神格であるというわけではない。

0:1.16 (3.3) 神性とは、独特で、統一的、調整的神格の特質である。

0:1.17 (3.4) 神性とは、創造物には真、美、善として理解できる。人格においては、愛、慈悲、聖職活動として関連づけられる。非個人的段階においては、正義、力、主権として明らかにされる。

0:1.18 (3.5) 神性は、楽園の完全性の実存的、かつ、創造者の段階でそうでように、完全— 完璧で —であるかもしれない。それは、時空の進化の経験的、かつ、創造物段階でそうであるように不完全であるかもしれない。あるいは、ハヴォーナのある段階の実存的-経験的な関係においてそうであるように、完全でも不完全でもなく、相対的であるかもしれない。

0:1.19 (3.6) 関連性のすべての局面と型における完全性について想像を試みるとき、我々は想像し得る7つの型に遭遇する。

0:1.20 (3.7) 1. すべての局面における絶対的完全性。

0:1.21 (3.8) 2. いくつかの局面における絶対的完全性と他のすべての局面における相対的完全性。

0:1.22 (3.9) 3. 様々な関係における絶対的、相対的で、そして不完全な局面。

0:1.23 (3.10) 4. いくつかの点における絶対的完全性、すべての他の点における不完全性。

0:1.24 (3.11) 5. いかなる特質においても絶対的完全性ではなく、すべての顕現において相対的完全性。

0:1.25 (3.12) 6. いかなる局面においても絶対的完全性ではなく、いくつかの局面においては相対的、他の局面においては不完全。

0:1.26 (3.13) 7. いかなる属性においても絶対完全性ではなく、すべてにおいて不完全性。

II. 神

0:2.1 (3.14) 進化する必滅の創造物は、神の有限的概念を象徴したいという抵抗しがたい衝動を経験する。人の道徳上の義務と精霊的理想主義の意識は、象徴化が困難である価値の段階 — 経験的現実 — を表す。

0:2.2 (3.15) 宇宙的意識は、第一原因、つまり一つの、かつ、唯一の因由されない現実の認識を含意する。神、すなわち宇宙なる父は、準無限の価値と相対的な神性表現の神格-人格の 3 段階において機能する。

0:2.3 (3.16) 1. 前人格的—たとえば思考調整者などの父の断片の聖職活動におけるように。

0:2.4 (3.17) 2. 人格的—たとえば創造され、繁殖された存在体の進化的経験におけるように。

0:2.5 (3.18) 3. 超人格的—たとえばある準絶対と関連する存在体が徐々に存在に至るように。

0:2.6 (3.19) 神とは、神格のすべての人格化を示す言語記号である。用語は、神格機能のそれぞれの人格段階における異なる定義を必要とし、またさまざまの同位の、そして

次位の神格の人格を示すために用いられるかもしれないとき、これらの各段階内でさらにいっそう定義しなおされなければならない。例えば:楽園の創造者たる息子—地方宇宙の父。

0:2.7 (4.1) 神という用語は、我々がそれを使うとき、次のように理解されるかもしれない。

0:2.8 (4.2) 名称により—父なる神として。

0:2.9 (4.3) 前後関係により—ある1神格段階、または関係についての議論に用いられるときのように。神という語の正確な解釈に関し不確かであるときには、それを宇宙なる父の人格に言及することが賢明であろう。

0:2.10 (4.4) 神という語は、つねに人格を意味する。神格は、神性人格に言及しているかもしれないし、していないかもしれない。

0:2.11 (4.5) 神という語は、これらの論文においては次の意味で用いられる。

0:2.12 (4.6) 1. 父なる神—創造者、制御者、支持者。宇宙なる父、つまり神格の最初の人格。

0:2.13 (4.7) 2. 息子なる神—調整の創造者、精霊の制御者、および精霊の行政者。永遠なる息子、神格の第二人格。

0:2.14 (4.8) 3. 精霊なる神—結合の活動者、宇宙の統合者、および心の授与者。無限の聖霊、つまり神格の第三人格。

0:2.15 (4.9) 4. 崇高なる神—時間と空間に関係する実現化の、または、進化の神。創造物-創造者の自己性の時空における経験的達成を実現する人格的神格。崇高なるものは、時間と空間の進化する創造物の発展し経験的な神として個人的に神の統一の達成を経験している。

0:2.16 (4.10) 5. 七重の神—時間と空間のいずこにおいても実際に機能する神格の人格。中央宇宙の境界内と以遠において機能し、時間と空間において神格顕示を統合する創造物の第一段階の崇高なるものとして、力-人格化をする人格の楽園神格と創造的仲間。この段階、すなわち壮大な宇宙は、進化的創造物の時空の上昇との相互関係における楽園人格の時空における下降の球体である。

0:2.17 (4.11) 6. 究極なる神—やがては超時間と超空間の神となるもの。統一的神格顕現の経験的第2段階。究極なる

神は、統合された準絶対-超人格の、時-空-超越の、そして、神格現実創造の最終段階において調整される最終的-経験的価値の実現を含意する。

0:2.18 (4.12) 7. 絶対なる神—現在は神格絶対として実存する超えられた超人格価値と神性についての意味の経験化の神。これは、神格の表現と拡大を統一する第3段階である。この超創造段階においては、神格は、人格化可能の可能性の消耗を経験し、神性の成就に遭遇し、人格化の連続的、進歩的段階への自己顕示のための能力の枯渇を被る。神格は、いま、無特質絶対に遭遇し、接触し、それとの同一性を経験する。

III. 第一根源と中枢

0:3.1 (4.13) 総合的無限の現実は、7局面において、また、同位の７絶対者として実存的である。

0:3.2 (5.1) 1. 第一根源と中枢

0:3.3 (5.2) 2. 第二根源と中枢

0:3.4 (5.3) 3. 第三根源と中枢

0:3.5 (5.4) 4. 楽園の小島

0:3.6 (5.5) 5. 神格絶対者

0:3.7 (5.6) 6. 宇宙なる絶対者

0:3.8 (5.7) 7. 無特質絶対

0:3.9 (5.8) 神は、第一根源と中枢として、総合の現実に関連しての根本である—無条件に。第一根源と中枢は、永遠であるとともに無限であり、したがって、意志によってのみ制限されるか、または条件づけられる。

0:3.10 (5.9) 神—宇宙なる父—は、第一根源と中枢の人格であり、そういうものとしてすべての同位の、そして下位の根源と中枢に無限の制御の人格的な関係を維持する。そのような制御は、そのような同位と下位の根源と中枢と人格の機能の完全性のために実際には決して機能しないかもしれないものの、人格的であり、可能性において無限である。

0:3.11 (5.10) 第一根源と中枢は、したがって、すべての領域で第一である。神格化のあるいは非神格化の、人格のあるいは非人格の、実際のあるいは潜在の、有限のあるい

は無限の領域。いかなる事物も生物も、いかなるの相関性も究極性も、第一の第一根源と中枢への直接的、または、間接的な関係と依存を除いては存在しない。

0:3.12 (5.11) 第一根源と中枢は、次のように宇宙に関連している。

0:3.13 (5.12) 1. 物質的宇宙の重力は、楽園の下の重力中心部に集中する。それが、まさに人格の地理的位置が楽園の下、または、楽園の物質的平面の原始力-エネルギーの中心部との絶対関係において永遠に不動にされる理由である。しかし、神格の絶対人格は、楽園の上、または、楽園の精霊的平面に存在している。

0:3.14 (5.13) 2. 心の原始力は、無限の精霊に収束する。熟練の７精霊における特異で分岐する宇宙心。威儀仙おける時-空の経験としての崇高者の実現化する心。

0:3.15 (5.14) 3. 宇宙の精霊的原始力は、永遠なる息子に収束する。

0:3.16 (5.15) 4. 神格活動のための無制限の能力は、神格絶対者に存在する。

0:3.17 (5.16) 5. 無限応答のための無制限の能力は、無特質絶対にある。

0:3.18 (5.17) 6. 2絶対者—資格がある、そして、無条件の—は、　宇宙なる絶対者に、また彼により調整され、統一される。

0:3.19 (5.18) 7. 進化する道徳的存在体、あるいは、いかなる他の存在体の潜在的人格も、宇宙なる父の人格に集中する。

0:3.20 (5.19) 現実は、有限存在体によって理解されるように、部分的で、相対的で、陰りがある。進化する有限の創造物により完全な理解が可能である神格の最大の現実は、崇高なるものの中に抱かれている。それにしても、時空の進化する創造物のこの崇高の神格にとって先祖である先行する、永遠の現実、すなわち超有限の現実がある。我々は、宇宙の現実の起源と本質を描こうとする際に、有限の心の段階に達するために止むを得ず時空の論法手段を用いる。したがって永遠の中の同時の出来事の多くは、連続的取り扱いとして提示されなければならない。

0:3.21 (6.1) 時空の創造物が現実の起源と現実の分化を見るように、永遠かつ無限の私はあるは、無条件の無限の足枷から本来の、永遠の自由意志の行使を通じて神格としての自由を実現し、また、この分離は、無条件の無限から最初の絶対的神性緊張状態を引き起こした。無限の分化のこの緊張は、宇宙なる絶対者により解決され、それは、総合神格の動的無限と無特質絶対の静的無限を統一し、調整するために機能する。

0:3.22 (6.2) 理論上の私はあるは、この最初の取り扱いにおいて最初の息子の永遠なる父になり、同時に楽園の小島の永遠なる根源になることにより、人格の実現を果たした。父からの息子の分化との共存、そして、楽園の臨場において、無限の精霊の人格とハヴォーナの中央宇宙が現れた。永遠なる息子と無限の精霊である共存人格の神性の登場とともに、父は、さもなければ総合神格の可能性の全体にわたる避けられない拡散から人格として立ち去った。ますます経験的である神格が、崇高性、究極性、絶対性の神性段階で実現化される一方で、その後ずっと父がすべての神格能力を満たすのは、単に２神格同等者との三位一体の関係においてのみである。

0:3.23 (6.3) 私はあるという概念は、我々が時間の拘束、空間の足枷、限定的人の心への、付け加えるならば、永遠生存 — 始まりのない、終わりのない現実と関わり合い — に対する創造物の理解の不可能性への哲学上の一譲歩である。無因の唯一者のみを除いては、万物には始めがなくてはならない。—原因の根本原因。それゆえに、我々は私はあるとしてこの哲学的な価値段階を概念化するのであり、同時に、永遠なる息子と無限の精霊は、私はあると同じように永遠であるということをすべての創造物に知らせているのである。言い換えれば、私はあるが、息子の父でなかったり、息子とともに精霊の父ではないという時は決してなかった。

0:3.24 (6.4) 無限者は、完全さを意味するために用いられる。--終局性--第一根源と中枢の第一性によって暗示される完全さ。理論上の私はあるは、「意志の無限」の創造物-哲学的外延であるが、無限は、宇宙なる父の絶対の、束縛のない自由意志の真の無限の永遠性-内包を表す実際の価値段階である。この概念は、時々父-無限を示す。

0:3.25 (6.5) 父-無限を発見しようと努力するにあたり、高度および低度の存在体の全系列の混乱の多くには、その理解に限りがある。宇宙なる父の絶対第一は、准無限段階においては明らかではない。この為、永遠なる息子と無限の精霊のみが、真に無限としての父を知るということは、あり得る。そのような概念は、他のすべての人格にとっては信仰の実行を表す。

IV. 宇宙の現実

0:4.1 (6.6) 現実は,さまざまの宇宙段階において異って実現する。現実は、宇宙なる父の無限の意志から生じ、それに由来し、宇宙実現の多くの異なる段階の基本的3局面において実現可能である。

0:4.2 (6.7) 1. 非神格化の現実は、非人格のエネルギー領域から宇宙存在の非人格化の価値の現実の領域までの、無特質絶対の臨場にさえ及ぶ。

0:4.3 (7.1) 2. 神格化の現実は、最下級の有限から最上級の無限へと、さらには神格絶対の臨場へさえと、人格の全領域にわたり広がりつつ、このようにして、人格化可能

の、また、それ以上の全ての領域を包囲しつつ、無限の神格の可能性のすべてを抱擁しているのである。

0:4.4 (7.2) 3. 相互に関係する現実。宇宙の現実は、おそらくは神格化であるか、または非神格化であるが、准神格化の存在体にとっては、可能性と実現化する識別の難しい相互に関係する現実の広大な領域が存在する。この同位の現実の多くが宇宙なる絶対の領域に抱擁されている。

0:4.5 (7.3) これは、最初の現実の第一概念である。父は現実を開始し、維持する。現実の第一分化は、神格化と非神格化である。 — 神格絶対と無特質絶対。第一の関係はそれらの間の緊張である。父により開始されたこの神性緊張は、宇宙なる絶対により完全に解決され、宇宙なる絶対として永遠化される。

0:4.6 (7.4) 現実は、時間と空間の観点からは、次のごとくに分割可能である。

0:4.7 (7.5) 1. 実際的、潜在的。成長のための明かされていない能力を運ぶそれらの人々と比べて豊かな表現を有する現実。永遠なる息子は、精霊の絶対的現実である。人間

は、きわめて多大に精霊の実現化されていない可能性である。

0:4.8 (7.6) 2. 絶対的、準絶対的。絶対現実は永遠生存である。準絶対現実は2段階で映し出される。準絶対—時間と永遠の両方に関しての相対的現実。有限—空間に映し出され、時間に顕在化される現実。

0:4.9 (7.7) 3. 実存的、経験的。楽園神格は実存的であるが、出現する崇高者と究極者は経験的である。

0:4.10 (7.8) 4. 個人的、非個人的。神格の拡大、人格表現、および宇宙発展は、楽園の永遠の小島に由来し、集中するそれらのものから永遠なる息子に実際に潜在的に軸となる心-精霊-人格的な意味と価値を永遠に分離した父の自由意志の行為により永遠に条件づけられる。

0:4.11 (7.9) 楽園とは、宇宙現実のすべての局面の人格的かつ非人格的の中心絶対者を含む用語である。適切に限定された楽園は、ありとあらゆる現実、神格、神性、人格、およびエネルギーの— 精霊的、心的、または物質的の—型を暗示できるかもしれない。すべてが、価値、意

味、事実上の存在に関し起源、機能、および目標の場所として楽園を分かちあう。

0:4.12 (7.10) 楽園の小島—修飾語を伴わずには楽園—は、第一根源と中枢の物質的な重力制御の絶対領域である。楽園は、宇宙の中の宇宙の唯一静止したものであり、動かない。楽園の小島は、宇宙に定位置があるが、空間には何の位置もない。この永遠の小島は、物理的宇宙の実際の起源である—過去、現在、未来の。光の核の小島は、神格派生物であるが、それは決して神ではない。物質的創造は、神格の一部でもない。それらは結果である。

0:4.13 (7.11) 楽園は創造者ではない。それは多くの宇宙活動の独自の制御者であり、反応者であるよりははるかに制御者である。物質的宇宙全体にわたり、楽園は、根源力、エネルギー、そして力と関係のあるすべての存在体の反応と行為に影響を及ぼすが、楽園自身は独自で、唯一であり、宇宙で孤立している。楽園は、何も代表はせず、また、何も楽園を代表はしない。それは、根源力でも臨場でもない。それは単に楽園である。

V. 人格の現実

0:5.1 (8.1) 人格は人格化現実の一段階であり、人間と中間者の崇拝と知恵のより高い心の起動段階からモロンチア段階と精霊段階を経て、人格状態の最終到達に及ぶ。それは、人間の、また人間同様の創造物の人格の進化的上昇であるが、他の数多くの宇宙人格の系列がある。

0:5.2 (8.2) 現実は宇宙拡大の支配をうけ、人格は無限の多様化をまぬかれず、双方は、神格のほとんど制限のない調整と永遠の安定化が可能である。非人格現実の変成範囲は、確実に制限されているとは言え、我々は人格現実の進歩的発展への制限について完全には知らない。

0:5.3 (8.3) すべての人格系列、あるいは価値は、達成された経験的段階において関連づけられ、共同創造的でさえある。神と人間さえ、キリスト　マイケル—人の息子と神の息子の現在の状態に実に絶妙に示されているように統一された人格に共存することができる。

0:5.4 (8.4) 人格のすべての准無限の系列と局面は、結合しやすい成就物であり、潜在的には共同創造的である。前人格、人格的、および超人格体はすべて、調整的到達、進歩的達成、共同創造のための能力の相互的可能性により

結びつけられる。しかし、非人格は決して直接的に人格には変形しない。人格は決して自然発生的でない。それは楽園なる父の贈り物である。人格はエネルギーに付加され、また、それは生活エネルギー体制だけに関連づけられる。自己性は、無生のエネルギーの模範と関連づけることができる。

0:5.5 (8.5) 宇宙なる父は、人格の現実、人格の贈与、人格の目標の鍵である。永遠なる息子は、絶対人格、すなわち、精霊的エネルギー、モロンチア精霊、完成された精霊の鍵である。結合の活動者は、精霊-心の人格、すなわち、知性、理由、宇宙の心の源である。しかし、宇宙本体の本質である楽園の小島は、物質の根源と中枢、宇宙の物質的現実の絶対の主たる型であり、非人格であり超精霊である。

0:5.6 (8.6) 宇宙の現実のこれらの特質は、ユランチアの人間の経験の次のような段階において明白である。

0:5.7 (8.7) 1. 肉体。人の物質的、あるいは、物理的有機体。動物の本質と起源をもつ活性の電気化学的仕組み。

0:5.8 (8.8) 2. 心。人間の有機体に対する考え、知覚、および感情の仕組み。意識的、無意識的の全体経験。崇拝と知恵を経て精霊段階へと上向きに広がる情緒的生活に関連づけられる知性。

0:5.9 (8.9) 3. 精霊。人の心に宿る神性の精霊--思考調整者。この不滅の精霊は、前人格である。--生存する人間の人格の一部になるように定められてはいるが、人格ではない。

0:5.10 (8.10) 4. 魂。人の魂は経験上の習得である。人間が、「天の父の意志を為す」ことを選ぶとき、内住する精霊は人間の経験における新しい現実の父になる。人間の、そして物質の心は、出現しているこの同じ現実の母である。この新現実の実体は、物質的ではないし、また精霊的でもない。—それはモロンチア的である。これは、人間の死を生き残り、楽園上昇を始めるように定められる出現しつつある不滅の魂である。

0:5.11 (9.1) 人格。人間の人格は、肉体でも、心でも、精霊でもない。それは魂でもない。人格は、その他では、変わり続ける創造物の経験において不変の1つの現実であ

る。そして、それは人格の他のすべての関連要素を統一する。人格とは、宇宙なる父が、物質、心、精霊の生きており関連するエネルギーに作るところの、またモロンチア魂の生存により生き残るところの特異な贈与である。

0:5.12 (9.2) モロンチアとは、物質と精霊の間に介在する広大な段階を明示する用語である。それは、人格的、あるいは非人格的現実を、つまり、生のエネルギー、あるいは無生のエネルギーを示すかもしれない。モロンチアの縦糸は精霊的である。その横糸は物理的である。

VI. エネルギーと型

0:6.1 (9.3) 父の人格回路に呼応するありとあらゆる事柄を、我々は人格とよぶ。息子の回路に呼応するありとあらゆる事柄を、我々は精霊とよぶ。結合の活動者の心の回路に応じるありとあらゆるものを、我々は心と呼ぶ、無限の精霊の属性としての心--そのすべての局面における心。楽園の下に中心を置く物質的重力に呼応するありとあらゆるものを、我々は物質と呼ぶ。—すべてのその変成状態にあるエネルギー物質。

0:6.2 (9.4) エネルギーを、我々は、精霊、心的、物質のそれぞれの領域に適用されるすべてを含む用語として用いる。また、原始の力はこのようにして広く使用される。力は、壮大な宇宙における物質、あるいは線重力反応物質の電子段階の名称に通常は制限されている。力は、主権を示すためにも用いられる。我々は、あなた方に一般に受け入れられている原始の力、エネルギー、および力の定義に従うことはできない。我々が複数の意味をこれらの用語に割当てなければならないというそのような言語不足がある。

0:6.3 (9.5) 物理的エネルギーとは、現象上の動き、活動、可能性のすべての局面と型を表す用語である。

0:6.4 (9.6) 物理的エネルギーの顕現についての議論において、我々は、一般的に、宇宙原始力、創発的エネルギー、および宇宙力という用語を使用する。これらはしばしば次のように用いられる。

0:6.5 (9.7) 1. 宇宙原始力は、無特質絶対に由来するが、まだ楽園重力に反応しないすべてのエネルギーを含む。

0:6.6 (9.8) 2. 創発的エネルギーは、楽園重力には反応するが、地方の、または、線の重力には無反応であるそれらのエネルギーを含む。これはエネルギー物質の前電子の段階である。

0:6.7 (9.9) 3. 宇宙力は、いまだに楽園重力に反応しつつ、直接に線重力に反応するすべてのエネルギーの型を含んでいる。これは、エネルギー物質とその後に起こるすべての進化の電子段階である。

0:6.8 (9.10) 心は、様々なエネルギー系統に加えて、生きた聖職活動の臨場活動を内包する現象である。そして、これはすべての知力段階において本当である。人格において、心は精霊と物質の間に常にある。したがって、宇宙は3種類の光によって照らされているのである。物質的な光、知的な洞察、および精霊の光輝。

0:6.9 (10.1) 光とは—精霊の明度—言語記号、修辞的表現であり、精霊のさまざまの系列の存在体の人格顕現の特性を内包する。この発光の放出は、知的な洞察にも物理的な光の顕現にも全く関係していない。

0:6.10 (10.2) 模範は、それぞれの物質的、精霊的、心的エネルギー、または、これらのいかなる組み合わせとしても映し出すことができる。それは、人格、自己性、実体、または無生の物質を瀰漫させることができる。しかし、模範は模範であり、模範のままである。複製だけが増加する。

0:6.11 (10.3) 模範は、エネルギーを形成するかもしれないが、それを制御はしない。重力は、エネルギー物質の唯一の制御である。空間も模範も重力に呼応しないが、空間と模範との間には何の関係もない。空間は、模範でも潜在的模範でもない。模範は、既にすべての重力債務を返済した現実の形成である。いかなる模範の現実も、そのエネルギー、その心、精霊、または物質要素から成る。

0:6.12 (10.4) 全体の様相に比して、模範はエネルギーと人格の個々の様相を明らかにする。人格、または、自己性の型は、エネルギー(物理的、精霊的、あるいは心的、)の結果の模範であるが、その中に固有ではない。模範の出現をもたらすエネルギーの質、または人格の質は、おそ

らく神—神格—に、楽園の根源力贈与に、人格と力の共存に帰するといえる。

0:6.13 (10.5) 模範は、それから複製される主要構想である。永遠の楽園は絶対不変の模範である。永遠なる息子は模範の人格である。宇宙なる父は、双方の直系の先祖-起源である。しかし、楽園は模範を与えないし、息子は人格を与えることができない。

VII. 崇高なるもの

0:7.1 (10.6) 主たる宇宙の神格の構造は、永遠の結びつきに関しては二重である。父なる神、息子なる神、それに精霊なる神は永遠である — 実存的存在体である。一方、崇高なる神、究極なる神、それに絶対なる神は、主たる宇宙の進化的拡大の時空の領域と時空を超越した領域における後ハヴォーナ新世紀の神格の人格を実現化している。神格の実現化するこれらの人格は、それらが、永遠の楽園の神格の結合的かつ創造的な可能性の経験的実現手段により増大している宇宙において力-人格化するにつれ、またそうするとき、永遠の存在体である。

0:7.2 (10.7) 神格は、したがって、臨場に関しては二元的である。

0:7.3 (10.8) 1. 実存的—過去、現在、未来の永遠の存在の存在体。

0:7.4 (10.9) 2. 経験的—後ハヴォーナの現在に顕在化するが、全将来の永遠の中で終わりなく続く存在体。

0:7.5 (10.10) 父、息子、および精霊は、実存的である—現実的には(すべての可能性は推定上経験的であるが)、実存的である。崇高者と究極者は完全に経験的である。神格絶対者は、実現化においては経験的であるが、可能性においては実存的である。神格の本質は永遠であるが、神格の最初の3名の人格だけは無条件に永遠である。他のすべての神格の人格には起源があるが、それらには永遠の目標がある。

0:7.6 (10.11) 息子と精霊の中の自身の実存的な神格表現を達成し、父は、今、崇高なる神、終局なる神、絶対なる神としてのこれまで非人格的で非-啓示の神格段階における経験的表現を達成している。しかし、これらの経験的

神格は、現在、完全に存在するというわけではない。それらは実現化の過程にある。

0:7.7 (11.1) ハヴォーナの崇高なる神は、三位一体の楽園の神格からの精霊の人格的反映である。この結合的神格関係は、現在、七重の神の中で外に向け創造的に広がっており、壮大な宇宙の中の全能の崇高者に属する経験的な力に統合されている。3人格として実存的である楽園の神格は、こうして、崇高性の二局面において経験的に発展しており、一方、これらの二元的局面は唯一の主、崇高なるものとして力人格の統一である。

0:7.8 (11.2) 宇宙なる父は、三重の神格人格化である三位一体化の手段により無限の拘束と永遠の足枷からの自由意志の解放を達成する。崇高なるものは、今でも、壮大な宇宙の時空の断片における神格の七重の顕現を准永遠の人格統一として進化している。

0:7.9 (11.3) 崇高なるもののは、威儀仙の父であることを除いては、直接的創造者ではないが、すべての創造物-創造者の宇宙活動の総合調整者である。進化する宇宙において、今実現化している崇高なるものは、時空間の神性

を、つまり時空の崇高なる創造者との経験的な関係における三位一体の楽園の神格を相関づけ、統合させる神格なのである。この進化の神は、最終的に実現化されるとき、有限者と無限者の永遠の融合を成すであろう—経験的な力と精霊人格の永遠の、壊すことのできない統一。

0:7.10 (11.4) 時空の有限現実のすべては、進化する崇高なるものの指導的強い衝動の下に、楽園現実の様々な局面と関連し、次に乗り出して行く超創造物成就の準絶対段階に達する試みの目的にむけて最後まで絶えず上向きの動員と有限の現実の全局面と全価値を統一完成(力-人格統合) とに従事する。

VIII. 七重の神

0:8.1 (11.5) 有限状態を埋め合わせるために、そして、概念の生きもの限界を補填をするために、宇宙なる父は、進化する創造物の神格への 7 重の接近を確立した。

0:8.2 (11.6) 1. 楽園の創造者たる息子

0:8.3 (11.7) 2. 日の老いたるもの

0:8.4 (11.8) 3. 熟練の 7 精霊

0:8.5 (11.9) 4. 崇高なるもの

0:8.6 (11.10) 5. 精霊なる神

0:8.7 (11.11) 6. 息子なる神

0:8.8 (11.12) 7. 父なる神

0:8.9 (11.13) 時、空間における、また7超宇宙への神格のこの七重の人格化は、人間に精霊である神の臨場達成を可能にさせる。この七重の神は、いつかは崇高なるものの中に力-人格化していく時空の有限の創造物にとっては、楽園-上昇経歴の進化的創造物の機能的神格である。神への理解のそのような経験的な発見経歴は、地方宇宙の創造者たる息子の神性の認識に始まり、楽園の宇宙なる父の神性人格の発見と認識の到達へと日の老いたるものの全超宇宙を、そして、熟練の７精霊の1つの人格を経て上昇して行く。

0:8.10 (12.1) 壮大なる宇宙は、崇高性の三位一体の、七重の神の、および崇高なるものの神格の３重領域である。崇高なる神は、自分の人格と精霊属性を引き出すところの楽園の三位一体の中に可能である。しかし、崇高なる神

は現在、時間と空間の超宇宙へと全能者としての彼の力を引き出す創造者たる息子、日の老いたるもの、および熟練の精霊を実現化している。進化する創造物の直接ごく近くの神からのこの力の顕現は、実際に時空において創造物と同時に進化する。非人格活動の価値段階で進化している全能の崇高者と崇高なる神の精霊人格は、一つの現実である — 崇高なるもの。

0:8.11 (12.2) 7重の神の神格関係における創造者たる息子は、必滅者が不滅になり、有限者が無限者の抱擁に到達する仕組みを提供する。崇高なるものは、これらの多種多様の取り扱いのすべての力-人格の動員、すなわち神性的統合、のための方法を提供し、こうして、有限が、他の可能な今後の実現化をへて、準絶対に達し、そして、究極者への到達の試みを可能にする。創造者たる息子と関係する神性の聖職活動者は、この崇高の動員の参加者であるが、日の老いたるものと熟練の７精霊は、おそらく壮大な宇宙における恒久的管理者として永久に固定される。

0:8.12 (12.3) 七重の神の機能は、7超宇宙の組織に始まり、おそらく外宇宙の創造の未来の発展に関連して広がるであろう。第一、第二、第三、第四の空間段階の進歩的発展のこれらの未来の宇宙の組織は、神格への超越的また準絶対的接近の就任を確かに目撃するであろう。

IX. 究極なる神

0:9.1 (12.4) 崇高なるものが、神性の事前の寄贈である壮大な宇宙の包み込むエネルギーと人格の可能性から次第に発展するように、究極なる神も同様に、主たる宇宙の超越の時空の領域にいる神性の可能性から存在するようになる。終局なる神格の実現化は、最初の経験的三位一体の準絶対統一を指し示し、創造的な自己-実現の第2段階における神格の統一的拡大を意味する。これは、超時空の価値のやがては究極に至る段階において楽園の準絶対現実の経験的神格の宇宙実現化の人格-力の同等物を構成する。そのような経験的発展の完成は、崇高なるものの完成した実現を通じて、また、七重の神の聖職活動により準絶対段階に達した時空の全創造物のために究極の奉仕-目標を提供するように設計されている。

0:9.2 (12.5) 究極なる神は、準絶対の神性段階上と、超時間と超空間の宇宙球体上において機能する人格の神格に言及する。究極者は、神格の超崇高の究極化である。崇高者は、有限の存在体に理解される三位一体統一体である。崇高者は、準絶対存在体に理解される楽園三位一体の統一体である。

0:9.3 (13.1) 宇宙なる父は、進化する神格の仕組みを通して、宇宙のそれぞれの意味段階において、有限者、准絶対者の現実の神性価値の、また絶対者の現実のそれさえの、人格の焦点化と力の動員のすばらしく、驚くべき行為に実際に従事している。

0:9.4 (13.2) 永遠の未来において楽園の最初の3人格の、それに過去-永遠の神格は、 —宇宙なる父、永遠なる息子、無限の精霊—は、仲間の進化的神格—崇高なる神、究極なる神、絶対なる神—の経験的実現により人格-補足されることになっている。

0:9.5 (13.3) いま経験的宇宙で進化している崇高なる神と究極なる神は、実存的ではない — 過去の永遠なものではない、唯一の将来の永遠なもの、時空に条件づけられ、先

験的に条件づけられる永遠なもの。彼らは崇高の、究極の、またことによると崇高に-究極の贈与の神格であるが、宇宙の歴史的起源を経験したもの達である。彼らには決して終わりというものはないが、人格の始まりはある。彼らは、実に永遠の、無限の、神の可能性の実現であるが、彼ら自体は、無条件に永遠でもなければ無限でもない。

X. 絶対なる神

0:10.1 (13.4) 時空の有限の心に完全には説明できない神格絶対者の永遠の現実の多くの特徴があるが、絶対なる神の実現は、第2の経験的三位一体、すなわち絶対の三位一体の統一の結果であろう。これは、絶対神性の経験的実現、すなわち絶対段階における絶対意味の統一を構成するであろう。しかし、有特質絶対者が無限者の同位者であるとはどんな時にも知らされてはいないのであるから、我々はすべての絶対価値の取り込みに関し確信はない。超究極の目標は、絶対的意味と無限の精霊性に関与しており、これらの非達成の現実の二つがなければ、我々は絶対価値を確立することはできない。

0:10.2 (13.5) 絶対なる神は、すべての超準絶対存在体の実現-到達目標であるが、絶対なる神の力と人格の可能性は我々の概念を超えており、我々は経験的実現からそれほどまでに遠くへ取り除かれるそれらの現実についての議論をためらう。

XI. 3絶対者

0:11.1 (13.6) 行動の神において機能し、宇宙なる父と永遠なる息子に関する結合的思考が、神性と中央宇宙の創造を構成すると、父は、次にハヴォーナ臨場と無限の可能性を区別し、息子の言葉と連合の幹部の行為に関しての自らの思考を表現した。そして、これらの明かされていない無限の可能性は、無特質絶対者に隠され、また神格絶対者に神々しくおおい隠されて空間にとどまり、一方、これらの2者は、宇宙なる絶対者の働きにおいて、つまり、楽園の父の明かされていない無限-統一において1つとなる。

0:11.2 (13.7) すべての現実の質の向上が経験的成長により、また、宇宙絶対者による経験者と実存者との相関関係を通してもたらされるとき、宇宙の根源力の潜在力と精霊

根源力の潜在力の双方が、進歩的な顕示-実現の過程にある。第一根源と中枢は、宇宙なる絶対の均衡的臨場によって、経験に起因する力の拡大を実現し、進化する創造物との一体感を味わい、崇高性、究極性、および絶対性の段階における経験的神格の拡大を達成する。

0:11.3 (14.1) 神格絶対者と無特質絶対者を完全に見分けることは可能ではないが、結合されていると思われる、されているはずの機能、または連携されているはずの臨場は、宇宙なる絶対の働きを明示する。

0:11.4 (14.2) 1. 絶対なる神は、いかなる宇宙状況においても准絶対的方法では応できない、あるいは少なくともしない。与えられたいかなる状況へのこの絶対者のあらゆる反応も、存在の現状況においてのみならず、すべての将来の永遠の無限の可能性の観点からもまた、事物生物の創造全体の繁栄への考慮から作られているようでもあるらしい。

0:11.5 (14.3) 絶対なる神は、あらゆる宇宙状況において准絶対的方法で反応できない、あるいは少なくともしない。与えられたいかなる状況へのこの絶対者のあらゆる反応

も、存在の現状況ばかりではなく、すべての将来の永遠の無限の可能性の観点からもまた、事物生物の創造全体の繁栄への考慮から作られているようにも見える。

0:11.6 (14.4) 絶対なる神は、宇宙なる父の自由意志の選択により全体の、無限の現実から隔離されたところのその可能性であり、また、その中で、すべての神性活動—実存的かつ経験的—が行われる。これが、無特質絶対者と対比しての有特質絶対者である。しかし、宇宙なる絶対は、すべての絶対的可能性の総合的包含において両者に超付加的である。

0:11.7 (14.5) 2. 無特質絶対者は、非人格化、超神性、かつ非神格化である。したがって、無特質絶対は、人格、神性、およびすべての創造者特権を欠いている。事実も真実も、経験も顕示も、哲学も准絶対も、宇宙的資質なしにはこの絶対者の本質と特質を理解することはできない。

0:11.8 (14.6) 無特質絶対は、壮大な宇宙に瀰漫し、また7超宇宙を超えて空間領域の唖然とさせる広がりの根源力活動へと、また前物質進化へと、等しい空間臨場を伴って広

がる肯定的現実であるということを明確にすべきである。無特質絶対は、無条件と無資格の普遍性、支配、および首位に関する形而上学の詭弁の前提で叙述される哲学的概念の単なる否定主義ではない。無特質絶対は、無限的に宇宙の肯定的総括管理である。この総括管理は、空間-根源力において無制限であるが、生命、心、精霊、人格の臨場によって決定的に条件づけられ、また、楽園三位一体の意志反応と目標ある命令によってさらに条件づけられる。

0:11.9 (14.7) 我々は、無特質絶対が、形而上学の汎神論的な概念に、あるいは科学のかつてのエーテル仮説のいずれかに匹敵する非分化とすべてに瀰漫している影響ではないと確信している。無特質絶対は、力において無制限であり、また、神性に条件づけられてはいるが、我々は、宇宙の精霊現実とのこの絶対者の関係を完全に察知するというわけではない。

0:11.10 (14.8) 3. 宇宙なる絶対は、神格化と非神格化—人格化可能、そして、非人格化可能—へと区別化する宇宙現実における宇宙なる父の絶対的自由意志行為の価値におい

て必然であったと、我々は論理的に導き出す。宇宙絶対者は、このように分化する宇宙現実の自由意志の行為によって創造された緊張解決の神格現象の暗示であり、実存的可能性のこれらの総和の結合しやすい調整者として機能する。

0:11.11 (15.1) 宇宙なる絶対者の緊張臨場は、無条件の無限の固定からの自由意志をもつ神性の力強い活動の分離における神格現実と非神格化現実の間の格差の調整を意味する。

0:11.12 (15.2) 常に覚えておきなさい。潜在的無限性は、絶対であり、永遠からは不可分である。時間上の実際の無限は、部分的ある以外のなにものでもあり得ず、それゆえに、非絶対的でなければならない。実際の人格の無限も、無条件の神格の場合を除いては、絶対であるはずがない。宇宙なる絶対を永遠化し、それにより空間において物質的宇宙を持つことを広大無辺に可能にし、時間においては有限人格を持つことを精霊的に可能にするということは、無特質絶対と神格絶対者における無限の可能の差異なのである。

0:11.13 (15.3) 有限者が、無限者と共存することができるのは、宇宙なる絶対の結合的臨場が、時間と永遠、有限と無限、現実的可能性と現実的現実性、楽園と空間、人間と神の間の緊張を実に完全に均等化するからである。宇宙なる絶対は、結合的に、准無限の神格顕現の宇宙の時空における、および超時空に存在する進化の前進的現実の領域の同一化を組成する。

0:11.14 (15.4) 宇宙なる絶対は、時間と永遠の段階において機能上は実現可能な静的、動的神格の可能性であり、こうして、無限-絶対価値として、また、経験的-実存的接近で実現可能である。神格のこの不可解な局面は、静的、潜在的、結合的であるかもしれないが、現在、主たる宇宙において機能する知的人格に関しては経験的には創造的でないか、または進化的ではない。

0:11.15 (15.5) 名の絶対者—有特質者と無特質者—は、心の創造物により目撃されるように、機能上明らかに分岐するが、宇宙なる絶対の中に、また彼により、完全に、また神らしく統一される。つまるところ、最終的な理解においては、3者すべてが1絶対者である。それらは、准無限

段階においては機能上分化されるが、無限においては、一つなのである。

0:11.16 (15.6) 我々は、絶対という用語を決してあることの否定、あるいは、何でも否認として用いてはいない。我々は、宇宙なる絶対を自主決定力として、一種の汎神論的かつ非人格的神格とは見なしていない。絶対者は、宇宙人格に属するすべてにおいて、厳密に三位一体に制限され神格に支配されている。

XII. 三位一体

0:12.1 (15.7) 最初の、そして、永遠の楽園の三位一体は、実存的であり、必然であった。決して始まりのないこの三位一体は、父の束縛のない意志による人格と非人格の分化の事実に固有であり、彼の人格意志が心によりこれらの二元的現実を調整したとき、現実化された。後ハヴォーナ三位一体は、経験的である。後ハヴォーナ三位一体は、2つの准絶対的なものと主たる宇宙の中における創造と進化の段階の力-人格顕現に固有なのである。

0:12.2 (15.8) 楽園の三位一体--宇宙なる父、永遠なる息子、無限の精霊の永遠の神格統一--は、現実には実存的である

が、すべての可能性は経験的である。依って、この三位一体は、無限を迎え入れる唯一の神格現実を構成し、これに伴い崇高なる神、究極なる神、絶対なる神の実現化の宇宙現象が起こる。

0:12.3 (15.9) 第と第2の経験的な三位一体、つまり後ハヴォーナ三位一体は、派生の神を、すなわち経験的楽園の三位一体により創造された、または究極化された現実の経験的実現により進化された神を抱えているのであるから無限であるはずがない。神性の無限は、拡大されないとしても、創造物と創造者の経験の有限性と准絶対性により常に豊かにされてきている。

0:12.4 (16.1) 三位一体は、調整された神格顕現の関係と事実にかかわる真理である。三位一体の機能は、神格現実を取り囲み、神格現実はいつも人格化における実現と顕示を求める。崇高なる神、究極なる神、また、絶対なる神さえ、それ故、神性の必然性である。これらの3名の経験的な神は、実存的な三位一体、つまり楽園の三位一体においては潜在的であったが、力の人格としての彼らの宇宙出現は、一部は力と人格の宇宙におけるそれら自身

の経験的機能であり、また、一部は後ハヴォーナ創造者と三位一体の経験的業績に依る。

0:12.5 (16.2) 後ハヴォーナの三位一体、崇高者と絶対者の経験的三位一体は、今は、完全に明らかではない。それらは宇宙実現の過程にある。神のこれらの連携は次のように説明できるかもしれない。

0:12.6 (16.3) 1. 現在発展している究極の三位一体は、結局は、創造者でも創造物でもないそれらの独自の宇宙の立案者である崇高なるもの、崇高なる創造者の人格、および主たる宇宙の準絶対の建築士から成るであろう。究極なる神は、ほとんど制限のない主たる宇宙の広がりゆく領域でのこの経験的な崇高の三位一体の統一の神格結果として、ついには、また必然的に力をつけ、そして、人格化する。

0:12.7 (16.4) 2. いま実現化の過程にある絶対の三位一体 —経験的第2の三位一体 — は、崇高なる神、究極なる神、それに宇宙の目標の未顕示の完了者から成り立つであろう。この三位一体は、ともに人格と超人格の段階におい

て、また非人格の境界にさえ働きかけるし、その統一は、絶対なる神格を経験するであろう。

0:12.8 (16.5) 究極の三位一体は、完成においては経験的に統一しているが、我々は、絶対の三位一体のそのような完全統一の可能性を真に疑う。永遠の楽園の三位一体という我々の概念は、しかしながら、神格三位一体化は、さもなければ達成不可能であるものを達成するかもしれないかということを遍在的に思い出させるものである。それなればこそ我々は、そのうちの崇高-究極の登場と絶対なる神の可能な三位一体-実現化を仮定するのである。

0:12.9 (16.6) 宇宙の哲学者は、三位一体の三位一体、すなわち、実存的-経験的三位一体の無限を仮定するものの、宇宙の哲学者はその人格化を心に描くことはできない。ことによるとそれは、私はあるの概念的段階における宇宙なる父の人格に相当するであろう。しかし、このすべての如何にかかわらず、宇宙なる父は実際に無限であるが故に、最初の楽園三位一体は潜在的に無限である。

0:12.10 (16.7) 承認

0:12.11 (16.8) 宇宙なる父の特徴とその楽園の仲間の本質描写、同時に、完全な中央宇宙と包囲する7超宇宙のについての記述の試みに関わる一連の提示をまとめるにあたり、我々は、真実を明らかにし、不可欠の知識を調整するという我々の全努力において、提示される対象に関し、人間の最も高い既存の概念の方をとることを指示すべきだと超宇宙支配者の命令に指導されることになっている。我々は、提示の概念が、人間の心に何の適切な前例表現のないときに限り純粋な顕示を用いるかもしれない。

0:12.12 (17.1) 神性真理の惑星の連続的顕示は、惑星知識に関する新たで高められた調整の一部として精霊的価値の最も高い既存概念を常に抱きかかえている。そこで、我々は、これらの論文の基盤として精霊的価値と宇宙的意味に関して人間がもつ最高かつ最先進の惑星知識を表す1,000以上の概念を選定した。神を知る過去と現在の人間から集められた人間のもつこれらの概念が、指示通りにそれを明らかにするには真実描写が不十分である場合、我々は、われわれの目的を果たすために躊躇なく人間のもつ概念を楽園の神格と超居住宇宙の現実と神性に

関する我々自身の優れた知識を駆使して補足をするのである。

0:12.13 (17.2) 我々は、自身の課題の困難さを完全に認識している。我々は、人間の心の有限概念に関する言語記号への神性と永遠の概念の言語を完全に翻訳する不可能さを認める。しかし、我々は、神の断片が人間の心の中に住み、真実の精霊が人間の魂と共に滞在するということを知っている。さらに我々は、これらの精霊根源力が物質の人間に精霊的価値の現実を理解させ、宇宙的意味の哲学を理解させ得ることに協力するということを知っている。しかし、より確かに、我々は、神性臨場のこれらの精霊が、個人的宗教経験の絶えず進歩する現実—神-意識—の充実に寄与する全真実の精霊的充当において人を補助できることを知っている。

0:12.14 (17.3) [ユランチアにおいて楽園神格と宇宙の中の宇宙に関する真実を描くために配属された超宇宙人格部隊の隊長であるオーヴォントンの神性顧問による著述]

ウランティア・ブック

第I. 部 宇宙の中心と超銀河団について

論文 1
宇宙なる父

1:0.1 (21.1) 宇宙なる父は、すべての創造の神、すべての事物の第一根源と中枢である。神を、まず最初に創造者として、次に制御者として、最後に無限の支持者として考えなさい。予言者が、「ただ、あなただけが神です。あなたのほかには誰もいない。あなたは、すべての軍勢と共に天と、天の中の天を創られた。あなたはそれらを保護し制します。神の息子達により宇宙は作られた。創造者は、光を衣のようにまとい、天を幕のように広げておられます。」と言ったとき、宇宙なる父に関する真実が人間にわかり始めた。宇宙なる父—多くの神の代わりに唯一の神—という概念だけが、神格創造者と無限の制御者としての父を人間に理解させることを可能にする。

1:0.2 (21.2) 神を知り、神の愛情を受け、その代わりに神を愛することのできる存在体である多くの異なる型の知力ある創造物が、いつかは住むようにと無数の惑星系が作られた。宇宙の中の宇宙は、神の作品であり、さまざまの創造物の居住域である。「神は天を創られ、地を形づく

られた。神は宇宙を設けられ、この世界を無駄には創られなかった。人が住めるようにとそれを形づくられた。」

1:0.3 (21.3) 開けた世界は全て、全創造の永遠の製作者であり無限の擁護者である宇宙なる父を認識し、崇拝している。宇宙という宇宙の意志をもつ創造物は、長い、長い楽園の旅に、つまり父なる神に到達する永遠の冒険への魅惑的な苦闘に乗り出す。時の子供の超越的目標は、永遠の神を見つけること、神性の本質を理解すること、宇宙なる父を認識することである。神を知る創造物には、ただ一つの至高の大望、つまり、燃えつくすような唯一の願望があり、それは、神が人格の楽園の完全性において、また、正義の崇高性の宇宙領域においてそうであるように、創造物がそれぞれの球体において神のようになるというものである。永遠に居住する宇宙なる父から「完全でありなさい、私が完全であるように。」という至上命令が発せられた。愛と慈悲をもって、楽園の使者は、各時代、各宇宙を経てユランチアの人類のような動物起源の下級の創造物にさえこの神性の奨励を伝えた。

1:0.4 (22.1) 神の完全性到達に向け懸命に努力するというこのすばらしい、かつ普遍的な命令は、全ての苦闘している被創造者の創造の最初の義務であり、最高の大望であるべきである。神性完全性への到達のこの可能性は、すべての人の永遠の、精霊的進歩の最終的、かつ、明白な目標である。

1:0.5 (21.2) ユランチアの人間は、無限という意味において完全であるということはとても望めないが、この惑星で開始するように、無限の神が人間のために用意した崇高かつ神性である目標を達成することは、人間にとってまったく可能である。そして、人間がこの目標を達成するとき、自己実現と心的到達に関係するすべてにおいて、神自身が無限と永遠の領域にいるように神性完全性の球体で同程度に十分に備わっているであろう。そのような完全性は、物質的な意味においては普遍的でなく、知的把握においては無制限でなく、または精霊的経験においては最終的ではないかもしれないが、それは意志の神性、人格動機の完全性、および神-意識のすべての有限局面において最終的であり、完全である。

1:0.6 (22.3) これこそが、「私が完全であるように、あなたも完全でありなさい」という神の命令の真の意味であり、それは、精霊的価値の、そして真の宇宙的意味のより高い段階到達にむけての長く、魅惑的な戦いにおいて常に人間を前方へ促し、内部に差し招く。宇宙の神を探し求めるこの高尚な捜索は、時間と空間の全世界の住民の最高の冒険である。

1. 父の名称

1:1.1 (22.4) 父なる神が宇宙全体に知れわたるすべての名前の中でも、第一根源と宇宙の中枢として指し示すそれらのものに最も頻繁に遭遇する。第一の父は、異なる宇宙において、また同じ宇宙の異なる領域において様々な名称で知られている。被創造者が創造者につける名前は、大いに被創造者の創造者についての概念に依存する。第一根源、そして、宇宙の中枢は、決して名称によってではなく、本質によってのみ明らかにされてきた。我々が、自分達はこの創造者の子供であると信じるならば、やがては彼を父と呼ぶのは、ごく当然のことである。しかし、これは我々自身が選ぶ名前であり、そしてそれは、

第一根源と中枢との我々の個人的な関係の認識からくるのである。

1:1.2 (22.5) 宇宙なる父は、宇宙の知力ある、意志をもつ創造物にいかなる形態の恣意的認識、形式的崇拝、あるいは、隷属的礼拝も決して課してはいない。時間と空間世界の進化する住民は、自らが--自身の心の中で--宇宙なる父を認識し、愛し、自発的に崇拝しなければならない。創造者は、物質の被創造者のもつ精霊的自由意志の恭順を強制すること、あるいは強要することを拒む。父の意志を為すという人間の意志からの愛に満ちた献身は、人から神への最高級の贈り物である。事実、被創造者の意志からのそのような献身は、楽園の父への唯一可能な真の価値をもつ贈り物になる。神のうちに、人は生き、動き、存在する。父の意志に従うというこの選択を除いては、人が神に贈ることができるものは何もなく、宇宙の知力ある意志をもつ被創造者がもたらすそのような決意は、創造者たる父の愛支配の本質へのまことに満足のいく真の崇拝の現実をもたらす。

1:1.3 (22.6) あなたが、一たび真に神意識をするようになったとき、つまり威厳ある創造者に本当に気づき、神性制御者の内住する臨場実現を経験し始めた後、あなたは、次に自らの啓発に従い、また神性の息子が神を明らかにする様式と方式に従うとき、第一の偉大なる根源と中枢というあなたの概念を適切に表現する宇宙なる父のための名前を見つけるであろう。そして、創造者は、関係性の精神の意味するところはすべて同様であるが、ある特定領域の創造物の心の中における創造者の崇拝の程度、崇拝の深さを表示する各名称、言葉や記号においては異なる名称により、異なる世界と様々な宇宙において数多くの名称で知られるようになる。

1:1.4 (23.1) 宇宙なる父は、宇宙の中の宇宙の中心近くにおいて一般的には、第一根源を意味すると見なされるかもしれない名前で知られている。より外側の空間宇宙においては、宇宙なる父を指して使われる用語が、しばしば宇宙の中心を意味する。父は、さらに外側の星の創造においてはあなたの地方宇宙の本部世界と同じように第一創造の根源と神性中枢として知られている。近くの1星座においては、神は、宇宙の父と呼ばれる。別の星座にお

いては、無限の支持者、東では、神性制御者。また、光の父、光の贈り物、全能者とも呼称されてきた。

1:1.5 (23.2) 神は、楽園の息子が贈与の生活を送ったそれらの世界においては個人的関係、優しい愛情、そして父親のように温かい献身を示唆する何らかの名前で一般的に知られている。あなたの星座本部においては、神は宇宙なる父と呼ばれ、あなたの地方宇宙の棲息界に属する異なる惑星においては、父の中の父、楽園の父、ハヴォーナの父、そして精霊なる父として知られている。楽園の息子たちの贈与の顕示を通じて神を知る者達は、ついには被創造者と創造者の連携の感動的な関係の感情的な心の力に従い、また、「我々の父」として神に言及する。

1:1.6 (23.3) 性をもつ創造物の惑星においては、要するに、親の感情的衝動がその知力ある存在体の心にもともと備わっている世界においては、父という用語は、永遠なる神の非常に表現的であり、適切な名称になる。最も一般的に承認されているその方は、あなたの惑星ユランチアにおいては神という名前でよく知られている。その方に与えられている名前はあまり重要ではない。重要なこと

は、あなたが、神を知り神に似るということを切望するべきであるということである。あなたの昔の予言者たちは、心からその方を「永久の神」と呼び、「永遠に生息する」ものとして言及した。

2. 神の実在

1:2.1 (23.4) 神は精霊世界における第一の現実である。神は心の世界の真理の源である。神は物質領域のいたるところですべてを覆っている。被創造のすべての知能の持ち主にとって、の神は、人格であり、宇宙の宇宙にとっては、永遠の現実の第一根源と中枢である。神は、人間のようではなく、また機械のようでもない。第一の父は、普遍的精霊、永遠の真理、無限の現実、そして父の人格である。

1:2.2 (23.5) 永遠なる神は、理想化された現実、あるいは人格化された宇宙とは比べものにならないものである。神は、単なる人の崇高的願望や人間の客観化された探求ではない。神は、単なる概念や正義の可能性の力でもない。宇宙なる父は、自然と同義語でもなければ、擬人化された自然法でもない。神は、超越的現実であり、単な

る人の最高価値の伝統的概念ではない。神は精霊的な意味の心理的一点集中化ではないし、「人間の最も高貴な仕事」でもない。神は、人の心の中のこれらの概念のいくつか、あるいは、すべてであるかもしれないが、神は、それ以上なのである。神は、地球上の精霊的な平和を享受する者、そして、死後の人格生存の経験を切望する者全てにとっての救いの人格であり、情愛深い父である。

1:2.3 (24.1) 神存在の現実は、神性臨場の内住する、つまり、人間の滅びる心に住むために、また、永遠の生存の不滅の魂の進化を助けるために楽園から送られた精霊の訓戒者人間の経験において明示される。人間の心の中のこの神性調整者の臨場は、3回の経験現象によって明らかにされる。神存在の現実は、神性臨場の内住する、つまり人間の経験において明示される。

1:2.4 (24.2) 1.　神を知るための知的可能性——神-意識。

1:2.5 (24.3) 2.　神を見つけようとする精霊的衝動——神-探求。

1:2.6 (24.4) 3.　神に似るという人格的渇望——父の意志を為すという心からの願望。

1:2.7 (24.5) 神の存在は、科学実験により、あるいは、論理的推理である純粋理性により立証されることは決してできない。神は、人間の経験領域においてのみ認識されることができる。にもかかわらず、神の現実の真の概念は、論理に適い、哲学には妥当であり、宗教には不可欠であり、また人格生存のいかなる望みにも必須である。

1:2.8 (24.6) 神を知る者達は、神の臨場の事実を経験してきた。神を知るそのような人間は、1人の人間が他者に提供することのできる生きた神の存在の唯一の確証を個人的な経験において保持する。神の存在は、人間の心の神-意識と、人間の知力に宿り、宇宙なる父の無料の贈り物として人に授与される思考調整者の神-臨場との間の接触以外のすべての実証の可能性をはるかにに超える。

1:2.9 (24.7) 理論的には、あなたは神を創造者とみなすかもしれないし、神は楽園と完全性の中央宇宙の直接の創造者である。ただし、時間と空間の全宇宙は、創造者たる息子達の楽園部隊によって創造され、組織化される。宇宙

なる父は、ネバドンの地方宇宙の人格的創造者ではない。あなたが住んでいる宇宙は、宇宙なる父の息子マイケルの創造である。父は自らは進化する宇宙を創造はしないものの、進化する宇宙の普遍的関係の多くにおいて、また、物理エネルギー、心的エネルギー、精霊エネルギーの特定の顕示においては進化する宇宙を制御する。父なる神は、楽園宇宙の直接の創造者であり、永遠なる息子との関係においては、他のすべての宇宙の人格的創造者たちの創造者である。

1:2.10 (24.8) 第一根源と中枢は、宇宙の中の物質的宇宙における物理的制御者として楽園の永遠の小島の型において機能し、永遠の神は、この絶対重力の中心を経て、中央宇宙において、また宇宙の中の宇宙全体において等しく物理段階の宇宙的総括的管理を行使する。神は、心としては、無限なる精霊の神格において機能する。精霊としては、永遠なる息子の人格において、そして、永遠なる息子の神性の子供の人格において明示する。等位の人格と楽園の絶対者との第一根源と中枢のこの相互関係は、すべての創造を通じ、そのすべての段階において宇宙なる父の直接の個人的行為を少しも排除しない。創造者た

る父は、断片化された精霊の臨場を通し被創造者の子らと創造された宇宙との直接的接触を維持する。

3. 神は普遍的精霊である

1:3.1 (25.1) 「神は精霊である。」神は精霊の普遍的臨場である。宇宙なる父は無限の精霊的現実である。宇宙なる父は、「主権の、永遠の、不滅の、不可視の、唯一の、真の神である。」あなたは、「神の子」ではあるが、「神の姿に似せて」造られると言われている事を理由に父は形や体格の上であなたがた自身に似ていると考えるべきではない。——あなたには神の永遠の臨場の中央の住まいから派遣される神秘の訓戒者が内住している。精霊の存在体は、人間の目には見えないにもかかわらず、実在する。精霊の存在体には肉体も血液もないのであるのだが。

1:3.2 (25.2) 昔の予言者いわく。「見よ、神が私の側を通り過ぎても、私には見えない。また、神が進んでいっても私には気づけない。」我々は、絶えず神の作品を観測したり、その威厳ある行為の物質証拠を大いに意識しているかもしれないが、神性の可視の顕現をめったに見つめる

ことはできないかもしれない。人間に内住する代表として派遣された精霊の臨場を見ることさえないかもしれない。

1:3.3 (25.3) 宇宙なる父は、物質的に不利な条件の、また限られた精霊的贈与の下級の創造物から隠れているので目に見えないのではない。状況はむしろ次の通りである。「あなたは私の顔を見ることはできない。いかなる人も私を見て、なお生きていることはできないのであるから。」精霊の神を眺め、現世の生活を維持できる人間は誰もいないであろう。精霊存在体の下級集団による、あるいは物質的人格のいかなる体制による神性人格の臨場の栄光と精霊的な輝きへの接近は不可能である。父の個人的臨場の精霊的光輝は、「人間が近づくことができない光」、人間が見たことのない、あるいは見ることのできない」ものである。しかし、精霊的にされた心の信仰の視力により神を識別するためには肉体の目で神を見る必要はないのである。

1:3.4 (25.4) 宇宙なる父の精霊の本質は、共存する自己、つまり、楽園の永遠なる息子と完全に分け合っている。父と

息子の両者は、同じように普遍かつ永遠の精霊を人格の連合等位者、すなわち無限の精霊と完全に、しかも率直に共有する。神の精霊は、それ自身において絶対である。息子においては、それはすべて無条件であり、精霊においては、普遍であり、それら自身のすべてにおいて無限である。

1:3.5 (25.5) 神は普遍的精霊である。神は普遍的人格である。有限創造の有する崇高的人格の現実は精霊である。人格的宇宙の究極の現実は准絶対精霊である。ただ無限性の段階だけが絶対であり、ただそのような段階だけに、物質、心、精霊間の一体化の完了状態がある。

1:3.6 (25.6) 宇宙における父なる神は、潜在的に、物質、心、精霊の総括的管理者である。神は、広範囲の人格回路によってのみ意志をもつ創造物の広大なその創造の人格に直接的に対処するが、(楽園の外においては)断片化された実体、つまり、宇宙に広まる神の意志の臨場においてのみ接触可能である。時間の人間の心に宿り、その場で、生存する創造物の不滅の魂の進化を促すこの楽園の精霊は、宇宙なる父の本質と神性を有する。しかし、進

化するそのような創造物の心は、地方宇宙において始まり、天で父の意志に従うという創造物の選択の必然の結果であるところの精霊到達のためのそれらの変革達成による神性の完成に至らなければならない。

1:3.7 (26.1) 人間の内的経験において、心は物質に結びつけられている。物質に繋がるそのような心は、人間の死を生き延びることはできない。のである。人間の心の物質への関連性から精霊統一へのこの進化は、不滅の魂のモロンチア現実への人間の心の潜在的に精霊である局面の変換という結果に至る。物質に従属的な人間の心は、ますます物質的になり、その結果いずれ起こる人格の消滅を被る。精霊に譲られる心は、次第に精霊的になり、生残し誘導している神性の精霊との一体感に達するために、そして、この方法で人格存在の生存と永遠性に達するためにますます精霊的に、崇高的になるよう運命づけられている。

1:3.8 (26.2) 私は永遠のものからきており、宇宙なる父のいる場所に繰り返し戻っていった。私は、第一根源と中枢の実在と人格、すなわち、永遠なる宇宙なる父を知ってい

る。私は、偉大なる神は絶対であり、永遠であり、無限であると同時に、善であり、神性であり、優しいことも知っている。私は「神は精霊である」それに、「神は愛である」という素晴らしい宣言の事実を知っている。そして、これらの2つの特質は、永遠なる息子において宇宙に徹底的に明らかにされるのである。

4. 神の神秘性

1:4.1 (26.3) 神の無限の完全性は、永遠に神を神秘にするそのようなものである。そして、神の測りがたい神秘のすべてのうち最もすばらしいものは、人間の心の中の神性内住の現象である。宇宙なる父が時間の創造物と逗留する態度は、宇宙のすべての神秘の中で最も核心を突くものである。人の心における神性臨場は、神秘中の神秘である。

1:4.2 (26.4) 人間の物理的肉体は「神の寺院」である。最高権威の創造者たる息子達は、生息界の被創造物の近くに来て、「すべての人々を息子達に引きつける」にもかかわらず、意識の「戸に立ち、」「たたき」、そして、「心の戸を開く」すべての者達に入ることを喜ぶが、創造者たる

息子と必滅の創造物の間にはこの親密な個人的親交があるものの、それにしても、人間は、実際に自分たちの中に住む神自身からの何かをもつ。人間の肉体はその寺院である。

1:4.3 (26.5) あなたがここで終わるとき、地球での一時的な形であなたの過程を終えたとき、肉体でのあなたの試練が終わったとき、必滅の仮小屋を構成する塵が、「それが来た地球に戻り」、その後、それは明らかにされ、内住する「精霊は、それを与えた神に戻る」のである。この惑星の道徳的存在体の中に、神性の部分であり、小包である神の断片が、滞在する。所得権はまだあなたのものではないが、あなたが人間存在を乗り切るならば、計画上、それはあなたと1つであるよう意図されている。

1:4.4 (26.6) 我々は、絶えず神のこの神秘に直面している。我々は、神の無限の善、果てしない慈悲、無比の知恵、すばらしい性格の終わりなき真実の全容のさらなる展開に困惑する。

1:4.5 (26.7) 神性の神秘は、有限と無限、一時性と永遠性、時空の被創造物と宇宙なる創造者、物質と精霊、人間の不

完全性と楽園の神格の完全性との間に存在する固有の違いにある。普遍的の愛の神は、神性の真、美、善の資質を精霊的に把握するその創造物個人の能力を満たし得るまで自分の創造物のあらゆるものに自分自身を確実に顕示する。

1:4.6 (27.1) 宇宙なる父は、宇宙の中の宇宙のあらゆる球体とあらゆる世界のすべての精霊存在体とすべての必滅の創造物に、そのような精霊存在体により、また、そのような必滅の創造物により識別され、理解されることのできる情けがあり神性である自己のすべてを明らかにする。神は、精霊的でろうと物質的であろうと人格をの差別をしない。宇宙のいかなる子供がいついかなるときでも楽しみとする神性臨場は、そのような創造物が超物質世界の精霊現実を受け入れ識別するための能力によってのみ制限される。

1:4.7 (27.2) 神は、人間の精霊的経験における現実としての神秘ではない。しかし、精霊世界の現実が、物質体制の物理的な心へ明らかにされようとするとき、神秘、すなわち神を知る人間の信仰に基づく把握だけが時間と空間の

物質界の進化する人間による永遠の神の識別、有限による無限の認識である哲学的な謎を実現することができるほどの非常に微妙かつ深遠な神秘は、現れる。

5. 宇宙なる父の人格

1:5.1 (27.3) 神の大きさ、無限性に神の人格をあいまいにさせたり、またはおおい隠させたりしてはいけない。「耳を植えつけた方が、聞かないということがあろうか。目を作った方が、見ないということがあろうか。」宇宙なる父は神性人格の偉大さである。神はすべての創造にわたり人格の起源と目標である。神は無限的かつ人格的である。神は無限の人格である。無限である神は、物質的で有限な存在体の完全な理解の及ばないところに永遠に神を置くにもかかわらず、父は、真に人格なのである。

1:5.2 (27.4) 神は、人間の心で解釈される人格をはるかに超える人格である。神は超人格のあらゆる概念をはるかに超えるものである。しかし、存在現実に関する最大概念が人格についての考えと理想にある物質創造物の心と神性人格のそのような不可解な概念について議論するということは、全く空しいことである。物質的創造物がもつ宇

宙なる創造者についての最高可能な概念は、神性人格の高遠な思考の精霊的理想に包含されている。したがって、あなたには、神は人格についての人間の概念をはるかに超えるものでなければならないと分かるとしても、同時に、宇宙なる父が永遠の、無限の、善の、そして、美しい人格には及ばない何かであるはずがないことも同様によく分かるのである。

1:5.3 (27.5) 神は自分の創造物のいずれからも隠れてはいない。神には、ただ単に「どんな物質的創造物も接近することができない光の中に住んでいる」ので、とても多くの存在体の系列にとっては近づきにくい。神性人格の広大さと壮大さは、進化する人間の未完の心での把握を超えている。神は「手のくぼみで水域を測り、手の幅で宇宙を測る。地をおおう天蓋の上にすわり、天を垂れ幕のように伸ばし、そして、住まうためにそれらを宇宙のように広げる方は神である。」「目を高く上げ、だれがこれらのすべてを創造したか、だれが数えて、それらの世界を持ち出し、その名をもって呼び出すかを視なさい。」まさに、「神の目に見えないものは、創造物において部分的に理解される」ということは本当である。今

日、あなたがそうであるように、あなたは、神の息子とその多数の従属物の顕示と奉仕を始めとして種々様々の創造を通して目に見えない製作者について明察しなければならない。

1:5.4 (28.1) 物質的人間は、神の人格を見ることはできないが、神が人格であるという保障を喜ぶべきである。宇宙なる父は、その進化の遅い住民の精霊の永遠の発展に備えるほどに世界を愛したということ、神は「我が子らが大好きである。」と描写する真実を、信仰により受け入れなさい。神は、完全で、永遠の、愛ある、そして、無限である創造者の人格を成す超人間と神性のそれらの属性の何も欠いてはいない。

1:5.5 (28.2) 局部創造において(超宇宙の人事を除く)神は、生息界の父と地方宇宙の君主である楽園の創造者たる息子は別として局部創造における神は、何の人格、あるいは住まい(超宇宙の人事を除く)、の顕現もしない。もし創造物の信仰が完全であるならば、創造物は、創造者たる息子を見たとき、宇宙なる父を見たということを確かに知るであろうに。創造物は、父を捜し求めるにあたり息

子は別として尋ねることも見ることも期待しないであろう。人間は、精霊の完全な変容を成し遂げ、実際に楽園に到達するまでは簡単に神を見ることはできない。

1:5.6 (28.3) 楽園の創造者たる息子の本質は、第一の偉大なる根源と中枢のもつ無限の本質の普遍的絶対性のなかのすべての無限界可能性を取り囲んでいるわけではないが、宇宙なる父は創造者たる息子の中にあらゆる方法において神々しく臨場している。父とその息子たちは1 つである。マイケルの系列のこれらの楽園の息子は、完全な人格であり、輝く明けの明星の人格から進行中の動物進化の最も低い人間までのすべての地方宇宙人格のための模範でさえある。

1:5.7 (28.4) 神がいないならば、またその偉大かつ中心的人格がなかったならば、宇宙の中の広大な宇宙のすべてにわたり人格は存在しないであろう。神は人格なのである。

1:5.8 (28.5) 神は永遠の力、威厳ある存在、並外れた理想であり、栄光の精霊であるが、神はこれらのすべてであり、無限にそれ以上であるにもかかわらず、それでもなお、本当に、しかも不滅に完全な創造者たる人格、すなわ

ち、「知り、知られる」ことができるもの、「愛し、愛される」ことができるもの、そして我々を助けることができるものである。また他の人間が知られてきたように、あなたは神の友人として知られることができる。神は真の精霊であり、精霊の現実である。

1:5.9 (28.6) 我々が宇宙なる父が宇宙全体に明らかにされるのを見るとき、無数の創造物に宿る宇宙なる父について明察するとき、宇宙なる父の君主の息子の人格に彼を視るとき、神性臨場を随所に、近くに、そして遠くに知覚し続けるとき、我々は、神の人格の優位性を疑ったり、疑問視しないようにしよう。宇宙なる父は、これらのすべての広範囲の分布にもかかわらず、真の人格のままであり、不滅に宇宙の中の宇宙に点在する創造物の無数の部隊との個人的接触を保つのである。

1:5.10 (28.7) 宇宙なる父の人格についての考えは、主に顕示を経て人類に届いた神についての拡大されたより真実の概念である。理性、知恵、宗教的経験はすべて、神の人格を推論し、含意するが、かならずしも正当であるとそれを証明するわけではない。内住する思考調整者さえ前

人格なのである。いかなる宗教の真理と円熟も、神の無限の人格のその概念に、また、神格の絶対統一のその把握に正比例している。人格の神格は、それゆえ、宗教が最初に神の統一の概念を定式化してしまうと、宗教の完全な発達規準となる。

1:5.11 (29.1) 原始宗教には多くの人格神がおり、それらは人間の姿に似せて作り上げられた。顕示は、第一根源の科学的公理においてはまったく可能であり、宇宙なる統一の哲学的な考えにわずかに暫定的に示されるにすぎない神の人格概念の正当性を肯定する。何人も人格接近によってのみ神の統一を理解しだすことができる。第一根源と中枢の人格を否定することは、人に哲学上の2つの窮地の選択のみを残す。唯物論、または汎神論。

1:5.12 (29.2) 人格の概念は、神格についての熟考の際、実物性についての考えを取り除かなければれならない。肉体は、人間あるいは神のいずれの人格にも不可欠ではない。実物性の誤りは、人間の哲学の両極点に示されている。唯物論においては、人間は死で肉体を失うので、人格としては消滅する。汎神論においては、神には肉体が

なく、それ故に人ではない。前進する人格の超人間の型は、心と精霊の統一において機能する。

1:5.13 (29.3) 人格は単に神の属性ではない。それは、むしろ完全な表現の永遠性と普遍性に示されている連携された無限の本質と統一された神の意志の全体性を表す。人格は、崇高的意味において、宇宙の中の宇宙への神の顕示である。

1:5.14 (29.4) 永遠であり、普遍的であり、絶対であり、無限である神は、知識が増したり、知恵が増大したりするのではない。神は、有限の人間が憶測したり、把握するかもしれないような経験は積まないが、神自身の永遠の人格の域内において、進化する世界の有限創造物による新経験の習得に幾つかの点において匹敵し、また、比較できる自己実現のそれらの連続的拡大を味わうのである。

1:5.15 (29.5) もし宇宙なる父が、神性の援助によって精霊的に完全な世界へ高く上昇しようとする広い宇宙の中の不完全なすべての魂の人格の苦闘に直接に関係するという事実がなかったならば、無限の神の絶対的完全性は、無限の神を無条件の終局性の完全さのもつ極度の限界に苦

しめさせるであろう。宇宙の宇宙の中のあらゆる精霊存在とあらゆる必滅のこの前進的経験は、自己実現における果てしない神性回路の絶えず広がる父の神性意識の一部である。

1:5.16 (29.6) 「あなたのすべての苦悩に、神は苦しめられる。」「あなたのすべての勝利に、神はあなたの中で、そしてあなたと共に勝ち誇る。」というのは文字通り本当である。前人格の神性の精霊は、あなたの本当の部分である。楽園の小島は、宇宙の中の宇宙のすべての物理的変化に応じる。永遠なる息子は、全創造の全精霊の推進力を包含する。連合活動者は、広がる宇宙のすべての心の表現を成就する。宇宙なる父は、神性意識に満ち溢れ、時間と空間の全進化の創造のあらゆる実体、存在体、および人格の広がる心と上昇する精霊の進歩的戦いのすべての個々の経験を実現する。そして、「我々は皆、神のうちに生き、動き、存在している」のであるから、このすべてが文字通り真実である。

6. 宇宙の中の人格

1:6.1 (29.7) 人間の人格は、創造者の神性人格により投げかけられる時空の姿と影である。そして、どんな現実も適切にその影の考査により理解することはできない。影は真の物質で説明されるべきである。

1:6.2 (30.1) 神は、科学にとっての原因、哲学にとっての考え、宗教にとっての人格であり、情愛深い天の父でさえある。神は、科学者にとっては最初の力であり、哲学者にとっては統一についての仮説であり、宗教家にとっては精霊の生きた経験である。宇宙なる父の人格という人のもつ不適切な概念は、宇宙における人の精霊的進歩によってのみ改善でき、時間と空間の巡礼者が最終的に楽園の生ける神の神性抱擁に達する場合にのみ、真に適切になるであろう。

1:6.3 (30.2) 神は、科学にとっての原因、哲学にとっての考え、宗教にとっての人格であり、情愛深い天の父でさえある。神は、科学者にとっては最初の力であり、哲学者にとっては統一についての仮説であり、宗教家にとっては精霊の生きた経験である。宇宙なる父の人格という人のもつ不適切な概念は、宇宙における人の精霊的進歩に

よってのみ改善でき、時間と空間の巡礼者が最終的に楽園の生ける神の神性抱擁に達する場合にのみ、真に適切になるであろう。

1:6.4 (30.3) 人間の心に宿る前人格の神性の精霊は、ほかならぬその存在において、その実際の存在の有効な裏づけを保持するが、神性人格の概念は、本物の人格的宗教経験の精霊的洞察によってのみ理解し得る。人間あるいは神性いずれの個人も、その人格の外面的反応、あるいは物質的臨場とはまったく別に、知られたり理解されたりるかもしれない。

1:6.5 (30.4) ある程度の道徳的類似性と精霊的調和が、二者間の親交に必要不可欠である。愛ある人格は愛のないものにまず自分を明らかにすることはできない。神性人格を知ることに接近するためにさえ、人の人格贈与のすべては、努力に完全に奉げられなければならない。浮き腰の、部分的な献身は効を奏しないであろう。

1:6.6 (30.5) 人は、より完全に自らを理解し、また仲間の人格的価値を評価すればするほど、起源の人格をより知ることを切望するし、またそのような神を知る人間が、より

ひたむきに努力すればするほど必死に起源の人格のようになろうとするのである。あなたは神に関する意見について議論することはできるが、神との、および神の中における経験は、人間のすべての論争や単なる知的論理の上に、またそれらを超えて存在しているのである。神を知る人間は、信じない者を納得させるためにではなく、信じる者の啓発と相互の満足のために精霊的経験について述べる。

1:6.7 (30.6) 宇宙を知ることができると、また、それがよく分かると決めてかかるすることは、宇宙は心で作られ、人格で制御されると決めてかかることである。人間の心は、人間的であるか、あるいは超人的であるとにかかわらず、他の心の心的現象を知覚できるに過ぎない。人の人格が宇宙を経験することができるならば、その宇宙の中に隠されている神性の心と実際の人格がどこかに存在するのである。

1:6.8 (30.7) 神は精霊である—精霊人格。人間もまた精霊である—潜在的精霊人格。ナザレのイェススは、人間としての経験において精霊人格のこの可能性の完全な実現を

果たした。したがって、父の意志を成し遂げるというイェススの生涯は、神の人格の最も真実の、しかも理想の顕示になる。宇宙なる父の人格は、実際の宗教経験においてのみ把握可能であるが、我々は、イェススの地球での人生における実に人間的な経験のなかにそのような神の人格の実現と顕示の完全な実証により触発される。

7. 人格概念の精霊的価値

1:7.1 (31.1) 「生きている神」について語ったとき、イェススは人格の神格--天の父に言及した。神格の人格の概念は、親交を促す。それは知性ある崇拝を奨励する。それは清々とした信頼を促進する。相互作用は、親交にではなく、非人格物間にありうる。父と息子との、すなわち神と人間のあいだのような親交関係は、両者が人格でないならば味わえない。この人格的親交は、ちょうど思考調整者のような非人格的実体の臨場によりはなはだしく容易にされるかもしれないが、ただ人格のみが、互いに親しく交わることができるのである。

1:7.2 (31.2) 人間は、1滴の水が海洋との合一にたどりつくかもしれないようには神との統一を達成はしない。人間

は、進歩的、相互的、精霊的な親交により、つまり、人格神との人格交流により、すなわち、神性の意志への心からの、また知的な適合により神性統一を達する。そのような高尚な関係は人格間にのみ存在し得る。

1:7.3 (31.3) 真理についての概念は、人格からは離れて受け入れられるかもしれないし、美についての概念は、人格なくして存在し得るかもしれないが、神性の善についての概念は、人格との関連においてのみ理解できる。人格だけが愛し、愛されることができるのである。美と真理が情愛深い父である人格神の属性でないならば、これらでさえ生存の望みから遊離するであろう。

1:7.4 (31.4) 我々には、神がいかに根本的、不変、全能、完全であり、同時に変わり続け、しかも法により限られているらしい宇宙に、すなわち、相対的な欠点のある発展している宇宙に囲まれることができるかを完全には理解できない。しかし、我々自身と環境双方の一定の変化にもかかわらず、我々は皆、人格の同一性と意志の統一を維持するので、自身の個人的な経験を通じてそのような真実を知ることができる。

1:7.5 (31.5) 宇宙の究極の現実は、数学、論理、または哲学によってではなく、人格的な神の神性意志への前進的適合における個人的経験によってのみ理解され得る。科学も、哲学も、神学も、神の人格の正当性を立証することはできない。天の父の信仰の息子の人格的経験だけが、神の人格の実際の精霊的実現化をもたらし得るのである。

1:7.6 (31.6) 宇宙人格のより高い概念は、同一性、自意識、我意、および、自己顕示のための可能性を含意する。そして、これらの特性は、楽園の神格の人格関係に存在するようなさらに他の相等しい人格との親交を含意する。加えて、これらの関係の絶対的統一は、非常に完全であるので、神性は不可分性、単一性によって知られるようになる。「主なる神は唯一である。」人格の不可分性は、神が人間の心の中に生きるように自分の精霊を贈与することを妨げない。人間の父の人格の不可分性は、人間の息子と娘の生殖を阻まない。

1:7.7 (31.7) 統一性の概念に関連するこの不可分性の概念は、神格の究極性による時と空間の双方の超越を含意する。

したがって、空間も時間も絶対であったり、または無限であるはずがない。第一根源と中枢こそが、資格も制限も無しで、すべての心、すべての事柄、すべての精霊を超えて無限大なのである。

1:7.8 (31.8) 楽園の三位一体の事実は、いかなる点においても神性統一の真理に背かない。楽園神格の3人格は、すべての宇宙現実への反応のおいて、そしてすべての創造物関係において、1つとしてある。これらの永遠の3人格のいずれも、神格の不可分性の真実に背かない。私は、これらの宇宙問題が我々にどう現れるかを人間の心に明らかにするための私の自由になる何の適切な言語もないということを百も承知している。しかし、あなたは落胆すべきではない。これらの事態すべてが、楽園存在体の私の集団に属する高い人格にさえ完全に明確であるというわけではない。神格に属するこれらの深遠な真理は、あなたの心が人間の楽園への長い上昇の連続する時代の間に次第に精霊的にされるようになるにつれ、ますます明らかになるということをずっと心に留めておきなさい。

1:7.9 (32.1) [ネバドンの地方宇宙の境界を越えた業務と関係がある来るべきこの顕示のそれらの部分を監督するために第７超宇宙の本部であるユヴァーサの日の老いたるものによって配属された天の人格の１集団の１員である神性顧問による提示。私は、いかなる生息界のそのような目的のための利用可能な最高の情報源を代表するので神の性質と属性を描写するそれらの論文を主催するために任命されている。私は、全7超宇宙において神性制御者として勤め、長い間、万物の楽園の中心に住んできた。私は、滞在中、宇宙なる父の即座の人格的臨場に最高の喜びに恵まれた。私は、挑戦され得ない権威をもって父の本質と属性の現実と真実を描く。私は、自分が何を言っているか分かっているつもりである。]

論文 2
神の性質

2:0.1 (33.1) 人がもつ神に関する最高に可能な概念が、最初の、かつ、無限の人格に関する人間の考えと理想の中に受け入れられている限り、神格の特質を構成する神性の特定の特徴を研究することは許されており、その上有用であることが分かるかもしれない。神の性質は、ネバド

ンのマイケルがその多種多様な教えと肉体でのこの世の見事な人生において繰り広げられた父の顕示に最もよく理解できる。人は、もし自分を神の子供と見なし、また、真の精霊の父として楽園創造者を敬うならば、神の性質というものを理解し得るのである。

2:0.2 (33.2) 神の性質は崇高な考えの顕示における研究が可能であり、神性の特質は崇高な理想の描写として思い描くことができるが、最も啓蒙的、かつ、精霊的に教化する神性の全顕示は、神性についての完全な意識への到達前後双方のナザレのイェススの宗教人生の理解にある。マイケルの甦生の生涯が人への神の顕示の背景とみなされるならば、我々は、宇宙なる父の人格の本質と特質についての人間の概念のなお一層の照射と統一に貢献するかもしれない神性に関する一定の考えと理想を人間の言語記号に置き換える試みができるのである。

2:0.3 (33.3) 我々は、神に関する人間の概念の拡大と精霊化への我々の全努力において、人心の能力の限界に途方もなく妨げられている。我々は、人間の有限かつ必滅の心に神性価値を描写し、精霊的な意味を提示する我々の努力

において言語の制限により、また例証、あるいは、比較の目的に利用できる資料不足により、任務の実行においてもまた極めて不利な立場におかれている。神に関する人間の概念を拡大する我々の全努力は、人間の心には宇宙なる父から与えられた調整者が宿り、創造者たる息子の真実の精霊が満ちているという事実を除いてはほぼ役に立たないであろう。したがって、神の概念の拡大における援助のために人間の心の中でのこれらの神性の精霊の臨場を頼みとし、私は、人心への神の性質の一層の描写を試みるために自分への命令実行を喜んで引き受ける。

1. 神の無限性

2:1.1 (33.4) 「無限者に触れても、我々は彼を見つけることはできない。神性の足跡は知られていない。」「神の理解は無限であり、偉大さは測りしれない。」目をくらます父の臨場の光は、劣る生き物にとっては、父は明らかに「深い暗闇に住む」そのようなものである。父の考えと計画は不可解であるばかりではなく、「神は無数の、すばらしく驚くべきことをする。」「神は、偉大である。我々には神を理解できないし、その年数を測り知ること

もできない。」「本当に、神は地球に住むのであろうか。見よ、天　(宇宙)と、天の中の天(宇宙の中の宇宙)は、神を含むことができない。」「なんと、その裁きは窮めがたくその道は測りがたいことか。」

2:1.2 (34.1) 「無限の父であり、忠実な創造者でもある唯一の神のみがいる。」「神性創造者は、魂の源と目標である宇宙の処分者でもある。彼は崇高なる魂、第一の心と、全創造の無制限の精霊である。」「偉大な制御者は間違いを犯さない。彼は威厳と栄光できらびやかである。」「創造者たる神は完全に恐怖と敵意を欠いている。彼は不死であり、永遠であり、自立自存であり、神性であり、物惜しみをしない。」「なんと純粋かつ美しく、なんと深く測り難い万物の崇高な祖先であることよ。」「無限者は、自分を人に伝える点において最も素晴らしい。彼は、初めであり終わりである。すなわち、善であり完全であるあらゆる目標の父である。」「神には何もできないことはない。永遠の創造者は、原因の原因である。」

2:1.3 (34.2) その永遠、かつ、普遍の人格のすばらしい顕現の無限性にもかかわらず、父は、無限と永遠の双方を無条件に意識している。同様に、自分の完全さと力を知りつくしている。自身の完全で、適切で、徹底的な評価を経験する父は、神性の同位者たちは別として、宇宙で唯一の存在である。

2:1.4 (34.3) 父は、主たる宇宙の様々な区域において時々変化するように、自分への異なる要求に絶え間なく、確実に応える。偉大な神は自分を知っており、理解している。つまり、完全性からくる自分の第一属性のすべてを際限なく意識している。神は宇宙の異変ではない。宇宙の実験者でもない。宇宙なる君主は冒険に入るかもしれない。正座の父は実験するかもしれない。体制の長達は練習するかもしれない。しかし、宇宙なる父は始まりから終わりを見、その神性の計画と永遠の目的は、広大な領域のあらゆる宇宙の中のあらゆる世界と体制と星座に自分のすべての仲間のすべての実験とすべての冒険を実際に擁し、理解する。

2:1.5 (34.4) 神にとり新たなものは何もなく、宇宙の驚くべき何の出来事もない。神は永遠の回路に居住する。神の日々には、初まりも、終わりもない。神には、過去も、現在も、あるいは未来もない。すべての時がいつなんどきでも存在している。神はすばらしさであり、唯一の私はあるである.

2:1.6 (34.5) 宇宙なる父は、そのすべての属性において絶対に、無制限に無限である。そして、この事実は、それ自体、有限の物質存在体と低く創造された他の知力あるものとのすべての直接的人格的意思疎通から自分を自動的に断つ。

2:1.7 (34.6) そしてこの全てが、まず最初は、神性的には完全であるものの、しばしば惑星の人種のまさにその肉体の性質を共にする、すなわち、あなた方の中の1人になり、そして、あなた方とともにいる神の楽園の息子の人格に定められてきたような多種多様の創造物との接触と意思疎通のためにそのような取り決めを必要とする。このように、言ってみれば、互換性を持って神の息子と人の息子と呼ばれたマイケルの贈与で起こったように神が

人間になる。そして、第2には、無限の精霊の人格が、つまり、低い起源の物質存在体に近づき、さまざまな形でそれらの世話し、奉仕しする熾天使の部隊と他の天の知性的存在体の様々な系列がある。そして、第3には、予告なしに、また説明もなく送られる偉大な神自身の実際の贈り物がユランチアの人間のようなものに宿るために送られる非人格の神秘の訓戒者、つまり思考調整者がある。思考調整者たちは、無限の豊富さにおいて、神-意識のための能力、あるいはそのための可能性を持つそれらの人間の謙虚な心を美しく飾り、また心に宿るために栄光の高さから降りてくる。

2:1.8 (35.1) これらの方法で、また多くの他の方法で、あなたに知られていない方法で、まったく有限の理解を越えて、　楽園の父は、創造物の子らの有限の心により近づくことができるように、自身の無限性を愛をもって、快く軽減させ、さもなければ修正し、和らげ、薄めるのである。こうして、減少的に絶対である一連の人格分布をへて、無限の父が、広範囲の宇宙の多くの領域のさまざまの知力者との密接な接触を楽しむことが可能にされる。

2:1.9 (35.2) 無限の父は、その無限性、永遠性、首位性の事実と現実からいささかも減じることなくこのすべてをしてきたし、今しているし、し続けていくであろう。そして、それらの理解の困難さ、包まれている神秘、または、ユランチアにすむそのような創造物に完全に理解される不可能性にもかかわらず、これらの事柄は絶対に真実である。

2:1.10 (35.3) 第一の父は、その計画においては無限であり、その目的においては永遠であるが故に、いかなる有限存在体にとっても神のこれらの計画と目的を十分に把握したり理解することは、本質的に不可能である。人間は、宇宙進行のその連続段階における創造物上昇計画の出仕事と関連して明らかにされるように、時折、あちらこちらに父の目的をちらりと見ることができるに過ぎない。人は無限の意味を取り込むことはできないのであるが、無限の父は、全宇宙のすべての子供のすべての有限性を最も確実に完全に理解し、愛情を込めて抱擁する。

2:1.11 (35.4) 父は楽園のより高い存在体とともに神性と永遠を共有するのであるが、無限性とその後の普遍の首位性

が、楽園の三位一体の等位の仲間を除く誰とでも完全に共有されるかどうかを我々は疑問とする。人格の無限性は、人格のすべての有限状態を必然的に抱擁しなければならない。したがって、「神のうちに、我々は生き、動き、存在している」と宣言する教えは真実—文字通りの真実—である。必滅の人間に宿る宇宙なる父の純粋な神性のその断片は、父の父である第一の偉大な根源と中枢の無限の一部である。

2. 父の永遠の完全性

2:2.1 (35.5) あなたの昔の予言者たちさえ、宇宙なる父の永遠の、決して始まらない、決して終わらない循環的性質を理解していた。神は、文字通り、永遠に自分の宇宙の中の宇宙に臨場している。神は、現時点においてすべての絶対の威厳と永遠の偉大さに居住する。「父は自分のうちに命を持たれ、そして、この命は永遠の命である。」永遠の全時代にわたり、「すべてのものに命を与える」父であった。神性の高潔さにおいては無限の完全性がある。「私は主である。私は変わらない。」宇宙の中の宇宙についての我々の知識は、神は光の父であるというだけではなく、惑星間の問題処理においても「可変性とか

変化の影とかもない」ということである。神は「始まりから終わりというものを宣言する。」神は言う、「私の助言は有効のままである。私は、私の望むすべてをする」「私の息子へ意図した永遠の目的にそって。」第一根源と中枢の計画と目的は、それゆえ、神自身に似ている。永遠で、完全で、いつまでも、不変である。

2:2.2 (35.6) 父の命令には完成の終局性と充満の完全性がある。「神が何をなされても、それは永遠になるであろう。それには何も加えられず、何かを取りさられることはない。」宇宙なる父は、賢明で完全な本来の目的を悔いない。神の計画は不動であり、勧告は不変であり、御業は神性で決して誤らない。「神の目には、1,000年も昨日のように過ぎ去り、夜回りのひとときのようです。」神性の完全性と永遠性の規模は、どこまでも人間の限定される心の完全な把握を超えるものである。

2:2.3 (36.1) 不変の神の反応は、神の永遠の目的の実行においては、創造された知力あるものの変化する態度や移行する心に従って変わるように見えるかもしれない。すなわち、その反応は明らかに、しかも表面的に異なるかもし

れない。だが表面下と外へ向かうすべての顕現の下に、永遠の神の不変の目的、永遠の計画は依然として存在している。

2:2.4 (36.2) 完全性とは、宇宙の外側においては、必然的に相関的用語であるには違いないが、中央宇宙において、特に楽園においては、完全性は薄められてはいない。ある局面においては、それは絶対である。三位一体顕現は、神性の完全性の提示を変えはするが、それを減衰はさせない。

2:2.5 (36.3) 神の最初の完全性は、想定された正義で成るのではなく、むしろ、神性の本質に固有の善の完全性で成る。神は最終であり、完成しており、完全である。神の公正な性格の美と完全性に欠けるものは何もない。空間世界における生きた存在物の全計画は、意志を持つすべての創造物を父の楽園の完全性を共有する高い経験目標へと向上させる神性の目的を中心に置いている。神は自己中心的でも自己内蔵的でもない。神は、自分を宇宙の中の広大な宇宙のすべての自己を意識する創造物への贈与を決してやめない。

2:2.6 (36.4) 神は、自身の経験として自ら個人的に不完全さを知ることはできないが、永遠に無限に完全であり、すべての楽園の創造者たる息子に属する進化的宇宙において戦っている全創造物の不完全さの全経験意識を共有するのである。完全性の神の人格的かつ解放的接触は、心を覆い、道徳的な認識の宇宙水準に昇ったそれらのすべての人間の本質を回路化させる。この様にして、宇宙なる父は、神性臨場の接触を通してさらに、実際に宇宙全体のあらゆる道徳的存在体の発展的経歴における未熟さと不完全さの経験に参加する。

2:2.7 (36.5) 人間の限界、すなわち潜在的悪は、神性の一部ではないが、悪との人間の経験と悪にとってのすべての人間関係は、絶対に違うことなく時間の子供--楽園から出かけさせるあらゆる創造者たる息子によって創造された、あるいは進化させられた道徳的責任を負う創造物--における神の広げ続ける自己実現の一部である。

3. 正当性と正義感

2:3.1 (36.6) 神は義である。したがって、神は正しい。「主は自身のすべての道において正しい。」「『私がしたすべて

のことは、故なくしてはしなかった』と主は言われる。」「主の裁きはまことであり、ことごとく正しい。」「なぜなら、我々の神である主には、悪行がなく、えこひいきをせず、贈り物を取らないので」、創造物の行為と実績は宇宙なる父の正義に影響を及ぼすことはできない。

2:3.2 (36.7) 我々が神の賢明な自然の法則と公正な精霊的命令の運用の正当な結果を避け得るようにと、神の不変な法令を変更するといった神に対するそのような幼稚な訴えをするということはなんと空しいことか。「だまされてはいけない。神は侮られはしない。人は何を蒔こうともそれを収穫することになる。」悪行の報いを受ける正義においてさえ、この神性正義はいつも慈悲と融合される。無限の英知は、与えられたいかなる状況にも配分される正義と慈悲の割合を測定する永遠の仲裁者である。神の政府に対する悪行と周到な反逆に対する最大の罰(現実には必然の結果)は、その政府の個々の対象としての存在の損失である。全霊を傾けた罪の最終結果は絶滅である。詰まるところ、そのような罪を確認された個人は、悪の抱擁を通じて完全に非現実的になることにより

自らを滅ぼしてしまった。そのような創造物の事実上の消滅は、しかしながら、その宇宙における正義の現行の制定された秩序が完全に順守されるまでいつも遅延されるのである。

2:3.3 (37.1) 存在停止は、通常、その領域、あるいは複数の領域の天啓あるいは新紀元の判決時に宣告される。ユランチアなどのそのような世界においては、それは惑星の天啓の終わりに来る。存在停止は、惑星協議会から創造者たる息子の裁判所を経て日の老いたるものの裁決法廷におよぶ所轄のすべての裁判所の調整機能によってこうしたときに宣告できる。停止命令は、悪事を働く者の居住球体に始まる起訴に対する突き崩されることのない立証後に超宇宙の上級裁判所で起こる。そして、次に、絶滅の宣告が天において確定されてしまうと、処刑は、超宇宙の本部に住まい、そこから機能するそれらの裁判官の直接行為による。

2:3.4 (37.2) この判決が最終的に確定されると、罪を確認された存在体は、即座に、まるで存在していなかったかのようになる。そのような運命からは何の復活もない。それ

は永続であり、永遠である。同一性の生けるエネルギー要素は、そこから一度現れた宇宙の可能性への時間の変化と空間の変容により分解される。不正者の人格に関しては、永遠の生が保証されるそれらの選択と最終的決断をする創造物の失敗により生命を継続する媒体が剥奪される。関連する心による罪の継続的抱擁が完全な不正との自己意識に至り、次に生命が停止すると、すなわち宇宙溶解が起こると、そのような孤立している人格は、創造の大霊に吸収され、崇高なるものの進化的経験の一部になる。それは人格としては決しては二度と現れない。その同一性は、まるでそれが存在しなかったかのようになる。調整者-内住の人格の場合、経験的精霊価値は、継続する調整者の現実の中に生き残る。

2:3.5 (37.3) 現実の実際の段階間のいかなる宇宙競争においても、より高段階の人格が、ついには低段階の人格に打ち勝つのである。宇宙論争のこの必然の結果は、資質の点における神性は、意志をもついかなる創造物の現実、あるいは、現実性の度合いに等しいという事実に固有である。弱められた悪、完全な誤り、意図的な罪、和らげられない不正は、本質的に、自動的に自滅する。そのよう

な宇宙非現実性の態度は、公正な裁決のための宇宙裁判所の正義決定の、また公平性認定の手順まで一時的な慈悲寛容のおかげで宇宙の中で生き残ることができる。

2:3.6 (37.4) 地方宇宙の創造者たる息子の支配は、創造と精霊化の支配である。これらの息子たちは、人間の前進上昇の楽園計画の効果的実行に、反抗者と誤った思索家の更生に献身するが、そのような優しい努力すべてが、最終的に、そして永久に拒絶されるとき、解散の最終的裁決は、日の老いたるものの管轄下で働く根源力により実行される。

4. 神の慈悲

2:4.1 (38.1) 慈悲とは、単に知識の完全性と生まれながらの弱点についての完全な認識と有限である創造物の環境上の不利な条件から脱するその知恵によって和らげられるところの正義である。「我々の神は、憐れみ深く、情け深く、辛抱強く、慈悲に溢れている。」したがって、「主を呼び求める者は誰でも救われる。」「というのも、主はふんだんに許して下さるから。」「主の慈悲は、永遠に変わらない。」その通りである。「主の慈悲は、永遠

に続く。」「私は主であり、地上に慈愛と公義と正義を行なうものであり、というのも私がこれらのことをまことに楽しむからである。」「私は人の子らを進んで苦しめたり、悲しませたりはしない、」なぜなら、私は、「慈悲の父でありすべての安らぎの神」であるから。

2:4.2 (38.2) 神は、本来親切で、おのずから情け深く、果てしなく慈悲深い。神の情けを引き起こすために決して父に何の影響ももたらす必要はない。創造物の要求が、父の思いやりの慈悲と救いの恩寵の完全な流れを全面的に保証するに足りるのである。わが子に関しすべてを知っているので、神にとって許すことは簡単である。人は隣人を理解すれば理解するほど、隣人を許し、愛しさえすることがより容易くなるであろう。

2:4.3 (38.3) 無限の知恵の認識だけが、公正な神が、同時に、しかも与えられたいかなる宇宙状況においても、正義と慈悲への聖職活動を可能にする。天なる父は、宇宙の子供への対立的態度に決して苦しめられはしない。神は決して抗争態度の犠牲者ではない。神の全知性は、完全に、同時に、また等しくそのすべての神性属性の要求と

その永遠の性質の無限の資質を満たすというその宇宙的行為選択における神の自由意志を変わらずに導く。

2:4.4 (38.4) 慈悲は善と愛の自然で必然の子である。情愛深い父の善の性質は、宇宙の子供のあらゆる集団の各構成員への賢明な慈悲の聖職活動を差し控えることはできない。永遠の正義と神の慈悲ともに、人間の経験で公正と呼ばれるものを構成する.

2:4.5 (38.5) 神性の慈悲は、宇宙段階の完全性と不完全性の間の調整のための公正手段を表す。慈悲は、進化する有限の状況に適合する崇高性の正義、すなわち、時の子供の最も高い関心と宇宙福祉を満たすために修正される永遠の正義である。慈悲は、正義が精霊の従属存在体に、また、進化的宇宙の物質的創造物に公正に適用されるように、正義への違反ではなく、むしろ最高の正義の要求への理解ある解釈である。慈悲は、それが神性の英知によりまとめられているように、そして宇宙なる父と全関連創造者の無限に賢明な心と至上の自由意志により決定されているように、時間と空間の創造に属する多方面の有

識者に賢明に、しかも愛情を込めて報いられた楽園の三位一体の正義である。

5. 神の愛

2:5.1 (38.6) 「神は愛である。」したがって、宇宙問題に対する神の個人に向けられた態度のみが、神性の愛情反応である。父はその生命を我々に授与するほどに我々を十分に愛している。「神は悪人の上にも、善人の上にも太陽を昇らせ、公正な者の上にも不公正な者の上にも雨を降らせる。」

2:5.2 (39.1) 神は、「父自身はあなたを愛しているがゆえに」自分の息子の犠牲、あるいは従属創造物の嘆願のために愛する我が子らに煽てられると考えるのは間違いである。神が人の心に宿るように素晴らしい調整者を送るということは、この父親らしい愛情への反応である。神の愛は普遍である。「望む者は誰でも来ることができる。」神は「すべての人が真理を悟るに至りことで救われるよう」望んでいるのである。神は「だれも滅ぶことを望んではいない」。

2:5.3 (39.2) 創造者たちは、神の法への愚かな違反の悲惨な結果から人間を救おうとしたまさに最初のものたちである。神の愛は、本来、父親らしい愛情である。したがって、神は、時として「我々自身の利益のため、その清きにあずからせるために我々を懲らしめるのである。」あなたの激越の試練の間でさえ、「我々のすべての苦悩において、神はともに苦しめられる。」ということを覚えていなさい。

2:5.4 (39.3) 神は、神性らしく罪人に親切である。反逆者が正義に戻ると、「我々の神は、十二分に許してくださるから」反逆者は慈悲深く受け入れられる。「私は、私自身のためにあなたの背きの罪をぬぐい去るものであり、私はあなたの罪を思い出すつもりはない。」「我々が神の息子と呼ばれるためには、いかに大きな愛を父から賜ったかをよく考えてみなさい。」

2:5.5 (39.4) つまるところ、神の善の最大の証と神を愛する最高の理由は、父の内在の贈り物である—あなた方両者が永遠に1つになる時間をそれほど我慢強く待ち受ける調整者。あなたは、探索によって神を見つけることはでき

ないが、内住の精霊の先導に従うならば、一歩一歩、誕生から死まで、宇宙から宇宙へ、そして時代ごとに、あなたが最終的に宇宙なる父の楽園の人格の臨場に立つまで誤ることなく導かれるであろう。

2:5.6 (39.5) 人間の性質の限界とあなたの物質創造の不利な条件が神を見ることを不可能にするという理由で、人が神を崇拝しないということは何と理屈に合わないことであるか。人と神の間には、横切られなければならない巨大な隔たり(物理的空間)がある。同様に、架け渡されなければならない精霊的分化の遠大な溝が存在している。だが、神の楽園の個人的臨場から人を物理的に精霊的に切り離すすべてにもかかわらず、神があなたの中に住まうという厳粛な事実というものを止まって、よく考えなさい。神は、自身の方法で既に溝に橋を架けた。神は、あなたが永遠の宇宙経歴を追求する間、自分自身を、つまり精霊を、あなたの中に生き、あなたと共にこつこつ働くために送り出した。

2:5.7 (39.6) 私は、劣る生物の向上的聖職活動にかくも偉大で、同時に、愛情深く専念するものを崇拝することは容

易で、快いと思う。私は、当然のことながら、創造において、また、その収拾においてとても強力であるもの、にもかかわらず、善においては完全であり、我々を絶えず覆う慈愛においてとても忠実であるものが好きである。私は、もし神がそれほど偉大で強力でないとしても、神が善で慈悲深くある限り同じ程度に愛すると考える。我々は皆、神の驚くべき属性を認めてというより神の性質ゆえに父を愛している。

2:5.8 (39.7) 創造者たる息子とその配下の行政官が空間宇宙の発展に固有であるさまざまの時間の困難ととても雄々しく戦っているのを観察するとき、私は宇宙のこれらの下級支配者に大きく深遠な愛情を抱いていることに気づく。やはり、私は、領域の人間を含む我々は皆、これらの人格が我々を本当に愛していることを明察するので、宇宙なる父と他のすべての存在体を愛していると考える。愛する経験は、大部分は、愛される経験への直接的応答である。神が崇高性、究極性、および絶対性のすべての属性を剥奪されたとしても、神は私を愛しているということを知っているがゆえに、私は、神をこの上なく愛し続けるであろう。

2:5.9 (40.1) 父の愛は、現在と永遠の時代の無限の回路にわたりずっと我々についてくる。あなたが、神の情愛深い本質を熟考する間、それにはただ1つの道理に適い自然な人格反応がある。あなたはますます製作者が好きになるであろう。あなたは、子供が地球の親に与えるそれに類似する愛情を神にもたらすであろう。なぜならば、実の父、真の父としての地球の父は、我が子を愛しているし、宇宙なる父も、同様に、創造された息子と娘を愛し、その福祉をとこしえに追い求めているのであるから。

2:5.10 (40.2) だが神の愛は、知的で明敏な親の愛情である。神性愛は、神性の英知と、宇宙なる父の完全な性質の中の他のすべての無限の特性との統一的関係において機能する。神は愛であるが、愛は神ではない。人間への神性愛の最大の顕現は思考調整者の贈与に見られるが、あなたへの父の愛の最大の顕示は、地上で理想の精霊的生活を送った点で神の息子マイケルの贈与の生涯に見られる。それぞれの人間の魂への神の愛を個性化するのは、調整者である。

2:5.11 (40.3) 私は、時に、宇宙の子供への天の父の神性愛を仕方なく人間の言語記号での愛の使用に頼って描くことに痛みのようなものを感じる。この用語は、敬意と献身の関係についての人の最高概念を含みはするものの、生ける神の宇宙創造物への比類なき愛情を指し示すには全くふさわしくない人間関係の大半にまことに頻繁に使用される。私が楽園なる父の神性愛の本質と絶妙に素晴らしい意味を人の心に伝える何らかの崇高で限定的な用語を利用できないということは、いかにも残念なことである。

2:5.12 (40.4) 人が人格神の愛を見失うとき、神の王国は単に善の王国となる。神性の無限の統一にもかかわらず、愛は創造物との神の人格的な関係の支配的特性である。

6. 神の善

2:6.1 (40.5) 我々は、物理宇宙において神性美を見、知的世界において永遠の真理を見分けるかもしれないが、神の善は人格的な宗教経験の精霊的世界にのみ見つけられる。宗教は、その真の本質に関しては、神の善への信仰に基づく信頼である。神は、偉大であり、絶対でありうる

し、哲学的には何となく知的で個人的でさえあるかもしれないが、宗教的には、神も道徳的でなければならない。神は善のはずである。人は、偉大な神を恐れているかもしれないが、善の神だけを信じ、愛している。神のこの善は、神の人格の一部であり、その完全な顕示は信じる神の息子の人格的宗教経験にのみ現れる。

2:6.2 (40.6) 宗教は、精霊の超世界というものは、人間世界の基本的な必要性を認識し、かつそれに敏感であるということを含意する。進化的宗教は倫理的になるかもしれないが、啓示的宗教のみが真に、そして、精霊的に道徳的になる。神は王者の道徳に支配される神格であるという昔の概念は、人間の経験においてこれ以上穏やかで美しいものはない睦まじい親子関係の家族道徳の愛情にみちて感動させるその段階へとイェススによって向上された。

2:6.3 (41.1) 「神の善の豊かさは、誤れる者を悔悟に導く。」「あらゆる良い贈り物とあらゆる完全な贈り物は、光の父から下ってくる。」「神は善である。神は人の魂の永遠の避難所である。」「主たる神は慈悲深く、恵み深

い。神は、我慢強く、善と真実に溢れている。」「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。神を信じる者は幸いである。」「主は、情け深く、思いやりに満ち溢れている。主は救済の神である。」「主は、失意の者を癒し、魂の傷を包む。主は人の全能の恩人である。」

2:6.4 (41.2) 王兼裁判官としての神の概念は、高い道徳基準を助長し、法を重んじる民族を集団として創造したものの、時間と永遠における個人の状態に関しては、個々の信者を不安定の嘆かわしい位置に放置した。後のヘブライ人の予言者は、神はイスラエルの父であると宣言した。イェススはそれぞれの人間の父として神を明らかにした。神に関する人間の概念全体には、イェススの生涯によって超越的に光が当てられている。無私は、親の愛に固有である。神は父のようにではなく、父として愛する。神はあらゆる宇宙人格の楽園の父である。

2:6.5 (41.3) 正義は、神が宇宙の道徳律の源であることを含意する。真理は顕示者としての、教師としての神を示す。しかし、愛は、愛情を与え、愛情を切望する、すなわち、親と子に介在するような理解ある親交を求める。正

義は神性の考えであるかもしれないが、愛は父の態度である。神の正義は、天の父の無私無欲な愛とは和解しえないという誤った仮定は、神性の性質における統一の欠如を前提とし、神の統一と自由な意志というものの両方への哲学上の襲撃である贖罪主義の労作に直接的に導く。

2:6.6 (41.4) その精霊が地上の子らに宿る慈愛深い天の父は、分割された人格ではないし、—正義の人格と慈悲の人格—父の恩恵、または許しを保証するための仲介も必要としない。

2:6.7 (41.5) 神は決して激怒せず、復讐心がなく、立腹もしない。英知はしばしば神の愛を抑えるというのは本当であり、正義は神の拒絶された慈悲を条件とする。正義に関わる神の愛は、罪への匹敵する憎しみとして示されざるを得ない。父は矛盾した人格ではない。神性の統一は完全である。楽園の三位一体には、神と等位である永遠の同一性にもかかわらず、絶対統一がある。

2:6.8 (41.6) 神は罪人を愛し、罪を嫌う。そのような意見は、哲学的には正しいが、神は超越している人格であり、

人々は他の人々を愛し、嫌うことしかできない。罪は人ではない。神は、人格現実 (潜在的に永遠の) であるが故に罪人を愛するが、罪に対しては何の人格的態度もとらない、なぜなら罪は精霊的現実ではないのであるから。それは人格的ではない。したがって、神の正義だけが、その存在を認識する。神の愛は罪人を救う。神の法は罪を滅ぼす。もし罪人が最終的に罪と自分とを完全に結びつけるならば、同様に人間のその同じ心が、内住する精霊調整者と自分とを完全に結びつけるかもしれないように、神性のこの態度は、明らかに変わるであろう。そのような罪で確認された人間は、次に、完全に事実上精霊的ではなくなるであろうし、(したがって、人格的に非現実的)、いずれ起こる存在体の絶滅を経験するであろう。非現実性は、創造物の性質の不完全性さえも、ますます本物の、ますます精霊的な宇宙にいつまでも存在することはできない。

2:6.9 (42.1) 人格の世界に直面すると、神は情愛深い人格であると分かる。精霊的な世界に直面すると、神は人格的愛である。宗教経験においては、双方である。愛は神の意志を見分ける。神の善は、神性の自由な決意の底部で休

息している--愛し、慈悲を示し、忍耐を表し、許しを執行する普遍的傾向。

7. 神性の真理と美

2:7.1 (42.2) すべての有限の知識と創造物の理解は相対的である。高い発信元から収集される情報と知性でさえ、相対的に完全で、局部的に正確で、人格的に真実であるにすぎない。

2:7.2 (42.3) 物理的事実は、かなり一定しているが、真理は宇宙の哲学に生きており自在性のある要素である。進化する人格は、意思疎通においてただ部分的に賢明であり、相対的に真実である。進化する人格は、それらの人格的経験が拡大する限りにおいてのみ確かでありうる。明らかに一箇所で完全に本当であるかもしれないものは、創造の別の区分で相対的に本当であるかもしれない。

2:7.3 (42.4) 神性の真理、究極的真理は、一様で普遍的であるが、様々な球体出身の数多の個人が言うように精霊的なものについての話というものは、時として知識の完全性における、またその経験の長さと範囲におけると同様に、個人的経験の充実においてもこの関連性のために細

部において異なるかもしれない。第一の偉大な根源と中枢の法と布告、思考と態度は、永遠に、無限に、普遍的に真実ではあるものの、同時に、あらゆる宇宙、体制、世界、および創造された知性への適用とまた、それらに対する調整は、無限の精霊の、そして他のすべての天の関連人格の地域計画と手順との調和のみならず、それらがそれぞれの属する宇宙で機能するように創造者たる息子の計画と方法に従う。

2:7.4 (42.5) 物質主義の誤った科学は、人間の判決が宇宙の中の浮浪者になることを宣告するであろう。そのような部分的知識は、潜在的に邪悪である。それは善と悪の両者で構成される知識である。真理は、それが十分であり、かつ対称であるがゆえに美しい。人は、真理を捜し求めるとき、神性的に真実であるものを追求しているのである。

2:7.5 (42.6) 哲学者は、抽象概念の誤りに、つまり現実の1局面に関心の焦点を合わせ、次にそのような孤立の局面を全体の真理であると断言する実践に導かれるとき最も重大な誤りを犯す。賢明な哲学者は、すべての宇宙現象の

後ろに、また前存在にある創造的な意匠を常に探すであろう。創造者の考えは、不変的に創造的行為に先行する。

2:7.6 (42.7) 知的自意識は、哲学的なその概念の一貫性だけでなく、遍在する真実の精霊の誤りのない反応によってもより明確に、確実に真実の美を、その精霊的資質を発見することができる。真理が実践可能であるが故に、幸福は真理の認識から起こる。真理は生きることができる。現実のものではない誤りは経験において成し遂げられないが故に、失望と悲しみは誤りに伴う。神性の真実は、その精霊的特色により最もよく知られる。

2:7.7 (42.8) 止むことのない探求は、統一のため、つまり神性統一のためである。広範囲の物理的宇宙は、楽園の小島を中心にまとまる。知的的宇宙は心の神、連合活動者を中心にまとまる。精霊的宇宙は、永遠なる息子の人格に緊密に結びついている。しかし、時間と空間の孤立している人間は、内住する思考調整者と宇宙なる父との直接的関係を通して父なる神に統一する。人の調整者は神の断片であり、永久に神の統一を捜し求める。それは第一

根源と中枢の楽園の神とともに、またその中にしっかりと結びついている。

2:7.8 (43.1) 園の神と、またその中にまとまる。最高の美の認識は現実の発見と統合である。永遠の真理における神性の善の認識、つまり、それは、究極の美である。人間の芸術の魅力でさえその統一の調和に含まれる。

2:7.9 (43.2) ヘブライ宗教の大変な間違いは、神の善を科学の実際の事実と芸術の魅力的な美に関連づけないことであった。文明の進歩とともに、宗教が神の善を偏重し、真実を除外し、美を無視しがちといった同様の賢明でない方向を追求し続けたので、ある種の人間、孤立された善に関する抽象的、分離的概念から目を背けるという強い傾向を展開した。20世紀の多くの人間の献身と忠誠を保持し損ねる近代宗教の過度に抑圧され孤立した道徳は、もしそれが、科学、哲学、および精霊的経験のそれぞれの真理に、そして物理的創造の美しさ、知的芸術の魅力、および本物の性格達成の壮大さに等しく配慮をするならば、それ自体を回復するであろう。

2:7.10 (43.3) この時代の宗教上の挑戦は、拡大され、絶妙に統合された広大無辺の真実、宇宙の美、神性の善の近代的概念から新たで魅力的な哲学を思い切って構成するそれらの洞察力のある将来を見つめる男女に向けたものである。そのような新たで公正な道徳的構想は、人間の心の良いものすべてを引きつけ、かつ人間の魂の最も良いものに挑戦するであろう。真、美、善は、神性の現実であり、人が精霊的な生活段階を昇るにつれ、永遠のもののこれらの最高の資質は、愛である神においてますます連携され、統一されるようになる。

2:7.11 (43.4) すべての真理—物質的、哲学的、または精霊的—は、美しく善である。すべての真の美—物質的芸術、または精霊的対称—は、真実であり、善である。すべての本物の善は、—個人的道徳、社会的公正さ、または神性の聖職活動にかかわらず—等しく真実であり、美しい。健康、健全さ、および幸福が人間の経験において混合されるとき、それは、真、美、善の統合である。そのような効率的な生活段階は、エネルギー体系、思想体系、および精霊体系の統一を経て生じる。

2:7.12 (43.5) 真理は緊密に結びついており、美は魅力的であり、善は安定している。そして、真実であるこれらの価値が人格経験で調整されるとき、結果は、英知に条件づけられ、忠誠に制限される高水準の愛である。全宇宙教育の真の目的は、広がる経験のより大きい現実との世界の孤立している子供のより良い連携に作用することである。現実は、人間の段階においては有限であり、より高く神性である段階においては無限で永遠である。

2:7.13 (43.5) [ユヴァーサの日の老いたるものの権威により活動する一神性顧問による提示]

論文 3
神の属性

3:0.1 (44.1) 神はいたる所にいる。宇宙なる父は永遠の回路を統治する。宇宙なる父は、ちょうどこれらの息子を通して生命を与えるように、楽園の創造者たる息子の人格の中にあって地方宇宙で統治する。「神が我々に永遠の命を賜り、そして、この生命はその息子のうちにある。」これらの創造者たる息子は、時間の領域の中における、そして、発展する空間宇宙の渦巻く惑星の子らへの、自身の人格表現である。

3:0.2 (44.2) 高度に人格化された神の息子は、低位の創造された知力あるものにより明確に認識され、しかも、無限の、それゆえ、あまり認識できない父の不可視性をこうして補うのである。宇宙なる父の楽園の創造者たる息子は、その他の点では不可視である、すなわち、永遠の回路において、また、楽園の神格の人格において固有の絶対性と無限性ゆえに不可視である存在体の顕示である。

3:0.3 (44.3) 創造者であることは、ほとんど神の属性ではない。それは、むしろ神の行為の性質の集合性である。創造者であることのこの普遍的機能は、それが第一根源と中枢の無限であり、神性である現実のすべての連携属性により条件づけられるように、また制御されるように永遠に明かにされる。我々は、神性の何か1つの特性を他のものに先立つと見なすことができるかどうか心から疑うが、もしこういう事情であるならば、神格の創造者であることの本質は、他のすべての本質、活動、および属性に優先するであろうに。そして、神格の創造者であることは、神の父権の普遍的真理に至る。

1. 神の遍在性

3:1.1 (44.4) いたる所に、そして同時に存在するという宇宙なる父の能力は、要するにその遍在の性質ということになる。神しか、同時に2箇所に、無数の場所にいることはできない。神は同時に、「上は天、下は地に」いる。詩編作者が詠嘆したように、「私は、あなたの御霊から何処へいけましょう。あなたの御前から逃げられましょうか」

3:1.2 (44.5) 「『私は、遠くはもとより手近にいる神である』と、主は言う。『私は天地を満たしはしないか。』」宇宙なる父は、絶えず、広範囲の創造のすべての部分とすべての中心にいる。宇宙なる父は、「すべてを満たし、すべてに満ち満ちている方の豊かさ、」そして、「すべてのものの中に働く方の豊かさ」であり、さらには、その人格の概念は、「天(宇宙) と天の中のと天 (宇宙の中の宇宙)も、神を含むことができない」ほどである。神はすべてであり、すべての中にいるということは文字通り本当である。しかし、それさえ神のすべてではない。無限者は、最終的には無限においてのみ明らかにすることができる。原因は、決して結果の分析によって完全に理解され得るというものではない。生ける神は、束縛のない自

由意志の創造的行為の結果として生まれた創造の全体よりも測り知れないほどに偉大である。神は、宇宙全体にわたり明らかにされるが、宇宙は、決して神の無限全体を収容したり、取り囲んだりは決してできない。

3:1.3 (45.1) 父の臨場は、絶えず主たる宇宙を巡回する。「神が行き巡るのは天の端からであり、その巡回はその終わりまである。また、その巡回の光から隠されるものは何もない。」

3:1.4 (45.1) 創造物が神に存在するだけではなく、神もまた創造物に生きる。「我々は、神が我我の中に生きているので我々は神の中に住んでいるのを知っている。神は自らの御霊を我々に賜れた。楽園の父からのこの贈り物は、人の切っても切れない友である。」「その方は遍在し、すべてに浸透している神である。」「不朽の父の御霊は、すべての人間の子の心に隠されている。」「まさしく友が自身の心の中に住まうその間に、人は友というものを捜し求めに行き巡る。」「真の神は、遠くにはいない。神は我々の一部である。その御霊は我々の内から話しをする。」「父は子供の内に生きる。神はいつも我々

と共にいる。神は永遠の目標へ誘導している御霊である。」

3:1.5 (45.1) 「あなたは神から出ている」なぜなら「愛に住む人は神に住んでおり、神はその人のうちにいる。」とまさしく人類について言われてきた。あなたは、たとえ悪行においてさえ、神の内住の贈り物を苦しめるのである。なぜなら、思考調整者は、人間のその幽閉の心との邪悪な考えの結果に直面せざるをえないのであるから。

3:1.6 (45.1) 神の遍在は、実際には神の無限の性質の一部分である。空間は神格への何の障害も設けない。神は、完全に、しかも、制限なくして、楽園と中央宇宙だけに識別可能に臨場している。神は、ハヴォーナを包囲する創造においてこのようにして、観察可能に臨場しているのではない。神は、時間と空間の宇宙の等位の創造者と支配者の主権と神性特権の認識において直接的、実際の、臨場を限ったのであるから。したがって、神性臨場の概念は、永遠なる息子、無限の精霊、楽園の小島の臨場回路を擁するさまざまの顕現様式と伝送路の双方を許容しなければならない。また、宇宙なる父の臨場と永遠の等位

者と媒体の作用とを見分けることも常に可能というわけではない。等位者と媒体は宇宙なる父の変らない目的の無限の全要件を完全に実現させるのであるから。人格回路と調整者についてはそうではない。ここでは、神は特異に、直接的に、排他的に活動する。

3:1.7 (45.1) 宇宙の制御者は、質量に一致し、この臨場に対する物理的要求に応え、また、万物が神に密着し、神の中にあって成り立つようにする全創造の固有の性質のために常に、また同じ度合いにおいて、宇宙の各部において楽園の小島の重力回路に可能性を秘めて臨場する。同様に、第一根源と中枢は、永遠の未来の創造されていない宇宙の集積所である無条件絶対に潜在的に臨場している。神は、こうして、過去、現在、未来の物理的宇宙を潜在的に瀰漫させる。彼は、いわゆる物質的創造の結合の原初の基盤である。この非精霊神格の可能性は、宇宙活動の舞台への専属媒体の中のどれか一つの説明し難い侵入による物理的生存段階を通じあちこちで顕在化する。

3:1.8 (45.1) 神の心の臨場は、結合の活動者と、すなわち無限の精霊の絶対心と相関関係があるが、それは、有限の創造においては、楽園の熟練の精霊の宇宙心の随所における作用においてよく明察される。ちょうど第一根源と中枢が結合の活動者の心の回路に潜在的に存在しているように、第一根源と中枢は宇宙なる絶対者の緊張感に潜在的に臨場している。しかし、人間の系列の心は、発展する宇宙の神性の聖職活動者である結合の活動者の娘の贈与である。

3:1.9 (46.1) 宇宙なる父の遍在の精霊は、永遠なる息子の普遍的精霊の臨場と神格絶対の永遠の神性可能性の作用と調整される。しかし、創造物の子供の心情においては、永遠なる息子とその楽園の息子の精霊的営みも、無限の精霊の心の贈与も神の内住する断片である思考調整者の直接行動を取り除くようには見えない。

3:1.10 (46.2) 惑星、体制、星座、あるいは宇宙における神の臨場に関しては、いかなる創造上の構成単位におけるそのような臨場の度合いが、崇高なるものの発展的臨場の度合いの尺度である。それは、体制と惑星自体にまで及

ぶ広大な宇宙組織側による全体の神の認識と神への忠誠全体で決定される。したがって、いくつかの惑星が、(または、体制でさえ)、深く精神の暗闇に突っ込んでしまったとき、それらがある意味において隔離されるか、または、より大きい創造単位との交わりから部分的に孤立され、神の貴重な臨場のこれらの局面を保存し、保護する望みが時としてある。そしてこのすべてが、それがユランチアで作用するように、強情で邪な謀反の少数派の離反行為からの孤立の因果関係から、自らを、できる限り救うための世界の多数派の精霊的防護の反応である。

3:1.11 (46.3) 父が、すべての自分の息子--すべての人格--を親らしく回路化する一方で、息子らへの影響は、神格の第二人格と第三人格からのそれらの起源の遠さにより制限され、しかも、息子らの目標到達がそのような段階に近づくにつれ増大する。創造物の心における神の臨場の事実は、神秘の訓戒者などの父の断片の内住の是非により決定されるが、髪の有効な臨場は、これらの内住調整者の滞在している心による協力にふさわしい度合いにより決定される。

3:1.12 (46.4) 父の臨場のばらつきは、神の可変性によるものではない。父は、侮辱を受けたがゆえに隠遁に身をおくのではない。父の愛情は創造物の悪行を理由に遠ざけられはしない。その子供らは、選択力(自己に関係して)が授与されたので、むしろ、その選択の行使において、直接自身の心と魂における父の神性の影響の度合いと限界を決定する。父は、制限も贔屓もせずに自分自身を自由に我々に贈与した。父は、人々、惑星、体制、または宇宙を差別するものではない。時間の領域において、父は、七重の神の機能の楽園の人格にだけ、有限宇宙の等位創造者に異なる名誉を贈る。

2. 神の無限の力

3:2.1 (46.5) 全宇宙が、「全能にして主なる神は君臨する。」ということを知っている。この世界と他の世界の問題は、神により監督される。「神は天の軍勢と地に住むものの中にあって自分の意のままにあしらう。」「神によらない力はない」というのは永遠に真実である。

3:2.2 (46.6) 神性と矛盾しない領内においては、「神には、全てが可能である」というのは文字通り真実である。民

族、惑星、および宇宙の延々と続く進化の過程は、調和して秩序よく、また、神のすべてに賢明な計画を保ちつつ、宇宙の創造者と行政者の完全な支配下にあり、宇宙なる父の永遠の目的に合致して展開する。ただ1人の立法者しかいない。宇宙なる父は、空間において世界を支え、永遠の回路の無限の円周において宇宙を回す。

3:2.3 (47.1) その全能性は、特に物質的宇宙に行き渡っているように、すべての神性属性の中で最もよく理解されている。精霊的でない現象として見るならば、神はエネルギーである。物理的事実のこの表明は、第一根源と中枢が全空間の普遍的な物理現象の第一原因であるという不可解な真実に基づいている。この神の営みから、すべての物理的エネルギーと他の物質的兆候が引き出される。光、すなわち、熱を伴わない光は、神格の非精霊的顕現の一つである。そして、まだ、ユランチアにおいては実際には知られていない非精霊のエネルギーの別の型がある。それはまだ認識されてはいない。

3:2.4 (47.2) 神はすべての力を制御する。神は「稲光のために道」を作った。すべてのエネルギーの回路を定めた。す

べての型のエネルギーと物質の顕現の時間と方法を命じた。そして、これらのすべてのことが、いつまでも神の永遠の把握を、--楽園の下を中心とした重力支配を、--持続する。永遠の神の光とエネルギーは、その結果、雄大な回路の、すなわち、宇宙の中の宇宙を構成する星の大群の終わりのない、だが、整然たる列の周りを絶えず揺れ動く。すべての創造は、万物と生物の楽園-人格の中心を永遠に回る。

3:2.5 (47.3) 父の全能は、物質、心、精霊の3種類のエネルギーが、区別のつかないほどとても父に近いところ--万物の根源--にある絶対段階の遍在支配に関係がある。楽園のモノタでも楽園の精霊でもない創造物の心は、宇宙の父には直接反応しない。神は、不完全の心に適応する--思考調整者を通してユランチアの人間と共に。

3:2.6 (47.4) 宇宙なる父は、一時的な原始の力でも、移動する力でも、変動するエネルギーでもない。父の力と英知は、宇宙のありとあらゆる緊急事態に対処するよう完全に適している。人間の経験に非常事態が発生するとき、父はそれらについてすべて見通しており、したがって、

宇宙の問題に離れた態度で反応するのではなく、むしろ永遠の知恵の命令と一致して、また、無限の判断の命令と調和して反応する。外観はどうであれ、神の力は宇宙の中で盲目の力として機能してはいない。

3:2.7 (47.5) 非常時の決定がなされたと、自然法が中断されたと、誤った適合が認識されたと、そして、状況を正す努力がなされたと見える状況が起こる。だが、そうではない。神についてのそのような概念は、あなたの観点の限られた範囲に、あなたの理解の有限性に、およびあなたの概観の限局される範囲にそのような概念の起源がある。神についてのそのような誤解は、あなたが、領域のより高い法の存在、父の性格の偉大さ、その属性の無限性、およびその自由な意志性の事実に関して享受する甚だしい無知によるものである。

3:2.8 (47.6) 神の精霊が内住する空間宇宙のあちこちに散在する惑星創造物は、数と体制においてほとんど無限で、知力は非常に異なり、心には限界があり、また時々粗野であり、それらの構想は縮小され、局所化されるので、父の無限の属性について適切に表現し、同時にこれらの創

造された知力あるものにとり少しも理解できない法律の一般化を構築することはほとんど不可能である。したがって、創造物であるあなたにとって、全能の創造者の行為の多くは、任意で、離れた、しかもしばしば無情で冷酷に思える。しかし、再度私は、これが本当でないことをあなたに断言する。神の行いはすべて、目的をもち、理に適ったおり、賢明で、親切であり、また、常に特定のもの、特定の人種、特定の惑星に対しての全体の幸福に対して永遠に思いやりがあるわけではない。特定の宇宙に対してでさえも。しかし、それらは、最も低いものから最も高いものまでの関係するすべての福祉と最善のためである。部分的繁栄は、新紀元においては、たまに全体的繁栄とは異なって見えるかもしれない。永遠の循環においては、そのような明白な違いは実在しない。

3:2.9 (48.1) 我々は全員が、神の家族の一員であり、そのために、時として家族規律を共有しなければならない。我々を妨害し、混乱させる神の行為の多くは、すべての知恵の決定と最終決定の結果である。すべての知恵の決定と最終決定は、結合の活動者が無限の心の絶対確実な意志の選択を実行するために、すなわち、人格の見渡し、構

想、および気遣いが広大かつ広範囲にわたるすべての創造の最高かつ永遠の福祉を迎え入れる完全な人格の決定を実施するために権限を与える。

3:2.10 (48.2) その結果、それは、あなたの繋がりのない、部分的で、有限で、粗野の、そして、非常に実利主義的観点と、あなたの性質に固有の限界が、あなたには押しつぶすそのような残酷さを孕んでいるように見える、そして、あなたの仲間の創造物の安らぎと福祉への、惑星の幸福と個人の繁栄へのそのような全くの無関心によって特徴付けられるように思える神性行為の多くの英知と思いやりをあなたが、見たり、理解したり、あるいは、知ることができないそのような不利な条件の構成要素となる。あなたが神の動機を誤解し、目的を曲解しているということ、それは、人間の視覚の限界のためであり、それは、あなたの限界的理解と制限的理解のためである。しかし、進化の世界においては宇宙なる父の人格的行為ではない多くのことが起こる。

3:2.11 (48.3) 神性の全能は、神の人格の他の属性と完全に調整されている。通常、神の力は、その宇宙の精霊的な顕

現が3種類の状態か状況によって制限されているに過ぎない。

3:2.12 (48.4) 1. 神の性質による、特にその無限の愛による、真と美と善による。

3:2.13 (48.5) 2. 神の意志による、慈悲の聖職活動と宇宙の人格との父親らしい関係による。

3:2.14 (48.6) 3. 神の法による、永遠の楽園の三位一体の公正と正義による。

3:2.15 (48.6) 神は力においては限りなく、性質においては神性で、意志においては確定的で、属性においては無限で、英知においては永遠で、現実においては絶対である。しかし、宇宙なる父のこれらのすべての特性は、神格に統一されており、楽園の三位一体と三位一体の永遠なる息子に普遍的に明示されている。そうでなければ、楽園とハヴォーナの中央の宇宙の外においては、神に属するすべては、究極の究極にいたる臨場によって条件づけられ、また、神格、普遍、無条件の実存的３絶対者よ

って調整される。神の臨場は、それが神の意志というものであるのでこのように制限される。

3. 神の普遍的知識

3:3.1 (48.8) 「神はすべてを知っている。」神性の心は、すべての創造の考えを承知しており、それに精通している。出来事に関しての知識は普遍的で、完全である。神から出て行く神性の存在体は神の一部である。また、「雲のつりあいをとる」神は、また「完全な知識をもつ。」「主の目はどこにでもある。」取るに足りない雀について「そのうちの一羽も私の父が知らずして地に落ちることはない、」そして、また、「あなたの頭の毛までも数えられている。」「神は星の数を教える、それらのすべてをそれぞれの名前で呼ぶ。」とあなたの偉大な教師は言った。

3:3.2 (49.1) 宇宙なる父は、すべての宇宙で唯一実際に空間の星と惑星の数を知る人格である。あらゆる宇宙のすべての世界は絶えず神の意識の中にある。また、神は言う。「私は民の悩みを確かに見、民の叫びを聞き、そして、それらの痛みを知っている。」「主は天から見られるの

で。主は人のすべての息子を見る。その住まいの場所から、地に住むすべてのものに目を注がれる。」すべての創造物の子は、心から言うかもしれない。「神は私が行く道を知っており、私を試されたあと、私は金のように出て来るであろう。」「神は我々の座るのも立つのも知っている。神ははるか彼方で我々の考えを分かっており、我々のすべてのやり方に詳しい。」「我々が共にしなければならない方の目には万事が裸であり、露にあらわにされている。」そして、「神はあなたの成り立ちを知っている」と理解するのは、すべての人間にとっての本当の安らぎのはずである。神は、あなたが塵であることを知っている。」イェススは、生きている神について話し、「あなたの父は、あなたが尋ねる前にさえ、あなたが何を必要としているかを知っている。」と、言った。

3:3.3 (49.2) 神にはすべてのことを知る無限の力がある。神の意識は宇宙全般にわたる。神の人格回路は、すべての人格を取り囲み、下位の創造物に関する知識でさえ、間接的には神性なる息子の下降する系列を通し、直接的には

内住の思考調整者を通して補われる。その上、無限の精霊は、絶えずいたる所に臨場する。

3:3.4 (49.3) 我々は、神が罪に基づく事件をあらかじめ知ることを選ぶか否かについては全体的には確信していない。しかし、もし神が我が子らの自由意志ををあらかじめ知るとしても、そのような先見は子らの自由を少しも無効にはしない。1つの事が確かである。神は決して驚かない。

3:3.5 (49.4) 全能は、することができないことを、神らしくない行為をする力を含意しない。また全知は、知ることができないことを知ることを含意しない。しかし、そのような声明を有限の心に分かりやすくすることは、ほとんどできない。創造物は、創造者の意志の範囲と限界をほとんど理解することができない。

4. 神の無限性

3:4.1 (49.5) 宇宙創造の際のその宇宙への自分自身の連続的贈与は、神格の主たる人格に住み、休息し続けるとき、力の可能性、あるいは知恵の蓄えを決して減少させない。父は、楽園の息子への、下位的創造への、およびそのさ

まざまの創造物への自分自身の無制限の贈与の結果として原始力、知恵、愛の可能性において、自身の所有物の何かを決して減少させたりはしなかったし、その栄光ある人格のいかなる属性も奪われはしなかった。

3:4.2 (49.6) あらゆる新しい宇宙の創造は、重力の新たな調整を必要とする。しかし、たとえ創造が、物質的創造が制限なくして存在するために、無期限に、永遠に、無限にさえ続いたとしても、やがて、楽園の小島において休息する力の支配と調整は、そのような無限の宇宙の統制、支配、調整に依然として等しいと、また適切であると分かるであろう。また、広大な宇宙への限りない原始力と力のこの贈与後に、無限者には同程度の原始力とエネルギーが加えられるであろう。無条件絶対者は、まだ減少されているであろう。神は、まるで原始力、エネルギー、力が、幾つもの宇宙への贈与のために一度も注ぎ出されたことがないかのようにまだ同じ無限の可能性を所有するであろう。

3:4.3 (50.1) 英知についてもそうである。心が領域の考えに自由に行き渡るという事実は、決して神性の英知からの中

心的根源を貧困にするものではない。宇宙の数が増えるにつれ、領域の存在体の数は、理解の限界範囲にまで増え、もし心が、上位と下位の状況にあるこれらの存在体に果てしなく贈与され続けると、まだ神の中央人格は、同じ永遠の、無限の、そして、すべてに賢明な心を抱き続けるであろう。

3:4.4 (50.2) あなたの世界と他の世界の男性と女性に内住するために精霊の使者を送り込むという事実は、神性かつ全能の精霊人格として作用する神の能力を少したりとも減じるものではない。そして、神が送り出すことができ、送り出すかもしれないそのような精霊訓戒者の範囲あるいは数にはもちろん何の限界もない。創造物へ自分を差し出すこの付与は、神に贈与されたこれらの人間のための進歩的で連続的生命の限りない、ほとんど考えも及ばない未来の可能性を創造する。そして、聖職の役目を果たすこれらの精霊の存在体としてのこの惜しみない自分自身の分配は、全賢、全知、全能の父の人格に休息する真実と知識の知恵と完全性を少しも減少させるものではない。

3:4.5 (50.3) 時間の人間には未来がある、ところが、神は永遠に居住する。私は、神格のまさに住居近くの出身であるけれども、あえて神性の多くの属性の無限に関する理解を完全に話すことはできない。唯一心の無限だけが、存在の無限と動作の永遠を完全に理解することができる。

3:4.6 (50.4) 人間には天の父の無限をとても知ることはできない。有限の心はそのような絶対真理、あるいは事実を通して考えることができない。しかし、この同じ有限の人間は、実際にそのような無限の父の愛の完全で非減少の衝撃を感じる--文字通り経験する--ことができる。経験の質が無制限であり、そのような経験量は、人間の精霊的感受性の潜在力により、また、代わりに父を愛する関連能力により厳密に制限されるが、とはいえ、そのような愛には本当に経験が可能である。

3:4.7 (50.5) 無限の資質についての有限の評価は、人間が神の姿に作られている--無限の断片が人間の内側に生きている—という事実のために、創造物の論理的には限られた能力をはるかに超える。したがって、人の神への最も近くて最も親愛な接近は、愛により、また愛を通してであ

る。神は愛であるが故に。そして、そのような特異な関係のすべてが、宇宙社会学の実際の経験、創造者-創造物間の関係である。—父-子の間の愛情。

5. 父の崇高なる支配

3:5.1 (50.6) 宇宙なる父は、後ハヴォーナ創造との接触において、直接通達により自身の無限の力と最終的権威を行使するのではなく、むしろ息子と息子らの下位の人格を通して行使する。神は自分の自由意志でのこのすべてをする。そして、もし機会が生じるならば、もしそれが神性の心の選択になるならば、委任されるありとあらゆる力は、直接に方向づけられることができるであろう。しかし、原則として、そのような行為は、神性の信頼を満たすことを委任された人格の失敗の結果行われるに過ぎない。こうしたときに、そのような時や不履行に直面の際に、また、神性の力と可能性の保留の限界内において、父は、独自に、しかも、自身の選択による命令に合致して行動する。そして、その選択は常に変わることのない完全性と無限の英知のひとつである。

3:5.2 (51.1) 父は息子を介し統治する。父の広大な領域の進化する球体の目標を方向づける惑星王子に終わる連綿と下方に続く支配者の系統が、宇宙組織全体にはある。次のように主張するのは単なる詩的表現ではない。「地とそれに満ちているものとは主のものである。」「神は王を廃し、王を立てる。」「いと高きものは人の王国を支配する。」

3:5.3 (51.2) 宇宙なる父は、人の心の問題においていつも意のままにできるわけではない。しかし、惑星の行政と目標において、神性の計画は広がっている。英知と愛の永遠の目的は勝利を収める。

3:5.4 (51.3) イェススは言った。「それらを私に与えてくださった私の父は、すべてにまさるのである。そして、だれも私の父の手からそれらをむしり取ることはできない。」あなたが、神の無限に近い創造の多種多様の働きを垣間見たり、その驚異的広大さを眺めるとき、あなたは神の卓越性の概念にためらうかもしれないが、万物の楽園の中心に永遠にしっかりと王位につく、また、すべての知的な存在体の慈悲深い父としての神の受け入れに

あなたは失敗すべきではない。「すべての上に、また、すべての中にいる唯一の神、すべての父」しかおらず、「そして、その方は万物よりも先にあり、万物はその方にあって成り立っている。」

3:5.5 (51.4) 生命の不確実性と生存の有為転変は、いかなる方法によっても神の普遍の主権の概念に矛盾することはない。すべての進化の創造物の生命は、ある必然性に悩まされる。次のことを考えなさい。

3:5.6 (51.5) 1. 勇気--強い性格--は、望ましいか。ならば、人は苦難に立ち向かうこと、そして、失望に反応することを必要とする環境で育てられなければならない。

3:5.7 (51.6) 2. 利他主義--仲間への奉仕—は、望ましいか。ならば、人生経験は社会的不平等の状況に遭遇に備えなければならない。

3:5.8 (51.7) 3. 望み--信用の壮大さ--は、望ましいか。ならば、人間の生存は絶えず不安感と再発する不確実性に直面しなければならない。

3:5.9 (51.8) 4. 信仰--最高の主張による人間の思考--は望ましいか。ならば、常に、人の心が信じることができるよりも少なく知るその厄介な立場にいる心自身を見つけなければならない。

3:5.10 (51.9) 5. 真実の愛とそれが導くところはどこへでも行く意欲は望ましいか。ならば、人はいつも誤りがあり、虚偽が可能である世界に成長しなければならない。

3:5.11 (51.10) 6. 理想主義—神性の迫りくる概念--は、望ましいか。ならば、人は相対的な善と美の環境において、つまり、より良いものへの抑えきれない努力を刺激する環境において奮闘しなければならない。

3:5.12 (51.11) 7. 忠誠心--最も高い義務に対しての専念--は望ましいか。ならば、人は裏切りと放棄の可能性の真っ只中で存続しなければならない。義務に対する専念の果敢さは言外の不履行の危険性の中にある。

3:5.13 (51.12) 8. 無私--無私無欲の精神--は、望ましいか。ならば、人間は認識と名誉のために不可避の自己の絶え間のない怒号に直面して生きなければならない。人は、見捨

てる何らの自己生命がないならば、活発に神性生命を選ぶことはできないであろう。もし対比により善を高め、また、識別するための何の潜在的悪がないならば、人は、決して正義を掴むことはできないであろう。

3:5.14 (51.13) 9. 喜び--幸福の満足感--は、望ましいか。それならば、人は痛みの代替物と苦しみの公算が、遍在の、経験上の可能性としてある世界に住まなければならない。

3:5.15 (52.1) 宇宙全体にわたり、あらゆる部隊が全体の一部と見なされる。部分の生存は、全体の計画と目的との協力に、つまり父の神性意志をするという心からの願望と完全な意欲に依存している。誤り(賢明でない判断の可能性)のない唯一の進化世界は、知性に自由のない世界であろう。ハヴォーナ宇宙には完全な住民のいる10億の完全な世界があるが、進化する人間が、自由であるならば、誤りを犯しやすいに違いない。自由で未経験な知性は、最初は一様に賢明であるはずがない。誤った判断(邪悪)の可能性は、人間の意志が周到な背徳判断を意識的に是認したり、故意に迎え入れるときにのみ、罪になる。

3:5.16 (52.2) 真、美、善の完全な鑑賞眼は、神性宇宙の完全性に本来備わっている。ハヴォーナ世界の住民は、刺激のための選択としての相対的価値水準の可能性を必要としない。そのような完全な存在体は、すべての対照的かつ思考を強いる道徳的状況にないとき、善を識別し、選ぶことができる。しかし、そのようなすべての完全な存在体は、特性と精霊的状態に関しては、存在事実の理由から彼らは今そうあるのである。それらの存在体は、自身に固有の状態の範囲内においてのみ経験的に前進をもたらした。必滅の人間は、自身の信仰と望みにより上昇候補としての自身の地位さえ獲得する。人間の心が把握し、人間の魂が獲得するところの神性であるすべてのものは、体験的到達である。それは、個人的な経験の現実であり、それゆえ、ハヴォーナの間違いのない人格の内在する善と正義とは対照的に、独自の所有物である。

3:5.17 (52.3) ハヴォーナの創造物は、生来勇敢であるが、人間の意味する勇敢ではない。それらは、本質的に親切で思いやりがあるが、人間的にはとても愛他的ではない。それらは、快い未来を期待しているが、進化する不確実な球体の信じて疑わない人間の洗練された手段において

は前途有望ではない。ハヴォーナの創造物は、宇宙の安定性を信じるが、それによって動物の状態から楽園の入り口へと登るその救いとなる信仰には全く不案内な者たちである。それらは、真実が好きであるが、その魂を救っている資質については何も知らない。それらは、理想主義者であるが、そのように生まれたのである。それらは、そのような恍惚をそう快な選択によっては全く知りえるないのである。ハヴォーナの創造物は忠誠であるが、不履行への誘惑に直面して、義務への心からの、また理にかなった献身からの身震いを一度も経験したことがなかった。寡欲であるが、好戦的な自己の堂々たる征服によるそのような経験段階に決して達しなかった。それらは、喜びを味わいはするが、痛みの可能性からの快楽逃避の甘味を理解はしない。

6. 父の首位

3:6.1 (52.4) 宇宙なる父は、神性の無私無欲、つまり完璧な寛大さゆえに、権威をあきらめ、力を委譲するが、依然として首位である。普遍の領域の情況の強力な梃の上に宇宙なる父の手がのっている。宇宙なる父は、すべての最終的決定を留保してきたし、また、広げられ、渦巻き、

絶えず旋回している創造の福祉と目標に対し挑戦し難い権威をもって自己の永遠の目的である拒否のための全能の笏を的確に行使する。

3:6.2 (52.5) 神の主権には制限がない。それはすべての創造の根本的事実である。宇宙は必然的なものではなかった。宇宙は偶然でもなく、独立的存在でもない。宇宙は、創造の作業結果であり、したがって、完全に創造者の意志に従属している。神の意志は、神性真理、生ける愛である。したがって、完成しつつある進化的宇宙の創造は、善--神性への接近により、潜在的悪--神性からの遠さによって特徴づけられる。

3:6.3 (53.1) すべての宗教哲学は、遅かれ早かれ、統一された普遍的規則の、一神の概念に到る。宇宙の原因が、宇宙の結果より低いはずがない。宇宙生命の流れと宇宙心の源は、それらの顕現の段階を超えているに違いない。人間の心は、あくまでも下方の存在系列の観点からは説明することはできない。人の心は、本当に、思考と目的ある意志のより高い系列の現実を認めることによってのみ真に理解されることができる。必滅の存在体としての人

間は、宇宙なる父の現実が認められない限り説明しがたい。

3:6.4 (53.2) 機械学的な哲学者は、普遍的で主権の意志についての考えを、つまり、深く畏敬する宇宙法の綿密な仕上げにおけるその活動のまさにその主権の意志についての考えを拒絶することを公言する。機械論者が自動で自明であるそのような法を着想するとき、何と意図されない敬意を払っていることか。

3:6.5 (53.3) 内住する思考調整者の概念を除いては、神を人間化するということは大きな失態であるが、それでさえ第一の偉大な根源と中枢についての考えを完全に機械化するほどには愚かではない。

3:6.6 (53.4) 楽園の父は苦しむか。私は知らない。人間がするように、創造者たる息子は、間違いなく苦しむことができるし、時として苦しむ。永遠なる息子と無限の精霊は、変更された意味に悩む。私は、宇宙なる父は苦しむと考えるものの、どのようにかは理解できない。おそらくは、人格回路を通じて、または、思考調整者と宇宙なる父の永遠の性質の他の贈与の人格を通して。宇宙なる

父は、「あなたのすべての苦悩に、私は苦しめられる。」と人類について言った。宇宙なる父は父親らしく、同情的な理解を確かに経験する。宇宙なる父は本当に苦しむかもしれないが、私はその本質を理解はしない。

3:6.7 (53.5) 宇宙の中の宇宙の無限と永遠の支配者は、力、型、エネルギー、過程、原型、原理、臨場、それに理想化された現実である。しかし、彼は、それ以上である。彼は人格的である。彼は主権の意志を行使し、神性の自意識を経験し、創造的な心の命令を実行し、永遠の目的実現の満足感を追求し、自分の宇宙の子供らへの父の愛と情愛を表す。そして、父のこれらのすべての、より人格的な特色は、あなたの創造者たる息子であるマイケルの贈与の生涯において、肉体を与えられユランチアにいた間に、明らかにされたようにそれらを観測することでより解釈することができる。

3:6.8 (53.6) 父なる神は人を愛している。息子なる神は人に仕える。精霊なる神は、精霊なる神の恩寵の聖職活動を通しての息子なる神に定められた方法により宇宙の子供ら

を父なる神を見つけるための上昇し続ける冒険へと奮い立たせる。

3:6.9 (53.7) [宇宙なる父の顕示の提示に割り当てられた神性顧問である私は、神格属性についてのこの声明を推進してきた。]

論文 4
宇宙との神の関係

4:0.1 (54.1) 宇宙なる父には、宇宙の中の宇宙の物質的、知的、精霊霊的な現象に属する永遠の目的があり、その目的は、ずっと自身が実行に移している。神は、自由で至上の自らの意志で宇宙を創造し、すべてに賢明で永遠の自らの目的に従ってそれらを創造した。楽園の神格と最高位のその仲間を除く誰かが、神の永遠の目的に関し深く知っているかどうかは疑わしい。楽園の喜びに満ちた公民でさえ、神格の永遠の目的の性質に関する非常にさまざまの意見を保持する。

4:0.2 (54.2) ハヴォーナの完全な中央宇宙を創造する目的が純粋に神性の満足であったと推論するすることは、容易いことである。ハヴォーナは、他のすべての宇宙のための

原型創造として、また時間の巡礼者のための教養学校として楽園への途中で役立つかもしれない。しかしながら、そのような崇高的創造は、主として、完全で無限の創造者の喜びと満足のために存在しなければならない。

4:0.3 (54.3) 進化的人間の完成を目指すという、また、それらの楽園到達と終局者部隊到達後に、明かされていない今後の活動に向けてのさらなる訓練の提供するという驚くべき計画は、現在のところ、7超宇宙とそれらの多くの再区分領域の主要な関心事の1つであるらしい。しかし、時間と空間の人間を精霊的にし、訓練するためのこの上昇計画は、決して宇宙有識の限定的業務ではない。たしかに、時間を占領し、天の部隊のエネルギーを取りつける他の多くの魅力ある活動が存在するのである。

1. 父の宇宙への態度

4:1.1 (54.4) 長い間、ユランチアの住民は神の摂理を誤解してきた。あなたの世界には神の働きの摂理があるが、それは多くの人間がそれを発想してきた子供じみた、気まぐれの、そして、物質的な聖職活動ではない。神の摂理は、神の名誉のためと宇宙の子供の精霊的前進のため

に、宇宙法に従い、絶えず働く天の存在体と神性の精霊の連動活動で成る。

4:1.2 (54.5) あなたは、あなたが、神の人の扱いの概念において宇宙の合言葉が進歩であると認めるその段階へと進むことができないのか。長い時代を通じて、人類は、その現在の位置に達するように戦ってきた。これら何千年の間、大神は進歩的発展の計画を成し遂げてきた。2つの考えは、実際のところ対立してはおらず、単に人の誤った概念にすぎない。神の摂理は決して人間の真の進歩の、一時的、または精霊的のいずれでも、相反して配置してはいない。摂理は、崇高の立法者の不変かつ完全な性質と常に一致している。

4:1.3 (55.1) 「神は誠実であり、」「神のすべての戒律は正しい。」「神の誠実さはまさしくその空に確立される。」「主よ、とこしえに、あなたの言葉は天において定まっている。あなたの誠実さは世々に至ります。「あなたは地を据えたので、地は固く立っています。」「神は誠実な創造者である。」

4:1.4 (55.2) 父が自分の目的を支え、自分の創造物を維持するために用いるかもしれない原始力と人格には制限がない。「永遠の神は、我々の避難所であり、永遠の腕が下にある。」「いと高きものの隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。」「視よ、我々を守る方は眠ることもなくまどろむこともない。」「我々は、万事が神を愛するものたちにとって益となるように共に働くということを知っている、」「というのも、主の目は義人たちに注がれ、主の耳はそれらの祈りに傾けられているから。」

4:1.5 (55.3) 神は「自分の力ある言葉をもって万物」を保っている。そして、新世界が生まれるとき、神が「息子を送られ、そして世界が創られます。」神は創造するだけではなく、「それらを皆、守ります。」神は、物質であるものすべてと精霊であるものすべてを絶えず支える。宇宙は永遠に安定している。見かけの不安定性のただ中に安定性がある。星明りの領域のエネルギ一変動と物理的大変動の真っ只中には内在する秩序と安全性がある。

4:1.6 (55.4) 宇宙なる父は、宇宙の管理から引き下がらなかった。宇宙なる父は、不活発な神格ではない。神がすべて

の創造の現在の支持者を退くならば、宇宙崩壊が即刻生じるであろう。神がいなければ、現実というようなものはないであろう。今この瞬間に、過去のかけ離れた時代と永遠の未来におけるように、神は、支え続ける。神性の手の届く範囲は、永遠の回路の周りで拡大している。宇宙は、動くだけ動いて後は動けなくなってしまう時計のようには巻かれない。万物は絶えず新たにされている。父はエネルギー、光、生命を絶えず注ぎ出している。神の業は文字通りであり、同時に精霊的である。「神は北を虚空に張り、地を何にもない上に掛けられる。」

4:1.7 (55.5) 私の系列の存在体は、究極の調和をつかみ、宇宙管理の通常業務において遠大かつ深遠な調整を見つけ出すことができる。人間の心には支離滅裂で場当たりに見える多くが、私の理解するところでは、秩序があり建設的に見える。しかし、私が完全には理解しない非常に多くのことが宇宙には起きている。私は、長い間、地方宇宙と超宇宙の認識された原始力、エネルギー、心、モロンチア、精霊、人格に多少なりとも精通した学生である。私は、どのようにしてこれらの媒体と人格が機能す

るかについて全面的な理解があり、壮大な宇宙の信任された精霊有識者の作業に深く通じている。宇宙現象に関する自己の知識にもかかわらず、私は完全に推測することができるというわけではない宇宙の反応に絶えず直面している。私は、私が満足に説明できない原始力、エネルギー、識者、精霊の相互関係からの明らかに思いがけない企みに絶えず遭遇している。

4:1.8 (55.6) 私には、宇宙なる父、永遠なる息子、無限の精霊、それにかなりの程度まで楽園の小島の機能に直接起因する全現象の働きをはっきりと辿ったり、分析するだけの完全な能力がある。私の当惑は、それらの神秘的な等位者、可能性の３絶対者の履行であるらしい遭遇によってもたらされる。これらの絶対者は、物質に取って代わり、心を超え、精霊を付加して起こるように思える。私は、無条件絶対者、神格絶対、宇宙なる絶対者の臨場と履行によるものとするこれらの複雑な相互作用を理解できないことに絶えず混乱し、しばしば当惑している。

4:1.9 (56.1) これらの絶対者が、広く宇宙において完全には明らかにはされない臨場、空間の潜在性からくる現象にお

いて、また他の超究極の機能において、崇高の調整と究極の価値を伴う複雑な現実状況でなされる要求に力、概念、または精霊の基本原理が、まさにどのように応じるかに関し、物理学者、哲学者、または宗教家にとってさえ確信ある予測を不可能にさせる臨場であるに違いない。

4:1.10 (56.2) また、宇宙の出来事全体の織物の基礎となるように思える時間と空間の宇宙における有機的な統一がある。進化する崇高なるものの、この生きた臨場は、映し出された不完全のこの内在性は、不可解にも時々、見た目には関係のない宇宙の出来事の驚くほどに偶然の連携であるらしいものに呈する。これは摂理の働きであるに違いない--崇高なるものと結合の活動者の領域。

4:1.11 (56.3) 私は、物理的、精神的、道徳的、精霊的な現象のそのような多彩で表面上は絶望的に混乱状態の寄せ集めを引き起こす宇宙活動の全局面の調整と相互関係に関わる広範囲の、一般的には認知できないこの制御が、神の栄光と人と天使の利益のために実に間違いなくなんとか解決をもたらすと信じる傾向にある。

4:1.12 (56.4) だが、より大きい意味においては、宇宙の見かけ上の「出来事」は、確かに、絶対者の永遠の操作における無限者の時-空の冒険の限界ある劇的事件の一部である。

2. 神と自然

4:2.1 (56.5) 自然とは、狭い意味において神の物理的傾向である。神の行為、または活動は、地方宇宙、星座、体制、または惑星の実験計画と進化様式により制限され一時的に変更される。神は、大きく広がる主たる宇宙全体において明確で安定した不変の法に従って活動する。しかし、神は、有限者の進化的展開上の企画の局部的目的、ねらい、計画に従って各宇宙、星座、体制、惑星、人格の調整し、均衡のとれた行為に貢献するよう自分の活動の形態を変更する。

4:2.2 (56.6) したがって、人がそれを理解するとき、自然は、不変の神格の基礎となる土台と基本的背景とその不変の法則を提示し、地方宇宙、星座、体制、それに惑星の原始力と人格により開始され運営されてきた局部の計画、目的、様式、および状況の機能ために変動し、また、そ

れを通じて激動を経験した。例えば: それは、神の法がネバドンで定められたように、この地方宇宙の創造者たる息子と創造者の精霊により確立される計画によって変更される。そして、これらの法則の運用は、このすべてに加え、あなたの惑星に居住しており、あなたのサタニアのすぐ隣の惑星の体制に属する特定の存在体の誤り、不履行、および暴動によりなお一層影響されてきた。

4:2.3 (56.7) 自然は、時間空間における宇宙の2要素からくる。1番目は楽園の神格の不変性、完全性、公正さ、2番目は、実験計画、行政の失態、暴徒の誤り、開発の不備、および最高位から最下位までの楽園以外の英知の不完全さ。したがって、自然は、永遠の回路から均一、不変、雄大、かつ驚くべき糸を運んでいる。しかし、各宇宙、各惑星、そして個々の生命において、この自然は変更され、制限され、おそらくは、進化する体制と宇宙の創造物の行為、誤り、また不忠により損なわれる。そこで、自然は、常に変化する傾向にあり、加えて気まぐれであり、下は安定しているとはいえ、地方宇宙の操作手順に従って異なっている。

4:2.4 (57.1) 自然は、未完の宇宙の不完全さ、悪、および罪により割られる楽園の完成である。この商は、それゆえ完全なものと部分のものの双方、永遠なものと一時的なものの双方を表現している。継続する進化は、楽園の完全性の内容の増大により、また相対的現実の悪、誤り、不調和の内容の減少により自然を変更する。

4:2.5 (57.2) 神は、自然の中には、あるいは、いかなる自然の力のいずれにも臨場していない。なぜなら、自然現象は、神の普遍的法則の楽園基盤への進歩的発展の不完全さと、時として、暴動を好む反逆の結果の付加であるがゆえに。自然は、ユランチアのような世界に現れるとき、すべてに賢明で無限である神の適切な表現、すなわち真の表示、忠実な描写であるはずがない。

4:2.6 (57.3) あなたの世界において自然は、地方宇宙の進化計画による完全性からくる法の必要条件である。神が充満させている自然は、制限され、条件づけられたているのであるが故に、また、普遍的で、したがって、神性である力の局面があるので、自然を崇拝するというのはなんという茶番劇であることか。自然もまた、秩序然たる進

化における宇宙実験の進歩、増大、前進からの未完の、不備の、不完全な効果の現われである。

4:2.7 (57.4) 自然界の明らかな欠陥は、神の特質における何か相当するそのような欠陥を示してはいない。むしろ、そのような観測される不完全さは、単に絶えず移動する無限の映画化の一巻の展示における必然の停止瞬間にすぎない。それは、物質の人間の有限の心にとり時間と空間において神性現実のはかない一瞥を捕らえることを可能にする完全性連続の他ならぬこれらの欠陥的中断である。人間は、単に自然の目を通して、モロンチアモタによる、あるいは、時間の世界のその補正代用品である顕示の助けを受けない人間の視力により現象を見ることに固執するので、人の進化する心にとり、神性の物質的顕現は、欠陥があるようである。

4:2.8 (57.5) 自然の一部ではあるものの時間においては自身の醜さをもたらした無数の創造物の反逆、不正行為、誤った考えにより自然は損なわれ、その美しい顔には傷跡を残され、その容貌はひからびている。いや、自然は神でない。自然は崇拝の対象ではない。

3. 神の不変の特質

4:3.1 (57.6) 人は、あまりにも長い間、自分に似たものとして神を考えてきた。神は、決して宇宙の中の宇宙の人間に、あるいはいかなる他の存在体にも嫉妬しないし、過去においてもしなかったし、未来においてもしないであろう。創造者たる息子が、人に惑星創造の傑作になることを、全地球の支配者となることを意図したということを知っているので、人が自身のより劣性の情熱に支配される様子、木、石、金、および利己的野心の偶像を崇拝する光景、--これらの見苦しい場面は、神とその息子たちが、決して人に嫉妬するのではなく、人に対して一途に心を配るよう喚起する。

4:3.2 (57.7) 永遠の神には、これらの人間の感情という意味における、また人がそのような反応を理解するような怒りと憤怒は不可能である。これらの感情は卑怯で、卑劣である。それらは、人間らしいと呼ばれるにはほとんどふさわしくなく、まして神性ではない。そして、そのような態度は、宇宙なる父の完全な性質と恵み深い特徴とは全く無関係である。

4:3.3 (58.1) ユランチアの人間が神を理解するにあたっての苦労の非常に多くは、ルーキフェレーンスの反逆とカリガスティアの裏切りの広範囲におよぶ影響のためである。罪によって隔離されていない世界においては、進化する民族は、宇宙なる父についてはるかに良い考えを策定することができる。それらは、概念の混乱、ひずみ、およびこじつけにあまり苦しまない。

4:3.4 (58.2) 神は、自分がしたこと、今すること、もしくはこれからすることに何も悔いることはない。神はすべてに賢明であり、全能である。人の知恵は、人間の経験からくる試練と誤りから生まれる。神の知恵というものは、宇宙に向けての無限の洞察力の無条件の完全性にあり、この神性の先見は創造的な自由意志を効果的に方向づける。

4:3.5 (58.3) 宇宙なる父は、決してその後の悲しみ、あるいは後悔を引き起こす何事もしないが、中心から離れた宇宙の創造者の人格により計画し、作る意志をもつ創造物は、自らの不幸な選択により、時として創造者の両親の人格の中の神性の悲しみの感情に見舞われる。しかし、

父は、間違いをしたり、痛恨の念を抱いたりせず、悲しみも経験しないものの、父の愛情をもつ存在体であり、そして、子らが宇宙の精霊的到達計画と人間の宇宙上昇方針によってそれほどまでに自由に与えられてきた援助により到達可能な精霊段階に達し得ないとき、父の心は違うことなく悲嘆にくれるのである。

4:3.6 (58.4) 父の無限の善は、時間の有限の心のを解を超えている。したがって、相対的善の全局面の効果的提示のために非絶対的悪(罪ではない)との対比が常になければならない。神性の善の完全性は、ただ空間の動きにおける時間と物質との関係における相対的不完全性との対照的関係があるという理由だけで、人間の洞察の不完全さによって明察が可能である。

4:3.7 (58.5) 神の特徴は、無限に超人的である。したがって、神性のそのような性質は、人の有限の心により信仰把握が可能である前にさえ、神性の息子として人格化されなければならない。

4. 神の実現

4:4.1 (58.6) 外側、向こう側、過去、未来をもたない神は、宇宙の中の宇宙全体において唯一の静止し、自己充足的で、不変の存在である。神は、目的あるエネルギー(創造的精霊)であり、絶対意志であり、また独立的存在で普遍的である。

4:4.2 (58.7) 神は、独立的存在であり、絶対的に独立している。神のまさにその同一性が、変化に相反している。「私、主は、変化しない。」神は不変である。しかし、あなたは、あなたが楽園の地位を獲得するまでは、神が、いかようにして単純さから複雑さへ、同一性から変化へ、静止から運動へ、無限性から有限性へ、神性から人間性へ、統一から二重性と三重性へと通過するかを理解し始めることさえできない。そして、神は、神性の不変性は不動性を含意しないので、このようにして、自身の絶対性の顕現を変更することができる。神には意志がある--神は意志である。

4:4.3 (58.8) 神は絶対的な自己決定の存在である。自らが課したそれらのものは別として、宇宙への神の反応には何の限界もなく、神の自由意志の行為は、ただ神の永遠の性

質を本質的に特徴づけるそれらの神性のそれらの資質と完全な属性によってのみ条件づけられる。したがって、神は、究極的善の存在体と加えて、創造的無限性の自由意志として宇宙に関わりをもつ。

4:4.4 (58.9) 父絶対は、中央の、そして、完全な宇宙の創造者と他のすべての創造者の父である。神は、人と他の存在体と人格、善、および幾多の他の特徴を、共有するが、意志の無限性は神独りのものである。神の創造的行為は、ただその永遠の性質の感情により、またその無限の知恵の指示により制限される。神は、無限に完全であるそれだけを、したがって、中央宇宙の崇高な完全性だけを個人的に選ぶ。そして、創造者たる息子が自身の神性を、自身の絶対性の局面さえも、完全に共有するものの、父の意志の無限性を方向づける知恵のその最終的状態により全体で制限されるというわけではない。したがって、息子関係にあるマイケルの系列においては、創造的自由意志は、もし絶対ではなくても、なおさら活発になり、完全に神性であり、ほとんど究極である。父は無限で永遠であるが、父の意志の自己規制の可能性を否定

するということは、結局は、父の意志の絶対性のまさしくこの概念の否定に到るということである。

4:4.5 (59.1) 神の絶対性は、全7段階の宇宙現実を全体に普及する。そして、この絶対的性質全体が、創造者の宇宙生物家族との創造者の関係に条件づけられる。精度は、宇宙の中の宇宙において三位一体の正義を特徴づけるかもしれないが、宇宙の神は、時間の創造物との広大なすべての家族関係においては、神性感情により支配される。総じて--永遠に--無限の神は父である。それにより彼が適切に知られているかもしれないすべての可能な称号の中で、私は、宇宙なる父として全創造物の神を描くように指示を受けてきた。

4:4.6 (59.2) 父なる神における自由意志の実行は、力により支配されるのではなく、唯一知力により導かれるのでもない。神性人格は、精霊の中にあり、愛として自身を宇宙に現れると定義される。したがって、第一根源と中枢は、宇宙の創造物の人格とのすべての個人的関係においては、常に、変わることなく情愛深い父である。神とは、用語の最高の意味合いでの父である。神は、神性愛

の完全な理想主義に永遠に動機づけられており、またその穏やかな性質は、その最も強い表現と愛し愛されることにおいて最もすばらしい満足感であることがわかる。

4:4.7 (59.3) 神は、科学においては、第一原因である。宗教おいては、普遍で情愛深い父である。哲学においては、存在のためにいかなる他の存在体に頼ることなく、万物に、そして、他のすべての存在体に存在の現実を慈悲深く付与する自分だけで存在するものである。しかし、科学の第一原因と哲学の自立自存の統一が、慈悲と善に満ち、地上の子供らの永遠の生存に作用すると誓約した宗教の神であったということを示すには、顕示を要する。

4:4.8 (59.4) 我々は、無限性の概念を切望するが、神の経験-考えを、すなわち、神格の最高概念の人格と神性要素のいつでも、どこでもを理解する我々の能力を崇拝する。

4:4.9 (59.5) 地球における人間の勝利の人生の意識は、人間の限界の凄まじい光景に直面するとき、存在に関するそれぞれの再発する出来事に、常に変わらない宣言により、あえて挑戦する創造物その信仰から生まれる。私がこれをできないとしても、それをすることができ、そして、

いずれそれをするものが、宇宙の中の宇宙の父絶対の一部であるものが、私の中に生きる。そして、それは「世界に、あなたの信仰にさえ打ち勝つ勝利」である。

5. 神についての誤った考え

4:5.1 (59.6) 宗教的伝統は、過去の時代の神を知る人間の経験の不完全に保存された記録であるが、そのような記録は、宗教生活への指針としては、または、宇宙なる父に関する真の情報源としては信用できない。そのような古代の信念は、原始人は神話作者であったという事実によっていつも変更されてきた。

4:5.2 (60.1) ユランチアにおける神の性質に関する混乱の最大原因の1つは、楽園三位一体の人格間において、また楽園神格と地方宇宙の創造者と行政者間において明らかに見分けられないあなたの複数の神聖本から生じる。部分的な理解を特徴づける過去の摂理の間、あなたの司祭と予言者たちは、惑星王子、体制君主、惑星の父、創造者たる息子、超宇宙の支配者、崇高なるもの、および宇宙なる父を明らかに区別できなかった。あなたの記録では、例えば、生命運搬者や天使の様々な系列などの下位

の人格に関する伝達内容の多くが神自身から来ると示された。ユランチア人の宗教的考えは、神格の提携的人格を宇宙なる父自身と未だに混同しているので、1つの名称にすべてが盛り込まれている。

4:5.3 (60.2) ユランチアの人々は、神に関する原始の概念の影響に悩み続ける。嵐の中を暴れまわる神々。激怒に地を揺るがし、憤怒に人を打ち倒すもの。飢饉や洪水時に不快の判決を負わせるもの--これらは原始宗教の神々である。それらは、宇宙に住み、宇宙を統治する神ではない。そのような概念は、人が、宇宙はそのような架空の神々の気まぐれの先導と支配下にあると想像した現代の遺物である。しかし、人間は、崇高なる創造者と崇高なる制御者の施政方針と指揮に関わる限りは、自分が比較法の領域に生きていると気づき始めている。

4:5.4 (60.3) 憤る神を静めるという、気分を害した主をなだめるという、犠牲と苦痛を経て、また、血を流すことによってでさえ神格の好意を得るという野蛮な考えは、全く幼稚で原始の宗教を、科学と真理の啓発された時代に値しない哲学を表す。そのような進行は、宇宙において仕

え、また、支配する天の存在体と神性支配者にとっては全く厭わしいものである。罪なき血が神の恩恵を得るために、または、架空の神性の怒りをかわすために流さなければならないと信じ、保持し、または教えることは、神への侮辱である。

4:5.5 (60.4) ヘブライ人は、「血を流すことなくして、罪の許しはあり得ない。」と信じた。人間の生贄を禁じ、無邪気なベドゥインの自分の追随者の原始の心に動物の儀式上の生贄に置き換えたとき、モーシェは明確な前進をしたにもかかわらず、ヘブライ人は、神々は血の光景によるしか宥められないという古い、異教の考えからの開放を見い出しはいなかった。

4:5.6 (60.5) 楽園の息子のあなたの世界における贈与は、惑星の最終時代の状況に固有であった。それは不可避であり、神の恩恵を勝ち取る目的のためには必要とされなかった。また、この贈与は、たまたま宇宙の経験的主権を獲得する長い冒険における創造者の息子の個人的最終行為であった。なんという神の無限の特徴への茶番であることか。そのすべての厳格な冷淡さと冷酷さにおける父

親らしい心が創造物の不運と悲しみによりほとんど手つかずであったので、神が、潔白な息子がカルヴァリーの十字架上にて血を流し死んでいくのを見るまでは、神の深い慈悲が来ようとしなかったとは。

4:5.7 (60.6) だが、ユランチア住民は、これらの古代の誤りと宇宙なる父の性質に関する異教の迷信からの解放を見つけるはずである。神についての真実の顕示は起こりつつあり、人類は、人の息子として、そして、神の息子としてユランチアに滞在した創造者たる息子によりそれほどまで壮大に描写された性格と属性の美の素晴らしの中に宇宙なる父を知るように運命づけられている。

4:5.8 (61.1) [ユヴァーサの神性顧問による提示]

論文 5
神の個人との関係

5:0.1 (62.1) もし人間の有限の心が、宇宙なる父のように、なぜそれほどまでに偉大でそれほどまでに壮大な神が、個々の人間と親しくつきあうために自分の永遠の住まいから無限の完全状態で下りることができるのかを理解できないならば、そのような有限の知性あるものは、生け

る神の実際の断片が、ユランチアの正常な心の、しかも道徳的に意識しているすべての人間の知力ある者たちの中に宿るという事実の真理に神性の連帯感の確かさに基づかなければならない。内住する思考調整者は、楽園の父の永遠の神格の一部である。人は、神を見つけ、交わりを試みるためにこの精霊現実の臨場に対しての魂沈思の自身の内面経験より遠くに行く必要はない。

5:0.2 (62.2) 神は、6絶対等位者の実存的現実の全体に自身の永遠の性質の無限性を分配してきたが、前人格の断片の媒体を介し、随時、創造のいかなる部分、あるいは局面、もしくは種類との直接の人格的接触をするかもしれない。そしてまた、永遠の神は、神性創造者に授与する人格の特権と宇宙の中の宇宙の生物を自分に留保し、その間に、これらのすべての人格的存在体との直接の、親らしい接触を人格回路を経て維持する特権をさらに留保した。

1. 神への接近

5:1.1 (62.3) 無限の父への有限生物の接近不能は、父のよそよそしさのに中にではなく、被創造体の有限性と物質的な

制限に内在的である。宇宙存在の最高の人格と被創造の有識者の下位集団の間の精霊的差の大きさは考えも及ばないほどである。知力ある下位の系列のもの達にとり父自身の臨場へと即座に輸送されることが可能であるならば、それらは、そこにいたことを分からないであろうに。かれらが、そこにいたとしても自分たちが今いるのと同じ様に宇宙なる父の臨場に気づかないのであろう。人間が、一貫して、しかも可能性の領域内において、宇宙なる父の楽園臨場へと安全な行為を求めることができる前に、人間の前方には長い長い道がある。人は、熟練の７精霊のどれか一名にでも会える精霊的な考え方をもたらす次元に達し得る前に精霊的に何回も移動されなければならない。

5:1.2 (62.4) 我々の父は隠れてはいない。気まぐれの隠遁にはない。父は、宇宙の領域の子らに自らを明らかにする終わりなき努力において神性英知の供給源を結集した。理解し、愛し、あるいは接近可能な創造されたすべての存在体のつながりにあこがれさせる愛の威厳と関連のある無限の壮大と名状しがたい寛大さというものがある。それは、したがって、あなたに固有の、あなたの有限人格

と物質的存在から不可分である限界、すなわち、その中において人間上昇の旅の目標を達成し、万物の中央にいる父の面前に立つことができる時間と場所を、そして情況を決定する限界である。

5:1.3 (63.1) 父の楽園臨場への接近は、精霊進行における最高の有限段階の到達を待ち受けなければならないが、あなたは、あなたの内なる魂と精霊化する自己とに非常に親密に関連づけられている父の贈与の精霊との即座の親交の絶えることのない可能性の認識を喜ぶべきである。

5:1.4 (63.2) 時間と空間の領域の人間たちは、生まれながらの能力と知的贈与において大いに異なるかもしれないし、社会的前進と道徳的進歩に好ましい環境をことのほか楽しむかもしれないし、または、文明技術における文化と想定された前進へのほとんどすべての人間の援助の不足に苦しむかもしれない。しかし、上昇経歴における精霊的進歩のための可能性はすべての者に対して等しい。精霊的洞察と宇宙的意味の増加する段階は、進化世界における様々の物質的環境のそのようなすべての社会道徳の差異とはまったく無関係に達せられる。

5:1.5 (63.3) いかにユランチアの人間が、知的、社会的、経済的機会と贈与において、また道徳的機会と贈与においてさえ異なるかもしれないとしても、それらの精霊的贈与は一様であり、特異ではないということを忘れてはいけない。ユランチアの人間は皆、父からの贈り物である同じ神性臨場を享受し、神性起源のこの内住する精霊との親密な人格的親交を求めるために、皆が等しく特権をもち、同時に、皆がこれらの神秘訓戒者の一様の精霊的指導の受け入れを選ぶことができる。

5:1.6 (63.4) もし人間が心から精霊的に動機づけられ、無条件に父の意志を為すことに捧げるならば、人間は、内住し、神性である調整者に確かに、しかも有効により授けられていることから、ますます神のようになる進歩的経験を手段として神を見つける目的に向け神を知るという崇高的意識と生残の崇高的保証を必ずその個人の経験において具体化する。

5:1.7 (63.5) 人には、生残の思考調整者が精霊的に内住している。もしそのような人間の心が、誠実に、精霊的に動機づけられるならば、もしそのような人間の魂が、神を知

り、神のようになることを望むならば、父の意志を為す事を誠実に欲するならば、人間生活における剥奪の好ましからざる影響も、神により動機づけられたそのような魂が楽園の入り口へとしっかりと昇れないようにする干渉可能な活発な力も存在はしはしない。

5:1.8 (63.6) 父は、すべての創造物に自分との人格的な交わりを望んでいる。生存状態と精霊的性質がそのような到達を可能にするそれらのすべての者たちを受ける場所を楽園に持っている。したがって、今、そして永遠に、あなたの哲学に慣れなさい。あなた達各人にとり、そして、我々全員にとり、神は近づきやすく、父は到達可能であり、道は開けている。神性愛の力と神性の行政手段すべてが、宇宙なる父の楽園臨場へのあらゆる宇宙のあらゆる価値ある知性あるものの前進を容易にする努力において連動している。

5:1.9 (63.7) 広大な時間が神の到達に関与するという事実は、無限の臨場と人格をいささかも非現実的にするものではない。あなたの上昇は、超宇宙回路の一部であり、あなたはそれを幾度となく振り回すが、あなたは、精霊的に

も地位的にも、ずっと内部に揺れ動くことを期待することができる。あなたは球体から球体へと、外側の回路から常に内側の中心近くへと、移されることを当てにでき、そしていつか、神性の、かつ中央の臨場に立ち、また彼と、比喩的に言えば、顔をあわせるということを疑ってはいけない。それは実際の、そして、文字通りの精霊的段階の到達問題である。そして、これらの精霊的段階は、神秘訓戒者が内住してきた者、そして、その後永遠にその思考調整者と融合した誰によっても達成できる。

5:1.10 (64.1) 父は精霊的に隠れてはいないが、創造物の非常に多くが、それら自身の強情な決心の靄に自らを隠してきたし、また、自身の屈折した方法の選択により、そして偏狭な心と精神的でない性質からの自己主張の沈溺により、とりあえず精霊と息子の精霊の接触から自分たちを切り離してきた。

5:1.11 (64.2) 人間は、神に徐々に近づき、また選択の力が残っている限り繰り返し神の意志を放棄するかもしれない。人の最終的な破滅は、父の意志を選ぶ力を失ってし

まうまでは封印されない。我が子らの要求と請願に対して父の心の閉鎖は、決してない。ただ父の子らが、神性の意志を為す願望--神を知り、父に似るようになること--をついに、しかも永遠に失うとき、父の接近への心を永遠に閉じてしまうのである。同じく、人の永遠の目標は、調整者融合が、そのような上昇者が父の意志を生きるために最終的、かつ取り消せない選択をしたと宇宙に宣言するとき保証される。

5:1.12 (64.3) 偉大な神は、人に直接に接触し、その人の中に生きて住むために自分の一部を与える。神は人と共に永遠の冒険に乗り出した。もしあなたの中の、またあなたの周りの精霊的な力の先導に従うならば、空間の進化の世界から上昇する創造物の宇宙目標としてのあなたは必ず情愛深い神により設定された高い目標を達成することができる。

2. 神の臨場

5:2.1 (64.4) 無限の物理的臨場は、物質的宇宙の現実である。神格の心の臨場は、個々の知的経験の深さと進化の人格段階によって決定されなければならない。神性の精霊的

臨場は、必然的に宇宙において異ならなければならない。それは、感受性のための精霊的能力により、また神性意志を為すことへの創造物の意志の奉献の度合いにより決定される。

5:2.2 (64.5) 神は、すべての精霊生まれの息子の中に生きている。楽園の息子は、神の臨場に、「父の右手」にいつも近づくことができ、創造物のすべての人格が「父の懐」に接近できる。これはいつでも、どこでも、またいかに接触したのか、または、宇宙なる父との人格的、自意識の接触と親交を伴う、中央の住まいにおいて、もしくは、楽園の神聖な球体中の１球体としてある他の指定された場所において、人格回路について言及している。

5:2.3 (64.6) 神性臨場は、しかしながら、あなたが試みる内住する神秘訓戒者、つまり楽園の思考調整者との親交ほどには自然の中のどこにでも、あるいは神を知る人間の人生においてさえ完全かつ確かには発見することはできない。宇宙なる父の精霊があなた自身の心の中に住むとき、はるかかなたの空に神を夢みるとは何という誤りであることか。

5:2.4 (64.7) あなたが、調整者の精霊的な導きとの調和において進歩するにつれ、あなたを取り囲み、あなたに影響を与える、だがあなたの中の総体部分として機能しないそれらの他の精霊的影響の臨場と変貌する力をより完全に明察することを望むことができるのは、この神の断片があなたに宿るからである。あなたが内住する調整者との間近で親密な接触を知的に意識していないという事実は、そのような高遠な経験を少しも覆しはしない。神性調整者との兄弟関係の証は、完全に個々の信者の人生経験においてもたらされる精霊の産物の性質と範囲にある。「あなたは、その実によって、それらを見分けるであろう。」

5:2.5 (65.1) 貧弱に精霊化された者にとり、人間の物質の心にとり、楽園の調整者のような神性の存在体の精霊活動の際立つ意識を経験することは、きわめて難しい。また、心と調整者の結合的創造の魂が、次第に実在化するにつれ、神秘訓戒者の臨場を経験し、精霊の導きと他の超物質活動を認識することができる魂の意識の新局面もまた発展する。

5:2.6 (65.2) 調整者親交の全体的経験とは、関連する1つの道徳状況、精神的動機、精霊的経験である。そのような達成の自己認識は、主に、単独的ではないとはいえ、魂の意識の領域に制限されてはいるものの、その証は、間近に迫りつつあり、そのようなすべての内側の精霊接触者の人生における精霊の果実の顕現において豊富である。

3. 真の崇拝

5:3.1 (65.3) 宇宙的見地からは、楽園の神性は、1つであり、ユランチアに居住するそのような存在体との精霊的関係においては、異なる別々の3者である。神の間には、個人的的要望、親交、および他の親密な関係の問題において違いがある。最も高い意味においては、我々は宇宙なる父を、しかも宇宙なる父だけを崇拝している。確かに、我々は、父が創造者たる息子に表されているように、父を崇拝することができ、また崇拝するが、直接的、あるいは間接的に、礼拝され崇められるのは父である。

5:3.2 (65.4) あらゆる種類の嘆願は、永遠なる息子と息子の精霊的組織の領域に属する。祈り、すべての公式伝達、宇

宙なる父の礼拝と崇拝を除くすべては、地方宇宙に関する事柄である。通常、それらは創造者たる息子の管轄領域を超えては進まない。しかし、崇拝は、父の人格回路の機能により間違いなく創造者の人格に回路化され、送り出される。加えて、我々は、調整者内住の一創造物のそのような崇敬の伝達は、父の精霊臨場により容易にされると信じる。そのような信念を具体化するための驚くべき量の証拠があるし、父の断片のすべての系列には、宇宙なる父の臨場にそれぞれの対象からの正真正銘の礼拝を伝えるための権限が与えられているということを私は承知している。また、調整者は、神との意思疎通のための前人格の直接回路もまた確かに利用するし、同様に永遠なる息子の精霊重力回路を利用することができる。

5:3.3 (65.5) 崇拝はそれ自身のためである。祈りは自己利益の要素、もしくは創造物利益の要素を具体化する。それは、崇拝と祈りの間の大きな違いである。真の崇拝には自己要求の要素、もしくは個人的利益の他の要素は絶対にない。我々は、神がそうであると我々が理解するもののためにただ単に神を崇拝する。崇拝は崇拝者に何も求めず、何も期待しない。我々はそのような崇敬から引き

出すかもしれない何かのために父を崇拝をしてはいない。我々は、父の優れた人格の認識への自然で自然発生的な反応として、そして愛すべき性質と崇拝できる属性のためにそのような献身をし、そのような崇拝をする。

5:3.4 (65.6) 自己利益の要素が崇拝に侵入するやいなや、すなわちその瞬間の信仰心は、崇拝から祈りへと変わり、より適切に永遠なる息子か創造者たる息子の人格へと導かれるはずである。しかし、実際の宗教経験においては、祈りが真の崇拝の一部として父なる神に向けるべきではない理由は何もない。

5:3.5 (66.1) あなたが、日常生活の実用的諸問題を扱うとき、あなたは第三根源と中枢に起源をもつ精霊人格の掌中にある。あなたは結合活動者の媒体に協力している。そして、それは次の通りである。あなたは神を崇拝している。そして、息子に祈り、息子と心を通い合わせている。また、あなたの世界とあなたの宇宙全体で活動している無限の精霊の有識者に関連して地球に滞在している詳細を練り上げている。

5:3.6 (66.2) 地方宇宙の目標の指揮をとる創造者、あるいは君主たる息子は、楽園の宇宙なる父と永遠なる息子の両者の立場に立つ。これらの宇宙の息子は、父の名において、崇拝の礼拝を受け、それぞれ各自の創造を通じて嘆願する自分達の対象の請願に耳を傾ける。地方宇宙の子供にとり、すべての実用的意図と目的の点からは、マイケル系の息子は神である。マイケル系の息子は、宇宙なる父と永遠なる息子の地方宇宙への人格化である。無限の精霊は、宇宙なる精霊、楽園の創造者たる息子の管理的、かつ、創造的な仲間を通してこれらの領域の子供との個人的なつながりを維持する。

5:3.7 (66.3) 誠実な崇拝とは、進化する魂の支配下への、また、関連する思考調整者の神性的方向づけにしたがっての人間人格の全力動員を暗示する。物質的限界の心は、決して真実の崇拝の真の意味を高く意識できるようにはならない。人の崇拝経験の真実の認識は、主として不滅の魂の発展状態により決定される。魂の精霊的成長は、完全に知的自意識とは無関係に起こる。

5:3.8 (66.4) 崇拝経験は、婚約的関係にある調整者が人間の魂の—神を探し求める人間の心と神が顕示する不滅の調整者の共同的創造の、--名状しがたい切望と言語を絶する願望を神性の父に伝える崇高な試みにある。したがって、崇拝は、関連する精霊精神の指導の下に、宇宙なる父の信仰の息子として神と意思疎通するために、物質の心がその精霊化する自己の試みに同意する行為である。人間の心は、崇拝に同意する。不滅の魂は崇拝を切望し、開始する。神性の調整者臨場は、人間の心と進化する不滅の魂のためにそのような崇拝を導く。最終的には、真の崇拝は、宇宙の4段階において実現される一つの経験になる。知的、モロンチア的、精霊的、人格的段階--心、魂、精霊の意識、およびそれらの人格における統一。

4. 宗教における神

5:4.1 (66.5) 進化的宗教道徳は、恐怖の原動力によって神探索を進める。顕示の宗教は、人間が神のようになることを切望するので愛の神を捜し求めるよう魅惑する。しかし、宗教は、単に「絶対依存」と「生存保証」の受身の感

情ではない。それは人類奉仕を前提とする神性到達の生活と動的経験である。

5:4.2 (66.6) 真の宗教に基づく大いなる、しかも即時の奉仕とは、人間の経験における持続する和合の構築、永続する平和と深遠な保証の構築である。初期の人類の場合、多神教でさえ、神格の発展的概念の相対的統一である。多神教は、進行中の一神教である。遅かれ早かれ、神は、価値の現実、意味の本質、真実の生命として理解されるよう運命づけられている。

5:4.3 (67.1) 神は運命の決定者であるだけではない。神は人の永遠の目標である。すべての非宗教の人間の活動は、自己への歪んだ奉仕へと宇宙を曲げようとする。真に敬虔な個人は、宇宙と自己を同一視ししようとし、次には同胞の宇宙家族の奉仕にこの統一された自己の活動を捧げようとする。

5:4.4 (67.2) 哲学と芸術の領域は、人間の自己の非宗教的活動と宗教的活動の間に介在する。物質志向の人間は、芸術と哲学を通して、永遠的意味の精霊的現実と宇宙の価値の沈思へと説き伏せられる。

5:4.5 (67.3) すべての宗教は、神格崇拝と人間救済の何らかの教義を教える。仏教は、苦難からの救済を、果てしない平和を約束する。ユダヤ教は、困難からの救済を、正義を前提とする繁栄を約束する。ギリシア宗教は、不調和、すなわち醜さからの救済を、美の実現による救済を約束した。キリスト教は罪、高潔からの救済を約束する。イスラム教は、ユダヤ教とキリスト教の厳しい道徳的規準からの救出を用意する。イェススの宗教は、自己からの救済、時間における、そして永遠における創造物孤立の悪からの救出である。

5:4.6 (67.4) ヘブライ人は善に基づいて宗教を築いた。ギリシア人は美に基づいて。両宗教は、真実を求めた。イェススは愛の神を明らかにし、愛は真、美、善のすべてを抱擁する。

5:4.7 (67.5) ゾロアスター教徒には、道徳の宗教があった。ヒンズー教徒には形而上学の宗教が。儒者には倫理の宗教が。イエスは奉仕の宗教生活を送った。これらのすべての宗教には、イェススの宗教への有効な試みがあるという点において価値がある。宗教は、善であり、美であ

り、人間の経験において真実であるというすべての精霊的な統一の現実になるように目標づけられている。

5:4.8 (67.6) ギリシャの宗教には、「あなた自身を知る」という標語があった。ヘブライ人は「あなたの神を知る」に教えの中心を置いた。キリスト教徒は「主イエス・キリストに関する知識」を目的とする福音を説く。イェススは「神を知ること、そして息子としての自分を知る」という朗報を宣言した。宗教目的に関するこれらの異なる概念は、様々な人生状況における個人の態度を決定し、崇拝の深さと個人的な祈りの習慣の本質を予示する。いかなる宗教の精霊的状態もその祈りの本質により決定できるかもしれない。

5:4.9 (67.7) 半人間と嫉妬深い神の概念は、多神教と崇高な一神教との間の必然的変遷である。発揚された神人同形論は、純粋に進化する宗教の最高到達段階である。キリスト教は、神人同形論の概念を人間の理想から賛美されたキリストの人格の超越的、かつ神性的概念へと高めた。これは、人間がかつて発想し得る最高の神人同形論である。

5:4.10 (67.8) 神に関するキリスト教概念は、別々の３つの教えを結合する試みである。

5:4.11 (67.9) 1. ヘブライの概念——道徳的価値の擁護者としての神、公正な神。

5:4.12 (67.10) 2. ギリシアの概念——統一者としての神、英知の神。

5:4.13 (68.1) 3. イェススの概念——生きている友、情愛深い父、神性の臨場としての神。

5:4.14 (68.2) したがって、キリスト教の混成的神学理論が、一貫性の達成において重大な困難に遭遇することは明白であるに違いない。この困難は初期のキリスト教の教義は、一般に人の異なる人々の個人的宗教経験に基づいたという事実によりさらに深刻化される。アレキサンドリアのフィロン、ナザレのイェスス、タルススのパウーロス。

5:4.15 (68.3) イェススの信仰生活の研究においては前向きにイエスを見なさい。イェススの正義を基点としての罪のなさではなく、その情愛深い奉仕を考えなさい。イェス

スは、ヘブライの概念における天の父をすべての個人の父、罪人の父でさえある生き生きとし、創造物を愛するより高い情愛の神へと明らかにされる受け身の愛を高めた。

5. 神に対する意識

5:5.1 (68.4) 道徳には、自意識の原因にその起源がある。それは超動物的であるにもかかわらず、完全に進化的である。人間の進化は、その展開において調整者の贈与に先立つ、また真実の精霊からの流出に先立つすべての天与のものを迎え入れる。しかし、道徳段階の到達は、人間生活の真の戦いから人を救出しはしない。人の物理的環境は、生存競争を伴う。社会的環境は倫理的調整を要する。道徳的状況は、最高の理由の領域における選択を必要とする。精霊的経験(神を認識)は、人が神を見つけ、神に似るように心から努力することを要求する。

5:5.2 (68.5) 宗教は、科学の事実、社会の義務、哲学の仮定、または道徳の暗示している義務を土台としていない。宗教は、生活状況への人間の反応の独立した領域であり、後必滅である人間発展の全段階において絶えず提示され

る。宗教は、価値の実現と宇宙共同体の享受の全4段階を浸透させるかもしれない。物理的あるいは物質的自己保存の段階。社会的あるいは感情的連帯の段階。道徳的あるいは義務的理由の段階。神性崇拝による宇宙親交の意識の精霊的段階。

5:5.3 (68.6) 事実を追求する科学者は、神を第一原因、原始力の神として心に描く。情緒的な芸術家は、神を美、美意識の神の理想と考える。論理展開の哲学者は、時おり普遍的統一の神として、汎神論的な神格としてさえ断定する傾向にある。信仰をもつ宗教家は、生存を助成する神、天の父、愛の神である父を信じる。

5:5.4 (68.7) 道徳的行為は、常に進化した宗教の先行事象であり、啓示宗教の一部でさえあるが、決して全体的宗教経験ではない。社会奉仕は、道徳的思考と宗教生活の結果である。道徳は、宗教経験のより高い精霊的段階へと生物学的には導かない。抽象的美の礼拝は、神の崇拝ではないし、性質の高揚も統一の崇敬も神の崇拝ではない。

5:5.5 (68.8) 進化的宗教は、人を調整者の贈与と真実の精霊の到来を含む啓示宗教に対する感受性の段階へと高めた科

学、芸術、哲学の母である。一方は進化的で生物的であり、他方は啓示的で周期的である宗教の異なる特質にもかかわらず、人間存在の進化の絵は、宗教に始まり、宗教に終わる。したがって、宗教は人にとり普通であり当然であるが、任意でもある。人は意志に反して宗教的である必要はない。

5:5.6 (69.1) 本質的には精霊的である宗教経験は、物質の心により完全に理解されることはとうていできない。それゆえに、神学の機能、宗教の心理学がある。人間の神の認識に関する不可欠の教義は、有限の理解における逆説を生み出す。神性内在の、すなわち、すべての個人の中の神と、またその一部である神の概念と、神の超越についての考え、つまり、宇宙の中の宇宙の神性支配を調和させるということは、人間の論理と限りある理由にとってはほとんど不可能である。神格のこれらの不可欠の概念は、知的な崇拝を正当化し、人格生存の望みを有効にするために人格神の超越の概念の信仰による把握において、またその神の断片の内住臨場の実現において統一されなければならない。宗教の困難さと矛盾は、宗教の現

実が人間の知的理解のための能力を完全に超えているという事実に固有である。

5:5.7 (69.2) 必滅の人間は、地球における一時的滞在時代にさえ宗教経験からの3つのすばらしい満足感を保証する。

5:5.8 (69.3) 1. 知的上は、必滅の人間は、より統一された人間の意識の満足感を我がものとする。

5:5.9 (69.4) 2. 哲学上は、道徳的価値の自身の理想の具体化を味わう。

5:5.10 (69.5) 3. 精霊的には、神性親交の経験において、つまり真の崇拝の精霊的満足感において成長する。

5:5.11 (69.6) 神-意識は、領域の進化する人間によって経験されるとき、異なる3要素で、現実実現の特異な3段階で構成されなければならない。まず、心の意識がある--神についての考えの理解。次ぎに、魂の意識が続く--神の理想の実現。最後に、精霊意識が発達し始める--神の精霊現実の実現。神性実現のこれらの要素の統一により、いかに不完全であろうとも、人間の人格は、神の人格認識をもって全意識段階を常に覆っている。このすべては、

終局者の部隊に達したそれらの人間においては、いつかは、神の至高性の実現に導くであろうし、次には、神の究極性の認識を、すなわち楽園の父の准絶対の超意識の何らかの局面の認識を、もたらすかもしれない。

5:5.12 (69.7) 神-意識の経験は、何世代にもわたり同じ状態のままであるが、人間の知識のそれぞれの前進的新紀元とともに哲学的概念と神についての神学上の定義は、変化しなければならない。神-知っていること、宗教意識とは、宇宙現実であるが、宗教経験がどのように有効で(本当で)あっても、それ自体が知的批評と合理的な哲学的解釈にかけられることを望んでいなければならない。それは、人間の経験全体で離れたものになろうとしてはいけない。

5:5.13 (69.8) 人格の永遠の生存は、人間の心の選択に完全に依存している。その決心が不滅の魂の生存の可能性を決定する。心が神を信じ、魂が神を知るとき、また、育てる調整者に伴い、それらが皆、神を望むとき、次に生存が保証される。知性の限界、教育の削減、文化の剥奪、あいにくの社会的状況の窮迫、教育的、文化的、社会的

利点の不運な欠如から生じる人間の道徳基準の劣等性でさえ、そのような不幸で人間的には不利な立場にある、だが信じている個人における神性の精霊の臨場を無効にすることはできない。神秘訓戒者の内在は、不滅の魂の成長と生存の潜在能力を開始し、また不滅の魂の成長と生存の潜在能力の可能性を保証する。

5:5.14 (70.1) 人間の両親の子孫をもうける能力は、教育的、文化的、社会的、または経済的状態に基づいてはいない。自然な状態の親の要素の結合は、子孫を開始するに十分である。もしそのような精霊を授けられた個人が、神を探し求め、神のようになることを真摯に望むならば、すなわち、天の父の意志を為すことを正直に選ぶならば、善悪を見極め、神を崇拝する能力を持つ人間の心は、神性調整者と共に、生存資質をもつ不滅の魂の生産を開始し、促進するその人間に必要とされるものはそれだけである。

6. 人格の神

5:6.1 (70.2) 宇宙なる父は人格の神である。宇宙人格の領域は、人格状態の最も低い必滅かつ物質の創造物から創造

者の威厳と神性状態の最も高い人格まで、宇宙なる父のその中心と周囲にある。父なる神は、あらゆる人格の贈与者であり保存管理者である。楽園の父は、同様に、神性の意志を為すことを心から選ぶすべての有限の人格、神を愛し、神に似ることを切望する者達の目標である。

5:6.2 (70.3) 人格は宇宙の未解決の神秘の1つである。我々は、人格の様々な系列と段階の構成に入る要素に関わる適切な概念を形成することができるが、完全に人格自体の真の性質を理解するというわけではない。我々は、人間人格の媒体を構成する多数の要素を知覚するが、要素がひとまとめにされるとき、そのような有限人格の性質と意味を完全に理解するというわけではない。

5:6.3 (70.4) 人格は、最小限の自意識から最大限の神-意識にまで及ぶ心の資性を持つすべての創造物に潜在的である。しかし、ただ心の資性だけが人格ではないのではなく、精霊も、身体エネルギーも人格ではない。人格は、父なる神により関連し、連携している物質、心、精霊のエネルギーのこれらの生ける体制に単独に贈与された宇宙現実における資質と価値である。人格は進歩的達成で

もない。人格は、物質的、あるいは精霊的であるかもしれないが、人格があるか、または人格がないかのいずれかである。楽園の父の直接行為による以外は、人格的であること以外には人格的段階には決して達しない。

5:6.4 (70.5) 人格の贈与は、宇宙なる父の単独機能である、すなわち、父が比較的に創造的である意識とその自由意志のその制御の属性を授ける生活エネルギー系の人格化である。父なる神から離れては何の人格もないし、父なる神を除いては何の人格も存在しない。人間人格の絶対調整者の核と同様に、人間の自我の基本的な属性は、宇宙なる父の贈与であり、宇宙の聖職活動の独占的に人格的領域で行動する。

5:6.5 (70.6) 前人格状態の調整者は、人間の数多くの型に宿り、それゆえ、これらの同じ存在体が究極の精霊到達の可能性をもつモロンチア創造物として人格化するために死を乗り切ることができることを保証する。なぜならば、人格資性のそのような創造物の心に人格の父の前人格贈与である永遠の神の精霊の断片が宿ると、この有限

人格は、神性と永遠の可能性を有し、また究極者へと同種の目標を目指し、絶対者の認識を模索さえする。

5:6.6 (71.1) 神性人格のための能力は、前人格調整者に備わっている。人間人格のための能力は、人間の宇宙心の資性に潜在的である。しかし、必滅の人間の経験上の人格は、自意識の、(比較的に)、自己決断の、自己創造的な人格として経験の海にこのようにして送り出される必滅の創造物の物質生活手段が、宇宙なる父の解放する神性を帯びるまでは、動的で機能的な現実として観察可能ではない。物質の自己は、本当に、無条件に個人的である。

5:6.7 (71.2) 物質の自己には、人格と同一性、一時の同一性がある。前人格の精霊調整者には、同一性、永遠の同一性がある。したがって、この物質的人格とこの精霊人格は、不滅の精神の生き残っている同一性を生み出すほどにそれらの創造的属性を結合させることができる。

5:6.8 (71.3) その結果、不滅の魂の成長に備えた後、そして、先行する原因への絶対依存の足枷から人の内なる自己を解放した後、父は脇へ寄る。今や、人間は、少なくとも

永遠の目標に関連して、原因への反応の足枷から解放され、また、対策が、不滅の自己、すなわち魂の成長のために施されたので、後は、創造を決意し、あるいは選択するだけで生残し、永遠である自己の創造を抑制するのは人間である。選択する人間の人格の永遠の目標に関し、すべての広い宇宙の中の宇宙の何の他の存在体、創造者、あるいは媒体も、人間の自由意志が領域内において作動するとき、人間の自由意志の絶対主権に少したりとも干渉することはできない。永遠の生存に関係し、神は、物質の、必滅の意志の主権を宣言し、しかも、その宣言は絶対である。

5:6.9 (71.4) 創造物人格の贈与は、先行原因への奴隷的反応からのそれなりの解放を与え、また進化的であるか、またはそうでない、すべてのそのような道徳的存在体の人格は、宇宙なる父の人格に中心が置かれている。それらは、永遠の神の広大で包括的家族の軌道と兄弟回路を構成する存在体のその同族関係によって宇宙なる父の楽園臨場に向けてて引かれる。すべての人格には神性の自然の同族関係がある。

5:6.10 (71.5) 宇宙の中の宇宙の人格回路は宇宙なる父を中心に置き、楽園の父は、全段階にある自意識生存の全人格を人格的に意識し個人的な接触をもつ。そして、すべての創造のこの人格意識は、思考調整者の任務の如何にかかわらず臨場する。

5:6.11 (71.6) すべての重力が楽園の小島の中に、すべての心が結合の活動者に、そしてすべての精霊が永遠なる息子に回路化されるように、同じくすべての人格も宇宙なる父の人格的臨場に回路化され、そして、この回路は最初の、永遠の人格へのすべての人格の崇拝を的確に伝える。

5:6.12 (71.7) 調整者内住ではないそれらの人格に関して:選択-自由の属性はまた、宇宙なる父によっても与えられ、そのような人格は神性愛の大なる回路、宇宙なる父の人格回路に同様に抱かれる。神はすべての真の人格の君主的選択に備える。人格的創造物はだれも永遠の冒険に強制させられない。永遠の入り口は、自由意志の神からの自由意志による息子の自由意志による選択に対応してのみ開く。

5:6.13 (72.1) そして、これは生きている神の時間の子供との関係を提示する私の努力を表す。そして、結局、私は、神はあなたの宇宙の父であると、あなたがたは皆、神の惑星の子供であると、改めて表明する以外には何も役立つことはできない。

5:6.14 (72.2) [これは、ユヴァーサの神性顧問による宇宙なる父の一続きの物語を提示する5番目と最後である。]

論文 6
永遠なる息子

6:0.1 (73.1) 永遠なる息子は、宇宙なる父の「最初の」人格の、かつ絶対の概念の完全で、しかも最終的表現である。従って、いつでも、どんなふうにでも父が個人的かつ絶対的に自分自身を表現し、ずっとそうであり、今そうであり、またいつもそうであろう生ける、かつ神性の言葉である永遠なる息子を介してそうする。この永遠なる息子は、永遠の、宇宙なる父と共同し、万物の中心に居住しており、また、すぐに個人的な存在をおおい隠す。

6:0.2 (73.2) 我々は、神の「最初の」考えについて話し、人間の知力の思考経路への接近手段の獲得目的のために永遠なる息子のありえない時間の起源について仄めかす。言語のそのような歪は、時間で限られた必滅の創造物の心との接触-妥協に我々の最善の努力を表す。連続した感覚では、宇宙なる父には最初の考えが一度もあり得ようがなく、永遠なる息子にも、始まりはあり得ない。しかし、私には、考えに関するそのような記号により時間で限られた人間の心に永遠の現実を描くことを、また、そのような連続性の時間の概念により永遠の関係を指定することが指示された。

6:0.3 (73.3) 永遠なる息子は、神性現実、無条件の精霊、および絶対人格に関する楽園の父の普遍で無限の概念の精霊的人格化されたものである。こうして、息子は宇宙なる父の創造者たる独自性の神性顕示を構成するのである。息子の完全な人格は、父が実際に精霊的であるもの、意志のあるもの、目的のあるものの人格のすべての意味と価値の永遠かつ普遍の源であるということを明らかにする。

6:0.4 (73.4) 我々は、時間の有限の心に楽園の三位一体の永遠かつ無限の存在体の関係についての何らかの連続した概念を構成できるようにする努力において、「父の最初の人格的、普遍的、無限の概念」に言及するとき概念のそのような立場を利用する。私には神格の永遠の関係のいかなる適切な考えも人間の心に伝えることは不可能である。それゆえ、私は、時間のその後の時代においてこれらの永遠の存在体の関係に関するある種の考えについて有限の心に何かを提供するであろうそのような用語を使うのである。我々は、息子が父から生じたと信じる。
我々には、両者が無条件に永遠であると教えられる。したがって、どんな時間の創造物にも、父から来ており、なおかつ協調的に父自身と共に永遠である息子のこの神秘を完全に理解できるというわけではないことは明らかである。

1. 永遠なる息子の独自性

6:1.1 (73.5) 永遠なる息子は、神の最初の、しかも、ひとり子である。永遠なる息子は、息子なる神、神格の第二人格と万物の副創造者である。父が第一の偉大な根源と中枢

であるように、永遠なる息子は第二の偉大な根源と中枢である。

6:1.2 (74.1) 永遠なる息子は、宇宙の中の宇宙の精霊政府の精霊的中心と神性行政者である。宇宙なる父は、まず創造者であり、次に制御者である。永遠なる息子は、まず共同創造者であり、次に精霊行政者である。「神は精霊であり、」息子はその精霊の人格的顕示である。第一根源と中枢は、意志絶対である。第二根源と中枢は、人格絶対である。

6:1.3 (74.2) 宇宙なる父は、息子との、あるいは息子の調整活動との関連の場合を除いては、創造者として人格的には決して機能しない。新約聖書の著者が記述の際に永遠なる息子に言及していたならば、真実を発声していたであろうに。「初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった。すべてのものは神によってできた。できたもののうち、一つとして神によらないものはなかった。」

6:1.4 (74.3) 永遠なる息子がユランチアに現れると、人間の姿のこの神性存在体と親しくした者たちは、「始めからお

られ、我々が聞き、我々が自身の目で見、我々が見つめた、我々の手でさわった方、まさに命の言葉」として永遠なる息子について仄めかした。この世の祈りの1つに示されているように、この贈与の息子は、ちょうど最初の息子がしたように、まさしく偽りなく、父からきている。「父よ、この世が造られる前に私がみそばで持っていた栄光でみ前に私を輝かせてください。」

6:1.5 (74.4) 永遠なる息子は、異なる宇宙で様々の名称で知られている。中央宇宙においては、等位の根源、共同創造者、准絶対として知られている。ユヴァーサ、つまり超宇宙の本部において、我々は等位の精霊中枢として、また永遠の精霊行政官として息子を指名する。サルヴィントンにおいては、あなたの地方宇宙の本部の上においては、この息子は第二の永遠の根源と中枢として記録されている。メルキゼデクは息子の中の息子として永遠なる息子について話す。あなたの生息球体の体制においてではなくあなたの世界においては、この最初の息子は、ユランチアの人類に自分自身を贈与した等位の創造者たる息子、すなわちネバドンのマイケルと混同されてきた。

6:1.6 (74.5) 楽園の息子のうちのいずれかは、適切に神の息子と呼ばれるかもしれないが、我々は、力と完全性の中央宇宙の宇宙なる父との共同創造者であり、無限の神格から生じる他のすべての神性の息子の共同創造者であるこの最初の息子、つまり第二根源と中枢のために名称「永遠なる息子」を留保することを常としている。

2. 永遠なる息子の性質

6:2.1 (74.6) 永遠なる息子は、宇宙なる父として同様に不変で、大いに信頼できる。永遠なる息子はまた、同様に父としても、本当に無制限の精霊と同様に精霊的である。息子は、宇宙なる父よりも親しみやすさにおいてあなたに一歩近いことから低い起源のあなたにとってはより個人的であると思われるであろう。

6:2.2 (74.7) 永遠なる息子は神の永遠の言葉である。永遠なる息子は、完全に父に似ている。事実上、永遠なる息子は、宇宙の中の宇宙に人格的に顕示している父なる神である。それゆえ、永遠なる息子とすべての等位の創造者たる息子にあてはまったし、今もそうであり、永遠にそ

うであろう。「息子を見たものは、父を見たのである。」

6:2.3 (74.8) 息子は、性質上は、完全に精霊的父のようである。我々は、宇宙なる父を崇拝しており、実際に、息子なる神と精霊を同時に崇拝している。息子なる神は、父なる神のように神々しく真実で性質の点では永遠である。

6:2.4 (75.1) 息子には父の無限かつ超越的なすべての正義があるだけではなく、息子もまた、父の特徴のすべての神聖さに反映的である。息子は父の完全性を共有し、神性の完全性に達する不完全の創造物の精霊的努力においてすべての不完全の創造物を支援する責任を共に分け合う。

6:2.5 (75.2) 永遠なる息子には、父の神性のすべての特質と精霊性のすべての属性がある。息子は、人格と精霊における神の絶対性に充満しており、これらの資質は宇宙の中の宇宙の精霊政府の個人的管理において明らかにする。

6:2.6 (75.3) 神は、実に、普遍的な精霊である。神は精霊である。そして、父のこの精霊の性質は、永遠なる息子の神

格に焦点化され、人格化される。息子においては、すべての精霊的特性が、第一根源と中枢の普遍性からの分化により明らかに大々的に高められる。そして、父が息子とその精霊の性質を共有するように、両者は、同時に神性の精霊を結合の活動者、すなわち無限の精霊と同等に十分に、控えることなく、共有するのである。

6:2.7 (75.4) 息子が普遍的な価値の排他的に精霊的な美の実現により専念するように見えることを除いては、父と息子は、真実の愛と創造において、また美の創造において相等しい。

6:2.8 (75.5) 私は、神性の善に関し、父と息子の間の何の違いも見分けない。父は、父として宇宙の我が子らを愛している。永遠なる息子は、父が見るように、また兄弟が見るように、すべての創造物を見る。

3. 父の愛の聖職活動

6:3.1 (75.6) 息子は、三位一体の公正と正義を共有するが、父の愛と慈悲の無限の人格化はこれらの神性の特徴を卓越している。息子は、宇宙への神性愛の顕示である。神が愛であるように、息子は慈悲である。息子は父ほど愛す

ることはできないが、父と同様の第一創造者であるばかりではなく、その同じ父の永遠なる息子であり、その結果、宇宙なる父の他のすべての息子の息子としての経験を共有するので1つの付加的方法で慈悲を創造物に示すことができる。

6:3.2 (75.7) 永遠なる息子は、すべての創造への大いなる慈悲の聖職活動である。慈悲は、息子の精霊的特性の本質である。永遠なる息子の命令は、第二根源と中枢の精霊回路を越えて出て行くとき、慈悲の音色に合わせられる。

6:3.3 (75.8) あなたが、永遠なる息子の愛を理解するためには、まず、その神性の源を、すなわち愛である父を知覚し、次に、無限の精霊と聖職活動をする人格のほとんど限界をもたない部隊の広範囲の聖職活動におけるこの無限の愛情の展開を凝視しなければならない。

6:3.4 (75.9) 永遠なる息子の聖職活動は、宇宙の中の宇宙への愛の神の顕示に注がれた。この神性の息子は、低い創造物を愛し、時間の悪事を働く者に慈悲を示すように優しい父を説得しようとする卑しい仕事には従事していない。空間の物質界の低い創造物に慈悲を示すように宇宙

なる父に求めるものとして永遠なる息子を心に描くことはいかに的外れであることか。神に関わるそのような概念は粗野で、異様である。むしろ、あなたは、神の息子のすべての慈悲深い奉仕が、父の心からくる普遍的な愛と無限の同情の直接的顕示であると気づくべきである。父の愛は、息子の慈悲の真の、かつ永遠の源である。

6:3.5 (75.10) 神は愛であり、息子は慈悲である。慈悲は適用された愛、永遠なる息子の人格における父の活動中の愛である。この普遍的な息子の愛は同様に普遍的である。愛が性の惑星で理解されるように、神の愛は父の愛により類似しており、一方、永遠なる息子の愛はむしろ母の愛情に似ている。そのような図解は、実に粗野ではあるが、私は、父の愛と息子の愛の間には、神性の中身ではなく、表現の質と方法に違いがあるという考えを人間の心に伝えることを希望してそれらを用いる。

4. 永遠なる息子の属性

6:4.1 (76.1) 永遠なる息子は、宇宙現実の精霊段階を動機づける。息子の精霊的な力はすべての宇宙現実に関連して絶対である。永遠なる息子は、すべての未分化の精霊エネ

ルギーの相互関係の、また精霊の引力の絶対把握によりすべての顕在化された精霊現実の完全な管理を行使する。すべての純粋な非断片化の精霊、そして、すべての精霊的存在体と価値は、楽園の第一の息子の無限の引き寄せの力に対応する。そして、永遠の未来が無限の宇宙の外観を目撃するならば、最初の息子の精霊引力と精霊力がそのような無限の創造の精霊的支配と有効な管理には完全に適切であることが分かるであろう。

6:4.2 (76.2) 息子は精霊的領域においてのみ全能である。宇宙管理の恒久的経済においては、機能上の無駄で不必要な反復には決して遭遇しない。神格は、宇宙聖職活動の無用の複製はしない。

6:4.3 (76.3) 最初の息子の遍在は、宇宙の中の宇宙の精霊的な統一を構成する。すべての創造の精霊的結合は、永遠なる息子の神性の精霊の随所の活発な臨場に基づく。我々が、父の精霊的臨場を想像するとき、永遠なる息子の精霊的臨場とそれを区別することは難しいとわかる。父の精霊は、永遠に息子の精霊の中に居住している。

6:4.4 (76.4) 父は精霊的に遍在していなければならないが、そのような遍在は永遠なる息子の精霊の随所の活動とは切り離せないようである。しかしながら、我々は、精霊の二重性質を帯びる父息子臨場のすべての状況において息子の精霊が父の精霊と協調していると信じる。

6:4.5 (76.5) 父は、人格との接触に際しては、人格回路内において行なう。父は、精霊的創造との個人的かつ感知可能の接触において、神格全体からくる断片に現れ、また、何処でも、いつでも宇宙に現れるこれらの父の断片は、孤独で、特異で、唯一の機能をもつ。息子の精霊は、すべてのそのような状況において宇宙なる父の断片化している臨場の性霊的機能と協調している。

6:4.6 (76.6) 精霊的に、永遠なる息子は、遍在している。永遠なる息子の精霊は、間違いなく、あなたとともに、また、あなたの周りにいるのであるが、神秘訓戒者のようにはあなたの内部や一部分ではない。内住する父の断片は、徐々に神性の態度へと人間の心を調整する。するとすぐ、そのような上昇する心は、ますます第二根源と中

枢の全能の精霊重力回路の精霊的な引き寄せの力に反応する。

6:4.7 (76.7) 最初の息子は、一般的に、そして、精霊的に自意識が強い。息子は、英知の面においては、父の完全な同輩である。知識、すなわち全知の分野においては、我々は、第一根源と第二中枢を見分けることができない。父のように、息子はすべてを知っている。息子は、いかなる宇宙の出来事にも決して驚かない。息子は始めから終わりを理解する。

6:4.8 (77.1) 父と息子は、実際に宇宙の中の宇宙におけるすべての精霊と精霊化された存在体の数と居所を知っている。息子は、自身の遍在の精霊の美徳によるものすべてを知るばかりではなく、父と、そして、結合の活動者と同等に崇高なるものの広大な反射的悟性を完全に認識している。その悟性は、7超宇宙のすべての世界において蒸散する万物にいつも気づいているそして、楽園の息子が全知である方法が他にもある。

6:4.9 (77.2) 愛情に満ち、慈悲深く、努めを果たす精霊的人格としての永遠なる息子は、宇宙なる父と完全に、無限に

同等であり、一方、下位の領域の上昇する存在体とのそれらのすべての慈悲深く優しい人格の接触においては、時間の進化の世界に自身を繁く授与する地方宇宙の楽園の息子のように、まさに親切で、思いやりがあり、我慢強く辛抱強い。

6:4.10 (77.3) 永遠なる息子の属性についてさらに長々と論じることは、不要である。例外には言及した上で、息子なる神の属性を理解し、正しく評価するために父なる神の精霊的属性を研究することのみが必要である。

5. 永遠なる息子の限界

6:5.1 (77.4) 永遠なる息子は、物理的領域で個人的には機能せず、被創造の存在体への心の聖職活動の段階においても結合の活動者を介する以外には機能しない。しかし、これらの資格取得は、精霊的な全知、遍在、全能のすべての神性の属性の十分かつ自由な行使において他の点ではいかなる方法でも永遠の息子を制限しない。

6:5.2 (77.5) 永遠なる息子は、神格絶対の無限に固有である精霊の可能性を人格的には浸透させないが、これらの可能

性が現実となるとき、息子の精霊重力回路の全能の把握内にやってくる。

6:5.3 (77.6) 永遠なる息子は、このように人格の共同創造者であるが、いかなる存在体にも人格を人格は宇宙なる父の単独的贈り物である。永遠なる息子は、父から人格を引き出しているが、父なくしては人格を与えない。息子は巨大な精霊部隊に起源を与えるが、そのような派生は人格ではない。息子が人格を作成するとき、息子は父との、もしくは、そのような関係で父の代理をするかもしれない結合創造者との連動においてそうする。授与せず、決して、自身が単独では、人格存在体を創造はしない。しかしながら、活動作関するこの制限は、人格以外の現実のいずれか、あるいはすべての型の現実を作成する能力を息子から奪うものではない。

6:5.4 (77.7) 永遠なる息子は、創造者の特権の伝播において制限されている。父は、最初の息子を永遠化する際、その後創造的な特質を所有するさらなる息子を産み出す神性行為において父に加わる力と特権を最初の息子に授与し、両者は、これをしてきたし、今そうしている。しか

し、これらの等位の息子が生み出されたとき、創造者としての特権は明らかにそれ以上は伝えられない。永遠なる息子は、創造者としての力を最初の、または、直接の人格化だけに伝える。したがって、父と息子が創造者たる息子を人格化するために結合するとき、両者は自分達の目的を達成する。しかし、地方宇宙の最高位の息子の中に、創造者たる息子の創造的特質の非常に限られた反映に見えるということにもかかわらず、こうして生み出された創造者たる息子は、決して創造者としての特権をその後に創造するかもしれない様々な息子の系列に移したり、委任したりはしない。

6:5.5 (78.1) 永遠なる息子は、無限の、かつ、単独に人格的存在体として、自分の本質を断片化することができない、すなわち、宇宙なる父と無限の精霊がするように他の実体、あるいは、人格に自我の人格化された部分を分配したり、与えたりすることができない。しかし、息子は、すべての創造に浴びせるために無制限な精霊として自分自身を与え、また、絶えずすべての精霊人格と精霊的な現実を自分に引きつけることができる。

6:5.6 (78.2) 常に覚えていなさい、永遠なる息子はすべての創造への精霊の父の人格的描写であるということを。息子は、人格であり、神格の意味において人格以外の何ものでもない。そのような神性の、かつ、絶対の人格は、崩壊したり、または断片化することができない。父なる神と精霊なる神は、実に人格的であるが、両者は、そのような神人格であることに加え、他のすべてでもある。

6:5.7 (78.3) 永遠なる息子は、個人的に思考調整者の贈与に参加はできないものの、永遠の過去に宇宙なる父と協議をし、父が思考調整者の贈与の企画をするにあたり、「我々自身のかたちに似るように人を造ろう。」と提案したとき、計画に賛成し、終わりなき協力を誓った。そして、父の精霊の断片があなたの中に住んでいるように、息子の精霊臨場もあなたを包み、またこれら2者は、いつまでもあなたの精霊的前進のために1者として働く。

6. 精霊の心

6:6.1 (78.4) 永遠なる息子は、精霊であり、また心を持つが、人間が理解できるところの心や精霊ではない。人間は、

心を有限段階、宇宙段階、物質段階、および人格的段階において理解する。また、人は、准人格(動物)段階において機能している生命体の心の現象を観測するが、人にとってそれが超物質存在体と関連づけられるときや、他を受け入れない精霊人格の一部として心の本質を理解することは、難しい。しかしながら、心は、存在の精霊段階に言及する際や、知性の精霊機能を意味するために用いられる際、異なって定義されなければならない。直接に精霊と結びついているその種類の心というものは、精霊と物質を調整するその心にも、物質にだけ結びついているその心にも匹敵してはいない。

6:6.2 (78.5) 精霊はつねに、意識し、注意をはらい、また独自性の様々な局面をもっている。何らかの局面における心がなければ、精霊存在体の友愛に何の精霊的意識もないであろう。心に相等する物、知ったり、知られる能力が、神格には元々ある。神格は、人格的、前人格的、超人格、あるいは、非人格的であるかもしれないが、神格は、決して愚かではない、つまり、同様の実体、存在体、または人格と少なくとも意志の疎通を図る能力を備えている。

6:6.3 (78.6) 宇宙のいかなる他の心とは異なる永遠なる息子の心は、父のそれに似ており、またそれは、父の心とともに宇宙と結合の創造者のさまざまの、そして、広範囲の心にとっての先祖である。父と息子の心は、つまり第三根源と中枢の絶対心を起源とするその知性は、思考調整者の前心に最も良く明らかである。というのは、父のこれらの断片は、結合の活動者の心の回路の完全に外にあるが、前心の何らかの型を持っているので。それらは、それらが知られているように知っている。それらは人間の考えの相当物をもつ。

6:6.4 (78.7) 永遠なる息子はまったく精霊的である。人はほとんど完全に物質的である。したがって、永遠なる息子の精霊人格に、楽園を包囲する精霊の7球体に、そして、楽園の息子の非人格的創造の本質に非常に関連する多くは、ネバドンの地方宇宙のモロンチア上昇のあなたの完成に続く精霊状態の到達を待ち受けなければならないであろう。そして、次に、あなたが超宇宙を通過しハヴォーナに移る間、「精霊の心」--精霊的洞察を授けられ始める間、精霊により隠されたこれらの神秘の多くがはっきりするであろう。

7. 永遠の息子の人格

6:7.1 (79.1) 永遠なる息子は、三位一体化の方法により、永遠なる息子の無条件の人格の足かせから逃げた宇宙なる父からのその無限の人格があり、また、その無限の人格の徳により父は、以来ずっと創造者と創造物の絶えず広がる宇宙へ無限の豊富さで自分を贈与し続けてきた。息子は絶対の人格である。神は父の人格である--人格の源、人格の贈与者、人格の要因。あらゆる人格的存在体は、ちょうど最初の息子が永遠に楽園の父からその人格を得ているように宇宙なる父から人格を得る。

6:7.2 (79.2) 楽園の息子の人格は、絶対であり純粋に精霊的であり、また、この絶対人格は、まずは結合の活動者への父の人格の贈与の神性かつ永遠の型であり、次には広範囲の宇宙全体の無数の創造物への人格の贈与の型である。

6:7.3 (79.3) 永遠なる息子は、実に慈悲深い聖職活動、神性の精霊、精霊的力、そして真の人格である。息子は、宇宙へ顕示がなされる神の精霊的で人格的な本質である--非人格で、超神性、非精霊的かつ純粋な可能性であるその

すべてが取り去られた第一根源と中枢の要点。しかし、生き生きとした美の描写と永遠なる息子の崇高な人格の壮大さを人間の心に伝えるのは不可能である。宇宙なる父を覆い隠す傾向のあるものすべてが、永遠なる息子の概念的認識を阻むほぼ同様の影響を及ぼす。あなたは、楽園への到達を待ち受けなければならない。その際、私がなぜ有限の心の理解へのこの絶対人格の特質を描くことができなかったかを理解するであろう。

8. 永遠なる息子の実現

6:8.1 (79.4) 永遠なる息子は、人格の独自性、性質、および他の属性に関し、宇宙なる父の最大限の同等者、完全な補体、永遠の対応者である。神が宇宙なる父であるという同じ意味において、息子は宇宙なる母である。そして、我々は高きも低きも皆、宇宙の家族を構成する。

6:8.2 (79.5) 息子の特質の真価を認めるには、あなたは、父の神性の特質の顕示を研究すべきである。両者は、永遠に、不可分に一つである。両者は、実際には知性の下方の系列により神性人格としては見分けがつけられない。その起源が神格自身の創造的行為であるもの達による

別々の認識はそれほど難しくはない。中央宇宙と楽園における誕生の存在体は、父と息子を宇宙制御の人格的統一としてだけではなく、宇宙行政の明確な領域で機能する別々の2個の人格としてもまた認識する。

6:8.3 (79.6) 人格としてのあなたは、宇宙なる父と永遠なる息子を、実際にそうであるので、別々の個人として思い描くかもしれない。しかし、宇宙行政においては、宇宙なる父と永遠なる息子は、非常にからみ合い、相互に関係がであるので、両者を見分けることがいつも可能であるというわけではない。宇宙の諸事万端において、父と息子が混乱させる相互関係に遭遇するとき、両者の働きを隔離しようとすることが、いつも有利であるというわけではない。神は、考えを開始するものであり、息子は、表現豊かな言葉であると単に思い起こしなさい。この不可分性は、それぞれの地方宇宙においては、1000万の生息界の創造物に対して父と息子の両者を代表する創造者の息子の神性に人格化される。

6:8.4 (80.1) 永遠なる息子は無限であるが、楽園の息子の人格を通し、また無限の精霊の忍耐強い聖職活動を通して接

近が可能である。楽園の息子の贈与の奉仕と無限の精霊の創造物の情愛深い聖職活動がなければ、物質起源の存在体は、永遠なる息子への到達をほとんど望むことはできない。そして、それは等しく真実である。これらの天の媒体の助けと指導で、神意識の人間は、確かに楽園に到達し、そのうちに息子の中のこの厳然たる息子の人格臨場に立つであろう。

6:8.5 (80.2) 永遠なる息子は、人間の人格到達の原型であるとはいえ、、父があなたの人間の人格の実際の贈与者であり、無限の精霊はあなたの人間の心の絶対源であることから、あなたには、父と精霊の両者の現実を把握することが、より簡単であることがわかる。しかし、あなたが精霊的進行の楽園への道を昇るにつれ、永遠なる息子の人格はあなたにとり次第に真実となるであろうし、永遠なる息子の無限に性霊的な心の現実は、前進的に精霊化しているあなたの心にますます認識できるようになるであろう。

6:8.6 (80.3) 永遠なる息子の概念は、あなたの物質的、あるいはその後のモロンチア心の中で決して光り輝くことはで

きないのである。あなたが精霊化し、あなたの精霊上昇が始まるまでは、永遠なる息子の人格に関しての理解は、ユランチアにおいて人格の中に生き、また人格として、かつて肉体を与えられ、人間の中で一個の人間として生きた楽園起源の創造者たる息子の人格についての概念の鮮明さを等しくすることは始まらないのである。

6:8.7 (80.4) その人格が人には分かりやすい創造者の息子は、あなたの地方宇宙経験の全体にわたり、専らより精霊的なもの、にもかかわらず人格的なものである永遠なる息子の完全な意味を理解できないあなたの無能さを補わなければならない。あなたがオーヴォントンとハヴォーナを経て進歩するとき、つまり、あなたの地方宇宙の創造者たる息子の生き生きとした絵と深い思い出をあなたの背後に残すとき、この物質とモロンチア経験の通過は、あなたが楽園方向に進行するにつれ、その現実と近さがつねに拡大する楽園の永遠なる息子に対する絶えず拡大する概念と増大する理解によって償われるであろう。

6:8.8 (80.5) 永遠なる息子は壮大かつ栄光の人格である。そのような無限の存在体の人格の現実を把握することは、必

滅の、かつ物質の心の力を超えているとはいえ、疑ってはいけない、永遠なる息子が人格であるということを。私は、自分が何を言っているか分かっているつもりである。私は、ほとんど数え切れないほどこの永遠なる息子の神性臨場に立ち、そして、優しい言いつけを実行に移すために宇宙を旅してきた。

6:8.9 (80.6) [楽園の永遠なる息子を描写するこの声明を定式化するために割り当てられた神性顧問による書。]

論文 7
永遠なる息子の宇宙との関係

7:0.1 (81.1) 最初の息子は、さまざまな生物集団を有する発展的宇宙現象において父の永遠の目的が徐々に展開とともにその精霊的局面の実行につねに関係している。我々は完全にこの永遠の計画を理解するというわけではないが、楽園の息子は確かに理解しているのである。

7:0.2 (81.2) 息子は、等位の息子と従属の息子に自分が持てる限りのすべてを与えようとしている点において父に似ている。息子は、それに加えて連合の幹部である無限の精

霊への自らの惜しみない贈与においても父の自己分配的な性質を分け与える。

7:0.3 (81.3) 第二根源と中枢は、精霊現実の擁護者としてすべての物質的な物を甚だ雄大に支えている楽園の小島の永遠的均衡役である。このようにして第一根源と中枢は、中央の小島の見事な有形美様式において、また永遠なる息子の崇高な人格の性霊的価値において永遠に明らかにされているのである

7:0.4 (81.4) 永遠なる息子は、精霊現実と精霊存在体の事実上の広大なる創造の擁護者である。精霊世界は、息子の習慣、すなわち個人的行為であり、また精霊の本質の非個人的現実は、いつも絶対なる息子の完全な人格の意志と目的によく対応している。

7:0.5 (81.5) 息子は、しかしながら、すべての精霊人格の行為に対し個人的には責任はない。人格的創造物の意志は、比較的自由であり、ゆえにそのような意志的存在体の活動を決定する。したがって、自由意志の精霊世界は、ちょうどユランチアの自然が、忠実に楽園と神格の完全性と不変性を顕示してはいないように、いつも忠実に永遠

なる息子の特質を代表しているというわけではない。だが、たとえ人間の、あるいは天使の自由意志行為を特徴づけるようとも、精霊の全現実の宇宙重力制御に対する息子の永遠の把握は、絶対に続くのである。

1. 精霊重力回路

7:1.1 (81.6) 神の内在性、遍在、全能、全知に関して教えられたすべてのことが、精霊的領域における息子に関して等しく事実である。全創造の純粋かつ普遍的な精霊重力は、つまりこの排他的に精霊的である回路は、直接に楽園の第二根源と中枢の人格へと戻る。楽園の第二根源と中枢の人格は、真の全精霊価値の遍在し、的確である精霊的把握の制御と操作を取り仕切る。その結果、永遠なる息子は、絶対的精霊主権を行使する。永遠なる息子は、文字通り全現実と精霊化された全価値を、まるで自分の手のくぼみにでもあるように保持する。精霊の普遍的重力の制御は、精霊の普遍的主権なのである。

7:1.2 (82.1) 精霊的事柄へのこの重力制御は、時間と空間とは関係なく機能する。したがって、精霊エネルギーは、伝播において衰えてはいないのである。精霊重力は決して

時間の遅れを被ることなく、空間的削減を受けない。それは、その伝播の距離の二乗に基づく減少はない。純粋な精霊力回路は物質的創造の質量による停滞はない。また、純粋な精霊エネルギーによる時間と空間のこの超越は、息子の絶対性に固有である。それは第三根源と中枢の抗重力の根源力介入によるものではない。

7:1.3 (82.2) 精霊現実は、それらの質的価値、すなわち、精霊本質の実際の度合いにより精霊重力の中心からの牽引力に対応する。精霊の現実 (質)は、物質（量）の組織化されたエネルギーが物理重力に反応するように精霊重力に反応する。精霊的価値と精霊根源力は実在する。人格の観点から、精霊は創造の魂である。物質は実態のない物体である。

7:1.4 (82.3) 精霊重力の反応と変動は、一個人の、あるいは一世界の精霊価値の中身、つまり質的精霊状態につねに忠実である。この牽引力は、いかなる宇宙状況、または惑星状態にある精霊相互間の、精霊内部の価値に即座に反応する。精霊的現実が宇宙において実現する度に、この変化は、精霊重力の直接、かつ瞬時の再調整を必要とす

る。そのような新精霊は、実際には第二根源と中枢の一部であり、必滅の人間は、たしかに精霊化の存在体になるのと同様に、精霊の息子、すなわち精霊重力の中枢と根源に達するであろう。

7:1.5 (82.4) 息子の精霊的牽引力は、息子関係の多くの楽園系列において本来それほどまでには備わっていない。なぜなら、より少ない創造単位において機能する精霊的誘引のそれらの地方体制が、絶対精霊重力回路内に存在するからである。精霊重力のそのような準絶対の焦点化は、時間と空間の創造者人格の神性の一部であり、崇高なるものの現れつつある経験的な総括的管理と関連している。

7:1.6 (82.5) 精霊-重力の牽引力とそれへの反応は、宇宙全体で作動するばかりではなく、個人や個体群の間でさえ作動する。いかなる世界、人種、国家、または個人の信心深い集団の精霊人格と精霊化人格の間には精霊的結束がある。同様の好みと切望をもつ精霊的傾向の人格間には、精霊の性質の強い魅力がある。気心が合うという表現は、完全に比喩というわけではない。

7:1.7 (82.6) 楽園の物質重力と同様に、永遠なる息子の精霊的重力は絶対である。罪と反逆は、地方宇宙回路の操作を妨げるかもしれないが、何ものも永遠なる息子の精霊重力を中断させることはできない。ルーキフェレーンスの反逆は、生息世界のあなたの体制とユランチアに多くの変化を引き起こしたが、我々は、あなたの惑星の結果として生じた精霊の隔離が、永遠なる息子の遍在精霊、あるいは精霊重力の関連回路のいずれかの臨場と機能に少しも影響を及ぼさないという観測はしていない。

7:1.8 (82.7) 壮大な宇宙の精霊重力回路のすべての反応は予測できる。我々は、永遠なる息子の遍在精霊の全行動と反応を認識するし、またそれらが信頼に足りると知っている。ちょうど人間が有限の物理重力の働きを試算するように、我々は、馴染み深い法に従い精霊重力を測定することができる。すべての精霊的なもの、存在体、および人格に対する息子の変わらない精霊反応があり、また、この反応は、すべてのそのような精霊価値の現実の度合い(現実の質的度合い)と一致している。

7:1.9 (83.1) しかしながら永遠なる息子の精霊的臨場の非常に信頼でき、予測可能のこの機能に平行して、それらの反応の中にはあまり予測できない現象が起こる。そのような現象は、恐らくは出現する精霊的可能性の領域内における神格絶対者の調整的活動を示している。我々は、永遠なる息子の精霊臨場は、厳然かつ無限の人格作用であるということを知っているものの、神格絶対者の推測された性能に関係する反応をまず人格だとは見なさない。

7:1.10 (83.2) 人格の見地からの、また人格による見地からの永遠なる息子と神格絶対者は、次のような方法で関係づけられるようである。永遠なる息子は、実際の精霊的価値の領域を支配しているが、神格絶対者は、潜在的精霊価値の広大な領域に浸透するようである。精霊の性質の全実際値は、永遠なる息子の重力把握に宿りの場を見つけるが、もし可能性があるならば、次には、明らかに神格絶対者の臨場に宿るのである。

7:1.11 (83.3) 精霊は、神格絶対者の可能性から出現するようである。進化する精霊は、崇高者と究極者の経験的かつ不完全な把握において相互関係を見い出す。精霊は、結

局は、永遠なる息子の精霊的重力の絶対把握に最終的目標を見つける。これは、経験的精霊の周期であるらしいが、実存的精霊は、第二根源と中枢の無限に固有である。

2. 永遠の息子の行政

7:2.1 (83.4) 楽園における最初の息子の臨場と人格的活動は、精霊的意味において深遠かつ絶対である。我々は、楽園から外へとハヴォーナを経て7超宇宙の領域を通過するにつれ、永遠なる息子の個人的活動を次第に発見できなくなる。後ハヴォーナ宇宙においては、永遠なる息子の存在は、楽園の息子に人格化され、崇高者と究極者の経験的現実により条件づけられ、神格絶対者の精霊の無制限な可能性と調整される。

7:2.2 (83.5) 中央宇宙においては、最初の息子の個人的活動は、永遠的創造の絶妙な精霊的調和のなかに認識できる。ハヴォーナは、驚異的に完全であるので、この原型宇宙の精霊的状態とエネルギー状態は、完全かつ永久の均衡にある。

7:2.3 (83.6) 息子は、超宇宙において人格的に臨場したり、居住したりはしない。これらの創造においては、息子は超人格表現だけを維持する。息子のこれらの精霊顕現は、人格的ではない。それらは宇宙なる父の人格回路の中にはいない。我々は、それらを超人格と名づける以外に何の用語も知らない。また、息子のこれらの精霊は有限存在体である。それらは准絶対でも絶対でもない。

7:2.4 (83.7) 排他的に精霊的かつ超人格である超宇宙の永遠なる息子の行政は、創造物人格には認識できない。それにもかかわらず、息子の人格作用のすべてに浸透している全精霊的衝動は、日の老いたるものの領域の全区域の活動のすべての局面で現われる。しかしながら、地方宇宙においては、我々は、永遠なる息子が楽園の息子の人格に個人的に提示するのを観測する。ここで、無限の息子は、等位の創造者たる息子の堂々たる軍団の人格に精霊的、かつ創造的に機能する。

3. 永遠の息子の個人との関係

7:3.1 (84.1) 地方宇宙上昇における時間の人間は、永遠なる息子の個人的代表としての創造者たる息子を頼みとする。

しかし、人間が超宇宙訓練型の上昇を始めると、時間の巡礼者は永遠なる息子が奮い立たせている精霊の崇高な臨場を次第に探知し、精霊的活力化のこの聖職活動の取り入れによる恩恵を得ることができる。上昇者は、ハヴォーナにおいて最初の息子のすべてに浸透している精霊の情愛深い抱擁をより意識するようになる。人間の上昇全体のどの段階においても、永遠なる息子の精霊は、時間の巡礼者の心、または魂に決して宿りはしないが、その善行は時間の前進している子らの福利と精霊的安全性につねに近く関係している。

7:3.2 (84.2) 永遠なる息子の精霊的重力の牽引は、生存する人間の魂の楽園上昇のための内在する鍵を構成する。本物の精霊価値のすべてと誠実な精霊化されたすべての個人は、永遠なる息子の精霊的重力の誤りのない把握に保持される。人間の心は、例えば、物質的構造としてその経歴を開始し、やがては、ほとんど完成させた精霊臨場として終局者部隊に集合され、物質的重力にあまり左右されなくなり、またこれにつれて、この全経験中に精霊重力の内部へ引く衝動にさらに対応するようになる。精霊

重力回路は、文字通り人の魂を楽園方向に引くのである。

7:3.3 (84.3) 精霊重力回路とは、人間の意識段階から実際の神格意識までの信心深い人間の心の本物の祈りを伝えるための基本経路である。あなたの陳情の真の精霊的価値を表すそれは、精霊重力の宇宙回路に突然に掴まれ、そして、すぐに、しかも同時に、関係するすべての神性人格に移るであろう。各々が、その個人の範囲に属するものに専念するであろう。したがって、あなたの実践的宗教経験においては、あなたが自身の地方宇宙の創造者たる息子、あるいは永遠なる息子を想像するか否かに関係なく、あなたの懇願の申し入れに際しては、それは重要ではない。

7:3.4 (84.4) 精霊重力回路の識別操作は、もしかすると物質的人体の神経回路の作用と比べられるかもしれない。知覚は内部へと神経経路全体を移動する。知覚の一部は、下方の自動脊椎中枢により引き止められ、かつ対処される。他の知覚部分は、脳の下部のそれほどには自動ではないものの習慣的に訓練された中枢に至り、そして最も

大切で重要な着信は、これらの従属中枢を素早く通り過ぎ、すぐに、人間の意識の最も高い段階に登録される。

7:3.5 (84.5) だが、精霊的世界の見事な技法は、よりはるかに完全であることか。あなたがそれを一度表現するならば、もし何かが、精霊の崇高価値に満ちているあなたの意識に起こるならば、宇宙のどんな力も、直接に全創造の絶対精霊の人格へのそのひらめきを妨げることはできないのである。

7:3.6 (84.6) 逆に、あなたの懇願が純粋に物質的であり、完全に自己中心的であるならば、そのような価値のない祈りは、永遠なる息子の精霊回路に場所を見つけ得るための何の計画も存在しない。「精霊により言葉に置き換えられて」いないいかなる陳情内容も、宇宙の精霊回路にはいかなる場所も見つけることができない。そのような完全に利己的で物質的な要求は、倒れて死ぬ。それらの要求は、真の精霊価値の回路を昇らない。そのような言葉は、「音が鳴る真鍮とリンリンと鳴るシンバル」のようなものである。

7:3.7 (85.1) それは動機づける考え、精霊的な内容であり、それは人間の懇願を有効にするのである。言葉は無価値である。

4. 神性の完全性計画

7:4.1 (85.2) 永遠なる息子は、意志をもつ創造物の創造、進化、上昇のための普遍的計画であるところの神性の前進計画の功を奏する実行における父との永遠のつながりにある。そして、神性の誠実さにおいて、息子は父の永遠の同輩である。

7:4.2 (85.3) 父とその息子は、永遠の完全性への時間の物質存在体を前進させるためのこの巨大な到達計画の定式化と実行において1つである。空間の上昇する魂たちの精霊的高揚のためのこの課題は、父と息子の共同創造であり、無限の精霊との協力において、神性の目的の連合的遂行に関与している。

7:4.3 (85.4) 完全性到達のこの神性計画は、驚くほどに関連はしているものの、3つの特異的な宇宙冒険事業を推進する。

7:4.4 (85.5) 1. 進歩的到達のための計画。これは、宇宙なる父の進化的上昇の計画である、つまり永遠なる息子が、「我々自身の姿に似せて人を造ろう」という父の提案に同意し、率直に受け入れられた設計図。時間の創造物を高めるためのこの対策は、父の思考調整者の贈与と人格の特権との物質的創造物の贈与を伴う。

7:4.5 (85.6) 2. 贈与計画。次の普遍的計画は、永遠なる息子とその等位の息子の父-顕示の偉大なる事業である。これは、永遠なる息子の提案であり、また進化する創造への神の息子の贈与を伴い、そこで、全宇宙の創造物に父の愛と息子の慈悲を人格化し、事実化すること、すなわち肉体化し現実のものとするのである。楽園の息子は、贈与計画に備わる、また、愛のこの奉仕の暫定的な特徴として、誤り導かれた創造物の意志が精霊的危機に置かれてきたところのその機能回復者として行動する。いつでも、どこでも、到達計画の機能における遅れは発生し、もし反逆が、おそらく、この事業を台なしにしたり、または複雑にするならば、次に、贈与計画に関する非常時の対策が直ちに、活発になるのである。楽園の息子は、回収者として誓約し、またいつでも機能するために、つ

まり、反逆のほかならぬその領域に行くこと、そして、そこで球体の精霊的状態を回復するために、待機している。等位の創造者たる息子は、主権獲得の経験的贈与の経歴に関してユランチアにおいてそのような武勇の貢献をしたのであった。

7:4.6 (85.7) 3. 慈悲の聖職活動計画。到達計画と贈与計画が練られ公表されると、無限の精霊は、自ら、しかも単独で、慈悲の聖職活動の驚異的かつ普遍的事業を考案し操業した。これは、到達の請け負い事業と贈与の請け負い事業の双方の実用的かつ効果的操作に非常に重要な奉仕であり、第三根源と中枢の精霊的人格すべてが、神格の第三人格の性質の非常に多くの部分である慈悲の聖職活動の精霊を分かち合っている。無限の精霊は、創造においてばかりではなく行政においてもまた、実際に、しかも文字通りに父と息子の合同行政者として機能する。

7:4.7 (86.1) 永遠なる息子は、創造物上昇の父の普遍的計画の個人的受託者、つまり神性の管理人である。「私が完全であるように、あなたも完全でありなさい、」と普遍的な命令を発布し、父は、この途方もない事業の履行を永

遠なる息子に託した。また、永遠なる息子は、無限の精霊である神性等位者とのこの崇高的事業業の育成を共にする。このようにして、神格は、創造、制御、進化、顕示、および聖職活動の作業において効果的に協同するのである。そして、もし必要ならば、回復と更生においても。

5. 贈与の精霊

7:5.1 (86.2) 永遠なる息子は、全創造への宇宙なる父のその驚異的指令の散布に無条件で参加した。「ハヴォーナの父が完全であるように、あなたも完全でありなさい。」という指令。その勧誘命令は、その後ずっと、全生存計画と永遠なる息子の贈与事業とその等位であり協働する息子の広大な家族を動機づけてきた。また、他ならぬこれらの贈与において、神の息子は、すべての進化的創造物への「道、真理、命」になった。

7:5.2 (86.3) 永遠なる息子は、父が、前人格の思考調整者の贈り物を通して連絡するようには直接には人間との接触はできないが、人いるところで、時には、人間自身として

あることが可能になるまで、神性の息子であることの一連の下降段階により創造された人格に近づくのである。

7:5.3 (86.4) 永遠なる息子の純粋に個人的な特性の断片化は不可能である。永遠なる息子は、精霊的作用として、または、人格としての他には決して仕えない。息子には、父-調整者がそこに関与するが、永遠なる息子が贈与の方法によるこの制限の代償するという意味においては、創造物経験の一部になることは不可能であることがわかる。断片化された実体の経験が宇宙なる父にとって意味するものと同じように、楽園の息子の肉体化における経験が永遠なる息子にとっても同じ意味をもつ。

7:5.4 (86.5) 永遠なる息子は、人間の心に宿る思考調整者である神性意志として人に達することはないが、息子のネバドンのマイケルの神性人格がナザレのイェススの人間の性質に具体化されたときに、ユランチアの人間に達した。神の楽園の息子は、創造された人格の経験を共有するために、そのような創造物のまさしくその性質を仮定し、実際の創造物自体としてそれらの神性人格に肉体を与えなければならないのである。肉体化、つまりソナリ

ントンの秘密は、さもなければ人格絶対のすべてを取り囲む足枷からの息子の逃避手段である。

7:5.5 (86.6) 大昔、永遠なる息子は、時間の上昇する巡礼者を含むハヴォーナのすべての住民と巡礼者の啓発と前進のために中央の創造のそれぞれの回路に自分自身を与えた。永遠なる息子は、これらの7 贈与のどれも、上昇者あるいはハヴォーナ出身者としては機能しなかったのである。永遠なる息子は自分自身として存在した。永遠なる息子の経験は特異であった。それは、人間とも、あるいは他の巡礼者とも一緒ではなく、または人間として、あるいは他の巡礼者としてではなかったが、超人格的意味において結合しやすい何らかの方法であった。

7:5.6 (86.7) 永遠なる息子は、ハヴォーナの内側の回路と楽園の岸とに介在する眠りというものも経験しなかった。永遠なる息子にとり人格の意識を中断させるということは、全精霊的重力が自分に集中しているので、絶対の存在体である彼には可能ではない。そして、これらの贈与の時代、精霊的な輝きの中央の楽園の場所は、薄暗くは

なく、普遍の精霊重力の息子の把握は低下してはいなかった。

7:5.7 (87.1) ハヴォーナにおける永遠なる息子の贈与は、人間の想像力の範囲内を超えるものである。それらは超越的であった。永遠なる息子は、その時、またその後、すべてのハヴォーナの経験に加えたが、我々は、彼が自身の実存的本質の想定された経験上の能力に加えたかどうかを知らない。それは、楽園の息子の贈与の神秘に含まれる。しかしながら、我々は、永遠なる息子がこれらの贈与任務において取得したものは何であろうとも以来ずっと維持していると信じるのである。だが、我々は、それが何であるかを知らない。

7:5.8 (87.2) 神格の第二人格の贈与の理解における我々の苦労が何であろうとも、我々は、永遠なる息子の一名の息子のハヴォーナ贈与を理解するし、その息子は、文字通り中央の宇宙回路を通過し、上昇者の神格到達の準備を構成するそれらの経験を実際に共有した。これが、上昇する巡礼者の回路から回路へと人生経験をした、つまりハヴォーナに達するすべての人間の最初の者であるグラン

ドファンダの時代に巡礼者と共に個人的に各回路を旅をした最初のマイケル、長子の創造者たる息子である。

7:5.9 (87.3) ほかに何を顕示したとしても、この最初のマイケルが、ハヴォーナの創造物へ最初の母たる息子の超越的贈与をしたのであった。その後永久にハヴォーナ回路を作る冒険において努力する時間の各巡礼者は、永遠なる息子が、ハヴォーナへの漸進的到達の7回路における時空の巡礼者の経験に参加するために楽園の力と栄光を7回放棄したという確かな知識にその後永久に励まされ、力強くされたというほどまでに具体的である。

7:5.10 (87.4) 永遠なる息子は、時間と空間の宇宙全体における贈与の聖職活動においてすべての神の息子にとっての模範的ひらめきである。等位の創造者たる息子と准権威ある息子はすべて、息子資格のあるの他の明らかにされていない系列と共に、創造物の生命の様々な系列と創造物自体として自分たちを与えるこの素晴らしい意欲をともにする。したがって、精霊において、また起源の事実と同様に性質の類似ゆえに、空間世界への神のそれぞれの息子の贈与において、これらの贈与において、これら

の贈与をへて、それにこれらの贈与により、永遠なる息子が、宇宙の意志を持つ創造物に自身を贈与してきたということが事実になる。

7:5.11 (87.5) 精霊と性質に関して、すべての属性に関しないまでも、それぞれの楽園の息子は、最初の息子の神々しく完全な描写である。楽園の息子を見たものは誰でも神の永遠なる息子を見たということは、文字通り本当である。

6. 神の楽園の息子

7:6.1 (87.6) 神の複数の息子に関する知識不足は、ユランチアにおける大混乱の源である。この無知は、「神の息子らが喜びを宣言し、明けの明星のすべてが一緒に歌ったとき、」というこれらの神性人格の秘密会議に関する記録のそのような声明に直面し続けている。領域標準時の1千年毎に、神性の息子の様々な系列は、定期的秘密会議のために集合する。

7:6.2 (87.7) 永遠なる息子は、創造全体において機能するように、下降する神の息子の全系列を実にふんだんに特色づける慈悲と奉仕の属性の人格的源である。すべての無限

の属性ではないまでも、すべての神性の性質を、永遠なる息子は、自身の神性の特徴を明らかにするために永遠の小島から宇宙の中の宇宙へと出かける楽園の息子に絶えず伝えるのである。

7:6.3 (88.1) 最初の永遠なる息子は、宇宙なる父の「第一番目」に完成された無限の考えの子-人格である。宇宙なる父と永遠なる息子が、新たで、初の、同一の、特異で絶対の人格の考えを共同で考案する度に、まさしくその瞬間に、この創造的着想は、新らしい、最初の創造者たる息子の存在体と人格の中に完全かつ最終的に人格化される。精霊の性質、神性の英知、および等位の創造力において、これらの創造者たる息子は、潜在的に父なる神と息子なる神に対等である。

7:6.4 (88.2) 創造者なる息子は、楽園から時間の宇宙に出向き、そして、制御的、創造的である第三根源と中枢の媒体と協力して地方宇宙の進歩的発展の組織化を終了する。これらの息子は、物質、心、精霊の主要かつ普遍的制御に配属されないし、または、携わってもいない。したがって、それらは、第一根源と中枢と、それに等位の

絶対者のもつ前存在、優先性と首位性により創造的行為において制限されるのである。これらの息子は、みずからが生み出すものだけを管理することができる。絶対的行政は、存在の優先順位に備わっており、臨場の永遠性になくてはならないものである。父は、宇宙において第一のままである。

7:6.5 (88.3) 創造者たる息子が父と息子により人格化されるように、息子と精霊により個人化される権威の息子もそうである。これらは、創造物肉体化の経験において、時間と空間の創造における生存の裁判官として役目を果たす権利を獲得する息子である。

7:6.6 (88.4) 父、息子、精霊はまた、人間と神性のすべての人格の、崇高な教師として壮大な宇宙に分布する万能の三位一体の教師たる息子を人格化するために結合する。そして、ユランチアの人間には伝えられていない数多くの楽園の息子の他の系列がある。

7:6.7 (88.5) 最初の母たる息子と、全創造にわたり拡散しているこれらの楽園の息子の部隊の間には直接かつ専属の回路がある。その機能が絶対に近い精霊的関係でそれらを

結びつける精霊的類似の特質に固有の回路。息子間のこの回路は、精霊重力の普遍的回路とは似ても似つかず、精霊重力の普遍的回路はまた、第二根源と中枢の人格に中心を置く。楽園の神格の人格に起源をもつ神の息子のすべては、永遠の母たる息子との直接、かつ耐えることのないの交信をする。そして、そのような交信は瞬時に起こっている。それは、時として空間により条件づけられるが、時間からは独立している。

7:6.8 (88.6) 永遠なる息子は、楽園の息子の全系列に属する状況、考え、および多様な活動に関し常に完全な知識があるばかりではなく、永遠の中心の一次的創造における全創造物の心に存在する、また等位の創造者たる息子の時間の二次的創造の心に存在する精霊的価値を伴うすべてに関してもまた常に完ぺきな知識がある。

7. 父の崇高的顕示

7:7.1 (88.7) 永遠なる息子は、宇宙なる父の精霊と人格に属する完全で、専属の、普遍的かつ最終的顕示である。父に関する全知識、また関係ある情報は、永遠なる息子と楽園の息子から来なければならない。永遠なる息子は、永

遠に存在しており、また完全に、しかも精霊上の制限なしで父と1つでいる。両者は神性人格においては、等位である。精霊的性質においては等しい。神性においては同じである。

7:7.2 (89.1) 神の特質は、本質的に息子の人格面において改善されるということは全くありえない。なぜなら、神性の父は、無限に完全であるが、その特質と人格は、非人格の、また非精霊の除去により、被創造の存在体への顕示のために増幅される。第一根源と中枢は、はるかに人格以上のものであるが、第一根源と中枢の父の人格の全精霊資質は、精霊的に永遠なる息子の絶対人格に臨場している。

7:7.3 (89.2) 第一の息子とその息子は、すべての創造への父の精霊的かつ人格的性質の普遍的顕示に従事している。中央宇宙、超宇宙、地方宇宙か、あるいは生息惑星において宇宙なる父を人と天使に顕示するのは、楽園の息子である。永遠なる息子とその息子は、創造物接近路を宇宙なる父に明らかにする。高い起源の我々でさえ、永遠な

る息子と永遠なる息子の息子における特質と人格の顕示を研究する際、ずっとはるかに父を完全に理解する。

7:7.4 (89.3) 父は、永遠なる息子の神性の息子を介してのみ人格としてあなたのところに降りてくる。そして、この同じ生きた道によってあなたは父に達する。あなたは、神性の息子のこの集団の指導により父の元へと昇る。そして、これは、他ならぬあなたの人格が宇宙なる父の直接贈与であるにもかかわらず、真実のままで続く。

7:7.5 (89.4) 永遠なる息子の広範囲にわたる精霊的行政のこれらの広範囲の全活動において、息子は、父が本当に、実際に人格であるように、人格であるということを忘れてはいけない。実に、かつての人間の系列の存在体にとり、宇宙なる父よりも永遠なる息子に、より簡単に接近するであろう。ハヴォーナ回路を通る時間の巡礼者の進行において、あなたは、父について明察する用意ができるずっと前に息子に達する力が十分にあるであろう。

7:7.6 (89.5) あなたは、かつては地球の人の息子、今はあなたの地方宇宙の高揚された君主--人の息子と神の息子--であるあなた自身の創造者たる息子による愛の奉仕におい

てなされる神性のこれらの属性の顕示について熟考する際、慈悲ある永遠なる息子の性格と慈悲深い性質の多くを理解すべきである。

7:7.7 (89.6) [楽園の永遠なる息子について表現するこの声明を練る任務を受けた神性顧問により書き綴られた]

論文 8
無限の精霊

8:0.1 (90.1) 宇宙なる父の「最初の」無限で絶対的な考えが、その神性表現に適した完全で適切なそのような言葉を永遠なる息子に見つける永遠にまで遡ると、相互表現と総合作用の自在で無限の行為者のための思考-神と言葉-神の両者の絶大な願望が、あとに続くのである。

8:0.2 (90.2) 父と息子の双方は、永遠性の夜明けにおいて、相互依存を、つまり両者の永遠かつ絶対単一性を際限なく認識するようになる。これにより、両者は神性連携の無限かつ永遠の契約を結ぶのである。この終わりなき盟約は、永遠の全回路にわたる結合的概念の遂行にむけて結ばれる。そして、この永遠の出来事以来、父と息子はこの神性結合を続ける。

8:0.3 (90.3) 我々は現在、神性の第三人格である無限の精霊の永遠の起源と向き合っている。父なる神と息子なる神が同一、かつ無限の活動をともに思いつくまさにその瞬間、--絶対的考え、つまり計画の実行--まさしくその瞬間に、無限の精霊は、存在へと成熟して飛び立つのである。

8:0.4 (90.4) こうして神格起源の系列を語るに際し、私は、単純にあなたがそれらの神格関係について考えることができるようにするのである。事実上は、3者すべてが永遠に存在しているのである。それらは実存的である。それらには、時代の始まりも終わりもない。等位で、崇高で、究極で、絶対であり、無限である。3者は今存在しており、常に存在してきており、未来にも存在する。また、それらは明瞭に個性化されているが、永遠に関連する3人格、つまり父なる神、息子なる神、精霊なる神である。

1. 活動の神

8:1.1 (90.5) 永遠の過去において、つまり無限の精霊の人格化にあたり、神性の人格回路は完ぺきで完全になる。活動

の神は実在し、驚異の創造劇—普遍的冒険—永遠の時代の神性の全景—のための広大な舞台空間が、準備されている。

8:1.2 (90.6) 無限の精霊の第1幕は、神性の両親、父-父、および母-息子の点検と認識である。彼、つまり精霊は、無条件にその両方を確認する。精霊は、結合された性質と機能はもとよりそれらの別々の人格と無限の属性を完全に認識している。次に、第一人格と第二人格との平等性にもかかわらず神格の第三人格は、卓越した意欲と鼓舞する自発性をもって、父なる神への永遠の忠誠心を誓約し、息子なる神への永続する依存を認める。

8:1.3 (90.7) 永遠の回路というものは、この相互作用に備わっており、またそれぞれの人格独立と3者すべての行政連合の互いの認識において設立される。楽園の三位一体は実在する。宇宙空間の舞台は、永遠なる息子の人格を介し、また、父-息子創造者連携の現実遂行のための行政体である活動の神の実行により、宇宙なる父の創造的展開目的の多様かつ果てしない全景が設けられている。

8:1.4 (91.1) 活動の神は機能し、死の丸天井は賑わっている。10億の完全な球体が突如として出現する。この仮定的永遠の瞬間に先立ち、楽園に固有の空間エネルギーは実在し、潜在的に作用可能であるが、それらには、存在の現実性はない。その間断のない牽引力への物質的現実の反応手段を除いては、物理的重力も測定し得ない。永久に遠方であるこの（想定上の）瞬間に、物質宇宙はないが、まさにその瞬間10億の世界が具体化し、楽園の永遠の把握においてそれらを保持するに十分かつ適切な重力が明らかに見られる。

8:1.5 (91.2) 今、神の創造を通して第2のエネルギーの型が放たれると、この流出する精霊は、永遠なる息子の精霊的重力によって即座に捉まれる。こうして、二要素からなる重力に取り巻かれる宇宙は、無限のエネルギーの接触をうけ、神性の精霊に浸される。このようにして、命の土壌が、無限の精霊の関連する知力の回路において明らかにされる心の意識のために準備されるのである。

8:1.6 (91.3) 神の主要な創造全体に拡散された潜在的存在のこれらの種子に、父は働きかけ、創造物の人格が現れる。

次に、楽園神格の臨場は、すべての組織化された空間を満たし、万事万物を楽園方向に引き寄せ始める。

8:1.7 (91.4) 無限の精霊は、父と息子の結合概念と連合意志に従い自身により、自身とともに、しかも自身の中にこの中央宇宙を創造し、同時にハヴォーナ世界の誕生を永遠化する。第三人格は、まさしくその結合創造により神格化し、その結果、永久に連合創造者になる。

8:1.8 (91.5) これらは、父と息子の両者の結合提携者と専属行政官、つまり第三根源と中枢の活動による、また、その中における父と息子の創造的展開の壮大かつ凄まじい時代である。これらの輝かしい時代に関するいかなる記録も存在していない。我々にはこれらの強力な相互活動を具体化する無限の精霊からのわずかな開示しかなく、無限の精霊は、中央宇宙とそれに加えて関係するすべてが、人格と意識的臨場の達成と同時に永遠化されたという事実を確かめるにすぎない。

8:1.9 (91.6) 要するに、無限の精霊は、自分が永遠であるので、中央宇宙も永遠であるということを明らかにしている。そして、これは宇宙の中の宇宙の歴史の従来の出発

点である。万物の中心にあり、極めて見事に機能する広大な宇宙を結晶化した創造的エネルギーと行政上の知恵のこの驚くべき出現に先立ついかなる出来事、または相互作用に関しても絶対に何も知られてはいないし、何の記録も存在しない。この出来事を超え、永遠性の不可解な相互作用と無限の深層が横たわる—絶対的神秘。

8:1.10 (91.7) このようにして我々は、時間的限定の、空間的条件の必滅の人間の心へ降りてくる解釈として第三根源と中枢の続いて起こる起源を描写する。人の心には、宇宙歴史の視覚化のための出発点がなければならないし、私は永遠に関する歴史的概念へのこの接近方法を提供するように指示されてきた。物質的な心にとり、一貫性は第一原因を必要とする。それゆえ、我々は、宇宙なる父を全創造の第一根源として、また絶対的中枢として仮定し、同時に息子と精霊は、宇宙歴史の全局面において、また創造的活動のすべての領域において父と共に永遠であるということを全創造物に教授する。そして、我々は、いかなる意味においても楽園の小島の現実と永遠性を、そして、無条件の絶対、宇宙の絶対、神格絶対の現実と永遠性を軽視することなくこれをする。

8:1.11 (92.1) それは、時間の子供の物質的心の範囲で永遠の父を想像するには十分である。我々は、どの子もまず親子の立場の関係を習得することにより、次に、家族全体を包括的に捉えるためにこの概念を拡大することにより最もよく自分自身を現実に関連づけるということを知っている。続いてその子の成長している心は、家族関係の概念に、次に、宇宙、超宇宙のそれらに、宇宙の中の宇宙のそれらにさえと適応することができるであろう。

2. 無限の精霊の本質

8:2.1 (92.2) 結合創造者は、永遠から来ており、宇宙なる父と永遠なる息子と完全に、しかも無条件に1つである。無限の精霊は、楽園の父の性質だけではなく、最初の息子の性質も完全に反映する。

8:2.2 (92.3) 第三根源と中枢は、数多くの名称により知られている。普遍なる精霊、崇高なる案内者、連合創造者、神性行政者、無限の心、精霊の精霊、楽園の母なる精霊、連合活動者、最終調整者、遍在の精霊、絶対知性者、神性の活動。ユランチアにおいては、時々宇宙心と混同される。

8:2.3 (92.4) 神は精霊であるので、神格の第三人格を無限の精霊と命名することは全くもって適切である。しかし、基本的な現実を問題として、また精霊とともに心を問題に根ざした基礎条件として見誤る傾向のある物質の創造物には、第三根源と中枢が、無限の現実、宇宙の主催者、または人格等位者と呼ばれるならば、第三根源と中枢をよりよく理解できるであろう。

8:2.4 (92.5) 神性の宇宙顕示としての無限の精霊は、不可解であり、完全に人間の理解を超えている。あなたが、精霊の絶対性を理解するには、宇宙なる父の無限を熟考し、最初の息子の永遠に畏敬の念を抱いてさえいれば十分なのである。

8:2.5 (92.6) 実に、無限の精霊の人格は神秘であるが、父と息子の人格の神秘ほどではない。父の性質の全側面のうち連合創造者は最もきわだって自身の無限を明らかにする。主たる宇宙が最終的には無限へと広がったとしても、連合活動者の精霊臨場、エネルギー制御、心の可能性、際限のないそのような創造需要にこたえるには適切であることがわかるであろう。

8:2.6 (92.7) 無限の精霊は、あらゆる方法で宇宙なる父の完全性、正義、愛を共有しているものの、永遠なる息子の慈悲の属性方向に傾いており、こうして、壮大な宇宙への楽園の神格の慈悲の聖職活動者になる。ずっと--遍くかつ永遠に--精霊は、慈悲の聖職活動者である。なぜなら、神性の息子が神の愛を明らかにするように、神性の精霊も神の慈悲を表現するのであるから。

8:2.7 (93.1) すべての善は父に起源を取るのであるから、精霊が父以上に善の多くを持ち得るということは可能ではないが、精霊の行為において、我々はそのような善をよりよく理解することができる。父の実意と息子の忠誠は、無限の精霊の人格の情愛深い聖職活動と絶えざる奉仕により球体の精霊存在体と物質的創造物にとって極めて現実的にされる。

8:2.8 (93.2) 連合創造者は、父の考えの美と真実の全特徴を引き継ぐ。神性のこれらの崇高的特色は、宇宙の心のほぼ崇高段階において第三根源と中枢の無条件で無限の心の、果てしなく、しかも永遠の知恵に従属して調整される。

3. 父への、息子への精霊の関係

8:3.1 (93.3) 永遠なる息子が、宇宙なる父の「第一」絶対と無限の考えの言語表現であるのと同様に、連合活動者は、思考-言語の絶対結合である父-息子の人格の連携による結合された行動のための「第一」の完成された創造的概念、あるいは計画の完全な実行である。第三根源と中枢は、同時に、中心的、あるいは厳命的創造を永遠に続け、また、宇宙間にはこの主要な創造だけが永遠に存在している。

8:3.2 (93.4) 第三根源は、その人格化以来個人的にはそれ以上は宇宙創造に参加しない。宇宙なる父は、ありとあらゆるものを永遠なる息子に委任する。同様に、永遠なる息子は、あらゆる可能な権威と力を連合創造者に授ける。

8:3.3 (93.5) 永遠なる息子と連合創造者は、創造されたてきたあらゆる後ハヴォーナ宇宙を提携者として、また、等位の人格を通じて計画し、築いてきた。精霊は、息子が最初の、かつ主要な創造において父と維持する関係を、その後の全創造において息子と同じ個人的関係を、維持する。

8:3.4 (93.6) 永遠なる息子の創造者たる息子と無限の精霊の創造の精霊は、あなたとあなたの宇宙を創造した。父がそれらが組織したものを忠実に維持し続ける間、それぞれの製作の創造物への聖職活動はもちろん、進め支えるそれら自身の仕事が、この宇宙の息子とこの宇宙の精霊に譲り渡される。

8:3.5 (93.7) 無限の精霊は、時間と空間の全世界における真実を愛するすべての魂を引きつける共同事業実行のためのすべてを愛する父とすべての慈悲深い息子の有能な動作主である。永遠なる息子が宇宙の創造物のための完全性到達の父の計画を受け入れたまさしくその瞬間に、つまり、上昇事業が父と息子の計画となったその瞬間に、無限の精霊が結合の、しかも永遠の目的実行のための父と息子の結合の管理者になった。その際、無限の精霊は、父と息子に神性臨場と精霊人格の自分のすべての資源を誓約した。無限の精霊は、生存意志をもつ創造物を楽園の完全性の神性の高さへの発揚計画にすべてを捧げた。

8:3.6 (93.8) 無限の精霊は、宇宙なる父と永遠なる息子の完全で、独占的で、普遍的な顕示である。父-息子連携に関

する知識のすべては、無限の精霊、つまり神性の思考-言語の結合の共同代表を通して得られなければならない。

8:3.7 (93.9) 永遠なる息子は、宇宙なる父への接近の唯一の手段であり、無限の精霊は永遠なる息子に達する唯一の方法である。ただ精霊の辛抱強い聖職活動によってのみ時間の上昇の存在体には息子の発見が可能なのである。

8:3.8 (94.1) 上昇する巡礼者が達到達すべき万物の中心にいる楽園神格の中の第一番目は、無限の精霊である。第三人格は、第二人格と第一人格をおおい隠しており、したがって、息子とその父への提示のための候補者全員にいつも最初に提示されなければならない。

8:3.9 (94.2) そして、他の多くの方法で、精霊は父と息子を等しく代表し、同様に両者に仕えているのである。

4. 神性の聖職活動の姿勢

8:4.1 (94.3) 息子の言葉が、神の考えを解釈し、そして「肉体となった」とき、共同創造者の結合された本質の情愛深い慈悲を示す精霊的宇宙は、楽園重力が万物をまとめて

保持する物理的宇宙に似ている。しかし、この有形無形の全創造を通して、無限の精霊とその精霊の子らが神性両親の聡明な子供らの協力的な工夫と作成に向けての神性の両親の相まった慈悲、忍耐、永続的な愛情を明らかにする広大な舞台がある。心への永遠の聖職活動は、精霊の神性格の本質である。そして、連合活動者のすべての精霊の子は、聖職活動へのこの願望を、すなわち奉仕へのこの神性的衝動を分かち合う。

8:4.2 (94.4) 神は愛であり、息子は慈悲であり、精霊は聖職活動である--すべての知力ある創造物への神性愛と無限の慈悲の聖職活動。精霊は、父の愛と息子の慈悲の人格化である。父と息子は、精霊のなかに、普遍的奉仕のために永遠に結合しているのである。精霊とは、創造物創造に適用された愛、すなわち父の愛と息子の愛の結合された愛である。

8:4.3 (94.5) 無限の精霊は、ユランチアにおいては遍在的影響、普遍的臨場として知られているが、ハヴォーナにおいては、あなたは、無限の精霊を実際の聖職活動の個人的臨場として知るであろう。楽園精霊の聖職活動は、こ

こでは、時間と空間の世界の創造された存在体に奉仕する各等位の精霊と各下位の人格にとっては模範的で奮い立たせる原型である。無限の精霊は、神性のこの宇宙において永遠なる息子の7個の超自然的出現に本格的に参加した。同様に、無限の精霊は、最初の息子ミカエルとともに、ハヴォーナの回路の7贈与に参加し、その結果、天のこれらの完全な回路を横断する時間の巡礼者全員に同情的でしかも、理解ある精霊の聖職活動者になったのである。

8:4.4 (94.6) 神の創造者たる息子が予定されている地方宇宙への義務を負う創造者としての責任を受け入れるとき、無限の精霊の人格は、創造的な冒険の任務に出向く際、この息子ミカエルの精力的な聖職活動者として公約する。我々は、特に個々の創造の娘を通じて、地方宇宙の母たる精霊を通じて、無限の精霊がますます高い段階の精霊的到達への物質の創造物の上昇促進の課題に専念したことを知るのである。創造物の聖職活動のこのすべての仕事が、これらの地方宇宙の創造者たる息子の目的との完全な調和と、またこれらの地方宇宙の創造者たる息子の人格との密接な結合において行われる。

8:4.5 (94.7) 神の息子が父の人格の宇宙への愛を明らかにする大事業に従事しているように、無限の精霊も、各宇宙のすべての子供の個々の心への父と息子の結合された愛を顕にする果てしない聖職活動に捧げるのである。これらの局部的創造において精霊は、特定の神の息子のようには（一部の息子のようには）人類のもとに人体に似た姿で下りては来ないが、無限の精霊とその等位の精霊は、天使としてあなたの側に立ち、あなたの地上生活の劣性の道案内をするために出現するまで、自身が下降する、つまり一連の驚くべき神性希釈を嬉々として耐えるのである。

8:4.6 (95.1) 無限の精霊は、他ならぬこの減少的手順により、また人格として、実際に、動物起源の球体のあらゆる存在体にはなはだしく接近するのである。精霊は、万物の中心の神性の第三人格として自分の存在を全く無効にすることなくこのすべてを為すのである。

8:4.7 (95.2) 連合創造者は、本当に、しかも、永遠に、偉大な聖職活動の人格、つまり普遍的慈悲の聖職活動者である。精霊の聖職活動を理解するには、精霊が父の果てし

ない愛と息子の永遠の慈悲の結合的描写であるという真実を熟考しなさい。しかしながら、精霊の聖職活動は、もっぱら永遠なる息子と宇宙なる父の表現に制限されはしない。また、無限の精霊は、自身の名前と権利において領域の創造物への聖職活動の力もまた持っている。第三人格は、神の威厳をもち、また、自身のために慈悲の普遍的聖職活動を与える。

8:4.8 (95.3) 人はこの無限の精霊の下方系列の創造物家族への愛と不断の聖職活動をさらに学ぶにつれ、宇宙なる父と永遠なる息子のこの結合活動の卓越して性質と無比の性格をいっそう賞賛し、崇める。この精霊は、実に、「主の目はいつも正しい者の上にあり、」「その耳はいつもそれらの祈りに傾けられている。」

5. 神の臨場

8:5.1 (95.4) 無限の精霊の優れた属性は遍在である。宇宙と神性の心の臨場と同様であるすべてに広がるこの精霊は、宇宙の中のすべての宇宙に遍く臨場している。神性の第二人格と第三人格の双方は、全世界に常に臨場するそれらの精霊に代表される。

8:5.2 (95.5) 父は無限であり、それゆえに意志によってのみ制限される。父は、調整者の贈与と人格の回路化において単独に行動するが、精霊の力と知力ある存在体との接触においては、無限の精霊と永遠なる息子の精霊と人格を利用する。父は、等しく随意に息子と、または連合活動者と精霊的に臨場する。父は、息子とともに、また精霊のなかに臨場する。父は、まずいたる所に確実に臨場し、また我々は、これらのさまざまではあるが、関連する力、影響、臨場により、またこれらを通じて、またこれらの中の幾つか、そしてありとあらゆるものを通して彼の存在について明察する。

8:5.3 (95.6) あなたの聖典では楽園の無限の精霊とあなたの地方宇宙の創造の精霊両者を指定するために神の精霊という用語が互換性を持って使用されているようである。聖霊は、楽園の無限の精霊のこの創造の娘の精霊的回路である。聖霊は、それぞれの地方宇宙に固有の回路であり、精霊的その創造領域内に限られている。だが、無限の精霊は遍在している。

8:5.4 (95.7) 多くの精霊的影響があり、それらすべてが1つである。思考調整者の仕事でさえ、他のすべての影響から独立しているにもかかわらず、無限の精霊と地方宇宙の母なる精霊の精霊的聖職活動の結合的影響と不変的に呼応している。これらの精霊的臨場は、ユランチア出身者の生活に作用しており、隔離はできない。あなたの心とあなたの魂では、これらの精霊的臨場は、多様な起源にもかかわらず、1精霊として機能する。そして、この結合した精霊的職務が経験されるとき、それはあなたにとっては崇高者の影響として働く。崇高者は「あなたを失敗から守り、天のあなたの父の前に非の打ちどころのない状態のあなたを紹介することができる。」

8:5.5 (96.1) 無限の精霊は連合活動者であることをずっと覚えていなさい。父と息子の両者が、無限の精霊なかで、また無限の精霊を通して機能している。無限の精霊は、自分として臨場するだけでなく、父として息子として、また父-息子として臨場する。無限の精霊の精霊臨場は、この認識において、また多くの付加的理由により、しばしば「神の精霊」と呼ばれる。

8:5.6 (95.2) それは、また神の精霊としてすべての聖職活動の精霊的なつながりに言及することと一致するであろう、というのも、そのようなつながりは、真に父なる神、息子なる神、精霊、七重の神の結合であるので。--崇高なる神の精霊でさえも。

6. 無限の精霊の人格

8:6.1 (96.3) 第三根源と中枢の幅広い贈与と広範囲にわたる分配をあいまいにしたり、あるいは別なふうに、人格の事実を損ねてはいけない。無限の精霊は、宇宙臨場、永遠の活動、宇宙力、聖なる影響、そして普遍的な心である。無限の精霊は、これらのすべてであり、大いにそれ以上であるが、また、真の、神性人格でもある。

8:6.2 (96.4) 無限の精霊は、完全かつ、非の打ちどころのない人格、つまり神性に等しい、しかも宇宙なる父と永遠なる息子の等位者である。連合創造者は、父と息子同様に宇宙のより高度の有識者にとり実在し、目に見える。実にそれ以上である、とういうのもすべての上昇者が息子を通して父に近づく前に達しなければならないものが精霊なのであるから。

8:6.3 (96.5) 無限の精霊、つまり神性の第三人格は、あなたが人格に結びつけるすべての属性を持っている。精霊は絶対心を与えられている。「精霊は、すべてのものを、神の深みまでも探査する。」精霊は、心を授かるばかりではなく、意志をも授かっている。精霊の天資の贈与に関する記録がある。「しかし、これらのすべてのひとつの同じ精霊の働きであるすべてのこれらのものは、御霊の思いのままに各自に分け与えられるのである。」

8:6.4 (96.6) “御霊の愛」は事実であり、御霊の悲しみもまたそうである。それ故、「神の御霊を悲しませてはいけない。」我々が楽園の神格として、または、地方宇宙の創造の精霊として無限の精霊を見ようと、我々には、連合創造者が第三根源と中枢であるばかりではなく、神性人格でもあるということがわかる。また、この神性の人格は、人として宇宙に反応する。精霊はあなたに話し掛ける、「耳あるものは精霊の言うことを聞くがよい。」と。「精霊自体があなたのためにとりなしてくださる。」精霊は、被創造物に直接の、個人的な影響を及ぼす。「神の精霊に導かれる数だけ、彼らは神の息子である。」

8:6.5 (96.7) 我々は宇宙の中の宇宙の遠く離れた世界への無限の精霊の聖職活動の現象を目にするとは言え、第三根源と中枢に起源を取る明かされてはいない多種多様の存在体の大群内やそれを通して行動しているこの同じ調整している神格を想像するとは言え、精霊の遍在を認めるとは言え、我々はそれでもなお、この同じ第三根源と中枢は人格であり、万象の、万物の、全宇宙の連合創造者であることを確言している。

8:6.6 (96.8) 父、息子、精霊は、宇宙行政において完全に永遠に相互に関連している。それぞれが全創造への個人的聖職活動に従事しているが、3者すべてが、永遠に3者を1つにする創造と管理の勤めにおいて神々しく、また完全に連動している.

8:6.7 (97.1) 父と息子は、無限の精霊の中に互いに臨場しており、常に、しかも無条件の完全化にいる。なぜなら、精霊は、父のようであり、息子のようであり、また父と息子が永遠に1つであるように父と息子のようでもあるから。

8:6.8 (97.2) [無限の精霊の性質とその働きを描写するために日の老いたるものに任命されたユヴァーサの神性顧問によるユランチアでの提示]

論文 9
無限の精霊の宇宙との関係

9:0.1 (98.1) 奇妙なことが、楽園において宇宙なる父と永遠なる息子が自らの人格化のために結合するときに起きた。連合活動者が絶対心と調整され、また、エネルギー操作の特異な特権を授けられた無制限の精神性として人格化するということを何もこの永遠状況においては予示しないのである。その出現が、集中化した完全性の束縛から、人格絶対の枷からの父の解放を終了する。そして、この解放は、後に発展する宇宙の物質的創造物にさえ聖職活動をする精霊として仕えるよく適合する存在体を創造するために連合創造者の驚くべき力で明らかにされる。

9:0.2 (98.2) 父は愛と意志において、精霊的な考えと目的において無限である。父は宇宙の擁護者である。息子は、英知と真実において、精霊的表現と解釈において無限である。息子は宇宙の顕示者である。楽園は、根源力賦与の

可能性において無限であり、それは、エネルギー支配能力において宇宙の安定装置である。連合活動者は、統合の特異な特権、つまり既存の全宇宙エネルギー、実際の全宇宙の精霊、および真の全宇宙識者を調和させる無限の能力をもつ。第三根源と中枢は、宇宙なる父の神性計画と永遠の目的からくる種々のエネルギーと様々な創造の宇宙の統一者である。

9:0.3 (98.3) 無限の精霊、連合創造者は、普遍の、神性の聖職活動者である。精霊は、安定し不変であり高潔である楽園の三位一体の正義と調和においてさえ、絶えず息子の慈悲と父の愛を施す。精霊の影響と人格は、つねにあなたに近いのである。その人格はあなたを本当に知っており、本当に理解している。

9:0.4 (98.4) 連合活動者の媒体は、宇宙の至るところで絶えず全空間の根源力とエネルギーを操る。第一中枢と根源のように、第三根源と中枢は、精霊の領域と物質の領域の双方に応じる。連合活動者は、万物、意味、価値、すなわちエネルギー、心、精霊—を有する神の一体性の顕示である。

9:0.5 (98.5) 無限の精霊は全空間に行き渡る。無限の精霊は永遠の回路に宿る。また、精霊は、父と息子のように、完全であり、不変である—絶対である。

1. 第三根源と中枢の属性

9:1.1 (98.6) 第三根源と中枢は、多くの名称で知られ、そのすべてが関係を示唆し機能を認識している。精霊なる神としての第三根源と中枢は、息子なる神と父なる神の人格等位であり神性同等である。無限の精霊としては、遍在の精霊的影響である。宇宙の操縦者としては、力制御の創造物と空間の宇宙根源力の活性者の先祖である。連合活動者としては、共同代表者であり父息子の連携執行者である。絶対なる心としては、宇宙全体にわたる知力の賦与の源である。活動の神としては、動き、変化、関係の明かな先祖である。

9:1.2 (99.19) 第三根源と中枢のいくつかの属性は、父からきており、また、いくつかは息子からきているが、他の属性—第三根源と中枢が、楽園の絶対性の永遠の事実と調和し認識して機能し続けることを永遠化する父-息子の協力関係の仮定にたよる以外にはとても説明し得ない属

性—は、父あるいは息子のいずれの臨場にも積極的に、または直接的にも観測されてはいない。連合創造者は、神格の第一と第二人格に関しての結合されたかつ無限の概念の豊かさを具体化する。

9:1.3 (98.8) あなたが、父を最初の創造者として、息子を精霊的行政者として心に描くとき、第三根源と中枢を宇宙の調整者として、無制限の協力をする聖職活動者と考えるべきである。連合活動者は、実際の全現実の相関者である。連合活動者は、父の考えと息子の言葉の神格収納庫であり、行為においては永遠に中央の小島の物質的絶対性に敬意を払う。楽園の三位一体は、宇宙の進歩上の系列を定め、神の摂理は連合創造者と進化している崇高なるものの領域である。どんな実際の、または、顕在化している現実も第三根源と中枢との最後の関係から逃がれることはできない。

9:1.4 (98.9) 宇宙なる父は前エネルギー、前精霊、前人格の領域を統括する。永遠なる息子は、精霊的活動範囲を支配している。楽園の小島の臨場は、物理エネルギーと物質化している力の分野を統一する。連合活動者は、息子を

代表する無限の精霊としての作用だけではなく、楽園の根源力とエネルギーの普遍の操縦者としての作用もしており、こうして、普遍かつ絶対の心を生み出す。連合活動者は、積極的かつ異る個性として壮大な宇宙全体で機能し、特に精霊的価値、物理的エネルギー関係、および心の真の意味のより高度の球体において機能する。殊に、エネルギーと精霊が関連し、相互作用するところならどこでも、いつでも、機能する。連合活動者は、心をもってすべての反応に支配力を振るい、精霊的世界において大力を行使し、エネルギーと物質に強力な力を揮う。第三根源はいつも第一根源と中枢の性質を表現している。

9:1.5 (98.10) 時おり遍在精霊と呼ばれる第三根源と中枢は、完全に、しかも制限なくして第一根源と中枢の遍在を共有する。独特の、そして、非常に個人的な態度で、心の神は宇宙なる父と永遠なる息子の全知を共有する。精霊の知識は深遠かつ、完全である。連合創造者は、宇宙なる父の全能性のある局面を示すが、単に心の領域においてのみ実際に全能である。神性の第三人格は、心の領域の知力の中心であり宇宙行政者である。この点におい

て、彼は絶対である。—神性の第三人格の主権は無条件である。

9:1.6 (98.11) 連合活動者は、父-息子の連携に動機づけられているようであるが、自己の全活動は、父-楽園関係を認識しているように見える。時に、また、ある機能においては、経験的な神格—崇高なる神と究極なる神—の進化の不備を補っているようである。

9:1.7 (100.1) ここに、無限の神秘がある。無限者は、息子の中に、また楽園として同時に自身の無限を明らかにし、それから、神と等しい存在体へと一躍神性の中に存在するようにり、息子の精霊的な性質に反映的であり、楽園の型を動かすことができ、主権に従属し、しかも、多くの方法で明らかに活動において最も万能である。活動におけるそのような見かけ上の優位性は、第三根源と中枢の物理的重力にさえも優れた属性に明らかにされる—楽園の小島の普遍の顕現。

9:1.8 (100.2) 無限の精霊は、エネルギーと物理的なもののこの超管理に加え、その精霊的聖職活動において非常にすばらしく顕示される忍耐、慈悲、愛のそれらの属性に絶

妙に与えられている。精霊は、愛を施し、正義を越えて慈悲に至ることにおいてこの上なく有能である。精霊なる神は、最初の永遠なる息子のすべての崇高な思いやりと慈悲深い愛情がある。あなたの出身宇宙は、正義の金床と苦しみの槌の間の外に鍛造されている。しかし、槌を振るうもの達は、慈悲の子供、すなわち無限の精霊の精霊の子らである。

2. 遍在の精霊

9:2.1 (100.3) 神は三重の意味において精霊である。神自らが精霊である。神は、精霊としてその息子に制限なく現れる。連合活動者の中に、心と同盟する精霊として。そして、これらの精霊的現実に加え、我々は、経験的精霊現象の段階を見分けていると思う。—崇高なるもの、究極なる神格、神格絶対の精霊たち。

9:2.2 (100.4) 無限の精霊は、息子が宇宙なる父を補足するものであるのとまったく同様に、永遠なる息子を補足するものである。永遠なる息子は、父の精霊化された人格化である。無限の精霊は、永遠なる息子と宇宙なる父の人格化された精霊化である。

9:2.3 (100.5) ユランチアの人々を楽園の神格に直接連結している精霊的根源力の多くの自由な線と超物質力の源がある。思考調整者の宇宙なる父との直接のつながりと、永遠なる息子の精霊的重力の衝動の広範囲の影響と、連合創造者の精霊的臨場とが存在する。息子の精霊、それに精霊の精霊の間には機能の違いがある。聖職活動における第三人格は、心に加えて精霊として、または、精霊として単独で機能するかもしれない。

9:2.4 (100.6) これらの楽園臨場に加え、ユランチア生まれの者達は、上向きと内向きの真の目的と正直な心をいつも神性の理想と至上の完全性に向けて導く無限的に情愛深い人格の大群を有し、地方宇宙と超宇宙からの精霊的影響と活動から利益を得る。

9:2.5 (100.7) 永遠なる息子の普遍的精霊の臨場を、我々は知る—紛れもなくそれを認識することができる。無限の精霊、神性の第三人格の臨場を、人間でさえ知るかもしれない。なぜなら、物質の創造物は、人類のさまざまの人種への地方宇宙贈与の聖霊として機能するこの神性の作用の恩恵を実際に経験することができるのであるから。

また、人間は調整者を、つまり宇宙なる父の無人格的臨場をいくらか意識するようになることができる。人の高揚と神性化のために働くこれらの精霊は皆、調和し完全な協力において作動する。これらの精霊は、人間の上昇と完全性到達計画の精霊的操作において1つとしてある。

3. 普遍の操縦者

9:3.1 (101.1) 楽園の小島は、物理重力の源であり実体である。また、それは、重力が最も現実的であり、宇宙の中の物理的宇宙全体において永遠に信頼できるものの1つであることをあなたに知らせるには十分のはずである。重力は、父と息子が共同的に提供する根源力とエネルギーにより変更されたり、無効にされる以外には、変更されたり、無効にされたりはできない。根源力とエネルギーは、第三根源と中枢の人格に委ねられ、また機能上関係づけられている。

9:3.2 (101.2) 無限の精霊には、特異で驚くべき力がある—抗重力。この力は、機能上(観察可能なほどに)父あるいは息子のいずれにも臨場はしていない。第三根源に備わっ

ている物質重力の牽引力に耐えるこの能力は、宇宙関係のある局面への連合活動者の人格的反応に明らかである。そして、この特異な属性は、無限の精霊のある種のより高い人格に伝えられることができる。

9:3.3 (101.3) 抗重力は局所構造体の範囲内において重力を無効にすることができる。それは、同等の根源力臨場行使によりそれをするのである。単に物質重力と関連して作動するのであり、心の活動ではない。回転儀の重力抵抗現象は、抗重力効果の満足のゆく例証ではあるが、抗重力の原因を例証する価値はない。

9:3.4 (101.4) 連合活動者は、根源力を超えエネルギーを中和できる力をさらに見せている。そのような力は、具体化するまでのエネルギーを減速により、また、あなたには未知の他の手段により作動する。

9:3.5 (101.5) 結合創造者は、エネルギーでもなく、エネルギー源でもなく、エネルギーの目標でもない。エネルギーの操縦者である。連合創造者は、行動である—動き、変化、変更、調整、安定化、および均衡である。楽園の直接的、または、間接的制御の影響下にあるエネルギー

は、第三根源と中枢の、またその多様の政府機関の行為への自然な反応によるものである。

9:3.6 (101.6) 第三根源と中枢の力制御の創造物は、宇宙の中の宇宙に広がっている。物理制御者、力の指揮官、力の中枢、および物理エネルギーの規制と安定化に関係のある活動の神の他の代表たち。物理的機能のこれらの特異な創造物にはすべて、たとえば抗重力などの壮大な宇宙の物質とエネルギーの物理的平衡を確立する努力において利用する力の制御の異なる属性がある。

9:3.7 (101.7) 神のこれらの全物質的活動は、その機能を楽園の小島に関連づけているらしく、また、力の媒体のすべては、真に永遠の小島の絶対性に配慮し、依存さえしている。しかし、連合活動者は、楽園のために、あるいはそれに応えての行動をすることはない。連合活動者は、人格的に、父と息子のために行動する。楽園は人格でない。第三根源と中枢の非個人の行動、無人格の行動、また別な方法で人格的ではない行動は、すべて連合活動者自身の意志行為である。それらは何かの、あるいは誰かの反射、誘導、あるいは、影響ではない。

9:3.8 (101.8) 楽園は無限の原型である。活動の神はその原型の活性剤である。楽園は無限に属する物質的支点である。第三根源と中枢の媒体は、物質的段階を動機づけ、物理的創造の仕組みに自然発生性を注ぐ知性のてこである。

4. 絶対なる心

9:4.1 (102.1) 物理的かつ精霊的属性とは異なる第三根源と中枢の知的な性質がある。そのような性質は、ほとんど接触可能ではないが、関連はしている—人格的にではないが知的に。それは、心の機能段階における第三人格の物理的属性と精霊的性格との区別は可能であるが、この性質は物理的、もしくは精霊的顕現の如何にかかわらず人格識別には決して機能しない。

9:4.2 (102.2) 絶対心は第三人格の心である。それは精霊なる神の人格とは不可分である。心は、機能する存在体においては、エネルギーから、あるいは精霊から、もしくは両者から切り離されない。心はエネルギーには備わっていない。エネルギーは、心をよく受けいれ、心によく反応する。心はエネルギーに重ね合わせることができる

が、意識は純粋に物質的段階には備わっていない。心は、精霊が本質的に意識し特定しているので、純粋な精霊に追加される必要はない。精霊は、いつも知的で、何らかの方法で心をもっている。それは、この心、もしくはその心であるかもしれない。それは、前心もしくは超心であるかもしれない。精霊心でさえあるかもしれないが、それは、考えることと知ることに同等なことをする。精霊の洞察は、卓越しており、続発しており、理論的に心の意識に先行する。

9:4.3 (102.3) 連合創造者は、心の領域に、すなわち普遍的知性の領域においてのみ絶対である。第三根源と中枢の心は無限である。それは宇宙の中の宇宙の活発かつ機能している心の回路を完全に超えている。7超宇宙の心の賦与は熟練の７精霊、つまり連合創造者の第一人格に起源がある。これらの熟練の精霊は、宇宙心として壮大な宇宙に心を配し、また、宇宙心のオーヴォントン型に属するネバドン異型が、あなたの地方宇宙に瀰漫する。

9:4.4 (102.4) 無限の心は、時間を無視し、究極の心は時間を超え、宇宙の心は時間により条件づけられる。空間に関

してもそうである。無限の心は、空間から独立しているが、心の無限段階から補助段階へと下降が生じるにつれ、知性はますます空間の事実と限界を考慮しなければならない。

9:4.5 (102.5) 宇宙の根源力は、ちょうど宇宙心が精霊に応じるように、心に応じる。精霊は神性的目的であり、精霊の心は行動に際しては神性的目的である。エネルギーは物であり、心は意味であり、精霊は価値である。時間と空間においてさえ、心は、永遠において親族関係を連想させるエネルギーと精霊とのそれらの相対的関係を確立する。

9:4.6 (102.6) 心は、精霊の価値を知性の意味に変質させる。意志には有形無形の二領域において心の意味に実を結ばせる力がある。楽園上昇は、精霊、心、およびエネルギーに相対かつ特異な成長をもたらす。人格は、経験的人格のこれらの要素の統一者である。

5. 心の聖職活動

9:5.1 (102.7) 第三根源と中枢は、心に関しては無限である。宇宙が無限へと成長するならば、それでも、心の可能性

は、適正な心と知性の他の前提条件に限りない数の創造物を授与するために適切であるだろう。

9:5.2 (102.8) 創造される心の領域において等位と下位の仲間と共に下す第三人格の裁決は、至上である。創造物の心の領域は、第三根源と中枢の唯一の起源である。第三根源と中枢は、心の贈与者である。父の断片でさえ、無限の精霊の心の働きと精霊的機能により道が父の断片のために適切に準備されるまで人の心に宿ることが不可能であるとわかる。

9:5.3 (103.1) 心の独自の特徴は、広範囲のそのような生命に授与され得るということである。創造提携者、かつ被創造提携者を介して、第三根源と中枢はすべての球体上のすべての心に奉仕する。第三根源と中枢は、地方宇宙の補佐を通して、そして、物理制御者の媒体を通して聖職活動をし、最も原始の型の生き物の最も低い非経験の実体にさえ聖職活動をする。また、心の傾向は、いつも心-精霊の、もしくは、心-エネルギーの聖職活動である。

9:5.4 (103.2) 神格の第三人格は心の源であるがゆえに、意志をもつ進化的創造物が、無限の精霊の理解しやすい概念

を形成することは永遠なる息子か宇宙なる父のいずれかにかについてそうするよりも容易であるということがわかるのは、至極当然である。連合創造者の現実は、人間の心の存在そのものにおいて完全には明らかにされない。連合創造者は、宇宙心の先祖であり、それが第三根源と中枢の創造の娘により地方宇宙に与えられると、人の心は、その宇宙心の人格化された回路、すなわち無人格の部分である。

9:5.5 (103.3) 第三人格が心の源であるからと言って、心の全現象が神であると大胆に考えてはいけない。人間の知性は、動物種属の物質的起源に根づいている。宇宙の知性が神の真の顕示ではないのは、物理的性質が楽園の美と調和の真の顕示ではないのと同じである。自然には完全性があるが、自然は完全ではない。連合創造者は心の源であるが、心は連合創造者ではない。

9:5.6 (103.4) 心は、ユランチアにおいて、思考完全性の本質とあなたの未熟な人間性の進化する精神との間の妥協である。実に、あなたの知的進化のための計画というものは、高尚な完全性の1つであるが、あなたは、肉体の寺

院で機能するとき、その神の目標にははるかに遠いのである。心は真に神性起源であり、それには神性の目標があるが、あなたの必滅の心はまだ神性尊厳のものではない。

9:5.7 (103.5) しばしば、何度も、あなたは自分の心を不誠実に傷つけ、不正に焦がす。あなたは心を動物の恐怖にさらし、無用な不安によって歪めている。したがって、心の源は神性であるが、あなたが承知するとおり、心は、あなたの上昇世界においてほとんど大きな賞賛の対象になることはできない。ましてや、敬拝の、または崇拝の対象には。未熟で不活発な人間の知識に関する熟考は、謙遜の反応にだけ導くべきである。

6. 心-重力回路

9:6.1 (103.6) 第三根源と中枢、すなわち普遍的知性は、 全創造においてあらゆる心を、あらゆる知性を人格的に意識しており、広範囲の宇宙における心の賦与を受けたこれらのすべての身体的、モロンチア的、精霊的な創造物との個人的で完全な接触を維持する。心のこれらの全活動は、第三根源と中枢において局地化する心-重力の絶対

回路において把握されており、無限の精霊の個人的意識の一部である。

9:6.2 (103.7) 父がすべての人格を自分に引きつけるのや、息子がすべての精霊的現実を引きつけるのにとてもによく似て、連合活動者もまたすべての心への引きつける力を駆使する。連合活動者は、無条件に宇宙の心の回路を支配し制御する。真の、本物の知的価値のすべては、神性の思考と完全な理念のすべては、心のこの絶対回路に的確に引き込まれる。

9:6.3 (104.1) 心の重力は、有形無形の重力とは無関係に作動することができるが、後者の 2 重力が、何処でも何時でも作用するときはいつも機能する。3重力のすべてが関わりあうとき、個性重力は物質的な生物を抱くかもしれない—物理的であるか、モロンチア的であるか、有限であるか、または准絶対である。しかし、この事実にもかかわらず、心の賦与は、非個人的な存在体にさえ、個性の全面的欠如にもかかわらず、考える資格を与え意識を授ける。

9:6.4 (104.2) 人間の、または神性の、不滅の、または潜在的に不滅である人格尊厳の自我は、しかしながら、精霊、心、または物質に起源をとらない。それは宇宙なる父の贈与である。また、精霊、心、および物質的重力の相互作用は、人格重力の登場への前提条件でもない。父の回路は、精霊重力に無反応である心-重力の存在体を擁しているかもしれないし、物質重力に無反応である心精霊の存在体であるかもしれない。人格重力の操作は、つねに宇宙なる父の意志行為である。

9:6.5 (104.3) 心は、純粋に物質的存在体に関連づけられるエネルギーであり、また純粋に精霊人格に関連づけられるエネルギーであるが、人間を含む人格の無数の系列には、エネルギーと精霊の双方に関連づけられる心がある。創造物の心の精霊的局面は、永遠なる息子の精霊-重力の牽引力に絶えず反応する。物質的機能は、物質宇宙の重力衝動に応じる。

9:6.6 (104.4) 宇宙心は、エネルギーか精霊のどちらかに関連づけられていなければ、物質回路の、あるいは精霊回路のいずれの重力需要にも応じない。純粋な心は、連合活

動者の普遍的重力把持にのみ応じる。純粋な心は、無限の心と近縁であり、無限の心(精霊とエネルギーの絶対者の理論上の等位)は明らかにそれ自体が法である。

9:6.7 (104.5) 精霊エネルギーの分岐が大であればあるほど、観察可能な心の機能はより大である。エネルギーと精霊の多様性が小であればあるほど、観察可能な心の機能はより小である。宇宙心の最大機能は、空間の時間宇宙にある。ここでは、心は、エネルギーと精霊間の中間帯で機能するように思えるが、これは、心より高い段階には当てはまらない。楽園においては、エネルギーと精霊は本質的には1つである。

9:6.8 (104.6) 心-重力回路は信頼できる。それは、楽園の神格の第三人格から発するが、観察可能な心の全機能を予測できるというわけではない。その機能が予測できない何らかのあまり理解されてはいない臨場が、周知の全創造を通して心のこの回路に平行する。我々は、この予測不可能性は、いくぶんは宇宙なる絶対者の機能に起因していると信じる。我々は、この機能が何であるかを知らない。我々は、それを作動するものを推測することができ

るだけである。創造物とのその関係に関し、我々は推測するしかない。

9:6.9 (104.7) 有限の心にある予測不可能性のある局面は、崇高なるものの不備のためであるかもしれないし、また、ことによるとその中で連合活動者と宇宙なる絶対者が接しているかもしれない渺茫たる活動区域がある。心に関し知られてはいない多くがあるが、我々はそれについて確信している。無限の精霊は、全創造物への創造者の心の完全な表現である。崇高なるものは、全創造物の心の創造者への進化的表現である。

7. 宇宙の反射性

9:7.1 (105.1) 連合活動者は、そのような方法で全段階の宇宙現実を調整できるので、精神的、物質的、精霊的の同時認識を可能にする。これは、宇宙反射力の現象、すなわち、すべてのことが超宇宙の至るところで発生するとき、すべてのことを見、聞き、感じ、そして知るという、また、反射力により、任意の必要な場所において、全情報と知識を焦点化するというその特異かつ不可解な力である。反射力の活動は、７超宇宙の各本部世界に完

全に示される。それもまた、超宇宙の全領域内と地方宇宙の区域内全体において作用している。反射性は楽園で最終的に集中化される。

9:7.2 (105.2) 反射力の現象は、超宇宙の本部世界に駐留する反射人格の驚くべき性能において明らかにされるように、全創造に見られる存在の全局面の最も複雑な相互関係を表す。精霊の線は、息子に、物理エネルギーは楽園に、心は第三根源にさかのぼることができる。しかし、宇宙反射力の並はずれた現象には、宇宙の支配者たちが、遠くの状況について瞬時に、同時に、それらの出来事を知ることができるようにするために3者すべての特異で例外的な統一がある。

9:7.3 (105.3) 我々は反射力の方法の多くを理解するのであるが、我々を困惑させる実に多くの局面がある。我々は、連合活動者が心の回路の宇宙の中心であり、連合活動者が宇宙心の先祖であり、宇宙心が第三根源と中枢の絶対心の重力の支配下で作動するということを知っている。我々はさらに、宇宙心の回路が周知の全存在の知的段階に影響を及ぼすことを知っている。宇宙心の回路は、宇

宙空間の報告を含んでおり、ちょうど同じくらい確かに、それらは熟練の７精霊に焦点を合わせ、第三根源と中枢に集中する。

9:7.4 (105.4) 有限の宇宙心と神性の絶対心との関係は、崇高者の経験的な心に発展しているようである。我々はこの経験的な心が時間の始まりに無限の精霊により崇高者に贈与されるということを教えられたし、また、我々は崇高なる心の活動を仮定することによってのみ反射現象のある種の特徴が説明されることができると推測する。崇高者が反射に関係がないならば、我々は、宇宙にあるこの意識の複雑な相互作用と的確な操作の説明にとまどうのである。

9:7.5 (105.5) 反射が、経験的有限の限界内においては全知に見え、加えて、崇高なるものの臨場意識の出現を表すかもしれない。この仮定が本当であるならば、その局面のいずれかにおける反射の利用は、崇高者の意識との部分的接触に同じである。

8. 無限の精霊の人格

9:8.1 (105.6) 無限の精霊は、その力と特権の多くを等位の人格と下位の人格、および媒体に伝えるための完全な力を持っている。

9:8.2 (105.7) 無限の精霊の最初の神性創造行為は、三位一体からは離れて機能するが、父と息子とのいくつかの明らかにされていない関連において宇宙への無限の精霊の分布者である楽園の熟練の７精霊の存在において人格化した。

9:8.3 (106.1) 第三根源と中枢の直接代行者は超宇宙本部にはいない。これらの7つの創造それぞれが、超宇宙の首都に位置する反射の７精霊を通して活動する楽園の熟練の精霊のなかの1名に依存している。

9:8.4 (106.2) 無限の精霊の次の、そして後に続く創造行為は、創造の精霊の生産において時々明らかにされる。宇宙なる父と永遠なる息子が創造者たる息子の親になるときはいつも、無限の精霊はすべてのその後の宇宙経験においてその創造者たる息子の親しい仲間となる地方宇宙の創造の精霊の祖先になる。

9:8.5 (106.3) 永遠なる息子と創造者たる息子との区別が必要であるのと同様に、無限の精霊と創造の精霊との区別が必要である。全創造にとっての無限の精霊は、地方宇宙にとっての創造の精霊である。

9:8.6 (106.4) 第三根源と中枢は、物理的、モロンチア的、精霊的性質のある一定の回路の監督とともに、壮大な宇宙において聖職活動の精霊、使者、教師、裁判官、助手、助言者の大群により代行される。これらすべての存在体は、厳密な用語の意味においては人格ではない。有限創造物の多種多様の人格は、次のように特徴づけられる。

9:8.7 (106.5) 1. 主観的自意識。

9:8.8 (106.6) 2. 父の人格回路への客観的反応。

9:8.9 (106.7) 創造者人格と創造物人格というものがあり、基本的なこれらの2つの型に加え、無限の精霊にとっては人格的であるが、被創造の存在体にとっては無条件に人格的ではない第三根源と中枢の人格というものがある。これらの第三根源の人格は父の人格回路の一部ではな

い。第一根源の人格と第三根源の人格は互いに接触可能である。すべての人格は接触可能である。

9:8.10 (106.8) 父は、自身の人格の自由意志によって人格を与える。なぜそうするのかに関しては我々は推測するしかない。いかようにそうするかについて我々は知らない。また、我々は、第三根源がなぜ父でない人格を贈与するのか分からないが、この無限の精霊は、永遠なる息子との創造上の結合において、およびあなたには未知である数多くの方法において、自分自身のためにするのである。また、無限の精霊は、第一根源人格の贈与において父の代理を行なうことができる。

9:8.11 (106.9) 第三根源人格の多数の型がある。無限の精霊は、例えば特定の力の指揮官というような父の人格回路に含まれていない数多くの集団に第三根源の人格を授与する。同様に、無限の精霊は、父の回路化された創造物との関係おいて自分達だけで一類である創造の精霊のような存在体の多集団を人格として扱う。

9:8.12 (106.10) 第一根源と第三中枢の人格の双方は、人格の概念に関連するすべてと、それ以上のものが与えられる。

双方は、記憶、理由、判断、創造的想像、思考の関連性、決定、選択、人間には全く未知の知性の付加的な数多くの力を迎え入れる心を持つ。ほとんど例外なくあなたに明らかにされる系列は、型と、紛れもない人格を持っている。それらは実在の存在体である。それらの大多数は、精霊存在体に関する全系列に確認できる。

9:8.13 (107.1) あなたでさえも、現在の有形の目の限られた洞察力から開放され、精霊的なものの現実への拡大された感度を備えたモロンチアの型を賦与されるや否や、あなたの下方系列の精霊的な仲間に会うことができるであろう。

9:8.14 (107.2) それがこれらの物語で明らかにされるとき、第三根源と中枢の機能的な家族は、大きな3集団に分類される。

9:8.15 (107.3) I. 崇高なる精霊。次の系列を擁するものは、とりわけ、合成起源の１集団は次の通りである。

9:8.16 (107.4) 1. 楽園の熟練の7精霊。

9:8.17 (107.5) 2. 超宇宙の反射精霊。

9:8.18 (107.6) 3. 地方宇宙の創造の精霊。

9:8.19 (107.7) II. 力の指揮官。組織化された空間全体で機能する制御創造物の１集団。

9:8.20 (107.8) III. 無限の精霊の人格 。この名称は、無限の精霊の人格の一部は意志を持つ創造物のように特異ではあるが、これらの存在体が第三根源の人格であるということを必ずしも含意するわけではない。通常、それらは3主要区分に分類される。

9:8.21 (107.9) 1. 無限の精霊のより高度の人格。

9:8.22 (107.10) 2. 空間の使者の部隊。

9:8.23 (107.11) 3. 時間の聖職活動の精霊。

9:8.24 (107.12) これらの集団は、楽園や中央の、または、居住宇宙や、超宇宙において奉仕の勤めをし、そのうえ、地方宇宙において、星座、体制、および惑星に対してさえ機能する命令を擁する。

9:8.25 (107.13) 神性と無限の精霊の広大な家族の精霊人格は、永遠に、時間と空間の進化世界のすべての知的創造物へ

の神の愛と息子の慈悲の聖職活動の奉仕に捧げられる。これらの精霊存在体は、それにより人間が混沌から栄光へと登る生きた梯子を構成するのである。

9:8.26 (107.14) [無限の精霊の性質と働きを描くよう日の老いたるものに委託されたユヴァーサの神性顧問によりユランチアで明らかにされた]

論文 10
楽園の三位一体

10:0.1 (108.1) 永遠の神格に属する楽園の三位一体は、父が人格絶対性から回避することを容易にする。三位一体は、神の無限の人格意志の限りない表現を神格の絶対性と完全に関連づける。永遠なる息子と神性起源の様々な息子は、連合活動者とその宇宙の子らと共に、さもなければ第一性、完全性、不変性、永遠性、普遍性、絶対性、および無限性にもともと備わっている制限から父の解放に効果的に備える。

10:0.2 (108.2) 楽園の三位一体は、有効に神格の永遠的本質の十分な表現と完全な顕示に備える。三位一体の定置の息子は、同様に神の正義の十分かつ完全な顕示を提供す

る。三位一体は神格の統一であり、この統一は永遠に父なる神、息子なる神、精霊なる神の最初の、そして、等位の3共存人格がなす神性単一性の絶対的基盤によるものである。

10:0.3 (108.3) 我々は、永遠の回路の現状況から後方へと無限の過去を振るかえると、宇宙情勢にある不可避な必然性しか発見することができなくて、それは楽園の三位一体なのである。私は、三位一体は必然であったと考える。私が、過去、現在、および未来を見るとき、宇宙の中の宇宙すべての中に他には何も必然と考えられものはない。現在の主たる宇宙は、回顧あるいは見込みの点から、三位一体なしには考えられない。楽園の三位一体が与えられると、我々は、万事をなす代替方法を、または複数の方法さえ仮定することができるが、父と息子と精霊の三位一体がなければ、いかに無限者が神格の絶対単一性に直面して三重かつ等位の人格化を達成できたかを発想することはできない。他の何の概念も、神格の三重の人格化に固有の意志解放の充実性と相まった神格統一性に固有である絶対性の完全性の三位一体基準には達しないのである。

1. 第一根源と中枢の自己分配

10:1.1 (108.4) 父は、永遠に遡り、意味深い自己分配の方針を開始させたようである。委託したり、または授与したりが不可能であると明らかに分かるそれらの力とその権威だけの執行を自身に留保させる何かが宇宙なる父の無私無欲で、情愛深く、愛すべき性質に備わっている。

10:1.2 (108.5) 宇宙なる父は、いかなる他の創造者、または被創造物に贈与可能である自分のあらゆる部分をずっと投げ出してきた。委任できるあらゆる力とすべての権威を永遠なる息子と息子らの関連有識者に委託してきた。宇宙なる父は、移転可能である行政上の自治の全特権を、各宇宙に、実際に君主たる息子に移した。地方宇宙業務においては、宇宙なる父は最初の、そして、中央宇宙における永遠なる息子のように各君主の創造者たる息子を同等に完全で、有能で、権威あるものにした。宇宙なる父は、あらゆる方法で、あらゆる時代に、あらゆる場所において、そしてすべての人へ、また中央にある自分の住まう宇宙を除くあらゆる宇宙において自身のすべてと自身の属性のすべてを、つまり自分自身を投げ出すこと

ができるすべてを品格と尊厳を持って与えてきた、すなわち実際に贈与してきた。

10:1.3 (109.1) 神性の人格は自己中心的ではない。人格の自己分配と共有は神性の自由意志の自己性を特徴づける。創造物は他の人格創造物とのつながりを切望する。創造者は、宇宙の子らと神性を共有する気にさせられる。無限の人格は、宇宙なる父として明らかにされる。宇宙なる父は、存在体の現実と自己均等を等位の2人格と、すなわち永遠なる息子と連合活動者と共有する。

10:1.4 (109.2) 我々は、父の人格と神性属性に関する知識のためにいつも永遠なる息子の顕示に依存するであろう。なぜなら、父は、創造の連合行為が成立するとき、神格の第三人格が人格存在として現われるとき、そして、神性の両親の結合された概念を実行されるとき、無条件の人格としては存在しなくなった。連合活動者の出現と創造の中央部の具体化とともに、ある永遠の変化が起きた。神は絶対人格としての自分自身を永遠なる息子に与えた。かくして、両者は無限の精霊に永遠の結合の「連合

人格」を与え、父は「無限の人格」を一人子の息子に授与するのである。

10:1.5 (109.3) 有限の心の概念を超えたこれらの理由、また他の理由から、神の無限の父-人格を理解することは、遍く永遠なる息子の中に明らかにされ、また、無限の精霊の中に、息子とともに、遍く活発であるということを除いては、人間の創造物にとりきわめて難しい。

10:1.6 (109.4) 神の楽園の息子は進化世界を訪れ、時として人間の姿で住みさえするので、また、これらの贈与は、人間が実際に神性人格の性質と特徴について何かを知ることを可能にするので、そのために惑星界の創造物は、父と息子と精霊に関する確実で信頼できる情報のためにこれらの楽園の息子の贈与に頼らなければならない。

2. 神格の人格化

10:2.1 (109.5) 父は、三位一体化の手段により息子である無条件の精霊人格の自分自身を投げ出すが、そうする際に、まさしくこの息子の父を自分で構成し、その後に創造された、結果的に生じた、または他の人格化された知力ある意志の創造物のすべての型の神性の父になる無制限な

能力の所有者となる。絶対の、かつ、無条件の人格としての父は、息子としてのみ、また息子とだけ共に機能することができるが、人格の父としては、異なる段階の意志を持つ知力ある人格の創造物のさまざまの部隊に授与し続け、いつまでも、宇宙の子らのこの広大な家族との人格的な情愛深い関係を維持する。

10:2.2 (109.6) 父が自身を息子の人格に完全に贈与した後、そしてこの自己贈与の活動が完成し完全であるときに、永遠の協同者は、父-息子の結合においてこのように実在する無限の力と性質からさらにまた自分たちのような他の存在体を構成するそれらの質と属性を共同して与える。そして、この結合人格は、すなわち無限の精霊は、神格の実存的人格化を終了する。

10:2.3 (110.1) 息子は神の父性に不可欠である。精霊は第二人格と第三人格の仲間にとって不可欠である。3者の人格は社会的最小集団であるが、これは連合活動者の必然性を信じる多くの理由の中では最小である。

10:2.4 (110.2) 第一根源と中枢は、無限の父-人格、つまり無制限の根源人格である。永遠なる息子は、無条件の人格絶

対者であり、つまり神性の存在体であり、それは、いつでも、また永遠にわたり神の人格の性質の完全な顕示としてある。無限の精霊は、結合人格、すなわち絶え間なくと続く父-息子連合からくる人格の特異な結果である。

10:2.5 (110.3) 第一根源と中枢の人格は、永遠なる息子の絶対人格を差し引いた無限の人格である。第三根源と中枢の人格は、解放された父-人格と絶対の息子-人格の結合の超付加的結果である。

10:2.6 (110.4) 宇宙なる父、永遠なる息子、そして無限の精霊は特異な人格である。誰も複製ではない。それぞれが原型である。すべては結合している。

10:2.7 (110.5) 永遠なる息子のみが人格の神性関係の豊かさを、すなわち、父との息子関係と精霊への父性に関する、また父-先祖と精霊-仲間の双方との神性平等に関する両方の意識を経験する。父は、同等である息子を持つ経験を知っているが、何の先祖の前例も知らない。永遠なる息子には、子息の経験、つまり人格祖先の認識があり、同時に、息子は無限の精霊の共同の親であることを

意識している。無限の精霊は、二重の人格起源をもつが、等位の神人格の親ではない。精霊とともに、神格の人格化の実存的周期は完成する。第三根源と中枢の第一人格は、経験的であり、数えて7名である。

10:2.8 (110.6) 私は楽園の三位一体の起源である。私は統一された神としての三位一体を知っている。私は、父、息子、および精霊がそれぞれの明確な人格能力で存在し行動するということもまた知っている。私は、彼らが個人的に、加えて集合的に行動するばかりではないということを、また、様々な組分けにおける自分達の性能を調整をもするので最終的には単数と複数の異なる7個の能力において機能するということを明確に知っている。そして、これらの7つのつながりが、そのような神性結合連携のための可能性を使い果たすので、宇宙の現実は、価値、意味、人格の7個の変化で現れるということは、必然である。

3. 神性の3人格

10:3.1 (110.7) 唯一の神格が存在するにもかかわらず、神格の神性の確かで神聖な3人格化がある。神性調整者の人へ

の賦与に関し、父は言った。「我々自身のかたちに似るように人を造ろう。」3根源と中枢の存在と働きを明確に示したユランチア出身者の著作物において繰り返し複数神格の行為と活動にかんしてのこの言及がある。

10:3.2 (110.8) 我々は、息子と精霊が父との三位一体関係において同じ、しかも平等の間柄を持続すると教えられている。息子と精霊は、永遠に、そして神格として、確かにそうするのであるが、時間において、そして人格として確かに、まことにさまざまの種類の関係を明らかにする。楽園から宇宙を眺めると、これらの関係は非常に類似しているように見えるが、空間の領域から見ると、それらは、全く異なるように見える。

10:3.3 (111.1) 神性の息子は、誠に「神の言葉」であるが、精霊の子らは実に「神の行為」である。神は、息子を通して話し、無限の精霊を通して、また息子と共に行動し、一方、全宇宙活動においては、賞賛され、神々しく敬われる共通の父への賛美と愛をもって同等の2名の兄弟として働く、息子と精霊は、すばらしく兄弟のようである。

10:3.4 (111.2) 父、息子、精霊は、本質的には間違いなく等しく存在面においては等位であるが、それぞれの宇宙業績には紛れもない違いがあり、単独行動に際しては、神格の各人格は絶対性の面において明らかに制約がある。

10:3.5 (111.3) 宇宙なる父は、息子と精霊を構成する人格、力、属性の自己意志による放棄に先立ち、哲学的に考えると、無条件の、絶対の、そして、無限の神格であったように思える。だが、息子をもたないそのような理論上の第一根源と中枢は、いかなる意味においても宇宙なる父とは考えることができるはずがない。父性は息子なくしては実存しない。その上、父は、総体的意味合いにおいて変わることなく離れた瞬間で単独に存在したに違いない。しかし、父には、そのような孤独な存在は決してなかった。息子と精霊は双方ともに、父と永遠に共存している。第一根源と中枢は、常に、最初の息子の永遠の父であったし、いつまでもそうであり、また息子とともに、無限の精霊の永遠の始祖である。

10:3.6 (111.4) 我々は、父が絶対父性と絶対意志を除く絶対性のすべての直接顕現を投げ出してきたことをよく見た。

我々は、意志というものが父の不可分の属性であるかどうかを知らない。我々は、父が意志を捨てないということを観測できるだけである。意志のそのような無限性は、永遠に第一根源と中枢に備わっていたに違いない。

10:3.7 (111.5) 永遠なる息子への人格の絶対性を贈与する際に、宇宙なる父は、人格絶対の足枷から逃れるが、そうすることにより、人格絶対として単独に行動することをいつまでも不可能にする一歩を進める。共存神格—結合活動者—の最終的人格化とともに、神格の絶対的機能全体に関わる神性３人格の三位一体の重大な相互依存が続いて起こる。

10:3.8 (111.6) 神は、宇宙の中の宇宙におけるすべての人格の父-絶対である。父は、行動の自由において個人的に絶対であるが、作られた、作成中の、まだ作られていない時間と空間の宇宙においては、楽園の三位一体における場合を除き、父は、総合神としての絶対性は認識可能ではない。

10:3.9 (111.7) 第一根源と中枢は、驚異的宇宙におけるハヴォーナの外で次のように機能する。

10:3.10 (111.8) 1. 創造者として、孫息子である創造者の息子を通して。

10:3.11 (111.9) 2. 制御者として、楽園の引力中心を通して。

10:3.12 (111.10) 3. 精霊として、永遠なる息子を通して。

10:3.13 (111.11) 4. 心として、連合創造者を通して。

10:3.14 (111.12) 5. 父として、自身の人格回路を通して全創造物との親たる接触を維持する。

10:3.15 (111.13) 6. 人格として、他にない自身の断片による創造を通して直接に行動する—思考調整者による人間内において。

10:3.16 (111.14) 7. 総合神として、楽園の三位一体内だけで機能する。

10:3.17 (112.1) 宇宙なる父による司法に関わるこれらすべての棄権や委任は、完全に自発的であり、自らが担うものである。全能の父は、宇宙における権威のこれらの制限を意図的に担っている。

10:3.18 (112.2) 永遠なる息子は、神断片の贈与と他の前人格活動以外にはすべての精霊の観点において父と1者として機能しているようである。息子は、物質創造物の知的活動とも、物質宇宙のエネルギー活動とも密接には同一視されない。絶対状態にあるとき、息子は人格として精霊宇宙の領域においてのみ機能する。

10:3.19 (112.3) 無限の精霊は、自身の全操作において驚くばかりに普遍的で信じ難いほどに万能である。無限の精霊は、心の、事象の、精霊の領域で機能する。連合活動者は、父-息子のつながりを代表するが、自分自身としても機能する。連合活動者は、物理的重力、精霊的重力、または人格回路に直接的には関係しないが、多かれ少なかれ他のすべての宇宙活動に参加する。無限の精霊は、実存的かつ絶対的重力の3制御に明らかに依存しているが、3超制御を行使しているようである。この三重の賦与は、第一の根源力とエネルギーの顕現さえ、絶対性の超究極のまさにその境界線にまで外観上は中和する多くの方法において用いられる。これらの超制御は、ある状況においては、絶対的に宇宙現実の第一顕現さえも超える。

4. 神格の三位一体結合

10:4.1 (112.4) すべての絶対的つながりの中で、楽園の三位一体(最初の3結合体)は、人格的神格の他にはないつながりとして特異である。神は、単に神と、また、神を知ることができる者達に関連してのみ神として機能するが、楽園の三位一体においてのみ、また宇宙全体との関連においてのみ絶対神として機能する。

10:4.2 (112.5) 永遠の神格は完全に統一される。にもかかわらず、神格の3者の完全に人格化された人格がいる。楽園の三位一体は、第一根源と中枢、その永遠の等位者たち、未分離の神格の宇宙機能における全神性統一の性格特性と無限の力にある多様性すべての同時表現を可能にする。

10:4.3 (112.6) 三位一体は、人格に反して機能するのではなく、非人格能力において機能する無限の人格のつながりである。例証は粗雑であるが、父、息子、孫息子が、非人格であったとしても、それでもなお、それぞれの人格的意志に従属する共同の実体を形成可能である。

10:4.4 (112.7) 楽園の三位一体は事実である。それは父、息子、精霊の神格結合として存在する。さらに、父、息子、もしくは精霊、もしくは、そのうちの任意の2者は、この同一の楽園の三位一体と関連して機能することができる。父、息子、精霊は3神格としてではなく、非三位一体手法において協調して取り組むことができる。それらは人格として、選択により、協調して取り組むことができるが、それは三位一体ではない。

10:4.5 (112.8) 無限の精霊がすることは連合活動者の機能であるということをいつも覚えていなさい。父と息子の両者は、連合活動者の中、連合活動者を通して、また連合活動者として機能している。しかし、三位一体の神秘の解明を試みても無駄であろう。1者としての、また1者の中の3者、そして、２者としての、また２者のために行動する1者。

10:4.6 (112.9) 三位一体は、宇宙の諸事に密接につながっているので、孤立したどんな宇宙の出来事、あるいは人格関係の全体性でも説明しようとする我々の試みにおいて考慮されなくてはならない。三位一体は宇宙の全段階にお

いて機能しており、人間は有限段階に限られている。それゆえに人は、三位一体としての三位一体の有限概念に満足しているに違いない。

10:4.7 (113.1) 肉体の人間としてあなたは、あなた個人の啓発に従い、また心と魂の反応と調和して、三位一体を見るべきである。あなたは絶対性についてほとんど知ることはできないが、あなたが楽園方向へと昇るとき、三位一体の崇高性と究極性の連続する顕示と予期せぬ発見に対する驚きを何度も経験するであろう。

5. 三位一体の機能

10:5.1 (113.2) 人格神には属性があるが、三位一体について属性があると語ることは全く辻褄が合わない。神性存在体のこのつながりは、司法行政、全体傾向、調整的活動、および宇宙総括的管理といったような機能を持っているとより適切に見なされるかもしれない。これらの機能は、人格価値のすべての生きている現実に関する限り、積極的に崇高で、究極で、(神格の制限内で)絶対である。

10:5.2 (113.3) 楽園の三位一体の機能は、父の明らかな神性賦与に加えた息子と精霊の人格的存在に特異な専門化されたそれらの属性の単なる総和ではない。楽園神格3者の三位一体の連携は、普遍的な顕示、活動、管理のための新たな意味、価値、力、および能力の発展、究極化、神格化をもたらす。生きた連携、人間家族、社会集団、または楽園の三位一体は、単なる算術加算による増大するのではない。集団の可能性というものは、つねに構成個人の属性の単純な合計をはるかに超えるものである。

10:5.3 (113.4) 三位一体は、三位一体として過去、現在、未来の宇宙全体に向け特異な姿勢を維持する。また、三位一体の機能は、三位一体の宇宙に対する姿勢に最もよく関連しているとおもわれる。そのような姿勢は、同時であり、いかなる孤立状況、または出来事に関しても多様であるかもしれない。

10:5.4 (113.5) 1. 有限者への姿勢。三位一体の最大の自己制限は有限者へのその姿勢である。三位一体は人格ではなく、崇高なるものも三位一体の唯一の人格化ではないが、崇高者は、有限創造物が理解することのできる三位

一体の力-人格の焦点化への直近進入路である。したがって、有限者に関係する三位一体は、時折、崇高性の三位一体として語られる。

10:5.5 (113.6) 2. 准絶対に対する姿勢。楽園の三位一体は、有限以上ではあるが絶対以下であるそれらの存在段階に注目しており、この関係性は時として究極者の三位一体と呼ばれる。究極者と崇高者のいずれも完全に楽園の三位一体を代表はしていないが、限定的意味において、またそれぞれの段階に向け、々が経験上の-力の開発の前人格時代において三位一体を代表しているようである。

10:5.6 (113.7) 3. 楽園の三位一体の絶対資性は、絶対生存と関連しており、最後は総合神格の働きに至る。

10:5.7 (113.8) 三位一体の無限者は、第一根源と中枢の３結合体の関係全体の調整活動を伴っており—神格化と同様に非神格化も—したがって、人格にとり把握することは非常に難しい。無限としての三位一体についての考慮において、7形態の３結合体を無視してはいけない。その結果、理解のための一定の困難は避けられるかもしれないし、特定の矛盾は部分的に解明されるかもしれない。

10:5.8 (114.1) だが、私は、楽園の三位一体に関わる全体の真実と永遠の意義、それに無限の完全性の3存在の終わることのない相互関係の性質を人間の有限の心に意のままに伝えられる言葉をもたない。

6. 三位一体の定置の息子

10:6.1 (114.2) すべての法律は第一根源と中枢に起源をとる。第一根源と中枢は法である。精霊的な法は第二根源と中枢に帰属している。法の顕示、すなわち神性法令の発布と解釈は、第三根源と中枢の機能である。法の適用、すなわち正義は、楽園の三位一体の範囲内にあり、三位一体の特定の息子らにより行使される。

10:6.2 (114.3) 正義は、楽園の三位一体の普遍的主権に固有であるが、善、慈悲、真実は、三位一体を構成する神格のその結合である神性人格の宇宙聖職活動である。正義は、父、息子、または精霊の姿勢ではない。正義は愛、慈悲、聖職活動のこれらの人格からの三位一体の姿勢である。楽園の神格のだれも司法を育成はしない。正義は決して個人的姿勢ではない。それは、いつも複数機能である。

10:6.3 (114.4) 証拠は、公正さの基盤(慈悲との調和における正義)は、第三根源と中枢の人格により、すべての領域への、全創造に属する知的存在体の心への父と息子の共同代理により提供される。

10:6.4 (114.5) 審判は、つまり無限の精霊の人格により提出される証拠に従った正義の最終適用は、三位一体の定置の息子の、つまり父、息子、精霊の三位一体の性質を共にする存在体の仕事である。

10:6.5 (114.6) 三位一体の息子のこの集団は、次の人格を擁する。

10:6.6 (114.7) 1. 崇高性の三位一体化の秘密。

10:6.7 (114.8) 2. 日の永遠なるもの。

10:6.8 (114.9) 3. 日の老いたるもの。

10:6.9 (114.10) 4. 日の完全なるもの。

10:6.10 (114.11) 5. 日の若きもの

10:6.11 (114.12) 6. 日の結合なるもの。

10:6.12 (114.13) 7. 日の誠実なるもの。

10:6.13 (114.14) 8. 英知の遂行者。

10:6.14 (114.15) 9. 神性顧問。

10:6.15 (114.16) 10. 普遍的検閲官。

10:6.16 (114.17) 我々は、私がたまたま普遍的検閲官であるこの集団の第10系列に属しており、三位一体として機能する3名の楽園神格の子供である。これらの系列は、普遍的意味における三位一体の姿勢を代表してはいない。それらは行政判断—正義—の領域においてのみ神格のこの集合的姿勢を表す。特に、それらは割り当てられた明確な仕事のために三位一体により考案され、人格化されたそれらの機能においてのみ三位一体を代理する。

10:6.17 (115.1) 日の老いたるものとその三位一体起源の提携者たちは、崇高に公正である正当な判断を7超宇宙に提供する。中央宇宙においては、そのような機能は理論上のみで存在する。そこでは、公正さは完全に自明であり、ハヴォーナの完全性は不調和への全可能性を排除する。

10:6.18 (115.2) 正義は、公正さについての集団思考である。慈悲は、その個人的表現である。慈悲は、愛の姿勢である。精度は、法の運用を特徴づける。神性の判断は、いつも三位一体の正義に合致し、いつも神の神性愛を満たす公正さの魂である。完全に感知され、完全に理解されるとき、三位一体の公正な正義と宇宙なる父の慈悲深い愛は一致する。しかし、人は、そのような神性正義を完全に理解していない。したがって、人が見るように、父の人格、息子の人格、精霊の人格は、三位一体においては時間の経験的宇宙における愛と法の調和的聖職活動において調整されるのである。

7. 崇高性の総括的管理

10:7.1 (115.3) 神格の第一人格、第二人格、第三人格は、互いに等しく、かつ1体である。「我々の主たる神は唯一の神である。」永遠の神格の神性三位一体にには、目的の完全性と実行の同一性がある。父、息子、連合創造者は、偽りなく、神々しく一体である。真実について書かれている。「私が最初であり、最後であり、私以外に神は存在しない。」

10:7.2 (115.4) すべての事柄が有限段階において人間に現れるとき楽園の三位一体は、崇高なるもののように、全惑星、全宇宙、全超宇宙、壮大な全宇宙といった全体のみに関係している。この全体性への姿勢は、三位一体が神格の総体であることと他の多くの理由のために存在する。

10:7.3 (115.5) 崇高なるもののは、有限宇宙で機能する三位一体以下の何かであり、三位一体以外の何かである。しかし、ある限界内と不完全な力-人格化の現時代において、この進化の神格は、崇高性の三位一体の態度をまさに反映するようである。父、息子、精霊は、崇高なるものとは個人的には機能しないが、現在の宇宙時代においては、三位一体として協力する。我々は、彼らが究極者との同様の関係を維持するということを理解している。我々は、しばしば崇高なる神が最終的に進化したとき、楽園の神格と神崇高者との個人的関係について推測するのであるが、実のところは分からない。

10:7.4 (115.6) 我々は、崇高性の総括的管理が完全に予測できるとは考えない。さらに、この予測不可能性は、ある開

発上の不備、疑いなく崇高者の不備と楽園の三位一体への有限反応の不備の耳印によって特徴づけられているようである。

10:7.5 (115.7) 人間の心は、すぐに、多くのものごと—壊滅的な物理的事象、凄まじい事故、恐ろしい災害、つらい病、世界的規模の惨劇—を考えることができ、またそのような災難は、崇高なるものによるあり得る機能の未知の操縦に関わるものどうかを質問することができる。率直に言って、我々は知らない。我々には実際のところ確信がない。しかし、我々は、時間の経過に従い、これらの困難で、多少神秘的な状況すべてが宇宙の福祉と進歩のためにいつもよい結果をうむということを観測する。存在の情況と説明し難い生活変化はすべて、崇高者の機能と三位一体の総括的管理により高い価値の重要な原型へと織り込まれているのかもしれない。

10:7.6 (116.1) 神の息子としてのあなたは、父なる神の全行為に個人の愛の態度について明察することができる。しかし、あなたは、空間の進化世界において楽園の三位一体の宇宙活動のうち幾つが個々の人間の利益を増すのかを

いつも理解できるというわけではないであろう。永遠性の進展において、三位一体の行為は要するに同じく重要であり、行き届いていると明らかにされるであろうが、それらは時間の創造物においていつもそのように現れるというわけではない。

8. 有限を超えた三位一体

10:8.1 (116.2) 楽園の三位一体に関する多くの真実と事実は、有限を超える機能を認識することによりただ部分的に理解できるに過ぎない。

10:8.2 (116.3) 究極者の三位一体の機能についての議論は勧められないが、究極なる神が理想化するものにより理解される三位一体顕現であることが明らかにされるかもしれない。我々は、主たる宇宙の統一が究極者の究極化の行為であり、おそらくは、楽園の三位一体の准絶対総括的管理の、全てではないが、ある局面の反射であると信じがちである。究極者は、崇高者がこのようにして有限と関連して三位一体を部分的に表すという意味においてのみ准絶対と関連する三位一体の適切な顕現である。

10:8.3 (116.4) 宇宙なる父、永遠なる息子、無限の精霊は、ある意味では総合神の構成要素人格である。楽園の三位一体と三位一体の絶対機能の統一は、総合神格の機能に達する。そして、神格のそのような完成は、有限者と准絶対者の両者を超える。

10:8.4 (116.5) 楽園神格の一者たりとも、潜在的、共同的に、3者すべてが行なうすべての神格を実際に充填したりはしない。無限の3者は、総合神格の前人格と実存的可能性を動かすに必要とされる最小存在体の数であるように思える--神格絶対者。

10:8.5 (116.6) 我々は、人格としての宇宙なる父、永遠なる息子、それに無限の精霊を知っているが、個人的には神格絶対者を知らない。私は父なる神を愛し、崇拝している。私は神格絶対を敬い称える。

10:8.6 (116.7) 私は、ある存在体集団が、終局者がいつかは神格絶対の子供になると教えた宇宙にかつて逗留した。しかし、私は終局者の未来をおおい隠す謎へのこの回答を受け入れる気がしない。

10:8.7 (116.8) 終局者部隊は、神の意志に適う完全性に達した時間と空間のそれらの人間を、他の者達も、擁する。創造物として、創造物の能力の限界内で、それらの者たちは最大限に真に神を知っている。全創造物の父としての神をこのようにして見つけたこれらの終局者は、いつかは超有限の父を求める探索を始めなければならない。しかし、この探索は、准絶対の性質をもつ楽園の父の究極的属性と特徴の把握を伴う。永遠性はそのような到達が可能であるかどうかを明らかにするが、我々は、終局者が神性のこの究極を実際に把握するとしても、おそらく絶対神格の超究極段階に達することはできないであろうと確信する。

10:8.8 (116.9) 終局者たちが、神格絶対に部分的に達するということはあるかもしれないが、もし達したとしてもまだ永遠の中の永遠においては宇宙なる絶対者の問題は、上昇し、進歩する終局者の興味をそそり、それらを当惑させ、困惑させ、それらに挑戦し続けるであろう。というのも我々は、宇宙なる絶対者の宇宙的関係は、物質宇宙とその精霊的行政の継続的拡大につれ、成長する傾向があるということに気づいている。

10:8.9 (117.1) ただ無限だけが、父-無限を明らかにすることができる。

10:8.10 (117.2) [ユヴァーサに居住の日の老いたるものからの権威により行動する宇宙検閲官による提示]

論文 11
楽園の永遠の小島

11:0.1 (118.1) 楽園は、宇宙の中の宇宙の永遠の中心であり、宇宙なる父、永遠なる息子、無限の精霊、神性の等位者とそれらの仲間の居所である。この中央の小島は、すべての主たる宇宙の中の宇宙現実の最も巨大な組織化された本体である。楽園は精霊の住まいばかりではなく物質の球体でもある。宇宙なる父の全知的創造体は、物質からなる住まいに居を定めている。それゆえに、絶対制御の中心もまた、文字通り物質的であらねばならない。そして再度、精神的なものと精霊的存在体が事実であるということが反復されなければならない。

11:0.2 (118.2) 楽園の物質的美は、その物理的成熟の壮大さにある。神の小島の壮大さは、その居住者のずば抜けた知的達成と心の進化で示される。中央の小島の栄光は、精

霊の神性人格の無限の賦与に示される—生命の光。しかし、精霊的な美の奥行きとこのすばらしい奇観の組み合わせは、物質創造生物の有限の心の理解力を完全に超えるものである。神性の住まいの栄光と精霊的壮麗さは人間には理解できない。楽園は永遠から来ている。光と生命のこの中心的小島の起源に関する記録も慣例もない。

1. 神の住居

11:1.1 (118.3) 楽園は、普遍的領域の行政における多くの目的に適うが、被創造の存在体には、主として神の居住地域として存在する。宇宙なる父の人格的臨場は、このほぼ円形の、しかし球体ではない神格の住まいの上面のまさにその中心に居住している。宇宙なる父のこの楽園臨場は、直接に永遠なる息子の個人的臨場に囲まれ、両者は、無限の精霊の言葉では表されない栄光に包まれている。

11:1.2 (118.4) 神は住んでおり、ずっと住んできており、そして、永久にこの同じ中央の、永遠の住まいに住むであろう。我々はいつもそこに神を見つけてきたし、いつも見つけるであろう。宇宙なる父は、宇宙的には局地化さ

れ、精霊的には人格化され、地理的には宇宙の中の宇宙のこの中心に居住している。

11:1.3 (118.5) 我々は皆、宇宙なる父を探し求めるための直接針路を知っている。あなたは、その悠遠さゆえに、また介在する宇宙の広大さゆえに、神の住居に関し多くを理解することはできないが、ちょうどユランチアで地理的に、確かに位置するニューヨーク、ロンドン、ローマ、あるいはシンガポールの都市の位置を確実に、完全に知っているように、これらの途方もない広がりの意味を理解することのできるものたちは、神の位置と住居を知っている。あなたが、船、地図、羅針盤を備えた理に適った航海士であったならば、容易にこれらの都市を見つけることができるであろう。同様に、あなたが通行のための時間と方法を持ち、殊に資格が与えられ、必要とする手引きがあるならば、ついに宇宙なる父の精霊的栄光の中央の輝きの前に立つまで星のきらめく領域を経て内側へと常に旅を続け、宇宙から宇宙、回路から回路へと水先案内ができるであろうに。旅行のすべての必需品が備えられ、万物の中心に神の個人的臨場を見つけるのはあなた自身の惑星の遠方の都市を見つけるのと同程度に可

能である。あなたがこれらの場所を訪れなかったということが、それらの現実、あるいは実際の臨場を少しも覆すことにはならない。わずかばかりの宇宙創造物だけが、楽園で神を見つけたということが、万物の中心における存在の現実、あるいは精霊的人格の実在のいずれかを覆すということはいささかもないのである。

11:1.4 (119.1) 父は、いつもこの中央位置に見つけられる。父が移動したとなれば、宇宙に大混乱がもたらされるるであろう。なぜなら、宇宙の引力線が最果ての創造からこの居住地域に集まるのであるから。我々が内に向かい父へと旅するに従い、宇宙を通って人格回路をさかのぼろうと、または上昇する人格についていこうとも、我々が下の楽園へと物質引力の線をたどろうと、または宇宙根源力の押し寄せてくる周期の後をつけようとも、永遠なる息子へと精霊的引力の線をたどろうとも、神の楽園の息子の内部へ向かう行進に従がおうとも、我々が心の回路をたどろうとも、無限の精霊から生じる何兆もの天の存在体の後をつけようとも、—これらの観測のどれかによって、またはそれらのすべてにより、我々は直接父の臨場へと、父の中央の住まいへと導かれるのである。こ

こに、神は、個人的に、文字通り、実際に臨場している。そして、生命、エネルギー、人格が、無限の存在から全宇宙へと洪水の勢いで流れるのである。

2. 永遠の島の特質

11:2.1 (119.2) あなたは、天文的位置から、つまりあなたの星体系の空間位置からさえ認識できる物質的宇宙のおびただしさを一瞥し始めているので、そのような物凄い物質宇宙には適切でふさわしい首都、すなわち物質領域と生き物のこのすべての広大かつ広範囲の創造の威厳と無限の広がりをもつ普遍的支配者の本部がなければならないということが、あなたには明白となるはずである。

11:2.2 (119.3) 楽園の形状は空間の生息本体とは異なる。球体ではない。それは、南北の直径が東西の直径よりも1/6長く、確実に楕円形である。中央の小島は基本的には平坦であり、上表面から下表面までの距離は東西の直径の1/10である。

11:2.3 (119.4) その静止状態と小島の北端の力-エネルギーのより大きい外への圧力を理解したうえでのこれらの寸法の違いが、主たる宇宙の絶対方向の確立を可能にする。

11:2.4 (119.5) 中央の小島は、地理的に3つの活動領域に分割される。

11:2.5 (119.6) 1. 上方の楽園

11:2.6 (119.7) 2. 周囲の楽園辺縁

11:2.7 (119.8) 3. 下方の楽園

11:2.8 (119.9) 我々は、人格活動に専念しているその面を上方とし、また反対面を下方として楽園のその表面について話す。楽園周辺は、厳密には人格的、または非人格でない活動に備える。三位一体は、人格面を、つまり上方面を支配し、無条件絶対者は、下方面を、つまり非人格面を支配しているようである。我々は、無条件絶対をほとんど人としては想像しないが、楽園下方に局地化されたこの絶対者の機能的な空間臨場については考える。

11:2.9 (120.1) 永遠の小島は、単一の具体化の形で成っている—現実の定常系。楽園のこの実際の物質は、宇宙の中の広い宇宙の他のすべての場所では見つけられない空間の潜在性の均一組織である。それは異なる宇宙において多くの名前を受け、ネバドンのメルキゼデク系は、以来、

長い間、それをアブソリュータムと命名した。この楽園の物質源は、死んでも生きてもいない。それは第一根源と中枢からの非精霊の最初の表現である。それは楽園であり、楽園に複製はないのである。

11:2.10 (120.2) 我々には、第一根源と中枢は、無限性の限界からの自己解放の手段の一部として、すなわち、準無限の創造を、時間-空間の創造をさえ可能にする方法として、楽園の宇宙現実のためのすべての絶対可能性を集結してきたように見える。しかし、宇宙の中の宇宙がこれらの質を明らかにするというだけで、楽園がかならずしも制限される時間-空間であるということにはならない。楽園は、時間なくして存在しており、空間に位置も持たない。

11:2.11 (120.3) 空間は、おおむね外観上では下方楽園の真下に源を発している。時間は、上方楽園の真上に。中央の小島の公民は、事象の非時系列を完全に意識しているが、あなたが理解している時間は、楽園存在の特徴ではない。動きは、楽園には備わってはいない。それは意志である。しかし、距離の概念には、それが楽園で相対的位

置に適合されるとき、絶対的距離にさえ、誠に多くの意味がある。楽園は無空間である。故に、その領域は絶対的であり、よって、人間の心の概念を超え様々な意味において実用的である。

3. 上方楽園

11:3.1 (120.4) 上方楽園には、神臨場、最聖域圏、聖域圏の壮大な3 つ活動圏がある。直接に神格の存在を囲む広大な領域は、最聖域圏としてかたわらに置かれ、崇拝、三位一体化、高い精霊的到達の機能のために用いられる。この領域には物質構造化もないし純粋に知的創造もない。それらは、そこには存在し得ないのである。私にとり、人間の心に楽園の最聖の球体に関する神性と美をともなう壮大さを描くことを引き受けるということは無益である。この領域は、完全に精霊的であり、あなたは、ほぼ完全に物質的である。純粋に精霊的現実は、物質的存在体にとり、明らかに実在しないのである。

11:3.2 (120.5) 最聖の領域における物理的具体化はないとはいえ、聖地の領域には、また楽園周辺の歴史を思い起こさ

せる領域には、なおさらにあなたの肉体時代の豊富な記念品がある。

11:3.3 (120.6) 聖地は、つまり中心から離れた領域、または居住領域は、7つの同心区域に分割される。楽園は、父の永遠の住居であるので時として「父の家」と呼ばれ、これらの7区域はしばしば「父の楽園大邸宅」と称される。その内側、または第1区域は、楽園公民とたまたま楽園に居住しているかもしれないハヴォーナ出身者がにより占有される。次の、または第二区域は、時間と空間の7超宇宙出身者の住居区域である。進化的発展の宇宙の出身である精霊存在体と上昇する創造物の楽園の家であるこの第二区域は、広大な7区分へと部分的に細分されている。これらの各区域は、もっぱら単一超宇宙の人格の福祉と前進に捧げられるが、これらの活動部門は、現在の7超宇宙の必要条件を大いに越えている。

11:3.4 (121.1) 楽園の７区分のそれぞれは、１０億の栄光ある各労働集団の宿泊本部のための単位へと細分されている。千のこれらの単位が１分隊を構成する。１０万の分隊が１会衆に相当する。　１千万の会衆が１議会を構成

する。１０億の議会が１大単位を作る。そしてこの上昇系は、第二大単位、第三大単位などを経て、第七大単位へと続く。そして、７個の大単位は、主たる単位を構成し、７個の主たる単位は、上級単位を構成する。上昇系は、こうして７個のまとまりで上級、超上級、天界、超天界を経て最高単位へと広がる。しかし、これさえも利用可能な全空間を活用するというわけではない。楽園におけるこの驚異的な数の住宅の名称は、あなたの概念を超えた数、聖地の割り当てられた領域の1パーセントをはるかに下回って占めている。内部に向かって進むもの達のための、楽園上昇を始めないもの達のためにさえ、永遠の未来の時代にまで上る余裕がまだ沢山あるのである。

4. 周辺楽園

11:4.1 (121.2) 中央の小島は、突然に崖状で終わるが、その規模は非常に巨大であるので、この終端角度はいかなる外接領域内においてもあまり識別はできない。周辺楽園の表面は、精霊人格の様々な集団の降着や派遣用に一部占領されている。未充満の空間帯は、外面にほぼ接触するので、楽園へと運命づけられているすべての人格輸送

は、これらの領域に到着する。上方でも、下方でもない楽園は、超熾天使、または空間通過者の他の型が接近し易い。

11:4.2 (121.3) 主たる7精霊は、息子の輝く球体とハヴォーナ世界の内側の回路間の空間において楽園周辺を周る精霊の７球体において個人的な権力と権威の座を持つが、楽園周辺の根源力-焦点の本部を保守する。ここで、緩やかに循環している崇高な力の7統括者の臨場は、7超宇宙に向かう一定の楽園エネルギーのために７個の閃光局の位置を示す。

11:4.3 (121.4) ここ周辺楽園には、時間と空間の地方宇宙に捧げられる創造者たる息子に割り当てられている歴史的かつ予言的な展示の領域がある。現在、打ち立てられたり、または蓄えられているちょうど7兆の歴史上のこれらの保留区域があるが、その配置は、このように割り当てられた周辺領域のその部分の、一まとめにしてもほんの4パーセント程度を占めるに過ぎない。我々は、創造のためのこれらの広大な保留区域が、そのうちに現在知

られている生息の、7超宇宙の境界を超えて設定されると推断する。

11:4.4 (121.5) 既存の宇宙の使用目的のために指定された楽園の一部は、ほんの1パーセントから4パーセントしか占めておらず、一方、これらの活動に割当てられる領域は、少なくともそのような目的に実際に必要であるその100万倍である。楽園は、ほぼ無限の創造活動に対応に足りる十分の大きさなのである。

11:4.5 (121.6) だが、楽園の栄光を思い描こうとするそれ以上の試みはあなたにとって徒労であろう。あなたは、待たなければならず、待っている間にも昇らなければならない。なぜなら、実に、「宇宙なる父が時間と空間の世界の肉体生活を乗り切る者達のために用意をした事を、まだ目は見ておらず、耳は聞いておらず、人間の心の中にも入っていかなかった。」のであるから。

5. 下方楽園

11:5.1 (122.1) 下方楽園に関しては、我々は明らかにされていることだけを知っている。人格はそこには滞在しない。それは、精霊の知力ある者の活動には何の関わりもな

く、神格絶対もそこでは機能しない。我々には、すべての物理エネルギーと宇宙根源力の回路が、下方楽園にそれらの起源を持つということ、また、それが次のように構成されているとが知らされている。

11:5.2 (122.2) 1. 下方楽園の中央部分にある三位一体の位置する真下は、未知で明らかにはされていない無限の区域である。

11:5.3 (122.3) 2. この区域は名のない領域に直接に囲まれている。

11:5.4 (122.4) 3． 下面の外側縁を占拠している主には空間の潜在性と力-エネルギーに関係する地域がある。この巨大な根源力の楕円形の中心の活動は、いかなる3結合体の周知の機能によっても識別可能ではないが、空間の根源力-補填はこの領域に局地化されている。この中心は、3同心の楕円形から成り立っている。最深部は、楽園自体の力-エネルギー活動の中心である。最外部は、ことによると無条件絶対の機能と同一視されるかもしれないが、我々は、中間区域の空間的機能については定かではない。

11:5.5 (122.5) この根源力の中心の内層は、その振動が物理空間の最外部の境界への流れを方向づける巨大な心臓として機能するようである。それは力-エネルギーを方向づけ、変更はするものの、それを追い出すことはほとんどしない。この第一根源力にある現実の圧力-臨場は、楽園中心の北端においては南の領域におけるよりも確実に大きい。これは一様に記録されている相違である。空間の主根源力は、根源力-エネルギーのこの基本形状の拡散に関する何らかの未知の循環系の操作を経て南で流入し、北で流出するようである。また、東西圧力には時として著しい違いがある。この区域から発する根源力は、観察可能な物理引力に対応しないが、つねに楽園引力に対応している。

11:5.6 (122.6) 根源力の中間区域の中心は、この領域を直接に取り囲む。この中間区域は、3周波活動を経て膨張し収縮することを除いては静的であるように見える。これらの中の最少の振動は、東-西方向に、次は南-北方向にあり、最大の振れは、あらゆる方向にあり、つまり一般化された拡大と収縮がある。この中間区域の機能は、実に一度も確認されたことはないが、それは根源力の中心の

内と外の区域間での相互的な調整と関わりがあるにちがいない。中間層は、主たる宇宙空間の連続段階を切り離している中間区域すなわち静寂区域の制御機構であると多くのものに信じられているが、何の証拠も顕示もこれを裏づけてはいない。この推論は、この中間領域が主たる宇宙の非瀰漫の宇宙機構の働きに関連する何らかの方法であるという知識に由来する。

11:5.7 (122.7) 外側の区域は、空間の未確認の可能性をもつ3同心の楕円帯の中で最大であり最も活発である。この領域は、想像外の活動場所、すなわち、全外宇宙の巨大かつ推測不可能な領域を一面に覆う７超宇宙とそれを越える最も外側の境界のあらゆる方向へと宇宙を進む放出の主要回路点である。この空間存在は、三位一体として機能するとき、何らかの明かされていない方法で無限の神格の意志と命令に間接的に対応するようであるが、完全に非個人的である。これは、無条件絶対の空間存在の中央の焦点化、つまり楽園の中心であると信じられている。

11:5.8 (123.1) 根源力のすべての形状とエネルギーの全局面は、回路化されているようである。それらは宇宙全体で

循環し、一定の経路で戻る。しかし、無条件絶対者の作動区域の放射に際しては、外向きであるか、または内向きであり、すなわち決して同時に両方ではない。この外側区域は、長年の周期の巨大部分で脈動する。ユランチア時間の10億年間余り、この中心の空間力は外向きである。また次にそれは、同様の期間内向きになるであろう。そして、この中心の空間-根源力の顕現は普遍的である。それらは瀰漫可能な全空間において広がっている。

11:5.9 (123.2) すべての物理的力、エネルギー、物質は一つである。すべての根源力-エネルギーは、そもそも下方楽園から来ており、やがてはその空間回路の完成後にそこへ戻るであろう。宇宙の中の宇宙の現在の現象状況にあるエネルギーと物質の組織はすべてが、下方楽園から来たのではない。空間は、物質と前物質のいくつかの形状の母体である。楽園の根源力の中心の外側区域は、空間-エネルギーであるが、空間はそこに源をとってははいない。空間は、根源力でも、エネルギーでも、力でもない。この区域の振れは、空間の呼吸を説明するが、この

区域の内向と外向の局面は、連動し、拡大-収縮空間の20億年周期に同調している。

6. 空間呼吸

11:6.1 (123.3) 我々は、空間呼吸の実際の仕組みを知らない。我々は、ただすべての空間が交互に縮小し、また広がるということを単に観測するに過ぎない。この呼吸は、瀰漫的空間の水平伸張と、楽園の上下の巨大空間の貯留層に存在する非瀰漫的空間の垂直伸張の両方に影響する。これらの空間貯留層の容積概観の想像を試みる際、あなたは、砂時計を思い浮かべるかもしれない。

11:6.2 (123.4) 瀰漫空間の水平伸張の宇宙が拡大する間、非瀰慢空間の垂直伸張の貯留層は収縮し、また逆も起こる。下方楽園の真下には瀰漫と非瀰慢の空間の合流がある。二つの型の空間は、宇宙の収縮と拡大において瀰慢可能な空間を非瀰慢可能にし、また同様に逆の変化がもたらされる変形する調整回路を経て流れる。

11:6.3 (123.5) 非瀰慢空間とは、瀰漫空間に存在すると知られているそれらの根源力、エネルギー、力、臨場に満たされないことを意味する。我々は、垂直(貯留層)空間が、

常に水平(宇宙)空間の釣り合いとして機能するようになっているかどうかは知らない。我々は、瀰漫空間に関し創造的な意図があるかどうかは知らない。我々は、空間貯留層に関し実際のところほとんど知らず、単に、それが存在しているということ、また、宇宙の中の宇宙の空間-拡大-収縮を相殺しているらしいということを知るに過ぎない。

11:6.4 (123.6) 空間呼吸の周期は、ユランチア時間の10億年間余りにわたり各段階ごとに広がる。次には収縮する。瀰漫空間は、いま、拡大段階の中間点に近づきつつあり、同時に、瀰漫空間は、収縮段階の中間点に接近しており、そして、我々には両空間拡大の最外部の限界が、理論上、今楽園からほぼ等距離にあると知らされている。非瀰漫空間の貯留層は、今、宇宙の瀰漫空間が周囲の楽園から外空間の第4段階へと、またそれを超えたところまで上方楽園の上と下方楽園の下に垂直に広がっているのである。

11:6.5 (124.1) 空間貯留層は、ユランチア時間の10億年間は収縮し、同時に、主たる宇宙とすべての水平空間の根源力

の活動は拡大する。したがって、拡大収縮全周期を完了するには、ユランチア時間の20億年強を要する。

7. 楽園の空間機能

11:7.1 (124.2) 空間は、楽園のどの表面上にも存在してはいない。もし人が、直接楽園の上面から「見上げる」ならば、ただ非瀰漫空間が出ていくのを、あるいは入ってくるのを、ちょうど今入ってくるのを、見るであろうに。空間は楽園には触れていない。静かな中ほどの区域だけが中央の小島に接触している。

11:7.2 (124.3) 楽園は、瀰漫と非瀰漫の空間の間に存在する比較的静かな区域にある実際には動かない核である。これらの区域は、地理的に、楽園の相対的広がりであるように見えるが、おそらくは何らかの動きがそれらにはある。我々は、それらに関しほとんど知らないが、空間減少された運動のこれらの区域が、瀰漫空間と非瀰漫空間を引き離すのを観測するのである。瀰漫空間の段階の間にはかつて同様の区域があったが、これらは現在、さほど静かではない。

11:7.3 (124.4) 全空間の垂直断面は、水平の腕が瀰漫の(宇宙)空間を表し、また非瀰漫(貯留層)空間を表すマルタ十字架にわずかに似ている。４本の腕の間の区域は、中央空間地域が瀰漫と非瀰漫の空間を引き離すように、多少それぞれを引き離すであろう。これらの無活動の中央空間領域は、楽園からはますます遠い距離においていよいよ大きくなり、ついには、全空間の境界を包含し、また空間貯蔵と広げられた空間の全水平延長の両方を完全に封入する。

11:7.4 (124.5) 空間は、無条件絶対内において準絶対的状態でもなく、無条件絶対の臨場でもなく、また、究極者の機能でもない。それは楽園の贈与であり、また壮大な宇宙の空間とすべての外側領域の空間は、無条件絶対の最初の空間の潜在性が実際に瀰漫していると信じられている。この瀰漫空間は、楽園周辺近くから第4空間段階を通して水平に外側へと、また主たる宇宙の周辺を越えて広がるのであるが、いかにはるかに越えてかは分からない。

11:7.5 (124.6) あなたが、楽園の上下の両表面に対し直角に位置する有限ではあるが、想像できないほどに大きなV字形、その先が周囲の楽園にほぼ接するほどのV字形の面というものを思い描き、次に、楽園の周りの楕円回転におけるこの面を思い浮かべるならば、その回転が、おおまかに瀰漫空間の容量を説明するであろう。

11:7.6 (124.7) 宇宙のある特定位置からは水平空間の上側と下側に限界がある。もし誰かが、オーヴォントンの平面に直角に、または上か下にも、遠くに十分に動くことができるならば、瀰漫空間の上限と下限が、やがては巡り合うであろう。主たる宇宙の知られている広さの中では、これらの限界は楽園からさらに大きく離れますます遠くへと引き離される。空間は厚くされ、それは創造の平面、つまり宇宙よりもいささか速く厚くされる。

11:7.7 (125.1) 例えば最初の宇宙段階から7超宇宙を切り離すものなどの空間面の間の比較的静かな領域には、静止状態の空間活動の巨大な楕円の区域がある。これらの区域は、整然たる列で楽園の周囲を回る広大な銀河を切り離す。あなたは、明かされてはいない宇宙が今形成しつつ

ある最初の宇宙段階を、楽園の周りで揺れ動き、上方と下方が静止の中間区域と接し、そして、内側と外側が比較的静かな空間区域と接する銀河の大行進として想像することができる。

11:7.8 (125.2) 一空間段階は、その結果、相対的静止に四方を囲まれる楕円の運動領域として機能する。動きと静止けさのそのような関係は、宇宙根源力と突発エネルギーが永遠に楽園の小島を周回する間、あとに続く運動への減少抵抗の空間の曲がった進路を構成する。

11:7.9 (125.3) 主たる宇宙のこの交互する区画は、銀河の時計回りと反時計回りの交互の流れと関連して、破壊的、分散的な活動と思えるほどの引力圧の強調を防ぐように設計された物理引力の安定化の要素である。そのような手はずは、反引力の影響を与えており、ともすれば危険な速度への歯止めとして機能する。

8. 楽園引力

11:8.1 (125.4) 引力に不可避の引く力は、全空間のあらゆる宇宙のすべての世界を引きつける。引力は楽園の物理的臨場の全能的把握である。引力は、永遠なる神すなわち、

万物であり、万物を満たし、その中に万物がある神の宇宙の物理的装飾を構成するきらめく星、灼熱の太陽、回転する球体が結ばれている全能のより糸である。

11:8.2 (125.5) 物質絶対引力の中心と焦点は、ハヴォーナを包囲する暗い引力本体に補足され、上下の空間貯留層に平衡化される楽園の小島である。下方楽園の既知のすべてのエマナチオンは、主たる宇宙の楕円空間段階の無限の回路において中央の引力牽引力に不変的に的確に応じる。知られているあらゆる型の宇宙現実には、時代による湾曲、すなわち周期の傾向、おおきい楕円の揺れがある。

11:8.3 (125.6) 空間は引力に無反応であるが、引力の均衡をとる。空間の衝撃緩和がなければ、爆発作用は周囲の空間体をぐいと動かすことであろう。瀰漫空間は、また物理的引力、あるいは線引力への反引力影響を及ぼす。空間は、実際にはそのような引力作用を遅らせることはできないが、中和することはできる。絶対引力は楽園引力である。局部の、または線の引力は、エネルギーあるいは物質の電気段階に関係がある。それは、中央宇宙、超宇

宙、外宇宙の適切な具体化が行われた場所のどこであろうとも作動する。

11:8.4 (125.7) 宇宙根源力、物理エネルギー、宇宙の力、および様々な具体化のおびただしい型は、楽園引力への、完全に明確ではないとはいえ、一般的な3段階を明らかにする。

11:8.5 (126.1) 1. 前引力段階(根源力)。これは宇宙根源力の前エネルギーの型への空間の潜在性の個体化における第一歩である。この状態は、時として純粋なエネルギーまたは分離と呼ばれる本源の根源力-補填の概念に類似している。

11:8.6 (126.2) 2. 引力段階(エネルギー)。空間の根源力-補填のこの変化は、楽園の根源力組織者の行動により生み出される。それは、楽園引力の牽引力に反応するエネルギー体系の登場を示唆する。この突発エネルギーは、本来なら中立であるが、結果としておこるさらなる変形は、いわゆる負と正の特性を示すであろう。我々はこれらの段階を究極と命名する。

11:8.7 (126.3) 3. 後引力段階（宇宙の力）。この段階において、エネルギー-物質は線形引力の制御への対応を明らかにする。中央宇宙におけるこれらの物理的体系は、ツリアータとして知られている三重の組織である。それらは、時間と空間の創造の強大な力の母体系である。超宇宙の物理体系は、宇宙力指揮官とその仲間により結集される。これらの物質的組織は、構成的には二元であり、引力（グラヴィタ）として知られている。ハヴォーナを包囲する暗い引力体は、ツリアータでもグラヴィタでもなく、その引き抜く力は、物理引力の二つの、線的そして絶対的型を明らかにする。

11:8.8 (126.4) 空間の潜在性は、引力のいかなる型の相互作用の影響下にもない。楽園のこの第一賦与は、現実の実際段階ではないが、すべての相対的かつ機能的な非精霊現実にとっての原型である。—根源力-エネルギーの全顕示、力と物質の組織。空間の潜在性は、定義するには難しい用語である。それが空間にとっての先祖であるものということを意味するのではない。その意味は、空間内に実在する潜在性と可能性についての考えを伝えるべきである。それは、楽園からきており、無条件絶対の空間

臨場を構成するそれらすべての絶対的影響と可能性を包含することを大まかに思い描くことができる。

11:8.9 (126.5) 楽園は、宇宙の中の宇宙の全エネルギー物質の絶対的源と永遠の焦点である。無条件絶対者は、その根源と起源として楽園を持つ顕示者、調整者、集積所である。無条件絶対者の宇宙臨場は、引力拡大の潜在的無限性、つまり楽園臨場の弾性的緊張の概念に相当しているように思われる。この概念は、すべてが楽園に向かって内部に引き込まれるという事実を理解する際に我々を支援する。例証は粗雑であるものの、それにしても有用である。また、それは、引力がなぜ物質に垂直な面において常に優先的に行動するかを説明し、楽園とその周囲の創造に関する異なる寸法の現象的意味を説明する。

9. 楽園の独自性

11:9.1 (126.6) 楽園は、それが第一起源の領域と目標の最終目的地であるという点において全精霊人格に固有である。地方宇宙の下級の全精霊存在体が、即座に楽園に運命づけられてはいないというのは本当であるが、それでも楽園は、全超物質人格が望む目標である。

11:9.2 (126.7) 楽園は、無限の地理的中心である。それは、宇宙創造の一部ではない、永遠のハヴォーナ宇宙の実際の部分でさえない。我々は、よく神性宇宙に属すると中央の小島に触れるが、それは実際にはそうではない。楽園は永遠かつ唯一の存在である。

11:9.3 (127.1) 過去の永遠において宇宙なる父は、永遠なる息子の存在における精霊自身の無限の人格の表現に際し、同時に、楽園として非人格的自己の無限の可能性を明らかにした。非人格と非精霊の楽園は、最初の息子を永遠化した父の意志と行為への必然的反響のであったように見える。こうして、父は、実際の2局面—人格的かつ非人格的、つまり精霊的かつ非精霊的—における現実を映し出した。2局面の間の緊張は、父と息子による活動への意志を前提にして、連合活動者と物質界と精霊存在体の中央宇宙に存在させた。

11:9.4 (127.2) 現実が人格と非人格 (永遠なる息子と楽園)へと分化されるとき、何らかの形で条件づけられない限り非人格の「神格」であるものと呼ぶのは全く適切ではない。神の行為のエネルギーと物質的影響をとても神格と

呼ぶことはできない。神格は、神格でない多くを引き起こすことができるが、楽園は神格ではない。それは、人間がそのような用語を理解することができるようには意識してはいない。

11:9.5 (127.3) 楽園は、いかなる存在体、あるいは生きるものにとっての先祖ではない。それは創造者ではない。人格と心-精霊関係は、伝えられるが、様式は伝えられない。様式は決して反映ではない。それらは複製である--再現。楽園は様式の中で絶対である。ハヴォーナは、現実には、これらの可能性の展示である。

11:9.6 (127.4) 神の住居は、中央にあり永遠であり、栄光的で理想的である。神の家はすべての宇宙本部世界のための麗しい様式である。そして、神の直接的宿りの中央宇宙は、それらの理想、組織、および究極目的におけるすべての宇宙のための様式である。

11:9.7 (127.5) 楽園は、すべての人格活動の普遍的本部であり、力-空間とエネルギー顕現の根源-中枢である。すでにあった、現在ある、あるいは、まだないすべてが、永遠なるの神のこの中央のとどまる場所からすでに来た、

いま来ている、あるいは、来るであろう。楽園はすべての創造の中心と、すべてのエネルギーの源と、すべての人格の第一の起源の場所である。

11:9.8 (127.6) 要するに、人間にとり永遠なる楽園についての最も重要なものは、宇宙なる父のこの完全な住まいが、神の必滅かつ物質の息子の不滅の魂、すなわち時間と空間の進化世界の上昇する創造物の現実であり、はるかに遠い目標であるという事実である。父の意志を為す経歴を抱く神を知るすべての人間は、神性追求と完全性到達の長い長い楽園の道に既に乗り出した。数え切れないほどの多くが現在そうするように、空間の下級の球体から昇り終えたそのような動物起源の存在体が楽園の神々の前に立つときこそ、そのような達成が、至高の限界に近似する精霊的変化の現実を表すのである。

11:9.9 (127.7) [ユヴァーサの日の老いたるものにより機能するようにこのようにして任命される英知の完成者による提示]

論文 12
宇宙の中の宇宙

12:0.1 (128.1) 宇宙なる父の広範囲にわたる創造のその広大さというものは、有限の想像力の把握を完全に越えるものてある。主たる宇宙の膨大さは私が属する系列存在体のもつ概念をさえたじろがせる。しかし、人間の心に宇宙の計画と配列に関し多くのことを教えることは可能なのである。あなたはそれらの物理的組織と驚異の管理について何かを知ることができる。あなたは、時間の7超宇宙と永遠の中央宇宙に生息する様々な集団の知力ある存在体に関し多くを学ぶことができる。

12:0.2 (128.2) 原則として、つまり、永遠の可能性に関し、我々は、発想する宇宙なる父が実際に無限であるがゆえに無限であると物質的創造を思い描くものの、物質的全創造を研究し観測するとき、それは、あなたの有限心には比較的限りがなく、実際には無限であるが、いかなる時点においても制限されるということを知っている。

12:0.3 (128.3) 我々は、自然界の法則の研究により、また星の世界の観測により、無限の創造者は宇宙表現の最終的状態においてまだ顕示されていないと、無限者の宇宙可能性の多くが、まだ自己充足的で非顕示であると思い描

く。創造された存在にとり、主たる宇宙は、ほとんど無限であるように見えるかもしれないが、それは完成からは程遠い。物質的創造には物理的限界がまだあり、永遠の目的の経験的顕示は今もなお進行中なのである。

1. 主たる宇宙の空間段階

12:1.1 (128.4) 宇宙の中の宇宙は、無限の平面、広大な立方体ではなく、際限のない円でもない。それには、確かに、大きさがある。物理編成と管理の法則は、根源力-エネルギーと物質-力の全体の広大な集合が結局空間単位として、組織化され連携している全体として機能すると最終的に立証する。物質創造の観察可能な行動が、確たる限界をもつ物理的宇宙の証拠を意味する。基本的エネルギーのあらゆる形態が楽園引力の不断の、かつ絶対的牽引力に服従的な主たる宇宙の空間段階の湾曲経路を常に動き周るという我々には周知の事実により円形の、区切られた宇宙の決定的証拠が得られる。

12:1.2 (128.5) 主たる宇宙の連続的空間段階は、満ちた空間、—組織化され、部分的生息であるか、あるいははこれから組織化され、生息されていく全体的創造—の大区域を

成す。もし主たる宇宙が、運動、相対的な静止圏との交替、に対し減少された抵抗の一連の楕円空間段階になかったならば、我々は、宇宙エネルギーの一部は無限の圏内に、つまり痕跡のない空間へと直線道に発射するところを観測されると想像する。しかし、我々は、このような動きの根源力、エネルギー、または物質を決して見ていない。それらは、つねに巨大空間の回路の軌跡においていつも前方へ揺れ動いて、渦巻いている。

12:1.3 (129.1) 主たる宇宙は、楽園から満たされた空間の水平方向の延長線上を経由し外側へ進み、個の同心楕円、中央の小島を包囲する空間段階に実在する。

12:1.4 (129.2) 1. 中央宇宙——ハヴォーナ

12:1.5 (129.3) 2. 七超宇宙

12:1.6 (129.4) 3. 第一外空間段階

12:1.7 (129.5) 4. 第二外空間段階

12:1.8 (129.6) 5. 第三外空間段階

12:1.9 (129.7) 6. Missing line

12:1.10 (129.8) ハヴォーナ(中央の宇宙)は、時間のにおける創造ではない。それは永遠の存在である。この始まりのない終わりのない宇宙は、億の崇高な完全性の世界から成り、また巨大な暗い引力体に囲まれている。ハヴォーナの中心には、その個の衛星に囲まれて静止し完全に固定された楽園の小島がある。中央宇宙の縁周りの暗い引力体に属する包囲している巨大な質量のために、この中央宇宙の質量含有は、壮大な宇宙の全7区分の知られている全質量をはるかに上回っている。

12:1.11 (129.9) 楽園-ハヴォーナ体制、永遠の小島を取り囲んでいる永遠の宇宙は、主たる宇宙の完璧かつ永遠の中心部分を構成する。全7超宇宙と外空間の全領域は、楽園の衛星とハヴォーナ世界の中央の巨大な集合体の周辺に確立された軌道を回転する。

12:1.12 (129.10) 超宇宙は、第一の物理的組織ではない。星雲の一群を分割する境界はどこにもないし、地方宇宙、すなわち主要な創造単位を横切ってもしてはいない。各超宇宙は、組織化され、部分的に生息化している後ハヴォーナ創造のおよそが群がる単なる地理的空間であり、また

それぞれが、抱かれる地方宇宙の数において、また取り囲まれる空間においてほぼ等しい。あなたの地方宇宙であるネバドンは、第７超宇宙であるオーヴォントンにおける新創造の中のつである。

12:1.13 (129.11) 壮大宇宙は、現在の組織化され生息化された創造である。それは、主要な創造の永遠の圏域は言うまでもなくおよそ兆の生息惑星の集合進化の可能性をもつ超宇宙から成る。しかし、この仮の見積りは建築の行政世界を勘定にはいれず、組織されていない宇宙の中心から離れた集団を含んでもいない。壮大な宇宙の現在の辺縁、つまり、その不ぞろいで未完成の周辺は、天文区画全体の途方もなく不安定な状態とともに、超宇宙でさえまだ未完成であることを我々の星の学習者に示唆している。我々が内側から、神性の中心から外側へとある一方向に移動すると、やがて、壮大な宇宙の外側の境界に至る。そして、それは、あなたの地方宇宙がその多事多端の存在体のいるこの外側の境界の近くに、つまりそのようなすばらしい創造のはるかかなたの一隅にある。

12:1.14 (129.12) 外空間段階。空間生息の超宇宙からの途方もない距離のはるか外側の空間に、組み立てつつある巨大かつ信じられないほどに膨大な根源力回路と具体化しつつあるエネルギーがある。超宇宙のエネルギー回路とこの巨大な外帯の根源力活動の間に、幅は異なるが、平均しておよそ万光年の比較的静かな空間帯がある。これらの空間帯には、星屑がない—宇宙の霧。これらの現象に関わる我々の学習者は、超宇宙を包囲する相対的静けさのこの圏内に存在する空間-根源力の正確な状態に関して疑問をもっている。しかし、現在の壮大な宇宙の周辺を約5万光年超えるところに、我々は、2,500万光年以上の間に体積と強度を増やす信じ難いエネルギー活動圏の始まりを観測する。エネルギー化をする原子力のこれらの巨大な輪は、最初の外空間に、すなわち、既知の、組織化され生息化されている創造全体を包囲する宇宙活動の連続する圏に位置している。

12:1.15 (130.1) ユヴァーサの物理学者が、最初の外側の宇宙段階の5,000万光年を越える一番はずれの現象範囲を、根源力の初期の形跡を発見したので、今でもこれらの領域を超えて、大きな活動が行なわれている。これらの活動

は確かに主たる宇宙の第宇宙段階の物質的創造の組織の前兆となる。

12:1.16 (130.2) 中央宇宙は永遠の創造である。超宇宙は時間の創造である。外宇宙の段階は、創造の究極性をもたらし、発展するように確かに方向づけられている。そして、無限者が決して完全な表現に達し得ないことを持続する無限のもの達がいる。だからこそ、それらの者たちは、番目と一番はずれの空間段階を超える、つまり追加の、明かされていない創造、無限の絶えず広がる、尽きることのない可能な宇宙を仮定するのである。理論上、創造者の無限性あるいは創造の潜在的無限性のいずれかを制限する方法を知らないが、それが存在し、管理されるように、我々は、主たる宇宙を限界のあるものとして、空間により確実に境界を定められ、またその外側縁に隣接しているものと見なしている。

2. 非特異絶対的なものの領域

12:2.1 (130.3) ユランチアの天文学者達は、ますます効果を発揮する望遠鏡を通して外部空間の神秘的な広がりを覗き込み、そこでほとんど無数の物質宇宙の驚くべき発展を

凝視するとき、主たる宇宙の建築者の不可解な計画の強力な働きを見つめていると気づくべきである。たしかに、我々には、今これらの外側の領域に独特の広大なエネルギーの顕現にわたってあちらこちらに楽園人格のある影響の臨場を示唆する証拠があるが、より大きい観点からは、7超宇宙の外側の境界を越えて広がる空間地域は、一般に、非特異絶対の領域を構成すると認識されている。

12:2.2 (130.4) 人間の肉眼は、オーヴォントンの超宇宙の境界外にあるつかつの星雲だけを見ることができるが、あなたの望遠鏡は形成過程にあるこれら何百万もの物理的宇宙をそっくりそのまま明らかにする。現代の望遠鏡による探査で目に触れる星の世界の大半が、オーヴォントンにあるが、写真技術により、より大きな望遠鏡が、壮大な宇宙の縁をはるかに超えて外空間領域に入り込み、そこには、数えきれない宇宙が組織過程にある。また、あなたの現在の機器の範囲を超えて他の何百万もの宇宙がさらにある。

12:2.3 (130.5) 遠くない将来、新しい望遠鏡は、不思議そうに覗き込むユランチアの天文学者らに遠くの外空間の広がりにある少なくとも億7,500万の新銀河を明らかにするであろう。同時に、これらのより強力な望遠鏡は、以前は外空間にあると信じられた多くの島状の宇宙が、実はオーヴォントンの巨大な体系の一部であることを明らかにするであろう。超宇宙はまだ発達しつつある。それぞれの周辺は徐々に広がりつつある。新星雲は絶えず安定化し、組織化されている。そして、ユランチアの天文学者が超巨大と見なすいくつかの星雲は、実際にはオーヴォントンの縁にあり、我々と共に旅しているのである。

12:2.4 (131.1) ユヴァーサの星の学習者らは、壮大な宇宙が、外側の幾つもの宇宙の同心輪としての生息物のいる現在の創造を完全に包囲する一連の星明りと惑星群の先祖に囲まれるているのを観測する。ユヴァーサの物理学者らは、これら外側の、また地図にない領域のエネルギーと物質は全超宇宙に迎え入れられる総質量と総エネルギー充足の何倍にも等しいと見込む。我々には、これら外宇宙段階における宇宙根源力の変化が楽園根源力の組織者の機能であると知らされている。我々は、また、これら

の根源力が現在のところ壮大な宇宙を動かすそれらの物理エネルギーにとっての源であることを知っている。しかしながら、オーヴォントンの力の指揮官は、これらはるか遠方の領域とは無関係であり、エネルギー運動は、組織化され、かつ居住の創造に属する力の回路にはここではっきりとは関係づけられてはいないのである。

12:2.5 (131.2) 我々は、外空間の途方もないこれらの現象の意味をほとんど知らない。未来のより大きい創造は、構成過程にある。我々は、その広大さを観測することができ、その範囲について明察し、その堂々たる大きさを理解することはできるが、これらの領域に関しユランチアの天文学者が知る以上には知らない。我々が知る限り、人間の系列のどんな存在体も、天使や他の精霊の創造物なども、星雲、太陽、および惑星のこの外側の輪には存在していない。この遠方の領域は、超宇宙の政府の司法権と管理を超えている。

12:2.6 (131.3) 新しい型の創造が進行中であると、すなわち、宇宙の一系列が集まる終局者部隊軍団の今後の活動の現場になるように定められているとオーヴォントン中で信

じられている。そして、我々の憶説が正しいならば、無限の未来は、無限の過去が、あなたの先達や前任者のために持っていた魅了する同じ光景をあなた方すべてのために有するかもしれない。

3. 普遍の引力

12:3.1 (131.4) すべての根源力-エネルギーの型—物質、心、または精霊の型—は、我々が引力と呼ぶその普遍的臨場の引力の握りに同じように支配される。人格もまた引力に敏感である—父の専属回路に。しかし、この回路は父に限られている。父は他の回路から除かれない。宇宙なる父は主たる宇宙の中の4個のすべての絶対-引力回路にわたり無限であり、かつ行動する。

12:3.2 (131.5) 1. 宇宙なる父の人格引力

12:3.3 (131.6) 2. 永遠なる息子の精霊引力

12:3.4 (131.7) 3. 連合活動者の心の引力

12:3.5 (131.8) 4. 楽園の小島の宇宙引力

12:3.6 (131.9) これらの回路は、楽園下方の根源力の中心には関連していない。それらは根源力回路やエネルギー回路ではなく力の回路でもない。絶対臨場回路であり、神と同じように時間と空間から独立している。

12:3.7 (132.1) この点に関し、引力研究者の一団による最近の数千年間のユヴァーサでのある観測を記録することは興味深い。この専門集団の労働者らは、主たる宇宙の異なる引力体系に関し以下の結論に到達した。

12:3.8 (132.2) 1. 物理的引力。それらは、壮大な宇宙の物理-引力全体の潜在的可能性の総和の見積りを定式化した上で、この発見と、現在作用している絶対引力の臨場の推定合計とを苦労しつつ比較した。これらの計算は、壮大な宇宙の総引力の動きが、宇宙物質の基本的な物理装置の引力反応に基づいて計算された楽園の推定の引力牽引力の非常に小さい部分であることを示した。これらの調査員は、中央宇宙と周辺の7超宇宙が現時点においては楽園絶対-引力把握の能動的機能の約5パーセントだけを利用しているという驚くべき結論に至る。言い換えれば、今や、この全体理論において算出される楽園の小島

の活発な宇宙-引力活動の約95パーセントは、現在の組織化された宇宙の縁を超える物質的体系の制御に従事している。これらの計算はすべて、絶対引力について触れている。線引力は、単に実際の楽園引力を知ることによる計算が可能である双方向の現象である。

12:3.9 (132.3) 2. 精霊的引力。対比の判断と計算の同じ方法により、これらの研究者は、精霊引力の現在の反応容量を探求し、単独の使者と他の精霊人格の協力で、第二根源と中枢の活発な精霊引力の総和に達した。そして、価値研究者達が、現在の活発な精霊引力の総合量のために仮定するという壮大な宇宙の中の精霊引力の実際の、かつ機能的臨場に関してほぼ同じ価値を見つけることに注意することは最も有益である。言い換えれば、現時点で、全体のこの理論に実際に計算される永遠なる息子の精霊引力全体は、壮大な宇宙の中で機能しており観察可能である。これらの発見が信頼できるならば、我々は、今外空間で展開する宇宙が、現在は完全に非精霊的であると結論を下せるかもしれない。そして、これが本当であるならば、それは、物理的臨場の事実の知識は別として、精霊-賦与の存在体がなぜこれらの広大なエネルギー顕

現についての情報をあまり、もしくは全然保持していないのかを十分に説明するであろう。

12:3.10 (132.4) 3. 心の引力。比較計算のこれらの同じ原則により、専門家たちは心-引力臨場と反応に関する問題に取り組んできた。力の監督者とその仲間に見られる心の型は、心-引力の見積りのための基礎単位に到る努力における不穏な要素であると判明するが、試算のための心の単位は、精神構造に関する3個の物質的な型と3個の精霊的な型を平均化することによりなされた。全体性に関するこの理論に一致した心-引力の機能ために第三根源と中枢の現在の容量に関する見積りを妨害するものはあまりない。発見は、この場合、身体と精霊引力の見積りほどには決定的でないとはいえ、比較して考えると、非常に有益であり、興味さえそそる。これらの調査員は、連合活動者の知的な素描への心-引力反応のおよそパーセントが既存の壮大な宇宙に起源を取ると推論する。これは、心の活動がいま外宇宙全体で進行中の観察可能な身体的活動にかかわるという可能性を示すであろう。この見積りは、少しも正確ではないかもしれないが、根源力の知力ある組織者は、現在のところ、壮大な宇宙の現在

の外側の限界を超えた空間段階における宇宙発展を指揮していると、原則的に、我々の信念に合致している。この仮定された知性の本質が何であろうとも、それは精霊-引力には明らかに反応的ではない。

12:3.11 (133.1) だがこれらのすべての計算は、たかだか想定された法に基づいて見積もられたものである。我々は、それらがかなり信頼できるものであると思う。いくつかの精霊存在体が外宇宙にいるとしても、それらの集合的臨場はそのような莫大な測定値にかかわる計算に著しくは影響を及ぼさないであろう。

12:3.12 (133.2) 人格引力は計算不可能である。我々は、回路を認めるものの、それに反応する質的、または量的な現実を測定することはできない。

4. 空間と動き

12:4.1 (133.3) 宇宙エネルギーの全構成単位は、基礎的回転にあり、普遍的軌道の周りで揺れ動くとともに、それぞれの任務の実行に従事している。空間にある宇宙とそれぞれの構成体系および世界はすべて、回転球体であり、主たる宇宙空間段階の無限の回路に沿って動いている。主

たる宇宙全体においては、ハヴォーナのまさにその中心を除き、すなわち、引力の中心である楽園の永遠の小島を除いては、静止しているものは絶対にない。

12:4.2 (133.4) 非特異絶対は、機能上空間に制限されているが、我々は、絶対の動きへの関わりについてあまり確信はない。動きはそこに固有であるのか。我々は知らない。我々は、動きが本来空間に備わっていないということを知っている。空間の動きさえ空間に起源をもたない。しかし、我々は、非特異、無条件の動きへの関わりについてあまり確信はない。だれが、あるいは何が、実際には現在の7超宇宙の境界を超えて今進行中の根源力-エネルギーの巨大な活動に関与しているのか。動きの起源に関し、我々には、次のような意見がある。

12:4.3 (133.5) 1. 我々は、連合活動者が空間で動きを開始すると考える。

12:4.4 (133.6) 2. 連合活動者が空間の動きを起こしているのであるならば、我々はそれを立証できない。

12:4.5 (133.7) 3. 宇宙の絶対者は、初動を始めないものの、動きによって発せられる緊張のすべてを均等化し、制御する。

12:4.6 (133.8) 外宇宙においては、根源力組織者が、いま星の進化過程にある巨大な宇宙の輪の生産に明らかに関与しているが、それほどまでに機能する能力は、非特異絶対の空間臨場の何らかの変更により可能にされてきたに違いない。

12:4.7 (133.9) 空間は、人間の観点からは、何でもない—消極的。それは、単に何か積極的なものと非空間的関連においてのみ存在している。しかしながら、空間は、実在する。それは動きを有し、動きを条件とする。それは動きさえする。空間の動きは、大まかに次のように分類できるかもしれない。

12:4.8 (133.10) 1. 第一の動き—空間呼吸、空間自体の動き。

12:4.9 (133.11) 2. 第二の動き—連続する空間段階の交互の方向性の揺れ。

12:4.10 (133.12) 3. 相対的な動き—それらが楽園を基点として評価されないという意味において相対的。第一の、そして、第二の動きは絶対的なもの、動かない楽園と関連した動きである。

12:4.11 (133.13) 4. 他のすべての動きを調整するように設計された補填的または関連する運動。

12:4.12 (134.1) あなたの太陽とその関連惑星の現在の関係は、空間の相対的、かつ絶対的な多くの動きを明らかにするとともに、あなたが空間で比較的静止している間、あなたの計算が外空間へと進むにつれ、周囲の星の集まりと趨勢が、絶えず増加する速度で外への飛行に従事していると天文観察者へ印象を伝える傾向がある。しかし、そうではない。あなたは、すべての瀰漫空間の物理的創造の外向きの、均一的な現在の拡大を認識できていない。あなた自身の局部的創造(ネバドン)は、外への普遍的拡大のこの動きに参加する。7超宇宙全体が、主たる宇宙の外側の領域に伴う20億年の周期の空間呼吸に参加している。

12:4.13 (134.2) 宇宙が、拡大し収縮するとき、瀰漫空間の質量は、交互に、楽園引力に対し動き、また楽園引力の牽引力と共に動く。創造の物質エネルギー量を動かす際の仕事は、力-エネルギーの仕事量ではなく、空間の仕事量である。

12:4.14 (134.3) あなたの宇宙速度の分光学的見積りは、かなり信頼できるとはいえ、あなたの超宇宙に属する星の世界とその仲間の超宇宙に適用されるとき、外空間の領域に関するそのような計算は、まったく当てにならない。スペクトル線は、標準周波から紫色に向かい迫りくる星により置き換えられる。同様に、これらの線は後退している星によって赤に向かって置き換えられる。多大の影響が、遠隔の宇宙の退出速度が100万光年の距離の増加ごとに秒あたり100マイル以上の速度で増加するかのように介入している。この計算方法によると、一層強力な望遠鏡の完成後には、これらのはるかに遠い体系は、宇宙のこの部分から秒あたり万マイル以上の信じられない速さで飛行しているかのようであろう。しかし、この外見上の退去の速度は本当ではない。それは、観測角度と他

の時-空間の歪を含む数多くの誤りの要因から生じるのである。

12:4.15 (134.4) 超宇宙領域の隣接区域にある外空間の広大な宇宙は、壮大な宇宙のそれとは反対方向に回転しているらしいので、そのような歪の中で最大のものが生まれる。すなわち、これらの無数の星雲と付随する太陽、および球体は、現在、主要な創造の周りを時計回りに回転している。超宇宙は、反時計回りの方向に楽園の回りを回る。銀河の番目の外宇宙が、超宇宙のように楽園の周囲を反時計回りに循環しているように見える。そして、ユヴァーサの天文観察者は、時計回りの性質をもつ方向づけの傾向を見せ始めているはるか遠方の空間の番目の外帯における回転運動に関する証拠を発見すると考えている。

12:4.16 (134.5) 宇宙の連続的空間行列のこれらの交互の方向は、根源力の調整と空間緊張の均等化からなる宇宙の絶対者の主たる宇宙引力の方法内に何らかの関係がありうる。動きは、空間と同様に引力の補完、あるいは平衡である。

5. 空間と時間

12:5.1 (134.6) 空間と同じく、時間は、同じ意味ではなく、間接的意味においてのみ、楽園の贈与である。心は本質的に連続性に気づいているので、時間は、動きの効力により生じる。実際的見地から、動きは時間に不可欠であるが、楽園-ハヴォーナの標準日が任意にそのように認識されていることを除いては、動きに基づく普遍的な何の時間の単位もない。空間呼吸全体は、時間の源としてその局所価値を打ち砕く。

12:5.2 (135.1) 空間は、楽園に起源をとるものの無限ではない。絶対的ではない。というのも、それは非特異絶対者により瀰漫しているので。我々は、空間の絶対的限界を知らないが、絶対段階の時間は永遠であることは知っている。

12:5.3 (135.2) 時間と空間は、単に時間-空間創造においてのみ、すなわち7超宇宙においてのみ切り離すことはできない。一過性の空間(時間のない空間)は、理論的に存在するが、唯一真に一過性である場所は、楽園領域であ

る。無空間時間(空間のない時間)は、楽園段階で機能する心に存在している。

12:5.4 (135.3) 楽園に衝突する比較的動かない中央空間領域と非瀰漫から瀰漫を分離する空間は、時間から永遠までの遷移圏であり、それゆえ楽園公民に至ろうとしているとき、この通過の間に楽園巡礼者が無意識になる必要がある。時間-意識の訪問者は、このようにして眠らないで楽園に行くことができるが、時間の創造物のままでいる。

12:5.5 (135.4) 時間との関係は、空間での動きなしには存在しないが、時間の意識は存在する。連続性は動きがないときにさえ時間を意識化できる。人の心は、心の本来の本質ゆえに時間への束縛であるよりも空間への束縛である。肉体での地球生活の時代にさえ、人の心は厳密には空間への束縛であるが、創造的人間の想像には、相対的に時間に束縛されていない。しかし、時間自体は、本質的には心の特性ではない。

12:5.6 (135.5) 異なる時間認識の3段階がある。

12:5.7 (135.6) 1. 心で知覚される時間—持続時間の系列、動き、および感覚の意識。

12:5.8 (135.7) 2. 精霊に知覚される時間—神へ向かう動きへの洞察と増加する神性段階への上昇運動の認識。

12:5.9 (135.8) 3. 人格は、現実に関する洞察と、加えて臨場の意識と持続時間の認識からの独特の時間の感覚を創る。

12:5.10 (135.9) 精霊的でない動物は、過去だけを知り、現在に生息する。精霊-内住の人間には、先見(洞察)の力がある。精霊-内住の人間は、未来を想像するかもしれない。前向きで進歩的な態度だけが人格的に現実である。静的倫理と伝統的な道徳は、わずかに超動物である。禁欲主義も上位の自己実現ではない。倫理と道徳は、活動的で進歩的であるとき、宇宙現実は生き生きとして真に人間らしくなる。

12:5.11 (135.10) 人間の人格は、単に時間-空間-事象と共に進まない。人間の人格はまた、そのような事象の宇宙原因として機能することができるのである。

6. 宇宙の総括的管理

12:6.1 (135.11) 宇宙は非静止である。安定性は、慣性の結果ではなく、むしろ均衡のとれたエネルギー、協力的な心、協調的なモロンチア、精霊の総括的管理、および人格統一の成果である。安定性は、完全に、そして常に神性に比例している。

12:6.2 (135.12) 主たる宇宙の物理的制御にの目的で、宇宙なる父は、楽園の小島を通して優先と首位を執行する。神は、永遠なる息子の人格における宇宙の精霊的行政に関し絶対である。父と息子は、心の領域に関し、連合活動者において協調的に機能する。

12:6.3 (136.1) 第三根源と中枢は、宇宙心のその把握の絶対性による、また、本来の普遍的な物理的、精霊的引力の補足物の行使による均衡維持において支援し、結合された物理的で精霊的なエネルギーと組織の調整を支援する。物質的なものと精霊的なものの間の連携が起こるときはいつでも、どこでも、そのような心の現象は、無限の精霊の行為である。心だけが、物理的根源力と物質段階に属するエネルギーを精霊段階の精霊的な力と存在体とを相互に交わらせることができる。

12:6.4 (135.14) 宇宙現象についての全熟考において、あなたは、物理的、知的、かつ精霊的なエネルギーの相互関係を考慮に入れるということ、当然の考慮が、人格によるそれらの統一に伴う予期されない現象のために、そして、経験的な神格と絶対者の動作と反応から生じる予測できない現象のためになされるということを確実にしなさい。

12:6.5 (135.15) 宇宙は、量に関するあるいは引力測定の意味においてのみ大いに予測可能である。第一の物理的根源力でさえ、線引力に反応しないし、究極の宇宙の現実のより高い心の意味と真の精霊の価値をもたない。質的に、宇宙は原始力の、また物質的、心的か、それとも精霊的な新しいつながりに関し十分に予測可能である。エネルギー、または根源力の重要な観察に従うとき、そのような多くの組み合わせは、部分的に予測できるようになる。物質、心、および精霊が、創造物の人格によって統一されるとき、我々は、そのような自由意志の存在体の決定を完全に予測できるというわけではない。

12:6.6 (135.16) 原初の根源力、初期の精霊、他の非人格の究極の全局面は、特定の比較的安定した、だが未知の法に従って反応するようであり、限局性の、孤立状況の現象に遭遇する際にしばしば混乱している遂行の自由裁量と反応の順応性により特徴づけられる。これらの発現する宇宙の現状によって明らかにされる反応のこの予測できない自由に関する説明は何であるのか。原初の根源力の１単位の働き、心の未確認段階の反応、または外空間の領域における製作中の広大な前宇宙の現象に属すか否かに関係なく、これらの未知の、不可解な予測できないことは、おそらく究極者の活動と宇宙の全創造者の機能に先行する絶対者の臨場-遂行を明らかにする。

12:6.7 (135.17) 我々は実際には知らないが、そのような驚くべき多様性とそのような意味深い連携が、絶対の臨場と遂行を指し示しすということ、そして、明らかに一貫した原因に直面の際のそのような対応の多様性が、即座の、状況的因果関係ばかりではなく、主たる宇宙全体の中の他のすべての関連する原因にも絶対者の反応を明らかにすると憶測する。

12:6.8 (135.18) 個人には、それぞれの将来の目標の保護者がいる。惑星、体系、星座、宇宙、および超宇宙にはそれぞれが、その領域の利益のために働くそれぞれの支配者がいる。ハヴォーナと、また壮大な宇宙でさえ、そのような重い責任が委ねられるもの達により監視されている。しかし、誰が、楽園から4番目の、そして、最外部の空間段階までを全体として主たる宇宙を育て、その基本的な必要物の面倒を見るのか。実存的にはそのような過度の懸念は、おそらく楽園三位一体に起因しているが、経験的観点からは、後ハヴォーナ宇宙の外観は次に依存している。

12:6.9 (135.19) 1. 可能性における絶対

12:6.10 (135.20) 2. 方向への究極者

12:6.11 (137.1) 3. 進化的調和における崇高者

12:6.12 (137.2) 4. 特定支配者の出現前の行政における主たる宇宙の建築者

12:6.13 (137.3) 非特性絶対はすべての空間を瀰漫させる。我々は、神格と宇宙の絶対者の正確な状態に関し完全に明ら

かであるというわけではないが、神格と非特性絶対がどこで機能しようとも、後者の機能を理解している。神格絶対は、普遍的に臨場するかもしれないが、ほとんど空間臨場をしていないかもしれない。究極者は、第4の空間段階の外周縁への空間臨場をする、あるいは、いつかそうするであろう。我々は、究極者が主たる宇宙の外周を超えて空間存在をもつであろうということは疑うが、この限界の中で、究極者は次第に3絶対者の可能性への創造的な組織を統合している。

7. 部分と全体

12:7.1 (137.4) すべての時間と空間にわたり、また宇宙摂理の機能に同等である変えられない、しかも非個人的である類の法が、全現実にも作用している。慈悲は、個人に対する神の愛の態度を特づける。公平さは、全体に向けての神の態度を動機づける。神の意志は、部分—いかなる1人格の心—に必ずしも行き渡るというわけではないが、神の意志は実際に全体を、宇宙の中の宇宙を統治する。

12:7.2 (137.5) 神が全存在体を扱うすべてにおいて、本来、神の法は、気まぐれでないということは、本当である。限られた想像力と限りある見解をもつあなたにとっては、神の行為は独裁的で恣意的であるとしばしば思えるはずである。神の法は、単に神の習慣、神なりの繰り返のやり方である。神はいつも上手に全てのことをする。あなたは、単に、それが与えられた状況でその特定のことをする最良の方法であるがゆえに、神が、繰り返し、同じことを同様にするのを観測する。最良の道は正しい道であり、したがって、無限の知恵はその正確で完全な方法でそれをするようにいつも命令する。あなたは、自然は、神格の排他的な行為ではないということもまた覚えているべきである。他の影響は、人間が自然と呼ぶそれらの現象に臨場している。

12:7.3 (137.6) いかなる類の劣化に耐えたり、または、劣った道において純粋にいかなる個人的行為の実行をつねに容認することは、神性にとってはいとわしい。しかしながら、もしいかなる局面の神性においても、いかなる状況の窮地においても、究極の知恵の進路が異なる行為の要求を示すかもしれないいかなる場合でも、—もし完全性

への要求が、何らかの理由で反応の別の方法を、すなわちより良いものを必要とするかもしれないならば、直ちにその場で、すべてに賢明な神が、より良く、より適切なその方法で機能するということが明らかにされるべきである。それは、低級の法の反転ではなく、より高い法の表現である。

12:7.4 (137.7) 神は、自身の自発的行為反復の慢性への習慣に拘束される奴隷ではない。無限者の法の中には何の不一致もない。それらはすべて、絶対確実な本質に属する完全な物である。それらはすべて、完璧な決定を表す疑いのない行為である。法は、無限の、そして、完全かつ神性の心の変らない反応である。この見かけの同一性にもかかわらず、神の行為はすべて意志である。神には、「可変性もなければ変化の影もない」。しかし、宇宙なる父について言うことができるこのすべてを宇宙なる父のすべての下位の有識者あるいは進化する創造物について等しい確実性をもって言うことはできない。

12:7.5 (137.8) 神は不変であるがゆえに、あなたは、すべての普通の情況において、同一かつ通常の方法での神の同じ

行為を頼みとすることができる。神は、すべての創造事象と存在体のための安定性確保である。彼は神である。それゆえ、変化しない。

12:7.6 (138.1) 行為のこの不変と動作の一様性のすべては、偉大な神が自身の完全性と無限への無力な奴隷でないがゆえに、人格的で、意識的で、非常に意志的である。神は自らの-行為の自動根源力ではない。神は卑屈な法-束縛の力ではない。神は数学の方程式でも化学式でもない。神は自由意志の、そして、第一の人格である。神は宇宙なる父であり、つまり人格で溢れるほどに満たされた存在体であり、すべての創造物の普遍の泉である。

12:7.7 (138.2) 神の意志は、神を探求する物質の必滅者の心に一様には行き渡らないが、時間枠が最初の人生全体を迎え入れる瞬間を越えて拡大されるならば、神の意志は、精霊に導かれた神の子らの人生において結ばれる精霊の果実の中でますます認識できるようになる。次に、人間の生命がモロンチア経験を盛り込むためにさらに拡大されるならば、人間の人格と宇宙なる父の人格との関係を経験している神性の喜びを味わい始めた時間の創造物の

精霊化行為において、ますます輝く神性の意志が観測される。

12:7.8 (138.3) 神の父の地位と人の兄弟の間柄は、人格の段階における部分と全体の矛盾を提示する。神は天の家族の個々の子として各個人を愛する。なおかつ、神は、こうして、それぞれの個人を愛している。神は人々を差別する方ではないし、神の愛の普遍性は、全体の関係を、宇宙の兄弟を生み出す。

12:7.9 (138.4) 父の愛は、宇宙なる父の他に類のない子供、無限における複製なしの子供、すべての永遠において意志をもつ置き換えられない創造物として、各人格を絶対的に個人化する。父の愛は、天の家族の一人一人を照らし、すべてものの父の友愛の回路外にある非個人的な段階に対し、それぞれの人格存在体の独特な本質をはっきりと浮かび上がらせて神の子の一人一人を賛美する。神の愛は、意志をもつ各創造物の超越的価値を際立たせて描く、すなわち、宇宙なる父が、時間と空間の何らかの進化世界における人類の夜明けの中の人間の未開部族の

中にいる品位ある意志の最も低い人格までの一人一人の子供に置いた高い価値を明らかにする。

12:7.10 (138.5) 個人への神の他ならぬこの愛が、神性家族、つまり楽園の父の自由意志の子の普遍的な兄弟を生む。そして、この兄弟が、つまり普遍的であることが、全体の関係というものである。兄弟は、普遍的であるとき、それぞれの関係ではなく、すべての関係を明らかにする。兄弟とは、全体の現実であり、したがって、部分の質に対照して全体の質を明らかにする。

12:7.11 (138.6) 兄弟は、普遍的生活におけるあらゆる人格との関係事実を構成する。何人も、他の人々との関係の結果として来るかもしれない利益、あるいは刑罰から逃がれることはできない。部分は、全体よりも幾分か利益を得たり、あるいはは苦しんだりする。それぞれの人間の良い努力はすべての人のためになる。それぞれの人間の誤り、あるいは悪は、すべての人の苦難を増大させる。部分が動くように、全体も動く。全体が進歩するように、部分も進歩する。部分と全体の相対的速度が、部分が全

体の慣性により遅らせるか、または宇宙の兄弟の勢いにより進展させるかどうかを決定する。

12:7.12 (139.1) 神が、居住本部をもつ非常に人格的自意識の強い存在体であり、同時にそのような広大な宇宙の中に人格的に臨場し、ほとんど無限の数のそのような存在体と人格的に接触するということは神秘である。そのような現象は人間の理解を超える神秘であるということが、あなたの信仰をいささかなりとも減じるべきではない。神の無限の大きさ、永遠の広大さ、無比の特徴の壮大さと栄光であなたを威圧させたり、または、動揺せたり、落胆させてはいけない。父はあなた方の誰からもそれほど遠くないところにいるのであるから。神はあなたの中に住まい、また我々は皆、神の中に、文字通り動き、実際に生き、本当に存在している。

12:7.13 (139.2) 楽園の父は、神性の創造者と非創造の子供を通して機能するが、あなたとの最も親密な内面的接触をよろこび、とても崇高で、とても非常に人格的でありがゆえに、私の理解が及ばないほどである。—人間の魂との、そして、その実際の内住する人間の心との父の断片

のその神秘的親交。あなたは、神のこれらの贈り物について自分がすることを知っているので、父が神性の仲間だけではなく、時間の進化する人間の子供との親密な接触にいるということもまた知っている。父は本当に楽園に住むが、神々しい臨場もまた人の心に住んでいる。

12:7.14 (139.3) 父は確かに楽園に留まりはするが、その神性臨場もまた人間の心の中に住んでいる。息子の精霊が、すべての人間に注がれてはいるにしても、息子が、かつて人間の姿で貴方と共に生きていたとしても、熾天使が、あなたを守り導くとしても、第二と第三根源の中枢のこれらの神性存在体の誰とても、あなたを本物かつ神性である自己に、永遠でさえある自己にするためにあなたの中に自分の一部を与えた父と同じほどにあなたに完全に近づいたり、理解することをほんとうに望むことができようか。

8. 事象、心、精霊

12:8.1 (139.4) 「神は精霊である」が、楽園はそうではない。物質的宇宙は、つねにそこですべての精霊的活動が営まれ

る活躍の舞台である。精霊存在体と精霊上昇者は、物質的現実の物理的球体に生きて働く。

12:8.2 (139.5) 宇宙根源力の贈与は、宇宙引力の領域は、楽園の小島の機能である。最初の全原始力-エネルギーは、楽園に始まり、明かされてはいない宇宙の形成のための物質は、現在、瀰漫された空間の根源力-補填を構成する超引力臨場の型の中にある主たる宇宙全体を循環する。

12:8.3 (139.6) 遠隔宇宙における根源力の変容が何であろうとも、それは、永遠の小島の終わることのない、遍在の、絶えることない牽引力の影響下に旅を続け、従順に、本来的に宇宙の永遠の空間軌道の周りを永久に揺れ続けている。物理エネルギーは、普遍的な法に対してのその服従において真実かつ不変な一現実である。創造物の意志の領域にのみ神性の道と最初の計画からの逸脱があった。力とエネルギーは、楽園の中央の小島の安定性、不変性、永遠性の宇宙の証拠である。

12:8.4 (139.7) 精霊の贈与と人格の精霊化は、精霊引力の領域は、永遠なる息子の領域である。全精霊的現実をつねに

自分に引きつけている息子のこの精霊引力は、楽園の小島の全能の物質的把握とまったく同様に本当であり、絶対である。しかし、物質志向の人間は、魂の精霊的洞察だけで明察される精霊的本質の等しく真実であり強力である操作よりも物理的本質の物質顕現に当然ながらより慣れ親しんでいる。

12:8.5 (140.1) 宇宙のいかなる人格の心がいっそう精霊的に—神のように—なるにつれ、それは物質的引力にあまり反応的でなくなる。物理的-引力反応により測定される現実は、精霊内容の質により決定される現実の正反対である。物理的-引力の働きは、非精霊エネルギーの量的決定者である。精霊的-引力の働きは、神性の生きたエネルギーの質的基準である。

12:8.6 (140.2) 身体創造にとっての楽園が、そして、精霊的宇宙にとっての永遠なる息子が、心の領域—物質の、モロンチアの、そして精霊の、存在体と人格の知的な宇宙--にとっての連合活動者である。

12:8.7 (140.3) 連合活動者は、物質的現実と精霊的現実の双方に反応し、したがって、本質的に、すべての知的な存在

体、創造の有形無形双方の局面の統一を代表するかもしれない存在体にとっての普遍的聖職活動者になる。知力の賦与、心の現象における物質的なものと精霊的なものへの活動は、連合活動者の専属領域である。連合活動者は、こうして精霊的な心の連携者、モロンチアの心の本質、時間の進化的創造物の物質的な心の本質になる。

12:8.8 (140.4) 心は、創造物人格にとり精霊現実が経験になる手法である。帰するところ、人間ですらの心の統一の可能性、すなわち、物、思考、価値を調整する能力は、超物質である。

12:8.9 (140.5) 人間の心にとり、7段階の相対的宇宙現実を理解することはほとんど不可能であるが、人間の知力は、有限現実の3機能段階の意味の多くを理解できるはずである。

12:8.10 (140.6) 1. 物質。動きにより変更され、心により条件づけられていることを除いては、線引力の影響下にある組織化されたエネルギー。

12:8.11 (140.7) 2. 心。物質的引力をまったく受けることがなく、また精霊により変更されると寸部たがわず解放されるようになる組織化された意識。

12:8.12 (140.8) 3. 精霊。最高の人格的現実。真の精霊は、物理的引力に支配されはしないが、いずれは、人格尊厳のすべての発展的エネルギー体系を動機づけの影響を与える。

12:8.13 (140.9) すべての人格の生活目標は、精霊である。物質的顕現は相対的であり、宇宙心は、これらの普遍的な反対物の間に入ってくる。心の贈与と精霊の援助は、神格の仲間の人格の、つまり無限の精霊と永遠なる息子の仕事である。総神格の現実は、心ではなく、人格により統一される精霊-心—心-精霊である。それにもかかわらず、精霊的領域と物質的領域双方の絶対的なものは、宇宙なる父の人格に収束する。

12:8.14 (140.10) 物理的、心的、精霊的3エネルギーは、楽園において調和している。精霊が、心の仲介を経て、支配を求めて努力している人格の中を除いては、進化宇宙においてエネルギー-物質は、優位である。精霊は、神が精

霊であるので、すべての創造物の人格経験の基本的現実である。精霊は不変であり、そのために、すべての人格関係において、それは心と物質の両方を超える。心と物質は進歩的到達の経験上の変化するものである。

12:8.15 (140.11) 宇宙発展における物質は、神性啓発の精霊光輝の臨場における心の哲学的な影になるが、これは物質-エネルギーの現実を無効にはしない。心、物質、精霊は、どちらも本物であるが、それらは、神性到達における人格には等しい価値はない。神性への意識は、進歩的な精霊経験である。

12:8.16 (141.1) 精霊化された人格(宇宙の中の父、個々の創造物の中の精霊の潜在的人格の断片)の輝きが明るければ明るいほど、その物質的投資への介入する心により投げかけられる影はますます大きい。時間の世界においては、人の肉体は、心あるいは精霊とまったく同様に本物であるが、死においては、心(同一性)と精霊の両方は生き残るが、肉体は生き残らない。宇宙の現実は、人格経験においては実在しない場合がある。したがって、あなたの

ギリシア的表現—より現実的な精霊の実体の影としての物質—には、哲学的な意味がある。

9. 人格の現実

12:9.1 (141.2) 精霊は、宇宙における人格の基本的現実であり、人格は、精霊的現実との全進捗経験の基本である。宇宙前進のあらゆる連続段階上の人格経験の全局面には、人格の現実を魅惑する発見の手がかりが溢れている。人の本当の目標は、新の、また精霊的目標の創造にあり、次いで非物質価値のそのような崇高的目標からくる宇宙誘惑への応答にある。

12:9.2 (141.3) 愛は、人格間の有益なつながりの秘訣である。あなたは、一度の接触から人を本当に知ることはできない。音楽は数学的リズムの型ではあるが、あなたは数学的演繹法で音楽を鑑賞的に知ることはできない。電話加入者に割り当てられる番号は、いかなる方法でも加入者の人格を識別したり、その加入者の性格に関する何も表しはしない。

12:9.3 (141.4) 数学は、物質科学は、宇宙の物質局面の知的な議論に不可欠であるが、そのような知識は必ずしも真実

の、　より高い実現、もしくは精霊的現実の人格的評価の一部であるというわけではない。生命の領域だけではなく、物理エネルギーの世界においてさえ、つ以上の合計物は、しばしば、そのような結合の予測可能な付加的結果以上の何かである。数学の科学全体、哲学の全領域、最高の物理学または化学は、個のガス状酸素原子との個のガス状水素原子の結合が、新たな質的に超添加物質—液体水—をもたらすであろうということを予測できなかったし、知り得なかった。この生理化学現象に関し理解する知識は、唯物論的哲学と機械学的宇宙の開発を防ぐべきであった。

12:9.4 (141.5) 技術的分析は、人、あるいは物ができ得ることを明らかにはしない。例えば、水は、消火に有効に用いられる。水が火を消すのは、日常体験の事実であるが、水のいかなる分析もそのような性質を明らかにするすることができない。分析は、水が水素と酸素で構成されるということを究明する。これらの要素に関する一層の研究は、酸素が燃焼の真の担い手であり、水素はそれ自体が、自在に燃えるということを明らかにする。

12:9.5 (141.6) あなたの宗教は、恐怖への奴隷状態と迷信の束縛から生じているので現実となるのである。あなたの哲学は、教義と伝統から解放を得ようと苦心する。あなたの科学は、抽象化への束縛、数学への奴隷状態、および機械学的唯物論への部分的盲目からの救出のために戦うとともに、真実と誤りの間の長年の争いを繰り広げている。

12:9.6 (142.1) 人間には、精霊の核がある。心は、神性精霊の核周辺に存在する物質的環境で機能する人格エネルギー体系である。人格的な心と精霊とのそのような生きた関係は、永遠の人格の宇宙の可能性を構成する。自己概念が、中心的精霊の核の支配的な力を完全に置換し、その結果、人格同一性の宇宙計画を混乱させると、その後に深刻な問題、持続する失望、重大な敗北、または不可避の死に道を開くことになる。

12:9.7 (142.2) [日の老いたるものの権威で行動する英知の遂行者による提示]

論文 13
楽園の神聖な球体

13:0.1 (143.1) 楽園の中央の小島とハヴォーナの惑星の最深部の回路間には、特別な球体のより小さい3個の回路が位置している。一番内側の回路は宇宙なる父の秘密の７球体から成る。第二集団は永遠なる息子の7個の発光世界で構成される。最外部には、無限の精霊の7個の巨大な球体、主たる7精霊の行政本部の世界がある。

13:0.2 (143.2) 父、息子、精霊のこれら3個の7世界回路は、比類なき壮大さと想像もつかない光輝の球体である。それらの物質的または物理的な構造すらもあなたには明らかにされていない系列のものである。それぞれの回路は物質の点においてはさまざまであり、息子の物理的組成の点において似通う7世界を除いては、回路はそれぞれに異なっている。21個すべてが、巨大な球体であり、7集団のそれぞれが異なって永遠化される。我々が知る限り、それらは常にあった。楽園のように、それらは永遠である。それらの起源に関する記録も言い伝えも存在していない。

13:0.3 (143.3) 永遠の小島に近接し、楽園の周囲を循環する宇宙なる父の秘密の７球体は、永遠の神格の中央で輝く精

霊的光輝を高度に反射しており、神々しい栄光のこの光を楽園中に、ハヴォーナの7個の回路にさえ発散している。

13:0.4 (143.4) 精霊光輝の非人格エネルギーは、永遠なる息子の神聖な7世界に起源をもつようである。どんな人格的存在体もこれら輝く7領域のいずれにも滞在してはいけない。輝く7領域は、精霊的栄光で全楽園とハヴォーナを照らし、精霊の純粋な栄光を7超宇宙へと送る。2番目の回路のこれらの光輝く球体は、同様に、楽園と回路化された7中央宇宙の10億の世界へとそれらの光(熱のない光)を放つ。

13:0.5 (143.5) 無限の精霊の7世界には、7超宇宙の将来の目標を統括し、時間と空間のこれらの創造へと神格の第三人格の精霊的照射をする主たる7精霊がいる。そして、楽園の小島ではなく、全ハヴォーナが、これらの精霊化の影響を浴している。

13:0.6 (143.6) 父の世界は、父-被賦与人格すべてのために究極状態にあるものの、これがその唯一の機能ではない。人格的存在体と実体を除く多くの存在体と実体は、これら

の世界に滞在する。父の回路と精霊の回路の各世界には、異なる型の永久公民がいるが、我々は、息子の世界には人格存在体以外のある一定の型が生息していると考える。父の断片はディヴィニントン出身者の中にある。永久公民の他の系列は、あなたには非啓示である。

13:0.7 (143.7) これらの報告では明らかにされていない楽園の21個の衛星は、中央宇宙と超宇宙の両所において多くの目的を果たす。あなたは、これらの球体の生命についてほんの少ししか理解できないのであるから、自然に関する、または機能に関する一貫した視点らしきものは望めない。あなたに非啓示の何千もの活動が進行し続けている。これらの21個の球体が、主な宇宙の機能の可能性を包括している。これらの報告は、壮大な宇宙の—むしろ壮大な宇宙の7区分の一つの—現在の宇宙時代に関係するある限られた活動のつかの間の片鱗を提供するに過ぎない。

1. 父の7個の神聖な世界

13:1.1 (144.1) 父の神聖な生命球体の回路は、宇宙の中の宇宙における人格に固有の唯一の秘密をもつ。楽園のこれら

の衛星は、3個の回路の最深部は、中央宇宙の人格に関する唯一の禁制領域である。下方楽園と息子の世界は、同様に人格には閉ざされているが、それらのいずれの領域も何らかの方法で直接人格には関係しない。

13:1.2 (144.2) 父の楽園の世界は、三位一体の定置の息子の最高の系列、すなわち崇高性の三位一体化の秘密により指揮されている。これらの世界について、私にはほとんど言うことができない。それらの種**々様々**の活動について、私はあまり言うことを許されていないのである。そのような情報は、そこで機能し、またそこから先へ進むそれらの存在体だけに関係がある。そして、私はこれらの特別な6個の世界にいくらか馴染みはあるものの、ディヴィニントンに一度も到着したことはない。その世界は私には完全に禁じられている。

13:1.3 (144.3) これらの世界に関する秘密の理由の1つは、これらの神聖な球体のそれぞれが、楽園の三位一体を構成する神格の専門化された代理、または顕現を味わうからである。人格ではなく、その特定の球体に居住する、またはそこに受け入れられる知力あるそれらの特定集団にの

み感謝され理解され得る神格の独自の臨場。崇高性の三位一体化の秘密は、神格の分化された、また非人格的なこれらの臨場のための人格媒体である。また、崇高性の秘密は、尊くかつ厄介な仕事を壮麗に授かり、しかも驚くほどに適合している高度に人格的な存在体である。

13:1.4 (144.4) 1. ディヴィニントン。独自の意味において、この世界は、「父の胸」、宇宙なる父の人格-親交球体であり、そこには父の神性の特別な顕現がある。ディヴィニントンは、思考調整者の楽園の集合場所であるが、それは、多数の他の実体、人格、それに宇宙なる父に起源を取る他の存在体の本拠地である。永遠なる息子のほかに多くの人格は、宇宙なる父の孤立の行為による直接起源のものである。宇宙なる父の断片とそれらの人格、および直接的かつ唯一の起源の他の存在体だけが、この住まいで親しく交わり、機能する。

13:1.5 (144.5) ディヴィニントンの秘密は、思考調整者の贈与と任務の秘密を含んでいる。その本質、起源、および進化世界の下級生物とのそれらの接触手段は、この楽園球体の秘密である。驚くべきこれらの相互作用は、残る

我々には人格的には関係がなく、したがって、神格は、我々の完全な理解からはこのすばらしく、神性である活動のある種の特徴を差し控えるのが適切であると判断する。我々が神性活動のこの局面に接触する限りにおいて、これらの取り扱いに関する完全な知識が我々には許されているものの、この偉大な贈与の詳細については完全に知らされるというわけではない。

13:1.6 (145.1) この球体はまた、他のすべての型の父の断片、重力の使者、あなたには明かされていない他の存在体部隊のもつ本質、目的、活動に関わる秘密を保持する。私には知らされていないディヴィニントンに属するそれらの真実が、もし私に明らかにされようなこよがあれば、現在の私の仕事において私をただ単に混乱し、妨げることになるであろうし、さらには私の存在体の系列に関する概念上の能力を恐らく超えることになるであろう。

13:1.7 (145.2) 2. ソナリントン。この球体は「息子のふところ」、永遠なる息子の個人的な受け入れの世界である。それは、上昇し下降する神の息子が完全に信任され、最終的に承認されるときの、またその後のかれらの楽園本

部である。この世界は、永遠なる息子の、その等位の、かつ仲間の息子のすべての息子たちにとっての楽園の家である。宇宙経由楽園への人間の精霊的前進の上昇計画には関係がないので人間には明らかにされていないこの崇高な住まいに属する神性の息子の数多くの系列がある。

13:1.8 (145.3) ソナリントンの秘密は、神性の息子の肉体化の秘密を包含する。1,900年前にあなたの世界に起きたように、神の息子が人の息子になるのは、つまり文字通り女性から生まれるのは、それは、宇宙の神秘である。それは絶えず宇宙の中で起きており、神性の息子に関わるソナリントンの秘密である。調整者は父なる神の神秘である。神性の息子の肉体化は息子なる神の神秘である。それは、この独自の経験をした者達を除いては誰にも侵入されない領域であるソナリントンの7区分目に封じ込められた秘密である。あなたの上昇経歴と関係があるそれらの肉体化の局面だけがあなたには知らされてきた。あなたには明かされていない宇宙奉仕の任務にある非啓示の型に属する楽園の息子の肉体化の謎には他の多くの

局面がある。そして、さらにソナリントンの他の神秘がある。

13:1.9 (145.4) 3. スプリントン。この世界は「精霊のふところ」、つまり独占的に無限の精霊を表す高位の存在体の楽園の家である。主たる7精霊とすべての宇宙からのその子孫の一部がここに集まる。永遠性の楽園水準に至る時間の創造物を向上させる計画に関連のない宇宙のさまざまな活動に割り当てられた非啓示の精霊の人格の系列の数多くがこの天の住まいにもまた見られるかもしれない。

13:1.10 (145.5) スプリントンの秘密は、奥深い反射の神秘を伴う。我々は、さらに詳しく、それが7超宇宙の本部世界で作用しているように、広大かつ普遍的反射の現象についてあなたに告げるのであるが、我々は、完全にそれを理解するというわけではないので、この現象について決して完全に説明するわけではない。我々は、実に、実に多く理解はしているが、多くの基本的詳細については謎のままでいる。反射は、精霊なる神の秘密である。あなたは、人間生存の上昇の枠組みと関連する反射機能につ

いて指導を受けてきており、またそのように機能するのであるが、反射は宇宙業務の他の多数の局面の通常運用にある不可欠の特徴でもある。無限の精霊のこの賦与は、情報収集と情報流布以外の回路で利用される。それに加えてスプリントンに関する他の秘密がある。

13:1.11 (145.6) 4. ヴァイスジェリントン。この惑星は、「父と息子のふところ」であり、父と息子の行為による起源を取るある非啓示の存在体の秘密球体である。これは、7超宇宙において作用する異なる多くの手段のためにその起源が複雑である複合先祖をもつ数多くの栄光的存在体の楽園の家でもある。ユランチアの必滅する者にはその正体が明らかにされていない多くの存在体の集団が、この世界に集まる。

13:1.12 (146.1) ヴァイスジェリントンの秘密は、三位一体化の秘密を含み、三位一体化は、三位一体を代表する、すなわち神の代理人として機能する権威の秘密を構成する。三位一体を代理をする権威は、楽園の三位一体化のうちの2者、または3者全員により三位一体化され、創造され、結果的に生じた、または永遠化された啓示、非啓示

のそれらの存在体にのみに帰属する。その種類のすべてのものが自由に受けられる神格抱擁の道をそのような創造物が昇るかもしれないとはいえ、栄光の創造物のある種の型の三位一体化の活動により生み出される人格は、その三位一体化に動員される概念的な可能性しか表わさない。

13:1.13 (146.2) 三位一体化されない存在体は、2者あるいは3者の創造者よる、または、ある創造物による三位一体化の手段を完全に理解するわけではない。ヴァイスジェリントンのこれらの秘密はいつもあなたに禁じられているので、あなたが、はるかかなたの栄光の経歴の未来においてそのような冒険を試み引き継がない限り決してそのような現象を完全に理解はしないであろう。しかし、三位一体起源の高い存在体である私にとっては、ヴァイスジェリントンの全区分は開かれている。私は、私の起源と将来の目標の秘密を完全に理解しており、同様に、完全に、そして神聖に保護している。

13:1.14 (146.3) ユランチア人には知らされていない三位一体化の他の型と局面がまだあり、これらの経験は、それらの

人格的局面において、ヴァイスジェリントンの秘密の区分で正規に保護されている。

13:1.15 (146.4) 5. ソリタリントン。この世界は、「父と精霊のふところ」であり、宇宙なる父と無限の精霊の連合行為における起源の非啓示の存在体、つまり、それらの精霊継承に加えた父の特徴を帯びる存在体からなる見事な部隊の出会いの場所である。

13:1.16 (146.5) これは、単独の使者と超天使の他の人格の家でもある。あなたはこれらの存在体についてあまり知らない。ユランチアには非啓示のおびただしい数の系列がある。それらが第5世界に住所を定めているので、父は、必ずしも単独の使者またはその超天使の仲間の創造に何か関係があったというわけではないが、この宇宙時代には実にそれらの機能と関係しているのである。現在の宇宙時代に、これは、また宇宙の力の監督者の階級球体なのでもある。

13:1.17 (146.6) 必滅の人間には未知の存在体であるが、ソリタリントンを楽園の自身の球体として見る精霊人格の数々の追加系列がある。宇宙活動の全区分と全段階は、楽園

の神性の将来の目標への人間上昇の援助に関する領域と同じように精霊活動者に完全に提供されるということが記憶されるべきである。

13:1.18 (146.7) ソリタリントンの秘密。三位一体化のある種の秘密以外に、この世界は第三中枢と根源の一部のより高度の子孫との無限の精霊の人格的関係の秘密を保持する。ソリタリントンには、父の、息子の、そして精霊者の精霊との、また三位一体の三重の精霊との、および崇高者、究極者、崇高者-究極者との非顕示の多数の系列の親密な関係の謎がある。

13:1.19 (146.8) 6. セラフィントン。この球体は、「息子と精霊のふところ」であり、息子と精霊により創造された非啓示の存在体の広大な部隊の故郷たる世界である。これは、超熾天使、第二熾天使、および熾天使を含む天使部隊のすべての活動系列の目標球体でもある。また中央の、そして、中心から遠く離れた宇宙においては、「救済を受け継ぐべき者達へ奉仕する精霊」ではない多くのずば抜けた精霊の系列が仕えている。宇宙活動のすべて

の段階と領域におけるこれらの全精霊労働者は、セラフィントンを楽園の故郷とみなしている。

13:1.20 (147.1) セラフィントンの秘密は、三重の謎、唯一私が言及できるもの—熾天使の輸送の謎—にかかわる。熾天使と提携関係にある精霊存在体の様々な系列が、それぞれの精霊の型の中に非物質の人格の全系列を包み込む能力、そして、惑星間の長い旅にそれらの人格を運び去る能力は、セラフィントンの神聖な区分に閉じ込められた神秘である。輸送熾天使はこの神秘を理解するが、それを我々の他の者達に伝えないし、あるいは恐らくは伝えることができない。セラフィントンの他の神秘は、いまだ人間には明らかにされていない精霊奉仕者の型の人格的経験に属する。そして、我々は、あなたがそのような生存物の近い系列をほぼ理解することができるので、そのような密接に関係づけられた存在体の秘密について議論するのを控える。そして、そのような現象に関する我々の部分的な知識さえ提示することは、信用の裏切りに等しいであろう。

13:1.21 (147.2) 7. アセンディントン。この特異な世界は「父、息子、精霊のふところ」、つまり、空間の上昇する創造物の出会いの場所、楽園への途中にハヴォーナ宇宙を通り抜けて行く時間の巡礼者の受容球体である。アセンディントンは、時間と空間の上昇する魂が楽園状態に達するまでの実際の楽園の家である。あなた方人間は、自分のハヴォーナ「休暇」の大部分をアセンディントンで過ごすであろう。アセンディントンとは、地方と超宇宙の上昇中に逆戻りの監督が果たしたものが、ハヴォーナ生活の間のあなたに果たすものであろう。ここで、あなたは人間の想像力の把握を超える何千もの活動に従事するであろう。そして、神へ向かう上昇以前のあらゆる進歩のように、人間であるあなた自身は、ここであなたの神性の自己との新しい関係に入っていくのである。

13:1.22 (147.3) アセンディントンの秘密は、性格と自己同一性に精霊的かつ潜在的に不滅の相当物を物質的かつ必滅の心の中にゆるやかで確実な構築をする神秘を含む。この現象は、宇宙の最も理解し難い神秘の1つを成す—必滅かつ物質的な創造物の心の中の不滅の魂の発展。

13:1.23 (147.4) あなたは、この神秘的な展開をアセンディントンに達するまでは決して完全には理解しないであろう。そして、それこそが、不思議そうなあなたの凝視にアセンディントのすべてのが開かれる理由にほかならない。1/7のアセンディントンが私には禁じられている—あなたの存在の型の独自の経験と所有である、(または、所有であろう)まさしくこの秘密に関わるその領域。この経験は、人間であるあなたの存在系列に属する。人格に関する私の系列は、直接そのような執行には関係しない。したがって、それは私には禁じられており、あなたにはやがて明らかされる。しかし、あなたに明らかにされた後でさえ、それは、何らかの理由で永遠にあなたの秘密としてある。あなたは、我々に、そして他のいかなる存在の系列にもそれを明らかにはしない。我々は、神性調整者と人間が起源である不滅の魂との永遠の融合に関して知っているが、上昇する終局者は、まさしくこの経験を絶対現実のものとして知っている。

2. 父-世界の関係

13:2.1 (147.5) さまざまの精霊的存在体の系列のこれらのふるさとの世界は、巨大かつ驚異的球体であり、その優れた

美とみごとな栄光において楽園に等しい。それらは、宇宙の定住所としての役目を果たす集合場所の世界、すなわち再会場所の球体である。終局者としてのあなたは、楽園に住所を定めるが、アセンディントンは、あなたが外空間での奉仕に入るときでさえいつもあなたの自宅になるであろう。あなたは、全永遠を通じアセンディントンを感傷的な思い出と彷彿させる回想の我が家と見なすであろう。あなたが、第7段階の精霊的存在体になると、あなたはことによると楽園での自らの在留身分をあきらめるであろう。

13:2.2 (148.1) もし外側の宇宙が製作中であるならば、もし上昇の可能性をもつ時間の創造物が外側の宇宙に居住するならば、我々は、未来のこれらの子供らもまたアセンディントンを楽園の自分達の家のある世界と見なす運命にあると察する。

13:2.3 (148.2) アセンディントンは、楽園到着者としてのあなたの点検に無条件に開かれるであろう唯一神聖な球体である。ヴァイスジェリントンは、私の精査に完全に無条件に開かれている唯一神聖な球体である。その秘密は、

私の起源に、そしてこの宇宙時代に関係があるのだが、私は、ヴァイスジェリントンを我が家とは見なさない。三位一体起源の存在体と三位一体化の存在体は同じではないのである。

13:2.4 (148.3) 三位一体起源の存在体は、父の世界を完全に共有するというわけではない。三位一体起源の存在体には、楽園の小島においていと聖なる球体に隣接する自分達の唯一の家がある。彼らは、アセンディントン、すなわち「父-息子-精霊のふところ」にしばしば現れ、そこで低い空間世界から来た自分達の同胞と親しく交わる。

13:2.5 (148.4) あなたは、創造者たる息子が父-息子起源であることから、ヴァイスジェリントンをそれらの家と見なしているであろうと考えるかもしれないが、この宇宙時代の七重の神の機能の場合はそうではない。というのも、楽園のごく近くにあるこれらの事柄に対し理解をしようとすとき、あなたは、確実に多くの困難に遭遇し、同様の多くの当惑させられる問題がある。あなたには、これらの質問を首尾よく解決することができない。あなたはほとんど知らない。あなたが、父の世界についてより知

っているとしても、それらに関し全てを知るまでには、あなたは、より多くの困難に遭遇するだけであろう。これらの秘密世界のどれかの地位が、起源の本質により得られるのは勿論、奉仕によっても得られし、また連続する宇宙時代が、これらの一部の人格集団の再配分をするかもしれない。

13:2.6 (148.5) 内部回路の世界は、実際の居住球体であるというよりも、実は友愛の、あるいは地位の世界である。人間は、1つを除いては父の世界のそれぞれにおいて何らかの身分に達するであろう。例えば：あなた方人間は、ハヴォーナに達するとアセンディントンへの許可が与えられ、そこではとても歓迎されるのであるが、神聖な他の6個の世界への訪問は許可されない。楽園訓練の終了後と終局者部隊への入隊後、あなたは上昇者であることはもちろんのこと神の息子でもある—それ以上でさえある—のでソナリントンへの許可が与えられる。しかし、神性の息子の肉体化の秘密の領域であるソナリントンの1/7は常に留まっており、あなたにとって精査は自由にはならないであろう。それらの秘密は神の上昇の息子には決して明らかにされないであろう。

13:2.7 (148.6) あなたは、最後にはアセンディントンへの完全な許可とディヴィニントンを除く父の他の球体への限定的な許可を得るであろう。しかし、あなたが終局者になった後さらに5個の秘密の球体への着陸許可が与えられるときにさえ、そのような世界の全領域の訪問が許されるわけではない。また、あなたは繰り返し「父の右手」に確実に立つであろうが、ディヴィニントンの岸、すなわち「父のふところ」に着陸することは許可されないであろう。思考調整者の世界におけるあなたの臨場の必要性は、全永遠を通し決して起こらないであろう。

13:2.8 (149.1) 精霊の生命のためのこれらの待ち合わせの世界は、完全に我々の経験の領域外にあるこれらの球体の各段階への入場交渉に応じないようにと我々に求められるまでに禁じられた場所である。あなたは、宇宙なる父が神格として完全であるように創造物として完全になれるが、宇宙人格に関する他の全系列の経験的な秘密のすべてを知ることはできない。創造者が創造物との人格の経験上の秘密をもつとき、創造者は永遠にその秘密を守る。

13:2.9 (149.2) すべてのこれらの秘密は、おそらく崇高性の三位一体化の秘密の集合体に知られている。これらの存在体は、それらの特別な世界集団にだけ完全に知られている。それらは他の系列にはほとんど理解されていない。楽園到達後、あなたは、アセンディントンを導く10名の崇高性の秘密を知り、熱愛するようになるであろう。アセンディントンほどには完全ではないが、あなたは、ディヴィニントンを除く父の他の世界における崇高性の10名の秘密の部分的な理解にも至るであろう。

13:2.10 (149.3) 崇高性の三位一体化の秘密は、その名前が示唆しているように崇高者と関係がある。それらは、同様に究極者と未来の崇高者-究極者に関係づけられている。崇高性のこれらの秘密は、崇高者の秘密であり究極者の秘密でもあり、崇高者-究極者の秘密でさえある。

3. 永遠なる息子の神聖な世界

13:3.1 (149.4) 永遠なる息子の7個の発光球体は、純粋-精霊の生命の7つの局面の世界である。これらの輝く天体は、楽園とハヴォーナの三重光の源であり、その影響力は、

完全にではないが、中央の宇宙に大部分が閉じ込められている。

13:3.2 (149.5) 人格は、これらの楽園の衛星には存在していない。したがって、これらの純粋-精霊の住まいに関して必滅かつ物質的な人格に提示できるものはあまりない。これらの世界は、永遠なる息子の存在体の非人格の生命に満ちあふれるということを我々は教わる。これらの実体が外宇宙の映し出された新恒星の活動のために組み立てられていると我々は察する。各楽園周期(およそ20億年のユランチア時間)が、永遠なる息子の秘密の世界におけるこれらの系列のさらなる予備軍の創造がみられると、楽園の哲学者は主張する。

13:3.3 (149.6) 私が知る限り、永遠なる息子のどの球体にも人格はいたことがない。私は、楽園出入りの長い経験全体においてこれらの世界へ一度も選任されたことがない。永遠なる息子により共同で創造された人格でさえこれらの世界には行かない。我々は、非人格の精霊のすべての型—起源にはかかわらず—は、これらの精霊の家に許されると察する。私は、人格であり、また精霊の型をも

つが故に、それへの訪問を許可されたとしても、おそらく、そのような世界は私には空で、しかも寂びれたものであろう。精霊の高位の人格は、無意味な好奇心、まったく役に立たない冒険を満足させる傾向にはない。実りのない、あるいは現実性のない課題への関心を起こさせるには、好奇心をそそり意味のある冒険がありすぎる。

4. 無限の精霊の世界

13:4.1 (149.7) ハヴォーナの内回路と永遠なる息子の輝く球体の間には、無限の精霊の7天体、すなわち、無限の精霊の子孫と栄光を受けて創造された人格の三位一体化の息子と、それと宇宙活動の様々な分野の多くの事業の能力ある運営陣に関係する他の型の非啓示の存在体とが住む世界が旋回している。

13:4.2 (150.1) 主たる7精霊は、無限の精霊の最高かつ究極の代表者である。主たる7精霊は、楽園周辺に自分達の個人的本部を、つまり力の集中点を維持するものの、壮大な宇宙の管理と方向に関する全業務は、無限の精霊のこれら7個の特別な行政球体において、または、そこから行われる。主たる7精霊は、実際には、宇宙の中の宇宙の

心-精霊の平衡輪、すなわち、中央に位置するすべてを抱擁し、すべてを取り囲み、すべてを調整している力である。

13:4.3 (150.2) 主たる精霊は、これらの特別な7球体から壮大な宇宙にある宇宙-心の回路を均等化し安定させるために働く。主たる精霊は、壮大な宇宙の至るところでの神格の異なる精霊的態度と臨場にもまた関係がある。物理的反応は一定で、不変で、つねに瞬時に起こり、しかも自動である。しかし、経験的で精霊的な臨場は、領域の個人の心のなかの精霊的感受性の内的状況、あるいは状態に従っている。

13:4.4 (150.3) 物理的権威、臨場、および機能は、大小にかかわらず全宇宙において不変である。精霊的臨場、または反応における異なる要素は、意志を持つ創造物によるその認識と受容における変動的な差である。とはいえ、絶対的かつ実存的な神格の精霊的臨にまったく影響されることなく、同時に、准絶対的かつ経験的な神格の機能は、そのような有限の被創造物の決定、選択、意志-態度により、—個人、惑星、体制、星座、または宇宙の忠

誠と献身により—確かに、じかに影響を受ける。しかし、神性のこの精霊的臨場は風変わりでも奇妙でもない。その経験的差異は、人格的創造物の自由意志の賦与に本来備わっているのである。

13:4.5 (150.4) 精霊的臨場差異の決定者は、あなた自身の情愛と心に存在しており、あなた自身の選択方法、あなたの心の決定、およびあなた自身の意志の決断にある。この差異は、宇宙なる父が指名した存在体が、この選択の自由を実行するであろう知的人格の存在体の自由意志の反応に固有である。そして、神格はつねに創造物の選択のこの差異ある条件と要求に応え、また満たすことにおいて精霊の浮き沈みに忠実である。つまり、神格は、時には臨場への心からの願望に対応して一層の臨場を与え、また時には、創造物が神々しく与えられた選択の自らの自由の行使において逆行して決めるような場面から引き下がることにおいても忠実である。その結果、神性の精霊は、領域の創造物の選択に謙虚に従順になるのである。

13:4.6 (150.5) 主たる7精霊の執行部の住まいは、実際には7超宇宙と外宇宙の関連区分の楽園本部にある。主たる精霊各自が1超宇宙を取り仕切り、これらの7世界のそれぞれは単独に主たる１精霊に割り当てられる。文字通り、7超宇宙の准楽園行政の全局面にあるものはこれらの行政世界に備えられているのである。父の球体あるいは息子の球体のようには除外的ではなく、在留身分は出身者とそこに働く者たちに制限され、これらの７個の行政惑星は、そこへの訪問を望み、通過の必要手段を命令できるすべての者たちにいつも開かれているのである。

13:4.7 (151.1) これらの行政世界は、私にとり楽園の外にある最も興味を起こさせ好奇心をそそられる場所である。広い宇宙の他のいかなる場所においても、とても多くの異なる生きものの系列にかかわり、とても多くの異なる段階における操作、つまり物質的であると同時に、知的、精霊的でもある職業に関係するそのような多様な活動を観測することはできない。私が任務から一定期間開放されるとき、楽園、または、ハヴォーナにたまたま居合わせていたならば、私は、そこでそのような活動、献身、忠誠、知恵、および効率の有様で私の心を奮い立たせる

ためにいつも主たる7精霊のこれらの繁忙の世界の一つに赴く。私は、宇宙現実の全７段階における人格の実績のそのような驚くべき相互関係をどこにも観測することはできない。また、私は、自分の仕事の仕方をよく知る者たちやそれをすることをいとも徹底的に楽しむ者たちの活動にいつも刺激されるのである。

13:4.8 (151.2) [このように機能するためにユヴァーサの日の老いたるものに任命される英知の遂行者による提示]

論文 14
中央の神性宇宙

14:0.1 (152.1) 完全かつ神性な宇宙は、全創造の中心を占める。それは時間と空間の広大な創造が周回する永遠の核心である。楽園はすばらしい永遠の宇宙のまさにその中心において不動状態で休息する絶対的安定性をもつ巨大な中心をなす小島である。この中央惑星群は、ハヴォーナと呼ばれネバドンの地方宇宙からはるか遠くにある。それは、途方もなく大きく信じられないような質量で、想像も及ばない美とずば抜けた壮大さの10億の球体から成るが、この広大な創造の真の大きさは実に人間の心による理解、把握を超えるものである。

14:0.2 (152.2) これは世界に定着し、完全で確立された唯一無二の集合体である。これは完全に創造された完全な宇宙である。それは進化的発展ではない。これは、すさまじい進化の実験、すなわち創造者たる息子の大胆な冒険を構成する宇宙のその無限の行進がその周りを旋回する完全性の永遠の中核である。創造者たる息子は、形態宇宙、すなわち神性の完全性、崇高の終局性、究極の現実、および永遠の完全性の理想を時間内において模写し、空間において複製することを切望するのである。

1. 楽園-ハヴォーナ体制

14:1.1 (152.3) 楽園周辺から7超宇宙の内側の境界までには次の7空間の状態と動きがある。

14:1.2 (152.4) 1. 楽園に衝突している静かな中央空間帯。

14:1.3 (152.5) 2. 3個の楽園回路と7個のハヴォーナ回路の時計回りの行進。

14:1.4 (152.6) 3. 中央宇宙の黒ずんだ重力体からハヴォーナ回路を分離しているやや静かな空間。

14:1.5 (152.7) 4. 黒ずんだ重力本の内側と反時計回りの帯状。

14:1.6 (152.8) 5. 黒ずんだ重力体の2空間経路を分割する第2の固有空間帯。

14:1.7 (152.9) 6. 楽園の周りを時計回りをする黒ずんだ重力体の外側の帯状。

14:1.8 (152.10) 7. 第3空間帯—やや静かな区域—7超宇宙の最奥部の回路から黒ずんだ重力体の外側の帯状を分離している。

14:1.9 (152.11) 10億のハヴォーナ世界は、楽園の衛星の3回路を直接に取り囲む7個の同心回路に配置されている。ハヴォーナの最奥部の回路には3,500万以上の、最外部には、比例する数が介在する2億4,500万以上の世界がある。回路は、それぞれに異なる。だが全回路は、完全に均衡がとれ、見事に組織されており、またそれぞれには、無限の精霊の特殊化された表現、つまり回路の７精霊のうちの1精霊が、全体に充満している。他の機能に加え、この無人格の精霊は、各回路にわたる天の業務執行を調整している。

14:1.10 (153.1) ハヴォーナの惑星回路は、重なり合ってはいない。それらの世界は、規則的に線行列で相互に続いている。広大な一平面の中央宇宙は、同心の安定した10個の構成単位を有する静止した楽園の小島の周りに渦巻いている。—楽園球体の3回路とハヴォーナ世界の7回路。物理的に見てハヴォーナと楽園回路は、すべてが一つのしかも同じ体制である。その分離は、機能上と行政上の認識による隔離である。

14:1.11 (153.2) 楽園においては時間は考慮されない。一連の出来事の順序は、中央の小島に土着するもの達の概念に固有のものである。しかし、時間は、ハヴォーナ回路とそこに滞在する天の起源を持つものと地球の起源を持つ両方の数多くの存在体に密接に関係している。それぞれのハヴォーナ世界には、その回路で決定されるそれ自身の現地時間がある。任意の回路のすべての世界には、楽園の周りを一様に揺れ動くので同じ長さの年があり、また、これらの惑星の年の長さは、一番はずれから最も奥深い回路へと減少している。

14:1.12 (153.3) ハヴォーナ-回路時間の他には、無限の精霊の楽園の７衛星で決定され送り出される楽園-ハヴォーナの標準日と他の時間の記号表示がある。楽園-ハヴォーナの標準日は、ハヴォーナ回路の1番目の、すなわち内側の惑星の住みかが楽園の小島を1回転し終えるのに要する時間の長さに基づく。その速さは、黒ずんだ重力体と巨大な楽園間のそれらの状態ゆえに途方もないものであるが、これらの球体のその回路一回り完了にはおよそ1,000年を要する。あなたの目が「夜の見張りがひとときに過ぎないように、神との1,000年は1日のようである。」という文に目を留めるとき、あなたは知らず知らずのうちに真実を読んだのである。楽園-ハヴォーナの１日は、現在のユランチア暦の閏年の1,000年にわずか7分3秒と1/8足りないのである。

14:1.13 (153.4) この楽園-ハヴォーナの1日は、たとえそれぞれが自身の内部時間の標準を維持するとはいえ、7超宇宙のための標準時測定なのである。

14:1.14 (153.5) ハヴォーナ世界の第7ベルトをはるかに超えるこの広大な中央宇宙のはずれには、信じられない数の巨

大な黒ずんだ重力体が渦を巻いている。これら多数の黒ずんだ密集体は、多くの点で他の空間体とはまったく異なっている。型においてでさえ非常に異なる。これらの黒ずんだ重力体は、光を反射せず吸収もしない。それらは物理的エネルギー光に反応せず、近くの時間と空間の生息宇宙の視界からさえ隠すほどにハヴォーナを完全に取り囲みおおい隠すのである。

14:1.15 (153.6) 黒ずんだ重力体の巨大なベルトは、特異な空間の割り込みによる2個の等しい楕円回路に分割される。内側のベルトは、反時計回りに回転する。外側は時計回りに回転する。黒ずんだ本体の並はずれた固まりと相待ったこれらの交互に入れ替わる動きの方向は、中央宇宙に物理的に均衡化し、完全に安定化された創造を与えるほどにハヴォーナ重力の線を効果的に均等化している。

14:1.16 (153.7) 黒ずんだ重力本体の内側の進行は、配列的には管状の3個の円形群である。この回路の断面は、ほぼ均等の密度の3同心円を見せている。黒ずんだ重力体の外側の回路は、内側の回路よりも1万倍高く垂直に配列さ

れている。外側回路の上下の直径は横の直径の5万倍である。

14:1.17 (154.1) 重力本体のこれらの2回路間の空間は、広い全宇宙の他の場所には見られないような特異なものである。この区域の特徴は、巨大な上下性の波動であり、未知の系列の物凄いエネルギー活動が行き渡っている。

14:1.18 (154.2) 我々の意見では、外部空間段階の将来の進展を特徴づける中央宇宙の黒ずんだ重力体のようなものは何もない。我々は、見事な重力-均衡体のこれらの交互進行というものが主たる宇宙においては特異であると見なすのである。

2. ハヴォーナ構造

14:2.1 (154.3) 精霊存在体は星雲の空間には住んでいない。それらは空気世界に生息してはいない。それらは、人間が生活しているものと同じ物質的種類の実際の球体に住所を定めている。ハヴォーナ世界は、言葉本来の意味の物質は7超宇宙の惑星の物質構成とは異なるものの、現実であり事実なのである。

14:2.2 (154.4) ハヴォーナの物理的現実には、空間の進化的宇宙には主流の任意の系列とは根本的に異なるエネルギー系列がある。ハヴォーナエネルギーは三重である。エネルギーのつの型は正と負の相に存在するが、超宇宙にあるエネルギー-物質の構成単位は、二重のエネルギー充足を有する。中央宇宙の創造は三重である(三位一体)。(直接的に)地方宇宙の創造は、創造者たる息子と創造の精霊による二重である。

14:2.3 (154.5) ハヴォーナの物質は、ちょうど1,000の基本的な化学要素の組織とハヴォーナエネルギーの7個の型の均衡のとれた機能から構成される。これらの基本的な各エネルギーは7相の励起を発現するので、ハヴォーナ出身者は49種の異なる感覚刺激に応じる。言い換えれば、純粋に物理的見地から、中央宇宙の出身者には専門化している49種の感覚の型がある。モロンチア感覚は70種であり、反作用反応のより高い精霊的系列は、70種から210種までの異なる型の存在体に反応する。

14:2.4 (154.6) 中央宇宙のどの物理的存在体もユランチア出身者には見えないであろう。それらの遠い世界の物理的刺

激も、あなたの感覚の総器官での反応を刺激しないであろう。ハヴォーナへのユランチアの人間の輸送が可能であるならば、人間は、そこでは聴覚障害、盲目、それに他の全ての感覚反応が完全に無能となるであろう。人間は、すべての環境刺激とそれへの反応を奪われた自意識をもつ限りある存在体として機能するしかないのである。

14:2.5 (154.7) ユランチアなどの世界では知られていない中央の創造に生じる多数の物理的現象と精霊的反応がある。三重創造の基本的組織は、時間と空間の創造された宇宙の二重構造のそれとは全く異なっている。

14:2.6 (154.8) すべての自然の法則は、進化的創造の二元的エネルギー体制には似ても似つかない状態で調整される。中央宇宙全体は、完全かつ均整のとれた管理の三重方式に基づいて組織化される。すべての宇宙現実とすべての精霊的原始力の間での完全な均衡が、楽園-ハヴォーナ体制全体を通して維持されている。楽園は、物質的創造の絶対的把握でこの中央宇宙の物理エネルギーを完全に管理し維持する。永遠なる息子は、すべてを抱擁してい

る自身の精霊的把握の一部として、ハヴォーナに宿るすべての精霊的身分を最も完全に支える。楽園においては、実験的なものはなく、また楽園-ハヴォーナ体制は創造的な完全性の一構成単位である。

14:2.7 (155.1) 永遠なる息子の宇宙の精霊的重力は、中央宇宙のいたるところで驚くほどに活発である。精霊価値と精霊的人格のすべては、絶えず神の住まいに向かって内側へと引き込まれる。この神方向の衝動は、激しく、しかも不可避的である。神到達の大望は、精霊重力が、遠く離れた宇宙のなかでよりも強いというのではなく、ハヴォーナに達したそれらの存在体がより完全に精霊的にされ、したがって、永遠なる息子による宇宙の精霊-重力の牽引力の絶えず臨場する行動により反応するので、中央宇宙ではより強いのである。

14:2.8 (155.2) 同様に無限の精霊は、知的価値のすべてを楽園方向に引きつける。無限の精霊の心の重力は、全中央宇宙にわたって永遠なる息子の精霊重力との繋がりにおいて機能し、これらは共に、神を見つけ、神格を獲得し、

楽園に達し、そして、神を知るという結合された衝動を成している。

14:2.9 (155.3) ハヴォーナは精霊的に完全であり、肉体的に安定した宇宙である。中央宇宙の管理と均衡のとれた安定性は完全のようである。すべての物理的もしくは精霊的であるものは、完全に予測可能であるが、心の現象と人格の意志はそうではない。たしかに我々は、罪は発生不可能であると考え得ると推察はするものの、これはハヴォーナ出身の自由意志の創造物が神格の意志に背いて有罪であったことがなかったいという理由に基づいてである。これらの崇高な存在体は、永遠にわたりずっと日の永遠なるものにつねに忠誠である。罪は、巡礼者としてハヴォーナに入ったいかなる創造物にも見られなかった。中央のハヴォーナ宇宙で創造されたり、またはそこへ認められた人格集団のいかなる創造物による不正行為の事例は一度もなかった。時間の宇宙における方法と選択手段が非常に完ぺきであり神性であるがゆえに、ハヴォーナの記録には決して過失は生じなかった。いかなる誤りも犯されなかった。上昇の魂が時期尚早に中央宇宙に認められたことはかつてないのである。

3. ハヴォーナ世界

14:3.1 (155.4) 中央宇宙の政府に関しては何もない。ハヴォーナは非常にすばらしく完全であるので、知的な政府の体制は必要とされない。定期的に設定される法廷はなく、立法府もない。ハヴォーナは行政指示のみを必要とする。真の政府の理想の高さはここに見られるかもしれない。

14:3.2 (155.5) そのような知力ある完璧なもの達、また、完璧に近いもの達の間に政府の必要性はない。それらのもの達は、ずっと以前に超宇宙の最高裁判所の精査を通過した進化する創造物が組み入れられた自然な完全性の存在体であるので規則の必要はない。

14:3.3 (155.6) ハヴォーナの行政は無意識的ではないが、驚異的に完璧であり神々しく効率的である。それは、主として惑星であり居住している日の永遠なるものに帰属しており、それぞれのハヴォーナ球体はこれらの三位一体起源の人格の中の1名により導かれている。日の永遠なるものは、創造者ではなく完全な行政者である。

14:3.4 (156.1) 日の永遠なるものは、最高の技能で教え、まるで絶対性のような知恵の極致で惑星の子供を導く。中央宇宙の10億の球体は、楽園とハヴォーナへの高度の人格訓練のための世界を構成し、さらには、時間の進化の世界からの上昇する創造物のための最終的実験場としての役割を果たす。創造物の上昇のための宇宙なる父のすばらしい計画の実行において、時間の巡礼者は、外側の、すなわち第７回路の受け入れ世界に導かれて到着し、増加された訓練と拡大された経験後、次第に内部へと、惑星ごとに、回路ごとに、最終的に神格に達し、楽園での居住を成就するまで前進する。

14:3.5 (156.2) 現在のところ、7回路の球体は、すべての崇高な栄光を維持しているとはいえ、全惑星の可能性のわずか1パーセントほどが人間の上昇に関する父の宇宙計画を促進する仕事に利用される。これらの巨大な世界の領域の1パーセントのうちのほぼ1/10は、終局者部隊の、すなわち、しばしばハヴォーナ世界に滞在し活動する永遠に光と生命に落ち着いている存在体の生活と活動に捧げられている。これらの高揚された存在体には楽園に自らの住居がある。

14:3.6 (156.3) ハヴォーナの球体の惑星構造は、進化する世界や空間体制の構造とは完全に異なっている。生息界としてのそのような巨大な球体を利用するに都合の良いところは、雄大な全宇宙のいずれにもない。巨大な黒ずんだ重力体の均衡効果に結びつけられたツリアータの物理的組成は、物理的根源力を実に申し分なく均等化し、またこの驚異的創造の様々な見所の絶妙な均衡化を可能にしている。また、反重力は、これらの巨大世界の物質的機能と精霊的活動の組織に利用される。

14:3.7 (156.4) ハヴォーナ球体の建築、照明、加熱は、生物学的また芸術的装飾と同様に、人間の想像力がもつ最大可能な広がりをはるかに越えるものである。あなたには、ハヴォーナに関して多くについて話すことはできない。その美と壮大さを理解するためには、あなたがそれを見なければならない。それにしても、これらの完全な世界には本当の河川や湖沼がある。

14:3.8 (156.5) 精霊的に、これらの世界は理想的に整備されている。それらは中央宇宙において機能する異なる存在体の数々の系列を接待する自己の目的にぴたりと適合して

いる。多様の活動は、はるかに人間の理解を超えるこれらの美しい世界で行われ。

4. 中央宇宙の生物

14:4.1 (156.6) ハヴォーナ世界には基本的な7個の型の生き物と存在体があり、それぞれの基本的な型は3つの異なる相で存在している。各３相は、70の大分類に、各大分類は1,000の小分類、さらに他の細分等に分割される。これらの基本的な生命集団は次のように分類されるかもしれない。

14:4.2 (156.7) 1. 物質的

14:4.3 (156.8) 2.モロンチア的

14:4.4 (156.9) 3.精霊的

14:4.5 (156.10) 4. 准絶対的

14:4.6 (156.11) 5. 究極的

14:4.7 (156.12) 6. 共同絶対的

14:4.8 (156.13) 7. 絶対的

14:4.9 (157.1) 腐敗と死は、ハヴォーナ世界の生命環の一部ではない。下級の生き物は、中央宇宙において肉体の変化を経験する。下級の生き物は、たしかに型と外観を変えるが、腐敗と細胞死の過程により分解するのではない。

14:4.10 (157.2) ハヴォーナ出身者は皆、楽園三位一体の子である。彼らは、創造物の両親をもたず、存在体を生殖しない。我々は、中央宇宙のこれらの民、つまり決して創造されなかった存在体の創造について描くことはできない。ハヴォーナ創造に関する全物語は、人間が理解するような時間あるいは空間とのいかなる関係も持たない永遠の事実に時間-間隔をもたらす試みである。しかし、我々は人間の哲学に起点を認めなければならない。人間の段階をはるかに超える人格でさえ「始まり」の概念を必要とする。それでもなお、楽園-ハヴォーナ体制は永遠である。

14:4.11 (157.3) ハヴォーナ出身者は、他の永久公民の系列がそれぞれの出生球体に住まうという同じ意味で中央宇宙の10億の球体に生活している。息子の資格をもつ物質的系列が、超宇宙の10億台の地方体制の物質的、知的、精霊

的な経済を維持するように、ハヴォーナ出身者は、より大きい意味で同じく中央宇宙の10億の世界に生活し機能するのである。あなたは、ことによると神性宇宙の物理的現実について説明するために「物質」という言葉が拡大できるという意味においてこれらのハヴォーナ存在体を物質的創造物と見なすかもしれない。

14:4.12 (157.4) ハヴォーナ在来の、またそれ自体が重要性を持つ生命が存在する。ハヴォーナ出身者は、多くの方法で楽園下降者への、また超宇宙上昇者への奉仕活動をするが、中央宇宙の中で特異な生活を送り、楽園、または超宇宙のいずれかからは全く離れた相対的な意味を持つ生涯を送っている。

14:4.13 (157.5) 進化世界の信仰の息子の崇拝が、宇宙なる父の愛の満足感に応えるように、ハヴォーナ創造物の高揚された敬愛は、神々しい美と真実の完全な理想を満たす。必滅の人間が、神の意志を為すことを目指すとき、中央宇宙のこれらの存在体は楽園三位一体の理想を満足させるために生きている。それらは、本質そのものにおいて神の意志なのである。人は神の善に歓喜し、ハヴォーナ

出身者は神性の美に狂喜し、一方あなた方双方は生ける真実の自由の活動を味わうのである。

14:4.14 (157.6) ハヴォーナ出身者には、現在の目標と将来の明らかにはされていない二つの任意の目標がある。そして、中央宇宙には特有の土着創造物の進行、楽園への上昇と超宇宙への浸透のいずれも伴なうことのない進行がある。ハヴォーナのより高い身分へのこの進行は次のように示されるかもしれない。

14:4.15 (157.7) 1. 1番目から7番目の回路までの外向きへの経験的進行

14:4.16 (157.8) 2. 7番目から1番目の回路までの内向きへの進行

14:4.17 (157.9) 3. 回路内の進行—任意回路の世界の中での進行

14:4.18 (157.10) ハヴォーナ出身者に加え中央宇宙の居住民は、様々な宇宙集団のための数多くの階級の原型的存在体を含む—創造全体のそれぞれの種類の、またそれぞれの種類への助言者、指導者、および教師。全宇宙における存在体すべてが、ハヴォーナの10億の中の1世界に生きる原型的創造物の1系列に沿って創り出される。時間の必

滅者でさえ天のこれらの原型的球体の外部回路における創造物の生活での目標と理想を持っている。

14:4.19 (157.11) 次には、宇宙なる父に到達し行き来が許され、特別職任務で宇宙のあちこちに配置される存在体がある。また、到達の候補者、つまり物理的には中央宇宙に達したものの楽園居住の主張ができるほどの精霊的進歩に達していないもの達があらゆるハヴォーナ世界に見られるであろう。

14:4.20 (158.1) ハヴォーナ世界においては、中央宇宙の知的かつ精霊的な問題の細部を処理する多数の人格、つまり優雅さと栄光を具えた存在体が、無限の精霊を代表している。神性完全のこれらの世界において多数の人格は、この広大な創造における通常行為に備わっている仕事をし、併せて、空間の暗い世界から栄光へと登っていった膨大な数の上昇の創造物の教育、訓練、および奉仕活動の様々な任務を果たして進む。

14:4.21 (158.2) 創造物の完全性到達に関する上昇計画には決して直接的には関連のない楽園-ハヴォーナ体制出身の多数の集団がある。だからこそ、それらは人類に提示され

た人格分類からは省略されているのである。ここには超人的存在体の主な集団と直接あなたの生存経験に関連する系列のみが、提示されている。

14:4.22 (158.3) ハヴォーナは、神性認識と最高の意味、究極の価値、絶対現実の拡大された評価のより高い段階到達への努力において低い回路からより高い回路へと進もうとする全相の知力ある存在体の生命に満ちている。

5. ハヴォーナの生活

14:5.1 (158.4) あなたは、ユランチアにおいて初期の短く激しい物質的存在の生涯で試練をくぐり抜ける。あなたは、大邸宅世界で、そのうえあなたの体制、星座、地方宇宙を経て、上昇のモロンチア段階を通過する。あなたは、超宇宙の訓練世界においては真の精霊の進行のさまざまな段階を経て、やがてハヴォーナ通過に向けての用意ができる。ハヴォーナの7回路におけるあなたの到達は、知的であり、精霊的で経験的である。そして、各世界のこれらの各回路において達成されるべき明確な任務がある。

14:5.2 (158.5) 中央宇宙の神性世界における生活は、非常に豊かであり完全であり、被創造の存在体が経験し得るいかなるものも人間の概念を完全に超えるほどである。この永遠の創造の社会的、経済的活動は、ユランチアのような進化世界に生息する物質的創造物の職業とは完全に異なる。ハヴォーナの思考法さえユランチアでの思考過程とは異なるのである。

14:5.3 (158.6) 中央宇宙の規定は、適切に本質的に自然である。行動規範は任意ではない。ハヴォーナのあらゆる要件における公正さの理由と正義の規則は、明らかである。結合されるとこれらの2要素は、ユランチアの公平性に匹敵するものに等しい。あなたは、ハヴォーナに到着するとそれらが為されるべき方法で事に当たることを自然に楽しむであろう。

14:5.4 (158.7) 知的存在体は、まず中央宇宙に達するとハヴォーナの第７回路の先導的世界に受け入れられ住所が定まる。新到着者は、精霊的に進歩し超宇宙の主たる精霊の同一性理解に至ると第6回路に移される。(人間の心における進歩の円が明示するのは、中央宇宙におけるこれら

の割り振りからである。)上昇者が崇高性の実現に達し、それに従って神格への冒険の準備ができると、第5回路に連れられる。無限の精霊に達すると第4回路に移される。永遠なる息子の到達の後で第3回路に移動される。そして、上昇者が宇宙なる父を認識すると、世界の第2回路の滞在へと向かい、そこでは楽園の多集団とさらになじみ深くなる。ハヴォーナの第１回路への到着は、時間の候補者の楽園奉仕への承認を意味する。創造物上昇の期間と本質によっては、時間の候補者は、無期限に、精霊の進歩的到達の内部回路に滞在するであろう。上昇する巡礼者は、この内部回路から楽園住居と終局者部隊への入隊へと内側に進んで行く。

14:5.5 (159.1) 上昇の巡礼者としてのハヴォーナでの滞在期間、あなたは自身の任務回路の世界の間を自由に訪ねることができるであろう。あなたはかつて移動したそれらの回路の惑星に戻ることを許されるであろう。そして、このすべてが、滞在するもの達にはハヴォーナの輪に超熾天使化される必要性なく可能である。時間の巡礼者は、「達成された」空間を移動するための準備ができるが、「非達成」の空間を通り抜けるためには定められた

方法に頼らなければならない。巡礼者は、輸送超熾天使の援助なしにはハヴォーナを去ったり、割り当てられた自分の回路を超えて進んで行くことはできない。

14:5.6 (159.2) この広大な中央部の創造には爽快な独創性がある。物質の物理的組織と知的存在体と他の生物の基礎的系列の基本構成は別として、ハヴォーナ世界間に共通するところは何もない。これら1つ1つの惑星が、最初の、特異で限定的な創造である。各惑星は、無比の、見事でしかも完全な製作物である。また、人格のこの多様性は、惑星生活の物理的、知的、精霊的局面のすべての特徴にまでおよぶ。これらの10億の完全性の球体のそれぞれが、居住している日の永遠なるものの計画により開発され、潤色されてきた。だからこそ、2つとして似たものはないのである。

14:5.7 (159.3) あなたがハヴォーナの最後の回路を横断し、ハヴォーナの最後の世界を訪問するまでには、冒険の強壮剤と好奇心による刺激は、あなたの経歴から消えうせるであろう。次には、衝動、永遠からの前進衝動は、その

前触れと、つまり時間の冒険的魅力と取って代わるであろう。

14:5.8 (159.4) 単調さは、創造的な想像力の未熟さと精霊的贈与との知的調整の不活発さを暗示している。上昇する人間が、これらの楽園のような世界の探検を始めるまでには、感情的、知的かつ社会的、もし霊精霊的でなくても、円熟さを既に獲得していたいたのである。

14:5.9 (159.5) あなたの驚きは、あなたがハヴォーナの回路から回路へと進むにつれ、夢にも思わない変化に気づくばかりではなく、各回路内の惑星から惑星への前進につれ言葉では表せなくなるであろう。これら10億の研究世界のそれぞれが、紛れもない驚きの大学である。継続する驚き、つまり果てしない驚きは、これらの回路を横断し、これらの巨大な球体を周遊するもの達の経験である。単調さは、ハヴォーナ経歴の一部ではない。

14:5.10 (159.6) 冒険への愛、好奇心、および単調さへの畏怖—進化する人間性に固有のこれらの特色—は、地球におけるあなたの短い滞在中、あなたを拗らせたり、悩ませるためにそこに投入されたのではなく、むしろ、死とは、

冒険での無限の経歴、期待に満ちた永遠の生命、発見の永遠の旅の始まりに過ぎないということをあなたに示唆するためである。

14:5.11 (160.1) 好奇心—調査の精神、発見の衝動、探検の意欲—は、空間の進化する創造物の生まれながらの、加えて神性の、贈与の一部である。これらの自然の衝動は、ただ挫折したり抑圧されるためにあなたに与えられたのではなかった。たしかに、これらの野心的衝動は、地球でのあなたの短い生涯を通じて頻繁に抑制されなければならないし、失望はしばしば経験されなければならないが、これらの野心的衝動は、来る長い時代には完全に認識され、華々しく満足がいくことになっている。

6. 中央宇宙の目的

14:6.1 (160.2) 7回路化されたハヴォーナの活動範囲は巨大である。一般的に、それらは次のように記述できるかもしれない。

14:6.2 (160.3) 1. ハヴォーナの

14:6.3 (160.4) 2. 楽園の

14:6.4 (160.5) 3. 上昇-有限の——崇高者-究極者の進化の

14:6.5 (160.6) 多くの超究極的活動が、現在の宇宙時代のハヴォーナで行われ、准絶対の明かされてはいない多くの事柄と心と精霊機能の他の局面にかかわっている。中央宇宙は、被創造物の心の理解を超えて数多くの方法で機能しているのであるから、私には明らかにされていない多くの目的を果たすということは可能である。それでもなお、私は、この完全な創造がいかに必要性に役立っているかを、そして宇宙知性に関する7系列の満足に貢献するかを描写しようと努力するのである。

14:6.6 (160.7) 1. 宇宙なる父—第１根源と中枢。父なる神は、主要な創造の完全性から親の崇高的満足を導き出す。父なる神はほぼ平等の段階における愛満喫の経験を楽しむ。完全な創造者は、完全な創造物の崇拝に神らしく満足している。

14:6.7 (160.8) ハヴォーナは、父に達成からの崇高的満足感を与える。ハヴォーナにおける完全性の実現は、無限拡大への永遠の衝動からくる時間-空間の遅れを補う。

14:6.8 (160.9) 父は、ハヴォーナからの神性美の返報を楽しむ。すべての発展する宇宙のための絶妙な調和の完全な型の提供が、神の心を満たす。

14:6.9 (160.10) 我々の神は、それが宇宙の中の宇宙のすべての人格への精霊現実のふさわしい顕示であるが故に、完全な喜びをもって中央宇宙を見守る。

14:6.10 (160.11) 宇宙の神は、時間と空間におけるその後の宇宙の全拡大のための永遠の力の核としてハヴォーナと楽園を重んじている。

14:6.11 (160.12) 永遠の父は、終わりのない満足で、時間の上昇候補者たちのための、すなわち創造者-父の永遠の家を実現する空間の必滅の孫たちのためのふさわしく魅惑的な目標としてハヴォーナ創造を見る。そして、神は神格と神性家族の永遠の家としての楽園-ハヴォーナ宇宙を楽しむ。

14:6.12 (160.13) 2. 永遠なる息子—第 2 根源と中枢。中央の見事な創造は、永遠なる息子に、神性の家族—父、息子、および精霊—の連携有効性の永遠の証拠を提供する。それ

は、宇宙なる父への絶対的信頼に向けての精霊的かつ物質的な基盤である。

14:6.13 (160.14) ハヴォーナは、精霊力の絶えず広がる実現にむかっての無限に近い基盤を永遠なる息子に提供する。中央宇宙は、提携者である楽園の息子の指導のために贈与活動の精神と方法を安全に確かに示すことができる活躍の舞台を永遠なる息子に与えた。

14:6.14 (161.1) ハヴォーナは、宇宙の中の宇宙の永遠なる息子の精霊-重力制御のための現実の基盤である。この宇宙は、親の欲求、つまり精霊再現の満足感を息子に与える。

14:6.15 (161.2) ハヴォーナ世界とその完全な住民は、息子は父の言葉であるという最初の、しかも永遠に最終の実証である。その結果、父を無限に補うものとしての息子の意識は、完全に満足させられる。

14:6.16 (161.3) そしてこの宇宙は、宇宙なる父と永遠なる息子の間の平等的同胞の相互作用実現のための機会を提供

し、これが、それぞれの無限の人格の恒久的証明になる。

14:6.17 (161.4) 3. 無限の精霊—第3根源と中枢。ハヴォーナ宇宙は、結合の活動者、つまり統合された父-息子の無限の代表である無限の精霊の証を提供する。無限の精霊は、ハヴォーナにおいてこの神性達成との絶対共存の満足感を味わいながら創造的活動として機能する複合的満足感を引き出す。

14:6.18 (161.5) 無限の精霊は、潜在的慈悲活動者として役目を果たす能力と意欲を示すことができる活躍の舞台をハヴォーナにおいて見い出した。精霊は、この完全な創造において進化する宇宙における活動冒険のために習熟をめざす。

14:6.19 (161.6) この完ぺきな創造は、神性の両親と共に宇宙行政に参加するための—提携者-創造者の子として宇宙統治のために、それによって、創造者たる息子の創造者たる息子の提携者として地方宇宙の共同行政のために準備し—無限の精霊に機会を与えた。

14:6.20 (161.7) ハヴォーナ世界は、宇宙心をもつ創造者の心の実験室であり、現存するあらゆる創造物の心への奉仕活動者である。心は、それぞれのハヴォーナ世界で異なり、精霊的かつ物質的な全創造物の知力のための形態として役目を果たす。

14:6.21 (161.8) これらの完全な世界は、楽園社会へと運命づけられた存在体すべてのための心の大学院である。この完全な世界は、信頼でき助言のできる人格に対して心への奉仕活動の方法を試す多くの機会を精霊に与えた。

14:6.22 (161.9) ハヴォーナは、空間宇宙における広範囲の、そして、寡欲な仕事に対する無限の精霊への補償である。ハヴォーナは、時間と空間の不屈の心の奉仕活動者にとっての最適の家であり静養所である。

14:6.23 (161.10) 4. 崇高なるもの—経験的神格の進化的統一。ハヴォーナ創造は、崇高なるものの精霊的現実を永遠に、完全に証明するものである。この完全な創造は、時間と空間の経験的宇宙における楽園の神格の有限的反映の力-人格統合開始前の崇高なる神の完全かつ釣り合いのとれた精霊の性質の顕示である。

14:6.24 (161.11) 全能者の力の可能性は、ハヴォーナにおいて崇高者の精霊的本質と統一される。この中央の創造は、崇高者の未来-永遠の統一の例示である。

14:6.25 (161.12) ハヴォーナは、崇高者の普遍の可能性の完全形態である。この宇宙は、未来に完成される崇高者の描写であり、究極者の可能性を暗示するものである。

14:6.26 (162.1) ハヴォーナは、崇高かつ完全な自制を備えた意志をもつ生ける創造物として存在する精霊価値の最終的状態を示す。やがては精霊に相当して存在する心；無限の可能性がある知性の現実と統一。

14:6.27 (162.2) 5. 等位の創造者たる息子。ハヴォーナは、楽園のマイケルが宇宙創造におけるその後の冒険に備える教育的訓練の場である。神性であり完全であるこの創造は、あらゆる創造者たる息子の形態である。創造者たる息子は、自身の宇宙がこれらの楽園-ハヴォーナ段階の完全性へついには到達するように努力する。

14:6.28 (162.3) 創造者たる息子は、ハヴォーナの創造物を自身の必滅の子らと精霊存在体のために人格-類型の可能性

として用いる。マイケルと楽園の他の息子は、楽園とハヴォーナを時間の子供の神性目標として見ている。

14:6.29 (162.4) 創造者たる息子らは、中央の創造が、地方宇宙を安定させ統一させる宇宙の不可欠の総括的管理といった類の真の源であるということを知っている。創造者たる息子らは、崇高者と究極者の遍在する影響の個人的臨場がハヴォーナにはあるということを知っている。

14:6.30 (162.5) ハヴォーナと楽園は、マイケルの息子の創造力の源である。ここには、宇宙創造においてマイケルの息子に協力する存在体が住んでいる。楽園からは、宇宙の母なる精霊、すなわち地方宇宙の共同創造者が来るのである。

14:6.31 (162.6) 楽園の息子は、中央の創造を神性の両親の家—自分たちの家—と見なす。それは、楽園の息子らが時々帰りを楽しむ場所である。

14:6.32 (162.7) 6. 等位の奉仕活動の娘。宇宙の母なる精霊、地方宇宙の共同創造者は、ハヴォーナ世界において回路の精霊と密接に関係して前人格の訓練を保証する。中央宇

宙の中での地方宇宙の精霊の娘は、父の意志に従属している間中、楽園の息子との協力方法について正式に訓練をうけた。

14:6.33 (162.8) 精霊と精霊の娘は、ハヴォーナ世界において精霊と物質の知力者の全集団のための心の類型を見つけるし、またこの中央宇宙は、宇宙の母なる精霊が創造者たる息子と共に後援する創造物の未来の目標である。

14:6.34 (162.9) 宇宙の母たる創造者は、自身の起源の場所と無限の母なる精霊の家として、すなわち無限の心の人格臨場の住まいとして楽園とハヴォーナを思い起こす。

14:6.35 (162.10) この中央宇宙からは、宇宙の神格活動者が意志を持つ生ける創造物を創造する作業における創造者たる息子への補足として採用する創造者資格の個人的特権の贈与もまた来る。

14:6.36 (162.11) そして最後に、無限の母なる精霊の娘なる精霊は、自分達の楽園の家には帰りそうにもないことから、ハヴォーナで崇高なるものと親しく交わり、楽園の威儀仙に人格化された普遍的な反射現象から大満足を得る。

14:6.37 (162.12) 7. 上昇経歴の進化する必滅者たち。ハヴォーナは、人間のすべての型の類型人格の家であり、時間の創造に固有ではないすべての超人間の人格の家である。

14:6.38 (162.13) これらの世界は、想像し得る最高の現実の水準における真の精霊価値到達に向かうすべての人間の衝動への刺激を供給する。ハヴォーナは、上昇するすべての人間の前楽園の訓練目標である。ここにおいて、人間は前楽園神格—崇高なるもの—に到達する。ハヴォーナは、楽園と神到達への入り口としてあらゆる意志の創造物の前に立つ。

14:6.39 (163.1) 終局者にとり、楽園は家であり、ハヴォーナは作業場であり遊び場である。そして、すべての神を知る人間は、終局者であることを切望する。

14:6.40 (163.1) 中央宇宙は、人間の確立された目標であるだけではなく、宇宙なる父の無限性を探検する経験における宇宙の、しかも明かされてはいない冒険に出発するように、そのうちに終局者の永遠の経歴を始める場所である。

14:6.41 (163.1) ハヴォーナは、超有限の段階において神の発見を試みる宇宙の巡礼者を目撃するかもしれない未来の宇宙時代においてでさえ疑いなく准絶対の重要性と機能し続けるであろう。ハヴォーナは、准絶対存在体のための訓練用宇宙としての役目が果たせる。それは、おそらく、7超宇宙が、外部空間の小学校卒業生のための中等学校として機能するとき、教養学校となるであろう。そして、我々は、永遠のハヴォーナの可能性が本当に無限であるという、中央宇宙が、創造された存在体のすべての過去、現在、または、将来の型の経験的訓練用の宇宙として永遠に役目が果たせるという意見に傾きがちである。

14:6.42 (163.1) [このように機能するためにユヴァーサの日の老いたるものに任命される英知の遂行者による提示]

論文 15
7超宇宙

15:0.1 (164.1) 宇宙なる父—父として—に関する限り、宇宙は実際には存在しない。宇宙なる父は人格に対応する。宇宙なる父は人格の父である。永遠なる息子と　無限の精霊—創造者たる提携者として—に関する限り、宇宙

は、創造者たる息子と創造の精霊の共同統治の下に局所化されており、個別である。楽園の三位　一体に関する限り、ハヴォーナの外側にはただ7個の生息宇宙すなわち後-ハヴォーナ空間の第一段階の回路に対する司法権を保持する7超宇宙がある。主たる　7精霊は、中央の小島から放射状にその影響を広げ、こうして1個の巨大輪の広大な創造を構成する。輪の中心部は楽園の永遠の小島であり、輪の7個の歯止めは　主たる7精霊の放射であり、輪の縁は壮大な宇宙の外部領域である。

15:0.2 (164.2) 超宇宙組織と政府の七重の計画が、宇宙創造具体化の初期に立てられた。後-ハヴォーナの最初の創造は、巨大な7区分にされ、そして超宇宙政府の本部世界が設計され構築された。現在の行政計画は、ほぼ永遠といえるほどにずっと存在してきており、7超宇宙の支配者たちは、正当に日の老いたるものと 呼ばれる。

15:0.3 (164.3) 私は、これらの領域全体において稼動する超宇宙に関する広大な知識のうち、あなたに多くを告げることは望めないものの、稼動が可能である物理的な力かつ精霊的な力の両者のための知的管理の方法がこの領域全

体はあり、普遍的な重力臨場は、厳然たる力と完全な調和で機能している。まず超宇宙領域の身体的構造と物質的組織についての考えを得ることが、重要である。なぜならば、あなたは、次に、超宇宙領域の精霊の政府のためと、これらの7超宇宙 のあちこちに散在する無数の生息惑星に暮らす意志を持つ創造物の知的進歩のために用意された驚異的組織の意味の理解に備えることができるのであるか ら。

1. 超宇宙の空間段階

15:1.1 (164.4) ユランチアおよび宇宙は、どの実用的な点から見ても、あなたの短い年で100万年、あるいは10億年にわたる世代の記録、観測、および記憶の限られた範囲において新空間への1つの長くて未知の突入の冒険を経験している。しかし、ユヴァーサに関する記録により、より古い観測に従い、我々の系列のよ　り広範囲の経験と予測に調和し、そしてこれらの、また他の発見に基づく結論から、我々は、宇宙が規則的で、よく理解され、完全に制御された行列に従事　しており、第一の偉大な根源と中枢とその居住宇宙の周りを厳然たる壮大さで揺れ動いているということを知っている。

15:1.2 (165.1) 我々は、7超宇宙が、巨大な楕円、巨大で細長い円を横断するということをずっと以前に発見した。あなたの太陽系と時間の他の世界は、図表と方位磁石　なしで、未知の空間に向こう見ずに突入はしていない。あなたの体系が属する地方宇宙は、中央宇宙を包囲する途方もない揺れの周りの明確で十分に理解されている反時計回りの軌道を進んでいる。この宇宙の通り道は、図によく表されており、あなたの太陽系を構成する惑星の軌道がユランチアの天文学者に知られているのと同程度に、超宇宙の星の観察者に徹底的に知られている。

15:1.3 (165.2) ユランチアは地方宇宙にあり、そして超宇宙は完全に組織化されてはおらず、また、あなたの地方宇宙は、数多くの部分的に完成された物理的創造に近接してい　る。あなたは、比較的最近の宇宙の1つに属している。しかしあなたは、今日図表にない空間に荒々しく突入したり、未知の領域に盲目的に揺れ動いたりはしていな　い。あなたは超宇宙の空間段階の規則的で予定された通り道を辿っている。あなたは、今、あなたの惑星体系、またはそれの先行したものがとっくの昔に移動した全く同じ空間を通過しているのである。そして、いつか

遠い将来において、あなたの体系、またはそれに後続するものが、今あなたがとても迅速に突入　している同じ空間を再び移動するであろう。

15:1.4 (165.3) この時代において、そしてユランチアにおいて方向づけされるように、第一超宇宙は、東の方向にあり、ほとんど真北に、偉大な根源と中枢の楽園住居とハヴォーナの中央宇宙へとほぼ正反対に揺れている。この位置は、西に対応するもので、永遠の小島への時間の球体の最短の物理的接近を表す。超宇宙第二　　は、第三が、既に南方への突入に通じる湾曲に入り現在空間の大通路の最北部分を保持する間、北にあり、西向きの揺れの準備をしている。第四は、南方への比較的直線方向、つまり偉大な中枢への反対に今接近しつつある漸進地域にある。第五は、　東方への揺れのほんの直前の南方への直線方向を続ける間、中枢の中の中枢のその反対位置をほぼ離れ、第六は、南の湾曲部の大半を、つまり、そこからあなた　の超宇宙がほぼ通り過ぎた部分を占拠する。

15:1.5 (165.4) ネバドンのあなたの地方宇宙は、つい近ごろ(我々が時間を計算するように)超宇宙の空間段階の南東の湾曲を曲がり、第一超宇宙と第六超宇宙の間で揺れ続けているオーヴォントン、つまり第7超宇宙に属している。今日、ユランチアが属する太陽系は、南湾曲の周りの揺れを10億年も過ぎているので、あなた は、今ちょうど南東の湾曲を超えて進んでおり、長く、比較的直線方向の北の通路経由で迅速に動いている。数えきれない年月の間、オーヴォントンはこのほぼ 直線の北方方向を進むであろう。

15:1.6 (165.5) ユランチアは、あなたの地方宇宙の境界域からははるかに外側の体系に属している。あなたの地方宇宙は、現在のところオーヴォントン周辺を横 断している。あなたの地方宇宙を超えてまだ他に体系があるのだが、偉大な根源と中枢に比較的近接して大円の周りで揺れているそれらの物理的体系からは遠く離 れている。

2. 超宇宙の組織

15:2.1 (165.6) 宇宙なる父だけが、空間の生息界の位置と実際の数を知っている。宇宙なる父は、それらすべてを名前

と番号で呼　ぶ。いくつかの地方宇宙には他よりも知的生命に適したさらに多くの世界があるので、私は、生息の、あるいは生息可能の惑星の概数しか伝えられない。計画された地方宇宙のすべても組織化されてはこなかった。したがって、私が提示する見積りは、広大な物質的創造の何らかの考えを提供する目的　　のためだけである。

15:2.2 (166.1) 壮大な宇宙には7超宇宙があり、それらはおおよそ次のように構成されている。

15:2.3 (166.2) 1. 体系。超政府の基本単位は、居住の、または居住に適したおよそ1,000個の世界から成る。照りつける太陽、寒い世界、灼熱の太陽に近過ぎる惑星、そして、生物居住に適さない他の球体は、この一団には含まれていない。これらの1,000個の世界は、生命維持に適する体系と呼ばれてはいるものの、これらの世界のうち比較的若い体系の小数世界にだけ、生息が生じているかもしれない。各生息惑星は惑星王子に統括され、各地方体系はその本部として建築球体を持ち、体系君主に統治される。

15:2.4 (166.3) 2. 星座。100個の体系(およそ10万の生息惑星)が、星座を作る。各星座は、建築本部球体を持ち、3名のヴォロンダデクの息子、すなわちいと高きものに統括される。また、各星座には、観測に当たる日の忠誠なるもの、楽園の三位一体の大使がいる。

15:2.5 (166.4) 3. 地方宇宙。100個の星座(およそ1,000個の生息に適した惑星)が、地方宇宙を構成する。各地方宇宙は、雄大な建築本部世界を持ちミカエルの系列　の等位の神の創造者たる息子の１名に統治されている。各宇宙は、日々の和合のものの臨場に、すなわち楽園の三位一体の代表者に祝福されている。

15:2.6 (166.5) 4. 小領域。100個の地方宇宙(およそ10億の生息可能な惑星)が、超宇宙政府の小領域を構成する。それには素晴らしい本部世界があり、そこから、その支配者つまり日の若きものが小領域の業務を担当する。3名の日の若きもの、崇高なる三位一体の人格は、それぞれの小領域の本部にいる。

15:2.7 (166.6) 5. 主要領域。100個の小領域(およそ1,000億の生息可能な世界)が、主要な1領域を作る。それぞれの主要

な領域にはみごとな本部が備わっており３名の日の完全なるもの、崇高なる三位一体の人格に統括される。

15:2.8 (166.7) 6. 超宇宙。10個の主要区分(およそ1兆の生息可能な惑星)が、超宇宙を構成する。各超宇宙は、巨大で燦然たる本部世界があり3名の日の老いたるものに統治される。

15:2.9 (166.8) 7. 壮大宇宙。7超宇宙は、おおよそ7兆の生息可能な世界と、建築球体と、ハヴォーナの生息可能な10億の球体から成る組織化された壮大な現在の宇宙を作る。超宇宙は、楽園から主たる7精霊により間接的に、そして反射的に統治され管理されている。ハヴォーナの10億の世界は、日の永遠なるものに直接的に統括される。そのうちの１名は、完全な各球体を統括する崇高なる三位一体の人格。

15:2.10 (167.1) 楽園-ハヴォーナを除く宇宙組織計画は、次の構成単位を前提とする。

15:2.11 (167.2) 超宇宙.....7

15:2.12 (167.3) 主要な領域.....70

15:2.13 (167.4) 小領域. 7,000

15:2.14 (167.5) 地方宇宙. 700,000

15:2.15 (167.6) 星座. 70,000,000

15:2.16 (167.7) 地方体系. 7,000,000,000

15:2.17 (167.8) 居住可能な惑星. 7,000,000,000,000

15:2.18 (167.9) 7超宇宙のそれぞれは、およそ以下の通りに構成される:

15:2.19 (167.10) 1体系が取り囲む数、およそ. 1,000個の世界

15:2.20 (167.11) 100,000個の世界

15:2.21 (167.12) 10,000,000個の世界

15:2.22 (167.13) 1,000,000,000個の世界

15:2.23 (167.14) 100,000,000,000個の世界

15:2.24 (167.15) 1,000,000,000,000個の世界

15:2.25 (167.16) 他の組織が物質的存在から一時的に消え去る一方で新しい体系が絶えず発展しているので、そのような見積りのすべてはせいぜい近似でしかない。

3. オーヴォントンの超宇宙

15:3.1 (167.17) ユランチアにおいて肉眼で見える星の領域のほとんどすべてが、壮大な宇宙の第7区分、つまりオーヴォントンの超宇宙に属している。広大な銀河系は、あなたの地方宇宙の縁を大きく超えあるオーヴォントンの中心核である。無数の個々の惑星とともに、太陽、空間の暗い島、二重星、球状星団、　星雲、渦巻状の、そして他の星雲のこの巨大集合体は、進化する生息宇宙のおよそ1/7の細長い円形の、時計のような形をなしている。

15:3.2 (167.18) ユランチアの天文位置から広大な銀河に近い体系の断面図を通して見るとき、あなたは、オーヴォントンの球体が、膨大な細長い平面状で、厚みをはるかに上回る幅と、幅をはるかに上回る長さで移動しているのを観測する。

15:3.3 (167.19) いわゆる銀河の観測は、天上を一方向に見るとき、オーヴォントンの星の密度の相対的増加を明らかにする。とはいえ、どちらの側においても密度は減少する。星と他の球体の数は、我々の物質の超宇宙の主要な平面から離れたところでは減少する。この領域の最大密度の本体を通過して眺める観測角度が好都合であるとき、あなたは、居住宇宙と万物の中心方向を見ているのである。

15:3.4 (167.20) オーヴォントンの主要な10区分のうち、８区分がユランチアの天文学者たちにより大まかに確認されてきた。他の2区分は、あなたがこれらの現象を内 側から見ることを強いられているので、見分けが難しい。あなたが空間のはるか遠くの位置からオーヴォントンの超宇宙を見ることができるならば、すぐに第7銀河の主要な10個の領域に気づくであろうに。

15:3.5 (168.1) あなたの小領域の回転の中心は、遠く射手座の巨大で高密度の恒星雲に位置し、その周りであなたの地方宇宙とその関連する全創造が動いており、射手座の広

大な小銀河系の反対側から巨大な星の渦巻きの中に現れる恒星雲の2つの大きな趨勢が観測できる。

15:3.6 (168.2) あなたの太陽とその関連惑星が属する物理的体系の核は、かつてのアンヅラノウヴァー星雲の中心である。このかつての渦巻星雲は、あなたの太陽系　の誕生に伴う事象、そして隣接する大星雲の近接近により引き起こされる事象に関係する重力分裂によりわずかに歪められる。至近、危機一髪の衝突が、アンヅ　ラノウヴァーをいくらか球形の集合体に変えはしたが、太陽の二方向前進とその関連物理集団を完全に破壊はしなかった。中心からほぼ中間の星流よりに位置す　るあなたの太陽系は、現在、この歪んだ渦巻きの腕の中の1つのかなり中央の位置を占めている。

15:3.7 (168.3) 射手座の領域とオーヴォントンにある他のすべての領域は、ユヴァーサの周りを回転しており、また次に掲げるような複数の回転運動により生み出される幻影と相対的な歪みが、ユランチアの星観察者の何らかの混乱を生じている。

15:3.8 (168.4) 1. その太陽の周りのユランチアの公転。

15:3.9 (168.5) 2. かつてのアンヅラノウヴァー星雲の核の周りのあなたの太陽系の回路。

15:3.10 (168.6) 3. ネバドンの星雲の回転-重力からなる中心の周りのアンヅラノウヴァーの恒星群とその関連する一団の自転。

15:3.11 (168.7) 4. ネバドンの局部星雲とその小領域の射手座の中心周辺のその関連創造の揺れ。

15:3.12 (168.8) 5. それらの主要な領域周辺の、射手座を含む100小領域の回転。

15:3.13 (168.9) 6. 主要10領域の渦、オーヴォントンのユヴァーサ本部周辺のいわゆる星流。

15:3.14 (168.10) 7. 楽園とハヴォーナ周辺のオーヴォントンと関連する6超宇宙の動き、すなわち超宇宙空間段階の反時計回りの前進。

15:3.15 (168.11) これらの複数の動きは、いくつかの系列からのものである。あなたの惑星と太陽系の空間軌道は、最初からあり起源において固有である。オーヴォン　トンの反時計回りの絶対的動きもまた最初からあり、主たる宇

宙の建築計画において固有である。中間の動きは、一部は超宇宙への物質-エネルギーの構成区分に由来しており、一部は楽園根源力の組織者による知的かつ目的ある活動により生み出される複合起源のものである。

15:3.16 (168.12) 地方宇宙は、ハヴォーナに接近するにつれより近づく。回路数はさらに増え、層ごとに増加した重ね合わせがある。しかし、永遠の中心から遠くなればなるほど体系、層、回路、および宇宙は、ますます少なくなるのである。

4. 星雲—宇宙の先祖

15:4.1 (169.1) 創造と宇宙構成は、絶えず無限の創造者とその提携者の支配下にある一方、現象全体は、規定の技法に基づき根源力、エネルギー、物質の重力法則に従い進展する。しかし、空間宇宙の根源力-補填に関連した神秘めいた何かがある。我々は、終局子の段階から先への物質的創造の組織化をかなり理解はしているものの、終局子の宇宙の祖先を完全に理解しているわけではない。
我々は、祖である根源力が、いつまでも楽園の正確かつ巨大な輪郭の中に広がる空間全体を揺れ動いているの

で、この祖の根源力には楽園起源があると確信している。楽園重力へ非反応であるが、明らかに下方楽園の中心の内外で周回している空間のこの根源力-補填、すなわちすべての物質化の祖は、常に下方楽園の臨場に対応している。

15:4.2 (169.2) 楽園根源力の組織者は、空間の潜在力を基本的な力に、そしてこの前物質の可能性を物理的現実の1次と2次エネルギーの発現に変える。このエネルギーが重力-反応段階に達すると、力の監督者とその超宇宙政権の仲間が、その場に現れ、時空の宇宙の様々の力の回路とエネルギー経路を定着させるために設計された果てしない操作を始める。このように物質は空間に現れ、宇宙組織化の開始のための舞台も設定されるのである。

15:4.3 (169.3) このエネルギー分割は、ネバドンの物理学者による解決が一度もなされたことのない現象である。生ける力の監督者は、空間-エネルギーの扱いにおいて 有能ではあるものの、とても巧みに、また知的に操るエネルギーの起源に関する概念をいささかも持っていないの

で、楽園根源力の組織者の相対的な近づき難さがそれらにとっての主たる困難さである。

15:4.4 (169.4) 楽園根源力の組織者は星雲創始者である。楽園根源力の組織者は、いったん始動すると瀰漫している根源力が、いずれ出現する宇宙物質の究極子の構成単位のために動員されるまで決して止められたり、または限られることはできないすさまじい根源力の旋風を空間臨場のまわりに起こすことができる。その結　果、渦巻星雲と他の星雲、直接-起源の太陽とそれらの様々な体系の母たる回転輪がもたらされる。外空間には宇宙の主たる発展の局面である異なる１０の星雲の型が見られ、これらの広大なエネルギー推進力は、7超宇宙におけるそれらのものが持っていた同じ起源を持っていた。

15:4.5 (169.5) 星雲は、その星と惑星の子孫の大きさにおいて、また結果として起こる数と総合質量において大いに異なる。オーヴォントンの境界のわずかに北にあり、それでも超宇宙空間段階内にある太陽を形成している星雲は、既におよそ4万の太陽に起源を与え、母なる推進力はまだ太陽を払いのけており、その大部分はあなたの太

陽の大きさの何倍もある。外空間のより大きい星雲の一部は、1億もの太陽の起源になりつつある。

15:4.6 (169.6) いくつかの地方宇宙が単一星雲の産物から組織化されはしたが、星雲は、小領域や地方宇宙などの行政単位のいずれにも直接的に関連はしていない。各地方宇宙は、星雲との関係に関わらず正確に超宇宙の総エネルギー補填の1/100,000を抱えている。というのも、エネルギーは星雲により組織化されるのではなく—普遍的に分配されている。

15:4.7 (170.1) 渦巻星雲のすべてが、太陽形成に従事するわけではない。渦巻星雲の一部は、その分離された星雲の多くの子孫の制御を維持しており、また星雲の渦巻の出現は、太陽が密集する星雲の腕から立ち去るが、さまざまの経路で戻ってくるという事実によって引き起こされる。その結果、ある点でそれらを観測することは簡単ではあるが、星雲の腕からはさらに遠く離れている異なる帰還経路に広く点在すると、それらを見る事は難しくなる。生息の超宇宙の外にあるアンドロメダは、非常に活発であるが、太陽-形成の活発な星雲は、現在オーヴォ

ントンには多くはない。このはるかに遠い星雲は肉眼で見えるし、あなたがそれを眺めるとき、見ている光は、およそ100万年前に遠方のそれらの太陽を去ったのだということを改めて考えなさい。

15:4.8 (170.2) 銀河系は、元渦巻星雲と他の星雲のおびただしい数からなり、多くがまだそれぞれの元の形状のままでいる。しかし、内部の大変動と外部の誘引力の結果として、そのような歪みと再配列に耐えてき　たこれらの途方もない集合体は、マゼラン星雲のような灼熱の太陽の巨大な発光体として出現させるほどであった。オーヴォントンの外縁近くを占拠しているのは、球形型の星団である。

15:4.9 (170.3) オーヴォントンの広大な星団は、銀河系の外部の空間地域において観察可能な別々の星雲に匹敵する物体の個々の集合体と見なされるべきである。しかしながら、空間のいわゆる星雲の多くがガス物質だけから成る。このガス状の星雲エネルギーの可能性は、信じられないほどに膨大であり、その可能性の一部分は、近くの

太陽に奪われ、太陽放射として空間に再び送り出される。

5. 空間本体の起始点

15:5.1 (170.4) 超宇宙の太陽と惑星に包含されている塊の大半が、星雲の渦から起こる。ほとんどの超宇宙質量は、力の監督者の直接行動により(建築球体の建設の際のように)組織化されるのではない。絶えず変わる物質量は空間において発生するのではあるが。

15:5.2 (170.5) 起源に関していえば、太陽、惑星、および他の球体の大部分は、次の10集団中の1つに類別できる。

15:5.3 (170.6) 1. 同心収縮輪。全ての星雲が渦巻状ではない。途方もない星雲が、二重星系に分かれるか、または渦巻きとして発展する代わりに、複数-輪の形成による凝縮を　　起こす。長期にわたり、そのような星雲は、包囲し、輪を生じる物質形成の多数のとてつもない一群に囲まれる巨大な中央の太陽として現れる。

15:5.4 (170.7) 2. 渦巻状の星は、非常に加熱されたガスの非常に大きな渦本体に投げ出されたそれらの太陽を抱きかか

える。それらは輪としてではなく、右巻きと左巻きの列状で投げ出される。渦巻状の星は、渦巻以外の星雲の起源もあるのである。

15:5.5 (170.8) 3. 重力-爆発惑星。太陽が、渦状星雲または棒状星雲から生まれるとき、往々にしてかなりの距離に放り出される。そのような太陽は高度にガス状であり、いくらか冷え凝縮した後に何らかの物質の膨大な質量、巨大な太陽、または空間の暗い島の近くでたまたま揺れるかもしれない。そのような接近は、衝突を引き起こすには十分な近さにはないかもしれないが、大きい物体の重力の引きが、小さい方の潮のひきつけを始め、その結果、激しく揺さぶられた太陽の反対側に同時に起こる一連の潮の大変動を開始する。これらの爆発噴火は、その絶頂において爆発中の太陽の重力-取り戻しの域を超えて映し出されるかもしれない一連の異なる規模の物質集合を発生させ、その結果、この出来事に関わる2体のうちの1体の自身の円周軌道に安定するようになる。後に、物質のより大きい集合体は、結合し徐々に小さい方の塊を引きつける。このようにより小さい体系固体惑星の多くが

生み出される。あなた自身の太陽系には、まさしくそのような起源があったのである。

15:5.6 (171.1) 4. 遠心惑星の娘。巨大な太陽は、ある発展段階にあるとき、またその回転の度合いが大きく加速するとき、親に当たる太陽の周りを回り続ける小さい世界のその後の形成のために組み立てられる大量の物質を振り払い始める。

15:5.7 (171.2) 5. 重力-欠乏球体。個々の星の大きさには限界がある。太陽がこの限界に達するとき、それは、回転の度合いが減速しない限り分裂する運命にある。太陽分裂が起こり、この種の新しい二重星が生まれる。多数の小惑星が、この巨大な分裂の副産物として引き続き形成されるかもしれない。

15:5.8 (171.3) 6. 拘縮星。より小さい体系においては、外側の最大の惑星は、時々その隣接世界を引きつけ、一方で太陽に近いそれらの惑星は、自身の末期の突入を始める。あなたの太陽系で、そのような終わりは、内側の4個の惑星が太陽に捉えられることを意味するであろうし、一方、大惑星、つまり木星は、残る世界を得ること

によりさらに拡大されるであろう。太陽系のそのような終わりは、2個の隣接するが不均衡の太陽つまり二重星構成の1つの型の生産をもたらすであろう。そのような大変動は、超宇宙の星の集合体の縁を除いては稀である。

15:5.9 (171.4) 7. 累積球体。小惑星は、空間を循環する広大な量の物質からゆっくりと蓄積するかもしれない。それらは、隕石増大と小規模の衝突により成長する。ある空間領域においては、状況が、そのような型の惑星誕生を有利にする。何と多くの生息界がそのような起源を持っていることか。

15:5.10 (171.5) 密集した暗い島々のいくつかは、空間での変形エネルギー増大の直接的結果である。これらの暗い島の他の一団は、空間を循環する膨大な量の冷たい物質、すなわち単なる断片と隕石の蓄積で生まれた。物質のそのような集合体は、一度も熱かったことはなく、密度を除いては成分の点で非常にユランチアに 似通っている。

15:5.11 (171.6) 8. 燃え尽きた太陽。空間のいくつかの暗い島は、すべての利用可能な空間エネルギーが放出されてし

まった燃え尽きた孤立の太陽である。物質の組織化された構成単位は、完全な凝縮、つまり事実上の完全な圧密に接近する。そして、それは、長きにわたり非常に圧縮された物質の巨大密集体が空間の回路で再補充されること、その結果、衝突あるいは新しい命を吹き込む宇宙のなにかの出来事に続く宇宙機能の新周期に備えることを必要とする。

15:5.12 (171.7) 9. 衝突球体。より厚い群がりの領域においては、衝突は珍しくはない。そのような天文の再調整には、凄まじいエネルギー変化と物質変化が伴う。死の太陽をもたらす衝突は、広範囲のエネルギー変動の引き起こしに特に影響力がある。衝突の残骸は、人間の居住地にふさわしい惑星本体のその後の形成のため　にしばしば物質の核を構成する。

15:5.13 (172.1) 10. 建築世界。これは、例えばあなたの地方宇宙の本部であるサルヴィントンや我々の超宇宙政府の所在地であるユヴァーサなどの何らかの特別な目的の計画と仕様に従って造られる世界である。

15:5.14 (172.2) 進化中の太陽や、分離中の惑星のための他の多くの方法があるが、前述の手順は星の体系と惑星群の大多数が生み出される方法を示している。星の変化と惑星の進化にかかわるすべての様々な方法についての説明を引き受けるということは、太陽構成と惑星の起源についてのおよそ100の異なる様式の叙述を必要とするであろう。あなたの星の研究者が、天上を走査するとき星の進化の全様式を暗示する現象を観測するが、広大な物質的創造の最重要の生息惑星として役目を果たすそれらの小さい、非発光物質の集塵形成の証拠はめったに発見しないであろう。

6. 空間の球体

15:6.1 (172.3) 空間の様々な球体は、起源に関係なく次の主要部分に類別される。

15:6.2 (172.4) 1. 太陽—空間の星。

15:6.3 (173.1) 2. 空間の暗い島。

15:6.4 (173.2) 3. 空間の小天体—彗星、隕石、および微小惑星体。

15:6.5 (173.3) 4. 惑星、生息世界を含む。

15:6.6 (173.4) 5. 建築球体—注文によりできた世界。

15:6.7 (173.5) 建築球体は例外としてすべての空間本体には、進化の起源がある。神格の命令により生み出されたのではないという意味における進化、神の創造的行為が、創造され、そして結果的に生じた多くの神格の有識者の操作を通して時-空の方法により繰り広げられてきたという意味における進化。

15:6.8 (173.6) 太陽。これらは様々な存在の各段階すべてにある空間の星である。一部は、進化している単独の宇宙体系である。その他は、二重星、すなわち　収縮しているまたは消滅している惑星系である。空間の星は少なくとも1,000の異なる状態と段階に存在する。あなたは熱を伴う光を放つ太陽に馴染みがあ　る。しかし、熱をもつことなく光り輝く太陽も存在するのである。

15:6.9 (173.7) 普通の太陽が、何兆年もの間熱と光を配り続けるであろうということを各物質単位の有する膨大なエネルギーの蓄えがよく例証している。目に見えないこれら

の物質粒子に蓄えられた実際のエネルギーは、ほとんど想像を絶している。このエネルギーは、燃えるような太陽の内部に広がるすさまじい熱の圧力と関連エネルギーの活動にさらされると、光としてほぼ完全に利用可能になる。さらに他の状況が、これらの太陽が確立された空間回路における太陽の方向に来る空間エネルギーの多くを変えたり、送りだしたりすることを可能にする。物理的エネルギーの多くの局面と物質の多くの型が、太陽のエネルギー発生体に引きつけられ、次にはその発電作用により分散される。このように、エネルギー流通の局所の加速体として、自動の力-制御局として機能して役目を果たす。

15:6.10 (173.8) オーヴォントンの超宇宙は、10兆以上の燃えるような太陽に照らされ、暖められる。これらの太陽は、観察可能なあなたの天文体系の星である。2兆以　上もが、ユランチアから見るにはあまりにも遠方過ぎるし小さ過ぎるのである。しかし、主たる宇宙には、あなたの世界の海水をコップで量るのと同程度の多くの太陽がある。

15:6.11 (173.9) 空間の暗い島々。これらは、死んだ太陽と光と熱を欠く物質からなる他の大集合体である。暗い島々は、時として巨大な質量であり宇宙均衡とエネルギー操作において強力な影響を及ぼす。これらの大きい塊のうちのいくつかの密度は、信じ難いほどである。そして、この大質量の凝縮は、これらの暗い島々が、隣接する大きい体系を効果的な綱状に保持し強力な転輪として機能することを可能にする。これらの暗い島々は、多くの星座の重力均衡を維持する。さもなければ近くの太陽で速やかに破壊に至るであろう多くの物理的体系が、これらの守りの暗い島々の重力把握にしっかりと保持される。我々が正確にそれらの場所を見つけられるのは、この機能のためである。我々は、発光体の重力牽引力を測定してきたし、従ってその進路において安定している任意の体系を保持するためにとても効果的に機能する空間の暗い島々の正確な大きさと位置について計算することができる。

15:6.12 (173.10) 小空間体。空間において循環し進化する物質の隕石と他の小粒子は、エネルギーと物質素材の巨大な集合体を構成する。

15:6.13 (173.11) 多くの彗星は、徐々に中央の支配的な太陽に押さえられる太陽のコマの確立されていない荒れた子孫である。また、彗星には、他の数多くの起源があ　る。彗星の尾は、非常に拡大されたそのガスの電気反応のために、また太陽から発する光と他のエネルギーの実際の圧力のために、引きつける物体または太陽の反対方向を指し示す。この現象は光の現実とその関連エネルギーの確証の1つとなる。それは、光に重さがあるということを明示する。光は単なる仮定のエーテ　ル波ではなく、本物の物質である。

15:6.14 (173.12) 惑星。これらは、太陽またはある他の空間体の周りの軌道を進むより大きい物質集合体である。その大きさは、微惑星からガス状、液状、または、固体の巨大な球体まである。浮遊する空間物質の集合により形成された冷たい世界は、近くの太陽とたまたま適切な関係にあるとき知力ある住人を育むのにより理想的な惑星である。死んだ太陽は、原則として、生命に適さわない。死んだ太陽は、生きて燃えているような太陽からは通常あまりにも遠く、あまりにも巨大であり過ぎる。表面の引力は猛烈である。

15:6.15 (173.13) あなたの超宇宙には、40個の冷えた惑星のうち1個としてあなたの系列の存在体の居住には適していない。もちろん、過熱状態の太陽と極寒の外郭にある　世界は、より高度の生命を育むには不向きである。あなたの太陽系の中では、現在のところ3惑星だけが、生命の育みに適している。ユランチアは、大きさ、密度、および位置などの多くの点で人間の居住には理想的である。

15:6.16 (173.14) 物理-エネルギー反応の法則は、基本的に普遍的であるが、地方からの影響は個々の惑星上と地方体系に広がる物理的条件に大きく関係している。創造物　の生命と現在の他の出現にみるすべてのほぼ無限の多様性は、空間の無数の世界を特徴づける。しかしながら、任意の体系に関連する世界の一集団には、知的な生命の宇宙形態もあり、幾つかの点の類似性もある。同じ物理的回路に属し、また宇宙の円の周りで無限の揺れにあって互いに密接に続くそれらの惑星体系の間には物理的な関係がある。

7. 建築球体

15:7.1 (174.1) 各超宇宙政府は、その空間区分の進化的宇宙の中心の近くで統治するが、別仕立ての世界を占拠しそこには公認の人格が住んでいる。これらの本部世界は、建築球体、すなわち空間にあるそれぞれの特別な目的のために特に構成された球体である。これらの球体は、近くの太陽の光を共有するとともに個々に照らされ加熱されている。それぞれは、球体の表面近くのエネルギー循環による熱の供給を受けるが、楽園の衛星のように熱のない光を発する太陽もある。これらの本部世界は、各超宇宙の天体の中心近くに位置するさらに大きい1体系に属する。

15:7.2 (174.2) 時間は、超宇宙の本部において標準化される。オーヴォントンの超宇宙の標準日は、ユランチア時間のおよそ30日間に等しく、オーヴォントンの１年は100標準日に等しい。ユヴァーサのこの１年は、第7超宇宙における標準であり、ユランチア時間の3,000日に22分不足しており、あなたの年数の約8 1/5年である。

15:7.3 (174.3) 7超宇宙の本部世界は、楽園の本質と威風、すなわち完全性の中枢様式を帯びている。実際には、本部世

界すべてが、楽園のようである。それらは、確かに天の住まいであるし、ジェルーセムから中央の小島までの物理的規模、モロンチアの美、および精霊の栄光は増大しているのである。また、これらの本部世界の全衛星が建築球体である。

15:7.4 (174.4) 様々な本部世界には、有形無形の創造のあらゆる局面が与えられている。物質の、モロンチアの、精霊の全種類の存在体が、宇宙のこれらの待ち合わせの世界の家にいる。創造物が、物質的領域から精霊的領域へと通過して宇宙を昇るとき、自身の存在の前段階への敬意とその楽しみを決して失わ ないのである。

15:7.5 (174.5) ジェルーセム、サタニアのあなたの地方体系の本部は、7個の変遷文化の世界をもち、これらの世界は、モロンチア拘留のための7大邸宅世界、つまり死後の人間の最初の住居がある７個の衛星に包囲されている。天国という用語がユランチアで使用されたとき、それは、時として第１大邸宅世界が第１の天国などと第７まで命名されてこれらの７個の大邸宅世界を意味してきた。

15:7.6 (174.6) エデンチア、ノーラティアデクのあなたの星座本部には交流文化と訓練のための70個の衛星があり、上昇者は、ジェルーセムの訓練体制での人格の可動化、統一、および具現化の成就にあたりそこに滞在する。

15:7.7 (174.7) サルヴィントン、ネバドンの首都であるあなたの地方宇宙は、それぞれが49個の球体からなる10個の大学集団に囲まれている。ここにおいて、人は、自分の星座段階における社会化の後に精霊的になるのである。

15:7.8 (174.8) Uマイナー第3、あなたの小領域の本部エンサは、上昇者の生命のより高度の物理的研究の7個の球体に囲まれている。

15:7.9 (174.9) Uメイジャー第５、あなたの主要領域の本部スプランドンは、超宇宙の前進する知的訓練の70個の球体に囲まれている。

15:7.10 (175.1) ユヴァーサ、あなたの超宇宙であるオーヴォントンの本部は、上昇する意志をもつ創造物のための高度な精霊的訓練のより高度の大学にじかに囲まれている。驚異のこれら7個の各球体群は、時間の巡礼者がハヴォ

ーナへの長い飛行準備に向けて再教育され再検討されるための宇宙訓練と精霊文化に従事するための何千もの完備された団体と組織を有する70個の特化された世界を有する。到着しつつある時間の巡礼者は、これらの関連世界にいつも受け入れられるが、出発しつつある卒業生はいつも直接にユヴァーサの岸からハヴォーナへ派遣される。

15:7.11 (175.2) ユヴァーサは、およそ1兆の居住の、または居住可能な世界のための精霊活動の、そして行政の本部である。オーヴォントン首都の栄光、威風、および完全性は、時間-空間創造の驚きのいずれをも凌ぐ。

15:7.12 (175.3) もし映し出された全地方宇宙と構成部分が構築されたならば、7超宇宙には5,000億に満たない建築世界があるであろう。

8. エネルギー制御と規則

15:8.1 (175.4) 超宇宙の球体本部は、構成する地方宇宙へのエネルギーの方向づけの中心として機能し、様々な領域のための効果的な力-エネルギーの調整者として機能できるように構築されている。超宇宙の球体本部は、組織化

された空間を循環する物理的エネルギーの調整と制御への強力な影響を発揮する。

15:8.2 (175.5) 一層の調節機能が、この明確な目的のために構成される生ける実体、また半生物の知力ある実体である超宇宙の力の中心と物理制御者により実行される。これらの力の中心と制御者は理解が困難である。下級の系列は、意志的ではなく、意向をもたず選択をすることもなく、その機能は、非常に知的ではあるものの高度に専門化された組織においては明らかに自動的であり固有のものである。超宇宙の力の中心と物理制御者は、グラヴィタ領域を包括する30の　エネルギー体系の指示と部分的制御を担っている。ユヴァーサの力の中心に管理された物理-エネルギー回路は、超宇宙の包囲終了に9億6,800万年余りを要する。

15:8.3 (175.6) 進化するエネルギーには実体がある。重さは、回転速度、質量、および反重力により、常に相対的であるとはいえ、それには重さがある。物質の質量は、エネルギー速度を遅らせる傾向がある。また随所に呈するエネルギー速度は、通過中の質量に起こる遅延を差し引

き、超宇宙の活発なエネルギー制御者の制御的機能と近くの非常に加熱されたか、大いに補填された本体の物理的影響をつけ加えた初期の贈与の速度である。

15:8.4 (175.7) 物質とエネルギー間の均衡維持のための宇宙的計画は、より少ない物質単位の永遠的作成と非作成を必要とする。宇宙の力の監督者には、変化するエネルギーの量を凝縮したり留め置いたり、または拡大したり解放する能力がある。

15:8.5 (175.8) 遅延の影響に十分な持続時間が与えられ、次の２要因がなければ、重力は、結局はすべてのエネルギーを物質に変換するであろう。物質は、第一には、エネルギー制御者の反重力の影響から、第2には、組織化された物質は、非常に熱い星に見つけられるある条件下や凝縮物質の非常に通電された冷たい本体近くの空間のある独特の条件下においては崩壊する傾向の理由で。

15:8.6 (176.1) 質量が凝集され過ぎるようになったり、エネルギーの均衡を損ねる、つまり物理的な力の回路を使い果たす恐れがあるとき、エネルギーを物質化し過ぎる重力自体の助長傾向が、空間の死の巨人の間での衝突の発生

に敗れ、その結果、すぐさま重力の累積収集物を完全に消散しない限り、物理的制御者が介入する。物質の巨大な質量は、これらの衝突により突然稀有な型のエネルギーに変換され、普遍的均衡のための戦いが新たに始まる。やがて、より大きい物理的体系は安定化し、物理的に定着するようになり、超宇宙の均衡のとれた確立された回路へと振られる。この出来事の後、そのような確立された体系にはこれ以上の衝突　あるいは他の破壊的激変も起こらないであろう。

15:8.7 (176.2) 過剰エネルギー時代には、電気の発現に伴われた力の撹乱と熱の変動がある。過少エネルギー時代には、物質が集まり、凝縮したり、また、より微妙に釣り合った回路における制御がきかなくなる傾向があり、循環エネルギーとより具体的に安定した物質間の均衡を素早く復活させる結果に起こる潮の、あるいは衝突の調整を伴う。灼熱の太陽と空間の暗い島々のそのようなありうる動きを予測したり、別の方法で理解することは、天の星観察者の任務の1つである。

15:8.8 (176.3) 我々は、宇宙均衡を統治する法の大部分を認識し、宇宙の安定性に関し多くを予測できる。実際に、我々の予測は信頼できるが、我々はいつ　でもエネルギー制御と物質反応についての我々の知る法則に完全には従わないある種の力に直面する。すべての物理的現象予測は、我々が宇宙において楽園から外側へと進む　につれ、ますます難しくなる。我々が、楽園の支配者の個人的行政境界を越えるとき、近くの天文体系の物理的現象にだけ関係のある観測で確立された基準と得られた経験に基づく計算能力のなさに直面する。7超宇宙の領域においてでさえ、我々は、我々の全領域に瀰漫し、　外空間の領域全体に統一され均衡して広がる根源力とエネルギー反応の真っただ中に住んでいる。

15:8.9 (176.4) 我々が、遠くに行けば行くほど間違いなく絶対者と経験的神格の計り知れない臨場-挙行の特徴である変動的かつ予測し難い現象により確実に遭遇する。これらの現象は、万物の多少の普遍の総括的管理を暗示しているはずである。

15:8.10 (176.5) オーヴォントンの超宇宙は、どうやら今ねじが止まりつつあるらしい。外宇宙は他に例を見ない今後の活動のためにねじを巻いているかのようである。中央のハヴォーナ宇宙は永遠に安定している。重力と、熱（冷たさ）の不在が、物質を組織しまとめている。熱と反重力は、物質を混乱させエネルギーを散らす。生きている力の監督者と力の組織者は、宇宙の作成、非作成、再作成である無限の変貌への特別な制御と知的な指示の秘密である。星雲は分散し、太陽は焼き尽くされ、体系は消え失せ、惑星は滅ぶかもしれないが、宇宙は衰弱しない。

9. 超宇宙の回路

15:9.1 (176.6) 楽園の普遍的回路は、実際に7超宇宙の領域全体に行き渡る。これらの臨場回路は次の通りである。宇宙なる父の人格重力、永遠なる息子の精霊的重力、連合活動者の心の重力、および永遠の小島の物質的重力。

15:9.2 (177.1) 楽園の普遍的回路に加え、また絶対者と経験的神格の臨場-実行に加え、超宇宙空間段階内においては

ただ2つのエネルギー-回路区分、あるいは力の分離だけが機能する。超宇宙回路と地方宇宙回路。

15:9.3 (177.2) 超宇宙回路：

15:9.4 (177.3) 1. 楽園の主たる7精霊のうちの１つの統一的知性回路。そのような宇宙-心の回路は、単一の超宇宙に制限される。

15:9.5 (177.4) 2. 各超宇宙における7反射精霊の反射的-貢献回路。

15:9.6 (177.5) 3. 神秘訓戒者の秘密の回路、ディヴィニントン経由にて楽園の宇宙なる父に何らかの形で相互に関連して。

15:9.7 (177.6) 4. 自身の楽園なる息子との永遠なる息子の親交回路。

15:9.8 (177.7) 5. 無限の精霊の瞬間的臨場。

15:9.9 (177.8) 6. 楽園の放送、ハヴォーナの空間報告。

15:9.10 (177.9) 7. 力の中心と物理制御者のエネルギー回路。

15:9.11 (177.10) 地方宇宙回路：

15:9.12 (177.11) 1. 楽園の息子の贈与の精霊、贈与世界の慰安者。真実の精霊、ユランチアのミカエルの精霊。

15:9.13 (177.12) 2. 神性活動者の回路、地方宇宙の母なる精霊、あなたの世界の聖霊。

15:9.14 (177.13) 3. 地方宇宙の諜報-奉仕活動の回路、心-精霊の補佐のさまざまに機能している臨場を含む。

15:9.15 (177.14) その個々の結合された回路が超宇宙のものとは区別がつかなくなるほどに地方宇宙におけるそのような精霊的調和が発展すると、すなわち、そのような機能の独自性と奉仕活動の一体性が確かに行き渡ると、地方宇宙は、すぐに超創造の完成統合の精霊的同盟者への仲間入りの資格が出来、すぐに光と生命の定着回路に向かって方向を変えるのである。日の老いたるものの協議会入会のための必要条件、超宇宙同盟者の構成員資格は次の通りである。

15:9.16 (177.15) 1. 物理的安定性。地方宇宙の星と惑星は平衡状態でなければならない。周辺の星の変成期間は終了しな

ければならない。宇宙は明確な進路上を進んでいなければならない。その軌道は安全に、最終的に定まらなければならない。

15:9.17 (177.16) 2. 精霊的忠誠心。そのような地方宇宙の問題を統括する神の君主たる息子への普遍的な認識と忠誠がなければならない。地方宇宙全体の個々の惑星、体系、星座との円満な協力態勢が生まれなければならない。

15:9.18 (177.17) あなたの地方宇宙は、超宇宙の定着した物理的系列に属していると見なされてさえおらず、ましてや、超政府の認識された精霊的な家族の構成員資格を保持しているとは見なされてはいない。ネバドンにはいまだユヴァーサに代表がおらず、私が直接ユヴァーサからユランチアに来たように、超宇宙政府の我々は、時として緊急に特別任務でその世界に派遣される。我々は、難しい問題解決においてあなたの監督者と支配者にすべての可能な力を貸す。我々は、あなたの宇宙　が超宇宙家族の関連創造への完全な承認を得られることを願ってやまない。

10. 超宇宙の支配

15:10.1 (178.1) 超宇宙の本部は、時空の領域の高度の精霊的政府の中枢である。三位一体の協議会に起源をもつ超政府の行政府は、楽園権威の座に就き、無限の精霊の7 個の特別な世界、つまり楽園の一番はずれの衛星に配置されている７最高幹部を通して超宇宙を管理する最高監督の任にある主たる7精霊のうちの１名の直接的指揮を受ける。

15:10.2 (178.2) 超宇宙本部は、反射精霊と反射像の補佐の居所である。これらの驚異の存在体は、この中途の位置から途方もない各反射操作を行い、上の中央宇宙と下の地方宇宙への活動奉仕をする。

15:10.3 (178.3) 各超宇宙は、3名の日の老いたるもの、つまり超政府の共同最高幹部に統治される。その行政府における超宇宙政府の職員は、異なる7集団から成る。

15:10.4 (178.4) 1. 日の老いたるもの

15:10.5 (178.5) 2. 英知の遂行者

15:10.6 (178.6) 3. 神性顧問

15:10.7 (178.7) 4. 宇宙検閲官

15:10.8 (178.8) 5. 強力な使者

15:10.9 (178.9) 6. 権威の高いものたち

15:10.10 (178.10) 7. 名前と番号を持たないものたち

15:10.11 (178.11) 3名の日の老いたるものは、30億の神性顧問が関連する10億の英知の遂行者を有する部隊の直接的補佐をうける。宇宙の10億の検閲官は、各超宇宙行政に所属している。これらの3集団は、等位の三位一体の人格であり、楽園の三位一体に直接に神々しい起源がある。

15:10.12 (178.12) 残る3系列は、つまり強力な使者、権威高きものたち、名前と番号を持たないものたちは、栄光の上昇する人間である。これらの系列の１番目は、上昇訓練を経て上って来てグランドファンダの時代にハヴォーナを通過した。楽園到達後、それらは、終局者部隊に召集され、楽園三位一体に迎え入れられ、次に、日の老いたるものの崇高な勤労に割り当てられた。これらの3系列は、二重の起源であるが、　今は三位一体の勤労に従事している１階級として、つまり功績の三位一体化の息子として知られている。超宇宙政府の行政機関は、進化世

界からの栄光を浴し、完全にされた子らを含むようにこのように拡大されたのである。

15:10.13 (178.13) 超宇宙の等位の協議会は、先に名づけられた７行政集団と次のような領域支配者と局所監督者からなる：

15:10.14 (179.1) 1. 日の完全なるもの—超宇宙の主要領域の支配者

15:10.15 (179.2) 2. 日の若きもの—超宇宙の小領域の指揮官

15:10.16 (179.3) 3. 日の和合なるもの—地方宇宙の支配者への楽園助言者

15:10.17 (179.4) 4. 日の誠実なるもの—星座政府のいと高きものの支配者への楽園顧問

15:10.18 (179.5) 5. 超宇宙本部でたまたま勤務中であるかもしれない三位一体の教師たる息子

15:10.19 (179.6) 6. 超宇宙本部にたまたまいるかもしれない日の永遠なるもの

15:10.20 (179.7) 7. 反射像の７補佐— 7反射精霊の広報担当官と７反射精霊を通しての楽園の主たる7精霊の代表

15:10.21 (179.8) 反射像の補佐は、超宇宙政府で有力であるが、個々の能力においては現在のところ完全に活発ではない存在体の多集団の代表としても機能する。この集団は次の通りである。崇高なるものの超宇宙人格の進展的顕現、崇高なるものの無条件の監督者、究極者の条件付きの代理、威儀仙の連絡係である無名の反射するもの、および永遠なる息子の超人格精霊の代表。

15:10.22 (179.9) 必ず非創造物の全集団の代表を超宇宙の本部世界に見つけることはほぼ可能である。超宇宙の所定の奉仕活動は、強力な第二熾天使と無限の精霊の広大な家族の他の構成員により果たされる。普遍的生活のあらゆる球体の知力あるものは、超宇宙の行政、制御、奉仕活動、執行判断の驚異のそれぞれの中心の仕事において効果的勤労、賢明な行政、愛の奉仕活動、および正しい判断に結びついている。

15:10.23 (179.10) 超宇宙はいかなる種類の大使の代理も留め置かない。それらは完全に互いから孤立している。それら

は主たる7精霊により維持される楽園の広報機関を通じてしか互いの事情を知らない。宇宙の創造の他の区域で何が生じているかに関わらず、それらの支配者は自身の超宇宙の福利のために神性の英知の協議組織で働いている。超宇宙のこの孤立は、それらの協調が進化している経験的崇高なるものの人格-主権のより完全な事実化により達成されるそのような時まで持続するであろう。

11. 審議会

15:11.1 (179.11) 完全性の独裁政治の代表と進化の民主主義の代表が面と向かい会うのはユヴァーサのような世界においてである。超政府の行政部門は完全性の領域で始まる。立法部門は進化的宇宙の開花を端緒としている。

15:11.2 (179.12) 超宇宙の審議会は、本部世界に限られている。この立法上の、または、顧問の機関は、7議会から成り、超宇宙協議会に認められたどの地方宇宙も1名の出身代表者を各7議会に選出する。これらの代表は、ハヴォーナへの輸送を許されたユヴァーサに滞在中のオーヴォントン上昇の巡礼者の卒業生の中からそのような地方

宇宙の高等協議会により選ばれる。勤労平均期間は、超宇宙標準時のおよそ100年である。

15:11.3 (180.1) 私は、いまだかつてオーヴォントン幹部とユヴァーサ審議会との意見の相違を知らない。超政府の行政部門が、実行することさえためらった提案を通過した審議会というものは、我々の超宇宙の歴史においてこれまでのところまだない。最も完全な調和と労働協定がいつも行き渡ってきた。このすべてが、進化の存在体は、完全な起源の人格と神性とを調和する資格を与える完成された知恵の高さに本当に達することができるという事実を証明する。超宇宙本部における審議会の臨場は、宇宙なる父と永遠なる息子に関する広大な進化の概念全体からの知恵を明らかにし、また究極の勝利を予示する。

12. 最高裁判所

15:12.1 (180.2) 我々がユヴァーサ政府の行政と審議会と言えば、あなたは、ユランチアの民間政府のある種の型との類推から我々が３番目の、または司法機関を持たなければならないと推論するかもしれないし、我々はそうする。しかし、それには別個の要員はいない。我々の法廷

は以下のように構成される。状況の性質と重大さに応じて、日の老いたるもの、英知の遂行者、または神性顧問が議長を務める。個人、惑星、体系、星座、または宇宙にとっての証拠、または反証は、検閲官により提示され解釈される。時間と進化の惑星の子供の防衛は、強力な使者、地方宇宙と体系への超宇宙政府の公式監視員により提供される。より高度の政府の態度は権威高きものたちにより描写されている。また通常、評決は、審議　会から選ばれた理解ある人格集団と名前と番号を持たないものたちとの同数で成る規模の異なる委員会によりまとめられる。

15:12.2 (180.3) 日の老いたるものの法廷は、全構成宇宙の精霊的な裁決のための高等再審裁判所である。地方宇宙の君主たる息子は、自身の領域において最高である。地方宇宙の君主たる息子は、意志の創造物の消滅にかかわる事柄を除き、日の老いたるものによる協議または裁決のために自発的に案件を提出する限り超政府に従属する。裁きの命令は、地方宇宙に源を発するが、意志の創造物の消滅に絡む判決は、つねに超宇宙本部においてまとめられ、そこから執行される。地方宇宙の息子は人間の生存

を命じることができるが、ただ日の老いたるものだけが永遠の生と死の問題に執行裁決を下すことができる。

15:12.3 (180.4) 日の老いたるもの、またはその准共同者が、裁判、つまり証拠提出を必要としない全てにおいて判決を言い渡し、また、これらの判決はいつも満場一致である。我々は、ここで完全性の協議組織を論じている。これらの最高の、最上級の裁決機関の判決には意見の相違も少数派意見もない。

15:12.4 (180.5) 超政府は、まれにある種の例外はあるものの各領域の万事万物を管轄する。日の老いたるものの意見と関与する超宇宙の将来の目的を統括する楽園からの主たる精霊の意見の一致を示すので、超宇宙当局の裁定と決定は上告できない。

13. 領域の政府

15:13.1 (181.1) 主要領域は、超宇宙のおよそ1/10を構成し、100の小領域と1万の地方宇宙、およそ1,000億の居住に適した世界から成る。これらの主要領域は、3名の日の完全なるもの、崇高なる三位一体の人格に統治されている。

15:13.2 (181.2) 日の完全なるものの法廷は、領域での精霊的な判断を下さないことを除いては、日の老いたるもののそれのように構成されているのである。これらの主要領域の政府の仕事は、主として広範囲の創造の知力の状態と関係がある。主要領域は、日の老いたるものの法廷に報告に向けてすぐさま領域の精霊的行政に、あ　るいは楽園支配者の人間-上昇計画の完遂に関係しない型通りの行政上の性質に重要な超宇宙の問題すべてを留めおき、免じ、表にする。主要な領域の政府職員は、超宇宙のそれとは異ならない。

15:13.3 (181.3) ユヴァーサの壮大な衛星がハヴォーナへのあなたの最終的な精霊的準備に取り組むように、Uメイジャー第5の70個の衛星も、超宇宙におけるあなたの知力の訓練と発達に全力を尽くすのである。弛みなく働く賢明な存在体が、時間の必滅者を全オーヴォントンから永遠の経歴へと一層の進歩にむけて準備させるために集められる。上昇する人間のこの訓練の大部分が70個の研究世界で行われる。

15:13.4 (181.4) 小領域の政府は3名の日の若きものにより統括される。その行政は、主に構成する地方宇宙行政の物理的制御、統一、安定化、および日常的調整に関係がある。各小領域は、100の地方宇宙、1万の星座、100万の体系、またはおよそ10億個におよぶ居住に適した世界を有する。

15:13.5 (181.5) 小領域の本部世界は、熟練した物理制御者の壮大な集合場所である。これらの本部世界は、超宇宙の入り口にあたる最初の学校を構成し、宇宙の中の宇宙に関係する物理と管理に関する知識のための訓練の中心である7個の教育球体に囲まれている。

15:13.6 (181.6) 小領域政府の行政者は、主要領域支配者の直接的支配権下にある。日の若きものは、三位一体の観察者、そして助言者として地方宇宙の本部球体に配置される日の和合なるものから、また星座の本部において同様にいと高きものの協議会に所属する日の誠実なるものから超宇宙に上がってくるすべての観測報告を受け取るし、すべての推薦を調整する。そのような報告すべてが、主要領域の日の完全なるものに伝えられ、続いて日

の老いたるものの法廷に回される。こうして三位一体政権は、地方宇宙の星座から超宇宙本部に広がってある。地方体系本部には三位一体の代表はいない。

14. 7超宇宙の目的

15:14.1 (181.7) 7超宇宙の発展において繰り広げられつつある主要目的が、７件ある。超宇宙発展における各主要目的は、7超宇宙のそれぞれに唯一最大限に現れるであろうし、各超宇宙には特別な機能と独自の本質がある。

15:14.2 (182.1) あなたの地方宇宙が属するオーヴォントン、つまり第7超宇宙は、主には領域の人間にへの慈悲深い奉仕活動からの著しく、しかも惜しみない贈与により知られている。正義は、慈悲により和らげられるとき行き渡り、力は、忍耐により条件づけられるとき支配する様式で知られており、一方時間の犠牲は、永遠の安定化を惜しげなく保証される。オーヴォントンは愛と慈悲の宇宙の実証である。

15:14.3 (182.2) しかしながら、オーヴォントンにおいて展開している進化の目的の本質についての我々の概念の説明はとても難しいものであるが、我々は、この超創造に関し

宇宙発展の特異な6個の目的が、6個の関連した超創造に表されるように全体の意味に相関的にここにあると感じると言うことを提唱できるかもしれない。そして、我々は、この理由から、崇高なる神の進化され完成された人格化が、全能主権の全経験に基づく威厳において完成された7超宇宙を遠い将来にユヴァーサから統治すると時々推測してきた。

15:14.4 (182.3) オーヴォントンは本質的に特異であり、目標においては個別であるように、6個の関連する各超宇宙も同様である。しかしながら、オーヴォントンで起きている多くは、あなたには明らかにされないし、オーヴォントンの生命のこれらの非啓示の特徴の多くは、他のいくつかの超宇宙において大部分が完全に現れるはずである。超宇宙発展の７個の目標が、全７超宇宙で達成されようとしているが、超創造のそれぞれは、これらの目標の中の唯一つに最もよく現れるであろう。これらの超宇宙目標に関しさらに理解するためには、あなたが理解していない多くが明らかにされなければならないであろうし、その場合でも、あなたは、少ししか理解しないであ

ろう。この報告全体は、あなたの世界と地方体系の一部分である膨大な創造の一瞥の提示にすぎない。

15:14.5 (182.4) あなたの世界はユランチアと呼ばれ、それはサタニアの惑星群、または体系の606番である。この体系には、現在のところ、619の生息世界があり、200以上の追加惑星は、いつか将来に生息世界になることに向けて発展している。

15:14.6 (182.5) サタニアにはジェルーセムと呼ばれる本部世界があり、それはノーラティアデクの星座体系24番である。あなたの星座であるノーラティアデクは、100の地方体系から成り、エデンチアと呼ばれる本部世界を持っている。ノーラティアデクは、ネバドンの宇宙の中の70番である。ネバドンの地方宇宙は、100の星座から成り、サルヴィントンとして知られる首都を持つ。ネバドンの宇宙は、小領域エンサの84番である。

15:14.7 (182.6) エンサの小領域は100の地方宇宙から成り、Uマイナー第３と呼ばれる首都を持つ。この小領域はスプランドンの主要領域の3番である。スプランドンは100の小領域から成り、Uメイジャー第5と呼ばれる本部世界を

持つ。それはオーヴォントンの超宇宙の5番目の主要領域、すなわち壮大な宇宙区分7番目である。あなたは、このようにして宇宙の中の宇宙の組織と行政の計画において自分の惑星の場所を定めることができる。

15:14.8 (182.7) 壮大な宇宙のあなたの世界であるユランチアの番号は、5兆3,424億8,233万7,666番である。それはユヴァーサと楽園の登録番号であり、生息一覧のあなたの番号である。私は物理-球体の登録番号を知っているが、それは、それほどまでに並はずれた大きさであるので人間の心に実用的な意味を持ちはしない。

15:14.9 (183.1) あなたの惑星は、途方もない宇宙の一部分である。あなたは、ほとんど無限大の家族に属しているが、あなたの球体は、まるで全存在のなかの唯一の生息界と同程度に的確に治められ同程度に愛情を込めて育てられているのである。

15:14.10 (183.2) [ユヴァーサ出身の宇宙検閲官による提示]

論文 16
主たる7精霊

16:0.1 (184.1) 楽園の主たる7精霊は無限の精霊の第一人格である。無限の精霊は、自己複製のこの七重の創造的行為において神格の3人格の実際の存在に数理的固有である結合の可能性を使い切った。より多くの主たる精霊を産することが可能であったならば、創出されていたことであろうが、3名の神格には、ちょうど7つの、そしてたった7つの結合しやすい可能性が ある。そして、これが、宇宙がなぜ7つの壮大な部分で操作されるのか、なぜ第七がその組織と行政においておおむね基本的であるかを説明しているのである。

16:0.2 (184.2) 主たる7精霊は、その結果、次の類似する7つに起源があり、そこからそれぞれの個々の特性を得る:

16:0.3 (184.3) 1. 宇宙なる父

16:0.4 (184.4) 2. 永遠なる息子

16:0.5 (184.5) 3. 無限の精霊

16:0.6 (184.6) 4. 父と息子

16:0.7 (184.7) 5. 父と精霊

16:0.8 (184.8) 6. 息子と精霊

16:0.9 (184.9) 7. 父、息子、精霊

16:0.10 (184.10) 我々は、主たる精霊の創造における父と息子の機能に関してあまり知らない。明らかに、それらは無限の精霊の個人的行為により存在にいたったのではあるが、我々は父と息子の両者がそれらの起源に参加したということを明確に教示されてきた。

16:0.11 (184.11) 楽園のこれらの７精霊は、精霊の特徴と資性において一つであるが、他のすべての側面における独自性は極めて異なっており、超宇宙における各機能の成果は、個々の違いが紛れもなく認識できるというそのようなものである。壮大な宇宙の全７区分の後計画は—外空間の7相関区分で さえも—崇高的かつ究極的指揮のこれらの主たる7精霊の別の精霊的多様性により条件づけられてきた。

16:0.12 (184.12) 主たる精霊には多くの機能があるが、現在のところ、その特定分野は、7超宇宙の中央の指揮である。各主たる精霊は、巨大な力-焦点の本部を維 持し、本部

は、直接指揮の超宇宙の反対側に、また、専門化しているその力の制御と部分エネルギー分配の楽園の中心にいつも位置を維持しつつ楽園の周辺を回っている。超宇宙のうちのいずれか1つの放射状の境界線も、監督している主たる精霊の楽園本部に実際に集まるのである。

1. 三位一体の神格との関係

16:1.1 (185.1) 連合創造者、無限の精霊は、三位一体の分割されない神格の人格化の完成に必要である。この三重神格の人格化は、本質的に個々の、そして結合しやすい表現の可能性において七重である。したがって、知的で潜在的に精霊的な存在体が生息する宇宙創成のその後の計画は、父、息子、および精霊を適正に表現する主たる7精霊の人格化を不可避にした。我々は神の三重の人格化を絶対必然性として話すようになり、加えて主たる7精霊の到来を準絶対的必然性 と見なすようになった。

16:1.2 (185.2) 主たる7精霊は、三重の神格をほとんどあらわにしていないが、それらは、七重の神格の永遠の描写、つまり3人格が絶えず存在する神格の活発で結合しやすい機能であ　る。これらの７精霊により、これらの７精霊

の中に、またこれらの７精霊を介して、宇宙なる父、永遠なる息子、あるいは無限の精霊、またはどの2者関係もそういうものとして機能することができる。父、息子、精霊がともに行動するとき、それらは三位一体としてではなく、主たる精霊第七号を通して機能できるし、機能する。主たる精霊は、三位一体ではなく、集合体ではなく、一つの、そして幾つ　かの、ありとあらゆる可能な神格機能を、個々に、集合的に表す。主たる精霊第七号は、楽園三位一体に関しては個人的に非機能的であり、また、これこ　そが、崇高なるもののために個人的に機能することができる理由である。

16:1.3 (185.3) 主たる7精霊が、個人的権力と超宇宙権威の個々の政権の座を空け、楽園神格の三位一体の前で連合活動者の周りに集合するとき、発展する宇宙への、またその中の分割されない神格—三位一体—の機能的な力、英知、および権威をすぐさま集合的に代表しているのである。神格の第一の七重の表現のそのような楽園統合は、崇高性と終局性の中の永遠の神格三者の属性と態度のすべてを実際に抱擁しており、文字通り取り囲んでいる。たちどころに、主たる7精霊は、主たる宇宙での崇高者-

究極者の機能領域を事実上すべての実用的な趣旨および目的を包含する。

16:1.4 (185.4) これらの７精霊は、我々が理解できる限りでは、神格の3名の永遠の人格の神性活動に関係している。我々は、絶対者の永遠の3局面の機能的臨場との何の直接的関連の徴候も発見しない。主たる精霊は、結合するとき、動作の有限領域として大まかに考えられるかもしれない点において楽園の神格の代理をする。それは、究極であるもの、しかし、絶対でないものを多く包含するかもしれない。

無限の精霊との関係

16:2.1 (185.5) 永遠で最初の息子が、絶えず増加する神格の息子の人格を通して明らかにされるのと同様に、無限で神性の精霊も、主たる7精霊とその関連する精霊集団の経路で明らかにされる。中心圏の真ん中では無限の精霊には近づきやすいが、楽園に達するもの全員が、無限の精霊の人格と分化された臨場をすぐに識別できるというわけではない。しかし、中央宇宙に達するもの全員は、到着したばかりの宇宙の巡礼者がくる超宇宙を統治する主

たる7精霊の1名とすぐに親しく交わることができるし、また交わったりする。

16:2.2 (186.1) 楽園なる父は、楽園なる父と息子が無限の精霊を通してのみ連合的に行動する一方で、宇宙の中の宇宙へはただ息子を介してのみ話す。無限の精霊は、楽園とハヴォーナの外においては、主たる7精霊の音声によってのみ話す。

16:2.3 (186.2) 無限の精霊は、楽園-ハヴォーナ体系内に人格臨場の影響を及ぼす。他の場所では、無限の精霊の個人的精霊臨場は、主たる7精霊の1者により、また1者を通して行使される。したがって、いかなる世界における、あるいは個人の中の第三根源と中枢の超宇宙の精霊の臨場は、その創造区分の監督上の主たる精霊の特異な本質により条件づけられるのである。逆に、精霊根源力と知性の結合線は、主たる7精霊を経て神格の第三人格へと内部に進む。

16:2.4 (186.3) 主たる7精霊は、第3根源と中枢の崇高-究極の属性を与えられている。各々が個別にこの授与を分かち合うとはいえ、主たる7精霊は、共同的に行動するときに

のみ全能、全知、遍在の属性を明らかにする。したがって、主たる7精霊のうちの何れといえどもあまねく機能することはできない。個人として、至高性と終局性のこれらの力の行使において個人としては各自が直接指揮の超宇宙に制限されている。

16:2.5 (186.4) 連合活動者の神性と人格に関してあなたに伝えてきたすべてが、神の贈与に従い、それぞれ異なる、しかも個々に特異な資質において壮大な宇宙の7区分に無限の精霊を非常に効果的に分配している主たる7精霊に同様に完全にあてはまる。したがって、無限の精霊の名前のいずれかを、あるいはすべてを7者の共同集団に当てはめるのは適切であろう。集合的に、それらは、準絶対の全段階において連合創造者と一つなのである。

3. 主たる精霊の独自性と多様性

16:3.1 (186.5) 主たる7精霊は、筆舌に尽くし難い存在であるが、はっきりと、明らかに確かに精霊的である。それぞれに名前があるが、我々は、それらを番号で紹介することとする。無限の精霊の第一の人格化として、それらは同種であるが、三位一体の神格の7つの可能な関係の第

一の表現としては、資質の点においては本質的に異なり、資質のこの多様性が超宇宙における行為の差異を決定する。これらの主たる7精霊は次のように説明できるかもしれない。

16:3.2 (186.6) 主たる精霊第一号。この精霊は、特別な方法で楽園なる父の直接表現である。主たる精霊第一号は、宇宙なる父の力、愛、英知の独特かつ効率的顕現である。主たる精霊第一号は、神秘訓戒者、ディヴィニントンの人格化された調整者の専門大学を統括するその存在体の、長官の親しい仲間であり、崇高な助言者である。主たる7精霊のすべての関係において、いつも宇宙なる父を代表して話すのは、主たる精霊第一号である。

16:3.3 (186.7) この精霊は、よりいっそう特に性格の点においては宇宙なる父に似ているとはいえ、無限の精霊の第一の人格化の神性を示し第一超宇宙を統括している。この精霊は、いつも最初の超宇宙本部の7反射精霊とつねに個人的なつながりをもつ。

16:3.4 (187.1) 主たる精霊第二号。この精霊は、永遠なる息子の、全創造の長子の無類の資質と魅力ある性格を適切に

表している。神の息子らが個人として居住宇宙に、あるいは楽しげな秘密会議にたまたまいるかもしれないときは常に、神の息子らの系列と常に親密に交流している。主たる精霊第二号は、主たる7精霊の全審議会において永遠なる息子を代弁し、また永遠なる息子を代表して話す。

16:3.5 (187.2) この精霊は、超宇宙第二号の未来の目標に導き、永遠なる息子がするであろうようにこの広大な領域を支配する。超宇宙第二号の首都に位置する7反射精霊とつねにつながりをもつ。

16:3.6 (187.3) 主たる精霊第三号。この精霊人格は、無限の精霊に特に類似しており、無限の精霊の高い人格の多くの活動と仕事を指揮する。主たる精霊第三号は、審議会を統括し、第3根源と中枢に起源を取るすべての人格と密接に関わりをもつ。主たる7精霊が会議にあるとき、つねに無限の精霊を代表して話すのは、主たる精霊第三号である。

16:3.7 (187.4) この精霊は、超宇宙第三号を担当しており、無限の精霊がするであろうようにこの領域の問題を処理す

る。この精霊は、第三超宇宙の本部の反射精霊とつねにつながりをもつ。

16:3.8 (187.5) 主たる精霊第四号。父と息子の結合資質を分かち合うこの主たる精霊は、主たる7精霊の協議会における父-息子の方針と手順に関しての決定的影響者である。この精霊は、無限の精霊に達し、その結果、息子と父を見る候補になった上昇存在体の主席指揮官であり助言者である。この精霊は、父と息子に起源を取るその巨大集団の人格を育てる。主たる7精霊のつながりにおいて父と息子の代表が必要となるとき、いつも話すのは、主たる精霊第四号である。

16:3.9 (187.6) この精霊は、宇宙なる父と永遠なる息子の属性の独特の関係に従って壮大な宇宙の第4番区分を伸ばしている。この精霊は、第4超宇宙の本部の反射精霊とつねに個人的なつながりをもつ。

16:3.10 (187.7) 主たる精霊第五号。宇宙なる父と無限の精霊の性格を極めてすばらしく混合するこの神性人格は、力の指揮官、力の中枢、および物理制御者として知られる存在体のその巨大集団の助言者である。また、この精霊

は、父と連合活動者に起源を取るすべての人格を育成している。父-精霊の態度に問題があるときに主たる7精霊の協議会において話すのは、つねに主たる精霊第五号である。

16:3.11 (187.8) この精霊は、宇宙なる父と無限の精霊の結合活動を示すようにそのような方法において第5超宇宙の福利を導く。この精霊は、第5超宇宙の本部の反射精霊といつもつながりをもつ。

16:3.12 (187.9) 主たる精霊第六号。この神性存在体は、永遠なる息子と無限の精霊の結合性格を演じているようである。共同で息子と精霊に創出された創造物が、中央宇宙に集まるときはいつでも、その助言者であるのはこの主たる精霊である。また、主たる7精霊の協議会において永遠なる息子と無限の精霊について共同して話すことが必要になるときはいつでも、対応するのは主たる精霊第六号なのである。

16:3.13 (188.1) この精霊は、永遠なる息子と無限の精霊がするであろうように第6超宇宙の諸事を指揮する。この精霊

は、いつも第6超宇宙の本部の反射精霊とのつながりにある。

16:3.14 (188.2) 主たる精霊第七号。第7超宇宙を主宰する精霊は、宇宙なる父、永遠なる息子、そして無限の精霊の比類なく等しい描写である。第七精霊、三位一体起源の全存在体を養育する助言者もまた、父、息子、精霊の結びつけられた奉仕活動を介して栄光の宮中に達したそれらの下級の存在体であるハヴォーナの上昇巡礼者の助言者であり指揮者である。

16:3.15 (188.3) 主たる７精霊は、楽園三位一体を組織的に代表しているのではない。しかし、連合活動者が描くその神格統合が楽園の三位一体であり、その機能がそういうものとして崇高なる神の個人的かつ精霊的な本質の源である同比率の3名の無限の人格の肖像画が、主たる７精霊の個人的かつ精霊的な本質であることは周知の事実である。したがって、第七主たる精霊は、進展している崇高者の精霊人格との個人的かつ組織的な関係を明らかにする。したがって、天の主たる精霊協議会において、父、息子、あるいは精霊の人格的な結合された態度への投

票、あるいは崇高なる精霊の精霊的態度の描写が必要になるとき、機能するのは主たる精霊第七号である。その結果、主たる精霊第七号は、主たる7精霊の楽園協議会の議長になる。

16:3.16 (188.4) ７精霊のうちのいずれも楽園の三位一体を組織上代表してはいないが、それらが七重の神格に結合させるとき神性的意味における—人格的意味ではなく—この統合は、三位一体機能に関連しうる機能的段階に等しい。この意味において「七重の精霊」は、楽園の三位一体と機能上関連している。これはまた、主たる精霊第七号が、時として三位一体の態度の確認のために話す、あるいは、むしろ、三重の-神格-統合の態度に関して七重の-精霊-統合の態度の広報官として行動するという意味においてもである。

16:3.17 (188.5) その結果、主たる第七精霊の多彩な機能は、父、息子、精霊の人格的特質の結合描写から崇高なる神の人格的態度の表現を経て、楽園の三位一体の神格態度の公開にまで及ぶ。主宰するこの精霊は、ある点におい

て同様に究極者の態度と崇高者-究極者の態度について表現している。

16:3.18 (188.6) 複合能力において、崇高性の分割されない神格の理解への達成を試みる時間の世界からの上昇候補の進歩を個人的に後援するのは、主たる精霊第七号である。そのような理解は、崇高性の三位一体の実存的主権の把握を伴い、その把握は崇高なるものの増加している経験に基づく主権の概念に調整されるほどに崇高性の統一についての創造物の把握を構成する。これらの3要素の創造物の実現は、三位一体現実についてのハヴォーナの理解を等しくし、ついには、三位一体に入り込むための、神格の3人格を発見するための能力を時間の巡礼者に授ける。

16:3.19 (188.7) 完全に崇高なる神を見つけるハヴォーナ巡礼者の力の無さは、そのような独特の方法による三位一体の本質が崇高者の精霊人格の天啓である第七の主たる精霊によって補われる。崇高者の人格の接触不可能性の現宇宙時代に、主たる精霊第七号は、個人的な関係の問題に関し上昇の創造物の神の立場で機能する。すべての上昇

者は、いつ栄光の中心圏に達するかを認識し、いくらか理解することが確かである唯一の高位の精霊体である。

16:3.20 (189.1) この主たる精霊は、ユヴァーサとの、つまり我々自身の創造の区分である第7超宇宙の本部の反射精霊とつねにつながりをもつ。オーヴォントンの行政は、父、息子、精霊の同等の神性融合からの驚異的対称を明らかにする。

4. 主たる精霊の属性と機能

16:4.1 (189.2) 主たる7精霊は、進化宇宙への無限の精霊の完全な表現である。主たる7精霊は、エネルギー、心、および精霊の関係において第3根源と中枢を表す。連合活動者の宇宙行政管理の調整長として機能しているとはいえ、主たる7精霊には楽園神格の創造的行為においてそれらの起源があるということを忘れてはいけない。これらの７精霊が、三位一体の神格、「宇宙全体に送り出された神の７精霊」の人格化された物理的な力と、宇宙心と、精霊的臨場であるということは文字通り本当である。

16:4.2 (189.3) 主たる精霊は、絶対を除外すれば、宇宙の現実の全段階において機能するという点において特異である。それゆえ、主たる精霊は超宇宙活動の全段階における行政事務の全局面の効率的で完全な監督である。主たる精霊の仕事は、高度に専門化され、なおかつすべてを抱擁し、例外的に物質的であり、同時に非常にすばらしく精霊的であるがゆえに、主たる精霊に関しての理解は、人間の心には難しい。宇宙心のこれらの万能の創造者は、宇宙の力の監督者の先祖であり、彼ら自身が、広大かつ広範囲におよぶ精霊-創造物の創造の最高指揮官である。

16:4.3 (189.4) 主たる7精霊は、壮大な宇宙の物理的エネルギーの組織、制御、および調整に不可欠の実体である宇宙の力の監督者とその仲間の創造者である。そして同じ主たる精霊は、地方宇宙を形成し組織化する仕事においてまさに物質的に創造者たる息子を補佐する。

16:4.4 (189.5) 我々は、主たる精霊の宇宙-エネルギーの作業と無条件絶対者の根源力の機能の間のいかなる個人的なつながりも辿ることができない。主たる精霊の司法下にお

けるエネルギー顕現のすべては、楽園周辺から指示されている。主たる精霊は、いかなる直接方法においても楽園の下表面と同一視される根源力の現象に関連づけられているようには見えない。

16:4.5 (189.6) 様々なモロンチアの力の監督者の機能的な活動に出会うとき、紛れもなく、我々は、主たる精霊の明らかにはされていないある活動の幾つかと直面している。物理的制御者と精霊奉仕活動者双方のこれらの先祖を別として、誰が、宇宙現実のこれまで実在しない局面を作り出すほどに物質エネルギーと精霊エネルギーを結合し、関連づけることを考案することができたであろうか。—モロンチア物質とモロンチア心。

16:4.6 (189.7) 精霊界の現実の多くは、ユランチアには完全に未知の宇宙現実の位相であるモロンチア系列のものである。人格存在の目標は、精霊的であるが、必滅の起源の物質的領域と前進する精霊的状況の超宇宙球体間の架け橋をしてモロンチア創造につねに介入する。主たる精霊が、人の楽園の上昇計画に大きく貢献をするのがこの領域においてである。

16:4.7 (190.1) 主たる7精霊には、壮大な宇宙の至るところで機能する人格代表者がいる。だが、これらの従属存在体の大多数は、楽園完全性の行く手に人間の前進の上昇計画に直接関係がないので、それらに関してわずかしか、または何も明らかにはされていない。あなたの楽園上昇の問題に決して直接には関係しないので主たる7精霊の多くの、非常に多くの活動が、人間の理解からは隠されたままである。

16:4.8 (190.2) 我々は確たる証拠を提供することはできないが、オーヴォントンの主たる精霊は、次の活動範囲において紛れもない影響を与えるという公算が高い。

16:4.9 (190.3) 1. 地方宇宙の生命運搬者の生命-開始の手順。

16:4.10 (190.4) 2. 地方宇宙の創造の精霊により世界に与えられた心-精霊の補佐の人生起動。

16:4.11 (190.5) 3. 組織化物体の線形-重力の反応体により示されるエネルギー顕現における変動。

16:4.12 (190.6) 4. 無条件絶対者の握りから完全に解放され、その結果、線重力の直接的影響と宇宙の力の監督者とその

仲間の操作に反応するようになるときの発生エネルギーの動き。

16:4.13 (190.7) 5. ユランチアでは聖霊として知られている地方宇宙の創造の精霊の奉仕活動の贈与。

16:4.14 (190.8) 6. ユランチアでは慰安者、または真実の精霊と呼ばれる贈与の息子の聖霊のその後の贈与。

16:4.15 (190.9) 7. 地方宇宙と超宇宙の反射の仕組み。この並はずれた現象に結びつく多くの特徴は、連合活動者と崇高なるものと関連する主たる精霊の活動を仮定せずには、ほとんど正当に説明できないし、または、合理的には理解できない。

16:4.16 (190.10) 主たる7精霊の多様な作業についての我々の適切な理解への失敗にもかかわらず、我々は、それらがすべき何もない宇宙活動の広大な範囲に2領域があると確信している。思考調整者の贈与と奉仕活動、そして、無条件絶対者の計り知れない機能。

5. 創造物との関係

16:5.1 (190.1) 壮大な宇宙の各部分、つまりそれぞれの宇宙と世界は、あらゆる主たる7精霊の統一した助言から、そして英知からの利益を受けているものの、ただ１名の主たる精霊の個人的な接触と色合いを受ける。そして、各主たる精霊の人格的特徴は、自身の超宇宙全体に広がり他に類をみせない超宇宙を決定づける。

16:5.2 (190.1) 主たる7精霊のこの個人的な影響により、楽園とハヴォーナ以外の知的存在体の全系列に属する全創造物は、これらの楽園の７精霊のうちの誰かの先祖の性質からの個体性を示す個性ある烙印を付されなければならない。7超宇宙に関しては、それぞれの土着の創造物、人間もしくは天使は、出生識別のこの印をいつまでも有するであろう。

16:5.3 (191.1) 主たる7精霊は、進化の空間世界において直接的には個々の創造物の物質的な心に入り込まない。ユランチアの必滅者は、オーヴォントンの主たる精霊からの心-精霊の影響からくる個人的臨場を経験しない。もしこの主たる精霊が、生息界の初期の進化の時代に個々の人間の心とのなんらかの接触を成し遂げるとするならば、

それは、地方宇宙の創造の精霊の奉仕活動を、つまり各地方創造の将来の目標を統括する神の創造者たる息子の配偶者、および仲間の奉仕活動を通じて起こらなければならない。しかし、他ならぬこの創造の母なる精霊は、本質と性格においてオーヴォントンの主たる精霊によく似ている。

16:5.4 (191.2) 主たる精霊の物理的烙印は、人の物質的起源の一部である。モロンチア経歴全体は、この同じ主たる精霊の継続的影響下で送られる。そのような上昇する人間のその後の精霊的経歴が、決してこの同じ監督精霊の個性ある烙印を完全に根絶するというわけではないということは、奇妙とは言い難い。主たる精霊の押印は、人間上昇のあらゆる前ハヴォーナ舞台のほかならぬその存在の根幹をなすのである。

16:5.5 (191.3) 各超宇宙に特有であり、また支配している主たる精霊の本質を直接表わす特色ある進化的人間の人生経験において示される人格の傾向は、決して完全に削除されているわけではない。そのような上昇者が、ハヴォーナの10億の教育球体における長い訓練や統一的規律の従

属対象の後でさえも。その後の強烈な楽園文化さえも、超宇宙起源の目印を根絶するには十分ではない。上昇する人間は、全永遠にわたり、出身超宇宙を統括する精霊を暗示する特色を表すであろう。終局者部隊においてさえ、進化的創造との完全な三位一体関係に到着したり、あるいはそれを描くことが必要とされるとき、各超宇宙からの1名ずつの7終局者の一団が常時構成されるのである。

6. 宇宙心

16:6.1 (191.4) 主たる精霊は、宇宙心の七重の源、すなわち壮大な宇宙の知力の可能性である。この宇宙心は、第3根源と中枢の心の準絶対的なものの顕現であり、ある意味においては、発展している崇高なるものの心に機能上関係している。

16:6.2 (191.5) 我々は、ユランチアのような世界においては、主たる7精霊の人類の諸事に関しての直接的影響に巡り合わない。あなたは、ネバドンの創造の精霊の直接的影響下に生きている。にもかかわらず、これらの同じ主たる精霊は、時間と空間の進化世界に居住する個人の人生

における機能のために地方宇宙において専門化されてきた知的で精霊的な可能性の実際の源であるので、すべての創造物の心の基本的な反応を支配している。

16:6.3 (191.6) 宇宙心の事実が、様々の型の人間の、また超人的な心の関連を説明する。同類の精霊が互いに引きつけられるだけではなく、同類の心もまた非常に兄弟的であり、互いに協力へと傾いている。人間の心に驚異的な類似性と不可解な協定が同じ経路内で生じているのが時々観測される。

16:6.4 (191.7) 「現実反応」と呼べるかもしれない特質が、宇宙心のすべての人格関係に存在する。意志の創造物を科学、哲学、宗教の黙示の演繹的仮定の無力な犠牲者になることから救うのは、意志の全創造物へのこの宇宙の授与である。宇宙心のこの現実に対する感度は、ちょうどエネルギー-物質が重力に反応するように現実のある局面に反応する。したがって、超物質現実が宇宙の心に応じると言うのはなおさら正しいであろう。

16:6.5 (192.1) 宇宙心は、絶えず宇宙現実の3段階において反応する(反応を認識する)。これらの反応は、明確な理由づ

けと深い思考の心に自明である。これらの現実の段階は次の通りである。

16:6.6 (192.2) 1. 原因—肉体感覚の現実領域、論理の画一性の科学的分野、事実の、および非事実の区別、宇宙反応に基づく内省的結論。これは宇宙識別の数学的な形である。

16:6.7 (192.3) 2. 義務—哲学分野での道徳の現実領域、理由の領域、相対的善悪の認識。これは宇宙識別の司法的な形である。

16:6.8 (192.4) 3. 崇拝—宗教経験に属する現実の精霊的領域、神性連帯の人格的認識、精霊価値の認識、永遠の生存の保証、神のしもべの身分から神の息子の喜びと自由への昇進。これは宇宙心の最も高い洞察、宇宙識別の敬虔で信心深い形である。

16:6.9 (192.5) これらの科学的、道徳的、かつ精霊的洞察、すなわち、これらの宇宙反応は宇宙心に先天的であり全創造物に授けられる。生きる経験は決して宇宙のこれらの3洞察の開発を妨げない。宇宙の3洞察は、反射的思考の

自意識を構成する。しかし、ユランチアのほんのわずかな人々しか、勇敢で自立的な宇宙思考のこれらの特質の育成を喜ばないと記録するのは悲しいことである。

16:6.10 (192.6) 宇宙心の3洞察は、地方宇宙の心の贈与において人が合理的で自意識の強い人格として科学、哲学、宗教の分野において機能することを可能にする推測的仮定を構成する。言い換えれば、無限者のこれらの3顕現の現実への認識は、自己顕示の宇宙手段によってである。物質-エネルギーは、感覚の数学論理により認識される。心-理由は、その道徳上の義務を直観的に知っている。精霊-信仰(崇拝)は、精霊的経験の現実からの宗教である。反射的思考におけるこれらの基本的3要素は、人格開発において統一され、調整されるかもしれないか、もしくは、各機能において不均衡になり、実際には関係なくなるかもしれない。しかし、基本的3要素が統一されるようになると、事実に基づく科学、道徳哲学、および真の宗教経験の相関関係になる強い性格を生み出す。そして、物、意味、価値における、またそれらとの人の経験に客観的妥当性、現実を与えるのは、これらの宇宙3洞察なのである。

16:6.11 (192.7) 人間の心のこれらの生得的資質を伸ばし際立たせることが、教育の目的であり、それらを表現することが文明の目的、それらを実現することが人生経験の目的、それらを高めることが宗教の、またそれらを統一することが人格の目的である。

7. 倫理、徳、人格

16:7.1 (192.8) 知性だけで徳性を説明することはできない。道徳(徳)は、人間の人格に生来のものである。道徳的直観、つまり義務の認識は、人間の心の授与の要素であり、人間性に属する他の種類の奪うことのできないものに関連している。科学的好奇心と精霊的洞察。人の精神構造は、いとこにあたる動物のそれをはるかに凌いではいるものの、人間を動物の世界から特に際立たせているのは道徳的性質と宗教的性質である。

16:7.2 (193.1) 動物の選択的反応は、行動の運動段階に限定されている。より高等の動物の想定的洞察は、運動段階にあり、通常は試行錯誤の経験後にのみ起こる。人はすべての探査、あるいは実験に先立つ科学的、道徳的、精霊的な洞察を働かせることができる。

16:7.3 (193.2) ただ人格だけが、それをする前にそれが何をしているかを知ることができる。人格だけに、経験に先立つ洞察力がある。人格は、跳ぶ前に見ることができ、それゆえ跳ぶことからはもとより見ることからも学ぶことができる。通常、非人格の動物は、単に跳ぶことによってのみ学ぶ。

16:7.4 (193.3) 動物は、経験の結果として目標に至る異なる方法を吟味したり、蓄積した経験にもとづく接近を選択できるようになる。しかし、人格は、目標自体を調べたり、その価値性、つまりその価値に判定を下すことなどもできる。唯一知性のみが、無差別の目標を達成する最良手段について識別できるが、道徳的行為者は、手段の中のみならず目的の中からも識別できるようにする洞察力を持ち合わせている。そして、道徳的行為者は、それでもなお徳を選ぶことにおいて知力に優れている。道徳的行為者は、自分が何をしており、なぜそれをしているのか、どこに行っているのか、またいかにそこに到着するのかを知る。

16:7.5 (193.4) 人は、自身の努力目標を正しく識別できないとき、動物の存在段階で機能している自分自身に気づく。人は、人格的存在体として自身の宇宙心の授与の不可欠の部分であるその物質的知性、道徳的識別、精霊的洞察の優れた利点を利用し損ねたのである。

16:7.6 (193.5) 徳は正義である—宇宙との整合。徳を唱えるということは、それを定義することではないが、それを実践するということは、それを知ることである。徳とは、単なる知識あるいは知恵ではなく、むしろ宇宙達成の上昇段階への到達における進歩的経験の現実である。必滅の人間のその日その日の生活において徳は、悪よりはむしろ善を一貫して選ぶことで実現され、またそのような選ぶ能力は、道徳的本質の所有の証である。

16:7.7 (193.6) 人間の善悪間の選択は、道徳性の鋭さによる影響ばかりではなく、無知、未熟、および迷いといったような影響も受ける。歪曲または欺瞞の結果から劣る代替物が選ばれるときには悪が行なわれるかもしれないが故に、均衡の感覚もまた、徳の発揮に関係している。相対

評価方法あるいは比較計測方法は、道徳的領域の美徳の実践に入る。

16:7.8 (193.7) 人の徳性は、計測方法、つまり意味を精査する能力に表現される区別なしくしては無力であろう。同様に、道徳的選択は、精霊的価値の意識をもたらすその宇宙洞察なくしては無意味であろう。人は、知性の見地からは人格を授かっているので道徳的行為者の段階に昇る。

16:7.9 (193.8) 徳性は、決して法律によってあるいは力によって推進させることはできない。それは、個人の、そして自由意志の問題であり、道徳的にはそれほど反応しないものの、多少なりとも父の意志を為すことを望む道徳的に優れた者たちとの接触の影響により広められなくてはならない。

16:7.10 (193.9) 道徳行為は、これらの目標に達する道徳的手段の選択におけると同様に優れた目標の選択の際の識別に導かれる最も高い知性に特徴づけられる人間のそれらの実施である。そのような行為は徳が高い。そして、崇高

の美徳とは、天の父の意志を心から実行に移すことを選ぶことである。

8. ユランチア人格

16:8.1 (194.1) 宇宙なる父は、存在体の幾多の系列が宇宙の現実の異なる段階で機能するとき、それらに人格を贈与する。ユランチアの人間には、神の上昇する息子の段階で機能している有限-必滅の型の人格が授けられている。

16:8.2 (194.2) 我々にはとても人格の定義を引き受けることはできないのであるが、物質的、精神的、精霊的なエネルギーの集合体を構成するために進む存知の要因の理解を語ることを試みることができる。宇宙なる父は、これらの相互関係のあるエネルギーに構成される仕組みの中で、その上で、そして、それとともに機能するために人格を贈与した。

16:8.3 (194.3) 人格は、人格の存在が思考調整者から独立した、また思考調整者に先立つ贈与であり、本来の性質の特異な授与である。にもかかわらず、調整者の臨場は、人格の質的顕現を増大させる。思考調整者は、父から現れるとき性質上は同じであるが、人格はさまざまで、独

自で、唯一である。そして人格の顕現は、人格顕現のための生物媒体を構成する物質の、心の、そして精霊の性質の関連エネルギーの特徴と性質によりさらに条件づけられ限定される。

16:8.4 (194.4) 人格は相似しているかもしれないが、決して同じではない。任意の連続するもの、型、系列、または形態の人格は、互いに類似し得るし、類似しているが、決して同じではない。人格は、我々が知り、我々がいつか将来に、型、心、あるいは精霊状態の変化の特徴や程度にかかわらずそのような存在体を確認することができるその特徴である。人格とは、たとえ表現手段や人格顕現の変更のために変わってしまったとしても、我々が以前に知る人物としてその人を認識したり、明確に特定することを可能にするいかなる個人のその部分である。

16:8.5 (194.5) 創造物人格は、人間の反射行動の自己-明白の、また独特の2現象により区別される。自意識と関連する相対的自由意志。

16:8.6 (194.6) 自意識は、人格現実の知的認識で成る。それは他の人格の現実を認識する能力を含んでいる。それは、

宇宙現実における、また宇宙現実との人格化された経験、宇宙の人格関係における独自性状態の到達に相当する経験のための能力をを示す。自意識は、心の奉仕の現実、また創造的であり決断的である自由選択からの相対的独立の実現の認識を内包する。

16:8.7 (194.7) 人間の人格の自意識を特徴づける相対的自由意志は次にかかわる：

16:8.8 (194.8) 1.道徳上の決断、最高なる知恵

16:8.9 (194.9) 2.精霊的選択、真実の識別

16:8.10 (194.10) 3.寡欲な愛、兄弟愛の奉仕

16:8.11 (194.11) 4.意図的協力、集団への帰属

16:8.12 (194.12) 5.宇宙の洞察、宇宙の意味の把握

16:8.13 (194.13) 6.人格の献身、父の意志を為すことへの心からの精進

16:8.14 (195.1) 7.崇拝、神性愛の真摯な追求、および神の価値-贈与者の心からの愛。

16:8.15 (195.2) ユランチアの人間人格の型は、ネバドン型の有機体の惑星変更からなる物理的機構で機能すると見られるかもしれない。有機体のネバドン型の惑星変更は、生命活性化の電気化学の系列に属しており、親の生殖型に関する宇宙心のオーヴォントン系に属するネバドンの系列を授かっている。心を授与されたそのような人的機構への人格の神の贈り物の贈与は、宇宙公民からの威厳を与え、そのような必滅の創造物が、直ちに宇宙の3つの基本的な心の現実の本質的認識に反応するようになることを可能にする。

16:8.16 (195.3) 1. 物理的因果関係の均一性の数学的、または、論理的な認識

16:8.17 (195.4) 2. 道徳的行為の義務に関する熟慮に基づく認識

16:8.18 (195.5) 3. 人類への愛の奉仕に関連する神格への親交的崇拝に対する信仰による理解

16:8.19 (195.6) そのような人格授与の完全な機能は、神との親族関係の初期の実現である。そのような自我、父なる神の前人格の断片による内住は、実は神の精霊的な息子な

のである。そのような創造物は、神性臨場の贈り物の受け入れの能力を明らかにするだけでなく、すべての人格の楽園なる父の人格-重力回路への反動的反応をも示している。

9. 人間の意識の現実

16:9.1 (195.7) 授けられた宇宙心、内住の思考調整者、人格的創造物には、エネルギー現実、心の現実、および精霊現実の生まれながらの認識-実感がある。意志をもつ創造物は、このように事実、法、および神の愛が識別できるように用意されている。人間の意識にかかわるこれらの3件の譲渡しえないものは別として、すべての人間の経験というものは、直感的な正当性の認識が、宇宙認識にかかわるこれらの3件の宇宙現実反応の統一に結合するということを除いては、実に主観的なのである。

16:9.2 (195.8) 神を識別する人間は、生残する魂の発展における、すなわち不滅の魂を二重にして内住する神性の精霊と連携する物理的な仮の住まいにおける人の崇高な仕事の発展におけるこれら3個の宇宙的特質の統一価値を感

じることができる。魂は、その最古の始まりから実在する。それには、宇宙生存の特質がある。

16:9.3 (195.9) もし人間が、自然死からの生存に失敗するならば、人間の経験の真の精霊的価値は、思考調整者の継続する経験の一部として生き残る。そのような非生存者の人格的価値は、実現化する崇高なるものの人格の中の一要素として持続する。人格のそのような持続的特質には、人間の生身の生活の間に蓄積される経験的価値ではなく独自性が奪われている。独自性の生存は、モロンチアの身分とますますの神性を増す価値とをもつ不滅の魂の生存に依存している。人格の独自性は、魂の生存のなかに、また魂の生存により生き残る。

16:9.4 (195.10) 人間の自意識は、意識する自己以外の自己の現実認識を含意し、さらにそのような認識は、相互的であるということを含意する。自己が、他の自己を知るのと同様に知られているということ。これは、人の社会生活において純粋に人間の態度で示される。しかし、あなたは、自分の中に住まう神の臨場の現実について確信できるようには、絶対に仲間の存在体の現実について確信で

きるようにはならない。神-意識ができないのとは異なり、社会的良心は譲渡できる。それは文化の発達であり、知識、符合、および人の本質的授与—科学、道徳、および宗教—からの貢献に依存している。そして、これらの宇宙の贈り物は、社会化されると、文明を構成する。

16:9.5 (196.1) 文明は、宇宙的ではないので不安定である。文明は、人類の個人というものに先天的ではない。文明は、人の構成的要素—科学、道徳、宗教—の結合的貢献により育まれなければならない。文明は、去来するが、科学、道徳、宗教はつねに崩壊を乗り切る。

16:9.6 (196.2) イエスは、人間に神を明らかにしただけではなく、自分と他の人間に新顕示をした。あなたは、イエスの人生に最善の状態の人間を見る。その人生においてイエスは多くが神からなっていたので、人はこうして非常に美しく実現化し、そのうえ神の認識(認知)は、奪うことができず、すべての人間に本質的である。

16:9.7 (196.3) 無欲さは、親の本能は別として完全に自然であるというわけではない。他人は、自然に愛されたり親し

く待遇されない。それは、寡欲で愛他的な社会的秩序を生むための理由、道徳、および宗教の、神-意識の衝動からの啓発を必要とする。また、自己の人格認識、自意識もまた生まれながらの他者認識のこの他ならぬ事実に、つまり、人間から神格に及ぶ他の人格の現実を認識し、理解するこの生来の能力に、直接に依存している。

16:9.8 (196.4) 寡欲な社会的意識は、根本的には宗教意識である。すなわち、もしそれが客観的であるならば。さもなければ、それは純粋に主観的な哲学的抽象化であり、それゆえに愛に欠けている。ただ神を知る個人のみが、自分自身を愛するように他者を愛すことができる。

16:9.9 (196.5) 自意識は、本質的には、共同意識である。神と人、父と息子、創造者と被創造物。人間の自意識における宇宙現実に対する４認識は、潜在的であり、本来的である。

16:9.10 (196.6) 1. 知識の追求、科学の理論

16:9.11 (196.7) 2. 倫理観の追求、義務の観念

16:9.12 (196.8) 3. 精霊的価値の追求、宗教経験

16:9.13 (196.9) 4. 人格の追求、人格としての神の現実を認める能力と仲間の人格との友愛関係の同時認識

16:9.14 (196.10) あなたは、創造者たる父として神を既に意識しているのであるから、被創造物の兄弟として人を意識するようになる。父性とは、兄弟愛認識へと我々が自身を説き伏せる関連性である。そして、父自身が、そのような存在体すべてに人格を贈与し普遍的な人格回路把握の中でそれらを回路化したがゆえに、父権は、すべての道徳的な創造物にとっての宇宙の現実になるか、またはなる可能性がある。我々は、まず神がおり、次に神が我々の中におり、最後に我々が神の中にいるので神を崇拝するのである。

16:9.15 (196.11) 宇宙心は、自意識をもってそれ自身の源、無限の精霊の無限の心に気づき、同時に広範囲の宇宙の物理的現実、永遠なる息子の精霊的現実、および宇宙なる父の人格現実を意識すべきであるというのは奇妙なことであろうか。

16:9.16 (196.12) [ユヴァーサからの宇宙の検閲官による後援]

論文 17
崇高なる７精霊集団

17:0.1 (197.1) 崇高なる７精霊集団は、壮大な宇宙の7行政区分の普遍的調整指揮官である。全集団が、無限の精霊の機能的な家族に分類されるとはいえ、通常、次の3集団が楽園の三位一体の子として分類される。

17:0.2 (197.2) 1. 主たる7精霊。

17:0.3 (197.3) 2. 崇高なる７幹部。

17:0.4 (197.4) 3. 反射精霊。

17:0.5 (197.5) 残る４集団は、無限の精霊の創造的行為により、あるいは創造する地位にある提携者により具体化される。

17:0.6 (197.6) 4. 反射像の補佐。

17:0.7 (197.7) 5. 回路の7精霊。

17:0.8 (197.8) 6. 地方宇宙の創造的精霊。

17:0.9 (197.9) 7. 心-精霊補佐。

17:0.10 (197.10) これらの7系列は、ユヴァーサでは崇高なる7精霊集団として知られている。その機能領域は、永遠の小島の周辺の主たる7精霊の個人的臨場から精霊に属する楽園の7衛星、ハヴォー回路、超宇宙政府、そして、地方宇宙の行政と監督を経て、時間と空間世界における進化する心の領域に贈与される補佐の謙虚な勤労にさえ広がっている。

17:0.11 (197.11) 主たる7精霊は、この広範囲の行政領域の調整指揮官である。主たる7精霊は、組織化された物理的な力、心のエネルギー、そして非個人的な精霊活動の行政規則に属するいくつかの問題においては個人的に直接的に行動し、他の問題においては多種多様の仲間により機能する。行政の類に属する全ての問題—支配、条例、調整、および行政上の決定—において、主たる精霊は崇高なる７幹部の人間の中で行動する。主たる精霊は、ハヴォーナ回路の7精霊を通して中央の宇宙において機能することができる。主たる精霊は、7超宇宙の本部においては反射精霊の通路を介して自分自身を明らかにし、反射像の補佐を通して個人的な意思伝達においては日の老いたるものの人格を通して機能する。

17:0.12 (197.12) 主たる7精霊は、日の老いたるものの法廷下の宇宙行政に直接的かつ個人的に接触はしない。あなたの地方宇宙は、オーヴォントンの主たる精霊により我々の超宇宙の一部として統治されるが、オーヴォントンの主たる精霊は、ネバドン生まれの存在体に関連する主たる精霊の機能からはすぐに解放され、あなたの地方宇宙の本部であるサルヴィントンに居住する創造の母なる精霊が、個人的に指揮をとる。

1. 崇高なる7幹部

17:1.1 (198.1) 主たる精霊の行政本部は、無限の精霊に属する楽園の衛星7個を占領し、衛星は、中央の小島の周りにおいて永遠なる息子の輝く球体と最奥部のハヴォーナ回路間で回っている。これらの行政球体は、宇宙への代表として機能することができた型の存在体のための主たる7精霊の仕様に従い、父、息子、精霊によって三位一体化された7名からなる一団の崇高なる幹部の指揮下にある。

17:1.2 (198.2) 主たる精霊は、これらの崇高なる幹部を通して超宇宙政府の様々な区域との連絡を維持する。7超宇宙

の基本的構成方向を大きく決定しているのはこれらの崇高なる幹部である。主たる精霊は、一様に、しかも神々しく完全であるが、人格の多様性も持ち合わせている。主たる精霊には議長というものはいない。集会毎に、その合同評議会の議長を務めるための1集団を選ぶ。定期的に、主たる7精霊との協議のために楽園へと遠く出かけていく。

17:1.3 (198.3) 崇高なる７幹部は、壮大な宇宙の行政調整者として機能する。崇高なる７幹部は、後ハヴォーナ創造の常務会と呼べるかもしれない。それらは楽園の内政に関係せず、回路の７精霊を介し限られたハヴォーナ活動の範囲を指示する。その他の点では、崇高なる７幹部の指揮範囲には限界はほとんどない。崇高なる７幹部は、物理的、知的、かつ精霊的な方向を取る。崇高なる７幹部は、7超宇宙とハヴォーナに起こるすべてを見、すべてを感じ、すべてを知りさえもする。

17:1.4 (198.4) これらの崇高なる幹部は、方針を創出せず、宇宙進展の変更もしない。崇高なる幹部は、主たる7精霊により公表される神性計画の実行に関係がある。崇高な

る幹部は、超宇宙の日の老いたるものの支配を妨げず、地方宇宙の創造者たる息子の主権も妨げない。崇高なる幹部は、壮大な宇宙における正しく構成された結合方針すべてを実行するのが機能とする調整幹部である。

17:1.5 (198.5) 各幹部とその球体の施設は、単独超宇宙の効率的行政にささげられる。球体第一号において機能する崇高なる幹部第一は、完全に超宇宙第一号の問題に専心しており、順次、崇高なる幹部第七は、精霊の楽園衛星から働き掛け、また第7超宇宙の管理へといった具合に自己の活力を捧げている。精霊の楽園衛星にはそれらの関連する同名の超宇宙があるので、この7番目の球体の名前はオーヴォントンである。実際、超宇宙はそれらに因んで名づけられた。

17:1.6 (198.6) 第７超宇宙の行政球体におけるオーヴォントンの諸事を正しく保つ仕事に従事する職員は、実際に天の知性の全系列を迎え入れ、その職員数は、人間の理解を超えるものである。 (鼓舞された三位一体の精霊と思考調整者を除く)人格の派遣のための超宇宙奉仕のすべては、楽園への、また楽園からの宇宙旅行においてこれら

の7行政世界の1つを通過し、そしてここでは超宇宙において機能する第3根源と中枢により創出される人格すべてのための中心となる登録が維持される。１行政世界における物質、モロンチア、精霊に関する登録制度は、私の系列の存在体さえも驚かせる。

17:1.7 (199.1) 崇高なる幹部の直属の部下の大部分が、楽園-ハヴォーナ人格の三位一体化息子と、時間と空間の上昇計画の長年の訓練からきた栄光に輝く人間の卒業生の三位一体化された子とから成る。これらの三位一体化の息子は、崇高なる幹部との勤労のために楽園の終局者部隊の最高審議会長により任命される。

17:1.8 (199.2) 各崇高なる幹部には2名の顧問内閣がある。それぞれの超宇宙本部の無限の精霊の子は、自分たちの崇高なる幹部の第一顧問閣僚に1,000年の間仕える代表を自分たちの階級から選ぶ。時間の上昇する人間に影響する万事に関しては、楽園到達の人間と栄光の人間の三位一体化の息子から成る第二内閣がある。この機関は、一時的に7超宇宙本部に住み完全になるつつある、かつ上昇

しつつある存在体により選ばれる。他のすべての業務長官は、崇高なる幹部により任命される。

17:1.9 (199.3) 時折すばらしい秘密会議が、精霊のこれらの楽園衛星において開催される。これらの世界に割り当てられた三位一体化の息子は、楽園に達した上昇者と共に、上昇経歴の苦闘と勝利の再結合において第三根源と中枢の精霊人格とともに集合する。崇高なる幹部は、いつもそのような兄弟的集会の議長をする。

17:1.10 (199.4) 崇高なる７幹部は、1,000年に１度権力の座を空け楽園に行き、そこで創造の一部である大勢の知力あるものへの宇宙的規模の挨拶と幸福を願う1、000年ごとの秘密会議を開く。この多事多端な行事は、すべての反射精霊集団の長である威儀仙の直接の臨場において行われる。その結果、崇高なる７幹部は、普遍的反射の特異な機能を経て壮大な宇宙における自分達の仲間すべてと一斉に意思伝達ができる。

2. 威儀仙——反射性の長

17:2.1 (199.5) 反射精霊は、三位一体の神性の出である。これには特異でいくらか神秘的な50名の存在体がある。並は

ずれたこれらの7人格は、一度に創出され、そのような創造の各出来事は、楽園三位一体と主たる7精霊のうちの1名とのつながりによってもたらされた。

17:2.2 (199.6) 時間の始まりに起こったこの重要な取り扱いは、楽園三位一体との共同創造者として機能するために主たる精霊に代表される崇高なる創造者たる人格の初期の努力を表す。三位一体の創造的な可能性との崇高なる創造者のもつ創造力のこの結合は、崇高なるものの現実のまさしくその源である。したがって、反射的創造の周期がその自然な経過をたどったとき、主たる7精霊のそれぞれが楽園三位一体との創造上の完全な同調性を見つけたとき、第49反射精霊が人格化したとき、次には、新たで広範囲の反応が、宇宙の中の宇宙全体において崇高なるものに新たな人格特権を与え、ついには49名の反射精霊とその提携者のすべての仕事の反射長と楽園の中心である威儀仙の人格化に至る神格絶対に起こったのであった。

17:2.3 (200.1) 威儀仙は、真の人格、つまり時間と空間の全7超宇宙の反射性現象の人格的で絶対確実の中核である。威

儀仙は、主たる7精霊の待ち合わせ場所である万物の中心近くの永続的な楽園本部を維持し、広範囲の創造における反射業務の調整と維持に唯一関係がある。威儀仙は、別の点では宇宙問題の行政には関わらない。

17:2.4 (200.2) 威儀仙は、神格絶対との機能的連携において崇高なるものにより創造された神性の唯一の既存人格であるので、我々の楽園人格に関する一覧表には含まれていない。威儀仙は人格であるが、排他的に、しかも明らかに自動的に宇宙経済のこの1局面に関係がある。威儀仙は現在、宇宙人格の他の(非反射)系列とのつながりに関し、個人的いかなる能力においても機能しない。

17:2.5 (200.3) 威儀仙の創造は、崇高なるものの最初の最高の創造的行為を際立てた。行動へのこの意志は、崇高なるものの意志であったが、神格絶対のすばらしい反応は予め知られてはいなかった。ハヴォーナの永遠-出現以来、宇宙は、巨大で広範囲にわたるそのような力の一致協力と機能的な精霊活動の調整の驚異的な事実化を目撃してはこなかった。崇高なるものとその仲間の創造的な

意志への神格反応は、断固たる意図を大いに超え、概念的な予測をはるかに上回る。

17:2.6 (200.4) 我々は、崇高者と究極者が新段階の神性に到達し、人格機能の新領域に昇るかもしれない後の世において、想像外の権力を有する拡張された宇宙調整の意外かつ夢にも思わないさらに他の存在体の神格化の領域で目撃するかもしれない将来の可能性に畏敬の念を抱いて立っている。そのような経験的神格と実存的楽園の三位一体との関係統一への神格絶対の反応の可能性に限界はなさそうである。

3. 反射精霊

17:3.1 (200.5) 49名の反射精霊は、三位一体起源であるが、その出現に付随する各7創造の出来事が、同じ先祖の主たる精霊の特性に類似する存在体の型の生産であった。したがって、49名の反射精霊は,さまざまに宇宙なる父、永遠なる息子、無限の精霊の神性的特性の関係の7つの可能な組み合わせの性質と特徴とを反映している。この理由のために、各超宇宙本部に7反射精霊を持つことが必要である。7種の型が、どの7超宇宙にもそのような現

象として起こるかもしれない楽園の神格3名の全局面におけるあらゆる顕現の完全な反映の達成に必要である。従って、それぞれの型が、各超宇宙における業務に割り当てられた。異なる7反射精霊の集団は、各領域の反射焦点で超宇宙の首都の本部を維持し、しかも、反射焦点は精霊的極性の核心と同じではない。

17:3.2 (200.6) 反射精霊には名前があるが、これらの名称は空間世界に明らかにされてはいない。この名称は、この存在体の性質と特徴に関係しており楽園の秘密球体のもつ宇宙共通の7神秘のうちの一部分である。

17:3.3 (201.1) 反射の属性、つまり連合活動者、崇高なるもの、および主たる精霊の心の段階現象は、普遍的知性のこの広大な計画の働きに関わる存在体すべてに伝えることができる。ここに大きな神秘がある。主たる精霊も楽園の神格も、調整している普遍的反射のこれらの力を威儀仙の連携人格49名に表されるようには単独的に、あるいは集合的に、明らかにはしないが、それでいて、主たる精霊と楽園の神格は、驚異的に授けられたこれらの全存在体の創造者なのである。神格継承というものは、創

造者には認識できないある種の属性を時々被創造物に明らかにする。

17:3.4 (201.2) 威儀仙と反射精霊を除く反射業務の全職員は、無限の精霊、その直接の仲間と部下のすべての創造物である。各超宇宙の反射精霊は、反射像の補佐の創造者、つまり日の老いたるものの法廷への反射精霊の人格的な声である。

17:3.5 (201.3) 反射精霊は、単に伝播体ではない。それらは、その上に保持力のある人格である。反射精霊の子、第二熾天使は、保持し、または記録もする人格である。真の精霊的価値のすべてが、正副二重に登録され、複製の1つは、反射精霊の広大な職員に属する第二熾天使の人格の多くの系列中の１構成員の個人的能力に保存される。

17:3.6 (201.4) 宇宙の正式記録は、天使の記録者により、また天使の記録者を介して渡されるが、真の精霊的記録は、反射により組み立てられ、また無限の精霊の家族のものである適切かつしかるべき人格の心に保持される。真の精霊的記録は、宇宙の形式的で死んだ記録とは対照的に

生の記録であり、無限の精霊の記録する人格の生ける心に完全に保存されている。

17:3.7 (201.5) 反射組織は、情報-収集であり全創造の法令-普及である。それは、様々な放送業務の周期的作動に比較し絶えず稼働中である。

17:3.8 (201.6) 地方の宇宙本部において発生する重要なものすべてが、本質的にはその超宇宙の首都に反射される。逆に、地方宇宙に意義あるものすべてが、超宇宙本部から地方宇宙首都へと外側に反映される。時間の宇宙からの超宇宙への反射業務は、一見したところ自動的、あるいは自己稼働のようであるが、それは稼働はしない。それはすべてが非常に人格的であり、知的である。その精度は人格協力の完全性から生じており、したがって、絶対者の非個人的な臨場-実行の精にすることはとてもできない。

17:3.9 (201.7) 思考調整者は、普遍的な反射体制の操作に参加はしないが、我々には、父の断片すべてが、これらの相互作用を完全に認識しており、またこれらの内容が利用できるということを信じるに十分な理由がある。

17:3.10 (201.8) 余分な楽園反射業務の空間範囲は、現宇宙時代においては7超宇宙周辺に制限されているようである。その他の点では、この業務機能は時間と空間から独立しているように思える。それは知られている準絶対の全宇宙回路からは独立しているようである。

17:3.11 (201.9) 各超宇宙本部における反射組織は、隔離された単位として機能する。しかし、光と生命の地方宇宙全体の決定による祝祭や崇高なる７幹部の千年の挨拶の時のような特別な場合には、7宇宙すべてが、威儀仙の指示に基づき、宇宙的に調和して行動するかもしれないし、行動をとるのである。

4. 反射の姿の補佐

17:4.1 (202.1) 49名の反射の姿の補佐は、反射精霊に創出され、各超宇宙本部には7名ちょうどの補佐がいる。ユヴァーサの7反射精霊の最初の創造行為は、7名の姿の補佐の産出であった。自身の補佐を創造する各反射精霊。ある種の属性と特性においては、姿の補佐は、母なる反射生霊の完全な再生産である。それらは反射の属性を差し引いた事実上の複製である。それらは真の姿であり、反

射精霊と超宇宙当局との伝達経路として絶えず機能する。姿の補佐は単に助手ではない。それらは自身のそれぞれの精霊先祖の実際の代表である。姿の補佐は姿であり、その名の通りである。

17:4.2 (202.2) 反射精霊自身は、真の人格であるが、物質の存在体には理解し難いほどの系列のものである。反射精霊は,超宇宙本部球体においてでさえ、日の老いたるものとその仲間との個人的交わりすべてにおいて姿の補佐の援助を必要とする。姿の補佐と日の老いたるものの間の接触においては時として１名の補佐が、満足に機能するのであるが、その他の場合には2名、3名、4名の、あるいは７名全員での完全で適切な委託された伝達提示が、必要とされる。同様に、姿の補佐の通報は、伝達内容の必要に応じて、１名の、２名の、あるいは３名すべての日の老いたるものによりさまざまな方法で受け取られる。

17:4.3 (202.3) 姿の補佐は、永遠に先祖の精霊の身近に仕え、しかも自由に使える助力者である信じ難く素晴らしい第二熾天使の部隊を持っている。姿の補佐は、人間の前進

の普遍的計画のための情報機関に密接に関連してはいるものの、人格的なこれらの存在体は、外観上は意志を持ってはいないので、あなたは、ユヴァーサの学校に滞在中個人的にそれらに接触はしないであろう。姿の補佐は、選択力を行使しない。それらは、真の姿である、つまり個々の精霊先祖の人格と心を完全に反射している。一集合体として、必滅の上昇者は、反射には親密に接触しない。反射的性質をもつ存在体の誰かが、あなたと実際の業務運用の間に常に介在するであろう。

5. 回路の7精霊

17:5.1 (202.4) ハヴォーナ回路の７精霊は、中央宇宙の7回路への無限の精霊と主たる7精霊の非個人的な共同代表である。主たる精霊の全体的子孫であるハヴォーナ回路の７精霊は、主たる精霊の奉仕者である。主たる精霊は、異なる様々な行政的個性を7超宇宙に供給する。ハヴォーナ回路のこれらの均一的精霊を通して、主たる精霊には中央宇宙のための統一的、一律的、そして連携している精霊的導きの提供が、可能になるのである。

17:5.2 (202.5) 回路の７精霊のそれぞれは、単一のハヴォーナ回路の浸透に限られている。それらは、日の永遠なるものの体制、つまり個々のハヴォーナ世界の支配者に直接には関係がない。しかし崇高なる７幹部との繋がりはあり、また崇高なるものの中央宇宙の臨場と連動している。それらの仕事は完全にハヴォーナに限定されている。

17:5.3 (203.1) これらの回路の精霊は、個人的子孫、つまり第三超熾天使を通してハヴォーナに滞在するもの達と接触をする。回路の精霊の機能は、主たる7精霊と共存する一方で、最初の巡礼者が、第三超熾天使の創造における時間のグランドファンダ時代にハヴォーナの外回路に到着するまで主要な重要性には至らなかった。

17:5.4 (203.2) あなたは、ハヴォーナの回路から回路へと進むにつれ回路の精霊に関し知るであろうが、その精霊的な影響に親しむかもしれないとしても、またその精霊的な影響の非個人的臨場に気づくかもしれないとしても、彼らとの個人的交流を保つことはできないであろう。

17:5.5 (203.3) 回路の精霊は、思考調整者が進化宇宙の世界に生息する必滅の創造物に関係しているように、ハヴォーナ出身の居住者に関係している。回路の精霊は、思考調整者のように非個人的であり、宇宙なる父の非個人的精霊が人間の有限な心に宿るようにハヴォーナの存在体の完全な心と一致する。しかし、回路の精霊は、決してハヴォーナ人格の永久的部分にはならない。

6. 地方宇宙の創造的精霊

17:6.1 (203.4) 地方宇宙の創造的精霊の性質と機能に関する多くが、地方創造の組織と管理における創造者たる息子との交流の物語であり適正に述べられている。それでも、崇高なる精霊の７集団に関するこの議論の一部として語られるかもしれないこれらの驚異の存在体の前地方宇宙経験の多くの特徴が、存在するのである。

17:6.2 (203.5) 我々は、地方宇宙の母なる精霊の経歴に関する6段階に詳しく、また、活動の第７段階の可能性に関し多くを推測する。これらの異なる段階は次の通りである。

17:6.3 (203.6) 1. 初期の楽園分化。創造者たる息子が、宇宙なる父と永遠なる息子の連合作用により個人化されると

き、「補数の最高反応」として知られていることが、無限の精霊の存在体に同時に起こる。我々には、この反応の種類がわかってはいないのだが、それが、共同創造者の創造的可能性の中に迎え入れられるそれらの人格化の可能性の固有の変更に言及しているということは理解している。創造者たる息子の誕生は、将来の地方宇宙の配偶者にむけての無限の精霊の存在体内でのこの楽園の息子の誕生の可能性をはっきり示している。我々は、実体のこの新しい前人格同一性を認識はしていないが、この事実がそのような創造者たる息子の経歴に関する楽園の記録の場所を見つけるということを知っている。

17:6.4 (203.7) 2. 創造者の予備訓練。宇宙の組織と行政におけるミカエルの息子の長い予備訓練期間中、その将来の配偶者は、さらなる実体の開発を受け、目標への集団的意識をもつようになる。我々は、知らないが、そのような集団-意識の実体が空間認識をするようになり、補足的なミカエルと共同して宇宙創造と行政の今後の仕事において精霊の技能の習得に必要とされるその予備訓練を始めるのであろうと推測する。

17:6.5 (204.1) 3. 物理的創造の舞台。創造者の責任が、永遠なる息子からミカエルの息子に授けられる時、この新しい創造者たる息子がやがて向かうはずの超宇宙にその息子を導く主たる精霊は、無限の精霊の臨場下において「識別の祈り」を述べる。そして、その後の創造の精霊の実体が、無限の精霊の人格とは区別されて初めて現れる。そして、この実体は、陳情している主たる精霊の人格に直接に進み出で、明らかにこの主たる精霊の人格の一部になり、すぐに、我々からは見えなくなる。新たに確認された創造の精霊は、創造者たる息子の空間における冒険への出発の瞬間まで主たる精霊と留まっている。またそこでは、主たる精霊は、新精霊配偶者を創造者たる息子の保持にゆだね、同時に永遠の信義と果てしない忠誠の委託を精霊配偶者に宣誓させる。それから、楽園での最も感動深い出来事の一つが起こるのである。宇宙なる父は、超宇宙司法の主たる精霊による創造者たる息子と創造の精霊との永遠の結合を認め、また行政に関するある種の共同力の贈与の確認について話す。

17:6.6 (204.2) 父に結合された創造者たる息子と創造の精霊は、次に宇宙創造の冒険に旅立つ。両者は、宇宙の物質

的組織での長く困難な間中この関連形式においてともに働いている。

17:6.7 (204.3) 4. 生命-創造時代。創造者たる息子による生命を創造する意図の宣言に当たり、主たる7精霊が参加し、また監督している主たる精霊が個人的に経験するところの「個人化の式典」が、楽園で続く。これは、創造者たる息子の精霊配偶者の人格への楽園神格の貢献であり、無限の精霊の人格の「第一萌出」現象において宇宙に出現するようになる。楽園上のこの現象と同時に、創造者たる息子のこれまでの非個人的な精霊配偶者は、実際的なすべての意図と目的にとっての誠実な人格存在体になる。この同じ地方宇宙の母なる精霊は、今後、未来永劫に、人格存在体と見なされ、続いて起こる生命創造の全人格部隊との個人的関係を維持するであろう。

17:6.8 (204.4) 5. 後贈与の時代。創造者たる息子が、宇宙本部に戻り第７贈与完了後に、そして完全な宇宙主権の取得後に、創造の精霊の果てしない経歴にもう一つの、しかも大きい変化が起こる。その際、勝利を収めた創造者たる息子は、集合した宇宙の行政者の前において、宇宙の

母なる精霊を共同主権者に昇進させ、同格者として精霊配偶者を承認する。

17:6.9 (204.5) 6. 光と生命の時代。光と生命の時代の設立に際し、地方宇宙の共同主権は、創造の精霊の経歴の第6段階に入る。しかし、我々にはこの素晴らしい経験の本質を描くことは許されていない。そのような状況は、ネバドンにおける将来の発展段階に属する。

17:6.10 (204.6) 7. 非啓示の経歴。我々は、地方宇宙の母なる精霊の経歴に関するこれらの6段階について知っている。第7の経歴はあるのか。と、我々が尋ねることは、必然である。我々は、終局者が人間の上昇の最終的目標らしきものに達するとき、第6-段階の精霊の経歴に入ったと記録にあることを心に留めている。我々は、終局者はいまだに宇宙課題における別の、そして、非啓示の経歴を待ち受けていると推測する。我々が、同様に、母なる精霊が、これから先に宇宙貢献と創造者ミカエルの系列との忠誠な協力における個人的経験の第７段階を構成するであろう将来の明かされてはいない何らかの経歴を持つと見なすということは、当然のことである。

7.心-精霊補佐

17:7.1 (205.1) これらの精霊補佐は、創造者たる息子とそのような創造精霊の合同創造からの生ける創造物への地方宇宙の母なる精霊の七重の心の贈与である。この贈与は、人格特権の身分への精霊の昇進時点で可能になる。7心-精霊補佐の性質と機能に関する叙述は、あなたの地方宇宙ネバドンの話により適切に属している。

8. 崇高なる精霊の機能

17:8.1 (205.2) 崇高なる精霊の7集団は、無限の精霊として、また連合活動者としての両者である第3根源と中枢の機能的な家族の母体を構成する。崇高なる精霊の領域は、楽園上の三位一体の臨場から空間の惑星における進化的人間の系列の心の機能に広がっている。したがって、崇高なる精霊は、行政の下降段階を統一し、その職員の多様な機能を調整する。日の老いたるものとのつながりにおける反射精霊集団であろうが、ミカエルの息子に呼応して行動する創造の精霊であろうが、もしくは楽園三位一体の周りを回路化している主たる7精霊であろうが、崇高なる精霊の活動には、中央宇宙、超宇宙、地方宇宙のいたる所で遭遇する。それらは「日の」系列の三位一体

人格とも、「息子」の系列の楽園人格とも同じように機能する。

17:8.2 (205.3) 崇高なる精霊集団は、無限の母なる精霊とともに、第3根源と中枢に属する創造物の広大な家族の直接の創造者である。奉仕活動に関する全系列がこのつながりから生じる。予備超熾天使は、無限の精霊に起源がある。この系列の二次存在体は、主たる精霊により創出される。第三の超熾天使は、回路の７精霊によるものである。反射精霊は、一括して、驚異の天使部隊の系列、つまり超宇宙勤労の強力な第二熾天使の母-製作者である。創造の精霊は、地方創造に属する天使の系列の母である。そのような熾天使の奉仕活動者らは、中央宇宙の様式に因んで創りだされはするものの、各地方宇宙の初代である。奉仕活動の精霊のこれらの創造者は、すべての天使の奉仕活動者の最初の、そして永遠の母である無限の精霊の中心拠点により唯一間接的に支援されるのである。

17:8.3 (205.4) 崇高なる７精霊集団は、生息創造に関わる調整者である。主たる7精霊である指揮官長らのつながりは、七重の神の広範囲の活動を調整するようである。

17:8.4 (205.5) 1. 集合的には、楽園神格の三位一体の神性段階にほぼ相当する主たる精霊。

17:8.5 (205.6) 2. 個々には、主たる精霊は、三位一体の神格の主要な関連する可能性を使い果たす。

17:8.6 (206.1) 3. 連合活動者の様々な代表としての主たる精霊は、個人的にはまだ執行していない崇高なるもののその精神-心-力の主権の宝庫である。

17:8.7 (206.2) 4. 主たる精霊は、反射精霊を介し、楽園の普遍的反射の中心である威儀仙との日の老いたるものの超宇宙政府を連動させる。

17:8.8 (206.3) 5. 主たる精霊は、地方宇宙の神性奉仕活動者の個別化への参加において七重の神の最終段階、つまり地方宇宙の創造者たる息子-創造の精霊の結合に貢献する。

17:8.9 (206.4) 連合活動者に固有の機能的統一は、主たる7精霊、つまり連合活動者の第一人格の発展的宇宙に明らかにされる。しかし、この統一は、未来の完成された超宇宙においては崇高者の経験的主権からは疑いなく不可分になるであろう。

17:8.10 (206.5) [ユヴァーサの神性顧問による提示]

論文 18
最高の三位一体人格

18:0.1 (207.1) 崇高の三位一体人格はすべて、特定の勤労のために創造される。それらは、ある種の明確な職務遂行のために神の三位一体によって考案されており、極致の方法と究極の献身で仕える資質をもっている。崇高の三位一体人格には7系列がある。

18:0.2 (207.2) 1. 崇高者の三位一体化の謎のもの

18:0.3 (207.3) 2. 日の永遠なるもの

18:0.4 (207.4) 3. 日の老いたるもの

18:0.5 (207.5) 4. 日の完全なるもの

18:0.6 (207.6) 5. 日の若きもの

18:0.7 (207.7) 6. 日の和合なるもの

18:0.8 (207.8) 7. 日の誠実なるもの

18:0.9 (207.9) 行政において申し分のないこれらの存在体は、明確で最終的な数である。これらの創造は、過去の出来事であり、もはや創造はされていない。

18:0.10 (207.10) 崇高の三位一体人格は、壮大な宇宙全体において楽園の三位一体の施政方針を示す。それは、正義を示しており、楽園三位一体の執行判断である。それは、父の楽園球体から地方宇宙の本部世界とその構成星座の首都にかけての行政充実かかわる相互的進路を形成する。

18:0.11 (207.11) 三位一体起源の全存在体は、その全神性属性における楽園の完全性をもって創造される。時間の経過は、経験の領域に限り宇宙勤労のための準備に加わえられた。何らかの不履行の危機、あるいは反逆の危険性は、決して三位一体起源の存在体には存在しない。それらは、神性本質であり、人格行為に関わる神性かつ完全な道からそれることはついぞなかった。

1. 崇高者の三位一体化の秘密

18:1.1 (207.5) 楽園の衛星の最深部の回路には7つの世界があり、揚々たるこれらの各世界は、崇高者の三位一体化の秘密の10軍団により統括されている。それらは、創造者ではないが、最高かつ究極の行政者である。兄弟のようなこれら7球体に関わる業務処理は、70名の最高指揮官からなるこの軍団に完全に委任されている。三位一体の子孫は、最も近くの楽園のこれらの神聖な7球体を監督しているが、この世界集団は、宇宙なる父の個人的回路として一般に知られている。

18:1.2 (208.1) 崇高者の三位一体化の秘密は、調整と共同の指揮官として1組10名の集団で機能するが、また、責任ある特定分野で個別に機能するこれらの特別な各世界の任務は、7主要部門に分割されており、その調整支配者のうちの１名は、そのような専門活動の各部を取り仕切る。残る3名は、他の7名に関係しており、１名は父を、１名は息子を、そして１名は精霊を代表して、三位一体の神格の人格代表者として行動する。

18:1.3 (208.2) 崇高者の三位一体化の秘密の特徴を表す明確な階級的類似はあるものの、異なる7集団の特性も明らかである。ディヴィニントン業務の10名の最高指揮官は、宇宙なる父の個人的な特徴と性質を反射している。7球体のそれぞれも同様である。10名からなる集団のそれぞれが、その領域の独特である神格または神格関係に類似している。アセンディントンを統治する10名の指揮官は、父、息子、精霊の結合された本質を反射している。

18:1.4 (208.3) 私は、それらが本当に崇高者の秘密であるので、父の神聖な7世界のこれらの高い人格たちの仕事についてほとんど明らかにすることはできない。宇宙なる父、永遠なる息子、あるいは無限の精霊への接近に関連づけられる船団的な秘密というものは、まったくない。神格は、神性の完全性に達するすべてのものに容易に知れるものであるが、すべての崇高者の秘密が、決して完全に達し得るというわけではない。我々は、七重の系列の被創造物との神格関係に関わる人格の秘密を包含する領域を完全に見抜くことはいつまでもできないであろう。

18:1.5 (208.4) これらの最高の指揮官は、宇宙存在体の基本的なこれらの7集団との神格の親密かつ人格的な接触に関係があるので、特別な7世界に居を定めるとき、あるいは壮大な宇宙全体において機能している間、これらの非常に個人的な関係と並はずれた接触は、神聖に秘密に保たれるということが適切である。楽園創造者は、下級の創造物に関してさえその人格の私事と尊厳を重んじる。そして、これは個人と人格の変化に富む個々の系列双方に本当である。

18:1.6 (208.5) より高い宇宙到達の存在体にとり、これらの秘密世界は依然として忠誠に対する試練としてある。それは、完全に、しかも個人として永遠の神々を知るために、神性と完全性をもつ神の特徴を自由に知るために我々に与えられるが、楽園支配者の被創造物とのすべての人格的な関係を十分に探求することが我々に許されているというわけではない。

2. 日の永遠なるもの

18:2.1 (208.6) ハヴォーナの10億の各世界が、崇高の三位一体人格の指揮を受ける。これらの支配者は、日の永遠なる

ものとして知られており、各ハヴォーナ球体に１名ずつおり、ちょうど10億を数える。それらは、楽園三位一体の子孫であるが、崇高者の秘密のようにその起源に関する記録はない。すべてに賢明な父のこれらの2集団は、絶えず楽園-ハヴォーナ体制の絶妙の世界を統治してきたし、交代も配置転換もなく機能する。

18:2.2 (208.7) 日の永遠なるものは、それらの領域に住む意志を持つすべての創造物に見える。日の永遠なるものは、惑星の定期の秘密会議の議長をする。定期的に、しかも交代で、7宇宙の本部球体を訪れる。日の永遠なるものは、日の老いたるものに密接につながっており、7超政府の将来の目標を統括する日の老いたるものに神性面において同格である。日の永遠なるものが自分の球体を留守にするとき、その世界は三位一体の教師たる息子が指揮にあたる。

18:2.3 (209.1) 中央宇宙のハヴォーナ出身者や他の人間や動物といったような確立された生命系列を除き、居住する日の永遠なるものは、完全に自身の個人的な考えと理想に沿って各球体を発展させてきた。日の永遠なるものは、

互いの球体を訪ねるが、複製をしないし模倣もしない。つねに、しかも完全に原型である。

18:2.4 (209.2) 構造、自然の装飾、モロンチア構造物、および精霊創造は、各球体に限られており特異である。あらゆる世界は、永続する美の場所であり、中央宇宙の他のいかなる世界とは完全に異なっている。そして、あなたは、ハヴォーナから楽園への途中にこれらの特異で胸躍る球体において長い、あるいは、短い時間を過ごすであろう。あなたの世界において楽園が上方であると話すことは自然であるが、上昇の神性目標が内向きであると言及するほうがより正しいであろう。

3. 日の老いたるもの

18:3.1 (209.3) 時間の必滅者が、地方宇宙の本部を囲む訓練世界を卒業し、それぞれの超宇宙の教育球体へと達するときには、日の老いたるものを含む高位の精霊的支配者と指揮官を認識し、意思疎通を図ることができるその程度への精霊的発達において前進しているのである。

18:3.2 (209.4) 日の老いたるものは、基本的には全員がまったく類似している。日の老いたるものは、三位一体の結合

された特徴と統一された本質を明らかにする。日の老いたるものは、個性をもち、人格面においては多様であるが、主たる7精霊のようには互いに異なってはいない。日の老いたるものは、その他の点では明確かつ隔離された特異な創造である異なる7超宇宙それぞれに同一の管理職を与える。主たる7精霊は、性質と属性の面においては異なるが、日の老いたるものは、つまり超宇宙の個人的な支配者はすべて、一様であり、楽園三位一体の超完全無欠の子孫である。

18:3.3 (209.5) 天の主たる7精霊は、それぞれの超宇宙の性質を決定するが、日の老いたるものは、これらの同じ超宇宙の行政を決定づける。日の老いたるものは、創造的な多様性に行政の同一性を重ね合わせ、壮大な宇宙の7区分集団の基本的な創造上の差をものともせず全体の調和を保証する。

18:3.4 (209.6) 日の老いたるものはすべて、同時に三位一体化された。日の老いたるものは、宇宙の中の宇宙の人格記録の始まりを表す。ゆえに、その名前は—日の老いたるもの。あなたが、楽園に達し、ものの始まりの書かれた

記録を捜すとき、人格の項に現れる最初の記入がこれらの21名の日の老いたるものの三位一体の詳説であることがわかるであろう。

18:3.5 (209.7) 高位の存在体は、つねに3名１組で治める。それらが個人として働く多くの活動局面があり、どの2者においても機能ができるのであるが、行政のより高い球体においては共同で行動しなければならない他の局面がある。高位の存在体は、決して個人的に自己の居住世界を去ることはないが、それどころか、これらの世界は広範囲の反射体制の超宇宙の中心点であるので去る必要はないのである。

18:3.6 (209.8) 日の老いたるもののそれぞれの３名組の個人の住まいは、本部球体の精霊的極性の場所にある。そのような球体は70の行政区画に分割され、日の老いたるものが時々住まう70の分割上の首都がある。

18:3.7 (210.1) 日の老いたるものは、力、権限の範囲、司法権の範囲において時-空間創造の直接支配者のいずれもが最も強力かつ強大である。宇宙の中のすべての広大な宇宙において、ただ日の老いたるものだけに意志をもつ創

造物の永遠の消滅に関し最終的な行政判決の強大な権限が付与される。また、３名のすべての日の老いたるものは、超宇宙の最高裁決機関の最終判決に参加しなければならない。

18:3.8 (210.2) 日の老いたるものは、神格と楽園のその提携者たちは別として、すべての時-空間存在の中にあって最も完全で、最も万能で、最も神らしく賦与された支配者である。明らかに超宇宙の最高の支配者である。しかし、それらは、この統治する権利を経験上獲得してきたのではなく、したがって、いつか崇高なるもの、すなわち経験に基づいた主権者に取って代わられる運命にある。日の老いたるものは、確かに主権者の代理人になるのである。

18:3.9 (210.3) 崇高なるものは、ちょうど創造者たる息子が経験的に基づいて地方宇宙の主権を獲得するように、経験的奉仕によって7超宇宙の主権を達成している。しかし、崇高者の未完成の発展にある現代、日の老いたるものは、発展する時間と空間の宇宙の調和のある完全な行政上の管理を提供する。そして、独創性の英知と個性の

自発性が、日の老いたるもののすべての命令と裁定を特徴づけている。

4. 日の完全なるもの

18:4.1 (210.4) 110名の日の完全なるものがおり、それらは各超宇宙の主要区域の政府を統括する。日の完全なるものは、超宇宙指揮官を補助する特別任務のために三位化されており、日の老いたるものの即座の、個人的な代理人として統治している。

18:4.2 (210.5) 日の完全なるものは、主要領域の各首都に割り振られるが、日の老いたるものとは異なり、いつも3名全員が臨場する必要はない。時々、この３名中の１名は、自分の領域の福祉に関し日の老いたるものとの直接の打ち合わせのために欠席するかもしれない。

18:4.3 (210.6) 主要領域のこれらの三位一体の支配者は、行政内容に格別に精通しており、それ故その名は — 日の完全なるもの。精霊世界のこれらの存在体の名前を記録する際に、我々は、あなたの言語に翻訳する問題に直面するし、満足できる翻訳を提供することは非常に多くの場合きわめて難しい。我々は、あなたにとって無意味な任

意の名称の使用を好まない。したがって、あなたにとり明確で、同時にいくらかその起源を代表するような適切な名前を選ぶことが、我々には難しいことがよくある。

18:4.4 (210.7) 日の完全なるものには、神性顧問、英知の遂行者、宇宙検閲官の中規模の軍団がある。さらに大勢の強力な使者、権威高きものたち、名前と番号を持たないものたちがいる。しかし、主要領域の業務に関する通常業務の多くは、天の守護者と高位の息子の補佐により遂行される。これらの2集団は、楽園-ハヴォーナ人格か、または栄光の人間終局者のどちらかの三位一体化の子孫の中から選ばれる。創造物-三位一体化の存在体のこれらの2系列のうちのあるものは、楽園神性により再び三位一体化され、次に超宇宙政府の行政を補佐するために派遣される。

18:4.5 (211.1) 天の守護者、それに高位の息子の補佐の大半は、大小の主要区域の奉仕に割り当てられるが、三位一体の守護者 (三位一体に抱擁された熾天使と中間者)は、3区分すべての法廷の役員であり、これらの役員は、日の老いたるもの、日の完全なるもの、および日の若きも

のの裁決機関において機能する。三位一体化の使節 (息子の、あるいは、精霊に融合された本質の、三位一体に抱擁される上昇の人間)は、超宇宙のどこにおいても遭遇するかもしれないが、大半は小区域の奉仕に従事している。

18:4.6 (211.2) 7超宇宙の政府案の完全な展開時代に先立ち、日の老いたるものを除くこれらの政府関係する様々な区域の事実上すべての行政者は、完全なハヴォーナ宇宙の様々な世界の日の永遠なるものの下での異なる見習期間を勤めた。後の三位一体化の存在体は、同様に日の老いたるもの、日の完全なるもの、および日の若きものへの奉仕のために派遣される前に、日の永遠なるものの下で訓練時季を通過する。後の三位一体化の存在体は皆、熟練した試練に耐えた、経験豊富な行政者である。

18:4.7 (211.3) これらの高貴の支配者は、時間の上昇する創造物にむけての高度の訓練のための70の主要な活動区域世界に密接に関連しているので、あなたは、小区域世界におけるあなたの滞在後にスプランドンの本部に達すると早い時期に日の完全なるものに会う。日の完全なるもの

は、主要な活動区域の上昇する卒業生の集団誓約を執り行う。

18:4.8 (211.4) 7個の小区域の教育球体でのより物理的で物質的な訓練の特徴と比べ、また、超宇宙本部の490の大学世界にでの精霊的な仕事と比べ、主要区域本部を囲む世界の時間の巡礼者の仕事は、主に知的性質のものである。

18:4.9 (211.5) あなたは、その起源の地方宇宙を包囲するスプランドンの主要区域にのみ登録されるのであるが、我々の超宇宙の主要な10区域のすべてを通り抜けなければならないであろう。あなたは、ユヴァーサに達する前に30名すべてのオーヴォントン日の完全なるものを見るであろう。

5. 日の若きもの

18:5.1 (211.6) 日の若きものは、超宇宙の最も若い崇高なる指揮官である。日の若きものは、3名からなる集団で、小区域の業務の統括をする。それらは、本性においては、日の完全なるものと調整しているが、行政権においては従属的である。人格的に栄光ある、しかも、神らしく有能なこれらの2万1千名の三位一体人格がいる。日の若き

ものは、同時に創造され、日の永遠なるものの下においてハヴォーナ訓練をともに経験する。

18:5.2 (211.7) 日の若きものは、日の完全なるものそれと同様の仲間と補佐の軍団を持っている。さらに、日の若きものは、天の存在体の莫大な数の様々な下位の系列を自分たちに割り当てた。小区域の行政には、数多くの居住の上昇者、様々な優待居留地の職員、および無限の精霊に起源をとる様々な集団を採用している。

18:5.3 (211.8) 小区域の政府は、排他的ではないが超宇宙の重大な物理的問題に甚だ多大に関心がある。上昇する人間は、これらの世界では崇高なる力の中枢の第3系列と熟練の物理制御者の全7系列の活動調査に関係する研究と精査を継続する。小区域球体は、熟練の物理制御者の本部である。

18:5.4 (212.1) 小区域の体制は、広範囲にわたり非常に物理的問題に関係があるので、その３名の日の若きものは滅多に首都球体には一緒にはいない。1名は、たいていの場合、統轄する主要区域の日の完全なるものとの会議で離れているか、または、三位一体起源の高位の存在体の楽

園秘密会議において日の老いたるものを代表するその間中留守にしている。日の若きもの３名は、楽園の最高協議会において日の老いたるものを代表するにあたり日の完全なるものと交替する。その間、別の日の若きものは、自分の管区に属する地方宇宙の本部世界の視察旅行で離れているかもしれない。しかし、少なくともこれらの支配者の1名は、絶えず小区域本部に勤務して居残っている。

18:5.5 (212.2) あなた方は皆、主要区域の訓練世界へと内部に向かう途中に彼らの手を借りなければならないのであるから、あなたの小区域であるエンサを担当する３名の日の若きものをそのうち知るであろう。あなたは、ユヴァーサ上昇に際し小区域訓練球体の1集団だけを通過するであろう。

6. 日の和合なるもの

18:6.1 (212.3) 「日」の系列の三位一体人格は、超宇宙政府の段階より下の行政能力における機能はしない。発展する地方宇宙においては、単に相談役や助言者として務める。日の和合なるものは、楽園三位一体により地方宇宙の二

重の支配者に認可された渉外人格の集団である。組織化された生息化の各地方宇宙は、三位一体の、またある点では宇宙なる父の地方創造への代表として活動するこれらの楽園顧問の中の1名をそれに割り当てた。

18:6.2 (212.4) 全員が任命されてはいないとはいえ、これらの存在体は70万もいる。日の和合なるものの予備部隊が、宇宙調整の最高協議会として楽園において機能する。

18:6.3 (212.5) これらの三位一体観察者は、特別な方法により地方宇宙の行政活動から区域政府の行政活動を経て超宇宙のそれへと宇宙政府の全支部の行政活動を調整する。ゆえにその名前は—日の和合なるもの。日の和合なるものは、上司に3部からなる報告書を提出する。小区域の日の若きものには物理的で準知的な性質の関連資料を作成する。主要区域の日の完全なるものには知的で準精霊的な出来事を報告する。超宇宙の首都の日の老いたるものには精霊的かつ準楽園的事柄を報告する。

18:6.4 (212.6) それらは、三位一体起源の存在体であるので、全楽園回路が相互通信のために利用可能であり、したが

って、いつも相互の、また楽園の最高協議会に至る他のすべての必要とされる人格との連絡をとるのである。

18:6.5 (212.7) 日々の和合のものは、組織的には自己の職務の地方宇宙政府とは繋がってはいない。観察者としてのその義務は別として、単に地方当局の依頼により行動する。日々の和合のものは、地方創造の主要である全協議会の、また重要な全秘密会議の職権上の構成員であるが、行政問題の技術的検討には参加しない。

18:6.6 (213.1) 地方宇宙が光と生命に定着すると、その栄光の存在体は、進化の完全性のそのような領域において拡大された能力でそのとき機能する日の和合のものと自由に作用し合う。しかし、それでもまだ、主としては三位一体の大使であり、楽園の顧問である。

18:6.7 (213.2) 地方宇宙は、二元的な神格起源の神性の息子により直接に統治されるが、その神性の息子の側には絶えず三位一体起源の人格である楽園の兄弟がいる。地方宇宙の本部からの創造者たる息子の一時的不在に際しては、代理支配者は、重大な決定において大きくは日の和合のものの助言に導かれる。

7. 日の誠実なるもの

18:7.1 (213.3) これらの三位一体起源の高位の人格は、各地方宇宙の中の100の星座の支配者への楽園助言者である。7,000万の日の誠実なるものがおり、日の和合なるものと同じく、全員が、勤務中というわけではない。楽園予備部隊は、相互宇宙倫理と自治諮問委員会である。日の誠実なるものは、予備部隊の最高協議会の判決に従い勤務を持ち回りで担当する。

18:7.2 (213.4) 地方宇宙の創造者たる息子にとっての日の和合のものは、その地方創造の星座を統治するヴォロンダデクの息子にとっての日の誠実なるものである。それらは、この上なく熱心であり、したがって、配属星座の福利にこの上なく貢献し、神々しく忠実である。だからこそその名前は—日の誠実なるもの。日の誠実なるものは、単に相談役として務める。星座当局の招待の場合を除き、行政活動には決して参加しないのである。星座本部を囲む建築訓練球体の上昇の巡礼者への教育奉仕活動にも直接関係していない。そのような仕事のすべては、ヴォロンダデクの息子の監督下にある。

18:7.3 (213.5) 地方宇宙の星座において機能する日の誠実なるものは、日の和合のものの管轄にあり、直接日の和合のものに報告をする。通常は地方宇宙内での相互関係において自己限定状態にある日の誠実なるものは、広範囲の相互通信の体制にはない。ネバドンに勤務中の日の忠誠なるものは、この地方宇宙に勤務中の自らの系列の他のすべてのものと連絡をとり合うことができる。

18:7.4 (213.6) 宇宙本部の日の和合のもののように、日の誠実なるものは、そのような領域の行政指揮官の個人的住居とは別に星座首都にそれぞれの個人的住居を維持する。その住まいは、星座のヴォロンダデク支配者の家と比較し実にこじんまりとしている。

18:7.5 (213.7) 日の誠実なるものは、万物の中枢近くの宇宙なる父の神性球体から地方宇宙の主要区域までの長い行政的-顧問の連鎖の最後のつながりである。三位一体起源の体制は星座で終わる。そのような楽園助言者は、永久に、惑星の構成体系には、または、生息界には配置されない。後者のこれらの行政単位は、完全に地方宇宙出身の存在体の管轄下にある。

18:7.6 (213.8) [ユヴァーサの神性顧問による提示]

論文 19
三位一体起源の調整存在体

19:0.1 (214.1) 三位一体起源の調整存在体と呼ばれるこの楽園集団は、神の楽園の息子の中に分類される三位一体の教師たる息子、超宇宙の高位の行政者の 3 集団、それに喚起された三位一体の精霊のやや非個人的な部類を有する。ハヴォーナ出身者でさえ、楽園に居住する数多くの存在体集団に伴う三位一体の人格のこの分類に適正に含まれるかもしれない。この考察で検討される三位一体起源のそれらの存在体は次の通りである。

19:0.2 (214.2) 1. 三位一体の教師たる息子

19:0.3 (214.3) 2. 英知の遂行者

19:0.4 (214.4) 3. 神性顧問

19:0.5 (214.5) 4. 宇宙検閲官

19:0.6 (214.6) 5. 喚起された三位一体の精霊

19:0.7 (214.7) 6. ハヴォーナ出身者

19:0.8 (214.8) 7. 楽園公民

19:0.9 (214.9) 三位一体の教師たる息子と、ことによると鼓舞された三位一体の精霊を除いては、これらの集団数は、明確に限定されている。その創造は終わっており過去の出来事である。

1. 三位一体の教師たる息子

19:1.1 (214.10) あなたに明らかにされる天の人格の高位の全系列のうち、三位一体の教師たる息子のみが、二重能力において行動する。それらは、三位一体性質の起源であり、機能上ほぼ完全に神性の子息性への奉仕に励んでいる。三位一体の教師たる息子は、三位一体と二元的起源の人格の間にある宇宙の大きな割れ目に架橋する連絡存在体である。

19:1.2 (214.11) 三位一体の定置の息子の数は、最終的数字であるが、教師たる息子は絶えず増加している。教師たる息子の最終的な数がどれほどかを私は知らない。しかしながら、私は、ユヴァーサへの最後の定期報告の楽園の記録が、これらの就労の息子は、210億162万4,821と記載があったと明言できる。

19:1.3 (214.12) 起源が楽園三位一体にあるこれらの存在体は、あなたに明らかにされる神の息子の唯一の集団である。それらは、中央宇宙と超宇宙に広がっており、また巨大な１部隊が各地方宇宙に割り当てられている。それらは、また他の神の楽園の息子のように個々の惑星に仕える。壮大な宇宙の計画が完全に展開されるというわけではないので、教師たる息子の多くは、楽園の予備部隊に留められており、それらは、空間の孤立世界の、地方宇宙や超宇宙の、またハヴォーナの世界の属する壮大な宇宙の全区域での緊急時の努めと特異な奉仕にも志願する。それらは楽園においても機能するが、我々が神の楽園の息子の論考に至るまで詳細な考察については延期する方がより有用であろう。

19:1.4 (215.1) しかしながら、これに関連し、教師たる息子は、三位一体起源の最高の調整人格であるということが留意されても良いかもしれない。そのような広範囲の宇宙の中の宇宙には、いつも限局的観点の誤りに、すなわち現実と神性に関する分断された概念に内在する悪に屈するという重大な危険がある。

19:1.5 (215.2) 例えば、通常、人間の心は、単純で有限のものから複雑で無限のものへの、つまり人間の起源から神性目標への進展によるこれらの顕示により描かれる宇宙哲学への接近を切望するのである。しかし、その道は精霊的英知には通じない。そのような方法は、ある種の型の遺伝に関する知識への最も簡単な道であるが、せいぜい人間の起源を明らかにし得るに過ぎない。それは神性の目標に関してはほとんど何も明らかにはしない。

19:1.6 (215.3) ユランチアにおける人間の生物進化においてさえ、現代の状況と現在の問題への限定的な歴史研究方法には深刻な反論がある。いかなる現実問題に関する真の観点 —人間あるいは神性、地球あるいは宇宙 — は、宇宙現実の三局面である起源、歴史、および目標に関わる完全かつ偏見のない研究と相関関係によってのみ得られる。これらの3つの経験的現実の適切な理解は、現状についての賢明な見積りのための基礎を提供する。

19:1.7 (215.4) 人間の心が、上方へ接近するための下方から始まる哲学的方法に従おうと目指すとき、生物学であろう

と神学であろうと、常に論理的思考の4つの誤りを犯す危険がある。

19:1.8 (215.5) 1. 心は、個人的到達、あるいは宇宙の目標のいずれかに関わる最終の、しかも完成された進化の目標を全く知覚しないかもしれない。

19:1.9 (215.6) 2. それは、宇宙進化の(経験的)現実を過度に単純化することにより哲学上の大きな誤りを犯すかもしれず、その結果、事実の歪曲、真実の曲解、目標の誤認へと導くかもしれない。

19:1.10 (215.7) 3. 原因調査は、歴史についての精査である。しかし、存在体がどうなるかに関する知識は、必ずしもそのような存在体の現況と本性についての知的な理解を提供するわけではない。

19:1.11 (215.8) 4. 歴史だけでは今後の開発 — 目標、を適切に明らかにはしない。限定的起源は有益ではあるが、神性の要因だけが最終的効果を明らかにする。永遠の終わりは、時間の始めには示されない。本当に関連する過去と

未来の光の中においてのみ現在を解釈することができる。

19:1.12 (215.9) したがって、これらの理由のためやさらに他の理由により、我々は、すべての人格現実とすべての宇宙存在の無限であり永遠である、また、神性である楽園の根源と中枢からの時間-空間旅行への出発により人間と人間の惑星段階の問題に接近する方法を駆使するのである。

2. 英知の遂行者

19:2.1 (215.10) 英知の遂行者は、超宇宙において楽園の三位一体により神性の英知が人格化されるように意図された特殊化された創造である。70億ちょうどのこれらの存在体が既存しており、10億がそれぞれの7超宇宙に割り振られている。

19:2.2 (215.11) 神性顧問であり宇宙検閲官である調整者と同様に、英知の遂行者は、楽園の英知、ハヴォーナの英知、そしてディヴィニントンを除く父の楽園球体の英知を経験した。これらの経験後に、英知の遂行者は、日の老いたるものへの奉仕のために永久的に配属された。英知の

遂行者は、楽園においても楽園-ハヴォーナ回路の世界においても勤めない。それらは完全に超宇宙政府の行政に専念する。

19:2.3 (216.1) 英知の遂行者が機能するときは、何時でも何処であろうともすぐにその場で神性の英知が機能する。強力で厳然たるこれらの人格の行動に表現される知識と英知には、臨場の現実と顕現の完全性がある。これらの人格は、楽園三位一体の英知を反映しない。これらの人格はその英知である。それは、宇宙知識の応用における全教師のための英知の源である。それは、全宇宙における学習と洞察力のための施設への思慮深さの泉であり判別の水源である。

19:2.4 (216.2) 英知は、完全な存在体に備わっている神性の洞察の完全性に由来し、並びに進化の生物により得られた人格的経験に由来しているので、起源においては二重である。英知の遂行者は、神性洞察からくる楽園の完全性の神性の英知である。ユヴァーサの英知の遂行者の行政仲間、つまり強力な使者、名前と番号のないもの達、それに権威高きものたちは、ともに行動しているとき経験

からくる宇宙の英知である。神性存在体は、神性知識に関する完全性を得ることができる。進化する人間は、いつかは上昇者の知識に関する完全性に至るが、これらの存在体のいずれもそれだけでは可能なすべての英知の可能性を使い果たすことはできない。従って、超宇宙の運営において最大限の行政英知の達成が望まれるときはいつでも、神性洞察の英知のこれらの遂行者は、常に進化の発展の経験上の苦難を通して超宇宙権威の高い職責に至った上昇人格との関わりがある。

19:2.5 (216.3) 英知の遂行者は、行政判断力の完成のためにいつも経験上の知恵であるこの穴埋めを必要とするであろう。しかし、高くてこれまでに達し得たことのない水準の英知は、楽園終局者が、いつか第7段階の精霊生活への誘導後に、もしかして楽園終局者により達成されるかもしれないと自明のこととして仮定されてきた。この推論が正しいならば、進化の上昇の完成されたそのような存在体は、疑う余地なくすべての創造の中で知られた最も有能な宇宙行政者になるのである。私は、このようなことが終局者の高い目標であると信じる。

19:2.6 (216.4) 英知の遂行者の多才さは、上昇する創造物の天の奉仕のほとんどすべてに参加することを可能にする。英知の遂行者と神性顧問である私の人格の系列、合わせて宇宙検閲官は、早期の画期的な時代であろうと、あるいは光と生命の定着時であろうと、個々の惑星と体制に真実を啓示する作業に従事するかもしれないし、また実際に従事する最も高い存在体の系列を構成する。時々、我々は皆、初期の生命のための惑星から地方宇宙と超宇宙、特に後者を経て、上昇する人間への奉仕に携わる。

3. 神性顧問

19:3.1 (216.5) これらの三位一体起源の存在体は、7超宇宙の領域への神格の助言である。それらは三位一体の神性顧問であり反射ではない。それらはその助言である。210億の顧問が任務についており、30億は各超宇宙に割り当てられている。

19:3.2 (217.1) 神性顧問は、英知の遂行者と宇宙検閲官の仲間であり同等者でもあり、1名から7名の顧問が後者の人格それぞれに連係している。全3系列は、主要区域と小区

域を含む地方宇宙と星座、および地方体制主権者の協議会において日の老いたるもの政府に参加する。

19:3.3 (217.2) 我々は、私がこの声明を書き綴る際のように個人として行動するが、必要があればいつでも3名組としても機能する。我々が管理資格において行動するときは常に英知の遂行者、宇宙検閲官、それに1名から7名の神性顧問が関連している。

19:3.4 (217.3) 1名の英知の遂行者、7名の神性顧問、1名の宇宙検閲官は、三位一体の神性の裁決機関、つまり時間と空間の宇宙における最高の移動諮問機関を構成する。そのような9名からなる一団は、実情調査の、あるいは真実啓示の裁決機関として知られており、超宇宙の全記録上そのような評決が日の老いたるものにより一度も覆されたことはないので、難問を裁いたり、判決を下す際、それはあたかも日の老いたるものが裁定したかのようである。

19:3.5 (217.4) 3名の日の老いたるものが機能するときは、楽園三位一体が機能する。9名からなる裁決機関がその一丸となった討議を受けて決定に至るとき、どの点から見て

も事実上日の老いたるものが話したことになる。そして、楽園支配者が、行政課題と政府規制において個々の世界、体制、および宇宙と個人的連絡をとるのがこの方法である。

19:3.6 (217.5) 神性顧問とは、楽園三位一体の神性顧問の完全性である。我々は、事実上、完全性の助言を代表する。我々が、仲間の、つまり進化の上昇の完成された、そして三位一体に抱擁された存在体の経験的助言により補完されるとき、我々の一致した結論は到達に至るばかりでなく充実している。我々の一致した助言が、宇宙検閲官にまとめられ、裁かれ、確認され、公表されるとき、宇宙の全体性の出発点に接近するということは、実にあり得る。そのような評決は、関連状況や懸念問題の時-空間内での神格の絶対的態度への可能な限りの最接近を意味している。

19:3.7 (217.6) 三位一体化した進化する三名組—強力な使者、権威高きもの、名前と番号を持たないもの—とのつながりにおける神性顧問7名は、ほぼ楽園水準の精霊的な意味と現実価値における人間の観点と神性の態度の融合に

むけての超宇宙の最接近である。創造物と創造者の宇宙に対する団結態度からくるそのような緊密な接近は、神であり人間である楽園の贈与の息子だけが上回るのである。

4. 宇宙検閲官

19:4.1 (217.7) 80億ちょうどの宇宙検閲官がいる。これらの特異な存在体は、神格の判断である。宇宙検閲官は、単に完全性の決定の反映ではない。それらは楽園三位一体の判断である。日の老いたるものでさえ、宇宙検閲官との関連以外には判断を下さない。

19:4.2 (217.8) 居住している日の永遠なるものの惑星の行政に所属している１名の検閲官が、中央宇宙の10億の各世界に任命されている。英知の遂行者も神性顧問もこのように永久にハヴォーナ行政には所属していないし、我々も、なぜ宇宙検閲官が中央宇宙に配置されるのかを完全に理解しているわけではない。それらの現在の活動は、ハヴォーナにおける自らの職務をほとんど説明しないし、我々は、それゆえ、宇宙検閲官が、ハヴォーナ人口

が部分的に変化するかもしれない将来の宇宙時代の必要性を見越してそこにいるのだろうと思う。

19:4.3 (218.1) 各7超宇宙には10億の検閲官が、割り当てられている。個々の能力においても英知の遂行者と神性顧問の関係においても、検閲官らは、7超宇宙の全区域にわたって稼動する。したがって、検閲官は、完全なハヴォーナ世界から体制君主の協議会までの壮大な宇宙の全段階において行動するし、また、進化世界の治世の全判決に不可欠部分である。

19:4.4 (218.2) いつでもどこでも宇宙検閲官が臨場するときは、神格の判断がある。また、検閲官がいつも英知の遂行者と神性顧問とのつながりに評決を下すので、そのような決定は、楽園三位一体の合一された英知、助言、および判断を迎え入れる。この法律上の三名組において、英知の遂行者は「私はあった」で、神性顧問は、「私はあるであろう」で、宇宙検閲官は常に「私はある」であろう。

19:4.5 (218.3) 検閲官は、宇宙において統合する人格である。1,000名__—もしくは100万名—の目撃者が証言したと

き、英知の声が話して神性の顧問が記録したとき、上昇の完全性の証言が加えられたとき、次には、検閲官が機能し、誤りのない神性の出来事すべてが、すぐに明らかにされる。そして、そのような公開は、神性の結論つまり最終的かつ完全な決定の要旨を示す。したがって、検閲官が話したとき、検閲官は、以前生じた本当の、しかも、紛れもないすべてを表現したのであるから、他の誰も話さないかもしれない。検閲官が話すとき、何の上訴もない。

19:4.6 (218.4) 私は、英知の遂行者の心の働きを最も完全に理解はしているが、宇宙検閲官の裁く心の働きをまちがいなく完全に理解するというわけではない。私には、検閲官が、宇宙問題の調査過程おいて提示される事実、真実、および発見の関係から新しい意味を定式化し、新しい価値をもたらすように見える。宇宙検閲官は、たぶん完全な創造者の洞察と完全にされた創造物の経験の組み合わせに対する最初の解釈を生み出すことができると思われる。楽園の完全性と宇宙経験のこの関連性は、確かに究極における新価値をもたらす。

19:4.7 (218.5) しかし、これが、宇宙検閲官の心の働きに関する我々の困難の終わりではない。任意のいかなる宇宙状況においても、我々は、検閲官の機能について知ったり、または憶測するすべてのための然るべき考慮をした後でも、それでもまだ決定を予測できなかったり、または評決を予測できないとわかる。我々は、創造者の態度と創造物の経験の関連性からの起こり得る結果をたいへん正確に断定するが、そのような結論は、つねに検閲官による公開の正確な予測ではない。検閲官は、何らかの方法で神格絶対者とつながりであるという可能性があるように思われる。さもなければ、我々は、それらの決定と判決の多くについて説明することはできない。

19:4.8 (218.6) 英知の遂行者、神性顧問、宇宙検閲官は、崇高なる三位一体人格の7系列とともに、時として三位一体の定置の息子と呼ばれるそれらの10集団を構成する。10集団はともに、三位一体の、行政者、支配者、行政者、助言者、相談役および裁判官の大部隊を構成する。その数は、370億をわずかに超える。72億が中央宇宙に配置され、また50億をわずかに越える数が各超宇宙に配置される。

19:4.9 (219.1) 三位一体の定置の息子の機能上の限界を描写することは非常に難しい。相互作用が、超宇宙の記録に見られるのであるから、それらの行為が、有限的制限があると述べることは正しくないであろう。三位一体の定置の息子は、時間-空間の状態により必要とされるかもしれないところの、すなわち主たる宇宙の過去、現在、未来の発展に属するところの宇宙行政または判決のいかなる段階においても活動する。

5. 喚起された三位一体の精霊

19:5.1 (219.2) 喚起された三位一体の精霊は、存在する完全に秘密の数少ない存在体の系列の一系列であるのであるから、私はそれに関してあまりあなたに伝えることはできない。彼らの創造元に非常に近い起源の我々にさえ自らを完全に明らかにすることは不可能であるので、それは、無論秘密なのである。喚起された三位一体の精霊は、楽園三位一体の行為により存在にいたり、3名全員はもとより1名または2名の神格により用いられることができる。我々は、これらの精霊が数的に完成されたものか、または絶えず増加するものであるかは知らないが、

精霊数は、固定されていないという意見に傾きがちである。

19:5.2 (219.3) 我々は、喚起された精霊の性質も行為も完全に理解するというわけではない。それらは、ことによると超人格精霊の部類に属するのかもしれない。それらは、周知の全回路にわたって作動するらしいし、時間と空間からはほとんど関係なく行動するようである。だが、我々は、その活動の本質からその性格を推論する以外はそれらについてはあまり知らないのだが、我々は、宇宙のあちらこちらでその結果を観測している。

19:5.3 (219.4) これらの喚起された精霊は、一定の条件下において三位一体起源の存在体による認識のために自らを優に人格化することができる。私はそれらを見た。だが、下位の天の存在体の系列にとりそれらの1名を認識することは決して可能ではない。また、三位一体起源のいかなる存在体も自身の任務を進める上でこれらの精霊を直接採用するかもしれない発展宇宙のに関する手続きにおいて時々ある一定の情況が起こる。したがって、我々は、それらが存在するということ、また、我々は、ある

条件下でそれらの支援を命じたり得たりするかもしれないということを知っているし、時々それらの臨場を認識する。しかし、それらは、そのような物質的創造が光と生命に落ち着く前に時-空間宇宙の運営を委ねられた明白で確実に明らかにされた組織の一部ではない。喚起された精霊は、進化する7超宇宙の現今の機構あるいは行政において明確に認識できる場所をもたない。それらは楽園三位一体の秘密である。

19:5.4 (219.5) ネバドンのメルキゼデクは、喚起された三位一体の精霊が、いつか永遠の未来において単独の使者の代わりに機能するのは必至であり、その地位はゆっくりではあるが確かにある型の三位一体化の息子の仲間としてそれらの職務によって消耗していると、教える。

19:5.5 (219.6) 喚起された精霊は、宇宙の中の宇宙の単独の精霊である。精霊としての後者は異なる人格であるということを除いては、非常に単独の使者に似ている。我々は、喚起された精霊に関する知識の多くを単独の使者から得る。単独の使者は、喚起された精霊の臨場への本来の感度に基づきその近さを感知し、その感度は、磁針が

磁極を指すように絶えることなく機能する。単独の使者は、喚起された三位一体の精霊の近くにいるとき、そのような神格の存在の質的兆しについて、そして実際に精霊の臨場、または複数の臨場に関する分類、あるいは数を知ることを可能にする非常に明確である量的登録についても意識している。

19:5.6 (220.1) さらなる興味深い事実を述べてもよい。その住民に思考調整者が内住するユランチアといったような惑星にいるとき、単独の使者は、精霊臨場に対する看破-感応性において質的興奮を認識している。そのような例には、量的興奮はなく、質的動揺しかない。調整者が来ない惑星においては、その惑星出身者との単独の使者の接触にはそのような反応は起きない。これは、思考調整者が楽園の三位一体の喚起された精霊に何らかの方法で関係しているか、または関連しているということを示している。何らかの方法で、それらはことによるとそれぞれの仕事のある局面において関連しているかもしれない。だが、我々には本当のところは分からない。両者ともに万物の中枢と根源の近くに源を発するのであるが、同じ

存在体系列ではない。思考調整者は、唯一父から生まれる。喚起された精霊は、楽園三位一体の子である。

19:5.7 (220.2) 喚起された精霊は、明らかに個々の惑星または宇宙の進化の計画には属さないにもかかわらず、ほとんどいたる所にいるようである。私は、この報告の作成に従事している今、私と関連している単独の使者のもつこの精霊の系列の臨場への人格的感性が、今この瞬間、25フィートも離れていないところに喚起された系列と第三の力の臨場の１名の精霊が、我々といるということを示している。第三体積の力の臨場は、３名の喚起された精霊が関係して機能しているという可能性を我々に示している。

19:5.8 (220.3) このとき私と関連している存在体の12以上の系列のうち、単独の使者は、三位一体のこれらの神秘的な実体の存在に気づいている唯一のものである。さらにまた、これらの神性の精霊の接近は、このようにして我々に知らされるが、我々は皆、等しくそれらのもの達の任務については知らない。我々は、神性の精霊が、単に関心をもつ自らの実行の観察者であるかどうか、それとも

我々への何らかの未知の方法において実際に我々の仕事の成功に貢献するかどうかを知らない。

19:5.9 (220.4) 我々は、三位一体の教師たる息子が宇宙の創造物の意識的啓発に専心しているということを知っている。私は、また、喚起された三位一体の精霊が、超意識により領域の教師としてもまた機能しているという確固たる結論に到達した。私は、意識的には受容しえない—自意識は、受容の確実性を事実上危険にさらすであろう—精霊に関する巨大かつ必須の知識、つまり精霊的到達に不可欠の真実があると確信している。我々がこの概念において正しければ、そして、存在体の私の系列全体がそれを共有するならば、この困難を克服すること、つまり道徳的啓発と精霊的前進のための宇宙計画におけるこの格差に橋を架けることが、喚起された精霊の任務であるかもしれない。我々は、三位一体起源の教師のこれらの2つの型は、その活動においてある種のつながりをもたらすと思うが、実のところは分からない。

19:5.10 (220.5) 私は、超宇宙の訓練世界においてまたハヴォーナの永遠の回路において完成しつつある人間—進化の領

域出身の精霊化にされた上昇する魂_—と親しくつきあってきたのだが、人間は、単独の使者に宿る看破の力が、実に我々の近くにいることを時おり示唆するその喚起された精霊に１度として気づいたことがない。私は、全系列の神の高位と下位の息子と自由に話してきたが、それらは、喚起された三位一体の精霊の戒めを同じようには意識していない。神の息子は、自らの経験を振り返ることができ、実際にそうするし、もしそのような精霊の機能が考慮に入れられなければ説明し難しい出来事についても詳しく話す。だが単独の使者を除く、時として三位一体起源の存在体を除いては、天の家族の誰も、喚起された精霊の接近というものを意識したことがない。

19:5.11 (221.1) 私は、喚起された三位一体の精霊が私と隠れん坊をしているとは思わない。喚起された三位一体の精霊は、私が彼らと通じ合おうとするように、おそらく一生懸命に私に自分たちを明らかにしようとしているであろう。我々の困難と限界は、相互的であり、また固有なものであるに違いない。私は、宇宙において何の気まぐれな秘密もないことに満足している。したがって、私は自

分の創造の系列に属するこれらの精霊の孤立の神秘を解決する努力を決して止めない。

19:5.12 (221.2) このすべてから、ちょうど今永遠の旅への第一歩を踏み出すあなた方必滅者は、「光景」と「物質」の確かさによる進展の前に長い道のりを進まなければならないということがよく理解できる。あなたは、すぐに、しかも安全に前進することを望むならば、長い間信仰を必要とし顕示に頼るようになるであろう。

6. ハヴォーナ出身者

19:6.1 (221.3) ハヴォーナ出身者は、楽園三位一体の直接の創造であり、またその出身者数は、あなたの限りある心の概念以上のものである。永遠の宇宙のこれらの三位一体起源の種族のような神らしく完全なそのような創造物の固有の授与を想像することは、ユランチア出身者にとってもまた可能ではない。あなたは、本当に、これらの栄光の創造物を決して思い描くことはできない。あなたは、ハヴォーナへの到着を待ち受けなければならない。そして、そのとき、精霊仲間としてそれらに挨拶することができる。

19:6.2 (221.4) ハヴォーナ文化をもつ10億の世界での長い滞在中、あなたは、これらの優れた存在体に対して永遠の友情を育むであろう。また、空間世界の最も低い人格的創造物と中央宇宙の完全な球体出身の高い人格存在体の間で成長するその友情のなんと深いことか。上昇する人間は、ハヴォーナ出身者との長く情愛深い関係において人間の前進初期の精霊の貧困化を補正するために多くのことをするのである。同時に、ハヴォーナ出身者は、上昇する巡礼者との接触を通じ、つねに神性の完全性の生活を送ってきた経験上の不利な条件をかなりの範囲で克服する経験をする。上昇する人間とハヴォーナの出身者の両者への利益は、すばらしく、かつ相互的なものである。

19:6.3 (221.5) 他のすべての三位一体起源の人格のようにハヴォーナ出身者は、神性の完全性に映し出され、他の三位一体起源の人格のように、時の経過が、経験的授与の貯蔵を増すかもしれない。しかし、ハヴォーナ出身者は、三位一体の定置の息子とは異なり地位が進展するかもしれない、つまり非啓示の将来の永遠-目標を持っているかもしれない。これは、調整者ではない父の断片との融

合のために奉仕-事実化し、このようにして終局者の必滅者部隊の隊員資格に適任であるハヴォーナ出身者により例証される。また、他の終局者部隊が、中央宇宙の出身者には開かれている。

19:6.4 (221.6) ハヴォーナ出身者の地位の進展は、ユヴァーサについて多くの考察をもたらした。ハヴォーナ出身者は、絶えず終局者のいくつかの楽園部隊に浸透しているので、その上もう存在体は創造されていないので、ハヴォーナに留まる出身者数が絶えず減少しているというのは明らかである。これらの出来事の最終結果は、我々には一度も明らかにされたことはないが、我々は、ハヴォーナからその出身者が完全に尽き果ててなくなるとは信じない。我々は、ハヴォーナ出身者が、ことによると外部空間段階の連続的創造時代のいつか終局者軍団に入ることをやめるであろうという見解を抱いてきた。また、我々は、中央宇宙は、これらのその後の宇宙時代に居住存在体の混合集団、すなわち原初のハヴォーナ出身者の一部だけから成る公民で満たされるかもしれないという考えも抱いてきた。創造物のいかなる系列、または型がこのようにして将来のハヴォーナの居住状態に運命づけ

られるのかは知らないが、我々は、次のように考えてきた。

19:6.5 (222.1) 1. ユーニーヴィータ - チア。これらは、現在のところ地方宇宙星座の永久的公民である。

19:6.6 (222.2) 2. 光と生命の時代の最盛期に超宇宙の生息球体に生まれるかもしれない人間の未来の型。

19:6.7 (222.3) 3. 一連の外空間の新来の精霊的特権階級。

19:6.8 (222.4) 我々は、以前の宇宙のハヴォーナは、現代のハヴォーナとはいくらか異なっていたということを知っている。我々は、来る時代を予示する中央宇宙におけるそれらの緩慢な変化をいま目撃していると推測することは妥当であると考える。一つの事が確かである。宇宙は非静的である。神のみが不変である。

7. 楽園公民

19:7.1 (222.5) 楽園には優れた存在体の、つまり楽園公民の数多くの集団がいる。それらは、上昇する意志の存在体の計画を直接には扱わないし、したがって、ユランチアの必滅者に完全に明らかにされるというわけではない。こ

れらの崇高な知力ある3,000以上もの系列があり、このうちの最後の集団は、三位一体が時間と空間の7超宇宙の創造計画を命じると同時に人格化された。

19:7.2 (222.6) 楽園公民とハヴォーナ出身者は、ときどき楽園-ハヴォーナ人格として集団で任命される。

19:7.3 (222.7) これで楽園三位一体により生み出されるそれらの存在体の話を完了する。それらのうちの何者とても迷ったことはない。しかも、最高度の意味で、それらには全員、自由意志が授けられている。

19:7.4 (222.8) 三位一体起源の存在体は、熾天使などの輸送人格に頼ることなく移動する特権を持つ。我々には皆、宇宙の中の宇宙において自由にすばやく動きまわる力がある。我々は、喚起された三位一体の精霊を除く単独の使者の信じられない速度に達することはできないが、空間での輸送施設全体を利用するので、その本部から、ユランチア時間の1年足らずで超宇宙のどの地点にも届くことができる。私は、ユヴァーサからユランチアまでの旅にあなたの時間の109日間を要した。

19:7.5 (222.9) 我々は、即座にこれらの同じ手段で連絡し合うことができる。我々の創造の系列全体は、喚起された精霊のみを除く楽園三位一体の子供のあらゆる区域内に抱擁されるすべての個人と接触しているそれ自体を見い出す。

19:7.6 (222.10) [ユヴァーサの神性顧問による提示]

論文20
神の楽園の息子

20:0.1 (223.1) オーヴォントンの超宇宙で機能するとき、神の息子は3名の一般首脳に分類される。

20:0.2 (223.2) 1. 神の下降する息子

20:0.3 (223.3) 2. 神の上昇する息子

20:0.4 (223.4) 3. 神の三位一体化の息子

20:0.5 (223.5) 下降する子息性の系列は、神性の、直接の創造である人格を包含する。必滅の創造物のような上昇する息子は、発展という創造的手段における経験的参加によってこの身分を獲得する。三位一体化の息子は、三位一

体の直接起源ではないものの楽園三位一体により抱擁される全存在体を含む合成起源の集団である。

1. 神の下降する息子

20:1.1 (223.3) 神の下降する息子は、高位で神性の起源である。神の下降する息子は、進化の起源__—神の上昇する息子—の下級の創造物が、楽園上昇において容易に進歩ができるように時間と空間の世界と体制において下降の奉仕活動に専念する。下降する息子の数多くの系列のうち、7系列がこれらの物語で表現されるであろう。中央の光と生命の小島の神格から来るそれらの息子は、神の楽園の息子と呼ばれ、次の3系列を含む。

20:1.2 (223.4) 1. 創造者たる息子たち—ミカエル系

20:1.3 (223.5) 2. 執政の息子たち—アヴォナル系

20:1.4 (223.6) 3. 三位一体の教師たる息子たち—デナル系

20:1.5 (223.7) 下降する子息性の残る4系列は、神の地方宇宙の息子として知られている。

20:1.6 (223.8) 4. メルキゼデクの息子たち

20:1.7 (223.9) 5. ヴォロンダデクの息子たち

20:1.8 (223.10) 6. ラノナンデクの息子たち

20:1.9 (223.11) 7. 生命運搬者

20:1.10 (223.12) メルキゼデクは、地方宇宙の創造者たる息子、創造の精霊、および父メルキゼデクの共有の子である。ヴォロンダデク系とラノナンデク系の双方は、創造者たる息子と創造者たる息子の創造の精霊提携者により生み出される。ヴォロンダデクは、いと高きもの、すなわち惑星の父として最もよく知られている。ラノナンデクは、体制君主として、また惑星の王子として。生命運搬者の三重系列は、超宇宙の管轄内の3名の日の老いたるものと相互に作用する創造の精霊と創造者たる息子とにより生み出される。しかし、これらの神の地方宇宙の息子の本質と活動については、地方の創造の問題を扱うそれらの書類により適切に描かれている。

20:1.11 (224.1) 神の楽園の息子は、三重の起源をもつ。一次の息子、すなわち創造者たる息子は、宇宙なる父と永遠なる息子により生み出される。二次の息子、すなわち執政

の息子は、永遠なる息子と無限の精霊の子である。三位一体の教師たる息子は、父、息子、精霊の子である。楽園の息子は、奉仕、崇拝、祈りの見地からは、まるで1者のようである。それらの精霊は一つであり、その働きは品質と完全性において同じである。

20:1.12 (224.2) 楽園の日の系列が神性行政者であると証明したように、楽園の息子の系列は、神性奉仕活動者—創造者、奉仕者、贈与者、裁判官、教師、および真実示現者—として自身を明らかにしたのである。これらの物語では明らかにされない中央宇宙と超宇宙における多様な奉仕をする日の系列は、永遠の小島の岸から時間と空間の生息世界までの宇宙の中の宇宙へと及ぶ。それらは、奉仕の性質と居場所次第でさまざまに組織化されるが、地方宇宙の中にあっては執政の息子と教師たる息子双方が、その領域を統括する創造者たる息子の指示のもとに貢献する。

20:1.13 (224.3) ユランチアの人間すべてに自らの精霊を注ぎ出したとき、創造者たる息子は、あなた自身の創造者たる息子がしたように、自らが制御し、また贈与できる人格

存在体に中心を置く精霊的な授与を持っているように思える。それぞれの創造者たる息子は、自身の領域におけるこの精霊的な引き寄せる力に恵まれている。創造者たる息子は、すべての下降する神の息子の行為と感情を個人的に意識している。宇宙の中の宇宙のいずこにいようとも、楽園の息子すべてとの接触を図り、接触の維持を可能にする永遠なる息子の引き寄せる精霊的なその絶対的な力の神性の反映、つまり地方宇宙の複製が、ここにある。

20:1.14 (224.4) 楽園の創造者たる息子は、奉仕と贈与の下降方向への職務において息子として貢献するばかりではなく、その贈与経歴の終了時に、各自が自己の創造において宇宙なる父として機能し、一方、神の他の息子は、宇宙なる父の愛情深い支配を惑星一つ一つが自発的に認識するようにと設計された贈与と精霊的高揚の貢献を続けるており、この認識は、楽園の父の意志への被創造物の献身において、また、創造者たる息子の宇宙主権への惑星の忠誠において頂点に到達するのである。

20:1.15 (224.5) 創造者と被創造物は、七重の創造者たる息子のなかに、理解があり、思いやりのある慈悲深い関係でいつまでも融合されている。ミカエルの系列全体、すなわち創造者たる息子は、その性質と活動についての検討が、本書の次の論文に持ち越されるほどに特異なものであるが、この解説文は、楽園の子息性の残りの系列、つまり執政の息子と三位一体の教師たる息子に関係するものである。

2. 執政の息子たち

20:2.1 (224.6) 永遠なる息子により定式化された存在体に関する最初の、しかも絶対的概念を愛の奉仕に関する無限の精霊により発想される新たで神聖的理想と一体化するたびに、神の新たな最初の息子、すなわち楽園の執政の息子が、生み出される。これらの息子は、ミカエルの系列とは対照的にアヴォナルの系列を構成する。執政の息子は、人格的意味において創造者ではないが、その全ての仕事においてミカエルに密接に関連している。アヴォナルは、惑星の奉仕活動者であり裁判官、つまり、時間-空間の領域の—全種族の、全世界の、全宇宙の判事である。

20:2.2 (225.1) 壮大な宇宙の執政の息子たちの総数はおよそ10億であると信じる理由が我々にはある。それらは、自治の系列であり、全宇宙の奉仕から得られた経験豊富なアヴォナル系を構成する楽園の最高協議会に指示を受ける。しかし、執政の息子たちは、地方宇宙に配置され委嘱されるとき、その領域の創造者たる息子の指揮下に仕える。

20:2.3 (225.2) アヴォナル達は、地方宇宙の個々の惑星への奉仕と贈与のための楽園の息子である。アヴォナルの各息子は、他にはない人格を持ち、つまり2者が似ることはなく、各自の仕事はその滞在領域において個々に特異である。そこでは、人間の肉体に似せてしばしば肉体が与えられ、ときには進化世界の地球の母から生まれる。

20:2.4 (225.3) より高い行政段階における奉仕に加え、アヴォナル達には、生息世界における三重機能がある。

20:2.5 (225.4) 司法活動。アヴォナル達は、惑星の治世の終わりに行動する。やがては、何十もの - 何百もの - そのような任務は、それぞの個々の世界において実行されるかもしれないし、また眠れる生存者の解放者として同じ

世界へ、または他の世界へ数え切れないほどの頻度で行くかもしれない。

20:2.6 (225.5) 2. 執政任務。通常、この型の惑星訪問は、贈与の息子の到着前に起こる。アヴォナルは、そのような任務に際し、人間の誕生を伴わない肉体化の手段により領域の大人として現れる。この最初の、通常の行政官の訪問に続き、アヴォナルは、贈与の息子の出現前後ともに同じ惑星において行政手腕で繰り返し貢献するかもしれない。アヴォナルは、これらのさらなる執政任務において物質形態、または可視形態で現れるかもしれないし、そうではないかもしれないが、それらのうちのいずれも無力な赤子として世界に生まれることはないであろう。

20:2.7 (225.6) 3. 贈与の任務。アヴォナルの息子はすべて、少なくとも一度は、何らかの進化世界の何らかの人種に自らを贈与する。司法訪問は頻繁であるかもしれないし、執政任務は複数回であるかもしれないが、各惑星には1名の贈与の息子のみが現れる。贈与のアヴォナルは、ユランチアにおいて肉体を与えられたネバドンのミカエルとして女性から生まれる。

20:2.8 (225.7) アヴォナルの息子には、行政任務上の、また贈与任務上の奉仕に回数制限はないが、通常7回の縦断経験後には、そのような貢献のないもの達のために一時的中止がある。複数の贈与経験のこれらの息子は、創造者たる息子の高等人格協議会に配属され、こうして宇宙業務の処理関係者になる。

20:2.9 (225.8) 執政の息子たちは、生息世界のための、また生息世界におけるすべての仕事の上で地方宇宙の創造物の2系列、すなわち、メルキゼデク系と大天使系の補助を受けており、一方、贈与任務上においても同様に、地方創造に起源をもつ輝ける宵の明星を伴っている。第二の楽園の息子であるアヴォナル系は、惑星におけるあらゆる努力において第一の楽園の息子、つまりアヴォナル系の地方宇宙奉仕の創造者たる息子の完全な力と権威の支持を受ける。人間生息のそのような世界における創造者たる息子の奉仕は、効果的かつ受容できたかもしれないように、生息球体におけるそれらの仕事は、どの点から見ても同じく効果的で受容できる。

3. 司法活動

20:3.1 (226.1) アヴォナル系は、領域の高位の行政長官、すなわち時間の世界の歴代の配剤の審判者であるので執政の息子として知られている。アヴォナル系は、睡眠中の生存者の覚醒を支配し、領域において判断を下し、司法の中断に終止符を打ち、最終的ではない慈悲の時代の使命を遂行し、惑星の奉仕活動の空間創造物を新配剤の務めに再選任し、任務の完了したところで自分たちの地方宇宙本部に戻る。

20:3.2 (226.2) アヴォナル系は、一時代の目標に判断を下すに当たり進化の人種の命運を定めるとはいえ、人格創造物の自己同一性を消すための判断を下すことを許されているとはいえ、そのような判決を実行はしない。この種の評決は超宇宙の当局以外の何者にも実行はされない。

20:3.3 (226.3) 配剤を終える目的と惑星進行の新時代開始の目的のための進化世界における楽園のアヴォナル系の到着は、必ずしも執政任務、あるいは贈与任務のいずれかではない。執政任務は時として肉体化であり、贈与任務はつねに肉体化である。すなわち、アヴォナル系は、惑星において物質の型—文字通り—でのそのような任務に

従事する。それらの他の訪問は、「技術的であり」、アヴォナルは、この能力での惑星の奉仕のために肉体化されるのではない。もし執政の息子が、もっぱら配剤調整者として来るのであるならば、領域の物質的創造物には見えない精霊存在体として惑星に到着するのであり、そのような技術的訪問は、生息界の長い歴史に繰り返し起きている。

20:3.4 (226.4) アヴォナルの息子は、治安と贈与の両経験に先立ち、惑星の裁判官として務めるかもしれない。しかしながら、肉体化の息子は、これらの任務のいずれかにおいて一時的な惑星時代に判決を下すであろう。同様に、創造者たる息子は、人間の肉体に似せて贈与の任務に際し肉体化する。楽園の息子が、進化世界を訪れその人々の中の一人のようになると、その臨場は、配剤を終えて領域の審判となる。

4. 執政任務

20:4.1 (226.5) 贈与の息子の惑星への出現に先立ち、生息界は、通常、執政任務をもつ１名の楽園のアヴォナルの訪問がある。それが最初の行政訪問であるならば、そのア

ヴォナルは、物質存在体として常に肉体が与えられる。そのアヴォナルは、人類のれっきとした男性、すなわち、その時代と世代の完全に必滅の創造物に見える存在体として配属の惑星に現れる。行政のための肉体化の間、地方の精霊力と普遍的な精霊力とのアヴォナルの息子の関係は、完全であり崩れない。

20:4.2 (226.6) 惑星は、贈与の息子の出現前後ともに権威の訪問を多く経験するかもしれない。配剤調整者として同じく活動するか、または他のアヴォナルの訪問を幾度となく受けるかもしれないが、審判のそのような技術的任務は贈与的でも権威的でもなく、このような場合アヴォナル系に肉体は与えられない。惑星が執政上の繰り返しの任務に恵まれるときでさえ、アヴォナル系は、いつも人間の肉体化に従うというわけではない。また、アヴォナル系は、人間の生身の姿で奉仕するときはいつも、領域の大人の存在体として現れる。女性から生まれるのではない。

20:4.3 (227.1) 楽園の息子は、贈与のあるいは行政のいずれかの任務の際に肉体を与えられるとき、調整者を経験し、

肉体化ごとにこれらの調整者は異なっている。神の肉体を与えられた息子の心を占領する調整者というものは、決してその内住する人間-神性の存在体との融合を通じて人格を期待することはできないが、宇宙なる父の命令により頻繁に人格化される。そのような調整者は、生息領域への神秘の訓戒者の行政、識別、および派遣にむけての指揮に関わるディヴィニントンの最高協議会を形成する。また、人間のこの世の肉体の溶解に際し、「父の懐」への帰還にあたり、調整者を受け入れ承認する。世界の裁判官である忠実な調整者は、このようにして自らの種の高位の長になる。

20:4.4 (227.2) ユランチアは、執政任務にあるアヴォナルの息子のもてなし係りをしたことは一度もない。ユランチアが、生息界の一般計画に従っていたならば、それはアダームの時代とキリスト・ミカエルの贈与の間で権威の任務に祝福されていたことであろうに。しかし、あなたの惑星での楽園の息子の順序は、最後の贈与においてあなたの創造者の息子の出現により1,900年前に完全に乱された。

20:4.5 (227.3) 執政任務に際し肉体化を命令された１名のアヴォナルが、ユランチアにはまだ訪れるかもしれないが、楽園の息子の将来の出現に関しては、「楽園の天使さえも、そのような訪問については、時間も方法も知らない」のである。なぜならば、ミカエル-贈与世界は、熟練の息子の個人的かつ人格的な保護区になり、そういうものとして、完全に自身の計画と支配を前提としている。そして、あなたの世界に関しては、これは、戻るというミカエルの約束によりさらに複雑にされるのである。ネバドンのミカエルのユランチア滞在に関する誤解にもかかわらず、一つのことが確かに信頼するに足るのである。—あなたの世界に戻るというミカエルの約束。この見込みを考慮して、ただ時のみが、神の楽園の息子のユランチア訪問の将来の順番を明らかにすることができる。

5. 神の楽園の息子の贈与

20:5.1 (227.4) 永遠なる息子、神の永遠の言葉である。永遠なる息子は、永遠の父の「第1」の絶対の、無限の考えの完全な表現である。この初代の息子の人格の複製、あるいは神性の延長が、人間の肉体化の贈与任務を始めると

き、神性の「言葉は肉体となる」ということ、その結果、言葉は、動物起源の卑しい存在体の間に住んでいるということが、文字通り真実になる。

20:5.2 (227.5) 息子の贈与の目的は、何らかの方法で、宇宙なる父の態度に影響を及ぼすためであるという広く知られた信念が、ユランチアにはある。しかし、あなたの啓蒙は、これが本当ではないことを示すべきである。アヴォナルの息子とミカエルの息子の贈与は、これらの息子を思いやりのある行政長官や支配者にし、時間と空間の民族と惑星が、安心ができるようにと考案された経験的過程の必要部分である。七重の贈与の経歴は、楽園の創造者たる息子すべての崇高目標である。そして、執政の息子たちすべては、第一の創造者たる息子と楽園の永遠なる息子を非常に豊かに特徴づけているこの同じ奉仕の精神により動機づけられている。

20:5.3 (227.6) 楽園の息子のある系列は、その球体のすべての普通の人間の心に思考調整者が宿ることを可能にするようにそれぞれの人間-生息界に授与されなければならない。というのも、調整者は、真実の精霊が全人類に注が

れるまですべての正真正銘の人間には来ないのであるから。また、真実の精霊の派遣は、発展世界の肉体における贈与の任務を首尾よく実行した楽園の息子の宇宙本部への帰還に依存している。

20:5.4 (228.1) 生息惑星の長い歴史の間には、多くの配剤裁決が起こるであろうし、一つ以上の執政任務が生じるかもしれないが、通常、贈与の息子は、ただ一度だけその球体において仕えるでろう。各生息界には、生から死までの人間の全生活を送るために来る1名の贈与の息子だけが必要とされるのである。創造者たる息子が、人間の姿での贈与を選んだ各地方宇宙の中のその一つの惑星を除き、遅かれ早かれ、精霊的状態にかかわらず、あらゆる必滅者-生息の世界が、贈与の任務を負う執政の息子のもてなし係りになるように運命づけられている。

20:5.5 (228.2) あなたは、贈与の息子に関しさらに理解したのであるから、ネバドンの歴史におけるユランチアになぜそれほどまでに多くの関心が寄せられるかを明察する。地方宇宙は、単にナザレの人間イエスの故郷の世界であるということから、あなたの小さく重要でない惑星に関

心をもつ。人間イエスの故郷の世界は、あなたの創造者たる息子の最終的かつ勝利の贈与の現場、つまり、ミカエルがネバドンの宇宙の最高の人格的主権を勝ち得た活動領域であった。

20:5.6 (228.3) 地方宇宙本部において創造者たる息子は、特に自身の人間贈与の終了後に、仲間の息子の、つまり執政の息子たちの集団に助言したり教授することに多くの時間を費やす。これらの執政の息子たちは、愛と献身で、深い慈悲と愛情の考慮をともなって、自らを空間世界に授与する。そして、これらの惑星の奉仕は、決してミカエルの人間の贈与に勝るとも劣らない。あなたの創造者たる息子が、創造物としての経験のために異常な不運に苦しんだ領域を自身の最後の冒険の場に選択したということは、本当である。しかし、創造者たる息子の贈与が、その精霊的復興をもたらすことを必要とするというほどいかなる惑星もそのような状態にはなかった。執政の息子たちは、地方宇宙の世界におけるすべての働きにおいて楽園の兄弟、つまり創造者たる息子のように同じく神々しく有能であり、すべてに賢明であるので、贈与集団のどの息子も、等しく満足させたことであろう。

20:5.7 (228.4) 贈与の肉体化の間、これらの楽園の息子に最悪の事態の可能性は常にあるとはいえ、私は、贈与の任務にある権威の息子の、あるいは創造者たる息子のいずれの失敗も不履行もいまだ見ていない。両者は、失敗するにはあまりにも絶対完全性に近過ぎる起源のものである。両者は、じつに危険を引き受け、実際に生身の必滅の創造物のようになり、創造物の特異な経験をするのであるが、私の観測の範囲内では、それらは、いつも成功している。両者は、決して贈与任務の目標の達成をしくじらない。全ネバドンの両者の贈与と惑星奉仕に関する物語は、あなたの地方宇宙の歴史の最も高貴で魅惑的な章を構成しているのである。

6. 人間-贈与の経歴

20:6.1 (228.5) それによって楽園の息子が贈与の息子として人間の肉体化の準備ができるようになる、つまり贈与の惑星において母になる方法は、普遍的謎である。また、このソナリントン手法の働きを見破るいかなる努力も、失敗は避けられない。ナザレのイエスの人間の生涯に関する高尚な知識をあなたの魂に深くしまっておきなさい。ただし、ネバドンのミカエルのこの謎の肉体化がいかに

成りたったかに関する無用な推測に考えを浪費してはならない。我々は、このような業績が神性の本質にとっては可能であるという知識と確信で我々全員を喜ばせ、このような現象をもたらす神性の賢明さにより駆使された手法について無益な憶測に時を無駄にしないようにしよう。

20:6.2 (229.1) 楽園の息子は、人間の贈与の任務にあたりイエスがユランチアにおいてしたように、いつでも女性から生まれ領域の男の子として成長する。崇高な奉仕に関わるこれらの息子はすべて、ちょうど人間のように幼年時代から青年時代をへて成年にうつる。それらは、すべての点において生まれる人種の人間のようになる。自身が勤める領域の子供がするように父に請願する。物質的観点から、これらの人間-神性の息子は、ただ一つを例外として普通の生活を送る。人間-神性の息子は、滞在する世界においてに子をもうけない。それは、楽園の贈与の息子の全系列に課される普遍的制限である。

20:6.3 (229.2) イエスが大工の息子としてあなたの世界で働いたように、他の楽園の息子も、それぞれの贈与惑星にお

いて様々な能力で労働する。あなたには、時間の進化惑星のどれか一つの贈与過程において不特定の楽園の息子が踏襲しなかった職業を思いつくことはとてもできまい。

20:6.4 (229.3) 贈与の息子は、人間の生活を経験を習得すると、内住する調整者との完全な同調を達成するとその後すぐに、肉体をもつ同胞の心を照らし、魂を奮い立たせるように考案された自分の惑星の任務に関わるその部分に取り掛かる。これらの息子は、教師として専ら滞在する世界における人類の精霊的な啓発に捧げられる。

20:6.5 (229.4) ミカエルとアヴォナルの人間-贈与経歴は、ほとんどの点において匹敵してはいるものの、全てにおいて同じではない。執政の息子は、あなたの創造者たる息子がユランチアにおいて、そして、うつし身となって「息子を見たものは誰でも父を見た、」と言ったたようには決して宣言しない。しかし、贈与任務にあるアヴォナルは、「私を見たものは誰でも神の永遠なる息子を見た、」と宣言するのである。執政の息子たちは、宇宙なる父からの直系ではないし、父の意志に従って肉体化を

するのではない。執政の息子たちは、楽園の息子が楽園の永遠なる息子の意志に従うようにいつも自分自身を与えるのである。

20:6.6 (229.5) 贈与の息子、つまり創造者たる息子か権威の息子が、死の入り口に入ると、それらは3日目に再び現れる。だが、それらが、1,900年前にあなたの世界に滞在した創造者たる息子が遭遇した悲惨な終わりに、つねに出会うという考えを抱くべきではない。ユランチアは、ナザレのイエスが通過した途方もなく、異常に残酷な経験により、「十字架の世界」として局所的に知られるようになった。そのような非人間的な扱いが神の息子に与えられる必要はなく、また大多数の惑星は、　より思いやりのある待遇を贈与の息子らに提供する。大多数の惑星は、非業の死を課すことなく、贈与の息子らにそれぞれの人間の経歴を終えさせ、時代を終えさせ、眠りの生存者を裁かせ、新配剤を開始させる。贈与の息子は、死に直面しなければならない、つまり、領域の人間の実際の全経験を乗り越えなければならないが、この死が暴力的であったり、異常であるという神性計画を必要とはしれない。

20:6.7 (229.6) 贈与の息子が暴力により処刑されない場合、「厳格な正義」あるいは「神性の激怒」の要求に応えるのではなく、むしろ、贈与を終了するために、すなわち、肉体化の経験と、必滅者のいる惑星において送られるような創造物の人生を構成する全てにおける個人的経験の、「杯を飲むために」、自ら進んで命を諦め、死の入り口を潜り抜けるのである。贈与は、惑星と宇宙にとっての必要性であり、肉体の死は、贈与任務の必要部分に過ぎない。

20:6.8 (230.1) 人間の肉体化が終わるとき、奉仕のアヴォナルは楽園に進み、宇宙なる父に受け入れられ、配置先の地方宇宙に戻り、創造者たる息子に承認される。贈与のアヴォナルと創造者たる息子は、そこでただちに贈与世界に居住する人類の心において機能するようにそれらの結合の真実の精霊を送り出す。これは、地方宇宙の前主権時代においては両者の息子の共同精霊であり、創造の精霊により実行される。それは、ミカエルの第7贈与に続く地方宇宙の時代を特徴づける真実の精霊とはいくらか異なっている。

20:6.9 (230.2) 創造者たる息子の最後の贈与が完了すると、その地方宇宙のすべてのアヴォナル-贈与世界に以前に送り出された真実の精霊は、本質面において変化し、ますます文字通り最高位にあるミカエルの精霊になる。この現象は、ミカエル-人間-贈与の惑星における奉仕のために真実の精霊の解放と時を同じくして起こる。その後、権威の贈与により光栄に浴した各世界は、地方宇宙の君主がその贈与の息子として直接的に肉体を与えられたとしたならば、その執政の息子と関連して、七重の創造者たる息子から受けるであろう同じ慰安者を受けるであろう。

7. 三位一体の教師たる息子

20:7.1 (230.3) これらの非常に個人的で精霊的な楽園の息子は、楽園の三位一体により誕生へと至る。それらは、ハヴォーナではデナルの系列として知られている。オーヴォントンでは三位一体の教師たる息子と記録されており、その親性ゆえにそのように命名されているのである。サルヴィントンでは、時として楽園の精霊の息子と呼ばれる。

20:7.2 (230.4) 教師たる息子は、数的には絶えず増加している。前回の宇宙調査に関する放送では、中央と超宇宙で機能するこれらの三位一体息子の数を210億余りと示しており、現存する三位一体の教師たる息子全員の1/3以上を含む楽園の予備部隊は除外されている。

20:7.3 (230.5) 子息性のデナル系列は、地方行政か超宇宙行政の不可欠部分ではない。その構成員は、創造者でも回収者でもなく、裁判官でも支配者でもない。それらは、道徳的啓発や精霊的進歩ほどには宇宙行政には関係がない。それらは、すべての領域の精霊的覚醒と道徳的指導に捧げられているので普遍的教育者である。子息性のデナル系列の奉仕活動は、緊密に無限の精霊の人格のそれと相互関係があり、密接に創造物の楽園の上昇に関わりがある。

20:7.4 (230.6) 三位一体のこれらの息子たちは、3名の楽園の神格の結合された性質を帯びているにもかかわらず、どうやらハヴォーナにおいては宇宙なる父の性質をより反映しているようである。超宇宙においては、永遠なる息子の性質を表現しているようであり、地方の創造において

は、無限の精霊の特徴を示しているらしい。三位一体のこれらの息子たちは、全宇宙においては奉仕の具体化と英知の分別である。

20:7.5 (230.7) 楽園の同胞とは異なりミカエル系とアヴォナル系は、つまり三位一体の教師たる息子らは、中央宇宙での何の予備訓練も受けない。それらは、直接、超宇宙本部に派遣され、そこからいずれかの地方宇宙での奉仕に任命される。デナル系自身そのものには、これらの進化の領域への奉仕活動において精霊的引力がないので、三位一体の教師たる息子らは、創造者たる息子と関連する執政の息子たちの結合された精霊的影響を活用する。

MISSING PARAGRAPH

20:8.1 (231.1) 楽園の精霊の息子は、三位一体起源の他とは異なる存在体であり、二重起源の宇宙の行為に完全に関係づけられた唯一の三位一体の創造物である。それらは、必滅の創造物と精霊的存在体の下級系列への教育的奉仕活動に愛情深く専念する。それらは、経験と業績に基づいて地方体制における労働を始め、地方創造の最高の仕事に向かって星座勤務を通じて内面へと進む。楽園の精

霊の息子らは、認定を受ると同時に奉仕先の地方宇宙を代表する精霊的大使になるかもしれない。

20:8.2 (231.2) ネバドンの教師たる息子の正確な数を、私は知らない。何千もの数になる。メルキゼデクの学校の学部の多くの責任者がこの系列に属するが、サルヴィントンの定期的に構成される大学の合同職員は、これらの息子を含む10万以上を擁する。数多くのものが様々なモロンチア-訓練世界に配置されるが、かならずしも必滅創造物の精霊的、知的向上に専念するわけではない。それらは、熾天使の存在体と地方創造の他の出身者の導きに等しく関係がある。その補佐の多くは、創造物-三位一体化の存在体の階層から選ばれる。

20:8.3 (231.3) 教師たる息子は、責務ある辺境哨兵から星の生徒の宇宙奉仕の下位段階すべての資格と公認のための全考査を行い、またすべての試験を実施する職員を構成する。それらは、惑星課程からサルヴィントンに位置する英知の高等大学にわたる長年の訓練課程を実施する。努力と到達の表示である認証は、知恵と真実でこれらの冒

険を終了する上昇の人間、あるいは意欲的な天使童子のすべてに与えられる。

20:8.4 (231.4) 神の息子のすべてが、全宇宙において絶えず忠実で普遍的に有能な三位一体の教師たる息子に見守られている。それらは、すべての精霊人格の発揚された教師であり、神の息子自身の立証済みの真の教師でさえある。しかし、私は、教師たる息子の義務と機能に関わる際限のない細部についてあまりあなたに教えることはできない。デナル-子息性活動の広大な領域は、あなたが知性の点でより進んでいるとき、またあなたの惑星の精霊的孤立が終了後に、ユランチアにおいてより理解されるであろう。

9. デナル系の惑星奉仕

20:9.1 (231.5) 三位一体の教師たる息子は、進化世界の成り行きの進展が、精霊的時代に着手する機が熟していることを示唆するとき、いつもこの奉仕に志願する。あなたは、ユランチアが精霊的時代を、すなわち、宇宙啓発の1,000年間を一度も経験したことがないので、子息性に関するこの系列には詳しくない。しかし、教師たる息子

は今でも、あなたの球体での計画された滞在に関する計画を定式化する目的のためにあなたの世界を訪問する。それらは、その住民が動物的行動の束縛から、また物質主義の拘束からの開放を獲得した後にユランチアに現れるはずである。

20:9.2 (231.6) 三位一体の教師たる息子は、惑星の配剤終了には全く無関係である。三位一体の教師たる息子は、死者を裁いたり生者を移したりはしないが、これらの奉仕を実行する執政の息子たちをそれぞれの惑星任務に伴う。教師たる息子は、精霊的時代の開始、すなわち進化する惑星における精霊的現実時代の夜明けに全面的に関係している。教師たる息子らは、物質的知識と俗世の英知の精霊的対応物を具体的にする。

20:9.3 (232.1) 教師たる息子は、惑星時間のその訪問惑星に通常1,000年間留まる。1名の教師たる息子は、惑星の千年の治世期間を統治し、70名の自分の系列の仲間の補助を受ける。デナル系は、肉体化をしないし、他の方法でも必滅の存在体に見えるようには自分たちを具体化しない。したがって、三位一体の教師たる息子と関連する地

方宇宙の人格である輝ける宵の明星の活動を通じて維持される訪問世界と接触する。

20:9.4 (232.2) デナル系は、幾度となく生息界に戻るかもしれないし、惑星は、最終的任務に続いて光と生命の定着状態の球体へと、すなわち現宇宙時代の必滅-生息世界すべての進化的目標へと先導されるであろう。終局者の必滅者部隊は、光と生命に定着した球体に大いに関係があり、その部隊の惑星における活動は、教師たる息子に接触する。実に、デナルの子息性の系列全体は、時間と空間の進化的創造における終局者の活動の全局面に緊密に関連づけられている。

20:9.5 (232.3) 三位一体の教師たる息子は、進化的上昇の初期段階からずっと人間前進の体制に完全に関わっているらしいので、我々は、しばしば未来宇宙の明かされていない経歴における終局者との可能な関係を憶測することになる。我々は、超宇宙の行政者は、一部は三位一体起源人格であり、一部は三位一体-抱擁された進化する上昇の創造物であると観察する。我々は、現在教師たる息子と終局者とが、何らかの非啓示の将来の目標における密

接なつながりに備えるための予備訓練であるかもしれない時間-関連性の経験を取得することに熱中していると堅く信じる。進化世界の問題にすっかりなじみ深くなり、また進化的人間の経歴に長い間関係してきたこれらの楽園の教師たる息子は、ついに超宇宙が光と生命に落ち着くとき、おそらく終局者の楽園部隊との永遠の関係へと移されるであろうというのが、ユヴァーサにおける我々の信念である。

10.楽園の息子の連合聖職活動

20:10.1 (232.4) 神の楽園の息子のすべてが、起源と性質において神性である。各世界のための楽園の息子の各々の働きは、まるで最初の、そして唯一の神の息子の奉仕のようである。

20:10.2 (232.5) 楽園の息子は、時間と空間の領域への神格の3人格に属する機能的性質の神性提示である。創造者たる息子、執政の息子、教師たる息子は、人の子らへの、そして、上昇可能の他の宇宙の全創造物への永遠の神格の贈り物である。これらの神の息子は、永遠性の高い精霊

的目標に達する時間の創造物を助ける仕事に絶えず専念する神性の奉仕活動者である。

20:10.3 (232.6) 宇宙なる父の愛は、創造者たる息子のなかに永遠なる息子の慈悲と融合されており、ミカエルのもつ創造力、愛の奉仕活動、理解ある統治をもって地方宇宙に明らかにされる。永遠なる息子の慈悲は、執政の息子のなかに無限の精霊の奉仕活動と結合されており、これらのアヴォナル系の裁定、奉仕、贈与の経歴において進化の領域に明らかされる。3名の楽園の神格の愛、慈悲、および奉仕活動は、三位一体の教師たる息子のなかで最高度の時-空間の価値-段階において調整され、生ける真実、神性の善、真の精霊美として宇宙に提示される。

20:10.4 (233.1) 子息性のこれらの系列は、空間の創造物への楽園の神格の顕示をもたらすために地方宇宙において協力をする。創造者息子は、地方宇宙の父として宇宙なる父の無限の特質を描き出す。アヴォナル系は、慈悲の贈与の息子として無限の思いやりをもつ永遠なる息子の比類なき本質を明らかにする。三位一体のデナルの息子は、上昇人格の真の教師として無限の精霊の教師の人格を明

らかにする。ミカエル系、アヴォナル系、デナル系は、神々しく完全な協力で時-空間宇宙内、またそれへの崇高なる神の人格と主権の実現と顕示に貢献している。これらの神の楽園の息子は、三位一体の活動で調和して、第一の偉大な根源と中枢の神性の楽園の永遠の小島から空間の未知の深層への終わりなき展開を追求するとき、神格の人格の先駆的位置においていつも機能する。

20:10.5 (233.2) [ユヴァーサからの英知の遂行者による提示]

論文 21
楽園の創造者たる息子

21:0.1 (234.1) 創造者たる息子は、時間と空間の地方宇宙の製作者であり支配者である。これらの宇宙の創造者と主権者は、父なる神と息子なる神の特性を具体化しており二重起源である。しかし、創造者たる息子のそれぞれは、他の全てとは異なっている。各自が、性質面においても人格面においても唯一無二である。各自が、完全な神性理想その起源から「唯一生み出された息子」である。

21:0.2 (234.2) これらの高位の息子は、地方宇宙を組織化し、発展させ、完成させる広大な仕事において宇宙なる父の

持続する承認を常に受ける。創造者たる息子の楽園の父との関係は、心を動かすものであり、最高のものである。疑いなく、神格の両親の神性子孫への深い愛情は、人間の両親ですらも我が子に抱く美しく、ほぼ神性の愛の源泉である。

21:0.3 (234.3) これらの第一の楽園の息子は、ミカエル系として人格化される。自身の宇宙を設立するために楽園から楽園からへと進むとき、それらは、創造者ミカエル系として知られている。最高の権威で定着するとき、それらは、主たるミカエル系と呼ばれる。時々、我々はあなたのネバドン宇宙の主権者をキリスト・ミカエルと呼ぶ。ミカエルは、その系列と本質に属する最初の息子の名称であり、「マイケルの指令」に従い、いつも、そして、いつまでも君臨する。

21:0.4 (234.4) 最初の、すなわち、長子のミカエルは、外圏球体から中央創造の最内部の回路へと進み、物質存在体として決して肉体化を経験はしなかったが、精霊的創造物のハヴォーナの7回路の上昇経験をした。ミカエルの系列は、壮大な宇宙の端から端までを知っている。いかな

る時間と空間の子らの不可欠の経験にも、ミカエル系が個人的に参加しなかったということはない。実のところ、ミカエル系は、神性だけではなく最高のものから最低のものまでのあなたの本質、つまり全本質を意味する分担者でもある。

21:0.5 (234.5) 最初のミカエルが、万物の中心での会議の際の、第一の楽園の息子の主席議長である。親の臨場とともに集合し統一の進歩と宇宙の中の宇宙の安定化と関係する審議に従事した15万名の創造者たる息子の永遠の小島における並はずれた秘密会議の宇宙放送について我々は、ユヴァーサにおいてつい近頃記録した。これが、君主ミカエル系の選ばれた集団、つまり七重の贈与の息子であった。

1. 創造者たる息子の起源と本質

21:1.1 (234.6) 永遠なる息子における精霊の絶対的観念化の豊かさが、宇宙なる父における人格の絶対的概念の豊かさに遭遇するとき、そのような創造的融合が最終的に完全に達せられるとき、つまり、精霊のそのような絶対的自己性と人格概念の無限のそのような同一性が起こると

き、その瞬間、何らかの損失を被ることなく、新たで独創的な創造者たる息子、すなわち、その融合が力と完全性をもつこの新しい創造者たる人格を生む完全な理想と強烈な考えから生まれた唯一の息子が、突如として成熟した存在体となる。

21:1.2 (235.1) 各創造者たる息子は、宇宙の中の宇宙のつねに存在する創造者の無限で永遠の、そして、完全な2つの心の最初の概念の完全な一致から唯一生み出されたり、生み出すことが可能な子である。各創造者たる息子は、永遠全体にわたり、このミカエルの息子を生み出すために結合した神性創造の可能性に見出されたり、表現されたり、またはそれから発展し得るあらゆる神性現実のあらゆる可能性にある局面ごと、特徴ごとのすべてに関する無条件で完了した最終的表現と具体化であるので、そのような別の息子は決してあり得ない。各創造者たる息子は、神性起源を成す結合した神概念の絶対者である。

21:1.3 (235.2) これらの創造者たる息子の神性は、原則として、等しく楽園の両親の属性に由来している。創造者たる息子のすべてが、宇宙なる父の神性の豊かさと永遠な

る息子の創造的な特権の豊かさを分かち合う。だが、我々は、宇宙におけるミカエルの機能の実用的な出仕事を観測するとき、見かけの違いを明察する。一部の創造者たる息子は、父なる神により似ているようである。他のものは、より息子なる神に。例えば、ネバドンの宇宙における行政傾向は、その創造者と統治の息子は、その性質と特徴が永遠の母たる息子のそれにより似ているということを示唆している。同様に父なる神と息子なる神に似ているらしい楽園のミカエル系が、いくつかの宇宙を統括していると、付け加えて述べられるべきである。また、これらの観測には、どのような形でも批判は示唆されていない。これらの観測は単に事実の記録なのである。

21:1.4 (235.3) 私は、既存の創造者たる息子の正確な数は知らないが、70万以上はいると信じるに足る理由がある。我々は、今、正確に70万の日の結合なるものがいるということを知っている。我々は、また現宇宙時代の定められた計画が、三位一体の助言する大使として１名の日の結合なるものが各地方宇宙に配置されるということを暗示しているのではと観測する。我々は、絶えず増加する

創造者たる息子の数が、既に日の結合なるものの固定数を超えていることになお一層留意する。しかし、70万を超えるミカエル系の目標に関し、我々は、一度として知らされたことはない。

2. 地方宇宙の創造者

21:2.1 (235.4) 第一系列の楽園の息子は、各自の領域の、すなわち進化する7超宇宙の基本的な創造単位である時間と空間の地方宇宙の、設計者であり、創造者であり、建築者であり、行政者である。創造者たる息子は、今後の宇宙活動の空間用地の選択が許されているのだが、自分の宇宙の物理的組織化の開始前にさえ、自分が計画活動をする超宇宙での各種の創造において兄達の研究努力観測に長い期間を費やさなければならない。そして、ミカエルの息子は、このすべてに先立って、楽園観測とハヴォーナ訓練の長い、独自の経験をし終えるであろう。

21:2.2 (235.5) 創造者たる息子は、宇宙製作の冒険に乗り出すために、すなわち、自身の組織の属する地方宇宙のその長—事実上は神—となるために楽園を出発すると、その後で初めて第三根源と中枢と親密な接触をしている

と、また、あらゆる点で依存しているのだと気づく。無限の精霊は、万物の中心に父と息子とともにいるとはいえ、それぞれの創造者たる息子の実際の、有能な助力者として機能するように運命づけられている。したがって、それぞれの創造者たる息子は、神性奉仕活動者、つまり新しい地方宇宙の母たる精霊になるよう運命づけられているその存在体である無限の精霊の創造の娘を伴う。

21:2.3 (236.1) この際のミカエルの息子の出発は、これらの根源と中枢の前存在に固有のある種の制限のみを条件として、また他のある種の先行する力と臨場のみを条件として、楽園の根源と中枢から創造者の特権を永遠に解放する。これらの制限を除けば全能である地方宇宙の父の創造者特権は、次の通りである。

21:2.4 (236.2) 1. エネルギー-物質は、無限の精霊に支配される。物質の大小のいかなる新形態の創造が許される前に、すなわち、エネルギー物質のいかなる新変化の試みが許される前に、創造者たる息子は、無限の精霊の同意と作業協力を保証しなければならない。

21:2.5 (236.3) 2. 創造物の意匠と型は、永遠なる息子により管理される。創造者たる息子は、存在体のいかなる新型の、すなわち創造物のいかなる新意匠の創造に従事することが許される前に、永遠かつ最初の母なる息子の同意を確保しなければならない。

21:2.6 (236.4) 3. 人格は、宇宙なる父により設計され与えられる。

21:2.7 (236.5) 心の型と様式は、存在体の前創造物要因により決定される。心は、 (人格的、その他の) 創造物の構成のためにこれらが関連づけられた後の、第三根源と中枢の授与、つまり楽園の創造者の段階の下に位置する存在体すべてへの心の奉仕活動の普遍的源の授与である。

21:2.8 (236.6) 精霊の意匠と型の調整は、その顕現段階に依存する。最後の分析における精霊的意匠は、三位一体により、あるいは三位一体人格—父、息子、精霊—の前三位一体精霊の授与により調整される。

21:2.9 (236.7) そのような完全で神性なる息子は、自分の選んだ宇宙空間の場所を手中に収めてきた。宇宙の具体化と

総体的均衡に関する最初の問題が解決されたとき、神性なる息子が無限の精霊の補完する娘と共に有効で協力的な機能連合を形成したとき、—その時にこそ、この宇宙の息子と宇宙の精霊は、両者の地方宇宙の子供からなる数え切れない部隊に起源をもたらすようにするその関係を開始するのである。この出来事に関連し、楽園の無限の精霊からの創造の精霊の局地化は、地方宇宙の母たる精霊の人格的資質を呈して性質上変化する。

21:2.10 (236.8) すべての創造者たる息子は、楽園の両親のように神然としては似ていないにものの、一名たりとも他者には似ていないのである。それぞれが、人格面のみならず性質面においても独特、特異、他にはなく独自である。創造者たる息子らは、各自の領域の生命設計の設計者であり製作者であるので、他ならぬこの多様性は、それぞれの領域が創造されるか、または次にそこに展開されるかもしれないミカエルがもたらす生きている存在体のあらゆる型と段階においてもまた様々であることを保証する。したがって、地方宇宙出身である創造物の系列は、まことに様々である。あらゆる点で全く同じである二重-起源出身の存在体が運営する、あるいは居住する

地方宇宙は二つとしてない。固有の属性の半分は、いかなる超宇宙においてもかなり似ており、創造の精霊に由来している。他の半分は、多様な創造者たる息子に由来しており異なっている。しかし、そのような多様性は、創造の精霊に唯一の起源をもつそれらの創造物も、中央宇宙の、または超宇宙の出身である取り込まれた存在体をも特徴づけはしない。

21:2.11 (237.1) ミカエルの息子が、自分の宇宙を不在にしているとき、その政府は、長子生まれの存在体、つまり地方宇宙の最高責任者である輝く明けの明星により導かれる。日の結合なるものの忠告と助言は、こうしたとき計り知れないほどに貴重である。創造者たる息子は、不在の間、生息界と人間の子供の心への精霊的臨場の総括的管理で関連する母たる精霊を授けることができる。そして、地方宇宙の母たる精霊は、つねにその本部に留まり、育成的保護と精霊的奉仕活動を進化するそのような領域の最も遠く離れた地域へと拡大する。

21:2.12 (237.2) 地方宇宙における創造者たる息子の人格的臨場は、確立した物質的創造の順調な活動には必要ではな

い。そのような息子は、楽園へ旅ができるし、息子たちの宇宙は、空間全体において振れ続けている。そのような息子らは、時間の子供として肉体の具体化のために一連の力をいったん下に置くことができる。それらの領域は、それでもまだ各自の中心の周りで回転する。物質組織は、楽園の絶対重力の握りから、あるいは、無条件の絶対者の空間臨場に固有の宇宙の総括的管理からは独立している。

3. 地方宇宙への主権

21:3.1 (237.3) 創造者たる息子には、監督に当たっている主たる精霊が関与する超宇宙の確認を伴い、楽園の三位一体の同意により一つの宇宙の区域が与えられる。そのような行為は、物理的所有、すなわち宇宙段階の貸借資格を構成する。しかし、支配権に関わるこの初期の、しかも自己による限定的段階から主権取得の経験に基づく崇高性へのミカエルの息子の昇進は、宇宙創造と肉体による贈与の仕事における自身の個人的経験の結果から来る。ミカエルの息子は、贈与で取得される主権の達成まで宇宙なる父の代理者として統治する。

21:3.2 (237.4) 創造者たる息子は、随時、個人的な創造に対する完全な主権を主張できるのであるが、賢明にもそうしないことを選んでいる。もし創造者たる息子が、創造物贈与の通過に先立ち、不労の最高主権を仮定するならば、地方宇宙での楽園人格の居住者は、引き下がるであろう。しかし、これは、時間と空間の全創造に一度も起こったことはない。

21:3.3 (237.5) 創造者の資格の事実は、完全な主権を暗示するのであるが、ミカエル系は、経験的にそれを選び、それによって地方宇宙行政への楽園のすべての人格の十分な協力を維持する。我々は、どのミカエルもそれを選択しなかったと心得ている。だが、ミカエル系は、実際に自由意志の息子であるので、できるのである。

21:3.4 (237.6) 地方宇宙の創造者たる息子の主権は、経験的顕現の6段階、恐らく7段階に渡る。これらは次の系列に現れる。

21:3.5 (237.7) 1. 初期の代理主権—関連する創造の精霊による人格的資質の習得前の創造者たる息子により行使される単独の暫定的権威。

21:3.6 (237.8) 2. 結合的代理主権—母たる宇宙の精霊の人格達成後の楽園の一対の共同支配。

21:3.7 (238.1) 3. 増大する代理主権— 7創造物の贈与期間の創造者たる息子の進歩的権威。

21:3.8 (238.2) 4. 最高主権—7贈与の完了に続く定着権威。ネバドンにおける最高主権は、ユランチアにおけるミカエルの贈与の完了にさかのぼる。それは、あなたの惑星時間の1,900年間をわずかに超えて存在している。

21:3.9 (238.3) 5. 増大する最高主権—光と生命における創造物の大部分の領域の定着から成長する高度な関係。この段階は、あなたの地方宇宙の未到の未来に関係する。

21:3.10 (238.4) 6. 三位一体主権—光と生命の全地方宇宙の定着後に行使されるところの。

21:3.11 (238.5) 7. 明かされていない主権—将来の宇宙時代の知られざる関係。

21:3.12 (238.6) １名の創造者ミカエルは、計画された地方宇宙の初期の代理主権の受け入れにあたり、7創造物贈与が超宇宙支配者により完成され公認されるまで最高主権を

担うことのないように三位一体に誓いを立てる。しかし、ミカエルの息子が、随意にそのような不労による主権を主張できないのであるならば、しないという誓いを立てる意味はないであろう。

21:3.13 (238.7) 創造者たる息子は、そのいずれの地域にも意見の相違がないとき、前贈与の時代においてさえ自分の領域を最高に近いほどに統治する。決して挑戦を受けることがなければ、限定的支配権というものは、とてもありえないであろう。反逆のない宇宙における創造者たる息子による主権行使は、　反逆のある宇宙におけるものに劣らない。しかし、前者の例の主権限定は明らかではない。後者の例は、明らかである。

21:3.14 (238.8) そもそも自分の権威あるいは行政が挑戦を受けるか、攻撃されるか、または危険にさらされることがあれば、創造者たる息子は、個人的創造を支持し、保護し、防御し、また必要ならば、挽回することを永遠に誓っている。そのような息子は、自分自身の創造物により、または自身が選ぶより高い存在体により悩まされたり、あるいは苦しめられる可能性がある。地方宇宙の上

の段階の起源である「より高い存在体」は、創造者たる息子を煩わしそうにないと推論されるかもしれないし、また、これは本当である。しかし、そうすることを選ぶならばできるであろう。美徳とは、人格に関しては意志の問題である。正義は、自由意志の創造物には自然には沸き起こらない。

21:3.15 (238.9) 創造者たる息子は、贈与経歴の完了前に自らが課しているある種の制限をもって統治するが、贈与奉仕の終了後には、多様な創造物の型と様相において実際経験の徳の力で支配する。創造者は、自らの創造物の間に7回滞在したとき、つまり贈与経歴が終わったとき、そのとき宇宙の職権に絶大に納まっている。熟練の息子、つまり主権を有する最高の支配者になったのである。

21:3.16 (238.10) 地方宇宙に最高の主権を得る方法は、次の経験的7段階を伴う。

21:3.17 (238.11) 1.関係する段階の創造物にそっくりの肉体化の贈与の手段を経て存在の創造物の7段階に経験的に入り込むこと。

21:3.18 (238.12) 2.それが主たる七精霊に人格化されているように、楽園神格の七重の意志の各段階への経験的献身をすること。

21:3.19 (239.1) 3.楽園神格の意志への7神聖化の１つの実行と同時に、創造物段階における7経験の１つを越えていく。

21:3.20 (239.2) 4.各創造物段階において、楽園の神格への、そして、宇宙の全有識者への創造物の生活の極点を経験的に描く。

21:3.21 (239.3) 5.各創造物段階において、贈与段階への、そして全宇宙への神格の七重の意志の1局面に経験的に明らかにすること。

21:3.22 (239.4) 6.神格の本質と意志啓示にむけて七重の創造物経験と七重の経験とを体験的に統一すること。

21:3.23 (239.5) 7.崇高なる存在体との新たでより高い関係を達成する。この創造者-被創造物の経験全体からくる影響は、崇高なる神の超宇宙現実と万能の崇高者の時-空間主権を増大させ、また、楽園のミカエルの地方宇宙の最高主権を事実化する。

21:3.24 (239.6) 創造者たる息子は、地方宇宙の主権問題の解決にあたり、統治における自身の適性を示すだけではなく、本質を明らかにもし、楽園の神格の七重の構えをも描いている。父の優位性に対する有限者の理解と創造物の評価は、自らの創造物の姿と経験を引き受けて下降するときの創造者たる息子の冒険に関係がある。これらの優位の楽園の息子は、父の、つまり全宇宙領域に渡るすべての力、人格、および政府の普遍的長_—息子と精霊とともに_—である同じ父の愛情に満ちた性質と慈悲深い権威の真の顕示者である。

4. ミカエルの贈与

21:4.1 (239.7) 贈与の創造者たる息子の７集団があり、各領域の創造物に自らを授与した回数に基づいて７分類にされている。贈与の創造者たる息子らは、７番目の最終の創造物-創造者の経験に達するまで１番目から進行的贈与のさらなる５球体およぶのである。

21:4.2 (239.8) アヴォナルの贈与は、いつも人間の肉体に似せてのものであるが、創造者たる息子の7贈与は、被創造体の7段階への出現を伴い、優位性の7表現をともなう神

格の意志と本質の顕示に関係している。例外なく、すべての創造者たる息子は、創造者たる息子が自身の創造の宇宙に対する定着の、最高の司法権を担う以前に自分の創造した子らへ自分自身を与える経験を7度する。

21:4.3 (239.9) これらの7贈与は、異なる領域と宇宙で異なっており、つねに人間-贈与の冒険を含む。創造者たる息子は、通常は、最終的贈与においてある生息界のより高等の人類のうちの構成員として、動物-起源の民族の身体状況を増進するために以前に取り込まれたアダーム系の最大の遺伝的遺産を含むその人種集団の１構成員として現れる。楽園のミカエルは、贈与の息子としての自身の七重経歴においてただ一度だけ、ベツレヘムの赤子の記録があるように女性からの生まれである。意志を持つ進化的創造物の最下級系列の一員としてただ一度だけ生きて死ぬのである。

21:4.4 (239.10) それぞれの贈与後、創造者たる息子は、「父の右手」に進み出て、そこで贈与の父の容認を得て宇宙奉仕の次回の準備のための教えを受ける。創造者たる息子

は、第７の、最終的贈与に続き、自身の宇宙への最高権威と司法権を宇宙なる父から受ける。

21:4.5 (240.1) あなたの惑星における神性の息子の最後の出現は、贈与経歴の6段階を終了してきた楽園の創造者たる息子であったという記録がある。それなればこそ、ユランチアでの肉体化の人生の意識的把握をあきらめたとき、「すべてが終わった」と言うことができたし、本当に言った、—それは文字通り終わった。ユランチアにおける彼の死はその贈与経歴を終了した。それは楽園の創造者たる息子の神聖な誓いを実現させる最終段階であった。そして、この経験が得られたとき、そのような息子は、最高の宇宙主権者である。もはや、それらは父の代理人としてではなく、「もろもろの王の王と、もろもろの主の主」として自身の権利と名において統治するのである。これらの七重の贈与の息子は、提示されたいくつかの例外とともに、住まいである宇宙において無条件に最高である。地方宇宙に関して、「楽園と地球におけるすべての力」は、この勝利に委ねられ、熟練の息子を王位につかせられた。

21:4.6 (240.2) 贈与経歴終了後の創造者たる息子は、別個の系列、七重の熟練の息子と見なされる。熟練の息子自身は、創造者たる息子と同一であるが、そのような特異な贈与経験をしたので、双方は、一般的には異なる系列と見なされる。創造者が贈与のために下降するとき、真の、かつ永久的な変化が、必ず起こる。贈与の息子は、いまだ創造者であり、創造者であるにもかかわらず、一創造物の経験を自分の本質に追加する。この事実が、創造者たる息子の神性段階から自分を永遠に取り去り、宇宙の統治権とその世界の管理権を完全に獲得した熟練の息子の経験的次元に昇進させる。そのような存在体は、神性の親子関係で確保できるすべてを具体化し、完成された-創造物の経験から得られるすべてを取り囲む。他ならぬ神が、宇宙の領域をついに完全に支配するにあたり、経験的にふさわしく、有能であると見なされる前に、同等な経験を潜り抜けなければならないとき、なぜ人は、自分の低い起源と強要された進化の経歴を嘆かなければならないのか。

5. 宇宙との熟練の息子の関係

21:5.1 (240.3) 熟練のミカエルの力は、楽園の三位一体との経験豊富な関係から得られるので無制限であり、そのような権威に従うまさしくその創造物として実際の経験から得られるのであるから疑問の余地はない。七重の創造者たる息子の主権の本質は、最高である。その理由は、

21:5.2 (240.4) 1.楽園神格の七重の観点を包含する

21:5.3 (240.5) 2.時-空間の創造物の七重の姿勢を具体化する

21:5.4 (240.6) 3.楽園の姿勢と創造物の観点を完全に統合する

21:5.5 (240.7) この経験的主権は、それゆえ、究極的に崇高なる存在体に至る７重の神の神性すべてを包括している。七重の息子の個人主権は、関連する時-空間の限界内における顕現可能な楽園の三位一体の最大可能の力と権威の中身を抱擁しているのでいつかは完成される崇高なる存在体の将来の主権に似ている。

21:5.6 (240.8) ミカエルの息子から現在の宇宙時代の間の被創造物の完全に新しい型を創造する力と機会が、最高の地方宇宙主権の実現とともに通過していく。しかし、完全に新しい存在体の系列をもたらす主たる息子の力の損失

は、すでに設立され展開過程にある生命労作を決して妨げない。宇宙進化のこの広大な事業は、中断も削減もなく継続する。主たる息子による最高主権の習得は、すでに設計され作成された、また次にこのようにして設計され作成されるもの達により生産されるであろう育成と管理への個人的献身の責任を含意する。さまざまの存在体のほとんど無限の進化が、そのうち展開するかもしれないが、いかなる知的創造物の完全に新たな様式、あるいは型も、今後は主たる息子からは直接起こらない。これは、いかなる地方宇宙における定着した行政の第一歩、つまり始まりである。

21:5.7 (241.1) 七重の贈与の息子の自分の宇宙の絶対的主権への昇進は、長年の不確実性と相対的な混乱の最後の始まりを意味する。この出来事の後、そのうちに精霊化されるはずのないそれは、ついには散乱するであろう。そのうちに宇宙現実と調整されるはずのないそれは、いつか破壊されるであろう。無限の慈悲と名状し難い忍耐の提供が、領域の意志をもつ創造物の忠誠と献身を得る努力に困憊するとき、公平さと正義が、広く行き渡るであろ

う。公平さが、慈悲が修復させることができないものをついには滅ぼすであろう。

21:5.8 (241.2) 主たるミカエル系は、いったん主権を有する支配者として任命されると自身の地方宇宙において最高である。支配上のわずかな制約食は、　一定の原動力と人格の宇宙前存在に固有の制約である。さもなければ、これらの主たる息子は、各宇宙における権威、責任、および管理力において最高である。それらは、実質的に万事において創造者として神として最高である。任意の宇宙の機能に関し、それらの知恵におよぶ洞察はないのである。

21:5.9 (241.3) 地方宇宙の確立的主権への昇進後、楽園のミカエルは、自身の領分において機能する他のすべての神の息子の優位に立ち、自身の領域の必要性の概念に沿って自由に統治ができる。主たる息子は、生息惑星の精霊的裁決と進化の調整に関する系列を自由自在に変えるかもしれない。そして、そのような息子らは、惑星の特別な必要性にかかわるすべての問題において、特に創造物滞在の世界に関し、また最終的贈与の領域、人身具体化の

惑星に一層関係して自らの選択についての計画を練りかつ実行する。

21:5.10 (241.4) 主たる息子は、贈与世界との、自身の個人的な滞在の世界だけではなく執政の息子が自らを贈与したその全ての世界との完全な意志の伝達をとるようである。この接触は、自身の精霊的臨場により、つまり真実の精霊により維持される。主たる息子らは、真実の精霊を「すべての肉に注ぐ」ことができる。また、これらの主たる息子は、万物の中心の永遠の母たる息子との途切れない関係を維持する。それらには、天の宇宙なる父から時間の領域における惑星生活の下級の種族への思いやりの手を差し伸べる範囲がある。

6. 主たるミカエル系の目標

21:6.1 (241.5) 誰とても、権威の終局性をもって地方宇宙の七重の主たる君主の本質や目標について論じることは許されない。とは言いつつも、我々は皆、これらの問題について多くを推測する。我々は、ミカエルは各自が、その起源の神格の二元的概念の絶対であると教えられし信じる。したがって、ミカエルは、宇宙なる父と永遠なる息

子の無限性の実際の側面を具体化する。ミカエル系は、完全な無限性に関し部分的であるには違いないが、その起源に関する無限性のその部分に関してはおそらく絶対である。しかし、現在の宇宙時代でのそれらの仕事を観測するとき、我々は、有限以上の何の動きも探知しない。いかなる超有限の推測された能力も、自己充足的であらねばならず、非啓示でもあらねばならない。

21:6.2 (242.1) 創造物-贈与経歴の完了と最高の宇宙主権への昇進は、無限の奉仕のための能力出現を伴うミカエルの有限-行為の能力の完全な解放を意味するはずである。ゆえに、この点に関連して我々は、そのような主たる息子が、次には、新型の創造物生産において制限されている、つまり、それらの超有限の可能性の解放により確かに必要とされる制限というものにに気づく。

21:6.3 (242.2) これらの明かされていない創造者の力は、現在の宇宙時代を通じて依然として自己充足的であるという公算が高い。しかし、我々は、いつかはるか遠い将来に、現在流動している外空間宇宙に、七重の主たる息子と第7-段階の創造の精霊間のつながりが、宇宙の究極的

意味の超越的段階での新しいもの、意味、価値の出現を伴う奉仕の準絶対水準に到達するかもしれないと信じる。

21:6.4 (242.3) ちょうど崇高者の神格が、経験的奉仕の効力により実現するように、創造者たる息子も計り知れない本質と密接な関係のある楽園-神性の可能性の人格的実現を果たすのである。キリスト・ミカエルは、ユランチアにおいてかつて「私は道であり、真理であり、命である」と言った。道が、崇高の神性から究極の準絶対を経て永遠の神格終局へと導くように、我々は、すべての宇宙人格のためにつねに先導的役割を果たすミカエル系は、永遠に「道、真理、命」になるように文字通り方向づけられていると信じるのである。

21:6.5 (242.4) [ユヴァーサからの英知の遂行者による提示]

論文 22
神の三位一体化の息子

22:0.1 (243.1) 神の息子と呼ばれる存在体の3集団がある。子息性の下降と上昇系列に加え、神の三位一体化の息子として知られている第3の集団というものがある。子息性の

三位一体化の系列は、明らかにされたものや明らかにされていない人格のその多くの型の起源に応じ、3主要集団に細分されている。これらの主要集団は次の通りである。

22:0.2 (243.2) 1. 神格-三位一体化の息子

22:0.3 (243.3) 2. 三位一体-抱擁された息子

22:0.4 (243.4) 3. 創造物-三位一体化の息子

22:0.5 (243.5) 起源を問わず神の三位一体化の息子すべてには、その起源の一部として、または、その後に得た三位一体抱擁の経験として三位一体化の共通の経験がある。神格-三位一体化の息子は、これらの談話においては明らかにはされない。したがって、この発表は残る2集団の描写に、とりわけ神の三位一体-抱擁された息子に限定される。

1. 三位一体-抱擁された息子

22:1.1 (243.6) すべての三位一体-抱擁の息子は、そもそも二元的であるか、または、一つの起源であるが、三位一体抱擁後いつまでも三位一体の奉仕と課題に専念する。この

部隊は、いま明らかにされ、超宇宙奉仕のために組織されているように人格の7系列を包含している。

22:1.2 (243.7) 1. 強力な使者

22:1.3 (243.8) 2. 権威高きものたち

22:1.4 (243.9) 3. 名前と番号を持たないものたち

22:1.5 (243.10) 4. 三位一体化の管理者

22:1.6 (243.11) 5. 三位一体化の大使

22:1.7 (243.12) 6. 天の保護者

22:1.8 (243.13) 7. 息子の高位の補佐

22:1.9 (243.14) これらの人格の7集団は、さらに起源、性質、機能に従い3主要集団に分類される。到達の三位一体化の息子、選択の三位一体化の息子、および完全性の三位一体化の息子。

22:1.10 (244.1) 到達の三位一体化の息子—強力な使者、権威高きものたち、名前と番号を持たないものたち—は皆、楽園と終局者部隊に達した調整者-融合の上昇必滅者であ

る。しかし、それらは終局者ではない。それらは、三位一体に抱擁されると、その名前は終局者点呼から取り除かれる。この系列の新しい息子は、ハヴォーナ回路の回路本部惑星において日の永遠なるものの指揮下にて訓練の特殊過程を比較的短期間に体験する。その後、それらは、7超宇宙において日の老いたるものの奉仕に割り当てられる。

22:1.11 (244.2) 選択の三位一体化の息子は、三位一体化の管理者と三位一体化の大使を有する。数名が、ハヴォーナを移動し楽園に達した進化する熾天使と移された中間創造物からと、同じく光と生命の中央の小島に同様に上昇した精霊-融合と息子-融合の必滅者から採用される。選択の三位一体化の息子は、楽園の三位一体による抱擁に続き、またハヴォーナにおける短期間の訓練後に、日の老いたるものの法廷に配置される。

22:1.12 (244.3) 完全性の三位一体化の息子。天の保護者とその協調者つまり息子の高位の補佐は、特異な集団の二度-三位一体化の人格を構成する。それらは、楽園-ハヴォーナ人格からの、あるいは長い間終局者部隊において功

績を立ててきた完成された上昇者からの創造物-三位一体化の息子である。主たる7精霊の最高行政官への奉仕の後、また三位一体の教師たる息子の下での働きの後、これらの創造物-三位一体化の息子の一部は、楽園の三位一体により再度三位一体化され、(抱擁され)、次には、天の保護者として、また息子の高位の補佐として日の老いたるものの法廷に任命される。完全性の三位一体化の息子は、追加訓練なしに超宇宙奉仕に直接配置される。

22:1.13 (244.4) 三位一体-起源の我々の仲間—英知の遂行者、神性顧問、そして宇宙検閲官——は、構成員数が定まっているが、三位一体-抱擁の息子らは、絶えず増加している。三位一体-抱擁の息子の7系列すべてが、7超宇宙政府の1構成集団として任命され、また、それぞれの各超宇宙奉仕における数はまったく同じである。1名たりとも失われたことはない。三位一体-抱擁の存在体は、一度も迷ったったことがない。一時的に躓くかもしれないが、1名たりとも超宇宙政府の侮辱罪で裁かれたことはない。到達の三位一体化の息子と選択の息子は、オーヴォントンの奉仕において一度も躓いたことはないが、完

全性の三位一体化の息子は、時として判断を誤り、その結果、一時的な混乱を引き起こしたことがある。

22:1.14 (244.5) 全7系列は、日の老いたるものの指示に基づき大抵は自治集団として機能する。その奉仕の領域は、広範囲に及ぶ。完全性の三位一体化の息子は、任務の超宇宙を去りはしないが、その三位一体化の仲間は、時間と空間の進化の世界から永遠の楽園の小島への旅をする壮大な宇宙に及んでいる。完全性の三位一体化の息子は、超宇宙のいずれかで機能できるのだが、常に最初の指定先の超政府の構成員としてそうする。

22:1.15 (244.6) 明らかに三位一体-抱擁の息子は、7超宇宙の奉仕に永久に配属されてきた。この任務は、確かに現在の宇宙時代の間中であるが、我々にはそれが永遠であるとは一度も知らされたことはない。

2. 強力な使者

22:2.1 (245.1) 強力な使者は、三位一体化の息子の上昇集団に属する。強力な使者は、反逆の試練を経た、または別の方法で同様に個人的忠誠心を立証した完成された必滅者の一団である。全員が、宇宙忠誠の何らかの決定的な試

練を潜り抜けた。それらは、かつて楽園上昇において上司の不忠に直面した際にしっかりと、忠実に立ち向かい、一部は、そのような不誠実な指導者の代わりに活発に忠実に機能したのであった。

22:2.2 (245.2) 信義と献身のそのような個人的記録をもつこれらの上昇する必滅者は、時間の巡礼者の進行と共にハヴォーナへと進み、楽園に達し、そこから卒業し、終局者部隊に召集される。そこで、楽園の三位一体の秘密の抱擁に三位一体化され、次には7超宇宙政府の行政において日の老いたるものに伴うよう託される。

22:2.3 (245.3) 忠実に機能する上昇の全必滅者の反逆に対しての経験は、結局、超宇宙奉仕の強力な使者になるように定められている。過失、悪、罪のそのような激変を効果的に防ぐ上昇の創造物も同様である。宇宙危機において反逆を防ぐように、または忠誠心のより高い型を生じるように考案された行為は、実際の反逆に直面した際の忠誠心よりもさらに大なる価値があると見なされるのであるから。

22:2.4 (245.4) 先輩の強力な使者は、多くがグランドファンダ時代にハヴォーナを横断した初期の楽園到着者の中にいた時間と空間の上昇の必滅者から選ばれた。しかし、強力な使者の最初の三位一体化は、候補部隊が各7超宇宙からの代表が含まれるまでは作用しない。そして、楽園で資格を得るこの系列の最後の集団は、ネバドンの地方宇宙からの上昇の巡礼者を抱え込んだ。

22:2.5 (245.5) 強力な使者は、各超宇宙への任務のために楽園の三位一体により10万名ずつが70万からなる集団に迎え入れられる。およそ1兆の強力な使者がユヴァーサにおいて任命されており、各7超宇宙において奉仕している数は、まったく同数であると信じるに十分な理由がある。

22:2.6 (245.6) 私は強力な使者であり、しかも、私の人間経験の際の伴侶と仲間もまた大いなる試練において勝利を収めたと、また我々は、ハヴォーナへの昔からの内向けの上昇において何度となく、しかも長期にわたり分離はされたものの、同じ70万集団で迎え入れられたと、その上、密接かつ情愛深いつながりでヴァイスジェリントン

を通過しつつ時間を過ごしたということを知ることは、ユランチア出身者にとり興味深いかもしれない。我々は、最終的にはオーヴォントンのユヴァーサに任命され、ともに配属され、また2名の使者の奉仕を必要とする任務実行のためにしばしば一緒に派遣される。

22:2.7 (245.7) 強力な使者は、すべての三位一体-抱擁された息子と同じように、超宇宙活動の全段階に配置される。それらは、超宇宙の反射の業務を通じて自らの本部との一定の関係を保つ。強力な使者は、私がこの機会にするように、超宇宙の全領域において勤務し、また頻繁に地方宇宙と個々の世界への使命を実行する。

22:2.8 (245.8) 強力な使者は、超宇宙法廷において個人と惑星の双方が裁決を受ける際、双方の保護者として役割を果たす。また、それらは主要な領域の諸事の方向づけにおいて日の完全なるものを補助する。それらの主要な任務は、集団としての超宇宙観察者のものである。強力な使者らは、様々な本部世界と日の老いたるものの公式観察者として個々の重要な惑星に配置される。また、それらは、そのように配属されるとき、滞在範囲の諸事を方向

づける当局への顧問として努める。使者らは、必滅者の前進のための上昇計画の全局面において積極的に参加する。それらは、必滅者起源の仲間と共に下降する神の息子の計画の状況と進行について超政府との密接かつ個人的な接触を保つ。

22:2.9 (246.1) 強力な使者は、自身の全上昇経歴を完全に意識しており、これが、強力な使者がいかなる空間世界でのいかなる時間の創造物にとっての奉仕のためにとても有用かつ思いやりのある奉仕活動者である、すなわち理解ある使者である理由である。我々は、空間の全進化世界の全人種から、すなわち、思考調整者が内住し、その後それと融合する人類から生まれるのであるから、あなたは、肉体から解放されるとすぐに、我々と自由に理解をもって意思を伝え合うであろう。

3. 権威高きものたち

22:3.1 (246.2) それらの権威高きものたち(到達の三位一体化息子の第2集団)は、人間起源の調整者-融合のすべての存在体である。これらは、優れた管理能力を示した、長い上昇経歴を通じて並はずれた行政才能を示した完成され

た必滅者である。それらは生残する空間の必滅者から引き出される能力を決定する最良部分である。

22:3.2 (246.3) 7万の権威高きものたちは、三位一体の各つながりごとに三位一体化される。ネバドンの地方宇宙は、比較的若い創造ではあるとはいえ、最近になって三位一体化されたこの系列の階級のなかに代表がいる。オーヴォントンにはこれらの100億以上の熟練の行政者が現在任命されている。権威高きものたちは、天の存在体の個々の系列すべてのようにユヴァーサの自身の本部を維持し、また、その予備隊は、他の三位一体-抱擁の息子のようにオーヴォントンの自身の系列の中央の指示機構として機能する。

22:3.3 (246.4) それらの権威高きものたちは、制限なしの管理者である。それらは、日の老いたるものの偏在の、常に-有能な幹部である。いかなる生息界においても、いかなる球体においても、また、いかなる7超宇宙における活動のいかなる局面においても奉仕している。

22:3.4 (246.5) これらの輝かしい存在体は、ずば抜けた行政の知恵と特殊の経営管理能力をもって超宇宙裁判所のため

に正義の理念の提示を引き受ける。これらのもの達は、進化宇宙における正義の実行と不適合の調整を促進する。したがって、あなたは、あなたの叙任された宇宙進行の世界と球体を上昇する間、もし判断の誤りによって出頭を命じられることがあったとしても、訴追者とっては、あなたがすでに横断した、またいま横断中の経歴のあらゆる段階に個人的になじみ深いかつての上昇の創造物であろうから、あなたが不正に苦しむということはほぼありそうにもないのである。

4. 名前と番号を持たないものたち

22:4.1 (246.6) 名前と番号を持たないものたちは、到達の三位一体化の息子の第三の、そして最後の集団を構成する。それらは、時間と空間の世界からの進化する人種のすべての息子と娘の技能を越えて礼拝する能力を見いだした上昇者たちである。名前と番号を持たないものたちは、宇宙なる父の永遠の目的の精霊的概念、名前あるいは番号をもつ進化の創造物の理解を多少とも越える概念を得た。ゆえにそれらは、名前と番号を持たないものたちと命名されるているのである。より厳密に訳すならば、そ

れらの名前は「名前と番号を持たないものの上のものたち」となるであろう。

22:4.2 (247.1) この系列の息子らは、楽園の三位一体の7,000名からなる集団に迎え入れられる。オーヴォントンで任命されるこれらの1億名以上の息子が、ユヴァーサに関する記録のものである。

22:4.3 (247.2) 名前と番号を持たないものたちは、生存する人種の精霊的な心をもっていることから、精霊的観点が望まれたり、裁かれるべき問題に関する質問への適切な理解に上昇経歴における経験が不可欠であるときに、それらには、特に判断を下したり意見を提供する資格がある。名前と番号を持たないものたちは、オーヴォントンの最高陪審員である。悪政の陪審制度は、いくつかの世界においては多少なりとも茶番劇の裁判であるかもしれないが、ユヴァーサとその支部の裁判所における我々は、精霊的に進化した精神構造の最高の型を陪審員-裁判官として採用している。裁定は、どの政府においても最高任務であり、評決提示を任されるもの達は、最も経

験豊かで理解ある個人の中から最高かつ最も高貴な型から選ばれるべきである。

22:4.4 (247.3) 三位一体化の集団のための強力な使者、権威高きものたち、名前と番号を持たないものたちからの候補者選びは、先天的かつ、自動的である。楽園における選択方法は、いかなる意味においても任意ではない。人格的な経験と精霊的な価値が、到達の三位一体化の息子の要員を決定する。そのような存在体は、権威において等しく、行政上の地位において同一であるが、全員が個性的で異なる性格をもつ。それらは標準化された存在体ではない。全員が、それぞれの上昇経歴の差に応じて個性的には異なっている。

22:4.5 (247.4) これらの資格は経験上のもので、到達の三位一体化の息子は、そのうえに楽園神格の神性の抱擁に三位一体化されてきた。その結果、三位一体の定置の息子の協調する仲間として機能する。というのも、三位一体の抱擁は、未来の時間の進行から被創造体の未だ実現されていない可能性の多くを引き起こしているらしいので。

しかし、これは、現在の宇宙時代に関係することだけに真実である。

22:4.6 (247.5) 息子のこの集団は、主として、だが完全にではなく、時-空間の必滅者の上昇経歴の奉仕に関係がある。もし必滅の創造物の観点が疑わしいならば、疑問は、強力な使者、権威高きものたち、および名前と番号を持たないものから成る上昇の委員会への訴えにより決着がつけられる。

22:4.7 (247.6) この報告を読むあなた方必滅者は、自身が楽園に昇り、三位一体抱擁に達し、7超宇宙の1つにおいて日の老いたるものの奉仕に所属する遠い未来において、そして、私が今ユランチアで機能しているように、いつか進化する生息惑星への真実の顕示の範囲を広げるために配属されるかもしれない。

5. 三位一体化の管理者

22:5.1 (247.7) 三位一体化の管理者は、選択の三位一体化の息子である。生存価値をもつあなたの人種と他の必滅者だけが、ハヴォーナを往来し楽園に達し、たまたまに位一体の定置の息子への超宇宙奉仕に方向づけられのではな

く、忠実な熾天使のあなたの保護者と同様に忠実な中間のあなたの仲間もまた、三位一体の認識と見事な人格の目標への候補者になるかもしれないのである。

22:5.2 (248.1) 三位一体化の管理者は、ハヴォーナを通り抜け楽園と終局者部隊に達した上昇の熾天使であり、移動された中間創造物である。それらは、次に楽園の三位一体に抱擁され、日の老いたるものの奉仕に配置される。

22:5.3 (248.2) 上昇の熾天使の中からの三位一体の抱擁のための候補者は、終局者部隊に達し、次に、三位一体化された一部の上昇の必滅者との勇敢な協力ゆえにこの認識が与えられる。必滅の経歴の私自身の熾天使の保護者は、私とともに経験し、後に三位一体化され、現在、三位一体化の管理者としてユヴァーサ政府に配属されている。

22:5.4 (248.3) 中間創造物の場合も同じである。多くが、移され楽園に到達し、熾天使とともに、しかも同じ理由で、三位一体抱擁であり、超宇宙において管理者として委託されるのである。

22:5.5 (248.4) 三位一体化の管理者は、7万名の集団の中で楽園の三位一体により迎え入れられ、各集団の1/7は超宇宙に配属される。現在、オーヴォントンには1,000万名をわずかに上回る信頼された高位の管理者が仕えている。三位一体化の管理者は、ユヴァーサと大小の本部球体において役目を果たしている。高位の管理者は、それぞれの労働において10億を数える第二熾天使と他の優れた超宇宙人格の部隊に支えられている。

22:5.6 (248.5) 三位一体化の管理者は、管理者として経歴を始め、そういったものとして超政府の諸事に留まる。ある意味において、それらは自身の超宇宙政府の官吏であるが、天の保護者のようには個人に対処はしない。三位一体化の管理者は、集団の問題を処理し、集団事業に着手する。それらは、記録、計画、および機関の管理者である。それらは、事業、人格集団、上昇者の事業、モロンチア計画、宇宙立案、および他の無数の活動の受託者として行動する。

6. 三位一体化の大使

22:6.1 (248.6) 三位一体化の大使は、選択の三位一体化の息子の第2の系列であり、また管理者である他の仲間のように上昇する創造物の二つの型から採用される。上昇する必滅者が皆、調整者融合であるかまたは父融合であるというわけではない。一部は精霊融合であり、一部は息子融合である。これらの精霊-融合と息子-融合の必滅者の一部は、ハヴォーナに達し楽園に達する。候補者は、これらの楽園の上昇者から三位一体抱擁のために選ばれ、時おり7,000名の集団において三位一体化される。それらは、日の老いたるものの三位一体化の大使として超宇宙において任命される。ほぼ5億名がユヴァーサに登録される。

22:6.2 (248.7) 三位一体化の大使は、ハヴォーナの各教師の助言に基づき三位一体抱擁のために選出される。それらは、各集団の優れた心を表しており、それゆえに精霊融合の必滅者が来た世界の利益の理解と管理において超宇宙の支配者を補助するには最適任である。息子-融合の大使は、人格の息子-融合の系列にかかわる我々の問題対応において大きな支援となっている。

22:6.3 (248.8) 三位一体化の大使は、いかなる、そしてすべての世界のための、あるいは配属先の超宇宙にむけてのいかなる、そしてすべての目的ための日の老いたるものの使節である。それらは、小区域の本部における特別かつ重要な奉仕を提供し、超宇宙の無数の多岐にわたる任務をなし遂げる。三位一体化の大使は、超政府の三位一体化の息子の非常時の、あるいは予備の部隊であり、したがって、広大な範囲の義務に対応可能である。これらの活動に多少なりとも類似した出来事はユランチアには何もないので、人間の心に描くには不可能である。三位一体化の大使は、超宇宙業務における何千もの請負い仕事に従事している。

7. 三位一体化の方法

22:7.1 (249.1) 私には、完全の、そして完全にされた存在体の最高の創造的遂行—三位一体化の行為—の経験を物質の心に繰り広げることができるというわけではない—三位一体化の行為。三位一体化の方法は、ヴァイスジェリントンとソリタリントンの秘密の中にあり、これらの得意な経験を潜り抜けたもの達を除いては誰にも明らかにはできず、理解できない。したがって、人間の心にこの

並はずれた相互作用の性質と趣旨を成功裏に描くことはいかなる存在体の可能性も超えるものである。

22:7.2 (249.2) 神格は別として、楽園-ハヴォーナ人格と各終局者部隊の一定の構成員のみが、終局者化に携わる。これらのずば抜けた存在体は、楽園完全性の特殊条件のもとで概念-自己性の特異な冒険に乗り出す事が許されており、また、新存在体、つまり、創造物-三位一体化の息子の産出に幾度も成功している。

22:7.3 (249.3) 三位一体化のそのような冒険に従事する栄光の創造物は、そのような経験1つにだけ参加できるが、楽園の神格の場合は、三位一体化場面の連続的実行に限界はなさそうである。神格は、ただ1つの点で制限されているようである。ただ1名の最初の無限の精霊だけが、つまり、父-息子の結合された意志のただ1名の無限の幹部だけがいる。

22:7.4 (249.4) 楽園文化と精霊的進化の一定水準に達した上昇する調整者-融合の人間終局者は、被創造体を三位一体化を試みることのできるもの達の中にいる。人間-終局者の集団は、楽園に配置されるとハヴォーナ時間の

1,000年毎に休暇が与えられる。そのような終局者が義務のないこの期間を過ごすことを選ぶことのできる7つの異なる方法があり、そのうちの１つは、一部の終局者仲間か一部の楽園-ハヴォーナ人格と共同して創造物三位一体化の実演を試みることできるのである。

22:7.5 (249.5) もし2名の人間終局者が、主たる宇宙の建築者の前に行くとき、三位一体化のための同じ概念を独自に選んだことを明示するならば、建築者には、自分自身の判断で、これらの栄光の人間上昇者が自身の休暇を延長すること、また楽園公民の三位一体化区域へしばらく立ち去ることを許可する命令を公表する権限が与えられる。与えられたこの静養の終わりに、それらが、選ばれた、しかも原初の概念を、それまでにまだ三位一体化されていない概念を精霊化し、理想化し、実現するために楽園に適する努力をすることを個々に、また共同して選んだと報告するならば、主たる精霊第七号は、次にはそのような並はずれた仕事の認可命令を出すのである。

22:7.6 (249.6) 信じられないほどの長期間が、時々これらの冒険に費やされる。これらの忠実かつ決意の固いかつての

必滅者—および時として楽園-ハヴォーナの人格—が、最終的にそれらの目標を達成する前に、すなわち、実際の存在体への宇宙の真実の選ばれた概念をもたらすことに実際に成功する前に、一つの時代が過ぎるようである。そして、これらの熱心な二人づれが、つねに好評を得るわけではない。何回も失敗し、しかも、当事者側には発見できる誤りはない。このように三位一体化に失敗する候補者には、最高の努力をし、極度の失望に耐えた存在体として指定された終局者の特別集団へ入る事が許されている。楽園神格は、つねに三位一体化の結合に成功するが、同種の創造物の一対との、つまり同系列の存在体からの2名の構成員の企ての結合は、そうではない。

22:7.7 (250.1) 神性の両親は、新たで独創的な存在体が神により三位一体化されるとき神性の可能性において不変である。しかし、発揚された被創造体がそのような創造的な出来事をもたらすとき、請負中の、参加している１個人は、独自の人格変更を受ける。創造物-三位一体化された息子の前身2名は、ある意味では精霊的に1者となる。我々は、人格の特定の精霊局面における2統一のこの状

態は、おそらく崇高なるものが、壮大な宇宙において完全かつ完璧の人格顕示に至るそうような時まで優勢であると信じる。

22:7.8 (250.2) 創造物-三位一体化の新たな息子の登場と同時に、前身者２名のこの機能的な精霊統合が起こる。2名の三位一体化の両親は、究極の機能水準において1つになる。宇宙の創造体は誰も、この驚くべき現象について完全に説明することはできない。それは、神性経験に近いものである。父と息子が無限の精霊の永遠化の結合をするとき、目標の達成に際し、両者はすぐに1者となり、以来ずっと1者である。そして、創造物2者の三位一体化の統合は、宇宙なる父と永遠なる息子の神格の完全な統合を際限なく巻き込む系列に匹敵するが、創造物三位一体化の影響は、本質的には永遠ではない。その影響は、経験的な神格の完成された事実化の際に終わるであろう。

22:7.9 (250.3) 創造物-三位一体化された息子のこれらの両親は、宇宙任務において1者になるとともに、終局者部隊の構成において、また主たる宇宙の建築者と終局者部隊

の点呼において、2つの人格として数え続けられる。現在の宇宙時代には、三位一体化-結合のすべての両親が任務と機能において不可分である。1方が行くところにはもう片方が行き、1方がすることはもう片方がする。もし親の2-統一が人間の、(または他の)終局者と楽園-ハヴォーナ人格を伴うならば、結合した親の存在体は、楽園出身者とも、ハヴォーナ出身者とも、終局者とも機能しない。そのような混合統合は、同様の存在体で構成されている特別部隊に集まる。親の存在体は、混合の、またはそうではない三位一体化の全統合において互いに意識し、また通じ合い、両者ともに以前に履行したことのない任務を実行することができる。

22:7.10 (250.4) 主たる7精霊は、終局者と楽園-ハヴォーナ人格の三位一体化統合を是認する権威を持っており、そのような複合連係はいつも成功している。結果として起こる見事な創造物-三位一体化の息子は、楽園の永遠の創造物あるいは空間に属する時間の創造物のいずれの理解にも不適当な概念を代表している。したがって、それらは主たる宇宙の建築者の後見者になる。目標の三位一体化の息子は、明らかに未来の宇宙時代に関係している、そ

れゆえ超宇宙、あるいは中央宇宙の政権のどちらにも直接の実用的価値のない理念、理想、経験を具体化する。時間の子供の無類の息子と永遠の公民は皆、ヴァイスジェリントンに保留され、そこでは、創造者たる息子の部隊の公表されていない大学に占有された球体の特別区域において時間の概念と永遠の現実の研究に従事している。

22:7.11 (251.1) 崇高なるものは、神格現実の三側面の統一である。崇高なる神、楽園の三位一体のある種の有限の局面の精霊的な統一。全能の崇高者、すなわち壮大な宇宙の創造者の力の統一。崇高なる心、すなわち第三根源と中枢の個々の貢献、および崇高なるものの現実への第三根源と中枢の調整者たち。三位一体化の冒険において中央宇宙と楽園の優れた創造物は、系列の三位一体化の息子の産出につながる崇高者の神格の三重の創造物探査に従事している。

22:7.12 (251.2) 1. 上昇者-三位一体化の息子。終局者は、創造的な努力において時間と空間を経由しての楽園への上昇に

おいて経験的に獲得した全能の崇高者の概念上のある現実の三位一体化を試みている。

22:7.13 (251.3) 2. 天国-ハヴォーナ-三位一体化の息子。楽園公民とハヴォーナ出身者の創造的努力は、究極者と永遠者に境を接する超崇高背景での経験上得た崇高なるもののに属する一定の高い精霊的側面の三位一体化をもたらす。

22:7.14 (251.4) 3. 三位一体化の息子。だが、終局者と楽園-ハヴォーナ出身者がともに新創造物を三位一体化する際、この結合努力は、崇高-究極の心のある局面において再び影響をもたらす。結果として起こる創造物-三位一体化の息子は、超創造的である。それらは、別の方法で経験的に獲得され、また、それゆえ自動的に主たる宇宙の建築者、すなわち現在の宇宙時代の創造の限界を超える事象に関わる管理者の範囲内に落ちる崇高-究極の神格の現実を表す。目標の三位一体化の息子は、崇高者-究極者の非啓示の主たる宇宙機能のある側面を具体化する。我々は、時間と永遠の結合の子らに関して多くは知らな

いが、明らかにすることを許されているよりもはるかに知っているのである。

8. 創造物-三位一体化の息子

22:8.1 (251.5) この報告において検討された創造物-三位一体化の息子に加え、創造物-三位一体化の存在体の数知れない非啓示の系列がある。——終局者7部隊と楽園-ハヴォーナ人格に属する複数の関係にあるさまざまの子孫。しかし、啓示の、非啓示のこれらのすべての創造物-三位一体化の存在体は、宇宙なる父による人格を与えられている。

22:8.2 (251.6) 新しい上昇者-三位一体化の息子と楽園-ハヴォーナ-三位一体化の息子が、若く未熟であるとき、それらは、通常、無限の精霊の7楽園球体における長期間の奉仕のために派遣され、そこでは崇高なる７幹部の後見の下に働く。それらは、次に地方宇宙における一層の訓練のために三位一体の教師たる息子に採用されるかもしれない。

22:8.3 (251.7) 高位の、栄光の創造物起源をもつ採用された息子は、分類上、教師たる息子の見習い、つまり学生助手

であり、しばしば一時的にこれらの息子とともにに付番される。採用された息子らは、奉仕のための自らが選んだ領域のために克己的に多くの気高い任務を実執行するかもしれないし、そうするのである。

22:8.4 (251.8) 地方宇宙の教師たる息子は、楽園の三位一体による抱擁のために自身の創造物-三位一体化の被後見者を指名するかもしれない。完全性の三位一体化の息子としてこの抱擁から現れ、二度-三位一体化された存在体のこの独特な集団の現在知られている目標である7超宇宙において日の老いたるものの奉仕につく。

22:8.5 (252.1) 創造物-三位一体化の息子すべてが、三位一体に迎え入れられているというわけではない。多くは、楽園の主たる7精霊の、超宇宙の反射の精霊、および地方創造の母なる精霊の仲間や大使になる。永遠の小島における特別任務を受け入れる者もいるかもしれない。さらには、父の秘密世界と精霊の楽園球体における特別な奉仕に入る者もいるかもしれない。多くは、やがてハヴォーナの内回路の三位一体化の息子の結合部隊にたどり着く。

22:8.6 (252.2) 完全性の三位一体化の息子とヴァイスジェリントンに集まるそれらの者を除き、創造物-三位一体化のすべての息子の崇高目標は、三位一体化の終局者部隊、つまり終局者の楽園7部隊の中の１部隊への入り口であるらしい。

9. 天の保護者

22:9.1 (252.3) 創造物-三位一体化の息子は、7,000名からなる集団で楽園の三位一体に抱かれる。完成された人間と楽園-ハヴォーナ人格の三位一体化の子らは皆、分け隔てなく神に抱かれ、しかも、それらの元教官、すなわち三位一体の教師たる息子の忠告に応じて超宇宙に配属される。より満足できる奉仕のものは、息子の高位の補佐に任命される。それほど顕著でない能力のものは、天の保護者に指定される。

22:9.2 (252.4) この特異な存在体は、三位一体に抱擁されるとき超宇宙政府への貴重な助手になる。この特異な存在体は、人格的な上昇ではなく、空間世界の三位一体の教師たる息子への奉仕の結果として、個人の上昇の経歴の問題に精通している。

22:9.3 (252.5) およそ10億の天の保護者が、オーヴォントンにおいて任命された。それらは、主要区域の本部の日の完全なるものの政権に配属され上昇の息子-融合の必滅者部隊にみごとに補助されている。

22:9.4 (252.6) 天の保護者は、法廷の使者として、また超宇宙政府の様々な裁判所の招喚状や判決文の持参者として機能する日の老いたるものの法の番人る。それらは、日の老いたるものの逮捕行為の代理者である。天の保護者は、超宇宙が判断する前に、臨場を求められている存在体を連れ帰るためにユヴァーサから先へ行く。それらは、超宇宙でのいかなる人格の拘留命令も実行する。また、それらの臨場が、何らかの理由によりユヴァーサで必要とされるとき、地方宇宙の精霊融合の必滅者に同伴する。

22:9.5 (252.7) 調整者は、天の保護者とその仲間、つまり息子の高位の補佐には決して内住したことはない。天の保護者とその仲間は、精霊でもなければ息子融合でもない。しかしながら、楽園の三位一体の抱擁は、完全性の三位一体化の息子の非融合状態を補ものである。三位一体の

抱擁は、抱擁された息子を他の方法では不変の状態において、創造物-三位一体化の息子に人格化される構想に基づいてのみ行動をおこすかもしれないが、そのような限界は、そう計画される場合にのみ発生する。

22:9.6 (252.8) 二度-三位一体化のこれらの息子は、驚くべき存在体ではあるが、上昇仲間ほどには万能でもなければ頼りにもできない。それらは、この集団に属する他の息子たちが、実際に空間の暗い領域から栄光へと登ることで取得したその素晴らしく、深遠な人格的経験を欠いている。上昇経歴出身の我々は、それらを愛し全力で彼らの欠陥を補うすべてをするのだが、彼らは、我々の卑しい起源と能力の経験に対しいつも感謝している。宇宙上昇の経験可能な現実における自身の欠陥を認識し、承認するそれらの意欲というものは、並外れて美しく、時々この上なくいじらしいほどに哀れをさそう。

22:9.7 (253.1) それらの経験的能力が、時間-空間に抑制されるていることから、完全性の三位一体化の息子は、他の三位一体-抱擁の息子とは対照的に限界がある。それらは、崇高なる幹部と教師たる息子との長い訓練にもかか

わらず、経験-不十分であり、もしこれが、事実でないとしたならば、経験上の飽和状態が、未来の宇宙時代で得る経験のために残されることを不可能にするであろう。実際の個人的な経験の代わりができるすべての普遍的な存在には実に何もないし、これらの創造物-三位一体化の息子は、宇宙新時代のいつか将来の経験的機能の予備のために保持される。

22:9.8 (253.2) 私は、大邸宅世界においてしばしば超宇宙の高裁のこれらの威厳のある役人が、空間の進化世界からの最近の到着者にさえ非常にあこがれをもち、また魅力的に見ているのを目にしてきたので、観察している者は、無経験の三位一体化のこれらの持ち主が、宇宙の進路を本物の経験と実際の生活を一歩一歩昇る恐らくはさほど恵まれてはいない同胞を本当に羨んでいることに気づかざるを得ないであろう。無経験の三位一体化のこれらの持ち主は、自己の不利な条件や限界にもかかわらず、超宇宙政府の複雑な管理計画の実行に関し驚くほど役に立ち、つねに自発的な労働者部隊である。

10. 息子の高位の補佐

22:10.1 (253.3) 息子の高位の補佐は、終局者の必滅者部隊に属する上昇する栄光の存在体と永遠の仲間とからの、つまり楽園-ハヴォーナ人格とからの再度三位一体化した息子の優れた集団である。それらは、日の老いたるものの政府の高位の息子に対する個人的な援助として超宇宙奉仕と職務を割り当てられる。それらは、ふさわしく個人秘書と呼べるかもしれない。それらは、時どき高位の息子の特別任務と他の集団結社の事務員として務める。息子の高位の補佐は、英知の遂行者、神性顧問、宇宙検閲官、強力な使者、権威高きものたち、および名前と番号を持たないものたちに仕える。

22:10.2 (253.4) もし、私が、天の保護者についての議論において、これらの二度-三位一体化の息子の限界と障害に注意を促しているようであれば、公正な立場で言わせてもらい、強大な力の一点に、つまり我々にとりほぼかけがえのないものにする特性に注意を向けさせて欲しい。これらの存在体の存在そのものが、単一かつ最高の概念の人格化であるという事実にある。二度-三位一体化の息子は、かつて一度も発想されたことのない、表明されたことのない、または三位一体化されたことがないような

何らかの神性の考え、何らかの普遍的理想の人格の具体化である。それらは、次に、三位一体に抱擁されたのである。したがって、それらは、自身の人格存在の考え-理想に関しては実際に神性の三位一体の他ならぬその知恵を示し具体化する。これらの人格は、その特定の概念が宇宙に啓示可能である限り、いかなる創造物、あるいは創造者の知性が発想し、表現し、または例示でき得るものすべてを具体化する。これらの人格は、具現化されるその考えなのである。

22:10.3 (253.5) あなたには、宇宙現実のただ一つの最高概念のそのような生きた凝縮が、超宇宙管理が委ねられているもの達への明かされていない奉仕であろうということが分かり得ないのか。

22:10.4 (254.1) つい先ごろ、私は6名からなる委員会を率いるよう指示され、— 高位の息子のそれぞれが—オーヴォントンの南側の新恒星集団に関する3件の問題研究を課せられた。私は、私の委員会へのそのような秘書の一時的任務をユヴァーサの息子の高位の補佐の系列の長に要求したときに、息子の高位の補佐の価値に強く気づいた

のであった。我々の最初の考えは、ユヴァーサの息子の高位の補佐により提示され、息子の高位の補佐が直ちに、我々の集団に配属された。我々の2件目の問題は、超宇宙第3号に配属される息子の高位の補佐により具体化された。我々は、欠くことのできない知識の調整と普及のための中央宇宙交換機関を介しこの関係者から大いに支援を得はしたが、崇高に創造物-三位一体化された、そして終局的に神格-三位一体化された概念である人格の実際の臨場によって提供された援助に匹敵するものは何もなかった。我々の3件目の問題に関しては、楽園に関する記録が、そのような考えは、決して創造物による三位一体化ではなかったということを明らかにした。

22:10.5 (254.2) 息子の高位の補佐は、途方もない概念と驚くべき理想の特異かつ最初の人格化である。そして、それらは、そういうものとして我々の思案に時どき名状しがたい光明を授けることができる。私が取り組み解決するために送られてきた他ならぬその問題に関し神の概念が満ち満ちた息子の高位の補佐を私の任務に配属されるほどに、それほどに私が幸いであるのならば、私が、空間宇

宙において何らかの遠隔任務に従事しているとき、それが何を意味するのか、援助という意味において考えなさい。そして、私は、まさしくこの経験を繰り返してきた。この計画の唯一の困難は、いかなる超宇宙もこれらの三位一体化の考えの完全版を持つことはできないということである。我々は、これらの存在体の1/7しか得られない。したがって、考えというものが、三位一体化されたと記録にあるときでさえ、我々は、これらの存在体の人格的関係を味わうということはおよそ7度に1度にすぎないのである。

22:10.6 (254.3) 我々は、ユヴァーサにおいてかなり多くのこれらの存在体を大いに用いることができた。我々は、超宇宙行政にとってのそれらの価値を理由に、そのような創造的な冒険の制定に不可欠である経験的現実に互いに貢献した後に三位一体化を試みるよう空間の巡礼者や楽園の居住者にもあらゆる可能な方法で奨励する。

22:10.7 (254.4) 現在およそ125万名の息子の高位の補佐が、超宇宙にはおり、ユヴァーサで機能するように大小両区域において役目を果たしているす。それらは、頻繁に遠く

離れた宇宙での我々の任務に同伴していく。息子の高位の補佐は、どんな息子にも、あるいはどんな委員会にも永久に配属されることはない。楽園の三位一体の息子となった高位の補佐は、楽園の三位一体の永遠の目標を最もよく進めることができる考えか理想を配し、つねに循環している。

22:10.8 (254.5) 息子の高位の補佐らは、感動的に愛情深く、実に見事に忠誠で、すばらしく知的で、この上なく賢明であり、 —ただ一つの考えに関し—解しがたいほどに謙虚である。息子の高位の補佐らは、自らの1つの考えまたは理想に関係する宇宙についての知識をあなたに授けることができるとはいえ、多くの問題に関する知識と情報を上昇の必滅者からさえ求めているところを観測するのはまったく哀れでさえある。

22:10.9 (254.6) そして、これこそが、神の三位一体化の息子と呼ばれるもの達につての、より具体的には、楽園の三位一体の神性の抱擁を経験したもの達についての、そしてハヴォーナの隣接した目的地と終局の楽園目標に向けての時間の上昇する人間の内部の進歩を助長するたゆまぬ

努力においてそこで日の老いたるものの管理者との賢明かつ理解ある協力を与えるために超宇宙の奉仕に配属されたもの達についての起源、性質、および機能に関する記述である。

22:10.10 (255.1) [オーヴォントンの天啓部隊の強力な使者による叙述]

論文 23
単独使者

23:0.1 (256.1) 単独使者は、連合創造者の個人的かつ普遍的な軍団である。それらは、無限の精霊からの高位の人格の最初の、先輩の系列である。それらは、単独の人格精霊をもたらす目的で単独機能において無限の精霊の初期の創造活動を示す。父も息子も、直接にはこのすばらしい精霊化に参加はしなかった。

23:0.2 (256.2) これらの精霊使者は、一つの創造的な出来事を人格化したし、その数に変動はない。この現在の任務に当たる私は、並はずれた存在体の中の1名を伴っているが、宇宙の中の宇宙にそのような人格がどれだけ存在するかは知らない。私は、我々の超宇宙の司法権内に差し

当たり機能している登録-記録数が、いかほどあるかについては時おり知るに過ぎない。私は、およそ7,690兆の単独使者がおり、さらにまたオーヴォントンの区域内において活動していると最後のユヴァーサの報告に見ている。また、これはその総数の1/7よりはかなり少ないと推測する。

1. 単独使者の性質と起源

23:1.1 (256.3) 無限の精霊は、ハヴォーナ回路の７精霊の創造直後に単独使者の巨大部隊を創出した。楽園とハヴォーナ回路を除くどの部分も、単独使者に先在する普遍的創造ではない。単独の使者は、永遠の近くから壮大な宇宙全体にわたり機能した。それらは、無限の精霊の自己顕示のための神性の方法と、時間と空間の広範囲の創造との人格的な接触に必須である。

23:1.2 (256.4) これらの使者は、永遠に近い時から存在しており、全員が、自己の始まりに気づいている。使者達は、そのような時間の意識を持つ無限の精霊の創造の1番目であり、時間を意識している。それらは、時間において

人格化され、空間において精霊化される無限の精霊の長子の創造物である。

23:1.3 (256.5) これらの単独の精霊は、成熟し完全に賦与された精霊存在体として時の始まりに現れた。それらは皆、平等であり、何の階級も細分も、個人的変化に基づいていない。その区分は完全に時々それらに割り当てられる仕事の型に基づくものである。

23:1.4 (256.6) 必滅者は、空間世界においてほぼ完全な物質存在体として始め、大いなる中枢に内向けへと向上する。これらの単独の精霊は、万物の中心を出発し、遠隔の創造に、一番はずれの地方宇宙の個々の世界へさえ、またそれを超えてさえの任務を切望する。

23:1.5 (256.7) それらは、単独使者と命名はされているものの、単独で働くのが誠に好きであるので孤立した精霊ではない。それらは、親しく交わることができる宇宙の知性をもつほんのわずかな系列との関係を等しく楽しむとはいえ、孤立の生活ができ、また実際にそうする全創造中の唯一の存在体である。

23:1.6 (257.1) 単独使者は、奉仕における孤立はしてはいない。それらは、滞在中の領域の全放送を「傍受する」能力があるので、絶えず全創造の識者の豊かさに触れ合っている。また、それらには、同じ超宇宙で同種類の仕事をする存在体である自身の直接部隊の隊員との交信が可能である。属する集団の他のもの達と伝達が可能ではあるが、主たる７精霊の協議会にそうしないように指示されており、忠誠な一団である。それらは従うし、履行もする。単独使者には今までに暗黒に転がり込んだという記録は何もない。

23:1.7 (257.2) 単独使者は、宇宙の力の指揮官と同じく時間と空間の裁判所による逮捕、あるいは拘留が免除されている領域全体で行動する数少ない存在体の型である。単独使者は、主たる７精霊の前に限って裁かれることができたであろうに、主たる宇宙の全年譜によると、この楽園協議会が、これまでに単独使者の事件を裁くことを求められたことはない。

23:1.8 (257.3) 単独任務のこれらの使者は、第三根源と中枢から生まれ、頼りになる独立独行の、万能かつ完全に精霊

的で、また広く思いやりのある存在体の集団である。それらは、楽園の中央の小島の居住者であり、地方宇宙の本部球体で人格化される無限の精霊の認可を得て稼動する。これらの使者は、地方宇宙の母なる精霊の直接的影響下の地方創造において機能するときにさえ無限の精霊から直接回路に発せられるものを絶えず取り入れるもの達である。

23:1.9 (257.4) これらの単独使者が、単独で旅行し働かなければならない特有の理由がある。それらは、短期間、そして静止しているとき集団で働くことができるのだが、このように集合体となるとき、楽園回路の生命維持と方向づけからは完全に断ち切られる。それらは完全に隔離される。通過しているとき、あるいは空間の回路と時間の流れにおいて稼動するとき、もしこの2系列またはそれ以上が、近接近しているならば、両者もしくはすべては、より高い循環力とのつながりを失う。それらは、あなたが実例的記号においてそれを説明するかもしれないように「短絡的」である。したがって、それらは、迫り来る摩擦を知らせるために的確に作動し、また適切で有効な機能を妨げないように絶えず単独使者を十分に切り

離しておく自動警報装置力、警告信号をもともと備えていある。それらは、喚起された三位一体の精霊と神性の思考調整者の両者の近接を察知し、指し示す特有の、無意識の、力を有している。

23:1.10 (257.5) これらの使者には、人格拡大の、もしくは人格再現の何の力もないのだが、実際に使者にとり従事不可能な宇宙においても、また不可欠で役立つ何かを賦与できない宇宙への何の仕事もないのである。特に、それらは、宇宙問題の管理にかかわるもの達のために時間を有効に節約してくれる。そして、最高位のものから最低位のものまでの我々皆を補助してくれる。

2. 単独使者の任務

23:2.1 (257.6) 単独の使者は、天の人格のいかなる個人あるいは集団にも永久には配属されない。それらは、職務に従事しており、またそのような仕事の間中は、各配属領域を指示するもの達の即座の指揮下で働く。それらには、いかなる種類の組織も政府もない。それらは単独使者である。

23:2.2 (258.1) 単独使者は、無限の精霊により次の7部門の奉仕に割り当てられる。

23:2.3 (258.2) 1. 楽園の三位一体の使者

23:2.4 (258.3) 2. ハヴォーナ回路の使者

23:2.5 (258.4) 3. 超宇宙の使者

23:2.6 (258.5) 4. 地方宇宙の使者

23:2.7 (258.6) 5. 無特定地職務の探検者

23:2.8 (258.7) 6. 特別任務の大使と使節

23:2.9 (258.8) 7. 真実の啓示者

23:2.10 (258.9) これらの精霊の使者は、１つの奉仕の型から他の型への交替があらゆる点で可能である。そのような転移は絶えず起きている。単独の使者に別の系列はない。それらは精霊的には似ており、あらゆる点で平等である。一般的には番号により指定されるが、無限の精霊には個人的な名前で知られている。それらは、我々の他のもの達には名前または現在の任務に与えられた番号で知られている。

23:2.11 (258.10) 1. 楽園の三位一体の使者。私には三位一体に配属されている使者集団の仕事について多くを明らかにすることは許されていない。それらは、神格の信頼され公表されていない僕であり、神の非啓示の方針と今後の処理にかかわる特別な伝達内容が任せられるとき、秘密を明かしたり、または自らの系列に寄せられる信頼を裏切るということは一度もなかった。それらの完璧さを自慢するためにではなく、むしろ神格が完璧な存在体を創造することができる、また、そうするということを指摘するために、このすべてが、伝えられているのである。

23:2.12 (258.11) ユランチアの混乱と騒動は、楽園の支配者たちが、問題への異なる対処への関心、または能力を欠くと意味するものではない。創造者は、ユランチアを真の楽園にするための完全な力を持つが、そのようなエデンというものは、神が、必要という金床と苦悩という金槌であなたの世界においてそれほどまでに確実に鍛造する強くて、高貴で、経験豊富な形質の発達に貢献することはないであろう。万物の有する最高目的への絶妙の完全性と無限の適合性が、中央の、かつ完全な宇宙世界における神性計画の部分であるのと同じく、あなたの憂いと悲

しみ、試みと期待外れというものは、あなたの領域におけるまさに神性計画の部分である。

23:2.13 (258.12) 2. ハヴォーナ回路の使者。あなたは、上昇経歴全体において単独使者の存在をばく然と、しかし、より探知できるようになるのだが、ハヴォーナに到着するまでは、間違うことなくそれらを認識することはできないのである。あなたが面と向かい会う最初の使者たちは、ハヴォーナ回路のものたちであろう。単独使者は、ハヴォーナ世界の出身者との特別な関係を味わう。

23:2.14 (258.13) 仲間の交わりにおいて機能上あまりに不利な立場にあるこれらの使者は、ハヴォーナ出身者とは非常に親しく、個人的な親交を持つことができる。だが、そのようなほぼ超越的人格の精霊との神々しく完全なこれらの存在体の心の接触の結果として起こる最高の満足感を人間の心に伝えることはまったく不可能である。

23:2.15 (259.1) 3. 超宇宙の使者。日の老いたるものには、すなわち７超宇宙の目標を統括する三位一体起源のそれらの人格、神性の力と行政の知恵をもつ三名組には、単独使者が惜しみなくあてがわれる。一超宇宙の三位一体の支

配者が、直接、個人的に他の支配者と伝え合えるのは、この系列使者を通してのみである。単独使者は、ことによると喚起された三位一体の精霊は別にして、一超宇宙の本部から他の本部へ直接に派遣できる唯一利用可能な精霊の知性の型である。他のすべての人格は、ハヴォーナと主たる精霊の執行業務の世界を経由してそのような旅をしなければならない。

23:2.16 (259.2) 重力の使者でも、反射、または放送でも得ることのできないある種の情報がある。確実にこれらのことを知りたいとき、日の老いたるものは、単独の使者を知識の所在源に派遣しなければならない。ユランチアにおける生命臨場のずっと以前に、現在私に関係している使者は、任務上ユヴァーサから中央宇宙に配属された。—オーヴォントンの点呼を約100万年間欠席したが、やがて必要な情報を持ち帰ったのであった。

23:2.17 (259.3) 単独使者の超宇宙での奉仕に制限はない。それらは、高等裁決機関の実行者として、または領域の利益のための諜報採集者として機能するかもしれない。ここでは、必要性は最大であり、英雄的な奮闘の機会は大い

に増すので、単独使者は、超創造すべての中ではオーヴォントンでの活躍を最も喜ぶ。我々は皆、より困窮している領域ではより十分な機能の満足感を味わう。

23:2.18 (259.4) 4. 地方宇宙の使者。単独使者には地方宇宙の奉仕における機能に何の制限もない。それらは、君臨する主たる息子の権限下にあるが、地方宇宙の母なる精霊の動機と意図の忠実な顕示者である。これは、直接に宇宙本部から旅をするかどうか、または、一時的に惑星の父、体制君主、あるいは惑星王子とのつながりで行動しているかどうかには関係なく、地方宇宙の中で活動する全使者に当てはまる。地方宇宙のこれらの使者は、昇進時に自身の宇宙の統治者として創造者たる息子の手にある全権集中化の前に、日の老いたるものの総指揮のもとに機能し、居住している自分達の代表、つまり日の結合なるものに対して直接的に責任を負う。

23:2.19 (259.5) 5. 無特定地職務の探検者。単独使者の予備部隊が過剰に募集されると、崇高な力の７指揮官のうちの1名から探検のための志願者要請が公表される。単独使者らは、自由で制約されない探検家として派遣されること

を、新世界と宇宙を組織する中軸を見つける興奮感の経験を喜びとするので、志願者不足は決してない。

23:2.20 (259.6) 探検家らは、領域に属する空間熟考者から提供された手がかりの調査のために旅立つ。確かに、楽園神格は、空間のこれらの未知のエネルギー体系の存在を知ってはいるものの、決してそのような情報を明かしはしない。そのような現象は、単独使者が、新たに組織しているエネルギーの中心を探検し図表にしないならば、隣接する領域の知力あるもの達にさえ長らく目だたないままであろう。単独使者は、一集団として重力に非常に敏感に反応する。従って、それらは、非常に小さい暗い惑星に、すなわち生命実験に最も順応するまさにその世界に、あり得る臨場を時々探知することができる。

23:2.21 (260.1) 無特定地職務のこれらの使者-探検者は、主たる宇宙を巡回する。それらは、絶え間なく全外空間の地図にはない領域に探検旅行をしている。単独使者らが、天の天文学者と共にしばしば働き研究するので、外空間領域における相互作用について我々が得る情報の誠に多くは、単独使者の探検に負うものである。

23:2.22 (260.2) 6. 特命の大使と使節。同じ超宇宙内に位置する地方宇宙は、自身の出身の子息性の系列から選ばれる大使を慣例的に交換する。しかし、単独使者は、遅れを避けるために一地方の創造から他の創造に大使として頻繁に行くこと、つまり1領域から他の領域に代表としてまた説明のために求められる。例えば：新たに生息する領域が発見されるとき、熾天使化の大使が、このはるかな宇宙に達するにはとても長い時間が経過するほどに空間的に非常に遠いと判明するかもしれない。熾天使化の存在体は、あなたの時間の1秒当たり89万9,368ユランチアキロメートルの速度を超えることはできない。膨大な星、交差する流れ、迂回、さらに引き合う接線は皆、そのような速度を遅らせる傾向にあるので、速度は、長旅においては平均して1秒あたり約89万キロメートル平均となる。

23:2.23 (260.3) 自身の出身域からの大使が、はるか遠方の地方宇宙に到着するのに何百年も要する事態が生じるとき、単独使者は、しばしば当座の大使としてすぐに機能するためにそこへ赴くよう依頼される。単独使者は、重力の使者が時間と空間には無関係に、ほぼ無関係に、非常に

迅速に行くことができる。また、それらは、特別任務の密偵として他の情況においても役目を果たす。

23:2.24 (260.4) 7. 真実の啓示者。単独使者は、真実を明らかにする任務を自身の系列の最高の信頼と見なす。それらは、時どき超宇宙から空間の個々の惑星に至るまでこの能力において機能する。それらは、頻繁に世界と体系への真実顕示の拡大のために送られる委員会に配属される。

3. 単独使者の時空間の奉仕

23:3.1 (260.5) 単独使者は、放送業務または反射装置のいずれかの利用が不便であるとき、全領域における重要かつ緊急情報の速い伝達のために利用可能な完ぺきな、しかも秘密の人格の最高の型である。それらは、領域の精霊の存在体、そして物質の存在体を助け、特に時間の要素を伴うところで実に多種多様な任務に就く。それらは、超宇宙領域の奉仕に配属される全系列の中で時間と空間をものともせず近づくことができる最高位の最も万能の人格化された存在体である。

23:3.2 (260.6) 宇宙には通行目的の重力を利用する精霊が十分に供給されている。精霊は、いつでもどこにでも行くことができる—直ちに—だが、人格ではない。重力の使者や超絶記録者というようなある種の他の重力移動者は、人格的存在ではあるが、超宇宙や地方宇宙の行政者に仕えることはできない。世界には、天使、人間、および他の非常に人格的な存在体が溢れているが、それらは時間と空間のために不利な立場にある。大部分の無熾天使化の存在体にとっての速度の限界は、あなたの世界の時間の1秒あたり29万9,789キロメートルである。中間創造物と他の存在体は、２倍の速度—すなわち1秒あたり59万9,578キロメートル—を達成し得るし、しばしば実際に達するのである。一方熾天使と他の存在体は、３倍の速度、1秒あたりおよそ89万9,3689キロメートルで空間を横断できる。しかしながら、重力移動者の瞬時速度と単独使者を除く熾天使の比較的遅い速度の間で機能する通行の人格または使者の人格は存在しない。

23:3.3 (261.1) 単独使者は、したがって、人格が任務成就に不可欠であったり、容易に利用可能な他の人格的使者の型を派遣で起こる時間の損失を避けることが必要であるよ

うな状況での派遣と奉仕活動のために一般的に採用される。それらは、壮大な宇宙の結合した普遍の流れと連動できる確実に人格化された唯一の存在体である。それらの空間横断速度は、妨害渉するさまざまな影響により可変ではあるが、私の副使者は、この任務実現の旅においてあなたの時間で1秒あたり1兆3,544億6,133万8,655キロメートルの速度で進んだと記録にある。

23:3.4 (261.2) 精霊が、いかにして本物の人間であると同時にそのような猛烈な速度で空間を横断するのかを物質の心の型に説明することは全く私の能力を超えるものである。しかし、他ならぬこれらの単独使者は、実際にこれらの理解しがたい速度でユランチアを往来するのである。実に、宇宙行政の経済全体は、これが事実でないならば、主にその個人的局面は奪われるであろう。

23:3.5 (261.3) 単独使者には、遠く離れた空間地域、つまり壮大な宇宙の確立された回路に包括されていない領域全体における非常時の情報網としての機能が可能である。したがって１使者が、そのように機能するとき、ユランチアの天文学者が星の距離を見積もるように、およそ100

光年離れた仲間の使者へ空間経由で情報を伝えるか、または瞬間力を送ることができるように発展させるのである。

23:3.6 (261.4) 超宇宙の諸事を進めるうえで我々に協力してくれる無数の存在体のうち、これらのもの達が実践上の有用性と時間節約において最も重要である。我々は、空間宇宙における時間のもつ不利な条件を考慮しなければならない。それゆえ、単独使者の偉大な奉仕は、その伝達における個人的特権を用いており、空間からはいささか無関係で、その上その猛烈な通過速度により時間からはほとんど無関係である。

23:3.7 (261.5) 私は、単独使者が、いかにして無形状態で、なおかつ本物の、明確な人格を持ち得るかのユランチアの必滅者への説明に途方に暮れている。自然のうちに人格に関連づけられるその形を成していないとはいえ、それらは、すべてのより高い精霊存在体の型が認識できる精霊臨場を有している。単独使者は、資格十分の人格の全特権と結合している無形のほぼ全利点を所有しているらしい唯一の存在体集団である。それらは本当の人格であ

り、その上、無個人的な精霊顕現の属性のほぼすべてを贈与されている。

23:3.8 (261.6) 通常、7超宇宙においては、—だが、いつもではない—時間と時空間の不利な条件からのいかなる創造物の解放を増加させる傾向のものすべては、人格的特権を比例して減少させる。単独使者は、この一般法則の例外である。それらは、活動においてその精霊的表現、神性の奉仕、人格的奉仕活動、および宇宙交信の限りないありとあらゆる手段の利用においてほぼ無制限である。もしあなたが、私の宇宙行政経験の光の中のこれらの並はずれた存在体を見ることができるとしたならば、多岐にわたるそれらの協力がなければ、超宇宙の諸事を調整することがいかに難しいかを理解するであろうに。

23:3.9 (262.1) 宇宙がどれほど拡大しようとも、それ以上の単独使者はおそらく決して創出されないであろう。宇宙の成長につれ拡大された行政上の仕事は、ますます精霊の奉仕活動の他の型により、また君主たる息子と地方宇宙の母なる精霊の創造物のようなこれらの新しい創造に起

源を取るそれらの存在体により担われなければならない。

4. 単独使者の特別奉仕活動

23:4.1 (262.2) 単独使者は、精霊存在体のすべての型のための人格調整者であるらしい。それらの奉仕活動は、広範囲の精霊的な世界の全人格を同系にするために手を貸す。それらは、すべての精霊存在体における集団同一性の意識の開発に非常に貢献する。いかに似ていないとしても、他のすべての型を理解し親しくつきあうためのそのような存在体の能力を育成する単独使者の特別集団が、すべての型の精霊存在体に仕える。

23:4.2 (262.3) 単独使者は、我々の何名かが、無限の精霊によるこれらの使者の創造は、連合活動者による崇高-究極の心の贈与に何らかの方法で結びついていると仮定するほどに有限の人格の型と系列すべての調整のための—主たる宇宙の総括的管理者の準絶対政権との接触のためさえの—そのような驚くべき能力を示す。

23:4.3 (262.4) 終局者と楽園公民が、「時間と永遠の子供」の三位一体化—崇高-究極の非啓示の心の可能性を伴う相互

作用—において協力するとき、またそのような未分類の人格がヴァイスジェリントンに派遣されるとき、単独使者(そのような神性心の贈与が推測される人格の反応)は、保護者-仲間としていつもそのような創造物-三位一体化の息子に配属される。この使者は、新しい息子の職務の世界へと同行し、もう二度とヴァイスジェリントンを離れない。単独使者は、このようにして時間と永遠の子供の目標に配置されると、永遠に主たる宇宙の建築者の単独指揮に移される。我々は、そのような並はずれたつながりの未来が何であるのかを知らない。独特の協調関係にあるこれらの人格は、長い間、ヴァイスジェリントンに集まり続けたが、1対としてそこから先へ行ったことはない。

23:4.4 (262.5) 単独使者の数は定まっているが、目標の息子の三位一体化は明らかに制限のないやり方である。目標の三位一体化の息子のそれぞれは、単独使者を自身に割り振ったので、我々には、いつか遠い将来に使者の提供が尽きるようにみえる。だれが、単独の使者の壮大な宇宙での仕事を引き継ぐのであろうか。喚起された三位一体の精霊の中の何らかの新開発が、それらの奉仕を引き受

けるのであろうか。壮大な宇宙は、一元的また二元的な起源の創造物が外空間領域に移動する一方で、いつか遠い時代には三位一体-起源の存在体によりもっと密接に管理されるのであろうか。もし使者が以前の自分達の奉仕に戻るならば、目標のこれらの息子は、それらに同行するのであろうか。単独使者の提供が、目標のこれらの息子の保護者-仲間として吸収されてしまったとき、終局者と楽園-ハヴォーナ出身者間の三位一体化は、やむのであろうか。我々の有能な単独使者全員が、ヴァイスジェリントンに集結されるのであろうか。これらの並はずれた精霊人格は、非啓示の目標のこれらの三位一体化の息子に永遠に伴われるのであろうか。我々は、ヴァイスジェリントンに集うこれらの二人連れが、強力な神秘の存在体、つまり主たる宇宙の建築者の唯一の指示下にあるという事実にどのような意味を添えるべきか。これらの、かつ多くの同様の問題を自らに問い、また天の存在体の他の無数の系列に尋ねるのだが、我々は、答えが分からない。

23:4.5 (263.1) 宇宙行政多くの同様の出来事と併せてこの相互作用は、壮大な宇宙の職員が、ハヴォーナと楽園の職員

さえが、外空間の領域全体に現在起きている広大なエネルギー進化との連携において、またそれに関連して明確かつ確実な再編成中であることを紛れもなく示している。

23:4.6 (263.2) 我々は、永遠の過去が経験したすべてを超えるであろう永遠の未来が、宇宙進化の現象を目撃するという信念に傾きがちである。そして、我々は、あなたでさえもするはずの、それほどに物凄い冒険を、強い趣と絶えず高まる期待を予期するのである。

23:4.7 (263.3) [ユヴァーサからの神性顧問による提示]

論文 24
無限の精霊のより高い人格

24:0.1 (264.1) ユヴァーサにおいては、我々は、連合創造者の全人格と本質を3大分類に、すなわち無限の精霊のより高い人格、空間の使者部隊、および、人間の前進のための上昇基本構想の意志を持つ創造物への教育と奉仕に携わるそれらの精霊存在体である時間の奉仕をする精霊に分類する。

24:0.2 (264.2) これらの解説文において言及する無限の精霊のより高い人格は、7分類の壮大な宇宙全体にわたり機能する。

24:0.3 (264.3) 1. 単独使者

24:0.4 (264.4) 2. 宇宙回路監督者

24:0.5 (264.5) 3. 登記責任者

24:0.6 (264.6) 4. 無限の精霊の人格補佐

24:0.7 (264.7) 5. 副検査官

24:0.8 (264.8) 6. 配属歩哨

24:0.9 (264.9) 7. 卒業生案内者

24:0.10 (264.10) 単独使者、回路監督者、登記責任者、および人格補佐の特徴は、反重力の途方もない資質の所有にある。単独使者には周知の総本部はない。単独使者らは、宇宙の中の宇宙のあちこちを移動する。宇宙回路監督者と登記責任者は、超宇宙首都の本部を維持する。無限の精霊の人格補佐は、中央の光の小島に配置される。副検査官と配属歩哨は、それぞれに地方宇宙の首都に、また

地方宇宙の構成体系の首都に配置される。卒業生案内者は、ハヴォーナ宇宙に居住し、その10億の全世界において機能する。これらのより高い人格の大半は、地方宇宙に拠点を持ちはするが、組織的には進化の領域の行政に属してはいない。

24:0.11 (264.11) この集団を構成する7分類のうち単独の使者と、ことによると人格補佐だけが、宇宙の中の宇宙の範囲にわたって活動する。単独使者には楽園から外側への間で出くわす。ハヴォーナ回路を経由し超宇宙首都へと、そこから超宇宙領域へ、そして各細別区域を含む地方宇宙へ、また生息界へさえ経由して。単独使者は、無限の精霊のより高い人格に属するとはいえ各々の起源、性質、奉仕についてはすでに議論されてきた。

1. 宇宙回路監督者

24:1.1 (265.1) 空間の広大な力の流れと精霊エネルギーの回路は、自動的に活動しているように思われるかもしれない。それらは、何らの支障もなく機能するように思われるかもしれないが、そうではない。これらのすべてのすばらしいエネルギー体系は、制御されている。知的な監

督を前提としている。宇宙回路監督者は、純粋に物理的か物質的エネルギーの領域—宇宙の力の指揮官の分野—とではなく、相対的な精霊的エネルギーの回路との、また高度に進化した精霊的存在体や知的創造物のモロンチアの型、または変遷の型の両方の維持に不可欠である変更された回路との関係がある。監督者は、エネルギー回路と神性の超本質に起源を与えはしないものの、一般的には時間と永遠のすべてのより高い精霊回路に、また壮大な宇宙の構成部分の管理に関係あるすべての相対的精霊回路に関与している。それらは、すべての精霊-エネルギー回路を楽園の小島の外で方向づけ操作する。

24:1.2 (265.2) 宇宙回路監督者は、無限の精霊の専門的創造によるものであり、唯一連合活動者の動作主として機能する。それらは次の4系列における奉仕のために人格化される。

24:1.3 (265.3) 1. 崇高回路監督者

24:1.4 (265.4) 2. 副回路監督者

24:1.5 (265.5) 3. 二次回路監督者

24:1.6 (265.6) 4. 三次回路監督者

24:1.7 (265.7) ハヴォーナの崇高の監督者と7超宇宙の副監督者は、数的には完成されたものである。これらの系列はこれ以上は創造されない。崇高の監督者は数の上では7名であり、7個のハヴォーナ回路の先導的世界に配置される。7超宇宙の回路は、無限の精霊の　7楽園球体、すなわち崇高なる７幹部の世界にある本部を維持する7名の副監督者の驚異的集団を担当しており、ここから空間の超宇宙回路を監督し導いている。

24:1.8 (265.8) 副回路監督者7名と崇高なる力の中枢の第1系列は、精霊のこれらの楽園球体において崇高なる幹部の指示の下に7超宇宙に向かう物質と精霊の全回路の准-楽園の調整をもたらすつながりを起こす。

24:1.9 (265.9) 各超宇宙の本部世界には時間と空間の地方宇の監督のために二次監督者が配置されている。大小の宙域は、超政府の行政区分であるが、精霊-エネルギー監督のこれらの問題には関係がない。私は、どれだけの二次回路監督者が壮大な宇宙にいるかを知らないのだが、ユヴァーサには84,691のこれらの存在体がいる。二次監督

は、絶えず創出されている。それらは、時どき70名からなる集団で崇高なる幹部の世界に現れる。

24:1.10 (265.10) 我々は、自分たちの管轄区域の新たに進化する宇宙への精霊エネルギーと連結力の個々の回路設立のための調整の際、要求によりそれらを獲得する。要求をして三次回路監督者は、全地方宇宙の本部世界で機能する。二次監督者のように700名の集団からなるこの系列は、引き続く創造からくるもの達である。それらは、日の老いたるものにより地方宇宙に割り当てられる。

24:1.11 (266.1) 回路監督者は、特定作業のために創出され、つねに最初の任務の集団で働く。それらは勤務交代はせず、したがって最初の任務の領域で見られる問題に関して長年の研究をする。例えば、三次回路監督者57万2,842号は、あなたの地方宇宙という初期の概念以来ずっとサルヴィントンで機能しておりネバドンのマイケルの部下の一員である。

24:1.12 (266.2) 地方の、またはより高い宇宙において行動するかどうか、行動しているのが地方であろうとより高い宇宙であろうと回路監督者は全員が、すべての精霊の言葉

の伝達のため、そして全人格の移動のために用いる適切な回路に関与している。これらの有能な存在体は、回路の監督の仕事において宇宙の中の宇宙の全政府機関、原始力、および人格を利用する。それらは、非啓示の「回路管理の士気旺盛な人格」を採用し、無限の精霊の人格から成る多勢の職員の巧みな助力を得ている。もしその惑星王子が、宇宙なる父とその代理の息子に反逆するならば、進化世界を隔離するのはこれらの有能な存在体である。それらは、より高い精霊系列の一定の宇宙回路からいかなる世界でも追い出すことができるのだが、力の指揮官の物質的な流れを破棄することはできない。

24:1.13 (266.3) 宇宙回路監督者は、宇宙の力の指揮官が物質回路に持つ同様の関係にあるものを精霊回路に持っている。2系列は、制御可能でかつ操作可能である全精霊回路と全物質的回路を監視をともにの監視権をともに持ち補足的関係にある。

24:1.14 (266.4) 回路監督者は、力の指揮官が、物理的-エネルギーに結びついている心—機械的な心—のそれらの局面に対する一定の司法権と同等の精霊に関連するそれらの

心の回路の一定の監視をする。一般的に、各系列の機能は、他方との連結により拡張されるが、純粋な心の回路は、いずれの指揮も受けることはない。2系列ともに調整はしていない。宇宙回路監督者は、その多様な全作業において崇高な力の７指揮官とその部下に従属する。

24:1.15 (266.5) 宇宙回路監督者は、各系列の中で完全に似ているとはいえ、皆異なる個人である。それらは実に人格的存在体ではあるが、すべての普遍的存在のいかなる創造物の他の型には遭遇することのない父が授けた以外の人格の型を有している。

24:1.16 (266.6) あなたは、楽園に向けて内側へと旅行するとき、宇宙の回路監督者を認識し知るのであるが、それらとのいかなる個人的関係も持たないであろう。それらは回路監督者であり、厳密に効率的に、自己の仕事に気を配っている。回路監督者は、監督下の回路に関わる活動を監視するそれらの人格と実体とだけ接触する。

2. 登記責任者

24:2.1 (266.7) 宇宙の知性の宇宙心は、思考する全創造物の存在と所在の認識しているにもかかわらず、宇宙の中の宇

宙には意志を持つ全創造物の数を数え続ける独立した方法が作用している。記録している

24:2.2 (266.8) 登記責任者は、無限の精霊の特別かつ完成した創造であり、その数は、我々には未知である。それらは、超宇宙の反射手段との同時性を維持できるように創造されており、同時に知的な意志に個人的に繊細であり敏感である。これらの責任者は、壮大な宇宙のいかなる部分での意志の誕生にも完全には理解されていない方法によりすぐに気づくようにされている。気づくしたがって、それらは、中央の創造と7超宇宙のいかなる部分の意志を持つ全創造物の数、性質、所在をつねに我々に伝える能力がある。しかし、それらは、楽園では機能しない。そこでは必要とされていない。楽園においては、知識は本来備わっている。神格はすべてを知っている。

24:2.3 (267.1) 7名の登記責任者は、ハヴォーナで活動しており、１名が各ハヴォーナ回路の先導的世界に配置されている。この7名と精霊の楽園世界の系列に属する予備部隊を除く全登記責任者は、日の老いたるものの司法権下で機能する。

24:2.4 (267.2) 各超宇宙本部においては1名の登記責任者が、取り仕切り、各地方宇宙の首都には1名がおり、そのような主要責任者1名には何千名もが従属している。この人格の全系列は、ハヴォーナの先導的世界にいる者たちと超宇宙の7名の責任者を除いては同等である。

24:2.5 (267.3) 第7超宇宙には10万名の登記責任者がいる。この数は地方宇宙に配属可能なもの達から成る。それは、ユーセイチアの個人的職員、つまりオーヴォントンの全責任者達の超宇宙統括者は含んではいない。ユーセイチアは、超宇宙の他の統括者のように、知的意志を持つものの登録に直接には一致しない。ユーセイチアは、専らオーヴォントンの宇宙に配置される従属物に同調する。ユーセイチアは、それゆえに地方創造の首都から来る報告を集計するすばらしい人格として務める。

24:2.6 (267.4) ユヴァーサの公式記録は、超宇宙の状態を時々記録している。それがユーセイチアの人格にすっかり——登録証明書によって示されるように、そのような統計資料は、超宇宙に固有のものである。これらの報告は、ハヴォーナへも楽園へも伝えられない。

24:2.7 (267.5) 登記責任者は、意志機能の事実を記録する範囲に限って人間に—意志をもつ他の創造物にそうであるように—携わる。それらは、あなたの人生とその実行に挙動に関する記録には携わらない。登記責任者は、いかなる意味においても記録に携わる人格ではない。ネバドンの登記責任者、現在サルヴィントンに配置されているオーヴォントンの81,412号は、まさしくこの瞬間にここユランチアでのあなたの生きた臨場に人格的に気づいており意識している。そして、あなたが、意志の創造物としての機能を止めるとすぐにあなたの死の記録確認を与えるであろう。

24:2.8 (267.6) 登記責任者は、意志をもつ新しい創造物が意志に基づく最初の行動に取り掛かるとその存在を登録し、意志の最後の行動がとられると意志をもつ創造物の死を表示する。より高等な動物のある種の反応に観察される意志の部分的浮上は、登記責任者の領分には属さない。それらは、本物の意志の創造物だけを記録しており、また意志の機能だけに反応する。我々は、それらが意志の機能をいかに正確に記録するかを知らない。

24:2.9 (267.7) これらの存在体は、今までずっと登記責任者であったし、これからもずっとそうであろう。それらは、いかなる他の宇宙分業においてもそれほど役には立たないであろう。しかし、それらは機能上絶対確実である。それらは決して履行を怠らず、改ざんもしない。そして、それらの驚異の力と信じられない特権にもかかわらず、登記責任者は人格体である。それらは認識可能な精霊の臨場と型を有している。

3. 無限の精霊の人格補佐

24:3.1 (268.1) 我々には、人格補佐の創造の時間、または、方法に関する確かな知識がない。その数は、夥しいものであるに違いないが、ユヴァーサには記録がない。それらの仕事に関する我々の知識に基づく慎重な推理から、私は、その数は大きく兆へと広がると敢えて見積もるのである。我々は、無限の精霊がこれらの人格補佐の創造における数に関して制限されないという意見を持つ。

24:3.2 (268.2) 無限の精霊の人格補佐は、神格の第三人格体の楽園臨場の専属援助のために存在する。それらは、直接無限の精霊に配属され楽園に居場所を定めてはいるもの

の、創造の極限部分のあちらこちらに瞬時に現れる。これらの人格補佐は、連合創造者の回路の広がりがどこであろうとも無限の精霊の言いつけを実行する目的のためにそこに現れるかもしれない。それらは、単独使者のように空間を横断するが、使者がそうであるという意味での人格体ではない。

24:3.3 (268.3) 人格補佐は、皆が等しく、また似通っている。個性の差別化は明らかではない。連合活動者は、それらを真の人格と見ているが、他のものたちには、それらを真の人格体と見なすことは難しい。人格補佐は、他の精霊存在体に精霊臨場を顕示しない。楽園-起源存在体は、これらの補佐の接近にいつも気づいている。しかし、我々は、人格臨場には気づいていない。そのような臨場-型の欠如は、疑いなくそれらを神格の第三者にいっそう役立てている。

24:3.4 (268.4) 人格補佐は、無限の精霊に起源をとる精霊存在体の明らかにされた全系列のうち、あなたが楽園への内部上昇において遭遇しないほとんど唯一のものである。

4. 副検査官

24:4.1 (268.5) 崇高なる７幹部は、無限の精霊の7楽園球体において7超宇宙のための超管理者の行政委員会として集合的に機能する。副検査官は、時間と空間の地方宇宙への崇高なる幹部の権威の人格的具体化である。地方創造業務のこれらの高位の観察者は、無限の精霊と楽園の主たる七精霊の結合子孫である。70万の副検査官が、永遠のほぼ始まりというほどの遠い過去に人格化され、その部隊は楽園に居住している。

24:4.2 (268.6) 副検査官は、時間と空間の地方宇宙への個人的かつ強力な代表である崇高なる７幹部の直接指揮下で働く。1検査官は、各地方創造の本部球体に配置されており、在住の日の結合なるものの親しい仲間である。

24:4.3 (268.7) 副検査官は、単に部下から、つまり生息界の地方体系の首都に配置されている配属歩哨からのみ報告と提案を受け、同時に直接上司だけに、関係する超宇宙の崇高なる幹部だけに報告書を作成する。

5. 配属歩哨

24:5.1 (268.8) 配属歩哨は、協調的人格であり崇高なる７幹部のつなぎ役の代表である。それらは、楽園において無限

の精霊により人格化され、自分の課題の特定目的のために創造された。それらは、定数のもの達であり、きっかり70億名が現存する。

24:5.2 (269.1) １名の副検査官が地方宇宙全体に崇高なる７幹部を代表するように、その地方創造の１万の各体系には、１名の配属歩哨がおり、その配属歩哨は、全7超宇宙の業務のためにはるかに遠い、かつ、最高の超制御委員会の直接代表として務める。オーヴォントンの地方体系政府に勤務中の歩哨は、第７崇高幹部、つまり第7超宇宙の調整者の直接権限下に行動している。しかし、その行政機構において地方宇宙で任命された全歩哨は、宇宙本部に配置の副検査官に従属する。

24:5.3 (269.2) 配属歩哨は、地方創造の範囲内において体制から体制へと移動され交代で勤務する。それらは、通常地方宇宙時間で1,000年ごとに入れ替えられる。それらは、体系首都に配置される最高位の人格の中にいるが、体系業務に関する協議には決して参加しない。進化世界から来る24名の職権管理者として地方体制において務めるが、さもなければ、上昇する人間はほとんどそれらと

の接触はない。歩哨は、宇宙副検査官が職務先の体制の福祉と状況に関連する事柄すべてを完全に知らされることに独占的に関わっている。

24:5.4 (269.3) 配属歩哨と副検査官は、超宇宙本部経由で崇高なる幹部に報告はしない。それらは、関係する超宇宙の崇高なる幹部に対して唯一責任がある。それらの活動は、日の老いたるものの行政とは異なっている。

24:5.5 (269.4) 崇高なる幹部、副検査官、および配属歩哨は、全天使と非啓示の人格部隊と共に壮大な全宇宙の万物に対する助言的調整と管理上の調整の効率的、直接的、集中的、しかも広範囲の体制を構成する。

6. 卒業生案内者

24:6.1 (269.5) 卒業生案内者は、集団として時代の目標への、すなわち神、休息、ひいては完成された奉仕の永遠性への人間到達に不可欠の技術教育と精霊的訓練のための高等大学を後援し指導する。これらの高度に人格的な存在体の名前は、自身の仕事の本質と目的に由来する。それらは、人間の卒業生を時間の超宇宙から教育と訓練のハヴォーナ過程、上昇する巡礼者に楽園と終局者部隊への

認容のために準備させる過程へと誘導する職務にひたすらに捧げられる。

24:6.2 (269.6) 私は、これらの卒業生案内者の仕事について伝えることを禁じられてはいないが、それは極度に精霊的であるので、私は、物質の心に多種多様の活動概念を適切には描けないと諦める。あなたは、大邸宅世界においてあなたの視覚範囲が拡大され、物質的比較の足枷から解放された後に、「見ることができない、聞くことができない、そして、人間の心の概念に一度も入ったことがないもの」というそれらの現実の意味、つまり、「神が、そのような永遠の真実が非常に好きであるもの達のために準備した」それらの事柄の意味さえも理解し始めることができる。あなたは、その視覚と精霊的な理解の範囲を常にそれほど限定されているわけではない。

24:6.3 (270.1) 卒業生案内者は、ハヴォーナ世界の7回路内での時間の巡礼者の案内に従事している。ハヴォーナの外側の回路の受け入れ世界へのあなたの到着時にあなたを歓迎する案内者は、天国の回路におけるあなたの全経歴中ずっとあなたと共にいるであろう。あなたは、10億の世

界での滞在中、他の無数の人格と関わりをもつであろうが、あなたの卒業生案内者は、あなたのハヴォーナ進行の終わりまであなたに同行するであろうし、時間の最後のまどろみに、つまり楽園目標への永遠通過、通行の眠りに入るあなたを目撃するであろう。そこでは、恐らくあなたが人間の終局者部隊の一員として手ほどきされるまであなたと留まるために割り当てられた楽園の同志が、あなたの目覚めに際しあなたを歓迎するであろう。

24:6.4 (270.2) 卒業生案内者の数は、人間の理解力を超えており、またそれらは現れ続ける。それらの起源は、謎めいている。それらは、永遠の過去からは存在していなかった。それらは、必要とされるきに神秘的に現れる。人間史上初の巡礼者が、中央創造の外側の領域に前進するそのはるか遠い日までは、中央宇宙の全域の卒業生案内者に関する記録はないのである。外側回路の先導的世界に到着するまさにその瞬間、人間初の巡礼者は、最初の卒業生案内者であり、現在は巨大な教育組織の最高の協議会の議長であり責任者であるマルヴォリアンに好意的に迎えられた。

24:6.5 (270.3) ハヴォーナに関する楽園の記録には、「卒業生案内者」と呼ばれる項にこの最初の項目がある。

24:6.6 (270.4)「そして、マルヴォリアン、この系列の最初のものは、ハヴォーナ巡礼の発見者を迎え入れて教授し、また初期の経験の外側の回路から一歩一歩回路ごとに全人格の根源と目標のまさしくその臨場に立つまで、続いて楽園への永遠性の敷居を越えるまで導いたのであった。

24:6.7 (270.5) 私は、そのはるか遠い昔にユヴァーサの日の老いたるものの業務に配置され、我々は皆、我々の超宇宙からの巡礼者が、やがてはハヴォーナに達するであろうという確信に喜んだ。長い間、我々は空間の進化の創造物が楽園に達するであろうということを教えられてきており、最初の巡礼者が実際に到着したとき天国の大宮廷全体に史上かつてない興奮がさっと流れた。

24:6.8 (270.6) ハヴォーナのこの巡礼者の発見者の名前は、グランドファンダであり、グランドファンダは、超宇宙第１号に位置する地方宇宙1,131の星座62の中の体系84の惑星341の出身であった。グランドファンダの到着は、宇宙の中の宇宙の放送業務設立の合図であった。それ以

前は、超宇宙と地方宇宙の放送だけが実施されていたのだが、グランドファンダのハヴォーナの入り口到着の発表が、「栄光に関する空間の報告」を合図し、最初の宇宙放送が、上昇生活の目標到着に至った初めての進化の存在体のハヴォーナ到着を報告したので、そのように名づけられた。

24:6.9 (270.7) 卒業生案内者は、決してハヴォーナ世界を離れない。それらは、時間と空間の卒業生巡礼者の業務に捧げられる。そして、あなたが、あなたの生存と上昇に作用するように設計された確実ですべて完成された計画を拒絶しないならば、いつかこれらの高潔な存在体に直接会うであろう。

7. 卒業生案内者の起源

24:7.1 (270.8) 進化は中央宇宙の系列ではないといえ、卒業生案内者は、中央宇宙の生物の他系列、つまりハヴォーナ従者の完全な、あるいは、より経験豊富な構成員であると、我々は信じる。我々は、卒業生案内者は、上昇の創造物を理解するためのそのような共感の幅と能力を示すので、それらが普遍的奉仕活動のハヴォーナの従者とし

て超宇宙領域における実際の奉仕によりこの文化を獲得してきたと確信する。この見解が正しくないならば、では我々は、先輩の、またはより経験豊かな従者の連続的消滅をどうして説明することができるのであろうか。

24:7.2 (271.1) 以前にそのような多くの任務にあった従者は、超宇宙の任務を課せられハヴォーナを長らく離れ帰還し、楽園の中心の煌きとの「個人的接触」の特権が与えられ、発光存在体に抱擁され、精霊仲間の認識から消え、そして自分の種類のそれらのものの中に決して再現しないであろう。

24:7.3 (271.2) 超宇宙奉仕からの帰還に際し、ハヴォーナの従者は、神の頻繁な抱擁を味わい、またそこから単に身分の高い従者が現れるかもしれない。発光の抱擁を経験するのは、必ずしも従者らが卒業生案内者に変わらなければならないと意味するわけではないが、神の抱擁を達成する四分の一のもの達は決して領域の奉仕には戻らない。

24:7.4 (271.3) 連続する次のような記載が天の記録にある。

24:7.5 (271.4) 「そして、サドナというハヴォーナの従者の842兆8,426億8,284万6,782番は、超宇宙奉仕から来て楽園に受け入れられ、父を知り、神の抱擁に入り、そして今はもういない。」

24:7.6 (271.5) そのような記載があるとき、そのような従者に関する経歴は終わっている。しかし、ちょうど3つの時期(あなたの時間の3日間足らず)に、新生の卒業生案内者が、ハヴォーナ宇宙の外側の回路上に「自然発生的に」現れる。そして、卒業生案内者の数は、移行中のもの達のわずかな違いを考慮に入れ、消えた従者の数とちょうど同じである。

24:7.7 (271.6) 卒業生案内者が進化したハヴォーナ従者であると思うさらなる理由というものがあり、それは、これらの案内者とその関連する従者がそのような並はずれた絆を形成する不変的傾向である。存在体の推定上は別々のこれらの系列が、理解し合い同情し合う態度は全く説明に窮するものである。それらの互いの献身を目撃することは、爽快であり奮い立たせてくれる。

24:7.8 (271.7) 主たる七精霊と関係する崇高な力の７指揮官は、それぞれに今のところ人格的には機能していない崇高なるものの心の可能性と力の可能性の人格的集積所である。そして、これらの楽園の仲間が、ハヴォーナの従者の創出のために協働するとき、後者は、崇高性のある局面に関わっている。その結果、ハヴォーナの従者は、実際は、時-空間領域のある種の進化の可能性の完全な中央宇宙における表現であり、そのすべては、従者が変化と改造を受けるときに明らかにされる。我々は、この変化は、崇高者のために確かに行動する無限の精霊の意志に対応して行われると信じる。卒業生案内者は、崇高なるものにより創造はされないが、我々は皆、経験に基づく神がこれらの存在体を生み出すそれらの取り扱いに何らかの方法で関わっていると推測する。

24:7.9 (271.8) 今や上昇する人間が横断するハヴォーナは、グランドファンダの時代前の中央宇宙とはあらゆる点で異なっている。人間上昇者のハヴォーナ回路到着は、経験的な子供の中の最初の子供の7超宇宙からの到着に対応したものであり、中心の、しかも神性の創造の組織の全面的修正、つまり、確かに崇高なるもの—進化的創造物

の神—により始められた修正を開始した。卒業生案内者の登場は、第三の超熾天使の創造と共に、崇高なる神のこれらの遂行を暗示している。

24:7.10 (271.1) [ユヴァーサの神性顧問による提示]

論文 25
空間の使者部隊

25:0.1 (273.1) 無限の精霊の家族の中で中間に格付けしているのは空間の使者部隊である。これらの多才の存在体は、より高い人格と奉仕の精霊の間を結びつけるものとして機能する。使者部隊は、次のような天の存在体を含む。

25:0.2 (273.2) 1. ハヴォーナ従者

25:0.3 (273.3) 2. 普遍の調停者

25:0.4 (273.4) 3. 技術顧問

25:0.5 (273.5) 4. 楽園の記録管理者

25:0.6 (273.6) 5. 天の記録係

25:0.7 (273.7) 6. モロンチア同志

25:0.8 (273.8) 7. 楽園同志

25:0.9 (273.9) 列挙された7集団のうち3集団のみ—従者、調停者、およびモロンチア同志—が、そういうものとして創造される。残る4集団は、天使の系列が到達する水準を表す。使者部隊は、固有の性質と到達状態により宇宙の中の宇宙においてさまざまに奉仕するが、常に自己の職務の領域を統治するもの達の指揮に準拠する。

1. ハヴォーナ従者

25:1.1 (273.10) 従者と名づいててはいるが、中央宇宙のこれらの「中間創造物」は、いかなる卑しい意味においても召使いではない。精霊的な世界には、召使いの仕事といったものは存在しない。すべての奉仕が、神聖であり爽快である。より高い系列の存在体は下方系列の存在体を見下してもいない。

25:1.2 (273.11) ハヴォーナ従者は、主たる七精霊とその仲間、つまり崇高な力の７指揮官の共同の創造的作業である。この創造的協力は、進化の宇宙における二元的系列の生殖の長い一覧表、つまり、創造者たる息子-創造のつながりによる輝く明けの明星の創造からユランチアのよう

な世界における性的生殖へと及ぶ長い一覧表のための雛形に最も近いものである。

25:1.3 (273.12) 従者の数は桁外れであり、さらに多くが絶えず創出されている。それらは、楽園のはるか北方領域にある共同領域における主たる精霊と崇高な力の指揮官の集会に続く第3時期に1,000名の集団に現れる。4番目の従者は皆、型の点において他の３者よりも物理的である。すなわち、1,000名ごとに750名は、明らかに精霊の型に忠実であるが、250名は性質面において准物質的である。これらの第4の創造物は、主たる精霊よりも物理的な力の指揮官に似ており、幾分か物質存在体(ハヴォーナの意味での物質)の系列である。

25:1.4 (274.1) 人格関係においては、ユランチアにおいてはそうは見えないとはいえ、精霊的なものは、物質的なものより優位である。そして、ハヴォーナ従者の産出においては、精霊支配の法則が広く行き渡っている。確立された割合は、１名の准物質体に対して３名の精霊存在体をもたらす。

25:1.5 (274.2) 新たに創出された従者全員は、先輩の案内者がハヴォーナの各７回路において継続的に行う訓練課程を新たに出現する卒業生案内者と共に修了する。続いて従者らは、最もよく適合する活動に割り当てられるが、それらには2つの型があるので—精霊と准物質—これらの万能の存在体が為し得る仕事の範囲にはほとんど限界がない。より高位の集団あるいは精霊集団は、父、息子、精霊への奉仕に選ばれ、また主たる七精霊の仕事に配属される。それらは、時々大勢で7超宇宙の本部球を包囲する研究世界、つまり、ハヴォーナ回路への前進準備をしている時間の上昇する魂の最終訓練と精霊文化にささげられる世界での奉仕に派遣される。また、精霊従者とより物理的な仲間の両者は、ハヴォーナに到達した、また楽園に達しようとする上昇する創造物の様々な系列への援助において、また指導において卒業生案内者の助手と仲間に割り当てられる。

25:1.6 (274.3) ハヴォーナ従者と卒業生案内者は、仕事への並外れた献身と互いへの感動的な愛情、あなたが人間愛の現象との比較によってのみ理解できるところの愛情というものを示す。案内者からの従者の分離には、従者が中

央宇宙の境界線を越えての任務に派遣される度ごとに起こるように、神性の哀愁がある。だが、それらは悲しみながらではなく、喜んで行く。高い義務からくる満足感の喜びは、精霊的存在体のより輝く感情である。悲しみは、忠実に実行される神性義務の意識からは存在し得ない。また、人の上昇する魂が最高判事の前に立つとき、永遠の重要な決定は、物質的成功あるいは量的業績によることはないであろう。高等裁判所全体に反響する評決は断言する:「よくやった、善良で忠実な召使よ、おまえは、いくつかの基礎的な事柄に忠実であった;おまえは宇宙現実の支配者になるであろう。」

25:1.7 (274.4) 超宇宙奉仕関しハヴォーナ従者は、一般的な、それに特別な精霊特権に最も類似している主たる精霊により統括される領域につねに割り当てられる。それらは、7超宇宙の首都を囲む教育世界に限って奉仕しており、ユヴァーサの最後の報告は、およそ1,380億の従者がその490個の衛星において奉仕活動していたと示している。それらは、オーヴォントンの超宇宙の超大学を包括するこれらの教育世界の仕事に関係する実に多種多様な活動に従事している。ここでは、それらはあなたの仲

間である。それらは、あなたを研究し、時間の宇宙から永遠の領域へのあなたの来るべき卒業の現実と確実性であなたを奮い立たせるためにあなたの次の仕事から下りてきた。そして、従者は、これらの接触において卒業生案内者の仲間として、または—移動された従者として—卒業生案内者自身としてハヴォーナ回路での自身のその後の作業において非常に役立った時間の上昇する創造物への奉仕活動のその予備経験をする。

2. 普遍の調停者

25:2.1 (275.1) ハヴォーナ従者が創造されるごとに、7名の普遍の調停者が、各超宇宙に1名ずつもたらされる。この創造的実施は、楽園で行われる業務への反射的対応のための明確な超宇宙の方法を伴う。実施、制定、

25:2.2 (275.2) 主たる七精霊の7反射は、7超宇宙の本部世界において機能する。これらの反射精霊の性質を物質の心に言葉での描写を引き受けることは難しい。それらは本物の人格である。その上、超宇宙集団の各構成員は、主たる七精霊のただ1名を完全に反射している。そして、主たる精霊が、ハヴォーナ従者の集団を創造する目的のた

めに力の指揮官と関わる度に、各超宇宙集団における反射精霊の1名への同時の焦点化があり、直ちに、しかも成熟した普遍の調停者の同等数が超創造の本部世界に現れる。もし、主たる精霊第七号が、従者の創造において指導力を発揮するならば、第7系列の反射精霊だけが調停者を孕むようになるであろう。そして、1,000名のオーヴォントン風の従者の創造と時を同じくして、1,000名の第7-系列の調停者が、各超宇宙首都に現れるであろう。主たる精霊の七重の性質を反映しているこれらの出来事から、各超宇宙において奉仕する調停者の創造された7系列が生まれている。

25:2.3 (275.3) 前楽園身分の調停者は、各自の出身の創造区域に制限されており、超宇宙間での互換性を持って仕えはしない。それゆえ創造された各系列の1/7を抱擁しているすべての超宇宙集団は、したがって、他のものを除外して主たる精霊のうちの1名の影響を受けて非常に長い時間を過ごす。というのは、全7精霊が超宇宙首都に反映されるのに反し、各超創造においては1名だけが優位であるがゆえに。

25:2.4 (275.4) 各7超創造は、その目標を統括する主たる精霊のうちの1名により実際に全体に普及する。各超宇宙は、その結果監督している主たる精霊の性質と性格を反映する巨大な鏡のようになり、このすべてがあらゆる補助的地方宇宙において創造の母なる精霊の臨場と機能によりさらに続けられる。そのような環境が進化の普及にもたらす影響は非常に深遠なので、それらの超宇宙後の経歴において調停者は、それぞれが角度をもった49の経験的観点を、あるいは洞察を、—したがって不完全である—ものの、全てが互いに埋め合わせ、また、ともに至高者の円を取り囲むことに気を配る傾向にある経験的観点を、あるいは洞察を集合的に表す。

25:2.5 (275.5) 各超宇宙における普遍の調停者は、不思議にも、本質的に4名の集団に、つまり奉仕し続ける団体に分離された自身に気づく。各集団では、3名は精霊人格であり、1名は従者の4番目の創造物のように半物質の存在体である。この3名組は、調停委員会を成しており次のように構成されている:

25:2.6 (275.6) 1. 裁判官-仲裁者。何の異論もなく他の3者により集団の司法代表として務めるに最も有能で最も適していると指名されたもの。

25:2.7 (275.7) 2. 精霊-支持者。証拠を提示し、調停する委員会の裁決に割り当てられたいかなる事柄にもかかわるすべての人格の権利を保護するために裁判官仲裁者により任命されたもの。

25:2.8 (276.1) 3. 神性実行者。領域の物質存在体に接触するために、そして委員会の決定を実行するために固有の性質により資格を得た調停者。神性実行者は、4番目の創造者であるので—准物質存在体—ほとんど、だが完全にではなく人類の狭い範囲の視野に見える。

25:2.9 (276.2) 4. 記録者。委員会の残る構成員は、自動的に記録者、つまり裁判所の書記官になる。記録者は、すべての記録が、超宇宙の公文書と地方宇宙記録のために適切に準備されることを確実にする。もし委員会が進化世界において役目を果たしているならば、第3の報告が、実行者の援助で、司法権の体制統治に関する物理記録のために準備される。

25:2.10 (276.3) 裁定中は支持者が分離されていることから、委員会は、会期中は3名の集団として機能し、公聴会の終わりにだけ評決の構築に参加する。したがって、これらの委員会は時として審判三名組と呼ばれる。

25:2.11 (276.4) 調停者には宇宙の中の宇宙を円滑に保ち続けることにおいて大きな価値がある。調停者は、光の３倍の速度である熾天使の速度で空間を横断して、世界の移動法廷、すなわち小規模な困難の迅速な裁定に専念する委員会として奉仕する。これらの移動性の、しかも著しく公明正大な委員会がなかったならば、絶望的にも球体の裁判所は領域の小さな意見の相違で覆われることであろう。

25:2.12 (276.5) これらの審判三名組は、永遠の重要性に関わる問題には判決を下さない。魂、つまり時間の創造物の永遠の可能性は、決して自分の行為により危険に陥りはしない。調停者は、時間の創造物の時の存在と宇宙福祉の域を越えて広がる懸案を扱わない。しかし、委員会が一度問題の司法権を受け入れてしまえば、その判決は最終

的であり、かつ、つねに全会一致である。裁判官-仲裁者の決定からの上告はない。

3. 調停者の広範囲におよぶ奉仕

25:3.1 (276.6) 調停者は、自らの第一予備部隊が控えている自身の超宇宙の首都の集団本部を維持する。その第二予備部隊は地方宇宙の首都に配置される。若くてあまり経験豊富でない委員らは、ユランチアのような下方世界での奉仕を始め、より円熟した経験後により重大な問題の裁決へと進んでいく。

25:3.2 (276.7) 調停者の系列は、完全に信頼に足る。1名たりとも道を外れたことがない。知恵と判断に関しては絶対確実ではないとはいえ、それらは、疑う余地のない信頼性をもち、忠誠面においては誤りを犯さない。それらは、超宇宙本部に起源を取り宇宙奉仕の次のような段階へと進み、やがてはそこへ戻って行く。

25:3.3 (276.8) 1. 世界への調停者。個々の世界の統轄人格が、既存の情況下において適切な手順に関し大いに当惑したり、または実際に行き詰まるようなときはいつでも、そして、もし問題が、領域の正規に構成される裁判所にも

たらされるに十分な重要性を持たないならば、その際は、各係争側から2名の人格のうち1名ずつの陳情の受理に際し、調停委員会は直ちに、機能し始めるであろう。

25:3.4 (277.1) これらの行政上の、また司法上の困難が、研究と裁決のために調停者の手に託されるとき、それらは権威上は最高である。しかし、調停者らは、全証拠が審問されるまでは判決を導き出さないであろうし、いたる所どこからでも証人を呼ぶそれらの権威には全く制限がない。そして、その決定が上告されないかもしれない一方で、時々、案件は、より上の裁判所に懸案全体を移すほどに発展するので、委員会が任意にその記録を閉じ、その意見を結論づける。

25:3.5 (277.2) 委員の決定は、惑星の記録に掲載され、必要ならば神性実行者により実行に移される。神性実行者の力は非常に大きく、生息界におけるその活動範囲は非常に広い。神性実行者は、そうあるべきものを追求することにおいて現状の優れた技能の操縦者である。それらの仕事は、時々領域の明らかな福祉のために実行され、時間と空間の世界におけるそれらの行為についての説明は時

として難しい。自然法にも、また領域の定められてはいない慣習にも逆らって執行はしないのだが、それらは、しばしば一風変わった行動うをとり、体制管理のより上位の法律に基づき調停者の命令を執行に移す。

25:3.6 (277.3) 2. 体系本部への調停者。これらの4名の委員は、進化世界での奉仕から体制本部での任務へと進む。それらは、ここでのなすべき多くの仕事を持っており、また人間、天使、および他の精霊存在体の物分かりのよい友人であることを示している。審判三名組は、創造物の異なる系列間に起こる集団論争や誤解に関心をもつほどには個人的な違いには関心がない。精霊と物質の両方の存在体は、物質の息子などの結合型と同様に体制本部に住んでいる。

25:3.7 (277.4) 創造者が、選択力をもつ進化している個人を生み出す瞬間、その瞬間に、神性の完全性の順調な操作からの逸脱が生じる。誤解が起こるのは確かであり、これらの偽りのない見解の差への正しい調整措置がなされねばならない。我々は皆、全-賢の全-能の創造者が、地方宇宙をハヴォーナのように完璧に創造し得えたのだとい

うことを覚えているべきである。調停委員会は、中央宇宙において機能する必要はない。しかし、創造者は、自身の全-英知でそうすることを選ばなかった。そして、相違が多く困難に満ちている宇宙を産出してきた一方で、それらは、同様にこれらのすべての違いを構成し、またこのすべての外観上の混乱を調和させるための仕組みと手段を提供してきた。

25:3.8 (277.5) 3. 星座調停者。調停者は、生息界の100の体制間に起こる小規模の困難を引き受けて、体制内での奉仕から星座の問題裁決へと昇進する。星座本部で展開している問題の多くがそれらの司法権下に入るわけではないが、それらは、証拠の収集や予備報告書の準備に体制から体制へと忙しく向かって行くのである。もし論争が正当であるならば、もし意見に対する誇張のない相違や視点に対する偽りのない多様性が生じるならば、たとえいかに少ない人格体の関わりであろうとも、たとえいかに誤解が明らかに些細であろうとも、調停委員会は、つねに論争の真価を伝えることができる。

25:3.9 (277.6) 4. 地方宇宙への調停者。委員は、宇宙のこのより大きい仕事においてメルキゼデク系と執政の息子の双方への、また星座の支配者と、100の星座の調整と管理に関係する人格部隊へのかなりの支援をしている。熾天使の異なる系列と地方宇宙の本部球体の他の居住者らは、審判三名組の援助と決定を利用している。

25:3.10 (278.1) 体系、星座、または宇宙の細目にわたる問題に起こるかもしれない違いの本質についての説明は、ほとんど不可能である。困難は生じるものの、進化世界での物質的生活のような物質的存在の些細な試練と辛苦とは大いに異なっているのである。

25:3.11 (278.2) 5. 超宇宙の小領域への調停者。委員は、地方宇宙の問題から、自身の超宇宙の小領域で起こる懸案の研究に進む。それらが、個々の惑星から内部に深く移動すればするほど、神性実行者の物質的任務はますます減少するのである。徐々に、神性実行者は、慈悲-正義の解釈者の新しい役割を引き受け、同時に、—準物質であり—その調査の物質的側面に同情的な接触をして委員会を全体的に維持する。

25:3.12 (278.3) 6. 超宇宙の主要な領域への調停者。委員の仕事の特徴は、それらの前進に応じて変化し続けている。判決すべき誤解はますます減少し、また説明し、解釈すべき神秘的現象はますます増大する。委員らは、段階ごとに仲裁者から神秘の説明者へと進化している—説明的な教師に進化する裁判官。無知で困難と誤解が起こることを許容するもの達の仲裁者。かつて自らがそうであった。しかし、それらは、いま心の衝突と見解の戦いを避けるために十分に知的で、かつ寛容であるもの達の講師になりつつある。創造物の教育が高ければ高いほど、他のものに関する知識、経験、および意見をますます重んじるようになる。

25:3.13 (278.4) 7. 超宇宙への調停者。ここで調停者は同位になる—相互に理解し完全に機能する4名の仲裁者-教師。神性実行者は、報いの力が奪われ精霊三名組の物理的な声になる。この時までには、これらの顧問と教師は、超宇宙業務上で遭遇する実際の問題と困難の大部分に詳しくなってくる。それらは、こうして超宇宙の本部世界を囲む教育的な球体において生活している上昇の巡礼者たちの素晴らしい助言者となり賢明な教師になるのである。

25:3.14 (278.5) すべての調停者は、楽園に達するそのような時まで日の老いたるものの一般監督下と生き写しの助手の直接指示下に仕える。それらは、楽園滞在期間中に自身の起源の超宇宙を統括する主たる精霊に報告する。

25:3.15 (278.6) 超宇宙登録は、自分達の管轄区域を越えた調停者を列挙しないし、そのような委員会は、壮大な宇宙全体に広く点在する。ユヴァーサの登録の最後の報告は、オーヴォントンにおいて機能するほぼ18兆の委員会としての数を示している—70兆以上の個人。しかし、これらはオーヴォントンで創造された多数の調停者のうちのごくわずかな部分に過ぎない。その数は、要するに大規模であり、卒業生案内者への変化を斟酌して、ハヴォーナ従者の総数に同等する。

25:3.16 (278.7) 時おり、超宇宙の調停者は、数の増加につれ楽園の完全性の協議会に移動され、続いて宇宙の中の宇宙のための無限の精霊により進化された調整部隊として、絶えず数と効率性を増大している存在体からなる驚異の集団としてそこから出現する。それらは、経験的上昇と楽園の訓練により崇高なるものの現れつつある現実を独

特に理解し、また特別任務に際しては宇宙の中の宇宙をあちこち移動する。

25:3.17 (279.1) 調停委員会の構成員は、決して切り離されない。4名１組が、最初に結びつけられたようにいつまでも共に努める。自分達の栄光の奉仕においてさえ、それらは、宇宙の蓄積された経験と経験上の完成された知恵の四重奏団として機能し続ける。それらは、永遠に時間と空間の最高の正義の具体化として関連づけられる。

4. 技術顧問

25:4.1 (279.2) 精霊世界のこれらの法と技術をもつ心のもの達は、そういうものとして創造されはしなかった。初期の超熾天使と全天使からは、100万の最も秩序ある心のものが、この広大かつ万能の集団の核として無限の精霊により選ばれた。そして、そのはるか遠い昔からずっと進化の創造計画への完全性の法の適用における実際の経験は、技術顧問になることを切望するすべてのもの達に要求されてきている。

25:4.2 (279.3) 技術顧問は、次の人格系列集団から採用される。

25:4.3 (279.4) 1. 超熾天使

25:4.4 (279.5) 2. 第二熾天使

25:4.5 (279.6) 3. 第三熾天使

25:4.6 (279.7) 4. 全天使

25:4.7 (279.8) 5. 熾天使

25:4.8 (279.9) 6. 上昇する人間のある種の型

25:4.9 (279.10) 7. 上昇する中間者のある種の型

25:4.10 (279.11) 現在、一時的結合であるすべての人間と中間者を除くユヴァーサに登録されオーヴォントンにおいて稼動中の技術顧問の数は、61兆をわずかに超えている。

25:4.11 (279.12) 技術顧問は、個人として頻繁に機能するが、奉仕のために組織化され7名からなる集団に与えられた任務球体にある共通本部を維持する。各集団においては、少なくとも5名は永久的身分のものでなければならないが、2名は一時的関係のものであるかもしれない。上昇する人間と上昇する中間創造物は、楽園上昇を探求しつつこれらの顧問委員会の委員として働くが、技術顧問の

ための通常の訓練課程には入らず、系列の永久的構成員にもならない。

25:4.12 (279.13) 顧問と過渡的に務めるそれらの人間と中間者は、普遍的法則と最高の正義の概念における基づいたその練達さからそのような仕事に選ばれる。絶えず追加の知識を、そして高められた技能を習得しながら楽園目標に向けて旅をするとき、あなたは、みずから既に蓄積した知恵と経験を他のもの達に分配する機会を継続的に与えられている。あなたは、最後のハヴォーナまで生徒-教師の役割を演じる。あなたは、あなたの前進経歴の新発見の知識をすぐ下にいるもの達伝えることにより、この広大な体験的大学の上昇段階を順番に進むであろう。宇宙政権においてこの知識と真実を他のものに伝えるためのあなたの能力と意欲を示すまでは、あなたは、知識と真実の所有者になったとはみなされない。

25:4.13 (280.1) 長期訓練と実体験の後、天使童子の身分より上の奉仕活動をする精霊のいずれかは、技術顧問として恒久指名を受けることが許されている。全候補者は、自発的にこの奉仕の系列に入る。しかし、一度そのような責

任を担ってしまったならば、それを放棄することは許されない。日の老いたるものだけが、これらの顧問を他の活動に移すことができる。

25:4.14 (280.2) 地方宇宙のメルキゼデク系大学で始められる技術顧問の訓練は、日の老いたるものの法廷へと続く。それらは、この超宇宙訓練からハヴォーナ回路の先導的世界に位置する「7個の円の学校」に続く。そして、先導的世界から、「法の倫理学と崇高性の技法の大学」に、すなわち技術顧問の腕の習熟のための楽園職業訓練所に受け入れられる。

25:4.15 (280.3) これらの顧問は、法律の専門家以上である。それらは、応用法の、すなわち広範囲の創造の広大な領域に生息するものすべての生活と将来の目標に適用される宇宙の法の、学生であり教師である。時の経過とともにそれらは、時間と空間の生きた法の図書になり、永遠の支配者に最も許容できる手順の形式と様式に関して時の人格を指導することによりいつ終わるともしれない問題や不必要な遅れを防いでいる。それらは、楽園の必要条件に調和して機能できるように空間の労働者に助言する

ことができる。それらは、創造者の方法に関する全創造物の教師である。

25:4.16 (280.4) 応用法のそのような生きた図書を創設することはできなかった。そのような存在体は、実体験により進化されなければならない。無限の神格は実存的であり、したがって経験不足の埋め合わせがなされる。それらは、すべてを経験をする前にさえ全てを知っているが、無経験の知識をその下位の創造物には伝えない。

25:4.17 (280.5) 技術顧問は、遅れを防ぎ、進歩を容易にし、達成を勧める仕事に捧げられる。ことをするに当たっては、最善かつ最適の方法がつねにある。完全性の方法、つまり神性の方法がつねにあるし、またこれらの顧問は、我々皆をこのより良い方法の発見に向かせる方法を知っている。

25:4.18 (280.6) きわめて賢明で実用的なこれらの存在体は、いつも密接に宇宙検閲官の奉仕と仕事とに関係がある。メルキゼデク系は、有能な部隊を有している。体制、星座、宇宙、および超宇宙領域の支配者にはすべて、精霊的な世界のこれらの技術的、または法的参照の心を持つ

ものが惜しみなく供給される。特別集団は、生命運搬者の法律顧問として行動する。生命運搬者は、生命伝播の確立された系列からの認められる出発範囲、具合に関しこれらの息子に助言を与え、また別の方法でそれらの特権と機能の自由裁量に関して指導する。それらは、精霊-世界の全処理の適切な用法と方法に関しての各階級の存在体の顧問である。しかし、それらは、領域の物質創造物に直接的に、また個人的には対応しない。

25:4.19 (280.7) 法的用法に関する相談以外に、技術顧問は、同様に被創造体に関するすべての法の—物理的、心的、精霊的の—効率的解釈にささげる。それらは、普遍の調停者に、そして、法の真実を知ることを望む他のすべてのものに利用可能である。言い換えれば、神格の至高性が、物理的、心的、精霊的な系列の要素のある状況においていかに反応するかを当てにできるということを知ること。それらは、究極の方法を明らかにする試みさえする。技術顧問は、選ばれ試された存在体である。私は、いまだかつてそれらの１名たりとも道を外したということは知らない。

25:4.20 (281.1) それらは、非常に実効的に解釈し、また非常に雄弁に解説しており、今までずっと神の法の無視を宣告されたという記録はユヴァーサにはない。それらの奉仕領域には既知の限界もなく、またそれらの進歩に何の限界も置かれて、はいない。認められない。それらは、引き続き顧問として楽園の入り口にさえ進む。それらには法と経験の宇宙全体が開け放たれている。

5. 楽園の記録管理者

25:5.1 (281.2) ハヴォーナの第三超熾天使の中から記録管理者として、つまり光の小島の正式の公文書の番人として幾名かの上級記録主任が選ばれ、また知識の管理者の心に登録された生きた記録と対照をなすそれらの公文書は、時々「楽園の生きた図書」と呼ばれる。

25:5.2 (281.3) 生息惑星の記録天使は、すべての個々の記録の源である。宇宙全体において、他の記録者は、正式記録と生活記録の両方に関して機能を果たす。ユランチアから楽園の間において双方の記録に出会う。地方宇宙においては、一層多くの書かれた記録に、またより少ない生きた記録に。楽園においては、さらに多くの生きた記録

に、そしてより少ない正式記録；ユヴァーサにおいては、双方は等しく入手可能である。

25:5.3 (281.4) 組織化の、そして生息の創造におけるあらゆる重要な、意味をもつ出来事は、記録上の事実である。局所的重要性に過ぎない出来事は地方の記録だけに見られ、より広い意味のものはそれ相応に扱われる。宇宙の重要性をもつすべてが、ネバドンの惑星、体系、および星座からサルヴィントンに掲示される。そして、それらの出来事は、そのような宇宙首都から領域と超政府の問題に関連するさらに上の記録へと送られる。また、楽園には、超宇宙とハヴォー資料の関連概要がある。宇宙の中の宇宙に関するこの歴史的かつ蓄積された談話は、これらの身分の高い第三超熾天使の保護監督下にある。

25:5.4 (281.5) これらの幾名かの存在体が、天の記録係の活動を指示する記録の責任者として奉仕するために超宇宙に派遣される一方で、１名たりともその系列の永久的会員名簿から移されたことはない。

6. 天の記録係

25:6.1 (281.6) これらは、すべての記録を複写する、最初の精霊記録と、半物質対応物—カーボン紙による写しと呼ばれるかもしれないもの—を作成するもの達である。それらは、精霊的エネルギーと物質的エネルギー双方を同時に操る独特の能力でこれができるのである。天の記録係は、そういうものとして創造はされない。それらは、地方宇宙からの上昇の熾天使である。それらは、7超宇宙本部の記録主任の協議会により受け入れられ、分類され、それぞれの任務球体に割り振られる。天の記録係を訓練するための学校もまた見られる。ユヴァーサの学校は、英知の遂行者と神性顧問により指導される。

25:6.2 (281.7) 宇宙奉仕において記録者が前進するにつれ、それらは、自己の二元的記録方式を続け、その結果、その記録は、つねに物質系列のもの達から光の高位の精霊達までの存在体全階級に利用可能である。あなたは、自身の変遷経験においてこの物質界から昇るとき、いつも自身の階級球体の歴史と伝統の記録を参考にすることができるし、他の方法において熟知することができる。

25:6.3 (282.1) 記録者は、十分に試された部隊である。私は、天の記録係の背信を一度として知らないし、それらの記録には改ざんは一度も発見されなかった。天の記録係は二重点検を受け、それらの記録は、ユヴァーサからの高貴な仲間により、また最初の精霊記録の疑似物理的な写しの正当性を保証する強力な使者により精査される。

25:6.4 (282.2) オーヴォントン宇宙の従属球体に配置されている前進する記録者の数は、何兆にも達するが、ユヴァーサに達した身分の数は、800万に至ってはいない。これらの最上級のあるいは卒業生の記録者は、超宇宙管理者と時間と空間の支持される記録の回送者である。それらの恒久的本部は、ユヴァーサに関する記録の領域周辺の円形住居の中にある。最上級のあるいは卒業生の記録者は、決してこれらの記録の管理を他者に託さない。個々人としては、留守にするかもしれないが、決して大きい数ではない。

25:6.5 (282.3) 天の記録係の部隊は、記録管理者となった超熾天使のように永久的任務に就くもの達である。熾天使と超熾天使は、いったんこれらの奉仕に召集されると、崇

高なる神の完全な人格化からくる新たで修正された行政の日までそれぞれに天の記録係と記録管理者のままでいるであろう。

25:6.6 (282.4) ユヴァーサのこれらの年輩の天の記録係は、はるか遠い昔の日の老いたるものの到着以来の全オーヴォントンにおける宇宙の重要性に関する全記録を示すことができ、さらに永遠の小島においては、記録管理者が、無限の精霊の人格化時代以来の楽園の業務を証明するその領域の文書局を警備する。

7. モロンチア同志

25:7.1 (282.5) 地方宇宙の母なる精霊の子供らは、上昇するモロンチア生活を送るすべての友人と仲間である。それらは、創造物進行に関わる上昇者の真の任務に不可欠ではなく、また、楽園旅行の際の人間の仲間にしばしば同伴する熾天使の保護者の仕事をいかなる意味においても置き換えもしない。モロンチア同志は、内面への長い動きを始めたばかりのもの達への丁重な部隊に過ぎない。それらは、また遊びの巧みな後援者であり、この仕事において逆戻りの監督からの効果的な援助を受ける。

25:7.2 (282.6) あなたは、ネバドンのモロンチア訓練世界において果たすべき重大かつ次第に困難な課題を抱えるであろうが、つねに定期的な休息と復帰の季節があなたに提供されるであろう。楽園への旅行中、常に休息と精霊の遊びのための時間があるであろう。そして、光と生命の経歴において崇拝と新達成のための時間が常にある。

25:7.3 (282.7) これらのモロンチア同志は、非常に好意的な仲間であるので、あなたは、最終的にモロンチア経験の最後の段階を去るとき、つまり、超宇宙精霊の冒険に乗り出すための準備をするとき、これらの親しみやすい創造物があなたに同伴できないということを本当に残念に思うであろうが、それらは、地方宇宙において単独的に奉仕する。接触可能なすべての人格は、上昇経歴の全段階において好意的で親しみやすいであろうが、あなたは、楽園同志に会うまではそれほどまでに友情と親交に捧げられる他の集団を見つけることはないであろう。

25:7.4 (283.1) モロンチア同志の任務は、あなたの地方宇宙業務を扱っているそれらの物語においてより完全に表現されている。

8. 楽園の同志

25:8.1 (283.2) 楽園の同志は、熾天使、第二熾天使、超熾天使、および全天使の系列から編成される複合の、または召集された集団である。楽園の同志らは、並はずれたとあなたが見なす時間の長さで仕えるが、永久的身分ではない。それらは、この奉仕活動が完了すると、原則として(不変的ではなく)、楽園奉仕へ呼び出された際の職務に戻る。

25:8.2 (283.3) 天使部隊の構成員は、地方宇宙の母なる精霊により、超宇宙反射の精霊により、および楽園の威儀仙により、この奉仕に推挙される。それらは、中央の小島へ召還され主たる七精霊のうちの1名により楽園の同志として任命される。楽園の永久的身分は別として、楽園の親交のこの一時的な奉仕は、これまでに奉仕精霊に与えられた最高の名誉である。

25:8.3 (283.4) これらの選ばれた天使は、親交の奉仕に専念し、また楽園でたまたま単独であるかもしれない全階級の存在体の、主に上昇の人間の、だが中央の小島で単独である他のすべてのものの仲間としても選任される。楽

園の同志には親しく交わるもの達のために達成すべき特別なものはない；それらは単なる仲間である。楽園滞在の間にあなた方人間が遭遇するであろうほとんど全ての他の存在体には、—あなたの仲間巡礼者は別として—あなたと共に、あるいはあなたのためにすべき明確な何かがある。しかし、これらの同志は、あなたと共に居ることを、また人格の仲間としてあなたと親しく交わるためだけに選任される。それらは、しばしば各奉仕活動において丁重で才気あふれる楽園公民の補助を受ける。

25:8.4 (283.5) 必滅者は、非常に社会的である集団を起源としている。創造者たちは、「人が単独であることは良くない」ということをよく知っており、準備は、それ故に、楽園においてさえ親交のためになされる。

25:8.5 (283.6) 上昇の人間としてのあなたがもし、あなたの地球の経歴に関わる付き添いと、あるいは親密な仲間と楽園に着いたならば、あるいは、将来の目標の熾天使である保護者があなたと共にたまたま到着するか、またはあなたを待ち受けているならば、永遠の同志もあなたには選任されないであろう。しかし、もしあなたが単独で到

着するならば、光の小島で時間の最後の睡眠からあなたが目を覚ますとき、１名の同志が確かにあなたを歓迎するであろう。あなたが上昇仲間の誰かに同伴されるであろうということがもし知られていても、臨時の同志は、永遠の岸にあなたを歓迎し、その上あなたとその仲間の歓迎に用意される保留地に付き添うために任命されるであろう。延々と続く楽園の岸での永遠への復活を経験するとき、あなたは、暖かく歓迎されることを確信できる。

25:8.6 (283.7) 受付の同志は、ハヴォーナの最後の回路における上昇者の最後の滞在期間に選任され、必滅者の起源と空間の世界とハヴォーナの円を通しての波瀾万丈の上昇に関する記録を慎重に調べる。受付の同志らは、時間の必滅者を出迎えるにあたり、到着しつつある巡礼者の経歴にすでに確かに精通しており、また同情的で好奇心をそそる仲間であると分かる。

25:8.7 (283.8) 何らかの理由でもしあなたが、楽園におけるあなたの前終局者滞在期間に、上昇経歴の仲間から—人間の、または熾天使の—一時的に切り離されるようなこと

があるならば、楽園の同志は直ちに助言と親交のために任命されるであろう。楽園での独り住まいの上昇する人間に一たび任命されると、同志は、自分の上昇仲間が再び加わるか、または正式に終局者部隊に召集されるまでこの人格体と共に留まる。

25:8.8 (284.1) 楽園の同志は、上昇者は決してその性質が超宇宙の型とは異なる同志には託されないということを除いては、待機順に配属される。もし今日ユランチアの必滅者が楽園に到着しつつあるならば、オーヴォントンが起源であるか、そうでなければ、主たる七精霊の本質をもついずれかの待機中の一番目の仲間が、必滅者に割り当てられるであろう。したがって、全天使は、7超宇宙からの上昇創造物とともには仕えない。

25:8.9 (284.2) 多くのさらなる奉仕が、楽園の同志によって実行される:上昇の人間が、ハヴォーナを横断中に単独で中央宇宙に達するならば、また神格冒険の何らかの局面において失敗するならば、時間の宇宙へ送還されるであろうし、直ちに、楽園の同志の予備部隊への招集が掛けられるであろう。この系列の1つは、挫折した巡礼者に

続くための、巡礼者を慰め励まして共にいるための、そして、楽園上昇を再開するために中央宇宙に戻るまで巡礼者と共に残るための任務を受けるであろう。

25:8.10 (284.3) もし上昇の巡礼者が、上昇熾天使、すなわち人間経歴の守護天使の同伴でハヴォーナを横断中に神格冒険に敗れるならば、守護天使は、人間の仲間に同伴することを選ぶであろう。これらの熾天使は、時間と空間の奉仕に戻る人間の長年の同志にいつでも同伴を志願したり、許可されたりする。

25:8.11 (284.4) だが、密接に関係する2名の人間上昇者に関してはそうではない。もし1方が神に達しもう1方が一時的に失敗するならば、成功している個人は、必ず失望した人格と共に進化の創造に戻ることを選ぶが、これは受け入れられない。その代わりに、楽園の同志の予備部隊に招集がかけられ、１名の志願者が失望した巡礼者への同伴に切り替えられる。そこで、志願の楽園公民は、成功している人間と関わるようになる。成功している人間は、破れた同志のハヴォーナ帰還を待ち受けて中央の小

島に留まり、そうしているうちに進化的上昇の冒険話を提示して幾つかの楽園の学校で教える。

25:8.12 (284.5) [ユヴァーサからの権威高きものによる後援]

論文 26
中央宇宙の奉仕活動をする精霊

26:0.1 (285.1) 熾天使は、楽園と中央宇宙に属する活動をする精霊である;それらは、無限の精霊の子供の最下級集団の中の最高系列である—天使部隊。奉仕するそのような精霊は、楽園の小島から時間と空間の世界の間で遭遇することになっている。大部分の組織化されたまた居住者のいる創造にはそれらの奉仕はない。

1. 奉仕精霊

26:1.1 (285.2) 天使は全空間の進化し上昇する意志を持つ創造物の奉仕する-精霊の仲間である;それらは、球体の神性人格の高位の部隊に属する同僚であり働く仲間でもある。全系列の天使は、異なる人格であり、非常に個人化されている。それらには皆、逆戻りの指揮官の奉仕を評価する大きな能力がある。奉仕する精霊は、空間の使者部隊と共に休息と変化の季節を楽しむ;それらは、並々

ならぬ社会性を備え持ち、人間のそれをはるかに超えて、結合しやすい能力を持ち合わせている。

26:1.2 (285.3) 壮大な宇宙の奉仕する精霊は次の通りに分類される:

26:1.3 (285.4) 1. 超熾天使

26:1.4 (285.5) 2. 第二熾天使

26:1.5 (285.6) 3. 第三熾天使

26:1.6 (285.7) 4. 全天使

26:1.7 (285.8) 5. 熾天使

26:1.8 (285.9) 6. 天使童子とサノビム

26:1.9 (285.10) 7. 中間創造物

26:1.10 (285.11) 天使系列の個々の構成員は、宇宙における人格的身分に関して完全に固定しているわけではない。ある系列の天使は、しばらくの間楽園の同志になるかもしれない;一部は天の記録係になる;他のものは技術顧問階級に昇る。ある天使童子は、熾天使の身分と将来の目標を

志すかもしれないし、一方、進化の熾天使は、神の上昇する息子の精霊的段階に到達することができる。

26:1.11 (285.12) 奉仕活動の７系列の精霊は、明らかにされるように、上昇する創造物への最も重要な機能に沿った提示のために集められる:

26:1.12 (285.13) 1. 中央宇宙の奉仕活動をする精霊。超熾天使の3系列は、楽園-ハヴォーナ体系において奉仕する。第一の、あるいは楽園の超熾天使は、無限の精霊により創造される。ハヴォーナにおいて奉仕する第二次の、そして第三の系列は、それぞれに主たる精霊の子であり回路の精霊の子である。

26:1.13 (286.1) 2. 超宇宙の奉仕する精霊—第二熾天使、第三熾天使、および全天使。第二熾天使、反射の精霊の子は、7超宇宙においてさまざまに奉仕する。無限の精霊の起源である第三熾天使は、最後には、創造者たる息子と日の老いたるものとの連結奉仕とに捧げられる。全天使は、協力的に無限の精霊と崇高７幹部により創造され、後者の専属的使用人である。これらの3系列に関する議

論は、後に続くこの一連の物語の表題を形成する。になる。

26:1.14 (286.2) 3. 地方宇宙の奉仕する精霊は、熾天使と天使童子であるその助手を抱擁する。人間の上昇者には宇宙の母なる精霊のこれらの子との最初の接触がある。生息界の出である中間創造物は、機能上しばしば奉仕する精霊に分類されはするが、厳密には天使系列のものではない。それらについての物語は、熾天使と天使童子に関する報告とともにあなたの地方宇宙の問題を扱うそれらの論文に提示されている。

26:1.15 (286.3) 天使部隊の全系列は、宇宙の様々な奉仕に専念し、何らかの方法で天の存在体のより高位の系列に奉仕する。しかし、時間の子の発展的進歩に関する上昇計画の助長において数多く起用されるのは、超熾天使、第二熾天使、熾天使である。中央宇宙、超宇宙、地方宇宙で機能するそれらは、永遠なる息子を通して宇宙なる父に達しようとするすべての者を助け導くために無限の精霊により提供される切れ目ない鎖状の精霊奉仕活動者を形成する。

26:1.16 (286.4) 超熾天使は、行為の1局面だけに、宇宙なる父とのそれだけに関しては「精霊の極性」により制限されている。それらは、父の専属回路を直接に使う時以外は単独で働くことができる。超熾天使は、父の直接の奉仕活動における力の受領に際し、機能できるように自発的に２名１組で連合しなければならない。第二熾天使は、同様に制限されており、その上永遠なる息子の回路と連動するよう対で働かなければならない。熾天使は、個々の、また局所化された人格として単独に働くことができるが、関係ある１対として分極される場合に限り回路化が可能である。そのような精霊存在体が、１対となって関連づけられるとき、１名はもう片方に対して補足的であると言われる。補足関係は一時的であるかもしれない;それらは必ずしも永久的性質ではない。

26:1.17 (286.5) これらの輝かしい光の創造物は、直接に宇宙の第一回路の精霊的エネルギーの取り入れにより支えられている。ユランチアの必滅者は、植物性の肉体化で光-エネルギーを得なければならないが、天使部隊は回路化される。それらは、「あなたの知らない食物を取り入れる。」また、驚異の三位一体の教師たる息子の循環する

教えを受けもする。それらは、生活エネルギーの同化方法にたいへん類似する知識の受容と知恵の取り入れ方法をもつ。

2. 強力な超熾天使

26:2.1 (286.6) 超熾天使は、楽園と中央宇宙に滞在する存在体すべての型への熟練の奉仕活動者である。これらの高位の天使は、主要な3系列で創造されている: 第一、第二、第三の。

26:2.2 (287.1) 第一超熾天使は、連合創造者からだけの子孫である。それらは、楽園公民の一定の集団と上昇巡礼者の拡大し続ける部隊の間でほぼ等しく奉仕活動を分担する。永遠の小島のこれらの天使は、楽園居住者の両集団に不可欠の訓練を促進するに当たり非常に効果を生んでいる。それらは、宇宙の創造物のこれらの独特の 2 系列の相互理解に役立つ多くを提供する—神性の、そして完全の、意志を持つ創造物の最高位の型であるものと、宇宙の中の全宇宙の意志を持つ創造物の最下位の型の完成された進化のもの。

26:2.3 (287.2) 第一超熾天使は、非常に独特かつ特徴的であるので後続の談話で別個に考慮されるであろう。

26:2.4 (287.3) 第二超熾天使は、ハヴォーナ7回路の上昇する存在体に関わる業務指導者である。それらは、中心的創造の世界回路に長らく滞在する楽園公民の数多くの系列の教育的訓練への奉仕において同様に考慮されるのであるが、我々はそれらの奉仕のこの局面については論じないかもしれない。

26:2.5 (287.4) 主たる七精霊に各々起源をもち、また本質もそれに沿って模倣されていれるこれらの高位の天使には7つの型がある。集合的に、主たる七精霊は独特な存在体と実体からなる多くの異なる集団を創造し、各系列の個々の構成員は性質的には比較的に一様である。だが、これらの同じ七精霊が個々に創造するとき、生まれる系列は性質的には常に七重である。主たる精霊の子らの各々は、その創造者の性質を帯びており、それゆえに他のものからは異なっている。第二超熾天使の起源はそのようなものであり、また、創造されたすべての7つの型の天使は、自分の系列全体に開放された活動の全経路に

おいて、主には、中央の、神性の宇宙の7回路において機能する。

26:2.6 (287.5) ハヴォーナの惑星の各7回路は、回路の七精霊の直接指揮下にあり、自らは主たる七精霊の集合的—ゆえに一律的—創造である。第三根源と中枢の性質を帯びてはいるとはいえ、ハヴォーナのこれらの補助的七精霊は最初の宇宙の型の一部ではなかった。それらは、最初の(永遠の)創造後に、だがグランドファンダ時代のずっと以前に機能していた。それらは、崇高なるものの新生の、台頭する目的への主たる精霊の創造的対応として確かに現れ、壮大な宇宙の組織化の際に機能しているところを発見された。無限の精霊とそのすべての創造的な仲間には、宇宙の調整者として、経験的神格と進化する宇宙における同時発展への適切な創造上の対応のための能力が豊富に授けられているようである。

26:2.7 (287.6) 第三超熾天使は、回路の七精霊に起源をとる。個々のハヴォーナ円において各七精霊は、中央宇宙の需要を満たすために第三系列に属する高位の超熾天使である十分な数の奉仕活動者を産出する権限が無限の精霊か

ら与えられる。回路の精霊は、時間の巡礼者のハヴォーナ到着前に比較的わずかの天使の活動奉仕者を創造したが、主たる七精霊は、グランドファンダの着陸まで第二超熾天使の創造を始めてさえいなかった。2系列のうちのより古い系列としての第三超熾天使は、それゆえまず最初に検討されるであろう。

3. 第三超熾天使

26:3.1 (288.1) 主たる七精霊のこれらのしもべは、ハヴォーナの様々な回路に属する天使の専門家であり、その奉仕活動は、時間の上昇巡礼者と永遠の下降巡礼者の双方にまでおよぶ。完全な中央創造の10億の研究世界においては、あなたの全系列の超熾天使の仲間は、あなたに完全に見えるようになるであろう。あなた達は皆、そこでは相互関係と共感をもった最高の意味における兄弟らしい理解ある存在体になるであろう。また、あなたは、最初の回路の先導的世界を経てハヴォーナに入り、それから第７回路に外へと進み、これらの回路を内から外へと移動する下降巡礼者、つまり楽園公民を完全に認識し、それらと絶妙につき合うであろう。

26:3.2 (288.2) 第7超宇宙からの上昇巡礼者は、第7回路の先導的世界を経由し内部に進み、反対方向にハヴォーナを通り抜ける。特定の期間が、モロンチア世界での居留に任意に割り当てられることはないのと同様に、世界から世界や回路から回路への上昇創造物の進歩には何の時間制限もない。しかし、適切に進化した個人は1つ、またはそれ以上の地方宇宙の訓練世界における滞在から免除されるかもしれない一方、いかなる巡礼者も進歩的な精霊化のハヴォーナ7回路すべてを通り抜けを避けることはできない。

26:3.3 (288.3) 時間の巡礼者の奉仕に主に配属される第三超熾天使の軍団は、次のように分類される:

26:3.4 (288.4) 1. 調和の監督者。完全なハヴォーナにおいてさえ、ある種の調整的作用が体制を維持し、その後の楽園でのそれらの業績のために時間の巡礼者に準備させるすべての仕事において調和の保証が必要とされるということが明らかなはずである。調和監督の真の任務はそのようなものである—すべてを円滑に、かつ迅速に先に進ませ続けること。それらは、第一回路を起点としてハヴォ

ーナ中で奉仕するし、回路上の自身の臨場の意味するところは、失敗など起こり得ないということである。異なる系列—複数段階さえ—の人格を巻き込む活動の多様性を調整する大きな能力は、これらの超熾天使が時と場所を問わず必要とされれば、援助を与えることを可能にする。それらは、時間の巡礼者と永遠の巡礼者の相互理解に桁外れに貢献している。

26:3.5 (288.5) 2. 記録責任者。これらの天使は、第2回路において創造されるのであるが、中央宇宙のいたる所で活動する。それらは、文字通りのハヴォーナの正確な資料、その系列の精霊的な資料、および楽園の正式資料を3部に記録する。さらには、楽園の活気のある図書館、第一系列の超熾天使に関する知識の管理人に対する真の-知識取引の自動的に取次ぎをする。

26:3.6 (288.6) 3. 放送者。公式の局は最も外側の円にある惑星70番に位置するが、第3回路の精霊の子らは、ハヴォーナ全体において機能する。これらの熟練の専門家は、中央創造の放送受信者と送者であり、楽園における全神格

現象に関わる空間報告の製作責任者である。それらは、空間の基本的回路のすべての操作ができる。

26:3.7 (288.7) 4. 使者たちは、第4回路に起源をとる。それらは、人格的な取り次ぎを必要とする報告すべての運び手として楽園-ハヴォーナ体系の範囲に及んでいる。それらは、仲間、天の人格、楽園巡礼者、および時間の上昇する魂にさえ仕える。

26:3.8 (289.1) 5. 情報調整者。第三超熾天使、第5回路精霊の子は、いつでも上昇巡礼者と下降巡礼者との共済関係の賢明かつ思いやりのある促進者である。情報調整者らは、宇宙の中の宇宙の問題に関し現下にハヴォーナ全住民を情報に通じさせることでハヴォーナの全住民へ、特に上昇者への奉仕活動をする。ハヴォーナのこれらの「生ける新聞」は、放送者と反射体との個人的な接触のおかげで、中央宇宙の広大な報道回路を通過する全情報を即座に熟知している。それらは、記録のためにあなたの最速の電信方法で1,000年を要するであろうユランチア時間の1時間で同程度の多くの情報を自動的に取り入れることのできるハヴォーナ図表方式により情報を確保する。

26:3.9 (289.2) 6. 輸送人格。起源が第6回路であるこれらの存在体は、通常、最も外側の回路の惑星40番から操作する。神格冒険に一時的に失敗する失望の候補者たちを連れ去るもの達である。それらは、ハヴォーナの奉仕において往来しなければならないもの達に、また空間移動者でないすべてのもの達に仕える準備ができている。

26:3.10 (289.3) 7. 予備部隊。上昇存在体、楽園巡礼者、およびハヴォーナに滞在する他の系列の存在体との仕事における変動は、それらが起源を取る第7円の先導的世界における超熾天使のこれらの部隊の維持を必要とする。それらは、特別な意匠なしに創造され、自身の第三系列の超熾天使の仲間のいずれかの義務のさほど面倒ではない段階での奉仕に適任である。

4. 第二超熾天使

26:4.1 (289.4) 第二超熾天使は、中央宇宙の7個の惑星回路への奉仕者である。一部のものたちは、時間の巡礼者の奉仕にささげ、全系列の半分は、永遠の楽園巡礼者の訓練に割り当てられる。ハヴォーナ回路経由の巡礼の旅においてこれらの楽園公民には、人間の終局者部隊からの志願

者が伴っている。すなわち最初の終局者集団の完成以来広く行き渡ってきている取り決め。

26:4.2 (289.5) 第二超熾天使は、上昇巡礼者の奉仕活動への周期的任務に従い、次の7集団において働く:

26:4.3 (289.6) 1. 巡礼者の助手

26:4.4 (289.7) 2. 崇高性への案内者

26:4.5 (289.8) 3. 三位一体への案内者

26:4.6 (289.9) 4. 息子発見者

26:4.7 (289.10) 5. 父への案内者

26:4.8 (289.11) 6. 顧問と助言者

26:4.9 (289.12) 7. 休息の補体

26:4.10 (289.13) これらの各労働集団は、創造された7個のすべての型の天使を含んでおり、空間の巡礼者は、巡礼者出身の超宇宙を統括する主たる精霊に起源をとる第二超熾天使により常に教授される。ユランチアの必滅者がハヴォーナに達するとき、あなたは、—あなた自身の進化し

た本質のように—オーヴォントンの主たる精霊から得られる性質を創造したその超熾天使により確かに導かれるであろう。あなたの家庭教師は、あなた自身の超宇宙の主たる精霊から生まれるので、楽園の完全性に達するあなたのすべての努力においてあなたを理解し、慰め、補助することに特に適任である。

26:4.11 (290.1) 時間の巡礼者は、7超宇宙の本部を中心に活動している第二熾天使からなる第一系列の輸送人格によりハヴォーナの暗い重力体を越えて外側の惑星回路へと輸送される。楽園上昇を認可された惑星奉仕と地方宇宙奉仕の熾天使の大半は、すべてではないが、ハヴォーナへの長い飛行前に人間の仲間に別れを告げ、熾天使としての存在の完全性と奉仕の崇高性の達成を期待し、崇高な任務のためにすぐに長い、しかも激しい訓練を始めるであろう。熾天使は、時間の巡礼者に再び加わり、宇宙なる父に達し、終局者部隊の明かされていない奉仕への任務を受けたそのような人間の針路に永久に続くもの達の中に数えられることを望んでこれをするのである。

26:4.12 (290.2) 巡礼者は、唯一の完全性の資性、すなわち目的の完全性だけを携えてハヴォーナの受け入れ惑星、すなわち第7回路の先導的世界に到着する。宇宙なる父は命じた:「私が完全であるように完全であれ。」それは、空間世界の有限の子らに対する驚くべき招待-指令の放送である。その強制命令の発布は、天の存在体の協力的努力をして第一根源と中枢のその驚異的指令の遂行と実現をもたらす援助においてすべての創造を活動をわきたたせた。

26:4.13 (290.3) 生存のための宇宙企画の助手部隊の奉仕活動を介して、またそれにより、あなたがハヴォーナの受け入れ世界に最終的に置かれるとき、あなたは、ただ1種類の完全性を携えて到着する—目的の完全性。あなたの目的は、徹底的に証明された;あなたの信念は試された。あなたには、失望への抵抗力があると知られている。宇宙なる父を見定めないことさえも、すべての者がハヴォーナの完全球体に達するために横断しなければならない経験をくぐり抜けた上昇の人間の信仰をぐらつかせたり、由々しく信用を妨げたりはできない。あなたの誠実さは、あなたのハヴォーナ到達までには崇高になった。

目的の完全性と願望の神性は、信念の不動さとともにあなたの永遠性定住への入り口を確保した;時間の不確定要素からのあなたの救出は完全である;そして、今、あなたは、ハヴォーナの問題と楽園の広大なものに、空間の世界学校での時間の経験的時代における非常に長い訓練において関わった問題に立ち向かわなければならないのである。

26:4.14 (290.4) 上昇の巡礼者は、時間の子らの永遠の入り口へを認める目的の完全性を信仰により勝ち取った。巡礼者の助手は、人格の楽園の完全性にそれほどまでに不可欠である理解のその完全性と知識のその方法を見いだす仕事を今始めなければならないのである。

26:4.15 (290.5) 理解する能力は、楽園への人間の旅券である。信じる意欲は、ハヴォーナへの鍵である。息子性の承認、内住する調整者との協力は、進化的生存の代価である。

5. 巡礼者の助手

26:5.1 (291.1) 遭遇するであろう7集団を有する第二超熾天使の第1番目は、多く旅した空間の上昇者を中央宇宙の安定

した世界と確立された経済へ歓迎する迅速な理解と広い思いやりをもつ存在体である巡礼者の助手である。これらの高位の奉仕活動者は、同時に外側回路の先導的世界へのグランドファンダの到着と同時に内側のハヴォーナ回路の先導的世界に到着する最初のものである永遠の楽園巡礼者のために仕事を始める。楽園からの巡礼者と時間の巡礼者は、はるか遠いその時代に第4回路の受け入れの世界で初めて会った。

26:5.2 (291.2) これらの巡礼者の助手は、ハヴォーナ世界の第7円で機能する上昇の人間のために主要な3区分において自らの仕事を行う：最初に、楽園三位一体の最高の理解；2番目に、父-息子協力関係の精霊的知識；3番目に、無限の精霊の知的な認識。これらの指導段階は、7部門、12小区分、70補助集団に分割される；そして、指導に関わる各補助的組分けでは、1,000の分類が示される。より詳細な指示はそれに続く円に提示されるのだが、楽園のあらゆる必要条件の概要は、巡礼者の助手により教えられる。

26:5.3 (291.3) 次に、それは、信念-試験済みの、また多く-旅した空間の巡礼者に立ちはだかる第一の、または基本の進路である。しかし、時間のこれらの上昇の子らは、ハヴォーナに達するずっと以前に、不確実性を楽しむこと、失望を経て肥えること、明らかな敗北に夢中になること、困難の存在に活気づくこと、広大さに直面し不屈の勇気を示すこと、そして、説明し難い挑戦に立ち向かうとき征服し難い信念を発揮することを学んできた。「神との連係においては、何ごとも—絶対に何ごとも—不可能ではない」は、ずっと前から、これらの巡礼者の鬨の声となった。

26:5.4 (291.4) 各ハヴォーナ円の時間の巡礼者には明確な必要条件がある;すべての巡礼者は、その特定の型の上昇の創造物の援助に適した性質により超熾天使の後見の下に続くが、習得されなければならない針路は、中央宇宙に達する全上昇者にとり公平に一様である。この到達針路は、量的、質的、経験的—知的、精霊的、崇高的である。

26:5.5 (291.5) 時間は、ハヴォーナ円においては重要ではない。限られた方法において、それは前進への可能性に入るが、達成は最終的かつ最高の試練である。あなたの超熾天使の仲間は、次の円の内部を通過する資格があなたにあると考えるまさしくその瞬間に、あなたは第7回路の精霊の12名の副官の前に連れて行かれるであろう。あなたは、ここであなたの起源の超宇宙と出身体系により決定している円の試験に合格しなければならないであろう。この円の神性到達は、先導的世界で行われ、また上昇巡礼者の超宇宙と結びつく主たる精霊の精霊的な認識と実現にある。

26:5.6 (291.6) 外側のハヴォーナ円の仕事を終わり、提示された針路を極めるとき、巡礼者の助手は、次の円の先導的世界に自分の対象を連れ行き、それらを崇高案内者の後見にゆだねる。巡礼者の助手は、快く有益な転送の手助けのためにいつでもしばらくの間留まる。

6. 崇高案内者

26:6.1 (292.1) 空間の上昇者は、7番目の円から6番目の円へ移されるとき、「精霊的な卒業生」と指定され、崇高案内

者の即座の指揮下に置かれる。これらの案内者は、卒業生案内者—無限の精霊の高位の人格に属している—と混同されるべきではない。卒業生案内者は、その従者仲間とともに、ハヴォーナの全回路において上昇巡礼者、下降巡礼者の双方に奉仕する。崇高案内者は、中央宇宙の第6円にかぎって機能する。

26:6.2 (292.2) 上昇者が崇高の神性に関する新認識を獲得するのは、この円においてである。時間の巡礼者は、進化宇宙の長い経歴を通じ、時間-空間創造の全能の総括的管理の現実に関し増大する認識を経験している。ここで、すなわちこのハヴォーナ回路で、時間の巡礼者らは、今にも時間-空間一体性の中央宇宙の起点—崇高なる神の精霊的現実に遭遇するところである。

26:6.3 (292.3) 私は、この円で行われることを説明することにいくらか当惑している。崇高性の人格化された臨場も上昇者には知覚可能ではない。主たる七精霊との新しい関係は、ある点において崇高なるもののこの非接触性を補填する。しかし、各上昇創造物は、我々がその方法を把握できないにもかかわらず、崇高なるものの非啓示の活

動を仮定なしではほとんど満足に説明しえない変形のための成長、意識の新統合、目的の新しい精霊化、神性へ向けての新しい感性を受けるようである。これらの謎めいた経済活動を観測してきた我々にとり、それは、まるで崇高なる神が経験的な子供にまさしくその経験的な能力の限界まで知的な把握、精霊的な洞察、および人格的援助の強化を愛情深く授与しているかのように見える。これらの強化は、崇高性の三位一体の神性段階を突き進む全努力において楽園の永遠かつ実存的な神格の実現を大いに必要とするであろう。

26:6.4 (292.4) 崇高案内者は、生徒の前進の機が熟していると考えるとき、70名の委員会、つまり第6回路の先導的世界において試験官として仕える混合集団の前にそれらを連れて来る。崇高なるものと崇高性の三位一体に対する生徒たちの理解がこの委員会を満足させた時点で、巡礼者には第5回路への移動が認証される。

7. 三位一体案内者

26:7.1 (292.5) 三位一体案内者は、時間と空間の前進している巡礼者へのハヴォーナの第5円における訓練の精力的奉

仕活動者である。巡礼者が、無限の精霊の人格認識を達成する試みに備えて神性の三位一体に関する進んだ指示を受けるのはこの円においてであることから、精霊的卒業生は、三位一体案内者の指示の下ここにおいて「神格冒険の候補者」に指定される。上昇巡礼者は、ここでそれらの達成のためにこの回路の世界に設定された高い目標の需要への対応が求められるところのますます多く課せられ、そしてはるかに困難である精霊的努力の性質を明察し始めるとき、本物の研究と真の精神的努力が意味することを発見するのである。

26:7.2 (292.6) 三位一体の案内者は、最も忠実で能率的である。各巡礼者は、この系列に属する第二超熾天使の全面的配慮を受けたり完全な愛情をあじわう。時間の巡礼者は、現れようとする神格冒険の性質と方法を尊敬する上昇者の教育に従事しているこれらの案内者や他の精霊存在体部隊の助力と援助がなかったならば、楽園の三位一体の親しみやすい最初の人格をを決して見つけはしなかったであろう。

26:7.3 (293.1) この回路における訓練過程の終了後、三位一体案内者は、生徒をその先導的世界に連れ行き、神格冒険の候補者に対する試験官としてまた証明者として機能する多くの三位一体委員会の1つの前に生徒たちを紹介する。これらの委員会は、終局者の仲間1名、第一超熾天使の系列の行為の指揮官のうちの1名、それと空間の単独使者あるいは楽園の三位一体化の息子のいずれかの1名から構成されている。

26:7.4 (293.2) 上昇の人間が実際に楽園に出発するときは、超熾天使円の仲間、卒業生案内者、および後者に属する遍在の従者の仲間からなる輸送3者だけが同伴する。ハヴォーナ円から楽園までのこれらの周遊旅行は試験的旅行である;上昇者はまだ楽園身分のものではない。それらは、宇宙なる父への到達に続く時間の最後の休息を通り抜けハヴォーナ回路を通過するまでは楽園での居住身分を獲得しない。それらは神性の休息後まで「神性の本質」と「崇高性の精霊」を伴わないし、実際には永遠の円と三位一体の臨場における機能を開始はしない。

26:7.5 (293.3) 輸送３者の上昇者仲間は、三位一体の精霊的な明度の地理的臨場位置を定められるようにすることは要求されないが、むしろ十分に人格認識を構成するために無限の精霊を認識し、識別し、理解するという困難な仕事において巡礼者への可能なすべての援助を提供する。楽園のいかなる上昇巡礼者も、三位一体の地理的あるいは位置的臨場を認識できるし、大多数は、神格の、特に第三人格体の知的現実と接触できるのだが、全員が、父と息子の精霊的臨場の現実を認識できたり、または部分的にでも理解できるわけではない。宇宙なる父の最小の精霊的理解ですらも、なおさらに困難である。

26:7.6 (293.4) 無限の精霊探求というものは、めったに成就に失敗しないし、三位一体案内者は、その対象が神格冒険のこの局面に成功したときハヴォーナの第4円上の息子発見者の奉仕活動にその対象を移す準備をする。

8. 息子発見者

26:8.1 (293.5) 第4ハヴォーナ回路は、時々「息子の回路」と呼ばれる。上昇巡礼者は、この回路の世界から永遠なる息子との理解ある関係を達成するために楽園に行くが、下

降巡礼者は、この回路の世界において時間と空間の創造者たる息子の性質と任務の新知識を得る。楽園ミカエルの予備部隊が、上昇巡礼者と下降巡礼者双方のために相互奉仕活動の特別な学校を維持するこの回路には7つの世界がある;そして、時間の巡礼者と永遠の巡礼者が初めて本当に相互理解に至るのが、ミカエルの息子のこれらの世界においてである。あらゆる点で、ハヴォーナ滞在全体の中で最も好奇心をそそる経験は、この回路におけるものである。

26:8.2 (294.1) 息子発見者は、第4 回路に属する上昇する人間への超熾天使の奉仕活動者である。息子発見者は、永遠なる息子の三位一体関係の実現のための候補者に準備させる一般的な仕事に加え、その対象が完全に成功するように完全に教授しなければならない:まず第一に、息子の適切な精霊的知識において;第二に、息子の満足できる人格認識において;第三に、無限の精霊の人格からの息子の適切な分化において。

26:8.3 (294.2) 無限の精霊の到達後、それ以上の試験は実施されない。内側回路の試験は、神格の覆い隠すような抱擁

にある時の巡礼者候補の仕事ぶりに関わるものである。前進は、純粋に個人の精霊性により決定されており、神の他には誰も差し出がましく評価はしない。失敗に際しては、理由は一度も与えられていないし、候補者自身も、その様々な家庭教師と案内者のいずれも窘められたり、または批評されたりはしない。失望は、楽園においては決して敗北とは見なされない;延期は決して不名誉とは見られない;時間の外見上の失敗は、決して永遠の重要な遅れとは混同されない。

26:8.4 (294.3) 神格冒険における失敗らしく見える遅れを経験した巡礼者は、それほど多くはない。超宇宙１番からの巡礼者は、時折最初の試みに成功はしないものの、ほぼ全員が、無限の精霊に達する。精霊に達する巡礼者らは、息子の発見にめったに失敗することはない;最初の冒険に失敗するもののうちほとんどすべてが、超宇宙3番と5番の出身である。精霊と息子の両者の発見後に父に達する最初の冒険に失敗するもの達の大多数は、超宇宙6番の出身である。超宇宙2番と3番からの少数者らも同様に不成功ではあるのだが。また、このすべてが、これらの明らかな失敗には何らかの好ましく十分な理由が

あるということを明確に示すようである;実際には、単に回避不可能な遅れ。

26:8.5 (294.4) 神格冒険の挫折した候補は、任務に関わる責任者たち、つまり第一超熾天使の集団の管轄下に置かれ、少なくとも1,000年の間空間の領域の仕事へと差し戻される。挫折した候補は、誕生の場所である超宇宙へは決して戻らず、2番目の神格冒険に備えての再教育に最も好都合のその超創造に戻るのである。それらは、この奉仕に続いて自発的にハヴォーナの外側の円に戻り、中断された経歴の円にすぐに送り届けられ、早々に神格冒険のための準備を再開する。第二超熾天使は、2番目の試みにおいて決して失敗することなく首尾よくその対象を導くし、同じ超熾天使の奉仕活動者と他の案内者は、この2番目の冒険の間いつもこれらの候補に付き添う。

9. 父の案内者

26:9.1 (294.5) 巡礼者の魂がハヴォーナの3番目の円に達すると、より年長の、高度に技術をもった、そして最も経験豊富な超熾天使の奉仕活動者である父の案内者の保護下に入る。父の案内者は、この回路世界において中央宇宙

に住むすべての存在体が教師として役目を果たす英知の学校と技術の大学を維持する。永遠到達のこの超越的冒険において時間の創造物の役に立つものは何も見落とされることはない。

26:9.2 (294.6) 宇宙なる父への到達は、残る縦断されるべき回路にもかかわらず永遠への通行証である。したがって、輸送3者が、時間の最後の冒険が続こうとしていると発表するとき、つまり、空間の別の創造物が、永遠の入り口を通って楽園への入園を求めると発表するとき、それは、3番目の円の先導的世界における極めて重要な時である。

26:9.3 (295.1) 時間の考査は、ほぼ終わりである。永遠に向けての競争はほぼ走り終えた。不確実性の時代は、終わりつつある;疑いへの誘惑は、失せつつある;完全であれという指令は、守られてきた。時間の創造物と物質の人格は、知的な存在のまさしくその底辺から空間の進化の球体を昇ってきた。また、世界の下級の創造物への「私が完全であるように完全であれ」という宇宙なる父の勅令

の公平さと正義を絶えず示すとともに、上昇計画実行の可能性を立証している。

26:9.4 (295.2) 一歩ごとに、人生ごとに、世界ごとに、上昇の経歴は習得され、神の目標は達成されてきた。生存は、成就において完全であり、完全性は、神性の崇高性において十分である。時間は、永遠において失われる;空間は、宇宙なる父との崇拝の同一性と調和において飲み込まれる。ハヴォーナ放送は、栄光の空間報告を、すなわち、実のところ獣性と物質起源の良心的な創造物が、進化的上昇を経て現実に、永久に、神の完成された息子になってきたという朗報を、前方へと放つのである。

10. 顧問と助言者

26:10.1 (295.3) 2番目の円の超熾天使顧問と助言者は、永遠の経歴に関しての時間の子らの講師である。楽園到達は、新たで、 より高い系列の責任を伴うし、また2番目の円における滞在が、これらの献身的な超熾天使の有用な助言を受ける多くの機会を与える。

26:10.2 (295.4) 神格到達に最初の試みで失敗するもの達は、超宇宙奉仕に戻される前に失敗の円から直接2番目の円へ

と進められる。したがって、顧問と助言者は、これらの失望した巡礼者の顧問と慰安者として役目を果たす。それらは、梯子を登るように混沌状態から栄光へ登ったような一連の長い経験からはその大きさを以外にはいささかも異なることのない最大の失望感に直面したばかりである。失望の巡礼者たちは、経験の杯の中のその粕までも飲み干した者たちである;そして、私は、それらが時間と一時の失望の子らへの愛の奉仕活動の最高の型として超宇宙の奉仕に一時的に戻るところを目にした。

26:10.3 (295.5) 失望の被験者は、第2回路での長い滞在後この円の先導的世界に座をとる完全性の協議会により吟味され、ハヴォーナの試験に合格したと公認される;これは、それらに、非精霊身分に関する限り、まるで実際に神格冒険に成功したかのように時間の宇宙での同じ地位を与える。そのような候補の精霊は完全に容認されるものであった;それらの失敗は、接近手段のある局面に、あるいは経験的背景の何らかの部分に固有であった。

26:10.4 (295.6) それらは、次に、円の顧問により楽園における任務の主任の前に連れて行かれ、そして空間の世界での

時間の奉仕へと送還される;それらは以前の時代に関する職務に大きな喜びをもって進む。それらは、後日大きな挫折を経験した円に戻り、新たに神格冒険を試みるであろう。

26:10.5 (296.1) 進化の不確実性の（もたらす）刺激は、第2回路の成功している巡礼者にとり終わったが、永遠の任務の冒険はまだ始まっていない;そして、この円における滞在は、とても楽しく、非常に有益であるのに反し、以前の円の期待に（からくる）満ちた熱意の一部を欠いている。喜びに満ちた羨望で長い長い苦闘を回想する多くの巡礼者がいる。それらは、何とかして時間の世界に戻り、もう一度それを始められることを真に願っている。ちょうどあなた方人間が、高齢に近づくにつれ時おり青年時代や若年期を回顧しもう一度人生を送れることを本当に願うように。

26:10.6 (296.2) だが最内部の円の縦断はすぐ先にあり、その後すぐ最後の輸送中の睡眠は終わるであろうし、永遠の経歴の新冒険は始まるであろう。2番目の円の顧問と助言者は、被験者のこの素晴らしい、しかも最終の休息、す

なわち上昇経歴の画期的な段階に介在する必然の睡眠の準備を始める。

26:10.7 (296.3) 宇宙なる父に達したそれらの上昇の巡礼者が、2番目-円の経験を終了すると、絶えず-付き添う卒業生案内者は、上昇の巡礼者らを最後の円へ認める命令を出す。これらの案内者は、対象を個人的に内円へと案内し、そこでそれらを休息の補体に、つまり、ハヴォーナの世界回路の時間の巡礼者の奉仕活動に配置される第二超熾天使の最後の系列に託す。

11. 休息の補体

26:11.1 (296.4) 最後の回路にいる上昇者の多くの時間が、楽園住居の差し迫る問題に関する研究の継続に当てられる。非啓示の、巨大かつ多様な存在体部隊の大半は、ハヴォーナ世界のこの内側の永久的かつ一時的な居住者である。これらの種々の型の混合は、上昇巡礼者の教育を促進する際に有効に活用する豊かで状況的な環境を、特にまもなく楽園で遭遇する多くの存在体集団への調整に関わる問題に関して、休息の超熾天使の補体に提供する。

26:11.2 (296.5) この内側回路に住む者たちの中には創造物-三位一体化された息子がいる。第一超熾天使と第二超熾天使は、人間の終局者の三位一体化の子孫と楽園公民の同様の子孫を含むこれらの息子の結合軍団の一般管理者である。これらの息子の一部は、三位一体に抱擁され超政府に任命されており、他のものはさまざまに割り当てられるが、大多数は、ハヴォーナの内側の回路の完全な世界において連合軍団の中に集められている。それらは、ここで超熾天使の指揮下において、グランドファンダの時代以前に最初は日の永遠なるものへの管理補佐であった高位の楽園公民の特別かつ無名の軍団によりいつか将来の仕事のために準備されている。三位一体の存在体の特異なこれらの2集団が、遠い将来に共に働きに行くと推測する多くの理由がある。そのうちの大きな理由は、三位一体の終局者の楽園部隊の予備軍における共通目標である。

26:11.3 (296.6) 上昇巡礼者と下降巡礼者双方は、この最内部回路において互いに、加えて創造-三位一体の息子と親しく交わる。これらの息子らは、両親のように相互の関係から大いなる利益を導き出し、またそれは、人間終局者

の三位一体化の息子と楽園公民の三位一体化の息子の団体を容易にし、保証するという超熾天使の特別な任務である。休息の超熾天使補体は、さまざまの集団との理解ある関連性を促進する訓練にはさほど関係はない。

26:11.4 (297.1) 必滅者は、楽園の勅令を受け取った:「楽園の父が完全であるように完全であれ。」連合部隊のこれらの三位一体の息子への宣言を統轄超熾天使は決してやめない:「楽園の創造者たる息子が上昇の同胞たちを知り愛するように、それらのもの達を理解しなさい。」

26:11.5 (297.2) 必滅の創造物は、神を見つけなければならない。創造者たる息子は、人間—最下級の創造物—を見つけるまでは決して止まることはない。疑う余地なく、創造者たる息子とその人間の子らは、未来のいつか未知の宇宙奉仕に備えている。双方が、永遠の任務のために経験的な宇宙の全域を横断し、教育され訓練される。宇宙全体にわたり、人間と神性のこの比類なき混合、創造物と創造者の混合が起きている。考えのない必滅者は、神性の慈悲と優しさというものを、特に弱者に向けての、また貧困者のための慈悲と優しさを、擬人化の神を

表すものとして顕現に言及してきた。何という誤りか! むしろ、人間による慈悲と寛容のそのような顕現は、必滅の人間には生きている神の精霊が住んでいるという証拠としてみなされるべきである。創造物は、結局は、動機づけられた神性なのである。

26:11.6 (297.3) 1番目の-円での滞在の終わり近く、上昇巡礼者は、まず最初に超熾天使の第1系列の休息扇動者に会う。これらは、永遠の入り口に立つもの達を出迎えるために、また最後の復活の変遷のまどろみのための準備完了のために出て来る楽園の天使である。あなたは、内円を横断し、時間の最後の睡眠からの永遠の復活を経験するまでは現実には楽園の子供ではない。完全な巡礼者は、ハヴォーナの最初の円においてこの休息を始め、つまり眠りにつくのだが、それらは楽園の岸で目を覚ます。永遠の小島に昇るすべてのもの達の中、このように到着するもの達だけが、永遠の子らである;他のもの達は、訪問者として、居住の身分にない客として出かける。

26:11.7 (297.4) そして今、ハヴォーナ経歴の頂点において、あなた方死すべき者が、内回路の先導世界において眠りにつくとき、あなたの起源の世界での人間の死である自然な睡眠で目を閉じたときのようには、またハヴォーナへの旅行のために通過のための長い昏睡準備に入ったときにしたようには単独で休息には入らない。さて、あなたが到達の休息に向けて準備するとき、あなたの変遷が終了され、そして完成の最後の仕上げだけを待ち受けるというハヴォーナの誓約としてあなたとともに休息に入る準備をする最初の円のあなたの長年の仲間が、つまり休息の威厳ある補体が、あなたの側に移動する。

26:11.8 (297.5) あなたの最初の変遷は事実上は死であったし、2番目は理想の眠りであったし、そして今、3番目の変化は真の休息、つまり最高の緩和である。

26:11.9 (297.6) [ユヴァーサからの英知の遂行者による提示]

論文 27
第一超熾天使の奉仕活動

27:0.1 (298.1) 第一超熾天使は、神格に仕える楽園の永遠の小島の崇高なしもべである。それらが、光と正義の道から

一度でも逸れたと聞いた事はない。点呼は完全である;この立派な部隊の誰とても永遠から失われてはいない。これらの高位の超熾天使は、完全な存在体、完全さにおいて崇高であるが、準絶対でも、絶対でもない。無限の精霊のこれらの子供は、完全性の本質を有しているのでその多様な任務の全局面において互換性を持ち、しかも自由に働いている。それらは、中央宇宙の様々な千年の集会や集団親睦会に参加はするが、楽園の外においては広範囲にわたる機能はしない。それらは、また神格の特別使者として出て行き、大勢が上昇し技術顧問になる。

27:0.2 (298.2) 第一超熾天使は、また反逆ゆえに孤立している世界において奉仕する熾天使部隊の指揮をゆだねられる。楽園の息子が、そのような世界を授与され、任務を終了し、宇宙なる父へと上昇し、受け入れられ、そしてこの孤立的世界の公認の配達人として戻ると、第一超熾天使は、新たに開墾された球体において勤務中である奉仕活動をする精霊を指揮する任務主務たちにより指定される。この特別奉仕における超熾天使は、定期的に交代する。ユランチアにおける現在の「熾天使の主務」は、

キリスト・ミカエルの贈与の時代以来勤務についているこの系列の２番目である。

27:0.3 (298.3) 第一超熾天使は、永遠からずっと光の小島において仕えてきて空間の世界への指導者の任務で出て行ったのだが、時間のハヴォーナ巡礼者の楽園への到達後になって初めて現在のように分類される機能をしてきた。これらの高位の天使は今、主として次の奉仕の7系列で活動する:

27:0.4 (298.4) 1. 崇拝指導者

27:0.5 (298.5) 2. 哲学師範

27:0.6 (298.6) 3. 知識管理者

27:0.7 (298.7) 4. 行為の指導者

27:0.8 (298.8) 5. 倫理の解説者

27:0.9 (298.9) 6. 任務主任

27:0.10 (298.10) 7. 休息扇動者

27:0.11 (298.11) 上昇する巡礼者は、実際に楽園住居に達して初めてこれらの超熾天使の直接的影響を受け、次にこれらの天使の指示に基づき自分たちの命名の逆順で訓練経験をする。すなわち、あなたは、休息扇動者の後見の下に、また介入している系列との一連の時期の後に自分の楽園経歴を始め、崇拝指導者とのこの訓練期間を終える。その結果、あなたは終局者（へ向けての）の終わりのない経歴を始める準備ができているのである。

1. 休息扇動者

27:1.1 (299.1) 休息扇動者は、中央の小島からハヴォーナの内回路へと進み、そこで2次系列の超熾天使の休息の補体である同僚に協力するために先へ行く楽園の検査官である。楽園の楽しみに不可欠なものは、休息、神性の休息である;また休息扇動者は、時間の巡礼者に永遠への導入のために用意をさせる最後の教官である。巡礼者が最後の変遷の眠りから、空間の創造物を永遠の領域へと少しずつ目盛りを上げていくまどろみから目を覚ますとき、休息扇動者は、中央宇宙の最後の到達円での仕事を始め、それを続ける。

27:1.2 (299.2) 休息には７重の本質がある。生命の下級系列には眠りと遊戯の休息、精霊人格のより高等の存在体には発見の休息、精霊人格の最高等の型には崇拝の休息がある。また、エネルギー取り入れ口の通常の休息、つまり物理的エネルギー、あるいは精霊的エネルギーを再充填する存在体がある。次に、輸送中の睡眠、熾天使化される際の、1球体から他球体への通過帯域にある際の無意識のまどろみがある。これらのすべての休息と全く異なのものは、変態中の深い眠り、すなわち存在体の1段階から他への、1生命から他への、存在の一つの状態から他への、いかなる1つの地位の様々な段階を経る進化とは対照的に実際の宇宙の地位からの移行に伴うその眠りである。

27:1.3 (299.3) だが最後の変態の眠りは、一連の上昇経歴の地位到達に印されてきたそれらのかつての変遷のまどろみ以上の何かである。その結果、時間と空間の創造物は、楽園の時間を、また空間を伴わない住まいでの居住身分に達するために時間的なものと空間的なものの最内部の縁を横断するのである。休息扇動者と休息補体は、熾天使と関連する存在体がそうであるように、必滅の創造物

の死からの生存へのこの超脱的変態に不可欠なのである。

27:1.4 (299.4) あなたは、最後のハヴォーナ回路において休息に入り楽園において永遠に復活する。しかもあなたは、精霊的に再人格化されるとき、ハヴォーナの最内部回路で最終的な睡眠を引き起こした他ならぬ第一超熾天使としてのあなたを永遠の岸に歓迎する休息扇動者をすぐに見分けるであろう;あなたは、また自己の同一性の維持を宇宙なる父の手にもう一度喜んで託そうとするとき、信仰の最後の壮大なる広がりを思い起こすであろう。

27:1.5 (299.5) 時間の最後の休息を味わった;変遷の最後の眠を経験した;今、あなたは、永遠の住まいの岸での永続する生命とともに目覚めるであろう。「もはや、眠りにはつかないであろう。神とその息子はあなたの前に臨場し、あなたは永遠その僕である;あなたは神の顔をすでに見たのであり、また神の名前はあなたの精霊である。夜はそこにはないのである;そして、それらは、太陽の光を必要としない、なぜならば、偉大なる根源と中枢はそれらに光を与えるのであるから;それらは永久に生き

るのである。そして、神はそれらの目からすべての涙をふき取るのである;もはや死はなく、悲しみも泣くこともなく、痛みとてないであろう。過去の事象は過ぎ去ってしまったのであるから。」

2. 任務主任

27:2.1 (300.1) これは、これらの天使の3系列全ての—第一、第二、第三の—組織を統括するために超熾天使長、つまり「原型天使」により時々指定される集団である。一機構としての超熾天使は、これらのすべての精霊人格を統括する楽園の最初の天使である互いの主任の機能を除いては、完全に自治的であり自主規制的である。

27:2.2 (300.2) 任務の天使は、終局者部隊に認められる前の楽園にいる栄光の必滅居住者に大いに関係がある。研究と指示は、楽園到着の唯一の仕事ではない;また、奉仕は、楽園の前終局者の教育的経験において不可欠の役割を演じる。加えて、私は、上昇の必滅者は余暇期間があると熾天使の任務主任の予備部隊と親しくする気質を明らかにするところを見た。

27:2.3 (300.3) 必滅の上昇者のあなたが楽園に達するとき、あなたの社会的関係は、発揚され、しかも神性である存在体部隊との、また栄光のなじみ深い大勢の仲間との接触以上の多くを伴う。あなたは、また楽園公民の3,000以上の異なる系列、超越者の様々な集団、それにユランチアでは明らかにされていない永久的、また一時的な楽園住民の他の多数の型とも親しく交わらなければならない。楽園のこれらの強力な識者との持続的接触後に、心の天使の型と雑談するのは非常に安らぐものである; 心の天使の型は、自身がそのような長い接触と壮快な関係を持っていた熾天使の時間の必滅者を思い出させる。

3. 倫理の解説者

27:3.1 (300.4) 生命の階段を昇れば昇るほどますますより宇宙倫理に留意しなければならない。倫理的認識は、他のありとあらゆる個人の存在に固有の権利をもつ個々人による認識にすぎない。精霊的倫理は、個人的、集団的関係についての人間の概念を、またモロンチアの概念をさえ超える。

27:3.2 (300.5) 倫理は、楽園の栄光への長い上昇において時間の巡礼者により正しく教えられたし適切に学習されてきた。上昇者は、この内部に昇る経歴が空間の出身世界から展開されるとき、それらの宇宙の仲間の絶えず広がる輪に集団を加え続けてきた。あらゆる同僚からなる新集団は、上昇の必滅者が楽園に達するまで、倫理的解釈の助けとなり好意的な助言を提供してくれる誰かを本当に必要とするまで、認識され、従われるべきもう一つの倫理段階を加える。それらは倫理を教えられる必要はないのだが、とても新しい物と接触をするという並はずれた職務に直面するとき、非常に苦労して学んだものが適切に解釈された物をもつ必要がある。

27:3.3 (300.6) 倫理の解説者は、楽園到達者が居住者の身分の到達から終局者部隊への正式入隊へと広がるその波瀾万丈の期間、堂々たる存在体の多くの集団への適応のための手伝において計り知れない援助をしている。上昇の巡礼者は、既にハヴォーナの７回路において数々の楽園公民の型の多くに会ってきたのである。賛美された必滅者は、これらの存在体が多くの教育を受けているハヴォーナの内回路において結合の部隊の創造物-三位一体化の

息子との親密な接触にも恵まれてきた。そして、上昇する巡礼者は、未来の非啓示の任務に備えてそこで集団訓練を続行する楽園-ハヴォーナ体系の非啓示の多数の居住者に他の回路上で出会った。

27:3.4 (301.1) これらのすべての天の親交は、不変に相互的である。あなたは、上昇する人間としてこれらの代々の宇宙の仲間や数々のますます神聖であるそのような仲間の恩恵に浴するばかりではなく、時間と空間の進化の世界から上昇する人間に関連づけられたことに対して誰をも永久に変えさせより良くするあなた自身の人格と経験からの何かをこれらの兄弟のような存在体に与えもする。

4. 行為の指導者

27:4.1 (301.2) 上昇の必滅者には、すでに楽園関係の倫理を完全に教えられてきたので、—無意味な形式でもなく人工の排他的階級制度でもなく、むしろ固有の作法—光と生命の中央の小島に滞在する高位の存在体の完全な行為の実践において楽園社会の新構成員に教える熾天使の行為の指導者の助言を受けることが役立つとわかる。

27:4.2 (301.3) 調和は中央宇宙の基本方針であり、気づくことができる系列は、楽園において広まる。適切な行為には、知識や哲学を通しての自然な崇拝の精霊的な高みに進歩することが不可欠である。神格への接近には神性の方法がある;この方法の習得は、巡礼者の楽園到着を待ち受けなければならない。その精霊は、ハヴォーナ円で伝えられたが、時間の巡礼者の訓練の最後の仕上げは、実際に光の小島に到達して初めてできるのである。

27:4.3 (301.4) 楽園における全行為は、完全に自然発生的、つまり、あらゆる意味において自然かつ自由である。だが、今もなお永遠の小島での適切で完全やり方があり、行為の指導者は、それらを指導するために「門内の見知らぬ者たち」の側にずっとおり、巡礼者を完全に安心させ、同時に、さもなければ避けられないであろう混乱と不確実性を免れることができるように導くのである。そのような取り決めによってのみ、無限の混乱を避けることができる;また、混乱は、決して楽園には生じない。

27:4.4 (301.5) これらの行為の指導者は、名誉ある教師と案内者として真に役目を果たす。それらは、ほぼ無限である

一連の新状況と馴染みのない慣例に関し人間の新居住者の指導に主に関係している。そのためのすべての長い準備と長旅にもかかわらず、楽園は、ついに居住身分に達するもの達にとりまだ名状しがたく奇妙であり、予想外に新しいのである。

5. 知識管理者

27:5.1 (301.6) 熾天使の知識管理者は、楽園の全居住者が知り、また読む高度の「生きた書簡」である。それらは、真実に関する神性の記録、すなわち真の知識に関する生きた本である。あなたは「生命の本」の中の記録について聞いてきた。知識の管理者は、まさしくそのような生きた本、つまり、神々しい生命と至上の保証を表す永遠の平板に刻印される完全性に関する記録である。それらは、実際は、生きた、自動の、書斎である。宇宙の事実は、これらの第一超熾天使に固有であり、実際にこれらの天使に記録されている;そして、永遠の真実と時間の知性のこれらの完全かつ十分な集積所に属する心の中に、虚偽のための宿をもうけるということは、本質的に不可能でもある。

27:5.2 (302.1) これらの管理者は、永遠の小島の居住者のために非公式の教育講座を実施するが、その主要な機能は、参照と検証に関するものである。楽園の滞在者のだれもが、知りたいかもしれない特定の事実あるいは真実の生きた所蔵庫を身近に意のままに持つことができる。求められた情報を保持する集団の指揮官を任命するであろう知識の生きた発見者が、小島の北端においては応対可能であり、　あなたが知りたいまさしくそのものである輝かしい存在体が直ちに現れるであろう。もはや、あなたは夢中になったページから教化を求めてはいけない;あなたは今、面と向かって生きた知性と親しく交わっている。あなたは、このようにしてその最後の管理者である生きた存在体から最高の知識を得るのである。

27:5.3 (302.2) あなたは、まさしくあなたが実証を望むその超熾天使を見つけるとき、すべての宇宙のすべての知られている事実が得られると分かるであろう。なぜなら、これらの知識管理者は、地方宇宙と超宇宙の熾天使と第二熾天使からハヴォーナの第三超熾天使の主任記録者へとおよぶ録音天使の広大な網状組織に関する最後の,しかも生きた概要なのであるから。知識のこの生きた蓄積

は、楽園の正式の記録、つまり宇宙歴史の累積的概要とは異なっている。

27:5.4 (302.3) 真実に関する英知は、中央宇宙の神性に起源があるが、知識は、経験的知識は、大部分が時間と空間の領域にその始まりがある。—それゆえ、天の記録係の支援を受ける記録の熾天使と超熾天使からなる広範囲の超宇宙組織の維持の必要性。

27:5.5 (302.4) 本来宇宙知識を所有している第一超熾天使もまた、その組織と類別に関与している。それらは、自分たちを組織して、宇宙の中の宇宙の生きた資料館をそれぞれがおよそ100万の区画分譲を有する壮大な7系列に分類した。自らの組織に際しては楽園の居住者がこの巨大な知識の格納を参考にできる施設は、唯一知識管理者の自発的、かつ賢明な努力によるものである。管理者もまた、ハヴォーナ回路中の全存在体にそれらの生きた宝物を自由に配る中央宇宙の高揚された教師であり、またそれらは、間接的ではあるが日の老いたるものの法廷によって広範囲に活用されている。しかし、中央宇宙と超宇宙に利用可能であるこの生きた書斎は、地方の創造には

活用できない。楽園知識の恩恵は、間接的に、反射的に地方宇宙に保証されているに過ぎない。

6. 哲学師範

27:6.1 (302.5) 崇拝の最高の満足感の次には、哲学の高揚感がある。あなたが、非常に高く登ろうとも、またははるかに進歩しようとも試みの解決において哲学の駆使を要する1,000の神秘は依然として存在するのである。

27:6.2 (302.6) 楽園の哲学の巨匠たちは、宇宙問題の解決の試みにおける爽快な追求においてその居住者、つまり先住の、それに上昇の両者の心を導びくことを楽しむ。哲学の熾天使の巨匠は、「天の賢者たち、」すなわち未知を習得する努力における知識の真実と経験の事実を活用する英知の存在体である。これらの巨匠達とあるとき、知識は真実に至り、経験は知恵に引き上げられる。楽園においては、空間の上昇人格は、存在体の高さを経験する。それらには知識がある;それらは真実を知っている;それらは哲学的に考えるかもしれない—真実を考える;それらは、究極者の概念を包含し、絶対の方法を把握する試みさえするかもしれない。

27:6.3 (303.1) 哲学行為の巨匠は、広大な楽園領域の南端において知恵の70の機能的区域に関し趣向を凝らした講義をする。それらは、ここで無限の計画と目的について論じ、自身の英知に近づく手段を持つすべて、全員に関する経験を統合し、知識を構成しようとする。それらは、様々な宇宙問題に対して高度に専門化された考え方を開発してきたが、その最終的結論は、つねにみな同意に至っている。

27:6.4 (303.2) 楽園のこれらの哲学者は、ハヴォーナのより高度のグラフ手法と情報伝達に関する楽園の特定方法を含むあらゆる可能な教授法によって教える。知識授与と思考伝達のこれらのより高度のすべての方法は、最高度に進化された人間の心の読解容量をさえ完全に超えている。楽園における1時間の教授は、ユランチアの単語-記憶法の1万年に相当するであろう。あなたは、そのような意思伝達方法を理解できないし、とにかく人間の経験にはそれらが比較できる何も、それらが繋げられる何もないのである。

27:6.5 (303.3) 哲学の巨匠らは、宇宙の中の宇宙に関する自己の解釈を空間世界から上昇してきた存在体に伝えることに最高の喜びを感じるのである。哲学は、決して知識の事実と経験の真実としてその結論に落ち着くはずはないのだが、それでもこれらの第一超熾天使が、永遠の未解決の問題や絶対の遂行について論じるのを聴き終えたとき、これらの未習得の疑問に確かで、長く続く満足感を抱くであろう。

27:6.6 (303.4) 楽園におけるこれらの知的探求は広められない;完全性の哲学は、個人的に出席しているもの達だけに利用可能である。包囲的創造は、この経験を通過した者達、また、後にこの英知を空間の宇宙へと持ち出した者達だけからのこれらの教えを知っている。

7. 崇拝指導者

27:7.1 (303.5) 崇拝は、すべての創造された知力を持つ者のための最高の恩恵であり最初の義務である。崇拝は、創造者とその創造物との親密かつ人格的関係の真実と事実を認識し承認する意識的かつ喜ばしい行為である。崇拝の質は、創造物の認識の深さにより決定される;そして、

崇拝行為は、神の無限の特徴に関する知識の発達につれ、ついには被創造体が知る経験上の最高の喜びの栄光や最も強烈な喜びを実現する。

27:7.2 (303.6) 楽園の小島は、崇拝のための特定の場所を含み持つが、それは、むしろ神性奉仕の広大な１聖域である。崇拝は、その至福の岸にはい上がるものすべての最初の、しかも支配的な情熱である—その臨場に到達するために神について十分学んだものの自然発生的迸り。崇拝とは、ハヴォーナを通る内向きへの旅の間に、円毎に、指示し、さもなければ、その表現の制御が楽園において必要になるまで、増大し続ける情熱である。

27:7.3 (304.1) 楽園で享受される至高の礼拝と精霊の称賛（からの）の周期的、自然発生的、集団的、そして他の特別な迸りは、第一超熾天使の特別部隊の指導下で行われる。そのような敬意は、これらの崇拝導体の指揮の下では至高の喜びである創造物の目標を達成し、高尚な自己表現と人格的な味わいおける完全性の高さに達する。すべての第一の超熾天使は、崇拝指導者であることを切望する;もし任務主務が、定期的にこれらの集まりを解散

しなければ、上昇者のすべてが、いつまでも崇拝の態度を持ち続けることを喜びとするであろう。しかし、上昇者は、崇拝での完全な満足感に至るまでは永遠の奉仕の職務開始を要求されることはない。

27:7.4 (304.2) 上昇の創造物に礼拝の方法を教え、自己表現の満足感を増すことができ、同時に楽園政権の不可欠の活動への注意を与えられるようにすることが、崇拝指導者の任務である。知的評価と上昇者の感謝に関する平均的人間の感情への完全かつ満足できる表現を与えるために礼拝方法に改良がなければ、楽園に達する平均的な人間には何百年もの時を要するであろう。崇拝指導者は、空間という子宮と時間という辛苦（からの）のこれらの素晴らしい子供がはるかに少ない時間で崇拝からの完全な満足感を得られるような表現のための新しい、これまでは未知であった大通りを解放する。

27:7.5 (304.3) 自己表現能力と感謝の伝達を増強し高められる全宇宙の全存在体からの全芸術は、それらの楽園神格の崇拝におい最高の能力で用いられる。崇拝は、楽園生活の最高の喜びである;楽園の壮快な遊戯である。遊戯

が、地球でのあなたの疲れ果てた心のためにすることを、崇拝が、楽園でのあなたの完成された魂のためにするであろう。楽園における崇拝方法は、全く人間の理解を超えるものであるが、あなたは、その精神をここユランチアにおいてさえ感謝し始めることができる。なぜなら、神の精霊は、今でさえあなたに宿り、あなたの上方に浮かび、またあなたを真の崇拝へと奮起させるのであるから。

27:7.6 (304.4) 楽園における崇拝のための定められた時と場所があるのだが、これらは、輝かしい存在体の永遠の小島への経験的上昇の成長する知性からの精霊的感情と拡大する神性認識の増大し続ける流出の調整には適切ではない。楽園における崇拝のための定められた時と場所があるのだが、これらは、成長する知性の精霊的感情の増え続ける氾濫と、それに永遠の小島への経験的上昇の輝かしい存在体の拡大する神性認識を調整するには適切ではない。超熾天使は、グランドファンダの時代からずっと楽園における崇拝の精神に対応するには決して完全ではなかった。つねにそれに対する準備段階での予測以上の崇敬さがある。これは、本来完全である人格がゆっく

り、しかも苦労して時間と空間の下級世界にある精霊の暗黒の深層から楽園の栄光へと上に向かって行った存在体の精霊的感情の驚異的な反応に決して完全に感謝できるというわけではないからである。そのような時間の天使と必滅者は、楽園の力を持つものの臨場に達すると、長い間の蓄積された感情表現が、楽園の天使にとっての驚くべき光景、楽園神格における神性の満足感の最高の喜びの生産的な光景が、現れる。

27:7.7 (304.5) 時々楽園中が、精霊的かつ崇敬のしるしが支配的である潮に吸い込まれるようになる。しばしば崇拝指導者は、神格の住まいのそのような光の三重の変動、つまり神の神性心が楽園の居住者、すなわち栄光の完全な公民と時間の上昇の創造物の誠実な崇拝により完全に完ぺきに満たされたことを意味する変動、の発現までそのような現象を制御することはできない。何という手法の勝利であることか!創造物の子らの知的な愛は、創造者たる父の無限の愛に完全な満足感を与え得るという神の永遠の計画と目的からのなんという結実であることか！

27:7.8 (305.1) 豊かさに満ちた崇拝からの最高の満足感への到達後に、あなたには終局者部隊への入隊資格がある。上昇経歴は、ほぼ終わり、7番目の歓喜は、祝賀に備える。最初の歓喜は、生存という決意が固められると、思考調整者との人間の同意を印す。2番目は、モロンチアの生命で目を覚ますことであった;3番目は、思考調整者との融合であった;4番目は、ハヴォーナで目を覚ますことであった;5番目は、宇宙なる父の発見を祝った;6番目の歓喜は、時間の最終的通過のまどろみからの楽園での目覚めのときであった。7番目の歓喜は、人間の終局者部隊への入隊と永遠の奉仕の始まりを印す。終局者による精神実現の第7段階への到達は、おそらく永遠の最初の歓喜の祝賀の合図を送るであろう。

27:7.9 (305.2) こうして楽園超熾天使、奉仕活動の全精霊の最高位の系列、つまり、あなたが永遠の三位一体の誓いを立て終局者部隊に召集されるとき、遂に崇拝指導者に別れを告げられるまで、宇宙の１階級としてあなたの出身世界からあなたにずっと付き添うそれらの存在体についての話は終わる。

27:7.10 (305.3) 楽園の三位一体の無限の奉仕が始まろうとしている;そして、今、終局者は、究極なる神の挑戦に直面しているのである。

27:7.11 (305.4) [ユヴァーサからの英知の遂行者による提示]

論文 28
超宇宙の奉仕活動をする精霊

28:0.1 (306.1) 奉仕する精霊は、超熾天使が中央宇宙の天使部隊であり熾天使が地方宇宙の天使部隊であるのと同様に、超宇宙の第二熾天使である。しかしながら、神性の度合いと崇高性能力の点において反射の精霊のこれらの子供は、熾天使よりも超熾天使にとても似ている。それらは、単独で超創造に携わることはなく、非啓示の仲間の後援をうけての業務は数え切れないし、興味もそそられる。Ｓ＆Ｖの関係

28:0.2 (306.2) 超宇宙の奉仕活動の精霊は、これらの談話で提示されているように次の3系列を包含する:

28:0.3 (306.3) 1. 第二熾天使

28:0.4 (306.4) 2. 第三熾天使

28:0.5 (306.5) 3. 全天使

28:0.6 (306.6) 後者の2系列は、直接的には人間進展の上昇計画にそれほど関係がないので、第二熾天使についてのより幅広い考察に先立ちそれらについて簡潔に議論されるであろう。双方ともこれらの領域において精霊奉仕者として務めはするものの、専門的に述べるならば、第三熾天使も全天使も奉仕する超宇宙の精霊ではない。

1. 第三熾天使

28:1.1 (306.4) これらの高位の天使は、超宇宙本部の記録に載っており地方創造における奉仕にもかかわらず、地方宇宙の出身ではないので形の上ではこれらの超宇宙首都の居住者である。第三熾天使は、無限の精霊の子であり、1,000名からなる集団が楽園で人格化される。神性の独創性とほぼ究極の多才さをもつこれらの崇高な存在体は、神の創造者たる息子への無限の精霊の贈り物である。

28:1.2 (306.5) 無限の精霊は、ミカエルの息子が、楽園の親の体制から分離され空間の宇宙冒険への準備ができると、これらの1,000名の仲間の精霊集団の１集団を産み出

す。厳然たる第三熾天使は、創造者たる息子が宇宙組織のための冒険に乗り出すとき、この息子に同伴する。

28:1.3 (306.6) 1,000名の第三熾天使は、宇宙構築の早期の間、創造者たる息子の唯一の個人的職員である。それらは、宇宙の組み立てと天文上の他の操作の感動的な時代の間ずっと息子の助手として並外れた経験を積む。それらは、地方宇宙の長子である輝く明けの明星の人格化の日まで創造者たる息子の側で務める。その後すぐに第三熾天使の正式の辞表が提出され、受け入れられる。天使の出身生命の初期の系列の登場とともに、それらは、地方宇宙の現役勤務からは引退し、以前の配属の創造者たる息子と超宇宙の日の老いたるものの間の連絡係りになる。

2. 全天使

28:2.1 (307.1) 全天使は、崇高七幹部との繋がりにおいて無限の精霊により創造されており、専属の使用人であり同じ崇高幹部の使者である。全天使は壮大な宇宙任務に配置されており、オーヴォントンにおいては、その部隊は、特別の優待居留者として住まうユヴァーサの北寄りの部

分にある本部を維持する。それらは、ユヴァーサ籍のものではないし、我々の行政に割り振られてもいない。人間の前進に関する上昇計画にも直接には関係しない。

28:2.2 (307.2) 全天使は、崇高七幹部の観点からの管理的調整のために超宇宙の監督に係りきりである。我々のユヴァーサにおける全天使の居留者は、楽園衛星の外輪に結合している行政球体の7号に位置するオーヴォントンの崇高なる幹部からのみ指示を受け、また崇高なる幹部にのみ報告をする。

3. 第二熾天使

28:3.1 (307.3) 第２熾天使部隊は、各超宇宙の本部に割り当てられる反射の7精霊により形成される。7名からなる集団におけるこれらの天使の創造に関連づけられる明確な楽園-反応方法がある。7名の各集団には、つねに１名の一次的第二熾天使、3名の二次的第二熾天使、3名の三次的第二熾天使がいる;それらはいつもこの正確な割合において人格化する。そのような7名の第二熾天使が創造されるとき、１名は、つまり一次的第二熾天使は、日の老いたるもの奉仕に配属されるようになる。3名の二次的

天使は、超政府の中の3集団の楽園-起源行政者らと関わり合いがある:神性顧問、英知の遂行者、宇宙検閲官。3名の三次的天使は、超宇宙支配者の上昇の三位一体化の仲間に所属する:強力な使者、権威高きものたち、名前と番号を持たないものたち。

28:3.2 (307.4) 超宇宙のこれらの第二熾天使は、反射精霊の子であり、したがって、反射性はそれらの本質に備わっている。それらは、第三根源と中枢と楽園の創造者たる息子の起源である全創造物の各局面のすべてに反射的によく反応するのであるが、第一根源と中枢に限って起源をもつ人格的の、あるいは人格的ではない存在体や実体に、の直接には反応しない。我々には無限の精霊の普遍的な知性回路の実在に関する多くの証拠があるが、他に証拠がなかったとしても、第二熾天使の反射的行動は、連合活動者の無限の心の普遍的臨場の現実を示すには誠に十分であろう。

4. １次的第二熾天使

28:4.1 (307.5) 日の老いたるものへの任務をもつ１次的第二熾天使は、これらの三位一体支配者の奉仕における生きた

鏡である。向きを変えることが、いわば、生きた鏡の方に向くこと、そして、千、あるいは十万光年離れた別の存在体の確実な応答をその中に見たり、それで聞いたりすること、そして即座に、また的確にこのすべてをすることが可能であるということが、超宇宙経済において何を意味するのかを考えなさい。記録は、宇宙の運営には不可欠であり、放送は実用的であり、単独使者や他の使者の仕事は、非常に有用ではあるが、日の老いたるものは、即座に生息界と楽園間—人と神の間—の自らの位置から両方を見、両方の道を聞き、両方の道を知ることができるのである。

28:4.2 (308.1) この能力—言うなれば、全てを聞くこと、見ること—は、超宇宙において日の老いたるものによってのみ、そして、それらの各本部世界においてのみ完全に実現されることができる。そこにおいてさえ、限界に相対する:そのような意思伝達は、ユヴァーサからはオーヴォントンの世界と宇宙には制限されており、一方、超宇宙間では効力がなく、この同じ反射方法は、それぞれを中央宇宙との、それに楽園との密接な連携に保つ。7超政府は、個別に隔離されてはいるが、こうして上からの

権威には完全に反射的であり、下からの必要性には完璧に詳しく、全く同情的である。

28:4.3 (308.2) １次的第二熾天使は、固有の本質により7種類の奉仕の型に傾くことが分かっており、この系列の最初の１団が、精霊の心を日の老いたるものに説明するためにそのように授けられるということは、適っている。

28:4.4 (308.3) 1. 連合活動者の声。各超宇宙においては、最初の１次的第二熾天使と、その系列の次に創造されたすべての7番目の１次的第二熾天使は、超政府において日の老いたるものとその仲間に無限の精霊の心を理解し説明するための高度の適応性を見せる。これは、超宇宙の本部において相当の価値をもつ。なぜならば、超政府の席は、神性奉仕活動者との地方創造とは異なり、無限の精霊の専門化している人格化が無いからである。したがって、これらの第二熾天使の声は、そのような首都球体において第三根源と中枢の人格的な代表に最も近いものである。7名の反射の精霊がそこにいるというのは本当であるが、第二熾天使部隊のこれらの母は主たる七精霊に

対するよりも連合活動者には忠実にも自動的にもそれほど反射的ではない。

28:4.5 (308.4) 2. 主たる七精霊の声。2番目の１次的第二熾天使とその後に創造される１次的第二熾天使のすべての7番目のものは、主たる七精霊の集団性質と反応を描くことに傾き勝ちである。傾向がある。各主たる精霊は、任務につく7反射精霊のいずれか1名により既に超宇宙首都に代理を置いているが、そのような代表は集団的ではなく個々である。それらは、集団的にはただ反射的に存在しているだけである;したがって、主たる精霊は、高度に人格的な天使、すなわち１次の第二熾天使の第2団、日の老いたるものの前に自らを表すことが甚だ有能である高度に人格的な天使の奉仕を歓迎する。

28:4.6 (308.5) 3. 創造者たる息子の声。無限の精霊は、ミカエルの系列の楽園の息子の創造あるいは訓練に何かの関係があったに違いない。というのも3番目の１次的第二熾天使とその後の一連の全7番目が、これらの創造者たる息子の心の反射である注目すべき贈り物を所有しているから。日の老いたるものが、考慮中の何らかの問題に関

するネバドンのミカエルの態度を知りたい—本当に知る—ならば、それらは、空間の線を通じてネバドンのミカエルを呼ぶ必要はない;それらはただ、要請に応じて記録のミカエルの第二熾天使を代理するであろうネバドンの声の主務を呼び求めることを必要とするだけである。また日の老いたるものは、その瞬間にその場でネバドンの主たる息子の声を感知するであろう。

28:4.7 (309.1) 子息性の他のどの系列も、このようにして"反射され得る"のではなく、また天使の他のどの系列もこのように機能できるのではない。我々は、これがいかに成就されたかを完全に理解するというわけではないし、私は、創造者たる息子自身がそれを完全に理解するとはたいへんに疑わしく思う。しかし、我々には、確実にそれがうまく運ぶと分かっており、またそれが絶えずうまく運ぶと知ってもいる。第二熾天使の声は、ユヴァーサの全歴史において、それらの提示に一度の間違えもなかったのであるから。

28:4.8 (309.2) あなたには、神性が時間の空間を取り囲み、空間の時間を習得する方法の何かをここに分かり始めてい

る。ここにあなたは、空間の難しい障害を征服する任務において当分の間、時間の子供の補助のために分岐している永遠周期の方法を初めて瞬間的一瞥を享受しつつあるている。そして、これらの現象は、反射精霊の確立した宇宙の方法に付加されている。

28:4.9 (309.3) 明らかに上の主たる精霊の臨場と下の創造者たる息子の人格的臨場を奪われはするものの、日の老いたるものには、反射的な完全性と究極の精度の宇宙の仕組みに適合された意のままになる生きた存在体がおり、人格的臨場を否定されるそれらのすべての高揚された存在体の反射的臨場をこの宇宙の仕組みにより楽しむことができる。神は、これらの方法とあなたには未知の方法により、またそれらを介して超宇宙本部に潜在的に臨場している。

28:4.10 (309.4) 日の老いたるものは、上からの精霊の声-閃光と下からのミカエルの声-閃光を同一視することにより父の意志を完全に推測する。その結果、それらは、地方宇宙の行政事務に関する父の意志を的確に確心できるのである。しかし、他の2者に関する知識から神々の１名の

意志を推測するためには、3名の日の老いたるものが共に行動しなければならない;2名が答えに到達することはできないであろう。そういう訳で、たとえ他には理由がないとしても、超宇宙においては１名ではなく、もうとう２名でもない、３名の日の老いたるものが、つねに統括をしている。

28:4.11 (309.5) 4. 天使部隊の声。4番目の１次的第二熾天使と一連の全7番目は、上に超熾天使と下に熾天使を含む天使の全系列の感情に格別に反応する天使であると判明する。したがって、命令する、あるいは監督するどの天使の態度も、日の老いたるもののいかなる協議会における検討材料としてすぐさま利用が可能である。あなたの世界においては、ユランチアの熾天使の主務が、反射的移転の現象を、何らかの目的のためにユヴァーサからとる状態を、意識されずに1日たりとも過ぎることは決してないのである。ただし、単独使者に前もって警告されないかぎり、彼女は求められる事やそれが確保される方法については全く無知である。これらの奉仕する時間の精霊は、日の老いたるものとその仲間の注目と助言に関与する絶えることのない一連の問題についての無意識の、

それゆえ確かに偏見のないこの種の証言を始終提供している。

28:4.12 (309.6) 5. 放送受信者。これらの１次的第二熾天使によってのみ受け入れられる特別な放送情報の種類がある。放送受信者は、ユヴァーサの定期の放送者ではない一方で、日の老いたるものの反射的視覚と宇宙通信の確立した回路から入ってくる実際の一定の情報とを連動させる目的のために反射的な声の天使との関係において働いている。放送受信者は、一連の5番目の者、すなわち創造作されるべき5番目の１次的第二熾天使とその後の全ての7番目の者である。

28:4.13 (310.1) 6. 輸送人格。これらは、時間の巡礼者を超宇宙の本部世界からハヴォーナの外円へと運ぶ第二熾天使である。それらは、楽園に向けて内へと、そしてそれぞれの区域の世界にむけて外へと移動する超宇宙の輸送部隊である。この部隊は、6番目の１次的第二熾天使とその後に創造されるすべての7番目の者で構成されている。

28:4.14 (310.2) 7. 予備部隊。第二熾天使の非常に大きい集団、つまり一連の7番目の第二熾天使は、機密の義務と領域

の緊急任務に備えている。それらは、高度に専門化されてはいなくて、さまざまの仲間の能力のいずれかでかなりよく機能できるのだが、そのような専門化した仕事は非常時に限って引き受けられる。それらの通常の仕事は、特定の課題をもつ天使の範囲内にはない超宇宙の一般的義務の遂行である。

5. 2次的第二熾天使

28:5.1 (310.3) 二次系列の第二熾天使は、第一の仲間に劣らないほどに反射的である。第一、第二、第三と分類されていることが、第二熾天使の場合、地位あるいは機能の相違を示すわけではない;それは、単に手法に関する系列を意味する。同一の特質が、全3集団の活動に示されている。

28:5.2 (310.4) 2次的第二熾天使の7種類の反射的な型は、日の老いたるものの同位の三位一体-起源の仲間の奉仕に割り当てられる:

28:5.3 (310.5) 英知の遂行者に—英知の声、哲学の魂、および魂の結合。

28:5.4 (310.6) 神性顧問に—顧問の心、存在の歓喜、奉仕の満足感。

28:5.5 (310.7) 宇宙検閲官に—精霊識別者。

28:5.6 (310.8) この集団は、一次系列のように順次創造される;すなわち、長子は英知の声であり、その後の7番目は同様であり、これらの反射的天使の他の 6 種類の型と同じである。

28:5.7 (310.9) 英知の声。これらの第二熾天使の一部は、第一の超熾天使に属する知識の管理者である楽園の生きた書斎との永遠の関係にある。専門化している反射的奉仕における英知の声は、宇宙の中の宇宙の協調された英知の徹底的に信頼できる集中と焦点化である。これらのずば抜けた存在体は、超宇宙の主回路を循環する無限に近い情報量にとても反射的、選択的、敏感であることから英知の本質を的確に隔離し、受け、また上司への、つまり英知の遂行者へのこれらの宝石を的確に伝えることができるほどである。英知の声は、英知の遂行者がこの英知の実際の、最初の表現を聞くだけではなく、高い、また

は低い起源の他ならぬ存在体をも内省的に見るほどに機能する。

28:5.8 (310.10) 「あなた方のうち、知恵に不足する者がであれば、その人に求めさせなさい。」と書かれている。英知の遂行者は、ユヴァーサにおいて超宇宙政府の複雑な問題の（からの）混乱状況において英知の決定に到達する必要にあるとき、完全性の英知と実行可能性の英知の双方が用意されなければならないとき、そのときに、集団の英知の声を呼び出し、また、宇宙の中の宇宙の心に取り込まれ循環している知恵の生きた受信者を自分たちの系列の熟達した技能により適合させ方向づけするので、やがて上の宇宙からの神性の英知の流れと下の宇宙のより高位の心からの実用性の英知の洪水が、まもなくこれらの第二熾天使の声から、続いて起こる。

28:5.9 (311.1) これらの英知の２種類の調和に関して混乱が生じるならば、神性顧問に即座の上告がなされねばならない。　神性顧問は直ちに、適切な手法の組み合わせに関して指導する。反乱が広まっていた領域から入ってくる何かの信憑性についての何らかの疑問があるならば、検

閲官に上訴される。検閲官は、精霊識別者と共に「どのような精神」が助言者を始動させたかを直ちに判決することができる。慈悲深い凝視の前の開いている本のように、日の老いたるものと共に遍在している古来の英知と現在の知力もまたそうである。

28:5.10 (311.2) あなたは、超宇宙政府の行為に対し責任があるもの達にとりこのすべてが意味することをほんのかすかに理解することができる。これらの業務の莫大さと包括性は、有限の概念を完全に超えるものである。私が繰り返してきたように、あなたが、ユヴァーサの英知の寺院の特別受け入れの判事室に立ち、実際の操作においてこのすべてを見るとき、あなたは、複雑さにある完全性により、また働くことの、宇宙の惑星間の通信の保証により礼拝へと動かされるであろう。あなたはそのような素晴らしい方法を計画し、実行する神々の神性の英知と善に敬意を払うであろう。これらの事は、私がそれらを描いてきたように実際に起こるのである。

28:5.11 (311.3) 2. 哲学の魂。素晴らしいこれらの教師は、英知の遂行者にも配属されており、別の方法で方向づけられ

ない限り楽園において哲学の博士に焦点的に同調している。有限かつ物質の自己に類似するものを凝視する代わりにまるで巨大な生きた鏡に進み行くことを、神性の英知と楽園の哲学の反映を知覚することを考えなさい。完全性のこの哲学に「肉体を与える」こと、すなわち下級世界の下級民族への適用に役立てられるように、またそれらにより同化されるようにそれを希釈することが、望ましくなるならば、これらの生きた鏡は、別の世界または宇宙の基準と必要性を反映するために自分の顔を下向きに変えるだけでよいのである。

28:5.12 (311.4) 英知の遂行者は、まさしくこれらの方法により検討中の民族と世界が真に必要とする物と実際の状況への決定と推薦を適合させるのである。それらは、つねに神性顧問と宇宙検閲官に呼応して行動するのである。しかし、これらの業務に対する崇高な満足感は、私の理解する能力さえも超えるものである。

28:5.13 (311.5) 3. 魂の結合。倫理的関係の理想と状態の（にある）これらの反射体は、英知の遂行者への三位一体団の配属を終了する。経験と適応性の完全な知恵の行使を必

要とする宇宙の中のすべての問題の中で、知性ある存在体の関係とつながりから起こる問題ほど重要なものはなにもない。通商と貿易、交友と結婚の人間関係において、あるいは天使部隊のつながりにおいては、小さい摩擦、つまり調停者の注意を引くことさえできないくらい些細な、だが、もしそれらを増大させ続かせるならば、宇宙の滑らかな運用を十分に損ないいらだたせ、妨害する小さい誤解の発生が続いている。いらだたせ妨害して宇宙の滑らかな運用を十分に損なうしたがって、英知の遂行者は、全体の超宇宙のための「和解の油」としてのそれらの系列の賢明な経験を利用可能にするのである。超宇宙のこれらの賢明なもの達は、このすべての仕事においてその反射的な仲間、つまり宇宙の状態に関する現在の情報を利用可能にし、また楽園の理想に基づくこれらの混乱させる問題の最善の調整を同時に描き示す魂の結合者による巧みな支援を受ける。これらの第二熾天使は、他の場所で明確に方向づけされないと、楽園の倫理の解説者との反射的なつながりを保つのである。

28:5.14 (312.1) これらは、全オーヴォントンの共同作業を助長し促進する天使である。あなたの人間の経歴の間に学ば

れるべき最重要の教えの1つは、共同作業である。他の存在体と共に働くこの芸術を習得したもの達が、完全性の球体には配置されている。宇宙における１名の使用人の義務はあまりない。一時的に仲間がいない場合、あなたは、高く昇れば昇るほどますます孤独になる。

28:5.15 (312.2) 4. 顧問の心。これは、神性顧問の指揮下に置かれる反射的才能の最初の集団である。この型の第二熾天使は、時間の回路のそのような資料に対して選択的であり、空間の事実を所有している。特に、それらは、超熾天使の情報調整者を反射しているが、高位の、あるいは低位の存在体であるか否かに関係なく、すべての存在体の助言を選択的に反映している。神性顧問が、重要な忠告あるいは決定を求められるときはいつでも、それらはすぐに、顧問の心の集合体を徴用し、やがて決定が下される。決定は、超宇宙全体の最も有能な心の調整された英知と忠告、すなわちハヴォーナの、楽園さえの高度の心の忠告に照らし合わせて検閲され修正されてきたものすべてを実際に盛り込んでいる。

28:5.16 (312.3) 5. 存在の喜び。本来これらの存在体は、上にいる超熾天使の調和監督者と下にいる何名かの熾天使に反射的に同調するのだが、この興味深い集団の構成員が実際にすることについての説明は、難しい。それらの主要な活動は、様々な天使部隊の系列と意志を持つ下級の創造物の間での喜びの反応を促進することに向けられている。それらのもの達が同伴している神性顧問は、特定の喜びの発見には滅多にそれらを用いない。より一般的な方法において、また、逆戻りの指揮官との共同において、滑稽さへの好みを高めさせようと、人間と天使の間に超-滑稽さを促進させようと努力する傍ら、領域の快楽への反応の向上させようとして喜びの情報局、機関として機能する。それらは、すべての異質な影響の如何にかかわらず、固有の喜びが自由意志の存在にあるということを示そうと努力する;それらは正しいのではあるが、この真実を原始人の心に教えこむことにおいて重大な困難に遭遇する。より高位の精霊人格と天使たちは、これらの教育的努力へより速く反応する。

28:5.17 (312.4) 6. 奉仕からの満足感。これらの天使は、楽園の行為の指揮官の態度に非常に反射的であり、存在に歓喜

するもののように、多いに機能しつつ奉仕の価値を高め、また奉仕からの満足感増大のために努力する。これらの天使は、寡欲な奉仕に、すなわち真実の王国の拡大のための奉仕に固有である繰り延べされた報酬を照らすために多くのことをした。

28:5.18 (312.5) この系列が配置される神性顧問は、精霊的奉仕から得られる利益を世界から別の世界への反射のためにこれらの天使を活用する。これらの第二熾天使は、凡庸な者を奮い立たせ励ますための最高の業を駆使することにより、超宇宙における全力奉仕の質に非常に貢献する。有効な活用は、他の世界、特に最良の世界が何をしているかについていずれか１つの世界に情報を循環させることにより兄弟らしい競争精神から生まれる。壮快で健全な競争は、熾天使部隊の中でさえ促進される。

28:5.19 (313.1) 7. 精霊の識別者。ハヴォーナ円の顧問や助言者と反射的天使の間には特別な繋がりがある。それらは、宇宙検閲官に配属された唯一の第二熾天使であるが、仲間すべての中でおそらく最も特異に専門化にされている。情報の源や回路にかかわらず、手元の証拠が反射的

精査にかけられるときその証拠がいかに貧弱であろうとも、これらの認識者は、直ちに真の動機、実際の目的、およびその起源の真の本質に関し我々に知らせるであろう。私は、いかなる個人焦点露光に関する実際の道徳的かつ精霊的特徴をとても的確に反射するこれらの天使のずば抜けた機能に驚嘆している。

28:5.20 (313.2) 宇宙検閲官が、これらの提示を見つめるとき、それらは反射された個人のありのままの魂と対しているのである;そして、肖像画のもつこのほかならぬ確実性と完全性は、検閲官がなぜ公正な裁判官と同じほどに公正にいつも機能できるかを一部説明する。識別者はいつも、ユヴァーサから離れたいかなる任務においても検閲官に同伴し、またユヴァーサ本部におけるのと全く劣ることなく宇宙において有能である。

28:5.21 (313.3) 私は、精霊世界のこれらのすべての業務が本当であるということ、確立された用法に従い、また普遍の領域の不変の法則と調和して行われるということをあなたに保証する。命の息吹を受けとり次第すぐに、新たに創造された全系列の存在体は、即座に高く反射される;

創造物の本質と可能性の生きた描写は、超宇宙本部に閃きを放つ。こうして、検閲官は、的確には「精霊のどんな方法」が空間世界において生まれてきたのかということを識別者を用いて完全に認識する。

28:5.22 (313.4) 人間についても同じである:あなたの世界の聖霊が「万物を捜し」、また第二熾天使の識別者が、あなたに関しての精霊の知識に関係する精霊とともに反射するときはいつであろうとも精霊があなたに関して知っていることは何であれすぐに利用可能であることから、サルヴィントンの母なる精霊はあなたを完全に知っている。しかしながら、父の断片の知識と計画は、反射可能ではないと言及されるべきである。識別者は、反射できるし、調整者の臨場を反射はするが、(検閲官は、調整者らが神性であると断言する)が、検閲官らは神秘の訓戒者の心性の中身を解読はできない。

6. 三次の第二熾天使

28:6.1 (313.5) これらの天使は、仲間のように同じ方法で、順次、反射的な7種類の型に創造されるが、これらの型は、超宇宙行政者の異なる奉仕に個々に割り当てられる

わけではない。すべての三次の第二熾天使は、到達の三位一体化の息子に割り当てられ、これらの上昇の息子は、それらを互換性を持って使用する;すなわち、強力の使者は、第三の型のどれかを利用できるし、利用するし、それらの調整者、つまり名前と番号を持たないものたちもそうするのである。三次の第二熾天使の7種類の型は次の通りである。

28:6.2 (314.1) 1. 起源の意味。超宇宙政府の上昇の三位一体化の息子には、いかなる個人、人種、または世界の起源から生じるすべての問題を扱う責任が課せられている;そして、起源の重要性は領域の生きた創造物の宇宙前進のための我々の全計画の中で最重要問題である。倫理のすべての関係と応用は、起源の基本的事実から生じる。起源は、神の関係反応の基礎である。連合活動者はつねに、「人がどのように生まれたかに注目する」のである。

28:6.3 (314.2) 起源とは、より高位にある下降存在体の場合は、単に確かめられるべき事実である;しかし、順番天使の下級系列を含む上昇の存在体の起源の本質と情況

は、常にそれほどの明確ではなく、宇宙情勢の変化すべても同様に極めて重要ではあるとはいえ、—ゆえに中央宇宙における、あるいは超宇宙の領域全体を通じてのいかなる存在体の創出に必要とされる何かを即座に描くことができる我々の思い通りになる一連の反射の第二熾天使を扱う価値がある。

28:6.4 (314.3) 起源の意味は、7超宇宙に生息する存在体、—人、天使、および他のもの—の広大な部隊の生きた、準備万端の-参照系図である。それらは、各超宇宙のいかなる世界における先祖の要因に関する最新で十分の、かつ信頼できる評価も、またいかなる個人に関わる現在の実際の身分も上司に提供する用意がある;掴んだ事実の算定はつねに最新情報である。

28:6.5 (314.4) 2. 慈悲の記憶。これらは、起源の意味の描写により明らかにされているように、領域の状況に正義の正当性を適合させる任務あるに無限の精霊が、穏やかな手段の奉仕により個人と人種に拡大してきた慈悲についての実際の、充実した、豊かな、生きた記録である。慈悲の記憶は、神の息子が、設立した救助供給資産に対して

定められる慈悲の子供らの道徳的負債—精霊的負債—を明らかにする。神の息子は、父の臨場前の慈悲の顕示にあたり、全生存者の保証のために必要な信頼を確立する。そこで、起源の意味の発見に従い、慈悲の預金が、つまり、惜しみない額の預金と真に神性の公民権を望むすべての魂の生存を保証するための十分な恩寵の預金が、理性あるそれぞれの創造物の生存に向けて確立される。

28:6.6 (314.5) 慈悲の記憶は、生きた試算表、すなわち領域の超自然の原始力に伴うあなたの現下の決算報告書である。果てしない生命への各個人の権利が、裁きにかけられるとき、すなわち、「御座が備えられ、日の老いたるものが座に着かれる」とき、これらは、ユヴァーサの法廷での証言に読み取られる慈悲の奉仕に関する生きた記録である。「ユヴァーサの放送は流され、それらのものの前から現れる; 数千のものがそれらへ仕え、数万のものがそれらの前に立つ。判断は確定され、本は開かれる。」そのような容易ならざる際に開かれる本は、超宇宙の三次の第二熾天使に関する生きた記録である。必要

ならば、慈悲の記憶の証言を確証するための正式の記録がある。

28:6.7 (314.6) 慈悲の記憶は、神の息子の確立した救済預金が、第三根源と中枢の我慢強い人格の情愛深い奉仕活動の中で完全に、忠実に支払われたということを示さなければならない。慈悲が枯渇するとき、「記憶」の慈悲がその減少について証言するとき、正義は勝り、正当性は決定する。慈悲は、それを軽蔑するものへの攻撃ではないが故に;慈悲は、時間の頑固な反逆者に踏みにじられるべき贈り物ではない。ところが、慈悲は、このように尊くあり、心から与えられるにもかかわらず、あなたが、目的に誠実で、心に正直であるならば、あなたの個々の引き出せる預金というものはいつも、蓄えを不毛にするあなたの能力をはるかに超えているのである。

28:6.8 (315.1) 慈悲の反射体は、第三の仲間と共に上昇する創造物の教育を含む数多くの超宇宙奉仕活動に従事している。起源の意味は、他の多くのものの中で精霊倫理の適用方法をこれらの上昇者に教え、そのような訓練に続き慈悲の記憶はいかに本当に慈悲深いかを教える。他者、

あなたは、慈悲の奉仕活動の精霊的方法は、あなたの概念を超えるとはいえ、慈悲が成長の質であるということことを今も理解すべきである。あなたは、まず公正であり、次に公明であり、それから我慢強く、親切である個人的な満足感の大きい報酬があるということに気づくべきである。次には、あなたが、その基礎の立脚しそれを選び心に持つならば、本当に慈悲を示すことができる;しかし、あなたはそれ自体で慈悲を示すことはできない。これらの段階は、踏破されなければならない;さもなければ、本物の慈悲は、あるはずがない。引き立て、へりくだり、または慈善があるかもしれない—あわれみさえ—だが慈悲ではない。本物の慈悲は、集団の理解、相互認識、兄弟らしい親交、精霊的交感、および神性の調和に先行するこれらの付加の美しい頂点のみ現れる。

28:6.9 (315.2) 3. 時間の重要性。時間は、意志をもつ全創造物の1つの普遍的な寄付である;それは、知力ある全存在体に託される「1タラント」である。あなた方には皆、生存を保証する時間がある;そして、時間は、無視で埋没されるときだけに、あなたが自分の魂の生存を確実にせずその利用を怠るときに限って必然的に浪費される。最大

限に自分の時間に対する改善がないことには、破滅的な刑罰は課されない;それは、単に時間の巡礼者を上昇旅行において遅らせるに過ぎない。生存が獲得されるならば、他の全損失の回復ができる。

28:6.10 (315.3) 時間の重要性の助言は、受託課題において非常に貴重である。時間は、ハヴォーナと楽園のこちら側のすべてにおける重大要素である。時間は、日の老いたるものの前での最終的判断における証拠の構成要素である。時間の重要性は、すべての被告には意思決定をし選択に至るための十分な時間があったということを示すためにつねに証言を提供しなければならない。

28:6.11 (315.4) 時間の評価者は、予言の鍵でもある;それらは、いかなる請負い仕事の成就にも必要とされる時間の要素を描写し、フランダランクとクロノルデクの生きた他の系列のように表示者は同じくらいに信頼できる。したがって、神は予見し、予知する。しかし、時間の宇宙の上昇権威者は、未来の出来事が予測できるためには時間の重要性に相談しなければならない。

28:6.12 (315.5) あなたが、大邸宅世界において最初にこれらの存在体に遭遇すると、それらは、その積極的な雇用つまり仕事において、またその消極的利用つまり休息の双方においてあなたが「時間」と呼ぶその有利な活用においてあなたを指導するであろう。積極的な雇用つまり仕事において、またその消極的利用つまり休息の双方においてあなたが「時間」と呼ぶそのその有利な活用をあなたに指導するであろう。時間の双方の用途は、重要である。

28:6.13 (315.6) 4. 信頼の厳粛さ。信頼は、意志をもつ創造物向けの決定的な試験である。信頼性とは、自制の真の尺度である。第二熾天使は、超宇宙経済における二重の目的を果たす:それらは、意志を持つ全創造物に信頼の義務、神聖さ、厳粛さの意味を描き示す。同時に、それらは、確信あるいは信頼のためのいかなる候補者の正確な信頼性を支配する権威者に的確に反映する。

28:6.14 (316.1) あなたは、ユランチアにおいて性格を読み、特定の能力を見積もることを異様に試みるが、我々は、ユヴァーサにおいて実際に、これらのことを完全に為す。

第二熾天使は、的確な特長評価の生きた測りにおいて信頼性を量り、またそれらがあなたを見たとき、我々は責任を果たし、信用を実行し、使命を全うするためのあなたの能力の制限を知るために単にそれらを見なければならない。あなたの信頼性の資産は、起こりうるあなたの不履行あるいは裏切りの債務と平行してに明確に説明される。

28:6.15 (316.2) あなたの性格が優雅にこれらの加えられた責任を担うために十分開発されると全く同程度に速く増大された信用によりあなたを進めるのが上司の計画であるが、個人に負担をかけ過ぎるということは、災難を招き失望を確実にするだけである。人間あるいは天使のいずれかに早まって責任を科す誤りというものは、絶対確実な評価者の時間と空間の個人の信頼能力に関わる奉仕活動の利用により避けることができるかもしれない。第二熾天使は、権威高きものたちに同伴し、これらの経営者は、自分たちの候補が第二熾天使の測りにかけられ、「用なし、足りない」と申し渡されるまでは決して課題を与えない。

28:6.16 (316.3) 5. 奉仕の高潔性。奉仕の特権は、時を移さず信頼性の発見の後にくる。何ごとも、あなた自身の不信頼性、つまり、信頼の厳粛さの認識のための能力不足以外には、あなたと増加された奉仕のための機会を妨げることはできない。

28:6.17 (316.4) 奉仕—奴隷制ではなく、目的ある奉仕—は、最高度の満足感を生むし、最も神性な尊厳を表している。奉仕—より多くの奉仕、増加する奉仕、危険に満ちた奉仕、そして最後に神性の、完全な奉仕—は、時間の目標であり、空間の到達先である。しかし、時間の遊戯の円は、進歩の奉仕の円と交互するであろう。時間の奉仕のあとには永遠の超奉仕が続く。あなたは、永遠の奉仕の間に時間の遊戯を回想するように時間の遊戯の間に永遠の仕事を思い描くべきである。

28:6.18 (316.5) 宇宙経済は、摂取と排出に基づいている; あなたは、永遠の経歴期間に無活動の単調さ、あるいは人格の停滞に決して出会うことはないであろう。進歩は、固有の動きにより可能にされ、前進は、動作のために神性の能力から生まれ、また達成は想像的冒険の所産であ

る。しかし、達成のためのこの脳力は、倫理の責任であり、世界と宇宙が多数の異なる存在体の型で満たされるということに気づくために必要である。あなた自身を含むこのすばらしい創造のすべては、あなたのためだけに作られたのではない。これは自己中心の宇宙ではない。神は、「受けるよりは与える方が幸いである」と宣言され、あなたの主たる息子は、「あなたの中で最も偉大なものは、すべての人の仕える者になる」と言った。

28:6.19 (316.6) いかなる奉仕の真の性質も、人間または天使により与えられるか否かに関係なくこれらの第二熾天使の奉仕の表示者に直面し完全に明らかにされる。真実についての、そして隠された動機についての完全な分析が、明確に示される。これらの天使は、宇宙の読心者、心の探索者、魂の顕示者である。必滅者は、自らの考えを隠すために言葉を使うことができるが、これらの高位の第二熾天使は、人間の心と天使の心の深い動機をあらわにする。

28:6.20 (317.1) 6と7. 偉大さの秘密と善の魂。上昇の巡礼者が、時間の重要性に目覚めると、信頼の厳粛さの実現と

奉仕の高潔さの識別のために道が用意される。これらは偉大さの道徳的要素であるが、偉大さの秘密もまたある。偉大さの精霊的試験が適用されるとき、道徳的要素は無視されないが、人間の地球の仲間、特に困窮し、窮地にあるふさわしい存在体の福祉のために公平無私の作業で明らかにされる非利己主義の質こそが、惑星の偉大さの実測度である。そして、ユランチアのような世界における偉大さの顕示は、自制の表明である。偉人とは、「町を占領する」か、または「国を滅ぼす」者ではなく、むしろ「自身の舌を征服するもの」である。

28:6.21 (317.2) 偉大さは、神性と同義である。神はこの上なく偉大で善である。偉大さと善は簡単には分離できない。それらは、神の中にいつまでも1つに作られている。この真実は、他方なしでは機能できないがゆえに、偉大さの秘密と善の魂の反射的相互依存により文字通りに、また、きわだって例証されている。超宇宙の第二熾天使は、神性の他の質を反射するに当たり単独行動をとることができるのだが、偉大さの反射の見積りと善の反射の見積りは、不可分であるらしい。したがって、いかなる世界においても、いかなる宇宙においても、偉大さの反

射体といつもそれらが焦点化するあらゆる存在の二元的かつ互いに依存する報告を示す善の反射体は、ともに働かなければならない。善の中身を知ることなく偉大さを見積もることはできないと同時に、その固有の、そして神々しい偉大さを示すことなく、善を描くことはできない。

28:6.22 (317.3) 偉大さの見積りは、球体により異なる。偉大であるということは、神のようであるということである。偉大さの質は、完全に善の内容により決定されるので、現在のあなたの人間の生活状態でさえ、もしあなたが恩恵を通じて善になることができるならば、あなたはそれによって大きくなるということになる。神性の善に関する概念をしっかりと凝視し、持続して追求すればするほど、あなたは、偉大さにおいて、すなわち本物の生存する性格の真の重要さにおいてますます確かに成長するのである。

7. 第二熾天使の奉仕活動

28:7.1 (317.4) 第二熾天使には、超宇宙の首都にその起源と本部があるが、それらはつながりのある仲間と共に楽園の

岸から進化の空間世界にまで及ぶ。それらは、価値のある助手として超政府の審議会の会員に仕え、ユヴァーサの優待居留者:ハヴォーナ輸送を待つ際に上昇の存在体を含む星の学生、千年毎の旅行者、天の観察者、および多数の他のもの達への大いなる助けになる。日の老いたるものは、ユヴァーサを囲む490の研究世界に住所を定めた上昇する創造物の補助のために一部の１次的第二熾天使の割り当てを喜び、ここで教師として多くの二次と三次の系列の奉仕をする。これらのユヴァーサの衛星は、ハヴォーナの7-回路化された大学のための予科を提供する時間の宇宙の教養学校である。

28:7.2 (317.5) 第三団は、上昇権威者に配属されている第二熾天使の3系列のうち時間の上昇する創造物への最大規模の奉仕活動をする。あなたは、オーヴォントンの滞在世界に辿り着くまではそれらの奉仕を自在に利用はしないであろうが、ユランチアからの出発直後にそれらに時々会うであろう。あなたは、ユヴァーサの学校の世界での滞在中それらについて完全に詳しくなるとそれらとの親交を楽しむであろう。

28:7.3 (318.1) 大きな戸惑いと精霊的な不確実性の瞬間にいる心配している巡礼者の足を誘導するために時の交差点に慈悲が置かれた３次の第二熾天使は、時間の節約者、空間短縮者、誤り看破者、忠実な教師、そして永遠の道しるべである—神性の保証の生きた印し。あなたは、完全性の入り口に到達するずっと以前に、神性の道具に接近し神格の方法と接触するようになるであろう。あなたは、最初の大邸宅世界への到着時から楽園移動へのハヴォーナ睡眠準備において目を閉じるまでは、完全性の入り口への長旅にあなたに先行したそれらの安全で頼もしい巡礼者の確かな知識と一定の知恵をとても完全に自由に反射するこれらの驚異の存在体の非常時の援助をますます利用するであろう。

28:7.4 (318.2) 我々には、反射的系列のこれらの天使をユランチアにおいて採用する完全な特権は認められていない。これらの天使は、あなたの世界の振り分けられた人格に伴う頻繁な訪問者であり、自由には機能できない。この球体は、まだ部分的な精霊的隔離中であり、それらの奉仕へのいくつかの不可欠の回路は、現在のところここにはない。あなたの世界が関係する反射的回路に再度戻さ

れるとき、惑星間と宇宙間の通信の仕事の多くは、大いに簡素化され、速められるであろう。ユランチアの天の労働者は、その反射的な仲間のこの機能上の削減のために多くの困難に遭遇する。しかし、これらの驚異の存在体、すなわち空間の生きた鏡と時間の臨場映写体の多くの奉仕の地方性の窮乏にもかかわらず、我々は、手元にある手段により引き続き嬉々として我々の問題処理にあたる。

28:7.5 (318.3) [ユヴァーサの強力な使者による後援]

論文 29
宇宙の力の指揮官

29:0.1 (319.1) 惑星間と宇宙間の業務の調整に関する宇宙のすべての人格の中で、ユランチアにおいては力の指揮官とその仲間が、最も理解されていない。あなたの人種は、長らく天の存在の天使と同様の他の系列の存在を知ってはいるが、物理的領域の管理者と監視委員に関する情報はほとんど伝えられたことがない。今でも、私は主たる宇宙の中の力の管理とエネルギー規則に関係する次の3集団の存在体の最後に限って完全に明らかにすることが許されている。

29:0.2 (319.2) 1. 第一帰結の主根源力組織者

29:0.3 (319.3) 2. 主根源力の先験的提携組織者

29:0.4 (319.4) 3. 宇宙の力の指揮官

29:0.5 (319.5) 私は、宇宙の力の、指揮官、中枢、制御者の様々の個性を描くことは不可能であると考えはするが、それらの活動領域に関する何かについて説明したいと願うのである。それらは、壮大な宇宙全体に及ぶエネルギーの理に適った調整に関係する存在体の特異な集団である。それらは、最高の指揮官を含めて次の主要な分隊を有する:

29:0.6 (319.6) 1. 崇高な力の七指揮官

29:0.7 (319.7) 2. 崇高な力の中枢

29:0.8 (319.8) 3. 主たる物理管理者

29:0.9 (319.9) 4. モロンチアの力の監督者

29:0.10 (319.10) 崇高な力の指揮官と中枢は、永遠に近い時代から存在してきており、我々が知る限りでは、これらの系列の存在体はもう創出されてはいない。7名の崇高な指

揮官は、7名の主たる精霊により人格化され、ついで100億名以上の仲間の生産においてその両親と協働した。力の指揮官の時代以前、中央宇宙の外側空間のエネルギー回路は、楽園の主たる根源力の組織者の知的な監視下にあった。

29:0.11 (319.11) あなたには、物質創造物に関する知識があり、少なくとも精霊的な存在体に関する対照的概念がある; だが、人間がその心に力の指揮官を描くということは非常に難しいことである。あなたは、存在のより高い水準への上昇進行の計画において、最高の指揮官あるいは力の中枢のいずれとも直接には関係しない。あるまれな機会に、あなたには物理制御者との関係があるであろうし、また大邸宅世界に達しては、モロンチアの力の監督者と共に自由に働くであろう。これらのモロンチアの力の監督者は、もっぱら地方創造のモロンチア政権において機能するので地方宇宙を扱う項でそれらの活動を語ることが最善であると考えられる。

1. 崇高な力の 7 指揮官

29:1.1 (320.1) 崇高な力の７指揮官は、壮大な宇宙の物理-エネルギーの監視委員である。主たる７精霊による創造は、真の精霊祖先からの準物質子孫に由来する最初の記録例である。主たる７精霊は、個々に創造するとき高度に精霊的な人格を天使の系列にもたらす。集合的に創造するときは、時として準物質存在体のこれらの高度の型を産出する。しかし、これらの準-物理的存在体でさえ、ユランチアの必滅者の短距離視力では見えないであろう。

29:1.2 (320.2) 崇高な力の指揮官は、7名でその外観と機能は同じである。各々が、直接的関係にあり、また機能上は完全な従属にあるその主たる精霊による以外は、他者との区別はできない。その結果、それぞれの主たる精霊は、その集合的子孫の中の１名と永遠の結合にある。同じ指揮官は、常に同じ精霊と関連しており、それらの作業提携は、物理的かつ精霊的なエネルギーの、つまり、準物質存在体と精霊人格の、特異な関係をもたらしている。

29:1.3 (320.3) 7名の崇高な力の指揮官は、周囲の楽園に配置されおり、そこでゆっくりと循環しているそれらの臨場感は、主たる精霊の力の焦点本部の所在を示す。これらの

力の指揮官は、超宇宙の力-エネルギーの調整においては独自に、しかし中央創造の管理においては全体的に機能する。それらは、楽園から操作はしているが、自らを効果的な力として壮大な宇宙全域の中心に置く。

29:1.4 (320.4) これらの強力な存在体は、力の中枢の広大な部隊の物理的祖先であり、またそれらを通しての、7超宇宙全体に点在する物理制御者の祖先である。そのような下位の物理的-制御の有機体は、基本的には一様である、つまり各超宇宙部隊の特異な常態を除いては同じである。超宇宙奉仕において変わるためには、それらは、ただ単に楽園に戻らなければならないであろう。物理的創造は、行政上は基本的には一様である。

2. 崇高な力の中枢

29:2.1 (320.5) 崇高な力の七指揮官は、個別には生殖はできないが、集合的には、それに主たる7精霊と関連して自分たちのような他の存在体を生殖—創造—できるし、またそうする。次の7集団で機能する壮大な宇宙の崇高な力の中枢の起源とはそのようなものである:

29:2.2 (320.6) 1. 中枢の最高監督

29:2.3 (320.7) 2. ハヴォーナの中枢

29:2.4 (320.8) 3. 超宇宙の中枢

29:2.5 (320.9) 4. 地方宇宙の中枢

29:2.6 (320.10) 5. 星座の中枢

29:2.7 (320.11) 6. 体系の中枢

29:2.8 (320.12) 7. 未分類の中枢

29:2.9 (321.1) 力の崇高な指揮官とともにこれらの力の中枢は、高度の意志と行動の存在体である。第三根源の人格が授けられており、全員が、高位の系列の疑いのない意志能力を明らかにしている。宇宙の力の体系のこれらの指示する中枢は、知性の絶妙な贈与の所有者である;それらは、壮大な宇宙の力の体系のための知性であり、主たる物理管理者とモロンチアの力の監督者の広大かつ広範囲の全機能網をもつ心の制御法の秘密である。

29:2.10 (321.2) 1. 中枢の最高監督。崇高な力の指揮官の対等者であり仲間であるこれらの7名は、壮大な宇宙の主要エネルギー回路の監視委員である。各中枢監督者は、7名

の崇高幹部の特別な世界の1つに本部を置き、また宇宙の一般業務の調整者たちと深く関連して働いている。

29:2.11 (321.3) 崇高な力の指揮官と中央の最高監督の両者は、「重力エネルギー」下の段階で全宇宙現象に関し個人として、また結合的にも機能する。つながりをもって行動するとき、これらの14名の存在体は、崇高なる７幹部が宇宙の一般業務に関わっており、主たる７精霊の宇宙心との関わりと同じく宇宙の力に関わるようなものである。

29:2.12 (321.4) 2. ハヴォーナの中枢。力の中枢は、時間と空間の宇宙の創造以前にはハヴォーナに必要ではなかったが、はるか遠い昔からずっと、100万のハヴォーナの中枢が、主要な創造において機能してきた。各中枢は1,000のハヴォーナ世界の指揮をしている。ここ神性の宇宙には、他の場所には存在しない状態のエネルギー制御の完全性がある。エネルギー規則の完全性は、すべての力の中枢と空間の物理的制御者の究極目標である。

29:2.13 (321.5) 3. 超宇宙の中枢。7宇宙の各首都球体に巨大な領域を占めているのは、第3系列の1,000の力の中枢であ

る。一次エネルギーの10分離の3つの流れはそれぞれが、これらの力の中枢に入りはするが、専門化され、かつ的が絞られた力の回路は、不完全に制御されてはいるものの、統一行動のその位置から先へと進む。これは、宇宙力の電子組織である。

29:2.14 (321.6) すべてのエネルギーは、楽園周期に回路化されているのだが、宇宙の力の指揮官は、中央宇宙と超宇宙の空間機能において変更された自身に気づくと、これらのエネルギーを有用かつ建設的利用の回路へと変換し、楽園下方の根源力-エネルギーを方向づける。ハヴォーナエネルギーと超宇宙エネルギーの間には違いがある。超宇宙の力の補充は、エネルギーの10分離の各三相から成る。三重のエネルギーのこの補充は、壮大な宇宙の空間全体に広がる;それは、7超創造のそれぞれを丸ごと吸い込みんで洗うエネルギーの広大な動く海洋に似ている。

29:2.15 (321.7) 宇宙の力の電子組織は、7段階において機能し、局所重力、または、線重力へと異なる反応を明らかにする。この七重回路は、超宇宙力の中枢から進み、そ

れぞれの超創造に広がる。時間と空間のそのような特殊化された流れは、メキシコ湾流が大西洋の真ん中で限定的現象として機能するように特定の目的のために開始され、方向づけられた明確かつ局所化されたエネルギー運動である。

29:2.16 (321.8) 4. 地方宇宙の中枢。各地方宇宙本部には、第4系列に属する100の力の中枢が配置されている。それらは、、超宇宙本部から発する7個の力の回路を減らすように、また別な方法で変更するよう機能し、こうして星座と体系奉仕に適応する。空間の局部的天文破局は、これらの力の中枢にとっての一時的関心事である; 力の中枢は、補助的星座と体系への有効なエネルギーの規則的な発信に従事している。それらは、宇宙組織とエネルギー動員後、創造者たる息子にとり大きな支援となる。これらの中枢は、重要な居住場所との惑星間通信に役立つ激化or強化されたエネルギー通路を提供することができる。時々エネルギー進路とも呼ばれるエネルギーのそのような通路、または回線は、力の1中心から別の力の中心への、あるいは1物理制御者から別の制御者への直接回路である。それは、他と区別された力の流れであ

り、非分化エネルギーの自由な空間運動とは異なっている。

29:2.17 (322.1) 5. 星座の中枢。100個の属地方体系へのエネルギー映写体として機能する10の生きる力の中枢は、各星座に配置されている。これらの存在体からは、通信と輸送のための、そして生命維持のための物理エネルギーの一定の型に依存しているそれらの生ける創造物を元気づけるために力の回線を進む。しかし、力の中枢も下位の物理的制御者も、別の方法で機能的な組織として生命に関係がある。

29:2.18 (322.2) 6. 体系中枢。1名の崇高な力の中枢は、永久に各地方体系に割り当てられている。これらの体系中枢は、時間と空間の生息界に力の回路を送り出す。それらは、従属的物理制御者の活動を調整し、さもなければ地方体系における満足できる力の配分を保証するために機能する。惑星間の回路の中継は、一定の物質エネルギーの完全な調整と物理的な力の効率的法則によるものである。

29:2.19 (322.3) 7. 未分類の中枢。これらは、生息惑星においてではなく特別な局所的状況において機能する中枢である。個々の世界には主たる物理管理者が託されており、その体系の力の中枢により派遣された回路化の力の回線を受け取る。最も強烈なエネルギー関係のそれらの球体だけに、宇宙のてん輪またはエネルギー統治者として活動する第7系列の力の中枢がいる。これらの力の中枢は、活動の全局面においてより高度の制御の構成単位において機能するもの達の完全な同輩ではあるが、100万のうちの1空間本体はそのような生ける力の組織を抱えている。

3. 力の中枢の領域

29:3.1 (322.4) 崇高な力の中枢は、その仲間と部下とともに超宇宙全体に100億以上の番号を割り当てた。それらは全員が、楽園創始者、つまり崇高な力の７指揮官との完全な同調性と完全なつながりにある。壮大な宇宙の力の制御は、このようにして主たる七精霊、つまり崇高な力の七指揮官の創造者の保護と指示に託されている。

29:3.2 (322.5) 崇高な力の指揮官とそのすべての仲間、補佐、および部下は、あらゆる空間のあらゆる裁判所による拘引、もしくは干渉を免れている;それらは、日の老いたるものの宇宙政府の行政指導、あるいは創造者たる息子の地方宇宙行政の行政指導にも従ってはいない。

29:3.3 (323.1) これらの力の中枢と指揮官は、無限の精霊の子らにより生み出される。それらは、宇宙の物質組織化の後の時代に創造者たる息子と提携をするものの、神の息子の行政に密接な関係はない。しかし、力の中枢は、何らかの方法で崇高なるものの宇宙の総括的管理に密接に関連づけられている。

29:3.4 (323.2) 力の中枢と物理制御者は、訓練を受けない;それらは全員が、完全に創造されており、活動においては本質的に完ぺきである。それらは、決して1つの機能から他の機能へ移らない;常に本来割り当てられた通りに仕える。階級上の昇格はなく、これは両系列の全7分隊に真実である。

29:3.5 (323.3) 上昇者には記憶上で戻るべき過去がないので、力の中枢と物理制御者は、決して遊ぶことはない;それ

らは、全行動において徹底して事務的である。それらは、いつも勤務に就いている;エネルギーの物理回路の中断に対する宇宙計画への何の対策もない;これらの存在体は、時間と空間のエネルギー回路の直接指揮を1秒何分の1の間も決して放棄はできない。

29:3.6 (323.4) 力の指揮官、中枢、および制御者は、力、つまり物質または準物質エネルギーを除いては全創造には何の関係もない;それらは、力をもたらしはしないが、変更し操り、また方向づけはする。重力の引きつける力への抵抗を除いては、物理的重力ともいささかの関わりもない。重力とのそれらの関係は完全に負である。

29:3.7 (323.5) 力の中枢は、分離された様々なエネルギー集合の生きた機構とのつながりにおいて広大なメカニズムと調整を活用する。それぞれの個々の力の中枢は、正確に100万個単位の機能的制御で構成されており、またこれらのエネルギー-変性の構成単位は、人の肉体に不可欠な器官のようには固定されてはいない;力の調整のこれらの「不可欠な器官」は可動的であり、結合的可能性において実に千変万化である。

29:3.8 (323.6) これらの生きている存在体が宇宙エネルギーの主回路の操作と規則性を包含する方法を説明することは、まったく私の能力を超えるものである。これらの巨大、かつほぼ完全に効率的である力の中枢の規模と機能に関しさらに進んであなたに知らせることを引き受けるならば、さらなる混乱と狼狽を増大させるだけであろう。それらは、生きてもおり「人格的でもある」が、あなたの理解を超えるものである。

29:3.9 (323.7) ハヴォーナの外において崇高な力の中枢は、構築された(建築の)球体上においてのみ、または別の方法で適切に構成された空間本体上においてのみ機能する。建築世界は、生ける力の中枢がこれらの球体に注ぎかける間、空間のエネルギーを方向づけ、変更し、そして集結するために選択できる切替装置として機能できるように構成されている。それらは、通常の進化する太陽あるいは惑星においてはそのようには機能できなかった。特定の集団は、これらの特別な本部世界における加熱や他の物質的必要性に関与している。それは、ユランチアの知識の範囲を超えてはいるものの、生ける力の人格に関するこれらの系列は、熱がなく光り輝く配光に非常に関

係があると述べることを私には許されている。主語曖昧それらは、この現象を引き起こしはしないが、その普及と方向づけには関係している。

29:3.10 (323.8) 力の中枢とその配下の制御者は、組織化された空間の全物理エネルギーの働きに割り当てられている。それらは、10種類のエネルギーそれぞれの基本的な3つの流れと連動している。これは組織化された空間のエネルギー充足である。また、組織化された空間は、それらのもの達の領域である。宇宙の力の指揮官は、7宇宙の現在の境界の外に今起こりつつある根源力の猛烈な活動とは何らの関係もない。

29:3.11 (324.1) 力の中枢と制御者は、宇宙のそれぞれの基本的な流れに含まれる10種類のエネルギーの型のうち７個の型にだけ完ぺきな制御を発揮する。それらの制御が部分的または全体的に免除されている型は、無条件絶対者により支配されているエネルギー顕現の予測できない領域を例証しなければならない。もしそれらが、この絶対の根本的な力に影響を及ぼすとしても、特定の物理制御者が、時々自動的に宇宙なる絶対者の特定の推進力に反応

するという意見を請け合う何らかのわずかな証拠があるとはいえ、我々はそのような機能を認識してはいない。

29:3.12 (324.2) これらの生ける力の作用は、無条件絶対者の主たる宇宙エネルギーの総括的管理に意識的には関連してはいないが、我々は、力の指示の全体の、ほぼ完全な計画が、この超重力臨場を優先させる何らかの未知の方法であるということを推量する。地方のエネルギーのいかなる状況においても、中枢と制御者は、近-崇高性を行使するが、常に超エネルギー存在と無条件絶対者の認知はできない性能を意識している。

4. 主たる物理管理者

29:4.1 (324.3) これらの存在体は、崇高な力の中枢の機動的従属物である。物理制御者は、単独使者の飛行に接近する速度で地方の空間を横断することができ、自己輸送の顕著な多様性に従事することができるそのような個性の本質の変化の能力に恵まれている。しかし、それらは、他のすべての空間横断者のように物質球体からの出発において重力の働きと慣性の抵抗に打ち勝つ際に、その仲間

の援助と他のいくつかの存在体の型の両方を必要とする。

29:4.2 (324.4) 主たる物理管理者は、壮大な宇宙で仕える。それらは、直接に楽園から超宇宙本部の範囲まで崇高な力の７指揮官により治められている; それらは、ここから均衡協議会、つまり主たる７精霊により主たる根源力の提携組織者の職員から派遣された力の高等弁務官により指示され、分散される。これらの高等弁務官は、１個の宇宙全体の力の圧力とエネルギーの補充を示す生ける道具である主たるフランダランク系についての解釈と登録の説明をするための権限が与えられている。

29:4.3 (324.5) 楽園神格の臨場が壮大な宇宙を回り、また永遠の円の周りをさっと通過するが、主たる７精霊のうちの誰かの影響は、単一の超宇宙に制限される。各7超創造の間には、エネルギーの異なる隔離と力の回路の分離がある;したがって、個性化された制御方法は行き渡らなければならないし、行き渡っている。

29:4.4 (324.6) 主たる物理管理者は、崇高な力の中枢の直系子孫であり、その数には次が含まれている:

29:4.5 (324.7) 1. 力の共同指揮官

29:4.6 (324.8) 2. 機械的制御者

29:4.7 (324.9) 3. エネルギー変換者

29:4.8 (325.1) 4. エネルギー送信者

29:4.9 (325.2) 5. 一次結合者

29:4.10 (325.3) 6. 二次分離者

29:4.11 (325.4) 7. フランダランク系とクロノルデク系

29:4.12 (325.5) これらの全系列が、個々の選択力を持つ意味においての人格体ではない。特に、最後の4者は上司の衝動への対応において、また既存のエネルギー状態への反応において完全に自動的であり、機械的であるらしい。しかし、そのような対応は完全に機械学的に見えるが、そうではない;それらは、自動装置に見えるかもしれないが、それらは皆、知力の特異な機能を明らかにしている。

29:4.13 (325.6) 人格は、必ず心に伴うものというわけではない。心は、下等動物の型の多くに、また特定のこれらの

下位の物理制御者にそうであるように、選択のすべての力が奪われるときでさえ考えることができる。物理的な力のより自動的であるこれらの監視委員の多くは、いかなる用語の意味においても人格体ではない。それらは、分担任務に合わせて企画する機械的な完全性にまったく補助的であり、意志や決定からの自立に恵まれてはいない。とはいえ、それらは皆、非常に知的な存在体である。

29:4.14 (325.7) 物理制御者は、ユランチアで未発見の基礎エネルギー調整に主に従事している。これらの未知のエネルギーは、惑星間の輸送体制、それに一定の通信技術にとり極めて不可欠である。我々が音の同等物を伝えたり、または視力拡大の目的のためにエネルギーの線を引くとき、エネルギーのこれらの未知の型は生きている物理制御者とその仲間に利用される。これらの同じエネルギーは、時に中間創造物にも通常の仕事に利用される。

29:4.15 (325.8) 力の共同指揮官。驚くほどに効率的である存在体には、領域のつねに変化するエネルギー状態の移行し続ける必要性に合わせて、主たる物理管理者に関する全

系列の課題と発信がゆだねられている。物理制御者の巨大な蓄えは、小領域の本部世界に保持され、物理制御者は、力の共同指揮官によりこれらの集中点から宇宙、星座、および体系の本部へ、そして個々の惑星へと定期的に派遣される。物理制御者は、このようにして割り当てられると、調停委員会の神性実行者の命令に暫定的に従属するが、その他の点ではもっぱらその副指揮官と崇高な力の中枢に従う。

29:4.16 (325.9) 300万の力の共同指揮官は、オーヴォントンの各小領域に配属されていき、驚くほど万能のこれらの存在体の超宇宙への割り当ては30億という合計にいたる。それら自身の控えの集団は、同じ小規模領域の世界に保持され。知的なエネルギー制御法と変換法に関する科学を研究するものすべての教官としてもそこで勤める。

29:4.17 (325.10) これらの指揮官は、小領域における行政活動の時代と空間の領域への点検業務において等しい期間を交代に務める。少なくとも1名の代理検査官が、その首都球体本部を維持し常に各地方体制にいる。それらは、調

和的な同時性で巨大な生きたエネルギーの全集合体を保つ。

29:4.18 (325.11) 2. 機械的制御者。これらは、力の共同指揮官のきわめて万能の、また機動力のある助手である。何兆という機械的制御者たちは、あなたの小領域であるエンサに派遣される。これらの存在体は、上司にとても完全に支配されるので、つまり力の共同指揮官の意志にとても完全に補助的であるので、機械的制御者と呼ばれる。にもかかわらず、機械的制御者自身は、非常に知的であり、その仕事は、性質上は機械的、かつ平凡であるものの巧みに遂行されている。

29:4.19 (326.1) 生息界に配属されるすべての主たる物理制御者のうち、機械的制御者は間違いなく最も強力である。他のすべての存在を上回る生きた反重力の資質の各制御者がもつ重力抵抗に匹敵するのは、物凄い速度で回転する巨大な球体だけである。制御者のうち10名は、現在ユランチアに配置され、また最も重要な惑星の活動の1つは、熾天使輸送の出発を容易にすることである。したがって、1,000名のエネルギー送信者の一団が熾天使の出

発に初期の運動量を提供する間、機械的制御者の10名全員は、そのような機能にあたり一斉に行動する。

29:4.20 (326.2) 機械的制御者は、エネルギーの流れを方向づけすることに、また専門化している流れまたは回路へのその集中を容易にすることに有能である。強力なこれらの存在体は、物理エネルギーの分離、方向づけ、強化、および惑星間回路の圧力の均等化に非常にかかわりがある。それらは、宇宙の力の補充を構成する空間の物理エネルギーの30種類のうちの21種類の操作に熟練している。また、物理エネルギーの9種類のより微妙な型のうちの6種類の管理と制御に向け多くを為し遂げることができる。力の共同指揮官は、これらの制御者を相互への、また特定の力の中枢への適切な技術的関係に置くことにより力の調整とエネルギー制御において信じ難い変化を生むことが可能となる。

29:4.21 (326.3) 主たる物理管理者は、しばしば数百の、数千の集団で、また100万の集団でさえ機能し、その上その位置と構成を変えることで、個々の能力のみならず集合体でエネルギー制御の実行が可能である。それらは、必要

条件の変化に準じてエネルギーの量や動きの増大ができ加速ができるし、もしくはエネルギーの流れを引き止めたり、圧縮したり、または遅らせることができる。それらは、言わゆる触媒が、若干の化学反応を増大させるようにエネルギー変換と力の変換に影響を及ぼす。それらは、固有の能力と崇高な力の中枢との協力において機能する。

29:4.22 (326.4) 3. エネルギー変換者。超宇宙のこれらの存在体は、信じがたいほどのの数である。サタニア単独ではおよそ100万名であり、各生息界向けの通常定数は、100名である。

29:4.23 (326.5) エネルギー変換者は、力の崇高な７指揮官と7中枢監督の結合的創造である。それらは、物理制御者のより人格的な系列の中にあり、力の共同指揮官が生息界にいる時を除いては、変換者が指揮をとっている。それらは、出て行く全熾天使輸送の惑星検査官である。すべての種類の天の生命体は、単に共同指揮官とエネルギー変換者のより人格的な系列とのつながりによってのみ物

理制御者のそれほど人格的ではない系列を利用することができる。

29:4.24 (326.6) これらの変換者は、特定の力の処理または方向づけのために、もしくは、それに対して自身を配置できる強力かつ能力ある生ける切り替え装置である。それらはまた、巨大な惑星と近隣の星の間を通過する強力なエネルギーに対し、惑星を隔離する取り組みに長けている。そのエネルギー-変化の属性は、変換者を宇宙エネルギー均衡維持、または力の均衡維持の重要な任務において極めて役に立つ。それらは、一度にエネルギーを費やすか、さもなければ蓄えるようである;またある時には、エネルギーを発散するか、遊離するようである。変換者は、各領域の生きた、あるいは死んだエネルギーの「蓄電池」の能力を増大するか、または減少させることができる。しかし、それらは、物理エネルギーや半物質エネルギーのみを扱い、生命の領域においては直接には機能しないし、生き物の形状を変えもしない。

29:4.25 (327.1) エネルギー変換者は、ある点では半物質のすべての生きた創造物の中で最も顕著で神秘的なものであ

る。それらは、何らかの未知の方法で物理的に区別され、その連携関係を変えることにより、その関連づけた臨場を貫通するエネルギーへの深い影響力を及ぼすことができる。物理的領域の状態は、それらの巧みな操作の下に変化を受けるようである。それらは、空間エネルギーの物理的形状を変えることができるし、変える。それらは実際に仲間の制御者の助けを借りて、超宇宙の力の充填をなす物理エネルギーの30種類のうち27種類の型とその潜在性を変えることができる。このうちの3種類のエネルギーが、エネルギー変換者の制御を超えるものであるということは、エネルギー変換者が、無条件絶対者の役立つ手段ではないということを立証している。

29:4.26 (327.2) 主たる物理制御者の残る4集団は、その言葉を容認できうる定義内においてもほとんど人格体ではありえない。これらの送信者、結合者、分離者、およびフランダランク系は、その反応において完全に自動的である;とはいえ、あらゆる意味において知的である。我々は、それらとの意思疎通が図れないことから、その素晴らしい実体に関する我々の知識は非常に限られている。それらは、領域の言語を理解しているように見えるが、

我々とは通じ合うことができない。十分に我々の通信を受け取ることはできるらしいが、応答においてはかなり無力であるらしい。

29:4.27 (327.3) 4. エネルギー送信者。これらの存在体は、完全ではないが、主として惑星内の立場にあって機能する。それらは、個々の世界において明らかであるように、エネルギーの驚異の発送者である。

29:4.28 (327.4) 送信者は、エネルギーが新回路へ迂回されると必要なエネルギー進路に沿い自らを一列に配置し、またエネルギー-引き寄せの独自の属性のおかげで増加するエネルギー流動を実際に好ましい方向へと誘導することができる。それらは、ある特定の金属回路がある特定の形の電気エネルギーの流れを方向づけるほどに文字通りこれをするのである。そして、それらは、物理エネルギーの30種類の形状の半分以上のための生きた超伝導体である。

29:4.29 (327.5) 送信者は、惑星から惑星への、個々の惑星の局から局への特殊化されたエネルギー通過がつくる弱下する流れの回復に効果的である妙を得たつながりを形成す

る。それらは、生き物の他のいかなる型も認識できないほどの弱すぎる流れの検出ができ、また付随の伝達が完全に理解可能になるほどにこれらのエネルギーを増大させることができる。それらの活動は、放送受信者にとり非常に貴重なのである。

29:4.30 (327.6) エネルギー送信者は、伝達可能な知覚の全形態に対処することができる;それらは、遠方の音を「聞こえる」ようにすることができるばかりではなく、遠方の光景を「見える」ようにすることができる。それらは、地方体制と個々の惑星における非常時の通信網を提供する。これらの活動は、定期的に設定される回路外での通信目的のためにほとんどすべての生物により利用されなければならない。

29:4.31 (327.7) エネルギー変換者と共にこれらの存在体は、疲弊した環境にあるそれらの世界における人間生存の維持に不可欠であり、無呼吸惑星の生活手段の不可欠部分である。

29:4.32 (328.1) 5. 一次結合者。これらの興味深くて非常に貴重な実体は、巧みなエネルギー保存者であり管理者であ

る。植物が、幾らかなりとも太陽光を蓄えるように、これらの生命体もまた、正の兆候時代にエネルギーを蓄えるのである。それらは、空間のエネルギーをユランチアでは知られていない物理的状態に変換し、大々的規模で取り組んでいる。それらはまた、これらの変化を物質存在のいくつかの原始構成単位の生産段階へと進めることができる。これらの存在体は、ただそれらの臨場により行動する。それらは、この機能で決して疲労困憊せず、劣化されもしない;生ける触媒作用のように振る舞う。

29:4.33 (328.2) それらには、負の兆候の季節には蓄積されたエネルギー放出の権限が与えられている。しかし、それらの仕事のこの段階での方法についての説明を可能にするには、あなたのエネルギーと物質に関する知識は十分に進歩してはいない。あなたが、大いに異なる物語を同じアルファベットの記号で伝えるために調整可能な活字を巧みに扱うように、それらは、原子、電子、およびアルチマトンを操作してつねに普遍的法則に従って働く。

29:4.34 (328.3) 結合者は、物質の組織球体に現れる最初の生命集団であり、あなたが生き物の存在とは全く相いれない

と見なす物理温度で機能することができる。それらは、全く人間の想像範囲を越える生命の系列を示す。それらは、その仕事仲間、つまり分離者と共にあらゆる知的創造物の中でも最も奴隷的である。

29:4.35 (328.4) 6. 二次分離者。一次結合者に比べ、巨大な抗重力の資質をもつこれらの存在体は、反対の労働者である。地方世界上の、または地方体系の特別の、あるいは変更された型の物理エネルギーが枯渇するであろうというような危険は決してないのである。なぜなら、これらの生きた組織は、無限のエネルギー供給を展開するための独自の力に恵まれているのであるから。それらは、ユランチアではほとんど知られていないエネルギーの型への、その型よりもまだ認識されていない物質の型からの発展に主に関係がある。それらは本当に空間の錬金術師であり時間の驚異-労働者である。しかし、すべての驚嘆のその働きにおいて、それらは、宇宙の崇高者の命令を決して逸脱することはない。

29:4.36 (328.5) 7. フランダランク系。これらの存在体は、エネルギー-制御の存在体の全3系列の共同創造である:一次

と二次の根源力の組織者と力の指揮官。フランダランク系は、全主たる物理制御者の中で最も数が多い;サタニア単独で機能する数は、あなたの数字の概念を超えている。それらは、全生息界に配置されており、いつも物理制御者のより高い系列に配属されている。それらは、中央宇宙と超宇宙において、また外部空間領域において互換性を持って機能する。

29:4.37 (328.6) フランダランク系は、30区分に、つまり基本的な宇宙力の型ごとに1区分ずつ、創造されており、もっぱら生ける自動の臨場計器、圧力計器、および速度計器として機能する。これらの生ける計測器は、唯一、根源力-エネルギーのあらゆる型の自動的、かつ的確な記録に関係がある。それらと物理的宇宙の関係は、広大な反射装置と心の宇宙の関係と同じである。量的かつ質的エネルギー臨場に加え時間を示すフランダランク系は、クロノルデク系と呼ばれる。

29:4.38 (328.7) 私は、フランダランク系は知的であると認めるが、生ける機械以外のものとしては分類できない。生ける機械装置へのあなたの理解の唯一可能な私の手助け方

法は、九分どうり知性的である精度と正確さで働くあなた自身の機械的考案とそれらを比較することである。そして、あなたがこれらの存在体を想像したいと思うならば、正確さのより高度の精巧さをもって、精度のなお一層の究極性をもって、よりすばらしい計算を伴うより複雑な課題を遂行できる知的かつ生きた機械装置(実体)を我々が実際に壮大な宇宙に持っていると気づく程度にまであなたの想像力に頼りなさい。

5. 主たる根源力の組織者

29:5.1 (329.1) 力の組織者は、楽園に居住はしているが、主たる宇宙の至るところで機能する。ことさらに無組織空間の領域において機能する。これらの並はずれた存在体は、創造者でも創造物でもなく、壮大な2区分からなる:

29:5.2 (329.2) 1. 第一帰結の主根源力組織者。

29:5.3 (329.3) 2. 先験的な主たる根源力の共同組織者。

29:5.4 (329.4) 原始-根源力の操縦者の強力なこれらの2系列は、排他的に主たる宇宙の建築者の指揮の下で働き、現

在のところ壮大な宇宙の境界内においては広範囲には機能しない。

29:5.5 (329.5) 第一帰結根源力の主たる組織者は、無条件絶対者の原始の、もしくは基本的空間-根源力の操縦者である;星雲創造者である。それらは、空間のエネルギー旋風の生きた扇動者であり、またこれらの巨大な顕現の初期の組織者であり、それを方向づける者である。力の組織者は、原始の根源力(楽園の直接の重力に反応しない前エネルギー)を第一の、または、強力なエネルギーに変える。つまり、無条件絶対者の排他的把握から楽園の小島の重力把握へと変えるエネルギー。それらは、その後すぐに、一次から二次を経て、あるいは重力-エネルギー段階を経て、エネルギー変化の過程を持続させる力の共同組織者に引き継がれる。

29:5.6 (329.6) 先験的な主たる根源力の共同組織者は、創造者たる息子の到着が合図となる地方宇宙の創造のための計画成就にあたり、天文管轄の超宇宙において活動する力の指揮官の系列に移行する。しかし、そのような計画がない場合、根源力の共同組織者は、外部空間で今活動し

ているように、無期限にこれらの物質的創造を続けて担当する。

29:5.7 (329.7) 主たる根源力の組織者は、オーヴォントンの多才な力の中枢と物理制御者にさえ堪え難い物理的条件下の温度と機能に耐える。外部空間のこれらの領域で機能できる明らかにされている存在体の他の唯一の型は、単独使者と喚起された三位一体の精霊である。

29:5.8 (329.8) [ユヴァーサの日の老いたるものの権威により行動する宇宙検閲官による後援]

論文 30
壮大な宇宙の人格

30:0.1 (330.1) いま楽園と壮大な宇宙で機能している人格と人格以外の実体は、ほぼ無数である。数え切れない下位の型や変化は言うまでもなく、主要な系列と型の数でさえも人間の想像を圧倒する。しかしながら、生き物の基本的な2分類—楽園分類の提案とユヴァーサ人格登記者の省略形—楽園分類に関する提案とユヴァーサ人格登記者に関する省略（形）について何かを提示することは、望ましいことである。

30:0.2 (330.2) 全集団が明らかにはされてはいないので、壮大な宇宙の人格の包括的な、しかも完全に一貫した分類を明確に表すことは不可能である。全集団の系統的分類が必要とされるさらなるば、顕示の補填は数多くの追加書類を必要とするであろう。部分的に明らかにされたこれらの概念が供給する創造的思索へのその刺激を次の1,000年の思慮深い必滅者から奪うであろうから、そのような概念的拡大はほとんど望ましくないであろう。人が過度の顕示を持たないことは、最善である;それは想像力を抑圧する。

1. 生き物の楽園分類法

30:1.1 (330.3) 生ける存在体は、楽園においては楽園神格との固有かつ成就した関係に基づき分類される。中央宇宙と超宇宙の遠大な集会の間、その参加者は、しばしば起源に基づき分類される:三位一体の起源、または三位一体到達のもの;二元的起源のもの;そして、一つの起源だけのもの。必滅者にとり生き物の楽園分類を解釈することは難しいが、我々には次を提示する権限が与えられている:

30:1.2 (330.4) I. 三位一体-起源の存在体。3名の神格としてか、それとも三位一体として、3名の楽園神格全員により創造された存在体、加えてその名称が三位一体の存在体のすべての集団に言及する三位一体化の啓示の部隊と非啓示部隊。

30:1.3 (330.5) A. 崇高なる精霊

30:1.4 (330.6) 1. 主たる7精霊

30:1.5 (330.7) 2. 崇高なる7幹部

30:1.6 (330.8) 3. 反射精霊の7系列

30:1.7 (330.9) B. 三位一体の定置の息子静止

30:1.8 (330.10) 1.崇高性の三位一体化の秘密のもの

30:1.9 (330.11) 2. 日の永遠なるもの

30:1.10 (330.12) 3. 日の老いたるもの

30:1.11 (330.13) 4. 日の完全なるもの

30:1.12 (331.1) 5. 日の若きもの

30:1.13 (331.2) 6. 日の結合なるもの

30:1.14 (331.3) 7.日の誠実なるもの

30:1.15 (331.4) 8.英知の遂行者

30:1.16 (331.5) 9.神性顧問

30:1.17 (331.6) 10. 宇宙検閲官

30:1.18 (331.7) C. 三位一体-起源と三位一体の存在体

30:1.19 (331.8) 1. 三位一体の師たる息子

30:1.20 (331.9) 2. 喚起された三位一体の精霊

30:1.21 (331.10) 3. ハヴォーナ出身者

30:1.22 (331.11) 4. 楽園公民

30:1.23 (331.12) 5. 非啓示の三位一体起源の存在体

30:1.24 (331.13) 6. 非啓示の神格-三位一体の存在体

30:1.25 (331.14) 7. 到達の三位一体化の息子

30:1.26 (331.15) 8. 選択の三位一体化の息子

30:1.27 (331.16) 9. 完全性三位一体化の息子

30:1.28 (331.17) 10. 創造物-三位一体化の息子

30:1.29 (331.18) II. 二-起源の存在体。楽園神格のいずれか2者の起源のもの、あるいは楽園神格に直接的、または間接的起源をもついずれか2者の存在体により別の方法で創造されたもの。

30:1.30 (331.19) A. 下降系列

30:1.31 (331.20) 1. 創造者たる息子

30:1.32 (331.21) 2. 執政の息子

30:1.33 (331.22) 3. 輝く明けの明星

30:1.34 (331.23) 4. 父なるメルキゼデク

30:1.35 (331.24) 5. メルキゼデク系

30:1.36 (331.25) 6. ヴォロンダデク系

30:1.37 (331.26) 7. ラノナンデク系

30:1.38 (331.27) 8. 輝く宵の明星

30:1.39 (331.28) 9. 大天使系

30:1.40 (331.29) 10. 生命運搬者

30:1.41 (331.30) 11. 宇宙の非啓示の補佐

30:1.42 (331.31) 12. 神の非啓示の息子

30:1.43 (331.32) B. 定置の系列

30:1.44 (331.33) 1. アバンドンター

30:1.45 (331.34) 2. スサチア

30:1.46 (331.35) 3. ユーニーヴィータ - チア

30:1.47 (331.36) 4. スピロンガ

30:1.48 (331.37) 5. 非啓示の二-起源の存在体

30:1.49 (331.38) C. 上昇系列

30:1.50 (331.39) 1. 調整者-融合必滅者

30:1.51 (331.40) 2.息子-融合必滅者

30:1.52 (331.41) 3.精霊-融合必滅者

30:1.53 (331.42) 4.被移動中間者

30:1.54 (331.43) 5.非啓示の上昇者

30:1.55 (332.1) III. 単独-起源の存在体。楽園神格のいずれか1名の起源の、あるいは別の方法で楽園神格からの直接的、または、間接的起源をもつ存在体のいずれか1名により創造されたもの達。

30:1.56 (332.2) A. 崇高なる精霊

30:1.57 (332.3) 1. 重力の使者

30:1.58 (332.4) 2. ハヴォーナ回路の7精霊

30:1.59 (332.5) 3. ハヴォーナ回路の12名の副官

30:1.60 (332.6) 4. 生き写しの反射助手

30:1.61 (332.7) 5. 宇宙の母なる精霊

30:1.62 (332.8) 6. 心-精霊の7重の副官

30:1.63 (332.9) 7. 非啓示の神格-起源の存在体

30:1.64 (332.10) B. 上昇系列

30:1.65 (332.11) 1. 人格化された調整者

30:1.66 (332.12) 2. 上昇の物質の息子

30:1.67 (332.13) 3. 進化の熾天使

30:1.68 (332.14) 4. 進化の天使童子

30:1.69 (332.15) 5. 非啓示の上昇者

30:1.70 (332.16) C. 無限の精霊の家族

30:1.71 (332.17) 1. 単独使者

30:1.72 (332.18) 2. 宇宙の回路監督者

30:1.73 (332.19) 3. 登記責任者

30:1.74 (332.20) 4. 無限の精霊の人格補佐

30:1.75 (332.21) 5. 副検査官

30:1.76 (332.22) 6. 配属歩哨

30:1.77 (332.23) 7. 卒業生案内者

30:1.78 (332.24) 8. ハヴォーナ従者

30:1.79 (332.25) 9. 普遍の調停者

30:1.80 (332.26) 10. モロンチア同志

30:1.81 (332.27) 11. 超熾天使

30:1.82 (332.28) 12. 第二熾天使

30:1.83 (332.29) 13. 第三熾天使

30:1.84 (332.30) 14. 全天使

30:1.85 (332.31) 15. 熾天使

30:1.86 (332.32) 16. 天使童子とサノビム

30:1.87 (332.33) 17. 非啓示の精霊-起源の存在体

30:1.88 (332.34) 18. 力の崇高な 7 指揮官

30:1.89 (332.35) 19. 崇高な力の中枢

30:1.90 (332.36) 20. 主たる物理制御者

30:1.91 (332.37) 21. モロンチアの力の監督者

30:1.92 (332.38) IV. 帰結の先験的存在体。宇宙が光と生命に落ち着くまではその起源が時間と空間の宇宙には明らかにはされない先験的な存在体の大部隊が、楽園にみられる。先験的な存在体は、創造者でも創造物でもない;それらは神性、究極性、および永遠性の帰結の子供らである。これらの「帰結者」は有限でも無限でもない—準絶対である;そして、準絶対性は、無限性でも絶対性でもない。

30:1.93 (333.1) まだ創造されていないこれらの非創造者は、つねに楽園の三位一体に忠誠であり、終局者に従順である。それらは、人格活動の究極の4段階に存在し、7階級のそれぞれに属する主要な1,000の労働集団から成る12大分割の准絶対の7集団において機能する。これらの帰結の存在体は次の系列を含む:

30:1.94 (333.2) 1. 主たる宇宙の建築家

30:1.95 (333.3) 2. 超越記録者

30:1.96 (333.4) 3. 他の先験的存在体

30:1.97 (333.5) 4. 第一帰結の主根源力組織者

30:1.98 (333.6) 5. 主根源力の先験的提携組織者

30:1.99 (333.7) 神は、超人格体として（現れる、もたらす）。神は、人格体として創造する。神は、人格体として断片化する;そのような調整者の自らの断片は、父である神の親としての行為によりそのような必滅の創造物に授与された人格の自由意志による選択に従い物質的かつ必滅の心に精霊の魂を進化させる。

30:1.100 (333.8) V. 神格の断片化された実体。これらの実体は、決して第一根源と中枢の前人格の現実の唯一の断片化ではないとはいえ、宇宙なる父に起源をとる生ける存在体のこの系列は、思考調整者が最も良く代表している。調整者以外の断片の機能は、多種多様であり、しかもあまり知られてはいない。調整者あるいは他のそのような断片との融合は、創造物を父-融合の存在体に制定、となる、する。

30:1.101 (333.9) 父の断片にはとても匹敵しないとはいえ、第三根源と中枢の前心の断片化がここで記録されるべきである。そのような実体は、調整者とは非常に異なっている;それらは、そういうものとしてスプリントンに住ん

ではいないし、心-重力回路を往来もしない;肉体の生涯の間、必滅の創造物にも宿らない。それらは、調整者のような意味での前人格ではないが、心以前のそのような断片は、生残するある種の必滅者に贈与され、また、それとの融合は、調整者-融合の必滅者とは対照的にある種の生残必滅者を精霊-融合必滅者に制定する。

30:1.102 (333.10) それとの統一が創造物を息子-融合の必滅者に制定する創造者たる息子の個別化された精霊についての記述は、なおさらに困難である。その上に、神格の他の断片化がまだある。

30:1.103 (333.11) VI. 超人格存在体。神性起源をもち、宇宙の中の宇宙の多種多様の業務についている人格体ではない存在体の大部隊がある。この一部の存在体は、息子の楽園世界の居住者である;他のものには、永遠なる息子の超人格の代表者のように他の場所で遭遇する。これらの談話では、これらについて大部分が言及されていないし、人格創造物に向けてそれらの記述を試みるということは全く空しいであろう。

30:1.104 (333.12) VII. 非分類の、非啓示の系列。現在の宇宙時代に、全存在体を、人格的であるかまたはそうでないものを、現宇宙時代に関する分類に入れることは可能ではなかろう。またそのような種類すべてが、これらの談話で明らかにされてきたわけではない;従って、数多くの系列がこれらの一覧表から省かれた。次を検討せよ:

30:1.105 (333.13) 宇宙目標の完成者

30:1.106 (333.14) 究極者の適任の代理人

30:1.107 (334.1) 崇高者の無特質の監督

30:1.108 (334.2) 日の老いたるもの非啓示の創造媒体

30:1.109 (334.3) 楽園の威儀仙

30:1.110 (334.4) 威儀仙の無名の反射体のつながり

30:1.111 (334.5) 地方宇宙の中間絶対系列

30:1.112 (334.6) 楽園分類にはそれらのいずれも現れないこと以外には、これらの系列の表に添えなければならない特別の意味はない。これらは、非分類のうちのわずかなもの

である;あなたは、非啓示の多くを知るにいたってはいない。

30:1.113 (334.7) 精霊は存在する:精霊体、精霊臨場、人格精霊、前人格精霊、超人格精霊、精霊実在、精霊人格—人間の言語も人間の知性も適切ではない。しかしながら、我々は、「純粋な心」の人格はないと述べることができるかもしれない;いかなる実体も、精霊である神によりそれを与えられない限り人格をもたない。精霊エネルギー、あるいは物理エネルギーに関連づけられないいかなる心の実体も人格ではない。しかし、心をもつ精霊人格があるという同じ意味において、精霊をもつ心の人格がある。威儀仙とその仲間は、心-支配の存在体のかなり良い例ではあるが、あなたには未知であるこの人格の型より良い例がある。そのような心の人格に属する非啓示の全系列さえあるのだが、それらは、常に精霊に関連づけられている。他のある種の非啓示の創造物は、心的-物理的-エネルギー人格と呼ばれるかもしれないものである。この存在体の型は、精霊重力には無反応であるが、それでもなお本物の人格は—父の回路内にある。

30:1.114 (334.8) 群れをなす時間の宇宙において、また永遠の中央宇宙において生きる、そして崇拝する生ける創造物、創造者、帰結者、さらに他の方法での存在体に関する物語つたえるこれらの論文は、まだ終わりに差し掛かってさえいない—差し掛かることさえできない—のである。あなた方必滅者は、人格体である;それゆえに、我々は、人格化される存在体について説明はできるが、準絶対の存在体について一体あなたにいかに説明できるであろうか。

2. ユヴァーサの人格登録者

30:2.1 (334.9) 生ける存在体の神性家族は、7大区分でユヴァーサに登録されている:

30:2.2 (334.10) 1. 楽園神格

30:2.3 (334.11) 2. 崇高なる精霊

30:2.4 (334.12) 3. 三位一体起源存在

30:2.5 (334.13) 4. 神の息子

30:2.6 (334.14) 5. 無限の精霊の人格

30:2.7 (334.15) 6. 宇宙の力の指揮官

30:2.8 (334.16) 7. 永久的な公民部隊

30:2.9 (334.17) これらの意志をもつ創造物集団は、多数の集団と小準型に分割されている。しかしながら、壮大な宇宙の人格に関わるこの分類の提示においては、主としてこれらの談話で明らかにされてきた知力ある存在体のそれらの系列についての説明がなされた。その大部分には、時間の必滅者の上昇経験における楽園への段階的上昇において遭遇するであろう。次の表は、人間の上昇計画は別として、それらの仕事を進める宇宙の存在体の巨大な系列には言及はしていない。

30:2.10 (335.1) I. 楽園神格

30:2.11 (335.2) 1. 宇宙なる父

30:2.12 (335.3) 2. 永遠なる息子

30:2.13 (335.4) 3. 無限の精霊

30:2.14 (335.5) II. 崇高なる精霊

30:2.15 (335.6) 1. 主たる7精霊

30:2.16 (335.7) 2. 崇高なる7幹部

30:2.17 (335.8) 3. 反射精霊の7集団

30:2.18 (335.9) 4. 生き写しの反射助手

30:2.19 (335.10) 5. 回路の 7 精霊

30:2.20 (335.11) 6. 地方宇宙の創造的精霊

30:2.21 (335.12) 7. 心-精霊の副官

30:2.22 (335.13) III. 三位一体起源の存在体

30:2.23 (335.14) 1. 三位一体化の崇高性の秘密のものたち

30:2.24 (335.15) 2. 日の永遠なるもの

30:2.25 (335.16) 3. 日の老いたるもの

30:2.26 (335.17) 4. 日の完全なるもの

30:2.27 (335.18) 5. 日の若きもの

30:2.28 (335.19) 6. 日の結合なるもの

30:2.29 (335.20) 7. 日の誠実なるもの

30:2.30 (335.21) 8. 三位一体の師たる息子

30:2.31 (335.22) 9. 英知の遂行者

30:2.32 (335.23) 10. 神性顧問

30:2.33 (335.24) 11. 宇宙検閲官

30:2.34 (335.25) 12. 喚起された三位一体の精霊

30:2.35 (335.26) 13. ハヴォーナ出身者

30:2.36 (335.27) 14. 楽園公民

30:2.37 (335.28) IV. 神の息子

30:2.38 (335.29) A. 下降する息子

30:2.39 (335.30) 1.創造者たる息子—ミカエル

30:2.40 (335.31) 2. 執政の息子—アヴォナル

30:2.41 (335.32) 3. 三位一体の師たる息子—デナル

30:2.42 (335.33) 4. メルキゼデクの息子

30:2.43 (335.34) 5. ヴォロンダデクの息子

30:2.44 (335.35) 6. ラノナンデクの息子

30:2.45 (335.36) 7.生命運搬者たる息子

30:2.46 (335.37) B. 上昇する息子

30:2.47 (335.38) 1.父-融合の必滅者

30:2.48 (335.39) 2. 息子-融合の必滅者

30:2.49 (335.40) 3. 精霊-融合の必滅者

30:2.50 (335.41) 4. 進化の熾天使

30:2.51 (335.42) 5.上昇する物質の息子

30:2.52 (335.43) 6.被移動中間者

30:2.53 (335.44) 7.人格化の調整者

30:2.54 (336.1) C. 三位一体化の息子

30:2.55 (336.2) 1. 強力の使者

30:2.56 (336.3) 2. 権威高きもの

30:2.57 (336.4) 3. 名前と番号を持たないもの

30:2.58 (336.5) 4. 三位一体化の管理者

30:2.59 (336.6) 5. 三位一体化の大使

30:2.60 (336.7) 6. 天の保護者

30:2.61 (336.8) 7. 息子の高位の補佐

30:2.62 (336.9) 8. 上昇者-三位一体化の息子

30:2.63 (336.10) 9. 楽園-ハヴォーナ-三位一体化の息子

30:2.64 (336.11) 10. 目標をもつ三位一体化の息子

30:2.65 (336.12) V. 無限の精霊の人格

30:2.66 (336.13) A. 無限の精霊のより高い人格

30:2.67 (336.14) 1. 単独使者

30:2.68 (336.15) 2. 宇宙の回路監督者

30:2.69 (336.16) 3. 登記責任者

30:2.70 (336.17) 4. 無限の精霊の人格補佐

30:2.71 (336.18) 5. 副検査官

30:2.72 (336.19) 6. 配属歩哨

30:2.73 (336.20) 7. 卒業生案内者

30:2.74 (336.21) B. 空間の使者部隊

30:2.75 (336.22) 1. ハヴォーナ従者

30:2.76 (336.23) 2. 普遍の調停者

30:2.77 (336.24) 3. 技術顧問

30:2.78 (336.25) 4. 楽園の記録管理者

30:2.79 (336.26) 5. 天の記録者

30:2.80 (336.27) 6. モロンチア同志

30:2.81 (336.28) 7. 楽園の仲間

30:2.82 (336.29) C. 奉仕する精霊

30:2.83 (336.30) 1. 超熾天使

30:2.84 (336.31) 2. 第二熾天使

30:2.85 (336.32) 3. 第三熾天使

30:2.86 (336.33) 4. 全天使

30:2.87 (336.34) 5. 熾天使

30:2.88 (336.35) 6. 天使童子とサノビム

30:2.89 (336.36) 7. 中間者

30:2.90 (336.37) VI. 宇宙の力の指揮官

30:2.91 (336.38) A. 力の崇高な七指揮官

30:2.92 (336.39) B. 崇高な力の中枢

30:2.93 (336.40) 1. 中央の最高監督

30:2.94 (336.41) 2. ハヴォーナの中枢

30:2.95 (336.42) 3. 超宇宙の中枢

30:2.96 (336.43) 4. 地方宇宙の中枢

30:2.97 (336.44) 5. 星座の中枢

30:2.98 (336.45) 6. 体系中枢

30:2.99 (336.46) 7. 非分類の中枢

30:2.100 (337.1) C. 主たる物理制御者

30:2.101 (337.2) 1. 力の共同指揮官

30:2.102 (337.3) 2. 機械的制御者

30:2.103 (337.4) 3. エネルギー変圧者

30:2.104 (337.5) 4. エネルギー送信者

30:2.105 (337.6) 5. 一次結合者

30:2.106 (337.7) 6. 二次結合者

30:2.107 (337.8) 7. フランダランク系とクロノルデク系

30:2.108 (337.9) D. モロンチアの力の監督者

30:2.109 (337.10) 1. 回路監視委員

30:2.110 (337.11) 2. 体制調整者

30:2.111 (337.12) 3. 惑星管理者

30:2.112 (337.13) 4. 結合制御者

30:2.113 (337.14) 5. 連携安定者

30:2.114 (337.15) 6. 選択的仕分け者

30:2.115 (337.16) 7. 共同記録係

30:2.116 (337.17) VII. 永久公民部隊

30:2.117 (337.18) 1. 惑星の中間者

30:2.118 (337.19) 2. アダムの体制の息子

30:2.119 (337.20) 3. 星座ユーニーヴィータ - チア

30:2.120 (337.21) 4. 地方宇宙スサチア

30:2.121 (337.22) 5. 地方宇宙の精霊-融合の必滅者

30:2.122 (337.23) 6. 超宇宙のアバンドンター

30:2.123 (337.24) 7. 超宇宙の息子-融合の必滅者

30:2.124 (337.25) 8. ハヴォーナ出身者

30:2.125 (337.26) 9. 精霊の楽園球体出身者

30:2.126 (337.27) 10. 父の楽園球体出身者

30:2.127 (337.28) 11. 楽園の被創造公民

30:2.128 (337.29) 12. 調整者-融合の楽園公民の人間

30:2.129 (337.30) ユヴァーサの本部世界の記録にあるように、これが、宇宙の人格に関わる実用的分類である。

30:2.130 (337.31) 人格の複合集団。ユヴァーサには壮大な宇宙の組織や管理に密接に関連している知的存在体の数多くの他の集団に関する記録がある。そのような系列の中には次に掲げる人格の3複合集団がある:

30:2.131 (337.32) A. 最終的な状態の楽園軍団

30:2.132 (337.33) 1. 人間終局者部隊

30:2.133 (337.34) 2. 楽園終局者部隊

30:2.134 (337.35) 3. 三位一体化の終局者部隊

30:2.135 (337.36) 4. 三位一体化の複合終局者部隊

30:2.136 (337.37) 5. ハヴォーナ終局者部隊

30:2.137 (337.38) 6. 先験的終局者部隊

30:2.138 (337.39) 7. 目標の非啓示の息子部隊

30:2.139 (337.40) 終局者の人間部隊は、次と最後のこの一連の論文で扱われる。

30:2.140 (338.1) B. 宇宙の補佐

30:2.141 (338.2) 1. 輝く明けの明星

30:2.142 (338.3) 2. 輝く宵の明星

30:2.143 (338.4) 3. 大天使

30:2.144 (338.5) 4. いと高き助手

30:2.145 (338.6) 5. 高等弁務官

30:2.146 (338.7) 6. 天の監視者

30:2.147 (338.8) 7. 大邸宅世界の教師

30:2.148 (338.9) 地方と超宇宙双方にある本部世界のすべてには、創造者たる息子、すなわち地方宇宙の支配者のための特定任務従事のこれらの存在体のために用意がなされている。我々は、ユヴァーサのこれらの宇宙補佐を歓迎するのだが、それらに対する司法権は持たない。そのような特使は、創造者たる息子の支配下において作業を

し、監視を推し進める。それらの活動は、あなたの地方宇宙についての談話においてより完全に説明される。

30:2.149 (338.10) C. 7優待居留者団

30:2.150 (338.11) 1. 星の学生

30:2.151 (338.12) 2. 天の熟練工

30:2.152 (338.13) 3. 逆戻りの指揮官

30:2.153 (338.14) 4. 付加-学校の講師 分校

30:2.154 (338.15) 5. 諸予備部隊

30:2.155 (338.16) 6. 学生訪問者

30:2.156 (338.17) 7. 上昇巡礼者

30:2.157 (338.18) これらの7集団の存在体は、地方体制から超宇宙の首都までの、特に後者までのすべての本部世界に見られ、このように組織化され、治められるであろう。7超宇宙の首都は、知力ある存在体のほとんどすべての階級と系列のための集合場所である。楽園-ハヴォーナ出身者の多数の集団を除き、生命のあらゆる局面にある意

志をもつ創造物がここで、観測され、研究されるかもしれない。

3. 優待居住者団

30:3.1 (338.19) 優待7居住者は、自身の任務の推進とその特別課題の遂行に従事する間の長い、　あるいは短い時間に建築球体に滞在する。それらの仕事は次のように説明できるかもしれない:

30:3.2 (338.20) 1. 星の学生、すなわち天の天文学者は、特別に構成されたそのような世界が、それらの観測と計算にとり殊のほか好ましいが故に、ユヴァーサのような球体において取り組むことを選ぶ。ユヴァーサは、その中央の場所のためばかりでなく、間近にエネルギーの流れを妨害する活発な、または死んだ巨大な太陽もないがために、この居住団の仕事にとり便利な位置にある。これらの学生は、超宇宙の業務にいかなる方法でも組織的に関係はない;それらは単に客である。

30:3.3 (338.21) ユヴァーサの天文学の居住団は、間近の多くの領域からの、中央の宇宙からの、そしてノーラチアデクからさえの個人を含む。いかなる宇宙のいかなる体制に

おけるいかなる世界のいかなる存在体も、星の学生になるかもしれない、つまり天の天文学者のいくつかの部隊に加わることを希望するかもしれない。唯一の必要条件は次の通りである。空間の世界に関する、特にそれらの発展と制御の物理的法則に関する継続的生命と十分な知識。星の学生は、この部隊において永遠に勤める必要はないが、この集団に認められた誰もユヴァーサの1000時間未満で離脱することはできない。

30:3.4 (339.1) ユヴァーサの星観察者居住団には現在、100万以上の数のものがいる。一部は比較的長期間留まるが、これらの天体観測者は去来する。それらは多数の機械器具と物理的装置の助けで仕事を進める;また、単独使者と他の精霊探検者に大いに助けられる。これらの天の天体観測者は、星の研究と空間調査の仕事において生けるエネルギー変圧者と生ける送信者の、および反射的な人格を常時使用する。それらは、空間の物質とエネルギー顕現のすべての型と段階を研究するし、星の現象と全く同じ程度に原始力の機能にも興味を持っている。それらの精査からは全空間の何も逃がれられはしない。

30:3.5 (339.2) 同様の天体観測者居住団は、地方宇宙とその行政区画の建築首都のみならず超宇宙にある小領域の本部世界にも見られる。楽園上を除いては、知識は先天的ではない;物質宇宙についての理解は、主に観測と研究に左右される。

30:3.6 (339.3) 2. 天の熟練工は7超宇宙の至るところで勤める。上昇する人間には、より完全に議論されるであろうこれらの熟練工に関連して地方宇宙のモロンチア経歴におけるこれらの集団との最初の接触がある。

30:3.7 (339.4) 3. 逆戻りの指揮官は、気晴らしとユーモアの促進者である--過去の記憶への逆戻り。それらは、特にモロンチア変遷と精霊経験の初期段階の間、人間前進の上昇計画の実作業において大きな役に立っている。それらについての物語は、地方宇宙における人間の経歴に関する談話に属する。

30:3.8 (339.5) 4. 付加-学校の講師。上昇経歴の次の、より上の居住世界は、すぐ下の世界の教師の強力部隊、つまりその球体の進歩している居住者のための一種の予備校をつねに維持する;これは、時間の巡礼者を進めるための上

昇計画の局面である。これらの学校は、その教育と試験の方法は、ユランチアでの実施を試みる何とも全く異なっている。

30:3.9 (339.6) 人間前進の全上昇計画は、習得するや否や新たな真実と経験を他の存在体へ付与する実践に特徴づけられている。あなたは、前進階級においてあなたのすぐ後ろのそれらの生徒への教師として働くことにより楽園到達の長い学校を卒業する。

30:3.10 (339.7) 5. 諸予備部隊。我々の直接指揮下にはない存在体の広大な予備部隊は、予備-部隊居住団としてユヴァーサに集結される。ユヴァーサにはこの居住団の第一の70区分があり、並はずれたこれらの人格と許された一時期を過ごすことが、これらにとっての一般教育である。同様の一般的な予備部隊は、サルヴィントンと他の宇宙首都に維持される;それらは、各集団指揮官の要請で現役勤務に派遣される。

30:3.11 (339.8) 6. 学生訪問者。天の訪問者の一定の流れは、全宇宙から様々な本部世界を貫いて流れ込む。個人としての、また集団としての各種の型のこれらの存在体は、観

察者、交換留学生、学生助手として我々に押し寄せてくる。ユヴァーサのこの優待居住団には、現在のところ10億以上の人格体がいる。この訪問者の一部は1日、他のものは1年滞在するかもしれないし、すべては、それぞれの任務の性質による。この居住団は、創造者人格とモロンチアの人間を除いてはほぼ全階級の宇宙存在体を含んでいる。

30:3.12 (340.1) モロンチアの人間は、自分の起源の地方宇宙の境界内に限られた学生訪問者である。それらは、精霊状態に達して初めて超宇宙の能力で訪問が許される。我々の訪問者である居住団のちょうど半分は、「立ち寄るもの」、つまり、他の場所への途中、オーヴォントン首都に立ち止まって訪問する存在体から成る。これらの人格は、宇宙任務を実行しているかもしれないし、または余暇を楽しんでいるかもしれない—任務からの解放。宇宙内での旅行と観察の特権は、上昇する全存在体の一部分である。旅をしたい、また初めての国民と世界を観察したいという人間の願望は、地方宇宙、超宇宙、そして中央宇宙経由の楽園への長く波乱に富んだ上昇中にすっかり満たされるであろう。

30:3.13 (340.2) 7. 上昇巡礼者。上昇巡礼者が、楽園前進に関わる様々な勤務に振り当てられる際、それらは、様々な本部球体の優待居住団として住所が定められる。そのような集団は、超宇宙の至るところで機能し、主には自治である。それらは、すべての系列の進化の人間と上昇する仲間を擁するつねに-移行する居住団である。

4. 上昇する人間

30:4.1 (340.3) 時間と空間の人間生存者は、楽園への前進上昇を公認されると上昇する巡礼者と呼ばれるが、この進化の創造物は、これらの談話においてそのような重要な位置を占めているので　我々は、ここに宇宙上昇経歴の次の7段階の一覧表の提示を望むのである:

30:4.2 (340.4) 1. 惑星の必滅者

30:4.3 (340.5) 2. 眠りの生存者

30:4.4 (340.6) 3. 大邸宅界の学生

30:4.5 (340.7) 4. モロンチア前進者

30:4.6 (340.8) 5. 超宇宙被後見者

30:4.7 (340.9) 6. ハヴォーナ巡礼者

30:4.8 (340.10) 7. 楽園到着者

30:4.9 (340.11) 次の談話は、調整者-内住の人間の宇宙経歴を提示する。息子融合、精霊-融合の人間は、この経歴部分を共有するが、ユランチアの全人類は、そのような運命を予期するかもしれないので、我々は、それが調整者-融合の人間に関係しているようにこの話をすることにした。

30:4.10 (340.12) 惑星の必滅者。必滅者とは、上昇の可能性をもつ動物起源の進化するすべての存在体である。人間のこれらの様々な集団と型は、起源、本質、および目標においてユランチア民族と完全に異なるわけではない。各世界の人類は、神の息子からの同じ奉仕活動を受けているし、奉仕する時間の精霊の臨場を享受している。上昇者のすべての型は、自然死の後には大邸宅世界の1モロンチア家族として親しく交わる。

30:4.11 (341.1) 眠りの生存者。生存資格をもつすべての必滅者は、目標の個人的な保護者の監視下にあり、自然な死の

入り口を通過し、第3期に大邸宅世界において人格化する。個人的な保護者に対する権利をもつであろう知性支配の水準と精霊性の寄贈の段階に何らかの理由により達し得なかったそれらの公認の存在体は、このように、すぐには、また直接には大邸宅世界に行くことはできない。そのような生残する魂は、新紀元の審判の日、新配剤、すなわちその時代の点呼をとり、領域に判決を下すために神の息子の到来まで無意識の睡眠をして休まなければならないし、これは、ネバドン全体における一般的習慣である。地球での仕事終了時に天に昇ったとき、キリスト・マイケルについて「彼は巨大な数の捕虜を導いた」と言われた。そして、これらの捕虜は、アダームの時代からユランチアにおけるあるじ復活の日までの眠りの生存者であった。

30:4.12 (341.2) 眠りにある必滅者にとり時間の経過は重要ではない;それらは休息の長さをまったく意識しておらず、気づいてはいない。１時代の終わりの人格の再集合の際、5,000年間眠ったものの反応は、5日間休息をとった人々と異なることはないであろう。これらの生存者は、

この時間の遅れは別として、死の、長い、または短い睡眠を避けるものと全く同様に上昇計画を経験する。

30:4.13 (341.3) 世界の巡礼者のこれらの配剤集団は、地方宇宙の仕事におけるモロンチアの集団活動に用いられた。そのような巨大集団の動員には大きな利点がある;それらは、長い期間の効果的勤務のためにこのように一緒にされる。

30:4.14 (341.4) 3. 大邸宅界の学生。大邸宅世界で再び目を覚ます全ての生残者は、この集団に属する。

30:4.15 (341.5) 人間の生身の肉体は、眠りの生存者の再構成の一部ではない;肉体は土に帰してしまった。任務をもつ熾天使は、不滅の魂のためと帰還調整者の内住のための新生活としての新しい体、モロンチアの型を支える。調整者は、眠りの生存者の心についての精霊の複写のための管理人である。割り当てられた熾天使は、生残する主体性—不滅の魂—の保管者である。それが、進化した程度に応じての。そして、これらの2者は、調整者と熾天使は、それらの人格受託を再結合させるとき、新しい個人は古い人格の復活、すなわち魂の進化するモロンチ

アの主体性の生存である。魂と調整者のそのような再連結は、非常に適切に復活、つまり人格要素の再構成と呼ばれる;しかし、これさえも生残する人格の再現を完全に説明してはいない。あなたは、おそらくそのような不可解な実際の出来事を決して理解はしないであろうが、人間の生存計画を拒絶しないならば、いつか、経験上その真実を知るであろう。

30:4.16 (341.6) 進歩的訓練の7世界における人間の最初の拘留計画は、オーヴォントンにおいてはほぼ普遍的である。およそ1,000個の生息惑星の各地方体制には、7個の大邸宅世界、通常は体制首都の衛星または小衛星がある。それらは、大部分の上昇する人間の受け入れ世界である。

30:4.17 (341.7) 時として人間居住のすべての訓練世界は、「大邸宅」と呼ばれ、イエスが、「私の父の家には、多くのすまいがある。」と言ったとき、そのような球体を暗に示したのであった。今後、上昇者は、大邸宅世界のような一定の集団球体内においては、1球体から他の球体へと、1生命球体から他へと個別に前進するであろうが、

集団形成で宇宙研究の1局面から他局面へと常に進むであろう。

30:4.18 (342.1) 4. モロンチア前進者。必滅者は、大邸宅世界から体系、星座、および宇宙の球体までの全域にわたるモロンチア前進者として分類される;それらは、人間上昇の変遷範囲を移動している。上昇する人間が、モロンチア世界の下から上へと前進するとき、教師との関連において、またより進んだ、またより上の同胞と共に数え切れない任務を果たす。

30:4.19 (342.2) モロンチア前進は、知力、精霊、および人格形式の継続的進歩を伴う。生存者はいまだ3-本質をもつ存在体である。それらは、モロンチア経験の全体にわたり地方宇宙の被後見者である。超宇宙の計画は、精霊経歴が始まるまでは機能しないのである。

30:4.20 (342.3) 必滅者は、超宇宙の小領域の受け入れ世界に向け地方宇宙本部を離れる直前に精霊の真の主体性を取得する。モロンチアの最終段階から1番目の、または最も低い精霊状態への通過は、ほんのわずかな過渡期に過ぎない。心、人格、および個性は、そのような進歩により

変えられはしない;ただ形状のみが変更を被るのである。しかし、精霊の型は、モロンチア体と同じく現実であり、それは同様に認識できる。

30:4.21 (342.4) 時間の必滅者は、出身の地方宇宙から超宇宙の受け入れ世界への出発以前には創造者たる息子と地方宇宙の母なる精霊からの精霊承認の受容者である。ここからは、上昇する人間の状態は永久に確保される。超宇宙の被後見者が堕落するとは一度として聞いたことがない。上昇熾天使もまた、地方宇宙からの出発時点での天使の地位で前進する。

30:4.22 (342.5) 5. 超宇宙の被後見者。超宇宙の訓練世界に到着する全上昇者は、日の老いたるものの被後見者になる;それらは地方宇宙のモロンチア生涯を横断してきており、現在は公認の精霊である。若い精霊としてのそれらは、自らの小領域の受け入れ球体から主要な10領域の研究世界を通り、超宇宙本部のより高い文化的球体にかけての訓練と教養のための超宇宙体制の上昇を始める。

30:4.23 (342.6) 精霊前進の小領域、主要領域、および超宇宙本部世界滞在に基づく学生精霊の3系列がある。モロンチ

ア上昇者が、地方宇宙の世界において研究し働いたように、精霊上昇者も同様に他者へ経験的な英知の源で吸収したものの分配を実行しつつ新世界を極め続ける。しかし、超宇宙経歴にある精霊として学校に行くということは、人の物質的な心の想像的領域に入ったことがあるものとは全く異なる。

30:4.24 (342.7) これらの上昇精霊は、ハヴォーナに向けて超宇宙を発つ前に、地方宇宙の指揮にあたりモロンチア経験の間に受けた———超宇宙管理にあたり同じ徹底的な講座を受ける。ハヴォーナ到達以前の精霊の人間にとっての主要な研究は、専門的業務ではなく地方と超宇宙行政に精通することである。この経験のすべての理由は、現在完全に明らかなわけではないが、そのような研修は、隊員としての終局者部隊の可能な将来の運命から見て確かに賢明でありかつ必要である。

30:4.25 (342.8) 超宇宙計画は、上昇するすべての人間に同じものではない。それらは、同じ一般教育を受けるが、特別の団体と階級は、特別の教育課程に伴われ特定研修過程を受けさせる。

30:4.26 (343.1) 6. ハヴォーナ巡礼者。生残する人間は、精霊の発達が終了するとたとえ何が溢れてはいなくとも、ハヴォーナへの、つまり進化する精霊の安息所への長い飛行準備をする。あなたは、地上においては生身の創造物であった;地方宇宙を経由する間モロンチア存在体であった;超宇宙を経由する間、進化する精霊であった;ハヴォーナの受け入れ世界への到着と同時に、あなたの精霊的教育が、現実に、本格的に始まる;やがて起こるあなたの楽園出現は、完成された精霊としてであろう。

30:4.27 (343.2) 超宇宙本部からハヴォーナの受け入れ球体への旅は、つねに単独でする。これから先は、学級授業も集団授業も行なわれないであろう。あなたは、時間と空間の進化世界の技術と行政の研修を終える。あなたの人格的教育、個々の精霊的訓練が始まるのは、これからである。教育は、ハヴォーナ中で、最初から最後まで個人的であり、しかも三重である:知的、精霊的、かつ経験的。

30:4.28 (343.3) あなたのハヴォーナ経歴の最初の行為は、あなたを輸送する第二熾天使の長くて安全な旅に気づき、ま

た感謝することになるであろう。あなたは、その後自分の初期のハヴォーナ活動を後援するそれらの存在体に紹介される。次に、あなたは、自身の到着を登録し、また地方宇宙の創造者たる息子、つまりあなたの息子性経歴を可能にした宇宙の父への感謝と敬愛のための書信を用意しに行く。これでハヴォーナ到着の手続きが完結する;その上、あなたには自由な観測のための長期の休暇が与えられ、これで長い上昇経験のあなたの友人、仲間、および同僚を訪ねる機会ができる。また、あなたは、あなたのユヴァーサ出発時点から仲間の巡礼者のうちの誰がハヴォーナへ出発したかを突き止めるために放送を調べることもできる。

30:4.29 (343.4) ハヴォーナの受け入れ世界へのあなたの到着の事実は、正式にあなたの地方宇宙の本部に送られ、その熾天使がたまたまどこにいようとも、あなたの熾天使の保護者に個人的に伝えられる。

30:4.30 (343.5) 上昇の必滅者は、空間の進化世界の業務において徹底的に養成されてきた; それらは、いま完全性の創造球体との長く有益な接触を始める。結合された、独自

の、この並はずれた経験により未来の何かの仕事に向けて何という準備がされていることか。しかし、私は、ハヴォーナに関してあなたに話すことはできない;あなたは、それらの栄光を評価するために、またはそれらの壮大さを理解するためにこれらの世界を見なければならない。

30:4.31 (343.6) 7. 楽園到着。あなたは、居住資格をもって楽園に達すると神性と準絶対性の前進過程に入る。楽園上のあなたの住居は、あなたが神を見つけたということ、終局者の人間部隊に召集されることになっているということを意味する。父融合であるものだけが、壮大な宇宙の全創造物の中で終局者の人間部隊に召集される。そのような個人だけが、局者の誓いを立てる。楽園の完全性の、あるいは楽園到達の他の存在体は、一時的にこの終局者部隊に所属するかもしれないが、それらは、時間と空間の進化の、そして完成された第一人者の集まるこの部隊の未知の、そして非啓示の任務への永遠の課題のものではない。

30:4.32 (343.7) 楽園到着者には、自由の期間が与えられ、その後、それらは、第一超熾天使の7集団との連携を始める。また、崇拝の導体との課程を終えると楽園卒業生に指定され、次には終局者として広範囲の全創造への観察の、協力的な勤務に割り当てられる。それらは、光と生命に落ち着く世界の多くの能力で役目を果たすが、まだ、終局者の人間部隊のための特定の、または、定着、解決された雇用はないようである。

30:4.33 (344.1) 終局者の人間部隊に将来の、あるいは非啓示の何の目標もなかったとしても、これらの上昇存在体の現在の任務は、まったく、全体で適切かつ輝かしいものであろう。それらの現在の目標は、進化する上昇の普遍的計画を完全に正当化する。しかし、外部空間球体の進化の未来の時代は、人間の生存と必滅者の上昇の神性計画の実行における神の英知と慈愛を確かにさらに念入りに展開し、また一層の充実で神々しく照らすであろう。

30:4.34 (344.2) この談話は、あなたに明らかにされてきたものと、それにあなた自身の世界に関する教授に関してあなたが取得するかもしれないものと合わせて、上昇する必

滅者の経歴の概要を提示するものである。経歴に関わる話は、様々の超宇宙においてかなり異なるが、それが、ネバドンの地方宇宙において、また壮大な宇宙区分の7番目、すなわちオーヴォントンの超宇宙において作用しているように、この詳説は、人間前進の典型的計画の片鱗を提供している。

30:4.35 (344.3) [ユヴァーサからの強力な使者による後援]

論文 31
終局者部隊

31:0.1 (345.1) 人間終局者部隊は、上昇する時の世界の調整者融合の人間にとっての現在知られている目標である。しかし、同様にこの部隊に配属される他集団がある。第一の終局者部隊は、以下からなる。

31:0.2 (345.2) 1. ハヴォーナ出身者

31:0.3 (345.3) 2. 重力の使者

31:0.4 (345.4) 3. 栄光の人間

31:0.5 (345.5) 4. 養子の熾天使

31:0.6 (345.6) 5. 栄光の物質の息子

31:0.7 (345.7) 6. 栄光の中間創造物

31:0.8 (345.8) 栄光のこれらの存在体の6集団は、永遠の目標のこの独自の本体を構成する。我々は、それらの今後の仕事を知っているつもりであるが、確信はない。人間終局者部隊は、楽園に出動し、結集また空間宇宙のかなりの広範囲にわたり奉仕をしたり、光と生命に定着する世界を管理するが、それらの将来の目的地は外部宇宙の現在-組織中の宇宙のはずである。少なくともそれが、ユヴァーサの憶測である。

31:0.9 (345.9) 部隊は、空間世界の労働団体に従って、合わせて、また長くて波瀾万丈の上昇経歴中に修得した連合的経験を保つことで組織される。この部隊に認められる全上昇創造物は、平等に受け入れられるが、この高められた平等性は決して個性を取り消しにはしないし、または人格的な同一性を破壊はしない。我々は、終局者との連絡に際し、上昇の必滅者、ハヴォーナ出身者、養子の熾天使、中間創造物、または物質の息子であるかをすぐに明察できる。

31:0.10 (345.10) 終局者は、宇宙時代の現在に時間の宇宙における勤務に戻る。それらは、他の6超創造すべてでの勤務後までは決して出身の超宇宙ではなく異なる超宇宙において引き続いて働くように割り当てられる。それらは、こうして崇高なるものの七重の概念を習得できるのである。

31:0.11 (345.11) 人間終局者の１名、あるいは複数の集団が、絶えずユランチアで勤務している。それらが配置されていない宇宙事業の領域はない;それらは、遍く、かつ交替して、また等期間の課せられた義務と無料奉仕において機能する。

31:0.12 (345.12) 我々は、この並はずれた集団の将来の組織の本質に関しては見当もつかないのだが、終局者は、現在完全に自治団体である。それらは、自身の永久的、周期的、かつ任務の指導者と指揮者を選ぶ。外部の影響力を使ってそれらの方針に働きかけることは決してできないし、それらは、楽園の三位一体だけに忠誠を誓う。

31:0.13 (346.1) 終局者は、楽園に、超宇宙に、地方宇宙に、そしてすべての局部首都に本部を維持する。それらは、進

化の創造の個々の系列である。我々は、直接にはそれらを監督しないし、取り締まりもしないが、それらは、それでも我々の全計画に無条件に忠誠であり、つねに協力的である。それらは、実に、時間と空間の増え続ける立証済みの魂—宇宙の進化の塩—であり、悪に対して永遠に立証され、罪に対して安全である。

1. ハヴォーナ出身者

31:1.1 (346.2) 教師として中央宇宙の巡礼者-職業訓練所に勤めるハヴォーナ出身者の多くは、上昇する人間に大いに愛着をもつようになり、人間の終局者部隊の今後の仕事と目標に一段と好奇心をそそられるようになる。グランドファンダの仲間により統括されたハヴォーナの奉仕活動者のための登録が、楽園上の管理部隊の本部に維持されている。今日、何百万人ものハヴォーナ出身者が、この順番待ちの名簿に見られるであろう。直接の、かつ神性の創造のこれらの完全な存在体は、人間終局者部隊にとり大きな支援であり、間違いなく遠い未来にさらに大きく役立つであろう。それらは、完全性と神性の充実さに満ちて生まれるものの観点を提供する。それゆえに、終

局者は経験的存在の両段階を迎え入れる—完成の、そして完成された。

31:1.2 (346.3) ハヴォーナ出身者は、宇宙なる父の精霊の断片の贈与に向けての受容能力を創造する進化の存在体とのつながりにおいて一定の経験的開発を実現しなければならない。人間終局者部隊には、第一根源と中枢の精霊と共に融合されたような存在体だけが、あるいは、重力の使者のような父なる神のこの精霊を先天的に具体化するものだけが永久的隊員としている。

31:1.3 (346.4) 中央宇宙の住民は、1,000名—終局者の1団—に1名の割合で部隊に受け入れられる。部隊は、一時的な奉仕のために１集団が1,000名の、つまり997名を数える上昇創造物にハヴォーナ出身者1名と重力の使者1名が組織化される。終局者は、このようにして集団で動員されるが、終局の宣誓は個別に行なわれる。それは、大胆な意味合いと恒久的な重要性をもつ誓いである。ハヴォーナ出身者は、同じ誓いを立て、部隊に永遠に所属するようになる。

31:1.4 (346.5) ハヴォーナ新隊員は、その任務の集団に続く;集団がどこへ行こうと、それらは行く。あなたは、終局者の新たな作業のそれらの熱意を見るべきである。終局者部隊に達する可能性は、ハヴォーナの最高の興奮の1つである;終局者になる可能性は、これらの完全な競争に起こる最高の冒険の1つである。

31:1.5 (346.6) ハヴォーナ出身者もまた、ヴァイスジェリントンの三位一体化の複合終局者部隊に、そして楽園の先験的終局者部隊に同じ割合で受け入れられる。ハヴォーナ公民は、ハヴォーナ終局者部隊への可能な入隊と合わせてこれらの3目標を自らの崇高な経歴の最高目標と見なす。

2. 重力の使者

31:2.1 (346.7) 終局者は、いつ何処で重力の使者が機能していようとも指揮にあたっている。すべての重力の使者は、グランドファンダの管轄下にあり、第一終局者部隊にだけ配属される。それらは、終局者にとり今でも計り知れないほどに貴重であり、また永遠の未来において全面的に役立つであろう。知力ある創造物の他のいかなる集団

も、時間と空間を超えることができるそのような人格化された使者部隊を所有してはいない。他の終局者部隊に配属される同様の型の使者-登録者は、人格化されない;それらは、准絶対化される。

31:2.2 (347.1) 重力の使者は、ディヴィニントンの出身であり、変更され人格化された調整者であるが、我々のユヴァーサ集団の誰も、これらの使者のなかの１名の本質についての説明を請け負いはしないであろう。我々は、それらが高度に人格的な存在体であると、神性で知的で、いじらしいほどにに思いやりがあるとは知っているが、空間を移動するそれらの不朽の手法については理解していない。それらには、ありとあらゆるエネルギー、回路、および重力でさえも利用する力が十分にあるらしい。人間部隊の終局者は、時間と空間に逆らうことはできないが、そうすることができる無限に近い精霊人格は、人間部隊の終局者と親交をもってきたし、それらの命令に服従する。我々は、重力の使者の人格とあえて呼ぶのだが、実際にはそれらは、超精霊の存在体、すなわち無限かつ広大無辺の人格である。それらは単独使者に比べ似ても似つかない人格系列のものである。

31:2.3 (347.2) 重力の使者は、無限の数で終局者の一団に配属されるかもしれないが、1名の使者だけが、仲間の長たるものだけが、人間の終局者部隊に召集される。しかしながら、この長には999名の常置隊員である仲間の使者が割り当てられ、また必要に応じて予備部隊の補佐を無制限に要請することができる。

31:2.4 (347.3) 重力の使者と栄光の人間終局者は、互いへの感動的で深遠な愛情をえる;両者には多くの共通点がある:一方は、宇宙なる父の断片の直接の人格化であり、他方は、同じ宇宙なる父の断片、すなわち精霊思考調整者と融合された生残する不滅の魂に存在する被創造の人格である。

3. 栄光の人間

31:3.1 (347.4) 第一終局者部隊の大部分は、上昇の調整者-融合の必滅者からなる。それらは、通常養子の、そして栄光の熾天使と合わせて各終局者集団で990名を構成する。数のうえでは人間が熾天使にはるかに上回るとはいえ、人間と天使の割合は、いかなる1集団においても異なる。物質の息子は、ハヴォーナ出身者、栄光の物質の息

子、栄光の中間創造物、重力の使者、未知の、それに行方不明の隊員は、部隊のほんの1パーセントである。1,000名の終局者を有する各集団には、これらの非必滅者と非熾天使の人格のちょうど10名の空きがある。

31:3.2 (347.5) ユヴァーサからの我々は、時間の上昇の必滅者のための「終局者の目標」を知らない。それらは、現在楽園に住んでおり一時的に光と生命の部隊で勤務しているが、上昇訓練のそのような猛烈な課程と長きにわたる宇宙教練は、信用の評価のためのより重大な検査と責任課題ためのより高尚な奉仕に向けてそれらに資格を与えるように意図されなければならない。

31:3.3 (347.6) これらの上昇の必滅者が、楽園に達し終局者部隊に召集され地方宇宙の活動に参加するために、また超宇宙業務の管理を補佐するために、大勢で送還されてきたにもかかわらず、—この明らかな目標にもかかわらず、それらは、唯一の6番目-段階の精霊として記録されているという重要な事実を残している。疑う余地なく、人間の終局者部隊の経歴においてもう一つの段階が残っ

ている。我々は、その段階の本質を知らないが、3個の事実を認識してきており、ここでそれに目を向ける:

31:3.4 (348.1) 我々は、小領域滞在中の必滅者は、第1系列の精霊であり、小領域へ移されるときは第2系列に、超宇宙の中央の訓練世界へと行くときは第3系列へと進むということを記録から知っている。ハヴォーナの第6回路到着後の人間は、４次の精霊、または卒業生の精霊になり、宇宙なる父を見つけると第5系列の精霊になる。それらは、宣誓をするにあたり、次に、6番目の段階の精霊生活に達し、この宣誓は、人間終局者部隊の永遠の任務へと永遠にそれらを喚起する。

31:3.5 (348.2) 我々は、精霊の分類、すなわち名称が宇宙貢献の1領域から他の領域への、あるいは1宇宙から他の宇宙への前進により決定されてきたと観察する。それに我々は、7番目-精霊分類の人間終局者部隊への贈与は、これまでは非記録で非啓示の球体での奉仕における永遠の任務への前進と同時であろうと、また崇高なる神への到達に並立するであろうと推量する。しかし、我々は、これらの大胆な憶測は別として、このすべてに関してあなた

が知っている以上には本当に何も知らない;人間の経歴についての我々の知識は、楽園の現在の目標を越るには至らない。

31:3.6 (348.3) 2. 人間終局者は、「完全であれ、」という時代の命令に完全に従った。それらは、人間到達へ向けての普遍の道を昇った;神を見つけ、正当に終局者部隊になった。そのような存在体は、究極の精霊状態の最終的状態ではなく、精霊進行の現在の限界に達した。人間終局者は、創造物貢献の最終的段階ではなく、創造物の完全性の現在の限界を達成した。それらは、経験的な神格到達の最終的状態ではなく、神崇拝の豊かさを経験した。

31:3.7 (348.4) 3. 楽園終局者部隊の栄光の人間は、知的存在に属する最大可能な生命についての現実と哲学に関する全段階の経験的知識を有する上昇の存在体である;　そして、最も低い物質界から楽園の精霊の高さへのこの上昇時代の間中、これらの生残創造物は、時間と空間の慈悲深く寛容であるばかりでなく、正当で効率的な全普遍的創造の管理に関わる神のあらゆる原則のあらゆる詳細についての自らの能力の限界まで訓練されてきた。

31:3.8 (348.5) 我々は、人間には我々の意見を共有する資格があり、また楽園終局者部隊の究極目標の神秘に関し、我々とともに推測する自由があると考える。完成された進化の創造物の現在の課題、任務は、宇宙理解と超宇宙行政の大学院課程の性質を帯びている、と明白に思われる;また、我々は皆、「神は、なぜ宇宙の管理方法においてまことに徹底的な訓練に生残する必滅者にそれほどまでに関与するのか。」と問いかける。

4. 養子の熾天使

31:4.1 (348.6) 人間の忠実な熾天使の保護者の多くには、人間の被後見人との上昇経歴の経験が許されており、またこれらの守護天使の多くは、父融合後に、終局者の永遠の宣誓に際しては臣下に加わり、必滅者の仲間の目標を永遠に受け入れる。必滅存在体の上昇経験を通過する天使は、人間性の目標を共有しているかもしれない;それらは、対等に永遠にこの終局者部隊に召集されるかもしれない。養子の、栄光の熾天使大勢は、必滅ではない様々の終局者部隊に配属される。

5. 栄光の物質の息子

31:5.1 (349.1) 時間と空間の宇宙においては対策があり、それによって地方体制のアダーム公民が、惑星任務の受け入れに大きく遅れている際、永久的-公民状態からの解除の申請を始めるかもしれない。そして、もし許可されるならば、それらは宇宙首都に上昇する巡礼者に合流し、そこから楽園と終局者部隊へと前方に進む。

31:5.2 (349.2) 高度な進化世界が、光と生命の時代の後に到達するとき、物質の息子たち、すなわち惑星のアダームとハヴァーは、人間らしくなることを選び調整者を受けいれ、また人間終局者部隊への宇宙上昇先導の進化の方向に乗り出すかもしれない。物質の息子の一部は、アダームがユランチアでしたように生物促進者としての任務において部分的に失敗するか、または技術的に履行を怠る; それらは、次にやむを得ず領域の民族の本来の進路を取り、調整者を受け入れ、死を潜り抜け、信仰により上昇計画を進展させ、続いて楽園と終局者部隊に達するのである。

31:5.3 (349.3) 物質の息子は、多くの終局者集団には見られない。それらの臨場は、そのような集団への高度の奉仕の

可能性に大きな将来性を与えるし、その指導者として不変的に選ばれる。エ-デンの１組の男女両者が、同じ集団に配属されるならば、それらは通常、1人格として共同で機能することが許される。そのような上昇の１組は、上昇の必滅者よりも訓練の冒険にはるかに成功している。

6. 栄光の中間創造物

31:6.1 (349.4) 中間創造物は、多くの惑星において数多く創造されているが、光と生命に定着後にはその出身世界には滅多に留まらない。それらは、その時またはその直後、時間と空間の必滅者とともにモロンチア世界、超宇宙、およびハヴォーナを通り抜け、永久的-公民状態を免除され楽園への上昇を開始する。

31:6.2 (349.5) 様々な宇宙からの中間創造物の起源と本質は大いに異なるが、中間創造物はすべてが、楽園終局者部隊のどれか一つに属するよう運命づけられている。二次中間者は全員が、ゆくゆくは調整者融合であり、必滅者部隊に召集される。多くの終局者集団のそれぞれには、これらの栄光の存在体の1名がいる。

7. 光の福音

31:7.1 (349.6) 現在、あらゆる終局者集団には、宣誓状態にいる人格、つまり永久的隊員数が、999名に達している。空席は、いかなる単一任務に割り当てられた光の福音に所属の長により埋められる。しかし、これらの存在体は、部隊の一時的隊員であるにすぎない。

31:7.2 (349.7) 終局者のいかなる部隊勤務に割り当てられた天のどの人格も、光の福音者と命名される。これらの存在体は、終局者の誓いを立てないし、部隊組織に従属はいるものの、永久的配属ではない。この集団は単独使者、超熾天使、第二熾天使、楽園公民、あるいはそれらの三位一体化の子を擁するかもしれない—終局者の一時的任務遂行に必要とされるいかなる存在体。我々は、永遠の任務に付いた部隊がこれらの存在体を有することになっているかどうかを知らない。これらの光の福音者らは、定着の終結とともに自らの以前の状態を取り戻す。

31:7.3 (350.1) 現在のところは人間の終局者部隊として構成されているように、永久隊員のちょうど6集団がある。終局者は、期待されているかもしれないように、将来の仲

間の主体性に関し多く推測をしているが、それらの間での協定はあまりない。

31:7.4 (350.2) ユヴァーサ出身の我々は、しばしば終局者の第7集団の主体性に関し推測する。我々は、楽園、ヴァイスジェリントン、およびハヴォーナの内側の回路における多数の三位一体化集団のいくつかの増え続ける部隊の可能な任務を擁し、多くの考えを検討する。終局者部隊は、現在製作中の宇宙への奉仕に予定される場合、宇宙行政の仕事にかかわる自分達の補佐の多くを三位一体化することが許されるかもしれないと推測さえされる。

31:7.5 (350.3) 我々のうち1名は、部隊におけるこの空位が今後のそれらの奉仕の新しい宇宙に起源がある何らかの存在体の型によって埋められるという意見を保持している; 別のものは、この場所は未だ作成されていない、結果に至っていない、あるいは三位一体化されていない何らかの型の楽園人格により埋められるであろうと信じる傾向にある。しかし、実際に知る前に、我々は、それらの第7段階の精霊到達時に終局者の入り口で待ち受けていそうである。

8. 先験的存在体

31:8.1 (350.4) 終局者としての楽園における完了の必滅者の経験部分は、準絶対属性の帰結の存在体である楽園の先験的超公民の1,000を超える集団の性質と機能についての理解にいたる努力にある。上昇の終局者は、これらの超人格とのつながりにおいて進化した終局者を楽園の新しい同胞に紹介する任務に携わる数多くの先験的な奉仕活動者系列の有益な指導の大いなる援助を受ける。先験的存在体の系列全体は、自分たちが占有する広大な領域の楽園の西に住んでいる。

31:8.2 (350.5) 我々は、先験的存在体に関する議論にあたり人間の理解の限界による制限ばかりではなく、楽園の人格に関するこれらの公開を統制する命令条件にも制限される。これらの存在体は、決してハヴォーナへの人間上昇とは関連がない。主たる宇宙業務の超宇宙行政だけに関する楽園の先験的存在体の巨大な部隊には、ハヴォーナ、あるいは7超宇宙のいずれの業務にも全く無関係である。

31:8.3 (350.6) 創造物であるあなたは、創造者を思い描くことができるが、創造者でも創造物でもない知力ある存在体の巨大かつ多様な集合体が存在するということをとても理解することはできない。これらの先験的存在体は、存在体を創造しないし、それらも決して創造されたのではない。それらの起源について話すにあたり、新しい用語—気まぐれの、無意味な名称—の使用を避けるために我々は、先験的存在体は、単純に帰結する、生じると言うのが最適であると考える。神格絶対者は、その起源に関係があったのも当然かもしれないし、また先験的存在体の目標に関わっているかもしれないが、これらの特異な存在体は今、神格絶対者に支配されてはいない。それらは、究極なる神に従属しており、それらの現在の楽園滞在は、あらゆる面で三位一体に監督され指示されている。

31:8.4 (351.1) 楽園に到達するすべての人間は、楽園公民とそうするように先験的存在体と頻繁に親しく交わるとはいえ、主たる宇宙の建築家の主席議長である先験的存在体の長により永遠の三位一体の誓いがとり行なわれるとき、新しい終局者集団の１構成員として人間の上昇者

は、終局者の受け入れ回路に立つとき、先験的存在体との人の最初の重大な接触がその波瀾万丈のその時に起こるということが明らかになる。主語

9. 主たる宇宙の建築家

31:9.1 (351.2) 主たる宇宙の建築家は、楽園の先験的存在体の統治部隊である。この統治部隊は、極めた心、優れた精霊、崇高な準絶対を持つ28,011の数の人格に達する。有する人格は、28,011に達する。この壮大な集団の主席幹部、つまり上級の熟練建築家は、神格の水準下の楽園全有識者の調整長である。

31:9.2 (351.3) これらの談話を認可する命令にある16番目の禁止事項は、示している:「賢明であると判断されるならば、主たる宇宙の建築家とその仲間の存在は、明らかにされるかもしれないが、その起源、本質、および目標は、完全に明らかにされないかもしれない。」我々は、しかしながら、これらの熟練建築家が准絶対の7段階に存在するということをあなたに知らせても差し支えない。これらの7集団は次の通りに分類される:

31:9.3 (351.4) 1. 楽園段階。上級建築家か、最初に-帰結の建築家だけが、準絶対のこの最上段階において機能する。この究極の人格—創造者でも創造物でもない—は、結局は永遠の夜明けになり、楽園の絶妙の調整者とその関連活動の21の世界として現在機能しているのである。

31:9.4 (351.5) 2. ハヴォーナ段階。第2建築家の帰結は、3名の熟練の立案者と準絶対の行政者をもたらし、それらは中央宇宙の10億の完全球体の調整につねに専念してきた。楽園の言い伝えは、これらの3建築家は、前帰結の上級建築家の助言と共に、ハヴォーナの計画に貢献したと断言するが、我々には本当のところは分からない。

31:9.5 (351.6) 3. 超宇宙段階。第3準絶対段階は、楽園の主たる7精霊と共に、また無限の精霊の特別な7つの世界の崇高なる7幹部と共に、今ほぼ均等な時間を費やす集団として7超宇宙の熟練の7建築家を擁する。それらは、壮大な宇宙の超調整者である。

31:9.6 (351.7) 4. 一次空間段階。この集団には建築家70名がおり、我々は、現在の7超宇宙の境界を超えていま結集す

る外部空間の最初の宇宙のための究極的な計画に関係していると推測する。

31:9.7 (351.8) 5. 二次空間段階。この5番目の部隊には、490名の建築家がおり、それらは、既に我々の物理学者が明確なエネルギー動員を探知した外部空間の第2宇宙に関係があるに違いないと、我々は、再び推測するのである。

31:9.8 (352.1) 6. 三次の空間段階。熟練の建築家のこの6番目の集団には、3,430名がおり、それらは、外部空間の第3宇宙のための巨大計画に専念しているかもしれないと、我々は、同様に推論する。

31:9.9 (352.2) 7. 四次空間段階。これ、最後の、そして最大の部隊は、24,010 名の熟練の建築家から成り、もし我々の前文の憶測が妥当であるならば、それは、外部空間の絶えず増加する規模の宇宙の4番目と、そして最後と関連づけなければならない。

31:9.10 (352.3) 熟練の建築家のこれらの7集団は、合計28,011名の総宇宙立案者である。永遠のはるか昔、第28,012番の熟練の建築家が、帰結を試みたというが、この存在体

は、宇宙なる絶対者による人格掌握を経験し、准絶対化に失敗したという言い伝えがある。前後関係熟練の建築家の一連の上昇が、第28,011番の建築家における准絶対性の限界に達するということ、そして28,012番目の試みが、絶対者の臨場の数学的段階に遭遇したということは、可能である。言い換えれば、28,012番目の帰結段階における准絶対性の特性は、普遍者の段階に相当し、絶対者の価値に至ったのである。

31:9.11 (352.4) それらの機能的な組織においてハヴォーナの3統轄建築家は、単独の楽園建築家への准補佐として行動する。超宇宙の7建築家は、ハヴォーナの3名の監督の同位者として行動する。第一外空間段階の宇宙の70名の立案者は、現在のところ7超宇宙の7建築家への准補佐として務めている。

31:9.12 (352.5) 主たる宇宙の建築家には、最初の帰結の、また準先験的存在体である根源力の組織者の巨大な2系列を含む思うままにできる補佐と助手の多数の配置集団がいる。これらの主たる根始力の組織者は、壮大な宇宙に密

接に結びついている力の指揮官と混同されてはならない。

31:9.13 (352.6) 例えば終局者の三位一体の子らと楽園公民などの時と永遠の子らの結合により産出されるすべての存在体は、熟練の建築家の被後見者になる。しかし組織された現在の宇宙において機能している他のすべての創造物あるいは実体のうち単独使者と喚起された三位一体の精霊だけは、先験的存在体と主たる宇宙の建築家とのいかなる有機的連携をも維持する。熟練の建築家は、地方宇宙の組織のために創造者たる

31:9.14 (352.7) 息子の宇宙への任務の技術承認を与える。熟練の建築家と楽園の創造者たる息子の間には非常に近い関係があり、この関係は非啓示であるが、あなたは、最初の経験的な三位一体の関係における建築家と壮大な宇宙にいる究極の創造者の提携について知らされてきた。これらの2集団は、進化の、経験的な崇高なるものとともに、先験的な価値と主たる宇宙の意味の三位一体の究極を構成する。

10. 究極の冒険

31:10.1 (352.8) 上級の熟練の建築家には終局者の7部隊の監督がおり、それらは次の通りである。

31:10.2 (352.9) 1. 人間終局者部隊

31:10.3 (352.10) 2. 楽園終局者部隊

31:10.4 (352.11) 3. 三位一体化の終局者部隊

31:10.5 (353.1) 4. 三位一体化の複合終局者部隊

31:10.6 (353.2) 5. ハヴォーナ終局者部隊

31:10.7 (353.3) 6. 先験的終局者部隊

31:10.8 (353.4) 7. 目標の非啓示の息子部隊

31:10.9 (353.5) これらの各目標部隊には、主席議長がおり、この7名の主席議長は、楽園に目標の最高協議会を制定する;グランドファンダは、現在の宇宙時代、究極の目標の子らのための宇宙任務にあるこの最高機関の長である。

31:10.10 (353.6) これらの7終局者部隊の集合は、おそらく崇高なるものの今後の主たる宇宙の機能をさえ超える可能

性、人格、心、精霊、准絶対、および体験上の実現性を現実移行することを意味する。7終局者部隊は、三位一体が、おそらく外空間宇宙における想像もできないような発展に備え有限性と準絶対性の根源力を集めることに従事している究極の三位一体の現在の活動を意味する。この動員らしきことは、楽園三位一体が、楽園とハヴォーナの当時の既存の人格を動員し、また時間と空間の映し出された７超宇宙の行政者と支配者としてそれらを任命したほぼ永遠に近い時代以来、行われたことはない。7終局者部隊は、外宇宙の未来-永遠の活動における将来の未発達の可能性の必要性に対する壮大な宇宙の神性反応を表す。

31:10.11 (353.7) 我々は、生息界の、すなわち新系列の優れた、しかも特異な存在体が住む新球体の将来の、より大きい外宇宙を大胆に予測する。これが、その究極性の中の物質的、崇高的宇宙、唯一重要な詳細に欠ける広大な創造—上昇生活の普遍的生活における実際の有限経験の臨場—であろう。そのような宇宙は、経験上の途轍もない不利な条件下に生まれるであろう:全能の崇高者の発達における参加の喪失。これらの外宇宙はすべて、崇高なる

ものの無比の奉仕活動と崇高な総括的管理の利益を得るが、崇高なるものの積極的な臨場の他ならぬその事実は、崇高なる神格の実現へのそれらの参加を前もって排除する。

31:10.12 (353.8) 壮大な宇宙の進化する人格は、宇宙時代の現在、崇高なる神の主権の不完全な実現に起因して多くの困難を受けるが、我々は皆、崇高なる神の発達の独自の経験を共有している。我々は、崇高なる神の中で進化し、崇高なる神は、我々の中で進化する。永遠の未来のいつか、崇高なる神格の進化は、宇宙歴史の成就された事実となるであろうし、この素晴らしい経験に参加する機会は、宇宙活動の舞台から通り過ぎてしまうことであろう。

31:10.13 (353.9) 宇宙の青春時代に我々の中のこの特異な経験を踏んだものは、すべての将来の永遠の至るところにこの特異な経験を秘蔵するであろう。そして、崇高なるものの時間 -空間進化に参加しなかった場合、他の同様に新規採用を行う6部隊と関連して、経験的欠如を代償する努力においてこれらの外端宇宙の行政をすることが、上

昇の、そして完成している必滅者の終局者部隊の徐々に増え続けている予備部隊の任務であるかもしれないと、我々の多くは推測するのである。

31:10.14 (353.10) これらの欠如は、宇宙存在の全段階において不可避である。精霊生存のより高い段階の我々は、宇宙時代の現在、進化の宇宙を治め、上昇する人間に奉仕活動をし、その結果より高い精霊的経験の現実におけるそれらの欠如の埋め合わせを試み、いま下りて来るのである。

31:10.15 (354.1) たとえ外側のこれらの創造に関わる主たる宇宙の建築家の計画について本当に何も知らなくとも、それでもやはり我々は、3つの事柄に関して確信している:

31:10.16 (354.2) 1. 外空間の領域において徐々に組織化している宇宙の巨大で新しい体系が実際にある。物理的創造の新系列、つまり生息の組織された創造の現在の領域をはるかに超えた群れて動く宇宙の多くの途方もなく巨大な回路は、あなたの望遠鏡を通して実際に見えるのである。現在のところ、これらの外側の創造は完全に物理的であ

る;それらには、明らかに居住者はなく生物による管理を欠いているようである。

31:10.17 (354.3) 2.他の6終局者部隊と関連し、時間と空間の完成して上昇する存在体の説明されない、かつ完全に神秘的な楽園動員が、 何時代も続いている。

31:10.18 (354.4) 3. 神格の崇高な人格体は、これらの活動に付随して超創造の全能の主権者として力を得ている。供給している。

31:10.19 (354.5) 我々が、創造物、宇宙、および神格を含むこの三位一体の進展を見るとき、何か新しく非啓示のものが主たる宇宙における頂点に近づくと期待する我々を批判できるであろうか。我々が、これまでの未知のそのような規模における物理的宇宙のこの長年の動員と組織と崇高なるものの人格出現を神性の完全性へと増進する時間の必滅者のこの途轍もない向上計画と、そして終局者部隊における楽園でのその後の動員—宇宙神秘に包まれている名称と運命—とを結びつけて考えることは当然なことではないか。終局者部隊の集合は、それぞれが現在の超宇宙のうちのいずれか1つよりもすばらしい少なくと

も7万の物質集合体の群がりを我々がすでに確認ができる外空間の宇宙における何らかの今後の奉仕に運命づけられてるということは、ますます全てのユヴァーサが信じるところである。

31:10.20 (354.6) 進化の必滅者は、空間の惑星に生まれ、モロンチア世界を通過し、精霊宇宙を昇り、ハヴォーナ球体を横断し、神を見つけ、楽園に到達し、第一終局者部隊に召集され、その中にあって宇宙奉仕の次の課題を待ち受ける。集合する他の6終局者部隊があるが、人間の最初の上昇者であるグランドファンダは、終局者の全系列の楽園長として取り仕切る。そして、我々は、この崇高さを眺めるとき、強調的に言う。動物-起源の時間の子らにとっての、空間の物質の息子らにとっての何という栄光の目標!

31:10.21 (354.7) [ユヴァーサの日の老いたるものにより機能するように認可された神性顧問と名前と番号を持たないものたちによる共同後援]

31:10.22 (354.8) 神格の本質、楽園の現実、中央宇宙と超宇宙の組織および働き、壮大な宇宙の人格、そして進化する必

滅者の高い目標を描写するこれらの31の論文は、西暦1934年に、ネバドンに属するノーラチアデクのサタニア606号であるユランチアにおいて我々が、これをするべきように指示するユヴァーサの日の老いたるものにより出された命令に従い行動する24名のオーヴォントンの行政者から成る高等弁務官により後援され、策定され、英語に翻訳された。

ウランティア・ブック

第II. 部 小銀河団について

論文 32
地方宇宙の発展

32:0.1 (357.1) 地方宇宙は、マイケルの楽園系列の創造者たる息子の業によるものである。それは、それぞれが、100の棲息界の体制を抱き込む100の星座を構成する。各体制は、やがては1,000程の棲息圏を包含するであろう。

32:0.2 (357.2) 時間と空間のこれらの宇宙は、すべて進化的である。楽園のマイケルの創造的計画は、常に物理的で、知的で、精霊的であり、またそのような地方宇宙を

包括する圏にある様々な系列に生息する多種多様の創造物のゆるやかな進展と累進的発展の道に沿って進む。

32:0.3 (357.3) ユランチアは、その主権者がネバドンの神-人間である、すなわちナザレのイエススでありサルヴィントンのマイケルである地方宇宙に属する。そして、この地方宇宙のためのマイケルの全計画は、イエススが空間の最高の冒険に乗り出す前に楽園の三位一体により全面的に承認された。

32:0.4 (357.4) 神の息子達は、自身の創造者活動領域を選んでもよいのだが、これらの物質的創造は、そもそも宇宙の楽園の建築者達により考案され計画された。

1. 宇宙の物理的発生

32:1.1 (357.5) 前宇宙の空間-根源力と根本的エネルギーの操作は楽園の主たる根源力の組織者の仕事である。しかし、超宇宙の領域においては、生まれつつあるエネルギーが地方の、あるいは線的重力に反応し始めると、楽園の主たる根源力の組織者は、関係する超宇宙の力の責任者を優先させて退く。

32:1.2 (357.6) 力の管理者は、単独で地方宇宙の創造段階の物質以前の、力の後の局面において機能する。力の責任者が、出現しつつある宇宙のために物質的な基礎—文字通りの太陽と物質的球体—を供給するために十分に空間-エネルギーの動員に効果をもたらすまでは、創造者たる息子には宇宙組織を始める機会は何もない。

32:1.3 (357.7) 地方宇宙はすべて、物理的規模において大いに異なり、その時々に目に見える物質内容は様々であるかもしれないが、ほぼ同じエネルギーの可能性をもつ。地方宇宙への力の補充と可能な物質の授与は、創造者たる息子の活動はもとより力の管理者とその前任者の操作により、また創造者たる息子の創造的な仲間によって保持される固有の物理制御の授与によって決定される。

32:1.4 (358.1) 地方宇宙エネルギー補充は、その超宇宙の力の授与のおよそ1/100,000である。あなたの地方宇宙であるネバドンの場合、質量の物質化は、　取るに足りないほどである。物理的に言って、ネバドンは、オーヴォントンの地方創造のいずれにおいても見られるエネルギーと物質の物理的授与のすべてを所有している。ネバドン宇

宙の開発拡大にける唯一の物理的制限は、総合体としての宇宙機構の関連する力と人格の重力支配により閉じ込められる空間エネルギーの量的補充にある。

32:1.5 (358.2) エネルギー物質が、質量物質化の一定局面に達すると、楽園の創造者たる息子は、無限の精霊の創造の娘に伴われてその場面に現れる。創造者たる息子の到着と時を同じくして、作業が、考案された地方宇宙の本部世界になる建築球圏で始められる。そのような局部的創造が展開する長い期間、太陽は、安定し始め、惑星は、その軌道を形成し弧を描いて回り、一方星座本部と体制首都の役割を果たすことになる建築世界創設の作業が続く。順番

2. 宇宙の組織化

32:2.1 (358.3) 創造者たる息子には、第三根源と中枢に起源をとる力の管理者と他の存在が先行する。あなたの創造者たる息子であるマイケルは、あらかじめこのようにして組織化された空間のエネルギーからネバドンの宇宙の棲息領域を確立し、以来ずっとその管理にきめ細かに専念してきた。これらの神性の息子は、前存在エネルギーか

ら目に見える物質を具体化し、動物を考案し、そして無限の精霊の宇宙臨場の協力で精霊人格のさまざまの部下を創造する。

32:2.2 (358.4) 創造者たる息子のずっと以前、宇宙組織の予備の物理的作業においてこれらの力の管理者とエネルギー制御者達は、当初組織し回路にのせたそれらのエネルギーの関連する支配に永久に留まり、この宇宙なる息子との素晴らしい繋がりで後に役目を果たす。サルヴィントンでは、この地方宇宙の最初の形成において協同した同じ100の力の中心部が、あなたの創造者たる息子と共にいま機能している。

32:2.3 (358.5) 物理的創造の完成されたネバドンでの最初の活動は、その衛星とともに本部世界機構に、すなわちサルヴィントンの建築圏においてであった。力の中心部と物理支配者の初期の移動時からサルヴィントンの完成された球体の生きているものの到着までには、あなたの現惑星時間でのわずかに10億年以上が介在した。考案された星座の100の本部世界の創造と考案された地方宇宙の惑星支配と行政の1万の本部圏の創造が、各建築衛星と共

にサルヴィントンの建設直後に続いた。そのような建築世界は、モロンチア、あるいは存在体の過渡期の段階はもとより物理的人格と精霊的人格の双方に対応するように設計されている。作られている

32:2.4 (359.1) ネバドンの本部であるサルヴィントンは、地方宇宙の正確なエネルギー物質の中心に位置する。しかし大きい体系は、その物理的中心に存在しているものの、あなたの地方宇宙は、単独の天文体系ではない。

32:2.5 (359.2) サルヴィントンは、ネバドンのマイケルの個人的本部であるが、いつもそこに見つけられるというわけではない。あなたの地方宇宙の円滑な機能は、もはや首都圏での創造者たる息子の定着的臨場を必要としないが、これは、物理的組織の以前においてはそうではなかった。創造者たる息子は、十分なエネルギーが物質の相互誘引により互いが釣り合うように種々の回路と機構を可能にできる具体化により領域の重力安定化に効果をもたらすそのような時まで自分の本部世界を去ることができない。創造者たる息子は、十分なエネルギーの物質化が、種々の回路と機構を物質の相互誘引により互いの釣

り合いが可能にする領域の重力安定化に効果をもたらすそのような時まで自分の本部世界を去ることはできない。

32:2.6 (359.3) やがて宇宙の物理的計画は完成され、創造者たる息子は、創造の精霊と関連して生命創造の自己の計画を実行する。するとすぐに、無限の精霊のこの提示は、明確な創造的人格としての彼女の宇宙機能の機動にはいるのである。この最初の創造的行為が系統立てられ執行されるとき、同一性のこの初期の創造的概念と神性の理想の人格化である輝く明星が突如として出現する。これは、創造者たる息子の個人的な仲間であり、神性の属性が著しく制限されるものの性格のすべての局面において創造者たる息子のような宇宙の最高責任者である。

32:2.7 (359.4) さて、創造者たる息子の片腕となる助手と最高責任者が与えられ、広大で素晴らしい異なる創造物の配列の誕生が続く。地方宇宙の息子と娘が現れつつあり、その後間もなく宇宙の最高協議会から星座の父と地方体系—意志をもつ被創造物の人間の様々な人種の家となるよう設計されるそれらの世界の集合体--の君主へと広が

るそのような創造の政府が設置される。そして、これらの世界のそれぞれが、惑星王子により統括されるであろう。

32:2.8 (359.5) 次いで、創造者たる息子は、これほどまでにそのような宇宙が完全に組織化され、要員が十分に配置されると、人間を自分と父の神格の姿に創造するという父の提案を実行し始めるのである。

32:2.9 (359.6) 惑星居住の組織化は、この宇宙が、オーヴォントンの星と惑星の領域の実に若い一団であるが故に、ネバドンでは今なお進行中である。最後の登録でネバドンには384万101の居住惑星があり、またあなたの世界の地方体系であるサタニアは、他の体系を大いに代表するものである。

32:2.10 (359.7) サタニアは、一定の物理的体系ではなく単一の天体単位でも組織でもない。その619の居住世界は、500以上の異なる物理的体系に位置する。そのうちの5体系のみが、3個以上の棲息界をもち、その内の1つだけが人の住まう4個の惑星を持ち、一方2つの居住世界を持つのは、46体系である。

32:2.11 (359.8) 棲息界のサタニア系は、ユヴァーサと7番目の超宇宙の物理の、あるいは天文の中心として機能するその大なる太陽集団からは遠くに取り外されている。それは、サタニア本部のジェルーセムから銀河密集状態の直径のはるかかなたのオーヴォントンにある超宇宙の物理的中心部へは20万光年以上ある。サタニアは地方宇宙の外周にあり、ネバドンは、現在オーヴォントンのはずれのかなり外側にある。棲息界の一番はずれの体系から超宇宙の中心へは、25万光年足らずである。

32:2.12 (360.1) ネバドンの宇宙は、現在オーヴォントンの超宇宙回路の遠く南東に揺動する。最近接の宇宙は次の通りである。アヴァロン、ヘンセロン、サンセロン、ポータロン、ウォルヴェリング、ファノヴィング、アルヴォリング。

32:2.13 (360.2) それにしても、地方宇宙の発展は、長きにわたる物語である。超宇宙を扱う論文は、この主題を紹介し、地方創造を扱うこの部分の論文は、それを続け、その後に続く論文は、ユランチアの歴史と将来の目標に触れて物語を終える。しかし、あなたは、かつてあなた自

身の進化する世界において人間の姿でのその生活を送ったような創造者たる息子に関する人生と教えの物語の精読によってのみ、そのような地方創造の人間の将来の目標を適切に理解できるのである。

進化的考え

32:3.1 (360.3) 時間と空間の物理的体系は、元来はすべて進化的である。それらは、各超宇宙の定着回路にのせるまで物理的にさえ安定していない。地方宇宙は、拡大と開発の物理的可能性が消耗するまで、その上、そのすべての棲息界の精霊の地位が永遠に治まり安定するまで光と生命の中に定着はしない。

32:3.2 (360.4) 時間と空間の物理的体系は、起源においてはすべて進化的である。それらはそれぞれの超宇宙の定着回路にのせるまで物理的にさえ安定していない。地方宇宙は、拡大と開発の物理的可能性が消耗するまで、その上、そのすべての棲息界の精霊の地位が永遠に治まり、安定するまで、光と生命の中に定着しない。

32:3.3 (360.5) 完全性は、中央宇宙の中以外では進歩的到達である。我々は、主要な創造においては完全性の型を持っ

ているが、他のすべての領域では、それらの特定の世界か宇宙の前進のために確立された方法によりその完全性に到達しなければならない。そして、ほとんどの無限の多様性は、各地方宇宙の組織、発展、矯正の教授、加えて、定着に向けて創造者たる息子の計画を特徴づける。

32:3.4 (360.6) あらゆる地方宇宙は、父の神格の臨場を除き、ある意味において、中央の行政組織、あるいは型創造の複製である。宇宙なる父は、居住宇宙に自ら臨場してはいるものの、時間と空間の人間の魂と共に文字通りの意味で住んでいるようにはその宇宙に起源をもつ存在体の心には宿らない。広範囲の創造の精霊的活動の調整と規則には、すべて賢明な補償があるように思える。父は、中央宇宙においてはそのようなものとして個人的に臨場しているが、完全なその創造の子供の心には不在である。空間の宇宙においては、君主たる息子が、代理を努めており、父本人は、不在である。その間、父は、これらの意志をもつ被創造物の心に住まう神秘訓戒者の前人格の臨場が精霊的に代理を努め、人間の子供達の心に親密に臨場する。

32:3.5 (360.7) 宇宙なる父の人格的臨場を除く自己充足的権威と行政自治をもつすべての創造者と創造的人格が、地方宇宙の本部に住んでいる。地方宇宙には、宇宙なる父を除く中央宇宙に存在する全階級の知的存在体の何者かについて、また何者かの何かについての発見がある。宇宙なる父は、地方宇宙には自らは臨場していないとはいえ、直接には創造者たる息子、神の先の代理人、後には主権を有する最高の、君主たる支配者が、その代理を務める。

32:3.6 (361.1) 我々が生命の段階を下方に行けば行くほど、目には見えない父の居場所の信仰の目による識別は、ますます困難になる。下等の被創造物には、—時としては高等の人格でさえ—創造者たる息子の中に宇宙なる父を常に認識することは難しいと分かる。精霊的高揚の時を待つ間、発達の完全化が神に直接に会うことを可能にするとき、下等の被創造物は、次第に疲れてきて、精霊上の疑問をいだき、混乱に陥り、こうして時間と宇宙の進歩的な精霊の目的から自分自身を隔離する。彼らは、このように創造者たる息子をじっくり見ているときに父に会う能力を失う。父に至る長い葛藤を通じての生物のため

の最も確かな防衛は、生来の状態がそのような到達を不可能にするこの時、その息子の中の父の臨場の真実-事実に粘り強く掴まることである。父と息子は、文字通りにも比喩的にも、精霊的にも人格的にも一つである。これは事実である。創造者たる息子を見たものは父を見たということ。

32:3.7 (361.2) ある宇宙の人格は、最初は、神格への関係の度合に比例してのみ安定し信頼できる。生物起源が、最初の神性の根源からかなり遠のくと、我々が神の息子、あるいは無限の精霊に属する奉仕活動の被創造物に対応しているか否かに関係なく、不調和、混乱、時には反逆—罪—の可能性が増大する。

32:3.8 (361.3) 神格起源の完全な存在体は例外として、超宇宙の意志をもつすべての被創造物は、下等の状態に始まり上向きに登る、事実上は内へと進化の本質をもつものである。非常に精霊的な人格でさえ、生活から生活へと、世界から世界へと向上的移動による生命の段階を昇り続ける。神秘訓戒者を歓待する者の場合は、その精霊的上昇と宇宙到達の可能な高さには、実に何の限界もない。

32:3.9 (361.4) 時間の生物の完成とは、遂に達成されるとき、完全に修得というもの、正真正銘の人格所有というものである。恩恵の要素は、自由に混合しているとは言うものの、創造物到達は、個々の努力と実際の生活、すなわち既存環境への人格反応の結果である。

32:3.10 (361.5) 動物進化の起源の事実は、それが意志をもつ有限の知的創造物の2つの基本的な型の1つを産する排他的方法であるので、宇宙の観点からすればいかなる人格にも汚名を着せない。完全性と永遠の高みに達するとき、人生の低部に始まり、そして嬉々として、ぐるぐると、生命のはしごを登る者の、また、栄光の絶頂に達するとき、人生の底部から天辺までのあらゆる局面に関わる実際の知識を具体化する個人的経験を積む者のなお一層の栄誉である。

32:3.11 (361.6) 創造者の知恵は、すべてに示されているのである。すべての人間を完全なものにすること、自らの神の言葉によって完全性を伝えることは、宇宙なる父にとって同じく簡単であろう。しかし、それは、長くゆるやかな内部への潜り込みに付随する冒険と鍛練からの素晴ら

しい経験、つまり幸運にも生活のどん底から始める者によってのみ積まれる経験を奪うであろう。

32:3.12 (362.1) ハヴォーナを取り囲む宇宙においては、生命の進化段階にいる上昇者向けの模範教師の案内者の需要に合致する数の完全な被創造物だけを有する。進化の型の人格の経験的本質は、楽園-ハヴォーナ創造物のつねに完全な本質がもつ、の、宇宙の自然な補足物である。現実には、完全な創造物と完成された創造物の両者は、有限全体の点では不完全である。しかし両者の型は、進化的宇宙から上昇する経験的には完成された終局者との楽園-ハヴォーナ体系の実存的には完全な創造物の補完的関係において固有の限界からの解放を見い出し、その結果、創造物の究極の地位における高尚な高みへの到達を共同で試みるかもしれない。

32:3.13 (362.2) 創造物のこれらの処置は、七重の神格の中の活動と反応であり、そこでは、楽園三位一体の永遠の神性が、崇高なるものの力の実現化の中において、それにより、またそれを介しての時空間宇宙の崇高な創造者の発展する神性と結合される。

32:3.14 (362.3) 神のように完全な創造物と完成された進化的創造物は、神性の可能性の度合いにおいては等しいが、本質的に異なる。それぞれが、奉仕の崇高性に達するために他方に頼らなければならない。進化的超宇宙は、上昇する公民のための最終訓練を提供するために完全なハヴォーナに頼るが、完全な中央宇宙もまたその下降する居住者の完全な進化に備えるために完成する超宇宙の臨場を必要とするのである。

32:3.15 (362.4) 有限現実の2つの主要な顕現は、すなわち先天の完全性と進化された完全性は、人格か宇宙であるかにかかわらず、調和し、依存し、統合している。それぞれが、機能、奉仕、将来の目標の完成を遂げるためにもう一方を必要とする。

4. 地方宇宙との神の関係

32:4.1 (362.5) 宇宙なる父は、それほどまでに自分自身と力の多くを他者へ委任したという理由で、神格の協力関係につらなる沈黙の、あるいは不活発な成員であるという考えを抱いてはいけない。人格の領域と調整者の贈与は別として、宇宙なる父は、極力永遠の目的遂行を果たすた

めに神格等位者、自分の息子、および多数の創造された有識者に許すそれに明らかに楽園の神格の中で最も積極的でないのである。対等の、あるいは従属の仲間のいずれもが、できることを決してしないという理由においてのみ、創造的な三つ組の中の沈黙の一員である。

32:4.2 (362.6) 神は、あらゆる知的な生物の機能と経験の必要性に十分に理解があり、それゆえあらゆる状況において、宇宙の目標に関するものであろうと、被創造物の中の最下級にある者達の福祉に関するものであろうと、本質的に自分と任意の宇宙状況または創造的な出来事の間にきら星のようにいる創造物の人格と創造者の人格を支持して活動から退く。しかし、この退役、すなわち無限の調整のこの提示にもかかわらず、神としては、これらの定められた媒体と人格により、そしてそれらを通じてのこれらの出来事における実際の、文字通りの、そして個人的な参加がある。父は、広範囲にわたる自分の全創造の福祉のためにこれらの全回路のにおいて働いている。

32:4.3 (363.1) 宇宙なる父は、地方宇宙の政策、運営、行政に関して創造者たる息子の人の中にあって行動する。息子と神の相互関係において、第三根源と中枢内の人格の集団の関連性において、または人間といったような他のいかなる創造物との関係において、—宇宙なる父は、そのような関連性に決して介入しない。創造者たる息子の法、星座の父、体制君主、惑星王子の規則、—その宇宙のために定められた方針と手順—は、常に優先する。権威にいかなる分割もない。神性の力とその目的に、決して相反の働きはない。複数の神格には、完全で不変の合意がある。

32:4.4 (363.2) 創造者たる息子は、倫理的関連性、すなわち他のどのような階級への創造物のいかなる分割関係、またはいかなる任意の集団中の2名あるいはそれ以上の個人の関係の全ての問題において統治する。だが、そのような計画は、宇宙なる父が自身の方法で介入しないかもしれないということを意味しないし、その個人の現在の状態か将来の見通しに関し、また父の永遠の計画と無限の目的に関し全創造の中のいかなる個々の生物とともに神

の心を喜ばせるものは何でもしないということを意味しない。

32:4.5 (363.3) 意志をもつ必滅の創造物の中の父は、前人格の自分の精霊である内住する調整者に実際に臨場する。そして父もまた意志をもつそのような必滅の創造物の人格の源である。

32:4.6 (363.4) 宇宙なる父の贈与であるこれらの調整者は、かなり孤立しており、人間の心に宿るはするが、地方創造の倫理的問題には識別し得る何のつながりもない。それらは、熾天使の奉仕とも、また体制、星座、地方宇宙の行政とも、意志が自分の宇宙の最高の法である創造者たる息子の規則にさえ直接連携していない。

32:4.7 (363.5) 内住する調整者は、無限も同然の創造物と接触する神の別の、しかも統一された形態の1つである。人間には見えない神は、その臨場を明らかにし、またそうできれば、さらに他の方法で我々に自分を見せるであろうが、そのような更なる顕示は、神としてはありえない。

32:4.8 (363.6) 我々は、息子が自分の管轄の宇宙にかかわる親密かつ完全な知識を享受することにより機構を見て理解できる。我々には、神がそれほどまでに完全に、また直に宇宙の中の宇宙に精通しているその方法を完全に理解できないとはいえ、我々は、宇宙なる父が、自らの膨大な創造の存在体に関する情報を受け、またそれに自己の臨場を示すことができる手段に気づくことができる。父は、人格回路を通して認識する—直接的認識がある—全宇宙の全創造の全体制における全存在体の考えや行為について。我々は、子供との神の親交のこの方法を完全に理解できるわけではないが、「主は自分の子供を知る」ということ、我々各自の「生まれた場所に気づく」ということを確信して元気づけられることができる。

32:4.9 (363.7) 宇宙なる父は、あなたの宇宙の中とあなたの心の中に、精霊的立場から言って、主たる7精霊の１名によって、特に人間の心の深層に住まい、働き、待っている神性の調整者によって臨場している。

32:4.10 (363.8) 神は、自己中心の人格ではない。父は、自由に自分の創造と創造物に自身を分配する。神は、神格ばか

りにではなく神らしく行ない得る全行為をゆだねるその息子の中にもまた生きて行動する。宇宙なる父は、実に別の存在が実行できるあらゆる機能を自ら剥ぎ取った。これは、地方宇宙本部において神の代理で統治する創造者たる息子と同様にちょうど人間についても当てはまる。こうして、我々は宇宙なる父の理想的で無限の愛の仕事を見る。

32:4.11 (364.1) 我々は、神自身のこの普遍の贈与の中に父の神性の本質の重要性とその度量の両者についての十分な裏付けを得る。もし神が、宇宙創造に何にせよ自分を与えずにいたならば、その結果、その残留物の中から領域の人間に思考調整者を、つまり永遠に続く命の人間の候補者にとても我慢強く宿る時間の神秘訓戒者を、余りあるほどの寛大さで贈与する。

32:4.12 (364.2) 宇宙なる父は、言うなれば、人格所有と精霊的可能な到達において全創造を豊かにするために自分自身を注ぎ出した。我々が、神に似ることができるように我々に神自身を与え、他の全てをこのように投げ出して

しまうほどの愛のためにそれらのものの維持に必要な自らの力と栄光を留めおいた。

5. 永遠の、神性の目的

32:5.1 (364.3) 偉大で栄光ある目的が、空間を通過する宇宙の行進にはある。あなたの人間としての戦いのすべてが、空しいわけではない。我々は皆、計り知れない計画、巨大な事業の一部であり、それは、いかなる時も、またいかなる一生涯においてもその大部分を見ることは不可能である仕事の巨大さである。我々全員は、神が監督し成し遂げている永遠の事業の一部である。驚異で普遍的な全体構造は、空間を第一根源と中枢の無限の考えと永遠の目的の韻律ある音楽へと厳然として移動する。

32:5.2 (364.4) 永遠の神の永遠の目標は、高い精霊的理想である。時間の出来事と物質的存在の闘いは、他方への、すなわち精霊の現実と崇高な生活の約束の地に橋渡しをする一時的な足場である。もちろん、あなた方死すべき者には、永遠の目標についての考えを理解することは難しいと思う。あなたには実際、決して何か始まっていないもの、また決して終わっていないものである永遠という

考えを理解することができない。あなたにとってすべての馴染み深いものには、終わりというものがある。

32:5.3 (364.5) 我々には、個々の人生、領域の持続時間、あるいは関連する一連の出来事の年表に関し、孤立する時間の広がりを扱っているように思えるであろう。すべてには、始めと終わりがあるように思える。そして連続的に配列されるとき、そのような一連の経験、生活、時代、紀元は、一直線、すなわち永遠の無限の顔の向こう側に一瞬にきらいて孤立する時間の出来事を構成するように見えるであろう。このすべてを我々が裏面から見るとき、より包括的視点、より完全な理解というものは、永遠の根本的目的と基本的な反応との時間の相互作用を適切に明らかにするにはそのような説明は不十分であり、纏まりがなく、完全に相入れないということを暗示している。

32:5.4 (364.6) 私には、人間の心への説明の目的のために、周期としての永遠と、無限の円つまり一時的物質の時間の周期と何らかの方法で同時進行させる永遠の周期としての永遠の目的を考え合わせることが、より当然に思え

る。我々には、永遠の循環と接続された時間の領域に関しては、また、その部分の形成に関しては、ちょうど時間の世界の一時的な生命が、生まれ、生き、死ぬのと同様に、そのような一時的新時代が、生まれ、生き、死ぬという認識を迫られる。ほとんどの人間は、調整者融合の精霊段階の到達に失敗して死ぬので、死の著しい変化が、時間の枷と物質的創造の拘束を回避できる唯一可能な手順を構成し、その結果永遠の躍進的進行で精霊的歩みをとることを可能にされる。あなたは、時間と物質生活の試練の人生を乗り切った後、永遠と、部分としての永遠とさえ接触し続け、永遠の時代の回路の周りで空間の世界とともに揺り動き続けることが可能となる。

32:5.5 (365.1) 時間の領域は、人間の姿での人格の閃きのようなものである。時間の領域は、しばらくの間現れ、次には人間からは見えなくなり、永遠の回路の周りでの絶え間ない振りのより高度の生命の新しい俳優として、また連続する要素として再び現れる。宇宙なる父の中央の居住地域の周りの広大で、引き伸ばされた円を移動する範囲を定められた宇宙に永遠を一直線と思い描くことは、我々の信念に照らしてみて、決してできない。

32:5.6 (365.2) 率直に言って、永遠は、時間の有限の心にとっては不可解である。あなたは、断じてそれを把握することはできない。それを理解することはできない。私は完全にそれを心に描くというわけではないし、もしそうしたとしても自分の概念を人間の心に伝えることは不可能であろう。にもかかわらず、私は、我々の観点の幾分かを描くために、永遠であるものについての我々の理解する幾分かをあなたに伝えるために最善をつくしてきた。私は、無限の本質と永遠の重要性をもつこれらの価値に関するあなたの考えの結晶化においてあなたを支援するための努力をしている。

32:5.7 (365.3) 神の心にはすべての広大な領域のあらゆる創造物を抱く計画があり、この計画は、限りのない機会、無制限の進歩、無限の生命の永遠の目的である。そして、そのような無比の経歴の宝物は、努力するあなたのものである。

32:5.8 (365.4) 永遠の目標が、前途にある。神性到達の冒険が、あなたの前に横たわっている。完全に向けての競争は、進行中である。望むものは誰でも参加でき、また確

かな勝利というものが、信用と信頼の競争において走る一歩一歩を内住する調整者の先導と全ての人間に思う存分注いできた宇宙なる息子のその良い精霊の指導に頼るすべての人間の努力に栄誉で報いるであろう。

32:5.9 (365.5) [一時的にネバドンの最高会議に配属され、サルヴィントンのガブリエルによりこの任務に充当された強力な使者による提示]

論文 33
地方宇宙の行政

33:0.1 (366.1) 宇宙なる父は、間違いなく広大な創造を統治する一方で、創造者たる息子の人格を通し地方宇宙行政において機能する。父は、別の方法では地方宇宙の行政問題には個人的に機能しない。これらの事柄は、創造者たる息子、地方宇宙の母なる精霊、それに様々の子供に委ねられる。地方宇宙に関わる計画、方針、行政活動においては、行政権はガブリエルに、司法権は星座の父、体制君主、惑星王子に委譲するこの息子により精霊の同僚とともに、立てられ執行される。

1. ネバドンのマイケル

33:1.1 (366.2) 我々の創造者たる息子は、宇宙なる父と永遠なる息子に同時起源をもつ611,121番目の無限の同一性の独創的概念からくる人格化である。ネバドンのマイケルは、神性と無限のこの611,121番目の宇宙概念を人格化する「一人息子」である。マイケルの本部は、サルヴィントンの光の三重大邸宅にある。この居住施設は、マイケルが、知的な生物存在の全三相：精霊、モロンチア、物質の三相の生活経験をしたことからそのように定められている。マイケルは、ユランチアにおける7番目の、また最終的贈与に関連づけられる名前ゆえに時としてキリスト・マイケルとして言及される。

33:1.2 (366.3) 創造者たる息子は、永遠なる息子、すなわち宇宙なる父と無限の精霊の実存的楽園の仲間ではない。ネバドンのマイケルは、楽園の三位一体の成員ではない。とは言うものの、我々の主たる息子は、永遠なる息子自身が、実際にサルヴィントンで提示し、ネバドンで機能している神性の属性と力のすべてを自分の領域で所有している。動詞の形永遠なる息子を人格化するばかりではなく、この地方宇宙に、またその中において宇宙なる父の人格臨場を完全に表し実際に具体化するので、マイケ

ルには付加的力と権威さえある。マイケルは、父-息子の代理さえする。これらの関係は、創造者たる息子を進化する宇宙の直接行政の能力と未熟な被創造体との人格接触の能力をもつ神性の全存在体の中で最も強力で、万能の、そして、影響力のあるものにする。

33:1.3 (366.4) 創造者たる息子は、楽園の永遠なる息子が、もし自らサルヴィントンに居合わせたならば発揮するであろう精霊的に引き付ける同じ力を、またそれ以上の力を、精霊の引力を地方宇宙の本部から発揮している。この宇宙なる息子はネバドン宇宙への宇宙なる父の人格化である。創造者たる息子は、楽園の父-息子の精霊の力のための人格集中所である。創造者たる息子は、七重の神に属する時間-空間の強力な属性の最終的な力-人格の焦点化である。

33:1.4 (367.1) 創造者たる息子は、宇宙なる父の代理者の人格化であり、永遠なる息子の神性調和であり、無限の精霊の創造的な仲間である。君主たる息子は、我々の宇宙とそのすべての棲息界にとり、つまりすべての実用的な意図と目的にとり神である。君主たる息子は、発達する人

間が英明に理解できる楽園の神格のすべてを人格化する。この息子とその精霊の仲間は、あなたの創造者の両親である。あなたにとりマイケル、創造者たる息子は、最高の人格である。あなたにとり永遠なる息子—無限の神格の人格は、超崇高である。

33:1.5 (367.2) 我々には、もし宇宙なる父と永遠なる息子の両者が、サルヴィントンに居合わせネバドンの宇宙行政に従事していたならば、そうであるのとまさに同程度に強力かつ効率的である情け深い支配者と神性の親を創造者たる息子がいる。

2. ネバドンの主権者

33:2.1 (367.3) 創造者たる息子についての観察は、何らかの特徴はより父に類似し、または息子に類似しており、一方他のものはそれぞれ両方の無限の両親の混合であることを明らかにする。創造者たる息子は、とても明確に永遠なる息子により類似する特色と属性を表している。

33:2.2 (367.4) マイケルは、この地方宇宙の組織化を選び、現在、ここに君臨している。その人格的な力は、楽園に中心化する実在前の重力回路により、また人格の消滅に関

する全最終的行政裁決の超宇宙政府の日の老いたるもの側への留保により制限される。人格は父の唯一の贈与ではあるが、創造者たる息子は、永遠なる息子の承認を得て、創造物の新意匠を開始し、精霊の仲間の労働協力を経て、エネルギー-物質の新変化を試みるかもしれない。

33:2.3 (367.5) マイケルは、ネバドンの地方宇宙への、またその中での楽園の父-息子の人格化である。したがって、創造の母なる精霊が、つまり無限の精霊の地方宇宙の代表者が、ユランチアでのキリスト・マイケルの最終贈与からの帰還の際に属し、主たる息子は、これにより「天と地のすべての力」に対する司法権を取得した。

33:2.4 (367.6) 地方宇宙の創造者たる息子への神性聖職者の従属は、これらの主たる息子を有限的に父、息子、精霊の神格の顕現可能の人格の宝庫にし、一方、マイケルの創造物贈与の経験が、崇高なるものの経験的神性を描写する。宇宙の他のいかなる存在も、このように、有限の現在の経験の可能性を自らが使い果たすことはないし、宇

宙の他のいかなる存在も単独主権のためのそのような資格をもたない。

33:2.5 (367.7) マイケルの本部は、サルヴィントン、すなわちネバドンの首都に正式に位置しており、マイケルは、星座、体系本部、それに個々の惑星さえも訪問して時間の多くを過ごす。定期的に楽園への、また老いたるものと共に助言を与えるユヴァーサへは頻繁に旅をする。サルヴィントンから遠国いるときは、ガブリエルが、交代し、ガブリエルは、その際ネバドン宇宙の摂政として機能する

3. 宇宙の息子と精霊

33:3.1 (368.1) 無限の精霊は、全時空間に全体的に浸透しつつ、創造者たる息子との創造的協力方法により人格の完全な特質を取得する特殊な焦点化として各地方宇宙の本部から機能する。地方宇宙に関しては、創造者たる息子の行政権限は、最高である。無限の精霊は、神性聖職者として完全に協力はするものの全く同等である。

33:3.2 (368.2) サルヴィントンの宇宙の母なる精霊は、すなわち、ネバドンの統制と行政におけるマイケルの提携者

は、崇高な精霊の第6集団に属し、その611,121番目である。楽園任務からの解放に際しマイケルへの同伴を志願し、以来ずっと、マイケルの宇宙創造と統治において共に機能してきた。

33:3.3 (368.3) 主たる創造者たる息子は、自身の宇宙の個人的主権者であるが、その行政の全細部にわたり、宇宙なる精霊は、息子との共同管理者である。精霊は、主権者として支配者として息子をつねに認めているが、息子は、つねに領域の全業務において精霊の調和的位置と権威の平等を与える。愛と生命贈与の自分の仕事の全てにおいて創造者たる息子は、つねに賢明で絶えず忠実な宇宙なる精霊により、加えて天使の人格の様々な全随員により、いつも、その上、完全に支持され、また有能な助力を受けてきた。そのような神性聖職者は、実は精霊と精霊の人格の母であり、耐えず臨場し、創造者たる息子のすべてに賢明な助言者であり、楽園の無限の精霊の忠実で本物の顕現である。

33:3.4 (368.4) 息子は、自分の地方宇宙において父として機能する。精霊は、必滅の創造物が理解するであろうよう

に、常に息子を補助し、いつまでも宇宙行政に不可欠の母の役割を演じる。息子とその同伴の息子は、反乱に直面の際、救出者として機能することができる。精霊は、決して反逆への異義を唱えたり割拠の引き受けはできないが、悪で汚れたり罪が主流となる世界において政府を安定させ権威を是認する努力での経験を要求されるかもしれない万事において息子を常に支えるのである。息子のみが、その共同創造作業を回復できるのだが、どの息子も、神性聖職者の絶え間ない協力と彼女の精霊助力者の、つまりそれほどまでに忠実に勇敢に人間の福祉と神性の両親の栄光を求めて闘う神の娘達の巨大集団の会合なくしては最終的成功の期待はできない。

33:3.5 (368.5) 創造者たる息子の7番目の、そして最終的創造物贈与の完了時、神性聖職者にとっての断続的な孤立の不安が終わり、息子の宇宙助力者は、永遠に確実さと支配の点で定着するようになる。宇宙なる精霊が、軍勢を召集する前に、息子への従属の公的、かつ宇宙規模の承認を最初にしたのは、主たる息子としての創造者たる息子の即位、記念祭の真っ最中である。この出来事は、ユランチア贈与後のサルヴィントンへのマイケルの帰還時に

ネバドンであった。極めて重要なこの出来事以前には、宇宙なる精霊は、決して宇宙なる息子への従属を承認したことはなく、また精霊による権力と権威のこの自発的放棄後まで、「天においても地においても一切の権威をその手に委ねられた」とは息子について正直に宣言できなかった。

33:3.6 (369.1) ネバドンのマイケルは、創造の母なる精霊による従属のこの誓約後、宇宙の自身の領域の精霊共同支配者を構成し、すべての創造物が、息子にしなければならなかったように精霊への忠誠をも要求し、精霊の仲間への自身の永遠の依存を堂々と承認した。そこで、最終的な「対等性の宣言」をし、旅立った。マイケルは、この地方宇宙の主権者であったが資性、息子は、人格の資性と神格の特徴の属性のすべてにおける自身と精霊との対等性の事実を世界に発表した。これは、空間世界の下級の生物ですらの家族組織と政府のための並み外れた原型となる。これこそが、じつに自発的結婚の家族と人間の慣例の高い理想である。

33:3.7 (369.2) 父と母が、息子と娘の家族を見守り尽くすのとほぼ同様に、息子と精霊は、いま宇宙を統括している。宇宙なる精霊を創造者たる息子の創造の仲間と呼んだり、領域の創造物を彼らの息子と娘と見なすことは、全く不適切であるというわけではない—巨大で素晴らしい家族にもかかわらず、明かされていない責任と終わりのない世話の1つ。

33:3.8 (369.3) 息子は、宇宙の子らの一部の創造を始め、一方、精霊は、同じこの母なる精霊の指示と指導下で活動し奉仕する数多くの精霊人格体制を存在にいたらしめる責任を担う。宇宙人格の他の創造においては、息子と精霊の双方がともに機能し、いかなる創造的行為においても、一方は、もう一方の助言と承認なしでは何もしない。

4. ガブリエル—最高行政官

33:4.1 (369.4) 輝く明星は、創造者たる息子と無限の精霊の地方宇宙の顕現により着想された自己同一性の最初の概念の人格化であり、人格の最初の理想の人格化である。創造関係の絆における創造者たる息子と母なる精霊の結合

前の地方宇宙の初期に戻り、多才な息子と娘のいる家族の創始前へと戻り、これらの2神のこの初期の、しかも自由なつながりの最初の活動が、息子と精霊の最高位の精霊人格の創造、輝く明星をもたらす。

33:4.2 (369.5) 唯一英知と威厳のそのような存在が、各地方宇宙において実を結ぶ。宇宙なる父と永遠なる息子は、自分たちと等しい神性に、をもつ無制限の数の息子を創造することができ、事実そうする。しかし、無限の精霊の娘と一体のそのような息子は、自分たちに似た、しかも結合された双方の特質を自由に取り入れてはいるものの両者の創造的特権はもたない輝く明星を各宇宙に一名しか創造できない。神の属性はかなり制限されているとはいえ、サルヴィントンのガブリエルは、神性特質においては宇宙の息子に似ている。

33:4.3 (369.6) 前例のない多能さと想像を絶する明敏さの存在である新宇宙の両親のこの長子は、いずれの祖先にも明らかには見られない多くの素晴らしい特性を持つ特異な人格である。この崇高な人格は、精霊の創作への想像力と結合した息子の神性意志を抱擁する。輝く明星の考え

と行為は、創造者たる息子と創造の精霊の両者を常に十分に表現するであろう。そのような存在は、精霊の熾天使の軍勢と意志をもつ物質的進化的創造物の双方の幅広い理解、そして同情的な接触もできる。

33:4.4 (370.1) 輝く明星は創造者ではないが、創造者たる息子の個人の行政代表をする素晴らしい行政者である。創造と生命の分与は別として、息子と精霊は、ガブリエルの臨場なしには重要な宇宙の手順を決して協議しない。

33:4.5 (370.2) サルヴィントンのガブリエルは、ネバドン宇宙の主要な執行者であり、その行政に関係する全行政要求の決定者である。この宇宙の執行者は、その仕事のために完全な授与で創造されたが、我々の局部的創造の成長と発展に沿って経験を重ねた。

33:4.6 (370.3) ガブリエルは、地方宇宙の無人格の問題に関連する超宇宙の使命、委任統治のための最高執行責任者である。日の老いたるものの判決が下された集団裁決と天啓後の復活に関するほとんどの問題は、ガブリエルとその配下に実行が委任される。それ故、ガブリエルは、超宇宙支配者達と地方宇宙支配者達双方の統合最高責任者

である。ガブリエルには、命令により特別な仕事のために編成され、進化する人間には明かされていない行政補佐官の有能な軍団がある。ガブリエルは、これらの補佐官に加えネバドンで機能する天の存在体の体制のありとあらゆるものを採用できるし、「天界の軍勢」—天の軍勢—の最高司令官でもある。

33:4.7 (370.4) ガブリエルとその配下は、教師ではない。それらは行政者である。それらは、マイケルが創造物贈与での肉体授与時を除いては、その定期の仕事から決して離れるということはなかった。ガブリエルは、そのような贈与の間、肉体を与えられた息子の意志にずっと付き添っており、日々の和合のものの協力を得て、後の贈与の期間宇宙問題の実際の指導者となった。ガブリエルは、マイケルの人間の贈与以来ユランチアの歴史と発展と密接に関係してきた。

33:4.8 (370.5) 人間は、贈与世界での、また一般復活の点呼と特別復活の点呼での出会いは別として、地方宇宙での上昇の間、地方宇宙の創造の行政業務に就任させられるまでガブリエルにめったに遭遇しない。あなたは、いかな

る体制、あるいは階級の行政者であろうとも、ガブリエルの指揮下に入るであろう。

5. 三位一体の大使

33:5.1 (370.6) 三位一体起源の人格の行政は、超宇宙の政府と共に終わる。地方宇宙は、二重の監督、つまり父母概念の始まりによって特徴付けられる。宇宙なる父は、創造者たる息子である。宇宙なる母は、神性聖職者、つまり地方宇宙の創造の精霊である。あらゆる地方宇宙が、しかしながら、　中央宇宙と楽園からの一定の人格の臨場の恩恵に浴している。ネバドンのこの楽園集団の首脳には、楽園三位一体の大使がいる。サルヴィントンのイマヌエル—ネバドンの地方宇宙に配属された日々の和合のもの。また、ある意味でこの高位の三位一体の息子は、創造者たる息子の宮廷への宇宙なる父の個人的代理人である。したがって、その名は、イマヌエル。

33:5.2 (370.7) サルヴィントンのイマヌエル、三位一体の崇高なる人格の第6体系61万1,121号は、全生物の崇拝と敬愛を拒否するほどまでに崇高な威厳と見事な謙遜の存在体である。イマヌエルは、弟マイケルへの従属をかつて承

認したことがないネバドンにおける唯一の人格である特色をもつ。君主たる息子に対する助言者として機能するが、要求に応じての助言を与えるに過ぎない。創造者たる息子の不在に際しては、宇宙のいかなる高等協議会を取り仕切るかもしれないが、要望に応じる以外には宇宙の執行業務への参加はしないであろう。

33:5.3 (371.1) ネバドンへの楽園のこの大使は、地方宇宙政府の司法権の対象にはない。この大使は、関係する同胞、すなわち星座本部で役目を果たす日々の忠実なるものの指揮の場合をは除いては、発展する地方宇宙の執行業務における正式の司法権もまた行使しない。

33:5.4 (371.2) 日々の忠実なるものは、日々の和合のものと同様求められない限りは決して星座の支配者への助言の申し出、もしくは援助提供をしない。星座へのこれらの楽園大使は、地方宇宙の顧問役で機能する三位一体の定置の息子の最後の個人的臨場を表す。星座は、地方体制よりも密接に超宇宙行政に関係づけられ、専ら地方宇宙出身の人格により管理される。

6. 一般的行政

33:6.1 (371.3) ガブリエルは、ネバドンの最高責任者であり実際の管理者である。マイケルのサルヴィントン不在は、宇宙業務の秩序正しい処理を決して妨げるものではない。楽園におけるオーヴォントンの主たる息子の再合同の任務で最近起きたように、ガブリエルは、マイケル不在中の宇宙の摂政である。ガブリエルは、こうした時にいつも重大問題のすべてに関しサルヴィントンのイマヌエルの助言を求める。

33:6.2 (371.4) 父メルキゼデクは、ガブリエルの最初の補佐である。輝く明星がサルヴィントンを不在にするとき、その職責は、このメルキゼデクの第一の息子が担う。

33:6.3 (371.5) 宇宙の様々な副次的行政には、割り当てられたある種の特別の責任範囲がある。一般に、体制政府は、その惑星の福利に従事するものの、特に生き物の肉体状態に、すなわち生物問題に関心がある。言い替えると、星座の支配者は、異なる惑星と体制に広く行き渡る社会的、政治的状態への特別な注意を向ける。星座の政府は、主に統一と安定化に影響を及ぼす。宇宙支配者は、それより上では領域の精霊の状態により専念している。

33:6.4 (371.6) 大使は、司法の法令によって任命され他の宇宙に宇宙を代表する。領事は、互いへの、また宇宙本部への星座の代表である。それらは、政令によって任命され、地方宇宙の境界内に限って機能する。観察者は、体制君主の執行令により他の体制と星座の首都にその体制の代表を委託され、それらもまた、地方宇宙の境界内に限って機能する。

33:6.5 (371.7) 放送は、サルヴィントンから星座本部、体制本部、個々の惑星に同時に流される。天の高度の存在体の体系は、宇宙に点在する仲間との意思の疏通のためのこの設備を利用できる。宇宙放送は、それぞれの精霊状態にかかわらず全棲息界に及ぶ。精霊隔離下にあるそれらの世界だけが、惑星の相互通信を拒否される。

33:6.6 (372.1) 星座放送は、星座の父の首長により星座本部から定期的に流される。

33:6.7 (372.2) 時間は、サルヴィントンの存在体の特別集団によって数えられ、計算され、修正される。ネバドンの標準日は、ユランチア時間の18日間と2分半に等しい。ネバドンの年は、ユヴァーサ回路と関連する宇宙運動時間

部分から成り、宇宙標準時間の100日間、ユランチア時間のおよそ5年に等しい。

33:6.8 (372.3) サルヴィントンから放送されるネバドン時間は、この地方宇宙の全星座と体制のための基準である。各星座は、ネバドン時間によりその業務を行うが、体制は、個々の惑星がするように自身の年表を保持する。

33:6.9 (372.4) ジェルーセムで計算されるサタニアにおける一日は、ユランチア時間の3日間にほんの少し(1時間4分15秒)足りない。これらの時間は、一般的にはサルヴィントン、あるいは宇宙時間、そしてサタニア、あるいは体制時間として知られている。標準時は、宇宙時間である。

7. ネバドンの法廷

33:7.1 (372.5) 主たる息子、マイケルは、ただ3つの事柄：創造、維持、奉仕活動に最高に関心がある。宇宙司法の作業には個人的には参加しない。創造者は、自らの創造物を決して裁かない。それは、高等の訓練と実際の生物経験をもつ創造物の唯一の機能である。

33:7.2 (372.6) ネバドンの全司法機構は、ガブリエルの監督下にある。サルヴィントンにある最高裁判所は、宇宙の一般的問題と体制の裁決機関から来る上訴事例とに従事する。これらの宇宙立法府には70の裁判所があり、しかも7分割にされ、それぞれに10部門で機能する。裁決の全ての問題においては完全である祖先の1名の裁判官と上昇経験の1名の行政判事から成る複合裁判官が主宰する。

33:7.3 (372.7) 司法権の点では、地方宇宙法廷は、次の事柄が制限される。

33:7.4 (372.8) 1. 地方宇宙行政は、創造、発展、維持、奉仕活動に関係する。宇宙裁決機関は、したがって永遠の生死の問題にかかわる事例を決定する権利は拒否される。ユランチアで享受するような自然死には関係ないが、もし存在し続ける、つまり生命不変の権利の裁決問題になるならば、オーヴォントンの裁決機関に送検され、個人に対して決定されるならば、絶滅の全文は、機関を通じて、超政府の支配者の命令にそって実行される。順番も！

33:7.5 (372.9) 2. 息子としての地位と権威を危険にさらす神の地方宇宙の息子の中の誰かの不履行、または背信は、決して息子の裁決機関では裁かれない。そのような考え違いは、即刻超宇宙法廷へ移されるであろう。

33:7.6 (372.10) 3. 精霊的孤立の後にくる地方創造における精霊の完全な親交状態への地方宇宙のいかなる構成部分—例えば地方体制といったような—への再承認の問題は、超宇宙の高等議会による同意を受けなければならない。

33:7.7 (373.1) サルヴィントンの法廷は、他の全ての問題においては最終的であり最高である。その決定と判決からは、上告も逃げ道もない。

33:7.8 (373.2) しかしながら、ユランチアで人間の論争が時として不公平に裁かれていると思われるかもしれないが、宇宙において正義と神の公平さは勝利するのである。あなたは、とても秩序ある宇宙に住んでおり、遅かれ早かれ、公正に、慈悲深くさえ扱われることを頼みとすることができる。

8. 立法と執行機能

33:8.1 (373.3) ネバドンの本部サルヴィントンには、真の立法府はない。宇宙本部世界は、主に裁決に関係がある。地方宇宙の立法議会は、100の星座の本部に設置されている。体制は、主に地方創造の執行と行政の仕事に関係がある。体制君主とその仲間は、星座支配者の立法命令を実施し、宇宙の高等裁判所の司法の法令を執行する。

33:8.2 (373.4) 真の律法が宇宙本部で制定されていない一方で、サルヴィントンでは、さまざまな状況報告と研究議会が、それぞれの範囲と目的を踏まえていろいろに構成され、機能している。幾つかは、永久的であり、他のものは、それぞれの目的達成時に解体する。

33:8.3 (373.5) 地方宇宙の最高協議会は、各体制からの3名と各星座からの7名で構成される。孤立する体制にはこの議会における代表はいないが、そのすべての審議に出席し、研究する観察者を送ることが許されている。

33:8.4 (373.6) 100の最高制裁協議会もまたサルヴィントンに置かれている。この協議会の議長は、ガブリエルの直接機能する内閣を構成する。

33:8.5 (373.7) 宇宙の高等諮問機関の全調査結果は、サルヴィントン司法機関か星座の立法議会のいずれかに送検される。これらの高等協議会は、自分達の推薦を実施する権威も力も持たない。それらの忠告が、宇宙の基本法則に基づくならば、ネバドンの法廷は、そこで執行裁定を公布するであろう。しかし、推薦が、地方あるいは非常時の状況と関係があるならば、審議制定のために星座の立法議会へと、また執行のために体制当局へと下方へ伝えられなければならない。これらの高等協議会は、実際には宇宙の超立法府であるが、制定の権威なしに、しかも執行力なしに機能する。

33:8.6 (373.8) 我々は、「法廷」と「議会」に置き換えて宇宙行政のことを話すとはいえ、これらの精霊の相互作用は、ユランチアのより原始的で物質的な活動に相当する名前を示すものとは非常に異なるということが理解されるべきである。

33:8.7 (373.9) 〔ネバドンの大天使の長官による提示〕

論文 34
地方宇宙の母なる精霊

34:0.1 (374.1) 創造者たる息子が、宇宙なる父と永遠なる息子により人格化され、次には無限の精霊が、この創造者たる息子に空間の領域へ同伴し、そこで、まずは物理的組織、続いて新たに企画された宇宙の創造と被創造生物への奉仕活動における自分の相方として新しく特異な自身の再提示を個別化する。

34:0.2 (374.2) 創造の精霊は、物理的現実と精神的現実の双方に反応する。創造者たる息子もそうする。こうして両者は、時間と空間の地方宇宙行政において対等であり結合している。

34:0.3 (374.3) これらの娘の精霊は、無限の精霊の本質からなるが、物理的創造と精霊の奉仕活動において同時に機能することはできない。宇宙なる精霊は、物理的創造において物理的現実の具体化を開始するが、宇宙の息子は、型を提供する。息子は、力の設計において作動するが、精霊はこ、れらのエネルギー創造を物理的実体に変える。無限の精霊のこの初期の宇宙臨場を人格として描くことは、やや困難ではあるが、とは言うものの創造者た

る息子にとり精霊共同者は、個人的であり異なる個人としていつも機能してきた。

1. 創造の精霊の人格化

34:1.1 (374.4) 次は新たに組織された宇宙に生命が放たれるというマイケルの息子の声明文が、星と惑星群の物理的組織の完了と超宇宙の力の中心部によるエネルギー回路の設置後に、すなわち地方宇宙の創造の集中化による操作とその指揮下にある無限の精霊の媒介による創造におけるこの準備段階のその後に公布される。この意志表明の宣言に対する楽園の認識と同時に、楽園の三位一体の承認反応が、この新創造が組織する超宇宙の、にいる、主たる精霊の神格の精霊の輝きの中への消失の後に生じる。他の主たる精霊が、楽園の神格のこの中央拠点に近づきつつある間、続いて神格に抱擁される主たる精霊が、その仲間の認識に浮上するとき、その仲間に認識され始めると、「第一の爆発」として知られていることが、起こる。これは途方もない精霊的閃光、すなわち関係する超宇宙部の遠くまで明確に認識できる現象である。同時に、ほとんどが理解されていない三位一体のこの顕現とともに、創造的精霊の臨場の本質と関係する地

方宇宙において無限の精霊の力に著しい変化が起こる。これらの楽園の現象に対応し、すぐに無限の精霊の新しい個人的再提示が、創造者たる息子のまさしくその臨場で人格化する。これが、神性聖職者である。創造者たる息子の個別化された創造の精霊の助力者は、創造者たる息子の個人的、かつ創造的な仲間、すなわち地方宇宙の母なる精霊となったのである。

34:1.2 (375.1) 全世界とその地方宇宙の存在体を瀰漫するように運命づけられる精神力と精霊の影響の確立された流れと定められた回路が、連帯創造者のこの新しい個人的隔離から、またそれを通じて進行する。この新たで個人的臨場は、実際には息子の物理的な宇宙組織の初期の仕事における息子の前存在の、またそれほど個人的ではない仲間の変容にすぎない。

34:1.3 (375.2) これが、わずかな言葉での巨大な劇に関するものであるが、それは、これらの重大な、瞬時に起こり、計り知れなく、不可解である。方法と手順の秘密は、楽園三位一体の胸中にある。我々は、その中のただ1つのものだけを確信する。純粋に物理的創造、あるいは組織

化の期間中、地方宇宙の中の精霊臨場は楽園の無限の精霊の精霊とは不完全に区別された。ところが、無限の精霊の地方宇宙の顕現は、無限神の秘密の抱擁からの監督中の主たる精霊の再現後に、また精霊のエネルギーの閃光に続き、精霊との変化するつながりにあるその主たる精霊の個人的類似へと突然に、しかも完全に変わるのである。その結果、地方宇宙の母なる精霊は、星雲司法権の超宇宙の主たる精霊のものによって染められる個人的特質を帯びる。

34:1.4 (375.3) 地方宇宙の創造の母なる精霊である無限の精霊のこの人格化の臨場は、サタニアでは神性聖職者として知られている。神格のこの顕現は、すべての実用的意図と精霊的目的にとり神の個体、すなわち精霊の人格である。また、彼女は、創造者たる息子にそのように認識され、見なされる。精霊が、それ以降創造者たる息子に完全に従属的になれるのは、この息子について「天国と地球上のすべての力が彼に任せられた」と偽りなく言われた我々の地方宇宙における第三根源と中枢この局部化と人格化を経てである。

2. 神性聖職者の本質

34:2.1 (375.4) 神性聖職者は、生命創造時に著しい人格変化を受けた後、人として機能し、じつに個人的方法において両者の局部創造の幅広い問題に関する計画と行政において創造者たる息子と協力する。無限の精霊のこの表現でさえ、多くの宇宙の型の存在体にとり、マイケルの最後の贈与に先行する時代には完全に個人的である風には見えないかもしれない。しかし、創造の母なる精霊は、主たる息子の最高権威への創造者たる息子の昇進に続き、人格的本質がそれほどまでに増大するようになるが故に接触するすべての個人に人格的に認められるのである。

34:2.2 (375.5) 宇宙なる精霊は、創造者たる息子との最初のつながり以来、反重力の完全な寄付を包括する無限の精霊の物理的管理のすべての特性を有する。宇宙なる精霊は、人格的地位の到達に際し、地方宇宙にもし直接に臨場しているならば揮うであろう最大限の、完全な心の重力の支配を発揮する。

34:2.3 (375.6) 神性聖職者は、各地方宇宙において楽園の主たる7精霊の1つに具体化される無限の精霊の本質と固有の特性に基づき機能する。すべての宇宙の精霊の特性には

基本的一様性があるが、主たる7精霊の1つのそれぞれの起源で決定される機能の多様性もある。この起源の差異は、異なる超宇宙において地方宇宙の母なる精霊の機能におけるさまざまの技法を説明する。しかし、これらの精霊は、不可欠の精霊の全属性において超宇宙の分化の如何にかかわらず同じであり、対等に精霊的であり、完全に神性である。

34:2.4 (376.1) 創造の精霊は、世界の創造物の形成において創造者たる息子と共同責任を負い、これらの創造を支え維持する息子の全努力を見捨てない。生命は、創造の精霊の作用を通じて務めを果たし維持される。「あなたが自分の精霊を送られると、彼らは作られます。あなたは地の面を新しくされます。」

34:2.5 (376.2) 創造の母なる精霊は、知的生物の宇宙の創造に関して、まずは宇宙の完全領域の球体において輝く明星の形成に関して息子との協力のもと機能する。次に精霊の子孫は、ちょうど息子がメルキゼデク系から領域の人間と実際に接触する物質の息子へと下方へと等級をつける、傾斜をつけるように、惑星の創造された生物の系列

に徐々に近づく。生命運搬者の息子は、必滅の被創造物の後の発展において領域の存在する組織化された物質から作られた物理的肉体を与え、一方、宇宙なる精霊は、「命の息、生きがい」を寄与する。

34:2.6 (376.3) 壮大な宇宙の7区分目は、開発面において遅々としているかもしれないが、我々の問題を扱う思いやりのある学生は、来る時代の並外れて均衡のとれた創造の発展を楽しみにしている。永遠の神格3者すべての特徴と性格の均衡のとれた結合と完全な協力を具体化している精霊の知的存在体であるこの超宇宙の主人役を務める精霊は、主たる精霊の長であることから、我々は、オーヴォントンのこの高度の対称を予測する。我々は、他の領域との比較において遅れており逆行してはいるが、我々にはいずれ永遠の時代に超絶の発展と先例のない達成が、待ち受けている。

3. 時空間の息子と精霊

34:3.1 (376.4) 永遠なる息子も無限の精霊のいずれも、時間あるいは空間に制限されてはいないが、その子孫のほとんどには制限されている。

34:3.2 (376.5) 無限の精霊は、全空間に浸透しており、しかも永遠の軌道に宿っている。無限の精霊の人格は、それでも時間の子供との個人的接触において、空間に関してはそれほどではないが、時間的要素に関してはしばしば考慮しなければならない。心の多くの活動は、空間を無視するが、さまざまの宇宙現実段階の調整作用において時間のずれを被る。単独使者には、時間は、ある場所から別の場所への移動に実際に必要とされることを除いては、空間とはほとんど無関係であり、またあなたには未知の同様の実体がある。

34:3.3 (376.6) 創造の精霊の個人的特権は、空間については完全に、全体的に束縛はされないが、時間についてはそうではない。そのような宇宙なる精霊の専門化された人格的臨場は、星座本部もしくは体制本部のいずれにもない。宇宙なる精霊は、自身の地方宇宙全体に等しく、かつ広く存在しており、したがって他のいかなる世界でもそうであるように、事実上、人格的に1つの世界に臨場しているのである。

34:3.4 (376.7) 創造の精霊には宇宙奉仕において時間の要素の点のみが、常に制限されている。創造者たる息子は、即座に自身の宇宙全域で行動する。だが、創造の精霊は、意識的に計画的に宇宙の息子の個人的特権を利用する場合を除き、宇宙の心の奉仕活動において時間について考慮する。また、創造の精霊は、純粋な精霊機能において宇宙反射の神秘的機能との協働に限らず、時間とは無関係に行動する。

34:3.5 (377.1) 永遠なる息子の精霊-重力回路は、時間と空間の両方に関係なく作動しているが、創造者たる息子の全機能は、空間制限を免除されているわけではない。進化する世界の取り引き、相互作用が除外されるならば、これらのマイケルの息子は、比較的時間に関係なく作用できるように思える。創造者たる息子は、時間には妨げられないが、空間には制約される。同時に、直接に2個所にいることはできない。ネバドンのマイケルは、自身の宇宙内で永遠に行動し、超宇宙でも実際に反射的にそうする。ネバドンのマイケルは、直接に永遠なる息子と永遠に通信する。

34:3.6 (377.2) 神性聖職者は、創造者たる息子が空間に関わる固有の制限に打ち勝ち埋め合わせができるようにする理解ある助力者である。というのも、行政統一で機能する時、この両者は実質上、地方創造の境界内においては時間と空間と無関係であるが故に。したがって、創造者たる息子と創造の精霊は、地方宇宙全体で実際に観測されているように、常に他方の時間と空間からの解放を利用可能な状態にあるので、通常、時間と空間の双方に関係なく機能している。

34:3.7 (377.3) 絶対存在体のみが、絶対的意味合いから時間と空間に関係していない。永遠なる息子と無限の精霊の双方の配下の大多数が、時間と空間に制約されている。

34:3.8 (377.4) 創造の精霊が、「空間意識をする」ようになると、彼女は、条件づけられている他のすべての空間への対比において制限のない空間の領域である囲まれた「空間領域」を我ものとして認識する準備をしている。誰でも意識の領域内においてのみ自由に選択し行動できる。

4. 地方宇宙回路

34:4.1 (377.5) ネバドンの地方宇宙には明確な3個の精霊回路がある。

34:4.2 (377.6) 1. 創造者たる息子の贈与の精霊、すなわち、慰安者、真実の精霊

34:4.3 (377.7) 2. 聖霊、神性聖職者の精霊回路

34:4.4 (377.8) 3. 7つ、名の補助の心-精霊の多少なりとも統一された活動、しかし、さまざまの機能を含む知力-奉仕活動の回路

34:4.5 (377.9) 創造者の息子には、楽園の主たる7精霊のそれに類似する多くの方法で宇宙臨場の精霊が授けられている。これこそが、そのような球体への精霊の肩書きを受領した後に贈与の息子によって世界に注がれる真実の精霊である。この授けられた慰安者は、地方宇宙における真実の人格化であるあの方に向かうすべての真実探求者を常に引きつける精霊の力である。この精霊は、創造者たる息子の固有の授与であり、この授与はちょうど壮大な宇宙の主回路が楽園の神格の人格臨場に由来するように、創造者たる息子の神性からくるのである。

34:4.6 (377.10) 創造者の息子は、往来するかもしれない。その人格的臨場は、地方宇宙に、あるいは他の場所であるかもしれない。しかし真実の精霊は、邪魔されずに機能する。なぜなら、この神性臨場は、創造者たる息子の人格に由来する傍ら、機能上は、神性聖職者の人格の中心に置かれているが故に。

34:4.7 (378.1) しかしながら、地方宇宙の母なる精霊は、決して地方宇宙本部の世界を去ることはない。創造者たる息子の精霊は、息子の人格臨場に頼ることなく機能する可能性をもち、そうするかもしれないが、彼女の人格精霊との関係においてはそうではない。神性聖職者の聖霊は、彼女の人格臨場がサルヴィントンから取り除かれるならば機能しなくなるであろう。彼女の精霊臨場は、宇宙本部世界で決められるようであり、また創造者たる息子の精霊が、息子の所在の如何にかかわらず機能することを可能にするのが、まさしくこの事実なのである。地方宇宙の母なる精霊は、自身の人格的影響、すなわち聖霊と同様に真実の精霊の宇宙焦点、中心として活動する。

34:4.8 (378.2) 創造者の父-息子と創造の母なる精霊の両者は、地方宇宙の子らの心の贈与にさまざまに貢献する。しかし創造の精霊は、自身が個人的特権を与えられるまでは心を贈与しない。

34:4.9 (378.3) 地方宇宙の超進化的人格の体系には超宇宙の心の型の地方宇宙が、に与えられる。進化する生命の人間と人間以下の系列は、精霊の副官の心の奉仕活動の型が与えられる。

34:4.10 (378.4) 心-精霊の補佐7名は、地方宇宙の神性聖職者の創造である。これらの心-精霊は、特徴は似ているが力の上での統一はなく、決して母なる創造者とは人格が別とは見なされないものの、皆一様に宇宙なる精霊の本質を帯びている。7名の補佐には次の名前が与えられてきた。知恵の精霊、崇拝の精霊、助言の精霊、知識の精霊、勇気の精霊、理解の精霊、洞察の精霊—迅速な知覚について。

34:4.11 (378.5) これらは、予言者が象徴のまぼろしを見た「王座の前で燃えている灯火のような」「神の7精霊」である。だが予言者は、心-精霊の補佐7名の周りにこれらの

24名の歩哨の席を見なかった。この記録には、1つは宇宙本部、他方は体制の首都に関する2つの提示の混乱がみられる。年長者24名の席は、棲息世界のあなたの地方体制本部であるジェルーセムにある。

34:4.12 (378.6) しかし、ヨハネが書いたのはサルヴィントンについてであった。「そして、王座から稲妻、雷、諸々の声が発していた」—地方体制への宇宙放送。ヨハネは、地方宇宙の方向制御の生物、本部世界の生ける方位磁石をも心に描いていた。ネバドンにおけるこの方向制御は、宇宙の流れで作用しており、最初の機能する心-精霊、すなわち洞察の補佐であり「迅速な理解」の精霊により巧みに補助をうけるサルヴィントンの4管理生物によって維持されている。しかし、この4生物についての—獣類と呼ばれる—記述は悲しむべきことに損なわれてしまった。それらは他に例をみない美と絶妙の型のものである。

34:4.13 (378.7) 方位磁石の4点は、ネバドンの生命に普遍的であり、固有である。全生物には、これらの方向性の流れに敏感で反応する身体上の単位がある。これらの生物創

造は、宇宙から個々の惑星へと反復され、世界の磁力と関連して動物有機体中の微細な肉体の宿主を動かし、そのためにこれらの方位細胞が常に南北を指す。こうして、宇宙の生物に方向感覚が永久に固定された。この感覚は、人類による意識的所有物としては完全に欠落してはいない。これらの肉体は、ほぼこの物語の時代にユランチアで最初に観測された。

5. 精霊の奉仕活動

34:5.1 (379.1) 神性聖職者は、第7贈与時まで生命の形成と新しい存在体の創造において創造者たる息子に協力し、次に、すなわち宇宙の完全主権への昇進後、世界的奉仕活動と惑星の前進のさらなる仕事において息子と贈与された息子の精霊との協働を続ける。

34:5.2 (379.2) 精霊は、領域の生命のない物質に始まり、まずは植物、次には動物、それから人間の最初の系列を授け、棲息界において進化的発達の仕事を始める。続いて起こる分与は、意志をもつ創造物の初期の、かつ原始の段階からその登場までの惑星の生命の進化的可能性の一層の展開に貢献する。精霊のこの労働は、主に約束の精

霊であり、より高い考えと精霊の理想に向かう人類の民族を常に、かつ統一的に導く発展する惑星の統一と調整する精神-心である7名補佐のを通じて成し遂げられる。

34:5.3 (379.3) 進化する生物の純粋に動物的な心が、崇拝と知恵の補佐のために受容能力を育成するとき、人間は、まず心と連動して精霊の奉仕活動を経験する。補佐の第6と第7のこの奉仕活動は、精霊の奉仕活動の敷居を跨ぐ心の発展を示唆する。そして、崇拝-と知恵-機能のをもつそのような心は、ただちに神性聖職者の精霊回路に包括されるのである。

34:5.4 (379.4) 心は、こうして聖霊の奉仕活動を授けられると、宇宙なる父の精霊臨場—思考調整者を(意識して、あるいは無意識のうちに)選ぶための能力をもつ。しかし、贈与の息子が、惑星の奉仕活動のためにすべての人間に真実の精霊を解放するまでは、正常な心は、思考調整者の受け入れのための準備を自動的にはできない。真実の精霊は神性聖職者の精霊の臨場と一致して働いている。精霊のこの二重つながりは、真実を教え、精霊的に人の心を啓発し、創造物の上昇する民族の魂を奮い立た

せ、また神性の目標である楽園の目標に常に向かう進化する惑星に住む民族を率いようと世界の上方に浮かんでいる。

34:5.5 (379.5) 真実の精霊は、すべての人に注がれるが、息子のこの精霊は、贈与の息子の使命の根本をなす人の個人的受け入れによる機能と力にほぼ完全に制限されている。聖霊は、幾分かは人間の態度には関係なく、部分的には意志ある人間の決断と協力により制約される。にもかかわらず、聖霊の奉仕活動は、より完全に神性の導きに従うそれらの人間の内面生活の神聖化と精霊化でますます効力を生じる。

34:5.6 (379.6) 個人としてのあなたは、創造者たる父-息子の精霊、あるいは創造の母なる精霊の隔離された部分、または実体を直接には保有してはいない。これらの奉仕活動は、神秘訓戒者がするようには個人の心の考えの中心とは接触もしないし、宿りもしない。思考調整者は、宇宙なる父の前人格の明確な個別化であり、実際にまさしくその心の1部分として人間の心に宿る創造者たる息子と

創造の精霊の結合された精霊との完全な調和で常に働いている。

34:5.7 (380.1) 無限の精霊の宇宙の娘の聖霊の中の臨場、永遠なる息子の宇宙の息子の真実の精霊の臨場、そして、進化する人間の中、もしくは、進化する人間とともにいる楽園の父の調整者-精霊の臨場は、精霊の授与と奉仕活動を意味し、意識的に神との息子関係の信仰-事実を認識する才能をそのような人間に与える。

6. 人の中の精霊

34:6.1 (380.2) 棲息惑星の進化の前進とその住民の一層の精霊化とともに、さらなる精霊的な影響が、成熟したそのような人格により受け入れられるかもしれない。これらの精霊多重奉仕活動は、人間が心の制御と精霊認識において進歩するにつれ、機能面でますます調整される。それらは、ますます楽園三位一体の間接的奉仕活動と溶け合うようになる。

34:6.2 (380.3) 神性は、顕現においては複数であるかもしれないが、人間の経験においては、単数であり常に一つである。精霊的奉仕活動もまた人間の経験においては複数で

はない。起源の複数性にもかかわらず、精霊の全影響は、機能において一つである。誠に、それらは、創造物と壮大な宇宙の中と自分たちへの七重の神の精霊奉仕活動であるがゆえに一つである。創造物が、精霊のこの統一的奉仕活動への評価を増大するにつれ、それは、自らの経験において崇高な神の奉仕活動になる。

34:6.3 (380.4) 神性の精霊は、進化する魂が、慈悲と奉仕活動のこの任務に初めに出帆した至福のまさしくその高さに無事に高められるまで、あなたがいるところであるがままのあなたにに会いに永遠の栄光の高さから連続する長い階段を決して止まることなく、信仰の協力関係において愛情を込めて人間の起源の魂を抱き確かで確実なその階段の遡源へと船出する。

34:6.4 (380.5) 精霊の力は、誤りなく自身の本来の水準を追い求めて到達する。精霊の力は、永遠なるものから出向いて内住する調整者の先導と教えを信奉した時間と空間のそれらの子供すべて真に「精霊の生まれ」、神の信仰の息子であるもの達を連れて必ずそこへ戻る。

34:6.5 (380.6) 神性の精霊は、継続的奉仕活動と人の子への励ましの源である。あなたの力と達成は、「あの方の慈悲による精霊の更新によるものである。」物理エネルギーのように精霊的生命は、消費される。精霊的努力は、精霊の相対的疲労困憊をもたらす。上昇の全体経験は本物であり、もちろん精霊的でさえある。故に、「速めるのは、精霊である。」「精霊は命を与える。」と本当に記されている。

34:6.6 (380.7) 最高の宗教主義でさえも死んだ理論は、人間の性格を変えたり、あるいは必滅者の振舞いを制御するには無力である。今日の世界が必要とすることは、あなたの昔の師が宣言した真実である。「言葉だけによらず、力と聖霊にもよった。」神性の精霊が、真実の型に息をかけるまで、そして正義の公式を速めるまでは理論上の真実の種子は死んでおり、最高の道徳的概念は効果がない。

34:6.7 (381.1) 神の宿りを受け入れ認めた者達は、精霊の生まれなのである。「あなたは神の寺院であり、神の精霊はあなたの中に住む。」この精霊が、あなたに注ぐだけで

は十分ではない。神性の精霊は、人間の経験のあらゆる局面を支配し制御しなければならない。

34:6.8 (381.2) 人間の不満の破壊的渇きと非精霊的人間の心の例えようもないその飢餓を未然に防ぐものは、神の精霊、つまり命の水の臨場である。精霊に動機づけられる存在体は、「決して渇かない。なぜなら、精霊のこの水が、それらの内にて永遠の命へと湧き上がる満足の井戸になるであろうから。」神々しく水をかけられたそのような魂は、生きる喜びと現世の生活の満足に関しては物質的状況にほとんど関係していない。それらは、精霊に照らされ、生き生きとさせられ、道徳的に強化され、賦与される。

34:6.9 (381.3) すべての必滅者には、二元的本質がある。動物的性癖の継承と精霊授与の高度の衝動。ユランチアで送る短い人生の間、さまざまの、かつ相反するこれらの2種類の衝動はめったに完全に和解できない。調和させ、統一させることはとてもできない。しかし、あなたの生涯を通じて結合された精霊は、あなたがいよいよ精霊の導きへ肉体を従属させることにおいてあなたをずっと補

助し奉仕する。あなたは、たとえ物質的人生を送らなければならないとしても、たとえ肉体とその必要物から逃がれることはできないとしても、それでもなお目的と理想においてますます獣性を精霊の支配に従属させるための力があなたには与えられる。実に、精霊の力の共謀が、その唯一の目的が、物質的束縛と有限の不利な条件からあなたに最終的救出をもたらす神性の力の同盟が、あなたの中に存在する。

34:6.10 (381.4) この奉仕の全、一番の目的は、「人間の内側のあの方を通じ力をもって強められるかもしれないということ。」そして、このすべてが、「神の精霊に導かれるすべての者達は神の息子であるがゆえに」、あなたが、「神の全ての豊かさで満たされる」であろう経験である信仰と奉仕の完全性の最終的到達へのただ予備的足取りを表している。

34:6.11 (381.5) 精霊は、決して駆り立てることなく、ただ導く。あなたが、意欲的学習者であるならば、精霊の水準に達し、精霊の高さに達したいならば、永遠の目標に達することを心から望むならば、そのとき、神性の精霊

は、そっと愛情を込めて息子の関係と精霊的進歩の小道に沿ってあなたを導くであろう。進む一歩ごとが、知的で愉快な協力である意欲の一つに違いない。精霊の支配は、決して強制で汚されず、または押さえ難い衝動によって危険にさらされてはいない。

34:6.12 (381.6) 精霊の導きのそのような生活が、自由に聡明に受け入れられるとき、神の接触と精霊の親交の確かさからくる、の積極的意識が徐々に展開する。遅かれ早かれ、「精霊は、あなたが神の子であるということをあなたの精霊(調整者)とともに証言する」。記録は、精霊があなたの精霊の証言をするのではなく、「あなたの精霊」と共に証言するので、既にあなた自身の思考調整者は、神へのあなたの親族関係についてあなたに伝えてきた。

34:6.13 (381.7) 人間の人生の精霊支配の意識には、精霊に導かれたそのような人間の人生反応における精霊の特性の増加する提示がやがて伴う。「なぜならば、精霊の果実は、愛、喜び、平穏、忍耐、優しさ、善、信仰、温順さ、節制であるから」。そのような精霊に導かれ神々し

く照らされた人間は、労苦の道を歩み、俗事の義務を忠実に実行する一方で、別の世界の遠い岸でかすかに光るとき既に永遠の命の光についてすでに明察し始めつつある。既に、彼らは、「神の王国は飲食物ではなく、聖霊の中の正義、平和、喜びである。」というその奮い立たせ元気づける真実の現実を理解する。そして、精霊生まれの魂は、あらゆる試練を経験し、あらゆる苦難の遭遇に際し、神の愛が、神の精霊の存在によってすべての心で広くはじかれるので、あらゆる恐怖を超えるその望みによって支えられている。

7. 精霊と肉体

34:7.1 (382.1) 肉体(動物-起源の人種に由来する固有の本質)は、生まれつき神性の精霊の果実を身につけてはいない。ユランチアの人種が、幾分かアダームの贈与によって進められるように、人間の本質が神の物質の息子の本質追加によって増進されるとき、そのとき道が、精霊の性格の産物の素晴らしい収穫をもたらすために内住する調整者との真実の精霊に協力してよりよく用意される。永遠は、依頼を実現させるために必要であるかもしれな

いが、あなたが、この精霊を拒絶しないならば、「彼は、あなたをすべての真実に誘導するであろう。」

34:7.2 (382.2) 精霊的進歩の正常な世界に居住する進化する人間は、現在のユランチア人種を特徴付ける精霊と肉体間の深刻な葛藤を経験しない。しかし、最も理想的な惑星においてさえ、前アダームの人間は、純粋に動物的経験の水準から徐々に知的な意味と精霊のより高い価値の連続する段階を経て上昇する積極的な努力を投入しなければならない。

34:7.3 (382.3) 通常の世界の人間は、物理的本質と精霊的本質間の絶えず続く争いを経験しない。人間は、存在の動物段階から精霊生活のより高い水準へ登る必要性に直面するが、この上昇は、相違する物質的および精神的本質のこの領域におけるユランチアの人間の激しい葛藤と比較すると、どちらかと言えば教育訓練を受けている方に近い。

34:7.4 (382.4) ユランチアの民は、進歩的惑星の精霊的到達に関わるこの課題における支援の二重の剥奪の結果に苦しんでいる。カリガスティア動乱は、世界的混乱を引き起

こし、秩序立った社会が提供したであろう道徳的援助をその後のすべての世代から奪った。しかし、より悲惨であったことは、精霊的切望とより調和的であった物理的本質の優れた型の人種を奪ったという点においてアダームの不履行であった。

34:7.5 (382.5) ユランチアの人間は、エーデンの贈与により遠い祖先が完全にアダームのようにはされなかったので、精霊と肉体の間のそのような著しい苦闘を被ることを余儀なくされる。ユランチアの必滅の人類は、より自然に精霊に反応的である物理的本質をもつということが神性の計画であった。—意味不解

34:7.6 (382.6) 人の本質とその環境へのこの二重の災難にもかかわらず、現代の人間が、神の信仰の息子が天の父の意志を為すことへの心からの献身である啓発的、かつ解放的奉仕における肉体の奴隷的束縛からのかなりの解放を味わう精霊の王国に入るならば、人間は、肉体と精霊間のこの明白な争いをあまり経験しないでろう。イエスは、人間がカリガスティアの反逆の恐ろしい結果からほぼ完全に逃げることができ、そして最も効果的にアダー

ムの不履行から生じる剥奪を補うことができる人間生活の新しい方法を人類に示した。「キリスト・イエスの命の精霊は、我々を動物の生活の法と悪と罪の誘惑から自由にした。」「あなたの信仰こそが、肉体に打ち勝たしめた勝利である。」

34:7.7 (383.1) 精霊生まれの神を知る男女は、一度も罪で汚れたり反逆に接したことのない最も正常な世界の住民と同じく、人間の本質とのそれ以上の闘争を経験しない。信仰の息子は、抑制されない、あるいは自然に反する物理的願望によって起こされる葛藤のはるか上の知的段階で努力して進み、また精霊の水準で生活する。動物的生物の正常の衝動と物理的本質の自然の欲求と刺激は、無知の者、間違ったことを教えられた者、あるいは不幸にも過度に真面目な者達の心を除いては、精霊的に最高度の到達に矛盾してはいない。

34:7.8 (383.2) 永遠に続く命の道に入った後は、課題を受け入れ向上する命令を受けた後は、人間の健忘性と移り気の危険を恐れてはいけない、失敗の疑念に、あるいは複雑な混乱に煩わされてはいけない、苦しんだり、あなたの

地位と状況をためらったり疑問をもってはいけない。真実の精霊は、前進の戦いでのあらゆる岐路において、暗い時間の度に、いつも「これが道である」と伝えるのであるから。

34:7.9 (383.3) [ユランチアでの奉仕に一時的に配属された強力な使者による提示]

論文 35
神の地方宇宙の息子

35:0.1 (384.1) すでに紹介された神の息子には楽園の起源があった。それは、普遍的領域の神の支配者の子である。ネバドンには、創造者の息子である最初の楽園の息子の体系の一名だけが、すなわち宇宙の父で主権者であるマイケルだけがいる。ネバドンには、楽園の息子関係の第二系列の中からは、すなわちアヴォナルの、あるいは権威の息子の中からはその完全な割当てである1,062の息子がいる。そして、これらの「小キリスト」は、ユランチアの創造者であり主たる息子がそうであったように惑星の贈与において同じように有効で全能である。三位一体の起源である第三系列は、地方宇宙に登録はしないが、私は、記録にある9,642の創造物-三位一体の補佐を除く

1万5千～2万の三位一体の教師たる息子がネバドンにいると見積もる。楽園のこれらのダイナルは、司法長官でも行政長官でもない。それらは、超教師である。

35:0.2 (384.2) 検討しようとしている息子の型は、地方宇宙の起源である。それは、相補関係の宇宙の母なる精霊との様々なつながりにおける楽園の創造者の息子の子である。これらの物語において地方宇宙の息子の次の位階について言及される。

35:0.3 (384.3) 1. メルキゼデクの息子

35:0.4 (384.4) 2. ヴォロンダデクの息子

35:0.5 (384.5) 3. ラノナンデクの息子

35:0.6 (384.6) 4. 生命運搬者の息子

35:0.7 (384.7) 三位一体の楽園神は、息子の3系列：マイケル系、アヴォナル系、ダイナル系の創造のために機能する。地方宇宙の二重神、すなわち息子と精霊もまた、息子の3高位の系列の創造において機能する。メルキゼデク系、ヴォロンダデク系、ラノナンデク系。そして、この三重発現の達成後、それらは、多才の生命運搬者の系

列の生産において次の七重の神の段階で協働する。これらの存在は、神の下降する息子の部に分類されるが、それらは、宇宙生命の特有で最初の型である。次の論文全体は、それらについての考慮すべき事項が占める。

1. 父メルキゼデク

35:1.1 (384.4) 輝く明星や他の行政人格のような個人補佐の存在体をもたらした後、特定宇宙の神性の目的と創造計画に基づき、創造者の息子と創造の精霊、つまり地方宇宙の無限の精霊の娘の間で創造的統一の新しい型が生じる。この創造的協力関係から生じる人格の子が、その名前の集団全体を生み出すために後に創造者の息子と創造の精霊と協働する固有の存在体である最初のメルキゼデク—父メルキゼデクである。

35:1.2 (385.1) 父メルキゼデクは、ネバドン宇宙において輝く明星の第1幹部提携者として務める。ガブリエルはより宇宙政策に専念し、メルキゼデクは実践的進行に。ガブリエルは、ネバドンの定期的に設置される裁決機関と協議会の議長を、メルキゼデクは、特別で驚くべき、しかも非常時の委員会と諮問機関の議長を務める。ガブリエ

ル不在時には父メルキゼデクがネバドンの主要な行政者として機能するので、ガブリエルと父メルキゼデクは、決して同時にサルヴィントンを離れることはない。

35:1.3 (385.2) 我々の宇宙のメルキゼデク系は、父メルキゼデクとのつながりにおける創造者の息子と創造の精霊により標準時1千年の期間内にすべてが創造された。メルキゼデクは、自身の番号の1つが調整的創造者として機能した息子の資格の系列であることから一部は自己起源として構成しており、それ故、崇高な型の自治実現のための志望者である。最初のメルキゼデクは、　ある固有の共通の親の特権を行使するものの、メルキゼデクは、標準時間で7年1期間の行政長官を定期的に選び、そうでなくても自己を規制する系列として機能する。この父メルキゼデクは、時々、特別生命運搬者として機能させるために中間ソナイト世界へ、ユランチアではこれまで明らかにされていない棲息惑星の一つの型へと系列の特定個人を任命する。

35:1.4 (385.3) メルキゼデク系は、超宇宙の法廷で審議中の目撃者として呼び出されたり、時々指定されるように、同

じ超宇宙内で別の宇宙への代表としての特別大使に指定される場合を除き、広範囲にわたる地方宇宙外での機能はしない。各宇宙の最初の、または長子のメルキゼデクは、隣接の宇宙、または自分の系列への関心と義務に関係する任務で楽園に旅することがいつでも自由である。

2. メルキゼデク系の息子

35:2.1 (385.4) メルキゼデク系は、人間上昇の奉仕活動において直接に機能できるように、つまり肉体化の必要性なくして進化する人種に奉仕できるように下級生物の生命に十分に接近する神性の息子の最初の系列である。これらの息子は、起源が最高神性と意志を天賦された最下級の生物の生命の間のほとんど中途にあるので、当然のことながら人格の雄大な下降の中間点にいる。このようにして、それらは、より高度で神聖な生活段階と進化世界上の下級の、さらには物質の生命の型の間の自然な仲介者になる。熾天使の系列、天使は、メルキゼデク系と共に働くことを大いに楽しむ。事実、知的生命のすべての型は、これらの息子の中に理解ある友人、思いやりのある教師、思慮ある助言者を見い出す。メルキゼデク系は、自治の系列である。

35:2.2 (385.5) 我々は、この独特の集団に至っては、地方宇宙の存在体側の自己決定への最初の試みに遭遇し、また最高度の自治の型を観測する。これらの息子は、関連する6球体とその支流世界はもとより自らの集団と故郷の惑星管理のために自身の機構を組織する。加えて、息子達は、決して自らの特権を乱用したことがないということが記録されるべきである。これらのメルキゼデクの息子は、オーヴォントンの全超宇宙を通じ、一度たりともかつてその信用を裏切ったことがなかった。それらは、自治を求める宇宙集団の望みである。ネバドンの球体全てへの自治の模範であり教師である。上からの優れたものと下からの配下の知的存在の全系列が、メルキゼデク系の政府を心から称賛している。

35:2.3 (386.1) メルキゼデク系の息子の系列は、大家族の長男の地位にあり、責任を担う。それらの仕事の大部分は、定まっておりやや平凡であるが、その多くが、自発的であり完全に自らが課しているものである。時々サルヴィントンで召集される特別会合の大部分は、メルキゼデクの動議提出によるものである。これらの息子は、自身の自発性に基づきその出身宇宙を巡回する。それらは、領

域の通常行政に関する通常機関を通して宇宙本部に入ってくる全情報に関係なく創造者の息子に定期的に報告し、宇宙情報に専念する自治組織を維持する。それらは、もともと偏見のない観察者であり、全階級の知的存在に完全な信用がある。

35:2.4 (386.2) メルキゼデク系は、領域の移動法廷、および勧告の見直し法廷として機能する。これらの宇宙の息子は、諮問委員会としての役目を果たし、宣誓供述書を取り、提案を受け入れ、また相談役としての役割を果たしに小集団で世界に出掛け、このようにして進化の領域の業務で時々起こる大きな困難の収拾と深刻な対立の解決のために力添えをする。

35:2.5 (386.3) 宇宙のこれらの最年長の息子は、創造者の息子の命令実行において輝く明星の主要な助力者である。一人のメルキゼデクが、ガブリエルの名において遠く離れた世界に行くとき、その特定任務の目的のために、送り主の名のもとに任命され、その場合には、メルキゼデクは、輝く明星の完全な権威をもって指定の惑星に現れるであろう。これは、より高等の息子が、領域の創造物の

姿でまだ出現していないそれらの球体においては特にそうである。

35:2.6 (386.4) 創造者の息子は、進化の世界における贈与経歴を始めるとき、単独で行く。だが楽園の兄弟のなかの1名、アヴォナルの息子が、贈与を始めるとき、非常に効率的に贈与任務の奏功に貢献するメルキゼデクの支持者達、数にして12名が、アヴォナルの息子に伴う。それらはまた、棲息界への権威の特務にある楽園のアヴォナルを支持しており、アヴォナルの息子もまたこのように明らかであるならば、これらの任務においてメルキゼデク系は、人間の目に見える。

35:2.7 (386.5) メルキゼデク系は、惑星の精霊の必要性の全局面において奉仕活動をする。それらは、創造者の息子と楽園の父の最終的、かつ完全な認識への進歩的生活の世界全体を勝ちとる教師である。

35:2.8 (386.6) メルキゼデク系は、賢明さにおいてはほぼ完全であるが、判断においては絶対確実ではない。惑星任務中、離れていたり単独であるとき、小事においてどうかすると失策する、つまり、上司が後に承認しないある事

柄をすることを選択してしまう。判断上のそのような誤りは、メルキゼデクが、サルヴィントンに行き、創造者の息子との謁見において仲間との不一致を引き起こした不調和を有効に清めるその指示を受けるまで資格を取り上げる。そして、3日目の教化の小休止後に、奉仕への復職がある。しかし、メルキゼデク機能におけるこれらの些細な不適合は、ネバドンでは滅多に起こらなかった。

35:2.9 (387.1) これらの息子は、増加する系列ではない。その数は、各地方宇宙で異なるものの、固定している。メルキゼデクのネバドン本部惑星の記録数は、1,000万を超えるのである。

3. メルキゼデクの世界

35:3.1 (387.2) メルキゼデク系は、宇宙本部であるサルヴィントン近くの自身の世界に陣取る。メルキゼデクという名のこの球体は、それぞれが、分化する活動に専念する従属的6球体に包囲されている70個の主要球体のサルヴィントン回路の誘導世界である。これらの驚嘆すべき球体—70個の主要体と420の属体—は、しばしばメルキゼデ

ク大学と言われる。ネバドンの全星座から上昇する人間は、サルヴィントン在留身分習得の際、全490世界における養成を経験する。しかし、上昇者の教育は、サルヴィントンの建築球体群で行われる多様の活動の1局面にすぎない。

35:3.2 (387.3) サルヴィントン回路の490球体は、10集団に分割されており、各々が7個の主要体と42個の属体を有する。この各集団は、宇宙生命の主要系列のどれか1つの全体的監視下にある。周回する惑星の進行において誘導世界と次の6個の第一球体を包含する第一集団は、メルキゼデクの監視下にある。これらのメルキゼデク世界は次の通りである。

35:3.3 (387.4) 1. 誘導世界—メルキゼデクの息子の故郷の世界

35:3.4 (387.5) 2. 肉体的生命の学校と生活エネルギーの実験室の世界

35:3.5 (387.6) 3. モロンチア生命の世界

35:3.6 (387.7) 4. 初期の精霊生命の球体

35:3.7 (387.8) 5. 中間の精霊生命の世界

35:3.8 (387.9) 6. 前進的精霊生活の球体

35:3.9 (387.10) 7. 統一的、かつ崇高的自己実現の領域

35:3.10 (387.11) メルキゼデクの各球体の6個の従属世界は、関連する第一球体の働きと密接な関係にある活動を続けた。

35:3.11 (387.12) 誘導世界、つまり球体メルキゼデクは、時間と空間の上昇する人間の教育と精霊化に従事する全存在体の共通の集会場である。この世界は、上昇者にとりおそらくネバドン中で最も興味深い場所である。星座級教育を卒業するすべての進化的人間は、メルキゼデクに下り立つ運命にあり、そこではサルヴィントンの教育制度の規律と精霊進歩の体制への先導がある。そして、あなたは、他とは異なるこの世界での生命の最初の日に対する自分の反応を決して忘れることはないであろう。楽園の目的地に到達後にさえも。

35:3.12 (387.13) 上昇する人間は、専門分野別教育が行われる周回する6個の惑星での教育続行の間メルキゼデク世界に居住しつづける。そして、この同じ方法は、70の文化世

界での、すなわちサルヴィントン回路の第一球体での滞在中固く守られる。

35:3.13 (387.14) メルキゼデク球体の6従属世界に住む夥しい存在体の時間は、多種多様の活動で費やされるが、これらの衛星においては、次の研究の特別な局面が上昇する人間に関して向けられる。

35:3.14 (388.1) 1. 球体1号は、上昇する人間の最初の惑星生活の再検討に従事する。この仕事は、人間の起源のある定められた世界の出身である者達で構成される学級で処理される。ユランチアからの者達はそのような経験的再検討に共に従事する。

35:3.15 (388.2) 2. 球体2号の特別の仕事は、地方体制本部の第一衛星を包囲している大邸宅世界での経験と同様の再検討にある。

35:3.16 (388.3) 3. この球体の再検討は、地方体制の首都における滞在に関係があり、残りの建築世界の体制本部群の活動を含む。

35:3.17 (388.4) 4. 4番目の球体は、星座とその関連球体の70の従属世界の経験の再検討で占められる。

35:3.18 (388.5) 5. 5番目の球体においては星座本部世界における上昇者滞在の再検討が行われる。

35:3.19 (388.6) 6. 球体6号の時間は、これらの5時代を相互に関連させる試みに注がれ、その結果、宇宙教育のメルキゼデク小学校に入る準備のための経験調整を成し遂げる。

35:3.20 (388.7) 宇宙行政と精霊的英知のための学校は、メルキゼデクの故郷の世界に位置しており、そこには、エネルギー、物質、組織、通信、記録、倫理、および生物の比較生活のような単一研究に向けられる学校もまた存在する。

35:3.21 (388.8) 精霊授与のメルキゼデク大学においては、神の息子のすべての系列は、—楽園の系列でさえも—精霊の自由と神の息子を宇宙の遠隔世界にさえも宣言する未来の目標の宣告者として出発する軍勢の養成においてメルキゼデクの教師と熾天使の教師に協力する。メルキゼ

デク大学のこの特殊学校は、この宇宙専用の公共施設であり、他の領域からの学生訪問者は受け入れない。

35:3.22 (388.9) メルキゼデク系によるメルキゼデク故郷の世界には宇宙行政教育の最高課程が開かれている。この高等倫理大学は、最初の父メルキゼデクによって主宰されている。様々な宇宙が、交換留学生を送るのはこれらの学校へである。ネバドンの若い宇宙は、精神的達成と高い倫理的発達において低い位置にあるとは言うものの、我々の行政問題が、すぐ近くの他の創造のために宇宙全体を巨大な診療所へと変化させたのでメルキゼデク大学には他の領域からの学生訪問者と観察者でにぎわっている。ネバドンのメルキゼデク系列は、スプランドン中で有名であることから、地方登録者の巨大集団の他にメルキゼデク学校に出席する10万人強の外国人学生が常にいる。

4. メルキゼデク系の特別活動

35:4.1 (388.10) メルキゼデク活動の非常に専門化している部門は、上昇する人間の進歩的モロンチア経歴の監督と関係がある。この教育の多くは、宇宙到達の比較的高い段階

に昇った人間による補助を受ける我慢強く賢明な熾天使の奉仕活動によって行われるが、この全教育業務が、三位一体の教師たる息子とのつながりにおいてメルキゼデクの一般的監視下にある。

35:4.2 (389.1) 主に地方宇宙の巨大な教育制度と経験的養成体制に力を注ぐ一方で、メルキゼデク系列は、独自の課題と異例の情況においてもまた機能する。いずれは1,000万ほどの棲息世界をもつようになる進化する宇宙には、並外れの多くの事が起こるように運命づけられており、メルキゼデク系が行動するのは、そのような非常時においてである。エデンチアにおいては、すなわち、あなたの星座本部においては、それらは、非常時の息子として知られている。それらは、惑星、体制、星座、宇宙にかかわらず、すべての緊急事態—物理的、知的、あるいは精霊的—に際しいつでも役目を果たす準備ができている。あなたは、特別な救援が必要なときは、いつであろうと、どこでであろうと、１名以上のメルキゼデクの息子を見つけるであろう。

35:4.3 (389.2) 創造者の息子の計画に何らかの機能破綻の兆候があると、一人の　メルキゼデクが、直ちに援助する。しかし、それらは、サタニアに起きたような罪深い反逆発生において機能するために幾度も呼び集められるというわけではない。

35:4.4 (389.3) メルキゼデク系は、意志をもつ生物が住む全世界のいかなる自然のあらゆる非常時にも真っ先に行動する者たちである。彼らは、不履行の惑星政府の受信機としての役目を果たし、一時的な世話役として、時おり方角の定まらない惑星で行動する。メルキゼデクの息子は、惑星の危機に際し多くの独自の能力をもって役に立つ。そのような息子にとり自分を人間に見えるようにすることは、容易に可能であり、時々この系列の1つは、人間の肉体の姿で具体化さえしてきた。1名のメルキゼデクは、ネバドンでは進化する世界で人間の姿で7回役目を果たし、これらの息子は、宇宙生物の他系列の姿で数多くの機会に現れた。これらの息子は、実に宇宙有識者の全系列への、全世界への、それに世界の体制への非常時の万能、かつ奉仕の公使である。

35:4.5 (389.4) アブラーハーム時代ユランチアで生活したメルキゼデクは、シャレイムと呼ばれる場所に住む真実探求者の小植民地を統括したことかたシャレイム王子として局所的に知られていた。彼は、人間の姿での肉体化を志願し、生命の光が拡大する精霊的暗黒のその期間に消されるようになると恐れた惑星のメルキゼデクの受取役の承認で肉体化をした。また自分の時代の真実の普及を深め、それを安全にアブラーハームとその仲間に伝えた。

5. ヴォロンダデク系の息子

35:5.1 (389.5) 創造者の息子と地方宇宙の創造の精霊は、個人的補佐と万能の最初の集団メルキゼデクの創造後、宇宙の息子の2番目のすばらしいさまざまの系列、つまりヴォロンダデク系を計画し生み出した。この系列の息子は、全地方宇宙の各星座政府の首脳に一様に見られ、より一般的には星座の父として知られている。

35:5.2 (389.6) ヴォロンダデク系の数は、各地方宇宙において異なり、ネバドンの記録数は、ちょうど100万である。これらの息子は、対等のものであるメルキゼデク系よう

には何の再生力もない。その数字を増加し得る周知の方法は、存在しない。

35:5.3 (389.7) これらの息子は、多くの点で運営集団である。それらは、個人として集団として、全体としてでさえメルキゼデクのようにおしなべて自己決定であるものの、ヴォロンダデク系だけは、そのような広範囲の活動で機能しない。それらは、優れた多才性においてメルキゼデクの同胞とは等しくはないが、支配者として、また明敏な行政者としてより以上に信頼でき有能でさえある。またヴォロンダデク系は、完全にはその下位の仲間の、すなわちラノナンデク体制君主の行政の仲間ではないとはいえ、目的の持続性と神性らしい判断において宇宙息子に関する全系列よりも優れている。

35:5.4 (390.1) 息子のこの系列の決定と統治は、いつも神の息子の精霊に従い、創造者の方針と調和しているが、過失のために創造者の息子への出頭を命じられており、また息子達の決定方法の細部については、宇宙の高等裁判所への上訴で時々覆された。しかし、これらの息子はめったに誤りを犯さず、しかも一度も反逆に至ったことがな

い。ネバドンの全歴史において、ヴォロンダデクの1名たりとも決して宇宙政府の侮辱罪に問われたことがない。

35:5.5 (390.2) ヴォロンダデク系の業務は、地方宇宙において大規模で様々である。他の宇宙への大使として、また出身宇宙内において星座を代表する領事として役目を果たす。重大な宇宙状況において行使される主権の完全委任は、ほとんどの場合が地方宇宙の息子の全系列中ヴォロンダデク系にする。

35:5.6 (390.3) 通常、精霊的な暗闇に隔離されるそれらの世界においては、すなわち、反逆と不履行ゆえに惑星孤立を被ってきたそれらの球体には、1名のヴォロンダデク観察者が、たいていは正常な状況回復まで居合わせている。このいと高きものの観察者は、ある種の非常時にその惑星に配属されるあらゆる天の存在体に絶対の、任意の権威を及ぼすことができた。サルヴィントンにある記録では、ヴォロンダデク系は、そのような惑星のいと高きものの摂政のような権威を時として行使した。これは

また、反逆の影響のない棲息世界についてでさえ本当である。

35:5.7 (390.4) しばしば、12名のヴォロンダデクの息子、あるいはそれ以上の軍団が、惑星もしくは体制の状況における特別案件の再検討や上告の高裁として裁判官全員出席の上で開廷する。しかし、それらの仕事は、主としては星座政府の生来の立法機能に関係する。ヴォロンダデクの息子は、これらの全活動のすえ、地方宇宙の歴史家となった。それらは、個人的にはすべての政治紛争と棲息界の社会的激変に精通している。

6. 星座の父

35:6.1 (390.5) 少なくともヴォロンダデクの3体系が、地方宇宙の100の星座の各支配者の位置に配属された。これらの息子は、創造者の息子に選ばれ、1　デカミレニアム—1万標準年、ユランチア時間のおよそ5万年—の間の活動のためにガブリエルにより星座のいと高きものとして任命される。君臨するいと高きもの、すなわち星座の父には上級と下級の2名の提携者がいる。上級提携者は、各行政変更毎に政府の首班となり、下級者は、上級者の職

務を引き受け、一方配属されなかったサルヴィントン世界に居住するヴォロンダデク系は、下級提携者の責務を担うための選抜候補者としてそれらの中から1つの番号を指名する。したがって現在の方針では、いと高きものの各支配者には星座本部における3デカミレニアムという活動の1期間、およそ15万ユランチア年がある。

35:6.2 (390.6) 100名の星座の父は、つまり星座政府の実際の統括首班は、創造者の息子の最高諮問内閣を構成する。この協議会は、宇宙本部での頻繁の会期があり、またその審議の範囲と程度は無制限であるが、星座の福祉と地方宇宙全体の行政統一に主に関係がある。

35:6.3 (391.1) 上級提携者は、星座の父が宇宙本部での奉仕に際して頻繁にそうであるように星座業務の代理指揮官になる。上級提携者の通常機能は、精霊的問題の監視であるが、下級提携者は、個人的に星座の物理的福祉に専念している。しかしながら、どんな主要方針も、いと高きもの3者全員がその実行の全詳細に同意しない限り1星座での実行はない。

35:6.4 (391.2) 精霊の知的存在体と通信回路の全機構は、星座のいと高きものの自由になる。サルヴィントンの上司と地方体制の君主である直属部下との完全な接触をする。彼らは、星座の状況についての審議のためにこれらの体制君主との協議会を頻繁に召集する。

35:6.5 (391.3) いと高きものは、星座本部における様々な集団の臨場または地方の必要条件に従って時々人数と人事が変化する相談役の一団を周りに集める。緊張時にはヴォロンダデク系の補足的な息子の管理業務の援助を求めるかもしれないし、またすぐに受け入れるであろう。ノーラティアデクは、つまりあなた自身の星座は、現在ヴォロンダデクの12名の息子により管理されている。

7. ヴォロンダデク系世界

35:7.1 (391.4) サルヴィントンを囲む70個の主要球体の回路における7つの世界の第二集団が、ヴォロンダデク系惑星を構成する。周回するその6個の衛星とともに球体のそれぞれが、特別なヴォロンダデク活動の局面で専心する。上昇する人間は、これら49の領域において宇宙法を尊重しつつ自身の教育の頂点を確保する。

35:7.2 (391.5) 上昇する人間は、星座の本部世界での働きの際立法議会を見学してきたが、ここヴォロンダデク界においては上級のヴォロンダデク系の後見により地方宇宙の実際の一般法制の制定に参加する。そのような制定は、100星座の自治の立法議会の様々な公式見解を調整するように考案されている。ヴォロンダデクの学校で行なわれる教育は、ユヴァーサに劣らないものである。この養成は、進歩的であり、その6個の衛星への補足作業とともに最初の球体から残る6個の主要球体、そして関連する衛星集団へとずっと広がっている。

35:7.3 (391.6) 上昇する巡礼者は、研究と実習のこれらの世界での数々の新活動に導き入れられるであろう。我々には、これらの新たで全く予想外の営みである顕示の仕事を禁じられてはいないが、人間の物質の心にはこれらの仕事を描けないものとあきらめる。我々にはこれらの崇高な活動の意味を伝える言葉がないし、49個の世界での研究を進めはするが、上昇する人間のこれらの新たな職業の実例として有用できる類似する人間の取り組みは何もない。また、上昇者の政権の一部ではない他の多くの

活動が、サルヴィントン回路のこれらのヴォロンダデク系世界の中心に置かれている。

8. ラノナンデクの息子

35:8.1 (392.1) 創造者の息子および宇宙の母なる精霊は、ヴォロンダデク系の創造後、宇宙の息子の第三系列、ラノナンデク系を生み出す目的で結合する。それらは、組織行政に関わりのある様々な課題に忙しなく取り組んではいるものの、体制君主、すなわち局部恒星系支配者として、それに惑星王子、すなわち棲息界の行政代表としてよく知られている。

35:8.2 (392.2) これらの存在体は、息子の創造の後の、しかも低い系列である—神性段階に関係して—その後の仕事に備えてメルキゼデク世界において訓練の課程を潜り抜けなければならなかった。彼らは、メルキゼデク大学の最初の学生であったし、また能力、人格、到達に準じてメルキゼデク教師と試験官により類別され公認された。

35:8.3 (392.3) 正確に1,200万のラノナンデク系が、ネバドンの宇宙にその存在を始め、またメルキゼデク球体を通過したとき最終テストで3分割された。

35:8.4 (392.4) 1. 主要ラノナンデク系。最高階級には、709,841の主要ラノナンデク系があった。これらは、体制君主として、また星座の最高協議会への補佐として宇宙のより高い管理業務の相談役に指定される息子である。

35:8.5 (392.5) 2. 第二次ラノナンデク系。メルキゼデクからのこの系列には、10,234,601があった。それらは、惑星王子としてその系列の増援部隊に割り当てられる。

35:8.6 (392.6) 3. 第三ラノナンデク系。この集団は1,055,558を有した。これらの息子は下級補佐、使者、世話役、委員、観察者として機能し、1体制とその構成世界の雑務を遂行する。

35:8.7 (392.7) これらの息子にとり、進化する存在体のようには、1集団から他集団へと進むことは可能ではない。それらは、一度試験され分類されると、メルキゼデク教育の対象になると、指定された階級で継続的に働く。これらの息子は、生殖にも従事しない。宇宙におけるそれらの番号は変わらない。

35:8.8 (392.8) ラノナンデクの系列は、概数でサルヴィントンで次のように類別される。

35:8.9 (392.9) 宇宙進行係と星座相談役 100,000

35:8.10 (392.10) 体制君主と補佐. 600,000

35:8.11 (392.11) 惑星王子と予備軍. 10,000,000

35:8.12 (392.12) 使者軍団. 400,000

35:8.13 (392.13) 世話役と記録係. 100,000

35:8.14 (392.14) 予備軍団. 800,000

35:8.15 (392.15) ラノナンデク系は、メルキゼデク系とヴォロンダデク系よりもいくらか低い系列であり、知力ある人種の下級生物をより近くに引き寄せることができることから、宇宙の下位の構成単位においてさらに大いに役立

つ。彼らは、また堕落の、すなわち宇宙政府の許容できる手段からの離脱のより大きな危機に立つ。しかし、これらのラノナンデク系は、特に第一の系列は、地方宇宙の全行政者の中で最も有能多才である。経営者能力においては、ガブリエルとその明かされていない仲間だけがそれらに抜きん出ている。

9. ノナンデクの支配者達

35:9.1 (393.1) ラノナンデク系は、惑星の継続する連連たる支配者とその体系の持ち回り制の君主である。そのような息子は、現在ジェルーセムで、つまり棲息界のあなたの局部恒星系本部において支配している。

35:9.2 (393.2) 体制君主は、棲息界の各体系本部の2、3の委員会で統治する。星座の父は、1万年毎にこれらのラノナンデク系の1名を長として任命する。星座支配者にとり問題というものは完全に任意であることから、時々三人組の頭には何の変更もしない。体系政府は、ある種の悲劇が起こらない限り、突然には人事変更をしない。

35:9.3 (393.3) 体制君主、あるいは補佐が更迭されるとその空席は星座本部にある最高協議会によりその系列の予備軍

からの、エデンチアでは前述の平均よりは大きい集団からの選出で埋められる。

35:9.4 (393.4) ラノナンデク最高協議会は、様々な星座本部に配置される。そのような機関は、星座の父の年長のいと高きもの提携者が統括する傍ら、年少の提携者は、二次系列の予備軍を監督する。

35:9.5 (393.5) 体制君主は、それぞれの名に背かない。それらは、棲息界の局部的問題においてほぼ最高である。それらは惑星王子、物質の息子、および奉仕活動の精霊の指揮において父親に近い存在である。主権の個人的把握は、ほぼ完全である。三位一体観察者によるこれらの支配者にたいしての中央宇宙からの監督はない。これらの支配者は、地方宇宙の管理部にあり、法的権限の執行信託者として、また判決適用のための執行者としてマイケルの息子の意志への個人の不忠が最も簡単、かつ容易にそれ自体の地歩を固め、それ自体について断言しようとする宇宙行政全体において1つの場所を提示する。

35:9.6 (393.6) ノナンデク系列の700名の息子が宇宙政府に反逆したことは、我々の地方宇宙にとっての不幸であった

し、その結果、いくつかの体制と多数の惑星上に混乱を勃発させた。この全失敗者の中で体制君主は、3名だけであった。実際上、これらの息子のすべてが、第2、第3番系列に、すなわち惑星王子と第三ラノナンデク系に属した。

35:9.7 (393.7) 清廉さから堕落したこれらの息子の多くは、創造における何の誤りも示さなかった。これらの息子は、神のように完全にされたかもしれないが、時間と空間の世界に住む進化する生物をよりよく理解し、また近づけるように創造された。

35:9.8 (393.8) 我々の宇宙は、ヘンセロンを除くオーヴォントンの全地方宇宙の中で息子のこの系列の多くを失った。ラノナンデク系列の我々の息子が選択や計画においてそのようなかなりの度合いの個人の自由を設定したことでネバドンに多くの行政問題が生じたというのが、ユヴァーサにおける共通認識である。私は批判の方法でこの観測をするのではない。我々の宇宙の創造者には、これをする完全な顕現と力がある。そのような自由選択の息子が、宇宙の初期において過度の問題を起こすが、事態は

完全に篩いに掛けられ、やがては落ち着くとき、これらの徹底的に試された息子側のより高い忠誠心とより完全な意志に基づく働きの収穫は、　早期の混乱と苦難を補う以上のものであろうというのが、我々の支配者の論点である。

35:9.9 (394.1) 新主権者は、体制本部での反逆の場合、通常は比較的短期間で任命されるが、個々の惑星においてはそうではない。それらは、物質的創造の構成要素単位であり、被創造物の自由意志は、そのような問題すべての最終的判決の際の要素である。後継の惑星王子は、孤立世界、すなわち権威あるそこの王子が身を誤ってしまったかもしれない惑星に指定されるが、反乱の結果がメルキゼデクと他の活動する人格によって採用される改善手段により部分的に克服され取り除かれるまでは、彼らはそのような世界の活発な統治者の支配権を引き受けない。惑星王子による反逆は、即座にその惑星を隔離する。局部の精神的回路は、すぐさま断ち切られる。贈与の息子だけが、そのような精神的に孤立の世界における惑星間の通信回路を回復させることができる。

35:9.10 (394.2) これらの我がままで浅はかな息子を救う計画は存在し、多くはこの慈悲深い対策を利用した。だが、それらの不履行の地位での機能は決して二度と許されない。それらは甦生後、守衛任務と物理的管理部に配属される。

10. ノナンデク世界

35:10.1 (394.3) 42個の衛星を有する70個の惑星のサルヴィントン回路における7世界の第3集団は、行政球体のノナンデク群を構成する。これらの領域においては、元の体制君主の軍団に属する経験豊富なラノナンデク系が、上昇する巡礼者のための行政教師と熾天使の軍勢の役を勤める。進化する人間は、仕事中の体制管理者を体制首都でよく観察するが、それらは、ここでは1万の地方体制の行政宣言の実際の調整に参加する。

35:10.2 (394.4) 地方宇宙のこれらの行政学校は、体制君主として、また星座相談役として長い経験を持つラノナンデクの息子の軍団に統監される。これらの施政大学より優れているのは、エンサの行政学校だけである。

35:10.3 (394.5) ラノナンデク世界は、上昇する人間のための教育球体として目的を果たし、宇宙の通常の正規の行政運営と関係ある大規模な仕事のための中心である。はるか楽園へと上昇する巡礼者は、応用知識のための実用学校でのそれぞれの研究に従事する—授業に基づきく実際の教練。メルキゼデクの後援する宇宙の教育制度は、実用的、進歩的、有意義、かつ経験的である。それは、物質的、知的、モロンチア的、かつ精霊的なものにおける教育を含む。

35:10.4 (394.6) その系列の救助された息子のほとんどが惑星業務の世話役として指導官として役目を果たすのは、ラノナンデク系のこれらの管理球体に関係している。提示された甦生の受け入れを選ぶ不履行の惑星王子と暴動を起したその仲間は、少なくともネバドンの宇宙が光と生命に落ち着くまで、これらの通常の能力で務め続けるであろう。

35:10.5 (394.7) しかしながら、より古い体制のラノナンデクの息子の多くは、業務、管理、および精神的達成の素晴らしい記録を確立してきた。それらは、個人の自由の誤り

と自己決定の創作による誤りに陥る自己の傾向にもかかわらず、高貴で、忠実で、忠誠な集団である。

35:10.6 (394.8) [サルヴィントンのガブリエルの権限で行動する大天使の長官による後援]

論文 36
生命運搬者

36:0.1 (396.1) 生命は、自然発生的には始まらない。生命は、(明かされてはいない)存在体の企画者達による公式化された計画により組み立てられており、直接導入、あるいは地方宇宙の生命運搬者の操作の結果、棲息惑星に現れる。生命運搬者は、宇宙の息子達の最も興味深い家族の中にいる。息子達には、生物の生命を考案し惑星世界へ運ぶことが委ねられている。そして、この生命のそのような新世界への植え付け後、その開発促進のためにそこに長期間留まる。

1. 生命運搬者の起源と本質

36:1.1 (396.2) 生命運搬者は、神の息子の家族に属するが、超宇宙の支配者が創造に参加する地方宇宙における知的生命の唯一の集団であり、宇宙の息子の独特の、そして異

なる型である。生命運搬者は、前存在3人格からの子である。創造者の息子、宇宙の母なる精霊、超宇宙に関係のある目標を統括する3名の日の老いたるもののうちの指名による1名。知的生命の消滅を唯一命じることができるこれらの日の老いたるものは、発展世界での物理的生命の確立を委ねられている生命運搬者の創造に参加する。

36:1.2 (396.3) ネバドン宇宙においては、我々には1億の生命運搬者の創造についての記録がある。生命普及のこの有能な軍団は、正確には自治集団ではない。彼らは、ガブリエル、父メルキゼデク、およびナムビア、つまりネバドンの最初の、長子の生命運搬者から成る生命を決定している三人組の指示をうける。しかし、それらは、分割行政の全局面においては自治を行う。

36:1.3 (396.4) 生命運搬者は、主要な3分隊に等級付けされている。最初の分隊は、上級の生命運搬者で、2番目は補佐、3番目は世話役である。第一の分隊は、様々な形式の生命顕現における12群の専門家に細分される。この3分隊の分離は、生命運搬者の本部球体においてそのよう

な目的のための試験をしたメルキゼデクによって実行された。メルキゼデクは、それ以来、生命運搬者に密接に結びつけられ、生命運搬者が、新惑星に生命を確立しに先へ行くときはいつも彼らに伴う。

36:1.4 (396.5) 生命運搬者は、進化する惑星が最終的に光と生命に定着するとき、世界とその世界で栄光的存在体の一層の管理と進化を助ける諮問機関のより高い審議会に組織化される。多くの新しい義務が、発展する宇宙の後の、そして定着時代にこれらの生命運搬者にゆだねられる。

2. 生命運搬者の世界

36:2.1 (397.1) メルキゼデクには、サルヴィントン回路中の7個の主要球体の第4集団の一般的監視がある。生命運搬者のこれらの世界は、次の通りである。

36:2.2 (397.2) 1. 生命運搬者の本部

36:2.3 (397.3) 2. 生命計画球体

36:2.4 (397.4) 3. 生命保護球体

36:2.5 (397.5) 4. 生命発展の球体

36:2.6 (397.6) 5. 心と結びついた生命の球体

36:2.7 (397.7) 6. 生物に住まう心と精霊の球体

36:2.8 (397.8) 7. 明かされていない生命の球体

36:2.9 (397.9) 各第一球体は、6個の衛星に囲まれており、生命運搬者の全活動の特定の局面は、宇宙の中のその衛星の中心に置かれている。

36:2.10 (397.10) 本部球体である第一世界は、宇宙生命、つまり知られている顕現の全局面における生命の研究に捧げられている。6個の従属衛星とともに、ここには、生命計画の大学が位置しており、ユヴァーサとハヴォーナからの、楽園からさえの教師と助言者が機能している。そして、補佐の心-精霊の7個の中央定置が、生命運搬者のこの世界に位置しているということを明らかにすることが、私には許されている。

36:2.11 (397.11) 数字の10—10進法—は、精霊の宇宙にではなく物理的宇宙に固有である。生命の領域は、3、7、12、またはこれらの基本的な数の倍数と組み合わせによって特

徴付けられる。3名の楽園の根源と中枢の系列後には、第一の、そして本質的に異なる生命の3企画があり、ネバドンの宇宙では、生命に関わるこれらの3つの基本的な型が、惑星の異なる3型に分離されている。元々、移動可能な生命についての区別可能で神聖な12の概念があった。この数字12は、その因数と倍数を含む7超宇宙のすべての基本的生命のすべての型に浸透している。また、生活設計の7つの建築型、つまり生命体の再生構成の基本的配列がある。オーヴォントンの生命の型は、12名の継承運搬者へと設定される。意志をもつ生物の異なる系列は、12、24、48、96、192、384、および768へと設定される。ユランチアには、人間再生の生殖細胞の中に原型制御のための48の単位体—特色決定体—がある。

36:2.12 (397.12) 第二世界は、生命設計の球体である。生命組織のすべての新方法が、ここではじき出される。本来の生命設計は、創造者の息子によって供給されるが、これらの計画の実際の仕事は、生命運搬者とその仲間に任されている。新しい世界のための一般的な生命企画が定式化されると、それは、本部球体に伝えられ、そこでメルキ

ゼデクに相談する軍団との共同で、上級の生命運搬者の最高協議会により細かく丹念に調べられる。企画が、以前に受け入れられた定則、打開策、からのものであるならば、創造者の息子により吟味され、裏書きされなければならない。メルキゼデクの長は、これらの審議においてしばしば創造者の息子を代表する。

36:2.13 (397.13) それ故、惑星の生命は、どこか類似しているが、様々な意味で進化する世界ごとに異なる。生命は、世界の1家族における一定の生命系においてさえいかなる2惑星でさえも正確には同じではない。生命運搬者は、絶えず管理に専念する命の方式の改良努力のために働くので、常に一つの惑星の型がある。

36:2.14 (398.1) 生命発現に関わる親の型と多数の基本的機能変化を構成する100万を超す基本の、あるいは宇宙の化学式がある。生命計画球体の衛星1号は、生命伝送の、いわゆる生殖細胞質の有形の輸送手段を立ち上げる際に使われる不可欠のエネルギー単位を捕らえ、組織化し、操作する仕事において生命運搬者の役に立つ宇宙物理学者と電気化学者の領域である。

36:2.15 (398.2) 惑星の生命計画実験室は、この第2世界の衛星2号に位置する。実験室では生命運搬者とそのすべての仲間が、ネバドンの10惑星ごとの着床のために設計された生命を変更し、可能な限り改良する努力においてメルキゼデクと協力する。ユランチアにおいて現在進化している生命は、まさにこの世界で計画され、部分的に実現された。ユランチアが10惑星目、つまり生命実験世界であることから、10世界毎の1世界における標準の生命設計における大きな変化は、他の(無実験)世界よりは許されている。

36:2.16 (398.3) 第三世界は、生命の保護にささげられる。ここにおいて、生命の保護と保存の様々な方法が、生命運搬者軍団の補佐と管理者により研究され開発される。あらゆる新世界のための生命企画は、いつも生命の基本型の専門操作における後見、管理、専門家から成る生命保護委員会の早い設立に備える。ユランチアにはそのような24名の世話役委員、つまり生命物質の構造組織のための基本型、あるいは親の型ごとに2名ずつの委員がいる。例えば、あなたの惑星ような惑星における最高度の生命の型は、24の単位文様を持つ生命-運んでいる、もたら

す、束により再生れる。(知的生命は、物理的なものから生じ、物理的なものを基礎にして成長するので精神組織の基本的な24系列が生まれる。)

36:2.17 (398.4) 第4球体とその従属衛星は、一般的には生物の命の進化の研究と、特に生命のいかなる1段階の進化上の前例の研究に向けられるている。進化する世界の最初の生命原形質膜は、今後のすべての開発上の変化とその後のすべての進化上の変化と修正のための最大限の可能性を含まなければならない。生命変容のそのような遠大な事業のための対策は、明らかに役に立たない多くの型の動植物の登場を必要とするかもしれない。惑星の発展の見通しのきく、または予期しないそのような副産物は、姿を消すためにのみ舞台に出現するが、このすべての長い過程において、またそれを通じて、惑星の生命企画と種の基本構想の原物設計者の賢明で知的な定式化の糸は動く。生物進化の多種多様の副産物は、　より高い知的生命の型の最終的で完全な機能にすべて不可欠であり、外へ向かう大きな不調和は、生命の劣性の型の支配に作用するために優性の生物の上向きの長い戦いで時々持ちこたえるかもしれないということにもかかわらず、

その多くは、進化する意志をもつ生物の平和と安らぎに、時として非常に対立している。

36:2.18 (398.5) 第5世界は心に関連づけられる生命に完全に関係がある。その各衛星は、生物生命の生物と関係する生物の心の単相の研究に向けられる。例えば人が理解する心は、無限の精霊の媒体による教育不可能な段階、または機械的段階の心に重ねられた心精霊の7補佐の授与である。生命の型は、これらの補佐と、時間と空間の宇宙の中で運用される精霊の異なる奉仕活動にさまざまに対応する。精神応答に効果をもたらすための物質的な生物の容量は、関連する心の授与に完全に依存しており、それが、次にはこれらの同じ必滅の創造物の生物的進化過程を方向づけた。

36:2.19 (399.1) 第6世界は、精霊と心が、生きている型と有機体に関係づけられるように、精霊との心の相関関係に捧げられる。この世界とその6個の従属物は、 生物調整の学校を擁し、ここにおいて中央宇宙と超宇宙双方からの教師が、時間と空間における生物到達の最高水準の提示に当たりネバドンの教官と協力する。

36:2.20 (399.2) 生命運搬者の第七球体は、それが、崇高なるものの拡大する現実化の宇宙哲学に関係づけられるように、進化する生物の明らかにされていない領域に専念する。

3. 生命移植

36:3.1 (399.3) 生命は、自発的には宇宙に現れない。生命運搬者は、不毛の惑星でそれを開始しなければならない。彼らは、空間の進化世界に現れる生命のような生命の運搬者であり、種子を撒く者であり、保護者である。惑星生命のすべての型が、ユランチアに存在するわけではないが、ユランチアで知られているすべての系列と型の生命が、これらの息子と共に生まれる。

36:3.2 (399.4) 新世界への生命の植え付けに任命される生命運搬者の軍団は、通常、100名の上級運搬者、100名の補佐、1,000名の管理者から成る。生命運搬者は、しばしば、いつもではないが、新しい世界へ実際の生命原形質を運ぶ。彼らは、時おり生命設立における新しい冒険的事業のために以前に承認された方法に従い指定の惑星到

着後に生命の型を組織する。ユランチアの惑星生命の起源とは、そのようなものであった。

36:3.3 (399.5) 物理的な型が、承認された方法に従い提供されるとき、生命運搬者は、次には、精霊の生気を自分自身を通しこの生命のない物質に触媒作用を及ぼすのである。そこで不活性の原型は、直ちに生命体となるのである。

36:3.4 (399.6) 生気—生命の神秘—は、生命運搬者によってではなく、生命運搬者を経て贈与されるのである。生命運搬者は、実際にそのようなやりとりを監督し生命原形質を方式化するが、生きている原形質の不可欠要素を供給するのは、宇宙の母なる精霊である。肉体に命を与え、心を知らしめるエネルギーは、無限の精霊の創造の娘から来る。

36:3.5 (399.7) 生命運搬者自身の性質は、生命贈与において何も移されることはない。生命の新系列が、組織されるそれらの球体においてさえも。彼らは、そのような時、単に生命の火花を起こし移動する、すなわち、定められた計画と型の物理的、化学的、また電気的仕様に応じて物

体の必要な回転を開始する。生命運搬者は、触媒の生きている臨場であり、物体の物質的系列のさもなければ不活性な要素を撹拌し、組織化し、生気を吹き込む。

36:3.6 (400.1) 惑星軍団の生命運搬者には、新世界に生命を確立するための一定期間が、その惑星の時間でおよそ50万年間が与えられている。惑星生命の開発上の一定の到達により示されるこの期間の終了時、彼らは、着床の努力をやめるかもしれないし、その惑星の生命に何か新たな、または補足的なものをのちに加えることはないかもしれない。

36:3.7 (400.2) 生命運搬者は、生命確立と道徳状態の人間出現に介在する期間、生命環境を操り、別の方法で、生物発展過程を順調に方向づけることが許されている。そして、彼らは、これを長期間行うのである。

36:3.8 (400.3) 新世界を作動させる生命運搬者が、意志をもつ、すなわち、道徳決断力と精霊的選択力をもつ存在体の形成に一旦成功すると、その場で彼らの仕事は終了する—終えたのである。彼らは、発展する生命をこれ以上操ることを許されない。生き物の発展は、この地点から

先、惑星の生命方式と型に与えられ、確立された固有の性質と性向の授与に従って進行しなければならない。生命運搬者には、意志を実験したり妨げたりすることは許されていない。彼らは、道徳的生物を支配したり、あるいは任意に影響を及ぼすことはできない。

36:3.9 (400.4) 2名の上級運搬者と12名の世話役は、惑星王子の到着の際、生命原形質の一層の開発と保護の問題においてその惑星に無期限に残ることを一時的放棄の誓いによって買って出るかもしれないが、皆は、去る準備をする。現在、2名のそのような息子とその12名の仲間がユランチアで仕えている。

4. メルキゼデクの生命運搬者

36:4.1 (400.5) メルキゼデクが生命運搬者として機能した1球体が、全ネバドン棲息界のあらゆる地方体制の中にある。これらの住まいは、体制中間ソナイト世界として知られており、それぞれに物質的に変更されたメルキゼデクの息子が物質的体制の息子の選択された娘と性関係をもった。そのような中間ソナイト世界の母ハヴァ一達は、管轄区域の体制本部から派遣され、メルキゼデクの球体の

物質の娘への体制君主の呼び出しに応じる多数の志願者から指名されたメルキゼデク生命運搬者に選ばれる。

36:4.2 (400.6) メルキゼデク生命運搬者と物質の娘の子孫は、中間ソナイトとして知られている。そのような堂々たる被創造物の種族のメルキゼデクの父は、ゆくゆくは独自の生命機能の惑星を去るし、また宇宙存在体のこの特別な系列の母ハヴァーは、惑星の子孫の7世代目の出現時に立ち去る。そのような世界の指揮は、その後、彼女の長男に譲り渡される。

36:4.3 (400.7) 中間ソナイトの被創造物は、自身のすばらしい世界で標準年齢の1,000歳になるまで再生させる存在体として生き、また機能する。そして、それらは、熾天使の輸送により移動される。中間ソナイトは、熾天使に包まれる準備のために潜り抜ける非物質化の手段が再生の特権を永久に奪うことから、その後は非再生体である。

36:4.4 (400.8) これらの存在体の現在の状態は、致死、もしくは不死とは考えられず、人間として、または神性としても明確には分類されない。これらの被創造物は、調整者内住ではなく、したがって、とても不死ではない。しか

し致死であるようにも思えない。どの中間ソナイトも、死を経験してはいない。かつてネバドンに生まれたすべての中間ソナイトは、今日、生きており、各出身世界で、中間球体で、または終局者集団の世界にあるサルヴィントンの中間ソナイト球体で機能している。

36:4.5 (401.1) 終局者のサルヴィントン世界。メルキゼデク生命運搬者は、並びに対応する母ハヴァーも、体制中間ソナイト球からサルヴィントン回路の終局者の世界に行く。そこでは、彼らの子孫にもまた、集合が運命づけられている。

36:4.6 (401.2) これに関してサルヴィントン回路における7個の第一世界の5番目の集団が終局者のネバドン世界であるということが、説明されなければならない。メルキゼデク生命運搬者と物質の娘の子供らには、終局者の7番目の世界、すなわちサルヴィントン　中間ソナイト球が定住場所である。

36:4.7 (401.3) 終局者の7主要世界の衛星は、ネバドンで任務を果たしているかもしれない超宇宙と中央宇宙の人格の待ち合わせ場所である。上昇する人間は、メルキゼデク大

学を包括する全490世界の文化的世界と養成球体のあちらこちらに自由に行くが、入ることが許されない一定の特別な学校と多数の制限された区域がある。これは、特に終局者の管轄下にある49球体において事実である。

36:4.8 (401.4) 中間ソナイトの被創造物の目的は、現在のところ知られてはいないものの、これらの人格は、宇宙発展における将来の何らかの不測の事態に備え7番目の終局者世界に集合しているようである。中間ソナイト仲間に関する我々の質問は、通常終局者に回され、終局者は、通常自身の被保護者の運命について議論することを差し控える。我々は、未来の中間ソナイトに関しては定かではないものの、オーヴォントンのあらゆる地方宇宙が、神秘的なこれらの存在体のそのような増え続ける軍団を有していることを知っている。いつの日か崇高な神により先験的で永遠の精霊が中間ソナイトの子供らに授与されるということが、メルキゼデク生命運搬者の信念である。

5. 心-精霊の7補佐

36:5.1 (401.5) 生物進化の過程を条件付けるのは、原始世界上の心精霊7補佐副官の臨場である。それが、進化はなぜ意図的であって偶然でないかのを説明する。これらの補佐は、地方宇宙の母なる精霊の操作で知的生命の下級の系列に広げられる無限の精霊の心への奉仕活動のその機能を示す。補佐は、宇宙の母なる精霊の子であり、領域の物質の心への彼女の個人の奉仕活動を構成する。そのような心は、何時でも何所でも明らかにされ、これらの精霊はさまざまに機能している。

36:5.2 (401.6) 心-精霊の7名の補佐は、次の名称に相当する名で呼ばれている。直観、理解、勇気、知識、助言、崇拝、および知恵。これらの心-精霊は、その仲間が機能の受理と機会を見つけるかもしれない度合いは全く別として、各々が顕現のために感受性容量を探し、他とは異なる発動性として自らの効力を全棲息界に送る。

36:5.3 (401.7) 生命運搬者本部世界における精霊補佐の主要拠点は、いかなる世界の、またいかなる任意の知的状態の生物の、心の機能の範囲と質を生命運搬者の監督に示す。これらの生命-心の拠点は、最初の補佐5名のための

生きた心の機能の完全な指標である。しかし、6番目と7番目の精霊補佐—崇拝と知恵—についてのこれらの主要拠点は、質的機能のみを記録する。宇宙の母なる精霊の個人的な経験である崇拝の補佐と知恵の補佐の量的活動は、サルヴィントンの神性聖職者の直接臨場に登録される。

36:5.4 (402.1) 7名の精霊補佐は、新惑星への生命運搬者に同伴するが、彼らは実体と見なされるべきではない。それらは、どちらかというと回路に似ている。7名の宇宙の補佐の精霊は、神性聖職者の宇宙臨場は別として、人格としては機能しない。それらは事実上、神性聖職者の意識段階であり、また常に彼らの創造的な母の活動と臨場に従属的である。

36:5.5 (402.2) 7名の心-精霊補佐を適切に現するには言葉に窮する。彼らは、経験的な心の下級段階の奉仕者であり、進化上の到達に関する系列においては次の通りに説明できるかもしれない。

36:5.6 (402.3) 1. 洞察の精霊—迅速な知覚、原始の物理的かつ固有の反射的本能、心の全創造への方向付け、授与と他

の自己保存の授与。動物生命の下級系列において大規模に機能する補佐の中の唯一無二、また、機械的な心の教育不可能段階との機能的接触を広大にする唯一無二のもの。

36:5.7 (402.4) 2. 理解の精霊—調整の衝動、考えの自然発生的で明らかに自動的関連性。これは、身につけた知識調整の天賦の才、迅速な論理的思考、迅速な判断、即座の決定の現象である。

36:5.8 (402.5) 3. 勇気の精霊—信義の授与—人格の存在体における性格習得の基礎、および道徳的持久力と精霊的勇気の知的根源。これは、事実により啓発され真実により奮い立たせられると、知的で良心的な自己指示の回路による進化的上昇に向けての衝動の鍵となる。

36:5.9 (402.6) 4. 知識の精霊—冒険と発見の好奇心の母、科学の精霊。勇気の精霊の案内者と忠実な仲間と、助言の精霊の案内者と忠実な仲間。勇気と助言の精霊の精霊の案内者でありと忠実な仲間。勇気の授与を成長に役立つ進歩的な道へと方向づける衝動。

36:5.10 (402.7) 5. 助言の精霊—社会的衝動、種の間の協力の授与。意志をもつ生物が仲間と調和する能力。より下級の生物の中での群居的本能の起源。

36:5.11 (402.8) 6. 崇拝の精霊—宗教的衝動、人間生活の2つの基本的階級へと心をもつ生物を切り離す最初の差別的衝動。異なる発動性崇拝の精霊は、その接触した動物と無魂で有心の生物をいつまでも判別する。崇拝は、精霊的上昇立候補の記章である。

36:5.12 (402.9) 7. 知恵の精霊—規則的かつ段階的な進化の促進に向けてのすべての道徳的な生物の固有の傾向。これは、最高の補佐、すなわちすべての他者の仕事の精霊の進行係であり、明瞭に発音する者である。この精霊は、上昇生活段階の実用的で有効な計画を開始し、維持する心の生物のその生まれながらの衝動の秘密である。生き残りにおける生き残るための、また、他の6名のすべての精神的奉仕者が、当該の有機体の心に動員することができるすべてのもののすべての獲得のために過去の経験と現在の機会の全調和を活用するための、それらの説明不可解な能力を説明する生き物へのその贈り物。知恵は

知力による遂行の極致である。知恵は、純粋に精神的かつ道徳的生活の目標である。

36:5.13 (403.1) 心-精霊補佐は、経験的に成長するが、決して人格的にはならない。それらは、機能の上で発展し、動物の系列における最初の5名の補佐の機能は人間の知性としてある程度7機能すべてに不可欠である。動物とのこの関係は、人間の心としての補佐を実際により効果的にする。したがって、動物は、ある程度人の物理的進化はもとより知的進化に不可欠である。

36:5.14 (403.2) 地方宇宙の母なる精霊のこれらの心-補佐は、力の中心者と物理制御者が宇宙の生きていない力に関連するのとほぼ同様に知性段階の生物の生命に関係する。彼らは、棲息界の心の回路において計り知れない働きをしており、物理の主たる制御者との有能な協力者である。物理の主たる制御者は、心の前補佐段階の、つまり教育不可能な心、あるいは機械的な心の段階の制御者としても指揮者としても働く。

36:5.15 (403.3) 経験から学ぶ能力発現前の生きている心は、主たる物理制御者の奉仕活動の領域である。生物の心は、

神性を見分け神格を崇拝する能力の取得以前に精霊補佐に限られた領域である。創造されたそのような心は、知力ある生物の精霊的反応の登場とともに忽ち超心状態、すなわち即座に地方宇宙の母なる精霊の精霊周期に回路化の状態になる。

36:5.16 (403.4) 心精霊補佐は、決して神性聖職者の個人的臨場の精霊の、つまり棲息界の聖霊に向けてのさまざまの、かつ非常に高度の精霊機能に直接関係づけなかった。しかし、それらは、機能上進化する人間の中の他ならぬこの精霊の出現に先行し準備する。補佐は、宇宙の母なる精霊に地方宇宙の物質的生物との様々な接触を提供し、また制御するが、前人格の段階での行動に際しては崇高なるものに影響しない。

36:5.17 (403.5) 精霊的でない心は、精霊エネルギーの顕現であるか、または物理的エネルギー現象のいずれかである。人間の心でさえ、人格的な心でさえ、精霊識別は別として何の生存特性もない。心は、神性贈与ではあるものの、精霊の洞察なしで機能するとき、また崇拝や生存を切望する能力に欠けるときは、不滅ではない。

6. 生きている力

36:6.1 (403.6) 生命は、機械的、かつ生命生気的の双方である—物質的かつ精霊的。ユランチアの物理学者と化学者は、動植物の原形質の型の理解において常に進歩していくであろうが、決して生物を生み出すことはできないであろう。生命とは、すべてのエネルギー顕現とは異なる何かである。物理的生物の物質的生命でさえ物質に固有ではない。

36:6.2 (403.7) 物質的なものは、独立して存在するかもしれないが、生命は、生命からのみ生じる。心は、前存在の心からのみ得られる。精霊は、精霊の先祖にのみ起源を取る。生物は、生命の型を生み出すかもしれないが、創造者の人格、あるいは創造力だけが駆動する生きた火花を供給できる。

36:6.3 (404.1) 生命運搬者は、存在体の物質の型、すなわち物理の型を組織化できるが、精霊は、最初の生気を供給し、心の天賦を贈与する。生命運搬者が、サルヴィントン世界において組織する実験生命の生活型でさえも、つねに再生の力に欠けている。生命運搬者の臨場は、生命

の製法と型が正しく組み立てられ適切にまとめられるとき、生命を起こすに十分であるが、そのようなすべての生物は2つの不可欠属性—心の授与と再生力—を欠いている。7名の精霊補佐を通して機能する動物の心と人間の心は、地方宇宙の母なる精霊の贈り物であり、一方再生する生物能力は、生命運搬者により始められた先祖の生命原形質への宇宙なる精霊の特定の、しかも個人的分与である。

36:6.4 (404.2) 生命運搬者が、いったん生命の型を設計してしまうと、エネルギー体制の組織化後に追加現象が起こらなければならない。「命の息」は、これらの生命のない型に送られなければならない。神の息子は、生命の型を構成できるが、実際に生気をもたらすのは、神の精霊である。このようにして送られる生命が費やされると、その時、残る物質の肉体は死物となる。肉体は、贈与された生命が使い果たされると、エネルギー物質のそのような目に見える関係に伝えたその生命贈与のための一時的手段として役立つために生命運搬者に借りられた物質的宇宙の懐に戻る。

36:6.5 (404.3) 生命運搬者により植物と動物に贈与された生命は、植物、あるいは動物の死に際して生命運搬者には戻らない。そのような生物の離れ行く生命には、自己同一性も人格もない。それは、個別に死を切り抜けてはいない。それは、離れ行く生命の存在期間、そして物質の肉体におけるその滞在時間、変化を遂げた。それは、エネルギー発展を遂げ、宇宙の秩序然たる力の一部としてのみ生き残っている。それは、個々の生命としては生き残らない。人間の生存は、完全に必滅の心の中の不滅の魂の展開に基づいている。

36:6.6 (404.4) 我々は、「エネルギー」として、また「力」として生命について話すが、実はいずれでもない。力-エネルギーは、重力にさまざまに反応する。生命は、そうではない。既にすべての重力-反応義務を果たしたエネルギーの構成であるが故に、型もまた重力へ無反応である。生命は、そういうものとして、エネルギーの何らかの型で構成されるか、あるいは別の方法で隔離された体制の生気を構成する—物質的、心的、または精霊的。

36:6.7 (404.5) 我々には完全には明らかではない進化する惑星の生命の労作に関連するいくつかの現象がある。我々は、生命運搬者の電気化学製法の物理的組織を完全に理解するが、生命-起動火花の本質と起源を完全には理解しない。我々は、生命が、父から息子を経て、そして精霊によって生まれることを知っている。主たる精霊が、全創造のときに流れ出る生命の川の七重の回路であるということは、十二分に可能である。しかし、我々は、監督している主たる精霊が新しい惑星において生命贈与の最初の出来事に参加する手法を把握していない。我々は、日の老いたるものもまた、新世界における生命開始において何らかの役割を担っていると、確信しているものの、その本質については全く知らない。我々は、宇宙の母なる精霊が、実際に生命のない型に生命を与え、また活性原形質をそのようなものに与えることを知っている。我々は、時々、時間と空間の崇高なる創造者と呼ばれるこれら3者が七重の神の段階であるということに言及する。しかし、その他の点では、我々は、ユランチアの人間が、—単に、概念は父に、表現は息子に、そして

生命実現は精霊に固有である—ということを知るにすぎない。

36:6.8 (405.1) [監督する顕示軍団のメルキゼデク長官の要請により観察者として、またこの役割で実行するユランチアに配置されたヴォロンダデクの息子による著述]

論文 37
地方宇宙の人格

37:0.1 (406.1) ネバドンのすべての人格の上端には、創造者であり主たる息子、つまりマイケル、すなわち宇宙の父であり主権者が位置する。神性においては調和し、創造的特性においては補充的であるのは、地方宇宙の母なる精霊、サルヴィントンの神性聖職者である。これらの創造者は、実に文字通りの意味において全ネバドン出身の生物の父-息子であり精霊-母である。

37:0.2 (406.2) 先の論文では息子の創造された系列を扱った。続く物語は、奉仕活動をする精霊と息子の上昇系列を描くつもりである。この論文は、介入する集団、宇宙の補佐に主に関係があるのだが、ネバドンに配置される特定

の、より高度の精霊と、地方宇宙における特定の永久公民権の系列をも簡潔に考慮する。

1. 宇宙の補佐

37:1.1 (406.3) 一般にこの範疇に分類される特有の系列の多くは、明らかにされてはいないが、これらの論文に示されているように、宇宙の補佐は、次の7系列を有する。

37:1.2 (406.4) 1. 輝く明星

37:1.3 (406.5) 2. 輝く宵の明星

37:1.4 (406.6) 3. 大天使

37:1.5 (406.7) 4. いと高き補佐

37:1.6 (406.8) 5. 高等弁務官

37:1.7 (406.9) 6. 天の監督者

37:1.8 (406.10) 7. 大邸宅界の教師

37:1.9 (406.11) 各地方宇宙には、宇宙の補佐の最初の系列、つまり輝く明星の中のただ1名がおり、しかも彼は、地方宇宙に起源をもつ全生物の長子である。我々の宇宙の輝

く明星は、サルヴィントンのガブリエルとして知られている。輝く明星は、最高行政者であり、君主たる息子の個人的代理として、また創造的な配偶者の広報担当官として機能する。

37:1.10 (406.12) ガブリエルは、ネバドンの初期、マイケルと創造の精霊とともに完全に単独状態で働いた。宇宙が発展し、行政問題が増大するにつれ、ガブリエルには明らかにされていない補佐の個人参謀を与えられ、結局、この1団は、ネバドンの宵の明星軍団の創設により増大した。

2. 輝かしい宵の明星

37:2.1 (407.1) これらの輝かしい創造物は、メルキゼデク系により計画され、創造者たる息子と創造の精霊によって生み出された。それらは、多くの能力をもち、しかし主には、ガブリエルの連絡役員として、地方宇宙の最高行政者として働く。これらの存在体の1名、もしくはそれ以上は、ガブリエルの代理としてネバドンのあらゆる星座と体制の首都で機能する。

37:2.2 (407.2) ガブリエルは、ネバドンの最高行政者としてサルヴィントンのほとんどの会議の職権上の議長であり、立合い者であり、これらの1,000ほどの会議は、しばしば同時に開会する。輝く宵の明星は、これらの機会にガブリエルの代理をする。ガブリエルは、同時に2個所にはいられず、そこで、これらの超天使が、この限界を補う。超天使らは、三位一体の教師たる息子の軍団のために類似の働きを実行する。

37:2.3 (407.3) ガブリエルは、個人的には行政職務に従事はするものの、輝く宵の明星を経て宇宙生活と宇宙問題のすべての他の局面との接触を維持する。輝く宵の明星は、常にガブリエルの惑星周遊に同伴し、その個人的代理として頻繁に特別任務で個々の惑星に行く。それらは、そのような職務に際し、時々「主の天使」として知られてきた。日の老いたるものの法廷と議会の前に輝く明星を代表し頻繁にユヴァーサに行きはするが、オーヴォントンの境界を超えての旅行はめったにしない。

37:2.4 (407.4) 輝く宵の明星は、授けられた威厳をもつ一部のものと奉仕活動を獲得した他のものを擁する特異な２系

列である。これらの超天使のネバドン軍団は、現在、13,641に付番する。4,832の創造された品格があり、同時にこの崇高な奉仕目標に達した8,809の上昇の精霊がいる。これらの上昇の宵の明星の多くが、熾天使として宇宙経歴を始めた。他のものは、明かされてはいない生物の段階から昇った。到達目標としてのこの高位の軍団は、宇宙が光と命に決着をつけない限り、上昇候補に対し決して閉ざされてはいない。

37:2.5 (407.5) 輝く宵の明星の二つの型は、モロンチアの人格と超必滅の物質の存在体のある型には容易に見える。この興味深い、かつ万能の系列の創造体には、それぞれの人格臨場に関係なく顕示できる精霊の力がある。

37:2.6 (407.6) これらの超天使の主班は、ネバドンのこの系列の長子であるガヴァーリアである。ユランチアでの勝利の贈与からのキリスト・マイケルの帰還以来、ガヴァーリアは、上昇の人間の奉仕活動に配属されており、仲間のガランティアは、この1,900ユランチア年間、ジェルーセムの本部を維持してきており、そこで自分の時間の

およそ半分を過ごす。ガランティアは、この高地位に達する上昇超天使の最初のものである。

37:2.7 (407.7) 多くの課題における2名一組の習慣的提携を除いては、輝く宵の明星のどの集団、あるいは団体組織も存在しない。それらは、人間の上昇経歴に関する任務に大々的に割り当てられてはいないが、このようにして任命される場合、決して単独での機能はしない。彼らは、常に2名一組—1名は造られ、他方は上昇の宵の明星—で働く。

37:2.8 (407.8) 宵の明星の重大な義務の1つは、ちょうどガブリエルがユランチア贈与でマイケルに同伴したように、惑星の任務でアヴォナルの贈与の息子に同伴することである。出席する2名の超天使は、大天使とこれらの仕事に配属された他のすべてのものとの共同指揮官として働くそのような任務の上位の人格である。重要な時間と年令に達すると、「兄弟の用向きを始めなさい。」と、アヴォナルの贈与の息子に告げるのが、これらの超天使指揮官の上級者である。

37:2.9 (408.1) これらの超天使の同様の2名1組は、棲息界の贈与時代後、もしくは精霊の夜明け時代を確立するために機能する三位一体の教師たる息子の惑星軍団に配属される。宵の明星は、そのような任務に際し、領域の人間と師としての息子の目に見えない軍団との連絡係として仕える。

37:2.10 (408.2) 宵の明星の世界。7個のサルヴィントン世界とそれに属する42個の衛星の第6集団は、輝く宵の明星の行政に割り当てられる。7個の主要世界は、これらの超天使の創造された系列により統括され、一方、従属衛星は宵の明星により統治される。

37:2.11 (408.3) 最初の3世界の衛星は、地方宇宙の精霊人格に捧げられる師としての息子と宵の明星の学校に当てられた。次の3集団は、上昇する人間の養成に従事する同様の合同学校に当てられている。7番目の衛星は、師としての息子、宵の明星、終局者の三位一体の協議のために用意されている。最近、これらの超天使は、終局軍団の地方宇宙の仕事に綿密に関係しており、また長い間師としての息子に関連づけられてきた。終局者の労働集団に

属する宵の明星と引力の使者間にはとてつもない力と意味のつながりがある。主要世界の7番目それ自体は、崇高の神の人格の超宇宙顕現の完成した出現の結果である師としての息子、終局者、宵の明星の間で入手するであろう今後の関係に属する明らかにはされていないそれらの事柄のために備えている。

3. 大天使

37:3.1 (408.4) 大天使は、創造者たる息子と宇宙の母なる精霊の子である。大天使は、地方宇宙において数多く生産される高度の精霊の最高の型であり、ネバドンには最後の登録時点でおよそ80万名がいた。

37:3.2 (408.5) 大天使は、通常ガブリエルの権限下にはなく、地方宇宙人格の少ない集団の1つである。それらは、生物生存の仕事、時間と空間の必滅者の上昇経歴の助成とに捧げられており、いかなる方法によっても宇宙の通常の行政に関係していない。大天使は、通常、輝く明星の指示に支配されない一方、時おり自らの職権で機能する。例えば宵の明星などのように、大天使は、宇宙の他の補佐とも協力する。あなたの世界への生命移植の物語

で表現されるある種の取り扱いによって例証されているように。

37:3.3 (408.6) ネバドンの大天使軍団は、この系列の長子に指揮されているし、より最近では、大天使の師団司令部が、ユランチアで維持されてきた。ネバドンの外部の学生訪問者の注意を引くのが、この珍しい事実である。宇宙間業務の早期の観測の中には、サタニアの地方体制の首都から輝く宵の明星の多くの上昇活動が、指示されるという発見がある。さらなる調査では、ある種の大天使活動は、ユランチアと呼ばれる小さく、しかも明らかに重要ではない棲息界から指示されているということを発見している。次いで、ユランチアにおけるマイケルの贈与の顕示と、あなたへの、またあなたの劣性球体への直ちに速められた関心が起こるのである。主語

37:3.4 (409.1) あなたは、あなたのみすぼらしく混乱した惑星が、楽園上昇計画と関係する大天使の特定の活動の宇宙行政と方向の師団司令部になったという事実の重要性を理解していますか。これは、確かにマイケルの贈与世界における他の上昇者の活動の今後の集中の前兆となり、

「私は再び来る」というあるじの個人的な約束に強大で厳粛な意味を添える。

37:3.5 (409.2) 大天使は、一般的には息子のアヴォナル系列の業務と奉仕活動に配属されるが、奉仕活動の様々な精霊の仕事の全局面における大規模な事前の養成を経験し終えるまでは配属されない。100名からなる軍団は、そのような贈与存続期間のために一時的に割り当てられて、棲息界へ向けてあらゆる楽園贈与の息子に同伴する。権威の息子が、惑星の一時的支配者になるならば、これらの大天使は、その球体のすべての天の存在体を導く主班として行動をするであろう。

37:3.6 (409.3) 2名の上級大天使は、訴訟、権威ある任務、または贈与の肉体化に関するか否かに関係なく、つねに惑星の全任務を負う楽園のアヴォナルの個人的補佐として選任される。この楽園の息子が、領域の判決を終え、死者が、記録(いわゆる復活)のために呼ばれるとき、微睡みの人格の熾天使保護者が、「大天使の声」に応じるというのは、文字通り本当である。天の配剤終了時の点呼

は、付き添いの大天使により公表される。これは、時々「マイケルの大天使」と呼ばれる復活の大天使である。

37:3.7 (409.4) 大天使界。サルヴィントン世界を包囲する第7集団は、それぞれの関連衛星とともに大天使に割り当てられる。球体1号とその6個の従属衛星は、人格記録管理者が占めている。記録者のこの巨大軍団は、そのような個人が、それぞれの人間の誕生の瞬間から宇宙経歴を経て超宇宙の政体のためにサルヴィントンを発つか、または日の老いたるものの命により「記録された存在から消し去られる」まで記録を残すことに精を出している。

37:3.8 (409.5) 人間の死と人格化の時間、つまり死からの復活に介在するその期間、人格の記録と身分の保証が分類され、整理され、そして保存されるのは、これらの世界においてである。

4. いと高きものの補佐

37:4.1 (409.6) いと高きものの補佐は、中央と超宇宙の代表として、あるいは観察者として一時的に局部的創造へ割り当てられる地方宇宙外の出の志願者からなる集団であ

る。それらの番号は、絶えず異なるが、数百万でも常に、はるか上の方である。数

37:4.2 (409.7) 我々は、このようにして時々ネバドン全体をオーヴォントンの構想と楽園の理想とのより豊かな調和へもたらす努力において我々の地方宇宙出身の人格を支援する目的で共に滞在する英知の完成者、神性助言者、宇宙検閲官、三位一体の啓示的精霊、三位一体化の息子、単独使者、超熾天使、第二熾天使、第三熾天使、および他の丁重な奉仕活動者としてそのような楽園-起源の存在体の聖職活動と援助の恩恵を受けている。

37:4.3 (410.1) これらの存在体のいずれかは、ネバドンで自発的に働くかもしれず、従って法的には、我々の司法権外にあるとはいえ、超宇宙や中央宇宙のそのような人格は、任務に基づいて機能するとき滞在中の地方宇宙の規則から完全に免除されているのではない。とはいうものの、彼らは、より高い宇宙の代表として機能し、我々の領域における任務を構成する指示通りに働き続ける。それらの一般的本部は、日々の和合のもののサルヴィントン領域に位置しており、彼らは、楽園三位一体のこの大

使の間接的監視に従いネバドンで活動する。より高い領域からのこれらの人格は、無所属の集団に奉仕するとき通常自ら方向づけをしているが、要求に応じて奉仕する際は、しばしば割り当てられた職務の領域の監督に当たる指揮官の完全なる管轄下に自発的に自らを置く。

37:4.4 (410.2) いと高きものの補佐は、地方宇宙と星座の立場で働くが、直接には体制、または惑星政府に付随しない。しかしながら、それらは、地方宇宙のどこにおいても機能するかもしれないし、ネバドンの活動—行政、施政、教育、それに、他の活動—のいかなる局面にも配属されるかもしれない。

37:4.5 (410.3) 大部分のこの軍団が、ネバドンの楽園人格—日々の和合のもの、創造者たる息子、日々の忠実なるもの、権威の息子、および三位一体の教師たる息子—の援助に服する。局部的創造業務の取り扱いにおいては、時おり実際にその地方宇宙出身の人格のすべてに関する知識から特定の詳細を一時差し控えるのが賢明である。ある高度な計画と複雑な支配もまた、いと高きものの補佐のより成熟し、かつ明敏な軍団によりさらに深く認識さ

れ、完全に理解されるほうがよいし、また宇宙の支配者と管理者にとり非常に実用的であるのは、そのような状況において、および多くの他の状況においてなのである。

5. 高等弁務官

37:5.1 (410.4) 高等弁務官は、精霊-融合の上昇する人間である。調整者-融合ではない。あなたは、調整者融合の人間候補のための宇宙上昇経歴について、キリスト・マイケルの贈与以来、ユランチアのすべての人間のための期待の高い目標である宇宙上昇経歴についてとてもよく理解している。だが、これは、あなたのような世界の前顕示の時代におけるすべての人間の唯一の目標ではなく、その住民には思考調整者が永久に住まうはずのない別の世界の型がある。そのような人間は、決して永久に楽園贈与の神秘訓戒者と一体化されない。調整者は、それにもかかわらず人間に宿り、肉体での生涯の持続期間の案内役として、また模範として仕える。調整者は、この一時的滞在の間、融合を望む存在体の中でするように、不滅の魂の進化を高めているのだが、人間の競争が終わると、一時的関係の被創造物から永遠の休暇を取る。

37:5.2 (410.5) この系列の生残魂は、地方宇宙の母なる精霊の人格化された精霊の断片との永遠の融合により不死に至る。それらは、多数からなる集団ではない、少なくともネバドンにおいては。大邸宅界において、これらの精霊-融合の人間が、自身が止まる遠くはサルヴィントンまであなたと共に楽園の道を昇るとき、あなたは彼らに会い、親しくつきあうであろう。彼らの一部は、次により高い宇宙段階に昇るかもしれないが、大部分は、いつまでも地方宇宙業務に留まるであろう。それらは、一纏まりとして楽園に達するよう運命づけられてはいない。

37:5.3 (411.1) それらは、調整者に融合されてはいないので、終局者には決してならないが、やがて地方宇宙の完全なる軍勢に登録されるようになる。彼らは、精神で「完全であれ」という父の命令に従ったのである。

37:5.4 (411.2) ネバドンの完全なる軍勢に到達後、精霊融合の上昇者は、宇宙の補佐としての課題を受けるかもしれないし、これが、それらに開かれている継続的経験上の成長への道のりの一つである。それ故、それらは、地方宇

宙の天の当局へいたる物質界の発展的被創造物の観点を解釈する高度の業務委託の候補者になるのである。

37:5.5 (411.3) 高等弁務官は、人種委員として惑星での職務を開始する。人種委員は、この立場で見解をまとめ、様々な人類の必要性を描く。その代弁者である人種委員は、他とのすべての関係における慈悲、正義、および公正な扱いを求め続け、必滅の人種の福祉にこの上なく熱心である。人種委員は、惑星の果てしない連鎖の危機において機能し、奮闘している人間の全集団の明確な表示として役目を果たす。

37:5.6 (411.4) 棲息界での問題解決における長い経験の後、これらの人種委員はより高機能段階に達し、地方宇宙の、またその中の高等弁務官の地位に達する。最近の登録では、15億をわずかに越えるネバドンのこれらの高等弁務官の数を記した。これらの存在体は、終局者ではないが、長い経験をもつ上昇者であり、自己の出身領域に大きな奉仕をするもの達である。

37:5.7 (411.5) 我々は、最低から最高までの全裁決機関に、これらの委員を必ず見つける。彼らは、法的手続きに参加

するというわけではないが、裁決に関係するそれらのもの達の前例、環境、および、固有の本質に関わり議長を務める行政長官に助言を与え法廷の友として行動するのである。進言

37:5.8 (411.6) 高等弁務官は、空間の様々な使者である主人役と、また常に奉仕する時間の精霊に配属される。それらは、宇宙の様々な集会の催しで出くわし、人間をよく知るこれらの同じ委員は、いつも空間世界への神の息子の任務に配属される。

37:5.9 (411.7) これらの委員は、公正と正義が、いかに熟考された方針、あるいは手順が進化的生活過程に影響するであろうかということに関し理解を必要とするときはいつであろうとも、各自の提案を発表するために間近にいる。それらは、自分を主張するために出席できないものたちのために常に出席している。

37:5.10 (411.8) 精霊-融合された人間の世界。サルヴィントン回路における7主要世界の8番目の集団と従属衛星は、ネバドンの精霊-融合された占有物である。調整者融合の上昇する人間は、精霊-融合居住者の招待客として数多の

快く有益な滞在を楽しむためにこれらの世界に関心があるのではない。

37:5.11 (411.9) これらの世界は、ユヴァーサと楽園に達する少数の者達を除いては、精霊-融合生存者の永久的住居である。人間の上昇のそのような計画的制限は、彼らの増大する経験が、地方宇宙行政の今後の安定化と多様化を高め続ける進化した永久的集団の保有を保証することにより地方宇宙の利益に対応する。これらの存在体は、楽園に至ることはないかもしれないが、ネバドン問題の克服における経験上の知恵、すなわち一時的な上昇者により達せられるものは何でも完全に凌ぐ経験上の知恵に達する。生残するこれらの魂は、これらの２つの大きくかけ離れた水準の観点を結びつけたり、また絶えず高める知恵とのそのような二元的観点の提示をますます可能にして、人間と神性の唯一の組み合わせとして続いていく。

6. 天の監督者

37:6.1 (412.1) ネバドンの教育制度は、三位一体の教師たる息子と軍団を教授するメルキゼデクによる共同運営である

が、その維持と築き上げの効果を狙った仕事の多くは、天の監督者が担う。これらの存在は、上昇する人間を教育し、養成する計画に関係するすべての個人の型を擁する募集された軍団である。300万以上のものがネバドンにはおり、それらは皆、領域全体への教育顧問としての役目を果たす経験から資格を得た志願者である。メルキゼデクのサルヴィントン世界の本部からのこれらの監督者は、上昇する被創造物の心の養成と精霊的教育を達成を目指して考案されたネバドン学校の手法の検査官として地方宇宙を回る。

37:6.2 (412.2) 心の養成と精霊の教育は、人間起源の世界から体制の大邸宅世界まで、またジェルーセムに関係する他の進歩的球体を経て、エデンチア所属の70の社会的交流の領域へ、またサルヴィントンを包囲する精霊進歩の490個の球体へと継続される。宇宙本部それ自体は、メルキゼデクの多数の学校、宇宙の息子の大学、熾天使の大学、および師としての息子と日々の和合のものの大学である。仕事の促進と機能改善に向け宇宙の様々な人格に資格を与えるために可能なあらゆる対策が施された。宇宙全体が、広大な1つの学校である。

37:6.3 (412.3) 高等な多くの学校で採用されている方法は、真実の教育法についての人間の概念を超えるものであるが、これが、教育制度全体の基調：啓発された経験により身につく性格である。教師は、啓発を与える。宇宙基地と上昇者の地位は、経験のための機会を提供する。これらの2つの賢明な活用は、性格を成長させる。

37:6.4 (412.4) 基本的に、ネバドン教育制度は、任務への割り当てに備え、次いで、その任務を最善に実行する理想的、かつ神の方法ににについての指示を受ける機会をあなたに提供する。あなたには遂行すべき明確な任務が与えられており、同時に、あなたの課題をこなす最善の方法をあなたに教える資格をもつ教師が用意されている。教育に関わる神の計画は、仕事と教授の緊密なつながりを用意している。我々は、我々があなたに命ずる事柄をいかに最善にこなすかをあなたに教える。

37:6.5 (412.5) このすべての養成と経験の目的は、 超宇宙のより高度の、　より精霊的な養成球体へ入る許可に向けあなたに準備させることである。与えられた領域内の進歩

は、個別であるが、1局面から他局面への変遷は、通常、階級を単位としてである。

37:6.6 (412.6) 永遠の進行は、単に精霊の開発にあるのではない。知性の習得もまた、宇宙教育の一環である。心の経験は、精神の地平線の拡大とともに等しく広げられる。心と精霊は、養成と前進のために同じような機会が提供される。しかし、あなたは、心と精神のずば抜けたこの訓練すべてにおいて必滅の肉体の不利な条件からは永遠に自由である。あなたは、もはや絶えず分岐しているあなたの精霊的で物質的な本質の相反する論点を審判してはならない。あなたは、ようやくずっと以前に物質的なものに向かう原始の動物的傾向が剥ぎ取られた光栄に値いする心からの統一された衝動が味わえる。

37:6.7 (413.1) ネバドンの宇宙を去る前にユランチアのほとんどの人間には、天の監督者のネバドン軍団の構成員として長期、あるいは短期にわたる役目を果たす機会が与えられるであろう。

7. 大邸宅界の教師

37:7.1 (413.2) 大邸宅世界の教師は、天使童子を募集し、栄光を与えた。大邸宅世界の教師は、ネバドンのほとんどの他の教官と同様、メルキゼデクに任命される。大邸宅界の教師は、モロンチア生活の教育事業の大部分で機能し、その員数は、全く人間の心の理解力を超えている。

37:7.2 (413.3) 天使童子とサノビムの到達段階としての大邸宅界の教師には、次の論文でさらなる考察がなされ、その間に論文中でモロンチア生命における重要な役割を演じる教師としてのその名前をより広く議論されるであろう。

8. より高い精霊系列の任務

37:8.1 (413.4) 力の中心者と物理制御者に加えて、無限の精霊家族に属する高い起源の特定の精霊体は、地方宇宙への永久的課題に配属されているものである。無限の精霊家族のより高い精霊の系列のもの達は、次のように割り当てられている。

37:8.2 (413.5) 単独使者は、職務の上で地方宇宙行政に配属されると、時と空間の不利な条件を克服する我々の努力に対し計り知れない貢献をする。それらが、このように割

り当てられないとき、地方宇宙の我々は、それらの上に絶対に何の権威も持たないのだが、その時にさえ、これらの特異な存在は、いつも我々の問題解決と、我々の命令実行とにおいて我々への援助を望んでいる。

37:8.3 (413.6) アンドヴォンチアとは、我々の地方宇宙に配置された第三宇宙回路の監督者の名前である。アンドヴォンチアは、力の管理者の管轄下にあるそれらにではなく、精霊とモロンチア回路のみに関係がある。惑星に対するカリガスティアの裏切りの時点でルーキフェレーンスの反逆の試練の季節にユランチアを隔離したのが、彼であった。ユランチアの人間へ挨拶を送る際、彼の指揮下の宇宙回路へのあなたの近々の回復見通しの喜びを示す。

37:8.4 (413.7) ネバドンの調査監督サルサチアは、サルヴィントンにあるガブリエルの領域内に本部を維持する。彼は、意志の生死を自動的に認識し、現在、地方宇宙で機能する意志の生物の正確な数を記録する。彼は、大天使の記録世界に住所を定める人格記録者と深く関連して働いている。

37:8.5 (413.8) 同僚、準、の監査官は、サルヴィントンに居住している。彼は、オーヴォントンの最高行政者の個人的代表である。地方体制の配属歩哨であるその仲間もまた、オーヴォントンの最高行政者の代表である。

37:8.6 (414.1) 宇宙の調停者は、時間と空間宇宙の巡回法廷であり、進化の世界から地方宇宙とその彼方のあらゆる区域に及んで機能する。これらの審判者は、ユヴァーサに登録される。ネバドンで機能する正確な数字は記録にはないが、私は、我々の地方宇宙には1億人ほどの調停委員がいると見積もる。

37:8.7 (414.2) 我々には、その割り当て数、つまり、およそ10億の半分の領域の法的専門家である技術顧問がいる。これらの存在対は、全空間の生きた、しかも経験に基づく法の巡回書斎である。

37:8.8 (414.3) 我々には、ネバドンに上昇する熾天使である75名の天の記録者がいる。これらは、上級記録者か監督する記録者である。養成中のこの系列の前進する学生は、数にして約40億に達する。

37:8.9 (414.4) ネバドンの700億のモロンチアの同志の奉仕活動は、時間の巡礼者の過渡期の惑星を扱うそれらの物語の中で述べられている。

37:8.10 (414.5) 各宇宙には、その宇宙出身の天使軍団がある。にもかかわらず、局部的創造の外の起源をもつそれらのより高い精霊の援助を得ることが、非常に役に立つ時がある。超熾天使は、ある種の稀で独自の仕事を実行する。ユランチアの　熾天使の現在の長官は、楽園の第一の超熾天使である。反映の第二熾天使には、超宇宙職員が機能する至る所で遭遇し、多くの第三熾天使は、いと高きものの補佐として暫定的な仕事をする。

9. 地方宇宙の永久公民

37:9.1 (414.6) 超宇宙や中央宇宙と同様、地方宇宙には、永久公民のいる系列がある。これらは次の創造の型を含む。

37:9.2 (414.7) 1. スサチア

37:9.3 (414.8) 2. ユーニーヴィーターチア

37:9.4 (414.9) 3. 物質の息子

37:9.5 (414.10) 4. 中間被創造物

37:9.6 (414.11) これらの局部的創造の出身者は、精霊-融合された上昇者とスピロンガ(別なふうに分類されるもの)と共に、比較的に永久的な公民を構成している。これらの存在体の系列は、概して上昇も下降もしない。それらは、すべて経験上の被創造物であるが、彼らの拡大する経験は、起源の各段階の宇宙に対して有用可能であり続ける。これは、アダームの息子と中間被創造者には完全に該当しないが、これらの系列では相対的に本当である。

37:9.7 (414.12) スサチア。これらの驚異の存在体は、この地方宇宙の本部であるサルヴィントンの永久公民として住み、機能する。それらは、創造者たる息子と創造の精霊の才気あふれる子であり、地方宇宙の上昇する公民、すなわちネバドンの完全なる軍勢の精霊-融合された人間と密接に関わる。

37:9.8 (414.13) ユーニーヴィーターチア。建築球体群の100の星座本部のそれぞれは、ユーニーヴィーターチアとして知られている存在の居住系列の継続的活動を味わう。創造者たる息子と創造の精霊のこれらの子供は、星座本部

世界の永久的な全住民を構成する。それらは、体制本部に住所を定める物質の息子の半物質状態と、　より明確には精霊-融合された人間とサルヴィントンのスサチア系の精霊の段階とのほぼ中間の生命段階に存在する非生殖の存在体である。しかし、ユーニーヴィーターチアは、モロンチア存在体ではない。彼らは、ハヴォーナ出身者が、中央の創造を通り抜ける巡礼の精霊に寄付するものを上昇する人間のために、星座球体の通過中に達成する。誰が

37:9.9 (415.1) 神の物質の息子。創造者たる息子と宇宙の母なる精霊である無限の精霊の宇宙代表との創造的なつながりがその周期を完了したとき、それ以上の結合された本質の子が現れないとき、創造者たる息子は、次には二元的な型で自身の存在の最後の概念を個人化し、こうして最終的に自身の、そして元の二元的起源を確認する。次には、自ら進んで自分の中に、宇宙の息子の物質的系列の美しく、ずば抜けた息子達と娘達を創造する。これが、ネバドンの各地方体制の最初のアダームとハヴァーの起源である。二人は、男女として創造された生殖する息子の系列である。一部は、惑星のアダーム系として任

命されるが、その子孫は、体制首都の比較的に永久の公民として機能する。

37:9.10 (415.2) 物質の息子と娘は、惑星任務中、その世界のアダーム人種、つまり、ゆくゆくはその球体の必滅の住民と合同するように設計された人種の基礎を築くことを委託される。惑星のアダーム系は、上昇もし下降もするが、我々は、通常、彼らを上昇するものとして分類する。

37:9.11 (415.3) 中間被創造者。超人的であるが具体化しているある種の存在は、棲息界の初期においては任務に就くのものであるが、通常、それらは、惑星のアダーム系の到着に際し退職する。そのような存在の相互作用と進化的人種を改良する物質の息子の努力は、しばしば分類しにくい限られた数の生物の出現をもたらす。これらの特異な存在は、しばしば物質の息子と進化的生物の中間である。したがって、それらの名称は、中間被創造物。これらの中間者は、比較的意味合いにおいて進化する世界の永久公民である。惑星の息子の到着の初期から光と生命の惑星定着のはるか彼方の時代まで、それらは、球体に

引き続き残っている知的存在体の唯一の集団である。ユランチアでは、事実上、中間の奉仕活動者は惑星の実際の世話係である。彼らは、事実上、ユランチア公民である。人間は、本当に進化世界の物理的、物質的住民であるが、それどころか、あなたがたは皆、非常に短命である。あなたは、そのような短期間自分の出身惑星に留まりつづけている。あなたは生まれて、生きて、死んで、そして発展的前進の他の世界へと向かう。天の奉仕活動者として惑星で仕える超人の存在体さえ一時的な課題をもつのである。それらの中のわずかしか長い間所定の球体に配属されない。中間被創造者は、しかしながら、変わり続ける天の奉仕活動者と絶えず移動する必滅の住民を目の前にして惑星の行政の継続性を提供する。この決して止まない変化と移行のすべてに渡り、中間被創造者は、途切れることなく仕事を続行し惑星に留まっている。

37:9.12 (415.4) 同様に、地方宇宙と超宇宙の行政機構の全部門には、多かれ少なかれ永久的な全住民、公民の地位にある住民がいる。ユランチアにその中間者がいるように、あなたの体制首都であるジェルーセムには、物質の息子

と娘達がいる。あなたの星座本部であるエデンチアには、ユーニーヴィーターチアがおり、一方サルヴィントンの公民は、授けられたスサチアと精霊-融合された進化の人間の二重である。超宇宙の小部門と主要部門の行政世界には、永久公民はいない。しかし、ユヴァーサの本部球体は、明らかにはされていない日の老いたるものの代理者とオーヴォントンの首都に居住している7名の反映の精霊の創造であるアバンドンターとして知られている見事な集団の存在体により途切れることなく助成さていれる。ユヴァーサのこれらの居住公民は、現在のところ、息子-融合の人間のユヴァーサ軍団の直接指揮の下に自分達の世界の通常業務を執り行っている。ハヴォーナにさえ、その出身たる存在体があり、光と生命の中央の小島は、楽園民の様々な集団の家である。

10. 他の地方宇宙集団

37:10.1 (416.1) 後の論文で検討される熾天使と人間の系列以外に、今でさえ300万以上の棲息界をもち、総数1,000万を見込むネバドンの宇宙としてのそのような巨大組織の維持と完成に関与する数多くの追加の存在体がいる。ネバドン生命の様々な型は、この論文で目録を作るには多す

ぎるのだが、言及されてもよい地方宇宙の647,591の建築球で広く機能する珍しい2系列がある。

37:10.2 (416.2) スピロンガ系は、輝く宵の明星と父メルキゼデクの精霊の子である。それらは、人格終了から免除されているにもかかわらず、進化的でも上昇体でもない。機能上、進化的上昇体制にも関係はない。それらは、地方宇宙の精霊補佐であり、ネバドンの通常の精霊の職務を履行する。

37:10.3 (416.3) スポーナーギア。地方宇宙の建築本部世界は、実在の世界である—物理的創造。それらの物理的維持に関連づけられる多くの仕事があり、我々には、ここにスポーナーギアと呼ばれる物理的生物集団の援助がある。それらは、これらの本部世界の、ジェルーセムからサルヴィントンまでの、物質的局面の対処と文化にささげられる。スポーナーギアは、精霊でもなく人間でもない。それらは、動物の系列であるが、もしそれらを見ることができるならば、あなたは、彼らが、完全な動物に見えるということに同意するであろう。

37:10.4 (416.4) 様々な優待居留者は、サルヴィントンと他の場所に居を定める。我々は、特に星座の天の熟練者の奉仕活動から利益を得、主に地方体制の首都で働く娯楽の監督の活動から恩恵を受けている。

37:10.5 (416.5) つねに栄光の中間被創造者を含む上昇する人間の軍団が、宇宙奉仕に配属される。サルヴィントン到達後、これらの上昇者は、宇宙業務遂行において無限に近い多様の活動に用いられる。これらの前進する人間は、上方への昇りにおいて自分たちの後をつける仲間にそれぞれの到達段階から援助の手を後方へ、下方へと差し伸べる。サルヴィントンの一時的滞在のそのような人間は、依頼に応じて、助力者、学生、観察者、教師としてほとんどすべての天の人格の軍団に配属される。

37:10.6 (416.6) 地方宇宙の行政に関わる知的生命の他の型がまだあるのだが、この談話の計画には、これらの創造系列の顕示の提示はない。人間の心に生存生活の現実と壮大さの理解をさせるために、ここにはこの宇宙の生命と行政について十分に描かれている。前進するあなたの経歴における一層の経験が、ますますこれらの興味深く魅力

ある存在体を明らかにするであろう。この談話では、時間の巡礼者が、自己の起源である宇宙の境界から超宇宙のより高度の教育体制へと、またそこからハヴォーナの精霊-養成世界へと、そして、やがては楽園と終局者の高い目標へと—まだ時間と空間の宇宙に明らかにされていない任務の永遠の課題へと—愛情を込めて送り出されるまで生命から生命へと、世界から世界へと進む巨大な職業訓練所としてのこれらの創造を管理しながら空間宇宙に群がる多様の人格の本質や働きについての概要以上のものは提示できない。

37:10.7 (417.1) [創造された軍勢の中のネバドンの輝く宵の明星1,146番による口述]

論文 38
地方宇宙の奉仕活動の精霊

38:0.1 (418.1) 無限の精霊の人格には、明確な3系列がある。例の性急な使徒は、「天国に行き、神の右側にいるもの。彼に従属するようにつくられた天使、権威者、権力者」と、イエスを敬って書いたとき、これを理解していた。天使は、時間の領域の奉仕活動の精霊である。権威者

は、空間の使者である主人役。権力者は、無限の精霊のより高い人格。

38:0.2 (418.2) 熾天使も、中央宇宙の超熾天使と超宇宙の第二熾天使と同じく、関連する天使童子とサノビムとともに地方宇宙の天使軍団を構成している。

38:0.3 (418.3) 熾天使は、全計画においてほとんど一貫している。宇宙から宇宙まで、全7超宇宙において最小限の変化をみせる。それらは、人格存在体の精霊のすべての型の中で最も標準に近い。それらの様々な系列は、地方創造の熟練した一般の奉仕活動者の軍団を構成する。

1. 熾天使の起源

38:1.1 (418.4) 熾天使は、宇宙の母なる精霊により創られ、ネバドンの早期に「原型の天使」とある天使の原型の創造以来、部隊編成——一度に41,472名——で組織されてきた。無限の精霊の宇宙表現と創造者たる息子は、他の宇宙人格の創造において多くの息子と共働する。創造者たる息子は、この結合努力の終了に続いて性をもつ生物の1番目である物質の息子の創造に従事し、一方で宇宙の母なる精霊は、精霊再生で自身の初期の孤独な努力に従

事している。こうして、地方宇宙の熾天使軍勢の創造が始まる。

38:1.2 (418.5) これらの天使の系列は、意志をもつ人間の進化のための計画を立てる時点で組織された。熾天使の創造は、主たる息子の後の等位のものとしてではなく、創造者の息子の初期の創造の助力者として宇宙の母なる精霊により相対的な人格到達から始まる。ネバドンで勤務中の熾天使が、隣接する宇宙により、から、この出来事以前に一時的に出向する。

38:1.3 (418.6) 熾天使は、まだ定期的に創造されている。ネバドン宇宙は、いまだ作成中である。宇宙の母なる精霊は、拡大し、完成しつつある宇宙における創造的活動を決してやめない。

2. 天使の本質

38:2.1 (419.1) 天使は、物質の肉体をもたないが、具体的で個々の存在である。精霊の本質と起源のものである。人間には見えないが、天使は、肉体をもつあなたを変換者、あるいは解釈者の援助なしで知覚する。彼らは、知的に人間の人生の様式を理解し、感覚的ではない人の感

情や思いのすべてを共有する。彼らは音楽、芸術、および真のユーモアにおけるあなたの努力を評価し、大いに楽しんでいる。あなたの道徳的葛藤と精霊的困難を完全に認識している。彼らは、人間を愛しており、あなたの理解し愛する努力からは、利益だけが生じることができる。

38:2.2 (419.2) 熾天使は、非常に慈愛深く同情的な存在であるものの、異性情動の被創造物ではない。それらは、大邸宅界の一員になるであろうあなたとほとんど同じであり、そこで「めとったり、とついだりはせず、天国の天使のようになるであろう。」なぜなら全員が、「めとりも、とつぎもしない大邸宅界に達するにふさわしいと判断され、天使と等しいので、もはや死にもしない」のであるから。にもかかわらず、神の娘としての精霊の子らに言及するとともに、神の息子としての父と息子からの直系のそれらの存在について話すことが、性をもつ生物の扱いにおける我々の習わしである。したがって、天使は、性の惑星の女性代名詞で一般的に表される。

38:2.3 (419.3) 熾天使は、精霊と字義通りの両段階で機能するように創造されている。それらの奉仕には開放されていないモロンチア、あるいは精霊活動の局面がわずかにある。もっている。天使は、個人的状態においては人間からかけ離れてはいない一方、熾天使は、機能的性能において人間を超える。熾天使は、人間の理解を超える多くの能力をもつ。例えば、あなたは、「自分の頭の他ならぬ毛髪は数えられる」と言われ、また毛髪は本当に数えられるのだが、熾天使はそれを数えたり、数字の最新修正に時間を費やしたりしないということが告げられてきた。天使には、そのようなことを知る固有の、自動の(すなわち、あなたが知覚できる範囲までは自動の)力がある。あなたは、実のところ熾天使を数学の天才と見なすであろう。したがって、人間にとり途方もない課題である数多くの義務は、殊の外やすやすと熾天使により実行されている。

38:2.4 (419.4) 天使は、精霊の身分においてあなたよりも優れているが、あなたの裁判官でも告発者でもない。あなたの欠点が何であろうとも、「天使は、勢いにおいても力においても勝っているにもかかわらず、　あなたを訴え

はしない」。天使は、人類を裁かず、個々の人間も、仲間の生物を先入観で判断すべきではない。

38:2.5 (419.5) あなたは、それらを本当に愛しはするが、それらを崇拝すべきではない。天使は、崇拝の対象ではない。優れた熾天使ロヤラティアは、あなたの予言者が、「天使の足もとにひれ伏し拝もうとした」とき言った。「そのようなことをしてはいけない。私は神を崇拝することを命じられたあなたやあなたの人種と同じ仲間のしもべである。」

38:2.6 (419.6) 熾天使は、本質と人格贈与関して、生物生命の段階でわずかに人種より優勢である。あなたは、肉体から救われるとき本当に、それらによく似てくるのである。あなたは、大邸宅界では熾天使に感謝し、星座球体ではそれらを楽しみ始めるであろうし、一方、熾天使は、サルヴィントンでは自己の休息と崇拝の場をあなたと共有する。熾天使とのあなたの兄弟愛は、モロンチア全体とその後の精霊上昇中理想的になるであろう。あなたの交友は、見事であろう。

3. 明らかにされていない天使

38:3.1 (420.1) 精霊体の非常に多くの系列は、人間には明かされていない地方宇宙の領域全体で機能する。なぜなら、それらは、楽園上昇の進化の計画と決して結びついていないのであるから。この論文における「天使」という言葉は、人間生存の計画実行に対し大きく関心をもつ宇宙の母なる精霊のそれらの熾天使、それに、関係する子孫の名称に意図的に制限されている。進化する人間の楽園上昇に付随するそれらの宇宙活動にいかなる方法によっても関わりのない明らかにはされていない天使である関連する存在体の他の6系列が、地方宇宙で役目を果たしている。これらの6集団の天使の仲間は、決して熾天使とは呼ばれず、奉仕活動をする精霊とも呼ばれない。これらの人格は、ネバドンの行政、そして人の精霊的上昇と完全性到達において進歩的経歴に決して関連しない取り組みである他の業務にひたすら専念している。

4. 熾天使の世界

38:4.1 (420.2) サルヴィントン回路の7主要球体中の9番目の集団は、熾天使の世界である。これらの各世界には、6個の従属衛星があり、そこには熾天使養成の全局面に向けられる特別な学校がある。熾天使は、サルヴィントン球

のこの集団を構成する49の世界すべてに接近できるものの、専ら7群のうちの最初の1群だけを占有する。残る6群は、ユランチアには明かされていない天使仲間の6系列に占有されている。そのような各集団は、これらの6主要世界中の1世界に本部を維持し、6個の従属衛星での専門活動をする。天使の各系列は、これらの異なる7集団の全世界に自由に接近できる。

38:4.2 (420.3) これらの本部世界は、ネバドンの壮大な領域内にある。熾天使の地所は、美と巨大さの双方によって特徴付けられる。ここでは各熾天使は、本当の家庭をもち、また「家庭」は2名の住居を意味する。2名一組で生きる。

38:4.3 (420.4) 熾天使は、物質の息子と人種にあるような男女ではないが、正と負である。任務の大部分は、課題達成に2名の天使を要する。熾天使が、回路化されないとき、それぞれが、単独で働くことができる。彼らは、静止しているとき存在体の補充もまた必要としない。彼らは、通常、最初の補充的存在体を持ち続けるが、必ずしもそうではない。そのようなつながりは、主に機能によ

り必要とされる。彼らは、きわめて親密的であり、本当に慈愛深いが、性の感情の特性は、帯びない。

38:4.4 (420.5) 指定された家庭の他に、熾天使には群団、隊、大隊、部隊、および軍団本部がある。彼らは、再会のために千年ごとに集合し、創造の日付けに基づき全員が出席するのである。熾天使が、職務からの欠席を禁じる責任を担っているならば、別の生年月日の熾天使による救援でその補充者と交替する。熾天使のそれぞれの相手は、その結果、少なくとも1回おきの再会の集いに出席する。

5. 熾天使の養成

38:5.1 (420.6) 熾天使は、委任状のない観察者としてサルヴィントンとその関連世界の学校にて最初の千年を過ごす。第二の千年は、サルヴィントン回路の熾天使の世界で過ごす。中央の職業訓練所では、現在、最初の10万のネバドン熾天使が統括をしており、その主班は、この地方宇宙の出身の、または長子の天使である。ネバドンの熾天使の最初に創造された集団は、アバロンからの1,000名からなる1熾天使軍団により訓練を受けた。続いて、

我々の天使は、自身の上級者に教えられた。また、メルキゼデク系は全地方宇宙の天使—熾天使、天使童子とサノビム—の教育と養成において相当部分を担っている。

38:5.2 (421.1) サルヴィントンの熾天使の世界におけるこの養成期間終了時に、熾天使は、それまでの天使の組織群団と部隊に動員され、星座のどれか1つに割り当てられる。それらは、天使養成の任命前の段階で好調に着手したとはいえ、いまだ奉仕活動をする精霊としては任命されていない。

38:5.3 (421.2) 熾天使は、進化する世界の最も低いところで観察者として役目を果たすことにより奉仕活動をする精霊として始める。この経験後、高度な研究を始めるために、何らかの特定の地方体制における業務により明確に備えるために指定された星座の本部の関連世界に戻る。それらは、この一般的教育に続き、地方体制のいずれか1つの業務へと進められる。我々の熾天使は、何らかのネバドン体制の首都に関連する建築世界において訓練を終了し、時間の奉仕活動をする精霊として任命される。

38:5.4 (421.3) 熾天使は、一旦任命されると任務上ネバドン中の範囲に及ぶ。宇宙におけるそれらの仕事は、領域も制限もないのである。それらは、密接に世界の物質の生物に関連づけられ、精霊世界のこれらの存在と物質の領域の人間との間の接触をとり、常に精霊人格の下級系列に仕えている。

6. 熾天使の組織

38:6.1 (421.4) 熾天使本部での2,000年目の滞在後、熾天使は12組の群団(12組、24熾天使)の長官の下に編成され、そのような12群団が、指導者に支配される隊(144組、288熾天使)を構成する。指揮官下の12隊は、1大隊(1,728組、つまり3,456熾天使)を構成し、大隊長下の12大隊は、熾天使部隊(20,736組、つまり41,472個人)と等しいが、監督の命令に従う12個部隊は、248,832組か497,664個人を数える軍団を構成する。イエスは、ゲッセマネの庭でその夜そのような集団の天使について暗示して言った。「私は、今でも父に尋ねることができるし、父は、やがて、12以上の天使軍団を私につかわされるであろう。」

38:6.2 (421.5) 天使の12の軍団は、2,985,984 組、つまりは、5,971,968個人からなり、そのような12軍勢(35,831,808組、つまりは、71,663,616個人)は、熾天使軍隊である最大執行組織を構成している。熾天使の軍勢は、大天使により、あるいは調停の立場にある他の人格により指揮され、一方、天使の軍隊は、輝く宵の明星により、またはガブリエルの他の直属中尉により指示を受ける。ガブリエルは、「天の軍隊の最高指揮官」、つまり「軍勢の主なる神」であるネバドンの君主の最高責任者である。

38:6.3 (421.6) 熾天使と他のすべての地方宇宙の系列は、サルヴィントンにおいて人格化される無限の精霊の直接指揮下に仕えてはいるもののユランチアにおけるマイケルの贈与以来、主たる息子の支配権を受けるようになった。超宇宙放送は、「マイケルが、ユランチアに肉体で生まれたときでさえ、天使すべてに彼を崇拝させよ」と、ネバドン中に宣言した。天使の全集団が、彼の支配権を受ける。それらは、「強力な天使」と命名されたその集団の一部である。

7. 天使童子とサノビム

38:7.1 (422.1) 全ての必須の贈与において天使童子とサノビムは、熾天使と同様である。彼らは、同じ起源をもつが、常に同じ目標をもつのではない。素晴らしく知的で、驚異的に有能で、感動的に愛情深く、ほとんど人間的である。天使童子とサノビムは、天使の最下の系列であり、したがって進化世界の人間のより進歩的な型により近い。

38:7.2 (422.2) 天使童子とサノビムは、本質的に関連しており機能上結合している。一方は、正のエネルギー人格であり、他方は、負のエネルギー。右手の偏向者、または正電気を帯びた天使は、天使童子—上級者、または制御する人格—である。左手の偏向者、または負の電気を帯びた天使が、サノビム—存在体の補充員—である。それぞれの型の天使は、単独機能に非常に限りがある。したがって、通常、それらは、対になって役目を果たす。熾天使の管理者から離れて働くとき、彼らは、ますます相互接触に依存し、常に共に機能している。

38:7.3 (422.3) 天使童子とサノビムは、熾天使の奉仕活動者の忠実で効果的な助手であり、熾天使の全7系列にはこれ

らの下位の補佐が与えられる。天使童子とサノビムは、これらの能力で長らく役目を果たすが、地方宇宙の境界を超える任務では熾天使に随行しない。

38:7.4 (422.4) 天使童子とサノビムは、体制の個々の世界の通常の精霊労働者である。人格に関係しない任務と非常時に際しては、熾天使の一組に成り代わって働くかもしれないが、決して、一時的でさえも、人間の世話をする天使としては機能しない。それは、熾天使の独占的特権である。

38:7.5 (422.5) 惑星に割り当てられるとき、天使童子は、惑星の慣習と言語の学習を含む現地の養成課程に入る。時間の奉仕活動の精霊は、出身の地方宇宙と超宇宙の言語を話し、全員が 2 言語を操る。それらは、領域の学校での勉強で更なる言語を習得する。天使童子とサノビムは、熾天使とすべての他の精霊体の系列のように、絶え間なく自己改善の努力に専念している。力の制御とエネルギー方向に関わる従属的存在体としてのそのようなものだけが、進行ができないのである。実際の、または、潜在

の人格意志を持つすべての被創造物が、新たな達成を求める。

38:7.6 (422.6) 天使童子とサノビムは、生来モロンチア段階の存在に非常に近く、物理の、モロンチアの、かつ精霊の領域で進む境界領域の仕事において最も敏腕であることがわかる。地方宇宙の母なる精霊のこれらの子供は、ハヴォーナ　サーヴァタルと調停委員のように「4番目の生物の特徴がある。4番目ごとの天使童子と4番目ごとのサノビムは、実に紛れもなくモロンチア段階の存在に類似していて準物質的である。

38:7.7 (422.7) これらの天使の4番目の被創造物は、自身の宇宙活動と惑星活動の物質的局面で熾天使にとっての大きな援助である。そのようなモロンチアの天使童子はまた、モロンチア養成世界において必要不可欠である境目の多くの仕事をし、大勢がモロンチア同志の業務に割り当てられる。進化の惑星にとり中間被創造者に当たるものが、モロンチア球体にとっての彼らである。これらのモロンチアの天使童子は、棲息界では中間被創造者とのつながりで頻繁に働いている。天使童子と中間被創造者

は、明瞭に別個の存在系列である。彼らは、異なる起源をもつが、本質と機能においてすばらしい類似性を明らかにしている。

8. 天使童子とサノビムの発展

38:8.1 (423.1) 前進する業務の数々の方法が、神性聖職者の抱擁によりさらに補強されるかもしれない状況向上へと導く天使童子とサノビムに開かれている。進化の可能性に関わる天使童子とサノビムの大きな3階級がある。優れた

38:8.2 (423.2) 1. 上昇候補。これらの存在体は、元来、熾天使状態の候補である。固有の贈与の点では熾天使と等しくはないが、この系列の天使童子とサノビムは、優秀である。だが、適用と経験の手段で熾天使の完全な身分に至ることは、それらにとり可能である。

38:8.3 (423.3) 2. 中間局面の天使童子。すべての天使童子とサノビムは、上昇の可能性において等しくはなく、天使の創造の本質的に限られた存在体である。より才能のある個人が熾天使の限定された業務を成し遂げるかもしれな

いが、そのほとんどが、天使童子とサノビムのままでいるであろう。

38:8.4 (423.4) 3. モロンチア 天使童子。天使の系列の「4番目の被創造物」は、常に準物質の特徴を持ち続ける。彼らは、崇高なるものの完成された現実化まで、中間段階の大多数の同胞と共に天使童子とサノビムとして進み続けるであろう。

38:8.5 (423.5) 第2、第3集団は、成長性においてやや限られているが、上昇候補は、天使の宇宙業務の極みに達するかもしれない。これらの天使童子のより経験豊富なものの多くが、熾天使の上級者に見捨てられると目標の熾天使の保護者に結びつけられ、こうして大邸宅世界の教師の身分への前進のための直系に置かれる。人間の被後見人が、モロンチア生命を獲得するとき、目標の保護者は、助手としての天使童子とサノビムを持たない。また進化する熾天使の他の型は、熾天使球と楽園への許可が与えられると、ネバドンの境界を出る際に元の従属物を見捨てなければならない。そのような見捨てられた天使童子とサノビムは、通常は、宇宙の母なる精霊に抱擁され、

こうして熾天使の身分到達において大邸宅世界の教師水準に同等のそれに達する。

38:8.6 (423.6) かつて受諾された天使童子とサノビムが、大邸宅世界の教師として長らく最下から最高の球体までのモロンチア球体で仕えたとき、またサルヴィントンの軍団が募集され過ぎるとき、輝く宵の明星は、時間の生物のこれらの忠実な僕を自分の前に召喚する。人格変換の誓いが、執り行われる。そこで直ちに、7,000人ずつの集団で、これらの進歩した上級の天使童子とサノビムは、宇宙の母なる精霊に再び抱擁される。彼らは、この2番目の抱擁から成熟した熾天使として現れる。熾天使の最大限の、かつ完了した経歴は、今後その楽園の可能性のすべてとともにそのような生まれ変わった天使童子とサノビムに開かれている。そのような天使は、運命の保護者として選任されるかもしれない。そのような天使は、一部の人間にとり目標の保護者として選任されるかもしれないし、もし被後見人が生存を手に入れるならば、次には、熾天使球への前進と熾天使が到達する7回路への、さらには楽園と終局者軍団への前進資格を得る。

9. 中間被創造者

38:9.1 (424.1) 中間被創造者には、３種類の分類がある。それらは、神の上昇する息子の部に適切に分類される。それらは、空間の個々の世界で人間に仕える仕事において天使の主人役との親密で有効な提携を理由に、機能上は時間の奉仕活動の精霊とみなされるが、実際には永久公民の系列と同系に分類される。

38:9.2 (424.2) これらの独特の創造物は、棲息界の大部分に現れ、ユランチアなどのような10進の惑星、あるいは生命実験惑星でいつも見かけられる。中間者には2つの—主要と二次の—型があり、それらは次の方法で現れる。

38:9.3 (424.3) 1. 主要中間者、つまりより精霊的な集団は、惑星王子の変更された人間の部下から一様に得られる存在のいくらか標準化された系列である。主要中間被創造者の数は、常に5万であり、どの惑星も奉仕活動の大集団を享有しないのである。

38:9.4 (424.4) 2. 第二中間者、すなわち、これらの生物のより物質的集団は、およそ5万が、平均であるとはいえ、その数はいろいろな世界で大いに異なる。それらは、惑星の生物的改善者、すなわちアダーム系とハヴァー系か

ら、またはそれらの直系子孫からさまざまに生じている。空間の進化世界におけるこれらの二次中間被創造者の生殖にかかわる少なくとも24の方法がある。ユランチアのこの集団のための起源形態は独特で並はずれていた。

38:9.5 (424.5) これら集団のいずれも進化上の偶然ではない。両方が、宇宙の建築家の予定された計画における本質的特徴であり、好機に際しての発展世界における登場は、監督する生命運搬者の当初の設計と開発上の計画による。

38:9.6 (424.6) 主要中間者は、知性と精霊に関しては天使の方法でエネルギーを与えられ、知的階級において同一である。心-精霊の7名の補佐は、それらに接触しない。第6と第7だけ、つまり崇拝の精霊と知恵の精霊だけが、二次集団への奉仕活動ができる。

38:9.7 (424.7) 二次中間者は、物理的にはアダームの方法によるエネルギーが与えられ、精霊的には熾天使により回路化され、知的には心のモロンチア変遷の型に恵まれている。それらは、物理的な4つの型に、精霊的には7系列

に、それと最後の2名の精霊補佐とモロンチアの心との協働奉仕活動への12段階の知的反応に分割される。これらの多様性は、それぞれの活動と惑星の任務の差異を決定する。

38:9.8 (424.8) 主要中間者は、人間よりも天使に類似している。二次系列は非常に人間に似ている。それぞれが、惑星の多種の任務の実行において非常に貴重な援助を他方に提供する。主要の奉仕活動者は、モロンチアと精霊エネルギー制御者と心の回路者双方との連絡協力を成し遂げることができる。二次集団は、物理的制御者と物質回路の操縦者に限って労働関係を確立できる。しかし、中間者の各系列は、他方との完全な共時性を確立できるので、その結果、いずれかの集団が、物質界の大きな物理エネルギー力から宇宙活力の変遷局面を経由し、天の領域のより高い精霊現実力へと広がるエネルギー全域の現実的活用を達成することができる。

38:9.9 (425.1) 物質世界と精霊世界間の隔たりは、人間、二次中間者、主要中間者、モロンチア天使童子、中間相の天使童子、それに熾天使の連続的つながりにより完全に橋

渡しがなされる。これらのさまざまの段階は、個々の人間の個人的経験においては神性の思考調整者の気づかれない、しかも神秘的操作により疑いの余地なく多少なりとも統一され、個人的に意味あるものにされる。

38:9.10 (425.2) 主要中間者は、通常世界において惑星王子のために諜報軍団として、また天の歓待者として役目を持続し、一方、二次奉仕活動者は、惑星の進歩的文明の大目的を促進するアダーム体制との協力を続ける。中間被創造者は、ユランチアで生じたような惑星王子の背信と物質の息子の不履行に際しては、体制君主の被後見者となり、惑星の代理世話係の指示の下に仕える。しかし、これらの存在体は、ユランチアの結合した中間奉仕活動者がするようにサタニアの他の3世界に限って統一された統率力の下における1集団として機能する。

38:9.11 (425.3) 主要の、また二次の中間者双方の惑星のための作業は、宇宙の多数の個々の世界において様々であるが、通常の平均的惑星おけるそれらの活動は、ユランチアといった孤立球体で時間を費やす義務とは大変に異なる。

38:9.12 (425.4) 主要中間者は、惑星王子の到着時から定着した光と生命の時代へと、体制本部世界での惑星展示のために惑星の歴史上の劇的事実を系統立てて描写し、企画する惑星の歴史家である。

38:9.13 (425.5) 中間者は、棲息界に長期間留まるが、信頼に忠実であるならば、創造者たる息子の主権維持における長年の働きに対し、ゆくゆくは間違いなく認められるであろう。それらは、時間と空間世界の物質的人間への忍耐強い奉仕活動に対する報酬を適宜に与えられるであろう。公認の中間被創造者は、遅かれ早かれ上昇する神の息子の階級へと召集されるであろうし、長い惑星滞在期間、油断なく警備し、また実効的に役目を果たした地球の同胞の動物起源をもつまさにその人間と共に正式に楽園上昇の長い冒険へと先導されるであろう。

38:9.14 (425.6) [ネバドンの熾天使軍勢の長官の要求により行動するメルキゼデクによる提示]

論文 39
熾天使の軍勢

39:0.1 (426.1) 我々が認識する限り、無限の精霊は、地方宇宙本部で人格化されるように、一様に完全な熾天使の生産を意図するが、何らかの未知の理由によりこれらの熾天使の子は、誠にさまざまである。この多様性は、進化する経験的神格の未知の介入の結果であるかもしれない。だとすれば、我々は、それを立証することはできない。だが、我々は、熾天使が教育試験と訓練規律の対象にあるとき、彼らは、失することなくはっきりと次の7集団に分類するのを観測する。

39:0.2 (426.2) 1. 崇高の熾天使

39:0.3 (426.3) 2. 優位の熾天使

39:0.4 (426.4) 3. 監督熾天使

39:0.5 (426.5) 4. 行政官熾天使

39:0.6 (426.6) 5. 惑星の助力者

39:0.7 (426.7) 6. 変遷の奉仕活動者

39:0.8 (426.8) 7. 未来の熾天使

39:0.9 (426.9) どんな熾天使も、いかなる他の集団の天使よりも劣ると言うのは決して真実ではなかろう。にもかかわらず、すべての天使は、まず最初の、しかも生来の分類の集団に限定された業務に就いている。私の熾天使仲間マノティアは、この記述の準備の際、最高の熾天使であり、以前は最高の熾天使としてのみ機能した。彼女は、精励さと熱心な働きにより、熾天使の7業務のすべてを１つずつ達成し、熾天使に開かれているほとんど総ての活動の道において機能し、また現在はユランチアにおける熾天使の副長官の職権を保持している。

39:0.10 (426.10) 人間には、高水準の奉仕活動のために作成された適応性が、必ずしも比較的低い業務水準で機能する能力を暗示する訳ではないということは、時として理解し難い。人は、無力な幼児として人生を始める。したがって、人間のあらゆる到達は、すべての経験的前提条件を擁する必要がある。熾天使は、そのような前成人期の生活を過ごさない—幼年期がない。しかしながら、それらは、経験の被創造物であり、経験により付加教育を通して、熾天使活動の1つあるいはそれ以上の経験からの職

務能力の習得により神性の、そして固有の能力の授与を増大させることができる。

39:0.11 (426.11) 熾天使は、任命後、各自本来の集団の予備軍に配属される。惑星の地位と行政の地位のもの達は、しばしば当初序列分けされた通りに長期間働くが、天使の奉仕活動は、本来備わっている機能が高ければ高いほどより粘り強く宇宙業務の低い序列への配属を求めるのである。特に、彼らは、惑星の助力者の予備軍への配置を望み、またもし何らかの進化世界の惑星王子の本部に付属する天の学校への入学に成功するならば、ここで、言語、歴史、および人類の地方の習慣についての研究を始める。熾天使は、人間とほぼ同じに知識を習得し経験を積まなければならない。それらは、ある種の人格特性においてあなたとは懸け離れてはいない。彼らは皆、低部、最低可能の奉仕活動の段階から始めることを切望している。彼らは、こうして、経験上の目標の最高可能の段階への到達を望むことができる。

1. 最高の熾天使

39:1.1 (427.1) これらの熾天使は、明らかにされている7系列の地方宇宙天使のうち最高のものである。それらは、7集団で機能し、各集団は、熾天使終了兵団に属する天使の奉仕活動者に密接に関連づけられている。

39:1.2 (427.2) 1. 息子-精霊奉仕活動者。最高の熾天使の第一集団は、地方宇宙に居住し機能している高位の息子達と聖霊起源の存在体の業務に配属されている。天使の奉仕活動のこの集団も、宇宙の息子と宇宙の精霊に仕え、また輝く宵の明星の諜報軍団、つまり創造者たる息子と創造の精霊との結合された意志の宇宙の最高行政官に密接に系列化されている。

39:1.3 (427.3) 高位の息子達と精霊へ配属されていることから、これらの熾天使は、楽園のアヴォナル、つまり、永遠なる息子と無限の精霊の神性の子孫の広範囲の業務に自然に結びつく。楽園のアヴォナル系には、すべての行政と贈与任務の際、1惑星の天の配剤の終了と1時代の始まりとに関係のある特別な仕事の組織と管理に専念する高く経験豊富な熾天使のこの系列が、常に出席する。し

かし、彼らは、天の配剤におけるそのような変化に付帯的であるかもしれない裁決の仕事には関係していない。

39:1.4 (427.4) 贈与従者。創造者たる息子ではなく楽園のアヴォナルは、贈与任務の際いつも144名の贈与従者の軍団を伴っている。これらの144名の天使は、贈与任務に関連づけられるかもしれない他の全ての息子-精霊の奉仕活動者の長官である。ことによると、惑星の贈与の肉体を与えられた神の息子の指揮に支配される天使軍団があるかもしれないが、これらのすべての熾天使は、144名の贈与従者に組織化され指示を受ける。より高い天使と熾天使、超熾天使と第二熾天使の系列もまた、任務中の軍勢の一部を形成するかもしれないし、また彼らの任務は、熾天使のものとは異なるが、これらの全活動は、贈与従者により調整されるであろう。

39:1.5 (427.5) 贈与従者は、終了熾天使である。それらは皆、熾天使球の軌道を通過し熾天使終了兵団に達したのである。その上、とりわけ、時間の子供の前進のために神の息子による贈与に関する難局の克服と非常時に対処するために、さらに訓練された。そのような熾天使全員が、

楽園と永遠なる息子である第二根源と中枢の個人的抱擁を得た。

39:1.6 (427.6) 熾天使は、肉体を与えられた息子の使命への委任と、将来の目標の守護者として領域の人間に付くことを同様に切望する。後者は、楽園への最も確かな熾天使のための旅券であり、一方贈与従者は、楽園到達の終了熾天使の地方宇宙の最高業務を達成してきた。

39:1.7 (428.1) 2. 法廷助言者。調停者から領域の最高裁判所までの裁決に関する全系列に所属する熾天使である助言者と助力者である。それは、懲罰の宣告を決定するそのような裁判の目的ではなく、むしろ偽りない意見の相違を裁き、上昇する人間の永遠の生存を命じるためである。法廷助言者の義務が、ここに存在するのである。必滅の被創造物に対するすべての告発が、公正に述べられ、また慈悲をもって裁かれているかを確かにすること。この仕事では、それらは、密接に高等弁務官、つまり地方宇宙で活動する精霊-融合された上昇する人間に関連づけられている。

39:1.8 (428.2) 熾天使の法廷助言者は、人間の擁護者として広範囲に活動する。領域の下等生物に不公平である何らかの傾向が常に存在するというわけではないが、正義は、神性の完全性に向かう上昇のあらゆる不履行に対する判決を要求する一方で、慈悲は、被創造物の本質と神の目的に合致してそのようなあらゆる過失が公正に裁かれることを要求する。これらの天使は、神性の正義に固有の慈悲の要素の擁護者であり例証である—すなわち、個人的動機と人種的傾向の基本的事実に関する知識に基づく公正さの要素。

39:1.9 (428.3) 天使のこの系列は、惑星王子の協議会から地方宇宙の最高裁判所まで、実にユヴァーサの日の老いたるものの法廷にまでわたっての役目を果たし、一方、熾天使終了兵団の仲間は、オーヴォントンのより高い領域において機能する。

39:1.10 (428.4) 3. 宇宙適応指導者。これらは、オーヴォントンの広大な超宇宙の前に広がる精霊冒険の縁に立つとき、自身の起源の宇宙にあるサルヴィントンで最後に休止している上昇するそれらの全創造物の真の友であり、大学

院生の相談役である。そして、多くの上昇者には、そのような時、人間の感情の郷愁との比較でのみ人間が理解できる感覚がある。達成の領域が、すなわち、長期の活動とモロンチア到達で馴染みのできる領域が、後ろに横たわる。よりすばらしく、　より広大な宇宙の挑戦的神秘が、前途に横たわっている。

39:1.11 (428.5) これが、上昇する巡礼者の宇宙業務の到達段階から未到段階への通路を容易にしているし、第一段階の精霊体が、地方宇宙モロンチア上昇の終わりと頂点にではなく、むしろ楽園の宇宙なる父への精霊的上昇の長い梯子のまさしくその底辺に立つという現実に固有の意味と価値の理解における変幻自在のそれらの調整においてこれらの巡礼者を手伝う宇宙適応指導者の職務である。

39:1.12 (428.6) 熾天使球卒業生の多くは、つまりこれらの熾天使に関連する熾天使終了兵団の構成員は、次の宇宙時代の関係に向けてネバドンの創造物の準備に関するサルヴィントン特定の学校での大規模な教育に従事している。

39:1.13 (428.7) 4. 教育相談役。これらの天使は、地方宇宙の精霊的教育軍団のかけがえのない助力者である。教育相談

役は、教師の全系列付きの、つまりメルキゼデクと三位一体の教師たる息子から上昇生活規模において自分達の直後にいる同種類のものへの助手として配属されているモロンチアの人間に至るまでの、秘書である。あなたは、ジェルーセムを囲む7大邸宅世界の中のある1大邸宅世界において教育に携わるこれらの熾天使仲間を最初に見るであろう。

39:1.14 (428.8) これらの熾天使は、地方宇宙の多数の教育の、また訓練団体の部長の仲間になり、大勢で地方体制と星座の70の教育球体の中の7訓練世界の教授陣に配属されている。これらの奉仕は、個々の世界にまで広がっている。時間の真の献身的教師でさえ、崇高熾天使のこれらの相談役に援助され、しばしば付き添われる。

39:1.15 (429.1) 創造者たる息子の第4の生物贈与は、ネバドンの崇高熾天使の教育相談役を手本としてまねていた。

39:1.16 (429.2) 5. 任務の指導者。144名の崇高熾天使の一団は、時々天使により生物居住の進化的球体上と建築球体上において選出される。これは、どの球体においても最高の天使協議会であり、それは、熾天使の働きと任務に

おける自律局面を調整する。これらの天使は、職務、あるいは崇拝の呼び出しに関係する全熾天使の全集会の議長を務める。

39:1.17 (429.3) 6. 記録係。これらは、崇高熾天使のための公式記録係である。この高位の天使の多くは、天賦の才が完全に開発された状態で生まれてきた。他のものは、下級の、またはそれほど責任を伴わない系列に配属され、研究への熱心な精励と同様の義務への忠実な遂行により信頼と責任ある地位への資格を得てきている。

39:1.18 (429.4) 7. 無所属の奉仕活動者。最高系列の無所属の熾天使の多くは、建築球と棲息惑星上の自律的奉仕者である。そのような聖職者は、自発的に崇高熾天使の業務に対する需要段階の差異に対処し、その結果、この系列の一般予備部隊を構成している。

2. 優位の熾天使

39:2.1 (429.5) 優位の熾天使は、決して天使の他の系列よりも質的に優れるているからではなく、地方宇宙のより高度の活動を担当しているのでその名前を受けている。この熾天使軍団の最初の2集団の非常に多くが、到達の熾天

使、すなわち全訓練段階で働き各自の以前の活動球体における指揮官として栄光の任務に戻った天使達である。若い宇宙であるので、ネバドンにはこの系列は多くない。

39:2.2 (429.6) 優位の熾天使は、次の7集団において機能する。

39:2.3 (429.7) 1.諜報軍団。これらの熾天使は、ガブリエルの、輝く宵の明星の個人的要員に属する。彼らは、ガブリエルのネバドンの協議会での指導のために領域に関する情報を収集して地方宇宙を回る。それらは、ガブリエルが主たる息子の代理人として統治する強力な軍勢の諜報軍団である。これらの熾天使は、直接には体制とも星座にも属することなく、またそれらからの情報は連続の、直接の、独立した回路でサルヴィントンに直に続々と入ってくる。

39:2.4 (429.8) 様々な地方宇宙の諜報軍団は、通信し合えるし、そうするのだが、特定の超宇宙の範囲内に限られている。様々な超政府の機能と処理を効果的に隔離するエネルギーの差がある。1超宇宙は、通常、楽園の情報交

換所の設備と施設を通じてのみ他の超宇宙との通信が可能である。

39:2.5 (430.1) 2. 慈悲の声。慈悲は、熾天使の奉仕と天使の聖職活動の基調である。それ故、特別な方法で慈悲を描く天使の軍団があるということは当然である。これらの熾天使は、地方宇宙の真の慈悲の聖職者である。彼らは、人と天使のより高度の刺激とより聖なる感情を培う見事な先導者である。これらの軍団の指揮官は、今は常に、人間の将来の目標の守護卒業者でもある終了熾天使である。すなわち、天使の各組は、肉体での生涯の間、動物起源の少なくとも一人の人間を誘導し、次に、熾天使球の軌道を通過し、熾天使終了兵団に召集されてきたのである。

39:2.6 (430.2) 3. 精霊調整者。優位の熾天使の第3集団は、サルヴィントンを本拠地とするが、実り多い働きができる地方宇宙のどこででも機能する。それらの職務は、本質的には精霊的であり、それ故人間の心の真の理解を超えているが、上昇の逗留者に地方宇宙での最後の変遷—モロンチアの最高段階から精霊の新生児の地位までの—に向

け、サルヴィントンで準備させる職務が、これらの天使に委ねられているということがあなたに説明されるならば、人間へのそれらの聖職についておそらく何かを把握するであろう。生残する創造物が、モロンチア心の可能性に順応し、それを効果的に活用できるよう大邸宅世界の心の立案者を手伝うように、これらの熾天使も同様に、精霊の心の新たに到達した能力に関してサルヴィントンでモロンチア卒業生を教授するのである。そして、それらは、他の多くの方法で上昇する人間に仕える。

39:2.7 (430.3) 4. 補助教員。補助教員は、仲間の熾天使の助力者であり仲間、つまり教育相談役である。それらはまた、地方宇宙の大規模な教育活動に個々に関係しており、特に地方体制の大邸宅世界で機能する訓練に関わる七重の基本構想に関連している。この系列熾天使の驚異の軍団は、真実と正義の大義を抱き促進する目的のためにユランチアで機能する。

39:2.8 (430.4) 5. 輸送者。奉仕活動をする精霊の全集団には、自身の輸送軍団、つまり1球体から他球体へと自らが旅行できないそれらの人格輸送の援助に専念する天使の系

列がある。優位の熾天使の第5集団は、サルヴィントンに本部が置かれ地方宇宙の本部を往復する空間通過者として働く。１部のもの達は、優位の熾天使の他の細分化部分と同様に創造され、他のもの達は、下級の、あるいはあまり資性を受けていない集団から上昇してきた。

39:2.9 (430.5) 熾天使の「エネルギー規模」は、地方宇宙に、また超宇宙の必要条件にさえ完全に適合しているが、ユヴァーサからハヴォーナまでのそのような長旅に伴うエネルギー要求に決して耐えることはできない。そのような消耗的な旅行は、主要第二熾天使の輸送資性の特別な力を必要とする。輸送者は、移動中に、エネルギーを取り込み、旅の終わりに個人の力を回復する。

39:2.10 (430.6) 上昇する人間は、サルヴィントンにおいてさえ個人の運送の型をもたない。上昇者は、世界から世界への前進においてハヴォーナの内側の回路での眠りの最後の休息と楽園での永遠の目覚めの後まで熾天使の輸送に依存しなければならない。あなたは、それ以降宇宙から宇宙への輸送において天使に依存しなくなるであろう。

39:2.11 (430.7) 熾天使に包まれる過程は、輸送の微睡みにおける自動的時間の要素を除き、死あるいは睡眠の経験と五十歩百歩である。あなたは、熾天使の休息の間、意識的に無意識である。しかし、思考調整者は、すっかり、完全に意識しており、実のところ、あなたが、創造的かつ変形する仕事を妨害したり、抵抗したり、または別な方法で妨げたりできないので、殊の外、能率的である。

39:2.12 (431.1) あなたは、熾天使に包まれると定められた時間眠りにつき、指定された瞬間に目覚める。輸送睡眠中の旅の長さは、重要ではない。あなたは、時間の経過に直接は気付かない。あなたは、あたかも1都市において輸送機関で眠りにつき、夜通し平和なまどろみで休息した後、他の市で、しかも遠方の大都会で目を覚ますようなものである。あなたは、うたた寝中に旅をした。それで、あなたは、熾天使に包まれて休息 - 睡眠 - 中に、空間を飛行通過するのである。輸送睡眠は、調整者と熾天使輸送者とのつながりにより引き起こされる。

39:2.13 (431.2) 天使は、燃焼体を、あなたなが現在持っているような—肉体を、輸送することはできないが、最も低い

モロンチアからより高い精霊の型までの他の総てのものを輸送することができる。それらは、自然な死の場合は機能しない。あなたが地球の経歴を終えるとき、あなたの身体はこの惑星に残る。あなたの思考調整者は、父の懐に進み、識別大邸宅世界でのあなたのその後の人格再構成には直接関係はない。あなたの新たな身体は、そこでは、モロンチア型、熾天使化ができるものである。あなたは、墓に「必滅の身体を撒く。」あなたは、大邸宅世界で「モロンチア型を収穫する。」

39:2.14 (431.3) 6. 記録者。これらの人格は、サルヴィントンとその関連世界の記録の受理、類別、再発送に特に関係がある。また、超宇宙とより高い人格の居住集団のための特別記録者として、またサルヴィントンの裁判所書記官と支配者付きの秘書として仕える。

39:2.15 (431.4) 放送者—受信者と発信者—は、記録の発信と主要情報の普及に関係があるので、熾天使記録者の専門部門である。それらの仕事は、144,000の通報が同時にエネルギーの同線を通過できるように多回路化されている上位のものである。彼らは、最高熾天使の主幹記録者の

より高度の表意文字技術を適応させ、これらの共通の記号で第三の超熾天使の情報調整者と熾天使終了兵団の栄えある諜報調整者との両者の相互的接触を維持する。

39:2.16 (431.5) 優位系列の熾天使記録者は、こうして自身の系列の諜報軍団と下位のすべての記録者との緊密な連携を達成し、一方、放送は、超宇宙のより高位の記録者との、またこの伝達経路によりハヴォーナの記録者と楽園に関する知識の管理人との不断の通信の維持を可能にする。優れた系列の記録者の多くは、宇宙の下級区分の同様の職務から昇ってきた熾天使である。

39:2.17 (431.6) 7. 予備軍。優位の熾天使のすべての型の大予備軍は、サルヴィントンに設置されており、任務を割り当てる指揮官に徴用されたり、または宇宙行政者からの要求に応じ、即座にネバドンの最も遠い世界への派遣に用意ができているのである。また、優位の熾天使予備軍は、個人的全通達の管理と発信を任されている輝く宵の明星の長官からの要求に応じ使者の援助を提供する。地方宇宙には相互通信の適切な手段が充分に提供される。

それにしても、個人的な使者による発信を必要とする残りの通達が常にある。

39:2.18 (432.1) 地方宇宙全体のための主要予備軍は、サルヴィントンの熾天使世界に設置されている。この軍団は、天使の全集団のすべての型を含んでいる。

3. 熾天使監督

39:3.1 (432.2) 宇宙天使のこの万能の系列には、星座の専門的業務が割り当てられている。これらの有能な聖職者は、星座首都に自らの本部を設けるが、割り当てられた領域のために全ネバドンで機能する。

39:3.2 (432.3) 1. 監督助力者。監督する熾天使の第一系列は、星座の父の集合的な仕事に割り当てられ、いと高きものの常に有能な助力者である。これらの熾天使は、主として星座全体の統一と安定化に関係がある。

39:3.3 (432.4) 2. 法予測官。正義のための理知的基礎は法であり、法は、地方宇宙においては星座の立法議会に源を発する。これらの審議会は、ネバドンの基本法を、人格の創造物の道徳的自由意志を侵害しない不動の政策と一致

した星座全体の可能な限りの最もすばらしい調整を提供するように設計された法を、成文化し、正式に公布する。いかなる立法案が、いかにして自由意志の創造物の生活に影響するかの予測を星座立法者に示すことが、監督熾天使の第二系列の義務である。彼らには、この働きを地方体制と棲息界における長い経験によって実行する十分の資格がある。これらの熾天使は、どれか1集団のために特別な引き立てを求めはしないが、自説を述べるために出席できないもの達のために代弁しに天の立法者の前に現れるのである。人間ですらも宇宙法の発展に貢献するかもしれない。なぜなら、他ならぬこれらの熾天使は、人の一時的かつ意識的願望ではなく、むしろ人の内側、すなわち　空間世界の物質的人間の発展しているモロンチア魂の真なる切望を忠実に、しかも完全に描写するのであるから。

39:3.4 (432.5) 3. 社会的建築家。これらの熾天使は、個々の惑星からモロンチア訓練世界まで、すべての誠実な社会的接触を高め、宇宙の創造物の社会的発展を促進しようと苦心する。これらは、真の自己理解と本物の相互認識を基礎に意志をもつ創造物の相互連携を容易にしようと努

めるとともに、知的存在体のつながりの全ての不自然さを剥ぎ取ろうとする天使達である。

39:3.5 (432.6) 社会的な建築家は、地球の効率的で快い働く集団を構成するかもしれない相応しい個人を一堂に集めるために自分の地域と力において全てを行なう。時々そのような集団は、実り多い持続的奉仕のために大邸宅世界で再連結されていた。しかし、これらの熾天使は、いつも彼らの目的に至るわけではない。これらの熾天使は、いつも与えられた目的を遂げたり、または、ある課題を成就するために最も理想的な集団を結成する人々を纏めることができるというわけではない。それらは、これらの条件のもとで利用可能な最良の材料を活用しなければならない。

39:3.6 (432.7) これらの天使は、大邸宅世界とより高いモロンチア世界での奉仕活動を続ける。それらは、モロンチア世界における進歩と、3名、あるいはそれ以上の存在体に関するいかなる仕事にも関係がある。2つの存在体は、配偶、補足、あるいは協力関係を基盤に機能すると見なされるが、活動のために3名、あるいはそれ以上が

集められるとき、社会的問題となり、したがって社会的建設者の管轄に属する。これらの有能な熾天使は、エデンチアで70区分に組織化され、またこれらの区分は、本部球を包囲する70のモロンチア進歩世界で奉仕する。

39:3.7 (433.1) 4. 倫理的に気づかせるもの。人格相互関係の道徳に向けての創造物認識の成長を強化し、助成することがこれらの熾天使の任務である。なぜなら、そのようなものが、人間の、あるいは超人の継続され、かつ目的ある社会と政府の成長の種子であり、解決の鍵である。倫理的評価のこれらの高揚者は、惑星支配者への志願の相談役として、また体制訓練世界の交換教師として役立つであろういたる所で常時機能する。しかしながら、あなたは、その時でさえノーラティアデクの首都の70個の衛星であるエデンチアの社会的実験室でユーニヴィターチアとの実際の生きる経験により大いに熱心に探検している仲間のまさしくその真の評価を速めるであろうエデンチアの兄弟関係の学校に着くまで、これらの高揚者の指導を受けることはないであろう。

39:3.8 (433.2) 5. 輸送者。監督熾天使の第5集団は、人格輸送者として機能し、星座の本部を往復して存在体を運ぶ。そのような輸送熾天使は、1球体から他球体への飛行における速度、方向、および天体の位置を完全に意識している。彼らは、無生命の発射体のようには空間を横断していない。彼らは、宇宙飛行の間、何らの衝突の危険もなく互いの近くを通過できる。それらは、完全に進行速度、飛行方向を変えることができ、宇宙の知性回路のいかなる空間合流点にあっても、もし指揮官が、目的地変更の指示をしたとしても、それに対応できるのである。

39:3.9 (433.3) これらの輸送人格は、3エネルギー線の各々が、1秒あたり299,789キロメートルの明確な空間速度をもつ万遍に分散しているそのすべてを同時に利用できるように組織化されている。その結果、これらの輸送者は、あなたの時間の距離単位で1秒当たり893,186キロメートルからほぼ899,623キロメートルほどの長旅の平均速度に至るまで、力の速度にエネルギー速度を重ねることができる。速度は、隣接する物質の質量と近接により、また近くの主な宇宙力回路の強度と方向により影響される。

空間を通過し、また適切に準備された他の存在体を輸送できる熾天使に類似した多数の存在体の型がある。

39:3.10 (433.4) 6. 記録者。監督する熾天使の第6系列は、星座業務の特別記録者として機能する。大きく有能な軍団は、エデンチア、あなたの体系と惑星が属するノーラティアデクの星座本部で機能する。

39:3.11 (433.5) 7. 予備軍。熾天使監督の一般予備軍は、星座の本部に留め置かれる。そのような天使の予備兵は、決して不活発ではない。多くが、使者の援助として星座支配者に仕える。他のものは、非割り当てのヴォロンダデク系のサルヴィントン予備軍に配属される。それでも、他のものは、例えばヴォロンダデクのユランチアでの立ち会い役に、また時には、支配者であるいと高きもののようなヴォロンダデクの息子に配属されるかもしれない。

4. 管理者熾天使

39:4.1 (434.1) 熾天使の第四系列は、地方体制の行政任務に割り当てられる。それらの大勢は、体制首都出身であるが、大邸宅世界とモロンチア球体と棲息界に配置されている。系列の第四熾天使は、先天的に独特の行政能力に

恵まれている。それらは、創造者たる息子の宇宙政府の下級区分の指揮官の有能な助力者であり、主に地方体制とその構成世界の業務に従事する。それらは、次のような奉仕のために組織化される。

39:4.2 (434.2) 1. 行政補佐官。これらの有能の熾天使は、体制君主、主要ラノナンデクの息子の直属補佐官である。それらは、体制本部の管理業務の錯綜する細部の実行において非常に貴重な補佐である。体制の福祉のためと棲息界の物理的、生物的利益における多くの業務執行のために大勢で様々な過渡期の世界や棲息界を往来し、体制支配者の個人的代理者としても役目を果たす。

39:4.3 (434.3) これらの同じ熾天使の行政者もまた、世界の支配者、つまり惑星王子の政府に付設されている。任意の宇宙の大多数の惑星は、二次ラノナンデクの息子の管轄下にあるが、たとえばユランチアのようなある一定世界には、神性計画の失敗があった。惑星王子の背信の場合、これらの熾天使は、メルキゼデク受信者と惑星の権威をもつその後継者に配属されるようになる。熾天使の

この1,000名の万能の系列軍団は、現在のユランチアの代理支配者を補助している。

39:4.4 (434.4) 2. 司法の案内者。これらは、そのような事柄が体制か惑星の裁判所に裁決議題になるとき、人と天使の永遠の福祉に関する証しの概要を提示する天使である。彼らは、人間生存に関する全予審に向けての陳述に備える。後にそのような事例に関する記録とともに宇宙と超宇宙のより上級の裁判所へ回される声明。不確かな生存に関する事例すべての弁護が、これらの熾天使によって準備され、これらの熾天使は、宇宙司法の行政者により提出された起訴状に関する各論点の特徴の詳細すべてに関して完全な理解がある。

39:4.5 (434.5) これらの天使の使命は、正義を打ち負かしたり遅らせたりすることではなく、むしろ全創造物へ公正で寛大な慈悲を伴う的確な正義が分配されることを保証することである。これらの熾天使は、一般的には、調停委員会の三審判の前に現れ、局部世界でしばしば機能する—比較的軽い誤解のための法廷。一時は下級領域にて正

義の案内者として勤めた多くのものは、　より上の球体とサルヴィントンに慈悲の声として現れる。

39:4.6 (434.6) 司法の案内者のほんのわずかのものが、サタニアでのルーキフェレーンスの反逆で身をあやまり、また他の管理熾天使と下級系列の熾天使の聖職者の４分の１以上が、抑えのきかない人身の自由の詭弁により間違った方向に導かれ欺かれた。

39:4.7 (434.7) 3. 宇宙公民の通訳者。大邸宅世界の訓練、すなわち宇宙経歴における学生の最初の見習期間を終了するとき、上昇する人間は、相対的円熟の一時的満足感を楽しむことが許されている—体制首都の公民。各上昇目標への到達は、事実上の達成であるが、より大きい意味では、そのような目標は、楽園への長い上昇進路の単なる道標である。しかし、そのような成功がいかに相対的であろうとも、いかなる進化的創造物も目標到達の完全ではあるが、一時的満足感を決して否定しない。時折、楽園上昇における休止、呼吸の短い区切りがある。その間、宇宙の地平線は、動かず、生物状態は、静止し、人格は、目標遂行の甘味を味わう。

39:4.8 (435.1) 人間上昇者の経歴におけるそのような最初の期間は、地方体制の首都で起こる。この休止の間、あなたは、ジェルーセムの公民として先行する8つの人生経験—ユランチアと7大邸宅世界を含む—の間に修得したそれらのことを生物生活で言い表そうと試みるであろう。

39:4.9 (435.2) 宇宙公民の熾天使の通訳者は、体制首都の新公民を誘導し、宇宙政府の責任のそれぞれの認識を速める。また、これらの熾天使は、体制管理における物質の息子に密接に関連づけられ、その上、棲息界上の物質的人間に宇宙公民の責任と道徳を描く。

39:4.10 (435.3) 4. 道徳胎動者。大邸宅世界では、あなたは関係者一同の利益のための自治を学び始める。あなたの心は、協力を学ぶ、つまり、他の、そして賢明な者と計画する方法を学ぶ。熾天使教師は、体制本部では、さらにあなたの宇宙道徳について—自由と忠誠の相互作用について—の認識を速めるであろう。

39:4.11 (435.4) 忠誠とは何か。それは、宇宙兄弟愛の知的認識の成果である。人は、多くを得つつ何も与えないということはできない。人格段階を昇るとき、まず忠誠である

こと、次に愛すること、そして子であることを学び、その結果、自由が許される。しかし、あなたが終局者になるまでは、忠誠の極致に達するまでは、自由の究極性を自己-認識はできない。

39:4.12 (435.5) これらの熾天使は、忍耐の成果を教える。その停滞は、ある種の死であること、だがその速すぎる成長は、等しく自殺行為であること。1滴の水が、高位置から低位置へ落下し、前方へと流れ、一連の短い落下を常に下方へと通過していくのと同じように、モロンチアと精霊世界での進歩においては、常に上向きであること—まさしく同程度にゆっくりと、そして、まさしく同程度のゆるやかな段階に従って。

39:4.13 (435.6) 道徳の胎動者は、切れ目のない多数の連鎖として人間生活を棲息界に向けて描く。ユランチアでのあなたの短い滞在は、人間の幼年時代のこの球体でのただ一つの輪であるが、宇宙の向こう側に伸び、永遠の時代を通るはずの長い鎖のまさしく最初の輪なのである。あなたが、この最初の人生で学ぶことはあまりない。重要なことは、この人生を生きる経験である。この世界の仕事

でさえ主要ではあるものの、あなたがこの仕事をする方法としてはとうてい重要ではない。有徳の生活に対する何の物質的報酬もないが、深い満足感—達成の意識—があり、これは、想像し得るいかなる物質的報酬をも超えるのである。

39:4.14 (435.7) 天国の王国の鍵は：誠意、さらに、さらに一層の誠意。すべての人が、これらの鍵を持っている。人は、決定により、さらなる、さらなる決定により、それを用いる—精霊状態の前進。最も高い道徳的選択は、最高可能な価値の選択であり、そして常に—いかなる局面においても、いかなる全局面においても—これは、神の意志を為すことを選ぶということである。もし人が、こうして選ぶならば、ジェルーセムの最も謙虚な公民であろうが、または、ユランチアの必滅者の最小者でさえあろうが、人は、偉大なのである。

39:4.15 (436.1) 5. 輸送者。これらは、地方体制で機能する輸送熾天使である。あなたの体制であるサタニアにおいて、ジェルーセムから旅客を運んで往復し、さもなくば、惑星間の輸送者として役目を果たす。ユランチアの岸のあ

る学生訪問者、もしくは、ある他の精霊の旅行者、もしくは準精霊の種類をサタニアの輸送熾天使に託さない日は滅多にない。他ならぬこれらの空間通過者は、そのうち、あなたを体制本部集団の様々な世界へ運んで往復し、あなたがジェルーセム任務を終えたとき、エデンチアにあなたを前進させるであろう。しかし、間違ってもあなたを人間の起源の世界へと後方には決して運ばないであろう。人間は、その一時的存在の天の配剤の間、出身惑星には決して戻らないし、その後の分配の間に戻るようなことがあるならば、宇宙本部集団の輸送熾天使に付き添われるであろう。

39:4.16 (436.2) 6. 記録者。これらの熾天使は、地方体制の3重記録の管理役である。体制首都にある記録の殿堂は、1/3が、輝く金属と水晶の物質で構成され、1/3が、人間の視覚の範囲を越えてはいるものの精霊と物質エネルギーのつながりで組み立てられたモロンチア的であり、1/3が、精霊的である独自の構造をもつ。この系列の記録者は、議長を務め、この三重の記録の体制を維持する。上昇する人間は、まず物質公文書を調べ、物質の息子とより高い変遷存在体は、モロンチアの大広間の公文

書を調べるが、熾天使と領域のより高い精霊人格は、精霊部門の記録を熟読する。

39:4.17 (436.3) 7. 予備軍。ジェルーセムの管理熾天使の予備軍団は、精霊仲間としてそれらの待ち時間の相当を体制の様々な世界から新たに到着した上昇する人間—大邸宅世界の公認の卒業生達—との寛ぎで過ごす。ジェルーセムにおけるあなたの滞在の喜びの1つは、休憩の間、待機中の予備軍のこれらの旅慣れた、また経験豊富な熾天使との語らいと寛ぎであろう。

39:4.18 (436.4) したがって、上昇する人間が、これほどおまでに体制首都を慕うのは、まさにそのような好意的関係に他ならない。あなたは、物質の息子、天使、および上昇する巡礼者の最初の混り合いをジェルーセムで見つけるであろう。完全に精霊的存在、準精霊的存在、それに物質的存在から出現したばかりの個人が、ここで親しく交わる。人間の型が、そこで互いの認識と同情的な人格理解を楽しむことができるようそのように光への反応の人間の範囲が修正され、広げられる。

5. 惑星の助力者

39:5.1 (436.5) これらの熾天使は、居住しているアダームの公民に、進化世界の物質的人種の生物的または物理的改善者に、密接に関連づけられてはいるが、体制首都の本部を維持し、主として惑星アダーム系の業務に割り当てられている。天使の奉仕の仕事は、棲息界に近づくにつれ、つまり永遠の目標に達する試みのために準備している時間の男女に直面する実際の問題に近づくにつれ、関心が高まる、興味を起こさせる。

39:5.2 (437.1) 惑星の助力者の大多数は、ユランチアではアダーム体制の崩壊の際に取り除かれ、あなたの世界の熾天使の指揮は、行政者、変遷の奉仕活動者、および運命の保護者に最大部分が移された。しかし、あなたの不履行の物質の息子のこれらの熾天使の援助は、次の集団の中でまだユランチアで活動している。

39:5.3 (437.2) 1. 園の声。人間進化の惑星過程が、生物上のその最高段階に達しつつあるとき、物質の息子と娘、アダーム系とハヴァー系が、その優れた生命原形質の実際の貢献により人種の一層の発展を高めるためにいつも現れる。そのようなアダームとハヴァーの惑星本部は、通

常、エーデンの園と命名され、それらの個人的熾天使は、しばしば「園の声」として知られている。これらの熾天使は、進化の人種の物理的かつ知的増進のためのそれらの全事業において惑星アダーム系への掛け替えのない奉仕に役立つ。ユランチア上のアダームの不履行後、これらの熾天使の一部は、惑星に残され、権力あるアダームの後継者に割り振られた。

39:5.4 (437.3) 2. 兄弟愛の精霊。アダームとハヴァーが、進化の世界に到着するとき、その様々の人種間での人種的調和と社会的協力を達成する課題が、重要部分の1つであるということは明らかなはずである。異なる色と多様な気質のこれらの人種が、人間の兄弟愛の計画を気に入ることはめったにない。これらの原始人は、成熟した人間の経験からの、また兄弟愛の熾天使の精霊の忠実な奉仕活動からの、平和な相互間のつながりからくる知恵をはじめて実感するようになる。これらの熾天使の働きがなければ、発展世界の人種を調和し前身させるという物質の息子の努力は、大いに遅れるであろう。そして、あなたのアダームがユランチアの前進のための当初の計画を固く守っていたならば、今頃は、兄弟愛のこれらの精霊

は、人類に信じられない変化をもたらしていたであろうに。アダームの不履行を鑑みて、これらの熾天使の系列が、あなたが現在ユランチアに持つ兄弟愛と同程度の兄弟愛さえ育て、実現させることができたのは、誠に注目に値する。

39:5.5 (437.4) 3. 平和の魂 。進化的人間の上向きの邁進における初期千年には、多くの奮闘が目立つ。平和は、物質的領域の自然な状態ではない。世界は、熾天使の平和の魂の奉仕活動を通して「地上に平和を、人類に善意を」ということに初めて気づく。これらの天使は、ユランチアにおいて初期の努力が大きく阻まれたとはいえ、ヴェヴォーナ、つまりアダーム時代の平和の魂の長官は、ユランチアに残され、現在、居住している総督の幕僚に配属されている。そしてマイケル誕生の際、「ハヴォーナで神に栄光があるように、地球に平和を、人類に善意を」と天使の軍勢の指導者として世界に告知したのは、この同じヴェヴォーナであった。

39:5.6 (437.5) 惑星発展の先進時代においてこれらの熾天使は、人間生存の哲学として神性同調の概念による償いの考えの追い越しに関与している。

39:5.7 (437.6) 4. 信頼の精霊。猜疑は、原始人固有の反応である。初期の時代の生存苦闘は、自然には信頼を生み出さない。信頼は、アダーム体制のこれらの惑星熾天使の奉仕活動によりもたらされた新しい人間の取得である。進化する人心に信頼を教え込むことは、惑星熾天使の任務である。神は、まさに信じて疑わない。宇宙なる父は、喜んで自分自身—調整者—を思う存分信頼する。

39:5.8 (438.1) この熾天使集団全体は、アダームの失策後、新体制に異動され、以来ずっとユランチアにおける労働を続けてきている。この熾天使集団は、確信と信頼のそれらの理想の多くを具体化する文明が現在展開中であるので完全には失敗していない。

39:5.9 (438.2) より進んだ惑星時代のこれらの熾天使は、不確実性とは、満ち足りた連続への鍵であるという真実への人の認識を高める。高めさせる。これらの熾天使は、無知が成功に不可欠であるとき、無知が成功にはつきもの

であるとき、被創造物にとり未来を知るということは途方もない大失敗であるということを人間の哲学者に理解を促す。彼らは、不確実性に伴う甘味への、つまり不成形の、かつ、知の未来の冒険と魅力への人の好みを高める。

39:5.10 (438.3) 5. 輸送者。惑星輸送者は、個々の世界のために働く。この惑星に連れて来られる熾天使化された存在体の大半が、移動中である。惑星輸送者は、単に一時逗留しているに過ぎない。彼らは、自身の特別な熾天使輸送者の保護にある。それにしてもユランチアには、そのような配置された多数の熾天使がいる。これらは、ユランチアからジェルーセムまでのような地方惑星から運行する輸送人格である。

39:5.11 (438.4) 天使に関するあなたの従来の考えは、次の方法で得られてきた。肉体の死の直前、反射的な現象が、人間の心で時々起こり、この仄暗くなる意識は、付き添っている天使の型の何かを想像するように思え、これは、すぐにその個人の心で保持される天使の習慣的概念の用語に翻訳される。

39:5.12 (438.5) 天使が翼を所有するという誤った考えは、天使が空中を飛ぶために翼を所有しなければならないといった完全に昔の概念によるものではない。人間には、輸送業務に備える熾天使の観測が時々許されており、これらの経験の伝統が、天使についてのユランチア人の概念を大きく決定した。惑星間の輸送のために旅客受け取りの用意のできている輸送熾天使を観測するに当たり、天使の頭から足に広がる明らかに２組の翼が見られているのかもしれない。実際は、これらの翼は、エネルギー絶縁体—摩擦遮蔽体である。

39:5.13 (438.6) 天の存在体は、一世界から他世界への転送のために熾天使化されようとするとき、球体本部に連れて来られ、然るべき登録後、輸送睡眠に追いやられる。その間、輸送熾天使は、惑星の宇宙エネルギー極の真上の水平位置に移動する。エネルギーが開け放たれる間、眠っている人格は、直接輸送天使の上に、つまり職務を執行中の熾天使の助力者により巧みに設置される。次に、上下2組の遮蔽体は、慎重に閉じられ、調整される。

39:5.14 (438.7) さて、熾天使が、変圧者と送信者の影響で宇宙回路のエネルギーの流れに向きを変える準備ができると、奇妙な変化が、始まる。見たところ、熾天使は両先端で尖り、琥珀色の奇妙な光に包まれるようになるので、すぐ熾天使化の人格を区別するのは不可能である。輸送主任者は、すべてが出発の準備状態にあると、生命の乗り物の適切な点検をし、天使が適切に回路化されるかどうかを確かめるために通常検査を実行し、それから旅行者が適切に熾天使化され、エネルギーが調整され、天使が分離され、すべてが出発の閃光に向け準備されるということが公表される。機械的制御者2名は、次にそれぞれの位置につく。輸送熾天使は、このときまでにはほとんど透明で、振動し、きらめく光の魚雷形の輪郭になる。領域の輸送発送者は、今、生活エネルギー送信機の補助電池を通常数にして1,000個を召集する。輸送発送者は、輸送目的地を発表すると、稲光のような速度で前方へと発射し、惑星の大気の外層が広がる範囲にまで天の光の跡を残して行く熾天使の乗り物の近くに手を伸ばして触る。驚くばかりの光景は、10分足らずで熾天使の補強視力にさえ見えなくなるであろう。

39:5.15 (439.1) 惑星空間の報告書は、指定の精霊本部の子午線で正午に受け取られるが、輸送者は、真夜中にこの同じ場所から派遣される。そのときが、特に指定されていないとき出発に最も好ましい時間であり標準的時間である。

39:5.16 (439.2) 6. 記録者。これらは、体制の一部として機能するように、また宇宙政府に関連付けて、また関係しているように惑星の主要業務の管理人である。それらは、惑星業務の記録において機能するが、個々の生命と生活の問題には関係がない。

39:5.17 (439.3) 7. 予備軍。惑星熾天使のサタニア予備軍団は、物質の息子の予備軍と深く関連してジェルーセムに保持される。これらの膨大な予備軍は、この熾天使系列の多様な活動の全局面に十分に備える。また、これらの天使は、地方体制の親書の使者でもある。それらは、体制本部に定住している他と同様に変遷の人間、天使、および物質の息子に仕える。ユランチアは、現在のところサタニアとノーラティアデクの精霊回路の外にあるが、あなたは、別な方法では惑星間の業務との緊密な接触にあ

る。その理由は、体制の他のすべての球体に来るように、ジェルーセムからのこれらの使者が、頻繁にこの世界に来るからである。

6. 変遷聖職者

39:6.1 (439.4) 過渡的奉仕活動の熾天使は、その名前が暗示しているかもしれないように、物質状況から精霊状況までの生物変遷に貢献できるところではどこででも仕える。これらの天使は、棲息界から体制首都までで仕えるが、サタニアに現在いるもの達は、7大邸宅世界に生残している人間の教育のための最大努力に向ける。この奉仕活動は、次の7系列の任務に基づき展開される。

39:6.2 (439.5) 1. 熾天使の福音

39:6.3 (439.6) 2. 人種の通訳者

39:6.4 (439.7) 3. 心の立案者

39:6.5 (439.8) 4. モロンチア相談役

39:6.6 (439.9) 5. 技術者

39:6.7 (439.10) 6. 記録者-教師

39:6.8 (439.11) 7. 聖職活動の予備軍

39:6.9 (439.12) あなたは、大邸宅世界とモロンチアの生命を扱う物語に関して過渡的上昇者へのこれらの熾天使の奉仕活動についてさらに学ぶであろう。

未来の熾天使

39:7.1 (440.1) これらの天使は、ネバドンのより古い領域とネバドンのより進歩した惑星以外では奉仕活動をしない。その多数が、サルヴィントン近くの熾天使界で予備として保持され、いつかそこでネバドンの光と生命時代の夜明けに関する追跡に従事する。これらの熾天使は、上昇する人間の経歴との関連において機能するのだが、変更された上昇系列の中のあるものが生残するそれらの人間にほぼ例外なく奉仕活動する。

39:7.2 (440.2) これらの天使が、ユランチア、あるいはユランチア人と現在直接的に関わらない限り、魅惑的な活動の記述を差し控えることが最善であると判断される。

8. 熾天使の目標

39:8.1 (440.3) 熾天使は、地方宇宙の起源のものであり、一部のものは、他ならぬその出身領域において奉仕の目標を成就する。一部の熾天使は、上級大天使の助けと助言を得て輝く宵の明星の気高い義務に登用されるかもしれないが、他のものは、宵の明星の非明示の調整者の身分と奉仕を手に入れる。地方宇宙の目標においてさらなる他の冒険が試みられるかもしれないが、熾天使球は、すべての天使の永遠の目標のままである。熾天使球は、楽園と神格到達への天使の敷居、すなわち永遠の崇高な奉仕への時間の奉仕活動からの遷移球体である。

39:8.2 (440.4) 熾天使は、多くの—数百の—方法で楽園に到達できるが、これらの物語で詳述するように最も重要なのは次の通りである。

39:8.3 (440.5) 1. 天の職人、技術顧問、あるいは天の記録者として専門的業務での熟達により個人の力量において楽園の熾天使の住まいへの承認を得ること。このように万物の中央に到達後、楽園の仲間になること、そして、おそらくは熾天使の他の系列と他のものたちへの永遠の聖職者と助言者になること。

39:8.4 (440.6) 2.熾天使球へ召喚されること。一定の条件下の熾天使は、天に配列される。他の状況における天使は、時々人間よりはるかに短期間で楽園に達する。しかし、いかなる熾天使の1組も、いか程に適合していようとも、熾天使球、もしくは他の場所への出発を開始することはできない。成功している目標の守護者のみが、進化的上昇の段階的経路により楽園に進むことが確信できる。他のすべてのものは、天に現れるよう命ずる召喚状を携える第三超熾天使の楽園使者の到着を我慢強く待ち受けなければならない。

39:8.5 (440.7) 3. 人間の進化的方法により楽園に達すること。時間の経歴における熾天使の崇高なる選択とは、終局の経歴に達することができ、熾天使業務の永遠の活動球への職務への資格を得るために守護天使の地位を得ることである。時間の子供のそのような個人的案内者は、目標の保護者と呼ばれ、神性の目標の道における必滅の創造物を保護し、そうする際に自身の高い目標を決定していることを意味する。

39:8.6 (440.8) 人間の進化的方法により楽園に達すること。時間の経歴における熾天使の崇高なる選択とは、終局の経歴に達することができ、熾天使業務の永遠の活動球への職務への資格を得るために守護天使の地位を得ることである。時間の子供のそのような個人的案内者は、目標の保護者と呼ばれ、神性の目標の道における必滅の創造物を保護し、そうする際に自身の高い目標を決定していることを意味する。

39:8.7 (441.1) 人間起源段階から神に到達することは、天使にとり可能ではなく、その理由は、彼らは「あなたよりほんの少ししか高く」創造されていないからである。しかし、最底辺、すなわち人間生活の精霊面の低地から始めることはできないが、底辺から始めるそのような者達へと下りて行き、そのような被創造物をハヴォーナの入り口へ、一歩ずつ世界ごとに案内できるように賢明に用意された。人間上昇者が、ハヴォーナの回路を始めるためにユヴァーサを去るとき、肉体の人生の後の連結しているそれらの守護者は、熾天使球への、つまり壮大な宇宙の天使の目的地に向けての旅行中の一時の別れを巡礼の

仲間に告げるであろう。これらの保護者は、熾天使の7回路を試み、疑う余地なく達成するであろう。

39:8.8 (441.2) 物質的人生の間の目標の守護者として配属されたそれらの熾天使の多くが、すべてではない、人間の仲間にハヴォーナ回路の間中同伴し、他の一部の熾天使は、人間の上昇とは完全に異なる方法で中央宇宙の回路を通過する。しかし、上昇の道筋の如何にかかわらず、進化するすべての熾天使は、熾天使球を通過し、また大多数がハヴォーナ回路の代わりにこの経験を経る。

39:8.9 (441.3) 熾天使球は、天使にとっての目標球であり、この世界への到達は上行球における人間巡礼者の経験とは全く異なっている。天使は、熾天使球に達するまでは自身の永遠の未来に全く確信がない。熾天使球に達するいかなる天使も、道に迷うとは知られていない。迷った罪は、決して完成の熾天使の心に応答を見つけないであろう。

39:8.10 (441.4) 熾天使球の卒業生は、さまざまに割り振られる。ハヴォーナ回路経験の目標の守護者は、通常、人間終局者の軍勢に入る。他の保護者は、ハヴォーナの分離

試験合格後、頻繁に楽園の人間の仲間に再度加わり、一部は、人間終局者の永続する仲間になり、他のものは、人間ではない様々な終局者軍団に入る一方で、多くは、熾天使の完成軍団に召集される。

9. 熾天使の完了軍団

39:9.1 (441.5) 天使は、精霊の父の到達と完了の熾天使の業務への承認後、光と生命に落ち着く世界の奉仕活動に時々割り当てられる。彼らは、宇宙の三位一体化された高い存在体と、楽園とハヴォーナの崇高な奉仕への配属を獲得する。地方宇宙のこれらの熾天使は、かつては自分達を中央と超宇宙の奉仕する精霊とを区別していた神性の可能性における格差を経験上補填してきた。熾天使終了兵団の天使は、超宇宙の第二熾天使　の仲間として、また超熾天使の楽園-ハヴォーナの高い系列の助力者として役目を果たす。そのような天使にとり時間の経歴は終わっている。彼らは、今後、そしていつまでも、神の僕であり、神性人格の配偶者であり、楽園終局者の同僚である。

39:9.2 (441.6) 完成熾天使の多数は、故郷の宇宙へと、そこで経験的完全性の奉仕活動による神性の寄付の奉仕活動の補足へと戻る。ネバドンは、比較して言えば、若い宇宙の1つであり、したがってこれらの帰還した熾天使球卒業生は、古い領域での現象ほどにはあまり多くいない。とはいうものの、進化の領域が、光と生命の状態に近づくにつれ、それらの、卒業生、奉仕のますますの必要性を明らかにすることが重要であることから、我々の地方宇宙には完成熾天使が十分に補充されている。完成熾天使は、現在、熾天使の最高系列でより広範囲に役目を果たすが、一部は、他の天使の各系列で役目を果たす。あなたの世界でさえ熾天使終了兵団の専門化している12集団の大規模な奉仕活動を享受するのである。惑星監視の達人熾天使は、棲息界に新たに任命されたそれぞれの惑星王子とともに行く。

39:9.3 (442.1) 奉仕活動の多くの魅惑的な大通りは、完成熾天使に開かれているが、ちょうど彼らが皆、前楽園時代の目標の守護者としての任務を切望したように、肉体を与えられた楽園の息子の贈与の従者として後楽園経験において役目を果たすことを切望している。それらは、進化

する世界の必滅の創造物を楽園の目標である神性と永遠に向けての長く魅惑的な旅に向かわせるその宇宙計画に今もなお崇高的に捧げている。熾天使の完成のこれらの精霊聖職者は、人間が神を見つけ、神性の完全性を達成するという冒険全体に渡って時間の忠実な奉仕活動をする精霊と共に、常に、しかもいつまでも、あなたの真の友であり、絶えることない助力者である。

39:9.4 (442.2) [ネバドンの熾天使軍勢の長官の要求に応えて行動するメルキゼデクによる提示]

論文 40
上昇する息子

40:0.1 (443.1) 主要な宇宙存在体の多くのように、神の上昇する息子の一般的7集団が、明らかにされてきた。

40:0.2 (443.2) 1. 父-融合の人間

40:0.3 (443.3) 2. 息子-融合の人間

40:0.4 (443.4) 3. 精霊-融合の人間

40:0.5 (443.5) 4. 進化する熾天使

40:0.6 (443.6) 5. 上昇の物質の息子

40:0.7 (443.7) 6. 移動された中間者

40:0.8 (443.8) 7. 人格化調整者

40:0.9 (443.9) これらの存在体の物語は、全ての時間を通じて、進化的世界の動物起源の下級の人間から宇宙なる父の人格化調整者までの、また楽園神の広範囲の創造の全宇宙における神の愛と仁慈深い下降の惜しみない贈与についての栄光談を提示するものである。

40:0.10 (443.10) これらの提示は、神の記述に始まり、また物語は、集団ごとに、不死の可能性が授けられる生命の最下級系列にいたるまでの宇宙の生物の階段を降下してきた。そして、現在、私は、息子の上昇系列に関し、とりわけ時と空間の必滅の創造物に関わる神の永遠の目的についての詳説を推敲し、継続するためにサルヴィントン—進化する時の世界の起源のかつての一必滅者—から急派されたのである。

40:0.11 (443.11) この物語の大部分は、上昇する人間の基本的な3系列の扱いに充てられているので、まず上昇する息子

の非必滅系列についての考慮である。—熾天使、アダーム、中間者、および調整者。

1. 進化する熾天使

40:1.1 (443.5) 動物起源の必滅の創造物は、息子の資格を享受する特権をもつ唯一の存在ではない。天使の軍勢は、楽園に達する崇高な機会を共有する。後見熾天使は、時間の上昇する人間との経験と奉仕により上昇の息子の身分もまた獲得する。そのような天使は、熾天使球を経て楽園に達し、多くが、人間終局者軍団に召集されさえもする。

40:1.2 (443.6) 神との息子関係にある終局者の崇高の高みに登るということは、天使にとっては見事な業績、すなわち永遠なる息子の計画と内住する調整者の絶え間ない臨場の助けによるあなたの永遠の生存の到達をはるかに超える成就である。しかし、後見熾天使、および時折、他のものは、実際にそのような上昇を遂げるのである。

2. 上昇の物質の息子

40:2.1 (444.1) 神の物質の息子は、全体が下降する息子として分類されるメルキゼデク系とその仲間とともに地方宇宙

で創造される。そして、実際に、惑星アダーム系—進化世界の物質の息子と娘—は、地方体制の首都である自分達の起源の球体から棲息界に下降するのである。

40:2.2 (444.2) そのようなアダームとハヴァーの１組が、生物上の改善者としてそれらの惑星の共同任務に完全に成功すると、双方は、自身の世界の住民の将来の目標を共有する。そのような世界が光と生命の進行段階に定着するとき、この忠実な物質の息子と娘は、全惑星の管理義務からの辞任が許され、こうして下降の冒険から解放されると完成された物質の息子として地方宇宙の記録への登録が許される。同様に惑星の任務が長引くとき、停留身分の物質的の息子—地方体制の公民—は、身分上の各球体活動から後退し、完成された物質の息子として同じく登録が許される。これらの形式的手続き後、解放されたアダームとハヴァーは、神の上昇する息子として認定され、その時のそれぞれの段階と精霊的到達の寸分たがわない地点から始まり、すぐにハヴォーナと楽園に向けて長旅を始めることができる。そして、彼らは、神を見つけ、楽園神格の永遠の奉仕における人間終局者の軍勢

を達成するまで人間と他の上昇する息子と共にこの旅を続行する。

3. 移動された中間者

40:3.1 (444.3) 神の下降する息子の惑星贈与の直接の恩恵が奪われ、楽園上昇は長らくの延期にもかかわらず、それでもなお、中間被創造者の両集団は、進化する惑星が光と生命の中間的時代への到達直後に惑星勤務から自由になる。それらの大多数は、時々その人間のいとこ達と共に光の寺院の下降と惑星王子の惑星君主の高位への上昇の日に移動される。両系列は、惑星勤務から解かれると、神の上昇する息子として地方宇宙の中に登録され、すぐさま物質界の必滅の人種の前進のために確立された他ならぬその経路にて長い楽園上昇を始める。第一集団は、様々な終局者軍団へと予定されてはいるものの、第二の、すなわちアダーム中間者は、全員が登録のために人間の終局者軍団へと導かれる。

4. 人格化調整者

40:4.1 (444.4) 時間の人間が、宇宙なる父の精霊の贈り物との惑星連合における永遠の魂の生存を果たし得ない場合、

そのような失敗は、決して調整者側の義務、奉仕活動、業務、または献身の無視の所為ではない。そのような見捨てられた訓戒者は、人間の死に際し、神性球に戻り、次には、つまり非生存者の判決に続き、時間と空間の世界へ再び配属されるかもしれない。これらの有能な調整者は、時折この種の勤務を繰り返すか、または、例えば肉体を与えられた贈与の息子の内住調整者として機能するといったような何らかの珍しい経験に続き、宇宙なる父により人格化される。

40:4.2 (445.1) 人格化調整者は、他とは異なる不可思議な集団の存在である。元々実存的な前人格状態のものであり、物質界の下級の人間の人生と経歴への参加により経験可能にされてきた。そして、これらの経験豊富な思考調整者に授与される人格は、宇宙なる父の経験的人格の被創造物の創造への贈与の個人的、かつ継続的奉仕活動に起源があり、その上その泉を持っているので、これらの人格化調整者は、神の上昇する息子として分類されており、息子に関するそのような全系列の中で最高系列である。

5. 時間と空間の必滅者

40:5.1 (445.2) 人間は、神の息子と呼ばれるそれらの存在体の一連の鎖の最後の輪である。最初の、永遠なる息子の特徴は、非常にあなたに似た存在体が到着するまで、次第に減少する神性の人格化と次第に増していく人間の一連の人格化とを渡し続ける。次に、何とあなたは、あなたの信仰が理解するかもしれない素晴らしい真実—永遠なる神との息子関係—に精霊的に気付かせられるのである。

40:5.2 (445.3) 同様に最初の無限の精霊は、次第に減少する神性と次第に増していく人間の系列の長い連続により、領域の苦闘している生物にますます近づき、時間の人間の経歴の人生旅行において個人的にあなたを警備し導く天使—その天使よりあなたはほんの少し下位に造られた—の表現の限界に達する。

40:5.3 (445.4) 父なる神は、こうして宇宙の中の宇宙全体に渡りほぼ無数の上昇者とのそのような密接な個人的接触をとるために下りはしないし、できないのである。しかし、父は、下級の被創造物との個人的接触を奪われてはいない。あなたには神性の臨場がないわけではない。父

なる神は、直接的人格顕示によりあなたと共にいる訳ではないが、父なる神はあなたの中におり、また、神性の訓戒者である内住する思考調整者の自己同一性のあなたの一部である。父は、こうして人格と精霊においてあなたから最も遠いものは、人格回路と人間の息子と娘のまさにその魂との内的意思疏通においてあなたに最も近づく。

40:5.4 (445.5) 精霊識別は、人格生存への鍵の構成要素をなし、精霊的上昇目標を決定する。そして、思考調整者が、肉体での人生の間に人と結びつける融合の可能性の唯一の精霊であるが故に、時間と空間の必滅者は、主に神性の贈り物、つまり内住する訓戒者とのそれぞれの関係に従って分類される。この分類は次の通りである。

40:5.5 (445.6) 1. 調整者の一時的、または経験的滞在の必滅者

40:5.6 (445.7) 2. 非調整者の融合型の必滅者

40:5.7 (445.8) 3. 調整者-融合の可能性の必滅者

40:5.8 (445.9) 連続1—一時的、あるいは調整者の経験的滞在の必滅者。この一連の名称は、第2系列の世界を除く全棲

息界の初期段階で使用され、いかなる発展惑星にとっても一時的である。

40:5.9 (445.10) 連続1の必滅者は、人類発展の初期は空間の世界に生息し、人間の心の最も原始の型を擁する。前アダームのユランチアの多くの世界では、より高度の、より進化した多数の原始人の型が生存の可能性を取得するのだが、調整者融合には達し得ない。何世代もの間、より高度の精霊的意志作用の段階への人の上昇前に、調整者は、苦闘している創造物の肉体での短い生涯の間、それらの心を占領し、意志をもつそのような創造物に調整者が住みつく瞬間、集団守護天使が機能し始める。最初の連続のこれらの必滅者には個人的後見者はいないが、集団管理人はいる。

40:5.10 (446.1) 経験的調整者は、原始人の肉体での全生涯を通じて原始人と共にいる。調整者は原始人の前進に非常に貢献するが、そのような必滅者との永遠の結合を形成することはできない。調整者のこの一時的奉仕活動は2つの事柄を達成する。まず最初に、彼らは自然における貴重で現実の経験と進化する知力の働きを獲得する。より

高い開発の存在体との他の世界での後の接触に関して非常に貴重になるであろう経験。2番目は、調整者の一時的滞在は、それぞれの人間の対象にその後の可能な精霊融合の準備をさせることに非常に寄与する。この型の神を探し求める全ての魂は、地方宇宙の母なる精霊の精霊的抱擁を通じて永遠の生命を獲得し、その結果、地方の宇宙政体の上昇する人間になる。前アダームのユランチアからの多くの人間が、このようにしてサタニアの大邸宅世界に進められた。

40:5.11 (446.1) 人は進化的試練と苦難の長い時代を経て精霊的知性のより高い段階を登るべきであると定めた神々は、あらゆる上昇段階の人の状態と必要に注意する。絶えず、神々は、進化する人種の初期のこれらの苦闘する必滅者の最終的な裁きにおいて、素晴らしく公明正大であり、魅力的に慈悲深くさえある。

40:5.12 (446.2) 連続2—非調整者融合型の必滅者。これらは、内住調整者との永遠の結合に達し得ない専門化された人間の型である。1頭脳、2頭脳、そして3頭脳をもつ人種間の型分類は、調整者融合において問題ではない。その

ようなすべての必滅者は、似通っているのだが、これらの非調整者の融合型は、意志をもつ創造物とは完全に異なり、しかも著しく変更された系列である。息をしないものの多くが、この連続に属し、また通常調整者と融合しない多数の他集団がある。

40:5.13 (446.3) この集団の各成員は、連続第1と同様に、単独の調整者の奉仕活動を肉体での生涯中に享受する。束の間の生涯の間これらの調整者は、必滅者が融合の可能性をもつ他の世界で行われる一時的内住の対象者のために総てをする。この第2番目の必滅者にはしばしば処女の調整者が内住するが、より高い人間の型は、しばしば最高の技能をもち、経験豊富な訓戒者と連係しての内住である。

40:5.14 (446.4) 第2の存在体は、動物起源の創造物高揚のための上昇計画において神の息子の必滅者のユランチア型に広げられるものと同様の熱心な勤労を味わう。非融合惑星の調整者との熾天使の協力は、融合可能の世界と全く同じように供与される。未来の目標の後見者は、ちょうどユランチアでのようにそのような球体で奉仕活動を

し、人間の生残時に同様に機能し、その時に生残する魂は、精霊融合する。

40:5.15 (446.5) 大邸宅世界にてこれらの変更された人間の型に遭遇するとき、あなたは彼らとの意志の疎通に何の困難もないと気づくであろう。そこでは、彼らは同じ体制言語だが修正された方法によって話す。これらの存在体は、精霊の顕現と人格顕現において被創造物の生命のあなたの系列と同じであり、ただ、ある身体的特徴において、また、それらが思考調整者と融合不可能であるという事実において異なる。

40:5.16 (447.1) 私は、この型の被創造物が、何故宇宙なる父の調整者と決して融合できないのかについて発言はできない。生命運搬者は、惑星の異常な環境における生活を維持できる存在体を定式化する彼らの努力において、調整者との永久的結合をもたらすことが本質的に不可能になるという意志をもつ知的創造物の宇宙計画においてそのような抜本的変更の必要性に直面する。しばしば、我々はといただ問い質してみた。これは意図的なものなの

か、または意図的でない部分なのか。だが、我々は、まだ答に至ってはいない。

40:5.17 (447.2) 第３—調整者-融合可能の必滅者。父融合のすべての必滅者は、動物の起源のものである、ちょうどユランチアの人種のように。それらは、調整者融合可能の1頭脳型、2頭脳型、3頭脳の型の必滅者を擁する。ユランチア人は、中間型か2頭脳型である。いろいろな意味で人間としては1頭脳集団より優れてはいるものの、3頭脳系列に比較して確実に限りがある。物理的頭脳の授与のこれらの3つの型は、調整者贈与において、熾天使の勤労において、または精霊奉仕活動のいかなる他の局面においても問題ではない。3種類の脳の型には知的かつ精霊的差異は、心の授与と精霊の可能性において別なふうによく似ている個人を特徴づけ、束の間の生活において最もすばらしく、また大邸宅世界がひとつずつ移動されるにつれ減少する傾向がある。体制本部からのその後は、これらの3種類の型の進行は、同じであり、最終的楽園の各々の目標は同じである。

40:5.18 (447.3) 無数の連続。これらの談話に進化世界での魅惑的変化のすべてを取り込むことはできない。あなたは、10番目のごとの世界というものは、10進の、または実験的な惑星であるということを知っているが、進化する球体の進行を時々中断する変化する他のものについては何も知らない。同一集団の惑星間での違いのように明らかである生物系列間でさえ語るには多過ぎる違いがあるが、この発表が、上昇経歴について本質的な違いを明らかにする。また、上昇経歴は、時間と空間の必滅者のいかなる考慮すべき事柄にも最も重要な要素である。

40:5.19 (447.4) 人間生存の機会に関し、それを永遠に、どこまでも、明らかにさせてもらおう。もし内住調整者に協力する意欲を明らかにし、神を見つけ神性の完全性に達する願望を示すならば、これらの願望は、「世に来るすべての人を照らすその誠の光」の原始的理解の最初のかすかな点滅でしかないとは言え、人間存在のあらゆる可能な局面のすべての魂は生き残るであろう。

6. 神の信仰の息子

40:6.1 (447.5) 必滅の人種は、知的で人格的創造の最下級集団の系列として存在する。あなた方必滅者は、神のように愛されており、1人1人が、栄光ある経験のある種の目標を受け入れることを選ぶかもしれないが、本質的にはまだ神性集団ではない。あなたは、完全に必滅である。あなたは、融合が起こる瞬間、上昇する息子とみなされるであろうが、時間と空間の必滅者の状態は、生残する必滅の魂と永遠かつ不滅の精霊の何らかの型との最終的な合同事象前の信仰の息子のものである。

40:6.2 (448.1) ユランチアの人間のような下級で物質の創造物が、神の息子、最も高きものの信仰の子であるということは、厳粛で高邁な事実である。「私達が神の息子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。」「あの方を受け入れた者全員に、神の息子であると認識する力を与えたのである。」「あなたがどうなるのかまだ明らかではない」とはいえ、今でさえ、「あなたは神の信仰の息子である。」「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、息子たる身分の霊を受けたのであるから、その霊により『私達の父よ』と呼ぶのである。」昔の予言

者は、永遠の神の名において語った。「私は、それらにさえ、我が家に場所と息子達よりよい名を与えるつもりである。永遠に続く名を、断ち切られないものをそれらに与えるつもりである。」「そして、あなた方は息子であるので、神はその息子の霊をあなたの心に送ったのである。」

40:6.3 (448.2) 人間居住の進化する世界のすべてが、神のこれらの信仰の息子を、恩恵と慈悲の息子を、神の家族に属しそれ故神の息子と呼ばれる必滅の者をもてなす。ユランチアの必滅者には、自身を神の息子と見なす権利が与えられている。

40:6.4 (448.3) 1. あなたは精霊の見込みのある息子、すなわち信仰の息子である。あなたは、息子たる身分を受け入れた。あなたは、自分自身の息子の現実を信じ、それ故神との息子関係は、永遠に真実になるのである。

40:6.5 (448.4) 2. 神の創造者たる息子はあなた方の中の1人になった。現実に、あなたの兄である。そしてもしあなたが、精霊上、真にキリストの、つまり勝利のマイケルの弟になるならば、そこで、あなたは、精霊上、あなた方

の共通のその父の息子でもあらなければならない—他ならぬすべてのものの宇宙なる父である。

40:6.6 (448.5) 3. あなた方は、息子の精霊があなたに注がれたので、ユランチアの全人種に自由にしかも確かに贈与されたので、息子である。この精霊は、精霊の源である神性の息子へと、またその神性の息子の源である楽園の父に向けて常にあなたを引き寄せている。

40:6.7 (448.6) 4. 宇宙なる父は、自身の神性の自由な意志から被創造物のあなたの人格をあなたに与えた。あなたは、神がその息子になるかもしれないすべての者と共有する自由意志に基づく行為のある程度のその神性の自然さを授与されてきた。

40:6.8 (448.7) 5. あなたの中には宇宙なる父の断片が住んでおり、あなたは、神のすべての息子の神性の父とこのようにして直接に関係しているのである。

7. 父融合の必滅者

40:7.1 (448.8) 調整者の送り出し、つまり宿りは、まことに父なる神の計り知れない神秘の1つである。宇宙なる父の

神性の断片は、創造物の不死の可能性をともに連れてくる。調整者は、不滅の精霊であり、融合必滅者の魂に永遠の生命を贈る。

40:7.2 (448.9) 生残する必滅者のあなた自身の人種は、神の上昇する息子のこの集団に属する。あなたは、現在惑星の息子、つまり生命運搬者の着床に起源をもち、アダーム-生命注入により変更された進化する生物であり、まだとても上昇する息子ではない。だが、あなたは、本当に上昇可能の息子であり、—栄光と神性到達の最高の高みにさえ—信仰により、そして、内住調整者の活動を精霊的にする取り組みとの自由意志の協力により上昇する息子のこの精霊の身分を獲得できる。あなたとあなたの調整者が、遂に永久に融合されるとき、ちょうどキリスト・マイケルの中で神の息子と人の息子が１つであるように、あなた方2者が1つにされるとき、そのとき、あなたは、現実に神の上昇する息子になったのである。

40:7.3 (449.1) 試験期間の、かつ進化する惑星における内住奉仕活動の調整者経歴についての詳細は、私の仕事の一部ではない。この素晴らしい真実の詳述は、あなたの全体

の経歴を含んでいる。私は、調整者-融合の必滅者に関し十分な記述作成のために調整者の特定機能についての言及を盛り込む。神の内住する断片は、ネバドンとオーヴォントンにおける、そしてハヴォーナを経て、楽園それ自体に至る上昇経歴の全てに渡る物理的存在の初期からあなたの系列と共にいる。それ以来、この同じ調整者は、永遠の冒険においてあなたと１つであり、あなたの中にいる。

40:7.4 (449.2) これらが、宇宙なる父に「私が完全であるようにあなたも完全になりなさい。」と命令されてき必滅者である。父は、あなたに自分を贈与し、あなたの中に自身の精霊を置かれた。だからこそ、あなたの究極の完全性を要求するのである。時間の人間の球体から神性の永遠の領域への人間上昇の物語は、私の仕事には盛り込まれてはいない好奇心をそそる詳説を構成するが、この崇高な冒険は、必滅の人間の最高の研究であるべきである。

40:7.5 (449.3) 宇宙なる父の断片との融合は、楽園の最終的到達の神性確認に等しく、そのような調整者-融合の必滅者は、ハヴォーナ回路を通過し楽園において神を見つけ

る全ての人間の唯一の階級である。調整者-融合の必滅者にとり、宇宙奉仕の経歴は開け放たれている。何という高潔さの目標と栄光到達が、あなた方1人1人を待ち受けていることよ。あなたは、あなたのために為されたことに完全に感謝しているのか。あなたは、あなた—いわゆる「涙の谷」を通る人生のみすぼらしい小道を今重い足取りで歩くあなた—の前にさえ広がる果てなき達成の高みの壮大さを理解しているのか。

8. 息子-融合の必滅者

40:8.1 (449.4) 実際にすべての生残の必滅者は、大邸宅世界の1つにおいて、またはより高いモロンチア球体への到着直後にそれぞれの調整者と融合する一方で、一部のものには、宇宙本部の最後の教育世界に達するまでこの最終的な生存の保証を経験をしない特定の遅延融合の事例というものがある。また、忠実な調整者との自己同一融合に完全に失敗する終わることのない生命への人間候補者も少数いる。

40:8.2 (449.5) そのような必滅者は、裁定権威者により生存に値すると判断され、神性球からの帰還により、それぞれ

の調整者ですら、大邸宅世界への上昇に同意した。そのような存在体は、体制、星座を経て、またサルヴィントン回路の教育世界を経て昇った。彼らは、融合に向けての「70の7倍」の機会に恵まれはしたものの、依然としてそれぞれの調整者との同一性に達し得ていない。

40:8.3 (449.6) 同時進行の何らかの困難が、父融合を禁じていることが明らかになるとき、創造者たる息子の生存審判者が召喚される。そして、日の老いたるものの個人的な代表により認可された査問会が、上昇する人間が融合到達への発見可能ないかなる失敗原因に関しても無罪であることを最終的に決定すると、生存審判者らは、地方宇宙の記録でそう認証し、この確認事項を日の老いたるものに正式に伝える。内住する思考調整者は、それに関して直ちに人格化訓戒者による承認のために神性球に戻り、モロンチア必滅者は、この暇乞いに際し、すぐに創造者たる息子の精霊の個別化された贈り物に融合される。

40:8.4 (450.1) これらの息子融合の創造物は、ネバドンのモロンチア球体が、精霊融合の必滅者と共有されるのとほぼ

同程度に、楽園のはるか遠くの小島への内面に向かう旅行中の思考調整者-融合の同胞とともにオーヴォントンの勤労を分かち合う。彼らは、真にあなたの同胞であり、また、あなたは、超宇宙の訓練世界を通過する間、彼らの提携を大いに享受するであろう。

40:8.5 (450.2) 息子融合の必滅者は、多数集団ではなく、オーヴォントンの超宇宙には100万足らずがいる。楽園の居住目標は別として、あらゆる点で、調整者融合の仲間の対等者である。息子融合の必滅者は、超宇宙の任務で頻繁に楽園に旅行するが、それらの出身の超宇宙に閉じ込められており、制限されており、一階級として、そこに永久に住むことは滅多にない。

9. 精霊-融合の必滅者

40:9.1 (450.3) 上昇する精霊-融合の必滅者は、第三根源の人格ではない。それらは、父の人格回路に含まれているが、第三根源と中枢の心以前の精霊の個性化と融合した。そのような精霊融合は、自然の生命の期間中には決して起こらない。それは、大邸宅世界のモロンチア生活における人間の再度の目覚めの時点で生ずる。融合経験に重複

はない。意志をもつ創造物は、精霊融合、息子融合、または父融合のいずれかである。調整者、あるいは父融合のもの達は、決して息子融合ではない。

40:9.2 (450.4) 肉体での人生の期間、必滅の創造物のこれらの型が調整者-融合候補ではないという事実が、調整者のこの型での内住を阻むことはない。調整者は、肉体での人生の間、そのような存在体の心で働いてはいるものの、その生徒の魂といつまでも決して1つにはならない。調整者は、この一時的滞在期間、調整者融合の候補者の中に築き上げる必滅の人間性の同じ精霊の相手—魂—を効果的に築き上げる。調整者の仕事は、人間の死の時まであなた自身の人種におけるそれぞれの機能と似かよっているが、人間の消滅に際し、調整者は、これらの精霊-融合候補から離れ、すべての神性訓戒者の本部である神性球に直接進み、そこで自身の系列の新任務を待ち受ける。

40:9.3 (450.5) そのような眠りの生存者が大邸宅世界で再人格化されるとき、立ち去った調整者の地位は、関係ある地方宇宙の無限の精霊の代表である神性聖職者の精霊の個

別化により埋められる。この精神注入が、これらの生存する創造物を精霊融合の必滅者にする。そのような存在は、心と精霊においてあらゆる点で、対等のもの達である。そして、彼らは、実にあなたの同時代のものであり、あなたの系列の融合候補と、また息子融合をするはずのもの達と大邸宅球とモロンチア球を共有している。

40:9.4 (450.6) しかしながら、精霊-融合の必滅者には、その上昇の同胞とは異なる1事項がある。出身物質界における人間の経験についての人間の記憶は、内住する調整者が、精霊的意義をもつ人間の人生のそれらの出来事に関わる精霊の相手、または転記物を取得したが故に、肉体における死を乗り切る。しかし、精霊融合の必滅者の場合、人間の記憶が持続するかもしれないそのような何の仕組みも存在はしない。調整者の記憶転記は、完全かつ損なわれてはいないが、これらの取得は、立ち去った調整者の経験上の所有物であり、それ以前の生活の意識をもたないまるで新たに創造された存在でもあるかのようにネバドンのモロンチア球の復活の広間で目を覚ます元の内住の創造物には利用可能ではない。

40:9.5 (451.1) 地方宇宙のそのような子らは、関係する熾天使と天使童子により再び聞かされたり、また記録係の天使により分類された人間経歴に関する記録を参考することにより、人間の過去の経験の記憶の多くを自分のものにすることが可能になる。彼らは、物質生活と人間生活における経験上の起源をもつ生残する魂が、人間の出来事について何の記憶も持たない一方で、記憶されていない過去の経験の出来事への経験上の残留認識応答があるが故に、疑う余地のない自信を持ってこれができるのである。

40:9.6 (451.2) 記憶されていない過去の経験の出来事が、精霊融合の必滅者に伝えられるとき、そのような生存者の魂(自己同一性)の中で語られた出来事が、即座に現実の情緒的色合と事実の知的資質を帯びて語られた出来事を即座に注ぎ込むそのような生存者の魂(自己同一性)の中で経験上の認識の即座の反応がある。そして、この二重の反応は、人間の経験の記憶されていない一面の再建、認識、および確認を構成する。

40:9.7 (451.3) 調整者-融合候補の場合ですらも、精霊価値をもつ人間のそれらの経験だけが、生残する必滅者と復帰する調整者の共通の所有物であり、それ故、それらの経験は、人間生存後すぐに思い出される。これらの調整者-融合者でさえ、精霊的意味のないそれらの出来事に関しては生残する魂の中の認識反応の属性に依存しなければならない。そして、何か1つの出来事が、他者にではなく1人の必滅者に精霊の内包的意味があるかもしれないので、それは、同じ惑星からの現代の上昇者集団にとり、調整者に記憶された出来事の蓄えをひとまとめにし、またその結果、上昇者の中の誰か1人の人生において精霊的価値があるいかなる共通経験も再建可能になる。

40:9.8 (451.4) さて、我々は,記憶再構成のそのような方法をかなりよく理解してはいるが、人格認識方法は、把握していない。1度の提携の人格は、記憶操作とは全く無関係に対応するとはいえ、記憶自体とその再構成方法は、人格のそのような相互反応に認識全体を与える必要がある。

40:9.9 (451.5) 精霊-融合の生存者はまた、かつて生活した自分の惑星の天の配剤後の世界への再訪によって肉体で生きた人生について多く学ぶことができるのである。精霊-融合の子は、一般に地方宇宙の勤労に拘束されるので、自身の人間の経歴を調査する機会を味わうことができる。彼らは、楽園の終局者軍団においてあなたの高い、また高められた運命を共有しない。調整者-融合の必滅者、あるいは他の特別に抱擁された上昇存在体だけが、神格の永遠の冒険を待ち受ける人々の集団に召集される。精霊-融合の必滅者は、地方宇宙の永久公民である。彼らは、楽園の目標を希望するかもしれないが、確信はできない。ネバドンのそれらの宇宙の家は、サルヴィントンを取り巻いている8番目の世界集団である。ユランチアの惑星の伝統により思い描かれるような目標-天国の性質と位置

10. 上昇者の目標

40:10.1 (452.1) 一般的に言って、精霊融合の必滅者は、地方宇宙に閉じ込められている。息子-融合の生存者は超宇宙に限られている。調整者-融合の必滅者は、宇宙の中の宇宙に浸透する運命にある。人間融合の精霊は、必ず起

源の段階に昇る。そのような精神実体は、絶えず主要根源の球体に戻る。

40:10.2 (452.2) 精霊-融合の必滅者は、地方宇宙のものである。通常、彼らは、故郷の領域の境界を超えては、つまりそれらを瀰漫させる精霊の空間範囲の境界を超えては上昇しない。息子融合の上昇者も、精霊授与の根源に昇る。なぜならば、創造者の息子の真実の精霊が、関連する神性聖職者に集束するのと全く同様に、より高い宇宙の反映の精霊において実行される創造者の息子の「融合精霊」もそうなのであるから。七重の神の地方宇宙と超宇宙段階とのそのような精霊関係は、説明しにくいかもしれないが、反映の精霊—創造者の息子の第二天使の声—のそれらの子供に紛れもなく明らかにされており、認識しにくいことはない。楽園の父から来る思考調整者は、人間の息子が永遠の神と直面するまで、決して止まることはない。

40:10.3 (452.3) 必滅の存在体が内住する思考調整者と永遠に融合しなかったり、あるいは、できなくなる結合方法における神秘的な可変要因は、上昇計画における不備を明ら

かにするように思えるかもしれない。息子と精霊融合は、表面的には、何らかの楽園-到達計画の詳細についての説明のつかない失敗に対する償いに類似している。だが、そのようなすべての結論は、思い違いである。我々は、これらのすべての出来事が宇宙の崇高なる支配者の確立した法への服従において展開するということを教えられている。

40:10.4 (452.4) 我々は、この問題を分析し、また創造者の息子と日の老いたるものの本部はより高い領域への移動中にあるそれらのものの勤労に完全に依存しているであろうから楽園の1つの究極目標へのすべての必滅者の委託が時間-空間宇宙に対して不当であろうという疑う余地のない結論に達した。地方政府と超宇宙政府のそれぞれには、上昇公民の永久集団が提供されるべきであるということが誠に実に適しているように思える。これらの行政機能は、アバンドンター系とスサチア系の進化した補体であり、恒久状態にある栄光に輝く必滅者の特定集団の努力により豊かにされるべきである。今や現在の上昇計画がまさしくそのような上昇生物の集団だけに効果的に時-空間行政を供給するということは、一目瞭然であ

る。我々は、幾たびも考え込んだ。このすべてが、創造者たる息子と日の老いたるものに上昇する永久的集団を、つまり来る宇宙時代にこれらの領域の業務を進展させることにおいてますます有能になる進化の公民の系列を、提供する主たる宇宙の建築者の意図された全ての賢明な計画の一部分を意味しているのかと。

40:10.5 (452.5) 人間の目標が、このように異なるということは、必ずしも一方が他方よりもすばらしいとか、または劣ると立証するものでは決してなく、ただそれらは異なっているに過ぎない。永遠の未来において上昇者の前に展開される終局者としての調整者融合の上昇者には、いかにも壮大で栄光の経歴があるのだが、これは、それらが上昇の同胞以上に好まれているということを意味しない。必滅者生存のための神性計画の選択操作に何の依怙贔屓はなく、何の気まぐれもない。

40:10.6 (453.1) 調整者融合の終局者は、最も幅広いすべての好機を明らかに享受する一方で、この目標到達は、早期の、またそれほど解決されていない時代から比較的完全到達の後の確立された時代に至るまでのある1つの宇宙

または超宇宙の果てしなく続く戦いに参加する機会から調整者融合の終局者を自動的に切り離すのである。終局者は、壮大な宇宙の全7区分における驚異的かつ広範囲の一時的奉仕の経験をするのだが、今でもネバドン終了兵団の精霊融合の老練者を特徴づけるいかなる１宇宙に関わるその詳細な知識を通常は習得しない。これらの個人は、1,000万の棲息界で１時代、１時代の展開中、惑星の時代の上昇行列目撃の機会を味わう。そして、然るべき時期が、集中的経験—信頼できる知恵—から生み出される知恵のその高い質を熟させるまで、そのような地方宇宙公民の忠実な勤労において経験は、経験に重ね合わさる。そしてこれ自体が、いかなる地方宇宙の決定にも重大な1要因なのである。

40:10.7 (453.2) それは、精霊融合者と共いるようにユヴァーサの居住身分を獲得したそれらの息子融合の必滅者と共にいるのである。これらの存在体の一部は、オーヴォントンの最も初期の時代から来ており、第7超宇宙の福祉と最終的定着への絶えず増大する奉仕援助をする洞察を深める知恵のゆっくり蓄積する本体をもたらす。

40:10.8 (453.3) 我々は、地方公民と超宇宙の公民の静止したこれらの系列の究極目標が何であるかを知らないが、楽園の終局者が、最初の外部空間段階の惑星体制における神性の広がり行く国境を開拓しているとき、進化の上昇的苦闘を潜った終局者の息子-そして精霊-融合の同胞は、外部空間の現在は地図にはないこれらの無人の銀河からの精霊探索の巨大な激流として、オーヴォントンとその姉妹関係にある創造へと注ぎ込むかもしれない楽園巡礼者の入り来る流れを歓迎するために待機すると同時に、完成された超宇宙の経験的均衡の維持にまずまず貢献しているであろうということは、完全に可能である。そのはるか遠い日に、

40:10.9 (453.4) 精霊融合者の大多数は、地方宇宙の公民として永遠に役目を果たすのだが、全員がそうするのではない。宇宙奉仕活動の何らかの局面が、超宇宙において個人的臨場を必要とするならば、存在体のそのような変容が、そのときより高い宇宙に昇ることを可能にするこれらの公民にもたらされるであろう。そして、系列を伴った天の後見者の到着に際し、精霊融合者は、そのような精霊-融合の必滅者を日の老いたるものの法廷で紹介す

るために永久にそこに昇り決して戻ることはない。それらは、仲間として天の後見者に永久に役目を果たし、楽園とハヴォーナの勤労にさらに召集されるそれらの少数のものを除いては超宇宙の被後見者になる。

40:10.10 (453.5) 息子-融合者は、精霊融合の同胞と同じくある種の修正変容を被らない限り、ハヴォーナを通過せず、また楽園にも達しない。正当かつ適切な理由で、そのような変更が、特定の息子融合の生存者にもたらされるし、またこれらの存在体は、時どき中央の宇宙の7回路上で遭遇することになっている。したがって、それは、息子-と精霊-融合の必滅者双方の一定数が、実際に楽園に昇るということであり、父-融合の必滅者を待ち受けるその目標に等しい多くの方法で１つの目標に達するのである。

40:10.11 (453.6) 父-融合の必滅者は可能性のある終局者である。父融合の必滅者の目的地は、宇宙なる父であり、まさしく父に至ることであるが、そのような終局者は、現在の宇宙時代内での目標達成者ではない。彼らは、未完成の被創造物—第6段階の精霊—のままで、それ故光と

生命以前の状態の進化の領域において非活動のままでいる。

40:10.12 (454.1) 必滅の終局者は、三位一体に迎え入れられている—強力な使者といったような三位一体化の息子—になるときその終局者は、そこで目標に到達したのである、少なくとも現在の宇宙時代の時点では。強力な使者とその仲間は、正確な意味での第7段階の精霊ではないかもしれないが、三位一体の抱擁は、他の事柄に加え、終局者が第7段階の精霊としていつか達成するであろうすべてにそれらを授与する。精霊-融合の必滅者、あるいは息子-融合の必滅者は、三位一体化の後、調整者-融合の上昇者と楽園経験を通過すると、超宇宙行政に属するすべての事柄において上昇者と同じである。選抜の、あるいは到達のこれらの三位一体化の息子は、現在のところ完成していない創造物である終局者と対照をなし、少なくとも当分の間は完成した創造物である。

40:10.13 (454.2) したがって、最終的分析において、上昇する息子の系列の目標を対照して、「より素晴らしい」、あるいは「より劣る」という言葉の使用は、あまり妥当では

ない。神のすべてのそのような息子は、神の父性を共有しており、また神は、創造物の息子のそれぞれを同様に愛している。彼は、そのような目標に達するかもしれない被創造物に対して偏らないように上昇の目的に対しても偏らない。父は、各々の息子を愛しており、その愛情—この息子に、そしてその息子に、個別に、人格的に、単独に与えられる愛—は、真実で、神聖で、神らしく、無限で、永遠で、そして無類以上のものなのである。また、そのような愛は、他のすべての事実を残らずおおい隠している。息子の資格は、創造者との創造物の最高の関係である。

40:10.14 (454.3) あなたは、人間として神性の息子の家族の中に自分の場所を認識でき、人間生存のための楽園計画の中に、また楽園計画により、そうまで自由に準備された長所活用の義務を感じ始めることができる。その計画は、贈与の息子の人生経験によってそのように高められ照らされてきた。あらゆる有用なものとすべての力が、神性の完全性である楽園目標のあなたの究極的到達を保証するために準備されてきたのである。

40:10.15 (454.4) [サルヴィントンのガブリエルの配下に一時的に配属された強力な使者による提示]

論文 41
地方宇宙の物理的局面

41:0.1 (455.1) それぞれの地方創造を他のすべてのものから引きたたせる独特の空間現象は、創造の精霊の存在である。全ネバドンは、確かにサルヴィントンの神性聖職者の空間臨場により充満しており、しかもそのような存在は、同様に確かに、我々の地方宇宙の外縁で終わる。我々の地方宇宙の母なる精霊により瀰漫されるものが、ネバドンである。母なる精霊の空間臨場を超えて広がるものは、ネバドンの外側であり、母なる精霊の空間臨場を超えて広がるものが、オーヴォントンの超宇宙にあるネバドン空間地域の外側にある。—他の地方宇宙である。

41:0.2 (455.2) 壮大な宇宙の行政組織が、中央宇宙、超宇宙、そして地方宇宙の政府間の明確な区分を明らかにする一方、これらの区分は、ハヴォーナと7超宇宙の空間分離において天文上は平行であるものの、そのような物理的分界の明確な線は、地方創造を区切らない。オーヴォン

トンの主要領域と小領域でさえ、(我々には)明確に区別可能であるが、地方宇宙の物理的境界の確認は、それほど簡単ではない。これは、地方創造が超宇宙の総エネルギー充電を支配する一定の創造的原則により行政上組織化されていのに対し、それらの物理的構成要素、空間の球体—太陽、暗い島、惑星など—は、主として星雲に起源を取り、またこれらの星雲が、主たる宇宙の建築者のある前創造的(先験的)計画を踏まえた天文の出現を引き起こすからである。

41:0.3 (455.3) 1つ、またはそれ以上の—さらに多くの—そのような星雲は、ちょうどネバドンが、アンドラノヴァーと他の星雲の星の子孫と惑星の子孫から物理的に組み立てられたように、単一の地方宇宙の領域内に取り囲まれるかもしれない。ネバドン球体は、星雲の様々の祖先に由来するものであるが、それらは皆、力の管理者の知的努力によって調整される空間運動のある種の最小の共通性があり、近接する一群として超宇宙の軌道上をともに旅行する空間本体の我々の現在の集合を起こさせるほどあった。

41:0.4 (455.4) それが、ネバドンの地方の恒星雲の形成といったものであり、それは、今日、我々の地方創造が属するオーヴォントンのその小領域の射手座の中心あたりでますます定着した軌道を動く。

1. ネバドンの力の中心者

41:1.1 (455.5) 渦巻星雲と他の星雲は、すなわち空間の球体の母たる輪形は、楽園の原動力のまとめ役により開始される。そして、それらは、星雲の重力反応の発展に続き、力の中心者と物理制御者により超宇宙機能においてそれらに取って代わり、双方は、星の、そして惑星の子孫の次世代の物理的発展を指示する完全な責任をそこですぐに負う。ネバドン前宇宙のこの物理的監視は、我々の創造者たる息子の到着に当たり、即座に、宇宙組織のための創造者たる息子の計画と調整された。この神の楽園の息子の領域内では、力の崇高な中心者と物理の主たる制御者は、ネバドンの空間の多種多様の天体を統合された１行政単位へと堅く結びつける通信回線、エネルギー回路、および力回線のその広大な複合体を作り出すために後に出現するモロンチアの力の監督者と他のものと協力した。

41:1.2 (456.1) 第4系列の100名の力の崇高な中心者は、我々の地方宇宙に永久に割り当てられている。これらの存在体は、ユヴァーサの第3系列中心者からの引き込み線を受け取り、そして我々の星座と体制の力の中心者への減少され、変更された回路に中継する。これらの力の中心者は、不安定で変わり易いエネルギーの均衡と分配の維持のために作動する調整と均等化の生物系産出のために共に機能する。力の中心者は、しかしながら、太陽黒点や電気障害の体系などの一時的かつ局部的エネルギー変動には関係がない。光と電気は、空間の基本的エネルギーではない。それらは二次的、補助的兆候である。

41:1.3 (456.2) 100名の地方宇宙の中心者は、サルヴィントンに配置されており、そこでその球体の正確なエネルギーの中心で機能する。サルヴィントン、エデンチア、およびジェルーセムのなどのような建築球体は、それらを空間の太陽から全く独立させる方法により点灯され、加熱され、エネルギーが与えられる。構成されたこれらの球体—誂え品—は、力の中心者と物理制御者によるものであり、しかもエネルギー分配への強力な影響を揮うように設計された。力の中心者は、エネルギー制御のそのよ

うな焦点に自らの活動の基礎を置き、自身の生ける臨場により、空間の物理エネルギーを方向づけ、回路化する。またこれらのエネルギー回路は、肉体的-物理的、そしてモロンチア-精霊の全現象の根底をなしている。

41:1.4 (456.3) 第5系列の10名の力の崇高な中心者は、ネバドンの各主要再区画、すなわち100個の星座に割り当てられている。それらは、ノーラティアデク、あなたの星座では本部球体に配置されないが、星座の物理的中心を構成する巨大な星の体系の中央に位置する。エデンチアには、程近い力の中心者と完全で不断の連絡をとる10名の機械的制御者と10名のフランダランクがいる。

41:1.5 (456.4) 第6系列の力の崇高な中心者の1名は、各地方体制の的確な重力点に配置される。配属の力の中心者は、サタニア系においてその体系の天体の中心に位置する空間の暗い島を占領する。これらの暗い島の多くが、一定の空間エネルギーを集め方向づける巨大な発電機であり、これらの自然情況は、サタニアの力の中心者により効果的に利用される。サタニアの力の中心者の生きた質量は、より高い中心者との連絡係として空間の進化する

惑星の物理の主たる制御者へのさらに実体化する力の流れを導いて機能する。

2. サタニアの物理制御者

41:2.1 (456.5) 物理の主たる制御者が、壮大な宇宙の中で力の中心者と共に勤労しているが、サタニアのような地方体制でのそれらの機能は、より理解が容易である。サタニアは、ノーラティアデクの星座の行政組織を構成する100の地方体制の1つであり、ごく近くにはサンドマシャ、アッサンシャ、ポロジア、ソーチリア、ランツリア、およびグラントニアの体制がある。ノーラティアデク体制は、あらゆる点で異なるが、すべてがサタニアのように非常に進化的で進歩的である。

41:2.2 (457.1) サタニア自身は、そのうちのわずかがあなたの太陽系のものと同じ起源をもつ7,000以上の天体集団、または物理体制で構成される。サタニアの天文の中心は、その付属する球体とともに体制政府の本部からは遠くない空間の巨大な暗い島である。

41:2.3 (457.2) サタニアの全体の物理的エネルギー体制の監督は、配属の力の中心者の臨場を除き、ジェルーセムに集

中した。この本部球に配置されている主たる物理の制御者は、体制の力の中心者と協調して働き、ジェルーセムに本部を設けた力の検査官の連絡長官として仕え地方体制の中で機能する。ジェルーセムに本部を設けた力の検査官の連絡長官として仕え地方体制の中で機能して体制の力の中心者と協調して働いている。

41:2.4 (457.3) エネルギーの周期化と回路化は、サタニア中に散在する50万の生きた知的なエネルギー操縦者が監督する。そのような物理制御者の行為を通し監督する力の中心者は、空間の非常に加熱された天体の放射とエネルギー補充された暗い球体を含む大部分の基礎エネルギーを全て、しかも完全に支配する。この生きる存在体は、組織化された空間の物理エネルギーのほとんど全てを集結し、一変し、変形し、操作し、そして転送することができる。

41:2.5 (457.4) 生命には、宇宙エネルギーの起動と変形のための固有の能力がある。あなたは、植物界における光の物質エネルギーからの様々な現象変換作用に詳しい。また、あなたは、この植物エネルギーが動物活動の現象に

変換できる方法について何かを知ってはいるが、空間の種々のエネルギーを起動し、変換し、方向づけ、集結する能力に恵まれている力の管理者と物理制御者の方法については特に何も知らない。

41:2.6 (457.5) エネルギー領域のこれらの存在は、生命をもつ被創造物の構成要素としてエネルギーに、物理化学の領域にさえ直接には関係してない。これらの存在は、時として生命の物理的準備段階に、すなわち基本物質の有機体の生きたエネルギーのための物理的手段として役立つかもしれないエネルギー体系の綿密さに関心を持つ。ある意味で、物理制御者は、心-精霊補佐が、物質の心の前精霊に関係するように物質エネルギーの前生命現象に関わっている。

41:2.7 (457.6) 力の制御とエネルギー方向に関わるこれらの知的生物は、その惑星の物理的組成と構造に応じ、各球体でそれぞれの方法を調整しなければならない。彼らは、非常に加熱された太陽と他の過給された星の型の局部の影響に関し、物理学者と他の技術顧問のそれぞれの助力者による算出と推論を絶えず活用する。空間の巨大な冷

たく暗い球体と宇宙塵の集まっている雲さえ計算されなければならない。これら物質的なものすべてが、エネルギー操作の実際問題において関係している。

41:2.8 (457.7) 進化する棲息界の力エネルギー監督は、物理の主たる制御者に責任があるが、これらの存在体は、ユランチアのエネルギーの不業績全てに責任があるのではない。そのような混乱には多くの理由があり、その中の幾つかは、物理管理者の領分と支配を越えている。ユランチアは、途方もなく大きいエネルギーの複数線上にあり、巨大な塊状の回路内の小さい惑星、また地方の制御者は、エネルギーのこれらの線を均等化する努力において、時として、その系列の莫大な数を用いる。巨大な塊状の回路内の小さい惑星であるユランチアは、途方もなく大きいエネルギーの複数線上にあり、その地方の制御者は、エネルギーのこれらの線を均等化する努力において、時としてその系列の莫大な数を用いる。彼らは、サタニアの物理的回路に関してはかなり順調であるが、強力なノーラティアデク電流に対する絶縁処理には苦労している。

3. 我々の星の仲間

41:3.1 (458.1) サタニアには光とエネルギーを流出させる2,000以上の燦々と輝く太陽があり、あなた自身の太陽は、燃える普通の天体である。あなたの太陽に最も近い30個の太陽のうち3個だけが、より輝いている。宇宙の力の管理者は、個々の星と各体制の間で役割を果たすエネルギー専用の電流を起こす。これらの太陽炉は、空間の暗い球体と共に物質的創造のエネルギー回路の効果的な集中化と方向づけのための中継地点としての力の中心者と物理制御者に有用である。

41:3.2 (458.2) ネバドンの太陽は、他の宇宙のものと異なりはしない。すべての太陽、暗い島々、惑星、衛星、物質的構成は、全く同じである。流星でさえも。これらの太陽は、あなた自身の太陽球のそれよりも僅かに少ない、直径平均約161万キロメートルである。宇宙の最大の星、星雲アンタレスは、あなたの太陽の450倍の直径であり、その体積の6,000万倍である。それでも、これらの巨大な数々の太陽のすべてを収容するに十分な空間がある。オレンジがユランチア全内部を循環するとして、しかも、その惑星が空洞の球体であったならば、それら

は、12個のオレンジが持つほどのかなりのゆとりがある。

41:3.3 (458.3) 大き過ぎる太陽が、星雲の母輪形からかなぐり捨てられるとき、それらは、すぐに分裂するか、または連星を形成する。すべての太陽は、後に準流動状態で存在するかもしれないが、そもそも実際は気体である。あなたの太陽が、超ガス圧力のこの半液体状態に達したとき、赤道上に分かれるには不十分な大きさであり、これは、二重星形成の1つの型である。

41:3.4 (458.4) これらの火のような球体は、あなたの太陽の1/10以下の大きさになると、急速に収縮し、凝縮し、そして冷める。その大きさの30倍以上—むしろ、実際の物質の総計の内容、総容量の30倍—のとき、太陽は、容易に2個の塊に分かれ、新体系の中心になるか、さもなくば、互いの重力把握に留まり、そして二重星の1つの型として共通の中心の周りを回転する。

41:3.5 (458.5) オーヴォントンにおける最新の主要な宇宙爆発は、途轍もない二重星の爆発であり、その光は、西暦1572年にユランチアに達した。この烈火は、まことに強

烈であり、その爆発が真昼にはっきりと目に見るほどであった。

41:3.6 (458.6) すべての星が堅いというわけではないが、古いものの多くは堅い。赤味を帯びかすかに明滅する幾つかの星は、ユランチアでならば1立方インチが、2,722キログラムとなる巨大な塊の中心での密度を獲得した。この結果、熱と循環エネルギーの損失を伴う莫大な圧力は、今や、電子の凝縮状態近くになるまで基本的な物質構成単位の軌道をもたらした。この冷却と収縮過程は、究極子凝縮の制限的、かつ決定的な爆発点へと続くかもしれない。

41:3.7 (459.1) 巨大な太陽は比較的に若い。矮星の大部分は古いが、すべてがそうではない。元気な輝きの初期の赤い段階を１度も知らない衝突する矮星は、非常に若いかもしれないし、強烈な白光で輝くかもしれない。非常に若い太陽と非常に古い太陽双方ともに、通常やや赤味を帯びて輝く。黄色の色合いは、中程度の若さ、あるいは老年間近を示すが、鮮やかな白光は、強健で長期の大人の生命を意味する。

41:3.8 (459.2) すべての若い太陽が、少なくとも目に見えて、脈打つ段階を通過するのではないが、あなたが、宙を見つめていると、呼吸の巨大な隆起が、１循環し終えるのに2日から7日間を要するこれらのより若い星の多くを観測できるのである。あなた自身の太陽は、その若い時代の巨大な膨らみが縮小する遺物を持ち越しているが、期間は、かつての3日と半日の脈動から現在の黒点周期の11年半までに伸びてきている。

41:3.9 (459.3) 星の可変要因には、数々の起源がある。一部の二重星においては、2個の本体が各々の軌道の周りを回るにつれ、急速な距離の変化による潮の干満がもたらされ、光の周期的変動をも引き起こす。これらの重力変化は、ちょうど表面でのエネルギー物質の増大による流星の獲得が、その太陽にとり通常の明るさへと急速に後退するかなり突然の閃光をもたらすように、通常の、また反復の揺らめく光を発生させる。時々、太陽は、減少された重力抵抗の一列の流星の連続を捕らえるであろうし、また、衝突は、時折、星の炎火引き起こすが、そのような現象の大部分は完全に内部変動によるものである。

41:3.10 (459.4) 変光星の1集団における光の変動期間は、直接には明度次第であり、この事実に関する知識は、天文学者が遠方の星団のさらなる探検のために宇宙の灯台や正確な測定地点としてそのような太陽を活用できるようにする。この方法により、最高100万光年以上までの最も正確な星の距離測定が可能である。空間測定のより良い方法と改良された望遠鏡技術は、そのうちにオーヴォントンの超宇宙の壮大な10区分をより完全に明らかにする。あなたは、巨大で全く対称である星団としてこれらの計りしれない8区分をとにかく識別するであろう。

4. 太陽の密度

41:4.1 (459.5) あなたの太陽の質量は、それをおよそ2オクティリオン(2x1027)トンと計算したあなたの物理学者達の見積りよりも僅かに上回る。それは、水の濃度のおよそ1倍半あり、現在、最も密集する星と最も拡散する星とのほぼ中間に存在する。しかし、あなたの太陽は、液体でも固体でもない—それは気体であり—そして、これは、気体物質がいかにしてこれに、またはるかに大きい密度にさえ達し得るのかの説明の困難さにもかかわらず真実である。

41:4.2 (459.6) 気体、液体、固体状態は、原子-分子の関係の問題であるが、密度は、空間と質量の関係である。密度は、直接的に空間の物質の量と、逆に物質のもつ隙間により異なる。すなわち、そのような質点内の空間はもとより物質の中核とそれらの中心の周りに渦巻く粒子間との空間。

41:4.3 (459.7) 冷却中の星は、物理的には気体であり、同時に途方もなく密度が高い場合がある。あなたは、太陽の超気体に馴染みがないが、物質のこれらの型と他の独特の型が、いかにして非固体の太陽でさえ鉄に等しい密度—ランチアとほぼ同じ—に達し得るのか、なおかつ非常に加熱された気体状態にあって太陽として機能し続けられるのかを説明する。これらの高密度の超気体内の原子は、殊のほか小さい。わずかな電子しか含んでいない。そのような太陽は、エネルギーの自由な究極子の蓄積を大むね失った。

41:4.4 (460.1) あなたの太陽とほぼ同程度の質量から人生を始めたあなたの近くの太陽の中の１つは、現在、ほぼユランチアの大きさに収縮し、あなたの太陽に劣らぬ4万倍

の高密度になった。この熱く冷たい気体-固体の重さは、1立方インチあたりおよそ1トンである。それでもこの太陽は、赤味がかった仄かな輝きで消滅する光の君主の老いた微かな燐きで光る。

41:4.5 (460.2) 太陽の大多数は、しかしながら、それほど密度が高くない。あなたのより近くの隣り合うものの1つは、あなたの海抜ゼロの大気のそれとまさに等しい密度である。もしあなたが、この太陽の内部にいたならば、何も見分けられないであろう。そして温度が許すならば、あなたが地球の居間の空気中の物質を知覚しないのは、あなたが夜空に煌く大多数の太陽を見抜くことができないのと同じであろう。

41:4.6 (460.3) オーヴォントンにおける最大級の1つであるヴィルンチアの巨大な太陽は、、ユランチアの大気のほんのの1/1,000の密度である。あなたの大気と同様の構成であり、その上、過熱されていなければ真空であるがゆえに、もし人間が、その中に、あるいはその上にいれば直ちに窒息するであろう。

41:4.7 (460.4) 別のオーヴォントン球体は、現在、3,000度にわずかに満たない表面温度である。その直径は、約5億マイル—あなたの太陽と地球の現在の軌道を収容するに十分な空間—である。なおかつ、途轍ない大きさにもかかわらず、あなたの太陽の大きさの4,000万倍以上、その質量はおよそ30倍強に過ぎない。これらの巨大な太陽は、ほぼ1個の太陽から別の太陽に達する。

5. 太陽放射

41:5.1 (460.5) 空間の太陽に密度があまりないということは、逃れる光-エネルギーの定常の流れにより立証される。高過ぎる密度は、光-エネルギー圧力が爆発点に達するまで光を透すことなく保有するであろう。太陽の中にエネルギーの流れを起こさせる途方もない光、あるいは気体の圧力があるので、何百万キロメートルもの空間を貫通し、遠方の惑星を活性化し、点火し、加熱する。ユランチアの密度をもつ表面から約5メートルの深さは、蓄積するエネルギーの上昇内部の圧力が、原子分裂から生じる外側への巨大な爆発に伴う重力に打ち勝つまで、太陽からすべてのX光線と光-エネルギーの脱出を効果的に防ぐであろう。

41:5.2 (460.6) 光というものは、推進力をもつ気体の存在するなかに不透明な擁壁に高温で閉じ込められるとき非常に爆発し易いのである。光は実在する。日光は、あなたの世界のエネルギーと力を評価するとして、454グラム当たり100万ドルの節約であろう。

41:5.3 (460.7) あなたの太陽の内部は、広大なＸ線発生機である。太陽は、この強力な発散の絶え間のない爆撃により中から支えられている。

41:5.4 (460.8) Ｘ線に誘導される電子にとり平均的な太陽の真ん中から太陽の表面まで進むには50万年以上を必要とし、その表面から電子の宇宙冒険に飛び出す。おそらくは、棲息惑星を暖かくするか、流星に捕らえられるか、原子の誕生に参加するか、空間の非常に帯電された暗い島により引き付けられるか、またはその起源の1つへと類似する太陽の表面への最終的な突入により終結されるその宇宙飛行を見つけに。

41:5.5 (461.1) 太陽内部のＸ線は、重力の分岐誘因にもかかわらず、空間を通り、介在する物質の引き止める多くの影響をくぐり、遠隔体系の遠くの球体へと電子を運び非常

に加熱され撹拌された電子に十分のエネルギーを満たす。１太陽の重力の影響から逃れるために必要な速度の大きな勢いは、太陽光線が、物質のかなりの質量に遭遇するまで衰えない速度で進むことを保証するに十分である。それは、すぐに他のエネルギーの解放とともに熱に変えられる。

41:5.6 (461.2) 光、あるいは他の形態にかかわらず、エネルギーは、その空間飛行においてまっすぐ前方に移動する。物質存在の実際の粒子は、一斉攻撃のように空間を通過する。それらは、優れた力によって作用される場合を除いては、また物質の質量に固有の線形重力牽引と楽園の小島の円形重力臨場に常に従う場合を除いては、真っ直ぐの連綿と続く線、あるいは行列で行く。

41:5.7 (461.3) 太陽エネルギーは、波のように推進されているように思えるかもしれないが、それは、共存作用やさまざまの影響によるものである。組織化されたエネルギーの特定の型は、波状ではなく、直線で進む。ちょうど烈風を伴う一寸先も見えない暴風雨で、時々水が激しく降るか、または波状で降るように、力エネルギーの2番目

か3番目の型の臨場は、観測中の流れが波状形成で旅行しているように見える要因かもしれない。雨粒は、切れ目のない一直線の列で降ってくるが、風の作用は、可視の薄板の水と雨粒の波の外観を与えるといったようなものである。

41:5.8 (461.4) あなたの地方宇宙の空間領域に臨場する特定の二次の、また他の未知のエネルギー作用は、明確な長さと重さの微小の部分に細かく切られるばかりではなく、太陽-光の消滅が、ある種の波形現象を作っているように見えるそういったものである。また、実際的な言い方をするなら、それがまさに起こることなのである。あなたは、ネバドンの空間地域で作動する様々な空間-原動力と太陽エネルギーの相互作用と相互関係のより明確な概念を習得するそのような時まで、光の働きについてより良い理解に到達することはほとんど望めない。問題が、主たる宇宙の人格的、非人格的支配の相関活動にかかわりがあるように、あなたの現在の混乱は、この問題にたいするあなたの不完全な把握のせいでもある—連帯動作主と無特性絶対者の臨場、性能、および調整。

6. カルシウム—空間の放浪者

41:6.1 (461.5) スペクトル現象を解読する際、空間は、がらんどうではないということが思い出されるべきである。その光は、空間を通過する際、すべての組織化された空間を循環する様々なエネルギーと質量の型により時としてわずかに変更される。あなたの太陽のスペクトルに現れる未知の物質を示す幾つかの線は、空間に被粉砕型で浮かぶ周知の要素の変化による、すなわち太陽の元素衝突、基本的な戦いである激しい接触からくる原子の減少、犠牲によるものである。空間には、これらのさすらう遺棄物、特にナトリウムとカルシウムが、充満している。

41:6.2 (461.6) カルシウムは、事実上、オーヴォントン中の空間の物質-浸透の主要な要素である。我々の超宇宙全体には、粉々の石が細かく撒散在している。石は、本当に空間の惑星と球体のための基本的建築物質である。宇宙雲、空間の巨大な毛布は、大部分がカルシウムの変化した原子から成る。石の原子は、最も一般的で持続する要素の中の1つである。それは、太陽のイオン化—分裂—に耐えるだけでなく、破壊的なX線に強打され、太陽の高温度に粉砕された後にさえ結合しやすい独自性を固持

する。カルシウムは、より一般的な物質のすべての型よりも優れた個性と寿命を持っている。

41:6.3 (462.1) あなたの物理学者が推測したように、太陽のカルシウムのこれらの切断された残物は、様々な距離を文字通り光線に乗り、また、こうして空間の至る所に広く行き渡る残物の散布は、大いに容易にされる。ナトリウム原子もまた、特定の変更のもとで、光とエネルギーの移動運動ができる。この要素にはナトリウムの質量のほぼ2倍あるので、カルシウムの快挙は、ひとしお注目に値いする。カルシウムによる局部的空間浸透は、変更された型で太陽の光子球から文字通り出て行く太陽光線に乗ることによって逃れるという事実によるものである。カルシウムは、そのかなりの容積—回転する20個の電子を含む—にもかかわらず、太陽内部から空間領域への脱出に太陽の全要素の中で最も成功している。これこそが、なぜ太陽には9,656キロメートルの厚さのカルシウム層が、つまりガス状の石の表面があるかを説明している。より軽い19個の要素が、および多数のより重いものが、下部にあるという事実にもかかわらず。

41:6.4 (462.2) 太陽温度の条件下のカルシウムは、活発で万能の要素である。石の原子は、外側の2個の電子回路内に非常に近接する機動的で緩く接続する2個の電子を持つ。それは、原子の揉み合いの初期にその外側の電子を失う。すぐに、それは、電子公転の19番目と20番目の回路間において19番目の電子を前後に操作する巧みな行為に従事する。切断された石の原子は、自身の軌道と1秒当たり25,000回以上のその無くした仲間の軌道の間でこの19番目の電子を前後に投げることにより部分的に重力に逆らい、その結果、自由と冒険へと、太陽光線である光とエネルギーの新生の流れに首尾よく乗ることができる。このカルシウム原子は、前方推進の交互運動により、太陽光線を毎秒およそ25,000回捉えたり放したりして外側に移動する。これが、石が空間世界の主要な構成要素である理由である。カルシウムは、太陽の刑務所の最も熟達した脱出者である。

41:6.5 (462.3) この曲芸的カルシウム電子の機敏さは、より高い軌道の円への温度-Ｘ線の太陽の力によって振り落とされるとき、毎秒およそ1/1,000,000の間、その軌道に残るだけであるという事実により示唆される。しかし、原

子核の電気-重力の力が、それをその古い軌道に引き戻す前に、原子の中心の周りで100万回の公転を終えることができる。

41:6.6 (462.4) あなたの太陽は、太陽系の形成に関連するその痙攣性の爆発期に夥しいカルシウム量を失った。太陽のカルシウムの多くは、現在太陽の外側の地殻にある。

41:6.7 (462.5) スペクトル解析は、太陽表面の構成だけを示すということが、記憶されるべきである。例えば、太陽のスペクトルは、多くの鉄の線を示すが、鉄は太陽の主要な要素ではない。この現象は、6,000度足らずの太陽表面の現在の温度にほぼ完全に起因しており、この温度は、鉄のスペクトルの登録、記録に非常に好ましいのである。

7. 太陽エネルギーの源

41:7.1 (463.1) 多くの太陽の内部温度は、あなた自身の太陽の内部温度さえ、普通に信じられているよりもはるかに高い。太陽内部には、事実上、原子全体は存在しない。それらすべては、そのような高温に特有の徹底的なX線爆撃によって多かれ少なかれ砕かれる。太陽の外層に何の

物質要素が現れるかにかかわらず、内部のそれらは破壊的なＸ線光線の解離作用により全く同じくされる。Ｘ線は、原子存在のすばらしい地ならし機である。

41:7.2 (463.2) あなたの太陽の表面温度はおよそ6,000度であるが、中央部がおよそ3,500万度の信じられない高さに達するまで内部が貫通されるに従い、それは急速に増加する。(これらの温度のすべては、華氏目盛りを参照する。)

41:7.3 (463.3) これらの現象のすべては、莫大なエネルギー消費を示しており、また重要性順に示された太陽エネルギー源は次の通りである。

41:7.4 (463.4) 1. 原子と、ゆくゆくは電子の絶滅。

41:7.5 (463.5) 2. このようにして解放されるエネルギーの放射性集団を含む要素の変化。

41:7.6 (463.6) 3. 特定宇宙空間エネルギーの蓄積と伝送。

41:7.7 (463.7) 4. 空間物質と赤々と燃える太陽に絶え間なく突っ込む流星。

41:7.8 (463.8) 5. 太陽の収縮。太陽の冷却と結果として生じる収縮は、時として、空間物質により供給されるそれよりも大きいエネルギーと熱をもたらす。

41:7.9 (463.9) 6. 高温での重力作用は、回路化された一定の力を放射エネルギーへ変える。

41:7.10 (463.10) 7.付加的太陽の起源を持つ他のエネルギーと共に、それを残した後に太陽に引き戻されるところの奪回された、受容性のある光と他の物質。

41:7.11 (463.11) 太陽を覆い、また熱の損失を固定させ、さもなければ、熱消散の危険な変動を防ぐために作動する熱いガスの調節毛布(時に何百万度の温度)が存在する。太陽の活発な期間、3500万度の内部温度は、外部温度の連続的低下にもかかわらずほぼ同じままである。

41:7.12 (463.12) あなたは、3500万度を、ある種の重力圧と関連させて電子沸点として思い描こうとするかもしれない。そのような圧力下では、またそのような温度では、すべての原子は、それぞれの電子の、また、受け継いだ他の構成要素へと退化され、粉々にされる。電子と究極子の

他の関連性さえ壊れるかもしれないが、太陽は、究極子を低下させることはできない。

41:7.13 (463.13) これらの太陽の温度が、桁外れの加速のために究極子と電子を、少なくとも後者のそれは、これらの条件下で自身の存在を維持し続けるために、操作する。あなたは、1滴の普通の水が10億以上の原子を含むということを考えて止まるとき、究極子の加速と電子活動を実例として、高温が何を意味するかがわかるであろう。これは、2年間絶え間なく出される100馬力以上のエネルギーである。現在、太陽系の太陽で毎秒発散されている総熱量は、ユランチアの全海洋の水をたった1秒で沸騰させるに十分なのである。

41:7.14 (464.1) 宇宙エネルギーの本流の直接経路で機能するそれらの太陽のみが、永久に照らすことができる。そのような太陽炉は、空間-原動力と類似の循環エネルギーの取り入れにより物質的損失を補給することができ、燃え続ける。しかし、再充電のこれらの主要経路から遠くに移動した星は、エネルギー枯渇を被る運命にある—徐々に冷え、やがては燃え尽きる。

41:7.15 (464.2) そのような死の、または死に行く太陽は、衝突の衝撃で再生できたり、空間の非発光性エネルギーの島、あるいは近隣の小さ目の太陽か体系の重力-強奪を通して再充電ができる。死んだ太陽の大多数は、これらの、あるいは他の進化の方法により回復を経験するであろう。このようにして最終的に再充電されないそれらは、重力凝縮がエネルギー圧力の究極子凝縮の臨界値に達するとき、大規模爆発による分裂を被る運命にある。このようにして消えつつある太陽は、その結果、より都合よく位置する他の太陽の活性化に見事に適した最も希な型のエネルギーになる。

8. 太陽エネルギー反応

41:8.1 (464.3) 太陽エネルギーは、空間-エネルギーで回路化されるそれらの太陽において様々な複雑な核-反応連鎖により解放され、その中の最も一般的なものは、水素-炭素-ヘリウム反応である。炭素は、実際にこの過程により水素からのヘリウム変換は決してできないので、この変態においてエネルギー触媒として作用する。水素は、高温の一定条件下で炭素核に入り込む。炭素は、この飽和状態に達すると、そのような4個以上の陽子を持つこ

とができないので、新たなものが到着するほどの速度で陽子を放ち始める。この反応で入って来る水素粒子は、ヘリウム原子として出現する。

41:8.2 (464.4) 水素含有量の減少は、太陽の光度を増加させる。絶頂光度は、焼き尽くされるよう運命づけられている太陽において水素の完全消費点に達する。輝きは、この点のその後、これの後、重力収縮の結果により維持される。結局、そのような星は、非常に凝縮された球体、いわゆる白色矮星になるであろう。

41:8.3 (464.5) 水素が使い果たされ重力収縮が結果として起こるとき、大きい太陽—小さな輪状星雲—においては、そのような本体が、外側のガス領域の支えの内部圧力を維持するために十分に不伝導でなければ、そのとき突然の崩壊が起こる。重力-電気の変化は、電位の欠けた広大な量の極小粒子をもたらし、またそのような粒子は、太陽内部から容易に漏れ、その結果、数日内に巨大な太陽の崩壊を引き起こす。それが、およそ50年前アンドロメダ星雲の巨大な新星の崩壊を引き起こしたこれらの

「逃亡粒子」のそのような移住であった。この広大な星の本体は、ユランチア時間の40分で崩れた。

41:8.4 (464.6) 原則として、物質の膨大な押出しは、星雲のガスの大規模な雲として太陽を冷やす残留物のまわりに存在し続ける。そして、このすべてが、およそ900年前にその起源を持ち、またこの不規則な星雲の固まりの中央近くに連れのない星としてまだ母球体を見せている蟹星雲のような不規則な星雲の多くの型の生まれについて説明する。

9. 太陽の安定性

41:9.1 (465.1) 大き目の太陽は、その光が強力なＸ線の援助だけで逃がれるそれらの電子への重力支配を維持する。これらの助力する光線は、全空間に浸透し、エネルギーの基本的究極子のつながりの維持に関係がある。最高温度—3,500万度以上—の到達後、太陽の初期における巨大なエネルギーの損失は、究極子漏出程には光による漏れではない。これらの究極子エネルギーは、若い太陽時代にエネルギーの紛れもない爆破として電子結合とエネルギー実体化の冒険に従事するために空間へと逃がれる。

41:9.2 (465.2) 原子と電子は、重力の影響を受ける。究極子は、局部重力、物質誘因の相互作用を受けないが、絶対密度か楽園重力への、つまり宇宙の中の宇宙の普遍かつ永遠の円方向の動向、揺れへの完全な従順である。究極子エネルギーは、近くの、または遠くの物質質量の線的、または、直接的重力の誘因に従わないが、始終、広範囲の創造の大きな楕円回路に忠実に揺れ動いている。

41:9.3 (465.3) 最初の10億年間、巨大な太陽は、初期の成長期間に驚くべき割合で物質を失うが、あなた自身の太陽の中心は、毎年およそ1,000億トンの実際の物質を発散する。内部の温度が最大に達し、原子内部で起こるエネルギーが放出されるようになると、太陽の生命は、安定するようになり、原子内部で起こるエネルギーが放出し始める。そして、より大きい太陽が痙攣性の脈動傾向にあるのは、まさしくこの限界点においてである。

41:9.4 (465.4) 太陽の安定性は、完全に重力熱の競合—創造し難い温度によって相殺される途方もない圧力—の間の均衡に依存している。太陽内部のガスの弾力性は、様々な物質の上にある層を支えており、また重力と熱が均衡状

態にあるとき、外側の物質の重さは、下に横たわる内部のガスの温度圧とまさに等しい。連続的重力凝縮は、多くの若い星の中で絶えず高める内部の温度を生じ、また内部の熱が増加するとき、超気体の風のＸ線内部の圧力がとても大きくなるので、太陽は、遠心性の動きに関連し、その外層を空間に払いのけ、その結果重力と熱の間の不均衡を是正し始める。

41:9.5 (465.5) あなた自身の太陽は、ずっと前にその膨張と収縮の周期間、つまり、多くのより若い星の巨大な脈動を引き起こすそれらの混乱の相対的な均衡に達した。あなたの太陽は、今、その60億年目を終えようとしている。現在、それは、最大の経済時代を通して機能している。それは、現在の効率で250億年以上も照らし続けるであだろう。それは、おそらくその若い時代と安定した機能の結合期間中、に等しい、部分的に効率的である衰退期間を経験するであろう。

10. 棲息界の起源

41:10.1 (465.6) 最大の脈動状態あるいはほぼその状態で、幾つかの変光星は、従属的体系をもたらす過程にあり、その

多くがやがては、あなた自身の太陽やその回転する惑星に非常に似てくるであろう。あなたの太陽は、大規模なアンゴナ体系が進入路近くへと揺れ始めたとき、ちょうど強力な脈動状態にあって、また太陽の外面は、連続的に流れる紛れもない延べ板状物質を噴出し始めた。これが、絶えず増加する激しさを最も近い同格にまで保ち続け、そしてその時、太陽熱結合限界に達し、物質の巨大な頂点が、太陽系の源が、吐き出される。同様の情況での引き付ける本体の最も近い接近は、時々、全惑星を、あるいは太陽の1/4か、1/3を引き上げる、取り除く。これらの主要な押し出しは、ある独特の雲に拘束された世界の型を、つまり木星と土星に非常に似た球体を形成する。

41:10.2 (466.1) 太陽系の大多数は、しかしながら、あなたのものとは似ても似つかない起源があり、これは、重力-干満方法による生ずるそれらのものにさえ当てはまる。だが、世界形成のいかなる方法を得ようとも、重力は、常に太陽系の創造の型を産み出す。すなわち、惑星、衛星、小衛星、および流星を伴う中央の太陽、あるいは暗い島を。

41:10.3 (466.2) 個々の世界の物理的局面が、大いに起源の様式、天文状況、および物理的環境を決定した。また、時代、規模、回転の速度、および空間を通る速度が、要素を決定している。気体収縮世界と固体増大世界の双方が、山により、水と空気により、それほど小さくない初期において、特徴付けられる。溶融-分裂世界と衝突世界には、時として大規模な山脈がない。

41:10.4 (466.3) これらのすべての新世界の初期において、地震は頻繁にあり、その初期のすべてにおいて、大きな物理的混乱が特徴的である。特にこれは、ガス収縮球に、すなわち一定の個々の太陽の早期の凝縮と収縮の結果として後に残される莫大な星雲の輪から生まれる世界に、該当する。ユランチアのような二重の起源を持つ惑星は、激しさと荒々しさの少ない若い進行を経験する。たとえそうだとしても、あなたの世界は、火山、地震、洪水、すさまじい嵐を特徴とする強力な隆起の初期段階を経験した。

41:10.5 (466.4) ユランチアは、サタニアの外れで比較的孤立しており、あなたの太陽系は、ただ1つを例外としてジェ

ルーセムから最も遠く、一方、サタニア自身は、ほとんどノーラティアデクの最も外側の体系のその内側にあり、また、このノーラティアデク星座は、今、ネバドンの外縁を通過している。あなたは、マイケルの贈与があなたの惑星を名誉ある位置と宇宙の大きな関心を集める位置へと高めるまで、実に、創造の最小の中にあった。時として、最後は最初であり、その上、本当に、最少は、最大になるのである。

41:10.6 (466.5) [ネバドンの力の中心者の長官との共同において大天使による提示]

論文 42
エネルギー—心と物質

42:0.1 (467.1) 宇宙の基礎は、エネルギーが全存在の基礎であるという意味において物質的であり、また純粋なエネルギーは、宇宙なる父により制御されている。原動力、エネルギーは、宇宙の絶対の存在と臨場を明示し、証明している永遠の記念碑として立つ一つのものである。楽園存在体から進行するエネルギーのこの広大な流れは、1度として消滅しなかったし、失敗決しなかった。無限の支えに中断は一度としてなかった。

42:0.2 (467.2) 宇宙エネルギーの操作は、常に個人の意志と宇宙なる父の全賢の命令に基づいている。顕示された力と循環エネルギーのこの人格的支配は、永遠なる息子の協調的行為と決定によるだけではなく、連帯動作主により行使された息子と父の結合目的によっても修正される。これらの神性の存在体は、個人的に、それに個人として機能する。宇宙の中の宇宙における永遠の、そして神性目的についてそれぞれがさまざまに表現しているほぼ無限の数の部下の人格と力においてもまた機能する。しかしながら、すべての原動力-エネルギーは、万物の中心で個人的な神の居住者の究極支配下にあるという声明の真実というものを、神性の力のこれらの機能的で暫定的変更、または変化が、決して揺るがすことはない。

1. 楽園の原動力とエネルギー

42:1.1 (467.3) 宇宙の基礎は物質的であるが、生命の本質は精霊である。また、精霊の父は、宇宙の始祖である。永遠の第一の息子の父は、最初の原型、すなわち楽園の小島の永遠の源でもある。

42:1.2 (467.4) 物質—エネルギー—の双方は、同じ宇宙現実のさまざまの顕現にすぎないのであるから、宇宙現象として宇宙なる父に固有である。「万物は彼にあって成り立っている。」物質は、固有のエネルギーを明らかにし自己充足的力を示すが、これらのすべての物理的現象に関係するエネルギーに関係ある重力の線は、楽園に由来し、楽園に依存している。究極子、すなわち測定可能のエネルギーの最初の型には、その核として楽園がある。

42:1.3 (467.5) ユランチアで知られていないエネルギーの型が、物質に固有で宇宙空間に存在する。最終的にこの発見がなされると、そのとき、物理学者達は、自分達が、少なくともほぼ物質の謎を解決したと感じるであろう。物理学者達は、そのようにして、創造者に1歩接近するであろう。そのようにして、神性技術のもう一つの相を習得するであろう。しかし、物理学者達は、いかなる意味においても神を見つけないであろうし、楽園の宇宙技術と宇宙なる父の動機づけの目的から切り離しては、物質の存在、または自然法の作用を確立もしないであろう。

42:1.4 (468.1) さらに大きい進歩とさらなる発見の後、ユランチアが、現在の知識との比較において測り知れなく進んだ後、人は、変更する物理的顕現の範囲で物質の電気構成単位のエネルギー公転の支配を獲得すべきであるとはいえ、—そのようなすべての可能な進歩の後にさえ、科学者は、物質の１原子を作成するか、エネルギーの１閃光、または我々が人生と呼ぶそれを物質に追加するには永遠に無力であろう。

42:1.5 (468.2) エネルギーの創造と生命の贈与は、宇宙なる父とその提携者である創造者の人格の特権である。エネルギーと生命の川は、神格からの連続した流出、つまり、全空間へ出て行く楽園の原動力の普遍的、かつ結合した流れである。この神性エネルギーは、すべての創造に浸透する。力のまとめ役は、それらの変化を起こし、エネルギーになる空間-原動力の変更を始める。力の管理者は、エネルギーを物質に変える。こうして、物質界が生まれる。生命運搬者は、我々が生命、物質的生命と呼ぶ死の物質における作用に着手する。モロンチアの力の監督者は、物質世界と精霊世界間の遷移領域の至るところで同様に機能する。より高い精神創造者は、神性のエネ

ルギーの型における同様の過程に着手し、知的生命のより高い精霊の型が続いて起こる。

42:1.6 (468.3) 神の系列にならって作成されたエネルギーは、楽園から進行する。エネルギー—純粋なエネルギー—は、神性組織の本質を帯びている。それは、3名の神の形で1つに包括された後に、宇宙の中の宇宙の本部で機能するように作成される。すべての原動力は、楽園で回路化され、楽園存在体から来ており、そこへ戻り、また本質的に自存の原因—宇宙なる父—の顕現である。その父なくして、何か存在するものが存在するであろうか。

42:1.7 (468.4) 自立自存の神格から得られる原動力は、それ自体でずっと存在する。原動力-エネルギーは、不朽、つまり不滅である。無限者のこれらの顕現は、無制限な変化、無限の変化、および永遠の変化を受けることがあるかもしれない。しかし、いかなる意味においても、いかなる度合においても、想像可能なほんのわずかな範囲でさえも、消滅を被ることはできないし、あるいは消滅を被らないであろう。しかし、エネルギーは、無限者から

生じるとはいえ、際限なく明白なわけではない。現在、思い描かれている主たる宇宙には、境界がある。

42:1.8 (468.5) エネルギーは、永遠であるが、無限ではない。それは、すべてを抱擁している無限者の把握に応じる。いつまでも、原動力とエネルギーは続く。原動力とエネルギーは、楽園から外へ出た後で、たとえ命じられた回路の完成に時代を重ねて必要とされてもそこへ戻らなければならない。楽園神格の起源であるそれは、楽園の目的地、あるいは神格目標しか持ち得ない。

42:1.9 (468.6) また、このすべてが、円形で、いくらか制限されており、しかし、規則的で広範囲の宇宙の中の宇宙についての我々の信念を支持する。これが本当でなかったならば、いつかエネルギー減少に関する証拠が遅かれ早かれ現れる。法、組織、行政、および宇宙探検家の証言のすべてが、今のところは無限の神の存在を示してはいるが、有限の宇宙、存在の無限の堂々巡りは、ほぼ限界がないが、とはいうものの無限とは対照的に有限である。

2. 宇宙の非精霊的エネルギー体系 **(**物理的エネルギー

42:2.1 (469.1) 原動力とエネルギーの様々な段階—物質的、心的、精霊的—を表したり、描写する適当な英語の言葉を見つけることは、実に難しい。これらの談話は、原動力、エネルギー、力についてのあなたの受け入れた定義に完全に添うわけではない。我々は、言葉不足のためにこれらの用語を多様な意味で使用しなければならない。例えば、この論文では、エネルギーという言葉は、現象的運動、作用、および可能性の総ての相と型の表現のために使用されるが、原動力は、エネルギーの前重力に、力は後重力に適用される。

42:2.2 (469.2) 私は、しかしながら、宇宙の原動力、発生エネルギー、および宇宙の原動力—物理的エネルギー—の次のような分類の採用を勧めて概念的混乱を少なくしようと心掛ける。

42:2.3 (469.3) 1. 空間の可能性。これは、無特質絶対者の疑いのない自由な空間臨場である。この概念の拡張は、無特質絶対者の機能的全体性に固有の宇宙の原動力-空間の可能性を意味するが、この概念の意味は宇宙現実の全体性—宇宙—を含意し、宇宙は、決して始まらず、決し

て終わらず、決して動かず、決して変わらない楽園の小島から永遠に流出している。

42:2.4 (469.4) 楽園の下方に特有の現象は、おそらく絶対的原動力の臨場と働きの3圏を擁する。無特質絶対者の支持圏、楽園自身の小島圏、およびある未確認の均等化と政府機関、あるいは機能の介入圏。これらの3同心圏は宇宙現実の楽園周期の中心である。

42:2.5 (469.5) 空間の可能性は、前現実である。それは、無特質絶対者の領域であり、第一の主たる原動力の組織者の臨場により変更可能に思えるにもかかわらず、宇宙なる父の人格的把握のみに反応する。

42:2.6 (469.6) ユヴァーサでは、空間の可能性は、アブソリューターとして言及する。

42:2.7 (469.7) 2. 根本的な原動力。これは、空間の可能性における最初の基本的変化を表しており、無特質絶対者の下方楽園の機能の1つであるかもしれない。我々は、下方楽園から出発する空間存在は、入来するそれから何らかの方法で変更されるということを理解している。しか

し、いかなるそのような可能な関係にもかかわらず、根本的な原動力への空間の可能性の公然に認識された変化は、楽園原動力の生きた組織者の緊張-臨場の、を区別する主な機能である。

42:2.8 (469.8) 受け身で潜在的な原動力は、発現するに至った第一の主たる原動力の組織者の空間臨場により付与された抵抗に反応して活動的になり根本的となる。原動力は、現在、無特質絶対者の占有的領域から多重反応—活動の神により開始されたある主要な運動への反応、またそこですぐに宇宙の絶対から放射する相殺運動への反応—の領域に登場している。根本的原動力は、外観上は絶対性に比例して先験的作用に反応している。

42:2.9 (469.9) 根本的原動力は、時として純粋なエネルギーとして述べられる。我々は、ユヴァーサではセグリガタとしてそれに言及する。

42:2.10 (470.1) 3. 発生エネルギー。第一原動力の組織者の受け身の存在臨場は、空間の可能性を根本的な原動力に変えるに十分であり、これらの同じ原動力の組織者が、彼らの初期の、かつ活発な操業を開始するのは、そのような

活性空間領域においてである。根本的原動力は、宇宙の力として現れる以前にエネルギー発現の領域での2つの異なる変化相を通過する運命にある。これらの出現するエネルギーの2段階は、次の通りである。

42:2.11 (470.2) a. 勢力の強いエネルギー。これは、強力な-方向性の、大量の-動かされる、移動される、膨大に-張力をかけられた、そして強制的-反応的エネルギー—第一原動力のまとめ役の活動により発動される巨大なエネルギー体系—である。この第一の、または勢力の強いエネルギーは、楽園の下側から作用している絶対影響の共同集団へのおそらくは統合-質量の、あるいは空間の-方向性の反応をもたらすとはいえ、最初は完全には楽園-重力牽引に反応を示さない。エネルギーが、楽園の円の、絶対重力の把握への初期の反応の段階に現れると、第一原動力のまとめ役は、２次の仲間の機能に交代する。

42:2.12 (470.3) b. 重力エネルギー。今登場の重力反応エネルギーは、宇宙の力の可能性を携行し、全宇宙物質の活発な先祖になる。この２次的あるいは重力エネルギーは、先験的主たる原動力の準組織者により組成された圧力臨場

と緊張傾向から生じるエネルギー合成の産物である。空間-エネルギーは、これらの力の操縦者の仕事に呼応して勢力ある段階から重力の段階へと急速に移り、こうして楽園の(絶対)重力の円形の握りに直接対応するようになり、同時にエネルギーと物質にある電子と後電子段階のやがて現れる材質量に固有の線重力牽引への感度のある種の可能性を明らかにする。もし宇宙の力のまとめ役が、重力反応の出現に際しその活動範囲に割り当てが可能であるならば、主たる原動力の准組織者は、空間のエネルギーのサイクロンから退くかもしれない。

42:2.13 (470.4) 我々は、原動力の進展の初期段階の正確な要因に関し全く確信はないが、発生-エネルギー顕現の両段階における究極なものの知的活動だと認識する。集合的に見なされるとき、勢力の強いエネルギーと重力エネルギーは、ユヴァーサにおいてはアルティマタとして述べられる。

42:2.14 (470.5) 4. 宇宙の力。空間-原動力は、空間エネルギーへと、そこから重力制御のエネルギーへと変えられた。その結果、物理的エネルギーは、それを力の経路へと導

き、宇宙の創造者の多目的に役立たせることができる程度へと発展したのであった。この仕事は、壮大な宇宙の物理的エネルギーに関わる多才の監督、中心者、制御者により継続される。—組織化され居住者のいる創造物。これらの宇宙の力のまとめ役は、7超宇宙の現在のエネルギー体系を構成するエネルギーの30相のうち21相の多少なりとも完全な調整を引き受ける。力-エネルギー-物質のこの領域は、時-空間の婉曲的支配下で機能する崇高なものの七重者の知的活動の領域である。

42:2.15 (470.6) ユヴァーサでは、我々は、宇宙の力の領域をグラヴィタと呼ぶ。

42:2.16 (470.7) 5. ハヴォーナエネルギー。この談話は、変化する空間-原動力が宇宙の時空間のエネルギー-力の作業段階へと追跡される一方で、概念的には段階ごとに楽園方向に動いてきた。楽園方向に続けて行き、次に、中央宇宙に特有のエネルギーの前存在相に遭遇した。ここでは、進化の周期は、それ自体を逆行しているかに見える。エネルギー-力は、今、原動力に向かい揺り戻し始めるように見えるが、原動力の種類は、空間の可能性と

根本的な原動力のそれとは非常に異なる。ハヴォーナエネルギー体系は二重ではない。それらは三位一体である。これは、楽園三位一体のために機能する連帯動作主の存在エネルギー領域である。

42:2.17 (471.1) ハヴォーナのこれらのエネルギーは、ユヴァーサではトライアタとして知られる。

42:2.18 (471.2) 6. 先験的エネルギー。このエネルギー体系は、楽園の上層部において、またそこから作用し、その上、準絶対民族だけに関係して作用する。それは、ユヴァーサではトラノスタと命名されている。

42:2.19 (471.3) 7. モノタ。エネルギーは、それが楽園エネルギーであるとき、神性に近い身内、に近いである。我々は、モノタは楽園の生きた非精霊のエネルギー—第一の息子の生きた精霊の永遠対応者—したがって、宇宙なる父の非精霊のエネルギー体系であるという信念に傾きがちである。

42:2.20 (471.4) 我々は、楽園の精霊と楽園のモノタとの本質を見分けることができない。それらは、明らかに似てい

る。それらは、異なる名前をもつが、精霊的、また非精霊的顕示が単に名前で区別可能である現実についてあなたにはほとんど話すことはできない。

42:2.21 (471.5) 我々は、有限の被創造物が、七重の神と思考調整者の聖職活動を経て宇宙なる父の崇拝経験に達することができるということを知っているが、我々は、いかなる準絶対人格も、力の管理者さえも、第一根源と中枢のエネルギーの無限を理解することができるとは思わない。1つの事が確かである。もし力の管理者が、空間-原動力の変化の技術に詳しいとしても、我々残りのものには秘密を明らかにはしない。力の管理者は、原動力の組織者の機能を完全に理解してはいないというのが、私の意見である。

42:2.22 (471.6) 力の管理者自身が、エネルギー触媒作用者である。すなわち、彼らは、自身の臨場の単位構成においてエネルギーに区分化、組織化、集合化を引き起こす。そして、このすべてが、こうして力の実体の臨場における機能を引き起こすエネルギーに固有の何かがあるに違いないということを仄めかす。ネバドンのメルキゼデク系

は、ずっと以前、宇宙の力への宇宙原動力の変換現象を「神性の7つの無限」の中の1つとして命名した。そして、それが、あなたの地方宇宙上昇の間にあなたがこの点に進む範囲である。

42:2.23 (471.7) 我々は、宇宙原動力の起源、性質、および変化を完全に理解しできない無力にもかかわらず、その直接の、しかも紛れもない反応の時代から楽園重力活動への発生するエネルギー作用の全相—超宇宙の力の管理者の機能のほぼ始まりの時間—に完全に精通している。

3. 物質の分類

42:3.1 (471.8) 全宇宙の物質は、中央宇宙を除いては同じである。その物理的特性における物質は、ユランチアではまだ未知のある種の力の存在のみならず、その構成部分の回転速度、回転部分の数と規模、核小体、または物質の空間含量からの距離次第である。

42:3.2 (471.9) 様々の太陽、惑星、空間の物体には、物質の重要な10区分がある。

42:3.3 (472.1) 1. 究極子物質—物質的存在の主要な物理構成単位、電子を構成するエネルギー粒子。

42:3.4 (472.2) 2. 亜電子物質—太陽のスーパーガスの爆発的で反発的段階。

42:3.5 (472.3) 3. 電子物質—物質分化の電気段階—電子、陽子、および電子集団の様々な構成にいたる他の様々な構成単位。

42:3.6 (472.4) 4. 亜原子物質—熱い太陽内部において広範囲に存在する物質。

42:3.7 (472.5) 5. 粉々の原子—冷却中の太陽と、空間の至るところに見つけられる。

42:3.8 (472.6) 6. イオン化物質—電子の、熱の、またはX線活動による、および溶媒によるそれらの外の(化学的に活動している)電子の奪い取られた個々の原子。

42:3.9 (472.7) 7. 原子物質—基本的組織の、分子の、あるいは可視物質の構成単位の化学段階。

42:3.10 (472.8) 8. 物質の分子段階 —通常の条件のもとで比較的に安定した物質化状態でユランチアに存在するような物質。

42:3.11 (472.9) 9. 放射性物質—緩やかな熱と減少した重力圧の状態のもとでのより重い要素の無秩序の傾向と動き。

42:3.12 (472.10) 10. 崩壊物質—冷たい、あるいは死んだ太陽内部に見られる比較的静止した物質。この型の物質は、実際には静止していない。何らかの究極子活動、電子活動すらまだあるが、これらの構成単位は、非常に緊密な近接状態にあり、その回転速度は、大いに減少する。

42:3.13 (472.11) 前述の物質の分類は、創出された存在へのその外見の型よりも、むしろその組織に関係する。エネルギーの前発生段階も楽園上と中央宇宙における永遠の物質化も考慮には入れていない。

4. エネルギーと物質変化

42:4.1 (472.12) 光、熱、電気、磁気、化学的性質、エネルギー、および物質は、—起源、性質、目標において—ユ

ランチアで今なお発見されていない他の物質的現実とともに同一物である。

42:4.2 (472.13) 我々は、物理的エネルギーが受け得る無限に近い変化を完全に理解するというわけではない。それは、ある宇宙においては光として、別の宇宙においては光と熱として、他の宇宙においてはユランチアでは知られていないエネルギーの型として見える。膨大な年数の間、物理的エネルギーは、絶え間なく動き波打つ電気エネルギーの何らかの型、あるいは磁気力として再発生するかもしれない。なお後になっても、それは、一連の変化に直面しながら何らかの型の可変物質としてその後の宇宙の中に再び現れ、そして領域の何らかの大変動でその外へ向かう物理的消滅がその後に続くかもしれない。次いで、数限りない時代、また、数限りないと言ってもいいほどの宇宙をさ迷った後、この同じエネルギーは、再現し、その型と可能性を何度となく変えるかもしれない。そのようにして、これらの変化は、連続する時代と無数の領域を経て続いていくのである。このようにして物質は、時間の変化を受けつつも常に永遠なる円に従って揺れ通過し続ける。それは、長きにわたりその源泉への回

帰を妨げられようとも、それに対し常に反応し、それを放った無限人格により定められた道を進み続ける。

42:4.3 (473.1) 力の中心者とその仲間は、究極子を電子の回路と回転に変形する仕事に非常に関係がある。これらの独特の存在体は、具体化されたエネルギー、究極子の基本単位の巧みな操作によって力を制御し統合する。それらは、この本来の状態で循環するとき、エネルギーの名人である。それらは、物理制御者と連係し、電気段階、いわゆる電子段階に変形した後にさえエネルギーを有効に制御したり導いたりできる。しかし、電子的に組織されたエネルギーが原子力体系の回転に揺れ動くとき、それらの活動範囲はすこぶる縮小される。これらのエネルギーは、そのような物質化の際、線重力の牽引力の完全な把握に陥る。

42:4.4 (473.2) 重力は、力の中心者と物理制御者の力の線とエネルギー回路に積極的に作用するが、これらの存在体には、重力への負の関係—反重力授与の実行—しかない。

42:4.5 (473.3) すべての空間に渡り、冷気の影響力と他の影響力は、創造的に究極子を電子へ編成する仕事中である。熱は、電子活動の尺度であり、冷気は、単に熱の欠如—比較エネルギーの休息—を意味する。発生エネルギーも組織された物質も存在せず、重力に応じていないときの空間の宇宙の原動力蓄積の状態。

42:4.6 (473.4) 重力臨場と活動は、理論上の絶対零度の状況を阻むことである。というのも、恒星間の空間には絶対零度という温度はないのであるから。すべての組織化された空間には、組織化する電子エネルギーのみならず重力に応じているエネルギーの流れ、力の回路、究極子活動がある。事実上、空間は空洞ではない。ユランチアの大気でさえ、宇宙のこの区域の平均的空間物質へと溶け込み始め、およそ4,800キロメートルまでますます減少していく。ネバドンで知られているほぼ空である空間は、各立方インチ当たりおよそ100究極子—1個の電子に相当—をもたらすであろう。物質のそのような希少性は、事実上は空間と見なされる。

42:4.7 (473.5) 温度—熱と冷気—は、エネルギーと物質発展の領域においては重力が唯一である。究極子は、気温の両極端につつましく、控え目に服従する。低温は、一定の形式の電子構造と原子組成を好み、高温は、諸々の原子分裂と物質分解を容易くする。

42:4.8 (473.6) 太陽が一定の内部状態の熱と圧力を条件とするとき、物質の本来のつながりを除く全ては、壊れるかもしれない。熱は、こうして重力の安定性に大きく打ち勝つことができる。しかし、知られているいかなる太陽熱も圧力も、究極子を力の強いエネルギーに変換し返すことはできない。

42:4.9 (473.7) 灼熱の太陽は、物質を様々な型のエネルギーに変換できるが、暗い世界と全外部空間は、これらのエネルギーを領域の物質へ変換する程度にまで電子と究極子の活動を減速させることができる。核物質の基本的関係を初めとした近い性質のある種の電子結合は、空間のきわめて低い温度で形成され、具体化するエネルギーのより大きい付着との関係によって後に増大される。

42:4.10 (473.8) 我々は、エネルギーと物質のこの果てしない変化のすべてを通じて、一定の温度、速度、回転条件下にある重力圧の影響と究極子エネルギーの反重力の作用を考慮しなければならない。温度、エネルギーの流れ、距離、および生きている力のまとめ役と力の管理者もまた、エネルギーと物質のすべての変化現象に係わりがある。

42:4.11 (474.1) 物質の質量の増大は、光速度の二乗で割られるエネルギーの増大に等しい。力学的意味において休息中の物質ができる仕事は、楽園からその部分を集める際に費やされるエネルギーから移動中の原動力の抵抗克服と物質の部分影響し合う誘因とを差し引いたものに等しい。

42:4.12 (474.2) 物質の前電子の型の存在は、鉛の２原子量により示される。鉛の原構成は、それがラジウム放射を経てウラニウム分解で産出されたものよりわずかに重い。また原子量のこの違いは、原子粉砕におけるエネルギーの実際の損失を表す。

42:4.13 (474.3) 物質の相対的完全さは、エネルギーは、ユランチアの科学者が命名したそれらの正確な量子にしか吸収されないか、またはそれらにしか放出されないという事実によって保証される。物質的領域におけるこの賢明な対策は、継続的活動体として宇宙の維持に役立つ。

42:4.14 (474.4) 電子の、または他の位置が移行する際、取り込むか、または放たれるエネルギー量は、必ず「量子」、またはその何らかの倍数であるが、エネルギーのそのような構成単位の振動の、または波状の動きは、関係する物質構造の次元に従って完全に決定される。そのような波状エネルギーは、究極子、電子、原子、あるいは、このようになされている他の構成単位の直径の860倍である。量子の動きの波動力学の観測に伴う果てしなき混乱は、エネルギー波の付加の結果である。２倍の高さの波頭を作るには２つの波頭の結合でできるが、１つの波頭と谷は結合するかもしれないし、その結果、相互取り消しを起こすかもしれない。

5. 波動エネルギーの発現

42:5.1 (474.5) オーヴォントンの超宇宙には100オクターブの波動エネルギーがある。これらのエネルギー発現の100の集合体の中の64は、ユランチアでは、完全に、または部分的に認識されている。太陽光線は、このシリーズの46番目である超宇宙規模においては4オクターブを構成し、そのうちの1オクターブを擁するのは可視光線である。紫外線グループが次に来、その上、10オクターブ上にはX線があり、ラジウムのガンマ線がその後に続く。太陽の可視光線の上の32オクターブは、非常に活発化された物質の微小粒子ととても頻繁に混合された外部空間エネルギー光線である。可視光線から次の下方には、赤外線があり、30オクターブ下には電波集合体がある。

42:5.2 (474.6) 波状エネルギーの発現—20世紀のユランチアの科学的啓発の見地からの—は、次の10集合体に分類できる。

42:5.3 (474.7) 1. 究極子外光線—明確な型を取り始めるときの究極子の境界での回転。これは波状現象が認められ、測定できる発生エネルギーの第一段階である。

42:5.4 (474.8) 2. 究極子光線。究極子の極小球へのエネルギーの組み立ては、認識でき測定できる隙間に振動をもたらす。物理学者が究極子を発見するずっと以前、光線がユランチアに注ぐ間、物理学者は、確かにこれらの光線の現象を検出するであろう。短くて強力なこれらの光線は、物質の電子組織へと向きを変えるその程度にまで減速されるとき、究極子の初期の活動を表す。究極子が電子へと統合するとき、エネルギー蓄積の結果、凝縮が起こる。

42:5.5 (475.1) 3. 短期空間光線 。これらは、純粋に電子である全振動の中で最短のものであり、この型の物質の核以前の段階を表す。これらの光線は、その生産のために異常に高いか、または低い温度を必要とする。空間光線には2種類ある。原子誕生への付随と他の原子分裂の表示。それらは、外端宇宙の最大密集平面でもある超宇宙の最大密集平面から、つまり銀河から最も大量に放射する。

42:5.6 (475.2) 4. 電子段階。エネルギーのこの段階は、7超宇宙におけるすべての物質化の基礎である。電子が、軌道回転のエネルギーの高い段階から下の段階へと通過すると

き、量子はつねに放出される。電子の軌道移行は、光エネルギーの非常に明確で一定の測定可能な粒子の射出、または吸収をもたらし、一方、個々の電子は、つねに光エネルギーの粒子を与える。波状エネルギーの発現は、正の物体と電子段階の他の部分の履行に伴う。

42:5.7 (475.3) 5. ガンマ線—原子物質の自然発生的な解離を特徴付けるそれらの放射。この形式の電子活動の最も良い例は、ラジウム分裂に関連づけられる現象にある。

42:5.8 (475.4) 6. X線集団。電子の減速の次の段階は、人工的に生成されたX線と共に太陽X線の様々な型をもたらす。電荷は電界を作り出す。動きは電流をもたらす。電流は磁場を引き起こす。電子が突然止められると、結果として起こる電磁動乱は、X線を発生させる。X線はその撹乱である。太陽X線は、それらがほんの少し長いということを除いては、人体内部診査のために機械的に発生されるそれと同じである。

42:5.9 (475.5) 7. 太陽光と様々な機械的創作の紫外線あるいは化学線。

42:5.10 (475.6) 8. 白色光—太陽の可視の光全体

42:5.11 (475.7) 9. 赤外線—まだ感知できる熱の段階に近い電子活動の減速。

42:5.12 (475.8) 10. ヘルツ波—ユランチアで放送用に利用されるそれらのエネルギー。

42:5.13 (475.9) 波状エネルギー活動のこれらの全10相中、人間の目はわずかに1オクターブ、通常の全日光にだけ反応できる。

42:5.14 (475.10) いわゆるエーテルは、空間で起こる原動力活動とエネルギー活動の塊まりを表す単なる集合的名称である。エネルギーの究極子、電子、および他の大規模な集合は、物質の一定粒子であり、空間通過において実際には直線で進む。光と他のすべての型の認識可能なエネルギー発現は、重力と介入する他の原動力により変更される以外には、直線で進む一連の明確なエネルギー粒子から成る。一定の観察対象にあるときエネルギー粒子のこれらの行列が波の現象として現れるのは、すべての空間、想定上のエーテルの非分化力の毛布の抵抗のためで

あり、また、物質の関連する塊まりからくる重力間の張力のためである。物質の粒子間の隙間は、エネルギー光線の初期速度と共に多くの型のエネルギー物質の波動の様相を確立する。

42:5.15 (476.1) 空間内の励起は、ちょうど水を行く船の通過が異なる振幅と間隔の波を起こすように、急速に動く物質の粒子の通過への波状反応を起こす。

42:5.16 (476.2) 根本的な原動力の動きは、あなたの仮定のエーテルに類似の多くの方法である現象を起こすのである。空間は空ではない。すべての空間の球体は、広がる原動力-エネルギーの広大な海洋に渡って回転し突入する。原子の空間内も空ではない。にもかかわらず、エーテルは存在せず、また、この仮定的エーテルの不在こそが、棲息惑星が太陽に落ちることを逃れ、また包囲電子が核に落ちることへの抵抗を可能にする。

6. 究極子、電子、および原子

42:6.1 (476.3) 宇宙原動力の空間蓄積は、均質で画一的であるが、物質へ発展した、進化した、エネルギーの組織化

は、明確な大きさと確立した重さの別々の塊まりへのエネルギー集結を必要とする—正確な重力反応。

42:6.2 (476.4) 局部的、または線的重力は、物質の原子組織の出現とともに完全に作用するようになる。核以前の物質は、X線と他の同様のエネルギーにより活性化されるとわずかに重力に反応するようになるが、どんな測定可能な線重力牽引力も、自由で、結合していないし、蓄積されていない電子エネルギー粒子、または、単独の究極子には感化を及ぼさない。

42:6.3 (476.5) 究極子は、相互引力により機能し、円形の楽園-重力牽引力だけに応じる。それは、線重力反応がなければ、このようにして宇宙の空間流動の中で保持される。究極子は、部分的反重力運動にまで回転速度を加速できるのだが、原動力のまとめ役か力の管理者に関係なくしては、没個性化の重要な、臨界、脱出速度に到達する、つまり勢いのあるエネルギー段階へ戻ることができない。本質的に究極子は、冷えて絶滅しかけている太陽の末期の崩壊に関係する際に限り物理的存在状態から逃げる。

42:6.4 (476.6) ユランチアにおいては未知の究極子は、電子組織への回転エネルギーの前提条件に達する前の物理的活動の多くの段階を経て減速する。究極子には3つの異なる動きがある。宇宙の原動力への相互抵抗、反重力の個々の回転、相互結合された100の究極子の電子内の位置。

42:6.5 (476.7) 相互の引力は、電子構成における100究極子を結合する。また、典型的な１個の電子中の究極子は、決して100以上でも100以下でもない。1個、あるいはそれ以上の究極子の損失は、電子の典型的な独自性を破壊し、こうして電子の変更された10の型の1つを生み出す。

42:6.6 (476.8) 究極子は、電子内の軌道を運行しないし、あるいは回路内で回転しないが、自己の軸回転の速度に従って広がるか、群がるかして、特異な電子の大きさが決まる。また、軸回転のこの同じ究極子の速度は、幾つかの電子構成単位の型の正、あるいは負の反応を決定する。電子物質の全体の隔離と組み分けは、エネルギー物質の正や負の物体の電気分化と共に、究極子の構成要素の相互結合のこれらの様々な機能から生じる。

42:6.7 (477.1) 各原子は、直径1インチ、2.54センチメートルの1/100,000,000をわずかに超え、一方電子は、最小原子の水素の1/2,000よりほんの少し重い。原子核の特性である正陽子は、もはや陰電子より大きくないかもしれないが、ほぼ2,000倍以上の重さがある。

42:6.8 (477.2) もし物質の質量が、電子の質量の2.83グラムと等しくなるまで拡大され、次に大きさが比例して拡大されるならば、そのような電子の体積は、地球の体積と同じ規模になるであろう。陽子の体積—電子の1,800倍の重さ—が、１個のピンの頭の大きさに拡大されるならば、そこでピンの頭は、比較して、太陽の周りの地球の軌道の直径に等しいであろう。

7. 原子物質

42:7.1 (477.3) 全物質の構成は、太陽系の配列に似ている。エネルギーのあらゆる微小宇宙の中心は、比較的安定し、割り合いに静止している物質存在の核の部分がある。この中央の構成単位は、３重の発現の可能性を備えもっている。あなた自身の太陽系のような何らかの星明りの集団の太陽を包囲するかすかに惑星に匹敵するエネルギー

構成単位が、無限に豊富に、だが変動する回路の中で、このエネルギーの中心を囲みつつ渦巻いている。

42:7.2 (477.4) 電子は、惑星が太陽系の空間で太陽の周りを回るときに持つ空間とほぼ同程度の余裕をもち、原子内部で中央の陽子の周囲を回転する。実際の大きさに比較して、内側の惑星、水星、そしてあなたの太陽の間に存在しているように、同比率の距離が、原子核と電子の内側の回路の間にある。

42:7.3 (477.5) 構成要素の究極子の速度は言うまでもなく、電子軸の回転と原子核の回りの各軌道速度は、ともに人間の想像を超えている。ラジウムの正の粒子は、1秒あたり16,093キロメートルの割合で空間に飛びかうが、負の粒子は、光速度に近似する速さに達する。

42:7.4 (477.6) 地方宇宙は、10進構成である。二重宇宙には見分けのつく空間-エネルギーのちょうど100の原子物質化がある。それは、ネバドンでの物質の最大可能な構成である。これらの100個の物質の型は、中央の、しかも比較的密に詰まった核の周囲を回転する1個から100個の通

常の電子の一続きから成る。様々なエネルギーが、この規則的で頼れるつながりにおいて、物質を構成する。

42:7.5 (477.7) あらゆる世界が、その表面に100個の認識可能な要素を見せるというわけではないが、それらは、どこかに臨場し、臨場してきたし、あるいはまた、発展の過程にある。惑星の起源とその後の発展を取り巻く状況が、100個の原子の型の中の幾つが観察可能になるかを決定する。重い原子は、多くの世界の表面では見られない。知られているより重い要素は、ユランチアにおいてさえラジウムの動きに例証されるように、粉々になる傾向を明らかにしている。

42:7.6 (477.8) 原子の安定性は、中心本体における電気的に不活発な中性子の数次第である。化学反応は、自由に回転している電子の活動に完全に依存している。

42:7.7 (478.1) 1原子体系中の100の軌道の電子への自然的集合は、オーヴォントンでは決して起こり得なかった。101個が人工的に軌道の領域に取り入れられたとき、結果は、つねに電子と他の解放されたエネルギーの激しい散

乱を伴うほとんど瞬時に起こる中心陽子の分裂であった。

42:7.8 (478.2) 原子が、1個から100個の軌道電子を包含するかもしれない一方で、別個の、離散的な物体としてより大きい原子の外側の10個の電子だけが、異なる個々の塊まりとして中央の核の周りを回転、つまり明確で具体的な軌道の周囲を維持しつつ、しかも密集して揺れ動く。中心に最も近い別々の、組織化された塊まりとして30個の電子を観測、または探知することは難しい。核近接の行動に関する電子の動きのこの同比率が、抱き込まれた電子の数には関係なく、すべての原子の中に得られる。核が近ければ近いほど、電子の個体性はない。１電子の波状エネルギーの伸張は、より少ない原子軌道全体を占領するほどに広がるかもしれない。これは、特に、原子核に最も近い電子にあてはまる。

42:7.9 (478.3) 最も内側の30個の軌道電子には固体性があるが、そのエネルギー体系は、電子から電子へ、またほとんど軌道から軌道へと広がり、混ざり合う傾向にある。付随するエネルギー体系より完全な支配を及ぼす物質の

塊まりである次の電子30個は、2番目の家族、またはエネルギ一圏を構成し、前進する個体性をもっている。次の電子30個、3番目のエネルギ一圏は、さらに個別化され、より異なって明確な軌道を循環する。10個の最重量の要素だけに存在する最後の電子10個は、独立の尊厳をもち、従って母核の支配から多少自由に脱出できる。温度と圧力の最小変化で、この4番目の、しかも最も外側の集団の電子は、ウランや同様の要素の自然発生的な分裂に例証されるように、中央の核の握りから逃れるであろう。

42:7.10 (478.4) 1個から27個の軌道電子を含む最初の27原子は、残りの原子よりも理解が容易である。我々は、28個から上は、無特異絶対者の想定される臨場のますます多くの予測不可能性に遭遇する。何らかの電子のこの予測不可能性は、特異な究極子軸の回転速度と究極子の説明のつかない「寄せ合い」傾向のためである。他の影響—物理、電気、磁気、重力上—もまた、定まらない電子の動きを起こすように作動する。それゆえ原子は、予見性に関しては人々に似通っている。統計学者は、単一の個々の原子、あるいは人ではなく、複数の原子か人々の

いずれかの多くを統制している法則を発表するかもしれない。

8. 原子結合

42:8.1 (478.5) 重力は、原子エネルギー体系の結合に関係する幾つかの要素の1つであるが、これらの基本的な物質単一体の中に、また、それに混じって、基本的構成の秘密と究極の動きの秘密をもつ強力で未知のエネルギーが、つまりユランチアで発見されていない原動力もまたある。この普遍の影響は、この小エネルギー組織の中に抱擁される全空間に浸透する。

42:8.2 (478.6) 1原子の電子間の隙間は、空ではない。原子の中でのこの電子間の隙間は、電子速度と究極子回転に完全に一致した波状の顕現により活性化される。この原動力は、正の引力と負の引力ついてのあなたの認識する法則により完全に支配されるのではない。したがってその動きは、時として予測できない。名前のないこの影響は、無特異対者の空間原動力の反応であるかに思える。

42:8.3 (479.1) 原子核の電荷された陽子と電荷されていない中性子は、電子の180倍重い物質の粒子である中間子の交

換作用により結合される。陽子のもつ電荷は、この仕組みなしには原子核に破壊をもたらすであろう。

42:8.4 (479.2) 電気力も重力も、原子が構成されるようには核を結合することはでできない。核の保全は、中間子の相互的結合機能により維持されており、原動力物質の優れた力により、また陽子と中性子の絶えまない場所の入れ替えを引き起こすさらなる機能により電荷された、あるいは電荷されていない粒子を結合できる中間子は、陽子と中性子間で核粒子の電荷が前後に絶え間なく投げられるようにする。1秒という極小の瞬間、特定の核粒子は、電荷された陽子であり、次の瞬間は電荷されていない中性子である。そして、これらの交互のエネルギー状態は、信じられないほどに急速であるので、電荷が破壊的な影響として機能するすべての機会を奪われるほどである。中間子は、このように原子の核安定性に勢いよく貢献する「エネルギー運搬」粒子として機能するのである。

42:8.5 (479.3) また、中間子の臨場と機能は、別の原子の謎についても説明する。原子は、放射能のように、放射線と

して、放射活性で働くとき予想よりはるかに多くのエネルギーを放つ。この余分の放射は、その結果単なる電子になる中間子の「エネルギー運搬」の崩壊から得られる。中間子壊変は、一定の電荷されていない小粒子の放出もまた伴う。

42:8.6 (479.4) 中間子は、原子核のある種の粘着性を説明するものの、陽子と陽子の結合や中性子と中性子の付着を明らかにするものではない。原子の凝集の完全性をもたらす矛盾した、しかも強力な原動力は、ユランチアでは、今のところはまだ、未知のエネルギーの型である。

42:8.7 (479.5) これらの中間子は、あなたの惑星に絶えず影響を及ぼす空間光線に豊富に見られる。

9. 自然哲学

42:9.1 (479.6) 宗教が、唯一独断的であるのではない。自然哲学も、同様に独断的主張をする傾向がある。一人の高名な宗教教師が、人間の頭には7つの隙間があるので数字の7が自然にとって基本的であると結論づけるとき、化学についてさらに知っていたならば、物質界の正確な現象に基づいて築かれるそのような信念を提唱するかもし

れなかった。時間と空間の物理的全宇宙には、エネルギーの10進法構成の普遍的発現にもかかわらず、前物質の七重の電子組織には、現実の遍在的暗示がある。

42:9.2 (479.7) 数字の７は、中央宇宙と性格の先天的伝播に関する精霊体系の根底とをなすが、数字の10、10進法は、エネルギー、物質、および物質的創造に固有である。にもかかわらず、原子の世界は、7つの塊まり—この物質界によって伝えられるその遠く離れた精霊の起源を暗示する母斑—で繰り返されるある周期的特徴づけを提示しているのである。。

42:9.3 (480.1) 創造的構成のこの七重の連続性は、基本元素がそれぞれの原子の重さ順に配置されるとき、7個ごとの特定周期において同様の物理的、化学的特性の反復として化学領域に表れる。ユランチアの化学元素は、このようにして連続的に配列されるといかなる特定の性質、あるいは特性も、7個ごとに繰り返される傾向がある。この周期的変化は、元素表全体に渡り7個ごとに漸減的に、また変化をもって繰り返され、初期の、あるいは軽い原子団の中に最も著しく観察可能である。ある1特性

への注目後、いずれかの1元素から始めるとき、そのような性質は、6個の連続する要素を経る間に変わるであろうが、8番目に達すると、それは再現する傾向にあり、すなわち化学的に活発な8番目の原素は1番目に、9番目は2番目に、という具合に類似している。物質界のそのような事実は、紛れもなく先祖のエネルギーの七重構成を指しており、時間と空間の創造の七重の多様性をもつ基本的現実を暗示している。人には、また自然の帯域には7つの色があるということに注目すべきである。

42:9.4 (480.2) 自然哲学の全仮定が、正当であるという訳ではない。例えば、人が空間現象についての自らの無知を統一する巧妙な試みを表す仮定上のエーテル。宇宙哲学は、いわゆる科学の観測に基づくことができない。科学者は、もしそのような変態を見られないならば、ややもすればイモムシからの蝶の発育の可能性を否定するであろう。

42:9.5 (480.3) 生物学上の融通性に関連した物理的安定性は、現実には創造の主たる建築者が所有するほとんど無限の知恵により存在している。先験的な知恵のみが、同時に

非常に安定し効果的に順応性のある物質単位を設計することができた。

10. 宇宙の非精霊エネルギー体系 (物質的心の体系)

42:10.1 (480.4) 楽園のモノタの絶対性から空間の可能性の絶対性までの相対的宇宙の現実の無限の全景は、第一根源と中枢の非精霊現実_—つまり空間の可能性に隠され、モノタで明らかにされ、また介在する宇宙段階で暫定的に明らかにされているそれらの現実—との関係における一定の発展を連想させる。エネルギーのこの永遠の周期は、宇宙の父の中に回路化されているので、絶対であり、絶対であるが故に、事実においても価値においても広げられないのである。にもかかわらず、第一の父は、今でも、—いつものように—絶えず広がる時-空間の活動領域の意味、また時-空間を超越した意味の自己実現をしている。すなわち、エネルギー-物質が、生きた、しかも人格の心の経験的努力をして、生きた、しかも神性である精霊の婉曲的支配への前進的に従属である活動領域。

42:10.2 (480.5) 宇宙の非精霊エネルギーは、様々な段階における非創造者の心の生ける体系で再結合されており、そのうちの確かなものは次のように表現されるかもしれない。

42:10.3 (480.6) 1. 前調整-精霊心。この段階の心は、非経験であり、棲息界においては物理の主たる制御者が務めを果たす。これは、機械的な心、物質生活の最も初期の型にある教えることのできない知力であるが、教えることのできない心は、原始の惑星生命の段階のほかに多くの段階で機能する。

42:10.4 (481.1) 2. 補佐-精霊心。これは、物質の心の教えを受けることのできる(非機械的)段階において心-精霊の補佐7名を通して機能する地方宇宙の母なる聖霊の聖職活動である。物質の心は、この段階において経験している。最初の補佐5名の人間以下(動物)の知力として。最後の2名の補佐の超人的(中間者)知力として。

42:10.5 (481.2) 3. 進化するモロンチア心—進化する人格の地方宇宙上昇経歴における拡大的意識。これは、地方宇宙の母なる聖霊の創造者たる息子との連係による贈与であ

る。この心の段階は、モロンチア型の生命媒体組織、すなわち地方宇宙のモロンチアの力の監督者によりもたらされる物質と精霊の統合を内包する。モロンチア心は、より高い段階の到達において宇宙心をもって増加する結合的可能性を明らかにし、モロンチア生活の570段階に応じて区別をつけて機能する。これは、必滅の創造物の進化過程であるが、非モロンチア体系の心は宇宙の息子と宇宙の精霊により地方創造の非モロンチアの子らに与えられる。

42:10.6 (481.3) 宇宙心。これは、時間と空間に関わる七重の変化の多い心である。その中で1つの相が、それぞれの主たる7精霊により7超宇宙の1つの宇宙で役目を果たす。宇宙心は、有限の心の全段階を包含し、経験的に崇高な心の進化-神性段階と、また超自然的に絶対心の実存的段階とを調整する。—連帯動作主の直接回路。

42:10.7 (481.4) 心は、楽園上においては絶対であり、ハヴォーナにおいては準絶対であり、オーヴォントンにおいては有限である。心は、臨場-聖職活動のさらにその上に様々なエネルギー体系の存在活動を常に内包しており、

これは、心のすべての段階とすべての種類に該当する。しかし、それは、宇宙心を超えての非精霊エネルギーへの心の関係を描くのがますます難しくなる。ハヴォーナ心は、準絶対であるが、超進化的である。それは、実存的に経験的であるのであなたに明らかにされた他のいかなる概念よりもより準絶対に近いのである。楽園心は、人間の理解を超えている。それは、実存的で、非空間的で、非時間的である。にもかかわらず、これらの心の段階全てが、連合動作主の宇宙の臨場により—楽園における心の神の心-重力の握りにより—陰に隠される。

11. 宇宙の機構

42:11.1 (481.5) 宇宙は、心の評価と認識において機械的でもなく不可思議でもないということに気づくべきである。それは、心の創造と法の仕組みである。だが、実用における自然の法は、物理的で精霊的の二元的領域に思われるものの中で作用する一方で、現実には一つである。第一根源と中枢は、すべての物質化の第一の原因であり、同時に、精霊すべての最初で最後の父である。楽園の父は、単に純粋なエネルギーと純粋な精霊—思考調整者と

他の同様の断片化—としてハヴォーナの外の宇宙に個人的に現れる。

42:11.2 (481.6) 機構は、絶対的に全創造を支配してはいない。宇宙の中の宇宙は、完全に心により計画され、作られ、管理されるのである。しかし、宇宙の中の宇宙の神の機構は、人の有限心が無限心の支配の形跡でさえも明察する科学的方法には実に完全であり過ぎる。創造し、支配し、保護するこの心は、物質の心でも生物の心でもない。それは、神性現実の創造者段階で、またそこから機能する精霊-心である。

42:11.3 (482.1) 宇宙機構において心を明察し、発見する能力は、観測に関するそのような課題に従事する究明心の能力、範囲、および容量に依存する。時間と空間のエネルギーから組織化される時間-空間心は、時間と空間の仕組みに制約される。

42:11.4 (482.2) 動きと宇宙引力は、宇宙の中の宇宙の非個人的な時間-宇宙機構の対の様相である。精霊、心、物質のための重力反応の段階は、時間とは全く無関係であるが、現実の真の精霊段階のみは、空間とは無関係(非空

間的)である。宇宙のより高い心の段階—精霊-心の段階—は、また非空間的であるかもしれないが、人間の心といった物質的な心の段階は、単に精霊識別に比例してこの反応を失い、宇宙引力の相互作用に敏感である。精霊-現実段階は、各精霊の中身、また時間と空間における精霊性は、逆に線重力反応に比例して測定される。

42:11.5 (482.3) 線重力反応は、非精霊エネルギーの量的測度である。すべての質量—組織化されたエネルギー—は、それに基づいて行動する動作と心を除き、この把握の制約を受ける。線重力は、原子内の結合力が小宇宙の短距離の原動力であるように、大宇宙の短距離粘着原動力である。いわゆる物質として組織化される物理的な物質化エネルギーは、線重力反応の影響なくして空間を横断することはできない。そのような重力反応は、質量に正比例しているが、介在する空間にあまりにも変更されるので、距離の二乗に反比例して表されるとき、最終的結果は概算に過ぎない。空間は、結局、重力作用とそれへの全反応を中和するために機能する多数の超物質原動力の反重力影響への臨場故に線引力を攻略する。

42:11.6 (482.4) 非常に複雑で高度に自動発生の宇宙機構は、独創的、または創造的な内在する心の臨場をあらゆる知識者から機構自体の性質と可能性の宇宙段階のはるか下に常に隠す傾向にある。したがって、創造物の下級体系にとり、より高い宇宙機構がどうしても無分別に思えるのは当然のことである。そのような結論への唯一可能な例外は、明らかに自己維持をしている宇宙の驚くべき現象における心の臨場の含蓄であるだろう—が、それは、実際の経験というよりもむしろ哲学の問題である。

42:11.7 (482.5) 心は、宇宙を調整するのであるから、機構の不変性は、実在しない。宇宙の自己維持に関連づけられる向上的進化の現象は、普遍的である。宇宙の進化の可能性は、際限のない自然さにおいて無尽蔵である。調和した統一に向けての進歩、つまり、絶えず増加する関係性からの複雑さに重ねられる増加の経験的統合は、目的をもつ支配的な心によってのみ成立し得る。

42:11.8 (482.6) 任意の宇宙現象と結びつく宇宙心が高ければ高いほど、下級の心の型にとってそれを発見することはより難しい。そして、宇宙機構の心は、創造的な精霊-心

であるので、(無限者の志向さえも)、宇宙の下位段階の心による、ましてや全ての中で最も低い、人間の心では決して発見したり、識別したりはできない。進化する動物の心は、生来神を探してはいるが、単独でも生得的にも神を知っているのではない。

12. 原型と型 - 心の支配

42:12.1 (483.1) 機構の進化は、創造的な心の隠された存在と支配を仄めかし、指し示す。自動的機構を発想し、設計し、作成する人間の知力の能力は、惑星への優位な影響としての優秀で、創造的で、目的のある人の心の特質を明示する。心は、常に次のようなものに働きかける。

42:12.2 (483.2) 1. 物質的機構の創造

42:12.3 (483.3) 2. 隠された神秘の発見

42:12.4 (483.4) 3. 遠隔状況への探検

42:12.5 (483.5) 4. 精神的体系の形成

42:12.6 (483.6) 5. 知恵に向けての目標到達

42:12.7 (483.7) 6. 精霊段階への到達

42:12.8 (483.8) 7. 神性の目標の達成—最高、究極、かつ絶対である目標

42:12.9 (483.9) 心は、いつも創造的である。個々の動物、必滅、モロンチアの精霊の上昇者、または究極到達者の心の授与は、生物の独自性に相応しく役に立つ肉体をいつも形成できる。しかし、人格の臨場現象、あるいは独自性の原型は、そういうものとしては、エネルギーの顕現ではなく、肉体的でも、心的でも、精霊的でもない。人格の型は、生物の原型相である。これは、エネルギーの配置を内包し、また、これは、加えて生命と動きも、生物存在の機構である。

42:12.10 (483.10) 精霊の存在体にさえ型があり、これらの精霊の型(原型)は、実在する。最高の型の精霊人格にさえ型—ユランチアの人間の体にあらゆる意味で類似している人格臨場—がある。7超宇宙で遭遇するほとんどすべての存在体が型を持つ。しかし、この通則には幾つかの例外がある。思考調整者は、必滅の仲間の生残する精霊との融合後までは型をもたないようである。単独使者、天分を受けた三位一体の精霊、無限の精霊の個人的補佐、

引力の使者，超越的記録者、および他のあるのの達にもまた、発見可能な型がないのである。しかし、これらは、例外的な幾つかによくある。大多数には、誠実な人格の型、個別に特質のある、また認識可能で個人的に区別可能な型、がある。

42:12.11 (483.11) 宇宙心と補佐の心-精霊の聖職活動のつながりは、進化する人間にとって物理的に相応しい住みかを発展させる。同様に、モロンチア心は、人間のすべての生存者のためにモロンチア型を個別化するのである。必滅の肉体が、あらゆる人間にとり個人的でありかつ特徴的であるように、モロンチア型も、それを支配する非常に個性的で適度に特徴的になるであろう。2個の人体がそれほど似ていないのと同様に、2個のモロンチア型もそれほど似てはいない。モロンチアの力の監督者は、それによってモロンチアの生命が働き始める画一的なモロンチア物質を後援し、付き添いの熾天使は、それを準備する。モロンチア生活の後、それぞれの精霊-心の内住者には同様にさまざまで、個人的で、特徴的な精霊の型があることがわかるであろう。

42:12.12 (483.12) あなたは、物質界において精霊をもつものとして肉体を考えるが、我々は、肉体をもつものとして精霊を見なす。肉体の目は、じつに精霊生まれの魂の窓である。精霊は、建築家であり、心は、建築業者であり、肉体は、物質的建築物である。

42:12.13 (484.1) 肉体的、精霊的、心的エネルギーは、そういうものとして、またそれぞれの混じりけのない状態において、現象宇宙の現実のものとして完全に相互作用するというわけではない。楽園における3種類のエネルギーは同等であり、ハヴォーナにおいては同等化され、一方、有限活動の宇宙段階においては物質的、心的、および精霊支配、のすべての範囲で遭遇する必要がある。有限活動の宇宙段階においては物質的、心的、および精霊の支配のすべての範囲で遭遇する必要があるのに、楽園においては3種類のエネルギーは同等であり、ハヴォーナにおいては同等化される。物理的エネルギーは、時間と空間の非人格的状況において優勢であるようだが、精霊-心の機能が、目的の神性と活動の崇高性により近づけば近づくほど、精霊の相もより優勢になるようにも思える。究極段階の精霊-心のそれは、ほとんど完全に優位

になるかもしれないように思える。絶対段階では、精霊は、確かに優位である。また、神性の精霊の現実が臨場する場所はどこであろうとも、真実の精霊-心が機能しているときはいつであろうとも、そこから時間と空間の領域全体へと、常にその精霊現実の物質的、あるいは物理的対応者がもたらされる傾向がある。

42:12.14 (484.2) 精霊は、創造的現実である。物理的対応者は、精神現実の時間空間の反映、すなわち精霊-心の創造的活動の物理的効果である。

42:12.15 (484.3) 心は、全般的に物質を支配しており、次には精霊の究極の婉曲的支配のとおりに対応している。そして、自由に精霊の指示を甘んじて受けるその心だけが、必滅の人間と共に、崇高なるもの、究極なもの、および絶対なるもの、つまり無限なるものの永遠の精霊世界の不滅の子として必滅の時-空間の生涯を乗り切ることを望むことができる。

42:12.16 (484.4) [ネバドン勤務中の、またガブリエルの要求に応じての強力な使者による提示]

論文 43
星座

43:0.1 (485.1) ユランチアは、地方宇宙ネバドンの100の星座中の1星座であるノーラティアデクの星座に位置するサタニアの地方体制の606番目の棲息世界を意味し、一般的にはネバドンに属するノーラティアデクのサタニア606と呼ばれている。星座が、地方宇宙の第一分割であることから、それぞれの支配者は、棲息界の地方体制をサルヴィントンの地方宇宙の中央行政に結びつけ、また反射によりユヴァーサの老いたるものの超行政に結びつける。

43:0.2 (485.2) あなたの星座の政府は、ノーラティアデクのいと高きもの、星座の父の行政府のエデンチアの真ん中にあり、最大である771個の建築球の一群に位置している。エデンチア自身は、あなたの世界のおよそ100倍の大きさである。エデンチアを囲む70の主要球体は、ユランチアのおよそ10倍の大きさであり、一方、これらの70世界のそれぞれの周囲を回る10個の衛星は、ほぼユランチアの大きさである。771個の建築球は、他の星座の大きさに十分匹敵するものである。

43:0.3 (485.3) エデンチアの時間計算と距離測定は、サルヴィントンのものであり、宇宙首都の球体同様、星座本部世界には天の有識者の全系列が完全に提供される。一般的に、これらの人格は、宇宙行政に関して説明されるそれらとそれほどの異なりはない。

43:0.4 (485.4) 地方宇宙天使の第3系列の熾天使監督は、星座勤務に割り当てられている。彼らは、首都球体に本部を設置し、モロンチア-訓練の包囲する世界の広範囲に渡り務めを果たす。ノーラティアデクの主要70球には、700の小衛星と共に、星座の永久公民であるユニヴィテチアが居住している。これらのすべての建築世界の大部分は、明かされていないが、有能なスパイロンガと美しいスポーナーギアを含む土着の生命の様々な集団により完全に統治されている。星座のモロンチア生活は、あなたが推測するかもしれないように、モロンチア-訓練制度の中間点にあることから、典型的、かつ理想的である。

1. 星座本部

43:1.1 (485.5) エデンチアは、モロンチア生命を頂き精霊的栄光を一面に覆う物質の大規模な高原に、魅惑的な台地に

富んでいるが、ユランチアに見えるような起伏の多い山はない。何万ものキラキラ輝く湖や何千もの互いに連結する小川があるが、大きな海洋も激しい川もない。高地だけにこれらの表層の流れが欠けている。

43:1.2 (486.1) エデンチアや同様の建築球の水は、進化する惑星の水と異なりはしない。そのような球体の水系は、表面と地下の双方にあり、一定の流れの水分がある。エデンチアにおける輸送の主要経路は、大気であるものの、これらの様々な水路により周航できる。精霊の存在体は、当然のことながら球体の表面上を移動し、一方、モロンチア存在体と物質の存在体は、大気通路を通り抜けるために物質と半物質手段を利用している。

43:1.3 (486.2) 真の大気、つまりそのような建築創造に特徴的であり、その上ユランチアの大気の2要素と、加えてモロンチア生物の呼吸に適したそのモロンチアガスを統合する通常の3-ガス混合物の真の大気が、エデンチアとその関連世界にはある。しかし、この大気は、物質でもありモロンチアでもあるが、嵐もハリケーンもない。夏もなければ冬もない。大気撹乱と季節変動のこの欠如は、

特に創造されたこれらの世界の全戸外の装飾を可能にする。

43:1.4 (486.3) エデンチア高地は、すばらしい物理的特徴であり、その美は、縦横あまねく溢れる生命のもつ果てしない豊富さにより強調される。これらの高地は、幾つかのやや孤立する構造を除いては生き物の手による作業は含んでいない。物質とモロンチアの装飾は、居住地域に限られている。低い標高は、特別住居の場所であり、生物の芸術とモロンチア芸術の双方で美しく飾られている。

43:1.5 (486.4) エデンチアの復活の広間は、7番目の高地区域の頂上に位置しており、上昇のための二次変性体系に属する上昇する人間が、そこで目を覚ます。創造物の再集会のためのこれらの会議室は、メルキゼデク系の監視下にある。また、エデンチア(サルヴィントン近くのメルキゼデク惑星のような)の受け入れ球体の1番目にも、特別な復活広間があり、そこでは変性された上昇系列の人間が再度集められている。

43:1.6 (486.5) メルキゼデク系もまた、エデンチアに2つの特別大学を維持する。そのうちの1つ(非常時の学校)は、サ

タニア反逆から生じる問題研究に向けられる。他方(贈与の学校)は、マイケルがノーラティアデク世界の中の1つでその最終贈与をしたという事実から起こる新しい問題の克服に向けられる。この後者の大学は、約4万年前に、ユランチアが最終贈与のための世界として選定されたというマイケルの発表直後に設立された。

43:1.7 (486.6) ガラスの海、エデンチアの受け入れ地域は、行政本部近くにあり、本部円形劇場に囲まれている。この区域を取り囲むのは、星座業務の70部門の統率本部である。エデンチアの半分は、その境界が、各区分の本部本館に集まる三角形の70区域に分割されている。この球体の残りは、1つの巨大な自然公園、神の庭である。

43:1.8 (486.7) エデンチアへのあなたの定期的訪問の間、惑星全体は、あなたの実況見分に門戸を開いているとはいうものの、あなたの時間の大半は、その番号があなたの現在の居住世界の番号に対応するその行政三角地帯の中で費やされるであろう。あなたは、立法議会の観察者としていつも歓迎されるであろう。

43:1.9 (486.8) エデンチアの上昇する人間居住者に割り当てられたモロンチア区域は、36番目の三角形に位置する終局者本部に隣接する35番目の三角中間帯に位置する。ユニヴィテチアの総司令部は、モロンチア公民の住宅保留地に隣接する34番目の三角中間地帯の膨大な区域を占有する。これらの配列から、少なくとも天の生命の70の主要区分の宿泊設備用に作られているということ、そして、これらの70の各三角区域が、モロンチア訓練の70の主要球体区域のどれか1つに関連しているということもまた分かるかもしれない。

43:1.10 (487.9) ガラスのエデンチア海は、円周約161キロメートルと深さおよそ48キロメートルの巨大な１円形である。このすばらしい水晶は、球体外の要所から到着するすべての輸送熾天使と他の存在体のための受け入れ専用場として役立つ。そのようなガラスの海は、輸送熾天使の着陸を大いに容易にする。

43:1.11 (487.2) この系列の水晶領域は、ほとんどすべての建築世界で見られる。そして、それは、その装飾的価値は別として集合体への超宇宙反射を示すために利用され、ま

た、空間の流れを変更するための、また、到来する他の物理的エネルギーの流れを適合させるためのエネルギー変化の方法の要素として多くの目的に役立つ。

2. 星座政府

43:2.1 (487.3) 星座は、各星座がそれ自身の立法制定に従っており、地方宇宙の自治単位体である。ネバドンの法廷が宇宙業務に判断を下すとき、すべての内部問題は、関係する星座において法にそって裁かれる。サルヴィントンのこれらの司法命令は、星座の立法制定と共に、地方体制の行政者により実行される。

43:2.2 (487.4) 星座は、このように立法構成単位として機能し、一方地方体制は執行、あるいは施行単位体として役立つ。サルヴィントン政府は、司法の、かつ調整の最高権威である。

43:2.3 (487.5) 最高司法機能が、地方宇宙の中央行政に立脚する一方で、2つの従属的ではあるが、主要な裁判機関、メルキゼデク系協議会といと高きものの法廷が、各星座本部にはある。

43:2.4 (487.6) すべての司法問題は、まずメルキゼデク系の協議会で再審理される。進化の惑星と体制本部世界での必要な一定の経験を持つこの系列の12名は、証拠を再吟味し、陳述を要約し、暫定的判決を下す権限が与えられている。この判決は、いと高きものへ、君臨する星座の父の法廷へ回される。この後者の裁判所の人間の部門は、そのすべてが上昇の人間である7名の裁判官から成る。宇宙を高く昇れば昇るほど、あなたはますます確実に自身の種類のものたちにより裁かれることになる。

43:2.5 (487.7) 星座の立法府は、3部門に分割された。星座の立法計画は、上昇者の下院、終局者と1,000名の人間の代表により主宰される一団に始まる。各体制は、この審議会に参加する10名を指名する。この機関は、エデンチアでは、現在のところ完全に補充されているわけではない。

43:2.6 (487.8) 立法者の中間議会は、熾天使軍勢と地方宇宙の母なる精霊の他の子供であるその仲間で構成されている。この集団は、100名を数え、星座内で機能するその

ような存在の様々な活動を統括する統轄人格により指名される。

43:2.7 (488.1) 星座の立法者の顧問、または最高機関は、貴族院—神性の息子の議院—から成る。この議員団は、いと高き父により選ばれ10名に達する。特別な経験の息子だけが、この上院での機能が許される。これは、立法議会の下級部門の両方に大変効果的に役立つ実情調査と時間節約の集団である。

43:2.8 (488.2) 立法者の合同議会は、星座の審議会のこれらの個々の部門からの3名ずつで成り、君臨する年少のいと高きものにより主宰される。この集団は、すべての立法の最終的な型を是認し、放送装置による自分達の発布を認可する。この最高委員会の承認は、立法制定を領域の法にならしめる。最高委員会の行為は、最終的である。エデンチアの立法声明は、全ノーラティアデクの基本法をなす。

3. ノーラティアデクのいと高きもの

43:3.1 (488.3) 星座の支配者は、地方宇宙の息子のヴォロンダデク系列に属する。これらの息子は、星座の支配者とし

て宇宙における現役任務を命じられるとき、あるいはそうでなくても、神の地方宇宙の息子の全系列の中にあってとても見通しの利いた、しかも知的な忠誠心と相まった最高の管理見識を具現化することから、いと高きものとして知られている。それらの個人的な保全、清廉と集団的忠誠は、一度も疑問に伏されたことがない。ネバドンではヴォロンダデクの息子に対する不満は、決して起こったことがない。

43:3.2 (488.4) 少なくとも3名のヴォロンダデクの息子は、ネバドンの各星座のいと高きものとしてガブリエルにより任命される。この三名組の議長は、星座の父として、またその2名の仲間は、年長のいと高きものと年少のいと高きものとして知られている。星座の父は、年少の仲間として、また年長の仲間として同等期間務めを果たした後、1万標準年(およそ5万ユランチア年)の間支配する。

43:3.3 (488.5) 詩篇作者は、エデンチアが3名の星座の父に統治されたことを知っており、よってその住まいについて複数形で語った。「川がある。その流れはいと高き方々の聖なる住まい、神の都を喜ばせる」と。

43:3.4 (488.6) 様々な宇宙支配者に関しユランチアには、大昔から大混乱が存在してきた。多くの後の教師は、あいまいで不明確な自身の部族の神をいと高きものの父と混同した。さらに後には、ヘブライ人は、これらの天の支配者のすべてを複合神に併合した。1教師は、「いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。」と言い、崇高な支配者でないということを理解していた。ユランチアの記録では、どうかすると「いと高きもの」という表現により誰に言及しているかを知ることは非常に難しい。しかし、ダニエルは、これらの事柄を完全に理解していた。ダニエルは、「いと高き方が人間の国を支配し、これをこころにかなう者に与える。」と言った。

43:3.5 (488.7) 星座の父は、棲息惑星の個人にあまり拘わらないが、棲息界のあらゆる人種と国家的集団に大いに関わりのある星座の立法機能と法を制定する機能に密接に関係がある。

43:3.6 (489.1) 星座政権は、あなたと宇宙行政の間に立つとはいえ、あなたは、個人として星座政府にはほとんど関係がないであろう。あなたの大きな関心は、通常は地方体

制サタニアに集中するであろう。しかし、一時的にユランチアは、ルーキフェレーンスの反逆から脱却するある体制状況と惑星状況の理由から密接に星座の支配者に関連している。

43:3.7 (489.2) エデンチアのいと高きものは、ルーキフェレーンスの分離時点で反逆的世界における一定の局面の惑星権威を握った。彼らは、この力を行使し続け、日の老いたるものはずっと以前に、これらの不安定な世界の支配のこの肩代わりを承認した。彼らは、ルーキフェレーンスが生きている限り、確かにこの継承司法権の行使を続けるであろう。この権威の多くは、忠誠な体制においては体制君主に与えられるであろう。

43:3.8 (489.3) しかし、ユランチアが格別にいと高きものに関連するようになる別の道がまだある。創造者たる息子マイケルが、最後の贈与の任務についていたとき、ルーキフェレーンスの後任者は、地方体制の全権力をもっていなかったことから、マイケル贈与に関するユランチアの全業務が、直接、ノーラティアデクのいと高きものによる監督であった。

4. 山の会議—日々の忠誠なるもの

43:4.1 (489.4) 最も神聖な会合の山は、エデンチアで機能する楽園三位一体の代表である日々の忠誠なるものの居住地域である。

43:4.2 (489.5) 日々の忠誠なるものは、楽園の三位一体の息子であり、本部世界の創造以来イマヌエルの個人的な代表としてエデンチアに臨場している。日々の忠誠なるものは、助言のためにずっと星座の父達の右方に立つが、求められない限り決して助言をしない。身分の高い楽園の息子は、そのような領域の代理支配者の陳情を除き、地方宇宙の業務の遂行に決して参加しない。しかし、創造者たる息子にとっての日々の和合のものは、星座のいと高きものにとっての日々の忠誠なるものである。

43:4.3 (489.6) エデンチアの日々の忠誠なるものの住居は、超宇宙通信と情報に関して楽園体制の星座の中心である。これらの三位一体の息子は、ハヴォーナと楽園の人格の仲間と共に、監督している日々の和合のものとのつながりにおいて自分達の系列との直接で絶え間のない宇宙全体にわたり通信を取り合う。

43:4.4 (489.7) 最も聖なる山は、極めて素晴らしく美しく見事に装備されているが、楽園の息子の実際の住居は、いと高きものの中央の住まいやヴォロンダデクの息子の住宅群を構成する周囲の70の造営物と比較するとこじんまりとしている。これらの建物は、住宅専用である。それらは、星座の業務が処理される広大な管理本部とは完全に離れている。

43:4.5 (489.8) エデンチアの日々の忠誠なるものの住居は、いと高きもののこれらの住居の北に位置しており、「楽園の会合の山」として知られている。この神聖な台地において上昇する人間は、ハヴォーナの10億の完全性世界から楽園のたとえようもない喜びへ進歩していく人間の長くて好奇心をそそる旅についての楽園のこの息子の話を聞くために定期的に集合する。また、中央宇宙を起源とする人格の様々な集団をモロンチアの人間がより十分に見知り合うようになるのが、山の会合でのこれらの特別集会である。

43:4.6 (490.1) サタニアの以前の主権者反逆者ルーキフェレーンスは、増大された自身の司法権の主張に際し、地方宇

宙の政府案における息子の資格のすべての優れた系列の置換に務めた。心中で企て、「私は我が王座を神の息子の上に高くするつもりである。北にある会合の山に座ろう。私はいと高き方のようになろう。」と言った。

43:4.7 (490.2) 100名の体制君主は、星座の福利を熟慮するエデンチア秘密会議に定期的にやって来る。サタニア反逆後、ジェルーセムの大反逆者は、ちょうど以前の時のようにこれらのエデンチア協議会に出頭するのが習慣であった。ユランチアにおけるマイケルの贈与とネバドン全体に渡るその後の無限主権の肩代わり後までこの傲り高ぶった厚かましさを止める方法は見い出せなかった。決してその日以来いまだかつて、罪の扇動者達は、忠誠な体制君主のエデンチア協議会への参加を許されていない。

43:4.8 (490.3) 昔の教師が、これらのことを知っていたということが記録に示されている。「そして、神の息子がいと高きものの前に姿を現した日があり、サタンも来て、その中にいた。」それが現れるつながりのいかんを問わず、これは事実の声明である。

43:4.9 (490.4) キリストの勝利以来、罪と反逆者が、すべてのノーラティアデクから洗い浄められている。肉体のマイケルの死の以前、堕落したルーキフェレーンスの仲間サタンは、エデンチアのそのような秘密会議に出席しようと努めたが、大反逆者に対する感情の固化が、同情への扉をほぼ全般的に閉じていたので、サタニアの敵対者の立場を見い出し得ないという点にまで至ってしまった。悪の受け入れへの何の門戸解放もないとき、罪の歓待の機会は存在しない。全エデンチアの心の門戸は、サタンに対して閉じた。サタンは、集合した体制君主に満場一致で拒絶され、また人の息子が、「サタンが電光のように天から落ちるのを見た」というのは、このときであった。

43:4.10 (490.5) ルーキフェレーンスの反逆以来、新建造物が、日々の忠誠なるものの住居近くで用意された。この臨時の建物は、いと高きものの連絡本部であり、いと高きものは、罪と反逆に立ち向かう日々の系列の方針と態度に関わるすべての問題において星座政府への助言者として楽園の息子と深く関連して機能する。

5. ルーキフェレーンス反逆後のエデンチアの父達

43:5.1 (490.6) エデンチアのいと高きものの交替は、ルーキフェレーンスの反逆時点で一時中断された。我々には今、当時任務中であった同じ支配者がいる。我々は、ルーキフェレーンスとその仲間が最終的に処分されるまでこれらの支配者への変更もないと推測する。

43:5.2 (490.7) しかしながら、星座の現政府は、ヴォロンダデク系列の12名の息子を含むために広げられてきた。これらの12名は次の通りである。

43:5.3 (490.8) 1. 星座の父。ノーラティアデクの現在のいと高きものの支配者は、ネバドンのヴォロンダデク系の617,318番である。エデンチアの責務につく前に、いと高きものの支配者は、我々の地方宇宙の中の多くの星座において奉公をした。

43:5.4 (490.9) 2.いと高きものの年長協力者

43:5.5 (491.1) 3.いと高きものの年少協力者

43:5.6 (491.2) 4. いと高きものの助言者、主たる息子の地位到達以来のマイケルの個人的代理

43:5.7 (491.3) 5. いと高きものの幹部、ルーキフェレーンス反逆以来配置されているガブリエルの個人的代理

43:5.8 (491.4) 6. 惑星観察者のいと高きものの長官、サタニアの孤立世界に配置されたヴォロンダデクの監督

43:5.9 (491.5) 7. いと高きものの仲裁者、星座内の反逆の結果生じるすべての困難の調整義務を委ねられているヴォロンダデクの息子

43:5.10 (491.6) 8. いと高きもの非常時の行政者、サタニアの反逆-孤立世界へのノーラティアデク立法府の非常時の制定を適合させる職務を負うヴォロンダデクの息子

43:5.11 (491.7) 9. いと高きものの仲介者、ユランチアで星座の通常行政との特別贈与の調整を調和させるために配属されたヴォロンダデクの息子。ユランチアで特別贈与の調整と星座の通常行政との融合を図るために配属されたヴォロンダデクの息子。ユランチアにおける大天使のある種の活動と他の数々の不規則な援助の臨場が、ジェルーセムにおける輝く宵の明星の特別活動と共にこの息子の機能を必要とする。

43:5.12 (491.8) 10. いと高き法務官、サタニア反逆の結果としての混乱から生じるノーラティアデクの特別問題の調整に専念する非常時の裁決機関の首班

43:5.13 (491.9) 11. いと高きもの連絡係、エデンチアの支配者に配属された、だが反逆と不忠の被創造物に関係ある問題処理において最善策追求のために日々の忠誠なるものと共に関わる特別な相談役として任命されたヴォロンダデクの息子

43:5.14 (491.10) 12. いと高きものの監督、エデンチアの非常協議会の議長。サタニア動乱がもとでノーラティアデクに配属されたすべての人格は、緊協議会を構成し、またその取り仕切り役は、並はずれた経験をもつヴォロンダデクの息子である。

43:5.15 (491.11) これは、多数のヴォロンダデク、ネバドン星座の使節、およびエデンチアにも居住している他のものについての説明はしていない。

43:5.16 (491.12) エデンチアの父は、ルーキフェレーンスの反逆以来、ユランチアとサタニアの他の孤立世界に特別な注

意を払ってきた。予言者は、遠い昔に、諸国の問題における星座の父の支配の手を認識した。「いと高き方が国々にそれらの遺産を分け与えたとき、アダムの息子達を引き離したとき、民の境を決められた。」

43:5.17 (491.13) あらゆる隔離、あるいは孤立世界には、観察者として機能するヴォロンダデクの息子がいる。ヴォロンダデクの息子は、国々の問題に介入するよう星座の父の命令をうける以外には、惑星行政に参加しない。実際「人の王国で統治する」のは、このいと高きもの観察者である。ユランチアは、ノーラティアデクの孤立世界の中の1つであり、カリガスティアの背信以来、ヴォロンダデク観察者が、惑星に配置されている。メルキゼデクのマキヴェンタは、「メルキゼデク、シャレイムの王は、いと高きものの祭司であった」と書かれているように、ユランチアで半物質の姿で奉仕したとき、そのとき任務中のいと高きもの観察者に敬意を払った。メルキゼデクが、「あなたの手にあなたの敵を渡されたいと高き方に誉れあれ」、と言ったとき、このいと高きもののアブラーハムとの関係を浮き彫りにした。

6. 神の庭

43:6.1 (492.1) 体制首都は、物質的かつ鉱物構造で特に美化されており、一方、宇宙本部は、精霊栄光をより反映しているが、星座の首都は、モロンチア活動と生きた装飾の極致である。星座本部世界においては、生きた装飾は広く利用され、また、それが、これらの世界が「神の庭」と呼ばれるところの生命のこの優勢さ—植物の芸術性—である。

43:6.2 (492.2) エデンチアの約半分は、いと高きものの絶美な庭に注がれ、これらの庭は、地方宇宙のモロンチアの最も絶妙な創造の中にある。これは、ノーラティアデクの棲息界上の並み外れて美しい場所がなぜそう度々「エデンの園」と呼ばれるかを説明している。

43:6.3 (492.3) 中心に位置するこのすばらしい庭には、いと高きものの崇拝神殿がある。詩篇者は、次のように書いているのでこれらのものについて何かを知っていたに違いない。「だれがいと高き方の丘に登りえようか。だれがこの聖なる所に立ちえようか。手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺きの態度で誓わなかった人。」いと高きものは、この神殿に

おいて10日目毎のくつろぎで崇高の神への敬虔な沈思において全エデンチアを主導する。

43:6.4 (492.4) 建築世界は、物質系列の生命の10の型を味わう。ユランチアには植物と動物があるが、エデンチアのような世界には、生命の物質系列の10部門がある。あなたが、エデンチアの生命のこれらの10区分を見るならば、すぐに、最初の3区分を植物として分類し、最後の3区分を動物として分類するであろうが、中間にくる4集団の豊富で魅惑的な生命の本質を完全に理解することはできないであろう。

43:6.5 (492.5) 特徴的に動物である生命さえ、進化の世界のものとは非常に異なっており、非常に異なっているからこそ、言葉を使わないこれらの創造物の特異な性格と慈愛深い性質を人間の心に描くことは全く不可能である。あなたの想像力が、何としても思い描けない何千もの生物がいる。動物創造全体は、進化する惑星の総動物種とは似ても似つかない系列のものである。しかし、このすべての動物の生命は、最も知的で極めて素晴らしく実用的であり、また様々な全種は、驚くほどに優しく、いじら

しいほどに親しみやすい。どんな肉食性の生物も、そのような建築世界にはいない。全エデンチアには生物を恐れさせる何もない。

43:6.6 (492.6) 植物もまた、物質とモロンチアの種類の両方から成っており、ユランチアのものとは非常に異なっている。物質的発達は、独特の緑の色彩があるが、植物のモロンチア同等物は、スミレ色、または薄い赤紫気味の異なる色と反射がある。そのようなモロンチア植物は、純粋にエネルギーの成長である。食される場合、残余部分は何もない。

43:6.7 (492.7) これらの建築世界は、モロンチアの種類は言うまでもなく、物理的生命の10区分に恵まれているので、風景の生物学的美化と物質とモロンチア構造の生物学的美化に巨大な可能性を提供する。天の熟練工は、植物の飾り付けと生物の装飾のこの大規模な仕事において土着のスポーナーギアを指揮する。あなたの芸術家達は、自身の概念を描くために不活性な塗料と生気のない大理石の助けを借りなければならないのに対し、天の熟練工と

ユニヴィテチア達は、自身の考えを表現し、理想を捕えるために生きた材料をより頻繁に利用する。

43:6.8 (493.1) あなたが、ユランチアの花、低木、木を楽しむなら、それならエデンチアの崇高な庭の植物の美と花の壮大さで目を楽しませるであろう。しかし、妙なる世界のこれらの美についての適切な概念を人間の心への伝達を引き受けるのは私の記述力を超えている。誠に、目というものは、人間-上昇冒険のこれらの世界へのあなたの到着を待ち受けているようなそれほどの栄光をまだ見たことがない。

7. ユニヴィテチア

43:7.1 (493.2) ユニヴィテチアは、エデンチアとその関連世界の永久公民であり、星座本部を囲む770のすべての世界がその指揮下にある。創造者たる息子と創造の精霊のこれらの子供は、物質と精霊の間に存在する平面上に映し出されるが、モロンチアの生物ではない。エデンチアの主要な70球体の原住民のそれぞれが、可視の異なる型をもち、モロンチアの人間は、連続的に1号の世界から70号の世界へ通過するように１エデンチアから他のエデン

チアへと住居を変えるたびに、ユニヴィテチアの上昇度合いに一致するようにモロンチアの型が適合される。

43:7.2 (493.3) 精霊的には、ユニヴィテチアは一様であり、知的には、人間がそうであるように異なる。型においては、モロンチア状態に非常に類似しており、70のさまざまの人格系列で機能するように創造されている。ユニヴィテチアのこれらの系列のそれぞれが、知的活動の異なる10の主要変化を見せ、また、これらの異なる知的な型のそれぞれが、主要なエデンチアの各世界の周りを回転する10個の衛星中のある1衛星において職業的、あるいは実用的な進歩的社会主義化の特別な訓練と文化的学校を主宰する。

43:7.3 (493.4) これらの700の小規模世界は、地方宇宙全体の働きにおける実践教育の技術的球体であり、知的存在体の全階級に開かれている。これらの訓練課程に出席するもの達の中で最大集団を構成しているのは圧倒的にモロンチアの学生であるとはいえ、特別技能と技術的知識のこれらの訓練所は、もっぱら上昇する人間のためにだけ管理されているのではない。あなたが、社会文化の70の主

要世界の中のいずれか一つを受け入れるとき、あなたには取り囲む10の衛星のそれぞれの許可が与えられる。

43:7.4 (493.5) 様々な優待居留地においては、上昇するモロンチアの人間が、逆戻りの監督の間で優位を占めているが、ユニヴィテチアは、天の熟練工のネバドン軍団に関連する最大集団に相当する。全オーヴォントンにおいて、ユヴァーサのアバンドンター系を除くハヴォーナの外の存在体は、芸術的技能、社会的適応性、調整における手際の良さにおいてユニヴィテチアに匹敵しない。

43:7.5 (493.6) 星座のこれらの公民は、実際には職人軍団の構成員ではないが、変遷文化のすばらしい芸術的可能性の実現のためにすべての集団と共に自由に働き、星座世界を主要な球体にすることに非常に貢献している。それらは、星座本部世界の境界を超えては機能しない。

8. エデンチア訓練世界

43:8.1 (493.7) エデンチアとその周辺の球体の物理的授与は、ほぼ完全である。それらは、サルヴィントン球の精霊的壮大さには、とても匹敵はしないが、ジェルーセムの訓練世界の荘厳さをはるかに凌いでいる。これらのすべて

のエデンチア球は、直接宇宙空間の流れにより活発化されており、それぞれの巨大な力の体制は、物質とモロンチアの双方ともに、物理の主たる制御者とモロンチアの力の監督者の有能な軍団に補助され、星座の中心者により専門的に監督され、割り当てられている。

43:8.2 (494.1) 人間上昇のエデンチア時代に関連したモロンチア変遷文化の70の訓練世界において費やされる期間は、終局者の地位へと上昇する人間の経歴において最も定着した期間である。これは、本当に典型的なモロンチア生活である。あなたは、一つの主要文化的世界からもう一つへと移るその度ごとに調子を整えはするが、同じモロンチアの肉体を保有し、人格無意識の期間はない。

43:8.3 (494.2) エデンチアとその関連球でのあなたの滞在は、知的人格の様々の宇宙と超宇宙系列間の快く有益な相互関係の鍵である集団倫理の精通に主に従事するであろう。

43:8.4 (494.3) あなたは、大邸宅世界においては人間の進化する人格の統一を完成した。体制首都においては、ジェルーセム公民権を得、また集団活動の規律に自己提出の意

志を実現し、仕事を調整した。しかし、あなたは今、星座訓練世界においてあなたの進化しているモロンチア人格の真の社会主義化を達成するところである。この崇高な文化的達成は、次の方法を学ぶことにある。

43:8.5 (494.4) 1. さまざまのモロンチア仲間10名と幸福に生き、効果的に働くこと。そのような10個の集団は、100名の仲間に組み込まれ、次に1,000名の軍団で連合化される。

43:8.6 (494.5) 2. 知的にはモロンチアの存在体と類似するものの他のあらゆる面で非常に異なる10名のユニヴィテチアと嬉々として住まい、かつ心から協同すること。そして、あなたは、1,000のユニヴィテチア軍団に連合される他の10家族と調整しながら、この10名の集団で機能しなければならないのである。

43:8.7 (494.6) 3. モロンチア仲間とこれらのユニヴィテチア接待役の双方への同時調整を達成すること。いくらか異なる知的創造物集団との近い作業関係においてあなた自身の存在体の系列と協同するために自発的に有効に能力を取得すること。

43:8.8 (494.7) 4. 自分と似ていたり、似ていない存在と共に社会的に機能する一方で、両集団の仲間との知的調和を達成し、職業上の調整を成し遂げること。

43:8.9 (494.8) 5. 知的かつ職業段階における人格の満足できる社会主義化を遂げる一方で、類似し、しかもわずかに異なる存在体との親密な接触をして絶えず減少していく短気さと憤りをもって生きる能力を完成させること。逆戻り監督は、自身の集団遊戯活動を通じてこの後者の到達に非常に貢献する。

43:8.10 (494.9) 6. 向上的協調の楽園-上昇経歴促進への社会主義化のこれらの様々な方法すべてを調整すること。時-空間の外観上はささいなこれらの活動の中に隠された永遠の目標-意味を理解する能力を高めることにより宇宙洞察を増大させること。

43:8.11 (494.10) 7. 次いで、それが、集団の精霊的つながりとモロンチア調整を経て個人的授与の全局面の増大に関係があるように、精霊的洞察の同時発生性の増進をもって複数の社会主義化のこれらの手順のすべてを極点に至らせること。2つの道徳的創造物は、知的に、社会的に、精

霊的に、協力関係の手法によりそれらの宇宙達成の個人的可能性を単に2倍にはしない。それらは、自分達の達成と成就の可能性をそれ以上のほぼ4倍にする。

43:8.12 (495.1) 我々は、10名のモロンチア仲間との同様のつながりに付随する10名の知的に異なる個人から成るユニヴィテチア家族集団とのモロンチアの人間のつながりとしてエデンチアの社会主義化を描いてきた。しかし、最初の7主要世界においては、ただ1人の上昇する人間が10名のユニヴィテチアとともに暮らす。7つの主要世界の第2集団においては、2名の必滅者が10名の各土着集団とともにおり、それは、7主要球体の最後の集団において10名のモロンチア存在体が10名のユニヴィテチアという具合にまで続く。あなたは。ユニヴィテチア系との上手な付き合い方を学ぶ間、モロンチア仲間の前進者との関係においてそのような改善された倫理を順守するであろう。

43:8.13 (495.2) あなたは、上昇する人間としてエデンチアの進歩的世界での滞在を楽しむであろうが、体制本部における宇宙業務との初期の接触を、あるいは宇宙首都の最後

の世界におけるこれらの現実との別れの感触を特徴付ける個人的満足感は経験しないであろう。

9. エデンチアの公民

43:9.1 (495.3) 上昇する人間は、70号の世界からの卒業の後エデンチアに居を定める。上昇者らは、日々の忠誠なるもの、つまり彼らが会った三位一体起源の崇高なる人格最初のものによって表現されているように、今、初めて「楽園の会合」に出席し、広範囲にわたる自身の経歴について話を聞く。

43:9.2 (495.4) エデンチア公民において頂点である星座訓練世界におけるこの滞在全体は、モロンチア前進者にとり真の、そして天の至福の期間である。あなたは、体制世界での滞在中、動物に近い状態からモロンチア創造物に進化していった。あなたは、精霊的であるよりも物質的であった。あなたは、サルヴィントン球でモロンチア存在体から真の精霊の地位へと進化していくであろう。あなたは物質的であるよりも精霊的になるであろう。しかし、上昇者は、エデンチアにおいては、かつての場所と未来の場所の中程に、つまり、進化する動物から上昇す

る精霊への通過域の中間にいるのである。あなたは、エデンチアとその複数世界における全滞在期間、「天使」としてある。あなたは、絶えず進歩するが、その間、一般的状態と典型的なモロンチア状態を維持している。

43:9.3 (495.5) 上昇する人間のこの星座滞在は、モロンチア行程の全経歴における最も一貫し、安定した時代である。この経験は、上昇者の前精霊の社会主義化訓練を成す。それは、ハヴォーナの前終局者の精霊的経験と、加えて楽園における前準絶対訓練に類似している。

43:9.4 (495.6) エデンチアの上昇する人間は、主に70の進歩的ユニヴィテチア世界における課題に従事している。それらは、またエデンチアそれ自体で、主に集団の、人種的、国家的、および惑星の福祉に関する星座計画と関連して様々な能力をもって役目を果たす。いと高きものは、棲息界で個々の前進をはかることにそれほど従事していない。彼らは、個人の心の中でよりむしろ人の王国で統治する。

43:9.5 (495.7) あなたは、サルヴィントン経歴に向けてエデンチアを去る用意ができたその当日、止まり、そして楽園

のこちら側の訓練のあなたの全時代の最も美しく最も壮快なものの1つを顧みるであろう。それにしても、そのすべての栄光は、あなたが神性の意味と精霊的価値の拡大される感謝のために内部に向けて上昇し、増加された可能性を達成する間増大するのである。

43:9.6 (496.1) [メルキゼデクによる後援]

論文 44
天の熟練者

44:0.1 (497.1) 様々な分割本部や宇宙の本部世界の優待居留地の中に天の熟練者と命名される複合人格の特異な系列が見つけることができる。これらの存在体は、モロンチア領域や下級精霊領域の芸術の巨匠であり職人の師匠である。それらは、モロンチア装飾と精霊の美化に従事する精霊であり、準精霊である。そのような熟練者は、壮大な宇宙全体に振り分けられている—光と生命に落ち着くすべての球体のみならず、超宇宙、地方宇宙、星座、体制に。しかし、それらの活動の主要領域は、星座に、特にそれぞれの本部球を囲む770の世界にある。

44:0.2 (497.2) それらの仕事は、物質的心にはほとんど不可解であるかもしれないとしても、モロンチアと精霊世界にはそれらの高い芸術と崇高な文化があるということが理解されるべきである。

44:0.3 (497.3) 天の熟練者は、そういうものとしては創造されてはいない。それらは、中央宇宙出身の不特定の教師の人格、それと上昇する人間と他の天の多数の集団から選ばれた志願生徒達からなる選ばれ採用された団体である。これらの熟練者の最初の教育団は、主たる7精霊との共同において無限の精霊によりかつて指定されており、7,000名のハヴォーナ教官、すなわちそれぞれに熟練者1,000名の7部門で構成されていた。精霊とモロンチアの問題において巧みな労働者のこの輝かしい団体は、そのような中核に始まり、発展してきた。

44:0.4 (497.4) モロンチア人格、つまり精霊の実体は、天の熟練者部隊への入隊資格がある。すなわち、本来備わっている神性の息子の資格層より下のあらゆる存在体。進化する球体から上昇していく神の息子は、モロンチア界への到着後、熟練者部隊への入隊申し込みをするかもしれ

ないし、才能に十分恵まれているならば、長期間、もしくは短期間、そのような経歴を選ぶかもしれない。しかし、千年、すなわち超宇宙時間の千年足らずの間、天の熟練者に徴募するものはいないかもしれない。

44:0.5 (497.5) すべての天の熟練者は、超宇宙本部に登録はするが、地方宇宙首都においてモロンチア監督により指導される。それらは、活動に関わる次の7主要分隊において各地方宇宙の本部世界で機能するモロンチア監督の中央団体により任命される。

44:0.6 (497.6) 1. 天の音楽家

44:0.7 (497.7) 2. 天の再現家

44:0.8 (497.8) 3. 神性建築家

44:0.9 (497.9) 4. 思考記録者

44:0.10 (498.1) 5. エネルギー操縦者

44:0.11 (498.2) 6. 意匠家と装飾家

44:0.12 (498.3) 7. 協和労働者

44:0.13 (498.4) これらの7集団の最初の教官は皆、ハヴォーナの完全な世界から来ており、またハヴォーナは、精霊芸術のすべての相と型のための原型、つまり原型の主題をもつ。ハヴォーナのこれらの芸術の空間世界への移転を引き受けることは大事業であるが、天の熟練者は、技術と実行面で時代から時代へと向上している。上昇経歴の他の全ての局面で求められるように、いかなる種類の努力であろうとも最も高度なそれらのものが、その優れた知識と技能をあまり恵まれていない仲間に伝達するよう絶えず求められている。

44:0.14 (498.5) あなたは、最初に大邸宅世界上のハヴォーナのこれらの移植された芸術を一瞥し始めるであろうし、それらの美とそれらの美へのあなたの鑑賞というものは、あなたがサルヴィントンの精霊の広間に立ち、精霊の領域の崇高な芸術家の奮い立たせる傑作に見入るまで高まるし啓発するであろう。

44:0.15 (498.6) モロンチアと精霊の世界のこれらの全活動は、現実である。精霊の存在体にとり、精霊世界は、現実である。我々にとり、物質界は、より非現実的である。精

霊のより高い型は、普通の物質を自由に通り抜ける。高度の精霊は、不特定の基本的エネルギーを除いては何も物質的なものに反応しない。物質存在体にとり、精霊の世界は、多少非現実的である。精霊現実の本質の単なる影であるが故に、精霊の存在体にとっての物質界は、ほぼ完全に非現実的である。

44:0.16 (498.7) 私は、この報告が翻訳され、記録されている建造物を精霊の占有的視力で知覚することができない。ましてや私の側にたまたまいるユヴァーサからの神性助言者は、純粋に物質的なこれらの創造を知覚しない。我々は、所属するエネルギー変成者の中の1名から我々の心に提示される精霊対応者を眺めることによりこれらの物質構造がどのように現れるかを明察する。しかし、この物質建造物は、必ずしも私には現実ではないのだが、精霊存在体には、それは、もちろん、まさに現実であり、物質的人間にとり非常に実用的である。

44:0.17 (498.8) 精霊界と物質界の双方の生物の現実を識別できるある種の存在体の型がある。この類に属するのは、いわゆるハヴォーナサーヴァタルの4番目の生物と調停者

の4番目の生物である。時間と空間の天使達は、肉体の人生からの救出後にくる上昇する人間もまたその能力に恵まれているように精霊と物質存在体のいずれについても明察する能力に恵まれている。上昇者は、より高い精霊段階への到達後、物質の、モロンチアの、精霊の現実を認識することができる。

44:0.18 (498.9) ここにはまた、かつての人間であり、また上昇する調整者融合のユヴァーサからの強力な使者が、私とともにおり、強力な使者は、あなたをあなたと知覚し、同時に単独使者、超熾天使、および他の天の存在体の出席を思い描いている。あなたは、その長い上昇において決して前の生活の仲間を見分ける力を失わないであろう。人生の段階において内部へと進むにつれ、あなたは、いつも自身の以前の、下級の経験段階にいる仲間の存在体を認識し、親しくつきあう能力を保有するであろう。それぞれの新移動、あるいはそれぞれの復活が、あなたから前の状態のあなたの友人や仲間を見分ける能力を全く奪うことなくあなたの視力の範囲にもう一つの精霊存在体集団を加えるであろう。

44:0.19 (498.10) このすべてが、内住する思考調整者の作用で上昇する人間の経験において可能にされる。かれらが、あなたの全生涯の経験の写しを保存により、あなたが、以前有していた真の特性を決して失わないことが保証されるし、これらの調整者は、あなたの一部として、事実上あなたとして、あなたと共に経験していく。

44:0.20 (499.1) だが、私は、天の熟練者の仕事の本質を物質的な心に伝えることができないと悲観する。私は、人間の心にこれらのモロンチア業務と準精霊現象の現実を繰り広げていく努力において絶えず思考を歪めたり、言葉をねじ曲げる必要に迫られている。あなたの理解力では把握できないし、これらの準精霊活動のもつ意味や価値や関係についてあなたの言語での伝達は、適正を欠いている。そこで、私は、そのような請負仕事において大成功は、絶対的に不可能であると完全に理解をする一方で、これらの現実に関し人間の心を啓発するこの努力を続けている。

44:0.21 (499.2) 私は、人間の物質的活動と天の熟練者の多様な機能の間の粗雑な平行の素描の試みをほんのわずかしか

できない。ユランチアの人種が、芸術と他の文化的達成においてより高度であったならば、私は、人間の心を映し出す努力において物質的事柄からモロンチアの事柄へと更に遠くへ進むことができるのである。私が完遂したいと望めるほとんどすべては、モロンチア世界と精霊世界のこれらの業務の現実に関わる事実を強調することである。

1. 天の音楽家

44:1.1 (499.3) あなたは、人間の限られた聴力をもってしてモロンチアの旋律をほとんど想像することはできない。人間の聴覚では認識されない美しい音の物質範囲さえ存在しており、モロンチアの協和と精霊の協和の想像もつかない範囲については言うまでもない。精霊の旋律は、物質的音波ではなく、天の人格の精霊により受け取られる精霊脈動である。演奏の壮大さはもちろんのこと、完全に人間の理解力を超える球体の旋律に関連する範囲の巨大さと表現の魂がある。私は、領域の旋律が天の回路の精霊エネルギーに流れ込む間、何百万もの崇高な法悦状態に陥った存在体を目にしてきた。これらの驚異の旋律

は、宇宙の最も遠く離れた地域に放送することができる。

44:1.2 (499.4) 天の音楽家達は、次の精霊原動力の操作によって天の協和の生産に従事している。

44:1.3 (499.5) 1. 精霊の音—精霊の流れの断続

44:1.4 (499.6) 2. 精霊の光—モロンチアと精霊の領域の光の制御と増大

44:1.5 (499.7) 3. エネルギー衝突—モロンチアと精霊エネルギーの巧みな管理により引き起こされる旋律

44:1.6 (499.8) 4. 色彩交響曲—モロンチアの色調の旋律。これは、天の音楽家の最高達成の中に位置する。

44:1.7 (499.9) 5. 関連精霊の協和—モロンチアと精霊存在体の異なる系列の配列と結合そのものが制作する荘厳な旋律

44:1.8 (499.10) 6. 思考の旋律—精霊的思考の熟考は、それほどまでに完成されたハヴォーナの旋律で急に現れる。

44:1.9 (499.11) 7. 空間の音楽—適切に調子を合わせることで他の球体の旋律は、宇宙放送回路で受信ができる。

44:1.10 (500.1) 人間の楽器利用に類似する、音、色、エネルギー操作に関する10万以上の異なる様式がある。あなたの舞踊の一座、合奏は、物質的創造物が存在体の配置と人格配列ための天の協和に近づく粗雑で奇怪な試みを明らかに表している。モロンチア旋律の他の5つの型は、物質体の知覚機構による認識はされていない。

44:1.11 (500.2) 和音、施律的関連性をもつ7段階の音楽は、精霊の意思の疏通の一つの普遍的記号である。例えばユランチアの人間が理解するところの音楽は、ジェルーセム、つまり体制本部の学校において最高の表現に到達する。そこでは、音についての調和が半物質の存在体に教えられる。必滅者は、モロンチア旋律の他の型と天の和音の他の型に反応しない。

44:1.12 (500.3) ユランチアにおける音楽鑑賞は、物理的であり、かつ精霊的である。そして、人間の音楽家は、人間の遠い昔の先祖の粗暴な単調さから音鑑賞のより高い段階へと音楽の理解力を高めるために多くのことをしてきた。ユランチアの人間の大多数が、物質的筋肉ではあまりにも大幅に、心と精霊ではあまりにも僅かに音楽に反

応する。それにしても、音楽鑑賞における35,000年以上もの間の安定した向上というものがあった。

44:1.13 (500.4) 美しいシンコペーションは、原始人の音楽的単調さからあなたの後の音楽家の表現に豊かな協和と意味深い旋律への変遷を表す。これらの初期のリズムの型は、和音鑑賞のためのより高い知能の発揮を伴わずして音楽愛好感覚の反応を刺激し、それ故、より広く未熟であるか精霊的に怠惰な個人の心を引く。

44:1.14 (500.5) ユランチアの最良の音楽は、あなたの音楽家の天の仲間が聞くすばらしい一節のただの一瞬の反響であり、天の仲間達は、音の調和の楽音的旋律としてモロンチア原動力のこれらの和音の断片だけを記録に残した。精霊-モロンチアの音楽は、表現と再現の7方法全ての使用はまれではないので、人間の心は、高い球体のこれらの旋律を音楽の中の音の単なる音符に縮小させるいかなる試みにおいても大いに不利である。そのような努力は、一楽器を用いて大きなオーケストラの旋律を再生させる努力をしているようなものであろう。

44:1.15 (500.6) あなたは、ユランチアでいくつかの美しい旋律を組み合わせてきたものの、音楽的にはサタニア内の隣接する多くの惑星ほどにはあまり進歩してこなかった。アダームとハヴァーが生存してさえいたならば、あなたにはほんとうに音楽というものがあったであろう。しかし、その本質がとても素晴らしい和音の贈り物が、非音楽的傾向の旋律によりたいそう希薄にされてきたので、人間1,000人の生涯においてただ一度だけ和音への何らかの素晴らしい鑑賞力が見られる。しかし、落胆していけない。いつか、本物の音楽家が、ユランチアに現れるかもしれないし、全民族が、その音楽家の旋律のすばらしい調べに魅了されるであろう。一人のそのような人間が、国全体の方向、文明世界全体の方向さえも永遠に変えることができる。「旋律は世界全体を変える力を持つ」というのは、文字通り本当である。永遠に、音楽は、依然として、人、天使、精霊の普遍言語であり続けるであろう。和音は、ハヴォーナの話法である。

2. 天の再現家

44:2.1 (500.7) 人間には、私があなたの物質的言語全体の、しかも限られた記号表現での例証を試みなければならない

天の再現家の機能についての貧弱で歪曲された概念以上のことはほとんど期待はできない。精霊-モロンチア世界には無数の最高価値の事柄、すなわち再現に値はするもののユランチアでは未知の事柄、とても「人の心に入り」にくかった活動、つまり神が肉体での人生を乗り切る者達を待つそれらの現実の活動の部類に属する経験がある。

44:2.2 (501.1) 天の再現家には7集団あり、私は次の分類でそれらの仕事を例証するつもりである。

44:2.3 (501.2) 1. 声楽家—過去の特定の協和音を繰り返し、現在の旋律を解釈する協和，和声家。しかし、このすべてがモロンチア段階で成し遂げられる。

44:2.4 (501.3) 2. 色彩労働者—あなたが素描家や画家と呼ぶかもしれない光と陰のそれらの芸術家。未来のモロンチアの楽しみのために過ぎ行く眺めや束の間の出来事を保存する芸術家。

44:2.5 (501.4) 3. 光の写生家—映画がまさにありのままの例であるところの真の準精霊-現象保存の製作者。

44:2.6 (501.5) 4. 歴史的展示家—宇宙記録と歴史の決定的な出来事を劇的に再現する者。

44:2.7 (501.6) 5. 予言的芸術家—未来に歴史の意味を映し出す者。

44:2.8 (501.7) 6. 伝記の語り手—人生経験の意味と重要性を永続させる者。将来の達成価値への現在の個人的経験の予測。

44:2.9 (501.8) 7. 管理演技者—政府の哲学と行政手法の重要性ついて表現する者、主権についての天の劇作家。

44:2.10 (501.9) 天の再現家は、頻繁にしかも効果的に心の休息のある型、加えて人格の気晴らしのある種の型と記憶再現との結合において逆戻り監督と共同する。モロンチアの秘密会議と精霊集会を前にして、これらの再現家は、時々そのような集会の目的を代表する途方もない劇的光景に係わりをもつ。私は、100万以上の俳優が1,000の連続場面を制作したそのような並み外れの上演を最近目のあたりにした。

44:2.11 (501.10) より高位の優れた教師と変遷聖職者らは、モロンチアの教育活動において自由に効果的にこれらの様々な再現家集団を利用する。しかし、すべての努力が、一時的な絵図に傾けられるわけではない。多くが、それらの仕事の非常に多くが、永久的本質であり、すべての未来への遺産としていつまでも残るであろう。これらの熟練者は、集団で機能するときとても万能であり、一時代を再現することができ、しかも熾天使の聖職者との共同においては、実際に時間の人間予言者に精霊世界の永遠の価値を描くことができるほどである。

3. 神性の建築者

44:3.1 (501.11) 「建築者と製作者が神である」ところの都市がある。我々は、精霊の類似物にあなた方人間が慣れ親しんでいるすべてを、また言い表せない以上に持っている。また言い表せない以上に親しんでいるすべてを持っている。我々には、家、精霊の安らぎ、およびモロンチアの必需品がある。我々には、人間が楽しむことができるあらゆる物質的満足に対し我々の存在を豊かにし、拡大することに役立つ何千もの精霊的現実がある。神性の建築者は、7集団で機能する。

44:3.2 (502.1) 1. 家の設計家と建築家—個人や労働集団に割り当てられた住まいを建設し改造する者。モロンチアと精霊のこれらの住居は、実存する。それらは、あなたの近距離の視力には見えないだろうが、我々にとっては非常に現実的であり、美しい。ある程度、すべての精霊存在体は、建築家とモロンチア、あるいは精霊の住まいに関し一定の細部の計画と創造を共有できる。これらの家は、住むことになるモロンチア、あるいは精霊創造物の必要性に従い備えつけたり、装飾が施される。これらのすべての建設には、個々の表現ための豊富な多様性と十分な機会がある。

44:3.3 (502.2) 2. 職業建築家—精霊とモロンチア領域の一定の、そして通常の労働者の住まいを設計し組み立てる際に機能する者。これらの建築家は、ユランチアの作業場と他の工場を建設するもの達に匹敵する。変遷世界には、互いの活動と専門部門には欠くことのできない経済がある。我々は皆、すべてをするわけではない。モロンチアの存在体と進化する精霊の間には機能の多様性があるが、これらの職業建築家は、より良い作業場を造るば

かりではなく、労働者の職業上の高揚にもまた貢献する。

44:3.4 (502.3) 3. 遊戯建築家。巨大な建物は、人間が気晴らし、ある意味では遊びと呼ぶであろう休息の季節に利用される。モロンチア世界、つまり進化する惑星からつい最近取り除かれた上昇する存在体の訓練が挙行されるそれらの変遷球のユーモアをもつもの達である逆戻り監督に適した設定のために対策がとられる。より高い精霊でさえ精霊的再充電の期間、回顧的ユーモアのある種の型に関わっている。

44:3.5 (502.4) 4. 崇拝建築家—精霊の寺院やモロンチア寺院の経験豊富な建築家。人間上昇の全世界には崇拝の寺院があり、それらは、モロンチア領域と精霊球の最も優れた創造である。

44:3.6 (502.5) 5. 教育建築家—モロンチア訓練と精霊の進歩的学習の本部を建設する者。道というものは、宇宙文化についての知識、つまり上昇する人間をモロンチアの世界と精霊の世界のより知的で有能な公民にするために設計された情報のみならず、さらなる知識を取得するため

に、すなわち人の現在の、そして今後の仕事に関する追加情報を獲得するためにいつも開かれている。

44:3.7 (502.6) 6. モロンチア立案者—いかなる1球体のいかなる1度の臨場の際と同じく、全領域の全人格の対等の関連性のために建てる者。これらの立案者は、進歩的なモロンチア生活の対等関係を充実させるためにモロンチアの力の監督者と協力する。

44:3.8 (502.7) 7. 公共建築家—崇拝目的のものを除く集会目的の所定場所を計画し、建設する熟練者。共通の集会場所は、優れておりかつ立派である。

44:3.9 (502.8) 物質的人間の感覚的理解には、これらの建造物もそれらの装飾も、正確には実感がわかないであろうが、我々にとっては誠に現実である。肉体でそこにいることができたとしても、あなたには、これらの寺院を見ることはできないであろう。にもかかわらず、これらの超物質の創造のすべてが実際にそこにあり、我々は、明確に識別し、と同時にそれらを完全に楽しむのである。

4. 思考記録者

44:4.1 (503.1) これらの熟練者は、領域の優れた考えの保存と再現に専念し、7集団で機能する。

44:4.2 (503.2) 1. 思考保存者。これらは、領域のより高度の思考の保存に打ち込む熟練者である。思考保存者は、モロンチア世界で実に精神機能のとても大切にする。私は、最初にユランチアに来る前に記録を見て、この惑星の幾つかのすばらしい心の観念化の放送を聞いた。思考記録者はそのような高貴な考えをユヴァーサの言語で保存する。

44:4.3 (503.3) それぞれの超宇宙にはそれ自身の言語、その人格によって話され、その領域全体に普及している言葉がある。これは、ユヴァーサの言葉として我々の超宇宙では知られている。また、各地方宇宙には、それ自身の言語がある。ネバドンのより上の系列のすべては、ネバドンの言語とユヴァーサの言葉の両方を話し2種類の言語を操る。異なる地方宇宙からの2名の個人が出会うとき、双方は、ユヴァーサの言葉で伝達し合う。しかしながら、もしそれらの1名が別の超宇宙の出身であるならば、双方は通訳者を当てにしなければならない。中央宇

宙には、言語の必要はほとんどない。誤りのないほぼ完全な理解が存在する。そこでは神以外については完全に理解される。我々は、楽園での一遇の機会は、1,000年間で人間の言語によって伝達し合えるよりも、一層の相互理解を披瀝するということを教えられる。サルヴィントンにおいてさえ、我々は、「我々が知られているように知っている。」

44:4.4 (503.4) 考えをモロンチアと精霊の球体における言語に翻訳する能力は、人間の理解を超えている。考えを永久的記録に移す度合いは、専門の記録者により非常に加速できるので、50万語相当、というか、思考表象が、ユランチアの1分間で登録できる。これらの宇宙言語は、発展する世界の言葉よりもはるかに充実している。ユヴァーサの概念記号は、基本的な字母はほんの70記号を有するとはいえ、10億文字以上ある。数にして48の基本的記号、つまりアルファベットであるネバドンの言語は、それほどまでに複雑ではない。

44:4.5 (503.5) 2. 概念記録者。この2番目の記録者集団は、概念の絵、すなわち思考の原型に関係している。これは、物

質的領域では未知の永久的記録の原型であり、私は、方法によりあなたが普通の文字言語の精読で100年間で獲得できるより以上の知識をあなたの時間の1時間で得ることができるであろう。

44:4.6 (503.6) 3. 表意文字記録者。我々にはあなたの書き言葉と話し言葉の双方に相当するものがあるが、思考の保存には通常絵画化と表意文字の手法を用いる。表意文字を保存するもの達は、概念記録者の仕事の際、1つを千倍に改良することができる。

44:4.7 (503.7) 4. 雄弁な話法の推奨者。この記録者集団は、再現のための思考を雄弁な話法で保存する課題に従事する。しかし、我々は、ネバドンの言葉を借りて言えば、30分の演説でユランチアの人間の全生涯の内容に言及できる。これらの業務の理解へのあなたの唯一の望みは、あなたの混乱し歪められた夢の世界の方法—あなたが、夜の季節のこれらの幻想の経験年数を数秒内で踏破する方法—について立ち止まって考えることである。

44:4.8 (503.8) 精霊世界の雄弁は、ユランチアの粗雑で口ごもりの演説だけを経験したあなたを待ち受ける稀なもてな

しの1つである。言葉では表現できない奮起させるサルヴィントンとエデンチアの演説には、音楽の協和と表現のもつ快い調子がある。これらの燃え立つような概念は、栄光の王冠の宝石の美に似ている。しかし、私にはそれができない。私には別の世界のこれらの現実の幅と深さを人間の心に伝えることができるものではない。

44:4.9 (504.1) 5. 放送監督。楽園、超宇宙、地方宇宙の放送は、思考保存者のこの集団の一般監督下にある。放送監督らは、全ての楽園放送を超宇宙に適合させ、日の老いたるものの放送を翻案し、地方宇宙の個々の言葉に翻訳し、放送資料の調整者はもちろん検閲者と編集者として役目を果たす。

44:4.10 (504.2) 地方宇宙の放送は、個々の体制と惑星による受信に向けて変更もされなければならない。宇宙のこれらの報告伝送は、慎重に監督され、一定回路のあらゆる世界についてのすべての報告に関わる適正な受信の保証のために、常に控えの登録簿がある。これらの放送監督は、情報伝達の全目的のために空間の流れの利用に技術的に熟練している。

44:4.11 (504.3) 6. リズム記録者。彼らの仕事は、あなたの詩的創作とは非常に異なり、またほぼ無限に卓越してはいるものの、ユランチア人は、まちがいなく熟練者を詩人と呼ぶであろう。リズムは、モロンチア存在体と精霊存在体の双方にとりあまり消耗しないので、喜びの増大はもちろん、リズミカルな型での数多くの機能の実践により努力というものは頻繁に効率を増加させる。私は、あなたがエデンチア集会の詩的な放送のいくつかを聞き、自己表現と社会的調和のこの絶妙の型の名手である星座の天才の色と音色の豊かさを楽しむ特権が与えられればと願うのみである。

44:4.12 (504.4) 7. モロンチア記録者。私は、モロンチアの出来事と精霊業務の様々な組分けの群像画を保存する仕事に割り当てられるこの重要な思考記録者集団の機能を物質の心に説明する方法を考えて途方に暮れている。ぞんざいに図解されるとして、モロンチア記録者らは、変遷世界の集団写真家である。彼らは、モロンチアの記録の殿堂の公文書保管所にそれらを保存し、これらの進歩的な時代の重大な場面とつながりを未来のために保存する。

5. エネルギー操縦者

44:5.1 (504.5) 注意を引きつけるこれらの有能な熟練者は、あらゆる種類のエネルギーに関わっている。物理的、心的、精霊的。

44:5.2 (504.6) 1. 物理的エネルギー操縦者。物理的エネルギー操縦者は、長期間、力の管理者と共に働き、物理的エネルギーの多くの段階の操作と管理における専門家である。それらは、基本的な3つの流れと超宇宙の30の補助的エネルギー分離に精通している。これらの存在体は、計り知れないほどに変遷世界のモロンチアの力の監督者の役に立っている。これらの存在体は、楽園の宇宙映像の永続的学生である。

44:5.3 (504.7) 2. 心-エネルギー操縦者。これらは、知的存在体のモロンチア型と他の型の間の相互通信の専門家である。人間相互間のこの伝達の型は、ユランチアには実際には存在しない。これらは、上昇するモロンチア存在体が互いに伝達し合うための能力を促進する専門家であり、それらの仕事は、人間の心に描くには私の力をはるかに超える知性のつながりにおける数多くの無類の冒険

を擁している。これらの熟練者は、無限の精霊の心の回路の鋭敏な学生である。

44:5.4 (505.1) 3. 精霊-エネルギーの操縦者。精霊エネルギーの操縦者は興味深い集団である。精霊エネルギーは、確立された法則通りに、ちょうど物理エネルギーのように作用する。すなわち、精霊原動力は、よく見てみると、ちょうど物理エネルギーができるように、当てにできる推論をもたらし、正確に扱うことができる。物質領域で普及しているように、精霊世界にも同様に信頼できる法則がある。過去数百万年の間、精霊的エネルギーの取り入れのための多くの改善方法は、宇宙全体の天の存在体のモロンチア系列と他の系列に適用される精霊エネルギーを律する永遠なる息子の基本法則を学ぶこれらの学生により功を奏してきている。

44:5.5 (505.2) 4. 合成操縦者。これは、物理的、心的、精霊的エネルギーとして宇宙全体に現れる神性エネルギーの3基本相の機能的つながりに専心するよく訓練された存在体の冒険集団である。これらは、この神性人格に壮大な全宇宙の神性の経験的統一が起こらなければならないの

で、崇高の神の宇宙臨場を現実に発見しようとしている鋭敏な人格である。しかも、これらの熟練者は、ある程度、近代において多少の成功を収めてきた。

44:5.6 (505.3) 5. 輸送顧問。輸送熾天使の技術顧問この一団は、そうでなければ空間世界で輸送主任を補佐する星について学ぶ学生との協力において最も敏腕である。それらは、球体の交通監督者であり、すべての棲息惑星に臨場している。ユランチアでは70名の輸送顧問団が努めている。

44:5.7 (505.4) 6. 情報伝達の専門家。ユランチアには、同様に、惑星間と宇宙間情報伝達の12名の技術者が努めている。これらの長い経験をもつ存在体は、領域の情報伝達に適用される伝送と干渉の法則に関する知識の専門家である。引力使者と単独使者の通信を除いては、この一団は、空間の通信のすべての型に関係がある。ユランチアでは、それらの仕事の多くが、大天使の回路上で達成されなければならない。

44:5.8 (505.5) 7. 休息の教師。神性の休息は、精霊-エネルギー取り入れ技術に関連づけられている。モロンチアと精霊

エネルギーは、物理的なエネルギーと同じく確かに、だが同じ理由ではなく、補給されなければならない。私は、必然的に、あなたを啓発する試みにおいて粗雑な例証を使うよう強いられている。にもかかわらず、精霊世界の我々は、定期的に我々の通常の活動を止め、神性の休息に入り、こうして、使い果たされるエネルギーを取り戻す適当な集合場所へ赴かなければならない。

44:5.9 (505.6) あなたは、モロンチアの存在体になり、精霊の諸事の手法を経験し始めた後に大邸宅世界に着くと、これらの事柄におけるあなたの最初の貴重な経験をする。あなたは、空間の巡礼者の前円横断後に、ハヴォーナの最も内側の円について知り、楽園の長い、しかも生き返る休息に入らなければならないということを知る。これは、時間の経歴から永遠の奉仕への通過のための技術的要求事項でのみならず、それもまた必需品である、つまり上昇経験の最終的段階に起こりがちなエネルギー損失を補給し、果てしない経歴の次の場面のための精霊の力の蓄えが必要な休息の型である。

44:5.10 (506.1) またこれらのエネルギー操縦者は、エネルギー取り入れの最も効率的様式に関し、また積極的な天使童子と消極的なサノビム間の相違する原動力の最も有用な均衡維持に関して熾天使、天使童子、サノビムに助言を与えるといったような一覧にするにはあまりにも多過ぎる他の何百もの方法で機能する。これらの専門家は、他の多くの方法で空間の基本的なエネルギーの有効利用に非常に不可欠である神性の休息を理解する努力においてモロンチアと精霊創造物に力を貸すのである。

6. 意匠家と装飾家

44:6.1 (506.2) 私は、これらの類い希なる熟練者の絶妙の業についての描写法を知っていたならばといかに願っていることか。精霊美化の仕事についての私のあらゆる説明の試みは、あなたの心と物質の世界においてこれらのことをするあなた自身の哀れな、だが価値ある努力を物質的な心に記憶を呼び起こすだけであろう。

44:6.2 (506.3) 1,000以上の活動を擁するこの一団には、次の主要な7団長がいる。

44:6.3 (506.4) 1. 色の工芸作家。これらは、精霊反射の1万の色調に自らの調和のとれた美の絶妙さをちりばめるものである。色の知覚はさておき、人間の経験にこれらの活動を比較できるものは何もない。

44:6.4 (506.5) 2. 音の意匠家。さまざまの自己同一性の精霊波とモロンチア的鑑賞は、あなたが音と呼ぶこれらの意匠家により表現される。実を言えば、これらの推進力は、ありのままの、しかも名誉ある天の軍勢の精霊-魂の見事な反映である。

44:6.5 (506.6) 3. 感動の意匠家。感覚のこれらの促進者と修復者は、時間の子供の研究と啓発に向け、それにモロンチア前進者の閃きと美化に向け、モロンチアの感情と神性の感動を保存する者である。

44:6.6 (506.7) 4. 臭いの芸術家。崇高な精霊活動と化学臭の物理的認識とのこの比較は、まことに残念ではあるが、ユランチアの人間には、他のいかなる名称でもこの活動を認識することはとてもできない。これらの熟練者は、光の前進的子供の啓発と喜びのために自分達の様々な交響

曲を創作する。あなたには、精霊的な壮大さのこの型に比較できるものは何一つない。

44:6.7 (506.8) 5. 臨場装飾家。これらの熟練者は、自己装飾の芸術、または創造物美化の方法に専心してはいない。これらの様々な存在体の合成群像における異なるモロンチアと精霊体系に割り当てられる位置的価値を通して関係の意味、重要性、を脚色することにより、個々のモロンチアと精霊創造物における多数の、そして喜ばしい反応の産生に専念する。これらの芸術家は、あなたが生きた音符、におい、光景を配列し、それから栄光の賛美歌へとそれらを混和するように超物質存在体を配列する。

44:6.8 (506.9) 6. 好みの意匠家。これらの芸術家についてあなたにどのように伝えられるのか。私は、それらはモロンチア好みの改善者であると、また進化する精霊の感覚を研ぎ澄ませることにより美的鑑賞を増加させることにも努力すると、漠然と提唱できるかもしれない。

44:6.9 (507.1) 7. モロンチア統合者。これらは、他の全ての者が各々の貢献をなし終えたとき、そのとき、モロンチア群像に最高潮の、仕上げの筆致を加え、その結果として

神らしい美の感激的描写を、すなわち精霊存在体とそのモロンチア仲間への永続的閃きを達成する名匠である。しかし、あなたは、モロンチアと精霊世界の芸術的栄光と審美的美を想像し始められる前に、動物体からの自己の救出を待ち受けなければならない。

7. 調和労働者

44:7.1 (507.2) これらの芸術家には、あなたが推測に導かれるかもしれないような音楽、絵画、または何か同様のものに対する関心はない。それらは、精霊世界に存在するが、人間には認識されていない特定の原動力とエネルギーの操作と構成に専念している。比較のための最少に可能な基礎が私にあったならば、精霊達成のこの無類の領域の描写を試みるのであるが、私は望みを絶つ。—天の芸術性のこの球体について人間の心に伝える何の望みもない。とは言うものの、説明し得ないことにまだ含意できるかもしれない。

44:7.2 (507.3) 美、リズム、および調和は、知的に関連づけられ精霊的に同系のものである。真実、事実、および関係は、知的に不可分であり美の哲学的概念に関連してい

る。善、正義、公正さは、哲学的相互関係があり、精霊的に生ける真実と神性美とが深く結びついている。

44:7.3 (507.4) 創造物のそのような試みられた発展が非統一であるならば、真の哲学の宇宙概念、天の芸術性の描写、または神性美についての人間の認識を表現する人間の試みは、決して本当に満足させられはしない。発展する生物の中の神性の強い衝動であるこれらの表現は、知的上現実であり、感情的に美しく、精霊的に善でありうる。しかし、表現に関わる真の魂は、真実のこれらの現実、美の意味、善の価値が熟練者、科学者、または哲学者の人生経験で統一されない限り不在である。

44:7.4 (507.5) これらの神性の本質は、完全にかつ絶対に神の中で統一される。そして、神を知るすべての人、または天使は、終わりなき神類似の到達手段により統合された自己表現の絶えず前進する段階における制限なき可能性を持っている。—不朽の真実、普遍の美、神性の善の進化的経験における経験上の混和。

8. 人間の切望とモロンチア業績

44:8.1 (507.6) 天の熟練者は、ユランチアといったような物質的惑星において個人的には働いていないものの、生まれながらに天才的な人類の個人に助力を申し出るために時々やって来る。これらの熟練者は、このように割り当てられると、進歩のための惑星天使の指揮下で一時的に働く。熾天使の軍勢は、生来の資性を持ち、特別の、かつ以前の経験の調整者を所有もしているそれらの人間の芸術家を補助する試みにおいてこれらの熟練者と協力する。

44:8.2 (507.7) 人間の特別能力には可能な3源泉がある。その底部には、自然の、あるいは生来の素質が常に存在している。特別能力は、決して神の任意の贈り物ではない。あらゆる際立つ才能には、常に伝来の基礎がある。この生まれながらの能力に加えて、あるいは、むしろそれに補足して、内住する調整者が、他の世界や他の人間の中において、実際の、真のそのような同じ経験をしたかもしれないそれらの個人において思考調整者の導きの寄与があるかもしれない。人間の心と内住する調整者双方が非常に熟練しているような場合、精霊の熟練者は、これらの才能を調和させるものとして行動するために、また別

な方法で、これらの人間が絶えず完成する理想を求めるよう、領域の啓発のための高められた描写の試みの手伝いを奮起させるために派遣されるかもしれない。

44:8.3 (508.1) 精霊熟練者の集団に階級制度はない。あなたの起源がいかに低くとも、もしあなたが、表現能力と天賦の才を持っているならば、モロンチア経験と精霊的到達の度合において上昇するにつれ、適切な認識を得、正当な評価を受けるであろう。モロンチア経歴が、完全に償わなかったり、完全に取り除かないというような人間の遺伝上の不利な条件、または人間の環境の剥奪はありえない。そして、芸術的達成と表現に満ちた自己実現のそのようなすべての満足感が、段階的前進におけるあなた自身の個人的努力によってもたらされるであろう。進化の平凡さからくる切望が、ついに実現されるかもしれない。神々は、任意に才能と能力を時間の子供に授与しないが、人間のすべての高貴な切望充足への到達に、また崇高な自己表現へのすべての人間の飢餓への満足感に備えるのである。

44:8.4 (508.2) 但し、すべての人間が覚えておくべきである。肉体の人間を魅了する秀でるための野心の多くは、モロンチアと精霊経歴におけるこれらの同じ人間には持続しないであろう。上昇するモロンチアは、かつての全く利己的な切望と自分本位な野心を社会化することを学ぶ。それでもなお、あなたが地球でしてみたいとあれほど真剣に切望したこと、またあれほど持続的にあなたを否定した情況それらのことを、モロンチア経歴において本当のモタ的洞察を取得した後に、もしあなたがやはりしたいと望むならば、そのときあなたには、長年の願望を完全に満たすあらゆる機会が間違いなく与えられるであろう。

44:8.5 (508.3) 精霊経歴に着手する上昇する人間は、地方宇宙を去る前にあらゆる知的、芸術的、社会的切望、あるいは人間の存在水準かモロンチアの存在水準を常に特徴づける真の大望に満たされるであろう。これは自己表現と自己実現の同等の満足感の達成ではあるが、同じ経験上の状態への到達ではなく、技能、手法、表現における特性的個性の完全な抹消でもない。しかし、経験上の個人的到達からの新しい精霊的差異は、こうしてハヴォーナ

経歴の最終円を終えてしまうまで鈍化されたり、均等化されはしないであろう。そして、楽園の居住者は、次に創造物の究極状態の集団到達—人間終局者の第7段階の精霊の目標。によってのみ平らにできる個人的経験のその準絶対の差異に適応していく必要性に直面するであろう—人間終局者の第7段階の精霊の目標。

44:8.6 (508.4) これが、楽園創造者の神性美をに関し芸術的描写で建築球体を賛美するために非常に多くのことをする絶妙の労働者のその宇宙的本体である天の熟練者の物語である。

44:8.7 (508.5) [ネバドンの大天使による記載]

論文 45
地方体制の行政

45:0.1 (509.1) サタニアの行政の中心部は、数にして57個の建築球体の一群から成る。ジェルーセム自体、7個の主要衛星、49個の小衛星。その引力はいささか小さいものの、体制首都ジェルーセムは、ユランチアの大きさのおよそ100倍である。ジェルーセムの主要衛星は、7個の変遷世界であり、その一つ一つが、ユランチアの約10倍の

大きさであるが、この変遷球体の7個の小衛星はユランチアの規模である。

45:0.2 (509.2) 7個の大邸宅世界は、変遷世界１号に属する7個の小衛星である。

45:0.3 (509.3) 建築世界57個のこの全体制は、特別に創造されたこれらの球体の物理的組織と配列の確立的手法に基づきサタニアの力の中心者と物理の主たる制御者の連携により独自に光、熱、水、エネルギーが供給されている。それらはまた、土着のスポーナーギアにより物理的に世話されており、その他の点でも維持されている。行き届いている、

1. 過渡的文化世界

45:1.1 (509.4) ジェルーセムの周りで揺れ動く7個の主要世界は、一般的には過渡的文化球体として知られている。その支配者達は、節目節目でジェルーセムの最高執行委員会により任命される。これらの球体は次の通りに付番され命名されている。

45:1.2 (509.5) 第１号。終局者の世界。これは、地方体制の終局者一団の本部であり、人間上昇の計画に完全に専念する7大邸宅世界である受信世界に囲まれている。終局者の世界は、すべての7大邸宅世界の居住者に開かれている。輸送熾天使は、変遷の人間の究極目標への信念を養うよう考案されているこれらの巡礼の旅で上昇する人格をあちらこちらに運ぶ。終局者とその構造体は、通常モロンチアの視覚には知覚可能ではないが、エネルギ一変成者とモロンチアの力の監督者が、実際に楽園上昇を終了した者、また、あなたが長旅を始めているまさしくその世界に戻っていた、来た、これらの高度の精霊人格を、あなたが垣間見えるようにするとき、折々に、あなたは、途方もない請負仕事を成し遂げることができるという保証のしるしとして非常に興奮するようになるであろう。全大邸宅世界の一時逗留者は、終局者の視覚化のこれらの集会のために少なくとも年に１度は終局者球体に行く。

45:1.3 (510.1) 第２号。モロンチア世界。この惑星は、モロンチア生活の監督者の本部であり、モロンチアの長官達

が、モロンチア存在体と上昇する人間双方のその仲間と助手達、を訓練する7球体に囲まれている。

45:1.4 (510.2) あなたは、７大邸宅世界を通過する際、増加するモロンチア接触のこれらの文化的で社会的球体を進んで行くであろう。あなたは、1番目の大邸宅世界から2番目の大邸宅世界へと進むと、第２暫定本部、つまりモロンチア世界、そしてその他への訪問許可証をもらう資格ができるであろう。これらの文化的6球体のどれか1つに臨場の際、招待されて、あなたは、関連集団活動の包囲する7世界のいずれにおいても訪問者や観察者になることができる。

45:1.5 (510.3) 第３号。天使の世界。これは、体制活動に従事する全熾天使団体の本部であり、天使の訓練と教育の7世界により囲まれている。これらは、熾天使社交球体である。

45:1.6 (510.4) 第４号。超天使界。この球体は、輝く宵の明星のサタニアの故郷であり、等位の存在体とほぼ等位の存在体の広大な中央広場である。この世界の衛星7個は、

これらの無名の天の存在体の主要な7集団に割り振られている。

45:1.7 (510.5) 第５号。息子の世界。この惑星は、創造物-三位一体化の息子を含む全系列の神性の息子の本部である。包囲する7世界は、これらの神らしく関係する息子達のある種の特有の組み分けに専念している。

45:1.8 (510.6) 第６号。精霊の世界。この球体は、無限の精霊の高い人格の体制の集合場所としての働きをする。取り巻くその7個の衛星は、これらのさまざまの系列の個々の集団に割り当てられる。しかし、変遷世界第６号においては精霊の代理はなく、体制首都においてもそのような臨場は観測できない。サルヴィントンの神性聖職者は、ネバドンのいたる所にいる。

45:1.9 (510.7) 第７号。父の世界。これは静かな体制球体である。そこに存在体の集団は居住していない。光の偉大な寺院が中央の場所を占領するが、そこにはだれも見られない。全体制世界の全存在体は、崇拝者として歓迎される。

45:1.10 (510.8) 父の世界を囲む7個の衛星は、異なる体制においてさまざまに利用される。サタニアでは、それらは、ルーキフェレーンス反逆の抑留された集団の拘留球体として現在使用されている。星座首都エデンチアには、類似する監禁世界はない。サタニア反逆において反逆者に寝返ったわずかな熾天使と天使童子は、ずっと以前からジェルーセムのこれらの孤立世界に閉じ込められている。

45:1.11 (510.9) 第７大邸宅界の一時逗留者として、あなたは、第7変遷世界、つまり宇宙なる父の球体への出入りができ、またこの惑星を囲むサタニア監禁世界への訪問が許され、現在、そこにはマイケルに対する反逆でルーキフェレーンスとそれに従った人格の大半が幽閉されている。この悲しい光景は、最近の時代にずっと観察可能であり、日の老いたるものが、ルーキフェレーンスと宇宙の父であるマイケルにより提供された救済を拒絶した堕落しているその仲間の罪を裁くまで、全ネバドンへの厳粛な警告として仕事を継続するであろう。

2. 体制君主

45:2.1 (511.1) 地方体制の棲息界の最高行政官は、第一ラノナンデクの息子、つまり体制君主である。我々の地方宇宙においては、これらの主権者には、大きい管理責任が、つまり独特の個人的特権が委ねらていれる。体制君主が、体制業務の指揮に際し著しく幅広い個人的裁量権の行使が許容できるようにと、全宇宙が、オーヴォントンにおいてでさえ、組織化されるというわけではない。しかし、ネバドンの全歴史においてこれらの制約されていない行政者は、3度だけ不忠を示した。サタニア体制のルーキフェレーンス反逆は、全ての中で最後のものであり、最も広範囲に渡るものであった。

45:2.2 (511.2) サタニアにおいては、この悲惨な激変の後にさえ体制行政法に全く変更はなかった。現体制君主は、日の老いたるものが、ルーキフェレーンの後継者であるラナフォーゲにまだ完全に戻してはいない、いま星座の父の指揮下のある事柄を除いては、価値のない前任者に投資されていた全権力を持ち、全権威を行使する。

45:2.3 (511.3) サタニアの現在の長官は、思いやりがあり才気あふれる支配者であり、反逆の試練を経た君主である。

体制君主補佐として働いていたとき、ラナフォーゲは、ネバドン宇宙の先頃の激変においてマイケルに忠実であった。サタニアのこの強力で才気あふれる主は、多くの試練に耐えた行政者である。ネバドンの2度目の体制反逆時に、体制君主がつまずき、暗闇に陥ったとき、過ちを犯す長官の第一補佐ラナフォーゲは、政権を握り、そのように体制業務を司ったので、その不幸な体制の本部世界において、または、棲息惑星において比較的わずかの人格しか失われなかった。ラナフォーゲは、マイケルの奉仕において、優れた権威と高位にある兄のまさしく不履行に直面の際にこのように忠実に機能した全ネバドンの唯一の第一ラノナンデクの息子である優秀性をもつ。ラナフォーゲは、先の愚行のすべての成り行きが克服されるまで、また、反逆の産物がサタニアから取り除かれるまで、おそらくは、ジェルーセムから移動させられないであろう。

45:2.4 (511.4) サタニアの孤立世界の全業務がラナフォーゲの管轄に戻ったというわけではないが、ラナフォーゲは、世界の福祉への大いなる関心を明らかにするし、頻繁にユランチアへ訪れる。他の、また正常な体制にあるよう

に、君主は、孤立世界の世界支配者、惑星王子、および居住総督の体制協議会を統轄する。この惑星協議会は、「神の息子らが集まるとき」その時々に体制本部に集合する。

45:2.5 (511.5) 君主は、本部世界に住所を定める人格の様々な系列のある1集団と週に１度、ジェルーセムでは10日毎に秘密会議を開く。これらは、ジェルーセムの楽しく、くだけた時間であり、忘れられない機会である。ジェルーセムでは、存在体の様々な系列間に、またこれらの各集団と体制君主の間にこの上ない友愛が存在する。

45:2.6 (511.6) これらの特異な集まりが、ガラスの海において、体制首都の大集会場において起こる。それらは、純粋に社会的で精霊的な時である。惑星の行政に関係するものは、または上昇予定に関係するものでさえ、審議されない。上昇する人間は、この好機に単に楽しみ、仲間のジェルーセム住民に会うために集まる。君主に招待されないそれらの集団は、各本部における週毎の気晴らしの際に会う。

3. 体制政府

45:3.1 (512.1) 地方体制の体制君主である最高行政官は、常に第一補佐と第二補佐として機能する2、3名のラノナンデクの息子の支援を受ける。しかし、現在サタニアの体制は、7名のラノナンデクの部下により統治されている。

45:3.2 (512.2) 1. 体制君主—ラナフォーゲ、つまり、第１系列の2,709番であり、背教のルーキフェレーンの後継者。

45:3.3 (512.3) 2. 君主の第一補佐—マンスーロチア、第３ラノナンデクの17,841番。マンスーロチアは、ラナフォーゲに伴ってサタニアに派遣された。

45:3.4 (512.4) 3. 君主の第二補佐—サディブ、第３系列の271,402番。サディブもまたラナフォーゲとサタニアに来た。

45:3.5 (512.5) 4. 体制の管理者—ホルダント、つまり第３団の19番、人間存在の系列より上の拘留されているすべての精霊の把持者であり管理者。ホルダントは、同じくラナフォーゲとサタニアに来た。

45:3.6 (512.6) 5. 体制記録者—ヴィルトン、サタニアのラノナンデク省の秘書、第3系列の374番。ヴィルトンは、ラナフォーゲの最初の集団の一員であった。

45:3.7 (512.7) 6. 贈与監督—フォータント、マイケルのユランチア贈与以来のジェルーセムに移住させれた全宇宙活動に属する第二ラノナンデクと一時的な監督の予備軍の319,847番。フォータントは、ユランチア時間で1,900年間ラナフォーゲに所属していた。

45:3.8 (512.8) 7. 高位の相談役—ハナヴァード、第一ラノナンデクの息子の67番であり、宇宙の相談役と調整者の高位軍団の一員。サタニア最高執行委員会の議長代理として機能する。ハナヴァードは、ルーキフェレーンス反逆以来、ジェルーセムでこのように奉仕するこの系列の12番目である。

45:3.9 (512.9) 7名のラノナンデクのこの行政集団は、ルーキフェレーンス反逆の緊急事態で必要となった非常時の拡大行政を構成する。体制は、判決ではなく行政単位であるので、ジェルーセムには小規模の法廷しかないが、それでもラノナンデクの行政は、ジェルーセム最高執行委員

会、つまりサタニアの最高諮問機関により支えられている。この協議会は、12名の構成員から成る。

45:3.10 (512.10) 1. ハナヴァード、ラノナンデクの議長

45:3.11 (512.11) 2. ラナフォーゲ、体制君主

45:3.12 (512.12) 3. マンスーロチア、君主の第一補佐

45:3.13 (512.13) 4. サタニアメルキゼデクの長官

45:3.14 (512.14) 5. サタニア生命運搬者の監督代理

45:3.15 (512.15) 6. サタニア終局者の長官

45:3.16 (512.16) 7. サタニアの最初のアダーム、物質の息子の監督長

45:3.17 (512.17) 8. サタニア熾天使団の監督

45:3.18 (512.18) 9. サタニアの物理制御者の長官

45:3.19 (512.19) 10. モロンチアの力の監督者体制の指揮者

45:3.20 (513.1) 11. 中間被創造者体制の代理指揮者

45:3.21 (513.2) 12. 上昇する人間の一団の団長代理

45:3.22 (513.3) この協議会は、宇宙本部の最高協議会で地方体制を代表する3名の構成員を定期的に選ぶが、この代表は、反逆により中断されている。サタニアは、現在、地方宇宙本部に観察者をおいているが、マイケルの贈与以来、体制は、エデンチア立法府への構成員10名の選出を再開している。

4. 4名と20名の相談役

45:4.1 (513.4) ジェルーセム上の天使の住居回路の中心には、4名と20名の相談役からなるユランチアの諮問機関の本部がある。啓示者ヨハネは、それらを4名と20名の長老と呼んだ。「また御座のまわりには4席と20席の座があって、4名と20名の長老が白い衣を身にまとってそれらの座についていた。」この集団の中心の王座は、主宰する大天使の判事席、すなわち、全サタニアのための慈悲と正義の復活点呼の王座である。この判事席は、ジェルーセムに常にあったが、取り囲む24の席はほんの1,900年前に、キリスト・マイケルがネバドンの完全主権への昇進直後に、設置された。これらの4名と20名の相談役は、ジェルーセムでのマイケルの個人的代行者であり、それらには、サタニアの点呼に関するすべての問題にお

いて、また体制における孤立世界の人間上昇のための計画の他の多くの局面において主たる息子を代表する権限がある。これらの相談役は、ガブリエルの特別な要求とマイケルの異例の命令を果たすために指名された代行者である。

45:4.2 (513.5) 24名のこれらの相談役は、ユランチアの8種族から採用されてきており、この最終集団は1,900年前にマイケルの復活点呼時点に編成された。このユランチアの諮問機関は次の構成員から成る。

45:4.3 (513.6) 1. オナガー、「息を与えるもの」の崇拝において仲間を導いた前惑星王子時代の最有力者。

45:4.4 (513.7) 2. マンサンツ、仲間を「偉大なる光」の崇敬に向けたユランチアの後惑星王子時代の偉大な教師。

45:4.5 (513.8) 3.オナモナーロントン、はるかかなたの赤色人種の先導者、またこの人種を多神崇拝から「偉大なる精霊」の崇敬へと方向づけた者。

45:4.6 (513.9) 4. オーランドフ、青色人種の王子、また「崇高なる首長」の神性認識における先導者。

45:4.7 (513.10) 5. ポーシュンタ、絶滅した橙色人種の神託者、および「偉大なる教師」の崇拝におけるこの民族の先導者。

45:4.8 (513.11) 6. シングラントン、多くの真実の代わりに「一つの真理」の崇拝において自民族を教え導いた黄色人種の最初の者。何千年も前にこの黄色人種は、一神について知っていた。

45:4.9 (513.12) 7. ファンタヅ、暗黒からの緑色人種の救出者、また、「生命の一根源」崇拝のその先導者。

45:4.10 (513.13) 8. オーヴォノン、藍色人種の啓発者、また「神の中の神」の以前の奉仕におけるその先導者。

45:4.11 (514.1) 9. アダーム、ユランチアの不名誉なれど復権された惑星の父、必滅の肉体の姿に格下げされた、しかし生残し、次にマイケルの命令によりこの位置に登用された神の物質の息子。

45:4.12 (514.2) 10. ハヴァー、ユランチアの紫色人種の母。不履行の刑罰を受け、連れ合いと苦しみ、また共に復権さ

れ、人間生存者のこの集団と共に仕えるために配属された者。

45:4.13 (514.3) 11. ハノウク、必滅の肉体の生前に思考調整者と融合するユランチアの人間の最初の者。

45:4.14 (514.4) 12. モーシェ、埋もれた紫色人種の生存者の解放者、また「イスラエルの神」の名の下宇宙なる父への崇拝復活の扇動者。

45:4.15 (514.5) 13. エーリージャ、物質の息子後の時代の輝かしい精霊達成の移された魂。

45:4.16 (514.6) 14. メルキゼデクのマキヴェンタ、自らをユランチアの人種に贈与するこの系列の唯一の息子。メルキゼデクとしてまだ付番されているが、アブラハムの時代シャレイムにて人間の姿でユランチアに滞在し、人間の上昇者として奉仕の課題を永遠に担い、「いつまでもいと高きものの聖職者」になっている。このメルキゼデクは、ジェルーセムに本部のあるユランチアの惑星王子代理と自分の最後の贈与を人間の姿で経験した世界のその惑星王子であるマイケルのために行動する権限を近ごろ

宣言された。これにもかかわらず、ユランチアは、居住する継続的総督達に、つまり24名の相談役にまだ監督されている。

45:4.17 (514.7) 15. 洗礼者ヨハネ、ユランチアのマイケルの任務の先触れ、生身での人の息子の遠い従兄弟。

45:4.18 (514.8) 16. 第一の1-2-3、マイケルにより無条件主権執行開始直後にこの位置への昇進を受けたカリガスティア背信時のガブリエルの奉仕における忠誠な中間被創造者の先導者。

45:4.19 (514.9) これらの選ばれた人格は、ガブリエルの要求において差し当たり、上昇政体から免除されており、それらが、どれほど長くこの立場で仕えるのか我々には分からない。

45:4.20 (514.10) 座席番号17、18、19、20は、永久に埋められることはない。ユランチアの現在の贈与後の息子の時代から上昇する人間に後の課題のために開放されたままであったので、それらは、16名の永久構成員の満場一致の同意により一時的に補充されている。

45:4.21 (514.11) 21、22、23、24番は、現代に違うことなく続く他の、そしてその後の時代の偉大な教師のための予備に控えている間、同様に一時的に補充されている。権威の息子と師としての息子の時代と光と生命の時代は、起こるか起こらないかもしれない神性の息子の予期せぬ訪問にかかわらず、ユランチアで期待されている。

5. 物質の息子

45:5.1 (514.12) 神性の息子、高度の精霊、超天使、天使、中間被創造者の様々な系列を含む天の生命体の大分隊には、ジェルーセムに各本部と巨大な保護区がある。この素晴らしい領域の中央の住まいは、物質の息子の主要な寺院である。

45:5.2 (515.1) アダーム系の領域は、すべての新しいジェルーセム到着者の注目の的である。物質の息子と娘の各家族は、進化世界上の奉仕のためのその構成員の出発時間まで、あるいは、楽園-上昇経歴着手までその地所に住むが、それは、1,000の集合場所から成る巨大な領域である。

45:5.3 (515.2) これらの物質の息子は、発展宇宙の訓練球体に見られる性の再生産をする存在体の最高の型である。それらは、本当に物質的である。惑星アダームとハヴァーでさえ、棲息界の人類に明らかに見える。これらの物質の息子は、神性と完全性の上から人間性と物質的存在の下へと広がる人格連鎖における最後の、そして物理的輪である。これらの息子は、目に見えない惑星王子と領域の物質的創造物間で互いに接触可能な中継者を棲息界に提供する。

45:5.4 (515.3) サルヴィントンにおける千年毎の最後の記載では、ネバドンの地方体制首都の公民の地位にある 161,432,840 名の物質の息子と娘が記録に現れている。物質の息子の数は、相違する体制で異なり、その数は、自然繁殖により絶えず増加している。それらは、その再生機能活動において接触する人格の個人的願望により完全に指導されるのではなく、より高い管理体制と諮問機関によっても指導される。

45:5.5 (515.4) これらの物質の息子と娘は、ジェルーセムとその関連世界の永久的住民である。彼らは、ジェルーセム

の広大な地所を占領しており、中間者と上昇者の援助をもって実際に全通常業務を管理し、首都球体の地方管理に自由に参加する。

45:5.6 (515.5) ジェルーセムのこれらの生殖作用をする息子達には、メルキゼデク流の自治の理想の試みが許されており、非常に高度の社会の型を達成しつつある。息子の資格をもつより高い系列は、領域の拒否権利を留保するが、ほぼあらゆる点において、ジェルーセムのアダーム系は、普通選挙と代議政治により自らを治める。彼らは、いつかは事実上の完全自治が与えられることを望んでいる。

45:5.7 (515.6) 物質の息子の服務の特徴は、主に各時代により決定される。彼らにはサルヴィントンのメルキゼデク大学への入学資格はない—物質的であり、通常は特定の惑星に制限されている—とは言うものの、メルキゼデクは、物質の息子のより若い世代の指示に向けて各体制本部で教師の優勢な学部、を維持する。教育的で精霊的な訓練体制は、若い物質の息子と娘の発達に備えており、

範囲、方法、および実行可能性において完成の極みにある。

6. 上昇者のアダーム法訓練

45:6.1 (515.7) 物質の息子と娘は、その子供と合わせて、すべての上昇する人間の好奇心を喚起し、注目をそそることに決して失敗しない魅力的な光景を提示する。物質の息子と娘達は、あなた自身の性をもつ物質的人種と非常に類似しているので、双方ともにそれぞれの考えに引きつけ、兄弟らしい時間をとるという多くの共通の関心に気づいている。

45:6.2 (515.8) 人間の生存者は、性をもつ優れた半物質的創造物の生活習慣と行為を観測し研究してその体制首都での余暇の大半をを過ごす。その理由は、ジェルーセムのこれらの公民は、本部世界において公民権を獲得時からエデンチアに向けての出発つまで人間生存者の当面の後援者であり庇護者であるがゆえに。

45:6.3 (516.1) 7大邸宅世界における上昇する人間には、継承物、環境、あるいは肉体の経歴の時期尚早の不幸な終結にしろ、出身世界で苦しんだ経験上のありとあらゆる剥

奪の代償のために十分な機会が提供される。これは人間の性生活とそれに伴う調整を除き、あらゆる意味で本当である。何千人もの人間が、土着の球体でのかなり平均的性関係に由来する修養からの利益を特に得ることなく、大邸宅世界に到着する。大邸宅世界経験は、これらの非常に個人的な剥奪の代償のために少ししか機会を与えることができない。体の感覚上の性の経験は、これらの上昇者には過去であるが、個人的にも家族の構成員としても性的に異なる必滅者達は、物質の息子と娘との密接なつながりにおいて社会的、知的、感情的、精霊的局面における欠陥の補正が可能になる。こうして、情況、あるいは悪い判断が、進化の世界における有利な性のつながりの利点を奪われたすべての人間に、ここ、体制首都上において体制首都の永久住居の崇高なアダーム系の性をもつ創造物との緊密かつ愛情のこもったつながりにおいて人間のこれらの不可欠な経験を取得する完全な機会が与えられた。

45:6.4 (516.2) 残存する人間、中間者、または熾天使は、世界の進化する子供との親関係を獲得するその崇高な経験、あるいはそれに類似し、しかも同等の他の経験をしない

ことには、楽園に昇ったり、父に達したり、終局者部隊に召集されたりすることは許されない。子と親の関係は、宇宙なる父とその宇宙の子らの基本的概念に不可欠である。それ故、そのような経験は、すべての上昇者の経験的訓練に不可欠となるのである。

45:6.5 (516.3) 上昇する中間被創造者と進化する熾天使は、体制本部の物質の息子と娘と関連してこの親の立場の経験を通り抜けなければならない。こうして、そのような非生殖の上昇者は、ジェルーセムのアダームとハヴァーが子孫を育てたり、訓練をしているのを助けることにより親としての経験を得るのである。

45:6.6 (516.4) 進化的世界で親の立場を経験しなかったすべての人間生存者は、ジェルーセムの物質の息子の故郷に滞在中に、加えて、これらのずば抜けた父母の親の仲間としてもまたこの必要な訓練を受ける。これは、そのような人間が、ジェルーセムの最初の過渡的文化世界に位置する体制育児室において自身の欠陥を補填できた場合を除き、真実なのである。

45:6.7 (516.5) サタニアのこの試用育児室は、終局者の世界の特定のモロンチア人格により維持されており、惑星存在体の半分が、子育てのこの仕事に専念する。例えば個人として精霊の身分を手にする前に進化的世界で死んだそれらの子のように、生残する人間の特定の子供らは受け入れられ、再び組み立てられる。その生みの親のいずれかの上昇が、領域のそのような人間の子に体制終局者の惑星で再人格化がなされるであろうし、そこで人間上昇の親の経路に続くことを選ぶか否かに関係なく、その後の自由意志の選択により示すことを可能にされるということを保証する。子供らは、性の分化の欠如を除いては、故郷の世界でのようにここに現れる。棲息界における人生経験後は、人類の何の生殖もない。

45:6.8 (517.1) 終局者世界の試用育児室に1名以上の子供を持つもの、また根本的な親の経験には不完全である大邸宅世界の学生は、大邸宅世界上の上昇義務から自身の子供と他の子供の準親として機能する機会が与えられる終局者世界への一時的出向をもたらすメルキゼデク許可証を申し込むことができる。親らしい活動であるこの奉仕は、後にそのような上昇者が、物質の息子と娘の家族で受け

ることを必要とされる訓練の半分の遂行としてジェルーセムで認可されるかもしれない。

45:6.9 (517.2) 試用育児室自体は、物質の息子と娘の1,000組、つまりジェルーセムのその系列の居留地からの志願者に管理される。それらは、サタニアの中間ソナイトの世界からサルヴィントンの終局者球体の中の特別な保留世界の明かされていない目標への途中でこの奉仕を提供するためにここに止まる同数の中間ソナイトの親の志願者集団からの直接的補助を受ける。

7. メルキゼデクの学校

45:7.1 (517.3) メルキゼデク系とは、ジェルーセムとその関連世界で、だが特に7個の大邸宅世界で全く十分に機能する監督からなる大教官部隊—部分的に精霊化された意志をもつ創造物と他のものである教官達—である。これらは、拘留惑星であり、そこでは肉体の生涯の間に内住する調整者との溶融を達し得ないそれらの人間は、一層の支援を受け、時期尚早にも死により中断された他ならぬその努力である精霊到達のための努力を続けるための延長された機会を味わうために一時的な型で元どおりにさ

れる。もしくは、世襲的な不利な条件、好ましくない環境、もしくは境遇がもたらす共謀のいかなる他の理由により、もしこの魂到達が果たされなかったならば、理由は何であれ、目的が精霊的に本物で相応しいもの達すべては、永遠の経歴の基礎の会得のために、肉体の生涯の中で習得できなかったり、しなかったりした特性を自分のものとするために、学ばなければならない連続する惑星に臨場する自分自身に、自分自身として、気づく。

45:7.2 (517.4) 輝く宵の明星(そして、名前の公表されていない彼らの等位者達)は、メルキゼデクの後援を含む宇宙の様々な教育活動において教師として頻繁に役目を果たす。三位一体の教師たる息子もまた共同し、これらの進歩的養成所への楽園の完全性に向けての仕上げをする。しかし、これらの全活動が、専ら上昇する人間の前進にささげられるというわけではない。活動の多くは、ネバドンが起源の精霊人格の進歩的訓練に等しく関わる。

45:7.3 (517.5) メルキゼデクの息子らは、ジェルーセムの異なる30の教育所を上方へと指導する。これらの訓練所は、独習の大学から始め、ジェルーセムの公民の学校で終わ

る。そこでは、物質の息子と娘は、代議政治の重い引責に対し人間生存者に資格を与えるための最高努力に携わるメルキゼデクと他のものに加わる。全宇宙は、総代計画に基づいて組織され管理される。代議政治は、不完全な存在体間の自治に関する神性の理想である。

45:7.4 (517.6) 各体制は、宇宙時間の100年毎に星座立法府に参加するその代表10名を選ぶ。それらは、そのような委任案件、あるいは任命案件のすべてにおける体制集団の代表義務を負う選択母体であるジェルーセムの1,000の協議会により選ばれる。全代表、もしくは他の使節は、1,000名の有権者の協議会により選ばれ、それらは、1,000名の有権者のこの集団を構成する人々のすべてもまたそうであるように、メルキゼデクの行政大学の最高の学校の卒業生でなければならない。この学校は、近ごろ終局者による補助のメルキゼデク系により強化されている。

45:7.5 (518.1) ジェルーセムには多くの選択母体があり、それらは、節目節目に3系列の公民—物質の息子と娘、中間被創造者を含む熾天使とその仲間、それに上昇する人間

—の投票により当局者へと選出される。候補者が代表の栄誉の指名を受けるには、メルキゼデクの経営学校からの必要な認定を得なければならない。

45:7.6 (518.2) ジェルーセムのこれら3集団の公民の間での投票は、普遍的であるが、投票は、認められ、正しく登録されたモタの個人の達成度—モロンチアの知恵—に応じ、それぞれに投じられる。いかなる1人格によるジェルーセムにおける投票は、1から1,000に及ぶ価値をもつ。ジェルーセム公民は、このようにしてそれぞれのモタ達成に応じて類別される。

45:7.7 (518.3) 時々、ジェルーセム公民は、モロンチアの知恵のそれぞれの、各自、到達を証明するメルキゼデク試験官へと出向いて行く。次には、精霊の洞察度を確かめる輝く宵の明星の審査団の前に出頭する。次いで、社会化における経験上の到達状態を決定する24名の相談役とその仲間の面前に現れる。これらの3要因は、順次代議政治の公民権記録係へ届き、記録係は、すぐにモタ状態を算定しその点において選挙権資格を割り当てる。

45:7.8 (518.4) 上昇する人間は、メルキゼデクの監督の下、特に新しいモロンチア段階にあるそれぞれの人格統一において遅々としているものは、物質の息子の掌中に引き取られ、そのような欠乏を正すように考案された集中訓練が与えられる。上昇する人間は、物質の息子がモタ人格—思考調整者の精霊の婉曲的支配によりともに混合されており、芽生え始めたモロンチア経歴との経験的つながりにおいて完成された人間存在を結合する人格—到達を証明するまでは、より大規模で様々の星座社会化の経歴に向けて体制本部を出ることはない。

45:7.9 (518.5) [ユランチアに一時的に割り当てられたメルキゼデクによる提示]

論文 46
地方体制本部

46:0.1 (519.1) ジェルーセム、つまりサタニアの本部は、地方体制の標準的首都であり、ルーキフェレーンス反逆とユランチアにおけるマイケルの贈与によってもたらされる数多くの変則は別として、それは同様の球体の特色を示す。あなたの地方体制は、いくつかの嵐のような経験を潜り抜けてきたが、現在のところ最も効果的に管理され

ているし、時の経過に従い、不調和の結果はゆっくりと、しかし確実に根絶されている。治安と善意は、回復してきているし、体制本部は本当に20世紀の宗教信者の大多数によりありありと心に描かれた天国であることから、ジェルーセムの状態は、ますますあなたの伝統の天国のような状態に近づきつつある。

1. ジェルーセムの物理的局面

46:1.1 (519.2) ジェルーセムは、1千の横割の領域と1万の縦割の領域に分割される。球体には、7つの主要な首都と70の小規模の管理所がある。7つの区分的首都は、さまざまの活動に関係があり、体制君主は、少なくとも年に１度はそれぞれの首都に姿を現す。

46:1.2 (519.3) ジェルーセムの標準マイル、長さの標準単位は、ユランチアのおよそ11キロメートルに相当する。標準の重さ「グラダンツ」は、熟慮した非妥協的態度からの10進法を通して確立されており、ほぼ正確にあなたの重さの283グラムを表す。サタニアの１日は、ユランチア時間の3日間に1時間4分15秒少なく、それはジェルーセムの軸の回転時間である。体制年は、ジェルーセムの

100日間から成る。体制時間は、最上のクラナラデ系により放送される。

46:1.3 (519.4) ジェルーセムのエネルギーは、領域回路にのり球体の周りを見事に制御し循環している。空間エネルギー充足から直接送り込まれ、物理の主たる制御者により巧みに管理される。これらのエネルギー伝導の物質経路通過への自然抵抗は、ジェルーセムの安定した温度の生成に必要とされる熱をもたらす。最光度の温度は、およそ摂氏21度で維持されるが、光の退行期間中は10度をやや下回る。

46:1.4 (519.5) ジェルーセムの照明装置は、あなたが理解するにはそれほど難しくはないであろう。昼夜はなく、熱さと寒さの季節もない。力の変成者は、希薄にされたエネルギーが、球体の電気の空気上限に達するまで一定の変化をしながら、惑星の大気で上向きに映し出される10万個の中心を維持する。そして、その時太陽が、午前10時に頭上を照らすとき、これらのエネルギーは、ほぼユランチアの日光強度の優しい、ふるい分けている、さらさらの、均等の光を下方へと反射し返している。

46:1.5 (520.1) 光線は、そのような照明状態の下では1箇所から来るようには見えない。それは、単に空からふるいわけている。全空間から等しく放射して。この光は、ずっと少ない熱を含んでいるということ以外は、自然の日光に非常に似ている。したがって、そのような本部世界の空間は、明るくないと分かるであろう。もしジェルーセムがユランチアに非常に近いならば、それは目には見えないであろう。

46:1.6 (520.2) この光エネルギーをジェルーセムの上方の電離層から地面へと反射し返す気体は、異なる原因により生成されるとはいえ、あなたのいわゆる北極光のオーロラ現象に関するユランチアの高層大気圏のそれらに非常に似ている。ユランチアで地上放送波の漏れを防ぐのは、この同じガスシールドであり、真っ直の外向き飛行でこのエアベルトを打つ時、それらを地球に向けて反射する。放送は、あなたの世界の周りの空気中を移動するとき、このような方法で表面近くに保持される。

46:1.7 (520.3) この球体の彩光は、ジェルーセムの日の75パーセント分を一様に維持し、あなたの澄んだ夜の満月ほど

の最小照度時にまで徐々に低下する。これは、全ジェルーセムにとり静かな時間である。放送受信局だけが、この休養と回復期間中に稼働している。

46:1.8 (520.4) ジェルーセムは、近くの数個の太陽—一種の光り輝く星明り—からの仄かな光を受けるが、それらに依存してはいない。ジェルーセムのような世界は、太陽面擾乱の変化の対象ではなく、冷却したり、または消滅する太陽の問題に直面もしない。

46:1.9 (520.5) 7個の過渡的研究世界とその49個の衛星は、ジェルーセムの技術により熱せられ、照らされ、エネルギーが与えられ、給水を受ける。

2. ジェルーセムの物理的特徴

46:2.1 (520.6) あなたは、ジェルーセムには地震も降雨もないのでユランチアや他の進化世界の起伏の多い山脈がないことを寂しく感じるであろうが、麗しい高地と他の独特の地形と景色の変化を楽しむであろう。ジェルーセムの膨大な領域は、「自然な状態」で保持されており、そのような地域の壮大さは、全く人間の想像力を超えている。

46:2.2 (520.7) 何千もの小さな湖はあるが、激流の川も広大な海洋もない。建築世界のいずれにも、降雨はなく、嵐も暴風雪もないが、光の低下に伴う最低温度時には水分の結露からの日々の降水がある。(3気体世界における露点は、ユランチアのような2気体惑星におけるものよりも高い。)物理的植物と生き物のモロンチア世界は、ともに水分を必要とするが、これは、広がる下層土の循環構造により球体全体に、高地のまさにその頂上にさえも、大幅に供給される。この水系は、ジェルーセムのきらめく湖を相互に連結する多くの運河の存在故に、完全に水面下にあるのではない。

46:2.3 (520.8) ジェルーセムの大気は、3気体の混合物である。この空気は、ユランチアのものと非常に似ているが、それに加えてモロンチア生命系列の呼吸作用に合せた気体がある。この3番目の気体は、物質系列の動物または植物の呼吸作用に決して不向きではない。

46:2.4 (521.1) 輸送体系は、エネルギー運動の循環の流れと関連しており、これらの主なエネルギーの流れは16キロメートル間隔である。惑星の物質存在体は、物理的構造の

調整により毎時322キロメートルから855キロメートルの異なる速度で進むことができる。輸送用の鳥は、1時間あたりおよそ161キロメートルで飛ぶ。物質の息子の空気機構は、毎時およそ855キロメートル移動する。物質の存在体と初期のモロンチア存在体は、これらの輸送の機構、機械的手段を利用しなければならないが、精霊人格は、エネルギーの優れた原動力と精霊の源とのつながりによって進む。

46:2.5 (521.2) ジェルーセムとその関連世界には、ネバドンの建築球体に特徴的な物理的生命の10標準区分が与えられている。ジェルーセムにはいかなる生物進化もないので闘争する生命の型はなく、存在のための戦いもなければ、適者生存もない。むしろ、中央の、神性の宇宙にある永遠の世界の美、調和、および完全性を予示する創造的な適合性というものがある。このすべての創造の完全性には、天の職人とその仲間による芸術的に対照をなす物理的、かつモロンチアの生命の最も驚くべき混合がある。

46:2.6 (521.3) ジェルーセムは、実に天国の栄光と壮大さの先取りである。しかし、あなたは、いかなる試みの記述によっても決してこれらの栄光の建築世界についての適切な考えの獲得を望むことはできない。あなたの世界の何かと比較できるものはほとんどなく、その時でさえ、ジェルーセムのものは、比較はほとんど奇怪でさえあるほどにユランチアのものを超越しているのである。実際にジェルーセムに到着するまで、あなたは素晴らしい天の世界について真の概念などは到底心に描くことはできないが、体制首都における来るべきあなたの経験が、宇宙、超宇宙、ハヴォーナのより遠い訓練球体への到着とが比較されるときは、未来のとても長い時間ではない。

46:2.7 (521.4) ジェルーセムの製造部門、あるいは実験部門は、大規模な領域であり、ユランチア人にはほとんど認識し得ないものである。とは言え、これらの特別な世界に関係する入り組んだ物的経済があり、あなたの最も経験豊富な化学者と発明者を驚かせ畏れさせさえする機械的技術と物理的達成の完全性がある。楽園旅行におけるこの最初の拘留世界は、精霊的であるよりもはるかに物質的であるということを止まって考えなさい。ジェルー

セムとその変遷世界におけるあなたの滞在全体に渡り、あなたは自身の前進する精霊存在体の後の生活よりもあなたの地球の物質的なものの生活にずっと近いのである。

46:2.8 (521.5) 熾天使山は、ジェルーセムで最高高度の山でおよそ4.5キロメートルあり、すべての輸送熾天使のための出発地点である。幾多の機械的開発は、惑星引力から逃げ、空気抵抗に打ち勝つ初期エネルギーを提供する際に使用される。熾天使の輸送は、明期の間中、時々は、退時にかなり入っても、ユランチア時間で3秒毎に出発する。輸送者は、ユランチア時間の1秒あたりおよそ40標準キロメートルで発進し、ジェルーセムから3,219キロメートル以上離れるまで、標準速度には達しない。

46:2.9 (521.6) 輸送は、水晶領域、いわゆるガラスの海に到着する。この領域周辺には、熾天使の輸送により空間を横断する様々な存在体の系列のための受信駅がある。学生訪問者のための強磁性結晶の受け入れ駅の近くでは、あなたは真珠のような天文台を昇り、本部惑星全体の莫大な立体地図を見ることができる。

3. ジェルーセム放送

46:3.1 (522.1) 超宇宙と楽園-ハヴォーナ放送は、サルヴィントンとの連絡に、また強磁性結晶、つまりガラスの海を伴う手法によって受信される。これらの特別なネバドン情報受信設備に加え、明確な受信局の3集団がある。これらの個々の、しかし3-回覧の部門は、地方世界からの、星座本部からの、それに地方宇宙の首都からの放送受信に合わせている。これらの全放送は、中央の放送円形劇場に出席しているすべての存在体の型が認識できるように自動的に流されている。ジェルーセムの上昇する人間のためのすべての最大関心事の中で、宇宙空間報告の果てしない流れ、傾向を聴くことほど魅力的で心を奪われるものはない。

46:3.2 (522.2) このジェルーセム放送受信局は、ユランチアではあまり知られていないまばゆいばかりの物質で構築されており、50億以上の存在体—物質とモロンチア—それに加えて無数の精霊人格を収容する巨大な円形劇場に囲まれている。全ジェルーセムにとり、宇宙の幸福と状況を知るために放送局で余暇を過ごすということは、気

に入りの気分転換である。そして、これは、光の後退の間の衰えることのない惑星の唯一の活動である。

46:3.3 (522.3) この放送受信の円形劇場にはサルヴィントンの通信が、絶え間なく入ってくる。近くでは、いと高き星座の父からのエデンチアの言葉が、少なくとも1日に一度受信される。定期的に、ユヴァーサの通常の、また特別な放送が、サルヴィントン経由で中継され、また楽園の通達が受信される間、全人口は、ガラスの海の周りに集まり、ユヴァーサの友人達が楽園放送の手法に反射現象を追加するので、聞こえるものすべてが目に見えるようになる。また、永遠の冒険で内部へと旅する間、人間の生存者に増加する美と壮大さに関する絶え間ない予想が提供されるのは、この様にしてである。

46:3.4 (522.4) ジェルーセムの発信局は、球体の対極に位置している。大天使の回路の上方の目的地まで時おり直接に行くマイケルの申し送りを除いては、個々の世界への放送全ては、体制首都から中継される。

4. 住宅と行政区域

46:4.1 (522.5) ジェルーセムのかなりの部分は、住宅区域として割り当てられているが、体制首都の他の部分は、619個の棲息球体、56個の過渡的文化世界、および体制首都自体の業務の指揮にかかわる必要な管理機能に託される。ジェルーセム上とネバドンにおいては、これらの割り振りは、次のように考案されている。

46:4.2 (522.6) 円形区域—非土着民の住宅区域

46:4.3 (522.7) 2. 正方形区域—体制の行政執行区域

46:4.4 (522.8) 3. 長方形区域—低級土着生命の集合場所

46:4.5 (522.9) 4. 三角形区域—地方、あるいはジェルーセムの行政区域

46:4.6 (522.10) 円形区域、正方形区域、長方形区域、および三角形区域への体制活動のこの割り振りは、ネバドンの体制首都すべてに共通である。別の宇宙では、完全に異なる割り振りが普及しているかもしれない。これらは、創造者の息子のさまざまの計画によって決定している事柄である。

46:4.7 (523.1) これらの住宅と行政区域に関する我々の説明は、ジェルーセムの永久公民である神の物質の息子の広大で美しい地所を考慮に入れてはいないし、他の数多くの魅惑的な精霊と精霊に近い創造物の系列にも言及していない。例えば、ジェルーセムは、体制機能の意匠でのスパイロンガの効果的奉仕を味わう。これらの存在体は、超物質の居住者と訪問者のために精霊的な活動に専心する。それらは、すべてのモロンチア創造の維持と美化のために働くより高いモロンチア創造物とモロンチア助手の遷移中の使用人である知的で美しい存在体の素晴らしい集団である。ジェルーセムにいる物質と精霊の間で機能する中間の助手は、ユランチアにいる中間被創造者に当たる。

46:4.8 (523.2) 体制首都は、宇宙存在の全三相：物質、モロンチア、および精霊をほぼ完全に展示する唯一の世界であるという点において独特である。あなたは、物質人格であろうと、モロンチア人格であろうと、または精霊の人格であろうとジェルーセムでくつろぐであろう。また、中間被創造者と物質の息子などの結合した存在体もまたそう感じるであろう。

46:4.9 (523.3) ジェルーセムには物質とモロンチア双方の型のすばらしい建築物があるが、純粋に精霊的領域の装飾も、やはり絶妙で充実している。ジェルーセムにある驚異の物理的設備のモロンチア類似物についてあなたに伝える言葉が私にありさえすればよいのだが。私が、この本部世界の精霊の設備の崇高な壮大さと絶妙の完全性を描き続けられたならばよいのだが。美の完全性と建物の充実性についてのあなたの最も想像的概念は、これらの壮観さにはとても迫れないであろう。ジェルーセムは、楽園美の崇高な完全性へのほんの第一歩に過ぎないのである。

5. ジェルーセムの円形区域

46:5.1 (523.4) 主要な宇宙生命集団に割り当てられた住宅用保留地は、ジェルーセムの円形区域に指定されている。これらの談話で述べられているそれらの円形区域の集団は次の通りである。

46:5.2 (523.5) 1. 神の息子の円形区域

46:5.3 (523.6) 2. 天使とより高度の精霊の円形区域

46:5.4 (523.7) 3. 三位一体の教師たる息子に割り当てられなかった創造物-三位一体化の息子を含む宇宙の補佐の円形区域

46:5.5 (523.8) 4. 物理の主たる制御者の円形区域

46:5.6 (523.9) 5. 中間被創造者を含む割り当てられた上昇する人間の円形区域

46:5.7 (523.10) 6. 優待居留地の円形区域

46:5.8 (523.11) 7. 終局者部隊の円形区域

46:5.9 (523.12) これらの住宅用の組分けのそれぞれが、同心の順次高くなる7個の円形区域から成る。それらは、すべて同じ手法で組み立てられるが、異なる大きさがあり、異なる物質で作成される。それらには、7同心円のあらゆる集団を完全に取り囲む大規模の型を形成するために増える広大な囲いが巡らされている。

46:5.10 (524.1) 1. 神の息子の円形区域。神の息子達は、過渡的文化世界の中の一つの自身の社会的惑星を所有するが、ジェルーセム上のこれらの大規模な領域もまた占有する。上昇する人間は、それらの過渡的文化世界において

神性の息子の全系列と入り交じる。あなたは、そこで個人的にこれらの息子達を知り、好きになるが、彼らの社会生活は、主にこの特別な世界とその衛星の範囲内に限定される。しかしながら、ジェルーセム円形区域において、息子の資格をもつこれらの様々な集団は、活動中に観測が可能である。モロンチアの視覚は、ずば抜けた範囲を持つが故に、息子の遊歩道を散歩することができ、それらの数多の系列の好奇心をそそる活動の監督ができる。

46:5.11 (524.2) これらの7円形区域は、同心であり連続的に高くされており、外側のより大きい円形区域のそれぞれは、内側のより小さい方を見下ろしており、各々が公共の遊歩道の壁に囲まれている。これらの壁は、きらめく明るさの結晶宝石を材料として組み立てられており、それ故、住宅の円形区域全体を見下ろすほどに高く上げられている。これらの各壁を貫く多くの門—50から15万—は、単一の真珠のような結晶から成る。

46:5.12 (524.3) 息子の領域の第一回路は、権威の息子とその個人的部下により占拠されている。ここに、これらの司法

の息子達の贈与と裁定活動に関わる計画と当面の活動が、集中する。体制のアヴォナル系が、宇宙との接触を維持するのもこの中心部を通してである。

46:5.13 (524.4) 第二回路は、三位一体の教師たる息子により占有されている。この神聖な領域では、ダイナル系とその仲間は、新たに到着した第一の師としての息子の訓練を進めるそれらは、この仕事のすべてにおいて輝く宵の明星の一定の等位者達の分隊により巧みに補助される。創造物-三位一体化の息子は、ダイナル系回路の領域を占領する。三位一体の師としての息子は、地方体制において宇宙なる父の個人的代表に最も匹敵する。それらは、少なくとも三位一体起源の存在体である。この第二回路はジェルーセム全民族にとり桁外れに関心のある領域である。

46:5.14 (524.5) 第三回路は、メルキゼデク系に振り分けられる。体制の長官は、ここに住み、これらの万能の息子達のほとんど無限の活動を監督する。上昇する人間の大邸宅世界の1番目から全ジェルーセム至るまでの経歴において、メルキゼデク系は、育ての父であり絶えず臨場し

ている相談役である。物質の息子と娘の遍在的活動は別として、メルキゼデク系が、ジェルーセムへの支配的影響であると言っても間違いではなかろう。

46:5.15 (524.6) 第四回路は、ヴォロンダデク系と別の方法では配慮されていない訪問中の息子達と観察者としての息子達の他の全系列の施設である。いと高き星座の父は、地方体制への点検訪問の際、この回路に住居を定める。英知の完成者、神性助言者、および宇宙検閲官のすべてが、体制に勤務中はこの回路に住んでいる。

46:5.16 (524.7) 第五回路は、ラノナンデク系、つまり体制君主と惑星王子の息子の系列の住まいである。この領域で施設にいるとき、この3集団は1つとして入り交じる。体制の保留地は、この回路で保持されるが、体制君主には、行政の丘の構築物の統治群の中心に位置する寺院がある。

46:5.17 (524.8) 第六回路は、体制の生命運搬者の滞在場所である。これらの息子達の全系列がここに召集され、ここから世界任務へと旅立つ。

46:5.18 (524.9) 第七回路は、上昇する息子、つまり熾天使の配偶者とともに一時的に体制本部で機能しているかもしれない人間に割り当てられたもの達の集合場所である。ジェルーセム公民の身分より上と終局者の身分より下のすべての元人間は、その本部をこの回路に持つ集団に属すると考えられる。

46:5.19 (525.1) 息子達のこれらの回路の保留地は、途方もない区域を占有し、巨大な空き地が、1,900年前までその中心に存在した。現在、この中央の領域には、およそ500年前に完成されたマイケルの記念碑がある。マイケルは、が495年前この寺院が奉納された際、本人自ら出席しており、全ジェルーセムが、サタニアでは最小であるユランチアにおける物質の息子の贈与に関わる感動的な話を聞いた。マイケルの記念碑は、現在、つい最近移されたサルヴィントン活動の大半を含むマイケルの贈与により変更された体制行政に含まれる全活動の中心である。記念碑に関わる職員は、100万以上の人格で構成されている。

46:5.20 (525.2) 2. 天使の円形区域。天使のこれらの回路は、息子達の住宅地域と同様にそれぞれが内側の区域を見下ろす7個の同心で連続するより上方の円形から成る。

46:5.21 (525.3) 天使の第一回路は、本部世界に配置されるかもしれない無限の聖霊の高位の人格—単独使者とその仲間—が占めている。第二回路は、折々に、たまたまジェルーセムで機能するかもしれない使者の団体、技術顧問、仲間、検査官、および記録係に任されている。第三回路は、高い系列と組分けの奉仕する精霊に管理されている。

46:5.22 (525.4) 第四回路は、行政熾天使により保持されており、サタニアのような地方体制で仕える熾天使は、「無数の天使の団体」である。第五回路は、惑星の熾天使が占め、第六回路は、変遷の聖職者達の故郷である。第七回路は、熾天使の非啓示の特定系列の滞在球体である。これらの全天使集団の記録係は、ジェルーセムの記録寺院に住所を定めているのでその仲間達と共に滞在はしない。すべての記録は、公文書保管所のこの三部分からなる広間で三つ揃いで保持されている。体制本部での記録

は、常に物質の型、モロンチアの型、精霊の型で保持されている。

46:5.23 (525.5) これらの7回路は、円周8,047標準キロメートルのジェルーセムでの全景展示に囲まれており、この全景展示は、サタニアの棲息世界の前進状況の提示に向けられており、また個々の惑星に関し正確に最新状況を示すために絶えず改訂されている。余暇の延長が初期の訪問で許されるとき、わたしは、天使の回路の見晴らしがきくこの広大な遊歩道が、あなたの注目に値するジェルーセムの最初の光景であろうということを疑わない。

46:5.24 (525.6) これらの展示は、ジェルーセム出身者が責任を負うが、それらはエデンチアへの途中でジェルーセムに滞在する様々なサタニア世界からの上昇者に補助される。惑星の状況と世界進歩に関する描写は、多くの方法で達成されており、そのうちの幾つかはあなたの知るところであるが、その多くがユランチアでは知られていない手法によるものである。これらの展示は、この広大な壁の外側の縁を占領する。遊歩道の残りは、まことに壮大に装飾され、ほとんど完全に解放されている。

46:5.25 (525.7) 3. 宇宙の補佐の回路には、中央の膨大な空間に位置する宵の明星の本部がある。超天使のこの強力な集団の副団長であるガランティアの体制本部は、上昇する宵の明星の全ての中で任命される1番目であるので、ここに位置する。これは、より最近の構造物の中にあるが、ジェルーセムの全行政部門で最もすばらしいものの1つである。この中心は、直径80キロメートルある。ガランティア本部は、完全に透明の一枚岩の鋳造された水晶である。これらの物質-モロンチア結晶は、モロンチア存在体と物質存在体の両方に大いに好まれている。創造された宵の明星は、そのような超人格の属性を所有しているので、ジェルーセム全体にわたり影響を与える。彼らの活動の多くがサルヴィントンからここに移されて以来、世界全体が、精霊的に楽しく変わってきた。

46:5.26 (526.1) 4. 物理の主たる制御者の回路。物理の主たる制御者の様々な系列が、力の巨大な寺院の周りに同心円状に配置され、そこでモロンチアの力の監督者達の長官と関連して体制の力の長官を務める。力のこの寺院は、上昇する人間と中間被創造者には許されないジェルーセムの2部門の中の1つである。他方は、物質の息子の領域内

の輸送熾天使が、物質の存在体を生活に関するモロンチアの系列のそれに酷似する状態に変える一連の実験室からなる非物質化部門である。

46:5.27 (526.2) 5. 上昇する人間の回路。体制の棲息世界を代表する619個の惑星記念碑の集団が、上昇する人間の回路の中央区域を占有しており、これらの構造物は、定期的に大規模な様変わりをする。折に触れ、それらの惑星の記念物へのある種の変更、または追加に同意することは、各世界からの人間の特権である。多くの変更が、今でも、ユランチア構造物に行われている。エデンチアの実用模型と上昇文化のその多くの世界が、これらの619個の寺院の中心を占領している。この構造模型は、直径64キロメートルあり、エデンチア体制のあらゆる詳細部が、原型に忠実な実際の複製である。

46:5.28 (526.3) 上昇者は、ジェルーセムの活動を味わい、他集団の手法の観測に喜びを感じる。これらの各回路で行われるすべてが、全ジェルーセムの完全な観測に公開されている。

46:5.29 (526.4) そのような世界の活動には異なる3種類がある。労働、進歩、進行、遊び。別の方法で述べるならば、それらは次の通りである。奉仕、研究、休養。総合活動は社交、集団娯楽、神性崇拝から成る。さまざまの人格集団と、すなわち自身の仲間とは非常に異なる系列と入り交じることにかなりの教育的価値がある。

46:5.30 (526.5) 6. 優待居留地の回路。優待居留地の7回路は、巨大な3構造により光彩が与えられている。ジェルーセムの巨大な天文台、サタニアの巨大な画廊、逆戻りの監督の広大な議事堂、モロンチア活動の舞台は、休息と気晴らしに充てられる。

46:5.31 (526.6) 天の熟練工は、スポーナーギア系を導き、あらゆる公の集会場所に豊富にある創造的装飾と堂々たる記念物を数多く提供する。これらの熟練工の仕事場が、この素晴らしい世界の中の最大最美の優れた全営造物の中にある。他の優待居留地は、大規模で美しい本部を維持する。これらの建築物の多くが、全体として結晶宝石で構築されている。すべての建築世界には、結晶といわゆる貴金属がふんだんにある。

46:5.32 (527.1) 7. 終局者の回路には、その中心に独自の建築物がある。そして、この同じ空っぽの寺院は、ネバドン中の体制本部世界すべてに見られる。ジェルーセムのこの建物は、マイケルの記章で封をされており、この碑文がある。「精霊の第7段階には—永遠の課題には—捧げられてはいない。」ガブリエルは、この神秘の寺院に封印をしおり、マイケル以外は、輝く宵の明星により押された主権の封印を切ることはできず、または許されないかもしれない。あなたは、その神秘を理解できないかもしれないが、いつかこの静かな寺院を目にするであろう。

46:5.33 (527.2) 他のジェルーセム回路。これらの居住回路に加えて数多くの指定された追加住居が、ジェルーセムにはある。

6. 行政管理の正方形区域

46:6.1 (527.3) 体制の行政管理区域は、数にして1,000の部署の巨大な広場に位置する。各行政単位は、10の下位集団をもつ100区画分譲地に分割されている。これらの1,000の正方形区域は、10の壮大な区域に塊まりとなり、その結果、次の10の行政部を構成する。

46:6.2 (527.4) 1. 物理的力とエネルギー領域の物理的維持と物質的改良

46:6.3 (527.5) 2. 仲裁、倫理、および行政裁決

46:6.4 (527.6) 3. 惑星と地方業務

46:6.5 (527.7) 4. 星座と宇宙業務

46:6.6 (527.8) 5. 教育と他のメルキゼデク活動

46:6.7 (527.9) 6. 惑星と体制の物理的進歩、サタニア活動の科学的領域

46:6.8 (527.10) 7. モロンチア業務

46:6.9 (527.11) 8. 純粋な精霊活動と倫理

46:6.10 (527.12) 9. 上昇者への聖職活動

46:6.11 (527.13) 10. 壮大な宇宙の哲学

46:6.12 (527.14) これらの構造は透明である。したがって、すべての体制活動は、学生訪問者にさえ見ることができる。

7. 長方形区域—スポーナーギア系

46:7.1 (527.15) 本部惑星の土着の下級生命が、ジェルーセムの1,000の長方形区域に占拠しており、その中心には、スポーナーギア系の巨大な回路本部がある。

46:7.2 (527.16) あなたは、ジェルーセムでの素晴らしいスポーナーギア系の農業業績に驚かされるであろう。そこでは、陸は、主に審美的効果と装飾的効果のために耕作される。スポーナーギア系は、本部世界の造園家であり、ジェルーセムの空地の扱いに関しては独創的かつ芸術的である。スポーナーギア系は、土の文化において動物と数多くの機械的装置のいづれをも利用する。それらは、下等動物創造の数多くのより劣る同胞系列の適用のみならず、これらの特別な世界で提供されるものの多くである領域の力の媒体の活用においても理知的に熟練している。この動物生命の系列は、現在、主に進化的球体からの上昇する中間被創造者に導かれている。

46:7.3 (528.1) スポーナーギアは、調整者内住ではない。スポーナーギアは生存する魂を所有しないが、長寿に、時として標準年の40万年から50万年の長さに恵まれている。

それらの番号は、多数であり、物質的奉仕を必要とする宇宙の人格の全系列に物理的奉仕活動を提供する。

46:7.4 (528.2) スポーナーギアは、生残する魂を所有もせず進化もさせないとはいえ、それでもなお生まれ変わりが経験できる人格を進化させる。時間の経過とともにこれらの特異な創造物の物理的肉体が使用と年齢故に衰えるとき、その創造者達は、生命運搬者と連携し、老いたスポーナーギアが自身の住居を回復させる新たな肉体を作る。

46:7.5 (528.3) スポーナーギアは、ネバドンの全宇宙においてこの、または、いかなる他の種類の生まれ変わりを経験する唯一の創造物である。それらは、心-精霊の補佐の最初の5つにだけに反応する。それらは、崇拝と知恵の精霊に反応しない。しかし、5補佐の心は、全体かまたは、第6現実段階に相当し、そのうえ経験的同一性として存続するのが、この要素なのである。

46:7.6 (528.4) これらの役に立つ珍しい生物について説明することを引き受けながらもそれらに匹敵するいかなる動物も進化世界にはないがゆえに、私には全く比べるものが

ない。彼らは、生命運搬者により現在の型と状態に考案されていることから、進化の存在体ではない。彼らは、両性具有であり、人口増加の必要に応えることが求められるとき繁殖する。

46:7.7 (528.5) 私は、忠実な馬と情愛深い犬の結合した特色を擁し、またチンパンジーの最も高い型の知性以上であることを示していると言うことで、これらの美しくかつ実用的な生物の本質についての何かをユランチアの心に最もよく示唆できるであろう。そして、それらは、ユランチアの身体的標準からみて非常に美しい。これらの建築世界における物質と半物質の一時逗留者は、それらをより最大に評価している。彼らには、モロンチア創造、下級の天使系列、中間被創造者、および精霊人格の下級系列の幾つかを—物質存在体に加えて—認識させる洞察力がある。スポーナーギアは、無限への崇拝を理解しないし、永遠なるものの重要性をも理解していないが、主人に関する愛情を通してその領域の外へ向かう精霊的献身に加わるのである。

46:7.8 (528.6) そこには、未来の宇宙時代において、これらの忠実なスポーナーギアが動物的生活水準から逃れ、進歩的な知的成長と精霊的達成のふさわしい進化目標に達するであろうと信じるもの達がいる。

8. ジェルーセムの三角区域

46:8.1 (528.7) まったく地方の、かつ通常のジェルーセムの業務は、100の三角形区域から指示を受ける。これらの一群は、ジェルーセムの地方行政を収容する驚異の10個の構築物の周囲に群がっている。三角形区域は、体制本部の歴史の全景描写に囲まれている。現在のところ、この回路の物語には３標準キロメートルを超える抹消がある。この部門は、サタニア再入場の際に星座家族に回復されるであろう。この出来事へのあらゆる措置が、マイケルの命令により取られてきたが、日の老いたるものの裁決機関は、いまだにルーキフェレーンス反逆事件の裁決を終えていない。サタニアは、光から暗黒に落ちた高位の被創造物である大反逆者を抱いている限りはノーラティアデクの完全な親交に戻らないかもしれない。

46:8.2 (529.1) サタニアが星座の古巣に戻ることができるとき、そこで棲息惑星の体制家族への領域の精霊的親交回復を伴う孤立世界の再入場のための考慮が持ち上がるであろう。しかし、もしユランチアが体制回路に戻されたとしても、あなたは、あなたの体制全体が、他の全体制からそれを部分的に分離するというノーラティアデクの隔離状態にある事実により依然として困惑するであろう。

46:8.3 (529.2) だが、やがてルーキフェレーンスとその仲間への裁決が、ノーラティアデク星座へサタニア体制を戻し、次にユランチアと他の孤立球体が、サタニア回路に戻されれば、そのような世界は、惑星間の情報伝達と体制間の親交の特権に再び恵まれるであろう。

46:8.4 (529.3) 反逆者と反逆の終わりは来るであろう。崇高な支配者は、慈悲深く我慢強いが、故意に抱かれる悪の法則は、あまねく、そして違うことなく実行される。「罪の賃金は死である」—永遠の抹消。

46:8.5 (529.4) [ネバドンの大天使による提示]

論文 47
7つの大邸宅界

47:0.1 (530.1) 創造者の息子は,ユランチア在中に「父の宇宙の中の多くの大邸宅」について伝えた。ジェルーセムを包囲する56個すべての世界は、ある意味で上昇する人間の過渡的文化に注がれるが、より明確には,第一世界の7個の衛星が、大邸宅界として知られている。

47:0.2 (530.2) 第一変遷世界自体は、サタニア配属の終局者部隊本部であり、全く単独に上昇活動に向けられる。この世界は、終局者の10万以上の仲間のための本部として現在役目を果たし、これらの各集団には栄光を浴した1,000名の存在体がいる。

47:0.3 (530.3) １体制が、光と人生に落ち着くと、また大邸宅界が、１大邸宅界ごとに人間-訓練拠点としての務めをやめると、大邸宅界は、これらの古く、より高度に完成している体制に集まる増加傾向の終局者人口により占拠される形になる。

47:0.4 (530.4) 7大邸宅界は、モロンチアの監督とメルキゼデク系に託されている。各世界には、ジェルーセム支配者達

を直に手伝う知事代理がいる。ユヴァーサの調停者は、各大邸宅界の本部を維持するが、技術顧問の地方の集合場所は、本部に隣接している。逆戻り監督と天の熟練工は、これらの各世界に集団本部を維持する。スパイロンガは、第２大邸宅世界から前方で機能し、一方、7大邸宅のすべてには、他の過渡的文化惑星や本部世界と同様、標準的創造のスポーナーギアが豊富に提供されている。

1. 終局者の世界

47:1.1 (530.5) 終局者と救出された子らとその世話係の特定の集団のみが、過渡的世界第一号に居住してはいるものの、全階級の精霊存在体、変遷の必滅者、および学生の訪問者のもてなしに備える。これらの全世界で機能するスポーナーギア系は、彼らが認識できるすべての存在体の手厚い主人役である。彼らは、終局者に対し漠然とした感情があるが、はっきりとは見えない。彼らは、あなたの現在の物理的状態で天使がするようにそれらを見るはずである。

47:1.2 (530.6) 終局者の世界は、絶妙の物理的美と並はずれたモロンチア潤色の球体であるのだが、終局者の寺院である活動中心部に位置するすばらしい精霊の住まいは、物質的、あるいは初期の助けを受けないモロンチア視覚には見えない。しかし、エネルギ一変成者は、上昇する人間にこれらの現実の多くをはっきりと描かせることができ、時々、こうして、この文化的球体における大邸宅世界の学生の学級集会の時のように機能する。

47:1.3 (531.1) あなたは、大邸宅界の全経験を通じ楽園到達の栄光を浴したあなたの同胞の臨場に、ある意味では精霊的に気付いているが、折に触れ、彼らが本部の住まいで機能するとき実際にそれを知覚するということは、非常に壮快である。あなたには、精霊の真の視覚を取得するまでは自然には終局者の姿が浮かばないであろう。

47:1.4 (531.2) すべての生存者は、第一大邸宅界において各自の出身惑星からの親の委員会の必要条件に合格しなければならない。現在のユランチア委員会は、思春期の年齢までの3人以上の子供を育てた人間の経験を持つ最近到着した12組の親から成る。この委員会における務めは、

持ちまわりで原則としてわずか10年間である。親の経験に関しこれらの委員を満足し得ないものは全員が、ジェルーセム上の物質の息子の家庭における奉仕、または終局者の世界の試験育児室での奉仕においてさらなる資格を得なければならない。

47:1.5 (531.3) しかし、親の経験の如何にかかわらず、試用育児室において成長している子をもつ大邸宅界の両親には、そのような子供の教育と訓練に関しモロンチア後見役と協力するあらゆる機会が与えられている。これらの両親は、1年あたり4回までのそこへの訪問の旅が許されている。そして、大邸宅界の両親が終局者世界への定期的な巡礼の旅毎に、自分達の物質の子を抱くのを観測することは、すべての上昇経歴の中で最も感動的に美しい光景の1つである。片親、あるいは両親共が、子供より先に大邸宅界を去るかもしれないとはいえ、しばらくの間、かなり頻繁に親と子は同年代なのである。

47:1.6 (531.4) 上昇する人間は誰も、物質界上、または後の終局者世界上、またはジェルーセム上での子育て—自身の、または他者の子—の経験から逃がれることはできな

い。父親は、ちょうど母と同様に確かにこの不可欠の経験を潜り抜けなければならない。子育ては主に母の任務であるというのは、ユランチアの現代人の不幸、かつ誤った概念である。子供は母親と同様に父親を必要とし、父親とは、母親がこの親としての経験を必要とするのと同程度にそれを必要としているのである。

2. 試験育児室

47:2.1 (531.5) サタニアの幼児受け入れの学校は、ジェルーセムの変遷文化の1番目の球体である終局者世界に位置している。幼児受け入れのこれらの学校は、宇宙の記録上の個々の身分の達成前に、空間の進化の世界で死んだ者達を含む時間の子供の養育と訓練に打ち込む事業である。そのような子供の両親のいずれかが、または双方共が生存の場合、目標守護者は、モロンチア世界の試験育児室にいる大邸宅界の教師の手にこの未発達の魂を届ける責任を課し、同伴する天使童子を子供の潜在的独自性の後見役として任命する。

47:2.2 (531.6) 後に残されたこの同じ天使童子は、大邸宅界の教師として、メルキゼデク系の指揮下において、終局者

の試験的被後見者の訓練のためにそれほどまでに大規模な教育機関を維持している。終局者の被後見者は、すなわち上昇する人間の幼児は、常に再生の可能性を除く死の時点での彼らの正確な肉体状況において人格化される。この目覚めは、第一大邸宅界への親の到着の正確な時間に起こる。次に、これらの子供には、死が折悪しく経歴を終了させた世界でそのような選択をさせられると同様に天の道を選ぶために、第一大邸宅界でのように、あらゆる機会が与えられる。

47:2.3 (532.1) 試験生物は、育児世界上において調整者が時間の世界上と同じようにこれらの物質の子に宿るためにやって来るので、調整者を伴っているかどうかに従って分類される。前調整者時代の子供は、1歳からおよそ5歳以下までの年齢範囲か、または調整者の到着時のその年齢の5人の子供のいる家族の中で世話がされる。

47:2.4 (532.2) 思考調整者を持つ、但し、死の前に楽園経歴に関する選択をしていない進化世界のすべての子供らもまた、体制の終局者世界において再個人化され、そこで調整者なしで到着したものの後に道徳的選択の必要な年齢

到達後に神秘訓戒者を受け入れるそれらの幼子らがするように物質の息子とその仲間の家族の中で同じく成長する。

47:2.5 (532.3) 6歳から14歳までの調整者-内住の終局者世界の子供と若者もまた、5人の子供のいる家族で育てられる。大体においてこれらの家族は、6歳、8歳、10歳、12歳、14歳の子供をもつ。最終的選択がなされたならば、16歳以降は、いつでも第一大邸宅界に移動し、各自の楽園上昇を始める。一部の者達は、この年齢以前に選択をし、上昇球体に進んでいくが、ユランチア標準年齢による16歳未満の子供は、ほとんど大邸宅界においては見かけられないであろう。

47:2.6 (532.4) 忠実なスポーナーギアが若者の物理的必要性を満足させる一方で、後見熾天使は、ちょうど彼らが精霊的に進化の惑星で人間に奉仕するように終局者世界の試験育児室のこれらの若者の世話をする。これらの子供は、自らの最終選択をするそのような時まで変遷世界において成長するのである。

47:2.7 (532.5) 物質生命がその行程を走行し終えたとき、上昇生活への選択がなされていなかったならば、または時間の子供が確実にハヴォーナ冒険をしないと決めるならば、死は、自動的に彼らの試験経歴を終わらせる。そのような事例へのいかなる裁決、審判もない。そのような2度目の死からの何の復活もない。彼らは、単にまるで存在しなかったかのようになる。

47:2.8 (532.6) しかし、楽園の完全性の道を選ぶならば、それらは、すぐにそれらの多くが、ハヴォーナ上昇にある各自の両親との合流に間に合うように到着する第一大邸宅界への移動に備える。ハヴォーナを通過し神格に到達後、人間が起源のこれらの救出された魂は、楽園へ上昇する永久公民を構成する。人間誕生世界での貴重で不可欠の進化的経験を奪われたこれらの子は、終局者部隊には召集されない。

3. 第一大邸宅界

47:3.1 (532.7) 復活した人間の生存者は、大邸宅界において死に取って代わった中止したところから人生を再開する。あなたは、ユランチアから第一大邸宅界へ行くとかなり

の変化に気付くのだが、もしより正常で進歩的な時間の球体から来たのであれば、異なる肉体を所有していたという事実を除き、違いにはほとんど気づかないであろうに。生身の人間の住まいは、その誕生の世界に残されてきたのである。

47:3.2 (532.8) 第一大邸宅界における全活動のまさにその中心は、復活の大広間、人格集合の巨大な寺院である。この巨大な構造物は、熾天使の目標の守護者、思考調整者、復活の大天使の主要な集合場所で構成されている。また生命運搬者は、死者の復活においてこれらの天の存在体と共に機能する。

47:3.3 (533.1) 物質的段階から精霊の段階に変えられるとき人間の心についての謄本、調査書、と創造物記憶の活性の原型は、離れた思考調整者の個々の所有にある。心、記憶、および創造物の人格のこれらの精霊化の要素は、いつまでも、そのような調整者の一部である。創造物の心の基盤と個性の不活性の可能性は、熾天使の目標の守護者の管理に委ねられるモロンチア魂に臨場している。そして、それは、創造物の人格を組み立て直し、眠ってい

る生存者の復活を構成する熾天使のモロンチア魂の委託と調整者の精霊心の委託の再結合である。

47:3.4 (533.2) 人間起源の一過性の人格が、決してこのようにして組み立て直されなかったならば、生存しない必滅の創造物の精霊要素は、かつての内住する調整者個々の経験上の贈与の不可欠部分としていつまでも続くであろう。

47:3.5 (533.3) 新たなる生命の寺院から放射状の7つの翼が、つまり人類の復活の大広間が広がっている。これらの各構造物は、時間の7人種の中の1つの組み立てにあてられる。これらの7つの各翼には100万名もの個人のための目覚めの部屋として用を果たす円形学級の集会所に各人格のための10万の復活室がある。これらの大広間は、後アダームの正常な世界の混合人種の人格組み立て室に囲まれている。特別の、あるいは天啓時代の復活に関して時間の個々の世界において採用されるかもしれない手法にかかわらず、実際の、そして完全な人格の真の、意識的再集会は、大邸宅界第一号の復活大広間において行われ

る。あなたは、これらの復活の朝の最初の目撃についての深い記憶の印象を未来永劫に思い出すであろう。

47:3.6 (533.4) あなたは、復活の大広間から永久的住居が割り当てられるメルキゼデク系の領域へと進む。あなたは、それから自由な10日間に入る。あなたは、自由に新しい家のすぐ近くを探検したり、目の前に待ち受けている予定に慣れたりすることができる。また、あなたには、登録を参照し、これらの世界に先に行ったかもしれない愛するものたちや他の地球の友人を訪問するというあなたの願望を満足させる時間がある。大邸宅界は単なる拘留惑星ではなく、実際の訓練球体であるので、あなたは、10日間の余暇の終わりに楽園旅行における第2段階にとり掛かる。

47:3.7 (533.5) あなたは、大邸宅界第一号において、(あるいは、上級の進行状況の場合には別のものにおいて)、死によって中断された正確な段階であなたの知的訓練と精霊的開発を再開する。人間は、惑星での死、あるいは移動と大邸宅界における復活の時間の間では、生存事実を経験することを別にしては、絶対に何も獲得はしない。

あなたは、こちらで中止したまさに同じところからあちらで始めるのである。

47:3.8 (533.6) 大邸宅界第一号の経験のほぼ全体は、欠陥の補足活動に関係する。最初の拘留球体に到着する生存者は、被創造物の個性の多くの、しかもそのような様々な欠陥と人間の経験での欠落を示すので、領域の主要な活動は、時間と空間の物質的進化世界における生身の生活おけるこれらの多種多様の遺産の修正と矯正に集中する。

47:3.9 (534.1) 大邸宅界第一号における滞在は、人間の生存者を正常な進化世界における少なくとも後アダームの天啓時代の段階まで発展するように設計されている。精霊的に、もちろん、大邸宅界の学生は、単なる人間発達のそのような状態のずっと先にいる。

47:3.10 (534.2) あなたが、もし大邸宅界第一号に引き止められることになっていないならば、10日間の終わりに移動睡眠に入り、世界第二号に進むであろうし、その後は10日毎に、あなたの任務の世界に到着するまで前進するであろう。

47:3.11 (534.3) 第一大邸宅界行政の7個の主要な円の中心には、上昇する人間に割り当てられた個人的案内役であるモロンチア同志の寺院がある。これらの同志は、地方宇宙の母なる精霊の子孫であり、その中の数百万名は、サタニアのモロンチア世界にいる。あなたは、集団の同志として割り当てられたそれらは別として、通訳、翻訳者、構築物管理者、および小旅行監督と多々関係するであろう。また、これらの同志は皆、モロンチアの体内のあなたの心と精霊の人格要素の開発に関係があるもの達に最も協力的である。

47:3.12 (534.4) あなたが、第一大邸宅界で始ると、上昇する1,000名の人間ごとに1名のモロンチア同志が割り当てられるが、あなたは、7大邸宅球体全体を進むにつれ、より大勢に遭遇するであろう。これらの美しく万能の存在体は、親しみやすい仲間であり魅力的な案内役である。彼らは、それらの、各自の、衛星世界を含む変遷文化球体の個人、または選抜集団のいずれにも自由に伴うことができる。彼らは、上昇する人間すべての小旅行案内役と余暇仲間である。彼らは、しばしばジェルーセムへの定期的訪問で生存者集団に伴うし、しかも、それらは住

居用の住まいと体制本部間の往復を自由に旅するので、あなたは、そこにいるときはいつでも体制首都の登録部門に行くことができ、全7大邸宅界からの上昇する人間に会える。

4. 第二大邸宅界

47:4.1 (534.5) あなたが完全に大邸宅界の生活に入るのはこの球体においてである。モロンチア生活の組分けが、具体化し始める。作業部会と社会的組織は、機能し始め、共同体は、公式の様相を呈し、前進している人間は、新しい社会系列と政治上の整理を開始する。

47:4.2 (534.6) 精霊融合の生存者は、調整者融合の上昇する人間と共有の大邸世界にいる。様々な天の生命体の系列は異なるが、それらは皆が、打ち解けて兄弟のようである。あなたは、人間の思いやりのない階級制度の不寛容と差別に匹敵するものを上昇の全世界に何も見つけないであろう。

47:4.3 (534.7) あなたが１つずつ昇るにつれ、大邸宅界は、前進している生存者のモロンチア同志の活動でより混雑するようになる。あなたは、前に進むにつれ、ジェルーセ

ムの特徴が、大邸宅界にますます多く追加されるのを認識するであろう。ガラスの海は、第二大邸宅界にその姿を見せる。

47:4.4 (534.8) 新たに生み出され相応に調整されたモロンチアの肉体は、一大邸宅界から他の大邸宅界への各上昇時に獲得される。思考調整者が、大邸宅界間での移動睡眠の間あなたを置き去りにしないこと以外は、あなたは、熾天使の輸送で寝つき、あなたが最初に大邸宅界第一号に到着時と同じように復活の大広間で新しいが未発達の肉体で目覚める。あなたが進化世界から最初の大邸宅界へと一旦通り過ぎると、あなたの人格は、そのままである。

47:4.5 (535.1) あなたの調整者の記憶は、あなたがモロンチア生活を昇るにつれ、完全にそのままで残っている。だが価値があり、生存価値のあるあなたの精神生活におけるすべては、を除く、純粋に動物的で完全に物質的であったそれらの精神的つながりは、物理的な脳とともに自然に滅びたが、調整者により対応物が作られ、また、個人的な記憶の一部として上昇経歴中ずっと保有される。あ

なたが、１大邸宅から他の大邸宅へと、そして宇宙の１区域から他の区域へと—楽園にさえ—進むにつれ、あなたは、すべての価値ある自身の経験を意識するであろう。

47:4.6 (535.2) あなたは、モロンチアの肉体をもっているとはいえ、これらの7つの全世界で、食べて、飲んで、休息し続ける。あなたは、モロンチアの食物系列を、つまり物質界では知られていない生けるエネルギー群を摂取する。食物と水の両方が、モロンチアの肉体に完全に取り込まれる。残余の廃棄物は何もない。止まって、考えなさい。大邸宅界第一号は、モロンチア体制の初期の始まりを提示している非常に物質的な球体である。あなたはまだ、人間に近く、人間生活の限られた観点からあまり遠くにはいないが、それぞれの世界は、明確な進歩を明らかにしている。あなたは、球体から球体へとより物質的でなくなり、より知的に、そしてわずかに精霊的になる。精霊的進歩は、これらの進歩的な7世界のうち最後の3世界において最大である。

47:4.7 (535.3) 生物上の欠陥は、第一大邸宅界で主に埋め合わせがなされる。そこでは、性生活、家族のつながり、および親の機能に関する惑星経験における欠陥は、修正されたるか、またはジェルーセムの物質の息子の家族間での将来の調整のために計画された。

47:4.8 (535.4) 大邸宅界第二号は、より具体的に知的闘争の全局面の除去とすべての種類の精神的不調和の療法に備える。第一大邸宅界で始められるモロンチアモタの意味を習得する努力は、ここではより真剣に継続されている。大邸宅界第二号における発展は、理想的な進化世界の後権威の息子の文化の知的状態と比較される。

5. 第三大邸宅界

47:5.1 (535.5) 大邸宅界第三号は、大邸宅界の教師の本部である。教師たちは、全7大邸宅球体で機能するが、世界第三号の学校の領域の中心にそれぞれの本部を維持する。大邸宅界とより高度のモロンチア世界にはこれらの何百万人もの教官がいる。これらの上級の、栄光の天使童子は、モロンチア教師として大邸宅界から地方宇宙の上昇訓練の最後の球体までずっと役目を果たす。送別の時、

つまり、あなたが、自分の起源の宇宙に別れを告げる時が近くなるときに、—少なくともいくつかの期間—超宇宙の小領域の受信世界への移動のために熾天使化するときに、慈愛深い別れを最後に告げるものの中にそれらはいるであろう。

47:5.2 (535.6) 第一大邸宅界に滞在中、あなたには、最初の変遷世界を、すなわち終局者の本部、および未発達の進化の子供の養育のための体制の試験育児室を訪れる許可がある。あなたは、大邸宅界第二号に到着すると、全サタニアのモロンチア監督の本部と様々のモロンチア系列のための職業訓練所が設けられている変遷世界第二号を訪問するために定期的に許可を受ける。あなたには、大邸宅界第三号に達すると、すぐに第三変遷球体、すなわち天使の系列の本部とそれらの様々な体制職業訓練所の郷里を訪問する許可が与えられる。この世からのジェルーセムへの訪問は、前進している人間にとりますます有益であり、絶えず興味を高めるものである。

47:5.3 (536.1) 大邸宅界第三号は、人間誕生世界の肉体からの解放に先立つこれらの文化回路の同等物を作ら、到らな

かったもの全員のための素晴らしい個人的達成と社会的達成の世界である。この球体においては、より積極的な育英事業が始められる。最初の2大邸宅界の訓練は、肉体の生活経験の補足に関係があるという点において欠陥的の—負の—性質のものである。この第三大邸宅界における生存者にり、それぞれの進歩的モロンチアの教養が本格的に始まる。この訓練の主要目的は、モロンチアモタと人間の論理の相関関係、つまりモロンチアモタと人間の哲学の等位についての理解を高めることである。生残する人間は、いま正しい形而上学に関する実用的な洞察を習得する。これは、宇宙の意味と宇宙相互関係についての知的理解への真の序論である。第三大邸宅界の文化は、通常の棲息惑星の後贈与の息子の時代の性質を帯びている。

6. 第四大邸宅界

47:6.1 (536.2) あなたは、第四大邸宅界到着時点で申し分なくモロンチア経歴を始めたのである。あなたは、初期の物質的存在からはるばる前進してきた。今、あなたには、変遷世界第四号への訪問許可が与えられ、そこで輝く宵の明星を含む超天使の本部と職業訓練所についてよく理

解するようになる。モロンチア訪問者は、変遷世界第四号のこれらの超天使の尽力によりジェルーセムへの定期的訪問の間、神の息子の様々な系列に至極近づくことができる。というのも、本部世界へのこれらの繰り返しの訪問の際、体制首都の新部門が、前進している人間に徐々に開いているのであるから。新たな壮大さが、次第にこれらの上昇者の広がりつつある心で展開されていく。

47:6.2 (536.3) 個々の上昇者が、第四号大邸宅界でモロンチア生活の集団作業と階級機能に自分の場所をより適切に見つける。上昇者は、ここで放送と地方宇宙の教養と進歩の他の局面について増加する高い評価を育成する。

47:6.3 (536.4) 上昇する人間が、本当に最初のモロンチア創造物の真の社会生活の要求と喜びに導き入れられるのは、世界第四号における訓練期間中である。また、進化の創造物にとっての栄達にも身勝手な征服にも基づかない社会的活動に参加することは、誠に新しい経験である。新たな社会秩序が、つまり双互の好意的評価からくる理解ある共感、相互奉仕の寡欲な愛、そして共通、かつ最高

の目標—信心深く神のような完全性の楽園目標—の認識からくる圧倒的動機に基づく社会秩序が導入される。上昇者すべてが、神を知り、神を明らかにし、神を探し、神を見つける自意識をもつようになる。

47:6.4 (536.5) この第四大邸宅界の知的文化と社会文化は、通常発展の惑星における後の師としての息子時代の精神生活と社会生活に匹敵している。精霊的状態は、そのような人間分配に大いに先んじている。

7. 第五大邸宅界

47:7.1 (537.1) 第五大邸宅界への輸送は、モロンチア前進者の生活における前方への大幅な一歩を意味する。この世界における経験は、本物のジェルーセムの生活の前触れである。忠誠な進化世界の惑星は、自然の発展の間この段階に尋常に進むことができるので、あなたは、ここで忠誠な進化世界の高度の目標に気づき始める。この大邸宅界の文化は、一般的に、正常の発展的前進の惑星の光と生命の初期の時代のものと一致している。そして、あなたは、このことから、時々これらの進化世界に生息する非常に洗練され進歩的な型の存在体が、1つの、あるい

はそれ以上の大邸宅球体の通過から、あるいは全大邸宅球体の通過からさえ免除されるよう取り計らわれている理由を理解することができる。

47:7.2 (537.2) あなたは、第四大邸宅界を去る前に地方宇宙の言語を習得し、いまはジェルーセム到着前に在留資格をもち2言語に堪能であるように、ユヴァーサの言葉に磨きをかけるためにより多くの時間を割いている。すべての上昇する人間は、体制本部からハヴォーナまでは2言語を話す。また単に超宇宙の語彙を拡大する必要があり、さらに楽園での住居のための追加拡大が必要とされる。

47:7.3 (537.3) 巡礼者は、大邸宅界第五号への到着時に、対応する番号の変遷世界、すなわち息子の本部を訪問する許可が与えられる。ここで、上昇する人間は、神の息子の資格をもつ様々な集団と個人的に親しくなる。上昇する人間は、これらのずば抜けた存在について聞き知っていたし、ジェルーセムで既にそれらに接触してはいたものの、今、実際にそれらを知るようになる。

47:7.4 (537.4) あなたは、第五大邸宅界上で星座研究世界について学び始める。あなたは、ここであなたにその後の星座滞在のための準備をさせる最初の教官に会う。この一層の準備は、第六と第七世界でも続くが、最後の仕上げは、上昇する人間のジェルーセム区域で補われる。

47:7.5 (537.5) 真の宇宙意識の誕生は、大邸宅界第五号で起こる。あなたは宇宙に関心をもつようになっている。これは、実に広がる地平線の時である。驚くほど壮大かつ崇高で神性の目標が、進歩的楽園上昇を終了するすべてのものを待ち受けるということが、上昇する人間の拡大していく心に明らかになりつつあり、進歩的楽園上昇は、それほどまでに苦心して、だが嬉々として、しかも幸先よく始められていたのであった。平均的人間の上昇者は、ほぼこの時点でハヴォーナ上昇に対する誠実な経験上の熱意を表し始める。学習は自発的に、寡欲な奉仕は自然に、崇拝は自発的になりつつある。本物のモロンチアの個性が芽生えている。本物のモロンチア創造物が展開している。

8. 第六大邸宅界

47:8.1 (537.6) この球体の一時逗留者は、これらの天の存在体の多くを想像できないものの、そこで超宇宙の高度の精霊に関してさらに学ぶ変遷世界第六号への訪問が許されている。また、ここで、地方宇宙のモロンチア訓練からの卒業に間髪を入れずに続く将来の精霊経歴における自分達の最初の授業を受ける。

47:8.2 (537.7) 体制君主補佐は、頻繁にの世界を訪問し、また初期の指示が、宇宙行政の手法でここで始められる。宇宙全体の業務を擁する最初の教育が、いま伝えられる。

47:8.3 (538.1) これは上昇する人間にとり輝かしい時代であり、また、たいていは、人間の心と神性調整者の完全な融合を目撃する。この融合は、可能性の点においては以前に起こったかもしれないが、実際の働く同一性は、第五大邸宅界における滞在時まで、または第六大邸宅界においてさえ、しばしば達成されない。

47:8.4 (538.2) 永遠の神性調整者との不滅の魂の結合は、復活した生存者の場合は監督している超天使の呼び集める熾天使により、また3日目の審判行くそれらものの場合は、記録の大天使の呼び集める熾天使によりはっきりと

示される。次には、そのような生存者のモロンチア同志の面前で、これらの承認の使者は言う。「これは私の心にかなう愛する息子である」と。この簡単な儀式は、楽園奉仕の永遠の経歴へと上昇する人間の入場を特徴づける。

47:8.5 (538.3) 新たなモロンチア存在体は、調整者融合の確認があり次第、その新しい名前で初めて仲間に紹介され、自身と心を通じ合いわせ、ハヴォーナへの任意の経路のいずれか1つを選び、楽園到達の特異な手法から選択する間、通常の全活動からの40日間の精霊的休暇が与えられる。

47:8.6 (538.4) しかし、これらの輝かしい存在体は、まだ大なり小なり物質的である。真の精霊であるにはほど遠い。新しいモロンチア存在体は、どちらかと言うと超人間であり、精霊的にはまだ天使よりも劣性である。しかし、それらは実に驚異の創造物になっているのである。

47:8.7 (538.5) 世界第六号上での滞在中の大邸宅界の学生は、光と生命の最初の段階を越えて順当にに発展した進化世界を特徴づける昂揚的発達に匹敵する身分を獲得する。

この大邸宅界における社会組織は、高水準のものである。これらの世界を一つずつ昇るにつれ、人間の特質の影は、次第に少なくなる。惑星の動物起源の粗雑な痕跡を後に残していくにつれ、あなたはますます魅力的になっていく。「大きな苦難を潜って来ること」は、栄光に輝く必滅者が、非常に親切かつ理解ある、またじつに同情的で許容的になるのに役立つのである。

9. 第七大邸宅界

47:9.1 (538.6) この球体における経験は、即座の後人間の経歴の頂点の達成である。あなたは、ここでの滞在中、ジェルーセムでの居留のために準備するあなたの課題において協力する多くの教師全員の指示を受けるであろう。孤立し発達の遅れた世界出身の人間と、より高度で進んだ球体からの生存者の間の認識可能のいかなる違いも、事実上、第七大邸宅界に滞在中に取り除かれる。ここにおいて、不運な遺伝、不健康な環境、不精霊的惑星傾向の残物全てが、あなたから一掃されるであろう。「野獣の印」の最後の残物は、ここにおいて根絶される。

47:9.2 (538.7) 大邸宅第七号に滞在中、変遷世界第七号、つまり宇宙なる父の世界への訪問許可が与えられる。ここで、あなたは、まだ見たことのない父の新たでより精霊的な崇拝を、つまりあなたの長い上昇経歴全行程においてさらなる追求習慣を始める。あなたは、過渡的文化のこの世界において父の寺院を見つけはするが、父を見ることはない。

47:9.3 (538.8) 今、ジェルーセムへ向けての卒業のために集団編成が始まる。あなたは、個人として世界から世界へ行ってしまったが、いまは集団でのジェルーセムへの出発準備をする。上昇者は、地球の遅々とした１名の仲間、あるいは大邸宅界の作業団体が、自分に追いつく可能性のために、一定の限界内で、第七大邸宅界での滞在を選べはするのだが、、、。

47:9.4 (539.1) 第七大邸宅界の職員は、居住身分をもつあなたのジェルーセムへの出発を目撃するためにガラスの海に集合する。あなたは、数百回、あるいは数千回となくジェルーセムを訪問したことがあったかもしれないが、いつも客としてであった。あなたは、かつて上昇する人間

として大邸宅界経歴全体に永遠の送れを告げる仲間の集団とともに体制首都に向けて一度も進んだことがなかった。あなたは、間もなくジェルーセム公民として本部世界の専用受け入れ場で歓迎されるであろう。

47:9.5 (539.2) あなたは、第七非物質化世界での最初から最後までの自身の進歩を大いに楽しむであろう。それらは、じつに非物質化の球体である。第一大邸宅界におけるあなたは、大部分が人間である。すなわち、単に物質の肉体をもたない必滅の存在体、モロンチアの型に収容される人間の心—血肉の人間の家ではなく、モロンチア界の物質的肉体である。あなたは、実際に調整者融合時点で必滅の状態から不滅の状態へと通過し、ジェルーセム経歴を終え切るその時までには、完全なモロンチア体になるであろう。

10. ジェルーセム公民権

47:10.1 (539.3) 大邸宅世界卒業生からなる新しい組の受け入れが、全ジェルーセムにとり歓迎委員会として集合する合図である。スポーナーギア系でさえも、惑星の競争を走り、大邸宅世界進行を終えたもの、進化の起源をもつ意

気揚々の上昇者の到着を楽しむ。物理制御者とモロンチアの力の監督者だけが、この喜びの機会に参加していない。

47:10.2 (539.4) 啓示者ヨハネは、第七大邸宅界から人間にとっての最初の天国、つまりジェルーセムの栄光へと前進する人間の組の到着光景を見た。啓示者ヨハネは記録した。「私は、まるで火の交じるガラスの海のようなものを見た。そして、ガラスの海に立ち、神の竪琴を手にし、人間の恐怖と死から救出の歌を歌っているもの達を、元々は自分達の中にあった獣に対して、大邸宅界中に存続し続けていたその像に対して、最終的には最後の印と痕跡に対して勝利を獲得したもの達を見た。」(宇宙の完成された通信は、これらのすべての世界で利用可能である。また、そのような通信のいかなる場所でのあなたの受信は、宇宙通信受信への未熟なモロンチア知覚の構造を直接に調整できない欠陥を補うモロンチアの工夫である「神の竪琴」を持ち運ぶことにより可能にされる。)

47:10.3 (539.5) パウーロスもまた、ジェルーセムで人間を完成させる上昇の公民部隊観を有し、次のように書いている。「しかし、あなたはシオン山に、天のエルサレムである生ける神の都に、無数の天使の一行のもとに、マイケルの壮大な集会に、そして、完全にされた義人の精霊のところに来た。」

47:10.4 (539.6) 人間は、体制本部に住居を獲得後、もはや文字通りの復活は経験しないであろう。大邸宅界からの出発の際に与えられたモロンチアの型といったようなものは、地方宇宙経験の終わりまであなたに役立つであろう。時々変更は行われるが、あなたは、上昇文化と精霊訓練の超宇宙世界への移動に向けての第一段階の精霊準備として現れる際にそれに別れを告げるまでは、この同じ型を保有するであろう。

47:10.5 (540.1) 大邸宅の全経歴を通過するそれらの人間は、調整睡眠と復活の目覚めを7度経験する。しかし、最後の復活の大広間、つまり最終の目覚めの間は、第七大邸宅界にとり残された。もはや、型の変更というものは、意

識の消滅、あるいは個人の記憶の連続性における中断を必要としないであろう。

47:10.6 (540.2) 進化世界で開始され、そして肉体に住まわせた—神秘訓戒者が内住し、真実の精霊が努力を注ぎ込んだ—人間の人格は、そのようなジェルーセム公民は、エデンチアに向けての認可が与えられ、ネバドンのモロンチア部隊の真正の構成員—調整者提携の不滅の生存者、楽園上昇者、モロンチア身分の人格、およびいと高きものの本当の子供—であると宣言されるその日までは、完全に動員され、認識され、統一されたりはしない。

47:10.7 (540.3) 人間の死は、肉体の物質生活からの逃避手段である。そして、修正的訓練と教養教育の7世界をへる進歩生活の大邸宅界経験は、進化の物質的存在、そして永遠の入り口到達を予定されている時間の上昇者のより高い精霊到達の間にある過渡的生活であるモロンチア経歴への人間生存者の導入を表す。

47:10.8 (540.4) [輝く宵の明星による後援]

論文 48
モロンチア生活

48:0.1 (541.1) 神々は、創造的魔法の何らかの神秘的行為により動物の粗野な性質を完成された精霊に変えるということができない—少なくともそうはしない。創造者が、完全な存在体を生みだすことを望む場合、直接かつ独自の創造によりそうするが、決して動物起源と物質的創造物を一挙に完全性の存在体への変換には着手しない。

48:0.2 (541.2) モロンチア生活は、地方宇宙経歴の様々な段階にまたがり拡大しており、物質的人間が、精霊世界の敷居に到達できる唯一可能な接近法である。死、つまり物質の肉体の自然分解は、そのような簡単な方法が、必滅の、物質的な心を不滅の、完成された精霊に即座に変換するという何の魔法を持てるというのか。そのような信仰は、無知な迷信と心地よい寓話に過ぎない。

48:0.3 (541.3) 常に、このモロンチア変遷が、人間の状態と生残する人間のその後の精霊状態の間に介入する。宇宙進歩のこの中間的状態は、様々な地方創造において著しく異なるが、意図と目的においては、すべて全く同じである。ネバドンの大邸宅界とより高いモロンチア世界の配

置は、オーヴォントンのこの一部のモロンチア変遷体制にはよくあることである。

1. モロンチア物質

48:1.1 (541.4) モロンチアの領域は、生物存在の物質段階と精霊段階の間の地方宇宙の連携球体である。このモロンチア生活は、惑星王子の初期以来ユランチアで知られている。この変遷状態は、時々人間に教えられてきたし、概念は、歪められた型で現代宗教の中に居場所を見い出した。

48:1.2 (541.5) モロンチア球体は、地方宇宙の進行世界をつらぬく人間上昇の過渡期である。地方体制の終局者球体を囲む7個の世界だけが、大邸宅界と呼ばれるが、体制56個の変遷の住まいすべてが、星座と宇宙本部周辺のより高い球体と同様にモロンチア世界と呼ばれる。これらの創造物は、地方宇宙の本部球体の物理的な美とモロンチアの壮大さを帯びている。

48:1.3 (541.6) これらの世界すべてが、建築球体であり、進化した惑星の２倍の数の要素がある。そのような別誂えの世界には、100の物理的要素を持つ重金属と結晶が豊富

であるばかりではなく、同様に丁度100の型モロンチア物質と呼ばれる独自のエネルギー構成がある。物理の主たる制御者とモロンチアの力の監督者は、この新しい物質を創造するために物質の主要単位の回転を変更することができ、同時にエネルギーのこれらのつながりを変えることができる。

48:1.4 (542.1) 地方体制の初期のモロンチア生活は、あなたの現在の物質界のそれに非常に似ており、星座研究世界においてより物理的でなくなり、またより誠実にモロンチアらしくなる。そのうえ、あなたは、サルヴィントン球体に達するにつれ精霊的水準に達する。

48:1.5 (542.2) モロンチアの力の監督者は、物質エネルギーと精霊エネルギー結合をもたらすことができ、その結果、制御精霊の重ね合わせを受け入れるモロンチア具体化の型を体系づける。あなたがネバドンのモロンチア生活に臨むとき、忍耐強く巧みなこれらの同じモロンチアの力の監督者らは、それぞれが、あなたの進歩的変化の段階である570のモロンチアの肉体を、次々にあなたに提供するであろう。物質界を去る時点からサルヴィントンの

第一段階の精霊とされるまで、あなたは別々の、上昇するモロンチアのちょうど570回の変更をうけるであろう。体制においてはこれらの8回の変更が、星座においては71回、そしてサルヴィントン球体滞在中には491回起こる。

48:1.6 (542.3) 神の精霊は、必滅の肉体の時代にはほとんど離れたものとしてあなたに宿る。実際は、宇宙なる父の贈与された精霊による人への侵入。しかし、モロンチア生活における精霊は、あなたの人格の実部になるであろうし、あなたは、相次ぐ570回の進歩的変化を通り抜けるにつれ、創造物存在の物質状態から精霊状態へと昇る。

48:1.7 (542.4) パウーロスは、「天国に、より勝りより永続する物質を持っている」と書いて、モロンチア世界の存在とモロンチア物質の現実を知っていた。これらのモロンチア物質は、「建築者と製作者が神である揺るがぬ土台を持つ都」に実在するように、文字通り実在する。これらのそれぞれの驚異の球体は、「より良い国、すなわち、天の国」なのである。

2. モロンチアの力の監督者

48:2.1 (542.5) これらの特異な存在体は、精霊的エネルギーと物理的エネルギーの働く組み合わせ、あるいは半物質エネルギーとの働く組み合わせを示すそれらの活動指揮に専ら関係がある。それらは、全くモロンチア進行の活動にのみ専心する。変遷経験の間、人間にそれ程までに奉仕するというわけではないが、これらの特異な存在体は、むしろ進歩しているモロンチア創造物のために変遷環境を可能にする。それらは、変遷世界のモロンチアの段階を支え、かつ充足するモロンチアの力の経路である。

48:2.2 (542.6) モロンチアの力の監督者は、地方宇宙の母なる精霊の子である。様々な地方創造において、性質の面ではわずかに異なるが、意匠の面ではかなり標準的である。彼らは、それぞれの特定機能に合わせて創造されており、責務に着手する前の訓練を必要としない。

48:2.3 (542.7) 最初のモロンチアの力の監督者の創造は、地方宇宙の第一大邸宅界のある1つの岸への最初の人間生存者の到着と同時である。それらは1,000名からなる集団に創造され、次のように分類される。

48:2.4 (542.8) 1. 回路規制者 400

48:2.5 (542.9) 2. 体制連係者 200

48:2.6 (542.10) 3. 惑星管理者 100

48:2.7 (543.1) 4. 合同制御者 100

48:2.8 (543.2) 5. 連携安定装置者 100

48:2.9 (543.3) 6. 選抜的類別者 50

48:2.10 (543.4) 7. 准記録係 50

48:2.11 (543.5) 力の監督者は、各自の出身宇宙において常に勤務する。それらは、専ら宇宙の息子と宇宙の精霊の共同精霊活動により方向づけられるが、その他の点において完全に自治集団である。それらは、本部を地方体制の各第一大邸宅界に維持し、そこでは、物理の制御者と熾天使両者との深い関連において働くが、エネルギー顕現と精霊応用に関しては各自の世界で機能する。

48:2.12 (543.6) また彼らは、臨時の任務の奉仕者として進化世界の超物質現象に関わって働く。しかし、棲息惑星においては滅多に務めない。主として地方宇宙のモロンチア

進行の変遷体制に専念することから、超宇宙の高度の訓練世界でも働かない。

48:2.13 (543.7) 1. 回路規制者。これらは、物理エネルギーと精霊エネルギーを調整し、モロンチア球体の隔離された経路へのその流れを規制する特異な存在であり、また、これらの回路は、ただ一つの世界に限られた独占的惑星である。モロンチア回路は、変遷世界の物理回路と精霊回路の双方とは異なり、またそれの補足であり、サタニアのような大邸宅界の体制でさえエネルギーを与えるにはこれらの何百万名もの調整者を要する。

48:2.14 (543.8) 回路規制者は、物質エネルギーにそれらの変化を起こし、その変化が、物質エネルギーを仲間の制御と規制の下に置く。これらの存在体は、回路監視員と同様にモロンチアの力の発生者でもある。発電機が、明らかに大気から電力を生産するのとほとんど同じように、これらの生けるモロンチア発電機は、空間中のエネルギーをモロンチア監督が上昇する人間の肉体と生活の営みに織り込むそれらの物質の中へと変化させているようである。

48:2.15 (543.9) ２．体制連係者。各モロンチア世界にはモロンチアエネルギーの別の系列があるので、人間がこれらの球体を想像することはきわめて難しい。しかし、連続する各変遷球体においては、植物と他のすべてが、上昇する生存者の前進する精霊化と一致するように次第に変更されているモロンチア生活に関係しているのが、人間にはわかるであろう。各世界のエネルギー体制は、このようにして個別化されるので、これらの調整者は、そのような異なる力体制をいかなる特定集団の関連球体のために働く一団へと調和し、融合するように機能する。

48:2.16 (543.10) 上昇する人間は、モロンチアの１世界から他の世界へと進むとき、物理的段階から精霊的段階へと徐々に進歩する。したがって、モロンチア球体の上昇範囲とモロンチアの型の上昇範囲を提供する必要性がある。

48:2.17 (543.11) １球体から他球体へと通過の際、大邸宅界の上昇者は、輸送熾天使により高度な世界の体制連係者の受信機、迎え役へ届けられる。ここにおいて、創造物の型における必要な変化が、地球起源の人間受理の最初の世界の復活大広間に似た変遷の間にある放射状の70の翼の

中心にあるそれらの類い稀な寺院の中において体制連係者により巧みにもたらされている。初期のモロンチア型のこれらの変化を達成するには、およそ7日間の標準時間を必要とする。

48:2.18 (544.1) 惑星管理者。大邸宅球体から宇宙本部までの各モロンチア世界は、70名の守護者の保護監督下—モロンチア業務に関して—にある。彼らは、モロンチア最高権威の地方の惑星協議会を構成する。この協議会は、球体に着陸し、また次の球体に進むことを可能にする創造物の型におけるそれらの変化を是認する全上昇創造物にモロンチア型のための物質を与える。あなたは、大邸宅界横断後、意識を放棄する必要はなくしてモロンチア生活の1局面から他の局面へ移るであろう。無意識は、初期の変化と、後の1宇宙から他の宇宙へ、それにハヴォーナから楽園への変遷だけに伴う。

48:2.19 (544.2) 4. 合同制御者。非常に機械的存在体のこれらのうちの1つは、モロンチア界の各行政単位の中心にいつも配置される。合同制御者は、モロンチアの物理的、精霊的エネルギーに反応し、エネルギーとともに機能す

る。そして、この存在と共に、2名の体制連係者、4名の回路監視員、1名の惑星管理者、1名の連携安定装置者、副記録係か、または選抜類別者のいずれか１名がいつもいる。

48:2.20 (544.3) 5. 連携安定装置者。これらは、領域の物理的、精霊的原動力と関係するモロンチアエネルギーの監視員である。彼らは、モロンチア物質の中へのモロンチアエネルギーの変換を可能にする。存在のモロンチア全体の組織は、安定装置者に依存している。彼らは、エネルギー回転を物質化が発生し得るその点にまで減速させる。しかし、私にはそのような存在体の活動を比較したり例証したりできる何の用語もない。それは、全く人間の想像を超えている。

48:2.21 (544.4) 6. 選抜類別者。あなたは、モロンチア界の一階級、あるいは一局面から他に進歩するにつれ鍵をかけ直すか、または前もって調整されなければならないし、それが、あなたをモロンチア生活との共時性に留めおくという選抜類別者の任務なのである。

48:2.22 (544.5) 生命と物質のモロンチアの基本型は、最初の大邸宅界から最後の宇宙変遷球体まで同じではあるものの、徐々に物質から精霊に広がる機能的な進行がある。この基本的には一定の、しかし連続的に進み精霊化していく創造へのあなたの適合性は、この選抜の鍵のかけ直しによりもたらされる。あなたは同じモロンチア型を保有はしているのだが、人格構造におけるそのような調整は、新創造に等しいのである。

48:2.23 (544.6) あなたは、繰り返し自分をこれらの審査官の試験にさらし、あなたが適切な精霊的達成を登録するや否や、彼らは、喜んであなたを高度な地位に認定するであろう。これらの進歩的変化は、食糧必要量と他の数々の個人的習慣における変更といったモロンチア環境への変化した反応をもたらす。

48:2.24 (544.7) 選抜類別者は、研究、教育、および他の事業目的のためにモロンチア人格の組分けにもかなり役に立つのである。彼らは、一時的関係において最もよく機能するものを自然に指し示す。

48:2.25 (544.8) 7. 副記録係。モロンチア界には、モロンチア創造に特有の記録と他の資料の管理と保護を精霊の記録係と共同して務めるそれ自身の記録係がいる。モロンチア記録は、人格の全系列に利用可能である。

48:2.26 (545.1) モロンチアの変遷領域全体は、物質と精霊の存在体に等しく接近可能である。モロンチア前進者としてあなたは、物質界との、また物質的人格との十分な接触を保ち、その間にますます精霊存在体を見分け親しくつきあうであろう。また、モロンチア体制からの出発までには、単独使者などのより高い型の幾つかを除く精霊の全系列を見てしまうであろう。

3. モロンチアの仲間

48:3.1 (545.2) 大邸宅界とモロンチア界のこれらの団体は、地方宇宙の母なる精霊の子である。それらは時代から時代に10万名の集団で創造され、現在のところ、ネバドンにおいては700億以上のこれらの特異な存在体がいる。

48:3.2 (545.3) モロンチアの仲間は、任務に備えてサルヴィントン近くの特別な惑星のメルキゼデク系により訓練される。彼らは、中央のメルキゼデクの学校を経験はしな

い。就役は、体制の最も低い大邸宅界から最も高いサルヴィントンの研究球体にまで及ぶが、モロンチアの仲間は、棲息界ではめったに遭遇しない。それらは、神の息子の総監督の下で、それにメルキゼデク系の直接指示の下で仕える。

48:3.3 (545.4) モロンチアの仲間は、地方宇宙に1万の本部—地方体制の第一大邸宅界それぞれに—を維持する。それらは、ほぼ完全に自治の系列であり、また一般的に、知的で忠誠な存在体の集団である。しかし、しばしば、ある種の不幸な天の激変に関連して身を誤ることが知られている。これらの何千もの役に立つ創造物が、サタニアでのルーキフェレーンス反逆の時代に失われた。つい最近ルーキフェレーンス反逆の損失の埋め合わせがなされたあなたの地方体制には、現在、これらの存在体の定員数がいる。

48:3.4 (545.5) 2つの異なるモロンチアの仲間の型がある。一方の型は攻撃的で、他方は後退型であるが、その他の点では、身分上は、相等しい。それらは、性をもつ創造物ではないが、互いに感動的に美しい愛情を表す。物質的

(人間の)感覚においてはとても友愛的ではないが、それらは、創造物存在の系列中の人類の親類に非常に近い。世界の中間被創造者は、あなたの親類で最も近いものであり、次にはモロンチア天使童子、その後にはモロンチアの仲間がつづく。

48:3.5 (545.6) これらの仲間は、感動的に慈愛深く、魅力的に社交的な存在体である。彼らには、はっきりとした人格があり、あなたは、大邸宅界彼らに会えば、彼らを一階級と認めるや、すぐにその個人的特徴を見分けるであろう。必滅者は皆、互いに似ている。同時に、あなた方一人一人には、異なる、認識可能な人格がある。

48:3.6 (545.7) 地方体制における彼らの活動に関係する次の分類から、これらのモロンチアの仲間の仕事の本質についてのある種の考えが、引き出せるかもしれない。

48:3.7 (545.8) 1. 巡礼管理者は、モロンチア前進者とのつながりにおいて明確な任務に割り当てられてはいない。これらの仲間は、モロンチア経歴全体に責任があり、したがって、モロンチア活動者と変遷活動者の他のすべての仕事を調整する。

48:3.8 (546.1) 2. 巡礼迎え役と自由な仲間。これらは、大邸宅界の新着の社交的な仲間である。あなたが第一大邸宅界において最初の移動時の睡眠から目覚めるとき、肉体の死からモロンチア生活へと復活を経験するとき、それらの中の1名が、確かに、あなたを歓迎するためにいるであろう。そして、目覚めに際しこのようにあなたが正式に歓迎される時から第一段階の精霊として地方宇宙を去るその当日まで、これらのモロンチアの仲間は、ずっとあなたと共にいる。

48:3.9 (546.1) 仲間は、永久に個人に割り当てられるのではない。大邸宅界か、より高い世界の中の1つにいる上昇する人間は、いくつかの連続する機会ごとに違う仲間がいるかもしれないし、長い期間1名もなしで再び行くかもしれない。すべては、必要条件と、加えて仲間の都合のつき具合にもよるであろう。

48:3.10 (546.1) ２．天の訪問者へのもたなし役。これらの親切な創造物は、変遷世界にたまたま滞在するかもしれない学生訪問者と他の天の存在体の超人集団のもてなしに専念する。あなたには、経験上到達したいかなる領域内を

訪問する十分な機会がおこるであろう。学生訪問者は、全棲息惑星に、孤立している惑星にさえも、いることが許されている。

48:3.11 (546.1) 調整者と連携監督。これらの仲間は、モロンチア交流の簡易化と混乱防止に打ち込む。これらのもの達は、社会的行為とモロンチア進歩についての教官であり、上昇する人間の中で団体と他の集団活動を後援する。これらの仲間は、そこに生徒を集めたり、時おり計画高揚のために天の熟練工と逆戻り監督を要請する大規模な領域を維持している。進歩するにつれ、あなたはこれらの仲間との親密な接触をするようになり、きわめて両集団を好むようになるであろう。あなたが攻撃的な仲間の型と、または後退型の仲間の型と結びつくかどうかは偶然の成り行きである。

48:3.12 (546.1) 5. 通訳者と翻訳者。大邸宅界の経歴の初期において、あなたは通訳者と翻訳者に頻繁に頼ることになるであろう。両者は、地方宇宙の全言語を理解し話す。領域の言語学者である。

48:3.13 (546.1) あなたは、無意識には新言語を習得しないであろう。ここで学ぶのとほぼ同様に向こうでも言語を学ぶであろうし、これらの輝かしい存在体が、あなたの言語の教師になるであろう。大邸宅界での最初の学習はサタニアの言語で、つぎはネバドンの言語であろう。そして、あなたがこれらの新言語を習得している間、モロンチアの仲間は、あなたの有能な通訳と我慢強い翻訳者になるであろう。あなたが、これらの世界のいずれかで訪問者に遭遇するときはいつでも、モロンチアの仲間の誰か1名が、通訳を勤めることができるであろう。

48:3.14 (546.1) 6. 小旅行と逆戻り監督。これらの仲間は、本部球体と変遷文化の周囲の世界へのより長い旅をするあなたに同伴するであろう。彼らは、訓練と文化の体制世界に関しそのようなすべての個人と団体旅行を計画し、実行し、監督する。

48:3.15 (546.1) 7. 領域と構築物管理者。あなたが大邸宅界の経歴において進むにつれ、物質とモロンチア構造でさえも完全性と壮大さを増す。あなたには、個人としてまた集団として、異なる大邸宅界における滞在本部として割り

当てられた住まいの一定の変更が許可されている。これらの球体の活動の多くが、さまざまに設計された円、正方形、および三角形区域の完全には囲われていない場所で行われる。大邸宅界構造の大部分は、立派な工事と絶美の装飾の囲いであり、屋根がない。建築界において一般的な気候や他の物理的状況が、屋根を完全に不要にしている。

48:3.16 (547.1) 上昇生活の変遷段階のこれらの管理者は、モロンチア業務の管理において最高である。これらの管理者は、この仕事のために創造され、また崇高なるものの現実化まで、ずっとモロンチアの仲間のままでいる。決して他の義務をこなさない。

48:3.17 (547.2) 体制と宇宙が光と生命に定着するにつれ、大邸宅界は、だんだんとモロンチア訓練の変遷球体として機能することをやめる。終局者は、ますます新しい訓練体制を設け、それは、現在の壮大な宇宙の段階から未来の外側の宇宙段階へと宇宙意識を移すために設計されているようである。モロンチアの仲間は、ますます終局者と共同し、また、在のところ、ユランチアには明らかにさ

れていない他の多くの領域で機能することが目標とされている。

48:3.18 (547.3) あなたには、滞在が長いか短いかに関係なく、これらの存在体がおそらく大邸宅界のあなたの楽しみに非常に貢献するということが予測できる。あなたは、引き続きサルヴィントンまでずっとモロンチアの仲間を楽しむであろう。それらは、技術的には、あなたの生存経験のいかなる部分にも絶対必要であるというわけではない。あなたは、それらなしでサルヴィントンに達することができるが、大いに物足りなく感じるであろう。モロンチアの仲間は、地方宇宙におけるあなたの上昇経歴の人格の楽しみである。

4. 逆戻り監督

48:4.1 (547.4) 嬉々とした歓楽と微笑に相当する物は、音楽と同じほどに普遍的である。歓楽と笑いに相当するモロンチアと精霊的な物がある。上昇生活は、仕事と遊びの間で大体等しく分割される—任務からの解放。

48:4.2 (547.5) 天界のくつろぎと超人のユーモアは、人間の対応物とは全く異なるが、我々は皆、実際に両方の型に満

足している。くつろぎとユーモアは、おおむね理想的なユーモアがユランチアであなたに為し得るものを、我々のために、我々の状態において、実際に成し遂げる。モロンチアの仲間は、巧みな遊びの後援者であり、この上なく有能に逆戻り監督に後押しされている。

48:4.3 (547.6) モロンチアと精霊領域の崇高なユーモアのこれらの聖職活動者である変化と緩和のこれらの監督の考えを伝えようとするきわめて粗雑でいくらか不幸な方法ではあろうが、彼らがユランチアでより高いユーモアの型に連結されていたならば、あなたは、逆戻り監督の仕事をおそらく最もよく理解するであろうに。

48:4.4 (547.7) 精霊のユーモアについて議論することにおいて、まずそれが何でないかを話させてもらおう。精霊の冗談は、決して不幸な弱さと過ちの誇張を帯びているのではない。それは、神性の正義と栄光の冒とくでもない。我々のユーモアの鑑賞には一般的3段階がある。

48:4.5 (547.8) 1. 追憶の冗談。人の戦闘、もがき、時として恐ろしさ、しばしば愚かで子供っぽい不安の経験における過去の出来事についての思い出から生じる駄酒落。ユー

モアのこの局面は、我々にとり、快適に現在の重荷に風味を添え、またそうでなくても重荷を軽くするために記憶材料に向けての過去に頼る深く根ざし、かつ永続する能力からきている。

48:4.6 (548.1) 2. 現在のユーモア。あまりにもしばしば我々が真剣な関心を引き起こす多くの無意味さ、つまり、我々の、が、重大な個人的な不安の多くの非重要さを発見する際の喜び。我々は、未来の確実性のために現在の不安を最高に割り引きできるとき、ユーモアのこの面に最も感謝する。

48:4.7 (548.2) 3. 予言的喜び。人間にとりユーモアのこの面を心に描くことは恐らく難しいであろうが、我々は、「万事が益となるように働く」という保証から独特の満足を得る—人間はもちろん精霊とモロンチアのために。天のユーモアのこの面は、我々の上司の情愛深い取越し苦労と崇高なる監督の神性安定性への我々の信頼から芽生えている。

48:4.8 (548.3) だが、領域の逆戻り監督が、単独に様々の知的存在体の系列の高度のユーモア表現に関係するのではな

い。それらは、気晴らし、精霊的娯楽、モロンチアの催しの指導者としても従事する。そして、彼らにはこれに関連して天の熟練者のさかんな協力がある。

48:4.9 (548.4) 逆戻り監督自身は、創造された集団ではない。それらは、ハヴォーナ出身者から空間の使者部隊と聖職活動の時間の精霊を経て進化の世界からのモロンチア前進者にまで及ぶ存在体を擁する募集部隊である。全員が、奉仕活動者であり、思考変化と心の休養の達成において仲間を補助する仕事に専心し、活力の回復時にそのような態度が最も役立つ。

48:4.10 (548.5) 到達努力によって部分的に消耗するとき、また新しいエネルギー充足を待ち受ける間、もう一度他の日々と時代の行為を経験することには快い喜びがある。人種、または系列上の早期の経験についての追憶は、安らぎを与える。だからこそ、これらの芸術家が、逆戻り監督と呼ばれるのである—彼らは、発達前の状態を、または記憶を存在体の乏しい経験状態に戻すのを助ける。

48:4.11 (548.6) 生来の創造者、したがって自ずと若返るものと、それぞれの創造において常に、また永遠に徹底的に

事務的である力の中心者と物理の制御者のようなある種の非常に専門化している創造物の型であるもの達を除いては、すべての存在体が、この種の逆戻りを楽しむ。機能的義務の緊張からのこれらの周期的解放は、楽園の小島においてではなく宇宙の中の宇宙すべてにわたる世界の通常の生活部分である。中央の住まいに特有の存在体は、枯渇不可能であり、それゆえ再充足を受けることはない。また、楽園の永遠の完全性のそのような存在体の場合、進化の経験へのそのような逆戻りはあるはずがない。

48:4.12 (548.7) 我々のほとんどは、存在の下方段階を経て、あるいは我々の系列を経て上って来ており、初期の経験のある出来事を回想するということは、爽快であり、幾分なりとも愉快である。人の系列には古い、また心の記憶所有物として長居するその沈思には安らかなさまがある。未来は、闘争と前進を意味する。それは、仕事、努力、達成を表す。しかし、過去は、既に習得され達成されたものを味わう。過去についての沈思は、緩和とそのような気楽な見直しの結果として精霊の歓喜と歓楽に隣接する心のモロンチア状態の導きを可能にする。

48:4.13 (548.8) 人間のユーモアでさえ、自分の現在の発達状態のほんの少し下のもの達に影響する出来事について表現するとき、または、想定される下位のもの達と広く交際した経験の犠牲になる想定された上司を描くとき、最も心温まるものになる。ユランチアのあなたは、同時に下品で不親切であるものの多くをユーモアと混同させてきたが、全体的に見ると、比較的鋭いユーモアの感覚があると言える。あなたの人種の幾つかは、豊かなユーモア味を持っており、その結果、それぞれの人種の地球の経歴において大いに助けられている。明らかに、あなたは、アダーム遺産からのユーモアに関し非常に多くを、音楽、もしくは芸術のいずれかを手に入れたよりもはるかに多くを受け取った。

48:4.14 (549.1) 全サタニアは、遊びの期間、その住民が下級の存在段階の思い出をすっきり復活させるような場合、ユランチアからの逆戻り監督の部隊の快いユーモアに啓発される。いつも、我々は、最も難しい課題に従事しているときでさえ、天のユーモアの感覚というものを携えている。それは、人の自尊の概念の開発過剰を避けることを助ける。しかし、我々は、それぞれの系列の重大な課

題からの休暇にある時以外は、「楽しみなさい」と、あなたが言うかもしれないとき、自由にそれに手綱を与えない。

48:4.15 (549.2) 自尊心を誇張したくなるとき、我々の製作者の偉大さと壮大の無限について立ち止まって熟考するならば、我々の自尊は、極度におかしくなり、滑稽にさえなる。ユーモアの働きの1つは、我々が皆、自分自身をそれほど真剣に受け止めることのないように助けることである。ユーモアは、自我高揚に対する神性解毒剤である。

48:4.16 (549.3) ユーモアの緩和と転換の必要性は、上向きの闘いにおける持続的圧力をまぬかれない上昇の存在体の系列において最大である。生命の2極端には、こっけいな気晴らしの必要は、ほとんどない。原始人にはそのために容量がなく、楽園の完全性の存在体には、その必要もない。ハヴォーナの部隊は、ありのままに楽しく陽気な最高に幸福な人格の集まりである。楽園では、崇拝の特質は、逆戻りの活動への必要性を未然に防ぐ。しかし、自分達の経歴を楽園の完全性の目標のはるか下で始める

もの達の間には、逆戻り監督の活動のための大なる場所がある。

48:4.17 (549.4) 人類が高度であればあるほど、緊張とユーモアの能力もそれへの必要性も大きい。精霊世界においては、正反対の事柄も本当である。我々が、より高く昇れば昇るほど、逆戻り経験の気分転換の必要性は、より少ない。しかし、楽園から熾天使部隊への精霊生活段階の下方へと向かうにつれ、歓楽の任務と陽気さの活動に対する必要性が増加する。前の経験の知的段階への周期的な逆戻りの休養を最も必要とするそれらの存在体は、同様の型の人格すべてとともに人類、モロンチア、天使、および物質の息子のより高い型である。

48:4.18 (549.5) ユーモアは、発達上の進歩と崇高な達成に向けての激しい闘争に関わる持続し、かつ重大な自己熟考の単調さによる過度の緊張増大を防ぐために自動安全弁として機能すべきである。また、ユーモアは、事実、または真実の、つまり厳しい断固たる事実と柔軟な不滅の真実や予期せぬ衝撃を少なくする機能を発揮する。次回遭遇するものに決して確信のない人間の人格は、事実であ

ろうと、真実であろうと予期せぬ状況の本質を、ユーモアを通して迅速に、把握する—要点を見て、洞察力を得る。

48:4.19 (549.6) ユランチアのユーモアは、極めて粗雑で、この上なく非芸術的である一方、健康保険として、また感情的重圧の解放者として双方の貴重な目的に役立ち、その結果、神経の有害な緊張と真面目過ぎる自己凝視を防ぐ。ユーモアと遊び—気晴らし—は、決して激しい進歩的活動の反応ではない。いつも、それらは後方一瞥の反映、すなわち、過去の回想である。ユランチアにおいてさえ、また現在、あなたは、短期間に、より新しくより高い知的な努力の発揮を中断させ、より簡単なあなたの先祖の活動に戻ることができるとき、いつもそれがあなたを若返らせているのがわかる。

48:4.20 (550.1) ユランチアの遊びの生活の原則は、哲学的に健全であり、ハヴォーナの回路を経て楽園の永遠の岸へとあなたの上昇人生全体にわたり適用し続ける。上昇の存在体としてのあなたは、かつての、そして下方の全生存の個人的な思い出を所有しており、そのような過去の自

己の思い出をなくしては、現在のユーモアのための、人間の笑い、またはモロンチア歓楽のいずれかのための基礎はないであろう。現在の気晴らしと楽しみの基礎を提供するのは、この過去の経験を思い出すことである。あなたは、こうして地球のユーモアに相当する天の同等物を長いモロンチアの経歴に、次には、次第に度をまし精霊的な経歴の全行程において楽しむであろう。上昇する人間の人格の永遠部分になる神のその部分(調整者)は、時間と空間の上昇する創造物の楽しい表現への神性の響きを、精霊的な笑いをさえ、付加する。

5. 大邸宅界の教師

48:5.1 (550.2) 大邸宅界の教師とは、後に残された、だが賛美された天使童子とサノビムの一団である。時間の巡礼者は、空間の試練の世界からモロンチア訓練の大邸宅界と関連世界へと進むとき、運命の保護者である個人の熾天使、あるいは集団の熾天使に伴われる。人間存在の世界のおいては天使童子とサノビムが、見事に熾天使を補助する。しかし、人間の後見人が肉体の束縛から免れ上昇経歴を始めるとき、つまり後物質の、あるいはモロンチアの生活が始まるとき、同伴熾天使には、自分の元副官

達、つまり天使童子とサノビムのさらなる奉仕の必要はない。

48:5.2 (550.3) 聖職活動の熾天使の後に残されたこれらの補佐は、しばしば宇宙本部に召喚され、そこで宇宙の母なる精霊の親近の抱擁をうけ、次に大邸宅界の教師として体制の訓練球体に出発する。これらの教師は、しばしば物質界を訪れ、最も低い大邸宅界から宇宙本部とつながりのある最高の教育球体へと機能し続ける。これらの教師は、自らの申請に基づき奉仕している熾天使とともに以前の関連の仕事に戻れるかもしれない。

48:5.3 (550.4) サタニアには何十億ものこれらの教師がおり、熾天使が調整者融合の人間とともに内部へと進むとき、その数は、１名の天使童子と１名のサノビム双方が後に残されることから、事例の大半が、絶えず増加する。

48:5.4 (550.5) 大邸宅界の教師は、大部分の他の教官のようにメルキゼデク系により任命される。大邸宅界の教師は、通常モロンチアの仲間により監督されるが、個人として教師としての彼らが教官として働いているかもしれない学校、あるいは球体の長の代理に監督される。

48:5.5 (550.6) これらの上級の天使童子は、熾天使に伴ったときのように、通常、対で働く。彼らは、本質的にモロンチアの存在体の型に非常に近く、上昇する人間の本来思いやりのある教師であり、最も効果的に大邸宅界とモロンチア教育制度に関する取り組みを実施する。

48:5.6 (551.1) モロンチア生活の学校におけるこれらの教師は、個人、集団、階級、および大集団教育に従事している。大邸宅界においては、そのような学校は、それぞれが100部門からなる一般的な3集団：思考の学校、感覚の学校、行為の学校で組織されている。あなたが星座に達すると、倫理の学校、行政の学校、社会適応の学校が加えられる。宇宙本部世界においては、哲学の学校、神性の学校、純粋な精霊の学校に入るであろう。

48:5.7 (551.2) あなたは地球で学習はしたかもしれないが、修得し得なかったそれらのことは、これらの忠実で我慢強い教師の指導のもとに取得されなければならない。楽園への楽な方法も、近道も、または安易な道もない。あなたは、個々の針路の相違の如何にかかわらず、別の球体に進む前に1球体の授業を習得しなければならない。こ

れは、少なくともあなたが出身の世界を一度去った後にあてはまる。

48:5.8 (551.3) モロンチア経歴の目的の一つは、遅延、曖昧さ、不誠実、問題回避、不公平、および容易さ追求のような動物の痕跡特徴をもつ人間生存者に永久的根絶をもたらすことである。大邸宅の生活は、延期は決して回避ではないということを早めにモロンチアの若い生徒に教える。もはや時間は、肉体の人生の後、難局から身をかわしたり、または不愉快な義務を回避する方法としては利用可能ではない。

48:5.9 (551.4) 大邸宅界の教師は、滞在中の最下級の球体における奉仕を始め、経験をし、体制と星座の教育球体を経てサルヴィントンの訓練世界に進む。それらは、宇宙の母なる精霊による抱擁の前後いずれのいかなる特別な規律にも左右されない。彼らは、大邸宅界滞在の生徒の出身世界において熾天使の仲間として務める間、既に自身の仕事のための訓練を受けていたのである。大邸宅界の教師には、棲息界において前進する人間との実際の経験があった。彼らは、実用的で思いやりのある教師であ

り、賢明で理解ある教官であり、有能な案内役である。彼らは、上昇計画に完全に通じており、前進経歴の初期の局面において徹底的に経験を積んでいる。

48:5.10 (551.5) サルヴィントン回路の世界で長らく仕えたこれらの年輩教師の多くは、宇宙の母なる精霊に再度抱擁され、この２度目の抱擁からこれらの天使童子とサノビムは、熾天使の身分で登場して来る。

6. モロンチア世界の熾天使 - 変遷の聖職活動者

48:6.1 (551.6) 惑星の補佐から崇高熾天使までの天使の全系列は、モロンチア世界において活動するが、変遷の聖職活動者達は、より独占的にこれらの活動に配属される。これらの天使は、熾天使の侍者の第6系列にあり、その活動は、物質的で必滅の創造物の生身の束の間の生活からモロンチア存在の７大邸宅界の初期段階への通過を容易にすることに捧げられる。

48:6.2 (551.7) あなたは、魂の受胎にあたり、精霊調整者が、道徳的創造物の心の状態に住んでいるその瞬間に、上昇する人間のモロンチア生活が、棲息界で本当に開始されるということを理解すべきである。そして、人間の魂に

は、その瞬間からずっと超人間の機能のための、地方宇宙のモロンチア球体のより高い水準における認識のためにさえ、潜在能力がある。

48:6.3 (552.1) あなたは、しかしながら、大邸宅世界に達するまで変遷熾天使の活動を意識しないであろう。次の７部門での奉仕に配属されている変遷熾天使は、人間の生徒の前進のために大邸宅世界に達するまでたゆまず働く。

48:6.4 (552.2) 1. 熾天使唱道者。あなたは、大邸宅世界で意識化されるとすぐに、体制の記録においては発達する精霊として分類される。いかにも、まだ実際には精霊ではないが、あなたは、もはや必滅の、あるいは物質の存在体ではない。あなたは、前精霊の経歴に乗り出し、モロンチア生活に正式に認められたのである。

48:6.5 (552.3) 大邸宅界において熾天使唱道者は、あなたが賢明にエデンチア、サルヴィントン、ユヴァーサ、ハヴォーナへの任意の針路の中から選ぶよう助けるであろう。望ましい幾つかの針路がある場合、これらはあなたの前に置かれ、あなたは最も気に入るものを選択することが許されるであろう。これらの熾天使は、次にそれぞれの

上昇する魂に最も有利な針路に関しジェルーセムの4名と20名の助言者への推薦状を作成する。

48:6.6 (552.4) 将来の針路に関する無制限な選択が、あなたに与えられるのではない。しかし、あなたは、変遷活動者とその上司があなたの将来の精霊到達に最も適していると賢明に判断するその限界内で選ぶことができる。精霊世界は、あなたが選ぶかもしれない針路があなたに不利益ではなく、もしくはあなたの仲間に有害でもないならば、あなたの自由意志の選択を尊重する原則に基づいて治められている。

48:6.7 (552.5) 熾天使のこれらの唱道者は、永遠の前進の、つまり完全性到達勝利の福音の宣言に専心している。唱道者たちは、大邸宅界において善の保護と善の支配のすばらしい法を宣言する。善の行為が失われることは滅多にない。それは、長い間邪魔されるかもしれないが、決して完全に無効にはされないし、その動機の神性に比例し永遠に強力である。

48:6.8 (552.6) ユランチアにおいてさえ、「すべての恐怖を捨てる神の愛」を宣言するために「悔悟に導く神の善」の説教

に忠実である真実と正義の人間の教師に助言をする。まさにそうで、あなたの世界でこれらの真実も宣言されてきた。

48:6.9 (552.7) 神々は、永遠の生命の美しい道と栄光の清新さの中で並んで私を導く。

48:6.10 (552.8) 私は、この神性の同席で、食物を欲したり水を渇望しないであろう。

48:6.11 (552.9) 私は、不安の谷に下り、あるいはまた疑念の世界に昇るとも

48:6.12 (552.10) 私は、孤独の中を歩み、あるいはまた私の種類の仲間といるとも

48:6.13 (552.11) 私は、光の聖歌隊で意気揚揚とし、はたまた球体の孤独な場所で躊躇おうとも、

48:6.14 (552.12) あなたの良い精霊が私の世話をし、あなたの栄光の天使が私を慰めるでしょう。

48:6.15 (552.13) 私が、暗黒と死自体の深層の中に降りるとも、

48:6.16 (552.14) 私は、あなたを疑いも恐れもしません。

48:6.17 (552.15) 時満ち、あなたの御名の栄光においてそれを知っているので

48:6.18 (552.16) あなたは、天の狭間の胸壁の上にあなたと座らせようと私を持ち上げるでしょう。

48:6.19 (552.17) 神々は私の世話人である。私は道にはぐれない。

48:6.20 (553.1) これが夜間に羊飼いの少年にささやかれた物語である。少年は、それを一言半句たがえずに覚えることはできなかったが、記憶の及ぶ限り今日記録されているのとほとんど同じに伝えた。

48:6.21 (553.2) これらの熾天使は、個々の上昇者はもとより体制全体のための完全性到達に関する福音の唱道者について伝えるものでもある。今でも、サタニアの新体制においては、それらの教えと計画は、大邸宅界がもはや天の球体への足掛かりとしては人間の上昇者に役に立たない未来の時代に関する対策を包含する。

48:6.22 (553.3) 2. 人種の通訳。必滅の存在体の全人種は、一様ではない。いかにも、任意の世界の様々な人種の物理

的、精神的、精霊的な性質と傾向を貫く惑星の原型がある。しかし、また、異なる人種の型があり、非常に明確な社会的傾向が、これらの異なる基本的な人間の型の子孫の特性を示す。時間の世界においては、熾天使の人種の通訳は、人種の様々な観点を調和させる人種委員の努力を助成し、これらの同じ違いがいくらか固執する傾向のある大邸宅界で機能を続ける。ユランチアなどの混乱した惑星においては、これらの優秀な存在体には機能する正しい機会はほとんどなかったのだが、彼らは、最初の天の熟練した社会学者であり、賢明な民族助言者である。

48:6.23 (553.4) あなたは「天」と「天の天」についての記述を考慮すべきである。あなたの予言者の大半が想像した天は、地方体制の大邸宅界の1番目であった。「第三の天にまで引き上げられた」と話したとき、使徒は、自分の調整者が睡眠中に引き離され、この珍しい状態で７大邸宅界の3番目へ投射されたその経験に言及した。あなたの賢人のうちの数人は、より大きい天、「天の天」の幻影を見ており、７重の大邸宅界の経験は、「天の天」のほんの1番目であった。2番目はジェルーセムであり、3番目

はエデンチアとその衛星、4番目はサルヴィントンと周辺の教育球体、5番目はユヴァーサ、6番目はハヴォーナ、7番目は楽園であった。

48:6.24 (553.5) 3. 心の立案者。これらの熾天使は、モロンチア存在体の功を奏する組分けと、大邸宅界におけるそれらの共同作業を組織化に専心する。彼らは、第一天国の心理学者である。熾天使活動のこの特定部門の大多数が、時間の子供への守護天使としての以前の経験を持つが、その被後見者達は、何らかの理由で大邸宅界での人格化に失敗したか、あるいは精霊融合手段により生き残った。

48:6.25 (553.6) 大邸宅界を通過中、調整者の魂の性質、経験、および状態を詳しく調べることと、課題と前進のためにそれぞれの組み分けを円滑にすることは、心の立案者の職務である。しかし、これらの心の立案者は、大邸宅界の学生の無知、あるいは他の欠点を画策したり、操ったり、別な方法で悪用したりはしない。それらは、完全に公正で著しく正当である。彼らは、あなたの新生のモロンチアの意志を尊重する。あなたを独立した意志の存在

体と見なし、あなたの迅速な発達と前進に働きかけようとする。ここにあなたは、真の友と理解ある助言者、あなたが「他者があなたを見るようにして、自分自身を見ること」そして、「天使があなたを知っているようにして自分自身を知ること」を本当に手伝うことのできる天使と面と向かい合う。

48:6.26 (553.7) これらの熾天使は、永遠に続く真実を、ユランチアにおいてさえ教える。あなた自身の心があなたによく仕えないならば、あなたは、常にあなたによく仕えるナザレのイエスの心とそれを交換することができる。

48:6.27 (554.1) 4. モロンチアの相談役。これらの聖職活動者は、体制本部のより高度の学校へ移動中の魂である人間の起源の世界からの生残する人間に教え、導き、助言するために割り当てられるので、その名を受ける。それらは、拡散的生活水準の経験上の統一に関する洞察を探究する者達の、価値の意味と統一の一体化を試みる者達の、教師である。これは、人間生活における哲学、モロンチア球体のモタの機能である。

48:6.28 (554.2) モタは、優れた哲学以上である。哲学にとってのそれは、一つの目にとっての二つの目である。それは、意味と価値に立体的効果を与える。物質の人間は、宇宙を、まるで一眼だけで見るように—平坦に—見る。大邸宅界の学生は、物理的生活の認識にモロンチア生活の認識を重ねることにより、宇宙の見解—深さ—に到達する。大邸宅界の学生は、疲れを知らない主に熾天使の相談役の活動を通してこれらの物質的観点とモロンチア的観点を真の焦点へともたらすことができ、熾天使の相談役は、とても我慢強く大邸宅界の学生やモロンチア前進者に教える。熾天使の最高系列の教育助言者の多くが、時間の人間の新たに解放された魂の助言者として各自の経歴を始めた。

48:6.29 (554.3) 5. 技術者。これらは、新しい上昇者がモロンチア球体の新しく、比較的不慣れな環境に順応できるようになるのを助ける熾天使である。変遷世界の生活は、物理的かつモロンチア段階双方のエネルギーと物質との、またある程度精霊的な現実との真の接触を要する。上昇者は、あらゆる新モロンチア段階に順応しなければならないし、このすべてにおいて、熾天使の技術者により大

いに助けられる。これらの熾天使は、モロンチアの力の監督者と物理の主たる制御者との連絡係として行動し、変遷球体において利用されるそれらのエネルギーの本質に関係がある上昇する巡礼者の教官として広範囲にわたり機能する。彼らは、非常時の空間通過者として仕え、他の通常の、それに特別な数多くの義務を遂行する。

48:6.30 (554.4) 6.記録者-教師。これらの熾天使は、精霊的なものと物理的ものの境界の取り引きに関わる記録係、人と天使の関係、宇宙の下方領域のモロンチア取り引きの記録係である。彼らは、また、事実記録の効率的、効果的な方法に関し教官として役目を果たす。関連資料の知的な組み立てと統一には芸術性があり、この芸術性は、天の熟練者との協働で高められ、上昇する人間さえこのようにして記録する熾天使に関係づけられるようになる。

48:6.31 (554.5) すべての熾天使系列の記録係は、一定の時間をモロンチア前進者の教育と訓練にあてる。時間の事実に関わるこれらの天使の管理者は、事実探求者のすべてにとっての理想的教官である。ジェルーセムを去る前に、あなたはサタニアの歴史とその619の棲息界にかなり馴

染み深くなるであろうし、この話の多くが、熾天使の記録係によって知らされるであろう。

48:6.32 (554.6) これらの天使全員が、時間の事実と永遠の真実の最下級の管理者から最上級の管理者に及ぶ一連の記録係である。いつの日か、彼らは、あなたが事実はもとより真理を求めること、あなたの心はもとよりあなたの魂を拡充することを教えるであろう。今でさえ、あなたは、あなたの心の庭に水をまき、乾いた知識の砂浜を捜し求めることも学ぶべきである。教訓が身につくと、型は無価値である。殻なしではひよこは得られないし、どんな殻もひよこが孵った後には何の価値もない。しかし、時々、誤りは重大であり過ぎ、顕示によるその修正は、その経験的な打倒に不可欠のゆっくり出現する真実にとっては致命的である。子供にそれぞれの理想があるとき、それを除去してはいけない。それを成長させなさい。また、人間として考えることを学ぶ間、あなたは、子供として祈ることを学ぶべきである。

48:6.33 (555.1) 法は、その行為に関する規則ではなく生活そのものである。悪は、生活に関する行為の規則に対する違

反ではなく、法の無視である。生活は、法である。虚偽は、話法の問題ではなく、真実の歪曲としての何か計画的なものである。古い事実からの新しい絵の創造、子の人生における親の人生の再声明—これらは真実の芸術的勝利である。歪んだ目的のために予め考えられたわずかの変化、極小のねじれ、または主義の歪曲—これらは虚偽を構成する。しかし、事実化された真実への執着、化石化された真実、いわゆる変わらない真実の鉄帯は、人を盲目的に冷たい事実の閉じられた円に拘束する。人は、事実に従って論理的には正しく、真実においては永遠に誤っている場合がある。

48:6.34 (555.2) 7. 聖職活動する予備軍。変遷熾天使の全系列の中の大軍団は第一大邸宅界にとどめられる。これらの変遷活動者は、目標の守護者の横で、最も近いものを熾天使のすべての系列の人間に引きつけ、またあなたの余暇の瞬間の多くは、それらとともに費やされるであろう。天使は、奉仕に喜びを見い出し、割り当てのない場合は、志願者としてしばしば奉仕する。上昇する多くの人間の魂には、初めて、熾天使予備軍志願の奉仕者との個人的友情を通して奉仕への意志の神の火が起こされた。

48:6.35 (555.3) あなたは、変遷活動者から重圧を安定性と確実性を発展させることを学ぶであろう。忠実で熱心で、その上に愉快になるように、苦情なしに挑戦を受け入れ、恐怖なしに困難と不明確ことに直面するように。彼らは尋ねる；もし失敗するとして、あなたは、断固として新たに試みて立ち上がるであろうか。成功するとして、あなたは、物質的惰性の足枷を断ち切るための、つまり精霊存在の自由を獲得するための長い闘いにおけるあらゆる努力を通じて、釣り合いの良い落ち着き—安定し精霊的にされた態度—を維持するであろうかと。

48:6.36 (555.4) 人間同様これらの天使は、多くの期待はずれをもたらす父であったり、時々、あなたの最もあっけない期待はずれが、あなたの最大の天恵になったと指摘するであろう。一粒の種子の植え付けは、時として、新しい人生と新しい機会の実を結ぶことができる前にその死を、あなたの最も好きな望みの喪失を必然の結果として伴う。そして、あなたは、まず他の人格に関して少な目の個人的計画を立て、次に自分の義務を忠実に実行したとき自身の巡り合わせを受け入れることにより、悲しみ

と失望にそれほど苦しまないことをこれらの天使から学ぶであろう。

48:6.37 (555.5) あなたは、自分を真剣に受け止め過ぎることであなたの負担を増やし、成功の見込みを減少させるということを学ぶであろう。あなたの身分でいる球体の仕事に優先するものは何もない—現世、もしくは来世。非常に重要なのは、次のより高度の球体のための準備作業であるが、何事も、あなたが実際に住んでいる世界の仕事の重要さには匹敵しない。仕事は重要ではあるが、自己はそうではない。あなたが重要であると感じるとき、自我威厳にエネルギーを消耗し、仕事をするためのエネルギーを失う。自己の重要性は、仕事の重要性ではなく、未熟な創造物を消耗させる。消耗させるのは自己要素であって、達成する努力ではない。尊大ぶらなければ、あなたは重要な仕事が果たせる。自分を抜きにするならば、あなたはいとも簡単に幾つかのことができる。多様性は安らかである。単調さは擦り切れ、消耗するものである。日々は一様である—単に生命、または代替は死。

7. モロンチアモタ

48:7.1 (556.1) モロンチアモタの下級段階は、人間哲学のより高い段階と直接に接合する。第一大邸宅界においては、あまり進んでいない学生に並列方法で教えるのが、習慣である。すなわち、一つの欄にはモタの意味を提示するより簡単な概念が示され、反対の引用欄には人間哲学を提示する類似文が作成されている。

48:7.2 (556.2) つい先頃、サタニアの第一大邸宅界での課題実行中に、私にはこの指導方法を見学する機会があった。私には、モタの授業内容提示の請合いは許されてはいないが、これらの新しい大邸宅界一時逗留者を補助するために考案された説明に有用の資料としてこのモロンチア教官が、モタの重要性と意味を理解する初期の努力において利用していた人間哲学の28の声明の記録が許されている。人間哲学のこれらの例証は次の通りであった。

48:7.3 (556.3) 1. 専門技能の表示は、精霊的才能の所有を意味しない。利口さは、真の性格の代替ではない。

48:7.4 (556.4) 2. わずかな者達しか、真に信じる信仰に従って行動していない。不合理な恐怖は、進化する人間の魂につけ込んだ知能的不正手段の達人である。

48:7.5 (556.5) 3. 生来の才能は超えられない。0.5リットルの缶に断じて1リットルの量を入れることはできない。機械的に精霊概念を物質的な記憶の型に強いることはできない。

48:7.6 (556.6) 4. わずかな人間しか、常にあえて自然と恩恵の結合された活動によって確立された人格の功績の要約のようには描かない。貧窮の魂の大半は、実に金持ちであるが、彼らは、それを信じようとはしない。

48:7.7 (556.7) 5. 困難は、平凡に挑戦し恐怖を打ち負かすかもしれないが、いと高きものの本物の子供を刺激するばかりである。

48:7.8 (556.8) 6. 悪習を用いず特権を楽しむこと、認可なくして自由を持つこと、力を持ち、しかも自己強化のためにその利用をしっかりと拒否すること—これらは高度の文明の印である。

48:7.9 (556.9) 7. 出口のない事故や予期しない事故は、宇宙においては起こらない。天の存在体は、自己の真実の光に従うことを拒否する下級の存在体を補佐もしない。

48:7.10 (556.10) 8. 努力は、いつも喜びを生むというわけではないが、どんな幸福も知的努力なくしてはない。

48:7.11 (556.11) 9. 行為は、強さをもたらす。節度は、魅力になる。

48:7.12 (556.12) 10. 正義は、真実の調和音をはじき、旋律は、宇宙全体で終局者の認識にさえ振動する。

48:7.13 (556.13) 11. 弱者は、決断を欲しいままにし、強者は行動する。人生は1日の仕事であるに過ぎない—上手にそれをしなさい。行為は、我々のものである。結果は神のもの。

48:7.14 (556.14) 12. 宇宙の最悪の苦悩は一度も苦しめられたことがない。人間は、ただ苦難を経験することにより分別を学ぶのである。

48:7.15 (556.15) 13. 星は、照らしだされ喜びにうきたつ山頂からではなく、経験的深層の孤独な隔離から認識されるのが最も良い。

48:7.16 (556.16) 14. あなたの仲間の真実への欲求を刺激しなさい。求められるときにだけ助言しなさい。

48:7.17 (557.1) 15. 気取りは、賢明に見える無知のばかげた努力、豊かに見える実を結ばない試みである。

48:7.18 (557.2) 16. あなたは、それをしみじみと経験するまで精霊の真実に気づかないし、多くの真実は、逆境を除いては本当には感じられない。

48:7.19 (557.3) 17. 野心は、それが完全に社会化されるまでは危険である。あなたが自分の行為でそれにふさわしくなるまでは、本当にはいかなる美徳も取得してはいない。

48:7.20 (557.4) 18. 焦りは、精霊の毒である。怒りは、スズメバチの巣の中に投げつけられる石に似ている。

48:7.21 (557.5) 19. 不安は、捨てられなければならない。最も堪え難い失望は、決して来ないものである。

48:7.22 (557.6) 20. 詩人だけが通常生活の平凡な散文の中に詩を見分けることができる。

48:7.23 (557.7) 21. いかなる芸術の使命の高度の維持は、、その幻想によるさらに高い宇宙の現実を予示することであり、時間の感情を永遠という考えに具体化させることである。

48:7.24 (557.8) 22. 進化する精霊は、それがすることによってではなく、それがしようと努力することによって神のようにされる。

48:7.25 (557.9) 23. 死は、知的所有物に、または精霊贈与に何も追加はしなかったが、生存の意識を経験的状況に追加した。

48:7.26 (557.10) 24. 永遠の目標は、日々の生活の成就により刻々と決定される。今日の行為は、明日の運命である。

48:7.27 (557.11) 25. 偉大さは、賢明かつ神性のそのような強さの行使にあるような力を持つことにあるのではない。

48:7.28 (557.12) 26. 知識は、共有することでのみ身につく。それは、知恵により保護され、愛により社会化される。

48:7.29 (557.13) 27. 進歩は、人格の開発を求める。凡庸は、標準化における永続化を求める。

48:7.30 (557.14) 28. いかなる提案のための議論じみた弁護も、その含まれる真実に反比例する。

48:7.31 (557.15) 第一大邸宅界の初心者の仕事は、そのようなものであるが、一方後の世界のより上級の生徒は、宇宙洞察とモロンチアモタのより高い水準を習得している。

8. モロンチア前進者

48:8.1 (557.16) 上昇する人間は、大邸宅世界からの卒業時から超宇宙経歴における精霊身分への到達までモロンチア前進者と命名される。この素晴らしい境界生活を経るあなたの道は忘れ難い経験、魅力ある記憶となるであろう。それは、上昇者がそれにより時間の目標を実現する精霊生活への進化の入り口と創造物の完全性の最後の到達—楽園の神の発見—である。

48:8.2 (557.17) 上昇する創造物のためのこの入念に作られた宇宙職業訓練所である、人間前進にむけてのこのすべてのモロンチアとその後の精霊計画における明確で神性の目的がある。それは、壮大な宇宙の運用と行政についての細部を習得するための段階的な機会を時間の創造物に提供する創造者の考案であり、また、長い訓練の針路は、生残する人間を上に登らせ、またあらゆる上昇段階における徐々に、しかも実際の参加により最高に進展する。

48:8.3 (558.1) 人間生存の計画には、実用的かつ有用な目的がある。あなたは、無限の至福と永遠の容易さをただ楽しむために生き残ることができるのではなく、このすべての神の作業と忍耐を必要とする訓練の受領者である。並み外れの奉仕の目標が、現在の宇宙時代の地平線の彼方に隠されている。もし神々が、長い永遠の喜びの一小旅行にあなたをただ単に連れていくために計画するとしたならば、たしかに神々は、宇宙全体を1つの広大かつ複雑な実用的職業訓練所にそれ程までに大きく変えたり、教師として教官として天の創造の相当部分を要求したり、次には、何世代にもわたりこの巨大な宇宙の経験的訓練の学校中をあなた方一人ずつを案内して過ごしたりはしないであろう。人間進行についての計画助長は、現在の組織化された宇宙の主要業務の一つのようであり、また、創造された有識者の無数の系列の中の大多数は、直接的、あるいは間接的にこの進歩的完全性の計画の何らかの段階を進めることに向けられている。

48:8.4 (558.2) 人間から神格抱擁への生活存在の上昇範囲を移動するにあたり、あなたは、現在の宇宙時代の限界内において完成された創造物存在のあらゆる可能な局面と舞

台の生活そのものを実際に送る。人間から楽園へと終局者は、いま存在し得るすべてを抱擁し、—やがて、知的で、完成している有限創造物存在に関する生活系列に可能な状態ですべてを取り囲む。もし楽園の終局者の将来の運命が、現在制作中の新しい宇宙での奉仕であるならば、人間の終局者が、上昇訓練の一部としてのそれらの生活が動物から天使へ、天使から精霊へ、精霊から神への長年の進歩の段階の一部としてある世界で送ったものとは完全に異なるであろうこの新しい、将来の創造においては経験的存在体に属する創造系列はないであろうということが保証されている。

48:8.5 (558.3) [ネバドンの大天使による提示]

論文 49
生息界

49:0.1 (559.1) 人間生息世界のすべては、起源と本質において進化する。これらの球体は、時間と空間の人類の育つ場所、すなわち進化の揺りかごである。上昇生活の各段階は、存在体のすぐ先にある段階にむけての真の職業訓練所であり、これは、人の進歩的楽園上昇の全段階についても言える。進化の惑星における人間の初期の経験につ

いて言えるように、上昇する人間が、超宇宙の体制と第一段階の精霊存在体の到達への移動間際までは通うことのないメルキゼデク系の宇宙本部の最終の学校についても言える。

49:0.2 (559.2) 全生息界は、天の行政を目的として基本的に地方体制にまとめられ、これらの各地方体制は、およそ1,000個の進化世界に限られている。この制限は、日の老いたるものの法令によるものであり、またそれは、生存状態の人間が生活する実際の進化の惑星に属する。最終的に光と生命に定着した世界も、そしてまた生命進化の前-人間段階の惑星のいずれも、この集団とはみなされない。

49:0.3 (559.3) サタニア自身は、619個の生息界だけを有する未完成の体制である。そのような惑星は、自らの登録に従いひとつづきに生息界として、すなわち意志をもつ創造物の住まう世界として付番される。このようにして、ユランチアには、長い進化の生命現象が人間出現となったこの地方体制における606番目の世界を意味してサタニアの606番が与えられた。生命贈与段階に近づく36個の

無人惑星があり、そのうちのいくつかは、今、生命運搬者の受け入れ準備ができているのである。この後数百万年のうちの生命着床準備に向けて発展しているおよそ200個の球体がある。

49:0.4 (559.4) 全惑星が、人間の生命の収容に適しているわけではない。高率での軸回転をする小惑星は、生命生息には全く不向きである。サタニアの物理的体制のいくつかの中央の太陽の周囲を回る惑星は、甚だしい重力を引き起こすその大きな質量、居住には大き過ぎる。これらの莫大な球体の多くには、衛星がどうかすると6個、もしくは、それ以上あり、またこれらの月は、しばしばユランチアの大きさに非常に近く、ゆえに居住にはほぼ理想的である。

49:0.5 (559.5) サタニア最古の生息世界は、つまり世界一は、巨大な暗い惑星を周回しているものの隣接する3個の太陽の特異な光にさらされている44衛星中の1つのアノヴァである。アノヴァは、進歩的文明の高度な段階にある。

1. 惑星の生命

49:1.1 (559.6) 時間と空間の宇宙は、緩やかな発達過程にある。生命の進行—地球の、または天の—は、任意でもなければ魔法でもない。宇宙の発展は、いつも理解できる(予測可能)というわけではないが、それは全くの偶然ではない。

49:1.2 (560.1) 物質生命の生物単位は,原形質細胞、つまり化学的、電気的、他の基本的ネルギーの共同のつながりである。化学式は、それぞれの体制において異なり、生細胞の生殖方法は、地方宇宙毎にわずかに異なるが、生命運搬者は、常に物質生命の根本的反応を起こす生ける触媒である。生命体のエネルギー回路の扇動者である。

49:1.3 (560.2) 地方体制のすべての世界は、紛れもない物理的親族関係を明らかにする。にもかかわらず、各惑星には、それ自身の生命の領域があり、植物および動物の贈与において全く同じ世界は二つとしてない。体制内の生命の型における惑星のこれらのばらつきは、生命運搬者の決定に起因する。しかし、これらの存在体は、気紛れでも移り気でもない。宇宙は、法と秩序に基づき維持される。ネバドンの法律は、サルヴィントンの神性の命令

であり、サタニアの進化する生命の系列は、ネバドンの進化の様式と調和している。

49:1.4 (560.3) 進化は、人間発達の法則であるが、その過程自体は、様々な世界で大いに異なる。生命は、ユランチアでのように、1つの中心において、時には3つの中心において始められる。大気の世界における生命は、通常、海洋起源を持つが、必ずしもそうではない。多くは、惑星の物理的状況が前提となる。生命運搬者には、それぞれの生命開始の働きにおいてかなりの許容範囲がある。

49:1.5 (560.4) 植物の型は、惑星の生命の進化において常に動物に先行し、動物の原型が分化する前にかなり完全に進化する。動物のすべての型は、生物の前植物界の基本的な型から進化する。それらは、別々には組織化されない。

49:1.6 (560.5) 生命進化の初期は、あなたの現代の視点と一致してはいない。必滅の人間は、進化上の予期せぬ出来事ではない。空間の球体上の惑星の生命の展開を決定する適確な体制、すなわち宇宙の法がある。普遍的な法がある。時間と数多くの種の生産は、制御的影響力ではな

い。ネズミは、象よりもはるかに急速に繁殖する。しかしながら象は、ネズミより急速に進化する。

49:1.7 (560.6) 惑星の発展過程は、整然としており制御されている。下級の生命の分類からより高度の有機体への進化は、偶然ではない。発展的進歩は、時として有望な遺伝子の中に運ばれる生命原形質の有利なある性質の破壊により一時的に遅れる。人間の遺伝の一つの優れた性質の損失によって引き起こされる損害を埋め合わせるには、しばしば何世代も必要とする。生きている原形質のこれらの選択された、しかも優れた性質が、いったん現れるとき、油断することなく理知的に保護されるべきである。そして、生息界の大部分においては、生命のこれらの優れた可能性は、ユランチアにおいてよりもはるかに高く評価される。

2. 惑星の物理的な型

49:2.1 (560.7) 各体制には、動植物の標準的で基本的な型がある。しかし、生命運搬者は、しばしば多くの空間世界でそれらに立ち向かう異なる物理的状況に適合するようにこれらの基本的な型を変更する必要性に直面する。生命

運搬者は、一般化された体制の必滅の創造物の型を助長するが、際立つこれらの7区分の比較的重要でない数千の異形と同様に異なる物理的7つの型がある。

49:2.2 (561.1) 1.大気型

49:2.3 (561.2) 2. 基本型

49:2.4 (561.3) 重力型

49:2.5 (561.4) 温度型。

49:2.6 (561.5) 5. 電気型

49:2.7 (561.6) 6. 活性型

49:2.8 (561.7) 7. 無名型

49:2.9 (561.8) サタニア体制は、幾つかは極めて控え目にしか現れないとはいえ、これらのすべての型と多数の中間集団を有する。

49:2.10 (561.9) 1. 大気型。人間居住世界の同士の物理的な違いは、主に大気の特徴によって決定される。惑星上の生命分化に寄与する他の影響は、比較的少ないのである。

49:2.11 (561.10) ユランチアの現在の大気状態は、呼吸型の人間の後ろ盾にはほぼ理想的であるが、人間の型は超大気、薄大気惑星の両方で生活できるように変更し得るのである。また、そのような変更は、動物の生態にまで及び、それは様々な生息球体において大いに異なる。薄大気と超大気世界の双方には、動物の系列の非常に大きい変化、変更、修正がある。

49:2.12 (561.11) サタニアの大気型のうち、およそ2.5パーセントが亜呼吸者、およそ5パーセントが超呼吸者、91パーセント以上が中間呼吸者であり、全体では、サタニアの98.5パーセントを算定する。

49:2.13 (561.12) ユランチアの人種のような存在体は、中間呼吸者として分類される。あなたは、必滅の存在体の平均的、あるいは典型的な呼吸系列を代表する。もし知的生物が、近隣の金星のそれと同様の大気の惑星に存在するとしたならば、知的生物は、超呼吸者集団に属するであろし、またあなたの外側の隣人の火星のそれと同程度に薄い大気の惑星に生息するもの達は、亜呼吸者と命名されるであろう。

49:2.14 (561.13) もし人間が、あなたの月のように空気のない惑星に生息するとしたならば、人間は、非呼吸者の別の系列に属するであろう。この型は、惑星の環境への徹底的な、あるいは極端な調整を表し、別個に扱われる。非呼吸者は、サタニア世界の残りの1.5パーセントを占める。

49:2.15 (561.14) 2. 基本型。これらの分化は、水、空気、陸との人間のつながりに関係があり、人間が、これらの居住環境に関わるように、知的生命の異なる4種がある。ユランチアの人種は、陸系列のものである。

49:2.16 (561.15) あなたが、初期のいくつかの世界に主流である環境を心に描くことは全く不可能である。これらの異例の状況が、進化する動物にとって、居心地のよい陸と大気環境を非常に早くに提供するそれらの惑星にいるよりもさらに長い期間その海洋の育児生息地に留まることを必要とさせている。逆に、惑星がそれほど大きくない場合、超呼吸者のいくつかの世界においては、容易に大気の通路を切り抜けることができる人間の型に備えるのが往々にして得策である。これらの航空士は、時には水の

集団と陸の集団の間に入り、いくらかは陸に居住し、ついには陸上居住者へと進化していく。だが、いくつかの世界においては、それらは、陸型存在体となった後にさえ長期間飛び続ける。

49:2.17 (562.1) そのような並はずれた球体の黎明の人種が、一つの事例では、空中や樹上において、他の事例では、保護された熱帯性盆地の浅瀬の中央に、もちろん水底、側面、それにこれらの海洋庭園の岸において人間の原始種族の初期文明の形成を観測するということは、楽しくもあり驚きでもある。ユランチアにおいてさえ、原始人は初期の樹上の先祖がしたように大半は梢に住むことにより身を守り、原始文明を発展させた長い時代があった。そしてユランチアでは、あなたにはまだ小型の哺乳動物(蝙蝠科)の集団があり、海洋生息のあなたのアザラシと鯨は、やはり哺乳類の系列である。

49:2.18 (562.2) サタニアには、基本的な型のうち、7パーセントは水型、10パーセントは空中型、70パーセントは陸型、13パーセントは陸と空中の結合型である。しかし、初期の知的創造物のこれらの変化は、魚人でもなければ

鳥人でもない。それらは、人間の型と前人間の型であり、超魚でも賛美された鳥でもなく確かに人間である。

49:2.19 (562.3) 3. 重力型。創造意匠の変更により知的存在体は、ユランチアよりも小さい球体と大きい球体の双方で自由に機能できるように構成され、こうして、幾分、大きさや密度が理想的ではないそれらの惑星の重力に順応した。

49:2.20 (562.4) ネバドンの平均的存在体は、2メートルにほんのわずかに足りず、惑星の様々な必滅の型は、高さが異なる。いくつかのより大きい世界には、およそ0.8メートルの高さしかない存在体が住んでいる。人間の身長は、ここから平均的規模の惑星における平均身長を経て小生息球体上のおよそ3メートルまでの多岐にわたる。サタニアには、高さ1.2メートル未満は1人種しかいない。生息界サタニアの20パーセントには、大き目の惑星と小さ目の惑星に変更された重力型の人間が住んでいる。

49:2.21 (562.5) 4. 温度型。ユランチアの人種の生命範囲よりもはるかに高く、かつはるかに低い温度に耐えることがで

きる存在体を創造することは可能である。温熱調節構造を基準にして分類されるとき、5つの明確な存在体がある。この尺度では、ユランチアの人種は3番目である。サタニア世界の30パーセントは、変更された温度型の人種で満たされている。中間の温度集団で機能するユランチア体と比較すると、12パーセントは高温領域に、18パーセントは低温領域に属する。

49:2.22 (562.6) 5. 電気型。世界の電気、磁気、そして電子の動きは、大いに異なる。球体の特異なエネルギーに耐えるようにさまざまに形作られた人間生命の10種のひな型がある。また、これらの多様な10種類は、通常の日光の化学光線にわずかに異なる方法で反応する。しかし、これらのわずかな物理的変化は、決して知的な、あるいは精霊的な生命に影響しない。

49:2.23 (562.7) 人間の生命の電気型の組分けのうち、およそ23パーセントは第4の型に、ユランチアの生存体の型に属する。これらの型は、次の通りに振り分けられる。第1、1パーセント；第2、2パーセント；第3、5パーセント；第4、23パーセント；第5、27パーセント；第6、24

パーセント；第7、8パーセント；第8、5パーセント；第9、3パーセント；第10、2パーセント—整数にて。

49:2.24 (563.1) 6. 活性型。全世界が、エネルギー取り入れ方法において似ているというわけではない。全生息界が、大気の海洋をユランチアに存在しているような気体の呼吸交換に合わせるわけではない。あなたの現在の系列の存在体は、多くの惑星の初期や後の段階において生存できなかった。惑星の呼吸要因が非常に高いか、または非常に低い場合、しかし知的生命への他のすべての前提条件が適切である場合、生命運搬者は、しばしばそのような世界に人間存在体の変更された型を、直接光エネルギーと物理の主たる制御者の直接の力の変更により生命現象の交換をもたらす有能な存在体を設ける。

49:2.25 (563.2) 動物と食物の栄養には異なる6種類の型がある。亜呼吸者は1番目の栄養の型、海洋居住者は2番目、中間呼吸者はユランチアのような3番目の型を用いる。超呼吸者はエネルギー摂取の4番目の型を用い、一方非呼吸者は栄養とエネルギーの5番目の種類を利用する。活性の6番目の方法は中間被創造者に限定される。

49:2.26 (563.3) 7. 無名型。惑星の生命には多数のさらなる物理変化があるが、これらの違いのすべては、完全に解剖的変更、生理的分化、および電気化学の調整の問題である。そのような区別は知的、あるいは精霊的生命には関係がない。

3. 非呼吸者の世界

49:3.1 (563.4) 大多数の生息惑星には知的存在体の呼吸をする型が住んでいる。しかし、あるかなしかの空気の世界で生活できる必滅者の系列もまたある。この型は、オーヴォントンの生息界においては7パーセント未満である。この割合は、ネバドンにおいては3パーセント未満である。サタニア全体では、9つの世界があるにすぎない。

49:3.2 (563.5) サタニア生息界の非呼吸者の型はほんのわずかであり、これは、ノーラティアデクのつい最近組織化した区域にはまだ流星体が多いからである。そして保護的な摩擦大気のない世界は、これらの放浪者による絶え間ない衝撃を受けることがある。いくつかの彗星でさえ流星群から成るが、原則として、それらは、分裂した小物体である。

49:3.3 (563.6) 何百万もの隕石が、1秒あたり約320キロメートルの割合で日毎ユランチアの大気に入る。非呼吸世界では、進んだ人種が、流星を消費するか、または押しやる作用をする電動設備を備えることにより隕石の被害からの自分達の保護のために多くのことをしなければならない。非呼吸者が、これらの保護された区間を超えて冒険するとき、重大な危険がそれらに対峙する。また、これらの世界も、ユランチアの知られざる種類の惨禍の電気嵐を被りやすい。そのような猛烈なエネルギー変動期間、居住者は、保護的絶縁の特別構築物に避難しなければならない。

49:3.4 (563.7) 非呼吸者の世界の生活は、ユランチアのそれとは根本的に異なる。非呼吸者は、ユランチア人種のように飲食をしない。神経系統の反応、温熱調節構造、およびこれらの分化している民族の新陳代謝は、ユランチアの人間のそのような機能とは根本的に異なっている。生殖は別として、あらゆる生きる行為のほとんどが異なり、出産方法さえいくらか異なっている。

49:3.5 (564.1) 非呼吸世界上の動物の種類は、大気惑星に見られるそれらとは根本的に異なる。非呼吸の生命計画は、大気世界の存在方法とは異なる。精霊融合の候補であるそれらの民族は、生き残ることにおいてさえ異なる。にもかかわらず、これらの存在体は、生活を楽しみ、大気世界に住んでいる人間が経験する同じ相対的試練と喜びをもって領域の活動を前進する。非呼吸者は、心と性格に関して他の人間の型と異なることはない。

49:3.6 (564.2) あなたは、そのような存在体の人種が、ユランチアに極接近している球体に生息するので、人間のこの型の惑星上の行為に関心をもつがあるどころではないであろう。

4. 意志をもつ進化的創造物

49:4.1 (564.3) 異なる世界の必滅者間には、知的かつ物理的な同じ型に属する必滅者の間においてでさえ、かなりの違いがあるものの、意志に基づく品格をもつすべての人間は、直立動物、二足動物である。

49:4.2 (564.4) 基本的進化の6人種がある。主要3人種—赤、黄、青；二次的人種—橙色、緑色、藍色。ほとんどの生

息界にはこれらのすべての人種がいるが、3頭脳の惑星の多くは、3主要型だけである。また、いくつかの地方体制には、これらの3人種しかいない。

49:4.3 (564.5) 3頭脳必滅者の特殊感覚は、1頭脳型や2頭脳型のそれらをいささか超えて広げられはするものの、人間特有の肉体感覚の平均的授与は、12個である。3頭脳必滅者は、ユランチアの人種よりも相当に見聞きができる。

49:4.4 (564.6) 通常は子供は１人生まれ、多子出産は例外的であり、家族生活は、すべての型の惑星でかなり一様である。性の平等は、すべての高度な世界に普及している。男女は、心の授与と精霊的状態において等しい。我々は、1つの性が他方を圧制しようとする限り、惑星が野蛮さから抜け出てきたとは見なさない。創造物経験のこの特徴は、物質の息子と娘の到着後にいつも大幅に改良される。

49:4.5 (564.7) 季節と温度の変化は、日照があり太陽熱のある全惑星に起こる。農業は、全大気世界に一般的である。土を耕すことは、そのようなすべての惑星の前進する人種に共通する追求である。

49:4.6 (564.8) 人間は、あなたが現在ユランチアで経験しているような初期における微細な敵との、恐らくそれほど大規模ではないにしても、同様の一般的な闘いがある。生命の長さは、原始世界の25年からより高度で古い球体の500年近くまでと異なる惑星において様々である。

49:4.7 (564.9) 人間はすべて、社交的で、部族的で、人種的である。これらの集団隔離は、それぞれの起源と構成に固有である。そのような傾向は、前進する文明とゆるやかな精霊化によってのみ変更可能である。生息界の社会の、経済の、そして政府の問題は、惑星の年齢と神性の息子の連続的滞在によるその惑星への影響の度合いに応じて異なる。

49:4.8 (564.10) 心は、無限の精霊の贈与であり、さまざまの環境において全く同じ機能をする。人間の心は、地方体制の意志をもつ創造物の肉体の性質を特徴づける一定の構造的、かつ化学的相違にかかわらず類似している。個人的相違、あるいは物理的惑星の相違にかかわらず、人間のこれらの様々な全系列の精神生活は、非常に相似しており、死後の即座の経歴は、とてもよく似ている。

49:4.9 (565.1) だが、必滅の心は、不滅の精霊なくしては生き残れない。人の心は、必滅である。贈与された精霊のみが不滅である。生存は、調整者の聖職活動による精霊化に—不滅の魂の誕生と進化に—依存している。少なくとも、物質的な心の精霊的変化に作用する調整者の任務に対する敵意は、展開してはならなかった。

5. 人間に関する惑星列

49:5.1 (565.2) 人間の一連の惑星についての適切な描写は、それに関しあなたはあまり知らないし、非常に多くの変異があることから、いくらか難しいであろう。だが、必滅の創造物は、次のような数多くの観点から研究されるかもしれない。

49:5.2 (565.3) 1. 惑星環境への調整

49:5.3 (565.4) ２．頭脳-型列

49:5.4 (565.5) 3. 精霊-受け入れ列

49:5.5 (565.6) 4. 惑星-人間紀元

49:5.6 (565.7) 5. 創造物-親族関係列

49:5.7 (565.8) 6. 調整者-融合列

49:5.8 (565.9) 7. 地球脱出方法

49:5.9 (565.10) 7超宇宙の生息球体には、進化的生物の生命に関して大別化されたこれら7分類中の各々1種類、あるいはそれ以上の種類に同時に分類する人間が住んでいる。しかし、これらの一般的分類さえも、中間ソナイトのような存在体や知的生命の他の特定の型への何の条項もない。生息界には、これらの物語で提示されてきように、進化する必滅の創造物が住んでいるが、それでも他の生命の型がある。

49:5.10 (565.11) 惑星環境への調整。生息界には惑星環境への創造物の生命調整の観点から一般的な3集団：標準的調整集団、過激な調整集団、試行的集団がある。

49:5.11 (565.12) 惑星の状態への通常の調整は、事前に考えられた一般の物理的な型に従う。非呼吸者の世界は、過激な、または極端な調整の典型であるが、他の型もまたこの集団に含まれる。実験的な世界は、通常、典型的な生物の型に理想的に適合させられ、これらの10進惑星にお

ける生命運搬者は、標準の生命雛形の有益な変化、種類、の実現を試みる。あなたの世界は、実験的惑星であり、サタニアのその姉妹球体とは著しく異なる。他の場所では見つけられない生命の多くの型が、ユランチアに出現した。同様に、多くの共通種が、あなたの惑星には欠けているのである。

49:5.12 (565.13) ネバドンの宇宙においては、生命変更世界すべてが、順次、結びつけられ、指定された管理者により与えられる宇宙業務に関わる特別領域を構成している。そして、その団長が、サタニアではタバマンチアとして知られている古参の終局者である宇宙の監督軍団が、これらの実験的世界のすべてを定期的に点検する。

49:5.13 (566.1) 2. 頭脳-型列。人間の肉体上の均一性は、脳と神経系である。とは言っても、脳の構造には基本的3組織がある。1頭脳-型、2頭脳-型、3頭脳-型。2頭脳-型にはユランチア体があり、1頭脳-型の必滅者よりもいくらか想像力が豊かで、冒険好きで、哲学的であり、3頭脳-型系列よりは精霊的、倫理的、敬虔的に劣る。これらの脳の差は、前人間の動物の生活さえ特徴づける。

49:5.14 (566.2) 類推により、ユランチア大脳皮質の2脳球体の型から、1頭脳-型について何かを把握することができる。3頭脳-型系列の3番目の脳は、より高い連動のために2つの優れた脳：知的機能のための1つと、思考調整者の精霊的に対応する活動のための他方を自由にし、主に身体活動を支配して機能する程度にまで開発されるあなたの下級の、または初歩的な脳の形式の展開として考えられるのが最も良い。

49:5.15 (566.3) 1頭脳-型人種の地球での達成は、2頭脳-型系列に比較して僅かに劣るが、3頭脳-型集団のより古い惑星は、ユランチア人を驚かせ、あなたの文明に比較するといくらか恥ずかしめる文明を提示する。人間の2頭脳-型の世界は、機械的発展と物質文明において、知的進歩においてさえ、3頭脳-型の球体に相当しうる。しかし、あなたは、より高度の心の支配と知的で精霊的相互作用の進化においていくらか劣っている。

49:5.16 (566.4) いかなる世界、または世界集団の知的進歩、あるいは精霊的到達に関するそのような比較評価すべてが、公正を期して惑星の年齢を認識すべきである。多く

が、非常に多くが、年齢に、生物の改善者の助けに、そして神性の息子の様々な系列のその後の任務に依存している。

49:5.17 (566.5) 3頭脳-民族は、1頭脳-、または2頭脳-系列のいずれよりもわずかに高度の惑星進化の能力をもつが、 3者ともに同じ生命原形質の型をもち、まるでユランチアの人間がするように、非常に似た方法で惑星活動を営む。これらの必滅の3種類の型は、地方体制の世界中に分布している。大部分の事例惑星状況は、生命運搬者が異なる世界における人間のこれらの変化した系列へ投影するという決定にはほとんど関係がないのである。このようにして計画し、実行することが生命運搬者の特権である。

49:5.18 (566.6) これら3系列は、上昇経歴において等しい足場に立っている。それぞれが、発展に関わる同じ知的段階を移動しなければならないし、進行に関わる同じ精霊的試練に打ち勝たなければならない。これらの異なる世界の体制管理と星座の婉曲的支配は、均一に差別を伴わない。惑星王子の体制さえ同じである。

49:5.19 (566.7) 3. 精霊-受け入れ列。心の雛形には、精霊問題との接触に関連する3部類がある。この分類は、必滅者の1頭脳-型、2頭脳-型、3頭脳-型系列には触れない。それは、主として腺の化学的性質に、とりわけ脳下垂体に匹敵する特定の種の腺の組織に言及する。人種は、いくつかの世界においては1つの腺をもち、そして他の世界においてはユランチア体のように2つを、さらに他の球体においてはこれらの3つの独特の身体を持っている。固有の想像と精霊的感受性は、確実にこの独特の化学贈与による影響を受けているのである。

49:5.20 (566.8) 精霊-受け入れ型のうち、65パーセントが、ユランチアの人種ような第二集団の型。12パーセントは、第一の型で、当然のことながら低い受容性であり、一方23パーセントは、陸上生活の間より精霊的に傾いている。しかし、そのような特徴は、自然の死を生き残りはしない。これらの人種的相違のすべてが、肉体の生涯だけに属する。

49:5.21 (567.1) 4. 惑星-人間の新紀元。この分類は、地球での人の状態と天の聖職活動の受理に影響するとき、時間の天啓の連続を認識する。

49:5.22 (567.2) 生命は、惑星において生命運搬者により起こされる。生命運搬者は、人間の進化的現象発生のいくらか後までその発展を見守る。生命運搬者は、惑星を去るにあたり領域の支配者として惑星王子を任命する。この支配者の到着とともに、全定数の従属的補助員と聖職活動の助手が到着し、また、生者と死者についての最初の裁決は、支配者の到着と同時である。

49:5.23 (567.3) この惑星王子は、人間の集団化の発現と共に人間の文明を開始し、人間社会に焦点を合わせるために到着する。混乱状態にあるあなたの世界は、惑星王子カリガスティアが体制君主ルーキフェレーンスの反逆の運命と共にしたユランチアでのそのような管理の始まり近くであったので、惑星王子の統治の初期の評価基準ではない。あなたの惑星は、以来ずっと嵐の進路をたどってきた。

49:5.24 (567.4) 惑星王子の体制期間、正常な進化の世界における人種的進歩は、その生物の自然の頂点に達し、体制君主は、その後すぐに物質の息子と娘をその惑星に派遣する。取り込まれたこれらの存在体は、生物上の改善者として役立つ。ユランチアにおけるそれらの不履行が、あなたの惑星の歴史をさらに複雑にした。

49:5.25 (567.5) 人類の知的かつ倫理的進歩が、進化的発展の限界に達した時点で権威ある任務にある楽園のアヴォナルの息子が来る。そして、後に、そのような世界の精霊的状態が、その自然な到達の限界に接近しているとき、楽園の贈与の息子が、惑星に訪れる。贈与の息子の主要任務は、惑星の地位を確立し、惑星的機能のために真実の精霊を放ち、その結果、思考調整者の普遍的到来をもたらすことである。

49:5.26 (567.6) 再びここに、ユランチアは、通常の任務から外れる。あなたの世界への権威ある任務というものは一度としてなかったし、あなたの贈与の息子もまたアヴォナルの息子の系列にはいなかった。あなたの惑星は、君主

たる息子ネバドンのマイケルにとっての人間の故郷の惑星になるという際立つ栄誉を味わったのである。

49:5.27 (567.7) 神性の息子の係属的全系列の聖職活動の結果、生息棲息界と前進する人種が、惑星発展の頂点にさしかかる。そのような世界は、現在、最高潮に至る任務、つまり、三位一体の教師たる息子の到着にむけ実りつつある。師としての息子のこの時代は、最後の惑星時代—進化の理想郷—光と生命の時代への玄関である。

49:5.28 (567.8) 人間のこの分類には、次の論文において特別の配慮がある。

49:5.29 (567.9) 5. 創造物-親族関係列。惑星は体制、星座などと上下方向に組織化されるだけではなく、宇宙行政もまた型、列、および他の関係に従い左右の組分けを提供する。宇宙のこの横の管理は、とりわけ異なる球体で独自に助長された同様の自然の活動の統一に関係する。宇宙の創造物の関連するこれらの部類は、長い経験豊富な終局者に統括される一定の高人格の合成部隊により定期的に検分を受ける。

49:5.30 (568.1) これらの親族関係の要素は、人間でない人格の間にも必滅の創造物の間にも—人間と超人の系列間にさえも—親族関係の連続性が存在していることから、全段階において明白である。知的存在体は、主要7分割にある12大集団のそれぞれに縦に関係づけられる。生物の独自に関係づけられたこれらの集団の統一は、おそらく崇高なるものの完全には理解されていない何らかの方法によりもたらされている。

49:5.31 (568.2) 6. 調整者-融合列。各々の前融合経験期間のすべての人間の精霊的な分類、あるいは組分けは、完全に内住する神秘訓戒者との人格状態の関係により決定される。90パーセント近くのネバドン生息界には、調整者-融合の人間が住んでおり、対照的に近隣宇宙の半分をわずかに超える世界では、永遠融合の調整者-内住候補者である存在体を抱えている。

49:5.32 (568.3) 7. 地球脱出方法。基本的に、生息界において個々の人間の生命を起こすことができる唯一の方法があり、それは、創造物の生殖と自然的誕生を通してであ

る。だが、人が、地球の状態から逃げ、楽園上昇者の内向きの流れを利用できる数多くの方法がある。

6. 地球脱出

49:6.1 (568.4) 異なる身体の型と人間の惑星列のすべてが、同様に思考調整者、守護天使、および無限の精霊の使者の部隊の様々な系列の聖職活動を経験する。自然の死の解放により肉体の束縛から揃って自由にされ、そこから精霊的進化と心の進歩のモロンチア世界に揃って行くのである。

49:6.2 (568.5) 時おり、眠りの生存者の特別な復活が、惑星当局もしくは体制支配者の動議に基づき実施される。そのような復活は、惑星の時間の少なくとも千年ごとに、すべてではなく、「塵の中に眠る多くのものが目覚めるとき」に起こる。これらの特別な復活は、人間上昇の地方宇宙における特定勤労に向けての上昇者の特別集団を動員する機会である。これには、特別な復活と係わり合いをもつ二つの実際的、心情的な理由がある。

49:6.3 (568.6) 生息界の初期を通じて、多くが特別な復活と千年の復活の際に大邸宅球体に呼ばれるが、ほとんどの生

存者は、惑星勤労の神性の息子の到来に関連する新天啓の開始の際に再人格化される。

49:6.4 (568.7) 1. 生存に関する天啓の系列、または集団系列に属する人間。棲息界への最初の調整者の到着とともに、後見熾天使もまた登場する。それらは、地球脱出に不可欠である。睡眠中の生存者の生命失効の期間中、新たに発展し、かつ不滅である魂の精霊的価値と永遠の現実は、個人の、または集団の後見熾天使による神聖な信用として保持される。

49:6.5 (568.8) 眠る生存者配属集団の保護者は、判断に関わる息子の世界到来とともにつねに機能する。「あの方は天使を遣わし、天使たちは四方から選民を呼び集めるであろう。」眠る人間の再人格化配属の各熾天使と共に、帰還の調整者、つまり肉体の時代に内住していた同じ不滅の父の断片は、機能し、それ故同一性は戻され、人格は復活される。それぞれの対象者の睡眠中、待ちうける調整者は、神性球で役目を果たす。調整者達は、この間、決して別の人間の心には宿らない。

49:6.6 (569.1) 人間存在のより古い世界は、モロンチア生活からは実際には免除されている高度に発展し、すばらしく精霊的な人間の型を抱くが、動物起源の人種の早期は、調整者との融合が不可能なまでに未熟である原始の人間によって特徴づけられる。これらの人間の再度の目覚めは、第三根源と中枢の不滅の精霊の個別化された部分と関連して後見熾天使によって達成される。

49:6.7 (569.2) こうして、惑星時代の眠る生存者は、天啓点呼で再人格化される。しかし不滅の精霊は、領域の救済不可能の人格に関し、将来の目標の集団保護者と共に機能するために臨場はしないし、これは、生物存在の休止と同等である。あなたの記録のいくつかは、人間の死の惑星で行われるとしてこれらの出来事について描写してきたが、それらは皆、大邸宅世界に実際に起こるのである。

49:6.8 (569.3) 2. 個々の上昇系列の人間。人間の個々の進歩は、宇宙の7回路の逐次到達と移動(精通度)により測定される。人間進行のこれらの回路は、関連する知的、社会的、精霊的、宇宙洞察の価値の段階である。第７回路

に着手する人間は、第１を求めて努力し、また第３に達した全員は、直ちに自分達に割り当てられた目標の個人的後見者をもつ。これらの人間は、天啓、または他の裁決の如何にかかわらずモロンチア生活において再人格化されるかもしれない。

49:6.9 (569.4) 一進化世界の初期にわたり、わずかな人間にしか3日目に判決を下されることはない。だが、時代の経過とともに、ますます多くの目標の個人的後見者が、向上している人間に割当てられ、その結果、増加しているこれらの進化の創造物は、自然な死の3日目に第一大邸宅界において再人格化される。そのような場合、調整者の帰還が、人間の魂の目覚めに信号を送り、文字通り、進化世界の天啓の終わりに一斉点呼がとられるときのように、これが、死者の再人格化である。

49:6.10 (569.5) 個々の上昇者には3集団ある。それほど高度でないもの達は、初期、あるいは第1大邸宅界に着地する。より高度な集団は、これまでの惑星の進行に応じ、中間の大邸宅界のいずれかにおけるモロンチア経歴を始めることができる。これらの系列の最も高度であるもの

は、本当に第七大邸宅世界においてモロンチア経験を始める。

49:6.11 (569.6) 3. 試験的依存の上昇系列の人間。調整者到着は、宇宙の見地からは自我を構成し、内住者すべてが、正義の点呼名簿に載っている。しかし、進化の世界における束の間の生命は不確実であり、多くのものが、楽園経歴を選ぶ前に若くして死ぬ。そのような調整者-内住の子供と若者は、最も進んだ精霊的状態の親について行き、その結果、3日目に、特別な復活のときに、または千年の天啓の定期的点呼のときに体制終局者世界(試験育児室)に行く。

49:6.12 (570.1) 思考調整者を持つにはあまりにも幼くして死ぬ子供達は、いずれかの親の大邸宅界到着と同時に地方体制の終局者世界において再人格化される。子供は人間としての誕生に際し物理的実体を取得するが、生存問題に関しては、調整者をもたない子供すべてが、まだそれぞれの両親に帰属すると見なされる。

49:6.13 (570.2) 思考調整者が、事が順調に運びこれらの子供達に宿るようになり、一方、試験的依存の生存者の系列の

両集団への熾天使の聖職活動は、一般的には、より進んだ親のものと同様であるか、または片方だけが生き残る場合にはその親のものに同等である。第3回路に達するもの達は、両親の状態のいかんを問わず、個人的後見者を受ける。

49:6.14 (570.3) 同様の試験育児室が、第一の、そして第二の変更された上昇者系列の調整者をもたない子供のために星座の終局者球体と宇宙本部に維持される。

49:6.15 (570.4) 4. 第二次変更の上昇系列の人間。これらは、進化の中間世界の進歩的な人間である。それらは、原則として、自然の死を免れないが、第七大邸宅世界までの通過からは免除されている。

49:6.16 (570.5) あまり完成していない集団は、大邸宅界だけを素通りし、地方体制の本部で再び目を覚ます。中間の集団は、星座の訓練世界に行く。それらは、地方体制の全モロンチア体制を素通りする。多くの生存者が、それより先の精霊的努力の惑星の時代に星座本部で目を覚まし、そこで楽園上昇が始まる。

49:6.17 (570.6) だが、これらの集団のどれかが前進を許される前に、それらは、学生として素通りしたそれらの領域において教師として多くの経験をするために後戻りの旅をしなければならない。それらは皆、次には、人間進行の定められた針路を経由し楽園に進む。

49:6.18 (570.7) 5. 第一次変更の上昇系列の人間。これらの人間は、進化する生命の調整者融合型に属するが、ほとんどの場合、進化する世界における人間発達の最終局面を代表している。これらの栄光を浴した存在体は、死の入り口の通過が免除されている。それらは、息子の保護管理に従う。それらは、生きているものの中から移され、すぐ地方宇宙本部の君主たる息子の面前に現れる。

49:6.19 (570.8) これらは、人間生活の間に調整者と融合する人間であり、そのような調整者融合の人格はモロンチア型をまとわされる前に自由に空間を移動する。融合された魂は、調整者の直接運搬による一層高いモロンチア球体の復活大広間へ行き、そこで、ちょうど進化世界から到着する他のすべての人間のように最初のモロンチアの衣裳、認証を受けとる。

49:6.20 (570.9) 人間上昇のこの第一次変更の系列は、調整者-融合世界の最も低い段階から最も高いもの段階への惑星列のいずれかに属する個人にあてはまるかもしれないが、神性の息子の数々の滞在恩恵を受けた後により古いこれらの球体においてより頻繁に機能する。

49:6.21 (570.10) 多くのものが、と生命の惑星時代の設立のともに第一変更の移動系列によってモロンチアの宇宙世界に行く。定着した生活の前進段階のずっと先に領域を去る人間の大多数が、この部類に抱えられるとき、惑星は、この列に属すると見なされる。自然の死は、光と生命に長く落ち着くこれらの球体においては次第に減少していく。

49:6.22 (571.1) [惑星行政のジェルーセム校の１メルキゼデクによる提示]

論文 50
惑星王子

50:0.1 (572.1) 惑星王子は、ラノナンデクの息子の系列に属する一方で、勤務上は専門化されているので一般には別個の一団と見なされているこれらの地方宇宙の息子は、第

ニラノナンデク系としてメルキゼデクによる証明後、星座本部の各々の系列の予備軍に配属される。それらは、体制君主によりここから様々な義務に割当てられ、ゆくゆくは惑星王子として任命され発展する生息界を治めるために遣わされる。

50:0.2 (572.2) 特定惑星への支配者配属対応のための体制君主への合図は、確立した生命や発達した知的進化の存在体が生息するこの惑星での機能へむけての生命運搬者からの行政長官派遣要請の受理である。進化する必滅の創造物が住む全惑星は、この系列の息子の身分の惑星支配者を割り当てた。

1. 王子の任務

50:1.1 (572.3) 惑星王子とその補佐の同胞は、楽園の永遠なる息子が時間と空間の遅々たる進化の生物にできる精一杯の人格化の、への、最接近(肉体化は別として)を表す。いかにも、創造者たる息子は、自らの精霊を通して領域の創造物に触れているが、惑星王子は、楽園から人間の子供に延々へと広がる人格の息子の系列の最後のものである。無限の精霊は、目標の後見者と他の天使の存在体

に非常に近づく。宇宙なる父は、神秘訓戒者の前人格の臨場により人間の内に生きる。しかし、惑星王子は、あなたを近くに引き寄せる永遠なる息子とその息子の最後の努力を表す。惑星王子は、新たに居住者のいる世界においては、創造者たる息子(宇宙なる父と永遠なる息子の子)と神性聖職者(無限の精霊の宇宙の娘)から生まれ、完全な神性の唯一の代表である。

50:1.2 (572.4) 新たに人が住む世界の王子は、助手と補助者の忠誠な部隊と多数の奉仕精霊に取り囲まれる。しかし、のような新世界の指揮部隊は、惑星の問題と困難に本質的に同情的、かつ理解があるには体制の行政者の下級の系列のものでなければならない。そして、進化世界への思いやりのある統治者の支配権を提供するためのこの全努力は、これらの人間に近い人格が、崇高な支配者の意志を超え、それら自身の心の高揚に惑わされるかもしれない増大された責任を伴う。

50:1.3 (572.5) これらの息子は、個々の惑星上の神性代表として全く単独であるので厳しく試されるし、ネバドンは、幾つかの反逆の不運を被った。体制君主と惑星王子の創

造において、宇宙なる父と永遠なる息子からより遠く離れてしまった概念の人格化が起こり、加えて人間の自己の重要性について言えば、平衡感覚を失うというさらなる危険と、神性存在体の数多くの系列と権威の段階における価値と関係についての適切な把握ができないという高まる可能性がある。父が地方宇宙に自ら臨場しないということが、これらのすべての息子に信頼と忠誠のある種の試練をしている。

50:1.4 (573.1) だが多くの場合、世界のこれらの王子は、生息球体の組織化と管理の任務に失敗するというわけではないし、またそれらの成功が、世界の原始人により高度型の創造物の生命を植え付ける物質の息子のその後の任務を大いに容易にする。それに、その統治は、世界を裁き、連続する天啓を開始するためにその後やって来る神の楽園の息子のために惑星を整備するために多くのことをする。

2. 惑星行政

50:2.1 (573.2) すべての惑星王子は、マイケルの最高責任者であるガブリエルの宇宙行政管轄権下にあり、一方直接権力においては、体制君主の行政命令に従う。

50:2.2 (573.3) 惑星王子は、いかなるときにも自分達のかつての教官や後援者であるメルキゼデク系の助言を求めることができるのだが、任意にそのような援助を求めないし、もしもそのような援助が自発的に求められなければ、メルキゼデク系は、惑星行政に干渉しない。これらの世界統治者は、また体制の贈与世界から集められる24名の助言者の忠告を利用するかもしれない。サタニアにおいては在のところ、これらの助言者は、皆ユランチア出身である。また、星座本部には領域の進化する存在体からも選ばれる70名からなる類似の協議会がある。

50:2.3 (573.4) 初期の、不安定な経歴における進化の惑星統治は、おおむね独裁的である。惑星王子は、惑星援助の各部隊の中から専門化している補佐集団を組織化する。彼らの周りには、通常、12名の最高協議会があるが、これはさまざまに選ばれ、また異なる世界においてさまざまに構成される。惑星王子もまた、1名かそれ以上の自身

の息子の身分の集団の第三系列からの補佐を、時にはある世界の、第二ラノナンデクの補佐である自身の系列からの１名の補佐をもつかもしれない。

50:2.4 (573.5) 世界統治に関わる構成員全員は、無限の精霊の人格とより高度に進化した特定の存在体の型と他の世界からの上昇する人間から成る。そのような部下は、平均するとおよそ1,000名となり、この助手部隊は、惑星の進歩とともに10万か、それ以上に増加するかもしれない。惑星王子は、より多くの補佐の必要性が生じるときは随時、体制君主である自分達の兄弟に単に要求をするだけで、その申し立ては、直ちに認められる。

50:2.5 (573.6) 惑星は、種類と組織において、また管理において大いに異なるが、すべてが治安裁決機関を規定する。地方宇宙の司法体制は、個人的部下の中の１構成員が統括する惑星王子の裁判所から始まり、そのような法廷の判決は、極めて父親らしく、自由裁量の態度を反映する。惑星の住民の規則を越えて影響を及ぼす問題のすべては、上の裁判所への上告対象となるが、世界領域の業務は、王子個人の自由裁量に基づき大幅に調整される。

50:2.6 (574.1) 方々を飛び回る調停者の仕事は、務めを果たし惑星の裁判所を補完し、また精霊制御者と物理的制御者は、これらの調停者の所見を受ける。しかし「いと高きものが人の王国を支配する」ので、何の任意の実行も決して星座の父の同意なしには実行されない。

50:2.7 (574.2) 惑星任務の制御者と変成者もまた、天使と天の存在体の他の系列と共同してこれらの後者の人格を必滅の創造物に見えるようにすることができる。特別時に、熾天使の助手と、メルキゼデクさえ、自分自身を進化世界の住民に見えるようにできるし、する場合がある。惑星王子の部下として体制首都から人間の上昇者を連れて来る主な理由は、領域の住民との意志の疎通を容易にすることである。

3. 王子の有体の部下

50:3.1 (574.3) 惑星王子は、若い世界に行くにあたり通常、地方体制本部からの志願の上昇者集団を伴う。これらの上昇者は、初期の人種改良の仕事において助言者と助手として王子に同行する。この物質の助手部隊は、王子と世

界人種との連結体を構成する。ユランチアの王子カリガスティアには、そのような100名の助手部隊があった。

50:3.2 (574.4) そのような志願の補佐は、体制首都の公民であり、その中の誰とても調整者との融合はなかった。そのような志願奉仕者の調整者の地位は、これらのモロンチア前進者が一時的に以前の物質的状態に戻るのに相反し、体制本部における居住身分のままである。

50:3.3 (574.5) 生命運搬者、型の建築家は、そのような志願者に新しい物理的肉体を提供し、その肉体は、各自の惑星滞在期間中占拠する。この人格の型は、領域の普通の病気からは免れるが、早期のモロンチアの肉体のようにある種の物理的事故を被ることはある。

50:3.4 (574.6) 王子の有体の部下は、通常、第2の息子の球体到着時に次の裁決に伴いその惑星から外される。王子の有体の部下は、去る前に習慣的に自分達の様々な義務を双方の子らと優れた原住の志願者に割り当てる。王子のこれらの助手が原住人種の優れた集団との結婚が許されていた世界においては、通常、そのような子らが、彼らを引き継ぐ。

50:3.5 (574.7) 惑星王子の補佐は、世界の人種とはめったに性関係をもたないが、自分たちの間では常にもつのである。2つの存在体の集団：中間被創造者の一次の型と、アダームとハヴァーの到着時点で両親が惑星から外された後に王子の部下に配属されたままの物質存在体の高度の型が、これらの結合から生じる。これらの子供らは、ある非常時と、加えて惑星王子の指示以外には人間の人種とは性関係をもたない。そのような出来事の場合、その子供ら—有体の部下の孫—は、優れた人種のその時代と世代の時点での地位にある。惑星王子のこれらの半物質の補佐の子供すべてが、調整者内住である。

50:3.6 (575.1) 王子の天啓の終わりに際し、この「帰還の部下」が、楽園経歴再開のために体制本部に返される時が来ると、これらの上昇者は、物質的の肉体を明け渡す目的のために生命運搬者に自身を提供する。これらの上昇者は、遷移の微睡みに入り、目覚め、肉体の纏いから救われ、モロンチア型を身につけ、引き離された調整者の待つ体制首都への熾天使の輸送準備をする。これらの上昇者は、全天啓のできの悪いジェルーセム集団ではある

が、独自の並はずれた経験を、すなわち上昇する人間の経歴におけるまれなる一章を獲得したのである。

4. 惑星本部と学校

50:4.1 (575.2) 王子の有体の部下は、早くに、訓練と文化についての惑星の学校を組織化し、そこでは、進化する人種の最良のもの達が教授され、次いで、これらのより良い方法を各自の民族に教えるために送り出される。これらの王子の学校は、惑星の物質的本部に位置している。

50:4.2 (575.3) 有体の部下は、この本部都市の設立に関わる多くの物理的な仕事を果たす。惑星王子の早期のそのような本部都市、または共同社会は、ユランチアの人間が想像するかもしれないものとは非常に異なる。それらは、後の時代との比較においては、鉱物装飾と比較的高度な物質構造により特徴づけられており、単純である。このすべてが、園の本部を中心に置くアダーム体制とは対照的であり、人種のためのそれらの仕事は、園の本部から宇宙の息子の第二の天啓の間に遂げられる。

50:4.3 (575.4) あなたの世界の本部定住においては、各人間の住宅には多くの土地が用意されていた。遠隔の部族は、

狩猟と食物採集を続行し、王子の学校の学生と教師は、全員が農業専門家と園芸家であった。時間は、次の仕事の間でほぼ当分に配分された。

50:4.4 (575.5) 1. 肉体労働。住宅建設と装飾に伴う土地耕作。

50:4.5 (575.6) 2. 社会活動。演戯上演と文化的な社会的集合。

50:4.6 (575.7) 3. 教育的応用。専門課程の訓練により補足される家族集団教育に関する個別教授。

50:4.7 (575.8) 4. 職業訓練。結婚と家政のための学校、芸術と工芸指導の学校、教師養成のための—世俗の、文化の、宗教の教師—授業。

50:4.8 (575.9) 5. 精霊的文化。師の兄弟愛、幼時と青年期集団の啓発、各自の民族への聖職活動者として引き取られた原住の子供の指導。

50:4.9 (575.10) 惑星王子は、人間には見えない。それは、部下である半物質の存在体提示を信じる信頼に関する試験である。しかし、文化と訓練のこれらの学校は、各惑星の必要性によく適合しており、またこれらの様々な学習団

体に入る努力において、すぐに人類間の猛烈、かつ賛美に値いする競争関係を展開する。

50:4.10 (575.11) ゆっくりと、しかも確かに進化する人種を変える意気を高め文明化する影響が、文化と達成のそのような世界の中心からすべての民族に広まる。その間に、王子の学校に引き取られ訓練された周辺民族の教育され精霊化された子供らは、各自の出身集団に戻り、全力を尽くして王子の学校の計画に沿う学習と文化のための新たで強力な中心をそこに確立しつつある。

50:4.11 (576.1) 全体の事業が、カリガスティアのルーキフェレーンス反逆への支持によりかなり、幾分、突然に、しかも最も不名誉な終わりに至ったとき、ユランチアにおける惑星の前進と文化向上のためのこれらの計画は、実に申し分なく進行中であった。

50:4.12 (576.2) 私にとり、息子関係にある自身の系列の一員であるカリガスティアの、故意に、かつ殺意をもって、組織的に指示をねじ曲げ、その時点で実施中のユランチア惑星のすべての学校に用意されていた教えを毒したカリガスティアの、冷淡なこの背信について知るということ

は、最も重厚に衝撃的な出来事の1つである。これらの学校の破滅は、迅速かつ完全であった。

50:4.13 (576.3) 王子の実体化された部下の上昇者の子らの多くは、カリガスティアの階級を放棄し、依然として忠誠であった。これらの忠臣者達は、ユランチアのメルキゼデク受領者により奨励され、またその子孫は、後の時代に真実と正義の惑星の概念を支持するために多くのことをしたのであった。これらの忠誠な福音唱道者は、ユランチアにおける精霊の真実の完全な消滅回避を助けた。これらの勇敢な者とその子孫は、父の支配に関する幾らかの知識を生かし続け、神性の息子の様々な系列による惑星の連続的天啓の概念を世界の人種のために保護した。

5. 進歩的文明

50:5.1 (576.4) 生息界の忠誠な王子達は、本来の仕事の惑星に永遠に配属される。楽園の息子と天啓は、往来するかもしれないが、功を奏する惑星王子は、自分の領域の統治者として続ける。惑星の文明発展を促進するように考案されている惑星王子の仕事は、　より上の息子の任務からはかなり独立している。

50:5.2 (576.5) 2つの惑星における文明の進歩は、ほとんど似ていない。人間進化の展開の細部は数多くの異なる世界において非常に相異する。物理的、知的、社会的状況に沿った惑星発展のこれらの多様性にもかかわらず、進化するすべての球体が、 ある明確な方向に進歩する。

50:5.3 (576.6) 時間と空間の平均的世界における人種は、物質の息子により補足され楽園の息子の周期的任務により中断される惑星王子の温和な支配下にあって次の発展的七時代を相次いで通過する。

50:5.4 (576.7) 1. 栄養時代。前人間創造物と原始人の原人種は、主に食物問題に対し関心がある。これらの進化する生き物は、食物を探すか、攻撃的に、または防御的に戦うかして起きている時間を過ごす。食物探索は、その後の文明をつくったこれらの初期の先祖の心の最優先事項である。

50:5.5 (576.8) 2. 保全時代。原始の猟師は、食物探索から時間を割くことができるときはいつでも早速、この閑暇を保全増大に向ける。ますます多くの注意が戦争技術に注がれる。家は、要塞化され、一族は、互いへの恐怖と異質

集団への憎しみの鼓吹により結束される。自衛本能は、常に自己保全に続く営みである。

50:5.6 (577.1) 3. 物質的安らぎの時代。食物問題が、部分的に解決され、いくらかの保全に達した後、さらなる余暇が、個人の安らぎの促進に活用される。贅沢は、人間の活動舞台の中心を占拠しようとして必要性と競う。そのような時代は、あまりにも頻繁に圧制、狭量、暴飲暴食、酒気の特性を示す。人種の中の弱い分子は、不節制と野蛮に傾く。徐々に、これらの快楽探究の虚弱者は、前進する文明のより強く、真実を好む要素に征服される。

50:5.7 (577.2) 4. 知識と知恵の探究。食物、保全、娯楽、余暇は、文化の発達と知識普及の基礎を提供する。知識を実践する努力は、知恵をもたらし、また文化が経験により恩恵を受け向上することを学んだとき、文明は、本当に成功したのである。食物、保全、物質的安らぎがまだ社会を支配しているが、多くの前向きの個人は、知識に飢え、知恵に渇きを覚えている。すべての子供には、行な

うことにより学ぶ機会が与えられる。教育は、これらの時代の合言葉である。

50:5.8 (577.3) 5. 哲学と兄弟愛の新紀元。人間は、考えることを身につけ経験を通じて恩恵を受け始めると哲学的になる—自らが推論し、識別的判断を駆使し始める。この時代の社会は倫理的になり、そのような時代の人間は、真に、道徳的行為者になる。賢明な道徳的行為者は、進歩するそのような世界に人間の兄弟愛を確立することができる。倫理的、かつ道徳的な存在体は、黄金律に従って生きる方法を学ぶことができる。

50:5.9 (577.4) 6. 精霊的努力の時代。物理的、知的、社会的発展段階を通過してしまうと、進化する人間は、遅かれ早かれ精霊的満足感と宇宙和合を求めずにはいられない個人的洞察のそのような段階に達する。宗教は、恐怖と迷信の感情的領域から宇宙的見識と個人的精霊経験の高い段階への上昇を完成しつつある。教育は、意味への到達を目指し、文化は、宇宙関係と真の価値を把握する。そのような進化している人間は、純粋に洗練され、真に教育され、この上なく見事に神を知っている。

50:5.10 (577.5) 7. 光と生命の時代 。これは、物理的保全、知力拡大、社会文化、および精霊的達成の連続的時代の開花である。人間のこれらの成果が、いま混ざり合い、関連し、宇宙統一と寡欲な奉仕に整合している。時間と空間のこれらの崇高で定着した世界に引き続き暮らしている前進的世代による進化の到達の可能性を襲う境界は、有限性と物質贈与の限界内に設定されてはいない。

50:5.11 (577.6) 惑星王子は、世界史の連続する天啓と惑星進歩の前進時代の全体にわたり自らの球体に仕えた後、光と生命の時代の就任にあたり惑星君主の位置に登用される。

6. 惑星文化

50:6.1 (578.1) ユランチアの孤立は、あなたのサタニアの隣人の生活と環境についての多くの細部の提示の引き受けを不可能にする。我々は、惑星の隔離と体制孤立によりこれらの論文の提示において制限されている。我々は、あらゆる努力をしてユランチアの人間を啓発するこれらの制限に導かれなければならないが、あなたは、許される限りにおいて、平均的進化世界の進行中に指示されてき

ており、またユランチアの現在の状況との世界のそのような経歴を比べることができる。

50:6.2 (578.2) ユランチアにおける文明の発展は、精霊の孤立の不運を被った他の世界のものとそれほど大きくは異なっていなかった。しかし、宇宙の忠誠な世界と比べるとき、あなたの惑星は、非常に混乱し、知的な進歩と精霊的到達の全局面において大いに遅れているように思える。

50:6.3 (578.3) あなたの惑星の不運ゆえに、ユランチア人は、通常世界の文化をあまり理解していない。しかし、あなたは、進化する世界を、最も理想的な世界でさえ、生活が全く楽である球体として考えるべきではない。必滅の人種の初期の生活には必ず苦闘が伴う。努力と決断は、生存価値修得の不可欠部分である。

50:6.4 (578.4) 文化は、心の質を前提とする。心が高められなければ、文化を向上させることはできない。優れた知性は、高貴な文化を求め、そのような目標に達する何らかの方法を見つけるであろう。劣る心は、最も高い文化が既存状態で提示されたとしても拒むであろう。また、多

くのことが、神性の息子の相次ぐ任務によって決まり、啓発は、各天啓の時代に受け入れられる度合により決まる。

50:6.5 (578.5) サタニアの全世界が、ルーキフェレーンスの反逆により20万年の間ノーラティアデクの精霊的な禁止令下で静止していたということを忘れるべきではない。また、罪と分離の結果の不利な条件を挽回するには、数多くの時代を必要とするであろう。あなたの世界は、反逆者の惑星王子と不履行の物質の息子の二重悲劇の結果として不規則で波瀾に富む生涯を今だに追い続けている。ユランチアにおけるキリスト・マイケルの贈与さえ、この世界の初期行政におけるこれらの深刻な失態の現世の因果関係をすぐには除外しなかった。

7. 孤立の報い

50:7.1 (578.6) 一見したところでは、ユランチアとその関連する孤立世界は、惑星王子と物質の息子と娘といったような超人的人格の役に立つ臨場と影響を剥奪されたことで最も不幸であるように見えるかもしれない。しかし、これらの球体の孤立は、信仰の実践のための、また視覚、

あるいはいかなる他の物質的考慮に依存しない宇宙の現実に対する確信に関わる独特の特性開発のための特異な機会をそれらの人種に提供する。ついには、反逆の結果孤立する世界から来る必滅の創造物が、至極幸いであると判明するかもしれない。我々は、宇宙の仕事への数多くの特別な課題の達成に必要とされる疑う余地のない信仰と崇高な自信が、そのような上昇者にとてもあ早くにゆだねられていると気づいた。

50:7.2 (579.1) これらの孤立世界からの上昇者は、ジェルーセムにおいては単独に住宅地域を占領しており、しかも見なくとも信じ、隔離に際しては辛抱し、孤立に際してさえ克服できない困難を打ち負かすことのできる意志をもつ進化の創造物を意味するアガンダンターとして知られている。アガンダンターのこの機能上の組分けは、地方宇宙の上昇と超宇宙の縦断を通じて持続する。それは、ハヴォーナ滞在中に見えなくなるが、楽園到達に際し即座に再登場し、確実に人間終局者部隊に存続する。タバマンチアとは、時間と空間宇宙で起きた最初の反逆にかかわる隔離球体の1つから生き残った終局者の身分のアガンダンターである。

50:7.3 (579.1) 楽園経歴を通じ、報酬は、原因の結果として努力のあとに続く。そのような報酬は、個人を平均的な者達から際立たせ、創造物に多様な経験を提供し、終局者の集合体において究極的業績の汎用性に貢献する。

50:7.4 (579.1) [予備軍団の第二ラノナンデク系の息子による提示]

論文 51
惑星のアダーム系

51:0.1 (580.1) 原始人が惑星王子の配剤時代中に自然的進化の発展の限界に至ると、生物上のこの到達は、そのような世界への生体改善者である息子の資格の第二系列の派遣を体制君主に合図する。これらの子孫、というのも2名—物質の息子と娘—がおり、惑星においては通常アダームとハヴァーとして知られている。サターニアの最初の物質の息子は、アダームであり、生体、生物、改善者として体制世界に行くもの達は、常にその特異な系列のこの1番目の、また最初の息子という名をもつ。

51:0.2 (580.2) これらの子孫は、生息界への創造者たる息子の物質的な贈り物である。それらは、そのような一球体の

進化過程において惑星王子と共に任務の惑星に留まる。そのような冒険は、惑星王子のいる世界においては大した危険はないが、そのような任務は、精霊的支配者不在の領域や惑星間の情報伝達が阻まれているような背教の惑星においては危険をはらんでいる。

51:0.3 (580.3) あなたは、サターニアと他の体制のすべての世界におけるこれらの息子の仕事に関してすべてを知ることを望めないとはいえ、他の論文では、ジェルーセムの生物上の改善者の部隊からユランチアの人種を高揚するために来たアダームとハヴァーの興味深い１組の生涯と経験についてより完全に表現されている。あなたの生来の人種を改良するための理想的計画には失敗があったが、それでもアダームの任務は無駄ではなかった。ユランチアは、アダームとハヴァーの贈り物から測り知れないほどに利を得てきており、またその仲間の間においても天の協議会においても、両者の仕事は完全な損とはみなされていない。

1. 神の物質の息子の起源と性質

51:1.1 (580.4) 物質の、あるいは性をもつ息子と娘は、創造者たる息子の子である。宇宙の母なる精霊は、進化世界の物理的改善者として機能するよう運命づけられているこれらの存在体の生産には参加しない。

51:1.2 (580.5) 息子関係の物質系列は、地方宇宙全体において一様ではない。創造者たる息子は、各地方体制におけるこれらの存在体の1対だけを生産する。起源となるこれらの対は、各体制の生活様式に調和されており、現実にはさまざまである。これは、必要な対策であり、さもなければ、アダーム系の再生潜在力は、どれか特定の体制の世界の発展している必滅の存在体のそれとは機能しないであろう。ユランチアに来たアダームとハヴァーは、物質の息子の中のサターニア起源の１対の流れを組んでいる。

51:1.3 (580.6) 物質の息子は、2.4メートルから3.0メートルと背丈が異なり、身体は光り輝くスミレの色合いでまぶしいほどである。物質の肉体全体には血液が循環するとともに、神性エネルギーで満たされ、天の光で浸されている。これらの物質の息子(アダーム系)と物質の娘(ハヴァ

一系)は、生殖の特徴と一定の化学贈与において異なるのみで、互いに同等である。それらは、同等であるが異なる男性と女性であり—従って相補的で—ほとんどすべての任務において１対で働くよう考案されている。

51:1.4 (581.1) 物質の息子は、二重の栄養摂取に恵まれている。物質の息子は、まるで領域の物理的存在体がするように物質化されたエネルギーを摂取し、一方その不滅の存在は、ある種の持久する宇宙エネルギーの直接的、かつ自動的取入れにより完全に維持されており、種類と組織において実に二元的である。物質の息子は、何らかの配属任務に失敗したならば、または意識的に、そして故意に造反したならば、息子のこの系列は、光と生命の宇宙の根源とのつながりから切られ、孤立するようになる。その上に、息子のこの系列は、配属の世界における物質的生活進路を取るよう運命づけられ、裁決のために宇宙の行政長官に目を向けざるを得なく、実際に物質存在体になる。物質的な死は、やがてそのような不幸で賢明でない物質の息子か娘の惑星経歴を終わらせるであろう。

51:1.5 (581.2) 最初の、つまり直接に創造されたアダームとハヴァーは、ちょうど地方宇宙の息子関係の他のすべての系列のように生来の資質により不滅であるが、不死の可能性の縮小は、両者の息子や娘らの特性を示す。この最初の１組は、無条件の不死を自分達の産み出した息子と娘に伝えることはできない。両者の子孫は、継続する生涯を精霊の心の重力回路との壊れない知的共時性に依存している。サターニア体制の始まり以来、13名の惑星アダームと責任ある地位の681,204名が反逆と不履行に陥った。これらの背信のほとんどが、ルーキフェレーンスの反逆時点で起きた。

51:1.6 (581.3) 思考調整者を有してはいないとはいえ、物質の息子が、体制首都の永久公民として生活しながら進化する惑星への下降使節を務めている時でさえ、調整者内住と楽園上昇経歴のための経験的能力を獲得するのは、他ならぬこれらの働きを通してである。これらの特異で素晴らしく役に立つ存在体は、精霊世界と物理世界との結合輪である。それらは、体制本部に集結され、そこで領域の物質の公民として繁殖し、生き続け、その領域から進化の世界に派遣される。

51:1.7 (581.4) 息子関係の物質的系列は、惑星活動の他方の創造された息子とは異なり、元来、ユランチアの住民のような物質の創造物の目に見えないわけではない。生物学上の向上のこの役割は、通常、惑星アダーム系の子孫の手に落ちるのだが、神のこれらの息子は、可視であり、理解可能であり、さらに、実際に時間の創造物との交流ができ、時間の創造物との生殖さえ可能である。

51:1.8 (581.5) どのアダームとハヴァーの忠誠な子らも、ジェルーセムにおいては不死であるが、進化の惑星の到着後に生殖された物質の息子と娘の子らは、自然死を免がれない。これらの息子が進化世界での再生機能のために再物質化されると、生命移転手段における変化が起こる。生命運搬者は、惑星のアダームとハヴァーから不死の息子と娘を生み出す力を計画的に奪う。もし彼らが履行しないならば、惑星任務中のアダームとハヴァーは、無期限に生き続けることができるが、その子供らは、一定制限内に後の各世代毎の寿命の減少を経験する。

2. 惑星のアダーム系の輸送

51:2.1 (582.1) 別の生息界が、物理的発展の絶頂に達したという報道の受理に応じ、体制君主は、物質の息子と娘の部隊を体制首都に召集する。そして、そのような進化世界の必要性についての議論に続き、志願者集団からの2名—物質の息子の上級部隊のアダームとハヴァーの１名ずつ—が、冒険着手のために、すなわち熾天使化に先立つ深い睡眠につき、関連業務に携わる自分の惑星から新しい機会と新しい危険の新領域へ輸送されるために、選抜される。

51:2.2 (582.2) アダーム達とハヴァー達は、半物質の創造物であり、従って熾天使による輸送は可能ではない。それらは、任務世界への輸送のために熾天使化されるには体制首都における非物質化を受けなければならない。輸送熾天使は、それらが熾天使化され、その結果、空間を経て一つの世界または、体制から他方への輸送を可能にするように物質の息子と他の半物質の存在体における変化をもたらすことができる。標準時でおよそ3日間が、この輸送準備に費やされ、熾天使の輸送旅行終了の到着時にそのような非物質化された創造物を通常の生命に戻すには生命運搬者の協力を要する。

51:2.3 (582.3) ジェルーセムから進化世界への輸送に向けアダーム系に準備させるこの非物質化手段がある一方で、全体の惑星が空にされない限り、つまり、そのような場合は、救済可能な全人口のために非物質化手段の非常時の導入がとられない限り、そのような世界からそれらを取り除く何の相当手段もない。何らかの物理的大変動が、前進する人種の惑星居住を運命づけるならば、メルキゼデク系と生命運搬者が、すべての生存者のために非物質化の手段を導入するであろうし、これらの存在体は、熾天使の輸送により自らの継続する生活のために用意された新世界へ運び去られるであろう。人類の進化は、空間世界で一旦開始されると、その惑星の物理的生存の如何にかかわらず全く単独で進行しなければならないが、1名の惑星アダームが、またはハヴァーが、進化の時代に自らの選んだ世界を去るということは別に意図されてはいない。

51:2.4 (582.4) 物質の息子と娘は、惑星の目的地到着に際し、生命運搬者の指示に基づき再物質化される。この全工程は、ユランチア時間の10日から28日間かかる。熾天使の微睡みの無意識状態は、この再構築の全期間にわたって

続く。これらの物質の息子と娘は、物理的有機体の再組み立てが完成されると、ちょうどジェルーセムにおいて非物質化を受ける前のように、事実上、自分達の新しい家に、そして新しい世界に立っている。

3. アダーム系の使命

51:3.1 (582.5) 生息界において物質の息子と娘は、さっそく自身の子供らに補助され、自身の家を園に建てる。通常、園の用地は惑星王子により選択されてきており、有体の部下は、準備作業の大半をより高度の人種の型の多くのものの助けをかりてする。

51:3.2 (583.1) これらのエデンの園は、星座首都であるエデンチアに敬意を表し、またいと高きものの父の本部世界の植物の壮大さを模範としている理由からそう命名されている。通常、そのような園の家は、人目につかない区域や亜熱帯に位置する。それらは、平均的世界の素晴らしい創造である。あなたは、ユランチアの中止になっているそのような仕事の開発についての断片的報告に基づくのでは、これらの美しい文化の中心地について何も判じ得ない。

51:3.3 (583.2) 惑星のアダームとハヴァーは、潜在的には、人類への物理的恩恵の最大限の贈り物である。取り込まれたそのような１対の主要な働きは、時間の子供を増やし向上させることである。しかし、園の人々と世界の人々の間には、直接的異種交配はない。何世代もの間、アダームとハヴァーは、自身の系列の強い人種を増やす一方、進化する人間からは、生物学上、隔離されたままでいる。これが、生息界の紫色人種の源である。

51:3.4 (583.3) 惑星王子とその部下は、人種向上のための計画を準備され、アダームとハヴァーが実行する。そして、これが、あなたの物質の息子とその仲間が、ユランチアに到着した際に多大な不利な立場に置かれた点である。カリガスティアは、アダーム系任務に対し、狡猾で、しかも功を奏する反対をした。そして、ユランチアのメルキゼデクの受信者らは、反抗的な惑星王子の臨場に内在する惑星の危険に関し、アダームとハヴァーの両者に正しく警告しておいたにもかかわらず、この大反逆者は、奸知にたけた計略により、エデンの１対の裏をかき、あなたの世界の目に見える支配者としてのそれらの信託統治の契約違反へと二人を罠にかけた。反逆の惑星王子

は、あなたのアダームとハヴァーを危うくすることには成功したが、ルーキフェレーンスの反逆への巻き込みは未遂に終わった。

51:3.5 (583.4) 惑星の助手である天使の第5系列は、世界冒険における惑星アダーム系に常に同伴し、アダーム系の任務に配置される。初期の職務部隊は、通常、およそ10万名である。ユランチアのアダームとハヴァーの仕事が、時期尚早に開始されたとき、つまり、定められた計画から逸れたとき、不届きな行為に関し彼らに諌言したのは園の声の中の1名の熾天使であった。この出来事についてのあなたの物語は、あなたの惑星の伝統が、超自然であるものすべてを主なる神に帰する傾向にある風習をよく例証している。これがために、ユランチア人は、父のすべての仲間と部下の言葉と行為が、一般的に父のせいであると考えられたので宇宙なる父の本質に関し、しばしば混乱するようになった。アダームとハヴァーの場合、園の天使は、そのとき任務についていた惑星の助手の長以外の何者でもなかった。この熾天使ソロニアは、神性の計画の不成功を宣言し、メルキゼデク系受信者のユランチアへの復帰を要求した。

51:3.6 (583.5) 第二次中間被創造者は、アダーム派遣団に固有である。惑星王子の有体の部下と同様、物質の息子と娘の子孫は2系列：有体の子供と中間被創造者の二次系列に属する。物質ではあるが通常目に見えない惑星のこれらの活動者は、文明の進歩へとよく貢献し、また社会的発展と精霊的進歩の転覆を図るかもしれない反抗的少数の従属活動にさえよく貢献する。

51:3.7 (583.6) 二次中間者は、惑星王子の到着時代近くから始まる第一系列と混同されてはならない。ユランチアでは、これらの早期の中間被創造者の大部分が、カリガスティアと反逆に入り、五旬節以来、拘禁されている。惑星の行政に忠誠でなかったアダーム系集団の多くのものが、同様に拘禁されている。

51:3.8 (584.1) 忠誠な第一系列と第二系列次の中間者は、五旬節の日、自発の結合を達成し、以来ずっと1単位体として世界業務において機能してきた。彼らは、2集団から交互に選ばれる忠誠な中間者の指導力の下に働く。

51:3.9 (584.2) あなたの世界には、息子の4系列が訪れてきた。惑星王子のカリガスティア、神の物質の息子のアダーム

とハヴァー、アブラハムの時代の「シャレイムの賢人」メルキゼデクのマキヴェンタ、そして、楽園の贈与の息子として来たキリスト・ミカエル。ネバドン宇宙の最高支配者であるミカエルが、忠誠で効率的な惑星王子と熱心で上首尾の物質の息子に、贈与の息子の一生の仕事と任務を充実させるために多くのことができたであろう両者に、喜んであなたの世界に迎えられていたならば、いかほどまでに効果的で美しかったことであろうか。だが、すべての世界が、ユランチア同様それほどまでに不幸であったわけではなく、惑星アダームの任務もつねに非常に困難でも危険でもなかった。彼らは、成功しているとき、偉大な民族の発展に貢献し、そのような世界が光と生命に落ち着く時代へと惑星業務の目に見える首脳として続けていく。

4. 進化する6人種

51:4.1 (584.3) 生息界の初期の優勢人種は、赤色人種であり、通常、人間の初達段階に最初に達するものである。赤色人種は、惑星の先輩人種ではあるが、人間出現時代においては次にくる有色民族が、非常に早く出現し始める。

51:4.2 (584.4) より初期の人種は、後の人種よりいくらか優れている。赤色人種は、藍色—黒色—人種のはるかに上に立つ。生命運搬者は、初期の、または赤色人種に対する生活エネルギーの完全なる贈与を授け、しかも人間の明確な1集団の続いておこる進化の各顕現は、最初の授与を犠牲にした変化を示している。ユランチアにおいては予期せぬ巨大性の傾向が、緑色民族と橙色民族の間に現れたとはいえ、人間の身長ですら赤色人種から藍色人種では低下する傾向にある。

51:4.3 (584.5) 進化の6人種すべてのいる世界における優勢民族は、1番目、3番目、5番目の—赤色、黄色、青色人種である。その結果、進化の人種は、知的成長と精霊的発達能力において、2番目、4番目、6番目に対し交互に、やや少な目に授けられている。これらの二次的人種は、ある種の世界においては見当たらない民族である。それらは、他の多くの世界においては絶滅したものである。混合された「白色人種」に存続することを除いては、優れた青色人種をそれほどまでに大きく失ったということは、ユランチアの不幸である。橙色と緑色の血統の損失は、それほど重大な関心事ではない。

51:4.4 (584.6) 有色の6人種—または3人種—は、赤色人種の本来の資性を低下させているようであるが、人間の型におけるある種の非常に望ましい変化を供給し、また、さまざまの人間の可能性の別の方法では達成できない表現を提供する。これらの変更は、もしそれらが取り込まれたアダーム系か紫色人種によってその後向上されるとすれば、全体としては人類の進歩に有益である。合併についてのこの通常の計画は、ユランチアにおいては広く実行されなかったし、また人種進化の計画実行のこの失敗は、これらの民族の生息界における状態に関するあなたの世界の初期の人種の残り、面影、の観測でのあなたの理解を不可能にする。

51:4.5 (585.1) 人種の進化の初期における赤色人種、黄色人種、および青色人種には軽度の雑交の傾向がある。橙色人種、緑色人種、藍色人種にも同様の混合傾向がある。

51:4.6 (585.2) 通常、より遅れている人間は、より進んでいる人種により労働者として使われる。これは、初期の時代における惑星での奴隷制度の起源を説明する。橙色人種は、通常赤色人に抑えられており、使用人の身分へと落

とされる—時として滅ぼされる。黄色人種と赤色人種は、しばしば親しく交わるが、いつもではない。黄色人種は、通常緑色人種を奴隷にするが、青色人種は、藍色人種を征服する。原始人のこれらの人種は、ユランチア人が、牛馬の売買について考えないのと同様に、強制労働における遅れた仲間の奉仕の利用について考えてはいない。

51:4.7 (585.3) 精神薄弱者と社会的犯罪者は、しばしば非自発的労働をいまだに強制されてはいるものの、非自発的隷属は、ほとんどの正常世界において惑星王子の配剤時代を乗り切りはしない。しかし、すべての標準的球体では、この種の原始の奴隷制度は、取り込まれた紫色、またはアダーム系人種の到着直後に廃止される。

51:4.8 (585.4) これらの進化の6人種は、アダーム系改善者の子孫との混交、により混合、混成され、高揚されるよう運命づけられている。しかし劣者と不適格者は、これらの民族が混合される以前におおむね排除される。惑星王子と物質の息子は、他の適当な惑星当局と共に、再生血統への適性を判断する。ユランチアにおけるそのような基

本予定を実行する困難は、あなたの世界の人種の個人の生物上の適性、あるいは不適性を伝える有能な裁判官の不在にある。この障害にもかかわらず、あなたは、より著しく不適性で欠陥があり、堕落しかつ非社交的である血統の生物上の村八分に同意しなければならないようである。

5. 人種的混交—アダーム系血統の贈与

51:5.1 (585.5) 惑星アダームと惑星ハヴァーの生息界到着に際し、それらは、知力ある存在体の人種に改良をもたらす最良の方法に関し上司の完全な指導を受けた。手順についての計画は一定ではない。多くは、務めを果たす二人の判断に任せられ、誤りは、特にユランチアのような無秩序で謀反の世界においては珍しくない。

51:5.2 (585.6) 通常、紫色民族は、自らの集団が100万以上になるまでは惑星原住者との混交を始めない。しかし、そうこうしているうちにも、惑星王子の部下は、神の子らが、まるで人類と1つになるために下りてきたと宣言する。人々は、優れた人種的血統に属するとエデンの園に進むことを許され、そこで資格を得た者達が新しい、混

合された人類系列の進化の父母としてアダームの息子と娘に選ばれると発表されるその日をしきりと楽しみにしている。

51:5.3 (585.7) 惑星のアダームとハヴァーは、正常世界において決して進化する人種とは性的結合しない。生物改善のこの仕事は、アダーム系子孫の任務である。しかしこれらのアダーム系は、人種間には出て行かない。王子の部下は、アダーム系子孫との自発的性的結合のために優れた男女をエデンの園に連れて来る。そして、ほとんどの世界においては、園の息子や娘との性的結合候補者として選ばれることを最高の名誉とみなされる。

51:5.4 (586.1) 人種戦争と他の部族闘争は、初めて減少し、いっぽう世界の人種は、園への入園資格と認識を得るためにますます努力をする。あなたは、いかにしてこの競争的闘争が、標準的惑星に全活動の中心を占めるにいたるかについてせいぜい実に貧弱な考えしか持つことができない。人種改良のこの計画全体は、ユランチアにおいては早くに壊れている。

51:5.5 (586.2) 紫色人種は、一夫一婦主義の民族であり、またアダーム系の息子と娘と結合するすべての進化する男性、あるいは女性は他の仲間を取らず、単一の性的結合を自己の子供に教えることを誓う。それぞれの結合の子供らは、惑星王子の学校において教育され訓練されており、次には、進化する親の人種に行き、そこで優れた人間の選択された集団内での結婚が許される。

51:5.6 (586.3) 物質の息子のこの血統が、世界の進化する人種に加えられるとき、発展的進歩の新しくより素晴らしい時代が開始される。取り入れられた能力と超進化の特色であるこの生殖力の流出に続き、文明と人種の発展における急速な一連の進歩が続く。10万年間に、100万年の前の苦闘におけるよりもはるかな進歩が見られる。あなたの世界では、定められた計画の失敗に直面してさえ、アダームの生命原形質の民族への贈り物以来、大きな進歩があった。

51:5.7 (586.4) しかし、惑星のエデンの園の純系の子らが、自身を進化する人種の優れた構成員に贈与し、その結果、人類の生物上の水準が向上できる一方で、ユランチアの

より高度の人間の血統にとっては下級の人種との性的結合は、有益とはならないであろう。そのような分別のない手段はあなたの世界の文明すべてを危険にさらすであろう。アダーム系の方法により人種調和に達成しなかったので、あなたは今、他の、しかも主に人間の適合と制御の方法によって人種改良にかかわる惑星問題を解決しなければならない。

6. エーデン体制

51:6.1 (586.5) エ-デンの園は、生息界の大半にずば抜けた文化的中心として残存し、時代時代に、惑星上の行為、運営、と慣用の社会的模範として機能し続ける。紫色民族が比較的、互いに、隔離されている初期においてさえ、彼らの学校は、世界人種の中から適した候補を受け入れており、一方、園の産業開発は、通商の新経路を開く。このようにして、アダーム系とハヴァー系とその子孫は、文化の突然の広がりと、自身の世界の進化的人種の急速な飛躍的な向上に貢献するのである。これらの関係のすべてが、進化する人種とアダームの息子達との混交により増大され、封じられている。生物の状態の即座の向上をもたらし、知的可能性、潜在性を速め、精霊的感

受性を増進し、進化する人種とアダームの息子達との混交により増大され、そして、封がされる。

51:6.2 (586.6) 標準的世界における紫色人種の園の本部は、惑星王子の本部都市と共に世界文化の2番目の中心地となり、文明発展ための模範を示す。何世紀ものあいだ、惑星王子の都市本部の学校とアダームとハヴァーの園の学校は、同時代に存在する。それらは、通常、それほど離れてはおらず、調和的協力で共に働いている。

51:6.3 (587.1) ３万７千年間間断なく機能してきた偉大な惑星の文化の大学が、文明世界の中心が、レヴァント地方のどこかにあったならば、それがあなたの世界では何を意味するかということを考えてみなさい。そして、その伝統が、５０万年の統合的進化の影響のもつ蓄積力を揮う別の、より古い天の聖職活動本部が、あまり遠方に位置していなかったならば、そのような古代の中心でさえ道徳的権威が、いかに強化されていたであろうかと再度、止まって考えなさい。エデンの理想をついには一つの世界全体に広げることは、慣例なのである。

51:6.4 (587.2) 惑星王子の学校は、主に哲学、宗教、倫理、およびより高度の知的かつ芸術的業績に関係がある。アダームとハヴァーの園の学校は、通常、実用的技術、基本的な知的訓練、社会的文化、経済開発、貿易関係、物的効率、および民政に向けられる。これらの世界の中心地は、やがては合併されるが、この実際の提携は、時として最初の権威の息子の時代まで起こらない。

51:6.5 (587.3) 惑星のアダームとハヴァーの継続的存在は、紫色人種の純系の母体と共に、無視できない伝統の力と、合わせて１世界の文明に作用するようにエデン文化へのその成長の安定性を与える。我々は、これらの不滅の物質の息子と娘に、永遠の創造者と最も低い有限の時間の人格の間のほとんど無限の湾に橋渡しをし、人に神を接続する最後で不可欠の輪に遭遇する。ここには、物理的かつ物質的である高い起源の存在体がおり、ユランチアの人間のような性をもつ創造物さえいる。物質の息子と娘は、精霊存在体の下級系列のすべてを見ることができるので、存在体の目には見えない惑星王子を見、また領域の人間に惑星王子について説明することができる。彼

らは、可視でもあり不可視でもある惑星王子とその全体の部下をありありと心に描く。

51:6.6 (587.4) この同じ物質の息子と娘は、何世紀もの経過とともに人類との子孫の混交を経て、人類の共通の先祖として、進化の人種の今は混合された子孫の共通の両親として受け入れられるようになった。生息界から始める人間が、7名の父を認識する経験を持つことが意図されている。

51:6.7 (587.5) 1.生物の父—生身の父

51:6.8 (587.6) 2. 領域の父—惑星アダーム

51:6.9 (587.7) 3. 球体の父—体制君主

51:6.10 (587.8) 4. いと高きものである父—星座の父

51:6.11 (587.9) 5. 宇宙の父—創造者たる息子と局部創造の最高支配者

51:6.12 (587.10) 6. 超たる父—超宇宙を治める日の老いたるもの

51:6.13 (587.11) 7. 精霊の父、あるいはハヴォーナの父--楽園に住まい、宇宙の中の宇宙に生息する下級創造物の心の中に生きて働くために自分の精霊を贈与する宇宙なる父。

7. 連合管理

51:7.1 (587.12) 楽園のアヴォナルの息子は、訴訟のために折に触れ生息界に来るが、権威ある任務で到着する最初のアヴォナルは、時間と空間の進化する世界の第4の配剤時代を開始する。この権威の息子は、一般に受け入れられる幾つかの惑星には1時代の間留まる。その結果、惑星は、3名の息子: 惑星王子、物質の息子、権威の息子の共同支配下に繁栄する。後者2名は、領域の全住民には可視。

51:7.2 (588.1) 最初の権威の息子は、正常な進化の世界におけるその任務完遂前に、惑星王子と物質の息子の教育上と管理上の仕事の統一を達成してきた。惑星の二元的な指揮のこの合併は、世界運営の新たで有効な秩序をもたらす。権威の息子の退職の際、惑星アダームは、球体の外向きへの指導を担う。物質の息子と娘は、こうして光と生命の時代における世界の定着まで惑星の管理者として

共同で務める。するとすぐ、惑星王子は、惑星君主の地位に登用される。アダームとハヴァーは、高度な発展のこの時代に賛美された領域の連合首相と呼べれるかもしれないものになる。

51:7.3 (588.2) 発展世界の新しくて統合された首都が確立されるやいなや、有能な下位の管理者が、できるだけ早く相応に訓練され、副首都が、遠隔の陸地に、そして異なる民族の中に設立される。配剤時代の別の息子の到着前に、これらの50から100の副都心が組織されてしまうことであろう。

51:7.4 (588.3) 惑星王子とその部下は、依然として精霊的、哲学的な活動の領域の発展を助ける。アダームとハヴァーは、領域の物理的、科学的、経済状態に特別の注意を払う。両集団は、等しく芸術、社会的関係、および知的業績の促進に全力を注ぐ。

51:7.5 (588.4) 惑星活動の立派な管理は、世界情勢の第5の配剤時代開始までに達成された。そのようなよく管理された球体の人間存在は、実に刺激的、かつ有益である。また、ユランチア人は、もしそのような惑星における人生

を観測できさえしたならば、すぐに自分達の世界が悪を擁し、反逆への参加を経て失ってしまったそれらの価値を正く認識したことであろうに。

51:7.6 (588.5) [予備軍団の第二ラノナンデク系の息子による提示]

論文 52
人間の惑星新紀元

52:0.1 (589.1) 進化の惑星上の生活の開始から光と生命の時代のその最終開花時代にかけ、世界の行動舞台には少なくとも人間生活の７期の時代がある。これらの連続する時代は、神性の息子たちの惑星への使命によって決定され、これらの時代は、１平均的生息界に次の順序で現われる。

52:0.2 (589.2) 1. 惑星王子到来前の人間

52:0.3 (589.3) 2. 後惑星王子到来後の人間

52:0.4 (589.4) 3. アダ―ム到来後の人間

52:0.5 (589.5) 4. 権威ある息子到来後の人間

52:0.6 (589.6) 5. 後与の息子到来後の人間

52:0.7 (589.7) 6. 教師たる息子到来後の人間

52:0.8 (589.8) 7. 光と生命の時代

52:0.9 (589.9) 空間世界は、それが生命にとり物理的に適当になり次第、生命運搬者名簿に登録され、時が来ればこれらの息子たちは、生命開始を目的としてこのような惑星に緊急派遣される。人間の生命開始から登場への全期間は　、前人間時代であり、この物語で検討される人間の連続的時代に先んじている。

1．原始人

52:1.1 (589.3) 人間登場と人間の動物水準からの脱出時代—創造者崇拝を決めることができるとき—から惑星王子の到着まで、脱出意志をもつ必滅の被創造者は、原始人と呼ばれる。原始人の基本的な６つの型、あるいは人種があり、これらの初期の民族は、赤色人種に始まり、続いてスペクトルの色順に現われる。この初期の生活進化で費やされる時間の長さは、ユランチア時間の１５万年から百万年以上に及び異なる世界において大いに変化する。

52:1.2 (589.4) 進化する有色人種—赤色人種、橙色人種、黄色人種、緑色人種、青色人種、藍色人種—は、原始人が単純な言語を発展させ、独創的想像力を働かせ始めるころに出現し始める。この時代までには人間は、直立状態に十分に慣れている。

52:1.3 (589.5) 原始人は、力のある狩人であり、荒々しい戦士である。この時代の掟は、身体上の適者生残である。これらの時代の政府は、完全に部族政府である。多くの世界における初期の人種の苦闘の間、いくつかの進化の人種は、ユランチアに起きたように壊滅する。生き残る者たちは、通常、後に移入された紫色人種、すなわちアダーム民族とその後混合する。

52:1.4 (589.6) 原始のこの時代は、後の文明に照らし合わせてみるとき、長く、暗く、血まみれの章である。密林の倫理と原生林の道徳は、啓示宗教やより高度の精霊的発展後の配剤時代の標準のものとは調和してはいない。通常の、しかも非実験的世界におけるこの時代は、ユランチアのこの時代を特徴づけた長期の、異常に残忍な争いとは非常に異なっている。自分の最初の世界の経験を切り

抜けたとき、あなたは、進化世界のこの長く痛い争いがなぜ起こるか見始めるであろうし、楽園の進路を前進するにつれ、あなたは、見たところ奇妙なこれらの行動の賢明さをますます理解するであろう。しかし、人間出現の初期のすべての興亡にもかかわらず、原始人の作業は、時間と空間の進化世界の年代史での素晴らしく、英雄的でさえある１章である。

52:1.5 (590.1) 初期の進化の人間は、生彩を放つ生きものではない。一般に、これらの原始の人間は、洞穴居住者あるいは断崖居住民である。大樹に、上に、粗雑な小屋を建てもする。原始の人間が非常に優れた知力を獲得する前に、時折、惑星にはより大型の動物がはびこる。だが、進化する人間は、この時代の初期に火をおこし維持することを身につけ、また独創的な想像力の増大と道具の改良とともに、やがてより大きい、より扱いにくい動物を征服する。初期の人種は、同様により大きい飛ぶ動物の広範な使用をする。これらの巨大な鳥は、８百キロメートル以上の無着陸飛行の間、標準体格の１人あるいは２人の人間の運搬ができる。いくつかの惑星におけるこれらの鳥は、しばしば領域の言語の多くの言葉を話すこと

ができ優れた知力を有していたので大いに役立つ。これらの鳥は、この上なく知的で、非常に従順で、信じられないほどに情愛が深い。このような乗客鳥は、ユランチアにおいてはとうに絶滅してしまったが、あなたの初期の先祖は、それらの勤労を享受した。

52:1.6 (590.2) 人間の倫理上の判断、つまり道徳的な意志の習得は、通常、早期の言語の登場と同時に起こる。人間の水準を達成するや否や、人間の意志のこの発現後、これらの生きものは、神性調整者の一時的内住を受容するようになり、死に際しては多くの者が、その後の復活と精霊融合のために大天使により生存者として正当に選ばれ、確認される。大天使は、常に惑星王子に同伴し、また領域の配剤時代の裁定は、王子の到着と同時である。

52:1.7 (590.3) 思考調整者内住のすべての人間は、礼拝者としての可能性がある。それらは、「真の光によって照らされ」てきたし、神性との相互連絡を求める能力を有する。にもかかわらず、原始人の初期の、あるいは生物的宗教は、主として無知な畏敬の念と部族の迷信に結びつけられる動物がもつ恐れの持続である。ユランチア人種

のなかの迷信存続は、あなたの進化的発達にはほとんど補足はなく、物質的進歩における他の点では素晴らしいあなたの業績にも適さない。が、この初期の恐れの宗教は、原始の創造物の激しやすい気性を抑え込みにおいては、非常に貴重な役目を果たす。それは、文明の前触れと惑星の王子とその活動者によって次に明らかにされた宗教の種を植えるための土壌である。

52:1.8 (590.4) 個人は、相対的にはほとんどこのように意志というものは進化しなかったものの、意志は、機能しているという生命運搬者の報告に基づき、人間が直立姿勢を身につけるその時から10万年以内には通常、体制統治者により派遣された惑星の王子が到着する。原始の人間は、通常惑星の王子とその目に見える部下を歓迎する。実際、もし原始の人間が抑制されていないならば、しばしば崇拝の念に近い畏怖と敬意をもってそれらを見る。

2．惑星王子到来後の人間

52:2.1 (591.1) 惑星の王子の到着とともに新配剤時代が、始まる。地球に政府が登場し、進歩した部族の新紀元になる。社会的大進歩が、この体制の数千年間に遂げられ

る。人間は、正常な状況下におけるこの時代に高度の文明に達する。それらは、ユランチア人種がそうしたほどには長いあいだ野蛮行為で苦闘しない。だが、あなたは、標準的惑星のそのような体制についての考えをわずかしか、あるいは全然持てないほどに生息界における生活が反乱により非常に変わるのである。

52:2.2 (591.2) この配剤時代の平均的期間は、あるものは長く、あるものは短くおおよそ50万年である。惑星は、この時代に体制回路内に確立され、熾天使の助手と天の他の助手の割り当て数が、その行政に配属される。思考調整者の数は増加し、熾天使の後見者は人間の監督の体制を拡充する。

52:2.3 (591.3) 惑星王子が、未開発世界に到着するとき、恐れと無知からくる進化した宗教が普及する。王子とその部下は、高度の真理と宇宙組織の最初の顕示をする。明らかにされた宗教の最初の提示は、非常に単純であり、通常、地方体制の問題に関係がある。宗教は、惑星王子の到着より前の全くの進化過程である。宗教は、その後、進化的発展ばかりでなく、累進的顕示により進歩する。

各配剤時代が、人間の各時代が、精霊的真実と宗教倫理の拡大された提示を受け取る。世界の住民の宗教受容力における進化は、主として精神的進歩の速度と宗教的啓示の程度を決定する。

52:2.4 (591.4) この配剤時代は、精神的な夜明けを目撃し、また異なる人種とさまざまの種族には、宗教的かつ哲学的思考における専門的な体制を開発する傾向がある。これらの人種の宗教すべてには、一様に２つの脈絡：原始の人間の初期の不安と惑星王子後の顕示がある。ユランチア人は、いくつかの点から完全に惑星進化のこの段階から現れたようには思われない。この研究を追求するにつれ、あなたは、あなたの世界が発展的進歩と開発の平均的進路からいかほど遠くに逸れるかをいっそう明らかに認識するであろう。

52:2.5 (591.5) しかし、惑星の王子は、「平和の王子」ではない。その頻度と過酷さは減少しつつあるとはいえ、人種の争いと部族戦争は、この配剤時代へと継続していく。これは、大いなる人種拡散の年代であり、ついには激しい愛国主義の時期に至る。色は、部族の、国家の集合体

の基礎であり、また異なる人種は、しばしば個々の言語を発展させる。膨張しつつある人間の各集団は、孤立を求める傾向にある。この分離は、多くの言語の存在を奨励している。容赦のない戦争は、いくつかの人種統一の前に、時として民族全体の抹消をもたらす。橙色人種と緑色人種は、特にこのような絶滅を被りやすい。

52:2.6 (591.6) 平均的世界における国民生活は、王子の支配の後半に部族組織に取って代わるか、あるいは、どちらかと言えば既存部族の分類に重ね合わされるようになる。だが、王子の時代の素晴らしい社会的達成は、家庭生活の登場である。人間関係は、これまでは主に部族であった。今、家庭が、具体化し始める。

52:2.7 (591.7) これは、性的平等の実現の配剤時代である。若干の惑星において男性は、女性を支配するかもしれない。他の惑星上ではその逆が、普及しているかもしれない。性の完全な平等が、家庭生活の理想のより完全な実現への下準備であり、この時代、通常の世界は、性の完全な平等を確立する。これは、家庭の黄金時代の夜明け

である。部族統治についての考え方は、徐々に国民生活と家庭生活の二重の概念にとって代わる。

52:2.8 (592.1) この時代、農業が登場する。家族についての考えの発展は、流浪し、不安定である狩猟者の生活には不適合である。次第に、定住の実践と土地耕作が、定着し始める。動物の家畜化と家庭生活の技術の開発は、速く進む。生物進化の頂上に到達するや否や、高水準の文明が達成されたが、機械的秩序の発展はほとんどない。発明は、次の時代の特徴である。

52:2.9 (592.2) 人種は浄化され、この時代終了前には高度の肉体の完全性と知力の状態に引き上げられる。通常世界の初期の発展は、劣性の相応的減少で、より高等の型の人間の増加の促進計画に大いに助けられる。そして、それは、これらの型をこのように区別できなかったあなたの早期の民族の失敗が、現代のユランチア人種の中の欠陥をもち、堕落した非常に多くの個人の存在を説明する。

52:2.10 (592.3) 王子の時代の大きな業績は、知能障害があり、社会に不適合である個人の増加に関わるこの制限であ

る。ほとんどの世界は、２番目の息子たち、つまりアダーム系到着のずっと以前、人種浄化の任務に、ユランチア民族がまだ真剣に着手さえしていない何かに、取り掛かるのである。

52:2.11 (592.4) 人種改良のこの問題は、人間進化のこの初期に着手されたそのような大規模な事業ではない。その前の部族闘争と人種生き残りの厳しい争奪期間に、異常で不完全な血統の大部分が、取り除かれた。原始の、戦争中の部族社会組織における低能者の生残の機会は、まずない。進化する人間に属する絶望的に欠陥のある種族を育成し、守り、永続させるということは、部分的に完成された文明社会の誤った感情である。

52:2.12 (592.5) それは、低下した人間、すなわち救いようがないほどに異常で、劣る人間への無駄な同情を向けることは、優しさでもなければ、利他主義でもない。最も標準的かつ進化の世界においてさえ、進化する人類の中の社会的に適さない者や道徳的に堕落した血統を永続させることなく利他的感情と非利己的な人間の活動のそれらすべての気高い特徴の完全な行使に備えるために個人や数

多くの社会集団の間での差し支えない、かなりの、相違が存在する。まだ取り返しがつかないほどに道義的遺産を失なってはおらず、精神的生得権を永久には破壊していない不幸で貧しい個人のための寛容の行使や利他主義機能の機会は、豊富にある。

3．アダーム到来後の人間

52:3.1 (592.6) 進化の生活の最初の勢いが、その生物上の進路を走らせたとき、つまり人間が、動物進化の先端に届いたとき、息子の２番目の系列が到着し、恩恵と聖職活動の２番目の配剤時代が開始される。これは、進化世界すべてにおいて確かである。これ以上はない進化生活の最高水準が達成されたとき、原始の人間が生物の階級で可能な限り上りつめたとき、物質の息子と娘は、常に体制統治者により派遣され、惑星に現われる。

52:3.2 (593.1) 思考調整者が、アダーム系到来後の人間にますます贈与され、また、これらの人間は、絶えず次の調整者融合のために能力を増大している。アダーム系は、下降する息子として機能する一方で調整者を有してはいないが、惑星の子孫は、—直接の、また混合の—やが

て、神秘訓戒者の受け入れのために正当な候補者になる。惑星は、後アダーム系時代の終了までには天の活動のその定数を占有している。ただ融合調整者だけが、まだ広く一般には贈与されてはいない。

52:3.3 (593.2) アダーム系の政治体制の主要目的は、進化する人間の狩人と牧夫の文明から農家と園芸家の文明段階への移行完了を促し、後に文明への都市と産業の付随物の補充がなされるようにすることである。生物改善者のこの１万年の配剤時代は、驚くべき転換をもたらすには十分である。惑星の王子と物質の息子の２万５千年にわたる共同の賢明さによるこのような行政は、通常、権威ある息子の到来にむけて球体を発達させる。

52:3.4 (593.3) 通常この時代は、不適格者の除去を、人種の血統のそれ以上の清浄化の完成を見る。通常世界の欠陥性の狂暴な傾向は、繁殖している領域の種族からもう少しのところで排除される。

52:3.5 (593.4) アダーム系の子孫は、進化する人種の劣る血統とは決して混交しない。また、惑星のアダーム系あるいはハヴァー系が個人的に進化の民族と交配することは、

神の計画ではない。この人種改良企画は各々の子孫の仕事である。だが、物質の息子と娘の子らは、何世代もの間、人種的併合活動の開始以前に動員される。

52:3.6 (593.5) 人種へのアダ―ム系の生命原形質の贈り物の結果は、即座の知力向上と精霊的進歩の加速となる。通常、多少の身体の改良もある。平均的世界における後アダ―ムの配剤時代は、大発明、エネルギー管理、機械開発の時代である。これは、多様な製造と自然力の制御の登場の時代である。探検の黄金時代であり惑星の最後の服従である。世界の物質的進歩の多くが、物理科学発展開始のこの時期に、つまりちょうどユランチアが今経験しているような時代に起こる。あなたの世界は、完全な１配剤時代であり、そして平均的惑星計画よりも遅れている。

52:3.7 (593.6) 人種は、標準的惑星においてはアダ―ムの配剤時代の終わりまでにはほとんど、実質的に、混合され、それゆえ、「神はすべての人々を１人から造り出し」、神の息子は「すべての人民を１色にした」と、本当に宣言することができる。このような混合された人種の色

は、ややオリーブの色調のすみれ色、球体の人種の「白」である。

52:3.8 (593.7) 原始人は、大半が肉食である。物質の息子と娘たちは肉を食べないが、その子孫の集団全体は、時々非肉食者のままでいるものの、数世代の内には通常自然に雑食段階に向かっていく。後アダーム人種のこの二重の起源は、そのような混合された人種が、なぜ草食動物と肉食動物の２集団に属する人体構造の痕跡を示すかを説明している。

52:3.9 (593.8) 人種混交の１万年以内のそうしてできた血統は、人体構造の混合のさまざまな度合いを示しており、いくつかの血統は、非肉食の先祖の特徴をもち、他の者たちは、進化する肉食性先祖の認識可能な特性と身体的特徴を示している。これらの世界の人種の大多数は、まもなく動物と植物の両世界から広範囲の食物を常食とし、雑食性になる。

52:3.10 (594.1) 後アダーム時代は、国際主義的配剤時代である。人種混合の任務の完成近くになると、愛国心は弱まり、人間の同胞関係が、本当に実現し始める。代議政体

は、君主制あるいは父権制に代わり始めている。教育制度は、世界規模になり、人種の言語は、次第に紫色の人々の言語にとって代わる。世界平和と協力は、人種がかなりよく混合されるまで、また公共の言語を話すまでは、めったに達成されることはない。

52:3.11 (594.2) 後アダ—ム時代の最後の数世紀間、芸術、音楽、文学における新たな趣向が、展開された。またこの世界規模の目覚めは、権威ある息子の登場の合図である。この時代の最高の発展は、知性の現実、すなわち真の哲学への普遍的な興味である。宗教は、それほど国家主義ではなくなり、ますます惑星の問題となる。真実の新しい顕示が、これらの時代を特徴づけ、星座のいと高きものが、人間の問題を司るようになる。真実は、星座の行政にまで明らかにされる。

52:3.12 (594.3) 倫理上の大きな進歩がこの時代を特徴づける。人間の兄弟愛が、その社会目標である。世界的な平和—人種対立と国家反目の停止—は、息子の第3系列、つまり権威ある息子の到来に向けての惑星円熟の指標である。

４．権威の息子到来後の人間

52:4.1 (594.4) 通常の、忠実的惑星におけるこの時代は、混合の、また生物学上適した人種とともに始まる。人種あるいは肌の色による問題はない。文字通りにすべての国と人種は、１血統、1人、からきている。人類の同胞関係は栄え、国々は平和と平穏のうちに地球に住むことを学んでいる。このような世界が、素晴らしい、頂点にいたる知的開発の寸前にある。

52:4.2 (594.5) 進化の世界がこうして権威ある時代への準備ができるとき、アヴォナルの息子の高系列の１名が、任務をもって到来する。惑星王子と物質の息子は、地方宇宙の起源である。権威の息子は、楽園出身である。

52:4.3 (594.6) 楽園のアヴォナル系が、司法行動に関して人間の球体に来るときは、唯一配剤裁定者としてであり、決して肉体化されてはいない。しかし行政任務でくるときは、少なくとも最初の任務においては、必ず肉体化されている。誕生を経験はしないが、領域の死も経験しない。ある特定の惑星において支配者として留まっているそのような場合、それらは、何世代もの間生き続けるか

もしれない。その任務を終える際、それらは、惑星の生活を引き渡し、神性の息子の以前の身分に戻る。

52:4.4 (594.7) それぞれの新配剤時代は、啓示宗教の地平線を延長し、権威ある息子たちは、地方宇宙とそのすべての支流の問題を描くための真実の顕示を延長する。

52:4.5 (594.8) 後権威ある息子の最初の訪問後、人種は、まもなくそれぞれの経済的解放をもたらす。自分の独立を維持するために必要とされる日々の仕事は、あなたの時間にして2時間半に相当する。このような倫理的な、知的な人間を開放することは、全く安全である。このような洗練された民族は、自己改善と惑星の進歩のためにいかように余暇を利用するべきかをよくわきまえている。この時代は、あまり適応しない、さほどに能力をもたない個人間の生殖制限による種族のさらなる清浄化を見る。

52:4.6 (595.1) 人種の政治的統治と社会行政は、改善し続け、この時代の終わりまでには自治は、かなりしっかりと確立されている。我々は自治により代議政体の最高の型に言及する。このような世界においては、社会的、政治的

責任を担うことに最適な指導者と支配者だけを昇進させ、名誉を与える。

52:4.7 (595.2) この新紀元の間、世界の人間の大多数は、調整者内住である。だが神性訓戒者の授与ですら、いまだに常に普遍的であるというわけではない。融合の運命をもつ調整者は、まだ全惑星の人間に与えられてはいない。意志をもつ創造物が、神秘訓戒者を選ぶ必要がまだある。

52:4.8 (595.3) この配剤終結時代、社会は、いっそう単純化された生活形式に戻り始める。進歩しつつある文明社会の複雑な性質は、その進路を走行しており、人間は、より自然に効果的に生きることを学びつつある。そしてこの傾向は、続く時代ごとに増大する。これは、芸術、音楽、そして高等教育が開花する時代である。自然科学は、すでにその開発の絶頂に達した。この時代の終焉は、理想的な世界において宗教上の大いなる目覚めを、世界的規模の精神的啓発の豊かさを、示す。そして人種の精霊的な性質のこの大規模な喚起は、贈与の息子の到

着のため、また人間の第５新時代の開始のための合図である。

52:4.9 (595.4) 惑星は、一つの権威ある任務による1名の贈与の息子のために準備されるのではないということを多くの世界において展開する。その出来事においては、１配剤時代から他の配剤時代へと贈与の息子の贈り物にむけ惑星の準備ができるまで人種を進めるであろう次の第二の権威ある息子、さらに次の第二の権威ある息子さえいるであろう。権威ある息子たちは、第２の、そして次の任務に関して肉体化されるかもしれないし、されないかもしれない。だが、たとえいかに多くの権威ある息子たちが現われようとも—そしてそれらがそういうものとして贈与の息子の後にも来ようとも—到来各々は、１配剤時代の終わりともう１つの始まりを示す。

52:4.10 (595.5) 権威ある息子たちのこれらの配剤時代は、ユランチア時間の２万５千年から５万年にわたる。時々このような新時代は、ずっと短く、また、まれな場合は長くさえある。しかし、機が熟すにつれこれらの同じ権威あ

る息子たちの１名が、楽園の贈与の息子として生まれるであろう。

５．贈与の息子到来後の人間

52:5.1 (595.6) 生息界において知的かつ精霊的開発の一定基準が達成されると、1名の楽園の贈与の息子が、かならず到着する。通常世界における楽園の贈与の息子は、人種が知的開発と倫理上最高水準の発達に届くまでうつし身、自分自身では現われない。しかし、贈与の息子は、あなた自身の創造者たる息子でさえ、アダームの配剤時代の終わりにユランチアに現われたが、それは、空間世界の通常の順序ではない。

52:5.2 (595.7) 世界に精霊化の時期がくると、贈与の息子が到着する。ネバドンのミカエルが、あなたの人類に自分自身を贈与するためにユランチアに現われたように、創造者たる息子が、ある進化世界でのその最終贈与にむけて準備をする場合を除いては、これらの息子たちは、常にこのような権威ある系列、すなわち、あるいは、アヴォナルの系列に属している。かつて、それぞれの地方宇宙において1度、１千万近くの世界の中でただ１つの世界

が、このような贈り物を享受できる。他のすべての世界は、精霊的には、アヴォナル系の楽園の息子の贈与により前進する。

52:5.3 (595.8) 贈与の息子は、高い教育文化の世界に到着し精霊的に訓練され進歩した教えを吸収し、そしてまた贈与の任務を正当に評価する用意をしている人種に遭遇する。これは、道義的文化と精神的真実の世界的な追跡によって特徴づけられる時代である。この配剤時代の人間の熱情は、精霊的現実の透徹力であり宇宙の現実との交わりである。真実の顕示は、超宇宙を組み入れ拡大されるようになる。教育と政府の完全な新体制が、古い時代の未熟な体制に取って代わるまで成長を遂げる。生きる喜びは、新たな色合いを引き受け、生活からの反応は、音調と音色の天国のような高みに高揚される。

52:5.4 (596.1) 贈与の息子は、１世界の人種の精霊的向上のために生き、そして死ぬ。贈与の息子は、「新しい生きた道」を確立する。その生活は、人間の肉体での楽園真実の具現であり、まさしくその真実を—真実の精霊でさえ、—知ることで人間は自由になるであろう。

52:5.5 (596.2) ユランチアにおけるこの「新しい生きた道」の確立は、真実の問題である同時に事実の問題でもあった。ルーキフェレーンスの反逆中のユランチアの孤立は、死に際しての人間の直接に大邸宅世界の岸に行ける手順をしばらく保留にとなった。すべての魂は、ユランチアにおけるキリスト･ミカエルの時代以前には、配剤時代の、あるいは千年ごとの特別の復活まで眠り続けた。モーシェでさえ、堕落した惑星の王子カリガスティアの異議の申し立てにより、このような救出の正当性を疑い、特別な復活の機会まで、向こう側に行くことが許されなかった。だが、ユランチアの人間は、精霊降臨祭の日以来、再度モロンチア球体に直接に進むことができる。

52:5.6 (596.3) 贈与の息子は、復活の際、肉体の命を捧げた後の３日目に、宇宙なる父の右手に上昇し、贈与の任務引き受け、受け入れ、承諾、の確保を得て、地方宇宙の本部で創造者たる息子へと戻る。そこで贈与のアヴォナルと創造者ミカエルは、二人の合同の精霊、すなわち真実の精霊を贈与の世界に送り込む。これが、「勝利の息子の霊が世の人々に注がれる」時である。宇宙の母なる精霊もまた、真実の精霊のこの贈与に加わり、そしてそれ

に付随して思考調整者の贈与の布告を公表する。その後、道義的な責任をもつ精霊的な選択の時代に達するやいなや、その世界の意志をもつすべての標準的な心の創造物は、調整者を迎え入れるであろう。

52:5.7 (596.4) もしそのような贈与のアヴォナルが、贈与の任務後に１世界に戻るならば、「栄光で熾天使部隊とともに」来るだろうということを除いて、肉体化はしないであろう。

52:5.8 (596.5) 贈与の息子の時代は１万年から10万年に渡るかもしれない。これらのどの配剤時代にも割り当てられた任意の時間というものはない。これは、大いなる倫理上の、また精霊的な進歩の時である。人間の性格は、これらの時代の精霊的影響のもとにおびただしい変化をし、また目を見張るような発展を経験する。黄金律の実践が可能になる。イエスの教えは、実に、性格の高潔と文化増大の配剤時代とともに前贈与息子の予備訓練を受けた人間世界に適用できる。

52:5.9 (596.6) 病気と不履行の問題は、この時代に事実上解決した。堕落は、すでに主として選択的生殖により排除さ

れていた。病気は、アダーム系の血統の高抵抗力の特質を介し、また前の時代の物理科学発見の知的かつ世界規模の適用によりほとんど克服されていた。平均寿命は、この期間ユランチア時間の３百年相当をかなり上回るものである。

52:5.10 (597.1) この時代、政府の監督の緩やかな減少がある。真の自治が機能し始めており、より少な目の制限的法制が必要とされる。国家の抵抗の軍事部門は消滅しつつある。国際調和の時代は実際に到来しつつある。主に土地分配により、しかも１人種、１言語、１宗教に基づく多くの国がある。人間に関する諸事は、完全ではないが、ほぼ理想郷である。これは実に、偉大かつ輝かしい時代である！

６．ユランチアの後贈与時代

52:6.1 (597.2) 贈与の息子は、平和の王子である。贈与の息子は、「地に平和を、人々の間には善意を」という言葉とともに到着する。これは、通常世界においては世界的平和の配剤時代であり、諸国は、もう戦争を学ぶことはない。だが、このような前向きな影響は、あなたの贈与の

息子キリスト･ミカエルの到来には伴わなかった。付随しなかった。ユランチアは、普通の順序では進んでいない。あなたの世界は、惑星の隊伍からはみだしている。あなたの主人は、地上に滞在中、自分の到来が通常の平和の統治をユランチアにもたらさないであろうということを門弟に警告した。彼は、「戦争と戦争のうわさ」がたつあるであろうと、また、国が国に逆らって立ち上がるであろうと明確に伝えた。他の機会には、「私が平和を地上にもたらすために来たと思うではない。」と言った.

52:6.2 (597.3) 世界規模の人間の同胞関係についての認識は、通常の進化世界においてさえ容易な達成ではない。このような業績は、ユランチアのような混迷し秩序の乱れた惑星においては、より長い時間を必要とし、その上はるかに大きい努力を必要とする。助けのない社会の進化というものは、このような幸せな成果を精霊的に孤立した球体においてあげることはほとんどない。宗教的啓示は、ユランチアにおける同胞関係の認識に欠くことはできない。イエスは、精霊的同胞関係の即時の達成への道を示すが、あなたの世界における社会の同胞関係の認識

は、次の個人の変化の成就と惑星の適応にかなり依存する。

52:6.3 (597.4) 1．社会的兄弟関係。国際的、異人種間の社会的接触の増大と、そして旅行、通商、競技を通しての兄弟関係の交流。共通言語の発展と多言語に通じた者の増加。学生、教師、実業家、宗教哲学者の人種的、国家的交流。

52:6.4 (597.5) 2．知的な交雑受精。同胞関係は、自分本位の愚行を認識できないほどに原始的である居住者世界には不可能である。国民文学と人種文学の交換が、起こるに違いない。各人種が、全ての人種の考えに精通するようにならなくてはいけない。各国が全ての国々の国民感情を知らなくてはならない。無知は、疑惑を生むし、疑惑は、同情と愛の本質的な態度にはそぐわない。

52:6.5 (597.6) 3．倫理の目覚め。ただ倫理意識だけが、人間の不寛容の非道徳性と身内の殺しの争いの罪深さの仮面をはがすことができる。ただ道義的良心のみが、国家の羨望と人種の嫉妬の悪を非難することができる。ただ道徳

的な生きものだけが、黄金律を生きるに不可欠なその精霊的洞察をずっと探し求めるであろう。

52:6.6 (598.1) 4. 政治的賢明さ。感情面の成熟は、自制心にとり欠かせない。ただ感情面の成熟のみが、残忍な戦争の仲裁に向けての文明的裁定関する国際的手段の代用を保証するであろう。賢明な政治家達が、国家の、あるいは人種集団の利益を増進しようと努力する間にさえ、いつかは人類の福祉のために働くであろう。政治上の利己的判断力は、結局は自滅的—惑星集団の生存を保証する特質に耐えているすべての人たちには破壊的—である。

52:6.7 (598.2) 5. 精霊的洞察。人間の兄弟関係は、つまるところ、神の父性の認識に基づいている。ユランチアにおける人間の兄弟関係を理解する最速の方法は、現代の人間性の精霊的変化をもたらすことである。社会進化の自然傾向を速める唯一の方法は、上からの崇高な圧力を高め、その結果、すべての他者を理解し、また愛、する全ての人間の魂の能力を強化するとともに道義的洞察を増大する方法である。相互理解と兄弟愛は、超越的開化で

あり、人間の同胞関係の世界的認識における強大な要素である。

52:6.8 (598.3) もし、あなたが、今贈与の息子の時代後のいずれかの標準的な惑星にあなたの遅れた、混乱した世界から移住させられたならば、あなたは、伝統の天国に移されたと思うであろう。あなたは、自身が人間居住の人類の球体の通常の進化の働きを観察していたということをほとんど信じないであろう。これらの世界は、それぞれの領域の精霊の回路にあり、宇宙放送と超宇宙の反射の業務のすべての利点を受けている。

7．教師たる息子到来後の人間

52:7.1 (598.4) 平均の進化の世界に到着する次の系列の息子は、三位一体の教師たる息子、楽園の三位一体の神性の息子たちである。我々は、またしても、あなたのイェススが戻ることを約束したという点で、ユランチアがその姉妹球体から離反していることを見いだす。その約束は、イェススが確かに果たすであろうが、その再臨が、ユランチアへの権威ある息子、あるいは教師たる息子の到来より先になるか後になるかは誰も知らない。

52:7.2 (598.5) 教師たる息子は、精霊化する世界に来る。惑星の教師たる息子は、70名の主要な息子たち、12名の第二の息子たち、デナルの最高系列に属する最高度の、最も経験豊かな３名の補佐と支援を受ける。この部隊は、進化の時代から光と生命の時代への移行をもたらすに十分な期間—惑星時間の少なくとも千年、しばしばかなりの長時間—しばらく世界に留まるであろう。この任務は、生息界に奉仕活動をした全神性人格の先行する努力への三位一体の貢献である。

52:7.3 (598.6) 真実の顕示は、いま中央宇宙へと楽園へと広げられる。人種は、大いに精霊的になる。偉大な民族が進化し、偉大な時代が接近しつつある。惑星の教育、経済、行政の体制は、急進的変化を経験しつつある。新しい価値と関係が確立されつつある。天の王国は、地球に現われつつあり、神の栄光は、世界中で注がれつつある。

52:7.4 (598.7) これが、多くの人間が生きているものの中から移される配剤時代である。三位一体の教師たる息子の時代が進行するにつれ、時間の人間の精霊的忠誠は、より

いっそう普遍的になる。自然の死は、調整者がその対象との肉体での生涯において一層融合するにつれ、頻繁ではなくなる。惑星は、やがて人間上昇の主要な修正系列に分類されていく。

52:7.5 (599.1) この時代の人生は、楽しく有益である。長い進化の争いからくる退化と非社会的終焉の産物は、事実上壊滅された。寿命は、ユランチア時間の５百年に近づき、人種増加の生殖の度合いは、賢明に制御される。完全に新しい社会の１系列が到着した。人間の間にはまだ大きな相違があるが、社会状況は、社会的同胞関係と精霊的平等の理想に近く迫る。代議政体は消滅し、世界は、個人の自制心の支配下を通過しつつある。政府の機能は、主に社会的管理と経済調整の共同任務に向けられている。黄金時代は、速くやって来る。長く激しい惑星進化の努力の時間的、一時的、目標は、視界に入っている。時代の報酬は、まもなく実現されるはずである。神々の英知が、明らかにされようとしている。

52:7.6 (599.2) この時代の１世界の物理的管理は、各成人個人ごとに毎日およそ１時間を必要とする。すなわちユラン

チアの１時間相当。惑星は、宇宙問題で緊密な連絡を取り、その人々は、いまあなたが日刊新聞の最新版に示す同じ強い関心をもって最近の放送を細かく、ざっと、調べる。これらの人種は、あなたの世界の知られていない幾千もの興味深い事柄に専念している。

52:7.7 (599.3) ますます、崇高なるものへの真の惑星の忠誠が育つ。世代から世代へと、ますます多くの人種が、公正さを実践し、また慈悲を生きる者たちと一緒に列に足を踏み入れる。ゆっくりと、だが確実に世界は、神の息子たちの喜ばしい奉仕に勝ち取られつつある。神の息子たちの喜ばしい奉仕は、世界を勝ち取りつつある。物理的困難と物質的問題は、大いに解決された。惑星は、進歩した生活といっそうの安定した暮らしに向け実を結びつつある。

52:7.8 (599.4) 教師たる息子は、時おり配剤時代全体を通じてこれらの平和な世界に続けて来ることがある。進化の計画が、それがその惑星に関係するとき、順調に機能しているところを観るまでは、世界を立ち去らない。審判に関わる権威の息子は、通常、連続する自身の任務におい

て教師たる息子に同伴し、一方、別の息子は、出発時点で役割を果たし、またこれらの司法上の行為は、時空の人間の政治体制の持続を通じ時代から時代へと継続していく。

52:7.9 (599.5) 三位一体の教師たる息子の繰り返される各任務は、次々にそのような天上世界を英知、精霊性、宇宙の明りの上り続ける高みへと上げる。だがそのような球体の高潔の住民は、まだ有限であり、死を免れない。完ぺきなものは何もない。それでも、完全に近い特性は、不完全世界の働き中で、その人間住民の生活において発展している。

52:7.10 (599.6) 三位一体の教師たる息子は、何度も同じ世界に帰るかもしれない。だが遅かれ早かれ、惑星の王子は、数ある任務の中の１つの終了に関連して惑星君主の位置に引き上げられるし、また体制君主は、そのような世界の光と生命の時代への入り口、門出、を発表するために現われる。

52:7.11 (599.7) ヨハネが、「私は新しい天と新しい地を見、王子のために着飾った王女のように用意を整え、新しいエ

ルサレムが神のもとを出て、天から下りてくるのを見た。」と書いたのは、教師たる息子の最終任務の結末（少なくともそれが通常世界の時間順であろう）についてであった。

52:7.12 (600.1) 「『なぜなら、私の作る新しい天と新しい地が私の前にいつまでも続くように、あなたとあなたの子供たちも生き残る。また１つの新月から別の新月へと、１つの安息日から別の安息日へと、すべての人が私の前に礼拝に来る。』と主は仰せられる。」と書いたとき、昔の予言者が想像したのは、同じ刷新された地球、進歩した惑星の段階である。

52:7.13 (600.2) 「選ばれた種族、忠誠な祭司、聖なる国、高められた民。そして、あなたを暗闇からこの驚くべき光に招き入れてくださった方への賛美を示すべきである。」と描写したこのような時代の人間である。

52:7.14 (600.3) １惑星の特殊の自然史がどうであろうとも、領域が、完全に忠実であったり、悪で汚されたり、あるいは罪にののしられてきたかどうかの相違にかかわらず—先行する物が何であろうとも—遅かれ早かれ神の恵みと

天使の奉仕活動は、三位一体の教師たる息子の到来の日に開始されるであろう。そして、彼らの最終任務に続く自身の出発は、光と生命のこの素晴らしい時代に、を、始まるであろう。

52:7.15 (600.4) サターニアの全世界は、「しかし我々は、神の約束に従って、義の住む新しい天新しい地を待ち望んでいる。それだから、愛する者たちよ、あなたがそのようなものを探すという事実にかんがみて、しみもなく過失もなく、安らかな心で神に見いだされるように励みなさい。」と書いた人の希望で、に、加わることができる。

52:7.16 (600.5) 教師たる息子の部隊の出発は、最初の、あるいは次のいずれかの統治の終わりに、光と生命の時代の夜明け - 時間から永遠の玄関への移行の敷居 - に、を、招じ入れる、案内する。この光と生命の時代の惑星認識は、生残する人間の即座の運命と最終居住地としての天国を描写する宗教信仰に含まれる概念と同様、未来の生命についてのよりいっそうの明敏な概念を受け入れなかったユランチアの人間の最も高い期待以上のものである。

52:7.17 (600.6) [一時的にガブリエルの部下に配属された力の強い使者による後援]

論文 53
ルーキフェレーンスの反逆

53:0.1 (601.1) ルーキフェレーンスは、ネバドンの才知に長けた第一ラノナンデクの息子であった。—は、　多くの体制における働きを経験し、自分の集団の高位の相談役をし、知恵、賢明さ、効率さにおいて際立っていた。ルーキフェレーンスは、その系列中の37番であり、メルキゼデク系により任命された時は、70万以上の自分の種類の中の最も有能で才知に長けた百名中の１名として指名された。ルーキフェレーンスは、このような見事な初まりから、悪と失策を経て、そして罪を迎え入れ、いまは自己の衝動に屈し、見せかけの個人の自由の詭弁—宇宙忠誠の拒絶と友愛の義務の無視、つまり宇宙関係への無分別さに身を任せたネバドンの３名の体制君主の１名として数えられている。

53:0.2 (601.2) ネバドンの宇宙、キリスト･ミカエルの領域には、１万の生息体制がある。ラノナンデクの息子の全歴史において、これらの何千というすべての体制と宇宙本

部全体に渡るすべての仕事においていままでに３名の体制君主だけに、創造者たる息子の政府への侮辱罪の裁決が下された。

１．反乱の指導者たち

53:1.1 (601.3) ルーキフェレーンスは、上昇の存在体ではなかった。地方宇宙の被創造の息子であった。ルーキフェレーンスについては、「あなたは、あなたが創られた日からあなたに不正が見いだされるまではすべてにおいて完全であった」と言われた。かれは、エデンチアのいと高きものと幾度も協議してきた。ルーキフェレーンスは、生息界607号の大体制の最高経営責任者であったことから「神の聖なる山に」ジェルーセムの行政の台座に君臨した。

53:1.2 (601.4) ルーキフェレーンスは、偉大なもの、才知に長けた人格であった。宇宙権威直系の星座のいと高き父の次に位していた。ルーキフェレーンスの違反にもかかわらず、従属的な知力あるものたちは、ミカエルのユランチアの贈与に先立ち、ルーキフェレーンスに不敬と軽蔑を表すことを差し控えた。モーゼの復活時点にミカエル

の大天使でさえ、「彼に対し非難の見解をもたらさなかったが、『裁判官はあなたを戒める。』と単純に言った。」そのような問題における判断は、超宇宙の支配者である日の老いたるものに帰属する。

53:1.3 (601.5) ルーキフェレーンスは、いま堕落し免職、退位させられたサターニアの君主である。自己静観は、天界の発揚された人格にとってさえ最たる悲惨である。「あなたの心はあなたの美しさに高ぶり、あなたの賢さゆえに自分の知恵を腐らせた。」とルーキフェレーンスについて述べられている。あなたの昔の預言者は、「ルーキフェレーンスよ、暁の子よ、あなたはどうして天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ、どうして地に切り倒されたのか！」と書いたとき、彼の悲しい状況を見たのであった。

53:1.4 (602.1) ルーキフェレーンスが、あなたの惑星に自分の主義を説くことを最初の副官、魔王に命じたという理由からユランチアでは彼についてあまり聞かれなかった。魔王は、ラノナンデクの主要な同じ一団の１構成員であったが、体制君主の役割を果たしたことはなかった。魔

王は、完全にルーキフェレーンスの反乱に参入した。「悪魔」は、ほかでもないカリガスティア、つまりユランチアの退位を強いられた惑星の王子であり、ラノナンデクの第二系列の息子である。肉体のミカエルが、ユランチアに滞在中、ルーキフェレーンス、魔王、カリガスティアは、贈与の任務に失敗をもたらすために結束した。だが、それらは、みごとに失敗した。

53:1.5 (602.2) アバッドンは、カリガスティア配下の長であった。アバッドンは、主人に従い反乱に入り、以来ずっとユランチア反抗者の行政最高責任者の役を務めてきた。ベルゼブブは、反逆者カリガスティアの軍勢側に寝返った不実な中間被創造者らの指導者であった。

53:1.6 (602.3) 龍は、ついにはこれらすべての悪者の象徴となった。ミカエルの勝利に際し、「ガブリエルはサルヴィントンから下りてきて、１時代の間、龍（すべての反乱指導者）を繋ぎおいた。」ジェルーセムの熾天使の反抗者等については、「彼は、最初の身分を保持しなかったが、自身のおるべき所を去った天使たちを確かに縛りつ

け重大な日の審判のために暗闇の中に閉じ込めておいた。」と書かれている。

2．反乱の原因

53:2.1 (602.4) ルーキフェレーンスと最初の補佐である魔王は、50万年以上もジェルーセムに君臨し、宇宙なる父、それに当時の行政代理者であるミカエルに対しその心のうちで態勢をとり始めた。

53:2.2 (602.5) サターニア体制に反乱を暗示したり、あるいは有利にはたらいた特異な、あるいは特別な状態は存在しなかった。考えは、ルーキフェレーンスの心に起源をとり形作り、そして、彼がいずれに配置されようとも、このような反乱を起こしたかもしれないというのが我々の考えである。ルーキフェレーンスは、まず魔王にその計画を示したが、有能で才知に長けた相手の心を堕落させるには数カ月を要した。だが、魔王は、いったん反抗の理論に転向するや、「自己主張と自由」の大胆かつ真剣な提唱者になった。

53:2.3 (602.6) 誰も１度もルーキフェレーンスに反乱を示唆しなかった。ミカエルの意志に反対し、宇宙なる父の計画

に反対する自己主張の考えは、その計画がミカエルに代表されているように、その起源はルーキフェレーンス自身の心にあった。創造者たる息子との彼の関係はそれまでは親密で、常に心からのものであった。自身の心の高揚前のいかなる時にも、ルーキフェレーンスは、宇宙行政についての不満を公然と表現しなかった。その沈黙にもかかわらず、標準時間で百年以上の間、サルヴィントンの日々の和合のものは、ルーキフェレーンスの心中はすべてが安らかではなかったということをユヴァーサに反射していた。この情報はまた、創造者たる息子とノーラティアデクの星座の父にも伝えられた。

53:2.4 (602.7) この期間、ルーキフェレーンスは、宇宙行政の全計画についてますます批判的になったが、常に崇高な支配者に心からの忠誠を表明した。あからさまなその最初の不忠実は、ルーキフェレーンスの自由宣言の公表の前のほんの数日間のジェルーセムへのガブリエル訪問の折に明らかにされた。ガブリエルは、差し迫る暴動の確実性を強く感じとり、公然たる反抗の際に採用される方策に関し星座の父に相談するためにエデンチアに直行した。

53:2.5 (603.1) 最終的にルーキフェレーンスの反逆に至った確かな原因、あるいは複数の原因を指摘することは非常に難しい。我々は、ただ１つのことを確信している。それは次のことである。これらの本来の始まりが何であったとしても、それはルーキフェレーンスの心にその始まりがあった。ルーキフェレーンスには、自己欺瞞の程度にまでそれ自身を育んだ自己の誇りがあったに違いなく、その結果、反乱計画は、実際には宇宙のためでなくとも、体制の利益のためであったと、当分の間本当に自分自身を納得させた。その計画が幻滅と言ってもいい程度にまで進んだころには、本来の、その上に有害な誇りは、中断を容認するには疑いなく手遅れであった。ルーキフェレーンスは、この経験のある時点において不誠実になり、また悪は、故意の、強情な罪へと徐々に発展していった。これが起きたということは、この才知に長けた幹部の次の行為により証明される。彼には長らく懺悔のための機会を与えられていたが、その部下の数名だけが、差し出された慈悲を受け入れた。エデンチアの日の忠誠なるものは、星座の父の要請により、自らこれらの名うての反抗者たちを救うミカエルの計画を提示した

が、創造者たる息子の慈悲は、増大する侮りと軽蔑をもって繰る返し拒絶された。

3．ルーキフェレーンスの宣言

53:3.1 (603.2) ルーキフェレーンスと魔王の胸中での問題の最初の起こりが何であるとしても、決定的暴動は、ルーキフェレーンスの自由声明として具体化した。謀反の原因は、３項目にわたって述べられた。

53:3.2 (603.3) 1. 宇宙なる父の現実。ルーキフェレーンスは、宇宙なる父が実は存在しないと、物質の引力と空間エネルギーは、宇宙に固有であると、また父は、楽園の息子たちが父の名において宇宙支配の維持を可能にするために楽園の息子により作り出された神話であると告発した。かれは、人格が宇宙なる父の贈り物であるということを否定した。かれは、終局者は父の人格が楽園において認識できるようには父の実際の人格について極めて明確な観念を持ち帰ってくることは決してなかったので、終局者は、ごまかしを全創造に押しつけるために楽園の息子と示し合わせたのだとほのめかしさえした。ルーキフェレーンスは、無知として敬意を利用した。告発は、

すさまじく、酷く、しかも冒とく的であった。当時ジェルーセムにいた上昇する公民に頑として、すべての反抗の提案への抵抗に不動でいるよう間違いなく感化させたのが、終局者へのこの遠まわしの婉曲的攻撃であった。

53:3.3 (603.4) 2. 創造者たる息子—ミカエル— の宇宙政府。ルーキフェレーンスは、地方体制が自立すべきであると強く主張した。かれは、創造者たる息子であるミカエルが、楽園の父の名のもとにネバドンの主権を握り、またすべての人格にこの不可視の父への忠誠を承認するように要求するその権利に抗議した。ルーキフェレーンスは、崇拝の計画全体が楽園の息子を強化する巧妙な案であると断言した。かれは、ミカエルを自分の神として、また正当な支配者としてではなく、創造者-父としてすすんで認めた。

53:3.4 (603.5) ルーキフェレーンスは、地方体制と宇宙の問題に干渉する日の老いたるもの—「外国の有力者」—の権利を最もひどく攻撃したのであった。これらの支配者らを専制君主で横領者だと非難した。ルーキフェレーンスは、もし人間と天使が自分自身を主張し、大胆に自らの

権利を要求する勇気を持ちさえすれば、これらの支配者の誰も完全な地方自治の運用への何の干渉もできないと信じるよう追従者を説得した。

53:3.5 (603.6) かれは、もし土着の存在体がその独立を断言しさえすれば、日の老いたるものの死刑執行者たちは、地方体制における機能を妨げることはできないのであると強く主張した。かれは、不死は体制人格に固有であると、復活は自然で自動的であると、またすべての存在体は、日々の老いたるもの死刑執行者の任意で不公平な行為を除いては永遠に生きるであろうと主張した。

53:3.6 (604.1) 3. 上昇する人間の訓練に関わる宇宙計画への攻撃。ルーキフェレーンスは、上昇する人間に彼が非倫理的で不合理であると主張する宇宙行政の原則を徹底的に訓練する計画にあまりにも多くの時間とエネルギーを費やしていると主張した。はっきりしない何かの目標のために空間の人間に準備させる長年の計画に抗議したうえで、これらの人間は、何らかの虚構の目標のための準備の時代をすでに過ごしてきたという証明として終局者部隊のジェルーセム臨場を指摘した。ルーキフェレーンス

は、終局者たちは、出身球体に類似の粗末な球体に返されるのと同様に、輝かしい運命に遭遇してはいないと、あざけりを持って指摘した。かれは、終局者は、過度の規律と長引く訓練により退廃させられてしまったと、また上昇する人間のための永遠の神話的運命の作り話に全被創造物を奴隷化にする企みにいま協力しているのであるから、かれらは、終局者は、実際には人間の仲間にとって裏切り者であると仄めかした。ルーキフェレーンスは、上昇者は、個人の自主的決定の自由を楽しむべきであると主張した。かれは、神の楽園の息子により後援され、無限なる精霊により支援された人間の上昇の全計画に異論をさしはさみ、非難した。

53:3.7 (604.2) ルーキフェレーンスは、そのような自由の宣言をして、暗黒と死のばか騒ぎを開始した。

4．反乱の勃発

53:4.1 (604.3) ルーキフェレーンスの声明は、ユランチア時間のおよそ20万年前、その年の最後の日にジェルーセムの召集部隊の前で、ガラスの海のサターニアの年度の秘密会議で公表された。魔王は、崇拝は宇宙の力—物理的、

知的、かつ精霊的—に与えられることができるということ、しかし忠誠は、実際の、現在の支配者に、つまり、ルーキフェレーンスに、「人間と天使の友人」であり、「自由の神」にのみ誓うことができると宣言した。

53:4.2 (604.4) 自己主張は、ルーキフェレーンス反乱の標語であった。その主要論点の１つは、もし自治というものが、メルキゼデク系と他集団にとり望ましく正しいのであるならば、同様に知性の全系列にも望ましいということであった。ルーキフェレーンスは、「心の平等」と「知性あるもの兄弟関係」の提唱において大胆で意固地であった。すべての政府は、地方惑星に、また自発的同盟は、地方体制に制限されるべきであると主張した。他のすべての統御を拒否した。ルーキフェレーンスは、惑星の王子らが最高行政官として世界を支配するということを約束した。かれは、星座本部の立法諸活動の設置を、また宇宙首都の司法業務の運営を非難した。ルーキフェレーンスは、政府のこれらすべての機能は、体制首都に集中されるべきであると強く主張し、自身の立法府の設立を進め、魔王の司法権下に自身の裁判所を組織した。

その上、背信世界の王子が同じことをするように指示した。

53:4.3 (604.5) ルーキフェレーンスの全行政内閣は、一団となって寝返り、「自由にされた世界と体制」の新首脳政権の士官として公に宣誓した。

53:4.4 (605.1) ネバドンにおいては過去に2つの反乱が起きたが、それらは、遠い星座においてであった。ルーキフェレーンスは、知力あるものたちの大多数がその指導者に追従できなかったことから、これらの反乱は不成功であると考えた。かれは、「過半数が支配する」と、「心には誤りがない」と強く主張した。宇宙の支配者によるルーキフェレーンスに許された自由は、明らかに多くの邪な主張をさせた。かれは、すべての上司を無視した。しかも上司らは、上辺ではルーキフェレーンスの行動に気づかなかった。ルーキフェレーンスには、何らの障害もなく誘惑的な計画を遂行する自由裁量が与えられた。

53:4.5 (605.2) ルーキフェレーンスは、反乱を阻止する楽園の息子の政府の無能力さの証拠として正義の慈悲深い遅れのすべてを指摘した。かれはミカエル、インマヌエル、

日の老いたるものに公然と反抗し、傲慢に挑戦し、また宇宙と超宇宙政府の不能さの確たる証拠として何の行動も後に続かなかったという事実を示すのであった。

53:4.6 (605.3) ガブリエルは、これらの不忠の全議事に終始直接に出席しており、時が来ればミカエルを代弁するであろうということ、そして、全存在体が、それぞれの選択において自由で、邪魔されずにいるであろうということ、「父のための息子たちの政治は、ただ自発的で、心からの、詭弁に負かされないその忠誠と献身だけを切望した」と発表しただけであった。

53:4.7 (605.4) ルーキフェレーンスには、ガブリエルが、脱退の権利に異議を申し立てたり、あるいは謀反の宣伝に抗する前に、自分の造反政府を設立し、徹底的に組織することを完全に容認された。だが星座の父は、すぐにこれらの不実な人格の行動をサターニア体制に幽閉した。とはいえ、この遅れの期間は、すべてのサターニアの忠実な存在体にとってのおおきな試練の時であった。数年間は、すべてが混沌としており、大邸宅界には大混乱があった。

5．対立の性質

53:5.1 (605.5) 反乱発生に際し、ミカエルは、楽園の兄弟インマヌエルについて協議した。この重大な会議以後にミカエルは、類似する過去の大変動の自分の扱いを特徴づけてきた同じ政策を、つまり不干渉の態度を続行するであろうと発表した。

53:5.2 (605.6) 絶対の、個人的主権は、この反乱とそれ以前に起こった２つの反乱時点におけるネバドン宇宙にはなかった。ミカエルは、まだ自身の個人の権利ではなく宇宙なる父の代理人として神権により支配した。ミカエルは贈与経歴を完了していなかった。いまだ「天における、そして地におけるすべての力」を与えられていなかった。

53:5.3 (605.7) ミカエルは、反乱勃発からネバドンの最高支配者としての自分の即位式の日にかけて、決してルーキフェレーンスの反抗勢力に干渉しなかった。反抗勢力は、ユランチア時間のほぼ20万年の間、自由な進路の走行を許された。クリストス･ミカールは、このような背信勃発を即座に、手短かにさえ扱う十分な力と権限をいま持

っているが、我々は、もしそのような別の大変動が起こるとしても、この最高権威者が、異なる行動をとるだろうということを疑問視する。

53:5.4 (605.8) ミカエルが、ルーキフェレーンス反乱の実際の戦争からそのまま距離を置いたままでいることを選んだので、ガブリエルは、エデンチアに部下を集め、いと高きものと相談のうえサターニアの忠実な部隊の指揮を担うことを選んだ。ミカエルは、サルヴィントンに留まり、一方ガブリエルは、ジェルーセムに出向き、父--ルーキフェレーンスと魔王がその人格を疑問視していた同じ宇宙なる父--に捧げられた球体に地歩を固め、忠実な人格の集合部隊に、ミカエルの旗印、すなわち全創造の三位一体政府の有形の象徴である白地に空色の青の３同心円を示した。

53:5.5 (606.1) ルーキフェレーンスの印は、赤い１つの円の中心が黒く塗られた白旗であった。

53:5.6 (606.2)「天では戦いが起こった。ミカエルの指揮官とその天使達は、龍（ルーキフェレーンス、魔王、背信の王子）を敵として戦った。龍と反抗的な天使らは応戦した

が、勝てなかった。」この「天での戦い」は、ユランチアで想像されるかもしれないそのような対立の物理的戦いではなかった。ルーキフェレーンスは、争いの初期、惑星の円形競技場でつづけて話した。ガブリエルは、近くに設けられた自分の本部から間断なく謀反の詭弁の暴露を行なった。球体に出席している自分の態度の定まらない種々の人格たちは、最終決断に到るまでこれらの論議の間を往復するのであった。

53:5.7 (606.3) しかし、天でのこの戦争は、実にひどく、きわめて本格的であった。未熟な世界の物理的戦争の特性をよく示す残虐行為の一つも見せない一方で、この対立は、より一層命取りであった。物質的生活は、物質的戦闘において危機に陥るが、天の戦争は、永遠の命の観点から戦われた。

6．忠実な熾天使の指揮官

53:6.1 (606.4) 敵意の発生、また新体制の支配者とその部下の到着のその間に数多くの人格が、献身と忠誠を有する気高く鼓舞的な多くの行動をとった。だが、これらすべての大胆な献身的偉業の最も感動的なものは、マノティ

ア 、 サタニア本部の熾天使の副司令官の勇敢な行動であった。

53:6.2 (606.5) ジェルーセムの反乱勃発においては、熾天使部隊の隊長がルーキフェレーンスの運動に参加した。これは、なぜそれほど多数の第四系列、つまり体制行政熾天使が正道を踏み外したかを疑いなく説明している。熾天使の指導者は、ルーキフェレーンスの才知に長けた人格に目をくらまされた。ルーキフェレーンスの魅惑的方法は、天の存在体の中の低系列を魅惑した。かれらは、これほどまでにまぶしい人格が、道を誤り得ることを理解しなかった。

53:6.3 (606.6) マノチアが、つい最近ルーキフェレーンスの反逆勃発に関連する経験を記述のなかで伝えた。「けれども私を一番気分を浮き立たせた瞬間は、熾天使の第2指揮官として私が、ルーキフェレーンスの反乱に関係する感動的な冒険、ミカエルに対する計画された辱めに参加することを拒否したときであった。そこで、強力な反抗者は、すでに手配していた連結力を使って私の破滅を求

めた。ジェルーセムでは大変動があったが、忠実な熾天使の1名たりとも害を加えられなかった。

53:6.4 (606.7)「私の直属上司の不履行に際し、体制の混乱した熾天使問題の名ばかりの指揮官としてジェルーセムの天使部隊の指揮が、私に委譲された。私は、自身の系列の巨大な１団には見捨てられはしたが、メルキゼデク系には道徳的に支えられ、大多数の物質の息子の巧みな助力を得、またジェルーセムの上昇する人間の見事な支援をえた。

53:6.5 (606.8)「我々は、ルーキフェレーンスの脱退により自動的に星座回路から放り出されたので、近くのランツーリア体制からエデンチアまで救援要請を転送する我々の諜報部隊の忠誠を頼みとしていた。我々には、その系列の王国、忠誠の知性、真実の精霊が、本質的には反乱、自己主張、それにいわゆる個人の自由に勝利していたということが分かった。我々は新体制君主、すなわち、ルーキフェレーンスの立派な後継者の到着まで続行することができた。私は、その後すぐにユランチアのメルキゼデクの財産管理部隊に配属され、裏切りのカリガスティア

の世界の上の忠誠な熾天使系列の管轄を引き受けた。カリガスティアは、自分の球体が『自由の世界と解放された人格』の新たに計画された体制、ルーキフェレーンスによる『サターニアの統治を誤り運営を誤った世界の自由を愛し、自由思想をもち、そして前向きな知性』への呼びかけにおいて公表された悪名高い自由宣言に提案された」体制の一員であると宣言していた。

53:6.6 (607.1) この天使は、熾天使の主任補佐の役割でいまだユランチアに勤務中である。

7．反乱の歴史

53:7.1 (607.2) ルーキフェレーンスの反逆は、体制規模であった。37名の離脱する惑星王子は、世界政権を大反抗者側に大きく変えた。惑星の王子は、ただパノプティアにおいてだけは自分の人々、身内、を運び損じた。人々は、ミカエルの支援のためにメルキゼデク系の指導の下この世界に集結した。死を免れないその領域の若い女性エラノーラは、人類の指導権を把握したし、またその紛争で荒れた世界の誰一人としてルーキフェレーンスの旗下にはつかなかった。それ以来、これらの忠実なパノプティ

アは、父の球体とその周囲の７個の拘留世界に世話人として、建築業者として第７のジェルーセム移行世界に勤務してきた。パノプティアは、単にこれらの世界の文字通り用務員の役を務めるだけではなく、将来のいつか、そして未知の使用のためにこれらの球体の潤色のためのミカエルの個人的な命令もまた実行に移す。パノプティアは、エデンチアへの途中の滞在中にこの仕事をする。

53:7.2 (607.3) カリガスティアは、この期間全体にわたり、ルーキフェレーンスの運動をユランチアで提唱していた。メルキゼデク系は、背信の惑星王子にみごとに対抗したのだが、抑制を離れた自由の詭弁と自己主張の妄想には、若い、未開発の世界の原始民族をだますためのあらゆる機会があった。

53:7.3 (607.4) 放送活動、あわせて惑星間の意思伝達の他の全手段が、体制回路の監督の行動により中断されたので、すべての脱退、離脱宣伝は、個人の努力によってすすめられなければならなかった。実際の反乱勃発に際し、サターニアの全体制は、星座回路と宇宙回路の両方で孤立していた。この間、すべての出入りの通信は、熾天使代

理者と単独の使者により送られた。堕落した世界への回路もまた切り離され、それ故、ルーキフェレーンスは、不埒な企み推進へのこの道を利用することができなかった。大反逆者がサターニアの境界内に住む限り、これらの回路は復旧されないであろう。

53:7.4 (607.5) これは、ラノナンデクの反乱であった。造反惑星に配属された生命運搬者の少数は、不忠の王子の反乱の影響を受けはしたものの、地方宇宙の息子のより高い系列は、ルーキフェレーンスの脱退に加わらなかった。三位一体化の息子のいずれも正道を逸れはしなかった。メルキゼデク系の大天使と輝ける宵の明星は、ガブリエルを含めすべてミカエルに忠実であり、父の意志と息子の統治を求めて勇敢に戦った。

53:7.5 (608.1) 楽園起源のどの存在体も、不忠に巻き込まれてはいなかった。彼らは、単独使者と団結し精霊の世界に本部を設立し、エデンチアの日々の忠誠なるものの指導体制の下に留まった。調停役の誰も背教せず、天の記録者のだれ一人として道を逸れなかった。ただし、モロンチア仲間と大邸宅界の教師には大きい犠牲がでた。

53:7.6 (608.2) 熾天使の最高系列からは、１名の天使も失われなかったが、次の系列の大集団、つまり上級集団はだまされ、陥れられた。同じく第３、つまり天使の管理系列の少数が迷わされた。だが第４集団に、つまり通常は体制首都の任務に割り振られる熾天使である管理者天使に凄まじい破綻が来た。マノティアは、ほぼ３分の２を救ったが、３分の１を少し上回るもの達が、造反隊伍へと自分達の長に続いた。管理者天使に配属されたジェルーセムのすべての天使童子の３分の１は、不忠の熾天使とともに道を誤った。

53:7.7 (608.3) 物質の息子に配属された惑星天使の助手のうちおよそ３分の１は騙され、移行活動者のほぼ10パーセントが陥れられた。ヨハネは、「そしてその尾は、天の星の３番目の部分を描き、そして暗闇にそれらを失墜させた。」と言って大きい赤い龍について書いたとき、これを象徴的に見た。

53:7.8 (608.4) 最大の欠損は天使の隊伍で起こったが、より低い知性の系列の大部分が不忠に関係していた。サターニアで道に迷っている681,217人の物質の息子のうち95パ

ーセントは、ルーキフェレーンスの反乱の被害者であった。中間被創造者の多数が、その惑星王子がルーキフェレーンスの運動に参加したそれぞれの惑星において進む道を失った。

53:7.9 (608.5) この反乱は、多くの点でネバドンのそのような全来事の中でも最も広範囲にわたる悲惨なものであった。他の二つに比べ、より多くの人格が、この反乱において巻き込まれた。そして、ルーキフェレーンスと魔王の特使らは、終局者の文化的惑星の幼児訓練学校を容赦することなく、むしろ慈悲により進化世界から回復されたこれらの成長している心を堕落させようと努めたのは両者にとって永遠の不名誉である。

53:7.10 (608.6) 上昇する人間は、脆弱ではあったが、下級の精霊よりも良く反乱の詭弁に耐えた。まだ調整者との最終的融合を達成していないさらに低い大邸宅界の多くのものが低落する、堕落していく、一方で、サタニアの公民権を持つジェルーセムの上昇する住民のだれ一人としてルーキフェレーンスの反乱に参加しなかったということ

が、栄えある賢明さのに記録の上昇計画に記録されている。

53:7.11 (608.7) 全ネバドンの放送局には、天の知性の考えうるすべての集団からの不安な視聴者が日ごと時々刻々群がり、かれらは、サタニア反乱の要覧を熱心に精読し、また脱退と罪の旗印の周りに非常に速く集合した微妙な悪のすべての力がもつ結合され長期におよぶ努力を、メルキゼデクの指導力の下に、成功裏に持ちこたえた上昇する人間の不動の忠誠について連続的に述べる報告に喜ぶのであった。

53:7.12 (608.8) 「天の戦争」の始まりからルーキフェレーンスの後継者就任までは、体制時間で2年あまりであった。だが、ついに新君主が部下とともにニガラスの海に上陸して来た。私は、ガブリエルによりエデンチアへ動員された予備軍の中にあってノーラティアデクの星座の父へのラナフォーゲの最初の申し送りをよく覚えている。それは、「ジェルーセムの市民の一人として道を逸れなかった。すべての上昇する人間は、烈火のごとき試練を生き残り、決定的な試練の勝利と完全な勝利から現れた。」

とあった。人間上昇の生存経験は、反乱に対する最大の安全と罪に対する最も確かな予防措置であるというこの保証の申し送りは、サルヴィントン、　ユヴァーサ、楽園へと回された。忠実な人間のこの気高いジェルーセム隊は、実に187,432,811名に達した。

53:7.13 (609.1) 大反逆者らは、ジェルーセムとモロンチア球体に、それに個々の生息界の周辺にさえ自由に行くことを許されはしたものの、ラナフォーゲの到着と時を同じくして退位させられ、全支配権を剥奪された。大反逆者らは、人間と天使の心を混乱させ、誤り導くための欺きと惑わしの努力を続けた。だが、ジェルーセムの行政の丘での仕事に関しては、「もはや、彼らのための場所はなかった。」

53:7.14 (609.2) サターニアでの全行政権をルーキフェレーンスから奪う一方で、この邪悪な反抗を押さえ止めたり、破壊する地方宇宙の力も裁判所も存在しなかった。その時ミカエルは、最高支配者ではなかった。日の老いたるものは、体制政府の奪取において星座の父たちを支援したが、ルーキフェレーンスと魔王、それにその仲間の現状

況と将来の処分に関し、審議中の多くの控訴において1度もその後の決定を伝えてはいない。

53:7.15 (609.3) というわけで、これらの大反逆者は、不満と自己主張の教義のさらなる浸透追求のために全体制の流浪が可能であった。だが、ユランチア年でのおよそ20万年、別の世界を欺くことは不可能であった。サタニア世界は、37回目の堕落以来、道を失ってはいないし、反乱のその日から若い世界さえ失ってはいない。

8．ユランチアの人の息子

53:8.1 (609.4) ルーキフェレーンスと魔王は、ミカエルのユランチアへの贈与任務了までサタニア体制を自由に移動した。両者は、最後に人の息子への合同攻撃の間あなたの世界にともにいた。

53:8.2 (609.5) かつては、「神の息子」である惑星王子が、定期的に招集されると、堕落した惑星王子の孤立世界のすべてを代理したと主張して「魔王も来た」。だが、ミカエルの最後の贈与以来、ジェルーセムへのそのような自由が魔王には与えられなかった。贈与の肉体においてミカエルを堕落させるそれらの努力の後に、ルーキフェレー

ンスと魔王へのすべての、一切の、同情は、サタニア中で、罪の孤立世界の外で、すなわち罪の孤立世界の外で滅失してしまった。

53:8.3 (609.6) ミカエルの贈与は、背信の惑星王子の惑星は別として全サタニアにおけるルーキフェレーンスの反逆を終了させた。そして、これは、肉体での死の直前のある日、使徒達に、「私は天からの稲妻のように落ちる魔王を見た。」と大声で言ったときのイェススの個人的経験の意味であった。魔王は、最後の決定的な争いのためにルーキフェレーンスとともにユランチアに来ていた。

53:8.4 (609.7) 人の息子は、成功を確信しており、あなたの世界におけるその勝利がサタニアばかりではなく、罪が入り込んでいた他の2体制においても長年の敵の状態に永久に決着をつけるであろうということを知っていた。あなたのあるじが、ルーキフェレーンスの提案に応じて、穏やかに、そして神の自信で「引き下がれ。サタン、」と返答したとき、人間には生存が、天使には保証があった。それが、原則的にはルーキフェレーンス反乱の真の終わりであった。ユヴァーサの法廷は、いかにも反抗者

の破滅を祈るガブリエルの控訴に関し、まだ幹部の決定を提出してはいなかったが、この事件の聴聞会で最初の処置がすでにとられていたので、このような判決が、疑いなく機が熟して間もなく下るであろう。

53:8.5 (610.1) カリガスティアは、その死の時近くまで人間の息子によってユランチアの技術王子として認知された。イェススは、「今はこの世界の裁かれるときである。今はこの世界の王子が追い出させられるであろう。」と言った。そして、さらに生涯の仕事の成就近くに、イェススは「この世界の王子は裁かれる。」と発表した。これが、かつて「ユランチアの神」と名づけられた退位し、信用を失墜させた同じ王子である。

53:8.6 (610.2) ユランチアを去る前のミカエルの最後の行為は、カリガスティアとダリガスティアへの慈悲の提示であったが、２人は、思いやりのある申し出を一蹴した。あなたの背信の惑星王子カリガスティアは、非道な企みを自由に遂行するためにまだユランチアにいるが、人間が、真ににカリガスティアの邪悪な臨場に悩まされることを望まない限り、かれは、絶対的に人間の心に入る力

を持ってはいないし、誘惑したり、あるいは堕落させるために人間の魂に近づくことはできない。

53:8.7 (610.3) ミカエルの贈与の前、暗黒のこれらの支配者は、ユランチアにおける自分達の権威を維持しようとし、下位の、従属的な天の人格に繰り返し抵抗した。しかし五旬節の日以来、この反逆者のカリガスティアと同等に卑劣な仲間ダリガスティアは、楽園の思考調整者と保護にあたる真実の精霊、すべての人間に注がれてきたミカエルの精霊であるの神性の威容の前には卑屈である。

53:8.8 (610.4) しかしそれでも、堕落した精霊は、心を侵害したり、あるいは神の子らの魂を苦しめる力を今まで持ってはいなかった。魔王とカリガスティアのいずれも、今まで神の信仰の息子に触れたり、あるいは接近することはできなかった。信仰は、罪と不正行為に対し効果的な武具である。「神から生まれた方が、彼自身を守ってくださるので悪しきものが触れるようなことはない。」というのは本当である。

53:8.9 (610.5) 一般的に、弱く、かつ自堕落な人間が悪魔や悪霊の影響下にあると考えられるとき、それらは、自身の本来の性癖により道を誤り、自身の生来の、堕落した傾向により支配されている。悪魔は、自分のものでない悪のことでかなり認められてきた。カリガスティアはキリストの十字架以来ずっと比較的無力であった。

9．現在の反乱状況

53:9.1 (610.6) ルーキフェレーンス反乱時代の早期に、マイケルにより救済が提示された。マイケルは、完全な宇宙主権の達成時に、心からの悔悟の証拠を示そうとするすべての者に何らかの形の宇宙の仕事における寛容と復帰を申し出た。どの指導者も、この慈悲深い申し出を受け入れなかった。しかし、何百人もも物質の息子と娘たちを含む天使と天の存在体のより下位の系列の何千名もが、パノプティア系の示す慈悲を受け入れ、そのうえ彼らには、1,900年前にイェススの復活時点に復権が与えられた。それ以来、規則上は、ジェルーセムに拘留されなくてはならないこれらの存在体は、ユヴァーサの法廷がガブリエルとルーキフェレーンスの問題の決定を伝えるまで、ジェルーセムの父の世界に移されてきた。だが、後

悔し、救出されたこれらの人格は、全滅評決が公表されるときには、絶滅の判決から免除されるであろうということを疑うものは誰もいない。これらの仮及第の魂は、父の世界を大切にする仕事に関しパノプティアと一緒にいま働いている。

53:9.2 (611.1) 大詐欺師は、ミカエルが贈与を完了し、また最終的に、しかも、たしかに自身をネバドンの制限されない支配者として地歩を固めようとする目的から戻そうと努めた日から１度としてユランチアにいたことがない。ミカエルが、ネバドン宇宙の定着した長になると、ルーキフェレーンスは、ユヴァーサの日の老いたるものの代理人により拘留され、それ以来ジェルーセムの移行球体である父の集団の衛星１号の囚人である。ここに、他の世界と体制の支配者たちは、サタニアの不貞な統治者の終わりを見る。パウーロスは、ミカエルの贈与後にこれらの反逆的指導者の状況について知っていた。というわけは、「天の場所での邪悪の精神的な軍勢」としてカリガスティアの長について書いているので。

53:9.3 (611.2) ミカエルは、ネバドンの最高主権を引き受ける否や、あなたの時間の計算のように、方法で、およそ20万年前にユヴァーサの最高裁判所の記録にとどめられたガブリエルとルーキフェレーンス事件における超宇宙法廷の裁定が出るまでルーキフェレーンスの反逆に関係したすべての人格を拘禁する権限を日の老いたるものに請願した。日の老いたるものは、体制首都集団に関しただ一つの例外を除き、ミカエルの請願に応じた。その例外は、もう１名の神の息子が、このような背信の世界に受け入れられるまで、あるいはユヴァーサの法廷が、ガブリエルとルーキフェレーンス事件の判定を始めるまで、魔王には、堕落した世界の背信の王子たちへの定期的な訪問が許されていた。

53:9.4 (611.3) あなたには居住する正式の息子が—惑星王子と物質の息子のいずれも—まだいなかったので、サタンは、ユランチアに来ることができた。メルキゼデクのマキヴェンタは、ユランチアの惑星王子の行政代理者であるとそれ以来宣言されてきており、宣言してきており、ガブリエル対ルーキフェレーンスの訴訟開始が、臨時惑星体制の始まりをすべての孤立世界への合図で知らせ

た、となった。サタンは、大反抗者の全滅のためのガブリエルの申し立ての最初の聴聞会があったこれらの顕示紹介の時までカリガスティアと他の堕落した王子の人々を定期的に訪問したというのは本当である。サタンは、いま無条件にジェルーセムの拘置世界に拘留されている。

53:9.5 (611.4) ミカエルの最終贈与以来、全サタニアの誰も拘禁された反抗者の世話のために刑務所世界に行くことを望んではいない。そして、もう詐欺師の運動に説得される存在体はでていない。1,900年間、その状況は変化していない。

53:9.6 (611.5) 我々は、日の老いたるものが大反抗者の最終的配置をするまでは、現在のサタニアの制限撤廃を待ち望んではいない。体制回路は、ルーキフェレーンスが生きている限り回復されないであろう。それまでは、ルーキフェレーンスは、完全に不活発である。

53:9.7 (611.6) ジェルーセムの反乱は、終わった。それは、神の息子たちが到着するのと同程度の速さで堕落した世界で終わる。我々は、慈悲を受け入れる反逆者すべてがそ

うしたと信じる。我々は、これらの裏切り者から人格存在を剥奪する強く強烈な放送を待ち受けている。我々は、これらの拘禁された反逆者に全滅をもたらすユヴァーサの評決の処刑放送を予期している。その後あなたは、自分の場所を探しはするが見つけられないであろう。「そして世界の中であなたを知っている者達はあなたに驚くであろう。あなたは今まで恐怖の種であったが、決してもうそうではないであろう。」こうして、これらすべての下劣な裏切り者は、「彼らが今までそうではなかったかのようになる。」すべての者が、ユヴァーサの判決を待ち受ける。

53:9.8 (611.7) しかし、「違反者の道は荒い、」「すべての罪の中には、それ自身の破壊の種が隠されている。」「罪の支払う報酬は死である。」と、サタニアの精霊的な暗闇の７個の拘留世界は、雄弁かつ効果的に大いなる真実を宣言し、まことに長い間全ネバドンへの厳粛な警告を表明してきた。

53:9.9 (612.1) [以前ユランチアの財産管理部隊に配置されたマノーヴァンデト･メルキゼデクによる提示]

論文 54
ルーキフェレーンス反逆の問題

54:0.1 (613.1) 邪悪、過ち、罪、不正行為の重要性を理解し、その意味を完全に把握することは、進化する人間には困難である。対照的な完全性と欠陥が、潜在的な悪を引き起こすということに気づくには、人間にとり時間のかかることである。すなわち、矛盾する真実と偽りは、紛らわしい過ちを生み出すということ。自由意志選択の神の寄贈は、罪と正義のさまざまな領域へ導くということ。不正の領域に導くその継続的拒否と比べ、神性への不断の追求は、神の王国に導くということ。

54:0.2 (613.2) 神々は、悪を創造せず、罪と反逆も許さない。潜在的な罪は、完全性の意味と価値の異なる段階を有する宇宙における時間的存在である。罪は、善悪を選ぶ能力を与えられた不完全な存在がいる全分野において可能である。真実と虚偽(事実と虚構)の相反する存在そのものは、誤りの可能性を構成する。悪の故意の選択は罪となる。真実の故意の拒絶は過ちである。罪と過ちの不断の追求は邪悪である。

1. 真の自由と偽りの自由

54:1.1 (613.3) ルーキフェレーンスの反逆から生じるすべての困惑させる問題のうち、未熟な進化的人間の真の自由と偽りの自由の区別のしくじりほど困難を引き起こしたものは他にはなかった。

54:1.2 (613.4) 真の自由は、幾時代もの探求であり、発展的進歩の報酬である。偽りの自由は、時間の過ちと空間の悪の微妙な偽装である。永続する自由は、公正の現実—知性、成熟、兄弟関係、公平さ—に基づいている。

54:1.3 (613.5) その動機が無知、無条件、無制御であるとき自由は、宇宙存在の自己破壊手段である。真の自由は、次第に現実との関係ができ、そして社会的公平、宇宙的公正、宇宙的兄弟関係、神性義務に配慮する。

54:1.4 (613.6) 物質の正当性、知力の公正、社会の忍耐、道義的義務、それに、精霊的価値から分離されるとき自由は、自滅的である。自由は、宇宙の現実を別としては実在せず、全人格の現実は、その神性との関係に比例している。

54:1.5 (613.7) 拘束のない自己意志と規制されない自己表現は、まったくの利己主義、不敬の絶頂に匹敵する。関連づけられない、常に増大する克己のない自由は、人間の利己的想像力の虚構である。自己に動機づけられた自由は、概念上の錯覚、すなわち残酷な惑わしである。自由の衣服で変装している自由は、惨めな奴隷の身分の前触れである。

54:1.6 (614.1) 真の自由は、本物の自尊の仲間である。偽りの自由は、自己称賛の配偶者である。真の自由は、自制心の果実である。偽りの自由は、自己主張の占有である。自制心は、愛他的奉仕に導く。自惚れは、仲間の上に不当な力を持つために正しい成就を進んで犠牲にしようとするそのような間違った個人の自己拡張のために他者を搾取する傾向がある。

54:1.7 (614.2) 知恵ですら、規模が大きく動機が精霊的であるとき、神性であり安全である。

54:1.8 (614.3) これらの人々の当然の自由を奪う目的のために、知的存在体を他の生きものの上に力の行使を切望するように仕向ける自己欺瞞のその類より大きな誤りはな

い。人間の公正さに関する黄金律は、すべてのそのような詐欺、不公平、自己本位、不正義に対し悲鳴を上げる。唯一真実の、本物の自由だけが、愛と慈悲の奉仕活動の統治と両立できる。

54:1.9 (614.4) 宇宙の崇高な支配者が、人格の意志と可能性のためにこれらの特権へ慈悲深い敬意を持って距離を置くとき、自己の意志に基づく被創造物は、よくも個人の自由の名において自分の仲間の権利を侵害できるものだ! 創造者から授けられ、また各自の忠実な仲間や部下や対象者のすべてから正当に敬意を受けるいかなる存在体から、何者も、個人の自由行使においてそれらの存在体の特典を奪う権利はない。

54:1.10 (614.5) 進化する人間は、モロンチア世界、あるいは精霊の球体ににおいてではなく、罪と不正行為のある世界において、あるいは原始の進化球体の早期において、自分の物質的な自由を求めて暴君や圧制者と争わなくてはならないかもしれない。戦争は、早期の進化する人間の遺産であるが、人種的な誤解調整の手段としての物理的

戦闘は、通常の進歩する文明世界においてははるか前に不評に陥った。

2. 自由の強奪

54:2.1 (614.6) 息子とともに、また精霊のなかに、神は、永遠のハヴォーナを計画し、それ以来ずっと創造における同等参加の永遠の型—　分け合うこと—を達成した。この共有型は、永遠の完全性の中央宇宙を時の世界において複製の試みに従事するために空間へ赴く神の息子と娘の中の各自のための主要構想である。

54:2.2 (614.7) 父の意志を為すことを熱望するすべての進化的宇宙のすべての創造物は、経験上の完全性到達のこの壮大な冒険において時、空間の創造者の相手になるように運命づけられている。もし、これが真実でなかったならば、父は、ほとんどこのような生きものには創造的な自由意志を授けず、それらに内住もせず、自分自身の精霊によって実際にそれらとの協力を結ぶことはないであろう。

54:2.3 (614.8) ルーキフェレーンスの愚行は、出来ないことをすること、すなわち経験的世界での時間を省く試みであ

った。ルーキフェレーンスの犯罪は、サタニアの人格すべてからの認められない短縮、すなわち個人的にも集合的にも光と生命の地位を達成する長い進化の争いにおける創造物の個人的参加 - 自由意志の参加 - 創造性の試みられた剥奪であった。あなたの体制のこのかつての統治者は、すべての人格の創造物に自由意志の贈与において顕示されているように、そうすることで、神の意志の永遠の目的に直接に逆らった自身のつかの間の目的を設定した。ルーキフェレーンスの反逆は、こうして、サタニア体制の上昇者と奉仕者の自由意志の選択の最大可能な侵害の恐れ - 完成されたサタニア体制としていつか存在するであろう経験上の知恵を記念して緩慢に建設しつつある記念碑にとり、個人的で独自な何かに貢献する感激満点の血を沸かすような経験をこれらの生きものの全員から永久に奪う脅威 - があった。こうして、ルーキフェレーンスの自由の衣服を装う宣言は、個人の自由の強奪を遂げるという、またネバドンの全歴史でただ 2 度接近するという規模でそれをするという途方もない脅威として際立っている。

54:2.4 (615.1) 要するに、ルーキフェレーンスは、神がすでにくれたものを、つまり自身の目標と生息界のこの地方体制の目標の創造に参加する神性的特権を、人間と天使から取り上げたことであろう。上げるところであった。

54:2.5 (615.2) 全宇宙のいかなる存在体も、いかなる他の存在体の真の自由を、すなわち愛し愛される権利、神を崇拝し自身の仲間に尽くす特権を剥奪する正当な自由を持ちはしない。

3. 正義の時間的ずれ

54:3.1 (615.3) 進化世界の意志をもつ道徳的な創造物は、全知の創造者がなぜ悪と罪を認めるのかという思慮のない質問に常に悩まされている。もし創造物が真に自由であるならば、二つともに避けられないということが理解できない。進化する人間の、あるいは絶妙な天使の自由意志は、単なる哲学的概念、象徴的な理想ではない。善、あるいは悪を選択する人間の能力は、宇宙の現実である。自分自身のために選択するこの自由は、崇高な支配者の贈与であり、いかなる存在体、あるいは、一団にも神々しいこの寄贈された自由の広い宇宙における一個の人格

を剥ぎ取ることを許さない。誤った呼び名の個人の自由を楽しむそのような道を誤った、無知な存在体を満足さえもさせはしない。

54:3.2 (615.4) 悪（罪）との意識的な、かつ心からの一体感は、非実在（絶滅）に相当するものの、人格の罪とのそのような一体感の時間と罰執行—このような故意の悪抱擁からくる必然的結果—の間には、常に時が、すなわち意志が、宇宙の関連人格すべてにとり完全に満足であると分かり、それが、罪人自身の承認を勝ち取るために公明正大であるようなこのような個人の宇宙状況についてこのような審判を容認する十分な期間が、介在しなければならない。

54:3.3 (615.5) しかし、もしこの宇宙が、真実と善の現実に抗し、評決承認を拒否するならば、またもし有罪者が、有罪宣告の正当性を心では知るが、このような自白を拒否するならば、日の老いたるものの自由裁量に従って刑の執行が遅滞されなくてはならない。そして、日の老いたるものは、悪事を働く者、そして関連する支援者すべてと可能な支持者の双方が、全道徳的価値と全精霊的現実

を消滅させるまでいかなる存在体の壊滅をも拒否するのである。

4. 慈悲の時間のずれ

54:4.1 (615.6) ノーラティアデクの星座における多少なりとも困難な説明のもう一つの問題は、逮捕され、拘禁され、裁かれるずっと以前にルーキフェレーンス、魔王、堕落した皇子達が、危害を加えることを許す、可能にする、理由に関係がある。

54:4.2 (616.1) 子供をつくり育てたそれらの親達には、創造者たる父親ミカエルが、なぜ自身の息子たちを容易に非難したり、破滅させたりしないかもしれないかがよく理解できる。イェススの放蕩息子の物語は、優しい父親が、誤りをおかした子の悔悟をいかに長い間待つことができるかをよく例示している。

54:4.3 (616.2) 悪行の人物は、悪の行ないを選択する - 罪を犯す - ことが実際にできるというまさしくその事実は、自由意志性の事実を確立するし、懺悔と更生に役立つかもしれない差し出された慈悲が、正義遂行においていかなる遅れの長さをも完全に正当化する。

54:4.4 (616.3) ルーキフェレーンスは、求めた自由の大半をすでに持っていた。残りは将来受け取るはずのもの。これらすべての貴重な授与は、焦りを抑えきれないこと、人が、宇宙の中の宇宙を構成する他の全存在体の権利と自由を尊重するための全義務を無視してそれをいま切望し所有しようという、焦りを抑えきれないこと、願望に屈することにより失われた。倫理上の義務は、生得で、神性で、普遍的である。

54:4.5 (616.4) 我々には、崇高なる支配者が、なぜすぐにルーキフェレーンスの反逆の指導者を掃滅するか、あるいは拘禁しなかったかを知る多くの理由がある。我々の知らない他の、おそらくもっと良い理由がまだあることは間違いない。正義の実行におけるこの遅延に関する慈悲の特徴は、ネバドンのミカエルにより個人的に拡大された。誤りをおかした息子へのこの創造者たる父親の愛情がなければ、最高の裁判官は行動をとっていたことであろう。もしルーキフェレーンスの反逆のような事件が、ミカエルがユランチアに姿を現している間にネバドンで起こっていたならば、このような悪の扇動者は直ちに、しかも絶対的に壊滅されていたかもしれない。

54:4.6 (616.5) 最高の正義は、神性の慈悲に拘束されないとき即座に作動できる。しかし時間と空間の子らへの慈悲の働きかけは、常にこの時間のずれに、種まきと収穫の間のこの救済のための切れ間に備えている。もし種蒔きが良ければ、この切れ間は、人格の試練と強壮を提供する。もし種蒔きが悪ければ、この慈悲深い遅れは、懺悔と修正の時間を提供する。悪事を働く者の裁決と執行におけるこの時間の遅れは、７個の超宇宙の慈悲の聖職活動に固有である。慈悲による正義のこの制約は、神は愛であるということ、そしてこのような愛の神というものが宇宙を支配し、創造物すべての運命と判断を慈悲において裁定するということを証明している。

54:4.7 (616.6) 慈悲ある時間の遅れは、創造者の自由意志の権限によるものである。罪深い反逆者の対処にあたりこの辛抱強い方法から宇宙に引き出されてくることになっている善がある。善は、悪を目論み行なう者には生じ得ないということはあまりにも真実であるとともに、（悪を含め、可能性のある、また明白な）すべてのことが、神を知り、その意志をすることを愛し、神の永遠の計画と神性の目的に従い楽園に向けて登っているすべての存在

体のために相まって働くということは等しく真実である。

54:4.8 (616.7) しかし、慈悲のこれらの遅れは、延々とは続かない。ルーキフェレーンスの反逆を裁くに当たっての長い遅れ（ユランチアで計られる時間での）にもかかわらず、この顕示をもたらす間に、ガブリエルとルーキフェレーンスの係争中の事件の最初の聴聞会がユヴァーサで開催されるし、魔王は、今後ルーキフェレーンスとともに牢獄界に閉じ込められるよう指示する日の老いたるものの命令がまもなく下されたと記録することが、我々には許されている。これは、魔王が、堕落したサタニアのいずれの世界へのさらなる訪問能力を終わらせる。慈悲に支配される宇宙の正義は、遅いかもしれないが、しかしそれは確実である。

5. 遅れの賢明さ

54:5.1 (617.1) ルーキフェレーンスとその同盟者が、なぜ早く拘禁されるなり判決を受けなかったかについて私が知る多くの理由のうち、私は次のことを列挙することが許されている。

54:5.2 (617.2) 1. 慈悲は、悪事をはたらく者すべてが、邪悪な考えや罪深い行為に関し故意の、そして完全に選んだ態度を明確に系統立てる十分な時間を要求する。

54:5.3 (617.3) 2. 最高の正義は、父の愛により支配される。それ故、正義は、慈悲が救い得ることを決して破壊しないであろう。悪を働く者すべてに救済を受け入れる時間が認められている。

54:5.4 (617.4) 3. 情愛深い父親は、決して家族の中の誤りをおかした者への処罰に参加しない。辛抱強さは、時間とは無関係には作用し得ない。

54:5.5 (617.5) 4. 悪行は、常に家族にとり有害である一方、賢明さと愛は、罪人が自分の道の誤りに気づき、救済を受け入れるかもしれない情愛深い父親によって許される間、誤りをおかした兄弟とともに耐える清廉な子供たちを諭す。

54:5.6 (617.6) 5. ルーキフェレーンスに対するミカエルの態度に関係なく、ミカエルがルーキフェレーンスの創造者たる父であるにもかかわらず、離脱の体制君主への即決裁

判権の執行は、そのとき贈与の経歴を完了していなかったので、こうしてネバドンの無制限の主権を達成し、創造者たる息子の管轄内にはいなかった。

54:5.7 (617.7) 6. 日の老いたるもの達は、すぐにこれらの反逆者を壊滅できたはずであるが、十分な聴聞会なしではめったに罪人を処刑しない。この場合、日の老いたるものらは、ミカエルの決定の覆しを拒んだ。

54:5.8 (617.8) 7. イッマーヌエルが、ミカエルに反逆者から距離を置くように、また反乱が自己抹消の当然の成り行きに任せるよう助言したことは明白である。そして日々の和合のものの賢明さは、楽園の三位一体の団結した賢明さの時間的反映である。

54:5.9 (617.9) 8. エデンチアの日々の忠誠なるものは、ノーラティアデクの現在と未来の全公民— すべての人間、モロンチア 、あるいは精霊の創造物—の心からこれらの悪を働く者へのすべての同情が根こそぎにされるように、反逆者をその終わりまでの自由な進路を許すよう星座の父に助言した。

54:5.10 (617.10) 9. ジェルーセムにおいてオーヴォントンの最高行政官の個人的代表者は、生きている全創造物が、ルーキフェレーンスの自由宣言に関わるそれらの問題において慎重な選択に達する十分な機会の増大を促進するようガブリエルに助言した。反乱問題が提起され、ガブリエルの楽園緊急助言者は、もしこのような十分、かつ自由の機会がノーラティアデクの生きもの全てに与えられないならば、そのとき全星座に対する自己防衛においてそのような気乗りのしない、あるいは疑いに打ちひしがれる可能性のある創造物に楽園隔離が広、げられるであろうと描写した。ノーラティアデクの存在体に楽園の上昇の扉を開け放しておくためには、反乱の完全な展開をもたらすこと、また反乱に関係するいかなる方法においても全存在体の側の完全な態度決定を確かにする必要があった。

54:5.11 (617.11) 10. サルヴィントンの神性聖職者は、3番目の独自の宣言として生半可に正したり、臆病に抑えたり、あるいは反逆者と反乱のひどく醜い顔を押さえるか、あるいは別の方法で隠したりするようなことは何もしないと指示する命令を発表した。天使の部隊は、悪と罪の襲

来に対しての完全で最終の治療法達成の最速手段として罪の表れにむけての完全で、限りない機会のために働くようにとの指示をうけた。

54:5.12 (618.1) 11. 同様の状態の個人的経験を持つ栄光ある人間である強力な使者から成る前人間の緊急会議が、同僚と団結して、ジェルーセムに組織された。それらは、もし任意の、あるいは略式の方法が試みられるならば、多くの存在体が堕落させられるであろうと、少なくとも3度ガブリエルに助言した。ユヴァーサの助言者の部隊全体は、たとえその終結に百万年を要とするとしても、反乱に完全かつ当然の進路をとらせるようガブリエルに助言することに同意した。

54:5.13 (618.2) 12. 時間は、時間の宇宙においてさえ相対的である。もしユランチアの平均寿命の人間が、世界的大混乱を引き起こす犯罪を犯すならば、そしてもし彼が逮捕され、裁かれ、犯行の2、3日内に処刑されるならば、あなたにはそれが長い時間に思われるであろうか。それにしても、もし今始められる彼の裁きが、ユランチアの10万年内に完了されないとないとしても、それは、ルーキ

フェレーンスの命の長さとの比較に近いであろう。ユヴァーサの観点からの訴訟係属中の相対的な時の経過は、訴訟係属中、ルーキフェレーンスの犯罪がその行為の2秒半以内に告発されていたと言うことによって示すことができる。楽園の観点からの裁判は、犯行と同時である。

54:5.14 (618.3) あなたには部分的に理解できるであろうルーキフェレーンスの反逆を独断的に止めない等しい数の理由があるが、私には述べることを許されていない。私は、ユヴァーサにおいて悪がそれ自身の道徳の破綻と精霊消滅の完全な自然の経過をたどらせる48の理由を我々は教えるということをあなたに知らせることができる。私は、自分の知らない同数程度のさらなる理由があることを疑わない。

6. 愛の勝利

54:6.1 (618.4) 進化する人間が、ルーキフェレーンスの反逆を理解しようとする努力においてどんな困難に遭遇しようとも、反逆者を扱う方法は神性愛の免罪であるということが、思慮深い思索家すべてに明らかでなければならな

い。反逆者に差し伸べられた優しい慈悲は、罪のない多くの存在体を艱難辛苦に巻き込んだが、動揺しているこれらすべての人格は、全知の裁判官が、司法と同様、慈悲でそれらの運命を裁くことを確かに頼りにしているかもしれない。

54:6.2 (618.5) 創造者たる息子と楽園の父の双方は、知的存在体とのすべての取り引きにおいて愛優位の立場にいる。父としての神が人間性との神性のすべての取り引きにおいて、神顕示のすべての他の局面に優先するということが思い起こされない限り、宇宙支配者の反逆者と反乱—罪と罪人—への態度の多くの局面を理解することは不可能である。楽園の創造者息子は、すべてが慈悲動機にもとづいているということが同じく思い起こされるべきである。

54:6.3 (618.6) もし大家族の情愛深い父親が、嘆かわしい非行の罪のある子の１人に慈悲を見せると決めるならば、この品行悪しき子への慈悲行為は、すべての他の、しかも品行の良い子供たちにおそらく一時的な困難をもたらすであろう。このような不測の事態は避けられない。この

ような危険は、愛情深い親を持っていることの、また家族集団の一員であることの現実の状況からは切り離せない。各家族構成員は、他の構成員の公正な振る舞いにより利益を得る。同様に、他の構成員の非行からくる時間の世界の即座の結果を経験するはずである。家族、集団、国、民族、世界、体制、星座、宇宙は、個性を有するつながりの関係である。それ故、大にしろ、小にしろ、そのような集団の全構成員は、関係する集団のすべての他の構成員の善行の成果を収めるし結果に苦しむ。

54:6.4 (619.1) しかし、１つのことが明らかにされるべきである。もしあなたが、家族の、同市民の、あるいは仲間の人間の誰かの罪の、悪の結果に、体制、あるいは他の場所での反乱にさえも—たとえ、あなたが同僚、仲間、あるいは上役の非行のために我慢しなければならないとても—苦しめられなければならないならとしても、あなたは、このような苦難が、つかの間の苦悩であるという永遠の保証に安んじることができる。集団の中の不品行に対するこれらの友愛の結果のどれ一つとして、決してあなたの永遠の見込みを危険にさらしたり、もしくは少し

もあなたから楽園上昇と神到達のあなたの神性からの権利を奪うことはできない。。

54:6.5 (619.2) 反乱の罪に必ず伴うこれらの裁判、遅延、期待はずれのための補償がある。言及されるかもしれないルーキフェレーンスの反逆の多くの重要な結果の中から、罪の詭弁に耐え自身を未来の強力な使者、すなわち私自身の系列の仲間になることをもとめて並んで待つそれらの人間の上昇者、ジェルーセム公民の高揚された経歴にだけ私は注意を向ける。その邪悪な事件の試練に耐えたすべての存在体は、それによりすぐに行政上の地位を進め、その上精霊的価値を強化した。

54:6.6 (619.3) ルーキフェレーンスの激変は、初めのうちは体制と宇宙にとりまったくの災難であるように思われた。次第に利益が生じ始めた。体制時間の２万５千年（ユランチア時間の２万年）が過ぎ去るとともに、メルキゼデク系は、ルーキフェレーンスの愚行に起因する善が被った悪に相当するようになったことを教え始めた。悪の総和は、孤立する特定世界においてのみ増加し続け、その時までにはすでにほとんど変動がなくなっており、一方

有益な反響は、増加し、宇宙と超宇宙をへて外へと、そしてハヴォーナにさえ拡大し続けた。メルキゼデク系は、サタニア反乱に起因するその善がすべての悪の総計の千倍以上であると、いま教えている。

54:6.7 (619.4) しかし、悪行から転じてのこのような桁外れで助けになる収穫は、エデンチアの星座の父から楽園の宇宙なる父へと拡大してきたルーキフェレーンスの上司すべての賢明な、神性の、慈悲深い態度があったからこそもたらされることができたのであった。時の経過は、ルーキフェレーンスの愚行に由来する必然的善を高めてきた。そして、罰せられる悪は、比較的に短時間の内に完全に展開されたので、全知の、明敏の宇宙支配者が、ますます有益な結果を収める時を延長するであろうことは明白である。サタニア反逆者の捕縛と裁判を遅らせる多くの付加的理由に関係なく、この１つの利得は、これらの罪人がなぜ早く拘禁されず、裁かれず、滅ぼされなかったかを十分説明したことであろう。

54:6.8 (619.5) 近視眼的、また時間に拘束される人間の心は、宇宙業務に関わる先見の、全-賢明の行政者の時間の遅れへの非難を緩めるべきである。

54:6.9 (620.1) これらの問題に関する人間の考えの誤りの一つは、もし罪が彼らの世界を苦しめ、呪っ、ていなかったならば、進化する惑星の進化の人間のすべては、楽園経歴に入ると決めるであろうという考えにある。生残を辞退する能力は、ルーキフェレーンスの反逆の時代に始まらない。必滅の人間は、楽園経歴に関しつねに自由意志の選択の資質を所有してきた。

54:6.10 (620.2) あなたは、生残経験での上昇するにつれ、宇宙概念を拡大し、意味と価値について視野を広げるであろう。従って、ルーキフェレーンスや魔王のような存在体が、なぜ反乱での継続を妨げられないかを良く理解できるであろう。あなたは、また（もし即刻でないとしても）どのように究極の善が、時間に制限された悪から得られるかをより理解するであろう。あなたは、楽園到達の後、最高熾天使の哲学者が、宇宙調整のこれらの深遠な問題を議論し、説明するのを聞くとき、本当に啓発さ

れ、慰められるであろう。だがその場合でさえ、私は、あなたがあなた自身の心に完全に満足するということを疑う。少なくとも、私は、このように宇宙哲学の頂点に達したときでさえ、落ち着いてはいなかった。私は、実際の経験により宇宙の公平さと精霊的な哲学におけるこのような多面的問題の理解に対して十分な概念上の能力を獲得した超宇宙における行政職務を課されるまでこれらの複雑さについての完全な理解に至らなかった。あなたが、楽園に向かって上昇するにつれ、宇宙行政の多くの問題的特徴は、増加した経験上の能力の取得後にのみ、そして高揚された精霊的洞察の達成後に理解され得るに過ぎないということをますます知るであろう。宇宙的賢明さは、宇宙状況の理解を欠くことはできない。

54:6.11 (620.3) [現在はオーヴォントンの超宇宙政府に配属され、サルヴィントンのガブリエルの要請によりこの問題に関して働いている時間の宇宙の最初の体制反乱における経験上の生存の強力な使者による提示]

論文 55
光と生命の球体

55:0.1 (621.1) 光と生命の時代は、時間と空間世界の最終的進化の到達である。そのような生息界は、原始人の初期から連続する惑星時代—惑星王子の前後の時代、アダーム後の時代、権威ある息子後の時代、贈与の息子後の時代—を経過してきた。次に、そのような世界は、神性の真実と宇宙の英知についての進歩しつづける顕示とともに、をもたらす、三位一体の教師たる息子の一連の惑星奉仕活動により頂点に達しつつある進化の到達、つまり光と生命の定着状態への準備ができている。教師たる息子は、惑星の最後の時代を確立するこれらの努力において、つねに輝ける宵の明星の、加えて時おりメルキゼデク系の援助を享受する。

55:0.2 (621.2) 最終的惑星任務の終わりに教師たる息子により開始される光と生命のこの時代は、生息界においていつまでも続く。定着状態の各前進段階は、権威ある息子たちの裁決により一連の天啓へと分離できるかもしれないが、そのような全裁決は、決して惑星の成り行きを修正することなく、この上なく形式的である。

55:0.3 (621.3) 継続的生存は、超宇宙の主要回路において達成するそれらの惑星のみに保証されるが、我々が知る限り、光と生命が定着したこれらの世界は、いつまでも永遠の時代を続いていく運命にある。

55:0.4 (621.4) 進化世界の光と生命の時代の展開には７段階があり、またこのつながりにおいて、精霊融合の人間の世界は、一連の調整者融合世界の者たちと同様のやり方で発展させるということに注目すべきである。光と生命のこれらの７段階は、次の通りである。

55:0.5 (621.5) 1. 第１あるいは惑星段階

55:0.6 (621.6) 2. 第２あるいは体制段階

55:0.7 (621.7) 3. 第３あるいは星座段階

55:0.8 (621.8) 4. 第４あるいは地方宇宙段階

55:0.9 (621.9) 5. 第５あるいは小分割段階

55:0.10 (621.10) 6. 第６あるいは主要分割段階

55:0.11 (621.11) 7. 第７あるいは超宇宙段階

55:0.12 (621.12) この物語の終わりに際しこれらの進化段階が、宇宙の組織化に関連するように記述されるのだが、いかなる段階の惑星価値も、他の世界の開発から、あるいは宇宙行政の超惑星段階からまったく独立しているいかなる世界によっても成し遂げられるかもしれない。

1．モロンチア寺院

55:1.1 (622.1) 生息界首都のモロンチア寺院の存在は、このような球体の光と生命の定着時代への承認の証明である。教師たる息子の最後の任務の終わりに１世界を去る前に、進化上の達成のこの最終の新紀元を開始する。「神聖な寺院が地に下りてくる」その日に、教師たる息子が取りしきる。この出来事は、光と生命の時代の夜明けを意味し、この素晴らしい日を目撃しに来るその惑星の楽園贈与の息子の個人的臨場によって常に光栄を浴する。楽園のこの贈与の息子は、比類なきこの美しい寺院において新しい惑星統治者として長年の惑星の王子を宣言し、また、このような忠実なラノナンデクの息子に新しい力と惑星問題に関する拡大された権威を授ける。体制統治者もまたこれらの確認宣言に出席し、話をする。

55:1.2 (622.2) モロンチア寺院は3部分からなる。真ん中は、楽園の贈与の息子の避難所である。右側には前任の惑星王子、すなわち現在は惑星の統治者の席がある。このラノナンデクの息子は、寺院内にいるとき領域のより精霊的な個人の目には見える。左側には惑星配属の終局者の代理責任者の席がある。

55:1.3 (622.3) 惑星の寺院は、「天から下りてくる」と話されてきたが、現実には実際の物質が、体制本部から輸送されるのではない。各設計図は、体制首都において縮小して作られ、モロンチアの力の監督が、その後認められたこれらの計画を惑星に持参する。モロンチアの力の監督は、ここで熟練の物理制御者と共同して設計書に従いモロンチア寺院建築に進む。

55:1.4 (622.4) 平均的モロンチア寺院は、およそ30万人の観客を収容する。これらの大建造物は、崇拝のため、あるいは放送受信のためには使用されない。この大建造物は、体制君主との、あるいはいと高きものとの連絡や、精霊存在体の人格臨場を明らかにすることを意図した視覚化の特別式典や、宇宙的黙想といったような惑星の特別式

典専用である。宇宙哲学の学校は、ここで卒業式を行ない、領域の人間は、同じくここで最高の社会奉仕の業績に対し、また他の優れた技能に対し惑星の称賛を受けるのである。

55:1.5 (622.5) このようなモロンチア寺院は、モロンチア生活への生きている人間の移動を目撃するための集合場所としても役立つ。神性調整者と最終融合を経験するそれらの人間の肉体を完全に抹消するような焼き尽くす燃え上がる栄光によって移動寺院が破壊されないのは、モロンチア物質で構成されているからである。大きい世界においてはこれらの出発の閃光は、ほとんど絶えることがなく、移動の数が、増加するにつれ惑星の異なる地域において従属のモロンチア生命の社が用意される。私は、つい最近25のモロンチアの社が機能する遠い北の世界に滞在していた。

55:1.6 (622.6) これらの融合の閃光は、いまだ定着していない世界においては、つまりモロンチア寺院のない惑星においては、惑星環境において何度も起こる。り、そこでは

転移候補者の肉体が中間創造者と物理制御者により上げられる惑星環境において何度も起こる。

2.死と転移

55:2.1 (623.1) 肉体の、自然の死は、人間の必然性ではない。前進した進化の存在体の大半は、すなわち光と生命の最終時代に存在している世界の公民は、死なない。それらは肉体生活からモロンチア生活へと直接に移動される。

55:2.2 (623.2) 物質的生活からモロンチア状態への転移経験—不滅の魂と内在する調整者との融合—は、惑星進化に比例の度合いで増す。最初は各時代の少数の人間だけが、精霊的進歩の転移段階に達するが、教師たる息子の時代が続くにつれ、ますます多くの調整者の融合が、これらの前進する人間の長くなりつつある命、生活、の終了前に起こる。そして、教師たる息子の最終任務の時までにこれらの素晴らしい人間のおよそ４分の１が自然死を免除されている。

55:2.3 (623.3) 光と生命の時代が進むにつれ、中間創造物、あるいはその仲間は、魂-調整者の予想される結合の接近状況を感じとり、目標の後見者にこれを示す。目標の後

見者たちは、次に終局者の司法権下にあるこの人間が役割を果たしているかもしれない終局者集団にこれらの事項を伝える。そこで次に、惑星君主の召喚状が、惑星の全職務を断念し、出身世界に別れを告げ、惑星君主の内なる寺院へ行き、そこでモロンチア変遷を、つまり進化の領域から前精霊進行のモロンチア段階への転移の一瞬を待ち受けるようこのような人間に発行される。

55:2.4 (623.4) このような融合候補者の家族、友人、労働集団が、モロンチア寺院において交歓したあとでは、融合候補者が、休憩したり、集う友人たちと自由に談話している中央の舞台の周りに振り分けられている。周りに集っている。介入している天の人格の一回路が、有形の肉体の拘束から上昇候補者を救出する「生命の閃光」のその瞬間に現われるエネルギー活動から物質の人間を守るために設定されており、自然の死が、それにより肉体から救われるそれらの者たちのために為すこのような進化の人間のためにこれによりする。

55:2.5 (623.5) 多くの融合候補者は、一斉に広い寺院に集められるかもしれない。精霊的な炎の中に自分たちの愛する

者達の上昇を目撃するのはなんと美しい機会であることか、また、人間が、死者達を地球の自然力の抱擁に委ねなくてはならない初期のそれらの時代との何という対照であることか。人間進化の初期の泣き叫びの特性を示す光景は、神を知る人間が、夢中にする壮大さと昇り行く栄光の精霊的な火により有体の仲間から移されるとき、愛する者達に一瞬の別れを告げるときに、恍惚とした歓喜と崇高な熱意に、いまとって代わる。光と生命に定着した世界における「葬儀」は、最高の喜びの機会であり、深遠な満足であり、表現しえない希望である。

55:2.6 (623.6) これらの進歩している人間の魂は、信仰、希望、保証でますます満たされている。転移の社の周りに集う広がる行き渡る精神は、自集団の１人のための卒業演習に集うかもしれない、あるいは集団の１人への何らかの大きい名誉の授与を目撃するために集まるかもしれない喜ぶ友や親類のそれに似ている。もし、さほど先進的でない人間が、幾らかのこの同じ快活さと陽気さで自然の死をみることを学びさえできたならば、それは、明らかに助けとなるであろう。

55:2.7 (624.1) 人間の観察者は、融合閃光後の転移された仲間の何も見ることができない。このような転移された魂は、調整者による適切なモロンチア訓練世界の復活広間へとに進んで行く。生きている人間のモロンチア世界への転移に関わるこれらのやりとりは、最初に光と生命に定着した日にそのような世界に配属された大天使が、監督する。

55:2.8 (624.2) 世界が光と生命の第４段階に到達する時までには、半分以上の人間が生きているものの中から転移により惑星を去る。このような死の減少は絶えず続くが、私は、長い間生命に安定しているものの自然死から完全に免れている生息界の体制について知らない。そのような高度の惑星の進化が一様に達成されるまで、地方宇宙のモロンチア訓練世界は、進化するモロンチア前進者のために教育の、そして文化的な球体として奉仕を続けなくてはならない。死の排除は理論的に可能であるが、私の観測ではまだ起こってはいない。多分このような状態は、定着した惑星生活のはるかに広がる第７段階の後の時代に達成されるかもしれない。

55:2.9 (624.3) 全盛時代にある定着球体の転移された魂は、大邸宅界を通過しない。また、学生として、体制、あるいは、星座のモロンチア世界に滞在しない。それらは、モロンチア生活の早期の段階のどれも通過しない。それらは、物質的生活から半精霊状態へのモロンチア転移をほぼ完全に逃れる上昇する唯一の人間である。息子に取り押さえられたこのような人間の上昇経歴の最初の経験は、宇宙本部の連続世界の奉仕にある。それらは、通り過ぎたまさしくその世界へと教師としてサルヴィントンのこれらの勉強世界から戻り、人間上昇の確立された進路を通り、その後、楽園へと内側に進む。

55:2.10 (624.4) 発達の進歩段階の惑星訪問ができさえすれば、あなたは、大邸宅世界とより高等なモロンチア世界に上昇する人間の差異ある受け入れに備えるための理由をすばやく把握するであろう。あなたは、高度に進化したそのような球体を通過する存在体が、ユランチアのような乱雑で遅れた世界から到着する平均的人間よりもはるかに進んでいるそれらの楽園上昇を再開のための用意を整えているということを容易に理解するであろう。

55:2.11 (624.5) ７つの大邸宅球体は、人間が、惑星到達のどの段階からモロンチア世界に上がろうとも、出身惑星の進歩状況ゆえに合格しなかったすべての事柄に関し、教師学生としての経験の中でかれらに十分な機会を与える。

55:2.12 (624.6) 宇宙は、上昇者は誰も上昇経験に欠くことができない何かを奪われないということを保証するための意図されたこれらの平等化の方法の適用において手落ちなく遂行する。

３．黄金時代

55:3.1 (624.7) 世界は、光と生命のこの時代、惑星君主の父親らしい支配の下でますます繁栄している。この時までに世界は、１言語、１宗教、そして標準的球体上における１人種の勢いの下で進歩している。だがこの時代は完璧ではない。これらの世界には、十分に支度の整った病院、病人の介護のための家が今なおある。偶発的事故による負傷、老衰と老人性障害に付随する回避不能の疾患を扱う問題がまだ残っている。病気は完全に克服されず、地球の動物も完全には服従させられなかった。しかし、前惑星王子時代の原始人の早期と比較すると、この

ような世界は、楽園のようである。あなたは本能的にこのような領域を地上の天国として—もしこの発展段階の惑星に突然輸送されることができるならば—記述するであろう。

55:3.2 (625.1) 人間の政府は、物質問題の扱いにおいて相対的進歩と完成のこの時代を通じて機能し続ける。私が最近訪れた光と生命の第一段階の世界の公共活動は、十分の一課税法による財源調達であった。全成人労働者 - そして何かに取り組んだ頑健な全市民 - は、自己の収入、あるいは利得の10パーセントを公庫に払い、それは次のように支払われた。

55:3.3 (625.2) 1. 3パーセントは真理の促進に費やされた - 科学、教育、哲学。

55:3.4 (625.3) 2. 3パーセントは美に傾けられた - 遊戯、社交的余暇、芸術。

55:3.5 (625.4) 3. 3パーセントは善に捧げられた - 社会奉仕、愛他主義、宗教。

55:3.6 (625.5) 4. 1パーセントは事故、病気、老齢、あるいは予防不可能な災害から生じる労働無能力の危険性に対する保険準備金に当てられた。

55:3.7 (625.6) この惑星の天然資源は、社会の所有物、共有財産として管理された。

55:3.8 (625.7) この世界における1市民に授けられた最高の名誉は、モロンチア寺院において今までに与えられた唯一の認識段階である「最高の奉仕」の命令であった。この認識は、超物質発見の一定の段階において、あるいは惑星の社会福祉において長い間著名であった者たちに贈与された。

55:3.9 (625.8) 社会的、行政的地位の大半は、男女共同で占められた。また教授のほとんども共同でなされた。同様にすべての司法の委託は、似通った連携男女により履行された。

55:3.10 (625.9) これらの素晴らしい世界における出産期間は、大巾には長くない。1家族の子供たちの年齢があまりに離れ過ぎるのは、最善ではない。子供たちの年齢が近い

と、相互の躾への寄与が可能である。これらの世界の子供らは、真、美、善の習得において様々な達成の進歩した領域と部門における熾烈な努力の競合体制により見事に訓練されている。決して恐れるでない。そのような賛美された球体でさえ、真実と誤り、善と悪、罪と正義の間で選ぶことを刺激するにたる十分な悪を、全くの、潜在的の悪を、呈している。

55:3.11 (625.10) それにもかかわらず、このような高度の進化惑星においても人間存在に付随するある特定の、避けられない罰則がある。定着した世界が光と生命の第3段階を越えて進歩するとき、すべての上昇者は、小分割を極める前に、進化の初期段階を通過している惑星でのある種の短期の任務を受けることが定められている。

55:3.12 (626.1) これらの連続的各時代が、惑星向上の全段階にでの前進的業績を示している。真理の顕示は、光の最初の時代に宇宙の中の宇宙の働きを擁するために拡大された。他方、第2期の神性研究は、七重の神の第一段階である創造者の息子の特性、使命、聖職活動、つながり、

起源、目標についての変幻自在な概念を習得する試みである。

55:3.13 (626.2) 相当に安定しているときのユランチア大の惑星は、およそ百の准行政中心機関を持つであろう。これらの次位の行政所機関では、資格を持つ次の管理者集団の１員、１団が取り仕切るであろう。

55:3.14 (626.3) 1. 支配しているアダームとハヴァーの補佐役を務めるために体制本部から連れて来られた若い物質の息子と娘。

55:3.15 (626.4) 2. これと他の類似の責務のためにある特定世界に作られた惑星の王子の半必滅の部下の子孫。

55:3.16 (626.5) 3. アダームとハヴァーの惑星の直系子孫。

55:3.17 (626.6) 4. 物質化し、人間化した中間創造物。

55:3.18 (626.7) 5. 自らの請願により調整者融合状態にある人間は、特定の重要行政職にあり惑星で継続できる宇宙の指導者の人格化された調整者の命により転移から一時的に免除される。

55:3.19 (626.8) 6. 同じくモロンチア寺院の最高業務の命令を受けた惑星の行政学校の特別に訓練された人間。

55:3.20 (626.9) 7.その惑星の特定区分で必要とされる明確な課題を特別な能力に合わせて遂行するために惑星統治者の指示により時おり一般市民に選ばれる適切に資格を持つ３人の市民からなる特定選出委員会。

55:3.21 (626.10) 惑星の光と生命の高度の目標達成に関しユランチアが直面している大きな障害は、病気、退廃、戦争、多彩な人種と多くの言語の問題の中にある。

55:3.22 (626.11) 進化の世界は、１言語、１宗教、１哲学を達成するまでは光に定着の最初の段階を越えての進歩は望めない。１人種がこのような達成を大いに容易にするとしても、ユランチアの多くの民族は、より高い段階の達成を妨げはしない。

４.行政上の再調整

55:4.1 (626.12) 安定した存在の連続的段階における生息界は、肉体の盟友への聖職活動のために戻って来た楽園達成の上昇者である終局者部隊の志願者の賢明で同情的な行政

の下に驚くべき進歩をする。これらの終局者は、三位一体の教師たる息子と協力して活発ではあるが、モロンチア寺院が地球に現われるまでは世界情勢への本格的な参加を始めない。

55:4.2 (626.13) 終局者部隊の惑星における聖職活動の正式就任に際し、大多数の天の部隊は撤退する。だが目標の熾天使後見者は、光の中の進歩的人間に個人的な聖職活動を続ける。惑星の一生の間には人間のより大きな集団が、人間の連携達成の第３宇宙回路に到着するので、事実そのような天使は、定着時代を通じて増え続けの状態で到着する。

55:4.3 (627.1) これは、定着した存在の第１段階から第７段階へと通過するにつれ生息界におけるますます輝かしい業績連続する時代の展開に伴う行政上の相次ぐ調整の単なる最初に過ぎない。

55:4.4 (627.2) 1. 光と生命の第１段階。安定したこの最初の段階の世界は、３名の支配者により治められている。

55:4.5 (627.3) a. 相談にのる三位一体の教師たる息子によりやがては助言を受ける惑星の統治者、おそらく惑星で機能するこのような息子たちの最後の部隊の長。

55:4.6 (627.4) b. 終局者の惑星部隊の長。

55:4.7 (627.5) c. 王子-君主と終局者の長の二重指導体制の統一者として共同して役割を果たすアダームとハヴァー。

55:4.8 (627.6) 熾天使後見者と終局者のために通詞役を務めるのは、高揚され自由にされた中間創造物である。最終任務にある三位一体の教師たる息子の最後の行動の１つは、領域の中間者を自由にし、惑星の上級地位に昇進させ、（あるいは復活させ）、定着した球体の新行政の責任ある場所に配属させることである。このような変更は、人間が初期のアダーム体制の従来は不可視のいとこ達を識別できるようにと、すでに人間の視力の範囲でなされてきた。これは、熟練の物理制御者の拡大された惑星機能との関係において物理科学の最終の発見により可能にされる。

55:4.9 (627.7) 体制君主は、それらが生命運搬者と物理制御者の支援によりモロンチアで人間化し、思考調整者の迎え入れ後に、楽園上昇に出発できるように安定した第一段階後に中間創造者をいつでも解放する権限を持っている。

55:4.10 (627.8) 第3段階とその後の段階において、主に終局者の接触する人格として、一部の中間者はまだ役割を果たしている。しかし、光と生命のそれぞれの段階に入ると、連携役の聖職活動者の新体制は大きく中間者を置換する。極めて少数のものしか決して光の第4段階を越えては留まらない。第7段階は、活動者が宇宙の特定の創造物の位置で、場所で、仕えるために最初の準絶対の楽園から来るであろう。

55:4.11 (627.9) 2. 光と生命の第2段階。人類を浄化し、安定させるためのさらなる努力に関し惑星支配者の志願相談役になる生命運搬者の惑星到着が、世界でのこの新世紀を際立ったものにしている。そこで、生命運搬者は、人類のさらなる進展に—肉体的に、社会的に、そして経済的に—活発に参加するのである。それから、それらは、知

的、哲学的、宇宙的、精霊的性質をもつ劣性の潜在力からの未発達で持続的な残存物の徹底的除去により人間の血統のさらなる浄化へと自らの指揮を拡大する。生息界において生命を設計し植えつけるもの達は、進化する人種からすべての有害な影響を一掃するための完全で、絶対的権限を持つ物質の息子と娘たちに助言する能力を十分にもっている。

55:4.12 (627.10) 教師たる息子は、相談役として終局者に仕える。それらは、このような任務のあいだ、割り当てによってではなく志願者として勤める。また、惑星のアダームとハヴァーへの助言者として抱えられる可能性を除けば、体制君主の同意があれば、それらは、もっぱら終局者部隊と共に勤める。

55:4.13 (628.1) 3. 光と生命の第 3 段階。この新世紀の間、生息界は、七重の神の第 2 段階である日の老いたるものを新たに認識するようになり、また、これらの超宇宙の支配者の代表者らは、惑星の行政との新しい関係に入る。

55:4.14 (628.2) 安定した存在の後の各時代における終局者は、増加しつづける能力で機能する。宵の明星（超天使）で

ある終局者と三位一体の教師たる息子の間には仕事上の親密な関係がある。

55:4.15 (628.3) この時代あるいは次の時代に教師たる息子は、聖職活動をする精霊４人組に助けられ、世界問題の共同行政者として惑星統治者と関わるようになる選出された人間の行政責任者に配属されるようになる。人間のこれらの最高責任者は、惑星時間の25年間を勤め、また惑星のアダームとハヴァーが次の時代に長年の自身の配属世界からの開放の取り付けを容易にするのが、この新展開である。

55:4.16 (628.4) 聖職活動をする精霊４人組は、球体の熾天使の長、超宇宙の第二熾天使の相談役、転移の大天使、それに体制本部に駐留する配属歩哨の個人的代表者としての役割を果たす汎天使からなる。ただしこれらの助言者は、求められない限り決して助言を申し出ることはない。

55:4.17 (628.5) 4. 光と生命の第４段階。三位一体の教師たる息子は、新しい役割で世界に登場する。長らく自分達の系列と関わってきた創造者の三位一体化された息子たちの

支援をうけ、三位一体の教師たる息子らは、惑星君主とその仲間に志願の相談役、それに助言者としていま世界に来る。このような２人組み—楽園-ハヴォーナの人格に三位一体化された息子たちと上昇者に三位一体化された息子たち—は、惑星支配者に大いに有用である異なる宇宙観点と様々の個人的経験を表現する。

55:4.18 (628.6) 惑星のアダームとハヴァーは、この時代の後のいかなる時も自らの楽園上昇を始めるために惑星の義務からの解放を最高権威の創造者息子に申請できる。あるいは、アダームとハヴァーは、超宇宙本部からの第二熾天使と共に２人１組で働くために今これらの世界に配属される輝ける宵の明星によって描きだされた終局者の哲学的な教えを理解しようと努力している先進的な人間のますます精霊的な社会の新たに出現しつつある系列の部長として惑星に留まることができる。

55:4.19 (628.7) 終局者は、主として新たな、超物質的な社会活動—社会的、文化的、哲学的、宇宙的、そして精霊的社会活動—の開始に携わった。我々が識別できる限り、それらは、宇宙空間の外側において聖職活動をするために

出て行くかもしれないとき、可能性として、この聖職活動を深く進化の安定性の第７新世紀へと続けるであろう。そこですぐに、我々は、それらの場所が準絶対の存在体によって楽園からとられるかもしれないと推測する。

55:4.20 (628.8) 5. 光と生命の第５段階。この段階の定着した存在再調整は、ほぼ完全に物質領域に関係があり、熟練の物理制御者にとり主要な関心事である。

55:4.21 (628.9) 6. 光と生命の第６段階は、領域の心の回路における新機能の開発を示す。宇宙の英知は、心の宇宙聖職活動で構成していくように見える。

55:4.22 (628.10) 7. 光と生命の第７段階。第７新世紀の初期に、惑星君主の三位一体の教師の相談役には、日の老いたるものにより遣わされた志願助言者が加わり、後に両者には、超宇宙の最高幹部出の3番目の助言者が加わるであろう。

55:4.23 (629.1) アダームとハヴァーは,その前でなければこの新世紀の間、常に惑星の義務から解放される。もし終局者

部隊に物質の息子がいるならば、人間の最高責任者とともに働くかもしれず、また時々この役割で機能しようと申し出るのは1名のメルキゼデクである。もし中間者が終局者の間にいるならば、惑星に留まっているその系列のすべては、すぐに解放される。

55:4.24 (629.2) 長年の任務からの免除を獲得するや否や、惑星のアダームとハヴァーが次のような経歴を選択するかもしれない。

55:4.25 (629.3) 1. アダームとハヴァーは、惑星からの解放を確かなものにすることができ、また宇宙本部から楽園経歴をすぐに開始し、モロンチア経験の終わりに思考調整者を迎え入れる。

55:4.26 (629.4) 2. 惑星のアダームとハヴァーは、１期間の惑星貢献を申し出た純粋な血統の移入された数名の子が行う調整者の受け入れに付随しておこる光に定着した世界で依然として仕えながら、じつに頻繁に調整者を迎え入れるであろう。その後は、全員が、宇宙本部に行き、そこで楽園経歴を始めるかもしれない。

55:4.27 (629.5) 3. 体制首都からの物質の息子と娘がするように、惑星のアダームとハヴァーは、逗留の短期間に中間ソナイト世界に直行し、そこで調整者の迎え入れを選ぶかもしれない。

55:4.28 (629.6) 4. 両者は、体制本部に戻り、当分そこで最高裁判所の席の占有を決め、その後に調整者を迎え入れ、楽園上昇を始めかもしれない。

55:4.29 (629.7) 5. 両者は、一時期教師として勤め、行政任務から出身世界に戻り、宇宙本部への移動時点で調整者内住を決めるかもしれない。

55:4.30 (629.8) これらの全時代を通じ、援助する移入された物質の息子と娘は、進歩している社会的、かつ経済的秩序に途方もなく大きい影響を及ぼす。それらは、潜在的に不死で、少なくともそのような時までは人間化をすること、調整者を受け入れること、そして楽園に出発することを選ぶ。

55:4.31 (629.9) 存在体は、進化世界において思考調整者を受け入れるために人間らしくなる必要がある。終局者の人間

部隊の全上昇構成員は、熾天使を除いては、調整者内住であり、調整者融合であり、また、それらは、この部隊に集められた時点で、もう１つの精霊の型が内住する父である。

５．物質的発展の絶頂

55:5.1 (629.10) ユランチアのような孤立世界にいる、属する、罪に苦しみ、悪に支配された、自己本位の必滅の創造物は、肉体の完全性、知的達成、罪不在の球体のこれらの進歩した時代を特徴づける精霊的発展を想像することができない。

55:5.2 (629.11) 光と生命に定着した世界の進歩段階は、進化による物質的発展の絶頂を表す。教養の高いこれらの世界には初期の原始時代の怠惰と摩擦はなくなる。貧困と社会の不均等性はほぼ消滅し、堕落は消失し、非行はめったに観察されない。狂気は事実上は消え、精神薄弱は稀である。

55:5.3 (629.12) これらの世界の経済の、社会の、そして行政の状態は、高度の完成された類のものである。科学、芸術、産業は、繁栄し、社会は、物質上の、知的かつ文化

的な高度の達成のための円滑な運用の仕組にある。産業は、主としてこのような実に見事な文明社会のより高い目的を果たすことに転換されてきた。そのような世界の経済生活は、倫理的になった。

55:5.4 (630.1) 戦争は歴史の問題となり、軍隊、あるいは警察はもう存在しない。政府は、次第に消えていく。自制心が、人間が制定する法律を緩やかに時代遅れにしている。民府と法令の広がりは、文明を進める中間的状態における市民の徳行と精神性とに反比例する。

55:5.5 (630.2) 学校は、大いに改善され、心の練磨と魂の拡大に傾けられる。芸術の中心地は素晴らしく、音楽団体は素晴らしい。哲学と経験的宗教の学校に関連する崇拝のための寺院は、美と壮大さをもつ創造である。野外の崇拝集会場は、芸術的装飾の単純さにおいて等しく荘厳である。

55:5.6 (630.3) 競技、ユーモア、そして個人と団体の他の達成段階のための用意は、十分かつ適切である。高度の教養のそのような世界における競い合う諸活動の特徴は、宇宙科学と宇宙哲学に優れようとする個人と集団の努力に

関係する。文学と雄弁術は栄え、言語は思考表現のためばかりではなく概念の象徴のためにも改善される。生活は、清清しいほどに単純である。人間は、ついに高度の機械発達状況と奮い立たせる知力の発達とを調整し、またすばらしい精霊的業績、段階、との両方に影を投げかけた。幸福の追求は、喜びと満足の経験である。

6．個々の人間

55:6.1 (630.4) 世界が、光と生命の生活の定着状況において進歩するにつれ、社会は、次第に平和になる。個人は、同様に、独立し家族に対して献身的であるとともに、いっそう利他的で友愛的になった。同様に独立し家族に対して献身的である個人は、いっそう利他的で友愛的になった。

55:6.2 (630.5) ユランチアにおいては、またあなたが今そうであるように、これらの完成された世界の啓発された人種の前進状況と進展する性質の評価をほとんど理解できない。性質をあまり評価できない。これらの人々は、進化の人種の全盛期にある。しかしこのような存在体はまだ死を免れない。それらは、呼吸をし、食べ、眠り、飲む

ことを続ける。この大いなる発展は天国ではないが、それは、楽園上昇の神性世界を荘厳に予想させる。

55:6.3 (630.6) 通常世界における人類の生物的適性は、後アダームの新世紀のずっと前に高い段階に引き上げられた。そして今、安定した紀元を経て時代から時代へと人間の身体上の進化は継続する。視聴覚は、双方ともに広げられる。人口は、今では静止状態になった。生殖は、惑星の必要条件と生得資質に従って調整される。この時代惑星の人間は、５集団から10集団に分けられ、下位集団は、上位集団の子供に比して半数のみの生殖が許される。光と生命の時代を通じてのこのような素晴らしい人種の継続的改良は、大きくは社会的、哲学的、宇宙的、精霊特質の優れた資質を示すそれらの人種の血統の選択的生殖の問題である。

55:6.4 (630.7) 調整者は前の進化時代のように来続けており、これらの人間は、時代の経過につれますます内住する父の破片と親しく交わることが可能である。進化の萌芽期と前精霊段階の間、心-精霊の補佐は、いまもなお機能を果たしている。聖霊と天使の聖職活動は、定着生活の

連続する時代が経験されるにつれさらにいっそう効果的である。光と生命の第４段階の進歩的人間は、超宇宙管轄に携わる熟練の精霊の精霊臨場との少なからぬ意識上の接触を経験するようである。一方そのような世界の哲学は、崇高な神の新顕示を理解する試みに焦点を合わせている。この進歩状態の惑星においては人間の住民の半分以上が、生きているものの中からモロンチア状態への転移を経験する。それでも、「古いものは過ぎ去りつつある。見よ、眺めなさい、すべては新しくなりつつある。」

55:6.5 (631.1) 我々は、肉体的進化は、光と生命の第５新世紀時代の終わりまでにはその完全な進化達成をしているであろうと考える。我々は、進化する人間の心と結びつけられる精霊的進化の上限は、モロンチアの結合価値と宇宙の意味の調整者融合段階により決定されるということに気づく。だが、我々は、賢明さに関してはまったく分からない一方で、知的進化と賢明さの達成には決して限界はあり得ないと推測する。英知は、第７段階の世界においては物質的可能性を使い切り、モタ洞察に入り、やがては準絶対の壮大ささえも味わうことができる。

55:6.6 (631.2) 我々は、人間は、移される前に高度に進化し長い第７段階にあるこれらの世界において地方宇宙の言語を完全に習得するのを観察している。私は、またバンドンターが、年長の人間に超宇宙の言語を教えていたとても古い少数の惑星を訪問したことがある。そして、私は、それによって準絶対の人格が、モロンチア寺院で終局者の臨場を明らかにする方法をこれらの世界において観察してきた。

55:6.7 (631.3) これは、進化の世界において努力する人間のすばらしい目標の話である。それはすべて、モロンチア経歴に入る前にさえ起こる。このすべての素晴らしい発展は、楽園上昇と神性達成の終わりのない、また理解不可能な経歴のまさしくその最初の段階である生息界の物質の人間により達成可能なのである。

55:6.8 (631.4) しかし、あなたは、定着した光と生命の第７新世紀に長らくある世界からどのような種類の進化の人間が、いまやってくるのか想像できるであろうか。それは、上昇経歴を始めるために地方宇宙の首都のモロンチア世界に進むこのようなもの達なのである。

55:6.9 (631.5) もし動揺したユランチアの人間が、長い間光と生命に落ち着いたこれらのいっそう進歩した１世界のを見ることができさえすれば、２度と創造のための進化の計画の英知を問題にはしないであろう。もし永遠の生きものの発展に未来がなかったならば、完成された業績のこのような安定した世界の人類の素晴らしい進化の才能は、まだ十分に時間と空間の世界の人間の創造を正当化するのであろうが、、、。

55:6.10 (631.6) 我々は、しばしば思い巡らす。もし雄大な宇宙が光と生命に定着していたならば、上昇する素晴らしい人間は、まだ終局者部隊へと定められるであろうかと。だが我々には分からない。

７.第１あるいは惑星の段階

55:7.1 (631.7) この新世紀は、惑星新本部のモロンチア寺院の登場から光と生命における体制全体の定着時に渡る。この時代は、惑星の王子がその球体の楽園の贈与の息子の命令と個人的臨場によって惑星君主の身分に登用されるとき、一連の世界任務の終わりに三位一体の教師たる息

子によって開始される。それに付随し、終局者は惑星業務への積極的な参加を開始する。

55:7.2 (632.1) 外へ向かっての可視の出現光と生命の定着したそのような世界の実際の支配者、あるいは指揮官は、物質の息子と娘、つまり惑星のアダームとハヴァーである。終局者は、王子である君主がモロンチア寺院内にいる時以外はそうであるように、目には見えない。惑星体制の実際の、そして文字通りの頭は、それゆえに物質の息子と娘である。宇宙領域全体で王と女王の考えに威信を与えたのが、これらの取り決めについての知識である。王と女王は、世界が、より高位の、だが見えない支配者のために行動をするようこのような高位の人格に命令できるとき、これらの理想的状況下で大なる成功を収める。

55:7.3 (632.2) あなたの世界においてそのような時代が達成されるとき、今はユランチアの代理の惑星の王子であるメルキゼデクのマキヴェンタは、疑いなく惑星統治者の地位を占めるであろう。そして、ノーラティアデクのいと高きものの被後見者として今エデンチアに留められてい

るユランチアのアダームとハヴァーの息子と娘が同伴するであろうということは、ジェルーセムで長い間推測されてきたことである。アダームのこれらの子供たちは、エデンチアへの移動準備にあたりユランチアにおける自分の物質の肉体を断念したほぼ37,000年前に前創造力を奪われたので、メルキゼデク統治者と共同してユランチアにそのように勤めるかもしれない。

55:7.4 (632.3) この安定時代は、体制における全生息惑星が、安定化の時代を達成するまでずっと続く。それから、最も若い世界—光と生命を達成する最後のもの - が、体制時間の1,000年の間にこのような定着を経験し終えると、全体制は、安定状態に入り、個別の世界は、光と生命時代の体制新世紀へと招き入れられる。

8.第2あるいは体制の段階

55:8.1 (632.4) 体制全体が生命に定着するとき、政府の新体制が開始される。惑星の統治者は、体制の秘密会議の構成員になり、また星座の父の拒否対象になり得るこの新行政機関は、権限において至上である。生息界のこのような体制は、事実上自治になる。体制の立法府は、本部世

界に設立され、各惑星はそこへ１０名の代表者を送る。法廷は、いま体制首都に設立され、上告だけが、宇宙本部に回される。

55:8.2 (632.5) 体制の定着とともに超宇宙の最高幹部の代表者である配属哨兵は、体制の最高裁判所の志願助言者になり、また新立法府の実際の議長となる。

55:8.3 (632.6) 光と生命の全体制の定着後、体制君主は、もう来もしないし、行きもしないであろう。そのような君主は、永久にその体制の頭に留まる。補助の君主は、前の時代のように交代を続ける。

55:8.4 (632.7) 中間ソナイトは、安定化のこの期間、立法府の相談役として、また裁定法廷の助言者として働くために逗留している宇宙本部世界から初めてやって来る。これらの中間ソナイトは、終局者と連携して後援する教授事業に最高価値の新モロンチア感性の意味を教え込む特定の努力も続ける。物質の息子が、生物学的に人類のためにしたことを、今中間ソナイトの創造物は、哲学と精霊化された考えの絶えず前進する領域におけるこれらの合一された栄光の人間のためにするのである。

55:8.5 (633.1) 教師たる息子は、生息界において終局者との自由意志の協力者となり、これらの同じ教師たる息子は、全体制が光と生命に定着後に、それらの球体がもはや受け入れの格付けされた世界として利用されないとなると大邸宅世界へと終局者にも同伴する。少なくとも、これは、星座全体がこのように発展し終えるまでは事実である。しかし、ネバドンではそれほどまでに進歩した集団はない。

55:8.6 (633.2) 我々にはそのような再貢献する大邸宅世界を監督するであろう終局者の仕事の性質を明らかにすることは許されていない。あなたには、しかしながら、これらの物語の中では描かれていない種々の知力ある創造物の型が宇宙全体にはあるということを知らされてきた。

55:8.7 (633.3) そして今、体制が、構成する世界の進歩の効力により1つ1つ光に定着するにつれ、特定の星座の最後の体制、そして宇宙の行政者たち—教師たる息子、日々の和合のもの、輝く明星—は、いと高きものが、生息界の定着体制の新たに完成された百家族の無条件の支配者で

ある、と公布するために星座の首都に到着するその時が来る。

9.第3あるいは星座の段階

55:9.1 (633.4) 定着体制の星座全体の統一には、行政当局の新たな分散と宇宙行政の付加的再調整が伴う。この新世紀は、全生息界の高度の達成を見るが、体制の監督と地方宇宙政府の双方との著しい関係修正を伴い、特に星座本部の再調整によって特徴づけられる。星座と宇宙の多くの活動は、この時代に体制首都に移行され、超宇宙の代表者は、惑星、体制、宇宙支配者との新たで、より一層の緊密な関係を担う。特定の超宇宙行政者は、これらの新連合に付随し、いと高きものの父の志願助言者として星座首都に地位を確立する。

55:9.2 (633.5) こうして星座が光に定着すると、立法の役割は終わり、いと高きものが議長を務める体制君主の上院が、その代わりに機能する。いま初めて、このような行政集団は、ハヴォーナと楽園の関係における問題において超宇宙政府と直に交渉する。さもなければ、星座は、以前と同様に地方宇宙との関係を続ける。ユーニーヴィ

ターチアは、定着した生命においては段階から段階へと星座のモロンチア世界を続いて治める。

55:9.3 (633.6) 時が経過するにつれ、星座の父は、かつては宇宙本部に集中されていた行政の、あるいは監督の細かな機能をより引き継いでいく。これらの統一された星座は、安定化の第６段階の達成までにはほとんど完全な自治の立場に到達しているであろう。定着の第７段階の開始に際しては、いと高きものという名前が意味する真の品位へのこれらの支配者の高揚を疑いなく目撃するであろう。星座は、どの点から見ても超宇宙支配者にその時じかに対応するであろうし、他方、地方宇宙政府は、宇宙の新しい雄大な義務の責任を理解するために拡大するであろう。

１０.第４あるいは地方宇宙の段階

55:10.1 (634.1) 宇宙が光と生命に定着すると、それは、まもなく超宇宙の確立された回路に入り、日の老いたるものが、無条件の権限をもつ最高審議会の設立を宣言する。日々の和合のものが議長をするこの新首脳部は、百名の日の忠実なるものからなり、この最高審議会の第一条例

は、熟練の創造者たる息子の継続的統治権を認めることである。

55:10.2 (634.2) 宇宙行政は、ガブリエルと父メルキゼデクに関する限りまったく変化していない。無条件の権限をもつこの評議会は、主として光と生命の進歩した状況から生ずる新たな問題と状態に関係している。

55:10.3 (634.3) 検査補佐官は、地方宇宙安定化の部隊を編成するためにすべての配属哨兵を今動員し、また父メルキゼデクに自分とその監督を共有することを求める。そして今、啓示を受けた三位一体の精霊部隊が、初めて日々の和合のものに配属される。

55:10.4 (634.4) 地方宇宙全体の光と生命の定着は、個々の生息界から宇宙本部までの全行政制度の深遠な再調整を開始する。新しい関係は、星座と体制へと下方に伸びる。地方宇宙の母なる精霊は、超宇宙の熟練の精霊との新しい連携関係を経験し、ガブリエルは、熟練の息子が本部世界を留守にするかもしれない時、効力を発するように日の老いたるものとの直接的接触を確立する。

55:10.5 (634.5) この時代とその後の時代、権威ある息子たちは、天啓の裁定者として役割を続けて果たし、一方、楽園のアヴォナルの百名の息子は、宇宙首都の輝く明星の新高等評議会を構成する。そして後には、これらの権威ある息子の中の１名は、統合の第７段階が達成されるまで体制君主の求めにより各地方体制の本部世界に配属の最高相談役になるであろう。

55:10.6 (634.6) 三位一体の教師たる息子は、この新世紀の間、惑星の統治者だけではなく星座の父に同様に仕える１組３名からなる集団の志願の助言者である。そしてついには、これらの息子たちは、地方宇宙の自分の場所を見いだす、というのも、それらは、このとき地方創造の管轄区域から取り除かれ、無制限の権限の最高審議会勤務に配属されているので。

55:10.7 (634.7) 終局者部隊は、いま初めて、楽園外の当局の、つまり最高審議会の管轄を認める。これまで終局者は、楽園のこちら側では監督を認識してこなかった。

55:10.8 (634.8) このような定着宇宙の創造者たる息子は、楽園とその関連世界において、また地方創造をすべてにおい

てはたらく多数の終局者集団に助言することに時間の大半を費やす。人間マイケルは、このようにして栄光を与えられた終局者である人間との交流に最大限の兄弟関係を見いだすであろう。

55:10.9 (634.9) いま事前の組み立て中にある外宇宙に関連するこれらの創造者たる息子の機能について推測することは、完全に無駄である。だが、我々は全員、時折このような仮定をたてるのである。創造者たる息子は、発展のこの第４段階を達成すると行政上自由になる。神性の聖職活動者は、次第に自己の活動を超宇宙の熟練した精霊と無限の精霊とのそれと混合していく。創造者たる息子、創造的の精霊、宵の明星、教師たる息子、そして常に増加する終局者部隊の間には、新たで荘厳な関係が進展しているように思われる。

55:10.10 (635.1) もしマイケルが、ネバドンを去るようなことがあるならば、ガブリエルは、父メルキゼデクを自分の相手として疑いなく最高の行政者者になるであろう。同時に、新しい地位が、物質の息子、ユーニーヴィターチア、中間ソナイター、スサチア、精霊融合の人間といっ

たような永久公民の全体制に与えられるであろう。しかし進化が続く限り、熾天使と大天使は、宇宙行政に必要とされるであろう。

55:10.11 (635.2) 我々は、しかしながら、自らの思惑の２つの特徴に満足している。もし創造者たる息子が、外宇宙方向へと予定されているならば、神性の聖職者は、確かにそれらを伴うであろう。我々は、メルキゼデク系が、出身宇宙に留まるであろうと等しく確信している。我々は、メルキゼデク系が増加し続ける責任ある役割を地方宇宙政府とその行政において果たすように予定されていると考える。

11. 大分割段階と小分割段階

55:11.1 (635.3) 超宇宙の大小の分割は、光と生命に定着する計画における役割を直接には演じない。このような進化の発展は、単体として主に地方宇宙に関係があり、また地方宇宙の構成要素だけに影響する。超宇宙は、その構成する地方宇宙のすべてが、こうして完成されるとき、光と生命に定着している。だが、７超宇宙のうちの１つは、これに近い発展段階にさえ達しなかった。

55:11.2 (635.4) 小部門時代。観察で見通す限りでは、安定化の第5あるいは小部門段階は、物理状況と、超宇宙の確立された回路に関する百の地方宇宙の調整の定着にもっぱら関係がある。見たところでは、力の中心とその仲間以外は、物質的創造のこれらの再編成に関係していない。

55:11.3 (635.5) 大分割時代。第6段階あるいは大分割の安定化に関し、我々のうち誰もこのような出来事を目撃しなかったので推測しかできない。にもかかわらず、我々は、おそらくこのような生息界の進歩状況と世界の宇宙の集団化に伴うであろう行政上の、また他の再調整に関し多くを仮定することができる。

55:11.4 (635.6) 小分割の状況は、均衡的物理平行に関係があるので、我々は、大分割統一は、一定の新知的到達段階に、おそらくは宇宙の英知についての最高認識のいくらか進歩した業績に関係するであろうと推論する。

55:11.5 (635.7) 我々は、個々の世界のこのような業績結果の観察により、またこれらの古い、高度に発達した球体に住まう個々の人間の経験におけるいまだ達成されていない

進化上の前進段階の認識に付随するであろう再調整に関して結論に到る。

55:11.6 (635.8) 宇宙、あるいは超宇宙の行政機構と統治手段は、個々の生息惑星、あるいはこのような球体上のいかなる個々の人間の発展的進化の、あるいは精霊的進歩をどんな方法でも制限したり、遅らせることはできないということを明らかにさせよう。

55:11.7 (635.9) 我々は、幾つかの古い宇宙において第５と第６段階に—はるか第７新世紀にさえ延長された—定着した光と生命の世界を見いだす。その地方体制は、まだ光に定着してはいない。若い惑星は、体制統一を遅らせるかもしれないが、これは、古い、しかも進化世界の進歩をいささかも妨げない。また環境的限界は、孤立世界でさえも個々の人間の個人的達成を妨害することもできない。ナザレスのイェススは、人間の中の１人間として、１千９百年以上前にユランチアに個人的に光と生命の状態を成就した。

55:11.8 (636.1) たとえ我々が、安全に７超宇宙の安定化の事象の様を仮定し得ないとしても、我々は、長らく安定した

世界において行なわれる観察により超宇宙全体が光に安定しているときに何が起きるかということについてかなり信頼できる結論に至るのである。

12. 第7あるいは超宇宙の段階

55:12.1 (636.2) このような出来事は、一度も現実化したことがないことから、我々は、超宇宙は光に定着し始めるとき何が起こるであろうかを明確には予測できない。一度も否定されたことのないメルキゼデク系の教えから、我々は、時間と空間の創造の生息界から超宇宙本部に拡大するすべての組織単位の組織化と行政全体には全面的な変更がなされるであろうと推し計る。

55:12.2 (636.3) 他の場所に配属されていない創造物の三位一体化された息子たちの多くは、定着した超宇宙本部と分割上の首都に集められると一般的には信じられている。これは、ハヴォーナと楽園に入る途中の外空間者のそのうちの到着を予期してのことであるかもしれない。しかし我々は、本当のところは知らない。

55:12.3 (636.4) 我々は、もし超宇宙が光と生命に定着するならば、そのとき、いま顧問である崇高なるものの無条件の

監督者は、超宇宙の本部世界の高度の行政機関になるであろうと信じる。これらは、準絶対の行政者と直に接触可能な人格であり、定着した超宇宙で直ちに現役になるであろう。これらの無条件の行政者は、高度の発展の創造部隊の中の助言者と相談役の機能を長らく発揮してきたが、崇高なるものの権限が最上になるまでは行政上の責任を負わない。

55:12.4 (636.5) この新世紀の間いっそう広範囲に機能する崇高なるものの無条件の監督者は、有限でも、準絶対でも、究極でも、無限でもない。それらは最上位にあり、崇高の神の代理だけを務める。それらは時間-空間の最上位の人格化であり、従ってハヴォーナでは機能しない。それらは最上位の統一者としてのみ機能する。それらは、もしかすると、宇宙反射の技術に関係しているかもしれないが、確信はない。

55:12.5 (636.6) 我々の誰一人として、雄大な宇宙（ハヴォーナに依存する７超宇宙）が、完全に光と生命に定着するとき、何が起きるかについて満足のいく概念を抱かない。その事象は、確かに中央宇宙の出現以来の永遠の年代史

における最も著しい出来事であろう。崇高なる存在体自身が、精霊本人を包み隠しているハヴォーナの神秘から脱するであろうと、また時間と空間の完成された創造の全能かつ経験上の君主としての第７超宇宙の本部の住み込みになるであろうと考える者達がいる。だが我々は、実のところは知らない。

55:12.6 (636.7) ［一時的にユランチアの大天使評議会に配属された強力な使者による提出］

論文 56
宇宙の統一

56:0.1 (637.1) 神は、和合である。神性は、普遍的に調和している。宇宙の中の宇宙は、絶対的に１つの無限の理性により統制される統合化された１巨大機構である。宇宙創造の身体的、知的、精霊的領域は、神々しく関連づけられている。完全なものと不完全なものは、真に相関関係にあり、それゆえ有限の進化の創造物は、「私が完璧であるように、完璧でありなさい。」という宇宙なる父の命令に服従して楽園に昇ることができる。

56:0.2 (637.2) 創造の多様な段階は、すべて主たる宇宙の建築家の計画と行政に統一されている。宇宙は、時-空の人間の制限ある心には、明白に不調和を表したり、効果的調和の欠如を示す多くの問題や状況を提示するかもしれないが、普遍的宇宙現象のより広範の観察が可能であるもの達や、創造的な多様性の下にある基本的統一性を探知したり、複数性のこの機能のすべてを覆う神性の単一性を見いだすこの芸術においてより経験のあるもの達、我々の中のそれらのものは、宇宙の創造的エネルギーのこれらすべての多種の顕示に示される神性の、しかも一つの目的によく気づく。

1. 身体的調整

56:1.1 (637.3) 物理的あるいは物質的創造は、無限ではないが、それは完全に調和している。原動力、エネルギー、そして力があるが、それらは全て一つの起源である。7 超宇宙は、表面上は二重であるらしい。中央宇宙は三位一体である。しかし楽園は一重構造である。また、楽園は、全物質宇宙の現実の源—過去・現在・未来—である。しかし、この宇宙の起源は、永遠の事象である。いかなるときにも—現在、過去、あるいは未来—宇宙あ

るいは物質宇宙は、光の核の島からは現れない。楽園は、宇宙の源として空間より前に、そして時間より先に機能する。それ故、その起源は、それらの空間の貯蔵所とそれらの時の啓示者と規制者である無条件の絶対者を経て出現しなければ、時と空間における孤児であるかのように思われるであろう。

56:1.2 (637.4) 無条件の絶対者は、物理的宇宙を支持し、他方で神格絶対者は、全物質的現実の絶妙な総括的管理をする。双方の絶対者は、機能上、宇宙なる絶対者により統合される。物質宇宙のこの密着した相互関係は、すべての人格—物質的、モロンチア的、準絶対的、あるいは精霊的—により、楽園の下に集中している重力に対する本物の物質的現実の重力反応の観察により最も良く理解される。

56:1.3 (638.1) 引力統合は、普遍的であり変わらない。純粋なエネルギー反応も、同じく普遍的であり逃れられない。純粋なエネルギー（根本の力、始原原動力）と純粋な精霊は、引力に完全に前反応的である。絶対者に備わるこれらの始原の力は、宇宙なる父により個人的に統制され

る。それ故に、すべての引力は、楽園の父の純粋なエネルギーと純粋な精霊の人格臨場に、また超物質住居に集中する。

56:1.4 (638.2) 純粋なエネルギーは、すべての相対的な、 無精霊の機能的な現実の祖であり、一方、純粋な精霊は、すべての基本的エネルギー体制の精霊的制御と直接的制御の可能性である。そして、空間全体に渡り明らかにされるように、また時間の動きにおいて観察されるように、まことに多様であるこれらの現実は、双方が、楽園なる父の人格に集中する。それらは、楽園なる父の中で１つ—統合される必要がある、統合されるべき、である。—神は１人であるが故に。父の人格は、絶対的に統合している。

56:1.5 (638.3) 父なる神の無限の性質には、物理的、精霊的といったような現実の二元性はとても存在しえない。だが、我々が、無限の段階と楽園の父の人格の価値の絶対的現実から目をそらす瞬間に、我々は、これらの２つの現実の存在を観察し、また父なる神の個人的臨場に十分

にこれらの現実が反応するということを認識するのである。すべてが父なる神の中にある。

56:1.6 (638.4) あなたが、楽園の父の無限の人格の無規制の概念から離れる瞬間、あなたは、心というものが、独創的な統合された主題の創造者の人格、すなわち第一根源と中枢—私はある—のこれらの二重の宇宙表明の常に広がる分岐を統合する避け得ない手段であるものと仮定しなくてはならない。

2.知力の統合

56:2.1 (638.5) 思考-父は、言葉-息子に精霊表現を実現し、広範囲におよぶ物質宇宙の中の楽園を通じて現実拡大を達成する。永遠の息子の精霊的表現は、無限の精霊の働きにより創造の物質的段階に関連づけられる、つまり精霊反応の心の無限の精霊の聖職活動により、また、無限の精霊の心の物理的-指示的聖職活動のなかに、神格の精霊的現実と神格の物質的な反響のなかで一方が他者と関連づけられる。

56:2.2 (638.6) 心は、無限の精霊の機能的贈与であり、それ故、可能性においては無限であり、授与においては普遍

的である。宇宙なる父の主要な考えは、二重の表現の中で永遠化される。楽園の島と神格匹敵者、すなわち精霊的である永遠の息子。永遠の現実のこのような二元性は、心の神、無限の精霊を不可避なものにする、避けられないようにする。心は、精霊的現実と物質的現実間の不可欠の疎通回路である。物質的進化の創造物は、心の聖職活動によってのみ内住の精霊を発想し、理解することができる。

56:2.3 (638.7) この無限かつ普遍的な心は、普遍の心として時空の宇宙において働きかけ、精霊補佐の原始の聖職活動から宇宙の最高責任者の壮大な心へと伸張するのだが、この宇宙の心さえ熟練の７精霊の超宇宙において適切に統合され、熟練の７精霊は、代わって時と空間の崇高なる心と調和し、無限の精霊の全てを擁する心と完全に関連づけられるのである。

３.精霊的統一

56:3.1 (639.1) 普遍的な心の重力が、無限の精霊の中の楽園の個人的臨場に集中されるように、楽園における無限の精霊の個人的臨場に集中されるように、普遍的精霊の重力

もまた、永遠の息子の楽園の個人的臨場において集中するのである。宇宙なる父は、１名ではあるが、時-空間にとっては、彼は純粋なエネルギーと精霊の二重の現象に明らかにされる。

56:3.2 (639.2) 楽園の精霊の現実は、同じく１つであるが、時-空間の状況と関係のすべてにおけるこの一つの精霊は、精霊の人格と永遠の息子の放射の二重現象と、精霊の人格と無限の精霊の影響の二重現象とに関連づけられた創造において明らかにされる。そしてさらに第３—純精霊の断片—前人格である思考調整者と他の精霊的存在の父の贈与の現象がある。

56:3.3 (639.3) あなたが、宇宙活動のいかなる段階の精霊現象に遭遇しようとも、または精霊の存在体に接触しようとも、それらは皆、精霊の息子と無限の心の精霊の働きかけによる精霊である神に由来するということがあなたには分かるかもしれない。そして、精霊のこの広範囲にわたる機能は、それが、地方宇宙の本部から指揮されるままに進化の時の世界の現象として作用する。聖霊と真実の精霊が、これらの創造者たる息子の首都から物質的な

心の下方の、また進化する段階へと、心と精霊の補佐の働きかけと共に来る。

56:3.4 (639.4) 心は、崇高なるものと関連する熟練の精霊の段階においてさらに統合され、そして絶対なる心へ従属する宇宙心として統合されるが、進化する世界への精霊の働きかけは、地方宇宙の本部に居住する人格内と取り仕切る神性聖職活動者の本人の中でより直接的に統合され、入れ代わって、取り仕切る神性聖職活動者は、順次ほぼ完全に、永遠なる息子の楽園重力回路と協力し、そこで時空の精霊全顕示の統一が起こるのである。

56:3.5 (639.5) 完全化された創造物の存在は、楽園の三位一体本人の中の誰か1名の前三位一体の精霊の贈与の断片との自意識の心の融合により達成され、維持され、そして永遠化されることができる。人間の心は、永遠の息子と無限の精霊の息子と娘の創造であり、父からの思考調整者と融合するとき、進化の領域の３重の精霊贈与の性質を共にする。だが、精霊のこれらの３表現は、宇宙なる私はあるのなかに永遠の息子と無限の精霊の宇宙なる父

になる前ににこのように永遠に統合されたのと全く同様に、終局者に完全に統合されるようになる。

56:3.6 (639.6) 精霊は、常にまた究極的に、表現においては３重に、最終の認識においては三位一体に統合されるようにならねばならない。精霊は、３重表現を通して１つの源に基づいている。そしてそれは、究極的に、父の宇宙的考えの永遠の言葉の無限の表現からの宇宙の心による聖職活動手段によって神を見いだすこと－　神性との一体感　－において経験される神性の統合においてその完全な認識を達成しなくてはならないし、また、そうする。

４．人格統一

56:4.1 (639.7) 宇宙なる父は、神々しく統合された人格である。それゆえ物質の人間に宿るために父の命令に服従して楽園から出向いた思考調整者の反射的勢いにより楽園へと運ばれる上昇する子供のすべては、ハヴォーナ到着前に同じように完全に統合される。

56:4.2 (640.1) 本質的に人格は、全構成要素の現実を統一するために手を差し伸ばす。宇宙なる父である第一根源と中

枢の無限の人格は、無限の絶対者の全７構成要素を統合する。また宇宙なる父の排他的かつ直接の授与である人間の人格は、同じく死を免れない創造物の構成要素を統合する可能性を所有する。全創造物の人格のそのような統合的創造力は、高く、排他的なその源の母斑であり、人格回路を通してのこの同じ源とのその途切れない接触の一層の証となる。その手段により、創造物の人格は、楽園の全人格の父との直接的かつ持続的接触を維持する。

56:4.3 (640.2) 神は、至上性と終局性を経て７重者の領域から絶対の神での顕示であるにもかかわらず、楽園と父なる神本人の中に集中している人格の回路は、知的存在の全段階において、完全な、完成された、また完成されていく宇宙のすべての領域において全創造物の人格に関しては、神性の人格のこれらすべての多様な表現の完ぺき、かつ完全な統合を提供する。

56:4.4 (640.3) 宇宙にとっての、また宇宙における神は、我々が描いてきた全てであるとともに、あなたと他の神を知る全創造物にとっては、それでも、神は１人であり、あ

なたの父でありそれらの父である。人格にとり神は、複数であるはずがない。神は、被創造物めいめいの父であり、いかなる子供でも１人以上の父親を持つことは文字通り不可能である。

56:4.5 (640.4) あなたは、哲学的に、宇宙的に、そして顕示の特異の段階と位置に関係し、必然的に、複数の神格の機能を想像し、複数の三位一体の存在を仮定するかもしれないし、そうしなくてはならない。だが、主たる宇宙の崇拝する人格すべての人格的接触からの崇拝に満ちた経験において、神は、一人である。統合された人格的な神格は、楽園の親であり、父なる神であり、賦与者であり、保護者であり、また生息界の人間から光の中央の島の永遠の息子までの人格すべての我々の親である。

５.神統合

56:5.1 (640.5) 楽園神性の、単一性、不可分性は、実存的であり絶対的である。神格の永遠の3者の人格化—宇宙なる父、永遠の息子、無限の精霊—があるが、楽園の三位一体における３者は、実際には分裂していない不可分の１神格である。

56:5.2 (640.6) 実存の現実の原初の楽園-ハヴォーナの段階からは２つの準絶対段階が分化し、その後父、息子、精霊が、多くの個人的な仲間と部下の創造に携わってきた。ちなみに崇高性の超越的段階における準絶対の神格統合についての考察に取り組むことは、不適当ではあるが、神性は、多様な創造分野において、また知性ある存在体の異なる体系において機能上明白なさまざまの神格の人格化統合機能の若干の特徴を見ることは可能なのである。

56:5.3 (640.7) 超宇宙における神性の現在の機能は、崇高なる創造者たち—地方宇宙の創造者たる息子と精霊、超宇宙日の老いたるもの、楽園の熟練の７精霊—の操作に盛んに明らかである。これらの存在体は、宇宙なる父へと導く７重の神の最初の３段階を成しており、また、７重の神のこの全域は、進化する崇高なるものの経験上の神格の最初の段階において調整している。

56:5.4 (641.1) 神格統合は、楽園と中央宇宙における存在事実である。神格統合は、時空の進化する宇宙全体における１つの達成である。

6．進化的神格の統合

56:6.1 (641.2) 神格である３名の永遠の人格が、楽園の三位一体の中の非分割の神格として機能するとき、完全な統合に達している。同様に、それらが、共同して、あるいはめいめいに創造するとき、それらの楽園の子孫は、神性特有の統合性をみせる。また時空の領域の崇高なる創造者と支配者により明らかにされる神性らしいこの目的は、結果的には宇宙の非個人的エネルギー統合の臨場において、経験的神格に属する経験的人格の現実との適切な統合を通してのみ解決し得る現実の緊張を構成する経験上の崇高性の主権を統合する潜在力となる。

56:6.2 (641.3) 崇高なるものの人格の現実は、楽園の神格から来ており、ハヴォーナの外側回路の先導的世界において雄大な宇宙の創造者の神性から上がってくる全能の崇高者の特権力を統合する。人格としての崇高なる神は、７超宇宙の創造以前にハヴォーナにいたが、精霊段階上においてのみ役割を果たした。進化する宇宙での多様な神性統合による崇高なる全能の力の進展は、ハヴォーナにおいて崇高なる心により崇高のものの精霊的人格と調和した神格の新たな力の臨場に至り、崇高なる心は、無限

の精霊の無限の心の中の可能性をもつ住民から崇高者の積極的な機能する心へと付随的に、同時に、変換する。

56:6.3 (641.4) 7超宇宙の進化世界の物質志向の創造物は、神格統合が崇高なるもののこの力と人格の統合において進展しているというだけで神格統合を理解することができる。神は、存在のいかなる段階においてもこのような段階に住む存在体の概念的可能性を越えることはできない。人間は、真実の認識、美の鑑賞、善の崇拝を通し愛の神の認識を発展させ、次に神格の上昇する段階を経て崇高なるものの理解へと進まなくてはならない。神格は、力に統合されるものとして理解されており、創造物の理解と達成にとって精霊的に人格化されることができる。

56:6.4 (641.5) 上昇する人間が、超宇宙の首都の全能者についての理解力とハヴォーナの外回路の崇高のものの人格理解とに至るとき、楽園神格を見いだすように定められているようには崇高なるものを実際には見いださない。終局者、第6段階の精霊でさえ、崇高なるものを見いださなかったのであるし、第7段階の精霊の身分を達成する

までは、また崇高なものが、未来の外宇宙活動にあって実際に機能的になるまでは、そのような可能性はありそうにもない。

56:6.5 (641.6) しかし、上昇者は、七重の神の第７段階としての宇宙なる神を見いだすとき宇宙の創造物との個人的な関係の全神格段階の最初の人格に達したのである。

７．普遍的進化の反響

56:7.1 (642.1) 時空宇宙における進化の着実な躍進は、全知的創造物による絶えず-拡大する神格顕示を伴う。世界、体制、星座、宇宙、超宇宙における、あるいは雄大な宇宙における進化発展の頂点到達は、創造のこれらの発展的単体への、またその中での相当する神格機能の拡大を示す。また、神性認識のそのような局部的拡張のすべては、創造の他の全分野に拡大された神顕示の一定の明確な効果を伴う。認識され達成された進化の各新領域は、楽園から外へと、宇宙の中の宇宙への新たで拡大された経験上の神性の顕示からなる。

56:7.2 (642.2) 地方宇宙の構成要素が次第に光と生命に定着されるにつれ、７重の神はますます明白になる。時空の進

化は、惑星において支配する７重の神—創造者たる息子-創造の精霊の関係—の最初の表現から始まる。この息子-精霊のつながりは、光における体制の定着で機能の充足性を達成する。七重の神の第２段階は、星座全体がこうして定着するときそのような領域全体に渡りより活発になる。地方宇宙の完全な行政上の進展は、超宇宙の熟練の精霊の新たでより直接的聖職活動をもたらす。また、この時点で、ハヴォーナの第６回路の世界を通過する間に、崇高なるものへの上昇者の理解が頂点にいたる崇高なる神に対し絶えず増加する顕示と認識もまた始まる。高なるものへの上昇者の理解が頂点にいたる。

56:7.3 (642.3) 宇宙なる父、永遠の息子、それに無限の精霊は、知力ある創造物への実存する神格顕示であり、それゆえに、全創造の心と精霊との人格関係においては同様には拡大されない。

56:7.4 (642.4) 上昇する人間は、人格的存在としてのこれらの神格の、経験上の個人的認識と、またそれとの接触に至るために十分に精霊的になり適切に教育されるようになるずっと以前に、神格の連続する段階の非個人的臨場を

経験するかもしれないということが付記されるべきである。上昇する人間は、人格的存在としてのこれらの神格の、経験上の個人的認識に至るために十分に精霊的になり、適切に教育されるずっと以前に、神格の連続段階の非個人的臨場を経験するかもしれないということが付記されるべきである。

56:7.5 (642.5) 創造分野におけるそれぞれの新しい進化の到達には、神性表明による空間のすべての新たな侵入と同様に、全創造のそのとき既存の、また以前に組織された単体の神格の機能と顕示の同時拡大が伴う。宇宙とその構成単体の事務のこの新たな侵入は、行政の新統制の次と継その後の時代のために用意すべき管理者の先遣隊の送り込みが慣習であることから、通常は、ここに概要された方法に従い確実になされているとは必ずしも見えないかもしれない。究極なる神さえも、光と生命に定着した地方宇宙の後の段階において宇宙の超越的統制を予示する。

56:7.6 (642.6) 時間と空間の創造が、次第に進化の状態に定着するにつれ、七重の神の最初の3顕示の撤回に付随する

崇高なる神の新たで十分な働きが見られる。もし壮大な宇宙が、光と生命に定着するならば、また、そうなるとき、すなわち、もし崇高なる神が、時間と空間のこれらの創造の直接的制御を担うならば、そのとき、何が、七重の神の創造者と創造的な顕示の未来の機能であるのか。時空の宇宙のこれらの組織者と開拓者は、外宇宙における類似の活動のために自由にされるであろうか。我々には分からないが、我々はこれらと、それに、これらに関連する問題に関して大いに推測するのである。

56:7.7 (643.1) 経験上の神格の最前線が、無条件の絶対者の領域へと外に拡張されるにつれ、我々はこれらの未来の創造の早期の進化時代における七重の神の活動を思い描く。我々は全員が、日の老いたるものと超宇宙の熟練の精霊の未来の状況に関し同じ意見をもっているわけではない。また、崇高なるものが、その中で７超宇宙でのように役割を果たすかどうかも知らない。だが、我々は皆、創造者たる息子であるマイケル系が、これらの外宇宙において役割を果たすことが定められていると推測する。我々のうちの何名かは、提携する創造者たる息子と神性の聖職者の間の何らかの連合形態的なものが後の時

代にみられるであろうと考える。そのような創造者連合は、究極の性質の関係する創造者の自己性の何らかの新表現に行き着くかもしれないということが可能でさえある。だが、我々は、明らかにされていない未来のこれらの可能性について実際のところ何も知らない。

56:7.8 (643.2) 我々は、しかしながら、時空の宇宙において、七重の神が、宇宙なる父への進歩的な接近を提供するということ、そしてこの進化的接近が、崇高なる神において経験的に統合されるということを知っている。我々は、このような計画が、外宇宙において普及しなくてはならないと推測するかもしれない。一方では、いつかこれらの宇宙に居住するかもしれない存在体の新系列が、究極の段階上において、また準絶対手段による神格への接近が可能であるかもしれない。要するに、我々は、未来の外空間において操作可能となるかもしれない神性への接近手段に関わるほんのわずかの概念さえ持ってはいないのである。

56:7.9 (643.3) にもかかわらず、我々は完成された超宇宙は、何らかの方法でこれらの外側の創造物に居住するかもし

れないそれらの存在体の楽園上昇経歴の一部になるであろうと思う。その未来の時代に熟練の７精霊の協力で、あるいは協力なしで崇高な神によって治められている７超宇宙を経て外空間者がハヴォーナに接近するところを我々が、目撃するかもしれないということは全く可能なのである。

８.崇高なる統合者

56:8.1 (643.4) 崇高なるものは、死を免れない人間の経験において３重部分から成る機能を持っている。彼は、第一に、時間と空間の神性の統合者、つまり七重の神であり、第二に、有限の創造物が実際に理解することのできる神格の最大限である。第三に、彼は準絶対の心、永遠の精霊、楽園の人格との死を免れない人間の、超自然的交流経験への唯一の手段である。

56:8.2 (643.5) 地方宇宙に生まれ、超宇宙で養成され、中央宇宙で訓練された上昇の終局者は、個人的経験において崇高者に統合する七重の神の時間と空間の神性についての理解の可能性を十分に擁している。終局者は、出身の超宇宙以外の超宇宙において引き続き役目を果たし、それ

によって、生物の可能な経験において七重の多様性の完全さが成就されるまで経験に経験を重ねる。終局者は、内住する調整者を通して宇宙なる父を見いだせるようになるが、このような終局者が本当に崇高なるものを知るようになるのはこれらの経験手段によってであり、終局者には外空間の未来の宇宙での、またそれへのこの崇高なる神格の勤めと顕示へと運命づけられている。

56:8.3 (644.1) 心に留めおきなさい。父なる神と楽園の息子が我々に為すすべてを。同様に、また精霊的に、我々は、出現しつつある崇高なるもののための機会を、またその中でするべき機会を持つ。宇宙の愛、喜びと奉仕の経験は相互的である。父なる神は、息子たちに贈与したすべてを自分に返してもらう必要はないが、息子らは、仲間や進化する崇高なるものにこのすべてを与える、（あるいは、そうすることができる）。

56:8.4 (644.2) 全創造現象は、前の、既述の、創造者-精霊の活動の反映である。イェススは次ぎのように言ったし、それは文字通り本当である。「息子は、父がすることを見てそれらのことだけをする。」時の世界においてあなた

がた人間は、仲間への崇高者の顕示を開始できりし、楽園へ向かって登るにつれ、ますますこの顕示を増大できる。永遠の世界おいてあなた方は、最高段階—究極段階さえ—　の進化的創造物のこの神のますますの顕示が許されるかもしれない。--第７段階の終局者として。

９.絶対の普遍的統合

56:9.1 (644.3) 無条件の絶対者と神格絶対者は、宇宙なる絶対者に統合されている。絶対者は、究極者に調整され、崇高者に条件づけられ、七重の神の中で時間と空間により変更される。準無限段階には、３絶対があるが、それらは、無限に１つのようである。楽園には、神格の３人格化があるが、三位一体においては１つである。

56:9.2 (644.4) 主たる宇宙の主要な哲学的命題とは、これである。絶対性（無限には一つとしての３絶対性）は、三位一体以前に存在したのか。また、絶対性は、三位一体にとっての先祖であるのか。もしくは、三位一体は、絶対性に先行するのか。

56:9.3 (644.5) 無条件の絶対者は、三位一体から独立した力であるのか。神格絶対者の臨場は、三位一体の無制限の機

能を暗示するのか。また、宇宙なる絶対者は、三位一体の、三位一体の中の一個の三位一体でさえの、最終機能であるのか。

56:9.4 (644.6) まず考えつく事は、万物—三位一体ですら—の祖先としての絶対者についての概念は、—三位一体ですら—一貫性の充足と哲学的統合における一過性の満足をもたらすように思われるが、いかなるそのような結論も楽園の三位一体の永遠の現実によって無効にされる。我々は、宇宙なる父と三位一体の仲間は、特質と存在において永遠である、と教えられているし信じてもいる。してみると、ただ１つの一貫した哲学的結論がある。そして、それは、絶対者は、すべての宇宙の知性にとり宇宙内外の空間のすべての基本的かつ主要な状況への（三位一体の）三位一体の非人格の、調和の反応である。雄大な宇宙のすべての人格の知性あるものにとっての楽園の三位一体は、個人的な理解と創造物認識の実際の目的のためには、終局的に、永久的に、崇高的に、究極的に、絶対のままでいつまでもある。

56:9.5 (644.7) 創造物の心は、その心がこの問題をとらえることができるように、三位一体と絶対者双方の根本誘因と無条件の源としての宇宙なる私はあるの最終的確認に導かれる。従って、我々は、絶対の個人的概念を受け入れることを切望するとき楽園の父についての我々の考えと理想に立ち戻って考える。我々は、他の点では非人格のこの絶対者に関する理解の促進を、あるいは意識の増大を望むとき、宇宙なる父が、絶対の人格性の実存の父であるという事実に逆戻りする。永遠なる息子は、経験上の意味における絶対の人格化ではないものの、絶対の人格である。そして、次に我々は、崇高性、究極性、無限性を伴う統合され調和された神格結合—三位一体の三位一体—からくる非人格の活動の明白な臨場の宇宙現象と外宇宙の現象を構成するのであると宇宙なる絶対者を概念化する一方で、神格絶対者の経験上の人格化において頂点に達すると経験上の三位一体を心に描いてさらに進む。移る

56:9.6 (645.1) 父なる神は、有限から無限への全段階において認識でき、楽園から進化世界までの創造物は彼をいろい

ろに認知してきたが、ただ永遠なる息子と無限の精霊だけが父なる神を無限として知っているのである。

56:9.7 (645.2) 精霊の人格はただ楽園上において絶対であり、絶対者についての概念は無限においてのみ無条件である。神格臨場は、楽園上においてのみ絶対であり、神の顕示は、神の力が無条件絶対者の空間潜在能力で経験的に無限になるまでは、常に部分的で、相対的で、前進的でなければならない。一方、その人格顕示は、神格絶対の明白な臨場において経験的に無限になり、また、無限のこれらの２つの可能性が宇宙の絶対者において現実と統合される。

56:9.8 (645.3) しかし準無限段階を越えた３絶対者は１つであり、したがって存在する他のいかなる系列が、今までに無限の意識を自分で理解するかどうかにかかわらず、神格によって理解された無限なのである。

56:9.9 (645.4) もう一つの永遠は、無限の永遠—永遠の無限—に備わる経験上の可能性の自己認識の経験が必要であるかもしれないとはいえ、永遠における実存的地位は、無限の実存的自意識を暗示している。

56:9.10 (645.5) 父なる神は、宇宙の中の宇宙すべてにおいて知性ある創造物と精霊の存在体への神格と現実の全顕示のための人格の源である。人格として、今、あるいは永遠の未来の一連の宇宙経験において、もしあなたが、七重の神到達にいたるか、崇高なる神を理解するか、究極なる神を見いだすか、あるいは神、　絶対なる神の概念の把握を試みるならば、あなたは、それぞれの冒険達成において、新しい経験上の段階において、rediscovered永遠なる神—宇宙のすべての人格の楽園の父—絶えることない満足で発見するであろう。

56:9.11 (645.6) 宇宙なる父は、宇宙統合の説明である。宇宙統合は、絶対的価値と意味—無条件の現実—の後究極統合の中で崇高的に、究極的にさえ、気づかれなくてはならない。

56:9.12 (645.7) 熟練の原動力の組織者は、空間へと向かい、楽園へと引く宇宙なる父の力に反応する引力になるためにそのエネルギーを動員する。そして、引き続いて創造者たる息子がきて、これらの引力に反応する原動力を生息宇宙へと編成し、その中で楽園の父の精霊を自身に受け

入れ、続いて可能な全神性特質が、父に似るように父のもとへ上って行く知性ある創造物を巻き込む。これらの引力に反応する原動力を生息宇宙へと編成し、その中で楽園の父の精霊を自身に受け入れ、続いて可能な全神性特質が、父に似るように父のもとへ上って行く知性ある創造物を巻き込む創造者たる息子が続いて来る。

56:9.13 (645.8) 間断なく拡大する楽園の創造的原動力の空間的進行は、宇宙なる父の絶えず広がる引力把握の領域を予示するようであり、神を愛することができ、神に愛されるもの、また神のようになることを選ぶかもしれないもの、こうして神を知るようになることにより楽園到達を選択し、そして神を見いだすかもしれないものであるさまざまな知性ある創造物の型の決して終わらない増加、

56:9.14 (646.1) 宇宙の中の宇宙は、完全に統一される。神は力と人格において一つである。エネルギーの全段階と人格の全局面の調整がある。哲学的に経験的に、概念的に現実的に、万事万物は楽園なる父を中心とする。神はすべてであり、すべての中にあり、万事あるいは万物も、神なくしては存在しない。

１０.真、美，善

56:10.1 (646.2) 光と生命に定着した世界は、初段階から第７新世紀へと前進するにつれ、創造者たる息子への敬慕から楽園の父の崇拝におよぶ七重の神の現実の認識をするようになる。進歩し続ける人間は、究極の神の影を投げかけている聖職活動の現実を漠然と識別する一方で、そのような世界歴史の継続的７段階にわたり、崇高の神への知識を増大している。

56:10.2 (646.3) 輝かしいこの時代にわたり、前進しつづける人間の主なる追求は、理解し得る神格の根本—真、美、善—についてより良い理解とより充実した認識の探求である。これは、心、物質、精霊に心的、物質的、精霊的に神を識別しようとする人間の努力を表している。人間は、この探索を進めるにつれ、哲学、宇宙学、神学についての経験上の研究に次第に熱中している自身に気づく。

56:10.3 (646.4) あなたは、いくぶんか哲学を把握し、礼拝、社会奉仕、個人の精霊的経験における神性，神学を理解するが、美—宇宙学—の追求に関してはあなたがたは、

皆が、人間の粗野の芸術的努力の研究に制限する。美、すなわち芸術とは、主として対照の統一に関わる問題である。多様性は、美の概念に欠くことができない。崇高の美、有限の芸術の頂点は、創造者と被創造者の宇宙両極端の広大さの統一劇である。神をみつける人間と人間をみつける神—創造者がそうであるように完全になる被創造者—それは、この上なく美しいものの崇高的達成、すなわち宇宙芸術の頂上到達である。

56:10.4 (646.5) それだからこそ、唯物論、無神論は、醜悪の最大限、美に対する限りある対照の頂点である。最高美は、前存在の調和のとれた現実から生まれた多様性の統一の全景にある。

56:10.5 (646.6) 思考における宇宙科学段階の到達は、次を含む。

56:10.6 (646.7) 1. 好奇心。調和への飢餓と美への渇望。調和の取れた宇宙関係の新段階を発見する不断の試み

56:10.7 (646.8) 2. 審美的鑑賞力。現実の全段階における全創造的顕示の芸術的特徴の美しく、絶えず前進する評価への愛。

56:10.8 (646.9) 3. 倫理的感性。美の評価は、真実の認識を通してすべての存在体との神格関係において神性善の認識に影響を与えるそれらのものの永遠的適合の直感に導く。かくして、宇宙科学でさえ神性現実の価値の追求へと—神意識へと導く。

56:10.9 (646.10) 真、美、善というこれらの質の高い価値が、時間と空間の領域に神格の顕示を受け入れるが故に、光と生命に定着した世界は、完全に真、美、善の理解に関係している。永遠の真理の意味は、必滅の人間の結合された知的かつ精霊的性質に訴える。普遍的な美は、宇宙の創造の調和のとれた関係とリズムを受け入れる。これは、より鮮明に知的な魅力であり、また物質宇宙の統一的、同時性の理解に向かって導く。神性の善は、有限の心への無限の価値への啓示を表し、そこで認知され、そして人間の理解の崇高な段階のまさしくその敷居へと引き上げられる。

56:10.10 (647.1) 宗教の知的な礎を提示する真実は、科学と哲学の基礎である。美は、芸術、音楽、そして人間の経験すべての意義あるリズムである。善は、倫理の、道徳の、宗教の意味 - 経験上の完全性への飢餓—を擁している。

56:10.11 (647.2) 美の実在は、進歩的発展の事実が崇高な心の支配を示すのと同程度に確かに創造物の感謝する心の臨場を暗示している。美は、そのすべてが前存在の、かつ永遠の統一性から生じる知覚可能な現実の広範囲の多様性の時間と空間における調和的統合に関わる知的認識である。

56:10.12 (647.3) 善は、神性の完全性のさまざまな段階の相対的価値に対する精神的認識である。善の認識は、心の道徳的状態、善悪を区別する能力を持つ人格的な心を意味する。しかし、善、すなわち偉大さの所有は、真の神性到達である。

56:10.13 (647.4) 真の関係についての認識は、真実と誤りを区別する力をもつ心を暗示する。ユランチアの人間の心に注

ぎ込む真実の贈与の精霊は、神へ向けての永遠の上昇において調整されるように真実に的確に反応する。

56:10.14 (647.5) あらゆる電子、思考、あるいは精霊の全衝動は、宇宙全体において一行動単位である。精神の段階と精霊の段階において罪のみが孤立し、邪悪のみが引力に抵抗している。宇宙は、一つの纏まりである。孤立しては、何事も存在せず何の存在体も生きてはいない。自己認識は、もしそれが反社会的であるならば、潜在的に邪悪である。「人は一人だけでは生きない。」というのは、文字通りに本当である。宇宙規模の交流は、人格統一の最高の形を構成する。イェススは、「あなた方の中で最も偉い人は、すべての者に仕えるものになるべきである。」と言った。

56:10.15 (647.6) 真、美、善でさえ—心、物質、精霊の宇宙への人間の知的接近—神格的、崇高的理想の統一された一概念へと結合されなければならない。人間の人格が、人間の経験を物質、心、精霊と統一するように、この神性と崇高の理想は、力により崇高性へと統一されるようにな

り、次に父らしい愛の神として人格化されるようになる。

56:10.16 (647.7) どの全体と部分の関係への全洞察は、部分全てとその全体の関係の理解ある把握を必要とする。また、これは、宇宙においては創造された部分と創造の全体者との関係を意味する。神格は、こうして、普遍的、かつ永遠達成の超自然的目標、無限の目標にさえなる。

56:10.17 (647.8) 宇宙の美は、物質的創造における楽園の島の反映の認識、表彰であり、他方、永遠の真実は、人類への自身の贈与ばかりではなく、すべての民族への真実の精霊の注出をもする楽園息子の特別な聖職活動である。表彰、聖職活動ともに楽園息子に属?神性の善は、無限の精霊の多重的人格の優しい聖職活動においてより完全に示される。しかし、愛は、すなわち、これらの3特質の総体は、自分の精霊の父としての神についての人間の認識である。

56:10.18 (648.1) 物理問題は、絶対の神格についての輝くエネルギーの楽園の時間と空間の影である。真実の意味は、神格の不滅の言葉からくる人間の知性の反響—時間と空間

における崇高な概念の理解である。神性の善の価値とは、宇宙なるもの、永遠なるもの、そして無限のものが、精霊人格の進化する球体の時間-空間の有限の創造物へ行う慈悲深い聖職活動である。

56:10.19 (648.2) 神性の意味あるこれらの現実の価値は、神性の愛としての各人格の創造物との父の関係において混ざり合う。それらは、神の慈悲として息子とその息子たちの中において調整される。神性の意味あるこれらの現実の価値は、精霊とその精霊の子供たちを通してそれらの特質を神性の聖職活動として、すなわち、時間の子供たちへの優しい愛の描写として表す。これらの３神性は、力-人格統合として主に崇高なるものによって明らかにされる。それらは、７重の神により上昇の７段階における神性の意味と価値の７つの異なる関係で様々に示されている。

56:10.20 (648.3) 有限の人間にとっての真、美、善は、神性現実の完全な顕示を包含する。神格のこの愛-理解が、神を知る人間の生活における精霊的表現を見いだすとき、神性の果実：知性の平和、社会の進歩、道義的満足感、精

霊的な喜び、宇宙の英知が、もたらされる。７段階の光と生命の世界の先進的な人間は、愛が宇宙で最も素晴らしいものであることを知り、　その上に、神が愛であることを知っている。

56:10.21 (648.4) 愛とは、他者に親切にしたいという願望である。

56:10.22 (648.5) ［ネバドンの天啓部隊の要請により、また、ユランチアの惑星の王子の代理人である特定のメルキゼデクと共同し、ユランチア訪問中の強力な使者による提示］

56:10.23 (648.6) 宇宙なる統合に関するこの報告は、マンツーチア　メルキゼデクの指示に基づいて活動する12名のネバドンの人格の委員会によるいろいろな著者による一連の提示である。我々は、ユランチア時間の1934年に、上司に認可された手法によりこれらの物語を組み立て、英語で掲載した。

ウランティア・ブック

第III. 部 ウランティア（地球）の歴史について

論文 57
ユランチアの起源

57:0.1 (651.1) 我々は、ユランチアに先立つ事柄とその初期の歴史に関し、ジェルーセムの公文書からのそれに関する記録抜粋に当たり、現在の時間の慣用法— 1年が365と1/4日の今現在の閏年のある暦—に則って計算するように指示を受けている。総じて記録にはあるが、正確な年は付されないであろう。我々は、これらの歴史的事実を提示するより良い方法として最も近い概数を用いるつもりである。

57:0.2 (651.2) 百万年も2百万年も前の出来事に言及するに当たり、西暦20世紀初頭の何十年間から遡りその年数を設定するつもりである。我々は、このようにして数千、数百万、および数十億年の時代にさえ起きているものとして、これらの遥かに遠い出来事について描写するつもりである。

アンドロノヴァー星雲

57:1.1 (651.3) ユランチアの起源は、あなた方の太陽にあり、その太陽は、アンドロノヴァ一星雲のさまざまな所産の一つである。かつては、ネバドンの局部宇宙の物理力と物質成分の一部分として組織化されていた。このすばらしい星雲自体は、大昔にオーヴォントンの超宇宙空間の宇中全域の激烈に強化された力に起源があった。

57:1.2 (651.4) この詳説の始まりの時点、楽園の力の組織者の第一主幹達は、長らく後にアンドロノヴァ一星雲として組織化された空間エネルギーの全管理をしていた。

57:1.3 (651.5) 987,000,000,000年前、ユヴァーサから長旅をしてきたオーヴォントン系列の力の準組織者であり、代理検査官でもあった811,307号は、オーヴォントンの当時の東寄り部分にあるの定区域の空間条件が、事象の具体化の開始に好ましいと高齢者達に報告した。

57:1.4 (651.6) 900,000,000,000年前、ユヴァーサの公文書は、ユヴァーサの均衡審議会が、検査官811,307号があらかじめ指定していた根源力の組織者1名と部下のその領域への派遣の権限を超宇宙政府に許可証を発行したと証明している。オーヴォントン当局は、将来存在可能なこの

宇宙についての公文書の最初の発見者に、高齢者達からの新しい物質的創造の組織化の命令実行を依頼した。

57:1.5 (652.1) この許可証の記録は、根源力の組織者と部下が、引き延ばされていた活動に、次にオーヴォントンの新しい物理的創造の出現の際終わるであろう活動に従事するために東寄りのその空間領域への長旅にユヴァーサからすでに出発していたことを意味する。

57:1.6 (652.2) 875,000,000,000年前、巨大なアンドロノヴァー星雲番号876,926が正式に着手された。空間のこの広大な旋風にやがては成長していく増大するエネルギー回転の開始に必要としたのは、根源力の組織者と連絡係の部下の出席だけであった。根源力の活発な組織者は、そのような星雲回転の開始後に回転盤の平面に対して直角に容易に退き、またその時点からエネルギーに固有の特性は、そのような新しい物理的体系の進歩的で規則的な回転を確実にするのである。

57:1.7 (652.3) 物語は、ここで超宇宙の人格の機能へと向きを変える。実際には物語は、この時点—オーヴォントンの超宇宙の力の管理官や物理制御官の行動のために空間エ

ネルギー状態の準備をし終え、ちょうど楽園の根源力の組織者が退く準備をしている頃—にその始まりがある。

2. 第一次星雲期

57:2.1 (652.4) すべての進化をともなう物質創造は、円形の、そしてガス状の星雲から生じ、そのような第一星雲すべては、初期のガス状態においてはずっと円形である。星雲は、年を重ねるにつれ通常螺旋状になり、太陽形成における星雲の機能が、その過程を辿るとき、しばしば星団として終わり、または、様々な意味であなた方自身の小さな太陽系に類似しながら異なる方法で異なる数の惑星、衛星、および、　物体のより小さい集団に囲まれる巨大な太陽として終わる。

57:2.2 (652.5) 800,000,000,000年前、アンドロノヴァー創造が、オーヴォントンの壮大な第一星雲の1つとして設定された。近くの宇宙天文学者達は、この空間現象をみてそれほど注意を払わなかった。隣接する創造物についての見積りの重力は、空間の具体化がアンドロノヴァー領域で起きていることを示してはいたのだが、それがすべてであった。

57:2.3 (652.6) 700,000,000,000年前、アンドロノヴァー系は、途方もない広がりを呈しつつあり、補助の物理制御官が、急速に発展していたこの新しい物質的体系のパワーセンターへの補助と供給協力をするるために9つの周囲の物質創造へと派遣された。大昔に、その後の創造に遺贈される物質すべてが、この巨大な空間の輪の境界内に抱きかかえられ、この輪は、ずっと渦巻きつづけ、その最大の直径に達した後には、凝集し収縮し続けながらますます速く渦巻き続けた。

57:2.4 (652.7) 600,000,000,000年前、アンドロノヴァーのエネルギー可動期間の最高潮に達した。星雲はその質量の極点を確保した。このとき、それはいくらか平らにされた球体のような、回転楕円形の巨大な円形のガス状の雲であった。これは、不均一の質量形成と異なる回転速度の初期の過程であった。重力と他の影響が、空間ガスを有機体への変換作用を始めるところであった。

3. 第二次星雲期

57:3.1 (653.1) 巨大な星雲は、今や、徐々に螺旋形を帯び、遠方の宇宙の天文学者にさえはっきりと見え始めた。これ

が、大抵の星雲の自然史である。これらの第二次空間星雲は、太陽を払いのけ、宇宙建設の仕事に取り掛かる前に、通常は螺旋状の現象として観測される。

57:3.2 (653.2) その遥か彼方の時代の真近の星の研究者達は、アンドロノヴァ一星雲のこの変化を観測したとき、20世紀の天文学者が望遠鏡を宇宙に向け隣接する外部空間の現代の螺旋状の星雲を見るときとまさしく同じものを見たのである。

57:3.3 (653.3) 最大質量にいたる頃、ガス含有の重力制御が弱り始め、源となる質量の反対側に生じた2本の巨大で明確に分かる腕として流出しながら、ガス漏出段階が、続いて起こった。この莫大な中心核の急速な回転は、すぐにこれらの2つの突出したガスの流れに螺旋の外観を与えた。突出しているこれらの腕の部分の冷却とその後の凝縮は、次第に節くれだった様相を呈した。より濃い部分は、母なる渦の重力把握の中にしかと抱かれている間、星雲のガス状の雲の真ん中の空間で渦を巻く自然の物体の広大な組織と従属組織であった。

57:3.4 (653.4) にもかかわらず、星雲は収縮を始め、回転速度の増加は、さらなる重力制御の減少をもたらした。すぐに、外側のガス状の領域は、変則的輪廓の回路を空間へと出て行き、それぞれの巡回を果たすために核の領域へと戻りつつ、実際には星雲の核の直接包囲からの脱出を始めた。しかし、これは星雲進行の一時的段階に過ぎなかった。絶えず増大する渦の速度は、独立する回路を、空間へと巨大な太陽を突き放すところであった。

57:3.5 (653.5) これが、大昔のアンドロノヴァー時代に起こったことである。エネルギーの渦は、その膨張最大点に達するまでますます拡大し、その後収縮が始まると、やがては遠心性の重要な段階に達し巨大な分裂が始まるまでは、 さらなる速度で渦を巻いた。

57:3.6 (653.6) 500,000,000,000年前に、最初のアンドロノヴァーの太陽が誕生した。この燃えている筋は、母なる重力の把握から逃がれ、創造の宇宙における単独の冒険で空間へと突き抜けた。その軌道は、その脱出路により決定された。そのような若い太陽は、空間の星としてそれぞれの長くて極めて多事な行路に乗り出す。最後の星雲の

核を除くオーヴォントンの太陽の圧倒的多数には、類似の誕生があった。これらの逃れ行く太陽は、異なる発展期間とその後の宇宙活動を経ていく。

57:3.7 (653.7) 400,000,000,000年前、アンドロノヴァー星雲の回収期間が始まった。近くの、　より小さい太陽の多くは、母なる核のゆるやかな拡大と一層の凝縮の結果奪回された。すぐに、星雲凝縮の終末過程、つまりエネルギーと物体のこれらの莫大な空間集合の最終的な隔離に常に先行する期間が開始された。

57:3.8 (654.1) 楽園の創造者たる息子ネバドンのマイケルが、宇宙建設の自身の冒険場所としてこの分解している星雲を選んだのが、この時代の辛うじて100万年後であった。サルヴィントンの建築世界と100の星座本部の惑星集団が、時を移さずして始められた。これらの特別に創造された世界の一団を完成するのにおよそ100万年を要した。局部恒星系本部の惑星は、その時から始まり約50億年前までに延長されておよんで構成された。

57:3.9 (654.2) 300,000,000,000年前、アンドロノヴァーの太陽の軌道は、すでに確立され、星雲系は、相対的な物理的

安定性の過渡期を潜り抜けていた。おおよそこの頃、マイケルの職員は、サルヴィントンに到着しており、またオーヴォントンのユヴァーサ政府は、ネバドンの局部宇宙に物理的なものを認識した。

57:3.10 (654.3) 200,000,000,000年前、アンドロノヴァーの中央の塊、または核物体に巨大な熱の発生と共に収縮と凝縮の進行がみられた。相対的空間が、中央の母たる太陽の輪の近くの領域にさえ現れた。外側の領域は、さらに安定してきて、一層まとまっていった。複数の新生の太陽の周囲を回るいくつかの惑星は、生命の注入に適するほどまでに冷えた。ネバドンの最古の棲息惑星は、これらの時代から始まる。

57:3.11 (654.4) ネバドンの完成された宇宙機構が、まず機能し始めると、マイケルの創造が、棲息界と人間の進歩的上昇の宇宙としてユヴァーサに登録される。

57:3.12 (654.5) 100,000,000,000年前に、星雲の凝縮緊張の最高点に達した。最大の熱緊張点に達した。引力と熱との争いのこの重要な段階は、長らく続くが、遅かれ早かれ熱が引力との戦いに勝ち、そうして太陽分散の壮観な期間

が始まる。そしてこれが、空間星雲の第二次活動の終わりを記す。

4. 第三期と第四期段階

57:4.1 (654.6) 星雲の第一期は円形である。第二期は螺旋形。第三期は、最初の太陽分散期であり、第四期は、第2次と最後の太陽分散周期を含み、母核が、球状星団として、あるいは最後の太陽系の中央として機能する単一の太陽として終える。

57:4.2 (654.7) 75,000,000,000年前、この星雲は、その太陽家族期の最高点に達した。これが、最初の期間の太陽損失の頂点であった。以来、これらの太陽の大多数が、惑星、衛星、暗い島、彗星、流星、および宇宙の塵雲の大規模な体系を所有している。

57:4.3 (654.8) 50,000,000,000年前、この最初の太陽分散期が終了した。星雲は、速くもその存在の第三周期を終えようとしており、その間に、87万6,926の太陽系の起源となった。

57:4.4 (654.9) 25,000,000,000年前に星雲の命の第三周期の完了があり、この親星雲から得られる広範囲の星系との相対的安定化がもたらされた。しかし、物理的収縮と増大された熱産出過程は、星雲残骸の中心の物質内で持続した。

57:4.5 (655.1) 10,000,000,000年前、アンドロノヴァーの第四周期が始まった。核質量の最高温度に達した。極めて重大な凝縮時点に差し迫っていた。元の母核は、それ自身の内部の熱凝縮緊張と、それに遊離された太陽系の取り囲む群れの増加する重力-潮汐の牽引力が結合された圧迫下で振動していた。2番目の星雲の太陽周期を開始する核爆発が切迫していた。星雲存在の第四周期が始まろうとするところであった。

57:4.6 (655.2) 8,000,000,000年前、すさまじい末期の爆発が始まった。そのような宇宙の変動時点では外側の体系だけが安全である。そして、これが星雲終焉の始まりであった。この最後の太陽の吐き出しは、およそ20億年にわたって広がった。

57:4.7 (655.3) 7,000,000,000年前、アンドロノヴァーの最終的崩壊の絶頂がみられた。これが、 より大きい最後の太陽の誕生期間であり、局部的な物理的撹乱の頂点であった。

57:4.8 (655.4) 6,000,000,000年前、あなた方の太陽の、つまりアンドロノヴァーの2番目の太陽家族の最後から56番目の最終の崩壊と誕生が、記された。星雲核のこの最後の爆発は、それらの大半が孤立する球体である13万6,702個の太陽を生んだ。アンドロノヴァー星雲に起源を持つ太陽と太陽系の総数は101万3,628個であった。太陽系の太陽の数は101万3,572個である。

57:4.9 (655.5) 巨大なアンドロノヴァー星雲は、 今はもう存在しないものの、空間のこの母なる雲から生まれた多くの太陽とそれらの惑星家族の中に生存し続ける。この壮大な星雲の最後の核の残骸は、やや赤い輝きでまだ燃えており、いま強大な光の君主の２世代のこの立派な生みの親の周囲を公転する165の世界のその残る惑星家族へ緩やかな光と熱を発し続けている。

5. モンマチアの起源—ユランチア太陽系

57:5.1 (655.6) 5,000,000,000年前、あなたの太陽は、近くで循環する空間物質の大部分を、すなわち自身の誕生に伴い少し前に起きた変動の残骸を、それ自体に集めて燃えている比較的に孤立した球体であった。

57:5.2 (655.7) 今日、あなたの太陽は、それなりの安定性に達成したが、その11年半の太陽黒点の周期は、若い時代には変光星であったということを示している。あなたの太陽の初期においては、収縮、そしてその結果として生じる温度のゆるやかな上昇が、その表面に猛烈な大振動を起こした。これらの巨大な隆起は、異なる明るさの1循環を完成するために3日半を要した。この可変状態、この周期的脈動は、あなたの太陽をまもなく遭遇しようとする外側のある影響に対して非常に敏感にさせた。

57:5.3 (655.8) このようにしてあなたの世界が属する太陽系モンマチア、あなたの太陽の惑星家族の名前であるモンマチアに固有な起源のために局部空間の舞台が、設定されたのであった。オーヴォントンの惑星系の1パーセント足らずが、同様の起源があった。

57:5.4 (655.9) 4,500,000,000年前、巨大なアンゴナ系が、この孤立する太陽付近に接近し始めた。この大体系の中心は、固く非常に帯電された、しかも引きつける物凄い力を所有する暗く巨大な空間であった。

57:5.5 (656.1) アンゴナが太陽により近く接近するにつれ、ガス物質の流れは、太陽の脈動間の最大の拡大瞬間において、巨大な太陽の舌として空間に射出された。これらの燃えるようなガス状の舌は、初めは必ず太陽へと退くのであるが、アンゴナが近づくにつれて巨大な訪問者の引きつける力が非常に大きくなるので、ガス状の舌はあちこちで物体独自の本体を、つまり太陽の隕石を形成するために外側の部分が分離すると共に、すぐに自身の楕円軌道で太陽の周りを回転し始めた。

57:5.6 (656.2) アンゴナ系が近づくにつれ、太陽の噴出はますます増大した。周辺空間で独自の循環体となるために物質がますます太陽から引き出された。この状態は、アンゴナが太陽へのその最短距離に接近するまでのほぼ50万年間展開した。そうすると、その周期的内部変動の1つと関連し、太陽に部分的分裂が起きた。反対側から、し

かも同時に物体から莫大な量の物質が吐き出された。アンゴナ側から、夥しい一筋の太陽のガスが引き出された。両端はかなり尖り、中央は隆起し、太陽の直接の引力支配からは永久に離れた。

57:5.7 (656.3) 太陽からこのようにして分離されたこの大きい一筋の太陽ガスは、次には太陽系の12の惑星へと発展していった。アンゴナ系が遠く離れた空間へ後退するとき、流星と宇宙塵の多くが、非常に多くが、次に、太陽の引力に奪回されはしたものの、太陽の反対側からのガスの跳ね返りの射出は、太陽系のこの巨大な先祖の噴出との潮流の一致してその後太陽系の流星と宇宙塵とに凝縮していった。

57:5.8 (656.4) アンゴナは、小惑星と流星として今は太陽の周りを循環している大量の物質と太陽系の惑星の先祖的物質との引き離しに成功はしたが、それ自体のためにはこの太陽物質を確保しなかった。来訪中の体系は、太陽物質の何かを実際に奪うほど充分近くには来なかったが、現在の太陽系を含む全物質を介入している空間へと引きつけるには十分の近さで揺れ動いた。

57:5.9 (656.5) 土星と木星が、より大規模で膨らんでいる中央部分から形成される一方で、内側の5個と外側の5個の惑星は、アンゴナが太陽からの分離に成功したところの巨大な引力の脹らみのあまり重量感のない先細りの部分で冷却し凝縮する核からすぐに小形へと組成していった。それらの衛星の幾つかの後退する動きが明らかにしているように、木星と土星の強烈な引力は、アンゴナから奪われた物質の大部分をすぐに引き付けた。

57:5.10 (656.6) 過熱された太陽ガスの巨大な一筋の真ん中から生じた木星と土星は、非常に加熱された多量の太陽物質を含んでいるのでまぶしく輝き、莫大な熱の量を放った。個々の空間の物体としてのそれぞれの形成後の短期間、それらは実際には二次的太陽であった。太陽系の惑星の中で最大のこれらの2個は、完全な凝縮、あるいは、固体化の点までにはいまだ冷え切っていないので今日までガス状態のままでいる。

57:5.11 (656.7) 他の10個の惑星のガス収縮の核は、すぐ固体化の段階に達したので、近くの空間で循環する流星物質を引き付ける量を増やし始めた。太陽系の世界にはこのよ

うに二重の起源があった。大量の流星の引き付けによるガス凝縮の核が後に増大した。確かに流星をまだ捕らえ続けているが、はるかに減少した数でそうしている。

57:5.12 (657.1) 惑星は、太陽の母体の赤道面における太陽の周りでは揺れない。もし、太陽の回転によって払いのけられていたならばそうなるはずである。むしろ、アンゴナの太陽の噴出面を運行する。噴出は、太陽の赤道の面に対しかなりの角度で存続した。

57:5.13 (657.2) アンゴナが、少しも太陽の固まりを捕らえることができない一方で、あなたの太陽は、来訪中の体系の循環している空間物質の幾らかをその変化する惑星家族に加えた。惑星のその従属、分家家族は、アンゴナの激しい引力領域のせいで、暗い巨大なものからかなりの距離の軌道を追いかけた。そして、太陽系の先祖の質量の押出しの直後、そして、アンゴナがまだ太陽の周辺にいる間、太陽の近くのアンゴナ系の3つの主要な惑星が、大規模な太陽系の先祖にとても近い状態で揺れ動いたので、太陽の牽引力によって増大されたその重力の牽引力は、アンゴナの引力掌握の平均を失なわせ、また、天の

放浪者のこれらの3支流を永久に取り外すに充分であった。

57:5.14 (657.3) その太陽から生じた太陽系の物質のすべては、軌道の揺れの均一方向に寄与し、これらの3個の他宇宙空間体の割り込みがなかったならば、すべての太陽系の物質は、まだ軌道運動の同じ方向を維持しているであろう。実際のところ、3個のアンゴナ従属体の衝撃が、後退運動の結果として起こる様相で現れつつある太陽系に新しい、しかも外側に向かう力を注いだ。いかなる天文体系の後退運動も、常に偶然であり、常に他宇宙空間体の衝突の衝撃の結果現れる。そのような衝突は、常に後退運動を起こすとは限らないが、異なる発生源の質量を含む包含する体系を除いては、いかなる後退運動も、決して起こらないのである。

6. 太陽系の段階—惑星の形成時代

57:6.1 (657.4) 太陽の吐き出し減少の期間が、太陽系の誕生のあとに続いた。漸減的に、さらに50万年間、太陽は、周囲の空間への物質流出量を減少させていった。しかし、不安定な軌道の初期、周囲の物体が太陽へのそれぞれの

最短距離に接近したそのとき、もとの太陽は、この流星物質の大きい部分を取り戻すことができた。

57:6.2 (657.5) 太陽に最も近い惑星が、潮汐摩擦によってそれぞれの回転を減速させた最初の惑星であった。そのような引力の影響は、つねにユランチア側に面して回転している水星と月が例証しているように惑星の1方の半球が常に太陽か、　またはより大きい物体に向いたままで軸回転がやむまで、ますます遅い回転を惑星にもたらし、惑星の軸をなす回転速度におけるブレーキとして機能する一方で惑星の軌道の安定化に貢献している。

57:6.3 (657.6) 地球は、月と地球の潮汐摩擦が同等になると、必ず同じ半球を月に向けて回り、1日とひと月は、およそ47日間の長さで等しくなるであろう。軌道がそのような安定性に達すると、もはや地球から月を遠くに追い散らすことなく惑星に向けて徐々に衛星を引きつけ、潮汐摩擦は逆の動作に入るであろう。そうして、月が地球のおよそ17,700キロメートルの範囲にまで近づくその遠い未来において、後者の引力行為が月を崩壊させるであろうし、この潮汐の引力からくる爆発が月を小さい粒子へ

と砕くであろうし、またこの粒子は土星の物体に類似するものとして世界の周りに集合するかもしれないし、あるいは流星として徐々に地球へと引きつけられるかもしれない。

57:6.4 (658.1) 宇宙空間体の規模と密度が同様であるならば、衝突は起こるかもしれない。しかし、同様の密度の2つの宇宙空間体の大きさが比較的不均等であるならば、そして小さい方が大きい方に次第に接近するならば、その軌道の半径が大きい方の本体の半径の2倍半よりも少なくなるとき、小さい方の本体の分裂が起こるであろう。宇宙空間の巨大な物体間の衝突は実に希であるが、小物体のこれらの引力-潮汐の爆発は、ごく当たり前である。

57:6.5 (658.2) 流星は、近くの、そしてより大きい空間物体の潮汐引力により分裂が生じた大きい物体の破片であるが故に群がって起こる。土星の輪は、分裂させられた衛星の断片である。木星の月の1つは、いま危険にも潮の分裂可能区域近くに接近しており、数百万年以内には、惑星に奪われるか、または引力潮汐の分裂を被るであろ

う。ずっと昔の太陽系の5番目の惑星は、引力-潮汐の分裂可能区域に入るまで、木星へより近く定期的に接近をしながら不規則な軌道を旋回し、素早く破片となり、今日の小惑星の群がりとなった。

57:6.6 (658.3) 4,000,000,000年前、数十億年間規模を増大し続けた月を除き、今日観測されるのとほとんど同じ木星と土星系がみられた。事実、太陽系の惑星と衛星のすべては、流星捕捉が続いた結果としてまだ増大している。

57:6.7 (658.4) 3,500,000,000年前、他の10個の惑星の凝縮核が充分形成され、小さ目の衛星のいくつかは、　後に今日のより大きい月を作るために結合したが、たいていの月の中心は完全であった。この時代は惑星設立時代と見なされることもある。

57:6.8 (658.5) 3,000,000,000年前、太陽系は今日のように機能していた。宇宙の流星が驚異的割合で惑星とそれらの衛星に流出し続けにつれ、その構成部分の大きさは成長し続けた。

57:6.9 (658.6) およそこの頃、あなたの太陽系は、ネバドンの物理登録簿に登録され、その名前モンマチアが与えらた。

57:6.10 (658.7) 2,500,000,000年前、惑星の規模は非常に成長していた。ユランチアは、現在のおよそ1/10の塊のよく発達した球体であり、流星付着によりさらに急速に成長していた。

57:6.11 (658.8) この途方もない活動のすべては、ユランチア系列における進化的世界形成上の正常部分であり、時間の世界の生物の冒険に備えてそのような空間世界の物理的発展の始まりのための舞台設定に向けての天体の下準備を構成している。

7. 流星時代—火山時代 [原始惑星圏]

57:7.1 (658.9) 小分裂と凝縮でできた物体が、初期の太陽系の空間領域には充満しており、そのような空間体は、防護燃焼環境の欠落ゆえに直接ユランチアの表面に衝突した。これらの絶え間ない衝突は、惑星の表面に多少なりとも熱を保ち、これが、引力の強められた作用と共に球体が大きくなるにつれて、次第に鉄のようなより重い要

素がますます惑星の中心に向かって徐々に定着するように誘発する影響作用をはじめた。

57:7.2 (659.1) 2,000,000,000年前、地球は紛れもなく月を引き離し始めた。始終、惑星は、その衛星よりも大きかったのであるが、巨大な宇宙空間体が地球に捕らえられたこの頃までには大きさにおいてそれほどの違いはなかった。ユランチアはその時、現在の規模のおよそ1/5であり、加熱された内部と冷却中の外部の間での元素抗争の結果として現れ始めた原始の大気を保持するに充分な大きさになった。

57:7.3 (659.2) 確かな火山活動は、これらの時期にまで遡る。地球内部の熱は、放射性の、もしくは流星により空間から重い成分がもたらされたますます深い埋没により増大し続けた。これらの放射性要素に関する研究は、ユランチアの表面が10億年以上であることを明らかにするであろう。ラジウム時計は、惑星の年齢を科学的に見積るには最も信頼できる時計ではあるが、精査に利用できる放射性物質は、全て地球の表面から得られており、したがってユランチアのこれらの要素の比較的最近の入手を意

味しており、惑星の年齢にかんするそのような見積りのすべては、短か過ぎるのである。

57:7.4 (659.3) 1,500,000,000年前、月がその現在の質量になりつつあったとき、地球はその現在の大きさの2/3であった。月を上回る地球の急速な規模の増大が、もともとその衛星にあった少量の大気の緩やかな略奪開始を可能にした。

57:7.5 (659.4) 火山活動は、今やその盛りである。地球全体は、紛れもない火の地獄、より重い金属が中心に向かって引き寄せられる前のその初期の溶融状態に似た表面である。これが火山時代である。にもかかわらず、地殻、主として比較的軽い花崗岩構成は、徐々に形成されている。いつか生命を支えられる惑星のための舞台準備がなされている。

57:7.6 (659.5) 現在幾らかの水蒸気、一酸化炭素、二酸化炭素、および水素塩化物を含んで原始の惑星の大気はゆっくり発展しているが、遊離窒素も遊離酸素も少ししかないか、あるいは全くない。火山時代の世界の大気は奇妙な光景を提示する。列挙された気体に加え、空気帯が発

達するにつれ、それは多くの火山ガスに満ち、重い流星雨の燃焼生成物に満ち、惑星の表面上に絶えず突進している。そのような流星燃焼は、大気中の酸素をほとんど空にし続け、流星爆撃は、今なお夥しい頻度である。

57:7.7 (659.6) まもなく、大気はさらに落ち着き、惑星の熱い岩だらけの表面への雨の蓄積をし始めるには十分に冷えた。何千年もの間、ユランチアは、広大で切れ目のない1枚の蒸気の毛布におおわれていた。これらの時代、太陽は地球の表面には決して光彩を放たなかった。

57:7.8 (659.7) 大気の多量の炭素が、惑星の表面層に豊富にある様々な金属の炭酸塩形成のために取り出された。後に、これらの炭素ガスの多量が早期の多産植物に消費された。

57:7.9 (660.1) 継続する溶岩流と到来する流星は、その後の時代においてさえ空気中の酸素のほぼ完全な使い果たしを続けた。間もなく原始の海洋に出現する初期の堆積物でさえも、有色の石も貝も含んでいない。そして、この海洋出現から長い間、大気には遊離酸素は実際にはなく、

また後に海草と他の植物の型により生成されるまでは、目立つほどの量は生じなかった。

57:7.10 (660.2) 火山期の原始の惑星の大気は、流星群の衝突時の衝撃に対しほとんど保護がない。固体としての何百万個もの流星は、惑星の殻を潰すためにそのような空気帯に入り込むことができる。しかし流星は、時が経つにつれ、後の時代の酸素を豊かにしている大気の絶えず強い摩擦の盾に抵抗するに足りる小さな規模に減少していることが分かる。

8. 地殻の安定化 [地震時代 | 世界の海洋と最初のヨーロッパ大陸]

57:8.1 (660.3) 1,000,000,000年前が、ユランチア歴史の実際の始まりの時期である。惑星は、ほぼその現在の規模に達した。そして、およそこの頃、ネバドンの物理的登録簿に記載され、その名前ユランチアが与えられた。

57:8.2 (660.4) 大気は、絶え間のない降水とともに地殻の冷却を容易にした。火山活動は、初期に内部の熱の圧力と外部の収縮を同等にした。火山が急速に減少する一方で、

地震は、この時代の地殻の外部の冷却と調整工程をもたらせた。

57:8.3 (660.5) ユランチアの実際の地質歴史は、最初の海洋形成をもたらすに十分な地殻冷却に始まる。冷却中の地表における水蒸気の凝縮は、一度始まると、それが実際に完了するまで続いた。海洋は、この期間の終わりまでには惑星全体を覆い平均1.5キロメートル以上の深さで世界中にひろがった。その当時、潮汐は、ほぼ今観測されているような活動振りであったが、この原始の海洋は塩辛くはなかった。それは実際には世界を覆う淡水であった。その頃塩素の大部分は、様々な金属と抱合していたが、水素と一体でこの水を微かに酸性にするには十分であった。

57:8.4 (660.6) この久遠の時代の始まりにおけるユランチアは、水に閉ざされた惑星と見なされるべきである。後には、　深く、したがって、より濃い溶岩流が現在の太平洋の下部に姿を現し、水で覆われた表面のこの部分はかなり沈下した。最初の大陸の広大な土地は、徐々に厚く

なる地殻均衡の補填的調整における世界海洋から現れた。

57:8.5 (660.7) 950,000,000年前、ユランチアは、1つの大きな陸の広がりと大きな水域体、太平洋の絵を提示する。火山はまだ広範囲にわたっており、地震は頻繁かつ激しいものである。流星は、地球を砲撃し続けるが、頻度と規模ともに減少している。大気は澄んできているが、二酸化炭素量は多いままである。地殻は徐々に安定している。

57:8.6 (660.8) ユランチアが、惑星管理のためにサタニア体系に割り当てられ、ノーランティアデクの生命記録に登録されたのは、ほぼこの頃であった。そしてマイケルが、後に人間贈与の途方もない仕事に従事し、それらの経験によってユランチアが、「十字架の世界」としてそれ以来周辺に知られるようなる惑星になるよう運命づけられた小さく重要でない球体への行政からの承認が始ったのである。

57:8.7 (661.1) 900,000,000年前、惑星を調べ、生命実験拠点のための適合性について報告をするためにジェルーセムから派遣された最初のサタニア偵察隊のユランチア到着が

見られた。この委員会は、生命搬送者、ラノナンデクの息子達、メルキゼデク、熾天使、それに他の惑星組織と管理の初期に関係のある天の生命の他の体制を含む24人の構成員で組織されていた。

57:8.8 (661.2) この委員会は、入念な惑星調査をした後ジェルーセムに戻り、体系主権者にユランチアが生命実験記録に記載されるようにと推奨をそえて報告した。あなたの世界は、それに応じて、10番目の惑星としてジェルーセムに登録され、また生命搬送者は、生命の移植と植え付け命令とを携えてのかれらの次の到着時に物理的、化学的、電気的起動の新型の開始が許されると知らされた。

57:8.9 (661.3) やがて、惑星占有のための計画案が、ジェルーセムで12人の混合委員会により完成され、エデンチアで70人の惑星委員会により承認された。生命搬送者の顧問官が提案したこれらの計画は、最終的にサルヴィントンで受理された。その直後、ネバドン放送は、生命搬送者が、ネバドンの生命型に属するサタニア型を拡大し、改良するように考案されたサタニア実験第60号を実施する舞台はユランチアであろうとの発表を伝えた。

57:8.10 (661.4) ユランチアは、全ネバドン向けの宇宙放送で初めて認識された直後、宇宙での正式な位置を得た。その後すぐ、超宇宙の大小の区域の本部の惑星に関する記録に付された。そしてユランチアの名は、この時代終了以前にユヴァーサの惑星の生命登録に見られたのであった。

57:8.11 (661.5) この時代全体は頻繁かつ激しい嵐によって特徴づけられた。地球の初期の地殻は、絶え間なく変化する状態にあった。表面冷却と夥しい溶岩流とが、交互に起こった。この世界の表面のいずれにもこの惑星の初期の地殻は、何も見つけられない。あまりにも頻繁にすべてが、深い発生源から押出されてくる溶岩と混ざり、また初期の世界の海洋のその後の堆積物と混合された。

57:8.12 (661.6) カナダの北東部のハドソン湾周辺ほどには世界の表面のどこにも、これらの古代の海洋岩石の出現以前の改変された残骸は、見られないであろう。この大規模な花崗岩隆起は、前海洋時代に属する石で構成されている。これらの岩石層は、加熱され、曲げられ、撚り合わ

され、揉み上げられ、再三これらの歪曲敵変形の経験をしてきた。

57:8.13 (661.7) 無化石層状になった石の巨大な層は、海洋時代の間にこの古代の海洋底部に堆積した。(石灰岩は、化学物質降下の結果、形成し得る。古い石灰岩のすべてが、海洋生物の堆積作用で生じたものではなかった。) これらの古代のいずれの岩石形成にも生命の形跡は見つけられないであろう。何かのはずみで、水の時代の後の堆積が、これらのより古い前生命層に混ざらない限り、何の化石も含んではいない。

57:8.14 (662.1) 地球の早期の地殻は非常に不安定であったが、山は形成過程にはなかった。惑星は、形成される間引力の圧縮の下で収縮した。山は、収縮する球体が冷却していく地殻崩壊の結果ではない。雨、重力、および浸食作用の結果として後に現れる。

57:8.15 (662.2) この時代の大陸の広大な土地は、地球のおよそ10パーセントを覆うまでに拡大した。激しい地震は、大陸の広大な土地が水面よりかなり上に現れるまで始まらなかった。それは、一度始まると、長い間頻度と激しさ

を増大した。地震は、何百万年もの間には減少したが、ユランチアには1日平均いまだに15個ある。

57:8.16 (662.3) 850,000,000年前、地殻の安定化の最初の真の時代が始まった。より重い金属の大部分は、地球の中心に向かって定着した。前の時代のような大規模の陥没は、冷却する地殻には終わった。陸の押出しとより重い海底とのより良い均衡が確立された。地殻下の溶岩の土台の流れは、ほぼ世界規模となり、これが、冷却、収縮、および表面移行による変動を釣り合わせ、安定させた。

57:8.17 (662.4) 火山爆発と地震との頻度と激しさは減少し続けた。大気は火山ガスと水蒸気を取り除いていたが、二酸化炭素の割合はまだ高かった。

57:8.18 (662.5) また空気中と地球での電気障害も減少していた。溶岩流は、地殻をいろいろ変化させ、一定の空間エネルギーから惑星をよりよく絶縁する成分混合物をその表面にもたらした。そして、磁極作用で明らかであるように、このすべてが、地球のエネルギー管理を容易にし、その流れを整えるために多くのことをしたのである。

57:8.19 (662.6) 800,000,000年前、最初の大いなる陸地時代、より一層の大陸出現の時代、がみられた。

57:8.20 (662.7) 地球の水圏の凝縮以来、まずは世界の海洋へと、次には太平洋へと、この後者の水域は、当時地球の表面の9/10を覆っていたと想像されるはずである。海に落下する流星は海洋底部に蓄積したし、概して、流星とは重い物質で構成されている。陸に落下するそれらは、主に酸化し、次に浸食で摩滅し、海盆へと押し流されていった。海洋底部は、このようにしてますます重くなり、これに加えて16キロメートルの深さの所では水自体の重さがあった。

57:8.21 (662.8) 太平洋の増大する押圧力は、大陸の広大な土地のさらなる押し上げに作用した。ヨーロッパとアフリカは、現在オーストラリア、北米と南米、南極大陸と呼ばれているそれらの主要部と共に太平洋の深層部からの上昇を始め、一方太平洋の海底は、さらなる埋め合わせの沈下調整をしていた。この期間の終わりまでには、地表の1/3が陸をなしており一つの大陸本体であった。

57:8.22 (662.9) 陸地の隆起のこの増大と共に惑星の気候の違いが生じた。陸の隆起、宇宙雲、および海洋の影響は、気候変動の主要な要素である。アジアの陸地の屋台骨は、陸の最大出現時点で約14.5キロメートルの高さに達した。非常に高く隆起した領域上方に漂う空気中に多量の湿気が含まれていたとしたならば、巨大な氷の層ができていたことであろう。氷河期は、実際に起きたずっと以前に至っていたことであろう。非常に多くの陸が、水上に再び現れるには何億年もかかった。

57:8.23 (663.1) 750,000,000年前、広大な土地の最初の割れ目は、南北の大幅な響割れとして始まり、後に海洋水が入り、グリーンランドを含む南米と北米大陸の西への漂流への道を準備した。長い東西分裂は、ヨーロッパからアフリカを切り離し、アジア大陸からオーストラリアへの陸地、太平洋諸島、それに南極大陸を断ち切った。

57:8.24 (663.2) 700,000,000年前、ユランチアは、生命擁立に適した状態の成熟期に近づきつつあった。大陸の漂流は続いた。海洋は、浅い水域を提供する長い指のような海と

してますます陸に入り込み、海洋生命の生息地に非常に適した湾を保護していた。

57:8.25 (663.3) 650,000,000年前、広大な陸地のさらなる分離と、その結果としての大陸間の海のさらなる拡大がみられた。そのうえ、これらの水は、急速にユランチアの生命に不可欠な塩度の度合いに達していた。

57:8.26 (663.4) 後に何層にもわたる非常に保存状態の良い石の層に見られるように、時が引き継がれ、時代がたつにつれ、ユランチア生命の記録を堆積していったのは、これらの海とその後の海であった。昔のこれらの内海は、真に進化の揺りかごであった。

57:8.27 (663.5) [元来のユランチア部隊の一員であり、いまは居留観察者である生命搬送者による提示]

論文 58
ユランチアにおける生命の確立

58:0.1 (664.1) 全サタニアには、生命変化の惑星であるユランチアに類似した61個だけの世界がある。棲息世界の大部分は、確立された方法で人々が住んでいる。そのような球体では、生命搬送者への生命移植計画における余地

は、ほとんど与えられていない。しかし、おおよそ10個の世界のうちの1つは、10進惑星として指定され、生命搬送者の特別な登録に割り当てられる。また、そのような惑星では、宇宙の生き物の標準型を変更したり、または、ことによると改良する努力において一定の生命実験が許されている。

1. 物理的生命の前提条件

58:1.1 (664.2) 600,000,000年前、ジェルーセムから派遣された生命搬送者の委員会は、ユランチアに到着し、サタニア系の606番の世界への生命送出前の物理的状態の研究を始めた。これは、サタニアにけるネバドン生命型を開始する606番目の我々の経験であり、局部宇宙の基本的かつ標準的生命設計において変化させたり、改変を始める60番目の機会となるのであった。

58:1.2 (664.3) 生命搬送者は、球体が進化の循環開始のために熟すまで生命に着手することはできないということが明らかされるべきである。また我々は、惑星の物理的進歩が、生命開発を支え、それに備えないかぎり、その急速な開発をすすめることはできない。

58:1.3 (664.4) サタニア生命搬送者は、塩化ナトリウムの生命の型を計画した。それゆえ海洋水域が、適当な塩度になるまでそれを配置する方向への何の方法も取れなかった。原形質のユランチア型は、適切な塩の溶液の中でのみ機能できる。すべての先祖の生命—植物と動物—は、塩溶液生息地で発展した。また、非常に組織化された陸棲動物は、この同じ不可欠の塩の溶液が、この「塩水の奥行き」の生きるあらゆる小細胞を自由に水浴びさせ、文字通り潜水させ体内の血液流を循環しなかったならば、住み続けることはできなかった。

58:1.4 (664.5) あなたの原始の先祖は、塩辛い海洋の中を自由に円運動をした。今日、この同じ海洋性の塩辛い溶液は、最初の生きた細胞の原形質の最初の反応を刺激した塩水に匹敵する必要不可欠な要素のすべてが、惑星で機能するために各細胞を化学液体に浸してあなたの体内を自由に循環している。

58:1.5 (664.6) しかしこの時代が始まると共に、ユランチアは、あらゆる方法で海洋生命の初期の型の支援に好ましい状態に向かい発展している。地球とその隣接する領域

での物理的状態は、展開する物理的環境へ最も良く順応するそのような生物の型、我々が定めていたような型、を確立する後の試みのために舞台—地球的、空間的環境の両面—をゆっくりと、しかも確実に準備しているのである。

58:1.6 (665.1) 次に生命搬送者のサタニア委員会は、広大な大陸に余分の内海や保護された湾をもたらす更なる粉壊を待ち受ける方を選び、実際に生命を移植する前にジェルーセムに戻った。

58:1.7 (665.2) 生命が海洋に起源をもつ惑星での生命移植に理想的な条件は、多くの内海により、すなわち浅い水域や保護された安全な湾の大規模な海岸線によりもたらされる。そして、地球の水域のまさしくそのような分布が急速に展開していた。これらの古代の内海は、めったに800キロメートル、あるいは900キロメートルの深さではなかったし、日光は、900キロメートル以上もの海洋水を突き通ることができる。

58:1.8 (665.3) 原始植物は、陸にその方法を見つけた後の時代の温暖で安定した気候のそのような海岸から来ていた。

そこでは、大気中の高濃度の炭素が、陸に住む新たな多様な生物に迅速で豊かな成長のための機会を提供した。その時、この大気は、植物の成長には理想的であったが、いかなる動物も、ましてや人間は、地表での生活ができないほどの非常に高濃度の二酸化炭素を含んでいた。

2. ユランチアの大気

58:2.1 (665.4) 太陽総放射のおよそ20億分の１が、惑星の大気を通して地球に漏れる。もし北アメリカに降りかかる光が、1キロワット時あたり2円の割合で支払われるならば、年間の照明請求書は、8,000兆円を上回るであろう。シカゴの日光に対する請求書は、1日あたり100万円を大幅に上回るであろう。その上に、他の形式のエネルギー—あなたの大気に達する太陽の貢献は光だけではない—を太陽から受け取っているということに気づくべきである。莫大な太陽エネルギーは、人間の視野の認識範囲の上下双方以上の波長をユランチアに注いでいる。

58:2.2 (665.5) 地球の大気は、スペクトルの極端紫外線の太陽放射線のほとんどを通過させない。これらの短い波長の

大部分は、地表からおよそ16キロメートルの範囲にまたがり、さらに上空へ16キロメートル伸びるオゾン層に吸収される。この領域を透過するオゾンは、地表に行き渡る状態では、2.5センチメートルのほんの1/10の層を作るであろう。それにしても、この比較的小さく明らかに瑣末、些細なオゾンが、日光に存在するこれらの危険で破壊的である過剰な紫外線からユランチア住民を保護している。しかし、このオゾン層がほんの少し厚かったならば、いま地表に達し、またビタミンに最も不可欠である中の1つにとって始祖的である非常に重要かつ健康を与える紫外線が奪われるであろう。

58:2.3 (665.6) いまだに、あまり想像的でない人間の一部の機械論者は、物質的創造と人間の進化を偶然と見なすと主張する。ユランチア中間者は、偶然の機会の法則とは相容れないと考えており、また、物質的な創造において紛れもなく知的な目的の存在を示していると主張して5万の物理学的、化学的事実を集めた。また、物質宇宙の計画、創造、維持における心の臨場を立証し続ける物理学と化学の領域外の10万以上の発見についての目録には、前述のすべてを含んではいない。

58:2.4 (666.1) あなたの太陽は、死をもたらす光線の実質上の洪水を流出させているのであるが、ユランチアにおけるあなたの快い生活は、この特有のオゾン層の作用に似た40以上の明らかに偶然の保護的作用の「思いがけない」影響によるものである。

58:2.5 (666.2) 熱というものは、もし夜の大気の「覆い」の効果がなければ、人工的設備を除いては生命の維持は不可能なまでに放射により急速に失われるであろう。

58:2.6 (666.3) 地球大気圏の下層の8キロメートルまたは10キロメートルの距離には対流圏がある。これは気象現象をもたらす風と気流の領域である。これより上の領域には、内電離層があり、その上には成層圏がある。地表から上昇するにつれ、温度は、10キロメートルから13キロメートルまで着実に下がり、そこではおよそ摂氏−50度を記録する。さらに上の65キロメートルにおいてはこの摂氏−48度から−50度の範囲内にあり変化はない。この一定温度の領域は、成層圏である。65キロメートルから72キロメートルの高さでは、温度は上昇し始め、この増加は、オーロラ現象の高さにおいては摂氏650度に達し、

酸素をイオン化するのはこの猛烈な熱である。しかし、そのような高度の大気の温度は、地表の熱計算とはとても比較できない。総大気の半分は、最初の5キロメートルにあるということを心に留めおきなさい。地球の大気圏の高さは、最高度にあるオーロラの吹流し—およそ640キロメートル—により示されている。

58:2.7 (666.4) まさに地球の熱帯ハリケーンがそうであるように、オーロラ現象は、太陽黒点に、すなわち太陽の赤道の上下で反対方向に渦巻く太陽の旋風に直接に関係がある。赤道の上、または、赤道の下に起こる時、そのような空中擾乱は反対方向に渦巻く。

58:2.8 (666.5) 光周波数を変更する太陽黒点の力は、これらの太陽の嵐の中心が巨大な磁石として機能することを示している。そのような磁場は、太陽黒点の噴火口から空間を地球圏外の大気圏へと充電された粒子を放出することができ、そこでは、それらのイオン化作用がそれほどまでに壮観なオーロラ現象を起こす。したがって、太陽黒点がその最盛期に—あるいは直後に—一般的には赤道

上に位置するときに、最大のオーロラ現象が起こるのである。

58:2.9 (666.6) 磁針でさえも、日が昇るにつれわずかに東に、また日が落ちるにつれわずかに西に回るのであるから、太陽の影響力に敏感である。これは毎日起こるが、太陽黒点の周期の最高点にある間の方位磁石のこの変化は、2倍の大きさである。方位磁石の日毎のこのずれは、日光によって生じる上層大気の増加するイオン化に呼応しているのである。

58:2.10 (666.7) 超成層圏の帯電された導電領域の異なる2つのレベルの存在は、長波と短波の無線放送の長距離伝送を説明しているのである。放送は、これらの外部電離圏でときおり猛威を奮うすさまじい嵐によりたまに妨害される。

3. 空間環境

58:3.1 (666.8) 宇宙具体化の初期、空間層は広大な水素雲を、はるかな空間の多くの領域を特徴付けているちょうどそのような天体の塵の塊を、点在させた。当初は、灼熱の太陽が分解し、放射エネルギーとして分散する組織され

た物質の多くが、初期に出現する空間にあるこれらの水素雲に積み重ねられた。ある珍しい条件のもとでの原子分裂は、より大きい水素物質の核心でも起こる。そして、原子形成と原子融解のこれらの現象すべてには、非常に加熱された星雲でのように、最高潮の放射エネルギーの短区間光線の発生が伴う。これらの様々の放射に伴う型は、ユランチアには知られていない空間エネルギーの型である。

58:3.2 (667.1) 宇宙空間のこの短い光線エネルギー装填は、組織化された空間領域に存在する放射エネルギーの他のすべての型よりも400倍も大きい規模である。短い空間光線の出力は、灼熱の星雲、緊張状態の電界、外部空間からくるか、または広大な水素の塵の雲から来るか否かに関係なく、温度、引力、および電子圧力の変動と突然の緊張変化により質的、量的に変更される。

58:3.3 (667.2) 宇宙光線の起源におけるこれらの不測事態は、変更された円から極端な楕円へとさまざまである循環物質の軌道のみならず、宇宙での多くの出来事によっても決定される。また電子スピンは、時としてより大きな物

質行動のものとは逆方向であることから、物理的状況は、同じ物理領域においてさえも大いに変更されるかもしれない。

58:3.4 (667.3) 巨大な水素雲は、発展するエネルギーと変容する物質の各面を抱く紛れもない宇宙化学実験室である。巨大なエネルギー活動が、頻繁に重なり、故に広範囲にわたって混合する夥しい連星周縁のガスの中で起こる。しかし、途方もない、広範囲におよぶこれらの空間エネルギー活動のいずれも、組織化された生命—生物と存在体の細胞質—の現象に対してほとんど影響を及ぼさない。空間のこれらのエネルギー条件は、生命確立に不可欠の環境に深く係わりがあるが、それらは放射エネルギーのより長い光線の幾つかのようには、細胞質の継承要素のその後の変更には有効ではない。生命搬送者の注入された生命は、この驚くべき宇宙エネルギーの短い光線の洪水のすべてに十分に耐えられる。

58:3.5 (667.4) 生命搬送者が、実際にユランチアで生命確立を始める以前、これらの欠くことのできない宇宙条件のすべてが、好ましい状態に発展しなければならなかった。

4. 生命の黎明期

58:4.1 (667.5) 我々が生命搬送者と呼ばれることが、あなたに混乱のもたらしてはならない。我々は、惑星に生命を運ぶことができるが、ユランチアには何の生命も連れては来なかった。ユランチアの生命は、その惑星に独自で、そこの生まれなのである。この天体は、生命変更の世界である。我々は、他ならぬこの惑星でここに現れる全生命をまとめあげた。全サタニアの他のいかなる世界にも、ネバドンにさえ、ユランチアの生命体にそっくりなものはない。

58:4.2 (667.6) 550,000,000年前、生命搬送者軍団はユランチアに戻った。我々は、精神力と超物質的な力との共助のうちに結団し、この世界独自の生命の型を起こし、領域の居心地の良い水域にそれらを配置した。カリガスティア、惑星王子の時代までの全惑星の生命は、(惑星外の人格は別として)我々の独自で、同一の、しかも同時の3個の海中生物の移植にその起源があった。これらの3個の生命移植は、次のように指定された。中央、つまりユーラシアとアフリカの生命移植、東、つまりオーストラ

ラシア生命移植、西、つまりグリーンランドとアメリカ大陸を含む生命移植。

58:4.3 (668.1) 500,000,000年前、原始の海洋植物の生命が、ユランチアにしかと確立された。グリーンランドと北極の陸地は、北米と南米と共に、その長くて緩慢な西への移動を始めていた。アフリカは、それ自体と母なる本体の間に東西を貫くトラフ地中海盆地を作り出しわずかに南に移動した。南極大陸、オーストラリア、そして太平洋の島々からなる陸地は、南と東に分裂し、その時代以来遠くへと移動した。

58:4.4 (668.2) 我々は、分裂した広大な大陸の東西分裂の中央の海にある保護された熱帯性の湾に原始の海洋生物の型を植えつけた。3種類の海洋生物移植をするに当たっての我々の目的は、後に陸が分離するときそれぞれの巨大な陸地が、この生命をそれと共に、その暖水の海に運ぶことを保証することであった。我々は、陸出現の後の時代において大きい海洋が、これらの移動する広大な大陸を切り離すことを見越していた。

5. 大陸移動

58:5.1 (668.3) 大陸移動が続いた。地球の中心は、平方センチ当たりおよそ3,500トンの圧力を受け、膨大な重力圧縮のせいで鋼鉄のように高密度で堅くなった。内深部は、非常に熱いままで、今でも熱い。温度は、中心が太陽の表面温度をわずかに上まわるまで表面から内に向かって上昇している。

58:5.2 (668.4) 地球質量の外側の1,600キロメートルは、主として異なる岩石から成る。下部は、より濃密で重い金属成分がある。世界は、初期の前-大気時代を通じてほぼ液体の溶融状態の非常に加熱された状態であったために、より重い金属が内部に深く沈んでいた。今日表面近くで見つけられる物は、古代の火山の染み出た物、後の、しかも大規模な溶岩流、それと最近の流星の堆積物を示している。

58:5.3 (668.5) 地球の外殻は、およそ65キロメートルの厚さであった。惑星の移動する圧力を均等化し、その結果地殻を安定する傾向を有する強い圧力下に押えられている、しかも、常に諸所へと流れがちである溶融状態の溶岩の可動層からなるこの外殻は、玄武岩の異なる厚みの溶融

状態の海に支えられており、また直接横たえられている。

58:5.4 (668.6) この大陸は、現代でさえ結晶化されていないこの座布団のような溶融状態の玄武岩の海に浮かび続けている。この保護的状態がなければ、より激しい地震が世界を文字通り粉微塵に震動させるであろう。地震は、固い外殻を滑らせたり、移動させたりして引き起こされるのであって、火山によるものではない。

58:5.5 (668.7) 地殻の溶岩層は、冷却されると花崗岩を形成する。ユランチアの平均密度は、水の密度の5倍半強である。花崗岩の密度は、水の密度の3倍弱である。地球の中心は、水の12倍の密度である。

58:5.6 (668.8) 海底は、陸塊よりも密度が高く、これが、大陸を水上にとどめているのである。海底が海面上に押し上げられると、主に玄武岩、つまり陸塊の花崗岩よりもかなり重い溶岩の型から成っているとわかる。さらに進んで、もし大陸が、海底より軽くなければ、引力は、陸に海洋の縁を引き上げるであろうが、そのような現象は観察可能ではない。

58:5.7 (668.9) 海洋の重さも、海底の圧力増加の一要因である。下部の、だが比較的重い海底、加えて横たわる水の重さは、 より高さのある、だがはるかに軽い大陸の重量に近似している。しかしすべての大陸は、海洋に潜り込む傾向にある。海底面における大陸の圧力は、1平方センチ当たりりおよそ1,400キログラムである。すなわち、これは海底から5,000メートルの高さの大陸質量の圧力となるであろう。海洋床の水圧は、1平方センチ当たりほんの350キログラムほどである。どちらかと言えば、これらの圧力差が、大陸を海底に向けて滑らせる傾向にある。

58:5.8 (669.1) 生命出現以前の海洋底の沈下は、その側圧が、下に横たわる半粘着性の溶岩床うえから陸の東西と南端を周囲の太平洋の水域へと滑べり落とすほどの高さにまで単一の広大な陸地を押し上げてしまった。これが、それほどまでに完全に大陸の圧力を補填したので、この古代のアジア大陸の東岸に幅広い亀裂は起こらなかったが、その東海岸は、以来ずっと水中の墓へと滑り込む険悪な状態で海洋深層に隣接する絶壁上にある。

6. 過渡期

58:6.1 (669.2) 450,000,000年前、植物から動物のへの変遷が生じた。この変化は、分離していく大陸の大規模な海岸線の保護された熱帯性の湾と潟の浅い水域で起こった。そのすべてが本来の生命様式に固有であったこの発展は、徐々に起きた。前原始の植物型の生命と後の動物と明確に定義された有機体の間には、過渡的多くの段階があった。今日でさえも過渡期の粘液糸状菌は持続しており、植物、または動物としてそれらを分類することはほとんどできない。

58:6.2 (669.3) 植物の進化は、動物に遡ることができ、また最も簡単な有機体から最も複雑で高度な有機体へと徐々に導く段階的に進む一連の植物と動物が見つけられてはきたが、あなたは、そのような連結、動物界の大区画におけるつながりも、あるいは人類出現以前の最高度の動物の型と人類の原始人とのつながりも見いだすことはできないであろう。これらのいわゆる「失われた鎖の環」はいつまでも欠けたままであろう。決して存在しなかったという簡単な理由から。

58:6.3 (669.4) 時代から時代へと動物の新種は急進的に起こる。それらは、小さい変化のゆるやかな蓄積の結果としては発展しない。充分に達した、また新種の生命として現れ、しかも突然に出現するのである。

58:6.4 (669.5) 新種の、また多様な生物の種の突然の出現は、完全に生物的であり、全く自然である。これらの遺伝子変異に関しては、超自然なものはない。

58:6.5 (669.6) 動物は、適当な海洋の塩度で進化し、また塩辛い水が、海の生物の動物の体内を循環するのは比較的に簡単であった。しかし海洋が収縮し、塩の割合が大いに増加したとき、これらの同じ動物は、ちょうど淡水に生きることを習得したそれらの有機体が、塩の保護の巧妙な業によって適度の塩化ナトリウムを体液に維持する能力を取得したように、体液の塩辛さを減少させる能力を進化させた。

58:6.6 (669.7) 岩石に閉じ込められた海洋生物の研究は、これらの原始有機体の早期の調整的もがきを明らかにしている。植物と動物は、決してこれらの調整のための試みを

やめない。環境は、いつも変化しており、生物は、つねに果てしない変動への順応努力しているのである。

58:6.7 (670.1) 生命の全新種の生理的装備と生体構造は、物理法則の行動に対応しているが、その後に続く心の贈与は、生まれながらの脳の容量に一致する心と精神の副官の恵与である。心は、物理的進化でない一方で、純粋に物理的、進化的発展によって供給される脳の容量に完全に依存するのである。

58:6.8 (670.2) すべての生物が、ほぼ無限の周期の利得と損失、調整と再調整を経て時代によって前進したり後退したりする。宇宙統一を成し遂げるものは存続し、一方この目標に達しないものは消滅する。

7. 地史の書物

58:7.1 (670.3) 生命の黎明期、すなわち原生代期、世界の地殻を成す広大な岩石体系群は、地表の多くの場所に今は現れていない。それが、後世の全堆積から出現するとき植物と初期の原始動物の化石の残骸だけが見つかるであろう。これらのより古い水中堆積岩のいくつかは、その後の層に混合わさり、それらは、時として植物の早期のい

くつかの型の化石残骸をもたらし、一方では、早期の海洋動物のより原始の型のいくつかが、　時折最上層に見つけられるかもしれない。動植物の双方の初期の海中生物の化石を含有するこれらの最古の重なり合う多くの場所の岩石層が、じかに古い画一的な石を土台の上に見つかるかもしれない。

58:7.2 (670.4) この時代の化石は、藻、珊瑚のような植物、原始の原生動物、および海綿のような変遷的有機体をもたらす。しかし、早期岩石層におけるそのような化石の欠如が、必ずしも、それらの堆積時点で生き物がほかの場所に存在していなかったと立証するというわけではない。生命は、これらの早期の時代を通して疎らであり、しかも地球の表面で緩やかに進んだに過ぎない。

58:7.3 (670.5) この往時の岩石は、現在地球の表面、あるいは現在の陸地の約1/8以上の表層のごく近くにある。この遷移の石の平均の厚み、つまり最古の層の岩石層は、およそ2.5キロメートルである。ある場所においては、これらの古代の岩石構造は、6.5キロメートルもの厚さで

あるが、この時代の結果とみなされていた層の多くはその後の時代に属する。

58:7.4 (670.6) 北アメリカにおいてはこの古代の、そして化石を宿す原始の石の層は、カナダの東、中央、そして北の領域の表面上にある。この岩石の東西に断続する尾根が、ペンシルヴェニアと古代のアディロンダック山地からミシガン、ウィスコンシン、ミネソタの西方へと広がって存在する。他の尾根は、ニューファンドランドからアラバマへ、それとアラスカからメキシコへと走る。

58:7.5 (670.7) この時代の岩石が、世界中のあちこちで露出しているが、いくつかの層に存在するこれらの化石を宿す原始の岩石は、太古の時代の隆起と表面変動が分かるスペリオル湖やコロラド川のグランドキャニオン周辺の物ほどには容易には分からない。

58:7.6 (670.8) 地殻の中で最古の化石を宿しているこの石の層は、地震と初期の火山の隆起の結果揉まれて折り重なり異様に捻じれてしまった。この時代の溶岩流は、惑星の表面近くに多量の鉄、銅、および鉛をもたらした。

58:7.7 (670.9) そのような活動は、ウィスコンシンの聖クロイ渓谷ほどにありありと見られるような場所は地球にはあまりない。この領域の陸地での連続する127回の溶岩流、その後の水没、その結果としての岩石堆積が、生じた。上部の岩石の堆積と断続的溶岩流の多くは、今日存在せず、またこの構造の下部は、土中深くに埋められているにもかかわらず、過去の時代を示すこれらの層のうちおよそ65か70が、現在露出していて目に触れる。

58:7.8 (671.1) 陸地の大部分が、海面近くにあったこれらの早期においては、多くの連続する潜水と浮揚が起こった。地殻は、ちょうどその後の比較的安定化の時期に入っていた。早期の大陸移動のうねり、隆起、沈下は、遠大な陸地の周期的浸水の頻発をもたらした。

58:7.9 (671.2) 原始の海洋生物のこの時代、大規模な大陸の海岸の領域が、海下に数メートルから1キロメートル近くまで沈んだ。より古い砂岩と礫岩の多くが、この古代の岸の沈殿作用による堆積を呈している。この早期の地層に属する堆積岩は、生命の起源をはるかに超える時代、

世界的な海洋の初期の出現に遡るそれらの層の上に直接横たわっている。

58:7.10 (671.3) 有機炭素の存在を示し、次の石炭紀、または石炭時代に地球に蔓延した植物の型の先祖の存在を証明するこれらの変遷をみせる岩石の堆積物の上部層のいくつかには、小量の泥板岩、または暗色の石盤が含まれている。これらの岩石層における銅の多くは、浸水により生じる。幾らかは、古い岩石のひびに見つけられ、古代の保護された海岸線の湿地帯の停滞した水の濃縮物である。北米とヨーロッパの鉄山は、　部分的に、古い無成層岩や、生命形成の過渡期のこれらの後の成層岩の中に横たわる堆積物や露出物の中にある。

58:7.11 (671.4) この時代は、世界の全水域での生命の普及を示している。海洋生物は、ユランチアで確かにうち建てられていった。浅く広範な内海の下部においては、大量で豊富な植物が繁茂しつつあり、一方海岸線の水域においては、単純な動物生態の型が蔓延しつつある。

58:7.12 (671.5) この話のすべてが、世界記録の広大な「石の本」の化石のページの中でありありと語られている。　人が

解釈の技を取得しさえすれば、この巨大な生物地質学の記録のページは、絶えず真実を告げている。古代のこれらの海底の多くは、現在、陸上高く持ち上げられており、長い年月を積み重ねてできた堆積は、それらの初期の時代の生命の闘争物語を知らせている。あなたの詩人が言ったように、「我々が踏みつける埃はかつて生きていた」というのは、文字通り本当である。

58:7.13 (671.6) [現在この惑星に居住するユランチア生命搬送者軍団の一団員による提示]

論文 59
ユランチアの海洋生命期

59:0.1 (672.1) 我々は、ユランチアの歴史は、およそ10億年前に始まり、5回の主要時期を経て広がっていると判断している。

59:0.2 (672.2) 1. 前生命時代は、惑星がその現在の規模に達する時代から生命確立の時代までの初期の4億5千万年間におよぶ。地球の研究者達は、この期間を始生代と指定した。

59:0.3 (672.3) 2. 生命黎明期は、次の1億5千万年間におよぶ。この時代は、　先行する前生命、または激変期と、次のより高度な海洋生命の時代とに介在する。この時代は、原生代として地球の研究者達に知られている。

59:0.4 (672.4) 3. 海洋生物時代は、次の2億5千万年にわたり、古原生代として最もよく知られている。

59:0.5 (672.5) 4. 初期の陸性生物期は、次の1億年にわたり、中原生代として知られている。

59:0.6 (672.6) 5. 哺乳類の時代は最後の5千万年間を占めている。この最近の時代は新原生代として知られる。

59:0.7 (672.7) 海洋生物時代は、このようにあなたの惑星の歴史の1/4にわたっている。それは6回の長い期間に細分されるかもしれない。それぞれが、地質学と生物学の両分野において、明確に定義された一定の開発によって特徴づけられている。

59:0.8 (672.8) 海底、大規模な大陸棚、および岸近くの浅い海盆多くは、この時代の始まりとともに豊富な植物に覆われていく。動物生態のより単純で原始の型が、早くも先

行する植物有機体から発達し、初期の動物の有機体は、多くの内海が原始の海洋生物で満たされるまで、様々な広大な土地の大規模な海岸線に沿って徐々に前進していた。初期のこれらの有機体のごく僅かしか殻をもっていなかったので、化石としては多くは残っていない。しかしながら、後の時代に非常に整然と貯蔵された生命記録の保存のその偉大な「石の本」の初章のために舞台は設定されるのである。

59:0.9 (672.9) 北米大陸は、化石を宿す全海洋生物時代の堆積が驚くほどに豊かである。まさしく最初で最古の層は、惑星進化のこれらの2段階を明確に隔離する大規模な浸食堆積により前期の後の層から切り離されている。

1. 初期の浅海海洋生物 [三葉虫時代]

59:1.1 (673.1) 生命は、地球の表面におけるこの期間の比較的静かな曙まで様々な内海と海岸線に閉じ込められている。陸の有機体のいかなる型もいまだ発展していない。原始の海洋動物は、定着し、次の進化的発達に備える。先行する変遷の終結期に向かって出現した単細胞動物は、動物生態のこの初期段階の典型的生存者である。

59:1.2 (673.2) 400,000,000年前、海洋生物は、すなわち植物と動物の両者は、全世界にそこそこに分布している。世界気候は、わずかに暖かくなり、より安定してくる。様々な大陸の海岸、特に北米と南米の海岸では全域にわたる浸水がある。新しい海洋が現れ、古い水域は大いに広がっている。

59:1.3 (673.3) 植物は今初めて陸の上に這い出て、ほどなく非海洋生息地への適合に向けてかなりの進歩をする。

59:1.4 (673.4) 突然に、しかも段階的変化の始祖がなく、最初の多重細胞動物が出現した。三葉虫が発展し、長らく海に君臨した。これは海洋生命の見地から三葉虫の時代である。

59:1.5 (673.5) この時代区分の後半において、北米とヨーロッパの大部分が海から現れた。地殻は一時的に安定していた。山々、すなわちかなりの高海抜の陸地が、大西洋と太平洋岸に沿って西インド諸島に、そして南ヨーロッパにおいて隆起した。全カリブ海領域は、高く隆起した。

59:1.6 (673.6) 390,000,000年前、陸はまだ隆起していた。これらの時期に横たえられた石の層が、アメリカの東西の地域と西ヨーロッパで見つかるかもしれない、しかも、これらは、三葉虫の化石を含む最古の岩石である。これらの化石を抱く岩石が堆積する陸地へと突出する長い指のような湾が、数多くあった。

59:1.7 (673.7) 太平洋は、数百万年の間に南北のアメリカ大陸に侵入し始めた。陸の縦割れ、または大陸のゆっくりした動きもまた1要因ではあったものの、陸の沈没は、主に地殻調整によるものであった。

59:1.8 (673.8) 380,000,000年前、アジアは小康状態となり、他の全大陸は短命の出現を経験していた。しかし、この時代が進むにつれ、新たに現れようとしている大西洋は、隣接するすべての海岸線に大規模に食い込んでいった。北大西洋、あるいは北極海が、そのとき南の湾の水域に繋がれた。この南の海が、アパラチア山脈の渓谷に入ったとき、その波は、アルプス山脈と同じ高さの東の山々に砕けたのだが、大陸は、概して景勝に欠けるまったく面白味のない低地であった。

59:1.9 (673.9) これらの時代の沈殿物の堆積は、4種類である。

59:1.10 (673.10) 1.礫岩—海岸線近くでの堆積物。

59:1.11 (673.11) 2. 砂岩—浅瀬ではあるが泥が定着するのを妨げるに十分なところでの堆積物。

59:1.12 (673.12) 3.泥板岩—より深くより静かな水中での堆積物。

59:1.13 (673.13) 4.石灰岩—深水の中の三葉虫の殻の堆積物を含有。

59:1.14 (673.14) これらの時期の三葉虫の化石は、 ある顕著な変化に伴う基本的なある一様性を示している。生命の起源の3つの移植から進化する初期の動物は独特であった。西半球に現れるものは、ユーラシアの一群、オーストラレーシア、またはオーストラリア-南極の型とは僅かに異なっていた。

59:1.15 (674.1) 370,000,000年前、北米と南米の大幅な、ほぼ完全な浸水が起こり、次にアフリカとオーストラリアの沈没が続いた。北米のある地域だけが、カンブリア紀のこれらの浅海の上にとどまっていた。500万年後、海は、

陸の隆起により後退していた。そして、陸の沈没と隆起のこれらの現象のすべてが、何百万年間もかけて飛躍的でもなくゆっくりと営まれていた。

59:1.16 (674.2) 三葉虫の化石を宿すこの時代の層が、中央アジアを除く全大陸のあちこちに露出している。多くの地域においてこれらの岩石は水平であるが、山では圧力と褶曲から傾いたり歪んだりしている。そのような圧力は、これらの堆積物の本来の特徴を多くの場所で変えてしまった。砂岩は、石英に、泥板岩は石盤に、一方、石灰岩は大理石に変えられた。

59:1.17 (674.3) 360,000,000年前、陸は、まだ上昇しているところであった。北米と南米は、かなり隆起していた。深く水没したウェールズの部分を除き、西欧とイギリス諸島が出現していた。これらの時代、大きな氷床はなかった。出現しつつあるヨーロッパ、アフリカ、中国、およびオーストラリアのこれらの層に関わる氷河の想定上の堆積は、孤立した山の氷河であるか、後に生じる氷河の残骸の移動によるものである。世界気候は、大陸性ではなく海洋性であった。南海は、当時は現在よりも暖か

く、北方へと北アメリカの極地にまでおよんだ。メキシコ湾流は、北アメリカ中央部へと勢いよく進路をとり、東方へ偏向しグリーンランドの海岸を洗いかつ暖め、今は氷の外套であるその大陸を紛れもない熱帯の楽園にした。

59:1.18 (674.4) 海洋生物は、世界中で非常に似通っており、海草、単細胞生物、単純な海綿、三葉虫、それに他の甲殻類—小エビ、カニ、大エビから成った。3,000種類の腕足類の各種は、この期間の終わりに出現し、そのうちの200種類だけが生き残った。これらの動物は、事実上は変化せず現在に至った初期の生物の種類を代表している。

59:1.19 (674.5) にもかかわらず、三葉虫は支配的な生物であった。それらは、性別のある動物で多くの形態で存在した。拙劣な泳者で、後に出現する敵の攻撃を受ける際には自己防衛目的で丸まり、緩慢に水に浮くか、海底づたいに這った。5センチメートルから30センチメートルの長さにまで成長し、4種の異なる群れに進化した。肉食性、草食性、雑食性、それに「泥を食する物」。主に無

機物を食する最後の群れの能力—それができた最後の複細胞動物—が、それらの大幅な増加と長い生存を説明している。

59:1.20 (674.6) これが、地球の地質学者にはカンブリア紀と称される5千万年を有する長期の世界歴史の中の終わりにあるユランチアの生物地質の絵であった。

2. 初期の大陸の洪水段階 [無脊椎動物時代]

59:2.1 (674.7) これらの時代の陸の隆起と沈下の特徴ある周期的現象には、火山活動も少ししか、あるいは全然なく、すべてが緩やかであり華々しくはなかった。これらの連続する陸の隆起と降下を通してアジアの母なる大陸は、他の陸地と完全に歴史を共有したというわけではなかった。それは、まず一方向へ、次には他方へと浸り、特にその早期の歴史においては多くの浸水を経験したものの、他の大陸で発見されるかもしれない画一的岩石の堆積物を提示してはいない。近世においては、アジアがすべての広大な陸の中で最も安定している。

59:2.2 (675.1) 350,000,000年前、中央アジアを除く全大陸の長い洪水期間の始まりがあった。陸地は繰り返し水に覆わ

れていた。沿岸の高地だけが、浅くはあるが広範囲におよぶこれらの振動する内海の上に依然としてあった。陸隆起の総量は、現在よりも15パーセントも大であり、3回にわたる大きな氾濫が、この期間を特徴づけたが、それが終わる以前に大陸は再び隆起した。カリブ海域は、かなり上昇した。この期間ヨーロッパでの火山活動は、絶え間なく続く一方で、陸の変動は、少なくあまり目立つ動きはない。

59:2.3 (675.2) 340,000,000年前、アジアとオーストラリアを除く別の大規模な陸の沈下が起こった。世界の海洋の水域は、全般的に混ぜ合った。これは、その時代の石の多くが石灰を分泌する藻類により横たえられている石灰岩の時代であった。

59:2.4 (675.3) 南北のアメリカ大陸とヨーロッパの大部分が、数百万年後に水から現れ始めた。西半球では、太平洋の腕に似たような部分だけがメキシコと現在のロッキー山脈の領域に留まったが、この時代の終り近くには大西洋と太平洋の海岸は再び沈み始めた。

59:2.5 (675.4) 330,000,000年前、陸の大半が再び水の上にあり、世界中で比的較静かな時間の１区分の幕開けとなる。地球の静けさのこの支配に対する唯一の例外は、東ケンタッキーにある北米の大火山の爆発、世界に知られる個々の火山活動の中で最大である爆発の一つ、であった。この火山灰は、1,300平方キロメートルを5メートルから6メートルの深さに覆った。

59:2.6 (675.5) 320,000,000年前、この期間の3番目の大きな洪水が起こった。この氾濫水域は、南北アメリカとヨーロッパ全域で多方面により広がりつつ先の大洪水で水没した陸のすべてを浸した。東北部のアメリカと西ヨーロッパは、水面下3,000メートルから4,500メートルであった。

59:2.7 (675.6) 310,000,000年前、北アメリカの南部を除く世界の陸は、再び相当に隆起した。メキシコが出現し、その結果、以来ずっとその存在を維持してきたメキシコ湾を生み出した。

59:2.8 (675.7) この期間の生命は、進化し続ける。世界は、また静かで比較的平和である。気候は、温暖で一様な状態にある。陸の植物は、海岸かより遠くへ遠くへと移動し

ている。これらの時代のわずかな植物化石しか見つけられないが、生命の型はよく進化している。

59:2.9 (675.8) 基礎的変化、つまり植物から動物へのそのような変遷の多くは、先に起こっていたが、これは、個々の動物の生命体の進化の大いなる時代であった。海洋動物は、脊椎動物段階より下のすべての生命の型が進化し、これらの期間に横たえられた岩石のなかの化石に典型としてあった。しかし、これらの動物すべてが海洋生物であった。海岸沿いに穴を堀る幾つかの虫の型を除いては、陸生動物はまだ現れていなかったし、陸上植物もまだ大陸に広がってはいなかった。呼吸をする生き物の存在を可能にするには、あまりに多量の二酸化炭素がまだ空気中にあった。本来、より原始の特定の動物を除くすべての動物は、それぞれの存在のために必要な植物に直接的、または間接的に依存している。

59:2.10 (676.1) 三葉虫は、いまだ顕著であった。これらの小動物は、何万という形態で存在し、現代の甲殻類の先祖であった。いくつかの三葉虫には、25個から4,000個の小さい穴があった。目が退化かをしたものもあった。この

期間の終わりに際し、三葉虫は、無脊椎動物の他の幾つかの型と海の支配を共にした。しかし、それらは次の期間の初めには全滅した。

59:2.11 (676.2) 石灰を蓄積する藻類は、広範囲にわたっていた。何千ものサンゴの初期の先祖の種が存在した。環形動物は、豊富であり、その後絶滅した多種多様のクラゲの多くがいた。後の珊瑚と海綿の型が、進化した。頭類動物は、かなり進化し、またそれらは、近代の真珠のようなオーム貝、蛸、コウイカ、およびイカとして生き残った。

59:2.12 (676.3) 多くの甲殻動物の種類がいたが、それらの甲殻は、当時その後の時代ほどには防衛目的にはあまり必要ではなかった。腹足類は、古代の海の水域に存在しており、一枚貝のアクキ貝、タマキビガイや、カタツムリを含んだ。二枚貝の腹足類は、何百万年を経て当時のままで伝わってきたもので、イガイ類、蛤、牡蛎、帆立貝がある。弁状の殻をもつ生物も進化し、これらの腕足類は、今日の状態で古代の水域に住んでいた。それらは、

弁膜のちょうつがい、刻み目、また他の種類の保護的手段さえ備えていた。

59:2.13 (676.4) こうして、地球の地質学者にオルドビス紀として知られる海洋生命の2番目の長い期間の進化物語を終わる。

3. 第2大洪水段階 [サンゴ期— 腕足類の時代]

59:3.1 (676.5) 300,000,000年前、別の長い期間の陸の浸水が始まった。古代シルル紀の海の南方と北方の侵食は、ヨーロッパと北米の大部分を飲み込もうとしていた。陸は、海上から大いに持ち上がってはいなかったので、海岸線ではそれほどの堆積はあまり起こらなかった。海には石灰の殻に覆われた生物が多く、海底へのこれらの殻の落下は、非常に厚い石灰岩層を徐々に築き上げていった。これが、広範囲にわたる最初の石灰石の堆積物であり、実質的にヨーロッパと北米の全てを覆っているが、地球の表面では幾つかの場所に見られるだけである。この古代の岩石層の厚みの平均は、およそ300メートルであるが、それ以来、この堆積物の多くは、傾斜、隆起、断層

で大いに変形され、またそのうちの多くが、石英、泥板岩、大理石へと変えられていった。

59:3.2 (676.6) 火山岩、あるいは、溶岩は、南欧と東メイン州の大火山とケベック州の溶岩流を除いては、この期間の石の層では見受けられてはいない。火山活動は、主に過去であった。これは、かなりの水による堆積の最高点であった。山は、少しも、あるいは全く形成されていなかった。

59:3.3 (676.7) 290,000,000年前、海は、大陸からかなり後退しており、大陸周辺の海底は沈んでいた。陸は、再び水没するまであまり変化はなかった。全大陸の山の初期運動が開始しており、これらの地殻隆起の中で最大なものは、アイルランドからスコットランドを貫きスピッツベルゲンへと広がるアジアのヒマラヤ山脈とカレドニア山脈であった。

59:3.4 (677.1) 発見されるガス、石油、亜鉛、鉛の多くは、この時代の堆積物にある。膨大な植物と動物の集積から得られるガスおよび石油は、その前の陸の浸水時に遡り、

一方鉱物埋蔵物は、緩慢な水域の沈殿を表す。岩塩堆積物の多くは、この期間に属する。

59:3.5 (677.2) 三葉虫は、急速に減退し、舞台の中央は、 より大きい軟体動物、あるいは頭足類に占拠された。これらの動物は、体長5メートル、直径30センチメートルに成長し海のあるじとなった。この種の動物は、突然に現れ、海の生物支配を我が物とした。

59:3.6 (677.3) この時代の大火山活動は、ヨーロッパ地域にあった。現在地中海のトラフの周辺や、特にイギリス諸島の近辺で起きているような激しく大規模な火山噴火は、何百万年も起こらなかった。イギリス諸島地域へのこの溶岩流が今日、溶岩と岩石とが交互するおよそ8,000メートルの層の厚さで現れている。これらの岩石は、浅い海底に広がる間欠溶岩流によって横たえられ、その結果、岩石の堆積物を点在させ、このすべてが次には高く海上に持ち上げられた。激しい地震は、北ヨーロッパに、とりわけスコットランドに発生した。

59:3.7 (677.4) 海洋気候は、温和で一定に留まり、暖かい海は、極地の陸海岸を洗った。腕足類と他の海洋生物の化

石は、北極にまでおよぶ堆積物中に見つけかるかもしれない。腹足類、腕足類、海綿、岩礁を作るサンゴは、増加し続けた。

59:3.8 (677.5) この時代の末期には、シルル紀の海の第二の接近で南北の海洋のもう一つの混合を経験する。頭足類は、海洋生物を支配しており、一方では頭足類に関連する生物の型が次第に発達し分化する。

59:3.9 (677.6) 280,000,000年前、主にシルル紀第二の洪水から大陸が出現した。現在流れているナイアガラの滝の上部は、岩石の層であることからこの浸水による岩石の堆積物は、北アメリカではナイアガラ石灰岩として知られている。この岩石層は、東の山々からミシシッピー流域へと広がり、それより西にはないが、南には存在する。平均の厚みがおよそ200メートルのこの一連のナイアガラいくつかの層は、カナダ、南米の一部、オーストラリア、そしてヨーロッパの大部分に広がっている。多くの地域においては礫岩、泥板岩、および岩塩の堆積が、ナイアガラ沈殿物の上にじかに横たわっているのがみられるかもしれない。これは二次的沈下の蓄積である。この

塩は、交互に海に開かれたり断ち切られたりした、そしてこのために溶液の中の塩と他の物体との堆積に蒸発が生じた大きな潟に定着した。いくつかの地域でのこれらの岩塩層は、20メートル以上の厚みである。

59:3.10 (677.7) 気候は、安定的で温和であり、海洋の化石は北極地域に横たわっている。だが、この時代の終わりまでには海は、過度に塩辛く、生物の生残はほとんどないほどである。

59:3.11 (677.8) シルル紀最後の浸水の終わりに向かい、ウミユリ石灰岩の堆積物によって証明されているように棘皮動物—石のユリ—の大幅な増加がある。三葉虫は、ほぼ消滅してしまい、軟体動物が海の君主を続ける。サンゴ礁形成は増大する。この時代より有利な場所で原始の水サソリが最初に進化する。その直後、突然に本来のサソリ—空気を呼吸する本物—が姿を現す。

59:3.12 (678.1) これらの展開が、2,500万年にまたがりシルル紀として地球の研究者達に知られている第三の海洋生命期が終える。

4.大いなる陸-出現段階 [陸生植物の期間 | 魚類の時代]

59:4.1 (678.2) 海は、陸と水との長年のもがきにおいて長いあいだ比較的に勝利を収めてきたのであるが、陸の勝利の時期は、すぐ先にある。大陸移動は、それほど進んではいなかったとはいえ、やはり、時には実際に世界の陸のすべてが、細長い地峡と狭い陸の橋とでつながっている。

59:4.2 (678.3) シルル紀の最後の洪水からの陸の出現とともに、世界発展と生命の進化における重要な期間は、終わるのである。それは地球の新時代の夜明けである。前期のむき出しで魅力のない風景は、繁茂する緑の草木を装うようになり、最初の壮大な森林がまもなく現れるのである。

59:4.3 (678.4) この時代の海洋生物は、初期の種類の分離の結果、非常に多様であったが、のちにはすべての異なるこれらの型の自由な混合と結びつきがあった。腕足類は、早くその頂点に達し、節足動物が引き継ぎ、そして蔓脚類が初めて登場した。しかし、何にもまして最大の出来事は、魚科の突然の出現であった。これは、魚類の時

代、つまり脊椎型の動物によって特徴づけられる世界歴史上のその期間になった。

59:4.4 (678.5) 270,000,000年前、大陸はすべて水の上であった。何百万年もの間、かつて陸は、それほど水面上にはなかった。それは、全世界史上で最大の陸出現時代の1つであった。

59:4.5 (678.6) 5百万年後、北米と南米、ヨーロッパ、アフリカ、北アジア、およびオーストラリアの陸地は、一時的に浸水し、北アメリカでの浸水は、ある時期はほとんど完全であり、また石灰岩層は、150メートルから1,500メートルの厚さにいたった。これらの様々なデボン紀の海は、最初は一方向へと、それから別方向へと広がったので、北米の、巨大な北極の内海は、北カリフォルニアから太平洋へと出口を見つけた。

59:4.6 (678.7) 260,000,000年前、北アメリカは、この陸の浸水時代の終わりにかけて太平洋、大西洋、北極、メキシコ湾に同時につながり、局部的に海に覆われた。デボン紀の最初の洪水の後期における堆積は、平均しておよそ300メートルの厚みである。これらの時代を特徴づける

サンゴ礁は、内海は透明で浅かったことを示している。サンゴのそのような堆積は、ケンタッキー州のルーイヴィル近くのオハイオ川の岸に露出しており、200種以上を包含するおよそ30メートルの厚さである。これらのサンゴ層は、カナダ、北欧から北極地域へとまたがっている。

59:4.7 (678.8) これらの浸水に続き、海岸線の多くがかなり隆起したので、早期の堆積物は、泥か泥板岩で覆われた。デボン紀の堆積の1つを特徴づける赤い砂岩層もまた存在し、この赤い層は、南米、北米、ヨーロッパ、ロシア、中国、アフリカ、およびオーストラリアで発見され、地球の表面の大部分に広がっている。そのような赤い堆積は、乾燥、あるいは半乾燥状態を示唆しているが、この時代の気候はまだ温和で安定的であった。

59:4.8 (679.1) シンシナティ島の南東の陸は、この全期間ずっと水のかなり上にあった。しかし、イギリス諸島を含むヨーロッパの大半は、水没した。ウェールズ、ドイツ、およびヨーロッパの他の場所では、デボン紀の岩石は6,000メートルの厚さである。

59:4.9 (679.2) 250,000,000年前、人類出現以前の全進化において最も重要な段階の1つである脊椎動物の魚科の出現がみられた。

59:4.10 (679.3) 節足動物または甲殻類は、最初の脊椎動物の先祖であった。魚科の先祖は、2つの変化した節足動物の先祖であった。一方は、長い体に頭と尾がついていたが、もう一方は背骨なし、顎なしの魚類出現以前のものであった。しかし、これらの初期の型は、魚、つまり動物界の最初の脊椎動物が北から突然姿を現すと、すぐに滅ぼされた。

59:4.11 (679.4) 最大の本物の魚の多くは、この時代に属しており、歯を有する種類の幾つかは、およそ8メートルから10メートルの長さである。現代の鮫は、これらの古代の魚の生き残りである。肺魚と装甲魚は、その進化の頂点に達し、魚類は、この時代終了前に淡水と塩水の両方に順応していた。

59:4.12 (679.5) 魚の歯と骨格の実際の骨の地層は、この期間の終わりに向けて横たえられた堆積中に発見されるかもしれない。また、太平洋の多くの保護された湾が、その地

域の陸へと広がったことから、カリフォルニアの海岸に沿って豊富な化石層がある。

59:4.13 (679.6) 陸の新植物が、急速に地球にはびこった。これまで水際を除く陸には、わずかな植物しか成長しなかった。今、突然にして、豊富なシダ類が現れ、そして世界の全域で急速にもち上がる陸の表面に広がった。すぐに太さ60センチメートル、高さ12メートルの樹木の種類が、出現し、後にはこれらの初期の種類に葉が発達したものの、未発達の枝葉しかなかった。より小さ目の多くの植物が存在したが、それ以前に姿をみせる細菌が、これらを破壊するのが一般的であったことから、それらの化石は見つかっていない。

59:4.14 (679.7) 陸が隆起すると、北アメリカは、グリーンランドに達する地峡でヨーロッパと接するようになった。今日、グリーンランドは、その氷の外套の下に早期のこれらの陸の植物の名残りを抱き込んでいる。

59:4.15 (679.8) 240,000,000年前、ヨーロッパと南北のアメリカ大陸の双方の陸の上部が沈み始めた。この沈下は、デボン紀の最後の、また最小規模の洪水の様相を呈した。北

極海は、再び北アメリカの大半を覆って南行し、南太平洋は、インドの大部分を覆う一方で、大西洋は、ヨーロッパと西アジアのかなりの部分を水浸しにした。この洪水は、緩慢に起こり、後退するのも同様に緩慢であった。ハドソン川西岸に沿うキャッツキル山脈は、北アメリカの表層に見られるこの時代の地質学上の最大の記念碑の1つである。

59:4.16 (679.9) 230,000,000年前、海はそれぞれの後退を続行していた。北アメリカの大部分は水上にあり、大火山活動は、セントローレンス地域に起こった。モントリオールにあるマウント ロイヤルは、これらの火山の1つが浸食した頸状部である。この時代全体の堆積物は、サスクエハナ川が、重なり合うこれらの層を露出する谷を切断した4,000メートルを越える厚みに達した北アメリカのアパラチア山脈に明示されている。

59:4.17 (680.1) 大陸の隆起は続き、大気には酸素が増えていた。地球は、高さ30メートルのシダの広大な森林や、当時の特有の樹木、そのような木々には葉はついていなか

ったので、何の音も、葉のサラサラいう音さえも聞かれない静かな森林に覆われていた。

59:4.18 (680.2) このようにして海洋生命の進化の最長の期間の1つ、魚類の時代は、終わりに近づいていた。世界の歴史上のこの期間は、およそ5千万年続いた。それは、デボン紀として地球の研究者に知られるようになった。

5. 地殻移行期 [石炭紀のシダの森林期間 | カエルの時代]

59:5.1 (680.3) 前の時代の魚の出現が、海洋生物の発展の頂点を記す。この時点から先は、陸の生物の進化がますます重要になる。そして、この期間、最初の陸生動物出現のための舞台がほぼ理想的に始まる。

59:5.2 (680.4) 220,000,000年前、大半の北アメリカを含む大陸の陸面積の多くが、水上にあった。陸には豊潤な植物がはびこっていた。これがまさにシダの時代であった。二酸化炭素は、大気中にまだ存在したが、減少段階にあった。

59:5.3 (680.5) 北アメリカの中央部は、やがて水浸しにされ、2つの大きい内海を創出した。大西洋と太平洋岸の双方の

高地は、現在の海岸線を越える場所に位置を定めた。それらの異なる型の生物を混ぜ合わせつつ、これらの2つの海はやがて結合し、またこれらの海洋動物群の結合が、海洋生物における急速で世界的規模の衰退の始まりとその後の陸の生物の時代の始まりを記した。

59:5.4 (680.6) 210,000,000年前 、北極海の暖水が、北アメリカとヨーロッパのほとんどを覆った。南極の水域は、南米とオーストラリアを水浸しにし、アフリカとアジアのいずれも高く隆起した。

59:5.5 (680.7) 海がそれぞれの最大の高さにあったとき、突如として新たな進化が起きた。いきなり最初の陸生動物が現れた。多種の陸上、または水中で生活のできる動物がいた。これらの空気を吸う両生類が、節足動物から発達し、その浮き袋が肺へと進化した。

59:5.6 (680.8) 塩辛い海水からカタツムリ、サソリ、カエルが陸上に這い出てきた。今日カエルは、いまだに水中で卵を産み、その子供は幼魚、オタマジャクシとして存在する。この期間は、カエルの時代と呼ぶに適していた。

59:5.7 (680.9) その直後、まず昆虫が現れ、やがてクモ、サソリ、ゴキブリ、コオロギ、バッタと共に世界の大陸に広がった。トンボの羽の幅は、75センチメートルあった。1,000種類のゴキブリが進化し、ある種は10センチメートルの長さに成長した。

59:5.8 (680.10) 2集団の棘皮動物は、特に進化し、事実上この時代の案内役の化石である。また、殻摂食の大鮫も高度に進化し、500万年以上も海洋を支配した。気候は、まだ温和で安定していた。海洋生物は、ほとんど変わらなかった。淡水魚が進化し、三葉虫は絶、滅に近づきつつあった。サンゴは、稀少で、ウミユリにより多くの石灰岩が作られていた。きめの細かい建築用の石灰岩は、この時代に横たえられた。

59:5.9 (681.1) 多くの内海の水域は、多くの海洋種の進歩と進化を妨げるほどに石灰と他の鉱物を含んでいた。海は、所々に亜鉛と鉛を含み大規模な石の堆積の結果、徐々に澄んでいった。

59:5.10 (681.2) 砂岩、泥板岩、石灰岩から成るこの早期の石炭紀の堆積物は、150メートルから600メートルの厚さであ

る。最古の層は、多量の砂利と盆地の沈殿物とともに陸海の動植物両者の化石をもたらす。使用可能な石炭は、これらのより古い層にはほとんど見つけられない。ヨーロッパ中のこれらの堆積物は、北アメリカに横たわるそれらと非常に似通っている。

59:5.11 (681.3) 北アメリカの陸地が、この時代の終わりに向かい隆起し始めた。短い中断があり、海は、その以前の基盤のおよそ半分を覆い戻した。これは短期の洪水であり、陸の大部分はすぐに水面上に出た。南アメリカは、アフリカ経由でまだヨーロッパにつながっていた。

59:5.12 (681.4) この時代、ヴォージュ山脈、黒い森、ウラル山脈の始まりをみた。他の、そしてより古い山の残根が、英国とヨーロッパ全体にわたってある。

59:5.13 (681.5) 200,000,000年前、石炭紀のじつに活動的な段階が始まった。この時代に先立つ2千万年の間に初期の石炭の堆積物が横たえられつつあったが、今や、より大規模な石炭形成活動が進行していた。実際の石炭形成時代は、2,500万年をやや上回った。

59:5.14 (681.6) 陸地は、海底活動によりもたらされる海面の高さの変化に応じ、周期的に上昇や下降をみた。沿岸の湿地帯の豊富な植物に関わるこの地殻の不安定—陸の安定と隆起—が、この期間が石炭紀として知られることとなった大規模な石炭堆積物の生産に貢献した。気候は、世界中でまだ温和であった。

59:5.15 (681.7) 石炭層は、泥板岩、石および礫岩と交替する。合衆国の中央と東のこれらの石炭層は、12メートルから15メートルの厚みの違いがある。しかし、これらの堆積の多くが、その後の陸の隆起の間に流失された。北アメリカとヨーロッパのいくつかの地域においては、石炭を抱える層の厚さは、5,400メートルである。

59:5.16 (681.8) 現在の石炭層の下の粘土の中で成長した状態のままの木の根の存在が、石炭が今ちょうど見つけられるところに形成されたことを示している。石炭は、この昔の沼沢地と湿地帯に成長している繁茂する植物が、水で保存され圧力で変更された残骸物である。石炭層は、しばしばガスと油の双方を保持している。泥炭層が、過去の植物成長物の残骸物が、適切な気圧と熱を被るなら

ば、一種の石炭に変換されるであろう。無煙炭は、他の石炭よりもさらに気圧と熱がかけられたものである。

59:5.17 (681.9) 数回にわたる陸地の沈下と隆起を示す様々な層の中の石炭層は、北米ではイリノイ州の10層、ペンシルバニア州の20層、アラバマ州の35層からカナダの75層までさまざまである。淡水と塩水の化石双方ともに石炭層で見られる。

59:5.18 (682.1) アンデス山脈と南の始祖的ロッキー山脈の両方が上昇しており、この時代を通じて北米と南米の山々は、活動的であった。巨大な大西洋と太平洋の高い沿岸の領域は、沈み始め、ついには、両方の海の海岸線がほぼ現在の位置にまで下がるほどに非常に浸食し水没した。この浸水の堆積物は、その厚みが平均約300メートルである

59:5.19 (682.2) 190,000,000年前、石炭紀の北米の海は、西方向への、現在のロッキー山脈地帯を越え北カリフォルニアを経て太平洋へのはけ口をともなう延長があった。これらの海岸振動時代の沿岸地帯の隆起や沈下に伴い、石炭

は、アメリカとヨーロッパ大陸中に、層の上に層をと、横たえ続けた。

59:5.20 (682.3) 180,000,000年前、石炭紀の終わりがきた。石炭は、この期間に世界中—ヨーロッパ、インド、中国、北アフリカ、アメリカ大陸—に形成された。。石炭形成期の終わり、北アメリカのミシシッピ一渓谷の東が隆起し、この区域の大部分は、以来ずっと海上にある。この陸の隆起期間は、アパラチア山脈領域と西部の双方に存在する北米の現代の山々の始まりを示す。火山は、アラスカとカリフォルニアにおいて、それにヨーロッパとアジアの山を形成している領域において活動中であった。東アメリカと西ヨーロッパにはグリーンランド大陸がつながっていた。

59:5.21 (682.4) 陸の隆起が、前の時代の海洋気候を変え、そのために、それほど温和ではなくより変化する大陸気候の始まりに取り交わりつつあった。

59:5.22 (682.5) これらの時代の植物は胞子をつけ、風がそれらを遠く広く散らすことができた。石炭紀の木の幹は、一般的に直径2メートル、高さ40メートル近くであった。

現代のシダ類は、じつにこれらの過去の時代の遺物である。

59:5.23 (682.6) 一般的には、これらが淡水有機体のための進化の時代であった。前の海洋生物には、ほとんど変化は起こらなかった。しかし、この期間の主な特徴は、カエルとそれらの多くのいとこ関係にあるものの突然の出現であった。石炭時代の生物の特徴は、シダとカエルであった。

6. 天候変動段階 [種子植物期 | 生物の苦難時代]

59:6.1 (682.7) この期間は、海洋生物の重要な進化の発展の終わりと、その後に続く陸生動物へと導く過渡期の始まりを告げる。

59:6.2 (682.8) この時代は、深刻な生命窮迫の1つであった。何千もの海洋種が滅び、陸には生物はまだほとんど確立されていなかった。これは、生物の苦難の時、生命が地球の表面と海洋の深層から危うく消え失せる時代であった。長い海洋生物時代の終わり近くには、地球の生き物の10万種以上があった。この変遷期の終わりには500種足らずが生き残った。

59:6.3 (682.9) この新時代の特異性は、ありふれた事と既存するものの影響—海の制限条件と途方もない陸の隆起の増大—との異常な組み合わせによるものほどには、地殻の冷却あるいは長い火山活動の欠如によるものではなかった。前の時代の温和な海洋気候は失せつつあり、より厳しい大陸型の気象が、急速に発達していた。

59:6.4 (683.1) 170,000,000年前、進化上の大なる変化と調整が、全地球上で起きていた。海底の沈下と同時に、陸は世界中で隆起していた。孤立した山の尾根が現れた。北米東部は、海上高くにあった。西部はゆっくり上昇していた。大陸は、大小の塩湖と狭い海峡によって海につながる多数の内海で覆われていた。この移行期間の地層の厚みは、300メートルから2,000メートルと異なっている。

59:6.5 (683.2) 地殻は、この陸の隆起の間に広範囲にわたり折り重なった。これが、非常に長い間アフリカと南米、それに北アメリカとヨーロッパをつないでいた大陸を含む特定の地峡の消滅を除く、大陸の出現の時であった。

59:6.6 (683.3) 内陸の湖と海は、世界中で乾燥していった。孤立した山の氷河や氷特定地域の氷河が、とくに南半球に現れ、また多くの地域において地域的氷形成による氷河堆積物は、上層部や後期の珊瑚堆積物のなかに見られるかもしれない。地球の高地の多くは、乾燥し不毛となってしまった。

59:6.7 (683.4) これらの気候変化の時代を通じて陸の植物に大きな変化が起こった。まず種子植物が、現れ、次に増加する陸動物集団に良い食物供給をもたらした。昆虫は急激な変化をした。静止段階は、冬期と干魃期の仮死状態の負担に対応して進化した。

59:6.8 (683.5) 陸生動物の中ではカエルが前の時代にその絶頂時に達し、また急速に減退したが、その生残の理由は、はるか遠くの、非常に困難なこれらの時期の干上がる水溜りや池でさえ長く生きることができたからであった。この減退するカエルの時代に、アフリカでは、カエルの爬虫類への進化の第一歩が、踏み出された。陸地はまだ接続されていたので、この前-爬虫類の生き物、呼吸者は、全世界に広がった。大気は、この時までに非常に変

化していたので見事に動物の呼吸を支える役目を果たした。北アメリカが、一時孤立し、ヨーロッパ、アジア、そして南米から切り離されたのはこれらの前-爬虫類のカエル到来の直後であった。

59:6.9 (683.6) 海洋水のゆるやかな冷却が、海洋生物の破滅に大きく関わった。その時代の海洋動物は、３ヶ所の都合のよい隠れ場所—現在のメキシコ湾域、インドのガンジス川湾、および地中海海底のシチリア湾—に一時的に避難した。そして、海洋の新種が、逆境に生まれ、後に再び海を満たしに行ったのが、これらの3地域からであった。

59:6.10 (683.7) 160,000,000年前、陸は、主に陸生動物集団を支えるために適合する植物で覆われており、大気は、動物の呼吸作用に望ましくなっていた。こうして、惑星進化の次の時代のより急速に進化し、高度に分化された生物の先祖として機能する資格を与えられたそのような生存価値を有するものを除く生命のすべての型を排除するという生物にとっての逆境、海洋生物縮少と試練の一区切りの時代が終わる。

59:6.11 (684.1) 二畳紀として地球の研究者に知られているこの期間の生物の苦難の終わりが、惑星歴史の四分の一、2億5千万年間にわたる長い古生代の終わりもまた告げている。

59:6.12 (684.2) ユランチアの生命の広大な海洋育児室は、その目的を果たした。陸が、生命擁立に不適当であった長い時代の間、大気がより高度の陸生動物を支えるための充分な酸素を含有する以前に、海は、母となり領域の初期の生物を養育した。陸での第2の進化段階の始まりとともに、いま海の生物のための重要性は次第に減少している。

59:6.13 (684.3) [ユランチア配置の最初の軍団の一つに属していたネバドンのある生命搬送者による提示]

論文 60
初期の陸上生物時代のユランチア

60:0.1 (685.1) 独占的海洋生命の時代は終わった。陸の隆起、地殻の冷却と海洋の冷却、狭められた海とその結果からくる深まりが、北方地方での大幅な陸の増大と共に、赤

道地帯からはるかに遠い全領域での世界的気候の変化が大いに作用し合った。

60:0.2 (685.2) 前の時代の最終期は、実にカエルの時代であったが、陸の脊椎動物のこれらの先祖は、極端に減少した数が生き残り、もはや優勢的ではなかった。ほんのわずかな型が、その前の時代の生物の苦難において厳しい試練を生き抜いた。胞子をつける植物さえほとんど絶滅していた。

1. 初期の爬虫類時代

60:1.1 (685.3) この期間の浸食作用の堆積物は、ほとんどが礫岩、頁岩、砂岩であった。アメリカとヨーロッパのすべてのこれらの沈澱物の中の石膏と赤い層は、両大陸の気候が乾燥していたことを示している。これらの乾燥地帯は、周囲の高地における激しく周期的な集中豪雨による大侵食に晒された。

60:1.2 (685.4) これらの層にはわずかな化石しか見られないが、陸の爬虫類が砂岩の多くに残した足跡は、観測されるかもしれない。多くの領域で、この期間の300メートルもある赤い砂岩の堆積物には一つの化石も含有されて

いない。陸生動物の生命は、アフリカの特定地域でのみ続いていた。

60:1.3 (685.5) これらの堆積物は、1,000メートルから3,000メートルのさまざまな厚みで、太平洋海岸では5,500メートルにさえわたる。溶岩は、後にこれらの層の多くに押し込められた。ハドソン川のパリセーズ岩壁は、玄武岩質溶岩の押出しにより、これらの三畳紀層の間に形成された。火山活動は、世界の異なる地域で大規模であった。

60:1.4 (685.6) この期間の堆積物は、ヨーロッパ、特にドイツとロシアで見られるかもしれない。イギリスでは、新しい赤砂岩が、この時代に属する。石灰岩は、の侵入の結果南アルプスに海横たわっていて、現在は、それらの領域の苦岩石の独特の壁、峰、および柱として見られるかもしれない。この層は、アフリカとオーストラリア中に見られる。カッラーラ大理石は、石灰岩の変性したようなものからきているのである。大陸のその部分が沈んだままで、よって先行する時代と後に続く時代に水か海洋の堆積だけを連続的に提示するので、南米の南の地域では、この期間の何も見つけられないであろう。

60:1.5 (686.1) 150,000,000年前、世界歴史の初期の陸の生物の時代が始まった。全般的に、生物にとって事はうまく運ばなかったが、激しく敵意のある海中生物時代の終わりよりはましであった。

60:1.6 (686.2) この時代が始まると、北米の東と中央の地域、南米の北半分、ヨーロッパの大部分、および全アジアが、水面のかなり上にある。北アメリカは、初めて地理的に分離するのだが、ベーリング海峡の陸の橋がやがて再出現するとその大陸をアジアにつなげることになるので長いことではない。

60:1.7 (686.3) 大西洋と太平洋の海岸に平行しつつ、遠大なトラフが北アメリカで発達した。片側は、3キロメートル以上徐々に沈みながら、大いなる東コネチカット断層が出現した。これらの北米のトラフの多くは、後に浸食堆積で埋まった。山岳地域の淡水や塩水の湖底の多くもまたそうであった。その後、これらの埋められた陸の窪みは、地下で起こる溶岩流によって大いに持ち上げられた。多くの地域の石化された森林は、この時代に属する。

60:1.8 (686.4) 通常は大陸の沈み込みの期間は水面上にある太平洋岸は、カリフォルニア南部、それに当時は現在の太平洋に存在した一つの大きい島を除いて、降下した。この古代のカリフォルニア海は、海洋生物が豊富であり、米国中西部地域の古い海の底をつないで東方へ広がった。

60:1.9 (686.5) 140,000,000年前、突如として、しかも前の時代にアフリカで発達した2つの前-爬虫類の先祖のかすかな兆候だけを伴い、すべて羽毛でおおわれた形態で爬虫類が現れた。それらは、やがて、わに類、鱗をもつ爬虫類、最後には海蛇と飛ぶ爬虫類をもたらし急速に進化した。それらの過渡期の先祖は素早く姿を消した。

60:1.10 (686.6) 急速に進化するこれらの爬虫類の恐竜が、たちまちこの時代の帝王となった。それらは、後に最大40トンの体重を制御するのに450グラムにも満たない重さの脳を持つ産卵生物であり、その小さい脳をもっていることで、すべての動物とは区別される。しかし、早期の爬虫類は、小さ目で肉食性で、カンガルーのように後足で歩行した。それらは、空洞の鳥の骨を持ち、後には後足

に3本の指だけを発達させ、また、それらの足跡の化石の多くは、巨大な鳥のものと間違えられてきた。その後、草食性の恐竜が進化した。それらは、四本足歩行で、この群れの中の1団が、防護器官を発達した。

60:1.11 (686.7) 数百万年後、最初の哺乳動物が出現した。無胎盤で、即時の失敗に終わった。何も生き残らなかった。これは、哺乳類の型を改良する実験的努力であったが、ユランチアにおいては成功しなかった。

60:1.12 (686.8) この期間の海洋生命は、貧弱であったが、海の新しい侵入に応じて急速に向上し、そして再び浅い水域の大規模な海岸線を作り出した。ヨーロッパとアジアの周辺はより浅い水嵩であったので最も豊かな化石層が、これらの大陸のあちこちに見られる。今日、この時代の生物を研究したいならば、ヒマラヤ、シベリアや地中海地方、並びにインド、南太平洋の盆地の島々を調べるとよい。海中生物の際立つ特徴は、多くの美しいアンモナイトの存在であり、世界中にその化石の跡が見られる

60:1.13 (686.9) 130,000,000年前、海は、それほど変わっていなかった。シベリアと北米は、ベーリング海峡の陸地の橋

でつながっていた。豊かで独特の海中生物が、カリフォルニアの太平洋岸に現れ、そこでは1,000種以上のアンモナイトが、　頭足類の高度の型から進化した。この期間の生物の変化は、過渡的であり緩やかであったにもかかわらず、いかにも革命的であった。

60:1.14 (687.1) この期間は、2,500万年間にまたがり三畳紀として知られている。

2. 後の爬虫類時代

60:2.1 (687.2) 120,000,000年前、爬虫類時代の新段階が始まった。この期間の大きな出来事は、恐竜の発展と衰退であった。陸生動物の生態は、大きさの点でその最大の発達に達し、実際にはこの時代の終わりまでに地球上から滅失した。恐竜は、体長60センチメートル未満から23メートル近くの巨大な非肉食性のものまでのあらゆる大きさで進化した。大きさにおいてはかつていかなる生物も匹敵したことはなかった。

60:2.2 (687.3) 最大の恐竜は、北米の西側で始まった。これらの巨大な爬虫類は、全ロッキー山脈、北米の全大西洋

岸、西ヨーロッパ、南アフリカ、インドに埋まっているが、オーストラリアにはない。

60:2.3 (687.4) こうしたがっしりとした重い生き物は、大きくなるにつれあまり活動的ではなく丈夫でもなくなった。しかし、それらは夥しい量の食物を必要とし、しかも、あまりにも陸に蔓延したので文字通り餓死し絶滅に至った。それらは状況に対処する知力を欠いていた。

60:2.4 (687.5) このときまでには、長い間隆起していた北米の東部の大半は平らになり大西洋へと洗い流されていたので、海岸は、現在より数百キロメートルも遠くへと伸びていた。大陸の西の部分はまだ上にあったが、これらの地域でさえ後には北海と、ダコタのブラック・ヒル地域の東方へと至る太平洋の両方に攻め入られた。

60:2.5 (687.6) これは、コロラド州、モンタナ州、ワイオミング州のいわゆるモリソン層の豊富な淡水化石に示されるように、多くの内陸湖によって特徴づけられる淡水時代であった。一体となった塩と淡水の堆積物の厚みは、600メートルから1,500メートルとさまざまである。しかし、これらの層にあまり石灰岩は存在していない。

60:2.6 (687.7) はるか北米まで伸びる同じ極地の海は、やがて現れてくるアンデス山脈を除く南米のすべてを同様に覆った。中国とロシアのほとんどが水浸しになったが、水の侵入はヨーロッパで最も大であった。南ドイツの石版用の美しい石が横たえられたのはこの潜水の時代であり、昔の昆虫の最も優美な翼の化石のなどの層は、さも昨日の物のように保存されている。

60:2.7 (687.8) この時代の植物相は、前の時代のものに非常に似ていた。シダは存続したが、現在の種類のような針葉樹と松がより多くなった。幾らかの石炭が、北部の地中海の海岸沿いではまだ形成されていた。

60:2.8 (687.9) 海の復帰が 気象を改善した。珊瑚がヨーロッパの水域に広まったということが、気候がまだ温和で安定的であったことを証明するが、珊瑚は、ゆっくり冷えている極海には決して二度と現れなかった。これらの時代の海の生物は、特にヨーロッパの水域においては、大いに改良し発達した。珊瑚とウミユリ双方共に、これまでよりも大きい数で一時的に現れたが、海洋の無脊椎動物の中で優勢であったのは、平均の大きさが7センチメー

トルから10センチメートル1種類は直径2.5メートルに達したものの、におよぶアンモナイトであった。海綿動物がいたるところにおり、また甲イカとカキの双方が進化し続けた。

60:2.9 (688.1) 110,000,000年前、海洋生物の可能性は、広がり続けていた。ウニは、この時代の際だつ変異の1つであった。カニ、大エビ、および現代の型の甲殻類が成熟した。チョウザメ型が、最初に現れ魚類に著しい変化が起きたが、陸の爬虫類の子孫である獰猛な海蛇は、まだ全ての海に横行しており、魚類全体の絶滅兆候を呈していた。

60:2.10 (688.2) 群を抜いて、これは、恐竜時代であり続けた。それらは海の侵食に先立つ時代の維持のために、2種類が水に入っていくほどまでに陸に氾濫していた。これらの海蛇は、進化の点では退化を呈している。いくつかの新種が前進している間、ある種は静止状態であり、また、他の種は元の状態へと逆に引き寄せられている。これが、これらの爬虫類の2つの型が陸を捨てたときに起きたことである。

60:2.11 (688.3) 海蛇は、その巨大な体の保護ができるほどの脳の大きさをもっていなかったので、時の経過とともに非常に不活溌になるほどの大きさにまで成長したので遂には滅びることとなった。これらの巨大な魚竜類の大多数は、10メートル以上の長さ、時には15メートルの長さになったという事実にもかかわらず、脳の重さは、60グラム足らずであった。海洋の鰐類も陸の爬虫類の型からの逆戻りであったが、海蛇とは異なり、これらの動物は、産卵のために常に陸に戻った。

60:2.12 (688.4) 2種類の恐竜が自己保存の空しい試みで水に移住した直後、他の2つの型は、陸上生活の激しい競争によって空へと追い立てられた。これらの飛ぶ翼竜は、その後の時代の本物の鳥の先祖ではなかった。それらは、空洞の骨の跳躍する恐竜から発展し、蝙蝠のような形の翼は、広げると6メートルから8メートルあった。これらの古代の飛ぶ爬虫類は、3メートルの長さに成長し、現代の蛇に非常に似た分離できる顎があった。これらの飛ぶ爬虫類は、当座は成功しているかに見えたが、航空操縦者としての生残を可能にする線に沿っての進化に失敗した。それらは、生存しない鳥の祖先の種を代表する。

60:2.13 (688.5) この時代、最初に北米に出現した亀が、増大した。先祖は、北の地峡を経てアジアから来た。

60:2.14 (688.6) 1億年前、爬虫類の時代は、終わりに近づきつつあった。恐竜は、そのような巨体を養うに足る食物調達の知力を欠く、その途方もない質量に似合わず、愚か同然の動物であった。したがって、これらの動きののろい陸の爬虫類の死は増え続けた。進化は、今後、物のかさではなく、脳の成長に従うであろうし、脳の発達が、動物の進化と惑星の進歩の次の各時代を特徴づけるであろう。

60:2.15 (688.7) 爬虫類の絶頂と衰退の始まりを包含するこの時代は、およそ2千5百万年にわたり、ジュラ紀として知られている。

3. 白亜紀[顕花植物期 | 鳥の時代]

60:3.1 (688.8) 重要な白亜紀は、海で白亜を多産する有孔虫の支配にその名の由来がある。この期間ユランチアは、爬虫類の長い支配の終わり近くに至り、陸に顕花植物と鳥類を目撃する。また、これは、途方もない地殻変動と同

時に生じる広範囲の溶岩流、および、頻繁な火山活動を伴う大陸の西と南寄りへの移動終了期でもあった。

60:3.2 (689.1) 前の地質時代の終わり近くには、まだ山頂はなかったが、広大な陸地の大部分は水上にあった。しかし、大陸の移動が続くにつれ、それは太平洋の深い底で最初の大きい障害にあった。地質学上の力は、アラスカからメキシコを経てホーン岬に延びる広大な南北の山脈全体の形成を促進した。

60:3.3 (689.2) この時代は、このように地史上の現代の山の形成段階となる。この時代に先立っては、山頂はほとんどなく、幅広のもち上げられたにすぎない陸の尾根があった。その時、太平洋岸の一帯は、隆起し始めていたが、それは、現在の海岸線の数百キロメートル西に位置していた。金を含む水晶層は、この時代の溶岩流の産物であるシエラ山脈が、形成し始めていた。北米の東部地域においては、大西洋の圧力もまた、陸の隆起に一役を買っていた。

60:3.4 (689.3) 100,000,000年前、北米大陸とヨーロッパの一部は水面のかなり上にあった。アメリカ大陸の歪みは続

き、南米のアンデス山脈の変形と北米西部の平野に緩やかな隆起をもたらした。メキシコの大半は、海下に沈み、南大西洋は、南米東海岸を浸し、最終的には現在の海岸線に達した。当時、大西洋とインド洋は、ほぼ現今の状態であった。

60:3.5 (689.4) 95,000,000年前、アメリカとヨーロッパの大陸は再び沈み始めた。大陸の2番目に大きい浸水を起こし、南方の海は、北米への侵入を開始し、北極海をつないで徐々に北方へと伸びていった。最終的にこの海が引くと、大陸をほぼ現在の状態にしていた。この大掛かりの浸水が始まる前、東アパラチア山脈の高地は、ほぼ水の位置にまで完全に侵食されていった。現在陶器製造に使用される多色の純粘土層は、その平均の厚みがおよそ600メートルであり、この時代に大西洋岸の地域に横たえられた。

60:3.6 (689.5) 火山の大活動は、アルプス山脈の南と現在のカリフォルニア海岸地域の山に沿って起こった。何百万年もにわたる地殻変動が、メキシコで起きた。大変化は、

ヨーロッパ、ロシア、日本、南米の南部でも起こった。気候は、ますます変化に富んできた。

60:3.7 (689.6) 90,000,000年前、被子植物は、初期の白亜紀のこれらの海から現れ、すぐ大陸に蔓延した。これらの陸の植物は、イチジクの木、モクレン、ユリノキと共に突然出現した。この直後、イチジクやパンの木、それに椰子の木がヨーロッパ、および北米西部の平野を覆った。新しい陸生動物は何も現れなかった。

60:3.8 (689.7) 85,000,000年前、ベーリング海峡は閉じ、北海の冷たい水域を遮断した。その時点まで、大西洋とメキシコ湾水域の海洋生物と太平洋の海洋生物は、今は均一的になっている2つの水域の温度のばらつきが原因で大いに異なっていた。

60:3.9 (689.8) この期間は、白亜と緑砂泥灰土の堆積物にちなんで名づけられた。粗悪な石炭、あるいは亜炭と共に、白亜、頁岩、砂岩、少量の石灰石から成るこの時代の堆積は多彩であり、多くの地域では油も含んでいる。これらの層は、ある場所においては60メートルから北米西部とヨーロッパの多くの地方においては3,000メートルと

その厚みが異なる、。これらの堆積物は、ロッキー山脈の東の境界沿いの山麓の丘陵地帯に観測できるかもしれない。

60:3.10 (690.1) 世界中でこれらの層には白亜が浸透し、また、これらの多孔性の未完成の石の層は、逆さになった露頭で水を捕らえ地球の現在の乾燥地域の大部分の給水を提供するためにそれを下方へと搬送している。

60:3.11 (690.2) 80,000,000年前、地殻に大きな乱れが生じた。大陸移動の西への進出が停止状態になり、辺境の広大な陸地の緩やかな弾みからくる巨大なエネルギーは、北米と南米双方の太平洋の海岸線を上向きに歪め、アジアの太平洋岸に沿って重大な反作用による変化を起こした。現今の山脈となるこの環太平洋の陸の隆起は、4万キロメートル以上の長さである。その誕生に伴う隆起は、生物のユランチア出現以来の表面の最大の歪みであった。溶岩流は、地面の上下双方において大規模かつ広範囲にわたった。

60:3.12 (690.3) 75,000,000年前の大陸移動は終わりを示す。アラスカからホーン岬までの長い太平洋岸の山脈は、完成したが、まだ峰々はわずかしかなかった。

60:3.13 (690.4) 大陸移動停止の際の背面への突きは、北米西部平野の隆起を継続したが、東部では、大西洋岸地域の擦り減ったアパラチア山脈にはあまり傾きはなく、あるいは全然なく、真っ直ぐ上に突出していた。

60:3.14 (690.5) 70,000,000年前、最大の隆起に関わる地殻の歪みが、ロッキー山脈地域に起きた。ブリティッシュ・コロンビアの地表の24キロメートルの大きい岩石の断片は、突き上げ断層であった。ここではカンブリア紀の岩石が、白亜紀層の上で斜めに押し出されている。カナダ国境近くのロッキー山脈の東斜面には、別の壮観な突き上げがあった。ここでは、当時少し前に起きた白亜紀の堆積物の上に押し出された生命出現以前の石の層が、見つけられるかもしれない。

60:3.15 (690.6) これは、多数の小さい孤立する火山円錐丘に隆起をもたらす世界中での火山活動時代であった。海中火

山が、海面下のヒマラヤ領域に発生した。シベリアを含むアジアの他の大部分もまだ水面下にあった。

60:3.16 (690.7) 65,000,000年前、史上最大の溶岩流の1つが起こった。これらの沈澱物層と先行する溶岩流は、アメリカ全土、南北両アフリカ、オーストラリア、および一部のヨーロッパに見つけられる。

60:3.17 (690.8) 陸生動物にあまり変化はなかったのだが、より大きい大陸出現、特に北米出現により急速に増えた。北米は、ヨーロッパのほとんどが水面下にあったので、これらの時代の陸の動物の進化にとっての重大地域であった。

60:3.18 (690.9) 気候はまだ暖かく安定していた。北極地域は、北米の中央部と南部の現在の気候と非常に似た天候に恵まれていた。

60:3.19 (690.10) 大いなる植物進化が進行していた。陸生植物の中では、被子植物が優勢であり、ブナ、樺、樫、クルミ、スズカケノキ、カエデ、および現代の椰子を含む多くの今日の木が、まず出現した。果実、草、穀類は豊富

であり、これらの種子をつける植物に植物界があるように、人の先祖には動物界があった。—種子性植物は、人間自身の出現を除く進化上での重要性においてひけをとらなかった。突然に、しかも前段階的変化なくして、顕花植物の大植生が変異した。そして、この新植物相はすぐに全世界を覆った。

60:3.20 (691.1) 60,000,000年前、陸の爬虫類は減少の途にあったが、恐竜は陸の王者として続いており、今や、小さ目の跳躍するカンガルー種による敏捷で活発な肉食性の恐竜が首位である。しかし、草食の新型の恐竜が、それ以前のある時点で現れており、その急速な増加は、陸生植物の草の種類の出現に起因した。これらの草食性の新恐竜の1つの型は、2本の角とケープのような肩に出縁のある真の四足獣であった。直径6メートルの陸型の亀が現れ、現代のワニと現代の型の本来の蛇も出現した。海洋生物の魚や他の種類の間にも大変化が起きていた。

60:3.21 (691.2) 歩いて渡ったり泳いだりする初期の鳥出現以前の生物は、空中で上首尾というわけではなかった。飛ぶ恐竜もそうではなかった。それらは、短命な種であり、

ほどなく絶滅するところであった。それらもまた、体の大きさに比してあまりにも小さ過ぎる脳の中身であったので、恐竜の悲運、滅亡の対象であった。大気を航行できる動物を生産するこの2度目の試みは、この時代と前の時代の哺乳動物生産の失敗に終わった試み同様にしくじった。

60:3.22 (691.3) 55,000,000年前、本来の1番目の鳥、すべての鳥類の先祖である小さい鳩のような生物の突然の出現により進化の行進が印づけられた。これは、地球での3番目の型の飛ぶ生物であり、それは、同時代の飛ぶ恐竜からでもなく、歯をもつ初期の陸の鳥の型からきたのでもなく、直接爬虫類のような集団から生じた。そけでこれは、爬虫類の減退時代と同様に鳥の時代として知られるようになる。

4. 白色石灰岩期間の終わり

60:4.1 (691.4) 長い白亜紀が終わりに近づきつつあり、その終わりが、海の大陸侵入の終わりを印す。これは殊に北米に当てはまり、そこでは、まさに24回の大洪水が起きた。その後小さ目の浸水があったが、これらのいずれ

も、これと前の時代の大規模で長期にわたる海洋の侵入には比べものにはならない。陸と海の支配のこれらの交互する期間は、百万年の周期で起きた。海洋床と大陸の地面の高さのこの隆起と沈下に関連する長年の律動があった。これらの同じ規則的地殻運動は、地球の歴史を通じ今後ずっと、頻度と範囲を減少させながらも続くであろう。

60:4.2 (691.5) この期間はまた、大陸の終わりとユランチアの現代の山々の形成を目の当たりにする。だが、大陸塊の圧迫と長年の移動の阻止された勢いは、山岳形成における唯一の影響ではない。山脈の位置を決定する主要かつ基本的要素は、低地、あるいはトラフであり、それは、前の時代の陸の浸食や海底移動からの比較的軽い堆積物で埋められた。陸のより軽量の地域は、厚さ4,500メートルから6,000メートルに達することもあり、いかなる原因であろうとも地殻が圧力をうけるとき、地殻における、または地殻の下の活動からくる競ったり相反する力や圧力を補整的に調整するためにこれらのより軽い領域が、最初に潰れ折り重なり持ち上がる。ときとして陸のこれらの押し上げは、折り重なることなく起こる。しか

し、ロッキー山脈の隆起に関しては、地下と地表双方における様々な層の巨大な押し付け圧とが相まった大仕掛けの折り重なりと傾きが起きた。

60:4.3 (692.1) 世界最古の山岳は、アジア、グリーンランド、北ヨーロッパの東西の古い山系の中に位置している。中間の時代の山岳は環太平洋群に、またほぼ同時期に生まれた2番目に古いヨーロッパの東西山系とにある。この巨大な隆起は、ヨーロッパから西インド諸島の高原に広がる長さ1.6万キロメートルほどである。ロッキー山脈系には最も若い山があり、そこでは、長い間、陸の盛り上がりは、より高い陸のいくつかは島として残りはしたものの、相次いで海に覆われるばかりであった。中間時代の山の形成に続き、本来の山の台地は持ち上げられ、次に、この台地は、自然の要素が結合された巧妙さで現在のロッキー山脈へと切り分けられる運命にあった。

60:4.4 (692.2) 現在の北米のロッキー山脈地帯は、陸の最初の隆起の高度ではない。その高度は、浸食によって平らにされ、次に再隆起して以来の長きにわたるものであった。現在の山脈の東側は、再度隆起した最初の連なりの

名残りである。パイクスピークとロングスピークは、この山の2世代、あるいはそれ以上の生涯に及ぶ活動の顕著な例である。これらの2つの山は、前の何回かの洪水の間、水上に頭をとどめていた。

60:4.5 (692.3) これは、地質学上、生物学上においても陸上と水面下での重大、かつ活発な時代であった。珊瑚とウミユリは減少したが、ウニは増加した。前の時代の優勢な顔役であったアンモナイトもまた急速に衰退した。陸上では、巨大なアカスギを含めて松と他の現代の樹木が、シダの森林に大きくとって替わった。有胎盤哺乳動物は、まだこの時代の終わりまでに進化はしていないが、生物学上の舞台が、その後の哺乳類の型の初期の始祖出現のために完全に備えられている。

60:4.6 (692.4) 初期の陸の動物出現から人類とその傍系種の直接の先祖のより最近の時代へと延長しながらの世界発展の長い時代は、このように終わるのである。これが、つまり5千万年にわたる白亜紀が、1億年の期間にまたがる中生代として知られる陸の生物の前哺乳類時代に終わりをもたらすのである。

60:4.7 (692.5) [サタニアに配属され現在ユランチアで機能しているネバドンの生命搬送者による]

論文 61
ユランチアの哺乳類時代

61:0.1 (693.1) 哺乳動物の時代は、有胎盤哺乳類の起源から最終氷期までの5千万年足らずに跨る。

61:0.2 (693.2) この新生代の間の世界の景観は、魅力的な様—起伏ある丘、広大な渓谷、幅の広い川、巨大な森林—を呈した。。この時代パナマ地峡は、2回上下した。ベーリング海峡の地峡も同様に3回上下した。動物の型は、数多く、かつ多様であった。木には鳥が群がり、世界全体が、進化する動物種の優越性への絶え間ない闘争にもかかわらず、動物の楽園であった。

61:0.3 (693.3) 5千万年のこの5つの期間に蓄積された堆積物は、哺乳類の継続的支配の化石記録を有し、人間自身の実際の登場時代へとまっすぐに導いていく。

1. 広大な陸地の新段階[初期の哺乳動物時代]

61:1.1 (693.4) 50,000,000年前、世界の陸地は、ごく一般的に水面上に、あるいはわずかに水没しているだけであった。

この期間の形成と堆積物は、陸と海の双方であるが、主には陸である。陸は、かなりの期間、徐々に隆起したが、同時に、下方と海への押し流しがあった。

61:1.2 (693.5) この時代の早期に、北米において、哺乳動物の胎盤型が突然現れ、それまでで最も重要な進化上の発展をなした。無胎盤哺乳動物の古い系列は存在したが、この新型は、恐竜の衰退時まで子孫が存続した以前からの爬虫類の先祖から直接、しかも突然生じた。有胎盤哺乳動物の父親は小さく、非常に活発で、肉食性の跳躍型の恐竜であった。

61:1.3 (693.6) 哺乳類の根本的本能が、これらの原始の哺乳類の型に現れ始めた。哺乳動物は、他の全ての動物の形態よりも夥しい生存利点を持っており次のようなことができる。

61:1.4 (693.7) 1. 比較的にしっかり成長し、よく発達した子孫を産む。

61:1.5 (693.8) 2. 情愛深い関心をもって子に食物を与え、育て、保護する。

61:1.6 (693.9) 3. 自己永続化において優れた知力を駆使する。

61:1.7 (693.10) 4. 敵から逃れる際に一層の機敏さを用いる。

61:1.8 (693.11) 5.環境の調整と適合に優れた知脳を用いる。

61:1.9 (694.1) 45,000,000年前、大陸の中心は、極めて広範囲にわたる海岸線の沈没を伴って隆起した。哺乳類の生命は、急速に発展していた。小さい爬虫類、産卵型の哺乳動物は栄え、後のカンガルーの先祖はオーストラリアを歩き回った。間もなく、小さい馬、足の速いサイ、鼻のあるバク、原始のブタ、リス、キツネザル、フクロネズミ、それに猿のような動物のいくつかの部族が存在した。それらのすべてが小さく、原始的であり、山岳地帯の森林の中に住むのに最も適していた。大きい駝鳥ような陸上の鳥は、3メートルの高さに発達し、23潦33センチメートル大の卵を産んだ。これらは、非常に知能の高い、かつては人間を空中輸送した巨大な乗用の鳥の先祖であった。

61:1.10 (694.2) 新生代前半の哺乳類は、陸上、水中、そして、木上に住んでいた。1対から11対までの乳房があり、す

べてが相当量の毛で覆われていた。一連の二揃いの歯を発達させ、体に比べ比較的大きい脳を所有していた。しかし、それら全ての中には、現代の型は全然存在しなかった。

61:1.11 (694.3) 40,000,000年前、北半球の陸の部分が隆起を始め、溶岩流、歪曲、湖の形成、および浸食を含む新しく大規模な陸の堆積物と地球の他の活動がこれに続いた。

61:1.12 (694.4) この時代の後半にヨーロッパのほとんどが水没した。わずかな陸の上昇の後、大陸は湖と湾に囲まれていた。海の島のように水上にあったアルプス山脈、カルパティア山脈、アペニン山脈、およびピレネー山脈高地が地中海をつないで当時北方に広げられたように、北極海は、ウラル川の窪みを通り抜け南に走った。パナマ地峡は水上にあった。大西洋と太平洋は切り離された。北米はアジアとはベーリング海峡の地峡で、ヨーロッパとはグリーンランドとアイスランド経由で繋がった。北緯地域の地球の輪は、ウラル海峡によってのみ壊された。その海峡は北極海を拡大された地中海とつないでいた。

61:1.13 (694.5) 多量の有孔虫石灰岩がヨーロッパの水域に堆積された。今日、この同じ石が、アルプスの3000メートル、ヒマラヤの4800メートル、チベットの6000メートルの高さに隆起している。この期間の石灰岩の堆積物は、アフリカとオーストラリアの海岸沿い、南米の西海岸、それに、西インド諸島周辺に見つけられる。

61:1.14 (694.6) いわゆるこの始新世の期間中、哺乳類と他の同族の動物の進化はあまり、あるいは、全然中断されることなく続行した。北米は、当時、オーストラリアを除く全大陸と陸続きであり、世界には様々な型の原始の哺乳動物相がはばをきかせていた。

2. 少し前に起きた洪水段階[進んだ哺乳動物時代]

61:2.1 (694.7) より進歩的な哺乳動物の形態がこれらの時代の間に進化し、この期間は有胎盤哺乳類の一層の、しかも、急速な発展によって特徴付けられた。

61:2.2 (694.8) 初期の有胎盤哺乳類は、肉食性の先祖に源を発するが、すぐ草食の種類が発達し、やがては雑食性の哺乳類も出現した。前の時代に現れた現代の植物と樹木の

大部分を含む現代の陸の植物相である被子植物が、急速に増加する哺乳動物の主要な食物であった。

61:2.3 (695.1) 35,000,000年前、有胎盤哺乳類の世界優位の時代の始まりを呈する。南の地峡は、再度当時の巨大な南極大陸を南米、南アフリカとオーストラリアに接続して広範囲にわたっていた。高緯度での陸の集塊化にもかかわらず、世界の気候は、熱帯の海の拡大のために依然として比較的温和なままであり、また陸は、氷河を形成するほどには十分に隆起しなかった。大規模な溶岩流が、グリーンランドとアイスランドに起こり、これらの層の間にいくらかの石炭が堆積された。

61:2.4 (695.2) 惑星の動物相に著しい変化が生じていた。海の生物は、かなりの変化を経験していた。海の生物の現代の系列の大部分が存在しており、有孔虫は、引き続き重要な役割を果たした。昆虫は、前の時代のものに非常に類似していた。コロラドのフローリッサントの化石層は、これらの昔の時代の後期に属する。現存する昆虫類のほとんどはこの時代に遡るが、当時存在した多くが、化石は残存しているものの、今は絶滅している。

61:2.5 (695.3) これは、陸においては支配的に哺乳類の刷新と拡大の時代であった。より早期の、　より原始の哺乳類の100種以上が、この時代終了前に消滅していた。小さい脳をもつ大型哺乳類でさえもすぐに滅びた。脳と機敏さが、動物生存の進化においては防護具と体の大きさとに取って替わった。恐竜類は減少状態にあり、哺乳類は、残りの爬虫類の先祖を速やかに完全に滅ぼしながらゆっくりと地球の支配を担っていた。

61:2.6 (695.4) 恐竜の消滅に伴い、トカゲ類の様々な分科においては別の、しかも大きい変化が起こった。初期の爬虫類の生き残りの顔ぶれは、亀、蛇、鰐であり、人間の初期の先祖で唯一残っている集団の代表である貴ぶべきカエルもその生き残りである。

61:2.7 (695.5) 様々な哺乳動物の集団は、今は絶滅した特異な動物に源を発する。この肉食性生物は、猫と海豹との雑種のなにかであった。それは陸上、もしくは水中で生きることができ、知能が高く、非常に活動的であった。ヨーロッパでは、犬類の先祖が進化し、やがて多種の小型犬をもたらした。ほぼ同時に、ビーバー、リス、地リ

ス、ネズミ、およびウサギを含む物を噛る齧歯動物が現れ、すぐ、注目に値する型の生物となり、以来この種類での変化はあまりない。この時代の後の堆積物は、先祖の型での犬、猫、アライグマ、およびイタチの化石を有している。

61:2.8 (695.6) 30,000,000年前、現代の型の哺乳動物が出現し始めた。哺乳動物は、旧来山地型であり、大半を丘で生活していた。突然、爪を持つ肉食性とは区別されるものとして草食性の平原型、あるいは有蹄型の進化が始まった。これらの草食動物は、この時代終了前に滅ぶ5本の爪と44本の歯を持つ未分化型の先祖に端を発した。3本指の段階を超えての足指の発達は、この時代にはなかった。

61:2.9 (695.7) 際立つ進化の例である馬は、その発達が後の氷河期までに完全に終了したというわけではないが、これらの期間、北米とヨーロッパの両方で生きた。この時代の終わりにサイの種類が現れたのだが、それは、のちにその最大の発展をした。豚、ペッカリー、およびカバの多くの種の先祖になる小さな豚のような生物も発達し

た。ラクダとラマは、この期の中盤に北米にその起源をとり、西部の平原に繁殖した。後にラマが南米、ラクダがヨーロッパへと移動し、少数のラクダは氷河期まで生き残りはしたものの、すぐ双方とも北米で絶滅した。

61:2.10 (696.1) およそこの頃注目に値するものが北米の西側に現れた。古代のキツネザルの初期の先祖が最初に出現した。この科を本来のキツネザルと見なすことはできないが、それらの到来が、本来のキツネザルが後に出現する系列の体制を印づけた。

61:2.11 (696.2) 海へ向かった前の時代の陸の蛇のように、今度は、有胎盤哺乳動物の全部族が陸を放棄し住居をその海に取った。そして、以来ずっと海に留まり、現代のクジラ、イルカ、ネズミイルカ、アザラシ、アシカをもたらした。

61:2.12 (696.3) 惑星の鳥の生物は、発達し続けたが、進化の重要な変化はあまりなかった。鴎、鷺、フラミンゴ、ハゲタカ、鷹、鷲、梟、鶉、および駝鳥を含む、現代の鳥の大部分が存在した。

61:2.13 (696.4) 千万年におよぶこの漸新世の終期までには海洋生物や陸生動物と共に、植物が、極めて大がかりな進化をし、多くがほとんど今日のようであった。次にかなりの分化が起こったが、ほとんどの生き物の先祖の型が、その時生存していた。

3. 現代の山の段階[象と馬の時代]

61:3.1 (696.5) 陸の隆起と海の分離はゆっくり世界の気象を変えており、徐々にそれを冷やしていたが、気候は、まだ温和であった。セコイアと木蓮はグリーンランドに成育したが、亜熱帯植物は南方に移動し始めていた。この期の終わりまでには、これらの温暖気候の植物と木は、主として北半球地方から姿を消しており、より多くの頑丈な植物や落葉樹がそれらに取って替わった。

61:3.2 (696.6) 草の種類は非常に増加し、多くの哺乳類の種の歯は、現代の牧草型に順じるよう徐々に様変わりをした。

61:3.3 (696.7) 25,000,000年前、長い間の陸の隆起時代に続くわずかな陸の潜水があった。ロッキー山脈地帯は、高く持ち上がった状態にあり、浸食の堆積物質は、低地を東へ

と延びていった。シエラ山脈はかなり再隆起した。実際、それは以来ずっと上昇している。カリフォルニア地域の6.5キロメートルの巨大な垂直断層はこの時から始まる。

61:3.4 (696.8) 20,000,000年前は、実に哺乳動物の最盛期であった。ベーリング海峡の地峡が上がり、4本牙のマストドン、短足の犀、および多種類の猫科を含む多くの動物の群れがアジアから北米に渡った。

61:3.5 (696.9) 最初の鹿が現れ、北米では、まもなく反芻動物—鹿, 牛, 駱駝, バッファロー, および幾つかの犀の種類—が、繁殖したが、高さ2メートル近くの巨大な豚は絶滅した。

61:3.6 (697.1) 大きい脳だけでなく巨体を有するこの時代とその次の時代の巨大な象が、やがてオーストラリアを除く全世界を占領した。その時ばかりは、それを維持できるに十分な大きさの能を持つ巨大な動物によって世界が支配された。大きく優れた質の脳を所有していなかったならば、これらの時代の非常に知能の高い動物に阻まれ、象の大きさのいかなる動物も生き残れなかったであろ

う。象には、知能と適合においてただ馬だけがほぼ同等であり、人間のみが、それらに勝るのである。それでも、この時代の始まりに現存した50種の象のうち2種類だけが生き残った。

61:3.7 (697.2) 15,000,000年前、ユーラシアの山岳地域は上昇しており、これらの地域では幾らかの火山活動があったが、西半球の溶岩流に匹敵するようなものではなかった。この不安定状態が、世界中に訪れていた。

61:3.8 (697.3) ジブラルタル海峡が閉じ、山頂と高地が島としてこの古代の海上に現れ、スペインは、古い地峡によってアフリカに接続されたが、地中海は、フランスに達する細長い水路経由で大西洋へと流入した。後にこれらヨーロッパの海は、後退し始めた。そのまた後に、地中海は、インド洋につなげられ、この時代の終末にはスエズ地域が隆起し、地中海は、一時内陸の塩海になった。

61:3.9 (697.4) アイスランド地峡は水没し、北極水域は大西洋の水域と混ざり合わさった。北米の大西洋岸は急速に冷えたが、太平洋岸は現在よりも暖かいままであった。今

日のように大きな海流は、役目を果たしており、また気候にも影響を与えた。

61:3.10 (697.5) 哺乳動物は、発展し続けた。馬の巨大な群れは、北米の西の平野でラクダに合流した。実に、これは馬と象の時代であった。馬の脳は、動物性で象の脳に次ぐものであるが、それは1点において明らかに劣っている。怯えると馬は、強い逃走癖を決して完全に克服しないという理由において。馬は象がもつ感情制御力を欠くが、象は大きさと機敏さの無さから大いに不利な立場にある。この期間、動物は、象と馬の両者に似た進化をしたが、間もなく急速に増加する猫科に滅ぼされた。

61:3.11 (697.6) ユランチアがいわゆる「馬のない時代」に入るつつあるとき、人は、しばらく立ち止まり、この動物が人間の先祖にとっての意味を熟考すべきである。人は最初に、食料のために、それから旅のために、後には農業と戦争において馬を利用した。馬は、長い間人類に役立ち、人間の文明の発展において重要な役割を演じた。

61:3.12 (697.7) この期間の生物の発展は、その後の人の出現のための舞台設定に向けて貢献した。中央アジアでは、共

通の先祖を持つ原始の猿とゴリラの両方の本来の型が、進化し、現在は消滅している。しかし、これらのいずれの種も、後に人類の先祖になる生物種には関係していない。

61:3.13 (697.8) 犬の種類は、いくつかの群れ、とりわけ狼と狐に代表された。猫の種類は、豹と大きな剣歯をもつ虎に代表され、後者は最初に北米で進化した。現代の猫と犬の種類が世界中で数を増やした。イタチ、テン、カワウソ、アライグマは、北半球で繁殖し発展した。

61:3.14 (698.1) 鳥は、わずかの変化しかしなかったものの、進化し続けた。爬虫類は、現代の型—蛇、わに、および亀—と同様であった。

61:3.15 (698.2) こうして世界の歴史の誠に波瀾万丈の、また興味深い期間の終わりに近づいた。この象と馬の時代は、中新世として知られている。

4. 新たな大陸上昇段階[最後の哺乳類の大移動]

61:4.1 (698.3) これは北米、ヨーロッパ、それにアジアの氷河期前の陸の上昇期である。陸は地形上大いに変更され

た。山脈が生まれ、流れはその進路を変え、孤立する火山が世界中で爆発した。

61:4.2 (698.4) 10,000,000年前、大陸の低地での広範囲にわたる局部的な陸の堆積物時代が始まり、これらの堆積の大部分は後に移動した。このときイギリスの一部、ベルギー、フランスをふくむヨーロッパの大半は、まだ水中にあり、地中海は、北アフリカの大部分を覆っていた。北米では大規模の堆積が、山麓、湖中、広大な陸の盆地で起きた。平均60メートルほどのこれらの堆積は、多少着色しており、化石は稀である。2つの大きな淡水湖が北米の西部にあった。シエラ山脈は隆起しつつあった。シャスタ、フッド、レーニアは、それぞれの山の経歴に入っていた。しかし、北米は、後の氷河期まで大西洋の降下に向けてのその忍び寄りを開始しなかった。

61:4.3 (698.5) 短い間に世界の全陸地は、オーストラリアを除き再び繋合され、世界規模の最後の大掛かりな動物移動があった。北米は南米、アジア双方につなげられ、そこでは動物の自由な往来があった。アジア産のナマケモノ、アルマジロ、カモシカ、クマが北米に入り、北米の

ラクダは中国に行った。サイは、オーストラリアと南米を除く全世界に移動したが、この時代の終わりまでには西半球で滅びていた。

61:4.4 (698.6) 概して前の時代の動物は、引続き進化し拡散していった。猫科が動物の生態を支配し、海の生物はほぼ行き詰まっていた。馬の多くはまだ3つ指であったが、現代の型が登場しつつあった。ラマとキリンのような駱駝が、牧草地帯の馬と入り交じった。今とちょうど同じ長さの首を持つキリンがアフリカに現れた。南米では、ナマケモノ、アルマジロ、アリクイ、そして原始の猿の南米型が発展した。大陸の最終的隔離前、それらの大規模な動物、マストドンが、オーストラリアを除く至る場所に移動した。

61:4.5 (698.7) 5,000,000年前、馬は現在のように進化し、北米から全世界に移動した。しかし、赤色人種到着のずっと以前に、馬はその出身大陸において絶滅してしまった。

61:4.6 (698.8) 気候は徐々に涼しくなっていた。陸の植物は、ゆっくり南方に移動していた。北の地峡への動物の移動を初めて止めたのは、北部地方での寒冷化であった。こ

れらの北米の地橋は、後に落ちた。その直後、アフリカと南米との陸の接続部は遂に水中に没し、西半球は今日のように隔離された。この時から、異なる生物の型の展開が東半球と西半球で始まった。

61:4.7 (699.1) ほぼ1000万年持続したこの時代は、このようにして終わりに近づいたが、人間の先祖は、いまだに出現していなかった。これが、通常は、鮮新世として示される時代である。

5. 初期の氷河期

61:5.1 (699.2) 前期の終了までには北米の北東部と北欧の陸が、広範囲にわたる規模で高く隆起し、北米では広大な地域が9千メートル以上上昇した。かつての温和な気候は、これらの北方領域を覆っており、北極水域は、すべてが蒸発できる状態にあり、それらは皆、ほぼ氷河期の最終まで不凍結のままであった。

61:5.2 (699.3) これらの陸の隆起と同時に海流が変わり、季節風がその方向を変えた。これらの情況は、やがて北の高地を越えるかなりの空気の飽和状態の移動によりほぼ一定の降水量を形成した。雪が、隆起しそのために冷えた

これらの領域に降り、それが6百メートルの深さに達するまで続いた。雪が最も深い領域は、高度と相まってその後の氷河の圧流の中心点を決定した。氷河期は、この過度の降水量が、固体だが、這う氷と化したこの巨大な雪のマントでこれらの北の高地を覆い続ける限り持続した。

61:5.3 (699.4) この期間の巨大な氷床のすべては、今日見ある山岳地帯にではなく、隆起した高地に位置していた。氷河の氷の半分が北米に、1/4がユーラシアに、そして1/4が他の場所に、主に南極大陸にあった。アフリカは、氷にはあまり影響されなかったが、オーストラリアは、ほとんどが南極の氷の毛布に覆われていた。

61:5.4 (699.5) この世界の北の領域は、個々の氷床活動に関わる何十回もの前進と後退はあったものの、6回におよぶ、しかも明らかな氷の侵入を経験した。北米の氷は2個所の、後には3個所の中心地に集まった。グリーンランドは覆われ、アイスランドは氷流れの下に完全に埋められた。氷は、南英海岸を除くヨーロッパでは、個々

別々の時代にイギリス諸島を覆い、西ヨーロッパからフランスへと広がっていった。

61:5.5 (699.6) 2,000,000年前、北米の最初の氷河が、南への進行を始めた。氷河期は、目下進行中であり、この氷河は、北の圧力の中心からの前進におよそ百万年を費やした。中央の氷床は、遠くはカンザスまで南へと広がった。東側と西側の氷の中心は、当時それ程大規模ではなかった。

61:5.6 (699.7) 1,500,00年前、最初の巨大な氷河が北方に後退していた。そうしているうちにも、膨大な量の雪が、グリーンランドと北米の北東部に降り続けており、やがてこの東側の氷の固まりが南へと流れ始めた。これが2度目の氷の侵入であった。

61:5.7 (699.8) この最初の2度の氷の侵入は、ユーラシアでは大規模ではなかった。これらの初期の氷河期に、北米は、マストドン、毛深いマンモス、馬、駱駝、鹿、ジャコウ牛、バッファロー、地上生のナマケモノ、巨大なビーバー、剣歯虎、象の大きさのナマケモノ、それに犬猫類の多くの種が繁殖した。しかし、それらは、氷河期の寒冷

化によりこの時から急速に減少した。こうした動物の大部分は、氷河期の終わりに向かい北米において消滅した。

61:5.8 (700.1) 氷から遠い世界の水陸の生物にはあまり変化はなかった。氷の侵入の間、気候は、現在とほぼ同程度に温和であった。ことによると少し暖かめであった。氷河は、途方もない領域を覆って広がりはしたものの、結局は局地的現象であった。沿岸の気候は、氷河の無活動の時期と巨大な氷山の時期、つまりメイン州の海岸沖から大西洋へと滑り落ち、ピューージェット湾から太平洋へとすり抜け、またノルウェーのフィヨルドから北海へと轟音を立てていった巨大な氷山のそのような時期とは大いに異なった。

6. 氷河期における原始人

61:6.1 (700.2) この氷河期の大きな出来事は、原始人の進化であった。黎明の哺乳動物が、アジアへ移住した北米のキツネザルの古い型の子孫の中に、インドのわずか西方の、現在は水中にある陸地に突然現れた。これらの小動物は、たいていは後足歩行であり、体の大きさ、また他

の動物の脳と比較して割に大きい脳を所有していた。この生物体系の70世代目に、新たなより高度の動物集団が突如として分化した。3番目の極めて重要な変異の霊長類が、確固たる地歩を固めるや否や、これらの新たな中間哺乳類—その先祖のほぼ2倍背格好で、しかも知力に比例して増大した脳を持つ—が、突然現れた。(この同じ時に、中間哺乳類の系統の中での退化が、類人猿の祖先の起始となった。ヒト科は、その時代から今日に至るまで、進歩的発展により進んできており、一方真猿類は静止のまま、あるいは実際には退歩してきた。)

61:6.2 (700.3) 1,000,000年前、ユランチアは棲息界として登録された。進化している霊長類の集団の変異が、突然2人の原始人、実際の人類の先祖をもたらした。

61:6.3 (700.4) この出来事は、3番目の氷河前進のほぼ開始時期に起きた。それゆえ初期の人間の先祖が、刺激的で元活気づけるような、しかも困難な環境に生育したのがわかるかもしれない。これらのユランチアの原住民、つまりエスキモーは、唯一の生存者であり、今でも極寒の北の気候の中に住むのを好む。

61:6.4 (700.5) 人間は、氷河期末近くまで西半球には存在しなかった。それらは、間氷期に地中海周辺を西側へと通過し、やがてヨーロッパ大陸を覆った。前進し後退する後の氷河時代にこれらの領域に人が住んでいたことを示す熱帯と北極の両方の動物の残骸が入り混ざって、西欧の洞窟の中に人骨が見つけられるかもしれない。

7. 継続する氷河期

61:7.1 (700.6) 他の活動は、氷河期のあいだ進行中であったが、氷の活動が、北半球の他のすべての現象に影を投げかける。地球の他のいかなる活動も地形に関するそのような特徴的形跡を残してはいない。特有の岩石や表面の亀裂、すなわち窪み、湖、置換された石、および岩粉などは、他の何の自然現象には見られないのである。氷はまた、穏やかな膨らみ、つまり氷堆丘として知られる表面起伏を引き起こす。氷河は、進みつつ、川を動かし地球の全表面を変える。氷河だけが、隠しきれない標積物—底堆石、側堆石、末端堆石—を背後に残す。これらの標積物、特に底堆石は、北米の東海岸から北と西方向へと達しており、またヨーロッパとシベリアで見られる。

61:7.2 (701.1) 750,000年前、4番目の氷床、すなわち北米の中央と東の氷原の結合が、その南への道をかなり進んでいた。その最高期には、ミシシッピー川を80キロメートル西にずらせイリノイ州南部に達し、東部では遠くはオハイオ川と中央ペンシルヴァニアにまで南へと広げていった。

61:7.3 (701.2) アジアではシベリアの氷床がその最南の侵入を果たし、一方ヨーロッパでは前進中の氷が、アルプス山脈の山の障害物のほんの少し手前で止まった。

61:7.4 (701.3) 500,000年前、人間の進化過程は、5番目の氷の前進期に拍車がかかった。突然、しかも1世代で原住の人間の集団から有色の6人種に変異した。これは、惑星王子の到来を印しもするので、二重に重要な時代である。

61:7.5 (701.4) 前進する5番目の氷河が、北米では3つの氷のすべての中心による結合的侵入から構成された。しかしながら東側の突出部は、セントローレンス川の谷間の下方のほんの短い距離を伸ばし、西側の氷床は、南への進出をほとんどしなかった。しかし、中央の突出部は、南に

延びアイオワ州の大部分を覆った。ヨーロッパでの氷のこの侵入は、前のものほど大規模ではなかった。

61:7.6 (701.5) 250,000年前、6番目の最後の氷河作用が始まった。これは、北の高原地方がわずかに沈み始めたという事実にもかかわらず、北の氷原での最大の雪の堆積時代であった。

61:7.7 (701.6) 3面の大きな氷床が1つの巨大な氷塊へと合体し、西方の山々すべてがこの氷河活動に加わった。北米での全ての氷の侵入ではこれが最大であった。氷は、その圧力の中心から2千4百キロメートル以上南に移動し、北米は最低温度を経験した。

61:7.8 (701.7) 200,000年前、最後の氷河の前進中、ユランチアの事象の進行と関係深い出来事—ルーキフェレーンスの反逆—が起きた。

61:7.9 (701.8) 150,00年前、6番目の最後の氷河は、西の氷床がわずかにカナダの境界を越え、中央の氷床がカンザス州、ミズーリ州、イリノイ州へ到来し、東の氷床が南に

進み、ペンシルヴァニア州とオハイオ州の大部分を覆い、南の延長線上の最遠地点に達した。

61:7.10 (701.9) これが、今日の大小の湖を切り出した多くの舌、と言うか氷の耳たぶを放った氷河である。北米の五大湖の水系は、その後退時に形成された。ユランチアの地質学者は、この様々な発展段階をじつに正確に推論したし、これらの水域が、まず最初にミシシッピ一渓谷へ、次にハドソ渓谷へと東方へ、最後に北の経路でセントローレンスへと異なる時代に実際に注ぎ込んだのを正しく推量した。五大湖の水系が、現在のナイアガラ水路に沿って注ぎ始めて以来3万7千年である。

61:7.11 (702.1) 100,000年前、広大な極地の氷床は、最後の氷河の後退期に形成し始め、氷の堆積の中心は、かなり北方に移動した。そしてもう1度氷河の時代が起こる可能性は、来るべき陸の上昇、あるいは海流の変更にかかわらず、極地が氷で覆われ続けている限りほとんどないのである。

61:7.12 (702.1) この最後の氷河は、10万年間の前進であり、その北への後退を終了するには同様の時間の長さを必要と

した。温暖地方においては5万年以上氷とは無関係である。

61:7.13 (702.1) 厳しい氷河期は、多くの種を破壊し数多の他種を根本的に変えた。多くが、前進したり後退する氷がもたらしたあちこちへの必然の移動により痛ましほどに篩いに掛けられた。氷河を追って陸上のあちらこちらに行った動物は、クマ、バッファロー、トナカイ、ジャコウ牛、マンモス、マストドンであった。

61:7.14 (702.1) マンモスは広々とした大草原を求めたが、マストドンは森林の保護された周辺を好んだ。マンモスは、比較的後の時代までメキシコからカナダに移動した。シベリアの種類は、毛に覆わるようになった。マストドンは、白人が後にバッファローを全滅させたように、多くが赤色人種に撲滅されるまで北米に居続けた。

61:7.15 (702.1) 北米では最後の氷河作用の間、馬、バク、ラマ、剣歯虎が消滅し始めた。それらに代わり、ナマケモノ、アルマジロ、カピバラが、南米から上って来た。

61:7.16 (702.1) 生物の強制的移動は、前進する氷を前に植物と動物の途轍もない混合へと導き、また動植物の両方の多くの北極種は、最終的な氷の侵入の後退とともに、特定の山頂高くにとり残され、氷河による絶滅から逃がれるための旅をした。それゆえ、これらの動植物が、今日ヨーロッパのアルプス山脈上や北米のアパラチア山脈上でさえ見られるかもしれない。

61:7.17 (702.1) 氷河期は、2百万年の長さのいわゆる更新世と呼ばれる最後の地質完成期である。

61:7.18 (702.1) 35,000年前、惑星の極地におけるものを除いては、巨大な氷河期の終了を印す。この年代は、物質の息子、物質の娘の到着、またアダームの配剤期の始まり、つまり概略的に当てはまる完新世、または氷河期後代の始まりに接近している点も特筆される。

61:7.19 (702.1) この物語は、哺乳動物の始まりから氷の後退まで、それに続く歴史的時代にまで広がるおよそ5千万年にわたる。これは、最後—現在—の地質学の期間であり、地球の研究者には新生代、または近世の時代として知られている。

61:7.20 (702.1) [居留生命搬送者に後援による]

論文 62
原人の黎明期の人種

62:0.1 (703.1) およそ百万年前、人類の直接の先祖が、有胎盤哺乳類であるキツネザル型の初期集団に由来する連続3回の、しかも突然の変異によって出現した。この初期のキツネザルの優勢要因は、西の、または後のアメリカの進化している生物の原形質に由来した。しかし、この系統は、人間の祖先の直系確立前に、アフリカで進化した中心的生物の着床からの貢献により補強された。東側の生物集団は、人類の実際の生産にはほとんど寄与していない。

1. 初期のキツネザルの型

62:1.1 (703.2) その子孫が現在まで生き残ってきた人類の祖先に関係がある初期のキツネザルは、当時、ユーラシアと北アフリカに住んでおり、テナガザルとサルの仲間とは直接には関係がなかった。それらは、ずっと以前に消滅した両者の共通の先祖に由来するが、いずれも近代の型のキツネザルの子孫ではなかった。

62:1.2 (703.3) これらの初期のキツネザルの西半球での進化中、人類の哺乳類の直系祖先の確立は、南西アジアにおいて、主要な生物の着床の元の領域で、ただし東の領域の境界で行われた。北米型キツネザルは、数百万年前ベーリング地峡を西へと移動し、そして南西寄りにアジアの海岸沿いにゆっくりと進んだ。これらの移動部族は、ついには当時拡大された地中海とインド半島にある隆起中の山岳地帯に横たわる健康によい地方に到達した。人類の祖先は、インドの西のこれらの土地で他の、好ましい種と結合し、こうして人類の祖先を確立した。

62:1.3 (703.4) 時の経過とともにインドの山の南西の海岸は、徐々に水中に沈み、この領域の生物を完全に隔離した。北への道を除きいては、このメソポタミア、またはペルシア半島へ接近する、またはそこから逃れる道もなく、それは、氷河の南への侵入により繰り返し断ち切られた。このキツネザル型の哺乳動物の優れた子孫から2種の群れが、現代の類人猿と現代の人類の種族が出現したのは、ほぼ天国のような当時のこの領域においてであった。

2. 黎明期の哺乳動物

62:2.1 (703.5) 百万年余り前、メソポタミアの最初の哺乳類、北米のキツネザル型の有胎盤哺乳類の直系子孫が、突然現れた。それらは、身長1メートル足らずの活発な小さい生き物であった。常に後足歩行ではなかったが、容易に直立でいることができた。毛深くて、敏捷であり、猿のような格好でしゃべるが、類人猿とは異なり、肉食性であった。非常に役立つ握ることのできる足の親指だけでなく、原始の対向性の親指をもっていた。人類出現以前の種族は、これ以降足の親指の握力を次第に失いはしたが、引続き対向の親指を進化させた。後の猿類は掴むことのできる足の親指を保有したが、決して人間の型の親指を進化させたのではなかった。

62:2.2 (704.1) これらの黎明期の哺乳動物は、3、4歳にして完全な成長にいたり、平均しておよそ20年の可能な寿命があった。子供は、時おり双子がいたが、原則として一匹ずつ生まれた。

62:2.3 (704.2) この新種の顔ぶれは、以前地球に存在したどんな動物よりも体格に比して大きい脳を持っていた。それらは、非常に好奇心が強く、いかなる活動の成功時にも

かなり意気揚々として、後に原始人に特徴的であった多くの感情を経験し、多くの本能をもちあわせていた。飢餓と性欲が高度に発達し、また粗雑な求愛と相手選びの形態において確かな性行為の相手の選択が明らかであった。恥と後悔に近似する謙遜の感覚を持ち、血縁関係の防御においては猛然と戦い、家族の繋がりにおいてはとても情け深かった。非常に情愛深く、いじらしいほどに仲間に忠誠であったが、情況がそれらを切り離したとしたならば、新しい相手を選んだであったろう。

62:2.4 (704.3) それらは、身長が低く、森林生息地の危険性に気づく鋭い知力をもっていたことから並はずれた恐怖を持つようになり、それが、地面生活の多くの危険性排除のために高い梢に粗雑な避難所をつくるといった賢明な予防措置に導き、生存にこのうえなく貢献したのであった。人類の恐怖の傾向の始まりは、具体的にはその時代に遡る。

62:2.5 (704.4) これらの黎明の哺乳類は、これまでに示してきた以上の部族精神を発達させた。誠にきわめて社交的であるにもかかわらず、ありきたりの生活の通常行為にお

いて多少なりとも妨害されると非常に好戦的であり、怒りの感情を十分に刺激されると激しい気性を呈した。しかしながらその喧嘩早い性質は、良い結果をもたらした。優れた集団は、劣る隣人を襲うことをためらわず、その結果、種は、選択的生存により次第に改良された。彼らは、まもなくこの領域のより小さい生物の生活を支配し、そして極めてわずかの初期の非肉食性の猿に似た部族が生き残った。

62:2.6 (704.5) こうした攻撃的な小動物が繁殖し、千年以上も体格と一般的知能を絶えず向上させながらメソポタミア半島全域に広がった。次の画期的な進展—ユランチアの人間の進化における突然の先祖の分化の次なる重大な一歩—があったのは、この新部族がキツネザルの先祖の最高度の型から生まれてちょうど70世代後であった。

3. 中期哺乳動物

62:3.1 (704.6) 黎明の哺乳動物の歴史の初期、これらの敏捷な生物の中の優れた夫婦の梢の住まいで雌雄1匹ずつの双子が生まれた。その先祖に比べ、誠に均整の取れた小さい生き物であった。体毛はほとんどなかったが、暖かく

安定した気候の中に生きていたので、これは障害ではなかった。

62:3.2 (705.1) 子供達は、背丈が1.2メートルを超えるほどに育った。長めの脚と短かめの腕を持ち両親よりもあらゆる面で大きかった。ほぼ完全に向かい合う親指をもち、現在の人間の親指のようにほとんどの様々な仕事によく適合していた。また後の人類が歩くに似つかわしいような足をもち、直立歩行をした。

62:3.3 (705.2) その脳は、人間のものより劣り小さくはあったが、その先祖のものよりもはるかに優れ、比較してはるかに大きかった。双子は、早くから優れた知能を示し、全黎明哺乳動物の部族の代表として認められ、実際に原始の社会的組織の型と原始的経済上の分業を始めた。このきょうだいは、交尾をし、やがて全員が1.2メートル以上で、あらゆる点で先祖の種よりも優れた自分たちに非常に似た21人の子供の集団社会を経験した。この新集団は、中期哺乳動物の核を形成した。

62:3.4 (705.3) この新しく優れた集団の構成員が増大すると、争い、間断のない争い、が起きた。ひどい争いが終わっ

たとき、先存の、先祖にあたる黎明哺乳動物の種族は、一匹も生存しなかった。少数だが、より強力で知能の高い種の分派が、その先祖を犠牲にして生き残った。

62:3.5 (705.4) そして今、およそ1万5千年間、(600世代)、この生物は、世界のこの地域の恐怖となった。先の時代の大きく獰猛な動物のすべてが滅亡した。これらの領域生まれの大きい獣類は、肉食性ではなく、猫科に属するライオンや虎のより大きい種は、まだ地球の表面のこの格別に保護された一隅には侵入していなかった。それ故、これらの中間哺乳動物は、しだいに勇敢になり、創造の全体を支配した。

62:3.6 (705.5) 中期哺乳動物は、先祖の種と比較しあらゆる面で改善されていた。見込める寿命でさえおよそ25年であり、より長かった。人間の基礎的特徴が、多くこの新種に現れた。これらの中期哺乳動物は、先祖によって示された生来の傾向に加えてある種の反発的状況において嫌悪感を表すことができた。それらは、明確な貯蔵本能をも所有していた。後の利用のために食物を隠し、攻防の

手段に適する滑らかな丸い小石と丸い石をとても上手に収集する習性があった。

62:3.7 (705.6) これらの中期哺乳動物は、競争して梢の住まいと多くの横穴をもつ地下の避難所の両方の建造において示されるように明らかな建造性向をもつ最初の動物であった。樹上と地下の両方の住まいでの身の安全に備えた哺乳動物の最初の種であった。昼間は地面で暮らし、夜は梢で眠り、住まいの場所としての木をほとんど捨てた。

62:3.8 (705.7) 数的な自然増加が、時の経過につれ最終的には容易ならない食物競争と性の対立関係をもたらし、もう少しで全体種を滅ぶするほどの一連の共倒れの闘争に至った。これらの戦いは、生残が100匹足らずの1集団に追い込まれるまで続いた。しかし、平和はもう一度行き渡り、この一つの生存種族は、新たにその梢の寝所をつくり、もう一度正常かつ半平和的な生活を再開した。

62:3.9 (705.8) 人類出現以前の先祖が、いかなる僅差で時々絶滅を免れたかは人にはとても分からない。全人類の先祖のカエルが、ある時5センチメートル短く跳んでいたな

らば、進化の全過程は、著しく変えられていたことであろう。キツネザルに似た黎明哺乳類の直接の母は、新しくより高等の哺乳類の系列の父親を生む前に、間一髪で少なくとも5回は死から逃れた。しかし間一髪の中の間一髪の危機からの脱出は、霊長類の双子の未来の母が眠っていた木を、稲妻が襲った時であった。これらの中期の哺乳動物の両親双方が、痛烈に衝撃を受けひどい火傷を負った。7匹の子供のうち3匹が、空からのこの電光で死んだ。進化のこれらの動物は、相当に迷信深かった。梢の棲家が襲われたこの一対は、実は中期哺乳類のより進歩的な集団の指導者であった。そして、その一対の例に倣い、より知能の優れた家族をもつ部族の半分以上が、この場所から3キロメートル以上離れたところに移動し、梢の新しい住まいと地面の新避難所—突然の危機に際しての一時的避難所—の工事にとりかかった。

62:3.10 (706.1) この一対は、つまり多難の老練者たちは、家の完成直後、人類出現以前の進化で重大な次の段階をもつ霊長類の新種の1番目であり、それまでに世界に生まれた最も興味深く重要な動物の双子の誇らしい両親となった。

62:3.11 (706.2) これらの霊長類の双子の誕生と同時代に、別の一対—中期哺乳類の異様に知能の遅れた雌雄、知的にも肉体的にも劣る一対—もまた双子を生んだ。これらの双子は、つまり雄と雌は、征服には無頓着であった。食物入手だけに関心をもち、肉を食べようとしなかったので、やがて獲物探しへの興味を失った。これらの発達の遅い双子が、現代の類人猿の種族の始祖となった。これらの子孫は、温和な気候と熱帯の果実のあるより暖かい南の領域を探し、初期のテナガザルやサルの型と交尾し、その結果大いに劣化したそれらの分派を除く物達は、そこで当時のまま存続した。

62:3.12 (706.3) したがって人とサルは、中期哺乳動物、つまり劣勢の対は、猿、ヒヒ、チンパンジー、およびゴリラの現代の型を産むように運命づけられ、優勢の対は、進化の上昇線を人自身へと続けるように運命づけられた2組の双子の同時誕生とその後の隔離が生じた種族から出現したということにだけ関係があるということが容易にわかるかもしれない。

62:3.13 (706.4) 現代の人間と猿は、同じ両親からではなく、同じから種族と種に端を発した。人の祖先は、この中期哺乳動物の種族の淘汰された生存者のうちの優れた系統の流れをくんでいるのに反して、現代の類人猿(キツネザル、テナガザル、サル、および他の猿のような生物の存在以前の型を除く)は、この中期哺乳動物集団の最も劣った一対の、部族の最後の激しい闘争の間2週間以上も地下の食物格納の避難場所に身を隠して生き残り、すなわち、戦争行為終了後にやっと現れた一対の、子孫である。

4. 霊長類

62:4.1 (706.5) 中期哺乳動物の種族の主だった2匹に、1匹の雄と1匹の雌の優れた双子の誕生に戻ろう。これらの動物の赤ん坊は、珍しい系列のものであった。体毛は両親よりもまだ少なく、まだ幼いときには垂直に歩くと言い張った。その先祖は、ずっと後足歩行を身につけてきたが、この霊長類の双子は、始めから直立した。身長は1.5メートル余りに達し、頭は種族の他のものと比較して太めになった。合図や音の手段での早くから相互伝達

を身につけたが、仲間にはこれらの新しい表象を決して理解させることはできなかった。

62:4.2 (707.1) 2匹は、14歳ほどのときに種族から逃がれ、自らの家族を育て、霊長類の新種を樹立するために西へ行った。この新生物は、人間の部族そのものの直系かつ現下の動物の先祖であったのでまことに適切に霊長類と命名されている。

62:4.3 (707.2) こうして霊長類は、知能が劣りしかも近縁である種族が、半島の先端部と東の海岸線で生活をする一方で、当時南海に突出していたメソポタミア半島の西海岸地域を占めることとなった。

62:4.4 (707.3) 霊長類は、中期哺乳動物の先祖よりもより人間に近く動物からは遠かった。この新種の骨格の比率は、原始の人類のものに非常に似通っていた。人間型の四肢は完全に発達し、歩くことができ、後の時代のどの人間の子孫と同様に走ることさえできた。霊長類は、初期の先祖同様非常に恐怖に陥り易かったので夜は安全対策として梢に頼り続けはしたものの、木の生活はおおむね見限った。より一層の手の使用は、本来備わっている知能

発達のための多くのことをしたが、まだ本当に人間と呼ぶほどの心を持ってはいなかった。

62:4.5 (707.4) 霊長類は、感情的な性向において先祖とはあまり異なっておらず、その性向のすべてが人間の傾向をより一層示していた。10歳で成熟し、およそ40年の自然の寿命を持つ、真にすばらしく優れた動物であった。もし自然な死を遂げたならば、すなわち、それほど長い間生きたかもしれないが、自然死を遂げる動物は、その初期の時代ほとんどいなかった。生存のための戦いはいかにも激し過ぎた。

62:4.6 (707.5) そして今、霊長類は、およそ9百世代の進化の後に、黎明の哺乳動物の起源からおよそ2万1千年にわたり、突如として2個体の注目すべき生物、最初の真の人間を生んだ。

62:4.7 (707.6) こうして北米のキツネザルの型に端を発し、中期哺乳動物に起源を与え、代わってこれらの中期哺乳動物が原始の人類のじかの先祖となる優れた霊長類を生み出したものこそが、黎明哺乳類であった。霊長類は、人種の進化における最後の重大な繋がりであったが、これ

らの並はずれた種族のうちの一個体として5千年足らずのうちに消えたのであった。

5. 最初の人間

62:5.1 (707.7) 西暦1934年から最初の2人の人間の誕生までは正確には99万3,419年である。

62:5.2 (707.8) 注目に値いするこれらの2個体の生物は、真の人間であった。それらは、先祖の多くのように、現代の人類と変わらない完全な足をもち、完全な人間の親指をもっていた。それらは、足の親指の握る機能を欠く、完全に欠く、木登りするものではなく、歩行者であり走者であった。それらは、危険に際し梢に追い立てられると時は、まるで現代の人間が登るように登った。枝から枝へ移動するチンパンジーかゴリラのようにではなく、クマのように木の幹に登ったのであった。

62:5.3 (708.1) これらの最初の人間(そして、その子孫)は、12歳で完全に成育し、およそ75年間の可能な寿命があった。

62:5.4 (708.2) 新たな多くの感情が、人間のこれらの双子に早く現れた。物と他の生き物の両方への感心を経験し、少なからぬ虚栄を示した。しかし感情の発達で最も顕著な進歩は、本当に一連の人間の新たな感情、一連の信心深さ、畏敬を抱くこと、崇敬、謙遜、さらに原始の謝意の形態さえの突然の出現であった。恐怖は、自然現象への無知と合わさった恐怖は、まさに原始の宗教を生みだそうとするところである。

62:5.5 (708.3) これらの原始人は、そのような人間の気持ちばかりではなく、高度に発達した多くの感情も初歩的な型で持っていた。また、著しい嫉妬の気持ちに影響されやすく、適度に哀れみ、恥、および非難を知り、また愛、憎しみ、報復を鋭く意識した。

62:5.6 (708.4) これらの最初の2人の人間—双子—は、霊長類の両親にとりかなりの試練であった。双子は、非常に好奇心が強く、大胆であったので、8歳前に、幾度となくもう少しで命を失うところであった。実情は、12歳までにかなりの傷跡を残した。

62:5.7 (708.5) 二人は、非常に早い時期に口頭でのやりとりを身につけた。10歳までには、およそ50程の考えに関するより一層の身振りと言葉の伝達法を編み出し、先祖の粗雑な伝達技術を大いに改良し、広げた。しかし一生懸命試みても、自分達の新しい合図と表象のほんの幾つかしか両親に教えることができなかった。

62:5.8 (708.6) 二人は、9歳ごろのある晴れた日、川を下って旅をし、重要な相談をした。ユランチアに配属の私自分を含む天の知者のそれぞれが、この真昼の会合でのやり取りの一観察者として臨場していた。二人は、この重大な日に一緒に、それに互いのために生きるという理解に達し、しかも、これが、遂に劣る動物の仲間から逃れ、北へと旅をする決意に至るそのような一連の合意の最初であった。それによって、自分達が人類を樹立するとは少しも知らずに。

62:5.9 (708.7) 我々は全員、年少の2人の未開人が、計画していたことに危惧しながらも、2人の心の働きを制御することにおいては無力であった。我々は、任意に2人の決定に影響を及ぼすことはしなかった—できなかった。しか

し我々生命搬送者は、惑星機能の許される範囲内で、関係者と共に全員で、人間の双子を北へ、そして毛深くて部分的に木で生活する者達からは離れたところへ導く企てをたてた。その後双子は、自らの賢明な選択理由に基づいて移住し、また我々の監督上のために、霊長類の劣る近縁生物との混合による生物上の劣化の可能性から逃がれ人里離れた地域へと北に移動したのであった。

62:5.10 (708.8) 二人は、故郷の森からの出発直前、テナガザルの襲撃により母を失った。母は、知能はなかったが、我が子に対しての高度の哺乳類にふさわしい愛情を持ってして、素晴らしい1組を救う試みにおいて恐れることなく自分の命を犠牲にした。彼女は、父親が援軍と到着し、侵略者を完全に敗走に追いやるまで阻止したので、その犠牲も徒労に帰すことはなかった。

62:5.11 (709.1) この若い一組が人類樹立のために仲間を見捨てた直後、その霊長類の父は、愁いに沈んだ—悲嘆に暮れた。残りの我が子らが、食物を持ってきても食べることを拒んだ。才気に溢れる我が子がいなくなると、普通の仲間の間での生きがいは、あるようには思えなかった。

そこで森の中へとさ迷い入り、敵対的なテナガザルに殴られて死んだ。

6. 人間の心の進化

62:6.1 (709.2) 我々は、すなわちユランチアの生命搬送者は、初めて惑星の水域に生物の原形質を仕掛けたその日以来ずっと注意深く待機して長い不寝番をして来ており、実に利口意志に基づく最初の生き物の出現は、当然のことながら、我々に大きな喜びと最高の満足をもたらした。

62:6.2 (709.3) 我々は、惑星到着時点からユランチア配属の7名の心-精霊の補佐のはたらきを観察し、双子が、精神的に発達するのを見てきた。惑星生物の長い進化的発展を通じて、これらの止むことのない心の奉仕者達は、徐々にまさった動物の引続き拡充していく脳容量とのかかわり合いにおける自分たちの増加する能力をつねに示してきた。

62:6.3 (709.4) 最初は、直観の霊のみが、本能的で反射的な振舞いで原始の動物の生活において機能することができた。理解の霊は、高度の型の分化とともに、自然発生的な考えの贈り物をそのような生き物に与えることができ

た。後に我々は、勇気の霊が稼働中であるのを観測した。進化する動物は、じつに保護的自意識の粗野な型を発達させた。我々は、哺乳類の集団の出現に続き、知識の霊それ自体が、さらに現われるのを視た。そして、より高等な哺乳動物の進化が、助言の霊の機能をもたらし、助言の霊の機能が群集心理の発育と、原始社会の発展の始まりを結果としてもたらした。

62:6.4 (709.5) 我々は、ますます黎明期哺乳類、中期哺乳類、および霊長類へと最初の5名の補佐の増大された働きを観測した。だが残る2名、最高の心の奉仕者は、ユランチア型の進化の心に作用することは一度もできなかった。

62:6.5 (709.6) ある日—双子が10歳の頃—崇拝の霊が、双子の女子の心に、そして、すぐその後に男子の心に最初の接触をしたときの我々の喜びを想像してみなさい。我々は、人間の心に酷似する何かが頂点に近づきつつあることを知った。二人は、およそ1年後、とうとう深い考えと意味深い決意から家を離れ北へ旅することを決め、知

恵の霊が、そのときユランチアでの働きに取り掛かったので、二人は、ただちに人間の心に気づいた。

62:6.6 (709.7) 7名の心-精霊の補佐の動員の即座の、新しい命令があった。我々は、期待に満ちていた。長く待たされていた時間の接近を感じた。我々は、ユランチアに進化する意志をもつ被創造者が進化のためのいつ果てるともなく続く努力の実現の敷居にいるのを知った。

7. 棲息界としての認識

62:7.1 (709.8) 我々は長い間待つ必要はなかった。正午に、双子の逃走日の翌日、宇宙回路の信号の初の試験的閃光が、ユランチア用の惑星の受信の的に現れた。我々は皆、もちろん、すばらしい出来事が迫っているという認識でざわめいた。しかしこの世界は、生物実験基地であったので、我々には、惑星の知的生命体の認識が我々にどのように知らされるのか見当もつかなかった。しかし、我々は、長く気をもむことはなかった。最初の惑星回路設立のネバドン大天使が、双子の駆け落ち後の3日目に、おなじく生命搬送者軍団の出発前に、到着した。

62:7.2 (710.1) それは、我々小集団が宇宙通信の惑星の極の周りに集まり、惑星の新設された心の回路に関するサルヴィントンからの最初の伝達を受け取ったユランチアでの多時な日であった。大天使軍団の団長が口述したこの最初の伝達は次の通りであった。

62:7.3 (710.2)「ユランチアの生命搬送者へ—挨拶を！我々は、意志尊厳の心の存在のユランチアでの現れをネバドン本部へ登録することを祝して、サルヴィントン、エデンチア、ジェルーセムにとって大いなる喜びの保証を伝える。劣性の先祖から北方へと逃れ、自分達の子を隔離するという双子の意味深い決定は、注目されていた。これは、心—人間の型の心—のユランチアでの最初の決定である。そして、この初の認識伝達が送られる通信回路が、自動的に確立される。」

62:7.4 (710.3) エデンチアのいと高きものからの挨拶に続いて、我々が確立した生物の型の妨害を禁じる居留の生命搬送者への指示を含めてこの新回路で届いた。我々は、人間の進歩の事態に干渉しないようにとの指示をうけた。生命搬送者が、惑星進化計画の自然の成り行きを任

意に、無意識に妨げると決して推論すべきではない。我々そうはしないのであるから。しかし、我々は、これまでのところ環境操作を許され、特別な方法で生物原形質を保護してきていたのだが、この並はずれた、だが完全に自然な助力は、中止されようとしていたのであった。

62:7.5 (710.4) そして、ルーキフェレーンスのすばらしい通達を終わるやいなや、サタニア体制の主権者のいと高きものが、惑星化に入った。生命搬送者は、そのとき自分達の団長の歓迎の言葉を聞き、ジェルーセムへの帰還許可を受けた。ルーキフェレーンスからのこの通達は、生命搬送者のユランチアにおける仕事の公式承認を含んでおり、サタニア体制に確立されたようにネバドンの生物の型を改良する我々のいかなる努力に対する今後全ての批判から我々を放免した。

62:7.6 (710.5) サルヴィントン、エデンチア、ジェルーセムからのこれらの通達は、生命搬送者の惑星での長年の指揮の終了を正式に印した。我々は、7名の心-精霊の補佐と熟練した物理制御者だけの補助で長い間勤務していた。

そして、いま意志、すなわち礼拝することと上昇することを選ぶ力が、惑星の進化する生物出現時に現れたので、我々の仕事の終了を知り、我々の集団は、出発の準備をした。ユランチアは生物改良世界であることから、上級の生命搬送者を2名、補佐を12名残す許可が与えられ、私は、この集団の1名として選ばれ、以来ずっとユランチアに滞在している。

62:7.7 (710.6) ネバドンの宇宙における人間の居住の惑星としてユランチアが正式に認証されたのは、993,408年前(西暦1934年から)に過ぎない。生物の進化は、再度人間の意志の威厳の水準に達した。人間はサタニアの惑星606号に到着した。

62:7.8 (710.7) [ユランチア居住のネバドンの生命搬送者の後援による]

論文 63
最初の人間の家族

63:0.1 (711.1) ユランチアは、最初の2人の人間—双子—が11歳のとき、また実際の人間の二世代目の長子の両親になる前に、棲息界として登録された。サルヴィントンからの

大天使の伝達、この時には惑星の正式な認識である伝達は、次の言葉で閉じられた。

63:0.2 (711.2) 「人の心がサタニアの606号に現れ、新人種のこの両親はアンドンとフォンタと呼ばれるものとする。すべての大天使は、宇宙なる父の内在する個人的な精霊の贈り物が、これらの生物に直ちに与えられるようにと祈った。」

63:0.3 (711.3) アンドンとは、「人間の完全性への渇望を示す父に似た最初の被創造物」を意味するネバドン名である。フォンタとは、「人間の完全性への渇望を示す息子に似た最初の被創造物」を意味する。アンドンとフォンタは、思考調整者との融合時点で授与されるまで決してこれらの名前を知らなかった。二人は、人間としてのユランチアでの滞在中、互いにソンタ-アンと、ソンタ-エンで呼び合った。ソンタ-アンは、「母に愛されている」を意味し、ソンタ-エンは、「父に愛されている」を表す。二人は自らにこれらの名前をつけ、その意味は互いへの敬意と愛情を表明する。

1. アンドンとフォンタ

63:1.1 (711.4) この素晴らしい1組は、全人類の事実上の両親、二人の直接の多くの子孫よりもあらゆる点で優れており、また直接的にも、根本的にも関係の薄いすべての始祖とは異なっていた。

63:1.2 (711.5) この最初の一組の人間の両親は、戦いで最初に投石したり、棍棒使用を習得した部族の平均的な者達とは、その中でより知性ある構成員ではあったが、見かけ上あまり違いはなかった。その両親は、鋭い針のような石、火打ち石、および骨も利用した。

63:1.3 (711.6) アンドンは、まだ両親との同居中、棍棒の先にとがった火打ち石を固定させるために動物の腱で結びつけ、そして、絶えず探検旅行のすべてに同伴した冒険好きで好奇心の強い女きょうだいとわが身の2つの命を救う際に少なくとも10回以上もそのような武器が役立った。

63:1.4 (711.7) アンドンとフォンタの霊長類種族から逃げ去るるという決断は、知能の発育の遅い類人猿のいとこ達との前かがみの交配をする後の多くの子孫を特徴づける劣位の知性をはるかに超える心の質を意味する。しかし、

単なる動物であるよりもそれ以上の何かであるというあいまいな感覚は、人格を有するためであり、内在する思考調整者の臨場により増大された。

2. 双子の逃走

63:2.1 (712.1) アンドンとフォンタは、北へむけて逃れると決めてから一時恐怖に、特に父と肉親を不機嫌にする恐怖に圧倒された。敵意のある親類に襲われることを心に描き、すでに嫉妬している種族民の手による死の可能性を認識した。子供のときの双子は、時間の大部分を互いを仲間として過ごしたので、霊長類の動物のいとこには決してそれほど好かれてはいなかった。また、二人は、別個の、しかも優れた木の家をつくり種族における地位の改善もしなかった。

63:2.2 (712.2) 二人が、ある夜激しい嵐のためにずっと目覚めていた後に恐怖を感じ優しく互いに抱き合いながら、部族の生息地と梢の家から逃げると最終的に、しかも完全に決心したのが、梢のこの新しい家であった。

63:2.3 (712.3) 二人は、すでにおよそ北へ半日の道程に粗雑な梢の避難所を用意していた。これは、棲家のある森林か

ら離れた初日のための二人の秘密の、安全な隠れ場所であった。双子は二人共、夜間地面にいることへの霊長類の極端な恐怖を持っていたにもかかわらず、日暮れ直前に北への難儀な旅へと出発した。二人にとってこの夜間旅行を企てることは、満月であったとしても、並々ならぬ勇気を要したが、種族や親類に気づかれたり、追跡されそうにはないと正確に結論をだした。そうして、二人は、夜中12時直後に以前から用意していた待ち合わせ場所に到着した。

63:2.4 (712.4) 二人は、北に向けての旅で露出した火打ち石の堆積を発見し、様々な用途のために適当な形の石を探し今後の予備品として収集した。アンドンは、一定の目的に合うようにこれらの火打ち石を削ぎ落とそうとしている時に火花を発する石の性質を発見し、火を起こす考えを抱いた。しかし、気候がまだ爽やかであり、炎の必要がほとんどなかったので、その考えは、その時点で心にしかと入り込まなかった。

63:2.5 (712.5) だが、秋の太陽は空で低くなりつつあり、また北へ旅するにつれ、夜はどんどん冷えていった。二人

は、すでに暖とりのために動物の皮を利用せざるをえなかった。アンドンは、家を離れてから1ヶ月足らずのうちに火打ち石で火を起こせると思うと、連れ合いに知らせた。二人は、2カ月間点火のために火打ち石の利用を試みたが、失敗ばかりであった。この一組は、毎日火打ち石を打って木を燃やそうとした。とうとうある夕方の日の入り頃に、フォンタが、置き去りにされた鳥の巣を手に入れるために近くの木に登るという考えたとき、その技の秘密が明かされた。巣は乾燥し非常に燃え易く、このためそれに火花が落ちるなり、大きな炎でパッと燃え上がった。二人は、非常に驚き、その成功に瞳目し、もう少しで炎を失うところであったが、適当な燃料をつぎ足しそれを救い、その後、全人類の両親による最初の薪探しが始まった。

63:2.6 (712.6) これは、短いが、多事多端な二人の生涯での最も喜ばしい１瞬間であった。気候に挑んだ結果、いつまでも南の地の動物の親類から独立できる発見をしたとばく然と気づき、一晩中火が燃えるのを見ながら起きていた。二人は、3日間の休息と火を楽しんだ後旅を続けた。

63:2.7 (712.7) アンドンの霊長類の先祖は、稲妻にもたらされた火をしばしば補充したが、地球の生物は、かつて意のままに火を起こす方法を持っていなかった。しかし、双子が、鳥の巣と同様、乾いた苔と他の材料で火が焚きつけられるということを学ぶまでには長らくかかった。

3. アンドンの家族

63:3.1 (713.1) 双子の家からの出発の夜から二人の最初の子供が生まれるまでにはほぼ2年間あった。その子をソンタドと名づけた。ソンタドは、出生時に保護用の覆いに巻かれたユランチアで生まれた最初の生き物であった。人類というものが始まり、より純粋に動物の型に対照して知的な種類の心の前進的発達を特徴づけるであろうますます弱化した幼児を適切に世話をする本能というものが、この新たな進化と共に表面化した。

63:3.2 (713.2) アンドンとフォンタには全部で19人の子供がおり、およそ50人の孫と6人の曽孫とのつながりを楽しんで生きた。家族は、4戸の隣接する岩石の住まい、または半ば洞窟に定住し、そのうちの3戸は、アンドンの子

供達が考案した火打ち石の道具で柔らかい石灰岩を掘削した廊下で相互に連結されていた。

63:3.3 (713.3) これらの初期のアンドン人種は、大いに目立つ排他的気風を表していた。集団での狩りをし、決して住居の範囲からあまり遠くには離れなかった。彼らは、孤立している特有な集団の生きものであり、したがって離れ離れになることを避けるべきであると気づいていたようであった。親密な親族関係のこの感情は、確かに精霊補佐の高められた心の働き掛けによるものであった。

63:3.4 (713.4) アンドンとフォンタは、脈々と一族の養育と向上のために働いた。二人は、地震で張り出した岩石の落下で死亡する42歳まで生きた。子供5人、孫11人がともに死に、ほぼ20人の子孫が重傷に苦しんだ。

63:3.5 (713.5) 両親の死に際し、ソンタドは、重傷の足にもかかわらず直ちに一族の指揮を引き受け、自分の長姉でもある妻に有能な助力を得た。二人の最初の仕事は、死んだ両親、兄弟姉妹、それに子供を実際に葬るために石を転がすことであった。必要以上の意味をこの埋葬行為に添えるべきではない。死後の生存に関する彼らの考え

は、主に空想的で多彩な夢の国から導かれ、非常にあいまいで不明確であった。

63:3.6 (713.6) アンドンとフォンタのこの家族は、20世代目まで団結を維持した。食糧競争と社会的摩擦が結びついたとき、分散の始まりをもたらした。

4. アンドン一族

63:4.1 (713.7) 原始人—アンドン人種—は、黒い目をもち、黄色と赤のかかった混血の浅黒い顔色であった。メラニンは、すべての人間の皮膚に見られる発色物質である。それが、本来のアンドン族の皮膚の色素である。これらの初期のアンドン人は、全体的な外貌と肌の色において現存する人間の他の型よりも今日のエスキモー人に最も類似していた。アンドン人種は、防寒に対し動物の皮を使用する最初の生き物であり、現代人よりも体毛は少なかった。

63:4.2 (713.8) この古代人の動物の先祖の部族生活は、数多くの社会的な規則の始まりの前兆となり、また社会組織と一族の新しい分業には、拡大していく感情と増大された脳の力での即座の発展があった。彼らは甚だしく模倣的

であったが、遊びの本能はわずかに発達されただけで、ユーモアに対する感覚はほぼ完全に欠けていた。原始人は、時おり微笑んだが、決して豪快な笑いには耽けなかった。ユーモアは、後のアダーム人種の遺産であった。これらの古代人は、進化する多くの後の人間ほどには痛みにあまり敏感ではなく、不快な状況にもそれほど早い反応はなかった。出産は、フォンタと直接の子孫にとり痛ましい、または悩ましい試練ではなかった。

63:4.3 (714.1) それらは素晴らしい部族であった。男は、連れ合いと子の安全のために勇ましく戦うのであった。女は、愛情深く子に専念した。しかし、愛国心は、完全に直系一族に限られた。家族に非常に忠誠であった。子供を守るためには一も二もなく死ぬのであったが、子孫のために世界をより良い場所にしようとする考えを持つことはできなかった。これらのユランチア原住民には、宗教誕生に不可欠のすべての感情がすでにあったが、利他主義は、人間の心に今なお生まれてはいなかった。

63:4.4 (714.2) これらの古代人は、仲間への感動的な愛情を持ち、また確かな、粗っぽくはあるが、本物の友情という

考えを持っていた。後の時代に、これらの原始人の一人が、劣性部族との止むことなく繰り返される戦闘中、仲間の手負いの戦士を守り、救おうと片手で果敢に戦うのはよく見掛ける光景であった。その後の進化的発達の最も高潔で極めて人間的な特色の多くは、これらの原始民族に感動するほどに予示されていた。

63:4.5 (714.3) 本来のアンドン一族は、ソンタドの直系に男性子孫が現れず、27世代目、つまり一族の支配者になるつもりの2人が最高位をかけて競い合うその時まで連綿たる指導者の地位を持続した。

63:4.6 (714.4) アンドン一族の大規模な分散以前、通じ合うための充分発達した言語が、早期の努力により発展した。この言語は、発展し続け、活発で休むことのないこれらの好奇心の強い人々によって環境への新しい考案と適合のためにほとんど毎日のように追加がなされた。これが、後の有色人種の出現までの古代人の仲間のユランチア界での言語となった。

63:4.7 (714.5) 時の流れと共にアンドン一族の数が増え、拡大する家族同士の接触が、摩擦と誤解を生み出した。ただ

2つの事だけ、つまり食物入手のための狩猟と隣接する部族からの実際の、または想定される何らかの不当行為や侮辱に対して恨みを晴らすための戦い、が、これらの民族の心を占めるようになった。

63:4.8 (714.6) 内輪もめは増加し、部族の戦いは勃発し、またより有能な、より進んだ集団の最良要素間のただならぬ損失が、続いた。これらの損失のいくつかは修復できなかった。能力と知能の最も価値ある種族のいくつかは、世界から永遠に失われた。この早期の種族とその原始文明は、この絶え間ない一族の抗争による消滅の危機に脅かされた。

63:4.9 (714.7) そのような原始の生き物に長い間の平和共存を促すことは、不可能である。人は、闘争的動物の子孫であり、無教育な人々は、密接に関係しているとき互いを苛立たせるし、怒らせる。生命搬送者は、進化する生物のこの性向を知っており、それに応じて少なくとも3つの、しばしば6つの異なる別個の人種へと進化する人間の最終的分離のための対策をとる。

5. アンドン族の分散

63:5.1 (715.1) 初期のアンドン人種は、いはるか遠くアジアへは進出せず、また最初にアフリカに入りはしなかった。当時の地形が、この人種を北に向かわせ、ゆっくり前進する第3期の氷河に妨げられるまでは、彼らは、更に北へ北へと旅をした。

63:5.2 (715.2) アンドンとフォンタの子孫は、この大規模な氷床が、フランスとイギリス諸島に達する前にヨーロッパを越え西へと前進し、北海の当時の暖かい水域に通じる大河沿いに1,000個以上もの個別の集落を設立した。

63:5.3 (715.3) アンドン族は、フランスでの初期の川沿いの住人であった。何万年もの間ソンム川沿いに住んでいた。今日とまったく同じように当時海に流れ込んでいたソンム川は、氷河で変えられることのなかった1本の川である。それゆえ、アンドンの子孫に関係するたいそう多くの証拠が、なぜこの流域沿い見つけられるのかを説明している。

63:5.4 (715.4) ユランチアのこれらの原住民は、非常時には木に赴きはしたものの、木の居住者ではなかった。それらは、良い眺めを提供したり、荒れ模様の天候から保護し

てくれる川沿いの張出した崖の避難所や山腹の洞窟を常用した。それらは、このようにしてあまり煙に困ることなく炎に安らぎを味わうことができた。後の時代の氷床が更に南に下がり、その子孫を洞窟へと追いやりはしたものの、これらの原住民は、実際には洞窟居住者ではなかった。彼等は、森のはずれ近くや小川の側での野営を好んだ。

63:5.5 (715.5) 彼らは、かなり早くから部分的に保護された住まいを隠すことに著しく賢明であり、睡眠のための石室、ドーム型の石の小屋を築く際にかなりの技術を示し、夜にはここに這い入った。そのような小屋への入り口は、屋根の石が最終的に所定の場所に置かれる前にこの目的のために小屋の内側に置かれていた大きい石を転がして入り口を塞いだ。

63:5.6 (715.6) アンドン族は、恐れを知らない狩り上手で、野生の実や特定の木の実を除いては、専ら肉食であった。子孫は、アンドンが石の斧を発明していたように早くに棒や銛投げを発見し、うまく利用した。ついに道具を作成する心は、器具を使用する手と一体化して機能してお

り、またこれらの古代人は、火打ち石の道具作成に非常に巧みとなった。彼らは、現代人が金、プラチナ、ダイヤモンドを求めて地の果てまでも旅するように火打ち石を求めて遠く広く移動した。

63:5.7 (715.7) アンドン部族は、後退している子孫が、火を起こす様々な方法を再三発見はしたものの50万年間で到達しなかった知能の段階を他の多くの点ではっきりと示した。

6. オナガー— 最初の真実の教師

63:6.1 (715.8) 一族の文化的、精神的状態は、アンドン族分散が延長されるにつれ約1万年間オナガーの時代にいたるまで衰退し、オナガーは、これらの部族の指揮を引き受け、平和をもたらし、初めて「人と動物への息吹を与えるもの」への崇拝に皆を導いた

63:6.2 (716.1) アンドンの哲学は最も混乱していた。彼は、火の偶然的発見から得られる大きな安らぎを理由に火の崇拝者になることはほぼ免れなかった。しかしながら、判断力は、アンドンを彼自身の発見からより優れた、神々

しい熱と光の源としての太陽へと導いたが、それはあまりにも遠過ぎたので太陽崇拝者にはならなかった。

63:6.3 (716.2) アンドン族は、早くも天候に現れる自然力—雷、稲妻、雨、雪、霰、氷—への恐怖を生じた。しかし飢餓は、初期時代に繰り返し起こる強い衝動であり、アンドン族は、主に動物を食したので、やがては動物崇拝の型を発展させた。アンドンにとって食用としてのより大きい動物が、 創造力と耐久力を象徴であった。時どきこれらの特定の大きいさまざまな動物を崇拝対象として指定することが、習慣になった。特定の動物が人気のある間、洞窟の壁にその動物の粗雑な輪郭線が描かれ、後に芸術上の継続的進歩が見られると、そのような動物の神が、様々な装飾品に刻まれた。

63:6.4 (716.3) アンドン民族は、非常に早くから部族崇拝の動物の肉を食べることを差し控える習慣をうち立てた。やがて、若者の心により適度の印象を与えるために、尊ばれた動物種の中の1個体の周りで崇拝の儀式が執り行われた。この原始の儀式は、さらに後に、子孫によるより入念な生贄の儀式へと進展した。これが、崇拝の一部と

しての生贄の起源である。この考えは、ヘブライの儀式でモーシェにより念入りなものとされ、根本的には「流血」による罪の償いの主義として使徒パウーロスにより順守された。

63:6.5 (716.4) 食糧が、これらの原始の人間の生活で極めて重要なものであったということが、オナガー、彼らの偉大な教師によりこれらの素朴な人々に教えられた祈りの中に示されている。この祈りは次の通りであった。

63:6.6 (716.5)「ああ、生命の息吹よ、この日に、我々に日々の糧をお与えください。氷の呪いから森の敵から我々を救い出し、慈悲をもって偉大なる彼方へと受け入れてください。」

63:6.7 (716.6) オナガーは、メソポタミア南部の地から北部に至る旅の道が西部に折れる滞在場所である現在のカスピ海地方のオーバンと呼ばれる集落、古代の地中海北岸に本拠地を維持した。オナガーは、自身の1神の新原理と、自身が偉大なる彼方と呼んだ来世の概念を広げるためにオーバンから遠く離れた集落に教師らを派遣した。オナガーのこれらの使者は、世界最初の宣教師であっ

た。また、最初に肉を料理する、つまり食物の調理に欠かさず火を使用する最初の人間でもあった。棒の先、また熱い石の上でも肉を料理した。後には火で大きな切れ端を炙ったが、その子孫は、ほぼ完全に生肉生活へと戻った。

63:6.8 (716.7) オナガーは98万3,323年前に(西暦1934から)生まれ、69歳まで生きた。前惑星王子時代のこのすぐれた知性と精神の指導者の業績に関する記録は、これらの原始民族からの本物の社会への組織化についての感激的な詳述である。オナガーは、効果的な部族政府を設けた。そのようなのものは、何千年もにわたる後続の世代によって達せられることはなかった。再び、惑星王子の到着まで、そのような高い精神文明は、地球にはなかった。これらの純真な人々は、原始ではあるが本物の宗教があったが、その後それは、もはや劣化していく子孫のものではなかった。

63:6.9 (717.1) アンドンとフォンタの両人は、子孫の多くと同様に思考調整者を受けていたが、それは、調整者と後見熾天使が大勢でユランチアに到来するオナガーの時代ま

でなかった。まことに、これは、原始人の黄金時代であった。

7. アンドンとフォンタの生存

63:7.1 (717.2) アンドンとフォンタ、人類のすばらしい始祖達は、惑星王子のユランチア到着宣言時点で承認され、やがてジェルーセムの公民の身分で大邸界の養成課程からやって来た。二人は、いまだかつてユランチアに戻ることは許されたことはなかったが、樹立した民族の歴史を認識している。二人は、カリガスティアの裏切りに深く悲しみ、アダームの失敗に嘆いたが、マイケルが、その最終贈与のための劇場として二人の世界を選定したという発表を受けたとき殊の外歓喜した。

63:7.2 (717.3) ジェルーセムでのアンドンとフォンタの両人は、それぞれの思考調整者と融合し、またソンタドを含む二人の子供の幾人かも同様にそうしたが、二人の直属の子孫の大半でさえ、聖霊との融合を実現したに過ぎなかった。

63:7.3 (717.4) ジェルーセム到着直後、アンドンとフォンタは、ユランチアからの時間の巡礼者を天球へ歓迎するモ

ロンチア人格と共に働くために第一大邸宅界へ帰還する許可を体制主権者から受けた。彼等は、この業務に無期限に割り当てられた。これらの啓示に関する挨拶をユランチアに送ろうとしたが、この要求は、賢明にも否定された。

63:7.4 (717.5) これが、ユランチアの全歴史、すなわちその発展、葛藤、死、全人類のたぐい稀なる両親の永遠の生存に関わる話のうちの最も雄々しく、非常に興味深い章の詳説である。

63:7.5 (717.6) [ユランチア居住の生命搬送者による提示]

論文 64
進化的人種の皮膚の色

64:0.1 (718.1) これは、約百万年前のアンドンとフォンタの時代から惑星王子の時代を経て氷河期終了時までのユランチアの進化する人間についての話である。

64:0.2 (718.2) 人類の年齢は、およそ百万年であり、その話の前半は、ざっとユランチアの前惑星王子の時代に相当する。人類の歴史の後半は、惑星王子の到着と6種類の着

色人種の出現時点に始まり、一般的に旧石器時代と見なされる期間に至るまでに相当する。

1. アンドン系原住民

64:1.1 (718.3) 原始人は、地球でのその進化上の姿をほぼ百万年前に現し、活発な経験をした。猿のような劣性部族と入り交じるという危険から本能的に逃げようとした。しかし、チベットの不毛の地の標高、つまり海抜9,000メートルのせいで東方へ移住できなかったし、また当時は東方へと拡大しインド洋に達した地中海のために西にも南にも行くことができなかった。そして、北に行くと前進する氷に遭遇した。だがより知能的集団は、更なる移動で氷に妨げられたときでさえ、また分散部族が、ますます敵意を抱くようになったときでさえ、木に住む知性の劣る毛深いいとこの中で生きるために南部に行く考えなど決して抱かなかった。

64:1.2 (718.4) 多くの宗教的感情が、この地理的状況—右には山、左には水、前には氷—に閉じ込められた環境の中で人間の最初期の無力感から芽生えた。しかし、これらの

進歩的アンドン族は、木に住む劣性の親族へ戻ろうとはしなかった。

64:1.3 (718.5) アンドン族は、人間でない親類の習慣とは対照的に森林を避けた。森林での人は、つねに劣化した。人間の進化は、戸外と　高緯度地方で進歩をなしてきた。広々とした土地での寒さと飢餓は、活動、発明、困難な状況に対処できる特質を刺激する。アンドン部族が、厳しい北方気候での苦境と窮乏の中で現在の人間の先駆者達を発展させている一方で、進歩の遅いいとこ達は、初期の共通の起源である南部の地の熱帯林を楽しんでいた。

64:1.4 (718.6) これらの出来事は、3番目の氷河期、地質学者の見積もりでは1番目に起きた。最初の2本の氷河は、北ヨーロッパでは大規模ではなかった。

64:1.5 (718.7) イギリスは、氷河期の大半はフランスと陸続きであり、一方アフリカは、後にシチリアの地峡によってヨーロッパにつながった。アンドン族移動時には、西はイギリスからヨーロッパへ、東はアジアからジャワへの続く陸路があった。しかし、オーストラリアは、再び隔

絶され、それが、さらに独自の固有な動物群の進化を際立たせた。

64:1.6 (719.1) 950,000年前、アンドンとフォンタの子孫は、遠く東と西とに移住した。ヨーロッパを通り越し西へはフランスとイギリスに行った。後の時代には、ごく最近それらの骨—いわゆるジャワ原人—が見つかった東方のジャワまで進出し、それからはタスマニア州へと旅を続けた。

64:1.7 (719.2) 西に行く集団は、知能の遅れた動物のいとこ達と自由に混ざる東に行かう共通の先祖の出である者ほどには発達の遅れた群れとあまり混濁することはなかった。これらの進歩的でない個人は、南方に漂って行き、やがて劣性部族と交雑した。後に、増加するそれらの雑種の子孫は、北に戻り急速に拡大するアンドン民族と交雑し、そのような不幸な結合が、優れた血統を確実に悪化させた。原始定住の少数者しか、息吹を与えるものへの崇拝を持続しなくなった。この初期の黎明の文明は絶滅に瀕していた。

64:1.8 (719.3) ユランチアはずっとこのようであった。前途多望な文明は、続けざまに劣化していき、優者に劣者との自由な生殖を許す愚かさによって最終的には消滅された。

2. フォックスホール民族

64:2.1 (719.4) 900,000数年前、アンドンとフォンタの工芸とオナガーの文化は、地球上から消え失せつつあった。文化、宗教、火打ち石加工さえもどん底期にあった。

64:2.2 (719.5) この時代は、非常に多くの劣性の雑種集団が、南フランスからイギリスに到着していた時期であった。これらの部族は、森林に住む猿のような生物と大規模にに入り交じっていたので、まず人間ではなかった。それらは、何の宗教も持ってはいなかったが、粗雑な火打ち石加工者であり、火を起こせる程度の知性があった。

64:2.3 (719.6) ヨーロッパではいくらか優れ、子だくさんの民族が、彼らに続き、その子孫はすぐ、北の氷河地帯から南のアルプス山脈と地中海へと全大陸に広がった。これらの部族は、いわゆるハイデルベルグ人種である。

64:2.4 (719.7) この長い文化退廃期間中、イギリスのフォックスホール民族とインドの北西のバドナン部族とが、アンドン族の幾つか伝統とオナガーの一定の文化の名残りを固守し続けた。

64:2.5 (719.8) フォックスホール民族は、最遠の西にあってアンドン文化の多くを引き継いだ。また自分達の火打ち石加工に関する知識を維持し、それを子孫、つまり古代のエスキモーの先祖に伝えた。

64:2.6 (719.9) フォックスホール民族の残骸物が、イギリスで発見された最後の物であり、アンドン族が、それらの領域に住むじつに最初の人間であった。その時、地峡はまだイギリスとフランスをつないでいた。そして、アンドンの子孫の大半の初期集落が、その初期の時代の川や海岸沿いに位置していたので、それらは、現在イギリス海峡と北海の水域下にあるが、まだイギリス海岸の水上にはまだ3個所や4個所はある。

64:2.7 (720.1) フォックスホール民族のより知的で精神的な多くの者は、人種的優越性を維持し、またその原始の宗教習慣を永続させた。これらの人々は、後にその後の血統

群体と混ざりながら、後の氷の災害後にイギリスから西に旅し現代のエスキモーとして生き残った。

3. バドナン部族

64:3.1 (720.2) 西のフォックスホール民族の外に、東ではもう一つの苦闘する文化の中心が存続した。この集団は、北西インドの高地の麓にある丘のバドナン族、すなわちアンドンの3代目の孫の部族の間にあった。これらの人々は、決して人間の生贄を実践しなかったアンドンの唯一の子孫であった。

64:3.2 (720.3) この高地のバドナン族は、森林に囲まれ、流れが横切り、獲物の豊富な広大な台地に居住していた。チベットの多少のいとこのように、粗雑な石の小屋、山腹の洞窟、半地下の通路などに住んでいた。

64:3.3 (720.4) 北の部族の氷への恐怖が、ますます増大する一方で、生まれ故郷の近くに住まう者達は、殊の外水を恐れるようになった。彼らは、アラビア半島が徐々に海洋に沈んでいくのを目撃し、また、それは何度か現れたが、これらの原始民族の伝統は、海の危険と周期的な水没の恐怖を近くにして生じた。そして、川の洪水の経験

と合わさったこの恐怖が、彼らが、住むに安全な場所として高地を求める理由を説明している。

64:3.4 (720.5) 人間と人類出現以前の様々な集団の変遷の型により近く迫る化石が、地球上のいかなる場所よりもバドナン民族の東、つまり北インドのシヴァリクの丘において見つけられかもしれない。

64:3.5 (720.6) 850,000年前、優れたバドナン部族は、劣性で動物のような隣人に対する絶滅戦争を始めた。これらの紛争地の大半の動物集団は、滅ぼされるかまたは南方の森林へと退けられた。劣性者に対するこの絶滅作戦は、その時代の丘の部族にわずかな改良をもたらした。この改良されたバドナンの血統の混血子孫が、明らかに新しい民族—ネアンデルタール人種として活動舞台に現れた。

4. ネアンデルタール人種

64:4.1 (720.7) ネアンデルタール人は、優れた戦士であり、広範囲に旅をした。それらは、徐々に北西インドの高地の中心から西のフランス、東の中国へと、それに北アフリカへさえ広がっていった。進化する有色人種の移動時代までのおよそ50万年間世界を支配した。

64:4.2 (720.8) 800,000年前、獲物は豊富であった。象やカバはもとより多くの鹿の種類がヨーロッパ中を移動した。牛は豊富であった。馬とオオカミがいたる所にいた。ネアンデルタール人は、見事な狩人であったし、フランスの部族は、最も上手い狩人に妻にしたい女性の選択を与える習慣を最初に採用した。

64:4.3 (721.1) トナカイは、その角と骨が様々に利用され、食物、衣服、また道具として役目を果たしたので、ネアンデルタール民族にとり非常に有用であった。文化はほとんどなかったが、もう少しでアンドン時代の水準に達するところまで火打ち石での仕事を大いに改良した。木製の柄に取り付けられた大きい火打ち石が、再度用いられ、斧やつるはしとして役立った。

64:4.4 (721.2) 750,000年前4番目の氷床は、かなり南への途中にあった。ネアンデルタール人は、改良された道具で北の川を覆う氷に穴をあけ、かくしてこれらの穴に近づいた魚を槍で突くことができた。これらの部族は、このときヨーロッパでの最も広範囲にわたる侵入をした氷を前に始終後退した。

64:4.5 (721.3) この時代のシベリアの氷河は、古代人に南への移動を強いて、生まれた土地へと戻し、南方へと進んでいた。しかし人類は、大いに分化してしまったので、非進歩的な類人猿の親類とのさらなる接触の危険性を大幅に減少した。

64:4.6 (721.4) 700,000年前、4番目の、ヨーロッパで最大の氷河が後退しつつあった。人と動物は北に戻りつつあった。気候は涼しく湿気があり、原始人は再びヨーロッパと西アジアで栄えた。森林は、つい最近まで氷河に覆われていた陸上を徐々に北へと広がっていった。

64:4.7 (721.5) 哺乳類の生活は、大氷河による変化はあまりなかった。これらの動物は、氷とアルプス山脈の間に横たわる細長いその地帯にとどまり、氷河の後退時に全ヨーロッパに再び急速に広がった。まっすぐな牙のある象、広い鼻をもつサイ、ハイエナ、アフリカライオンが、シチリアの地橋を越えてアフリカから到着し、これらの新しい動物は、実質的に剣歯虎とカバを絶滅させた。

64:4.8 (721.6) 650,000年前、継続的温和な気候をみた。間氷期の半ばまでには非常に暖かくなり、アルプス山脈に氷と雪はほとんどなかった。

64:4.9 (721.7) 600,000年前、氷は、その後退当時の最北端の地点に達し、数千年の間休止をした後、その5番目の南へと行程を再開した。しかし、気候変動は、5万年の間ほとんどなかった。ヨーロッパの人と動物に変化はあまりなかった。前の期間のわずかな乾燥は減少し、山岳氷河は、渓谷を遠くへ下っていった。

64:4.10 (721.8) 550,000年前、前進する氷河は、再び人と動物を南に押しやった。しかし今回人間には、アジアへと北東に延び、氷床と当時は地中海の延長である大いに拡大された黒海の間に横たわる帯状の幅の広い陸に十分な空間があった。

64:4.11 (721.9) この4番目と5番目の氷河時代、ネアンデルタール人の粗野な文化の一層の普及がみられた。しかし、ユランチアにおける新しく変更された知的生命体の型を産する試みはまるで失敗しているかのように見えるほどに実際の進歩はあまりなかった。これらの原始民族は、狩

りと戦いをし、一定期間、一定方向への改善をしたものの、全体的には優れたアンドンの先祖と比較し着実に退歩しながらおよそ25万年間さまよい続けた。

64:4.12 (721.10) 精神的には無知蒙昧のこれらの時代に、迷信深い人類の文化は、その最低水準に至った。ネアンデルタール人には、恥ずべき迷信以外実際には何の宗教もなかった。それらは、極端に雲を、とりわけ霞と霧を恐れた。自然の力への恐怖の原始宗教が徐々にあ発達し、動物崇拝は、獲物の豊富さと合わせ、道具の改良とともに衰え、これらの人々が、食糧に関しての不安を軽減して生活できるようになり、狩りの報酬としての性交は、狩猟技術改良に大いに貢献した。恐怖へのこの新宗教は、これらの自然的構成要素に潜む目に見えない力を宥める試みに、後には、不可視で未知の物理的力を静めるために人間の犠牲に導導いた。人間生贄のこの恐ろしい習慣は、ユランチアのより遅れている民族により20世紀まで永続してきた。

64:4.13 (722.1) この初期のネアンデルタール人を太陽崇拝者とはとても呼べなかった。彼らは、むしろ暗闇の恐怖に生

きた。日暮れに対し死の恐怖があった。少し月が照る限りはなんとかできたが、無月期には次第に恐怖状態になり、月を再び光り輝かせるために男らしさと女らしさの最良の個体を犠牲にし始めた。彼等は、太陽は定期的に戻るものであると早くに習得していたが、仲間の部族民を犠牲にしたので月は戻るにすぎないと推測した。犠牲の対象と目的は、民族が進化するにつれ次第に変化したが、宗教儀式の一部としての人間の生贄奉納は長く持続した。

5. 有色人種の起源

64:5.1 (722.2) 500,000年前、インド北西部の高地のバドナン部族は、別の重大な民族闘争に陥った。この冷酷な交戦状態は、100年以上も猛威を振るい、長い戦いの終了時、100家族ほどしか残らなかった。しかし、これらの生存者は、アンドンとフォンタの当時の生きていた全子孫の中では、最も知的で、好ましい者達であった。

64:5.2 (722.3) そしてこの時、これらの高地のバドナン族の中に新しく一風変わった出来事が起きた。当時その高地の北東部地域に住む男女が、著しく知能の高い子供の家族

を突然つくり始めた。これが、サンギクの家族、ユランチアの6有色人種のすべての先祖であった。

64:5.3 (722.4) サンギクのこれらの子供は、19人は仲間に勝って利口であるばかりか、日光への露出で様々な色に変わる他とは異なる傾向を示した。19人の子供うち、赤色は5人、橙色は2人、黄色は4人、緑色は2人、青色は4人、藍色は2人であった。子供の成長につれこれらの色はより著しくなり、これらの若者が後に仲間の部族民と交雑したとき、その子等は皆、サンギクの親の皮膚の色をもつ傾向にあった。

64:5.4 (722.5) 我々が、当時の惑星王子到着に注意を促し、ユランチアのサンギクの6人種を個別に考察するために、私は、いま年代を追っての物語を中断する。

6. ユランチアの6種類のサンギク人種

64:6.1 (722.6) 進化する平均的惑星には、6種類の有色人種は、1つずつ出現する。赤色人間がまず進化し、彼は、つぎの有色人種が出現するまで長らく世界を放浪する。ユランチアにおいて全有色人種の同時の、しかも1家族における出現は、とても珍しかった。

64:6.2 (723.1) ユランチアにおける初期のアンドン族の出現は、サタニアにとっても何か新しいことであった。局部恒星系の他の世界においては、意志を持つ被創造物のそのような人種に進化的人種の皮膚の色の展開はもたらされなかった。

64:6.3 (723.2) 1. 赤色人間。これらの民族は、多くの点でアンドンとフォンタよりも優れた人類の優れた見本であった。それらは、最も知的な集団であり、部族の文明と政府を発展させるサンギクの最初の子供等であった。それらはずっと一夫一婦主義であった。その混合された子孫さえ滅多に複数の婚を実践しなかった。

64:6.4 (723.3) 赤色人間は、同族であるアジアの黄色の同胞との間に深刻で長期にわたる紛争があった。初期の弓矢の発明で助けを得たが、あいにく内部抗争の傾向を先祖から強く引き継いでおり、黄色部族は、アジア大陸から退却させてしまうほどに赤色人間を弱体化させた。

64:6.5 (723.4) 8万5千年前、比較的純血の赤色人種の残党は、ひとまとめに北米を横断し、その後まもなくベーリング地峡が沈み、その結果彼等を隔離してしまった。一人の

赤色人種も二度とアジアには戻らなかった。だが、シベリア、中国、中央アジア、インド、およびヨーロッパの中に他の有色人種と混合された多くの血統を後に残した。

64:6.6 (723.5) 赤色人種は、アメリカにわたったとき自らの起源の数多くの教えと伝統を携えていった。直系の先祖は、惑星王子の世界本部における後の活動に関する連絡を取っていた。しかし、赤色人種は、アメリカ大陸到着後まもなくこれらの教えを見失い始め、知的で精神的文化におけるかなりの衰退をみた。これらの人々は、またもやすぐに同士間の戦いに猛然と陥ったので、これらの部族戦争が、この残りの比較的純血の赤色人種に迅速な絶滅をもたらすかに見えるほどであった。

64:6.7 (723.6) 赤色人種は、およそ6万5千年前、オナモナロントンが、赤色人種の先導者として、また精神の救出者として現れたとき、この大幅な後退の理由から消える運命にあるように見えた。オナモナロントンは、アメリカの赤色人種間に一時的な平和をもたらし、「偉大なる霊」の崇拝を蘇らせた。オナモナロントンは、96歳まで生

き、カリフォルニアの巨大なアカスギの木々の中に自分の本部を維持した。ブラックフット族のその後の子孫の多くが、現代にまで続いた。

64:6.8 (723.7) オナモナロントンの教えは、時の経過とともに漠然とした伝統になった。血なまぐさい戦争は再開され、この偉大な教師時代後、ほかの先導者は、自分たちに全体に平和をもたらすことはできなかった。ますますより知性ある血統が、部族間の戦いで死んだ。さもなければ、すばらしい文明がこれらの有能で知的な赤色人種により北米大陸に築かれていたことであろう。

64:6.9 (723.8) 中国からアメリカに渡ってから北の赤色人種は、後に白人に発見されるまで二度と他の世界の影響に(エスキモーを除く)接することはなかった。赤色人種が、後のアダーム系との混合による向上の機会からほぼ完全に外れたのは、いかにも不運であった。実のところ、赤色人種は、白人を統治できなかったし、進んで仕えようとはしなかった。そのような状況においては、2つの人種が混合されないならば、いずれかが消え失せる運命にある。

64:6.10 (723.9) 2. 橙色人種。この人種の傑出した特性は、構築すること、何でも、全てを形成すること、どの部族が最大の山を造ることができるかを見るためだけに巨大な石の山を積み上げさえするという風変わりな衝動であった。橙色人種は、進歩的民族ではなかったが、王子の学校から多くの利益を得るために指示を求めてそこに代表を送った。

64:6.11 (724.1) 地中海が西に退くと、まず最初に海岸線を南にアフリカへと向かったのが橙色人種であった。しかしそれらは、アフリカには決して有利な足場を確保せず、後に到着した緑色人種に絶滅された。

64:6.12 (724.2) この民族は、その最期に先んじて文化的、精神的地盤の多くを喪失した。しかし、それらの本部が、およそ30万年前ハルマゲドンにあったとき、皆の世話をしたポーシュンタの、すなわちこの不運な人種の主導者の賢明な統率力の結果、生活向上の大復活があった。

64:6.13 (724.3) 橙色人種と緑色人種間での最後の大きな闘争が、エジプトのナイル渓谷の下流地域で起きた。この長期戦は、100年間ほど繰り広げられ、その終わりには、

ほんのわずかの橙色人種が、生き残った。疲れ切ったこれらの人々は、緑色人種と後に到着した藍色人種に吸収された。しかし、人種としての橙色人種は、10万年ほど前に消滅した。

64:6.14 (724.4) 3. 黄色人種。原始の黄色部族は、狩りを捨て、定住の共同体を確立し、農業に基づく家庭生活を発達させた最初の部族であった。知的には赤色人種にいくらか劣っていたが、部族文明の促進において社会的に、集合的に、全サンギク民族よりも優れていることを示した。様々な部族が、比較的に平和に共存することを会得する友愛精神を発達させたので、黄色人種は、次第にアジアに拡大して行くにつれ赤色人種を自分達の前に追いやることができた。

64:6.15 (724.5) 黄色人種は、世界の精神本部の影響から遠のいて旅をし、いつしかカリガスティア背信に続く大きな暗黒へと陥った。しかし、およそ10万年前、シングラントンが、これらの部族の指揮を引き受け、「一なる真実」の崇拝を宣言すると、この民族間に輝かしい一時代が生まれた。

64:6.16 (724.6) 多くの黄色人種の生存は、種族間の平和に起因している。シングラントンの時世から現代中国の時代まで、黄色人種は、ユランチアの最も平和な国家の中に数えられてきた。この人種は、後に取り込まれたアダームス系の小さくはあるが、強力な遺産を得た。

64:6.17 (724.7) 4. 緑色人種。緑色人種は、それほど有能ではない原始人集団の一つであり、異なる方向での大規模な移動により大いに弱められた。分散以前これらの部族は、およそ35万年前、ファンタゾの統率の下にかなりの文化の回復を経験した。

64:6.18 (724.8) 緑色人種は、主要な3集団に分裂した。北の部族は、黄色人種と青色人種に征服され、奴隷にされ、吸収された。東の集団は、その頃のインディアン民族と合併し、生存者は、それらの中でいまだに存続している。南の民族は、アフリカに入り、そこで自分達と同程度に劣る橙色人種のいとこ達を滅ぼした。

64:6.19 (724.9) 多くの統率者は、各自が巨大な種族の血統を伝えもっていたので、2,4メートルから2,7メートルの背丈であり、両集団が、この戦いでは多くの点で互角であっ

た。緑色人種のこれらの巨漢の種族は、主にこの南方の、つまりエジプト人の国に閉じ込められた。

64:6.20 (725.1) 打ち勝った緑色人種の残党は、その後、人種分裂の核心である本来のサンギク人種から発達し、移住する最後の有色民族の藍色人種に吸収された。

64:6.21 (725.2) 5. 青色人種。青色人種は偉大な民族であった。早くに槍を発明し、その後多くの現代文明の芸術の基礎をもたらした。青色人種は、赤色人種の知能と黄色人種の魂と感情に相当するものを有していた。アダームの子孫は、後の存続する全有色人種よりも青色人種を好んだ。

64:6.22 (725.3) 初期の青色人種は、カリガスティア王子の職員である教師の説得にすぐさま反応し、反逆的な指導者達のその後の誤った教えに大きく撹乱された。それらは、原始の他の人種のようにカリガスティアの裏切りからうまれた騒動を完全に回復したわけでは決してなく、内部抗争の傾向に対しても完全に克服したわけではなかった。

64:6.23 (725.4) カリガスティアの失墜からおよそ500年後、広範囲におよぶ学習復活と原始的宗教—それでも本物で有益である—が、現れた。オーランドフが、青色人種の中の偉大な教師となり「最高なる酋長」という名の下に多くの部族を真の神の崇拝へと引き戻した。アダーム系の混血者によりはなはだしく高められる後の時代までは、これが、青色人種にとっての最大の進歩であった。

64:6.24 (725.5) 青色人種は、最近までヨーロッパに生残していたので、ヨーロッパ人の旧石器時代についての研究と探検が、これらの古代の青色人種の道具、骨、および工芸品を掘り出すのに大きく係わりがある。ユランチアのいわゆる白色人種は、最初に黄色と赤色のわずかな混合により変更され、後に紫色人種のかなりの部分を吸収することで大きく向上されたこれらの青色人種の子孫である。

64:6.25 (725.6) 6. 藍色人種。全サンギク民族のなかで赤色人種が、最も高度であったように、黒色人種は、最も進歩的でなかった。黒色人種は、高地の自分達の家からの最後の移住者達であった。アフリカに旅をし、その大陸を占

有し、代々奴隷として強制的に連れ去られた時を除き、以来ずっとそこに留まった。

64:6.26 (725.7) 藍色民族は、アフリカに孤立し、赤色人種同様アダーム系の注入から得られたであろう人種向上を少ししか、あるいは全然受けなかった。藍色人種は、アフリカに離れており、すばらしい精神の目覚めを経験したオーヴォノンの時代まであまり向上しなかった。オーヴォノンによりはっきりと示された「神の中の神」を後にほぼ完全に忘れている間も、知られざるものへの崇拝願望を完全には失わなかった。少なくとも、崇拝の形態を数千年前まで維持した。

64:6.27 (725.8) これらの藍色人種は、その後進性にもかかわらず、地球の他の人種同様に天の力の前にはまったく同じ立場にある。

64:6.28 (725.9) 様々な人種間での激しい戦いの時代ではあったが、惑星王子の本部近くでは、ルーキフェレーンスの反逆勃発によるこの政権の深刻な分裂時までそれほど立派な世界人種の文化上の征服も達成されてはいなかったも

のの、より進んだ、より最近の教えを受けた集団が、かなり睦まじく一緒に生活していた。

64:6.29 (726.1) これらの異なる民族は皆、時おり文化的、精神的復活を経験した。マンサンツは、惑星王子後の偉大な教師であった。しかし、全体の人種に著しく影響をおよぼし、刺激を与えた傑出のそれらの指導者と教師にだけ言及する。時の経過につれ、多くの、　あまり優秀ではない教師が、異なる地域に現れた。彼らは、全体としては、文化的開化の全壊阻止につなげる感化力の総体的結果に大いなる貢献をした。特にカリガスティアの反逆とアダームの到着の間の長く暗い時代に。

64:6.30 (726.2) 空間世界における3種の有色人種、あるいは6種の有色人種の発展計画のための望ましくて満足できる理由が多くある。ユランチアの死すべき者は、これらの理由の全てを感謝する立場に完全にはいないかもしれないが、我々は次への注意を促したい。

64:6.31 (726.3) 1. 多様性は、幅広い自然淘汰の働く機会を欠くことはできない。優れた血統の格差的生存。

64:6.32 (726.4) 2.これらの異なる人種が優れた遺伝要素の携行者であるとき、さまざまの民族との交配からのより強く、　より良い人種は、いくらでもある。そのような結合している民族が、優れたアダーム系との徹底的混合によりその後効果的に高められていたならば、ユランチアの人種は、初期のそのような融合による恩恵を受けていたことであろう。ユランチアでのそのような実験の試みは、現在の人種状況のもとでは非常に悲惨なものであろう。

64:6.33 (726.5) 3. 競争は、人種の多様性により健康的に刺激される。

64:6.34 (726.6) 4. 人間の寛容と利他主義の開発には、各人種内の人種とその集団の状況差が不可欠である。

64:6.35 (726.7) 5. 人類の均質性は、進化する世界の民族が比較的高い精神開発の水準に到達するまでは望ましくない。

7. 有色人種の分散

64:7.1 (726.8) サンギク族の有色の子孫が増え始め、隣接する領土への拡大の機会を摸索しているとき、5番目の、地

質学上は3番目の氷河の南側の移動は、ヨーロッパとアジアへむけてかなりの前進をした。早期のこれらの有色人種は、その起源である氷河時代の厳しさと苦難により法外に試練を受けた。この氷河は、アジアでは大規模であり、東アジアへの移動は、何千年もの間断ち切られるほどであった。アラビア隆起の結果としての地中海のその後の後退まで、それらは、アフリカに達することはできなかった。

64:7.2 (726.9) その結果、異なる人種間で初期に生じた独特ではあるが自然な反感にもかかわらず、これらのサンギク人種が、山麓の丘陵地帯に広がり、多少なりとも入り混じったのは、およそ10万年間であった。

64:7.3 (726.10) インドは、惑星王子の時代とアダーム時代の間にかつて地球上で見られる最も国際的集団の発祥地となった。しかし、この混合が、緑、橙、藍色の人種を非常に多く含むことになったのは不運であった。これらの二次的サンギク民族は、南方の地での生活が容易で好ましいと分かり、その多くが後にアフリカにわたった。一次的サンギク民族は、つまり優れた人種は、熱帯地方を避

け、赤色人種はアジアへと北東に行き、それに黄色人種が密接に続き、一方青色人種はヨーロッパへと北西に移動した。

64:7.4 (727.1) 赤色人種は、インドの高地を迂回し、アジア北東部すべてを占有し、後退する氷のすぐ後について一足早く北東に移住し始めた。黄色部族は、アジアから北アメリカへと追い出されたが、その後をしっかりと付いていった。

64:7.5 (727.2) 赤色人種のうちの比較的純系の生存者がアジアを見限ったとき11部族が存在し、それらは7,000人強の男女、および子供等であった。これらの部族は、複数人種の祖先をもつ3小集団を引き連れており、そのうちの最大の混交は、橙色と青色人種の組み合わせであった。この3集団は、赤色人種と全面的に親しくしたわけではなく、早くにメキシコや中米へと南に旅をし、後にそこで黄色と赤色との混血の小集団が加わった。これらの民族のすべては、姻戚関係を結び、純系の赤色人種よりも非戦闘的で、新しい融合的人種を樹立した。この合併した人種は、5,000年のうちにそれぞれにメキシコ、中

米、南米の文明を確立し、3集団に分散した。南米へ派生したものは、アダームの血とのかすかな接触を経験した。

64:7.6 (727.3) 初期の赤色人種と黄色人種は、アジアにおいてある程度混ざり合い、この組み合わせからの子孫が、東へ、そして南の海岸に沿って旅をし、やがて急速に増加する黄色い人種に半島や近くの島へと追いやられてしまった。これらの子孫は、現代の褐色人種である。

64:7.7 (727.4) 黄色人種は、東アジア中央領域を占有し続けた。6有色人種のすべてが、かなりの数で生き残った。黄色人種は、時おり民族戦争をしたが、赤色、緑色、橙色人種がしたような絶え間のない、残忍な撲滅戦争を持続しなかった。これらの3人種は、とうとう他人種の敵に絶滅される前に、実質的には自滅した。

64:7.8 (727.5) ヨーロッパにおける5番目の氷河は、遠く南に広がることはなかったので、北西へと移住する道が、これらのサンギク民族に部分的に開かれた。青色人種は、氷の後退の際、他の人種集団のいくつかと共に、アンドン部族の古道に沿って西へ移住した。青色人種は、大陸の

大半を占領し、間断のないうねりでヨーロッパに侵入した。

64:7.9 (727.6) 青色人種は、まもなく初期の、共通の先祖であるアンドンのネアンデルタールの子孫にヨーロッパで遭遇した。この昔のヨーロッパのネアンデルタール人は、氷河によって南へと東へと追いやられ、その結果、侵入してくるサンギク部族のいとこに速やかに遭遇し吸収する位置にいた。

64:7.10 (727.7) サンギク部族は、一般的に、また最初は、アンドン系の初期の平原住民の劣化した子孫よりも知能が高く、あらゆる点ではるかに優れていた。サンギク部族のネアンデルタール民族との混交は、 旧来の人種の直接的改良のきっかけとなった。この注入こそが、ネアンデルタール民族にあの著しい改良をもたらした、知性を増す部族の間断のないうねりとなって東からヨーロッパへ押し寄せたサンギクの、とりわけ青色人種の血統であった。

64:7.11 (727.8) 次の間氷期、この新ネアンデルタール人種は、イギリスからインドへと広がっていった。昔のペルシア

半島に残された青色人種の生存者は、後に一定の他の人種と、主には黄色人種と混合した。こうしてできた、後にはアダームの紫色人種によりいくらか高められた混合人種は、現代のアラブ人の浅黒い遊牧民的部族として持続してきた。

64:7.12 (728.1) 現代人の中のサンギクの祖先の見分けにおける全努力は、アダーム系の血統のその後の混合によるその後の種族改良を考慮に入れなければならない。

64:7.13 (728.2) 優れた人種は、北方、または温和な気候を求めていき、一方、緑色人種、橙色人種、藍色人種は、インド洋から西方に後退する地中海とを切り離した最近隆起した地橋を渡り、相次いでアフリカへと引き寄せられていった。

64:7.14 (728.3) 人種起源の中心地から移住するサンギク民族の最後の者達は、藍色人種であった。緑色人種が、エジプトで橙色人種を抹殺しようとして自らを大いに弱めていた頃、パレスチナから海岸沿いに南への黒色人種の大移動が始まった。後のエジプト侵略の際、これらの肉体的に強い藍色人種は、ただ数の力だけで緑色人種を絶滅さ

せた。これらの藍色人種は、橙色人種の残りとかなりの緑色人種の系統を吸収し、一定の藍色部族は、この人種的合併によりかなり改良された。

64:7.15 (728.4) エジプトは、まず橙色人種、それから緑色人種、続いて藍色(黒色)人種、さらに後には、藍色、青色、改質された緑色の雑種の人種に支配されたようである。しかし、アダームが到着するずっと前に、ヨーロッパの青色人種とアラビアの混合人種が、藍色人種をエジプトから、そしてアフリカ大陸の遠く南に追い出した。

64:7.16 (728.5) サンギク族移動の終わりが近づくにつれ、緑色と橙色の人種はいなくなり、赤色人種は北アメリカ、黄色人種は東アジア、青色人種はヨーロッパを保持し、藍色人種はアフリカに引き寄せられていた。インドは、二次サンギク人種の血をもつものを宿し、また、褐色人種(赤色と黄色の混合)は、アジア海岸沖の島々を制する。かなり優れた素質を持つ混交人種は、南米高地を占有している。より純血のアンドン系は、ヨーロッパの極北地域、アイスランド、グリーンランド、それに北米の北東部に住んでいる。

64:7.17 (728.6) 最遠の氷河の進出期間、最西端のアンドン部族は、海に追い込まれるほどの目にあった。アンドン部族は、長年イギリスの現今の島の南側の細長い土地で生活した。そして6番目の最後の氷河が遂に姿をみせたとき、海に連れていくように追い立てたのがこれらの繰り返しの氷河についての言い伝えであった。アンドン部族は、最初の海洋冒険家であった。それらは、小舟を造り、恐ろしい氷の侵入のないことを望み、新しい陸地捜しに取り掛かった。そして、ある者はアイスランド、他の者はグリーンランドに達したが、圧倒的多数は、大海原で飢餓と渇きで死んだ。

64:7.18 (728.7) 8万年余り前、赤色人種の北米の北西進入直後、北の海の氷結、それにグリーンランドにおける局部的氷原の前進が、ユランチア原住民のこれらのエスキモーの子孫をより良い土地、新しい家探しへと追い立てた。そして、子孫達は、当時北米の北東部の陸からグリーンランドを分離していた狭い海峡を無事に横断してこれに成功した。それらは、赤色人種のアラスカ到着からおよそ2,100年後に大陸に達した。青色人種混血の一部

が、次に西に旅し、後のエスキモーと混合し、この結合は、エスキモー部族にとりわずかに有益であった。

64:7.19 (728.8) およそ5,000年前、インディアン部族と孤立するエスキモー集団との遭遇の機会が、ハドソン湾の南東の海岸であった。2つの部族は、互いの意思伝達に困難を感じたものの、すぐに姻戚関係をもち、これらのエスキモーは、その結果、最終的には数の多い赤色人種に吸収された。そして、これが、北米赤色人種にとっての他の人間の血統との接触、つまり白人が、たまたま大西洋海岸に初めて着陸した約1,000年前まで、の最後であった。

64:7.20 (729.1) これらの早期の時代の苦闘は、度胸、勇気、武勇さえの特徴がある。我々は皆、あなた方の初期の先祖の立派で飾らない特性の非常に多くが、後の時代の人種では失われたことを遺憾に思う。我々は、前進する文明の多くの改良点の真価を評価する傍らで、あなたの初期の先祖のもつ、しばしば壮大さと崇高さに近似した、すばらしい粘り強さとずば抜けた献身の欠如を淋しく思う。

64:7.21 (729.2) [ユランチア居住の生命搬送者による提示]

論文 65
進化に対する過剰管理

65:0.1 (730.1) 基礎的進化の物質生命—心以前の生命—は、主たる物理的管理者と生命搬送者の活発な奉仕と関連する熟練の７精霊の生命分与活動の明確化である。調和して働くこの三重の創造性機能を受けた結果、生物体の心のための物理的容量—外的環境刺激と、後には、内的刺激への、生物体の心自体からくる影響への知的な反応のための物質的仕組み—には発展がある。

65:0.2 (730.2) その時、生命の増殖と進化には異なる3段階がある。

65:0.3 (730.3) 1. 物理的エネルギーの領域—心の可能性の増殖。

65:0.4 (730.4) 2. 精神の補佐の心の働き—精神の可能性に影響を与えている。

65:0.5 (730.5) 3. 死すべき者への精神贈与—思考調整者贈与において最高点に達する。

65:0.6 (730.6) 生物体の環境への反応における機械的で教育不可能な段階は、物的管理者の領域である。補佐の心-精神は、適応性があり、あるいは非機械的で教育可能な心の型— 経験から習得できる有機体のそれらの反応の仕組み—を作動させ、規制する。そして、精神補佐が、このようにして心の可能性を操るように、生命搬送者も、進化過程の環境状況に人間の意志—神を知る能力と神崇拝を選ぶ力—出現のまさしくその時点まで少なからぬ任意の調整を行うのである。

65:0.7 (730.7) 生命搬送者、物理的管理者、精神補佐の統合的機能こそが、棲息界での生物進化の過程を条件づけるのである。そして、これが、—ユランチア、または他所において—進化が、なぜ常に意図的であり、決して偶然でないかという理由である。

1. 生命搬送者の機能

65:1.1 (730.5) 生命搬送者には、ごくわずかの被創造物の型しか持っていない人格変容の可能性が贈与されている。局部宇宙のこれらの息子達は、存在体の多様な3局面で機能することができる。彼らは、通常は中自分たちの出自

である中間相の息子として自らの義務をはたす。しかし生命搬送者は、そのような存在舞台において物理的エネルギーと物質粒子の加工者として電気化学の領域で機能することは到底できなかった。

65:1.2 (730.6) 生命搬送者は、次の3段階での機能が可能であり、機能する。

65:1.3 (730.7) 1. 電気化学の物理的段階

65:1.4 (730.8) 2. 準モロンチア存在体の通常の中間相

65:1.5 (730.9) 3. 高度な半精神段階

65:1.6 (731.1) 生命搬送者は、生命着床準備にかかわる際、またそのような仕事のための場所選択後に、生命搬送者変成の大天使委員会を召集する。この集団は、物的管理者とその仲間を含むさまざまな人格の10系列から成り、ガブリエルの命令と日の老いたるものの許可のもとにこの立場で行動する大天使長が、取り仕切る。これらの存在体が適切に回路化されると、かれらは、電気化学の物理段階で意志がすぐさま機能できるのと同様に、生命搬送者においてそのような変更をもたらすことができる。

65:1.7 (731.2) 生命伝播に関わる超物質力は、生命の型が決定され、また正式に物質組織が完成されると、直ちに活動的になり、生命が存在にいたる。その上、生命搬送者が、人格存在の正常な中間相に戻ると、新型の生きものを構成する—創造する—ための全能力を取り去られているにもかかわらず、生きている編成単位を巧みに操り、進化する有機体をその状態の中で巧みに扱うことができる。

65:1.8 (731.3) 生物進化が一定の進路をたどり、人間の型の自由意志が、最高度の発達をしている生物に現れると、生命搬送者は、惑星を去るか、放棄の誓約をしなければならない。すなわち、生物進化過程への更なる影響およぼす試みすべてを差し控えると誓約しなければならない。そして、進化したばかりの意志をもつ被創造者の育成を任される者達への未来の助言者として惑星に残ることを選択する生命搬送者が、そのような誓いを自発的に立てると、系統君主の権威とガブリエルの許可を得て、宵の明星の議長により12名からなる委員会が召集される。これらの生命搬送者は、そこで直ちに、人格存在の第3相—存在体の準精神段階—に変成される。私は、アンド

ンとフォンタの時代以来ずっとユランチアでこの3番目の相で機能している。

65:1.9 (731.4) 我々は、宇宙が命と光に落ち着く時を、我々が完全に精神的でありうる存在体の第4段階というものを待ち望んでいるのだが、いかなる方法でこの魅力ある進歩的状態に達し得るのかは我々には一度として明らかにされたことはない。

2. 進化の全景

65:2.1 (731.5) 地球創造の海草から君臨への人間上昇の物語は、実に生物の葛藤と心の生存の冒険物語である。人間の原始の先祖は、古代の内海の広大な海岸線の停滞し、かつ温水の湾や潟の海底にある文字通り、粘液であり、軟泥であり、生命搬送者達は、ユランチアの他ならぬその水中に独立する3つの生命を樹立したのであった。

65:2.2 (731.6) 動物に似たどっちつかずの有機体をもたらした画期的な変化に登場した初期の海洋植物のほんのわずかな種が、今日現存している。海綿類は、野菜からゆるやかな変遷を経て動物が生ずるまでのそれらの有機体である初期中間型の中の生存体の1つである。これらの早期

の変遷型は、現代の海綿類とは同じではないが、酷似していた。真の境界線の有機体—植物でも動物でもない—であったが、最終的には真の動物の生命の型の進化に導いた。

65:2.3 (732.1) 細菌は、つまり極めて原始的性質の単純な植物は、生命の黎明以来ほとんど変化していない。その寄生行動においてはある程度の退歩さえ示している。葉緑素形成能力を失い、多かれ少なかれ寄生的になった植物である菌類の多くもまた、進化において後退の動向を呈している。病気を引き起こす細菌とその補助的ウイルス体の大半が、実際には変節の寄生菌類のこの群れに属する。広大な全植物界は、介在する時代の間、細菌が子孫である先祖から進化してきた。

65:2.4 (732.2) 動物生態の中の高等原生動物の型は、すぐ現れ、しかも突然であった。そして、これらの遠い昔から典型的な単細胞動物の有機体であるアメーバは、あまり変更のないまま続いて来た。アメーバは、生物進化において最後の、最大の達成であったときのように、今日、楽しんでいる。植物界にとっての細菌である物が、動物

創造にとってのこの極小生物とその原生動物のいとこ達にあたるのである。それらは、その後の発達の失敗とともに、生命分化における第一の初期進化段階の生存を代表している。

65:2.5 (732.3) 初期の単細胞動物の型は、間もなく、まずヴォルヴォックスの形態で、やがてヒドラと海月の種類に似た形で集団で結びついた。なお後になって、ヒトデ、海ユリ、ウニ、ナマコ、ムカデ、昆虫、クモ、甲殻類、それに密接に関係づけられたミミズとヒルの集団が進化し、これにすぐ軟体動物—カキ、蛸、およびカタツムリ—が、続いた。何百もにおよぶ種類が介在し滅びていった。長い、長い戦いを乗り切った物に限って言及した。そのような非進歩的被検物は、後に出現する魚科と共に、今日、初期の下等動物の固定型、つまり進歩しなかった生命の系譜の支系を代表する。

65:2.6 (732.4) こうして、最初の脊椎動物、魚科出現の舞台準備が整った。この魚科から、2個体の独自の変形物、カエルとサンショウオが発生した。そして、やがては人間

自身に至る動物生態における進歩的分化を始めたのが、カエルなのであった。

65:2.7 (732.5) カエルは生存する人類先祖の最初期の1つであり、遠い昔と全く同じように今日生存しているものの進歩もなかった。カエルは、現在地球上に生活する黎明期の人種の唯一の祖先である。人類には、カエルとエスキモーの間に生残する祖先は何もない。

65:2.8 (732.6) カエルは、実質的には消滅しているが、滅びる前に全鳥類と数々の哺乳動物系列をもたらした重要な動物群の爬虫類を生み出した。

65:2.9 (732.7) おそらく人間出現以前の全発展の中の唯一最大の飛躍は、爬虫類が鳥になった時に果たされた。今日の鳥の型—鷲、アヒル、鳩、駝鳥—は、全て大昔の巨大な爬虫類の系統であった。

65:2.10 (732.8) カエル科の子孫である爬虫類世界は、現存する4門に代表される。そのいとこのワニや亀を伴う蛇やトカゲの非進歩的な2門。鳥科の部分的に進歩的1門。それに、4門目が、哺乳動物の先祖と人類の直系子孫。しか

し、長らく軌道を逸脱はしているものの、一時的な爬虫類のその巨大な質量は、象とマストドンに蘇り、一方その独特の形状は、跳ねるカンガルーに永続した。

65:2.11 (733.1) 魚類を最後に、14門だけがユランチアに出現し、鳥類と哺乳動物以来新種は、進化しなかった。

65:2.12 (733.2) 胎盤の哺乳動物が突然生じたのは、肉食性の習慣にもかかわらず比較的大きい脳を持つ敏捷な小爬虫類の恐竜からであった。これらの哺乳動物は、急速に進化し、しかも多くの異なる種類で、現代の普通種をもたらしたばかりでなく、鯨や海豹のような海洋型へと、そして蝙蝠族のような空中操縦者へと進化していった。

65:2.13 (733.3) 人間は、主として古代の東西の保護された海の西側の生命着床に遡る高等哺乳動物からこうして進化した。東と中央の生物集団は、早くから動物存在の原人の水準到達に向かい順調に進歩していた。しかし、東側の生命定置の中心は、人間の可能性を取り戻す力を永遠に奪い取られた細菌原形質のその最高の型の度重なる、しかも取り返しのつかない損失を受けて、時代の経過につ

れ原人の満足できる知的状態水準に至ることができなかった。

65:2.14 (733.4) この東側の集団における進化に向けての心の可能性の質は、他の2者には断然劣っていたので、生命搬送者は、進化する生命のこれらの原人の下等種族を、上司の同意を得てさらに制限するように環境を操作した。これらの劣る生物集団の除去は、どう見ても偶然のようであったが、現実には全く意図的であった。

65:2.15 (733.5) 知能の進化的展開の後半、人類のキツネザルの先祖は、他の領域でよりも北アメリカにおいてはるかに進歩した。ゆえのそれらは、西側の生命着床の活躍舞台からベーリングの地峡へと、そしてアジア南西の沿岸を下がり移住へと導かれ、そこで、発展し、中央の生命集団の一定種族の付加による恩恵を受け続けた。その結果、人は、種族的には東と中央の特定の生命から、地域的には中近東の中心部で進化した。

65:2.16 (733.6) ユランチアに植えつけられた生命は、かくのごとく人間自身がまず現れ、その多事な惑星での経歴を始める氷河期まで進化した。また、地球氷河期のこの原始

人の出現は、ただの偶然ではなかった。それは計画的であった。氷河時代の苦難と気候上の厳しさは、途方もない生存贈与と頑丈な人間の型の所産の促進目的においてあらゆる点で適合した。

3. 進化の促進

65:3.1 (733.7) 現代人の心に、初期の進化過程での明らかに珍妙で異様な多くの出来事を説明することはとてもできない。意味深長な計画が、外観上奇妙なこれらの生き物の進化のすべてに作用はしていたが、一度工程が始まってしまうと、我々には任意に生命の型の開発を妨げることは許されていない。

65:3.2 (733.8) 生命搬送者は、可能な限りの天然資源を用い、また生命実験の進展過程を高めるありとあらゆる思いがけない情況を利用するかもしれないが、植物進化、あるいは動物進化のいずれをも無意識に干渉したり、その行為や過程を任意に操ることは我々には許されてはいない。

65:3.3 (733.9) ユランチアの死すべき者には、1匹のカエルの可能性として有した原始のカエルの発達により進化してき

たこと、そしてこの上昇する遺伝子が、ある特定場面において辛うじて消滅を逃がれたということを知らされてきた。だがこの際、人類の発達が、事故により終結されたと推論してはいけない。我々は、多くの様々な型に導かれていたはずの少なくとも1,000種の異なる、しかも遠隔地にいた生命の変異種族の原人進化をまさしくその瞬間観測し、促進していたのである。前の2つの遺伝的性質は保持のための我々の全努力にもかかわらず滅びてしまっており、この特有の先祖のカエルは、我々の3番目の選択を意味した。

65:3.4 (734.1) 子を持つ前のアンドンとフォンタの損失でさえも、人間の進化を遅らせたであろうが、それを防ぐことはできなかったであろう。その後のアンドンとフォンタの出現後と動物の生命からの人間の変異する可能性が尽きる前に、ある種の人間の進化の型が達成され得る少なくとも好ましい7,000の種族の発達があった。そして、これらのより良い群体の多くが、次には拡大する人類の様々な支系によって同化された。

65:3.5 (734.2) 物質の息子と娘が、すなわち生物学上の改良に努めるもの達が、惑星到着のずっと以前、進化する動物種からの人間の可能性は使い果たされていた。動物のこの生物状態は、補佐精神起動の3相の現象により生命搬送者に明らかにされ、それは、原人個人の変異体の可能性の起始となるすべての動物の可能性の枯渇に同時に、自動的に起こる。

65:3.6 (734.3) ユランチアの人類は、いまいる人間種族と一緒に人間進化のその問題を解決しなければならない。原人からはこれ以上の人種は、これから先発展することはないであろう。しかし、この事実は、まだ人種に内在する進化の可能性を育成する知能が、人間発達のはるかに高い水準にいたる可能性を排除するものではない。我々生命搬送者が、人間の意志の登場前に生命遺伝子を育くみ、保護にむけてしていることを、人は、そのような出来事の後や、我々の進化への活発な参加からの発退役後に、人間自らのためにしなければならない。概して、人の進化の運命は、自身の手中にあり、科学的知性は遅かれ早かれ、抑制されない自然淘汰と偶然的生存の無作為の働きに取って代わらなければならない。

65:3.7 (734.4) 進化の育成にかかわる議論関して、あなたは、先の長い未来に、いつか生命搬送者の軍団に配属されるかもしれないとき、生命の管理と移植の計画と手法において数多くの十分な申し出での機会をえたり、可能な改良を何でもするということを指摘しても間違いではなかろう。忍耐して待ちなさい。もし名案が、あなたにあるならば、もし宇宙のあらゆる領域の管理のためのより良い方法が、あなたの心に豊富にあるならば、あなたは、確かに来る時代に同僚と管理者仲間にそれらを提示する機会をもつことになるであろう。

4. ユランチアの冒険

65:4.1 (734.5) ユランチアは、生命実験世界として我々に割り当てられたという事実を見落としてはいけない。我々は、この惑星で、ネバドン生命の型からのサタニアへの適合性の60回目の変更と、可能な改良を試みたし、また記録には、頻繁かつ有益な生命標準型の変更を成したとある。具体的に言うと、我々は、いつまでもずっと全ネバドンに役立つ少なくとも生命変更にかかわる28の機能に関してユランチアで良い結果を出し、満足のいくように明示してきた。

65:4.2 (735.1) いかなる世界での生命の確立というものは、試されなかったり、知られていなかった何かを試みるという意味の実験には基づいていない。生命の進化は、これまで進歩的で、特異で、可変的な方法であったが、決して出鱈目で抑制のない、しかも完全に行き当たりばったりの実験的なものではない。

65:4.3 (735.2) 人間の生命の多くの特徴は、人間存在の現象が知的に計画されているということ、生物進化が単なる宇宙の偶然ではないという多くの証拠を示している。細胞は、活発な細胞が傷つけられると、傷の回復を容易にする特定物質の分泌をすぐに始められるように隣接する正常な細胞を刺激し活性化するためにある化学物質を合成する能力をもつ。同時に、これらの正常で、しかも損なわれていない細胞は増殖し始める。つまり事故により破壊されてしまったかもしれない同種のいかなる細胞も、交換のために実際に新細胞創生にとりかかる。

65:4.4 (735.3) 傷の回復と細胞増殖に関するこの化学作用と反応は、10万以上の相と性質を有する可能な化学反応と生物的影響の対応策の生命搬送者による選択を示してい

る。最終的にユランチアの生命実験に対するこの対応策におさまる前に、生命搬送者による50万以上もの明確な実験が、実験室で行なわれた。

65:4.5 (735.4) これらの癒しの化学物質についてさらに知る時、ユランチアの科学者は、疾病治療においてより効果をあげるであろうし、特定の深刻な病気の抑制に関し間接的にさらに知るであろう。

65:4.6 (735.5) 生命がユランチアに確立されて以来、生命搬送者は、別のサタニア界で導入されてきたようにこの治療方法を改良してきており、ゆえにさらなる鎮痛と関連づけられた正常な細胞の増殖能力をよりよく抑制する。

65:4.7 (735.6) ユランチアの生命実験には多くの独自の特徴があるが、顕著な2つの出来事は、6有色人種の進化に先立つアンドン人種の出現と、１家族内でのサンギク変異体の後の同時出現であった。ユランチアは、サタニアにおいて6有色人種が同じ人間家族から出た最初の世界である。それらは、通常、現人の動物群体の中の単独変異から様々な種族として起こり、だいたい1人種ごとに地上

に現れ、赤色人種に始まり、その色を藍色に譲り渡しつづけ、その後長期にわたり他の人種が出現する。

65:4.8 (735.7) 進展のもう一つの際立つ変異は、惑星王子の遅い到着であった。王子は、原則として意志の進展とほとんど時を同じくして惑星に現れる。もしそのような計画が実行されていたならば、カリガスティアは、6つのサンギク人種の同時の出現でもあるおよそ50万年後どころではなく、アンドンとフォンタの生存期間中にさえユランチアに来ていたかもしれない。

65:4.9 (735.8) 惑星王子は、普通の棲息界においてアンドンとフォンタの出現時に、時にはその後に生命搬送者の要求を認めていたことであろう。しかし、ユランチアが生命変更惑星に指定されていたことから、事前合意によってメルキゼデクの観察者、数にして12名、、が、相談役として、また惑星王子のその後の到着までの惑星の監督者として生命搬送者へ向けられた。これらのメルキゼデクは、アンドンとフォンタが人間の心に思考調整者を宿らせる決断をしたときにやって来た。

65:4.10 (736.1) サタニアの生命の型を改良するという生命搬送者のユランチアでの努力が、明らかに無用な多くの変遷生命の型の生産を必然的にもたらした。しかし、既に蓄積された利得は、ユランチアの標準的生命設計の変更を正当化するに足りるのである。

65:4.11 (736.2) 我々の意志は、ユランチアの進化的生命における意志の早期の顕現をもたらすということであり、我々はそれに成功した。意志は、大抵は有色人種が長い間生活するまで現れず、通常、まず赤色人種の優れた型の中に現れる。着色人種出現以前に人間型の意志が現れたのは、サタニアではあなたの世界が唯一の惑星である。

65:4.12 (736.3) にもかかわらず、我々は、最終的に人類の哺乳類の先祖をもたらした遺産要素のその組み合わせと関連性に備える努力において、数百も数千もの他の、また多少なりとも無用の遺産要素の組み合わせと営みを可能にする必要性に突き当たる。一見したところでは奇妙な我々の努力からのこの副産物の多くが、人が惑星の過去を研究していくとき、その注視に出合うのは確かであり、また、私は、これらのうちのあるものは人間の限り

ある見地にはどれほどか不可解であるに違いないとよく理解できるのである。

5. 生命進化の盛衰

65:5.1 (736.4) ユランチアの知能の優れた生命を変更する我々の特別な努力が、我々の統制し切れない悲惨な堕落—カリガスティアの裏切りとアダームの不履行—により不利な立場に追いやられたということは生命搬送者にとっての後悔の源であった。

65:5.2 (736.5) この生物の冒険全体を通じての我々の最大の失望は、そのような広範囲にわたる予想外の規模での寄生虫細菌の前葉緑素段階へのある原始植物の逆戻りから生じた。植物進化におけるこの偶発性は、高等哺乳動物に、特に傷つき易い人類に多くの苦痛をともなう病気を引き起こした。この当惑する状況に直面したとき、アダームの生命原形質のその後の混合が、結果として生じる混合人種への抵抗力を補強するほどまでに、それが実際に植物型の有機体に引き起こされたすべての病気に免疫をもたらすであろうということが分かっていたので、我々は、伴う困難を若干軽視した。しかし、我々の望み

は、アダームの不履行の不幸のために失望の運命へと追いつめられた。

65:5.3 (736.6) ユランチアと呼ばれるこの小世界を含む宇宙の中の宇宙は、単に我々の賛同を得ないばかりか、我々の都合にそぐわない、ましてや我々の気まぐれな考えや好奇心を満足させるような扱いをしてはいない。宇宙管理を担う賢明で全能の存在体は、疑う余地もなく、自らが何をしているかを確かに知っている。したがって、叡知の統治、力の支配、進歩の前進との我慢強い待機と心からの協力を得ることは、生命搬送者に適しており、人間の心に相応しい。

65:5.4 (736.7) もちろん、ユランチアにおけるマイケルの授与といったような苦難への報酬はある。しかし、この惑星の後の天の監督は、そのような考のすべてのはともかくとして、人類進化の究極的勝利において、また我々の本来の計画と生命の型の最終的擁護において全面的な確信を表明する。

6. 生命の進化の方法

65:6.1 (737.1) 移動物体の正確な位置と速度を、同時に正確に測定することは不可能である。いずれの測定のいかなる試みも、必然的に他方に変化をもたらす。同じ類いの矛盾がは、原形質の化学分析に着手するとき人に対峙する。化学者は、死んだ原形質の成分を明らかにはできるが、生きた原形質の物理的組織も運動性能のいずれも見分けられない。科学者は、常に生命の秘密により近づくであろうが、それを分析するために原形質を殺さなければならないという理由だけでは、決してそれを見つけないであろう。死んだ原形質は、生きた原形質と同じ重さであるが、同じではない。

65:6.2 (737.2) 生物と存在体には、適合の本来の贈与がある。あらゆる植物、または動物細胞には、つまりあらゆる生物—物質的、あるいは精神的—には、環境調整、生物的適合、および増大された生命実現における絶えず増大する完全性到達への飽くことのない渇望がある。すべての生き物のこの果てしない努力は、その内部の完全性のための生まれながらの努力の存在を証明している。

65:6.3 (737.3) 植物進化における一番重要な一歩は、葉緑素を作る能力の開発であり、第2の進歩は、胞子の複雑な種子への進化であった。胞子は、再生因子として最も効率的であるが、種子に固有の多様性と多能性の発展性に欠けている。

65:6.4 (737.4) 最も実用的で複雑な出来事の1つは、高等動物の型の発展において酸素を運ぶものと二酸化炭素除去の二役を演じる循環血球中の鉄の能力開発にあった。そして赤血球のこの性能は、いかにして進化している有機体が、その機能を異なる、あるいは変化する環境に適合させることができるかを例証している。高等動物は、人を含み、生体細胞に酸素を運ぶと同時に、効率的に二酸化炭素を取り除く赤血球中の鉄の作用で自らの組織に酸素を送る。しかし、同じ目的に適うように他の金属を用いることができる。コウイカはこの機能に銅を使い、ホヤ貝はバナジウムを利用する。

65:6.5 (737.5) そのような生物の調整の継続が、 ユランチアの高等哺乳動物の歯の進化で例証される。人間の遠い先祖においては36本に達し、次に、原始人とその身内におい

ては32本に向かって順応性ある再調整を始めた。今、人類はゆっくりと28本へと引き寄せられている。発展過程は今もなお活発であり、この惑星で順応的に進行中である。

65:6.6 (737.6) 生物の多くの外見上は神秘的な調整は、純粋に化学的であり、完全に物理的である。いかなる人間の血流中には、いかなる瞬間にも12の内分泌腺のホルモン生産との間に1,500万以上の化学反応の可能性がある。

65:6.7 (737.7) 下等植物の型は、物理的、化学的、電気的環境に全く敏感である。しかし生命の階級が上がるにつれ、7名の補佐の精霊の心の援助活動は、個々に作用するようになり、心は、ますます柔軟に創造的に統一され、優性になる。空気や水、そして陸に適合させる動物の能力は、超自然の贈与ではないが、超物質的調整である。

65:6.8 (738.1) 物理学と化学だけが、初期の海の原始時代の原形質から人間がいかに進化したかを説明できるのではない。学ぶ能力、すなわち記憶と環境への分別ある反応は、心の贈与である。物理法則は、訓練に対応せず、不変で、一定している。化学反応は、教育による変更はな

く、一貫しており、信頼できる。無条件絶対の存在は別として、電気的、化学的反応は、予測できる。しかし、心は、経験から恩恵を受けることができ、刺激の反復を受けて行動への反応習性から学ぶことができる。

65:6.9 (738.2) 無知脳の有機体は、環境刺激に反応するのであるが、心に反応的な有機体は、環境自体を調整したり巧みな扱いができる。

65:6.10 (738.3) 人格の進歩する心が、精神的感受性に対しての生まれながらのある種の受容能力を持ち、それゆえ精神的進歩と到達の可能性を有しているように、その神経系に関連する物質的頭脳は、心の援助への対応のための生まれながらの受容能力を持っている。知力的、社会的、道徳的、そして精神的進化は、7名の補佐の精霊と、その超物質的提携者の心の援助に依存している。

7. 進化的心の段階

65:7.1 (738.4) 7名の補佐の心霊は、局部宇宙にいる低知能生存物の心への多才な奉仕者である。この心の種類は、局部宇宙の本部から、またはそれにつながる世界から働き掛

けられるが、劣る心の機能への体系首都からの影響力のある指示がある。

65:7.2 (738.5) 進化的世界では、じつに多大にこの7名の補佐の心霊の仕事を頼みとしている。しかしながら、彼らは心の奉仕者であり、生命搬送者の領域である物理的発展には関係がない。にもかかわらず、命をうけ、そして次々に明かされ、かつ固有である生命搬送者の統治の自然進行とのこれらの精神贈与の完全な統合は、心の現象において、自然の手と自然過程の働きを除いては、人間の識別不能性に原因があるとはいえ、人は、物質と関係のある心の自然な反応に繋がる事柄すべてを説明する際、時おりいくらか当惑をみせる。そして、あなたは、もしユランチアが本来の計画通りに運んでいるならば、心の現象において注意を引くようなことは更に見ることはなかったであろう。

65:7.3 (738.6) 7名の補佐の精神は、統一体であるよりも回路体であり、通常世界においては局部宇宙内で他の準機能で接続されている。生命実験惑星においては、しかしながら、それらは比較的孤立している。そして下級補佐は、

生命の型のもつ独自の性質のため、ユランチアでは生命贈与のより画一された型との場合よりも進化的有機体との関わりにおいてはるかに面倒なことを経験した。

65:7.4 (738.7) 一方、7名の補佐の精神は、平均的進化世界ではユランチアにおけるよりもはるかに動物発達の前進段階に合わせている。補佐は、ネバドンの宇宙全体において機能してきたすべてのなかでは、ただ一つの例外を除いては、ユランチア有機体の進化する心との接触において最大の困難を経験した。この世界では、多くの型の境を接する現象—機械的教育不可能性と非機械的教育可能性の生物反応の混迷的組み合わせ—が展開された。

65:7.5 (739.1) 7名の補佐の精神は、生物体の環境反応の純粋に機械的な型とは接しない。生物のそのような知能以前の反応は、純粋に力の中心者、物的管理者、それに仲間のエネルギー領域に属している。

65:7.6 (739.2) 経験から学ぶ能力の可能性の取得は、補佐の精神の機能の開始を特徴づけ、補佐らは、人間の進化段階において原始的で目に見えない生存物の最も下等な心から最高の型にまで働きかける。彼らは、他の点では、多

少なりとも物質環境への神秘的な振舞いと理解不充分な迅速な心の反応の源であり、様式である。これらの忠実で、常に信頼できる影響は、動物の心が、人間の精神感受性の水準に達する前の予備的奉仕を長く進めなければならない。

65:7.7 (739.3) 補佐は、6相目の水準へと、すなわち崇拝の精神へと体験的心の進化において機能する。この段階では、奉仕における不可避の重複—上級者が、高度の進化段階へのその後の到達を期待して下級者との連携のために手を差し出す現象—が、起こる。さらに、精神の付加的奉仕は、7番目と最後の補佐、すなわち知恵の精神の行動に伴う。個人は、精神世界の援助活動中、決して精神協力の突然の変化を経験することはない。これらの変化は、常に緩やかで相互的である。

65:7.8 (739.4) 物理的(電気化学的)領域と環境刺激への心的反応が、常に識別されるべきであり、次には、それは皆、精神的活動からは切り離され、現象として認識されなければならない。物理的、心的、精神的重力の範囲は、そ

の親密な相互関係にもかかわらず、宇宙現実の異なる領域である。

8. 時空間における進化

65:8.1 (739.5) 時間と空間は、不可分に連結している。本質的な関連性がある。ある空間条件にあるとき、時間の遅れは必然である。

65:8.2 (739.6) 生命発達における進化上の変化をもたらすに当たり非常に多くの時間消費が、混乱をもたらすならば、私は、生命現象というものは、惑星が可能にする物理的変化以上には生命過程を調節することはできないのであると言いたい。我々は、自然で物理的な惑星の進化を待たなければならない。我々は、地質の進化に何の支配も絶対に揮えない。物理的状態が許すならば、我々は、100万年のかなりの少年数で、生命進化の完成の手筈ができたであろう。しかし、我々は皆、楽園の崇高なる支配者の管轄下にあり、また時間は楽園には実在しない。

65:8.3 (739.7) 時間測定のための個人の物差しは、その人の生命の長さである。すべての被創造物は、従って時間に条件付けられており、それ故、進化を延々と続く過程であ

るように見なすのである。進化は、寿命が一時的な存在により制限されない我々のようなものにとっては、長引く出来事のようなものには思えない。これらの事は、時間の実在しない楽園では、全て無限なるものの心と永遠なるものの行為に存在する。

65:8.4 (739.8) 心の進化は、物理的状態の緩慢な発達の助けを受け、また、それにより進行を妨げられているように、精神的発達も、心の拡大に依存し、また知能発達の遅れにより絶えず遅延されている。しかし、これは、精神的進化が教育、文化、または知恵に依存していると意味するものではない。魂は、心的文化にはそうではないかもしれないが、知的能力や願望—生存の選択と絶えず増大する完全性達成、つまり天で父の意志をなすということへの決心—には関係がある。生存は、知識と知恵の所有を拠り所としてはいないかもしれないが、発達は、間違いなくそうである。

65:8.5 (740.1) 心は、宇宙進化の実験室においていつも物質に対して優位であり、精神は、心と関連する。これらの異なる贈与の同調と調整の不履行が、遅れを引き起こすか

もしれないが、個人が本当に神を知り、また神を求め神のようになる願望をもつならば、生存は、不利な時間的条件にかかわらず保証される。物理的状態は、心を妨げるかもしれないし、つむじ曲がりな心は、精神的到達を遅らせるかもしれないが、これらのいずれの障害も、全魂のこもった意志選択を打ち破ることはできない。

65:8.6 (740.2) 物理的条件が整うとき、突然の心的発達があるかもしれない。心の状態が好ましい状況にあるとき、突然の精神的変化が起こるかもしれない。精神的価値が、適切な認識を受けるとき、そのとき宇宙の意味が認識できるようになり、人格は、ますます時間の不利な条件から解かれるし、空間の制限を免れる。

65:8.7 (740.3) [ユランチア在住のネバドンの生命搬送者による後援]

論文 66
ユランチアの惑星王子息子の資格 4

66:0.1 (741.1) ラノナンデクの息子の平均的世界への到来というものは、意志が、つまり永遠の生存への道を選ぶ能力が、原始人の心で発達したことを意味する。しかし、惑

星王子が、ユランチアに到着したのは人間の意志が出現してからおよそ50万年後であった。

66:0.2 (741.2) およそ50万年前、カリガスティア、すなわち惑星王子が、6有色、つまりサンギク人種と時を同じくしてユランチアに到着した。王子の到着時点、地球には50万の原始人がおり、ヨーロッパ、アジア、アフリカに散在していた。メソポタミアに設立された王子の本部は、世界の個体群のほぼ中心にあった。

1. カリガスティア王子

66:1.1 (741.3) カリガスティアは、ラノナンデクの息子の二次系列の9,344番であった。局部宇宙の行政一般を、後代には、特にサタニアの局部恒星系の管理の経験があった。

66:1.2 (741.4) カリガスティアは、サタニアでのルーキフェレーンスの統治に先立ち、生命搬送者の相談相手のジェルーセムの協議会に所属していた。ルーキフェレーンスは、カリガスティアを直属部下の位置に登用し、カリガスティアは、名誉と信用の連続的課題5つを無難にこなした。

66:1.3 (741.5) 惑星王子としてのカリガスティアは、非常に早くから任務を得ようとしたが、再三再四、星座委員会の承認を求める王子の要請が上がってきても星座の父の賛成を得られないのであった。カリガスティアは、惑星支配者として特に10番目の世界か、生命変更世界に送られることを願って止まないようであった。その嘆願は、最終的にユランチアに割り当てられるまで何度か却下されていた。

66:1.4 (741.6) カリガスティアは、ある種の落ち着きの無さに加え、小事において既定の秩序と意見を異にする傾向もかかわらず、出自でありすみかである宇宙の福利への忠誠と献身の人も羨む経歴を携えジェルーセムから世界統制の責任ある任務へと出発した。

66:1.5 (741.7) 私は、頭の切れるカリガスティアが、恒星の首都を出発したときジェルーセムにいた。50万年前の多事多端なその日のカリガスティアほどには、より豊かな予備体験で、あるいはより良い見通しで、かつて世界統制の経歴に乗り出した惑星王子は、誰もいなかった。1つの事が確かである。私は、その出来事を局部宇宙の放送

で流すにあたり、決してこの高潔なラノナンデクが、惑星保護の神聖な依託をそれほどまでにすぐに裏切り、宇宙の息子の資格の気高い体制の立派な名前をひどく汚すであろうなどという考えを一瞬たりとも、いささかなりとも抱いてはいなかった。実際に私は、ユランチアは、そのように経験豊富で、輝かしく、世界の政務で舵を取る独創的知性を持つことになっていたことから、全サタニアで最も幸いな5個か6個の惑星の中にあると考えていた。その時私は、カリガスティアが、狡猾にも自惚れに陥るとは了知していなかった。その時私は、人格の奢りの微妙さを完全に理解していなかった。

2. 王子の部下

66:2.1 (742.1) ユランチアの惑星王子は、単独では任務に送られず、補佐と行政助手の通常部隊を伴った。

66:2.2 (742.2) この一団の頭は、ダリガスティア、惑星王子の次席補佐であった。ダリガスティアは、二次ラノナンデクの息子でもあり、その系列の319,407番であった。カリガスティアの仲間としての配置時点では補佐としての地位を占めた。

66:2.3 (742.3) 惑星の部下は、人類の関心を向上し、福利を促進するために任命された数多くの天使の協力者と多数の他の天の存在者から構成されていた。しかし全ての中で最も興味ある集団は、あなたの立場からは、王子の部下の、時としてカリガスティアの100名と呼ばれた有体構成員であった。

66:2.4 (742.4) 再度肉体の姿になった王子の100名の部下は、ユランチア冒険着手に志願したジェルーセムの上昇市民78万5,000名以上からカリガスティアによって選ばれた。選出された各100名は、異なる惑星から来ており、ユランチアからは1名もいなかった。

66:2.5 (742.5) ジェルーセムのこれらの志願者は、熾天使の輸送により直接に系列首都からユランチアへと連れて来られ、それらは、到着の際、惑星特別奉仕のための二面性の人格の型が与えられるようになるまで文字通り生身の体と、しかも系列の生命回路にも合わせた天使のままでいた。

66:2.6 (742.6) この100名のジェルーセム市民到着以前、監督に当たっていたユランチア在住の2名の生命搬送者は、自

分達の計画を完了していたので、アンドンとフォンタの群体から選ばれた生存者100人の原形質を王子の部下である有体成員のための具体的な体内への移植許可をジェルーセムとエデンチアに陳情した。その要求はジェルーセムで承認され、エデンチアで許可された。

66:2.7 (742.7) 従って、特異な人種のうちの最良種族の生存者を代表して、アンドンとフォンタの子孫であるそれぞれ50人の男女が、生命搬送者により選ばれた。人種前進へのこれらのアンドン族の貢献者は、一人か二人の例外はあるものの、互いに見知らぬ者同士であった。それらは、思考調整者の指示と天使の指導との調整に広範囲に離れた場所から王子の惑星本部の入口に集められた。ここで、人間100人の被験者は、非常に熟練したアヴァロンからの志願委員の手に渡され、志願委員は、これらのアンドンの子孫の生命原形質の一部の物質抽出を指示した。この生ける物質は、王子の部下である100名のジェルーセム構成員のために作出された実際の肉体に移された。その間、系列の首都に到着したばかりのこれらの市民は、天使の輸送中、睡眠状態にされていた。

66:2.8 (742.8) これらの取り扱いは、カリガスティアの100名に特別な肉体の字義通りの創造と共に、数多くの伝説の由来を与え、そのうちの多くは、その後アダムとハヴァーの惑星の導入に関する後の言い伝えと混乱されるようになった。

66:2.9 (743.1) 熾天使によるジェルーセム100名の志願者輸送の到着時から領域の三重の存在体が目覚めるまでの全体の人物化執行業務には、まるまる10日間掛かった。

3. ダラマティア—王子の都市

66:3.1 (743.2) 惑星王子の本部は、その頃のペルシャ湾域に、後のメソポタミアに対応する地区に位置していた。

66:3.2 (743.3) 当時のメソポタミアの気候と景観は、あらゆる点で王子の部下とその補佐の取り組みに都合がよく、優勢的であった状態とはときおり非常に異なっていた。原始のユランチアが、文化と文明での最初の一定の進歩を確実に引き起こすように考案された自然環境の一部としてそのような有利な気候を持つことが必要であった。当時の1つの大きな任務は、狩人から牧夫へと、やがて平

和を愛好し、家に住む農夫へと進化するであろうという望みをもって人を変えることであった。

66:3.3 (743.4) ユランチアの惑星王子の本部は、若くて発達的球体におけるそのような拠点の典型であった。王子の入植地の中核は、12メートルの高さの壁に囲まれた、非常に単純な、しかし美しい都市であった。この世界の文化の中心は、ダリガスティアを称えダラマティアと名づけられた。

66:3.4 (743.5) 市には細分化地域の中心にある有体部下からなる10の委員会の本部用大邸宅と合わせて10区域が、設置されていた。市の真ん中には目に見えない父の寺があった。王子と仲間の行政本部は、寺のごく周辺近くにまとめられた12個の会議所に設置された。

66:3.5 (743.6) ダラマティアの建造物は、2階建ての協議会本部、それと小さくとも3階建てのすべての者の父の中央の寺を除き、すべてが1階建てであった。

66:3.6 (743.7) 市の建築材料は、初期の時代の最優良事例—レンガ—を代表していた。ごく少量の石、または木が使用

された。周囲の民族間での住宅と村の建築様式は、ダラマティアの実例によって大いに改良された。

66:3.7 (743.8) 王子の本部近くには、人間の全有色人種と全階層が住んでいた。王子の学校の最初の学生達が募集されたのは、これらの近隣の部族からであった。ダラマティアの最初の学校は、粗末であったが、その原始の時代の男女のためにできるすべてを提供した。

66:3.8 (743.9) 王子の有体の部下は、絶えず周囲の部族から優れた個人を集め、これらの学生を訓練し奮い立たせた後、教師や指導者としてそれぞれの民族の元に送り返した。

4. 初期の100名

66:4.1 (743.10) 王子の部下の到着は、感慨深い印象を与えた。情報が広まるにはおおよそ1,000年を要したが、ユランチアの新たな一時逗留者の100名の教えと行為によりメソポタミア本部近くの部族等は、大いに影響を受けた。王子の部下のこれらの構成員が、超人としてユランチアで再度人格化された時、その後の神話の多くが、これらの初期の時代の誤り伝えられた伝説から生まれた。

66:4.2 (744.1) そのような外惑星の教師の望ましい影響への重大な障害は、死すべき者が教師達を神と見なす傾向にあるということであるが、カリガスティア100名—50名の男と50名の女—は、地球出現の手法は別として、超自然の方法にも超人的操作にも頼らなかった。

66:4.3 (744.2) 有体の部下は、それでもなお超人的であった。部下達は、並はずれた三重の存在としてユランチアでの任務にとりかかった。

66:4.4 (744.3) 1. 彼らは有体で、1人類の実際の生命原形質、ユランチアのアンドン系の生命原形質を体内に持っていたので、相対的には人間であった。

66:4.5 (744.4) 王子の部下のこれらの100名は、男女同数に、またかつての人間の状態に応じて分けられた。この集団の各自が、何らかの新種の肉体的存在の共同の親になることができたのだが、一定条件のもとでのみ親としての手段に訴えるように慎重に指示されていた。特別な惑星の事業から引退前に後継者を作ることは、惑星王子の有体の部下にとっての習わしである。これは、通常、惑星の

アダムとハヴァーの到着時か、または、その直後である。

66:4.6 (744.5) したがって、これらの特別の存在体には、性交により生み出される物質的生物が何型であるかに関し、あまり、あるいは全く見当がつかなかった。だから、彼等は断じて知らなかった。世界のための仕事の実行においてそのような一歩を踏み出す前に、全体制は、反逆により覆され、後に親の役目を果たす者達は、系列の生命の流れからは隔離されてしまった。

66:4.7 (744.6) 肉体化したカリガスティアの部下は、皮膚の色と言語の面でアンドン民族に従った。彼らは、次のような違いを除き領域の死すべき者がするように食物を摂取した。この集団の再形成された体は、完全に非肉食で満たされた。これは、果実と木の実に富む温暖地域に住居を決定するという考慮すべき事項の1つであった。非肉食の生活習慣は、カリガスティア100名の時代に遡る。それゆえ、この文化的風習は、かつて肉食のみであった進化的人種に起源をもつ周辺の多くの部族の食習慣に影響を与えるまでに至る所に広まった。

66:4.8 (744.7) 2. 100名は、高度で特別の目に属する特異な男女としてユランチアで再編成された有形ではあったが超人的存在体であった。

66:4.9 (744.8) この集団は、ジェルーセムで暫定的市民権を享受する一方で、各自の思考調整者とはまだ融合されていなかった。この集団は、下降してくる息子の身分系列と連係しての惑星事業に志願し受け入れられたときに調整者とは分離された。しかし、これらのジェルーセム系は、超人的存在—上昇的成長の魂を有したもの—であった。その魂は、肉体での人間生活の間、胎児の状態である。モロンチア生命に生まれ(復活し)、次のモロンチア世界を経て成長経験をする。カリガスティア100名の魂は、こうして7大邸宅世界の進歩的経験によりジェルーセムの公民の地位へと進んでいった。

66:4.10 (744.9) 部下は、指示に従い有性生殖に従事はしなかったが、個人の構造をきめ細く観察すると同時に、あらゆる想像可能な知力(心)とモロンチア(魂)の連携の相を慎重に探求した。ダン系集団の2番と7番が偶然モロンチアの自我(推定では、無性で非物質的)の付随的現象を発見

したのは、壁完成のずっと前のダラマティア滞在の33年目であった。この冒険の結果は、第一中間被創造者の1番目であると判明した。この新存在体は、惑星の部下と天の仲間には完全に可視であったが、様々な人間部族の男女には見えなかった。全有体部下は、惑星王子の権限を拠りどころとし、先駆者のダン系1組の指示に従い、相似する存在体の生産を引き受け、すべてが成功した。王子の部下は、こうして遂には、第一中間者5万名の初代の軍団を生み出したのであった。

66:4.11 (745.1) 中間型の被創造者は、世界本部の業務続行に当たり功績を挙げた。それらは人間には不可視であったが、原始のダラマティア一時逗留者には、これらの見えない半霊について教えられており、長い間、半霊は、進化的必滅者にとり精神界のすべてを意味した。

66:4.12 (745.2) 3. カリガスティア100名は、個人としては不滅であるか、もしくは死ななかった。恒星系の生命の流れのための解毒性の補足物が、彼等の物質の型を循環していた。そして、反逆経験により生命回路との接触が絶たれることがなかったならば、その後の神の息子の到着ま

で、あるいは中断されていたハヴォーナと楽園への旅の再開のためにそのうち解放されるまで無期限に生き続けたことであったろうに。

66:4.13 (745.3) サタニア生命回路のこれらの解毒性の補足物は、カリガスティアの到着時点、ノーランティアデクのいと高きものが、ユランチアに送ったエデンチアの低木の命の木の実から得られた。この木は、ダラマティア時代、見えざる父の寺の中央の中庭に生えており、それは、王子の有体の、さもなければ必滅の部下が無期限に生き続けることを可能にする命の木の実であった。

66:4.14 (745.4) この類希な食物は、進化的人種には何の価値もない一方で、カリガスティア100名にとり、また関連する変化したアンドン族の100人にも、継続的生命を与えるにはかなり満足のいくものであった。

66:4.15 (745.5) 生命搬送者は、100人のアンドン族が王子の部下に人間の生殖細胞質を与えたときに、恒星系回路の補足を人間の体に導入したということが説明されるべきである。このように100人のアンドン族は、物理的な死に

果敢に抵抗して、いく世紀も部下と共に生き続けることが可能となった。

66:4.16 (745.6) 結局、アンドン族の100人は、新しい優者の型への自らの貢献に気づき、一方アンドン部族のこれらの同じ100人の子供は、王子の有体の部下の個人的な付き添いとして本部に置かれた。

5. 100名の組織

66:5.1 (745.7) 100人は、構成員が10人ずつの10の自治協議会へと編成された。これらの10協議会のうち2つかそれ以上の合同会議の開催時、そのような連絡集会ではダリガスティアが議長を務めた。これらの10部門は次のように構成された。

66:5.2 (745.8) 1. 食糧と物資の福祉協議会。この部門はアングが議長を務めた。この有能な部隊は、人類の食糧、水、衣類、物質的進歩を助長した。井戸掘り、泉の管理、潅漑を教えた。それらは、標高の高い地帯や北の地からの者達に衣服用の皮の取り扱いの改良された方法を教え、後には芸術と科学の教師が、機織りを紹介した。

66:5.3 (746.1) 食料保存方法での大きな前進があった。食糧は料理、乾燥、燻しにより保存された。その結果、それは、最も初期の財産となった。人間は、周期的に世界を破壊した飢饉の危険に備えることを教えられた。

66:5.4 (746.2) 2. 動物の家畜化と利用のための委員会。この協議会は、人間の荷物や自身の輸送のため、食糧供給のため、また後には土地耕作に役立つ最適の動物を選択し、飼育する任務を専門とした。この有能な部隊は、ボンが導いた。

66:5.5 (746.3) 今は絶滅した有用な動物の幾つかの型が、家畜として今日に続いてきた幾つかの動物と共に飼い馴らされた。人は、長い間犬と共に暮らしてきたし、また青色人種は、すでに象の飼いならしに成功していた。雌牛は、慎重な飼育により相当に改良されたので貴重な食料源となった。バターとチーズは、人間の食生活のありふれた物となった。人は、荷物運びに雄牛の利用を教えられたが、馬は、後の時代まで家畜化されなかった。この部隊の成員は、まず牽引を容易にするための車輪の使用を人間に教えた。

66:5.6 (746.4) 通信や、援助を求める目的で長旅に伴われた伝書鳩が最初に使われたのは、これらの時代であった。ボンの一団は、乗客用の鳥として大きなファンドルの訓練に成功していたが、それらは3万年以上前に絶滅した。

66:5.7 (746.5) 3. 食肉動物の退治に関する顧問。古代人にとり特定動物を飼いならそうとするだけでは十分ではなく、敵対動物界の残りよる破壊から自身を防御する方法もまた学ばなければならなかった。ダンが、この集団の団長を務めた。

66:5.8 (746.6) 古代都市の壁の目的は、敵対的人間による急襲のみならず、獰猛な獣類からの防御であった。無壁での、また森林での生活者達は、樹上の居住、石の小屋、夜の焚き火の維持に依存していた。したがって、これらの教師が、人間の住居改善について多くの時間を生徒に教えることに専念したということは、誠に自然であった。改良された手法を用い、罠を使用し、動物征服においてすばらしい進歩が見られた。

66:5.9 (746.7) 4. 知識の普及と維持のための教授陣。この集団は、初期の時代の純粋に教育的企画をまとめたり、指示

した。ファドが、議長を務めた。ファドの教育方式は、改善された労働方法の指導をともなう仕事の監督にあった。ファドは、初めてのアルファベットを考案し、書記法を導入した。このアルファベットは、25文字であった。初期の民族は、筆記具として樹皮、粘土の平板、石板、獣皮を叩いて作った羊皮紙の種類、それに蜂の巣から作られた木のような粗雑な材料を利用した。カリガスティア離反直後に壊されたダラマティアの文庫は、200万以上の別個の記録を蔵し、「ファドの家」として知られていた。

66:5.10 (746.8) 青色人種は、アルファベットを書くことを特に好み、その方面で最もすばらしい進歩をなした。赤色人種は、絵を描くことを好み、黄色人種は、いつの間にか言葉と考えの表現のために、現在使用しているものに酷似した記号の使用へと辿り着いた。しかし、アルファベットとさらに多くのものが、その後反逆に付随する混乱の間に世界から失われた。カリガスティアの背信は、最低でも計り知れないほどの年月の間、世界共通語への世界の望みを粉々にした。

66:5.11 (747.1) 5. 産業と交易委員会。この協議会は、部族内での産業を伸ばし、様々な平和集団の間での交易を促進することに従事した。その指導者は、ノドであった。原始の製造のあらゆる形式が、この部隊によって促進された。それらは、原始人の空想を魅惑する多くの新しい生活必需品を提供し、生活標準の引き上げに直接貢献した。それらは、科学と技術協議会が生産した改良された塩での交易を大きく広げた。

66:5.12 (747.2) 最初の商業貸し出しが実践されたのは、ダラマティアの教習所で教育されたこれらの英明な部隊であった。中央の掛け売り取引所から、実際の物々物交換に代わる象徴になる物を手に入れた。世界は、何百年、何千年もの間これらの商法を改善しなかった。

66:5.13 (747.3) 6. 啓示宗教団体。この機関は、機能が沈滞気味であった。ユランチア文明は、文字通り必要性の金床と恐怖の金槌の間から形作られた。しかしこの部隊は、離脱という大変動に付帯した後の混乱で自らの仕事が中断される前に、生物の恐怖(幽霊崇拝)の代わりに創造者へ

の恐怖に置き換える試みにおけるかなりの進歩をみた。この協議会の議長は、ハプであった。

66:5.14 (747.4) 王子のどの部下も進化を複雑にするような顕示の提示をしようとはしなかった。進化の勢いは、損耗の頂点の後にはじめて顕示を呈した。しかしハプは、礼拝形式の確立のために市民の願望に道を譲った。ハプの部隊は、崇拝の7つの聖歌をダラマティア族に供与し、日々の称賛句をも与え、最終的には「父の祈り」を教えた。それは次の通りであった。

66:5.15 (747.5) 「すべてのものの父よ、その息子を尊敬します、私達を好意をもって見てください。あなたは別として、全ての恐怖からお救いください。我々が、神性の教師に喜びをもたらし、また、いつまでも我々に真実を口にさせてください。暴力と怒りからお救いください。年長者への、また隣人の所有するものへの敬意をお与えください。我々の心を喜ばせるためにこの季節に青々とした牧草地と実り多産の群れをお与えください。約束の精神高揚者の到来を早めるために祈り、また向こうの世界

で他のものがするようにこの世であなたの意志を行ないます。」

66:5.16 (747.6) 王子の部下は、人種改良に向けては自然の手段や通常の方法に限られてはいるものの、生物進化の到達の際には、進歩的発達の目標としてアダームからの新しい人種の贈り物の約束を示した。

66:5.17 (747.7) 7. 健康と生命の保護者。この協議会は、公衆衛生の導入と原始の衛生促進に関係しており、ルツが率いた。

66:5.18 (747.8) その構成員は、後の時代の混乱中に失われたものを、20世紀まで決して再発見されることのなかったものを多く教えた。彼らは、加熱調理、すなわち沸かすことと焼くことが、病気を避ける方法であることを人類に教えた。またそのような調理が、幼児死亡率を大いに減少させ、早目の離乳を容易にした。

66:5.19 (747.9) ルツの健康保護者の初期の教えの多くは、曲げられたり、また大いに変化はしたものの、モーシェの時代まで地球部族の間に持続した。

66:5.20 (748.1) 多くの病気の真の原因は、肉眼で見るには小さ過ぎたり、また皆が、迷信深い心配から炎を保持したので、無知な民族の中で衛生を促進する行く手には大きな障害があった。廃物を燃やすように説得するのに何千年をも要した。そうしているうちにも、かれらは、腐りかけた廃棄物を埋めるように促された。この時代の衛生上の大きな進歩は、健康を与え病気を破壊する日光の特性に関する知識に基づいていた。

66:5.21 (748.2) 水浴びは王子到着以前、もっぱら宗教儀式であった。健康習慣として身体を洗うように原始人を説得することは、じつに困難であった。ルツは、最終的にはすべての父の崇拝において1週間に1度、禊の一部として水での洗浄儀式を昼の祈祷に盛り込むことを宗教教師に促した。

66:5.22 (748.3) 健康の保護者は、個人の友情の印として、また集団の忠誠の象徴としての唾液のやりとり、あるいは血を飲む代わりに握手の導入もしようとした。しかし、これらの原始民族は、上の指導者の教えの有無を言わせぬ圧力下にないとき、健康を壊したり病気を繁殖させるか

つての無知と迷信の習慣への逆戻りに手間取ってはいなかった。

66:5.23 (748.4) 8. 芸術と科学の惑星協議会。この部隊は、原始人の産業技術を改善し、美の概念を高めるために多くのことをした。指導者は、メクであった。

66:5.24 (748.5) 技術と科学は、世界中で衰微期にあったが、物理学と化学の基礎がダラマティアにより教えられた。焼き物は高度であり、装飾的芸術は、すべて改良されており、人間の美の理想は、大いに高められた。しかし音楽は、紫色人種の到着まであまり進歩しなかった。

66:5.25 (748.6) これらの原始人は、教師の繰り返しの要請にもかかわらず、蒸気動力の実験を承諾しなかった。原始人は、閉じ込められた蒸気の爆発力への大きな恐怖にけっして打ち勝つことはなかった。かれらにとって1片の赤熱の金属は、恐怖をあたえる物体ではあったが、かれらは、最終的には金属と火を扱う仕事に同意した。

66:5.26 (748.7) メクは、アンドン人種の文化を進めたり、青色人種の芸術を改良するために多くをした。青色人種のア

ンドンの血統との混合は、芸術的に才能豊かな型を産出し、それらの多くが、優れた彫刻家になった。彼らは石、あるいは大理石での作業はしなかったが、焼いて固められた粘土作品が、ダラマティアの庭を飾った。

66:5.27 (748.8) すばらしい進歩が、家庭内の技術に見られたが、その大部分が長く暗い反逆の時代で失われ、現代までついぞ再発見されていない。

66:5.28 (748.9) 9. 高度な部族関係の統括者。これは人間社会を国家の水準にまで引き上げる仕事を委ねられた部隊であった。首長は、ツツであった。

66:5.29 (748.10) これらの指導者は、部族間の結婚をもたらすことに非常に貢献した。かれらは、知り合う最大の機会と、熟考のうえでの求愛と結婚を促進した。極めて軍事的な出陣の踊りが精錬され、価値ある社会的目的に役立った。多くの競合の遊びが導入されたが、これらの古代人たちは、真剣な人々であった。ユーモアは、初期の部族にあまり彩を添えなかった。ほんのわずかの習慣しか、その後の惑星反乱による崩壊から存続しなかった。

66:5.30 (749.1) ツツと仲間は、平和的な集団交際を促進し、戦争を規制し宥め、部族間の関係を調整し、部族政府を改善するために働いた。より高度の文化が、ダラマティア付近で発展し、これらの改善された社会的なつながりは、より離れた部族に影響を与えるのに非常に有効であった。しかし、王子の本部で普及していく文明様式は、ちょうど20世紀の南アフリカのケープタウンの社会が、北の小型のブッシュマンの粗野な文化とはまるで異なるように、他の場所で発達する野蛮な社会とはまったく異なっていた。

66:5.31 (749.2) 10. 部族協調と民族協力の最高裁判所。この最高協議会は、ヴァンに導かれ、人間社会の諸事、人事の管理を委託された残る9つの特別委員会すべての控訴裁判所であった。この協議会は、他の部隊に明確に割り当てられない地球の全ての問題に関して任されている広く機能するものであった。この選ばれた部隊は、ユランチアの最高裁の機能の引き受けが認められる以前に、エデンチアの星座の父にすでに承認されていた。

6. 王子の治世

66:6.1 (749.3) 世界文化の度合いは、その人間の社会的遺産によって測定され、文化の発展速度は、全体的にその住民が新しく進歩的な考えを理解する能力によって測定される。

66:6.2 (749.4) 伝統への隷属は、過去と現在を感傷的につなぐことで安定性と協力を産みはするが、同じように自発性を窒息させ、人格の創造力を奴隷にする。全世界は、伝統に縛られた社会習慣の行き詰まりに状態にあり、そんなときカリガスティアの100名が到着し、その時代の社会集団内での個々の自発性の新しい福音宣言を始めた。しかしこの漸進的支配は、すぐさま中断されたので、人種は、習慣への隷属から完全に解放されることはなかった。風潮は、いまだにユランチアを過度に支配している。

66:6.3 (749.5) カリガスティアの100名—サタニア大邸宅界の卒業生—は、ジェルーセムの芸術と文化を熟知はしていたが、そのような知識は、原始の人間が居住する粗野な惑星においてはほぼ無価値である。これらの賢明な存在体は、その時代の原始民族の突然の変化、あるいは全体的

に向上させることを引き受けるほど愚かではなかった。彼らは、人類の遅い進化をよく理解し、また賢明にも地球上での人の生活様式を修正するいかなる過激な試みも控えた。

66:6.4 (749.6) 各10の惑星委員会は、委託された重要な事業を進めるためにゆっくりと自然に着手した。彼らの計画は、周囲の部族の最もすぐれた心の持ち主を社会向上のための特使として人々の元へ送り返すことにあった。

66:6.5 (749.7) 外部への特使は、その民族の具体的な要求がなければ決してその人々のもとには送られなかった。あてがわれた部族かまたは人種の向上と前進のために働く者達は、通常その部族か人種の出身者であった。100名は、優れた人種の習慣や慣習を別の部族に強要しようとはしなかった。彼らは、いつも各人種の長い年月に試された慣習の向上と進歩のために根気よく働いていた。ユランチアの単純な人々は、新たでより良い習慣との交換ではなく、より高い文化と優れた心との接触による向上のために彼らの社会風習をダラマティアに携えて来た。その過程は、ゆっくりであったが非常に効を奏した。

66:6.6 (750.1) ダラマティアの教師達は、純粋に生物進化の自然淘汰に意識的な社会淘汰を加えようとした。人間社会を錯乱させはしなかったが、その正常で自然な発展を著しく加速した。その動機は、進化による前進であり、顕示による革命ではなかった。人類は、もてる小さな宗教と道徳の習得に長い間過ごしてしてきており、超人達は、過度の指導や啓発をもって進歩の遅い人種の向上に着手するときにいつも結果として生じる混乱と驚愕により人類からこれらのわずかな進歩を奪い取らないほどの分別はもっていた。

66:6.7 (750.2) キリスト教の宣教師達が、息子と娘は、両親の全生涯を通じてその支配と指示の下に居続けるべきであると考えるアフリカの中心部に入るとき、これらの子供は、21歳に到達してしまえば親の抑制のすべてから解放されるべきであるという教えによりこの習慣を、1世代で、押し退けようとするならば、すべての権威の混乱と崩壊を引き起こすだけである。

7. ダラマティアでの生活

66:7.1 (750.3) 王子の本部は、この上なく美しく、その時代の原始人を畏れさせるほどの設計であったが、まったく質素なものであった。畜産導入から最終的には農業開発を奨励することが、これらの移入された教師の動機であったことから建物は特に大きくはなかった。都市の壁内の土地の条件は、およそ2万の人口扶養のための牧畜と園芸に備えるには十分であった。

66:7.2 (750.4) 10棟の協議会大邸宅は、崇拝のため中央の寺の内装と統轄している超人から成る集団に属するじつに美しい芸術作品であった。住宅用の建物は、整然さと清潔さの模範であったが、後に発達した物と比較してすべてが実に質素で全体に原始的であった。この文化の中心拠点においては、本来ユランチアに属しない方法は何用いられなかった。

66:7.3 (750.5) 王子の有体の部下は、世界の社交の中心地と教育本部に滞在している学生の観察者を奮い立たせ、関心を引くように設計された家として維持された質素で模範的な住まいを統轄した。

66:7.4 (750.6) 家族生活の明確な秩序と比較的定まった場所での1住居1家族の生活は、このダラマティアの時代に遡り、また主には100名とその教え子の実例と教えの結果である。社会単位としての家庭は、ダラマティアの超人的な男女が、人間に孫とその孫の子供を愛した、かれらのための計画を立てるように導くまで決して成功しなかった。未開人は、子供を愛してはいるが、文明人は、その孫をも愛する。

66:7.5 (750.7) 王子の部下は父母と共に暮らした。事実、それらには子供はいいなかったが、ダラマティアの50の家庭の型は、アンドン人種とサンギク人種の優れた家族から集められ保護された子供が、500人に満たないということは決してなかった。これらの子供の多くが孤児であった。子供達は、これらの超人の両親の躾と教育に恵まれた。次に、それらは、王子の学校(13歳から15歳まで在学)在学の3年後に、結婚の資格ができ、また王子の特使とそれぞれの人種の困窮している部族へ各自の任務の準備ができていた。

66:7.6 (751.1) ファドは、生徒が行動によって学び、日々の有用な作業により進んで行く実業学校として運営されるダラマティアの教育計画を実践にうつした。この教育計画は、人格形成に関する思考と感情を無視はしなかったが、手工訓練を第一とした。個別的、また集合的教授方式であった。男性、女性、それに共に行動する二名の男女が、生徒に教えた。この集団教育の半分は、男女別学で、残る半分は共学であった。学生は、個人的には技術が教えられ、集団、学級単位で交流した。生徒は、同世代との協同作業はもとより、若い集団、年長集団、大人と親しくつきあう訓練をうけた。また、家族集団、遊びの小集団、学校の授業のような繋がりにも慣れ親しんだ。

66:7.7 (751.2) のちに出自の人種と働くためにメソポタミアで訓練中の学生には、西インド高地からのアンドン人種がおり、赤色人種と青色人種の代表も共にいた。さらに後には、小数の黄色人種が受け入れられた。

66:7.8 (751.3) ハプは、道徳律を初期の人種に示した。この掟は、「父の道」として知られ、次の7つの戒めから成った。

66:7.9 (751.4) 1. すべてのものの父以外いかなる神も恐れたり、仕えたるすべきではない。

66:7.10 (751.5) 2. 父の息子、つまり世界の支配者に背いたり、超人的仲間を軽視すべきではない。

66:7.11 (751.6) 3. 人民の裁判官に呼び出された場合、嘘をつくべきではない。

66:7.12 (751.7) 4. 男、女、または子供を殺すべきではない。

66:7.13 (751.8) 5. 隣人の物品、または牛を盗むべきではない。

66:7.14 (751.9) 6. 友人の妻に触れるべきではない。

66:7.15 (751.10) 7. 両親、もしくは部族の年長者を軽視すべきではない。

66:7.16 (751.11) これが、およそ30万年にわたるダラマティアの法であった。この法が記された石の多くが、今やメソポタミアとペルシア沿岸沖の海に横たわっている。挨拶と

食事時の感謝の祈りにそれを用いて、週の毎曜日にこれらの戒めの1つを心に留め置くことが習慣となった。

66:7.17 (751.12) この時代の時間計測は、陰暦であり、この時期は、28日間で計算されていた。昼と夜を除いては、古代人が知る唯一の時間日数計算は、それであった。1週7曜は、ダラマティアの教師達により導入され、7は28の1/4であるという事実から生まれた。超宇宙におけるこの数字7の意味は、共通の時間計算に精神的促し導入の機会を確かに教師達に提供した。しかし、1週間の天然的由来は何もない。

66:7.18 (751.13) 都市周辺地域は、160キロメートルの区域内にすっかり定着した。王子の学校の何百人もの卒業生が、直接都市を囲んで畜産に従事し、別な方法では、王子の部下と人間の多くの助力者からの指示を実行した。少数の者は、農業と園芸に従事していた。

66:7.19 (751.14) 人類は、想定上の罪の刑罰として農業労役を託されたわけではなかった。「顔に汗して、畑の実りを得る」ということは、人が反逆者カリガスティアの統率下のルーキフェレーンスの反逆の愚行に参加したために申

し渡された罰の判決ではなかった。土壌耕作は、進化的世界の前進文明の確立に固有であり、この指令は、30万年間、つまりユランチア到着時から、カリガスティアが反逆者ルーキフェレーンスと運命を共にした悲惨な時代まで、の惑星王子と部下の全教育の中心であった。土を扱う仕事は呪いではない。むしろすべての人間の活動の中でこのように最も人間らしさを味わうことが許される者すべてへの最高の天恵である。

66:7.20 (752.1) ダラマティアは、反逆勃発時およそ6,000人の居住人口であった。この数字は、通常の学生を含むが、常時1,000人を越す訪問者と観察者はその数に入らない。あなたは、それでもその遠い時代の驚異的進歩についてほとんど、あるいは少しの考えにもおよぶことはできない。実際には、当時人間の獲得した素晴らしいもののすべてが、カリガスティアの欺瞞と扇動の破局に続いた恐ろしい混乱と絶望的な精神の暗黒によって破壊された。

8. カリガスティアの不運

66:8.1 (752.2) 我々は、カリガスティアの長い経歴を振り返るにあたり、疑問を呈したかもしれない行為にただ1つの

傑出的特徴を見い出す。カリガスティアは、極端な個人主義者であった。抗議するほとんどすべての当事者に共鳴する傾向があり、言外の批判を穏やかに表現する人々に同情的であった。我々は、権力下にあっては落ち着きがなく、つまりすべての指揮形態にいささか憤慨するというこの初期の彼の傾向の現れを見破る。彼は、上役の助言でわずかに憤慨し、より上の権威下にあっては幾分反抗的であったのだが、それでもなお試練到来の際は、いつでも宇宙の支配者達に忠誠であり、星座の父の命令に従順であった。ユランチアの恥ずべき裏切りの時まで、かつて彼にはいかなる本格的な欠点も見られなかった。

66:8.2 (752.3) ルーキフェレーンスとカリガスティアの両者は、批判的傾向、自惚れの微妙な発達、関連した自尊感情に伴う過大視に関し忍耐強く教えられ、愛をもって警告されていたことが言及されるべきである。しかし、援助しようとしたこれらの試みのすべては、根拠なき非難として、また個人の自由の不当な干渉であると曲解された。カリガスティアとルーキフェレーンスの両者は、二人の歪められた考えと誤った計画を、友好的な助言者達

が、非常に不埒な動機にのっとって支配を始め、行動していると判断した。両者は、変化していく自身の利己主義により利他的な助言者達を批判した。

66:8.3 (752.4) 惑星の文明は、カリガスティア王子の到着からおよそ30万年間かなり自然なさまで進歩した。ユランチアは、生命変更の球体であること以外は、そして、それ故に進化的変動の夥しい不規則性と変事が起こり易いその惑星経歴において、ルーキフェレーンス反逆と同時発生のカリガスティア裏切りの時まで非常に良好に進歩した。その後の全歴史は、この破滅的失態により、また惑星任務を果たせなかったアダームとハヴァーの後の失敗により明確に変更されてしまった。

66:8.4 (752.5) ユランチアの王子は、ルーキフェレーンスの反逆時点で暗闇に入り、その結果、惑星の長い混乱を引き起こした。その後、彼の最高権威は、星座支配者達と他の宇宙当局の協調的活動機能により剥奪された。ユランチアの王子は、アダームの惑星滞在時へと孤立しているユランチアの必然的変化を共に経て、また新しい紫色人種—アダームとハヴァーの子孫—の生命の注入により

必滅の人種を向上させる計画の失敗に何かをもたらした。

66:8.5 (753.1) 人間社会の諸事を妨害する堕落した王子の権力は、アブラハムの時代のマルキゼデクのマキヴェンタの肉体化により途方もなく縮小された。この反逆の王子は、肉体におけるマイケルの生存中、最終的にはユランチアでのすべての権威を奪い取られた。

66:8.6 (753.2) ユランチアの人的悪魔の教義は、反逆の、かつ不正のカリガスティアの惑星の存在に何らかの基礎はあったにもかかわらず、自由で自然な正常な人間の心の選択に反して、その心に影響を及ぼし得る「悪魔」といったような教えは、完全に虚構であった。カリガスティアもダリガスティアも、ユランチアのマイケルの贈与の以前にさえ、人間の意志に反して何も必滅者にまたは通常の個人に圧迫や、強要はできなかった。人の自由意志は、道徳問題における最高のものであり、内在する思考調整者は、人間自身の意志選択に反して一つの考え、あるいはただ一つの行為を強制することを拒否する。

66:8.7 (753.3) かつての臣下に害を及ぼすすべての力を剥奪された領域この反逆者は、いまユヴァーサの高齢者達によるルーキフェレーンスの反逆に参加したすべての者に対する最後の判決を待ち受けている。

66:8.8 (753.4) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 67
惑星の反逆

67:0.1 (754.1) ユランチアの人間生活に関する問題は、過去の特定の画期的な時代に関する知識、とりわけ惑星の反逆の発生と結末に関する知識なくして理解することは不可能である。この激変は、生物進化の進度を由々しく妨げはしなかったが、社会的発展と精神開発の過程を著しく変更した。惑星の超物質的歴史全体は、この破壊的な不幸な出来事により大いに影響を受けた。

1. カリガスティアの裏切り

67:1.1 (754.2) サタン、つまりルーキフェレーンスの助手が、ある定期視察をしたとき、カリガスティアは、ユランチアを30万年にわたり担当していた。惑星到着時のサタンの外観は、決して邪悪な威光をもつ風刺画に似てはいな

かった。卓越し優れた明敏さをもつラノナンデクの息子であったし、今でも、そうである。「しかし、驚くには及ばない。サタン自身が、光の輝かしい被創造者なのであるから。」

67:1.2 (754.3) サタンは、この視察中にルーキフェレーンスのカリガスティアに「自由の宣言」を提案し、王子は、今我々が知っているように、反逆発表に際し、惑星を裏切ることに同意した。忠誠な宇宙の人格は、この計画的な裏切りに対し、独特の蔑の目でカリガスティア王子を見ている。創造者の息子は、次のように言ったとき、この軽蔑をはっきりと口にした。「あなたは、あなたの指導者のルーキフェレーンスのようである。そして、罰当たりなことに彼の邪悪行為を永続化させた。ルーキフェレーンスは、真実に生きることなく最初から自己賛美の歪曲者であった。」

67:1.3 (754.4) 局部宇宙の全管理業務におけるいかなる高い信用も、新たな棲息世界の進化的人間の福祉と指導への責任を担う惑星王子に頼るということほどには神聖にはみなされなかった。悪のすべての型のうち信頼への背信と

全面的な信頼を置く友人への不実ほど人格的信望にとり有害なものはない。カリガスティアは、この意図的な罪を犯すことにより、以来決してその心の均衡を取り戻すことができないまでに人格を完全に歪めた。

67:1.4 (754.5) 多くの罪の見方があるが、宇宙の哲学的観点からの罪とは、宇宙現実に故意に抵抗する人格の態度である。誤りは、誤解か現実の歪曲と見なされる。悪は、宇宙現実の部分的実現、もしくは宇宙現実への適応不全である。しかし、罪とは、神性現実への意図的抵抗—精神的進歩に逆らう意識的選択—であり、一方邪悪とは、認識された現実に対する公然の、しかも持続する反抗的態度であり、それほどまでに高い個性崩壊の度合は、宇宙現実からの逸脱の境界線にいることを意味する。

67:1.5 (755.1) 誤りは知性の鋭敏さの欠落を示唆する。悪は知恵の欠如、罪は絶望的な精神の貧困さ、しかし、邪悪は、消えゆく人格制御を暗示する。

67:1.6 (755.2) 罪が、幾度となく選択されたり頻繁に繰り返されていくと、それは習慣となるかもしれない。常習的罪人は、容易に邪悪になり得る、つまり宇宙とその神性現

実のすべてに対し根っからの反逆者になり得る。ありとあらゆる種類の罪が許されるかもしれないが、我々は、邪悪になりきった者がその悪行に対し心から悲しみを経験したり、その罪への許しを受け入れるかどうかを疑う。

2. 反逆勃発

67:2.1 (755.3) サタンの視察直後、惑星の執行部が、ユランチアで大事を現実化に近づきつつある時、カリガスティアは、ある日、北大陸の真冬、同僚のダリガスティアと長い会議をし、後者は、そののち特別会議のためにユランチアの10の緊急協議会を召集した。この集会は、カリガスティア王子がユランチアの絶対主権者であると宣言しようとしているという声明で開始され、声明は、惑星政府の再編成と行政官庁のその後の官職再配分をそのままにして、全職務と全職権を受託者としてのダリガスティアの手に譲り渡すことにより全行政集団が退くことを要求した。

67:2.2 (755.4) 度肝を抜くようなこの要求提示後に、調整機能をもつ最高協議会の議長であるヴァンは、熟達した要請

をした。この著名な管理者で有能な法学者は、カリガスティアの提案の方向性を惑星反逆に近い行為であると決めつけて、サタニアの体系君主であるルーキフェレーンスに上訴が取り上げられるまでは会議出席者にすべての参加を控えるように求めた。そこで、全部下の支持を得た。上訴は、それに応じてジェルーセムに回され、直ちにユランチアの最高主権者としてカリガスティアを指名し、かれの命令への絶対無条件の忠誠を要求する指令が戻ってきた。　高潔なヴァンが、ダリガスティア、カリガスティア、それにルーキフェレーンスがネバドンの宇宙主権の侮辱罪を負うとして3名の正式起訴のために7時間におよぶ忘れがたい演説をしたのは、この驚くべき通達に答えてのことであった。そうして、エデンチアのいと高きものに支援と承認を求めた。

67:2.3 (755.5) その間にも、受送信回路は危機に陥った。ユランチアは孤立状態であった。惑星の天の生命のあらゆる集団は、突然に何の前触れもなく、外部からのすべての忠告と助言から全く切断されてしまった。

67:2.4 (755.6) ダリガスティアは、カリガスティアが「ユランチアの神であり、すべての上で最高」であると正式に宣言した。全員の前でのこの宣言で問題は明確にされた。各集団は、それぞれに分かれ、最終的には惑星のあらゆる超人的人格の運命を決定することになる審議や討議に入った。

67:2.5 (755.7) 熾天使や智天使、および他の天の存在体が、この痛烈な闘争、この長くて罪深い相剋の決定にかかわった。その孤立時点でユランチアにたまたま居合わせた熾天使やその仲間のような多くの超人的集団は、ここに引き止められ、罪と正義—ルーキフェレーンスの道と見えない父の意志—のどちらかを選択を強いられた。

67:2.6 (756.1) 7年以上もこの闘争は続いた。関係しているあらゆる人格が、最終的な決定を下すまでは、エデンチア当局は、干渉、あるいは介入をしなかったし、しようともしなかった。ヴァンとその忠誠な仲間は、長引く不安と堪え難い未決定に対する擁護も、解放もその時まで受けることはなかった。

3. 7年の危機の歳月

67:3.1 (756.2) メルキゼデク協議会は、サタニアの首都ジェルーセムにおける反逆勃発を放送した。非常時勤務のメルキゼデク達は、すぐにジェルーセムに派遣され、ガブリエルは、その権威が問題にされた創造者たる息子の代表として務めることを申し出た。この放送により、サタニア系の反逆事実についての体制は孤立し、その姉妹系列から隔離された。サタニア本部の「天の戦い」があり、それは局部体制のあらゆる惑星へと広がった。

67:3.2 (756.3) ユランチアでは、100名の有体部下の中の40名が(ヴァンを含む)、暴動参加を拒否した。部下の人間の同僚(変更されたものとそうでないもの)の多くもまた、マイケルとその宇宙政府の勇敢で高潔な擁護者であった。熾天使と智天使の中に凄まじい人格の損失があった。惑星に配属された行政熾天使と変遷熾天使のほぼ半数が、ルーキフェレーンスの主張を支持しその指導者とダリガスティアに加わった。4万119名の第一中間生物が、カリガスティアと手を握り合ったが、残りの存在体は、依託に対し忠実なままでいた。

67:3.3 (756.4) 反逆の王子は、自分の企ての実行のために不実な中間生物と反逆心のある人格の他集団を先導し、皆を編成した。一方ヴァンは、忠誠な中間者と他の忠実な集団を集め、惑星の部下と置き去りにされた他の天の人格救済のための重要な戦いを始めた。

67:3.4 (756.5) 忠臣者達は、この紛争中ダラマティアから数キロメートル東の無壁で、防備不十分な居留地に住んでいたが、用心深く絶えず気を配る忠実な中間生物が、その住居を昼夜警備されており、また彼らは、非常に貴重な生命の木を所持していた。

67:3.5 (756.6) 反逆勃発に際し、忠誠な智天使と熾天使は、生命の木の保護を引き受け、3名の忠実な中間者の助けを借りて、忠誠な40名の部下と変更された人間の仲間に限ってこのエネルギー植物の果実と葉の摂取を許可した。これらの部下の中には変更されたアンドン族の仲間が56名おり、不忠な部下のアンドン族の16人の従者は、主人の反逆参加を拒否した。

67:3.6 (756.7) ヴァンは、カリガスティア反逆の極めて重大な7年間に人間、中間者、天使からなる忠誠な軍隊の援助に

全霊を捧げた。宇宙政府に忠誠で、有能なヴァンのそのような揺るぎない態度からくる精神的洞察力と倫理上の堅実さは、明確な考え、賢明な論法、論理的判断、偽りのない動機、寡欲な目的、知性ある忠誠心、経験上の記憶、訓練された性格、そして楽園の父の意志を為すことへの自身の人格の絶対的献身の産物であった。

67:3.7 (756.8) この待機の7年間は、心の探索と魂の鍛錬の時期であった。宇宙情勢のそのような危機は、精神的選択要因としての強い心の影響を示す。教育、訓練、および経験は、進化する道徳的な生　物すべての重大な決断の大部分の要因である。しかしながら、内在する霊にとり、楽園の父の意志と道への忠誠心からの素晴らしい行為のために完全に奉げている生物の意志に力を与えることができるように人間の人格の意思決定力と直接に接触することは、全く可能なことなのである。これが、まさにアマドンの、ヴァンの仲間の変更された人間の経験の上で起こったことである。

67:3.8 (757.1) アマドンは、ルーキフェレーンス反逆においてずば抜けた人間の英雄である。アンドンとフォンタのこ

の男の子孫は、王子の部下に生命原形質を寄付した100人中の1人であり、その事件以来、仲間と人間の補佐としてヴァンに配属されてきた。アマドンは、長く耐え難い戦い中ずっと上司を支持することを選んだ。彼とその忠誠な仲間が、7年の紛争中、頭の切れるカリガスティアの欺瞞の教えのすべてに不屈の精神で抵抗する一方で、進化的人種のこの子供が、ダリガスティアの詭弁に動じることなく立っている光景は、奮い立たせるものであった。

67:3.9 (757.2) 宇宙情勢における最大限の知力と広大な経験をもって、カリガスティアは、身を誤った—罪に奉じた。アマドンは、最小限の知力で宇宙経験には全く欠ける状態で、宇宙業務と仲間への忠誠において忠実であった。ヴァンは、堂々たる、しかも効を奏する知的決断と精神洞察力との結合において心と精神の両方を活用し、その結果、達成し得る最上位の人格実現の経験的段階を達成した。心と精神が完全に結合されるとき、超人的価値の創造が、モロンチア現実の創造でさえも、可能である。

67:3.10 (757.3) これらの悲惨な時代の動揺する出来事の物語に終わりはない。しかし、ついに最後の人格の最終的決定が下され、その時、しかもその時限り、エデンチアのいと高きものが、ユランチアの権威奪取のために非常勤のメルキゼデク達と共に到着したのであった。ジェルーセムでのカリガスティアの概観的治世記録は抹消され、惑星回復の保護観察時代が、始まった。

4. 反逆後のカリガスティア100名

67:4.1 (757.4) 最後の点呼の際、王子の部下の有体の成員達は、次のように列をなしているのに気づいた。ヴァンとその全調整役員は、忠誠を通していた。アングと食料協議組織の3名の成員は、生き残った。家畜委員会は皆、畜産顧問全員と同様、反逆へと掃き集められた。ファドと教育学部の成員5名は、救われた。ノヅと産業と交易委員会の全員は、カリガスティアに加わった。ハプと啓示宗教の全協会は、ヴァンとその高潔な一団にずっと忠誠であった。ルツと全健康委員会は、身を誤った。芸術と科学協議会は、その団体に忠実であったが、部族政府のツツと代理委員会は皆、道をはずした。こうして、

100名のうちの40名は救われ、後にジェルーセムに移され、そこで楽園への旅を再開した。

67:4.2 (757.5) 反逆に参加した惑星の部下の60名は、指導者としてノヅを選んだ。皆は、謀反を起こす王子のために専心誠意働いていたが、すぐに生命の体系回路の維持が剥奪されたと気づいた。皆は、自分達が死すべき存在の状態に下げられていたという事実に目覚めた。それらは、本当に超人的であるが、同時に有形で、死ぬべき運命にあった。ダリガスティアは、人数を増やそうとして、本来の60名と変更されたアンドン系の44名の仲間は、遅かれ早かれ死滅を被る運命にあることを熟知していたので、緊急有性生殖方策を命じた。ダラマティアの破綻後、不忠な部下は、北と東に移動した。その子孫は、ノヅ族として、またその居住地域は、長い間「ノヅの土地」として知られていた。

67:4.3 (758.1) 反逆により取り残され、やがて地球の息子や娘と結婚するこれらの並はずれた超人的男性と超人的女性達の存在は、神が、死すべき者と配偶するために下りて来るという伝統的な物語の始まりとなった。こうして、

反乱後日の事実に基づくものではあるが、無数の神話伝説が、始まり、それは、後にノヅ民族とその子孫とのこれらのつながりに加わった先祖である様々な民族の民話と伝統に場所を見つけた。

67:4.4 (758.2) 精神的な支えを剥奪された部下の反逆者達は、最終的には、自然死を遂げた。そして、人類のその後の偶像崇拝の多くは、カリガスティアの時代のこれらの高く崇めらた者達の記憶を永続させる願望から芽生えた。

67:4.5 (758.3) 100名の部下は、ユランチアに来たとき、各自の思考調整者から一時的に分離された。メルキゼデクが到着するや否や、忠誠な人格は、(ヴァンを除く)、ジェルーセムに返され、待機している調整者と再結合された。我々は60名の反逆者の部下の結末を知らない。それらの調整者は、ジェルーセムにまだいる。事態は、ルーキフェレーンスの反乱全体が最終的に裁かれ、全関係者の運命が決定されるまで違うことなく現状のままであろう。

67:4.6 (758.4) カリガスティアやダリガスティアのような頭の切れる信頼を受けている者が身を誤る—裏切りの罪を犯す—と考えることは、天使や中間者のような者にとり非

常に難しいことであった。罪を犯した者達—彼らは、故意に、あるいは予め考えて反逆を始めなかった—は、上司に欺かれ、信じていた指導者に惑わされた。原始の心をもつ進化する人間の支持を得ることは同様に容易かった。

67:4.7 (758.5) ジェルーセムのルーキフェレーンスの反逆の犠牲者であったすべての人間、そして超人的な者達の圧倒的多数と誤り導かれた様々な惑星が、以来長い間心から自分達の愚かさを悔やんできた。だから我々は、最終的に高齢者達が、つい最近始めたばかりのサタニア反逆問題の裁決終了にあたる際、そのようなすべての誠実な悔悟者が、何らかの方法で名誉を回復し、宇宙業務のある局面に復帰されるであろうと信じている。

5.反逆からの即座の結果

67:5.1 (758.6) 反逆扇動のおよそ50年後、ダラマティアとその領域に大混乱が続いた。徹底的、基本的な世界全体の再編成が試みられた。革命は、文化の前進と人種改良方策としての進化と取ってかわった。文化的状態に突然の進歩が、優れた部分的に訓練されたダラマティアとその近

くの短期逗留者の間で現れたが、この新たで基本的方法が遠隔地の民族に試みられると、言葉では表現し得ない混乱と人種的大混乱という即座の結果が生じた。自由は、半ば進化した当時の原始人により放埒へとすばやく変えられた。

67:5.2 (758.7) 反乱直後、扇動の部下全体は、時期尚早に教えられた自由主義の結果都市の壁を包囲していた半野蛮人の大群に対し精力的に都市防衛にかかわった。そして、誤った方向に導かれ、間違ったことを教えられたダラマティアの辺境部族は、美しい本部が南の海中に没する何年も前に、すでに見事な都市に半野蛮的攻撃で押し寄せ、脱退部下とその仲間を北方へと追い立てた。

67:5.3 (759.1) 個人の解放と集団の自由に関する考えに基づく即座の人間社会再建のためのカリガスティアの企みは、迅速かつ、ほぼ完全な失敗であると分かった。この大変動が世界を混乱よりもひどい錯乱状態にしたままの社会は、早速もとの古い生物水準に下落し、カリガスティアの企て開始時の前進状態からはそれほどかけ離れていないところから前進への戦いが、再び始まった。

67:5.4 (759.2) ダラマティアに高波が、反乱から162年後に押し寄せ、惑星本部は海下に沈み、しかもこの陸地は、素晴らしい時代の気高い文化のほとんど全ての名残りが抹消されるまで二度と浮上はしなかった。

67:5.5 (759.3) それは、世界最初の首都が吸い込まれると、ユランチアのサンギク人種の最低の型だけを、すなわちノグ、つまり光と火の偽の神に捧げられる神殿としてすでに父の寺を変換してしまった裏切り者達だけを匿った。

6. ヴァン—強剛者

67:6.1 (759.4) ヴァンの追随者は、かつてバドナン系の初期の前任者全員が、サンギク部族誕生時代の直前に、無意識に人類の福祉のために尽くしたことがあったように、早くにインドの西の高地に退却し、混乱した低地の人種による攻撃を免れ、撤退した場所からの世界の再建計画を立てた。

67:6.2 (759.5) ヴァンは、メルキゼデク接待者の到着以前、人事の事務処理を各4名からなる10の委員会、王子の体制に全く相等しい集団の手に委ねた。先輩の居住の生命搬送者達は、40名のこの協議会の一時的な指揮を引き受け

た。この40名は、7年間待機して機能した。アマドン系の同様の集団は、39名の忠誠な部下がジェルーセムへの帰還時にこれらの責任を担った。

67:6.3 (759.6) アマドンのその名前によって知られるようになったこれらのアマドン部族は、アマドンが属した144人の忠誠なアンドン系からの派生集団であった。この集団は、39人の男性と105人の女性から成った。56というこの数字は、不滅状態であり、すべて(アマドンを除く)が、部下のうちの忠誠な成員と共に移動させられた。この高潔な一団の残りは、ヴァンとアマドンの指揮下にあって、各自のこの世での終わりまで地上での活動を続けた。それ等は、数を増やし、反乱後の長い暗い時代を経て指導力を世界に提供し続けた生物上のパン種であった。

67:6.4 (759.7) ヴァンは、惑星で機能するすべての超人的人格の名義上の首脳として留まり、アダームの時代までユランチアに残された。ヴァンとアマドンは、15万年以上メルキゼデクが専門とする生命の奉仕とともに生命の木の手法に支えられた。

67:6.5 (759.8) ユランチアの業務は、長い間12名のメルキゼデクからなる惑星の接待役の協議会に取り仕切られており、ノーランティアデクのいと高きもののである星座の先輩の支配者の命令により承認された。メルキゼデクの接待役に関連するものは、次のもの達を含む顧問協議会であった。堕落した王子の忠誠な補佐うちの1名、居住する生命搬送者2名、見習訓練中の三位一体化された息子、篤志の師なる息子、アヴァロンの光輝く宵の明星(周期的に)、熾天使と智天使の長たる者達、隣接する2惑星からの顧問、下位の天使の活動の長官、それに中間的被創造物の最高司令官であるヴァン。ユランチアは、こうしてアダームの到着まで治められ管理された。勇敢で忠誠なヴァンに、久しくユランチア業務を管理した惑星の接待役の協議会の位置が割り当てられたということは、不思議ではない。

67:6.6 (760.1) ユランチアの12名のメルキゼデク接待役は、勇敢な働きをした。それらは、文明の遺物を保存し、ヴァンは、自分達の惑星の方針を忠実に実行にし移した。ヴァンは、反乱後の1,000年のうちに進化した350以上の集団を広く世界に点在させた。この文明の前哨部隊は、サ

ンギク人種とわずかに混合された子孫、特に青色人種、およびノヅ系との忠誠なアンドン系の子孫がおもであった。

67:6.7 (760.2) 地球の生物学上の将来性にとって数多くの良い血統は、猛烈な反乱の妨げもかかわらず存在した。ヴァンとアマドンは、メルキゼデク接待役の指揮の下に、物質の息子と物質の娘のユランチア派遣を保証するために、人の物理的進化を最高点に到達するまですすめて、人類の自然な進化を促進する仕事を続けた。

67:6.8 (760.3) ヴァンとアマドンは、アダームとハヴァーの地球到着直後まで留まっていた。両者は、その数年後、ジェルーセムに転任され、ヴァンは、待機していた調整者とそこで再結合された。ヴァンは、楽園完成と集合中の人間の終局部隊の明かされていない長い長い小道へ進めという命令を待ち受ける間、ユランチアのために今は働いている。

67:6.9 (760.4) 星座の父は、ルーキフェレーンスがユランチアでカリガスティアを支えた後に、ヴァンがエデンチアのいと高きものに訴えると、ヴァンの主張のあらゆる点で

彼を支える即座の決定を送ったということが記載されるべきである。この答申は、送信中に惑星の通信回路が断ち切られたのでヴァンには届かなかった。ユランチアの孤立以来ずっとエネルギー伝達装置に詰まっていたこの実際の裁定が発見されたのは、つい最近のことであった。この裁定の発表は、この発見がなければ、ユランチア中間者の調査の結果としてユランチアの星座巡回への復興を待ち受けていたことであろう。エネルギー伝達装置は、情報の受信や送信はできるが、伝達の開始はできないので、惑星間の通信のこの外見上の偶然は、可能なのであった。

67:6.10 (760.5) サタニアの正当な記録の上でのヴァンの形式上の地位は、エデンチアの父のこの裁定がジェルーセムで記録されるまで、実際には、しかも最終的には定まっていなかった。

7. 罪の間接的影響

67:7.1 (760.6) 光に対する被創造物の意図的かつ永続的な個人の(求心性の)結末は、必然でも個別でもあり、また神性にとっての、そしてその被創造者個人にとっての関心事

である。魂を滅ぼす邪悪のそのような収穫は、邪悪な意志をもつ被創造者の内面を刈り取るものである。

67:7.2 (761.1) しかし、罪の外側からの影響においてはそうではない。受容した罪の非個人的(遠心性の)結末、そのような出来事の範囲内で機能必然でもあり、集合的でもある。

67:7.3 (761.2) 地球の業務は、惑星執行部崩壊後の5万年までには、人類が、カリガスティア到着時点の35万年前の総体的進化状態にはとうてい達し得ないほどに非常に混乱し、停滞していた。ある点での進歩は見られていた。他の方面では、多くの地盤が失われていた。

67:7.4 (761.3) 罪のその影響は、決して純粋に局部的ではない。宇宙の管理部門は生物体である。1人格の苦況は、ある程度まではすべてによって共有されなければならない。罪というものは、人が現実に向かいあう態度であることから、ありとあらゆる宇宙の価値水準にその固有の負の収穫を提示するように運命づけられている。しかし、誤った考え、悪行、または罪深い計画の全体の結果は、実際の履行段階でのみ知る。宇宙の法に対する違反

は、心に真剣にかかわることなく、または精神的な経験を害することなく、物質領域には致命的であるかもしれない。罪は、それが全人間の態度であるときにだけ、心の選択や魂の望みを意味するときにだけ、人格生存への致命的結果をともなう。

67:7.5 (761.4) 悪と罪は、物質的、社会的領域においてそれぞれの結果をもたらし、また、時として宇宙現実のある段階の精神的進歩を遅らせさえするかもしれないが、ある者の罪が、他者の人格生存にかかわる神性権利の実現を奪うことは決してない。永遠の生存は、心の決定と個人自身の魂の選択によってのみ危険に曝されるのである。

67:7.6 (761.5) ユランチアにおける罪は、生物進化を遅らせることはほとんどなかったが、人類からアダームの遺産の全恩恵を奪う働きをするのである。罪は、知能の発達、道徳的成長、社会的進歩、および集団の精神的到達を途方もなく遅らせる。しかしそれは、個人が、神を知り、心から神の意志をすることを選ぶ精神上の最高の成就を妨げたりはしない。

67:7.7 (761.6) カリガスティアは、反逆し、アダームとハヴァーは、履行をしなかったが、その後ユランチアに生まれる必滅者の誰とても、これらの大失敗のせいで個人の精神的経験で苦しむことはなかった。カリガスティアの反逆以来、ユランチアに生まれるすべての必滅者は、いくらか時間的に罰せられてきたが、そのような魂の将来的幸福が永遠に危険に晒されたことはかつて一度もない。誰も他人の罪のために極めて重要な精神的剥奪を受けはしない。罪は、管理的、知的、社会的領域におけるその広範囲の影響にもかかわらず、道徳上の自責、あるいは精神的結果において全く個人的である。

67:7.8 (761.7) 我々は、そのような破局を可能にする知恵の測定ができない一方で、宇宙全体で反映されるときこれらの局部的混乱の有効な結果についていつでも明察することができる。

8. 反逆時の人間の英雄

67:8.1 (761.8) ルーキフェレーンスの反逆には、サタニアの様々な世界における多くの勇敢な存在者が抵抗した。だがサルヴィントンの記録は、扇動の上げ潮におけるアマ

ドンの栄光的拒絶において、またヴァンへの揺るぎない献身において、全組織の傑出者としてアマドンを描いている—ヴァンとアマドンは、目に見えない父とその息子マイケルの主権への忠誠において不動状態で並んで立った。

67:8.2 (762.1) 私は、これらの重大な出来事の時点、エデンチアに配置されており、試験的かつ初めてのアンドン部族の血統からのかつての半野蛮人の信じ難い確固たるもの、並外れた献身、見事な忠誠心を日毎に告げるサルヴィントン放送をよく調べたときの経験した陽気さをいまだに覚えている。

67:8.3 (762.2) すべての下位の天の存在体からの長い7年間のサタニア反乱に関する第一の問合せは、エデンチアからサルヴィントンへと、さらにはユヴァーサにまで変わることなくずっと、「ユランチアのアマドンはどうした。まだ固守しているのか。」であった。

67:8.4 (762.3) もしルーキフェレーンスの反逆が、局部体制とその堕落の世界を不利な状態にしたのならば、もしこの息子とその惑わされた仲間の喪失が、一時的にノーラン

ティアデクの星座の進歩を妨げたのならば、その不忠な上司が、揮ったそれほどに途方もなく不利な圧力に直面し、宇宙の管理と行政のより高い概念のためにしっかりと立ち上がるこの一人の自然児の奮い立たせる業績と、断固たるその143人の彼の仲間の一群の広範囲にわたる提示の効果を比較せよ。そして、きみを安心させてあげよう。これは、かつてルーキフェレーンスの反逆のすべての悪と悲しみの全体的結果を十二分に上回るほどに、すでにネバドンの宇宙とオーヴォントンの超宇宙により多くの益をもたらしたのである。

67:8.5 (762.4) そして、このすべてが、楽園に人間の終局部隊を集結するために、また必滅の運命にある者—堅固なアマドンのような必滅の運命にある者—の上向きの前進の多くは平凡な粘土から未来の神秘的な使用人のこの広大な集団編成のために、父のもつ宇宙の英知ある計画の美しく感動的、かつ素晴らしく壮大な照明なのである。

67:8.6 (762.5) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 68
文明の夜明け

68:0.1 (763.1) これは、不完全ではあるが、真の文明が、動物生活も同然の状況から長い時代を経てより高度な人間の間で発達する後の時代へと長い長い前進のための人類の戦いの物語の始まりである。

68:0.2 (763.2) 文明は、人種的習得である。それは、生物学的に固有ではない。したがって、若者の後の各世代が新たにその教育を受けなければならないと共に、すべての子供は一定の文化の環境の中で育てられなければならない。優れた文明—科学、哲学、宗教上—の特徴は、世代から世代へと直接的継承によっては伝えられない。これらの文化的業績は、賢明な社会的遺産の保存によってのみ保護される。

68:0.3 (763.3) 共同的秩序の社会的発展は、ダラマティア教師により始められ、人類は、30万年の間、集団行動の考えに基づいて育まれた。この初期の社会的な教えの恩恵を受けたのは、特に青色人種で、赤色人種はある程度まで、黒色人種はとりわけ少なかった。ユランチアでは黄色人種と白色人種が、時代がさがるにつれ最も高度な社会的発展を示してきた。

1. 保護的社会化

68:1.1 (763.4) 人は、緊密にまとめられるとき、しばしば互いを好きになることを学ぶが、原始人は、自然に兄弟のような精神的感情や仲間との社会的接触願望に満ち溢れたりはしなかった。むしろ、初期の種族は、「力を合わせるところには、強さがある」ということを不運な経験によって身につけた。そして、いまユランチアにおける人の兄弟愛の即座の実現を邪魔をするものは、自然な兄弟愛のこの欠落なのである。

68:1.2 (763.5) 連合は、早くから生存の代償となった。連れのない者は、いかなる攻撃にも確実に報復をする集団に属する証拠となる部族の目印を有していなければ、無力であった。カイーンの時代においてさえ、集団結社の何らかの印なしで単独で外へ行くということは命にかかわることであった。文明は、暴力死に対する人の保険となったが、その保険料は、社会の数々の法的要求への服従によって支払われる。

68:1.3 (763.6) 原始社会は、こうして相互の必要性を基に、また、つながりからくる高められた安全性の上に設立され

た。そして人間社会は、この孤立に対する恐怖の結果、また不承不承気の協力によって果てしなく続く周期で発展してきた。

68:1.4 (763.7) 原始人は、集団というものは、個々の群れの単なる和よりも非常に大きく強いということを早くから学んだ。一致団結して働く100人の人間は、巨大な石を動かすことができる。20人のよく訓練された擁護者は、怒りの群衆を制止することができる。そうして社会は生まれた。単なる数の繋がりではなく、むしろ知能の協力者の組織化の結果として。しかし、協力は、人の本来の特質ではない。人は、まず恐怖を経験し、後に困難遭遇に際し、また永遠の想定された危険防止において、それが、最も有益であると気づくので協力することを学ぶ。

68:1.5 (764.1) このようにして早くから原始社会へと結団した民族は、仲間に対する防衛のみならず自然への攻撃にも成功していた。それらの者にはより大きい生存の可能性があった。したがって、ユランチでは文明が、その多くの妨げにもかかわらず着実に進行した。そして人の多くの失態が、これまでのところ文明を停止させたり破壊し

ていないのは、単に群衆での生存価値増大の理由に過ぎない。

68:1.6 (764.2) 現代的文化社会というものがかなり最近の現象であるということは、オーストラリアの原住民やアフリカのブッシュマン、およびピグミー族を特徴づけるような原始的社会状況の今日までの存続により明確に示されている。原始民族すべてにとても特徴的であった初期の集団的対立、個人的な疑惑、そして非社交的習性のようなものが、これらの進歩の遅い民族の中に観察できるかもしれない。社会性のない古代民族のこれらのみすぼらしい生存者が、人の生まれながらの個人主義的傾向というものは、より強力で権力を持つ組織や社会的進展とは首尾よく競争はできないという事実を雄弁に証言している。惑星王子の有体の部下と社会改善に努めるアダーム部族集団の後の働きの連合教育がなかったならば、60キロメートル、あるいは80キロメートルごとに異なる方言を話すこれらの遅れた、しかも疑い深い反社会的部族が、人は、いまどのような世界に住んでいるかを例証できるかもしれない。

68:1.7 (764.3) 現代の言い回し「自然にかえる」とは、無知の妄想、かつての偽りの「最盛期」実在への信仰である。最盛期の伝説の唯一の土台は、ダラマティアとエデンの歴史的事実である。しかしこの改善された社会は、ユートピアの夢の実現からは遠かった。

2. 社会発展における要因

68:2.1 (764.4) 文明社会は、孤立に対する嫌悪に打ち勝つ人の早期の努力の結果である。しかし、これは必ずしも相互の愛情を意味するわけではないし、ある原始集団の現在の不穏状態は、初期の部族が何を経て来たかをよく例証している。しかし、文明の個人は、互いに衝突するかもしれないし、文明それ自体が、矛盾だらけの奮闘や藻掻きの塊に見えるかもしれないが、それこそが、真剣な努力の証であり、致命的な澱みの単調さなどではない。

68:2.2 (764.5) 知能の水準が、文化の進行速度に相当の貢献をしてきた一方で、社会は、本質的には個人の生活様式における危険要素を減少させるように考案されており、人生での痛みを減らし、快楽要素増大に成功したのと同程度の速さで進歩してきた。その結果、社会全体が、自己

保持か、それとも自己満足かによる行き先—滅亡か生存—へとゆっくりと押している。自己保持は、社会に源を発するが、過度の自己満足は、文明を破壊する。

68:2.3 (764.6) 社会は、自己永続、自己保持、自己満足に関係があるが、人間の自己実現は、多くの文化的集団の当面の目標となるにふさわしい。

68:2.4 (765.1) 本来の人の集団本能は、現在ユランチアにあるような社会的組織の発達を説明するには不充分である。この生まれながらの集団傾向は、人間社会の根底にあるが、人の社交性の多くは、取得によるものである。初期の人間の繋がりに導く2つの大きな影響は、飢餓と性欲であった。これらの本能的衝動は、動物界と共通するものである。人間を一堂に集め、結合に駆り立てる他の2つの感情は、虚栄と恐怖、より詳しくは幽霊に対しての恐怖であった。

68:2.5 (765.2) 歴史は、人の長年の食糧への藻掻きの記録に他ならない。原始人は、空腹時にのみ考えた。食料貯蓄は、人の最初の自制、自己訓練であった。飢餓は、社会の発展につれ相互の繋がりのための唯一の誘因ではなく

なった。他の種類の数多くの飢餓が、つまり様々な必要性の認識の全てが、人類の繋がりをより近い関係に導いた。しかし今日社会は、人間が必要とする物の異常増加で釣り合いが取れなくなっている。20世紀の西洋文明は、甚だしい贅沢の重荷と人間の願望や切望の法外な増加の下に飽き飽きして呻いている。現代社会は、その広範囲にわたる相互の連携と非常に複雑な相互依存の最も危険な局面の1つの重圧に耐えている。

68:2.6 (765.3) 飢餓、虚栄、幽霊への恐怖は、社会的圧力の中で継続していたが、性の満足感は、一時的であり発作的であった。原始の男女を家庭維持の重荷を担うことに駆り立てたのは、性欲だけではなかった。初期の家庭は、常習的な満足感を奪われた男性の性欲不穏状態、そして女性のもつより高度のすべての動物の雌と幾分か共通している母性愛に基づくものであった。無力な赤ん坊の存在が、初期の男女の活動の分化を決定した。女性は、土地耕作のできる定住の住み家を維持しなければならなかった。そして、最も早い時代から、女性の居る場所が、つねに家庭と見なされてきた。

68:2.7 (765.4) 女性は、このようにして発展する社会の枠組にとり早くに不可欠となった。一瞬の性のためというよりは、むしろ食糧必要量の結果であった。女性は、自己維持に不可欠な協力者であった。女性は、食料供給者、荷物運搬用動物、それに乱暴な憤りをもつことなく相当の虐待に耐える相手であったし、これらの望ましい特色のすべてに加え、常に居合わせる性欲を満たす手段であった。

68:2.8 (765.5) 文明における永続する価値のほとんどすべてが、家族にその基礎がある。家族は、男女が、子供に平和の追求を教えると共に、反目の解決法の習得に成功した最初の平和集団であった。

68:2.9 (765.6) 進化における結婚の機能は、民族生存のための保険であり、単なる個人の幸福実現ではない。自己維持と自己永続は、家庭の現実の目標である。自己満足感は、性的繋がりを保証する動機を除き、付帯的であって不可欠ではない。自然は生存を要求するが、文明の技術は、結婚の喜びと家族生活の満足感を増加させ続ける。

68:2.10 (765.7) 虚栄心が、自惚れ、野心、体面を隠すために拡大されるならば、我々は、これらの傾向がいかに人間の繋がりの成立に貢献するかということばかりではなく、そのような感情は、誇示のための聴衆なくしては空しいものであるがゆえに、人をいかに結合するかをも見分けるかもしれない。虚栄心は、やがて自己を表に出し、かつ満足させるかもしれない社会舞台を必要とする他の感情、衝動と結びついた。この一群の感情は、すべての芸術、儀式、および遊戯的試合と競争の始まりをもたらした。

68:2.11 (766.1) 虚栄心は、活発に社会誕生の一役を担った。しかし、この顕示の時点で、自惚れの強い世代の邪な試みは、非常に分化された文明全体の複雑な構造を水浸しにし、水中に沈める脅威を与える。快楽への欲望は、飢餓への欲望に取って代わった。自己維持ための社会の正当な目的は、急速に人々を底辺に移し、自己満足の形態を脅かしている。自己維持は、社会を築く。勝手な自己満足は、必ず文明を破壊する。

3. 幽霊に対する恐怖の社交上の影響

68:3.1 (766.2) 原始的欲望は、最初の社会を生み出したが、幽霊への恐怖はそれを結合し、またその存在に人間以外の局面を与えた。一般的恐怖である肉体的苦痛、満たされない飢餓、または何らかのこの世の災難への恐怖の源は、生理的であった。しかし幽霊への恐怖は、新たで壮絶な恐怖の種類であった。

68:3.2 (766.3) おそらく人間社会の発展におけるで最大唯一の要因は、幽霊の夢であった。ほとんどの夢は、原始の心を大いに狼狽させたが、幽霊の夢は、霊界のあいまいで見えない架空の危険に対し、互いの保護のために心からの、しかも真剣な付き合いにおいてこれらの迷信深い夢みる者達を互いの腕の中に駆り立てて、実際に古代人を恐れさせた。幽霊の夢は、最も早く動物と人間の心の型に現れた違いの中の1つであった。動物は、死後の生存を心に描かない。

68:3.3 (766.4) この幽霊要素を除き、すべての社会は、基本的な必要性と生物的衝動に基づいていた。しかし、幽霊への恐怖、すなわち手を差し延べかつ個人の基本的な必要性から離れる恐怖、また集団を維持のための戦いをはる

かに超越する恐怖は、文明に新たな要因をもたらした。死者の霊への畏怖の念は、新の、驚くべき恐怖の形態、すなわち恐るべきかつ迫力のある恐怖を明らかにし、それは、初期の緩やかな社会的秩序を刺激することで徹底的に訓練されより制御された古代の原始集団へと導いた。そのうちの幾つかはまだ存続しているこの愚かな迷信は、非現実的で超自然の迷信から生じる恐怖を介し、人間の心を「知恵の始まりである主への恐怖」の後の発見に備えさせた。進化からの根拠のない恐怖は、神性に対し顕示によりもたらされた畏敬に取って代わるように考案されている。幽霊への恐怖の初期の信仰は、強力な社会的結合となり、人類は、大昔からずっと多少なりとも精神性の到達を追及しつづけてきた。

68:3.4 (766.5) 飢餓と愛は、人を一堂に会するように駆り立てた。虚栄と幽霊への恐怖は、人を団結させた。しかし、平和を促進している顕示の影響なくしてこれらの感情だけでは、人間の相互関係からくる疑念や苛立ちの重圧に耐えることはできない。社会の重圧は、超人側からの助けがなければ、一定の限界に達すると壊れ、これらの社

会可動への影響そのもの—飢餓、愛、虚栄、および恐怖—は、戦争と流血への人類の突入を企てる。

68:3.5 (766.6) 人類の平和性向は、天賦の才ではない。それは、啓示宗教の教えから、進歩的人種の蓄積された経験から、殊のほかイエスの教え、つまり平和の王子から導き出されたものである。

4. 社会慣習の発展

68:4.1 (767.1) 現代の社会慣行のすべてが、未開の始祖の原始習慣の発展から生じている。今日のしきたりは、変更され拡大された昨日の習慣である。個人にとっての習癖は、集団にとっての習慣である。集団の習慣は、習俗、あるいは部族の伝統—大衆のしきたり—へと発展する。現代の人間社会の慣例のすべてが、これらの初期の始まりからそれぞれの劣る起源がある。

68:4.2 (767.2) 慣習は、大衆存在条件にたいする集団生活の調整努力に始まったということを心に留め置かねばならない。慣習は、人間の最初の社会制度であった。これらの部族の反応のすべてが、快楽と力の教授を摸索すると同時に痛みや屈辱を避ける努力から生まれた。習俗の起源

は、言語の起源と同様、つねに無意識で意図的ではなく、それゆえに常に謎に包まれている。

68:4.3 (767.3) 幽霊への恐怖は、原始人を超自然なものを思い描くように追い立て、その結果、次には代々引き続く社会の慣習や風習を犯すことなく維持する倫理と宗教の強い社会的影響への地盤を確実に築いた。早くに築き具体化した慣習のうちの1つは、死者は、それによって一生を終えた自らの風習に嫉妬するという信念であった。従って、生存中自分達が敬った生活規則を大胆にも軽率な侮蔑で扱う生活している人間に恐ろしい罰を下すのであった。黄色人種の先祖への現在の崇敬にこのすべてが最も良く例証されている。その後の進化する原始宗教は、慣習を安定させるに当たり幽霊への恐怖を大いに補強したのだが、前進する文明は、いよいよ恐怖による束縛と迷信による奴隷状態から人類を解放しつづけた。

68:4.4 (767.4) 古代人は、ダラマティア教師が解放し自由にする以前、慣習に伴う儀式の無力な犠牲者として束縛されていた。原始の野蛮人には、絶え間のない儀式により制限が設けられた。すべては、朝の目覚め時から夜の洞窟

での眠りにつく瞬間まで全くその通りに—部族の習俗に従って—しなければならなかった。古代人は、慣用専制への奴隷であった。古代人の生活は、自由であったり自発的であったり、または独自なものは何もなかった。より高度の精神的、道徳的、社会生活に向けての自然の進歩もなかった。

68:4.5 (767.5) 原始人は、習慣にしかと捉えられた。未開人は、慣例への紛れもない奴隷であった。しかし新たな思考方法や改善された生活方法を始める勇気をもつ型の者から変種が、時々現れた。にもかかわらず原始人の惰性は、急速すぎる前進的文明の破滅的な適応障害への突然すぎる加速に対しての安全な生物的歯止めとなる。

68:4.6 (767.6) だがこれらの習慣は、純然たる弊害ではない。習慣の進化は続くべきである。急進的革命による完全な変化を企てるということは、文明の継続にとり破滅に等しいのである。習慣は、文明をつなぐ連続性の糸であった。人類の歴史の通り道には、捨て去られた習慣と廃れた社会的習慣の残物が撒き散らされている。しかし、いかなる文明も、より優れ、より適した習慣の取入れをし

ない限り、その習慣を捨てて持ちこたえていくことはなかった。

68:4.7 (767.7) 社会の存続は、主にはその慣習の発展次第である。習慣の発展過程は、試しの願望から生じる。新しい考えが提唱され、—結果として競争が起こる。進歩する文明は、進歩的な考えを迎え入れて続いている。時間と状況は、遂には存続のためにより適合する集団を選び出す。だがこれは、人間の社会構造における個々別々の孤立する変化が　より良いものであるということを意味するのではない。そうではない。大いにそうではない。何しろユランチ文明の前進のための長い戦いにおいて非常に多くの退歩があったのであるから。

5. 陸の技術 — 維持の方法

68:5.1 (768.1) 陸は社会の舞台である。人は役者である。そして、人は、常に陸の状況に適合するように行動を合わせなければならない。慣習の進歩は、常に陸地に対する人間の割合に依存している。これは、この認識の困難性にもかかわらず、その通りである。人の陸の技術は、または維持方法、加えてその生活基準は、習俗、慣習の総称

に等しい。そして、人生における要求への人の調整の和は、文化面の文明に相等しいのである。

68:5.2 (768.2) 最も初期の人間の文化は、東半球の川沿いに起こり、文明の前進には大きな4段階の歩みがあった。それらは次の通りであった。

68:5.3 (768.3) 収集段階。食物への抑えがたい欲望、つまり飢餓は、産業組織の最初の形式、つまり原始の食糧採集の列をもたらした。陸での食物収集のそのような飢餓行進の列は、時には15キロメートルの長さにもなるのであった。これが、原始の遊牧民的文化の舞台であり、現在アフリカのブッシュマンが辿っている生活様式である。

68:5.4 (768.4) 2. 狩猟段階。武器用の道具発明は、人が狩人になり、その結果、食物への奴隷状態からかなりの自由の獲得を可能にした。本格的な戦闘でひどく傷を負ったある考え深いアンドン人は、腱質で先を縛った長い棒を腕に、拳には固い火打ち石一個を使用する考えに至った。多くの部族が、独自のこの種類の発見をし、これらの様々な槌の様式が、大いなる人間の文明の前進の1つを

意味した。現今、幾つかのオーストラリアの土着民にはこの段階を超えての進歩はあまりなかった。

68:5.5 (768.5) 青色人種は、熟練の狩人と罠で獣をとる猟師となった。川に柵を設け、夥しい数の魚を捕らえ、過剰分は冬用に乾燥させた。罠と落とし穴の多くの巧妙な方法が、獲物捕獲に用いられたが、より原始の人種は、大き目の動物の猟はしなかった。

68:5.6 (768.6) 3. 遊牧段階。文明のこの局面は、動物の家畜化により可能にされた。アラブ人とアフリカ原住民は、最近の遊牧民族に属する。

68:5.7 (768.7) 遊牧生活は、食物奴隷からの更なる不安を除去した。人は、資本の利子で、すなわち群れの増加による生活を学んだ。そして、これが、文化と進歩のための更なる余暇を提供した。

68:5.8 (768.8) 前遊牧社会は、異性協力の社会であったが、畜産の普及が、女性を社会的な奴隷制の深みに陥れた。古くは、男が動物性の食料の確保、女が植物性の食料の調達をするのが務めであった。したがって、男が暮らしの

ための遊牧時代に入ると、女の威厳は大いに低下した。女は、生活に必要な野菜生産のためにまだこつこつ働かなければならないが、男は、ただ豊かにある動物性食物の調達に群れのところに行きさえすれば良いのである。その結果、男は女にあまり依存しなくなった。女性の地位は、遊牧時代全体を通して着実に衰えた。この時代の終わりまでには、群れの動物が、働き、子を産むことを期待されるように、女性は、作業をし、子を生むことを任され、かろうじて動物を越える存在となった。遊牧時代の男達は、家畜に対して大きな愛を持っていた。だから余計に、妻へのより深い愛情を育くまなかったということは残念なことであった。

68:5.9 (769.1) 4. 農業段階。この時代は、植物栽培化によってもたらされ、それは、物質文明の最高度の型を意味する。カリガスティアとアダームはともに、園芸と農業を教えようと努力した。アダームとハヴァーは、羊飼いではなく園芸家であり、当時、園芸は高度な文化であった。植物の育成は全人類に高尚化する影響を及ぼす。

68:5.10 (769.2) 農業は、世界における陸地と人間の割合を4倍強にした。それは、前の文化段階の遊牧従事と結合できるかもしれない。3段階が重なり合うとき、男は狩りをし、女は土を耕す。

68:5.11 (769.3) 牧夫と土の耕作者の間には常に摩擦がある。猟師と牧夫は、戦闘的で好戦的であった。農業家は、　ずっと平和主義型である。動物とのつながりは苦闘と勢力を示唆する。植物とのつながりは忍耐、平穏、および平和を植えつける。農業と産業は平和の活動である。しかし双方の弱点は、世界の社会的活動として興奮と冒険に欠けることである。

68:5.12 (769.4) 人間社会は、狩猟段階から牧夫のそれを経て領土的農業舞台へと発展した。そして、この段階的文明の各舞台では、次第に遊牧が少くなった。人はますます家に住み始めた。

68:5.13 (769.5) そしてその結果、いま産業は、更なる都市化と市民階級の非農業集団の増加を伴い農業を補っている。しかし、もしその指導者達が、最高度の社会の発展でさえも、健全な農業基盤につねに依拠する必要があると見

分けないならば、産業時代の存続を望むことはできない。

6. 文化の発展

68:6.1 (769.6) 人は、土からの生き物、自然の子である。いくら真剣に土地から逃れようとしても、帰するところ失敗は確かである。「人は塵であり、塵に戻る」は、文字通り全人類にり当てはまる。人の基本的葛藤は、過去に、現在に、そして未来にわたり陸にある。原始人の最初の社会的つながりは、これらの陸の苦闘に勝つ目的のためのものであった。陸地と人間の比率は、すべての社会文明の根底にある。

68:6.2 (769.7) 人の知力は、芸術と科学によって土地からの収穫を増加させた。同時に、子孫の自然増加は、いくらか抑えられ、その結果、文化面の文明の建設のための暮らしと自由時間が与えられた。

68:6.3 (769.8) 人間社会は、人口が直接陸の技術に合致し、与えられた生活水準に反比例して変化しなければならないと定める法によって支配される。これらの初期の時代を通じて、現在もさることながら、人と陸に関する需要と

供給の法則が、双方の算定価格を決定した。人の需要は、豊富な土地—占有されていない領域—の時代ずっと大であり、したがって、人命の価値は、非常に強調された。故に、人命損失は、いっそう恐るべきものであった。土地不足とそれに伴う人口過剰の間、人命は、わりあいに軽んじられ、その結果、戦争、飢饉、および疫病にはそれほど関心がもたれなかった。

68:6.4 (770.1) 土地の生産高が減少するか、または人口が増加すると、避けられない苦闘が再び始まる。すると人間性の最悪の特徴が表面化する。土地生産高の改良、機械技術の拡大、人口減少の全ては、人間性のより良い測面の開発を促進する傾向がある。

68:6.5 (770.2) 開拓段階の社会は、未だ熟練さていない人類の側面を開発する。美術と真の科学の進歩は、陸地対人間の比率をわずかに下まわる農業人口と産業人口によって支えられるとき、精神文化と共に、すべてが、より大きな生活密集地で最もよく栄えてきた。都市は、常に善、悪いずれかに対し住民の力を増加させる。

68:6.6 (770.3) 家族の規模は、いつも生活標準の影響を受けてきた。家族は、確立した状態か、ゆるやかな消滅点に至るほどまでに標準が高ければ高いほどより小さいのである。

68:6.7 (770.4) 生活水準は、大昔からずっと存続する集団の単なる量とは対照的に質を決定してきた。地方階級の生活水準が、社会の新たな階級制度、すなわち新しい慣習をもたらす。人は、生活水準が複雑になり過ぎたり、極めて贅沢になり過ぎると、急速に自滅的になる。階級制は、高密度の人口がもたらした激しい競争の強い社会的圧力の直接的結果である。

68:6.8 (770.5) 初期の人種は、しばしば人口制限のために考案された習わしに頼った。すべての原始部族は、奇形や病弱な子供を殺した。女の嬰児は、妻の買い入れ時代以前は、頻繁に殺された。子供は、出生時に時々絞め殺されたが、好まれた方法は遺棄であった。多子出産は、呪術か背信のいずれかによるものと信じられていたことから、双子の父は、通常一児を殺すことを要求した。原則としては、しかしながら、同性の双子は容認された。双

子に関するこれらの禁忌は、かつてほとんど世界共通であったが、決してアンドン系の慣習の一部ではなかった。これらの民族は、通常双子を好運の前兆と見なした。

68:6.9 (770.6) 多くの人種が、妊娠中絶技術を習得し、この習慣は、未婚者の出産禁忌体制後、ごく普通のことであった。未婚の少女がその子を殺すことは、長い間の習慣であったが、より文明的である集団の間では、これらの私生児は、その少女の母が後見人となった。多くの原始の氏族は、事実上、妊娠中絶と嬰児殺しの二つの習慣により絶滅した。しかし慣習の命令にもかかわらず、一度授乳されればその後では、ほんのわずかな子供しか殺されなかった—母性愛はとても強い。

68:6.10 (770.7) 20世紀においてでさえ、この原始の人口抑制の名残りを固持している。母が、3人か4人以上の子供を育てることを拒否する部族がオーストラリアにある。つい先頃、ある人食い部族は、5番目の子供が生まれる度に食した。マダガスカルでは、いくつかの部族は、今でも

縁起の悪い日に生まれる子供すべてを殺しており、全乳児のおよそ25パーセントの死の結果をもたらしている。

68:6.11 (770.8) 人口過剰は、世界的観点からは決して過去の重大問題ではなかったが、もし戦争が減少し、科学が人間の病気を一層抑えるならば、それは、近い将来、重大問題になるかもしれない。そのような時、世界の指導者達の英知に大きな試練が、到来するであろう。ユランチアの支配者達は、超常的な集団と莫大に増加する普通以下の集団の両極端の代わりに平均的、あるいは安定した人間の生殖を助長するための洞察と勇気を持ち合わせるであろうか。健常な人間が育成されるべきである。健常な人間は、文明の大黒柱であり、突然変異の人種の特殊な才能の源である。普通以下の人間は、社会の調整の下に保たれるべきである。正常以下の人間は、動物よりも高い知能を要するのだが、より高度の人類の型にとっては紛れもなく奴隷状態であるそのような低い要求しかしない産業の低い段階の機能において必要とされる以上に生殖されるべきではない。

68:6.12 (771.1) [かつてユランチアに配置されていたメルキゼデクによる提示]

論文 69
原始の人間の制度

69:0.1 (772.1) 人は、情緒的にユーモア、芸術、宗教の真価を認める能力において動物の祖先を超越する。社会的には、工具製作者、伝達者、制度建設者であるという点でその優位性を示す。

69:0.2 (772.2) 人間が長く社会集団を維持するとき、そのような集合体は、いつでも制度化に頂点をなす一定の活動方向の創始ということになる。人の制度のたいていが、集団保全の強化のために何かを与えるとともに労力節約であることが分かっている。

69:0.3 (772.3) 文明化した人間は、設立された制度の特徴、安定性、および継続性に大いなる誇りをもつが、人間のすべての制度が、禁忌により保護され、宗教により威厳が加えられるとき、それは、単に過去の蓄積された慣習である。そのような遺産は伝統となり、伝統は、ついには慣例に変わる。

1. 人間の基礎的制度

69:1.1 (772.4) 開発過剰というものは、過去、または現在において人格の影が薄くなり、自発性が弱まるという点において間違いなく個人の価値を下げるにもかかわらず、人間のすべての制度は、何らかの社会的要求を果たす。人は、前進する文明のこれらの創造による支配を容認するよりも、むしろ制度を制御すべきである。

69:1.2 (772.5) 人間の制度には3つの一般的種類がある。

69:1.3 (772.6) 1. 自己維持の制度。これらの制度は、食物飢餓から生まれる習慣と自己保存のその関連本能を包含する。それらは、産業、財産、利得のための戦争、および全社会の規定機構を含んでいる。遅かれ早かれ、恐怖の本能が、禁忌、しきたり、および宗教的制裁によるこれらの生き残りの制度の確立を促進する。しかし、恐怖、無知、迷信は、人間の全制度の初期の起源とその後の開発において際立つ役割を演じた。

69:1.4 (772.7) 2. 自己永続化の制度。これらは、性への渇望、母性本能、および人種のより高等の哀れみの感情から成長する社会の体制である。それらは、家庭と学校、家族

生活、教育、倫理、宗教の社会的保護手段を含む。それらは、結婚習慣、防衛のための戦争、住宅建設を含む。

69:1.5 (772.8) 3. 自己満足の制度。これらは、虚栄の傾向と自尊心の感情から芽生える習わしである。それらは、衣服や装身具を身につける習慣、社会的慣習、栄光のための戦争、踊り、娯楽、遊び、および他の官能の満足感を取り入れる。しかし、文明は、自己満足の独特の制度を一度も発展させたことはない。

69:1.6 (772.9) 社会の習わしであるこれらの3制度は、深く相互に関連し、一方が他方へと相互に依存している。ユランチアでは、それらは、一つの社会構造として機能する複雑な組織を呈している。

2. 産業の夜明け

69:2.1 (773.2) 原始産業は、飢饉の恐怖に備えての保険として徐々に発達した。その存在の初期に人は、特定の動物から収穫の間に不足の日々に備えて食物を蓄える貴重な経験を学ぶようになった。

69:2.2 (773.3) 平均的部族の境涯は、早期の倹約と原始産業の夜明け前、貧困と本当の苦しみのものであった。古代人は、食物のために動物世界全体と競争しなければならなかった。競争の比重は、人間を野獣の地位へと引き下げる。貧困は、天然のままの、暴君的状況である。富は、自然の贈り物ではない。それは、労働、知識、および編制から生じる。

69:2.3 (773.4) 原始人が付き合いの利点に気づくのに時間は掛からななかった。付き合いは、組織化へと導き、組織化の最初の結果は、時間と材料の即座の節約を伴う分業であった。労働のこの専門化は、圧力への適合—抵抗減少の道を追求すること—によって生じた。原始の野蛮人は、決していかなる本当の仕事も朗らかに、または快くもしなかった。原始人の適合性は、必要性からの強制によるものであった。

69:2.4 (773.5) 原始人は、重労働を嫌い重大な危機に直面しない限り急ごうとはしなかった。労働の時間的要素、与えられた課題を制限時間内にする考えは、完全に現代の概念である。古代人は、決して焦ることはなかった。それ

は、生来怠惰な古代の人種を産業の道へ駆り立てる存在のための激しい軋轢と絶えず前進する生活水準の二重の要求であった。

69:2.5 (773.6) 労働、工夫による努力は、人と獣を区別し、獣の奮闘振りは大部分は本能的である。労働への必要性は、人の至上の天恵である。王子の部下は皆働いた。部下は、ユランチアにおける力仕事を高尚にするために多くのことをした。アダームは園丁であった。万物の創造者であり、擁護者であったヘブライ人の神は働いた。ヘブライ人は、産業を最高に重んじる最初の部族であった。「働かざる者食うべからず」と命じる最初の民族であった。しかし世界の宗教の多くは、初期の怠惰の理想に戻った。ジュピターは、酒盛り騒ぎをする者であり、仏陀は、内省的余暇の愛好家になった。

69:2.6 (773.7) サンギク部族は、熱帯地方から遠のいて居住していたとき、かなり勤勉であった。しかし怠惰な魔術の熱愛者と仕事の唱道者—先見の明を発揮した者達—の間には、長い、長い苦闘があった。

69:2.7 (773.8) 人間の最初の洞察力は、火、水、食物の維持に向けられた。しかし原始人は、生まれつきの賭博者であった。つねに無駄に何かを手に入れたがっていたし、初期にはしばしば、我慢強い習慣から生じる成功は、まじないのせいだと考えられた。魔術は、洞察、自制、および産業の前になかなか譲歩しなかった。

3. 労働の専門化

69:3.1 (773.9) 原始社会の分業は、まずは自然に、次いで社会に、つまり情況によって決定された。労働における初期の専門化の順序は、次の通りであった。

69:3.2 (774.1) 1. 専門化は性に基づいた。女性の仕事は、子供といることを選ぶことから来ている。女性は、男性がそうするよりも自然に赤ん坊を愛する。女性は、したがって日常の仕事の働き手となり、一方男性は、猟師と戦士になり、集中的仕事と休息の時間を際立たせた。

69:3.3 (774.2) 禁制は、大昔からずっと女性を厳しく自身の領域に閉じ込めてきた。男性は、決まりきった骨折り仕事を女性に任せ、　この上なく利己的により快い仕事を選んできた。男性は、女性の仕事をすることをずっと恥じ

てきたが、女性は、決して男性の仕事をすることに少しの嫌気も示したことがない。しかし、記録するには奇妙ではあるが、男女は、家を建てたり内装に当たってはいつもともに働いてきた。

69:3.4 (774.3) 2. 年齢と病気による変更。これらの違いが、次の分業を決定した。老人と身体障害者は、道具と兵器を作る仕事に配置された。のちには潅漑作業に割り当てられた。

69:3.5 (774.4) 3. 宗教に基づく分化。祈祷師は、肉体的労役から免除された最初の人間であった。それらは、職業階級の先駆けであった。鍛冶屋は、魔術師としての祈祷師達の向こうを張る小集団であった。金属を扱う仕事上の技能が、人々を恐れさせた。「錫の鍛冶屋」と「黒鉄の鍛冶屋」は、白魔術と黒魔術の初期の信仰に起源を与えた。この信仰は、後に善と悪の幽霊、すなわち善と悪の霊の迷信にかかわることとなった。

69:3.6 (774.5) 鍛冶屋は、特権を享受する最初の非宗教集団であった。戦争の間は中立者と見なされ、この特別な余暇は、それらが一階級として原始社会の政治家になること

につながった。しかし、鍛冶屋はそのひどい特権乱用のため一般的に嫌われるようになり、祈祷師は、時を移さず自分達の競争相手への憎しみを培った。宗教(迷信)が、科学と宗教間のこの最初の競争で勝った。村から追放された鍛冶屋は、その後入植地周辺に初めての宿屋を、簡易宿泊所を整備した。

69:3.7 (774.6) 4. 主人と奴隷。労働の次の分化は、征服者と被征服者の関係から生じ、それは、人間の奴隷制度の始まりを意味した。

69:3.8 (774.7) 5. 分化は、さまざまの肉体的、精神的資性に基づいた。なお一層の分業が、人間の生来の違いにさらに有利に働いた。すべての人間が、平等に生まれるというわけではない。

69:3.9 (774.8) 産業の初期の専門家は、火打ち石の細工師と石工であった。次に、鍛冶屋が出現した。続いて、集団の専門化が、展開した。家族と一族の全体が、ある種類の労働に専従した。最も初期の祭司の階級制度の起源の1つは、部族の祈祷師は別として、専門の刀工家族の迷信的高揚によるものであった。

69:3.10 (774.9) 産業における最初の集団の専門家は、岩塩輸出者と陶工であった。女性は質素な焼き物を、男性は見栄えのよい物を作った。縫い物と機織りは、いくつかの部族間では女性が、他の部族では男性が従事した。

69:3.11 (774.10) 初期の商人は女性であった。それらは、兼業として商いをし、密偵として雇われた。やがて、通商が拡大するにつれ、女性は、仲介者—請負人夫として活動した。次に、用役のための手数料、すなわち利益を請求する商人階級が現れた。集団の物々交換の増大が、商業へと発展した。また熟練労働者の交換が、商品交換の後に続いた。

4. 交易の始まり

69:4.1 (775.1) ちょうどだ捕による結婚が、契約結婚の後に続いたように、急襲による強奪が、物々交換交易の後に続いた。初期の穏やかな物々交換の習慣と、　現代の交換方法による後の交易との間には長い海賊行為期間が介在した。

69:4.2 (775.2) 最初の物々交換は、中立地点に商品を置いていた武装商人により行われた。女性が、最初の市場を支え

た。彼女らが最初の商人であり、これは、それらが重荷の運搬人であったからである。男性は戦士であった。非常に早くから商売用の売り台が、つまり商人の兵器が互いに届かないように充分な広さの壁が開発された。

69:4.3 (775.3) 呪物が、穏やかな物々交換のための商品貯蔵所の上に見張り番として用いられた。そのような市場の地域は、窃盗に対して安全であった。物々交換、あるいは購買を除いては何も持ち去られなかった。商品は、呪物の見張り番のお陰でいつも安全であった。初期の商人は、自身の部族の中では周到に正直であったが、遠隔のよそ者を誤魔化すのは差し支えはないとみなした。初期のヘブライ人でさえ異教徒との取り引きにおいては別の倫理規定を認めた。

69:4.4 (775.4) 穏やかな物々交換は、以前には神聖な市場で武装をせず長い間続いた。市が開かれるこれらの同じ広場は、最初の神聖な場所となり、いくつかの国においては、後に「のがれの町」として知られた。いかなる逃亡者であろうとも市場に到着すると攻撃に対して無事であった。

69:4.5 (775.5) 最初の被重量測定物は、小麦や他の穀類であった。最初交換媒体は魚かヤギであった。その後牛が、物々交換の単位になった。

69:4.6 (775.6) 現代の筆記は、初期の通商記録から始まった。人の最初の文献は、商売振興文書、つまり塩の広告であった。初期の戦争の多くは、火打ち石、塩、および金属などの自然の埋蔵物をめぐって争われた。部族の最初の正式盟約は、種族間での塩の堆積物の所有に関するものであった。この盟約の場は、友好的、和平的考えの交換や様々な部族との交流の機会を提供した。

69:4.7 (775.7) 筆記は、「表象が彫り刻まれた棒」結ばれた紐、絵による記録、象形文字、および貝殻玉の帯、の段階をへて、初期の記号によるアルファベットへと進歩した。情報発信は、原始の発煙信号から電報、電話、および無線通信はもとより走者、動物の乗り手、鉄道、飛行機へと発展した。

69:4.8 (775.8) 新しい知識とより良い方法が、古代の交易者により棲息界中に伝えられた。冒険に連動した商業は、探検と発見をもたらした。これらすべてが、輸送手段を生

み出した。商業は、文化の融合を促進することですばらしい文明の推進者であった。

5. 資本の始まり

69:5.1 (775.9) 資本とは、未来の利益のための現在の放棄として適用された労働である。貯蓄は、維持と生存のための保険の形態を意味する。食糧貯蔵は、自制を育むとともに資本と労働の最初の問題を引き起こした。食料を持つ者が、強盗からそれを保護することができたならば、食料を持たない者より明確な利点があった。

69:5.2 (775.10) 初期の銀行家は、部族の勇敢な男性であった。彼は、一族の宝物を保管し、一方族全体は、来襲に際し彼の小屋を守った。こうして、個人の資本と集団の富の蓄積は、すぐに軍事組織へとつながった。当初そのような警戒は、よその侵略者に対して財産を守るように考案されていたが、後に隣接部族の財産と富急襲開始により実践的軍事組織の維持が習慣となった。

69:5.3 (776.1) 資本蓄積につながる基本的衝動は、

69:5.4 (776.2) 1. 飢餓—見通しに関連。食料貯蓄と保存は、十分な見通しを持ち、その結果将来の必要性に備える者達にとっての力と安らぎを意味した。食料貯蔵は、飢饉と災害に対する適切な保険であった。原始の慣習全体は、実際には人が現在を未来に従属させる助けとなるように工夫されていた。

69:5.5 (776.3) 2. 家族愛—必需品をあてがう望み。資本は、今日の欲望の圧力にもかかわらず、未来の要求に対して保証する財産の蓄えを表す。この将来の必要性の一部は、人の子孫と関係があるかもしれない。

69:5.6 (776.4) 3. 虚栄—財の蓄積誇示を切望すること。余分な衣類は、卓越性の最初の象徴の1つであった。収集の虚栄は、早くから人の自尊心を引きつけた。

69:5.7 (776.5) 4. 地位—社会的、政治的名声を購入する熱意。すなわち何らかの特別の仕事の功績による特権階級への加盟、または金銭支払いによりあからさまに特権階級に加盟する商品化した貴族階級が、早くから出現した。

69:5.8 (776.6) 5. 力—主人であることへの渇望。富の貸し付け、年あたり100パーセントの古代の貸出利率が、隷属化の手段として維持された。金貸しは、債務者からなる常備軍を創設し、自身を王に仕立てた。奴隷は、蓄積財産の最初の形態の一つであり、また往時の債務による奴隷制度は死後の肉体管理にさえも及んだ。

69:5.9 (776.7) 6. 死者の幽霊への恐怖—保護に課される祭司への謝礼。人は、自分の財産を使用して来世での前進を容易にするために早くから死のに備えての贈物を祭司に与え始めた。その結果、祭司は金持ちになった。それらは古代の資本家の中で最たるものであった。

69:5.10 (776.8) 7. 性の衝動—1人以上の妻を買う願望。人の商取引の最初の型は、女性交換であった。それは、長い間、馬の取り引きに先んじた。しかし、性の奴隷の物々交換は、決して社会を前進させなかった。そのような取り引きは、同時に家族生活の発展を妨げ、優れた民族の生物学的適性を汚染したので人種的不名誉であったし、今もそうである。

69:5.11 (776.9) 8. 自己満足の数多くの形式。ある者達は、それが、力を与えるという理由から富を追求した。他の者は、安楽の意味から財産のためにこつこつ働いた。古代人(それに後のある者達)は、自分の財源を贅沢品に浪費する傾向にあった。酔わせる物と薬物は、原始民族の好奇心をそそった。

69:5.12 (776.10) 人は、文明の発展につれ蓄えのために新たな誘因を身につけた。新たな欲望が、急速に本来の食物飢餓に追加された。貧困は、非常に嫌われ、死ぬと富者だけが直接天国に行くと考えられるようにまでなった。財産は、もったいぶった宴を張ることが、人の不名誉を一掃するほどまでに非常に高く評価されるようになった。

69:5.13 (777.1) 富の累積は、早くに社会的区別の象徴になった。ある部族の個人は、ある休日にそれを焼き尽くすか、または仲間の部族民にそれを分配することにより印象を与えるためにだけに長年財産を蓄積するのであった。これが、彼等を偉大な人物にした。現代人でさえ気前のよいクリスマスの贈り物の配分を楽しみ、その上金持ちは、博愛と学習のための大きな公共団体に寄付をす

る。人の方法は異なるが、気質は全く変わらないままである。

69:5.14 (777.2) それでも多くの富める古代人が、財産を切望する者達に殺される恐怖を理由に自分の財産の多くを分配したと記録することは公正というものである。裕福な者は、富に対する軽蔑を示すために何十人もの奴隷を当たり前のように犠牲にした。

69:5.15 (777.3) 資本は、人を解放する傾向があったが、社会的、産業的組織を大いに複雑にした。不正な資本家による資本の乱用は、それが現代の産業社会の基礎であるという事実を無効にするものではない。現代人は、資本と発明を通じ、かつて地球に先行したいかなる世代よりも高度の自由を味わっている。これは、事実として記録されるのであって、無分別で利己的な管理人による資本の多くの誤用を弁護しているのではない。

6. 文明に関連しての火

69:6.1 (777.4) 産業、統制、宗教、軍事上の4区分を伴う原始社会は、火、動物、奴隷、財産により生まれた。

69:6.2 (777.5) 火を起すことが、一つの跳躍で人を動物から永久に切り離した。それは、人間の基礎的発明、または発見である。火は、すべての動物がそれを恐れているとき、人が夜地面にいることを可能にした。火は夕暮れの社交を奨励した。それは寒さと野獣から守るだけではなく幽霊に対する防衛手段としてもまた用いられた。それは、初めは、熱よりも光のために使用された。多くの進歩の遅れた部族は、夜通し火が燃えていないと眠ることを拒否する。

69:6.3 (777.6) 火は、人が燃えている石炭を自身から奪うことなく隣人に与えることを可能にし、損失なく愛他的である最初の方法を提供することですばらしい文明化への促進者であった。母か長女に管理された家庭の火は、注意深さと頼みになることを必要としたことから最初の教育者であった。初期の家は、建築物ではなかったが、家族は、火の周り、炉端に集った。息子が、新しい家を築くと、家族の囲炉裏から燃えさしを持って行った。

69:6.4 (777.7) 火の発見者アンドンは、それを崇拝の対象として扱うことを避けたが、子孫の多くは、炎を迷信の対

象、あるいは霊と見なした。彼らは、廃物を燃やそうとはしなかったので火の衛生上の利点を得なかった。火を恐れた原始人は、香を散りばめ常に火の機嫌をとろうとした。古代人は決して火に唾を吐こうとはしなかったし、人と燃える火の間も通り過ぎようとはしなかった。初期の人類は、打を打ち出しに用いられる黄鉄鉱と火打ち石さえ神聖に保った。

69:6.5 (777.8) 消火は、罪であった。もし小屋が火事になったとしても、それは燃えるに任せた。寺社の火事は、神聖であり、毎年または何らかの災難の後には新しい火を焚きつけるのが習慣であったことを除いては決して消火は許されなかった。女性は、家庭の火の管理人であったので祭司に選ばれた。

69:6.6 (778.1) 火が神からどのように伝えられたかにまつわる初期の神話が、稲妻によって引き起こされる火の観測から生じた。これらの超自然起源の考えは、そのまま火の崇拝につながり、火の崇拝は、モーシェの時代まで続けられた習慣、「火を通り抜ける」習慣へとつながった。火を通り抜ける考えは、さらに死後に持続する。火の神

話は、初期には強力な結束であり、いまだにパルシ一教徒の象徴主義に存続している。

69:6.7 (778.2) 火は、料理に導き、「なま物を食する者」が嘲笑用語となった。また料理は、食物消化に必要な極めて重要なエネルギ一消費量を減少させたので、古代人は、社会的文化のために幾らかの体力を残すと同時に、畜産は、食料保証に必要な努力の軽減により社会活動のための時間を提供した。

69:6.8 (778.3) 火が、金属加工への扉を開き、その後の蒸気動力の発見と現代の電力使用へ導いたということに思いを馳せるべきである。

7. 動物の活用

69:7.1 (778.4) まず初めに、動物界全体が、人の敵であった。人間は、獣類から自らを防御することを修得しなければならなかった。まず最初、人は、動物を食したが、後には飼いならし、また役立たせることを会得した。

69:7.2 (778.5) 動物の飼い馴らしは、偶然に生じた。未開人は、アメリカインディアンがバッファローを狩猟したよ

うに、群れを追ったのであった。群れを取り囲むことにより動物の管理ができ、その結果、食物の必要性に応じて動物を殺すことができた。その後、さく囲いが組まれ、群れ全体が捕獲されたのであった。

69:7.3 (778.6) ある種の動物を飼いならすのは容易であったが、多くの動物は、象のように監禁状態では生殖しないのであった。さらに後には、ある種の動物は、人の臨場におとなしく従うということ、また監禁状態で生殖しそうであるということが判明した。このような恣意的選択の飼育による動物の飼い慣らしが、ダラマティアの時代からずっと素晴らしい進歩をなしてきた芸術により促進された。

69:7.4 (778.7) 犬は、飼いならされた最初の動物であり、ある犬が、1日中猟師について回り実際に一緒に家に帰ったときに飼いならしの困難な経験が始まった。犬は、長い間、食物、狩猟、輸送、および仲間として用いられた。初め犬は、唸るだけであったが、後には吠えることを学んだ。犬の鋭い嗅覚は、霊を見ることができるという考えにつながり、その結果、犬の盲目的崇拝が生まれた。

番犬の利用が、一族全体が夜眠ることをまず可能にした。やがて有形の敵同様に霊から家を守るのに番犬を使うことが習慣となった。犬は、人や野獣が接近すると吠えたが、霊が近くにいるときは唸った。今でも多くの者が、夜の犬の唸り声は死を予示するといまだに信じている。

69:7.5 (778.8) 男性が、狩人であったとき、女性に対してかなり親切であったが、動物の家畜化の後、カリガスティア混乱と相まって多くの部族が、女性を恥知らずに扱った。あまりにも女性全体を動物のように扱い過ぎた。男性の女性に対する残忍な扱いは、人間の歴史の最も暗い章の1つを構成している。

8. 文明の要因としての奴隷制度

69:8.1 (778.9) 原始人は、仲間を奴隷にすることを決して躊躇わなかった。女性が、最初の奴隷、家族の奴隷であった。遊牧民は、劣る性的相手として女性をとりこにした。この種類の性の奴隷制度が、男性の女性への依存を直接的に減少させた。

69:8.2 (789.1) 奴隷化の多くは、つい最近まで征服者の宗教の受け入れを拒否した軍事上の捕虜であった。捕虜は、初期の頃食われるか、死ぬまで拷問に掛けられるか、霊の生贄にされるか、互いに戦わされるか、またはとりこにされた。奴隷制度は、虐殺と人食い習慣からの進歩であった。

69:8.3 (789.2) 奴隷化は、戦争捕虜への慈悲深い待遇における大いなる前進であった。征服者の虚栄心を満足させるために王だけが救われ、男女、および子供の大量虐殺のアイーの待ち伏せは、いわゆる文明的民族も行った野蛮な虐殺の正確な絵である。バシャンの王オーグへの襲撃は、同様に残忍でかつ効果的であった。ヘブライ人は、戦利品として全財産を奪い、敵を「残らず壊滅した。」それらは、「全ての男の絶滅」の罰を加えると脅し、すべての都市に貢ぎ物を納めさせた。しかし現代部族の多くは、つまりあまり部族的利己主義でない者達が、優れた捕虜の採用を実践し始めてから久しい。

69:8.4 (789.3) アメリカの赤色人種のような狩人は、人を奴隷にしなかった。捕虜をわがものとして取り入れるか、ま

たは殺した。遊牧民の間での奴隷制度は、わずかな労働者しか必要としなかったので一般的ではなかった。牧夫は、戦争ですべての男性捕虜を殺し、女性と子供のみを奴隷として認めることが習慣となった。モーシェの律法は、これらの女性捕虜を妻にする明確な指示を有した。ヘブライ人は、満足がいかなければ追い払うことができたが、そのような拒絶された配偶者を奴隷として売ることはできず、—少なくともそれは文明における1つの進歩であった。ヘブライ人の社会的基準は粗雑であったが、周囲の部族のものよりはるかに上であった。

69:8.5 (789.4) 牧夫は、最初の資本家であった。動物の群れは資本を意味し、牧夫達はその利息—自然な増加—に頼って生活した。そして、奴隷か女性のいずれかを保つのにことにこの富を用いることには気が進まなかった。しかし、後には、男性を捕虜にし耕作を強いた。これが、初期の農奴制—土地に配属された人間—の始まりである。アフリカ人には地を耕すことを容易に教えることができた。したがって、彼等は大奴隷種族となった。

69:8.6 (789.5) 奴隷制度は、人間の文明の不可欠な一環を成した。それは、社会が混乱状態と怠惰から秩序と文明度の高い活動へわたる架け橋であった。それは、進歩が遅く怠惰な者が働き、その結果、優者の社会向上のための富と余暇活動の提供を強いた。

69:8.7 (789.6) 奴隷制度は、人に原始社会の統制機構の創案を強いた。それが、政府の始まりをもたらした。奴隷制度は、強い規制を必要としたし、また領主が、奴隷を管理できなかったことから実際にはヨーロッパの中世に姿を消した。古代の遅れた部族には、現代のオーストラリアの原住民のように奴隷は決していなかった。

69:8.8 (789.7) 実のところ、奴隷制度は非道ではあったが、それは、人が産業を学ぶ抑圧の学校であった。最終的に奴隷は、いやいやながらも創設に一役買ったより高度の社会の恩恵を共有した。奴隷制度は、最も憂慮すべき全ての破壊的社会悪として文化と社会成就の体制を創設するが、やがて陰険に内部から社会を襲うのである。

69:8.9 (789.8) 現代の機械の発明が、奴隷を時代遅れにした。奴隷制度は、複婚のように割りに合わないので終わろう

としている。しかし、かなりの数の奴隷を突然に解放するのは、つねに悲惨であるのは明らかであった。段階的解放は、結果として問題は少ない。

69:8.10 (780.1) 今日人は、社会機構上の奴隷ではないが、数千もの者が、自身の野心を負債に隷属させている。不本意な奴隷制度は、産業の変更された奴隷待遇の新しい、しかも改良された形態に譲歩した。

69:8.11 (780.2) 社会の理想は、普遍的自由であるが、怠惰は決して許容されるべきではない。すべての健常者は、少なくとも自活できる仕事量こなすことを強いられるべきである。

69:8.12 (780.3) 現代社会は逆の状態にある。奴隷制度はほとんど失せた。飼い馴らされた動物は消え去ろうとしている。文明は、動力のために火—無機の世界—へと記憶を遡っている。人は、凶暴性から火、動物、奴隷制度を経由して来た。今日人は、奴隷の助力と動物の応援を放棄し、元素状態で存在する自然の宝庫から富と権力の新たな秘密と源をもぎ取ろうと努めながら記憶を遡っている。

9. 私有財産

69:9.1 (780.4) 原始社会は、実質的には共同であり、原始人は、現代の共産主義の原理に基づいていなかった。これらの早期の共産主義は、単なる空論でもなく社会的な教えでもなかった。それは、簡単な実践上の自動調整であった。共産主義は、貧窮と欠乏を避けた。物乞いと売春は、これらの古代の部族間ではあまり知でられていなかった。

69:9.2 (780.5) 原始の共産主義は、人を特に均一にせず、平凡さを高めもしなかったが、不活発と怠惰に報い、それが産業を抑え、向上心を叩きのめしたのであった。共産主義は、原始社会の発展に不可欠の足場であったが、強い人間の4つの傾向に反したのでより高い社会秩序の発展に屈した。

69:9.3 (780.6) 1．家族。人は、資産の蓄積を切望するだけではない。資本財を子孫に遺贈することを望む。しかし、人の資本は、初期の共同社会では即消費されるか、彼の臨終に集団内で分配された。何の資産継承もなく—相続税は100パーセントであった。後の資産蓄積と資産継承慣

習は、独特の社会的進歩であった。これは、資本の誤用に伴うその後の甚だしい悪習にもかかわらず本当である。

69:9.4 (780.7) 2. 宗教上の傾向。原始人は、また次の世界での生活開始のための土台としての資産を貯えたいと思った。この動機は、かなり長い間、なぜ身の回り品を人と共に埋める習慣があったかを説明している。古代人は、富める者だけが、即座の喜びと威厳を手にして死を乗り切ると信じた。啓示宗教の教師、とりわけキリスト教の教師が、貧乏人は、金持ちと同等に救済を受けることができるとまず最初に公布した。

69:9.5 (780.8) 3. 自由と余暇に関する願望。初期の社会進化におけるの個人所得の集団内での配分は、実際には奴隷の形態であった。働く者が、怠け者の奴隷にされた。これは、共産主義の自滅的弱点であった。先を考えない者は、常習的に倹約する者に依存した。現代においてさえも将来への備えを怠る者は、自らの面倒を国家に(つましい納税者)に依存している。その上、いかなる資産も持たない者は、未だに自分達を養う人々を期待する。

69:9.6 (780.9) 4. 保全と権力への衝動。共産主義は、部族のやる気のない怠け者と部族への奴隷状態から逃がれようとしてさまざまの口実に訴える進歩的で成功した個人の欺瞞的実践により遂に崩壊した。しかし最初すべての蓄積は、秘密であった。原始時代の危険性は、表向きの資本の蓄積を阻んだ。後においてさえも、あまりに多くの富を蓄えることは最も危険であった。王は、金持ちの財産没収をねらって何らかの罪を確実にでっちあげるのであった。そして富者が死ぬと、葬儀は、家族が公益、または王のために多額の寄贈をするまで差し止められた。

69:9.7 (781.1) 最も初期における女性は、共同体の資産であり、母は、家族で優位を占めた。初期の首長は、すべての土地を所有し、全女性の所有者であった。結婚は、部族の支配者の同意を必要とした。女性は、共産主義の終わりとともに個人的に所有され、しかも父親が、徐々に家庭の支配を担った。このように家庭には、その始まりがあり、また一般的な複婚の習慣は、一夫一婦制へと徐々に取って代わった。(複婚制は、結婚における女性の隷属要素の遺物である。一夫一婦制は、男性1人と女性1人が、家庭樹立、子育て、相互の修養、および自己

改善の見事な事業における比類のない結合の、奴隷のない、理想である。)

69:9.8 (781.2) 道具と兵器を含むすべての資産は、初めは部族共通の所有物であった。私財は、最初は直接に触れた全ての物から成った。見知らぬ者が茶碗で飲んだ場合、茶碗は、それからはその人間の物であった。次には、血が流されたいかなる場所も、その負傷者かその集団の財産となった。

69:9.9 (781.3) 私財は、所有者の人格の何らかの部分に負うものであると考えられていたので、元々、このようにして尊敬された。資産の公明正大さは、安全にこの迷信の型に基礎を置いていた。私物の警備のために警察を必要とはしなかった。人は、他の部族の物品を盗用することに躊躇いはなかったが、集団内での盗みはなかった。資産との関係は死をもって終わらなかった。早い時期から個人の所有物は、燃やされ、次に死者が埋葬され、その後に、残された家族、または部族に引き継がれた。

69:9.10 (781.4) 装飾用の身の回り品は、お守りを身につけることから始まった。虚栄、加えて幽霊への恐怖は、古代人

が、好みのお守り、つまり必要性を超えて評価されるそのような所有物を取り除く試みすべてに抵抗させた。

69:9.11 (781.5) 眠りのための空間は、人の最初の所有物の1つであった。その後、族長が、家の敷地を割り当てた。族長は、部族のために全ての土地を任され保持した。やがて、火の場所が所有権を与えた。また、さらに後には、井戸は、それを取り囲む土地の所有を確立した。

69:9.12 (781.6) 個人の最初の所有物の中には泉と井戸があった。呪物の慣行全体が、泉、井戸、木、作物、蜂蜜の警備に利用された。呪物への信仰喪失に続いて法が、個人の所有物の保護のために発達した。しかし、狩猟法、狩りの権利が、長らく土地の法に先行した。アメリカの赤色人種は、決して個人の土地所有権というものを理解しなかった。白人の物の見方を理解することができなかった。

69:9.13 (781.7) 私財には早くから家族の印が付され、これが、初期の家紋の起こりである。土地はまた、霊の見張りの下に置くことができた。祭司は、一区画の土地を「清め」、それは、次にそこで直ちに魔力禁制の保護下に置

かれるのであった。所有者は、そこから「祭司の肩書き」を持つと言われた。ヘブライ人は、家族の道標を大いに重んじた。「隣人の地境を移す者は呪われる。」これらの目印の石には祭司の頭文字があった。木さえも、頭文字を付せられると私財になった。

69:9.14 (782.1) 初期においては、作物だけが私有であったが、継続的農作については所有権が与えられた。農業は、このように土地私有の起源であった。終身保有権のみが、まず個人に与えられ、死に際し、土地は部族に戻った。部族から個人に認可された最初の土地の権利は、墓所—家族用の埋葬地—であった。土地は、後の時代になるとそれを取り囲んだ者に属した。しかし、都市は、通常公共の牧草と包囲攻撃の際の使用のための一定の土地を留保した。これらの「共有地」は、初期の共同所有権の形式の名残りを表わしている。

69:9.15 (782.2) 国が、課税の権利を有し、次第に個人への所有地を割り当てた。地主は、権利を保証され賃貸料の取り立てができ、土地は、収入源—資本—となった。土地

は、最終的に販売、譲渡、抵当、および差し押さえで実際に交渉可能になった。

69:9.16 (782.3) 私有権は、より一層の自由と安定性をもたらした。しかし土地私有権には、公共の管理と指揮が機能しないときに限って社会的認可が与えられ、やがて奴隷、農奴、および土地を持たない階級が、あとに続いた。だが改良された機械が、徐々に人を奴隷状態の労役から解放している。

69:9.17 (782.4) 資産権は絶対的なものではない。それは、純粋に社会的である。しかしながら、政府、法、秩序、市民権、社会的特権、慣習、平和、および幸福のすべては、現代の民族がそれらを享受しているように、資産の私有権を中心に発達した。

69:9.18 (782.5) 現在の社会秩序が必ずしも正しいというわけではないが、—神性でも、神聖でもない—人類は、徐々に修正することでうまく事を運ぶであろう。あなたが持っている物は、先祖の知るいかなる制度よりも大いに良いのである。社会秩序の変更に際しては、改善を確実にしなさい。祖先が捨てた常套手段を試すことを納得して

はならない。前進せよ、後退ではなく。発展を続けよ。退歩してはならぬ。

69:9.19 (782.6) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 70
人間の政府の進化

70:0.1 (783.1) 人間は、暮らしを立てる問題を部分的に解決するや否や、人間関係を統制する課題に突き当たった。産業発達は、法、秩序、および社会的調整を要した。私財は政府を必要とした。

70:0.2 (783.2) 抗争は、世界進化において自然である。平和は、ある種の社会の統制的体制によってのみ保証される。社会的規制は、社会的組織と切り離すことはできない。結合は、何らかの権限の制御を含意する。政府は、部族、一族、家族、および個人の反目の調整を余儀なくさせる。

70:0.3 (783.3) 政府は、無意識の発達である。それは、試行錯誤で進化する。それには、生存価値がある。それゆえ伝承的となる。無秩序は、悲惨さを増大した。それ故、政治が、すなわち匹敵する法と秩序が、徐々に台頭した

し、もしくは台頭しつつある。存在のためのな紛争への強要は、文字通り文明進歩の道づたいに人類を駆り立てた。

1. 戦争の起源

70:1.1 (783.4) 戦争は、進化する人間の自然な状態であり遺産である。平和は、文明促進を測定する社会的基準である。人は、前進する人種の部分的社会化の前には、きわめて個人主義で、非常に疑り深く、信じられないほどに短気であった。暴力は、自然の法則であり、敵愾心は、子供の無意識な自然反応であり、一方戦争とは、これらの同じ活動が、集団的に続行されれるものに過ぎない。そして文明組織が、何処であろうと何時であろうと前進する社会の複雑な状態からの重圧を感じ始めると、人間の相互作用からくる苛立ちに対し、これらの初期の方法である暴力による調整のための即座の、かつ破滅的な逆戻りが、つねに存在する。

70:1.2 (783.5) 戦争は、誤解と苛立ちへの動物的反応である。平和は、そのような問題や困難のすべての文明的解決策に伴う。サンギク部族、後の劣化したアダーム系とノヅ

系は皆、ともに好戦的であった。アンドン系では黄金律が早くから教えられ、また今日でさえ、そのエスキモーの子孫は、その律に従って生活している。習慣は、それらの中に強く存在しており、彼等には暴力的反目はない。

70:1.3 (783.6) アンドンは、各自が、木を罵り棒で叩くつことで争いを解決することを自分の子供達に教えた。最初に棒の折れた者が、勝者であった。後日のアンドン人は、論争の当時者が、互いをからかったり嘲ったりするその間に、聴衆が、その拍手で勝者を決める公開の催し物を開き争いに決着をつけたものであった。

70:1.4 (783.7) しかし、戦争のような現象は、社会が、実際に十分に、平和な年月を経験し、軍事的実践を容認する程度にまで発展するまではあり得なかった。他ならぬ戦争の概念は、何らかの組織を意味する。

70:1.5 (784.1) 個人の苛立ちは、社会集団の台頭と共に集団内に沈められるようになり、これが、種族間の平和を犠牲にした種族内の平穏を促進した。平和は、このようにいつもまず最初に外集団、つまりよそ者を嫌う集団内、ま

たは部族内で享受された。古代人は、よそ者の血を流すことを美徳と見なした。

70:1.6 (784.2) にもかかわらず、初めはこれさえうまくいかなかった。初期の首長達が誤解を解こうとするとき、部族の石合戦を少なくとも年に1度は、許可する必要があると分かった。一族は、2班に分かれ、1日がかりの戦をするのであった。そしてこれは、楽しみ以外の何ものでもなかった。全員が実に戦いを楽しんだ。

70:1.7 (784.3) 人は動物から進化した人間であり、すべての動物は好戦的であるが故に戦闘は続く。初期の戦争原因には、次のようなものがあった。

70:1.8 (784.4) 1. 飢餓、それが食料襲撃に導いた。土地不足が常に戦争を引き起こし、初期の平和部族は、これらの争いの間に事実上撲滅された。

70:1.9 (784.5) 2. 女性不足—家事の手伝い不足を取り除くための試み。女性掠奪は、常に戦争を引き起こしてきた。

70:1.10 (784.6) 3. 虚栄—部族の武勇を示す願望。優勢な集団は、劣勢民族にその生活様式を押しつけるために戦うのであった。

70:1.11 (784.7) 4. 奴隷—労働階層補充の必要性

70:1.12 (784.8) 5. 周辺部族が、仲間の部族民に死をもたらしたと思われる確信とき、報復は、一族のとり戦争の動機であった。悲しみは、頭部が家に持ち帰られるまで続いた。報復戦争は、比較的現代に至るまでうけが良かった。

70:1.13 (784.9) 6. 娯楽—戦争は、初期において青年に娯楽と見なされていた。戦争を起こすに足る名目が生じなければ、隣接部族は、休日のつもりで略奪に着手するために、すなわち偽の戦いを楽しむために、やや友好的な戦いに出掛けるのが習わしであった。

70:1.14 (784.10) 7. 宗教—宗派へ改宗させる願望。原始宗教すべてが、戦争を是認した。つい最近、宗教は、戦争に難色を示し始めた。あいにく初期の司祭職は、通常は武力と

同盟を結んだ。長い間の最大の和平工作の1つは、政教分離の試みであった。

70:1.15 (784.11) 昔の部族は、常に神の言いつけで、首長、または祈祷師の命令により戦争をした。ヘブライ人は、そのような「戦いの神」を信じた。ミディアン系の襲撃物語は、古代の部族戦争における非人道的残虐行為の典型的な詳説である。この襲撃は、すべての男性の虐殺と、すべての男子児童とすべての非処女の女性のその後の殺害を伴う20万年前の部族の首長の慣習に栄誉を授けたのであろう。そして、このすべてが、「イスラエルの主なる神という名」において実行された。

70:1.16 (784.12) これは、社会進化—民族問題の自然な解決—の物語である。地球での自身の運命を解決する人間。そのような残虐行為は、責任を神にかぶせる人の傾向にもかかわらず、神による扇動はない。

70:1.17 (784.13) 軍事上の寛容さは、人類にはなかなか生まれてこなかった。一人の女性、デボラが、ヘブライ人を統治したときでさえ、同じ大規模の残酷さが続いた。軍司令

官は、「陣営の者はみな剣の刃に倒れ、残された者は1人もいなかった。」という結果を異教徒にもたらした。

70:1.18 (785.1) 毒の兵器が、民族歴史上のごく早期に使用された。あらゆる種類の切除が、慣行された。シャウールは、ダーヴィドが娘ミカールのために支払うべき結婚持参金としてペリシテ人100人の包皮を臆せず要求した。

70:1.19 (785.2) 初期の戦争は、部族間での全体としての争いであったが、後代後においては、異なる部族の2人の個人に揉め事があると、両方の部族が戦う代わりに、2人の論争者が決闘をした。また2つの軍隊が、ダーヴィドとゴリアテの事例のように双方から選ばれた代表者間での闘いの結果にすべてを賭けるのが習慣となった。

70:1.20 (785.3) 戦争の最初の改良点は、捕虜にすることであった。次に女性は、戦争行為から免除され、間もなく非戦闘員の認識が生まれた。やがて軍事階級と常備軍が、戦闘の増加と複雑さとに足並をそろえるために発達した。そのような戦士は、初め女性との交際を禁止され、また女性は、常に兵士に食べ物を供給し、看護をし、兵士を

戦闘に追い立てたりしてきたものの、とうの昔に戦うのはやめていた。

70:1.21 (785.4) 宣戦布告の習慣は、大いなる進歩を意味する。そのような戦うという意志宣言は、公正感到着の前兆となったし、しかも「文明的な」交戦規則のゆるやかな発展が、これに続いた。ごく早期に、信仰の場所近くでは戦わない、さらに後には、特定の祝日には戦わないという習慣が生まれ、次には、庇護権の一般的認識が生じ、政治亡命者は、保護を受けた。

70:1.22 (785.5) こうして戦争は、原始人の狩猟から「文明」諸国の若干の秩序正しい体系へと徐々に進化したのであった。しかし、社会への反目的態度から親善のそれへの移行は、ゆっくりでしかない。

2. 戦争の社会的価値

70:2.1 (785.6) 過去におけるすさまじい戦争というものは、1万年では自然には起こらないであろう社会変化をもたらしたり、新しい考えの採択といったものを容易にしたのであった。これらのある種の戦争利点のために支払われる惨憺たる代価は、社会が一時的に未開状態に戻されると

いうことであった。文明上の理由は、放棄されなければならなかった。戦争は強力な、非常に高価で最も危険な薬である。それは、しばしばある種の社会不安に効くが、時として患者を殺し、社会を破壊する。

70:2.2 (785.7) 不断の国防の必要性が、多くの新たで高度な社会適応を生み出す。今日社会は、当初は完全に軍事的であった多くの有用な革新の恩恵を受けており、軍事教練の初期形態のその1つであったダンスは、戦争に恩恵を受けてさえいる。

70:2.3 (785.8) 戦争が過去の文明に社会的価値を持っていた理由は、それが、

70:2.4 (785.9) 1. 規律を課し、協力を強要した。

70:2.5 (785.10) 2. 不屈の精神と勇気を重んじた。

70:2.6 (785.11) 3. 愛国心を育て結束させた。

70:2.7 (785.12) 4. 力がなく適さない民族を滅ぼした。

70:2.8 (785.13) 5. 原始人の平等の幻想を解消し、社会を選択的に階層化した。

70:2.9 (785.14) 戦争には、 ある種の進化と淘汰的価値があったが、奴隷制度と同様に、それはいつか、ゆるやかに進む文明として放棄されなければならない。昔の戦争は、旅と文化交流を促進した。現代の輸送機関と通信の方法は、これらの目的に一層役立っている。昔の戦争は国を強化したが、現代の戦いは、教化された文化を崩壊する。古代の戦争は、劣性民族の大量殺害をもたらした。現代の紛争の最終結果は、最良の人間の群体の選択的破壊である。初期の戦争は、組織と効率性を助長したが、現在、これらは近代産業の照準となった。戦争は、過去の時代に文明を押し進める社会的発酵体であった。いまこの結果は、野心と発明がよりよく成し遂げる。古代の戦争は、戦さの神の概念を後押したが、現代人は、神は愛であると教えられてきた。戦争は、過去において多くの貴重な目的を果たし、文明形成において不可欠の足場であったが、いまは急速に、文明上の破綻—いかなる方法にてもその祈りに付帯する惨たる損失に釣り合う社会的利益配当の生産不能—をきたしている。

70:2.10 (786.1) かつて医師は、多くの病気の治療として流血を信じていたが、その後これらの大半の疾患に対するより

良い療法を発見してきた。そこで国際戦争の流血もまた、国の害悪除去ためのより良い方法の発見に必ずとって代わらなければならない。

70:2.11 (786.2) ユランチアの国々は、既に国家主義の軍国主義と産業主義との巨大な戦いを始めてしまい、様々な意味でこの葛藤は、牧夫である狩人と農夫との間での長年の戦いに類似している。しかし、産業主義が軍国主義を打ち負かすそうとするならば、それにつき纏う危険を避けなければならない。ユランチアに芽生え始めた産業の危険の原因は次の通りである。

70:2.12 (786.3) 1. 物質主義への強い動向、精神の盲目性

70:2.13 (786.4) 2. 富と権力の崇拝、価値の歪み

70:2.14 (786.5) 3. 贅沢の悪習、文化の未熟さ

70:2.15 (786.6) 4. 増加する怠惰の危険性、奉仕への無感覚

70:2.16 (786.7) 5. 望ましからぬ人種的軟弱性の増大、生物学上の劣化

70:2.17 (786.8) 6. 標準化された産業奴隷制度の脅威、個性の停滞。労働は高尚にし、苦役は感覚を失わせる。

70:2.18 (786.9) 軍国主義は独裁的で残酷—野蛮—である。それは、征服者間での社会的組織を促進はするが、敗戦者を崩壊させる。産業主義は、さらに文明化され、独創力を増進し個人主義を奨励するように維持されるべきである。社会は、あらゆる可能な方法を尽くして独創性を育成すべきである。

70:2.19 (786.10) 戦争を賛美する誤りを犯してはいけない。むしろそれが、社会のためにしてきたことを見分けたうえで、人が、文明の前進を続けるためにその代用品が提供しなければならないものをより正確に心に描けるようにしなさい。人は、そのような適切な代用品が用意されなければ、戦争が長く続くことを確信するのである。

70:2.20 (786.11) 人は、平和が物質繁栄に最善であると完全に、かつ繰り返し確信するまでは、また社会が、人類の自己保存反応がもつ絶えず蓄積する感情と活力の解放のために考案された集合的原動力を定期的に緩めさせるその固有の傾向を満たすために賢明に平和的代用品を備えるま

では、決して平和を正常な生活状態として受け入れないであろう。

70:2.21 (786.12) だが過ぎ去っても、戦争は、傲慢な個人主義者の人種が、高度に集中する権威—最高責任者—に服従を強いられる経験的訓練場として支持されるべきである。古風な戦争は、統率力のために本質的に偉大な者達を選んだが、現代の戦争はもはやこれをしない。指導者を見い出すために社会は今、平和の獲得、すなわち産業、科学、および社会的な達成に取り掛からなければならない。

3. 初期の人間の繋がり

70:3.1 (787.1) 群れは、最たる原始的社会においてすべてである。子供でさえもその共有財産である。進化する家族が、子育てにおいて群れに取って代わった一方で、新興の一族と部族は、群れを社会単位とみなした。

70:3.2 (787.2) 性欲と母性愛が、家族を確立する。しかし真の政府は、秀逸な家族集団が形成するようになるまで出現しない。指導者の地位は、遊牧集団の家族形成以前には非公式に選ばれた個人に与えられた。この原始段階を超

えての進歩は、アフリカのブッシュマンには決してなかった。彼らには、群れの中に頭という者がいない。

70:3.3 (787.3) 家族は、血縁者の集合体である一族の中で結びついた。これらは次に、部族、地域共同体へと発展していった。戦争と外部の圧力が、親族関係の一族に部族組織を押しつけたが、この早期の原始集団をある程度の内部の平和状態に結合させていたのは、商業と交易であった。

70:3.4 (787.4) ユランチアの平和は、幻想的平和計画に関する感傷的詭弁の全てによるよりも、国際的な貿易組織によりさらに促進されるであろう。貿易関係は、より良い輸送のみならず、言語の発展により、また改良された通信方法により容易にされてきた。

70:3.5 (787.5) 共通語の欠如が、常に平和集団の発展の妨げとなっていたが、貨幣が、現代貿易の世界共通語となってきた。現代社会は、主に産業市場により結合している。利得追求の動機は、役立つという願望により増大させられるとき強力な教化をする者である。

70:3.6 (787.6) 初期における各部族は、増加する恐怖と疑念の同心円に囲まれていた。従って、かつては見知らぬ者を殺す慣習が、後には、奴隷にすることになった。友情という昔の考えは、一族への受け入れを意味した。そして、一族の成員は、死を生き残る—最も初期の永遠なる命の概念の1つ—と信じられていた。

70:3.7 (787.7) 縁組の儀式は、互いの血を飲むことで成立した。いくつかの集団では、血を飲む代りに唾液が交換され、これが古代の社交上の口づけの習慣の始まりである。すべての結合の儀式は、結婚であれ縁組であれ、常に祝宴によって終結された。

70:3.8 (787.8) 後の時代には赤葡萄酒で薄められた血が、用いられ、やがて縁組儀式の固めには葡萄酒だけが飲まれ、それは、杯に触れることで示され、飲物を飲み込んで行われた。ヘブライ人は、この縁組儀式の改変形態を採用した。そのアラブ人の先祖は、部族出身者の生殖器に候補者の手が置かれている間に誓いを立てる方法を用いた。ヘブライ人は、受け入れたよそ者を親切に、そして兄弟のように採り扱った。「共に住む見知らぬ者を自分

達の間に生まれた者とし、また自分を愛するように愛すべきである。」

70:3.9 (787.9) 「客への親好」は、一時的な歓待関係であった。1枚の皿が、訪問客の出立の際に半分に割られ、片方の破片は後に到着するかもしれない第三者への相応しい紹介役となるように去りゆく友人に与えられたのであった。客は、その旅と冒険について語ることで自分の費用を払うことが慣習であった。語り部は、昔甚だ人気があったので、徐々に慣習として狩猟と収穫のいずれの季節にも語り部の職務を禁じた。

70:3.10 (788.1) 最初の平和条約は「血の同盟」であった。戦争中の2部族の平和使節が接触し、敬意を表し、次に血が出るまで皮膚を刺すのであった。その上で互いの血を舐め平和を宣言するのであった。

70:3.11 (788.2) 最も初期の平和使節は、かつての敵の性的満足のためにかつての敵の選んだ少女を連れて来る男性代表団から成った。非常に名誉ある部族は、献上する少女を伴い答礼訪問をしたものであった。そのうえで、平和が

しかと確立されるのであった。やがて首長達の家族間での結婚が認められた。

4. 一族と部族

70:4.1 (788.3) 初めての平和集団は、家族、次に一族、部族、やがて民族になり、ついにはそれが、現代の領土的国家になった。ユランチアの諸国が、未だに巨額を軍備に費やしているという事実にもかかわらず、現代の平和集団が、長い間血の結びつきを超え国々を容認するために拡大させてきたという事実が最高の励みになっている。

70:4.2 (788.4) 一族は部族内の血族集団であり、その存在は次のような一定の共通利益によった。

70:4.3 (788.5) 1. 共通の先祖へ起源を遡ること

70:4.4 (788.6) 2. 共通の宗教上の崇敬物への忠誠

70:4.5 (788.7) 3. 同じ方言を話すこと

70:4.6 (788.8) 4. 共通の居住地域を共有すること

70:4.7 (788.9) 5. 同じ敵を恐れること

70:4.8 (788.10) 6. 共通の軍事経験を持つこと

70:4.9 (788.11) 初期の政府は一族の大雑把な同盟であり、一族の頭は常に部族の首長に従属した。土着のオーストラリア人は、部族形態の政府をもつことはなかった。

70:4.10 (788.12) 通常、一族の平和な首長は母系により統治した。部族戦争の首長は、父系を確立した。部族の首長と初期の王の法廷は、一族の頭達から成った。その頭達は、1年に何度かは王の面前に招待されるのが通例であった。これは、王が彼等を見、彼等のより良い協力の保証を可能にした。一族は、地方自治における価値ある目的に役立ったが、大きくかつ強い国の発展を大いに遅らせた。

5.政府の始まり

70:5.1 (788.7) あらゆる人間の制度には始めがあり、民政は、結婚、産業、宗教と同程度に漸進的発展の産物である。初期の一族と原始部族から20世紀の2/3を特徴づける社会と文民統制の型へと去来する人間の政府の継続的体系が徐々に展開した。

70:5.2 (788.8) 政府の基盤は、小刻みな家族単位の現れとともに一族の組織、つまり血族の集まりに確立された。最初の実際の政府機関は、年長者の協議会であった。この統制集団は、何らかの敏腕振りを示した老人で構成された。知恵と経験は、早くに野蛮な人間にさえ評価され、年長者の支配が長期に続いた。この寡頭政治時代の治世は、徐々に家長的な考えに変わっていった。

70:5.3 (789.1) 初期の年長者の協議会には、行政、立法、司法のすべての政府の機能の可能性が備わっていた。協議会が、最新の慣習を解釈するとき、それは法廷であった。社会慣習の新様式を確立するとき、それは議会であった。そのような法令と立法が励行されたという点で、それは行政者であった。協議会の議長は、部族の後の首長の前触れの1つであった。

70:5.4 (788.10) 幾つかの部族には女性の協議会があり、時々多くの部族に女性の支配者がいた。赤色人種のある部族は、「7人協議会」の満場一致の規則に従うことでオナマナ―ロントンの教えを維持した。

70:5.5 (788.11) 人類にとり、平和と戦争のいずれも討論会による実行はなし得ないということを学ぶことは、困難であった。原始の「会話」はめったに役に立たなかった。人類は、一族の首脳の一団に命じられた軍隊は、強い1個人に導かれる軍隊に対して見込みのないことを早くに学んだ。戦争は、常に国王の擁立者であった。

70:5.6 (788.12) 最初のうち戦争の首長は、軍務のためだけに選ばれ、平和時にはより社会性義務があり、何らかの権威の放棄したのであった。しかし首長は、戦争から戦争へと統治し続ける傾向にあり、徐々に平和時にもくい込むようになった。首長は、しばしば戦争と戦争の間が長過ぎることのないように取り計らった。初期の戦争支配者達は、平和を好まなかった。

70:5.7 (788.13) 首長の中には、後の時代の軍役以外の理由から非凡な風貌、あるいは傑出した個人的能力の理由から選ばれた。赤色人種には、2組の首長—酋長つまり平和首長と世襲の戦争首長—がいた。平和の支配者は、裁判官と教師であった。

70:5.8 (788.14) 初期のいくつかの共同体は、しばしば首長を務める祈祷師が統治した。1人の男性が祭司、医師、および最高行政官を務めたのであった。初期の王族の紋章は、実にしばしば司祭の衣服の表象、または記章であった。

70:5.9 (788.15) 政府の行政府は、これらの段階を経て徐々に生まれたのであった。一族と部族の協議会は、諮問の権能と後に登場する立法と司法の部門へと続いた。アフリカにおいては今日、これらすべての原始政府の形態が、様々な部族の中に実際に存在する。

6. 君主政府

70:6.1 (789.8) 効果的な国家統治は、完全な行政権を持つ首長の到来とともにようやくやってきた。人は、効を奏する政府は、考えを提供することではなく、人格に力を授与することによってのみ得られということに気づいた。

70:6.2 (789.9) 支配者の地位は、家族のもつ権力、あるいは富の考えから生まれた。父系の弱い王が本物の王になると、時として「民の父」と呼ばれた。後世には、王は英

雄から出現すると考えられた。さらに後の支配の地位は、神に由来する王の信仰により世襲性となった。

70:6.3 (789.10) 世襲制王位は、以前には非常な大混乱をもたらしていた王の死と後継者選びの間の無政府状態を回避した。家族には、血のつながる長がおり、一族には、生まれながらの選ばれた指導者がいた。部族や後の国家には生まれながらの指導者が存在せず、これが、首長と王の世襲制に至る更なる理由であった。王族と貴族の考え方もまた、一族の「名前所有権」の慣習に基づいた。

70:6.4 (790.1) 王位継承は、王の血統が、カリガスティア王子の肉体をもつ部下の時代にまで遡ると考えられていたので、やがては超自然と見なされるに至った。したがって、王は、盲目的崇拝対象の人格となり、過度に恐れられた。宮廷慣用に向けての特別話法形態が導入された。ごく近代でさえ、王の接触が病いを治すと信じられており、ユランチアの幾つかの民族は、未だに自分達の支配者は神の起源を持つと見なしている。

70:6.5 (790.2) 初期の盲目的崇拝対象の王は、しばしば隔離されていた。王というものは、祝祭日を除いては目にする

には神聖過ぎると考えられた。通常は、王の役を演じる代理人が選ばれ、これが首相の起こりである。最初の内閣の委員の一人は、食物管理者であった。間もなく他の役員があとに続いた。支配者は、すぐに商業と宗教の任を負う代表を任命した。そして内閣の発展が、行政当局の非人格化に向かう直接的第一歩であった。初期の王のこれらの補佐が、容認された貴族となり、また王の妻は、時の経過につれより尊敬される女性としての女王の位を得た。

70:6.6 (790.3) あくどい支配者は、毒の発見により巨大な力を得た。初期の宮廷呪術は極悪非道であった。王の敵は即刻死んだ。しかし最も専制である暴君さえいくつかの制限を受けることがあった。少なくとも絶えず付きまとう暗殺の不安に縛られた。祈祷師、まじない師、そして祭司は、王にとり常に強力な制動力であった。次に、地主、すなわち貴族は、抑制する影響を揮った。そして時折、一族と部族が簡単に奮い立ち、専制君主と暴君を打倒するのであった。専制支配者は、死刑宣告を受けると自殺の選択肢が与えられそれは、特定情況下の古代社会の風潮の起源となった

7. 原始の同好会と秘密結社

70:7.1 (790.4) 親族関係が、最初の社会的集団を決定した。付き合いが、親族関係にある一族を拡大した。結婚が、集団拡大での次の段階であり、その結果として起こる複雑な部族が、最初の実際の政治団体であった。社会発展における次なる進歩は、宗教宗派と政治的同好会の発展であった。これらは、まず秘密結社として現れ、本来は完全に宗教に関するものであった。それらは、その後、統制的となった。初めは、男性の同好会であった。後には女性団体が現れた。やがて、社会政治的なもの、宗教神秘主義的なものの2種類に分割されるようになった。

70:7.2 (790.5) これらの社会結社の秘密には次のような多くの理由があった。

70:7.3 (790.6) 1. 何らかの禁忌違反がもとで支配者の不快を被る恐怖

70:7.4 (790.7) 2. 少数派の宗教儀式の実践のため

70:7.5 (790.8) 3. 大切な「精神」、もしくは商いの秘密を守る目的のため

70:7.6 (790.9) 4. 何らかの特別な厄除けか、呪術の楽しみのため

70:7.7 (790.10) これらの結社の秘密こそが、全会員に部族内の他者を支配する神秘の力を与えた。秘密主義は、虚栄の心をも引きつける。創始者達は、その時代の社会の一流人であった。創設後、少年達は男達と狩りをした。それまでは、女達と共に野菜を採集していたのだが。思春期の試練にしくじり、このように女や子供と共に男の住まいの外に留まることを強いられるということは、女々しいと考えられ、最高の屈辱、部族の不名誉であった。そのうえ、非入会者には結婚は認められなかった。

70:7.8 (791.1) 原始の人間は、非常に早くから思春期の若者に性の抑制を教えた。教育、および鍛練は、男性の秘密結社に任され、思春期から結婚までの間、両親から少年を連れ去るのが習慣となった。またこれらの同好会の主な機能の1つは、思春期の青年を管理したうえで私生児を未然に防ぐことであった。

70:7.9 (791.2) これらの男性同好会が、他の部族の女性の利用のためにその部族に金を支払ったとき、商業的売春が始

まった。しかし、初期の集団には目立った性的放縦さはなかった。

70:7.10 (791.3) 通常、思春期通過儀礼は5年の期間にわたった。これらの儀式の一部は、多くの苦行と苦痛の切断であった。包皮切除が、秘密友愛会の一つへの入会儀式としてまず実行された。部族印が、思春期通過の一部として身体に刻まれた。入れ墨は、会員資格の烙印そういうものとして始まった。そのような拷問は、多くの窮乏と合わせて、これらの若者を強健にするために、人生の現実とその必然的苦難を強く認識させるために考案された。この目的は、後に現れる体育競技と肉体競技によって一層達成される。

70:7.11 (791.4) そんなことよりも、秘密結社は、思春期の道徳心向上を目的とした。思春期の儀式の主な目的の1つは、他の男性の妻をそっとして置かなければならないということを少年に認識させることであった。

70:7.12 (791.5) 青年は、通常数年にわたる厳しい教練と訓練に続いて、また結婚の直前に短期間の余暇と自由のために解き放たれ、その後結婚のため、そして部族の禁制に対

し生涯の従属のために帰還した。この古代の習慣は、「放蕩の限りを尽くす」という愚かな概念として現代まで続いてきた。

70:7.13 (791.6) 後の多くの部族は、女性の秘密同好会の構成を是認した。その目的は、思春期の少女が、妻であること、母であることへの準備のためであった。少女は、入会すると結婚資格が得られ、「花嫁のショー」への、すなわち当時の世に出る会への出席が許された。結婚に反対に誓約した女性集団が、早くに結成された。

70:7.14 (791.7) やがて未婚男性集団と無所属の女性集団が、それぞれの組織を形成した時、秘密をもたな同好会が成立した。これらの結社が、事実上最初の学校であった。そして男女の同好会が、しばしばお互いを悩ます一方で、幾つかの高度な部族は、ダラマティアの教師との接触後、男女のための寄宿学校を設けて男女共学を試みた。

70:7.15 (791.8) 秘密結社は、主にそれぞれの儀式の神秘的特長が、排他的社会的階級の設立に一役買った。当初これらの会の構成員は、哀悼の儀式—先祖崇拝—から物見高い者達を脅かして追い払うために覆面をしていた。その

後、この儀式は、幽霊が現れたと一般に言われる降霊術の会へと発展していった。「新生」の古代社会は、合図を用い、その上特別な秘密の隠語を使った。また、特定の食物と飲み物を摂取しないことを誓った。夜の警察として活動し、とにかく社会的活動において広範囲に機能した。

70:7.16 (792.1) すべての秘密結社は、誓いを強制し、信頼を強制し、秘密の保持を教えた。これらの命令は暴徒を畏れさせ、規制した。また、自警結社としても機能し、その結果、死刑を実行した。部族交戦中は、彼らが最初の密偵であり、平和時には、最初の秘密警察であった。何よりも良いことには、彼らは、平気で悪事を働く王を不安な状態で座に着かせた。それらを相殺するために、王は自身の秘密警察を育成した。

70:7.17 (792.2) これらの結社が、最初の政党を生み出した。最初の政党政治は、「弱さ」対「強さ」であった。古代における政権交代は、内戦後にのみ続く、つまり弱者が強くなったという充分な裏付け後にはじめて起きた。

70:7.18 (792.3) これらの結社は、負債取り立てのために商人に、また税金徴収のために支配者に雇われた。十分の一税である最も初期の形態の1つであり、狩りか戦利品の1/10の課税は、長い間の葛藤であった。税は、元来、王の家の維持のために徴収されたのだが、寺の礼拝式の支援のための供え物として隠蔽して徴収する方が容易いことが分かった。

70:7.19 (792.4) これらの秘密結社は、程なく最初の慈善団体になり、後には初期の宗教結社—教会の前身—に発展していった。最終的にこれらのうちの幾つかは、種族間の結社、つまり国家間の最初の友愛会となった。

8. 社会階級

70:8.1 (792.5) 人間の心身の不同は、社会階級の誕生を保証する。唯一社会階層のない世界は、最も原始的であり、最も高度である。黎明の文明は、まだ社会的地位の分化を始めてはいないが、一方光と生命に定着した世界は、進化の全中間的段階の特徴である人類のこれらの分化を大幅に削除してきた。

70:8.2 (792.6) 社会が未開状態から蛮行へと移動すると、その人間の構成要素は、次の一般的な理由から階級別に分類されるようになる傾向があった。

70:8.3 (792.7) 1. 自然的—接触、親類関係、結婚。最初の社会的区別は、性、年齢、および血筋—首長との親族関係に基づいた。

70:8.4 (792.8) 2. 個人的—能力、忍耐力、技能、および不屈の精神の認識。まもなく言語の熟達、知識、および一般的知性が後に続いた。

70:8.5 (792.9) 3. 機会—戦争と移住が、人間集団の分離をもたらした。奴隷制度が、自由と拘束の最初のおおざっぱな区分を社会にもたらす一方で、征服による勝者と敗者の関係が、階級の発展に強く影響を与えた。

70:8.6 (792.10) 4. 経済的—貧富。富と奴隷の所有は、社会の1階級の誕生基盤であった。

70:8.7 (792.11) 5. 地理的—階級は、都市、あるいは地方での定住の結果生じた。都市と田舎が、互いに異なる視点と反

応で個々に牧夫-農家と交易者-企業家の分化の要因であった。

70:8.8 (792.12) 6. 社会的—階級は、異集団の社会的価値に人気のある評価にそって徐々に形成されてきた。この種の最も早い区分の中では、聖職者-教師、支配者-戦士、資本家-交易者、一般労働者、奴隷の間での区分があった。賃金労働者は、時には資本家階級に加わることを選ぶことができたが、奴隷は、決して資本家にはなれなかった。

70:8.9 (793.1) 7. 職業的—人々は、職業が増えるにつれ階級制度と同業組合を樹立する傾向にあった。労働者は3集団に分かれた。祈祷師、次は熟練労働者、それに熟練を要しない労働者を含む職業階級。

70:8.10 (793.2) 8. 宗教的—初期の宗派同好会は、一族と部族の中での自らの階級を生み出し、そして聖職者の敬虔さと神秘主義が、別々の社会集団として彼らを永続させてきた。

70:8.11 (793.3) 9. 人種的—ある国、または領土単位の中での2つ、あるいはそれ以上の人種の存在が、通常皮膚の色による階級制度を生む。インドの本来の排他的社会制度は、初期のエジプトにあったような皮膚の色に基づくものであった。

70:8.12 (793.4) 10. 年齢—若さと成熟。部族の中で少年は、父親が生きている限り父親の管理下にあり、一方少女は、結婚するまで母親の手元に置かれていた。

70:8.13 (793.5) 柔軟性があり変わり易い社会階級は、進化する文明に不可欠であるが、社会の安定の強化は、階級が排他的社会制度になるとき、社会層が石化するときに個人の自発性の減弱により得られる。社会階級制度は、人が、産業に居場所を見つける問題を解決はするが、それはまた急に個人の開発を抑え、実際には社会的協力を妨げる。

70:8.14 (793.6) 社会における階級は、一度自然に形成されると、人が、次に掲げるような漸進的文明に属する生物、知力、そして精神の源の知的操作を介して徐々に進化の消滅にいたるまで持続するであろう。

70:8.15 (793.7) 1. 部族集団の生物学的改造—劣る人間種族の選択的除去。これは、人間の多くの不同を根絶する傾向にある。

70:8.16 (793.8) 2. そのような生物学上の改良から増加した知能の教育的訓練

70:8.17 (793.9) 3. 人間の親族関係と兄弟愛の感情への宗教的高まり

70:8.18 (793.10) 社会の多くの改善は、文化的進歩のこれらの加速要因である知的で、賢明で、我慢強い巧みな操作により早速に効果をもたらすであろうが、これらの措置は、何千年も遠い未来においてのみ真の実を結ぶことができる。宗教は、混沌から文明を引き上げる強力な梃ではあるものの、健全で正常な世襲に基礎を置く健全で正常な心の支点を別にしては無力である。

9. 人権

70:9.1 (793.11) 自然は、ただ生命とそれが生きる世界というものの他には何の権利も人に与えない。もし非武装の人間が、原始の森林の中で空腹な虎に直面したならばいかな

ることが起こりうるかということを考えて推論できるように、自然は、生きる権利さえ与えない。社会から人への主な贈り物は、安全性である。

70:9.2 (793.12) 社会は、その権利を徐々に確立し、現在ではそれらは、つぎの通りである。

70:9.3 (793.13) 1. 食糧供給の保証

70:9.4 (793.14) 2. 軍事防衛—備えによる安全保障

70:9.5 (793.15) 3. 国内の保安—個人的暴力と社会的混乱の防止

70:9.6 (794.1) 4. 性の抑制—結婚、家族制度

70:9.7 (794.2) 5. 財産—所有する権利

70:9.8 (794.3) 6. 個人競争と集団競争の助長

70:9.9 (794.4) 7. 若者の教育と訓練のための対策

70:9.10 (794.5) 8. 通商貿易の促進—産業新興

70:9.11 (794.6) 9. 労働条件と報酬の改善

70:9.12 (794.7) 10. これらの他の社会的活動のすべてが、精神的に動機づけられることによって高められるように、永久的な宗教実践の自由の保証。

70:9.13 (794.8) 権利というものが、起源が分からないほどに古いとき、それはしばしば自然権と呼ばれる。しかし、人権は実のところ自然ではない。それは完全に社会的である。それは、競争の規則—変化し続ける人間の競争の現象を支配している関係についての公認の調整—以外の何ものでもなく相対的であり変化しつづけてている。

70:9.14 (794.9) 一時代に正しいと見なされるかもしれないことが、他の時代ではそうではないかもしれない。数多くの欠陥物や退化物の存続は、20世紀文明を妨ぐための何らかの自然権があるのではなく、単にその時代の社会、つまり社会慣習が命じているのである。

70:9.15 (794.10) 人権は、中世のヨーロッパにおいては、ほとんど認識されなかった。当時すべての者は、他の誰かに属し、権利は、国家あるいは教会によって与えられる単なる特権か恩恵にすぎなかった。この誤りに対する反乱

は、すべての者は平等に生まれるという信念に導いたが故に負けず劣らず誤った。

70:9.16 (794.11) 弱者と劣者は、常に等しい権利のために戦ってきた。弱者と劣者は、国家が、自分達の必需品の供給を強者と優者に強制し、その他の点では、自身の無関心と怠惰の自然な結果である欠陥を償うことをあまりにも頻繁に常に主張してきた。

70:9.17 (794.12) しかしながら、この平等観念は、文明の子である。それは自然の中には見つけられない。文化そのものでさえも、人間生来の不同を非常に不平等なその能力によって決定的に示している。自然であると考えられている平等の突然かつ進化的でない実現は、文明人をすばやく原始時代の粗雑な慣例へと後戻りさせるであろう。社会は、等しい権利をすべての者に提供はできないが、それぞれの異なる権利を公平に運用すると約束はできる。社会のすべき事は、自然の子供が、人間の幸福の３構成要素すべてを、つまり公正で平和な機会を享受し、自己維持の追求をし、参加する一方で、ある程度の自己満足を得る機会をあたえることである。

10. 司法の発展

70:10.1 (794.13) 自然の正義は、人為的理論である。それは現実のものではない。正義は、現実には純粋に理論的であり、完全に作り事である。自然は、1種類の正義—結果と原因との必然的一致だけを提供する。

70:10.2 (794.14) 人間が思い描いている正義は、人が権利を得ることであり、それ故、漸進的発展の内容を意味してきた。正義の概念は、おそらく霊を授けられた心においては先天的であろうが、それは、充分発達して空間世界の生活へ突然に現れることはない。

70:10.3 (794.15) 原始人は、すべての現象を人のせいにした。死についていえば、未開人は何が人を殺したかではなく、誰が殺したかを問うた。偶発的殺人は、したがって認められなかったし、犯罪に対する罰に関し犯罪者の動機は、完全に無視された。判断は、受けた負傷に応じて下された。

70:10.4 (795.1) 世論は、最も初期の原始社会において直接的に作用した。法の役人は必要ではなかった。原始生活においては個人の何の情報機密もなかった。一人の人間の行

為に対する責任は、隣人にあり、それ故その個人の問題に首を突っ込む権利もあった。社会は、集団の構成員が、各個人の行動に興味を持ち、一定の規制力を持つべきであるという理論で統制された。

70:10.5 (795.2) 非常に早くから、幽霊が、祈祷師と聖職者を通して正義を行なうと信じられた。これが、この位階の者たちを最初の犯罪看破者や法の役人に選んだ。犯罪を見つける初期の方法は、毒、火、痛みの試練を実施することであった。これらの残酷な試練は、粗雑な裁定方法以外の何物でもなかった。必ずしも公正に論争に決着をつけたというわけではない。例えば、毒が投与され嘔吐すれば、被告は潔白であった。

70:10.6 (795.3) これらの試練の1つ、夫婦間の有罪吟味の記録が、旧約聖書にはある。もし男性が、妻は不誠実であると疑い、司祭の元に連れて行き疑いを主張したならば、聖職者は、聖なる水と寺の床の塵から成る混合物を調合した。脅しの呪いを含む相応の儀式の後、被告の妻はむかつくような一服を飲まされた。有罪ならば、「呪いを引き起こす水は、体内に入り苦くなり、腹は膨らみ、太

腿は腐り、そして女は人々の間で責められるであろう。」いかなる女性であろうとも、万が一不潔な一服を痛飲でき、肉体の病の兆候を示さなかったならば、嫉妬深い夫の告発は、取り下げられた。

70:10.7 (795.4) ほとんど全ての進化する部族は、犯罪看破のこれらの残虐な方法をある時期に実践された。果たし合いは、厳しい試練による近代裁判の遺物である。

70:10.8 (795.5) ヘブライ人と他の半文明部族が、3,000年前に司法制度のそのような原始の方法を慣行したということには驚かされはしないが、そのような野蛮な異風を聖典の紙面にその後維持しようという考えにこの上なく驚かされる。反省的思考が、いかなる神の存在体も、夫婦間の不貞の看破とその判定に関し人間にそのような不公平な指示を与えはしなかったということをはっきりさせるべきである。

70:10.9 (795.6) 社会は、早くから報復への仕返しの態度を取り入れた。目には目を、命には命を。進化する部族はみな、流血復讐のこの権利を認めた。復讐は原始生活の目的になったが、宗教は以来、これらの初期の部族の習慣

を大いに変えてきた。啓示宗教の教師達は、常に「『復讐は我がものである』と主は言われる。」と宣明してきた。初期の復讐のための殺しは、不文律を口実とする現代の殺人とは全く異なっていた。

70:10.10 (795.7) 自殺は、一般的報復方法であった。ある者は、生存中に仇を討つことができなかったならば、幽霊として戻り敵に復讐を加えることができるという信仰を抱きながら死んでいった。この信仰は非常に一般的であったことから、通常、敵の戸口の階段での自殺の脅迫は、相手を承服させるには十分であった。原始人は、命をそれほど大切にしなかった。些細なことのための自殺が多く見られたが、ダラマティアの教えは、この習慣を大いに減少させたし、同時により近代においては、余暇、安らぎ、宗教、および哲学が、生活をより心地良く、より望ましくするために結合されてきた。絶食示威は、しかしながら、この昔の報復方法の現代版である。

70:10.11 (796.1) 進んだ部族の最も早期の法の策定の1つは、血で血を洗う争いを部族問題として取り入れることと関係があった。しかし奇妙な話だが、男性は、その時でさ

え、全額支払ったという条件で罰せられることなく妻を殺すことができた。しかしながら、現代のエスキモー人は、未だに犯罪に対する罪を、殺人でさえ、不当な扱いを受けた家族による判決と執行に任せている。

70:10.12 (796.2) もう一つの前進は、禁制違反のための罰金の賦課、刑罰対策であった。これらの罰金は、最初の公共収入を構成した。また、「殺人報酬」への支払いの習慣は、流血の復讐の代替として台頭した。通常、そのような金銭による賠償は、女性か家畜で支払われた。実際の罰金、つまり通貨での償いが、犯罪のための罰として課せられるまでには長らくかかった。また、処罰への考えは本質的には補償であったので、人間の生命を含むすべてが、最終的には、損害賠償として支払い得る代価を持つようになった。ヘブライ人は、まず殺人謝礼金を支払う習慣を撤廃した。モーシェは、「死にあたいする罪を犯す殺人者の命に対して仇を取るな。」「殺人者は、必ず処刑されるのである。」と教えた。

70:10.13 (796.3) このようにまずは家族、それから一族、後には部族が、処罰を与えた。真の司法の執行は、報復を個人

や血縁集団から取りあげ、社会集団、国家の手に預けることから始まった。

70:10.14 (796.4) 生きたまま焼く刑罰は、かつて一般的な習わしであった。それは、ハンムラピとモーシェを含む多くの古代支配者によって認められた。後者は、多くの犯罪、特に深刻な性に関するものは火刑に処されるべきであると指図するほどであった。もし「司祭の娘」、または、他の指導的立場の娘が公共の売春に走ったならば、「その女を焼く」のがヘブライの習慣であった。

70:10.15 (796.5) 反逆罪—「裏切り」、あるいは部族の仲間を裏切ること—は、最初の極刑であった。家畜の窃盗は、全般的に即決の死によって罰せられ、最近でさえ馬の窃盗は、同様に罰せられてきている。しかし時の経過とともに、刑罰の厳しさは、過去のその確実性と迅速性ほどには犯罪への有益な抑止力でないことが判明した。

70:10.16 (796.6) 集団の憤りは、社会が罪を罰することができないとき、私的制裁法として、通常それ自体が主張をする。保護区対策が、この突然の集団の怒りから逃がれる

方法であった。私的制裁と決闘は、国家への私的補償措置の引き渡しに対する個人の不本意を表している。

11. 法と法廷

70:11.1 (796.7) いつ夜が昼に変わるかを夜明け時に的確に指し示すことが、難しいのと同様に、慣習と法の間に厳格な区別をすることは困難である。慣習は、作られつつある法と警察の規則である。未定義の慣習は、長らく確立されていると、明確な法、具体的な規則、および明確な社会的なしきたりにと具体化する傾向にある。

70:11.2 (796.8) 法は、初めはつねに否定的で禁制的である。それは、前進的文明においてはますます積極的になり指令的になる。初期社会は、すべての他のものに「殺してはならない」という命令を課すことにより個人に生活する権利を与え、禁制的に運用した。個人への権利あるいは自由のすべての付与は、すべての他者の自由刑にかかわっており、これが、禁制により、すなわち原始の法により功を奏する。原始社会は、その組織そのものが完全に否定的であり、また初期の司法行政は、禁制の励行にあったがゆえに、禁制の全体構想は、本来否定的である。

しかし、そもそもこれらの法は、異教徒との扱いにおいて異なる倫理規定を持つヘブライ人に例証されるように、仲間の部族民に限って適用された。

70:11.3 (797.1) 宣誓は、より正直に証言をする目的でダラマティアの時代に始まった。そのような誓いは、自らに呪いをかけることから成っていた。以前は、いかなる個人も出身集団に不利な証言をしないのであった。

70:11.4 (797.2) 犯罪は、部族慣習への攻撃であり、罪は、幽霊の強要から利を得た禁忌への違反であり、犯罪と罪の分離失敗による長い間の混乱があった。

70:11.5 (797.3) 自己利益は殺害の禁制を確立し、社会は伝統的な慣習としてそれを神聖化し、一方宗教は、道徳律として習慣を尊いものとし、こうして3つの全てが、人間の生活をより安全で神聖にすることにおいて作用し合った。宗教の拘束が初期になかったならば、社会は纏まることはできなかったであろう。迷信は、長い進化の時代の道徳的で社会的な警察力であった。古代人は皆、昔の法、すなわち禁忌は神によって先祖に与えられたのだと断言した。

70:11.6 (797.4) 法は、人間の長い経験の成文化された記録、民意の具体化であり合法化であった。慣習は、後の支配者の心が成文法を定式化するに至る蓄積された経験の素材であった。古代の裁判官には、何の法もなかった。裁判官は、判決を言い渡すとき、あっさりと「それがしきたりである。」と言った。

70:11.7 (797.5) 法廷決定における先例の参考は、変化する社会状況への成文法を適合させる裁判官の努力を示している。これは、伝統継続の印象深さと相まって変化する社会情勢への進歩的な適合性に備える。

70:11.8 (797.6) 所有物争いは、次のように様々に処理された。

70:11.9 (797.7) 1. 係争物を破壊により。

70:11.10 (797.8) 2. 力により—当事者が、勝負がつくまで戦った。

70:11.11 (797.9) 3. 仲裁により—第三者が決定した。

70:11.12 (797.10) 4. 年長者への上告により—後には法廷へ。

70:11.13 (797.11) 最初の法廷は、殴り合いの対決を取り締まった。裁判官は、単に仲裁者か審判者であった。双方は、同意した規則に従って戦うことを保証した。それぞれの関係者は、法廷闘争に際し費用支払と裁判で負けた際の罰金の支払いのために裁判官に金を預けた。「力は、やはり正義であった。」その後言葉での闘いが、肉体の殴り合いに取って代わった。

70:11.14 (797.12) 原始の正義に対する全体的考えは、争いを処理して治安紊乱と個人の暴力を防ぐところまでには公正ではなかった。しかし、原始人は、現在不正と見なされるようなことにあまり憤慨しなかった。力を持つ者が、利己的にそれを使用することは当然とされた。にもかかわらず、いかなる文明の状態も、その法廷の徹底性と公平性により、またその裁判官の高潔さにより非常に正確に決まるかもしれない。

12. 民間権威の配分

70:12.1 (797.13) 政府の発展における大きな苦闘は、権力の集中に関係していた。宇宙の管理者たちは、よく統一された行政、立法、司法部門の間での適切な力の均衡が保たれ

るとき、民間政府の代表的な型が、棲息界の進化する民族を最もよく統制するということを経験から学んできた。

70:12.2 (798.1) 原始の権威は、強さに、つまり体力に基づき、一方理想的な政府は、指導者が能力に基づく代議制である。しかし、未開時代には、代議政治が有効に機能するには専ら戦争が起こり過ぎた。独裁者は、権威の分割と命令の一元性との長い藻掻きにおいて勝った。早期の、しかも拡散した原始協議会の年長者の力は、絶対君主という形で徐々に集結された。年長者集団は、本物の王達の出現後、準立法顧問機関に固執した。その後、同格の立法府が出現し、最終的には、立法府から分離した裁定の最高裁判所が設置された。

70:12.3 (798.2) 王は、慣習、すなわち本来の法、あるいは不文律の執行者であった。王はその後、立法の制定、世論の具体化を実施した。世論の表現としての大衆議会の出現は遅れたが、大きな社会的進歩があった。

70:12.4 (798.3) 初期の王は、慣習—伝統、あるいは世論—に大いに制限を受けた。ユランチアのいくつかの国家は、近

代においては政府の文書基盤にこれらの慣習を盛り込んだ。

70:12.5 (798.4) 自由の権利が、ユランチアの死すべき者達には与えられている。自らの統治機構を創出すべきである。死すべき者達は、憲章か、あるいは市民の権力と行政手続きの憲法を採用すべきである。これをし終えてから最高行政官として最も有能でふさわしい仲間を選出すべきである。立法部門の代表に関しては、そのような神聖な責任を実現するために知的でかつ道徳的に適任である者だけを選出すべきである。高等裁判所や最高裁判所の裁判官としては、生まれながらの能力に恵まれた者、また十分な経験をもつ賢明な者だけが選ばれるべきである。

70:12.6 (798.5) 人が、自分の自由を維持したければ、自由の憲章を決めた後に、次の事項を防ぐために賢明で、知的で、しかも恐れを知らない解釈を備えなければならない。

70:12.7 (798.6) 1. 行政、または立法による保証がない権力の奪取

70:12.8 (798.7) 2. 無知で迷信深い扇動者達の策謀

70:12.9 (798.8) 3. 科学的進歩の遅れ

70:12.10 (798.9) 4. 凡人支配の膠着状態

70:12.11 (798.10) 5. 悪質な少数派による支配

70:12.12 (798.11) 6. 野心満々かつ賢い独り善がりの独裁者による管理

70:12.13 (798.12) 7. 恐慌による悲惨な混乱

70:12.14 (798.13) 8. 無節操な者による搾取

70:12.15 (798.14) 9. 国による市民への奴隷状態の課税

70:12.16 (798.15) 10. 社会的、経済的公正の不履行

70:12.17 (798.16) 11. 政教の結合

70:12.18 (798.17) 12. 個人の自由の喪失

70:12.19 (798.18) これらは、進化的世界における代議政治の原動力により統治者として行動する合憲的裁判所の目的であり狙いである。

70:12.20 (799.1) ユランチアで政府を完成させる人類の葛藤は、行政系統の完成し、変化し続ける現在の必要性に適合させ、政府内での権力の分配を改善し、次に実に賢明である行政指導者を選ぶことに関係がある。神聖かつ理想的な政府の形態があり、そのようなものは明らかにはできないが、各惑星の男女が、時間と空間宇宙の中でゆっくりと、しかも苦心して発見しなければならない。

70:12.21 (799.2) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 71
国家の発展

71:0.1 (800.1) 国家は、文明の有益な進化である。それは、戦争の破壊行為と苦難からの社会の純益に相当する。政治的手腕でさえ、もがく部族と国家間の勢力争いを調整するための単に蓄積された技術に過ぎない。

71:0.2 (800.2) 現代国家は、集団権力のための長い戦いで生き残った制度である。優れた権力は、徐々に普及し、それは、国のために生きて死ぬ国民に絶対的義務についての道徳的な神話とともに現実の産物—国家—を生み出した。だが国家は、神の創生によるものではない。それ

は、知的な人間の意志に基づく活動でうまれたのでもなかった。それは、純粋に進化的制度であり、その始まりは、完全に自然発生的であった。

1. 未発達段階

71:1.1 (800.3) 国家は、社会的規制の領土的組織体であり、最強かつ最も効率的な永続的国家は、その民が共通の言語、慣習、および制度を持つ1つの国からなる。

71:1.2 (800.4) 初期の国家は、小さく、すべてが征服の結果であった。それは、自発的連合から始まったのではない。多くが、穏やかな牧夫や定住農業者を打ち負かし、奴隷にするために襲いかかる征服的遊牧民により樹立された。征服から生ずるそのような国家は、必然的に階層化された。階級は必然であり、階級闘争はずっと淘汰的であった。

71:1.3 (800.5) アメリカの北の赤色部族は、真の国家の地位に達したことがなかった。かれらは、決して部族間のゆるい同盟、非常に原始的な国家形態を超えての進歩にいたらなかった。イロクイ同盟が、最もそれらしいものであったが、この6つの民族集団は、国家としては決して機

能せず、また現代の国民生活にある程度不可欠なものの欠如のために生き残ることができなかった。それらは、

71:1.4 (800.6) 1. 私有財産の獲得と継承

71:1.5 (800.7) 2. 都市に加えて、農業、および産業

71:1.6 (800.8) 3. 有用な家畜

71:1.7 (800.9) 4. 実際的な家族編成。これらの赤色人種は、母系家族と甥への継承に執着した。

71:1.8 (800.10) 5. 明確な領土

71:1.9 (800.11) 6. 強い執行指導者

71:1.10 (800.12) 7. 捕虜の奴隷化—捕虜を受け入れるか、殺戮した。

71:1.11 (800.13) 8. 決定的な征服

71:1.12 (800.14) 赤色人種は民主的であり過ぎた。良い政府があったが、それは失敗した。かれらは、ギリシア人とローマ人の政治的手法を追求していた白人のより高度な文明

に時期尚早に遭遇しなかったならば、最終的には国家を発展させていたことであろう。

71:1.13 (801.1) ローマの国家は、次の事柄に基づいて成功した。

71:1.14 (801.2) 1. 父系家族

71:1.15 (801.3) 2. 農業と動物の家畜化

71:1.16 (801.4) 3. 人口の集中—都市

71:1.17 (801.5) 4. 私有の財産と土地

71:1.18 (801.6) 5. 奴隷制度—身分階級

71:1.19 (801.7) 6. 虚弱で逆行的民族の征服と再編成

71:1.20 (801.8) 7. 道路を備えた明確な領土

71:1.21 (801.9) 8. 1個人としての強い支配者達

71:1.22 (801.10) ローマ文明における大きな弱点、そして帝国の最終的破綻の一要因は、21歳の少年解放のための思い込みの自由と思い込みの進歩的対策と、そして自身が選ぶ男性と結婚するか、または土地を離れ外へ行くことで不

道徳になる少女の無条件での放免であった。社会への害は、これらの改革自体にあったのではなく、むしろ突然の、しかも大々的なそれらの導入方法にあった。ローマの崩壊は、国家が内部変質に伴う急速過ぎる拡大を経験するときに何が起こるかが予期できるということを示している。

71:1.23 (801.11) 未発達の国家は、領土を優先させ、血の絆の衰退により可能となり、また通常そのような部族同盟は、征服による強い絆が結ばれた。すべての些細な争いと集団の不和を超える主権は、真の国家の特徴であるが、それでも、多くの階級とカースト制度は、前の時代の一族と部族の生存者として後の国家組織に固執する。その後の、また複数のより大きい領土国家は、複数の小さな同族集団、つまり家族から国家権力への貴重な変化を証明する部族政府との間には長く痛烈な戦いがあった。後には多くの一族は、交易と他の産業団体から生じた。

71:1.24 (801.12) 国家統合の失敗は、例えば中世ヨーロッパの封建制度といった国政術の「国家誕生前の状態」への退歩をもたらす。領土的国家は、暗黒時代に崩壊し、小さい

城の集団への逆戻り、すなわち発達段階の一族や部族の再現があった。同様の半国家が、今でもアジアとアフリカに存在するが、それらの全てが進化的逆行というわけではない。多くは、未来の国家の未発達の核である。

2. 代議政体の発展

71:2.1 (801.13) 民主主義は、理想である間は文明の生産物であって進化ではない。ゆっくり進みなさい。慎重に選びなさい。次のような民主主義の危険が存在するのであるから。

71:2.2 (801.14) 1. 凡庸の称賛

71:2.3 (801.15) 2. 卑しく無知な支配者の選択

71:2.4 (801.16) 3. 社会発展の基本的事実の認識ができないこと

71:2.5 (801.17) 4. 無教育で怠惰な過半数に任せる国民参政権の危険性

71:2.6 (801.18) 5. 世論への隷属。大多数がいつも正しいという訳ではない

71:2.7 (802.1) 世論、つまり一般的意見は社会を常に遅らせてきた。にもかかわらず、それは、社会の発展を遅らせているあいだ文明を維持しているので有用である。民意の教育は、文明を加速する唯一安全で真の方法である。武力は臨時措置にすぎないし、文化の発展は、弾丸が投票用紙に屈するときますます加速するであろう。民意は、すなわち慣習は、社会の進化と国家の発展の基軸であり基本的エネルギーではあるが、国家的価値であるためには表現において非暴力的でなければならない。

71:2.8 (802.2) 社会の進歩の指標は、世論が、非暴力的表現力により個人の振舞いと政府の規制を制御できる度合いにより直接に決定される。世論が、真に文明度の高い政府は、個人の特権力を纏うとき到来した。普通選挙は、常に正しく物事を決めないかもしれないが、それは、間違いを犯すとしても正しいやり方を示している。進化は、最上の完成域にすぐに達するものではなく、むしろ比較的、しかも前進的な実践的調整をつくり出す。

71:2.9 (802.3) 実用的、かつ効率的代議政体の発展への10段階、または局面があり、これらは次の通りである。

71:2.10 (802.4) 1. 人間の自由。奴隷制度、農奴制、およびすべての人間の束縛形態は消失しなければならない。

71:2.11 (802.5) 2. 心の自由。自由というものは、自由な民が教育を授けられない限り—理知的に考え賢明に計画することが教えられない限り—通常、利益よりも危害を加える。

71:2.12 (802.6) 3. 法の支配。自由は、認められた基本法に沿った立法制定と人間の支配者の意志と気まぐれな思い付きとが置き換えられて初めて自由を享受できる。

71:2.13 (802.7) 4. 言論の自由。代議政体は、人間の大望と意見のためのすべての表現形式の自由なしには到底考えられない。

71:2.14 (802.8) 5. 財産の安全性。いかなる政府も、何らかの型での私有財産の享受の権利が提供できなければ、長らく持ち堪えることはできない。人は、自己の財産を用い、管理し、与え、売り、賃貸し、遺贈する権利を切望する。

71:2.15 (802.9) 6. 陳情の権利。代議政体は、市民が思うところを聞いてもらえるという権利を前提とする。陳情の特権は、自由な市民に本来備わっているものである。

71:2.16 (802.10) 7. 統治する権利。聞いてもらえるだけでは十分ではない。陳情の力は、政府の実際の管理へと進歩しなければならない。

71:2.17 (802.11) 8. 国民参政権。代議政体は、理知的、効率的、かつ普通選挙民を前提とする。そのような政府の特徴は、それを構成する人々の特徴と力量に応じて決定されるであろう。選挙権は、文明が進むにつれ男女に共通であり、有効に修正され、再編成され、さもなくば変更されるであろう。

71:2.18 (802.12) 9. 公僕の管理。いかなる民間政府も、市民が、役人や公務員を導き監督する賢明な方法をもち、しかも用いない限り役に立ち、かつ効を奏しはしないであろう。

71:2.19 (802.13) 10. 知的、かつ鍛えられた代議制。民主主義の生存は、代議政体の成功に依存している。そしてそれ

は、専門的に訓練され、知的に有能で、社会的には忠誠で、道徳的には適任の個人のみを官公庁に選出の実践を条件とする。人民のための人民による人民の政府は、そのような対策によってのみ持続され得るのである。

3. 国家の理想

71:3.1 (803.1) 政府の行政上の、または管理上の形態は、市民生活の進歩の基礎—自由、安全、教育、および社会の連携—を提供しているのであればあまり重要ではない。社会発展の進路を決定するのは、国家が何であるかということではなく、それが何をするかということである。つまるところ、いかなる国家も、選ばれた指導者が例示するその国民の道徳的価値を超えることはできない。無知と利己主義は、最高の政府の形態にさえも確実な破綻をももたらすであろう。

71:3.2 (803.2) 国家の利己主義は、非常に残念なことではあるが、社会の存続には不可欠であった。神の選民主義は、部族結合と国家建設において直接現代に至るまで主な要因であった。しかし、いかなる国家も、あらゆる不寛容の型を習熟するまでは、理想の機能水準に到達すること

はできない。それは、いつまでも人間の進歩に反目している。また不寛容は、科学、商業、遊び、および宗教の連携によって闘うことが最も好ましい。

71:3.3 (803.3) 理想国家は、3つの強力で調和して働く機能の影響の下で役割を果たす。

71:3.4 (803.4) 1. 人間の兄弟愛の実現に由来する愛の忠誠

71:3.5 (803.5) 2. 賢明な理想に基づく知的な愛国心

71:3.6 (803.6) 3. 惑星の事実、必要性、および目標の点からの宇宙洞察

71:3.7 (803.7) 理想国家の法の数は少なく、否定的禁制から高度の自制による個人の自由の積極的な進歩の時代へと消え去った。優れた国家は、国民に労働を強要するばかりではなく、進む機械時代がもたらす労苦解放からますます増える余暇の有利かつ向上的活用へと誘う。余暇は、消費ばかりではなく生産もしなければならない。

71:3.8 (803.8) いかなる社会も、怠惰を容認したり貧困を甘んじて受けるときあまり進歩はなかった。しかし、貧困と

依存は、不完全かつ堕落した群体の再生が、制限なく自由に支持され許されるならば、決して根絶はできない。

71:3.9 (803.9) 道徳的社会は、その公民の自尊心を保護し、あらゆる正常な個人に自己実現のための適切な機会を提供することを目的とすべきである。そのような社会的達成の計画は、最高の文化社会の体制をもたらすであろう。社会の発展は、最小限の取り締まり規制を行使する政府の管理によって奨励されるべきである。極少の行政支配にあるとき、その国家は、最も良く統一される。

71:3.10 (803.10) 国家の地位の理想は、発展により、市民意識のゆっくりとした成長により、すなわち社会奉仕の義務と特権の認識により達成されなければならない。人は、政治の猟官主義者の行政終了後にまず義務として政府の負担を負い、しかし後にはそのような奉仕を特権として、すなわち最もすばらしい名誉として追求する。いかなる段階の文明状況も、国家の地位の責任を進んで引き受けるその市民の力量によって忠実に映しだされる。

71:3.11 (803.11) 都市と州を治める真の共和国の機能は、ちょうど人々の経済と商業のつながりの他のすべての形態のように、専門家が指揮し、管理する。

71:3.12 (803.12) 政治的奉仕は、進歩した国家においては市民の最高の献身として尊重される。最も賢明で最も気高い市民の最大の抱負は、市民の認識を獲得することであり、つまり政府への信用ある地位に選出されるか、または任命されることであり、またそのような政府は、公務員や非政府組織の尽力に対して最も高い認識の名誉を与える。次には、哲学者、教育者、科学者、実業家、および軍国主義者の順に名誉が与えられる。両親には、その子等の優秀さにより正正当に報酬が与えられ、また純然たる宗教的指導者は、精神の王国の大使であることから真の報酬を別の世界において受け取る。

4. 進歩的文明

71:4.1 (804.1) 経済、社会、そして政府は、踏み留まるつもりであるならば発展しなければならない。進化的世界の静止状態は、腐敗を暗示しており、進化の流れと共に前進する制度のみが持続する。

71:4.2 (804.2) 拡大する文明の進歩的計画は次のような事項を取り入れる。

71:4.3 (804.3) 1. 個人の自由の保護

71:4.4 (804.4) 2. 家庭の擁護

71:4.5 (804.5) 3. 経済安定の促進

71:4.6 (804.6) 4. 疾病予防

71:4.7 (804.7) 5. 教育の義務

71:4.8 (804.8) 6. 就職の義務

71:4.9 (804.9) 7. 有益な余暇活用

71:4.10 (804.10) 8. 不運な者への配慮

71:4.11 (804.11) 9. 人種の向上

71:4.12 (804.12) 10. 科学と芸術の促進

71:4.13 (804.13) 11. 哲学の促進—知恵

71:4.14 (804.14) 12. 宇宙的洞察の拡大—精神性

71:4.15 (804.15) 文明の術策におけるこの進歩は、人間と神の最も高い目標への人間の努力の実現化—人間の兄弟愛の社会的達成と神-意識の個人の威信—へと導き、それは、すべての個人が天の父の意志を為すという最高の願望に明らかにされるようになる。

71:4.16 (804.16) 本物の兄弟愛の現れは、すべての人間が喜んで互いの重荷を負う社会秩序に到達したことを意味する。すべての人間は、黄金律の実施を実際に望んでいる。しかし、弱者あるいは悪人のいずれかが、まず第一に真、美、善の奉仕への献身に燃えている者を不公平かつ不道徳の利用のために虎視眈々と狙うとき、そのような理想的社会は実現され得ない。そのような状況においては、ただ1つの針路が現実的である。「黄金律の統治者」は、平和偏向者の搾取をねらうか、または前進する文明の破壊を試みるかもしれない文化の遅れた仲間に対して相応な防衛維持をしながら自分達の理想に沿って生きる進歩的社会を樹立できるのである。

71:4.17 (804.17) 理想主義は、各世代の理想主義者が、人類のより下劣な秩序による皆殺しを可能にするならば、発展的

惑星における存続はありえない。ここに、理想主義の大きな試練がある。高度な社会は、自己中心的利得、もしくは国家拡大目的のために他民族への攻撃作戦においてこの軍事力を用いる誘惑に屈することなく、好戦的隣人の全攻撃に対し社会を安全にする軍備維持ができるのか。国家の生存は、軍備を要求すると同時に、ただ宗教の理想主義が、攻撃準備の堕落を防ぐことができる。愛、すなわち兄弟愛だけが、強者の弱者圧迫を防ぐことができる。

5. 競争の進化

71:5.1 (805.1) 競争は社会の進歩に不可欠であるが、野放図な競争は暴力の原因となる。競争は、産業自体の生存を決定するとともに、現在社会においては個人の居場所を産業において決定するので、ゆっくりと戦争にとって代わっている。 (殺人と戦争は、慣習以前はそれぞれの事情において異なる。殺人は初期の社会以来禁止されてきており、一方戦争は、未だに人類全体として一度も禁止されたことがない。)

71:5.2 (805.2) 理想国家は、個人の争いから暴力を取り除くに十分の社会的行為を規制し、個人の自発性の不平等を防ぐことを引き受ける。ここに国家にとっての重大な問題がある。いかにして平和と静けさを産業に保証し国力を支えるために税を支払い、同時に課税が産業を不利な立場に立たせることを防ぎ、国家が寄生的、あるいは専制的になることを妨ぐことができるか。

71:5.3 (805.3) どんな初期世界のすみからすみまで競争は、進歩的文明に不可欠である。人の進歩するにつれ、協力はますます効を奏してくる。協力は、高度な文明においては競争よりも効率的である。古代人は競争に刺激される。初期の進化は、生物学的に適合する生存によって特徴づけられるが、後の文明は、理に適った協力、人の気持ちが理解できる友愛、それに精神の兄弟愛によって促進される。

71:5.4 (805.4) 本当に、産業における競争は甚だしく無駄であり、まったく効果がないが、そのような調整が、個人の基本的特権のいずれかのわずかな廃棄さえ引き起こすよ

うなことがあれば、この経済の無駄な動きを排除する何の試みも黙認されるべきではない。

6. 利潤動機

71:6.1 (805.5) 現代の利潤が動機づけの経済は、利潤動機が奉仕の動機により増大させられなければ絶望的である。偏狭的私利に基づく容赦のない競争は、ついには維持しようとする事柄さえも損ずるものである。排他的、かつ私利的な利潤動機の目的は、キリスト教の理想とは矛盾する—イエスの教えにはるかに矛盾するものである。

71:6.2 (805.6) 経済における利潤動機は、宗教における恐怖が、愛に関係するように奉仕の動機に関係がある。しかし、利潤動機は、突然に破壊されても取り除かれてもいけない。それは、さもなくば不精な人間を懸命に働かせておく。しかしながら、この社会的エネルギーを喚起する者の目的は、いつまでも利己的である必要はない。

71:6.3 (805.7) 経済活動の利潤動機は、完全にあさましく、社会の高度な秩序にまったくふさわしくない。にもかかわらず、それは、文明の初期段階の間ずっと欠くことのできない要素である。利潤動機は、人が経済努力と社会奉

仕のための非営利目的の優れた型—超越的な衝動、すなわち最上級の英知、興味をそそる兄弟愛、精神到達の卓越性—を堅く自分のものにするまでは取り除かれてはならない。

7. 教育

71:7.1 (806.1) 持続する国家は、文化に基礎があり、理想が主役であり、奉仕が動機となっている。教育目的は、技術習得、知恵の追求、自己実現、および精神的価値の達成であるべきである。

71:7.2 (806.2) 理想的国家における教育は、全生涯を通じて続き、また哲学は、時としてその市民の主な趣味となる。そのような共和国の国民は、人間関係の意味、現実の意味、価値の高潔さ、生活目標、および宇宙の運命の栄光に関する洞察強化として知恵を追求する。

71:7.3 (806.3) ユランチア人は新しくより高い文化社会の洞察力を得るべきである。教育は、純粋に利益に動機づけられた経済体系の消滅時に価値の新段階へと飛躍するであろう。教育は、あまりにも長い間、地方主義的、軍国主義的、自我称賛、成功追求であり過ぎた。それは、つい

には、世界的、理想主義的、自己実現的、宇宙理解に至らねばならない。

71:7.4 (806.4) 教育は最近、聖職者の管理から弁護士と実業家の管理へと移った。最終的にそれは、哲学者と科学者に明け渡されなければならない。教師は、哲学つまり知恵への探求が、主要な教育上の追求になり得るように自由な身、真の指導者でなければならない。

71:7.5 (806.5) 教育は、生涯の主たる活動である。それは、人類が、人間の知恵の上昇段階を徐々に経験できるように生涯を通じて続かなければならない。それらは次の通りである。

71:7.6 (806.6) 1. 事象に関する知識

71:7.7 (806.7) 2. 意味の具現化

71:7.8 (806.8) 3. 価値の正しい認識

71:7.9 (806.9) 4. 仕事の尊さ—義務

71:7.10 (806.10) 5. 目標への動機—道徳

71:7.11 (806.11) 6. 奉仕の愛—性格

71:7.12 (806.12) 7. 宇宙的洞察—精神的認識

71:7.13 (806.13) 次いで、多くの者が、これらの達成により人間の心の達成の究極点、つまり神-意識に昇るであろう。

8. 国家の特徴

71:8.1 (806.14) 人間のいかなる政府の唯一神聖な特性は、国家機能の行政、立法、司法の3領域への分割である。宇宙は、そのような機能と権威の分離計画に基づいて管理される。効果的な社会的規制、すなわち民間政府のこの神の概念は別として、増大された自制と増加された社会奉仕の目標に向かって市民が進歩しているのであるならば、一民族が、いかような国家形態を選ぶということはあまり重要ではない。民族の知力の鋭さ、経済の知恵、社会の賢明さ、および道徳持久力は、国家に忠実にすべて反映される。

71:8.2 (806.15) 国家の発展は、段階から段階への進歩を必要とする。それらは、

71:8.3 (806.16) 1. 行政、立法、司法3部門の政府の創設

71:8.4 (806.17) 2. 社会、政治、宗教活動の自由

71:8.5 (807.1) 3. 奴隷制度と人間束縛のすべての形態の撤廃

71:8.6 (807.2) 4. 税の徴収を調整する市民の能力

71:8.7 (807.3) 5. 普遍的教育体制—揺りかごから墓場までの幅のある学習

71:8.8 (807.4) 6. 地方と中央政府間の適切な調整

71:8.9 (807.5) 7. 科学の助長と疾病の克服

71:8.10 (807.6) 8. 家庭、学校、教会における性の平等と男女の連携機能の正当な認識、そして産業と政府機関における女性の専門的業務

71:8.11 (807.7) 9. 機械発明とその後の機械時代の支配による奴隷制度の除去

71:8.12 (807.8) 10. 方言の征服—世界共通語の勝利

71:8.13 (807.9) 11. 戦争の終結—国際法廷の定期的に退職する議長達から自動的に補充された惑星の最高裁判所が主宰する大陸法廷による国家間、人種間の不和の国際審決。世界裁判所は権威がある。常設国際司法裁判所は助言を与える—倫理的。

71:8.14 (807.10) 12. 知恵の追求への世界的人気—哲学の高揚。世界宗教の発展、それは光と生命に定着の初期段階に入る惑星の入り口の前兆となるであろう

71:8.15 (807.11) これらは、進歩的政府の前提条件と理想的国家の特徴である。ユランチアは、これらの高められた理想の実現からはかけ離れてはいるが、文明度の高い人種が一つの始まりを作った。—人類は、　より高い進化の運命に向かって進行中である。

71:8.16 (807.12) [ネバドンのメルキゼデクによる後援]

論文 72
近隣の惑星政府

72:0.1 (808.1) 私にはエーデンチアのいと高きものの承認とラナフォーゲの許可が与えられており、サタニア系に属するそれほど遠くない惑星に住む最高度の人類の社会的、道徳的、政治的生活の何らかについて語る権限が委任されている。

72:0.2 (808.2) この惑星は、ルーキフェレーンスの反逆参加のせいで孤立にいたった全サタニア界の中でほとんどユランチアのような歴史を経験した。体系の支配者が他の惑

星問題についての叙述を承諾するということは、とても珍しいことであることから、2球体の類似性こそが、この類希な発表の許可が与えられたかを間違いなく説明しているというものである。

72:0.3 (808.3) この惑星は、ルーキフェレーンスの反逆との関連においてその惑星王子の不忠により、ユランチアのように惑わされた。この惑星は、アダームがユランチアに来た直後に物質の息子を受け、以来、行政長官の息子は、その必滅の人種に贈与されることはなかったことから、その球体は隔離されたままでこの息子もまた違約した。

1. 大陸国家

72:1.1 (808.4) これらの惑星のすべての不利な条件にもかかわらず、非常に優れた文明が、ほぼオーストラリア大の孤立している大陸で発展している。この国の人口はおよそ1億4千万である。その民族は、いわゆるユランチアの白色人種よりも紫色人種の割合をわずかに多く持つ主には青色と黄色の混合民族である。これらの異なる民族は、まだ完全に混合されているというわけではないが、まず

まずは親しくつき合い、非常に社交的である。現在、この大陸の平均寿命は、惑星上のいかなる他民族よりも15パーセント高い90歳である。

72:1.2 (808.5) この国の産業構造は、大陸固有の地形に由来する大きな利点を享受している。1年に8カ月大雨の降る高い山々は、まさに国の真ん中に位置している。この自然の配置は、水力利用に有利に働き、より乾燥した大陸の西地区の潅漑を大いに容易にする。

72:1.3 (808.6) これらの国民は、自活しており、すなわち周辺の国々からいつまでも何も取り込むことなく生きることができる。天然資源は十分であり科学技術により生活必需品の欠乏を補う方法を学んできた。活発な国内通商に恵まれているが、あまり進歩的ではない隣国のありきたりの敵意のせいで対外貿易はほとんどない。

72:1.4 (808.7) 一般的にこの大陸国家は、惑星の発展的方向に進んだ。部族段階から強烈な支配者と王の出現までには何千年もかかった。多くの異なる政府の体制—不成功の共和国、共同国家、それに独裁者等—による絶対的君主が続いたが、不断の夥しさで去来した。この発展は、政

治的動乱期の国の強力な独裁的三執政の一人が心変わりをしたおよそ500年前まで続いた。他の支配者のうちの1人が、 つまり残る2人の下位の者が、独裁者の権力を空け渡すという条件で退位することを自発的に申し出た。こうして大陸の主権は、一支配者の手に託された。統一された国家が、100年以上も強い君主政治の下に進歩し、この間に見事な自由憲章が発展した。

72:1.5 (809.1) その後の君主制から代議政治形態への変遷はゆるやかであり、王は単なる社会的、あるいは感傷的な表看板として残存し、男系子孫が尽きるとやがて消えていった。現在の共和国は、今では200年間存続しており、その間これから叙述されようとしている国政術に向けての継続的進歩があり、過去10年の産業と政治の分野における最後の開発があった。

2. 政治団体

72:2.1 (809.2) この大陸国家には、現在、国の中心に位置する首都に代議政体がある。中央政府は、比較的自由な100州の強い連邦から成る。これらの州は、10年間任期の州知事と立法者を選出し、再選資格は誰にもない。州の裁

判官たちは、知事により無期の任命を受け、市民10万人当たり1人の代表から成る各立法府によって承認される。

72:2.2 (809.3) 都市の規模に応じて異なる5つの形態が、都市政府にはあるが、どの都市も100万人以上の住民は認められていない。これらの市の統治の基本構想は、概して非常に簡単で、直接的で、経済的である。最高の種類の市民のは、市のわずかな管理職を熱心に求めている。

72:2.3 (809.4) 連邦政府は、等位の3部門を採用している。行政、立法、司法。連邦最高行政者は、6年毎に一般の地域選挙によって選ばれる。彼は、各州知事の同意を得た少なくとも75の州議会の誓願を除いては再選の資格はなく、その時でも1任期限りである。連邦最高行政者は、生存する全ての元最高責任者で構成される「最高閣議」の助言を受ける。

72:2.4 (809.5) 立法部門は3議会を採り入れている。

72:2.5 (809.6) 1. 上院は、経済機能に従い、産業、専門職業、農業、そして他の労働者集団が、投票し選出する。

72:2.6 (809.7) 2. 下院は、産業に、あるいは専門職業に属しない社会、政治、哲学集団を包含する一定の社会組織によって選出される。会費を納めているすべての市民は、両分野の代表選挙に参加するが、上院に関する選挙か、下院に関するかにより異なって区分けされる。

72:2.7 (809.8) 3. 3番目の議院—元老—公務員の老練者たちを採用し、またそれぞれ最高行政者たち、地域(準連邦)行政者たち、最高裁判長の指名をうけた、くわえて他の立法院いずれかの議長たちの指名をうけた多くの著名な人々を採り入れている。この集団は100人に限られており、その構成員は、長老自身の多数派に選ばれる。会員資格は、無期であり、欠員ができると指名された中から最大得票者が正式に選出される。この機関の目的は、純粋に諮問的であるが、それは世論への強力な監視官であり、また政府の全部門に強い影響力を揮う。

72:2.8 (810.1) 連邦行政の実に多くが、10の地方分権(準連邦)機関により運営され、各機関は10州の団体からなる。これらの地方区分は、立法上、司法上のいずれの機能も持たず、完全に行政的であり、管理的である。10人の地方

行政官は、連邦最高行政者の直接の任命をうけ、任期は、最高行政者の任期—6年—と同じである。連邦最高裁判所は、この10人の地方行政者の指名を承認する。この10人は再任されないかもしれないが、退職行政者は、自動的にその後任の近い仲間となり、顧問となる。これらの地方行政官は、別な方法においてそれぞれ自身の事務官を選ぶ。

72:2.9 (810.2) この国は、2つの主要な裁判機関により裁かれる—法律法廷と社会経済法廷。法律法廷は、次の3段階において機能する。

72:2.10 (810.3) 1. 市や地方管轄の簡易裁判所の決定は、州の高等裁判所に上告できるかもしれない。

72:2.11 (810.4) 2. 州の最高裁の決定は、連邦政府、あるいは市民の権利と自由の危険を伴わないすべての問題において最終的なものである。地方行政官には、いかなる訴訟も即座に連邦最高裁の審判にかける権限が与えられている。

72:2.12 (810.5) 3. 連邦最高裁判所—国の論争裁決のための高等法廷と州立裁判所からの上告訴訟。この最高裁判所は、どこかの州立裁判所に2年、あるいはそれ以上勤務し、そして最高閣議と立法議会の3番目の議院の大多数の承認と最高行政者によってこの高い位置に任命された41歳以上、75歳未満の12人の男性で構成される。この最高司法機関の全決定は、少なくとも2/3の票決で成る。

72:2.13 (810.6) 社会経済法廷の機能は、次の3分割である。

72:2.14 (810.7) 1. 家庭と社会体制の立法と行政部門に関する親のための法廷

72:2.15 (810.8) 2. 教育法廷—州と地方の学校組織と係わりをもち、教育行政機構の行政と立法部門と結びつく司法機関

72:2.16 (810.9) 3. 産業法廷—経済上のすべての誤解調停のために完全な権限を与えられた司法裁判所

72:2.17 (810.10) 連邦最高裁判所は、中央政府の第３の立法部門、すなわち老齢の政治家の議院の3/4の票を除き、社会経済問題には判決を下さない。その他の点では、親法

廷、教育法廷、産業の高等法廷のすべての決定が最終的である。

3. 家庭生活

72:3.1 (811.1) この大陸では2家族が、同じ屋根の下に生活することは違法である。しかも集団居住は禁止されているので、長屋形式の建物の大部分は取り壊されてきた。しかし未婚者達は、まだ同好会、ホテル、その他の集団用居住施設に住んでいる。許可される最小家屋の敷地は、4,500平方メートルの土地を用意しなければならない。家の目的に使用される土地とその他の不動産は、最小家屋の敷地割当ての10倍までが無課税である。

72:3.2 (811.2) この民族の家庭生活は、前世紀の間に大いに向上した。両親の、すなわち父母双方は、子供育成のための親の学校に出席する義務がある。10日に1回は—2週間毎に、というのも1週間は5日であるから—口頭教授のために近くの集会所に行き、田舎の小集落に住まう農業者でさえも通信手段をもってこの任務を進める。

72:3.3 (811.3) 各家族の平均子供数は5人であり、子供は、両親の完全な管理下にあるか、片親もしくは両親死去の場合

は、親のための法廷により任命された保護者管理下にある。完全な孤児の後見役を与えられるということは、いかなる家族にとっても非常な名誉であるとみなされる。親たちの間での競争試験があり、孤児は、最良の親の資格を示した家庭に与えられる。

72:3.4 (811.4) これらの民族は、家庭をその文明の基本的機関と見なす。子供の教育と性格指導の最も大切な部分は、その両親と家庭での保証が期待されており、父は、母の子供の教養への心配りと同相当の専心している。

72:3.5 (811.5) すべての性教育は、両親、または法的後見者が、家庭において管理する。道徳教育は、教師が、学校の作業場で休息時に教えるが、宗教指導についてはそうではなく、宗教は、家庭生活の不可欠部分とみなされていることから両親の独占的特権であると判断されている。宗教教育は、純粋に哲学寺院においてのみ公的に与えられ、この民族の間ではユランチアの教会が展開してきたような完全に宗教的団体のようなものは展開しなかった。彼らの哲学での宗教とは、神を知り、奉仕を通じて仲間に対する愛を表す努力であるが、これは、この惑

星の他の国々の典型的宗教事情ではない。宗教は、これらの民族間では完全に家族の問題であるので、宗教上の集会は、何の公共の場もないのである。政治的には、教会と国家は、ユランチア人がよく言うように完全に別々であるが、宗教と哲学には奇妙な重なりがある。

72:3.6 (811.6) 20年前まで、両親から適切に教育を受けたかどうか子供を定期的に調べるために各家族を訪問する精神的な教等師 (ユランチアの牧師に匹敵する)は、政府の指揮下にあった。これらの精神面の助言者と試験官は、現在、新たに作成された精神向上財団法人、つまり自発的出資の後援のもとにある団体の指示下にある。この団体は、ことによると天の行政長官の息子の到着後までさらなる発展はないかもしれない。

72:3.7 (811.7) 子供は、市民の最初の義務が開始する15歳になるまで法的にはそのまま親の支配下にある。その後、両親への義務が減少されるそのような年齢層に対し、似通った公的儀式のように、連続して5年毎に5回の実施され、一方では、市民の、また社会的な新しい責任が課される選挙権は20歳で与えられ、親の同意なしの婚姻の権

利は25歳まで与えられず、また子は、30歳に達すると家を出なければならない。

72:3.8 (812.1) 婚姻と離婚法は、国中画一である。20歳前の結婚—民間参政権賦与の年齢—は認められていない。婚姻許可は、通告1年後に、その上、花嫁と花婿の両人が、結婚生活の責任に関し親の学校で正規に教授を受けたということを示す証明書を提示後に初めて与えられる。

72:3.9 (812.2) 離婚規定はいくらか緩いが、親の法廷が発行する離別の判決は、申請登録から1年後まで取得できないかもしれない。また、この惑星の1年は、ユランチアよりもかなり長い。現在の離婚率は、簡単な離婚法にもかかわらず、ユランチアの進んだ人種の離婚率の1/10に過ぎない。

4. 教育制度

72:4.1 (812.3) この国の教育制度は、大学教育前の5歳から18歳までの生徒が通う義務であり、しかも男女共学である。これらの学校はユランチアのものとは大いに異なる。教室はなく、1度に1つの学習だけがなされ、全ての生徒

は、最初の3年が過ぎるとが低学年を教える補助教員になる。本は、学校の作業場と農場に起こる問題解決に役立つ情報確保のためだけに使用される。この大陸で使用される家具の多くと機械発明の多く—これは発明と機械化の偉大な時代である—は、これらの作業場で生産される。隣り合う各作業場は、学生が必要な参考図書を閲覧を必要とするかもしれない実用的図書館である。農業と園芸もまた、地元のそれぞれの学校に隣接する大規模な農場において全教育期間にわたって教えられる。

72:4.2 (812.4) 頭の働きの鈍い者は、農業と畜産だけを学び、普通以下のすべての者は、否定されている親になることを未然に防ぐために性別に隔離される特別な管理集落に生涯収容される。これらの抑制策は、75年間実施されてきている。引き渡し命令は、親のための法廷によって言い渡される。

72:4.3 (812.5) 誰もが、毎年1カ月の休暇を取る。大学進学前の学校は10年間であり、1年のうち9カ月間実施され、休暇は両親か友人と旅行をしながら過ごす。この旅行は、成人教育計画の一部であり、生涯を通じて続けられ、費用

を賄うための基金は、老齢保険に採り入れられているものと同じ方法によって蓄積される

72:4.4 (812.6) 学期の1/4は、遊戯に—運動競技に—あてられている。生徒は、これらの競技で地方から、州と地域を経て全国試合へと進む。同様に、弁論大会と音楽大会、もちろん科学と哲学におけるものも、下層の社会区分から国家の名誉のための競争まで学生の注意を占有している。

72:4.5 (812.7) 学校管理は、学校関係者が、3番目の、すなわち立法顧問部門として機能し、相関3部門をもつ中央政府の摸写である。この大陸の教育主要目的は、すべての生徒を自活する国民にすることである。

72:4.6 (813.1) すべての子供は、大学前の16歳で学制を卒業するが、熟練した職人である。その後、成人学校か大学のいずれかで書物の研究と特別知識の探求が始まる。才気あふれる学生が、予定より早く仕事を終了すると、 自身の考案による何らかの得意の研究課題にとりくむ時間と手法の特典が与えられる。全体の教育制度は、個人を適切に訓練するよう考案されている。

5. 産業組織

72:5.1 (813.2) この国民の間での産業状況は、その理想からはかけ離れている。労使は、今なおそれぞれの問題を抱えてはいるが、双方が真剣な協力計画に合わせ少し変化してきている。労働者は、この特有の大陸でますます全産業事業の株主になっている。全知的労働者は、徐々に小資本家になっている。

72:5.2 (813.3) 社会的対立は減少しており、また親善精神が速やかに拡大している。毎年2パーセントの奴隷解放によるこの調整が、徐々に発効されて以来、深刻な経済問題は、奴隷制度撤廃(100年以上前)以来起こっていない。文句なく精神的、道徳的、それに体力検査に合格した奴隷には市民権が与えられた。これらの優れた奴隷の多くは、戦争捕虜か、戦争捕虜の子供等であった。およそ50年前、人々は、劣る最後の奴隷を追放し、さらに最近では、堕落し悪質な階級の数を減少させる課題に本気で取り組んでいる。

72:5.3 (813.4) これらの人々は最近、産業に関する意見の相違の調整と経済上の弊害の修正のための新たな方法、つま

りそのような問題解決の古い方法に改善を印した新たな方法を発達させた。個人、または産業上の不一致のいずれかの調整手段としての暴力は、非合法化された。賃金、利益、および他の経済問題は、厳しく規制されておらず、産業立法府におおむね制御されているが、産業から起こるすべての論争は、産業法廷で全般的に統制される。

72:5.4 (813.5) 産業法廷は、ほんの30年に過ぎないが、非常に満足のいく機能をしている。最新の進展は、今後産業法廷が、3部門に当てはまるような法的補償の承認を確立する。

72:5.5 (813.6) 1. 投資資本の法的利率

72:5.6 (813.7) 2. 産業活動技能に対する妥当な俸給

72:5.7 (813.8) 3. 労働に対する合法で公正な賃金

72:5.8 (813.9) これらは、まずは契約に合致させるか、または減少収益に直面する際は、一時的減少に比例して分担するものとする。そして、これらの固定負担金を超える全

収益は、その後配当と見なされ、全3区分：資本、技術、労働に割り当てられるものとする。

72:5.9 (813.10) 地方行政官は、10年毎に合法的な日々の有給労役を調整し、決定する。産業は現在、労働4日と遊戯1日の週5日で作動している。これらの人々は、学生同様、就業１日当たり6時間、10ヶ月ある1年のうち9カ月働く。通常、休暇は旅行に費やされ、最近では新輸送方法が開発されたので、国全体が旅行をする傾向にある。気候は、1年におよそ8カ月旅行に向いており、人々はその機会をできるだけ利用している。

72:5.10 (813.11) 200年前、産業にとっての利益目的は、完全に優位であったが、今日、それは他の、また一層高い推進力により急速に置き換えられている。この大陸における競争は、猛烈ではあるが、その多くが産業から遊戯、技能、科学的達成、および知的到達へと移行された。それは、社会奉仕と政府への忠誠心において最も活発である。この民族の間では、社会奉仕が、急速に待望の主目的になっている。この大陸の最も金のある者は、1日あたり6時間自分の機械工場の事務所で働き、次に本人

が、社会奉仕のための資格を得ようと公職者の学校の地方分校へと取り急ぐのである。

72:5.11 (814.1) この大陸での労働は、名誉なことであり、体の丈夫な19歳以上の者は皆、家庭や農場、広く認められた産業、または一時的失業者が受け入れられる公的な仕事、さもなければ鉱山の強制労働部隊で働く。

72:5.12 (814.2) これらの国民はまた、新しい型の社会的嫌悪—怠惰と過分な富の両者への嫌悪—を心に抱き始めている。人々は、ゆっくりと、しかも確実に、自分達の機械を征服している。かつて、彼らもまた、政治上の自由と、続いて経済自由のために戦った。彼らは、現在、自己実現に専念できる自分の力で勝ち得た余暇に感謝し始めると共に、双方の楽しみを自分のものとしている。

6. 老齢保険

72:6.1 (814.3) この国家は、自尊心を打ち砕く慈善行為の型を老後を保証する堂々たる政府の保険と置き換える決然たる努力をしている。この国家はすべての子供に教育を、すべての成年に仕事を提供する。それ故に、虚弱者や老

齢者の保護のためにそのような保険制度を首尾よく実行できるのである。

72:6.2 (814.4) この国民のすべては、70歳まで仕事に残る権利を与える許可証を州の労働委員から手に入れない限り有給の職業からは65歳で退かなければならない。この年齢制限は、公務員、あるいは哲学者には適用されない。身体的障害者、あるいは永久的不具者は、地方政府の年金審議官が連署して裁判所の命令により、何歳ででも退職表に載せられる。

72:6.3 (814.5) 老齢年金のための基金は4財源から引き出される。

72:6.4 (814.6) 1. 連邦政府は、この目的のため毎月1日分の所得を徴収する。この国では皆が働く。

72:6.5 (814.7) 2. 遺産—多くの裕福な市民がこの目的のために財源を残す。

72:6.6 (814.8) 3. 国の鉱山での強制作業収入。徴集された労働者が自らを支え、自身の退職負担金を積み立てておき、

自己労働からの超過収入のすべてがこの年金基金に回される。

72:6.7 (814.9) 4. 天然資源からの収入。大陸のすべての自然的財産は、社会の信託金として連邦政府によって保持され、そこからの収入は、疾病防止、天才教育、および公職者育成学校の特に有望な個人の経費といった社会目的に利用される。天然資源からの収入の半分は、老齢年金基金に回される。

72:6.8 (814.10) 国家と地方の保険計理財団が、保護的保険の多くを供給するとはいえ、老齢年金は、連邦政府が、地方の10部門をつうじて独自に管理する。

72:6.9 (814.11) これらの政府資金は、長い間正当に管理されてきた。裁判所が与えた最も重い刑罰には、反逆罪と殺人に国民の信頼への裏切りが加えられている。社会的不実、政治的不実は、今、すべての犯罪で最も凶悪であると見なされている。

7. 課税

72:7.1 (815.1) 連邦政府は、老齢年金管理と天才と創造的な独創性を助長することにおいてのみ温情主義的である。州政府は、それよりもわずかに個々の住民に寄りそっており、地方自治体は、はるかに温情主義的であるか、または社会主義的である。市(または、それの何らかの亜区分)は、健康、衛生、建築物規制、美化、給水、照明、暖房、娯楽、音楽、および意思の疎通のような事柄に携わる。

72:7.2 (815.2) 全産業での第1の配慮は、健康にむけられている。物理的福利にかかわる特定の局面は、産業と一般社会の特権と見なされるが、個人と家族の健康問題は、個人的な関心だけの問題である。薬に関しては、他のすべての純粋に個人的問題と同様に、政府の干渉はさらにいっそう控える計画である。

72:7.3 (815.3) 市には課税する権力はなく、借金することもできない。市は、州の公庫から一人当たりの支給金を受けるとともに、社会主義的企業収益と様々な商業活動の認可からそのような収入を補わなければならない。

72:7.4 (815.4) 市の境界を大いに広げ実用的にする高速輸送機関は、市の管理下にある。市の消防署は、防火と保険基金に支えられており、市あるいは国における全建築物は耐火性であり、75年以上存続している。

72:7.5 (815.5) 市により任命された保安官はいない。警察は、州政府が維持する。この部門は、ほぼ全体的に25歳から50歳の間の未婚男性からに募集される。大部分の州が、かなり重い独身税を査定しており、それは州警察に加わるすべての者に支払われる。平均的州の警察は、現在、50年前のそれの1/10の規模に過ぎない。

72:7.6 (815.6) 経済や他の状態は、大陸の異なる区域で大いに異なり、比較的自由で主権をもつ100州の課税の仕組みに均一性はほとんど無いか、あるいは無い。全ての州には連邦の最高裁の同意がある場合を除いては、変更不可能な10の基本的な憲法条項があり、これらの条項の1つには町にあろうと田舎にあろうと免除されている家屋の敷地以外は、いかなる資産にも1年当たりその価値の1パーセントを越える税の徴収を禁じている。

72:7.7 (815.7) 連邦政府は、借金をすことはできないし、いかなる州も戦争目的を除いては金の借り入れには3/4の住民投票を要する。連邦政府は、負債を被ることができないので、戦争の際には防衛国民会議が、人と物資のみならず必要に応じ、州に金銭を課する権限が与えられている。しかし、負債は25年以上に及んではならない。

72:7.8 (815.8) 連邦政府を支える収入は、以下の5源泉から得られる。

72:7.9 (815.9) １．輸入税。 すべての輸入は、惑星のいかなる他の国の水準よりもはるかに高いこの大陸での生活水準を保護するように設計された関税対象である。産業議会の両院は、2立法府の共同被任命者である経済問題最高行政者の推薦を承認した後に最高産業法廷においてこれらの関税を設定する。産業上院は、労働者に、下院は、資本家により選出される。

72:7.10 (816.1) 2. 印税。 連邦政府は、すべての型の才能—芸術家、作者、および科学者—を援助し、またそれらの特許を保護し、地方の10個所の実験室での発明と独自の創造を奨励している。代わりに政府は、機械、書籍、芸術作

品、植物、または動物に属するか否かに関係なく、そのようなすべての発明と創造からの収益の半分を受ける。

72:7.11 (816.2) 3. 相続税。 連邦政府は、地所の規模、および他の条件によって決まる1パーセントから50パーセントにおよぶ累進相続税を徴収する。

72:7.12 (816.3) 4. 軍用設備。 政府は、商業や娯楽目的使用のための陸海軍設備の賃貸により相当額を稼いでいる。

72:7.13 (816.4) 5. 天然資源。 天然資源からの収入は、連邦国家の憲章に特定目的で完全に必要としなければ国庫に転じられる。

72:7.14 (816.5) 連邦政府の予算割当額は、国民防衛協議会において査定される戦争基金を除き、上院の立法府で起案され、下院の同意をうけ、最高行政者が承認し、最終的に100人の連邦予算委員会によって有効とされる。この会の委員は、州知事に指名され、24年間務める州議会により6年毎に1/4が選出される。この機関は、6年毎にその構成員の中の一人を3/4の得票により選んで会長とし、その結果、彼は、連邦基金の統括者兼管理者になる。

8. 特別大学

72:8.1 (816.6) 5歳から18歳にかけての基本的義務教育計画に加え、次のような特別学校が維持されている。

72:8.2 (816.7) 1. 公職者育成学校。 これらの学校は3分野に分かれる。国立、地方、および州。官公庁は、4部門に分類される。国民への責任の第一部門は、主に国家の管理に属し、この団体の全公務員は、地域と国の双方の施政学校の卒業生でなければならない。個人は、地域の10の公職者の学校のうちのいずれかを卒業し、第2部門の政治、選挙、または任命による職を受けるかもしれない。その地位は、地域の管理と州政府においての責任に関係がある。第3部門は、州の責任を盛り込み、当該職員は、施政の学位だけが必須となる。そのような職は、完全に任命によるもので第4と最後の部門の公務員は、施政の学位を保持する必要はない。それらの職は、助手職、秘書職、それに政府の管理能力をもって機能する様々な学術的職業により取り扱われる技術的責任の低い身分である。

72:8.3 (816.8) 下級裁判所と州立裁判所の裁判官は、州立の施政学校の学位を持つ。社会、教育、産業問題の司法の裁判官は、地域の公職者学校の学位を保持する。連邦最高裁の裁判官は、これらの全ての施政学校からの学位を保持しなければならない。

72:8.4 (817.1) 2. 哲学の学校。 これらの学校は、哲学の寺院と協力し、公の機能として大なり小なり宗教に関係がある。

72:8.5 (817.2) 3. 科学機関。 これらの専門学校は、教育制度よりもむしろ産業と同位であり、15部門下において管理される。

72:8.6 (817.3) 4. 職業訓練学校。 これらの特別機関は、様々な学術的職業のための技術的訓練を与え、総数12機関である。

72:8.7 (817.4) 5. 陸軍と海軍学校。全国本部の近くと沿岸の25の軍事施設は、18歳から30歳までの軍事訓練を志願する市民向けに維持されている。これらの学校へに25歳以前の入学は、親の同意を必要とする。

9. 普通選挙案

72:9.1 (817.5) 官公庁の志願者全員は、州、地域、または連邦の公職者の学校卒業生に限られ、この国の進歩的指導者達は、普通選挙案の重大な弱点を発見し、およそ50年前に次の特徴を取り入れた投票方法修正のための憲法条項を作成した。

72:9.2 (817.6) 1. 20歳以上のすべての男女は、1票を有する。この年齢に達すると、全国民が2つの投票集団の会員資格を得なければならない。まず、経済上の役割—産業、専門職、農業、あるいは通商—に従って加わる。政治、哲学的、社会的傾向に応じて2番目の集団に入る。その結果、全労働者が、何らかの経済会員集団に属し、そしてこれらの同業組合は、非経済協会のように、三権分立を持つ国の政府とほぼ同様に規制されている。これらの集団における登録は、12年間変更できない。

72:9.3 (817.7) 2. 社会に多大に尽力した個人、あるいは政府用役において並はずれた賢明さを示した個人は、5年足らずの頻度ではなく、そのような9票の特別投票権を超えることなく、州知事か地方行政官の指名、また地域の最

高協議会の権限で与えられた追加の投票権を持つかもしれない。いかなる複数投票権者の最大選挙権は、10票である。科学者、発明者、教師、哲学者、および精神指導者もまた、拡大された政治権力を与えられて同様に認識され栄誉を受けている。特別大学から学位が与えられるのとほぼ同様に、州と地方の最高協議会から都市のこれらの高度の特権が、与えられ、その受益者は、他の学位に加えてそのような都市認識の表象を個人的業績表に添付することを誇りに思っている。

72:9.4 (817.8) 3. 鉱山での強制作業を言い渡された個人、また税金財源による公務員のすべては、そのような奉仕期間、選挙権を奪われる。これは65歳で年金をもらって退職する老人には適用されない。

72:9.5 (817.9) 4. 5年間対象のうちの1年当たりに支払われる平均税を反映する選挙権には5区分がある。重納税者には5票までの追加票が許される。この付与は他のすべての認定からは独立しているが、何人といえども決して11票以上を投じることはできない。

72:9.6 (818.1) 5. この特権計画が採用されたとき、地域別投票方法は、経済体制や機能体制を優先して放棄された。すべての市民は現在、それぞれの住居にかかわらず産業、社会、あるいは専門職集団の構成員として投票する。したがって、選挙母体は、政府への信用と責任ある地位に最適な人員だけを選出する団結し、統一し、その上知的である集団で構成されている。機能的または集団選挙のこの体制には1つの例外がある。6年毎の連邦最高行政者の選挙は、全国的な投票によるし、いかなる市民も1票を越えての投票はない。

72:9.7 (818.2) こうして選挙は、最高行政者の選挙を除き、市民の経済的、専門的、そして知的な社会集団ごとに行使される。理想国家は、有機的であり、自由で知的なあらゆる市民集団とは、より大きい政府の有機体内での生命維持に必要、かつ機能する器官を意味する。

72:9.8 (818.3) 政治学校は、障害があったり、欠陥があったり、無関心であったり、または罪を犯した個人の選挙権剥奪をみすえて州の法廷に訴訟を起こす権限を有する。国民は、国の50パーセントの者が劣るか、または欠陥が

ありながら投票権を持つとき、そのような国は消える運命にあると知っている。凡人による支配はいかなる国の滅亡をも告げると信じている。投票は義務であり、票を投じない者すべての対しては重い罰金が課される。

10. 犯罪への対応

72:10.1 (818.4) この民族の犯罪、精神異常、堕落への対応方法は、ある意味では心地よいものであるが、他方では、疑いもなく、ほとんどのユランチア人にとって衝撃的なものである。通常の犯罪者と欠陥者は、性別に異なる農業居住地に収容され、十二分に自活している。裁判所は、より深刻な常習犯と不治の狂人に毒ガス室での死刑を言い渡す。殺人を別とする、政府の信頼への裏切りを含む頻繁な犯罪もまた、死刑を伴い、正義の天罰は、確かで迅速である。

72:10.2 (818.5) これらの国民は、法の否定的時代から積極的時代へと移っている。最近では、殺人可能者や重罪人に拘留地での終身服役の判決申し渡しによる犯罪防止を試みるところまで行った。そのような受刑者は、その後今まで以上に正常になったことを示すならば、仮釈放される

か、または赦免されるかもしれない。この大陸での殺人率は、他の国々の1パーセントに過ぎない。

72:10.3 (818.6) 犯罪者と欠陥者の繁殖防止の努力は、100年以上も前に始められ、すでに喜ばしい結果をもたらした。精神異常者のための刑務所も病院もない。理由の1つは、ユランチアで見られるこれらの集団のほんの10パーセント程に過ぎないからである。

11. 軍備

72:11.1 (818.7) 連邦軍事学校の卒業生は、能力と経験に応じて防衛国民会議の総裁により、7階級の「文明の守護者」として任命されるかもしれない。親の最高裁判所、教育最高裁判所、産業最高裁判所により指名されたこの会は、25の協議会から成り連邦の最高裁判所により承認され、連携軍事の参謀長により統轄された。そのような構成員は70歳まで仕える。

72:11.2 (819.1) そのような任命された役員が探求する過程は、4年の長さであり、必ず何らかの貿易、あるいは職業への精通に関連している。軍事訓練は、この関連する産業学校、科学学校、または職業学校での教育なしには決し

て与えられない。軍事訓練終了後の個人は、特別な学校で同様に4年の課程の長さの教育の半分を、4年の課程の間に、既に受けたことになる。職業軍人階級の創設は、こうして技術上、あるいは職業訓練の前半を確実なものする一方で、多くの男性が、自らを支えられるようにこの機会を提供することにより回避している。

72:11.3 (819.2) 平時の兵役は純粋に自発的であり、全兵役部門における入隊は4年間である。その間、すべての者が軍略習熟に加え専門とする何らかの研究を続行する。音楽における訓練は、中央の軍事学校と大陸周辺に分布する25の訓練所の主要な活動の1つである。産業の不景気が続くあいだ、何千人もの失業者は、自動的に陸海における大陸軍事防衛を築き上げることに活用される。

72:11.4 (819.3) これらの国民は、周辺地域の民族の侵入に対する防衛としての強力な戦時編成を維持しているが、この軍事手段を100年以上も攻撃的戦争というものに用いていないということが、立派なこととして記録されてもよい。これらの国民は、侵略に戦力を用いる誘惑に屈することなく文明を力強く防御することができる程度にまで

文明的になった。内戦は、大陸連合国の設立以来一つもないが、これらの国民は、ここ2世紀の間に9回の激しい防衛闘争に召集されてきており、そのうちの3戦は、強力な世界列強同盟に対してであった。この国は、敵意を抱く隣国による攻撃に対し適切な防衛維持はしているものの、政治家、科学者、および哲学者の訓練や養成によりはるかに注意を向けている。

72:11.5 (819.4) 世界と平和状態にあるとき、すべての可動防衛機構は、完全に貿易、商業、娯楽に利用される。戦争が布告されると、国全体が動員される。軍の支払いは、戦争期間中すべての産業で調達し、総軍事省の長官たちが、最高行政内閣の成員となる。

12. 他の国々

72:12.1 (819.5) この類稀なる民族の社会と政府は、あらゆる点でユランチア国のものよりも優れているが、他の大陸では(この惑星には11ヶ国ある)、政府は、ユランチアのより高度な国々に明らかに劣っていると述べられるべきである。

72:12.2 (819.6) この優れた政府は、ちょうど今、劣性民族との使節関係の確立を計画しており、周辺国への宣教師派遣について提唱する偉大な宗教指導者が、初めて生まれた。我々は、非常に多くの他のものが、他民族に優れた文化と宗教の強制を試みたときに犯した誤りをかれらが、繰り返そうとしていることを恐れる。この大陸の高度の文化をもつ国が、ただ単に外へ出向き、近隣民族の中の最も優れた者を連れ帰り、それ等を教育後に未開の同胞に文化の特使として送り返すならば、この世界で何とも素晴らしいことができるであろう。もちろん、行政長官の息子が、この高度な国にすぐ来るならば、この世界ですばらしい事が急速に起こり得る。

72:12.3 (820.1) 隣接の惑星事情に関するこの詳説は、ユランチアの文明を前進させ、政府の発展を増大させる意図をもって特別な許可でなされている。ユランチア人に興味を起こさせ好奇心をそそるさらに多くを語ることはできるが、この発表は、我々の許される限界に及んでいる。

72:12.4 (820.2) ユランチア人は、しかしながら、サタニア系の自分達の姉妹球体は、天なる息子の権威ある任務、ある

いは贈与任務のいずれにも拠らないということに気づくべきである。ユランチアの様々な民族は、大陸国家が、その惑星の仲間から切り離すような文化の不均衡により互いを切り離すようにはならない。

72:12.5 (820.3) 真実の聖霊からの注入は、贈与世界の人類の幸福の偉業を実現するために精神的な基礎を用意する。ユランチアは、したがって、法、機構、象徴、しきたり、および言語とともに惑星政府のより即座の実現に備えており—そのすべてが、法の下での世界平和確立へ向けて非常に勢いよく貢献でき、精神的努力の真の時代の夜明けのいつかへと導くことができた。そして、そのような時代は、光と生命の理想郷の時代への惑星の敷居である。

72:12.6 (820.4) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 73
エーデンの園

73:0.1 (821.1) カリガスティアの失脚の結果から文化の退廃と精神の貧困、また必然の社会的混乱は、ユランチア民族の物理的、あるいは生物的情勢にそれほどの影響はなか

った。生物進化は、カリガスティアとダリガスティアの離反の結果として非常に早く生じた文化と道徳的退行にまったく関係なく速やかに続いた。およそ4万年前、任務中の生命搬送者が、ユランチアの発展過程は、純粋に生物学の見地からのその頂点に近づきつつあることに気づいたとき、惑星の歴史の瞬間がやって来た。メルキゼデクの受信者は、この意見に同意して、生物上の改善に努めるもの達、つまり物質の息子と娘のユランチア実況見分への派遣をエーデンチアのいと高きものに陳情する生命搬送者とともにすることに直ちに同意した。

73:0.2 (821.2) この要求は、カリガスティアの失脚とジェルーセムの一時的権威の明け渡し以来、エーデンチアのいと高きものが、ユランチアの諸事に対して直接管轄を行使してきたことから、エーデンチアのいと高きものに申し入れされた。

73:0.3 (821.3) タバマンチア、つまり一連の少数の、または実験的世界の君主的監督官は、惑星査察のために到来し、人種の進歩状況を調査した後、ユランチアに物質の息子が下付されることを正式に推薦した。この査察時点から

100年間足らずで、局部恒星系の物質の息子と娘であるアダームとハヴァーが、到着し、反逆による停滞と精神的孤立の隔離状態にある惑星の混乱した問題解決に努める厄介な任務に着手した。

1. ノヅ系とアマドン系

73:1.1 (821.4) 平均的惑星への物質の息子の到着は、偉大な発明、物質的進歩、および知的啓発の時代への接近を前触れする。アダーム時代の後、ほとんどの世界は、素晴らしい科学時代にあるものの、ユランチアではそうではない。この惑星には物理的に適合する人種が住んでいたが、部族は野蛮と道徳的停滞の深層の中で苦しんだ。

73:1.2 (821.5) 反逆後の1万年以内に王子の行政のほぼすべての進歩は、拭い去られてしまった。世界の人種は、この道を誤った息子がユランチアに来なかったとした時に比べ、暮らし向きはあまり良くなかった。ダラマティアの伝統と惑星王子の文化の持続性は、ノヅ系とアマドン系の間にだけ存在した。

73:1.3 (821.6) 産業と通商のダラマティア委員会の以前の議長であり最初の指導者であるノヅにその名が由来するノヅ

系は、王子の部下の反逆勢力の子孫であった。アマドン系は、ヴァンとアマドンに忠誠であり続けることを選んだアンドン系の子孫であった。「アマドン系」は、人種的用語であるよりも文化と宗教的な意味がある。人種の上から考察すると、アマドン系は本質的にはアンドン系であった。「ノヅ系」は、文化的、人種的表現の双方である。ノヅ系自身が、ユランチアの8番目の人種を構成したからである。

73:1.4 (822.1) 従来からの敵意が、ノヅ系とアマドン系に介在した。この確執は、これら2集団の子孫が何らかの共通事業に従事しようとするとき常に表面化した。その後でさえ、2集団にとり共にエーデンの情勢にかかわって平穏に働くことはきわめて困難であった。

73:1.5 (822.2) ダラマティアの滅亡直後、ノヅの信奉者は、3大集団に分離するようになった。中央集団は、ペルシャ湾源流近くの元の家のすぐ近くに残った。東方集団は、ユーフラテス渓谷のすぐ東のエラーム高地の領域に移動した。西方集団は、地中海北東部のシリアの沿岸と隣接する地域に場所を定めた。

73:1.6 (822.3) ノヅ系は、サンギク人種と自由に混交し、有能な子孫を後に残した。反逆的ダラマティアの子孫の幾らかは、後にメソポタミアの北の土地でヴァンとその忠誠な信奉者に合流した。ノヅ系は、ここヴァン湖地方と南カスピ海地帯においてアマドン系と交際し混ざり合い、そして「昔の勇士」の中に数えられた。

73:1.7 (822.4) アダームとハヴァーの到着前、これらの集団—ノヅ系とアマドン系—は、地球で最も前進し、文化的に進んだ人種であった。

2. 園のための計画

73:2.1 (822.5) タバマンチアの査察に先立つおよそ100年間、高地に位置する世界の倫理と文化の本部からヴァンとその仲間は、約束された神の息子、人種的改善に努めるもの、真実の教師、そして反逆者カリガスティアに代わる相応しい後継者の到来について説き続けていた。世界の当時の住民の大部分は、まずそのような予知に関心を示さなかったが、ヴァンとアマドンに直接接触していた人々は、そのような教えを真剣に受け止め、約束された息子の実際の受け入れ計画を立て始めた。

73:2.2 (822.6) ヴァンは、最も身近な仲間にジェルーセムの物質の息子の話をした。ヴァンがユランチアに来る以前に知っていたことを。ヴァンは、アダームの息子達は、いつもは素朴ではあるが魅力的な園の家に住んでいるということを知っており、アダームとハヴァー到着の83年前に、二人の到来の布告とともに受け入れのために園の家の準備に専念することを提案した。

73:2.3 (822.7) ヴァンとアマドンは、高地の本部と遠くに点在する61集落から約束された—少なくとも期待されている—息子のために準備のためのこの任務に、厳粛な集会で、打ち込む3,000人を越える労働者部隊を編成した。

73:2.4 (822.8) ヴァンは、志願者を100組に分割し、それぞれに隊長一人と連絡係としての側近要員を務める副官一名を配置し、自分の副官としてはアマドンを留め置いた。これらの委員全員は、真剣に準備作業に取り掛かり、園の位置選定委員会は、理想的な場所を求めて出発した。

73:2.5 (822.9) カリガスティアとダリガスティアは、悪事のために力の多くを剥奪されてしまったもかかわらず、楽園準備の仕事を阻み、妨害するために可能な限りのことを

した。しかしそれらの邪悪な企みは、事業を進めるために非常に精力的に働くおよそ1万の忠誠な中間的被創造者の忠実な活動によりおおむね相殺された。

3. 園の用地

73:3.1 (823.1) 園の位置選定委員会は、およそ3年間不在であった。委員会は、実行し得る3個所に関する見通しの明るい報告をした。1番目はペルシャ湾の中にある島であった。2番目は、後に2番目の園として占有された川の場所。3番目は、地中海の東岸から西側へ突出している長く狭い半島—島のような。

73:3.2 (823.2) 委員会は、3番目に選ばれたものをほぼ満場一致で支持した。この場所が選ばれ、世界の文化本部の移転に、生命の木を含むこの地中海の半島への移転に2年掛かった。ヴァンとその仲が到着したとき、半島居住者のただ一つの集団を除く全員が、穏やかに立ち退いた。

73:3.3 (823.3) この地中海の半島は、爽やかな気候と一定した気温であった。この安定した天候は、取り囲む山とこの地域が実際には内海の島であったという事実にあった。周囲の高地におびただしく雨を浴びせたが、エーデンそ

のものには滅多に降らなかった。しかし夜毎、大規模な人工用水路から園の植物を生き生きさせるために「霧が上昇するのであった。」

73:3.4 (823.4) この陸の海岸線はかなり持ち上げられており、本土と接続する頸状部は、最狭地点においてはほんの43キロメートルであった。園に給水する大河は、半島の高い土地から下降し、その頸状部を経て本土へと、そしてそこからメソポタミアの低地を横断し先の海へと東に流れた。大河は、エーデン半島沿岸の丘陵に源をもつ4支流によって供給され、「エーデンから出た」川の「4つの頭状のもの」で、後には2番目の園を取り囲む川の支流と混同されるようになった。

73:3.5 (823.5) 園を囲む山々は、あまり注目はされなかったものの、貴石と金属が豊富であった。園芸賛美と農業高揚が支配的な考えであった。

73:3.6 (823.6) 園にと選定れた場所は、おそらく全世界のその種の最も美しい場所であり、気候は理想的であった。そのような植物発現の楽園に完全に適する場所はその場所以外どこにもなかった。この集合場所にユランチアの文

明の最良部分が集合しつつあった。エーデンの外とその向こうの世界は、暗黒、無知、野蛮状態にあった。エーデンは、ユランチアで唯一明るい場所であった。それは、自然の理想の素晴らしさであり、間もなくこの上なく美しい、しかも完成された風景の栄光の詩となった。

4. 園の創設

73:4.1 (823.7) 物質の息子、生物上の改善に努めるもの達が、進化的世界に逗留し始めたとき、かれ等の居住場所は、星座の首都であるエーデンチアの花の美と植物の壮大さの特徴的であったことからしばしばエーデンの園と呼ばれた。ヴァンは、これらの習慣を熟知しており、そこで全半島が、園に明け渡されるように準備をした。牧草地と畜産は、隣接する本土に計画された。動物生態については、唯一鳥と様々な飼い慣らされた種類が公園で見られた。ヴァンの指示は、エーデンは庭園をめざしているということ、庭園のみであるということであった。いかなる動物も、その区域内では一度も屠殺されなかった。建設の全歳月に渡り、園の労働者が食したすべての肉は、監視下で本土において養われた群れから持って来られた。

73:4.2 (824.1) 最初の仕事は、半島の頸状部を横切るするレンガ壁の建設であった。これが完成されると、本物の風景美化と住宅建設に妨害なく取り掛かることができた。

73:4.3 (824.2) 動物園は、主壁のすぐ外側に小さ目の壁の建設造成がされた。あらゆる種類の野生動物に占拠されているその間の狭まった場所は、敵対攻撃に対する付加的防御として役立った。中央の領域を占有する川とその隣接する牧草地にあるこの異色の動物園は、壮大な12区域で組織化され、これらの動物集団の間の壁を巡らせた道は、園の12宇の出入口へと続いた。

73:4.4 (824.3) 園の準備には勤労奉仕者のみが用いられた。決して一人の雇い人も使われなかった。食物のために園を耕作し、動物の群れの世話をした。また近くの信者からの食物寄附も受け取った。この偉大な事業は、世界の混乱状態の困難にもかかわらず、騒然としたこれらの時勢において完成へと漕ぎ着けた。

73:4.5 (824.4) しかしながら、ヴァンは、待ち望まれる息子と娘が後どのくらいで来るかを知らずにいて、万一の二人の到着の遅れに際しては、若い世代もまた事業続行のた

めに訓練されると示唆をしたとき、大きな失望をもたらした。これは、ヴァン側の信念不足の自認のように見え、かなりの問題を生じ、多くの脱走の原因となった。しかし、ヴァンは、その間に職場放棄者の代わりにより若い奉仕者で埋め合わせ、準備計画にそって邁進した。

5. 園の家庭

73:5.1 (824.5) エーデンの半島中央に宇宙なる父の見事な石の寺院、園の神聖な神殿があった。北には管理本部が設立された。南には、労働者とその家族のための家が建てられていた。西には、待ち望まれる息子の計画された教育制度の学校用地が用意され、一方、「エーデンの東」には約束された息子とその直系子孫のために意図された住居が建てられた。エーデンの建築計画は、100万の人間のための家と豊富な土地を用意した。

73:5.2 (824.6) 園は、アダームの到着時点ではほんの1/4仕上がっていたが、何千キロメートルもの用水路と1万9千キロメートル以上の舗装された小道や道路があった。僅かに5千を越えるレンガ造りの建築物があり、樹木や植物は数え切れないほどであった。公園の中で一塊りを成する

最多の家屋数は、7軒であった。園の構造は簡単ではあったが、この上なく芸術的であった。道路と小道はりっぱに造られ、風景は絶美であった。

73:5.3 (824.7) 園の衛生設備は、それ以前にユランチアで試みられてきたものよりもはるかに先んじていた。エーデンの飲料水は、その純度を保つように設計された公衆衛生規則の厳しい遵守により安全に保たれた。初期の多くの問題は、これらの規則の無視から生じたが、ヴァンは、園の給水に何も落ちることを許さない重要性を次第に仲間に力説した。

73:5.4 (825.1) エーデン人種は、その後の下水処理設備の設置までにすべての廃棄物、または腐敗しかかった物質の埋葬を几帳面に実践した。アマドンの検査官は、毎日巡回して可能な病気の原因を入念に調べた。ユランチア人は、19世紀後期と20世紀まで人間の病気予防の重要性への喚起を起こさなかった。覆われたレンガ導管の廃棄設備は、壁の下を流れ、園の外側の壁、つまりより低い壁のおよそ1.5キロメートル先のエーデン川へ注ぎこむように、アダーム政権中断以前に、構築された。

73:5.5 (825.2) アダームの到着までに世界のその区域の植物の大部分がエーデンで育っていた。既に、果実、穀類、木の実の多くが大いに改良されていた。現代の野菜と穀類の多くが最初にここで栽培されたが、食料用の植物の何十品種もが、その後世界から消え失せた。

73:5.6 (825.3) 園のおよそ5パーセントは、高度の人工栽培、15パーセントが部分的耕作、残りは、アダームの考えに沿って公園を仕上げるのが最良と考えられ、迫りくるアダームの到着までほぼ自然な状態で残された。

73:5.7 (825.4) こうして約束されたアダームとその配偶者受け入れのための用意が、エーデンの園でもなされたのであった。また、この園は、完全な運営と通常の管理下にあったとしたならば、世界にとって価値あるものとなったことであろう。アダームとハヴァーは、自分達の個人的住居の備え付けの多くを変更はしたものの、エーデンの基本計画にはとても満足した。

73:5.8 (825.5) 装飾の仕事が終えるか終えないかのうちにアダームが到着したが、その場所は、すでに植物の美の珠玉であった。そしてアダームのエーデンでの初期の滞在

中、園全体は、新しい外観を呈し、新たな美と壮大の調和で装った。ユランチアは、この後にも先にもそのように美しく十分に備えた園芸と農業を発揮したことはなかった。

6. 生命の木

73:6.1 (825.6) ヴァンは、長らく警備されていた生命の木を園の寺院の中央に植えた。その葉は「民を癒す」ためのものであり、その実はヴァンを地球でずいぶん長い間支えてきた。ヴァンは、アダームとハヴァーも、一旦ユランチアに姿を現した後ではその生命維持のためにエーデンチアのこの贈り物に依存していることを熟知していた。

73:6.2 (825.7) 体系首都の物質の息子等は、自らの生命維持のために生命の木を必要とはしない。惑星での再人格化においてのみ、物質の息子等は肉体の不死のためにこの付属物に依存している。

73:6.3 (825.8) 「善悪に関する知識の木」は、言葉のあや、つまり人間の幾多の経験にあてはまる象徴的名称であるかもしれないが、「生命の木」は神話でなかった。それは本当であり、長らくユランチアに存在していた。　エーデ

ンチアのいと高きものが、ユランチアの惑星王子をカリガスティアの委員として、また100人のジェルーセム市民を王子の管理職員として承認したとき、彼らはエーデンチアの低木をメルキゼデクに託し、惑星に発送し、この植物は、ユランチアで生命の木として成長した。この知力をもたない生命の型は、星座本部圏に起源があり、またハヴォナ圏のみならず局部と超宇宙の本部の世界でも見つけられるような生命体であり、体系首都では見つけられない。この超植物は、動物生存の老化作用要素への対抗手段である特定の空間活力を蓄積した。生命の木の実は、摂取されると神秘的に宇宙の生命拡大力を放ち、超化学物質の蓄電池に似ていた。

73:6.4 (826.1) この栄養物の型は、ユランチアにおける通常の進化の存在体には全く役に立たなかったが、特に有形化した100人のカリガスティアの部下と王子の部下に生命原形質を寄与した100人の変更されたアンドン系には役立った。また王子の部下は、代わりに、さもなければ死を免れない存在を無期拡大するために生命の木の実を利用することを可能にする命のその補足物の保有者にされた。

73:6.5 (826.2) 王子の支配時代、父の寺院の中央の円形の中庭の地面からこの木は生えていた。それは、反逆突発の際、一時的な野営地でヴァンとその仲間により樹芯から再度育成された。後にこのエーデンチア低木は、高地の退却先に持って行かれ、そこで15万年以上ヴァンとアマドンの二人に役立った。

73:6.6 (826.3) ヴァンと仲間は、アダームとハヴァーのためにエーデンの園の用意をし、エーデンチアの木を園に移植し、そこでもう一度、父のための別の寺院の中央の円形の中庭で育った。アダームとハヴァーは、二重の肉体生活形態の維持のために定期的にその果物を摂取した。

73:6.7 (826.4) 物質の息子の計画が脱線したとき、アダームと家族は、園からの木の芯の持ち運びを許されなかった。ノヅ系がエーデンに侵入した際、彼らは「木の実を摂取すれば神」のようになると告げられた。非常に驚いたことに、それは監視されていなかった。長年にわたり自由にその果物を食べたが、彼等には何の役にもたたなかった。彼らは、皆領域の物質の死すべき者であった。それらは、この果実を補助として働く資性を欠いていた。そ

れらは、生命の木から恩恵を得ることができないことに激怒するようになり、そのうえ内部戦争の1つに関連して寺院と木はともに火事で破壊された。園が後に水没するまでは石垣だけが立っていた。これが、父の2番目に滅んだ寺院であった。

73:6.8 (826.5) そして、現在、ユランチアのすべての生物は、生と死の自然の流れを取らなけらばならないのである。アダーム、ハヴァー、その子供、その子供の子供すべてが、それぞれの仲間と共に時の流れの中に滅びてしまい、大邸宅世界の復活は、肉体の死に続く局部宇宙の上昇計画の支配を受けることとなった。

7. エーデンの運命

73:7.1 (826.6) 最初の園がアダームから空け渡されると、それは、多様にノヅ系、クティーテース系、およびスンティーテース系に占領された。後にそれは、アダーム系との協力に反対した北部出身のノヅ系の居住地域となった。アダームが園を後にしてからおよそ4,000年間、半島にはこれらの下級のノヅ系があふれ、周囲の火山の激しい活動とアフリカとシチリア間の陸橋の潜水とに関係し

て、地中海の東の海底は、エーデン半島全体を伴い水面下に沈んだ。この広大な沈没に付随し、東地中海の海岸が大いに持ち上げられた。そしてこれは、ユランチアが育んだ最も美しい自然の創造の最後であった。半島全体を完全に水没させるには数百年を要することから沈没は突然ではなかった。

73:7.2 (827.1) 我々は、園のこの消滅をいかなる点においても神の計画の失敗の結果、あるいはアダームとハヴァーの誤りの結果であると見なすことはできない。エーデンの水没を自然発生とはほど遠いとは見なさないが、園の沈没は、紫色人種が世界民族回復の仕事を引き受けるための予備人員集合の時期に起こるように調整されたように我々には思える。

73:7.3 (827.2) メルキゼデクは、アダームの家族が50万に達するまで人種向上と人種混合の事業に着手しないよう助言した。園がアダーム系の永久的生息地であることは決して意図されていなかった。彼等は、新生活の全世界への使者になるところであった。地球の貧窮民族への寡欲な恵与のために動員されるところであった。

73:7.4 (827.3) メルキゼデクからアダーム与えられた指示は、アダームが、人種の、大陸の、そして地区の本部を確立し、また直系の息子と娘を統率するようになるということを暗示しており、一方アダームとハヴァーは、生物学上の向上、知力の向上、および道徳回復の世界規模の活動の助言者、また取り纏め役としてこれらの様々な世界首都の間で自分達の時間を区切るようになっていた。

73:7.5 (827.4) [ソロニア、熾天使の「園の声」による提示]

論文 74
アダームとハヴァー

74:0.1 (828.1) アダームとハヴァーは、西暦1934年から遡る3万7,848年前にユランチアに到着した。二人が到着したのは、園が花盛りの季節の半ばであった。正午しかも発表もなく、生物の改善に努めるもののユランチアへの輸送を任されたジェルーセム要員に同伴された二名の熾天使輸送係が、宇宙なる父の寺院近くの回転惑星の表面にゆっくりと着いた。アダームとハヴァーの再度の肉体化のすべての仕事が、新たに建設されたこの神殿の境内の中で進められた。世界の新統治者としての披露のために二元的な人間の姿に再現されるまで二人の到着から10日が

経過した。二人は同時に意識を取り戻した。物質の息子等と娘等はいつも共に役目を果たすのである。二人の本質的重要性は、何時でも何処でも決して切り離されることなく仕えることがである。二人は対で働くように予定されており、めったに単独では機能しない。

1. ジェルーセムでのアダームとハヴァー

74:1.1 (828.2) ユランチアに到着の惑星のアダームとハヴァーは、双方共に1万4,311番であるジェルーセムの物質の息子の年長部隊に属する隊員であった。二人は、物理的には3番目の組に属し、およそ2メートル半の身長であった。

74:1.2 (828.3) アダームは、ユランチア行きに選ばれた時、ジェルーセムの試験と実験の物理実験室で仲間と共に働いていた。彼らは、1万5,000年以上も生形体に適用される実験エネルギー部門の管理者であった。このずっと以前には、ジェルーセムの新規到着者のための公民学校の教師であった。そしてこのすべてが、ユランチアにおける彼等のその後の行為の叙述に関し覚えておかれるべきである。

74:1.3 (828.4) ユランチアにおけるアダームの冒険任務のための志願者要請が発表されると、物質の息子と娘の年長部隊全体が志願した。メルキゼデクの試験官は、ラナフォーゲとエーデンチアのいと高きものの承認と共に、ユランチアの生物上の改善に努めるものとして機能するために最終的にアダームとハヴァーを選出した。

74:1.4 (828.5) アダームとハヴァーは、ルーキフェレーンスの反逆期間、ミカエルに忠実であり続けた。にもかかわらず、二人は、尋問と指令のために体系君主とその内閣全体に召喚された。ユランチア問題の詳細は、すっかり提示され、二人は、そのような紛争で疲弊した世界の支配者の責務を引き受けるに当たり、果たされるべき計画について徹底的に指示を受けた。二人は、ともにエーデンチアのいと高きものとサルヴィントンのミカエルへの忠誠の宣誓をした。そして二人は、その行政機関が、配属先の世界の支配から手を引くのが適当であると思われるまで、メルキゼデク受信者のユランチア部隊に従属すると見なすよう順当に助言を受けた。

74:1.5 (829.1) ジェルーセムのこの1組の男女は、サタニアの首都と他の場所に100名の子—50名の息子と50名の娘—進行途中の落とし穴を逃がれ、両親のユランチアに向けての出発時点において、宇宙の信頼に対し忠実な執事として全員が就役していたすばらしい被創造者達を後に残した。そして、これらの娘と息子の全員が、物質の息子の美しい寺での贈与承認の最後の儀式に伴う送別授与式に参列していた。これらの子供等は、属する系列の非物質化本部にむけて両親に同伴し、両親が、熾天使の輸送のための準備に先立つ人格の意識中断状態のうちに眠りに入るとき、一番最後に両親への別れとその道中の安全を述べた。子供等は、まもなく両親が目に見えるサタニア系の惑星606号の代表者、実際には唯一の支配者となることを喜びながら家族の待合せ場所でしばらくともに時を過ごした。

74:1.6 (829.2) アダームとハヴァーは、こうして、市民が、拍手喝采し成功を願う中でジェルーセムを後にしたのであった。二人は、ユランチアで遭遇するあらゆる義務と危険に対し適切に装備し、充分に指導を受け新たな責務へと旅立っていった。

2. アダームとハヴァーの到着

74:2.1 (829.3) アダームとハヴァーはジェルーセムで眠りにつき、二人を歓迎するために集まった、大観衆のいるユランチアの父の寺院で目覚めたとき、以前よく耳にしていた二人、ヴァンとその忠実な仲間アマドンに直接向かい合っていた。新庭園の家で最初に二人を歓迎したのは、カリガスティア脱退のこの2人の英雄であった。

74:2.2 (829.4) エーデンの言葉は、アマドンの話すアンドン方言であった。ヴァンとアマドンは、24文字の新アルファベットの作成によりこの言語を著しく改良し、またエーデン文化が世界中に広まるにつれ、それが、ユランチアの言葉になるのを見たいと願っていた。アダームとハヴァーは、ジェルーセム出発前にこの人間の方言を完全に習得していたので、アンドンのこの息子は、自分の世界の地位の高い支配者が同じ言葉で演説するのを聞いた。

74:2.3 (829.5) その当日、走者が、遠近から集められた伝書鳩の集合場所へと「鳥を放て。約束された息子が来られたと知らせを運ばせよ。」大急ぎで叫んでいると、エーデン中に大きな興奮と喜びがあった。毎年のように何百も

の信者の集落は、まさしくそのような特別の機会のためにこれらの自家飼育の鳩の供給を忠実に続けてきた。

74:2.4 (829.6) アダームの到着の知らせが広まると、近隣の何千人もの部族民がヴァンとアマドンの教えを受け入れる一方で、巡礼者は、何カ月も何カ月も、アダームとハヴァーを歓迎するため、また見えない父に敬意を表するためにエーデンへと繰り出してきた。

74:2.5 (829.7) 目覚めの直後、アダームとハヴァーは、寺の北部にある大きい堤での正式の歓迎会へ案内された。この自然の丘は、拡大され、世界の新支配者の就任のために用意されていた。ここで正午に、ユランチア歓迎委員会は、サタニア系のこの息子と娘を歓迎した。アマドンはこの委員会の議長であった。委員会は、サンギクの6人種の各代表を含む12人の構成員；中間者の臨時の主任、ノヅ系の忠誠な娘であり広報担当であるアナン、園の設計者かつ建築者の息子であり、また故人となった父の計画実行者であるノア、そして在住の2名の生命搬送者から成った。

74:2.6 (830.1) 次の活動は、年輩のメルキゼデク、ユランチアの財産管理の協議会長が、アダームとハヴァーに対して惑星後見義務を実施することであった。物質の息子と娘は、ノーランティアデクのいと高きものとネバドンのミカエルとに忠誠の誓いを立て、ヴァンは、アダームとハヴァーが、ユランチアの支配者であると宣言した。その結果、ヴァンは、メルキゼデク受信者の働きの効力により15万年以上維持してきた名義上の権威を放棄した。

74:2.7 (831.2) この時、つまり世界支配者への正式の就任時に、王らしい礼服が、アダームとハヴァーに授けられた。ダラマティアの全ての芸術が世界から失われていた訳ではなかった。エーデンの時代、機織りはまだ営まれていた。

74:2.8 (830.3) その時大天使の宣言が聞こえ、加えてガブリエルの放送の声が、ユランチアの2度目の裁決点呼と、サタニア606号の恩寵と慈悲の2度目の配剤の対象である眠れる生存者たちの復活を命じた。王子の統治は終わり、アダームの時代、つまり3度目の惑星時代は、簡易で雄大な場面の中で開始する。ユランチアの新支配者達は、

惑星で権力を持つ前任者の協力不足で引き起こされた世界的混乱にもかかわらず、見たところ好ましい状態の下で治世に着手する。

3. 惑星について学ぶアダームとハヴァー

74:3.1 (830.4) そして今、アダームとハヴァーは、正式の就任後、自分達の惑星の孤立に痛々しいほどに気づくようになった。馴染みのある放送は全く静寂で、惑星外の通信回路は、すべて休止していた。アダームとハヴァーのジェルーセムの仲間は、自分たちが初期の経験をしている間に、定着した惑星王子と経験豊富な部下が、自分たちのための受けいれの準備ができており、協力ができるそのような円滑に動いている世界に行った経験があった。しかし、ユランチアでは、反逆がすべてを変えてしまった。惑星王子は、ここでは非常に目立ち、また悪を働く力の大部分を刈り取られたにもかかわらず、それでもなおアダームとハヴァーの任務を難しくし、またある程度危険に晒すことができたのであった。その夜、満月の輝く下で翌日の計画を明確にしながら庭園の中を歩いたのは、ジェルーセムの真剣で、しかも幻滅を感じている息子と娘であった。

74:3.2 (830.5) アダームとハヴァーの初日は、孤立したユランチア、カリガスティアの裏切りで混乱した惑星でかくして終わった。二人は、かなり夜遅くまで、地球での初めての夜、歩いて、そして話した。—それは、誠に孤独であった。

74:3.3 (830.6) アダームの地球での2日目は、惑星の受信者と顧問機関との会議に費やされた。アダームとハヴァーは、メルキゼデク、それにその仲間からカリガスティア反逆の細部と世界進歩のその大変動の結果に関しさらに学んだ。それは、つまり世界情勢にかかわるこの長い不始末の詳説は、概して期待外れの話であった。二人は、社会進化の過程を加速するカリガスティアの企みの完全な崩壊に関するすべての事実を知った。かれらは、惑星の前進を果たすために神の発展計画を独自に試みる愚かさを完全に認識する結果となった。このようにして、悲しくはあるが、得るところの多い日—ユランチアでの2日目が、終わった。

74:3.4 (831.1) 3日目は、庭園の実況検分にあてられた。アダームとハヴァーは、乗客用の大きい鳥—ファンドル—か

ら世界一美しい場所の上空で運ばれている間、茫漠たる庭園を見下ろした。この検分の日は、エーデンの美と壮大さをもつこの庭園を世に送り出すために尽力したすべての者を称えるとても大きな宴会で終わった。そして再び、息子とその連れ合いは、庭園の中を歩き、3日目の夜遅くまで、自分達の問題の計り知れなさについて語った。

74:3.5 (831.2) 4日目、アダームとハヴァーは、園に集合した者に演説をした。二人は、就任の丘から世界回復のための計画について話し、また罪と反逆の結果堕落したユランチアの社会文化を低い水準から救うための方法をあらまし説明した。これは、すばらしい日であり、また世界情勢の新しい管理責任を負うために選ばれていた男女からなる委員会のための祝宴で閉じられた。注目しなさい。男性のみならず女性もこの集団にはおり、そのようなことは、ダラマティアの時代以来、地球に起こった初めてであったということを。ハヴァーが、つまり女性が、男性と世界情勢に関し名誉と責任を分かち合うところを見ることは驚くべき革新であった。地球での4日目は、このようにして終わった。

74:3.6 (831.3) 5日目は、一時的な政府組織、メルキゼデク受信者のユランチア出発時まで機能することになる行政部の組織に専念した。

74:3.7 (831.4) 6日目は、人と動物の非常に数多くの型の検分に当てられた。アダームとハヴァーは、エーデンの東部の壁に沿って惑星の動物の生態を見たり一日中案内をうけ、そのようなさまざまな生物が生息する混乱状態の世界に秩序をもたらすためにしなければならないことにより良い理解にいたった。

74:3.8 (831.5) この小旅行に同行した者達は、アダームが見せられた何千匹もの動物の性質と機能をいかに完全に理解したかを目撃し大いに驚かされた。アダームは、動物を一瞥した瞬間に、その種類と行動形態を指摘するのであった。アダームは、一目で即座に、すべての動物の起源、特徴、機能を叙述して名前を与えることができた。この検分巡りでアダームを案内した者達は、世界の新支配者が全サタニアの最も熟練した解剖学者の一人であるということを知らなかった。そのうえハヴァーも、負けず劣らず熟練していた。アダームは、人間の目で見るに

は小さ過ぎる多数の生き物について説明をし仲間を驚かせた。

74:3.9 (831.6) 地球滞在の6日目が終わると、アダームとハヴァーは、「エーデンの東」の二人の新居で初めて休息した。ユランチア冒険の最初の6日間は非常に忙しく、二人は、すべての活動からの自由なまる1日を大喜びで楽しみにしていた。

74:3.10 (831.7) しかし情況は、別な状態に決定づけた。アダームがユランチアの動物生活について非常に理知的に、徹底的に論じて過ぎ去ったばかりのその日の経験は、その見事な就任演説とその魅力ある態度と合わせて、庭園居住者の心を勝ちとり、知力を圧倒したので、かれらは、新たに到着したジェルーセムの息子と娘を支配者として心から受け入れる気になったばかりではなく、大多数の者は、神として二人に平伏し崇拝せんばかりであった。

4. 最初の大変動

74:4.1 (832.1) その夜、すなわち6日目の夜、アダームとハヴァーが微睡んでいると、奇妙なことがエーデンの中央部にある父の寺の付近で起こっていた。そこで、興奮状態の

熱心な何百人もの男女が、まろやかな月の光の下で何時間も指導者達の熱情的な請願を聴いた。指導者達は、好意はもっていたが、新支配者の友愛的、民主的な気取りのない態度をどうしても理解できなかった。そして夜明のかなり前、世界情勢に関わる新たで、臨時の管理者達は、アダームとその相方は、全体的に穏やかで、控え目であり過ぎるという実質的には一致した結論に達した。皆は、神が肉体の姿で地球に降りて来られたと、つまりアダームとハヴァーはほんとうは神であると、でなくとも敬虔な崇拝に値するほどの地位に近接していると決め込んだ。

74:4.2 (832.2) 地球でのアダームとハヴァーの最初の6日間は、世界の善人達でさえも不用意のその心には全く手に余るものであった。皆の頭は渦巻いていた。皆は、敬意をもって崇拝し、また謙虚の服従でひれ伏すことができるように高貴なその一組の男女を正午に父の寺まで招来するという提案に心を奪われていた。園の居住者達は、この全てに実に真剣であった。

74:4.3 (832.3) ヴァンは異議を申し立てた。アマドンは、アダームとハヴァーと共に夜通し残る名誉の護衛の任にあり不在であった。ヴァンの抗議は一蹴された。ヴァンは、同じ様に穏やかであり過ぎ、控え目であり過ぎると、ヴァン自身は神からそれほどかけ離れてはいない、でなければ何故それほど長い間地球に住んでいたのか、また、アダームの到来のようなすばらしい出来事を引き起こしたのかと言われた。そして、興奮気味のエーデン人が、崇拝のためにヴァンを差し押さえ山に連れていこうとしたとき、ヴァンは群衆の波を泳ぎ出て中間者達と話し合いができ、大急ぎでその指導者をアダームのところへ向かわせた。

74:4.4 (832.4) アダームとハヴァーがこれらの善意の、しかし見当違いの人間の驚異的な申し出の知らせを聞いたのは、地球での7日目の夜明け近くであった。それから、乗客用の鳥が二人を寺に連れ行くために迅速に飛んでいるときでさえ、そのようなことができた中間者たちは、アダームとハヴァーを父の寺に輸送した。アダームが、神の息子の身分に関する序列に関し長々説明をし、また父だけが、それに父が指名する者だけが崇拝されてもよ

いのだと、地球のこれらの心に明らかにしたのは、この7日目の朝早くであった。アダームは、いかなる名誉も受け入れ、すべての敬意を受けいれるだろうが、礼拝は決して受けないということを明らかにした。

74:4.5 (832.5) それは重要な日であった。アダームとハヴァーは、ちょうど正午前、使者である熾天使が、世界の支配者たちの就任に関わるジェルーセムの承認を携えて到着する時刻、群衆から離れ父の寺を指差して言った。「父の目に見えない臨場である物質的象徴の場所にいま行き、我々皆を創られ、我々を生き続けさせるあの方に頭を下げて崇拝しなさい。そして、神以外の何者をも迷って二度崇拝しないというこの行ないを誠実な誓約としなさい。」皆は、アダームの指示通りにした。人々が寺の周りでひれ伏す一方で、物質の息子と娘は、二人だけで山上に立ち頭を垂れていた。

74:4.6 (832.6) これが、安息日の伝統の由来であった。エーデンにおいてはいつも、7日目が寺での真昼の集会に当てられた。長い間、この日を自己修養にささげるのが習慣であった。午前は肉体の改善に当てられ、真昼は霊的崇

拝、午後は心の育成に向けられ、一方、夕方は社交上の悦びに費やされた。これは、決してエーデンの法ではなかったが、それは、地球を支配するアダームの管理の間ずっと習慣としてあった。

5. アダームの管理

74:5.1 (833.1) メルキゼデク受信者たちは、アダームの到着後のおよそ7年間、任務に着いたままでいたが、遂にアダームに世界情勢の管理を譲りジェルーセムに戻るときがやって来た。

74:5.2 (833.2) 受信者たちの送別は1日掛かりで、晩には個々のメルキゼデクが、アダームとハヴァーに別れの助言と応援を伝えた。アダームは、顧問達に共に地球に残るよう何度か要請してきたが、陳情はいつも拒否された。物質の息子が、世界の問題処理に対して完全な責任を負わなければならない時が来た。そこで真夜中に、サタニアの熾天使の輸送は、ジェルーセムに向け14人の生命体と惑星を出発、つまり12人のメルキゼデクの出発とヴァンとアマドンの返還の同時に進行した。

74:5.3 (833.3) ユランチアでは当分の間すべてが完全に順調であり、やがてはアダームが、エーデン文明の小刻みな進展の助長をするために何らかの開発計画が、可能であるらしく見えた。アダームは、メルキゼデクの意見に従って、外の世界との貿易関係を築く考えをもって製造技術を促進し始めた。エーデンが混乱に陥ったときには100を越す原始の製造工場が生産過程にあり、周辺部族との大規模な貿易関係が確立されていた。

74:5.4 (833.4) アダームとハヴァーは、長い間、漸進的文明の発達にむけ専門的な貢献に備えて世界の改善方法を教えられてきた。しかし今二人は、未開人、野蛮人、半文明人の世界での法や秩序の設立というような緊急課題に直面していた。園に結集した地球の人口の最上部は別として、ここかしこで、わずかの集団しか、アダーム文化の受け入れ準備は、できていなかった。

74:5.5 (833.5) アダームは、世界政府樹立のために英雄的、かつ決然たる努力をしたが、事あるごとに頑固な抵抗があった。アダームは、すでにエーデン全体で集団経営体制に着手し、これらの全集団をエーデン連盟の連邦制にし

た。しかし、問題が、重大な問題が、アダームが園外に赴きこれらの考えを遠隔地の部族に適用しようとした際、結果として起こった。アダームの仲間が、園外で働き始めたその瞬間、カリガスティアとダリガスティアの直接の、しかも巧みに計画された妨害にあった。堕落した王子は、世界の支配者としては既に退位させられていたが、惑星からは除去されてはいなかった。まだ地球におり、人間社会再建のためのアダームの全計画に、少なくともある程度、抵抗することができた。アダームは、カリガスティアについて警告しようとしたが、大敵は、人間の目には見えず、その仕事は非常に困難であった。

74:5.6 (833.6) エーデン系の中にさえ、カリガスティアの人格の放逸な自由の教えに傾くという混乱した心をもつ者がいた。そして、アダームに多くの苦労をもたらした。常に、秩序正しい前進と実質的な開発のための慎重な計画を覆していた。アダームは、自分の迅速な社会化に関する予定を取り下げざるを得なかった。彼は、ヴァンの組織方法に頼ってエーデンの者を100人単位の一団に分割し、それぞれに団長をつけ、それに10人単位の集団を担当する副官を配する方法を最後の拠り所とした。

74:5.7 (834.1) アダームとハヴァーは、君主政治の代わりに代議政治を制定するようになるが、どんな政府も全地球上ではその名に相応しくないことがわかった。アダームは、当面のところは、代議政治設立への全ての努力をやめ、エーデン政権が崩壊する前に、強い個人がアダームの名で統治している園外に100か所ほどの貿易と社会的な中心地の確立に成功した。これらの中心地の大部分は、ヴァンとアマドンによりあらかじめ組織化されていた。

74:5.8 (834.2) 1部族から他の部族への大使の派遣は、アダームの時代から始まった。これは、政治の発展における大きい前進であった。

6. アダームとハヴァーの家庭生活

74:6.1 (834.3) アダーム家の敷地は1,300ヘクタールをわずかに越える広さを有した。直接にこの敷地をの周りでは、30万人以上の純系子孫のための対策が、講じられていた。しかし、計画された建築物の最初の1個だけが建設されたに過ぎなかった。アダームの家族の規模が、これらの

初期の設備よりも大きくなる前に、エーデンの全計画が中断され、園を立ち退いた。

74:6.2 (834.4) アダームソンは、ユランチアの紫色人種の長子で、その後には妹と、アダームとハヴァーの2番目の息子のハヴァーソンが生まれた。ハヴァーは、メルキゼデクが去る以前に5人の子—3人の息子と2人の娘—の母であった。次の2人は双子であった。彼女は、不履行前に、63人の子供、32人の娘と31人の息子を生んだ。アダームとハヴァーが園を離れるとき、その家族は、純系子孫4世代から成る1,647人を数えた。二人には、地球の人間の血筋との親から生まれた2人の子供以外に園を出た後42人の子供がいた。これは、アダームの血統のノヅ系と進化する人種に関しては含まれていない。

74:6.3 (834.5) アダームの子供は、1歳で母乳をやめる際、動物からの乳を取らなかった。ハヴァーは、多種多様の木の実の液汁と多くの果汁とを利用できたし、またこれらの食物の化学的属性やエネルギーについてよく知っていたので、子供の育成のために歯が生えるまで適当にそれらを混合した。

74:6.4 (834.6) エーデンのすぐ隣のアダーム地区の外では料理が一般的にされていたが、アダームの家庭では料理はしなかった。熟して食べ頃の食物—果実、木の実、穀類—を採集した。1日に1度、真昼直後に食べた。また、アダームとハヴァーは、生命の木の援助と併せて、一定の空間放散物から直に「光とエネルギー」を吸収した。

74:6.5 (834.7) アダームとハヴァーの体は光輝を発したが、仲間の習慣に合わせていつも衣服を身につけた。二人は、日中はあまり着なかったが、夕暮れには夜間用の巻き布を身につけた。敬虔で神聖であると思われている人々の頭を取り巻く伝統的な光輪の起源は、アダームとハヴァーの時代にまでさかのぼる。彼らの体からの光の発散は、主に衣服で覆い隠されたので、頭からの放射の輝きだけが認識できた。アダームソンの子孫は、このように常に精神的開発において並はずれていると信じられる自分達個人についての考えを絵にした。

74:6.6 (834.8) アダームとハヴァーは、およそ80キロメートルの距離にわたって、お互いに、また子供との意思疏通ができた。この思考のやりとりは、脳構造のすぐそばに位

置する精巧な気体室からもたらされた。この仕組みによって、思考の振幅を送受することができた。しかし、この力は悪からくる不和と分裂へ心を引き渡したときに即座に停止された。

74:6.7 (835.1) アダームの子供は、16歳になるまで独自の学校に通い、年少者は年長者に教えられた。年下の者達は30分毎に、年上の者達は1時間毎に活動を変えた。アダームとハヴァーの子供達の純然に楽しげで陽気な活動で遊んでいる姿は、ユランチアでは確かに新しい光景であった。現代人の遊びとユーモアは、主にアダーム系から得ている。アダーム系は皆、鋭いユーモア感覚ばかりでなく音楽への大いなる理解もあった。

74:6.8 (835.2) 婚約の平均的年齢は18歳であり、そこで若者たちは、婚姻責任の承諾に備え、２年の教育課程に入った。20歳で結婚の資格があった。そして結婚後に、それぞれの生涯の仕事、あるいは、そのための特別な準備を始めた。

74:6.9 (835.3) 兄弟と姉妹との結婚を認めるという、おそらくは神の系統を汲むいくつかの後の国々の王室の習慣は、

アダームの子孫の伝統—配偶すること、（互いに必要であることから）—を端緒としている。園の一世代と二世代の結婚式は、ずっとアダームとハヴァーがとりおこなった。

7. 園の生活

74:7.1 (835.4) アダームの子供達は、西側の学校での4年間の修学を除いては、「エーデンの東」で生活し働いた。ジェルーセムの学校の方式に従い16歳まで知的に訓練された。16歳から20歳までは、下の学年の教師としての役目も果たしながら、園のもう一方の端にあるユランチアの学校で教育を受けた。

74:7.2 (835.5) 園の西側の学制の全体的目標は社会化であった。午前中の休み時間は、実用的な園芸と農業に、午後の休み時間は、競技的遊戯に当てられた。夜は社交と個人的親交性の育成に使われた。宗教的、性教育は、家庭の領域、すなわち両親の義務と見なされた。

74:7.3 (835.6) これらの学校での教育は、次のような教授に関係した。

74:7.4 (835.7) 1. 肉体の健康と維持

74:7.5 (835.8) 2. 黄金律、社交の基準

74:7.6 (835.9) 3. 集団の権利と共同体の義務に対する個人の権利の関係

74:7.7 (835.10) 4. 地球上の多様な人種の歴史と文化

74:7.8 (835.11) 5. 進化し向上する世界貿易の方法

74:7.9 (835.12) 6. 相反する義務と感情の調整

74:7.10 (835.13) 7. 肉体的な戦いに代わる遊び、ユーモア、競争の教化

74:7.11 (835.14) 学校、事実上は園のあらゆる活動は、常に訪問者に公開されていた。非武装の観察者が、自由にエーデンに短期訪問することが許された。ユランチア人は、園に滞在するためには「養子」にならなければならなかった。ユランチア人は、アダーム贈与の計画と目的に関する教授を受け、この任務を順守する意志を示した上で、アダームの社会的な規則と宇宙なる父の精神主権への忠誠をの宣言した。

74:7.12 (836.1) 園の法は、ダラマティアの古い規範に基づいており、7項目の見出しで公表された。

74:7.13 (836.2) 1. 健康と衛生の法

74:7.14 (836.3) 2. 園の社会的規制

74:7.15 (836.4) 3. 貿易と商業の規約

74:7.16 (836.5) 4. 公平な試合と競技の法則

74:7.17 (836.6) 5. 家庭生活の法律

74:7.18 (836.7) 6. 黄金律の民法

74:7.19 (836.8) 7. 最高の道徳規則を表す7戒律

74:7.20 (836.9) エーデンの道徳律は、ダラマティアの7戒律とはそれほど違ってはいなかった。しかしアダーム系は、これらの戒律に多くの追加理由を教えた。例えば、殺人に対する勧告に関しては、人間生活を破壊しない追加理由として思考調整者の宿りが提示された。「誰であろうと人の血を流す者は、人によって血を流されるであろう、神は人を神のかたちに造られたのであるから。」

74:7.21 (836.10) エーデンの一般大衆の礼拝時間は正午であった。日没は家族崇拝の時間であった。アダームは、効果的な祈りは完全に個人的なものでなければならないということを、「魂の願望」でなければならないということを教え、型にはまった祈りの採用を阻むために最善をつくした。しかしエーデン人は、ダラマティア時代から伝えられてきた祈りと形式を用い続けた。アダームはまた、宗教儀式での血の生贄を陸の産物の果実の供え物に置き換える努力をしたが、園の分裂以前進歩はほとんどなかった。

74:7.22 (836.11) アダームは、性の平等を民族に教える努力をした。ハヴァーが夫の傍らで働く様子は、園の居住者全員に感慨深い印象を与えた。アダームは、女性は、男性と同等に、新しい存在体を形成するために結合するそれらの生命要因に貢献するということを確実に皆に教えた。それ故、人類は、すべての生殖が「父の腰」に宿ると決め込んだ。彼らは母は単に胎児を育み、新生児に授乳するために用意されたものと見なした。

74:7.23 (836.12) アダームは、同時代人が理解できるすべてを、だが相対的にそれほど多くはない全てを教えた。にもかかわらず、地球部族のより知力ある者は、紫色人種の優れた子供との結婚が許されるその時をしきりに待つのであった。ユランチアは、もし人種を向上するこの偉大な計画を断行していたならばどんなにか違った世界になっていたことであろう。そのままであってさえ、途方もない利益が、進化的民族が偶然に手にしたこの持ち込まれた人種の少量の血液から生じたのであった。

74:7.24 (836.13) アダームは、このようにして自分が滞在した世界の福祉と向上のために働いたのであった。しかし、より良い方法でこれらの混合した、雑種の民族を導くことは、難しい仕事であった。

8. 創造に関する伝説

74:8.1 (836.14) 6日間にわたるユランチア創造の物語は、アダームとハヴァーが、園の初期の調査でちょうど6日間を過ごしたという言い伝えに基づく。この状況は、元々ダラマティア人によって導入されたその週の間に神聖に近い承認を与えた。アダームが、園の視察で6日間を過ご

し、組織化のために予備的計画を策定することは前もって決められてはいなかった。それは、日毎に解決された。この機会に述べられる事実には、崇拝のために7日目を選ぶということは、完全に付帯的であった。

74:8.2 (837.1) 6日間にわたる世界創造の伝説は、結果論であり、実際には、3万年以上も後のことであった。この物語の1つの特徴、太陽と月の突然の出現は、長い間太陽と月の両方を覆い隠していた微小な物体からなる宇宙の濃い雲からの世界の突然の出現の伝統に根差したものかもしれない。

74:8.3 (837.2) アダームの肋骨からハヴァーを創造する話は、アダーム達の到着と、45万年以上も前に惑星王子の有体の部下の到着に関する生命物質の置換に繋がる天界の手術との混乱した要約である。

74:8.4 (837.3) 世界民族の大半は、アダームとハヴァーが、ユランチア到着に当たり自分達のために肉体の型を作り出したという伝統に影響されてきた。人が粘土から作り出されたという信仰は、東半球においてはほとんど一般的であった。この伝統は、フィリピン諸島からアフリカま

で世界中に辿ることができる。多くの集団が、漸進的創造—進化における初期信仰の場に特別な創造に関わる何らかの形式により粘土からの人の起源のこの物語を受け入れた。

74:8.5 (837.4) 人間は、ダラマティアとエーデンの影響から離れ、ゆるやかな人類上昇への思考体系の傾向がみられた。進化の事実は、現代の発見ではない。古代人は、人間進歩の遅いが進歩する特質を理解した。初期のギリシア人は、メソポタミアへの近さにもかかわらず、これについての明確な考えを持っていた。地球の様々な人種は、発展に関する概念で、悲しいことに、混乱するようになったが、にもかかわらず、原始部族の多くは、自分達が様々な動物の子孫であることを信じていたし、教えもした。原始民族は、「トーテム的な象徴」のためにそうだと考えられている自分達の祖先の動物を選択する習慣を作った。ある北米インディアン部族は、自分達はビーヴァーとコヨーテに源があると信じた。アフリカの複数の部族は、自分達の起源はハイエナであると、マレー部族は、キツネザルから、ニューギニアの集団はオウムからであると教えている。

74:8.6 (837.5) バビロニア人は、アダーム系の文明の名残りとの直の接触ゆえに、人間創造の話を拡大し、尾ひれをつけた。自分達は、直接神から降りてきたと教えた。バビロニア人は、実に粘土からの創造の教義さえも相容れない人種の貴族的起源に固執した。

74:8.7 (837.6) 創造にかかわる旧約聖書の報告は、モーシェの時代からずっと後に始まる。モーシェは、そのような歪められた話をヘブライ人に決して教えなかった。だが、イスラエルの主なる神と自らが呼んだ創造者、宇宙なる父を崇拝する自分の訴えを増大させることをこのように望み、イスラエル人に単純かつ凝縮された創造の物語を与えた。

74:8.8 (837.7) モーシェは、初期の教えにおいてアダームの時代に戻ることをあまり賢明には試みなかったし、ヘブライ人の最高の教師であったので、アダームの物語は、創造の物語に深く関連づけられるようになった。前アダーム文明を認識する初期の伝統というものは、アダーム時代以前の人間社会の諸事にかんする参照の根絶を意図した後の編集者達が、カインが妻をめとった「ノヅの土

地」へのカインの移住の証拠となる引用の除去をし忘れたという事実により明確に示されている。

74:8.9 (838.1) ヘブライ人は、パレスチナ到達後の長い間、一般的な用法としての文字をもっていなかった。かれらは、高度のクレテ文明からの政治難民であった近隣のペリシテ人からアルファベットの使用を学んだ。ヘブライ人は、紀元前およそ900年まであまり書いたことがなく、またそのような後の時代まで文字をもたなかったので、いくつかの異なる創造物語があったが、バビロニア人の監禁後は、メソポタミア変更版をより受け入れる傾向にあった。

74:8.10 (838.2) モーシェに関するユダヤ人の伝統が具体化されるようになり、ユダヤ人は、モーシェが、アダームへと戻るアブラーハームの家系をたどる努力をしたことから、アダームが全人類の最初の人であると決め込んだ。ヤハウェは、創造者であり、アダームが最初の男性であると思われたので、アダームを作る直前に、世界を作ったに違いない。それから、アダームの6日間の伝統が物語へと織り込まれ、モーシェの地球滞在後の約1,000年

のその結果、6日間創造の伝統は、それ以降モーシェに当てはめられた。

74:8.11 (838.3) ユダヤ人祭司達は、エルサレムに戻ったときには、自分達の物語のなかの事の始まりをすでに書き終えていた。やがて、祭司達は、この詳述は、最近発見されたモーシェが書いた創造の物語であると公言した。しかし紀元前500年頃の当時のヘブライ人は、これらの文章が神の顕示であるとは考えなかった。後の民衆が神話と見なしたようにヘブライ人もそう見た。

74:8.12 (838.4) モーシェの教えであると考えられたこの偽の文献は、エジプトのギリシア人王プトレマイオスの注意を引くこととなり、かれは、アレキサンドリアの自分の新しい書斎のために70人の学者からなる委員会にギリシア語に翻訳させた。こうしてこの報告は、ヘブライ宗教とキリスト教の「神聖な経典」のその後の収集の一部になった文書の中にその場所を見つけた。そのような概念は、これらの神学体系による認証を経て長い間、多くの西洋民族の哲学に深く影響を及ぼした。

74:8.13 (838.5) キリスト教の教師は、命令による人類創造の信仰を永続させ、そしてこのすべてが、過去のユートピア的至福の最盛期の仮説構成と、非ユートピアの社会状態について説明する人や超人間の堕落の理論構成へと直接導いた。人生と宇宙における人の居場所に関するこれらの見通しは、かつての惑星の特定の管理者達の誤りのために人類に怒りを発散させた執念深い神を含意すると同時に、進行よりもむしろ後退への信念に基づく叙述であったがゆえに、せいぜいよく見ても落胆させるものであった。

74:8.14 (838.6) 「最盛期」は神話であるが、エーデンは事実であり、園の文明は実際に転覆された。アダームとハヴァーは、117年間園で生き続け、ハヴァーのいらだちとアダームの判断の誤りにより定められた道から大胆にも逸脱しようとした時、直ちに自分たちには災難を、ユランチア全体の開発上の進行には破滅的妨害を招いた。

74:8.15 (838.7) [ソロニア、熾天使の「園の声」による報告]

論文 75
アダームとハヴァーの不履行

75:0.1 (839.1) アダームは、100年以上のユランチアでの努力の後、園外にたいして進歩を見ることができなかった。世界は、全体的にはあまり向上しているように見えなかった。人種改良の実現は、ずっと先に思え、状況は絶望的に見えたので、当初の計画にはなかった救援のための何かを要求しているようであった。少なくともそれがしばしば心に浮かんだことであり、アダームは、自分の考えを何度もイブに述べた。アダームとその配偶者は、忠誠であったが、自分達の種類からは孤立しており、二人の世界の嘆かわしい窮状にひどく悩まされていた。

1. ユランチア問題

75:1.1 (839.2) 実験的な、反逆に焼き焦がされた、そして孤立したユランチアにおけるアダームの任務は、手強い仕事であった。物質の息子と娘は、早くに惑星の課題の困難さと複雑さに気づき始めた。それにもかかわらず、二人は、勇敢に多種多様の問題解決の職務に着手した。しかし二人は、人間の遺伝的性質の中から欠陥や退化を排除するすべての重要な仕事に本気でとりかかったとき、かなり当惑した。二人は、窮地からの逃げ道を見い出すことができず、その上、ジェルーセムやエーデンチアのい

ずれの上司にも相談できなかった。二人は、ここに孤立し、日々何らかの新たで複雑なもつれに、中には解決不可能な問題に、突き当たった。

75:1.2 (839.3) 通常の状態の下での惑星のアダームとハヴァーの初仕事は、人種の協調と混合であったであろう。しかし、ユランチアでは、生物学的には適合しながらも、知能が遅れ、欠陥のある遺伝的性質が、一度も人種から取り除かれたことはなかったので、そのような企ては、ほとんど絶望的に見えた。

75:1.3 (839.4) アダームとハヴァーは、気づいてみると、人間の兄弟愛宣言に対し完全に用意のできていない球体に、すなわち底知れない精神的暗闇で手探りしている、また前の行政任務の失敗でより悪い混乱に苦しめられている世界にいた。心と品行は、低水準にあり、二人は、宗教統一をもたらす任務に取り掛かる代わりに、住民を最も簡単な型の宗教的信仰に転換させる仕事すべてを新たに始めなければならなかった。二人は、採用に適した1言語を発見する代わりに、何百もの地域方言の世界規模の混乱に直面した。惑星の仕事に携わる一人のアダームと

いえども、いままでに難しい世界に配置はされなかった。障害は克服しがたく、問題は生物が解決できる域を超えているように思えた。

75:1.4 (839.5) 二人は孤立状態にあり、重くのしかかる途方もない孤独感は、メルキゼデク受信者の初期の出立によりますます高められた。二人は、唯一間接的に、天使の体制の手段により惑星から離れた者と連絡をとることができた。二人の勇気は、徐々に弱まり、精神は萎れ、そして二人の信仰は、時折、鈍りがちであった。

75:1.5 (840.1) これが、二人に立ちふさがる課題に思いを巡らしたときの高潔な二人の狼狽についての本当の状況である。二人は、惑星の自分達の任務実行にかかわる甚大な課題にはっきりと気づいた。

75:1.6 (840.2) アダームとハヴァーがユランチアの嘆かわしい窮境に対峙したような非常に困難で、見たところ絶望的な課題に直面したものは、おそらくネバドンの物質の息子の誰一人としていなかった。しかし二人が、　より明敏で我慢強かったならば、いつかは成功していたことであろう。両人ともに、特にハヴァーが、要するにせっか

ちであり過ぎた。二人は、腰を落ち着けて長い、長い耐久試験に身をきめる気がなかった。二人は、いくつかの即座の結果を期待し、また得もしたのだが、このようにして手にした結果は、両人と二人の世界にとって最も悲惨であると証明した。

2. カリガスティアの陰謀

75:2.1 (840.3) カリガスティアは、頻繁に園を訪ね、アダームとハヴァーと会議を多くの開いたが、二人は、頑固としてカリガスティアの妥協と手っ取り早い冒険の全提案を拒んだ。そのような意味ありげな提案に対し有効な免疫を生じるに足る反逆の結末が、二人の前にあった。アダームの年若い子供達でさえも、ダリガスティアの申し入れに影響されなかった。もちろんカリガスティアもその仲間も、アダームの子供の個々の意志に反して影響を及ぼしたり、ましてや悪いことをするように説得する力はなかった。

75:2.2 (840.4) それでも、カリガスティア、ユランチアの名義上の惑星王子は、誤ったとはいえやはり局部宇宙の高位の息子であるということが、思い起こされねばならな

い。彼は、最終的にはクリストス・ミカエルのユランチアでの時代まで退陣させられなかった。

75:2.3 (840.5) だが、堕落の王子は、執拗で意思が強かった。王子は、やがて、アダームへの働きかけを諦め、ハヴァーへの陰険な側面攻撃の試みを決めた。その邪悪者は、成功への唯一の望みは、自分の以前の有体の部下仲間の子孫であるノヅ系集団の上層部に属する適当なもの達の巧みな雇用にあると結論を下した。そして、紫色人種の母を罠にかける計画が、それに応じて立てられた。

75:2.4 (840.6) アダームの計画に不利に作用したり、あるいは自分達の惑星への信頼を危険にさらすようなことはハヴァーの意志からは最もほど遠いことであった。メルキゼデク達は、女性というものは、先見の明をもって遠い未来の効果のための計画を立てるというよりも、むしろ即座の結果を見る傾向を知っていたので、出発前に、特に惑星における孤立状態をおびやかしている独特な危険性に関して、特にハヴァーに仲間の傍から決してはぐれないように、つまり互いの仕事を促進するいかなる個人的、あるいは秘密の方法も決して試みることのないよう

に警告しておいた。ハヴァーは、100年以上も几帳面にこれらの指示を実行しており、セラパタチアという名のノヅ系の特定の指導者と楽しんでいたますます個人的で秘密の訪問に、少しの危険も伴うとは思いつきもしなかった。全ての出来事は、全く徐々に、自然に展開したので、ハヴァーは不意を打たれた。

75:2.5 (840.7) 園の居住者は、エーデンの早い時期からずっとノヅ系と接触していた。彼らは、カリガスティアの部下の不履行の成員のこれらの混血子孫から大いなる重要な援助や協力を受けたのだが、今かれらを通してエーデンの体制が、その完全な堕落と最終的な滅亡を迎えようとしていた。

3. ハヴァーの誘惑

75:3.1 (841.1) セラパタチアが、父の死に合い、ノヅ系部族の西方の、つまりシリアの連合の指導者のところに来たとき、アダームは、地球での最初の100年間をちょうど終えたところであった。セラパタチアは、茶色味を帯びた男性で、遠い昔の青色人種の女性の際立った心の一人と交合したダラマティア健康委員会のかつての長の才気あ

ふれる子孫であった。この血統は、時代を通して西ノヅ系部族の中で権威を保持し、時代を通してずっと多大の影響を振るっていた。

75:3.2 (841.2) セラパタチアは園に幾度か訪問れ、アダームの動機の正当性に深く感動するようになった。そして、シリアのノヅ系の指揮を引き受けて間もなく、かれは、アダームとハヴァーの楽園の仕事と連携関係を築く意志を告げた。セラパタチアの民の大半がこの計画に加わり、また隣接する最も強力で知力あるすべての部族が、ほぼそっくり世界改善のための計画支援に向かったという知らせにアダームは、励まされた。それは、明らかに激励であった。アダームとハヴァーは、このすばらしい出来事の直後、自分た達の家でセラパタチアとその新要員をもてなした。

75:3.3 (841.3) セラパタチアは、アダームの全副官の中で最も有能で腕のたつ1人になった。その活動全てにおいてひたすら正直で、徹底的に誠実であった。後にさえも、かれは、奸知に長けたカリガスティアの状況手段として利用されということに気づかなかった。

75:3.4 (841.4) やがて、セラパタチアは、部族関係のエーデン委員会の副議長になり、また部族を説得して園の大義に加入させる仕事のより活発な実行のための多くの計画が立てられた。

75:3.5 (841.5) アダームとハヴァー—特にハヴァー—と多く談合をし、法式改善のための多くの計画について話し合った。ある日のハヴァーとの話し合いの最中、大勢の紫色人種の補充を待ち受けている間、もし助力を必要としている部族がすぐさま前進するために何かができたならば、非常に役立つであろうということが、セラパタチアの心に浮かんだ。セラパタチアは、もしノヅ系が、最も進歩的で協力的な人種として紫色血統に幾分かの起源をもつ一人の指導者を自分達にもたらせることができるならば、これらの民族をより密接に園に結びつける強力な繋がりを構成するであろうにということを強く主張した。そして園で育てられ教育されるこの子供は、その父の民に見事な影響を揮うであろうから、このすべてが、世界の利益になると冷静に、正直に考えられた。

75:3.6 (841.6) セラパタチアは、全ての提案に完全に正直であり、全く誠実であったと重ねて強調されるべきである。かれは、カリガスティアとダリガスティアの術中に陥っているとは一度たりとも決して疑わなかった。セラパタチアは、混乱したユランチアの民族の世界規模の向上を試みる前に紫色人種の強い増援部隊の確立計画にひたすら忠誠であった。しかしこれは、達成するには何百年をも要するものであり、セラパタチアは、せっかちであった。セラパタチアは、何らかの即座の結果を見たがった—自分の生きている間に何かを。セラパタチアは、アダームが、世界向上にむけてあまり達成のないことにしばしばがっかりしているとハヴァーに明らかにした。

75:3.7 (841.7) これらの計画は、5年余の間に秘かに熟した。ついに、計画は、ハヴァーが、友好的なノヅ系の近接植民地の最も才気溢れる意欲的な指導者であるカノーとの秘密会議実施の同意にまでこぎつけたした。カノーは、アダームの体制に非常に共感した。事実、カノーは、園との友好関係に好意を示したそれらの隣接するノヅ系の誠実な精神的指導者であった。

75:3.8 (842.1) 秋の宵の薄明かりの中、アダームの家からあまり遠くないところで運命的な出会いがあった。ハヴァーは、素敵で熱心なカノーに一度も会ったことがなかった—カノーは、王子の部下である遠い祖先の優れた体格と傑出した知力が生存したそのすばらしい見本であった。カノーはまた、セラパタチア計画の正義を徹底的に信じていた。(複数の仲間との交合は、園外においての一般的習慣であった。)

75:3.9 (842.2) ハヴァーは、世辞、熱意、それに相当の個人的な説得に促され、その時その場で、世界救済の自身の小計画をより大きく、より遠大な神の計画に加えるために大いに議論された事業に着手することに同意した。何が起こるかハヴァーが完全に気づく前に、運命の一歩が踏み出された。それは行われた。

4. 不履行の認識

75:4.1 (842.3) 惑星に降りてきた天界の存在体は、ざわめいていた。アダームは、何かがおかしいと気づき、ハヴァーに共に園に来るよう求めた。そしてその時初めて、アダームは、2方向に同時に作動して世界改善を早めるため

に長らく育まれてきた計画の全容を聞いた。セラパタチア計画の実行にともなうの神の計画の遂行。

75:4.2 (842.4) 物質の息子と娘が月明りの園でこのようにして語り合っていると、「園の声」は、不服従に対して二人を窘めた。その声は、エーデンの1組の男女へ、園の盟約を逸脱し、メルキゼデクの指示に背き、宇宙の主権者への二人の委託にたいする誓いの不履行であると告知する他ならぬ私自身のものであった。

75:4.3 (842.5) ハヴァーは、善と悪の実行参加に同意してしまった。善は神の計画の遂行である。罪は神の意志への意図的違反である。悪は、宇宙の不調和と惑星の混乱を招く計画の不適合と手法の誤用である。

75:4.4 (842.6) 園の1組が命の木の実を摂取する度に、大天使監守者は、善悪を一つにするカリガスティアの提案に屈することのないように注意してきた。二人は、「善悪を混合するその日に、あなた達は、確実に領域の死すべき者となるであろう。確実に死ぬであろう。」と訓戒されていた。

75:4.5 (842.7) ハヴァーは、運命的な密会の機会にこの度重なる警告をカノーにしたのだが、カノーは、そのような説諭の重要性も意味も分からずに、善の動機と真の意図をもつ男女は、どのような悪事も働けないということを、彼女は、確かに死にはせず、どちらかといえば、世界を祝福し、安定させるために成長するであろう子孫の中に新たに生きるであるということをハヴァーに断言するのであった。

75:4.6 (842.8) 神の計画を変更するこの計画は、まったくの誠意をもって、また世界の繁栄に関して最高度の動機のみで考えられ実行されたものではあるが、それは、正義の目的達成のためには誤った方法であり、正しい道、つまり神の計画から逸脱したがゆえに、悪であった。

75:4.7 (843.1) 本当に、ハヴァーは、カノーが見た目に美しいと感じ、「人間の諸事に関する新たで増加された知識と、アダーム系気質の理解への補足としての速められた人間性への理解」に関して、彼女の誘惑者が、約束した全てを体得した。

75:4.8 (843.2) 私は、わたしの任務が悲しい情況下になったその夜、紫色人種の父母と園で話した。私は、母なるハヴァーを不履行へと導いた詳しい説明をすべて完全に聞き、即座の状況に関する忠告と助言を双方に与えた。二人は、この忠告の幾つかに従い、幾つかは無視した。この会議は、「園でアダームとハヴァーに呼びかけ、『どこにいるのか』と尋ねる主なる神」としてあなたの記録にある。それは、自然か、または精神的かいずれにせよ、珍しく並はずれたすべてを直接に神の個人的介入のせいにする後の世代の習わしであった。

5. 不履行の成り行き

75:5.1 (843.3) ハヴァーの幻滅は、実に痛ましいものであった。アダムは、全体の状況を明察し、ひどく失望し、悄然となりはしたものの、過ちを犯している相手へのあわれみと同情だけを心に抱いた。

75:5.2 (843.4) ハヴァーの過失の明くる日、アダームは、園の西の学校の校長であり才気あふれるノヅ系の女性ラオッタを探し出したのは、計画的にハヴァーと同じ愚行を犯したという失敗の認識に絶望しているときであった。し

かし、誤解してはいけない。アダームは、欺かれはしなかった。かれは、自分がまさに何をしようとしているかを知っていた。　かれは、ハヴァーの運命を共有することを意図的に選んだ。アダームは、超人間的愛情をもって配偶者を愛しており、彼女のいないユランチアでの孤独な監視の可能性についての考えは、我慢できないものであった。

75:5.3 (843.5) ハヴァーに起こったことを知ると、激怒している園の激住民は、御しがたくなった。皆は、近くのノヅ系集落に宣戦布告をした。皆は、さっとエーデンの出入り口からこれらの用意のない人々に襲い掛かり完全に—男も、女も、または子供も容赦なく—滅ぼした。そして、未だ生まれていないカインの父カノーも死んだ。

75:5.4 (843.6) セラパタチアは、起こってしまった事態の認識に際し驚愕に襲われ、恐怖と後悔にいてもたってもいられなかった。翌日、セラパタチアは、大河に身を投じた。

75:5.5 (843.7) アダームの子供等は、父が30日間寂しくさ迷っている間、取り乱した母を慰めようとした。その最後の

日に、判断は、明らかであった。アダームは家に戻り、自分達の今後の行動計画を立て始めた。

75:5.6 (843.8) 誤った両親の愚かさの結果は、たびたびその無垢な子供等と共有された。アダームとハヴァーのまっすぐで高潔な息子と娘等は、あまりに突然に、あまりにも無慈悲にのしかかる信じ難い悲劇により不可解な悲しみで圧倒された。これらうち年長の者達は、悲劇の日々の悲痛と沈痛から50年間立ち直ることはなく、特に父が家をあけ、取り乱した母が、父の居場所も存亡も全く知らないその30日間の恐怖からは。

75:5.7 (843.9) その同じ30日間は、ハヴァーにとっても長い悲しみと苦しみの年月であった。この高貴な魂は、その耐えがたい心の苦しみと精神の悲しみの影響から決して完全に回復したわけではなかった。ハヴァーの記憶の中では、その後の喪失と物質的苦境のいかなる様相も、孤独で耐え難い不安なつらい昼と恐ろしい夜との比較すら始まらなかった。ハヴァーは、セラパタチアの向こう見ずの行為を知り、その配偶者が悲しんで自滅したのか、または自分の過失に対する報いで世界から取り除かれたの

かを知らなかった。そこでアダームが戻ったとき、ハヴァーは、長く難しい骨の折れる奉仕での生涯の協力関係が決して消されることのない喜びと謝意の満足感を経験した。

75:5.8 (844.1) アダームは、時間は過ぎたが、ハヴァーの不履行の70日後まで、すなわちメルキゼデクの受信者がユランチアに戻り、世界情勢での司法権を担うときまで、自分達の違法行為の本質が定かではなかった。間もなく、自分達が失敗したことを知った。

75:5.9 (844.2) だが、まださらに多くの問題が起ころうとしていた。エーデン近くのノヅ系集落全滅の情報は、セラパタチアの地元の北の部族に届くのに時間は掛からず、やがて大軍勢が園への進撃のために集合していた。そしてこれは、これらの敵対行為は、エウフラーテス渓谷における第二の園へのアダームとその追随者の移住後にずっと続いたがゆえに、アダーム系とノヅ系間での長く苦い戦争の始まりであった。激しく長引く「その男性と女性の間の、また彼の子孫と彼女の子孫の間の敵意」があった。

6. アダームとハヴァー園を去る

75:6.1 (844.3) アダームは、ノヅ系が進行中であると知るとメルキゼデク系の助言を求めたが、彼等は、助言を拒否し、アダームに最善だと考えることをするようにと、またどのように決定しようともできるだけの友好的な協力を約束すると言うだけであった。メルキゼデク系は、アダームとハヴァーの個人的計画の妨げを禁じられていた。

75:6.2 (844.4) アダームは、自分とハヴァーが失敗したのを知った。未だ自分達の個人的立場も将来の運命についても何も知らなかったが、メルキゼデクの受信者達の臨場が、アダームにそれを伝えていた。アダームは、その指導者に従うと誓約した1,200 人ほどの追随者と徹夜の会議を開き、翌日の正午、これらの巡礼者達は、新しい家を求めてエーデンから旅立った。アダームは、戦争を好まず、従って相対することなくノヅ系に最初の園を残すことを選んだ。

75:6.3 (844.5) エーデンの一団は、園から出て3日目にジェルーセムからの熾天使の輸送団の到着により止められた。ア

ダームとハヴァーは、初めて、その子供達がどうなるのかを知らされた。輸送団がそばに控えている傍らで、選択の自由(20歳)の年令に達した子供等には、両親と共にユランチアに残るか、またはノーランティアデクのいと高きものの被保護者になるかの選択肢が与えられた。2/3は、エーデンチアに行くことを選んだ。およそ1/3は、両親と共に残ることを選んだ。選択の自由の年令前の子供は、全員エーデンチアに連れて行かれた。だれも、違反者の道の困難さを実感せずには、この物質の息子と娘とその子供の悲しい別れを視ることはできなかった。アダームとハヴァーの子らは、現在エーデンチアにいる。我々は、その子等にいかなる処分がなされるのかは知らない。

75:6.4 (844.6) 旅続行の準備をする悲しい悲しい一団であった。更なる悲劇的な何があり得たであろうか。そのように高い望みで世界に来て、それほど幸先よく迎えられ、次には、エーデンから恥辱のうちに出て行き、まさに新しい居所を見つけようとする前に子供達の3/4以上を失うとは。

7. アダームとハヴァーの免職

75:7.1 (845.1) アダームとハヴァーがその違反の本質について知らされ、その運命に関する忠告を受けたのは、エーデンの一隊が足止めをされている間であった。ガブリエルは、裁きの発表のために現れた。そして、これが決定であった。ユランチアでの惑星のアダームとハヴァーは、不履行の宣告を受けた。二人は、この棲息界の支配者としての信託統治の盟約に違反した。

75:7.2 (845.2) 罪の意識に意気消沈する一方で、アダームとハヴァーは、サルヴィントンの裁判官達が、「宇宙政府の侮辱」のすべての告発から二人を赦免したという発表に大いに励まされた。二人は反逆の罪には問われなかった。

75:7.3 (845.3) エーデンの1組は、死すべき者の地位へと自らを貶めてしまったということ、自らの未来のために世界民族の将来に目を向け、今後はユランチアの男と女として身を処さなければならないということが、告げられた。

75:7.4 (845.4) 教官達は、アダームとハヴァーがジェルーセムを去るかなり前に、神の計画からの重大な離脱の結末について二人に完全に説明しておいた。私は、二人のユラ

ンチア到着の前後にわたり、直接にしかも繰り返し確実に伴う必滅の肉体の地位への引き下げが確実な結果、すなわち確かな刑罰であり、それは、二人の惑星の任務実行における不履行を伴うということを警告しておいた。しかし、息子の身分における物質的序列の不死の地位に対する理解は、アダームとハヴァーの不履行に伴う結末に対する明確な理解に不可欠である。

75:7.5 (845.5) 1. アダームとハヴァーは、ジェルーセムの仲間のように、聖霊の心-重力回路との知的な繋がりを介して不死の状態を維持した。この重大な維持が、精神的な離接により破られると、その結果、被創造者の精神的水準にかかわらず、不死状態は無くなる。物理的溶解に続く必滅の状態は、アダームとハヴァーの知力上の不履行からの必然の結果であった。

75:7.6 (845.6) 2. この世界の必滅の姿をした個人化されたユランチアの物質の息子と娘は、二元的循環系の維持、一つは物理的な自然から得られるもの、他方は生命の木の実に蓄えられている超エネルギーから得られるものの維持によりいっそう依存していた。いつも大天使監守者は、

委託の不履行は、身分の左遷に至るということをアダームとハヴァーに訓戒してきた。そして、このエネルギー源の入手は、その不履行後に否定された。

75:7.7 (845.7) カリガスティアは、アダームとハヴァーの陥れに成功はしたものの、宇宙政府に対する公然たる反逆に二人を導く目的は達成しなかった。二人がしたことは本当に悪であったが、決して真実への侮辱罪を犯してはいなかった。二人共、故意に宇宙なる父と創造者の息子の公正な支配に対する反逆に参加したのではなかった。

8. いわゆる人間の堕落

75:8.1 (845.8) アダームとハヴァーは、物質の息子の高い地位から必滅の人間の卑しい身分にまで落ちた。しかし、それは人間の堕落ではなかった。アダームの不履行の即座の結末にもかかわらず、人類は高揚されてきた。ユランチアの民に紫色人種を与える神の計画は失敗に終わったが、必滅の人種は、アダームとその子孫がユランチアの人種にした限られた寄与から途方もなく利益を得てきた。

75:8.2 (846.1) 「人間の堕落」はなかった。人類の歴史は1つの漸進的発展であり、アダーム贈与は、世界の民族に以前の生体条件以上の大いなる改良をもたらしたのであった。ユランチアのより優れた血統は、現在、別々の4起源から得られる遺産因子、アンドン系、サンギク系、ノヅ系、アダーム系を包含する。

75:8.3 (846.2) アダームは、人類への呪いの原因と見なされるべきではない。神の計画を進めることにおいて失敗し、神との盟約に違反をし、配偶者と間違いなく生物状態に地位を落とされはしたものの、人類に対する二人の貢献は、このすべてにもかかわらず、ユランチアの文明を前進させる多くのことをした。

75:8.4 (846.3) あなたの世界でのアダームの任務の結果の見積もりに際して、正義が、この惑星の状況認識を要求する。アダームは、かれの美しい配偶者とジェルーセムからこの暗く、混乱した惑星に移送されてきたとき、ほとんど絶望的な課題と直面した。だが、もしメルキゼデクとその仲間の助言により導かれていたならば、もう少し我慢強くあったならば、二人は、やがては成功していた

ことであろうに。だがハヴァーは、個人の自由の狡猾な宣伝と惑星的行動の自由に耳を傾けた。ハヴァーは、物質の息子の序列の生命原形質の実験に導かれ、この実験では、尚早にもこの生命を混合されるにまかせた。この混合は、かつて惑星王子の部下に配属された生殖存在体とすでに混合されていた生命搬送者の最初の計画に基づいた当時の混合の原形質とであった。

75:8.5 (846.4) 楽園への上昇において、確立された、しかも神の計画を手っ取り早い方法で、完全性の道、完全性への道、そして永遠の完全性のための道の改善のために、個人的な創案、あるいは他の手段で回避しようと性急に試みることでは、決して、何も得られはしない。

75:8.6 (846.5) 大体において、多分ネバドンのいかなる惑星における最悪の期待外れの知恵の失敗は、けっしてなかった。しかしこれらの過失が、進化的宇宙の諸事に起こるのは驚くべきことではない。我々は巨大な創造の一部であり、すべてが完全に働かないということは不思議ではない。我々の宇宙は、完全に創造されなかった。完全性は、我々の起源ではなく、我々の永遠の目標である。

75:8.7 (846.6) もしこれが機械的な宇宙であったならば、もし第一の偉大なる根源と中枢が、力ばかりで人格をもたなかったならば、もし全創造が、不可変のエネルギー動作に特徴づけられる法則により支配される広大な物質集合体であったならば、完全性は、そこで宇宙状態の不完全性にもかかわらず、手に入るかもしれない。何の不一致もないであろう。何の摩擦もないであろう。しかし、我々は、比較的完全性と不完全性の発展的宇宙において不一致と誤解が可能であるということを歓喜する。なぜならば、それによって宇宙における事実と人格の行為を証明されるのであるから。そして、もし我々の創造が人格により支配される実在というものであるならば、そのとき人格の生存、前進、および達成の可能性を保証され得る。我々は、人格の成長、経験、および冒険に自信を持ち得る。何という栄光ある宇宙であることか。単に機械的であったり、消極的に完全であるのではなく、個人的で、進歩的であるという点において。

75:8.8 (846.7) [熾天使の「園の声」ソロニアによる提示]

論文 76
第2の園

76:0.1 (847.1) アダームが反対者のいないノヅ系に最初の園を残すことを決心したとき、彼とその追随者達は、エーデンの民にはそのような海洋冒険に適する船がなかったので、西へ行くことができなかった。かれらは、北へは向かえなかった。北方のノヅ系が、既にエーデンに向けて進行していた。かれらは、南へ行くことを恐れた。その領域の丘には敵意を抱く部族が横行していた。唯一開かれた道は東であったので、チグリス川とユーフラテス川の間の当時の心地よい領域に向け東方へ旅をした。そして、後に残された多くの者は、その後新しい谷間の家のアダーム系に合流するために東方へと旅をした。

76:0.2 (847.2) カインとサンサの二人は、アダームの一団がメソポタミアの川の合間の目的地へ到着する前に生まれた。サンサの生みの親であるラオッタは、娘を分娩する際に死亡した。ハヴァーは、非常に苦しみはしたものの優れた強さのお陰で生き残った。ハヴァーは、ラオッタの子供サンサを胸に抱きよせ、その子はカインと共に育てた。サンサは、成長し立派な能力をもつ女性となった。北方の青色人種の長であるサーガンの妻となり、その時代の北方の青色人種の進歩に貢献した。

1. エーデンの民メソポタミアに入る

76:1.1 (847.3) アダームの一団は、ユーフラテス川到達にまる1年近くを要した。それが氾濫していると分かり、かれらは、第２の園となる川にはさまれた陸へ向かう前に、流れの西の平野でおよそ6週間野営した。

76:1.2 (847.4) 第二の園のその土地の居住者たちは、エーデンの園の王と高僧が、進行中であるという知らせが届くと、東方の山々に急いで逃げた。到着したアダームは、必要とする地域すべてが空であるのが分かった。そしてここで、この新しい場所で、アダームとその応援者らは、新しい家々を建設し、文化と宗教の新しい中心地を確立するための仕事に取り掛かった。

76:1.3 (847.5) アダームは、この用地は、ヴァンとアマドンから申し入れのあった園用に可能な場所として委員会に選択するために選定されていた最初の3個所のうちの1個所として知っていた。2本の川自体は、当時の優れた自然の防御で、ユーフラテス川とチグリス川は、第二の園のすこし北の離れたところで近接していたので、川の合間

と南において、領域保護のために延長する90キロメートルの防御壁の建設が、可能であった。

76:1.4 (847.6) 新しいエーデンに住みつくようになると、粗雑な生活方法の採用が必要になった。土地は、まるで呪われてしまったということが誠しやかであった。自然はもう一度その本来の進路を取りつつあった。今、アダーム系は、不整備の土地で生き抜くこと、そして自然の敵意と必滅の身の生活の適合性の無さに直面する人生の現実に対処することをを強いられた。第一の園は、一部分が自分達のために整備されていたことがわかったが、第二の園は、自らの手による労働と「自らの顔の汗」で作り出さなければならなかった。

2. カインとハーベル

76:2.1 (848.1) アダームとハヴァーには、カイン出生後2年足らずのうちに2番目の園での最初の子供ハーベルが生まれた。ハーベルは、12歳に達すると牧夫になると決めた。カインは、農業に従事することを選んだ。

76:2.2 (848.2) ところで、その頃は、手近にある物を司祭職にあるものに奉納するのが、通例であった。牧夫は群れか

らの動物、農夫は畑からの産物を持参した。そして、この習慣に従って、カインとハーベルは、同様に司祭に対する定期的な奉納をした。2人の少年は、それぞれの職業の優劣を幾度も論じ合ってきており、しかもハーベルは、動物の生贄に対して示される好みに素早く気づいた。カインは、最初のエーデンの伝統に、すなわち畑の産物へのかつての好みを甲斐もなく訴えた。しかしこのハーベルは、認めることなく、わだかまりをもって兄をののしった。

76:2.3 (848.3) アダームは、第一のエーデンでの日々、いかにも動物の犠牲の捧げ物を阻止しようとしていたので、カインには論争上、正当な先例があった。しかしながら、第二のエーデンの宗教生活を組織化することは難しかった。アダームは、建築、防衛、および農業の仕事に関連する無数の詳細を荷なっていた。精神的に非常に落ち込んでいたアダームは、第一の園でこれらの役目を果たしてきたノヅ系出身者達に崇拝と教育の組織化を任せた。そして職務を行なうノヅ系の司祭達は、まことに短時間のうちに前アダーム時代の基準と規則に戻っていくのであった。

76:2.4 (848.4) 2少年の間は仲良くやっていったことがなく、この犠牲問題が、2人の間の増加していく憎しみをさらに助長した。ハーベルは、自分はアダームとハヴァーの両人の息子であることを知っており、カインにアダームがカインの父でないということを痛感させるさせることを決して怠らなかった。カインは、その父が後に青色人種と赤色人種との、そして土着のアンドン系との混合されたノヅ系人種の者であったので純粋な紫色人種ではなかった。そしてこのすべてが、カインの本来持っている好戦の遺伝性と合わせ、弟への絶えず増加する憎しみを養っていった。

76:2.5 (848.5) 両者間の緊張に最終的に決着がつけられたのは、ある日、怒りのあまり弟を襲い殺してしまうほどにハーベルの嘲りがけんか早い兄カインを激怒させたときであり、少年は、各々に18歳と20歳であった。

76:2.6 (848.6) ハーベルの振る舞いに対する観察は、人格開発の要素としての環境と教育の価値を明らかにする。ハーベルは、理想的継承を受けていたし、しかも遺伝は、全人格の根底に横たわっているのである。しかし劣る環境

の影響が、実際にはこのすばらしい継承を中和した。ハーベルは、特に若い数年間、その好ましくない環境から大いに影響を受けた。もし25歳か30歳まで生きていたならば、全く違った人間になっていたであろうに。そのずば抜けた継承が、その時に示されたことであろうに。良い環境は、性格上の劣悪な遺伝の不利な条件に克服のために多く寄与はできないが、悪い環境は、少なくとも人生の若い数年間に素晴らしい継承を事実上損ない得る。良い社会的環境と適切な教育は、良い継承を最大限に活用するための不可欠の土壌と大気である。

76:2.7 (849.1) ハーベルの死は、その犬たちが、主人なしで群れを家に連れ戻ったとき両親の知るところとなった。カインは、アダームとハヴァーにとり、ぞっとする自分達の愚かさの名残りであったので、二人は、園を出るという彼の決定を奨励した。

76:2.8 (849.2) メソポタミアでのカインの生活は、不履行のそのような独特の成り行きで象徴的であったことから正確には満足なものではなかった。それは、仲間が不親切であったということではなかったが、それにしても、仲間

からくる自分の存在への潜在的憤りに気づいていない訳ではなかった。しかし、カインは、部族印を施していなかったので、たまたま出会うかもしれない最初の近隣部族民に殺されるであろうということを知っていた。カインは、恐怖、並びに何らかの自責の念で後悔した。思考調整者が一度も宿ったことのないカインは、ずっと家族の規律に反抗的で、また父親の宗教にも軽蔑的であった。しかしカインはただちに、母のハヴァーのところに行き、精神的な助けと指導を求めた。そして、誠実に神の助けを探し求めたとき、調整者が宿った。カインに内在し気を配るこの調整者は、カインは、アダーム系の大いに恐れられた部族に属するのだという明確な優性の利をカインに与えた。

76:2.9 (849.3) それでカインは、第2のエーデンの東のノヅの地へと出発した。カインは、父の民の1集団の中で最高指導者になり、ある程度まで、セレパタチアの予測を実現させた。かれは、その生涯を通じて、ノヅ系のこの分隊とアダーム系の間での平和を促進したのであるから。カインは、遠縁のいとこレモーナと結婚し、二人の最初の息子ハノウクは、エラーム系ノヅの頭となった。何百年

もの間、エラーム系とアダーム系は、平和状態を保った。

3. メソポタミアでの生活

76:3.1 (849.4) 不履行の結果は、第二の園の時の経過につれ、ますます明らかになった。アダームとハヴァーは、エーデンチアに強制送還された子供はもちろん、自分達のかつての美しく平和な家庭をこの上なくなつかしく思った。この立派な男女が、領域の通常の人間へと身分を落とすところを観測するのは本当に哀れであった。しかし二人は、気品と勇気をもって権威を失った生活状態に耐えた。

76:3.2 (849.5) アダームは、民間管理や教育法式、それに宗教心において子供と仲間の訓練に大抵の時間を賢明に費やした。この先見がなかったならば、アダームの死に際し大混乱が勃発したことであろう。実のところ、アダームの死は、その民の問題処理にあまり差はなかった。しかし、アダームとハヴァーは、亡くなるずっと以前に、我が子と追随者が、エーデンでの栄光の日々を徐々に忘れていくようになったと気づいた。エーデンの壮大さを忘

れるということは、大多数の追随者にとっては良いことであった。皆は、それほど恵まれてはいない環境への過度の不満を経験しそうにはなかった。

76:3.3 (849.6) アダーム系の民間支配者は、最初の園の息子達からの世襲性によった。アダームの最初の息子アダームソン(アダームの息子のアダーム))は、第2エーデンの北部の紫色人種の第二次中心地を設立した。アダームの2番目の息子ハヴァーソンは、見事な支配者になり管理者になった。父の卓越した助力者であった。ハヴァーソンは、アダームほど長生きはせず、その長男ジャンサドが、アダーム系部族の頭としてアダームの後継者になった。

76:3.4 (849.7) 宗教支配者または司祭職は、セス、つまりアダームとハヴァーの第二の園で生まれたうちの生き残った最年上の息子から始まった。セスは、アダームのユランチア到着の129年後に生まれた。セスは、父親の民の精神状態を向上する仕事に没頭するようになり、第二の園の新司祭の長となった。その息子エノスは、崇拝の新手

順を設定し、その孫息子ケーナンは、遠近の周辺部族に対する対外伝道業務を実施した。

76:3.5 (850.1) セス系の司祭職は、宗教、健康、教育を抱きかかえる三重の仕事であった。この系列の司祭は、宗教儀式を司り、医師として衛生検査官としての役目を果たし、それに園の学校で教師として務めるための訓練を受けた。

76:3.6 (850.2) アダームの一隊は、第一の園からの何百もの植物や穀類の種子と球茎を川合いの土地へと持ち運んだ。また大規模な群れと全家畜の型の中から幾つかずつを連れて来た。このために、周囲の部族よりもかなりの利点があった。アダームの一隊は、最初の園以前の文化から多くの利益を享受した。

76:3.7 (850.3) アダームとその家族は、第一の園を出る時まで常に果実、穀類、木の実で生活していた。メソポタミアへの途中、初めて香草や野菜を摂取した。肉食は早くから第二の園へ導入されたが、アダームとハヴァーは、通常の食生活の一部としては決して肉を食べなかった。ま

たアダームソン、ハヴァーソン、それに第一の園の第一世代の他の子供も肉食者にはならなかった。

76:3.8 (850.4) アダーム系は、周囲の民族よりも文化面の業績と知的開発においてかなり優れていた。3番目のアルファベットを作成し、そうでなくても近代美術、近代科学、および近代文学の前駆である多くの基礎を築いた。ここティーグリス川とユーフラテス川の間の土地においては、書、金属加工、陶器作成、機織りの芸術を維持し、何千年ものあいだ抜きんでるもののない建築の型を生み出した。

76:3.9 (850.5) 紫色民族の家庭生活は、当時理想的であった。子供等は、農業、技能、畜産の訓練課程を受け、さもなければ、セス系の三重の義務の実践のために、つまり司祭、医者、そして教師になるための教育を受けた。

76:3.10 (850.6) セス系の司祭職について考えるとき、健康と宗教に関わる高潔で高貴なそれらの教師、すなわち真のそれらの教育者と、後の部族や周囲の諸国に属する品位が低下し、営利目的の司祭と混同してはならない。セス系の神と宇宙の宗教概念は、高度であり、当時としては比

較的正確であり、健康対策は、優れており、教育方式は以来一度もそれを上回ったことがない。

4. 紫色人種

76:4.1 (850.7) アダームとハヴァーは、ユランチアに登場する9番目の人類である紫色人種の祖であった。アダームとその子孫は青い目をしており、また、紫色民族は、色白で明るい髪の色—黄色、赤、および茶色—を特長とした。

76:4.2 (850.8) ハヴァーは、出産時の痛みに苦しまなかった。進化する初期の人種も苦しまなかった。進化する人間とノヅ系との結合による、また後にはアダーム系との結合による混血種族のみが出産の激しい痛みに苦しんだ。

76:4.3 (851.1) アダームとハヴァーは、ジェルーセムの同胞と同じく食物と光の両方で存続する、ユランチアでは明かされていないある超物質的エネルギーにより補われる二重の栄養摂取からエネルギーを得た。ユランチアの子孫は、エネルギー摂取と光の循環の親の資性を引き継がなかった。それらには、ただ一つの循環、血液維持の人間の型があった。それらは長命ではあるが、寿命は後継の

各世代毎に人間の標準寿命に向けて引き寄せられたにもかかわらず、意図的に必滅とされていた。

76:4.4 (851.2) アダームとハヴァーとその子供の第一世代は、動物の肉を食用とはしなかった。それらは、完全に「木の実」を食べていた。第一世代の後、アダームの子孫は皆、乳製品を摂取し始めたが、彼らの多くが肉をとらない食習慣を守った。また、それらが後に結合した南方部族の多くが、非肉食人であった。やがて、これらの菜食部族の大部分は、東に移動し、現在インドの民族に混合され生き残った。

76:4.5 (851.3) アダームとハヴァーの肉体的、精神的双方の視覚は、現代人のものよりもはるかに優れていた。二人の特殊な感覚は、実に鋭く、中間者と天使の軍勢、メルキゼデク、それに高潔な後継者との打ち合わせに何度か来た堕落したカリガスティア王子を見ることができた。二人は、不履行後の100年以上にわたりこれらの天の存在体を見る能力を保有した。これらの特種感覚は、その子供達にはあまり鋭敏には備わっておらず、続く世代毎に減少する傾向にあった。

76:4.6 (851.4) アダーム系の子供全員には、疑う余地のないな生存能力があったので、通常、調整者が内在していた。これらの優れた子孫は、進化する子供達ほどには容易に恐れなかった。あなた方の先祖は、人種の肉体的向上のための初期の失敗によりアダームの生命原形質のほんの少ししか受けとらなかったので、あまりに多くの恐怖が、ユランチアの現代の種族には存続している。

76:4.7 (851.5) 物質の息子とその子孫の体細胞は、この惑星生まれの、進化する生き物のそれよりもはるかに病気への抵抗力がある。土着種族の体細胞は、病気を発生させる微細で極微のその領域の生きた有機体と同種である。これらの事実が、なぜユランチア民族が多くの身体障害に耐えるための科学的努力により多くのことをしなければならないかを説明している。あなた方の種族が、より多くのアダーム系の生命をもっていたならば、あなた方は、より多くの病気への抵抗力をもっていたであろうに。

76:4.8 (851.6) アダームは、ユーフラテス川の第二の園に定住するようになってから、自分の死後、この世界の利益の

ためにできるだけ多くの自分の生命原形質を残すことにした。それに伴って、ハヴァーが、種族改善の12人委員会の会長になり、アダームが死ぬ前にこの委員会は、ユランチアで最高の型の1,682人の女性を選び、この女性たちは、アダーム系の生命原形質で受精した。112人を除くその子供たちは皆成人し、世界は、1,570人の優れた男女の追加によりこうして恩恵をうけた。これらの候補の母は、周囲の全部族から選ばれ地球の人種の大部分を代表してはいたものの、大部分は、ノヅ系の最高の血統から選ばれ、彼らは初期の強力なアンド系人種の始まりをなした。これらの子供は、それぞれの母の部族の環境のなかで生まれ育てられた。

5. アダームとハヴァーの死

76:5.1 (851.7) 第2エーデンの設立後まもなく、アダームとハヴァーの後悔は、受け入れ可能であると、その上、ふたりは、世界の死すべき者の宿命に耐えるよう運命づけられはしたものの、確かにユランチアの眠れる生存者の身分に属する資格ができるであろうと正式に知らされた。かれらは、メルキゼデク系が、感動的に二人に宣言した回生と更生に関するこの福音をすっかり信じた。二人の違

反は、意識的かつ故意の反逆の罪ではなく、判断上の誤りであった。

76:5.2 (852.1) アダームとハヴァーは、ジェルーセムの市民として、思考調整者を有していなかったし、第一の園のユランチアで機能したときも調整者を内在してはいなかった。しかし、必滅の地位への零落直後、かれらは、それぞれの中に新しい存在を意識するようになり、真摯な悔悟に連結した人間の状態が、調整者内住を可能にしたという認識に目覚めた。アダームとハヴァーの残りの人生を通じて大いに元気づけたのは、調整者が内在するというこの知識であった。ふたりは、サタニアの物質の息子としての自分たちの失敗を熟知しつつ、上向する宇宙の息子として楽園進行がまだ開かれていることも知っていた。

76:5.3 (852.2) アダームは、惑星への到着と同時に起きた天啓的復活に関して知っており、彼とその仲間は、息子の身分の次の序列の到来と関連して再人格化されると信じていた。アダームは、この宇宙の主権者ミカエルが、ユランチアにそれほど早く現れることを知らなかった。到着

する次の息子は、アヴォナルの序列のものであることを期待していた。たとえそうだとしても、アダームとハヴァーには、理解するには難しい何かと同様に、これまでにミカエルから受けた唯一の親書を熟考するということは、いつでも安らぎであった。この通信は、友情と安らぎの他の表現に加えて次の通りであった。「私はあなた方の不履行の情況を考慮してみた。父の意志に常に忠誠であるというあなた方の心の願望を思い出してみた。もし私の領域の副次的息子等が、その時以前にあなたを呼びにやらないようであれば、私が、ユランチアに行くとき、人間のまどろみの死からあなた方を呼ぶであろう。」

76:5.4 (852.3) これは、アダームとハヴァーには大きな謎であった。この通信にある可能で、特別な復活の隠された約束の理解はでき、その上、そのような可能性は、二人を大いに励ましはしたものの、ミカエルの個人的なユランチア登場に関する復活の時まで二人を休ませるかもしれないという暗示の意味の理解はできなかった。エーデンの1組は、いつか神の息子が来るということをいつも宣言し、自分達の愛するもの達に自分達の失態と悲しみの

世界は、ことによるとこの宇宙の支配者が、楽園の贈与の息子として機能することを選ぶ領域であるかもしれないという信念を、少なくとも切望を伝えた。それは信じるには良過ぎる話であったが、アダームは、騒乱のユランチアが結局は、サタニア体系の中の全ネバドンの中で羨まれる唯一の惑星、最も幸運な世界であると判明するかもしれないという考えをいだいた。

76:5.5 (852.4) アダームは530年間生きた。死因はいわゆる老齢によるものであった。その肉体的機能が単に尽き果てた。崩壊の進行が、回復の進行を次第に追いつき、そして当然の終わりが来た。ハヴァーは、その19年前に衰弱した心臓のために死んだ。二人は、集団居住地の壁が完成した直後に、ふたりの計画にそって建てられていた神を礼拝する寺の中心にともに埋められた。またこれが、有名で敬虔な男性たち、女性たちを崇拝の場所の床下に埋葬する習慣の始まりであった。

76:5.6 (852.5) メルキゼデクの指示に基づくユランチアの超物質的政府は、継続したにもかかわらず、進化的人種との直接の身体的接触は、切断されてしまった。宇宙政府の

肉体をもつ代行者たちは、惑星王子の有体の部下の到着の遠い時代からヴァンとアマドンの時代を通してのアダームとハヴァーの到着まで惑星に配置されていた。しかし、アダームの不履行で、45万年以上の期間におよぶこの政権は終わった。精神的領域では、天使の助力者は、思考調整者と協力して個人救助のためにともに勇ましく働き奮闘し続けた。しかし、アブラーハームの時代の、地球の死すべき者には、広範囲におよぶ世界福祉のための包括的何の計画も、神の息子の力、忍耐、および権威を携え、不幸なユランチアの一層の向上と精神再生の土台づくりをしたメルキゼデクのマキヴェンタの到着まで公表されることはなかった。

76:5.7 (853.1) 不運は、しかしながら、ユランチアの唯一の当たり籤ではなかった。この惑星はまた、ネバドンの地方宇宙の中で最も好運な惑星であった。ほかならぬこの暗黒の背景が、ネバドンのミカエルに訴えなければならないほどに、愛情深い人格を明らかにする活躍の舞台として天の父のこの世界を選んだために、もし先祖の失態とその初期の世界の支配者達の誤りが、この惑星を望みのない混乱状態に陥れる、すなわち悪と罪によりますます

混乱させるのであれば、ユランチアの民は、それをすべて幸運と思うべきである。それは、ユランチアが、そのもつれた事態を整理するために創造者たる息子を必要としたわけではない。むしろ、ユランチアの悪と罪が、楽園の父の無比の愛、慈悲、忍耐を顕にするより衝撃的な背景を創造者たる息子に提供したということである。

6. アダームとハヴァーの生存

76:6.1 (853.2) アダームとハヴァーは、いつか二人が、大邸宅世界での、つまりユランチアでの紫色人種の物質的肉体で任務につくまえのとても身近であった世界での、生活再開のために死の眠りから目覚めるであろうというメルキゼデクの約束を強く信じて、死の眠りについた。

76:6.2 (853.3) 二人は、死すべき者の領域の無意識の眠りに長くは休んではいなかった。アダームの死から3日目、敬虔な埋葬の2日後、エーデンチアのいと高きもののからの支持を受け、ミカエルの代理であるサルヴィントンの日々の和合のものの意見と一致したラナフォーゲの命令が、ユランチアにおけるアダームの不履行時代の優れた生存者の特別点検を指示する命令がガブリエルの手に託

された。そして、アダームとハヴァーは、ユランチア系列の第26番目の特別な復活についてのこの命令に基づき、第一の園の経験の際の1,316人の仲間と共にサタニアの大邸宅世界の復活の大広間で人格化され、再構成された。他の多くの忠誠な魂は、アダームの到着時点ですでに移動されており、この到着時に、眠っている生存者と資格を与えられた生ける上向者の両者への天啓裁定があった。

76:6.3 (853.4) アダームとハヴァーは、ジェルーセムでもう一度市民権を獲得するまで、もう一度出身惑星の居住者になるように、だが今度は宇宙人格の異なる序列の一員として、進歩的な上昇の世界をすばやく通過した。彼らは永久公民—神の息子—としてジェルーセムを発った。彼らは上向する公民—人の息子—として戻った。それらの者は、すぐに体系首都ユランチアの服務に配属され、現在のユランチアの顧問と規制機関を構成する24人の相談役の中の会員資格が後に与えられた。

76:6.4 (854.1) ユランチアでの惑星のアダームとハヴァーの物語、つまり試練、悲劇、そして勝利の物語、少なくとも

善意から出た、しかし欺かれた物質の息子と娘にとっての個人の勝利の物語、また疑いなく、最終的には、二人の世界と反逆が漂い、悪に悩まされた住民の究極的勝利の物語は、こうして終わる。すべてが要約されるとき、アダームとハヴァーは、速やかな文明に強力な貢献をし、人類の生物上の進歩を加速させた。彼らは地球に重要な文化を残したが、そのような高度な文明は、アダームの遺伝上の早期の希釈化と最終的沈潜に直面して生き残ることは不可能であった。文明を作るのは人である。文明は人を作らない。

76:6.5 (852.1) [熾天使の「園の声」ソロニアによる提示]

論文 77
中間被創造者

77:0.1 (855.1) ネバドンのほとんどの棲息界は、領域の必滅者と天使の系列のものとの中間の生活機能段階にある特有な存在の1集団、あるいは複数集団にとっての棲家である。故に、それらは、中間被創造者と呼ばれる。中間被創造者は、時の偶然であるかに見えるが、それらは、非常に広範囲に存在し、また援助者としてとても貴重であるので、我々は皆、我々の一体となった惑星援助活動の

不可欠の体系の1つとしてずっと前に彼らを受け入れてきた。

77:0.2 (855.2) ユランチアでは、異なる中間者の2系列、ダラマティアの時代に遡って出現した第一の、または年輩の部隊、それに起源がアダムの時代に始まる第二の、あるいは若い集団が、機能する。

1. 第一中間者

77:1.1 (855.3) 第一中間者には、ユランチアの物質と精神の相互の繋がりにその起源がある。我々は、他の世界や体系上の同様の被創造物の存在を知っているが、それらは異なる方法によって出現した。

77:1.2 (855.4) 発展的惑星での神の息子の連続的贈与は、領域の精神的組織における著しい変化を引き起こし、また時折じつに理解し難い状態を引き起こすほどに惑星における精神的、かつ物質的媒体の相互の働きをそのように変更ということをいつもよく心に留めおくことは、当を得ている。カリガスティア王子の部下の100人の有体成員の身位は、まさにそのような特有な相互の繋がりを例証している。彼らは、ジェルーセムの上向するモロンチア

公民として生殖上の特権をもたない超物質的生物であった。彼らは、ユランチアの惑星の下降する援助活動者として、(後に彼らの何人かがそうしたように)、物質の子孫を産み出すことができる物質の性的生きものであった。我々は、これらの100人が、超物質的段階で親の役割においていかに機能できたかということを満足に説明できないことだが、それが、まさに起こったことである。肉体的な部下の男性隊員と女性隊員の超物質的(無性の)結合は、第一中間者の長子の出現をもたらした。

77:1.3 (855.5) 人間と天使の階層の中間にいるこの系列の生物は、王子の本部の仕事を続ける際に非常に役に立つとすぐに分かり、その結果、肉体的な部下の各1組は、同様の存在を産する許可が与えられた。この努力は、50人の中間被創造者の最初の集団をもたらした。

77:1.4 (855.6) 惑星王子は、この特有な集団の仕事を観測した1年後、中間者の再生産を制限なしで認可した。この計画は、作る力が続く限り実行され、5万人の最初の部隊が、結果的に生み出された。

77:1.5 (856.1) 各中間者の増殖の間には半年の期間が介在し、1組毎にそのような1,000の存在体が生まれてしまうと、それ以上はもう望めなかった。何故この力が、1,000番目の子が生まれると消耗するかという理由について何の説明も可能ではない。さらなる実験も、失敗以外の何もものももたらさなかった。

77:1.6 (856.2) これらの生物は、王子の行政の諜報部隊を構成した。遠く広くにおよんでこれらの生物は、世界の人種を研究し観測し、惑星本部から遠く離れた人間社会に影響をおよぼす仕事のうえで王子とその部下のために計り知れない他の活動をした。

77:1.7 (856.3) この体制は、4/5をわずかに上回る数の第一中間者を陥れた惑星反逆の悲惨な日まで続いた。忠誠な部隊は、ヴァンの肩書きだけの指揮の下にアダムの時代まで機能し、メルキゼデクの受信者の活動に入った。

2. ノヅ系人種

77:2.1 (856.4) これは、ユランチアの中間的被創造者の起源、資質、および機能の物語であるとともに、２系列間の親族関係—第一次と第二次—が、惑星の反逆時代からア

ダームの時代までのカリガスティア王子の有体の部下の反逆成員からの血統を突き止めるために、この時点で第一中間者の話を中断する必要がある。第二の園の初期に中間被創造者の第二次系列のための祖先の半分を提供したのは、この系統であった。

77:2.2 (856.5) 王子の有体の部下は、アンドン部族の中の選ばれた血統の者と自分達の中の特種系列の結合した特性を具体化する子をもうける計画参加の目的で性別のある生物としてつくられ、しかも、このすべてが、その後のアダム出現を予想してのことであった。生命搬送者は、王子の部下のこれらの子孫とアダームとハヴァーの第一世代の子孫とを結合する人間の新たな型を計画した。その結果、彼らは、人間社会の教師兼支配者になることを望む惑星の生物の新系列を思い描きながら計画をたて、導入した。そのような存在体は、公民統治のためではなく、社会統治のために考案された。しかしこの企画は、ほぼ完全に失敗に終わり、我々は、なんと温和な一流の指導者と比類のない文化がユランチアからこの程度にまで奪われたかを決して知ることはないであろう。というのも、肉体をもつ部下が後に生殖されたとき、それは、

反逆の後であったし、また、体系の生命回路とのそれらの関係が奪われた後であったから。

77:2.3 (856.6) 多くの変事が、ユランチアでの反逆後の時代に見られた。偉大な文明—ダラマティア文化—が崩壊していくところであった。「ネフィリム(ノヅ系)がその頃地上におり、そして神々の息子らが人間の娘のところに行き、娘らに子供らができたとき、その子供らは『昔の勇士』、『名のある者達』であった。」遠い時代の進化する人間は、部下と初期のその子孫をとても「神の息子」ではないと見なした。その身長さえ伝統的に誇張されるようになった。そうして、これが、地球に降りてきて、そこで人間の娘と古代の英雄の人種を生み出した神にまつわる全世界のほとんどの民話の起源である。そして、このすべての伝説が、第二の園のアダーム系の後に出現する人種混合とさらに混乱するようになった。

77:2.4 (857.1) 王子の有体の100人の部下は、アンドン系の人間の生殖細胞質をもっていたので、もし有性生殖に従事したならば、その子孫が他のアンドン系の両親の子にすっかり似るということが当然に期待されたであろう。しか

し、部下の60人の反逆者が、つまりノヅの追随者が、実際に有性生殖に従事してみると、その子供等は、アンドンとサンギクの両民族とはほとんどあらゆる点ではるかに優れていると分かった。この予期しない長所は、肉体上、知力上の特色だけではなく、精神的能力にも特性を示した。

77:2.5 (857.2) ノヅ系最初の世代のもつ突然変異によるこれらの特色は、アンドン系の生殖細胞質の化学構成要素と遺伝要素の配置において生じたある変化によるものであった。これらの変化は、サタニア系の強力な生命維持回路の部下の体内の存在によって引き起こされた。これらの生命回路は、ネバドンの生命の定められた発現からのサタニアの標準化された特殊の型にさらに似せてユランチアの特殊化された型の染色体を再編成する元を引き起こした。体系の生命回路の活動によるこの生殖細胞質変化の方法は、ユランチアの科学者が、植物と動物の生殖細胞質をX線使用により変更するその手順と異なりはしない。

77:2.6 (857.3) ノヅ系民族には、その結果、アバロンの外科医たちが、アンドン系の寄与者の体内から肉体をもつ部下へと移した生命原形質に生じる独特で予期しないある変更が起きたのであった。

77:2.7 (857.4) 代わりに、100人のアンドンの生殖細胞質寄与者は、生命の木の有機補足物の所有者にされ、故にサタニアの生命回路が、同様に彼らの体内に注ぎ込んだということが思い出されるであろう。反逆についていった44人の変更されたアンドン系もまた、仲間内で結合し、ノヅ民族のより良い血統に大きく貢献した。

77:2.8 (857.5) 変更されたアンドン系の生殖細胞質を有するこれらの2集団は、ノヅ系の祖先、すなわちユランチアに現れる8番目の人種となる。そして、ユランチアのこの新しい人間の生命の特徴は、これが予期しない開発の1つであったということを除いては、生命変更世界として発達するこの惑星を活かして本来の計画作業の別の局面を示している。

77:2.9 (857.6) 純系のノヅ系は、すばらしい人種であったが、徐々に地球の進化する民族と入り交じり、間もなく大き

な劣化が発生した。その平均寿命は、反逆の1万年後には進化的人種のものと大差はなかった。

77:2.10 (857.7) 考古学者が、ノヅ系の後のスメール人の子孫の粘土板記録を掘り起こすと、数千年も遡るスメール王の一覧表を発見する。そして、これらの記録をさらに遡ると、個々の王の治世は25年か30年から150年、あるいはそれ以上の長さに及ぶ。より昔の王のこの長きにわたる治世を早期のノヅ系支配者の幾人(王子の部下の直接の子孫)かは、後の後継者より長く生き、また王朝をダラマティアへと引き延ばす努力をも指し示している。

77:2.11 (857.8) また、そのような個人の長命記録は、時間としての月数や年数の混乱によるものである。これは、聖書のアブラーハームの系譜と中国人の初期の記録においてもみられるかもしれない。後に取り入れられた350日を越える1年と、28日間の1ヶ月、あるいは季節との混乱には、そのように長い人間の寿命の伝統に原因がある。900「年」以上も生きた一人の人間の記録がある。この期間は、70年にはたりないことを表し、そのような人生

は、非常に長いと見なされ、そのような寿命としての「70年」は、後に示された。

77:2.12 (858.1) ひと月28日の時間計算は、アダームの時代のずっと後まで続いた。しかしおよそ7,000年前、エジプト人が、暦の改正に取り掛かったとき、365日単位の年を導入し、高度の正確さでそれをした。

3. バベルの塔

77:3.1 (858.2) ダラマティアの沈水後、ノヅ系は北へ東へと移動し、やがて、その人種の、また文化の本部としての新都市ディルムンを創設した。また、ノヅの死からおよそ5万年後、指導者達は、王子の部下の子孫が、ディルムンの新都市に隣接する土地に最低限の暮らしの糧を見つけることができないほどに多くなり過ぎたると、その上、境界に隣接するアンドン部族とサンギク部族との人種間の結婚に至ってしまうと、人種的統一保護のために何かがなされるべきであると思いついた。というわけで、部族の協議会が召集され、よくよくの審議の後、ノヅの子孫のバブロットの案が承認された。

77:3.2 (858.3) バブロットは、当時の占領地の中央に人種賛美のための尊大な寺の建設を提案した。この寺は、今までに一度も見たことがないような最大の塔を持つことになっていた。それは、過ぎ去った偉大さへの途方もない記念物であった。ディルムンにこの記念物を建設することを願う多くの者がいたが、他のものは、最初の首都ダラマティアの水没の言い伝えを思い起こし、そのような大構造物は海の危険からは安全な距離に設置されるべきであると主張した。

77:3.3 (858.4) バブロットは、新建築物はノヅの文化と文明の未来の中心地の核になるべきであると立案した。その助言が、最終的には主流となり、その案に応じて工事が始められた。新都市は、塔の企画者と建築者にちなんでバブロットと命名されることになった。この場所は、後にバブロッドとして、最終的にはバベルとして知られるようになった。

77:3.4 (858.5) しかし、ノヅ系は、この仕事の計画と目的に関して感情的にまだいくらか分裂していた。建設計画、あるいは完成後の建物の使用法のいずれに関しても指導者

達の間に全体的同意はなかった。4年半の作業の後、塔建設のための目的と動機に関し、かなりの論争が生じた。論争は、辛辣になりすべての作業が止まるほどであった。食糧運搬者達が、不和に関する情報を広め、多くの部族が、建築用地に集合し始めた。塔建設の目的に関わる3件の異なる意見が提出された。

77:3.5 (858.6) 1. ほぼ半分の最大派閥は、ノヅ系の歴史と人種優越性の記念としての塔の建設を望んでいた。かれらは、それが、未来の全世代の賛美を要求する立派で印象的な構造物であるべきだと考えた。

77:3.6 (858.7) 2. 次に大きい派閥は、ディルムン文化を記念するために設計される塔を望んだ。かれらは、バブロットが商業、芸術、製造の大きな中心地になることを予知した。

77:3.7 (859.1) 3. 最小かつ少数派は、 塔の建設は、カリガスティア反逆参加における先祖の愚かさを償う機会を提示すると考えた。それ等は、塔が、すべての者の父の崇拝に捧げられるべきであるということ、新都市全体の目的は、ダラマティアにとって代わるべきであるということ

—周囲の未開人のために文化と宗教の中心として機能すること—を主張した。

77:3.8 (859.2) 宗教集団は、即座に否決された。大多数は、先祖が反逆の罪を犯したという教育を拒絶した。彼らは、そのような人種的恥辱に憤慨した。論争に対する3つの見地の1つを処分し、討論で他の2つに決着がつけられず、それらは戦い始めた。宗教家、つまり非戦闘員は、南の自分達の家に逃げ帰ったが、その間に仲間達はほぼ全滅するまで戦った。

77:3.9 (859.3) およそ1万2,000年前、2度目のバベルの塔の建設の試みがあった。アンド系(ノヅ系とアダーム系)の混合人種は、最初の構造物の廃虚跡に新しい寺を建てることを企てたが、事業への十分な支援がなかった。それは、それ自体の尊大な重みで倒壊した。この領域は長らくバベルの土地として知られていた。

4. ノヅ系の文明の中心

77:4.1 (859.4) ノヅ系の分散は、バベルの塔を巡る内紛の即座の結果であった。この内乱は、　より純血のノヅ系の数を大いに減少させ、偉大な前アダーム文明の確立におお

くの面で重大な失敗の原因であった。この後ずっとノヅ系文化は、アダーム系の注入による向上をみるまで12万年以上衰退しつづけた。しかし、アダムの時でさえ、ノヅ系は依然として有能な民族であった。園の建築者には、その混合型の子孫の多くがいたし、ヴァンの集団の統率者の数人は、ノヅ系であった。アダームの最も有能な心の部下の何人かが、この人種の者であった。

77:4.2 (859.5) 大きいノヅ系中心地の4か所のうちの3か所が、バブロット紛争直後に設立された。

77:4.3 (859.6) 1. 西方の者、すなわちシリアのノヅ系 。国家主義的というか、人種的回顧者の残党は、北方へと旅をし、後のノヅ系中心地をメソポタミアの北西に設立するためにアンドン系と結合した。これは、分散していくノヅ系の最大集団であり、後のアッシリア人の血統の出現に非常に貢献した。

77:4.4 (859.7) 2. 東方のあるいは、エラームのノヅ系。文化と商業の擁護者は、大人数で東向へとエーラムに移住し、部族は、そこで混血のサンギク部族と結合した。3万年から4万年前のエーラム系は、気質においては概ねサン

ギク族になっていたとはいえ、周囲の未開人よりも優れた文明を維持し続けた。

77:4.5 (859.8) 第二の園の設立後、この近くのノヅ系の居留地を「ノヅの土地」として暗に示すのが通例であった。そして、神の息子(アダーム系)が、このノヅ系集団とアダーム系の間の長い間の相対的に平和の期間、人間(ノヅ系)の娘と結婚するのがますます習慣になったので、2つの人種は、大いに混ぜ合わさった。

77:4.6 (860.1) 3. 中央の、もしくは前スメール人のノヅ系。チグリス川とユーフラテス川の河口の小集団は、一層の人種的全体性を維持した。彼らは、何千年も存続し、結局、有史時代のスメール民族を起こすためにアダーム系と混ざったノヅ系祖先を提供するに至った。

77:4.7 (860.2) このすべてが、スメール族がいかにメソポタミアの活動舞台に突然に、しかも神秘的に登場したかを説明する。調査員等は、ダラマティアの沈水後の20万年前に起源を持つスメール人の始まりにまでこれらの部族をたどり、追い求めることは決してできないであろう。これらの古代部族は、世界の他の場所に起源の痕跡がな

く、寺院、金属加工、農業、動物、陶器、機織り、商法、民法、宗教儀式、それに古い書記体系を擁し、完全に熟し優れた文化を携え、文明の地平線に突然に立ち上がる。彼らは、ディルムンに端を発する独特の書記体系を採用していたので、ダラマティアのアルファベットを歴史時代の始めのずっと以前に失っていた。スメール語は、実際には世界からなくなっていたが、セム語ではなかった。それは、いわゆるアーリア人の言葉と多くの共通点があった。

77:4.8 (860.3) スメール人によって残された入念な記録が、ディルムンの初期の都市の近くのペルシャ湾に位置した驚くべき集落場所について説明している。エジプト人は、この古代の栄光都市をディルマトと呼んだが、アダーム系と混血化した後のスメール人は、1番目と2番目のノヅ人の都市の両方をダラマティアと混同し、3都市すべてをディルムンと呼んだ。そして、考古学者等は、この地上の楽園を「神が最初に文明的かつ洗練された生活で人類を祝福されたところ」と告げているこれらの古代スメール人の粘土板を既に見つけた。そして、ディルムン、

人と神の楽園に関して記述するこれらの平板は、いま多くの博物館の埃だらけの棚で静かに休息している。

77:4.9 (860.4) スメール人は、第一と第二のエーデンをよく知っていたが、アダーム系との大規模な雑婚にもかかわらず、園の北の住人を外国民族と見なし続けた。スメール人のより古代のノヅ系文化に対する誇りは、かれらが、ディルムンの都の壮大で楽園的伝統を好み、もっと後のこれらの栄光の場面を無視する方向へと導いた。

77:4.10 (860.5) 4. 北のノヅ系とアダーム系—ヴァン系。この集団は、バブロット紛争前に生まれた。この最北端のノヅ系は、ヴァンとアマドンの統率力のためにノヅとその後継者等の統率力を見捨てた者達の子孫であった。

77:4.11 (860.6) ヴァンの初期の仲間の数人は、その後今もなおその名をもつ湖の岸に定住し、それらの伝統はこの地方で発展した。アララトは、ヘブライ人にとってのシナイとほぼ同じ意味を持って後のヴァン系にとって神聖なる山となった。1万年前、アッシリア人のヴァン系先祖は、神が、アララト山でヴァンに七戒の道徳律を与えたと教えた。彼らは、ヴァンとその仲間のアマドンが山で

崇拝しているときにこの惑星から生きた状態で連れて行かれると堅く信じた。

77:4.12 (860.7) アララト山は、北メソポタミアの神聖な山であり、これらの古代の伝統の多くは、バビロニアの洪水の話に関連して得られたももであり、アララト山とその領域が、後にノアと全世界の洪水のユダヤ人の物語の中に織り込まれたということは驚きではない。

77:4.13 (860.8) アダームソンは、紀元前3万5千年頃、文明の中心地の設置のために昔のヴァン系の一番東の端にある定住地の一か所を訪ねた。

5. アダームソンとラッタ

77:5.1 (861.1) 二次中間者のノヅ系の来歴を図表にすると、二次中間者は、ユランチアの紫色人種の長子の孫であるアダームソンの孫でもあるので、この物語は、かれらの祖先の半分であるアダーム系を考慮すべきである。

77:5.2 (861.2) アダームソンは、父母と共に地球に残ることを選んだアダームとハヴァーの子供の集団の中にいた。さて、アダームのこの長男は、たびたび北の高地の自分達

家の話をヴァンとアマドンから聞いており、第二の園の創立後いつかは若々しい夢のこの土地を探しに行くと決心した。

77:5.3 (861.3) アダームソンは、このとき120歳であり、第一の園の32人の純系の子の父親であった。かれは、両親と共に残り第二の園の設立を助けたかったのだが、いと高きものの被後見者になることにしたアダーム系の他の子供と共にエーデンチアに行くことを選択した我が子全員と連れ合いの損失に大いに困惑した。

77:5.4 (861.4) アダームソンは、ユランチアの両親を見捨てようとはせず、苦難あるいは危険から逃げることには気が向かなかったが、第二の園の交友関係は満足とはほど遠いものと感じた。彼は、防衛と建設の初期の活動を進めるために多くのことをしたが、最も早い好機に北に向けて発つと決めた。その出発は、全く快いものであったが、アダームとハヴァーは、長男を失うことを、つまり未知の、敵意に満ちた世界に向かわせて永久に戻ってこないことを恐れて非常に悲しんだ。

77:5.5 (861.5) 27人の仲間が、幼年期の空想のこれらの人々の探索に向かうアダームソンに北方へと従った。アダームソンの一行は、3年余りで冒険の目標対象を見つけ、またアダームソンは、これらの人々の中に王子の部下の最後の純系子孫であるという20歳の見事な美しい女性を発見した。この女性ラッタは、自分の先祖は全員が、王子の堕落した2人の部下の子孫であると言った。生きている兄弟、あるいは姉妹はいないので、彼女が種族の最後のものであった。ラッタは、結婚しないとほぼ決めていて、子を残さずに死ぬ決心をしていたが、堂々たるアダームソンに心を奪われた。そしてラッタは、エーデンの話を聞くと、ヴァンとアマドンの予測がいかに現実に起こり、また園の不履行の詳説を聞くにつれても、ただ一つの考えに—アダームの継承者であるこの息子と結婚すること—に夢中になった。この考えはまた、アダームソンの心のなかで急速に大きくなった。3カ月余りで、二人は結婚した。

77:5.6 (861.6) アダームソンとラッタの家族には67人の子供がいた。かれらは、世界の指導者の大系列の誕生源となったが、それ以上の何かをした。二人は、本当に超人的で

あったことが思い出されるべきである。特有な種類の子供が、４人ごとに両人に生まれた。多くの場合不可視であった。世界の歴史においてそのような事は決して起こらなかった。ラッタは、大いにうろたえた—迷信的でさえあった—が、アダームソンは、第一中間者の存在をよく知っており、何か同様のことが目の前で起こっているのだと結論づけた。奇妙に振る舞う2番目の子が生まれたとき、1人が男で、もう片方が女であったので二人に性交をもたせることにした。これが、中間者の第二次序列の起源である。100年以内に、つまりこの現象終止前には、およそ2,000人が生まれた。

77:5.7 (862.1) アダームソンは、396年間生きた。何度も、父と母を訪問しに戻った。アダームソンは、7年毎にラッタと第二の園へと南に旅し、その間、中間者は、民の生活振りについてアダームソンに知らせ続けた。アダームソンは、その生涯で真実と正義のために新たで独立した世界の中心地を築き上げることに大いなる貢献をした。

77:5.8 (862.2) アダームソンとラッタには、意のままになる素晴らしい助力者であるこの部隊がおり、この部隊は、高

度な真実の伝播と精神的で、知的で、物理的な生活のより高い水準の普及を手伝うために二人の長命の生涯の間中、共に働いた。そして、世界向上におけるこの努力の結果は、決してその後の退歩で完全におおい隠されるようにはならなかった。

77:5.9 (862.3) アダームソン系は、アダームソンとラッタの時代からおよそ7,000年間、高い文化を維持した。後にそれらは、隣接するノヅ系とアンドン系と混合するようになり、また「昔の勇士」の中にも含まれていた。そして、その時代の前進のいくつかは、後にヨーロッパ文明になった文化的な可能性の潜在的部分になって存続した。

77:5.10 (862.4) この文明の中心地は、カスピ海南端の東の領域に、すなわちコペトダグ山脈近くに位置した。トルキスタン山麓の少し上の丘陵地帯には、紫色人種のかつてのアダームソン系本部の名残りがあった。コペトダグ連山下方の山麓の丘に横たわる古代の狭い肥沃地帯に位置するこの場所には、アダームソンの子孫の異なる4集団が、個々に育んだ4文化が様々な時代に相次いで起こっ

た。地中海の西へとギリシアや島々に移動したのが、これらの中の2番目の集団であった。アダームソンの残る子孫は、北方と西方に移動し、最後のアンド系のうねりの混合群体と共にメソポタミアからヨーロッパに入り、インドのアンド系アーリア人の侵略者の数のうちにも入っている。

6. 第二中間者

77:6.1 (862.5) 第一中間者が超人に近い起源を持つ一方で、第二次系列は、上級部隊の血統である共通の先祖をもつ人間化された子孫と結合した純アダーム系の子孫である。

77:6.2 (862.6) アダームソンの子供の中の第二中間者には、ほんの16人の特有の先祖がいた。他とは異なるこれらの子供は、性別上は等分であてり、一対の男女は、それぞれに性交や非性交関係を織り交ぜた手段により、第二中間者を70日ごとに一人産むことができた。その時以前にはそのような現象は、決して地球では可能ではなかったし、それ以来ずっと起こってはいない。

77:6.3 (862.7) これらの16人の子供は、(その特性を除いては)領域の死すべき者として生活し死んでいったが、電気に

より活力を与えられた子孫は、必滅の肉体の限界を受けることなく生き続ける。

77:6.4 (862.8) 8組はそれぞれに、最終的には248人の中間者を産み、その結果、独自の二次部隊—数にして1,984人—が、誕生したのであった。第二中間者の下位の8集団がある。それらはA-B-Cの1番、2番、3番、D-E-Fの1番、2番などと名づけられた。

77:6.5 (862.9) アダームの不履行後、第一中間者は、メルキゼデク受信の仕事に戻り、一方第二集団は、アダームソンのその死までかれの中枢に帰属した。33人のこれらの第二中間者、すなわち、アダームソンの死の際のその組織の長たちは、こうして第一部隊との連携をもたらすために全体制をメルキゼデクの業務へと移り替わろうと努めた。しかし、これを達成できずに、かれらは、仲間を見捨て、こぞって惑星の受信者の仕事に乗り換えた。

77:6.6 (863.1) アダームソンの死後、第二中間者の残党は、一風変わった、未組織の、連結性のないユランチアの勢力となった。かれらは、その時からメルキゼデクのマキヴェンタの時代まで、不規則で組織的でない生活を送っ

た。かれらは、部分的にこのメルキゼデクに抑えられたはしたものの、依然としてキリスト・ミカエルの時代まで多くの危害を引き起こした。また、キリストの地球滞在中、かれらは全員、将来に関して最終的決定を下した。その時、忠誠な大多数は、第一中間者の指導の下に入った。

7. 謀反の中間者

77:7.1 (863.2) 第一中間者の大多数は、ルーキフェレーンス反逆時点で罪に陥った。惑星反逆による惨状が列挙されたとき、他の損失の中には、当初の5万のうち、4万119がカリガスティアの分離に参加していたと分かった。

77:7.2 (863.3) 第二中間者の当初の数は1,984人で、このうち873人は、ミカエルの規則に同調せずに、五旬節の日にユランチアの惑星判決に関連して正式に拘禁された。誰も、これらの堕落した被創造物の未来を予測することはできない。

77:7.3 (863.4) 反逆的中間者の両集団は、現在、体系反逆事件の最終判決を待つ間拘禁されている。しかし、彼らは、

現在の惑星統治開始前に地球で多くの奇妙なことをした。

77:7.4 (863.5) 不忠実なこれらの中間者は、ある情況下においては人間の目に自分たちを明らかにすることができ、背教の第二中間者の指導者であるベエルゼブブの仲間については特にこれが当てはまった。しかし、これらの特異な被創造者をキリストの死と復活の時まで同じく地球にいた反逆的な一部の智天使や熾天使と混同してはいけない。昔の著者の一部は、これらの反逆的中間被創造者を悪霊や悪魔として、また背教の熾天使を邪悪な天使として呼んだ。

77:7.5 (863.6) いかなる世界においても悪霊は、楽園の贈与の息子の人生以降どの人間の心にも取り憑くことはできない。しかし、ユランチアでのキリスト・ミカエルの時代以前—全ての者への思考調整者の訪れや全人類へのあるじの霊の注ぎ以前—これらの反逆的中間者は、ある種の劣った人間の心に実際に影響を及ぼしたり、その行動を支配することができた。これは、忠誠な中間的被創造者が、ユランチアの終局目標の待機部隊の人間の心に接触

する有能な保護者として機能するときとほとんど同じようなやり方で成し遂げたように、調整者は、超人の知力あるものとの接触時期のそのような時に、事実上、人格から分離されるのである。

77:7.6 (863.7) それは単なる比喩ではない。「そして、人々は、いろいろな病いに苦しむ者、悪霊にとりつかれた者、気がふれた者達をその方のもとに連れて来た。」と記録が述べている。イエスは、その時代や世代に生きた人々の心では大いに混乱していたものの、狂気と悪霊憑依との違いを知り、また見分けた。

77:7.7 (863.8) 五旬節前でさえ、いかなる反逆的精神といえども、通常の人間の心を牛耳ることはできなかったし、その日以後、劣った人間の弱い心でさえそのような可能性とは無関係である。真実の聖霊の到着以来、想定的である悪魔退散は、ヒステリー、狂気、および精神薄弱性と悪霊憑依の信仰との混乱の問題であった。しかし、ミカエルの贈与が、悪霊憑依の可能性からユランチアのすべての人間の心を自由にしたからといって、そのようなも

のは、過去の時代の現実のようではなかったと想像してはならない。

77:7.8 (864.1) 反逆的中間者の全集団は、現在のところエーデンチアのいと高きものの命令により捕らえられている。もはや、彼らは、悪さを企んでこの世界を徘徊することはない。全類への真実の聖霊からの注入が、思考調整者の臨場のいかんを問わず、最もか弱い人間の心にさえ二度と侵入するいかなる類の、またはいかなる記述の不忠実な霊にも永久に不可能にした。五旬節の日以来、悪霊憑依のような事は二度とありえないのである。

8. 連合中間者

77:8.1 (864.2) この世界の最後の裁決で、ミカエルが時間の世界の眠っている生存者を移動させたとき、中間的被創造者は、惑星での精神と準精神的労働における援助のために残された。現在それらは、両方の体制を抱えており、1万992名を有する単一部隊として機能する。現在のところ各体制の古参成員が、ユランチアの連合中間者を交替で管理している。この体制は、五旬節直後の1集団への合併以来とられている。

77:8.2 (864.3) 年輩、あるいは第一体制の成員は、一般的には番号で知られている。彼らは、しばしば1-2-3 の1番目、4-5-6 の1番目などという名が与えられる。ユランチアでは、アダーム系の中間者は、第一中間者の番号名称と自分達を区別するためにアルファベット順に呼ばれる。

77:8.3 (864.4) 両系列は、栄養とエネルギー摂取の点では非物質的存在であるが、人間の多くの特色を帯び、あなた方の崇拝はもとよりあなた方のユーモアを楽しみもし理解もできる。彼らは、死すべき者に愛着を感じるとき、人間の仕事、休息、遊びの精神に足を踏み入れる。しかし、中間者は眠りもしないし、生殖力も持たない。ある意味で二次集団は、しばしば「彼」や「彼女」と言われて、男らしさと女らしさに沿って区別される。しばしば彼らは、ともにそのような1組で働いている。

77:8.4 (864.5) 中間者は、人間ではなく天使でもないが、第二中間者は、本質的には天使より人間に近いのである。かれらは、ある意味であなた方の人種であり、従って人間との接触において非常に理解があり共感的である。熾天使にとり、かれらは、人類の様々な人種のためのその仕

事において、また様々な人種とのその仕事において非常に重要であり、両系列は、個人的後見人として人間に尽くす熾天使に不可欠である。

77:8.5 (864.6) ユランチアの連合中間者は、天賦の資質と取得した技能に基づき、惑星の熾天使との活動のために次の集団に組織化される。

77:8.6 (864.7) 1. 中間使者。この集団は名前をもつ。小部隊であり、迅速で信頼できる個人的通信活動において進化的世界でかなり役に立つ。

77:8.7 (864.8) 2. 惑星歩哨。中間者は、空間世界の後見者であり、歩哨である。彼らは、領域の超自然の存在体にとり重要な数多くの意思疎通の現象と型のすべてに関し重大な観察者の義務を果たす。彼らは惑星の目に見えない精神領域を巡回する。

77:8.8 (865.1) 3. 接触する人格。中間的被創造者は、通常、物質界の死すべき存在体との接触において、すなわちこれらの通信がとられたそのような対象との接触において用

いられる。それらは、精神的、また物質的段階のそのような繋がりにおいて不可欠要因である。

77:8.9 (865.2) 4. 進歩的補佐。これらは、中間的被創造者の中でより精神的であり、惑星上での特別集団で機能する熾天使の様々な体制の補佐として振り分けられる。

77:8.10 (865.3) 中間者は、下層部の人間のいとこ達と上層部の熾天使とのその接触能力において大いに異なる。例えば、第一中間者が、物質媒介者と直に接触することはきわめて難しい。彼らは、天使の型の存在にかなり近く、それゆえ通常は惑星に居住する精神根源力との働きに配属される。彼らが、天界の訪問者と学生の身分の一時逗留者のための仲間として、また案内役として務めるのに反して、二次被創造者は、専ら領域の物質的存在の活動に配属される。

77:8.11 (865.4) 1,111人の忠誠な第二中間者は、地球での重要な任務に従事している。第一の仲間と比べると明らかに物質的である。それらは、人間の創造力の範囲のまさに外側に存在しており、人間が「物質的なもの」と呼ぶものとの意のままの物理的接触のための適応に対し十分な許

容度を備えている。これらの特異な被創造者は、領域の獣類を除くことなく、時間と空間の事物の上に、　ある明確な力を持っている。

77:8.12 (865.5) 天使の行為とみなされるより物質的現象の多くは、二次中間被創造者が、行ってきた。イエスの福音の初期の教師が、当時の無知な宗教指導者に投獄されたとき、実際の「主の天使」は、「夜陰に乗じ、牢獄の戸を開け、それらを連れ出した。」しかし、ヘロデの命令によるジェームスの殺害後のペトロスの救出の場合、天使の行為とみなされる働きをしたのは、二次中間者であった。

77:8.13 (865.6) 今日のそれらの主要な仕事は、終局目標の惑星待機部隊を構成する男女への人目につかない個人的なつながりに関わるものである。この発表が一部分である連続の顕示を可能にする命令を与える結果となるそれらの陳情をついに惑星の天の監督に開始させるユランチアの人格と情況の調整をもたらしたのは、一部の第一部隊が巧みに援助したこの二次集団の仕事であった。しかし、中間的被創造者は、「精神的特質」の一般的名称で行わ

れる浅ましい行動に関りのないことが明らかにされるべきである。現在のところ、全員が立派な地位にあるユランチアの中間者は、いわゆる「霊媒能力」の現象に結びつかない。通常、中間者は、時折必要とする身体的活動、もしくは物質界との他の接触を人間の感覚が知覚するようには、人間が目撃することは許さない。

9. ユランチアの恒久公民

77:9.1 (865.7) 中間者は、必滅の被創造者と天使の軍勢のような進化する上向者とは対照的に、全宇宙の世界の様々な体制に見られる永久的住民の最初の集団と見なされるかもしれない。楽園上昇の各所でそのような恒久公民に遭遇する。

77:9.2 (866.1) 中間者は、惑星活動に配属される天界の存在体の様々な体制とは異なり、棲息界に住んでいる。熾天使は、往き来するが、中間被創造者は、惑星の土着でありつつ奉仕者であるにもかかわらず、滞在しており、これからも滞在するにもかかわらず、熾天使の軍勢の変化する政権を調和し接続する1継続的体制を提供する。

77:9.3 (866.2) 中間者は、ユランチアの実際の公民としてこの球体の運命に親族関係の関心を持っている。それらは、土着の惑星の進歩のために粘り強く働く断固たる結社である。それらの決意は、それらの体制に関する標語によって示されている。「連合中間者が引き受けることを、連合中間者が行なう。」

77:9.4 (866.3) エネルギー回路を横断する能力が、どの中間者にも惑星からの出発を実行可能にするとはいえ、かれらは、そのうちにある宇宙当局による解除の前には惑星を去らないと個々に宣誓した。中間者は、惑星に落ち着いた光と命の時代までつなぎ留められる。1-2-3の1番目を除いては、どの忠誠な中間的被創造者もユランチアから離れたことがない。

77:9.5 (866.4) 1-2-3の1番目、すなわち第一体制の最年長者は、五旬節の直後に惑星の当面の義務から解除された。この高潔な中間者は、ヴァンとアマドンとともに悲劇的な惑星の反逆の時代に断固として立ちあがり、その恐れをしらない指導力は、その体制の死傷者を減じる助けになっていた。かれは、五旬節後にユランチアの総督とし

て一度すでに役目を果たし、現在のところ24人の相談役の一員としてジェルーセムで働いている。

77:9.6 (866.5) 中間者は、惑星に縛られてはいるが、死すべき者が、遠方からの旅人と話し、その結果惑星の遠く離れた場所について学ぶのと同じく、宇宙の遠い場所について学ぶために天界の旅行者と会話をするのである。したがって、この体系と宇宙、さらにはオーヴォントン、およびその姉妹の創作物にさえ詳しくなり、また、生物存在の高水準での公民権にたいして準備をする。

77:9.7 (866.6) 中間者は、完全に発達した存在に—未熟からの成長、あるいは発達への一区切りの経験もせず—生み出されるが、決して知恵と経験の成長をやめない。それ等は、人間のように、進化する被創造物であり、正真正銘の進化達成の文化をもつ。ユランチアの中間部隊の中には多くのすばらしい心と強力な精神がある。

77:9.8 (866.7) ユランチアの文明は、より大きい局面においてユランチアの人間とユランチアの中間者との共同産物であり、これは、2つの文化水準の現在の差異、つまり光

と命の時代以前には補正されないであろう差異にもかかわらず本当である。

77:9.9 (866.8) 不滅の惑星の公民の産物である中間者の文化は、人間の文明を悩ませるそれらの一時的な変遷に比較的免疫がある。人間の世代は忘れる。中間者部隊は覚えており、その記憶はあなたの棲息界の伝統の宝庫である。惑星の文化は、こうして去ることなくその惑星に残り、そして適切な情況においては、そのような過去の出来事の貴重な思い出は、提供可能となる。まさにイエスの人生の話や教えが、ユランチアの中間者によって肉体のいとこに与えられてきたように。

77:9.10 (867.1) 中間者は、アダームとハヴァーの死の際に登場したユランチアの物質と精神問題間の格差を補正する妙を心得た奉仕者である。それらは、あなたの兄と同様に、ユランチアの光と命の定着状態に到達するための長い戦いにおける仲間である。連合中間者は、反逆試練済みの部隊であり、この世界が時代の目標に達するまで、事実上、地球に平和が君臨し、本当に人の心に善意があ

るその遠い日まで、惑星進化に本分を忠実に実行するであろう。

77:9.11 (867.2) 我々は、これらの中間者が、大事な任務を果たしたが故に、かれらは、領域の精神的営みの真の不可欠部分であると結論を下した。そして、反逆が、惑星業務を破壊しなかったところでは、かれらは、さらに大きく熾天使の役に立っているのである。

77:9.12 (867.3) 高度の精霊、天使の大群、および中間者の組織全体は、進化する人間の進歩的上向と完全性到達のための楽園計画の促進に専念した。宇宙の崇高な機能の中の1つ—人に神を連れて降りて来る見事な生存計画、そして神に、そして奉仕と神性到達の永遠へと人を運んで上がる—人間と中間者も同様に上がる—提携関係の崇高な種類。

77:9.13 (867.4) [ネバドンの大天使による提示]

論文 78
アダーム時代後の紫色人種

78:0.1 (868.1) およそ3万年の間、第二エーデンは、文明の揺りかごであった。ここメソポタミアでは、アダーム系民族

は、その子孫を地の果てにまで送り出し、その後は、ノヅ系とサンギク部族と混合し、アンド系として知られていた。有史時代の事業を開始し、ユランチアでの文化的進歩を途方もなく加速させたそれらの男女は、この領域から出かけていった。

78:0.2 (868.2) この論文は、紀元前およそ3万5千年のアダームの不履行の直後に始まり、紀元前1万5千年頃のノヅ系とサンギク人種との融合へと及び、またアンド族の形成にいたる、そして紀元前2千年頃のメソポタミアの故国からのその最終的な消滅に至る紫色人種の惑星の歴史を説明する。

1. 人種的、かつ文化的分布

78:1.1 (868.3) 人類の心と道徳は、アダームの到着時、低水準にあったが、肉体的進化は、カリガスティアの反逆の緊急事態による影響をまったく受けない状態で前進してきた。アダームの人種の生物的状態への貢献は、仕事上の部分的な失敗にもかかわらず、ユランチアの人類を桁外れに向上させた。

78:1.2 (868.4) アダームとハヴァーは、人類の社会的、道徳的、知的進歩にもまた多大に貢献した。その子等の存在が、文明を大いに速めた。しかし、3万5千年前、世界は全体的にそれほど文化がなかった。ある種の文明の中心地は、あちらこちらに存在したが、ほとんどのユランチアは、蛮行に無気力であった。人種的、文化的分布は、次の通りであった。

78:1.3 (868.5) 1. 紫色人種—アダーム系とアダームソン系。アダーム系文化の重要な中心地は、チグリス川とユーフラテス川の三角地帯に位置する2番目の園にあった。これが、実に西洋の、そしてインドの文明の揺りかごであった。紫色人種の二次の、または北の中心地は、コペトダグ山脈近くのカスピ海南岸の東に位置する本部にあった。すべての人種を速やかに刺激した文化と生命原形質が、これらの2か所の中心地から周辺地域に広がった。

78:1.4 (868.6) 2. 前スメール人と他のノヅ系。メソポタミアにもまた、河口近くにダラマティア時代の古代文化の面影があった。この集団は、何千年もの時の経過と共に、北のアダーム系と完全に混合されるようになったものの、

決して自分達のノヅ系の伝統を完全に失うことはなかった。レヴァント地方に住みついた他の様々なノヅ系集団は、たいていが後に拡大していく紫色人種に吸収されていった。

78:1.5 (869.1) 3. アンドン系は、アダームソン本部の北と東にかなり代表的な5か所か6ヶ所の集落を維持した。それらの孤立集団は、ユーラシア全体、特に山岳地帯に存続する一方で、トルキスタン全体にも点在した。これらの原住民は、アイスランドやグリーンランドと同じくユーラシア大陸の北部地方をまだ保持していたものの、ずっと以前にヨーロッパ平野からは青色人種に、またさらに遠いアジアの流域からは拡大する黄色人種に追い出されていた。

78:1.6 (869.2) 4. 赤色人種は、アダーム到着前の5万年にアジアから追い出された後にアメリカ大陸を占拠した。

78:1.7 (869.3) 5. 黄赤色人種。中国民族は、東アジア支配をしっかり確立した。最高度の集落は、チベットと境を接する現代の中国の北西に位置した。

78:1.8 (869.4) 6. 青赤色人種。青色人種は、ヨーロッパ全体に点在したが、その文化のより優れた中心地は、地中海盆地の当時の肥よくな谷と北西のヨーロッパに位置した。ネアンデルタールの吸収が、その文化を大いに遅らせたが、その他の点ではユーラシアの進化する全民族の中で、最も攻撃的で、大胆で、探索的であった。

78:1.9 (869.5) 7. 前ドラヴィダ系のインド。インドの人種の複雑な混合—地上のあらゆる人種、特に緑色人種、橙色人種、および黒色人種を有する—が、辺ぴな領域のものよりわずかに上の文化を維持した。

78:1.10 (869.6) 8. サハラ文明。藍色人種の優れた集団は、いまは大きなサハラ砂漠に最も進歩的な集落をもっていた。この藍色-黒色集団は、消えた橙色人種と緑色人種の血族を大規模に携えていた。

78:1.11 (869.7) 9. 地中海盆地。インドの外で最も高度に混合された人種は、現在は地中海盆地にあたる場所を占拠した。北からの青色人種と南からのサハラ人は、ここで東からのノヅ系とアダーム系に遭遇し入り交じった。

78:1.12 (869.8) これが、およそ2万5千年前の紫色人種の巨大な拡大の始まりに先立つ世界状況であった。未来文明の望みは、メソポタミアの二本の川の間の第二の園にあった。ここ南西アジアでは、すばらしい文明の可能性が、つまりダラマティアの時代とエーデンの時代から救われてきた考えと理想を世界に普及する可能性があった。

78:1.13 (869.9) アダームとハヴァーは、限られた、ただし有能な子孫を残したので、ユランチアの天の観察者は、過ちを犯す物質の息子と娘のこれらの子孫がどう振る舞うか成り行きを心配そうに待った。

2. 第二の園のアダーム系

78:2.1 (869.10) アダームの息子等は、何千年もの間、南では潅漑と治水問題を解決し、北では防御施設を完成させ、そして第一のエーデンの栄光の伝統の保存を試みながら、メソポタミア河川に沿って働いた。

78:2.2 (869.11) 第二の園での統率力に発揮された武勇は、ユランチアの歴史の驚くべき、しかも奮い立たせる叙事詩の1つを構成する。これらのすばらしいもの達は、決してアダーム系任務の目的を完全に見失いことなく、その結

果、選り抜きの息子と娘を地球の人種への特使として、絶え間なく快く送りだす傍ら、果敢に周囲の劣る部族の影響を退けた。時々、この拡大は、生国の文化を枯渇させてはいたが、これらの優れた民族は、いつでも回復するのであった。

78:2.3 (870.1) アダーム系の文明、社会、文化情勢は、ユランチアの進化する人種の一般水準よりはるかに上であった。ヴァンとアマドン、およびアダームソンの古い集落地の中にだけ多少なりとも匹敵する文明があった。しかし第二エーデンの文明は、人工的構造であり、—いまだ進化はしておらず—したがって、自然の進化段階に達するまで低下する運命にあった。

78:2.4 (870.2) アダームは、重要な知的かつ精神的文化を残して去ったが、あらゆる文明は、創意の結実を保証するには、利用可能な天然資源、固有の特質、それに適度の余暇活動に制限されているので、機械的な器具での進歩はあまりなかった。紫色人種の文明は、アダームの存在と第一エーデンの伝統に基づいていた。アダームの死後、またこれらの伝統が、何千年もの時の経過とともに薄れ

て行くにつれ、アダーム系の文化水準は、周辺民族の状況と自然に進化する紫色人種の文化的能力との相互の均衡状態に達するまで悪化の一途をたどった。

78:2.5 (870.3) にもかかわらずアダーム系は、紀元前1万9千年頃、450万人を数える現実の国家であり、すでに何百万人もの子孫を周辺民族に流出していた。

3. アダーム系の初期の拡大

78:3.1 (870.4) 紫色人種は、エーデンの数千年間の平和の伝統を保持し、それが、この人種の領土征服における長い遅れを説明している。彼らは、人口圧迫に悩むと、より多くの領土獲得のための戦争の代わりに、他の人種への教師として余剰住民を派遣した。これらの初期の移動の文化的効果は、永続的ではなかったが、アダーム系の教師、商人、および探検家の吸収は、周囲の民族に生物学上の活性化となった。

78:3.2 (870.5) アダーム系の一部は、当初ナイル川渓谷へと西に旅をした。他の者は、アジアへと東方に入り込んだが、これらは少数派であった。後日の大規模な移動は、広くは北方へと、そこからまた西部へ向けてであった。

それは、主としてゆるやかな、しかし断え間のない北方への押し進みであり、かなりの数が、北進し、それからカスピ海周辺をヨーロッパへと西に道をとった。

78:3.3 (870.6) およそ2万5千年前、よりアダーム系分子をもつ多くの者は、北方の長旅にあった。かれらは、北方に入り込むとトルキスタンの占領時代までには、徹底的に他の人種と、特にノヅ系と混合されるようになるまで、ますますアダームの血を失っていった。ほんのわずかの純粋な紫色民族は、遠くヨーロッパかアジアに浸透していった。

78:3.4 (870.7) 紀元前およそ3万年から1万年まで、画期的な人種的混合がアジア南西の至るところで行われていた。トルキスタンの高地住民は、雄々しく活発な民族であった。ヴァンの時代の文化の多くが、インドの北西に存続した。初期のアンドン系の最も優れた者達が、これらの定着地の北にはまだ存続していた。そして、優れた文化と特質をもつこれらの両人種は、北方に移動するアダーム系に吸収された。この融合は、多くの新しい考えの採

用へと導いた。それは、文明の進歩を容易にし、芸術、科学、および社会文化の全局面を大きく前進させた。

78:3.5 (871.1) 紀元前1万5千年頃のアダーム系の初期の移動期間が終わると、アダームの子孫は、すでに世界の他のどこよりも、メソポタミアよりさえも、ヨーロッパと中央アジアに多くいた。ヨーロッパの青色人種が主に侵入していた。現在ロシアとトルキスタンと呼ばれる地帯は、ノヅ系、アンドン系、そして赤色と黄色のサンギク系と混じり合ったアダーム系の優れた大集団が、その南の一続きを占領した。南欧と地中海周辺は、アンドン系とサンギク系民族—橙色、緑色、藍色—の混血人種、それにわずかなアダームの血統との混血人種が占領していた。小アジアと中央東ヨーロッパの土地は、アンドン系の部族が、圧倒的に保持した。

78:3.6 (871.2) ほぼこの時期にメソポタミアからの到着により大いに教化された混合有色人種は、エジプトでの主流であり、ユーフラテス渓谷の消失しつつある文化を引き継ぐ用意があった。黒人民族は、赤色人種のようにアフリカのさらに南に移動しており、実際には孤立していた。

78:3.7 (871.3) サハラ文明は、干魃と地中海盆地の洪水で中断されていた。青色人種は、まだ高度の文化を発展させてはいなかった。アンドン系は、いままでどおり北極と中央アジア地域に点在していた。緑色人種、橙色人種はそういうものとして絶滅していた。藍色人種は、アフリカを南に移動しており、そこでその遅い、しかし長く続く人種的劣化が始まった。

78:3.8 (871.4) インドの民族は、進歩のない文明で停滞状態にあった。黄色人種は、中央アジアのその占有地を統合しつつあった。茶色人種は、太平洋の程遠からぬ島々での自らの文明をまだ起こしてはいなかった。

78:3.9 (871.5) 大規模な気候変化に関連したこれらの人種分布は、ユランチア文明のアンド系時代の開始に向けての世界の舞台を設定した。早期のこれらの移動は、 紀元前2万5千年から1万5千年の1万年間におよんだ。後の、またはアンド系の移動は、紀元前およそ1万5千年から6千年におよんだ。

78:3.10 (871.6) 初期の高まりとしてのアダーム系のユーラシア通過には、相当の時間がかかったことから、その文化

は、主として移動中に喪失された。後のアンド系のみが、メソポタミアからいかなる遠距離であってもエーデン文化の保持に十分の速度で移動した。

4. アンド系

78:4.1 (871.7) アンド系人種は、主に純系の紫色人種とノヅ系と、加えて進化する民族との混合であった。アンド系は、一般に、現代の人種よりもアダーム系の血統をはるかに大きい割合で持つと考えられるべきである。概して、アンド系という語は、その人種的継承が1/8から1/6が紫色人種であるそれらの民族を指すのに用いられる。近代のユランチア人は、北方の白色人種でさえ、アダームのこの血統の割合は非常に少ない。

78:4.2 (871.8) 最も初期のアンド系民族は、2万5千年以上も前にメソポタミアに隣接する領域に起源をもち、アダーム系とノヅ系の混合からなっていた。第二の園は、消滅しつつある紫色人種色の血統の同心円によって囲まれ、またアンド系人種が生まれたのは、この人種の坩堝の円周外辺であった。移動してくるアダーム系とノヅ系が、後に当時のトルキスタンの肥沃な領域に入ってくると、や

がて優れた居住民と混合し、結果として生じる人種混合は、北方のアンド系型を拡大していった。

78:4.3 (872.1) アンド系は、純系の紫色人種の時代以来、ユランチアに現れた最も多才な人間の系統であった。それらは、アダーム系とノヅ系人種の生き残りの最高の型の大部分を、後には、一部の黄色、青色、緑色人種の最良種族を包含した。

78:4.4 (872.2) これらの初期のアンド系は、アーリア人ではなかった。前アーリア人であった。白人ではなく、前白人であった。西洋民族でも東洋民族でもなかった。しかし、多国の混合体であるいわゆる白色人種にコーカソイドと呼ばれてきた一般化された同種が与えられたのは、アンド系の遺産によるものである。

78:4.5 (872.3) 紫色人種のより純粋な種族は、平和探究のアダーム系の伝統を維持してきており、それは、初期の人種移動が、なぜより穏やかな移動の性質を帯びていたかを説明している。しかし、アダーム系が、この頃までには好撃的な人種であったノヅ系の血統と結合するにつれ、そのアンド系子孫は、その時代にとしては、ユランチア

で最も巧みで賢明な軍国主義者となった。そのときから、メソポタミア人の動きは、性質上はますます軍事的になり、実際の征服にますます似通ってきた。

78:4.6 (872.4) アンド系は、冒険好きであった。流浪気質をもっていた。サンギク系かアンドン系の血統のいずれかの増加は、彼等を安定化させる傾向にあった。それにしても、後の子孫は、世界を一周し、最後の遠く離れた大陸を発見するまで決して止まることはなかった。

5. アンド系の移動

78:5.1 (872.5) 第二の園の文化は、2万年間持続はしたものの、それは、セース系の聖職と、輝かしい時代を開始したアモサドの指導力の刷新時である紀元前1万5千年頃まで着実な衰退を経験した。後にユーラシア中に広まった文明の巨大なうねりが、アダーム系と周辺のノヅ系との大規模な結合の結果としてアンド系を形成する園の大いなる復興の後にすぐさま続いた。

78:5.2 (872.6) これらのアンド系は、ユーラシアと北アフリカ中に新たな前進を開始した。アンド系文化は、メソポタミアから新疆まで優勢であり、また、ヨーロッパに向け

ての規則的な移動は、メソポタミアからの新たな到着により絶えず埋め合わせがなされた。しかし、アダームの混血子孫の末期の移動の始まり近くまでアンド系を適切なメソポタミアの人種として言及するのはあまり正しくはない。この頃までには第二の園の人種さえそれほどまでに混合されるようになったので、もはやそれらをアダーム系であると考えることはできなかった。

78:5.3 (872.7) トルキスタンの文明は、絶えずメソポタミアからの新参者、特に後のアンド系騎兵により復興され活気づけられたのであった。いわゆるアーリア人の母国語が、トルキスタン高地において形成しつつあった。それは、アダームソン系と後のアンド系の言語とその領域のアンドン系の方言の混合であった。現代の多くの言語は、ヨーロッパ、インド、そしてメソポタミア平原の北部の広域を征服したこれらの中央アジア部族のこの初期の言葉から派生している。この古代言語は、西洋の言語にアーリア語と呼ばれる類似性のすべてを与えた。

78:5.4 (872.8) 紀元前1万2千年までには世界のアンド系の3/4の群体は、ヨーロッパの北と東に居住しており、またメソ

ポタミアからの後の、同時に最後の大移動に際、この最後的移住のうねりの65パーセントがヨーロッパに入った。

78:5.5 (873.1) アンド系はヨーロッパのみならず中国北部とインドにも移住し、一方、多くの集団が、宣教師、教師、および商人として世界の果てまでも進出した。彼らは、サハラ砂漠のサンギク系民族の北の集団にかなり貢献した。しかし、かつてほんの数人の教師と商人しか、ナイルの源流より奥のアフリカの南には入り込んでいない。混血のアンド系とエジプト人は、後に赤道のかなり南の東西双方のアフリカ海岸に沿って南下したが、マダガスカルには達しなかった。

78:5.6 (873.2) アンド系は、いわゆるドラヴィダ系、後のインドのアーリア系の征服者であった。中央アジアでのそれらの存在は、ツラーニ系の先祖を大いに向上させた。この人種の多くは、新疆とチベットの二地域を経て中国に旅し、望ましい特性を後の中国の血統に加えた。小集団は、沿岸航路で中国南部にあまり入ることはなかった

が、時おり日本、台湾、東インド諸国、それに中国の南へと進んでいった。

78:5.7 (873.3) この人種の132人は、日本から何艘もの小舟の一団で旅立ち、ついには南米に達し、アンデス山脈の原住民との結婚で後のインカ族の支配者の祖先をもたらした。かれらは、途中で見つけた多くの島々に滞在しながらゆっくりと太平洋を横断した。ポリネシア諸島は、当時現在より数も多く、大きくもあり、これらのアンド系の船乗りは、自分達の後に続く者達と共に移動過程において、生物学上、先住集団を変更した。文明繁栄の多くの中心地は、アンド系浸入の結果、今は水没しているこれらの地域で生じた。イースター島は、長らくこれらの失われた集団の中の宗教上の、そして管理上の中心の1つであった。しかし、ずっと昔太平洋を航行したアンド系のうち、この132人の他にアメリカ大陸の本土に到達した者はいなかった。

78:5.8 (873.4) アンド系の移動性の征服は、紀元前8千年から6千年までのその最終的分散へと続いた。かれらは、メソポタミアから流出するあいだに周囲の民族を著しく強化

する一方、自国の生物学上の資力を連続的に減少させた。またかれらは、旅をしたあらゆる国に笑い、芸術、冒険、音楽、および製造面で寄与した。それらは、巧みな動物飼育者であり、農業専門家であった。少なくともその存在は、当面のあいだ従来の人種の信仰と道徳習慣をたいていの場合改良した。メソポタミアの文化もまたヨーロッパ、インド、中国、北アフリカ、および太平洋の諸島へと静かに広がった。

6. アンド系の最終的分散

78:6.1 (873.5) アンド系の最後の3回のうねりは、紀元前8千年から6千年の間にメソポタミアから注ぎ出た。この3回の文化のうねりは、東の丘陵部族の圧力と西の平原住民の迷惑行為によるメソポタミアからの追い出しを強いられたものであった。ユーフラテス渓谷と隣接領域の住民は、複数方向の最終的大移動に旅立った。

78:6.2 (873.6) 65パーセントは、新たに出現しつつある白色人種—青色人種と初期のアンド系の混合—を征服し、併合しカスピ海経由でヨーロッパに入った。

78:6.3 (873.7) セース系聖職者の大集団を含む10パーセントは、エーラム高原を通り抜けイラン高原とトルキスタンへと東方に移動した。この子孫の多くは、アーリア人の同胞と共に北のその領域からインドへと追いやられた。

78:6.4 (874.1) メソポタミア人の10パーセントは、北の長旅へと東に向きを変え、新疆に入り、そこでアンド系黄色居住民と混ざり合った。この人種的結合の有能な子孫の多くは、後に中国に入り、北方区域の黄色人種の即座の改良に非常に貢献した。

78:6.5 (874.2) これらの早く逃亡するアンド系の10パーセントは、アラビアを経てエジプトに入った。

78:6.6 (874.3) アンド系の5パーセントは、すなわち隣接する劣った部族民との雑婚を免れたチグリスとユーフラテス河口辺りの海岸地区の非常に優れた文化を持つ者達は、故郷を後にすることを拒否した。この集団は、ノヅ系とアダーム系の多くの優れた血族の生存を意味した。

78:6.7 (874.4) 周辺地域のサンギク系人種と小アジアのアンドン系との混合のその子孫は、かなり後の時代に北と東の

侵略者に戦いを挑むためにそこに居たが、アンド系は、紀元前6千年までにこの地域からほぼ立ち退いた。

78:6.8 (874.5) 第二の園の文化時代は、周辺の劣った血統の高まる浸透により終結された。文明は、ナイルと地中海諸島へと西に移動し、その根源が、メソポタミアで劣化したずっと後にそこで繁栄し続けた。劣性民族のこの野放しの流入が、能力ある残りの血族を追い出した北方の未開人による全メソポタミアの後の征服のための道に備えた。後年においてさえ、文化をもつ残者達は、これらの無知で粗野な侵略者の存在にあいかわらず憤慨していた。

7. メソポタミアの洪水

78:7.1 (874.6) 川の居住者は、特定の季節に土手からあふれる川に慣れていた。周期的な洪水は、彼らの生活での年中行事であった。しかし新たな危険が、北へ進行する地質変化の結果、メソポタミア渓谷を脅かした。

78:7.2 (874.7) 地中海の東岸周辺の山脈、それにメソポタミアの北西と北東の山脈は、第一のエーデン浸水後の数千年間隆起し続けた。高地のこの隆起は、紀元前5千年頃に

大幅に加速され、これが、北部の山々の大いに増加する降雪と合わせて毎春ユーフラテス渓谷全体に空前の洪水を引き起こした。この春の洪水は、ますますひどくなったので、流域住民は、とどのつまり東部の高地へと追いやられた。数多くの都市は、ほぼ1千年間のこれらの大規模な大洪水のために事実上見捨てられた。

78:7.3 (874.8) バビロン捕囚の身のヘブライの聖職者等は、ほぼ5千年後、ユダヤ民族をアダームにまで遡遡ろうとしているとき、話の全貌を知る上での大きな困難にたどり着いた。そして、そのうちの1人は、努力を断念し、ノアの洪水時に全世界がその邪悪さに溺れるがままにするほうが、ノアの3人の生き残りの息子の一人に遡るにはアブラハムが良い位置にいるという考えに至った。

78:7.4 (875.1) 地球の表面全体を水が覆うときの言い伝えは、世界共通である。多くの人種が、過去のいつの時代にか世界規模の洪水の話を心に抱く。聖書の中のノア、箱舟、および洪水の物語は、バビロン捕囚の間のヘブライの司祭職の作り事である。世界規模の洪水は、ユランチアに生命が確立されて以来一度もなかった。唯一度、地

球の表面が完全に水で覆われたのは、陸が現れ始める前の始生代であった。

78:7.5 (875.2) だが、ノアは本当に暮らしていた。ノアは、ウルク近くの川に定住地アラームのブドウ作り者であった。ノアは、川の増水日数を毎年記録していた。かれは、家屋はすべて、船の形の木製にし、洪水の季節の接近時には毎晩家族の動物を船積みにするようにと提言して渓谷を上下して大いに嘲笑された。毎年、隣接する川の集落に行き、これこれの日数のうちに洪水が来ると警告するのであった。とうとう異常に激しい降雨で年間の大水が非常に増し、突然の水嵩が、村全体を破壊する年が来た。ノアとその肉親だけが、自分達の屋形船の中で救われた。

78:7.6 (875.3) これらの洪水は、アンド系文明の崩壊を徹底的なものにした。第二の園は、この大洪水期の終わりとともに無かった。南のスメール人の間にだけかつての栄光の何らかの形跡が残った。

78:7.7 (875.4) この残物が、つまり最古の文明の1つが、これらのメソポタミア地域と、その北東と北西に見掛けられ

る。しかし、ダラマティア時代の一層古い痕跡が、ペルシャ湾の水域下に存在し、また第一のエーデンが、地中海東端の下に沈んで横たわっている。

8. スメール人—アンド系の最後

78:8.1 (875.5) アンド系の最後の分散が、メソポタミア文明の生物学上の屋台骨を折ってしまうと、この優れた人種のごく少数は、故国の河口近くに留まった。これらは、スメール人であり、その文化は、特質性においては全くノヅ系であったが、血統上では紀元前6千年までには大きくアンド系となり、またかれらは、ダラマティアの古代の伝統に執着した。沿岸領域のこれらのスメール人は、それでもなお、メソポタミアの最後のアンド系であった。しかし、メソポタミアの人種は、この時代の墓で見つけられる頭蓋骨の型に証明されるようにこの時代までには既に徹底的に混合されていた。

78:8.2 (875.6) シューシャンが、大いに繁栄したのは洪水時代の間であった。最初の、つまり低い都市は、水浸しになったので、第二の、すなわち高い場所の町は、当時の独特の美術工芸の本部として低い都市を継承した。ウル

は、洪水の後の減少と共に、陶器産業の中心地となった。川の堆積物が陸をその現在の境界に築き上げてしまったウルは、およそ7千年前にはペルシャ湾にあった。これらの集落では、仕事をうまく制御し、河口を広げたりしたので洪水にはそれほど苦しまなかった。

78:8.3 (875.7) ユーフラテス川とチグリス渓谷の穏やかな穀物栽培者は、長い間、トルキスタンとイラン高原の未開人の襲撃に悩まされていた。しかし今や、高地の牧草地の増大する干魃が、ユーフラテス渓谷の一斉の侵略をもたらした。そしてこの侵入は、飼いならした多くの馬を所有していた周辺の牧夫と猟師にとっては、　より一層深刻であった。かれらが、軍事の上で南の豊かな隣人よりも格段に有利であったのは、馬を所有していたからであった。彼らは、ヨーロッパ、西アジア、北アフリカ中に分散した文化の最終的なうねりを押し流し、短期間で全メソポタミアを蹂躙した。

78:8.4 (876.1) メソポタミアの征服者は、トルキスタンの北の混血人種に属するより優れたアンド系血族、いくらかのアダームソン系の血統をふくむアンド系の多くの血を有

していた。それほど高度ではないが、より活発なこれらの北からの部族は、すぐにまた積極的にメソポタミア文明の残留物を吸収し、やがて歴史の年譜の始めにユーフラテス渓谷の中で見つけられたそれらの混血民族へと発展していった。彼らは、渓谷部族の手工芸やスメール人の多くの文化を取り入れ、メソポタミアの一時的な文明における多くの局面をすぐに蘇らせた。彼らは3番目のバベルの塔を建設しようとさえし、後に自国の名称にその語を採用した。

78:8.5 (876.2) 北東からのこれらの未開の騎兵が、ユーフラテス渓谷全体に侵略してきたとき、彼らは、ペルシャ湾の河口周辺に住むアンド系生存者を征服しなかった。これらのスメール人は、優れた知性、性能の良い兵器、それに相互に繋がる溜池の潅漑計画への付属物である大規模な軍用の運河体系のお蔭で自分たちを防御することができた。彼らは、一様の集団宗教をもっていたので団結的民族であった。北西の隣人達が、孤立する都市国家へと散り散りになったずっと後でも、民族的かつ国家の姿勢をこのようにして維持することができた。これらの都市

集団のただ一つとして団結したこのスメール人を打ち負かすことはできなかった。

78:8.6 (876.3) 北からの侵略者は、やがて有能な教師と管理者としてのこれらの平和愛好のスメール人を信用し、重んじるようになった。スメール人は、美術と産業の教師として、商業の指導者として、また市民の指導者として北や西のエジプトから東のインドまですべての民族に大いに尊敬され、求められた。

78:8.7 (876.4) 初期スメール人の同盟の崩壊後、後の都市国家は、セース系司祭の背教の子孫に統治された。これらの司祭は、隣接する都市を征服したときに限り、自分たちを王と呼んだ。後の都市の王たちは、神の嫉妬のせいでサーゴーン時代以前には強力な同盟を果たしえなかった。各都市は、その市の神が他のすべての神よりも優れていると信じており、それゆえ共通の一指導者への従属を拒んだ。

78:8.8 (876.5) 都市の司祭による弱い統治の長い時代の終端は、自分が王であると宣言し、メソポタミア全体と隣接地帯の征服に取り掛かったキシュの司祭のサーゴーン

が、終わらせた。当分は、これが、それぞれの市の神と儀式的習慣が各都市にあったことから、司祭統治の、司祭支配の都市国家を終わらせることとなった。

78:8.9 (876.6) このキシュ同盟の崩壊後、主権のための長く続く絶え間ない戦争が、これらの谷の都市間で起きた。統治者の支配権は、スメール、アッカド、キシュ、ウルク、ウル、シューシャンの間をさまざまに移動した。

78:8.10 (877.1) 紀元前2,500年頃、スメール人は、北のスーツ人とグーツ人の手厳しい逆転を被った。洪水除けの土手に造られたスメールの首都ラガシュは陥落した。ウルクは、アッカド陥落後の30年間持ち堪えた。スメール人は、ハンムラビ支配の樹立までには北方のセム族の階層に吸収されるようになり、メソポタミアのアンド系は、歴史のページを通過した。

78:8.11 (877.2) 遊牧民は、紀元前2,500年から2,000年にかけ大西洋から太平洋で暴れ回っていた。ネーリーティー人は、アンドン系とアンド系人種の混血であるメソポタミア人の子孫のカスピ海集団の最後の湧出を構成した。そ

の後の気候変化が、メソポタミア破滅をねらった未開人の失敗に決着をもたらした。

78:8.12 (877.3) これが、アダームの時代後の紫色人種とチグリス川とユーフラテス川の間のそれらの祖国の運命の話である。それらの古代文明は、優れた民族の移住と劣った隣人の移住の結果、最終的に滅びた。しかし未開の騎兵が、渓谷を征服するずっと以前、園の文化の多くは、ユランチアの20世紀文明をもたらす発酵体を生産し、アジア、アフリカ、ヨーロッパに広まっていた。

78:8.13 (877.4) [ネバドンの大天使による提示]

論文 79
東洋におけるアンド系の発展

79:0.1 (878.1) アジアは、人類の祖国である。この大陸の南の半島でアンドンとフォンタが生まれた。現在のアフガニスタンの高地ではその子孫のバドナンが、50万年以上持続した原始文化の中心地を樹立した。サンギク民族は、ここ人類のこの東の中心においてアンドン血族から分化し、アジアは、それらの最初の家であり、猟場であり、戦場であった。南西アジアは、ダラマティア系、ノヅ

系、アダーム系、およびアンド系の継続的文明を目の当たりにし、これらの領域から現代文明の可能性が世界に広まった。

1. トルキスタンのアンド系

79:1.1 (878.2) ユーラシアの中心には、紀元前2千年頃までの2万5千年以上の間、減少的でありつつ圧倒的にアンド系がいた。トルキスタンの低地にいたアンド系は、内陸湖周辺でヨーロッパへと西に向きを変え、一方この領域の高地からは東方へと侵入した。東トルキスタン(新疆)と、より小範囲で、チベットは、メソポタミアのこれらの民族が、黄色人種の北方地帯へと山々を通って行く際の古代の出入口であった。アンド系のインドへの浸入は、トルキスタン高地からパンジャブへと、そしてイランの牧草地からバルチスタンを通って進んだ。これらの初期の移動は、決して征服ではなかった。むしろ西インドと中国へのアンド系部族の絶え間のない漂流であった。

79:1.2 (878.3) 混血アンド系文化の中心は、およそ1万5千年間、新疆のタリム川の盆地と、アンド系とアンドン系が

大規模に混合した地であるチベットの高原地帯の南で存続した。タリム渓谷は、真のアンド系文化の最東端の前哨地であった。ここで、かれらは、入植地を建設し、東の進歩的な中国人と北のアンドン系との交易関係を始めた。タリム地域は、当時沃地であった。降雨量は豊富であった。東にあるゴビ砂漠は、牧夫が徐々に農業に着手した広々たる草原であった。この文明は、雨をもたらす風が南東に向きを変えたとき滅びたが、それは、その時代メソポタミアそのものに匹敵した。

79:1.3 (878.4) 紀元前8千年までには中央アジアの高原地帯の緩慢に拡大する乾燥が、アンド系を川沿いの低地や海岸へと追いやり始めた。この拡大する干魃は、ナイル川、ユーフラテス川、インダス川、黄河の渓谷にそれらを移動させるだけではなく、アンド系文明における新発展をも引き起こした。人間の新階層である通商者が、大勢登場し始めた。

79:1.4 (879.1) 気候条件が、移動中のアンド系に狩猟を無益なものにしたとき、彼らは、牧夫になることで昔の人種の進化過程に従わなかった。商業と都市生活が登場した。

より高度に文明的な部族が、エジプトからメソポタミアとトルキスタン経由で中国とインドの川へと製造と商業にゆだねる都市に集合し始めた。アドニアは、現在のアシュ　アバドの都市近くに位置しており、中央アジアの大商業都市になった。石、金属、木、および陶器の商業が、陸と水上の両方で急速に進展した。

79:1.5 (879.2) だが、絶えず拡大する干魃は、徐々にカスピ海の南と東の地からのアンド系の大移動を引き起こした。移動の潮流は、北方から南方に向きを変え始め、またバビロニア人の騎兵は、メソポタミアへと突入し始めた。

79:1.6 (879.3) 中央アジアでの拡大する乾燥は、人口を減少させ、これらの人々をより非戦闘的にする一層の影響を与えた。そして北への雨量の減少が、遊牧民的アンドン系を南方への移動を強いるとき、アンド系のトルキスタンからの途方もない大移動があった。これが、レヴァント地方とインドへのいわゆるアーリア人の最後の移動である。あらゆるアジア民族と大半の太平洋の島の民族が、これらの優れた人種によってある程度改良される間、そ

れは、アダームの混血子孫の長い分散の最高潮に達した。

79:1.7 (879.4) こうして彼らは、東半球中に分散したが、アンド系は、アンドン系のこの大規模な南方への移動が、中央アジアのアンド系をほとんど消滅点にまで薄めるほどのものだあったので、メソポタミアとトルキスタンの故国を奪われた。

79:1.8 (879.5) クリストス後の20世紀においてでさえもこれらの領域で時折見られる金髪の型に目撃されるように、アンド系の血筋の痕跡が、ツラーニ民族とチベット民族の間にはある。初期の中国の年譜には、黄河にある平和的集落の北部の赤毛の遊牧民の存在を記録があり、そこにはまだ、昔のタリム盆地における金髪のアンド系と黒髪のモンゴル型双方の存在を忠実に記録する絵が残っている。

79:1.9 (879.6) 中央アジアのアンド系の消えた軍才の最後の徴候があったのは、ジンギスカンの下にモンゴル人がアジア大陸の大部分を征服し始めた西暦1,200年であった。かつてのアンド系同様、これらの戦士は、「天の唯一の

神」の存在を賛美した。その帝国の早期の崩壊が、長いあいだ西洋と東洋間の文化的交流を遅らせ、アジアにおける一神教の概念の発展は、大きく不利になった。

2. アンド系のインド征服

79:2.1 (879.7) インドは、アンド系侵入で最後の血族を加え、ユランチアの全人種が混合された唯一の場所である。インドの北西の高地にサンギク人種が出現し、ユランチアに今までに存在する最も異種の混血を残しながら、その初期に例外なくそれぞれの構成員がインド亜大陸に入り込んだ。古代インドは、移動する人種のための集水溝としての役割を果たした。ガンジス川とインダス川の三角州のほとんどが、ここ5万年の作用によるものであり、半島の麓は、かつては現在よりもいくらか狭かった。

79:2.2 (879.8) インドでの最も初期の混血は、移動してくる赤色人種や黄色人種との土着のアンドン系の交合であった。この集団は、非常に多くの橙色人種のみならず、絶滅した東の緑色民族の大部分を吸収することにより後には弱められ、青色民族との限られた混合を通してわずかに改良されたが、数多くの藍色人種の同化作用を経て殊

の他苦しんだ。しかし、インドのいわゆる原住民は、これらの初期の人々をほとんど代表していない。それらは、むしろ最も劣る者達で、南方と東方の外れにあり、初期のアンド系、あるいは後に出現するアーリア人のいとこのいずれによっても、決して完全に吸収されたわけではなかった。

79:2.3 (880.1) インド西部の人々は、紀元前2万年までに既にアダームの血筋を帯びるようになり、ユランチアの歴史上いかなる1民族もそれほどまでに多くの異民族を結合しなかった。しかし、二次的サンギクの血族が支配的であったというのは不幸であり、青色人種と赤色人種の双方が、遠い昔のこの人種的坩堝からそれほど大きく外れているというのは、本当の災難であった。一層多くの第一サンギク血族は、さらなる文明の高揚に向けて多大に貢献したことであったろう。赤色人種は、発達するにつれ、アメリカ大陸で自らを滅ぼしていき、青色人種は、ヨーロッパで息抜きをしていた。アダームの初期の子孫(それに後の大部分のもの)は、インド、アフリカ、または他の場所のいかんにかかわらず皮膚の黒い有色民族との混合願望をあまり示さなかった。

79:2.4 (880.2) 紀元前1万5千年頃、増大する人口過剰が、トルキスタンとイラン全域において最初の実に大規模なアンド系のインドに向けての移動を引き起こした。15世紀以上の間に、これらの優れた民族は、バルチスタン高地へと殺到し、インダスとガンジスの渓谷中に広がり、南方にゆっくりデッカン高原へと移動した。北西からのこのアンド系の圧迫は、多くの劣者を南方と東方のビルマや中国南部へと追い立てたはしたが、侵略者を人種喪失から救うには十分ではなかった。

79:2.5 (880.3) ユーラシア覇権達成のインドの失敗は、主に地形の問題であった。北からの人口圧迫は、南方の人々の大半を四方を海に囲まれたデッカン高原の減少しつつある領土へと押しのけたに過ぎなかった。劣者達は、移出のための隣接領地があれば四方八方に殺到し、優者の血統は、より高度の文明に達していたことであったであろうに。

79:2.6 (880.4) そんなわけで、これらの初期のアンド系征服者は、異人種間の婚姻に関する堅い拘束の体制により独自性の維持と人種的飲み込みの潮流をせき止める必死の試

みをした。とは言うものの、アンド系は、紀元前1万年までには消え始め、同時に民族集団全体は、この吸収によって著しく改良された。

79:2.7 (880.5) 人種混合は、文化の汎用性を助け、進歩的文明に向かうので通常有利ではあるが、そのような成果は、劣る人種的血統が支配的であるとき短命であろう。多言語文化は、優れた血統が劣者より安全な係数で生殖する場合にだけ持続できる。優者の減少的生殖につれての劣者の無制限の増殖は、間違いなく文化的な文明の自滅である。

79:2.8 (880.6) アンド系の征服者が、実際の3倍の数であったならば、あるいは最も望ましくない橙色と緑色と藍色の混血の1/3が、追い出されるか、滅ぼされるかしていたならば、インドは、その結果、世界の文化的な文明の代表的中心の1つになり、トルキスタンへと、そしてそこからヨーロッパへと北方に流入したメソポタミアのその後のうねりを疑う余地なくさらに引き付けたことであったろう。

3. ドラヴィダ族のインド

79:3.1 (881.1) インドのアンド系征服者の土着の血統との混合が、最終的にはドラヴィダ族と呼ばれてきた混血民族をもたらした。初期の純粋なドラヴィダ族は、文化の業績面においてかなりの力量があり、それは、アンド系の遺産が次第に減衰するにつれ絶え間なく弱められていった。これが、およそ1万2千年前に芽生え始めたインド文明を運命づけたものである。しかし、この少量のアダムの血液の注入は、社会的発展において著しく加速させた。この混成の血統は、直ちにその時の地球で最も他面的な文明を生んだ。

79:3.2 (881.2) ドラヴィダ族のアンド系は、インドを征服後まもなくメソポタミアとの人種的かつ文化的接点を失ったが、後の海上交通路と隊商路線の開始が、これらの接点を回復させた。そしてインドは、ここ1万年間いかなる時も、山の障壁が西の交流を大いに助けはしたものの、西のメソポタミアと東の中国と全く連絡を取っていなかったわけではなかった。

79:3.3 (881.3) ドラヴィダ族支配の初期に始まるインド民族の優れた文化と宗教の傾向は、一つには、非常に多くのセ

ース系司祭がインドに入った、すなわち初期のアンド系と後のアーリア人の二つの侵入という事実による。インドの宗教歴史をよぎる一神教の糸は、このように第二の園でのアダーム系の教えに由来する。

79:3.4 (881.4) 100人のセース系司祭の仲間が、早くも紀元前1万6千年にインドに入り、もう少しでその多言語民族の西半分の宗教征服を達成するところであった。しかし、彼れらの宗教は持続しなかった。それらの楽園三位一体の教義は、5千年のうちに火の神の三位一体の表象に陥った。

79:3.5 (881.6) しかしインド住民の宗教状況は、アンド系移動の終わりまでの7千年間以上もの間、全体としては世界のそれをはるかに上回るものであった。インドは、この時期、世界の主な文化、宗教、哲学、そして商業の文明を形成しようとしていた。この運命は、南の民族によるアンド系の完全な消滅を除いては、たぶん実現されていたことであろう。

79:3.6 (881.6) ドラヴィダ族の文化の中心は、川の流域、主にはインダス川とガンジス川、それに東部ガートを海へと

貫流する3本の大河に沿うデッカン高原にあった。西部ガートの海岸沿いの集落は、スメールとの海運関係での卓越さのおかげであった。

79:3.7 (881.7) ドラヴィダ族は、都市建設、陸路と海路双方における大規模な輸出入業に従事した一番最初の民族のなかにいた。紀元前7千年までにはラクダの行列が、遠方のメソポタミアへの定期的な旅をしていた。ドラヴィダ族の海運業は、アラビア海を横断しペルシャ湾のスメールの都市へと海岸沿いに活発であり、ベンガル湾水域ははるか遠くの東インド諸島へと乗り出していた。アルファベットは、書く芸術と共に、これらの船乗りや商人によってスメールから取り込まれた。

79:3.8 (881.8) これらの通商関係は、さらなる世界的文化の多様化に大いに貢献し、都市生活の多くの趣やさらには贅沢品の早期の出現をもたらした。後に現れるアーリア人がインドに入った際、かれらは、サンギク人種の中に覆い隠された自分達のアンド系のいとこ達をドラヴィダ族のなかに見分けはしなかったが、かなり高度な文明は見つけた。ドラヴィダ族は、生物学上の限界にもかかわら

ず、優れた文明を樹立した。それは、全インドによく拡散され、現代までデッカン高原で生残してきた。

4. アーリア人のインド侵略

79:4.1 (882.1) アンド系の2度目のインドへの浸入は、紀元前3千年の中頃のおよそ500年に渡るアーリア人の侵略であった。この移動は、アンド系のトルキスタンの故国からの最終的脱出を記した。

79:4.2 (882.2) 初期のアーリア人の中心地は、インドの北半分に、とりわけ北西に点在した。これらの侵略者は、そのうちの少人数が、後にヒマラヤ地方を除く全半島を侵略した南のドラヴィダ族による吸収に対し無防備にしたことで、決してその国の征服を終えることなく、その後この怠りが、自らの破滅を迎えた。

79:4.3 (882.3) アーリア人は、北方地域を除きインドでは人種上の影響をあまり与えかった。デッカン高原でのそれらの影響は、人種上よりも文化や宗教上であった。北インドでのいわゆるアーリアの血液のより重要な持続性は、彼らのこの領域での相当数の存在のみならず、後の征服者、商人、および宣教師によっても補強されたが故でも

あった。紀元前1世紀まで、プンジャブへのアーリア人の血液の間断のない浸透があり、ヘレニズム民族の軍事行動に伴う最後の流入があった

79:4.4 (882.4) アーリア人とドラヴィダ族は、ガンジス平原で最終的には高度の文化を産むために混ざり合い、この中心地は、北東から来る、すなわち中国から来る血統要素により後に補強された。

79:4.5 (882.5) インドでは、アーリア人の半民主的組織から専制的、君主的政府の形態まで多くの社会的組織の型が、時によって栄えた。しかし最も特徴ある社会形態は、人種の独自性を永続させる努力においてアーリア人によって設けられたすばらしい社会階級制の持続性であった。この精巧な階級制度は、現在まで維持されてきた。

79:4.6 (882.6) 主要な4階級のうち1番目を除く全階級は、アーリア人征服者の下位の臣下との人種的融合を避けるために空しい努力のうちに確立された。しかし最高の階級、教師兼司祭は、セース系に端を発する。彼らの教えは、その秀抜な先輩のものとは大いに異なるものの、クリス

トス後の20世紀の婆羅門階級は、第二の園の司祭の文化的に直系の子孫である。

79:4.7 (882.7) アーリア人は、インドに入る際、第二の園の続く宗教伝統の中に保持されてきたように自分達の神の概念を携えて来た。しかし、婆羅門司祭は、アーリア人の人種抹消後に、デッカン人の劣る宗教との突然の接触によって確立された異教徒の勢いに決して耐えることができなかった。したがって、人口の圧倒的多数が、劣った宗教の迷信の隷属に陥った。それが、インドが、初期に兆候を示していた高度の文明を産むことができなかった理由であった。

79:4.8 (882.8) 紀元前6世紀の精神の目覚めは、イスラム教徒の侵略以前に廃れてしまいインドでは存続しなかった。だがいつの日にか、偉大なガウタマが、生ける神の探求において全インドを導くために蘇るかもしれないし、世界は、次に進歩的でない精神洞察力の麻痺させる影響の元でとても長い昏睡状態にある様々な民族の文化的可能性の結実を観測するであろう。

79:4.9 (883.1) 文化は、生物基盤を拠り所としているが、階級制度だけではアーリアの文化を永続させることはできなかった。なぜならば、宗教は、真の宗教は、人を人間の兄弟愛に基づく優れた文明を確立するように駆り立てるそのより高いエネルギーに不可欠の源であるがゆえに。

5. 赤色人種と黄色人種

79:5.1 (883.2) インドについての話は、アンド系の征服についての、そして昔の進化的民族の終局的消滅につてであり、東アジアの物語は、より適切には第一サンギク民族の、特に赤色人種および黄色人種についてである。これらの2つの人種は、ヨーロッパの青色人種をそれほどまでに遅らせたネアンデルタール血族とのその混合を大きく免れ、その結果、第一サンギク型の優れた可能性を保持した

79:5.2 (883.3) 初期のネアンデルタール人は、ユーラシア全域に広がり、東隻は、質が落とされた動物種族でさらに汚染されていた。これらの人間以下の型は、東アジアへのサンギクの移動を非常に長い間妨げた同じ氷床である5度目の氷河により南に押しやられた。赤色人種は、イン

ドの高地周辺を北東に移動したとき、これらの人間以下の型のいないアジアの北東部を見つけた。赤色人種の部族組織は、いかなる他の民族のそれよりも早く形成され、中央アジアのサンギクの中心から最初に移動したもの達であった。劣性のネアンデルタール血族は、後に移動する黄色部族に滅ぼされるか、または本土から撃退された。しかし赤色人種は、黄色部族到着前のおよそ10万年間東アジアで最高の状態で支配していた。

79:5.3 (883.4) 黄色人種の本隊は、30万年以上も遠い昔、沿岸の移住者として南から中国に入った。千年毎により内陸に侵入したものの、比較的近世まで移動するチベット人の同胞との接触はなかった。

79:5.4 (883.5) 拡大する人口的圧迫は、黄色人種が赤色人種の猟場へと押し入り始める北方への移動の原因となった。自然の人種的反目に結びつけられたこの侵害は、増大する敵意に達し、その結果、より遠方のアジアの沃地の決定的な奪い合いが始まった。

79:5.5 (883.6) 赤色人種と黄色人種間のこの長年の争いの物語が、ユランチアの歴史の叙事詩である。この優れた両人

種が、20万年以上にわたり苦い不断の戦争をした。赤色人種の襲撃隊は、初期の戦で黄色人種の集落に破壊を拡大しつつおおむね成功していた。しかし黄色人種は、戦術面で利発な生徒であり、早くから同胞と穏やかに暮らす著しい能力を明らかにした。中国人は、団結力には強さがあることを1番先に学んだ者達であった。赤色部族は、血なまぐさい争いを続け、やがてからえらは、北方への容赦ない行進を続けた執拗な中国人による繰り返しの敗北に苦しみ始めた。

79:5.6 (883.7) 10万年前、多数派を占める赤色人種の部族は、最後の氷河の後退している氷へと追い詰められており、ベーリング地峡の上の東への陸路が通行可能になると人を寄せつけないアジア大陸の沿岸をすぐに見捨てた。最後の純血の赤色人種がアジアを出発してから8万5千年であるが、長い戦いは、勝利を得た黄色人種にその遺伝子の痕跡を残した。北方中国民族は、アンドン系シベリア人と共に赤色人種の血統の多くを同化し、それによりかなりの恩恵を受けた。

79:5.7 (884.1) 北米インディアンは、アジアの故国を取り上げられていたことから、アダム到来以前のおよそ5万年間アダームとハヴァーのアンド系子孫とさえ決して接触しなかった。純血の赤色人種の血族は、アンド系移動時代に遊動民族、つまり少しばかり農業を営む猟師として北米中に広がっていた。これらの人種と文化的集団は、アメリカ大陸到着から西暦の最初の1千年末まで、ヨーロッパの白色人種に発見される時まで、ほぼ完全に孤立したままであった。北部の赤色民族にとり、その時までは最も白人に近くみえたのがエスキモー人であった。

79:5.8 (884.2) 赤色人種と黄色人種は、アンド系の影響は別として、高度の文明に到達した唯一の人間の血統である。最古のアメリカ原住民の文化は、カリフォルニアのオナモナロントンの核心であったが、これは、紀元前3万5千年までにはすっかり姿を消してしまっていた。支配的には赤色人種の、しかし黄色人種、橙色人種、青色人種のかなりの混血の人種による最近の、　より永続的文明が、メキシコ、中央アメリカ、それに南米の山々に築かれていた。

79:5.9 (884.3) アンド系の血の痕跡は、ペルーに達したにもかかわらず、これらの文明は、サンギクの進化の結果であった。西半球の民族は、北米のエスキモーと南米の幾つかのポリネシア系アンド人を除いては、クリストス後の最初の1千年の終わりまで世界のその他の国々との接触はなかった。アダームの100万人の純系子孫は、ユランチアの人種の改良のためのメルキゼデクの本来の計画では、アメリカ大陸の赤色人種の向上に赴くべきであるということが取り決められいた。

6. 中国文明の夜明け

79:6.1 (884.4) 拡大しつつある中国人は、赤色人種を北米の方へと追いやったしばらくの後、東部アジアの流域から、北はシベリアへ、西はやがてそこでかれらが、アンド系の優れた文化に接触することになるトルキスタンへとアンドン系を片づけた。

79:6.2 (884.5) インドと中国の文化が、ビルマとインドシナ半島で混合し溶け合い、それらの領域の継続的文明を生み出した。失われた緑色人種は、世界の他のどこでよりもここで多くの割合で存続した。

79:6.3 (884.6) 多くの異なる人種が、太平洋の島々に居住した。一般的には、緑色人種と藍色人種の血の高い割合をもつ民族が、南方の、またより広範囲にわたる島々に居住した。アンドン系が、そして後には黄色人種と赤色人種との血統の高い割合を有する人種が、北方の島々を保持した。日本民族の祖先は、紀元前1万2千年まで、つまり強力な北方の中国部族が、南の沿岸沿いの猛襲により追い払うときまで、本土からの追い出しを被らなかった。その最終的な大移動は、人口圧迫というよりむしろ彼らが、神的人物と見なすようになった指揮官の主導権によるものであった。

79:6.4 (885.1) 黄色人種の勝利の部族は、インドやレヴァント地方の民族と同じく、海岸沿いと川の上流に最も初期の中心地を建設した。後年、増加する洪水と移動する川の流れが、低地都市を支えることができなくなるにつれ、沿岸集落は、貧弱に暮らした。

79:6.5 (885.2) 2万年前、中国人の祖先は、12か所の原始の文化と学問の強力な中心地を、特に黄河と揚子江沿いに築き上げた。さて、これらの中心地は、新疆とチベットから

の優れた混合民族の定常の流入により補強され始めた。チベットからの揚子江渓谷への移動は、北ほど大規模ではなく、またチベットの中心地もタリム盆地のものほど高度ではなかった。しかし二つの動きは、一定量のアンド系の血を川の集落へと東方へ運んだ。

79:6.6 (885.3) 古代の黄色人種の優秀さは、4大要因によるものであった。

79:6.7 (885.4) 1. 遺伝的。赤色人種と黄色人種の両方は、ヨーロッパの青色人種のいとこと異なり低下した人間血統との混合からおおむね逃がれてきた。優れた赤色人種とアンド系血族の少数により既に強化された北方の中国人は、アンド系の血のかなりの流入による利益を間もなく得るところであった。南方の中国人は、この点に関しそれほどうまくはいかず、緑色人種の吸収に長らく苦しみ、一方では、後にドラヴィダ族-アンド系の侵略によりインドの外へ押しやられた劣性民族の群れの潜入により更に弱められていった。今日の中国において北方人種と南方人種の間には明確な違いがある。

79:6.8 (885.5) 2. 社会的。黄色人種は、早くに自分たちの間で平和の価値を学んだ。内部の平和の可能性が、何百万人の間での文明普及を保証するほどの人口増加に貢献した。ユランチアで最も高度の大規模文明が、紀元前2万5千年から5千年まで中国の中央と北部に存在した。黄色人種は、最初に民族的連帯意識達したもの達—大規模な文化的、社会的、政治的文明に到達した最初の人種—であった。

79:6.9 (885.6) 紀元前1万5千年の中国人は、攻撃的な軍国主義者であった。かれらは、過去への過剰崇敬によって弱められてはおらず、共通語を話す、1,200万足らずの小規模集団を形成した。かれらは、この時代に、本当の国家を、歴史の上での政治的結合の時代のよりもはるかに結合した均質の国家を築き上げた。

79:6.10 (885.7) 3. 精神的。中国人は、アンド系移動時代、地球のより精神的民族に属していた。シングラントンが宣言した一つの真理の崇拝への長い間の順守が、かれらを他の人種の大半よりも進歩させ続けた。進歩的で高度な宗教の刺激は、多くの場合、文化的開発における決定的要

因である。中国は、インドが衰退していくにつれ、真実が、最高の神格として奉安される活気づける宗教の激励の下に前進した。

79:6.11 (885.8) この真理の崇拝は、研究への挑発と、自然の法と人類の可能性への恐れ知らずの探検であった。中国人は、6千年前でさえまだ鋭敏な学生であり、その真実の追求において積極果敢であった。

79:6.12 (885.9) 4. 地理的。中国は、西の山々と東の太平洋に守られている。ただ北だけが攻撃を受けやすかったが、北部は、赤色人種の時代からアンド系の後の子孫の到来までいかなる攻撃的人種にも占領されなかった。

79:6.13 (886.1) しかし、黄色人種は、もし山の防壁と後の精神的文化の衰退がなければ、トルキスタンからのアンド系移動の大部分を確かに自分達に引き付け、疑いなく世界文明を素早く支配したことであったろう。

7. アンド系中国に入る

79:7.1 (886.2) およそ1万5千年前、アンド系は、かなりの数で、Ti Taoの峠を横断し黄河渓谷の上流に広がり、甘粛

の中国人集落の間にいた。やがて、彼らは、湖南へと東方に侵入し、そこに最も進歩的な集落が定着した。西からのこの浸透は、アンドン系とアンド系とのおよそ半分半分であった。

79:7.2 (886.3) 黄河沿いの文化の北の中心地は、揚子江の南方の定住地よりもいつも進歩的であった。黄河沿いの定住地は、これらの優れた人間のほんのわずかな数の到着後、数千年の間に徐々に揚子江の村落の先頭に出て、以来ずっと維持されている南の同胞よりも高い位置を樹立した。

79:7.3 (886.4) それは、非常に多くのアンド系がいたからという訳ではなく、またその文化がとても優れていたという訳でもなく、彼らとの合併がより多才な血統を生み出したからであった。北部の中国人は、生来の優れた心を穏やかに刺激するに足るアンド系の気質を受けたが、北方白色人種にかなり特徴的な止むことのない探検への好奇心で自分達を奮いたたせるには十分ではなかった。アンド系継承遺産のこのより限定的注入は、サンギク型の生

まれながらの安定性にとってはあまり気掛かりなものではなかった。

79:7.4 (886.5) アンド系の後日のうねりは、メソポタミアのある種の文化的進歩を携えて来た。これは、西からの最後の移動の波で特に本当である。彼らは、北部の中国人の経済的、また教育的実践を大いに改良した。黄色人種の宗教文化への影響は、長続きしなかったが、後の子孫は、その後の精神の覚醒に非常に貢献した。しかしエーデンとダラマティアの美に関するアンド系の伝統は、中国伝統に大きく影響を及ぼした。初期の中国の伝説は、「神の国」を西に置いている。

79:7.5 (886.6) 中国民族は、トルキスタンにおける気候変化と後日のアンド系移民の到着の紀元前1万年後まで、都市の建設に取り掛かったり製造に従事しなかった。この新しい血の注入は、優れた中国人の血統の潜在的体質のより一層の、かつ急速な開発を刺激したほどには、黄色人種の文明に多くを補足しなかった。河南からShensiまで高度な文明の可能性は、実を結ぼうとしていた。金属加工とすべての製造技術は、この時代にまで遡る。

79:7.6 (886.7) 初期の中国人とメソポタミア人の時間の計算法、天文学、政府の行政の類似性は、遠く離れたこの2か所の中心地間の商業関係によるものであった。中国の商人は、スメール人の時代にさえトルキスタンからメソポタミアへと陸路を旅した。またこの交流は一方的ではなかった。ガンジスの平原民族がそうであったように、ユーフラテス民族も、それによって相当に恩恵を被った。しかし、紀元前第三千年紀の気候変化と遊牧民の侵入が、中央アジアの隊商路を横断する交易量を大いに減少させた。

8. 後の中国文明

79:8.1 (887.1) 赤色人種が戦争に非常に苦しんでいる間、中国人の間での国の開発が、自身のアジア征服の徹底によって遅れたと言うことは必ずしも間違ってはいない。彼らには人種的連帯意識の大きな可能性があったが、絶えずつきまとう外部からの侵略の危険性への間断のない駆動的刺激が欠けていたが故に、それは適切に展開しなかった。

79:8.2 (887.2) 古代の軍事国家は、東アジアの征服終了と共に次第に崩壊した。過去の戦争は忘れられた。赤色人種との勇壮な戦いのうち、弓を操る民族との古代の争いのおぼろげな伝説だけが存続した。中国人は早くから農業従事に移り、それが、さらに穏やかな性向を助長し、一方で農業における人対土地の比率をかなり下回る人口が、国の拡大する平和にますます貢献した。

79:8.3 (887.3) 過去の業績への意識、(現在ではいくらか減少)、徹底的なまでに農業的な民族の保守主義、またよく開発された家族生活は、先祖崇拝の誕生、過去の人間への崇拝を非常に尊ぶ習慣への到達、に匹敵した。非常に類似した態度は、ヨーロッパの白色人種の間でギリシャ・ローマ文明の崩壊後500年ほど広く行き渡った。

79:8.4 (887.4) シングラントンに教えられた「一つの真理」の信仰、そして崇拝は、決して完全に廃れなかった。しかし時の経過につれ、新しくより高い真実の探究は、既に樹立された敬いへの気運の高まりにより影を帯びるようになった。ゆっくりと黄色人種の特質は、未知の探究から

知ることの保存に転換されるようになった。これが、最も急速に進歩する世界文明の停滞の原因である。

79:8.5 (887.5) 黄色人種の政治的統一は、紀元前4千年から紀元前5百年の間に達成されたが、揚子江と黄河の中心地の文化的結合は、すでにもたらされていた。後の部族集団のこの政治的統一に争いはあったものの、戦争に対する社会の意見は低いままであった。先祖崇拝、増加する方言、何千年にもわたる軍事活動への無要求は、この民族を極端に平和的にした。

79:8.6 (887.6) 黄色人種は、先進的国家の早期発展の希望への実現の失敗にもかかわらず、文明の芸術実現において、特に農業と園芸面において徐々に前進した。ShensiとHonanにおいて農業専門家たちが直面した水力問題では、解決のための集団協力を要した。そのような潅漑と土壌保持の困難が、少なからず農耕集団の間の結果として生じる平和促進への相互依存の発達の一要因となった。

79:8.7 (887.7) やがて、学校の設立と共に筆記の発展が、これまでにない無類の度合での知識の普及に寄与した。しか

し、早くからの印刷の登場にもかかわらず、表意文字の書記体系の扱いにくい特徴が、知識階級を数の上で制限した。そして他の何よりも、社会の画一化と宗教哲学の教義化の進行が、速やかに続いた。先祖崇敬の宗教的発展は、自然崇拝にかかわる迷信の洪水によりさらに複雑になったものの、神の真の概念のなかなかに消えない痕跡が、Shang-tiの皇室の崇拝において持続された。

79:8.8 (888.1) 先祖崇敬の大いなる弱点は、過去を振り返る哲学、退嬰主義を促進するということである。過去から知恵を拾い集めることがいかに賢明であろうとも、過去を他にはない真実の源と見なすのは愚かである。真実は、相対的であり広がっている。それは、人間の各世代に—それぞれの人間の生涯においてさえ—新しい表現に達し、いつでも現在に生きている。

79:8.9 (888.2) 先祖崇敬における素晴らしい強さは、そのような姿勢が家族に位置づける価値である。中国文化の驚くべき安定性と持続性は、家族に与えられた最高の位置の結果である。なぜなら、文明は、家族の有効な機能に直接依存しているのでのあるから。そして、中国では家族

が、他のわずかな民族が取り組んだ社会的な重要性に、宗教の意味にさえ到達した。

79:8.10 (888.3) 先祖崇拝の増大する儀式により強要された孝行と家族忠誠は、優れた家族関係と永続的家族集団の確立を保証した。そのすべてが、文明保存において次のような要因を助長した。

79:8.11 (888.4) 1. 財産と富の保護

79:8.12 (888.5) 2. 2 世代以上の経験を共有すること

79:8.13 (888.6) 3. 過去の芸術と科学における効果的な子供の教育

79:8.14 (888.7) 4. 強い義務感の開発、道徳の高揚、倫理的感受性の増大

79:8.15 (888.8) アンド系の到来に始まる中国文明の形成期は、紀元前6世紀の倫理的、道徳的、それにいくらか宗教的な大いなる目覚めへと延びている。また中国の伝統は、進化的過去のかすんだ記録を保持する。母から父への家族の変遷、農業の確立、建築術の進歩、産業の創設—これらの全てが逐次語られていく。そして、この物語は、

野蛮な段階からの優れた民族の堂々たる上昇の絵を、他のいかなる同様の報告よりもはるかに優れた精度で示す。彼らは、この時代、原始農業社会から、都市、製造物、金属加工、商業交換、政府、筆記、数学、芸術、科学、および印刷術を有するより高度の社会的組織へと移行した。

79:8.16 (888.9) 黄色人種の古代文明も、同じく何世紀もずっと続いてきた。中国文化における最初の重要な進歩以来およそ4万年がたち、多くの退歩がありはしたものの、ハンの息子達の文明が、全ての文明の中でも20世紀までの継続的発展の破れていない絵の提示に最も接近している。白色人種の機械的、宗教的発展は、上位のものであるが、家族の忠誠、集団倫理、または個人道徳において決して中国人を凌いだことがない。

79:8.17 (888.10) この古代文化は、人間の幸福に非常に貢献した。その業績に祝福され何百万人もの人間が生きて、死んだ。このすばらしい文明は、何世紀ものあいだ過去の栄誉に寄りかかっているが、それは、人間生活の死を免れない存在の崇高な目標を新たに思い描くために今でさ

え再び目を覚ましている。終わることのない進歩への緩まない闘いをもう一度始める。

79:8.18 (888.11) [ネバドンの大天使による提示]

論文 80
西半球におけるアンド系の拡大

80:0.1 (889.1) ヨーロッパの青色人種は すばらしい文化的な文明を自ら達成することはなかったものの、紫色人種と彼らのアンド系後継者の時代以降、アダーム系と混合されたその種族が後のアンド系侵略者と混合されると、ユランチアに現れた積極果敢な文明到達のための最も強力な血統の1つをもたらした生物上の基礎を提供した。

80:0.2 (889.2) 現代の白人民族は、サンギク民族、つまり幾らかの赤色人種と黄色人種とだが特に青色人種と混合されるようになったアダームの血統の生き残りの種族を取り込んでいる。全ての白色人種と、そしてさらに多くに初期のノヅ系血族には、最初のアンドン系の血統が、かなりの割合である。

1. アダーム系ヨーロッパに入る

80:1.1 (889.3) 最後のアンド系が、ユーフラテス渓谷に追いやられる前、その同胞の多くは、冒険家、教師、交易者、および戦士としてヨーロッパに入った。地中海地溝は、紫色人種の初期ジブラルタル地峡とシチリアの陸橋により保護されていた。ごく早期の人間の何らかの海商がこれらの内陸湖で樹立され、北からの青色人種と南からのサハラ砂住民は、そこで、東からのノヅ系とアダーム系に遭遇した。

80:1.2 (889.4) ノヅ系は、地中海の東部の地溝で最大規模の文化の1つを設立し、これらの中心地からいくらか南ヨーロッパへと、しかしとりわけ北アフリカへと浸透していった。横幅のある頭のノヅ系-アンドン系のシリア人は、ゆっくり上昇しているナイル川デルタ地帯での定住に因み、かなり早くから焼き物と農業を展開した。かれらは、また、羊、ヤギ、牛、および他の家畜を取り入れ、またシリアは当時その産業の中心地であったので大いに改良された金属加工法を取り込んだ。

80:1.3 (889.5) エジプトは、ナイル渓谷に芸術と文化をもたらし、それを豊かにしたメソポタミア人の絶え間ない流入

を3万年以上受け入れてきた。しかし、エジプトは、多くのサハラ民族の入来が、ナイル川沿いの早期の文明を大いに悪化させたことから、およそ1万5千年前にその最低文化水準に至った。

80:1.4 (889.6) しかし、初期、アダーム系の西への移動を妨げるものはあまりなかった。サハラは、牧夫と農業家が、一面に広がる開かれた牧草地であった。サハラ砂漠のこれらの住民は、決して製造に従事することがなく、都市建設者でもなかった。それらは、絶滅した緑色人種、それに橙色人種の大規模な遺伝子をもつ藍色と黒色の集団であった。しかしかれらは、陸の隆起と水分の多い変動する風が、この繁栄し平和な文明の残余物を分散させる前に、紫色人種の極めて限られた量の遺産を受け取った。

80:1.5 (890.1) アダムの血は、ほとんどの人類と共有されたが、ある者達は、他の者以上に確保した。インドの混血人種とアフリカのより黒い民族は、アダーム系にとり魅力を感じるものではなかった。かれらは、アメリカ大陸に遠く隔たっていなければ、赤色人種と自由に交際して

いたであろうし、黄色人種に好感をもったであろうが、黄色人種は、遠いアジアにあり接近は同様に困難であった。したがって、かれらは、冒険かまたは利他主義に心が動かされると、またはユーフラテス渓谷を追い出されると、ごく自然にヨーロッパの青色人種との交合を選んだ。

80:1.6 (890.2) 当時ヨーロッパで優位であった青色人種は、早期の移動中のアダーム系が嫌悪感を催す何の宗教習慣ももってはおらず、紫色人種と青色人種間には、かなりの性的誘因力があった。最良の青色人種は、アダーム系との結婚を許されることは高い誉れであると考えた。青色人種の全男性は、アダーム系の女性の愛情を勝ち取るために巧みで芸術的になる覇気を抱いたし、またアダーム系の注目を受けることは、優れた青色女性にとっての最高の熱望であった。

80:1.7 (890.3) エーデンの移動する息子らは、ネアンデルタールの群体の生きながらえている種族を情け容赦なく撲滅する一方で、自分達の文化的な実践を活気づけて、青色人種のより高度の型と徐々に結合した。劣性血族の除去

と一体とされたこの人種混合の手法は、十数集団のより雄々しく進歩的な青色人種を生み出し、そのうちの1集団は、クロマニョン人と命名された。

80:1.8 (890.4) 初期のメソポタミア文化の高まりは、これらと他の理由によりより好ましい移動経路という些細ではない理由を含め、ほぼ例外なくヨーロッパへと前進した。そして、現代ヨーロッパ文明の先例を決定づけたのが、これらの情況であった。

2. 気候と地質の変化

80:2.1 (890.5) 紫色人種の初期のヨーロッパへの拡大は、ある種のかなり突然の気候と地質の変化によって急に遮られた。北の氷原の後退とともに、西からの水を孕んだ風は、向きを北に変え、サハラの広漠とした牧草地帯は、徐々に不毛の砂漠に転じた。この干魃は、巨大なサハラ高原の背の低い、黒髪の、黒目だが長頭の居住者を分散させた。

80:2.2 (890.6) より純粋な藍色の集団は、中央アフリカの森林へと南方に移動し、以来そこにずっと留まっている。さらに混血した集団は、3方向に広がった。西に向かう優

れた部族は、スペインへ、そこからヨーロッパの隣接地域に移動し、長髪で暗褐色の後の地中海種族の核を形成した。サハラ高原の東へ向かった最も進歩的でない分隊は、アラビアへ、そして北メソポタミアとインドを通過し遠くセイロンに渡った。支配的集団は、北と東からナイル渓谷とパレスチナへと移動した。

80:2.3 (890.7) これが、デカン高原からイラン、メソポタミア、加えて地中海の両岸沿いに点在する現代の民族間にある程度の親族関係を呈しているこの二次サンギクの下層である。

80:2.4 (890.8) アフリカでのこれらの気候変化の同時期、イギリスは、大陸から分離し、デンマークは、海から隆起し、一方西の地中海盆地を保護しているジブラルタル地峡は、地震の結果崩れ、すぐに大西洋の水面の位置にまでこの内陸湖を上げた。シチリアの陸橋は、やがて水中に沈み、地中海の一続きの海を作り出し、また大西洋にそれを接続した。自然のこの大災害は、全世界史において何十もの人間の定住地に洪水をもたらし、最大の生命損失を引き起こした。

80:2.5 (891.1) 地中海盆地のこの抱き込みは、ただちにアダーム系の西部移動を抑え、サハラ住民の大きな流入は、増加人口の捌け口をエーデンの北と東に求めた。アダムの子孫は、チグリスとユーフラテス渓谷から北方への旅の最中、山岳の障害と当時は広域にわたっていたカスピ海に出くわした。アダーム系は、トルキスタン中に点在する自分達の定住地の周りで何世代にもわたり猟をし、群れを追い、土を耕した。この立派な民族は、ゆっくりとその領土をヨーロッパへと拡大していった。しかしアダーム系は、この領域が、ほぼ完全にメソポタミアと接触をしていなかったことから、東からヨーロッパ入りし、そのときアジアの文化より何千年も遅れた青色人種の文化を知った。

3. クロマニョンの青色人種

80:3.1 (891.2) 青色人種の古代文化の中心地は、ヨーロッパのすべての川沿いに定められていたが、ソンム川だけが、現在、前氷河期時代に流れた同じ水路を流れている。

80:3.2 (891.3) 我々は、青色人種がヨーロッパ大陸に充満しているように話してはいるが、そこには数十もの人種の型

があった。ヨーロッパの青色人種は、3万5千年前にさえすでに、赤色人種と黄色人種の二つの血統を有する非常に混合された民族であったが、かれらは、一方大西洋沿岸地帯と現代のロシアの領域においてはかなりの量のアンドン系の血を吸収し、また南ではサハラ砂漠の民族に接触していた。だが多くの人種的集団を列挙する試みは無益であろう。

80:3.3 (891.4) アダーム系以後のこの初期のヨーロッパ文明は、アダーム系の独創的な創造力と青色人種の活力と芸術との特異な混合であった。青色人種は、相当の活力をもつ人種であったが、アダーム系の文化的で精神的な状態を大いに低下させた。余りにも多くのものが、少女達をだましたり、堕落させたりする傾向にあり、後者にとりクロマニヨン族に自分達の宗教を認識させることは非常に難しかった。ヨーロッパの宗教は、1万年の間インドやエジプトでの発展に比べ不振であった。

80:3.4 (891.5) 青色人種は、何をするにもとても正直であり、混血のアダーム系の性的非行とは全く無関係であった。

かれらは、純潔を尊重し、戦争が男性不足を生じたときに限って一夫多妻を実践した。

80:3.5 (891.6) クロマニョン人は、勇敢で明敏な人種であった。それ等は、子供文化の効率的組織を維持した。両親は、これらの仕事に参加し、年上の子供等が全面的に用いられた。それぞれの子供は、洞窟の手入れ、芸術、火打ち石作成において注意深く訓練された。初期に女性は、家庭内の技術と天然農業に熟練しており、一方男性は、狩猟に長けており勇敢な戦士であった。

80:3.6 (891.7) 青色人種は、猟師であり、漁夫であり、食物採集者であった。専門の船大工であった。石斧を作り、木を切り倒し、一部は地面の下に、それに獣皮の屋根を付けた丸木小屋を組み立てた。シベリアにはまだ同様の小屋を建てる民族がいる。南方のクロマニヨン人は、一般に洞窟や岩穴に住んでいた。

80:3.7 (892.1) 夜の警備に立つ歩哨が、冬の厳しい間、洞窟の入り口で凍死することは珍しくなかった。かれらは、勇気があったが、何よりも芸術家であった。アダーム系混血者は、突然独創的な想像力に拍車をかけた。青色人種

の芸術の頂点は、より黒い肌の人種がアフリカからスペイン経由で北に来る前のおよそ1万5千年前であった。

80:3.8 (892.2) アルプスの森林は、1万5千年前、大規模に広がっていた。ヨーロッパの狩人は、世界の満足な猟場を乾燥と不毛の砂漠に変えた同じ気候の威圧により川の流域へ、また海岸へと追いやられていた。ヨーロッパの巨大な広々とした放牧地は、雨を伴う風が北に向きを変えると、森林に覆われるようになった。この大々的かつ比較的突然の気候変更は、ヨーロッパの人種を広々とした空間の狩人から牧夫へと、また多少は漁夫と土地耕作者への転職に追い立てた。

80:3.9 (892.3) これらの変化は、文化的進歩をもたらしつつあった生物学上の退歩に至った。優れた部族は、先の狩猟時代より高度の型の戦争捕虜と結婚し、劣ると思われる者達を一貫して滅ぼしてしまった。しかし、かれらは、集落を確立し、農業と商業に従事し始めると、凡庸な捕虜の多くを奴隷としてその命を救うようになった。そして、全体のクロマニヨン型を後に大いに劣化させたのがこれらの奴隷の子孫であった。文化的この退歩は、メソ

ポタミア人の最終かつ大挙の侵攻が、ヨーロッパを一掃し、すばやくクロマニヨン型と文化を併合し、白色人種の文明を開始する東からの新鮮な起動力を受けるまで続いた。

4. アンド系のヨーロッパへの侵攻

80:4.1 (892.4) アンド系が一定の流れでヨーロッパに流入する間、7度の主な侵攻があり、最後の到来者は、馬に乗り3度のうねりでやってきた。一部は、エーゲ海の島々やドナウ川渓谷を経てヨーロッパに入ったが、さらに初期のより純血の種族の大半は、ヴォルガ川とドン川の牧草地を越えた北方経路で北西のヨーロッパにわたった

80:4.2 (892.5) アンドン系の大群は、3度目と4度目の侵攻の合間にロシアの幾つもの川とバルト海経由でシベリアから来て、北からヨーロッパに入った。それらは、すぐに北アンド系部族に同化された。

80:4.3 (892.6) より純血な紫色人種の初期の拡大化は、その後の半ば軍隊的で征服好みのアンド系子孫のものよりはるかに平和的であった。アダーム系は平和を好んだ。ノヅ系は好戦的であった。これらの群体の結合は、後にサン

ギク人種と混合したように、実際の軍事上の征服をした攻撃的なアンド系を生み出した。

80:4.4 (892.7) ただし馬が、アンド系の西洋における支配を決定した漸進的要素であった。馬は、分散していくアンド系にこれまでに存在しない移動の利点を与え、アンド系騎兵の最後の集団が、全ヨーロッパを侵略し、カスピ海周辺でのすばやい進行を可能にした。アンド系の前のすべてのうねりは、非常にゆっくり動いたので、メソポタミアから長い距離でも崩壊しがちであった。しかし、これらの後のうねりは、急速に動いたので、密着した集団としてヨーロッパに達することができ、まだある程度の高い文化を保持していた。

80:4.5 (893.1) 中国とユーフラテス川地域の外の全生息界では、馬を巧みに乗りこなすアンド系騎手が、紀元前6千年と7千年に出現すると、1万年にもわたる非常に限られた文化的進歩しかなかった。アンド系騎手は、青色人種の最良の者達を吸収し、最悪を撲滅しつつロシアの原野を横断し西部に移動するにつれ、1つの民族に混合されていった。これらが、いわゆる北方人種の先祖、スカン

ジナビア、ドイツ、そして、アングロサクソン民族の祖先であった。

80:4.6 (893.2) それは、ほどなく優れた青色人種の種族が、北ヨーロッパ中でアンド系によって完全に吸収されるときであった。昔のアンドン系は、ただラプランド (そして、ある程度ブルターニュ) において独自性の外見さえ保持した。

5. アンド系の北欧の征服

80:5.1 (893.3) 北ヨーロッパ部族は、メソポタミアからロシアの南のトルキスタン領域経由の移住者の一定の流れによって絶え間なく補強され向上されており、またアンド系騎兵の最後のうねりは、ヨーロッパを一掃したときには、アンド系を受け継いだ者が、世界の全ての他の国々で見られるよりもその領域にすでに多くいた。

80:5.2 (893.4) 北アンド系の軍本部は、3千年のあいだデンマークにあった。この主要地点から、連続的な征服の波が押し進み、メソポタミアの征服者と被征服民族との最終の混合を目の当たりにする何世紀かが過ぎるにつれ、それ

が、アンド系を徐々に減少させ、白人をますます増大させていった。

80:5.3 (893.5) 青色人種が、北で吸収され、ついには南に進出した白人の騎兵侵略者に屈する一方で、前進する混血の白人部族は、クロマニヨンの頑固で長引く抵抗にあったが、優れた知力と増大し続ける生物供給源が、より平凡な人種の絶滅を容易にした。

80:5.4 (893.6) 白人と青色人種との決定的な戦いが、ソンムの谷間で争われた。ここで、最良の青色人種は、南方に移動するアンド系と激しく争い、これらのクロマニヨン人は、白人侵略者の優れた軍事戦略に屈する前の500年以上に渡り、首尾よく自分達の領土を防御した。最後のソンムの戦で勝利を収めた北の軍隊の指揮官トールは、北の白人部族の英雄になり、後にその一部の者により神として崇敬された。

80:5.5 (893.7) 最も長く存続した青色人種の要塞は、南フランスにあったが、軍事上の最後の強大な抵抗勢力は、ソンム沿いで打ち負かされた。その後の征服は、商業の浸透

と川沿いの人口的圧迫、それに劣者の容赦ない根絶を伴う優者との連続的結婚によって進行した。

80:5.6 (893.8) アンド系年長者の部族協議会が、劣性の捕虜が不適任であると宣告すると、その捕虜は、シャーマンの司祭に委ねられ、その聖職者は、捕虜を川に連れていき入念な儀式、「極楽」—致死水没—開始の儀式を施した。このようにしてヨーロッパの白人侵略者は、自分達の集団にすぐに吸収されていない遭遇する全民族を皆殺しにし、その結果青色人種は終わり—しかもすぐに—を告げた。

80:5.7 (893.9) クロマニヨンの青色人種は、現代のヨーロッパ人種の生物学上の礎を構成したが、その後の、しかも故国の精悍な征服者に吸収された形でのみ生き残った。青色人種は、ヨーロッパの白色人種の多くの逞しい特徴と体力に貢献したが、混血のヨーロッパ民族のユーモアと想像力は、アンド系に由来している。北方の白色人種をもたらすこのアンド系と青色人種の結合は、アンド系文明の即座の喪失、過渡的特徴の遅れをもたらした。つい

に、これらの北の野蛮人の潜在的優越性が現れ、現代のヨーロッパ文明となった。

80:5.8 (894.1) 発展する白色人種は、紀元前5千年までには北ドイツを含む北フランス、イギリス諸島などの北ヨーロッパの全てにおいて優位であった。中央ヨーロッパは、しばらくのあいだ青色人種と丸い頭のアンドン系に支配された。後者は、主にドナウ川渓谷に場所を定め、決して完全にはアンド系にとって代わられなかった。

6. ナイル沿いのアンド系

80:6.1 (894.2) 文化は、アンド系の最後の移動期からユーフラテス渓谷において衰退し、当面の文明の中心は、ナイル渓谷に転じた。エジプトは、地球上で最も高度な集団の本部としてメソポタミアの継承者になった。

80:6.2 (894.3) ナイル渓谷は、メソポタミア渓谷が洪水に苦しみだす少し前に洪水に苦しみ始めたが、はるかによく事を運んだ。この初期の妨げは、継続的アンド系移民の流れによってより大きく埋め合わされたので、エジプト文化は、ユーフラテス川地域に由来はするとはいえ、前進するかに見えた。しかしエジプトには異なる7集団の人

間が、メソポタミアの洪水期の紀元前5千年にはいた。1集団を除くすべてが、メソポタミアから来た。

80:6.3 (894.4) エジプトは、ユーフラテス渓谷からの最後の大移動の際、最も巧みな芸術家と職人の多くを幸いにも獲得した。これらのアンド系職人は、川の生活やその洪水、潅漑、および渇水期に精通していたので、まるで家にいるかのようであった。保護されたナイル渓谷の位置を楽しんだ。そこでは、ユーフラテス川沿いよりも敵の急襲や攻撃を受けにくかった。彼らは、エジプト人の金属加工技能に大いに拍車をかけた。ここで、アンド系職人は、黒海地域の代わりにシナイ山から来る鉄鉱石を扱った。

80:6.4 (894.5) エジプト人は、非常に早くに自分達の地域の神を国家神の複雑な体系へと組み込んだ。大規模な神学を開発し、また同様に大規模だがやっかいな聖職を有した。異なる数人の指導者が、セース系の初期の宗教の教えの残余を蘇らせようとしたが、これらの努力は短命であった。アンド系は、エジプトで最初の石の営造物を建設した。最初で最も優美な石のピラミッドは、アンド系

の建築の天才インホテップにより首相としての役目を果たしている間に建設された。前の営造物は、レンガを材料として建築されており、世界の異なる地方で多くの石の営造物が建設されていたが、これは、エジプトで最初であった。しかし建築術は、この偉大な建築家の時代から着実に下り坂となった。

80:6.5 (894.6) この輝かしい文化の時代は、ナイル沿いの内部戦争によって遮られ、やがて国は、メソポタミアがそうであったように、人を寄せつけないアラビアからの劣性部族と南からの黒人部族に侵略された。その結果、社会の進歩は、500年以上に渡り着実に衰退した。

7. 地中海の島々のアンド系

80:7.1 (895.1) メソポタミアでの文化の衰退期間中、東地中海の島々ではしばらくの間優れた文明が持続した。

80:7.2 (895.2) 紀元前1万2千年頃、アンド系の優れた部族は、クレタ島にわたった。これは、そのような優れた集団が、実に早くに定住した唯一の島であり、それは、これらの水夫の子孫が隣接する小島に拡大するおよそ2千年前であった。この集団は、北部ノヅ系のヴァン系分隊と

結婚した細い頭と、小柄のアンド系であった。それらは皆1.8メートル以下の背丈であり、本土からより大きく、しかも劣る仲間に文字通り追い出されていた。クレタ島へのこれらの移住者は、織物、金属、陶器、建材用の石の扱いに高度な技術を有していた。かれらは、文字を書き、牧夫と農業家として生き続けた。

80:7.3 (895.3) アダムソンの上背のある子孫の集団は、クレタ島定住の約2千年後、メソポタミアの北の高地の家からほぼまっすぐにやって来て、ギリシアへと北の島々に向かった。これらのギリシア人の祖先は、アダームソンとラッタの直系子孫のサートにより西方へと率いられた。

80:7.4 (895.4) 最終的にギリシアに住みついた集団は、アダームソン系の第2文明の終わりを構成した375人の選ばれた優者から成った。アダームソンのこれらの後の息子等は、新生の白色人種の当時の最も価値ある血統を有した。第一のエーデン時代以来、それらは、高い知力の系列のものであり、肉体的に最も美しい者であった。

80:7.5 (895.5) やがてギリシアとエーゲ海諸島の地域は、商業、芸術、文化の西洋の中心地としてメソポタミアとエ

ジプトに続いた。しかし、エジプトでそうであったように、実際にエーゲ海世界の人文科学のすべては、アダームソン系ギリシア人の先駆者の文化を除いては、メソポタミアから得られた。これらの後者の芸術と特質の全ては、アダームとハヴァーの最初の息子であるアダームソンとカリガスティア王子の純ノヅ系の部下の直系子孫の娘である彼の並はずれた2番目の妻の子孫の直接遺産である。ギリシア人が、かれらは、神と超人的存在からの直接子孫であるという神話の伝統を持っていたのも無理からぬことである。

80:7.6 (895.6) エーゲ海地域は、それぞれが先行するものよりはあまり精神的ではない明確な文化の5つの舞台を経験した。やがて、最後の輝かしい芸術時代は、ギリシア人の後の世代に取り込まれていた急増中の平凡なドナウの奴隷の子孫の重みの下で崩壊した。

80:7.7 (895.7) カインの子孫の母信仰が、その最高の人気に達したのがクレタ島におけるこの時代であった。この信仰は、「偉大な母」の崇拝においてハヴァーを賛美した。ハヴァーの偶像がいたる所にあった。何千もの公の神殿

が、クレタ島と小アジア中に建設された。そして、この母信仰は、イエスの地球の母マリアの賛美と崇拝を装って後に初期のキリスト教を組み入れるようになるクリストスの時代まで存続した。

80:7.8 (895.8) 紀元前6.5千年頃までにはアンド系の精神的遺産にかなりの衰退があった。アダームの子孫は、広域に渡り分散し、実際にはより昔のより人数の多い民族に吸収された。アンド系文明のこの退廃は、宗教規範の消滅と共に嘆かわしい状態にある世界の精神的に窮迫している民族を置き去りにした。

80:7.9 (896.1) 紀元前5千年までには、アダムの子孫の最も純血な3種族が、スメール、北ヨーロッパ、ギリシアにいた。全メソポタミアは、アラビアから浸透してきた混血で皮膚の黒い人種の流入によりゆっくりと悪化していった。これらの劣性民族の到来が、アンド系の生物学的、かつ文化的残留物の海外への分散の一因となった。より大胆な民族は、肥沃な三日月地帯のあちこちから島へと西側へ殺到した。これらの移住者は、穀類と野菜の両方を栽培し、また家畜も連れて行った。

80:7.10 (896.2) 進歩的なメソポタミアの強力な軍勢が、紀元前およそ5千年、ユーフラテス渓谷を立ち退きキプロス島に定住した。この文明は、約2千年後に北からの野蛮な群衆により一掃された。

80:7.11 (896.3) 別の大移民が、後のカーヘドン跡近くの地中海に定住した。また大勢のアンド系は、北アフリカからスペインに入り、後にはこれに先立ってエーゲ海諸島からイタリアに来た同胞とスイスで入り混じった。

80:7.12 (896.4) エジプトが、文化的衰退の点でメソポタミアに続くと、より優れた進歩的家族の多くは、クレタに逃がれ、その結果すでに進歩したこの文明を大いに増強させた。そして、エジプトからの劣った集団が到着し、クレタの文明を脅かした後、より洗練された家族が、ギリシアへと西に移った。

80:7.13 (896.5) ギリシア人は、偉大な教師と芸術家であっただけではなく、世界の最も偉大な貿易業者と植民地開拓者であった。ギリシア人は、自分達の芸術と商業をついには吸い込んだ劣等者の殺到に屈する前に、西へ多くの文化の前哨地設立に成功したので、初期のギリシア文明に

おける進歩の大多数は、南ヨーロッパの後の民族に固持され、またこれらのアダームソン系の混血子孫の多くが、隣接する本土の部族に組み込まれるようになった。

8. ドナウ川流域のアンドン系

80:8.1 (896.6) ユーフラテス渓谷のアンド系民族は、ヨーロッパへと北に移動し青色人種と接触し、また地中海地方へと西に移動し、サハラ砂漠の住民と南の青色人種と入り交じった生存者と混合した。白色人種のこの2つの支流は、長い間これらの中央地帯に生息していた初期のアンドン系の頭の広い山の生存者により過去にもまた現在にも、広く分離されていた。

80:8.2 (896.7) アンドンのこれらの子孫は、ヨーロッパの中央と南東のほとんどの山岳地帯に分散していた。かれらは、小アジアからの到来者に加勢を得て、そして、かなりの数でその領域を占拠した。古代のヒッタイト人は、直接アンドン系の血統に始まった。その白い肌と広い頭は、その人種の典型であった。この種族は、アブラーハムの祖先に流れており、アンド系から文化と宗教を得る傍ら、まったく異なる言語を話したその後のアブラーハ

ムのユダヤ人子孫の独特の容貌に多く寄与した。かれらの言語は、明確にアンドン系であった。

80:8.3 (897.1) イタリア、スイス、南欧の湖上に杭、もしくは丸太の埠頭を組み立てた家屋に住んでいた部族は、アフリカ人、エーゲ海の民、とりわけ、ドナウの移動する民の広がる縁であった。

80:8.4 (897.2) ドナウの民は、バルカン半島経由でヨーロッパ入りをし、ドナウ渓谷まわりでゆっくり北方へ移動していたアンドン系の農夫と牧夫であった。かれらは、谷に住むことを好み、陶器を作り土地を耕した。ドナウの民の最も北寄りの定住地は、ベルギーのリエージュにあった。これらの部族は、その文化の中心地と基点から遠くに移動したとき、急速に劣化した。最良の陶器は、初期の定住地の産物である。

80:8.5 (897.3) ドナウの民は、クレタ島からの宣教師の仕事の結果として母崇拝者になった。これらの部族は、後に小アジア海岸から船で来て、同じように母崇拝者であったアンドン系の船員集団と混合した。石造りの小屋で死者を火葬にすることは、母崇拝者にとっての習慣であった

ことから、母崇拝と死者の火葬の宗教儀式を実践する頭の広い白色人種の混血型が、中央ヨーロッパの大半に定住した。

9. 3種類の白色人種

80:9.1 (897.4) アンド系移動の終わりにかけてのヨーロッパにおける人種の混合は、次の3種類の白色人種にまとめられるようになった。

80:9.2 (897.5) 1. 北方白色人種。このいわゆる北方人種は、主として青色人種とアンド系から成るが、わずかな量のサンギクの赤色と黄色と共に、かなりの量のアンドン系血液も含んだ。その結果、北白色人種は、これらの4つの最も望ましい人間の血統を有した。しかし、最大の継承は、青色人種から来ていた。早期の典型的北方人種は、長い頭で、背が高く金髪である。しかしこの人種は、とうの昔に白人の支流のすべてに徹底的に混合されるようになった。

80:9.3 (897.6) 攻め入る北方人種に遭遇するヨーロッパの原始文化は、青色人種と混合した後退的ドナウの民のものであった。北方人種とデンマーク人の文化と、ドナウの民

とアンドン系の文化は、今日のドイツの2種類の人種集団の存在でみせているように、ライン川で出合い混合された。

80:9.4 (897.7) 北方人種は、バルト海沿岸からの琥珀貿易を続け、ドナウ渓谷の幅の広い頭を持つ人々との大々的な商業をブレンナー峠経由で確立した。ドナウの民とのこの長期にわたる接触が、これらの北部の人々を母崇拝に導き、死者の火葬は、数千年もの間スカンジナビア全体でほぼ一般的であった。ヨーロッパ中で埋葬は行われはしたものの、なぜ初期の白色人種の遺骨が見つけられないかを—石や粘土の骨壷の中には灰だけ—これが説明している。これらの白人は、居住施設も造り、洞窟には決して住んでいなかった。これに先だつクロマニョン型は、洞窟や岩穴のしっかりと封をされたところによく保存されているにも　かかわらず、白人の初期の文化に関する形跡が、なぜ僅かしかないかをも、これが説明している。まるで、ある日北ヨーロッパで退化しているドナウの民と青色人種の原始の文化が存在し、明くる日、非常に優れた白人の文化が突然現れたかのようである。

80:9.5 (897.8) 2. 中央部の白色人種。この集団は、青色人種、黄色人種、およびアンド系の種族を含んでいるが、それは支配的にアンドン系である。これらの人々は、広い頭で、浅黒く、がっしりとした体格である。かれらは、アジアに広い基盤を横たえ、頂点が東フランスを貫通する楔のように、北方人種と地中海の人種の間に押しやられている。

80:9.6 (898.1) ほぼ2万年間、アンド系は、アンドン系に中央アジアの北部へとさらに遠く押しやられてきた。紀元前3千年までには、増大する乾燥状態が、これらのアンドン系をトルキスタンへと追い立てていた。南方へのこのアンドン系の前進は、カスピ海と黒海周辺で分裂し、1千年以上続き、バルカン諸国とウクライナの双方を経てヨーロッパに浸透した。この侵略は、残るアダームソンの子孫の集団を含み、侵入期間の後半にセース系聖職者の子孫の多くと同様に相当数のイランのアンド系を連れてきた。

80:9.7 (898.2) アンドン系の西部への猛攻は、紀元前2,500年までにヨーロッパに達した。そしてこのトルキスタンの丘

の野蛮人による全メソポタミア、小アジア、ドナウ川盆地のこの侵略は、その時までの文化に最も重大かつ永続的な退行をもたらした。これらの侵略者は、特徴的にそれ以来アルプス人種のままで残ってきた中央ヨーロッパ人の特徴を確実にアンドン系化させた。

80:9.8 (898.3) 3. 南方の白色人種。この褐色の地中海人種は、北の白色人種よりは少な目のアンドン系の特徴をもつと同時に、アンド系と青色人種の混合から成った。またこの集団は、サハラ砂漠の住民を通してのかなりの量の二次サンギクの血液を取り込んだ。後代になると、白色人種のこの南の集団は、東地中海からの強いアンド系分子によって生気を吹き込まれた。

80:9.9 (898.4) 地中海沿岸地帯は、しかしながら、紀元前2,500年の遊牧民の大々的な侵入時代までアンド系に浸透されるようにはならなかった。陸上交通と貿易は、大人数の遊牧民が、東地中海地方に侵入する数世紀の間、ほぼ中断された。陸路の旅のこの障害が、海上交通と貿易の大いなる拡大をもたらした。地中海生まれの商業は、およそ4,500年前に盛んであった。そして、海上交通のこの

発展が、地中海盆地全体の沿岸地域の中でのアンド系子孫の突然の拡大をもたらした。

80:9.10 (898.5) これらの人種混合は、最も強く混合された南ヨーロッパ人種のための基盤を据えた。そして、この時以来、この人種は、一層の混合を、とりわけアラビアの青色-黄色-アンド系民族との混合を経験した。事実上、この地中海の人種は、実際には別々の型のように識別できなくなるほどに周囲の民族と自由に混合されているが、その仲間は、一般的には、背が低く、頭が長く、黒髪である。

80:9.11 (898.61) アンド系は、北で戦争と婚姻を経て、青色人種を全滅させたが、青色人種は、南ではかなりの数で生き残った。バスク人とベルベル人は、この人種の2支流の生存を意味するが、これらの民族さえ完全にサハラ砂漠の住民と混合された。

80:9.12 (898.7) これが、紀元前3千年頃の中央ヨーロッパで示された人種混合の絵である。一部のアダームの不履行にもかかわらず、より高度の型が混合したのであった。

80:9.13 (898.8) これらは、来たる青銅器時代に重なり合う新石器時代の期間であった。青銅器時代は、スカンジナビアでは母崇拝と結びついていた。新石器時代は、南フランスとスペインでは太陽崇拝に結びついていた。これは、円形の、屋根のない太陽寺院の建築の時代であった。ヨーロッパの白色人種は、太陽への象徴として大きな石を楽しんで配置して活気に満ちた建築者であり、その後代の子孫もストーンヘンジでほとんど同じようにした。太陽崇拝の人気は、これが、南ヨーロッパの長い農業期間であったことを示す。

80:9.14 (899.1) この比較的最近の太陽崇拝時代の迷信は、今でもブルターニュの習俗の中に存続している。これらのブルトン人は、1,500年以上キリスト教化されているが、悪の眼差しを避けるために新石器時代の魔除けを今もなお継続している。彼らは、稲妻から身を守るために煙突にまだ雷石を保っている。ブルトン人はスカンジナビアの北方人種と決して交わらなかった。ブルトン人は、西ヨーロッパの最初のアンドン系住民の生存者であり、地中海の群体と交わった。

80:9.15 (899.2) だが大胆にも、白人民族を北方人種、アルプス人種、および地中海人種として分類することは誤りである。そのような分類を容認するには、あまりに多くの混合があり過ぎた。かなり明確な白色人種のそのような分類区分が、一時的にあったが、以来、広範囲の混合が起こり、いかなる明確さをもってしても、これらの区分を特定することは、もはや可能ではない。古代社会集団は、現在の北米居住民のように、紀元前3,000年においてさえ1人種だけではなかった。

80:9.16 (899.3) 5千年間のこのヨーロッパ文化は、成長し続け、ある程度まで混合し続けた。しかし、言語の壁が、異なる西洋諸国の完全な交換を阻んだ。この文化は、前の世紀に北アメリカの全世界の住民と調和するためのその最良の機会を経験している。そして、その大陸の未来は、 維持されている社会的文化の水準にばかりではなく、その現在の、また将来の人々に入ることが許されている人種的要素の質により決定されるであろう。

80:9.17 (899.4) [ネバドンの大天使による提示]

論文 81
現代の文明の発展

81:0.1 (900.1) 人類の基本的生物進化は、カリガスティアとアダームの任務に示された世界改善のための計画の失敗にもかかわらず、人間の進歩と人種の発展の段階において民族を前進させ続けた。進化は、遅らせることはできるが、それを止めることはできない。

81:0.2 (900.2) 紫色人種の勢力は、計画したよりも少数ではあるが、その以前の全存在のほぼ百万年に渡る人類の進歩をはるかに超えたアダームの時代以来の文明の進歩を生み出した。

1. 文明の揺りかご

81:1.1 (900.3) 文明の揺りかごは、アダームの時代のおよそ3万5千年後に、ナイル渓谷の東部からわずかに北へとアラビア北部を越え、メソポタミアまわりでトルキスタンへ伸びる南西アジアにあった。また、気候は、その領域の文明確立における決定的要素であった。

81:1.2 (900.4) 彼らのヨーロッパ入りを拡大された地中海で妨げ、トルキスタンへの北と東の移動の流れを逸らし、ア

ダーム系の初期の移動を終了させたのが、北アフリカと西アジアにおける気候と地質の大々的な変化であった。これらの土地の隆起の完了と関連する気候変化の時期、すなわち紀元前1万5千年頃までには、文明は、アジアの東の山々により、またヨーロッパの西に広がる森林によりいまだに閉じ込められたアンド系の文化の発酵と生物学的蓄えを除いては、世界的規模で行き詰まっていた。

81:1.3 (900.5) 気候の展開が、いま他の総ての努力が成し得なかったことを達成しようとしており、すなわちユーラシア人が、牧畜や農耕のより高度な求め(職業)のために狩猟の放棄を強制していた。進化は、遅いかもしれないが、それは非常に効果的である。

81:1.4 (900.6) 早期の農業家は、一般的に奴隷をよく使役していたことから、農夫は、かつて猟師と牧夫の両者に軽蔑された。土地耕作は、長い間、卑しいこととしてみなされた。それゆえに、土を扱う労働という考えは、呪いであるのだが、すべての天恵の中でそれは最もすばらしいのである。カインとハーベルの時代においてでさえ、遊牧生活の生贄は、農業の捧げ物より高い評価があった。

81:1.5 (900.7) 人は、通常、牧夫時代を変遷し猟師から農夫になり、これは、アンド系の間でもそうであったが、気候の必然性からくる進化上の強制は、しばしば全部族を直接に猟師から成功する農夫へと移らせる。しかし狩猟から農業への速やかなこの移行現象は、紫色群体と高度の人種混合のあったそれらの領域にのみ起こった。

81:1.6 (901.1) 進化的民族(とりわけ中国人)は、偶然に湿った種子、または故人への食物として墓に置かれた種子の発芽の観測を経験し、種子を撒くことや作物を育てることを学んだ。アンド系は、アジアの南西地域の至る所で、肥よくな川底と、また隣接する平野沿いに第二の園の境界内での農耕と園芸を主要な仕事としていた先祖から引き継いだ改良農業技術を実施していた。

81:1.7 (901.2) アダームの子孫は、何千年間も、園で改良された通りの小麦と大麦をメソポタミア上流の境界の高地の至る所で育てていた。アダームとアダームソンの子孫は、ここで出会い、取り引きをし、交流した。

81:1.8 (901.3) 食習慣でそれほどまでにかなりの人類を雑食性にしたのが、生活条件でのこれらの強制的変化であっ

た。そして、小麦、米、野菜と家畜の肉との摂取の組み合わせが、これらの古代民族の健康と活力に大きな前進を印した。

2. 文明の道具

81:2.1 (901.4) 文化の発展は、文明の道具の開発に基づいた。そして、未開状態からの向上で人が利用した道具は、人力を課せられたより高度の仕事の遂行のために自由にするという程度にまで効を奏した。

81:2.2 (901.5) 社会に芽生え始めた文化と始まりつつある進歩の現代の情勢の真っ只中に今生きている人は、つまり、社会と文明についての考えに割く時間をもたない人は、初期の祖先には、考え深い反省や社会的な考えに当て得る暇もほとんどなかったという事実を見過ごしてはならない。

81:2.3 (901.6) 人間の文明における最初の4つの大いなる進歩は：

81:2.4 (901.7) 1. 火の扱いに慣れること

81:2.5 (901.8) 2. 動物の家畜化

81:2.6 (901.9) 3. 捕虜の奴隷化

81:2.7 (901.10) 4. 私財

81:2.8 (901.11) 火、すなわち最初の重要な発見は、科学世界の扉を徐々に開錠はしたものの、この点については原始人にとってはほとんど価値はなかった。原始人は、ありふれた現象についての説明として自然的要因を認めることを拒んだ。

81:2.9 (901.12) 火がどこから来たかと尋ねられると、アンドンと火打ち石についての簡単な話は、やがて何人かのプロメテウスが、天からそれをいかにして盗んだかという伝説とすり替えられた。古代人は、個人の理解の範疇にではなく、すべての自然現象に超自然的説明を求めた。そして多くの現代人が、これをし続けている。いわゆる自然現象の非人格化は、長い時を必要とし、それはまだ完成されていない。しかし、率直で、正直で、恐れを知らない真の理由への探究は、現代科学を生んだ。それは、占星術を天文学へ、錬金術を化学へ、魔術を薬へと変えた。

81:2.10 (901.13) 前機械時代に自分でそれをせずに仕事を成し遂げることができた唯一の方法は、動物の使用であった。動物の家畜化は、人に生きた道具を、農業、輸送の両方のための道を用意する道具の賢明な使用法を与えた。そして、人は、これらの動物がいなければ、その原始の生活状態からその後の文明水準に上昇できなかったかもしれない。

81:2.11 (902.1) 家畜化に最も適した動物の大半は、アジアで、特に中央から南西の領域で見かけられた。これが、文明が世界の他の場所よりもその地方でより速く進歩した1つの理由であった。動物の多くは、前に二度飼いならされていたし、アンド系の時代にもう一度飼いならされた。しかし犬は、大昔に青色人種に採り入れられてからずっと漁師と共にいた。

81:2.12 (902.2) トルキスタンのアンド系が、大規模に馬を飼いならす最初の民族であり、そしてこれが、なぜその文化が非常に長く優勢であるかというもう一つの理由である。メソポタミア、トルキスタン、および中国の農夫は、紀元前5,000年までには羊、ヤギ、雌牛、ラクダ、

馬、家禽、および象を育成し始めた。かれらは、役畜として雄牛、ラクダ、馬、および野牛を使った。人は、ある時には自身が荷物運搬用動物であった。青色人種のある支配者は、かつてその植民地に10万人の荷物運搬者人を抱えていた。

81:2.13 (902.3) 奴隷制度と土地の個人所有権が、農業とともに到来した。奴隷制度は、主人の生活水準を上げ、社会的な文化により多くの余暇を提供した。

81:2.14 (902.4) 未開人は、自然の奴隷であるが、科学文明は、増大する自由をゆっくりと人類に授与している。人は、動物、火、風、水、電気、および未知のエネルギー源を通して根気強く不断の苦労への必要性から自身を解放してきたし、これからも続けるであろう。実りある機械の発明により生じた一過性の問題にもかかわらず、そのような機械発明から得られる最大利益は計り知れない。文明は、人が考え、計画し、事をするに当たりより新しく、より良い方法を想像する余裕をもつまでは、決して栄えることはできず、ましてや確立されることはない。

81:2.15 (902.5) 人は、まず単に避難所を占有した。つまり、岩棚の下に、または洞窟の中に住んでいた。次に、木や石のような自然素材を家族用の小屋の作成に適合させた。最後に、住宅建築の創造的段階に入った。すなわち、煉瓦や他の建材の製造を習得した。

81:2.16 (902.6) トルキスタンの高地民族は、アメリカの開拓移住者の初期の丸太小屋によく似た木造の家を建てる最も現代的な最初の人種であった。平原の至るところで人間の住居は、煉瓦で、後には焼かれた煉瓦で造られた。

81:2.17 (902.7) 昔の川の人種は、地面に円形に高い棒を立てて小屋を造った。葦を横に絡ませた小屋の骨組みを造り、上端で一纏めにし、創作物全体は、逆さにした篭に似せてあった。この構造物は、日光で乾燥され、そこで粘土を塗ることができ、風雨に耐えられる非常に実用的な住居を作られるのであった。

81:2.18 (902.8) 独自に始まった篭編みについてのその後のいろいろの思いつきは、これらの初期の小屋からであった。1集団での陶器を作る思いつきは、これらの骨組みに湿った粘土を塗りつける効果の観測から生まれた。陶器を

焼くことで堅くする習慣は、これらの粘土で覆われた原始の小屋の1つが偶然燃えたときに発見された。往時の芸術は、しばしば初期の民族の日常生活での偶然の出来事から得られた。少なくとも、これは人類の進化過程についてもアダームの到着までほぼ当てはまっていた。

81:2.19 (903.1) 陶器は、ほぼ50万年前に王子の部下により最初に導入されていたものの、土器の作成は、実際には15万年以上も中断していた。湾岸沿いの前スメール人のノヅ系だけが、土器を作成し続けた。陶器作成の芸術は、アダームの時代に蘇った。この芸術の普及は、アフリカ、アラビア、中央アジアの砂漠地帯の拡大と同時であり、それは、技術向上の連続する高まりの中でメソポタミアから東半球へと広がった。

81:2.20 (903.2) 陶器もしくは他の芸術の工程により、いつもアンド系時代のこれらの文明を辿ることができるというわけではない。人間の進化の平坦な過程は、ダラマティアとエーデンの両体制により途方もなく複雑になった。後の壷と道具の方が、より純血なアンド系民族の早期の製品よりも粗悪であるということがしばしばある。

3. 都市、製造、交易

81:3.1 (903.3) 紀元前1万2千年頃に始まるトルキスタンの豊かで広々とした草原の狩り場と放牧地の気候の破壊は、それらの領域の人々が新形式の産業と粗雑な製造に頼らざるを得なくした。一部は、飼い慣らされた動物の群れの飼育に転じたり、他のものは、農業者か水生食物の採集者になったりしたが、より高度のアンド系識者の型は、通商と製造に従事することを選んだ。一産業の発展に専心することが、部族全体の慣習になりさえした。ナイル渓谷からヒンヅークシュ山脈まで、それにガンジス川から黄河まで、優れた部族の主要な家業は、交易を兼業とする土の耕作になった。

81:3.2 (903.4) 通商と原材料からの様々な商品製造の増加は、文化と文明の芸術を拡大に非常に影響があった初期の、幾分平和的共同体を生み出す直接的な助けとなっていた。大規模な世界貿易時代に先立つ社会的共同体は、部族—拡大された家族集団—であった。通商は、異なる人間の種類を仲間意識へと至らせ、その結果、文化間のより迅速な交雑受精をもたらした。

81:3.3 (903.5) およそ1万2千年前、独立都市の時代が明けていた。これらの原始の交易と製造都市は、つねに農業と牧畜地帯に囲まれていた。産業が、生活水準の向上により促進されたことは本当である一方で、初期の都市生活の改良に関し誤解があってはならない。初期の人種は、あまり清楚ではなく、原始の平均的地域社会は、単なる土と廃物の蓄積の結果、25年ごとに30センチメートルから60センチメートル上昇した。焼かれていない泥を固めた小屋は長続きせず、またその古い廃墟の上に新住居を造るのが習慣であったことから、昔のこれらの特定の都市は、周囲の地面より非常に速く上昇した。

81:3.4 (903.6) 広範囲の金属利用は、初期の産業と通商の都市におけるこの時代の特徴であった。人は、紀元前9,000年以前のトルキスタンの青銅文化をすでに見つけ、アンド系は、早くから鉄、金、および銅の扱いを身につけた。しかし状況は、高度な文明の中心地からの遠くにおいては、非常に異なっていた。石器時代、青銅時代、および鉄器時代のような明確な時代区分はなかった。3時代全てが、同時に異なる場所に存在した。

81:3.5 (904.1) 金は、人が探した最初の金属であった。当初、それは、扱いが簡単で単に装飾品として用いられた。銅が、その次に用いられたが、より固い青銅を作るために錫と混合されるまでは大規模ではなかった。トルキスタンのアダームソン系の1人が、トルキスタン高地の銅山にたまたま錫堆積物に並列してあったことから青銅を作るための銅と錫を混ぜる発見をした。

81:3.6 (904.2) 天然のままの製造と初期産業の台頭に伴い、商業は急速に文化的文明の普及に最も強い影響を与えた。陸と海とによる流通経路の開拓が、文明の融合と同様に、大いに旅と文化の混合を容易にした。馬は、紀元前５千年まで、文明的または半文明的である土地の至るところで一般的に用いられていた。後の人種は、飼い慣らされた馬だけでなく、様々な種類の荷車や戦車も持っていた。車輪は、とうの昔に使用されていたが、今や相当に整備された車輌が、交易と戦争で一般的に採用されるようにった。

81:3.7 (904.3) 旅商人や放浪する探検家が、他のすべての併合的影響よりも、はるかに歴史的文明を前進させたのであ

った。後の宗教により助成される軍事的征服、植民地化、および伝道活動もまた、文化普及の要因であった。しかしこれらは、総て急速に発展する技術産業と科学産業によって加速された通商関係に次ぐものであった。

81:3.8 (904.4) 人類へのアダームの血統注入は、文明の速度を速めるだけでなく、やがてユーラシアと北アフリカが、急速に増加するアンド系の混血子孫に占領されるという結果により冒険と探検への彼らの性癖を大いに刺激した。

4. 混血人種

81:4.1 (904.5) 人類の混合人種は、歴史上の時代の夜明けになると全ユーラシア、北アフリカ、太平洋の諸島に広がった。今日のこれらの人種は、ユランチアの基本的な5種類の人種の血統の混合と再混合から生まれた。

81:4.2 (904.6) ユランチアのそれぞれの人種は、一定の物理的特性によって識別された。アダーム系とノヅ系は長い頭であった。アンドン系は広い頭であった。サンギク人種は、ふつうの頭の大きさで、黄色人種と青色人種は、広い頭の傾向にあった。青色人種が、アンドン系と混合す

ると明らかに広い頭であった。準サンギク人種は、普通か、長い頭であった。

81:4.3 (904.7) これらの頭蓋骨の寸法は、人種の起源を解読するのに実用的であるが、概して骸骨の方がはるかに信頼できる。ユランチア人種の初期の進化には、本来異なる5つの骨組みの型があった。

81:4.4 (904.8) 1. アンドン系、ユランチア原住民

81:4.5 (904.9) 2. 第一サンギク系、赤色人種、黄色人種、青色人種

81:4.6 (904.10) 3. 二次サンギク系、橙色人種、緑色人種、藍色人種

81:4.7 (904.11) 4. ノヅ系、ダラマティア系子孫

81:4.8 (904.12) 5. アダーム系、紫色人種

81:4.9 (904.13) 継続的混合は、これらの5大の人種集団が大規模に混ざり合うと、サンギク系の遺伝的優勢によってアンドン系の型をぼかす傾向があった。ラップ人とエスキモー人は、アンドン系とサンギク系青色人種の混合であ

る。それらの骨格構造は、土着のアンドン型の存続に最も近い。しかし、アダーム系とノヅ系は、他の人種とそれほどまでに混合されるようになったので、単に一般化された白色人種の系列としてのみ見つけられる。

81:4.10 (905.1) したがって、ここ2万年にわたる人骨が掘り出されるとき、一般的に言って、本来の5つの型を区別することは、明らかに不可能であろう。そのような骨格構造の研究は、現在人類は、およそ3分割されるということが明らかになるであろう。

81:4.11 (905.2) 1. 白色人種—ノヅ系とアダーム系血統の混合であるアンド系、さらに一次と(いくらかの)二次サンギクによる混合と、かなりのアンドン系との掛け合わせによってさらに変更された。西洋の白色人種は、一部のインド人とトゥラン民族と共にこの集団に含まれる。この区分の統一因子は、アンド系遺産の比率がより大きいか、より少ないかである。

81:4.12 (905.3) 2. モンゴル人—第一サンギク型、最初の赤色、黄色、青色人種を含む。中国人とアメリカ原住民は、この集団に属する。ヨーロッパでは、モンゴル人型は、二

次サンギクとアンドン系の混血によって、さらにはアンド系注入によって変更された。マレー人と他のインドネシア民族は、高い割合の二次サンギクの血液を有するもののこの種別に含まれている。

81:4.13 (905.4) 3. ネグロイド—二次サンギク型、それは、最初は橙色、緑色、藍色の人種を含んだ。これは、黒人が最も良い例証の型であり、アフリカ、インド、インドネシアの二次サンギク系が居住したどこにでも見つけられるであろう。

81:4.14 (905.5) 北部中国には、多少の白色人種系の混合とモンゴル系の型がある。レヴァント地方では、白色人種系とネグロイドが混合した。インドでは、南米でそうであるように、全3種類の型が相当する。そして、生残する3種類の型の骨格の特徴は、いまだに存続しており、現代人類のその後の祖先の識別を助ける。

5. 文化的社会

81:5.1 (905.6) 生物進化と文化的文明は、必ずしも関連していない。いかなる時代の生物進化も、文化の退廃のその真っ只中で妨害されずに続くかもしれない。しかし長期に

渡る人間の歴史が概観されるとき、進化と文化は、最終的には原因と結果として関連づけられるようになるということに気づくであろう。進化は、文化の不在において進むかもしれないが、文化的文明は、先行する人種的進行の適切な背景なしでは繁栄しない。アダームとハヴァーは、人間社会の進歩に馴染まない何の文明技術も導入しなかったが、アダームの遺伝子をもつ者達は、生来備わっている人種の能力を高め、経済開発と産業発展を加速した。アダームの贈与は、人種の脳の力を向上させ、その結果、自然的発展過程を大いに早めた。

81:5.2 (905.7) 人類は、農業、動物の家畜化、それに改良された建築物によって生きるための絶え間ない苦闘の最悪状態から徐々に脱出し、生活の過程を有利にするあらゆるものを探し回り始めた。これは、ますますの、しかも常に高い物質的安らぎの水準のための努力の始まりであった。人は、製造と産業を通して必滅の人生の快楽の中味を徐々に増大させている。

81:5.3 (906.1) にもかかわらず、文化的社会は、すべての人が自由な構成員であり、完全な平等をもって生まれてくる

引き継がれた特権のすばらしくかつ慈悲深い同好会ではない。それは、むしろ、その子供とまたその孫がその後の時代に生き、かつ前進するかもしれない世界をより良い場所にするために努力するそれらの労働者のうちの高潔な者だけを構成員として認める地球の労働者の高められ、絶えず前進する同業組合なのである。文明のこの同業組合は、高価な入場料を取り立て、厳格で厳しい規律を強要し、すべての反対者と非協調者に重刑を課し、一方では共通する危険と人種的危難に対し強化された防衛手段を除いては、わずかな個人的認可または特権を与える。

81:5.4 (906.2) 社会的な繋がりは、人間が有益であるということを学んだ生存保険の形態である。したがって、ほとんどの個人は、社会がこの機能強化された集団保護の見返りにその構成員から取り立てる自己犠牲や個人の自由の削減を保険料として支払うことを望むのである。要するに、現代社会の仕組みは、人類の早期の経験を特徴づけたひどい反社会的状態への逆戻りに対する幾分かの保証と保護を提供するように設計された試行錯誤の保険案である。

81:5.5 (906.3) 社会は、その結果、制度を介しての公民の自由、資本と発明を介しての経済的自由、文化を介しての社会的自由、警察の取り締まりを介しての暴力からの自由を保証するための協力的枠組となる。

81:5.6 (906.4) 力は、権利を作り上げないかもしれないが、それは、次の各世代の一般的に認識された権利を行使する。政府の主要任務は、権利の定義、階級差の正当かつ公平な調整、法規則の下における機会均等の行使である。あらゆる人間の権利は、社会的な義務に関連づけられる。集団の特権は、集団への奉仕のために厳しく要求する保険料の完全な支払いを失することなく請求する保険の仕組みである。そして、性欲への傾向の規制を含めて集団の権利は、個人の権利と同様に保護されなければならない。

81:5.7 (906.5) 集団規則を前提とする自由は、社会発展の正当な目標である。無制限の自由は、不安定で気紛れな人間の心の空しく非現実的な夢である。

6. 文明の維持

81:6.1 (906.6) 生物進化が上向きに進行する一方で、文化の発展の多くが、ユーフラテス渓谷から波のように伝播し、その波は、やがてアダームの純血の全後代のもの達が旅立ち、アジアとヨーロッパの文明を豊かにするまで時の経過と共に逐次弱まっていった。人種は、完全に混合されたというわけではないが、その文明は、かなりの程度まで混合した。文化は、ゆっくりと世界中に広まった。そして、今日この文明は、文化の新たな源も存在せず、文明発展の鈍い進行を鼓舞したり刺激する一人のアンド系もいないのであるから、維持と育成がなされなければならない。

81:6.2 (906.7) ユランチアで現在進展しつつある文明は、次の要因から始まり、また現在それに基づいている。

81:6.3 (906.8) 1. 自然情況。物質文明の特徴と範囲は、利用可能な天然資源に大きく決定される。気候、天候、および数多くの物理状態は、文化の発展要因である。

81:6.4 (907.1) アンド系時代の始まりには、大規模で肥沃の広々とした狩猟地域が、世界にはたった2個所しかなかった。1つは、北アメリカにあり、そこにはアメリカ原

住民が一面に広がっていた。他方は、トルキスタンの北にあり、アンド系黄色人種が、部分的に陣取っていた。南西アジアでの優れた文化の発展における決定的要因は、人種と気候であった。アンド系は、偉大な民族であったものの、その文明の進路決定の決定的要因は、イラン、トルキスタン、新疆での増大する乾燥であり、それが、生産性の落ちていく肥沃な土地から生計を捻りとる新たで高度な方法の発明と導入をかれらに強いた。

81:6.5 (907.2) 大陸の形状と他の土地配列の状況は、平和か戦争かの決定に非常に影響を及ぼす。ユランチア人は、北アメリカの民族が享受されたような—事実上、四方を広大な海洋に保護されている—連続的かつ邪魔のない発展の好機にはあまり恵まれなかった。

81:6.6 (907.3) 2. 資本財。文化は、貧困状況のもとでは決して発展しない。余暇は、文明進歩に不可欠である。個人の道徳的、精神的価値の特徴は、物質的な富を欠いても得られるかもしれないが、文化的文明は、大望に結合される余暇を促進するその物質的繁栄条件からしか得られない。

81:6.7 (907.4) ユランチアにおける原始時代の生活は、真剣かつ地味なものであった。人類が、熱帯の健康的な気候に向かって絶えず漂流する傾向にあったのは、この絶え間ない戦いと果てしない労苦から逃げることであった。暖かい区域での居住が、生存のための激しい戦いからの何らかの和らぎを与えたが、こうして容易さを求めた人種と部族は、文明の前進のために労せずして得た余暇をほとんど活用しなかった。社会的進歩は、知的な労役により減少された努力と短縮された労働日数で土地からの暮らしをもぎとる方法を身につけるというそれらの人種の考えや計画から必然的にもたらされ、その結果、もらって当然の、しかも有益な余暇の幅を味わうことができた。

81:6.8 (907.5) 3. 科学知識。文明の物質的局面は、科学的資料の蓄積を常に待ち受けなければならない。人が、弓矢の発見と効力のための動物の活用から始まり、風と水を役立てる方法を学び、次に蒸気と電気の使用するようになるまでには長い時間がかかった。しかし文明の道具は、ゆっくりと改善された。機織り、陶器、動物の家畜化、金属加工、書くことと印刷の時代が続いた。

81:6.9 (907.6) 知識は、力である。発明は、つねに世界規模の文化発展の促進に先行する。科学と発明は、とりわけ印刷機から恩恵を得て、しかも、これらのすべての文化的、発明的活動の相互作用が、文化の振興速度に途方もないほどに拍車をかけた。

81:6.10 (907.7) 科学は、人に数学の新言語を話すことを教え、厳格な精度に沿っての考えを教え込む。科学は、また誤りの除去により哲学を安定させるが、それは、同時に迷信の破壊により宗教を清める。

81:6.11 (907.8) 4. 人的資源。人力は、文明の普及に不可欠である。すべての条件が同じ場合、多くの人々は、小規模の人種の文明を支配するであろう。それ故に、一定程度にまで数を増やさないということは、国家の運命の完全な実現を阻むが、一層の人口増加には、自滅的な時点がやってくる。人間対陸の通常比率の最適条件を超える数の増加は、生活水準の低下か、あるいは平和的進入か軍事征服、すなわち、力ずくの占領による領土境界の即座の拡大を意味する。

81:6.12 (908.1) 人は、時おり戦争の破壊行為に衝撃を受けるが、社会と道徳発展の十分な機会を生むためには多くの死すべき者を生産する必要性を認めるべきである。惑星のそのような出産率には、人口過剰の深刻な問題が、すぐに生じる。ほとんどの棲息世界は小さい。ユランチアは、平均的であり、恐らくわずかに小型であろう。国の人口の最上の安定化は、文化を高め、戦争を防ぐ。そして増大をいつ止めるかを知ることが、賢明な国というものである。

81:6.13 (908.2) だが、最も豊かな天然堆積物と最も高度な機械設備をもつ大陸は、もしその人々の知力が下降線をたどるなら、あまり進歩しないであろう。知識は教育によって得られるが、真の文化に不可欠である分別は、本質的に知的な男女による経験を通じてのみ保証され得る。そのような民族は、経験から学ぶことができる。それらは真に賢明になれるかもしれない。

81:6.14 (908.3) 5. 物質資源の有効性。天然資源、科学知識、資本財、人間の可能性の利用において発揮される知恵にかなり依存している。早期の文明における主な要因は、賢

明で社会的に優れた者が奮った力であった。原始人は、優れた同時代人に文明を文字通り押しつけられた。十分に組織化された優れた少数が、主にこの世界を統治した。

81:6.15 (908.4) 力は、正義を引き起こさないかもしれないが、力は、今存在すること、そして歴史にあったことを作る。最近、ユランチアは、進んで力と正義の倫理を討論する社会状況に達した。

81:6.16 (908.5) 6. 言語の有効性。文明の普及は、言語を待たなければならない。存続し進歩する言語は、文明的な考えと計画の拡大を保証する。初期における重要な進歩は、言語が果たした。現代は、進化する考えの表現を容易にするすばらしい言語の一層の発達が必要である。

81:6.17 (908.6) 言語は、団体組織、つまり地域の各団体が、それぞれの言葉の交換体系を発展させることで発達した。。言語は、身振り、合図、叫び、擬声音、抑揚、および口調を通してその後のアルファベットの発声へと進歩した。言語は、人の最もすばらしく、そして実用的な思考の道具であるが、社会集団が幾らかの余暇を取得す

るまでは決して栄えなかった。言語をもてあそぶ傾向は、新しい言葉—俗語—を生み出す。多数の者が、俗語を取り入れるならば、慣用が、それを言語の構成要素にする。方言の起源は、家族集団内での「幼児語」が欲しいままにされることで例証されている。

81:6.18 (908.7) 言語の違いは、常に平和拡大への大きな障害であった。方言の克服は、人種全体、1大陸、または全世界に渡る文化普及に先行しなければならない。世界共通語は、平和を促進し、文化を保証し、幸福を増大させる。世界の言語が、少数に減少するときでさえ、主要な文化的民族による支配は、世界的な平和と繁栄の達成に強い影響を及ぼす。

81:6.19 (908.8) ユランチアでは国際的言語を生み出すことに向けての進歩は、あまりみられないが、国際間の商業上の交易の確立によって多くのことが達成された。これらの国際関係のすべてが、言語、貿易、芸術、科学、競技、または宗教にかかわるか否かに関係なく、育成されなければならない。

81:6.20 (909.1) 7. 機械装置の有効性。文明の進歩は、道具、機械、および流通経路の開発と所有に直接的に関わりがある。改良された道具、精巧で効率的な機械は、前進する文明の舞台で競い合う集団の生存を左右する。

81:6.21 (909.2) 初期において、耕作に適用された唯一の労力は、人力であった。雄牛を人の代わりに用いることは、人を無職へと放り投げるのであるがゆえに長い間の葛藤であった。後に、機械が、人に取り替わるようになり、その上、人力をより重要な課題達成のために自由にすることから、そうしたあらゆる進歩が、直接社会の進歩に寄与している。

81:6.22 (909.3) 知恵に導かれる科学は、人にとっての偉大な社会解放者になるかもしれない。機械時代は、省力化への新型機械の速すぎる発明の結果起こる突然の大勢の雇用損失失業から生まれる過渡期における困難さに対し、首尾のよい適応のための賢明な方法と十分な技術を発明するには知的水準が低過ぎる国に限り悲惨であるとはっきりと示すことができる。

81:6.23 (909.4) 8. 文明の先駆者の人格。社会的遺産は、人が、すべての先んじる者や文化と知識全体に何かを貢献した者の成果の上に立つことを可能にする。次世代への文化の松明を伝えるこの仕事において、家庭は、常に基盤的制度になるであろう。複雑で非常に組織化された社会においては遊びと社会生活が、次にくるし、最後に等しく不可欠な状態で学校がくる。

81:6.24 (909.5) 昆虫は、生活—実に非常に限られ、しかも完全に本能的な生存—にむけて十分に教えられ備えができて生まれてくる。人間の乳児は、教育なしで生まれる。それ故に、人は、若い世代の教育指導を制御することにより文明の進化過程を大きく変更する力を持っている。

81:6.25 (909.6) 文明推進と文化の進歩に及ぼす20世紀最大の影響は、世界旅行の著しい増加と伝達方法の比類なき改良である。しかし、教育改善は、拡大する社会構造と歩調を揃えてこなかった。倫理に対する現代の認識も、より純粋に知的で科学的な線に沿う成長に一致して開発されてはいない。そして現代文明は、精神的発達と家族制度の保護に行き詰まっている。

81:6.26 (909.7) 9. 人種の理想。1世代の理想は、次世代の子孫のための運命の方向を切り開く。社会指導者の質は、文明が前進するか後退するかを決定するであろう。1世代の家庭、教会、学校は、後続世代の特徴的傾向を運命づける。人種、もしくは国の道徳的、かつ精神的勢いは、その文明の文化的速度を大きく決定する。

81:6.27 (909.8) 理想は、社会の流れの源泉を高める。たとえどのような圧力手法、あるいは方向制御が駆使されようとも、いかなる流れもその水源より高くは上がらない。文化的文明の最たる物質的側面の駆動力は、最少に物質的な社会的成就にある。知性は文明の仕組みを制御するかもしれないし、知恵がそれを導くかもしれないが、精神的理想は、人間文化を1つの水準から別の水準へと真に向上させ、前進させるエネルギーである。

81:6.28 (910.1) 生活は、最初存在のための苦闘であった。現在は生活水準のため。次にそれは、思索の特質、つまり人間の来るべき地球の目標のためとなるであろう。

81:6.29 (910.2) 10. 専門家の連携。文明は、早期の分業により、またその後の専門化の必然的結果により大いに進め

られてきた。文明は、現在、専門家の有効な連携に依存している。社会が拡大するとき、様々な専門家を引き寄せる何らかの方法を見つけなければならない。

81:6.30 (910.3) 社会、芸術、技術、それに産業の専門家は、技能や器用さを増やし続けるであろう。そして能力のこの多様化と雇用の不同性は、もし連携と協力の効果的方法が開発されなければ、ついには人間社会を弱め崩壊させるであろう。しかし、そのような創作力と専門化を可能にする知性は、急速な発明力の成長や加速度的文化の拡大から生じるすべての問題に対し、適切な制御と調整手段の工夫において完全に有能であるべきである。

81:6.31 (910.4) 11. 場所を見つける装置。社会開発の次の時代は、絶えず増加し拡大する専門化のより良く、より効果的な協力と連携が取り入れられるであろう。そして、個人を適切な雇用に方向づけるための何らかの方法が、労働の多様化につれ工夫されなければならない。機械は、ユランチアの文明的民族の間の失業の唯一の原因ではない。経済の複雑さと産業の、そして職業専門化の恒常的な伸びが、作業配置の問題に拍車をかける。

81:6.32 (910.5) 仕事に向けて人を訓練するだけでは、十分ではない。場所発見の効率的方法もまた、複雑な社会にはなくてはならない。国民は、生計を立てるための非常に専門化された技術訓練を受ける前に、専門職で一時的に失業した際、1つ、あるいはそれ以上の当たり前の労働、つまり有用とされる職業を仕込まれるべきである。どんな文明も、長年にわたる大人数の失業者階級の抱え込みを乗り切ることはできない。国庫援助の受け入れは、そのうちに国民の中の最良者達さえ歪め、やる気をなくさせるようになるであろう。健康な市民への個人の慈善行為でさえも、長々と延長されると有害となる。

81:6.33 (910.6) そのような高度に分化された社会は、昔の民族の共同的、封建的な古代の習わしには馴染まないであろう。多くの一般業務は、本当に許容でき、しかも有益に社会化されるが、非常に訓練され、極端に専門化された人間は、何らかの知的な協力方法により管理できるのが最善である。近代化された連携と友愛的規制の方が、より古く、　より原始の共産主義的方法、あるいは力に基づく独裁的規制的機関よりも長続きする協力を生むであろう。

81:6.34 (910.7) 12. 協力する意欲。人間社会の進歩への大きな妨害の1つは、より大きく、より社会に適合した人間集団と、反社会的傾向の1個人は言うまでもなく、より小さく、相容れない反社会的な人間の結社との間での利害と繁栄の葛藤である。

81:6.35 (910.8) どの国家文明も、その教育方法と宗教理想が、知的な愛国心と国家への献身の気高い型を発奮させない限り、長くは続かない。万国は、この種の知的な愛国心と文化的連帯意識なくしては、偏狭的妬みや局所的利己心の結果、崩壊しがちである。

81:6.36 (911.1) 世界的文明の維持は、いかに平和と友愛のうちに共存すべきかを学ぶ人間によって決まる。産業文明は、効果的連携がなければ、極端な専門化の危機に脅かされる。単調さ、狭さ、および不信と嫉妬を引き起こす傾向。

81:6.37 (911.2) 13. 敏腕で賢明な始動力。文明においては、熱心で敏腕であり重荷を担う精神の多くに、非常に多くに左右される。大きな荷物を持ち上げるには、一緒に—全員同時に—持ち上げない限り、10人は、一人以上に価値

があるわけではない。そのような共同作業—社会的協力—は、指導力で決まる。過去と現在の文化的文明は、賢明で進歩的な指導者との市民の知的協力に基づいてきた。文明は、人が、より高い水準に進化するまで、賢明で主導的な指導力を頼り続けるであろう。

81:6.38 (911.3) 高度の文明は、物質的富、知性の卓越さ、道徳的価値、社会の巧妙さ、および宇宙洞察の賢明な相関関係から生まれる。

81:6.39 (911.4) 14. 社会的変化。社会は神性団体ではない。それは、段階的発展現象である。前進する文明は、その指導者が、その時代の科学開発の対応に不可欠な社会組織におけるそれらの変更に遅鈍であるときに常に遅れる。とは言うものの、ただ古いという理由だけで物事を軽蔑してはいけないし、ただ珍奇で新しいという理由だけで無条件に考えというものを迎え入れるべきでもない。

81:6.40 (911.5) 人は、社会の仕組みを試すことを恐れるべきではない。文化の調整における冒険は、社会的発展の歴史に完全に詳しい人々によって常に調整されるべきである。また、これらの革新者は、社会的、あるいは経済的

角度から検討した実験領域において実際に経験をした人々の見識による助言を常に受けるべきである。大きい社会的、あるいは経済的変化も決して突然に試みるべきではない。人間のすべての調整の型—物理的、社会的、または経済的—には時間が、不可欠である。道徳的、そして精神的調整だけが、即座に可能であり、これらでさえも、物質的、社会的影響の完全な成就のための時間の経過を必要とする。人種の理想は、文明が1段階から別の段階へ推移する重要な期間の主要な支えと保証である。

81:6.41 (911.6) 15. 過渡期の挫折防止。社会とは、何世代にもわたる試行錯誤の所産である。それは、惑星情勢における動物から人間の高さへの人類の長年の上昇の連続的段階における選択的調整と再調整を乗り切ったものである。重大な危険は、どの文明にとっても—いかなる瞬間においても—確立された過去の方法から新しくより良い、しかし未経験の未来の方法への変遷時期の挫折の脅威である。

81:6.42 (911.7) 指導力は、進歩にとり不可欠である。知恵、洞察、先見は、国の存続に不可欠である。文明は、指導力が消失し始めるまで実は決して危険にさらされない。そして、そのような賢明な指導の数量は、決して人口の1パーセントを超えたことがない。

81:6.43 (911.8) またそれは、文明が急速に広がりつつある20世紀文化に到達したそれらの強力な影響を開始することができたその場所に登った進化の梯子の横木によるものであった。人は、これらの基礎への固守だけで続けられた開発と確かな生存に備えつつ現代文明の維持を望むことができる。

81:6.44 (912.1) これが、地球の民族が文明を確立しようとアダームの時代以来奮闘した長い、長い戦いの要旨である。現代の文化は、この精力的な発展の最終結果である。1世代が、非常に速くその先輩の業績から恩恵を受けられず、印刷発見の前、進歩は比較的遅かった。しかし、現在人間社会は、文明が戦った全時代の蓄積された勢いの下で前方に突入している。

81:6.45 (912.2) [ネバドンの大天使による提示]

論文 82
結婚の進化

82:0.1 (913.1) 結婚—交合—は、両性愛から生じる。結婚は、そのような両性愛への人の反応的適合であるが、家族生活は、そのようなすべての進化と適応調整から生まれる総体的結果である。結婚は持続する。それは、生物進化に固有ではないが、すべての社会進化の基礎であり、したがって、何らかの形での存続は確かである。結婚は、家庭を人類に与え、また家庭は、長く困難な進化的全葛藤の有終の美である。

82:0.2 (913.2) 宗教、社会、教育機関の総ては、文化的文明の存続に不可欠であり、家族は、最上の文明化をするものである。子供は、その家族と隣人から人生の基礎の大半を学ぶ。

82:0.3 (913.3) 昔の人間には豊かな社会文明はなかったが、もてるものは忠実に有効に次世代に伝えていった。過去のこれらの文明の大部分は、家庭が、効果的に機能していたので他の制度上の最小限の影響で発展し続けたと気づくべきである。今日人類は、社会的、文化的遺産を所有しており、それは、賢明に効果的に後の世代に伝えられ

なければならない。教育機関としての家族が、維持されなければならない。

1. 交合本能

82:1.1 (913.4) 性欲は、男女間の個性の大きな隔たりにもかかわらず、種の繁殖のために一緒になることを保証するに足りるのである。この本能は、後に愛、献身、夫婦間の忠誠心と呼ばれる多くのことを人間が経験をするずっと以前に効果的に作用した。交合は、生まれながらの性癖であり、結婚は、その社会的進化の影響である。

82:1.2 (913.5) 性の関心と願望は、原始民族においては支配的激情ではなかった。原始民族は、単にそれらを当然のことと思った。生殖経験のすべては、想像的な潤飾とは無関係であった。全ての性の激情を飲み込むような高度の文明民族は、主には人種混合に起因しており、特に進化する資質が、ノヅ系とアダーム系の連想的想像力と美の認識に刺激された場所においては。　しかし、進化する人種は、より鋭い性の意識と、　より強い性交衝動の資質が、このようにして速めて、そそる獣欲に対し十分な自制をもたらし得ないほどにこのアンド系の遺産を限定

的量において吸収した。進化する人種の中では、赤色人種が最も高度の性の慣例を持っていた。

82:1.3 (913.6) 結婚に関する性の規制は、次の事柄を示す。

82:1.4 (913.7) 1. 文明の相対的進行。文明は、性が、有用な媒介と慣習に従って満たされることをますます要求した。

82:1.5 (914.1) 2. どの民族であれアンド系の血統の量。そのような集団の間での性は、肉体的、感情的性質の双方における最高と最低の両方を表現するようになった。

82:1.6 (914.2) サンギク人種には平均的獣欲があったが、異性の美や肉体的な魅力にあまり興味や評価を示さなかった。いわゆる性的魅力は、現代の原始の人種にさえほとんど欠けていると言ってもよいほどである。これらの混ざり気のない民族は、明確な性交本能をもつが、社会規制を必要とする重大な問題を生じさせるには性的誘因は不十分である。

82:1.7 (914.3) 性交本能は、人間の肉体上の支配的原動力の1つである。それは、個人の喜びの名の下に、責任からの個人的な安らぎと個人の自由のずっと上に民族の幸福と永

続性を利己的な者にだまして置かせる1つの効果的感情である。

82:1.8 (914.4) 制度としての結婚は、その始まりの初期から現代に至るまで自己永続のための生物的傾向からくる社会的発展を描写している。進化する人類の永続は、この人種的交合衝動、大まかに性的魅力と呼ばれる衝動の存在により確実にされる。この大いなる生物的衝動は、あらゆる種類の関連する本能、感情、および慣用—物理的、知的、道徳的、社会的—のための衝動の中心部になる。

82:1.9 (914.5) 食物供給は、未開人の間では人を駆り立てる動機であるが、文明が豊富な食物を保証するとき、性的衝動は、しばしば支配的衝動となり、したがって社会的規制を必要とする。動物では本能の周期性が、交尾の傾向を食い止めるが、人間は、多大に自制心のある生き物なので性欲は完全に周期的ではない。それゆえ社会が、個人に自制を強いることが必要になってくるのである。

82:1.10 (914.6) 拘束され甘やかされるとき、いかなる人間の感情あるいは衝動も、この強力な性衝動ほどに多くの害と悲しみを引き起こし得るであろうか。この衝動を抑え社

会規則への知的服従が、文明の現実性に対する最高の試験である。自制は、ますますの自制は、前進する人類への絶え間なく増大する要求である。秘密、不誠実、および偽善は、性の問題をあいまいにするかもしれないが、解決法を提供しないし、倫理を進歩させもしない。

2. 制限的禁忌

82:2.1 (914.7) 結婚進化の物語は、単純に社会、宗教、そして市民制約の圧力による性の抑制の歴史である。自然は、個人を見分けるとは言いがたい。いわゆる倫理の認識もしない。それは、単に、しかも排他的に種の生殖に関心がある。自然は、有無を言わせず生殖を強く求めるが、必然的な問題を無頓着に社会の解決するがままにし、その結果、進化的人類にずっとつきまとう重大問題を生じさせる。この社会的葛藤は、基本的本能と進化する倫理との終わりのない戦争の中にある。

82:2.2 (914.8) 初期の人類は、性関係の規制は、あるかなしかの状態であった。この性の認可の理由から売春も存在しなかった。今日、ピグミー族と他の後退的集団は、何の結婚制度もない。これらの民族の研究は、原始人類が踏

襲した簡単な性交習慣を明らかにする。しかし、すべての古代民族について、常に各時代の社会習慣の道徳的基準を考慮にいれて研究され、判断されるべきである。

82:2.3 (915.1) 自由恋愛は、しかしながら、甚だしい野蛮の階級より上では決して受けがよくなかった。社会集団が形成し始めるとすぐに、結婚の慣例と規制が発達し始めた。交合は、このようにしてほぼ完全な性の認可の状態から比較的完全な20世紀の性の制限基準へと数多の変遷を経て進歩してきた。

82:2.4 (915.2) 道徳的慣習と制限的禁忌は、部族発達の初期段階においては非常に粗雑であったが、男女は切り離していた。—これは、静寂、秩序、勤勉を促し—そして、結婚と家庭の長い進化が始まった。衣服と装飾、および宗教習慣に関わる性別による習慣は、性の特権の範囲を定義し、その結果ついには悪、犯罪、罪の概念を産むことになる初期の禁忌に起源があった。しかし、それは、重要な、特に五月祭にすべての性の規制を中断する長い間の習慣であった。

82:2.5 (915.3) 女性は、昔から男性よりも制限的禁忌を受けてきた。早期の道徳慣習は、未婚女性に男性同様の性の自由を認めたが、妻にはいつでも夫に忠実であることが要求されてきた。原始の結婚は、男性の性の特権をあまり抑えはしなかったが、妻には更なる性の許容への禁止を課した。既婚女性は、常に自分たちを１種類として区別し髪型、衣服、ベール、隔離、装飾、および輪などの何らかの印を身につけてきた。

3. 初期の結婚慣習

82:3.1 (915.4) 結婚は、男性の絶え間ない衝動からくる繁殖—自己増殖—への常に存在する生物的緊張に対する社会有機体の制度上の対応である。交合は、普遍的に自然であり、また社会が単純なものから複雑なものに発達するにつれ、交合のための社会慣習に対応する進化、すなわち結婚制度が生まれた。結婚は、社会的発展が、社会慣習段階へと進む所ではどこでも発展的制度となるであろう。

82:3.2 (915.5) 結婚には、常に異なる2つの領域があったし、これからもずっとそうであろう。慣習、つまり交合の外面

的様相を規定する法、さもなければ男女の秘密の、個人的な関係。個人は、いつも、社会に強いられた性の規制に対し反抗してきた。これが、この長年の性問題の原因である。自己維持は、個人的ではあるが、集団に維持されている。自己永続化は、社会的であるが、個人の推進力に保証されている。

82:3.3 (915.6) 社会慣習は、尊重されているときすべての人種間で示されたように性の衝動を抑制し制御する十分な力がある。結婚の基準は、常に道徳慣習のその時の力と民間政府の機能の全体性の真の指標であった。しかし、初期の性と交合慣習は、矛盾と粗雑な規則の固まりであった。両親、子供、親類、社会のすべてが、結婚の規則に相反する関心を持っていた。しかし、このすべてにもかかわらず、結婚を自然に高め実践したそれらの人種が、より高い段階に発展し、より多くの数で生き残った。

82:3.4 (915.7) 原始時代の婚姻は、社会的地位への報酬であった。妻の所有は傑出の印であった。未開人は、自分の婚礼の日を責任と男らしさへの門出を記すものと考えた。ある時代には、結婚は、社会的義務と見なされた。他の

時代には宗教義務として。さらに別の時代には市民を国家に供給する政治上の必要条件として。

82:3.5 (916.1) 初期の部族の多くは、結婚のための資格として盗みの快挙を求めた。後の民族は、運動競技、競合遊戯をそのような急襲と置き換えた。これらの競技の勝者には一等賞—婚期に至った花嫁の選択—が与えられた。首狩り族の間では、若者は、少なくとも1つの首を所有、頭蓋骨は時々購入可能であったが、するまで、結婚を許されなかった。妻の購入の衰退につれ、多くの黒人集団内にいまだに存続している習慣である謎解きの競い合いによって勝者が妻を得た。

82:3.6 (916.2) 文明の進歩と共に幾つかの部族では、結婚のための男性の忍耐力有無の厳しい試験を女性の手に委ねた。彼女等は、その結果、自分で選んだ男性に便宜を図ることができた。結婚のためのこれらの試験は、猟や戦いの技能、それに家族扶養能力を含んだ。花婿は、少なくとも1年間花嫁の家族に入り、そこで暮らし、働き、その妻にふさわしいと立証することが求められた。

82:3.7 (916.3) 妻の資格は、きつい仕事をし子供を生む能力であった。一定の期間内に一定の農作業を実行しなければならなかった。もし結婚前に子供を生んだならば、彼女は、なおさら貴重であった。彼女の繁殖力は、こうして確信された。

82:3.8 (916.4) 古代民族が不名誉と見なした、あるいは罪とさえ見なした事実が、すなわち結婚しないことが、子供の結婚の起源について説明している。人は結婚しなければならないのであるから、早いほどよい。また、未婚者は霊界に入ることができないというのが一般的信仰であり、これが、出生時の、時には出生以前にさえ、子供の結婚への一層の誘因であった。古代人は、死者さえ結婚しなければならないと信じた。最初の仲人は、死んだ個人のための結婚を取り決めるために雇われた。1人の親が、死んだ息子と他の家族の死んだ娘との結婚を実行するためにこれらの仲人を手配するのであった。

82:3.9 (916.5) 後の民族の間では、思春期が結婚の一般的年令であったが、これは、文明の進歩に正比例して進んだ。社会発展の初期、男性と女性双方の風変わりな、しかも

独身の階級が生じた。それらは、大かれ少なかれ通常の性の衝動を欠く個人によって始められ維持された。

82:3.10 (916.6) 多くの部族は、夫に与えられる直前に支配的集団の構成員達に花嫁との性関係を持たせた。これらの各男性は、少女に贈り物を与えるのが常で、またこれが結婚祝いの品を与える習慣の起こりであった。いくつかの集団内では、若い女性は、花嫁披露の広間での彼女の性のサービスに対し報酬として受け取られる贈り物から成る持参金の収得を期待した。

82:3.11 (916.7) 幾つかの部族では、若い二人の結婚が許されれば、双方が愚かな親になると考えたことから、若者を寡婦や年上の女性と結婚させ、その後男やもめとなったとき、若い女性との結婚を許し、こうして双方の両親が愚か者にならない手段を取った。他の部族は、同年齢層との結合を制限した。近親相姦禁忌の考えが、まず一定年齢層への結婚制限の起始となった。(インドでは、今でも結婚に何の年齢制限もない。)

82:3.12 (916.8) ある道徳的慣習の下のやもめ暮らしは、配偶者と共に霊の世界にわたるはずであったので未亡人は殺さ

れるか、または夫の墓での自殺を許され、大いに恐れられていた。生き残った未亡人は、ほぼ間違いなく夫の死の責任を問われた。いくつかの部族では未亡人を生きながらに焼いた。未亡人が生き続けるならば、再婚は一般に認められていないので、その人生は、悲しみの連続であり、耐え難い社会的制限があった。

82:3.13 (917.1) 今は不道徳であると見なされる多くの習慣が、昔は奨励された。原始の妻は、他の女性との夫の情事を大きな誇りとした。少女の貞操は、結婚への大いなる妨げであった。結婚前の子供の出産は、男性がかならず多産な伴侶を持つことにしていたので、少女の妻としての好ましさを高めさせた。

82:3.14 (917.2) 多くの原始部族は、女性が妊娠するまで、つまり通常の結婚式が執り行われるまで試験的結婚を認めた。他の集団の間では、最初の子供が生まれるまで結婚式は挙行されなかった。妻は、不妊であったならば両親に引き取られなければならず、結婚は破棄された。社会習慣は、すべての夫婦に子供がいることを要求した。

82:3.15 (917.3) これらの原始の試験的結婚は、認可には似ても似つかないものであった。それらは、単に生殖能力の真剣な試みであった。婚約関係にある個人は、繁殖力が確認されるとすぐに永久に結婚した。現代の男女が、完全に結婚生活に満足させられない場合には便利な離婚という考えを内心にもって結婚するとき、実際には試験的結婚の1つの型に、しかもそれほど文明的ではない先祖の正直な冒険の状態のはるか下の型に入っているのである。

4. 財産慣習による結婚

82:4.1 (917.4) 結婚は、昔から財産と宗教の両方に密接に結びつけられてきた。財産は結婚の安定剤であった。宗教は道を説くもの。

82:4.2 (917.5) 原始の結婚は、投資、つまり経済投機であった。それは、媚びの問題であるよりも仕事上の問題であった。古代人は、集団の利益と福祉のために結婚した。それ故、結婚は、集団、両親、年長者によって計画され手配された。財産慣習が、結婚制度を安定させることに効果的であったことが、初期の部族間での結婚が、多く

の現代の民族間でよりもより長かったという事実によって示されている。

82:4.3 (917.6) 文明が進み、私有財産が社会習慣の中で一層の承認を得てくると、窃盗が大犯罪となった。姦通は、窃盗の種類、夫の財産権の侵害として認識された。それは、したがって初期の掟や道徳的慣習で明確に言及されてはいない。女性は父の財産として人生を始め、父はその権利をその夫に移し、すべての合法化された性の関係が、これらの先在の財産権から生まれた。旧約聖書は、財産形式の一つとして女性を扱う。コーランは、女性の劣性を教える。男性は妻を友人、あるいは客に与える権利をもち、この習慣は、いまだに一部の民族の間で通用している。

82:4.4 (917.7) 現代の性の嫉妬は、先天的なものではない。それは、進化する慣習の生産物である。原始人は妻に嫉妬しなかった。ただ自分の財産の警備に当たっていた。夫より妻に厳しい性の責任を負わせる理由は、彼女の不貞が、世襲と遺産に関わったからであった。私生児は、ごく初期の文明の進歩において不評判を招いた。最初は女

性だけが密通のために罰せられた。やがて、道徳的慣習がその相手の制裁を命じ、傷つけられた夫、もしくは庇護者の父は、長い時代にわたり男性の侵害者を殺す完全な権利をもった。現代民族は、これらの道徳的慣習を実行し続けており、それが不文律の下でのいわゆる名誉のための犯罪を許容している。

82:4.5 (917.8) 貞節のための禁忌には財産慣習の局面としてその起源があり、初めは既婚婦人に適用され、未婚の少女には適用されなかった。後年には、貞節は求婚者よりも父から要求された。処女は、父にとり商業資産であり、彼女にはより高い値がついた。貞操への要求がより高くなるにつれ、将来の夫のために貞節な花嫁を適切に育てる功労を認識し花嫁の費用をその父親に支払うのが習慣であった。女性の貞操というこの考えは、一度始められるとその処女性を保証するために、少女を文字通り檻に入れるまでに、実際に長年投獄することが習慣になるまでに人種を牛耳た。その結果、より最近の基準と処女性の吟味が、自動的に売春階級を生みだした。これらの女性は、拒絶された花嫁、花婿の母に処女でないと見なされた女性達であった。

5. 同族結婚と異族結婚

82:5.1 (918.1) 非常に早くから未開人は、人種混合が子の質を改良することを観察した。それは、同系交配がいつも悪かったというわけではないが、異系交配が比較的いつも良かったということであった。したがって、慣習は、近親内での性関係の制限を具体化する傾向にあった。異系交配は、進化的変化と前進のために選択の機会を大いに増加させるということが認められた。異系交配された個人は、　より万能であり、敵意に満ちる世界で生き残るより優れた能力を持っていた。同系交配者は、その慣習と共に徐々に姿を消した。すべては、緩慢な発展であった。未開人は、意識的にそのような問題について推論しなかった。しかし後の前進する民族はそれをし、また一般的な弱点が、時々過度の同系交配から生じるという観察もした。

82:5.2 (918.2) 優れた血統の同系交配が、時々強い部族を築き上げる結果をもたらす一方で、遺伝的欠陥のある同系交配の悪い結果の劇的な事例は、より力強く人の心に印象づけ、その結果、前進的慣習は、近親間でのすべての結婚に対する禁忌をますます定式化した。

82:5.3 (918.3) 長い間、宗教は、異系結婚に対し有効な障害であった。多くの宗教の教えは、異宗教の間の結婚を禁じた。通常女性は、内部結婚の習慣を好んだ。男性は外部結婚を。財産は、いつも結婚に影響を及ぼしてきており、時として、一族の中で財産を保存する努力のために女性が父の部族の中から夫を選ぶことを強制する慣習が起こった。この種の措置は、いとこ同志の結婚の多大な増加に至った。内部結婚は、技術の秘密を保持する努力のためにも実践された。熟練した労働者は、工芸に関する知識を家族内に保とうとした。

82:5.4 (918.4) 優れた集団は、隔離される度にいつも血族交合に戻った。ノヅ系は、15万年以上にわたり内部結婚の多い集団の1つであった。後の内部結婚慣習は、当初は必然的に、交合がきょうだい間であった紫色人種の伝統に大いに影響された。きょうだい同志の結婚は、早期のエジプト、シリア、メソポタミア、それにかつてアンド系に占領された土地全体において共通であった。エジプト人は、王の血を純粋に保つ目的できょうだい間の結婚を長く順守した。アブラハムの時代以前、メソポタミア人の間では、いとこ同志の結婚が義務的であった。いとこ

は、いとこと先に結婚する権利を持っていた。アブラハム自身は、片親が異なるきょうだいと結婚したが、そのような結合は、ユダヤ人の後の慣習の下では許されなかった。

82:5.5 (919.1) きょうだいである妻が、もう一人の妻、あるいは複数の他の妻を横柄に支配したので、複数妻帯の慣習による兄弟姉妹同士の結婚からの最初の離脱が生じた。いくつかの部族慣習は、死者の兄弟の未亡人との結婚を禁じたが、生存中の兄弟が、死んだ兄弟のために子供を儲けることを求めた。いかなる度合の内部結婚に対しても何の生物本能も存在しない。そのような制限は、完全に禁忌の問題である。

82:5.6 (919.2) 外部結婚は、男性の好みの理由により最終的に優位を占めた。外部から妻を得ることは、姻戚からのより大きな自由を保証した。親しさは侮りを生む。したがって、個々の選択要素が交合を支配し始めると、部族外から相手を選ぶことが習わしとなった。

82:5.7 (919.3) 多くの部族が最終的に一族内での結婚を禁じた。他の部族は、一定の社会階級内の交合へと制限し

た。自分自身のトーテムの女性との結婚に対する禁忌が、隣接する部族から女性を盗む習慣に弾みをかけた。結婚は、後には親族関係よりも住居地域に従って規制された。現代の外部結婚慣習への内部結婚の進化には、多くの段階があった。庶民の中で禁忌が内部結婚にのしかかった後でさえ、首長と王には、王の血を濃く純粋に保つために近い親類のものとの結婚が許された。通常、慣習は、性の問題に関しては統治者に一定の許可を容認した。

82:5.8 (919.4) 後のアンド系民族の存在は、サンギク人種の部族外での交合願望の高まりと大いに関係があった。しかし近隣集団が、比較的平和で共存し始めるまで外部結合が優勢になることは可能ではなかった。

82:5.9 (919.5) 外部結婚それ自体は、平和促進剤であった。部族間の結婚は、戦争を少なくした。外部結婚は、部族を連携と軍事同盟に導いた。それは、強さを提供したので優位になった。それは国家の構築者であった。外部結婚は、また通商関係の拡大により大いに支持された。冒険

と探検は、交合領域の拡大に貢献し、かつ人種的な文化の交雑受精を大きく容易にした。

82:5.10 (919.6) 結婚の人種的慣習の、その他の点で不可解な矛盾は、外部部族から妻を盗んだり買ったりに付随するこの外部結婚習慣に大きく起因している。内部結婚を尊重したこれらの禁忌は、社会的であり生物的ではないことは、親族関係の結婚に関する禁忌によく例証されている。これらの禁忌は、少しの血族関係もないことを示す姻戚関係の多くの度合いを網羅する。

6. 人種混合

82:6.1 (919.7) 今日、世界に純血人種は存在しない。早期の、しかも最初の進化的有色民族は、世界に存続する代表的2人種である黄色人種と黒色人種しかいない。これらの2人種さえ、絶滅した有色民族と多く混合されている。いわゆる白色人種は、主に古代の青色人種の血を引くが、それは、アメリカ大陸の赤色人種とほとんど同じように他の人種と多かれ少なかれ混合されている。

82:6.2 (919.8) 有色サンギクの6人種のうち、半分は一次的で、残りの半分は二次的であった。一次的人種—青色、赤

色、黄色—は、あらゆる点で3種類の二次的民族よりも優れていたが、そのより良い血統が、これらの二次的人種に吸収されていたならば、一次的民族を相当に高めていたであろう多くの望ましい特色があったということを忘れてはならない。

82:6.3 (920.1) 近代の人種の異種交配は、大部分が関係する人種のはなはだしく劣る血統の間にあるので、現代の偏見が、「混血児」、「合いの子」、および「雑種」に対して生まれる。また同人種の退歩の血統同士が結婚すると不満足な子孫を設ける。

82:6.4 (920.2) もしユランチアの現代の人種が、低下し、反社会的で精神薄弱の落ちこぼれている者達の最低層の災いから解放されることができるならば、限定的人種の合併に対してさほど異論はないであろう。またそのような人種混合が、いくつかの人種の最高の型の間で行われることができるならば、ましてや異論はないであろう。

82:6.5 (920.3) 優れた、しかも異なる血統の交配は、新たで、かつより力強い血族創造の秘訣である。そしてこれは、植物、動物、人類に該当する。交配は、活力を増大さ

せ、繁殖力を増加させる。様々な民族の平均的、あるいは優れた層の人種混合は、北米合衆国の現在の住民で示されるように創造的な可能性を大いに高める。そのような交配が、下層間で、つまり劣層間で行われるとき、創造性は、南インドの現代の民族に示されているように減少する。

82:6.6 (920.4) 人種混合は、新たな特性の突発的出現に大いに貢献するし、また、そのような交配が、優れた血族の結合であるならば、これらの新たな特性は、優れた特徴になり得るであろう。

82:6.7 (920.5) 現代の人種が、劣り退化する血族で詰め込まれ過ぎている限り、大規模での人種の混合は、最大の弊害をもたらすであろうが、そのような試みへの反論の大半は、生物学的問題によりも、むしろ社会的、文化的偏見に向けられている。雑種は、劣性血統の中でさえ、しばしばその先祖よりも改良されたものである。交配は、優性遺伝子の役割で種の改良に寄与する。人種の混合は、雑種に存在する望ましい優性遺伝子の数多くの可能性を増加させる。

82:6.8 (920.6) より多くの人種交配が、何千年間に起きた以上に過去100年間にユランチアで起きている。人間の血統の異種交配から生じるひどい不調和の危険性は、大いに誇張されてきた。「混血児」の主要な問題は、社会の偏見が原因である。

82:6.9 (920.7) 白人とポリネシア民族を混合するピトケアンの実験は、白人とポリネシアの女性が、かなり良い人種的血族であったことから、結果的にかなり良かった。白色人種、赤色人種、黄色人種の最も優れた型の間での雑交は、たちまち多くの新しくて生物学的に効果的な特性を生み出すであろう。これらの3民族は、第一サンギク人種に属する。白色人種と黒色人種の混合は、それらの即座の結果においてあまり望ましくないし、社会的、人種的偏見が、黒白混血児は好ましくはないと仕向けるほどに反対すべきものではない。物理的に、そのような黒と白の雑種は、他の幾つかの点でのわずかな劣性にもかかわらず、人類の素晴らしい見本である。

82:6.10 (920.8) 第一のサンギク人種が、二次サンギク人種と融合するとき、後者は、前者を犠牲にしてかなり改良され

る。そして、小規模での—長い期間に及ぶ—第一人種による二次集団向上へのそのような犠牲的貢献に対し深刻な異論はほとんどあり得ない。二次サンギクは、生物学的に考慮されるとき、ある点では第一人種よりも優れていた。

82:6.11 (921.1) 煎じ詰めれば、人類の本当の危険は、そう考えられている人種的雑交におけるよりも様々の文明民族の劣性で退化した血統の無制限な繁殖にある。

82:6.12 (921.2) [ユランチアに配置された主熾天使による提示]

論文 83
結婚制度

83:0.1 (922.1) これは初期の結婚制度の始まりについての物語である。それは、群れのだらしなくふしだらな交合から多くの変化と適合にいたるまで、さらには、1対の交合、すなわち最高度の社会体制の家庭を確立するための1人の男性と1人の女性の結合のの実現に最終的に至る結婚基準の出現まで着実に進歩した。

83:0.2 (922.2) 結婚は何度も危険にさらされてきたし、また結婚慣習は、保護のために資産と宗教の両方を重度に利用

してきた。しかし、結婚とその結果生じる家族をいつまでも保護する真の効力は、男女が最も原始的な野蛮人か最も教養ある必滅者であるとにかかわらず、お互いがいなくては確実に生きないという単純、かつ生まれながらの生物的事実である。

83:0.3 (922.3) 利己的な人間が動物よりも何か良いものへと誘い込むのは、必滅性の衝動のためである。利己主義の、また自己満足の性的関係は、自己否定に対するある種の結果を必然的に伴い、利他的義務と人種に利益をもたらす家庭での数多くの引責を保証する。この点において性は、野蛮人への認識されていない、しかも疑われていない文明剤である。というのも、この同じ性衝動は、自動的に、また的確に人に考えるように強いるし、ついには愛するように導くのであるから。

1. 社会的体制としての結婚

83:1.1 (922.4) 結婚は、両性交の身体的事実に起因する多くの人間関係を規制し制御するように考案された社会の仕組みである。そのような制度として結婚は、2方向に機能する。

83:1.2 (922.5) 1.個人の性的関係の規制において。

83:1.3 (922.6) 2. 家系、遺産、継承、社会秩序の規制においてこれが、より古く、しかも本来のその機能であること。

83:1.4 (922.7) 結婚から生じる家族は、それ自体が財産慣習と同様に結婚制度を安定させるものである。結婚の安定性における他の強力な要因は、誇り、虚栄、騎士道、義務、宗教信念である。しかし、結婚というものは、天で承認されたり否認されたりするかもしれないが、天国では決して執り行われない。人間の家族は、疑いようもなく人間の制度、段階的発展である。結婚は、社会の慣行であり、教会の領域ではない。宗教は、確かにそれに強く影響を及ぼすべきではあるが、専らそれを制御したり規制することを引き受けるべきではない。

83:1.5 (922.8) 原始の結婚は、主として産業的であった。現代においてさえ、しばしばそれは、社会的であるか商務的である。アンド系血族の混合の影響を経験し、また前進する文明の慣習の結果、結婚は、次第に相互的、恋愛的、親的、詩的、慈愛的、倫理的で理想主義的になりつつある。しかしながら、選択、そしていわゆる恋愛は、

原始の交合においては最小限であった。早期における夫と妻は、あまり一緒にいなかった。それほど頻繁に一緒に食事さえしなかった。しかし、古代人の間では、個人的な愛情は、性的誘因には強く連結されなかった。大体は、一緒に暮らし一緒に働いているのでお互いが好きになった。

2. 求愛と婚約

83:2.1 (923.1) 原始の結婚は、常に少年と少女の両親によって計画された。この習慣と自由な選択の間の変遷段階は、結婚仲立ち人か仲人に取って代わられた。これらの仲人は、最初は床屋であった。後には司祭であった。結婚は、元来集団に関する事柄であった。次には、家族の問題に。一個人の冒険になったのはほんの最近である。

83:2.2 (923.2) 魅力ではなく強制が、原始の結婚への接近法であった。初期において女性には性に対してよそよそしさはなっかったが、慣習による性への劣等性を繰り返し教え込まれたに過ぎなかった。強奪が通商に先行したように、分捕りによる結婚が、契約による結婚に先行した。一部の女性は、部族の年配の男性の支配から逃げるため

に分捕りを黙認するのであった。女性らは、別の部族からの同年令の人の手に落ちることを好んだ。この疑似の駆け落ちは、力ずくで取る方法とその後の魅力による求愛の間の変遷段階であった。

83:2.3 (923.3) 初期の結婚式の型は、模擬の逃亡、かつては一般的習慣であった一種の駆け落ちの下稽古であった。その後、捕獲のまねごとが、通常の結婚式の一部になった。現代の少女の「捕獲」への見せかけの抵抗、すなわち結婚に対して控え目になることは、すべて昔の習慣の遺風である。数ある習慣の中で、敷居の上を花嫁を抱えて越すことは、妻の窃盗時代からの多くの古代の習慣の名残りである。

83:2.4 (923.4) 結婚において自分の思い通りにする完全な自由は女性に対して長い間否定されたが、より知力の優れた女性は、賢明に機知を駆使しこの制限をいつも回避することができた。男性は、通常求愛での先導をしてきたが、いつもそうとは限らなかった。女性が時々正式に、内密でも結婚を主導する。そして文明が進歩してくる

と、女性は、求愛と結婚のすべての局面において増加する役割を担ってきた。

83:2.5 (923.5) 結婚前の求婚の高まる愛、恋愛、および個人的な選択は、アンド系の世界人類への貢献である。異性間の関係は、順調に発展している。多くの進歩的民族は、徐々に性的誘因のいくらか理想化された概念をより古い有用性や所有権の動機の代わりに用いている。性の衝動と愛情の気持ちが、終生の伴侶の選択において冷ややかな打算と入れ替わり始めつつある。

83:2.6 (923.6) 婚約は、そもそも結婚に相当した。そして初期の民族の間での性的関係は、婚約期間中、常套的であった。近代において、宗教は、婚約から結婚の間の性の禁止を確立した。

3. 買い入れと持参金

83:3.1 (923.7) 古代人は、愛と約束を信用しなかった。古代人は、いつまでも続く結婚は、何らかの具体的な保障、財産によって保証されなければならないと考えた。このため妻の買値は、夫が離婚か放棄する際に損失が決定的になる没収金か預け入れ金と見なされた。花嫁の買値がい

ったん支払われると、多くの部族は、夫の焼き印を入れることを許可した。アフリカ人は今でも妻を買う。アフリカ人は、愛する妻、または白人の妻は費用を要しないので猫にたとえる。

83:3.2 (924.1) 花嫁のお披露目は、妻としてより高い代価をもたらす考えで公衆に見せるために娘を正装させ飾らせる機会であった。彼女らは、動物として売られなかった—そのような妻は、後の部族間では、譲渡可能ではなかった。花嫁購入が、いつも単に冷酷な金の取り引きであったというわけではない。奉公は、妻の購入金額に同等であった。それ以外では、望ましい男性が、妻の代価を支払うことができないならば、その男性は、少女の父が息子として養子にすることができ、それから結婚することができた。また、貧しい男性が妻を探し求め、強欲な父親に要求された価格に応じることができないならば、年長者が、しばしばその要求に変更をもたらすよう父親に圧力をかけるか、または駆け落ちがあったかもしれない。

83:3.3 (924.2) 父親は、文明が進歩するにつれ娘を売ることを好まなかったらしく、花嫁の買値を受け入れ続ける一方で、ほぼ購入代価に等しい高価な贈物をその夫婦に与える習慣を始めた。これらの贈物は、後に花嫁のための支払いが廃止されると花嫁の持参金になった。

83:3.4 (924.3) 持参金という考えは、花嫁の独立の印象を与えるために奴隷的妻と財産的伴侶の時代からの遠くへの退去を示唆する目的であった。男性は、持参金の全額返済なきして持参金妻と離婚することができなかった。いくつかの部族間では、花嫁、花婿双方の親は、夫婦の一方が他方から去る場合に没収されるべき相互積み立て、すなわち事実上の結婚債券を設定した。子供は、購入から持参金への変遷期間においては、妻が買われたならば父に属した。でなければ、らは、妻の家族のものであった。

4. 結婚式

83:4.1 (924.4) 結婚式は、単に2個人の決定の頂点ではなく、結婚が元々地域社会の問題であったという事実から発展し

た。対になるということは、個人的機能と同様に集団の関心事であった。

83:4.2 (924.5) 魔法、儀式、および式典は、古代人の全生活を取り巻き、結婚も例外ではなかった。結婚は、文明が進むとより真剣に考慮されるようになり、結婚式は、ますます見栄を張るようになった。初期における結婚は、今日そうであるように、財産への関心が要因であり、それゆえ法的儀式を必要とし、一方、その後の子の社会的地位は、最大限の公表を要求した。原始人は、何の記録も持たなかった。したがって、結婚式は、多くの人々の目撃を必要としなければならなかった。

83:4.3 (924.6) 当初結婚式は、婚約のようであり、単に共に暮らす意志の公示であった。その後、それは、一堂に集まる正式の食事から成った。いくつかの部族間では、両親は、単に娘を夫の元へ連れていった。他の事例では、唯一の儀式は、親の間での正式の贈答品交換で、その後、花嫁の父が、花婿に娘を与えるのであった。多くのレバント民族の間では、結婚は性的関係によって成り立ったので、すべての儀式を省くのが習慣であった。赤色人種

は、より入念な結婚式の祝賀を生み出した人種であった。

83:4.4 (924.7) 子なしは大いに嫌がられ、不妊は霊の策謀のせいにされたので、多産を保証する努力は、結婚とある種の魔力か宗教儀式の提携にもつながった。そして、幸福で多産の結婚を保証するこの努力では多くのまじないが用いられた。占星術師さえ、婚約の当事者の生まれた星を確かめる相談にあずかった。人間の生贄は、かつて裕福な人々の間でのすべての結婚式の通常の形態であった。

83:4.5 (925.1) 吉日が求められ、木曜日は最良と見なされ、満月で祝う結婚式が殊の外幸先が良いと考えられた。穀物を新婚夫婦に投げるのは、中近東の多くの民族の慣習であった。これは、多産を保証するはずの呪術的儀式であった。東洋の一部の民族は、この目的に米を用いた。

83:4.6 (925.2) 火と水は、亡霊と悪霊に抵抗する最善策であると常に考えられた。したがって亡霊と霊が手がかりを失うようにと、偽りの婚礼の日を決め、次にその催しを突然に延期するのが、長い間のしきたりであった。

83:4.7 (925.3) 新婚夫婦への嘲戯と新婚旅行者への悪ふざけはすべて、霊が見ると惨めで居心地が悪く見えた方がよいと考え、嫉妬の喚起を避けるようにと考えられたはるか昔の名残りである。花嫁のベールの着用は、亡霊が花嫁と気づかないように花嫁を変装させたり、またそうでなければ、嫉妬深く羨望的な霊の凝視からその美を隠すことが必要であると考えられた時代の遺風である。花嫁の足は、儀式直前に決して地面に触れてはいけない。20世紀においてさえ、キリスト教の道徳慣習の下では、乗り物到着の場所から教会の祭壇へ絨毯を敷き伸べるのが今でも習慣である。

83:4.8 (925.4) 結婚式の最古の型の1つは、結合による受精を保証するために司祭に初夜の寝床を祝福させることであった。これは、あらゆる正式の結婚儀式の確立のずっと以前に行われた。結婚慣習の発展におけるこの期間、結婚式の客は、夜、列を作って寝室を通ることが期待され、その結果、結婚成就の法的な目撃者となった。

83:4.9 (925.5) 運の要素、結婚前のあらゆる試みにもかかわらず、一部の結婚はまずい結果になるということが、結婚

失敗に対し原始人に保険による保護を求めさせた。司祭と魔術へと導いた。そしてこの動きが、直接現代の教会結婚式になった。しかし長い間結婚は、一般的には契約する両親の—後にはその当事者の—決定で成ると認識された。一方ここ500年間は、教会と国家が、結婚の権限を担ってきたし、今はその公表を引き受ける。

5. 重婚

83:5.1 (925.6) 初期の結婚の歴史における未婚女性は、部族の男性に属した。その後、女性には、1度にただ1人の夫がいた。1度に1人の男性のこの習慣が、群れの乱交からの決別の第一歩であった。女性にはただ1人の男性が許されるのに反し、その夫は、そのような一時的な関係を自由自在に断ち切ることができた。しかし、これらの大まかに規制された関係は、群れでの生活とは対照的に対での生活に向かう第一歩であった。結婚のこの発展段階における子供は、通常母親に属した。

83:5.2 (925.7) 交合進化における次の段階は、集団結婚であった。結婚のこの地域的局面は、結婚慣習がまだ対の関係を永続的にするまでには強くなかったという理由から、

家族生活の展開に介入しなければならなかった。兄弟姉妹の結婚は、この分類に属した。1家族の5人兄弟は、他の家族の5人姉妹と結婚したのであった。集団婚のゆるい型は、世界中で徐々に様々な形式に発展していった。集団結合は、トーテム慣習により大幅に規制された。性と結婚の規則は、より多くの子供の生存の保証により部族自体の生存を奨励することから、家族生活は、ゆっくりと、しかも確実に発展した。

83:5.3 (926.1) 集団婚は、より高度な部族の間での多婚制—一夫多妻と一妻多夫—の実践が始まる前に徐々に崩壊した。しかし、一妻多夫は、通常女王と金持ちの女性に限られており、決して一般的ではなかった。その上、それは、通例内輪の事であり、1人の妻に数人の兄弟であった。カースト制度と経済制限が、時々数人の男性が共に1人の妻に甘んじることを余儀なくした。その時でさえ、女性は、他の者達を共同子孫の「おじ」として柔軟に許容され、1人とだけ結婚するのであった。

83:5.4 (926.2) 一人の男性が「兄弟のために子を作る」目的で、死んだ兄弟の未亡人と付き合うというユダヤ人の習慣

は、古代世界において半分以上の習慣であった。これは、結婚が個々の関係よりむしろ家族の問題であった頃の名残りであった。

83:5.5 (926.3) 一夫多妻制度は、異なる時代に4種類の妻を承認した。

83:5.6 (926.4) 1. 公式の、もしくは法的な妻

83:5.7 (926.5) 2. 愛情に基づく妻と認可による妻

83:5.8 (926.6) 3. 内妻、契約上の妻

83:5.9 (926.7) 4. 奴隷の妻

83:5.10 (926.8) すべての妻が対等の位置にあり、すべての子供が平等である真の一夫多妻は、誠に稀である。重婚においても、通常家庭は、伴侶の身分の本妻が支配した。彼女だけが儀式としての結婚式を行ない、また妻の身分の者との特別な取り決めがない限り、購入された配偶者、または持参金付きの配偶者の子供だけが、財産相続ができた。

83:5.11 (926.9) 妻は、必ず愛の妻であったというわけではない。初期においては、彼女は、通常そうではなかった。人類がかなり進歩するまで、特に、進化する部族であるノヅ系とアダーム系との混合後まで、愛の妻、または恋人は、登場しなかった。

83:5.12 (926.10) 禁制の妻—法的に妻の身分である者—が、内妻の慣習を考案した。男性は、これらの慣習の下では1人の妻しか持たないかもしれないが、数多くの妾との性的関係を維持することができた。内縁関係は、一夫一婦制への足掛かりであり、公然の一夫多妻からの最初の脱皮であった。ユダヤ人、ローマ人、中国人の妾は、まさに頻繁に妻の小間使いであった。その後、法的な妻は、ユダヤ人の間でそうであったように、夫に生まれてくるすべての子供の母として見られた。

83:5.13 (926.11) 妊娠中や授乳中の妻との性行為に関する昔の禁は、一夫多妻を大いに助長する傾向にあった。原始の女性は、困難な仕事に加え頻繁な出産のために非常に早く年老いた。(加重な負担をうけたそのような妻は、妊娠していないとき毎月1週間隔離されるという事実のお蔭

でどうにか生きた。)そのような妻は、しばしば子作りに疲れるようになり、2番目の、もっと若い妻、出産と家事の両方で助けることができる者を娶るよう夫に要求するのであった。新しい妻は、したがって、通常、　年上の配偶者達に喜んで迎え入れられた。性の妬みに匹敵する何も存在しなかった。

83:5.14 (926.12) 妻の数は、男性の扶養能力によってのみ制限された。裕福で有能な者は、多くの子供を望み、その上幼児死亡率が非常に高かったので、大家族を編成するための妻の集合体を必要とした。これらの複数妻の多くは、単なる労働者、奴隷的妻であった。

83:5.15 (927.1) 人間の習慣は、進展し、しかも非常にゆっくりと。ハーレムの目的は、王位擁立のための強い、しかも数多くの親族の一団を確立することであった。ある支配者は、かつてハーレムをもつべきではないと、1人の妻に満足すべきであると確信していた。そこで、即座に自分のハーレムを始末してしまった。不満な妻達は、各自の家に戻り、感情を害した親類達は、怒りでその支配者を急襲しその場で殺した。

6. 真の一夫一婦制— 対の結婚

83:6.1 (927.2) 一夫一婦制は、独り占めである。それは、この望ましい状況に到達する人々には良いが、それほど幸いでない者達には生物上の苦労をかける傾向がある。しかし、一夫一婦制は、個人への影響には全く関係なく、明らかに子供にとっては最善である。

83:6.2 (927.3) 最も初期の一夫一婦制は、環境の力、つまり貧困によるものであった。一夫一婦制は、文化的、社会的であり、人工的かつ不自然であり、換言すれば、進化する者にとり不自然である。それは、より純粋なノヅ系とアダーム系にとっては完全に自然であったし、すべての進歩した人種にとっては大きな文化的価値があった。

83:6.3 (927.4) カルデア部族は、妻が、配偶者に2番目の妻、または妾を取らないように結婚前の誓約を課す権利を認めた。ギリシア人とローマ人は、双方共に一夫一婦制の結婚を支持した。先祖崇拝は、結婚を聖礼典と見なすキリスト教徒の誤りのように、いつも一夫一婦制を促進してきた。生活水準の上昇でさえ一貫して複数の妻に不利に作用した。ユランチアへのミカエルの到来までには、実

際に文明世界のすべてが、理論上の一夫一婦制の水準に達した。しかし、この消極的な一夫一婦制は、真の2人1組の結婚習慣の人類の実践開始を意味するものではなかった。

83:6.4 (927.5) つまるところ、ある種の独占的な性的関係である一夫一婦の理想的な結婚目標を追求する一方で、社会は、最善を尽くしその要求に協力し、入ろうとしてさえ、この新たで改善された社会秩序に場所を見つけられない不幸な男女らの望ましくない状況を見落としてはいけない。社会的競争の場において相手を獲得できないことは、現在の慣習が課した打ち勝ちがたい困難か非常に多くの制限のためであるかもしれない。実に、一夫一婦制は、それに当てはまる者には理想的であるが、孤独な生活の寒さの中に取り残された者には必然的に大きな苦難をもたらす。

83:6.5 (927.6) 進化的文明の展開する慣習の下では、常に、わずかしか持たない少数の不運な者は、大多数の者が、進めるように苦しまなければならなかった。しかし、恵まれている大多数は、上向きの社会的発展の最高度の慣習

に関わる是認にしたがって生物的衝動全ての満足感を与える理想的な性の相手の階級において会員資格を獲得し損ねた代償を払わなければならないそれほど幸運でない仲間を常に親切心と思いやりをもって見るべきである。

83:6.6 (927.7) 一夫一婦制は、つねに人間の性の発展の理想主義的な目標であったし、現在も、またこれからもずっとそうであろう。この真の対の結婚についての理想は、必然的に自制を伴い、したがって婚約関係にある片方か両方が、人間の美徳すべてのその頂点を欠くという理由からしばしば失敗するのである。

83:6.7 (927.8) 一夫一婦制は、純粋に生物進化と区別された社会文明の進歩を測定する物差しである。一夫一婦制は、必ずしも生物的でも自然的であるというわけではないが、社会文明の即座の維持と一層の進歩に不可欠である、それは、感情の繊細さ、徳行洗練、また一夫多妻では全く不可能である精神の成長に貢献する。女性は、始終夫の愛情を求める競争を余儀無くなくされるとき、理想的な母には決してなることはできない。

83:6.8 (928.1) 対の結婚は、親の幸福、児童福祉、および親の幸せに最善である熟知と効果的な協力を奨励し育成する。粗野な威圧で始まった結婚は、徐々に自己修養、自制、自己表現、自己永続化のすばらしい制度へと発展している。

7. 結婚生活の解消

83:7.1 (928.2) 結婚慣習の初期発展における結婚は、随意に終わらせることができる締まりのない結合であり、子供はいつも母に従った。母子の絆は、本能的であり、慣習の発達段階に関係なく機能してきた。

83:7.2 (928.3) 未開人の間では結婚のおよそ半分だけが、満足な結果を示した。別離の原因として最も多いのは不妊であり、それは通常、妻の精にされた。また、子供のない妻は、精神界では蛇になると信じられた。離婚は、より原始の慣習の下では、ただ男性に限られた選択であり、この規範は、いくつかの民族間では20世紀まで持続してきた。

83:7.3 (928.4) 慣習の発展につれ、ある部族は、2つの形式の結婚を展開した。離婚を認める普通の結婚、それに離別を

許さない聖職者による結婚。妻の買い入れと妻の持参金の開始、すなわち結婚の失敗に対する財産罰則の導入が、離別の減少に大きくかかわった。そして、現代の多くの結合は、実にこの古来の財産要因が安定をもたらしているのである。

83:7.4 (928.5) 共同体の状況と財産の恩恵の社会的圧力は、つねに結婚に関する禁忌と慣習の維持において影響を及ぼす。結婚は、大昔からずっと個々の選択—新しい自由—が、最も大きく役割を演じる民族の中で広範囲におよぶ不満に険悪に悩まされてはいるものの、着実に前進をしてきており、現代世界の中で進歩の基盤に立っている。突然に加速している社会発展を受けて、より進歩的な人種間ではこれらの調整の大変動が起こる一方で、それほど進歩のない民族の間での結婚は、成功し、昔の慣習の手引きの下にゆっくりと向上し続けている。

83:7.5 (928.6) 昔の長い伝統の財産目的のための結婚において理想的な、だが極端に個人主義的愛の動機に対する新たで突然の代替が、結婚制度を一時的に不安定にすることを余儀なくした。男性の結婚の動機は、常に実際の結婚

道徳をはるかに超えており、19世紀と20世紀における西洋の結婚の理想は、突然に身勝手さをはるかに追い越し、人種の性の衝動をただ部分的に制御してきた。いかなる社会での多くの未婚者の存在が、慣習の一時的な機能停止、または変遷を示している。

83:7.6 (928.7) 結婚の真の試練は、時代を通じてずっと、すべての家族生活に不可避である継続的親密さであった。過保護で甘やかされた、虚栄と自我のあらゆる我儘と完全な満足を期待するよう教育された2人の若者というものは、結婚と家庭の確立—控え目な態度、歩み寄り、深い愛情の一生続く協調関係と子供の育成への無私の献身—において大きな成功をほとんど望めない。

83:7.7 (929.1) 求婚に至る高度の想像と空想的な恋愛の始まりには、現代の西洋民族の間での増加する離婚傾向に大きく原因があり、そのうちのすべてが、女性個人の大きな自由と増加された経済的自由によりさら複雑になった。自制欠落からの、あるいは通常の性格適合の失敗からの容易な離婚は、人間が、ごく最近、しかも個人的な苦悩

と人種的な苦しみの結果抜け出した粗野な社会段階へと直接に逆戻りするだけである。

83:7.8 (929.2) しかし、離婚は、社会秩序が結婚前の指導を適切に提供しない限り、社会が子供と若者の適切な教育ができない限り、そして、賢明でない未熟な若者の理想主義が結婚への入り口の決定に基づく限り、長く蔓延のままであろう。社会集団が若者のための結婚準備の提供が不十分である限り、離婚は、進化する慣習の急速な成長の時代の中で依然として悪状況を防ぐ社会的な安全弁としての程度まで機能しなければならない。

83:7.9 (929.3) 古代人は、一部の現代人とほぼ同程度に結婚を真剣に考えた。現代の軽率で失敗の結婚の多くは、恋愛資格のある若い男女の古代の習わしの改善されたものであるとはあまり思われない。現代社会の大きな矛盾は、愛と結婚双方の徹底的な検討に難色を示しつつ、愛を称賛し、結婚を理想化することである。

8. 結婚の理想化

83:8.1 (929.4) ついには家庭にいたる結婚は、実に人間の最も気高い慣例であるが、それは本質的に人間的である。そ

れは、決して聖礼典と呼ばれるべきではなかった。セス系の司祭者は、結婚を宗教儀式化した。しかしエーデン後の何千年もの間、男女の結合は、純粋に社会的、また一般市民の制度として続いた。

83:8.2 (929.5) 人間関係の神の関係への例えは、最も不運である。結婚と家庭の関係における夫と妻の結合は、進化の世界の必滅者の物質的機能である。実に、誠に、多くの精神的進歩は、夫と妻の誠実な人間的努力の結果生じるかもしれないが、これは、結婚が必ず神聖であることを意味しない。精神的進歩は、人間の努力の他の目的達成のための手段への誠実な適用の結果として伴う。

83:8.3 (929.6) 結婚は、調整者と人間との関係に正確には比較できないし、クリストス・ミカエルとその人間の同胞の友愛とも比較できない。そのような関係は、ほとんどいかなる点においても夫と妻の関係に匹敵しない。これらの関係についての人間の誤解が、結婚の現状にとても多くの混乱を起こしたということはこの上もなく不幸である。

83:8.4 (929.7) また必滅者の一定の集団が、結婚を神の行為により完成されるものとして考えたということも不幸である。そのような信念は、婚約当事者の情況、もしくは願望にかかわらず、解消できない結婚状態の概念に直接導く。しかし、結婚解消その事実自体が、神は、そのような結合への結合当事者ではないということを示している。神が何か2つの物や人を一度結合させたことがあるとするならば、それらは、神がその別離を命じるそのような時まで、そのように接合されたままでいるであろう。しかし誰が、人間の慣例である結婚と、本質的にも起源においても全く人間のものとは著しく異なる宇宙の監督が、承認するかもしれない結び付きと対比してあえて裁くであろうか。

83:8.5 (930.1) しかしながら天の領域における結婚の理想はある。神の物質の息子と娘は、それぞれの局部恒星系の首都において男女の夫婦の絆での結び付きと産んで育てる目的のための理想の高さを描くのである。つまるところ必滅の人間の理想的結婚は、人間的に神聖である。

83:8.6 (930.2) 結婚は常に存在し、今もなおこの世の理想に関する人の最高の夢である。この美しい夢は、滅多にそっくりそのままは実現されないが、人間の幸福のために進歩する人類をよりすばらしい邁進へと引き寄せ、輝かしい理想として続いている。だが、若い男女には、家族生活内のつながりの厳しい要求に飛び込む前に結婚の現実についての何かが教えられるべきである。若者らしい理想化は、ある程度の結婚前の幻滅でいくらか緩和されるべきである。

83:8.7 (930.3) 結婚に関する若者らしい理想化は、しかしながら、阻止されるべきではない。そのような夢は、家族生活の将来の目標の視覚化である。結婚とその後の家族生活の実用的かつ平凡な要求実現への無感覚さを引き起こさせないとの条件で、この態度は、刺激的でありしかも役立っている。

83:8.8 (930.4) 結婚の理想は、近代においてすばらしい進歩をなした。女性は、いくつかの民族の中では配偶者と実際に等しい権利を享受している。少なくとも、概念では、家族は、性における貞節によって子育てのための忠実な

協力関係になりつつある。しかしこのより新い結婚の解釈でさえ、全人格と個性の互いの占有に極端に向きを変える必要はない。結婚は個人主義的理想であるだけではない。それは、現在の慣習の下に存在し機能する男女の進化する社会的な連携関係、すなわち禁忌により制限され、社会の法と規則により執行される連携関係である。

83:8.9 (930.5) 過去の世代の慣習の遅々とした進化において非常に長い間拒否されてきた権利である女性の特権の早まった増強が、突然に社会的組織に問題を押しつけることにより、家庭制度は、現在、重大な試練を受けているにもかかわらず、20世紀の結婚は、過去の時代のものと比較すると高い位置を占めている。

83:8.10 (930.6) [ユランチアに配置された主熾天使による提示]

論文 84
結婚と家族生活

84:0.1 (931.1) 物質的必要性が結婚生活を基盤づけ、性への渇望がそれを飾り、宗教がそれを認可し高め、国家がそれを要求し規制し、一方後の時代においては、進化する愛は、最も役に立ち荘厳な文明の機関、つまり家庭の先祖

として創造者としての結婚を正当化し、賛美し始めている。また家庭を築くということは、すべての教育的努力の中心であり核心であるべきである。

84:0.2 (931.2) 対をなすことは、純粋に、異なる自己満足の度合と結びつく自己永続化の行為である。結婚、つまり家庭建設は、主に自己維持の問題であり、それは社会の発展を含意する。社会自体は、家族単位の集合構造である。個人は、惑星要素としては極めて一時的である。家族だけが、社会的発展において継続的媒体である。家族とは、文化と知識の川が1世代から次世代へと流れる水路である。

84:0.3 (931.3) 家庭は、基本的に社会的機関である。結婚は、自己満足の要素は主に付帯的であり、自己維持における協力と自己永続化における連携関係から生じる。にもかかわらず、家庭は、人間存在に不可欠の3機能すべてを迎え入れるが、生命の増殖は、それを人間の基本的機関にし、性は、他のすべての社会活動からそれを隔離する。

1. 原始の対のつながり

84:1.1 (931.4) 結婚は、性関係に基づいてはいなかった。それに付随して起こった。結婚は、妻、子供、そして家庭の責任に妨げられることなく性欲をほしいままにした原始男性には必要とされなかった。

84:1.2 (931.5) 女性は、子供への肉体的、感情的な愛着のために男性との協力に依存しており、これが、結婚の避難保護へと彼女を促している。しかし、直接の何の生物的衝動も男性を結婚に導かなかった—ましてや、その中に抑えてもいなかった。男性にとり結婚を興味をそそるものにしたのは、愛ではなく、そんなことよりも飢餓が、女性とその子供が共有する原始の避難所に最初に引き付けたのであった。

84:1.3 (931.6) 結婚は、性関係からくる義務への意識的認識によってさえもたらされなかった。原始人は、性への耽溺とその結果の子供の誕生との関係を少しも理解しなかった。かつては処女が、妊娠できると一般に信じられた。初期に未開人は、赤子が霊の世界で作られるという考えを抱いた。妊娠は、女性に霊、進化する亡霊が入り込んだ結果であると信じられた。食習慣と悪意のこもった目

つきも、処女、あるいは未婚女性の妊娠の原因となりうると信じられ、後の考え方では、命の始まりを呼吸と日光に関連づけた。

84:1.4 (932.1) 多くの初期の民族は、亡霊を海に結びつけた。したがって、処女は、大いに水浴び慣習を制限された。若い女性は、性関係を持つよりも満潮の海での水浴びをはるかに恐れた。奇形児や未熟児は、不注意な水浴びの結果、あるいは邪悪な霊の働き経由で女性の身体に届いた動物の子と見なされた。野蛮人は、言うまでもなく、そのような子を出生時に絞め殺すことを何とも思わなかった。

84:1.5 (932.2) 教化への第一歩は、性関係は、孕ませる亡霊が女性に入る道を開くという考えとともに到来した。人は、以来、父母が子を作る生命遺産の要因への等しい貢献者であると気づいた。しかし、20世紀においてさえ多くの両親は、今だに人間の生命の起源に関し多かれ少なかれ子供を無知の状況に閉じ込める努力をしている。

84:1.6 (932.3) ある単純な種類のいくつかの家族は、再生機能が母子関係を伴うという事実によって保証された。母性

愛は、本能的である。それは、結婚とは違い慣習で起こらなかった。全哺乳類の母性愛は、局部宇宙の補佐の心・精神の固有の贈与であり、種の無力な幼年時代の長さに常に直接に正比例する強さと献身の中にある。

84:1.7 (932.4) 母と子の関係は、自然で、強く、本能的であり、またそれ故にそれは、原始の女性に多くの奇妙な状況への服従と言うに言えない辛苦への我慢を強いるものである。この抑えきれない母性愛は、男性とのすべての抗争においていつもそのような甚だしい不利な立場に女性を立たせてきた。にもかかわらず、人類の母性本能は、圧倒的ではない。それは野心、身勝手さ、宗教的信念によって阻まれるかもしれない。

84:1.8 (932.5) 母と子の関係は、結婚でも家庭でもないが、それは、その二つが生じるところの核であった。交配の進化過程における大きな進歩は、これらの一時的連携関係が、結果としてできる子を育てるに足る長さが続くときに生じ、それが、家事というものであった。

84:1.9 (932.6) 初期の対の男女らの反目にもかかわらず、関係の弛みにもかかわらず、存続の機会は、これらの男女の

連携関係により大いに向上した。1人の男性と1人の女性が協同するとき、家族や子はさておき、男性2人、あるいは女性2人のいずれよりもほとんどの点で優れている。性のこの組み合わせは、生存を高め、しかも人間社会のまさに始まりであった。性による分業は、また安らぎに寄与し幸福を増大させた。

2. 初期の母-家族

84:2.1 (932.7) 女性の周期性の出血や出産時の出血は、子供の創造者としての血を(魂の台座としてさえ)暗示し、人間関係の血の絆についての概念が始まった。初期におけるすべての子孫は、確かな遺伝質の唯一の部分である女系に加えられた。

84:2.2 (932.8) 原始の家族は、母と子の本能的な生物上の血の絆から生じたので必然的に母の家族であった。そして、多くの部族が長らくこの仕組みを持続した。母-家族は、群れの中での集団結婚の段階から後の改善された多婚と単婚の家族生活への唯一可能な変遷であった。母-家族は、自然で、生物学的であった。父-家族は社会的、経済的、政治的である。その他の点では進歩的なイ

ロコイ族が、決して本物の国家にならなかった主な理由の1つは、北米の赤色人種間の母-家族の持続である。

84:2.3 (933.1) 母-家族の慣習の下での妻の母は、家庭で最高の権威を享受したと言ってもいいほどであった。妻の兄弟とその息子は、家族管理において夫以上に活発であった。父親は、しばしば自身の子供に因んで改名された。

84:2.4 (933.2) 最も初期の人種は、要するに子供は母から来ると見なし、父親はあまり認められなかった。子供は、付き合い交わることで父親に似ると、または母親は、彼らの父親に似ることを望んだのでこの様にして「印された」と信じた。後に母-家族から父-家族への変化が生じると、父親は、子供をすべて自分の手柄にし、妊婦への禁忌の多くが、その後その夫にまで延長された。将来の父は、出産時が近づくと仕事をやめ、分娩に際しては3日から8日間何もせず妻とともに寝た。妻は、翌日起き重労働に従事するかもしれないが、夫は、祝賀を受けるために床に留まった。全ては、子に対する父の権利の確立のために設計された初期の慣習の一部であった。

84:2.5 (933.3) 最初は、男性が妻の身内の方に行くのが習慣であったが、後代になると、男性が、花嫁の代価を支払うか、または労働で支払ったあとで妻と子を自分の身内の方に引き取ることができた。母-家族から父-家族への変遷は、等しい親類関係の他のものは承認されているが、その他の点では無意味なある種のいとこ同士の結婚の禁止について説明している。

84:2.6 (933.4) 狩人の慣習の流れとともに、牧畜が、主要な食糧供給調整を人に提供すると、母-家族は、速やかな終わりに至った。それは、単に新たな父-家族とうまく競争できずに失敗に終わった。母方の男の親族に宿る力は、夫-父の集結力には匹敵することができなかった。女性には、出産と継続的権威と家庭内の拡大する力の行使の複数の課題は無理であった。接近しつつある妻の盗み取りとその後の妻の購入が、母-家族の流れを急がせた。

84:2.7 (933.5) 母-家族から父-家族への驚くべき変化は、かつて人類によって実行された最も根本的で全面的な180度の方向転換調整の1つである。この変化は、早速より大

きな社会的な表現をもたらし、家族の冒険を増大させた。

3. 父支配下の家族

84:3.1 (933.6) 母性本能が女性を結婚に導いたかもしれないが、慣習の影響に加え女性を結婚生活に留めおいたのは、男性の上回る強さであった。牧歌的生活には、慣習の新体系、家長型の家族生活を作り出す傾向があった。また牧夫と初期の農業慣習下における家族統一の基礎は、疑問の余地のない、しかも独断的な父の権威であった。すべての社会は、国家であろうが、または家族であろうが、家長体制の専制権威の段階を通過した。

84:3.2 (934.1) 旧約聖書時代に婦人に払われた乏しい礼儀が、牧夫の慣習の本当の反映である。「主は私の羊飼いである」という諺に見られるように、ヘブライの家長は、皆牧夫であった。

84:3.3 (934.2) だが、男性の女性に対する過去の時代の低い評価の責めは、男性ばかりにではなく同じく女性自身にもあった。女性は、非常時に機能しなかったが故に、原始時代に社会的認識を得なかった。女性は、華々しい英雄

でも危機の英雄でもなかった。母性は、生存闘争において明白な障害であった。母性愛は、部族防衛において女性を不利な立場に立たせた。

84:3.4 (934.3) 原始女性は、また無意識のうちに男性のけんか好きと男らしさへの称賛と喝采で自らの依存心を作り出した。戦士のこの精神的高揚は、男性の自我を高め、一方では負けず劣らず女性の自我を低下させ、さらに依存させた。軍服は、今だに女性の感情を強く喚起する。

84:3.5 (934.4) より進化した人種間では、女性は、男性ほどには大きくも強くもない。女性は、したがって弱ければ弱いほど、ますます抜かりがなくなり、早くから性の魅力の利用を学んだ。彼女は、わずかに深遠さでは劣るが、男性よりも注意深く保守的になった。男性は、戦場と狩りでは女性より優位であったが、家庭では、通常、女性が、最も原始の人々さえ打ち負かした。

84:3.6 (934.5) 牧夫は、生計のために群れに目を向けたが、女性は、その牧畜時代にわたってなお植物性食物を提供しなければならなかった。原始人は、土を回避した。それは、いかにも平和であり過ぎ冒険的でなさ過ぎた。ま

た、女性の方が、より上手に植物を育てられるというのが昔の迷信でもあった。彼女たちは母であったから。今日の多くの後退的部族では、男性は肉を、女性は野菜を調理し、また、オーストラリアの原始部族の前進中、女性は、決して獲物を襲わず、男性も屈んで根を掘ることはなかった。

84:3.7 (934.6) 女性は、いつも働いていなければならなかった。少なくとも現代まで女性は、真の生産者であった。通常、男性は、より簡単な道を選んできており、この不平等は、人類の歴史全体において存続した。家族の所有物を運び、子供の世話をし、このように戦い、もしくは狩猟のために男性の手を自由にしておき、女性は、いつも重荷を支える者であった。

84:3.8 (934.7) 女性の最初の解放は、男性が土地を耕すことを承諾したときに、その時までは女性の仕事と見なされてきたことをすることに同意したときに訪れた。男性捕虜がもはや殺されず農業専門家として俘にされたとき、それは大いなる前進であった。これが、家事と育児に多く

の時間を充てられるようになり、女性の解放をもたらした。

84:3.9 (934.8) 幼少児童への乳の供給がきっかけで乳児の早期の離乳となり、このため母親によるより多くの出産へと、時おり一時的な不毛をこのようにして救い、一方では牛乳と山羊乳の使用が、幼児死亡率を大いに減少させた。牧畜社会の段階では、母親は、赤ん坊が4、5歳になるまで授乳していた。

84:3.10 (934.9) 原始の戦争の減少が、性に基づく分業からくる相互の不一致を大いに小さくした。しかし男性が、見張りの務めを果たす一方で、女性は、まだ実際の仕事をしなければならなかった。昼夜にかかわらず無防備のままでいられる野営地も村もなかったが、この作業でさえ犬の家畜化により軽減された。一般的に言って、農業の到来が、女性の威信と社会的地位を高めた。少なくともその時までには男性自身が、農業者に変わったのは真実であった。そして、男性が、本気で土耕作に取り組むやいなや、次世代へとずっと連続していく農耕方法における大いなる改良が結果として起こった。男性が、狩りと戦

いで組織の価値を学び、これらの方法を産業に取り入れ、またその後女性の仕事の多くを引き継ぐとき、その労働のずさんな方式を大いに改善した。

4. 初期社会における女性の地位

84:4.1 (935.1) 一般的に言って、どの時代においても女性の地位は、社会的慣行としての進化過程の結婚の正しい評価基準であり、一方、結婚の進化それ自体が、人間文明の進歩を表すかなり正確な測定基準である。

84:4.2 (935.2) 女性の地位は、つねに社会の矛盾であった。女性は、つねに男性の抜け目のない操縦者であった。つねに彼女自身の関心と自身の前進のために男性のより強い性の衝動に乗じてきた。彼女は、自分の性の魅力を微妙に利用することで、無気力な奴隷の身分で縛りつけられている時でさえ、しばしば男性に支配力を奮うことができた。

84:4.3 (935.3) 初期の女性は、男性にとっての友人、恋人、愛人、仲間ではなく、むしろ一財産、使用人または奴隷であり、後には経済上の仲間、遊び道具、子を産む者であった。それにもかかわらず、適切で満足できる性の関係

は、いつも女性による選択と協力の要素を伴い、知性ある女性は、一種の性としてのその社会的地位の枠を越え、いつも直接の、個人的な地位へのかなりの影響を与えてきた。しかし、女性が束縛を緩和する努力において始終抜け目なさに頼ることを余儀なくされたという事実は、男性の不信と疑いを正す役には立たなかった。

84:4.4 (935.4) 男女には互いの理解において大きな困難があった。無知ゆえの疑念とぞっとするような魅力の混ざり合ったな奇妙な交錯の目で、時としては嫌疑や軽蔑をもって、見る男性は、女性を理解することは難しいとわかった。部族的、人種的伝統の多くは、ハヴァー、パンドーラ、または他の代表的女性のせいにする。これらの物語は、女性が男性に悪をもたらしたと見えるように常に歪められた。そして、このすべてが、一度限りの女性の普遍的な不信用を表している。独身聖職者への支持を引き合いに出す理由の中には女性の卑しさがあった。そう考えられていた大方の魔女が女性であるという事実が、昔の女性の評判を改善しなかった。

84:4.5 (935.5) 男性は、長い間、女性を風変わりに、異常でさえあると見なしていた。女性には魂がないとさえ信じた。したがって、女性は、名前さえ否定された。初期においては、女性との最初の性の関係への恐怖が存在した。したがって聖職者が、処女との最初の性交を持つのが習慣となった。女性の影さえ危険であると考えられた。

84:4.6 (935.6) 出産は、かつて一般的に、女性を危険で汚くすると見られた。そして、多くの部族の慣習が、母親は、子の誕生後に大規模なお祓いを受けなければならないと定めた。出産を控えた母親は、夫がお産に参加した集団以外の間では、一人にされ遠ざけられた。古代人は、家で子供を生ませるのを避けさえした。最終的には陣痛の間、老女が母親に付き添うことが許され、この習慣が、助産業をもたらした。陣痛の間、出産を容易にする努力から何十もの愚かなことが言われ、行われた。亡霊の干渉を防ぐために新生児に聖水をまき散らすのが習慣であった。

84:4.7 (935.7) 出産は純血部族の間では、比較的容易くほんの2時間か3時間しか掛からなかった。混血人種の間ではそれほど簡単ではない。もし女性が、出産時に、特に双子の出産で死亡したならば、霊との姦通罪を犯していると信じられた。その後、より高度の部族は、出産における死を天の意志として見た。そのような母親は、尊い理由で死んだと見なされた。

84:4.8 (936.1) 自分の衣服関しての女性のいわゆるしとやかさと肌の露出は、月経期間に気づかれることへの過度の恐れから起きた。このように看破されることは、嘆かわしい罪、禁忌違反であった。昔の慣習の下では、すべての女性は、青春から出産期の終わりにかけて月ごとにまる1週間家族と社会からの隔離を果たすことを免れなかった。女性が触れるもの全てが、座ったり、または横たわったものすべてが、「汚された」。悪霊を体から追い払う目的で月経後の度に容赦なく少女を殴打することが、長い間の習慣であった。しかし女性は、出産年齢を超えると、通常前よりも権利や恩恵が多く与えられ、もっと思いやりをもって扱われた。このすべてから見て、女性が、軽蔑されたことは奇妙ではなかった。ギリシア人で

さえ生理中の女性を3大汚染の原因の1つとみなした。残る2つは、豚肉とにんにく。

84:4.9 (936.2) これらの昔の概念がいかにに愚かであろうとも、酷使された女性に、少なくとも若いときに、もてなしの休息と有益な思索のために1カ月あたり1週間を与えたので、これらの昔の概念は幾らかの善を施した。したがって女性らは、残りの時間を男性仲間との対応に知恵を磨くことができた。また女性のこの隔離は、過剰の性の不節制から男性を守り、それによる人口制限と自制の増進に間接的に貢献した。

84:4.10 (936.3) 大いなる進歩が、自在に妻を殺す権利を男性が否定したときにあった。女性が、結婚祝いの品を所有することができたとき、同様に、急進的進歩があった。女性は、その後財産を所有し、管理し、処分さえする法的権利を獲得したものの、教会または国家のいずれかで役職に就く権利は、長らく奪われていた。女性は、キリスト後の20世紀までずっと、また20世紀にも、つねに多かれ少なかれ財産として扱われてきた。男性支配下における隔離から世界的規模の自由をまだ獲得していない。先

進的民族の間でさえ、女性を守る男性の試みは、いつも無言の優越性の主張である。

84:4.11 (936.4) にもかかわらず、原始の女性は、より最近に解放された同胞姉妹が常としたようには自らを哀れみはしなかった。原始の女性らは、煎じつめると相当に幸福で、満足していた。より良い、あるいは異なる生存の型を敢えて思い描かなかった。

5.発達する慣習下の女性

84:5.1 (936.5) 女性は、自己繁殖において男性と同等であるが、自己維持の協力関係においては明らかな不利な条件で働いており、この強いられた母性の不利な条件は、漸進的文明の進んだ慣習によって、それに男性のこれまで培ってきた増大する公正さの感覚によってのみ償うことができる。

84:5.2 (936.6) 社会の発展につれ、性慣習の違反の結果に女性がより苦しんだので、女性の間での性の基準は、より高くなった。男性の性の基準は、文明が要求するその公正さについての純然たる自覚の結果としての嫌々ながらの

改善をしているに過ぎない。自然は、公正さについて何も知ず—女性だけを出産の激痛で苦しめている。

84:5.3 (936.7) 性の平等に対する現代の考えは、美しく展開する文明にふさわしいが、それは、自然の中には見つけられない。男性は、力が正しいとき女性に権力を振るう。女性は、一層の正義、平和、公正が普及するとき、徐々に奴隷制度と薄暗がりから台頭してくる。一般に女性の社会的地位は、どの国、またはどの時代の軍国主義の程度に反比例して変化してきた。

84:5.4 (937.1) 男性は、意識的にも、意図的にも女性の権利を理解しないながらもその後徐々に、渋々それらを女性に返した。このすべてが、社会的発展に関する無意識の、無計画な話であった。付加された権利を楽しむ時が本当にやってくると、女性は、全く男性の意識的な態度にかかわらず、すべてを得た。ゆっくりと、しかし確実に、慣習は、文明の持続的発展の一部である社会的調整に備えるために変化する。進歩的慣習は、さらにより良い女性の待遇を徐々に提供した。女性に残酷さを固持したそれらの部族は、生残しなかったのである。

84:5.5 (937.1) アダーム系とノヅ系は、女性へのさらなる認識を許容し、また移動していくアンド系に影響をうけたたそれらの集団は、女性の社会的地位に関するエーデンの教えに影響を受ける傾向にあった。

84:5.6 (937.1) 初期の中国人とギリシア人は、周囲の大部分の民族よりも女性を望ましく扱った。しかしヘブライ人は、女性を殊の外信用しなかった。西洋において、キリスト教は、男性には厳しい性の義務を押しつけにより慣習を進歩させはしたものの、女性は、キリスト教に帰属するようになるパウーロスの教義の下で苦しい登坂を経験した。女性の地位は、イスラム教において女性にともなう独特の権利の剥奪の下ではほとんで絶望的であり、他のいくつかの東洋宗教の教えの下ではさらにひどい状態で暮らしている。

84:5.7 (937.1) 宗教ではなく、科学が、現実には女性を解放した。家での幽閉から女性を主に解放したのは、近代的工場であった。男性の肉体的能力は、もはや新しい維持機構における不可欠要素にはならなかった。科学が、生活

状態をすっかり変えたので、男性の力はもはや女性の力にそれほど勝るものではなかった。

84:5.8 (937.1) これらの変化が、家庭での奴隷状態からの女性解放に貢献し、現在ではある程度の個人の自由と男性とほとんど等しい性の決断を味わう女性のそのような地位の改善をもたらした。かつて、女性の価値は、その食物生産能力にあったが、発明と富が、その中で機能する新しい世界—優雅さと魅力の領域—の創造を可能にした。産業は、かくして女性の社会的、経済的解放のためのその無意識の、意図しない戦いを勝ちとった。そして、進化は、再度、啓示が達成しなかったことを成し得たのであった。

84:5.9 (937.1) 女性の社会的地位を支配する不公平な慣習に対する賢明な民族の反応は、その極端さにおいて誠に振り子のようであった。工業化の進んだ人種の間では、女性は、ほとんどすべての権利を受け、兵役などの多くの義務の免除を享受した。生存に向けての葛藤のあらゆる軽減は、女性の解放を高め、彼女は、一夫一婦制へのあらゆる進歩から直接的に恩恵を受けた。弱者は、いつも段

階的社会の発展において慣習のあらゆる調整における不均衡な利得を受ける。

84:5.10 (937.1) １対の理想的結婚において女性は、最終的には認識、威厳、独立、平等、教育を獲得した。しかし女性は、新たで前例のないすべてのこの成就に値いすると証明するのであろうか。現代女性は、社会的解放のこの大きな成就に怠惰、無関心、不妊、不貞で反応するのであろうか。今日、20世紀において女性は、世界での自身の長い間の存在の決定的な試練を受けようとしている。

84:5.11 (938.1) 女性は、人種の繁殖において男性の同等の相手であり、それ故、展開する人種の進化においても同様に重要である。したがって、進化は、いよいよ女性の権利の実現に向けて努力をしてきた。しかし、女性の権利は、決して男性の権利ではない。男性が女性の権利で栄えることができないのと同様に、女性は、男性の権利で栄えることはできない。

84:5.12 (938.2) それぞれの性は、自身の特有の生存活動範囲があり、その活動範囲内での自身の権利を同時に持っている。女性が、男性の権利のすべてを楽しむことを文字通

り切望するならば、その結果、遅かれ早かれ薄情で無感動な競争が、多くの女性が現在享受している騎士道的精神や心遣いと確かに取って代わるであろう。

84:5.13 (938.3) 文明は、男女間の行動の溝を決して取り除くことはできない。時代から時代へと慣習は変化するが、本能は、決して変わらない。生まれながらの母性愛は、解放された女性が、産業において男性の容易ならない競争相手になることを決して許さないであろう。それぞれの性は、生物上の相違による、また精神的な相違による自身の領域でつねに最高でいるであろう。

84:5.14 (938.4) 男女はそれぞれに、たとえ時として重なることはあるとしても、自身の特別な活動範囲を常に持つであろう。男性と女性は、等しい条件でただ単に社会的に競争するであろう。

6. 男女の連携

84:6.1 (938.5) 生殖の衝動は、自己永続のために絶えず男女を結びつけるが、それだけでは相互協力でともにいること—家庭の設立—を保証はしない。

84:6.2 (938.6) 人間の効を奏するあらゆる慣例は、作業の実用的調和に適応した個人的関心の反目を有しており、家事も例外ではない。結婚、すなわち家庭建設の基礎は、しばしば自然と社会の接触を特徴づけるその対立を伴う協力の最高の現れである。衝突は必然である。交配は先天的である。それは自然である。しかし、結婚は生物的ではない。それは社会的である。情熱は、男女が一緒になることを保証しはするが、弱い親の本能と社会慣習が、二人を結合している。

84:6.3 (938.7) 実際に見てみると、男性と女性は、親しく打ち解けた関係で生きる同じ種の明確な2つの別種である。それぞれの観点と生活への全体の反応は、本質的には異なる。完全かつ実際の相互理解はまったくできない。男女間の完全な理解には到達できない。

84:6.4 (938.8) 女性は、男性よりも洞察力があるように思えるが、いくらか論理的でないようにも見える。女性は、しかしながら、つねに道徳的基準の担い手であり、人類の精神的指導者であった。揺りかごを揺する手は、まだ将来の目標と親しくしている。

84:6.5 (938.9) 懸念するどころではなく、男女間の気質、反応、立場、考え方の違い、個別的にも集合的にも、人類にとって非常に有益であると見なすべきである。宇宙の生物の多くの系列は、人格顕示の二元的局面で創造される。この違いは、必滅者、物質の息子、中間ソナイターの間では男性、女性と呼ばれている。熾天使、智天使、モロンチア同伴者の間では、積極的、挑戦的、または消極的、後退的であると称されてきた。そのような双対関係は、楽園のハヴォーナ体系の特定の三位一体の団体が、そうでさえあるように、汎用性を大いに拡大し、固有の限界を克服している。

84:6.6 (939.1) 男と女は、人間の経歴においてはもとよりモロンチア的にも精神的にも互いを必要とする。男女間の観点の違いは、最初の人生を超えてまでも、また局部と超宇宙の上向の全体においてさえ持続している。そして、ハヴォーナにおいてでさえ、かつては男であり女であった巡礼者達が、楽園上昇においていまだに互いを補佐しているであろう。終局部隊においてさえ、被創造者は、決して人間が男性、女性と呼ぶ人格の傾向を抹消するほどには変化しないであろう。つねに人類の基本的なこの

2種類は、互いに引きつけ、刺激し、励まし助け合うであろう。つねにかれらは、複雑な宇宙問題の解決と多種多様の宇宙の困難の克服において互いに依存するようになるであろう。

84:6.7 (939.2) 男女は、決して完全な相互理解を望むことができるというわけではないが、互いに効果的に相補的であり、協力は、個人的にはしばしば多少は対立するものの、社会を維持し、再生させることができる。結婚は、性の差を解決するように考案された制度であり、一方で文明の継続に効を奏し人種の再現を保証する。

84:6.8 (939.3) 結婚は、社会構造上の基盤である家庭建設と家庭維持にそのまま通じるので、すべての人間慣習の母親である。家族は、自己保全方法に重大に繋がっている。それは、文明の慣習下における人種永続化の唯一の望みであるが、同時に最も効果的に、　自己欲求に対して一定の満足の形を提供する。家族は、男女の生物的関係の発展と夫と妻の社会的関係とを結合する人間の純粋に最大の達成である。

7. 家族生活の理想

84:7.1 (939.4) 性的結合は、本能的であり、子供は、その自然の結果であり、家族は、このように自然の成り行きで生まれる。人種、あるいは国家の家族が、そうであるようにその社会もそうである。家族が良ければ、社会も同様に良い。ユダヤ民族と中国民族のすばらしい文化の安定性は、その家族集団の強さにある。

84:7.2 (939.5) 女性の子供への本能的愛と配慮は、結婚と原始の家族生活の促進において、女性を関心をもつ当事者にさせた。男性は、　その後の慣習と社会的因習の圧力により家庭建設を強いられたに過ぎない。男性は、その性行為が、彼に生物上の因果関係を押しつけないが故に、結婚と家庭の確立に興味をもつまでには時間が掛かった。

84:7.3 (939.6) 性的繋がりは自然であるが、結婚は社会的であり、いつも慣習に規制されてきた。慣習(宗教的、道徳的、倫理的)は、財産、自尊心、騎士道精神と相まって、結婚と家族の制度を安定させる。慣習が変化するたびに家庭-結婚の安定性に変動がうまれる。結婚は今、財産の段階から個人の時代へと通過している。以前、男

性は、自分の所持品であったので女性を保護し、同じ理由で女性は従った。この制度は、その長所のいかんを問わず、安定性を提供した。今や女性は、もはや財産とは見なされず、新慣習が、結婚-家庭のしきたりを安定させるよう設計され登場しつつある。

84:7.4 (939.7) 1. 宗教の新しい役割—親の経験は、不可欠であるという教え、宇宙市民を生殖する考え、生殖の特権、—息子を父に与えること—に対する拡大的理解。

84:7.5 (940.1) 2. 科学の新しい役割—生殖は、ますます自発的、すなわち人間の掌中の対象になりつつある。理解の欠如が、古代においてはそれゆえに望んでもいない子供の出現を確実にした。

84:7.6 (940.2) 3. 快楽心への新作用—これが、人種生存への新要素を導き入れる。古代人は、望まれていない子供を死にさらした。現代人は、産むことを拒む。

84:7.7 (940.3) 4. 親の本能の高揚。今や各世代は、人種の生殖の流れから親の本能、子供、つまり次世代の予期される

両親の生殖の保証が不十分であるとき、そういった個人を排除する傾向にある。

84:7.8 (940.4) しかし、制度としての家庭は、つまり、1人の男性と1人の女性の間の協力関係は、明確にはダラマティアの時代から、およそ50万年前から始まる。アンドンとその直系子孫がずっと前に廃止した一夫一婦制の慣行。家族生活は、しかしながらノヅ系と後のアダーム系時代以前のものほどには自慢するものではなかった。アダームとハヴァーは、全人類に永久的影響を及ぼした。世界歴史において初めて、男女が、園において協力的に働いているのが観測されたのであるから。園芸者としての家族全体のエーデン的理想は、ユランチアでの新しい考え方であった。

84:7.9 (940.5) 初期の家族は、1つの居住施設に全員が住みながら、奴隷を含む関係する労働集団を包含した。結婚と家族生活が、いつも同じであるという訳ではなかったが、必然的に密接に関係してきた。女性は、ずっと個別の家族を欲し、最終的には意のままにした。

84:7.10 (940.6) 子への愛は、ほとんど普遍的であり、紛れもない生存価値がある。古代人は、子供の幸福に関する母の関心を常に犠牲にした。エスキモーの母は、今でも赤ん坊を洗う代わりに舐めさえする。しかし原始の母は、子供がまだ幼いときに食物を与え面倒をみるだけであった。子供が成長すると、動物のようにすぐに見捨てた。持続的で絶え間のない人間のつながりは、生物的愛情だけでは決して確立されたことがない。動物は自分の子供を愛している。人間—文明人—は、自分の子供の子供を愛している。文明が高ければ高いほど、子供の前進と成功における両親の喜びはより大きい。したがって、名前への自負心の認識が生まれる。

84:7.11 (940.7) 古代民族の間の大家族は、必ずしも情愛に満ちていたというわけではなかった。多くの子供が望まれたのは、次の理由からであった。

84:7.12 (940.8) 1. 労働者として貴重であった。

84:7.13 (940.9) 2. 老齢保険であった。

84:7.14 (940.10) 3. 娘は売りやすかった。

84:7.15 (940.11) 4. 家族の誇りが、名前の広がりを必要とした。

84:7.16 (940.12) 5. 息子は保護と防衛を提供した。

84:7.17 (940.13) 6. 亡霊への恐怖が、単独でいることへの畏怖を生んだ。

84:7.18 (940.14) 7. ある種の宗教は子を必要とした。

84:7.19 (940.15) 先祖崇拝者は、息子を持てないことを永遠に時を超えて最大の災難と見なす。それ等は、死後の饗宴で、息子が式の司祭を勤めるために、つまり亡霊の前進のために霊界を通して必要な犠牲を提供するために、息子を持つことを他の何よりも望んでいる。

84:7.20 (941.1) 子供の躾は、古代の未開人の間では非常に早くから始められた。また子供は、動物にとってそうであったように、反抗は不履行、あるいは死を意味するということを自覚した。現代の反抗の大きな一因をなしているのは、愚かな行為の当然の結果から文明が子供を防護をしていることである。

84:7.21 (941.2) エスキモーの子供は、生まれつき温順な小さな動物であり、ほんのわずかの躾と矯正でよく育つ。赤色

人種と黄色人種の両方の子供は、ほとんど等しく扱い易い。しかしアンド系の遺伝を有する人種の子供は、それほど穏やかではない。これらのより想像的で大胆な若者は、　より多くの指導と躾を必要とする。子供の育成に関する現代の問題は、次の事柄によってますます困難になっている。

84:7.22 (941.3) 1. 大きな度合の人種混合。

84:7.23 (941.4) 2. 不自然の、しかも浅薄な教育。

84:7.24 (941.5) 3. 両親を模倣することでの子供の教養会得の不能性—家族の場面から両親がほとんどの時間欠けている。

84:7.25 (941.6) 家族についての昔の考えは、生物的であり、つまり両親は、子供の存在の創造者であるという認識に起因した。家族生活の前進的理想は、親の幾つかの権利を与える代わりに子供を世界にもたらし、人間の存在の最高の責任を伴うという概念に通じている。

84:7.26 (941.7) 文明は、両親をすべての義務を引き受ける者、子供をすべての権利を持つ者と見なしている。子供の両

親への敬意は、親の生殖上の恩義に含まれる認識にではなく、子供が、人生の戦いに勝つ支援の際に愛情深く示される世話、躾、情愛の結果として自然に生まれてくる。本物の親は、賢明な子供が認識し感謝するようになる連続的な奉仕と援助に従事している。

84:7.27 (941.8) 結婚制度は、現在の産業と都市の時代において新経済に沿って進化している。家族生活は、ますます費用が嵩むようになり、同時にかつては資産であった子供は、経済負担になってしまった。しかし文明のに1世代の高まる意欲に掛かっている。そして親の責任を国、または教会へ移行させるいかなる試みも、文明の福祉と前進にとっては自滅的であると判明するであろう。

84:7.28 (941.9) 結婚とは、子供と結果として生じた家族生活と共に人間性における最高の可能性への刺激であり、同時に人間の人格のこれらの速められた属性の表現に理想的な手段を提供する。家族は、人類の生物上の永続化に備える。家庭は、血を分けた兄弟関係の倫理が成長する子供に理解されるかもしれないところの自然で社会的な活躍の舞台である。家族は、両親と子供が、すべての人間

の間における兄弟愛の実現にこの上なく不可欠である我慢強さ、利他性、寛容、忍耐についての教えを学ぶ基礎的な友愛単位である。

84:7.29 (941.10) 文明的人種が、より広くアンド系の家族協議会の習慣に戻るならば、人間社会は、大いに改善されるであろう。アンド系は、家長的、あるいは独裁的形式の家族政府を維持しなかった。非常に親密で付き合いやすく、自由で率直に家族にかかわるあらゆる提案や規則について議論した。すべてのそれぞれの家族統率の中で理想的に友愛的であった。理想的な家族では子としての、また親としての愛情は、双方とも兄弟愛の献身により増大する。

84:7.30 (942.1) 家族生活は、真の道徳の祖、義務への忠誠意識の原型である。家族生活内の強制的関係は、他の、しかもさまざまの個性への必然的調整の抑え難い衝動を経験し、人格を安定させ、その成長を促進する。本物の家族—良い家族—は、創造者のその子供への態度というものを親である生殖者に明らかにするのはなおさらのことであり、同時に、そのような本物の両親は、宇宙のすべ

ての子供の楽園の親からの愛を向上的開示の長い連続の1番目の開示を我が子らに描き示している。

8. 自己満足の危険性

84:8.1 (942.2) 家族生活に対する大きな脅威は、現代の快楽の狂気である自己満足の脅迫的な高まりである。結婚への主要誘因は、以前は経済上のものであった。性の誘引力は二次的であった。結婚は、自己維持の上に築かれ、自己永続化につながり、そして付随的に自己満足の最も望ましい型の1つを提供した。それは、生きるための3大誘因のすべてを有する人間社会の唯一の制度である。

84:8.2 (942.3) 元々、財産は、自己維持の基本的慣例であり、一方結婚は、自己永続化の独特な慣例として機能した。周期的な性の耽溺と並び、食物による充足感、遊び、笑いは、自己満足の手段であったが、進化する慣習が、自己満足のいかなる別個の制度の設置に失敗したことは、一つの事実としてある。そしてそれは、人間のすべての制度にこの快楽追求がすっかり染み込んでいる愉快な楽しみの専門的技術を進化させる失敗によるものである。財産の蓄積は、自己満足のすべての形式を増大するため

の手段になっているが、結婚は、単に喜びの方法としてしばしば見られる。そして、この耽溺、つまりこの広く行き渡った快楽の狂喜が、現在、家族、つまり家族生活の進化的な社会制度に押しならされてきたという最大の脅威の構成要素となっている。

84:8.3 (942.4) 紫色人種は、新しく、しかも単に不完全に認識された特性を人類の経験に取り入れた—笑いの感覚に結びつけられた遊びの本能。それは、適度にサンギク系とアンドン系にはあったが、アダーム系は、この原始的性向を喜びの可能性、新しくて美化された自己満足の形式に高めた。基本的な自己満足の型は、飢餓の緩和は別として、性的満足であり、この官能的な喜びの型は、サンギク系とアンド系の混合により途方もなく高められた。

84:8.4 (942.5) アンド系以後の人種の不安、好奇心、冒険、および快楽放棄の特徴の取り合わせには実際の危険がある。魂の飢餓は、物理的な喜びに満足はできない。家庭への愛と子供への愛は、浅はかな快楽追求によって増大はされない。あなたは、芸術、色、音、韻律、音楽、および身体の飾りの供給源を使い果たすが、その結果、魂

の向上、または精神の育成をこのようにして望むことはできない。虚栄と流行は、家庭構築と子供の育成で役目を果たすことはできない。高慢と競争は、続く世代の生存の中味を高めるには無力である。

84:8.5 (942.6) 前進する天の存在体すべてが、逆戻りの管理者の休息と活動を享受している。健全な気分転換を手に入れ、また向上させる遊びに従事するすべての努力は、健全である。爽快な睡眠、休息、気晴らし、単調さからくる退屈を防ぐすべての楽しみには価値がある。対戦競技、物語、食物の味の良ささえ自己満足の型として役立つことができる。(食物の味わいに塩を用いるときは止まって、人が、およそ100万年間、単に食物を灰に浸すことだけで塩が得られたということを考えなさい。)

84:8.6 (943.1) 人に楽しませなさい。無数の方法で人類に喜びを見つけさせなさい。進化的人類に正当な自己満足の型、つまり長い上向きの生物学上の闘いの成果を探検させなさい。人は、現代のいくつかの喜びと楽しみを得るに値する。しかし運命の目標によく目を向けなさい。楽しみは、自己維持の制度となった財産崩壊につながるな

らば、実に自滅的であり、そして自己満足が、もし結婚の崩壊、家族生活の退廃、家庭—人間の進化の最高の習得と文明生存の唯一の望みである家庭—の破壊を引き起こすならば、自己満足は、誠に致命的な犠牲を払ったのである。

84:8.7 (943.2) [ユランチアに配置された主熾天使による提示]

論文 85
崇拝の起源

85:0.1 (944.1) 原始宗教には、道徳的関連性や精神的的影響は別として、生物的起源、進化的自然的発展があった。高度の動物には、恐怖はあるが幻想はなく、したがって何の宗教もない。人間は恐怖心から、また幻想によって原始宗教を作り出す。

85:0.2 (944.2) 人類進化における崇拝の原始の表現は、人の心が、宗教と呼ばれるに足る現在と将来の人生のより複雑な概念を定式化することができるずっと以前に現れる。初期の宗教は、本質的には完全に観念的であり、もっぱら関連する情況に基づいた。崇拝目的は、要するに示唆的であった。手近な自然のもの、または原始の単純な心

のユランチア人の当たり前の経験に大きく迫る自然のものから成った。

85:0.3 (944.3) 宗教が一旦自然崇拝を超えて発展すると、それは、精神起源の根底を確保はしたが、それでもなお、つねに社会的環境に条件づけられた。自然崇拝が展開するにつれ、人間の概念は、超人間界での分業を思い描いた。湖、樹木、滝、雨、および他の何百もの通常の地象には、自然の霊があった。

85:0.4 (944.4) しばしば人間は、自分を含む地上の総てを礼拝した。また、空や、地下の想像可能なほぼ総てのものを敬った。原始人は、すべての力の徴候を恐れた。自分が理解できないあらゆる自然現象を崇めた。嵐、洪水、地震、地滑り、火山、火、熱、寒さなどの強力な自然の力への観察は、人の拡大する心に大いに感銘させた。人生での不可解な事柄は、今だに「神の行為」とか「大神の神秘的摂理」と呼ばれている。

1. 石と丘の崇拝

85:1.1 (944.5) 進歩する人間が崇拝した最初の対象は、石であった。今日南インドのカテーリ部族は、北インドの多数

の部族がするように今でも石を崇めている。ヤコブは、石を尊んでいたので、その上で眠った。それを塗布さえした。ラーケルは、自分の天幕の中に多くの神聖な石を隠し持った。

85:1.2 (944.6) 古代人は、石が、耕作地または牧草地の表面にまったく突然に現れる様を理由に通常ではないとしてまず強い印象をうけた。人は、浸食、あるいは土をひっくり返す結果のいずれも考えに入れなかった。初期の民族は、石の動物との頻繁な類似に大いに感心した。文明人の注意は、動物の顔や人の顔にさえ非常に類似している山の中の数多くの形象に引き付けられる。しかし、原始の人間がうけた最も深遠な影響は、目の辺りにした壮大に燃えながら大気に突進する流星のような石によってであった。流星は、古代人にとり凄じいものであり、古代人は、そのように赤々と燃え上がる筋は、地球への霊のその通り道に印されると容易に信じた。人が、そのような現象を、特にその後に隕石を発見したような時に、崇拝へと導かれたのは不思議ではない。そしてこれが、他のすべての石へのさらなる崇敬となった。ベンガルでは

多くの者が、西暦1880年に地球に落下した隕石を崇拝している。

85:1.3 (945.1) 古代のすべての氏族と部族には、それぞれの神聖な石があり、現代民族のほとんどが、ある種の石—自分の宝石—への崇拝の度合いを明白に示している。インドでは5個の一塊まりの石が崇敬された。ギリシアでは、30個の塊であった。赤色人種の中では、通常それは石の円であった。ローマ人は、木星を呼び出すとき、いつも石を空中に投げた。インドでは、今日に至るまで目撃者として石を使用することができる。いくつかの地域では、法の護符として石が用いられているかもしれないし、その威光により犯罪者を法廷に引っ張りだすことができる。しかし単純な者は、敬虔な儀式の対象と神とをいつも見極めるというわけではない。そのような盲目的崇拝物は、しばしば真の崇拝対象の単なる象徴である。

85:1.4 (945.2) 古代人は、石の穴に独特の敬意を抱いた。そのような多孔性の岩石は、病気の治癒に著しく効果があると考えられた。石を運ぶために耳に穴を開けられはしなかったが、石は、穴を開けておくために耳にはめられて

いた。現代でさえ、迷信深い人々は、硬貨に穴を作る。アフリカでは、原住民は、迷信の対象の石のことで騒ぎ立てる。事実石は、進歩の遅い部族や民族間ではいまだに迷信的崇拝で保持されている。石の崇拝は、今でも世界中で広範囲にわたっている。墓石は、死んだ同胞の亡霊や霊への信仰に関連して石に彫られた形象や偶像の名残りの象徴である。

85:1.5 (945.3) 丘の崇拝は石の崇拝に続き、崇拝されるべき最初の丘は大きい石の構造であった。それは、やがて神が山に居住したと信じる習慣となり、故に、土地の高い盛り上がりは、この補足的理由から崇拝された。時の経過とともに、幾つかの山々は特定の神に関連づけられ、その結果、神聖になった。無知で迷信深い原住民は、善霊と神格の発展的後の概念で同一視される山とは対照的に、洞窟は、その悪霊と、そして魔物と共に、地下の世界に通じると信じた。

2. 植物と樹木の崇拝

85:2.1 (945.4) 植物は、そこから得られ酔わせる液体がもとで最初は恐れられ、その後崇拝された。原始人は、陶酔は

人を神にすると信じた。そのような経験に関し何か珍しく神聖なものがあると考えられた。現代でさえ、アルコールは、「スピリッツ」として知られている。

85:2.2 (945.5) 古代人は、発芽する種子を恐れと迷信深い畏敬をもって見た。使徒パウーロスが、発芽する種子から深遠な精神的教訓を引き出したり、宗教上の信念を意味しようとした最初の者ではなかった。

85:2.3 (945.6) 木の崇拝宗派が、最古の宗教集団の中にある。初期の全ての結婚は、木の下で執り行われ、女性が、子供を欲するとき森林の中で頑丈な樫を愛情を込めて抱いているのが時々見かけられるのであった。多くの植物と樹木は、実際の、または架空の薬効の理由で尊ばれた。未開人は、すべての化学作用による効果を超自然力の直接の働きによるものと信じた。

85:2.4 (945.7) 樹木の霊に関する考えは、異なる部族と人種間で大きく変わる。いくつかの木には優しい霊が宿った。他の木には人を欺くような、または残酷なものが隠れた。フィンランド人は、ほとんどの木には親切な霊が居住すると信じた。スイス人は、油断のならない霊が入っ

ていると信じ、長い間木に疑いの目を向けた。インドと東ロシアの住民は、木の霊を残酷であると見なす。パタゴニア人は、初期のセム族のように未だに樹木を崇拝する。ヘブライ人は、樹木崇拝の中止後もずっと様々な神を木立ちの中で崇拝し続けた。中国を除き、かつては生命の木の一般的信仰が、存在した。

85:2.5 (946.1) 木製の占い棒によって地面の下の水、あるいは貴金属を検出することができるという信仰は、古代の樹木信仰の名残りである。メイポール、クリスマスツリー、それに木をコツコツと叩く縁起をかつぐ習慣は、木の崇拝と後日の木の信仰のいくつかの古代の習慣を永続化している。

85:2.6 (946.2) 自然崇拝のこれらの最も初期の型の多くは、後の進展的崇拝方法と混合されるようになったが、最も初期の心の補佐が、活動していた崇拝の型は、人類の新たに目覚める宗教の本質が、精神的影響の刺激に十分に反応をするようになるずっと以前に機能していた。

3. 動物崇拝

85:3.1 (946.3) 原始人には、より高度の動物に対して一風変わった感情と仲間意識があった。先祖は、動物と同居し、結婚さえした。初期における南アジアでは、人間の魂は、動物の型で地球に戻ると信じられた。この信仰は、動物崇拝のより早期の習慣の遺風であった。

85:3.2 (946.4) 古代人は、その力と抜け目のなさに対して動物を崇めた。古代人は、ある生き物の鋭い臭覚と遠見の利く目は、霊の誘導を示すと考えた。動物はすべて、ある人種、あるいは別の人種によって同時に、あるいは違った時に崇拝された。そのような崇拝の対象の中には、半分は人間で半分は動物と見なされたケンタウロスや人魚などの生き物があった。

85:3.3 (946.5) ヘブライ人は、ヒズキーヤ王の時代まで蛇を崇拝していたし、またはヒンズー教徒は、いまだにイエヘビと親しい関係を保っている。中国人の竜の崇拝は、蛇信仰の名残りである。蛇の知恵は、ギリシアの薬の象徴であり、いまだに現代の医師に用いられている。蛇使いの技術は、蛇愛好宗派の巫女の時代から伝えられ、毎日蛇に咬まれた結果免疫ができ、実際、本物の毒液中毒者

になり、この毒なしでは暮らしていくことができなかった。

85:3.4 (946.6) 昆虫や他の動物崇拝は、黄金律—してもらいたいと思うことを他にも(あらゆる生命の型にも)施すこと—の後の曲解により促進された。かつて古代人は、風という風は、鳥の翼により生じると信じ、したがって翼があるすべての生物を恐れもし、崇拝もしていた。初期のスカンジナビア人は、いろいろな食は、太陽か月の一部をむさぼり食ったオオカミが引き起こしたと考えた。ヒンズ一教徒は、しばしば馬の頭をもつヴィシュヌを表現する。動物の象徴は、多くの場合忘れられた神か、または消え去った信仰を意味する。子羊は、進化的宗教の初期に典型的な生贄動物となり、鳩は平和と愛の象徴となった。

85:3.5 (946.7) 宗教における象徴物は、その象徴が本来の信心深い理念を置き換えるか、または置き換えないという程度において良いかもしれないし、または悪いかもしれない。また、象徴主義は、有形物が直接、かつ実際に崇拝される直接的偶像崇拝と混乱されてはならない。

4. 崇拝要素

85:4.1 (946.8) 人類は、土、空気、水、および火を崇めてきた。原始民族は、湧き水を尊び、川を崇めた。洗礼は、バビロンで宗教儀式になり、ギリシア人は、年に一度の儀式的沐浴を習慣的に行なった。古代人は、容易く泡立つ湧き水、ほとばしり出る泉、流れる水、激しい急流に霊が住んでいたと想像した。今でも、モンゴルでは影響力のある川の信仰が栄えている。動く水、は、霊の生気と超自然力の信仰でこれらの単純な心を鮮やかに刻みつけた。時に、溺れる者は、ある種の川の神を怒らせるのを恐れ、救助を拒絶されるのであった。

85:4.2 (947.1) 多くの事柄や行事が、異なる時代の異なる民族への宗教的刺激として働いた。虹は、まだインドの丘陵部族の多くが崇拝している。インドとアフリカの両国では、虹は、巨大な天の蛇であると考えられている。ヘブライ人とキリスト教徒は、それを「約束の虹」と見なす。同様に、世界の一部で慈悲深いと見なされる感化力は、他の地域では悪意があると見なされるかもしれない。東風は、雨をもたらすので南米では神である。インドでは、埃をもたらし、干魃を招くので、悪魔である。

古代のベドゥイン族は、自然の霊が砂の渦を引き起こすと信じ、モーシェの時代にさえ、自然の霊への信仰は、ヘブライの神学における火、水、空気の天使としてそれらの永続化を保証するほどに強いものであった。

85:4.3 (947.2) 雲、雨、霰はすべて、数多くの原始部族と初期の自然崇拝集団に恐れられ、崇拝されてきた。暴風は、雷と稲妻とともに古代人を畏怖させた。古代人は、雷を立腹している神の声と見なすほどにこれらの自然の撹乱を強く刻印されれた。火の崇拝と稲妻への恐怖は、結びつけられ、初期の多くの集団の間で広まった。

85:4.4 (947.3) 火は、原始の恐怖にかられた必滅者の心では魔法と混同されていた。魔術の信者は、魔術の常套手段の実践において1件の偶然の肯定的な結果を生き生きと思い出しはするものの、20件の否定的な結果、つまり徹底的な失敗は無頓着に忘れてしまう。火の崇敬は、ペルシアでその頂点に達し、そこでは長い間持続した。いくつかの部族は、神自身として火を崇拝した。他は、自分達の敬う神の浄化し清める霊の燃える象徴としてそれを崇敬した。巫女は、神聖な炎を見守る務めを任され、20世

紀においては蝋燭が、多くの礼拝儀式の一部としてまだ燃えている。

5. 天体崇拝

85:5.1 (947.4) 岩石、丘陵、樹木、動物の崇拝は、自然要因への恐れを伴う崇敬を経て太陽、月、星の神聖視へと自然に展開した。星は、インドや他の場所においては、肉体の生活からこの世を去ってしまった偉人の栄光の魂と見なされた。カルデア人の星の崇拝者は、自分たちが空の父と地球の母の子であると考えた。

85:5.2 (947.5) 月の崇拝は太陽崇拝に先んじた。月の崇拝は、狩猟時代がその絶頂であったが、太陽崇拝は、その後の農耕時代の主要な宗教儀式になった。太陽崇拝は、最初にインドで広範囲に定着し、そこでは最も長く続いた。ペルシアでの太陽崇拝は、後のミトラ教をもたらした。多くの民族の間では、太陽は、自分達の王の先祖と見なされた。カルデア人は、「宇宙の7個の円」の真ん中に太陽を置く。後の文明は、週の最初の日にその名前を与えて太陽を重んじた。

85:5.3 (947.6) 太陽神は、気に入りの人種の救済者として授けられたと時々考えられた天命の処女から生まれた息子の神秘的な父であると考えられた。これらの超自然の幼児は、通常、並はずれた方法で救われるべく特定の神聖な川に流され、その後、成長し奇跡を行なう人物やその民族の救出者となるのであった。

6. 人の崇拝

85:6.1 (948.1) 人間は、地上と天上のその他のすべてを崇拝し、そのような敬愛で自身を敬うことをためらわなかった。単純な未開人は、獣類、人間、神の間の区別を明確にしない。

85:6.2 (948.2) 古代人は、一風変わった人々をすべて超人とみなし、そのような人物を恐れるあまり敬虔な畏怖の念をもった。文字通りそういう者達をある程度崇拝していた。双子を持つことさえ非常に幸運であるか、または非常に不運であると見なされた。精神異常者、癲癇患者、精神薄弱者は、そのような異常な人物には神が宿ると信じる通常の精神の仲間にしばしば崇拝された。聖職者、

王、予言者は、崇拝された。ずっと昔の聖なる男性は、神に霊感をうけたと見られた。

85:6.3 (948.3) 部族の長は、死ぬと祭られた。その後、優れた魂は、この世を去ると聖列に加えられた。助けをかりない進化は、賛美され、高められ、進化した死んだ人間の霊より上には決して神を高めることはなかった。初期の進化的宗教は、それ自身の神を創造する。神は、顕示の過程において宗教を定式化する。進化的宗教は、その神を必滅の人間の形に、またそれに似せて創造する。啓示的宗教は、必滅の人間を神の形に、またそれに似せて進化させ変えようとする。

85:6.4 (948.4) 起源が人間であると考えられていた亡霊の神は、自然崇拝がすべての神—神の位置に上げられた自然の霊—を進化させたのであるから自然神とは区別されるべきである。自然信仰は、後に登場する亡霊信仰と共に展開し続け、それぞれが、もう一方へ影響を与えた。多くの宗教体系は、自然神、および亡霊神である神の二元的概念を有した。いくつかの神学では、これらの概念

は、稲妻の主でもある亡霊の英雄トールに例証されるように紛らわしくからみ合っている。

85:6.5 (948.5) 人間による人間の崇拝は、時の支配者が、臣下からのそのような崇敬を命じ、そのような要求を正当化して神の子孫であると主張したときその頂点に達した。

7. 崇拝と英知の補佐

85:7.1 (948.6) 自然崇拝は、原始の男女の心で自然に、しかも自発的に起こったように思えるかもしれないし、実際そうであった。しかし、これらの同じ原始の心の中では6番目の補佐の精霊が、人間進化のこの段階の導く影響力としてずっと活動していた。この精霊は、その最初の顕現がいかに原始的であろうとも、絶えず人類の崇拝意欲を刺激していた。崇拝の精霊は、動物的恐怖が信心深さの表現を動機づけたにもかかわらず、また、その早期の習慣が自然の対象物を中心に置いたにもかかわらず、人間の崇拝への衝動に明確な起源を与えた。

85:7.2 (948.7) 人は、考えではなく感情が、すべての進化的発展における影響を誘導し支配しているということに気づ

かなければならない。原始の心には、恐れ、回避、名誉、崇拝の間に違いはほとんどない。

85:7.3 (948.8) 崇拝意欲が知恵により諭され導かれるとき—瞑想的、経験的な考え—それは、そのとき真の宗教現象へと前進し始める。7番目の補佐の精霊が、つまり英知の精霊が、効果的な活動を成し遂げるとき、人間は、そのとき崇拝において自然や自然物から本来の神に、万物の永遠の創造者に向き直り始める。

85:7.4 (949.1) [ネバドンの輝かしい宵の明星による提示]

論文 86
初期の宗教の進化

86:0.1 (950.1) 先行する、原始の崇拝衝動からの宗教の進化は、顕示に依存してはいない。宇宙の精霊贈与の6番目と7番目の心の補佐の指示の影響下にある人間の心の正常な機能は、そのような発達を保証するにはまったく十分である。

86:0.2 (950.2) 宗教発生前の自然の力に対する人間の最も早期の恐怖は、自然が人格化され、霊化され、遂には人間の意識で神格化されるようになったとき、徐々に宗教にな

った。したがって、原始の型の宗教は、そのような心が超自然の概念を受け入れるやいなや、進化する動物の心の心理的慣性からの自然な生物的結果であった。

1. 偶然: 幸運と不運

86:1.1 (950.3) 自然崇拝の衝動は別として、初期の進化的宗教には、人間の偶然という経験—いわゆる運、通常の出来事—にその発端があった。原始人は、食糧の狩人であった。狩りの結果は、そもそもどうしても様々であるし、これが、人間が幸運と不運の解釈をする自らの経験に確かな起源を与える。不幸は、絶えず不安定に悩まされる生活の崖っぷちに住む男女の人生での大きな要因であった。

86:1.2 (950.4) 未開人の限られた知的展望は、偶然というものに意識を集中するので、運が人生において恒常的要因となる。原始のユランチア人は、生活水準のためにではなく生存のために藻掻いた。偶然が、重要な役割を果たす危険な生活を送った。未知の、見えない災難への絶え間ない恐怖は、あらゆる楽しみを効果的におおい隠す絶望の雲としてこれらの未開人の上にしだれ掛かった。未開

人は、不運を持たらす何かをすることに対する絶え間ない恐怖の中に生きた。迷信深い未開人は、いつも一続きの幸運を恐れた。そのような幸運を確実な災難の前触れとして見た。

86:1.3 (950.5) この絶えず付きまとう不運への恐怖は、無力にさせた。目的もなく暮らしていて好運に遭遇する—無償で何かを得る—かもしれないならば、なぜ、一所懸命に働き不運の報いを受ける—何かの代償に何も得ない—のか。軽率な人は、幸運は忘れる—それを当然のことと思う—が、不運は痛々しいほどに覚えている。

86:1.4 (950.6) 古代人は、不確実性と偶然—不運—の恐怖にハラハラしながら生きた。人生は、興奮させる偶然の遊技であった。生存は、賭けであった。部分的に文明度の高い人々は、まだ偶然を信じ、長引く賭けに走る傾向を示すというのも驚くに値しない。原始人は、2つの強力な関心事の間を行き来した。無償で何かを得る情熱と何かの代償に何も得ない懸念。そしてこの生存の賭けは、初期の未開人心にとり主要な関心であり、最高の魅力であった。

86:1.5 (951.1) 後の牧夫は、偶然と運について同じ見方をしたが、それより後の農業従事者は、人が、あまり、もしくは全然支配できない多くの事柄に作物が直接影響を及ぼされると次第に意識した。農夫は、自分が、暑さと寒さだけでなく、干魃、洪水、霰、嵐、病害虫、および害虫の犠牲者であることがわかった。これらの自然の影響の総てが、個々の繁栄に影響するとき、それらは幸運、もしくは不運と見なされた。

86:1.6 (951.2) 偶然と運に関するこの概念は、すべての古代民族の哲学を強烈に普及した。それは、近代においてさえソロモンの知恵の中で言及されている。「私は戻ってみて、そして、競争は足の早い人のためではなく、戦いは勇士のものではなく、またパンは知恵ある人のものではなく、また富は悟りのある人のものではなく、愛顧は技量のある人のものではないことが分かった。しかも、運命と偶然はそれらの人々全員に降り掛かる。人は自分の運命を知らないが故に、悪い網にかかった魚のように、罠にかかった鳥のように、人の子らもまた、災いの時が突然自分達を襲うと、罠にかかってしまう。」

2. 偶然の擬人化

86:2.1 (951.3) 不安は、未開人の心の自然な状態であった。男女が、過度の不安に陥ると、単純に遠い昔の先祖の自然な状態に戻る。そして、不安が実際に苦痛になると、それは、活動を抑制し、必ず進化上の変化と生物的適合を始める。痛みと苦しみは、漸進的進化に不可欠である。

86:2.2 (951.4) 生活のための葛藤は、非常に苦痛であり、一部の進歩の遅い部族は、今だに遠吠えし、それぞれの新たな日の出を悲しみさえするほどである。原始人は、止むことなく「だれが私を苦しめているのか」と尋ねた。自分の災いに物質的原因を見つけず、精神的説明に落ち着いた。神秘なものへの恐怖、見えないものへの畏敬、未知の畏怖から生まれる宗教もまた、そうであった。自然の恐怖は、その結果、偶然のせいで、そして神秘のせいで、まず、生存のための戦いにおける要因となった。

86:2.3 (951.5) 原始の心は、論理的であったが、知的連携に対する考えはあまりなかった。未開の心は、無教育で、完全に素朴であった。1つの出来事が別の出来事に続いて起こったならば、未開人は、それらが原因と結果であると考えた。文明人が迷信とすることに対して、未開人

は、単に無知であった。人類は、目的と結果の間に必ずしも何の関係もないことを学ぶのに時間がかかった。人間は、生存への反応は行為と行為の結果の間に現れると分かり始めたばかりである。未開人は、すべての実体のない、また抽象的なものを擬人化しようと努め、その結果、自然と偶然の両方が亡霊—霊—として、後には神として擬人化されるようになる。

86:2.4 (951.6) 人は当然のことながら自分にとり最善であるもの、即座の、または先での利益になるものを信じる傾向にある。私利が論理を大きく曖昧にする。未開人の心と文明人の心の相違は、その中味よりも性質、質よりもむしろ程度の問題である。

86:2.5 (951.7) しかし、理解し難しいものを超自然の原因にし続けるのは、知的で困難な仕事のすべての形式を避ける怠惰で便利な方法に他ならない。運は、単にいかなる時代の人間生存の説明し難いものを覆うために作られた用語である。それは、人が見抜くことはできない、もしくは、そうしたくないそれらの現象を意味する。偶然は、人が無知であり過ぎるか、または原因を割り出すには怠

惰であり過ぎるということを示す言葉である。人は、好奇心や想像力が貧困であるときにだけ、人種が自発性と冒険を欠くときにだけ、自然の出来事を事故、あるいは不運と見なす。生活の現象の探求は、遅かれ早かれ機会、運、およびいわゆる事故への人の思考体系を壊し、従って、すべての効果が、明確な原因に先導される宇宙の法と秩序を代替する。このようにして、生存の恐怖は、生活の喜びに取り替えられるのである。

86:2.6 (952.1) 未開人は、すべての自然は生きている、何かに所有されていると見なした。文明人は、自分の邪魔をしたり、突き当たるそれらの無生物を蹴ったり呪ったりする。原始人は、決して何かを偶然とはみなさなかった。いつも、すべてが意図的であった。原始人にとっての運命の領域、すなわち運の作用、つまり霊界は、原始社会と同じく末組織的で場当たり的であった。運は、霊界の奇妙で気まぐれな態度と見なされた。後には神々の滑稽として。

86:2.7 (952.2) しかし、すべての宗教は、霊魂信仰から発達しなかった。超自然にかかわる他の概念は、霊魂信仰と同

時性であり、これらの信仰はまた崇拝へとつながっていった。自然主義は宗教ではない—それは宗教の子である。

3. 死—不可解なもの

86:3.1 (952.3) 進化する人間にとっての死は、最高の衝撃、偶然と神秘の最も理解しにくい組み合わせであった。命の尊厳ではなく死の衝撃が、恐怖を奮い立たせ、その結果、事実上宗教を育成した。死は、未開民族の間では大抵が暴力によるもので、ゆえに暴力を伴わない死は、ますます神秘的になった。人生の自然で予想された終わりとしての死は、原始の人々の意識には明確ではなく、人がその必然性に気づくには何世代も要した。

86:3.2 (952.4) 古代人は、命を事実として受け入れたが、死はある種の訪問と見なした。すべての人種は、死なない人々の伝説、死に対する初期の態度の名残りの伝統を持っている。既に人間の心には、ぼんやりとした組織化されていない精神界が、すなわち人生におけるすべての不可解なものが来る領域が、存在しており、この長い解明されない現象の一覧表に死が追加された。

86:3.3 (952.5) 人間のすべての病気と自然な死は、最初は霊の影響によると信じられた。現在でさえ、幾つかの文化的人種は、病気が「敵」によって作られたと見なし、効果的回復を宗教儀式に頼る。後の、　しかもさらに複雑な神学体系は、まだ死を精神界の作用のせいにしており、その総てが、原罪や人間の堕落としての教義へと導いた。

86:3.4 (952.6) 人間の弱さの認識にくわえて自然の強大な力の前に、病と死の災いに対峙して、未開人に超物質界に助けを求めるよう駆り立てる無力さの認識があり、未開人は、それを人生の神秘的な変化の根源としてばく然と心に描いた。

4. 死-生存の概念

86:4.1 (952.7) 人間の人格の超物質段階の概念は、日々の生活の出来事やくわえて亡霊の夢からの純粋に偶発性の関係、想像、生まれた。部族の数人が死んだ首長の夢を同時に見ることは、かつての首長が何らかの手段で本当に戻ったという説得力のある証の構成要素をなすようであった。汗にまみれ、震え、叫び声を上げてそのような夢

から目覚める未開人にとっては、総てがまさに現実であった。

86:4.2 (953.1) 夢に基づく未来の存在への信仰は、いつも見えないものを見えるものの点から想像する傾向について説明する。やがて、この夢-亡霊-未来-生活の新概念は、生物の自衛本能に関連づいた死の恐怖への対策を効果的に始めた。

86:4.3 (953.2) 古代人はまた、息を吐き出すと雲のように見えるところ、特に寒い気候において、自分の死を非常に危惧した。命である息は、生きる者と死ぬ者を区別する一現象と見なされた。息が体を離れることができることを知っており、そして睡眠中にいろいろな奇妙なことをする夢は、人間に関して何か実体のないものがあると納得させた。人間の魂の最も原始の考えは、つまり亡霊は、息-夢の思考体系からきている。

86:4.4 (953.3) 結局未開人は—体と息—の二つとして自らを想像した。息から体を差し引いたものは霊、すなわち亡霊に相当した。非常に明確な人間の起源を持ちながら、亡霊または霊は、超人的に見なされた。そして実体のない

霊の存在へのこの信仰が、尋常ではない、並はずれた、稀な、不可解なものの発生について説明しているように思われた。

86:4.5 (953.4) 死後の生存についての原始の教義が、必ずしも不死の信仰であったわけではない。20以上を数えることができなかった生き物は、とても無限と永遠を想像することができなかった。むしろ繰り返し起こる霊魂の化身を考えに入れた。

86:4.6 (953.5) 橙色人種は、輪廻と転生を特に信じる傾向にあった。この転生の考えは、先祖との子孫の遺伝的、そして特徴類似点の観察に源を発した。祖父母と他の先祖にちなんで子供に名付ける習慣は、転生の信仰に起因した。後のいくつかの人種は、人は3回から7回死ぬと信じた。この信仰(大邸宅世界に関するアダームの教えからの残留物)と、他の多くの啓示宗教の残余物は、20世紀の未開人のまったく不条理な主義に見い出せる。

86:4.7 (953.6) 古代人は、地獄について、あるいは今後の罰についての考えを抱かなかった。未開人は、来世をまるでこの世と同様に、すべての凶は差し引いて見た。後に、

良い亡霊と悪い亡霊のための別々の運命—天国と地獄—が考え出された。しかし多くの原始の人種は、人間は、この世を離れるときのまま来世に入ると信じたので、年をとったり老いぼれたりする考えを有り難く思わなかった。年老いた者達は、虚弱になり過ぎる前に殺されることをとても好んだ。

86:4.8 (953.7) ほとんど総ての集団には、亡霊の魂の運命に関し異なる考えがあった。ギリシア人は、弱い人間には弱い魂が宿っているに違いないと信じた。それで、そのような無気力な魂の受理のための適当な場所としてハデスを考案した。またこれらの頑強でない雛形には、短めの影があると信じられていた。初期のアンド系は、亡霊は先祖の故国に戻ると考えた。中国人とエジプト人は、かつて魂と体は一緒に残ると信じた。エジプト人の間ではこれが、念入りな墓の建造と肉体保存の努力に繋がった。現代の民族でさえ死者の腐敗を阻止ようとする。ヘブライ人は、個人に似た幽霊が地下の冥土に降りると想像した。それは、生者のこの世には戻ることはできなかった。ヘブライ人は、魂の発展の教義においてそのような重要な前進をした。

5. 亡霊-魂の概念

86:5.1 (953.8) 人の非物質的部分は、亡霊、霊、黄泉の住人、幽霊、妖怪、また後には魂とさまざまに呼ばれてきた。魂は、初めは夢の中の自分であった。それは、接触に反応しないことを除いては、あらゆる点で人間自身にそっくりであった。夢の中の自分の信仰は、すべての有生物、そして無生物には人間と同様に魂があるという概念に直接導いた。この概念は、長らく、自然-霊の信仰を永続させる傾向があった。エスキモー人は、いまだに自然のすべてに霊が宿ると考えている。

86:5.2 (954.1) 亡霊の魂は、聞いたり見たりできるが、触われなかった。徐々に、人種の夢の中の生活は、死が、この進化する霊の世界の活動を非常に進展し拡大したので、死は、最終的には「亡霊をあきらめる」と見なされるほどであった。動物の少し上の部族を除く原始部族のすべては、魂についての何らかの概念を生み出した。魂のこの迷信深い概念は、文明が進むと打ち壊され、人は、神を知る人間の心とその内在する神霊、すなわち思考調整者との共同創造として魂に関する自分の新しい考えについて顕示と個人的な宗教経験に完全に依存している。

86:5.3 (954.2) 通常、初期の必滅者は、内在する霊と進化的本質の魂の概念とを識別しなかった。未開人は、亡霊の魂が肉体の生まれであるのか、それとも体の所有者の外的媒体であるのかに関し非常に混乱していた。当惑の中での道理に基づく考えの欠如は魂、亡霊、および霊についての未開人の視点の甚だしい矛盾について説明する。

86:5.4 (954.3) 香水を花と関連づけるように、魂は、体と関連づけて考えられた。古代人は、次のように魂が様々な方法で体を離れることができると信じた。

86:5.5 (954.4) 1. 通常の、しかも一時的な失神

86:5.6 (954.5) 2. 睡眠、自然な夢

86:5.7 (954.6) 3. 病気と事故に関連する昏睡と無意識

86:5.8 (954.7) 4. 死、永久の出発

86:5.9 (954.8) 未開人は、くしゃみを魂の体からの不成功の脱出のとみなした。体は、目覚めていたり用心をしているとき、魂が試みる脱出を阻むことができた。後にくしゃみは、通常「神があなたを祝福しますように。」などのような何らかの宗教表現が添えられた。

86:5.10 (954.9) 進化の初期における睡眠は、亡霊の魂は体を離れていることができるということを立証すると見なされ、話し掛けるか、または睡眠者の名前を叫ぶことによって呼び戻すことができると信じられた。魂は、その他の無意識の形でにおいてはずっと遠くにある、恐らく永遠に逃げようとしていると考えられた—差し迫る死。夢は、睡眠の間、一時的に体を離れる魂の経験と見なされた。未開人は、夢は目覚めている経験のどの部分とも同等に現実であると信じる。古代人は、魂が、体に戻る時間があるようにと、徐々に睡眠者を起こすことを常とした。

86:5.11 (954.10) 人は、大昔から夜間の幻影を恐れ、ヘブライ人も例外ではなかった。ヘブライ人は、この考えに対するモーシェの指示にもかかわらず、本当に、神が夢で話すと信じた。そして通常の夢は、精神界の人格が、物質的存在者と意志疎通を図ろうとするとき用いる方法ではないので、モーシェは、正しかったのである。

86:5.12 (954.11) 古代人は、魂が、動物に入ることができると、無生物にさえ入ることができると信じた。これは、つい

にはオオカミ人間の動物との同一化の考えとなった。人は、日中は法に従うかもしれないが、寝入ると、その魂は、夜中にうろつき回るために狼、あるいは他の動物に入ることができた。

86:5.13 (955.1) 原始人は、魂を息に関連づけ、その特徴は、その息によって伝えるか、または移すことができるかもしれないと考えた。勇敢な首長は、新生児に息を吹きかけ、それによって勇気を分け与えるのであった。初期のキリスト教徒の間では、志願者に息を吹きかけて聖霊を授ける儀式を伴った。詩篇作者は言った。「主の言葉によって天は作られ、天の万象もすべて、御口のいぶきによって。」長男は、瀕死の父の最後の息を捕らえようとするのが長い間の習慣であった。

86:5.14 (955.2) 後には影が、息と等しく恐れられようになった。水面に映る自分の姿もまた、時々二重の自己の証拠と見なされ、鏡は、迷信的な畏敬をもって見られた。多くの文明的な人々が、死に際しては今でも、鏡を壁に向ける。いくつかの進歩の遅い部族は、まだ絵、素描、模型、または形象の作成は、体から魂のすべてか、一部を

取り除くと信じている。したがって、そのようなことは禁じられている。

86:5.15 (955.3) 魂は、息と同一視されると一般に考えられたが、様々な民族が、頭、髪、心臓、肝臓、血液、および脂肪の中にその居場所を定められた。「地面からアベルの血が叫んでいる」というのは、血液中の亡霊の臨場のかつての信仰の表現である。セム族は、魂が、肉体の脂肪内に住んでいると教え、また、多くの者の間では、獣脂を食べることは禁物であった。首狩りは、敵の魂の捕獲方法であった。近代において目は、魂の窓と見なされてきた。

86:5.16 (955.4) 3つか4つの魂の教義を持つ者達は、1つの魂の損失は不快、2つは病気、3つは死を意味すると信じた。1つの魂は息、1つは頭、1つは髪、1つは心に居住した。病人は、さ迷っている自分の魂を取り戻す望みをもって戸外をぶらつくようにとの助言を受けた。最も偉大な祈祷師は、死者の病む魂を新しい物、すなわち「新生」との交換をすると信じられた。

86:5.17 (955.5) バドナンの子供等は2つの魂、つまり息と影の信仰を発展させた。初期のノヅ系の人種は、人間は2人、つまり魂と体からなると見なした。人間存在のこの哲学は、後にギリシア人の見解に反映された。ギリシア人自身は、3つの魂を信じた。胃に住む植物的なもの、心の動物的なもの、頭の知性的なもの。エスキモー人は、人には3つの部分があると信じる。体、魂、それに名前。

6. 亡霊-魂の環境

86:6.1 (955.6) 人は、自然環境を引き継ぎ、社会環境を獲得し、亡霊環境を想像した。国家は自然環境への、家は社会環境への、教会は架空の亡霊環境への人の反応である。

86:6.2 (955.7) 人類の歴史上の非常に早い時期、亡霊と霊の架空世界の現実が一般に信じられ、新しく想像されたこの霊の世界は、原始社会で威力となった。全人類の精神生活と道徳生活は、人間の思考と行動におけるこの新要因の出現によって永久に変更された。

86:6.3 (955.8) 幻想の、そして無知のこの大前提への人間の恐怖は、原始民族のその後の迷信と宗教のすべてを押し固めた。これは、顕示のときまで人の唯一の宗教であり、今日、世界の人種の多くには、この粗雑な発展の宗教しかない。

86:6.4 (955.9) 進化が進むにつれ、幸運は、良い霊と、また不運は悪い霊と関連づけられるようになった。変化する環境への強制的順応の不快感は、不運すなわち霊の亡霊の不満と見なされた。原始人は、生まれながらの崇拝衝動と偶然性の誤解からゆっくりと宗教を進化させた。文明人は、これらの偶然の発生に打ち勝つために保険計画を提供する。現代科学は、架空の霊と奇妙な神の代わりに数学的計算と共に保険数理士を置く。

86:6.5 (956.1) 通過する各世代は、その祖先の愚かな迷信に微笑みかけ、一方良識ある後世の方では、一層の微笑の原因を与える考えと崇拝の誤りを抱き続けている。

86:6.6 (956.2) しかし、ついに原始人の心は、生来の生物的衝動のすべてを超えた考えで頭が一杯であった。ついに人は、物質的な刺激への反応よりも何かに基づいて生きる

芸術を発展させようとしていた。原始の哲学的人生の方針が、始まりつつあった。超自然の生活水準が、登場しようとするところであった。というのも、もし霊の亡霊が、怒って凶を、喜んで幸運を与えるのであるならば、人間の行為は、しかるべく規制されなければならないのであるから。善悪の概念が、ついに発展した。そしてこの総てが、地上でのいかなる顕示のずっと以前のことであった。

86:6.7 (956.3) これらの概念の登場で、絶えず不満な霊を宥める長く無駄な苦闘が、つまり進化的宗教の恐怖への、すなわち、墓、寺、犠牲、および聖職への人間の長く無駄な努力への奴隷的束縛が、開始した。それは、支払うにはつらく醜悪な代償であったが、人がその相対的な善悪の自然な意識を達成したので、かかったすべての価値はあった。人間の倫理が、誕生したのであった。

7. 原始宗教の機能

86:7.1 (956.4) 未開人は、保険の必要性を感じ、したがって魔法の保険措置に向け恐怖、迷信、畏怖、および聖職者への贈り物への重くのしかかる保険料を進んで支払った。

原始宗教は、単に森林の危険に対する保険料の支払いであった。文明人は、産業の偶発事故や現代生活様式の緊急事態に対する有形の支払いをする。

86:7.2 (956.5) 現代社会は、それを経済学の領域に置いて、聖職者と宗教の領域からは保険事業を取り除いている。宗教は、ますますあの世での生活の保証に対するそれ自体を懸念をしている。現代人は、少なくとも考える人々は、もはや運を支配するために無駄な保険料を支払わない。宗教は、不運に対する保険案としてのその前の機能と比べて、より高い哲学的水準に徐々に昇っている。

86:7.3 (956.6) しかし、これらの古代宗教の考えは、人が諦観的なったり、絶望して悲観的になることを防ぐことができなかった。かれらは、それが、少なくとも運命に何か影響を及ぼすことができると信じていた。亡霊恐怖の宗教は、自らの行為を規制しなければならないということ、人間の運命を掌握する超物質界があるということを人間に印象づけた。

86:7.4 (956.7) 現代の文明的人種は、運と生存に関するあるきたりの不平等にの説明としての亡霊の恐怖からちょうど

脱出しつつある。人類は、不運に関する亡霊-霊の説明の束縛からの解放を獲得しつつある。しかし人は、人生の浮沈に関わる霊が原因とする誤った教義をあきらめつつある一方で、人間のすべての不平等を政治上の不適合、社会的不正、および産業競争のせいにすることを命じるほとんど同様に当てにならない教育を受け入れることに驚くべき意欲を示す。しかし、いかにそれら自体は良かろうが、新しい法律、拡大する博愛、さらなる産業の再編成は、出生の事実と生活の偶然の出来事を修正はしないであろう。自然の法則に沿っての事実の理解と賢明な操作だけが、人が欲するものを得、欲しないものを避けることを可能にするであろう。科学的活動に導く科学的知識が、いわゆる予想外の病気のための唯一の解毒剤である。

86:7.5 (957.1) 産業、戦争、奴隷制度、および民間政府は、自然環境における人の社会的発展に対応して生まれた。宗教は、実体のない亡霊界の非現実的な環境への人間の対応として同様に生まれた。宗教は、自己維持の段階的発達であり、元々、概念的には誤っており全く不合理であったにもかかわらず、功を奏してきた。

86:7.6 (957.2) 原始宗教は、超自然の起源である本物の精神の力、つまり思考調整者の贈与にむけて、理由のない恐怖の強くすさまじい力によって人間の心の土壌に備えた。そして神性調整者は、以来ずっと、神-恐怖を神-愛に変えるために働いている。進化は遅いかもしれないが、それは違うことなく効力がある。

86:7.7 (957.3) [ネバドンの宵の明星による提示]

論文 87
亡霊信仰

87:0.1 (958.1) 亡霊信仰は、不運な危険の埋合わせとして発展した。その原始の宗教的慣習は、不運への不安と死者への過度の恐怖からの自然の成り行きであった。初期のこれらの宗教のいずれも神性の認識、または超人崇敬とはあまり関係がなかった。亡霊を避けるか、追放するか、あるいは威圧するように考案されており、儀式は、ほとんど否定的であった。亡霊信仰は、災害に対する保険以外の何ものでもなかった。それは、より上の、また将来に向けての利益のための投資とは関係なかった。

87:0.2 (958.2) 人には、亡霊信仰との長く苦々しい奮闘があった。人間の歴史の中で、亡霊-霊の恐怖への悲惨な奴隷状態のこの絵ほどにあわれみを起こさせるものはない。人類は、他ならないこの恐怖の誕生に伴い宗教発展の改善に取りかかった。人間の想像は、自己という岸から出港し、本当の神性、本物の神の概念に到着するまで再び錨を見つけないであろう。

1. 亡霊への恐怖

87:1.1 (958.3) 死は、その肉体からのもう一つの亡霊の解放を意味したので恐れられた。古代人は、死を避けるために、つまり新たな亡霊と闘うという問題回避のために最善をつくした。古代人は、亡霊に死の場面からの退去を促すことを、死の世界への旅立ちを、常に切望していた。亡霊は、死に際してのその出現と自国への出発の間の想定上の移行期間に最も恐れられた。

87:1.2 (958.4) 未開人は、亡霊は超自然の力をもつと信じたが、超自然の知力を持っているとは想像だにしなかった。亡霊をごまかしたり欺いたりするために多くのいたずらと策略の努力がめぐらされた。文明人は、外向きの

敬虔の顕現が、何らかの方法で全知の神さえも欺くという望みを依然として非常に信じている。

87:1.3 (958.5) 原始人は、それがしばしば死の前触れであることを観察したが故に病気を恐れた。部族の祈祷師が苦しむ者の治療ができなければ、病人は通常、家族の小屋から小さ目の小屋に移されるか、一人で死ぬように戸外に置き去りにされた。死が生じた家は、通常、壊された。さもなければ、それはいつも避けられ、この恐怖は、頑丈な住まいを人に造らせなかった。またそれは、永続的な村や市の設立に不利に作用した。

87:1.4 (958.6) 未開人は、一族の一人が死ぬと、夜通し寝ずに話した。死体の近くで寝入るならば死ぬと恐れた。死体からの接触伝染は、死者への恐怖を具体化し、そこである時期にはすべての民族が、死者との接触後の個人を洗う入念な禊を採り入れた。古代人は、死体に光を与えなければならないと信じた。遺体が暗闇に放置されることは決して許されなかった。蝋燭は、20世紀におけるいまでも処刑室で点されるし、また人は、死者の夜伽をす

る。いわゆる文明人は、その人生哲学から死体への恐怖をまだ完全に排除したというわけではない。

87:1.5 (959.1) このすべての恐怖にもかかわらず、人はそれでも亡霊を欺こうとした。死体は、死の小屋が壊されずともその穴から取り出され、決して扉口からではなかった。これらの手段は、亡霊を混乱させ、その滞在を阻み、またその帰還阻止のために行われた。また会葬者は、葬儀から亡霊がついて来ないように異なる道を戻っていった。亡霊が墓から戻らないことを保証するために後戻りや何十もの他の策が慣行された。男女は、亡霊を誤魔化すためにしばしば衣服を交換した。喪服は、生存者が変装するために、後には死者への敬意を表すために、こうして亡霊を宥めるために考えられた。

2. 亡霊の鎮静

87:2.1 (959.2) 宗教における亡霊鎮静への消極的な取り組みは、長い間霊の強制と懇願の肯定的取り組みに先行した。人間の崇拝の最初の行為は、崇敬ではなく防衛事象であった。現代人は、火災保険をかけるのが賢明であると考える。同じく未開人は、亡霊の災難に対し保険の備

えが賢明であると考えた。この保護確保への努力が、亡霊信仰の方法と儀式を構成した。

87:2.2 (959.3) 亡霊の最大の願望は、邪魔をされずに死の世界に進めるようにすばやく「横たえられること」だと、かつて考えられた。亡霊を横たえる儀式において生者の行為のいかなる遂行上の誤り、あるいは手ぬかりも、亡霊界へのその進行を確実に遅らせた。これは、亡霊を不快にさせていると信じられ、また怒らせた亡霊は、災難、不運、不幸の源だと考えられた。

87:2.3 (959.4) 葬儀は、亡霊の魂が、その将来の家に向けての出発を促す人の努力に始まり、弔辞は、元々新たな亡霊にそこに到着する方法を知らせるように考案された。亡霊の旅に備え、墓の中か、その近くに食物と衣服が置かれるのが習慣であった。未開人は、「亡霊を横たえる」には—墓の周辺からそれを離れさせるために—3日間から1年を要すると信じた。エスキモーは、霊は3日間肉体に留まると今なお信じている。

87:2.4 (959.5) 亡霊が家に引き付けられないように、沈黙もしくは喪が、死後に執り行なわれた。苦行—傷—は、哀

悼の共通の形式であった。多くの進んだ教師がこれを止めようとしたが、失敗した。断食や自己否定の他の形態は、死の世界への実際の出発前の潜伏中の移行期間、生者の不快感を楽しむ亡霊にとり快いと考えられた。

87:2.5 (959.6) 長く頻繁な服喪の無活動期間は、文明前進への大きな障害の1つであった。非生産的で無益なこの服喪に毎年何週間、何カ月間もが文字通り無駄に費やされた。専門の会葬者が葬儀の際に雇われたという事実は、服喪が、悲しみの証しではなく、儀式であったことを示唆する。現代人は敬意を表して、また死別を理由に死者を悼むかもしれないが、古代人は恐怖ゆえにこれをした。

87:2.6 (959.7) 死者の名前は決して口にされなかった。事実上、それらは言語からしばしば払いのけられた。これらの名前は禁止され、またこのようにして言語は絶えず貧困に陥った。これが、結局、「人が決して言及しない名前、あるいは日」などの象徴的話法や比喩的表現の増加を引き起こした。

87:2.7 (960.1) 古代人は、亡霊の追い払いの苦心のあまり、生涯を通じて望んだかもしれないもの全てを亡霊に提供した。亡霊は、妻と使用人を欲した。裕福な未開人は、己の死に際しては少なくとも1人の奴隷妻が生きたまま埋葬されることを要求した。後には未亡人が夫の墓で自殺することが習慣になった。子供が死ぬと、大人の亡霊が子供の亡霊に伴い、世話ができるように母、おば、または祖母がしばしば絞殺された。通常は自らの命を諦めた人々が、このように積極的にそうした。実際、自らの命を諦めた人々が習慣に違反して生きたとしたならば、亡霊の怒りに対する恐怖は、原始人が楽しんだそのような数少ない喜びを人生から剥ぎ取ったことであったろう。

87:2.8 (960.2) 死んだ長に同伴させるために多くの臣下を殺すのが通例であった。主人が死ぬと奴隷は、亡霊界で仕えるようにと殺された。ボルネオ人は、いまだに特使の仲間を提供している。奴隷は、死んだ主人との亡霊の旅をするために槍で殺される。被殺害者の亡霊は、その殺害者の亡霊を奴隷に従えることを喜ぶと信じられた。この考えが、首狩りへの動機を人に与えた。

87:2.9 (960.3) 亡霊は、建前としては食物のにおいを楽しんだ。葬儀の宴での食物の供え物は、かつては世界共通であった。原始の食前の祈りの方法は、霊鎮静の目的で魔法の式文を呟きながら食物を少量炎の中に投げることであった。

87:2.10 (960.4) 死者は、生存中に所有した道具や兵器の亡霊を活用すると考えられた。品物を壊すことは「それを殺す」ことであり、亡霊界での仕事のためにこのようにしてその亡霊を解き放つ。財産の犠牲もまた燃やすか、埋めるかによってなされた。古代の葬儀の廃棄物は、甚だしいものであった。後の人種は、これらの死の生贄に本物の物品や人々の代わりに紙の模型を作ったり、絵を用いた。一族の遺産が、財産の焼却と埋蔵とに取って代わったとき、それは、文明における大いなる進歩であった。イロコイ族は、葬儀の無駄に多くの改革をもたらした。そして財産のこの保護が、かれらを北部の赤色人種の間で最も強力な集団にになることを可能にした。現代人は、亡霊を恐れてはいないと考えているが、習慣は、根強く、いまだに多くの地球の富が、埋葬や死の儀式に消費されている。

3. 先祖崇拝

87:3.1 (960.5) 前進する亡霊信仰は、普通の亡霊と高等な霊との、つまり前進する神との連結をしたので、先祖崇拝を必然的なものにした。初期の神は、単に称賛された亡くなった人間であった。

87:3.2 (960.6) 先祖崇拝は、本来、崇拝というよりも恐怖であったが、そのような信仰は、確かに亡霊の恐怖と崇拝の一層の普及に貢献した。初期の先祖亡霊信仰の信者は、悪意ある亡霊が、そのような時に自分の肉体に入らないように欠伸することさえ恐れた。

87:3.3 (960.7) 子供を養子にする習慣は、ある人が、死後の魂の平和と前進のために捧げものを確実にするためであった。未開人は、仲間の亡霊の恐怖に生き、死後の自身の亡霊の安全通交のための計画を立てて余暇を過ごした。

87:3.4 (960.8) ほとんどの部族が、少なくとも年に1度、すべての魂の祭礼を設けた。ローマ人は、毎年、亡霊の12回の祭礼とそれに付随する儀式を開いた。1年の半分は、これらの古代の信仰に関連するある種の儀式に捧げられた。1人のローマ皇帝は、祭礼の日数を1年あたり135日

にまで減少させることで、これらの習慣を改革しようとした。

87:3.5 (961.1) 亡霊信仰は、継続的に進化した。亡霊が、生存の不完全な段階からより高い段階へと通過すると想像されたように、信仰も、つまるところ霊の、さらには神の、崇拝にさえ発展した。しかし、より高度の霊へのさまざまな信仰には関係なく、すべての部族と人種は、一度は亡霊を信じた。

4. 善と悪の霊の亡霊

87:4.1 (961.2) 亡霊恐怖は、すべての世界宗教の根源であった。そして長い間、多くの部族が、1種類の亡霊への古い信仰に執着した。かれ等は、亡霊が、嬉しいときには人に良運があり、腹を立てているときには悪運があると教えた。

87:4.2 (961.3) 亡霊恐怖の信仰が広がるにつれ、より高等の霊の型、すなわち、いかなる個々の人間とも明確には識別できない霊の認識が生まれた。それらは、亡霊界の領域を越え、霊界のより上の領域に進んだ卒業した亡霊、あるいは栄光を与えられた亡霊であった。

87:4.3 (961.4) 霊の亡霊に関する2種類の概念は、世界中で緩やかではあるが確かな進歩をした。この新しい２つの心霊術は、部族から部族へと広まる必要はなかった。それは独自に世界中に生まれた。考えのもつ力は、影響を及ぼすことに関しては、拡充する進化の心に、その真実、または妥当性にあるのではなく、むしろその敏速で簡単な適用性の鮮明さと普遍性にある。

87:4.4 (961.5) 人の想像力は、さらに後には善と悪の超自然の媒体の概念を思い描いた。幾つかの亡霊は、決して善霊の段階に進化しなかった。亡霊恐怖の初期の単一心霊主義は、徐々に二元的な精神主義へと、俗事に関わる不可視の支配の新概念へと発展していった。ついに好運と悪運には、それぞれの管理者がいると想像された。そして2種類のうち、悪運をもたらす一団は、より活発で多数であると信じられた。

87:4.5 (961.6) 善霊と悪霊の教義が最終的に熟すと、それは、全宗教の信仰の中で最も広くゆきわたり、持続した。この二元性は、人が、好運と悪運双方についての説明を可能にし、その行動においてある程度一貫した超人間の存

在を同時に信じているので、かなりの宗教哲学的進歩を意味した。霊が、善か悪かのいずれかであることを見込むことができた。霊は、原始のほとんどの宗教を特徴づける単一心霊術の初期の亡霊がそうであると想像されていたようには、完全に気性が激しいと考えていたわけではなかった。とうとう人は、行動において一貫した超人間の影響力を想像することができ、そして、これは、宗教発展の歴史全体と人間の哲学の拡大において最も重要な真実発見の1つであった。

87:4.6 (961.7) 進化的宗教は、しかしながら、二元的心霊主義の概念に対して惨たる代償を支払った。そして、人の初期の哲学は、2種類の霊を事実として仮定することにより、つまり片方を善とし、もう一方を悪とすることによってのみ精神不変性と現世の繁栄の変化との折り合いをつけることができた。そして、この信仰は、人が機会の可変性と不可変の超人間の力の概念との折り合いをつけることを可能にすると同時に、この教義は、以来ずっと、宗教家の宇宙統一についての想像を難くしてきた。進化的宗教の神々は、一般に暗黒の力に妨害されてきた。

87:4.7 (962.1) この悲劇のすべては、これらの考えが、人の原始の心に定着しつつあるとき、悪い、あるいは不協和な霊は、世界中に実際には無いという事実にある。そのような不幸な状況は、カリガスティア反逆の後まで展開せず、しかも五旬節までしか持続しなかった。20世紀においてさえ、宇宙の等位としての善と悪の概念は、実に人間の哲学に生きている。世界宗教の大半は、遠い昔の新興の亡霊信仰のこの文化の痣をいまだに持っている。

5. 前進する亡霊信仰

87:5.1 (962.2) 原始人は、霊と亡霊は無制限に近い権利を持つが、何の義務も持たないと考えた。人は、種々の義務を持つが、何の権利も持たないと霊は見なしていると考えられた。霊は、人が、霊的義務の履行に絶えず失敗するので人を蔑んでいると信じられた。亡霊は、人間の問題に不干渉であることへの代償として連続的奉仕を課すというのが、人類の一般的信仰であり、最小の不幸でさえ亡霊の行為とされた。初期の人間は、神による何らかの名誉を見落としてはいないかと非常に恐れ、知っているすべての霊に生贄を捧げた後に、念のために「未知の神々」にもう1度捧げた。

87:5.2 (962.3) さて単なる亡霊信仰には、より進歩し、比較的複雑な霊-亡霊信仰、つまり人の原始的想像力の進化に伴うより高度の礼拝と崇拝の実践が続いた。宗教儀式は、精神の発展と進歩とに足並みをそろえなければならない。拡大的信仰は、超自然存在体への信仰に関連して実践される自己維持の芸術、つまり精神環境への自己調整にすぎない。産業と軍事組織は、自然環境と社会環境への順応であった。そして男女の愛の需要に応えるために結婚が生まれたように、宗教組織もより高い精神力と自然を超越したものへの信仰に対応して発展したのであった。宗教は、機会の謎に対する人の幻想への調整を意味する。霊への恐怖とその後の崇拝は、不幸に対する保険として、つまり繁栄方策として採用された。

87:5.3 (962.4) 未開人は、自分達のすべきことをするものとして、人間に要求するものはあまりないものとして善霊を想像する。上機嫌の状態に置かれていなければならないのは悪い亡霊と霊である。従って、原始の民族は、優しい霊によりも意地の悪い亡霊に注意を向けた。

87:5.4 (962.5) 人間の繁栄は、悪霊の嫉妬に特に挑発的であると考えられ、そして悪霊の報復方法は、人の媒体と邪視の方法による逆襲であった。霊の回避に関わる信仰の局面は、邪視の策謀に大いにに関係があった。それに対する恐怖は、ほとんど世界的となった。美しい女性は、邪視からの保護のためにベールで覆った。後には、美しいと思われたい多くの女性は、この習慣を採り入れた。悪霊へのこの恐怖の理由から、子供には日が暮れてからの外出はめったに許されず、また、初期の祈りにはいつも「邪視より救い出し給え」という祈願を盛り込んでいた。

87:5.5 (962.6) コーランには全章が邪視と魔法の呪縛に振り当てられた章があり、ユダヤ人はそれらを完全に信じた。全男根崇拝は、邪視に対する防衛として発展した。生殖器官は、それを無力にできる唯一の呪物であると考えられた。邪視は、子供の胎児期の斑点、つまり母の押印に関わる最初の迷信を生み、またその信仰は、ひところ、ほぼ普遍的であった。

87:5.6 (963.1) 嫉妬は、深く根ざした人間の習性である。それゆえに原始人は、それを初期の神のせいにしたのであった。そして、人は、一度亡霊で誤魔化しを実践していたことから、すぐに霊を誤魔化し始めた。人は、「もし霊が、我々の美と繁栄に嫉妬するならば、我々は自分達を傷つけ自らの成功をけなすつもりである」といった。初期の謙遜は、それゆえ自我の卑しめではなく、むしろ嫉妬する霊の裏をかくことであり、騙すことであった。

87:5.7 (963.2) 人間の繁栄への霊の嫉妬を止めるために採用された方法は、幸運な、あるいは非常に好きである、物や人に対し悪罵を積み重ねることであった。自分自身、もしくは家族に関する世辞めいた一言を軽視する習慣には、このようにその起源があり、それは、結局、教化された謙遜、抑制、礼儀へと発展していった。同じ動機を踏まえて、醜く見られることが流行となった。美は、霊の嫉妬をそそった。それは、罪深い人間の誇りの前兆であった。未開人は、醜い名前を捜し求めた。信仰のこの特徴は、芸術振興への大いなる障害であり、それは、長い間、世界をくすんだ、醜い状態にし続けた。

87:5.8 (963.3) 霊信仰下の人生は、いくらよく見ても賭け事であり、つまり霊の支配の結果であった。人の未来は、霊に影響を及ぼすことに利用されるかもしれないことを除いては、努力でも、産業でも、才能の結果でもなかった。生々世々、次から次に人種が、この超-亡霊教義の改良に務めてきたが、どの世代もまだあえて完全にそれを拒絶したことがない。

87:5.9 (963.4) 霊の意図と意志が、前兆、お告げ、兆候の手段によって研究された。そしてこれらの霊の知らせは、易、占い、魔術、神明裁判、および占星術によって解釈された。信仰全体は、この偽装贈賄で霊を宥め、満足させ、厄介払いをするように考案された策であった。

87:5.10 (963.5) その結果、次のような新たで、拡大された世界哲学が生まれた。

87:5.11 (963.6) 1. 義務—霊に好感を抱かせるために、少なくとも中立にさせるためにすべき事柄

87:5.12 (963.7) 2. 権利—霊が積極的に人の利益をもたらすように考えられた適正な行動と儀式

87:5.13 (963.8) 3. 真実—霊への正しい理解と態度、この故に生と死に対する態度

87:5.14 (963.9) 古代人が将来を知ろうと努めたのは、単なる好奇心からではなかった。古代人は、不運から身をかわしたがった。占いは、単に問題を避ける試みであった。この期間、夢は、予言と見なされたが、並外れたことはすべてが前兆であると考えられた。そして今日でさえ、文明的人種は、昔の前進する亡霊信仰の印、兆候、また他の迷信深い名残りへの信仰に苦しめられている。人は、人生の進化の段階を非常に緩やかに、痛々しいほどに昇るそれらの方法を捨て去るのにまことに遅々としている。

6. 強制と悪魔払い

87:6.1 (963.10) 宗教儀式は、人が亡霊だけを信じるときは、より個人的で、つまりあまり組織的ではなかったが、より高度の霊の認識には、かれらを扱う際の「霊的なより高度の方法」の採用を必要とした。霊を宥める手法の改良や入念な計画のこの試みは、直接霊に対しての防衛措置につながった。人は、地球の生活に作用する制御の及ば

ない力の前には誠に無力であると感じ、また人間の劣等感というものが、ある種の補整的調整を見い出す試みへと、つまり対宇宙への人間の一方的な戦いにおける不均等をならすための何らかの方法へと追い込んだ。

87:6.2 (964.1) 亡霊の活動に影響を及ぼす人の努力は、その信仰の初期においては、宥めの範囲内、すなわち、不運を贈賄で追い払う試み、にとどめられていた。亡霊信仰の発達は、悪霊はもとより善霊の概念へと進歩するにつれ、これらの儀式は、より積極的な類の試みに、つまり幸運を得る努力に向き直っていった。もはや人の宗教は、完全に消極的ではなく、幸運を得る努力以上のことをした。人はまもなく、それによって霊の協力を余儀なくさせ得る計画について工夫し始めた。もはや宗教家は、自身が捻り出す霊の幻影の絶えざる要求の前に無防備に立ってはいない。未開人は、それにより霊の活動を強制したり、その援助を強要できるかもしれない武器を発明し始めている。

87:6.3 (964.2) 人の防衛における最初の努力が、亡霊に対して向けられた。生者は、時代の経過とともに死者に抵抗す

る方法を工夫し始めた。亡霊を脅かしたり追い払うための多くの手法が開発されており、また、その中の手法は、次のように引用できる。

87:6.4 (964.3) 1. 頭を切り落とし、墓に肉体をしばりつけること

87:6.5 (964.4) 2. 死者の家に投石すること

87:6.6 (964.5) 3.去勢、または死体の脚を折ること

87:6.7 (964.6) 4. 石の下への埋葬、近代の墓石の起源の1つ

87:6.8 (964.7) 5. 火葬、つまり亡霊問題を防ぐための後の創案

87:6.9 (964.8) 6. 肉体を海中に投げること

87:6.10 (964.9) 7. 野生動物にさせるための死体の野ざらし

87:6.11 (964.10) 亡霊は、雑音に妨害されると怯えると考えられた。叫び声、鈴、太鼓は、生者からそれらを追い払った。そして古代のこれらの方法は、死者のための「通夜」で今なおとり行なわれている。悪臭に満ちた調合物は、歓迎されない霊を追放するのに利用された。見るも恐ろしい霊の姿は、自らが視たときに急いで逃れるよう

に作られた。犬は、亡霊の接近を感知でき、遠吠えにより警告を与え、雄鶏は、霊が近いと鳴くと信じられたのであった。風向計としての雄鶏の使用は、この迷信の永続化である。

87:6.12 (964.11) 水は、亡霊に対する最良の防衛と見なされた。聖水は、聖職者が自分の足を洗った水は、他のすべての型よりも優れていた。火と水は共に、亡霊に対し通行不能の障害物になると信じられた。ローマ人は、水を携え死体の周りを3周した。20世紀において肉体には聖なる水が振り掛けられ、墓地での手洗いは、いまだにユダヤ人の儀式である。洗礼は、後の水の儀式の機能であった。原始の水浴びは、宗教儀式であった。入浴は、ごく最近、衛生上の習慣になった。

87:6.13 (964.12) しかし人は、亡霊威圧を止めなかった。宗教儀式と他の習慣とを介し、すぐに霊の活動の威圧を試みていた。悪魔払いは、他の霊を抑えるか、または追放するために1つの霊を利用することであり、またこれらの戦術は、亡霊と霊を脅かすために活用された。もし強力な男性が、　より弱いものを負かすことができるのであれ

ば、強い霊が、劣る亡霊を確かに支配すできるのであるから、善悪の力に関わる二元的-霊主義の概念は、ある媒体と別の媒体とを戦わせようと試みる十分な機会を人に提供した。原始の呪いは、低位の霊を畏怖させるように目論まれた威圧的習慣であった。その後、この習慣は、敵への呪いの宣言へと拡大した。

87:6.14 (965.1) 霊と半神半人は、より古代の慣習採用に立ち戻ることにより望ましい活動を余儀なくされると長い間信じられた。現代人は、同じ行動において有罪である。あなた方は、共通の、そして日常の言語で互いに話し掛けるが、祈りに際しては、別の世代のより古い型の、いわゆる厳粛な型に頼っている。

87:6.15 (965.2) またこの教義は、神殿売春などの性の特質をもつ多くの宗教儀式の逆戻りについて説明している。原始の習慣へのこれらの逆戻りは、多くの災難に対する確たる保護であると考えられた。そして、これらの単純な心の民族と共に、そのようなすべての業績は、現代人が乱交と称する事とは全く無関係であった。

87:6.16 (965.3) 儀式上の誓約の習慣が、次に起こり、すぐに宗教上の誓約と神聖な誓いが続いた。これらの誓いの大部分には苦行と自傷が伴った。後には、断食と祈りが。自己否定は、のちには確実に強制的であると見なされた。これは、性の抑圧問題において特に本当であった。原始人は、早くに宗教習慣における明らかな厳格さ、つまり不本意の霊が、そのような全ての苦しみと剥奪に向かって都合良く反応することを強要できる儀式としての苦行と自己否定の効果への信仰、を作り上げていた。

87:6.17 (965.4) 現代人は、もはや霊への強要を公然とは試みないが、まだ神との駆け引きの傾向をはっきりと表わしている。かれは、いまだに誓い、木をトントン叩き、十字を切り、それに喀痰の後に何らかの使い古された句が続く。かつてそれは、魔術の常套手段であった。

7. カルト主義の特質

87:7.1 (965.5) 社会的組織の信仰の型は、道徳的感情と宗教的忠誠心の保存と刺激のための象徴を提供したので持続した。信仰は、「古い家族」の伝統から生まれ設立された制度として永続化した。すべての家族には、ある種の信

仰がある。奮い立たせるあらゆる理想は、永続するある種の象徴をしっかり掴む—生存を保証し、自己実現を増大させる文化の現れの何らかの方法を探し—また、信仰が、感情を育て満足させることによりこの目的を実現する。

87:7.2 (965.6) 文明の黎明期以来、あらゆる社会文化の訴求的な動き、または宗教の前進は、儀式、象徴的儀式を開発してきた。この儀式が、無意識の成長であればあるほど、それは、その愛好家を強くつかんできた。カルトは、感情を維持し、情感を満たしはしたものの、いつも社会の改造と精神的進歩への最大の障害であった。

87:7.3 (965.7) 信仰は、常に社会的進歩を遅らせてきたにもかかわらず、道徳基準と精神的理想において非常に多くの現代の信者は、何の適切な象徴ももたない—相互支援の信仰がない—ということは、残念なことである。しかし、宗教信仰は、製造できるはずがない。　それは成長しなければならない。そして、それらの儀式が、権威により人為的に標準化されない限り、同じ宗教信仰集団は、2つとないであろう。

87:7.4 (965.8) 初期のキリスト教派は、今までに思いついた、あるいは考え出したいかなる儀式の中でも最も効果的で、魅力的で、永続的であったが、その価値の多くは、本来の根底にある教義の非常に多くの破壊により科学的時代に打ち砕かれてきた。キリスト教信仰は、多くの当初の考えの損失により無気力にされてきた。

87:7.5 (965.9) 過去において、信仰に弾力性があり、拡張性があるとき、真実は、急速に成長してきており、思う存分に拡大した。豊富な真実と調整可能な信仰は、社会発展の速度を促した。無意味な信仰が、哲学に取って代わり理性をとりこにしようとするとき、宗教を腐敗させる。本物の信仰が、成長する。

87:7.6 (966.1) 欠点や障害のいかんを問わず、あらゆる新たな真実の啓示は、新信仰をもたらし、そしてイエスの宗教の再陳述さえも新しく、しかも適切な象徴を開発しなければならない。現代人は、新たな拡大する考え、理想、および忠誠のための何らかの適切な象徴を見つけなければならない。この高められた象徴は、活発で、精神的な宗教経験から生まれなければならない。そして、より高

い文明のこのより高い象徴は、神の父性の概念に基づいており、人の兄弟愛の強力な理想が、充満していなければならない。

87:7.7 (966.2) 昔の信仰は、自己中心的であった。新しい信仰は、適用された愛の産物でなければならない。新しい信仰は、古い信仰のように感情を育て、情感を満たし、忠誠を促進しなければならない。しかしそれは、より以上のことをしなければならない。それは、精神的進歩を容易にし、宇宙の意味を高め、倫理的価値を増大させ、社会開発を奨励し、個人の宗教生活の高度の型を促さなければならない。新しい信仰は、一時の、そして永遠の—社会的、そして精神的—双方の生存の最高目標を提供しなければならない。

87:7.8 (966.3) どの信仰も、家庭の生物的、社会的、宗教的意味に基づかない限り、社会文明と個人の精神的到達の向上へとは続かないし、貢献できない。存続している信仰は、絶え間ない変化が存在するとき永続的であるものを象徴しなければならない。それは、変わり続ける社会変化の流れを統一するものを賛美しなければならない。そ

れは、真意を認識し、美しい関係を高め、真の高潔さの善なる価値を賛美しなければならない。

87:7.9 (966.4) しかし、新たで満足のいく象徴を見い出す際の大きな困難は、現代人というものが、1集団として科学的な態度に執着し、迷信を控え、無知を嫌いつつ、一方では皆が個人として、神秘を切望し、未知を尊ぶことにある。いかなる信仰も、何らかの巧妙な神秘を具体化し、何らかの価値ある達成しえないものを仄めかすことなくして、生き残ることはできない。さらに新象徴は、単に集団にとって意義深いばかりでなく、個人にとっても意味がある。いかなる実用的象徴の型も、個人が自発性をもって実行することができ、また仲間と共に楽しむことができるものでなければならない。新信仰が、静的ではなく動的であるならば、それは、本当に、人類の進歩に価値のある何かに、一時的、かつ精神的双方の何かに役立つかもしれない。

87:7.10 (966.5) しかし、信仰—儀式、旗印、または目標の象徴—というものは、複雑であり過ぎると機能しないであろう。そして、献身への要求、すなわち忠誠への反応があ

るに違いない。効を奏するあらゆる宗教は、相応しい象徴霊を誤りなく開発するし、またその信者は、そのような儀式を社会的、道徳的、精神的進歩の総てを妨げたり、遅らせるだけの締めつけたり、醜くしたり、鎮圧する型にはまった儀式への具体化を防ぐことが賢明であろう。いかなる信仰も、道徳的発展を遅らせ、精神的進歩の助成を怠るならば、生き残ることはできない。信仰とは、個人の精神的経験—真の宗教—である生きた、しかも活発な肉体がその周りで育つところの骨格構造である。

87:7.11 (966.6) [ネバドンの輝かしい宵の明星による提示]

論文 88
呪物、護符、魔法

88:0.1 (967.1) 霊は、無生物、動物、もしくは人間に入り込むという概念は、宗教の進化の始まり以来持ち堪えてきたのであるから、非常に古く、しかも敬うべき信念である。憑依のこの教義は、呪物崇拝に他ならない。未開人は、必ずしも呪物を崇拝しない。かれは、非常に論理的に崇拝するし、そこに居住の霊を崇敬する。

88:0.2 (967.2) 最初呪物の霊は、死者の亡霊であると信じられた。その後、高等な霊が呪物に住むと考えられた。呪物信仰は、最終的には亡霊、魂、霊、それに悪霊憑依の原始的考えのすべてを取り入れた。

1. 呪物信仰

88:1.1 (967.3) 原始人は、つねに何か並はずれたものを呪物化したいと思った。ゆえに多くの物に起源の機会を与えた。人は、病気にかかり、何かが起こり、そして回復する。多くの薬の評判と疾患治療の偶然の方法についても同じことが、当てはまる。夢と結びつく物は、呪物へと変えられ易かった。山ではなく火山が、呪物になった。星ではなく彗星が。原始人は、流星と隕石を地球訪問の特別な霊の到着を示唆するものと見なした。

88:1.2 (967.4) 最初の呪物は、奇妙な印のある小石であって、人は、以来「神聖な石」をずっと捜し求めた。一連のビーズは、かつて神聖な石の収集物、一揃いの護符であった。多くの部族には、呪物の石があったが、カーバ神殿とスクーンの石のようにわずかしか存続しなかった。火

と水もまた、初期の呪物の中にあり、火の崇拝は、聖水の信仰と共にまだ存続している。

88:1.3 (967.5) 木の呪物は、後の発展であったが、いくつかの部族の間では根強い自然崇拝は、ある種の自然の霊が、内在する護符の信仰へと導いた。植物と果実が、呪物になるとき、それらは、食物としては禁忌であった。りんごは、この範疇に入る最初のものであった。レバント民族は、決してそれを食べなかった。

88:1.4 (967.6) 動物が人肉を食べれば、それは、呪物になった。このように犬は、パルシー教徒の神聖な動物になった。呪物が動物であれば、亡霊は、永久にそこに居住し、呪物は、生まれ変わりに影響を及ぼすかもしれない。未開人は様々に動物を羨んだ。かれらは、動物よりも優れているとは感じず、しばしば自分達の好きな獣に因んで名付けた。

88:1.5 (967.7) 動物が呪物になると、呪物の動物の肉を食べることが結果として禁制になった。類人猿や猿は、人に似ていることから、早くから呪物的動物となった。またその後、蛇、鳥、豚が、同様に見なされた。排泄物が非常

に尊重された間、牛乳は禁制であり、乳牛は、ひところ呪物であった。蛇は、悪霊の代弁者であると考えられパレスチナにおいてユダヤ人同様と、特にフェニキア人に崇拝された。多くの現代人でさえ爬虫類の魔力を信じる。アラビアからインド経由の赤色人種のモキ部族の蛇舞踊へと、蛇は、ずっと崇拝されてきた。

88:1.6 (968.1) 週のうちの特定の曜日は呪物であった。金曜日は、随分長らく不運な日、13は、不吉な数と見なされてきた。幸運な数の3と7は、後の啓示から来た。4は、原始人の幸運な数であり、早期の方位磁石の4方位の認識から得られた。家畜、あるいは他の所有物を数えることは、不運と信じられた。古代人は、人口調査、「人に付番すること」に常に反対した。

88:1.7 (968.2) 原始人は、性行為からの必要以上の呪物を作らなかった。生殖機能には、ほんのわずかな配慮しかなかった。未開人は、自然な心であり、卑猥でも淫乱でもなかった。

88:1.8 (968.3) 唾液は、強力な呪物であった。人に唾を吐きかけることにより悪魔を追い払うことができた。年長者か

目上の者に唾を掛けることは、最高の挨拶であった。人体部分は、特に髪と爪が、可能な呪物として見られた。首長の長く伸びた爪は、非常に尊重され、その切り取り部分は、強力な呪物であった。頭蓋骨の呪物信仰は、後の首狩りの多くを説明する。臍の緒は、非常に大切な呪物であった。今日でさえ、アフリカではそう見なされる。人類の最初の玩具は、保存された臍の緒であった。しばしばそうであったように、それは、真珠がちりばめられ人の最初の首飾りであった。

88:1.9 (968.4) 猫背と不具の子供は、呪物と見なされた。精神異常者は、気がふれていると信じられた。原始人は、才能と狂気を見分けることができなかった。痴人は、死ぬまで打たれるか、または呪物人物として崇拝された。ヒステリーは、魔術で受けのよい信仰をますます確かなものにした。てんかん患者は、しばしば聖職者と薬師であった。酩酊は、霊占有の型と見られた。未開人が馬鹿騒ぎをするとき、自己の行為への責任を拒否する目的で髪に木の葉を入れる。毒や酔わせるものは、迷信の対象になった。それらは、取り付かれていると考えられた。

88:1.10 (968.5) 多くの人々が、天才は賢明な霊に取り憑かれている崇拝対象の人物として見た。これらの才能ある人間は、利己的な利害促進のための詐欺や誤魔化しに頼るようになった。呪物である人物は、人間以上のものであると考えられた。かれは、神性であり、誤りさえしないのであった。したがって、首長、王、聖職者、予言者、および教会支配者は、徐々に大きな力を振るい、限りない権力を行使したのであった。

2. 呪物の発展

88:2.1 (968.6) 亡霊は、生存中に所有していた物に宿るのが、それ自身の好みだと考えられた。この信仰は、現代の多くの遺物の効力について説明している。古代人は、常に指導者の骨を崇敬したし、聖者や英雄の骨格の遺骸は、いまだに迷信的畏怖で多くの者に尊重されている。今日でさえ、偉人の墓への聖地巡りが行なわれている。

88:2.2 (968.7) 遺物信仰は、古代の呪物信仰の副産物である。現代宗教の遺物は、未開人の神仏を合理化する試みを表しており、こうして、それを現代の宗教体系の威厳と体面の場所に高めている。呪物や魔法を信じることは、異

教的であるが、遺物と奇跡を受け入れることは、一応は問題ない。

88:2.3 (969.1) 囲炉裏—暖炉—は、多かれ少なかれ、崇拝対象物、つまり神聖な場所になった。神社と寺院は、死者がそこに埋葬されたことから、最初に崇拝対象の場所となった。ヘブライ人の崇拝対象の小屋は、モーシェにより強力な呪物が隠される場所へと、その後神の掟の既存概念へと高められた。しかしイスラエル人は、石の祭壇へのケナーンの独特の信仰を決して放棄しなかった。「石の柱として立てたこの石は、神の家となる。」イスラエル人は、神の霊が、現実には呪物であるそのような石の祭壇に住んでいると本当に信じた。

88:2.4 (969.2) 最も初期の形象は、傑出した死者の風貌と思い出を保つために作られた。それは、実際には記念碑であった。偶像は、呪物の手の込んだものであった。原始人は、奉納の儀式は、霊を形象に入らせると信じた。同様に、ある物体が祝福されると、それはお守りになった。

88:2.5 (969.3) モーシェは、古代のダラマティアの道徳律に2番目の戒律を追加してヘブライ人の間での呪物崇拝を抑え

る努力をした。呪物として奉納されるようになるかもしれないいかなる種類の形象も作るべきではないと慎重に指示した。モーシェは、「彫像を作ってはいけない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、または地の下の水の中にあるものでも似せて作ってはいけない。」とそれを簡単にした。この戒律が、ユダヤ人の間での芸術を非常に遅らせると共に呪物崇拝を低くしたのであった。しかし、モーシェは、昔の呪物を突如除くことには分別をもっていたので、戦争用の祭壇と宗教聖堂を兼ね備えた箱にある法典の横に一定の遺物を置くことを承諾した。

88:2.6 (969.4) 言葉は、徐々に呪物に、殊のほか神の言葉と見なされるものになった。このようにして宗教聖典の多くは、人の精神上の想像力を閉じ込める呪物的牢獄になった。呪物に対するモーシェの努力そのものが、最高の呪物になった。その戒律は、後に芸術を無意味にし、美の楽しみと憧れの妨げのために用いられた。

88:2.7 (969.5) はるか昔、権威の呪物の言葉は、恐怖をかきたてる教義、人を奴隷化する全暴君の最も残忍なもの、で

あった。教義的呪物は、偏狭、狂言、迷信、狭量、および最も極悪野蛮な残酷性の本性を現すように必滅の人間を導くであろう。知恵と真実への現代の重視は、　呪物作りの傾向から思考と推論のより高い段階への最近の回避に他ならない。様々な宗教家が聖典として保持している収集された呪物の文章に関しては、書物の内容が本当であると信じるばかりでなく、あらゆる真実もまた書物に含まれていると信じられている。これらの聖典の1つが、たまたま地球は平坦であると述べると、ほかの点で健全である男女は、長い世代に渡り、惑星が丸いという肯定的な証拠の受け入れを拒否するであろう。

88:2.8 (969.6) 目に偶然に一節を発見させるためにこれらの聖典を開き、重要な人生決定、または計画を決定するかもしれない一節に従う習慣は、完全な呪物に他ならない。「聖なる書」に誓いを立てるか、または何らかの最高の尊敬対象に誓うことは、洗練された呪物の型である。

88:2.9 (969.7) だがそれは、未開人の首長の爪を切り取る呪物の恐怖から、篩いに掛けられた何世紀もの道徳の知恵を、煎じ詰めれば、少なくともそれらが「聖典」として

組み立てられる時と出来事に至るまでを反映する手紙、法、伝説、寓話、神話、詩、および年代記の優れた収集の敬愛へと前進する真の段階的進歩を呈している。

88:2.10 (970.1) 言葉が呪物になるには、感化されたと考えられなければならないし、また神々しく奮い立たせると信じられている文章の祈りは、直接教会の権威の確立に導き、一方で民間の型の進化は、国家の権威の実現へと導いた。

3. トーテム崇拝

88:3.1 (970.2) 呪物崇拝は、最も初期の神聖な石への信仰から偶像崇拝、人食いの習慣、自然崇拝を経てトーテム信仰まで原始のすべての呪物信仰を経験した。

88:3.2 (970.3) トーテム信仰は、社会的慣例と宗教行事の組み合わせである。本来生物上の起源と考えられている崇敬動物への敬意は、食糧供給を保証すると考えられた。トーテムは、同時にその集団とかれらの神の象徴であった。そのような神は、一族の権化であった。トーテム崇拝は、その他の点で個人の宗教の社会化未遂の1局面で

あった。トーテムは、最終的には現代の様々な民族の旗、または国家の表象へと発展していった。

88:3.3 (970.4) お守り袋、つまり薬袋は、幽霊がしみ込んだ品物の立派な詰め合わせを収納する小袋であり、昔の祈祷師は、自分の袋、つまり自分の力の象徴を決して地面に触れさせなかった。20世紀の文明的民族は、自分達の旗が、つまり国家意識の象徴が、同様に決して地面に触れないように注意する。

88:3.4 (970.5) 聖職者にふさわしい、また王にふさわしい職務の記章は、いつかは呪物と見なされ、国家至高の呪物は、一族から部族、領主から封建君主、トーテムから旗へと数多くの発展段階を経た。呪物的王は、「神権」によって統治し、他の多くの政府の型を得た。集合的に「世論」と呼ばれるとき、人は、民主主義の呪物というもの、つまり共通の考えの高揚や崇拝もまた作りあげた。分離して取り上げられるとき、1人の意見は、あまり価値があるとは見なされないが、多くの人が、民主主義としてまとめて機能するとき、この同じ平凡な判断は、正義の最高権威や正しい規準であると考えられる。

4. 魔術

88:4.1 (970.6) 文明人は、科学を通じて現実の環境問題に着手する。未開人は、魔術によって実体のない亡霊環境の現実問題を解決しようとした。魔術とは、不可解さを際限なく説明する憶測上の霊の環境を巧みに操る方法であった。それは、霊の任意の協力を得る芸術であり、呪物、もしくは他の、しかもより強力な霊の効用を通じて霊の不本意な援助を強制する芸術であった。

88:4.2 (970.7) 魔術、妖術、および占いの目的は二面的であった。

88:4.3 (970.8) 1. 招来の見通しを得るため

88:4.4 (970.9) 2. 好都合に環境に影響を及ぼすため

88:4.5 (970.10) 科学の目的は、魔術のそれらと同じである。人類は、魔術から科学へと、思索と理由によってではなく、むしろ長い経験を経て徐々に、しかも苦しみながら進歩している。人は、誤りに始まり、誤りの中で前進し、ついには真実の敷居に到達し、徐々に真実へと立ち戻っている。人は、科学的方法の到来でのみ前に向いて

きた。だが原始人は、試みるか、または死ななければならなかった。

88:4.6 (970.11) 初期の迷信の魅力は、後の科学的好奇心の母であった。これらの原始の迷信には進歩的な活力に満ちた感情—恐怖に加えて好奇心—があった。昔の魔術には進歩的な駆動力があった。これらの迷信は、惑星の環境を知ることと制御するという人間の願望の出現を意味した。

88:4.7 (971.1) 未開人は、自然死の概念が理解できなかったので、魔術は、非常に強く未開人を掴まえた。後の原罪の考えは、自然死を説明する点において人種の魔術の支配力を弱めることに大きく役立った。1つの自然死に対し、かつては疑われた10人の潔白な人々が殺されるということは少しも珍しいことではなかった。これが、なぜ古代民族が、もっと速く増加しなかったかという1つの理由であり、いくつかのアフリカ部族にとってはいまだに事実である。告発された個人は、死に直面しているときでさえ、通常罪を自供した。

88:4.8 (971.2) 魔術は、未開人にとって自然なものである。毛髪、あるいは指の爪を切る魔術の駆使により実際に敵を殺すことができると信じる。蛇に咬まれて死ぬことは、魔術師の魔術のせいにされた。魔術との戦いにおける苦労は、恐怖が死をもたらすことがあるという事実から起こる。原始の民族は、魔術を非常に恐れたので実際に魔術に殺されるほどであり、また、そのような結果が、この誤った信仰を立証するに十分であった。失敗の場合には、何らかのもっともらしい説明がいつもあった。欠陥のある魔術の特効薬は、さらなる魔術であった。

5. 魔術の護符

88:5.1 (971.3) 体に結び付くものは何でも呪物になり得たので、最も初期の魔術は、毛髪と爪に関係があった。体の排泄物にともなう秘密は、敵が、体からの何かを手に入れ、害をもたらす魔術にそれを用いるかもしれないという恐怖から生まれた。したがって、体のすべての排泄物は、入念に埋められた。唾液が、有害な魔術に使用されるという恐怖から公共で唾を吐くことは慎まれた。唾は、いつでも覆われた。残りものの食べ物、衣服、装飾品さえ魔術の器具になり得た。未開人は、食事の残り物

を決して食台に置き去りにしなかった。このすべては、そのような習慣の衛生の重要性に対する判断からではなく、敵が、魔術の儀式でこれらのものを使用するかもしれないという恐怖から行われた。

88:5.2 (971.4) 魔術の護符は、さまざまなものから作られた。人肉、虎の鉤爪、鰐の歯、植物の種子、蛇の毒液、人間の毛髪。死者の骨は、非常に魔術的であった。足跡の塵埃さえ魔術に用いることができた。古代人は、愛の護符の大いなる信者であった。血液と肉体の他の分泌物は、愛の魔術の影響を保証することができた。

88:5.3 (971.5) 形象物は、魔術に効果があると考えられた。ひと形が作られ、そしてそれが、虐待されたり、もしくは良く待遇されると、実在の人物に同じ効果をもたらすと信じられた。迷信深い人々は、購買をするに当たり売り手の気持ちを柔らかくするために少し固い木を噛むのであった。

88:5.4 (971.6) 黒牛の乳は、非常に魔術的であった。黒猫も然りであった。杖、もしくは棒は、太鼓、鈴、および結び目と共に魔術的であった。古代の総ての物体が、魔法の

護符であった。新の文明の、またはより高い文明の習慣は、誤って信じられた悪の魔術的性質のために好意を示されなかった。文章、印刷、絵画は、長らくそのように見なされた。

88:5.5 (971.7) 原始人は、名前、特に神の名前は、敬意をもって扱われなければならないと信じた。名前は、実体として、物理的な個性とは全く別の感化力と見なされた。それは、魂と影と同様に尊重された。名前は、借金のかたにされた。人は、借金の支払い義務が果たすまで自分の名前を使用することはできなかった。現在では人は、書き付けに自分の名を記す。個人の名前は、やがて魔術において重要になった。未開人は、2つの名前をもった。重要な方は、通常時の使用には神聖過ぎると見なされた。故に、2つ目の、というか日常用の名前—あだ名—があった。人は、本名を決して見知らぬ人には名乗らなかった。人は、普通でないいかなる自然の経験にも自分の名前を変えた。時折、それは、病気の治療か、または不運を押し止める努力であった。未開人は、部族長から買うことにより新しい名前を得ることができた。人は、今でも肩書きや地位に投資する。しかしアフリカのブッ

シュマンのような最たる原始部族の中では個々人の名前は存在しない。

6. 魔術の習慣

88:6.1 (972.1) 魔術は、棒、「薬」の儀式、そして化身を介して実践され、実行者は、衣服を着けずにするのが通例であった。原始の魔術師の中で女性は、数の上で男性にまさっていた。魔術において「薬」は、処置ではなく神秘を意味する。未開人は、決して自分自身を治療しなかった。魔術の専門家の忠告以外には決して薬を使用しなかった。20世紀のブードゥー教の医師は、昔の魔術師の典型である。

88:6.2 (972.2) 魔術には公的局面と私的局面の両方があった。祈祷師、シャーマン、もしくは聖職者が執り行なう魔術は、全部族の利益のためであると考えられた。魔女、魔術師、男の魔法使いは、個人用の魔術を、つまりある個人の敵に悪を持たらす強制的方法として用いられた個人的で利己的な魔術を施した。二元的心霊術の概念は、つまり善と悪の霊は、その後の白魔術、黒魔術の信仰をもたらした。また魔術は、宗教の発展につれ自身の宗派外

で行動する霊に当てはめる用語であり、またより昔の亡霊信仰に言及した。

88:6.3 (972.3) 言葉の組み合わせは、すなわち詠唱と呪文の儀式は、非常に魔術的であった。いくつかの初期の呪文は、最終的には祈りに発展した。やがて模倣呪術が行なわれた。祈りが実行された。魔術舞踊は、劇的な祈りに過ぎなかった。祈りは、犠牲の関連要素として徐々に魔術に取ってかわった。

88:6.4 (972.4) 身振りは、 言語行動よりも古く、より神聖で魔術的であったし、また物真似には強い不思議な力があると信じられた。赤色人種は、構成員の1人が捕らえられる野牛の役を演じ、差し迫っている狩りの成功を保証する野牛踊りをしばしば演じた。五月祭の性の祭礼は、単なる模倣呪術、植物界にある性の情熱への暗示的魔術であった。人形は、まず魔法のお守りとして不妊の妻に用いられた。

88:6.5 (972.5) 魔術は、最終的には科学時代の実を結ぶ進化的宗教の枝分かれであった。占星術の信仰は、天文学の発

達につながった。賢者の石の信仰は、金属への精通に繋げ、一方、魔術の数字の信仰は、数学を樹立した。

88:6.6 (972.6) だが魔除けに満ちた世界は、すべての個人的野心と主導権を打破するために多くのことをした。余分な労働、あるいは勤勉さの成果は魔法の力によると見られた。ある者の畑に隣人より多くの穀物が実るならば、この人物は、首長の前に引き摺られ、怠惰な隣人の畑からこの余分な穀物を引き付ける行為で告発されるかもしれなかった。誠に未開時代においては、多くを知るということは、危険であった。いつでも黒魔術師として処刑される可能性があった。

88:6.7 (972.7) 徐々に科学は、人生から賭博的要素を取り除いている。しかし現代の教育方法が失敗するならば、魔術への原始信仰へのほぼ即座の逆戻りがあるだろう。これらの迷信は、いわゆる文明的な多くの人々の心にまだ纏わりついている。言語は、人種が長い間魔術の迷信に染まってきたということを証言する多くの化石、つまり、呪文で縛られた、星回りの悪い、乗り移り、霊感、　神隠し、巧妙さ、魂を奪う、びっくり仰天した、驚くとい

うような言葉を含んでいる。また知力ある人間が、いまなお幸運、邪眼、占星術を信じている。

88:6.8 (973.1) 古代の魔術は、その頃には不可欠の、しかし今はもはや役に立たない現代科学の繭であった。そこで無知な迷信の幻は、科学概念が生まれ得るまで人の原始の心を撹拌した。今日、ユランチアは、この知的発展の中間地帯にある。世界の半分が、頻りに真実の光と科学的発見の事実を知ろうとしており、もう一方は、古代の迷信と希薄に変装している魔術だけの腕のなかで苦しんでいる。

88:6.9 (973.2) [ネバドンの輝かしい宵の明星による提示]

論文 89
罪、生贄、償い

89:0.1 (974.1) 原始人は、霊に恩義があると、つまり贖いの必要性があると考えた。未開人の観点からは、霊は、正義の立場からさらに多くの不運を自分達にもたらしたかもしれないのだとみなした。時の経過と共に、この概念は、罪と救済の教理へと発展した。魂は、喪失状態で世界に入ると—原罪—と見なされた。魂は、受け戻され

なければならない。身代わりが、用意されなければならない。首狩り人は、頭蓋骨崇拝信仰の実践に加え、自身の命の替え玉を、身代わりを提供することができた。

89:0.2 (974.2) 未開人は、霊が、人間の災い、苦しみ、屈辱を見て最高の満足感を得るという考えにとりつかれていた。最初に人は、作為の罪のみを関心をもったが、後には不作為の罪に対処するようになった。そして、その後の生贄の体系のすべては、これらの2つの考えの周りで成長した。この新儀式は、生贄の宥めの儀式の遵守と関係があった。原始人は、神に気に入られるために何か特別なことをしなければならないと信じた。高度な文明だけが、一貫して冷静で慈善の神を見分ける。宥めは、将来の幸福への投資よりむしろ即座の不運に対する保険であった。そして回避、悪魔払い、強制、宥めの儀式はすべて、互いに併合する。

1. 禁忌

89:1.1 (974.3) 禁忌のしきたりは、不運をはぐらかすための人の努力、何かの回避により亡霊の怒りを阻む人の努力であった。禁忌は、最初は非宗教的であったが、初期には

亡霊、あるいは霊の制裁を習得し、こうして補強されると、それは、立法者や団体の作り手となった。禁忌は、儀式基準の源であり、原始の自制の原型である。それは、最も初期の社会的規制であり、長い間唯一無二であった。それは、まだ社会規制構造の基本単位である。

89:1.2 (974.4) 未開人の心でこれらの禁止があつめた敬意は、それらを執行すると思われる力への恐怖と全く相等しかった。禁忌はまず、偶然の不運の経験がもとで起きた。その後、禁忌は、首長やシャーマンにより—亡霊により、神によってさえも導かれると考えられた呪術師—により提案された。霊報復への恐怖は、未開人の心では非常に大きく、禁制を破ってしまったとき、時として恐怖で死ぬほどであり、この劇的な出来事が、生存者の心に禁忌の保持を途方もなく強くする。

89:1.3 (974.5) 最も初期の禁止の中には女性の処分と他の財産処分に制限があった。宗教は、禁忌の進化においてより大きい役割を演じ始めるにつれ、禁止令下にある品目は、不浄であると、後には神聖でないと見なされた。ヘブライ人の記録は、清廉なものと不浄なもの、聖なるも

のと邪悪なるものに多く言及しているが、これらの線に沿った信仰は、他の多くの民族のものよりもずっと厄介ではなく、広範囲におよばなかった。

89:1.4 (975.1) ダラマティアとエーデンの7条の戒律は、ヘブライ人の10の命令と同じく明確な禁忌であり、総てが、最古の禁止がそうであったように否定形で表現された。しかし、これらのより新しい掟は、何千もの以前の現在の禁忌を代理をしたという点で、実に救済であった。そして後のこれらの戒律は、これ以上に、何かを服従と交換に確実に約束した。

89:1.5 (975.2) 初期の禁忌とされる食物は、物神崇拝とトーテム信仰が端緒であった。。豚は、ヒンズー教徒にとっての牛のように、フェニキア人にとって神聖であった。エジプト人の豚肉の禁制は、ヘブライ人とイスラム教徒の信仰によって永続化された。禁制食物の変異形は、妊婦が特定の食物について考え過ぎると、生まれてくるその子供は、その食物の反映であるという信仰であった。そのような食品は、子供にとり禁忌となるのであった。

89:1.6 (975.3) 喫食方法は、やがて禁忌となり、昔と今の食事作法が始まった。カースト制度と社会階層は、昔の禁止の遺留である。禁忌は、社会の組織化において極めて効率的ではあったが、ひどく耐え難い負担であった。否定的な禁制は、有用で建設的な規則を維持するばかりでなく、陳腐で、時代遅れの、無益な禁忌をも維持した。

89:1.7 (975.4) しかしながら、広範囲の、しかも多種多様のこれらの禁忌を除外し、原始人に関する批評に参加する文明的社会というものは、ないであろうし、禁忌は、原始宗教の支えとなる制裁がなかったならば決して持続はしなかったであろう。人間進化における不可欠要素の多くは、非常に高価であり、努力、犠牲、自己犠牲においては莫大な費用が掛かったが、これらの自制の業績は、人が文明の上向いのはしごを登る本物の横木であった。

2. 罪の概念

89:2.1 (975.5) 偶然の恐怖と不運の畏怖は、これらの災難に対する想定される保険であるとように、文字通り人を原始宗教の創案へと追い込んだ。宗教は、魔術と亡霊から霊と物神を経て禁忌へと発展した。あらゆる原始部族に

は、それぞれの禁断の実の木が、文字通りリンゴが、しかし比喩的にはいろいろな種類の禁忌を重くぶらさげる1,000種の枝があった。そして禁制の木は、絶えず「してはならない。」と言った。

89:2.2 (975.6) 未開の心が、善霊と悪霊の両方を描くまでに発展し、また禁忌が、進化的宗教の厳粛な制裁を受けたとき、舞台は、罪の新概念の登場に向けてすっかり準備された。罪の考えは、啓示宗教のその登場以前に広く世界に確立された。自然な死は、原始の心にとり罪の概念によってのみ論理的になった。罪は禁忌への違反であり、死は罪への刑罰であった。

89:2.3 (975.7) 罪は、儀式的であり、理性的ではなかった。行為であり、考えではなかった。そして、罪のこの全概念は、ディルムンの長引く伝統と地球の小楽園の時代までに育成された。アダムとエーデンの園の伝統もまた、人種黎明のかつての「最盛期」の夢に中味を添えた。そしてこのすべては、思考体系で後に表現される考え、つまり人は特別な創造にその起源があり、自分の経歴を完全

に開始し、そして禁忌への違反—罪—が、人を後のひどい苦況に落しためたという考えを固めた。

89:2.4 (976.1) 禁忌への常習的違反は、悪になった。原始の法は、悪を犯罪にした。宗教は、それを罪にした。初期の部族間での禁忌への違反は、犯罪と罪の結合したものであった。共同体の災難は、必ず部族の罪に対する罰と見なされた。見た目に明らかな邪悪な者の繁栄は、繁栄と正義は相伴うと信じる者達に大変な心配をもたらすしたので、禁制違反者への罰のために地獄を考案する必要があった。今後の罰のこれらの場所の数は、1ヶ所から5ヶ所と異なった。

89:2.5 (976.2) 告白と許しの考えは、原始宗教に早くから登場した。人は翌週に犯すつもりの罪を公開の会合において許しを求めるのであった。告白は、単に赦免の儀式、しか　冒涜の公示、つまり「不浄、不浄」の叫びの儀式であった。つぎには、浄化の儀式的枠組のすべてが続いた。すべての古代民族が、これらの無意味な儀式を慣行した。初期部族の多くの明らかに衛生的慣習は、主に儀式的であった。

3. 断念と屈辱

89:3.1 (976.3) 断念は、宗教発展の次の段階として到来した。食を断つことは、一般的習慣であった。それは、やがて肉体的快楽の、特に性的種類の多くの型に先んずる習慣となった。断食の儀式は、多くの古代宗教に深く根づいており、事実上、すべての現代の神学的思索体系へと伝承してきた。

89:3.2 (976.4) 未開人が、死者とともに財産を焼却したり埋葬する荒廃的習慣から立ち直ろうとしている頃、つまり人種の経済構造の形をなし始めている頃、この新しい断念の信仰教義が現れ、何万もの熱心な魂が、自ら貧困を求め始めた。財産は、精神的障害と見なされた。物質所有からくる精神の危険性に及ぶこれらの概念は、フィロンとパウーロスの時代に広範囲に受け入れられ、以来、ヨーロッパ哲学に著しく影響を及ぼした。

89:3.3 (976.5) 貧困は、多くの宗教、とりわけキリスト教に関する書物や教えに盛り込まれるようになった苦行の儀式のほんの一部であった。苦行は、しばしばこの愚かな断念の儀式の否定の型である。しかしこのすべてが、未開

人に自制を教え、またそれは、社会発展における価値ある前進であった。自己否定と自制は、初期の進化的宗教からの2大社会的利得であった。自制は、新しい人生哲学を人に与えた。それは、利己的満足の分子を増加させる試みの代わりに個人的要求の分母を低減することにより、人生の分数を増大させる芸術を人間に教えた。

89:3.4 (976.6) 自己訓練のこれらの昔の考えは、鞭打ちや肉体的拷問の様々な種類を取り入れた。母信仰の聖職者は、自らが去勢を甘受し手本を示し、肉体的な苦しみの美徳を教えることに特に活発であった。ヘブライ人、ヒンズー教徒、仏教徒は、肉体的屈辱のこの教義の熱心な信者であった。

89:3.5 (976.7) 人間は、古代ずっと神の自制の原簿上に余分な貸し方記入においてこれらの方法を探求した。自己否定と苦行の誓いをたてることは、かつては何らかの情緒の緊張下における慣習であった。これらの誓いは、そのうちに、神との契約の型をとり、その意味で、神が、肉体のこの難行と屈辱の代償に何か明確なことをするはずだと考えられたがゆえに、真の進化の過程を意味した。誓

いは、否定的でもあり、肯定的でもある。今日この有害で極端な自然の誓約が、インドの特定集団の間に最もよく観測される。

89:3.6 (977.1) 断念と屈辱の信仰が、性的満足に注意を向けたのは尤もなことであった。禁欲信仰は、戦争従事に先立つ兵士の間の儀式として生まれた。それは、後日、「聖者」の慣習になった。この信仰は、密通よりも単なる小悪であるという理由から結婚を黙認した。世界の重要な宗教の多くが、この古代信仰に著しく影響を受けてきたが、キリスト教が、何にもまして最も影響を受けてきた。使徒パウーロスは、この宗派の熱愛者であり、その個人的視点は、パウーロスがキリスト教神学に結びつけた教えに反映されている。「男が女に触れないのは良いことである。」「すべての人が私のようであればよいのに。」「私は、それ故、未婚者と未亡人に、私のようにしていさえすれば良い、と言う。」パウーロスは、そのような教えは、イエスの福音の一部でないことをよく知っていたし、これに関してのパウーロスの承認が、「私は命令によって話すのではなく、許可でこれを話す」というその声明によって例証されている。しかしこの信仰

は、パウーロスを女性軽蔑へと導いた。一番残念なことは、パウーロスの個人的な意見が、重要な世界宗教の教えに長い間影響を及ぼしているということである。天幕造りの教師の忠告が文字通り、しかも広く順守されるならば、人類は、突然の、不名誉な終わりに至ったことであろう。その上、古代の禁欲礼賛との宗教のかかわり合いは、結婚と家庭との戦い、社会の本物の基礎と人間の進歩の基本的制度に直接通じる。そのような総ての信仰が、様々な民族の多くの宗教における独身司祭の形成を育んだということは驚きに当たらない。

89:3.7 (977.2) 人は、いつの日か認可なくして自由を、暴食癖なくして栄養を、放蕩なくして快楽を享受する方法を学ぶべきである。自制は、人間の極端な自己否定であるよりも行動上の規制のためのより良い手段である。イエスもまた、決してこれらの無理な見解を追随者に教えなかった。

4. 生贄の起源

89:4.1 (977.3) 信仰心の一部としての生贄には、他の多くの信心深い儀式と同様に、単純かつただ唯一の源を持たなか

った。権威に頭を下げたり、神秘の存在の前に信心深い敬愛でひれ伏す傾向は、その主の前の犬のへつらいに見られる。それは、崇拝の衝動から生贄行為への一歩に過ぎない。原始人は、自分が被った痛みにより生贄の値打ちを測った。最初に生贄に対する考え方が、宗教儀式に加わったとき、痛みを生じない捧げものは検討されなかった。最初の生贄は、毛を引き抜いたり、肉を切ったり切断したり、歯を叩き落したり、指を切除するような行為であった。生贄のこれらの粗野な考え方は、文明が進むにつれ自己犠牲、禁欲、断食、剥奪の儀式への段階へと、そして肉体の悲しみ、苦しみ、苦行を経る後のキリスト教義の清めへと高められた。

89:4.2 (977.4) 宗教発展の初期、生贄に関する2つの概念が存在した。感謝の気持の態度を意味する寄贈の生贄、そして贖いの考えを取り入れた負債の生贄の考え。その後、代替の概念が展開した。

89:4.3 (977.5) さらにその後、人は、神への伝言持参人として機能するかもしれないいかなる自然をも生贄であると思いついた。それは、神の鼻孔に甘い味としてあるかもし

れない。これが、生贄の馳走に発展し、その内にますます入念に飾り立てるようになる生贄儀式の香や他の美的特徴をもたらした。

89:4.4 (978.1) 和解と宥めの生贄の儀式は、宗教が発展するにつれ回避、慰め、悪魔払いのより古い方法を差し換えた。

89:4.5 (978.2) 生贄の最も初期の考えは、先祖の霊に課せられる敵意のない査定の考えであった。償いの考えは、後にようやく展開した。人が人種の進化の起源の概念から逃がれるにつれ、つまり惑星王子時代の伝統とアダームの滞在が時とともに知れ渡るにつれ、罪と原罪の概念が、広範囲におよび、ゆえに偶発的、個人的な罪の生贄が、人種的な罪の償いに関する生贄の原理へと発展した。生贄の償いは、未知の神の憤りと嫉妬さえ覆い隠す総合保険手段であった。

89:4.6 (978.3) 多くのとても感情を害し易い霊と意地汚い神に囲まれた原始人は、すべての聖職者、儀式、それに精神的負債から救い出す全生涯を通じての生贄を必要とするそのような多くの債権者である神と直面した。原罪の、

または人間の罪の教義は、生まれるすべての人を霊の力に対して由々しい負債を作らせた。

89:4.7 (978.4) 寄贈と賄賂は人に与えられる。しかし、神に供されるとき、それらは神聖に作られたとか、捧げられたとか描写されるか、または生贄と呼ばれる。断念は、宥めの消極的な形であった。生贄は、積極的な型になった。宥めの行為は、称賛、賛美、世辞、それに持てなしさえ盛り込んでいた。それは、神の崇拝の現代の形式を構成している昔の宥めの信仰の積極的なこれらの習慣の名残りである。崇拝の現代の型は、単にこれらの古代の生贄の積極的な宥めの手法の儀式化である。

89:4.8 (978.5) 動物の生贄は、現代種族にとってよりも原始人にとってはるかに意味深かった。これらの未開人は、動物を自分達の実際の、近い親類と見なした。人は、時の経過につれ作業用動物の贈呈をやめて生贄奉納において明敏になった。人は、当初は家畜を含むすべてのものの最上のものを生贄にした。

89:4.9 (978.6) あるエジプトの支配者が次のような生贄をしたと述べたとき、それは、空威張りではなかった。11万

3,433人の奴隷、49万3,386頭の牛、88隻の船、2,756個の黄金の形象、33万1,702本の蜂蜜と油、22万8,380本の葡萄酒、68万714羽のガチョウ、674万4,428本のパン、574万352袋の硬貨。このために彼は、骨折って働く臣下に痛ましいほどに税をかけねばならなかった。

89:4.10 (978.7) 純然たる必要性が、神がその魂を味わった後、最終的に生贄の物質部分を食べるようにこれらの半未開人を追い立てた。この習慣は、古代の神聖な食事の、現代用語での聖餐式の見せかけによる大義名分を見つけた。

5. 生贄と人食い習慣

89:5.1 (978.8) 初期の人食い習慣に対する現代の考え方は、完全に誤っている。それは、早期社会の慣習の一部であった。人食い習慣は、伝統的に現代文明にとっては身の毛もよだつものであるが、それは、原始社会の社会構造と宗教構造の一部であった。集団の利益が、人食い習慣の実践を決定した。それは、迷信と無知への奴隷状態ゆえに必要性の催促にそって成長し、持続した。それは、社会、経済、宗教、そして軍事上の習慣であった。

89:5.2 (979.1) 古代人は、人食い人種であった。古代人は、人肉を味わい、それゆえに霊と原始の神に食物の贈り物としてそれを捧げた。亡霊霊は、単に変性した人間であり、また食物は、人間の最大の必要物でる理由から、食物は、ひいては同様に霊の最大の必要物であったに違いない。

89:5.3 (979.2) 人食い習慣は、かつて進化的人種の間ではほとんど普遍的であった。サンギク系は、すべて人食いであったが、元々アンドン系はそうではなく、ノヅ系もアダーム系もそうではなかった。アンド系も、進化的人種との甚だしい混合が始まるまでそうではなかった。

89:5.4 (979.3) 人肉嗜好は、進む。飢餓、友情、報復、または宗教儀式で始まると、人肉を食することは、習慣的食人に移行する。人食いは、滅多にこれが基本的理由ではないものの、食料不足を経験して起こった。しかしながらエスキモーと初期のアンドン系は、飢饉の時を除いては、滅多に人食いはしなかった。赤色人種は、特に中米では、人食い人種であった。出産で失われる体力を更新する目的で自身の子供を殺して食べるのが、かつて原始

の母にとっての一般的習慣であり、クイーンズランド州では、最初の子供は、今もなお頻繁にこのようにして殺され、むさぼり食われる。近代における人食いの習慣は、多くのアフリカ部族による戦争手段として、隣人を恐れさせる一種の恐怖として用いられてきた。

89:5.5 (979.4) 一定の人食い習慣は、一度は優勢の血統の退化から生じたが、それは、進化的人種の中ではほとんど一般的であった。人食いは、人間が、敵への激しく苦々しい感情を経験すると一度に起こった。人肉を食することは、報復の厳粛な儀式の一部になった。敵の亡霊は、破壊され得るか、または食べる人と融合できると信じられた。男性の魔法使いは、人肉を食することによりその力を得るということが、かつては広範囲におよぶ信仰であった。

89:5.6 (979.5) ある人食い集団は、自身の部族の者、部族団結を強くすると考えられた擬似霊の同系交配だけを消費するのであった。しかし、彼らは、その強さを盗用する考えで報復のためにも敵を食べた。その身体が、食べられたならばそれは友人、または仲間の部族民の魂にとり名

誉であると考えられ、一方で敵をむさぼり食うことは、敵への罰以外の何物でもなかった。未開人の心は、一貫性への何の見せかけもしなかった。

89:5.7 (979.6) いくつかの部族の間では、老いた両親が、その子供に食べられようとしたのであった。近親者を食べることは、他の部族では控えるのが慣習であった、それらの体は売られるか、他人のものと交換された。殺戮の目的で肥育された女性と子供のかなりの取引きがあった。病気、もしくは戦争が、人口を抑え切れないときは、余剰人数は、あっさり食された。

89:5.8 (979.7) 人食い習慣は、次の影響のために徐々に消えつつある。

89:5.9 (979.8) 1. それは、共同儀式、仲間の部族民に死刑を課す共同責任の肩代りになることがあった。流血の罪悪感は、全員が、すなわち社会が参加するとき犯罪でなくなる。アジアの人食い習慣の最後は、処刑された犯罪者を食するこれであった。

89:5.10 (979.9) 2. それは、非常に早く宗教儀式になったが、亡霊への恐怖の増大が、人食い習慣の減少に常に作用したというわけではかった。

89:5.11 (979.10) 3. 最終的にはそれは、体の一部分あるいは器官、つまり魂もしくは霊の部分を有すると考えられるそれらの部分だけが食べられるという程度にまで進歩した。飲血が一般的になり、薬に体の「食べられる」部分を混合することが慣習であった。

89:5.12 (980.1) 4. それは、男性に限られるようになった。女性が、人肉を食べることは禁じられた。

89:5.13 (980.2) 5. 次には首長、聖職者、およびシャーマンに限られた。

89:5.14 (980.3) 6. その後、 それは、より高度の部族の間では禁制になった。人食いの禁制は、ダラマティアに始まり、ゆっくりと世界に広がった。かつては埋葬された体を掘り起こしそれを食べるのが一般的な習慣であったので、ノヅ系は、人食い習慣に対抗する方法として火葬を奨励した。

89:5.15 (980.4) 7. 人間の生贄は、死者の人食い習慣に弔鐘を鳴らした。人肉は、優れた人間、つまり首長の食物になり、ついにはさらに優れた霊のために取り置かれた。その結果人間の生贄の供え物が、最も劣る部族を除いては、人食い習慣を有効に終わらせた。人食いは、人間の生贄が完全に確立されて禁制となった。人肉は、神のためだけの食物であった。人は、わずかな儀式的小片、聖餐しか食べることができなかった。

89:5.16 (980.5) 最終的には動物が、生贄目的の一般的用途になり、またより後退した部族の間でさえも犬を食べることが、人食いを大いに減少させた。犬は、飼い馴らした最初の動物であり、食物としてもそれ自体高い評価で保持された。

6. 人間の生贄の発展

89:6.1 (980.6) 人間の生贄は、人食い習慣の間接的結果でもあり、その解決策でもあった。決してこれらの死の生贄を食することが習慣ではないとき、霊世界への霊の護衛の提供はまた人食いの減少へと導いた。アンドン系、ノヅ系、アダーム系は、人食い習慣に最も耽けってはいない

者であったが、いかなる人種も何らかの型における、またはいつかの時点において人間の生贄の習慣と完全に無関係ではなかった。

89:6.2 (980.7) 人間の生贄は、事実上普遍的特性である。それは、中国人、ヒンズー教徒、エジプト人、ヘブライ人、メソポタミア人、ギリシア人、ローマ人、および他の多くの民族の宗教慣習に存続し、アフリカやオーストラリアの進歩の遅い部族の間で最近に至ってまでも存続した。後のアメリカ先住民には、人食い習慣からの新生する文明があり、したがって、人間の生贄に浸った。特に中米と南米において。動物をその代用にし、通常時の人間の生贄を最初に断念したのはカルデア人であった。およそ2,000年前、心の優しい日本の天皇は、人間の生贄の代わりをする埴輪を導入したが、北ヨーロッパでこれらの生贄が立ち消えになるのは、1,000年足らずも前のことである。人間の生贄は、進歩の遅いある部族においては一種の宗教的あるいは儀式的な志願者による自殺がまだ続けられている。あるシャーマンは、以前ある部族の非常に尊敬される一老人の生贄を命じた。人々は、反抗した。従おうとしなかった。するとこの老人は、自分

の息子をシャーマンに殺させた。古代人は、この習慣を信じ切っていた。

89:6.3 (980.8) 古代の、昔ながらの宗教習慣と前進的文明の正反対の要求の間の心を引き裂く争いの例証となる記録上のイフサーと一人娘のヘブライの物語より悲惨で哀れな経験はない。この善意の男性は、一般の習慣通り愚かな誓いをし、敵への勝利に対しある代償を支払うことに同意し、「戦いの神」と掛け合ってしまった。この代償とは、この男性が、自宅に帰り着くと、迎えに最初に家から出て来た者を生贄にするというものであった。イフサーは、信頼できる奴隷の一人が、迎えを務めるものと思っていたのだが、自分の娘の、しかも一粒種が、喜んで自分の帰宅を迎えるために出て来たのであった。そのため、そんな後の時代でさえも、しかも一応は文明的民族の間においてさえ、この美しい乙女は、その運命を悲しむ2カ月後に、実際にその父により、また仲間の部族民の賛意をもって人間の生贄として捧げられた。このすべてが、人間の生贄奉納に対するモーシェの厳しい裁定にもかかわらず為されたのであった。しかし男女は、愚かで不必要な誓いをたてることに耽け、また、老人は、そ

のようなすべての誓約を非常に神聖であると信じられた。

89:6.4 (981.1) 昔はいかなる重要な建築が新たに開始されるときも、「礎の生贄」として人間を殺すのが通例であった。これが、営造物を監視し、保護するための亡霊の霊を提供した。中国人は、鐘の鋳造の準備に際し、風習上少なくとも少女1人が、鐘の音を良くする目的のために生贄に命じられた。選ばれた少女は、溶融した金属の中に生きながらに投じられた。

89:6.5 (981.2) 重要な壁に生きた奴隷を組み入れることが多くの集団の長い間の習慣であった。北ヨーロッパ部族は、後代に新しい建物の壁に生きている人間を葬るこの習慣の替わりに通行人の影を壁の中に置き換えた。中国人は、建設中に死亡したそれらの労働者を壁の中に葬った。

89:6.6 (981.3) パレスチナの小領土の王は、イェリーホの城壁の構築に当たり、「長子アビラムでその地盤を築き、最年少の息子セグブでその門を組み立てた。」そのような時代にさえ、この父は、その都の門の土台の穴に2人の

息子を生きたまま置いたばかりでなく、その行為も「主の言葉の通りに」したと記録されている。モーシェは、これらの礎の生贄を禁じたが、イスラエル人は、モーシェの死後すぐにこの生贄に戻った。新建築物の礎石に小さな装身具と形見の品を埋蔵する20世紀の儀式は、原始の礎の生贄の名残りである。

89:6.7 (981.4) 霊に初物の果実を捧げるのは、多くの民族の長い間の慣習であった。現在では大なり小なり象徴的であるこれらのしきたりは、人間の生贄に関わる早期の儀式すべての遺物である。生贄として長子を捧げる考えは、古代人、特にそれを諦めた最後の者であるフェニキア人の間で普及していた。かつては生贄に際して「命には命」と言われていた。今死に際しては「塵から塵へ」と言う。

89:6.8 (981.5) 息子イサクを生贄にと強いたアブラーハームの姿は、文化的感受性には衝撃を与えるが、当時の人間には新しくも奇妙でもない考えであった。父親にとり長子の息子を生贄にすることは、大きな情緒的圧迫下での長い間の一般的習慣であった。並はずれの、または珍しい

何かが起こるとき、人間の生贄を提供するのが必要であるという世界規模での深遠な信仰がかつて存在したことから多くの民族には、この話に類似する言い伝えがある。

7. 人間の生贄の修正

89:7.1 (981.6) モーシェは、代わりとして受け戻しの開始により人間の生贄を打ち切らせようとした。民が軽率で愚かな誓いからの最悪な結果の回避を可能にする系統的な計画を立てた。聖職者に支払うべき制定された料金に従い、土地、財産、および子供を身請けすることができた。長子の生贄をやめたそれらの集団は、残虐行為を続けたあまり進歩的でない隣人よりもかなりの利点をすぐに得た。そのような多くの後進的部族は、この息子損失により大いに弱体化したばかりでなく、指導者継承さえもしばしば中断した。

89:7.2 (982.1) 一時的な子供の生贄の自然の産物は、長子保護のために家の側柱に血を塗りつける習慣であった。これは、1年の神聖な祝宴の1つと絡めてしばしば行われ、し

かもこの儀式は、かつてメキシコからエジプトまでの世界のほとんどで行なわれていた。

89:7.3 (982.2) ほとんどの集団が、子供殺害の儀式をやめた後でさえ、遠く荒野に、または水上の小舟の中に幼児を独り置き去りにするのが習慣であった。もし子供が生き残ったならば、神が、サーゴーン、モーシェ、キーロス、ロームルスの伝統のように、子供の保護に介入したと考えられた。間もなく、長子の息子を成長させ、死の代わりに追放し、神聖であるとして、または生贄として捧げる習慣が到来した。これが、植民地化の起源であった。ローマ人は、植民地化の計画におけるこの習慣を固く守った。

89:7.4 (982.3) 原始崇拝と独特の性のだらしなさとの多くの結びつきは、人間の生贄とにその起源があった。女性は、昔首狩り人に出会ったならば、性的降伏により自分の生命を救うことができたのであった。その後、生贄として神に奉納される少女は、寺の神聖な性の奉仕のために身体を捧げることで、自分の生命の救いを選ぶことができた。この方法で自分の買い戻しの金を得ることができ

た。古代人は、このようにして自分の命の贖いに従事する女性と性関係を持つことを極めて高揚的であるとみなした。それは、神聖な少女と付き合う宗教儀式であり、さらに、この儀式全体は、平凡な性的満足感への無難な口実を提供した。これは、少女達とその相手の双方が、自らに実践する微かな自己欺瞞の種であった。慣習は、文明の段階的進歩において常に遅れをとり、その結果、進化的人種の初期の、　しかもより野蛮な性の慣習を是認した。

89:7.5 (982.4) 寺の売春は、ついには南ヨーロッパとアジア全体に広まった。寺の売春婦から得た金は、すべての民族の間で神聖—神への気高い進物—であると考えられた。最高の型の女性が、寺の性市場に群がり、その収益をすべての神聖な奉仕と公的利益の仕事の捧げた。上流階級の女性の多くは、寺での暫定的な性の接客業により結婚持参金を集め、ほとんどの男性が、そのような女性を妻に持つことを好んだ。

8. 贖いと契約

89:8.1 (982.5) 犠牲の贖いと寺の売春は、実際には人間の生贄の変形であった。次いで娘達の見せかけの生贄が、登場した。この儀式は、流血と生涯純血の誓いからなり、昔の寺の売春への道徳的反応であった。最近では、処女達は、神聖な寺の火の番の仕事に専念した。

89:8.2 (982.6) 人間は、ついには体のある部分の提供は、 昔の、しかも純然たる人間の生贄の代理でありうるという考えを思いついた。また、肉体切断は、受け入れのできる代替えであると考えられた。毛髪、爪、血液、そして指さえもが、生贄にされた。後の、またほとんどの古代の一般的儀式は、部分的な生贄の宗教慣習の結果であった。それは、純粋に生贄的であり、それに対する衛生上の考えはなかった。男性は割礼を施された。女性は耳に穴を開けられた。

89:8.3 (983.1) その後切断の代わりに指をまとめて縛ることが、習慣になった。頭を剃り髪を切るのは、同じく信仰心の型であった。去勢行為は、当初は人間の生贄の考え方への変形であった。鼻と唇に穴を開けることは、今で

もアフリカで実行されており、入れ墨は、初期の残酷に体に傷跡を残すことからの芸術的発展である。

89:8.4 (983.2) 生贄の習慣は、ついには進歩的教育の結果、契約の考えに後押しされた。神は、とうとう人間との本当の契約に入ると考えられた。そしてこれは、宗教の安定化における重要な一歩であった。法、つまり契約が、運、恐怖、迷信に取って代わる。

89:8.5 (983.3) 人は、神についての概念において、宇宙の管理者が、信頼できると心に描かれる段階に達するまでは、決して神との契約締結を夢にみることさえできなかった。神に関する人の初期の考えは、非常に擬人化したものであったがゆえに、人間自身が、比較的信頼でき、道徳的であり、倫理的になるまでは、信頼できる神を想像することができなかった。

89:8.6 (983.4) ところが、神と契約をする考え方が、ついに遂に到着した。進化的人間は、あえて神との取り引きをするというそのような道徳上の尊厳をついに習得した。したがって、生贄奉納は、徐々に人の神との哲学的取り引きの目標へと発展した。このすべてが、不運から守る新

たな手段、もしくは繁栄のより明確な購買のためのむしろ高められた新たな方法を意味した。これらの初期の生贄は、神への無料の贈り物、自発的な報恩の、あるいは感謝の捧げ物であったという間違った考えを抱いてはいけない。それらは、真の崇拝表現ではなかった。

89:8.7 (983.5) 原始の祈りの型は、霊との取り引き、神との議論に他ならなかった。それは、懇願と説得が、　より具体的で高価な何かに置き換えられる一種の物々交換であった。人種の開発途上の通商は、商業の霊に熱心に説き聞かせ、物々交換の抜け目なさを展開した。今、これらの特色は、人の崇拝方法に現れ始めた。そしてある者は、他者より優れた商人であったように、ある者は、他者より優れた祈り人と見なされた。公明正大な者の祈りは、重んじられた。公明正大な者は、神にあらゆる儀式の義務を完全に放出し、すべての負債を霊に支払う者であった。

89:8.8 (983.6) 初期の祈りは、崇拝とは言いがたかった。それは、健康、富、命のための取り引きの陳情であった。祈りは、あらゆる点において時代の経過における変化があ

まりなかった。それらは、いまだに本から読まれており、堅苦しく朗唱され、回転礼拝器に定置するために、そして木に掛けるために完全に書き出され、そこでは、吹く風が、人自らの呼吸の消費の手間を省くであろう。

9. 生贄と聖餐式

89:9.1 (983.7) 人間の生贄は、ユランチアの儀式の発展過程において人食いの流血の領域からより高度の、より象徴的な段階へと進んだ。初期の生贄儀式は、後の聖餐式を作り出した。最近では、聖職者だけが、人食い的生贄を少量摂取し、あるいは人間の血を摂取し、その後は、全員が、動物の代用品を食するのであった。身代金、贖い、および契約のこれらの初期の考えは、近代の聖餐式に発展していった。そして、このすべての儀式の発展が、強力な社交的影響を揮った。

89:9.2 (984.1) 神の母信仰に関し、最終的にはケーキと葡萄酒の聖餐式が、人間の昔の生贄の肉と血の代わりにメキシコと他の場所において用いられた。ヘブライ人は、長い間過ぎ越しの祭式の一部としてこの儀式を執り行ない、

また聖餐式の後のキリスト教徒版が、その起源を取ったのはこの儀式からであった。

89:9.3 (984.2) 古代の社会的同胞愛は、血液飲酒の儀礼に基づいた。初期のユダヤ人の友愛関係は、血液の生贄的行為に基づくものであった。パウーロスは、「永遠の契約の血」に基づき新しいキリストの信仰の建設に取り掛かった。かれは、血と生贄に関する教えで不必要にキリスト教を苦しめたかもしれないが、人間、あるいは動物の生贄による贖いの主義をきっぱりと終わらせた。その神学上の妥協は、顕示さえも進化の段階的調整に応じなければならないということを示唆している。パウーロスの言うところによれば、クリストスは最後の、そして全て十分な人間の生贄になった。神性の審判者は、いま完全に、永遠に満足している。

89:9.4 (984.3) そのため、生贄の信仰は、長い時代の後に聖餐式の信仰に発展していった。したがって現代宗教の聖餐式は、人間の生贄の衝撃的なそれらの初期の儀式と、加えてそれよりも以前の人食儀式の合法的後継者である。

多くの者が、まだ救済を血に頼っているが、それは少なくとも比喩的、象徴的、神秘的になった。

10. 罪の許し

89:10.1 (984.4) 古代人は、生贄を介して神に気に入られる意識に到達したに過ぎない。現代人は、救済への自意識を得る新方法を発達させなければならない。罪の意識は、人間の心に持続するが、そこから救済の思考形態は、古臭く時代遅れになった。精神面での必要性の現実は、持続しているが、知的面での進歩は、心と魂のための平和と安らぎを保証する昔の方法を破壊してしまった。

89:10.2 (984.5) 罪は、神格への意図的背信と再定義されなければならない。背信には度合いがある。優柔不断の不完全な忠誠心。分割された矛盾の忠誠心。死につつある無関心の忠誠心。そして、神を信じないた理想へ強い愛着に示される死の忠誠心。

89:10.3 (984.6) 罪の感覚や自覚は、社会習慣への違反の意識である。必ずしも罪ではない。神格への意識的背信の不在に真の罪はない。

89:10.4 (984.7) 罪意識に対する認識の可能性は、人類にとっての優れた特徴の印である。それは、人を手法として印さず、むしろ潜在的偉大さと絶えず上昇する栄光の被創造物として際立たせる。そのような無価値の感覚は、人間の心を道徳的高潔さ、宇宙洞察、精神的生活の堂々たる段階に移す信仰征服にすぐに、しかも確実に導くべき最初の刺激である。人間存在のすべての意味は、束の間から永遠へと変えられ、すべての価値は、人間から神へと高められる。

89:10.5 (984.8) 罪の告白は、背信の断固たる拒否であるが、それは、決してそのような背信の時間-空間の因果関係を緩和しない。だが、告白—罪の本質の偽りのない認識—は、宗教上の成長と精神上の進歩に不可欠である。

89:10.6 (985.1) 神格による罪の許しは、意識的反逆の結果としてのそのような関係の消滅についての人間の意識の期間の後の忠誠関係の回復である。許しは、求められる必要はなく、被創造者と創造者との忠誠関係の再構築意識として受け取られるだけある。そして、神のすべての忠誠

な息子は、幸福であり、奉仕を愛し、楽園上向において絶えず進歩している。

89:10.7 (985.2) [ネバドンの輝かしい宵の明星による提示]

論文 90
シャーマン— 祈祷師と聖職者

90:0.1 (986.1) 宗教的行事の発展は、懐柔、回避、悪魔払い、強制、和解、宥めから生贄、償い、贖いへと進歩した。宗教儀式の方法は、原始の集団礼拝の型から呪物を経て魔術と奇跡へと通じた。そして、儀式が、人のいよいよ複雑な超物質領域の概念に対応しより複雑になるにつれ、それは、必然的に祈祷師、シャーマン、聖職者に支配された。

90:0.2 (986.2) 原始人の前進する概念における霊界は、ついには並の人間には反応しないと見なされた。人間の中の並み外れた者だけが、神からの注目を得ることができた。並はずれた男性か女性だけが、霊に聞かれるのであった。宗教は、このようにして新たな局面、徐々に間接的になる段階に入った。祈祷師、シャーマン、または聖職者は、常に宗教家と崇拝対象の間に入るのである。そし

て今日、組織化されたほとんどのユランチアの宗教的信仰体系が、この段階的発展の位置を通過している。

90:0.3 (986.3) 進化的宗教は、単純かつ全能の恐怖、すなわち未知なもの、説明のつかないもの、不可解なものに立ち向かうとき人間の心に押し寄せる恐怖というものから生じる。宗教は、やがては深く素朴な全能の愛、つまり人間が、宇宙の息子のために宇宙なる父の限りない愛情の概念に目覚めるとき、人間の魂全体に否応なく襲う愛の実感を得る。しかし、宗教発展の発端と達成の間には、仲介者、通訳者、斡旋者として人と神の間に立ちはだかるシャーマンが長年介在している。

1. 最初のシャーマン—祈祷師

90:1.1 (986.4) シャーマンは、進化的宗教の全しきたりに対応する第一位の祈祷師であり、儀式上の呪物者であり、中心的人物であった。多くの集団の間においては、シャーマンが、戦争主導者より高地位を占めるとき国家の教会支配の始まりを印した。シャーマンは、時には聖職者として、また聖職者-王としてさえ機能した。幾つかの後の部族には、初期のシャーマン-祈祷師(予言者)と後に出

現するシャーマン-聖職者の両方がいた。また多くの場合、シャーマンの職務は、世襲性になった。

90:1.2 (986.5) 昔は異常なものは何でも神霊憑依に帰されたがゆえに、精神上の、あるいは物理上のいかなる衝撃的異常も、祈祷師である資格構成要素となった。これらの男性の多くは、癲癇患者で、女性の多くは、ヒステリー患者であり、これらの2つの型は、霊や悪魔の憑依のみならず、古代の霊感も原因になった。これらの最も初期の聖職者の多くは、以来、妄想に支配されている階級のものであった。

90:1.3 (987.1) シャーマンの大多数は、小事においては誤魔化しを働いたかもしれないが、自身の神霊憑依の事実を信じた。自らが恍惚状態、もしくは強硬症の発作に投じ得る女性は、強力な女性シャーマンになった。その後、そのような女性は、予言者や霊媒者になった。カタレプシーの恍惚状態は、通常、死者の亡霊との、言うところの意思疎通を伴った。また、多くの女性シャーマンは、職業的踊り手でもあった。

90:1.4 (987.2) しかし、すべてのシャーマンが自己欺瞞に陥ってはいなかった。多くの者は、抜け目のない有能な詐欺師であった。この職業が発展するにつれ、初心者には、祈祷師としての資格を得るための10年間の辛苦と自己否定の見習い期間の勤めが求められた。シャーマンは、職業上の衣服形態を開発し、謎めいた行為に影響をおよぼした。かれらは、部族民に感銘を与えたり、煙に巻くようなある肉体状態を引き起こすために頻繁に薬物を使った。まやかしの芸当は、庶民には超自然と見なされ、腹話術は、最初は抜け目のない聖職者が用いた。昔のシャーマンの多くは、知らず知らずのうちに催眠術を見い出した。他のものは、自分のへそを長く見つめることで自己催眠を誘発した。

90:1.5 (987.3) 多くの者が、これらの仕掛けと誤魔化しに助けを求める一方で、一階級としてのシャーマンの評判は、要するに見かけの業績に針路を保った。シャーマンは、引き受けた仕事に失敗し、もっともらしい言い訳を提供できなければ、降格されるか、または殺された。その結果、正直なシャーマンは、早々に消え失せ、抜け目のない役者だけが生き残った。

90:1.6 (987.4) 老人と強者の手から部族業務の独占的な指示を奪い、それを抜け目のない利口で、先見の明のある者の手に預けたのは、シャーマンであった。

2. シャーマンの習慣

90:2.1 (987.5) 霊の呼び出しは、古代語で行われる現代の教会儀式に匹敵する非常に正確かつ高度に複雑な手順であった。人類は、非常に早くから超人間に助けを、つまりお告げを求めた。そして人は、シャーマンが、実際にそのようなお告げを受けると信じた。シャーマンは、その仕事において大いなる暗示の力を利用すると共に、そのほとんどが必ず否定的な暗示であった。つい最近、積極的な暗示方法が、採られてきた。シャーマンは、その職業の発展初期において雨を降らせたり、病気を治したり、犯罪を見破るようなことを専門にし始めた。病気の治療は、しかしながら、シャーマン的祈祷師の主要な機能ではなかった。それは、むしろ、生活の危険を知り、調整することであった。

90:2.2 (987.6) 宗教的であり非宗教的でもある古代の黒魔術は、聖職者、予言者、シャーマン、あるいは祈祷師のい

ずれかによって執り行われるとき、白魔術と呼ばれた。黒魔術の実践者は、妖術師、魔術師、奇術師、魔女、魔法使い、巫術師、交霊術師、占い師と呼ばれた。時の経過と共に、超自然との接触と言われるそのようなものすべては、妖術かシャーマンの術として分類された。

90:2.3 (987.7) 魔術は、早期の、不規則で認識されていない霊が執り行う魔力を迎え入れた。シャーマンの術は、通常の霊によって行われる奇跡と、部族の認識する神による奇跡とに関係があった。、魔女は、後代になると悪魔と結びつくようになり、その結果、比較的最近の異教に対する不寛容の多くの提示のための舞台が、設定された。魔術は、多くの原始部族の間の宗教であった。

90:2.4 (987.8) シャーマンは、霊の意志を示す機会の任務において偉大な信者であった。シャーマンは、決定に至るために頻繁にさいころを投げた。さいころを投げる現代のこの傾向の名残りは、多くの勝負事ばかりではなく、周知のものを「声に出して数える」押韻においても例証している。かつて、数えられない人は、死ななければならなかった。今は、何かの子供の遊びの中の鬼にすぎな

い。原始人にとり重大な仕事であったそれは、現代の子供の気晴らしとして存続してきた。

90:2.5 (988.1) 祈祷師は、「桑の木の先のサラサラという音を聞くと、あなたは奮起する」というような符号や前兆を大いに信用した。シャーマンは、人種の歴史の非常に早くから星に興味を向けた。原始の占星術は、世界の信仰と習慣であった。夢の解釈もまた広範囲に及んだ。死者の霊と意思疎通を図ることができると公言する気まぐれな女性シャーマンの出現が、このすべての後に続いた。

90:2.6 (988.2) 古代の起源ではあるが、雨ごい祈祷師、あるいは気象シャーマンが、時代を通じて持続してきた。ひどい干魃は、初期の農業専門家にとり死を意味した。気象調整は、古代魔術の目標であった。文明人は、今だに天気を会話の共通話題にしている。昔の民族は皆、雨ごい祈祷師としてのシャーマンの力を信じはしたもの、失敗の際は、失敗の原因となるもっともらしい弁解が提示できなければ、シャーマンを殺すのが通例であった。

90:2.7 (988.3) ケーサー一家は、再三再四、占星術師を追放したが、術師たちの占星能力が、一般的に信じられていた

がゆえに、術師等は常に戻ってくるのであった。かれらを排斥できず、西洋の教会と国家の指導者は、キリスト後の16世紀においてでさえ占星術の後援者であった。何千人もの一応は知的な人々が、人は幸運な星か不運な星の支配の下に生まれるかもしれないと、天体の並置は、様々な地球の冒険の結果を割り出すとまだ信じている。占い師は、信じやすい者達に今もなお贔屓にされている。

90:2.8 (988.4) ギリシア人は、神託の効力を信じ、中国人は、悪魔に対する保護として魔術を用い、シャーマンは、インドで栄え、しかも中央アジアで今なお公然と持続している。それは、ごく最近世界の至る所で断念された習慣である。

90:2.9 (988.5) やがて、真の予言者と教師が、シャーマンを糾弾し暴露する行動を開始した。そのような予言者は、姿を消しつつある赤色人種の中にさえ、過去の100年のうちに、すなわち1808年の日食を予測し、白人の悪を糾弾したショーニー族のテンスクワタワがいた。様々な部族と人種の中に、また進化の歴史の長い時代を経て多くの

真実の教師が現れた。そして、かれらは、一般教育に反対し、科学的進歩を阻もうとする古今のシャーマンあるいは聖職者にも、挑戦しつづけそうである。

90:2.10 (988.6) いろいろな意味で、しかも遠回りの方法により昔のシャーマンは、神の声と神意の管理人として自らの名声を確立した。シャーマンは、新生児に水を振りかけ名前を与えた。男性に割礼を施した。かれらは、すべての埋葬式で主人役を務め、霊界への死者の安全な到着時期を発表をした。

90:2.11 (988.7) シャーマン的聖職者と祈祷師は、多くの場合、表面上は霊に納める各種料金の増大により非常に裕福になった。往々にして、シャーマンは、部族の実にすべての物質的な富を蓄積するのであった。裕福な男性の死に際しては、シャーマンと公共企業体、もしくは慈善事業の間で等しくその男性の財産を分割するのが通例であった。この習慣は、チベットのいくつかの地域で今なお行われており、そこでは男性人口の半分が、非生産者のこの階級に属している。

90:2.12 (989.1) シャーマンは、きちんとした身なりをし、通常、複数の妻をもっていた。部族の全規制からは免除されており、最初の貴族であった。とかく低品位の心と道徳をもっていた。かれらは、魔女とか妖術師と呼ぶことで競争相手を抑え、また、たびたび非常に影響と力をもつ立場に上がったので、主要人物や王に支配力を振るうことができた。

90:2.13 (989.2) 原始人は、シャーマンを必要悪と見なした。かれは、シャーマンを恐れはしたが、好きではなかった。古代人は、知識を尊敬した。知恵を敬い、知恵に報いた。シャーマンは、ほとんどが誤魔化しであったものの、シャーマンへの尊敬が、人種発展における知恵重視をよく例証している。

3. 病と死についてのシャーマンの持論

90:3.1 (989.3) 古代人は、自己と物質環境は、亡霊の気まぐれと霊の空想に直接対応していると見なしており、古代人の宗教がもっぱら物質問題に関係があったということは、奇妙ではない。現代人は、物質問題に直接取り組む。かれは、物体は、心の知的操作によく反応すると気

づいている。原始人は、同様に、物理的領域の生命とエネルギーを変更し制御することを望んだ。宇宙についてのその限られた理解が、亡霊、霊、神は、人生と物質の詳細な管理に直接に、しかも時をうつさず関係しているという思考体系に導いたので、論理的にかれは、その努力をこれらの超人的媒体の恩恵と支援を得ることに向けた。

90:3.2 (989.4) そう考えると、古代の礼拝体系における不可解さと不合理の多くが理解できる。礼拝儀式は、自分がいると気づいた物質界を制御する原始人の試みであった。その努力の多くが、延命と健康保証の目的に向けられた。すべての病気と死自体は、元々霊現象と見なされていたことから、シャーマンが、祈祷師と聖職者として機能するとともに医師として外科医として働いたということは必然的であった。

90:3.3 (989.5) 原始の心は、事実不足により不利な立場に立たされるかもしれないが、それは、やはり理にかなっている。考え深い人が病気と死を観察する際、これらの災いの原因の確定に取りかかり、そしてその理解に基づき、

シャーマンと科学者は、苦悩をもたらすものについて次の理論を提出した。

90:3.4 (989.6) 1. 亡霊—霊の直接影響。初期の病気と死に関する進んだ仮説は、霊が、魂を肉体から誘い出し病を引き起こすということであった。それが戻らなければ、死が続いた。古代人は、病気を引き起こす意地の悪い亡霊の働きを恐れ、病気中の個人は、食物も水もなしでしばしば見捨てられるというほどであった。これらの思考体系の誤った土台にもかかわらず、古代人は、事実上苦しむ個人を隔離し、伝染病の普及を防いだ。

90:3.5 (989.7) 2. 暴力—明白な原因。いくつかの事故と死の原因は、識別し易く、亡霊行為の範疇から早くに除去された。戦争、動物との格闘、および他の容易に特定可能な媒体の伴う死と負傷は、自然発生と考えられた。しかし、遅い回復、さらには自然の」原因である傷の感染に対して霊が原因であると長い間信じられた。いかなる観察可能な自然の作用因子も発見できなければ、霊の亡霊が、やはり、病気と死の原因であると考えられた。

90:3.6 (990.1) 今日、アフリカや他の場所で非暴力の死が発生する度に誰かを殺す原始的民族が見つけることができる。祈祷師が、有罪の関係者を指し示す。出産時に母が死ぬならば、その子供は、即刻絞め殺される—命には命を。

90:3.7 (990.2) 3. 魔術—敵の影響。多くの病は、魔力すなわち邪視の行為、指し示す魔術の弓によって引き起こされると考えられた。かつてだれかを指差すことは、実にに危険なことであった。それは、今なお無作法とされている。古代人は、不明な病気と死の場合、正式の検死を行ない、体を解剖し、死因として何らかの発見に落ち着くのであった。さもなければ、死は、魔法のせいにされ、その結果その責任を負うべき魔女の処刑を必要とした。これらの古代の検死官は、誤ってそう考えられていた多くの魔女の命を救った。部族民が、自身の魔術の報いとして死ぬと信じられたある集団の中では、そのような出来事においては誰も告発されなかった。

90:3.8 (990.3) 4. 罪—禁制違反に対する罰。比較的最近、病は、個人的もしくは人種的な罪に対する罰であると信じ

られてきた。発展のこの段階を横ぎる民族の間で一般的な理論は、人は、禁忌に違反しない限り苦しめられないということである。病気と苦しみを「皆の中の全能の神の矢」として見なすことは、そのような信念の典型である。カルデア人は、苦しみの原因として星も見たが、中国人とメソポタミア人は、病気を邪悪な悪魔の行為の結果と長い間見なした。神の怒りの結果としての病気のこの理論は、世評では文明化したとされる多くのユランチア集団の中ではまだ一般的である。

90:3.9 (990.4) 5. 自然原因。人類は、エネルギー、物体、生命の物理的領域における物質の神秘の原因と結果の相互関係を知るまでに非常に時間がかかった。古代ギリシア人は、アダムソンの教えの伝統を保存し、すべての病気が、自然の原因の結果であると認める最初の者達の中にいた。次々に明らかになる科学的時代は、徐々に、しかも確かに、病気と死についての人の古い理論を破壊している。熱は、超自然疾患の範疇から取り除かれるべき人間の最初の病気の1つであり、次第に科学の時代は、非常に長い間人間の心を封じ込めていた無知の足枷を壊した。老齢と伝染への理解は、人間の災いと苦しみの個人

の凶行者としての亡霊、霊、神に関する人の恐怖を徐々に取り除いている。

90:3.10 (990.5) 進化は、その目的を的確に達成する。それは、神の概念のための足場である知られざるものへのその迷信深い恐怖と見えざるものへの畏怖を人に吹き込む。そして進化のこの同じ手段は、調和して働く顕示の行動により神格についての高度な理解の誕生をみたので、次にその目的を果たした足場を容赦なく抹消するそれらの思考の勢いを的確に発動する。

4. シャーマンのもとの薬

90:4.1 (990.6) 古代人の生活全体は、予防的であった。その宗教は、少なからず疾患予防の手段であった。そして、その理論における誤りにかかわらず、それらを実行に移すことに熱心であった。自分達の治療法に無限の確信を持ち、またそれ自体が強力な療法である。

90:4.2 (991.1) 古代のシャーマンのうちの愚かな1人の司式の下での回復のために求められる信仰は、結局は、非科学的な病気治療に従事する後の幾人かの後継者の手による回復の経験に必要であるそれと大したに違いはなかった。

90:4.3 (991.2) より原始の部族は、病人を大いに恐れ、長い間注意深く回避されたし、恥ずべきことに無視された。シャーマンの術の発展が、疾患治療に同意した聖職者と祈祷師を生みだしたとき、人道主義に大きな進歩があった。その後、一族全体が病室に群がり、病気をもたらす亡霊にわめき立て、シャーマンを助けることが、通例になった。女性は、診断をするシャーマンで、一方男性は、治療を施すということは珍しくなかった。通常の疾病診断の方法は、動物の内臓を調べることであった。

90:4.4 (991.3) 病気は、詠唱、喚き、手を置くこと、患者への息の吹きかけ、それと他の多くの方法により治療がなされた。後の時代には寺での睡眠が、睡眠期間中に回復が起こると思われる方策が、広まった。やがて祈祷師は、寺での眠りに関連して実際の外科的処置を試みた。当初の手術の中には、頭痛の霊を逃がすために頭蓋骨を穿孔することがあった。シャーマンは、骨折や脱臼の治療や腫れ物や膿瘍の切開術を修得した。女性のシャーマンは、産婆術に熟練してきた。

90:4.5 (991.4) 体の感染部分、または傷ついた部分に何かをこすったり、護符を投げ捨てたり、また、建て前上の療法を経験することが、共通の治療法であった。誰かがたまたま捨てられた護符を拾うならば、すぐに感染するか傷をうけると信じられた。薬草や他の本物の薬が導入されるまでには長くかかった。揉療治は、まじないに関連して開発され、現代人の塗布薬を擦り込む努力と同じく、霊を体からこすり出すことが始まった。流血と共に患部を茶碗状にしたり、吸い出したりすることは、病気の原因の霊を取り除く価値があると考えられた。

90:4.6 (991.5) 水は、効能ある物神であり、多くの病気の治療に用いられた。長い間、霊が引き起こす病は、発汗によって排除できると信じられた。蒸気浴は、高評であった。天然温泉は、原始の療養地となった。原始人は、痛みが加熱で和らぐと発見した。日光、新鮮な動物の器官、熱い粘土や石を使用し、またこれらの方法の多くが、依然として使われている。霊に影響を及ぼす努力においては、リズムが用いられた。トムトムが一般的であった。

90:4.7 (991.6) 病は、一部の人々の間では霊と動物との邪悪な共謀によって引き起こされると考えられた。これが、あらゆる動物によって引き起こされる病気に対する有益な植物療法が、存在するという意識が生まれた。赤色人種は、全てにきく植物による療法理論にことのほか専念した。赤色人種は、植物が引き抜かれたときに残される根の穴にいつも1滴の血を垂らす。

90:4.8 (991.7) 断食、食事療法、および誘導刺激薬が、療治手段としてしばしば用いられた。明らかに不思議である人間の分泌物は、重んじられた。血液と尿は、最も初期の薬の中にあり、間もなく根と様々な塩により補足された。シャーマンは、ひどい匂いといやな味の薬で病の霊を体外に追いやることができると信じた。身を清浄にすることが早くからの日常治療となり、生のココアとキニーネに対する価値観が、最も早期の医薬品発見にあった。

90:4.9 (992.1) ギリシア人は、病人治療の実に合理的な方法を進化させた最初の人々であった。ギリシア人とエジプト人の両者は、ユーフラテス渓谷から医学上の知識を得

た。油とワインは、傷を治すための最も初期の薬であった。ヒマシ油と阿片は、シュメール人によって使用された。これらの古代の、しかも効果的な秘密の療法の多くは、広く知られるようになると効力をなくした。秘密は、効を奏する詐欺と迷信の実践に常に不可欠である。事実と真実だけが、十分な理解の光を招き、科学的研究の証明と啓発に喜んだ。

5. 聖職者と儀式

90:5.1 (992.2) 儀式の最重要点は、その実行の完全性である。それは、未開人の間では正確な細心さで実行されなければならない。式典は、宗教儀式が正しく実行された時にのみ霊の上に無視できない力をとらえる。儀式が不完全であるならば、それは神の怒りと恨みを喚起するだけである。したがって、人の緩慢な進化の心は、儀式の方法というものは、その効力に決定的な要素であると思いついたことから、初期のシャーマンが、遅かれ早かれ儀式の注意深い実行に導くよう訓練される聖職へと進化するのは必然的であった。したがって、止むことのない儀式は、何万年ものあいだ社会を妨げ、文明を冒涜し、すな

わち人生のあらゆる行為、あらゆる人種的企てに堪え難い重荷であった。

90:5.2 (992.3) 儀式は、習慣を神聖化する手段である。儀式は、神話を創作し永続させるとともに社会的、宗教的習慣の維持にも貢献する。一方、儀式自体は、神話により父となった。しばしば儀式は、最初は社会的であり、後には経済的、最終的には宗教儀式の尊厳と威厳をもたらす。祈り、踊り、および演劇に例証されるように、儀式は、実際面では個人的、もしくは集団的—あるいは両方—であるかもしれない。

90:5.3 (992.4) 言葉は、アーメンやセラといった用語の使用のように儀式の一部分になる。罵り、冒涜は、かつての聖なる名前の儀式的な反復の悪用例である。聖なる神殿への巡礼の旅は、非常に古い儀式である。宗教儀式は、次に清め、浄化、神聖化の入念な式典へと変わった。原始部族の秘密結社の開始式は、実際は粗雑な宗教儀礼であった。昔の不可解な集団の崇拝方法は、長きにわたり蓄積された宗教儀式のただ1つの長い動作であった。儀式は、社会的儀式と宗教崇拝、祈りを含む礼拝、歌、共鳴

しながら読むこと、それに他の個人と団体の精神的献身の現代の型へと発展した。

90:5.4 (992.5) 聖職者は、シャーマンに始まり、神官、占い師、歌い手、踊り手、気象操作人、宗教上の遺物の監視者、寺の管理人、事件の予言者を経て、宗教崇拝の実際の指導者へと発展した。ついにその職務は、世襲性にり、継続する聖職者階級が生まれた。

90:5.5 (992.6) 生まれながらの才能、あるいは特別な好みによる聖職者の専門化が、宗教の発展とともに始まった。ある者は歌い手に、他のものは祈り手に、さらに他のものは生贄を捧げる信仰家になった。後に演説者—伝道者—が、登場した。これらの聖職者は、宗教が、制度化されるようになると、「天国のかぎを握る」と主張した。

90:5.6 (992.7) 聖職者は、古代の言葉で宗教儀式を行い、また自身の信心と権威を高めるために参拝者を種々の魔力の手の動きで当惑させることにより、いつも平民に印象づけたり、畏れさせようとした。このすべてにおける重大な危険は、儀式が、宗教の代用品になる傾向があるということである。

90:5.7 (993.1) 聖職集団は、科学的発展を遅らせ精神的進歩を妨げる多くのことをしたものの、文明の安定化とある種の文化の高揚に貢献した。しかし、多くの現代の聖職者は、興味を神学—神を定義する試み—に向けてしまい、神崇拝の儀式の指導者としての機能をやめてしまった。

90:5.8 (993.2) 聖職者は、人種の重荷であったということは否定されないが、真の宗教指導者は、より高度の、より優れた現実への道を指し示すことにおいて非常に貴重であった。

90:5.9 (993.3) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 91
祈りの進化

91:0.1 (994.1) 宗教の媒体としての祈りは、以前の非宗教の独白と対話の表現から進化した。原始人の自意識到達とともに、他者意識の回避不能な当然の結果、つまり社会的反応と神認識の二元的な可能性が生じた。

91:0.2 (994.2) 最も初期の祈りの形は、神への話し掛けではなかった。その表現は、人が、ある重要な請け負い事に着

手する時、友人に「幸運を祈って」と言うのに非常に似ていた。原始人は、魔法のとりこになった。運は、幸運も不運も、生活の諸事に足を踏み入れた。運の請願は、初めは独白—ちょうど、魔法提供者が声に出して考える類—であった。運を信じるこれらの者は、次に、友人や家族の協力を求め、やがて家族、または部族全体を含む何らかの形の儀式が、実行されるのであった。

91:0.3 (994.3) 亡霊と霊の概念が発展すると、請願の呼びかけは、超人に向けられるようになり、また神への意識と共に、そのような表現は、本物の祈りの水準に達した。この例証としては、あるオーストラリア部族間での原始宗教の祈りは、霊と超人的個性への信仰に先立つものであった。

91:0.4 (994.4) インドのトダ族は今、ちょうど初期の民族が、宗教意識の時代以前にしたように、特に誰にも祈らないこの習慣を守っている。しかしながらこれは、トダ族の間の退化する宗教のこの原始の水準への逆戻りを意味している。トダ族の酪農夫である聖職者の現代の儀式は、これらの非人称的な祈りが、いかなる社会的、道徳的、

もしくは精神的価値の保護、または充実に何の貢献もしていないがゆえに、宗教儀式を意味していない。

91:0.5 (994.5) 宗教以前の祈りは、メラネシア人のマナ慣習の一部であり、アフリカのピグミー族のウーダ信仰であり、北米インディアンのマニトゥーの迷信であった。アフリカのバガンダ族は、ごく最近、マナの祈りから浮上して来たところであった。この早期の進化の混乱では、人は、神—地域の、そして国家の—呪物、守札、亡霊、支配者、そして世間一般の人に祈る。

1. 原始の祈り

91:1.1 (994.6) 初期の進化的宗教の機能は、緩やかに形成しつつある欠くことのできない社会的、道徳的、精神的価値を保護し高める。宗教のこの使命は、人類によって意識的には順守されてはいないが、祈りの機能によって主に達成されている。祈りの習慣は、意図はされてはいないものの、それでもなお、より高い価値のこの保護を保証する(実現する)　いかなる集団の努力、個人的かつ集合的、を示している。宗教上のすべての祭日は、祈りの保護がなければ速やかにただの休日へ戻るであろう。

91:1.2 (995.1) 最も重要なものが祈りである宗教とその媒体は、社会の一般的認識、つまり集団の承認のあるそれらの価値とのみ同盟している。したがって、原始人が、野卑な感情を満足させたり、または純然たる利己的野心を達成しようとしたとき、宗教の安らぎと祈りの援助が奪われた。もし個人が何か非社会的なものを達成しようとするならば、かれは、非宗教的魔術の援助、つまり妖術師の助けを求めることを強いられ、その結果、祈りの援助が奪われた。祈りは、したがって非常に早くから社会的発展、道徳的進歩、および精神的到達の強力な促進者になった。

91:1.3 (995.2) しかしながら原始の心は、論理的でも、一貫してもいなかった。原始人は、物質的なものは、祈りの範疇に入らないとは理解していなかった。これらの単純な人間は、食物、避難所、雨、獲物、および他の有形財が社会福祉を高めると結論づけ、したがって、これらの物理的な恩恵のために祈り始めた。これは、祈りの歪曲となったが、それは、社会的、倫理的行動による物質目標の実現のための努力を奨励した。祈りのそのような悪用

は、一民族の精神的価値の質を落とす傍ら、それでもなお直接的に経済、社会、倫理の慣習を高めた。

91:1.4 (995.3) 祈りは、最も原始の型の心における独白にすぎない。それは、初期の対話になり、急速に集団崇拝の水準に展開する。祈りは、原始宗教の魔術以前の呪文は、人間の心が、情け深い力の現実、あるいは社会的価値を高め、道徳的な理想を増大させることができる存在体の現実を認識するその段階、さらにはこれらの影響は、超人的であり、自意識の強い人間とその仲間の死すべき者の自我とは全く異なるということに気づくその水準に高めたということを意味する。それゆえ真の祈りというものは、宗教活動の媒体が人格として心に描かれるまで出現しない。

91:1.5 (995.4) 祈りは、精霊信仰とはあまり関係はないが、そのような信仰は、新興の宗教感情に平行して存在するかもしれない。幾度となく宗教と精霊信仰には、完全に別々の起源があった。

91:1.6 (995.5) すべての祈りは、恐怖への原始の束縛を免れなかったそれらの死すべき者の場合、不健全な罪悪感、現

実の、または想像上の罪への根拠のない慣習へと導くかもしれないという真の危険がある。しかし現代において、多くの者は、不徳、あるいは罪深さを企てるこの有害な思案へと導く祈りに時間を費やしそうにはない。祈りの歪みと悪用に伴う危険は、無知、迷信、結晶化、活力喪失、物質主義、狂信にある。

2. 進化する祈り

91:2.1 (995.6) 最初の祈りは、単に言葉での願望、心からの願望表現であった。次に祈りは、霊協力を達成する手段になった。次いで、有益なすべての価値の保護における宗教を補助するより高い機能に達した。

91:2.2 (995.7) 祈りと魔術の双方は、ユランチアの環境への人の適合反応の結果生まれた。しかし祈りと魔術には、この一般化された関係は別として、あまり共通点がない。祈りは、つねに祈る自我による積極的行為を示してきた。それは、つねに心的であり、時に精神的であった。魔術は、通常、操る者、つまり魔術の実行者の自我への影響をともなわずに、現実を操る試みを意味した。魔術と祈りは、各個別の起源にもかかわらず、後のそれらの

発達段階においてしばしば相関的であった。魔力は、時として決まり文句から儀式と呪文を経て真の祈りの入り口への目標の上昇により高まった。祈りは、時として非常に物質的になり、ユランチアの問題解決に不可欠な努力を避けるための疑似魔術の手段に陥ってしまった。

91:2.3 (996.1) 人は、祈りは神を強制できないと分かると、次に、祈りはより一層の請願、恩恵の追求にいたった。しかし、最も真実の祈りは、実際には人とその造物主との親交である。

91:2.4 (996.2) 人が神の意志を為すという自身の捧げられた意志の代わりに物質所有物の捧げ物を用いようという点でいかなる宗教においても生贄の考えの出現が真の祈りのより高い効力を絶えず失わせる。

91:2.5 (996.3) 宗教から人格神が剥奪されるとき、その祈りは、神学と哲学の段階へと変わる。宗教の最高度の神の概念が、汎神論的な理想主義のような非人格神格の概念であるとき、それは、神秘的親交の特定の形式の基盤を提供してはいるものの、人格的かつ優れた存在との人の

親交をいつも支持する本物の祈りの力にとって致命的であると分かるのである。

91:2.6 (996.4) 祈りは、人種進化の初期においては、現在にあってでさえも、実に平均的人間のその日その日の経験における自身と自身の潜在意識との交流現象である。しかし、知的に注意深く、そして精神的に進歩している個人には、人間の心の意識を超えた深層との多かれ少なかれ接触を成し遂げる領域、つまり内在する思考調整者の領域での祈りの領域もまたある。さらに、宇宙の超自然力がその受理と認識に関する真の祈り、そして、すべての人間的そして、知的な交流とは完全に異なる真の祈りには、明確に精神的局面がある。

91:2.7 (996.5) 祈りは、進化する人間の心の宗教感情の発展に大いに貢献する。それは、人格の孤立を防ぐ作用をする重大な影響力である。

91:2.8 (996.6) 祈りはまた、倫理的優秀性のより高度の宗教、つまり顕示の宗教の経験的価値の一部をも形成する人種的進化の自然の宗教に関連づけられる1手段を呈している。

3. 祈りと第2の自我

91:3.1 (996.7) 子供は、最初に言語使用を学ぶとき、誰一人として聞く者がいなくても、考え事を口に出し、言葉で考えを表現する傾向がある。子供は、創造性に富んだ想像力の夜明けと共に、想像上の仲間と話す傾向をはっきり示す。このように、芽生え始めた自我は、架空の第2の自我との親交を保持しようとする。この方法により子供は、この第2の自我が、独白を口頭の考えと願望表現とに答える疑似対話へ変換することを早くから身につける。大人の考えの多くは、心の中で会話形式で進められる。

91:3.2 (996.8) 初期で原始の祈りの形式は、現代のトダ族の反魔術的朗唱、特に誰にも向けることのない祈りに非常に似ていた。しかしそのような祈りの方法は、第2の自我の考えの登場により、意思伝達の対話型へと発展する傾向にある。第2の自我の概念は、そのうちに、神の威厳の優れた状態へと高められ、そして宗教の媒体としての祈りが現れた。この原始の祈りの型は、多くの局面と長い時代の間に知的かつ真に倫理的な祈りの段階到達に先行して発展する運命にある。

91:3.3 (997.1) 祈る必滅者の後続の世代が、自己の分身が思い描かれるに、それは、亡霊、呪物、精霊から、多神教の神、ついには唯一なる神、すなわち祈っている自我の最高の理想と最も崇高な大望を具体化する神性体へと進化する。その結果、祈りは、祈る人々の最高の価値と理想の保護における宗教の最も強力な媒体として機能する。祈りは、第2の自我を宿す瞬間から神性と天なる父の概念の登場まで営みを常に社会に適合させ、道徳的にし、精神的にしている。

91:3.4 (997.2) 信仰の簡単な祈りは、原始宗教の第2の自己の架空の象徴との古代の会話が、無限なるものの精霊との親交段階へと、またすべての知的創造の永遠の神と楽園の父の真実の意識段階へと高められてきた人間の経験における強力な進化をはっきり表している。

91:3.5 (997.3) 倫理的な祈りは、祈りの経験における超自我であるもののすべてはさておき、人の自我を向上させ、よりよい生活とより高度の達成のために自己を強めるすばらしい方法があるということが思い起こされるべきである。祈りは、人間の自我が助けのために両方向を見るよ

うに仕向ける。つまり必滅者の経験の潜在意識の貯蔵所への物質的援助の方向と、物質的領域と精霊との、つまり謎の訓戒者との接触の超意識の境界への鼓舞と導きの方向。

91:3.6 (997.4) 祈りは今までもずっと、そしてこれからもずっと人間の二重の経験、精神的方法と互いに結びついた心理学の手順、になるであろう。また祈りのこれらの2つの機能を完全に切り離すことは決してできない。

91:3.7 (997.5) 賢明な祈りは、外在的かつ個人的な神だけではなく、内在的、かつ非人格の神、すなわち内在する調整者も認識しなければならない。人は、祈るとき、楽園にいる宇宙なる父の概念を理解する努力をすべきであるのは当然である。しかし、もっとも実用的な目的のためのより効果的な方法は、ちょうど原始の心が習慣としていたように、またこの第2の自我の考えが、単なる創作から調整者の実際の臨場において人が面と向かって、言うなれば、人に内在し、生ける神の、つまり宇宙なる父のまさに存在と本質である真の、本物の、そして神の第2の自我と話すことができるように神の内在する人間の真

実へと発展したということを認識するために、すぐ近くの第2の自我の概念に逆戻りすることであろう。

4. 倫理的な祈り

91:4.1 (997.6) どんな祈りも、嘆願者が仲間よりも利己的な利益を求めるとき倫理的ではあり得ない。利己的で物質主義的な祈りは、無私で神性の愛に基づく倫理的宗教とは相容れない。そのようなすべての非倫理的な祈りは、原始の疑似魔術の段階に逆戻りし、進歩する文明と啓発された宗教に値しない。利己的な祈りは、愛情に満ちた正義に基づくすべての倫理の精神に背いている。

91:4.2 (997.7) 祈りは、決して行為の代用品になるように悪用されてはならない。すべての倫理的な祈りは、行動への刺激であり、自己超越-到達の理想主義的目標へ向けての進歩的努力への指針である。

91:4.3 (998.1) すべての祈りにおいて公正であれ。神に依怙贔屓を、神の他の子供、あなたの友人、隣人、さらには敵よりも自分を愛することを期待してはならない。しかし、自然の、あるいは進化的宗教の祈りは、後の啓示的宗教のようには、当初は倫理的ではない。すべての祈り

は、個人的であろうと共同的であろうと、自己本位であるか、または利他的であるかもしれない。すなわち祈りは、自己あるいは他者に集中されるかもしれない。祈りが祈る者のため、または、仲間のために何も求めないとき、そのような魂の態度は、真の崇拝段階に向かって行く傾向にある。自己本位な祈りは、告白と請願を伴い、しばしば物質的恩恵の要求にある。許しに対処したり、より一層の自制のための知恵を求めるとき、祈りは、いくらか倫理的である。

91:4.4 (998.2) 前進する科学的発見が、人は、法と秩序の物理的宇宙の中に生きるということを示すにつれ、非利己的な祈りの型が、強化したり癒す一方で、物質主義的祈りは、失望と幻滅をもたらす。個人、あるいは人種の幼年期は、原始的、利己的、物質的祈りによって特徴づけられる。そのようなすべての誓願は、ある程度までは、そのような祈りに対する答えに至る有力な努力と人力へと変わることなく導くという点において効果を示す。信仰の真の祈りは、そのような請願が精神的認識に値しなくとも生きる方法の増大に常に貢献する。しかし精霊的に高度な人は、そのような祈りに関する原始的、あるいは

未熟な心を落胆させようとする試みに大いなる警戒を払うべきである。

91:4.5 (998.3) 心に留めておきなさい。祈りは神を変えなくとも、それは、信じ、しかも自信に満ちた期待をもって祈る者に大きく、永続する変化を頻繁にもたらす。祈りは、進化する人種の男女の大いなる心の平穏、朗らかさ、静けさ、勇気、自制、および公正な考えの原型である。

5. 祈りの社会的影響

91:5.1 (998.4) 祈りは、先祖崇拝においては先祖の理想の教化に導びく。しかし神崇拝の特徴としての祈りは、神の理念の教化に導びくのであり、そのような他の全ての営みを超越する。祈りの第2の自己の概念が、崇高で神聖になると、人の理想も単なる人間から崇高で神聖な段階へとそれに応じて高められ、また、そのようなすべての祈りの成果は、人間の性格と人格の奥深い統一の高揚である。

91:5.2 (998.5) だが、祈りは、常に個人的でなければならないというわけではない。集団または集会礼拝は、その影響

が非常に社会に役立つという点で非常に効果的である。集団が、道徳強化と精神高揚のために共同体の祈りに従事するとき、そのような献身は、集団を構成する個人に作用している。全員が、参加により善良になる。そのような一意専心の祈りは、市全体あるいは国全体でさえ援助することができる。告白、悔悟、祈りは、個人、都市、国、および全人種を強力な改革努力と勇敢な功績に至る勇ましい行為に導いてきた。

91:5.3 (998.6) あなたが、ある友人への批評の癖に打ち勝つことを本当に望むならば、そのような態度の最速かつ最も確かな変化の達成方法は、あなたの人生で毎日その人のために祈る習慣をうち立てることである。しかし、そのような祈りの社会的影響は、主に2つの条件に依存している。

91:5.4 (998.7) 1. 祈られる人は、祈られているということを知るべきである。

91:5.5 (999.1) 2. 祈る人は、祈られている人との親密な社会的接触をもつべきである。

91:5.6 (999.2) あらゆる宗教は、祈りの手法により、遅かれ早かれ、制度化されるようになるのである。やがて祈りは、聖職者、聖なる書、崇拝行事、儀式などのように、助けとなるもの、他の明らかに有害なものの数多くの二次的媒体を伴うようになる。

91:5.7 (999.3) しかしより精霊的に大いに啓蒙された心は、微弱な精霊的洞察力の起動のために宗教的な象徴を切望する知力に恵まれない者に我慢強くあり、寛容でなけらばならない。強者は、弱者を軽蔑の目で見てはならない。宗教的な象徴をもたず神を意識する者は、形式や儀式を伴わない神格を崇拝し、真、美、善を敬うことを難しいと感じる者達のもつ仁慈深い奉仕の宗教的象徴を否定してはならない。祈りに満ちた崇拝においては、ほとんどの死すべき者は、それぞれの一意専心の対象-目標を思い描いている。

6. 祈りの範囲

91:6.1 (999.4) 祈りは、個人の精神力の意志と行動、それに領域の物質統括者と連係しない限り人の物理的環境に何の直接的効果も与えることはできない。祈りの請願範囲に

は非常に明確な限界があると同時に、そのような限界は、祈る者の信仰に等しくは当てはまらない。

91:6.2 (999.5) 祈りは、実際の、また器質性疾患治療のための方法ではないが、それは、はち切れぬばかりの健康の享受と、また精神的、感情的、神経的な数多くの病の療法に途方もなく貢献してきた。そして、実際の細菌性疾患においてでさえも、祈りは、他の治療のための手順の効力に幾度となく拍車をかけてきた。祈りは、多くの怒りっぽく不平を言う病人を忍耐の手本に変え、他のすべての人間の苦しむ者にとっての霊感へと変化させてきた。

91:6.3 (999.6) 信仰の誠実な祈りは、祈りの効力に関する科学的疑念と神の源からの助けと導きを求める遍在的衝動とを和解に至らしめることがどんなに困難であろうとも、個人的な幸福、個々の自制、社会的調和、道徳的進歩、および精神的到達の促進に強大な力であったということを決して忘れてはいけない。

91:6.4 (999.7) 祈りは、純粋に人間の習慣としてでさえ、つまり人の第2の自己との対話は、人間の心の無意識の領域に格納され保存されている人間性の予備動力の実現への

最も有効な接近方法を構成している。祈りは、その宗教的意味合いとその精神的意義は別として、しっかりした心理的習わしである。ほとんどの人が、それなりに難境にあるならば、何らかの方法で何らかの助けの源に祈るということが、人間の経験の現実である。

91:6.5 (999.8) 問題の解決を神に頼むほどに怠惰であってはならないが、自身が堅く心に決め、勇敢に目前にある問題に取り組む一方で、導き支えるための知恵と精神的な強さを神に求めることを決して躊躇ってはならない。

91:6.6 (999.9) 祈りは、宗教文明の進歩と維持に不可欠の要素であり、祈る人々が、科学的事実、哲学的分別、知的誠実さ、精霊的信仰に照らしてそうするならば、社会の一層の高揚と精神的意味を与えるために現在でも偉大な貢献をする。イエスが弟子に教えたように祈りなさい—正直に、非利己的に、公正に、しかも疑わずに。

91:6.7 (1000.1) しかし、祈る者の個人の精神的経験における祈りの効力は、決してそのような崇拝者の知的な理解、哲学的な鋭い洞察力、社会水準、文化状況、または人間の他の技能によっては決まらない。信仰の祈りの心理上、

精神上の付随事情は、即座で、個人的で、経験的である。被創造者が、他の俗世の全業績にかかわらず、造物主と通じ合うことができ、創造者の現実と、つまり内在する思考調整者と接触するその領域の敷居に非常に効果的に、しかも即座に接近できる手法は他にはない。

7. 神秘、恍惚、霊感

91:7.1 (1000.2) 神存在い関する意識の教化方法としての神秘主義は、要するに賞賛には値するが、そのような習慣が、社会的孤立につながり、宗教的狂信に至るとき、そのような習慣は、ほぼ避難に値する。要するにあまりに頻繁に、興奮しきった神秘主義者が神の霊感として評価するそれは、神秘主義者自身の深い心の反乱である。その内在する調整者との人間の心の接触は、熱心な思索によってしばしば推進される一方で、同胞への心からの、また情愛深い奉仕によってより頻繁に助長される。

91:7.2 (1000.3) 宗教の過去の時代の偉大な教師と予言者は、極端な神秘主義者ではなかった。かれらは、仲間の人間への無欲な活動により神に最もよく尽くした神を知る男女であった。イエスは、思索と祈りのために短い期間しば

しば使徒達を連れ出しはしたが、ほとんどの場合、彼らを大衆との接触活動につかせていた。人の魂は、精神の滋養物と同様に精神的運動を必要とする。

91:7.3 (1000.4) 宗教的歓喜は、健全な先行する事柄から生じるときは差し支えないが、しばしばそのような経験は、意味深い精霊的な特徴の顕現であるよりも純粋に感情の影響の結果である。信仰心の厚い人々は、あらゆる鮮明な心理的予感と激しい感情経験を神の顕示あるいは精霊的な意思疎通として見なしてはならない。本物の精霊的歓喜は、通常、外向きの深い静けさとほぼ完全な感情抑制を伴う。しかし、真の予言的洞察力は、超心理的予感である。そのような訪れは、疑似幻覚症状ではなく、また昏睡に類似した歓喜でもない。

91:7.4 (1000.5) 人間の心は、潜在意識の高まり、もしくは超意識の刺激に敏感であるとき、霊感と呼ばれるものに対応して演じるかもしれない。いずれの場合も、意識の内容のそのような増大は、個人には多少なりとも異質に思われる。抑えきれない神秘的な熱意と激しい宗教的歓喜は、霊感の資格証明、いわゆる神の資格証明ではない。

91:7.5 (1000.6) 神秘、歓喜、そして霊感に関するこれらのすべての奇妙な宗教経験の実地試験は、これらの現象が個人に起こるかどうかを観測することである。

91:7.6 (1000.7) 1. より良い、一層の身体の健康を味わうこと

91:7.7 (1000.8) 2. 精神生活においてより効率的に実質的に機能すること

91:7.8 (1000.9) 3. より完全に、嬉々として宗教経験を社会に適合させること

91:7.9 (1000.10) 4. 人間の平凡な生活の当たり前の義務を忠実に果たすとともに、より完全に日々の生活を精神的にすること

91:7.10 (1001.1) 5. 真、美、善への愛を高め、それを評価すること

91:7.11 (1001.2) 6. 現在認識される社会的、道徳的、倫理的、精神的価値を維持すること

91:7.12 (1001.3) 7. 精神的洞察力—神-意識—を増代させること

91:7.13 (1001.4) だが祈りには、これらの例外的宗教経験との真の繋がりはない。祈りが過度に審美的になると、すなわち専ら楽園神性に美しく幸せに耽ける状態になると、それは、その社交的影響の多くを失い、その信者の神秘主義と孤立につながる傾向がある。集団の祈り、つまり共同体の精進により修正され、防げられる個人的な過剰な祈りに関連づけられるある種の危険がある。

8. 個人的経験として祈ること

91:8.1 (1001.5) 原始人は、神についての何らかの明確な概念をもつずっと以前に祈る自身に気づいていたので、実に自然発生的な祈りの局面がある。原始人は、2つの異なる状況における祈りを習慣としていた。差し迫った必要にある時、かれは助けを求めようとする衝動を経験した。かれは、喜びにあるとき、喜びの衝動的表現にふけった。

91:8.2 (1001.6) 祈りは、魔術の進化ではない。両者は、それぞれ独自に起こった。魔術は、神格を状況に調整する試みであった。祈りは、神格の意志に人格を調整する努力で

ある。真の祈りは、道徳的、宗教的である。魔術は、いずれでもでない。

91:8.3 (1001.7) 祈りは、確立された風習になるかもしれない。他のものが祈るので多くのものが祈る。他のものは、さらに自己の定期的嘆願を申し出なければ何か恐ろしいことが起こるかもしれないと恐れるので祈る。

91:8.4 (1001.8) 祈りは、一部の個人にとり謝意の穏やかな表現である。他のものにとっては、称賛の集団表現、すなわち社会的専心である。真の祈りは、生物の精神的本質と創造者の霊のあらゆる場所への臨場との誠実かつ信頼の意思疎通であるとはいえ、他者の宗教の摸倣が時としてある。

91:8.5 (1001.9) 祈りは神-意識の自然発生的な表現か、もしくは神学の常套手段の無意味な暗唱であるかもしれない。それは、神を知る魂の有頂天の称賛、もしくは恐怖に苦しめられる人間の奴隷的従順であるかもしれない。祈りは、時に精神的渇望の哀れな表現であり、時に敬虔な句のあからさまな叫びである。祈りは、楽しげな称賛か許しへの謙虚な請願であるかもしれない。

91:8.6 (1001.10) 祈りは、不可能なものへの子供じみた嘆願、もしくは道徳的な成長と精神的な力のための分別のある懇願であるかもしれない。請願は、日々の糧のためかもしれず、または神を見つけその意志をするための心からの切望を具体化するかもしれない。それは、完全に利己的な要求か、あるいは寡欲な兄弟愛の実現に向けての本当の、しかも崇高な意志表示であるかもしれない。

91:8.7 (1001.11) 祈りは、復讐への憤りの叫びか、1人の敵への慈悲による仲裁であるかもしれない。それは、神を変える希望の表現か、自我を変える力強い方法であるかもしれない。それは、おそらくは厳しい裁判官の前の迷える罪人のへつらいの嘆願か、生きており慈悲深い天なる神の解放された息子の楽しい表現であるかもしれない。

91:8.8 (1001.12) 現代人は、純粋に個人的な方法で神と話し合うという考えに当惑する。多くのものが、習慣的な祈りを放棄した。異常な苦難の下で—非常時に—祈るだけである。人は、神への話しかけを恐れるべきではないが、精霊的な子供だけが、神を説得することを引き受けたり、または敢えて神を変えようとしたであろう。

91:8.9 (1002.1) しかしながら、真の祈りは、現実に到達する。どんな鳥も、広げた翼の力を用いない限り、気流が上昇するときにさえ、高く昇ることはできない。祈りは、宇宙の上昇する精神面の流れの利用による進歩の方法であるがゆえに人を高めるのである。

91:8.10 (1002.2) 本物の祈りは、精神的発達に加え、態度を修正し、神性との親交から来る満足感をもたらす。それは、神-意識の自然発生的な迸りである。

91:8.11 (1002.3) 神は、真実の一層の顕示、美への高められた感謝、善の増大された概念を人に与えて人の祈りに答える。祈りは、主観的意志表示であるが、人間の経験の精神的段階において強力な客観的現実と接する。それは、人間が、超人的価値に向けて意味ある手を差し伸べることである。それは、最も強力な精神的発達の刺激である。

91:8.12 (1002.4) 言葉は、祈りとは無関係である。それは、単に精神的な懇願の川がたまたま流れるかもしれない知的な水路である。祈りの言葉の価値は、純粋に個人的専心における自己への提示であり、集団的専心における社会へ

の提示である。神は、言葉にではなく魂の態度に答える。

91:8.13 (1002.5) 祈りは、闘争からの逃避手段ではなく、むしろまさに目前の対立をからの成長への刺激である。事物のためにではなく、価値のためにだけ祈りなさい。満足のためにではなく、成長のために。

9. 効果的な祈りの条件

91:9.1 (1002.6) 人は、有効な祈りに従事するつもりならば、有力な請願の規則を心に留めておくべきである。

91:9.2 (1002.7) 1. 人は、宇宙現実の問題に真摯に勇敢に立ち向かうことにより力強い祈り手としての資格を得なければならない。ひとは、宇宙的持久力を持たなければならない。

91:9.3 (1002.8) 2. 人は、人間の可能性を人間段階での整のために正当に使い果たしたのであろう。人は勤勉であったにちがいない。

91:9.4 (1002.9) 3. 人は、心の願望すべてと魂の渇望すべてを精霊的な成長を変換的な受容に明け渡さなければならな

い。人は、意味の充実と価値の向上を経験したのであろう。

91:9.5 (1002.10) 4. 人は、心から神の意志の選択をしなければならない。優柔不断の膠着状態を取り除かなければならない。

91:9.6 (1002.11) 5. 人は、父の意志を認識しそれを行動に移すことを選ぶだけでなく、実際の父の意志をなすことへの無条件の献身、また活力に満ちた専心をもたらした。

91:9.7 (1002.12) 6. 人の祈りは、楽園上昇—神の完全性の到達—において行きあたる人間特有の問題を解決する神の叡智へのみ導かれるであろう。

91:9.8 (1002.13) 7. また人には、信仰—生ける信仰—がなければならない。

91:9.9 (1002.14) [ユランチアの中間者の首長による提示]

論文 92
宗教の後の発展

92:0.1 (1003.1) 人間には、組織的顕示がユランチアに為されるずっと以前から進化の経験の一部としての自然な起源を

もつ宗教があった。しかし自然の起源のこの宗教は、本質的には人の超動物的資質の産物であった。進化的宗教は、未開人、野蛮人、文明人の間で機能し、それらに触れる次にかかげる活動影響を与え、人類の経験上の経歴の数千年にわたりゆっくりと生まれた。

92:0.2 (1003.2) 1. 崇拝の補佐官—現実認識に対する動物意識における超動物可能性の出現。これは、神格への根本的な人間の本能と呼ばれるかもしれない。

92:0.3 (1003.3) 2. 知恵の補佐官—神格現実のより高度の表現経路における、また絶えず広がる神格現実の概念に向けてその崇敬を方向づける敬虔な心における顕現。

92:0.4 (1003.4) 3. 聖霊—これは、初期の超心の贈与であり、すべての誠実な人間の人格にかならず現れる。崇拝-切望と知恵-欲求の心へのこの働き掛けは、神学の概念において、そして実際の、また事実上の人間生活としての双方において人間生存の公理を得る能力を創造する。

92:0.5 (1003.5) この神性的な３つの働きにおける等位の調和した機能は、完全に十分に進化的宗教の発展を開始し、遂

行する。これらの影響は、後に思考調整者、熾天使、真実の聖霊によって増大され、そのすべてが、宗教発達の速度を速める。これらの媒体は、長らくユランチアで機能しており、この惑星が棲息球体のままで残る限り、ここで継続するであろう。これらの神性媒体の可能性の多くには、表現の機会がまだ一度もない。来る時代に人間の宗教の上昇につれ、これらの神性媒体の可能性の多くは、段階ごとに、モロンチアの価値と精霊の真実で明らかにされるであろう。

1. 宗教の進化の本質

92:1.1 (1003.6) 宗教の発展は、初期の恐怖と亡霊から、まずは霊を威圧し、次にはおだてるというそれらの努力を含む多くの連続的発展段階をたどってきた。部族の呪物崇拝は、トーテムと部族神へと変わった。魔術の決まり文句は、現代の祈りになった。割礼、最初は犠牲は、衛生処置になった。

92:1.2 (1003.7) 宗教は、人種の野蛮な幼年期に自然崇拝から亡霊崇拝を経て呪物崇拝へと進歩した。文明の夜明けとともに人類は、　より神秘的、また象徴的信仰を信奉し、

一方現在は、人類は、成熟するにつれ、真の宗教への感謝、真実自体の顕示の始まりにさえ迫りつつある。

92:1.3 (1004.1) 宗教は、精神的信念と環境への心の生物的反応として起こる。それは、人種の中で滅びるか、あるいは変化する最後のものである。いつの時代においても、宗教は、神秘なものへの社会の適応である。社会機関としてそれは、儀式、表象、教団、経典、祭壇、神社、寺院を取り入れる。聖水、遺物、呪物、護符、衣服、鐘、太鼓、および聖職は、すべての宗教に共通である。そして純粋に進化した宗教が、魔術、あるいは妖術のいずれからも縁を切ることは完全に不可能である。

92:1.4 (1004.2) 神秘と力は、昔から宗教上の感情と恐怖を刺激してきており、情感は、それらの発達における強力な条件要素として機能してきた。いつも恐怖は、宗教上の基本的刺激である。恐怖は、進化的宗教の神を創り出し、原始の信者の宗教儀式を動機づける。恐怖は、文明が進むにつれ、崇敬、称賛、敬意、共感により変更され、次には後悔と悔悟によってさらに変化される。

92:1.5 (1004.3) アジアの1民族は、「神は大いなる恐怖である」と教えた。それは、純粋に進化的宗教の産物である。宗教生活の最高度の型の顕示であるイエスは、「神は愛である。」と宣言した。

2. 宗教と慣習

92:2.1 (1004.4) 宗教は、人間の全慣行の最も厳格で揺るぎないものであるが、それは、社会の変遷に遅々とした順応をする。進化的宗教は、最終的には変化するしきたりを反映し、さらに啓示宗教の影響を受けるかもしれない。宗教(崇拝)は、ゆっくりと確実に、しかし不承不承に、英知—経験的分別に方向づけられ、神の啓示に灯される知識—の先例に倣うのである。

92:2.2 (1004.5) 宗教は、しきたりに執着する。それは、古色蒼然とし、建て前上は神聖である。石器は、この理由だけで青銅と鉄の時代へと長い間存続した。この声明「もし、私に石の祭壇を作るならば、切り出された石でそれを建てないであろう。というのも、それを作る際に道具を使用するならばそれを汚すので。」が、記録にある。今日でさえ、ヒンズー教徒は、原始の火錐棒を使用して

祭壇に火をともす。進化的宗教の過程では、目新しさは、常に神聖冒涜と見なされてきた。聖餐は、新しく製造された食物から作られるのではなく、最も原始の食品から作られなければならない。「焼かれた肉とパン種を入れないパンに苦菜を添えて出した。」社会的慣習のすべての型は、法的手順さえ古い型に執着している。

92:2.3 (1004.6) 現代人が、反道徳的であるとみなされるかもしれない異なる宗教の経典の非常に多くの提示に驚くとき、去来する世代は、先祖が神聖不可侵だと考えたことを排除することを恐れてきたということを立ち止まって考えるべきである。1世代が、卑猥と見なすかもしれない多くのものを、前の世代は、受け入れられた慣習の一部であると、承認された宗教儀式とさえ考えた。新たに提示された理由と昔の、ただし咎むべき習慣との折り合いをつけるために、すなわち古代の、時代遅れの習慣の教義の永久化の正当性に相応しい理論を見つけるために、かなりの宗教的な論争が、決して終わることのない試みによって引き起こされてきた。

92:2.4 (1004.7) しかし、宗教的発展のあまりに突然の加速の試みは、愚か以外のなにものでもない。人種または国家は、その現在の進化状況、加えて適合性へのその賢明さとかなり一貫し両立し得るものだけをいかなる進歩的宗教からも同化することができるのである。社会、気候、政治、経済の状況のすべては、宗教発展の過程と進歩の決定において影響力がある。社会道徳は、宗教、すなわち進化的宗教により決定はされない。むしろ、宗教の型は、人種の道徳により決定づけられる。

92:2.5 (1005.1) 人類の種族は、奇妙で新しい宗教を表面的に受け入れるだけである。実際には自分達の慣習と信じる古い様式にそれを適合させる。これは、ニュージーランドの部族の聖職者達が、名目上はキリスト教を受け入れた後に、この同一部族は、神の選ばれた民になり、無規律な性関係や昔の非難されるべき夥しい他の習慣を欲しいままにすることを許されると指示する趣旨でガブリエルから直接の顕示の受理を公言した例によく説明されている。そして、間髪を入れず新興のキリスト教徒は皆、この新しく、あまり厳しくないキリスト教の異説へと宗旨変えをした。

92:2.6 (1005.2) ある時期宗教は、すべての相入れない、また矛盾する振舞いを是認してきたし、現在は不道徳、または罪深いとされる全てをかつては実際に承認してきた。経験では教えられない、また、理性の助けを受けない良心というものは、決して人間の品行に対しての安全で的確な指針ではなかったし、なり得ない。良心は、人間の魂に話し掛ける神の声ではない。それは、単に人間存在にかかわる現在のいかなる段階の道徳的かつ倫理的慣習の中味の総体的結果である。それは、いかなる情況においても人間的に発想される理想的反応の表現にほかならない。

3. 進化的宗教の本質

92:3.1 (1005.3) 人間の宗教についての研究は、化石を有する過去の時代の社会層の調査である。擬人化の神の慣習は、そのような神を最初に想像した人間の倫理の正直な反映である。古代宗教と神話は、ずっと以前に知られぬままに失われた民族の信仰と伝統を忠実に描いている。これらの昔の集団礼拝の習慣は、　より新しい経済習慣と社会発展に平行して存続し、もちろん甚だしく矛盾しているようである。集団礼拝の名残りは、過去の人種的宗教

の実態を提示している。常に集団礼拝というものは、真実を発見するものではなく、形成されるものであり、むしろその教義を広めるためのものであると心にとめておきなさい。

92:3.2 (1005.4) 宗教は、主に儀式、行事、祝賀、式典、および教義の問題であった。通常、しつこく離間をするその誤り、つまり神の選民という妄想に染まるようになった。呪文、霊感、顕示、宥め、悔悟、償い、仲裁、生贄、祈り、告白、崇拝、死後の生存、正餐、儀式、身代金、救済、身受け、盟約、不浄、清め、お告げ、原罪の宗教の主要な概念—は皆、原始的亡霊恐怖の初期に遡る。

92:3.3 (1005.5) 原始宗教は、死後の存在へと延長された物質的存在のための葛藤に他ならない。そのような教義の順守は、想像亡上の霊-霊世界の領域への自己維持葛藤の延長を意味した。だが進化的宗教を批判をする気になるとき、用心しなさい。心にとめておきなさい、それは起こったことである。それは史実である。さらに、どんな考えの力も、その確実性、あるいは真実にはあるのではな

く、むしろその人間の訴えの鮮明さにあるということを思い起こしなさい。

92:3.4 (1006.1) 進化的宗教は、変更つまり修正には備えない。科学と異なり、それは、それ自体の進歩的な是正を提供しない。その信奉者は、それが真理であると信じるがゆえに、発展的宗教は、尊敬される。「聖徒に一度伝えられた信仰」は、理論上は、最終的かつ絶対確実でなければならない。真の進歩は、教団自体を変更するか、または破壊することは確かであり、教団は、発展に抵抗する。したがって、見直しは、つねに行わざるをえない。

92:3.5 (1006.2) 2つの影響のみが、自然の宗教の教義を変更し、高めることができる。ゆっくりと前進する慣習の圧力と画期的な顕示の周期的な照明。また進歩が遅いということは、不思議ではない。大昔には、進歩的であること、または独創的であることは、魔術師として殺されることを意味した。集団礼拝は、世代の時代と長年の周期でゆっくりと進む。しかし、それは前へと進む。亡霊への進化的信仰は、最終的にはその起源の迷信を打ち壊す啓示の哲学のための地盤を築いた。

92:3.6 (1006.3) 宗教は、多様な方法で社会の発展を妨げてきたが、宗教なくしては永続的道徳も倫理も、つまり価値ある文明はなかったであろう。宗教は、多くの非宗教文化の母体となった。彫刻は偶像作成、建築は寺院建造、詩歌は呪文、音楽は崇拝の詠唱、演劇は霊誘導のための演技、舞踊は季節の礼拝行事を端緒とした。

92:3.7 (1006.4) しかし、宗教は、文明の発展と維持に不可欠であったという事実に注意を促す一方で、自然宗教は、その他の点では育成し維持した文明そのものを無力にし、不利な立場に立たせる多くのこともしたということが記録されるべきである。宗教は、産業活動と経済開発を妨げた。それは労働を無駄にし、資本を浪費した。家族にとっていつも有用であったわけではない。宗教は、適切に平和と善意を養育してこなかった。時々教育を無視し科学を遅らせた。それは、死の世界の偽りの裕福のために人生を過度に貧弱にした。進化的宗教、つまり人間の宗教は、これらの総てと、多くの誤り、不手際、大失敗を犯してきた。とは言うものの、それは、文化的倫理、文明度の高い道徳、社会的一貫性を維持し、後の啓示的

宗教は、これらの多くの進化上の短所の補正を可能にした。

92:3.8 (1006.5) 進化的宗教は、人の最も高価な、だが比較にならないほど効果的な制度である。人間の宗教は、進化的文明に照らし合わせるだけでの正当化はできない。人は、動物進化の向上の結果でなければ、宗教発展のそのような過程に、正当性はないであろう。

92:3.9 (1006.6) 宗教は資本の蓄積を容易にした。それは、ある種の仕事を育てた。聖職者の余暇は、芸術と知識を促進した。人種は、つまるところ、倫理手法におけるこれらの早期のすべての誤りの結果、多くを獲得した。シャーマンは、正直であろうと不正直であろうと、ひどく高くつくが、それだけの価値はあったということであった。学術的職業と科学自体は、寄生的な聖職から浮上してきた。宗教は、文明を育て、社会の継続を援助した。それは、かつてない道徳的警察力であった。宗教は、知恵を可能にした人間の規律と自制を供与した。宗教は、怠惰で苦しんでいる人類を知能のもつ惰性のその自然な状態

から理性と知恵のより高い段階に向け前方へ、上方へと無慈悲に押しやる進化の有効な鞭である。

92:3.10 (1006.7) 動物向上のこの神聖な遺産つまり進化的宗教は、啓示宗教の継続的検閲により、また本物の科学の燃えさかる炉により精製され、高尚にされ続けなければならない。

4. 顕示の贈り物

92:4.1 (1007.1) 顕示は、進化的であるが、いつも前進的である。世界歴史を通じて、宗教の啓示は、絶えず広がり連続してより啓蒙的である。顕示の使命は、連続する進化的宗教を選別し、検閲することである。しかし顕示が、進化的宗教を高め増進することであるならば、神のそのような訪問は、それが、提示される時代の考えと反応からはあまりにも掛け離れた教えを描かなければならないのである。かくして、顕示は、進化との接触を常に保たなければならず、実際保っているのである。つねに顕示の宗教は、人の受容性の容量によって制限されなければならない。

92:4.2 (1007.2) 外見上のつながり、あるいは起源にかかわらず、顕示の宗教は、最終的価値の何らかの神格における、また死後の人格の独自性の生存の何らかの概念における信仰よって常に特徴づけられる。

92:4.3 (1007.3) 進化的宗教は、論理的ではなく、感傷的である。それは、仮定上の亡霊-霊世界への信仰への人の反応である—未知の認識と未知への恐怖により興奮している人間の信念-反射。天啓的宗教は、真の精神世界により提出される。それは、宇宙なる神格を信じ、宇宙なる神格へ頼る人間の渇望にむけての超知力の宇宙の応答である。進化的宗教は、真実探究における人類の回り道の手探りを描写している。天啓的宗教は、まさしくその真実そのものである。

92:4.4 (1007.4) 多くの宗教啓示の出来事があるが、画期的な意義のあるものは、5個にすぎない。これらは、次の通りであった。

92:4.5 (1007.5) 1. ダラマティアの教え。第一根源と中心者の真の概念は、まず、カリガスティア王子の肉体をもつ100名の部下によりユランチアで広められた。神格のこの拡

大的顕示は、惑星の分離と教育体制の途絶により突然に打ち切られるまで30万年以上も継続したダラマティアの顕示の影響は、。ヴァンの仕事を除き、事実上、全世界から失われた。ノヅ系でさえアダームの到着までこの真実を忘れていた。100名の教えを受け入れた全体の中では、赤色人種が、最も長くその教えを保持したものの、偉大なる霊についての考えは、キリスト教との接触がそれを大いに明らかにさせ強化したときアメリカ原住民の宗教においては朦朧たる概念であった。

92:4.6 (1007.6) 2. エーデンの教え。アダームとハヴァーは、再び進化的民族にすべての者の父の概念を言葉で描写した。第一のエーデンの途絶は、アダームの顕示が、そもそも完全に始まる前にその顕示の進路を絶った。しかし、アダームの中断された教えは、セース系の聖職者により続行され、また、これらの真理のいくつかは、世界で完全に失われるということは決してなかった。レヴァントの宗教発展の全傾向は、セース系の教えにより変更された。しかし人類は、紀元前2,500年までには、エーデン時代に促進された顕示を大きく見失ってしまった。

92:4.7 (1007.7) 3. シャレイムのメルキゼデク。この緊急時のネバドンの息子は、ユランチアにおける真実の3番目の顕示を開始した。その教えの基本的指針は、信頼と信仰であった。神の全能の善行への信頼を教え、信仰とは、人がそれによって神の恩恵を得た行為であると宣言した。シャレイムのメルキゼデクの教えは、徐々に様々な進化的宗教の思考体系と混合し、キリスト後の最初の1千年の初めに、ユランチアに存在するそれらの神学体系へと発展していった。

92:4.8 (1008.1) 4. ナザレスのイエス。クリストス・ミカエルは、ユランチアに宇宙なる父としての神の概念を4度目の提示をし、この教えは、以来ずっと広く存続してきた。彼の教えの本質は、愛と奉仕であり、つまり被創造の息子が、父である神の愛情に満ちた奉仕の認識とそれへの応答に与える愛情深い崇拝であり、そしてそのような被創造の息子が、父である神に同様に仕えるこの奉仕において悦ばしい認識のうちに同胞に与える自由意志の奉仕である。

92:4.9 (1008.2) 5. ユランチアの論文。そのうちの一つがこれであるところの幾つかの論文は、ユランチアの死すべき者への最新の真実提示となる。これらの論文は、宇宙の単一人格の仕事ではなく、多くの存在体による複合提示であることからこれまでの全ての顕示とは異なっている。しかしながら、どの顕示も、宇宙なる父の達成以外に完全ではあり得ない。他のすべての天の援助は、部分的、一時的でしかなく、実際には時空間の局部的状況に適合している。このような是認は、ことによると全顕示の直接の力と権限を減じるかもしれないが、ユランチアの人種への最新の真実顕示のその後の影響と権威を弱める危険を犯してさえも、そのような率直な声明を出すことが望ましいときが、その時が、ユランチアに来たのである。

5. 偉大な宗教指導者達

92:5.1 (1008.3) 進化的宗教において神は、人の姿に似せて受け止められている。天啓的宗教においては、人は、神の息子である—神性の有限の姿で造られさえする—ことを教えられる。顕示に関する教えと進化の産物から成り立

つ統合的信仰における神の概念は、次のような混合である。

92:5.2 (1008.4) 1.進化的集団礼拝の前存在の考え

92:5.3 (1008.5) 2. 啓示宗教の崇高な理想

92:5.4 (1008.6) 3. 人類の偉大な宗教指導者、予言者、教師の個人的観点

92:5.5 (1008.7) 最もすばらしい宗教時代は、何らかに傑出している人格の人生と教えによって始められてきた。指導力は、歴史上の価値ある道徳的運動の大部分に源を発してきた。そして人は、その教えを犠牲にしてさえも、指導者の人格を崇敬するために、その指導者が公言した真実を見失ってさえも、常に指導者を崇拝傾向にある。これには理由がないわけではない。進化的人間の心には上からくる、彼方からくる助けを求める本能的な切望がある。この渇望は、惑星王子と後の物質の息子の地球への出現を予期するように考案されている。ユランチアでは、人間は、これらの超人的指導者と支配者を奪われてきており、したがって、絶えず超自然の起源と驚くべき

経歴に関係ある伝説をもつ人間の指導者を包み込むことによりこの損失を補おうとするのである。

92:5.6 (1008.8) 多くの人種は、自分達の指導者は処女から生まれると考えてきた。指導者達の経歴は、驚くべき出来事が気前よく散りばめられており、それぞれの集団は、指導者の帰還を常に期待している。中央アジアでは部族民は、今なおまだジンギスカンの帰還を期待している。チベット、中国とインドでは、それは、仏陀である。イスラム教では、モハッマドである。アメリカ原住民の間では、ヘスナニン・オナモナ―ロントンであった。一般論として、ヘブライ人には、それは、物質的な支配者としてのアダームの帰還であった。バビロンでの神メロダクは、神の息子の考え、つまり人と神との接合のアダーム伝説の永続化であった。地球へのアダームの出現後、いわゆる神の息子は、世界の人種の間において共通であった。

92:5.7 (1009.1) しかし、明らかにされた真実の梃子は、いわゆる神の息子に向けしばしば抱かれた迷信深い畏敬にかかわらず、これらの教師は、人類の倫理、哲学、宗教の進

歩にむけて委ねるこの世の人格の支点であったという事実は残る。

92:5.8 (1009.2) ユランチアの100万年の人間の歴史上、オナガーからグル・ナナクまで何百人もの宗教指導者がいた。この間宗教上の真実と精神的信仰の潮流には干満があり、ユランチアの宗教のそれぞれの復興は、過去において、 ある宗教指導者の人生と教えに結びついてきた。近世の教師達について考える際、アダーム後のユランチアの主要な7つの宗教時代に分類することが有用であると分かるかもしれない。

92:5.9 (1009.3) 1. セース系期間。アモサドの統率力の下で刷新されたセース系聖職者は、アダーム後の偉大な教師になった。それらは、アンド系の土地全体に渡って機能し、その影響は、ギリシア人、シュメール人、ヒンズー教徒の中で最も長く持続した。ヒンズー教徒の間では、ヒンズー信仰の婆羅門として現在に続いてきた。セース系とその信奉者は、アダームが明らかにした三位一体の概念を決して完全には失うことはなかった。

92:5.10 (1009.4) 2. メルキゼデク宣教師時代。ユランチアの宗教は、西暦紀元前2,000年ごろ、シャレイムで生活し、教えたメルキゼデクのマキヴェンタに任命された教師達の努力によって少なからず刷新された。これらの宣教師は、神との好意的関係の代価としての信仰を宣言し、すぐに出現するいかなる宗教の非生産的、それでもなお彼らの教えは、後の真実の教師がユランチアの宗教を造ることになっていた地盤を形成した。

92:5.11 (1009.5) 3. メルキゼデク後の時代。アメネモペとイフナトンは、ともにこの時代に教えたが、メルキゼデク後の時代の傑出した宗教的天才は、レヴァント人のベドウィン一団の指導者であり、かつヘブライ宗教の創設者—モーシェであった。モーシェは、一神教を教えた。モーシェ曰く。「聞け、イスラエルよ、我々の神である主はお一人である。」「主が、神である。あの方の他に神はいない。」モーシェは、民の間での亡霊礼拝の名残りを、その施術者に対する死刑を定めさえして、根絶しようとした。モーシェの一神教は、その後継者達により品位が低下されたが、後の時代にはモーシェの教えの多くに立ち戻った。モーシェの偉大さは、その知恵と明敏さにあ

る。他の人間は、神に関するより大きな、重要な、概念を持ってはいたが、そのような高度の信仰を多くの人々に取り入れさせることに成功した者は、かつて一人としていなかった。

92:5.12 (1009.6) 4. 紀元前6世紀。多くの人が、この世紀に真実の宣言のために立ち上がり、今までユランチアで目撃された宗教開眼の最もすばらしい世紀の中の1つであった。これらの多くの人の中に、釈迦牟尼、孔子、老子、ゾロアストレス、ジャイナ教の教師等が、記録されるべきである。釈迦牟尼の教えは、アジアで広範囲におよんでおり、釈迦牟尼は、何百万もの人々により仏陀として崇敬されている。中国道徳にとっての孔子は、ギリシア哲学にとってのプラトンに当たり、また二つの教えには、宗教上の多少の間接的影響があったが、厳密に言うと、二つの教えとも宗教教師ではなかった。老子は、孔子が人道に、あるいはプラトンが理想主義に思い描いた以上に「道」に神を思い描いた。ゾロアスターは、二元的な精神主義の一般的概念、善霊と悪霊、に非常に影響を受けると同時に、永遠の神格と暗闇に対する光の最終的勝利の考えを確実に高めた。

92:5.13 (1010.1) 5. 紀元後1世紀。宗教教師としてナザレスのイエスは、洗礼者ヨハネが設立した教団に働きかけ始め、断食と形式から離れ得るかぎり前進させた。イエスは別として、タルススのパウーロスとアレクサンドリアのフィロンは、この時代の最も偉大な教師であった。二人の宗教概念は、キリストの名を示すその信仰の発展において主要な役割を果たした。

92:5.14 (1010.2) 6. キリスト後の6世紀。モハッマドは、彼の時代の多くの教義よりも優れた宗教を設立した。モハッマドの教義は、外国人の信仰の社会的要求に対する、また自身の民の宗教生活の一貫性のなさに対する抗議であった。

92:5.15 (1010.3) 7. キリスト後の15世紀。この期間は、2回の宗教運動を経験した。西洋でのキリスト教統一の中断と東洋における新宗教の統合。ヨーロッパでは、制度化されたキリスト教が、統一とは共生できない一層の成長をなすほどの不撓不屈の度合にまで達した。東洋では、イスラム教、ヒンズー教、仏教の結合された教えが、ナナク

とその追随者によりアジアで最高度の宗教の1つであるシーク教に統合された。

92:5.16 (1010.4) ユランチアの将来は、疑いなく宗教心理—神の父性とすべての被創造物の友愛—の教師の出現によって特徴づけられるであろう。しかし、これらの将来の予言者の熱心かつ誠実な努力は、宗教間の障壁の強化には少なく、また、サタニアのユランチアを特徴づけている違いのある知的な神学の多くの追随者の間での精神的崇拝の宗教的兄弟愛の拡大に向けて導かれることが願わしい。

6.複合宗教

92:6.1 (1010.5) 20世紀のユランチアの宗教は、人の崇拝衝動における社会的発展について興味ある研究を提示する。多くの信仰は、亡霊信仰の時代以来、ほとんど進歩していない。アフリカのピグミー族は、一部の者は、わずかに精霊の領域を信じてはいるものの、集団としての何の宗教的な反応も持たない。ピグミー族は、原始人が、宗教発展の開始時にいたところに今日いるのである。原始宗教の基本的思考体系は、死後の生存にあった。人格神崇

拝の考えは、高度な漸進的発展を、顕示の第一段階をさえ示している。ダヤク族は、最も原始の宗教習慣だけを発展させた。比較的最近のエスキモーとアメリカ原住民は、神の非常に貧弱な概念をもっていた。それらは、亡霊を信じ、死後のある種の生存に関して不明確な考えを持っていた。現代のオーストラリア原住民には、亡霊への恐怖、暗闇への畏怖、先祖への粗野な尊敬しかない。ズールー族は、ただ亡霊への恐怖と犠牲の宗教を展開させている。多くのアフリカ部族は、キリスト教徒とイスラム教徒の伝道の仕事を除いては、宗教発展の呪物段階をまだ超えてはいない。しかし、幾つかの集団は、長い間、かつてのトラーケ人のように、一神教の考えを固持していたし、トラーケ人もまた不死を信じた。

92:6.2 (1010.6) これらの論文の文字化の時代の世界に見られる様々な神学体系へ調和させたり、融合させる一方で、ユランチアでは、進歩的、かつ、啓示的宗教は、並行して前進している。これらの宗教、20世紀のユランチアの宗教は、次のように列挙されるかもしれない。

92:6.3 (1011.1) 1. ヒンズー教—最古のもの

92:6.4 (1011.2) 2. ヘブライ宗教

92:6.5 (1011.3) 3. 仏教

92:6.6 (1011.4) 4. 儒教の教え

92:6.7 (1011.5) 5. 道教の思想体系

92:6.8 (1011.6) 6. ゾロアスター教

92:6.9 (1011.7) 7.神道

92:6.10 (1011.8) 8. ジャイナ教

92:6.11 (1011.9) 9. キリスト教

92:6.12 (1011.10) 10. イスラム教

92:6.13 (1011.11) 11.シーク教—最新のもの

92:6.14 (1011.12) 最も高度な古代宗教は、ユダヤ教とヒンズー教で、それぞれが宗教の発展過程で東洋と西洋において大いに影響を及ぼした。ヒンズー教徒とヘブライ人の双方が、自分達の宗教が鼓舞され、浮き彫りにされると信じ、他のすべての宗教は、一つの真実の信仰の退廃的な型であると信じた。

92:6.15 (1011.13) インドは、ヒンズ一教徒、シーク教徒、イスラム教徒、ジャイナ教徒の間で分割され、それぞれが、着想のままに神、人間、宇宙について思い描いた。中国は、道教と儒教の教えに従っている。神道は、日本で崇敬されている。

92:6.16 (1011.14) 国際的、つまり異人種間のすばらしい信仰は、ヘブライ教、仏教、キリスト教、イスラム教である。仏教は、チベットと中国経由でスリランカとミャンマーから日本へと伸びる。仏教は、キリスト教だけがもつ民族慣習への適応性に匹敵するそれをみせた。

92:6.17 (1011.15) ヘブライの宗教は、多神教から一神教への哲学的変遷を成就する。それは、進化の宗教と顕示の宗教との進化の絆である。ヘブライ人は、真っ直ぐに顕示の神へとむかう初期の進化の神々に従う唯一の西方の人々であった。しかしこの真実は、宇宙の創造者と結合した人種的神格の複合された考えを再度教えたイザヤの時代まで決して広く受け入れられるようにはならなかった。「万軍の主よ、イスラエルの神よ、あなたは神であられる、他ならぬあなたお一人。あなたは天地をお作りにな

った。」西洋の文明の生存の望みは、かつて卓越したヘブライの善の概念と高度なギリシャの美の概念にあった。

92:6.18 (1011.16) キリスト教は、ユダヤ教の神学に基づき、ゾロアスターの特定の教えとギリシア哲学の混成作用でさらに変更され、そして主にフィロン、ペトロス、パウーロスの3人の個人が系統立てたキリストの生涯と教えに関する宗教である。パウーロスの時代からずっと進化の多くの段階を経験し、徹底的に西洋化され、多くの非ヨーロッパ民族は、見知らぬ人々のための不思議な神の不思議な顕示としてとても自然にキリスト教を見ている。

92:6.19 (1011.17) イスラム教は、北アフリカ、レバント地方、それに南東アジアの宗教文化の結合である。イスラム教を一神教にしたのは、後のキリスト教の教えを伴うユダヤの神学であった。モハメッドの追随者は、三位一体の先進の教えにつまずいた。かれらは、三神格と一神格の主義を理解することができなかった。進化の心にとって、突然に高度の顕示的真実を受け入れることはつねに

難しい。人は、進化の生物であり、主として進化的方法によって宗教を得なければならない。

92:6.20 (1012.1) 先祖崇拝は、かつて宗教発展上、明確な前進をしたが、この原始の概念が、仏教とヒンズー教などのように比較的に高度に進んだ中国、日本、インドで存続したことは驚くべきことであり、悔やまれることである。西洋では、先祖崇拝は、国家神への崇敬と人種的英雄に対する尊敬へと発展した。20世紀においては、英雄を尊敬するこの国家主義的宗教は、西洋の多くの人種と国を特徴づける様々な急進的かつ国家主義的世俗主義に現れた。また、この同じ態度の多くが、英語圏の民族の素晴らしい大学や、より大きい産業共同体で見うけられる。これらの概念は、宗教は、「良い人生の共有された探索」に過ぎないという考えとそれほど違いはない。「国家宗教」は、初期のローマ皇帝崇拝への、それに神道—皇族崇拝国家—への逆戻りに過ぎない。

7. 宗教のさらなる発展

92:7.1 (1012.2) 宗教は、決して科学的事実にはなり得ない。哲学は、科学的根拠に基づくかもしれないが、宗教は、進

化的もしくは天啓的のままであるか、または世界で今日そうであるように、両者の可能な組み合わせのままである。

92:7.2 (1012.3) 新宗教を考案することはできない。それは、進化するか、または突然明らかにされる。すべての新宗教は、単に古い思考体系の進化的表現、すなわち新しい適合と調整を進めている。古いものは消滅しない。それは、シーク教が、ヒンズー教、仏教、イスラム教、および他の現代の集団礼拝の土壌と形式から芽生え、開花さえしたのと同様に、新しいものに同化吸収される。原始宗教は、非常に民主的であった。未開人は、借貸が迅速であった。啓示宗教にだけ、神学上の専制で偏狭な我執が現れた。

92:7.3 (1012.4) ユランチアの多くの宗教はすべて、人を神にもたらし、人に父の実現をもたらすほどに良いものである。いかなる宗教家集団も、自らの教義を真実なるものと考えることは誤りである。そのような態度は、信仰の確実性よりも一層の神学の傲慢を反映している。他のすべての信仰にある最善の真実を有利に研究し、吸収でき

なかったユランチアの宗教はない。宗教家は、延々と続く迷信や古臭い儀式の最悪なものを公然と非難するよりも、隣人の精神的な生ける信仰の最善なものを借りる方がむしろ良いであろう。

92:7.4 (1012.5) これらのすべての宗教は、同一の精霊的統率への人の可変の知的反応の結果として生じた。宗教は、決して信条、教義、儀式の均一性に達することを望むことはできない—これらは知的である。しかし、真の崇拝は、精神的であり、また人は、精神面において皆平等であるが故に、すべて者の父への真の崇拝における統一を実現することができるし、いつかはそうなるであろう。

92:7.5 (1012.6) 原始宗教は、主に物質的価値意識であったが、本物の宗教は、重要で最高の価値の奉仕への自己の献身であるがゆえに、文明は、宗教価値を高める。宗教の進化するにつれ倫理は、道徳の哲学になり、道徳は、最高の意味と価値の基準—神性かつ精神的理想—により自己鍛錬になる。こうして、宗教は、自然でこの上なく素晴らしい献身、すなわち愛の忠誠心の生活経験になる。

92:7.6 (1013.1) 宗教の質は、次のようなもので示される。

92:7.7 (1013.2) 1. 価値の度合い—忠誠心

92:7.8 (1013.3) 2. 意味の深さ—最高価値の理想主義的認識への個人の感作性

92:7.9 (1013.4) 3. 精進の強さ—神性価値への献身の度合い

92:7.10 (1013.5) 4.宇宙のこの道における理想的な精霊的な生活における人格の足枷のない進歩、つまり、神との息子関係の実現と宇宙における果てしない進歩的な市民権

92:7.11 (1013.6) 宗教の意味は、子供が、全能に関する考えを両親から神へと移すとき、自意識の中で進歩する。そのような子供の宗教経験全体は、親子関係を支配したのが、恐怖であるか愛であるかにより大きく左右される。奴隷は、主人への恐怖を神-愛の概念に移すことで常に大きな苦労を経験してきた。文明、科学、および先進的宗教は、自然現象への畏怖から生まれる恐怖から人類を救い出さなければならない。同様により高い啓発は、神格との親交において教育を受けた死すべき者を仲介者へのすべての依存から救い出すであろう。

92:7.12 (1013.7) 人間と目に見えるものから、神と目に見えないものへの宗教的崇拝の転移において偶像崇拝躊躇のこれらの中間段階は、不可避であるが、これらの段階は、内在する神霊の容易にする奉仕の意識によって短くされるであろう。とは言っても人は、神格の概念にばかりではなく、選んで尊敬する英雄の品性によっても深く影響を受けてきた。神性の、そして復活したキリストを崇拝するようになった人々がその男性—果敢で勇ましい英雄ヨシュア・ベン・ヨセフを見過ごすとはこの上なく不幸なことである。

92:7.13 (1013.8) 現代人は、宗教への自意識は十分にあるが、急速な社会的変化と空前の科学開発が、敬虔的習慣を混乱させ、否定する。考える男女は、宗教の再定義を欲し、またこの要求は、宗教のそれ自体の再評価を強いるであろう。

92:7.14 (1013.9) 現代人は、2,000年間で為されてきた以上に1世代における人間の価値感のさらなる再調整の課題に直面している。そして、このすべてが、宗教は、考える手法

と同様に生活する方法であるがゆえに、宗教にたいする社会的な態度に影響を及ぼす。

92:7.15 (1013.10) 真の宗教は、永遠の基礎であり、同時に、すべての永続的文明の導きの星でなければならない。

92:7.16 (1013.11) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 93
メルキゼデクのマキヴェンタ

93:0.1 (1014.1) メルキゼデク体制は、局部宇宙世界で驚くべき活動分野に従事していることから非常時の息子として広く知られている。あらゆる並はずれた問題が起こるとき、あるいは何か異常なことが企てられるとき、たびたび任務に応じるのはメルキゼデクである。メルキゼデクの息子が、非常時や宇宙の拡散的段階において機能する能力、人格顕現の物理的段階においてさえも機能する能力は、メルキゼデクの息子の体制に固有である。生命搬送者だけが、幾らかの度合いで人格機能のこの変成範囲を共有する。

93:0.2 (1014.2) 宇宙の息子関係のメルキゼデク体系は、ユランチアにおいて極めて活動的である。12名軍団は、生命搬

送者と共同して仕えた。後の12名軍団は、カリガスティアの分離直後に、あなたの世界のための受託者になり、アダームとハヴァーの時代まで権力に居つづけた。これらの12名のメルキゼデクは、アダームとハヴァーの不履行の際ユランチアに戻り、その後ナザレのイエスが、人の息子として名義上のユランチアの惑星の王子になるその日まで惑星の受託者として続いた。

1. マキヴェンタの肉体化

93:1.1 (1014.3) 顕示された真実は、アダームのユランチアにおける任務の失敗に続く何千年もの間消滅の危機に脅かされた。人類は、知的に進歩をしたものの、精神的に徐々に不利な立場に陥っていた。紀元前3,000年頃、神の概念は、人の心の中でひどく霞むようになった。

93:1.2 (1014.4) 12名のメルキゼデクの受託者は、それらの惑星でのミカエルのまじかに迫る贈与については認識していたが、いつ起こるかについては知らなかった。それゆえに、かれらは、厳粛な協議会を召集し、ユランチアにおいて真実の光を維持するために何らかの対策を講じるようエデンチアのいと高きものに要請した。この嘆願は、

「サタニア606号における事務管理は、完全にメルキゼデクの管理者に託されている」という指令で退けられた。受託者等はそこで、父メルキゼデクに援助を求めたが、ただ「喪失と不確実性から惑星の称号を救うであろう」もの、すなわち、「贈与の息子の到着まで、」自身の選択手段で真実を守り続けるべきであるという言葉だけを受け取った。

93:1.3 (1014.5) すっかり機略を失ってしまったので、惑星受託者の12名中の一名であるメルキゼデクのマキヴェンタは、ネバドンの全歴史でかつて6回だけ為されたことを、つまり領域の一時的な人間として地球で人格化すること、世界奉仕の緊急時の息子として自分自身を与えようと申し出た。サルヴィントン当局は、この冒険のための許可を与えたので、後にパレスチナのシャレイムの都市になるところでメルキゼデクのマキヴェンタの実際の肉体化が、なされた。このメルキゼデクの息子の具体化の全執行は、生命搬送者、物質制御長、およびユランチア居住の他の天の人格との協力で惑星の受託者により成し遂げられた。

2. シャレイムの賢人

93:2.1 (1015.1) マキヴェンタがユランチアの人類に授与されたのはイエス生誕の1,973年前のことであった。その到来は、華々しいものではなかった。その具体化は、人間に目撃されなかった。その多事多端な日に、シュメール出身のカルデア人牧夫であるアムドンの天幕に入ったマキヴェンタを最初に見たのは、人間であった。マキヴェンタの任務の宣言は、この羊飼いへの「私はメルキゼデク、エル・エリョンの聖職者、いと高きもの、唯一のものであり唯一の神である。」と簡単な声明に具体的に表現されていた。

93:2.2 (1015.2) 牧夫は、驚きから覚め、この見知らぬ者に盛んに多くの質問をした後に、メルキゼデクを夕食に招待し、そしてこれは、長い宇宙経験において、マキヴェンタが、物質でできた食物を伴食した、すなわち有形の生き物としての94年の生活のなかで自身を支える滋養を摂取した最初であった。

93:2.3 (1015.3) その夜、二人が星の下で徹底的に話し合っていると、メルキゼデクは、腕を一振りし、アムドンの方に向き直り、「エル・エリョン、いと高きものは、天空の

星の、それに我々が住むまさしくこの地球の神々しい創造者であり、天国の最高の神でもある。」と言って、神の現実についての真実顕示の任務を開始した。

93:2.4 (1015.4) 数年内にメルキゼデクは、シャレイムの後の共同体の核を形成する生徒、弟子、信者の一団を自分の周りに集めた。まもなく、エル・エリョンの聖職者、いと高きもの、それにシャレイムの賢人としてパレスチナ中で知られた。いくつかの周囲の部族の中では、しばしばシャレイムのシークとして、または王として言及された。シャレイムとは、メルキゼデク失踪後にイェブースの都市となり、続いてジェルーセムと呼ばれる場所であった。

93:2.5 (1015.5) 容姿の面でメルキゼデクは、身長1.83メートルほどの堂々たる風采をして、当時のノヅ系とシュメール人の混合民族に似ていた。かれは、カルデア語の他に6言語を話した。かれは、楽園の三位一体のサタニアの象徴である3同心円の紋章を胸につけている以外は、カナン人の聖職者とほぼ同様の装いをしていた。追随者達は、かれの任務の間、3同心円のこの記章を非常に神聖

と見なされるようになり、敢えてそれを使用せず、しかも数世代の経過とともにすぐに忘れられた。

93:2.6 (1015.6) マキヴェンタは、領域の人間の風習が消えた後も生きたが、決して結婚せず、地球に子孫を残すこともできなかった。人間の男性に類似しているのだが、どの人類の生命原形質も包含しなかったこと以外は、彼の身体は、現実には、カリガスティア王子の部下の具体化された100人の用いられたる特別に組み立てられた体に類似するものであった。また、ユランチアには利用可能な生命の木もなかった。マキヴェンタが地球にもう少し長く留まっていたならば、その物理的構造は、徐々に低下化していたことであろう。実のところ、マキヴェンタは、その有形の肉体が崩壊し始めるずっと前に94年間でその贈与の任務を終えた。

93:2.7 (1016.1) この肉体を与えられたメルキゼデクは、時間の監視者と肉体の良き指導者としての超人の人格に内在する思考調整者を受け入れた。こうして人間の肉体に似せて地球に現れたとき、ユランチアの問題へ、後の神の息子ミカエルの人間の心でそれほどまで勇敢に父のこの精

霊が機能することを可能にした肉体化の息子に宿る方法へのその経験と実地指導を獲得した。そして、これは、ユランチアで２つの心で機能した唯一の思考調整者であるが、２つの心は神らしくもあり人間らしくもあった。

93:2.8 (1016.2) マキヴェンタは、人間の姿での期間、惑星の管理者軍団の仲間11名との十分な接触はあったが、天の人格の体系とは連絡はとれなかった。マキヴェンタは、メルキゼデク受託者は別として、人間との接触がなく、同様に超人の有識者との接触もなかった。

3. メルキゼデクの教え

93:3.1 (1016.3) 10年の時の流れと共に、メルキゼデクは、第2エーデンの初期のセース系聖職者が、開発した昔の体系を模範としてシャレイムに学校を創設した。後の転向者であるアブラーハームが導入した10分の1税制の考えさえも、古代セース系の長く続く伝統方法に由来した。

93:3.2 (1016.4) メルキゼデクは、1神、普遍の神の概念を教えたが、エル・エリョン—いと高きもの—と彼自身が、命名したノーランティアデクの星座の父とこの教えの関連づけを人々に許した。メルキゼデクは、ルーキフェー

レンスの状態とイェルーセムの情勢に関してはほぼ沈黙でいた。ラナフォーゲ、系統主権者は、ミカエルの贈与終了後までユランチアにはほとんど無関係であった。シャレイムの学生の大多数にとり、エデンチアは天国であり、いと高きものは神であった。

93:3.3 (1016.5) 大半の人々は、メルキゼデクが、贈与の記章として採用した３同心円の象徴を人間、天使、神の３つの王国を表すと解釈した。そして彼らは、その信念を持ち続けることを許された。メルキゼデクの追随者のごく少数しか、この３円が、神性の保守と指示に関る楽園三位一体の無限、永遠、普遍の象徴であることを決して知らなかった。アブラーハームでさえも、この表象を３名のいと高きものが１名として機能するように指令されて以来、エデンチアの３名のいと高きものを表していると、むしろ考えた。メルキゼデクは、自分の記章に象徴された三位一体の概念の程度まで教え、通常、それをノーランティアデクの星座の３名のヴォロンダデク支配者に関連づけた。

93:3.4 (1016.6) メルキゼデクは、一般の追随者にエデンチアのいと高きもの—ユランチアの神々—の支配者の地位についての事実を越えての教えを提示をしようとはしなかった。しかしメルキゼデクは、何人かには局部宇宙の管理と組織を含む高度な真実を教えると同時に、才気あふれる弟子ケニーテ族のノーダンと熱心な学生の一団には超宇宙の真実とハヴォーナの真実さえも教えた。

93:3.5 (1016.7) メルキゼデクが30年以上ともに暮らしたカートロー家族は、これらのより高度の真実の多くを理解し、長い間、傑出した子孫モーシェの時代にまでも家族内で永続させ、その結果、メルキゼデクの時代の強い伝統を持つモーシェは、母方の他の関係筋を介してはもとより父方にもこれを伝えた。

93:3.6 (1016.8) メルキゼデクは、追随者には、受けて、理解する能力があると全てを教えた。多くの現代宗教の天地、人間、神、天使に関する考えさえも、メルキゼデクのこれらの教えからかけ離れてはいない。だが、この偉大な師は、すべてを一神、宇宙神、天の創造者、神性の父の教理に従属させた。この教えは、崇拝への人の注意を喚

起し、この同じ宇宙なる父の息子としてのミカエルの後の出現のための道を準備する目的のために強調された。

93:3.7 (1017.1) メルキゼデクは、自分が来たようにいつか未来に神の別の息子が現身となって来ると、しかし女性から生まれるということを教えた。そしてそれが、後の多数の教師が、「メルキゼデク体制の後いつまでも」イエスが聖職者、または牧師であると考えた理由である。

93:3.8 (1017.2) その結果、メルキゼデクは、一神の楽園の息子そのものの贈与のための道を準備させ、世界の風潮である一神論の舞台を整えた。かれは、すべての父としてとても生き生きと描き、また、個人の信仰の簡単な条件に基づいて人を受け入れる神としてアブラーハームに提示した。またミカエルは、地球に出現したとき、メルキゼデクが楽園の父に関して教えていたことをすべて確認した。

4. シャレイムの宗教

93:4.1 (1017.3) シャレイム崇拝の儀式は、非常に簡単であった。メルキゼデク教会の粘土板の名簿に署名するか、印

をつけたすべての者は、次のような思考体系の暗記に専心し、その体系を受け入れた。

93:4.2 (1017.4) 1. 私は、エル・エリョン、いと高きもの、唯一の宇宙の父であり万物の創造者を信じる。

93:4.3 (1017.5) 2. 私は、生贄や焼いた供物ではなく、私の信仰に恩恵を授けるメルキゼデクのいと高きものとの盟約を受け入れる。

93:4.4 (1017.6) 3. 私は、メルキゼデクの7つの戒律に従い、すべての人にいと高きものとのこの盟約に関する朗報を告げることを約束する。

93:4.5 (1017.7) そして、それが、シャレイム居留地の教義の全容であった。だが、信仰についてのそのような短く簡単な宣言でさえも、当時の人にはあまりに高度であった。彼らは、単に無償で—信仰により—神の好意を得るという考えを理解することができなかった。彼らは、神に債務をおって生まれたとあまりに深く信じた。彼らは、あまりに長く、あまりに真剣に犠牲になり、聖職者へ贈り物をしたので、救済つまり神の恩恵は、メルキゼデク

の盟約を信じるすべての者への無償の贈り物であるという良い知らせが理解できなかった。これに反しアブラーハームは、実に熱意をもたずに信じたが、それさえも「正しさと認められた」。

93:4.6 (1017.8) メルキゼデクが広めた7つの戒律は、古代のダラマティア憲法に沿う模範とされ、第一と第二のエーデンで教えられた7つの戒律に大変類似していた。シャレイム宗教のこの戒律は、次の通りであった。

93:4.7 (1017.9) 1. 天地の創造者のいと高きもの以外の神に仕えてはいけない。

93:4.8 (1017.10) 2.永遠の救済の唯一の必要条件は、信仰であるということを疑ってはいけない。

93:4.9 (1017.11) 3. 偽の目撃者になってはいけない。

93:4.10 (1017.12) 4. 殺してはいけない。

93:4.11 (1017.13) 5. 盗んではいけない。

93:4.12 (1018.1) 6. 不義を犯してはいけない。

93:4.13 (1018.2) 7. 両親と年長者を蔑んではいけない。

93:4.14 (1018.3) 居留地内でのいかなる犠牲も認められてはいないが、メルキゼデクは、昔からの習慣を突然根絶することがいかに困難であるかを熟知しており、昔の血肉の生贄に因んで、パンとワインの聖礼典の代用品を人々に適宜に、賢明に提供した。「メルキゼデク、シャレイムの王は、パンとワインを出した」と記録にある。しかしこの用心深い刷新さえ完全に成功していたというわけではない。様々な部族はみな、生贄と焼いた供物を提供する場所であるシャレイムの町外れにある予備の中心的場所を維持した。アブラーハームさえケドルラオメルに対する勝利後、この野蛮な習慣の助けをかりた。かれは、従来の犠牲を捧げるまではあまり簡単には気持ちが安ぐことはなかった。メルキゼデクは、追随者の宗教習慣から、アブラーハームの宗教習慣からさえ生贄へのこの性癖の完全な根絶に成功することは決してなかった。

93:4.15 (1018.4) メルキゼデクは、イエスのように贈与の任務遂行に厳しく励んだ。かれは、慣習の改革、世界の習慣の変更、高度な衛生習慣、または科学的事実すら普及をしようとはしなかった。メルキゼデクは2つの課題の達成のために来た。神の真実を地球に生き続けさせ、その宇

宙なる父の楽園の息子の人間としてのその後の贈与のための道を準備するために。

93:4.16 (1018.5) メルキゼデクは、シャレイムにおいて基本の啓示的な真実を94年間教え、またこの時期アブラーハームは、シャレイム学校に3回にわたって通った。アブラーハームは、メルキゼデクの最も才気あふれる生徒と主だった支持者の中の一人になり、最終的にはシャレイムの教えの転向者になった。

5. アブラーハームの選択

93:5.1 (1018.6) 「神の選民」について話すことは誤りであるかもしれないが、選ばれた個人としてのアブラーハームに言及することは、誤りではない。メルキゼデクは、複数の神への一般的信仰と区別される一神の真実を生かし続ける責任をアブラーハームに課した。

93:5.2 (1018.7) マキヴェンタの活動場所としてのパレスチナの選択は、幾分かは指導者の可能性を有するある人間家族との接触を確立する願望に基づいていた。メルキゼデクの肉体化の時点でアブラーハームの家族のようにシャレイムの教義を受ける準備が整った多くの家族が、地球に

はいた。等しく、赤色人種、黄色人種、それに西や北のアンド系子孫の間に授けられた家族がいた。しかし、こ場合も、地中海の東岸部ほどにはミカエルのその後の地球出現に適する場所は、これらのどこにもなかった。メルキゼデクのパレスチナにおける任務とヘブライ民族の間へのミカエルのとその後の出現が、地形により、つまりパレスチナが世界の当時の既存の貿易、旅行、および文明に関し中心に位置したという事実によって少なからず決定した。

93:5.3 (1018.8) メルキゼデク受託者は、ここしばらくの間アブラーハームの先祖を観察し続けてきており、知性、自発性、聡明さ、誠意によって特徴づけられる特定の世代の子孫に自信をもって期待した。アブラーハームの父であるテラの子供は、すべての面でこれらの期待を満たした。それは、エジプト、中国、インドよりはむしろシャレイムにおいて、もしくは北の部族の間において、マキヴェンタの出現に関係したテラの多才なこれらの子供との接触のこの可能性であった。

93:5.4 (1019.1) テラとその家族全体は、カルデアで伝道されていたシャレイム宗教への不熱心な改宗者であった。彼らは、ウルでシャレイムの教義を公布したフェニキア人教師であるオヴィディウスの説教を通してメルキゼデクについて学んだ。家族は、直接シャレイムに行くつもりでウルを去ったが、メルキゼデクを見ていないアブラーハームの兄弟ナホーは、乗り気ではなく、皆にハランに留まるように説得した。またかれらが、携えてきた家族の守護神のすべてを進んで破棄するまでにはパレスチナ到着後から長い時間があった。家族にとりシャレイムの神のためにメソポタミアの多くの神をあきらめるには時間が掛かった。

93:5.5 (1019.2) アブラーハームの父テラの死の数週間後、メルキゼデクは、アブラーハームとナホーの二人にぬむけて学生の一人であるヒッタイト人のヤーラムを遣わせた。招待状は、「シャレイムに招待します。永遠なる創造者の真実についてに我々の教えを聞き、あなた方兄弟2人の賢明な子孫で全世界は祝福されるでしょう。」ところでナホーは、完全にはメルキゼデクの福音を受け入れていなかった。ナホーは、後に残り、自分の名をもつ強い

都市国家を築きあげた。しかし、アブラーハームの甥ロートは、おじと一緒にシャレイムに行くと決めた。

93:5.6 (1019.3) シャレイムに到着すると、アブラーハームとロートは、北の侵略者の多くの不意打ちから身を守ることができる都近くの起伏のある要塞を選んだ。このとき、ヘティテ人、アッシリア人、ペリシテ人、および他の集団は、絶えずパレスチナの中央と南部の部族を襲っていた。アブラーハームとロートは、丘の砦からシャレイムへの頻繁な巡礼の旅をした。

93:5.7 (1019.4) シャレイムに落ち着いて間もなくアブラーハームとロートは、当時パレスチナに干魃があり、まとまった食料を手に入れるためにナイル渓谷に旅をした。エジプトでの短い滞在の間、アブラーハームは、エジプトの王位に就いている遠縁に当たる者に出会い、そして、この王のために非常に成功を収めた2軍隊遠征の指揮官として役目を果たした。アブラーハームは、ナイル滞在の後半妻のサラと宮廷に住み、エジプトを去るにあたっては軍事行動の戦利品の分け前が与えられた。

93:5.8 (1019.5) アブラーハームにとり、エジプト王室からの名誉をはねつけ、マキヴェンタの後援するより精神的な仕事に戻るには大きな決断を必要とした。しかしメルキゼデクは、エジプトにおいてさえ敬われ、ファラオに全容が提示されると、かれは、シャレイムの大儀への誓いの実行に戻ることをアブラーハームに強く促した。

93:5.9 (1019.6) アブラーハームには王者の野心があり、エジプトからの帰途、全ケナーアンの地を征服し、その国民をシャレイムの支配下に入れる計画をロートに示した。ロートは、商取り引きの方に心を傾けた。したがって、後日の意見の不一致の後、かれは、商業と畜産に従事するためにソドムに行った。ロートは、軍人と牧夫のいずれのの生活も好きではなかった。

93:5.10 (1019.7) 家族とシャレイムに戻るとアブラーハームは、軍事計画を完成し始めた。かれは、やがてシャレイム領土の民間支配者として認められ、その統率下に近隣の7部族をまとめた。まことに、周辺部族をより早くシャレイムの真実の知識に至らせるために旅立ち、かれらを剣で近隣種族を集めるための熱意をもつアブラーハームを

拘束するということは、メルキゼデクにとり実に大きな困難を伴った。

93:5.11 (1019.8) メルキゼデクは、すべての周辺部族との平和な関係を維持した。かれは、軍国主義的ではなく、また往復の際にもいずれの軍隊にも決して攻撃されることはなかった。アブラーハームは、後に実践するようなシャレイムのための防衛方針を定式化するべきであることを完全に望んでいたが、かれは、生徒の征服のための野心的な計画に同意しようとはしなかった。それで、友好的関係の断絶が生じた。アブラーハームは、軍事本部設立のためにヘブロンに移動した。

93:5.12 (1020.1) アブラーハームには、著名なメルキゼデクとの密接な関係ゆえに周辺の下級の王よりかなりの利点があった。王らは皆、メルキゼデクを敬い、アブラーハームを過度に恐れた。アブラーハームはこの恐怖を知っており、隣人を攻撃する好機を待ち受けるだけであった。そしてこの口実は、これらの支配者の幾人かが、ソドムに住む甥のロートの財産を大胆にも襲おうとしたとき成立した。これを聞いた連合部族の長であるアブラーハーム

は、敵を襲った。自身の318人の護衛は、このとき戦闘に従事した4,000人以上の軍隊を統率した。

93:5.13 (1020.2) メルキゼデクは、アブラーハームの戦争宣言を知ると思いとどまらせるために出発したが、勝利して戻りくる元弟子に遭遇したに過ぎなかった。アブラーハームは、シャレイムの神が敵に対する勝利をもたらしたと主張し、また戦利品の10分の1をシャレイムの宝物蔵に与えると強く主張した。残りの90パーセントは自分の首都ヘブロンへと持ち去った。

93:5.14 (1020.3) シッディムのこの戦いの後、アブラーハームは、11部族の第2の連合の指導者になり、メルキゼデクに10分の1税を納めるだけでなく、周辺の他のすべてのものが同様にすることを確実にした。セドムの王とのアブラーハームの外交取り引きは、アブラーハームが広く恐れられていたことと合わせてセドムの王や他のものが、ヘブロン軍事同盟者に合流する結果をもたらした。アブラーハームは、パレスチナに強力な国家を設立する道に向かっていた。

6. メルキゼデクのアブラーハームとの盟約

93:6.1 (1020.4) アブラーハームは全ケナーアンの征服を心に描いていた。メルキゼデクが、その企てを認可しないであろうという事実により決断が弱められたに過ぎなかった。しかし、アブラーハームは、企てに乗り出す意を決しようとしたとき、この提案された王国の支配者として後任の息子が一人もいないということに悩み始めた。アブラーハームは、メルキゼデクとの別の会議を手配した。そしてシャレイムの聖職者、神の目に見える息子が、天の王国の精神的概念を優先し、物質的征服と一時的支配の計画を捨てるようにアブラーハームを説得したのは、この会見であった。

93:6.2 (1020.5) メルキゼデクは、エモール族連合と戦うことの無益の苦労についてアブラーハームに説明したが、進歩の遅い一族達は、自らの愚かな習慣により確実に死に追いつめられており、数世代のうちには大いに増加するアブラーハームの子孫が、たやすく打ち勝つことができるまでに、それ等は非常に弱くなるであろうということを等しく明確にした。

93:6.3 (1020.6) メルキゼデクは、アブラーハームとシャレイムにおいて正式契約をした。アブラーハームに言った。「さあ、空に目をむけ、できるのならば星を数えてみなさい。あなたの子孫はあのようにとても数多いのである。」そこでアブラーハームは、メルキゼデクを信じた。「そして、これを彼の義として認められた。」メルキゼデクは、続けてアブラーハームの子孫のエジプト滞在後のケナーアン将来の占領について話した。

93:6.4 (1020.7) メルキゼデクのアブラーハームとのこの盟約は、神がユランチア人の神性と人類の間でのすべてをすることに同意する重大な協定を表している。人は、神の約束を信じ、神の指示に従うことに同意するだけである。それまでは、働き—生贄と供え物—だけが、救済を保証できると信じられてきた。。今、メルキゼデクが、信仰によってもたらされる救済、つまり神の恩恵という福音を再びユランチアにもたらした。しかし、神への簡単な信仰のこの福音は高度であり過ぎた。後に、セムの部族民は、昔の生贄と罪と流血の償いに戻る方を望んだ。

93:6.5 (1021.1) この盟約樹立後、メルキゼデクの約束に従いアブラーハームの息子イシャークが生まれるのにはさほど時間が掛からなかった。イシャークの出生後、アブラーハームは、メルキゼデクとの盟約に関しそれを書面にさせるためにシャレイムに向かい、非常に厳粛な態度でこれに臨んだ。自分の名前をアブラームからアブラーハームに変えたのが、この公の、そして正式の盟約受諾のときであった。

93:6.6 (1021.2) メルキゼデクが義務化したことは一度もなかったが、シャレイム信者の大半は、割礼を慣行した。アブラーハームは、割礼に対し常に強く反対してきたので、この機会にシャレイム盟約批准の象徴としてこの儀式を正式に荘厳にすることにより受け入れることに決めた。

93:6.7 (1021.3) マムレーの平原で天の存在体が、アブラーハームに姿を現したのは、アブラーハームが、メルキゼデクのより大きい計画のために個人の望みを実際に、公に放棄をした後であった。セドムとゴモラの自然な滅亡に関連する後に捏造された物語とのその関連性にもかかわらず、これが事実の様子であった。そして、その頃の出来

事に関するこれらの伝説は、ごく最近でさえも道徳と倫理の発達がいかに遅れていたかを示している。

93:6.8 (1021.4) 厳粛な盟約成就におけるアブラーハームとメルキゼデクの間の和解は完全であった。アブラーハームは、再度シャレイム集落の民事と軍事の指揮を引き受け、その絶頂時には10万人の常時の10分の1税支払い者が、メルキゼデクの組合名簿に記載されていたアブラーハームは、シャレイムの寺院を大いに改修し、新しい学校全体に天幕を提供した。10分の1税制度の拡大だけではなく、学校業務を運営の多くの改善方法も設定し、その上に、宗教的宣伝活動の面のより良い取り扱いに大いに貢献した。また、牧畜の改善とシャレイムの酪農事業の再編成に大きな効果をもたらした。アブラーハームは、その時代の人としては抜け目のない有能な実業家、裕福な人であった。過度に敬虔ではなかったが、とことん誠実であり、またメルキゼデクのマキヴェンタを信じていた。

7. メルキゼデク宣教師

93:7.1 (1021.5) メルキゼデクは、数年間自分の生徒に教え、特にエジプト、メソポタミアへ、小アジアの周辺の全部族に入り込むシャレイム宣教師の訓練を続けた。そして数十年の時が流れるにつれ、これらの教師は、マキヴェンタの神への信念と信仰を携え、シャレイムからより遠くへと旅をした。

93:7.2 (1021.6) ヴァン湖岸に群がるアダムソンの子孫は、シャレイム教団のヘティテ人教師にとり意欲的な聞き手であった。教師達は、かつてのアンド系のこの中心地から、遠く離れたヨーロッパとアジアの両地域に派遣された。シャレイムの宣教師達は、全ヨーロッパに、イギリス諸島にさえ進出した。1集団は、フェロー諸島の住民経由でアイスランドのアンドン系へ行ったが、別集団は、中国を横断し、東方の島の日本人に達した。東半球の部族を啓発するためにシャレイム、メソポタミア、ヴァン湖から危険を冒した男女の人生と経験は、人類の年譜の英雄の章を提示している。

93:7.3 (1022.1) しかし職務は、とても重大で、しかも部族は、非常に逆行的であったことから、結果は、曖昧かつ不明

確であった。シャレイムの福音は、1世代から次世代へとあちらこちらに足場を見つけたが、全部族あるいは全人種からの一神の考えへの継続的な忠誠は、パレスチナを除き、決して獲得できなかった。イエス到来よりずっと以前に、初期のシャレイム宣教師の教えは、昔の、より一般的な迷信と思考体系に一様に潜航するようになった。メルキゼデクの本来の福音は、偉大な母、太陽、および他の古代の集団礼拝の思考体系にほぼ完全に吸収されていた。

93:7.4 (1022.2) 今日、印刷技術の便宜を味わう者は、これらの初期の時代に真実を永続させることがいかに困難であるかをあまり理解していない。1世代から次世代までに新しい教義を見失うことは、いかに容易であったことか。新教義は、常に宗教教育と不思議な習慣の古い躯幹部に吸収される傾向があった。新顕示は、いつも古い進化的思考体系から悪影響を受ける。

8. メルキゼデクの出発

93:8.1 (1022.3) マキヴェンタがユランチアでその非常時の贈与を終わらせることを決めたのは、セドムとゴモラの滅亡

直後であった。生身の姿での滞在を終えるというメルキゼデクの決定は、数多くの条件の影響をうけたが、その主要なものは、周辺部族、さらには直接の仲間がメルキゼデクを神人と見なす、すなわち超自然の存在、実際にそうであったのだが、と見る傾向が強まっていた。しかし、彼らは極度に、しかも非常に迷信深い恐怖でメルキゼデクを崇敬し始めていた。これらの理由に加えて、メルキゼデクは、自分を信奉する者の心に地球での自身の活動舞台に唯一無二の神の真実が強く確立されることを保証する十分な時間を、アブラーハームが死ぬ前に、残したかった。と言うわけで、ある夜マキヴェンタは、人間の仲間に就寝の挨拶をした後、シャレイムの自分の天幕に退いた。そして皆が朝呼びに行くと、仲間がすでに連れ去っていたので彼はそこにはいなかった。

9. メルキゼデクの出発後

93:9.1 (1022.4) メルキゼデクが突然に姿を消したときは、アブラーハームにとっての重大な試練であった。メルキゼデクは、到着の際のように自分がそのうちに去らなければならないことを信奉者に十分に警告していたのであったが、皆は素晴らしい指導者の損失に諦めがつかなかっ

た。当時の伝統は、モーシェがヘブライ人の奴隷をエジプトから率いた際にうちたてたにもかかわらず、シャレイムで確立された偉大な組織は、危うく姿を消すところであった。

93:9.2 (1022.5) メルキゼデクの損失は、アブラーハームの心に決して完全に克服されない悲しみを生んだ。アブラーハームは、物質的王国をうち建てる野心をあきらめたとき、ヘブロンを捨てた。そして、今、アブラーハームは、精神的王国の建設で仲間の損失に合うとシャレイムを出発し、自分の興味に基づいて暮らすためにゲラルへと南に行った。

93:9.3 (1022.6) アブラーハームは、メルキゼデクの失踪直後、恐がりやすく臆病になった。アブラーハームは、ゲラル到着の際自分の正体を差し控えたので、アビメレクは、アブラーハームの妻を連れていった。(アブラーハームは、サラとの結婚直後、ある夜、才気あふれる我が妻を獲得するために自分を殺害する陰謀を立ち聞きした。この不安が、その他の点においては勇敢かつ大胆な指導者にとっての恐怖となった。誰かがサラを得るために秘か

に自分を殺すであろうということを終生ずっと恐れていた。そしてこれが、3回にわたって別の機会にこの勇士が、本当の臆病振りを呈した理由を説明している。)

93:9.4 (1023.1) にもかかわらず、アブラーハームは、長い間メルキゼデクの後継者としての任務を思いとどまろうとはしなかった。やがてペリシテ人とアビメレクの人々を改宗させ、彼等と条約を結び、それがまた、彼等の迷信の多くにより、特に長男の生贄の習慣によってアブラーハームは汚されるようになった。こうしてアブラーハームは、パレスチナで再び最高実力者になった。すべての集団に敬われ、すべての王に称賛された。かれは、周囲の全部族の精神的指導者であり、その影響は彼の死後しばらく続いた。人生の終わりの数年間、アブラーハームはもう一度、初期の活動の現場であり、またメルキゼデクと共同で働いた場所へブロンへ戻った。アブラーハームの最後の行為は、自身の民の女性を息子イシャークの妻として確保するために、メソポタミアの境界の兄弟ナホーの都市に信用のできる使用人を送ることであった。長い間、いとこと結婚するのがアブラーハームの民の慣習であった。アブラーハームは、シャレイムの消滅した学

校でメルキゼデクから学んだ神への信仰に確信を持って死んでいった。

93:9.5 (1023.2) 次の世代にとってメルキゼデクの話を理解することは難しかった。500年のうちには多くの者が、物語全体を神話と見なした。イシャークは、父の教えをかなりよく保持し、シャレイムの居留地からの福音を助長したが、ヤコブにはこれらの伝統の意味は理解しにくかった。ヨセフは、メルキゼデクの強い信者で、主にはこのために兄弟達には夢想家と見なされた。エジプトにおけるヨセフの栄誉は、主に曾祖父アブラーハームの記憶によるものであった。ヨセフにはエジプト軍の軍の指揮にとの申し出があったが、メルキゼデクの伝統とアブラーハームとイシャークの後の教えの強い信者であったことから、天の王国の前進のためにさらに働くことができると信じ、民間管理者としての役目を果たすことを選んだ。

93:9.6 (1023.3) メルキゼデクの教えは、完全かつ十分なものであったが、後のヘブライの聖職者にとり当時の記録は、不可能で空想的であったらしいとはいえ、多くの者が、

これらのやりとりの幾つかについては、少なくともバビロンでの旧約聖書の記録の総括編集の時代までは理解していた。

93:9.7 (1023.4) アブラーハームと神との対話として旧約聖書の記録が記述することは、実際にはアブラーハームとメルキゼデクとの会談であった。後の筆記者は、メルキゼデクを神の同意語とみなした。アブラーハームとサラの「主の天使」との数多くの接触に関する記録は、二人のメルキゼデクとの頻繁な会話について言及している。

93:9.8 (1023.5) 事実からの多くの転換も包含し、バビロン捕囚の間のヘブライ人聖職者によるこれらの記録の編集時点の故意の、あるいは故意ではない変更を含んではいるものの、イシャーク、ヤコブ、ヨセフのヘブライの物語は、アブラーハームに関するそれらの物語よりもはるかに信頼できる。ケツーラは、アブラーハームの妻ではなく、ハーガールと同じく単に妾であった。アブラーハームの所有地のすべては、イシャーク、妻の身分のサラの息子のものになった。アブラーハームは、記録が示しているほどの年ではなく、妻ははるかに若かった。これら

の年齢は、その後に申し立てられるイシャークの奇跡的出生に備えて故意に変更された。

93:9.9 (1023.6) ユダヤ人の国家的自尊心は、バビロン捕囚により途方もなく押圧された。国家の劣勢への反発において、全く正反対の国家的、人種的自己中心へ移り変わり、すべての人種の上に神の選民として自分たちを高める目的で自らの伝統を歪め、正道からそれた。そのような訳で、彼らは、他のすべての人々の上に、メルキゼデク自身の上にさえも、アブラーハームと国家の他の指導者を高める目的のために自分達のすべての記録を慎重に編集した。ヘブライ人の筆記者は、それ故に、アブラーハームに大変な名誉をもたらしたと考えるシッディム戦の後のアブラーハームとメルキゼデクの出会いの物語だけを保存し、見つけ得るこれらの重要な時代に関するあらゆる記録を処分した。

93:9.10 (1024.1) またその結果、メルキゼデクを見失うことで、約束された贈与の息子の精神的任務に関しこの緊急時の息子の教えをも見失った。マキヴェンタの予言通り生身の姿でミカエルが地上に現れたとき、かれを見分けたり

受け入れることができる、あるいは進んでする子孫は、ほとんどないまでに完全にこの任務の本質を見失った。

93:9.11 (1024.2) しかし、ヘブライ書の著者の一人は、メルキゼデクの任務を理解した。「このメルキゼデクも、いと高きものの聖職者もまた平和の王であった。父はなく、母はなく、系図はなく、生涯の初めも命の終わりもなく、しかし神の息子のようであって、絶えず、聖職者でいる。」と記述されているので。この著者は、イエスは、「メルキゼデクの命令への永遠の聖職者」であったと確言し、ミカエルの後の贈与の予示の例としてメルキゼデクを明示した。この比較は概して好都合ではなかったが、キリストが、世界贈与の時点で「12名のメルキゼデク受託者の命令」のユランチアの暫定的称号を受け取ったのは、文字通り本当であった。

10. メルキゼデクのマキヴェンタの現状

93:10.1 (1024.3) マキヴェンタの肉体化の数年間、ユランチアのメルキゼデク受託者は、11名で機能した。マキヴェンタが、非常時の息子としての任務を終えたと考えたとき、この事実を11名の仲間に信号を送ると、彼らはすぐに、

彼が肉体から解放され安全に元のメルキゼデクの状態に戻る手段を整えた。また、シャレイムからの失踪後の3日目、マキヴェンタは、ユランチア配置の11名の仲間の間に現れ、サタニア606号の惑星受託者の1名として中断されている自分の生涯の仕事を再開した。

93:10.2 (1024.4) マキヴェンタは、それを始めたのと同じくらい突然に、出し抜けに生身の人間の生物としての贈与をを終えた。その出現にも出発にも何の異例の発表、あるいは実演も伴わなかった。マキヴェンタのユランチアへの出現は、復活点呼にも惑星の配剤の結末にも記されなかった。マキヴェンタの贈与は、非常時のものであった。しかしマキヴェンタは、父メルキゼデクが正式に発表するまで、それと非常時の贈与が、ネバドンの主要な経営者であるサルヴィントンのガブリエルの承認を受けたと知らされるまで人間の肉体での滞在を終えなかった。

93:10.3 (1024.5) メルキゼデクのマキヴェンタは、肉体時代の自分の教えを信じた人間の子孫の事情に大きな関心を持ち続けた。しかしながら、ケニーテ人と結婚するアブラー

ハームからイシャークの子孫は、シャレイムの教えの明確な概念を長い間抱き続けた唯一の血統であった。

93:10.4 (1024.6) この同じメルキゼデクは、続く19世紀に渡って多くの予言者と占い師と共働し続け、このように、例として地球へのミカエルの出現の予定の時までシャレイムの真実を生かし続ける努力をした。

93:10.5 (1025.1) マキヴェンタは、ユランチアのミカエルの勝利の時代まで惑星の受託者として続いた。次に、かれは、24名の管理者の1名としてジェルーセムにおけるユランチア奉仕に配属され、ユランチアの惑星王子の代理の称号を携えて、つい最近創造者の息子のジェルーセムの個人的大使の地位に登用された。ユランチアが棲息惑星のままである限り、メルキゼデクのマキヴェンタは、息子の身分に関する命令義務に完全に返されるというわけではないが、時間の観点から言えば、いつまでも惑星聖職者であるキリスト・ミカエルの代理をするというのが我々の信じるところである。

93:10.6 (1025.2) 彼の贈与は、ユランチアの非常時のものであり、マキヴェンタの将来がいかなるものかは、記録には

現れていない。ネバドンのメルキゼデク軍団は、その集団の1つの永久的損失を被ってしまうということになるかもしれない。エデンチアのいと高きものが言い渡し、その後ユヴァーサの高齢者達が承認した最近の判決は、この贈与のメルキゼデクが、堕落した惑星王子カリガスティアに代わる運命にあることを強く示している。我々の憶説が、この点で正しいならば、ユランチアに再び本人自らが現れ、何らかの変更された方法で廃位の惑星王子の役割を再開するか、さもなくば、メルキゼデクのマキヴェンタは、現在、実際にユランチアの惑星王子の肩書きを保持するキリスト・ミカエルを代理する惑星王子の代理として機能するために地球に登場することが全く可能である。我々にはマキヴェンタの運命が何であるかに関し、て決して明確ではないが、それにもかかわらず、つい最近起こった出来事は、前述の憶説がおそらく真実からは遠くないことを強く示している。

93:10.7 (1025.3) 我々は、ユランチアにおけるかれの勝利によりミカエルが、いかにカリガスティアとアダーム両者の後継者になったかをよく理解している。いかにして平和の惑星王子と第二のアダームになったかを。我々は今、こ

のメルキゼデクへのユランチアの惑星王子の代理の肩書きの贈呈を眺めている。彼はまた、ユランチアの代理の物質の息子に選ばれるのであろうか。または、予期しない空前の出来事が、すなわちアダームとハヴァーの惑星への、またはユランチアの第二のアダームの代理権力を行使する肩書きをもつミカエルの代表としての彼らの特定の子孫へのそのうちの帰還の可能性があるのか。

93:10.8 (1025.4) 権威ある息子と三位一体の教師たる息子の両方の将来の出現の確実性に関連したこれらのすべての思惑は、創造者の息子のいつの日かの帰還の明白な約束に関して、ユランチアを将来が不安定な惑星にし、ネバドンの全宇宙の中で最も興味深く、好奇心をそそる球体の1つにしている。後のいつの世にか、ユランチアが光と生命の時代に近づくとき、ルーキフェーレンスの反逆とカリガスティア脱退問題が、最終的に裁かれた後に、われわれが、行政長官の息子か、または三位一体の教師たる息子はもちろん、同時にマキヴェンタ、アダーム、ハヴァー、キリスト・ミカエルのユランチア臨場を目撃することは、全く可能なのである。

93:10.9 (1025.5) ユランチア管理者であるジェルーセム軍団、つまり24名の相談役のマキヴェンタの在籍は、ユランチアの死すべき者に宇宙計画の前進と上昇に、楽園の終成者軍団にさえずっとついていく運命にあるという信念の保証に十分な証拠であるというのが、長い間の我々の系列に関しての意見である。我々は、アダームとハヴァーが、ユランチアが光と生命に定着してしまうとき、楽園の冒険において地球の仲間に同伴する運命にあるということを知っている。

93:10.10 (1025.6) この同じメルキゼデクのマキヴェンタ、シャレイムのかつての賢人は、1,000年もたたない間気づかれずに100年間ユランチアに存在し、惑星の居住総督として務めた。そして、惑星の業務を指示する現体制が続くとすれば、彼は1,000年あまりのうちに、同じ地位で戻ることになるであろう。

93:10.11 (1026.1) これは、不規則で風変わりなあなた方の世界の今後の経験において重要な役割を果たすように運命づけられているかもしれないユランチアの歴史と人格に関連づけられるようになるメルキゼデクのマキヴェンタに

ついての、これまでのすべての存在体の中の最も類まれなものについての話である。

93:10.12 (1026.1) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 94
東洋におけるメルキゼデクの教え

94:0.1 (1027.1) シャレイム宗教の初期の教師は、アフリカとユーラシアの最果ての地の部族へと入り、神の恩恵を永遠に獲得する唯一の代償として一柱の宇宙なる神への人の信仰と信頼についてのマキヴェンタの福音をつねに説いた。アブラーハームとのメルキゼデクの盟約は、シャレイムと他の中心地へと伝えられた初期のすべての伝道のための原型であった。ユランチアには、全東半球にわたりメルキゼデクの教えを伝えたこれらの堂々たる男女よりも熱心で活動的な宣教師は、どの宗教にもいなかった。これらの宣教師は、多くの民族と人種から募集され、主に原地の転向者を媒体として自己の教えを広げた。宣教師らは、世界の異なる地域に訓練所を設け、シャレイム宗教を原住民に教え、次にはこれらの生徒に、自身の人民の間で教師として機能する権限を与えた。

1. ヴェーダ系インドにおけるシャレイムの教え

94:1.1 (1027.2) メルキゼデクの時代、インドは、近年北と西からきたアンド系のアーリア民族の侵略者の政治上、また宗教上の支配下にあった国際的な国であった。このとき、アーリア人は、半島の北部と西部だけに広範囲に浸透していた。これらのヴェーダ系の新来者は、多くの部族の神を共に連れて来ていた。その宗教の崇拝形式は、まだ父が司祭、母が女司祭として機能するその早期のアンド系先祖の儀式習慣に密接に従っており、家族の囲炉裏は、祭壇としての利用が続いていた。

94:1.2 (1027.3) ヴェーダの集団礼拝は、その頃広がりゆく崇拝儀式を徐々に支配していた教師-聖職者の婆羅門階級の指導に基づく成長と変化の過程にあった。アーリア人のかつての33柱の神の合併は、シャレイム宣教師がインドの北部に進出したとき、すでに進行中であった。

94:1.3 (1027.4) アーリア人の多神教は、部族ごとに祀る神を持つ部族単位への分離によるその早期の一神教の退化を呈した。当初の一神教のこの退化とアンド系メソポタミアの三位一体の考えは、紀元前２千年の初頭における再統

合の過程にあった。多くの神は、天空の神ヅヤウスのピター、大気の嵐のように激しい支配者インドラ、３頭の炎の神アグニの三位一体、つまり地球の支配者であり、初期の三位一体の概念の痕跡的な象徴の指導力の下、神の集団へと組織化された。

94:1.4 (1027.5) 確かな単一神教の発展は、進化する一神教への道を開いていた。最古の神アグニは、すべての神殿の父-首長としてしばしば高められた。たまにプラヤパティと呼ばれたり梵天と称される神格-父の原理は、婆羅門聖職者が後にシャレイム教師と交えた神学上の一戦に覆い隠された。婆羅門は、ヴェーダの神の集団全体を動かすエネルギー-神性の原理として発想された。

94:1.5 (1028.1) シャレイム宣教師は、メルキゼデクの一神、天のいと高きものについて説いた。この描写は、全ての神の本源としての父-梵天の進展的な概念に完全に不調和であったというわけではないが、シャレイム教義は、儀式偏重主義ではなく、ゆえに婆羅門聖職に関する教義、伝統、教えに直接的に応えるものではなかった。婆羅門聖職者は、信仰による救済についてのシャレイムを教

え、つまり、儀礼的な行動や生け贄の儀式を切り離した神の恩恵を決して受け入れようとはしなかった。

94:1.6 (1028.2) 神への信頼と信仰を通しての救済に関するメルキゼデクの福音の拒絶は、インドにとっての重大な転機であった。シャレイム宣教師は、古代のすべてのヴェーダ神信仰の損失の大きな原因となったが、ヴェーダの教えの聖職者である指導者達は、1神と単純な１信仰であるメルキゼデクの教えの受諾を拒否した。

94:1.7 (1028.3) 婆羅門は、シャレイム教師への対抗目的で当時の聖典を選択し、また後に改訂されるこの編集が、最古の聖典の中の1つであるリグ・ヴェーダとして現代に至った。婆羅門が、その頃の崇拝の儀式を結晶化、形式化、固定化、民族の犠牲を求めるにつれ、第2、第3、第4のヴェーダが続いた。その最良部の取り上げるならば、これらの著述は、概念の美しさと洞察の真実において類似する特徴をもつ他のいかなる著述にも匹敵するものである。かし、この優れた宗教が、南インドの何千もの迷信、集団礼拝、および儀式で汚染されるようになると、それは、次第に必滅の人間によりかつて開発された

神学の最も多彩な体系へと変化していった。ヴェーダについての考査は、これまでに考えられる神に関する一部の最高の、一部の最低の概念を明らかにするであろう。

2. 婆羅門教

94:2.1 (1028.4) シャレイム宣教師は、ドラヴィダ人のデッカン高原に南へ進出していくと、二次サンギク民族の台頭に直面するアーリア人が、人種の独自性の損失防止ための方策である拡大するカースト制度に直面した。婆羅門聖職者階級は、この制度の本質そのものであったので、この社会組織は、シャレイム教師の前進を大いに遅らせた。アーリア人種の防衛に失敗はしたものの、この階級制度は、婆羅門の永続に成功し、引続き、その婆羅門は、インドにおいて現在に至るまで宗教上の主導権を維持してきた。

94:2.2 (1028.5) それでアーリア人の礼拝集団は、より高い真実の拒絶を通してヴェーダの教えの弱めることで、デッカン高原からの拡大する侵入をうけた。婆羅門階級は、人種的な絶滅と宗教の消滅潮流を止める必死の努力において、他の何よりも自分たちを高めようとした。神格への

生贄それ自体が、きわめて効果的であるということ、そしてそれが、力においてきわめて強要的であるということを教えた。かれらは、宇宙の２つの基本の神の原理のうちの1つが婆羅門であり、他方が婆羅門聖職であると公言した。神に属する栄誉を自分たちに委託するために大胆にも神々よりも自分たちを高めた聖職者は、他のユランチア民族の中にはいなかった。ところが、聖職者は、途方もなく思い上がった主張をしたことから、不安定な体制は、周囲のそれほど高度でない文明から流入してくる質を落とす礼拝集団の前にして崩れた。巨大なヴェーダの聖職自体は、自身の利己的かつ賢明でない図々しさが全インドにもたらした慣性と悲観の黒い洪水にもがき、その下に沈んだ。

94:2.3 (1029.1) 自己に対する過度の集中は、確かに、人間、野獣、または雑草としての連続的化身の無限の輪における自己の非進化の恐怖へと導いた。そして、新生の一神教に発展したかもしれないものにしかと結びつけられたかもしれない悪影響を及ぼすすべての信仰のうち、デッカン高原から来たこの輪廻の信仰—魂の生まれ変わりの教理—ほど無意味なものはなかった。繰り返される輪廻の

うんざりさせる単調な循環のこの信仰は、初期のヴェーダ信仰の一部であった死に際してのその救出と精神的前進を見つけるかねての望みを窮する死すべき者から奪い去った。

94:2.4 (1029.2) 哲学的に衰弱させるこの教えの後には、全創造の大霊である婆羅門との絶対的結合からくる普遍的な休息と平和に浸りきり、自己からの永遠の脱出の教理の考案が、すぐに続いた。死すべき者の願望と人間の野心は、事実上奪い去られ、実際に破壊された。2,000年以上の間、インドのより良い心の者は、すべての欲望から逃れようとして、その結果、実際には多くのヒンドゥー民族の魂を束縛した後の集団礼拝と教えの入り口への扉を大きく開いた。全文明の中のヴェーダのアーリア人は、シャレイム福音の拒絶のために最も苛酷な代償を払った。

94:2.5 (1029.3) 階級制度だけではアーリア人の宗教-文化体制を永続させることはできず、またデッカン高原の粗悪な宗教が北部に充満すると、失意と絶望の時代が展開した。命を取らない礼拝集団がうまれたのは、これらの暗い

日々のことであり、それは、以来ずっと持続している。新しい礼拝集団の多くは、達成可能な救済は、助力なしの人間各自の努力によってのみ起こり得ると主張し、実のところは無神論であった。しかし、この不幸なすべての哲学の大半には、メルキゼデクの教えと、さらにはアダームの教えの名残りさえ辿ることができる。

94:2.6 (1029.4) これらはヒンドゥー信仰、すなわち婆羅門とウパニシャッドの後の経典の編集時代であった。婆羅門教の司祭職は、一柱の神との個人的な信仰経験を貫く個人的宗教の教えを拒絶し、またデッカン高原からの品性を落とし弱体化させる集団礼拝そして教義の氾濫で、すなわち擬人化と転生で汚染されるようになったことから、汚損する信仰に対して激しい反応を経験した。真の現実を求めて見つける断固たる努力があった。婆羅門教徒は、インド人の神格の概念の非擬人化に着手したが、そうするに当たり神の概念を非人格化するという悲しむべき誤りを犯し、また、楽園なる父の崇高で精神的な理想ではなく、あらゆるものを含む絶対者についての距離のある、しかも最終的には極めて抽象的な考えに終わった。

94:2.7 (1029.5) その努力において婆羅門階層は、メルキゼデクの一神を拒絶し、今度は結局は婆羅門、その不幸な日から20世紀までインドにおける精神生活を無力にし、横たえさせたままにしていた非個人的で無力な婆羅門についての仮説、不明瞭で実体のない哲学上の自己に終わった。

94:2.8 (1029.6) 仏教がインドで発祥したのは、ウパニシャッドの執筆時代のことであった。しかし、その1,000年の成功にもかかわらず、それは、後のヒンドゥー教に対抗できなかった。より高度の道徳にもかかわらず、神についてのその早期の描写は、ヒンドゥー教のそれよりもはるかに明確ではなく、それが、より劣性の、人格の神を提供した。仏教は、宇宙の最高神としてのアラーの明確な概念をもつ好戦的なイスラム教の猛攻撃の前に北インドで最終的に崩れた。

3. 婆羅門の哲学

94:3.1 (1030.1) 婆羅門教の最高段階は、とても宗教とは言えなかったが、実にそれは、人間の心が哲学と形而上の領域における最も崇高な広がりの1つであった。究極の現実

を発見し始めてからは、インド人の心は、宗教に不可欠の二元的概念、すなわち、宇宙の全生物の宇宙なる父の存在、加えて父が完全であるように完全であれと命じた永遠なる父に到達しようとする他ならぬこれらの生物の宇宙における上昇経験の事実、を除く神学のほとんどあらゆる局面に考えを巡らすまで止むことはなかった。

94:3.2 (1030.2) 婆羅門の概念において当時の心は、広く普及する何らかの絶対者についての考えをしっかりと掴んだ。というのも、この公理は、創造的なエネルギーと宇宙反応として同一視していたので。婆羅門は、すべての定義を超えていると、すべての有限の属性の連鎖的な否定によってのみ理解することができると思われた。それは、確実に存在への、絶対的、さらには無限の信仰であったが、この概念は、主として人格属性に欠けており、したがって個々の宗教家による経験が可能ではなかった。

94:3.3 (1030.3) 婆羅門-ナーラーヤナは、絶対者、無限のそれはある、潜在的な宇宙の根本的かつ創造的な力、静止状態で存在し全ての永遠を通じ可能性のある普遍なる自己、として生みだされた。当時の哲学者が、神の概念におけ

る次なる前進を果たすことができ、婆羅門を結合的で想像的であるものとして、つまり創造され進展する存在による近づきやすい人格として受け入れることができていたならば、そのような教えは、神の総体機能の最初の5段階を包含したことであろうから、ユランチアで最も高度な神の描写になっていたかもしれないし、事によると残る2段階を思い描いていたかもしれない。

94:3.4 (1030.4) 生物の全存在の要約の全体としての宇宙の一大霊の特定の局面における概念は、インドの哲学者を崇高なる者の真実へと導いたが、彼らが、婆羅門-ナーラーヤナの理論的な一神教の目標到達への何らかの理に適う、あるいは合理的な個人の方法を発展させることができなかったので、この真実は全く役に立たなかった。

94:3.5 (1030.5) 連続性の因果関係についての業の原則は、崇高者の神格臨場におけるすべての時空間の行為の影響統合の真実に、再び、非常に近いのである。しかしこの原則は、決して個々の宗教家による神格への個人の調和の到達に対して備えることはなく、ただ宇宙の大霊によるすべての人格の最終的な取り込みのためだけに備えた。

94:3.6 (1030.6) 婆羅門教の哲学は、内在する思考調整者の認識にもまた非常に接近したものの、結果的に真実の誤解を通して歪められた。宇宙なるもののこの宿り以外に人間の個性はないという信仰によって完全に損なわれてこなかったとしたならば、魂は婆羅門の宿りであるという教えは、先進的宗教の序開きとなっていたであろうに。

94:3.7 (1030.7) インドの神学者は、大霊との自己の魂の融合の教義において、つまり、何か人間らしいもの、何か新しく独特であるもの、何か人の意志と神の意志の結合から生まれるもののために備えなかった。婆羅門への魂の復帰の教えは、密接に宇宙なる父の胸への調整者の復帰の真実に平行してはいるが、生き残る調整者、すなわち人間の人格のモロンチア対応者とは何か異なるものがある。そして、この重要な概念が、婆羅門哲学には致命的にも欠如していた。

94:3.8 (1031.1) 婆羅門哲学は、宇宙の事実の多くに近づき、幾多の宇宙の真理に迫ったが、あまりにも頻繁に絶対的、超越的、有限的のような現実のいくつかの段階の見分けができない誤りに陥った。それは、絶対段階における有

限-錯覚が、有限段階の絶対的実在であるかもしれないことを考慮に入れることを怠ってきた。また、それは、進化する生物の神との限られた経験から楽園の父との永遠なる息子の限りのない経験への全段階で個人的に接触可能な宇宙なる父の不可欠の人格への何の考慮もしなかった。

4. ヒンドゥー教

94:4.1 (1031.2) インドでの何世紀かの経過につれ、庶民は、メルキゼデク宣教師の教えにより変わり、後の婆羅門聖職により具体化されたヴェーダの古代儀式に多少なりとも立ち返った。世界の宗教のなかで最古の、しかも最も国際的なこれは、仏教とジャイナ教に呼応し、また後に登場するイスラム教とキリスト教の影響に一層の変化を被った。しかし、イエスの教えの到着時までには、すでに西方化し過ぎ、それは、「白人の宗教」になってしまい、それ故ヒンドゥー教徒の心には奇妙で無縁となった。

94:4.2 (1031.3) ヒンドゥー教神学は、現在のところ、神格と神性について下降する4段階を描く。

94:4.3 (1031.4) 1. 婆羅門、絶対的なもの、無限のもの、それはある。

94:4.4 (1031.5) 2. 三神一体、ヒンドゥー教の究極の三位一体。このつながりにおいて、第1の構成者である梵天は、婆羅門—無限—からの自己創造であると考えられた梵天は、汎神論的無限なるものとの近接する同一性がなければ、宇宙なる父の概念の基礎を構成することができた。梵天は、運命とも同一視されている。

94:4.5 (1031.6) 第2と第3の構成者、シヴァとヴィシュヌへの崇拝は、キリスト後の最初の1,000年の間に起こった。シヴァは、生と死の主、肥沃の神、破壊の支配者である。ヴィシュヌは、定期的に人間の姿に化身するという信仰のために非常に人気がある。このようにして、ヴィシュヌは、インド人の創造力の中で現実となり、生きている。シヴァとヴィシュヌはそれぞれに、一部の人々によりすべての上に最高であると見なされている。

94:4.6 (1031.7) 3. ヴェーダの神とヴェーダの後の神。アグニ、インドラ、ソマのようなアーリア人の古代の神の多くが、三神一体の3名の構成者の補助として持続してき

た。多数の付加的な神が、ヴェーダ系インドの初期からずっと生まれてきており、これらは、またヒンドゥーの神々へ取り込まれてきた。

94:4.7 (1031.8) 4. 半神半人、。人、半神、英雄、幽霊、悪霊、妖精、怪物、鬼、後の礼拝集団の聖人。

94:4.8 (1031.9) ヒンドゥー教は、長らくインドの人々に生気を与えられないでいたが、他方では許容性のある宗教であった。その大きな強みは、ユランチアに出現する最も順応性のある、また明確な形のない宗教であるという事実にある。それは、ほとんど無制限の変化が可能であり、また知的な婆羅門についての高尚かつ半一神教的思索から、卑しく意気消沈の無知な信者階級の途方もない物神崇拝と原始の礼拝集団の習慣への柔軟性のある異例の調整範囲を持っている。

94:4.9 (1032.1) ヒンドゥー教は、それが本質的にはインドの基本的社会機構の不可欠部分であるが故に存続してきた。それには、妨害されたり、破壊可能な大きな階層がない。それは、人々の生活様式に組成されている。それは、変化する状況に対し他のすべての礼拝集団を凌ぐ適

応性があり、また他の多くの宗教にも、ヴィシュヌの再来であると主張される釈迦牟尼仏陀とキリスト自身に対してさえも許容性のある受容態度を見せている。

94:4.10 (1032.2) 今日、インドは、イエスの福音—神の父権と全人類の息子性とそれに伴う兄弟関係、そしてそれは、愛ある援助と社会奉仕において個人的に実現されるもの—の描写のための大きな必要がある。インドには哲学的な枠組みが実在し、礼拝集団の構造が存在している。唯一必要とされるのものは、マイケルの生命の贈与を白人の宗教にする傾向にあった西洋の教義と教理が取り除かれた状態の人の息子の本来の福音に描写されている動的な愛の生気を吹き込む火花である。

5. 中国の真実のための戦い

94:5.1 (1032.3) シャレイム宣教師は、アジアを通過し、いと高き神と信仰による救済の教理を広げつつ、横切っていく様々な国の哲学上、宗教上の考えを多く吸収した。しかし、メルキゼデクとその後継者達に任命された教師達は、その責任を怠らなかった。ユーラシア大陸の総ての民族に浸透し、また中国に到着したのは紀元前の第2千

年紀の中頃であった。シー　フチュにおいては、シャレイム人が、100年以上の間、その本部を維持し、そこで黄色人種の全領域で教える中国人教師を養成した。

94:5.2 (1032.4) 今日その名をもつものより大いに異なる宗教である道教の型が中国で最も早期に生まれたのは、この教育の必然的結果であった。初期の、あるいは原始の道教は、次の要因の複合物であった。

94:5.3 (1032.5) 1. シングラントンの残存する教え。天帝、すなわち天の神の概念に存続した。シングラントンの時代の中国の人々は、実際には一神教になった。後に天の霊、宇宙の支配者として知られる一つの真理への崇拝に全力を注いだ。知らぬ間にその後の世紀に多くの下位の神と霊がそれらの宗教に入り込みはしたものの、黄色人種は、神格のこの初期の概念を決して完全に失ったというわけではなかった。

94:5.4 (1032.6) 2. 人間の信仰に応え賛意を人類に授与するいと高き創造者の神格のシャレイム宗教。しかし、メルキゼデク宣教師が、黄色人種の地に進入する頃には、彼らの本来の知らせが、マキヴェンタの時代のシャレイムの単

純な教理からかなり変えられたというのは、あまりに本当である。

94:5.5 (1032.7) 3. すべての悪から逃がれる願望に結びつけられたインド哲学者の婆羅門絶対者の概念。シャレイム宗教の東方への普及における恐らく最大異質の影響は、ヴェーダ信仰のインド人教師によって発揮された。その教師達は、シャレイムの救世者の考えへに婆羅門—絶対者—に関する概念を注入した。

94:5.6 (1033.1) この複合信仰は、宗教-哲学的な思考に潜在的影響として黄色人種と茶色人種の領土中に広がった。日本においてこの原始-道教は、神道として知られており、パレスチナのシャレイムからははるか遠方のこの国では、国民は、人類によって神という名前が忘れられないように地球に住んだマキヴェンタ・メルキゼデクの肉体化について学んだ。

94:5.7 (1033.2) 中国におけるこれらの信仰のすべては、後に先祖崇拝の絶えず成長集団礼拝と区別がつかず、混同された。しかし、シングラントンの時代以来の中国人は、聖職者の政略の無力な奴隷に陥ることは決してなかった。

黄色人種は、他の人種が恐れたほどには死者の幽霊を恐れさえせず、神への無気力の恐怖からある程度の自由を獲得する最初の者であったことから、野蛮な束縛から秩序正しい文明へと最初に浮上する人々であった。中国は、聖職者からの早期の解放を超える進歩がなく敗北した。ほぼ同様に悲惨な誤りに、つまり先祖崇拝に陥った。

94:5.8 (1033.3) だが、シャレイム人は、無駄骨を折ることはなかった。6世紀の中国の偉大な哲学者等が彼らの教えを確立したのは、シャレイム人の福音を土台にしてのことであった。老子と孔子の時代の道徳的状況と精神的感情は、シャレイム宣教師の初期の教えから育った。

6. 老子と孔子

94:6.1 (1033.4) マイケルの到着のおよそ600年前、はるか以前に肉体を離れたメルキゼデクは、地球での自分の教えの純粋さが、古いユランチアの信仰への一般的な吸収により過度に危険にさらされていると思った。マイケルの先触れとしての自分の任務は、しばらくの間失敗の危険にさらされているかのようであった。紀元前6世紀に、ユ

ランチアは、惑星の監督者さえすべてを理解していない精神的作用の異例の調整を介し多面的な宗教上の真実の最も珍しい提示を目のあたりにした。シャレイム福音は、人間の教師数人の働きにより言い換えられ、新しい生命を与えられ、次には、それが提示されたままに、多くが、この論文の時代へと持続した。

94:6.2 (1033.5) この特異な世紀の精神的進歩は、文明世界全体にわたる偉大な宗教、道徳、哲学の教師によって特徴づけられた。中国において傑出の２人の教師は、老子と孔子であった。

94:6.3 (1033.6) 老子が、道とは、全創造の第一原因なるものであると宣言したとき、直接シャレイム伝統の概念を踏まえていた。老子は、精神的に洞察力の優れた人であった。老子は、「人の永遠の定められた目標は、道との、崇高なる神と宇宙なる王との永続的結合」であると教えた。根本的因果関係についての老子の理解は、最も明敏であった。次のように著した。「和合は、絶対道から起こり、和合から宇宙の二元性が現れ、そしてそのような二元性から三位一体が誕生し、また、三位一体は、すべ

ての現実の第一根源である。」「総ての現実は、常に宇宙の可能性と現実の間の均衡をとっており、そして、これらは、神性の霊により永遠に調和を保たれている。」

94:6.4 (1033.7) 老子はまた、善をもって悪に報いる最も初期の教理の提示の一つをした。「善は善をきたすが、本当に良い者には、悪もまた善をきたす。」

94:6.5 (1033.8) かれは、創造者への被創造者の帰還を教え、死は、被創造者のこの人格の帰宅に似ているが、宇宙の可能性からの人格の出現としての生活について描写した。老子の真の信仰の概念は、独特であり、彼もまたそれを「小さい子供の態度」にたとえた。

94:6.6 (1034.1) 神の永遠の目的に関する老子の理解は明確であり、「絶対神格は戦わずしていつも勝利を得ている。人類に強いることはなく常に人類の真の願望に応じる準備ができている。神の意志は、忍耐において永遠であり、その表現の必然性において永遠である。」と言った。また、本物の宗教家については、受け取るよりも与えることがより喜ばしいという真実を言い表した。「善人は、それが、真実の実現であるので自分のために真実を繋ぎ

止めようとはせず、むしろこれらの富を仲間に授与しようとする。絶対神の意志は、常にためになり、決して破壊しない。本物の信者の目的は、強要することではなく常に行動することである。」

94:6.7 (1034.2) 無抵抗の教えと行為と強制の間の区別は、後に「何も見ず、何もせず、何も考えない」という信仰に曲解された。しかし老子は、そのような誤りを決して教えなかったにもかかわらず、その無抵抗の提示は、中国民族の平和贔屓のさらなる発展要因であった。

94:6.8 (1034.3) だが、20世紀のユランチアの人気のある道教は、それを明らかにした通りの真実を教えた昔の哲学者の高尚な情操と宇宙概念との共通点はあまりない。その真実とは、絶対神に対するその信仰は、世界を作り変えるその神性エネルギーの源であるということ、そして、それにより道、つまり永遠なる神格と宇宙の絶対の創造者との精神的結合へと人が上昇するということ。

94:6.9 (1034.4) 孔子(孔夫子)は、6世紀の中国の老子より若い同世代人であった。孔子は、黄色人種の長い歴史のより良い道徳的伝統を自身の教理の基盤とし、シャレイム宣教

師の依然として残っている伝統にいくらかの影響を受けた。その主要な仕事は、古代の哲学者の名言の編集にあった。生存中は拒絶された教師であったが、その文章と教えは、以来ずっと、中国と日本においてかなりの影響を及ぼした。孔子は、魔法に代わる道徳を導入した点でシャーマンのための新たな一歩を示した。しかし、かれは、あまりにも立派に構築し過ぎた。社会体制から新しい呪物を作り出し、また、まだこの著述時点での中国人に敬われている先祖の行いに対する敬意を確立した。

94:6.10 (1034.5) 道徳についての孔子の説教は、地道は、天道の歪んだ影であるという理論、この世の文明の真の型は、天の永遠の秩序の正反射であるという理論で述べられた。儒教における神に関する潜在的概念は、天の道、つまり宇宙の型に置かれた重点にほぼ完全に入っていた。

94:6.11 (1034.6) 東洋においてはごく一部を除いて、老子の教えが失われたが、孔子の著作は、以来ずっと、ユランチアのほとんど3分の1の文化の道徳的な骨組みの基礎を構成してきた。孔子の教訓は、過去の最良のものを永続させつつ、大いに崇められたそれらの成就をもたらしたまさ

しくその中国人の究明精神にいくらか反目していた。秦の始皇帝の帝国の努力と墨子の教えの双方は、これらの教理の影響において不戦勝に終わった。墨子は、倫理的義務に関してではなく、神の愛に関して築かれるる兄弟愛を宣言した。かれは、新しい真実のために古代の探究を再燃させようとしたが、その教えは、孔子の弟子達の強健な反対の前に失敗した。

94:6.12 (1034.7) 多くの他の精神的、道徳的教師と同様、孔子と老子の両者は、道教への信仰の衰退と堕落と、そしてインドからの仏教宣教師の到来との間に介在する中国の精神的に暗い時代の彼らの追随者に最終的には神聖視された。精神的に退廃の世紀に黄色人種の宗教は、悪魔、竜、および悪霊すべて、人間の啓発的でない心からの戻りくる恐怖を予示するすべて、が群がるなかで哀れな神学へと堕落した。そして先進的な宗教により一度は人間社会の先頭にあった中国は、その後、個々の人間だけではなく、時空間の進化の惑星における文化と社会の進歩を特徴づける錯綜し複雑な文明も、真の進歩に不可欠であるその神-意識の真の進行軌道における一時的な進歩の失敗のゆえに後退した。

7. ゴータマ・シッダッタ

94:7.1 (1035.1) 中国の老子と孔子の同時期の人が、もう一人の真実の偉大な教師がインドに現れた。釈迦は、紀元前6世紀にネパールのインド北部地域で生まれた。その信奉者達は、ゴータマは、途方もなく裕福な支配者の息子であると後に明らかにさせたが、実は、かれは、黙認により南ヒマラヤ山脈の人里離れた小さな山間の谷を統治した下級指揮官の継承者と目された人であった。

94:7.2 (1035.2) ゴータマは、６年間の無駄なヨーガの修行後、その理論を仏教哲学へとまとめた。シッダッタは、高まりを見せる階級制度への決然の、だが効果のない戦いをした。この若い予言者である王子には、当時の人々の心を動かすような高潔な誠意と類稀な無私の姿勢が備わっていた。かれは、肉体的苦悩と個人の苦痛の経験による救済を求める修行をおとしめた。かれは、自分の福音を世界中に伝えるよう追随者に熱心に説いた。

94:7.3 (1035.3) インドの混乱と極端な集団礼拝の実践の真っただ中、ゴータマのより健全で節度ある教えは、爽やかな安堵をもたらした。神、聖職者、犠牲を非難はしたもの

の、彼もまた一宇宙的の人格に気づけなかった。ゴータマは、もちろん、個々の人間の魂の存在を信じることなく、霊魂輪廻の古くからの信仰に対して勇敢な戦いをした。かれは、人が大いなる宇宙において安心し、くつろいだ気分になるように人を恐怖から救い出すための堂々たる努力はしたが、上昇する死すべき者の真の、崇高な家—楽園—への道、そして永遠の存在の広がりゆく奉仕へ人々を導くことができなかった。

94:7.4 (1035.4) ゴータマは、真の予言者であったし、もし隠者ゴダヅの指示に心を留めていたならば、信仰による救済に関するシャレイム福音の復活の閃きにより全インドを喚起させていたかもしれない。ゴダヅは、メルキゼデク宣教師の伝統を一度も失ったことのない家族の子孫の出であった。

94:7.5 (1035.5) ゴータマは、ワーラーナシーに自分の学校を設立し、一人の生徒のバウタンが、自分の教師にアブラーハームとのメルキゼデクの盟約に関しシャレイム宣教師の伝統について伝えたのはその2年目の年であった。シッダールタには宇宙なる父のまことに明確な概念はなか

ったものの、信仰による救済への前進姿勢をとった—単純な信仰。かれは、追随者の前でそのように表明し、それからインドの人々に「無償の救済の吉報。すべての者、身分の高い者と低い者は、正義と公正への信仰により至福に達することができるということ」を宣言する60人ずつの学生集団の派遣を開始した。

94:7.6 (1035.6) ゴータマの妻は夫の福音を信じ、尼僧会の創設者でもあった。息子は、彼の後継者になり、その集団礼拝を大いに広げた。息子は、信仰による救済の新しい考えについて理解したが、単なる信仰による神の恩恵のシャレイム福音に関しては後年に心が揺らぎ、また老年のその辞世の言葉は、「自身の救済を実現せよ」ということであった。

94:7.7 (1036.1) ゴータマの普遍的救済に関する福音は、最良の状態で公布されたときは、犠牲、拷問、儀式、聖職者に束縛されることなく、その時代にしては革新的、かつ驚くべきな教理であった。そして驚いたことには、それは、シャレイム福音の復活状態に近づいた。何百万もの絶望的な魂に救援をもたらし、後の世紀のその奇怪なこ

じつけにもかかわらず、それは、何百万人もの人間の望みとしてまだ存続している。

94:7.8 (1036.2) シッダールタは、彼の名のつく近代の礼拝集団の間で生き延びた真実よりもはるかに多くの真実を教えた。現代の仏教は、キリスト教がナザレのイエスの教えでないのと同様に釈迦の教えではない。

8. 仏教徒の信仰

94:8.1 (1036.3) 仏教徒になるには、人は単に加護を暗唱することによって信仰を公表した。「私は仏陀に避難する。私は教理に避難する。私は同胞愛に避難する。」

94:8.2 (1036.4) 仏教は、神話ではなく歴史的人物に起源を取った。ゴータマの信奉者は、ゴータマを主人、あるいは師を意味するサスタと呼んだ。かれは、自分自身とその教えのいずれに対しても超人的主張をしなかったが、弟子達は、悟りに達した者、仏陀と早くから呼び始めた。後には、釈迦牟尼仏陀と。

94:8.3 (1036.5) ゴータマの最初の福音は、四諦に基づいた。

94:8.4 (1036.6) 1. 苦諦

94:8.5 (1036.7) 2. 集諦

94:8.6 (1036.8) 3. 滅諦

94:8.7 (1036.9) 4. 道諦

94:8.8 (1036.10) 苦しみとそこからの逃避の教理に密接につながるものは、八正道、すなわち、正見、正思惟、正葉、正業、正命、正精進、正念、正定の哲学であった。ゴータマの狙いは、苦しみからの逃避におけるすべての努力、願望、愛情を破壊する試みではなかった。むしろ、俗世の目標と物質的な目的に向けてのすべての望みと切望を完全に押え込む無用さを人間の心に描かせるよう考案された教えであった。それは、人間の仲間の愛は、回避されるべきであるというよりはむしろ、真の信者は、この物質界を超越した永遠の未来の現実を見るべきであるということであった。

94:8.9 (1036.11) ゴータマの説教の道徳的戒律は、全部で5条であった。

94:8.10 (1036.12) 1. 殺さない。

94:8.11 (1036.13) 2. 盗まない。

94:8.12 (1036.14) 3. 不貞をはたらかない。

94:8.13 (1036.15) 4. 嘘をつかない。

94:8.14 (1036.16) 5. 酒を飲まない。

94:8.15 (1036.17) いくつかの付加の、あるいは補助的戒律があり、その遵守は信者にとり任意であった。

94:8.16 (1036.18) シッダールタは、人間の人格の不死をほとんど信じなかった。その哲学は、一種の機能的連続性を提供したに過ぎなかった。涅槃の教理に何を盛り込むかを決して明確には定義しなかった。生活で理論的に経験できるという事実は、完全な全滅の状態としては見られないということを示すであろう。それは、人を物質界に束縛するすべての足枷が壊される最高の悟りと崇高な至福の状態を含意した。人間の生活の願望からくる自由と肉体化の再度の経験というすべての危険からの救出があった。

94:8.17 (1037.1) ゴータマの当初の教えによると、神の助けは別として、救済は、人間の努力により達成される。救済する信仰あるいは超自然の力への祈りの余地はない。ゴー

タマは、インドの迷信を最小にする試みにおいて人に魔術的救済のあからさまな要求を回避させる努力をした。この努力において、かれは、その後継者らが、彼の教えを曲解し、すべての人間の到達への努力は嫌気のさす、また苦痛を与えると宣言する可能性を広げたままにした。その追随者らは、最高の幸福は、価値ある目標の知的で意欲的な追求に関連しているということ、またそのような成果が、宇宙的自己実現で本当の進歩を構成するという事実を見落とした。

94:8.18 (1037.2) シッダールタの教えの大いなる真実は、絶対正義の宇宙を表明するものであった。かれは、これまでに人が創案した無神の最良の哲学を教えた。それは、理想的な人間至上主義であり、その上、迷信、魔術儀式、幽霊あるいは悪霊の恐怖へのすべての根拠を最も効果的に取り除いた。

94:8.19 (1037.3) 本来の仏教の福音の大きな弱点は、寡欲な社会奉仕の宗教を生産しなかったということである。仏教の兄弟愛は、長い間、信者の友愛ではなく、むしろ師と門弟の共同体であった。ゴータマは金の受け取りを禁じ、

それによって階級性傾向への促進を防ごうとした。ゴータマ自身は、非常に社会的であった。その人生は、まことに、その説教よりもはるかにすばらしかった。

9. 仏教の普及

94:9.1 (1037.4) 仏教は、仏陀、悟りに達した者への信仰による救済を提供したから繁栄した。それは、東アジア全体で見つけうる他のいかなる宗教体制よりも最もメルキゼデクの真実を代表していた。しかし、仏教は、低い階級君主のアソーカが、自己保護の意味で擁護するまで宗教としては広まらず、エジプトのイフナトンに続いてアソーカ王は、メルキゼデクとマイケルの間にいた最も顕著な民間支配者の一人であった。アソーカ王は、仏教宣教師の宣伝活動により偉大なインド帝国を樹立した。25年の1期間、全世界の最遠の辺境地帯に1万7千人以上の宣教師を養成して送り出した。1世代で、仏教を半分の世界の優位な宗教にした。それは、やがて、チベット、カシミール、セイロン、ビルマ、ジャワ、タイ、韓国、中国、および日本で確立されるようになった。そして、一般的に言って、それは、それが取って代わったり、高められたものよりも大いに優れた宗教であった。

94:9.2 (1037.5) インドのその故国から全アジアへの仏教の普及は、誠実な宗教家の精神的献身と伝道持続の感動的な物語の中の一つである。ゴータマの福音教師は、全アジア大陸における使命を果たし、全民族に信仰の趣旨を持たらすに当たり、陸路の隊商道路の危険に勇敢に立ち向かうばかりでなく、シナ海の危険にも直面した。しかし、この仏教は、もはやゴータマの容易な教理ではなかった。それは、ゴータマを神にする奇跡を加えた福音であった。そして、仏教が、インドのその高地の故郷から遠くへ広まれば広まるほど、ゴータマの教えとはますます異なり、ますます取って代わった宗教のようになった。

94:9.3 (1038.1) 後に、仏教は、中国では道教、日本では神道、チベットではキリスト教の影響を相当にうけた。1,000年後、仏教は、インドでは、単に萎み、絶えた。それは、婆羅門化され、後には情けなくイスラム教に明け渡され、一方、東洋の残りのほぼ全体にわたり、それは、釈迦が決して承認しようとしなかった儀式へと衰退した。

94:9.4 (1038.2) シッダールタの教えの南方の原理主義は、セイロン、ビルマ、およびインドシナ半島で存続した。これは、初期の、つまりは反社会的教理にしがみつく小乗仏教の分派である。

94:9.5 (1038.3) しかし、インドでの崩壊前にさえ、ゴータマ信奉者の中国人と北部インドの集団は、小乗仏教、または「小道」に固執する南の純粋主義者とは対照的に救済への「大道」の大乗仏教の教えの動きを始めた。これらの大乗仏教は、仏教の教理に固有の社会的制限からは解き放たれ、以来ずっとこの北方仏教は、中国と日本で発展し続けた。

94:9.6 (1038.4) それが支持者の最高の道徳的な価値の多くの保存に成功していることからり、仏教は、今日、生きており、発達する宗教である。それは、平静と自制の促進、平穏と幸福の増大、悲しみと哀悼の防止のために多くのことをする。この哲学を信じる人々は、信じない多くの者よりもより良い生活を送る。

10. チベットの宗教

94:10.1 (1038.5) 仏教、ヒンドゥー教、道教、キリスト教に結合されるメルキゼデクの教えの最も奇妙な関連性が、チベットに見られるかもしれない。仏教の伝道師が、チベットに入ったとき、初期のキリスト教宣教師が、ヨーロッパの北方部族の中で見つけたそれと非常に似た原始の野蛮の状態に遭遇した。

94:10.2 (1038.6) これらの単純なチベット人は、自分達の古代の魔術と護符を完全には諦めなかった。現代のチベットの儀式の宗教上の行事についての考査は、鈴、読経、線香、行列、念珠、像、護符、絵画、聖水、派手な礼服、複雑な合唱をとりいれた入念な儀式を行う剃髪の聖職者の大きくなり過ぎた兄弟愛を明らかにする。彼らには、柔軟性のない教義、明確な主義、神秘的儀式、および特別な断食がある。その階層は、僧、尼僧、修道院長、それにダライ・ラマを包含している。かれらは、天使、聖者、聖母と神に祈る。かれらは、告白を慣行し、地獄、浄罪を信じる。その僧院は大規模で、大聖堂は壮麗である。かれらは、神聖な儀式の無限の際限のない反復を続け、またそのような儀式が救済を与えると信じている。祈りは輪転に固定されており、そしてかれらは、その回

転と共に誓願が効果をもたらすようになると信じる。とても多くの宗教からのこれほど多くの遵守は、現代の他の民族の間に見い出すことはできない。そして、そのような度重なる礼拝式が、過度に厄介で耐えられないほど重荷となるのは必然である。

94:10.3 (1038.7) チベット人は、イエスの福音の簡単な教えを除いては、すべての主な世界宗教の何かを持っている。神との息子関係、人との兄弟愛、および永遠の宇宙の中の絶えず上昇する市民の資格。

11. 仏教徒の哲学

94:11.1 (1038.8) 仏教は、キリスト後の第1千年紀に中国に入り、それは、黄色人種の宗教習慣によく収まった。彼らが持っていた先祖崇拝において、かれらは、死者に長い間祈った。今また、彼らは、死者達に祈ることができた。仏教は、すぐ、自壊する道教の残存する儀式主義的習慣と混合した。寺院でのその崇拝と明確な宗教儀式とのこの新しい合成宗教は、やがて中国、韓国、日本の諸国民に一般的に受け入れられる集団礼拝となった。

94:11.2 (1039.1) ゴータマの追随者が、彼を神の存在にするために礼拝集団の伝統と教えを正道から逸らす後まで、仏教が、世界に広げられなかったということは、ある意味で不幸ではあるが、それでもなお、数多くの奇跡で装飾された彼の人生のこの神話は、仏教思想の北方の、すなわち大乗福音の聴取者に非常に魅力的であると分かった。

94:11.3 (1039.2) 後の追随者の幾人かは、釈迦牟尼仏陀の霊は、生ける仏陀として定期的に地球に戻ると教え、その結果、仏陀の像、寺院、儀式、および「生ける仏陀」の替え玉の無期の永続化をもたらした。このようにして、ついには抗議を表明するインドの偉大な宗教家は、ゴータマが大変不敵に戦ったもの、そして大変勇敢に糾弾した行事的慣習や儀式的な呪文に束縛された。

94:11.4 (1039.3) 仏教哲学における大きな進歩は、全真実の関連性の理解から成った。仏教徒は、この仮説手段を通して自身の経典と他の多くのものとの違いはもとより自身の宗教の経典の中の意見の相違の折り合いをつけたり、また関連させることができた。小さい真実は小さい心のた

めに、大きい心は大きい真実のためのものであるということが教えられた。

94:11.5 (1039.4) この哲学もまた、仏陀(神性)の特質がすべての人間に宿るということ、人間は、自身の努力で、この内部の神性の実現に達することができるということを保持した。そしてこの教えは、かつてユランチアの宗教により作られた内在する調整者の真実の最も明確な提示の1つである。

94:11.6 (1039.5) シッダールタの本来の福音の大きな限界は、かれの追随者が解釈したように、自己を客観的現実から分離する手法によって人間の本質のすべての制限から人間の自己の完全な解放を試みたということであった。宇宙の自己実現は、宇宙現実との、そして空間により制限され時間により条件づけられるエネルギー、心、精神の限りある宇宙との同一化によって生まれる。

94:11.7 (1039.6) しかし、仏教の儀式と外向きの遵守は、それが旅をした土地のそれらで著しく汚染されたが、この退廃は、この考えと信仰の体系を抱いていた偉大な思想家の哲学的人生においては、時として事実に当てはまらなか

った。2千年以上も、アジアの優れた人々の多くは、絶対的真実と絶対者の真実を確かめるという問題に集中している。

94:11.8 (1039.7) 絶対者についての高度の概念の発展は、多くの思考回路を経て、また遠回りの論理的思考の道筋により成し遂げられた。無限についてのこの主義の上向きの登攀は、ヘブライ神学における神の概念ほどには明確に定義されなかった。それにもかかわらず、仏教徒の心が宇宙の第一根源を思い描く道に達し、留まり、通過する一定の広い段階があった。

94:11.9 (1039.8) 1. ゴータマの伝説。概念の根底には、インドの予言者である王子のシッダールタの生涯と教えについての史実があった。この伝説は、何百年もにわたり、しかもアジアの広い土地を横断する間に悟りに達した者としてのゴータマの構想状態を上回る程度にまで神話へと成長した。そして、さらなる特性を呈し始めた。

94:11.10 (1040.1) 2. 多くの仏陀。もしゴータマがインドの諸国民に来たのであれば、次には、遠い過去と遠い将来において、疑いようもなく、全人類は、真実の他の教師達に祝

福されていたに違いないと結論づけられた。これは、多くの仏陀が存在するという教え、無制限で無限の数、誰もが仏陀になることを望むことさえできるという—仏陀の神性に達すること—教えをもたらした。

94:11.11 (1040.2) 3. 絶対の仏陀。仏陀の数が無限に近づくまでには、当時の人々にとりこの扱いにくい概念を再統一する必要に迫られた。それに対応して、総ての仏陀は、多少のより高い本質の顕現、無限の、絶対の存在である永遠なるもの、すべての現実の若干の絶対源以外の何ものでもないということが、教えられ始めた。ここから、仏教の神の概念は、その最高の型では、釈迦の人間の身体から分離するようになり、それを皮紐につないできた擬人的制限から解き放す。永遠なる仏陀のこの終局的な概念は、絶対者として、時として無限の私はある、としてさえ十分に同一視することができる。

94:11.12 (1040.3) 絶対神のこの考えは、決してアジア民族の大きな支持を受けていない傍らで、これらの国々の識者が、彼らの哲学を統一し、彼らの宇宙を調和させることを可能にした。仏陀絶対の概念は、時に疑似個人的であ

り、時に完全に非個人的で—無限の創造の力でさえ—ある。そのような概念は、哲学には有用であるが、宗教発展には重要ではない。擬人観のヤハウェでさえ、仏教か婆羅門教の無限に隔たった絶対よりも大きい宗教価値がある。

94:11.13 (1040.4) 時として絶対者は、無限の私はあるの中にあるとさえ考えられた。しかし、これらの推測は、神への信仰が、神の恩恵と永遠の生存を保証するという約束の言葉を聞くこと、シャレイムの単純な福音を聞くことを切望する空腹の大衆への冷え冷えとした安らぎであった。

12. 仏教思想の神の概念

94:12.1 (1040.5) 仏教の宇宙論の大きな弱点は、2要素であった。インドと中国の多くの迷信によるその汚染、そしてまず悟りに達した者、次には永遠なる仏陀としてのゴータマのその昇華。ちょうどキリスト教が、多くの誤った人間の哲学の併合に苦しんだように、同様に仏教は、その人間の生まれつきの痣をもつ。しかしゴータマの教えは、過去2,500年間発展し続けた。悟りに達した仏教徒

にとっての仏陀の概念は、開眼のキリスト教徒にとってのエホバの概念が、ホレーブの悪霊と同じではないのと同様に、ゴータマの人間の人格ではない。古い命名法の感傷的な保持と相まった専門用語の不足は、宗教的概念の進化の性格な意味の把握に関する怠慢をしばしば引き起こす。

94:12.2 (1040.6) 神の概念は、絶対者に比しての、徐々に仏教に現れ始めた。その源は、小道と大道の信奉者のこの分化の初期に遡ってある。神と絶対の二元的概念が最終的に熟したのは、仏教の後者の分割の中であった。一歩一歩、世紀ごとに、神の概念は、日本の良忍、法然上人、親鸞の教えと相まって発展し、またこの概念は、阿弥陀仏陀への信仰において最終的に実を結んだ。

94:12.3 (1041.1) 魂は、死の経験に際し、涅槃、すなわち存在の究極に入る前に楽園での滞在を楽しむことを選ぶかもしれないということが、これらの信者に教えられた。この新たな救済は、神の慈悲と西の楽園の神である阿弥陀の愛に満ちた保護への信仰とによって達成されると広布される。阿弥陀の信奉者は、その哲学において、すべての

有限の人間の理解力を超えてある無限の真理にしがみついている。彼らの宗教において、本物の信仰をもち純粋な心をもって阿弥陀の名を呼び求める者は、1人として楽園の崇高な幸せの到達に失敗することのないとても世界を愛し、すべてに慈悲深い阿弥陀の信仰にすがりついている。

94:12.4 (1041.2) 仏教の大きな強味は、その支持者がすべての宗教からの真理を自由に選ぶことができることである。そのような選択の自由は、ユランチアの信仰をあまり特徴づけてこなかった。この点で、日本の真宗は、世界一進歩的な宗教集団の1つになった。それは、ゴータマの追随者の古代の伝道の精神を蘇らせ、教師を他の民族に送り始めた。ありとあらゆる源から真実を充当するこの意欲こそが、20世紀前半、宗教信者の間に現れる称賛に値する傾向である。

94:12.5 (1041.3) 仏教自体は、20世紀の復興を経験している。キリスト教との接触において仏教の社会的局面は大いに高められた。学ぶという願望は、僧聖職者の兄弟愛の心で

再燃し、またこの宗教を通じての教育の普及は、確かに宗教発展に新たな進歩をもたらすであろう。

94:12.6 (1041.4) アジアの大半は、この著述の時点において仏教にその望みを置いている。過去の暗黒時代を果敢に生き続けてきたこの崇高な信仰は、かつてインドの弟子達が偉大な師の新たな真実の宣言を聞いたように広がった宇宙現実の真実をもう一度受け入れるのであろうか。この古代の信仰は、もう一度、非常に長い間求めてきた神と絶対者の新概念の提示を活気づける刺激に反応するのであろうか。

94:12.7 (1041.5) 全ユランチアは、19世紀の蓄積された教理と主義の進化的起源をもつ宗教との接触に妨げられないマイケルの高尚な主旨の宣言を待ちうけている。仏教、キリスト教、ヒンドゥー教への、すべての信仰の民族にまでも、イエスに関する福音ではなく、イエスの福音の生きた、精霊的な現実の提示のための時を告げている。

94:12.8 (1041.6) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 95
レヴァント地方におけるメルキゼデクの教え

95:0.1 (1042.1) インドが、東アジアの宗教と哲学の多くを生み出したように、レヴァント地方も西洋世界の信仰の故国であった。シャレイム宣教師は、どこにおいてもメルキゼデクのマキヴェンタの福音の朗報を広布しながらパレスチナ、メソポタミア、エジプト、イラン、アラビアを経て南西アジア全体に広がっていった。これらの国のいくつかでは、それらの教えは実を結んだ。他の国々では異なる好評を得た。失敗は、時には彼等の知恵不足であり、時には情況に対しし切れなかったからであった。

1. メソポタミアのシャレイム宗教

95:1.1 (1042.2) メソポタミアの宗教は、紀元前2,000年までには、セース人の教えをまさに失うところであり、主に2集団の侵略者、じわじわと西方の砂漠からのベドゥインのセム族の侵入、また北方から下りてきた未開騎馬人の原始信仰の影響下にあった。

95:1.2 (1042.3) 週の7日目を祝う初期のアダーム系民族の慣習は、決して完全にメソポタミアで消滅したわけではなかった。メルキゼデク時代における7日目は、不運中の不運と見なされたに過ぎない。それは、禁忌に支配されて

いた。不吉な7日目に旅にでたり、料理をしたり、または火を起こすことは不法であった。ユダヤ人は、目にしたバビロニアの7日目の遵守、すなわち安息日に関係づけるメソポタミアの禁忌の多くをパレスチナに持ち帰った。

95:1.3 (1042.4) シャレイムの教師は、メソポタミア宗教に磨きをかけ、また向上させるために多くのことをしたとはいえ、様々な民族を一神の永続続認識に至らせることには成功しなかった。そのような教えは、150年以上のあいだ主流となり、そして徐々に多神の昔の信仰に取って代わられた。

95:1.4 (1042.5) シャレイムの教師は、メソポタミアの神の数を大いに減少させ、ひところは主要な神をベル、シャマスク、ナブ、アヌ、エーア、メロダク、シンの７神にまで減らした。その新しい教えの最盛期に、かれらは、他の総てのもの、つまりバビロニアの３神の上に地と海と空の神々であるベル、エーア、アヌの３神の地位を上げた。さらに他の３組が、アンド系とシュメール人の三位一体の教えを連想させる、またメルキゼデクの３円の記

章でシャレイムの信仰に基づくすべてが、異なる場所で成長した。

95:1.5 (1042.6) シャレイムの教師らは、決して神の母であり性的繁殖力の霊であるイシュタールの人気に完全に打ち勝つことはできなかった。かれらは、この女神への崇拝の改善のために多くのことをしたが、バビロニア人とその隣人は、性崇拝の偽装の型から一度も完全に脱却したことがなかった。すべての女性が、少なくとも若い頃一度は見知らぬ人を受け入れることが、全メソポタミアでの一般的習慣になっていた。これは、イシュタールが必要とする献身であると考えられ、また繁殖力は、主にこの性の犠牲に依存していると信じられていた。

95:1.6 (1043.1) メルキゼデクの教えの早期の進歩は、キシュにある学校の指導者であるナボダドが、寺での蔓延的売春慣習への集中攻撃をすると決めるまで極めて満足できるものであった。だが、シャレイムの宣教師達は、この社会改革をもたらすことができず、精霊的かつ哲学的なより重要な教えのすべては、この失敗による挫折のなかで敗北に終わった。

95:1.7 (1043.2) シャレイム福音のこの敗北の後には、パレスチナにはアシュトレースとして、エジプトにはアセト、ギリシアにはアフロディーテ、北方部族にはアスターテとして既に侵入していたイシュタールの宗教儀式の拡大が、すぐに続いた。そして、バビロニア人の司祭者が星の観測へと新たに向き直ったのは、イシュタールの崇拝のこの復活との関連においてであった。占星術は、広範囲におよぶメソポタミアのその最後の復興を経験し、易断が流行となり、また司祭は、何世紀もの間ますます堕落していった。

95:1.8 (1043.3) メルキゼデクは、すべての父であり造物主である一神についての教えと信仰経験のみによる神の恩恵の福音ただ一つの説教について追随者に警告を与えてきた。しかし、過度の試み、すなわち突然の革命による鈍い発展に取って代わる試みは、多くの場合しばしば新しい真実の教師の誤りであった。メソポタミアのメルキゼデク宣教師は、道徳的水準を人々にとってあまりにも高く設定した。あまりに多くを試みた結果、その高潔な大儀は敗北した。かれらは、明確な福音を説くために、つまり宇宙なる父の現実の真実を広布するために任命され

たが、慣習改革という明らかに価値ある動機に巻き込まれるようになり、その結果、重大な任務は、脇道に逸れ、事実上、挫折し忘却された。

95:1.9 (1043.4) キシュのシャレイム本部は、1世代で終わりを告げ、また一神信仰の宣伝活動は、実質的には全メソポタミアで消滅した。しかし、シャレイムの学校の残存者は、持続した。あちらこちらに点在する小集団が、一創造者の自分達の信仰を存続し、メソポタミアの司祭の偶像崇拝と不道徳性と闘った。

95:1.10 (1043.5) 彼らの教えが拒絶された後の時期に、シャレイム宣教師たちは、旧約聖書の多くの詩篇を書いた石に書き、その石を後のヘブライの聖職者たちが、監禁中に見つけ、次にユダヤ人の著述とされる賛美歌の収集の中にそれらを取り入れられた。バビロンからのこれらの美しい詩篇は、ベルメロダークの寺院では書かれなかった。それらは、初期のシャレイム宣教師の子孫の仕事であったし、またバビロニア人司祭の魔術の集塊に対し著しい対照をなしている。ヨブ記は、キシュのシャレイム学校

やメソポタミア全体に至る相当に優れた教えの反映である。

95:1.11 (1043.6) メソポタミアの宗教文化の多くは、アメネモペとイフナトンの働きによりエジプト経由でヘブライ文学と礼拝式へと至った。エジプト人は、初期のアンド系メソポタミア人から得られる社会的義務に基づく教えをよく保持し、しかもこの教えは、ユーフラテス渓谷を占領した後のバビロニア人により大規模に失われた。

2. 初期のエジプト宗教

95:2.1 (1043.7) メルキゼデクの本来の教えは、エジプトでその最も深い根をおろし、そこからヨーロッパへと広まった。ナイル渓谷の進化的宗教は、ノヅ系、アダーム系、後のアンド系民族の優れた血統の到来により周期的に補強された。エジプト人の民生長官の多くは、時にシュメール人であった。エジプトは、インドが、このころ最大規模混合の世界の人種を有していたように、ユランチアに存在する徹底的に混合された宗教哲学の型を育成し、またそれは、ナイル渓谷から世界の多くの地域に広がった。ユダヤ人は、天地創造に関する考えの多くをバビロ

ニア人から受け入れたが、神の摂理の概念はエジプト人から得ていた。

95:2.2 (1044.1) エジプトがメソポタミアよりも一層好意的にシャレイムの教えに受容を示したのは、哲学的、もしくは宗教であるよりも、むしろ政治的で道徳的風潮であった。エジプトの各部族の指導者は、王位への道を戦った後、部族の神を最初の神格と他のすべての神の創造者であると宣言することにより自らの王朝を永続させようとした。このようにしてエジプト人は、超越的神の考えに、つまり普遍的創造者の神格についての後の教理に対する踏み台に徐々に慣れてきた。一神教の考えは、何世紀もの間エジプトで前後に揺らいだ。一神の信仰は、常に前進してきたが、発展的多神教の概念を圧することは決して完全にはできなかった。

95:2.3 (1044.2) 長い間、エジプト民族は、自然神を崇拝していた。とりわけ雄牛を崇拝する部族、ライオンを崇拝する別の部族、雄羊を崇拝する3番目の部族という具合いに40の部族が、独自の神をもった。それより以前には、アメリカ原住民によく似てトーテム部族であった。

95:2.4 (1044.3) そのうちエジプト人は、煉瓦の貯蔵所に埋められた死体は腐敗する一方で、ソーダを染み込ませた砂の作用により煉瓦のない墓に置かれたものは保存される—防腐処置が施される—ことに気づいた。この観測は、死者を防腐処理する後の習慣につながる実験に導いた。エジプト人は、肉体の保存が来世への人の通路を容易にすると信じた。個人は、肉体の腐敗後の遠い未来において正確に確認されることができるように、棺には像を彫り、墓には死体と共に埋葬用の像を収納した。これらの埋葬像の作成は、エジプト芸術における大きな改良に導いた。

95:2.5 (1044.4) 何世紀もの間、エジプト人は、肉体の保護と死後の快い生存としての墓を信じた。魔術習慣の後の発展は、揺りかごから墓場まで人生に重荷になる一方で、人々を墓の宗教から最も有効に救い出した。聖職者は、「人が冥界で心を持ち去られる」からの保護であると信じられたまじないの内容を棺に記すのであった。まもなく、これらの魔術の本文のさまざまの組み合わせが、死者の書として収集され保存された。ナイル渓谷の魔術的儀式は、その当時の儀式ではあまり達しない程度の良心

と性格の領域に早くから関わるようになった。次には、これらの倫理的で道徳的な理想が、入念な墓よりも、救済のための頼りとされた。

95:2.6 (1044.5) これらの時代の迷信は、エジプトにその起源を持ち、そこからアラビアとメソポタミアに広まった治療物質としての唾の効き目の一般信仰によく例示されている。若い神セットは、ホルスの伝説的な戦いで目を失ったが、セットの敗北後に、賢明な神トスが傷に唾を吐きかけこの目を治した。

95:2.7 (1044.6) エジプト人は、長い間、夜空のきらめく星は、立派な死者の魂の生存を表すと信じた。かれらは、他の生存者は太陽に吸収されると考えた。ある期間、太陽崇拝は、先祖崇拝の種類となった。巨大ピラミッドの入り口への傾斜のある通路は、王の魂が墓から出るとき、恒星の静止し、固定された星座に、つまり王の想定上の住まいに、まっすぐに行くことができるように北極星を直接指し示した。

95:2.8 (1045.1) 太陽の傾斜光線が、雲の隙間から地球に向かって貫いているのが観測されるとき、王と他の公正な魂が

昇ることのできる天の階段の降下を示すと信じられた。「ペピ王は母のもとに昇るために彼の輝きを自分の足下の階段として掛けた。」

95:2.9 (1045.2) メルキゼデクが肉体で現れたとき、エジプト人は、周辺民族の宗教よりはるかに高度のものを持っていた。肉体から離脱した魂は、魔術の唱え文句で適切に武装させられるならば、妨害する悪霊を回避し、またオシリスの判決の間へ進み、そこで、もし「殺人、強盗、虚偽、密通、窃盗、身勝手さ」がなければ、それは、至福の領域に認められるのであった。もしこの魂が、秤にかけられ、欠けていると分かるならば、地獄に、貪食婦に送られるのであった。これは、周辺民族の多くの信仰との比較において比較的高度な来世の概念であった。

95:2.10 (1045.3) 地球での肉体における人の人生の罪に対する死後の判決に関する概念は、エジプトからヘブライ神学に継続された。判決という言葉は、ヘブライ詩篇の書全体のなかでただ一度だけ現れ、その特別の詩篇は、エジプト人によって書かれた。

3. 道徳概念の発展

95:3.1 (1045.4) エジプト文化と宗教は、主にアンド系のメソポタミアに由来し、ヘブライ人とギリシア人を介しておおむねその後の文明に伝わったとはいえ、エジプト人の多くの、じつに多くの社会的で倫理的な理想主義が、純粋に進化的発展としてナイル渓谷で起きた。アンド系出来の多くの真実と文化の移入にもかかわらず、エジプトにおいては純粋に人間の発展としての道徳的文化が、マイケルの贈与以前の他のいかなる外接地域における同様の自然手段による発展よりもさらに発展した。

95:3.2 (1045.5) 道徳的進化は、完全には顕示に依存していない。高い道徳概念は、人間の自己の経験から導きだすことさえできる。神の魂が内に宿ることから、人は、精神的価値さえ進化させ、人格の経験的生活から宇宙洞察を導き出すことができる。良心と性格のそのような自然の進化は、古代の第2エーデンから、後にはシャレイムのメルキゼデクの本部からの真実の教師の周期的到着によっても高められた。

95:3.3 (1045.6) シャレイム福音がエジプトに浸透する何千年も以前に、その道徳指導者達は、正義、公正、貪欲の回避

を教えた。ヘブライ経典が著される3,000年前、エジプト人の処世訓は、次の通りであった。「正義を基準とする者は地歩を固めている。その人はその道に従って歩く。」彼らは、優しさ、節度、思慮深さを教えた。この時代の偉大な教師の一人の教えは、次の通りであった。「正しいことをし、すべての者を公正に扱いなさい。」この時代のエジプトの三つ組は、真実-司法-正義であった。ユランチアの純粋に人間的なすべての宗教のなかで、ナイル渓谷のこのかつての人道主義の社会的理想と道徳的な崇高さ壮大さを凌ぐものは、一つもなかった。

95:3.4 (1045.7) シャレイム宗教の存続する教理は、これらの進化する倫理的考えと道徳的理想の土壌に栄えた。善と悪の概念は、「命は平和を好む者に与えられ、死は罪ある者に。」と信じる民族の心にすぐ反応した。「平和を好む者は愛されることをする者である。罪ある者は嫌われることをする者である。」何世紀ものあいだ、ナイル渓谷の住民は、そもそも正邪—善悪—の後の概念を受け入れる以前にこれらの台頭しつつある倫理的、社会的基準によって生活していた。

95:3.5 (1046.1) エジプトは、知的で道徳的であったが、それほど精神的ではなかった。6,000年間に、エジプト人の間に出現した偉大な予言者は、4人だけであった。エジプト人は、アメネモペにはしばらくの間従った。彼らは、オフバンを殺害した。イフナトンを受け入れはしたが、熱心さを欠いての短い1世代の間であった。モーシェを拒絶した。アブラーハームにとり、後にはヨセフにとり、シャレイムの一神の教えのためにエジプト中に大きな影響を与え易くしたのは、この場合もやはり、宗教情況よりもむしろ政治的情況であった。しかし、最初にエジプトに入ったとき、かれらは、メソポタミア移民の変更された道徳基準と混合されたこの非常に進化した倫理的文化に遭遇した。初期のナイル渓谷のこれらの教師は、神の命令、神の声として最初に良心を宣言する最初の者であった。

4. アメネモペに関する教え

95:4.1 (1046.2) そのうちに、多くの者に「人の息子」と呼ばれ、他からはアメネモペと呼ばれる一人の師がエジプトで育った。この予言者は、善と悪の間で良心を裁定のその最

頂点へ高め、罪に対する処罰を教え、太陽神を求めることを通して救済を宣言した。

95:4.2 (1046.3) アメネモペは、富と財産は神の贈り物であることを教え、この概念は、後に登場するヘブライ哲学に徹底的に影響を与えた。この高潔な教師は、神-意識がすべての行為の決定要素であると信じた。神臨場の、また神への認識の中で刻一刻送られるべきであると信じた。この賢人の教えは、旧約聖書が書物になるずっと以前、ヘブライ語に翻訳され、その後その民族の聖典となった。この善人の主要な説教は、政府の責任ある地位における正直さと誠実さを自分の息子に教えることに関係があり、とうの昔のこれらの気高い心情は、現代のいかなる政治家をも礼遇するであろう。

95:4.3 (1046.4) ナイル渓谷のこの賢人は、「富は自分たちに翼をつけ、飛び去る」—地球のすべてのものは儚い、ということを教えた。この賢人の重要な祈りは「恐怖から救われる」ということであった。彼は、すべての者に「人の言葉」から「神の行為」 へ向き直るように勧めた。現に、彼は教えた。人は申し入れるが、神は処分する。へ

ブライ語に翻訳されたこの賢人の教えは、旧約聖書の箴言に関する哲学を決定した。その教えは、ギリシア語に翻訳され、その後のすべてのギリシャ宗教哲学に影響を与えた。フィロン、後のアレクサンドリアの哲学者は、知恵の書を一冊所持していた。

95:4.4 (1046.5) アメネモペは、進化の倫理と顕示の道徳を保護するために機能し、その著述においてヘブライ人とギリシア人にそれらを伝えた。かれは、この時代の最も偉大な宗教教師ではなかったが、西洋文明の発展におけるその後の極めて重要な2つのつながりの思想—西洋の信仰の極致はヘブライ人の間で発展し、そしてギリシア人がヨーロッパのその最大の高さへと純粋な哲学的思想を発展させた—に着色したという点で最も影響力があった。

95:4.5 (1046.6) ヘブライの箴言の第15章、第17章、第20章、それに第22章の17節、第24章の22節まではアメネモペの知恵の書からほぼ逐語的に収められている。ヘブライ書の最初の詩篇は、アメネモペによって書かれており、イフナトンの教えの核心である。

5. 注目すべきイフナトン

95:5.1 (1047.1) 王室の一人の女性が、エジプト人のシャレイム医師の影響で、メルキゼデクの教えを支持すると、アメネモペの教えは、徐々にエジプト人の心の中で手を緩めつつあった。この女性は、唯一なる神のこの主義を受け入れるようにとエジプトのファラオである息子のイフナトンを説き伏せた。

95:5.2 (1047.2) 肉体のメルキゼデクの失踪以来、イフナトンのようにシャレイムの啓示的宗教について驚くべき明確な概念を有した人間は、その時まで誰一人としていなかった。ある点で、この若いエジプト王は、人間の歴史で最も注目すべき人々の一人である。イフナトンは、精神的な落ち込みが増大するメソポタミアのこの時代、エジプトにおける一なる神のエル・エリョンの教理を生かし続け、マイケルのその後の顕示の宗教背景に必要であった一神教の哲学的な伝統をこうして維持した。他にも理由はあるが、幼子イエスは、エジプトに連れられ、そこでイフナトンの数人の精神的後継者が、イエスを見、ユランチアへのイエスの神からの任務のある局面をある程度理解したのはこの功績を認めてのことであった。

95:5.3 (1047.3) メルキゼデクとイエスの間における最も偉大な人柄のモーシェは、ヘブライ人種とエジプト王室からの世界への同時の贈り物であった。そして、もしイフナトンにモーシェの多才さと能力があったならば、驚くべき宗教的指導力に釣り合う政治的才能を明示していたならば、エジプトは、間もなくその時代の偉大な一神教の国になっていたことであろう。また、もしこれが、起こっていたならば、イエスは、人間としてのその生涯の大部分をエジプトで過ごしたかもしれないということがかろうじて可能である。

95:5.4 (1047.4) 歴史上どの王も、決してこの並はずれたイフナトンのように全国民を多神教から一神教へと整然と向きを変えさせなかった。最も驚くべき決断で、この若い支配者は、過去と決別し、自分の名を変え、自分の首都を捨て、まったく新しい都市を建設し、全国民のために新しい芸術と文学を創造した。しかし、この若い支配者は、あまりに速く進んだ。彼が死んでしまうと、立ちゆかないないほどあまりに多く建てた。一方、この若い支配者は、その国民の物質的な安定性と繁栄を提供ができず、その後の逆境と圧迫が続々とエジプト人に押し寄せ

たとき、そのすべてが、都合悪く彼の宗教上の教えに反発した。

95:5.5 (1047.5) 驚くばかりの明確な見通しと目的への並はずれた一途さをもつこの男性に、モーシェの政治上の明敏さがあったならば、西洋世界の宗教発展と真実啓示の歴史全体を変えていたことであろう。モーシェは、その生涯のうちに、通常は不審を抱いていた聖職者の活動に歯止めをかけることができたが、権力から若い王が去るやいなや、彼らは、秘密で礼拝集団を維持し、行動に移した。聖職者達は、エジプトのその後のすべての問題をこの王の治世の間の一神教の体制に結びつけることにためっらてはいなかった。

95:5.6 (1047.6) イフナトンは、とても賢明に太陽神を装って一神教を確立しようとした。すべての神を太陽崇拝に吸収することにより宇宙なる父の崇拝に近づくというこの決定は、シャレイム医師の助言によるものであった。イフナトンは、神格の父性と母性に関して当時存在したアトン信仰の一般化された教理を取り込み、人と神の間の親密で敬虔な関係を認識する宗教を創出した。

95:5.7 (1048.1) イフナトンは、賢明にも太陽神アトンの外向きの崇拝を維持したが、自分の仲間をアトンの創造者とすべてのものの崇高なる父への偽装崇拝へと導いた。この若い教師-王は、多作の作家であり、聖職者が権力に返り咲くと完全に破棄された「唯一なる神」と題される31章からなる本を説明する作者であった。また、イフナトンは、137篇の賛美歌を著わし、そのうちの12篇は、ヘブライ人の著述によるものとされ、現在旧約聖書の詩篇に保存されている。

95:5.8 (1048.2) 日常生活におけるイフナトンの宗教の最高の言葉は、「正しさ」であり、またイフナトンは、国家の倫理のみならず国際倫理をも迎え入れるために正しい行ないをする概念を急速に広げた。これは、驚くべき個人の敬虔さをもつ1つの世代であり、神を求め、神を知るというより知的な男女の中の本物の切望によって特徴づけられた。当時、社会的地位、または、富は、法的観点から言うと、いかなるエジプト人にも何の利点も与えなかった。エジプトの家族生活は、道徳的文化を保存し、補強するために多くのことをし、またパレスチナでのユダヤ人の後のずば抜けた家族生活のひらめきであった。

95:5.9 (1048.3) イフナトンの福音の致命的弱点は、その最もすばらしい真実、つまりアトンは、エジプトの創造者であるばかりではなく、「人類と獣類の世界全体の、またこのエジプトの地の外のすべての異郷の地の、シリアとクシュの創造者でさえある。アトンは、それぞれの場所にすべてをはめ込んで、彼らの必要なものをすべてを提供する。」という教えであった。神格のこれらの概念は、高度で、高揚するものであったが、国家主義的ではなかった。宗教におけるそのような国際的感情は、戦場でのエジプト軍隊の士気を高めはしなかったものの、若い王とその新宗教に向けて使用する有効な兵器を聖職者に提供した。アトンは、後のヘブライ人のものよりはるかに高度の神についての概念を持っていたが、それは、国の建設者の目的を果たすには高度過ぎた。

95:5.10 (1048.4) ―神の理想は、イフナトンの死に弱体化したが、多くの集団の心に存続した。イフナトンの娘婿は、自分の名前をツタンハモンと変え、聖職者と協力し古い神々の崇拝へと戻った。首都は、テーバーイスに戻り、聖職者は、土地で富を肥し、最終的には全エジプトの

1/7を所有した。やがて、大胆にも聖職者のこの同じ体制の一人が、王冠を奪取した。

95:5.11 (1048.5) だが、聖職者は完全に一神教の波に打ち勝つことができたというわけではなかった。かれらは、だんだんと自分達の神を止むええず結合し、ハイフン結びつけていった。ますます神の家族は縮小した。イフナトンは、創造者たる神を天の燃えるような円盤に関連づけ、若い改良者が亡くなったずっと後にもこの考えは、人の心の中で、聖職者の心の中でさえも、燃え続けた。一神教の概念は、エジプトや世界の人々の心から決して消えなかった。それは、イフナトンが、全エジプトによる崇拝のためにとても熱心に宣言した1神のその同じ神性の父をもつ創造者の到着までも存続した。

95:5.12 (1048.6) イフナトンの教理の弱点は、教育を受けたエジプト人だけがその教えを完全に理解できるというそれほどに高度な宗教を提案したという事実にあった。農業労働者の一連は、イフナトンの福音を現実には決して理解せず、したがって聖職者とともにアセトとその配偶者、つまり闇と邪悪の神のセットの手による残酷な死から奇

跡的に復活したとされるオシリスの昔の崇拝に戻る状態にあった。

95:5.13 (1049.1) すべての人への不死の教えは、エジプト人には高度過ぎた。復活は、王と金持ちだけに約束された。彼らは、それゆえ裁きの日に備え、非常に念入りに自分達の肉体に防腐処置を施し保存した。しかし、イフナトンが教える救済と復活の民主主義は、やがてはエジプト人が後に物の言えない動物の生存を信じるというまでに広がった。

95:5.14 (1049.2) 人民へ一神崇拝を押しつけるこのエジプト人支配者の努力は失敗するかに見えたが、その働きの影響は、何世紀ものあいだ、パレスチナとギリシアに存続したということ、そしてその結果、エジプトは、結合されたナイルの進化的文化とユーフラテス川の天啓的宗教を西洋のその後の全民族への伝道剤になったということが記されるべきである。

95:5.15 (1049.3) ナイル渓谷におけるこの長い道徳的発達と精神的成長時代の栄光は、ヘブライ人の国民生活が始まる頃に急速に過ぎ去り、これらのベドゥインは、エジプト滞

在の結果としてこの教えを携え、彼等の人種的宗教においてイフナトンの教理の多くを永続させた。

6. イランのシャレイム教理

95:6.1 (1049.4) 数人のメルキゼデク宣教師は、パレスチナからメソポタミア経由でイラン大高原へと進んだ。シャレイム教師は、500年以上、イランにおいて前進し、支配者の交替が悲惨な迫害を早めているとき、国全体は、シャレイムの集団礼拝の一神の教えを実際に終わらせるメルキゼデク宗教へと揺れていた。道徳復興のあの偉大な世紀に、つまり紀元前6世紀にゾロアスターがシャレイム福音の残り火を蘇生させるために出現したとき、アブラーハームの盟約の教理は、ペルシアで実質的に消滅した。

95:6.2 (1049.5) 新宗教のこの創設者は、男性的で冒険好きな若者であり、メソポタミアのウールへの最初の巡礼の旅においてカリガスティアとルーキフェーレンスの反逆の伝統について—他の多くの伝統に加えて—知った。そのすべてが、彼の宗教の素質に強く訴えた。それに合わせて、かれは、ウールでの夢の結果、人民の宗教改造に取

り掛かるために北の故郷に戻ることにした。かれは、正義の神についてのヘブライ風の考え方、神性モーシェの概念を取り込んだ。最高の神についての考えは、彼の心の中では明確であり、かれは、他のすべての神をメソポタミアで聞いたことのある悪魔の位置に付した。伝統ウールに残存したていたので、かれは、主たる7精霊の話を知っており、したがって、アフーラマーズダをその長にした七柱の最高神の華やかな１群を創り出した。彼は、これらの従属的な神々を正なる法、善なる思考、高潔なる政府、聖なる品性、健康、不死の理想化に関連づけた。

95:6.3 (1049.6) この新宗教は、行動の1つ—仕事—であり、祈りや儀式ではなかった。その神は、最高の知恵をもつ者であり、文明の後援者であった。それは、悪、無活動、後退とあえて戦う好戦的な宗教哲学であった。

95:6.4 (1049.7) ゾロアスターは、火の崇拝を教えなかったが、普遍的で最高の支配である純粋で賢明な聖霊の象徴として炎を利用しようとした。(残念なほどに本当であるが、後の追随者は、この象徴的な火を崇敬もし崇拝もし

た。)最終的に、この新宗教は、イラン人の王子の転向後武力によって広げられた。そしてゾロアスターは、「光の主の真実」を信じたそれのために、戦いで勇ましく死んだ。

95:6.5 (1050.1) 拝火教は、主たる七精霊に関するダラマティアとエーデンの教えを永続させる唯一のユランチア教義である。三位一体概念の発展に失する一方で、それは、ある方法で神の7重の概念に近づいた。本来の拝火教は、純粋な二元性でなかった。初期の教えは、たしかに悪を善と等位において描写したものの、それは、確実に永遠の、究極の善の現実に水没した。この思考体系は、後になりやっと、善と悪は同じ条件で争うという支持を得たのであった。

95:6.6 (1050.2) ヘブライ経典に記録される天国と地獄、それに悪魔についてのユダヤ人の伝統は、ルーキフェーレンスとカリガスティアの存続する伝統に基づく一方で、ユダヤ人が、ペルシア人の政治的、文化的支配下にあった時期のゾロアスター教徒に主に由来していた。ゾロアスタ

ーは、エジプト人のように、「裁きの日」を教えたが、この出来事を世の終わりに関連づけた。

95:6.7 (1050.3) ペルシアで拝火教を引き継いだ宗教ですら、著しくその影響を受けた。イラン人の聖職者達が、ゾロアスターの教えを崩壊しようとしたとき、かれらは、ミースラの古代の崇拝を復活させた。そして、ミースラ教は、レヴァントと地中海地域に蔓延し、しばらくはユダヤ教とキリスト教双方と同時代に存在した。ゾロアスターの教えは、その結果、連続して重要な3宗教の注目を引いた。ユダヤ教とキリスト教、それらを通してのイスラム教。

95:6.8 (1050.4) ゾロアスターの高い教えや堂々たる詩篇は、ゾロアスターが決して身を落とさなかった詭弁への信条をもつことに結びつけて、死者に関し大きな恐怖をもつパルシー教徒によるゾロアスターの福音の現代のこじつけとはほど遠いのである。

95:6.9 (1050.5) この偉人は、暗くされた世界にいる人に永遠の命へと導く光の道を示すためにほんのかすかに燃える間、シャレイムの光が完全に、そして最後に消されない

ように守るために紀元前6世紀に登場したその特異集団の1人であった。

7. アラビアにおけるシャレイムの教え

95:7.1 (1050.6) ―神のメルキゼデクの教えは、比較的最近アラビア砂漠で確立されるようになった。シャレイム宣教師は、過度の組織化に関するマキヴェンタの指示に対する誤解からギリシアでそうであったようにアラビアにおいても失敗した。しかし、かれらは、軍事力、あるいは民間への強制で福音を広げる全努力に対するマキヴェンタの訓戒の解釈においてはこのようには妨げられなかった。

95:7.2 (1050.7) メルキゼデクの教えは、中国、あるいはローマにおいてさえ、シャレイムそれ自体にとても近いこの砂漠地域ほどには完全に失敗しなかった。東洋と西洋の民族の大半がそれぞれに仏教徒とキリスト教徒になったずっと後、アラビア砂漠は、数千年間もそうであったように当然の報いが続いた。それぞれの部族は、その昔の物神を崇拝し、また個々の家族の多くは、家庭ごとの神をもっていた。長い間、バビロニア人のイシュタール、へ

ブライ人のヤハウェ、イランのアフーラ、そして、主イエス・キリストのキリスト教徒の父の間での戦いが続いた。1つの概念は、他のものに決して完全に置き換えらることはできない。

95:7.3 (1051.1) アラビア中のあちこちに漠然とした一神の考えにすがる家族と一族がいた。そのような集団は、メルキゼデク、アブラーハーム、モーシェ、ゾロアスターの伝統を大事にした。イエスの福音に反応していたかもしれない多数の中心地が存在したが、砂漠の地のキリスト教使節団は、地中海の国々で宣教師として機能した妥協者や革新者に比べると厳格で頑固な集団であった。イエスの追随者が、より真剣に「全世界に進み、福音を説けよ」という彼の命令を受け止めていたならば、またその説教においてもっと丁重あったならば、自身が考案する社会的必要条件の厳しさが控え目であったならば、それならば多くの国々が、その中のアラビアが、大工の息子の簡単な福音を喜んで受け入れていたことであろうに。

95:7.4 (1051.2) 重要なレヴァント人の一神教が、アラビアに定着しなかったという事実にもかかわらず、この砂漠の国

は、その社会要求にあまり厳しくはないものの、それでもなお、一神教である信仰を生み出すことができた。

95:7.5 (1051.3) 砂漠の原始的で組織的でない信仰に関する部族、人種、あるいは国家の特徴のただ1つの要因があり、それは、ほとんど総てのアラビア部族が、メッカのある寺院の特定の黒い石の呪物に進んで表す独特の、一般的な敬意であった。共通の接触と崇敬のこの点が、次にはイスラム宗教の確立へと導いた。ユダヤ人のセム族にとっての火山の霊のヤハウェは、彼らのアラビアのいとこにとってのカーバ神殿の石になった。

95:7.6 (1051.4) イスラム教の強みは、唯一無二の神としてのアラーの明快かつ明確な提示である。その弱さは、女性の地位の低下とともに、その普及と軍事力との関連。しかし、それは、すべての者の唯一の宇宙の神格の提示「見えないものと見えるものを知っている方、彼は、慈悲深く情け深い。」をしっかりと保ってきた。「本当のところ、神はすべての人への善に満ちている。」「そして、私が病気であるときに、私を癒すのは彼である。」「3人もの人が同時に話そうとも、いつでも神は4人目として

出席している、」というのも彼は、「最初でも最後でもなく、また見られるものでも隠れるものでも」ないではないか。

95:7.7 (1051.5) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 96
ヤハウェ— ヘブライ人の神

96:0.1 (1052.1) 人間は、神格の概念を思い描くに当たり、まずすべての神を含み、次には部族の神にすべての外国の神を従属させ、やがて最後に、最終かつ最高の価値の一柱の神以外の全てを除外する。ユダヤ人は、思い描くすべての神をイスラエルの自分達の主なる神のより高尚な概念に統合した。同様にヒンズ一教徒は、リグヴェーダに描かれている「神々の一精神性」 へと自分達の多種多様の神を結合させ、一方、メソポタミアの住民は、自分達の神々をベルメロダクのより集中された概念に縮小させた。一神教のこれらの考えは、メルキゼデクのマキヴェンタが、パレスチナのシャレイムに登場してから間もなく世界中で円熟した。だがメルキゼデクの神格についての概念は、包括、従属、および排斥の進化的哲学のそれとは異なっていた。それは、それ専ら創造力に基づいて

形成され、メソポタミア、インド、エジプトの最高度の神の概念にすぐに影響を及ぼした。

96:0.2 (1052.2) シャレイム宗教は、ケニーテ人と他の幾つかのケナーアン部族による伝統として崇敬された。これは、メルキゼデクの肉体化の目的の1つであった。つまり1神の宗教は、その1神の息子の地球での贈与への道に備えるように育成されるべきであるということ。マイケルは、かれが現れることができる民族、つまり宇宙なる父を信じる民族が存在するまで、ユランチアにはとても来ることはできなかった。

96:0.3 (1052.3) シャレイム宗教は、教義としてパレスチナのケニーテ人のあいだで持続し、この宗教は、後にヘブライ人に採用されたように、まずは、エジプト人の道徳指導に影響された。その後、バビロニアの神学思想によって。そしてついには、善と悪のイラン人の概念によって。ヘブライ宗教は、実際アブラーハームとマキヴェンタ・メルキゼデクの間の盟約に基づいており、進化的には多くの独自の環境状況の結果であるが、文化的にはレヴァント地方の宗教、道徳、哲学から自由に借りてき

た。エジプト、メソポタミア、イランの道徳や宗教的考えの多くが、西洋民族に伝えられたのはヘブライ宗教を通してのことである。

1. セム族のあいだの神性概念

96:1.1 (1052.4) 初期のセム族は、すべてを霊が宿るものと見なした。動物と植物界の霊があり、年毎の霊や子孫の主人があり、火、水、空気の霊があり、恐れられ崇められるべき紛れもない霊の殿堂があった。そして、宇宙の創造者に関するメルキゼデクの教えは、これらの従属的霊を、または自然神への信仰を決して完全に破壊したというわけではなかった。

96:1.2 (1052.5) 多神教から単一神教を経て一神教へのヘブライ人の進歩は、不屈で連続した概念的発展ではなかった。神性の概念の進化において多くの退歩を経験したが、どの時代にもセム族信者の異集団のあいだには神についての種々の考えが存在した。時々、数々の用語が神の概念に適用され、また、混乱を防ぐためにこれらの様々な神格の称号は、ユダヤ教の神学の発展に関係があるように定義されるであろう。

96:1.3 (1053.1) 1.ヤハウェは、南パレスチナ部族の神であり、その部族は、神のこの概念をシナイ火山のホレーブ山に関連づけた。ヤハウェは、セム部族とその民族が注目し、崇拝を要求をした何百、何千もの自然神の中の単なる1神であった。

96:1.4 (1053.2) 2. エル・エリョン。メルキゼデクのシャレイム滞在後の数世紀の間、メルキゼデクの神の教理は、様々な異説を持ち続けたが、一般に、用語エル・エリョン、天のいと高き神の名によって表現された。アブラーハームのすぐ次の子孫を含む多くのセム族は、ヤハウェとエル・エリョンの双方をさまざまな時期に崇拝した。

96:1.5 (1053.3) 3. エル・シャッダイ。エル シャッダイが何を意味するのかについての説明は難しい。神についてのこの考えは、アメネモペの知恵の書の教えから派生し、アトンに関するイフナトンの教理により変更され、エル・エリョンの概念に表現されるメルキゼデクの教えによってさらに影響を受けた混成物であった。しかし、エル　シャッダイの概念がヘブライの心に浸透すると、それは、

すっかり砂漠のヤハウェ信仰に彩色されるようになった。

96:1.6 (1053.4) この時代の宗教の支配観念の1つは、神の摂理に関するエジプト人の概念は、すなわち物質的繁栄は、エル　シャッダイへの奉仕に対する報酬であるという教えであった。

96:1.7 (1053.5) 4. エル。用語に関するすべてのこの混乱と概念の不明瞭さの真ん中にあって多くの敬虔な信者は、神性のすべての発展的考えのすべてを心から崇拝しようと努力し、この合成神をエルと呼ぶ習慣が行き渡った。そして、この用語は、さらにベドゥインの他の自然神を包含した。

96:1.8 (1053.6) 5. エロヒーム。長い間キシュとウールにはアダームとメルキゼデク時代の伝統に基づいて設立された3柱の中の1柱の神の概念を教えたシュメール系カルデア人集団が、存続した。この教理はエジプトへと届き、そこにおいてこの三位一体は、エロヒーム、または、単数でエロアーの名で崇拝されていた。エジプトの哲学集団とヘブライ系のアレクサンドリアの後の教師達は、多元

的な神のこの統一を教え、また、脱出時のモーシェの顧問の多くが、この三位一体を信じた。しかし、三位一体のエロヒームの概念は、バビロニア人の政治的影響を受けるまで決してヘブライ神学の実部にはならなかった。

96:1.9 (1053.7) 6. 種々様々の名前。セム族は、神の名を口に出すことを嫌がり、したがって、その時々に次のような数多くの称号に頼った。神の霊、主、主の天使、全能者、聖なるもの、いと高きもの、アドーナイ、高齢者達、イスラエルの主なる神、天地の創造者、キーリオス、ヤー、万軍の主、天の父。

96:1.10 (1053.8) イェホヴァは、ヘブライの長い存在においてようやく展開したヤハウェの完成された概念を表すために近代において使われてきた用語である。しかし、イェホヴァという名前は、イエスの時代から1,500年後まで慣例とはならなかった。

96:1.11 (1054.1) 紀元前およそ2,000年まで、シナイ山は、火山として断続的に活動しており、この地帯でのイスラエル人の滞在時まで、時おり爆発が起きていた。火と煙は、この火山噴火に関連した雷のような爆発音とともに、す

べてが、周辺地域のベドゥインを感銘させ、恐れさせもし、またヤハウェを大いに恐れさせる結果となった。ホレーブ山のこの霊は、後にヘブライ人のセム族の神になり、ヘブライ人のセム族は、ついには、この神が他のすべての神の上にあって最高であると信じた。

96:1.12 (1054.2) ケナーアン人は、長い間ヤハウェを崇敬し、またケニーテ人の多くは多かれ少なかれエル・エリョン、シャレイム宗教の超越的な神を信じたが、ケナーアン人の大多数は、漠然と昔の部族神の崇拝を固守した。かれらは、惑星的とは言えないまでも国際的な神のために、決して自分達の国家の神を進んで捨てようとはしなかった。ケナーアン人は、普遍的な神に関心がなく、したがって、これらの部族は、ヤハウェと、それにベドゥイン牧夫のシナイ火山の霊の概念を象徴する銀色と金色の子牛を含む部族神を崇拝し続けた。

96:1.13 (1054.3) シリア人は、自分達の神を崇拝しつつ、ヘブライ人のヤハウェも信じた。というのは、シリア人の予言者が、シリア人の王に次のように言ったからであった。「かれらの神は丘の神です。だから、我々よりも強かっ

たのです。しかしながら、平野でかれらと戦うならば、私達の方がきっと強いでしょう。」

96:1.14 (1054.4) 人が文化的に進むにつれ、より重要でない神は、最高の神の次にされる。偉大なジュッピターは、単に感嘆だけとして持続する。一神教信者は、彼らの従属的な神を霊、悪霊、運命の三女神、ネレイス、妖精、ブラウニー、小人、バンシー、および邪眼として守っている。ヘブライ人は、単一神教を経験し、長い間ヤハウェ以外の神々の存在を信じたが、これらの外国神は、ますますヤハウェに従属するものであると考えた。彼らは、アモル人の神であるケモシュの実在を認めたが、彼はヤハウェに従属すると主張した。

96:1.15 (1054.5) ヤハウェについての考えは、神についての人間のすべての理論の最も大規模な発展を経た。その進歩的発展は、アジアでの仏陀の概念の変化にのみ比較することができる。アジアでの仏陀の概念は、ヤハウェの概念が最終的に宇宙なる父の考えにつながるように、最後には宇宙の絶対者の概念に導いた。しかし、歴史的事実の問題として、ユダヤ人がホレーブ山の部族神から後の時

代の愛情に満ち慈悲深い創造者の父へと神への視点をこのように変えたにもかかわらず、かれらは、神の名前を変えなかったということが理解されるべきである。彼らは常に神のこの発展する概念を、ヤハウェと呼び続けた。

2. セム民族

96:2.1 (1054.6) 東洋のセム族は、肥沃な半月地域の東の領域に侵入したよく組織化され、よく統率された馬の乗り手であり、バビロニア人と結合した。ウル近くのカルデア人は、東方のセム族のなかで最も高度であった。フェニキア人は、地中海沿岸に位置するパレスチナの西の区域を保持する優秀でよく組織化された混血セム族集団であった。セム族は、世界の9人種のほとんど総てからの遺伝的要素を有するユランチア民族のなかでも最も混合した者達の中にあった。

96:2.2 (1054.7) アラビアのセム族は、再三北の約束の地へと、「乳と蜜のあふれた」土地へと血路を開いたが、しばしばより組織化され高度に文明化した北のセム族とヘティテ人に排除された。後に、これらの流浪のベドゥイン族

は、異常に苛酷な飢饉の間、エジプトの公共事業の契約労働者として大量にエジプトに入ったが、結果的には、ナイル渓谷の普通の、虐げられた労働者の厳しい日々の労役において奴隷状態の苦い経験をしたに過ぎなかった。

96:2.3 (1055.1) セム族のある部族が、独自の信仰のためにイスラエルの、後のヘブライ人、ユダヤ人、および「神の選民」の子孫が召集されたのは、メルキゼデクのマキヴェンタ　とアブラーハームの時代の直後であった。アブラーハームは、全ヘブライ人の人種上の父ではなかった。かれは、エジプトで捕虜になった総てのベドゥインのセム族の先祖でさえなかった。いかにも、エジプトから来た彼の子孫は後のユダヤ人の母体を形成はしたものの、イスラエルの一族に取り入れられるようになった男女の圧倒的多数は、エジプトに一度も滞在したことはなかった。彼らは、アブラーハームの子孫とそのセム族の仲間がエジプトから北アラビア経由で旅をしたようにモーシェの統率力に従うことを選んだ単なる遊牧民の仲間であった。

96:2.4 (1055.2) いと高きものであるエル・エリョンに関するメルキゼデクの教えと信仰を通じての神の恩恵の盟約は、まもなくヘブライ国家を形成するセム系民族のエジプト人の奴隷時代までには大部分が忘れられていた。しかし、これらのアラビア遊牧民は、捕らわれのこの期間を通して自らの人種の神としてのヤハウェへの残存する伝統的信仰を維持した。

96:2.5 (1055.3) ヤハウェは、100以上の個々のアラビア部族に崇拝されており、また、ヘブライ人の奴隷捕虜の中の庶民の宗教は、ヘブライ人とエジプト人の混合の血統を含むエジプトのより教育された階級の中に固執したメルキゼデクのエル　エリョンの概念の色合いを除いては、魔術と犠牲の古いヤハウェの儀式の修正版であった。

3. 無双のモーシェ

96:3.1 (1055.4) 至上の創造者についてのヘブライの概念と理想の進化の始まりは、偉大な指導者、教師、またまとめ役であるモーシェのセム族のエジプトからの出発に遡る。モーシェの母は、エジプト王室の出であった。父は、政府とベドゥインの捕虜の間のセム人の連絡員であった。

モーシェには、その結果、優れた人種の源から得られる特質があった。祖先は大いに混合されたので、いかなる1つの人種集団に類別することは不可能である。モーシェは、この混合型でなかったならば、その指導力の下にエジプトからアラビア砂漠へと逃れたそれらのベドゥイン系のセム族と徐々に結びつくようになる雑多な大群の管理を可能にしたその異例の多才と順応性を決して見せなかったであろう。

96:3.2 (1055.5) ナイル王国の文化の誘惑にもかかわらず、モーシェは、父の民と運命を共にすることを選んだ。この偉大なまとめ役が、父の民のきたるべく解放のための計画を立てているとき、ベドゥインの捕虜には宗教の名に相応しいものはほとんどなかった。それらは事実上、真の神の概念をもたず、世界に望みももっていなかった。

96:3.3 (1055.6) これまで指導者は誰一人として、見放され、うちひしがれ、悄然とした無知な人間集団を改革し高めることを引き受けなかった。しかしこれらの奴隷は、遺伝的傾向に隠れた発展の可能性を持ち、しかも、解放のための反乱と攻撃の日に備えて有能な組織者軍団の構成の

ためにモーシェの指導をうけてきた教育のある十分な数の指導者がいた。これらの優れた者達は、自国の民の監督者として雇われた。かれらは、エジプトの支配者らへのモーシェの尽力により何らかの教育を受けていた。

96:3.4 (1056.1) モーシェは、仲間のセム族の自由のために外交交渉努力を払った。モーシェとその兄は、彼らがアラビア砂漠へ向けてナイル渓谷を平和的に去る許可をえるためにエジプト王との協定締結に入った。エジプトでの長年の奉仕の印にささやかな金品の支払いを受け取ることになった。ヘブライ人側は、ファラオとの友好関係を維持し、エジプトに対しいかなる同盟にも参加しない契約を結んだ。しかし、王は後に、自分の間者が、ベドゥインの奴隷の間に不忠実を発見したという口実を理由にこの条約を無効にしようと決めた。王は、ベドゥインの奴隷は、砂漠に入り、エジプトに背いて遊牧民を組織化するための自由を求めていると主張した。

96:3.5 (1056.2) だが、モーシェは落胆しなかった。好機の到来を待ち、そして、1年足らずで、エジプト兵力が、リビアの南からの強い襲撃とギリシア海軍の北からの侵入の

同時の猛攻撃に対し全力で抵抗している隙に、この大胆な組織者は、目覚ましい夜間の脱出でエジプトから同胞を連れ出した。自由のためのこの突進は、慎重に計画され巧みに実行された。ファラオと全滅した少人数のエジプト集団が激しく追跡したにもかかわらず、彼らには多くの戦利品がもたらされ、戦利品の全ては、先祖の砂漠の家に向けて行進する間に前進する逃亡奴隷の集団の略奪品は増大し、かれらは成功した。

4. ヤハウェの宣言

96:4.1 (1056.3) モーシェの教えの進化と高揚は、全世界のほぼ半分に影響を及ぼしてきており、20世紀においてでさえもまだそうである。モーシェがより高度なエジプトの宗教哲学を理解する一方、ベドゥインの奴隷は、そのような教えをあまり知らなかったものの、先祖がヤハウェと呼んだホレーブ山の神を決して完全に忘れたことはなかった。

96:4.2 (1056.4) 王の血筋の女性と捕虜の部族の男性の間の異例の結合に対する説明は、信仰の共通性であり、モーシェは、父母の双方からメルキゼデクのマキヴェンタの教え

について聞いていた。モーシェの舅は、ケニーテ人のエル・エリョンの崇拝者であったが、この解放者の両親は、エル・シャッダイの信者であった。モーシェは、その結果、エル・シャッダイ教徒として教育され、舅の影響で、エル・エリョン教徒になった。エジプト脱出後シナイ山周辺でのヘブライ人の露営の頃までには、モーシェは、神格(自分のすべてのかつての信仰に由来する) の新しくて拡大した概念を明確の述べ、そして賢明にも自分達の昔の部族神ヤハウェの拡張された概念として民に宣言することを決めた 。

96:4.3 (1056.5) モーシェは、エル エリョンについての考えをこれらのベドゥインに教えようと努力をしていたのだが、皆はこの教理を決して完全には理解しないであろうとエジプトを去る前に確信するようになった。したがって、意図的に自分達の砂漠の部族神をかれの追随者の唯一無二の神として妥協的に採用することとした。モーシェは、他の民族と国には他の神がいるかもしれないとは明確には教えなかったが、決然として、ヤハウェは、すべてを越えて上に位置するということを、特にヘブライ人に主張した。しかし、かれは、ベドゥイン部族の黄金色

の子牛にずっと象徴されてきた古代の用語ヤハウェの名の下に、神に関する新しくより高度の自分の考えをこれらの無知な奴隷に提示しようとしている厄介な困難にいつも悩んでいた。

96:4.4 (1056.6) ヤハウェが逃亡するヘブライ人の神であったという事実は、シナイの聖なる山の前になぜそれほど長い間滞在したのか、また、モーシェがホレーブの神であるヤハウェの名にかけて公表した十戒をなぜそこで受けたかを説明している。シナイの前でのこの長い滞在中、新しく進化するヘブライ人の崇拝の宗教儀式がさらに仕上げられた。

96:4.5 (1057.1) その麓での信仰深い滞在の3週目にホレーブの激しい爆発が無かったならば、モーシェには、いくらか進んだ儀式的崇拝の確立と追随者を四半世紀の間維持することにおいてそもそも成功していたとは思えない。「ヤハウェの山は火に焼きつくされ、煙は炉の煙のように昇り、山全体は激しく揺れた。」この大災害を目にしたことで、彼らの神が、「強力で、凄まじく、むさぼり食う炎、恐ろしく全能で」あるという教えでモーシェが

同胞を印象づけることができたということは驚きではない。

96:4.6 (1057.2) モーシェは、ヤハウェが、選民としてヘブライ人を特定したイスラエルの主なる神であると宣言した。モーシェは、新しい国を建設しつつあり、ヤハウェが厳しい現場監督、「嫉妬する神」であると追随者に伝え、宗教についての自分の教えを賢明に全国的にした。しかし、かれが、ヤハウェは、「すべての肉なるもののすべての精神の神」であると教えたとき、また「とこしえの神はあなたがたの避難所であり、下には永遠の腕がある。」と言ったとき、かれは、神格の概念を拡大しようとしたのであった。モーシェは、ヤハウェは契約を守る神であることを教えた。また、神は「あなた方を見捨てず、滅ぼしもせず、あなた方の先祖との盟約を忘れない。なぜなら、主はあなた方を愛しており、あなた方の先祖に誓った約束を忘れないから。」と教えた

96:4.7 (1057.3) 「真実で不正のない神、その道は公正で正しい」と神を提示したとき、モーシェは、ヤハウェを最高の神格の高位に掲げる雄々しい努力をした。それでいて、こ

の気高い教えにもかかわらず、追随者の有限の理解力の理由から、人の姿での神であり、発作的に怒り、復讐し、厳しさをもつものとして、さらには執念深くて人の行為に容易に影響されるものとして神を語る必要があった。

96:4.8 (1057.4) モーシェの教えの下に、この部族の自然神ヤハウェは、荒野を通り抜け、放浪の身にあるその民の後を追い、やがてはそこで、すべての民族の神として思い描かれるイスラエルの主なる神となった。ユダヤ人を奴隷にしたバビロンでの後の監禁が、万国の神の一神教の役割を引き受けるヤハウェの発展概念を遂に自由にした。

96:4.9 (1057.5) ヘブライ人の宗教歴史の最も特異で驚くべき特徴は、ホレーブ山の原始の神から歴代の精神的指導者の教えを経て、愛と慈悲深い創造者なる父のすばらしい概念を宣言したイザヤのもつ神格教理に表現される高水準の発展への神に関するこの連続的進化に関係がある。

5. モーシェの教え

96:5.1 (1057.6) モーシェは、軍の指導者、社会の組織者、宗教の教師の並はずれた結合体であった。かれは、マキヴェ

ンタとイエスの時代の間の最も重要な個人の世界的な教師であり指導者であった。モーシェは、イスラエルに記録には残されていない多くの改革を取り入れようとした。一生の間に、モーシェは、1国家のその後の誕生と1人種の恒久化のための地盤を築くとともに、いわゆるヘブライ人の多言語の群衆を奴隷の身分、そして文明から隔絶した流浪の身分から導いた。

96:5.2 (1057.7) 脱出の時代ヘブライ人には何の文字言語もなかったが故に、モーシェの偉大な働きに関わる記録はあまり無い。その時代とモーシェの行為についての記録は、偉大な実力者の死の1,000年以上も後に現存する伝統からきている。

96:5.3 (1058.1) エジプト人と周辺地域のレヴァント部族の宗教にモーシェが与えた進歩の多くは、メルキゼデクの時代のケニーテ人の伝統によるものであった。アブラーハームとその同時代人へのマキヴェンタの教えがなければ、ヘブライ人は、絶望的にエジプトから暗闇に出て来たことであろう。モーシェと舅のイスロは、メルキゼデク時代の伝統の名残りを収集し、エジプト人の学習に接合さ

れたこれらの教えは、イスラエル人の改善された宗教と儀式の創造においてモーシェを導いた。モーシェはまとめ役であった。彼は、エジプトとパレスチナの宗教としきたりの最良のものを選択し、これらの習慣をメルキゼデクの教えの伝統に結びつけ、ヘブライの崇拝の儀式的体系を組織化した。

96:5.4 (1058.2) モーシェは、神の摂理の信者であった。かれは、ナイル川の超自然の支配と自然の他の要素に関するエジプトの教理に徹底的に染まるようになった。神に関する立派な洞察力を持ってはいたが、皆が神に従うならば「神はあなたを愛し、あなたを祝福し、あなたを増やす」とヘブライ人に教えたとき、モーシェは、全く真剣であった。神はあなたの子宮から生まれるもの、地の産物—穀物、ブドウ酒、油、家畜—を増やすであろう。「あなたは、すべての国々の民の中で最も栄え、あなたの神、主は、あなたからすべての病を取り除き、エジプトの悪疫の何一つとてあなたにもたらしはしないであろう。」とさらに言った。「富を得る力をあなたに与えるのはあの方なのであるから、あなたの神、主を心に据えなさい。」「あなたは多くの国に貸すが、あなたが借り

ることはない。あなたは多くの国々を支配するが、彼らがあなたを支配することはない。」

96:5.5 (1058.3) しかし、モーシェのこのすばらしい心が、無知で文盲のヘブライ人の理解力にエル　エリョン、いと高きもののこの高尚な概念を適合させようとするのを見ることは痛ましいことであった。かれは、集まった指導者達に雷のような声を出して、「あなたの神、主はお一人である。他には神はいない。」と言った。入り交じる群衆には「すべての神々のうちあなたの神のような方はいるか」と言い放った。モーシェは、「主がホレーブで火の中からあなた方に話しかけた日に、あなた方は何の姿も見なかった。」と言明し、呪物と偶像崇拝に立ち向かう勇敢で一部功を奏する立場を取った。また、いかなる種類の像の作成も禁じた。

96:5.6 (1058.4) モーシェは、民が神の正義に恐れて畏敬する方を好み、ヤハウェの慈悲の広布を躊躇した。「あなたの神である主は、神々の中の神であり、主の中の主であり、偉大な神、人間をものともしない力があり、恐ろしい神である。"」と言った。「あなたが背くとき、神はあ

なたを殺す。あなたが従うとき、神は、あなたを癒すし、命を与える。」と宣言したとき、荒れ狂う一族を抑えようとした。しかしモーシェは、「すべての戒律を守りすべての定めに従う」という条件つきでのみ神の選民になるということをこれらの部族に教えた。

96:5.7 (1058.5) ヘブライ人は、これらの初期において神の慈悲についてあまり教えられなかった。彼らは、「全能者。力に輝き、敵を打ち砕く主は、戦さ人、戦闘の神。」としての神を知っていた。「あなたの神である主は、あなたを救い出すために陣営の中を歩まれる。」イスラエル人は、自分達を愛する神を考えに入れたが、「ファラオの心を堅くし、」「自分達の敵を呪う」ものとしても考えた。

96:5.8 (1058.6) モーシェは、普遍的で慈悲深い神格の一瞬の片鱗をイスラエルの子らに示す一方、概して、ヤハウェについての日常のありふれた概念は、周辺の小部族民のものに比べそれ程良いものではなかった。それらの神の概念は、原始的で、粗雑で、擬人化したものであった。モーシェがこの世を去ると、これらのベドゥイン部族は、

すばやくホレーブと砂漠の半野蛮的な昔の神の観念に戻った。モーシェが時々指導者達に提示した拡大されより高尚な神の洞察力は、すぐ失われ、一方大部分の人々は、彼らの物神である黄金色の子牛の崇拝、つまりパレスチナの牧夫のヤハウェの象徴の方に向いた。

96:5.9 (1059.1) モーシェがヘブライ人の采配をヨシュアに引き継いだとき、かれは、アブラーハーム、ナホー、ロート、それに関連する他の部族の何千人もの傍系子孫を既に集めており、それらを自立型の、また部分的に自己規制する牧歌的戦士の国へと強く駆り立てた。

6. モーシェの死後の神の概念

96:6.1 (1059.2) モーシェの死後、ヤハウェの崇高な概念は、急速に低下した。ヨシュアとイスラエルの指導者等は、すべてに賢明で慈悲深く、全能の神のモーシェの伝統を抱き続けたが、一般大衆は、急速に昔の砂漠のヤハウェの観念に戻っていった。そして、神格の概念のこの後方への漂流は、様々な部族の族長、いわゆる裁判官の継続的支配の下で徐々に継続した。

96:6.2 (1059.3) モーシェの並はずれた個性の魅力は、神のますます拡大した概念の内意をその追随者の心に生かし続けた。しかし、かれらは、一旦パレスチナの沃地に達すると急速に遊牧的牧夫から定着の、物静かな農夫へと変化した。そして生活習慣のこの発展と宗教の観点の変化は、神ヤハウェの本質に関する概念の特徴のほぼ完全な変化を要求した。ヘブライ人は、厳格で、粗雑で、厳しくて、雷のようなシナイの砂漠神の変化の開始する時代の間に、愛、正義、慈悲の神の後に登場する概念にもう少しでモーシェの気高い教えを見失うところであった。彼らは一神教のすべての概念を失うところであった。ユランチアの精神的発展において重大な輪として役立つ者になる、他ならないすべての父の息子の肉体化の時まで1神のメルキゼデクの教えを保護する集団になる機会を失うところであった。

96:6.3 (1059.4) ヨシュアは、必死に部族民の心に崇高なヤハウェの概念を固定させようとし、「私はモーシェといたように、あなたと共にいよう。私はあなたを見放さず、見捨てもしない。」と宣言するに至った。ヨシュアは、信じない民に、すなわち古い土着の宗教を容易に信じよう

とするものの信仰と正義の宗教と共に進んでいこうとしない民に、厳しい福音を説く必要があると考えた。ヨシュアの教えの主旨は、「ヤハウェは聖なる神である。 妬む神である。あなたの背きも罪も許さない。」となった。この時代の最高の概念は、「力、判断、義の神」としてのヤハウェを描いた。

96:6.4 (1059.5) しかし、この暗い時代にさえ、モーシェの神格の概念を宣言する孤独な教師が、時として現れるのであった。「あなた方邪悪な子らは主に仕えることはできない。主は聖なる神であるので。」「人は神の前に正しくありえようか。人はその造り主の前に清くありえようか。」「あなたは神の深さを見抜くことができようか。全能者の極致を見つけることができようか。見よ、神は偉大であり、私達には知ることができない。触れはするが、私達は全能者を見つけることはできない。」

7. 詩編ヨブ記

96:7.1 (1060.1) ヘブライ人は、族長と聖職者の統率の下に漫然とパレスチナに定着するようになった。しかしかれらは、すぐ砂漠の未開の思考体系にむけて押し戻され、あ

まり高度ではないケナーアン人の宗教習慣によって質が落とされるようになった。それらは、偶像崇拝的で放縦となり、また神格に関する考えは、特定の生き残っているシャレイム集団によって維持されたエジプトやメソポタミアの神の概念よりはるかに劣り、その概念は、詩篇の幾つかに、またヨブ記と呼ばれるものに記録されている。

96:7.2 (1060.2) 詩篇は、20人あるいはそれ以上の著者の作業である。多くがエジプト人とメソポタミアの教師によって書かれた。レヴァント人が、自然神を崇拝していたこれらの時代、まだ、かなりの数のエル　エリョン、いと高きものの至上性を信じる者がいた。

96:7.3 (1060.3) 宗教のいかなる著作も詩篇ほどには神への献身と心を揺さぶる考えの豊かさはない。そして、他には一つの著作もそのように広範囲の時間を網羅していないことを念頭に置き、もし称賛と礼拝の一つ一つの詩篇の源と年代を検討することができるならば、それは非常に役立つであろうに。この詩篇は、レヴァント地方全体にわたりシャレイム宗教の信者に受け入れられた神の異なる

概念に関する記録であり、アメネモペからイザヤまでの全期間を包含する。詩篇では、神は、部族神の粗雑な考え方からヤハウェが情愛深い支配者であり慈悲深い父として描写される後のヘブライ人の大いに拡大された理想までの概念の全段階において描写されている。

96:7.4 (1060.4) このように考察されるとき、詩篇のこの一群は、20世紀に至るまで人によってかつて組み立てられた信心の言葉の最も貴重で有用な取り合わせを構成している。この賛美歌著作の信心深い精神は、世界の他のすべての聖典の精神を超えている。

96:7.5 (1060.5) ヨブ記に提示されている神格の斑模様の絵は、およそ300年に及ぶ20人以上のメソポタミアの宗教教師達の産物であった。そしてメソポタミア人の信仰のこの編集物に見られる神性についての高い概念を読むとき、人は、真の神の考えがパレスチナの暗い時代に順守されたのは、ハルダイアのウルの近辺であったということに気づくであろう。

96:7.6 (1060.6) 神の叡知と全てへの浸透性は、パレスチナにおいてはよく理解されたが、その愛と慈悲は、そうではな

かった。これらの時代のヤハウェは、「敵の魂を支配するために悪霊を送る。」かれは、自身の従順な子らを繁栄させ、その間すべての他のものを呪い、恐ろしい判断を加える。「かれは狡猾な者の企みをうちこわす。かれは、知恵ある者を彼ら自身の悪知恵を使って捕らえる。」

96:7.7 (1060.7) ウルにいるときだけ、表明者は、「彼が神に祈ると受け入れられ、喜んで顔を見る。神は人に神の義を報いるので。」と神の慈悲を大声で訴えた。このようにウルから、信仰による救済、神の恩恵が、説かれた。「神は、懺悔する者に寛大であり、『黄泉の穴に下って落ちないように彼を救い出せ。私はすでに身の代金を得た。』もし誰かが、『私は罪を犯し、正しいことを曲げた。そして、それは私の利益にならなかった。』というならば、黄泉の穴に落ちないように彼の魂を救い出され、彼は命の光を見る。」と言われる。メルキゼデクの時代以来、レヴァント人の世界は、ウルの予言者でありシャレイム信者らの、すなわちメソポタミアのかつてのメルキゼデクの居留地の生存者らの聖職者であるエリー

フーのこの並はずれた教えほどには、人間救済のためのそのような鳴り響く励ましの言葉を聞いていなかった。

96:7.8 (1061.1) そして、このようにメソポタミアにおけるシャレイム宣教師の生存者達は、ヘブライ民族の分裂期間、決して止むことのないイスラエルの教師達のその歴代の最初の出現まで、すべての者の宇宙なる父、創造者なる父の理想の実現、つまりヤハウェの概念の進化の頂上を極めるまで、概念の上に概念をうち建てて、真実の光を堅持したのであった。

96:7.9 (1061.2) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 97
ヘブライ人の間の神の概念の進化

97:0.1 (1062.1) ヘブライ人の精神的指導者達は、それまでに他の誰も首尾よくしたことのなかったことをした。—哲学者だけが理解できる神格の抽象概念に変換することなく神の概念を非擬人化した。一般民衆さえ父としてのヤハウェの、個人でなければ、少なくとも人種の、しっかりした概念を評価することができた。

97:0.2 (1062.2) 神の人格の概念は、明らかにメルキゼデクの時代にシャレイムで教えられた一方、エジプト脱出時には曖昧で霞んでおり、精霊的な指導者の教えに応じて代々引き続いてヘブライ人の心の中で徐々に進化するだけであった。ヤハウェの人格への理解は、その漸進的発展において多くの他の神の属性のそれよりもはるかに継続的であった。モーシェからマラキエまで、ヘブライ人の心の中にほとんど完全な神の人格の概念について成長があり、この概念は、天の父に関するイエスの教えにより次第に高められ賛美された。

1. サムエル—ヘブライ人の最初の予言者

97:1.1 (1062.3) パレスチナの周辺民族の敵対的な圧力は、ヘブライの族長たちに部族組織を中央集権政府へと連合しない限り、生き残ることは望めないということを早々と教えた。そして行政権のこの集中化は、サムエルに教師として改革者として機能するより良い機会を提供した。

97:1.2 (1062.4) サムエルは、崇拝形式の一部としてメルキゼデクの真理の維持に固執した歴代のシャレイム教師から生まれた。この教師は、雄々しく意志の堅い人物であっ

た。全イスラエル人をモーシェ時代のヤハウェの崇拝に引き戻すことに取り掛かった際、遭遇したほとんど全面的な反対にかれを耐させたのは、並はずれた決断と相まったその強い献身だけであった。その時でさえ、サムエルの成功は部分的であった。かれは、ヤハウェのより高度の概念への活動にむけて、ブライ人の知的な半分だけを取り戻した。残る半分は、国の部族神の崇拝とヤハウェの劣性の概念を持続した。

97:1.3 (1062.5) サムエルは、粗野だが有能な型の人物であり、仲間と共に出かけ1日のうちにバアールの史跡の20個ほどを倒すことができた実践的改革者であった。彼のなした進歩は、衝動からの純然たる抑え難い力によるものであった。かれは、ほとんど説教をせず、それほど教えず、ひたすらに行動した。ある日、サムエルはバアールの聖職者を愚弄していた。次にはとりこの王をずたずたに切った。かれは、ひたむきに1神を信じており、「地の柱はあるじのものであり、その上に世界を据えられた。」天地の創造者としての明確な1神、の概念を持っていた。

97:1.4 (1063.1) しかし、神格概念の発展へのサムエルの大いなる貢献は、ヤハウェは不変であり、つまり永久に誤りのない完全性と神性の同じ具体化であるという明確で断固たる宣言であった。この時代のヤハウェは、嫉妬深く気まぐれであり、あれこれしてしまったことを後悔する発作的な神であると考えられていた。だが今、ヘブライ人は、エジプトから威勢よく繰り出して以来初めて、「イスラエルの力である方は偽ることも悔いることもない。この方は人間ではないので悔いることがない。」という驚くべき言葉を聞いた。神との関係における安定性は宣言された。サムエルは、アブラーハームとのメルキゼデクの契約を改めて表明し、イスラエルの主なる神は、すべての真実、安定性、不変性の源であると宣言した。ヘブライ人は、つねに人間、超人、未知の起源の崇高な霊として神を見てきた。しかし今、創造者たる完全性の変らない神として高められたホレーブのかつての霊を聞いた。サムエルは、人間の心の変化の状態と人間存在の変動を超えた高さに昇る進展的神の概念を促進していた。サムエルの教えの下、ヘブライの神は、部族神の種類の

考え方から全能かつ不変の創造者と全創造の監督者へと上昇を始めていた。

97:1.5 (1063.2) サムエルは、また神の誠実さについての話、すなわち契約保守の信頼性を新たに説いた。サムエルは、「主は民を見捨てないだろう。」「私達と永遠の契約を立てられ、このすべては備えられ、また守られる。」と言った。そこで、パレスチナのありとあらゆる所で、崇高なヤハウェの崇拝に戻ることを告げた。「あなたは大いなる方です。主よ、神よ、あなたのような方は他になく、あなたの他に神はいないのですから。」と、いつもこの活気に満ちた教師は広布した。

97:1.6 (1063.3) その時までヘブライ人は、ヤハウェの恩恵を主に物質的繁栄の点から見ていた。それは、イスラエルにとり大きな衝撃であり、「主は富ませ、貧しくする。低くし、また高くする。貧しい者を塵から起こし、乞食を引き揚げ王子の中に座らせ、栄光の位を継がせる。」とサムエルが大胆に主張したとき、危うくその命を失うところであった。モーシェ以来、謙虚である者やそれほど恵まれない者へのとても励みになる約束は宣言されてお

らず、貧乏人の中の絶望する何千もの者が、精神的状態を改善できるという望みを持ち始めた。

97:1.7 (1063.4) しかしサムエルは、部族神の概念をはるかに超える進歩をしなかった。すべての人間を創ったヤハウェを宣言したものの、主としてヘブライ人、神の選民で頭が一杯であった。にもかかわらず、モーシェの時代のように、もう一度、神についての概念は、聖なる真っ直な神を描いた。「主のように聖なる方はありません。「だれをこの聖なる主の神と比較することができるでしょうか。」

97:1.8 (1063.5) この白髪まじりの年老いた指導者は、時の経過とともに神の理解において進歩した。かれは、「主は知識の神であり、行動は神によって測られる。」「主は地球の終わりを判断され、慈悲ある者に慈悲を示され、真っ直な者とまた真っ直におられる。」と言明したのであるから。慈悲深い者だけに限られているとはいえ、ここには慈悲の夜明けさえある。その後逆境に際し、かれは、民に「主の手に今、陥ることにしよう。主の慈悲はすばらしいので。」「多くを救うか、僅かしか救わない

かのいかなる制限も主にはない。」と熱心に説いてさらに一歩進んだ。

97:1.9 (1063.6) ヤハウェの特徴についての概念のこの緩やかな展開は、サムエルの後継者の活動の下で続いた。後継者らは、契約保守の神としてのヤハウェの提示を試みたが、サムエルが設定した速度を少しも維持しなかった。サムエルが後に発想したようには神の慈悲の考えを開発しなかった。ヤハウェがすべての上にあるという考え「王国はあなたのものです。主よ、そして、あなたはすべてのものの上に崇められる方です。」の維持にもかかわらず、他の神々の認識に向かう一定の押し戻しがあった。

97:1.10 (1064.1) この時代の基調は神の力であった。この時代の予言者は、ヘブライの王座の王を育成するように考案された宗教を唱道した。「主よ、偉大さと力と栄光と勝利と尊厳はあなたのものです。御手には勢いと力があり、すべてが偉大にされ力づけられるのです。」そして、これが、サムエルとその次の後継者達の時代の間の神の概念の進捗状況であった。

2. エーリージャとエリーシャ

97:2.1 (1064.2) 紀元前10世紀のヘブライ国家は2つの王国に分割された。これらの政治的な分割の双方において、多くの真実の教師は、すでに定着し、その上悲惨にも分離戦争後も続いた精神退廃の反動的な流れをせき止めようと努力をした。しかし、ヘブライの宗教を進めるこれらの努力は、正義のための断固とし恐れ知らずのかの戦士エーリージャが自分の教えを始めるまで成功しなかった。エーリージャはサムエルの時代に保持されたものに匹敵する神の概念を北の王国に回復した。エーリージャには、神の高度な概念を提示する機会がほとんどなかった。エーリージャは、その前にサムエルがそうであったように、バアールの祭壇を打倒したり邪神の偶像を壊し、忙しく立ち回った。そして、偶像崇拝の君主の敵対をものともせず改革を進めた。エーリージャの課題はサムエルが直面していたものよりさらに巨大で難しかった。

97:2.2 (1064.3) エーリージャが召されると、忠実な仲間であるエリーシャは、彼の仕事を始め、ほとんど知られていな

いミジュカージャのかけがえのない援助で、真実の光が、パレスチナで消えないようにした。

97:2.3 (1064.4) だが、これらは神格の概念の進歩の時代ではなかった。ヘブライ人は、いまだモーシェの理想にさえ上ってはいなかった。エーリージャとエリーシャの時代は、より上の階級を崇高なヤハウェの崇拝に戻すに至り、サムエルがそれを残したほぼその位置への宇宙の創造者の思考体系の回復を目撃した。

3. ヤハウェとバアール

97:3.1 (1064.5) ヤハウェの信者とバアールの信奉者の間の延々と続く論争は、宗教的信念の違いというよりは、むしろ社会経済上の思想の衝突であった。

97:3.2 (1064.6) パレスチナ住民は、土地の個人所有権に対する考え方に異があった。南の、つまり放浪のアラビア部族(ヤハウェの信者)は、譲渡できないものと—神の贈り物と見なした。土地というものは、販売したり抵当に入れることができないと考えた。ヤハウェは、「『土地は売られてはならない。私のものであるから。』と言われた。」

97:3.3 (1064.7) 北のより定着したケナーアン人(バアール人)は、自由に土地を売買し抵当に入れた。バアールという言葉は、所有者を意味する。バアールの集団礼拝は、主要な2つの教理に基づいた。第一に、資産の交換、契約、契約の合法化—土地を売買する権利。第二に、バアールは、雨を送ると考えられた—彼は肥沃の神であった。豊作は、バアールの愛顧によって決まった。集団礼拝は、主に土地、その所有権と産出力に対する関心であった。

97:3.4 (1065.1) 一般的にバアール人は、家、土地、奴隷を所有していた。貴族的地主で、都市に住んでいた。各バアール人は、聖地、聖職者、「聖女」すなわち礼拝式用の売春婦を所有していた。

97:3.5 (1065.2) ケナーアン人とヘブライ人によって示される社会的、経済的、道徳的、宗教的な態度の苦々しい対立は、土地へのこの基本的な違いから発展した。この社会経済上の論争は、エーリージャの時代まで明確な宗教問題にはならなかった。この攻撃的な予言者の時代から、この問題は、厳密に宗教路線上で—ヤハウェ対バアール

—で論じ合って決着がつけられ、そしてそれは、ヤハウェの勝利とその後の一神教に向かう流れに終わった。

97:3.6 (1065.3) エーリージャは、ヤハウェ-バアール論議を土地問題からヘブライ人の宗教局面とケナーアン人の思考形態へと転じた。アハーブが、彼らの土地を手に入れるために陰謀でナボスを殺害したとき、エーリージャは、昔の土地慣習から道徳の問題にし、バアール人に対し活発な作戦行動を開始した。これは、都市による支配に対する田舎の人々の戦いでもあった。ヤハウェが、エロヒームになったのは主としてエーリージャの下でのことであった。この予言者は、農地の改革者として始まり、神を高めることによって終わった。バアールは、数多くあり、ヤハウェは、一つであり—一神教が多神教を破った。

4. アーモーセとホゼイア

97:4.1 (1065.4) 部族神—非常に長い間、犠牲と儀式の役目を果たしてきた神、つまり初期のヘブライ人のヤハウェ—の自身の民の間でさえ犯罪と不道徳を罰する神への変遷における大きな一歩は、アーモーセにより進められた。ア

ーモーセは、北方部族の犯罪行為、酩酊、抑圧、および不道徳を公然と非難するために南の丘陵地帯から現れた。モーシェの時代以来、パレスチナではそのような感動的な真実は、明確には示されていなかった。

97:4.2 (1065.5) アーモーセは、単なる修復人でも改革者でもなかった。アーモーセは、神格の新概念の発見者であった。アーモーセは、先人達により発表されてきた神について多くを宣言し、いわゆる神の選民の間で罪を是認する神性者への信仰を勇敢にも攻撃した。メルキゼデクの時代以来人間は初めて、国家の正義と道徳の二重の基準の告発を耳にした。その歴史上ヘブライ人は、自分達の神ヤハウェは他のいかなる人々の間で許さないように、自分達の生活での犯罪や罪を許さないということを初めて耳にした。アーモーセは、サムエルとエーリージャの厳しく公正な神を思い描いたが、悪行への罰におよぶとき、他のいかなる国と同じくヘブライ人も同様に判断する神もまた見た。これは、「神の選民」の自己本位教理への直接攻撃であり、その頃の多くのヘブライ人は、それに対してひどく憤慨した。

97:4.3 (1065.6) アーモーセは言った。「山を造り、風を造り出された方、7つの星とオリオン座を造られた方、死の影を朝に変え、昼を暗い夜にする方を探しなさい。」生半可な宗教心の、時勢に便乗した、時に不道徳である仲間を糾弾する際に、変らないヤハウェの厳然たる正義を描こうとして、悪人に言及して次のように言った。「彼らが黄泉に入り込んでも、私はそこから彼らを引き出す。彼らが天に登っても、そこから、私は彼らを引き降ろす。」「彼らが敵のとりことして行っても、私は正義の剣に命じ、そこで彼らを殺す。」咎めと非難で彼らを指さし、「私は、必ずあなたのしたことを決して忘れない。」「そして、小麦が篩いに掛けられるように、私は万国の間でイスラエルの家を篩いにかける。」とヤハウェに誓って宣言したとき、アーモーセは、さらに聞き手を驚かせた。

97:4.4 (1066.1) アーモーセは、ヤハウェを「万国の神」であると宣言し、イスラエル人にむけて、儀式が正義の代理をしてはならないと警告した。そして石打ちで死ぬ前に、この勇敢な師は、崇高なヤハウェの教理を救うために真実

の気運を十分に広げておいた。アーモーセは、メルキゼデクの顕示のさらなる進展を保証していた。

97:4.5 (1066.2) ホゼイアは、愛の神のモーシェの概念の復活によりアーモーセと正義の普遍的な神の教理に従った。ホゼイアは、犠牲による許しではなく、悔悟による許しを説いた。愛ある優しさと神の慈悲の福音を宣言し、「私はあなたと永遠に契りを結ぶ。実に、正義と公義と慈愛と慈悲をもって契りを結ぶ。私は誠実さをもって契りを結びさえする。私は思う存分に彼らを愛する。私の怒りは離れ去ったからである。」と言った。

97:4.6 (1066.3) ホゼイアは、神に言い及んで「私は彼らを懲らしめようと思う」とアーモーセの道徳的警告を忠実に続けた。しかし、アーモーセが、「私は、私の民でない者に『私の民である』と言う。すると彼らは、『あなたは私達の神です。』と言おう。」と言うと、イスラエル人は、それを反逆に近い残酷さと見なした。アーモーセは、「私は彼らの背信を許し、喜んで愛する。私の怒りは離れ去ったからである。」と言い、悔悟と許しを説き続けた。常にホゼイアは、望みと許しを宣言した。その

伝言の要旨はいつも次の通りであった。「私は私の民に慈悲をかける。あなたは私の他に神を知らない。私の他には救い主はいないのであるから。」

97:4.7 (1066.4) アーモーセは、ヘブライ人は神の選民とされているので、ヤハウェは、彼らの犯罪と罪を容赦するという認識へのヘブライ人の国民としての良心を奮い起こし、その一方でホゼイアは、イザヤとその仲間が、とても絶妙に歌った神の同情と慈愛の後の慈悲深い和音の初めの音符を鳴らした。

5. 第一のイザヤ

97:5.1 (1066.5) ある者は、北の一族の中の個人の罪と国家の犯罪に対する罰での威喝を示し、他のものは、南の王国の違反の報いに対する凶変を予測した時代があった。最初のイザヤの登場を促したのは、ヘブライ国家の良心とこの自覚の喚起の後であった。

97:5.2 (1066.6) イザヤは、神の不変の本質、無限の叡知、不変で完全な信頼性を説き続けた。イスラエルの神を次のように提示した。「私はまた、公正を測り縄とし、正義をおもりとする。」「主は、あなたの痛み、恐怖、人に負

わされた苛酷な労役のつらい束縛を除かれる。」「あなたの耳は後ろから『これが道である。これに歩め。』と言われるのを聞くであろう。「見よ、神が私の救いである。主は私の強さであり歌であるので、私は頼りとし恐れない。」「『　さあ、来たれ、論じ合おう。』主は言われる。『あなたの罪が緋のように赤くとも、雪のように白くなる。たとえ紅のように赤いとしても、羊の毛のようになる。』」

97:5.3 (1066.7) 恐怖におののき精神が渇望しているヘブライ人に、この予言者は言った。「起きて光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に輝いているから。」「神である主の霊が、私の上にある。従順な者に良い知らせを説くために私に油を注がれたので。心の傷ついた者を癒すために、捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げるために私を遣わされた。」「私は主にあって大いに楽しみ、私の魂は神にあって喜ぶ。主が私に救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせてくださったから。」「彼らが苦しむときは主も苦しまれ、ご自身の天使が彼らを救った。その愛とあわれみで、主は彼らを贖われた。」

97:5.4 (1067.1) 魂を満足させるかれの福音を支持し文飾したミイカとオバヅヤが、このイザヤに続いた。そして、この2人の勇敢な使者は、ヘブライ人の聖職者に支配されている儀式を大胆に糾弾し、恐れることなく全体の犠牲的制度を攻撃した。

97:5.5 (1067.2) ミイカは「報酬のために裁く支配者と、代金のために教える聖職者と、金のために占う予言者」を糾弾した。かれは、「しかし、あらゆる者は、自身のつるの下に座り、誰も彼を脅かす者はいない。人はみな生き、各自が自分の理解する神に従うのであるから。」と言い、迷信と牧師の行いからの自由な1日というものについて教えた。

97:5.6 (1067.3) ミイカの伝言の要旨は、いつも次の通りであった。「丸焼けの生贄を持って神の前に行くべきであろうか。主は1,000頭の雄羊、幾万の油を喜ばれるであろうか。私の犯した罪のために私の長子を、私の魂の罪のために私の身体の果実を、捧げるべきであろうか。人よ、あの方は私に見せられた。何が良いことかを。主はあなたに何を求めているのか。それはただ公義を行ない、慈

悲を愛し、へりくだって神と共に歩むくことではないか。そして、それは素晴らしい時代であった。本当に、2,500年以上も前にそのような解放する知らせを必滅の人間が聞き、また、ある者達は信じさえした感動的な時代であった。聖職者の強情な抵抗がなかったならば、これらの教師はヘブライの崇拝儀式の血なまぐさい全体の儀式を打倒していたことであろう。

6. イレミアス剛胆者

97:6.1 (1067.4) 数人の教師が、イザヤの福音を詳しく述べ続ける一方、イレミアスにはヤハウェ、ヘブライ人の神の国際化の次の大胆な前進が残っていた。

97:6.2 (1067.5) イレミアスは、ヤハウェは、ヘブライ人の他の国との軍事闘争に味方していないと大胆に宣言した。ヤハウェは、地球すべての、万国の、全民族の神であると断言した。イレミアスの教えは、イスラエルの神の国際化のうねりの最高潮であった。最後にそして永遠に、この大胆な伝道者は、ヤハウェが万国の神であるということ、エジプト人のためのオシリスも、バビロニア人のためのベルも、アッシリア人のためのアッシュールも、ま

たはペリシテ人のためのダゴンもいないということを宣言したのであった。ヘブライ人の宗教は、このようにほぼこの頃に、またそれに引き続いて、世界の中の一神教のその復興において次の事柄を共有した。ついに、ヤハウェの概念は、惑星の神格水準へ、そしてさらには宇宙の威厳に昇った。しかし、イレミアスの仲間の多くにとっては、ヘブライ国家は別としてヤハウェを思い描くことは難しいとわかった。

97:6.3 (1067.6) またイレミアスは、イザヤが描写した公正で情愛深い神について説いた。「げに、私は永遠の愛をもってあなたを愛した。それゆえ、私は慈愛で導いてきた。」「主は人の子を進んで苦しめようとは思っておられないから。」

97:6.4 (1067.7) この大胆不敵の予言者は言った。「公正であるのは主であり、おもんばかりは大きく、み業は力がある。御目は、人の行いの方法と成果に応じてあらゆる者に与えるために、人のすべての息子のすべての道に開いている。」しかし、エルサレムの攻囲戦の際、彼が次のように言ったとき、それは冒涜的な反逆罪であると考え

られた。「さて、私はこれらすべての土地をバビロンの王、私の使用人のネブカドネザルの手に与えた。」そして、イレミアスが都市の降伏について忠告したとき、聖職者と民間支配者は、彼を陰鬱な地下牢の泥まみれの穴に投げ込んだ。

7. 第2のイザヤ

97:7.1 (1068.1) メソポタミアにおけるヘブライ国家の破壊と彼らの監禁は、もし聖職の決定行為がなかったならば、神学の拡大にむけての大きな利益について立証していたことであろう。その国家はバビロンの軍隊の前に崩壊し、国家主義的なヤハウェは、精霊的な指導者の国際的な説教に苦しんだ。国家神の損失に対しての憤りこそが、ユダヤ人聖職者が、すべての国の国際化された神についての新しく、拡大された考えにおいてさえ神の選民としてのユダヤ人復興の努力において、それほどまでにヘブライの歴史上の寓話の発明と奇跡的な出来事の作りごとをさせた。

97:7.2 (1068.2) イスラエルの祖先と歴史に名誉と栄光を反映するためにこれらの伝説を常に歪めたにもかかわらず、彼

らが借用したカルデアの物語の道徳的風潮と精神的な意味を絶えず改良したことには注意するべきであるが、捕らわれの身の間のユダヤ人は、バビロニアの伝統と伝説に大変な影響を受けた。

97:7.3 (1068.3) これらのヘブライの聖職者と筆記者の心の中にはただ一つの考えがあり、それは、ユダヤ国家の再建とヘブライの伝統の賛美と人種の歴史の高揚であった。これらの聖職者が、誤った考えを西洋世界のそのような大部分に結びつけたという事実のへの憤りがあるならば、彼らは故意にこれをしなかったということが、心に留め置かれるべきである。彼らは、閃きで書いているとは主張しなかった。神聖な本を書いているとは明言しなかった。彼らは、単に捕らわれの身の仲間の弱まる勇気を奮い立たせるために工夫された教科書を作成していた。紛れもなく、同国人の国家精神と士気を高めることを目的としていた。後の人間には、絶対確実な教えとされる手引書へのこれらと他の文章の組み立て作業が残った。

97:7.4 (1068.4) ユダヤの司祭職は、監禁以降にこれらの文章の自由な使用をしたが、彼らの仲間の捕虜への影響は、若

くて不屈の予言者、正義、愛、公正、慈悲の最初のイザヤの神への完全な転向者である2番目のイザヤの存在によって大いに妨げられた。また、イザヤは、イレミアスと共にヤハウェが万国の神になったと信じた。かれは、人と自分達を捕らえる者達の中にも一様に転向者を作った神の本質についてのこれらの理論をきわめて効果的に説教した。この若い伝道者は、自分の教えを記録に残し、美と雄大さに対する純然たる敬意は先のイザヤの文章の中への編入に導いたものの、敵意を抱き容赦のない聖職者らは、その教えを彼とのすべての繋がりから切ろうとした。その結果、その名前の本に第2のイザヤの文章の第40章から第55章までを含んでいると見分かるかもしれない。

97:7.5 (1068.5) マキヴェンタからイエスの時代まで予言者、あるいは宗教教師一人として、捕らわれの身の時代に第二のイザヤが広布した神のその高い概念に到達しなかった。この精神指導者が公言した神は、小さい、擬人化の、また人工の神ではなかった。「見よ、主は島々をごく小さいものとして取り上げられる。」「天が地よりも

高いように、私の道はあなた方の道よりも高く、私の考えはあなた方の考えよりも高い。」

97:7.6 (1069.1) ついにメルキゼデクのマキヴェンタは、必滅の人間に本物の神を広布する人間の教師らを見た。第一のイザヤ同様、この指導者は、宇宙的創造と擁護の神について説教した。「私が地を造り、その上に人間を置いた。みだりに造ったのではなく、人を住まわせるためにそれを造った。」「私こそ初めであり、終わりである。私の他に神はいない。」イスラエルの主である神の代わりに、この新予言者は、「天は散り失せ、地は古びるかもしれないが、私の正義はとこしえに、そして、私の救いは代々に続く。」「恐れるな。私はあなたと共にいる。たじろぐな。私はあなたの神だから。」「私—正義の神、救い主—の他に神はいない」と言った。

97:7.7 (1069.2) 以来何千という人を慰めてきたように、ユダヤ人の捕虜は、そのような言葉を聞いて慰められた。「このように主は言われる。『私があなたを造り、私があなたを贖う。私があなたの名を呼んだ。あなたは私のもの。』」「あなたが水の中を過ぎるときも、私の目にはあ

なたは大切であるので私はあなたと共にいる。」「女が自分の乳飲み子を忘れられようか、そうして、息子を哀れまないであろうか。さよう、彼女は忘れるかもしれない。しかし、私は私の子らを忘れない。見よ、私は両の掌に子らを刻んだのであるから。私は私の手の影にそれらを覆いさえした。」「悪者にはおのれの道を、不法者にはその計りごとを捨てさせ、そこで主に、私たちの神に、戻らせなさい。そうすれば、主は慈悲をかけられる。主はふんだんに許してくださるから。」

97:7.8 (1069.3) シャレイムの神のこの新顕示の福音を再び聞きなさい。「主は羊飼いのようにその群れを飼う。御腕に子羊を引き寄せ懐に抱く。疲れた者には力を与え、力のない者には強さをつける。主を待ち望む者は新しく力を得る。それらは鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない」

97:7.9 (1069.4) このイザヤは、崇高なヤハウェの拡大する概念の福音を広範囲にわたって宣伝活動をした。イザヤは、主なる神を宇宙の創造者として叙述した雄弁さでモーシェと競った。宇宙なる父の無限の特性の描写において詩

的であった。天の父についてそれ以上の美しい発表はされたことがなかった。詩篇のように、イザヤの文章は、ユランチアへのマイケルの到着以前の必滅者が初めてきく神の精霊的な概念の最も崇高で真の提示の一つである。神のその描写を聞きなさい。「私は永遠の住まいに住む高く高邁なものである。」「私こそ初めであり、終わりである。私の他に神はいない。」「主の御手が短かくて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。」この温和な、だが、命令する予言者が、神格の不変性、神の誠実さの説教に固執するとき、それはユダヤ民族の新教理であった。かれは、「神は忘れないであろう、見捨てないであろう。」と宣言した。

97:7.10 (1069.5) この大胆な教師は、人は非常に密接に神と関係があるとはっきりと示して言った。「私の名で呼ばれるすべての者は、私の栄光のために私が創造した。そして彼らは私の栄誉を述べ伝えるであろう。私、この私は、私自身のために彼らの背きの罪を拭い去るのであり、私はもう彼らの罪を思い出さない。」

97:7.11 (1069.6) 宇宙なる父の神性を見事に宣言し、その父に言いおよんで「天は私の王座、地は私の足台である。」という一方、国家の神の概念を粉砕するこの偉大なヘブライ人に耳を傾けなさい。イザヤの神は、それでもなお、神聖で、厳然とし、正当で、不可解であった。砂漠のベドゥイン族の立腹し、執念深く、そして嫉妬するヤハウェの概念というものは、ほとんど消え失せてしまった。最高の、そして決して人の視点を失わない普遍的なヤハウェの新概念が、人間の心に現れた。神の正義の実現は、原始の魔術、生物的恐怖の破壊を始めた。ついに人は、法と秩序の宇宙へと、そして信頼でき、最終的な属性のある普遍的な神に導かれている。

97:7.12 (1070.1) 崇高な神のこの伝道者は、愛の神を広布することを決してやめなかった。「私は高く聖なる場所に住まい、また、深く悔いており遜る者と住む。」そして、同時代人にさらなる安らぎの言葉をこの偉大な師は伝えた。「主は絶えずあなたを導き、あなたの魂を満たされる。あなたは潤された園のようになり、水の枯れない泉のようになる。敵が洪水のように来ようとも、主の霊が敵に対して防衛をもたらすであろう。」そして、人類祝

福のためにもう一度メルキゼデクの恐怖を打ちこわす福音とシャレイム信頼を育む宗教は光輝いた。

97:7.13 (1070.2) 明敏で勇敢なイザヤは、威厳と普遍的全能の崇高なヤハウェの、つまり愛の神、宇宙の支配者、全人類の慈愛深い父の気品に溢れた荘厳な描写によって国家主義的なヤハウェを効果的に影を落とした。多事多難のそれらの時代以来、西洋における最も高い神の概念は、普遍の正義、神の慈悲、永遠の正義を包含した。この偉大な教師は、全能の創造者をずば抜けた言語と無類の優美さですべてを愛する父として描いた。

97:7.14 (1070.3) 捕らわれの身のこの予言者は、同国人とバビロンの川のそばで聴いている多くの国の人々に説いた。そして、この第2のイザヤは、約束された救世主の任務について多くの誤った、また人種的に利己主義の概念に歯止めをかけるために多くのことをした。だが、この努力において完全な成功を収めることはできなかった。聖職者達が、誤認された愛国心を打ち立てる仕事に専心しなかったならば、二人のイザヤの教えは、約束された救世

主の認識と受け入れのための道を準備したことであったろう。

8. 神聖、かつ冒涜的歴史

97:8.1 (1070.4) ヘブライ人の経験の記録を神聖な歴史とし、残りの世界の出来事を冒涜的な歴史として見る習慣は、歴史の解釈に関して人間の心に存在する混乱に大きな原因がある。そしてこの困難は、ユダヤ人の世俗史の無さから起こる。バビロニアへ追放された聖職者は、ヘブライ人とのいわゆる神の奇跡的な関係のの新しい記録を、つまり旧約聖書に描かれているそのものをイスラエルの神聖な歴史として準備した後に、ヘブライの出来事についての既存の記録を慎重に、そして完全に破棄した。—「イスラエルの列王紀の行ない」と「ジェフーダの列王紀の行ない」のような本と共に他のいくつかのヘブライ歴史についての多少なりとも正確な記録。

97:8.2 (1070.5) 我々は、徹底した破壊的圧力と世俗史の不可避的強制が、いかにして、捕虜の身にあり外国支配の身にあったユダヤ人を非常に恐れさせ、自らの歴史の完全な書き直しと作り書きを試みたかを理解するために、その

国家の複雑な経験の記録について手短かに調査すべきである。ユダヤ人は、神学ではない適切な人生哲学の展開に失敗したということが思い起こすべきである。ユダヤ人は、罪に対する恐ろしい罰に加え正義のための神の報酬に関する彼らの最初の、しかもエジプト人の概念と取り組んだ。ヨブの劇的な事件は、この誤った哲学に対するある種の抗議であった。伝道の書の率直な悲観主義は、摂理へのこれらの過度の楽観的な見方への世慣れた反応であった。

97:8.3 (1071.1) しかし、500年の外国支配者の過剰な専制支配は、我慢強く長い間苦しんできたユダヤ人にとってさえ酷なものであった。予言者と聖職者は叫び始めた。「いつまでですか、主よ、いつまでですか。」正直なユダヤ人が経典を詳しく調べるにつれ、その混乱は、 さらにひどくなった。昔の予言者は、神は「神の選民」を保護し、救うということを約束した。アーモーセは、国家の正義の基準を再確立しない限り、神はイスラエルを捨てるであろうと脅かした。申命記の筆記者は、大いなる選択—善と悪、祝福と呪いの間の選択—を描いた。第一のイザヤは、慈善心に富む王である救世人について説教

した。イレミアスは、内面的な正義—心の平板に書かれた契約—の時代を広布した。第二のイザヤは、犠牲と贖いによる救済について話した。イェゼケイルは、奉仕と献身を通じての救済を広布し、エズラは法の順守による繁栄を約束した。しかし、このすべてにもかかわらず、彼らは束縛のうちに生き長らえ、救済は延期された。それからダニエルは、差し迫る「危機」の劇的な事件—重要な偶像の強打と正義の永続する治世の即時の設立、つまり救世主の王国を提示した。

97:8.4 (1071.2) この誤った希望のすべては、やがて楽園の神の息子が人間の姿で—人の息子として肉体を与えられ—彼らのところに来たとき、ユダヤの指導者が、非常に混乱し、楽園の神の息子の任務と活動を認識し、また受け入れることができない程度にまで人種的失望と挫折の段階へと導いた。

97:8.5 (1071.3) すべての現代宗教は、人間の歴史の特定の時代の画期的な出来事に奇跡的な解釈を与える試みにおいて深刻な失敗をしてしまった。神は、神意の父の介入の手を人事の流れに幾度も突き出してきたのは事実である

が、神学上の教義と宗教上の迷信を人間のこの歴史の流れにおける奇跡的働きによる超自然の堆積作用の現れと見なすのは誤りである。「いと高きものが人間の国を支配する」という事実は、世俗の歴史をいわゆる神聖な歴史に変換するのではない。

97:8.6 (1071.4) 新約聖書の作者らと後のキリスト教徒の筆者らは、ユダヤの予言者を理想化する彼らの善意からの試みによってヘブライ歴史の歪みをさらに複雑にした。その結果、ヘブライ歴史は、ユダヤ人著者とキリスト教徒の著者の両者に惨めに利用された。世俗のヘブライ歴史は、徹底的に教義化された。それは、神聖な歴史の創作に変換され、いわゆるキリスト教国家の道徳的概念と宗教の教えに動きがとれないほどに深く依存するようになった。

97:8.7 (1071.5) ヘブライの歴史における最高時の手短かな詳述は、ユダヤ人の聖職者が、バビロンにおいて彼らの民のありふれた世俗史を架空の、神聖な歴史に返したことに関して記録の事実がいかにして変えられたかを例証するであろう。

9. ヘブライの歴史

97:9.1 (1071.6) イスラエル人の12部族は、決して存在せず—ほんの3部族か4部族がパレスチナに住みついた。ヘブライ国家は、いわゆるイスラエル人とケナーアン人の同盟の結果として生まれた。「イスラエル人は、ケナーアン人の間に住んでいた。彼らの娘を妻にめとり、自分達の娘をケナーアン人の息子に与えた。」これらの事柄に関する聖職者の記録は、ヘブライ人がケナーアン人を排撃したと躊躇なく言明してはいるものの、ヘブライ人は、決してそうしなかった。

97:9.2 (1071.7) イスラエル人的意識は、エフライェムの丘陵地帯に起源があった。後のユダヤ人の意識は、ジェフーダの南方の一族に始まった。ユダヤ人は、(ジェフーダ人)は、常に北方のイスラエル人(エフライェム人)の記録を中傷し、汚点をつけようとした。

97:9.3 (1072.1) 尊大なヘブライの歴史は、アンモン人が、ヨルダンの東の仲間の部族民—ギラード人—への攻撃に抵抗するために、シャウールの北の一族の結集から始まった。シャウールが、1軍隊3,000人余りで敵を破ると、丘

の部族が、彼を王に導いたのは、この功績であった。この話を書き直したとき、追放された聖職者らは、シャウールの軍隊を33万人にまで増やし、戦いに参加する部族の表に「ジェフーダ」を追加した。

97:9.4 (1072.2) アンモン人の敗北直後、シャウールは、自分の軍による普通選挙で王にされた。聖職者も予言者もだれ一人この出来事に参加しなかった。しかし聖職者は、後にシャウールは、神の指示に従い予言者サムエルによって王冠を授けられたと記録に組み入れた。これは、ジェフーダ人へのダーヴィドの王政のために「神性の子孫」を打ち立てるためにそうしたのであった。

97:9.5 (1072.3) ユダヤ歴史のすべての歪みの中で最大なものは、ダーヴィドと関係していた。シャウールのアンモン人に対する勝利 (彼がヤハウェに帰した) の後、ペリシテ人は、警戒をするようになり、北方部族への攻撃を始めた。ダーヴィドとシャウールは、断じて同意できなかった。600人を連れるダーヴィドは、ペリシテと同盟をし、沿岸をエスドラエロンへと進軍した。ガテでは、ペリシテ人が、ダーヴィドに戦場を出るよう命じた。彼ら

は、ダーヴィドがシャウールに寝返るかもしれないと恐れた。ダーヴィドは退却した。ペリシテ人は、シャウールを攻撃し、破った。ダーヴィドがイスラエルに忠誠であったならば、彼らはこうすることはできなかったであろう。ダーヴィドの軍隊は、ほとんどが社会に適応できない者や正義からの逃亡者からなる数か国語が分かる造反者の寄せ集めであった。

97:9.6 (1072.4) ペリシテ人によるギルボーアでのシャウールの悲惨な敗北は、周囲のケナーアン人の目には神の中間でのヤハウェを最低の位置へいたらせた。通常、シャウールの敗北は、ヤハウェからの背教のせいにされたであったろうが、今回、ジェフーダ人の編者らは、それを儀式の誤りのせいにした。彼らは、ダーヴィドの王政のための背景としてシャウールとサムエルの伝統を必要とした。

97:9.7 (1072.5) ダーヴィドと寡兵は、ヘブロンの非ヘブライの都市に本部を設定した。やがて、ダーヴィドの同国人が、ジェフーダの新王国の王であると宣言した。ジェフーダは、ほとんど非ヘブライ分子—ケニーテ人、カーレ

ーブ人、イェブース人、および他のケナーアン人—で成り立っていた。それらは、遊牧民—牧夫—であったので、ヘブライの土地所有の考えに徹していた。彼らは、砂漠部族の思考形態を保持した。

97:9.8 (1072.6) 旧約聖書見られるように、ダーヴィドを王にしたてる異なる2話の物語は、神聖な歴史と冒涜的な歴史の間の違いをよく例証している。彼の近い追随者ら(彼の軍隊)が、いかにして彼を王にしたかに関する非宗教的な物語の一部は、神の指示により予言者サムエルが、どのようにして同胞からダーヴィドを選び、またヘブライ人の王に聖別し、そしてシャウールの後継者であると示すために正式に、しかも入念かつ厳粛な儀式によって進めたかが、神聖な歴史について長々と散文的な報告を後に準備した聖職者らにより不注意に記録に残された。

97:9.9 (1072.6) 聖職者らは、イスラエルへの神の奇跡的対処に関する架空の物語を用意した後、既に記録にある明白でありのままの声明を幾度となく完全に削除し損ねた。

97:9.10 (1072.7) ダーヴィドは、まずシャウールの娘と、次に富裕のエドム人ナバールの未亡人と、その次にはゲシュー

ルの王であるタルマイェの娘と結婚することで政治的に自分を確立しようとした。彼は、ヘティテ人の妻バテシカは言うまでもなく、イェブスの女性の中から6人の妻をめとった。

97:9.11 (1073.1) ダーヴィドは、エフライェム人のイスラエルの消え失せる北の王国の遺産と伝統の後継者としてジェフーダの神の王国の作り話を築き上げるためにそのような方法と人々を駆使した。ジェフーダのダーヴィドの国際的部族は、ユダヤ人であるよりも非ユダヤ教徒であった。それにもかかわらず、エフライェムの圧迫された年長者らが、南下してきて「油を注いでイスラエルの王とした。」軍事的脅威の後、ダーヴィドは次に、イェブース人と協定を結び、イェブース(エルサレム)に連合王国の首都を設置した。そこは、ジェフーダとイスラエルの中程の強い壁で囲まれた都市であった。ペリシテ人は興奮し、すぐにダーヴィドを攻撃した。激戦の後、それらは破られ、そしてもう一度、ヤハウェは、「万軍の神、主」として確立された。

97:9.12 (1073.2) しかし、ダーヴィドの軍隊の大半は、非ヘブライ人であったので、ヤハウェは、やむなくこの栄光の幾らかをケナーアン人の神と共有しなければならない。したがって、あなたの記録(ジェフーダ人の編者に見過ごされた)では、この密告者の申し立てが登場する。「ヤハウェは私の前で私の敵を破られた。それ故、ダーヴィドは、その場所の名をバアールペラティムと呼んだ。」そして、ダーヴィドの兵隊の80パーセントがバアール人であったので、彼らはこうした。

97:9.13 (1073.3) ダーヴィドは、ギボンの民がエフライェム人と平和条約を結んでいたケナーアンの都市ギボンをシャウールが攻撃したと指摘し、ギルボーアでのシャウールの敗北について説明した。このために、ヤハウェは、シャウールを見捨てた。シャウールの時代にさえ、ダーヴィドは、ペリシテ人からケイーラのケナーアンの市を防御し、次には、ケナーアン都市に自分の首都を置いた。ダーヴィドは、ケナーアン人との妥協政策を守る際、絞首刑のためにシャウールの7人の子孫をギボン人に引き渡した。

97:9.14 (1073.4) ペリシテ人の敗北後、ダーヴィドは、「ヤハウェの箱舟」を手に入れ、それをエルサレムに持って来て、ヤハウェを王国公式の崇拝とした。次には、近隣部族—エドム人、モアブ人、アンモン人人、およびシリア人—に重い租税を課した。

97:9.15 (1073.5) ダーヴィドの不正な政治機構は、ヘブライの慣習に違反して北の土地の個人所有を始め、やがて、以前はペリシテ人によって集められた隊商関税の管理を獲得した。そしてその時、ウリーヤの殺人により一連の残虐行為は、頂点に達した。すべての司法控訴は、エルサレムで判決が下された。もはや、「年長者」は、正義を行なうことができなかった。反乱が勃発したのは当然であった。今日、アビシャロームは、扇動者と呼ばれるかもしれない。その母はケナーアン人であった。バスシェバの息子ソロモンの外に王座への競争者が6人いた。

97:9.16 (1073.6) ダーヴィドの死後、シェロモーは、すべて北部勢力の政治機構を粛清したが、父の政治体制の圧制と課税のすべてを続けた。シェロモーは、その贅沢な宮中と、入念な建築計画によって国を潰した。レバノンの

家、ファラオの娘の宮殿、ヤハウェの寺院、王の宮殿、他にも多くの都市の壁の修復があった。シェロモーは、シリア人の船員に動かされ、全世界との取り引きをする巨大なヘブライ海軍を創設した。ハレムの妻妾の数は、およそ1,000人に達した。

97:9.17 (1073.7) この頃までにはシーロのヤハウェの寺院は、信用を落とし、国全体の崇拝は、豪華な王立礼拝堂のイェブスに中心が置かれた。北方の王国は、いくらかなりともエロヒームの崇拝に戻った。かれらは、後にジェフーダを隷属させ、南の王国に貢ぎ物を課したファラオの好意的な態度を楽しんだ。

97:9.18 (1073.8) 浮き沈み—イスラエルとジェフーダ間の戦争—があった。4年に渡る内戦と3代の王朝の後にイスラエルは、土地の取り引きを始めた都市の専制君主の支配に下った。オムリ王でさえ、シェメールの地所の買い取りを試みた。しかし、シャルマネセルIII世が、地中海沿岸を支配すると決めたとき、終わりは速く近づいた。エフライェムのアハブ王は、他の10集団を集め、クアルクアルで抵抗した。戦いは引き分けであった。アッシリア人は

阻止されたが、同盟国は大量に殺された。この大戦は、旧約聖書では言及さえされていない。

97:9.19 (1074.1) アハブ王がナボテから土地を買おうとしたとき、新たな問題が始まった。アハブのフェニキア人の妻は、ナボテが「エロヒーム、そして王」の名を冒涜したという告発でその土地没収の指示書にアハブの名を偽造した。ナボテとその息子らは、即座に処刑された。積極的なエーリージャは、アハブをナボテ家族の殺人の理由で非難して場面に登場した。エーリージャ、予言者の中で最も偉大な者の1人は、このように、バアーリムの土地販売の態度に対して、都市が国を支配する試みに対して、古い土地慣習の防御者として教え始めた。しかし、地方地主のエヒューが、サマリアでバアールの予言者(不動産業者)を滅ぼすためにジプシーの指揮官イェホナーダーブと兵力を合流するまで、改革は成功しなかった。

97:9.20 (1074.2) イェホアシュと息子のヤラベアムが敵からイスラエルを救い出すと新生活が見えた。しかしこの時までサマリアでは、昔日のダーヴィド王朝の略奪に匹敵する

悪漢貴族が統治した。政府と教会は手を携えて進んでいた。言論の自由を抑圧する企ては、エーリージャ、アーモーセ、ホゼイアをそれぞれの秘密の執筆開始に導き、これがユダヤ人の、そしてキリスト教徒の聖書の本当の始まりであった。

97:9.21 (1074.3) イスラエルの王が、エジプトの王と共謀し、アッシリアに以後の進貢を拒否するまで、北方の王国は、歴史から消え失せなかった。その後、3年間の包囲攻撃のあとに北方王国の完全な分散が続いた。エフライェム(イスラエル)は、このようにして消失した。ジェフーダ—ユダヤ人、「イスラエルの残者達」は、—イザヤが、「家に家を連ね畑に畑を寄せて」と言ったようにわずかの者の手に土地の集中を始めた。やがてエルサレムには、バアールの寺が、ヤハウェの寺院の横にあった。この恐怖の治世は、少年王ヨアシュによる一神教の反乱によって終わった。その王は、35年間ヤハウェのための改革運動をした。

97:9.22 (1074.4) 次の王のアマツジャは、税の支払いに抵抗するエドム人とエドム人の隣人で苦労をした。彼は、著しい

勝利の後に北の隣人の攻撃に移り、同様に著しく敗北した。次に、田舎の民衆が、反乱を起こした。彼らは、王を暗殺し、16歳のその息子を王座に据えた。これが、イザヤにはウッズィーヤと呼ばれたアザーヤであった。ウッズィーヤの後、事態はますます悪化し、ジェフーダは、アッシリア王へ進貢することで100年間存在した。第一のイザヤは、エルサレムは、ヤハウェの都市であるので決して滅びないと言った。しかしイレミアスは、その没落宣言を躊躇わなかった。

97:9.23 (1074.5) ジェフーダの破滅の本当の原因は、少年王マナッセスの支配下で機能する堕落し、富める政治家の一味によってもたらされた。変化する経済は、個人の土地の取り引きがヤハウェの思考形態に反するバアールの崇拝の復帰の一助となった。アッシリアの破滅とエジプトの主導権は、一時は、ジェフーダに救出をもたらし、田舎の民が、主導権を引き継いだ。ヨシアの下で、彼らは堕落した政治家のエルサレムの一味を撲滅した。

97:9.24 (1074.6) だがこの時代は、ヨシアが、バビロンに対するアッシリアの援助のためにエジプトから海岸を北上し、

大胆にもネコの強力な軍隊を迎撃したとき、悲惨な終わりに至った。彼は破壊され、ジェフーダはエジプトへの貢ぎ物を課された。バアールの政党は、エルサレムの政権を取り戻し、こうしてエジプトの本当の束縛が始まった。それからバアーリムの政治家が、法廷と聖職の両方を制する期間が続いた。バアールの崇拝は、土壌の肥沃に関係があるばかりでなく、財産権に関わる経済的、かつ社会的制度であった。

97:9.25 (1075.1) ネブカドネザルによるネコの打倒で、ジェフーダは、バビロンの支配下に入り、10年間の猶予が与えられたが、すぐに造反した。ネブカドネザルが、それらに対して前進したとき、ジェフーダ人は、奴隷を釈放するというような、ヤハウェに影響を及ぼすための世直しに取り掛かった。バビロニアの軍隊が、一時的に撤退すると、ヘブライ人は、改革の魔法が自分達を救ったと喜んだ。イレミアスが、差し迫る破滅について皆に伝えたのはこの間であり、やがて、ネブカドネザルが戻ったのは、この時代であった。

97:9.26 (1075.2) そうしてジェフーダの終わりが突然やって来た。都市は破壊され、人々はバビロンに連れ去られた。ヤハウェ対バアールの戦いは、捕らわれの身に終わった。監禁は、イスラエルの残存者に衝撃を与え一神教へ向かわせた。

97:9.27 (1075.3) バビロンでのユダヤ人は、独自の社会習慣と経済習慣をもっており、パレスチナにおいては小集団として存在することはできないと、また、自分達の観念形態を行き渡らせようとするならば、異教徒を改宗させなければならないという結論に至った。その結果、神の意図についての新概念—ユダヤ人はヤハウェの選ばれた僕にならなければならないという考え—を起こした。旧約聖書のユダヤ宗教は、バビロンでの捕らわれの身の間に実際に発展した。

97:9.28 (1075.4) 不死の教理もまたバビロンで形成した。ユダヤ人は、来世についての考えが、社会正義の福音への重要性を損なうと考えた。今、初めて、神学は、社会学と経済学を置き換えた。宗教は、政治、社会、経済とますま

す切り離されるために人間の思考と行為の体系としての形を取りつつあった。

97:9.29 (1075.5) ユダヤ民族についての事実も、神聖な歴史と見なされてきたものの多くが、普通の不敬な歴史の記録にすぎないと判明するのである。ユダヤ教は、キリスト教の成長土壌であったが、ユダヤ人は奇跡的な民族ではなかった。

10. ヘブライ宗教

97:10.1 (1075.6) 彼らの指導者達は、イスラエル人は、特別な甘やかしや神の恩恵の独占のためではなく、総ての国に1神の真実を届ける特別な活動のための神の選民であるとかれらに教えた。そして、彼らがこの運命を実現させるならば、すべての民族の精神的指導者になるということ、そして、来たる救世主が平和の王子として彼らの上に、そして全世界に君臨するとユダヤ人に約束した。

97:10.2 (1075.7) ユダヤ人は、ペルシア人に解放されると、パレスチナに戻ったが、聖職者が支配する法、犠牲、および儀式の法典の束縛に陥る結果となった。そして、ヘブライ部族が、犠牲と苦行の儀式のためにモーシェの送別の

演説で提示された神の素晴らしい物語を拒絶したように、ヘブライ国家のこれらの生存者は、増加している聖職の規則、規制、および儀式のために第二のイザヤの素晴らしい概念を拒絶した。

97:10.3 (1075.8) 国家の自己中心主義、約束の誤った救世主への間違った信仰、そして、聖職階級の増大する束縛と圧制が、精神的指導者 (ダニエル、エゼキエル、ハガイ、およびマラキを除く)の声をいつまでも黙らせた。そして、その日からバプテスマのヨハネの時代まで、全イスラエルが、拡大する精神的退歩を経験した。しかし、ユダヤ人は、宇宙なる父の概念を決して失わなかった。彼らは、キリストの20世紀後までもこの神格概念に従い続けた。

97:10.4 (1076.1) モーシェからバプテスマのヨハネまで、絶えず破廉恥な支配者を咎め、商業にはしる聖職者を糾弾し、無遠慮な定規を叱責して、崇高なヤハウェ、イスラエルの主の神の崇拝を固く守るように人々に勧めつつ、世代から世代への光の一神教の松明を渡す忠実な教師が連綿と続いた。

97:10.5 (1076.2) 一国としてのユダヤ人は、ついには主体性を失ったものの、一柱の、かつ普遍の神への誠実な信念のヘブライ宗教は、拡散する亡命者の心の中に生き続けている。そしてこの宗教は、その信奉者の最高価値を維持するために有効に機能してきたがゆえに存続する。ユダヤ宗教は、一民族の理想を保存こそしたが、真実の分野における進歩を促し、創造的な哲学上の発見を奨励できなかった。ユダヤ宗教には多くの欠点があり—それは、哲学に欠け、ほとんど美的特質を欠いていた—が、道徳的価値を保持し、ゆえに持続した。他の神の概念と比べるとき、崇高なヤハウェは、明快で、生き生きとし、個人的で道徳的であった。

97:10.6 (1076.3) ユダヤ人は、わずかな民族がしたように、正義、知恵、真実、および正義を好んだが、これらの神の特質、ことに民族を知的な把握解と精神的認識に関する貢献は一番少なかった。ヘブライの神学は、発展を拒否したとはいえ、それは他の2つの世界宗教、キリスト教とイスラム教の発展において重要な役割を演じた。

97:10.7 (1076.4) ユダヤ宗教は、その組織ゆえに持続した。宗教は、孤立した私人の個人的習慣として存続することは難しい。これは、常に宗教指導者の誤りであった。それらは、制度化された宗教の弊害を目にし、集団機能の手法を破壊しようとする。すべての儀式を破壊する代わりに、それを改革する方がよいであろう。この点において、イェゼケイルは、同時代人よりも賢明であった。個人の道徳的責任を主張するに当たりそれらに加わりはしたものの、勝り、浄められた儀式の忠実な遵守の確立にも着手した。

97:10.8 (1076.5) その結果、イスラエルのその後の教師は、ユランチアで功を奏する宗教の発展史上において最大の功績を成し遂げた。突然に爆発するシナイ火山の嫉妬深く残酷な霊神である野蛮な悪霊ヤハウェの原始的概念のゆるやかではあるが、連続する変化から、万物の創造者であり、全人類の愛に満ちた慈悲深い父である後の者達にとっての崇高なヤハウェの高揚され崇高な概念。神についてのこのヘブライの概念は、その息子、ネバドンのマイケルの直接の教えと人生の手本によりそれがさらに拡大

され、じつに絶妙に増幅されるその時まで、宇宙なる父に関する人間の最も高い視覚化であった。

97:10.9 (1076.6) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 98
西洋におけるメルキゼデクの教え

98:0.1 (1077.1) メルキゼデクの教えは、多くの経路に沿ってヨーロッパに入ったが、主にそれらは、完全にギリシャ化され、西洋哲学に組み込まれ、後にはキリスト教化されエジプト経由で到来した。西洋世界の理想は、基本的にはソクラテス的であり、シュウルなその後の宗教哲学は、発展する西洋哲学と西洋宗教との接触により変更され、妥協されるとイエスの宗教哲学となり、そのすべてがキリスト教会に至った。

98:0.2 (1077.2) シャレイム宣教師は、長い間ヨーロッパにおいて活動を続け、周期的に起こる礼拝集団と儀式集団の多くに徐々に吸収されるようになり、た。その中で最も純粋な型においてシャレイムの教えを維持したキニコス人について言及されなければならない。神に対する信頼と信仰のこれらの伝道者は、後に新たに形成するキリスト

教に組み入れられ、キリスト後の1世紀のローマ支配のヨーロッパでまだ機能していた。

98:0.3 (1077.3) シャレイム教理の多くは、西洋の軍事闘争で幾度となく戦ったユダヤ人の傭兵によりヨーロッパに広げられた。古代におけるユダヤ人は、神学の特性と、同じく軍の武勇さで有名であった。

98:0.4 (1077.4) ギリシア哲学、ユダヤ神学、およびキリスト教倫理の基本的教理は、基本的に初期のメルキゼデクの教えの結果であった。

1. ギリシア人の間でのシャレイム宗教

98:1.1 (1077.5) 崇拝のための排他的な会衆の組織を禁じ、食物、衣類、避難所以外は祭祀のための料金を決して受領せず、聖職者として決して機能しないという約束を要求したマキヴェンタにより強要される誓約がなければ、シャレイム宣教師は、ギリシア人の間にかなりの宗教構造を打ち建てていたかもしれない。メルキゼデクの教師が、初期のギリシャに入り込んだとき、依然としてアダムソンの伝統とアンド系の時代を促進する民族を見つけたが、これらの教えは、ギリシア沿岸に連れて来られた

劣る奴隷の群れの考え方と信条で大いに質を落としていた。この不純物混入は、血なまぐさい儀式と共に、下層階級が死刑囚の処刑から儀式を作りさえする粗野なアニミズムへの逆戻りをした。

98:1.2 (1077.6) シャレイム教師の早期の影響は、南ヨーロッパと東洋からのいわゆるアーリア人の侵入によってもう少しで破壊されるところであった。これらのギリシャの侵略者は、アーリア人の仲間がインドに伝えたものに類似する擬人化された神の概念を携えて来た。この導入が、神々と女神達のギリシア家族の発展を開始した。この新宗教は、幾分かは入来するギリシャの野蛮人の礼拝集団に基づいたが、それはギリシアの昔の住民の神話をも共有した。

98:1.3 (1078.1) 古代ギリシャのギリシア人は、主に母信仰に支配される地中海世界を発見し、人-神、ジャウス-ゼウス、単一神教的セム族の中のヤハウェのようになった、従属の神の全神殿の主神をこれらの人々に強要した。そして、ギリシア人は、運命の総支配の維持以外、やがてはゼウスの概念の真の一神教を達成していたことであろ

う。究極の価値の神自身は、運命の決定者であり宿命の創造者でなければならない。

98:1.4 (1078.2) 宗教発展におけるこれらの要因の結果として、やがてオリンパス山の暢気な神々、神性よりも人間的な神々への、知的なギリシア人が決してあまり真剣に評価しなかった神々への一般信仰の発展があった。知的なギリシア人は、また自身の創造のこれらの神性をそれほど愛しもせず、それほど恐れもしなかった。ゼウスと半人半神のゼウスの家族に愛国的、人種的感情をもってはいたものの、あまり敬いもせず、崇拝もしなかった。

98:1.5 (1078.3) ギリシア人は、初期のシャレイム教師の聖職者の反活動を染み込ませるほどに、かつていかなる重要な聖職もギリシアには起こらなかった。神の形象の作成さえ崇拝の問題であるよりも芸術の仕事になった。

98:1.6 (1078.4) オリンポスの神々は、人間の典型的な擬人化を例証する。しかしギリシア神話は、倫理的であるよりも美学的であった。ギリシア宗教は、神性集団に治められる宇宙を描いた点で有用であった。しかしギリシアの道徳、倫理、哲学は、やがて、神の概念をはるかに超えて

進み、知的成長と精神的成長の間のこの不均衡は、インドでそうであったと判明したようにギリシアにとっても同じく危険であった。

2. ギリシアの哲学的思考

98:2.1 (1078.5) 軽く見なされ中味のない宗教というものは、特にその型を促進し、熱愛者の心を恐怖と畏敬で満たす司祭階級がいないとき、持続することはできない。オリンポスの宗教は、救済を約束せず、その信者の精神的な渇きも和らげなかった。それゆえに、死ぬ運命にあったのである。それは、オリンポスの宗教開始の1,000年以内に危うく消失するところであり、またギリシア人は、オリンパスの神々がより良い心に対する支配を失ったことから国家的宗教なしであった。

98:2.2 (1078.6) これが、紀元前6世紀に東洋人とレヴァント人が精神的意識の復活と一神教の認識への新しい目覚めを経験したときの状況であった。しかし西洋は、この新しい開発に参加しなかった。ヨーロッパも北アフリカも、この宗教復興に広範囲に参加しなかった。ギリシア人は、しかしながら、見事な知的向上に従事していたので

あった。ギリシア人は、恐怖を習得し始めており、もはや宗教を恐怖への矯正手段として求めていなかったが、本物の宗教が、魂の飢餓、精神の不穏、道徳的な絶望の療法であるとは知覚しなかった。かれらは、深い考え—哲学と形而上学—で魂の慰めを捜し求めた。彼らは、自己保存—救済—の熟考から自己実現と自己理解の方に向いた。

98:2.3 (1078.7) 筋道の通った考えを介してギリシア人は、生存に対する信念の代わりとして用いられる安全のその意識への到達を試みたのだが、完全に失敗した。ギリシャ民族の上層階級のより知的な者だけがこの新しい教えを把握することができた。前の世代の普通の奴隷の子孫は、この新しい代用宗教の受け入れに対し何の容量もなかった。

98:2.4 (1079.1) 哲学者は、ほとんどが皆、大まかに「宇宙の有識者」、「神の考え」、「偉大な根源」のシャレイム教理の背景をなす信念を抱いたにもかかわらず、すべての崇拝の型を侮蔑した。ギリシアの哲学者らが、神性と有限性を越える者を認める限り、彼らは実のところ一神教であ

った。哲学者らは、オリンポスの神と女神の全星雲を僅かに認めた。

98:2.5 (1079.2) 5世紀と6世紀のギリシア詩人は、とりわけピンダロスは、ギリシア宗教の改革を試みた。詩人らは、その理想を高めはしたが、宗教家であるよりも芸術家であった。彼らは、究極の価値を強化し保護する手段の発展に失敗した。

98:2.6 (1079.3) クセノファーネスは、1神を教えたが、その神の概念は、必滅の人間にとっての個人的な父であるには汎神論的過ぎた。アナクサゴラスは、第一原因を、最初の心を認識したということを除いては、機械技師であった。ソクラーテスとその後継者であるプラトンとアリストテレスは、美徳は知識であると、善は魂の健全さであると教えた。罪を犯すよりも不当な処置に苦しむ方がましであると、悪に悪を報いるのは間違いであると、また、神は賢明で良いと教えた。3人の基本的美徳は次の通りであった。知恵、勇気、節制、正義。

98:2.7 (1079.4) ギリシャとヘブライ民族の宗教哲学の発展は、文化的進歩の形成における制度としての教会の機能の対

照的な実例を提供する。パレスチナでは、人間の思考は、とても聖職者に管理された、聖典に指示されていたので、哲学と美意識が、完全に宗教と道徳の中に沈められた。ギリシアにおいては聖職者と「神聖な経典」のほぼ完全な欠如が、人間の心を自由にし、束縛しない状態にし、思考の深さに驚異的な発展をもたらした。しかし、個人的経験としての宗教は、宇宙の自然と現実への知的な徹底的調査についていけなかった。

98:2.8 (1079.5) ギリシアでは、考えることは信じることに支配された。パレスチナでは、考えることは信じることに制約された。キリスト教の長所の多くは、ヘブライ道徳とギリシア思想の双方から重度に取り入れたことによる。

98:2.9 (1079.6) パレスチナでは、宗教教義は、さらなる成長を危険にさらすほどに結晶化された。ギリシアでは、人間の思考は、非常に抽象的となり、神の概念は、婆羅門哲学者の人格をもたない無限とは異なり汎神論的考察の霧状の気体へと消散した。

98:2.10 (1079.7) だがこれらの時代の普通の人々は、自己実現のギリシア哲学も抽象的な神も理解することができず、そ

れほど関心もなかった。むしろかれらは、自分達の祈りを聞くことのできる個人的な神に加え、救済の約束を切望した。かれらは、哲学者を追放し、シャレイム礼拝集団の残存者を迫害し、（両方の教義は非常に混合されていた）当時地中海の国々に広がっていた神秘礼拝集団の愚行へのその激しい突入に向けて準備をするようになった。エレイシスの謎は、オリンポスの殿堂、豊穣崇拝のギリシア版の中で成長した。ディオニソスの自然崇拝は栄えた。最良の礼拝集団は、オルペウスの同胞関係であり、その道徳についての説教と救済の約束は、多くの者の興味をそそった。

98:2.11 (1080.1) 全ギリシアが、救済を手に入れるこれらの新方式に、つまり、感情的で火のようなこれらの儀式にかかわるようになった。実に短い時間で芸術的哲学のそのような高さに達する国は、かつてどこもなかった。実質的に神性なくして、また完全に人間救済の約束を欠いたそのような倫理的に高度な体制を創造したものは、いままでに誰もいなかった。この同じギリシア民族が、神秘礼拝集団の気ちがいじみた騒動に飛び込んだときほどには、知的停滞、道徳的腐敗、精神的貧困のそのような深

層に速く、深く、また乱暴に突入した国はかつてなかった。

98:2.12 (1080.2) 宗教は、長い間哲学的擁立なしで続いているが、多くの哲学は、それとして、宗教との何らかの関連性なしでは長く持続しなかった。行動には概念が関係するように宗教には哲学が関係している。しかし、理想的な人間の条件は、知恵、信仰、経験の結合的な働きにより哲学、宗教、科学が、意味のある統一に結合されることである。

3. ローマにおけるメルキゼデクの教え

98:3.1 (1080.3) 家族神崇拝以前の宗教の型から軍神であるマールスへの部族崇拝が生まれ、ラテン民族の後の宗教がギリシア人と婆羅門の、あるいは他のいくつかの民族のより精神的宗教の知的体系であるよりも政治上の遵守であったということは、自然なことであった。

98:3.2 (1080.4) 紀元前6世紀、メルキゼデクの福音の一神教のすばらしい復興において、シャレイム宣教師の少数しか、イタリアには突き進むことはなく、またそうした者達でも、急速に広がりつつあるエトルリア人の司祭職達

ときら星のように並ぶその新しい神々と寺院との影響に打ち勝つことができず、そのすべてが、ローマ国教へと組織化されるようになった。ラテン部族のこの宗教は、ギリシア人のそれのように瑣末でもなく、腐敗してもなく、ヘブライ人のそれのように厳格でもなく、専制的でもなかった。それは、大体が単なる型、誓い、禁忌の遵守から成った。

98:3.3 (1080.5) ローマ宗教は、ギリシアからの大規模な文化導入によって大いに影響をうけた。結局、オリンポスの神々のほとんどは、ラテン系の殿堂に移され組み入れられた。ギリシア人は、長く家庭の炉の火を崇めた。ヘスティアは、囲炉裏の処女神であった。ヴェスタはローマの家の女神であった。ゼウスは、ユーピテルとなり、アフロディテはヴィーナスに、その他の多くのオリンポスの神性に至るまで。

98:3.4 (1080.6) ローマの若者の宗教的な始動、は、国家奉仕への厳粛な奉献の行事であった。市民権への宣誓と承認は、実際は宗教的な儀式であった。ラテン民族は、寺院、祭壇、神殿を維持し、危機に際しては神託を伺うの

であった。彼らは、英雄の骨を、後にはキリスト教聖者のものを保存した。

98:3.5 (1080.7) 偽りの宗教的愛国心のこの形式的かつ感情的でないな型は、ちょうど、ギリシア人の高度に知的で芸術的な崇拝が、神秘礼拝集団の熱烈で深く感情的な崇拝に屈服したように、失敗する運命にあった。これらの荒廃的礼拝集団の最大のものは、神の母宗派の神秘宗教であり、その本部は、当時ローマの、現在は聖ペトロス教会の同じ場所にあった。

98:3.6 (1080.8) 新興のローマ国家は、政治的には勝ったものの、一方エジプト、ギリシア、レヴァント地方の集団礼拝、儀式、神秘、神の概念により征服された。これらの輸入された集団礼拝は、純粋に、政治的、また市民の理由のために神秘礼拝儀式を破壊し、以前の政治的な宗教を復活させる英雄的で、いくらか好結果の努力をしたオーガストゥスの時代までローマの国中に栄え続けた。

98:3.7 (1081.1) 国教聖職者の1人が、1神の教理を広げるシャレイム教師の初期の試みについてオーガストゥスに伝えた。この考えは、彼が、多くの寺院を建設し、そこに美

しい装飾作品を多く備え、国の聖職層を再編成し、国教を再建させ、自らを高僧代表に任命し、皇帝として、自身が崇高な神であると躊躇うことなく宣言した。

98:3.8 (1081.2) オーガストゥスのこの新宗教は、ユダヤ人の故国パレスチナを除き、かれの生存中繁栄し実践された。公式のローマ礼拝集団は、全員が奇跡的な出生と超人的な他の属性を申し立てる40人以上の自己昇進を果たした元人間の神の名簿を持つまで、人間の神のこの時代は続いた。

98:3.9 (1081.3) 野蛮で無意味な宗教儀式を捨て、ギリシア人の哲学との接触で変更され汚染されてきたメルキゼデクの具体化する福音崇拝の型に戻るようローマ人に勧めるキニコス人の熱心な説教者集団により減少するシャレイム信者集団の最後の抵抗が明示された。減少するシャレイム信者集団の最後の抵抗は、キニコス人の熱心な説教者集団により明示され、説教者集団は、ローマ人に野蛮で無意味な宗教儀式を捨て、ギリシア人の哲学との接触で変更され汚染されてきたメルキゼデクの具体化する福音崇拝の型に戻るように勧めた。しかし、一般庶民はキニ

コス人を拒絶した。かれらは、個人の救済の望みを与えるだけでなく、気晴らし、刺激、娯楽への願望をも満足させる神秘の儀式にどっぷり漬かることを好んだ。

4. 神秘礼拝集団

98:4.1 (1081.4) ギリシア・ローマの世界の人々の大半は、原始的家族と国教を失い、またギリシア哲学の意味を理解できず、あるいは、理解をしたがらず、エジプトとレヴァント地方からの壮観で感情的な神秘礼拝集団に目を向けた。一般大衆は救済の約束—当分の間の宗教の安らぎと死後の不死への望みの保証—を切望した。

98:4.2 (1081.5) 最も人気のあった3つの神秘礼拝集団は、

98:4.3 (1081.6) 1. キベレのフリギアの礼拝集団とフリギアの息子アッティス。

98:4.4 (1081.7) 2. オシリスとその母アセトのエジプトの礼拝集団。

98:4.5 (1081.8) 3. 罪深い人類の救世主と贖い主としてのミースラ崇拝のイランの礼拝集団。

98:4.6 (1081.9) フリギアとエジプトの神秘宗教は、その神の息子(それぞれにアッティスとオシリス)が、死を経験し、神の力により復活したということを、さらに、神秘集団に適切に入会し、神の死との復活をうやうやしく祝うものすべてが、それによって神性と不死の分配にあずかる者になるであろうということを、教えた。

98:4.7 (1081.10) フリギアの儀式は、堂々とはしていたが、堕落的であった。血なまぐさい行事は、レヴァント人の神秘がどれほどに低下し原始的になったかを示している。宗教の最大の聖日は、アッティスの自らに課した死を記念する魔の金曜日、「血の日」であった。祭りは、アッティスの犠牲と死の祝賀の3日後にその復活を祝して喜びに変わった。

98:4.8 (1082.1) アセトとオシリスの崇拝儀式は、フリギア礼拝集団のものよりも洗練され印象的であった。このエジプトの儀式は、死んで復活したナイルの古い神の伝説を中心に構築され、その考え方は、植物の成長停止の毎年の繰り返し、それに続く植物すべての春の復活の観測によるものであった。神性認識の「熱意」を導くとされるこ

れらの神秘礼拝集団の遵守の狂乱と儀式の行き過ぎは、往々にしてとても不快なものであった。

5. ミースラの礼拝集団

98:5.1 (1082.2) フリギアとエジプトの神秘は、最終的には、神秘礼拝集団、すなわちミースラ崇拝のすべての中で最もすばらしいものの前に屈した。ミースラ礼拝集団は、幅広い人間性に訴え、その先行した両方に徐々に取って代わった。ミースラ教は、レヴァント地方で編成されるローマ軍団の普及によりローマ帝国に広がり、軍団が行く先々に携えたのでこの宗教は流行した。また、この新しい宗教儀式は、以前の神秘礼拝集団をかなり改良したものであった。

98:5.2 (1082.3) ミースラの礼拝集団は、イランで起こり、ゾロアスターの追随者の過激な敵対にもかかわらず、長くその故国に存続した。しかし、ミースラ教がローマに達するまでには、それは、ゾロアスターの教えの多くの吸収によって大いに改良されるようになった。ゾロアスターの宗教が後に出現するキリスト教への影響を及ぼしたのは、主としてミースラ礼拝集団を通してであった。

98:5.3 (1082.4) ミースラ礼拝集団は、大きな岩を起源とし、雄々しい功業に従事し、矢で射た岩から水を勢いよく流出させる好戦的な神を描写した。1人の男が特別に組み立てられた舟で逃れる洪水があり、またミースラが、天上に昇る前に太陽神と祝う最後の晩餐があった。この太陽神、または、ソル・インウイクトスは、拝火教のアフラ・マズダー神の概念の退化であった。ミースラは、暗黒の神との戦いにおける太陽神の生き残りの勝者として発想された。そして架空の神聖な雄牛の殺しが認められ、ミースラは、天の神々の間の人類のための仲裁者の身分に高められ不滅にされた。

98:5.4 (1082.5) この礼拝集団の支持者らは、洞窟や他の秘密の場所で崇拝し、賛美歌を詠唱し、魔法を呟き、生贄の動物の肉を食し、その血を飲んだ。かれらは、毎週、太陽神の日に特別な儀式と、12月25日のすべてのミースラの年中行事の中でも最も入念な遵守と併せて１日に３度、崇拝した。聖餐に参加することは、永遠の寿命、すなわち死後即座にミースラの胸へ向かうこと、そこに裁きの日まで至福のうちに留まると信じられた。天国のミースラの鍵は、判決日に信心深い者達の歓迎のために楽園の

門を開錠する。そこで、洗礼を受けていない活ける者と死者のすべては、ミースラの地球復帰の際、全滅させられる。人が死ぬと、裁きのためにミースラの前に行き、世の終わりにミースラ最後の審判に直面するために墓からすべての死者を呼び出すということが教えられた。邪悪な者は、炎によって破壊され、公正な者は、ミースラと共に永遠に君臨する。

98:5.5 (1082.6) 最初それは、男性のためだけの宗教であり、信者が引き続き加入できる7つの異なる序列があった。後に、信者の妻と娘が、偉大な母の寺院に認められた。その寺院は、ミースラ寺院に隣接していた。女性の集団礼拝は、ミースラの儀式とキベレーのフリギア集団礼拝、アッティスの母の混合儀式であった。

6. ミースラ教とキリスト教

98:6.1 (1083.1) 神秘礼拝集団とキリスト教の到来以前、北部アフリカとヨーロッパの文明的な国々における個人的宗教は、ほとんど独立団体としては発達しなかった。むしろ、家族、都市国家、政治的、そして帝国のものであった。古代ギリシャのギリシア人は、崇拝の集権制を発展

したことがなかった。儀式は地域的であった。彼らには、聖職がおらず、何の「神聖な本」もなかった。ほぼローマ人と同じように、その宗教組織は、高度の道徳的で精神的価値の保存のための強力で精力的な働きを欠いていた。宗教の制度化においては、通常その精神的特色が損なわれたというのは本当であるが、いかなる宗教もこれまでのところ、大なり小なり、何らかの度合いの制度的組織の援助なくしては残存しなかったというのも事実である。

98:6.2 (1083.2) 西洋の宗教は、その結果、懐疑論者、キニコス人、エピクーロス人、ストア哲学者の時代まで、だが、何よりも重要なことは、ミースラ教とキリスト教のパウーロスの新宗教の間のすばらしい論争の時代まで、無気力になっていた。

98:6.3 (1083.3) ミースラ教とキリスト教会は、キリスト後の3世紀に、儀式における外観と特徴において非常に類似していた。崇拝のためのそのような場所の大部分が、地下であり、双方ともに罪に呪われた人類に救済をもたらす

救世主の受難について様々に表現する背景の祭壇を有した。

98:6.4 (1083.4) 寺に入る際、聖水に指を浸すことが、ミースラ崇拝者の常の慣行であった。ひところ双方の宗教に属した者が、いくつかの地区にいたことから、人々は、ローマ周辺のキリスト教会の大半にこの習慣を持ち込んだ。二つの宗教は洗礼を採用し、サクラメントのパンとワインの相伴した。ミースラ教とキリスト教間の1つの大きな違いは、ミースラとイエスの特徴は別として、一方は軍国主義を奨励し、他方は超平和的であったということである。ミースラ教の他宗教(後のキリスト教を除く)への寛容性が、その最終的破滅の原因となった。しかし、2宗教間の争いにおける決定的要因は、キリスト教の完全な親交への女性の是認であった。

98:6.5 (1083.5) 名目上のキリスト教は、結局は西洋を支配した。ギリシア哲学は倫理意識の概念を提供した。ミースラ教は、崇拝遵守の儀式を、キリスト教それ自体は、倫理的価値と社会的価値の保護のための方法を。

7. キリスト教

98:7.1 (1083.6) 創造者たる息子は、怒れる神と和解させるためではなく、むしろ全人類が、父の愛の認知へ、神との息子の関係の実現の勝利へたどり着くために死すべき者の姿で転生し、ユランチアの人類に自分を授与したのであった。ついには、償いの教義の偉大な提唱者でさえこの真実の何かを理解した。なぜならば、かれは、「神はキリストにおいて世界を自分自身に和解させる」と断言したので。

98:7.2 (1083.7) キリスト教の起源と普及を扱うことは、この論文の範囲ではない。それは、ナザレのイエスという人物、人間の姿に転生したネバドンの息子マイケル、ユランチアにおいてはキリストとして知られている聖油で清められた者の周りに組織されると言えば十分である。キリスト教は、このガリラヤ人の追随者によりレヴァント地方と西洋中に広げられ、彼らの伝道の熱意は、熱心なアジアの同時代人、つまり仏教の教師のものに限らず、傑出した先輩のもの、つまりセース人やシャレイム人のものに匹敵した。

98:7.3 (1084.1) ユランチアの信仰体系としてのキリスト教は、次のような教え、影響、信仰、礼拝集団、個人的な個々の考え方の合成で生じた。

98:7.4 (1084.2) 1. メルキゼデクの教え。その教えは、ここ4,000年間で起こった西洋と東洋の全ての宗教における基本要素である。

98:7.5 (1084.3) 2. 摂理と最高のヤハウェ双方へのヘブライの道徳、倫理、神学、信仰の体系。

98:7.6 (1084.4) 3. すでにユダヤ教とミースラ教に刻みつけた宇宙の善と悪との間の戦いに関するゾロアスター教の概念。ミースラ教とキリスト教間の戦いの長期的接触のために、イランの予言者の教義は、イエスの教えのギリシャ版とラテン版の教義、信条、および宇宙論の神学的、哲学的な型と構造の決定における重要な要因となった。

98:7.7 (1084.5) 4. フリギア集団礼拝における偉大な母の崇拝だけではなく、神秘集団礼拝、特にミースラ教。地球への到来が差し迫るこの出来事を天使から知らされていたほんの一握りの羊飼いが目撃するはずであったユランチア

におけるイエスの出生の伝説でさえ、イランの救世主であり英雄である奇跡的なミースラの出生のローマ版で損なわれることとなった。地球への到来が差し迫るこの出来事を天使によって知らされていたほんの一握りの羊飼いによって目撃されるはずであったユランチアにおけるイエス誕生に関する伝説さえ、イランの救世主であり英雄であるミースラの奇跡的誕生のローマ版で損なわれることとなった。

98:7.8 (1084.6) 5. 人間ヨシュア・ベン・ヨセフの人生の歴史的事実、神の息子、栄光を与えられたキリストとしてのナザレのイエスの現実。

98:7.9 (1084.7) 6. タルススのパウーロスの個人的観点。ミースラ教はパウーロスの青春時代のタルススの優位な宗教であったということが、記録されるべきである。パウーロスは、転向させた者達への自分の善意の手紙が、さらに後のキリスト教徒にいつか「神の言葉」と見なされることをあまり夢想していなかった。そのような善意ある教師が、後の後継者によるその文章での使用責任を問われるべきではない。

98:7.10 (1084.8) 7. アレキサンドリアとアンチオケからギリシアを経由しシラクサとローマまでのヘレニズム民族の哲学的思考。ギリシア人の哲学は、現在の他のいかなる宗教体系よりもパウーロスのキリスト教版と調和しており、西洋でのキリスト教の上首尾で重要な要素となった。ギリシア哲学は、パウーロスの神学に加え、今もなおヨーロッパ倫理の基礎を形成している。

98:7.11 (1084.9) イエスの本来の教えが、西洋に入り込むとそれは西洋化され、それが西洋化される一方で、人間のすべての人種と民族にとっての潜在的に普遍的な魅力を失い始めた。キリスト教は、今日、白色人種の社会的、経済的、そして政治的な慣習によく適合する宗教になった。それは、その教えの道に真摯に続こうとする個人にイエスに関する美しい宗教をいまだに立派に描写してはいるものの、久しくイエスの宗教であることをやめている。それは、キリストとしてのイエス、神からメシアの聖油を注がれたものを賛美してきたが、大いにあるじの個人の福音を忘れてきた。神の父たることとすべての人の普遍的な兄弟愛。

98:7.12 (1085.1) これがユランチアでのメルキゼデクのマキヴェンタに関する教えの長い物語である。この非常時のネバドンの息子は、自分をユランチアに授与し、「エル・エリョンの聖職者、いと高き神」に関する教えがすべての人種と民族に入り込んだその時以来およそ4,000年である。マキヴェンタは、異例の贈与の目的の達成に功を奏した。マイケルがユランチアに現れる用意をすると、神の概念が、つまり空間の渦巻く惑星で自分達の好奇心をそそる束の間の生活を送りながら宇宙なる父の様々なの子供の生き生きとし、精神的な経験の中で今もなお新たに燃えているという神の同じ概念が、男女の心の中に存在した。

98:7.13 (1085.2) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 99
宗教の社会的問題

99:0.1 (1086.1) 宗教に関係のない社会団体とのつながりが一番薄いとき、宗教は、最高の社会的奉仕を果たす。過去に、社会改革は、主に道徳的領域に閉じ込められていたので、宗教は、経済体系、また政治体系における大規模な変化へのその姿勢を調整する必要はなかった。宗教の

主要問題は、政治文化と経済文化の既存の社会的秩序の中での悪を善と置き換える努力であった。宗教は、その結果、間接的に文明の現存する型の維持を助成するために社会の確立された秩序を永続させる傾向にあった。

99:0.2 (1086.2) しかしながら宗教は、新しい社会秩序の創造、あるいは古いものの保存に直接に関わるべきではない。本物の宗教は、社会的進化手段としての暴力に対抗はするが、それは、その使用を適応させ、新しい経済状況と文化的要求にその機関を合わせる社会の知的な努力を妨害しないのである。

99:0.3 (1086.3) 宗教は、時折起こる過去の世紀の社会改革をたしかに承認したが、20世紀においては、大規模で継続的社会再建への調整に直面することが必然的に求められている。生活のための環境が、非常に急速に変わるので制度上の変更が大きく加速されなければならず、宗教は、それに応じて、この新たで変わり続ける社会秩序へのその適合を速めざるをえない。

1. 宗教と社会再建

99:1.1 (1086.4) 機械の発明と知識の普及は、文明を変えている。文化的災いを避けようとするならば、ある種の経済調整と社会変化は、必須である。この新しく、また接近しつつある社会秩序は、1,000年の間、完全には落ち着かないであろう。人類は、変化、調整、再調整の過程に調和させなければならない。するようにならなければならない。人類は、新たで、惑星の隠された運命に向かって前進中である。

99:1.2 (1086.5) 宗教は、これらの変化し続ける状況と果てしない経済調整の中にあって動的に機能する道徳の安定性と精霊的な発達へと力強く誘うものにならなければならない。

99:1.3 (1086.6) ユランチア社会は、過去の時代のように落ち着くことを決して望むことができない。社会という船は、確立した伝統の保護された湾から出港し、進化の目標の公海でのその航行を開始した。人間の魂は、世界歴史上かつてなかったほどに、道徳のその図を慎重に注意深く精査し、宗教指導の範囲を労を惜しまず観測する必要がある。社会的影響としての宗教の至上の使命は、文明の

1局面から他局面へ、文化の1段階から別段階への変遷のこの危険な時代の間、人類の理想を安定させることである。

99:1.4 (1087.1) 宗教には果たすべき何の新しい義務もないが、新たで、急速に変化している人間の状況のすべてにおいて賢明な導き手として、経験豊富な相談役として機能することが、緊急に要求されている。社会は、　より機械的で、より密集し、より複雑で、より批判的に相互依存するようになっている。宗教は、新しくて親密な相互の繋がりが、互いを後退させたり、破壊をもたらせたりすることのないように機能しなければならない。宗教は、前進の発酵体が、文明の文化的な味を破壊するのを防ぐ宇宙の塩として機能しなければならない。これらの新しい社会的関係と経済的激変は、宗教の働きによってのみ持続する兄弟愛を結果として生むことができる。

99:1.5 (1087.2) 神を信じない人道主義は、人間的見地からは気高い意思表示ではあるが、真の宗教は、他集団の必要性と受難に対して1つの社会集団の感応性を永続的に増大させることができる唯一の力である。社会の上層部は、

過去においては無力な下層部の苦悩と抑圧に耳を貸すことなく、制度的宗教は、受け身のままでいることができたが、現代においては、これらの下層社会は、もはや、それほど哀れなほどに無知でもなく、政治的に無力でもない。

99:1.6 (1087.3) 宗教は、社会再建と経済再編成の非宗教的な活動に組織的にかかわるようになってはいけない。しかしそれは、その道徳的な指令と精霊的な指針、つまり人間の生活と超越的な生存のその進歩的哲学、の明確で活発な再度の声明により、文明におけるすべてのこれらの進歩と力強く足並みを揃えなければならない。宗教の精神は、永遠であるが、その表現形式は、人間の言語の辞書が改訂されるたびに言い換えられなければならない。

2. 組織的宗教の弱点

99:2.1 (1087.4) 残念なことに、組織的な宗教は、多少なりとも再建の引き受けに運命づけられている社会組織と経済体制の構成部分になっており、の間近に迫った世界規模の社会再建と経済再編成においてひらめきを提供したり、指導力を与えたりすることはできない。個人的な精神経

験の真の宗教のみが、文明の現在の危機に役立ち、しかも創造的に機能することができる。

99:2.2 (1087.5) 制度的宗教は今、悪循環の膠着状態に捕らわれている。それは、まずそれ自体の再建なしには社会の再建はできない。そしてあまりにも確立された体制の不可欠部分であるが故に、社会が根本的に再建されるまでは、それ自体を再建することはできない。

99:2.3 (1087.6) 宗教家は社会、産業、政治における団体、党派、または組織としてではなく個人として機能しなければならない。そういうものとして機能するつもりの宗教団体は、宗教活動は別として、たちまちのうちに政党、経済団体、または社会制度になる。宗教の集団主義は、その努力を宗教大義の推進に制限しなければならない。

99:2.4 (1087.7) 宗教が、より一層の宇宙的洞察力を与え、この上なく神を愛し、天の王国で兄弟としてすべてのものを愛する心からの願望をもって生まれるあの優れた社会的な知恵を贈与する範囲を除いては、宗教家が、社会再建の課題において無宗教家以上に価値があるわけではな

い。理想的な社会体制は、その中で人が自らを愛するようにすべての人が隣人を愛することである。

99:2.5 (1087.8) 制度化された教会は、過去においては、確立した政治と経済体制を賛美することによって社会に奉仕するように見えたが、生き残るつもりであるならば、そのような活動は、すぐにやめなければならない。その唯一の適切な態度は、非暴力の教え、つまり暴力革命に代わる平和的な発展の教義—地球の平和とすべての人の善意—にある。

99:2.6 (1088.1) 現代宗教は、それ自体があまりにも徹底的に伝統化され、教義化され、制度化されることを許容したばかりに、急速に移行している社会変化に向けその姿勢を調整することが困難である。生きた経験の宗教は、これらのすべての社会的発展と経済の大変動を凌ぐことにおいて道徳的な安定装置、社会的な指針、精神の水先案内人としてその只中で常に機能する。真の宗教は、価値ある文化と神を知り神のようになる努力をする経験で生まれる知恵とを1時代から別の時代へと引き継ぐ。

3. 宗教と宗教家

99:3.1 (1088.2) 初期のキリスト教は、行政とのもつれあい、社会的公約、および経済協力から完全に自由であった。制度化されたキリスト教は、後になってやっと西洋文明の政治的、社会的構造の構成部分になった。

99:3.2 (1088.3) 天の王国は、社会秩序も経済秩序もない。それは、専ら神を知る個人の精霊的な兄弟関係である。そのような兄弟関係は、それ自体に政治的、経済的な目ざましい影響によりもたらされる新たで驚くべき社会現象であるということは正しい。

99:3.3 (1088.4) 宗教家は、社会の苦悩に冷淡ではなく、行政の不正に無頓着ではなく、経済的考えを隔離せず、暴政に無感覚でもない。宗教は、個々の市民を精神的にし、理想的にするのであるから社会再建に直接影響を及ぼす。市民が様々な社会的、道徳的、経済的、政治集団の積極的で有力な構成員になるにつれ、文化上の文明は、これらの個々の宗教家の態度により間接的に、影響をうけている。

99:3.4 (1088.5) 高度の文化的な文明の達成は、まず市民の理想的な型を、次に理想的で適切な社会機構を要求し、それ

によってそのような市民がそのような高度な人間社会の経済と政治制度を制御できる社会機構を要求する。

99:3.5 (1088.6) 過度に誤った感情のため、教会は、恵まれなかったり不幸な人々の面倒を長い間してきた。これはすべて良かったのだが、この同じ感情は、文明の進歩を途方もなく遅らせた人種的に退化した血統の賢明でない永続化に導いた。

99:3.6 (1088.7) 多くの個々の社会の再建者は、組織化された宗教を激しく拒否すると同時に、結局は、社会改革の伝播において熱心に宗教的なのである。したがって、個人的であり多少認識されていない宗教動機が、社会復興の今日の計画においてかなりの役割を演じているということである。

99:3.7 (1088.8) この認識されず無意識のすべての宗教活動の型の最大の弱点は、公然の宗教批評から利益を得ることができず、その結果、自己修正の有利な水準に到達できない。宗教は、建設的批判により鍛練され、哲学により増幅され、科学により精練され、忠実な親交によって助長されない限り成長しないというのは、事実である。

99:3.8 (1088.9) 戦時にそれぞれの対立国家がその宗教を軍事宣伝に悪用するときのように宗教が歪められ、誤った目的追求に悪用されるという重大な危険は、つねに存在する。愛のない熱意は、宗教にとりいつも有害であり、一方、迫害は、宗教活動を何らかの社会的あるいは神学的原動力達成に転換する。

99:3.9 (1089.1) 宗教は、次の事柄だけにより世俗の不道徳な同盟から無関係であり続けることができる。

99:3.10 (1089.2) 1. 批判的に修正的哲学

99:3.11 (1089.3) 2. すべての社会、経済、政治同盟からの自由

99:3.12 (1089.4) 3. 創造的で、励みとなり、しかも愛を拡げる仲間

99:3.13 (1089.5) 4. 精神的洞察の進歩的高揚と宇宙の価値観の鑑賞

99:3.14 (1089.6) 5. 科学的な心構えの補填による狂信の防止

99:3.15 (1089.7) 集団としての宗教家は、決して宗教以外の何事にも携わってはいけない。たとえそのような宗教家が、

一個人の国民として、何らかの社会的、経済的、または政治的復興運動の際だつ指導者になるかもしれないとしても。

99:3.16 (1089.7) 宗教の働きは、難しいが、望ましいこれらのすべての社会奉仕の前進において成功達成に向かわせるような個々の市民の宇宙的忠誠心を作り出し、支え、奮い立たせることである。

4. 変遷の困難さ

99:4.1 (1089.9) 真の宗教は、宗教家が社会的に心が惹かれるなるようにし、人間の親交への洞察力を生み出す。しかし、宗教集団の形式化は、集団の組織促進のためのまさしくその価値を何度も破壊する。人間の友情と神の宗教は、それぞれでの成長が均等化され調和するならば、相互に助けになり著しく啓発的である。宗教はすべての集団協会—家族、学校、同好会—に新しい意味をつけ加える。それは、遊びに新しい価値を与え、すべての真の笑いを高める。

99:4.2 (1089.10) 社会的統率力は、精神的洞察によって変えられる。宗教は、すべての集合的運動から真の目的を見失う

ことを防ぐ。宗教は、生き生きとし増大する信仰がある限り、子供と同じ様に家族生活のすばらしい統括者である。家族生活は、子供なしで送ることはできない。宗教なしで暮らすことはできるが、そのような不利な条件は、この親密な人間のつながりの困難さを途方もなく拡大させる。20世紀初期の数十年間、家族生活は、個人的な宗教経験の次に、古い宗教的な忠誠心から浮上しつつある新しい意味と価値への移行の結果として生じる退廃に最も苦しむのである。

99:4.3 (1089.11) 真の宗教は、平凡な日々の生活の現実に動的に面と向かって生きる重要手段である。しかし、もし宗教が、個々の性格開発を刺激し、人格の統合を拡大させることであるならば、それは、標準化されてはならない。価値ある魅力として経験と奉仕の評価を刺激するつもりであるならば、それが、枠にはめられてはならない。宗教が最高の忠誠を促進することであるならば、それが、形式化されてはならない。

99:4.4 (1089.12) たとえ文明の社会的、経済的成長が、いかに激変を伴うことがあろうとも、真、美、善の行使が、広が

る個人の経験を助成するならば、宗教は、本物であり価値がある。というのも、これこそが、崇高なる現実の真の精神的概念であるが故に。そしてこれは、愛と崇拝を介し人との親交と神との息子関係に重要になる。

99:4.5 (1090.1) 煎じ詰めれば、行為を決定し個人の実績を支配するのは、人が知っていることよりむしろ信じていることである。純粋に事実に基づく知識は、感情的に動かされない限り、並の人間にほんのわずかしか影響を及ぼしはしない。しかし、人生における精霊的活力との接触、そしてその放出による超自然的段階での人間の全経験を統一している宗教の活性化、は、超感情的である。

99:4.6 (1090.2) 心理学的に不安定である20世紀おいて、すなわち、経済的激変、道徳的な逆流、そして科学時代のサイクロンに似た変遷の社会的な引き潮の真っ只中において、何千という男女が人間として混乱した。それらは、気を揉み、落ち着きがなく、恐れ、不確かで、動揺している。世界歴史においてかつてなかったほどに正常な宗教の慰めと安定を必要としている。空前の科学の功績と

機械の発展にもかかわらず、精神的停滞と哲学的混沌がある。

99:4.7 (1090.3) 寡欲で情愛深い社会奉仕に関するその動機を失わない限り、宗教が、ますます私的な問題—個人的な経験—になる危険性はない。宗教は、多くの二次的影響に苦しんできた。市街化と機械化と共に、文化の突然の混合、教義の混合、教会権威の縮小、家族生活の変化。

99:4.8 (1090.4) 人の最も重大な精霊的な危機は、部分的な進歩、未完の成長の苦境、つまり、愛の天啓的宗教をすぐに理解することなく、恐怖への進化的宗教を見捨てること、にある。現代科学は、特に心理学は、主に恐怖、迷信、感情に依存するそれらの宗教だけを弱めた。

99:4.9 (1090.5) 変遷には常に混乱が伴い、競合する3つの宗教哲学の間での大きな闘いが終わるまで、宗教世界に静寂はほぼないであろう。

99:4.10 (1090.6) 1. 多くの宗教の精神的な信仰、(神意による神格への)信仰。

99:4.11 (1090.7) 2. 多くの哲学の人道主義的、理想主義的信条。

99:4.12 (1090.8) 3. 多くの科学の機械的そしてと自然主義的概念。

99:4.13 (1090.9) 宇宙の現実へのこれらの部分的な３つの接近は、結局、楽園の三位一体からの精霊、心、エネルギーの三位一体の存在を描写する、そして崇高なるものの神格の中に時-空間の一体化を図る宗教、哲学、宇宙の啓示的な提示により和解的にならなければならない。

5. 宗教の社会的側面

99:5.1 (1090.10) 宗教は、全く個人的な精神経験—父としての神を知ること—である一方で、この経験の自然の結果—兄弟として人を知ること—は、他の自己に対する自己の調整を要し、それは、宗教人生の社会的、あるいは集団的局面を伴う。宗教は、まずは内面的、または個人的な適合であり、次には社会奉仕か集団適合の問題となる。人の集合性の事実は、宗教集団が生まれることを必然的に決定する。これらの宗教集団に起こることは、優れた指導者によるところが大である。原始社会においては、宗教集団は、いつも経済、または政治集団と非常に異なるわけではない。宗教は、絶えず道徳の保護機能と社会

の安定装置であった。多くの現代の社会主義者や人道主義者の相反する教えにもかかわらず、これは、今なお真実である。

99:5.2 (1091.1) 常に肝に銘じておきなさい。真の宗教は、あなたの父を神として、また人を兄弟として知ることである。宗教は、罰への恐れ、あるいは神秘主義の将来的報酬への魔術的約束の卑屈な信仰ではない。

99:5.3 (1091.2) イエスの宗教は、人類を動かすこれまでで最も動的影響を持つものである。イエスは、伝統を打ち砕き、教義を破壊し、時間と永遠におけるその最高度の理想—天の父のように完全になること—の成就に向け人類に呼びかけた。と。

99:5.4 (1091.3) 宗教には、宗教集団—天の王国の精霊的な会員の社会組織—が、他のすべての集団と切り離されるようになるまで機能する好機はあまりない。。

99:5.5 (1091.4) 人間の全体的堕落の教義は、希望を与える性質の、刺激を与えるような価値の社会的影響を生じるために、宗教の可能性の多くを破壊した。イエスは、すべて

の人間は神の子供であると宣言したとき、人の威厳を回復しようとした。

99:5.6 (1091.5) 信者を精神的にすることにおいて効果的であるいかなる信仰も、そのような宗教家の社会生活に強力な影響を持っているのは確かである。宗教経験は、精神に導かれた死すべき者の日常生活において絶えず「御霊の実」をもたらす。

99:5.7 (1091.6) 人は、信仰を共有するのとちょうど同じ程度に確かに、いつかは共通の目標を創造するある種の宗教集団を生み出す。いつか宗教家は、心理的な意見と神学上の思考体系に基づいてそう試みるよりも、むしろ集い、理想と目的の統一に基づいて実際に協力をするであろう。教義よりむしろ目標が、宗教家を統一すべきである。本物の宗教は、個人的かつ精神的な経験の問題であり、それぞれ個々の宗教家が、その精神的経験の認識について自身のしかも個人的解釈を持たなければならないということは避けられない。「信仰」という言葉に死すべき者の一部の集団が、一般の宗教的な態度として同意できてきたことに信条の定式化のためによりも、むしろ

神との個人の関係に意味をもたせよう。「信仰を持っていますか。では、自分自身にそれを持ちなさい。」

99:5.8 (1091.7) 信仰は、望む事象を確信し、見ていない事実を確認することであると宣言する新約聖書の定義に示されている理想の価値の把握にだけ関心がある。

99:5.9 (1091.8) 原始人は、宗教信念を言葉で表す努力をほとんどしなかった。かれの宗教は、考え抜くよりも、むしろ踊り抜いた。現代人は、多くの教義を考え抜き、信仰の多くの試練を作りあげた。未来の宗教家は、自らの宗教に生き、心からの人間の兄弟愛の奉仕に捧げなければならない。人は、そろそろ個人の宗教的な経験を的に、しかも高尚にして「言葉にするには深過ぎる状態の気持ち」によってのみ気づ、言い表す時である。

99:5.10 (1091.9) イエスは、追随者に定期的に集まり、共通の信念を表示する言葉の形を復唱を要求しなかった。イエスは、皆が実際に何かをするために—ユランチアでの贈与の人生に関する共同の追悼晩餐を相伴するために—集まるべきであると定めただけである。

99:5.11 (1091.10) キリスト教徒が、精神的な指導者の最高の理想としてキリストを紹介して、特定の国家的、または人種的啓発に貢献した神を知る者達の歴史的な指導力の拒絶を神を意識している男女にあえて要求するとき、キリスト教徒にとっての何という誤りであることか。

6. 制度的宗教

99:6.1 (1092.1) 宗派心は、制度的宗教の病であり、教条主義は、精神性の奴隷状態である。宗教なしで教会を持つよりは、教会なしで宗教を持つ方がはるかに良い。20世紀の宗教の混乱は、それ自体、精霊的な退廃を示さない。混乱は、破壊前に限らず、成長前にもある。

99:6.2 (1092.2) 宗教の社会化には真の目的がある。宗教的な忠誠を劇的に表現することが、集団の宗教活動の目的である。真、美、善の魅力を拡大すること。最高価値の魅力を促進すること。寡欲な親交的な奉仕を強化すること。家族生活の可能性を賛美すること。宗教教育を促進すること。賢明な助言と精霊的な指導を提供すること。そして、集団崇拝を奨励すること。すべての生きている宗教が、人間の友情を奨励し、道徳性を保護し、地域の福祉

を促進し、永遠の救済のそれぞれの伝達内容の不可欠な福音の普及を容易にする。

99:6.3 (1092.3) しかし宗教が制度化されるようになると、善のためのその力は縮小されるが、悪のための可能性ははなはだ増大する。形式化された宗教の危険性は次の通りである。信念の固定化と感情の結晶化。世俗化の高まりに伴う特権の蓄積。真実を標準化し、化石化する傾向。宗教の神への奉仕から教会の奉仕への転換。聖職者の代わりに管理者になる指導者の傾向。派閥と競争の分隊を形成する傾向。圧制的な教会権威の確立。「選ばれた人々」の貴族的な態度の創造。神聖さに対する誤った、誇張された考えの育成。宗教の慣例化と崇拝の石化。現在の要求を無視する一方での過去を傾慕する性向。　宗教の最新解釈の不履行。世俗団体の機能とのもつれ。それは、宗教階級の弊害的差別を引き起こす。それは、正教の偏狭的裁判官になる。それは、大胆な若者の関心をとらえず、永遠の救済の福音に関する救いの伝達内容を徐々に失う。

99:6.4 (1092.4) 形式的な宗教は、王国の建設者として高められた奉仕に解き放つ代わりに個人的な精神活動において人を拘束する。

7. 宗教の貢献

99:7.1 (1092.5) 教会や他のすべての宗教集団は、すべての世俗的活動から離れているべきであり、宗教は、同時に人間の組織の社会連携を妨げたり遅らせてはならない。人生は、大きな価値や意義に向かって成長し続けなければならない。人は、自身の哲学の改革と自身の宗教の明確化を進めなければならない。

99:7.2 (1092.6) 政治学は、社会科学から学ぶ技術により、また宗教生活から得られた洞察と動機により経済学と産業の再構成を達成しなければならない。宗教は、すべての社会的な再建において、並外れた目標に安定させる忠誠心を、つまり即座の、しかも一時的な目的を超えたその上に安定させる目標を提供する。急速に変化している環境の混乱の只中にあって、必滅の人間は、広範囲にわたる宇宙的展望の維持を必要とする。

99:7.3 (1093.1) 宗教は、人を地球の表面で勇敢に、嬉々として生活するように奮い立たせる。それは、忍耐と情熱を、熱意に洞察を、力と共感を、そして理想とエネルギーを接合する。

99:7.4 (1093.2) 人は、神の主権の存在に思いを巡らせ、神の意味と精神的価値の現実について考えない限り、決して賢明に世俗の問題について決めることはできないし、個人的関心の身勝手さを超えることはできない。

99:7.5 (1093.3) 経済的相互依存と社会的友愛が、究極的には兄弟愛をもたらすであろう。人は生まれながらにして夢想家であるが、宗教が、やがて熱狂的な反応の誘発にははるかに少ない危険性で人を動かすことができるように科学が酔いをさましているのである。経済上の必要性は人を現実に拘束し、個人的宗教経験は、この同じ人を絶えず広がり進歩している宇宙市民の永遠の現実に真正面から向かわせるのである。

99:7.6 (1093.4) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 100
人間の経験における宗教

100:0.1 (1094.1) 活力に満ちた宗教生活の経験は、平凡な個人を理想主義的な能力の人格に変える。宗教は、各々の個人の進歩の促進を通じて、全員の進歩に助力し、また、個々人の進歩は、全員の業績に寄り増大する。

100:0.2 (1094.2) 精霊的な成長は、他の宗教家との親密な交際により互いに促進される。愛は、宗教の成長—主観的満足感に代わる客観的な魅力—に対する地盤をもたらす。まだそのうえに、最高の主観的満足をもたらす。宗教は、平凡な日々の生活の退屈でつらい仕事を高尚にする。

1. 宗教の成長

100:1.1 (1094.3) 宗教は、意味の発展と価値の向上を引き起こすとともに、純粋に個人的評価が絶対的なものの水準に登用されるとき、悪が結果として必ず生じる。子供というものは、喜びの内容に基づいて経験を評価する。成熟度は、個人的な喜びに代わる高い意味に比例しており、さらに忠誠は、様々な生活状況と宇宙関係の最高概念に比例している。

100:1.2 (1094.4) 一部の人々は、成長するには忙し過ぎ、したがって精霊の固着という深刻な危険性にある。異なる年齢

の連続的な文化において、そして進歩する文明の通過段階において、意味の成長のための準備が、なければならない。成長の主要な抑制剤は、偏見と無知である。

100:1.3 (1094.5) 宗教経験をのばす機会をすべての成長している子供に与えなさい。既成の大人の経験を押しつけてはいけない。心しなさい。年ごとの確立された教育制度を通しての進歩が、必ずしも知的な進歩、ましてや精霊的な成長を意味するというわけではない。語彙の拡大は、人格形成をを意味しない。成長は、実際は単なる産物により示されるのではなく、むしろ進歩により示される。教育上の本物の成長は、理想の高揚、価値への増加する感謝、価値の新しい意味、最高の価値への増大された忠誠心により示される。

100:1.4 (1094.6) 子供は、大人の関係者の誠実さだけにいつまでも感動する。教訓あるいは手本でさえ、永続的影響力はない。誠実な人々は、成長する人々であり、成長は、印象的で奮い立たせている現実である。今日、誠実に生きなさい、—成長しなさい、そうすれば、明日は、それ自体に対応するであろう。オタマジャクシがカエルになる

最速方法は、それぞれの瞬間をオタマジャクシとして誠実に生きることである。

100:1.5 (1094.7) 宗教的な成長に不可欠の土壌は、自己実現、生来の傾向の調整、好奇心の行動化と理にかなった冒険の楽しみ、満足感の経験、注意と認識に対する恐怖刺激の機能、驚きの魅力、誘惑と微小さ、つまり謙遜の通常の意識の進歩的な生活を前提としている。成長もまた自己批判—良心が伴う個性の発見—に基づいている。なぜならば、良心は、実際に自身の価値-習慣、個人的理想による自身の批判であるから。

100:1.6 (1095.1) 宗教経験は、肉体の健康、遺伝的気質、および社会環境により著しく影響を受ける。しかし、これらの世俗的状況は、天の父の意志の実行に専念する人間による内面の精霊的な進歩を妨げない。特に妨げられていなければ機能する成長と自己実現に向かう何らかの生来の衝動は、すべての通常の死すべき者にある。組成分のこの授与の精霊的な成長の可能性を育成する確かな方法は、最高価値への心からの傾倒の態度を維持することである。

100:1.7 (1095.2) 宗教は、授けたり、受け取ったり、貸与したり、学んだり、または失ったりはできない。それは、究極的価値への増大する探究に比例して成長する個人的経験である。宇宙成長は、こうして意味の蓄積と絶えず広がる価値の上昇に伴う。しかし高潔さ自体は、常に無意識の成長である。

100:1.8 (1095.3) 思考と行為の宗教上の習慣は、精霊的な成長の無駄のない理法に寄与している。人は、精霊的刺激への好ましい反応、一種の精霊的条件反射に向けての宗教的素因を開発することができる。宗教の成長を奨励する習慣は、神の価値への感性、他者が送る宗教生活の認識、宇宙の意味についての反射的思索、信心深い問題解決、仲間との精霊的人生の共有、利己主義の回避、神の慈悲への甘えの拒否、神の前にいるような生活を取り入れた。宗教成長の要素は、意図的であるかもしれないが、成長自体は常に無意識である。

100:1.9 (1095.4) 宗教的な成長の無意識の特徴は、しかしながら、人間の知性の想定された潜在意識の領域で機能する活動であることを意味する。むしろ、それは、人間の心

の意識を超える段階の創造的活動を意味する。宗教上の無意識の成長の現実についての認識経験は、超意識の機能的存在の1つの確証である。

2. 精霊的な成長

100:2.1 (1095.5) 精霊の発達は、最初に、真の精霊力と生きた精霊的なつながりの維持、第2には、連続する精霊的な結実に基づく。つまり、人の精霊の後援者から受け取られたその奉仕を仲間にもたらすこと。精霊的進歩は、完全性への飢餓の自意識、つまり神を知り神に似る願望、天の父の意志を成すという心からの目標に結びつけられた精霊的貧困の知的認識に基づいている。

100:2.2 (1095.6) 精霊の成長は、まず必要性への目覚めであり、次に意味の認識、次いで価値の発見である。真の精霊的な発達の証しは、愛に動機づけられ、寡欲な活動に駆動され、神性の完全理想の心からの崇拝に支配される人間の人格の表示にある。そしてこの全体の経験は、単なる神学の信念とは対照的に宗教の現実の構成要素となる。

100:2.3 (1095.7) 宗教は、それが宇宙への啓発され賢明な精霊的な反応方法になるその経験段階に進むことができる。そ

のような栄光ある宗教は、人格の3段階で機能することができる。知性、モロンチア、精霊、すなわち心に、進展する魂の中に、そして内在する霊と共に。

100:2.4 (1096.1) 精霊性は、同時に神への人の近さの指標となり、仲間の人間への有用性の基準になる。精霊性は、物事に美を発見し、意味に真実を認識し、価値に善を発見する能力を高める。精霊の発達は、容量に従って決定されており、それゆえ直接的に愛の利己的資質の除去に比例している。

100:2.5 (1096.2) 実際の精霊的な状態は、神格達成、つまり調整者同調の標準である。精霊性の最終的達成は、現実への最大限の到達、神類似への最大限到達に等しい。永遠の命は、無限の価値を求めての終わりなき探索である。

100:2.6 (1096.3) 人間の自己実現の目標は、物質的ではなく、精霊的でなければならない。求めて努力する価値がある唯一の現実は、神聖で、精霊的で、永遠である。必滅の人間は、物理的な喜びの享受と人間の愛情の満足感を得る資格がある。人間は、人間関係とこの世の団体組織への忠誠によって恩恵を受けている。しかし、これらは、空

間を超え、時間を負かし、神の完全性と終局者の奉仕の永遠の目標を実現しなければならない不滅の人格を形成する永遠の地盤ではない。

100:2.7 (1096.4) イエスは、神を知る死すべき者の奥深い確実性を描写して、「神を知る王国の信者には、すべての地球のものが砕けようとも、どういうことがあろうか。」とこう言った。一時的保護は脆いが、精霊的な保証は動じない。人間の災難、身勝手さ、残酷さ、憎しみ、悪意、嫉妬の最高潮が、人間の魂を打ち砕くとき、人は、完全に難攻不落の内面の1つの砦、精霊の拠り所があるという保証で休息することができる。少なくともこれは、内在する永遠の神の霊への魂の維持に捧じるすべての人間に当てはまる。

100:2.8 (1096.5) そのような精霊的な到達後、段階的な成長、もしくは特定の危機により確保されるか否かにかかわらず、価値の新基準の発展と同様に人格の新たな方向づけが生じる。そのような霊生まれの個人は、自分の最も野心が消滅し、最も熾烈な望みが砕ける間、冷静に傍観できるように人生において再び意欲を起こす。人は、その

ような破局が、人のこの世の創造を破壊する大災害に向けて宇宙到達の新たな、より崇高な段階のより立派で永続的な現実の育成に向け直す以外の何物でもないことを明らかに知っている。

3. 最高価値の概念

100:3.1 (1096.6) 宗教は、静的で至福な心の平穏に達するための手法ではない。それは、魂を動的奉仕のために備えるための刺激である。それは、神を愛し人に仕えることを好む忠誠的尽力における自己の全体性の動員である。宗教は、最高の目標、永遠の恩賞への到達に不可欠のいかなる代償をも支払う。見事に崇高である宗教的な忠誠には、神聖にされた完全性がある。そして、この忠誠心は、社会的に有効であり、精霊的に進歩的である。

100:3.2 (1096.7) 宗教家には神という言葉は、最高の現実への接近と神性価値の認識を意味する象徴になる。人間の好き嫌いというものは、善悪を決定しない。道徳的価値は、願望遂行、または感情的落胆からは芽生えない。

100:3.3 (1096.8) 人は、価値の熟考に際し、価値であるものと価値を持つものとの区別をしなければならない。愉快な活

動と、その有意義な統合と人間の経験のますます高い段階における高められた認識との間の関係に気づかなければならない。

100:3.4 (1097.1) 意味とは、経験が価値に加える何かである。それは、価値の鑑賞的意識である。孤立した純粋に利己的な喜びは、意味の事実上の切り下げ、つまりは相対的な悪に近い無意味な楽しみを意味するかもしれない。現実が重要であり、精神的に関連しているとき、すなわちそのような関係が心によって認識され、評価されるとき、価値は、経験的である。

100:3.5 (1097.2) 価値は、静的であるはずがない。現実は、変化、成長を意味する。成長、すなわち意味の拡大と価値の高揚のない変化は、無価値である—潜在的悪である。宇宙適合の資質が大きければ大きいほど、いかなる経験の持つ意味合いは、より大きい。価値は概念的幻想ではない。それは、実在するが、常に関連性の事実に依存する。価値は、常に現実でもあり潜在的でもある—が、過去にそうあったことではなく、今そうであり、将来そうなることである。

100:3.6 (1097.3) 現実性と可能性の関連は、成長に、すなわち価値の経験の実現に等しい。しかし成長は、単なる進歩ではない。進歩は、常に重要であるが、成長なくしては相対的に無価値である。人間の生涯の最高価値は、価値の成長に、意味における進歩に、そしてこの2つの経験の宇宙相互関係の実現にある。そして、そのような経験は神-意識に同等である。そのような死すべき者は、超自然ではないが、正確には超人的になっている。不滅の魂は、進化している。

100:3.7 (1097.4) 人間は成長をもたらすことはできないが、好ましい状態を供給することはできる。成長は、物理的、知的、または精神的であろうともいつも、無意識である。愛は、このように成長する。それは、作成したり、製造したり、または購入することはできない。それは、成長しなければならない。進化は、成長の宇宙的方法である。社会的発展は、立法による保証はできないし、道徳的成長は、改良された行政による保証はない。人は機械を製造するかもしれないが、その真の価値は、人間の文化と個人的認識から得られなければならない。成長への

人の唯一の貢献は、人格のもつ総力の動員—生きた信仰—である。

4. 成長の問題

100:4.1 (1097.5) 宗教生活は、献身的な生活であり、献身的な生活は、創造的な生活、つまり独自の、自然の生活である。新しい宗教洞察は、　古く、その上劣る反応形態に成り代わる新たでより良い反応習慣を選び始める闘争から起こる。新しい意味は、闘争の中にだけ現れるのである。闘争は、優れた意味に内包されるより高い価値の支持を拒絶するときに限って持続する。

100:4.2 (1097.6) 宗教上の混乱は、不可避である。何らかの成長は、心的闘争と精神的動揺なしにはあり得ない。哲学的生活水準の組織は、哲学的な心の領域のかなりの動揺を伴う。忠誠は、闘いなくしてはすばらしいもの、善なるもの、真実なるもの、高潔なもののために発揮はされない。努力は、精神的洞察の明確化と宇宙洞察の増進に付随する。人知は、この世の生活から非精神的活力により引き離されることを拒絶する。懶惰な動物の心は、宇宙問題解決との苦闘に必要とされる努力に反抗する。

100:4.3 (1097.7) にもかかわらず、宗教生活の重大問題は、愛の支配による人格の魂の力を統一する課題にある。健康、精神的効率、および幸福は、肉体組織、心の組織、精神体系の統一から生まれる。人間は、健康と健全さについては多くを理解しているものの、幸福については、実際のところほとんど気づいていない。最高度の幸福は、精神の進歩に固く結びついている。精神的な成長は、永久の喜び、すべての理解を超える平和をもたらす。

100:4.4 (1098.1) 物質的な生活においては、感覚がものの存在について伝える。心は、意味の現実を発見する。しかし、精神的経験は、個人に人生の本物の価値を明らかにする。人間生活のこれらの高度の段階は、神の崇高な愛と人の寡欲な愛で獲得される。もし人が仲間を愛しているならば、仲間の価値を見出したのに違いない。イエスはそのような高い価値を人に置いたが故に、人をとても愛していた。人は、付き合う仲間の動機の発見により最もよく価値を発見することができる。誰かがあなたを苛立たせるならば、つまり憤りの気持ちを起こさせるならば、あなたは、相手の観点について、そのような好ましくない行為の理由について、好意的に明察を試みるべき

である。一度隣人を理解するならば、人は寛容になり、この寛容は友情へと育ち、愛へと実を結ぶであろう。

100:4.5 (1098.2) 洞窟居住時代の原始の先祖の一人の絵—猛然と正面を見て脚を広げ、棍棒を持ち上げ、憎悪と恨みを吸い込んで、低く、見てくれの悪い、不潔で怒鳴って立っている不格好な男—を思い浮かべつてみなさい。そのような絵は、人類の中の神の威厳についてほとんど表現していない。しかし、我々に絵の拡大をさせてもらいたい。この生き生きとしている人間の正面には、剣歯虎が、うずくまっている。男の後ろには1人の女と2人の子供。人は、すぐにそのような絵に人類のすばらしく高貴な多くの始まりを表していると認めるが、人間は、両方の絵において同じである。しかしながら、第２の点描の中で、人は広がる地平線で優遇されている。人は、そこにこの進化する人間の動機について明察する。人は、男を理解するがゆえに、男の態度が賞賛に値するものになる。仲間の動機を推し測ることができさえするならば、人は、どれほどよく理解するであろうか。仲間を知ることができさえすれば、いつかは、彼らと恋に落ちるであろうに。

100:4.6 (1098.3) 人は、意志の単なる行為により心から仲間を愛することはできない。愛は、隣人の動機と感情の徹底的な理解からだけ生まれるのである。それは、実際には今日すべての人を愛することは、毎日もう一人の人間を愛することを学ぶほどにはそれほど重要ではない。もし毎日あるいは毎週、あなたが、もう一人の仲間の理解を勝ちとり、これがあなたの能力の限界であるならば、あなたは、確かに社会的に付き合いをしているし、本当に自分の人格を精霊化している。愛が、感染性であり、人間の献身が、知的で賢明であるとき、愛は、憎しみよりもより伝染性である。しかし、本物の、寡欲な愛だけが、本当に移り易いのである。各々の人間が、動的な愛情の中心になることができさえすれば、愛のこの良性のウイルスは、すぐさま、全文明が愛に囲まれ、それが、人間の兄弟愛の実現であるほどまでに人類の感傷的な情感の流れを瀰漫させるであろうに。

5. 転向と神秘主義

100:5.1 (1098.4) 苛立ちの哲学的な時代の主義や礼拝集団の間を混乱して転々としている失われた魂、神学的意味ではなく方向的な意味での失われた魂が、世界に満ちている。

じつにわずかの者しか、宗教権威に代わる生きた哲学を導入する方法を学んでこなかった。(社会化された宗教の象徴は、成長のための媒介として軽蔑されるものではない、たとえ河川敷が、川ではないとしても。)

100:5.2 (1098.5) 宗教成長の前進は、停滞から闘争を経て調整不安定からためらいのない信仰、宇宙意識の混乱から人格の統一、一時的な目的から永遠の目的、恐怖の束縛から神の息子の自由へと導く。

100:5.3 (1099.1) 崇高な理想への忠誠表明—神-意識の心的、感情的、精神的認識、—は、自然でゆるやかな成長であるかもしれないし、あるいは危機の場合のように、ある転機で時々経験されるかもしれないということが明らかにされるべきである。使徒パウーロスは、ダマスカス街道でのあの多事多端な日にそのような突然の、しかも華々しい改心を経験した。釈迦は、ただ一人座り、究極真実の神秘を見抜こうとした夜、同様の経験をした。他の者達にも似た経験があり、多くの本物の信者は、突然の転向はなく、精神上の進歩をした。

100:5.4 (1099.2) いわゆる宗教転向に関連する壮観な現象の大半は、本質的には完全に心理的であるが、時として起源が、精神的でもある経験も生じるのである。精神的な起動が、精霊到達への心的に上向きのどの段階においても全く総体的であるとき、神の考えに対する忠誠の人間の動機づけが成就するとき、次には、内在する精霊の突然の下方への把握が、信じる人間の超意識的な心の集中され神聖にされた目的に連動させるために頻繁に起こる。そしてそれは、純粋に心理的なかかわり合いを超えた要因の転換を構成する統一された知的で精霊的な現象のそのような経験である。

100:5.5 (1099.3) だが、感情だけでは誤った転向である。人には、感情はもちろん信仰がなければならない。そのような心的意欲が部分的であるという範囲で、またそのような人間の忠誠心の動機に限って言えば不完全であるという範囲で、転向経験は、実に知力を要する感情的で、精神的な混合された現実であろう。

100:5.6 (1099.4) もし人が、別な方法で統一された知的な人生において理論上の潜在意識の心を実際的な作業仮説として

認めたいと思うならば、人は、一貫するために、同様の、呼応する知的な上昇活動の領域を、つまり内在する精霊の実体、すなわち思考調整者との即座の接触圏を超意識の段階として仮定すべきである。すべてのこの心的推測の大きな危険は、空想と他のいわゆる神秘的な経験が、突飛な夢とともに人間の心への神の伝達と見なされるかもしれないということである。神の存在体は、過去に、恍惚状態や病的な空想の理由からではなく、こういったすべての現象にもかかわらず、自分たちを神を知る特定の人々に明らかにしてきた。

100:5.7 (1099.5) 転向志向とは対照的に、思考調整者との接触可能なモロンチア圏へのより良い接近は、生ける信仰と誠実な崇拝、つまり心からの寡欲な祈りを介してであろう。要するに、人心の無意識の段階の記憶の過剰な突き上げのあまりに多くが、神の顕示と精霊の導きに間違えられてきた。

100:5.8 (1099.6) 習慣的な宗教的夢想の習慣には重大な危険が伴う。神秘主義は、時として本物の精神的親交の方法ではあったが、現実回避の方法になるかもしれない。忙しい

人生の場面からの短い後退の季節は、深刻に危険ではないかもしれないが、人格の長引く孤立は、最も望ましくない。空想意識の恍惚的状態は、間違っても決して宗教経験として修めるべきではない。

100:5.9 (1099.7) 神秘的な状態の特徴は、比較的受動的な知性に作用している焦点の真に迫る孤立したものによる意識の拡散である。このすべてが、霊接触圏、つまり超意識圏への方向よりも、むしろ潜在意識への方向に意識を引きつけている。多くの神秘主義者は、異常な心的徴候段階にまで心の分裂を押し進めてしまった。

100:5.10 (1100.1) より健康な精神的思索の態度が、内省的崇拝と感謝の祈りに見られる。現身のイエスの人生の後年に起きたような思考調整者との直接の親交は、これらのいわゆる神秘主義的経験と混同されるべきではない。神秘主義の親交開始に貢献する要素は、そのような心的状態の危険を暗示している。神秘的状態は、次のようなものに支持されている。肉体的疲労、断食、心的分離、感慨深い美的経験、強烈な性衝動、恐怖、懸念、激怒、荒々

しい踊り。そのような初期の準備の結果として起こる内容の多くは、潜在意識の心の中にその起源がある。

100:5.11 (1100.2) 神秘現象のための状態は、好ましかったかもしれないが、ナザレのイエスは、決して楽園の父との親交のためにそのような方法に頼らなかったということが明確に理解されるべきである。イエスには、潜在意識の迷いも超意識の幻想もなかった。

6. 宗教生活の印

100:6.1 (1100.3) 進化的宗教と天啓的宗教は、方法において著しく異なるかもしれないが、動機には、かなりの類似性がある。宗教は、人生の特定機能ではない。むしろ、それは、生活様式である。真の宗教とは、宗教家が自身と全人類にとり最高の価値があると判断する何らかの現実への心からの献身である。全宗教の傑出している特性は次の通りである。最高価値への疑問を持たない忠誠心と心からの献身。最高価値へのこの宗教的敵な傾倒は子供へのおそらく無宗教の母の関係や支持された主張への無宗教家の熱い忠誠心に示されている。

100:6.2 (1100.4) 宗教家の受け入れた最高価値は、下劣であるか、もしくは誤りでさえあるかもしれないが、それでもなお、それは宗教的である。宗教は、崇高であると保持される価値が、真に本物の精神的価値の宇宙の現実であるというまさしくその点において本物である。

100:6.3 (1100.5) 宗教的な衝動への人間の反応の特徴は、気高さ雄大さの性質を包含する。誠実な宗教家は、宇宙の市民権を意識し、超人的な力の源との接触に気づいている。かれは、神の息子の優れた、また高められた親交に属する保証で興奮し、活気づけられる。自尊の意識は、宇宙の最高目的を—最高目標—を求める探索の刺激に増強されるようになった。

100:6.4 (1100.6) 自己は、高められた自己管理能力を課し、感情の対立を少なくし、人間の生活を本当に住む価値のあるものにするすべてを取り囲む動機づけの興味をそそる意欲に降伏した。人間の限界に対する病的認識は、最高の宇宙と超宇宙の目標に到達するための道徳的決断と精神的願望に関連した人間の短所の生まれながらの意識に変えられる。そして超人間の目標到達のためのこの激しい

努力は、増大する忍耐、慎み、不屈の精神寛容によって絶えず特徴付けられる。

100:6.5 (1100.7) だが真の宗教は、生き生きとした愛、すなわち奉仕の生活である。純粋に世俗的で、取るに足らない多くのものからの宗教家の分離は、決して社会的孤立にはつながらないし、またそれは、ユーモアを解する感覚を無効にすべきではない。本物の宗教は、人間の生活から何も取り去らず、それどころか、人生のすべてに新しい意味を加えさえするのである。それは、新しい型の熱意、情熱、勇気を生む。人間の忠誠心に関わる当然の社会的義務への精神的洞察と忠実な献身による支配がないならば、それは、この上なく危険な改革運動者の精神を生み出しさえするかもしれない。

100:6.6 (1101.1) 宗教生活の最も驚くべき特徴の1つは、活力に満ちた崇高な平和、すべての人間の理解を越える平和、すべての疑念と混乱の欠如を予示する宇宙の平静さである。精神安定のそのような段階は、失望に対して免疫がある。そのような宗教家は、使徒パウーロスに似ている。パウーロスは、「私は確信する。死も生も、天使も

支配者も、権威者も、現在あるものも、将来のものも、高いものも深いものも、その他どんなものも神の愛から私達を切り離すことはできない。」と言った。

100:6.7 (1101.2) 崇高なるもの現実を理解する宗教家、そして究極なるものの目標を追求する宗教家の意識の中に住まう勝利の栄光の実現と結びつく安心感がある。

100:6.8 (1101.3) 進化的宗教でさえ、本物の経験であるが故に、忠誠と壮大さにこのすべてがある。しかし天啓的宗教は、本物であるうえに、卓絶している。拡大された精神的洞察力の新たな忠誠心は、新たな愛と献身の段階、奉仕と親交の段階を作り出す。このすべての高められた社会的展望が、神の父権と人の兄弟愛の拡大した意識を生み出すのである。

100:6.9 (1101.4) 進化的宗教と啓示的宗教の特質上の違いは、純粋に経験的な人間の知恵に加えられる神の叡智の新たな特性である。しかし、神の叡智と宇宙洞察のさらなる贈与のその後の受け取るの能力を発達させるのは、人間の宗教における、また人間の宗教との経験である。

7. 宗教生活の極致

100:7.1 (1101.5) ユランチアの並みの死すべき者は、ナザレのイエスが生身で滞在中に取得した性格の高度の完全性に達することを望むことはできないとはいえ、すべての必滅の信者にとり、完成されたイエスの人格の線に沿った強く、かつ統合された人格を開発することは断然可能である。あるじの人格の唯一無二の特徴は、その完全性というよりは、むしろその釣り合い、その絶妙、かつ均整のとれた統合であった。最も効果的なイエスの紹介は、告発人の前に立つあるじに向かい身振りで示し、「この男を見よ」と言った者の例に倣うことにある。

100:7.2 (1101.6) イエスの不断の思いやりは、人の心に触れたが、その人柄のもつ勇敢な力は、その信奉者を驚かせた。イエスは、じつに誠実であった。けっして偽善者などではなかった。てらいというものには無関係であった。いつも非常に爽快なまでに偽りがなかった。決して見せかけに身を屈せず、決して偽りに頼らなかった。真実を教え、教えた通りに生きさえした。イエスは、真実であった。そのような誠意が、時折苦しめたが、かれは、その世代に救済の真実の宣言をせざるをえなかった。イエスは無条件にすべての真実に忠実であった。

100:7.3 (1101.7) にもかかわらず、あるじは、とても道理をわきまえており、とても親しみやすかった。かれは、すべての活動においてとても実用的であり、同時に、すべての計画が、そのような神聖化された常識に特徴づけられた。奇抜で、異常で、風変わりな風潮のすべてとは全く関係がなかった。決して気紛れでも、酔狂でも、理性を失ってもいなかった。その教えと行為すべてに、常に並みはずれの礼儀正しさで対応する絶妙の判別があった。

100:7.4 (1102.1) 人の息子は、いつもとても落ち着きのある人格であった。敵でさえも彼に対する健全な敬意を維持した。彼らは、人の息子の存在を恐れさえした。イエスは恐れなかった。神の熱意に満ち満ちていたが、決して狂信的にはならなかった。感情的に活溌であったが、決して軽はずみではなかった。想像的であったが、いつも実用的であった。ありのままに人生の現実に直面したが、決して無味乾燥でも退屈でもなかった。勇敢であったが、決して無謀ではなく、慎重あったが、決して臆病ではなかった。同情的であったが、感傷的ではなく、類い希であったが、風変わりではなかった。敬虔であった

が、聖人ぶらなかった。また、それほどまでに完全に統合的であったので、とても落ち着いていた。

100:7.5 (1102.2) イエスの独創性は、息苦しくなかった。伝統に縛られもせず、狭い慣例への奴隷化により妨げられもしなかった。かれは、疑いのない自信で話し、絶対権威で教えた。しかし、そのずば抜けた独創性は、イエスの前任者や同時代人の教えの真実の珠玉を見落とさなかった。その教えの最も独創的なものは、恐怖と犠牲に代わる愛と慈悲の強調にあった。

100:7.6 (1102.3) イエスの展望は非常に広大であった。福音をすべての民族に説くように追随者に強く勧めた。かれは、すべての偏狭さとは無関係であった。その思いやりのある心は、全人類を、宇宙をさえ抱擁した。そのいざないは、いつでも「望む者は誰でも来させなさい。」であった。

100:7.7 (1102.4) イエスについて「彼は神に頼っていた」というのは、本当であった。かれは、人の中にいる人間として、天の父を最も崇高に信じた。幼子がこの世の親を信じるように父を信じた。その信仰は、完全であるが、決して

押しつけがましくなかった。いかに自然が残酷に見えようとも、自然がいかに人の幸福に無関心に見えようとも、決してイエスの信仰は、揺るがなかった。かれは、失望に平気であり迫害に動じなかった。外見上の失敗に心を動かされることはなかった。

100:7.8 (1102.5) かれは、兄弟として人を愛しており、同時に人はいかに生まれながらの資性や身につけた特質において異なるかを認識した。「彼は良い働きをして回った。」

100:7.9 (1102.6) イエスは、著しく快活な人であったが、盲目的で無分別な楽天家ではなかった。不断の勧告の言葉は、「しっかりしなさい。」であった。神に対する揺るぎない確信と人に対する確固たる自信から、この自信の態度を維持することができた。人を愛し信じたので、いつもすべての人に感動的なまでに思いやりがあった。その上、いつも自分の信念に誠実であり、父の意志をなすことへの献身的愛情で堂々と毅然としていた。

100:7.10 (1102.7) あるじは、いつも寛大であった。「受けるよりは与えるほうが幸いである。」と言うことに決して飽きることはなかった。曰く「ただで受けたのであるから、

ただで与えるがよい。」しかしながら、その限りない寛大さのすべてにもかかわらず、決して無駄がなく、贅沢でもなかった。あるじは、救済を受けるということを信じなければならないと教えた。「求める者のすべては、得る。」

100:7.11 (1102.8) あるじは、率直であったが、つねに親切であった。「もし無かったならば、私はそう言いおいていただろう。」と言った。隠し立てがなく、いつも好意的であった。罪人に対する愛と罪への憎しみに対し率直であった。しかも、かれは、すべてのこの驚くべき率直さの中にあって、確かに正しかった。

100:7.12 (1102.9) イエスは、時々人間の悲しみの杯を深々と飲んだにもかかわらず、一貫して陽気であった。生活の現実に不敵に直面したが、それでもなお王国の福音に対する熱意に満たされていた。しかし、イエスは、自分の熱意を抑えた。熱意は、決してイエスを抑えなかった。自身を無条件に「父の用向き」に捧げた。この神の熱意は、精神的でない同胞にはイエスが横にいると思わせるが、見物中の宇宙は、イエスを健全さの手本とし、精神

的生活の高水準への人間の崇高な献身の型として評価した。そして、その制御された熱意は、伝染的であった。仲間は、イエスの神性の楽天主義を分け合うことを強く求めた。

100:7.13 (1103.1) ガリラヤのこの男性は、悲しみの人ではなかった。喜びの人であった。「喜んだ上にも喜びなさい。」といつも言った。しかし、職務が求めるときに、彼は、「死の影の谷」を勇敢に歩き抜けることをいとわなかった。喜ばしい人であり、同時に、謙虚な人であった。

100:7.14 (1103.2) その勇気は、その忍耐と全く等しかった。早まって行動を強いられるとき「私の時はまだ来ていない。」と返答するのであった。決して急がなかった。その落着きは気高いものであった。ただし、悪には度々憤慨し、罪には我慢できなかった。かれは、しばしば地球の我が子らの幸福に反目するものに抵抗するよう激しく動かされた。しかし、罪に対するイエスの憤りは、決して罪人への怒りにはつながらなかった。

100:7.15 (1103.3) その勇気は立派であったが、決して無鉄砲ではなかった。その合言葉は「恐れるではない。」であった。その果敢さは高邁であり、その勇気はしばしば英雄的であった。しかしその勇気は、思慮深さにつなげられ、判断力に制御されていた。それは、盲目的憶測の無謀さではなく、信頼からくる勇気であった。かれは、誠に勇敢であるが、向こう見ずではなかった。

100:7.16 (1103.4) あるじは、崇敬の模範であった。その青春時代の祈りにおいてでさえ、「天にまします神よ、御名が崇められますように。」と始めた。仲間の不完全な崇拝さえも重んじた。しかし、これが、宗教伝統を攻撃をしたり、または人間の信念の誤りの強襲を思いとどまらせたりはしなかった。本物の神聖さに向けて敬虔であり、なおかつ、「あなたの中のだれが私に罪があると責めるのか。」と言って、仲間に妥当に訴えることができた。

100:7.17 (1103.5) イエスは、善であったがゆえに偉大であったが、それでもなお幼子らと親しく交じわった。個人的生活において優しく、でしゃばらず、しかも宇宙の完成さ

れた人間であった。その仲間は、自発的にあるじと呼んだ。

100:7.18 (1103.6) イエスは、完全に統合された人間の人格であった。そして、ガリラヤでしたように、かれは、今日、死すべき者の経験を統合し、人間の努力を調整し続けている。イエスは、人生を統合し、人柄を高尚にし、経験を簡素化する。人間の心を向上させ、変えさせ、変貌させるために人間の心に入る。「誰でもキリスト・イエスにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去っている。視よ、すべてがが新しくなっている。」というのは文字通り本当である。

100:7.19 (1103.7) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 101
宗教の本質

101:0.1 (1104.1) 宗教は、人間の経験として、進化する未開人の恐怖への原始の奴隷状態から永遠の神との息子関係をこの上なく意識する文明的な人間の崇高で素晴らしい信仰の自由におよんでいる。

101:0.2 (1104.2) 宗教は、漸進的社会進化の高度な倫理と道徳の原型である。しかし、宗教は、そのように、宗教の外向きで、社会的である顕現が、人間社会の倫理的かつ道徳的な勢いに強く影響を受けるが、単に道徳的活動ではない。宗教は、絶えず人の進化的本質を感化するものであるが、その進化への鍵ではない。

101:0.3 (1104.3) 宗教は、人格の確信である信仰は、不信心な物質的な心に生まれる表面的に絶望の矛盾した理論につねに打ち勝ことができる。「世界に生まれるすべての人を照らす誠の光」という真実の、正真正銘の内側の声が本当にある。そして、この精神の導きは、人間の良心の倫理的鼓舞とは異なっている。宗教上の保証の感覚は、感情的な感覚以上のものである。宗教的な保証は、心の理性、哲学の理論さえ超える。宗教は、信頼、信用、保証である。

1. 真の宗教

101:1.1 (1104.4) 真の宗教は、論じられたり、自然な裏付けにより実証できる哲学的信念の体系でもなく、神秘主義の空想的な愛好家だけが楽しむことのできるたとえようもな

い素晴らしく神秘的な経験でもない。宗教は、推論の産物ではないが、宗教の観点から見ると、それは全く道理に適っている。宗教は、人間の哲学理論からは得られないが、人間の経験として、それは全く論理的である。宗教は、進化の起源のある道徳的行為者の意識にある神格の経験である。それは、時間における永遠の現実の真の経験、まだ肉体にある間の精霊的な満足感の認識を例示する。

101:1.2 (1104.5) 思考調整者は、自己表現を得る何の特別手段をもたない。宗教感情の受理または表現のための神秘的宗教の何の機能もない。これらの経験は、人間の自然に定められた心の仕組みを通して可能にされる。そしてそこに、絶えず続く宿りの物質的な心との直接対話に関しての調整者の困難に関して1つの説明がある。

101:1.3 (1104.6) 神性の霊は、必滅の人間と気持ち、あるいは感情で接触するのではなく、最も高く最も精神的にされた思考領域において接触する。神の方向へ人を導くのは、人の気持ちではなく、考えである。神性は、心の目だけで知覚されるかもしれない。しかし本当に神について明

察し、内在する調整者を聞くのは、純粋な心である。「神聖さがなければ、誰も主を見ることはできない。」そのようなすべての内側の、そして精神的親交は、精神的洞察と呼ばれる。　そのような宗教経験は、調整者と真実の聖霊が、神の進化の息子の考え、理想、洞察、および精神的邁進の最中に機能するにつれ、調整者と真実の聖霊の結合操作により人の心に印象づけられた結果として生じる。

101:1.4 (1105.1) 宗教は、視覚や感情によってではなく、むしろ信頼と洞察により生きており、また繁栄する。それは、新事実の発見や独特の経験の発見にあるのではなく、むしろ、すでに人類によく知られている事実に関し、新たで精神的な意味の発見にある。最高度の宗教経験は、信念、伝統、権威の事前行為に依存していない。宗教は、崇高な気持ちの子でもなく、純粋に神秘主義的な感情の子のいずれでもない。それは、むしろ、人間の心に住む精神の影響力との徹底的に深く、また精神的親交の実経験であり、そのような経験が、心理学の観点から定義可能である限り、それは、そのような純粋に個人的な経験

の現実として神を信じる現実を体験する単なる経験である。

101:1.5 (1105.2) 宗教は、物質宇宙論の合理的空論の産物ではないが、それは、やはり人の心の経験で起こる完全に合理的洞察の創造である。宗教は、神秘的な瞑想からでも、孤立した黙想から生まれたのでもないにもかかわらず、それはつねに多少なりとも神秘的であり、いつも必ず定義できるものではなく、まったく知的な理由と哲学的な論理では説明できない。神秘主義の思索、あるいは、孤立の沈思から生じるものではない。真の宗教の兆しは、人の道徳意識の領域に源を発し、人の精神的洞察、すなわち神を渇望する人間の心の中の神を明らかにする思考調整者の存在の結果として生じる人間の人格のその機能の成長で明らかにするのである。

101:1.6 (1105.3) 信仰は、道徳的な洞察を価値の良心的な識別と結合し、そして義務への先在的な進化の義務感は、真の宗教の原型を完成する。結局、宗教の経験は、神に対する確かな意識と信じる人格の疑いの余地のない生存保証につながる。

101:1.7 (1105.4) このように、宗教的な切望と精霊的な衝動は、単に人に神を信じたくさせるだけのような性質ではないということ、むしろ、神を信じるべきであるという信念に人が深く感動するというそのような本質と力のあるものであるということがわかるかもしれない。顕示の照明の結果として生じる進化の義務と責務の感覚は、ついに心のその位置に、そして神を信じない権利はないと結論する魂の態その態度にいたるという人の道徳的な本質にそのような深い印象を与える。啓発され規律あるそのような個人の高度で超哲学的な知恵は、神を疑ったり、神の善を信用しないということは、人間の心と魂の中の最も真実で最も奥深いもの—神性の調整者—に虚偽であると証明することであると、彼らに最終的には指示している。

2. 宗教の事実

101:2.1 (1105.5) 宗教についての事実は、分別ある平均的人間の宗教経験の中に全体的にある。そしてこれは、宗教が、科学的または心理的であるとさえ見なされ得る唯一の意味である。顕示が顕示であるという証明は、人間の経験のこの同じ事実である。顕示は、明らかに異なる自然の

科学と宗教の神学を一貫して論理的な宇宙哲学、つまり科学と宗教双方の整合された、完全な説明、こうして、無限が、その意志と計画をいかに物質、心、精霊に働きかけるかを知ることを切望する人間の経験における人間の心のそれらの質問に答える心の調和と精神の満足感をこのように創造するということ、をよく統合するのである。

101:2.2 (1106.1) 推論は、科学の方法である。信仰は、宗教の方法である。論理は、哲学の試みの手段である。顕示は、心の仲介により物質と精神の現実の理解とその関係の理解における和合獲得のための方法を提供することによりモロンチア的観点の欠如を補う。そして、真の顕示は、決して科学を不自然にしたり、宗教を理に適わなくしたり、または哲学を不合理にはしない。

101:2.3 (1106.2) 科学研究を通しての推論は、自然を介して第一原因なるものに導くかもしれないが、科学の第一原因なるものを救済の神に変えるには信仰を必要とする。そして顕示は、そのような信仰、そのような精神的洞察の確証のためにさらに必要である。

101:2.4 (1106.3) 人間の生存を助長する神を信じる2つの根本的理由がある。

101:2.5 (1106.4) 1. 人間の経験、個人の確信、つまり内在する思考調整者により何とかして著した望みと信頼。

101:2.6 (1106.5) 2. 真実の顕示、真実の聖霊の直接的な個人の活動によるものであるか、神の息子の世界贈与によるものであるか、あるいは文章の顕示を通してであるかどうかにかかわらない。

101:2.7 (1106.6) 科学は、第一原因なるものの仮説におけるその理由探索を終わらせる。宗教は、それが救済の神を確信するまで信仰のその飛行を止めない。科学の識別研究は、絶対者の現実と存在を論理的に示す。宗教は人格生存を助長する神の存在と現実を率直に信じる。形而上学が、完全に失敗すること、また哲学でさえ部分的に失敗することを顕示はなす。すなわち、それは、科学のこの第一原因なるものと宗教の救済の神が一つであり全く同じ神であることを確認する。

101:2.8 (1106.7) 推論は科学の証明、信仰は宗教の証明、論理は哲学の証明であるが、顕示は、人間の経験によってのみ証明される。科学は知識をもたらす。宗教は幸福をもたらす。哲学は統一をもたらす。顕示は、この三位一体の宇宙現実への接近の経験上の調和を確認する。

101:2.9 (1106.8) 自然に対する熟考は、自然の神、運動の神を明らかにできるに過ぎない。自然は、物質、運動、生気—生命—だけを示す。物体とエネルギーは、ある条件のもとでは、生命の形で明らかにされ、自然の生き物は、現象としてこのように比較的連続しているが、生命は、個体にとっては完全に一時的である。自然は、人間の人格生存における論理的信念のための根拠を提供しない。自然の中に神を見つける信仰家は、既に、そして最初に、自身の魂にこの同じ人格神を見つけたのである。

101:2.10 (1106.9) 信仰は、魂に神を明らかにする。顕示、つまり進化の世界のモロンチア洞察の代替は、信仰が、人の魂に示す同じ神を自然の中に見ることを可能にする。このように顕示は、物質と精霊の間の、被創造者と創造者の、人間と神の間の隔たりにさえうまく橋を架ける。

101:2.11 (1107.1) 自然に対する熟考は、知的な指導の方向、生きた監督の方向にさえ、論理的に指し示すが、それは、どんな満足的方法においても人格神を明らかにはしない。その半面、自然は、宗教上の神の仕業と見なされることから宇宙を排除する何も明らかにはしない。自然だけを通して神を見つけることはできないが、人が別の方法で神を見つけるや否や、自然の研究は、宇宙の、より高度の、より精神的な解釈と完全に一致するようになる。

101:2.12 (1107.2) 画期的な現象としての顕示は、周期的である。それは、個人的な人間の経験として連続している。これらの3つの超-必滅の贈与が、崇高なるものの奉仕として人間の経験に基づく進化に統合されるとともに、神性は、父の授与としての調整者の、息子の真実の聖霊としての、宇宙の霊の聖霊としての人間の人格で機能する。

101:2.13 (1107.3) 真の宗教は、現実に関する、すなわち道徳的意識の信仰の子に関する洞察であり、独断主義のいかなる団体への単なる知的同意ではない。真の宗教は、「霊

自らが、我々の精神とともに、我々は神の子供であるということを証言する」という経験から成る。 宗教は、神学上の命題から成るのではなく、精神の洞察と魂の信頼の崇高さから成る。

101:2.14 (1107.4) 人の最も深い本質—神性の調整者—というものは、人の中に正義への飢餓と渇き、神の完全性へのある種の渇望を創造する。宗教は、神到達へのこの内面的衝動の認識の信仰行為である。そして、このようにして、救済手段として意識するようになる、すなわち真実であり善であると見るようになるそれらの全ての価値の生存手段として意識するようになるその魂の信用と保証がもたらされる。

101:2.15 (1107.5) 宗教の認識は、決して高度の学識、あるいは賢明な論理次第ではない。それは、精霊的な洞察であり、それこそが、世界の最も偉大な宗教教師の数人が、予言者さえもが、時として世界の英知をほとんど備えていなかった理由である。信仰は、学のある者にも無学な者にも同じように持てるのである。

101:2.16 (1107.6) 宗教は、常にそれ自身の評論家と裁判官でなければならない。それは、決して外部から観測はできず、ましてや理解されることはできない。人の人格神の唯一の保証は、人自らの精神的なものへの信仰について、および精神的なものの経験に関する人自身の洞察で成る。同様の経験を持つ人の仲間のすべてには、神の人格、あるいは現実についての　　何の議論も必要ではなく、一方、神にこのように確信のない他のすべての人々にはいかなる可能な議論もつねに実際に説得力をもつわけではない。

101:2.17 (1107.7) 心理学は、確かに社会環境への宗教反応の現象の研究を試みるかもしれないが、それは、決して宗教の真の、また内面の動機と作業に入り込むことを望むことはできない。神学だけが、すなわち、信仰の範囲と顕示の方法だけが、自然についてのいかなる類の知的説明と宗教経験の内容をも提供できるのである。

3. 宗教の特徴

101:3.1 (1107.8) 宗教は、非常に重要であるので、学習欠如においても持続する。それは、誤った宇宙論や哲学論による

その汚染にもかかわらず生きている。形而上学の混乱さえも乗り切っている。宗教のすべての歴史的な波乱において、またそれを通して、人間の進歩と生存に不可欠であるもの、倫理に基づく良心と道徳的な意識が、常に持続している。

101:3.2 (1108.1) 信仰-洞察、または精霊的直観は、人への父の授与である思考調整者と関連した宇宙心の贈り物である。精霊の理性、魂の知力は、聖霊の贈り物、創造的精霊の人への贈り物である。精霊的哲学、精霊の現実の英知は、真実の聖霊の贈り物、人の子への贈与の息子の結合的な贈り物である。そして、これらの精霊の贈り物の調整と相互提携は、人に可能な運命における精霊的人格を構成する。

101:3.3 (1108.2) それは、原始の、胎性の形で、肉体の自然死を生き残る調整者所有の、この同じ精霊の人格である。人間の経験と関連した精霊起源のこの複合実体は、物質と精霊のそのような一時的協力関係が、不可欠な動作の休止によって分離するとき、神の息子により提供される生

きる道により心と物質の物質的自己の分離を乗り切ることが(調整者保護で)可能にされる。

101:3.4 (1108.3) 人の魂は、宗教を通じてそれ自体を明らかにし、また、人間の人格が、知力を要する苦しい状況や社会的に極めて困難なある種の状況への反応を促す独特の方法によってその新生の性質の潜在的な神性を示す。本物の精神的信仰は、(真の道徳的意識)は、次のような点で明らかにされる。それは、

101:3.5 (1108.4) 1. 生来の、しかも不利な動物的傾向にもかかわらず、倫理と道徳の進歩をもたらす。

101:3.6 (1108.5) 2. 苦い失望と大敗の目前においてでさえも神の善における崇高な信用を産む。

101:3.7 (1108.6) 3. 自然のもたらす不幸と物理的災難にもかかわらず、強い勇気と自信を来たす。

101:3.8 (1108.7) 4. 不可解な疾病や深刻な肉体的苦痛にもかかわらず、説明し難い落ち着きや持久する平静さを示す。

101:3.9 (1108.8) 5. 虐待や最悪の不正をものともせず、神秘的な落ち着きや人格の沈着さを維持する。

101:3.10 (1108.9) 6. 人間の福祉への外観上は無分別な運命の残酷な行為と自然の力の見た目に明らかな全くの無関心にもかかわらず、究極の勝利における神々しい信頼を維持する。

101:3.11 (1108.10) 7. 論理のすべての正反対の実証にもかかわらず、神へのゆるぎない信仰を固持し、他のすべての知的な詭弁に首尾よく耐える。

101:3.12 (1108.11) 8. 誤った科学の人を惑わす教えと不安定な哲学の説得力のある妄想に関係なく、魂生存への勇敢な信仰を示し続ける。

101:3.13 (1108.12) 9. 現代の複雑で部分的な文明の圧倒的過重負担の如何にかかわらず、生きて、しかも勝利を収める。

101:3.14 (1108.13) 10. 人間の利己主義、社会的対立、産業的などん欲さ、政治的な不調整にもかかわらず、利他主義の継続的生存に貢献する。

101:3.15 (1108.14) 11. 断固として悪と罪の面倒な存在に関係なく、宇宙の統一と神性の導きに対する崇高な信念に固執する。

101:3.16 (1108.15) 12. 万難を排しての神の崇拝が続く。恐れずに「たとえ神が私を殺されようとも、私は神に仕える。」と宣言する。

101:3.17 (1108.16) 次に我々は、人間は、３現象から神の霊、あるいは自身の中に住まう霊がいるということを最初に個人的経験—信仰により、第２には顕示—個人的で人種的な—第３に、実際の、骨の折れる人間の本当の生活状況に直面し、前記の12項の霊のような行動に関する説明に例証される人間の物質環境に対するそのようなじつに並はずれて不自然な反応の驚くべき展示により、知るのである。その上他にまだある。

101:3.18 (1109.1) それは、人間性のこの上ない贈与、宗教経験の個人的所有と精神的現実を人に確信させる資格を与える宗教領域におけるそのような重大かつ力強い行動である。

4. 顕示の制限

101:4.1 (1109.2) 人の世界は、一般的に起源について、物理的起源についてさえ無知であるので、時々宇宙について教育をすることは賢明であるように見えた。これが、いつも

将来に問題を起こしてきた。顕示の法は、労せずして得た知識、あるいは時期尚早の知識の分与の禁止によって我々を大いに妨げる。啓示宗教の一部として提示されるいかなる宇宙も、非常に短い時間で大きくなるように運命づけられている。従って、そのような顕示の将来の学生は、そこに提示された関連宇宙の表面上での誤りを発見するので、顕示が包蔵するかもしれない本物の宗教の真実のあらゆる要素を捨てるよう心がそそられる。

101:4.2 (1109.3) 人類は、真実の顕示に参加する我々は上司の指示によって非常に厳しく制限されているということを理解すべきである。我々には次の1,000年の間の科学的発見を見越してものを言う自由はない。啓示者は、顕示命令の一部を形成する指示に基づき行動しなければならない。我々は、現在、あるいはいかなる未来にもこの困難を克服する何の方法も見ない。我々は、この一連の天啓提示の歴史的事実と宗教真理が、来る時代の記録に耐えるであろうが、短い年数内に物理科学に関する我々の声明の多くが、更なる科学の発達と新発見の結果、改正を必要としているということを十分に承知している。我々は、今でもこれらの新たな情勢を見通してはいるもの

の、我々が、人間が発見していないそのような事実を天啓の記録に収録することは禁じられている。顕示は、必ずしも奮い立たせられるというわけではないということを明確にしなさい。これらの顕示の宇宙論は、奮い立たせられない。それは、現代の知識の調整と選別のための我々への許可による制限がある。神性の、または精神の洞察は、贈り物であるが、人間の英知は進化しなければならない。

101:4.3 (1109.4) 真実は、常に顕示である。内在する調整者の働きの結果として現れるときは、自動顕示である。他のある天の媒体、集団、または人格の機能を介して提示されるときは、新時代をもたらす顕示である。

101:4.4 (1109.5) 宗教は、論じ詰めると、その実によって、すなわちそれ自身に固有な長所と神の素晴らしさを示す方法と範囲に準じて判断することである。

101:4.5 (1109.6) 顕示は、不変的に精霊的な現象ではあるが、真実は、単に相対的に鼓舞されるかもしれない。宇宙論に関する声明は、決して奮い立たせられないが、次のような方法により少なくとも一時的に知識をはっきりさせる

点においてそのような顕示には計り知れない価値がある。

101:4.6 (1109.7) 1. 誤りの正式の除去による混乱の減少により。

101:4.7 (1109.8) 2. 知られていたり、まもなく知られようとしている事実と観測の調整により。

101:4.8 (1110.1) 3. 遠い昔の画期的な出来事に関する重要な具体例についての失われた知識の回復。

101:4.9 (1110.2) 4.得た知識の欠けている重大な隙間を埋める情報の供給。

101:4.10 (1110.3) 5. 付随する顕示に含まれる精霊的な教えを照らすための方法で宇宙情報を提示すること。

5. 顕示により拡大される宗教

101:5.1 (1110.4) 顕示は、精神習得の真実から進化の誤りを分類し、ふるいわける必要な仕事において多くの時が、それによって節約される一手段である。

101:5.2 (1110.5) 科学は事実を扱う。宗教は、価値にしか関心がない。心は、啓発された哲学を通し事実と価値の双方に

意味を結合させる努力をし、その結果、完全な現実の概念に到着する。科学は知識の領域であり、哲学は知恵の分野であり、宗教は、信仰経験の範囲であることを心しなさい。しかし宗教は、それにもかかわらず、顕現の2つの姿を提示する。

101:5.3 (1110.6) 1. 進化的宗教。原始的崇拝の経験、心の派生物である宗教。

101:5.4 (1110.7) 2. 啓示宗教。精霊派生物である宇宙への姿勢。永遠の現実の保存、人格の生存、およびこのすべてを可能にした宇宙の神格の目的への最終的到達の保証とそれへの信仰。遅かれ早かれ、進化的宗教は、顕示の精神的な拡大を受ける運命にあるということは、宇宙の計画の一部である。

101:5.5 (1110.8) 科学と宗教の両者は、論理的推論のための一般的に受け入れられたある一定の基本要素の仮定から始める。また同様に、哲学も、3項目の現実の仮定にその経歴を始めなければならない。

101:5.6 (1110.9) 1. 物体。

101:5.7 (1110.10) 2. 人間の超物質の局面、精神または、さらには内在する霊の局面。

101:5.8 (1110.11) 3.人間の心、つまり相互通信のための装置と、精神と物体間の、つまり物質的なものと精神的なものの相互のつながり。

101:5.9 (1110.12) 科学者は事実を組み立て、哲学者は考えを調整するが、予言者は理想を高める。感覚と感情は、宗教の不変の付随物であるが、宗教ではない。宗教は、経験の感覚であるかもしれないが、それはけっして感覚の経験ではない。論理(合理化)も感情(感覚)も、双方ともにすべてが個人の心の状態と生まれつきの傾向次第である現実への精神的な洞察の助長における信仰の適用にさまざまに関連づけられるかもしれないが、本質的には宗教経験の一部ではない。

101:5.10 (1110.13) 進化的宗教は、進化する人間のうちにある崇拝の特徴を創造し育成する任を負う地域宇宙の心の補佐の授与の熱心な働きである。そのような原始の宗教は、直接には倫理と道徳、人間の本分の知覚に関係がある。

そのような宗教は、良心の保証に基づいており、比較的倫理的な文明の安定化という結果になる。

101:5.11 (1111.1) 個人的に啓示される宗教は、楽園の三位一体の3者の人格を代理する贈与の霊の後援をうけており、真実の拡大に特に関係がある。進化的宗教は、個人の義務についての考えを個人によくよく理解させる。啓示的宗教は、愛することに、黄金律により一層の重点を置いている。

101:5.12 (1111.2) 進化した宗教は、まったく信仰に基づく。顕示には、神性と現実の真理についてのその拡大的提示の付加的保証があり、また発展的な信仰と顕示の真実の実践的な取組みの結果に蓄積する実際の経験のさらなる貴重な証言がある。人間の信仰と神性の真実のそのような機能的統合は、モロンチア人格の実際の習得に向けてかなり進歩している人格所有を成している。

101:5.13 (1111.3) 進化的宗教は、信仰の保証と良心の確認のみを提供する。天啓的宗教は、顕示の現実における生活経験の真実に加え、信仰の保証を提供する。宗教における第3段目、または宗教経験の3段階目は、モロンチア状

態、すなわちモタのより確固たる把握に関係がある。モロンチア進行においては、啓示された宗教の真実が次第に拡充される。人は、最高価値の真実、神性の善、普遍的関係、永遠の現実、および究極の運命の真実をますます多く知るであろう。

101:5.14 (1111.4) モロンチア進行の間中、真実の保証は、次第に信仰の保証に取って代わる。人が最終的に実際の精神世界に召集されると、次には信仰と真実の代わりに、あるいは、むしろ人格保証のこれらの前の方法と連動し、重ねられ、純粋な精神洞察の保証が作用する。

6. 進歩的な宗教経験

101:6.1 (1111.5) 啓示宗教のモロンチア段階は、生存経験と関係があり、大きそのその衝動は、精神の完全性の達成である。また、さらなる倫理的奉仕へ駆り立てる呼び出しに関連づけられる崇拝へのより高い衝動が存在する。モロンチア洞察は、七重なるもの、崇高なるもの、さらには究極なるものの絶えず広がる意識を伴う。

101:6.2 (1111.6) 物質段階におけるその最も早い始まりから完全な精神状態の到達の時間まで宗教経験すべてを通じ、調

整者は崇高なるものの存在の個人的現実認識への鍵である。そして、また、この同じ調整者は、究極なるものの超越的な到達において人の信仰の秘密を保持する。実存の神の本質をもつ調整者に結合された進化する人間の経験的人格は、最高の存在の潜在的完成を構成し、本質的に超越的な人格の超有限の発生のための基礎である。

101:6.3 (1111.7) 道徳は理路整然たる知識に基づき、知恵により増大され、信仰によって是認された決定を有するであろう。そのような選択は徳性の行為であり、道徳的人格の、つまり、モロンチア人格の、そして、いつかは真の精神の地位の先駆者の存在を示す。

101:6.4 (1111.8) 進化的知識の型は、原形質の記憶物質の蓄積に他ならない。これは、生物意識の最も原始の型である。分別は、繋がりと組み替えの過程における原形質の記憶から定式化される思考を迎え入れ、そして、そのような現象は、単なる動物の心から人間の心を識別している。動物には知識があるが、人だけが見識能力を持っている。真実は、父と息子の霊、思考調整者、真実の聖霊の

そのような心への贈与により見識を備える個人にとり接近しやすくなる。

101:6.5 (1112.1) キリスト・ミカエルは、ユランチアに授与されると、洗礼の時まで進化的宗教支配の下で生きた。かれは、その瞬間から磔刑を含むその時まで、進化的であり啓示的である宗教の複合の指導により自分の仕事を進めた。キリスト・ミカエルは、その復活の朝から昇天まで、物質の世界から精神の世界への必滅の人間の変遷のモロンチア生活の多局面を横断した。昇天後、マイケルは、崇高さの経験、つまり崇高なるものの実現の習得者になった。また、崇高なるものの現実を経験する無制限な能力をもつネバドンにおける1人であるので、マイケルは直ちに、地域宇宙において、それと地域宇宙への至高の主権の地位に達した。

101:6.6 (1112.2) 人について言えば、内在する調整者とのいずれ起こる融合と結果として起こる単一性—人間の人格統合と神の本質—は、人を、崇高なるものの生きた部分になる可能性を秘めて構成し、崇高なるものへの。そして崇高なるものとの宇宙奉仕の終局に向けて無限の追求であ

る永遠の生得権をそのようなかつての死すべき者に保証する。

101:6.7 (1112.3) 顕示は、時間の進行によって空間でそのような素晴らしくて興味をそそる冒険を始めるために、思考-決定への知識の組織化によって始めるべきであるということを人に教え、次に、冷静な考えをますます実用的ではあるが、それでもなお、天上の理想に変えるその尊い仕事において粘り強く努力するよう知恵に命じる。それらの概念は、思考としては道理に適っており、理想としては論理的であり、調整者は、それらをあえて結合させ、精霊化させ、人間の実際の補足物になるそのような交流が、有限の心において可能であるように概念を与え、楽園の真実—普遍の真実—の時空間の顕現である息子の真実の聖霊の活動においてこのように準備をさせる。思考決定、論理的な理想、および神性の真実の連携は、公正な人格の、つまり、絶えず広がり、ますます精神的なモロンチア世界の現実への人間の入場のための前提条件の所有を構成する。

101:6.8 (1112.4) イエスの教えは、完全に、そして同時に、一時の平静さ、知的な確実性、道徳的啓発、哲学的安定性、道徳上の感受性、神-意識、および個人生存の明確な保証を提供できるように、知識、知恵、信仰、真実、愛の調和のとれた協調を完全に取り込んだ最初のユランチア宗教を設立した。イエスの信仰は、次の事柄を提供したので、人間救済の究極への、人間の宇宙到達の究極への道を指し示した。

101:6.9 (1112.5) 1. 霊である神との息子関係の個人的認識による物質の足枷からの救済。

101:6.10 (1112.6) 2. 知的な束縛からの救済。人は真実を知るものであり、真実は人を解放するものである。

101:6.11 (1112.7) 3. 精神的盲目からの救済、死すべき者の友愛についての人間の認識、および、すべての宇宙生物の兄弟愛のモロンチア認識。精霊的な現実の奉仕-発見と精霊的な価値の善の活動-顕示。

101:6.12 (1113.1) 4. 宇宙の精霊段階の到達を経験し、ハヴォーナの調和と楽園の完全性の最後の認識、最終的な実現を通しての自己の不完全さからの救済。

101:6.13 (1113.2) 5. 自己からの救済、崇高なるものの心の宇宙水準到達を経験し、他のすべての自意識ある存在者の達成したものとの協調による自意識の限界からの救出。

101:6.14 (1113.3) 6. 時間からの救済、神-認識と神-奉仕における終わりのない進歩をする永遠の生命の成就。

101:6.15 (1113.4) 7. 有限からの救済、それによって被創造物が、半絶対半有限の後終局者の段階における究極なるものの超越的な発見を試みる崇高なるものの中での、また崇高なるものを介しての神との完成された単一性。

101:6.16 (1113.5) そのような七重の救済は、宇宙なる父の究極の経験の実現の完全性と真秀性に同等である。そして、可能性として、このすべてが、人間の宗教経験の信仰の現実の中にある。イエスの信仰が、究極を超える現実によってさえ育てられ、しかも啓示的であったが故に、かくあり得るのである。イエスの信仰は、時間と空間の進

化する宇宙の中での顕現において宇宙の絶対が可能である限りにおいて宇宙の絶対の状態に接近した。

101:6.17 (1113.6) イエスの信仰の充当により、人間は、いつかは永遠の現実を先取りすることができる。イエスは、人間の経験において終局なる父を発見し、そして生身の人間生活の兄弟等は、父発見のこの同じ経験に沿ってイエスに続くことができる。イエスが、あるがままに、父とのこの経験において達したように、人は、あるがままに同じ満足に達することさえできる。新しい可能性は、マイケルの終端の贈与の結果としてネバドンの宇宙の中で顕在化され、このうちの1つは、すべてのものの父に通じる永遠の進路の新たな照明であり、その進路は、物質の血肉の人間でさえも空間の惑星での最初の人生において横断することができる。イエスは、人が、ただ尋ねるだけで得られる父が命じた神性の遺産を手にすることができる新しくて、生きる道であったし、道である。イエスには、人類の、さらには神のような人類の信仰経験の始めと終わりの両方が豊富に示されている。

7. 宗教上の個人的哲学

101:7.1 (1113.7) 思考は、行動のための理論的計画にすぎないが、積極的な決定は、確認された行動計画である。固定観念、確認なしで受け入れられる行動計画である。宗教の個人的な哲学の構築素材は、個人の内面と環境経験の両方に由来する。一個人の時間と空間の社会的地位、経済状態、教育を受ける機会、道徳的風潮、制度上の影響、政治的な展開、人種的傾向、および宗教の教えのすべてが、宗教の個人的哲学の定式化における要素になる。生来の気質と知的な好みさえ宗教哲学の型を著しく決定する。職業、結婚と親族すべてが、その人の個人の生活水準の進化に影響を及ぼす。

101:7.2 (1113.8) 宗教の哲学は、思考と実験的な生活が、仲間を模倣する傾向により修正されように両者の基本的な成長から進化する。哲学の結論の堅実さは、意味に対する敏感さと評価の精度に関連する鋭く、正直で、識別する思考に依存している。道徳的に臆病な者は、高度の哲学的思考を決して実現しない。それは、新しい経験段階に侵入し、知的な生活の未知の領域の探検を試みる勇気を必要とする。

101:7.3 (1114.1) やがて、価値の新体系が生まれる。原則と基準の新しい定式化が成し遂げられる。習慣と理想は再構築される。人格の神についての何らかの考えに達すると、その関係の概念の拡大が次に続く。

101:7.4 (1114.2) 生活の宗教的な哲学と非宗教的な哲学との大きな違いは、認識される価値と性質と段階に、そして忠誠の対象とにある。宗教的な哲学の進化には4つの段階がある。そのような経験は、単に一致するようになる、すなわち伝統と権威への服従を断念するようになる、かもしれない。または、それは、わずかな達成（日々の生活を安定させるに十分な）で満たされるかもしれないし、したがって、早くにそのような付加的段階での制止状態になる。そのような人間は、現状に甘んじることを信条としている。３分の1の集団は、論理的知力の段階に進むが、文化への奴隷状態の結果として停滞する。文化的束縛の容赦のない把握の中に非常に確実に保持される巨大な知力を凝視するということは誠に哀れである。誤ってそう呼ばれる科学、の物質的な拘束と文化的な束縛を交換する人々を観測することは、等しく哀れである。哲学の第4段階は、すべての従来の、因習的な不利な条件

から自由を得て、考えて、行動して、正直に、忠誠をつくして、恐れることなく真に生きることである。

101:7.5 (1114.3) いかなる宗教哲学のためにでも厳密な吟味は、物質界と精神界双方の現実を見分けるか否かを試すことと、同時に、知的努力と社会的奉仕におけるそれらの統合を認識することにある。健全な宗教哲学は、神のものをカエサルのものと混同させない。それは、純粋な驚きための美的集団礼拝を宗教の代用品としても認めない。

101:7.6 (1114.4) 哲学は、主に良心のおとぎ話であったその原始宗教を宇宙現実の上昇価値の生活経験に変えるのである。

8. 信仰と信念

101:8.1 (1114.5) 信念は、生活を動機づけ生活様式を形成するとき、信仰の水準に達したのである。真実として教えを容認することは、信仰ではない。それは単なる意見である。確実性も、確信のいずれも信仰ではない。精神状態は、実際に生活様式を支配する時に限って信仰段階に達する。信仰は、個人の本物の宗教経験の生きた特質である。人は真実を信じ、美を賞賛し、善を崇敬するが、そ

れらを崇拝はしてはいない。救済の信仰のそのような態度は、擬人化された、無限にそれ以上のものであるこれらの全てである神にだけ集中している。

101:8.2 (1114.6) 信念は、常に制限的で、結合的である。信仰は、拡大的で、解放的である。信念は固定し、信仰は解放する。しかし、生きている信仰は、尊い信念のつながり以上のものである。それは、哲学の高められた体系以上のものである。それは、精神的な意味、神の理想、最高価値に関心をもつ生活経験である。それは、神を知り人に仕えることである。信念は、集団の所有物になるかもしれないが、信仰は、個人的でなくてはならない。神学上の信念は、集団に示されることはできるが、信仰は、個々の宗教家の心の中にだけ起こり得る。

101:8.3 (1114.7) それが現実を否定し、その信奉者に想定上の知識を与えようとするとき、その信頼を歪めてきた。それが、知的な高潔さに対する裏切りを助長し、最高価値と神の理想への忠誠を過小評価するとき、信仰は反逆者である。信仰は、人間生活の問題解決の義務を決して避け

はしない。生きている信仰は、偏狭、迫害、または不寛容を育成してはいない。

101:8.4 (1115.1) 信仰は、創造的な創作力を拘束せず、科学的調査の発見に対する不合理な偏見も保持してはいない。信仰は、宗教に命を与え、宗教家に黄金律を勇ましく実践し生活するすることを強制する。信仰の熱意は知識によって存在し、その真剣な努力は、雄大な平和への序曲である。

9. 宗教と道徳

101:9.1 (1115.2) それが、進化的宗教に先行することにより創設され、促進された倫理義務の任務要求を認めることができないならば、宗教の見せかけの顕示は、本物だとは見なされることはできない。顕示は、すべての事前の顕示の道徳的責務を一斉に、しかも絶えず拡大するとともに、進化する宗教の倫理的な範囲をつねに拡大する。

101:9.2 (1115.3) あなたが、人の原始の宗教に(または原始人の宗教に)あえて批判的判断を下すとき、彼らの良心の啓発と状態に従って彼らの宗教経験を評価することを忘れ

ではならない。もう一つの宗教を自身の知識と真実の標準で判断するという誤りを犯してはならない。

101:9.3 (1115.4) 真の宗教は、倫理的かつ道徳的最高の概念、すなわち生命の最大の価値と宇宙の深遠現実に関する最高の解釈、を構成するモロンチア現実を信じないということは間違いであるということを人に有無を言わさぬほどに諭す魂の中の崇高で深遠な確信である。そして、そのような宗教は、単に精霊的な意識の最も高い命令に知的な忠誠を与える経験である。

101:9.4 (1115.5) 美の追求は、それが倫理的である限り、道徳概念を豊かにするという範囲においてのみ、宗教の一部である。芸術は、高い精霊的な動機づけに由来した目的で満たされるときにだけ宗教的である。

101:9.5 (1115.6) 文明人の啓示された精霊的な意識は、生活の真実することと同様に、人間の繰り返される生活状況に反応する良くて正しい方法の発見を懸念するほどには、何らかの特定の知的な信念、または生活の一つの特定の型に関係しない。道徳的な意識とは、人が、日々の行為の管理と指導を順守すべきであるということを要求する倫

理的で現れつつあるモロンチア価値に関する人間の認識と意識に適用される名前に過ぎない。

101:9.6 (1115.7) 宗教が不完全であると認めはするが、その性質と機能の少なくとも2つの実用的顕示がある。

101:9.7 (1115.8) 1. 宗教の精霊的衝動と哲学的圧力は、人が倫理的価値の評価を仲間の問題へと直接外に投入—宗教の倫理的反応—させる傾向にある。

101:9.8 (1115.9) 2. 宗教は、人間の心のために倫理的価値の先行する概念に基づき、それに由来する信仰により、また精神的価値の重畳された概念と調整された神性現実の精神的にされた意識を創造する。宗教は、それによって人間の諸事の検閲、すなわち、道徳的な信用と現実における自信の形、時間の強化された現実と永遠のより永続的な現実になる。

101:9.9 (1116.1) 信仰は、継続続的な現実の道徳的意識と精神的概念との間の関係となる。宗教は、救済手段、すなわち進歩的なモロンチア変容による、また、それを介しての

一時的かつ自然な世界の物質的制限から永遠かつ精神的な世界の崇高な現実への人の逃げ道になる。

10. 人間の解放者としての宗教

101:10.1 (1116.2) 知力ある人間は、自分は自然の子、物質的宇宙の一部であることを知っている。かれは、同様にエネルギー宇宙の数理段階の運動と緊張における個々の人格の無生存を明察している。また、人は、物理的原因と結果の検査を通して精霊的な現実を認めることができない。

101:10.2 (1116.3) 人間は、自分が概念的宇宙の一部であることもまた意識しているものの、概念は、人間の一生を超えて続くかもしれないが、理解している人格の個人の生存を示す概念に固有のものは何もない。そして、論理と理由の可能性の枯渇は、論法家や理論家に人格生存の不朽の真実を決して明らかにしないであろう。

101:10.3 (1116.4) 法則の物質段階は、因果関係の連続性、つまり先行する行動に対する影響の果てしない反応に備える。心の段階は、概念の連続性の永続化、すなわち先在的な概念からの概念上の可能性の絶え間ない流れを示

す。しかし、宇宙のこれらの段階のいずれも、不完全さの事態からの、宇宙の一時的な現実である耐え難い不安な状態、限られた生命活力の枯渇に際して抹消される運命の現世の人格からの脱出方法を好奇心の旺盛な人間に明らかにはしない。

101:10.4 (1116.5) 人が、宇宙における死を免れない状態に固有の足枷をいつでも壊すことができるのは、精霊的な洞察に導くモロンチアの道を経るしかない。エネルギーと心は、楽園と神格へと導くが、エネルギー授与も人の心の贈与も直接そのような楽園の神格から生じてきてはいない。精神的感覚においてだけ、人は神の子である。これは、人には現在楽園の父が授けられ、内在しているという精神的感覚にかぎられているという理由で真実である。人類は、宗教経験の方法による以外は、また真の信仰の実践による以外は神性を決して発見することはできない。神の真実の信仰による受け入れは、人に物質的限界の制限された境界から逃れることを可能にし、死が存在する物質領域から永遠の生命がある精神的領域への安全な行いを成し遂げる理に適った望みを与える。

101:10.5 (1116.6) 宗教の目的は、神への好奇心を満たしはしないが、むしろ知的な恒久性と哲学的な保証を提供し、人間と神性を、不完全なるものと完全なるものを、人と神を混合することにより人間の生活を安定させ豊かにする。理想についての人の概念に現実が与えられるのは、宗教的な経験によってである。

101:10.6 (1116.7) 神性の科学的あるいは論理的証明も決してあるはずがない。理性だけで宗教経験の価値と長所を決して確認することはできない。しかし、それは、つねに真実ままである。神の意志を為そうとする者は誰でも、精神的価値の正当性を理解する。これが、宗教経験の現実の証拠を人間の段階で提供できる最も近い接近法である。そのような信仰は、物質界の機械の一群からの、それと知的な世界の不完全性の誤りの歪みからの唯一の逃げ道を提供する。それは、個々の人格の継続的な生存に関する人間の考えの行き詰まり対し発見された唯一の解決策である。それは、現実の完成への、そして愛、法、統一、および進歩的な神性達成の宇宙創造における生命の永遠性への唯一の旅券である。

101:10.7 (1117.1) 宗教は、人間の理想主義的孤立、あるいは精神的孤独の感覚を効果的に治療する。それは、信者を神の息子として新たで意味のある宇宙の国民として解放する。宗教は、魂の中で認識できる正義のひらめきに続くとき、それによって自分を無限者の計画と永遠なるものの目的と同一視している。そのような解放された魂は、すぐにこの新宇宙、自分の宇宙でくつろぎを感じ始める。

101:10.8 (1117.2) 信仰のそのような変化を経験するとき、人は、もう数学的宇宙の奴隷の部分ではなく、むしろ宇宙の父の解放された意志の息子である。もはや、そのような解放された息子は、こ現世の生活の終了の容赦ない運命と一人で戦ってはいない。もはや、人は、絶望的に不利な見込みですべての自然と戦うというわけではない。もはや、人は、おそらく見込みのない幻影を信頼したり、空想的な誤りに信仰を託した麻痺の恐怖にたじろがされはしない。

101:10.9 (1117.3) 今は、むしろ、神の息子は、存在の部分的な影に対する現実の勝利の戦いにともに徴募されるのであ

る。ついに、すべての生き物は、ほとんど無限の宇宙の神と神性のすべての軍勢が、生命の永遠と神性の状態に達する崇高な闘いにおいて自分達に味方しているという事実を意識するようになる。そのような信仰で解放された息子は、永遠の最高の力と神性の人格の側について時間の戦いに確かに参加した。かれらの進路の星でさえ、今、かれらのための戦いをしている。ついに、ついに、神の視点から、かれらは、宇宙を見つめ、そしてすべては、感覚的な孤立の不確実さから永遠の精霊的な前進の保証に変えられる。時間それ自体さえ、楽園現実が空間の動くよろいかぶとに投げかける永遠の影にしかならないのである。

101:10.10 (1117.4) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 102
信仰の礎

102:0.1 (1118.1) 信じない実利主義者にとり、人間は単に進化の偶然である。生存への彼の望みは、人間の想像力の作りごとに結びつけられる。人間の恐怖、愛、切望、および信念は、物体のある種の生気、生命のない原子の偶発的並置の反応にすぎない。エネルギーの表示も信頼の表現

も、かれを墓の向こうに運ぶことはできない。人間の最高の献身的労務と感動を与える天賦の才能は、死により、つまり永遠の忘却の長くて孤独な夜と魂の消滅により消される運命にある。無名の絶望は、人間存在のこの世の太陽の下で生きることや、こつこつ働くことに対する人の唯一の報酬である。人生の毎日は、美しく、気高く、高潔で、善である人間の願望におけるすべてに対し最悪の侮辱となった物質の敵対的できびしい宇宙が定めた冷酷な運命の操作をゆっくり、しかも確実にきびしくする。

102:0.2 (1118.2) しかし、それは、人の終わりと永遠の目標ではない。そのような展望は、精霊的な暗闇で迷ってしまったり、複雑な学習の混乱と歪みによって目をくらまされた物質的な哲学の機械的な詭弁に直面して勇敢に闘い続けるあるさすらいの魂により発せられる絶望の叫びに過ぎない。そして、暗黒のこのすべての破滅と絶望のこのすべての運命は、神の最も謙虚で学問のない地上における子供の側の1つの勇敢な信仰の伸びによって永遠に追い払われる。

102:0.3 (1118.3) この救済の信仰は、人間の価値がその経験において物質的なものから精神的なものへと、人間から神へと、時間から永遠へと移すかもしれないということに人の道徳的意識が気づくとき、人間の心にその誕生をみる。

1. 信仰の保証

102:1.1 (1118.4) 思考調整者の働きは、人間の原始的かつ進化的な義務感を顕示の永遠の現実における高く、より確かなその信仰への移行の説明を構成する。人の心には最高の到達への信仰の道を理解するための能力を保証するために、完全性への飢餓がなければならない。誰でも神の意志を為すことを選ぶならば、その人は、真実の道を知るのである。「人間のことは愛するために知らなければならないが、神のことは知るために愛さなければならない」というのは文字通り真実である。だが、正直な疑問と真剣な質問は、罪ではない。そのような態度は、完全性への到達に向けての前進の旅の遅れを招くだけである。子供のような信用は、天への上昇のための王国への人の入場を確保はするが、進歩は、十分に成長した人間

の強健で自信に満ちた信仰の活発な運動に完全に依存している。

102:1.2 (1119.1) 科学の根拠は、時間の観察可能な事実に基づく。宗教の信仰は、永遠のための精霊の予定に基づいて論争する。真の知恵は、知識と理由が我々にできないことを、宗教洞察と精神的変化を介して信仰を成就させるように我々に訓戒する。

102:1.3 (1119.2) 反逆によってもたらされた孤立がもとで、ユランチアにおける真実の顕示は、あまりにも頻繁に部分的で一時的な宇宙の声明と混同されてきた。真実は、世代から世代へと変わらぬままであるが、物質界に関連する教えは日々、年々異なる。不朽の真実が、偶然物質界に関して時代遅れの考えと共に見つけかるからといって軽視されるべきではない。人は、科学を知れば知るほど確信が持てない。宗教を持てば持つほどより確信する。

102:1.4 (1119.3) 科学の確実性は、完全に識者から生じる。宗教の確信は、全人格の他ならぬその礎から発する。科学は心の理解を求める。宗教は、肉体、心、および精神の忠誠と献身を求める。

102:1.5 (1119.4) 神は、すべてが本物であり絶対であるので、何の証明の具体的な兆候や奇跡と言われる何の実証も提供できない。いつも我々は、神を信じるので神を知り、神への我々の信仰は、完全に神の無限の現実の神性顕現への我々の個人の参加に基づいている。

102:1.6 (1119.5) 内在する調整者は、神、かの調整者の神性との源交わりによってのみ十分に満たされ得る広範囲にわたる好奇心とともに、完全性への本物の、くまなく入り込む渇望を人間の魂の中に絶えず喚起している。人の飢えた魂は、生きている神の個人的実現よりも小さいものは何であろうとも満たされることを拒否する。高度の完全な道徳的な人格であろうとも、神は、我々の乏しく有限の概念においては決して小さいものではあり得ない。

2. 宗教と現実

102:2.1 (1119.6) 仲間の人生にそれを発見するとき、観察する心と識別する魂は、宗教を知る。宗教は何の定義も必要としない。我々は皆、その社会的、知的、道徳的、精神的な実を知っている。そして、これは、宗教が人類の特性であるという事実からすべて生じる。それは、文化の寵

児ではない。宗教の人の認識は、まだ人間的であり、したがって、無知による束縛、迷信による奴隷状態、世故にたけた誤魔化し、誤った哲学の欺きに陥りやすいということは、本当である。

102:2.2 (1119.7) 本物の宗教的な確信の典型的な特色の1つは、その確認の絶対性とその態度の揺るぎの無さにもかかわらず、その表現の精霊は、自己主張、または利己的高揚のほんのわずかな印象を決して伝えないように、非常に落ち着き和らげられている。宗教経験の知恵は、それが人間に由来しており、かつ調整者の派生物であるという双方においていささか矛盾をはらんでいる。宗教的な力は、個人の人格の特権の産物ではなく、むしろ人のその崇高な協力関係と永遠に続くすべての知恵の源の働きである。このように、本物の、純粋な宗教の言葉と行為は、啓発されたすべての人間にとって有無を言わせぬほどに信頼できるようになるのである。

102:2.3 (1119.8) 宗教経験の要因を特定し、分析することは難しいが、そのような宗教実践者が、あたかも神の面前ですでに生きており、生き続けているところを観察すること

は難しくない。信者は、まるで不死というものが既に彼らの掌中にあるかのようにこの世での生活に反応する。そのような死すべき者の人生には、世界の知恵だけを吸収した者達を仲間のそれらから永遠に分離する有効な独創性と表現の自発性がある。宗教家は、時の世事の流れの固有の波乱に伴う悩ましい性急さと痛みをあたえる緊張からの効果的な解放の中で生きているように見える。宗教家は、生理学、心理学、および社会学の法則では説明されない人格の安定化と性格の平静さを示している。

102:2.4 (1120.1) 時間は知識獲得における不変の要素である。成長の重要な要因、つまり宗教経験の全局面における明確な進歩があるとはいえ、宗教は、その授与をすぐに利用可能にする。知識は、永遠の探索である。人は、絶えず学んでいるが、決して絶対の真実についての完全な知識に達することはできない。ただ知識だけでは、決して絶対の確実性ではありえず、近似の可能性を増やすだけである。しかし、精霊的な照度の宗教的な魂は知っており、しかも、いま知っているのである。それでいてこの重大で積極的な確信は、そのような健全な心の宗教家に進歩の遅い科学の進展に物質的な終わりに結びついてい

る人間の知恵の進歩の変動に対するより少しの関心を持たせるようには導かない

102:2.5 (1120.2) 科学の発見でさえ、それらが解明され、関連づけられるまでは、つまり、それらの関連事実が、心の思考の流れの回路を通して実際に意味をもつようになるまでは、人間の経験の意識においては実際には本当でない。必滅の人間は、その物理的環境を心の水準からさえ、その心理的な印象の見解からさえ見る。それは、したがって、人間が高度、に統一された解釈を宇宙に関して置かなくてはならず、それから、自分の科学のこのエネルギー統一を自分の宗教経験の精霊的な統一と同一視しようとしなければならないということは、奇妙ではない。心は統一である。人間の意識は、心の段階で生活し、授与の心の目を通して宇宙の現実を知覚する。心の観点は、現実の根源、第一根源と中枢の実存的な統一をもたらせはしないであろうが、それは、崇高なる者の中に、また崇高なる者としてエネルギー、心、精神の経験的統合を人に描くことができるし、いつかするであろう。しかし、そのような心が、物質的なもの、知的な意味、と精神的価値にしかと気づかない限り、心は、現実

の多様性のこの統一に決して成功することはできない。機能的な現実の３結合体の調和だけでは統一があり、また統一においてのみ、宇宙の恒久性と一貫性の実現からの人格の満足感がある。

102:2.6 (1120.3) 人間の経験における統一は、哲学を介して最もよく見つかる。哲学的思考の本体は、物質的事実に基づかなければならないが、真の哲学の力の魂とエネルギーは、人間の精霊的な洞察である。

102:2.7 (1120.4) 進化的人間は、激務を自然には楽しまない。人生経験における発達する宗教経験の駆り立てる要求と抑え切れない衝動と歩調を合わせるということは、精神的成長、知力の拡大、事実の拡大、および社会奉仕における絶え間ない活動を意味する。非常に活動的な人格から離れた真の宗教はない。したがって、人のさらなる怠惰は、型にはまった宗教の教理と教義の誤った避難所への退却に訴える手段として巧妙な自己欺瞞の型により真の宗教の活動の厳しさからしばしば逃れようとするのである。しかし、本物の宗教は生きている。宗教概念の知的な結晶化は、精神的な死に相当するものである。人は考

えなくして宗教を想像することはできないが、一度宗教が思考のみに下げられるようになると、それは、もはや宗教ではない。それは、単に人間の哲学の種類になってしまったのである。

102:2.8 (1121.1) また一方、生活からの苛々させる要求、必要なものから逃れる方法として宗教についての感傷的な思考を使う不安定であまり統制のとれていない他の魂の型がある。特定の優柔不断で臆病な人間が、進化的な生活の絶え間ない圧力から逃れようとするとき、宗教は、人間がそれを考えて、最も近い避難所、脱出の最善方法を提示するようである。しかし、それこそが、人に立派にさらには勇ましく、人生の波乱に直面させる準備をさせる宗教の任務である。宗教は、進化的人間の最高の授与、人が辛抱し、「見えないあの方を見ているようにと忍び抜くこと」を可能にする唯一のものである。神秘主義は、しかしながら、しばしば人間社会と商業の開かれた活躍の舞台において生きた宗教生活のより健全な活動を楽しまないそれらの人間に取り入れられる生活からのある種の後退である。本当の宗教は行動しなければならない。人は、実際にそれを持つとき、というよりは宗教

が、本当に人の所有を許されるとき、行為は、宗教の結果になるであろう。宗教は、単なる思考、あるいは行動を伴わない感情には決して満足しないであろう。

102:2.9 (1121.2) 我々には、宗教は、しばしば分別なく、反宗教的にさえ行動するという事実が分からない訳ではないが、それは、行動する。宗教的信念の逸脱は、残忍な迫害につながったが、宗教は、いつでも、またずっと何かをする。それは、動的なのである。

3. 知識、知恵、および洞察

102:3.1 (1121.3) 知的欠陥、あるいは教育の欠如というものは、精神的な性質のそのような窮迫している環境が、宗教から科学的知識の世界との哲学的接触のその主要な回路を奪うので、不可避に宗教上のより高い達成を不利な立場に立たせる。宗教の知的要因は重要であるが、それらの発達過剰は、同様に、時として非常に妨げであり、厄介である。宗教は、絶えず逆説的な必要性に苦しまなければならない。すべての考えの精霊的な有益性を減じるとともに、思考の有効利用の必要性。

102:3.2 (1121.4) 宗教的な推測は、不可避であるが、常に弊害である。推測は、つねにその対象を裏切る。憶測は、宗教を何か物質的なもの、または人道主義的なものに変える傾向があり、その結果、直接的に、論理的思考の明瞭さを妨げる一方で、それは、この世界、つまり対照的に不滅に立っていなければならないまさしくその世界、の機能としての宗教を間接的に登場させている。したがって、宗教は、常に矛盾をはらむものと位置づけられる。宇宙の物質的段階と精神的段階との経験的関係—モロンチアのモタ、すなわち、真実洞察力と統一認識のための超哲学の感性—の欠如から生じる矛盾。

102:3.3 (1121.5) 肉体的意識は、つまり人間の感情は、直接に物質的動作、利己的行為に通じる。宗教的な洞察は、精神的な動機は、直接宗教的な行動、つまり社会奉仕と利他的慈善心の寡欲な行為に通じている。

102:3.4 (1121.6) 宗教的な願望は、神性現実の飢餓的探索である。宗教経験は、神発見の意識の認識である。人間は、神を見つけると、さほど啓発されていない仲間との愛情に満ちた奉仕の接触を求めるように、神を見つけたこと

を明らかにするということではなく、むしろ仲間を元気づけ高めるために自分の魂の中で永遠の善の噴出の溢れ出させるように駆り立てられるほどの発見にたとえようもない勝利の動揺が、その人間の魂の中で経験される。本物の宗教は、さらなる社会奉仕につながる。

102:3.5 (1122.1) 科学、知識は、事実の意識につながる。宗教、経験は、価値の意識につながる。哲学、知恵は、調和の意識につながる。顕示(モロンチア感性の代替)は、真の現実の意識につながる。事実、価値、および真の現実の意識の調整は、まさしくその人格生存の可能性に対する信念と共に人格現実の認識、すなわち最高の存在を構成する。

102:3.6 (1122.2) 知識は、人の配置、社会層と階級制の開始へとつながる。宗教は人への奉仕へと、その結果、倫理と利他主義の創出へとつながる。知恵は、考えと人の仲間の双方に関わるより高度でより良い親交につながる。顕示は人を解放し、永遠の冒険へと旅立たせる。

102:3.7 (1122.3) 科学は人を分類する。宗教は、自分を愛するように人を愛する。知恵は、異なる人々を公平に扱う。し

かし、顕示は、人を称揚し、神との協力関係の可能性を明らかにする。

102:3.8 (1122.4) 科学は、文化に基づくきょうだい関係を創造するためにむだに努力している。宗教は、精神の兄弟関係の存在に至らせる。哲学は、知恵の兄弟関係のために励む。顕示は、永遠の兄弟関係を、楽園の終局者軍団を描く。

102:3.9 (1122.5) 知識は、人格の事実に誇りをもたらす。知恵は、人格の意味に関する意識である。宗教は、人格の価値認識の経験である。顕示は、人格生存の保証である。

102:3.10 (1122.6) 科学は、無限の宇宙の区分された部分を特定し、分析し分類しようとする。宗教は、全体の考え、全体の宇宙を把握する。哲学は、全体に関する精霊的洞察の概念で科学の物質部分の識別を試みる。そこで哲学は、この試みに失敗する、顕示は、宇宙円が普遍で、永遠で、絶対で、かつ無限であることを主張して成功する。無限の私はあるのこの宇宙は、それ故、終わりがなく、限りがなく、すべてを包括している—時間を超越し、空間がなく、無特質である。そして、我々は、無限

の私はあるもまた、ネバドンのマイケルの父と人間救済の神であると証言する。

102:3.11 (1122.7) 科学は、事実として神性を示す。哲学は、絶対者の考えを提示する。宗教は、情愛深い精神的人格として神を思い描く。顕示は神性の事実の統一性、絶対者の考え、神の精神的人格を確認し、さらに、我々の父としてのこの概念—存在の普遍的事実、心の永久不変の考え、命の無限の精神—を提示する。

102:3.12 (1122.8) 知識の追求は、科学を構成する。知恵の探求は哲学である。神への愛は宗教である。真実への渇望は顕示である。しかし、現実の感覚を宇宙に対する人の精神的洞察に帰属させるのは内在する思考調整者である。

102:3.13 (1122.9) 科学において、考えはその認識表現に先行する。宗教においては、認識経験は考えの表現に先行する。信じる進化的意志と賢明な理知、宗教的洞察、および顕示—信じる意志—の成果の間には、の間にはまったく大きな違いがある。

102:3.14 (1122.10) 進化において、宗教は、しばしば人が神の概念を創り出すことに人を導く。顕示は、神の進化している人間の現象を示すが、キリスト・マイケルの地球人生に、我々は、自らを人に明らかにする神の現象を視る。進化は、神を人間のようにする傾向がある。顕示は、人を神のようにする傾向がある。

102:3.15 (1122.11) 科学は第一原因に、宗教は最高の人格に、哲学は統合に満たされるだけです。顕示は、これらの3つが1つであり、また、すべては良いということを肯定する。永遠に真実であるものは、宇宙の善であり、空間の悪の時間的幻想ではない。すべての人格の精神的経験においては、本当のものは良いものであり、良いものは本当であるということは常に誠である。

4. 経験の事実

102:4.1 (1123.1) 人の心の中の思考調整者の臨場の理由から、他のいかなる心、人間、あるいは超人の心を知る意識が確かであることと同様に、神の心を知っているということは不思議ではない。他のいかなる人間、あるいは超人の心を知る意識が確かであることと同様に、人の心の中の

思考調整者の臨場の理由から神の心を知るということは不思議ではない。宗教と社会意識にはこれが共通している。それは、他者の心の意識に基づいている。人が他者の考えを自分のものとして受け入れることができる方法は、人が「キリストにあった同じ心をあなたの中にも抱かせる」ことができる同じ方法である。

102:4.2 (1123.2) 人間の経験とは何か。それは、活動的かつ探求的な自己と他の活動的で外的な現実の間の単なるあらゆる相互作用である。経験の量は、概念の深さに加えて、外部の現実の認知全体により測定される。経験の運動は、期待に満ちた想像力に加え、触れた現実の外部の性質の感覚の発見の鋭さに相等しい。経験の事実は、自意識に加えて、他の存在—他の客観的な実在性、他の客観的な心性、そして他の客観的な精霊性—に見つけられる。

102:4.3 (1123.3) 人間は、自分が世界または宇宙において単独ではないということをとても早くに意識するようになる。自我の環境における他の客観的心性の自然なのびのびとした自意識には、発達がある。信仰は、この自然な経験

を宗教へ、すなわち他の客観的心性の現実—源、自然、運命—としての神に対する認識を解釈する。しかし、神に関するそのような知識は、ずっと、そして常に個人的な経験の現実である。神が人格でないならば、かれは、人間の人格の本当の宗教経験の生きた一部になることはできないであろう。

102:4.4 (1123.4) 人間の宗教的経験に存在する誤りの要素は、宇宙なる父の精神的概念を汚染する物質主義の内容に正比例する。宇宙の中の人間の前-精神の進行は、神の本質と純粋で本当の精神の現実に関わるこれらの誤った考えを自分から剥奪することにある。神格は、精霊以上であるが、精霊的接近は、上昇する人間にとり唯一接近可能である。

102:4.5 (1123.5) 祈りは、いかにも宗教経験の一部ではあるが、それは、現代宗教によって不当に強調され、より不可欠の崇拝親交に対しては非常に無視されてきた。黙想に耽ける心の力は、崇拝によって深められ広げられる。祈りは、人生を豊かにするかもしれないが、崇拝は目標を照らし出す。

102:4.6 (1123.6) 啓示宗教は、人間生活の統一的要素である。顕示は、歴史を統一し、地質学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学、および心理学を調整する。精神的経験は、人の宇宙の真の魂である。

5. 目的のある可能性の崇高性

102:5.1 (1123.7) 信念の事実の確立は、信じられるものの事実を確立することには相当しないとはいえ、それでもなお、人格状態への単純な生活の進化的前進は、まず第一に人格の可能性の存在事実を示すのである。そして、時間の宇宙において可能性は、つねに実際のものの上に最高である。進化する宇宙において、可能性とは、存在することであり、存在することは、神格の目的ある命令の展開である。

102:5.2 (1124.1) この同じ目的がある崇高性は、原始の動物的な恐怖が、神への深まる崇敬へと宇宙への増加する畏敬へと止むことなく変えられるとき、心の観念化の進化において示される。原始人には、信仰より宗教的な恐怖があり、この臆病な恐怖が、精神の現実で生きる信仰に表せ

られるとき、心に現実に存在するものの上にある精神の可能性の崇高性が、示される。

102:5.3 (1124.2) 人は、進化的宗教を心理学的に考察することはできるが、個人的な経験である精神的起源の宗教は、心理学的に考察することはできない。人間の道徳は、価値を認識するかもしれないが、宗教だけがそのような価値を保存し、高め、精神的にすることができる。しかし、そのような作用にもかかわらず、宗教は、感情的に強く訴えられる道徳以上の何かである。愛が義務にあり、息子関係が隷属にあり、本質が物質にあるように、宗教は、道徳にある。道徳は、全能の統制者、仕えられる神格を明らかにする。宗教は、すべての者を愛する父、崇拝され愛される神を明らかにする。これは、宗教の精霊的な可能性が、進化の道徳性の実際の義務、の上に優位であるからである。

6. 信仰の確実性

102:6.1 (1124.3) 宗教的な恐怖に対する哲学における除去と科学の安定した進展は、誤った神々の死に拍車をかける。そして、人工神のこれらの犠牲者は、しばらくの間、精霊

的な洞察力を曖昧にするかもしれないが、かれらは、非常に長いあいだ永遠の愛の生きている神を見えなくしたその無知と迷信をついには破壊する。被創造者と創造者との関係は、生活経験、正確な定義に制約されない動的信仰である。人生の一時期を孤立させ、それを宗教と呼ぶことは、人生を崩壊させ宗教を歪めることである。そして、これがまさに、崇拝の神が、すべての忠誠もしくは何も要求しない理由である。

102:6.2 (1124.4) 原始人の神々は、原始人自身の影に過ぎなかったのかもしれない。生きている神は、中断が全空間の創造の神の影を構成する神性の光である。

102:6.3 (1124.5) 哲学的な到達をなした宗教家には、現実、価値、段階の成就、高められた過程、変容、時空間の究極性、理想化、エネルギーの人格化、重力の本質、人間の投射、自己の理想化、自然の隆起、善への傾向、進化の推進、または高揚的仮説以上の何かの個人的救済の人格神に対する信仰がある。宗教家は、愛の神を信じる。愛は、宗教の本質と優れた文明の源泉である。

102:6.4 (1124.6) 信仰は、個人的な宗教経験において可能性の哲学的な神を確実性の救済の神に変える。懐疑は、神学の理論に挑戦するかもしれないが、個人の経験の信頼性に対する自信は、信仰になったその信念の真実を確信する。

102:6.5 (1124.7) 神に関する確信には、賢明な論理的思考を通して達し得るかもしれないが、個人は信仰により、個人的経験でのみ神を知るようになる。生活に関係する多くに、可能性は、考慮されなければならないが、宇宙現実に触れるとき、そのような意味と価値が生きた信仰に接近されるとき、確実性が経験できるかもしれない。神に関するこの知識が、知的論理に全く裏打ちされていないがゆえに、そのような確信を否定する信じない人に質問されるときでさえ、神を知る魂は、恐れずに「私は知っている」と言う。信者は、そのようなあらゆる不信を抱く人に、「私が知らないとどうして知っているのか。」と返答するだけである。

102:6.6 (1125.1) 理由は、つねに信仰を疑うことができるが、信仰は、つねに理由の双方を補うことができる。理知は、

強い確信に、精霊的な経験にさえ変わることができる可能性を作り出す。神は、最初の真実であり最後の事実である。したがって全ては、神に起源があり、存在するすべての事実は、神に関連して存在する。神は、絶対的真実である。人は、真実として神を知るかもしれないが、神を理解するためには—説明するためには、宇宙の中の宇宙の事実を探らなければならない。神の真実の経験と神の事実に関する無知の間の巨大な隔たりは、生ける信仰によってのみ橋を架けることができる。科学的根拠だけで無限の真実と宇宙の事実の調和を実現することはできない。

102:6.7 (1125.2) 信念は、疑問を追い払い、恐怖に耐えることができないかもしれないが、信仰は、積極的で、かつ生きているので、いつも疑いに対して勝ち誇っている。否定より積極が、誤りより真実、理論より経験、時間と空間の孤立している事実より精神的な現実が、有利である。この精神的確実性の説得力のある証拠は、そのような信者が、すなわち信仰を持つ者が、この本物の精神的経験の結果として与える精神の社会的実りにある。イエス曰く、「私があなたを愛したように仲間を愛するならば、

あなたが私の弟子であることをすべての人が知るであろう。」

102:6.8 (1125.3) 神は、科学にとっては可能性、心理学には好ましさ、哲学には可能性、宗教には確実性、つまり宗教経験の現実性である。科学的根拠は、確率の神を見つけることができない哲学が、確信の神を見つけることのできるその宗教信仰を非常に重んじなければならないことを要求する。人の知的かつ哲学的な贈り物が、後退すればするほどより劣性の知性から出現したということ、最後にはすべての考えと感覚が全く欠けた原始の生活に起源を取るという仮定に固執する限りは、科学も、信じ易さの理由で宗教経験を無視すべきではない。

102:6.9 (1125.4) 進化の事実は、神を知る死すべき者の宗教生活の精神的な経験の確実性の現実についての真実に対して配列されてはならない。知的な人間は、子供のように推論することをやめるべきであり、また、成人の一貫した論理、つまり事実の観測に沿った真実の概念を許容する論理の使用を試みるべきである。それぞれの繰り返される宇宙現象に直面し、科学的な実利主義は、明らかに高

いものを明らかに低いものへと言及することによりその現在の反論の支えに固執するとき行き詰まってしまった。一貫性は、目的がある創造者の活動の認識を要求する。

102:6.10 (1125.5) 生物進化は事実である。目的のある、あるいは漸進的な進化は、進化の絶えず上昇する業績のそれ以外は相容れない現象を一貫させようとする真実である。いかなる科学者でも、選んだ科学における進歩が高ければ高いほど、かれは、崇高なる心の支配の宇宙の真実を優先してますます物質主義的な事実の理論を捨て去るであろう。物質主義は、人間の生活を軽んじる。イエスの福音は、すべての死すべき者をすばらしく向上させ、神々しく高める。人間の存在が、上方への人間の差し伸べと神性の、そして救済の下方への差し伸べの出合いの現実認識の興味をそそり、魅惑的な経験にあると視覚化されなければならない。

7. 神性の確信

102:7.1 (1126.1) 自立自存である宇宙なる父もまた、明白である。宇宙なる父は、すべての理性ある死すべき者の中に

実際に生きている。しかし、人は、神を知らない限り、神に関して確信できるはずがない。息子関係は、父性を確実にする唯一の経験である。宇宙は、いたる所で変化を被っている。変化する宇宙は、従属的宇宙である。そのような創造は、最終的でもなく、絶対的でもあり得ない。有限的宇宙は、究極なるものと絶対者に完全に依存している。宇宙と神は同じではない。一方は原因、他方は影響である。原因は絶対であり、無限であり、永遠であり、不変である。影響は、時-空間的で超自然的であるが、常に変化しており、いつも成長している。

102:7.2 (1126.2) 神は、自らによってもたらされた宇宙にける唯一無二の事実である。かれは、物と存在体の系列、計画、目的の秘密である。遍く変わる宇宙は、絶対に変らない法、すなわち不変の神の習慣により管理され、安定している。神の事実、神の法は、不変である。神の真実、宇宙との神の関係は、絶えず進化している宇宙に十分適応できる相対的顕示である。

102:7.3 (1126.3) 神なしで宗教を作り上げようとする者は、木なしで果物を集めようとする者、両親なしで子供を作る者

に似ている。原因なくして結果は得られない。私はあるだけが原因がない。宗教経験の事実は、神を意味し、個人的な経験のそのような神は、人格神性でなければならない。人は、化学公式に祈ったり、数学的な方程式に懇願したり、仮説を崇拝したり、公理を信用したり、過程と親しく交わったり、抽象性に仕えたり、または法と情愛深い交わりを持つことはできない。

102:7.4 (1126.4) 本当の、多くの明らかに宗教的な形質は、非宗教的な根から起こり得る。人は、理知的に神を否定し、なおかつ道徳的には善であり忠誠であり、孝行であり、正直で、理想主義的でさえあり得る。人は、基本的な精神的本質に多くの純粋に人道主義的なの枝を接ぎ木し、このように明らかに、神を否定した宗教のために論点を示すかもしれないが、そのような経験は、生存価値、神を知ることと神に向かっての上昇に欠けている。そのような人間の経験においては、社会的な、精神的ではない、果実だけが、まさに現れようとしている。接ぎ木は、生きている滋養物は、心と精神双方の神性の本来の授与の根から得られる事実にもかかわらず、果実の種類を決定する。

102:7.5 (1126.5) 宗教の知的な目印は確実性である。哲学的特徴は一貫性である。社会的果実は愛と奉仕である。

102:7.6 (1126.6) 神を知る個人は、現代の迷信、伝統、物質主義傾向の迷宮において神を見つける行く手を塞ぐ困難が分からなかったり、障害に気づかなかったりする者ではない。神を知る個人は、これらの全障害に遭遇し、それらを打ち負かし、生きた信仰で乗り越え、それらをものともせず精神的な経験の高地に達した。しかし、神に関し信念をもつ多くの者達が、神を信じることに反論を組み立て困難を拡大する人々の多様性と利口さゆえに、そのような確実な気持ちを強く主張することを恐れるということは本当である。あら探しをしたり、質問をしたり、異議を唱えたりすることに、大した知性の深さは必要としない。しかし、これらの質問に答え、これらの困難を解決するには心の冴えを要する。信仰の確実性は、そのようなすべての上滑りの論点を扱うには最も優れた方法である。

102:7.7 (1127.1) 科学、哲学、あるいは社会学が、真の宗教の予言者と大胆にも独断的に競うようになるならば、神を知

る者は、そのような不当な教条主義に対して、個人の精神的経験の確実性のそのより明敏な教条主義で、「私は、私はあるの息子であるので、自分が経験したことを知っている。」と応じるべきである。信仰をもつ者の個人的経験が、独断的な考えの挑戦を受けるならば、経験可能な父のこの信仰生まれの息子は、挑戦する余地のないその教義で、宇宙なる父との実際の息子関係の声明で答弁することができる。

102:7.8 (1127.2) 無条件の現実だけが、絶対的なものだけが、一貫して独断的であることを敢行できた。独断的であることを当然と思う者達が、一貫しようとするならば、遅かれ早かれエネルギーの絶対者、真実の宇宙そして愛の無限者の腕の中へと追いやられるはずである。

102:7.9 (1127.3) 宇宙現実への非宗教の接近が、その立証されなかった状態を根拠に信仰の確実性にあえて挑戦するならば、精神の経験者は、同様にそれらが同様に立証されないということを根拠に科学の事実と哲学の思考体系の独断的の挑戦に訴えることができる。それらは、同様に、科学者あるいは哲学者の意識における経験である。

102:7.10 (1127.4) 我々にはすべての宇宙経験の中で、全臨場の最も不可避なもの、全事実の最も本当であるもの、全真実の最も生き生きしているもの、すべての友の最も情愛深いもの、すべての価値で最も神性であるものの神について最も確信する権利がある。

8. 宗教の証し

102:8.1 (1127.5) 宗教の現実と有効性の最高の証しは、人間の経験の事実にある。すなわち、生来自己保存の強い本能を授けられ、死後の生存を切望する生来恐がりで疑い深い人間は、信仰が神として呼ばれるその力と人の維持と方向への現在と将来の最も深い関心を完全に信じることを望んでいるということ。これが、すべての宗教の1つの中心真実である。この見守りと世話と最終的救済の代償に力または人が必要とするものに関して人に課するものに関し、2つの宗教は、一致しないのである。実のところ、すべての宗教は皆、多少意見を異にする。

102:8.2 (1127.6) 進化の段階におけるいかなる宗教の状態に関しても、それは、その道徳的な判断と倫理基準によって最も良く判断されるかもしれない。いかなる宗教の型も高

ければ高いほど、それはさらに奨励し、絶えず向上する社会的道徳と倫理的文化により奨励される。我々は、付随するその文明状態によって宗教を判断することはできない。我々は、その宗教の純粋さと気高さで文明の真の本質を評価するほうがよい。世界で最も注目に値する宗教教師の多くは、実質的には無学であった。世界の知恵は、永遠の現実に対する救済信仰の運動には必要ではない。

102:8.3 (1127.7) 様々の時代の宗教の違いは、完全に、現実の人の理解力における違いと、道徳的価値、倫理的関係、精神現実の異なる認識しだいである。

102:8.4 (1127.8) 倫理学は、内部の精霊的かつ宗教的な発達のそれ以外は観察不可能な進歩を忠実に映す外部の社会的、あるいは人種的な鏡である。人は、いつも自分が最善と知る観点から、最も深い考えや最も高い理想で神のことを考えた。歴史的宗教でさえ常に認識されたその最高価値からその神の概念を作成していた。あらゆる知力ある被創造物は、自分が知る最も良く最も高いものに神という名を与える。

102:8.5 (1128.1) 宗教は、理由と知的表現の段階まで引き下げるとき、常に大胆にもそれ自身の倫理的文化と道徳的進歩の基準により判断される文明と発展的進歩を批評した。

102:8.6 (1128.2) 個人的宗教は、人間道徳の発展に先行するが、残念ながら、その制度的宗教は、ゆっくりと変化する人類の慣習に不変的に後れを取ってきたと記録されている。組織化された宗教は、保守的に遅いことが判明した。予言者は、通常、宗教発展において人々を導いてきた。神学者は、通常、人々を制止してきた、宗教は、内面的または個人の経験の問題であり、人種の知的な進化に先立って決してあまり発達することはできない。

102:8.7 (1128.3) しかし、宗教は、決していわゆる奇跡への訴えによって高められはしない。奇跡の探索は、魔法の原始宗教への立ち戻りである。本物の宗教は、真偽の疑わしい奇跡とは無関係で、決して啓示的宗教は、奇跡を権威の証拠として指し示さない。宗教は、これまでに、またいつも個人的経験に深く根ざしている。最も高度の宗教、イエスの人生は、まさにそのような個人の経験であった。肉体の短い人生の間、神を求め、完全に神を見つ

ける泌滅の人間。同じ人間の経験において人を求め、無限の至高の完全な魂の完全な満足感を見つける神が現れる間に。そして、それが、ネバドンの宇宙における最も高く、しかも明らかにされている宗教である。—ナザレのイエスの地上での人生。

102:8.8 (1128.4) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 103
宗教経験の現実

103:0.1 (1129.1) 人の真の宗教的反応のすべては、初期の聖職活動の崇拝の補佐の後援をうけ、知恵の補佐の検閲をうける。人の最初の超心の授与は、宇宙の創造霊の聖霊における人格の回路のそれである。そして、神性の息子の贈与あるいは調整者の宇宙の贈与のずっと以前に、この影響は、人の倫理、宗教、精神性の視点を拡大するために機能する。楽園の息子の贈与のその後、解放された真実の精霊は、宗教的真理を知覚する人間の能力拡大に強力な貢献をする。進化が、棲息界に迫るとき、思考調整者は、ますます人間の宗教洞察のより高度の型の発達に参加する。思考調整者は、有限生物が、限りのない神格、

つまり宇宙なるの父の確実性と神性とを信仰を通じて一瞥するかもしれない宇宙の窓である。

103:0.2 (1129.2) 人類の宗教的傾向は、生まれながらのものである。それらは、あまねく提示され、明らかに自然の起源をもつ。原始宗教は、その起源において常に進化的である。自然な宗教経験が進歩し続けるにつれ、真実の周期的な顕示は、惑星進化の、それ以外は遅い運動を時々中断する。

103:0.3 (1129.3) ユランチアにおいては、今日、4種類の宗教がある。

103:0.4 (1129.4) 1. 自然的、あるいは進化的宗教。

103:0.5 (1129.5) 2. 超自然的、あるいは天啓的宗教。

103:0.6 (1129.6) 3. 実用的、あるいは現在の宗教、自然宗教と超自然宗教の混合の異なる度合。

103:0.7 (1129.7) 4. 哲学的宗教、人工的、あるいは哲学的に考え抜かれた神学原理と理由を確立された宗教。

1. 宗教哲学

103:1.1 (1129.8) 社会的あるいは人種的集団の間での宗教経験の統一は、個人に宿る神の断片の同じ本質に由来する。他の人間の幸福への寡欲な関心に起源を与えたのが、この神性である。しかし、人格は、固有—似ている2人の人間はいない—であるので、2人の人間が、それぞれの心の中に住まう神性の精神の導きと衝動を同様には解釈できないということが必然的に成り立つ。人間の集団は、精神和合を経験できるが、決して哲学的な一様性に達することはできない。そして、宗教的考えと経験の解釈のこの多様性は、20世紀の神学者と哲学者が宗教の500以上の異なる定義を定式化したという事実により示される。実際は、あらゆる人間が、自身の内に住む神の霊から発している神性の衝動の彼自身の経験にもとづく解釈の条件で宗教を定義し、それ故、そのような解釈は、固有であり、他のすべての人間の宗教哲学とは完全に異るはずである。

103:1.2 (1130.1) 1人の人間が、仲間の人間の宗教哲学と完全な意見の一致をみるとき、その現象は、これらの人間には2人の哲学の宗教解釈の類似性に関係のある事柄に影響している類似した宗教経験があったことを示している。

103:1.3 (1130.2) あなたの宗教が個人的経験の問題である一方、あなたの宗教生活が、自己中心的—束縛状態、利己的、非社交的—になることを防ぐことのできる最後まで、非常に多くの他の宗教経験に関する知識、(他の、また多種多様な人間の多様な解釈)に晒されるべきであるということが最も重要である。

103:1.4 (1130.3) 合理主義は、宗教が、まずは何かに対する原始的信念であり、次に価値追求が続くと仮定するとき、それは間違いである。宗教とはそもそも価値の追求であり、そしてそこで、解説的な信念の体系を考案する。人が、宗教的な価値—目標—に同意することは、信念—解釈—に同意するよりもはるかに簡単である。そして、これは、何百もの対立する信念—信条—に対する確信を維持する混乱させる現象を示す一方で、宗教が、いかに価値と目標に同意することができるかを説明している。またこれは、ある特定の人が、信仰の多くを断念するか、変えることに直面して、いかに自分の宗教経験を維持できているかを説明している。宗教は、信仰の革命的変化にもかかわらず、持続する。神学は、宗教を形成しない。神学哲学を生むのは、宗教である。

103:1.5 (1130.4) 宗教家が、多くの誤った事を信じたということは、宗教を無効にはしない、というのは、宗教は、価値認識に基づいて築かれ、個人の宗教経験の信念により確認されるのであるから。宗教は、次に経験と宗教的な考えに基づく。神学、つまり宗教哲学は、その経験を解釈する正直な試みである。そのような解説的な信念は、善悪または真実と誤りの混成であるかもしれない。

103:1.6 (1130.5) 精霊価値の認識の実現は、超概念的経験である。我々が、神-意識と言うことに決めた「感覚」、「感じ」、「直観」、または「経験」を示すために使用可能な言葉は、人間のいかなる言語にもない。人に住まう神の霊は、人格的ではないが—調整者は、人格的である—が、この訓戒者は、価値を提示し、神格の味を滲ませる。そして、それは、最も高くかつ無限の意味において人格的である。神が少なくとも人格的でないならば、神は、意識するはずはなく、また、もし意識がないならば、人間より下位であろう。

2. 宗教と個人

103:2.1 (1130.6) 宗教は、人間の心で機能的であり、人間の意識においてそのの登場前に経験において実現されてきた。子供は、その誕生経験のおよそ9カ月前に存在している。だが宗教の「誕生」は突然ではない。それは、むしろ緩やかな出現である。にもかかわらず、遅かれ早かれ、「誕生の日」はある。人は、「再び生まれる」—精霊から生まれる—ことをしない限り、天の王国には入らない。多くの精神的誕生には、多くの身体的誕生が、「激しい陣痛」と「出産」の他の異常によって特徴づけられるのと同様に、精神の多くの苦悶が伴ない、心理的動揺を印した。何の宗教的な発展も、意識的な努力と積極的かつ個々の決断なしでは起こらないが、他の精霊的な誕生は、精霊的な経験の強化を伴う最高価値の認識の自然で正常な成長である。宗教は、決して受け身の経験、つまり否定的態度ではない。「宗教の誕生」と呼ばれるものは、精神的葛藤、感情的抑圧、および気質上の動揺の結果として人生後半に起こる宗教的な出来事を特徴づけるいわゆる転換経験と直接には関係していない。

103:2.2 (1131.1) しかし、情愛深い天の父の子である意識のもとに育った両親にそのように育てられた人々は、精霊的な

危機、感情の動揺を経て神との親交のそのような意識にはじめて達することができる人間の仲間を不信の目で見るべきではない。

103:2.3 (1131.2) 啓示的宗教の種子が発芽する人の心の進化の土壌は、非常に早く社会的意識に起源を与える道徳的本質である。子供の道徳的な性格の最初の刺激は、性、罪の意識、または個人的な誇りには関係なく、むしろ正義、公正さへの鼓舞、そして親切さへの衝動—仲間への助けとなる活動—と関係がある。そして、そのような初期の道徳的な目覚めが養育されるとき、多少とも闘争、隆起、および危機のない宗教人生のゆるやかな進化が起こる。

103:2.4 (1131.3) あらゆる人間は、利己的衝動と愛他的衝動の間のある種の矛盾を非常に早い時期に経験し、そして、何度となく、そのような道徳的矛盾を解決する課題において超人的な助けを捜し求める結果として、神-意識の最初の経験が、達成されるかもしれない。

103:2.5 (1131.4) 子供の心理は、生来積極的であり、否定的ではない。とても多くの死すべき者が、否定的であるのはそ

のように訓練されたからである。子供が積極的であると言われるとき、それは、思考調整者到着の前兆となる心の力である道徳的衝動に言い及んでいるのである。

103:2.6 (1131.5) 普通の子供の心は、間違った教えがない場合、宗教意識の出現において、否定的に罪と罪悪感の意識から離れるよりも、むしろ肯定的に道徳的正義と社会的活動の方へ進む。矛盾が、宗教経験の発達においてあるかもしれないし、ないかもしれないが、必然的決心、努力、人間の意志の機能は、常にある。

103:2.7 (1131.6) 道徳的な選択は、通常、多少の道徳的矛盾を伴う。そして子供の心の中のまさにこの最初の葛藤は、利己主義の衝動と利他主義の推進力の間にある。思考調整者は、利己主義的動機の人格的価値を無視はしないが、人間の幸福の目標と天の王国の喜びに導きつつわずかな優先を利他的な推進力に置くために働く。

103:2.8 (1131.7) 道徳的行為者が、利己的衝動に直面し、寡欲であることを選ぶとき、それは原始的宗教経験である。動物は、そのような選択をすることはできない。そのような決定は、人間らしく、かつ宗教的である。それは、神

-意識の事実を迎え入れ、社会奉仕の推進力、人の兄弟愛の基礎を示す。心が、自由選択の行為により正しい道徳判断を下すとき、そのような決定は、宗教経験を構成する。

103:2.9 (1131.8) だが、道徳的適応力を十分に獲得し、その結果、利他的奉仕を選べるようになる以前に、その子供は、強くよく統一された利己的本質を開発してしまっている。そして、「より高い」本質と「より低い」本質の間の、つまり、「罪の老人」と恩恵の「新の本質」との間の闘いの理論を引き起こすのは、この事実に基づく状況である。通常の子供は、人生の非常に早い時期に「受け取るよりも、与えることがより尊ばれる」ということを学び始める。

103:2.10 (1131.9) 人は、利己主義からくる衝動を自己—自分自身—と見なす傾向がある。対照的に、かれは、何らかの影響で利他的な意志を自分の外側—神—と見なす傾向がある。実にそのような判断は正しい、なぜならば、すべてのそのような自己のためではない欲求は、実際には内在する思考調整者の導きにそれらの起源があり、しか

も、この調整者は神の断片である。精霊訓戒者の推進力は、衝動が利他的であると、つまり仲間の生物に注意が払われると、人間の意識で理解される。少なくともこれは、子供の心の早期の基本的な経験である。成長過程にある子供が個性統一を達成できないとき、利他的な衝動は、過度に発達するかもしれないほどに自己の幸福への重大な傷をもたらす。見当違いの良心は、多くの葛藤、憂慮、悲しみと人間の際限のない不幸の原因となり得る。

3. 宗教と人類

103:3.1 (1132.1) 霊、夢、そして多様なすべての他の迷信に対する信念が、原始宗教の進化の起源の一翼を担う一方で、人は、団結の一族の精神、あるいは部族の精神の影響を見落とすべきではない。集団関係にあっては、初期の人間の心の道徳的本質にある利己的-利他的な対立への挑戦を提した正確な社会的状況が、示された。霊に対する思考体系にもかかわらず、原始オーストラリア人は、まだ宗教を一族に焦点を合わせている。やがて、そのような宗教概念は、最初は動物として、後には超人間として、あるいは神として人格化する傾向がある。アフリカ

のブッシュマン（その信仰はトーテムでさえない）のような劣った人種さえ、私利と集団利益の間、つまり世俗的価値と神聖な価値の間の違いの認識をする。しかし、社会的集団は、宗教経験の起点ではない。人の初期の宗教へのこれらのすべての原始の貢献の影響にかかわらず、真の宗教衝動は、寡欲である意志を動かす本物の精神臨場感にその起源があるという事実は依然としてある。

103:3.2 (1132.2) 後の宗教は、自然の驚異と神秘、つまり無人格的なマナに対する原始の信念に前もって示されている。しかし、遅かれ早かれ、進化的宗教は、個人が社会集団の利益のために何らかの個人的犠牲を払うべきである、つまり他の人々をより幸福でより良くする何かをするべきであることを要求する。最終的に、宗教は、神と人への奉仕になる運命にある。

103:3.3 (1132.3) 宗教は、人の環境を変えるように考案されているが、今日人間の中に見られる宗教の多くが、これをするには無力になってしまった。環境は、宗教をあまりにも頻繁に征服してきた。

103:3.4 (1132.4) あらゆる時代の宗教において、最も勝る経験は、神学教義、あるいは哲学的理論に関する考えではなく、道徳的価値と社会的意味に関する感覚であることを覚えていなさい。宗教は、魔術の要素が道徳の概念に取り替えられるとともに、順調に進化する。

103:3.5 (1132.5) 個人の宗教的な態度が一族の集団反応になったそれによって、人間は、マナ、魔法、自然崇拝、霊の恐怖、動物崇拝の迷信を通して様々な儀式へと進化した。次いでこれらの儀式は、部族の思考体系へと集中され、また結晶化されるようになり、ついには、これらの恐怖と信仰は、神へと人格化されるようになった。だが、この宗教的進化のすべてにおいて、道徳的要素は、決して完全に欠落していたわけではなかった。人の中の神の推進力はずっと強力であった。そして、これらの強力な影響—1人の人間と他方の神性—は、時代の波乱を通して宗教の生存を保証したにもかかわらず、宗教は1,000の破壊傾向と敵意に満ちた反目によってしばしば絶滅に瀕した。

4. 精神的な交わり

103:4.1 (1133.1) 社会的な行事と宗教的集会の特徴的な相違は、宗教に関係ないものに比べ、宗教的なものは、親交の空気が一面に広がる。このように、人間の交流は、神との親交感を生み、また、これが集団崇拝の始まりである。一般の食事に加わることは、社会的交わりの最も初期の型であり、初期の宗教は、崇拝者が、公式の犠牲の若干の部分を食さなければならないと定めた。キリスト教においてでさえ、主の晩餐は、親交のこの方法を実行し続けている。親交の環境は、内在する精神訓戒者の利他的衝動との利己的自我の葛藤における壮快で励みとなる停戦期間を提供する。これは、真の崇拝—人の兄弟愛の出現に至る神の臨場の実践の前奏曲である。

103:4.2 (1133.2) 原始人は、神との親交が中断されたと感じると、償いの努力において好意的な関係を回復するためにある種の犠牲に頼った。正義への飢餓と渇きは、真実の発見に通じており、また、真実は、理想を増大させ、これが宗教家個人に新しい問題を生じさせる。というのも、我々の能力は、等差数列だけにより高められる間、我々の理想は、等比数列により成長する傾向があるのであるから。

103:4.3 (1133.3) 罪の感覚(原罪の意識ではない)は、中断された精神的親交か、または人の道徳理想の低下から来る。そのような窮地からの救出は、人の最高度の道徳的理想が必ず神の意志と同義であるというわけではないという認識から起こり得る。人は、最も高い理想を叶えることを望むことはできないが、神を見つけ、ますます神に似てくる目的に誠実であることはできる。

103:4.4 (1133.4) イエスは、犠牲と償いの儀式のすべてを一掃した。イエスは、人は神の子であると宣言し、すべてのこの虚偽の罪の基盤と宇宙における孤立感を破壊した。被創造者-創造者の関係は、子-親の基盤に置かれた。神は、必滅の息子と娘の情愛深い父になる。そのような親密な家族関係の合法的な部分ではない総ての儀式は、永久に廃除される。

103:4.5 (1133.5) 父なる神は、実際の美徳、あるいは値打ちではなく、子供の動機の認識—被創造者の目的と意図—に基づいて我が子を扱う。その関係は、親-子の交流の1つであり、神の愛によって動かされる。

5. 理想の起源

103:5.1 (1133.6) 早期の進化の心は、主として感情的な恐怖に由来する社会的義務と道徳的義務感に起源を与える。より積極的な社会奉仕への衝動と利他主義の理想主義は、人間の心に宿る神性の霊の直接の推進力から得られる。

103:5.2 (1133.7) 他に利することへのこの考えと理想—隣人の利益のための自我に何かを拒む衝動—は、最初は非常に制限されている。原始人は、自分にとても近い者だけを、自分を友好的に扱う人々だけを隣人と見なす。宗教文明が進むにつれ、人の隣人は、一族、部族、国を包含する概念に広がる。次いで、イエスが、隣人を人類全体の外延に、我々の敵を愛するべきであるという範囲にまで拡大した。そして、この教えは、すべての通常の人間の内面に道徳的である—正しい—と告げる何かがある。この理想を最少に実践する者でさえ、それが理論上正しいと認める。

103:5.3 (1134.1) すべての人は、寡欲で、利他的でありたいという人間のこの普遍的衝動を認める。人道主義者は、この衝動を物質心の自然な働きのせいにする。宗教家は、人

間の心の本当に寡欲な刺激が、思考調整者の内側の精神の導きに対応するということをより正確に認める。

103:5.4 (1134.2) 我意と、自己以外の意志との間のこれらの初期の不一致に関する人の解釈は、必ずしも信頼できるわけではない。かなりよく統一された人格だけが、自我渇望と芽生え始めた社会的意識からくる多様な争いを仲裁することができる。自己には、隣人と同じ様に権利がある。自己も隣人も、個人の注意と奉仕を独占しない。この問題解決に対する怠慢は、人間の有罪感の最も初期の型に起源を与える。

103:5.5 (1134.3) 人間の幸福は、統一し監督する人格の統合された意志により、自己という自己本位の願望とより高い自己(神性の精神)の利他的な衝動は、調整され、融和しているときにだけ、成し遂げられる。進化的人間の心は、感情的な衝動の自然な拡大と、精神的洞察—本物の宗教的な反映—に基づく寡欲な衝動の道徳的成長との争いを仲裁する複雑な問題に常に対峙している。

103:5.6 (1134.4) 自己と他の自己の最大多数のために等しい利益を確保する試みは、必ずしも時空間の枠組で満足に解決

されるという訳ではない問題を提示する。永遠の寿命が与えられるならば、そのような敵意を解決することはできるが、短い人間の1つの寿命では、それらは解決できない。イエスは、そのような矛盾を次のように言及した。「誰でも自分の命を救おうとする者はそれを失い、王国のために自分の命を失う者はそれを見つけるであろう。」

103:5.7 (1134.5) 理想の追求—神のようである努力—は、死の前と後の絶え間ない努力である。死後の人生は、根本的に人間生活と何ら変わりはない。我々がこの良い人生で行なうすべてが直接来世の向上に貢献する。真の宗教は、高貴な性格のすべての美徳が自然死の入り口を通過する結果として与えるのだとはかない望みを持つことを奨励することによって道徳的怠惰と精神的怠惰を促進してはいない。真の宗教は、人生で与えられた期間の間の進歩する人の努力を過小評価しない。あらゆる人間の前進は、不滅の生存経験の最初の舞台の質の向上への直接的貢献である。

103:5.8 (1134.6) 人は、利他的衝動のすべては単に群れの自然本能の発達であると教えられるとき、それは、人の理想主義にとって致命的である。しかし、魂からのこれらのより高度の衝動が人間の心に宿る精神力から発すると学ぶとき、人は、高められ、活気づけられる。

103:5.9 (1134.7) それは、永遠で神性である何かが自分の内に住まい奮闘していると人がいったん完全に気づくと、自分自身の外へ、また自分自身より高く持ち上げる。そこで、それは、我々の理想への超人的な起源の生ける信仰が、我々の信念を確証するということ、我々は神の息子であり、我々の利他的信念、人の兄弟愛の気持ちを本物にするということである。

103:5.10 (1134.8) 人間は、精神的領域において自由意志がある。必滅の人間は、全能の神の不動の支配の無力な奴隷でもなければ、宇宙の機構的決定の絶望的運命の犠牲者でもない。誠にもって、人は、自身の永遠の運命の建築家なのである。

103:5.11 (1135.1) しかし、人は圧力によって救われないし、気高くはされない。精神の成長は、発達する魂の内から生

じる。圧力は、性格を変形するかもしれないが、それは決して成長を促進しない。教育的な圧力でさえ、悲惨な経験防止において助成するかもしれないという点で否定的に役立っているだけである。精神的成長は、すべての外圧が最小限であるところで最大である。「主の霊のあるところに自由がある。」人は、家庭、共同体、教会、および国家の圧力が最少であるときに最もよく成長する。しかし、これは、進歩的社会には家、社会組織、教会、および国家のためのいかなる場所もないという意味に解釈されてはいけない。

103:5.12 (1135.2) 社会的宗教集団の一員が、そのような集団の要望に従うとき、かれは、信仰の真実の個人的解釈と宗教経験の事実に関する完全な表明において、信仰の自由を楽しむことが奨励されるべきである。宗教集団の安全性は、神学上の統一ではなく、精神的和合によって決まる。宗教団体は、「自由思想家」になることはなく、自由思想の自由を楽しむことができなければならない。いかなる教会対しても、生きている神を崇拝し、人の兄弟愛を正当であると確認し、すべての教義的圧力をその構成員から取り除くというすばらしい望みがある。

6. 哲学的調整

103:6.1 (1135.3) 神学とは、人間精神の働きと反応の研究である。それは、その個人の表現における心理学と、そしてその系統的な描写における哲学に多少なりとも常に結合されなければならないので、決して科学にはなり得ない。神学は、常に自身の宗教についての研究である。他者の宗教についての研究は、心理学である。

103:6.2 (1135.4) 人間が、外側から自分の宇宙の研究と考査に接近するとき、様々な自然科学を生み出す。内側から自分と宇宙について研究に接近するとき、神学と形而上学に起源をあたえる。哲学の後の方法は、まず物質と存在体の宇宙に接近する発見と教えのこれらの2つの正反対の手段の間に現れることが運命づけられている多くの食い違いを調和させる努力において発達する。

103:6.3 (1135.5) 宗教は、精神的観点、すなわち人間の経験の内面性の自覚と関係がある。人間の精神的本質は、自身に宇宙を裏返しにする機会を提供する。したがって、専ら人格経験の内面性から見られる全創造が現実には精神的であるように見えるというのは本当である。

103:6.4 (1135.6) 人が、体の感覚と対応する心の知覚の物質的授与を通して宇宙を分析的に調べるとき、宇宙は機械的であり、エネルギー物質的であるように見える。現実を研究するのそのような手法は、宇宙を裏返しにすることにある。

103:6.5 (1135.7) 論理的で一貫した宇宙の哲学的概念は、物質主義または精神主義のいずれの基礎条件に基づいても確立することはできない、というのも、思考のこれらの双方の型は、広く適用されると、宇宙を歪曲して見ることを強要されるとき、前者は、宇宙を内を外にして接触し、後者は、宇宙の自然を外を内にして認識、意識しているからである。それから、決して、科学、あるいは宗教のいずれかは、それ自体では、つまり孤立しては、人間の哲学の指導と神性顕示の照明なくしては普遍の真実と関係についての十分な理解を得ることを望むことはできない。

103:6.6 (1136.1) 人間の内面的霊は、その表現と自己実現のために心の仕組みと方法に頼らなければならない。同様に、人の物質的現実の外側の経験は、経験する人格の心の意

識に基づかなければならない。したがって、精神的で物質的人間の経験、内面的で外面的人間の経験は、いつも心の機能で相互に関連づけられ、それらの意識的な実現に関し心の働きによって調整される。人の経験は、その心においては物質である。人は、魂で精神的現実を経験するが、心でこの経験を意識するようになる。知性は、人間の経験全体の調和者であり、絶えず付きまとう条件をつける者であり、資格を与える者である。エネルギーをもつ物と精神価値の両方が、意識の心の媒体によるそれらの解釈により着色される。

103:6.7 (1136.2) 人にとって科学と宗教間でのより調和のとれた連携へ到達する際の難しさは、物や存在体のモロンチア界の介入領域についての完全な無知に起因している。地域宇宙は、３つの角度、３段階の現実顕現：物質、モロンチア、および精神から成る。モロンチアの接近角度は、自然科学の発見と宗教の精神の機能の間でのすべての分岐を抹消する。理性は、科学についての理解の方法である。信仰は、宗教の洞察方法である。モタは、モロンチア段階の方法である。モタは、不完全な成長の補正を始めている超物質の感性であり、その本質には知識-

理性が、またその核心には信仰-洞察がある。モタは、物質的人物では到達できない分岐する現実知覚の哲学を超えての和解である。それは、ある程度、肉体の物質生活を乗り切った経験に基づいている。しかし多くの人間は、広く切り離された科学と宗教の領域間で相互作用を調停する何らかの方法を持つ好ましさを認めた。そして、形而上学は、このよく認識された溝にかける人の無駄な試みの結果生まれたものである。しかし、人間の形而上学は、啓発するよりも混乱させると判明した。形而上学は、モロンチアのモタの不在を補おうとする人の善意ではあるが、空しい努力を表している。

103:6.8 (1136.3) 形而上学は、失敗を立証した。モタを人は、知覚することができない。顕示は、物質界におけるモタの真実感度の欠如を補うことができる唯一の方法である。顕示は、進化する球体で理性により発展した形而上学の混乱を厳然と明らかにする。

103:6.9 (1136.4) 科学は、物理的環境、すなわちエネルギーと物質の世界に関し人間の試みた研究である。宗教は、精神価値の宇宙との人の経験である。哲学は、広く切り離さ

れたこれらの概念の発見を宇宙に向けての道理に適い統一された態度のような何かに組織化し、関連させるために人の心の努力で展開されてきた。顕示により明確にされる哲学は、モタの欠如やモタ—形而上学—のための人の理由の代わり崩壊と失敗に際し、受け入れられるように機能する。

103:6.10 (1136.5) 原始人は、エネルギー段階と精神段階を見分けなかった。最初に意志から数学の切り離しを試みたのは、紫色人種とそのアンド系の後継者であった。文化的な人間は、ますます、無生物と生物を区別した最も初期のギリシア人とシュメール人の足跡に続いた。そして文明の進歩につれ、哲学は、精神概念とエネルギー概念の間の絶えず広がる深い割れ目に橋渡しをしなければならないであろう。しかし、空間の時間には、これらの分岐は、崇高なるものに一致してある。

103:6.11 (1137.1) 科学は、常に理由に基づかなければならないが、想像力と推測は、その境界の拡張に役立つ。理由は、安定した影響と役立つ小間使いであるが、宗教は、永久に信仰に依存している。そして自然の世界と精霊的

な世界、つまり誤って科学と宗教と呼ばれている双方の現象のまぎらわしい解釈が、常に存在したし、これからもあるであろう。

103:6.12 (1137.2) 人間は、科学の不完全な把握、宗教に対するおぼろげな理解、形而上学の失敗に終わった試みから、哲学の公式化を試みた。現代人は、物質と精神の世界の間のすべて重要で不可欠な形而上学の関係の機能停止がなければ、つまり、身体と精神の間のモロンチアの深い割れ目の橋架けのための形而上学の破綻がなければ、自身と自身の宇宙にふさわしく魅力的な哲学を実際に造るであろう。必滅の人間には、モロンチアの心と物質の概念が欠けている。そして、顕示は、人が、宇宙の論理的哲学を構成するために、そしてその宇宙における自分の確かで落ち着いた場所について満足のいく理解にいたるために緊急に必要とする概念的基本資料におけるこの欠陥の埋め合わせのための唯一の方法である。

103:6.13 (1137.3) 顕示は、モロンチアの深い割れ目の架橋に関する進化的人間の唯一の望みである。モタによる助けを受けない信仰と理性は、論理的宇宙を着想し、組み立て

ることはできない。モタの洞察がなければ、必滅の人間は、物質界の現象の善、愛、真についての明察はできない。

103:6.14 (1137.4) 人間についての哲学が重く物質の世界界に傾くとき、それは、合理主義的あるいは自然主義的になる。哲学が、特に精霊的な段階に傾くとき、それは理想主義的になるか、神秘主義的にさえなる。哲学が不幸にも形而上学に傾くとき、それは絶えず懐疑的になり、混乱するようになる。過去においては、大部分の人の知識と知的な評価は、認識のこれらの3つの歪曲の1つに陥った。哲学は、線形論理における現実の拡大解釈をする勇気がない。それは、現実の楕円形の対称性とすべての関係概念の重要な歪を決して考慮に入れ損なってはいけない。

103:6.15 (1137.5) 必滅の人間の達成し得る最高度の哲学は、科学の理由、宗教の信仰、顕示によって与えられる真実の洞察に論理的に基づかなければならない。この統合により人間は、適切な形而上学を構築できなかったことに対

し、またモタを理解することができないことに対し若干の埋め合わせができる。

7. 科学と宗教

103:7.1 (1137.6) 科学は理由に支えられ、宗教は信仰に支えられる。信仰は、理性に基づきはしないが道理に適っている。論理から独立してはいるが、それは健全な論理により促進される。信仰は、理想的な哲学によってでさえ育成されることはできない。実に、それは、科学とともに、そのような哲学の源そのものである。信仰は、つまり人間の宗教的な洞察は、確実に、顕示によってのみ教授され得るし、霊である神の精神的な調整者臨場の人間の個人的経験によってのみ確実に高めることができる。

103:7.2 (1137.7) 真の救済は、物質識別からモロンチア結合の領域を経て精神相関の高度の宇宙状態への人間の心の神性進化の方法である。そして、物質的かつ直感的な本能が、地球の進化で論じられた知識の登場に先行するように、精霊的な直感的な洞察の顕現もまた、天の進化の崇高な計画、つまり束の間の人間の可能性を永遠の人間、つまり楽園の終局者の現実性と神性へ変える仕組みにお

けるモロンチアと精霊の理性と経験の後の登場の前兆となる。

103:7.3 (1138.1) だが、上昇する人間は、神経験のために内面と楽園に向けて手を差し伸べる一方で、物質宇宙のエネルギー理解のために外側と空間に向けて同様に手を差し伸べている。科学の進行は、人の地球上の生活に限られてはいない。宇宙と超宇宙への人の上昇経験は、少なからず、エネルギー変化と物質変化の研究になる。神は精霊であるが、神格は統一であり、神格の統一は、宇宙なる父と永遠なる息子の精神的価値を包含するだけではなく、宇宙の統制者と楽園の小島のエネルギー事実をも認識しており、その上、宇宙現実のこの二局面は、連帯動作主の心の関係に完全に関連しており、現れつつある崇高なるものの神格の限りある段階において統一される。

103:7.4 (1138.2) 経験的哲学の媒介による科学的な態度と宗教洞察の結合は、人の長い楽園上昇経験の一部である。数学の近似性と洞察の確実性は、崇高なるものの最大限の達成に届かないすべての段階における心の論理の調和させる機能をいつも必要とする。

103:7.5 (1138.3) しかし、論理は、人格の科学的局面と宗教的局面の双方が、心からそれが達するかもしれない結論のいかんにかかわらず、それが導くかもしれない場合はいつでも真実に続くことを心から願ってやまない支配される真実でない限り、科学の発見と宗教の洞察の調和において決して成功はできない。

103:7.6 (1138.4) 論理は、哲学の方法、つまり、その表現法である。真の科学の領域内では、理由は、つねに本物の論理に従う。真の宗教の領域内では、内面の基本的観点からは、そのような信仰は、内側を望く科学的接近の観点からはかなり根拠のないように見えるかもしれないが、信仰は、常に論理的である。外側から内側を見ると、宇宙は、物質的に見えるかもしれない。内側から外を見ると、同じ宇宙は、完全に精神的であるように見える。理性は、物質的意識から生じ、信仰は、精神的意識から生じるが、論理は、顕示により強化される哲学の媒介で内部と外部へ向かう見解の双方を確認し、その結果、科学と宗教の両方の安定化に作用するかもしれない。このように、哲学の理論との共通の接触を通して、科学と宗教

は互いにますます寛容になり、次第に懐疑的でなくなるかもしれない。

103:7.7 (1138.5) 開発途上の科学と宗教の双方が必要とするものは、進化状態における不完全さに対するよりすばらしい意識である探究的かつ批判を恐れない自己批判である。科学と宗教双方の教師は、しばしば、まったく自信があり過ぎ、かつ独断的である。科学と宗教は、それぞれの事実についてのみ自己批判的であり得る。事実の段階からの出発のその瞬間、理性は退位するか、さもなければ誤った論理の一方へと暗転する。

103:7.8 (1138.6) 真実—宇宙関係、宇宙の事実、精神的価値の理解—は、真実の精霊の働きを通して獲得し、また顕示によって最も良く批評することができる。しかし顕示は、科学も宗教ももたらしはしない。その機能は、現実の真実で科学と宗教の両方を調整することである。常に、顕示がないときは、またはその受け入れ、あるいは把握の不成功に当たっては、形而上学は、真実の顕示のため、あるいはモロンチア人格のモタのための人間の単なる代

用品であるので、必滅の人間は、形而上学の空しい意思表示に頼ってきた。

103:7.9 (1139.1) 物質界の科学は、人が物理的環境を制御し、ある程度支配できるようにする。精神的経験の宗教は、人が科学時代の文明の複雑さの中で共存することを可能にする親交衝動の源である。形而上学は、いや、より確かに顕示は、科学と宗教双方の発見のために共通の合流の場を提供し、別々ではあるが、互いに依存する思索の領域を科学の安定性と宗教の確実性の均衡の良い哲学に論理的に関連させる人間の試みを可能にする。

103:7.10 (1139.2) 人間の置かれた状況においては、何も絶対に立証されることはできない。科学と宗教の双方は、仮定に基づいている。モロンチア段階では、科学と宗教双方の仮定は、モタの論理で部分的な証拠が可能である。最大の状態の精神段階においては、限りある証明の必要性は、現実の、実際の経験と前に徐々に消え失せる。しかしその時でさえ、多くは、立証されないまま有限を超えている。

103:7.11 (1139.3) 人間の考えのすべての境界は、立証されてはいないが、人の心の贈り物の構成する現実の感度により受け入れられるある種の前提に基づいている。科学は、物質、運動、生命の３つの現実を仮定することにより論理的思考のその誇る経歴を始める。宗教は、心、精霊、宇宙—崇高なるもの—の３つの現実の仮定で始める。

103:7.12 (1139.4) 科学は、数学の、つまりエネルギーと物質の思考領域と空間における時間の領域になる。宗教は、有限で一時的精神とだけではなく、永遠で至高の精神に関係すると提案する。宇宙知覚のこれらの2つの極端な領域は、ただモタにおける長い経験を通してのみ、起源、機能、関係、現実、運命の類似した解釈をもたらすことができる。エネルギーと精霊の分岐の最大の調和は、主たる七精霊の回路にある。その最初の統一は、崇高なるものの神格に。その最終的統一は、第一根源と中枢の無限に、すなわち私はあるに。

103:7.13 (1139.5) 理由は、エネルギーと物質の物質界における、またその世界との経験に関する意識の結論を認識する行為である。信仰は、精神的意識—人間の他の証明が

果たし得ない何か—の正当性を認識する行為である。論理は、信仰と理性の統一の真実探究の総合的進行であり、死すべき者の心の構成する授与、事象、意味、価値の生得の認識に基づいて築かれる。

103:7.14 (1139.6) 精霊的な現実の真の証しが思考調整者の臨場にはあるが、この臨場の真実は、外界に提示可能なものではなく、内在する神をこのように経験するものだけに明白である。調整者の意識は、真実の知的な受け入れ、善の超心の認知、人格の愛することへの動機に基づいている。

103:7.15 (1139.7) 科学は、物質界を発見し、宗教は、それに価値を見極め、哲学は、宗教的、精神的な概念で科学的、物質的な観点を調整すると共に、その意味を解釈しようと努力する。しかし歴史は、科学と宗教が、決して完全に同意しないかもしれない分野である。

8. 哲学と宗教

103:8.1 (1140.1) 科学と哲学の双方は、それぞれの理由と論理によって神の確率を呈するかもしれないとはいえ、精神に導かれる個人的な宗教経験だけがそのような崇高で、人

格的な神格の確実性を確言することができる。生ける真実のそのような具体化の方法によって神の可能性の哲学的仮説は宗教的な現実となる。

103:8.2 (1140.2) 神の確実性の経験に関する混乱は、別々の個人による、また異なる人種によるその経験の異なる解釈と関係から生じるる。神の経験は、完全に有効であるかもしれないが、神に関する論説は、知的かつ哲学的で、互いに異なりしばしば紛らわしく誤っている。

103:8.3 (1140.3) 善良で高潔な男性は、この上なく妻を愛しているかもしれないが、夫婦愛の心理について完全に納得のいくように筆記試験に合格はできない。配偶者に愛を持たない別の男性は、最も満足するようにそのような試験に合格するかもしれない。最愛の者の本質に対しての恋人の洞察の欠点は、いささかもその愛の現実、あるいは誠意を取り消しにはしない。

103:8.4 (1140.4) 人が本当に神を信じる—信仰により神を知り神を愛する—ならば、科学の疑いの仄めかし、論理のあら捜し、哲学の公理、または神なしで宗教をつくる善意の者達の賢明な提案によってそのような経験の現実が、多

少なりとも減じられたり、損なわれるようなことを許してはならない。

103:8.5 (1140.5) 神を知る宗教家の確実性は、疑う唯物論者の不確実さにより妨害されてはならない。むしろ、不信心者の不確実さが、経験ある信者の深遠な信仰とゆるぎない確実性により激しく疑問が呈されるべきである。

103:8.6 (1140.6) 哲学は、科学と宗教双方にとり最大に役に立つために、物質主義と汎神論双方の両極端を避けるべきである。ただ人格の現実を認識する哲学のみ—変化における恒久性—が、人への道徳的な価値であり得る、つまり、物性物理学と精神的宗教の理論との間の繋ぎとして役立つことができる。顕示は、進化する哲学の弱さに対する補償である。

9. 宗教の本質

103:9.1 (1140.7) 神学は、宗教の知的な内容を扱い、形而上学(顕示)は哲学的な局面を扱う。宗教経験は、宗教の精神的内容である。宗教の知的な内容からくる神話の突飛な考えや心理的幻想にもかかわらず、誤った形而上学と自己欺瞞の方法、宗教の哲学的内容に関する政治上的な歪

曲と社会経済の悪用、個人の宗教の精霊的経験は、依然として本物で有効のままである。

103:9.2 (1140.8) 宗教は、単に考えだけではなく感じること、行動すること、生きることに関係がある。考えることは、物質生活に一層密接に関係があり、理性と科学の事実により完全にではなく支配され、そして精霊の領域に向けその非物質的な到達においては真実により支配されるべきである。人の神学がいかに非現実的であり、かつ間違いであろうとも、人の宗教は、完全に信憑性があり、永遠に本当であるかもしれない。

103:9.3 (1141.1) 仏教は、この信仰が、展開するにつれ神不在のままでとどまりはしなかったが、その元の様式において、ユランチアのすべての進化的歴史に起きた神のいない最良の宗教の1つである。信仰を伴わない宗教は、矛盾というものである。神をもたない宗教は、哲学的矛盾であり、知的な不条理というものである。

103:9.4 (1141.2) 自然宗教の不思議で神話的生まれは、後の啓示的宗教の現実と真実、そしてイエスの宗教の完全な救済の福音を無効にはしない。イエスの人生と教えは、魔法

の迷信、神話の幻想、伝統的な教条主義の束縛を宗教から最終的に剥ぎ取った。しかし、この初期の魔法と神話は、超物質の価値と存在体の存在と現実を仮定することによって、後の、優れた宗教の下地をつくった。

103:9.5 (1141.3) 宗教経験は、純粋に精神的な主観的現象であり、そのような経験は宇宙における目的現実の最も高い領域に向けての積極的で生きた信仰態度を包含する。宗教哲学の理想は、無条件に人に宇宙の中の宇宙の無限の父に対する絶対的愛に依存させるそのような信仰-信用である。そのような本物の宗教経験は、理想主義的な願望の哲学の対象化をはるかに越える。それは実は救済を当然のこととし、楽園の父の意志を知り行動に移すことにのみ関心を持つ。そのような宗教の目印は、次の通りである。崇高なる神への信仰、永遠の生存の望み、愛、特に人間の仲間への愛。

103:9.6 (1141.4) 神学が宗教を克服するとき、宗教は死ぬ。それは、人生になる代わりに主義になる。神学の使命は、単に個人の精神的経験の自意識を容易にすることである。神学は、宗教の経験に基づく主張を定義し、明確にし、

解義し、正当化する宗教的な努力を構成し、最後の分析において、生きた信仰だけによって有効にできる。宇宙のより高度の哲学においては、知恵は、理性と同じように、信仰に同盟するようになる。理性、知恵、信仰は、人間の最高度の到達である。理由は、人を事実の世界に、すなわち事象の世界に導く。知恵は、真実の世界に、関連性に導く。信仰は、神性、精神的経験の世界に先導する。

103:9.7 (1141.5) 理性が機能し、完全な哲学の限界に知恵で続く限り、信仰は、快く理性をもたらす。次に、それは、あえて真実の唯一の仲間との限りなく果てしない宇宙旅行に飛び立つ。

103:9.8 (1141.6) 科学(知識)は、理性は有効であるという、宇宙は理解されることができるという固有の(精霊の補佐)に基づいている。哲学(統一的理解)は、知恵は有効であるということ、物質的宇宙は精神的宇宙に調整できるという生来の(知恵の精神)仮定に基づいている。宗教(個人の精神的経験の真実)は、信仰は有効であるということ、

神は知ることができ、また達することができるという固有(思考調整者)の仮定に基づいている。

103:9.9 (1141.7) 人間の一生の現実の完全な実現は、理性、知恵、信仰のこれらの仮定を信じていたいという進歩的意欲にある。そのような人生は、真実に動機づけされ、愛に支配されるものである。そして、これらは、存在が物質的に示されることができない客観的な宇宙現実の理想である。

103:9.10 (1142.1) 理由が、一度善と悪を認識すると、それは知恵を示す。知恵が善と悪、真実と誤りのいずれかを選ぶとき、それは精神の先導を示す。このようにして、心、魂、精神が、密接に結合され、機能上、相互に関係づけられる。理由は、事実に基づく知識に対処する。知恵は哲学と顕示に対処する。信仰は生き生きとした精神的経験にに対処する。人は真実を通し、美に達し、精神的な愛によって善に向かって昇る。

103:9.11 (1142.2) 信仰は、単に神性の神秘主義的感情に向けてではなく、神を知ることに導く。信仰は、その感情的結

果から影響を受け過ぎてはならない。心の宗教は、感情の満足と同様に、知ることと信じることの経験である。

103:9.12 (1142.3) 精神的内容に比例する宗教経験には現実があり、またそのような現実は、理由、科学、哲学、知恵、および人間の他のすべての業績を超越している。そのような経験の確信は、難攻不落である。宗教生活の論理は明白である。そのような知識の確実性は超人的である。その満足感は見事に神性であり、勇気は不屈であり、献身は疑いがなく、忠誠は最高であり、将来の目標は決定的—永遠で、究極で、普遍的—である。

103:9.13 (1142.4) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 104
三位一体概念の発展

104:0.1 (1143.1) 啓示的宗教の三位一体の概念は、進化的宗教の３結合体の信念と混同されてはならない。３結合体についての考えは、多くの示唆的関係から生じたが、主としては指の３つの関節からきたものである。というのも、丸椅子の３本の足は、椅子を安定させることのできる最少の数であったからであり、３支点は、天幕を維持する

ことができた。さらに、原始人は、長い間、3以上数えることができなかった。

104:0.2 (1143.2) 過去と現在、昼夜、寒暖、男女などの特定の自然の対句は別として、人は、一般的に３結合体で考える傾向がある。昨日、今日、明日。日の出、正午、日没。父親、母親、子供。万歳三唱は勝者に送られる。死者は3日目に埋葬され、幽霊は、水の3つの沐浴で宥められる。

104:0.3 (1143.3) 人間の経験のこれらの自然の関係の結果として、３結合体は、宗教にその姿を見せ、そしてこれは、ずっと以前、神格の楽園の三位一体、あるいはそれらの代表のどれでも人類に明らかにされていた。後に、ペルシア人、ヒンズ一教徒、ギリシア人、エジプト人、バビロニア人、ロ一マ人、スカンジナビア人には皆、３結合体の神がいたが、これらは、本当の三位一体ではなかった。３結合体の神にはすべて自然な起源があり、また、ユランチアの聡明な民族のほとんどに、しばしば現れた。時おり、進化的３結合体の概念は、啓示された三位一体の概念と混同されるようになった。これらの例にお

いて、1つと他を区別することはしばしば不可能である。

1. ユランチアの三位一体概念

104:1.1 (1143.4) 楽園の三位一体の理解へつながるユランチアの最初の顕示は、50万年前のカリガスティア王子の部下によってなされた。この最も初期の三位一体概念は、惑星反逆後、不安定な時代に世界から消えた。

104:1.2 (1143.5) 三位一体の2番目の提示は、第一と第二の園でアダームとハヴァーによってなされた。これらの教えは、およそ3万5千年後にメルキゼデクのマキヴェンタの時代にさえ全く抹消されてはいなかった。なぜならセース人の三位一体概念は、メソポタミアとエジプトの2個所に、しかも特定すると、よりインドにおいて存続し、それは、そこでアグニ、3つの頭をもつベーダの炎の神の中に存続した。

104:1.3 (1143.6) 三位一体の3番目の提示は、メルキゼデクのマキヴェンタによってなされ、この教理は、シャレイムの賢人が胸当てにつけていた3同心円により象徴された。しかし、マキヴェンタは、パレスチナのベドゥイン族に

宇宙なる父、永遠なる息子、無限なる精霊について教えることは非常に難しいとわかった。弟子のほとんどは、三位一体が、ノーランティアデクの３名のいと高きものから成ると考えた。少数の者は、三位一体を体制君主、星座の父、また地域宇宙の創造者たる神格として想像した。それでも少数の者達は、父、息子、精霊の楽園の関連性をわずかに理解したに過ぎなかった。

104:1.4 (1144.1) 三位一体に関するメルキゼデクの教えは、シャレイム宣教師の活動を通してユーラシアと北アフリカの多くの中で徐々に広がった。二つの概念がある程度まで混合し融合するとき、後のアンド系とメルキゼデク時代以後の３結合体と三位一体の見分けは、大抵の場合難しい。

104:1.5 (1144.2) 三位一体の概念は、存在、知性、喜びとしてヒンズー教徒の間に根づいた。(後のインドの概念は、婆羅門、シーヴァとヴィシュヌであった。)初期の三位一体の描写は、セース人司祭によってインドに持たらされたが、後の三位一体の考えは、シャレイム宣教師によって取り込まれ、インド出身の識者によりこれらの主義を

進化の３結合体概念で倍加させることを通してを発展した。

104:1.6 (1144.3) 仏教徒の信仰は、三位一体主義の本質の2つの教義を開発した。以前のものは、教師、法、同胞関係であった。それは、釈迦による提示であった。後の考えは、仏陀の信奉者の北部集団の間で発達し、崇高なる君主、聖霊、肉体化の救世主を含んだ。

104:1.7 (1144.4) ヒンズ一教徒と仏教徒のこれらの考えは、本当の三位一体主義の公理、すなわち一神教の神の三段構えの顕現の考えであった。真の三位一体概念は、3人の別々の神の集まりであるだけではない。

104:1.8 (1144.5) ヘブライ人は、メルキゼデクの時代のケニ人の伝統から三位一体を知ってはいたものの、一神への、ヤハウェへの一神教信者の熱意は、イエス出現時までにはそのようなすべての教えをおおい隠してしまったので、エロヒーム教理は、ユダヤ教の神学から実質的に根絶されてしまった。ヘブライの心は、三位一体主義の概念と唯一の君主、イスラエルの神への一神教の思考体系と折り合いをつけることができなかった。

104:1.9 (1144.6) イスラム信仰の信奉者は、同様に三位一体の考えを理解しなかった。多神教に阻まれるとき、三位一体を許容することは、新興の一神教にとり常に難しい。三位一体の考えは、安定した一神教の伝統を教義上の順応性に結合させておくそれらの宗教を最もよく把握する。偉大な一神教信者であるヘブライ人とイスラム教徒は、多神教の３柱の神、そして神格と人格の三位一体の顕現に存在する1神格の崇拝である三位一体の崇拝との区別に困難を感じた。偉大な一神教信者であるヘブライ人とイスラム教徒は、3柱の神、多神教の崇拝と三位一体の崇拝、神格と人格の三位一体の顕現に存在する1つの神性の崇拝を区別することに困難を感じた。

104:1.10 (1144.7) イエスは、楽園の三位一体の人格に関する真実を使徒に教えたが、使徒は、イエスが、比喩的に、また象徴的に話したと考えた。ヘブライの一神教で育てられた使徒には、ヤハウェの支配的概念に相反するようないかなる思考体系も受け入れることは困難であった。また、初期のキリスト教徒は、三位一体の概念に対しヘブライの偏見を引き継いだ。

104:1.11 (1144.8) キリスト教の最初の三位一体は、アンチオケで公布され、神、その言葉、その叡智から成っていた。パウーロスは、父、息子、精霊の楽園の三位一体について知っていたが、それについての説教は滅多にせず、新たにできている教会宛てのほんの幾つかの手紙でそれに言及をした。その時でさえ、パウーロスは、仲間の使徒達と同様に、イエス、地域宇宙の創造者たる息子を神性の第二の人格、すなわち楽園の永遠の息子と混同した。

104:1.12 (1144.9) キリスト後の1世紀終盤近くに認められ始めた三位一体のキリスト教の概念は、宇宙なる父、ネバドンの創造者たる息子、サルヴィントンの神性の聖職者—地域宇宙の母なる霊と創造者たる息子の配偶者—から成った。

104:1.13 (1145.1) イエスの時代以来、楽園三位一体の事実上の同一性は、(それが特に明らかにされた幾人かの個人以外は、)これらの啓示的公開の提示までユランチアでは知られていなかった。しかし、三位一体のキリスト教の概念は、事実上誤ちを犯したが、それは、精神的な関係に関しては実際に本当であった。この概念は、単にその

哲学の含みと宇宙の因果関係においてのみ困惑を経験した。神格の第二の人格、三位一体の第2構成員が、かつてユランチアに住んだということを信じることは、宇宙的考え方をする多くの者にとっては困難なことであった。またこれは、精神面において本当であるが、現実には、それは事実ではない。マイケルの創造者等は、永遠なる息子の神性を完全に具体化するが、絶対的人格ではない。

2. 三位一体の統一と神格の複数性

104:2.1 (1145.2) 一神教は、多神教の矛盾に対する哲学的抗議として起こった。それは、まず、超自然的な活動の部門細分化をもつ神殿組織を通して、それから多くの神の上の1柱の神の単一神教の高揚を通して、ついには最終的な価値の唯一なる神のみを通して発達した。

104:2.2 (1145.3) 三位一体主義は、無関係な宇宙重要性の非擬人化された単独の神格の単一性を考えることができないことに対する経験の抗議から起こる。十分な時間があれば、哲学は、純粋な一神教の神格概念から人格的特性を取る傾向があり、その結果、無関係な神についてのこの

考えを汎神論的な絶対の位置にまで下げる。他の人格存在体や統一された人格存在体とは質的に関係を持たない神の人格の本質を理解することは、つねに難しいことであった。神格の人格は、そのような神格が、他の、そして対等の人格を持つ神格に関して存在するにということを要求する。

104:2.3 (1145.4) 人の心は、三位一体概念の認識により時-空間の創造における愛と法の相互関係の何かをつかむことを望むことができる。人は、精神的な信仰により神の愛への洞察を得るが、この精神的信仰は、間もなく物質界の定められた法には何の影響も持たないと気づく。楽園の父としての神への人の信仰の堅さの如何にかかわらず、彼は、拡大している宇宙の眺望が、普遍の法として楽園の神格の現実を認めるということ、つまりかれは、楽園から外へ延びている、そしてその神格統一が事実であり、現実であり、永遠の不可分性の楽園三位一体である永遠の人格３者である創造者たる息子と創造者たる娘の進化する地域宇宙さえ曇らせる三位一体の主権を認識するということを要求する。

104:2.4 (1145.5) この同一の楽園三位一体は、本当の実体—人格ではないが、それにもかかわらず、真実の、絶対の現実—である。人格ではないが、それにもかかわらず、共存する人格—父、息子、そして精霊の人格—と一致する。　三位一体は、楽園の神格３者の結合からなる神格の現実である。三位一体の性質、特性、機能は、楽園神格3者の属性の単純な合計ではない。三位一体の機能は、何か独特で、独創的であり、父、息子、精霊の属性の分析から全く予測できないものである。

104:2.5 (1146.1) 例えば：あるじは、地上にあるとき、正義が決して個人的行為ではないということを追随者に訓戒した。それは常に集団機能である。人格として、神々も、裁かない。しかし、集合的な全体として、楽園の三位一体としてまさしくこの機能を実行する。

104:2.6 (1146.2) 父、息子、聖霊の三位一体の連合の概念上の把握は、特定の他の三重の関係のさらなる提示のために人間の心に準備をさせる。神学上の根拠は、楽園の三位一体の概念で完全に満たされるかもしれないが、哲学的、そして宇宙論的根拠は、第一根源と中枢の他の３結合の

関連性、すなわち無限者が、宇宙顕示—原動力、エネルギー、力、原因、反応、可能性、現実性、重力、緊張、型、原則、および統一の神の関係—の父ではない様々な受容能力において機能するそれらの３結合体の認識を要求する。

3. 三位一体と３結合体

104:3.1 (1146.3) 人類は、時として神格の3名の三位一体の理解をしてきたが、一貫性は、人間の知力が、７絶対すべてと特定の関係があると認めることを要求している。しかし、楽園の三位一体にとって真実であるそのようなものすべてが、必ずしも３結合体にも真実であるというわけではない。３結合体とは、三位一体以外の何かであるので。特定の機能的な局面において、３結合体は、三位一体に類似しているかもしれないが、それは、決して本質的には三位一体に相応しない。

104:3.2 (1146.4) 必滅の人間は、広がる眺望とユランチアに関する概念を拡大して長い時代を通過しており、またその宇宙哲学は、人間の思考の知的な活動領域の拡大と足並みを揃えるために進化において加速しなければならない。

人間の宇宙意識が広がるにつれ、人は、その物性物理学、知的哲学、および精神的洞察に見い出す総ての相関性に気づく。さらに、宇宙統一に対するこのすべての信念において、人は、すべての存在の多様性に認める。神格の不変性に関するすべての概念にもかかわらず、人は、不断の変化と経験の成長をする宇宙に住んでいると認める。人は、精神的な価値の存続の認識にかかわらず、原動力、エネルギー、力の数学と前数学を考慮に入れなければならない。

104:3.3 (1146.5) 何らかの方法で、無限の永遠の充満は、進化している宇宙の時間-成長、そしてそれらの宇宙の経験的な住民の不完全さと一致しなければならない。何らかの方法で、全無限に関する概念は、人間の識者とモロンチア魂が、究極的価値と精霊化する重要性に関するこの概念を理解できるように区分され、明示されなければならない。

104:3.4 (1146.6) 理性が宇宙現実の一神教的統一を要求する傍ら、有限の経験は、複数の絶対者の、そして宇宙関係における各連携の仮定を必要とする。調和した存在なくし

ては、絶対の関係の多様性の出現の可能性はなく、差異、可変、変更、減衰、限定、または減少の見込みもない。

104:3.5 (1146.7) これらの論文においては、全体の現実(無限)は、それが7絶対者に存在していると提示されてきた。

104:3.6 (1146.8) 1. 宇宙なる父

104:3.7 (1146.9) 2. 永遠なる息子

104:3.8 (1146.10) 3. 無限の精霊

104:3.9 (1147.1) 4. 楽園の小島

104:3.10 (1147.2) 5. 神格絶対者

104:3.11 (1147.3) 6. 宇宙の絶対者

104:3.12 (1147.4) 7. 無条件絶対者

104:3.13 (1147.5) 永遠なる息子にとっての父である第一根源と中枢は、楽園の小島にとっての型である。かれは、息子においては無条件の人格であるが、神格絶対者においては可能にされる人格である。父は、楽園-ハヴォーナで

明らかにされるエネルギーであると同時に、無条件絶対では隠されたエネルギーである。無限なるものは、宇宙の絶対者の補正の、だが包み隠された活動で永遠に機能し、結合活動者の絶えざる行為でつねに明らかにされる。このように父は、6名の調和した絶対者に関連しており、このように、7名全てが、永遠の終わりのない循環全体に渡って無限の円を取り囲むのである。

104:3.14 (1147.6) 絶対関係の３結合体は回避不能であるらしい。人格は、他のすべての段階はもちろん絶対段階での人格の繋がりを追求する。そして楽園の3人格の繋がりは、第一の３結合体、すなわち父、息子、精霊の人格結合を永遠化する。これらの３人格が、人格として連合的な機能のために結合する時、かれらは、機能的統一の３結合体、三位一体—有機的実体—ではないが、それでもなお三段構えの集合体の機能的合意をそれによって構成する。

104:3.15 (1147.7) 楽園の三位一体は、３結合体ではない。それは機能的合意ではない。むしろ、それは分裂してはおらず、分割できない神格である。父、息子、精霊(人格と

して)は、三位一体が、それぞれの分裂していない神かくであるがゆえに、楽園三位一体との関係を継続することができる。父、息子、精霊は、3人格としての機能的結合であることから、最初の３結合体とのそのような人格関係を維持しない。三位一体だけとして—分裂していない神格として—かれらは、人格集合体の３結合体との外部の関係を全体的に支える。

104:3.16 (1147.8) このように楽園の三位一体は、絶対の関係の間において独特な立場にあり、いくつかの実存的な３結合体があるが、実存的な三位一体は一つしかない。３結合体は実体ではない。それは、有機的であるよりもむしろ機能的である。その構成員は、協力的であるよりもむしろ仲間である。３結合体の構成要素は、実体であるかもしれないが、３結合体自体は、連合というものである。

104:3.17 (1147.9) しかしながら、三位一体と３結合体の間には1つの比較する点がある。双方ともに構成要員の認識できる全属性以外の何かである機能に行きつく。しかし、機能的な見地からこのように相当する一方、その他の点で

は双方ともに、明確な関係を示さない。それらは、構造への機能の関係として大雑把に関連がある。しかし、3結合体連合の機能は、三位一体体制、あるいは実体の機能ではない。

104:3.18 (1147.10) それにもかかわらず、3結合体は、本当である。かれらは、非常に本物である。現実のすべては、3結合体において機能的にされ、そして宇宙なる父は、3結合体を通じて無限のあるじの機能への直接の個人的調整を行使するのである。

4. 7つの3結合体

104:4.1 (1147.11) 7つの3結合体の説明を試みるにあたり、注意は、宇宙なる父がそれぞれの第一構成員であるという事実に向けられる。宇宙なる父は、今いて、過去にもいて、またずっといるであろう。宇宙なる父の第一根源、絶対的中枢、第一原因、宇宙の統制者、無限の活力者、最初の統一、無条件の擁護者、神格の第一人格、宇宙の根本の型、および無限の本質。宇宙なる父は、絶対者の人格的原因である。絶対者の中の絶対者である。

104:4.2 (1148.1) 7つの３結合体の本質と意味は、次のように示すことができるかもしれない。

104:4.3 (1148.2) 第一３結合体—人格-目的の３結合体。これは、神格の３人格の集団である。

104:4.4 (1148.3) 1. 宇宙なる父

104:4.5 (1148.4) 2. 永遠なる息子

104:4.6 (1148.5) 3. 無限の霊

104:4.7 (1148.6) これは、愛、慈悲、奉仕、の三重の結合—永遠の楽園の３人格の目的をもつ人格の繋がり—である。。これは、神々しく兄弟らしく、被創造物を愛し、父親らしく振る舞い、そして、上昇を促進する繋がりである。この第一の３結合体の神性人格は、人格を遺贈し、精神を与え、心を授ける神である。

104:4.8 (1148.7) これは無限の意志の３結合体である。それは、永遠の現在を通して、また時間の過去-現在-未来の流れの全てにおいて行動する。この繋がりは、無限の意志をもたらし、それによって人格の神格が、進化する宇宙の被創造物への自己天啓になる仕組みを提供する。

104:4.9 (1148.8) 第二の３結合体—力の型の３結合体。最小の物質組織から最大の物質組織まで、それは、小究極子、燃える星、または渦巻く星雲、中央、あるいは超宇宙でさえあることにかかわらず、いつも３結合体の機能に由来するこの物理的な型—宇宙構成—である。

104:4.10 (1148.9) 1. 父-息子

104:4.11 (1148.10) 2. 楽園の小島

104:4.12 (1148.11) 3. 連合活動者

104:4.13 (1148.12) エネルギーは、第三根源と中枢の宇宙代行者により組織される。エネルギーは、楽園の型、絶対の具体化に基づいて作成される。しかし、この絶え間ない操作のすべての後に、その結合が、無限の精霊、結合活動者の誕生に伴うハヴォーナの同時の出現における楽園の型を最初に起動させた父-息子の存在がある。

104:4.14 (1148.13) 宗教経験において、被創造者は、愛である神に接触するが、そのような精神的洞察は、楽園である事実の宇宙の型の知的認識を決しておおい隠してはいけない。楽園の人格は、神性の愛の無視できない力によって

すべての被創造者の自由意志の崇敬を得て、そのような精神生まれのすべての人格を神の終局者の息子の果てしない奉仕からの天上の喜びに導く。第二の３結合体は、これらの事象が展開する空間舞台の建築家である。それは、宇宙構成の型を決定する。

104:4.15 (1148.14) 愛は、第一の３結合体の神性を特徴づけるかもしれないが、型は第２の３結合体の星雲の顕示である。第一の３結合体が進化宇宙に関係するものが、第二の３結合体が発展する宇宙に関係している。型と人格は、第一根源と中枢の行為の2つの巨大な顕示である。そして、いかに理解し難くとも、それでもなお、力の型と情愛深い人格は、一つであり同じ宇宙の現実である。楽園の小島と永遠なる息子は、宇宙なる父の根源力の測り知れない自然の調和はしているものの正反対の顕示である。

104:4.16 (1149.1) 第三の３結合体—精霊-進化の３結合体。精霊的な顕現の全体のその始まりと終わりがこの繋がりにある。次なるものを有して。

104:4.17 (1149.2) 1. 宇宙なる父

104:4.18 (1149.3) 2. 息子-精霊。

104:4.19 (1149.4) 3. 神格絶対者

104:4.20 (1149.5) 精霊の可能性から楽園の精霊まで、すべての精霊は、父の純粋な精霊本質のこの三位一体の繋がりに、息子-精霊の活動的な精神的価値に、そして、神格絶対者の無制限な精神の可能性において現実表現を見い出す。。精神の実存的価値は、この３結合体にそれぞれの原始の起源、完全な顕現、最終的な目標を持っている。

104:4.21 (1149.6) 父は、精神に先立って存在する。息子-精霊は、活発な創造的な精神として機能する。神格絶対者は、精神をすべて包含し、霊を超えてさえも存在している。

104:4.22 (1149.7) 第四の３結合体—エネルギー無限の３結合体。この３結合体の中で、空間からモノタまでの総てのエネルギー現実の始まりと終結末を永遠化する。この集団は、次を包含する。

104:4.23 (1149.8) 1.父-精霊

104:4.24 (1149.9) 2.楽園の小島

104:4.25 (1149.10) 3. 無条件絶対

104:4.26 (1149.11) 楽園は、宇宙の原動力-エネルギー起動の中心—第一根源と中枢の宇宙の位置、無条件の絶対の宇宙の焦点、および総エネルギーの源—である。この3結合体の中に実存的に存在しているのは、壮大な宇宙と主たる宇宙が部分的な顕現に過ぎない宇宙無限のエネルギーの可能性である。

104:4.27 (1149.12) 第四の3結合体は、絶対的に宇宙エネルギーの基本単位を支配し、変化している宇宙を管理し、安定させる準絶対的能力の経験の神格における出現に正比例して無条件の絶対の握りから開放する。

104:4.28 (1149.13) この3結合体は、原始力とエネルギーである。無条件絶対者の無限の可能性は、楽園の小島の絶対的物質の周りに集中しており、無条件のそれ以外は、静的休止の想像もおよばない揺れを発散している。そして、無限宇宙の楽園の物質の中心の絶え間ない鼓動は、

無限の活性者、第一根源と中枢の測り難い型と探り当てられない計画と調和して脈打っている。

104:4.29 (1149.14) 第四の3結合体—反応無限の3結合体。この繋がりは次から成る。

104:4.30 (1149.15) 1. 宇宙なる父

104:4.31 (1149.16) 2. 宇宙の絶対

104:4.32 (1149.17) 3. 無条件絶対

104:4.33 (1149.18) この集団は、非神格現実の領域内で実現可能であるすべての機能的な無限の実現の永遠化をもたらす。この3結合体は、他の3結合体の意志、原因、緊張、そして型の行動と臨場への無制限の反応能力を明らかにする。

104:4.34 (1150.1) 第六の3結合体—宇宙的に関連している神格の3結合体。この集団は次から成る。

104:4.35 (1150.2) 1. 宇宙なる父

104:4.36 (1150.3) 2. 神格絶対者

104:4.37 (1150.4) 3. 宇宙の絶対者

104:4.38 (1150.5) これは、宇宙の中の神格、すなわち神格の超越と連携した神格の内在、の関係である。これは、神性化された現実の領域の外にあるそれらの現実に向けての無限の段階における神性の最後の援助活動である。

104:4.39 (1150.6) 第七の 3 結合体—無限の統一の 3 結合体。これは、時と永遠における、現実と永遠の調和の統一における機能上明白な無限の統一である。この集団は次から成る。

104:4.40 (1150.7) 1. 宇宙なる父

104:4.41 (1150.8) 2. 結合活動者

104:4.42 (1150.9) 3. 宇宙の絶対者

104:4.43 (1150.10) 結合活動者は、有限から超自然までの顕現の全段階における顕在化されたすべての現実の異なる機能的な局面をあまねく統合する。宇宙絶対は、活動的-意志の、また原因となる神格現実の限りない可能性から無条件絶対の理解不可能な領域における静的、反応的、非

神格の無限の可能性までのすべての不完全な現実の異なる局面において固有の差異を完全に補正する。

104:4.44 (1150.11) 結合活動者と宇宙絶対者は、この３結合体において機能するように、神格に、そして非神格の臨場に対し同様に反応し、またこの関係においてどの点から見ても私はあるからは概念的に見分けのつかない第一根源と中枢もまた同様に反応する。

104:4.45 (1150.12) これらの近似は、３結合体の概念を解明するには十分である。人は、３結合体の究極段階を知ることなく、最初の７組を完全に理解することはできない。これ以上の詳述の試みが賢明であるとは考えないが、我々は、第一根源と中枢の15組の３結合体の繋がりがあると述べることができ、そのうちの８組は、これらの論文では明かされていない。こ明かされていないれらの繋がりは、至高の経験的段階を超えてある現実、実在、および可能性に関係がある。

104:4.46 (1150.13) ３結合体は、無限の機能的なはずみ車、つまり無限の七絶対者の独自性の統一である。7絶対者への無限の多様化にもかかわらず、機能的な無限の統一を経

験することは、父-私はあるを可能にする３結合体の実存的な存在である。第一根源と中枢は、統一されるすべての３結合体の構成員である。万物は、彼にあるすべて事物は、それぞれの無条件の始まり、永遠の存在、無限の運命があり、「万物は彼にあって成り立っている。」

104:4.47 (1150.14) これらの繋がりは、父-私はあるの無限を増大することはできないとはいえ、それらは、実にその現実の準無限と準-絶対の顕示を可能にするように見える。七つの３結合体は、多様性を拡大し、新たな深さを永遠化し、新価値を神格化し、新価値を明らかにし、新たな意味を浮き彫りにする。そして、時と空間における、また永遠の宇宙におけるこれらのすべての様々な顕現は、私はあるの最初の無限の仮定的停滞で存在する。

5. 三名組み

104:5.1 (1151.1) 構成上は父を含まない特定の３結合体の関係があるが、それらは、真の３結合体ではなく父の３結合体とは常に区別される。それらは、準３結合体、調和の３結合体、3名組みとさまざまに呼ばれている。それら

は、３結合体の存在の結果である。これらの繋がりのうち2組は次のように構成される。

104:5.2 (1151.2) 現実の3人組。この3人組は3名の絶対実存の相互関係で成る。

104:5.3 (1151.3) 1. 永遠なる息子

104:5.4 (1151.4) 2. 楽園の小島

104:5.5 (1151.5) 3. 結合活動者

104:5.6 (1151.6) 永遠なる息子は、精神現実の絶対者、つまり絶対人格である。楽園小島は、宇宙現実の絶対、つまり絶対の型である。結合活動者は、心の現実の絶対者、精神の絶対現実の調和、そして人格と力の実存的な神格の統合である。この３結合体の繋がりは、顕在化された現実の総和の調和—精神の、宇宙の、または心の現実—に終わる。それは実際には無条件である。

104:5.7 (1151.7) 可能性の3人組。この3人組は、可能性の3絶対者の繋がりにある。

104:5.8 (1151.8) 1. 神格絶対者

104:5.9 (1151.9) 2. 宇宙の絶対者

104:5.10 (1151.10) 3. 無条件絶対者

104:5.11 (1151.11) すべての潜在的エネルギーの—精霊の、心の、宇宙の—現実の無限の貯蔵所は、このように、相互に繋がっているのである。この繋がりは、すべての潜在的エネルギー現実の統合をもたらす。それは可能性において無限である。

104:5.12 (1151.12) 3結合体が、主として無限の機能的な統一に関係があり、三人組も、ちょうど同じように経験的神格の宇宙の実現に関与している。3結合体は間接的に関係があるが、三人組は、経験的神性に直接的に関係がある。—崇高の、究極の、絶対の経験的神格。彼らは、崇高なるものの新興の力-人格の統合に現れる。そして、空間の時間の生物にとって崇高なるものは、私はあるの統一の顕示である。

104:5.13 (1151.13) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 105
神格と現実

105:0.1 (1152.1) 宇宙の有識者の高位集団にとってさえ、無限は、ただ部分的に理解できるのであり、また、現実の終局性は、相対的に理解できるに過ぎない。人間の心は、本当であると言われるすべての起源と未来の目標の永遠-神秘を理解しようとするとき、一つの絶対的原因によって生み出され、また、無限の多様化のこの宇宙循環によって機能し、未来の目標の何らかの絶対、かつ無限の可能性をずっと求めているほとんど無限の楕円として永遠-無限を発想することにより問題への助けとして近づくかもしれない。

105:0.2 (1152.2) 人間の知性が、現実全体の概念を理解つかもうとするとき、そのような有限の心は、無限の現実と直面する。現実全体は、無限であり、したがって概念的容量において準無限であるいかなる心によっても、決して完全に理解されることはない。

105:0.3 (1152.3) 人間の心は、永遠生存の十分な概念をほとんど形成できないし、また、そのような理解なくしては現実全体の我々の概念さえ描くことは不可能である。それでもやはり、我々の概念は、人間の心の理解の段階への翻

訳-変更中に、深刻な曲解を免れないことを百も承知をしているが、我々は、そのような提示を試みるのである。

1. 私はあるの哲学的概念

105:1.1 (1152.4) 宇宙の哲学者は、宇宙なる父が、無限の、永遠の、そして絶対の私はあるとして機能している無限における絶対第一の原因であると断定する。

105:1.2 (1152.5) この概念は、意味の重大な歪みと価値の誤解をもたらすほどに、人間の経験上の理解からは甚だかけ離れていることから、提示に付随する多くの危険的要素が、無限の私はあるに関するこの考えの人間の知力にはある。にもかかわらず、私はあるの哲学的概念は、有限存在体に絶対の起源と無限の目標の部分的な理解への企てた接近に何らかの根拠を提供する。しかし、すべての人格的意味と価値において神格の第一人格と同義である私はあるのこの概念は、現実の創始と結実を明らかにする我々のすべての試みにおいて、すべての人格の宇宙なる父と同義であるということを明確にさせなさい。しか

し、私はあるのこの公理は、宇宙の現実の非神格化の領域においてはそれほど明確に特定可能ではない。

105:1.3 (1152.6) 私はあるは無限者である。私はあるは無限でもある。連続的、かつ時間的観点から、すべての現実は、過去の無限の永遠におけるその孤独な存在が、有限の生物の最初の哲学的仮な仮定でなければならない無限の私はあるにその起源がある。私はあるの概念は、無条件の無限、つまりこれまでにすべてが無限の永遠でありえたすべての未分化の現実を暗示している。

105:1.4 (1153.1) 私はあるは、実存的な概念として神格化も非神格化もされておらず、現実性でも可能性でもなく、人格的でも非人格的でもなく、また静的でも動的でもない。私はあるということを述べる以外、何の限定も無限者に適用されることはできない。私はあるに関する哲学的な仮定は、無条件絶対者のそれよりもいくらか理解し難い宇宙概念である。

105:1.5 (1153.2) 有限の心には始まりとういうものが、単純になければならないのだが、現実には決して本当の始まりはなく、依然として現実が無限に明らかにする特定の起源

の関係がある。前現実の、根本の永遠の状況は、次のように考えられるかもしれない。一種の無限に遠く、仮定的、過去-永遠の瞬間に、私はあるは、ものして、またものとしてではない双方として、つまり原因と結果の双方として、意志と応答の双方として考えることができる。この永遠の仮定的な瞬間に、すべての無限を通して何の区別もない。無限は、無限によって満たされる。無限者は無限を含む。これは永遠の静止の瞬間である。現実は、それぞれの可能性の中にまだ包含されており、可能性は、まだ私はあるの無限の中に現れていない。しかし、この推測された状況でさえ、我々は自己-意志の可能性の存在を前提条件としなければならない。

105:1.6 (1153.3) 宇宙の父に対する人の理解は、個人的経験であるということをずっと覚えていなさい。神は、あなたの精神の父として、あなたに、そして他のすべての死すべき者にとって理解できる。しかし、あなたの宇宙なる父に対する経験の、かつ信心深い概念は、第一根源と中枢、つまり私はある、の無限に対するあなたの哲学的公理よりも常に下でなければならない。父について話すとき、我々は、彼の創造である高等と下等の両方の生き物

が理解できるような神を指しているが、宇宙生物には理解できない神格についてさらに多くのことがここにある。あなたの父であり私の父である神は、我々が、実際の経験の現実としての人格に知覚する無限者のその局面であるが、私はあるは、我々が、いつも第一根源と中枢について知り得ないと感じるすべての我々の仮説のままである。そして、その仮説でさえ、おそらくは本来の現実の底知れない無限にははるかに及ばないのである。

105:1.7 (1153.4) しかし、宇宙の中の宇宙は、その無数の居住する人格集団とともに、広大で複雑な有機体であるが、第一根源と中枢は、その意図的な命令に応じて現実になった宇宙と人格よりもはるかに複雑である。あなたが主たる宇宙の大きさの畏敬の中に立つとき、この思いもよらない創造でさえ無限者の部分的顕示でしかないと考えるために立ち止まって注意を払いなさい。

105:1.8 (1153.5) 無限は、人間の理解の経験段階からは本当に掛け離れてはいるが、ユランチアのこの時代にさえ無限についてのあなたの概念は拡大しており、それは、将来の永遠へと伸び続けるあなたの無限の経歴の中で成長し続

けるであろう。無条件の無限は、有限の生物には無意味であるが、無限は、自己制限ができ、宇宙生存のすべての段階に現実表現が可能である。そして、無限者がすべての宇宙人格に向ける顔は、父の顔、愛の宇宙の父である。

2. 三位一体としての、また七重としての私はある

105:2.1 (1153.6) 現実の起源を考慮する際、すべての絶対現実は、永遠からあり、またその存在の始まりは無しであるということを心に留め置きなさい。我々は、３神格の実存的人格、楽園の小島、そして３絶対者を絶対の現実によって言及する。我々は、人間にかれらの連続した起源を提示する際に時間宇宙の言語を用いるにもかかわらず、これらの７現実は、対等に永遠である。

105:2.2 (1154.1) 現実の起源の年代順の描写に続き際、「最初の」意志表現と「最初の」波及的反応の仮定された理論的な瞬間が、私はあるの中になければならない。現実の起源と発生を描写する我々の試みにおいて、この段階は、無限からの無限なる者の自己分化として着想されるかもしれないが、この二元的関係の公理は、つねに私はあるの

無限者の永遠の連続についての認識によって三位一体概念に拡大されなければならない。

105:2.3 (1154.2) 私はあるのこの自己変化は、神格化現実と非神格化現実、潜在的かつ実際の現実、それにほとんどそのようには分類できない他の特定の現実の多重分化に達する。理論上の一元的な私はあるのこの分化は、同じ私はある—前可能性、前現実性、前人格性、一神の前現実性—の中に起こる同時の関係によって永遠に統合される。前現実性は、無限ではあるが、第一根源と中枢の臨場における絶対として、また、宇宙なる父の限りない愛における人格として明らかにされる。

105:2.4 (1154.3) これらの内部の変化により、私はあるは、7重の自己関係のための基礎を確立している。単独の私はあるの哲学的(時間の)概念と渦渡的(時間の)概念は、三位一体としての私はあるを七重としての私はあるへと、いま拡大されることができる。この七重の—あるいは7局面の—性質は、無限の七絶対者とからめて最も良く示されるかもしれない。

105:2.5 (1154.4) 1．宇宙なる父。永遠なる息子の父としての私はある。これは現実の第一の人格関係である。息子の絶対の人格は、神の父性の事実を絶対にし、すべての人格の潜在的息子権を設立する。この関係は、無限者の人格を確立し、最初の息子の人格におけるその精神的顕示を達成する。私はあるのこの局面は、我々の父を崇拝するかもしれない生身の人間によってさえ精神的な段階において部分的に経験可能である。

105:2.6 (1154.5) 2. 宇宙統制者。永遠の楽園の源である私はある。これは、現実の第一の非個人的な関係、本来の非精神的つながりである。宇宙なる父は、愛としての神である。宇宙統制者は型としての神である。この関係は、形態—構成—の可能性を確立し、非個人的、また非精神的な関係の主な型—すべての摸写が作られる中心的な型—を決定する。

105:2.7 (1154.6) 3. 宇宙なる創造者。永遠なる息子とともにいるものとしての私はある。父と息子のこの結合(楽園の臨場における)は、創造的周期を始動し、そして、それは、結合している人格と永遠の宇宙の出現において完成

される。有限である人間の観点から、現実は、ハヴォーナ創造の永遠の出現に伴うその真の始まりがある。神格のこの創造的活動は、実際のすべての段階に明らかにされる本質的には父-息子の統一である活動の神により、また活動の神を通してある。したがって、神の創造性は、統一によって絶えず特徴づけられ、また、この統一は、父-息子の二重性と父-息子-聖霊の三位一体の絶対同一性の外への表現である。

105:2.8 (1155.1) 4. 無限の支持者。自己結合の私はある。これは、現実の静止と可能性の根本的なつながりである。この関係ではすべての特性と無特性は補填される。私はあるのこの局面は、宇宙なる絶対者—神格と無条件絶対者の統一者—として最もよく理解されている。

105:2.9 (1155.2) 5. 無限の可能性。自己特性の私はある。これは、３重の自己表現と自己顕示が達成された私はあるの永遠の意志の自己制限を証明している無限の基準である。私はあるのこの局面は、通常、神格絶対者として理解されている。

105:2.10 (1155.3) 6. 無限の可能性。静的に反応している私はある。これは、無限の母体、すべての将来の宇宙拡大のための可能性である。私はあるのこの局面は、恐らく無条件絶対者の超重力存在として発想するのが最も良い。

105:2.11 1155.4) 7. 無限の宇宙なるもの。私はあるとしての私はある。これは、停滞の、もしくは無限の自己関係、つまり無限-現実の永遠の事実と現実-無限の宇宙の真実である。この関係が人格として認識できる限り、それは、全人格の—絶対の人格のさえ—神性の父の中の宇宙に明らかにされる。この関係が非個人的に表現できる限り、それは、宇宙なる父の面前で純粋なエネルギーと精神の絶対的結合として宇宙による接触がある。この関係が絶対的なものとして考えられる限り、それは、第一根源と中枢の優越性で明らかにされる。彼において、空間の生物から楽園の住民までの皆は、生き、動き、存在している。そして、これは、主たる宇宙にとって真実であるように、微小の非妥協的態度にとっても同様で、今そうであり、かつてそうであり、やがてはそうなるものについても同じである。

3. 無限の七絶対者

105:3.1 (1155.5) 私はあるの中の主要な関係は、無限の七絶対者として永遠化する。しかし、我々は、連続した物語によって現実の起源と無限分化を描くかもしれないが、実際すべての7絶対者は、無条件に、かつ対等に永遠である。人間の心にとり自分達の始まりを想像することは必要であるかもしれないが、つねにこの概念は、7絶対者には始まりがないという認識により影が薄くされなければならない。かれらは、永遠であり、いつもそういうものであった。7絶対者は、現実の前提である。かれらは、これらの論文で次のように説明された。

105:3.2 (1155.6) 1. 第一根源と中枢。神格の第一人格、そして第一の非神格の型、神、宇宙なる父、創造者、統制者、および支持者。宇宙の愛、永遠の精神、無限のエネルギー。すべての可能性の可能性とすべての現実の源。すべての静止の安定性とすべての変化の活力。型の源と人格の父。集合的に、すべての7絶対者は、無限に同等であるが、宇宙なる父自身が、実際には無限である。

105:3.3 (1155.7) 2. 第二根源と中枢。神格の第二人格、永遠の、第一の息子。私はあるの絶対人格現実と「私はあるの人

格」の認識-顕示のための基礎。いかなる人格も、その永遠なる息子を介する以外には宇宙なる父に達することを望むことはできない。人格もまたすべての人格のためのこの絶対のひな型の行動と援助を切り離しては、存在の精神水準に達し得ない。第二根源と中枢においては、人格は絶対であるが、精霊は無条件である。

105:3.4 (1156.1) 3. 楽園の根源と中枢。第2の非神格の型、楽園の永遠の小島。「私はあるの力」の実現-顕示の根拠と宇宙を通した重力支配の確立のための基盤。すべての現実化され、非精霊の、非人格の、無意志の現実に関し、楽園は、型の絶対的存在である。ちょうど精霊エネルギーが母-息子の絶対人格を通して宇宙なる父と関係があるように、すべての宇宙エネルギーは、楽園の小島の絶対の型を通して第一根源と中枢の重力支配において把握される。楽園は空間にはない。空間は楽園に比例して存在し、運動の持続は、楽園との関係を通して決定される。永遠の小島はまったく静止している。他のすべての組織化されたり組織化しているエネルギーは、永遠の運動の中にある。すべての空間では、無条件絶対の存在だけが平穏であり、無条件は、楽園と対等である。楽園は空間

の中心に存在し、無条件はそれに充満し、すべての相対的存在がこの領域内に存在する。

105:3.5 (1156.2) 4. 第三根源と中枢。神格の第三人格、結合活動者。楽園の宇宙エネルギーと永遠なる息子の精霊エネルギーの無限の統合者。意志の動機と根源力の仕組みの完全なまとめ役。すべての現実の、また、現実化しつつある現実の統一者。無限なる精霊は、同時に無限の操縦者として機能するとともに、その様々な子供の世話を通して、空間のエネルギーに楽園の型を絶えず織り込み、永遠なる息子の慈悲を顕示する。この同一の結合活動者、つまりこの活動の神は、父-息子の限りない計画と目的の完全な表現である。同時に結合活動者自身は、心の源、それに広範囲の宇宙の生物に知力を授ける働きをする。

105:3.6 (1156.3) 5. 神格絶対者。宇宙の現実、すべての神格の可能性の全体の原因となる可能性、潜在的に個人の可能性。神性絶対者は、無条件の、絶対の、また非神格の現実の目的ある指定者である。神性絶対者は、絶対の条件者と条件者の絶対化をする者である—目標始動者。

105:3.7 (1156.4) 6. 無条件絶対者。静的、反作用的、休止的。私はあるの非顕示の宇宙の無限性。非神格化の現実全体と非人格のすべての可能性の究極性。空間は、無特性の機能を制限するが、無特性の臨場には限界がない、すなわち無限である。主たる宇宙には概念上の外周があるが、無特性の臨場は無限である。永遠でさえもこの非神格絶対者の果てしない静止を使い果たすことはできない。

105:3.8 (1156.5) 7. 宇宙なる絶対者。神格化と非神格化の統一。絶対と相対の相互関連体。宇宙なる絶対者(静的、潜在的、連合的)は、絶えず存在するものと未完のものの間の緊張を埋め合わせる。

105:3.9 (1156.6) 無限の七絶対者は、現実の始まりを構成する。人間の心がそれに注目するであろうという点で、第一根源と中枢は、すべての絶対的なもに先立つように見えるであろう。しかし、そのような公理は、いかに役立とうとも、息子、精霊、３絶対者、および楽園小島の永遠共存により無効にされる。

105:3.10 (1157.1) 絶対者が、私はある-第一根源と中枢の顕現であるということは真実である。これらの絶対者には決し

て始まりがないが、第一根源と中枢との調和した永遠であるということは事実である。永遠における絶対的なものの関係は、時間の言葉と空間の概念の型における矛盾を巻込むことなくして、必ずしも提示することができるというわけではない。しかし、無限の七絶対者の起源に関するいかなる混乱にも関係なく、すべての現実は、その永遠存在と無限関係に基づくことは、事実でもあり真実でもある。

4. 統一性、二重性、および三重性

105:4.1 (1157.2) 宇宙の哲学者は、すべての現実の第一の源として私はあるの永遠の存在を仮定する。それに伴ってかれらは、第一の自己関係—無限の7局面—への私はあるの自己分割を前提とする、仮定する。そして、同時にこの想定は、3番目の前提—無限の七絶対者の永遠の出現と私はあるとこれらの7絶対者の7局面の二重性のつながりの永遠化—である。

105:4.2 (1157.3) 私はあるの自己顕示は、このようにして静的自己から自己分割と自己関係を経て絶対関係、すなわち自己からの派生の絶対者との関係へと進む。二重性は、そ

の結果、無限の七絶対者と私はあるの自己分割の局面である七重の無限との永遠のつながりにおいて存在するようになる。7絶対者として宇宙を不滅にするこれらの二元的関係は、全宇宙現実のために基本的土台を永遠化する。

105:4.3 (1157.4) 統一は、二重性を生み出すということ、二重性は、三重性を生み出ということ、そして三重性は、万物の永遠の先祖であるということは、以前述べられた。いかにも、重大な3種類の根本的関係があり、それらは次の通りである。

105:4.4 (1157.5) 1. 統一関係。その統一として私はあるの中に存在する関係は、３重として、そして、７重の自己分化として考えられる。

105:4.5 (1157.6) 2. 二重関係。7重としての私はあると無限の七絶対者の間に存在する関係。

105:4.6 (1157.7) 3. 三重関係。これらは無限の七絶対者の機能的なつながりである。

105:4.7 (1157.8) 三重関係は、絶対なるものの相互関係の必然性から二重性の土台に起こる。そのような三重性は、すべての現実の可能性を不滅にする。それらは、神格化された現実と非神格化された現実を包含する。

105:4.8 (1157.9) 私はあるは、統一として絶対的無限である。二重性は、現実の土台を永遠化する。三重性は、宇宙の機能としての無限の実現をもたらす。

105:4.9 (1157.10) 前-実存は、７絶対者に実存するようになり、実存は三重性、すなわち絶対者の基本的なつながりにおいて機能的になる。三重性の永遠化と同時に、宇宙舞台が、設定され—可能性は存在し、現実は臨場しており—そして永遠の充満は、宇宙エネルギーの多様化、楽園の精霊の広がり、そして人格の贈与と同時に心の授与を目撃する。その長所によって、これらの神格と楽園の派生物のすべては、生物段階における経験において、そして超生物段階の他の方法により統合される。

5. 有限現実の普及

105:5.1 (1158.1) 私はあるの最初の多様性が、生来の、かつ自己の内なる意志によるものでなければならないのと同様

に、有限現実の普及は、楽園の神格の意志行為にあり、機能的な三重性の反応的な調整にあるとされなければならない。

105:5.2 (1158.2) 有限の神格化の前に、現実多様化のすべては、絶対段階で起こったように見えるかもしれない。しかし、有限現実を広める意志行為は、絶対性の制限を暗示し、かつ関連性の様子を意味する。

105:5.3 (1158.3) 我々はこの物語を連続するものとして提示し、絶対不変の直接の派生物として有限の歴史の様子を描く間、超絶的なもののが、有限であるすべてに先行し、または引き継ぐものの双方が心に留め置かれるべきである。超絶的な究極なるものは、有限に関しては原因でもあり、成就でもある。

105:5.4 (1158.4) 有限の可能性は、無限者に固有であるが、可能性と必然性への確率変容は、三重性のつながり全てを起動させている第一根源と中枢の独立的自存の自由意志に起因していなければならない。父の意志の無限性だけが、究極をもたらすか、または有限を作り存在の絶対段階を条件づけることができた。

105:5.5 (1158.5) 相対的かつ限定された現実の出現とともに、無限の高さから有限の領域への下方向きの堂々たる一掃、すなわち、つねに無限の源に相応したそれらの高い目標を求め、楽園と神格への内向きへの永遠にゆれる現実の新周期—成長周期—が生まれる。

105:5.6 (1158.6) これらの想像もつかないやり取りは宇宙史の始まりを記す、つまり、時間それ自体の生まれることを記す。有限の始まりは、被創造物にとっては、現実の起源である。被創造物の心によりみられるように、有限なるものに先立ってはいかなる現実性も考えられない。この新たに現れている有限の現実は、本来の2局面に存在している。

105:5.7 (1158.7) 1. 第一の最大限、この上なく完全な現実、宇宙と被創造物のハヴォーナの型。

105:5.8 (1158.8) 2. 第二の最大限、この上なく完成された現実、被創造物と創造の超宇宙の型。

105:5.9 (1158.9) これらは、その結果、2つの最初の顕現である。本質的に、完全であり、進化的に完成されたもの。

2者は、永遠の関係において対等であるが、時間の範囲内においては、一見異なっている。時間の要素は、成長するものにとり成長を意味する。二次的有限体は成長する。したがって、成長しているそれらは、時の領域においては必ず不完全に見える。しかし、楽園のこちら側においては非常に重要であるこれらの違いは、永遠においては実在しない。

105:5.10 (1158.10) 我々は第一の最大限を完全なもの、また第二の最大限を完成されたものとして話すが、さらにもう一つの型がある。第一次と第二次間の3結合体化と他の関係は、第三の最大限—いまだ完全でも、また完成もされていないが、両方の先祖の要素と同等である事象、意味、価値—の出現をもたらす。

6. 有限現実の波及

105:6.1 (1159.1) 有限生存の発布全体は、機能的な無限の絶対的つながりにおける可能性から現実への移転を表す。有限の創造的実現への多くの影響のうち、次のようなことが挙げられるかもしれない。

105:6.2 (1159.2) 神格反応、経験的な至高の3段階の出現。ハヴォーナの個人の精霊の至高の現実性、将来の壮大な宇宙における個人の力の至高への可能性、そして、未来の主たる宇宙における至高の何らかの段階における心の経験的行為の何らかの未知の機能の可能性。

105:6.3 (1159.3) 2. 宇宙の反応は、超宇宙空間の段階の構造上の計画の起動を必要とし、この進化は、7超宇宙の物理的組織化を通してまだ進行している。

105:6.4 (1159.4) 3. 有限現実普及への被創造物の波及は、ハヴォーナの永遠の住民のような、そして完成された存在体と７超宇宙からの完成された進化の上昇者のような系列を登場させた。しかし、進化的(時間-創造的)経験として完全性に到達するということは、出発点としての完全性以外の何かを含意する。そうして、進化の創造における不完全が起こる。そして、これは、潜在的悪の起源である。不適合、不調和、闘争、このすべては、物理的宇宙から個人の生物までの進化の成長に固有である。

105:6.5 (1159.5) 4.進化の時間のずれにおける固有の欠点への神性の対応は、その活動により完成しているものが、完全

なものと完成されたものの両方に一体化される７重の神の埋め合わせの存在に明らかにされる。この時間のずれは、時間においては創造である進化と切り離すことはできない。それが故に、もちろん他の理由からも、崇高なるものの全能の力は、七重の神の神性の成功に基づいている。この時間のずれは、被創造物の人格が最大の発展の到達における神格の共同者になることを可能にすることによって神の創造への被創造物の参加を可能にする。必滅の被創造物の物質的な心さえ、このように不滅の魂の二重化における神性思考調整者の協力者になる。七重の神も、不完全の上昇前の制限を補填すると同時に、本来備わっている完全性の経験の制限の補償方法も提供する。

7. 超自然なるものの結果

105:7.1 (1159.6) 超自然なるものは準無限であり準絶対であるにもかかわらず、超有限であり超生物である。超自然なるものは、超価値なものを有限の最大価値に関連づける統合段階として発展する。被創造物の見地からは、超自然なるものは有限の結果としてもたらされたように見え、永遠なるものの観点からは、有限の予想においてもたさ

れ、また、それを有限の「前-反響」と考えた者達がいる。

105:7.2 (1159.7) 超自然なるものは必ずしも無進化であるというわけではないが、有限者の意味においては超進化的である。いずれも非経験的ではないが、それは、被創造物にとり重要なものとして、超経験である。恐らくそのような矛盾して見える最高の実例は、完全性の中央宇宙である。それは決して絶対ではない—楽園の小島だけが、「実現されている」点において真に絶対である。どちらも、7超宇宙である有限進化の創造ではない。ハヴォーナは永遠であるが、非成長の宇宙であるという意味において不変ではない。それは、決して実際には創造されなかった被創造物(ハヴォーナの住民)が生息する、なぜなら彼らは、永遠に存在するので。ハヴォーナは、厳密に有限でもなく、まだ絶対でもない何かをこのように例示する。ハヴォーナは、さらに絶対の楽園と有限創造の間において緩衝器の役割りを果たし、またさらに超自然なるものの機能を例証する。しかし、ハヴォーナ自身は、超自然なるものでない—それはハヴォーナである。

105:7.3 (1160.1) 崇高なるものは、有限と関連しており、究極なるものは、超自然なるものと同一視される。我々は、このように崇高なるものと究極なるものを比較するが、それらは度合だけではなく何かで異なっている。違いは、特質の問題でもある。究極なるものは、超自然段階に写し出される超-崇高なるもの以上の何かである。究極なるものは、そのすべてであり、しかもそれ以上である。究極なるものは、それ以前は無条件のものの新段階である新しい神格現実の結果である。

105:7.4 (1160.2) 超自然なるものの段階に関連づけられるそれらの現実の中には次のようなものがある。

105:7.5 (1160.3) 1. 究極なるものの神格の存在

105:7.6 (1160.4) 2. 主たる宇宙の概念

105:7.7 (1160.5) 3. 主たる宇宙の建築家

105:7.8 (1160.6) 4. 楽園の根源力に関する2系列の組織者

105:7.9 (1160.7) 5. 空間潜在力の特定の変更

105:7.10 (1160.8) 6. 精霊の特定の価値

105:7.11 (1160.9) 7. 心の特定の意味

105:7.12 (1160.10) 8. 準絶対有限の資質と現実

105:7.13 (1160.11) 9. 全能、全知、遍在

105:7.14 (1160.12) 10. 空間

105:7.15 (1160.13) 我々が現在住んでいる宇宙は有限で、超自然で、かつ絶対の段階に存在すると考えることができる。これは、人格による演技とエネルギー変化の無限の劇作が演じられる宇宙の舞台である。

105:7.16 (1160.14) そして、これらの多種多様の現実の全ては、いくつかの三重性によって絶対的に、主たる宇宙の建築家によって機能的に、また主たる7精霊、すなわち七重の神の準崇高なまとめ役によって相対的に統一される。

105:7.17 (1160.15) 七重の神は、最大かつ準最大の状態の双方の被創造物に宇宙なる父の人格と神性顕示を表すが、精霊である神の神性の精霊活動の顕現に属さない第一根源と中枢の他の七重の関係がある。

105:7.18 (1160.16) 過去の永遠における絶対なる者の根源力、神性の精霊、および神の人格は、自立自存の自己-意志の根本的な自己-意志に応じてかすかに動いた。この宇宙時代に、我々は皆、すべてのこれらの現実の無限の可能性の準絶対的顕現の広範囲の宇宙全景のすばらしい波及を目撃している。そして、第一根源と中枢の最初の現実の継続的な多様化が、時代時代を経て前方へと外部へと、引き続き、遠く、想像もつかない絶対無限の広がりに続くかもしれないということは、全く可能である。

105:7.19 (1161.1) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 106
現実の宇宙段階

106:0.1 (1162.1) 上昇する死すべき者は、宇宙現実の起源と顕示への神格の関係についての何かを知るだけでは十分ではない。死すべき者は、自分自身と実存的かつ経験的現実間の、つまり潜在的かつ実際の現実の、多数の段階に存在する関係についても何かを理解するべきである。人の地球での位置付け、その宇宙洞察、その精神的な方向付けのすべては、宇宙現実のより良い理解と相互のつながり、統合、統一の方法によって強化される。

106:0.2 (1162.2) 現在の壮大な宇宙と現れつつある主たる宇宙は、それはそれで機能的な活動のいくつかの段階にある現実の多くの形式と局面で作り上げられる。これらの多種多様の存在するものと潜伏するものは、以前にこれらの論文に示されてきており、それらは今、概念上の便宜のために次の範疇に集められる。

106:0.3 (1162.3) 1. 不完全な無限者。これは、壮大な宇宙の上昇している被創造者の現況、すなわちユランチアの必滅の現況である。この段階は、惑星の人間から未来の目標到達者までの、だがそれを含まない、被創造の存在を包含する。それは、初期の物理的な始まりから光と命の定着までの、だがそれを含まない、宇宙に関係する。この段階は、時空間における現在の創造的活動の周辺を構成する。光と命の壮大な宇宙到達を目撃し、また最初の宇宙段階における発展的成長の何らかの新系列の出現を確かに目撃する現在の宇宙の時代の閉鎖ために、それは、楽園から外側に移動しているように見える。

106:0.4 (1162.4) 2. 最大の無限者。これは、未来の目標に到達したすべての経験的被創造者の現在の状況—現在の宇宙年

令の範囲内で明らかにされる未来の目標—である。宇宙でさえ、精神的にも物理的にも最大限の状態に到達し得る。しかし、「最大」という語は、それ自体が相対語である—何に関連して最大であるのか。そして、現在の宇宙時代の最大限、表面上、であるそれは、来る時代においての本当の始まりであるに過ぎないかもしれない。ハヴォーナのいくつかの局面は、最大限の段階であるように見える。

106:0.5 (1162.5) 3. 超自然なもの。この超有限段階 (先行的に) は、有限進行に続く。それは、有限の始まりの前有限の起源と、全ての見た目の有限の結末、あるいは未来の目標の後有限の重要性を意味する。楽園-ハヴォーナの多くは、超自然なるものの段階にあるように見える。

106:0.6 (1162.6) 4. 究極なもの。この段階は、主なる宇宙の意味をもつものを包含し、完成された主たる宇宙の未来の目標段階に影響を与える。楽園-ハヴォーナ (特に父の世界の回路) は、多くの点で究極の意味をもつ。

106:0.7 (1163.1) 5. 共同絶対なもの。この段階は、創造的な表現の超-主たる宇宙の領域での経験的な投射を意味する。

106:0.8 (1163.2) 6. 絶対なもの。この段階は、7実存絶対者の永遠の存在を意味する。また、それは、結合しやすい経験的到達のいくらかの度合にかかわるかもしれないが、だとすれば、我々は、恐らく人格の接触の可能性を通してはその方法を理解しない。

106:0.9 (1163.3) 7. 無限。この段階は、前実存的であり、後経験的である。無限の無特質の統一は、すべての始まり以前とすべての未来の目標後の想定的現実である。

106:0.10 (1163.4) 現実のこれらの段階は、現在の宇宙時代と人間の見解のための便利な妥協の象徴化である。人間以外の見解からの、また宇宙の他の時代の見地から現実を見るいくつかの他の方法がある。したがって、これに添えて提示される概念は、完全に相対的である、つまり、次のように条件付きにされたり、限定されるという意味で相対的であるということが認識されるべきである。

106:0.11 (1163.5) 1. 人間の言語の限界

106:0.12 (1163.6) 2. 人間の心の限界

106:0.13 (1163.7) 3. 7超宇宙の限られた発展

106:0.14 (1163.8) 4. 楽園への人間上昇に関係しない超宇宙開発の6つの主要な目的についてのあなたの不案内さ。

106:0.15 (1163.9) 5.部分的な永遠の観点さえつかめないあなたの不能さ。

106:0.16 (1163.10) 6. 単に7超宇宙の進化の展開の現代に関するだけではなく、全宇宙時代に関する宇宙進化と未来の目標について表現できないこと。

106:0.17 (1163.11) 7. いかなる創造物も、前-実存的、あるいは後-経験的なもの—始まりの前と未来の目標後に横たわるもの—が、本当に意味するということを把握できないこと。

106:0.18 (1163.12) 現実の成長は、一連の宇宙時代の情況に条件づけられる。中央宇宙は、ハヴォーナ時代に何の進化的変化もなかったが、超宇宙時代の現在に、それは、進化的超宇宙との連携により誘発されるある種の漸進的変化を被っている。現在進化している7超宇宙は、いつか光と命の定着状態に達するであろう、すなわち、現在の宇宙時代にむけての成長限界に達するであろう。しかし、

疑う余地もなく、次の時代には、最初の外部空間段階の時代には、超宇宙を現代の未来の目標制限から自由にするであろう。充満は、絶えず完成の上に重ねられている。

106:0.19 (1163.13) これらは、事物、意味、価値の宇宙規模の成長と現実の絶えず上昇する段階におけるかれらの統合の宇宙規模の成長についての統一概念を提示しようとする際に、我々が遭遇する制限のいくつかである。

1. 有限機能の第一のつながり

106:1.1 (1163.14) 有限現実の第一の局面、あるいは精霊-起源の局面は、被創造物段階では完全な人格として、宇宙段階ではハヴォーナの完全な創造として直接現れる。経験的神性でさえこのようにハヴォーナの崇高なる神の精霊に表現される。しかし、有限の二次的、進化的な時間と物質を条件とする局面は、単に成長と到達の結果として宇宙的に統合するようになる。結局、すべての二次か、完成しつつある無限者は、第一次の完全性のものと等しい段階に達することになるのであるが、そのような未来の目標は、中央の創造では本来的にはない時間の遅れ、超

宇宙の本質的特徴を前提としている。(我々は、第三の無限者の存在を知ってはいるが、その統合方法は、まだ明かされていない。)

106:1.2 (1164.1) この超宇宙の時間的ずれは、すなわち完全性到達へのこの障害は、進化的成長における創造物の参加に備えている。それは、このように創造物が、その同一の創造物の発展において創造者との連携を可能にする。そして、これらの展開する成長期間、不完全なるものは七重の神の活動を介して完全なるものに関わる。

106:1.3 (1164.2) 七重の神は、空間の進化的宇宙における楽園の神性による時間の障壁の認識を意味する。物質的生存人格というものが、楽園からいかに隔たり、空間的に深く起源があろうとも、七重の神は、不完全で、苦闘し、進化しているそのような被創造物への愛と慈悲深い真実、美、善の働きに従事してそこにいるとわかるであろう。七重の神性の聖職活動は、永遠なる息子を通して内部に向かい楽園の父へと、高齢者達を通して外に向かって宇宙の父—創造者たる息子—へと達する。

106:1.4 (1164.3) 人格的であり、精神の進行により上昇する人間は、七重の神格の個人的で精神的な神性を見つける。しかし、人格の進行に関わらない七重の他の局面がある。この神格の組分けに関係する神性の局面は、現在のところ、主たる七精霊と連合結合者との連携で統合しているが、彼らは、崇高なものの出現しつつある人格で永遠に統一される運命にある。七重の神性の他局面は、現在の宇宙時代にさまざまに統合してされているが、すべては、同様に崇高なるものに統一される運命にある。七重者は、全局面において、現在の壮大な宇宙の機能的な現実の相対的統一の源である。

2. 二次的最高有限者の統合

106:2.1 (1164.4) 七重の神が、機能的に有限の進化を調整するように、崇高なるものも、やがては未来の目標到達を統合する。崇高なるものは、壮大な宇宙発展の神格の頂点—精霊の核の周りの物理的進化と、そして包囲し、旋回している物理的進化の領域のうえの精霊の核の最終的優勢—である。そして、このすべてが人格からの指令に基づいて起こる。最高の意味における楽園の人格、宇宙の意味における創造者の人格、人間の意味における人間の人

格、頂点を極める、あるいは経験的総合的意味における崇高な人格。

106:2.2 (1164.5) 崇高なものの概念は、精霊的な人、進化の力、力-人格統合—精霊の人格との進化の力の統一、また、精霊の人格によるその支配—の異なる認識に譲らなければならない。

106:2.3 (1164.6) 精霊は、要するに、楽園からハヴォーナを経て来る。エネルギー - 物質は、外見上は空間の深層で進化し、神の創造者たる息子と連携して無限なる精霊の子供により力として組織化される。そしてこのすべてが、経験的である。それは、創造者の神性と進化する被創造物をさえ含む広範囲の生きている存在体にかかわる時間と空間における出来事である。壮大な宇宙における創造者の神性からの支配力は、時-空間の創造の進化的定着化と固定化を取り囲むために緩やかに広げており、これは、七重の神の経験的な力の開花である。それは、宇宙なる父の調整者の贈与から楽園の息子の命の贈与までの時間と空間における神性到達の全域を包み込む。これが、獲得された力、示された力、経験的力である。それ

は、楽園の神格の永遠の力、計り知れない力、実存的な力と対照を成している。

106:2.4 (1165.1) 七重の神の神性到達から生ずるこの経験的な力それ自身は、進化的創造の成し遂げられた経験的支配の全能の力としての統合—統括—により神性の密接した特質を表す。そして、この全能の力は、次には、ハヴォーナ臨場の崇高なる神の精霊人格と一体となっているハヴォーナ界の外郭地帯の水先案内の領域における精霊-人格を見つける。こうして経験的な神格は、精霊臨場と中央の創造の場に居住する神性人格を時空間の力の所産に注ぎ込むことにより長い進化の戦いを完結させる。

106:2.5 (1165.2) こうして、崇高なるものは、結局はこれらの特質に精霊の人格を注ぎ込みながら、時間と空間で進化しているすべての包括に至るのである。創造物は、人間でさえ、この厳然たる営みにおける人格の関係者であるので、そこで、彼らは、確かに、そのような進化する神格の真の子供として崇高なるものを知り、崇高なるものを認識する能力を獲得するのである。

106:2.6 (1165.3) ネバドンのマイケルは、楽園の父の楽園の完全性を共有するので、楽園の父のようなものである。このように、人間は、崇高なるものの進化的完全性を共有するので、進化する人間は、いつかは、経験的な崇高なるものとの親族関係に達するのである。

106:2.7 (1165.4) 崇高なる神は経験的である。したがって、崇高なる神は、完全に経験可能である。7絶対者の実存的な現実は、経験の手段による知覚はできない。祈り-崇拝の態度における有限の被創造物の人格だけが、父、息子、精霊の人格現実を理解することができるのである。

106:2.8 (1165.5) 崇高なるものの完成された力-人格統合の範囲内では関連することのできた幾つかの三人組みの絶対性のすべては、関連させられるであろうし、進化のこの厳然たる人格は、すべての有限の人格によって経験上達成することができ、理解できるであろう。上昇者が、精霊存在体の仮定された第7段階に到達するとき、そこで絶対性の新しい意味-価値の実現を経験し、三人組みの無限のそういうものとして、経験可能である崇高なるものにおいて準絶対的な段階で明らかにされる。しかし、最

大の発展のこれらの段階への到達は、おそらく光と命の壮大な宇宙全体の協調的定着を待ち受けるであろう。

3. 超絶的な第三の現実のつながり

106:3.1 (1165.6) 準絶対有限の建築者は、計画を執行する。崇高な創造者は、それを存在に至らせる。崇高なるものは、それが、やがては崇高な創造者によって創造されるように、それが、主たる建築者によって空間の時代に予測されるように、その豊かさを極点まで高めるであろう。

106:3.2 (1165.7) 現在の宇宙時代の間、主たる宇宙の管理調整は、主たる宇宙の建築者の機能である。だが、現在の宇宙時代終了時の全能の崇高なるものの出現は、進化する有限者が、経験的な未来の目標の第一段階に達したということを意味する。この出来事は、確かに、最初の経験的な三位一体—崇高な創造者、崇高なるもの、そして主たる宇宙の建築者の結合—の完成された機能につながるであろう。この三位一体は、主たる創造の一層の進化的統合に作用するよう目標づけられている。

106:3.3 (1166.1) 楽園の三位一体は、真に無限の1つであり、この本来の三位一体を有しない三位一体というものはあり

得ない。しかし、最初の三位一体は、絶対神格の独占的なつながりの必然性である。準絶対的なものは、この第一のつながりとは無関係であった。後に登場の、経験的な三位一体は、被創造物の人格の貢献をさえ受け入れる。確かにこれは、そこでの崇高な創造者の顔ぶれの間の主たる創造者の息子のそこでのほかならぬ臨場が、そしてこの三位一体のつながりの中で実際の、正真正銘の、創造物経験のそこからの同時の臨場を意味する三位一体の究極についての真実である。

106:3.4 (1166.2) 最初の経験的三位一体は、究極の結果の集団達成に備える。集団のつながりは、個々の能力を見込む、また、超えさえすることが可能にされる。またこれは、有限段階を超えてさえ本当である。来る時代には、つまり7超宇宙の光と命に定着後には、終局者の部隊は、三位一体の究極者に指示されるように、また崇高なるものの中で力-人格に統一されるように、疑いなく楽園神格の目的を広めていくであろう。

106:3.5 (1166.3) 過去と未来の永遠のすべての巨大な宇宙情勢を通して、我々は、宇宙なる父の理解可能な要素の拡大を

見つける。私はあるとして、我々は、完全な無限のその浸透性を哲学的に仮定するが、いかなる被創造物もそのような仮定を経験的に包含することはできない。宇宙が拡大し、また、重力と愛が、時間-組織化の空間へ届くにつれ、我々は、第一根源と中枢についてますます多くを理解することができる。我々は、重力の作用が、無特質絶対者の空間臨場に浸透しているのを観測するし、精霊の被創造物が、神格絶対者の神性臨場の中で発展し拡大しているのを探知する。宇宙と空間の進化の双方が、崇高なるものとして有限神格段階において心と経験により統一しており、究極の三位一体なるものとして先験的段階で調整している。

4. 究極の第四段階の統合

106:4.1 (1166.4) 楽園の三位一体は、確かに究極段階の意味において統合するが、自己-特性の絶対的なものとしてのこの点において機能する。経験的三位一体の究極なるものは、先験的なものとして先験的段階を統合調整する。永遠の未来において、この経験の三位一体は、統一を増大させることで、究極なる神格のもたらしつつある臨場をより起動させるであろう。

106:4.2 (1166.5) 三位一体の究極なるものは、主たる創造を調整する運命にあるが、究極な神は、主たる宇宙全体の方向づけの先験的な力-人格化である。究極なるものの完成された存在に至ることは、主たる創造の完成を含意し、またこの先験的な神格の完全な出現を暗示する。

106:4.3 (1166.6) 我々は、究極なるものの完全な出現により何が変化するのかは知らない。しかし、現在、崇高なるものが、ハヴォーナに精神的に人格的に存在しているように、究極なるものもまた、準絶対有限と超人格に存在している。あなたは、究極なるものの有資格の代表の現在の行方や機能について知らされてはいないが、その存在については知らされてきた。

106:4.4 (1167.1) 究極なる神格の出現に伴う行政の影響はともかくとして、その先験的神性の人格的価値は、この神格段階の実現における関係者であるすべての人格により経験可能になるであろう。有限の超越は、究極の到達へのみ通じ得る。究極なる神は、時と空間を超越して存在しているが、それでもなお絶対的なものとの機能的の関係の固有の能力にもかかわらず、準絶対的である。

5. 共同絶対のつながり、すなわち第5局面のつながり

106:5.1 (1167.2) 究極なるものは、まさに崇高なるものが、進化的-経験的現実の頂点であるように先験的現実の頂点である。そして、これらの2者の経験的神格の実際の出現が、第2の経験的三位一体のための基礎を築く。これが、三位一体絶対者、崇高な神の統合、究極な神、そして明らかにされていない宇宙目標の完成者である。そして、この三位一体には、可能性の絶対、—神格、宇宙、無条件、—を動かす理論上の可能性がある。しかし、この三位一体絶対者の完成された形成は、全ての主たる宇宙の進化、つまりハヴォーナから4番目の、そして一番はずれの空間段階までの進化、の完了後にだけ起こる。

106:5.2 (1167.3) これらの経験的三位一体は、経験的神性の人格特質とだけではなく、それぞれが到達した神格統一を特徴づけるすべての人格以外の特質ともまた相関関係にあることが明らかにされるべきである。この発表は、主として宇宙の統一の人格的局面に対処するものであるが、それでもなお、現在崇高なるものの進化との関係において進行中の力-人格統合に例証されているように、宇宙の中の宇宙の非人格的な局面も同様に、統一を経る運命

にあるということは本当である。崇高なるものの精霊-人格的特質は、全能なるものの力の特権からは不可分であり、双方ともに崇高なるものの心の未知の可能性によって補足される。人としての究極の神もまた、究極なる神格の人格以外の局面から離れては考えることはできない。また絶対段階における神格と無特質絶対者は、宇宙なる絶対者のいるところでは不可分であり区別がつかない。

106:5.3 (1167.4) 三位一体は、それ自体で人格ではないが、人格に背きもしていない。むしろ、三位一体は、それを取り囲み、集合的な意味において、それを非人格的機能において関連させる。その時、三位一体は、常に神格現実であり、決して人格現実ではない。1つの三位一体の人格的局面は、その個々の成員に固有であり、彼らは、個々人として、その三位一体ではない。それらは、単に集合体として三位一体である。それが三位一体というものである。しかし、常に、三位一体は、すべての包含された神格である。三位一体は神格の統一である。

106:5.4 (1167.5) 3絶対者—神格絶対者、宇宙絶対者、無特質絶対者—は、すべてが神格ではないので、三位一体ではない。神格化したものだけが三位一体になることができる。他のすべてのつながりは、三統一か三人組みである。

6. 絶対統合、または第6局面の統合

106:6.1 (1167.6) ほぼ究極的ではあるだろうが、主たる宇宙の現在の可能性は、決して絶対ではなく、我々は、準絶対宇宙の域内の絶対の意味-価値の完全な顕示を達成することは不可能であると考える。したがって、我々は、3絶対者の限りない可能性の完全な表現の着想を試みるに当たり、または、神格絶対者の現在の非個人的な段階における神絶対者の経験的人格化の視覚化の試みにおいてさえかなりの苦労に遭遇する。

106:6.2 (1168.1) 主たる宇宙の空間-舞台は、崇高なるものの実現化のために、三位一体の究極なるものの形成と完全な機能のために、究極な神の実現化のために、並びに、三位一体絶対者の開始のためにさえ適切であるように思える。しかし、この第2の経験的な三位一体の完全な機能

に関する我々の概念は、大きく広がる宇宙を超えてさえ何かを意味しているように思える。

106:6.3 (1168.2) 我々が、宇宙-無限—主たる宇宙を超えての何らかの無限の宇宙—を仮定するならば、また我々が、絶対者三位一体の最終的な成果が、行動のそのような超究極的な段階において生じると考えるならば、三位一体絶対者の完成された機能が、無限の創造における最終的表現を達成し、また、すべての可能性の絶対的な実現を完成するという推測が、そこで可能となる。現実の絶えず拡大する断片の統合とつながりは、このように関連する断片の中で、すべての現実の包含と比例した状態の絶対性に接近するであろう。

106:6.4 (1168.3) 換言して：その名が暗示するように、三位一体絶対者は、総合機能においていかにも絶対である。我々は、絶対機能が、どのように条件つきであるか、限られ、その他の点では制限された基盤を踏まえて総体的表現を実現することができるかを知らない。したがって、そのような全体機能は、無条件である (可能性を秘めている)と仮定しなければならない。また、我々は、量的

関係に関しあまり確信はないが、無条件であるものは、少なくとも質的見地からも無制限であるように見える。

106:6.5 (1168.4) しかしながら、これについて我々は確信している。実存的な楽園の三位一体は、無限であり、経験的な三位一体の究極なるものは、準無限である一方で、三位一体絶対者の分類は、それほど容易ではない。起源と形成上は経験的ではあるが、それは、可能性の実存的な絶対者にたしかに影響を与える。

106:6.6 (1168.5) 人間の心が、そのような遠く、超人的な概念を把握しようとすることはほとんど有益ではない一方で、我々は、三位一体の絶対者の永遠の活動が、可能性に関する絶対者の何らかの経験化に至ると考えられるかもしれないと提唱する。これは、宇宙絶対者、さもなければ無特質絶対者に関する合理的な結論であるように思われる。少なくとも我々は、宇宙絶対者は、静的で、潜在的であるだけでなく、総合的神格に関するそれらの言葉の意味においても関連していると承知している。しかし、神性と人格の考え得る価値に関して、これらの推測される出来事は、神格絶対者—3番目と最終の経験的神性

—の人格化と絶対者の神の人格完成に固有であるそれらの超人格の価値とそれらの究極人格の意味の登場を含意する。

7. 未来の目標の最後

106:7.1 (1168.6) 無限の現実の統合についての概念形成における幾つかの困難は、全てのそのような考えは、宇宙発展の最終的段階、すなわち、それが、これまでにそうあり得た何らかの経験的実現を包含するという事実に本来備わっている。そして、量的無限が、つねに最終に、完全に実現され得たということは想像もつかない。つねに経験的発展の量が、決して使い果たすことのできない3名の可能性絶対者の探査されていない可能性がなければならない。永遠自体は、絶対ではあるが、絶対を越えるものではない。

106:7.2 (1169.1) 最終的統合についての一時的な概念は、無特質の永遠の結実からは不可分であり、したがって、想像し得るいかなる未来にも実際には実現不可能である。

106:7.3 (1169.2) 未来の目標は、楽園の三位一体を構成する神性の意志行為により打ち立てられる。未来の目標は、絶対

性が、すべての未来の発展の可能性を含む3つの重要な可能性の巨大さで確立される。未来の目標は、宇宙目標の完成者の働きによっておそらく完成され、この働きは、絶対者の三位一体の中の崇高なるものと究極なるものとにおそらく関連しているであろう。どんな経験的な未来の目標も、経験している被創造物により少なくとも部分的に理解できる。しかし、無限の実存段階におよぶ未来の目標は、とても理解し難い。最終段階の未来の目標は、神格絶対者を伴うような実存的-経験的到達である。しかし、神格絶対者は、宇宙絶対者の力で無特質絶対者との永遠関係に立つ。そして、可能性において経験的であるこれらの3 名の絶対者は、限りがなく、時間を超越し、空間を超越し、広大無辺で、測り知れないが故に、—誠に無限であるが故に—実際は実存的、またそれ以上である。

106:7.4 (1169.3) しかしながら、目標到達の見込みのなさは、そのような仮定的未来の目標に関する哲学的な理論づけを阻みはしない。到達し得る絶対的な神としての神格絶対者の実現は、実際には実現不可能であるかもしれない。にもかかわらず、そのような最終的結実は、理論上の可

能性のままである。何らかの思いもよらない宇宙-無限における無特質絶対者のかかわり合いは、終わりのない永遠の未来の結実においては計り知れないほどに遠く隔たっているかもしれないが、そのような仮説は、それでもなお、有効である。必滅者、モロンチア体、精霊、終局者、超越者には、宇宙自体と現実の他のすべての段階とともに、価値の上で絶対である潜在的に最終的な未来の目標が確かにある。しかし我々は、いかなる存在体、あるいは宇宙も、完全にそのような未来の目標の全局面に到達するということに疑いを抱いている。

106:7.5 (1169.4) あなたが父をいかほどに理解するようになろうとも、あなたの心は、つねに父-私はあるの明かされていない無限により、すなわち永遠のすべての周期を通して常に測りしれない、また理解し難い探査されていない巨大さにより、いつも驚愕するであろう。あなたが、神にどれだけ到達しようとも、いつも神に関するさらに多くのことが残るであろう。残された多くのことに気づきさえしないであろう。そして我々は、それが、有限存在の領域にあるように、これは先験的段階で同じように本当であると信じる。神への探究は無限なのである。

106:7.6 (1169.5) 神に至るそのような無能さは、最終的な意味において決して宇宙の被創造物を落胆させるものではない。実際、あなたは、七重、崇高なるもの、および究極なるものの神格段階に達することができるし、達するのである。そしてそれは、永遠存在のそれぞれの絶対状態における永遠なる息子と連合活動者にとっての父たる神が意味するものが、あなたにとって意味するものである。神の無限は、被創造物を悩ませるものであるどころか、上昇人格には、すべての無限の未来を通して、永遠でさえも使い果たせない、また終了させられない人格開発と神格のつながりの可能性が自分の前にあるという最高の保証でなければならない。

106:7.7 (1169.6) 壮大な宇宙の有限被創造物にとっての主たる宇宙の概念は、ほとんどで無限であるように思えるが、確かに、そこからの準絶対の建築家は、将来へのその関連性に、また私はあるの中に想像できない展開に気づく。空間自体でさえ、究極の状態、すなわち中央空間の静かな区域の相対的な絶対性の中の特定状態だけである。

106:7.8 (1170.1) 主たる宇宙全体の最終的完成の想像し難いほど遠い将来の永遠の瞬間に、間違いなく、我々は皆、その全歴史を単なる始まりとして、すなわち、単純に未知の無限におけるより一層すばらしく、　より魅惑的な変化に向けて特定の有限で先験的な地盤の創造として振り返るであろう。そのような将来の永遠の瞬間に、主たる宇宙は、まだ若々しく見えるであろう。誠に、それは、けっして終わりない永遠の無限ない可能性に直面していつも若いであろう。

106:7.9 (1170.2) 無限の未来の目標到達に至りそうもないということは、そのような未来の目標に関する考えを少しも妨げないし、もし3つの絶対的可能性が、完全に実現されることができるならば、我々は、現実全体の最終的統合を思い描くことは可能であるだろうということを躊躇わずに言う。この発展上の実現は、その統合が、私はあるの潜在性を構成する3つの可能性、つまり無特質の絶対者、宇宙の絶対者、神格絶対者の完成された実現に基づいている。この潜在性は、永遠の停止した現実、つまり全未来の出来事の停止状態の可能性、およびそれ以上のものを含む。

106:7.10 (1170.3) そのような不測の事態は、控え目に言ってもとても起こりそうもない。それにもかかわらず、我々は、３つの三位一体の機構、人格、つながりにおける父-私はあるの７つの絶対的局面の再結合の理論上の可能性を感知すると信じる。そして、これが、実存的状態の楽園の三位一体と、経験的な特質と起源をもつやがて現れてくる２つの三位一体とを包含する三重の三位一体の概念へと我々を向かい合わせる。

8. 三位一体中の三位一体

106:8.1 (1170.4) 三位一体中の三位一体の本質を人間の心に描くことは困難である。永遠実現の理論上の無限に表されているように、それは、経験的無限の全体に現実の要約である。三位一体中の三位一体において、経験的な無限は、実存的な無限とともに同一性に至り、また双方は、前-経験、すなわち、前-経験の私はあるの中の一名としてある。三位一体中の三位一体は、15の3統一と対応する三人組みに含意されるすべての最終的表現である。実存的であるか、または経験的であるかということにかかわらず、最終的状態は、相対的存在体にとって理解する

ことは難しい。したがって、それらは、関連性としていつも提示されなければならない。

106:8.2 (1170.5) 三位一体中の三位一体は、幾つかの位相に存在する。それは、人間段階をはるかに超える存在体の想像を揺るがす可能性、確率、および必然性を含んでいる。その含意は3統一にあり、3統一は、煎じ詰めると、計り知れないが故に、おそらく天の哲学者には疑われていないという含みがある。

106:8.3 (1170.6) 三位一体中の三位一体を描くことができる多くの方法がある。我々は、以下の通りの3段階の概念の提示を選択する。

106:8.4 (1170.7) 1. 3つの三位一体の段階

106:8.5 (1170.8) 2. 経験的な神格の段階

106:8.6 (1170.9) 3. 私はあるの段階

106:8.7 (1170.10) これらは、増進的統一の段階である。実際に三位一体中の三位一体は、第1段階であり、第2および第3段階は、第1段階の統一-派生物である。

106:8.8 (1171.1) 第一段階：つながりのこの初期段階における3つの三位一体の機能は、識別可能ではあるが、完全に一致した神格人格の集まりであると信じられる。

106:8.9 (1171.2) 1. 楽園の三位一体、3人の楽園神格のつながり—父、息子、精霊。楽園の三位一体とは、三重の機能を含意するということが銘記されるべきである—絶対的機能、先験的機能、(究極の三位一体)、および有限的機能(崇高な三位一体)。楽園の三位一体は、いつもこれらのありとあらゆるものである。

106:8.10 (1171.3) 2．究極の三位一体。これは、崇高なる創造者、崇高な神、主たる宇宙の建築者の神格のつながりである。これが、この三位一体の神性面の適切な提示であるのだが、この三位一体には、とはいえ、神性局面と完全に調整しているような他の局面があるということが記録されるべきである。

106:8.11 (1171.4) 3. 絶対三位一体。これは、すべての神性価値に関わりのある崇高な神、究極な神、それに宇宙目標の完成者の集まりである。この三位一体の集まりの他のある局面は、広がる宇宙の中における神性以外の価値に関係

がある。しかし、これらは、経験的神格の力と人格的局面が経験的な統合の進行中のちょうどそのとき、神性局面と統合している。

106:8.12 (1171.5) 三位一体中の三位一体におけるこれらの３組の三位一体のつながりは、現実の可能で無限の統合に向けて準備をする。この集まりは、原因、中間、最終を含んでいる。開始者、実現者、完成者。始まり、生存、未来の目標。父-息子の協力関係は、息子-精霊、次には精霊-崇高なるもの、それから崇高なるもの-究極なるものと究極なるもの-絶対なるもの、さらには絶対なるものと父-無限なるもの—現実の周期の完成になった。同様に、神性と人格にそれほど直接に関係していない他の局面においては、第一の偉大なる根源と中枢は、自己存在の絶対性から自己顕示の永遠を経て、自己実現の最終段階へと—実存の絶対から経験の最終段階へと—自己実現をする。

106:8.13 (1171.6) 第2段階：3組の三位一体の調整は、これらの三位一体の起源に関係する経験的神格の連合的結合に必

然的に関わっている。この第2段階の性質は、時おり次のように提示されてきた。

106:8.14 (1171.7) 1. 最高なるもの。これは、楽園神格の創造者-創造的な子供との経験的連結における楽園の三位一体の統一の神格の結果である。崇高なるものは、有限進化の第一段階の完成の神格具体化である。

106:8.15 (1171.8) 2. 究極なるもの。これは、第2の三位一体の結果的統一、つまり先験的、かつ準絶対の神格の有限人格化の結果である。究極なるものは、多くの特性の可変にみなされた統一にあり、それに関する人間の概念は、管理指導をし、人格的に経験可能であり、少なくとも、緊張して統一している究極のそれらの局面を含むことが賢明ではあろうが、終結的神格には他の多くの非啓示の局面がある。究極なるものと崇高なるものは類似するが、それらは同じではなく、また究極なるものは単に崇高なるものの拡大でもない。

106:8.16 (1172.1) 3 . 絶対者。三位一体中の三位一体の第2段階の第3構成員の特徴に関しては多くの理論がある。絶対者の神は、三位一体絶対者の最終的な機能の人格の結果

として疑う余地なくこのつながりにかかわっているが、それでも神格絶対者は、永遠状態の実存的な現実である。

106:8.17 (1172.2) この第3構成員に関する概念上の困難は、そのような構成員の資格は、実際にはただ一名の絶対者を含意するという事実にはつきものである。理論上は、そのような出来事が起こり得るならば、我々は、一者としての３絶対者の経験的統一を目撃するであろう。また、我々は1絶対者が、無限の中に、実存的にいるということを教えられる。それが、この第3構成員が誰であり得るのかについては少しも明確ではないが、それは、何らかの想像できない連携と宇宙顕現の形式における神格絶対者、宇宙絶対者、および無特質絶対者から成るかもしれないと、しばばしば仮定される。確かに、三位一体中の三位一体は、3絶対者の完全な統一がなければ完全な機能にほとんど達することができず、また、3絶対者は、ほとんどすべての無限の可能性の完全な実現がなければ統一できない。

106:8.18 (1172.3) この概念は、静的で潜在的であるばかりではなく、結合したものとしても宇宙を思い描くならば、もし三位一体中の三位一体の第3構成員が、宇宙絶対者と考えられるならば、それは、おそらく真実の最小の歪みを意味するであろう。しかし、我々は、まだ神格全体の機能に関わる創造的で発展的局面との関係を把握してはいない。

106:8.19 (1172.4) 三位一体中の三位一体の完成された概念の形成は難しくはあるが、限定的概念を形成することはそれほど難しくはない。三位一体中の三位一体の第2段階が、本質的には人格的であると考えられるならば、これらの経験的な神格にとっての先祖の人格の三位一体の結合である人格の結果としての崇高な神、究極な神それに絶対者の神の結合の仮定は、まったく可能になる。我々は、これらの3名の経験的神格が、第一段階を構成する彼らの先祖であり、また原因である三位一体の拡大する統合の直接結果として第2段階で確かに統一するであろうという見解を敢えて言う。

106:8.20 (1172.5) 第1段階は3つの三位一体から成る。第2段階は、経験的に発展し、経験的に終結し、経験的に実存する神格の人格の人格のつながりとして存在している。三位一体中の完全な三位一体の理解における概念的ないかなる困難にかかわらず、第2段階のこれらの3人の神性の人格的なつながりは、究極なるものを介して活動し、崇高なるものの初期の創造的な委任に応じて行動する神格絶対者によるこの第2段階で顕在化された威儀仙の神性化の現象において我々自身の宇宙時代に明らかになった。

106:8.21 (1172.6) 第3段階：三位一体中の三位一体の第2段階の無特質の仮説においては、今あり、かつてあった、あるいは無限の全体にあり得るあらゆる種類の現実のあらゆる局面の相関関係が含まれる。崇高なるものは、精霊だけではなく、心と、力と経験でもある。究極なるものは、神格絶対者、宇宙絶対者、無特質絶対者の一体の結合された概念において、すべての現実実現の絶対的最終の状態を含むとともに、このすべてであり、これ以上なのである。

106:8.22 (1172.7) 崇高なるもの、究極なるもの、完全な絶対者の結合においては、私はあるにより最初に細分化され、無限の七絶対者の出現にいたる無限のそれらの局面の機能的な再組み立てをもたらし得るであろう。宇宙の哲学者らは、これを最も起こりそうにない確率であると考えるが、それでも、我々は、この質問をしばしばする。もし三位一体中の三位一体の第2段階が、三位一体の統一を実現することができるならば、では何が、そのような神格統一の結果として生じるのであろうか。我々には分からないが、我々は、それが、経験的に達成し得るものとして私はあるの実現に直接通じるであろうと確信している。人格的存在の見地から、それは、知り得ない私はあるが父-無限として経験可能になったことを意味したかもしれない。これらの絶対未来の目標が無人格見地から意味するかもしれないものは、別の事柄と。永遠だけが、もしかすると、はっきりさせることができるかもしれないものである。しかし、人格の創造物としてこれらのとても起こりそうにない不測の事態を見るように、我々は、すべての人格の最終的な未来の目標は、これら

の同一の人格の宇宙なる父を最終的に知ることであるということを推論する。

106:8.23 (1173.1) 我々が、哲学的に私はあるを過去の永遠において思い描くように、私はあるは、単独であり、なにもその横にはない。心待ちにして未来の永遠を考えるとき、私はあるがひょっとして実存的であるとして変化することができるとは考えないが、膨大な経験の差を予測しがちである。私はあるについてのそのような概念は、完全な自己実現を意味する—私はあるの自己顕示における意志に基づく参加者になった、また、絶対的父の最終的な息子である無限全体の絶対意志の部分として永遠に留まる人格者の無限の銀河を含む。

9. 実存的な無限の統一

106:9.1 (1173.2) 我々は、三位一体中の三位一体の概念において限りない現実の可能な経験的統一を仮定し、また、この総てが、はるか彼方の永遠の全くの遠隔で起こるかもしれないと時々理論上想定する。しかし、すべての過去、また未来の宇宙時代であったように、まさしくこの時代に実際の、かつ現在の無限の統一が、それにもかかわら

ず、存在する。そのような統一は、楽園の三位一体で実存する。経験的現実としての無限統一は、想像を絶するほどに遠くにあるが、無限の無特質の統一は、宇宙存在の現在の瞬間を、いま支配しており、すべての現実の分岐を絶対である実存的威厳で結合させている。

106:9.2 (1173.3) 有限の被創造物が、完成された永遠の最終的段階における無限の統一の想像を試みるとき、それらの有限生存に固有な知性の限界に直面する。時間、空間、経験は、被創造物の概念にとって障害である。にもかかわらず、時間なくして、空間から離れ、そして経験を除いては、いかなる被創造物も、宇宙現実の限定的理解にさえ到達し得ないであろう。時間の意識なくして、いかなる進化的創造物も、系列の関係を知覚できないであろう。空間の知覚なくして、いかなる創造物も、同時性の関係を測り得ないであろう。経験なくして、いかなる進化的創造物も、存在することさえできないであろう。無限の七絶対者のみは、ほんとうに経験を越え、またこれらさえ、特定の局面において経験的であり得る場合がある。

106:9.3 (1173.4) 時間、空間、経験は、相対的な現実知覚への人の最大の援助であるにもかかわらず、完全な現実知覚への最も侮りがたい障害である。人間と他の多くの宇宙被創造物は、空間で実現され、時間で成果を進化すると可能性を考えることが必要であると分かるが、この全過程は、楽園と永遠で実際には起こらない時間-空間現象である。絶対段階においては、時間も空間もない。すべての可能性は、現実として知覚され、そこにあるかもしれない。

106:9.4 (1173.5) 全現実の統一の概念は、この宇宙時代であろうとも、あるいは、いかなる他の宇宙時代であろうとも、基本的に二要素である。実存的であり、経験的である。そのような統一が、三位一体中の三位一体において経験的な実現の過程にあるが、この三重の三位一体の明らかな実現の度合いは、宇宙の中の制限の消滅と現実の不完全に正比例している。しかし、現実の総統合は、無特性に、永遠に、その上実存的に楽園の三位一体の中に臨場しており、そこでは、まさしくこの宇宙の瞬間に、無限の現実が確実に統一される。

106:9.5 (1174.1) 経験的かつ実存的観点によって生じる矛盾は、回避不能であり、楽園の三位一体と三位一体の中の三位一体それぞれは、死すべき者が、時間-空間の関連性としてのみ知覚できる永遠関係にあるという事実にもとづいている。三位一体の中の三位一体の段階的経験の実現についての人間の概念—時間の観点—は、これは既に現実化—永遠性からの観点—であるという付加的仮定によって補われなければならない。しかし、どのようにこれらの2つの観点は、折り合いさせ得るのか。我々は、楽園の三位一体は、無限の実存的統一であるということ、また三位一体の経験的三位一体の実際の存在と完了された顕現を認められないということは、一つには次のような相互的な歪みのせいであるという真実の受け入れを有限の人間に勧める。

106:9.6 (1174.2) 1. 人間の限られた観点、無特質の永遠の概念をつかむことができないこと。

106:9.7 (1174.3) 2. 人間の不完全な状態、経験の絶対段階からの遠さ。

106:9.8 (1174.4) 3. 人間の一生の目的、人類が経験の手段により進化するようになっており、したがって、生まれながらに、また本質的に、構成的に、経験に頼らなければならないという事実。絶対者だけが実存的であり、かつ経験的であり得る。

106:9.9 (1174.5) 楽園の三位一体の中の宇宙なる父は、三位一体の中の三位一体の私はあるであり、無限としての父を経験できないということは、有限の限界のせいである。実存的で、孤独で、達成し得ない前-三位一体の私はあるの概念と三位一体の経験的な後-三位一体と到達し得る私はあるの仮定とは、全く同一の仮説である。いかなる実際の変化も無限には起こらなかった。明らかなすべての発展は、現実受け入れと宇宙への感謝に向けての高まる能力によるものである。

106:9.10 (1174.6) 私はあるは、詰まるところ、全実存前と全経験後に、存在しなければならない。これらの考えが、人間の心で永遠と無限の矛盾をはっきりさせはしないかもしれないと同時に、それらは、そのような有限識者が、これらの決して終わらない問題に、すなわちサルヴィン

トンと、後には終局者として、広く開けた宇宙におけるあなたの永遠の経歴の途方もない未来に渡り、あなたが、好奇心をそそり続けるであろういう問題に、少なくとも新たに取り組むように刺激すべきである。

106:9.11 (1174.7) 遅かれ早かれ、すべての宇宙人格は、永遠の最終的探求は、無限の終わりなき探検、すなわち第一根源と中枢の絶対性への発見の果てしない航海、であると気づき始める。遅かれ早かれ、我々は皆、全創造物の成長は、父識別に比例している。神の意志を生きるということは、無限それ自体の無限の可能性への永遠の通行証であるという理解に我々は到達する。人間は、無限の探求における成功は、父に似ることへの達成に正比例しているということ、またこの宇宙時代において父の現実は、神性の特質の中で明らかにされるということにいつか、気づくであろう。そして、神性のこれらの特質は、神のように生きる経験において宇宙の創造物により直接に充当され、また、神のように生きるということは、実際に神の意志に基づいて生きることを意味する。

106:9.12 (1175.1) 物質の、進化の、有限の被創造者にとり、父の意志に基づいて生きる生活は、直接に人格の活動領域における精霊の崇高性への到達に導き、そのような被創造者を父-無限の理解へとさらに一歩連れて行く。そのような父との生活は、真実に基づき、美に敏感で、善により支配されるものである。神を知るそのような人は、これらのすべての生活の特質が、宇宙の知恵、自己実現、神-発見、および父崇拝の絶えず上昇する段階において進化する人格に統一されると同時に、内面的には崇拝により照らされ、外面的には全人格の宇宙の兄弟愛の心からの奉仕に、つまり慈悲に溢れ愛に動機づけられる奉仕活動に専念している。

106:9.13 (1175.2) [ネバドンのメルキゼデクによる提示]

論文 107
思考調整者の起源と本質

107:0.1 (1176.1) 宇宙なる父は、自らは楽園に、宇宙の真ん中に居住しているものの、神秘訓戒者として彼らに宿っているので、時の無数の子供の心のなかで空間の世界に実際に臨場している。永遠なる父は、自己の惑星の必滅の息

子達と一つであり、同時に最も遠くに隔たっており、かつ最も親密に関わっている。

107:0.2 (1176.2) 調整者は、人の魂に具現した父の愛の現実である。調整者は、必滅者の心の中に閉じ込められる人間の永遠の経歴への実際の約束である。調整者は、人の完成された終局者の人格の本質であり、それは、一歩一歩、かれが、実際に楽園の父の神性臨場に達するまで、次から次へと宇宙の上昇を通して父の意志の生活を成し遂げる神性手段を習得するにつれ、いつかは味わうことのできる終局者の完成された人格の本質である。

107:0.3 (1176.3) 神は、まさに自分が完全であるように、完全であることを人間に命じ、このようにして定められた崇高な目標の達成において人間の経験上の共同者になるように調整者として下ったのであった。人の心に宿る神の断片は、人がこの神性の調整者との関連において宇宙なる父を見つけることができるという絶対的、かつ無条件の保証であり、それは、肉体の時代にさえ神から人間に息子の資格を与えにやって来た。

107:0.4 (1176.4) 創造者の息子を見た人間は、誰でも宇宙なる父を見たのであり、神性の調整者が内在する人間には楽園の父が内在するのである。意識的にせよ無意識的にせよ、内在する調整者の導きに続く死すべき者のすべては、神の意志に従って生きている。調整者臨場の意識は、神臨場の意識である。人の進化の魂との調整者の永遠の融合は、神格の宇宙での仲間としての神との永遠の結合の事実経験である。

107:0.5 (1176.5) 神に似ること、楽園に到達すること、そしてそこで神性の贈り物である無限の源を崇拝するために神格の本当の人の前にありたいというその抑え難い思慕と絶えざる切望を人の心の中に引き起こすのは調整者である。調整者は、実際に必滅の息子を楽園の父に連結し、また父により近く引きつけていく生ける存在である。調整者は、人が、神からの移動によりもたらす距離、そして永遠なる父の普遍性と対照をなす人の一面性の度合いにより引き起こされる宇宙の非常な緊張の我々の補償的均等化である。

107:0.6 (1176.6) 調整者は、そのような人間の選択によって、ついには神と人とのこの一時的結合を完成することができ、終わることのない宇宙奉仕への新系列を実際に顕在化する有限生物の心の中に閉じ込められている無限存在体の絶対的本質である。調整者は、神は人の父であるという真実を事実化する宇宙の神性現実である。調整者は、常に、しかも的確に神の方角に魂を向けている人の絶対確実な宇宙の羅針盤である。

107:0.7 (1177.1) 進化する世界では、意志をもつ創造物は、存在の一般的な発達上の3段階を通過する。訓戒者は、調整者の到着から比較的に完全な成長の間、つまりユランチアでのおよそ20歳まで、ときおり思考変更者と称される。この時から、およそ40年間、明察時代の到達まで、神秘訓戒者は、思考調整者と呼ばれる。明察力への到達から肉体からの救出まで、それらは、しばしば思考管理者と呼ばれる。必滅者の人生のこれらの三局面には、心の複製と魂進化における調整者のの進歩3段階とはいかなる関係もない。

1. 思考調整者の起源

107:1.1 (1177.2) 思考調整者は最初の神格の根本的要素をもっているので、誰も厳然とその特質と起源について論じるつもりはないかもしれない。私は、ただサルヴィントンの伝統とユヴァーサの信念を伝えることができるだけである。我々がどのように壮大な宇宙の至る所でこれらの神秘訓戒者らとその関連する実体に注意するかを説明することができるだけである。

107:1.2 (1177.3) 思考調整者の贈与の形態に関するさまざまの意見はあるが、それらの起源に関するそのような違いは何も存在しない。全員が、思考調整者は、宇宙なる父、すなわち第一根源と中枢から直接生じるということに同意している。それらは作り出された存在体ではない。思考調整者は、無限の神の実際の臨場を構成する破片化された実体である。彼らの多くの明かされていない仲間と共に、調整者は、薄められても、混ざってもいない神格、無条件の、弱力化されていない神格の部分である。調整者は、神から来ており、我々が認め得る限り、彼らは神である。

107:1.3 (1177.4) 我々は、第一根源と中枢の絶対性は別として、調整者の別々の存在開始時に関して知らない。調整者の番号についても知らない。我々は、思考調整者が、人間の心に宿るために時間の惑星に到着するまで、かれらの経歴に関してはわずかしか知らないが、それ以後は、それらの三位一体の目標達成まで、そしてその目標成就を含むそれらの宇宙進行を多少なりとも知っている。ある人間の上昇者との融合による人格到達、宇宙なる父の決定による人格到達、または思考調整者の既知の任務からの解放。

107:1.4 (1177.5) 我々は、知らないのだが、調整者は、宇宙の拡大につれ、調整者融合候補者数の増加につれ、絶えず個別化されていると思っている。しかし、調整者に数字上の我々の割り当ての試みは、等しく間違っているかもしれない。神自身のように、推測できない神の本質のこれらの断片は、実存的には無限であるかもしれない。

107:1.5 (1177.6) 思考調整者の始まりの方法は、宇宙なる父の非顕示の機能の1つである。我々には、第一根源と中枢の他の絶対の仲間のだれにも父の断片の生産にはどう考え

ても何の関係もないと信じるありとあらゆる理由がある。調整者は単に、また永遠に神の贈り物である。それらは神の本質をもつ、神から来ており、また神のようである。

107:1.6 (1177.7) 融合の被創造者との関係において、かれらは、神は霊であるという宣言を大いに確認する高邁な愛と精神的な活動を明らかする。しかし、ユランチアの必滅者にはこれまで明らかにされたことのないこの人知の及ばない活動とは別に起こる多くのことがある。我々は、宇宙なる父が、時間の世界の被創造者の人格の一部であるために自分自身を与えるとき、何が、本当に生じるかを完全に理解するというわけでもない。また、楽園終局者の上昇経過は、まだ人と神のこの崇高な共同者関係に固有の完全な可能性を明らかにはしていない。煎じ詰めれば、父の断片は、絶対としての神への到達の可能性を包含する被創造者の目標への絶対の神の贈り物であるに違いない。

107:1.7 (1178.1) 宇宙なる父が、前人格の神格を断片化するように、無限なる精霊は、打ち続く精霊融合で生き残ってい

る死すべき者の進化の魂と実際に融合し、宿るために心以前の自身の精霊部分を個別化する。しかし、永遠なる息子の特質は、このように断片化が可能ではない。第一の息子の精霊は、拡散しているか、または個々に人格的である。息子-融合された被創造者は、永遠なる息子の創造者の息子からの精霊の個別化された贈与と結合される。

2. 調整者の分類

107:2.1 (1178.2) 調整者は、未経験の実体として個別化され、全員が、解放されるか、融合されるか、または専属訓戒者になるように運命づけられている。これらの区分けを完全に理解するというわけではないが、我々は、思考調整者の7系列があると理解している。我々は、次のように異なる系列についてしばしば言及する。

107:2.2 (1178.3) 1. 未経験調整者、永遠の生存の進化的候補者の心において、それぞれの初期の課題に携わるものたち。神秘訓戒者は、神の特質において永遠に一定である。神性球から最初に出かけるとき、それらも経験的特質にお

いて一定である。その後の経験的分化は、宇宙の活動における実際の経験の結果である。

107:2.3 (1178.4) 2. 上級調整者、最終的融合が、時間の被創造者の同一性と、第三根源と中枢の局部宇宙の顕現の人格化された精霊部分との間に生じる世界において1期あるいは、それ以上の期間奉仕したものたち。

107:2.4 (1178.5) 3. 最高調整者、進化的世界において時間の冒険に携わったにもかかわらず、その人間共同者が何らかの理由で永遠の生存を拒んだが故に、後に他の発展する世界において他の必滅者に冒険を割り当てられたそれらの訓戒者。最高調整者は、未経験の訓戒者ほど神性ではないが、より多くの経験があり、人間の心においてそれほど経験豊富ではない調整者ができなかったことをすることができる。

107:2.5 (1178.6) 4. 消滅調整者。ここに神秘訓戒者の経歴に続く我々の努力に中断が生じる。我々には確信のない4番目の奉仕段階がある。メルキゼデクは、4番目の段階の調整者は、課題から離れ宇宙の中の宇宙に留まると教える。単独使者は、調整者は、父自身との爽やかなつなが

りの一区切りを楽しんで、第一根源と中枢と共にいると信じる傾向にある。そして、調整者が、主たる宇宙であちこと移動し、同時に遍在する父と一体となって共にいることができるということは十分にあり得る。

107:2.6 (1178.7) 5. 解放調整者、進化する球体の死すべき者への時間の奉仕から永遠に解放されたそれらの神秘訓戒者。我々は、彼等の機能が何たるかを知らない。

107:2.7 (1179.1) 6. 融合調整者—終局者—超宇宙の上昇している被創造者と一体となったものたち、すなわち終局者の楽園部隊の時間の上昇者の永遠の共同者たち。通常、思考調整者は、時間の上昇する死すべき者と共に融合し、そのような生き残りの人間との上行球への出入りが記録される。それらは、上昇の存在体の進路をたどる。調整者は、上昇する進化の魂との融合時点で、宇宙の絶対実存の段階から上昇する人格との機能的なつながりの有限経験的段階へと移行するようである。実存的神性の特質の全てを保持するとともに、融合された調整者は、生き残った上昇する必滅者の経歴に固く繋がるようになる。

107:2.8 (1179.2) 7. 人格化調整者、具現化された楽園の息子と共に奉仕したものたち、合わせて、人間に内在する間、並々ならぬ働きをしたものの、その対象が生存を拒絶した多くのものたち。我々には、そのような調整者が、超宇宙における任務のために高齢者達からの推薦に基づき人格化されると信じる根拠がある。

107:2.9 (1179.3) これらの神の神秘的な断片を分類できる多くの方法がある。宇宙任務による、個々の人間の内在における成功の度合、または融合に対しての人間候補者の人種的祖先にさえよる分類。

3. 調整者の神性球の本拠地

107:3.1 (1179.4) 全宇宙活動は、神秘訓戒者の7超宇宙のすべての奉仕からの派遣、管理、指示、そして神性球の神聖な球体の中心からの帰還に置かれているようである。私が知る限り、調整者と父の他の存在者しか、その球体にはいなかった。おそらく、明らかにはされていない多数の前人格的実体が、故郷の球体として神性球を調整者と共有するようである。我々は、仲間のこれらの実体が何らかの方法で神秘訓戒者の現在と将来の活動に関連づけら

れるかもしれないと推測する。しかし、我々は実のところは知らない。

107:3.2 (1179.5) 思考調整者が、父の元に戻る際は、想定される基点の領域、すなわち神性球に帰る。そして、おそらくこの経験の一部として、この秘密の球体に位置すると報告される父の神性の特殊化された顕現との接触のみならず父の楽園人格との実際の接触がある。

107:3.3 (1179.6) 我々は、楽園の秘密の7球体の全てについて何かを知ってはいるが、神性球についてよりも他の球体について知っている。高い精霊系列の存在体は、神性の3つの命令だけを受ける。それらは次の通りである。

107:3.4 (1179.7) 1. 常に年長者と上司の経験と資性に対し適切な敬意を示すこと。

107:3.5 (1179.8) 2. 常に年少者と部下の限界と無経験に思いやりがあること。

107:3.6 (1179.9) 3. 決して神性球の岸に着陸を試みないこと。

107:3.7 (1179.10) 私は、神性球に行っても、私には全く無駄であろうとしばしば考えた。私は、例えば人格化調整者を

除いては、おそらく、何の居住者も見ることはできないであろうし、また私は、他の場所で彼らに会った。私は、神性球には私にとって真の価値あるものや利益となるものは何も無いと、自分の成長と発達に不可欠なものは何も無いと、しかと確信しており、さもなければ、私がそこに行くことを禁じられるはずはない。

107:3.8 (1180.1) 我々は、調整者の特質や起源について何も神性球からは知ることができないが故に、無数の異なる情報源からの収集を強いられるが、そのような知識が有益となるには、この蓄積された情報を収集し、分類し、相関させる必要である。

107:3.9 (1180.2) 思考調整者が示す勇気と知恵は、彼らが、相当な幅と広さの修練を耐え忍んできたということを示唆する。かれらは人格ではないので、この修練は、神性球の教育機関で与えらなければならない。固有の人格化調整者は、確かに神性球の調整者養成所の構成員である。そして、我々は、宇宙の領域の人種と民族に七重の贈与の完了のためにマイケル系列の楽園の最初の息子の現在の

人格化調整者が、この中心的管理部隊を取り仕切っているということを知っているのである。

107:3.10 (1180.3) 我々は、無人格化調整者に関し本当にほとんど知らない。我々は、人格化の系列しか接触も通信も行なわない。これらは、神性球で洗礼をうけ、数によらず前々から名前によって知られている。人格化調整者は、永久に、神性球に住所が定められている。その神聖な球体が、それらの故郷である。彼らは、宇宙なる父の意志だけによってその住まいから出かけて行く。ほんのわずかなものが局部宇宙の領域で見掛けられるが、より多数は中央宇宙にいる。

4. 調整者の特質と臨場

107:4.1 (1180.4) 思考調整者が神であると言うことは、単に起源の本質を認めるだけである。神性のそのような純粋さは、永遠無限の楽園の父の宇宙存在の絶対的本質をもつそのような断片に含まれ得る神格の全属性の本質的可能性を迎え入れるということは、大いにあり得る。

107:4.2 (1180.5) 調整者の実際の源は、無限でなければならず、進化の人間の不滅の魂との融合の前に、調整者の現実

は、絶対性に接しなければならない。神格的な意味において、調整者は、宇宙的な意味の絶対的なものではないが、それらは、断片化した特質の可能性の範囲内においておそらく真の絶対的なものであろう。それらは、特質に関してではなく、普遍性に関して限りがある。それらは、広範さにおいては制限されるが、意味、価値、および事実においては絶対である。だからこそ、我々は、父の制限的絶対の断片として神性の贈り物と時々命名する。

107:4.3 (1180.6) どの調整者も、未だかつて楽園の父に不忠実であったことはない。人格の低い創造物の系列は、時々不忠実な仲間を相手に苦労するかもしれないが、調整者には、決してそういうことはない。それらは、被創造者の活動と宇宙機能の崇高な球体において最高であり、絶対確実である。

107:4.4 (1180.7) 無人格化の調整者は、人格化調整者だけに見える。私の系列は、つまり単独使者は、鼓舞された三位一体の精霊同様に、精霊の反応的現象手段によって調整者の存在を探知することができる。そして、熾天使でさえ

も時々、訓戒者のの人の物質的な心への臨場との想定されたつながりの精霊の光度を明察することができる。しかし、例え調整者の特質が、進化世界から上昇する人間の融合された人格と一体となって知覚できるとしても、調整者が人格化されない限り、我々の中の誰も、実際に調整者の本当の存在を裁量することはできない。調整者の普遍的不可視性は、かれらの高い、独自の神性起源と特質を強く示唆している。

107:4.5 (1181.1) 特徴ある光、つまり精霊の明度があり、それは、この神性存在を伴い、また思考調整者と一般的に関連するようになった。ネバドンの宇宙では、楽園のこの明度は、「種火」として広範囲に知られている。ユヴァーサでは、これは、「命の光」と呼ばれる。ユランチアでは、この現象は、時々その「世界に入るすべての人を照らす真の光」と呼ばれてきた。

107:4.6 (1181.2) 宇宙なる父に到達したすべての存在体には、人格化思考調整者が見える。実体、精霊、人格、および精霊顕現の他のすべての存在と合わせて全段階の調整者は、楽園の神格に始まる、また壮大な宇宙の主要な政府

を統轄するそれらの崇高なる創造者の人格により常に識別できる。

107:4.7 (1181.3) あなたは、調整者の内在の真の重要性を確かに理解することができるのか。あなたは、有限の必滅の創造物に内在し、融合する絶対と無限の神格、すなわち宇宙なる父の絶対的断片を持つことが、何を意味するのか本当に推し測ることができるのか。必滅の人間が、全宇宙の実存的原因の実際の断片と融合するとき、いかなる制限もそのような先例のない、想像もおよばない共同者関係の目標に決して置かれることはできない。永遠には、人は、客観的な神格の無限だけではなく、この同じ神の主観的断片の果てしない可能性も発見していくであろう。常に、調整者は、必滅の人間の人格に神の驚異を顕示しているであろうし、また、この崇高な顕示には決して終わりがない。というのも調整者は、神の出であり、必滅の人間にとっての神であるがゆえに。

5. 調整者の心ばえ

107:5.1 (1181.4) あなたが認識するように、それは、本当に心の主要な活動であるので、進化の人間は、心を精霊と物質

の間の宇宙的仲介として見る傾向がある。故に、人間が、思考調整者には心があると知覚することは、かなり難しい。なぜならば、調整者は、前人格であるばかりではなく、すべてのエネルギーと精霊相違にも先立つ現実の絶対段階における神の断片であるので。エネルギーと精神分化への一元的段階においては、調停される何の相違もないので、心の何らかの仲介機能は、あるはずがなかった。

107:5.2 (1181.5) 調整者は、計画し、働き、愛することができるので、心に相応する個性の力を持たなければならない。かれらは、互い、つまり最初の、または未経験の団体より上の訓戒者のすべての形と伝え合う無制限の能力を備えもつ。我々は、、それらの相互通信の性質と趣旨に関しては知らないので、ほとんど明らかにすることはできない。そして我々は、調整者が何らかの方法で心を持たれなければ、決して人格化できないということも、さらに知っている。

107:5.3 (1181.6) 思考調整者の関心は、宇宙なる父と永遠なる息子の心ばえに似ている—そのような心ばえは、結合活動者の心に原型をとる。

107:5.4 (1181.7) 調整者に仮定される心の型は、おそらく第一根源と中枢から同様に始まる前人格の実体の多数の他の系列の心の贈り物と同様であるに違いない。これらの系列の多くが、ユランチアでは明らかにされていなかったが、それらは皆、心髄の特性を明らかにする。起源とする神格のこれらの個別化が、多数の進化の型の死を免れない存在体と、またそのような神格の断片との融合のための可能性を既に開拓した限られた数の非進化型の存在体とさえ統一されることも可能である。

107:5.5 (1182.1) 思考調整者が、生残している人間の進化している不滅のモロンチア魂に融合されるとき、上昇する人間が、宇宙進歩の精霊水準に達するまでは、調整者の心は、被創造者の心から離れて確認され得るだけである。

107:5.6 (1182.2) 上昇経験の終局者段階への到達において、第6段階のこれらの精霊は、そのような上昇する人格の神性と人間の局面との連結の役目を以前に果たした人間と調

整者の心の特定の局面の結合を表す何らかの心の要因を変えるようにみえる。この経験的な心の特性は、おそらく「崇高化」し、次には、進化的神格—崇高なるもの—の経験的授与を増やすであろう。

6. 純粋な精霊としての調整者

107:6.1 (1182.3) 思考調整者は、被創造者の経験に遭遇するとき、精霊影響の存在と導きを明らかにする。調整者は、本当に精霊、純粋な精霊であるが、精霊以上である。我々は、これまで満足に神秘訓戒者を分類することができなかった。それらについて確かに言えるすべては、それらが、本当に神に似ているということである。

107:6.2 (1182.4) 調整者は、人の永遠の可能性である。人は、調整者の人格可能性である。あなたの個々の調整者は、あなたの一時的同一性を永遠化することを願ってあなたの精霊化に向けて取り組んでいる。調整者は、精霊の父に対する美しい、そして自己を与える愛で満ちている。調整者は、あなたを本当に、そして神々しく愛している。彼らは、人の心に閉じ込められた精霊の望みの捕虜である。調整者は、孤独が終わるかもしれないという、かれ

らが、物理的な衣服と時間の衣装の制限からあなたと自由になれるかもしれないという、あなたの必滅の心の神性到達を切望している。

107:6.3 (1182.5) 楽園へのあなたの道は、精霊到達への道であり、調整者の特質は、宇宙なる父の精霊の特質顕示を忠実に繰り広げるであろう。楽園上昇の向うに、そして永遠の経歴の後終局者の段階において、調整者は、おそらく精霊活動より他の以前の人間のかつての共同者と接触するかもしれないが、楽園上昇と終局者の経歴は、神を知り、精霊化している人間と神-顕示の調整者の精霊的な活動との共同者関係である。

107:6.4 (1182.6) 我々は、思考調整者が精霊である、純粋な精霊である、おそらく絶対的精霊であるということを知っている。しかしまた、調整者は、占有的に精霊の現実であるに違いない。推測される心髄に加え、純粋なエネルギーの要素も存在している。あなたが、神は、純粋なエネルギーと純粋な精霊の源であるということを思い出するならば、神の断片は、両方であると知覚することはそれほど難しくないであろう。調整者が、楽園小島の瞬間的

で、普遍の重力回路の空間を通るということは、事実である。

107:6.5 (1182.7) 神秘訓戒者が、宇宙の中の宇宙の物理回路とこのようにつながっているということは、誠に説明のつかない事である。しかし、それは、かれらが、物理重力回路を通って壮大な宇宙の全体をよぎるということは事実として残る。神秘訓戒者が、外部空間段階を射通しさえするということは、全く可能である。かれらは、これらの領域に確かに、壮大な宇宙の境界をも超えた結合活動者の心の回路を横断できるとはいうものの、私の人格の系列は、楽園の重力の臨場に続いてこれらの領域に入ることができ、我々は、外部空間の未知の領域での調整者臨場を決して見つける確信はなかった。

107:6.6 (1183.1) にもかかわらず、調整者が物理-重力回路を利用するとき、かれらは、物質創造のようにはそれに服従しない。調整者は、重力の結果として起こるものではなく、重力の原型の断片である。それらは、重力出現に仮定的に先立つ存在の宇宙段階で断片化した。

107:6.7 (1183.2) 思考調整者には、その贈与の時から人間対象者の自然な死による神性球への出発の解放の日まで何の息抜きもない。そして、対象者が自然の死の入り口を潜り抜けない思考調整者は、この一時的休止期間さえ経験しない。思考調整者は、エネルギー摂取を必要としない。それらは、エネルギー、すなわち最高の、最も神性な系列のエネルギーなのである。

7. 調整者と人格

107:7.1 (1183.3) 思考調整者は人格ではないが、それらは本当の実体である。それらは実際に、かつ完全に人格化されており、人間に宿ってはいるものの、決して人格化されない。思考調整者は、真の人格ではない。それらは、真の現実、宇宙の中の宇宙で知られる最も純粋な系列の現実である—それらは神性臨場である。人格ではないが、父のこれらの驚異の断片は、一般的には存在体として、また時として、死すべき者への現在の活動の精神的局面から見た精神実体として呼ばれる。

107:7.2 (1183.4) 思考調整者が、意志の特権と選択の力を持つ人格でないならば、では、どのようにして必滅の対象を選

択し、進化の世界のこれらの被創造者に宿ることが出きるのか。これは容易い質問ではあるが、おそらく宇宙の中の宇宙のいかなる存在体もこれまでに正確な答えを見つけなかった。私の人格の系列、すなわち単独使者でさえ人格的でない実体における意志、選択、愛の恩恵を完全には理解していない。

107:7.3 (1183.5) 我々は、思考調整者は、前人格の全段階において選択の意志力を持たなければならないと、しばしば推測してきた。思考調整者は、人間に宿ることを志願し、人の永遠の経歴の計画を立て、情況に応じて適合し、変更し、そして、これらの活動は、本物の意志を内包している。思考調整者は、死すべき者に対する愛情を持ち、宇宙の危機に際し機能し、人間の選択に応じ決定的に行動するために待機しており、かたこれらはすべて、高度な意志の反応である。人間の意志の領域に関心をもたないすべての状況において、かれらは、あらゆる意味において意志、つまり最大限の決定に相当する力の行使を意味する行為を明白に示している。

107:7.4 (1183.6) では、もし意志があるならば、思考調整者は、なぜ人間の意志に補助的であるのか。我々は、調整者意志は、特質においては絶対であるが、顕現においては前人格であるからだと信じる。人間の意志は、宇宙現実の人格段階で機能し、全宇宙にわたり、非人格—無人格、準人格、および前人格—は、常に、意志と実存の人格の行為に応じるのである。

107:7.5 (1183.7) 被創造の存在体と無人格的エネルギーの宇宙全体にわたり、我々は、人格から離れて顕示された意志、決意、選択、愛を観測しない。調整者と他の同様の実体を除いては、我々は、非個人的な現実と関連して機能する人格のこれらの属性を目撃しない。調整者を準人格と示すのは正しくないであろうし、そのような実体を超人格と暗に指すのも妥当ではなかろうが、前人格の存在体と称することは全く許されるであろう。

107:7.6 (1184.1) 神性のこれらの断片は、我々の系列には神性の贈り物として知られている。我々は、調整者の起源は神性であるということ、宇宙なる父が、事実上は無限である領域全体におけるいかなる、あるいは全ての物質的被

創造者との直接的、かつ無制限の意志疏通、また、まったく楽園の息子の人格のその臨場から、あるいは、無限なる精霊の人格の間接的な活動を通して起こるこの全ての可能性を留保する見込みのある証明と実証を構成するということを認識している。

107:7.7 (1184.2) 神秘訓戒者の主人役であることを喜ばない被存在体はないが、終局者の目標に向かう意志をもつ進化的被創造者以外には、いかなる存在体の系列もこのようには内在しない。

107:7.8 (1184.3) [オーヴォントンの単独使者による提示]

論文 108
思考調整者の使命と活動

108:0.1 (1185.1) 思考調整者の人類への使命は、時間と空間の必滅の創造物に宇宙なる父を提示すること、宇宙なる父であることである。それが神の贈り物の基本的な仕事である。思考調整者の使命は、人間の心を高め、人の不滅の魂を楽園の完全性に関わる神性の高さと精霊段階へと移すことでもある。そして、一時的創造物である人間の性質を永遠の終局者の神の性質にこのように変える経験に

おいて、調整者は、他のいかなる宇宙手段によっても複製不可能の完全な調整者と完成された創造物との永遠の結合になる存在体の独自の型を生み出す。

108:0.2 (1185.2) 宇宙全体の何も、非無実存段階における経験事実を擦り替えることはできない。無限の神は、満ちており、完全であり、悪と被創造者の経験を除く万物をいつものように無限に含んでいる。神は曲がったことはできない。絶対確実である。神は、自分が決して個人的に経験したことがないことを経験的に知ることはできない。神の前知識は実存的である。それ故、父の精霊は、有限の死すべき者と共に上昇経歴のあらゆる本物の経験に関係するために楽園から降りる。実存的な神が、真実と事実に合致して経験的な父になり得るのは、そのような方法だけによってである。永遠の神の無限は、有限経験への可能性を包含する。そしてそれは、人間の生活変化の経験を実際に共有する調整者断片の活動において本当に現実となる

1. 選択と任務

108:1.1 (1185.3) 調整者は、人間奉仕のために神性球から派遣されるとき、実存的な神性の資質においては、相等しいのであるが、進化の創造物の中で、またそれとの以前の接触に比例した経験の性質においては異なる。我々は、調整者の任務の基準について説明することはできないが、われわれは、これらの神性の贈り物が、被内住人格への適合の永遠の合理性の何らかの賢明で効果的な方針に基づいて与えられると推測する。我々は、より経験豊富な調整者が、しばしば人間のより高い型の心の内在者であることを観測している。人間の遺産は、したがって、選択と任務の決定にかなりの要因があるに違いない。

108:1.2 (1185.4) 我々は、確信はないが、全思考調整者は、志願者であると堅く信じる。しかし、志願する前に、思考調整者は、内在の候補者に関する完全な資料を手にしている。祖先の天使の草案と映し出された日常生活の型は、地方宇宙の首都から超宇宙の本部へと内部におよぶ反射方法により神性球の調整者の予備部隊へと楽園経由で送られる。この予測は、人間候補者の遺伝的前例ばかりではなく、見込のある知的授与と精神的能力の推定にもお

よんでいる。調整者は、詳細に完全に知らされた本質のその心に宿ることを志願する。

108:1.3 (1186.1) 志願する調整者は、人間候補者の3つの資格に特に興味を持っている。

108:1.4 (1186.2) 1. 知的能力。心は正常であるのか。知力の可能性、知性の能力とは、何なのか。個人は、本物の意志の被創造者へと成長できるのか。英知には機能する機会はあるのか。

108:1.5 (1186.3) 2. 精霊の認識。敬虔的発展の見込み、宗教本質の誕生と成長。魂の可能性、つまり起こり得る精霊の受容能力とは、何なのか。

108:1.6 (1186.4) 3. 結合された知力と精霊的な力。人間の性格の強さを産み、生存価値の不滅の魂のある種の進化に貢献できるようにこれらの2つの授与がことによると関連し、結合されるかもしれない度合い。

108:1.7 (1186.5) これらの事実を目前にして、訓戒者は、任務に自由に志願するというのが我々の意見である。恐らく複数の調整者が、志願する。多分、人格化された統轄系列

は、人間候補の個性の精霊化と永遠化の仕事に最適なものを調整者を志願するこの集団から選択する。(調整者の任務と奉仕において創造物の性別は重要ではない。)

108:1.8 (1186.6) おそらく調整者の志願と実際の派遣の短い介在時間は、人格接近と心の精霊化のために最も効果的な進め方について任命された調整者を指導するにあたり、待機中の人間の心の働く型が用いられる人格化訓戒者の神性球の学校で費やされる。この心の型は、超宇宙の反射の奉仕によって供給される資料の組み合わせで定式化される。少なくともこれが我々の理解するところである。すなわち、これは、単独使者の長い宇宙経歴の中で多くの人格化調整者との接触により入手される情報集約の結果としての我々の見解である。

108:1.9 (1186.7) いったん調整者が実際に神性球から派遣されると、その瞬間と選ばれた対象の心に登場する間には、実際には何の時間も介在しない。神性球からユランチアまでの調整者の平均通過時間は117時間42分と7秒である。実質的に、この時間すべては、ユヴァーサにおける登録に占有される。

2. 調整者内住の前提条件

108:2.1 (1186.8) 調整者は、人格についての予測が神性球に取り継がれるや否や奉仕を願い出るが、人間対象者が、それぞれの最初の道徳的人格決意をするまでは実際には配属されない。人間の子供の最初の道徳的選択は、第7の心の補佐に自動的に示され、地方宇宙の創造霊を経て、神性球へこの情報を直ちに送り出す超宇宙管轄の主たる精霊の出席のもとに結合活動者の宇宙規模の心重力回路へと即座に登録する。調整者は、平均的にちょうど6回目の誕生日前に、ユランチアの人間の対象者に達する。現代の人々は、5年10カ月と4日間におよぶ。すなわち、地上生活の2,134日目。

108:2.2 (1187.1) 調整者は、人間の心が、内在する補佐の心-霊の活動により順当に用意され、聖霊により回路に載せられるまでは、人間の心に侵入することはできない。そして、それは、調整者の受け入れに向けて人間の心をこのように相応しくすることをすべての7名の補佐の調和的機能に要求する。創造物は、善と悪の道徳的選択の新生価値の間において選択能力を示すことより崇拝活動を示し、知恵の働きを表わさなければならない。

108:2.3 (1187.2) このようにして人間の心の舞台は、調整者の受け入れに備えるが、概して彼らは、真実の精霊が、これらの異なる精霊活動の精神的調整者として機能しているそれらの世界上であること以外は、当該の心に宿るために直ぐには現れない。贈与の息子のこの精霊が臨場するならば、調整者は、第７の補佐の心-霊が機能し始めて、宇宙の母なる精霊へ信号を送る瞬間に確実にくる。それは、そのような人間の知力への先行する活動の関連する６名の補佐の可能な調整を成就した。その結果、神性調整者は、五旬節の日以来ユランチアでは道徳的な地位のすべての通常のな心に一般的に授与されているのである。

108:2.4 (1187.3) 真実の精霊を贈与された心でさえも、調整者は、道徳的な決定の現象前には、人間の知力に任意に侵入できない。しかし、そのような道徳的決定がなされると、この精霊の助手は、神性球からの直接の管轄権を担う。神性調整者とその人間の対象の間には、機能する何の仲介者も、他の介入的権威者も、あるいは力も存在しない。神と人は、直接に関連がある。

108:2.5 (1187.4) 進化の世界の住民に真実の精霊を注ぐ時代以前に、調整者の贈与は、多くの精霊の影響と人格態度で決定されるようである。我々は、そのような贈与を定めている法律を完全には理解していない。我々は、そのような進化している心に宿ることを申し出た調整者の放出をまさに何が決定するのかを理解はしていない。しかし、我々は、真実の精霊の贈与の前にそのような心への調整者の到着に関連しているらしい数々の影響と状況を観察するのである。そして、それらは次の通りである。

108:2.6 (1187.5) 1. 個人的な熾天使の後見者の任務。もし調整者が予め必滅者に宿っていなかったならば、個人的な後見者の任務は、直ちに調整者をもたらす。調整者の活動と個人的な熾天使の後見者の活動の相互間には何らかの非常に明確な、しかし、未知の関係が存在する。

108:2.7 (1187.6) 2.知的な業績と精霊的な達成の第3回路への到達。私は、そのような事柄に関する地方宇宙の人格にそれほどの達成がはっきり示されることができる前にさえ、調整者が第3回路の克服の人間の心に到着するのを観測した。

108:2.8 (1187.7) 3. 精霊の驚くべき重要性に対する最高の決定の場合。惑星の個人的な危機におけるそのような人間の行動は、通常、待機中の調整者の即座の到着が伴う。

108:2.9 (1187.8) 4. 兄弟愛の精霊。精神的な回路への到達や個人的な後見者の任務のいかんを問わず—危機決定に類似するような何かがない場合でも—前進する人間が、仲間への愛に支配され、肉体の同胞への寡欲な活動に奉げられるようになるとき、待機中の調整者は、そのような人間奉仕者の心に宿るために例外なく下りる。

108:2.10 (1188.1) 5. 神の意志を為す意思表示。我々は、空間世界の多くの死すべき者が、調整者を受けるために準備が明らかに整っていると観察しているにもかかわらず、訓戒者は、まだ現れない。我々は、そのような創造物が、日々を生き、そして、ほぼ無意識に、天の父の意志を為す仕事を始めるという決定に間もなく静かに、到達するのを見続ける。そして、我々は、思考調整者の即座の派遣を観察する。

108:2.11 (1188.2) 6. 崇高なるものの影響。調整者が、必滅の居住者の進化する魂と融合しない世界において、我々は、調

整者が、完全に我々の理解を超える影響に応じて時おり与えられるのを観察する。我々は、そのような贈与が、崇高なるものに始まる何らかの宇宙反射的な行為により決定されると推測する。我々は、これらの調整者が、なぜこれらの進化する人間の心の特定の型との融合ができなかったり、または、しなかったりするのかについては知らない。そのような扱いは、我々には一度も示されたことがなかった。

3. 組織と管理

108:3.1 (1188.3) 我々が知る限り、調整者は、宇宙の中の宇宙の独立した働く部門として組織化され、明かに、神性球から直接に管理される。それらは7超宇宙にわたって同型であり、神秘訓戒者の同じ型が、全地方宇宙で勤めを果たしている。我々は、人種を通し、天の配剤について、そして世界と組織と宇宙へ広がる連続的組織にかかわる数多くの一連の調整者がいるということを観測から知っている。これは、しかしながら、それらが、壮大な宇宙の至るところで互換性を持って機能するので、神のこれらの贈り物の動向をおさえることは、きわめて難しいのである。

108:3.2 (1188.4) 調整者に関する完全な記録は、(神性球の外の)7超宇宙の本部にしかない。上昇する各創造物に宿る各調整者の数と系列についてはは、楽園当局が、超宇宙の本部に報告し、そこから関係する地方宇宙の本部に伝えられ、特定の惑星に中継される。しかし、地方宇宙の記録は、思考調整者の完全な番号を明らかにしない。ネバドンの記録は高齢者達の代表により指命される地方宇宙での任務番号だけを網羅している。調整者の完全な番号の本当の重要性は神性球だけで知られている。

108:3.3 (1188.5) 人間の対象者は、それぞれの調整者の番号によってしばしば知られている。必滅者は、調整者融合の後まで本当の宇宙名を受けないし、その結合は、目標後見者による新しい被創造物への新しい名前の贈与によって示される

108:3.4 (1188.6) 我々には、オーヴォントンに思考調整者に関する記録があるが、それに、彼らと彼らの行政関係に対し全く何の権威も持ってはいないが、我々は、地方宇宙の個々の世界と神性球上の神の贈り物の中央宿舎との間には非常に緊密な行政関係があると堅く信じる。我々は、

楽園の贈与の息子の登場に続き、進化の世界は、人格化調整者を調整者の惑星監督としてそれに割り当てるということを知っている。

108:3.5 (1189.1) 地方宇宙の査察官は、惑星調査を行う際、ちょうど査察官が、熾天使の責任者と進化する世界の行政に配属された存在体の他の系列の指導者に命令を届けるように、つねに思考調整者の惑星の責任者に話し掛けることに注目することは興味深い。つい先頃、ユランチアは、ネバドンの宇宙の生命-実験の全惑星の主権を有する監督タバメンチアによるそのような定期的な点検を受けた。そして超人間の人格の様々な責任者への訓戒と告発に加え、サルヴィントンかユヴァーサ、または神性球の惑星に位置するのかどうかは我々は全く知らないが、記録は、タバメンチアは、調整者の責任者に次のような承認も届けるということも明らかにしている。タバメンチアは言った。

108:3.6 (1189.2) 「さて、私よりはるかに優れるあなたがたのところに、私は、一連の実験的惑星に一時的な権威で配置されるものとして来ました。私は、この不規則な球体で

の奉仕を申し出た天の奉仕活動者のこの立派な集団の神秘訓戒者に対し、賛美と深い敬意を表しに来ました。危機がいかに困難であろうとも、あなたがたは決して怯まない。ネバドンの記録にも、またオーヴォントンの委員会の前でも、一人の神性調整者に対する起訴は、かつて提示されたことはなかった。あなた方は、その信託に忠実であった。あなた方はこの上なく誠実であった。あなた方は、この混乱した惑星で働くすべての者の誤りを訂正し、短所の補正の手伝いをしてきた。あなた方は驚くべき方々であり、この遅れている領域の魂の善の後見者である。あなた方が、篤志の活動者として明らかに私の管轄下にいる間にさえも、私はあなた方に敬意を表します。私は、あなた方の申し分ない利他性、奉仕への理解、公平な献身を認識し、あなた方にお辞儀をします。あなたは方は、この争いで疲弊し、悲しみに打ちひしがれ、病に苦しむ世界の死を免れない住民への神のような奉仕者の名に値する。私は、あなた方を尊敬する。私はあなた方を崇拝すると言ってもいいくらいです。」

108:3.7 (1189.3) 多くの一連の証拠の結果、我々は、調整者が徹底的に組織化されていると、どこか遠くの中心源から、

おそらくは神性球からのこれらの神性の贈り物である非常に知的で効果的で指示的な行政が存在すると信じる。我々は、調整者が、神性球から世界に来ることを知っているし、確かに、それらは、その対象者の死に際しそこに帰って行く。一連の

108:3.8 (1189.4) 高い精霊の系列の間に、行政機構を発見することは、きわめて難しい。私の人格の系列は、明確な任務に従事する間、広範囲の宇宙の関連者として連合して機能する多くの他の人格的かつ非人格的な準-神格集団とともに確かに無意識に参画している。我々は、前人格化の実体の多数の系列の存在に一様に気づいている人格化された創造物の唯一の集団(人格化調整者は別として)であるが故に、我々は、このように奉仕しているのではないかと推測する。

108:3.9 (1189.5) 我々は、第一根源と中枢の前人格の神性の断片である調整者の存在に気づいている。我々は、楽園三位一体の超人格表現である三位一体の啓示的精霊の存在を感じる。我々は、同様に、ある種の明かされていない系列の精霊の存在が、永遠なる息子と無限なる精霊から湧

き出てくるのを感知する。我々は、あなたにはまだ顕示されていない他の実体に全く反応していないわけではない

108:3.10 (1190.1) ネバドンのメルキゼデクは、これらの様々な影響が、進化の崇高なるものの進化する神格に入り込むように、単独使者が、これらの様々な影響の調整者の人格であるということを教える。我々は、時の不可解な現象の多くの経験的統一の関係者であるかもしれないということは極めて可能であるが、我々はこのように機能をすることに意識的確信はない。

4. 他の精霊的な影響への関係

108:4.1 (1190.2) 他の神格の断片とのありうる連携は別として、調整者は、人間の心における自分の活動範囲において全く単独である。父が、壮大な宇宙全体においてすべての直接的な個人の力と権威の行使を明らかに辞めたかもしれないが、楽園の神格の崇高なる創造者の子供のための放棄のこの行為にもかかわらず、父は、共同的に楽園の息子の精霊的な引力で、自分自身に全創造の被創造者を引き寄せるためにそのように行動できる目的で進化する

創造物の心と魂への臨場のために議論の余地のない権利を抗しがたく確保したという事実を神秘訓戒者は、雄弁に示す。楽園の神性の崇高なる創造者の子供のための放棄のこの行為にもかかわらず、父は、壮大な宇宙全体においてすべての直接の個人的な力と権威の行使を明らかに断念したかもしれないが、神秘訓戒者は、父は確かに、共同的に楽園の息子の精霊の引力と全創造の被創造者を自分に引き寄せるためにそのように行動するかもしれない目的で進化する創造物の心と魂への臨場するために議論の余地のない権利を永久に留保してきたという事実を雄弁に示す。あなたの楽園の贈与の息子は、まだユランチアに滞在中、「私が引き上げられるときは、すべての人を引き寄せるであろう」と言った。我々は、楽園の息子のこの精霊の引く力とそれぞれの創造的な仲間を認識し理解はしているが、人間の心のなかで非常に勇敢に生き、かつ働いているこれらの神秘訓戒者のなかで、そしてそれを通しての全英知の父の機能の手段を完全に理解しているわけではない。

108:4.2 (1190.3) 宇宙の中の宇宙の仕事に従属的ではなく、同等でもなく、または、明らかに関連してもいない一方で、

人の子供の心で独自に行動はするが、これらの神秘的臨場は、内在する創造物を神性の理想に向けて絶えず駆り立てる、つまり将来とより良い人生の目的と目標に向けて上へと誘う。これらの神秘訓戒者は、オーヴォントンで高齢者達の主権の安定化において不思議なほどに貢献するとともに、ネバドンの宇宙の中でマイケルの精霊的統治の確立においても、絶えず補佐をしている。調整者は、神の意志であり、神の崇高なる創造者の子供もまたその同じ意志を人格的に具体化することから、調整者の行為と宇宙支配者の主権が互いに依存するということは避けられない。明らかに無関係ではあるが、父の臨場である調整者とネバドンのマイケルの父の主権は、同じ神性のさまざまの顕現であるに違いない。

108:4.3 (1190.4) 思考調整者は、他のありとあらゆる精霊の臨場に全く関係なく行き来するように見える。彼らは、他の精霊のすべての影響の働きを支配し、管理するそれらとは全く切り離した宇宙の法則に基づいて機能するようである。しかし、そのような見かけの独立に関係なく、長期の観測は、補佐の心-霊、聖霊、真実の精霊、および他の影響を含む他のすべての精神活動との完全な協働と

相まって人間の心において機能するということを疑いなく明らかにする。

108:4.4 (1190.5) 世界が反乱により隔離するとき、惑星がすべての外側の回路化された交信から切り離されるとき、個人的使者は別として、カリガスティア動乱後のユランチアのように、直接の惑星間、あるいは宇宙の通信の唯一の可能性が依然としてあり、そして、それは球体の調整者の連携を通してである。世界、または、宇宙で何が起こっても、調整者は、決して直接関係がない。惑星の隔離は、地方宇宙、超宇宙、または中央宇宙のいかなる場所との通信をする調整者とかれらの能力に決して影響をあたえない。そして、これが、目標の予備部隊の崇高で独立的な調整者との接触が隔離された世界でよく頻繁におこる理由である。惑星孤立の不利な条件を回避手段としてそのような方法に訴える。近年、大天使の回路はユランチアで機能したが、通信手段は、主に大天使部隊自体の活動に限られている。

108:4.5 (1191.1) 我々は、理解に全く途方に暮れる遠く離れた宇宙の多くの精霊的な現象を認識している。我々は、周り

で起こるすべてにまだ通じるものではない。そして、私は、この計り知れない仕事の多くが、重力使者と特定の型の神秘訓戒者によってもたらされると思っている。私は、調整者が、単独に人間の心の改造に専心しているとは信じない。私は、人格化訓戒者と明らかにされていない前人格の他の系列が、領域の創造物との宇宙なる父の直接で説明のつかない接触を代表していると確信している。

5. 調整者の任務

108:5.1 (1191.2) 調整者が、ユランチアで生活するような複合的存在体に宿ることを志願するとき、かれらは、難しい任務を受け入れている。かれらは、然るに、あなたの心に存在し、領域の精霊の有識者の訓戒をそこで受け、次に、精霊のこれらの通達事項を物質の心に再度伝えるか、あるいは、言い換えを引き受けるための任務を担ったのである。それらは楽園上昇に不可欠である。

108:5.2 (1191.3) 思考調整者は、あなたの現在の人生で役立てることができないこと、婚約関係にある人間にうまく伝えることができないそれらの真実を、適切な協力を与える

ことへの被創造物の無能さ、または失敗がもとで、対象である人間の経験において入力し損ねたそれらの事柄を今まさに軌道から軌道へと運んでいるように、かれは、存在の次の段階での活用のために忠実に保持するであろう。

108:5.3 (1191.4) あなたが当てにできる一つのこと。調整者は、自分が世話に専念している何も決して失わないであろう。我々は、これらの精霊助力者が、履行を怠るということを決して知らない。地方宇宙の息子の型を例外とせず、天使と他の高い型の精霊体は、時として悪を容認することがあるかもしれないが、神性の道から逸脱することがあるかもしれないが、調整者は、決してためらわない。彼らは、絶対に信頼できるし、これはすべての７集団に等しく本当である。

108:5.4 (1191.5) あなたの調整者は、あなたの存在、つまり神とのあなたの永遠の息子性の事前の贈与の新しい、次の系列の可能性である。あなたの意志の同意により、そして同意に基づいて、調整者には、創造物の物質の心の動向

を新生のモロンチアの魂の動機と目的の変換行為に従属させる力を持っている。

108:5.5 (1191.6) 神秘訓戒者は、思考助力者ではない。彼らは思考調整者である。彼らは、調整と精霊化により、新しい世界とあなたの未来の経歴の新しい名前により、構築目的に向けての物質の心で働く。彼らの任務は、この世ではなく、主に来世に関係する。それらは地球の助力者ではなく、天の助力者と呼ばれる。彼らは、人間の経歴を容易くすることに関心はない。むしろ、かれらは、決意が刺激され、増やされるように、あなたの人生をそれなりに困難で険しくする際に関与している。すばらしい思考調整者の臨場は、生活の容易さや精力的な考えからの自由を与えはしないが、神性のそのような贈り物は、心の崇高な平穏と精神のじつに見事な静けさを与えるはずである。

108:5.6 (1192.1) あなたの一時的で変化し続ける喜びと悲しみの感情は、主には、あなたの内部の精神的傾向と外部の物質的環境への純粋に人間的、そして、物質的な反応にある。したがって、利己的な慰めと人間らしい安らぎを調

整者に期待してはいけない。あなたに永遠の冒険の準備をさせることが、あなたの生存を保証することが調整者の仕事である。あなたの混乱した気持ちを静めたり、あるいは傷ついた誇りに役立つことが、神秘訓戒者の使命ではない。それは、調整者の注意を引き、時間を占拠する長い上昇経歴のためのあなたの魂の準備である。

108:5.7 (1192.2) 私には、調整者があなたの心の中で、そして魂のためにまさに何をするのかあなたに説明できるのか疑わしい。神性の訓戒者と人間の心の宇宙的繋がりにおいて実際に起こっていることを完全に認識しているかどうか私には分からない。我々にとり、すべては、計画や目的に関してではなく、実際の達成方法に関し、幾分か謎である。そして、これこそが、我々が人間へのこれらの崇高な贈り物の適切な名前を見つける際、そのような困難に直面する理由である。

108:5.8 (1192.3) 思考調整者は、あなたの恐怖の気持ちを愛と自信の確信に変えることを希望している。しかし、彼らは、機械的に、また任意にそのようなことを行なうことはできない。それはあなたの仕事である。恐怖の足枷か

らあなたを救い出すという決定を実行するに当たり、あなたは、調整者が、照明を高めたり、進める精霊の梃をその後適用するかもしれない精神の支点を文字通り供給する。

108:5.9 (1192.4) 人種の高度と低度の性向の間に、つまり本当に正しいものと、悪であるものの間に (単にあなたが正悪と呼ぶものではなくて)、鋭くてはっきりした衝突が起こるとき、あなたは、調整者は、そのような経験において何らかの明確で積極的な態度で常に参加するであろうということを当てにすることができる。そのような調整者の活動は、人間の共同者には無意識であるかもしれないという事実は、その価値と現実を少しも損なわない。

108:5.10 (1192.5) あなたには、将来の目標の個人的な後見者がおり、そして生存を達成できなければ、その守護天使は、信託の忠実な実行に関し立証のための審判を受けなければならない。しかし、彼らの対象が生残し損なった場合、思考調整者は、このように審査にはかけられない。我々は皆、天使はことによると活動において完成に達しないかもしれないが、思考調整者は、楽園の完全の

方法で働いていることを知っている。かれらの活動は、神性球の外のいかなるものによる批判の可能性を超える非の打ち所のない方法によって特徴づけられる。あなたには、完全な案内人がいる。したがって、完全性の目標は、必ず達成できるのである。

6. 人の内なる神

108:6.1 (1192.6) 崇高で完全な調整者にとりユランチアの死すべき者といったような物質的生物の心に実際に存在するために自分自身を提供するということ、つまり地球の動物起源の存在体との試験的結合を本当に成就するということは、実に神性の謙遜の極致である。

108:6.2 (1193.1) 調整者は、世界の住民の以前の状態がどうであれ、全ての人間への神性の息子の贈与に続き、また真実の精霊の贈与の後に、意志ある全ての標準的創造物の心に住むことを望んでそのような世界に繰り出すのである。楽園贈与の息子の任務完了に続き、これらの訓戒者は、本当に「あなたの中の天国の王国」になる。調整者は、人間の邪悪のまさしくその中でさえ人間の心で共存しなければならないということは、文字通り本当なので

あることから、父は、神性の贈り物の恵与を通して、罪と悪への可能な最接近をする。内在する調整者は、全く浅ましく、利己的なそれらの考えに特に苦しめられる。かれらは、美しく神性であるもへの不敬に苦しめられており、人の愚かな動物的恐怖と子供じみた懸念の多くに自分達の仕事が実質的に阻まれている。

108:6.3 (1193.2) 神秘訓戒者は、確かに宇宙なる父の贈与、宇宙のあちこちでの神の姿の反映である。偉大な教師は、人間は、心の精霊で一新されるべきであると、神のように、正義と真実の完成から誕生する新たな人間になると、かつてかれらに諭した。調整者は、神性の印、神の臨場である。「神の姿」とは、身体的類似性にも物質的創造物の拘束的制限にも言及するのではなく、むしろ、宇宙の謙虚な被創造者への思考調整者の崇高な贈与における宇宙なる父の精霊存在の贈り物に言及しているのである。

108:6.4 (1193.3) 思考調整者は、精霊的到達の源泉であり、あなたの中の神の性格の望みである。思考調整者は、生存のための力、特権、可能性であり、単なる動物の創造物と

あなたを完全に永遠に区別する。彼は、外部の、また物理的刺激とは対照的に高度の真に内部の精神的思考の刺激であり、それは、物体の神経-エネルギーの働きに沿って心に達する。

108:6.5 (1193.4) 将来の経歴のこれらの忠実な管理人は、つねに精霊的な対応物としてあらゆる心の創造を絶えず複製する。あなたが、本当に生存世界における復活を(精神的にだけ)目指すように、彼らは、ゆっくりと、確実にあなたを作り直している。そして、これらの絶妙の精霊改造のすべては、あなたの進化している不滅の魂、すなわちモロンチアの自己が現れている現実で保持されている。これらの現実は、実際にそこにある。にもかかわらず、調整者は、かれらを意識の光に示すためにこれらの複製の創造を十分に高めることはあまりできない。

108:6.6 (1193.5) また、あなたが人間の親であるように、調整者は、神性のあなたの真の親、あなたのより高く前進的自己、より良いモロンチアと将来の精神的な自己である。そして、あなたの存続を宣告し、あなたの忠実な共同者—神、調整者—との永遠の繋ぎにおいてあなたを新世

界へと、また決して終わらない生存へと上に移行する時、裁判官と検閲官が見分けるのは、この進化しているモロンチア魂なのである。

108:6.7 (1193.6) 調整者は、あなたの進化する不滅の魂の永遠の原型、神性の源である。調整者は、人に精霊的経歴と将来の経歴を考慮にいれた物質生活と現在の生活への精通へと導こうとする絶え間ない衝動である。訓戒者は、不滅の望みに自由を奪われた者、永遠の進行の泉である。彼らは、多少直接的な回路で対象との通信をどれほど楽しんでいることか。彼らが、象徴や他の間接的方法を不要とすることができ、直接に人間の共同者の知力に情報を伝えることができるとき、どれ程までに歓喜していることか。

108:6.8 (1194.1) あなた方人間は、無限に近い展望、つまり気分を浮き立たせる奉仕、無類の冒険、崇高な不確実性、そして果てしない達成の機会の決して終わらない、広がり続ける球体の無限の展開を始めた。雲が頭上に集まるとき、あなたの信仰は、内在する調整者の臨場の事実を認めるべきであり、その結果、あなたは、人間の不確実性

の霧の先にサタニアの大邸宅世界の招いている高さに永遠の正義の太陽の澄んだ輝きをのぞき見ることができるであろう。

108:6.9 (1194.2) [オーヴォントンの単独使者による提示]

論文 109
調整者の宇宙生物との関係

109:0.1 (1195.1) 思考調整者は、宇宙経歴の子供であり、実際に、未経験の調整者は、人間が成長し向上している間に経験しなければならない。人間の子供の人格は、進化的な一生のための闘いに向けて発展するように、調整者も上昇する命の次の活動範囲の予行において大きくなるのである。子供が、幼年期の社会生活や遊びの世界を通してかれの大人の活動に向けて適応性のある多才さを習得するように、内在する調整者は、モロンチア経歴と関係のあるそれらの活動のための人間の予備計画と予行の効力により宇宙人生の次の舞台のための技術を獲得する。人間の存在は、増加した責任と来世のより大きい機会に備える際、調整者により効果的に活用される演習期間を構成する。しかし、あなたの中で暮らしている間、調整者の努力は、現世の一生と惑星の一生の問題にはそれほ

ど関わりはない。今日、思考調整者は、人間の進化する心における宇宙経歴の現実について、いわば、予行演習をしている。

1. 調整者の発達

109:1.1 (1195.2) かれらが、神性球から送り出される前に、未経験の調整者の訓練と発展のための包括的で入念な計画がなければならないが、我々はそれに関してあまり多くを本当に知らない。かれらが、人間とのつながりの新たな任務に乗り出す前に、内在経験のある調整者を再訓練するための大規模な体制もまた疑いなく存在するのであるが、我々は、実は知らない。

109:1.2 (1195.3) 私は、訓戒者の内在する人間が生存に失敗する度に、つまり調整者が神性球に戻るとき、訓練の延長の過程に従事すると人格化調整者から告げられた。この延長訓練は、人間に宿る経験によって可能にされ、訓練については、その調整者が、時間の進化の世界へ送り返される前に、それはいつも与えられる。

109:1.3 (1195.4) 宇宙には実際の生活経験の代用品は何もない。形成されたばかりの思考調整者の神性の完全性は、いか

なる方法においてもこの神秘訓戒者に経験豊富な援助能力を授けはしない。経験は、生活から不可分である。神性の贈り物は、実際の生活から確保する必要性から免除できない唯一である。したがって、崇高なるものの現在の球体内で生きており機能するすべての存在と同じように、思考調整者は、経験をしなければならない。それらは、下方から一層高い集団へと、未経験からより経験豊富な集団へと進化しなければならない。

109:1.4 (1196.1) 調整者は、人間の心で確かな発達上の経歴を経験する。永遠に自分達のものである到達の現実を獲得する。調整者は、物質的人種とのありとあらゆる接触の結果、特定の人間対象者の生存、あるいは非生残にかかわらず、次第に調整者としての技能と能力を取得する。調整者もまた、生存能力の不滅の魂の進化を促進することにおいて、人間の心の平等の共同者である。

109:1.5 (1196.2) 調整者進化の第一段階は、死を免れないものの生残する魂との融合によって達せら到達される。このように、あなたが、ありのままに人から神への内側の、そして上向きの進化している間、　調整者は、神から人へ

の外面の、そして下向きの進化をしている。であるからこそ、神性と人間のこの結合の完成品は、永遠に、人の息子と神の息子になるのである。

2. 独行的調整者

109:2.1 (1196.3) あなたは、経験に関して調整者の分類—未経験で、高度で、最高—について知らされてきた。あなたは、特定の機能的な分類—独立的な調整者—も認めるべきである。独立的な調整者とは次のようなものである。

109:2.2 (1196.4) 1.調整者が、人間の対象に貸与されるだけの世界の型において、あるいは、人間が、生存をしそこなった実際の融合惑星上において一時的な居住者として志をもつ創造物の進化する人生においてある種の必要な経験を持つもの。そのような訓戒者は、高度の調整者か最高の調整者である。

109:2.3 (1196.5) 2.第3の精霊回路に到達し、個人的な熾天使の保護者を割当てられた人間の精霊的な力の均衡を得たもの。

109:2.4 (1196.6) 3. 最高の決断をしたもの、すなわち厳粛で誠実な婚約的関係に入った調整者をもつ対象者をもつもの。調整者は、あらかじめ、実際の融合の時間に目を向け、結合を事実の出来事とみなす。

109:2.5 (1196.7) 4. 人間上昇の進化的世界で目標予備部隊の1つに召集された対象者をもつもの。

109:2.6 (1196.8) 5.人間の睡眠の間のいつか、、指定先の世界の精霊の管理に関連する連携、接触、再登録、または人間圏の外からの他の奉仕の何らかの功績を果たすために一時的に人間の幽閉の心から離れているもの。

109:2.7 (1196.9) 6. 惑星の精霊的な業務に不可欠の何らかの宇宙の目標への実施が委ねられた精霊人格の物質共同者であった一部の人間の経験における危機の際に役目を果たしたもの。

109:2.8 (1196.10) 独行的調整者は、その多くの功績が、結合している人間対象者の内外両面において示されているように、直接内在する人間の人格には含まれないすべての事柄において際立つ意志の度合をもつと思われる。そのよ

うな調整者は、領域の数々の活動に参加するが、より頻繁に、自身が選ぶ地球の棲家の気づかれない内在者として機能している。

109:2.9 (1196.11) 間違いなく、これらの高度のより経験豊かな調整者の型は、他の領域の調整者達と意思の疏通をはかることができる。しかし、独行的調整者が、このように相互に通じる間、時として、危機の時代の惑星間の問題において機能するということはことは知られているが、互いの仕事のうえだけで、そして滞在する領域の調整者の活動に不可欠の保存資料の維持の目的のためだけにそうするのである。

109:2.10 (1197.1) 最高の、独行的である調整者は、人体を意にままに離れることができる。内在者は、人間の生命の有機的部分でも生物的部分でもない。内在者は、その上での神性の重ね合わせである。調整者は、本来の生命計画において備えられはしたが、それらは、物質的存在に不可欠ではない。それにもかかわらず、一度自分達の内在に着手すると、彼らは、滅多に、一時的にさえ、人間の棲家を去ることはないと記録されるべきである。

109:2.11 (1197.2) 超独行的調整者は、委ねられた課題の克服を達成したもの達であり、ひたすらに物質生活手段、あるいは人間の魂の移動を待ち受けている。

3. 調整者の人間の型との関係

109:3.1 (1197.3) 神秘訓戒者の詳細な仕事の特徴は、つながりの、あるいは融合の調整者であるかにより、それぞれの任務の性質において異なる。一部の調整者は、その対象者の束の間の生涯のために単に貸与されるだけである。他のものは、それらの対象者が生き残るならば、永遠の融合の許可をもつ人格候補者として用いられる。また、異なる体制と異なる宇宙だけでなく、異なる惑星の型の間のかれらの仕事におけるわずかな変化もある。しかし、それらの作業は、概して、天の存在体の作られたどの命令のどの任務よりも著しく均一している。

109:3.2 (1197.4) 特定の原始世界(第1直列群)では、調整者は、経験的訓練として、主に自己修養と進歩的発展として、創造物の心に宿る。原始人が決断の深みに到る初期に、しかし、新生の精神性のより高い水準に達するために自制と性格獲得の丘の向こうの道徳的な高さを昇ることを比

較的に選ばない初期に、未経験の調整者は、通常、そのような世界に送られる。 (しかしながら、調整者融合に失敗する多くのもの達は、精霊-融合の上昇者として生残するのである。)調整者は、原始の心との一時的なつながりにおいて貴重な訓練を受け、素晴らしい経験をし、その後、他の世界上の優れた者の利益のためにこの経験を活用することができる。そもそも生存価値のあるものは、広い全宇宙において何も失われない。

109:3.3 (1197.5) 別の世界の型では(第 2 直列群)、調整者は、単に人間に貸与される。ここでは、訓戒者は、決してそのような内在を介しての融合人格に達することはできないが、人間の生涯の間に、ユランチアの人間に与えることができるよりもはるかに、人間の対象者に大きな力添えを提供する。調整者は、より高い精霊的到達のためのひな型として、必滅の創造物に一生の寿命の期間ここで貸し与えられる。調整者は自然死の後には戻らない。これらの生残の人間は、精霊融合で永遠の命に達する。

109:3.4 (1197.6) たとえばユランチアのような世界では(第3直列群)、神性の贈り物との本当の婚約的関係、生と死の契

約がある。もしあなたが生残するならば、永遠の結合、永遠の融合、人と調整者の一つの存在製作があることになっている。

109:3.5 (1197.7) この一連の世界の3個の脳をもつ人間の中では、束の間の生活の間、調整者は、1個や2個の脳をもつ型の中で、それぞれの対象者とのさらに一層の実際の接触ができる。しかし、死後の経歴においては、3個の脳の型は、ちょうど1個の脳の型と2個の脳の民族—ユランチの人種—のように進行する。

109:3.6 (1198.1) 2個の脳の世界においては、楽園贈与の息子の滞在の後、未経験の調整者は、疑いなく生存能力を持つ人々には滅多に割り当てられない。そのような世界では、生存の可能性をもつ知的な男女に宿るすべての調整者は、実際には高度、または最高の型に属するというのが我々の信念である。

109:3.7 (1198.2) ユランチアの早期の進化する人種の多くには、3つの存在集団があった。かれらは、断然動物的であり、調整者受け入れの容量を全く欠くほどのもの達がいた。道徳的責任の時代に達したとき、調整者の疑う余地

のない能力を示し、即座に彼らを受けいれたもの達がいた。境界線の位置を占めた3番目の階級があった。彼らには調整者受理の容量はあったのだが、訓戒者は、個人の嘆願に際しやっと心に宿ることができたのである。

109:3.8 (1198.3) 多くの未経験の調整者は、実際には不適任の媒体や劣る先祖による廃嫡により生存資格を取り上げられるそれらのもの達と共に、進化する心に連絡する際の貴重な予備経験のために役立ち、その結果、どこか他の世界のより高い心の型へのその後の任務により優れた資格を得た。

4. 調整者と人間の人格

109:4.1 (1198.4) 人間の間の知的な相互通信の高度の形は、内在する調整者によって大いに促進される。動物は共感をもつが、互いに概念を伝えない。感情を表すことはできるが、考えと理想は表明できない。動物起源の人間もまた、思考調整者が贈与されるまで高い型の知的関係、あるいは仲間との精神的な交わりを経験しない。にもかかわらず、そのような進化の生きものが言語行動を発展するとき、かれらは、調整者を受ける本道を歩んでいる。

109:4.2 (1198.5) 動物は、粗雑な方法で互いに伝達し合うが、そのような原始的接触にはほとんど人格はない。調整者は人格ではない。それらは前人格の存在である。しかし、彼らは人格の源の出であり、その臨場は、人間の人格の質的徴候を増大させる。特に、調整者に以前に経験をしたならば、これは本当である。

109:4.3 (1198.6) 調整者の型は、人間の人格表現に関する可能性と非常に関係がある。時代を通して、ユランチアの偉大で知的で精神的指導者の多くは、内在する調整者の優越性と以前の経験のため、主に自分達の影響力を奮ってきた。

109:4.4 (1198.7) 内在する調整者は、昔の原始人の子孫を変えたり、人間らしくすることにおいて、少なからず他の精霊的な影響と協力した。ユランチアの住民の心に宿る調整者が引っ込められるならば、世界は、ゆっくりと原始時代の人間の多くの場面と習慣に戻ることであろう。神性訓戒者は、前進的文明の真の可能性の1つである。

109:4.5 (1198.8) ユヴァーサの記録によると、ユランチアで１つの心に宿る１名の思考調整者が、以前オーヴォントンに

おいては15の心に住んでいたことに気づいた。我々は、この訓戒者が他の超宇宙で同様の経験をしたかどうかについては知らないが、私はそうではないかと推測する。これは、驚くべき調整者であり、この現代のユランチアにおいて最も役に立つ大きな力の1つである。生き残ることを拒否したという点で他のもの達が失ったものを、この人間は、(そして、あなたの世界全体も)獲得する。生存資格のないもの達からは調整者が現在持っているその経験さえ取り上げられ、一方、生存の見込みのある者には懶惰な逃亡者に属した前-経験の調整者でさえ与えられるであろう。

109:4.6 (1199.1) ある意味で、調整者は、真、美、善の領域におけるある程度の惑星融合を助成しているかもしれない。だが、同じ惑星で調整者に2度の内在経験が与えられることは滅多にない。現在、以前この世界にいたことのある調整者は、誰もユランチアで勤務していない。我々にはユヴァーサの文書保管所にそれらの番号と記録があるので、私は、自分の話していることを理解している。

5. 調整者内在の物質的障害

109:5.1 (1199.2) 創造的な想像力の自由だが制御された回路を自由に心が流れるとき、最高の、独行的な調整者は、しばしば精霊の重要な要素を人間の心に貢献することができる。そのようなときに、そして時おり睡眠の間、調整者は、精神的な流動を捕らえ、抑え、流れに留まり、次には思考の進行を転ずることができる。このすべてが、超意識のより高い奥底で深い精霊的な変化をもたらすために行われる。こうして、心の勢いと活力は、現在と未来の精霊水準の接触傾向のための階調に完全に調整される。

109:5.2 (1199.3) 絶えず内に宿る潜在的人格の知恵、真実、善、および美を部分的に意識できるようになるために、時として心を啓発したり、つまり、絶えずあなたの中で話しかける神性の声を聞くことは、可能である。

109:5.3 (1199.4) しかし、不安定で急速に変化するあなたの精神的態度は、しばしば調整者の計画を妨害し、仕事を中断する結果となる。調整者の仕事は、必滅の人種の生来の本質に妨げられるばかりではなく、この活動は、あなた自身の前もって考えられた意見や解決された考え、また

積年の偏見によっても大いに遅れを引き起こす。これらの障害のために、幾度となく、調整者の未完成の創造だけが、意識に現れるし、また概念の混同は、回避不能である。したがって、精神的状態を精査するにあたっては、安全性は、完全にそれがどうであったかということを無視し、確実に、しかも基本的にそうであることのために、一つ一つの考えと経験の即座の認識だけにある。

109:5.4 (1199.5) 人生の重大問題は、神秘訓戒者の神性臨場により開始される精霊の強い衝動からくる要求に対しての先祖の生活習慣の調整である。誰も宇宙と超宇宙の経歴において二君に仕えることはできないが、今ユランチアで送る人生においては、誰もが必然的に二君に仕えなければならない。人は、ただ一人の主に精霊の忠誠を尽くしつつ、人間の現世の打ち続く妥協術には巧みにならなければならない。そして、これが、非常に多くの者がつまずき、しくじる理由、つまり進化の闘いの圧力にうんざりし、屈する理由である。

109:5.5 (1199.6) 脳の授与の継承的遺産と電気化学の総括的管理の継承的遺産の双方ともに、効率的な調整者の活動範囲

を区切るために働くが、継承的障害 (正常な心の)は、最終的な精霊的業績をけっして妨げない。遺伝は、人格征服の速度を妨害するかもしれないが、上昇冒険の最終的達成を妨げない。調整者に協力しようとするならば、神性の贈り物は、遅かれ早かれ、不滅のモロンチア魂を進化させ、その魂との融合後、地方宇宙の主権を有する主たる息子に、そして最終的には楽園の調整者の父に新しい創造物を提示するであろう。

6. 真の価値の持続

109:6.1 (1200.1) 調整者は決して失敗しない。生存価値のあるものは何も失われない。意志をもつあらゆる生物のあらゆる重要な価値の生存は、人格の意味の発見、あるいは人格の評価の生存、非生存の如何にかかわらず、確かである。そういうことであり、必滅の創造物は、生存を拒絶するかもしれない。それでも、人生経験は無駄ではない。永遠の調整者は、そのような外見上の失敗の人生の価値ある特徴を他の世界へ持ち越し、そこでこれらの生残の意味と価値を人間の心のより高い型に、すなわち生存能力の一つを与える。価値ある経験は、決して無駄に

は起こらない。本当の意味また本当の価値は、決して消滅しない。

109:6.2 (1200.2) 融合候補に関して言うと、もし神秘訓戒者が人間である仲間に見捨てられるならば、人間の共同者が上昇経歴の追求を断るならば、自然な死により(あるいはそれに先立って)、調整者が放免されるとき、調整者は、その非生存創造物の心で進化した生存価値のすべてを運び去る。調整者が、人間対象者の非生残という理由で繰り返し融合人格達成に失敗するならば、そして、この訓戒者が後に人格化されるならば、身につけた内在経験の総てとこれらの修得された人間の心の全ては、そのような新たな人格化調整者の実際の所有物、すなわち、すべての未来に渡って享受され利用される恩恵となるであろう。この系列の人格化調整者は、創造物であるかれの前のすべての宿主の生き残りの特徴すべての複合組み立てである。

109:6.3 (1200.3) 長い宇宙経験をもつ調整者が、贈与任務に際し神性の息子に宿ることを申し出るとき、かれらは、人格到達がこの奉仕を通しては決してを達成できないことを

知っている。だが、しばしば精霊の父は、これらの志願者に人格を与え、かれらをその系列の責任者に定める。これらは、神性球で権威をもち光栄に浴している人格である。そして、それらの独自の本質は、人間内在の複数の経験のモザイク風の人間性と、楽園の贈与の息子の最後の内在経験に属する人間の神性についての精霊的な記述もまた具体化する。

109:6.4 (1200.4) 肉体のヨシュア・ベン・ヨセフが、人間生活を送ったときに、彼を一歩一歩誘導したほかならぬその訓戒者ネバドンのマイケルの人格化調整者により、あなたの地方宇宙における調整者の活動は、指示される。この並はずれた調整者は、その信頼に誠に忠実であり、この勇敢な訓戒者は、常に父の完全な意志の道を選ぶ際に楽園息子の人間の心を先導し、賢明に人間性を導いたのであった。この調整者は、以前アブラハムの時代にメルキゼデクのマキヴェンタと共に働きこの内在経験前とこれらの贈与経験の間の相当な功績の双方に係わったことであった。

109:6.5 (1200.5) この調整者は、イエスの人間の心—人生の繰り返し状況のそのれぞれで、「私の意志ではなく、あなたの意志、がなされますように。」と言って、父の意志に完全な献身を維持したその心—で誠に勝利を収めたのであった。そのような決定的な奉献は、人間性の制限から神性到達の終局への本当の確実な手段を意味する。

109:6.6 (1200.6) この同じ調整者は、現在、かれの強力な人格の計り知れない本質にヨシュア・ベン・ヨセフの洗礼前の人間性を反映している。それが、人間の経験で達成し得る精霊的な価値を完全に使い果たす人生を送ったように、これは、全ユランチア人の最も偉大な者が、当たり前の人生の質素な情況から作り出された永遠で生きた価値についての永遠で生きた転写を包含する。

109:6.7 (1201.1) 調整者に委ねられた永久的価値のすべては、永遠の生存を保証する。ある例では、訓戒者は、将来内在する人間の心の贈与のためにこれらの財産を保持する。他の例や、人格化の場合においては、生残の、かつ保存されたこれらの現実は、主たる宇宙の建築者の働きにおける今後の活用のために委託される。

7. 人格化調整者の未来の目標

109:7.1 (1201.2) 調整者の断片ではない父の断片が、人格化可能であるか否かについては我々が述べることはできないが、人格は、宇宙なる父の主権的、自由意志の贈与であるとあなたには知らされてきた。我々の知る限り、父の断片の調整者の型は、人格的存在への奉仕-活動を通しての人格的属性の習得のみで人格に達する。これらの人格化調整者は、神性球の故郷におり、そこで彼らは、自分達の前人格の仲間に教えたり指示を与える。

109:7.2 (1201.3) 人格化思考調整者は、拘束されず、割り当てられない、主権をもつ安定装置者であり、広範囲の宇宙の中の宇宙の補整者である。かれらは、創造者と創造物経験を結合する—実存的であり、経験的である。かれらは、時間と永遠の結合体である。かれらは、宇宙管理において前人格と人格を結びつける。

109:7.3 (1201.4) 人格化調整者は、主たる宇宙の建築者のすべてに賢明で強力な経営陣である。彼らは、宇宙なる父の全活動—人格的、前人格的、超人格的活動—の人格的な主体である。彼らは、究極の神の領域、先験的な準絶対

の球体全域の、絶対の神の段階にさえ、驚異的なもの、普通でないもの、予期しないものをもたらす人格的な奉仕者である。

109:7.4 (1201.5) かれらは、人格の全ての既知関係を自分達の存在の中に迎え入れる宇宙の唯一の存在である。彼らは全人格である—人格前の存在であり、人格であり、人格後の存在である。彼らは、永遠の過去、永遠の現在、および永遠の未来の場合のように宇宙なる父の人格を授ける。

109:7.5 (1201.6) 父は、無限と絶対の系列の実存的な人格を永遠なる息子に贈与したものの、実存的な前人格調整者に授与される人格化調整者の型の経験的な人格を自身の活動のために留保することを選んだ。それらは双方共に、このようにして、究極なるもの、崇高なるもの-究極なるもの、さらに崇高-絶対の段階への準絶対の領域における先験的活動の将来の永遠の超人格へと運命づけられる。

109:7.6 (1201.7) 人格化調整者は、概して宇宙ではめったに見かけられない。時折、彼らは、高齢者達に助言を求め、ま

た、時々、七重の創造者なる息子の人格化調整者は、ヴォロンダデクの支配者達との打ち合わせのために星座の本部世界に来る。

109:7.7 (1201.8) ヴォロンダデクのユランチア観察者—つい先頃あなたの世界の非常時の摂政を担ったいと高きものの管理人—が、居住している総督の面前でその権限を主張したとき、自身が選んだ全構成員とユランチアの非常時の管理を始めた。彼はすぐに、それぞれの惑星の義務をすべての仲間と補佐に割り当てた。しかし、かれは、摂政を担うとすぐに自分の面前に現れた3人格化調整者は選ばなかった。彼は、かれらが、前の摂政の時に神性の臨場を明らかにしなかったので、このように現れるということさえ知らなかった。いと高きものの摂政は、これらの志願の人格化調整者のために活動を割り当てたり、義務を明示したりはしなかった。それにもかかわらず、これらの無限の人格の3存在体は、その時ユランチアで働いていた多数の天の存在体の中で最も活発であった。

109:7.8 (1202.1) 人格化調整者は、宇宙人格の多数の系列のための広範囲にわたる仕事を実行するが、我々は、これらの

活動を調整者-内在の進化的創造物と討論することを許諾されていない。これらの驚異的な人間の神性は、壮大な全宇宙の最も注目に値する人格の中におり、誰もそれらの将来の任務が何であるかを敢えて予測はしない。

109:7.9 (1202.2) ［オーヴォントンの単独使者による提示］

論文 110
個々の人間への調整者の関係

110:0.1 (1203.1) 不完全な存在体への自由の授与は、必然的な悲劇を伴い、そして、それは、優しい交わりにおいて、広く、愛を込めてこれらの受難を共有することは、親である完全な神格の本質である。

110:0.2 (1203.2) 宇宙の情勢に精通する範囲において、私は、思考調整者に対する愛情と献身を全創造において偽りなく神性である愛と見なす。人種への彼らの働きにおける息子の愛は、見事であるが、個人への調整者の献身は、感動的に崇高で、つまり神々しく父のようである。楽園の父は、自分の個々の創造物との個人的な接触のこの形を独占的的な創造者の特権として明らかに確保した。そして、非常に魅力的に進化する惑星の子供に宿るこれらの

非人格の実体の驚異的活動に匹敵するものは、宇宙の中の全宇宙には何もない。

1. 人間の心に宿ること

110:1.1 (1203.3) 調整者は、人間の物質的な脳に生きていると考えられるべきではない。それらは、領域の物理的生物の有機的部分ではない。思考調整者は、物理的な単一器官の境界の中に存在するというよりも、むしろより適切には人間の必滅の心に宿ると見なすことができる。認識されていない調整者は、人間の対象と、特に超意識における精霊との心の敬虔な接触のそれらの崇高な経験の間、間接的に、絶えず情報交換をしている。

110:1.2 (1203.4) 進化する死すべき者が、より良い理解を成し遂げ、また人の精霊的な幸福を助成する任務に心から忠実である人間に内在する寡欲で素晴らしい調整者の仕事への全面的認識をするという助けが、私にとって可能であったらと望んでいる。これらの訓戒者は、人の心の精神的な幸福を促進する仕事に切に忠実である。これらの訓戒者は、人の心のより高い段階への有能な奉仕者である。それらは、人間の知力の精霊的可能性の賢明で経験

豊富な操縦者である。これらの天の助手は、あなたを安全に内部へと、また上向きへと幸福の天の港に案内する並外れた任務に専心している。これらの疲れを知らない労働者は、あなたの永続する人生における神性の真実の勝利の今後の人格化に奉げられる。彼らは、遠方の、永遠の岸で完全の神の港に向け人の進化している魂を上手に誘導しながら、悪の浅瀬から神を意識している人間の心を遠くへと水先案内をする注意深い労働者である。調整者は、愛に満ちた指導者、すなわち、あなたの短い地球の経歴の暗くて不確かな迷路を通して安全で確かな案内人である。彼らは進歩的完全性の道において対象者を絶えず前方に駆り立てる忍耐強い教師である。彼らは、創造物の性格の崇高な価値のための慎重な管理人である。あなたが、調整者をさらに愛し、より完全に協力し、より愛情を込めて大事にできたら、と願う。

110:1.3 (1204.1) 神性内住者は、終わることのない生存の次の段階に対するあなたの精霊的な準備に主に関心をもつとはいえ、あなたの束の間の福祉と地球での真の業績にも深く興味を持っている。喜んであなたの健康、幸福、繁栄に貢献する。かれらは、永遠の進歩のあなたの将来の生

活に有害ではない惑星の進歩のすべての問題におけるあなたの成功に無関心ではない。

110:1.4 (1204.2) 調整者は、ちょうどこれらが、現世のあなたの重要な選択と重大な精霊の決定のための決断において影響がある範囲にまで、またあなたの魂の生存と永遠の進歩の問題解決における要素であるが故に、あなたの日常の行ない、それに、あなたの生活の多方面の細部にわたり、興味を持ち、関心をもっている。調整者は、純粋に現世の福利に関しては消極的ではあるが、あなたの永遠の未来のすべての事柄に関して神々しく積極的である。

110:1.5 (1204.3) 調整者は、すべての災害と精神状態を完全には破壊しないあらゆる病の間中、あなたと共にいる。しかし、地球の礼拝堂として役立てなければならない神からのこの驚異の贈り物である物理的な肉体を、知りつつ冒涜するか、でなければ、故意に汚すということは、いかに不親切であることか。全ての物理的毒は、人間の心を高める調整者の努力をとてつもなく遅らせており、また、恐怖、怒り、羨望、妬み、疑い、不寛容の心の毒

は、進化している魂の精霊的な進歩をとてつもなく同様に妨げている。

110:1.6 (1204.4) 今日、あなたは調整者の求愛期間を通過しつつある。もしあなたが、永遠の結合において心と魂のを求める神の精霊により、あなたに置かれている信頼に誠実であることを立証しさえするならば、そこで最も経験豊かな人格でさえも、融合の相手—必滅の人間と神性調整者—を別々の主体性として決して隔離も見分けもできない程に完璧で最終的である存在のモロンチアの同一性、その崇高な調和、その宇宙連携、その神性の同調、その天の融合、主体性の決して終わることのない混合が、最終的に起こる。

2. 調整者と人間の意志

110:2.1 (1204.5) 思考調整者が人間の心に宿るとき、かれらは、自分自身と神性球の人格化調整者により判断され、予め定められるように模範となる経歴、ユランチアの人格化調整者に公認された模範となる経歴、理想的な人生を持ってくる。このように、彼らは、対象である人間の知的で精霊的な成長のための確かで、予め定められた計画で

仕事を始めるが、一人の人間も、この計画に応じる義務はない。あなた方すべては、運命の対象ではあるが、神性のこの運命を受け入れなければならないと定められてはいない。あなたには思考調整者の予定計画のいかなる部分、または全体を拒絶する完全な自由がある。それは、人格の方向づけにさらなる影響を及ぼすことができる最後まで、あなたが喜んで、そして知的に認可するかもしれないようなそのような心の変化をもたらし、そのような精霊的調整をすることが彼らの任務である。しかし、いかなる状況下でもこれらの神性訓戒者は、決してあなたを利用したり、あなたの選択と決定において独断的には影響を及ぼさない。調整者はあなたの人格の主権を尊重する。かれらは、いつもあなたの意志に補助的である。

110:2.2 (1204.6) 調整者は、粘り強く、巧妙で、仕事の方法に申し分はないが、自分の宿主役の意志の自己性に決して背かない。人間は、その意志に対して決して神性訓戒者により精霊化されないであろう。生存は、時間の創造物が望まなければならない神の贈り物である。詰まるところ、調整者が、あなたに代わってすることにおいてせい

こうした何事も、記録は、変化があなたの協力の同意で成し遂げられたということを示すであろう。あなたは、上昇経歴の途方もない変化の段階ごとの到達において調整者との自発的な共同者となっていることであろう。

110:2.3 (1205.1) 調整者は、そういうものとしてあなたの考えを制御しようとはしないが、むしろそれを精霊化し、永遠化しようと努力している。天使も調整者も、人間の思考力に直接的な影響を及ぼすことに専心してはいない。それは、あなたの唯一の人格特権である。調整者は、あなたの思考過程を改善し、変更し、調整し、調和することに打ち込む。しかし、特に、さらに正確にいうと、かれらは、あなたの経歴の精霊的な類似物、つまり生存目的のためにモロンチアの写し、の確立する仕事に捧げられるのである。

110:2.4 (1205.2) 調整者は、人間の心のより高い段階の領域で働き、そした人間の知力のあらゆる概念のモロンチア複製を絶えず追求している。従って、人間の心に影響を与え、集中する２つの現実がある。1つは、生命運搬者の本来の計画から発展さする人間自身、他方は、神性球の

高い世界からの不滅の実体、つまり神からの内在する贈り物。しかし、人間の自己もまた人格の自己である。それには、人格がある。

110:2.5 (1205.3) 人格の創造物としてのあなたには心と意志がある。前人格の創造物としての調整者には、前-心と前-意志がある。あなたが見解の一致をみるという調整者の心に完全にかなうならば、そこであなたの心は1つになり、調整者の心の補強を受ける。その後、あなたの意志が、この新しい心、または結合した心の決定の実行を命じて、実施するならば、調整者の前人格の意志は、あなたの決定を通して人格表現に達し、その特定の企画に関する限り、あなたと調整者は一つである。あなたの心は、神性同調に到達し、調整者の意志は、人格表現を実現したのである。

110:2.6 (1205.4) この同一性が実現されるまで、あなたは、生活に関するモロンチアの系列に精神的に近づいている。モロンチア心とは、さまざまに物質的であり精霊的である本質の中味と総体を意味する用語である。モロンチア知性は、したがって、一つの意志により支配される地方宇

宙の二元的な心を意味する。そして、人間について言えば、これは、起源が人間である意志、つまり人間の心と神の心ばえと一体になることを通じて神性になる意志というものである。

3. 調整者との協力

110:3.1 (1205.5) 調整者は、長い間の神聖で荘厳の遊戯をしている。調整者は、空間における時間の最高の冒険の1つに携わっている。そして、彼らが、永遠の世界におけるそれぞれのより大きい課題を遂行し続けて、あなたの協力が、時間の世界の短い闘いにおいて彼らの支援を受け入れようとするとき、彼らはいかほどに幸福であることか。しかし、あなたの調整者が、あなたとの意志の疎通を試みるとき、通常、通信は人間の心のエネルギーの流れの物質的電流で失われる。ほんの時折、あなたは神の声の反響を、ほのかで遠方の反響を捕らえているに過ぎない。

110:3.2 (1205.6) 人間の人生を通して、あなたを導き、あなたの生存をもたらす企てにおけるあなたの調整者の成功は、あなたの決定、決断、不動の信頼ほどには、あなたの信

念の理論に依存してはいない。人格成長のこれらのすべての動きは、あなたが調整者と協することを助けるので、あなたの前進に役立つ強力な影響になる。かれらは、あなたが抵抗するのをやめる手伝いをする。思考調整者は、人間が、完全到達の上昇する道に沿って進められる計画に成功するか、または失敗するかのちょうどその範囲において、地球の仕事に成功するか、または明らかに失敗する。生存の秘密は、神のようであるたいという人間の最高の願望と、その抑えがたい願望の最終的達成に不可欠のありとあらゆることをしたり、ありとあらゆるものになったりする関連する意欲にかかっている。

110:3.3 (1206.1) 我々は、調整者の成功あるいは不成功について話すとき、人間生存の観点から話している。調整者は決して失敗しない。それらは、神の本質をもち、常にそれぞれの仕事において意気揚揚と出現する。

110:3.4 (1206.2) 私は、とても多くのあなた方が、永遠の重要性のより不可欠の現実を、つまり、あなたとあなたの調整者間のより調和して働く同意の発展に関わる成果そのものを、ほとんど完全に見落とす一方で、生活のほんの些

細なことにそそれほどにまで時間と考えを費やしていると述べざるせざるをえない。人間の存在の大きな目標は、内住する調整者の神格に適合させることである。人間の人生の大きな達成は、あなたの心の中で待ち、そして働いている神の精霊の永遠の目的への真の、そして理解ある献身の達成である。しかし、永遠の目標を実現する献身的かつ確固たる努力は、気軽で楽しげな人生、また地球における成功の、しかも立派な経歴と完全に両立する。思考調整者との協力は、苦行、偽りの敬虔さ、または偽善的で仰々しい卑下を伴わない。理想的な人生は、恐ろしい不安の存在よりも、むしろ愛のこもった奉仕をである。

110:3.5 (1206.3) 当惑、困惑状態、時々の落胆と動転でさえ、内住する調整者の導きに対する抵抗を必ずしも意味するというわけではない。そのような態度は、時として神性訓戒者との積極的な協力不足を意味するかもしれないし、それは、それ故に、精霊的な進歩をいくらか遅らせるかもしれないが、そのような知的、感情的障害は、神を知る魂の確かな生存を少なくとも妨げはしない。無知だけでは、決して生存を阻むことはできない。混乱状態の疑

いも恐ろしい不確実性もそうすることはできない。調整者の先導への意識的な抵抗だけが、進化する不滅の魂の生存を妨げるのである。

110:3.6 (1206.4) あなたは、調整者との協力を特に意識的方法と見なしてはならない。そうではないのであるから。しかし、あなたの動機と決定、あなたの忠実な決断と最高の願望は、本物かつ有効な協力を構成する。あなたは次の行為によって調整者との調和を意識的に増やすことができる。

110:3.7 (1206.5) 1. 神性の導きに応じることを選ぶこと。心から真、美、善の最高の意識に人生を基礎をおき、次に、知恵、崇拝、信仰、愛を通して神性のこれらの質を調和すること。

110:3.8 (1206.6) 2. 神を愛し、神に似ることを望むこと—神の父性の真の認識と神々しい親への情愛深い崇拝。

110:3.9 (1206.7) 3. 人間を愛し、心から尽くすことを望むこと—仲間である人間一人一人への知的で賢明な愛情に結合する人間の兄弟愛の心からの認識。

110:3.10 (1206.8) 4. 宇宙市民権の喜びの承認—崇高なるものに対するあなたの進歩的な義務への正直な認識、進化の人間と進化している神格の相互依存の認識。これは、宇宙道徳の誕生と宇宙における義務の夜明けの実現である。

4. 心における調整者の仕事

110:4.1 (1207.1) 調整者は、時間と空間の主回路に入る宇宙通信の連続する流れを受け入れることができる。それらは、宇宙の精霊の通信とエネルギーとの完全な接触である。しかし、これらの強力な内住者は、性質の共通性の欠如と反応的認識欠如のために、人間対象者の心に知恵と真実のこの富の多くについて伝えることができない。

110:4.2 (1207.2) 思考調整者は、あなたのモロンチア魂を進化させるためにあなたの心を精霊化する恒常的な努力に携わっている。しかし、あなた自身は、この内部の活動をほとんど意識していない。あなたは、自身の物質的知性の所産と魂と調整者の結合的活動のそれを見分けることが全くできない。

110:4.3 (1207.3) 心の考え、結論、および他の絵のある突然の提示は、時として、調整者の直接的、間接的な業である。

しかし、はるかに頻繁に、それらは、潜在的な、精神的な段階に集まる考え、つまり進化する動物の心の回路に固有の正常かつ通常の精神機能の自然で日常的な発生の考えの意識への突然の、出現である。(これらの潜在的放射と対照的は対照的に、調整者の顕示は、超意識の領域を通って現れる。)

110:4.4 (1207.4) 調整者の保護に、意識の確かな段階を越えた向こうの心のすべての問題を任せよ。そのうちに、この世界でにおいてではなくても、大邸宅世界で、かれらは、それぞれの執事的職務について良い報告をし、最終的には、調整者の世話と維持に委ねられたそれらの意味と価値を引き出すであろう。彼らは、あなたが生き残るならば、人間の心のあらゆる価値ある宝を復活させる。

110:4.5 (1207.5) 人間と神性の間には、人と神の間には、広大な深淵が存在する。ユランチアの人種は、電気的に化学的に大きく制御されており、一般的習性は、極めて動物的であり、通常の反応においては感情的であり、そのため、訓戒者にとり彼らを誘導し、指示することがきわめて難しくなる。あなたには勇敢な決定と献身的協力にと

ても欠けており、内住する調整者が、直接人間の心と通じ合うことは不可能に近いと感じるほどである。進化している人間の魂に新たな真実の微光をひらめかせることができるとわかるときでさえ、この精霊の顕示は、狂言的な発作を早めたり、あるいは結果として惨めに至らさせるある種の他の知的な激変を引き起こすほどにしばしば生物の目をくらます。多くの新興宗教と奇妙な「主義」は、思考調整者に関する中止され、不完全で、誤解され、歪められた情報から生じた。

110:4.6 (1207.6) 何千年もの間、エルサレムの記録によると、各世代において、より少ない人間が、独立的調整者と問題なく機能できて生きてきた。これは、ただならぬ絵であり、サタニアの監督している人格は、ユランチア人種のより高度の精霊の型を促進し、保存するように設計された手段の開始を提唱するあなたのより即座の惑星の何人かの監督の提案に賛意を表する。

5. 調整者の指導についての誤った概念

110:5.1 (1207.7) 調整者の任務と影響を一般的に良心と呼ばれるものと混合したり混同してはいけない。それらは、直接

には関係がない。良心は、人間の、そして純粋に精神の反応である。それは、蔑ろにされるものではないが、とても魂への神の声ではない。もしそのような声が聞かれるならば、それはいかにも調整者の声であるだろう。良心は、適切には、正しくすることをあなたに訓戒する。しかし、調整者は、その上で本当に正しいものをあなたに伝えようと努力する。すなわち、あなたが、訓戒者の先導を知覚できるとき、知覚できるものを。

110:5.2 (1208.1) 人の夢の経験、つまりまとまりのない眠りの心の混乱し、途切れ途切れの行列である夢は、人の心の互いに異なる要因を調和させ、関連づけるために、調整者の失敗の十分な証拠を提示している。調整者は、一度の生涯でも、人間と神性のような考えのそれほどに似てはいない、しかも、多様な2つの型を任意に調整し、同調させることは簡単にはできない。彼らが、そうするとき、時々してきたように、そのような魂は、死の経験をする必要がなく直接大邸宅世界に移される。

110:5.3 (1208.2) 調整者は、完全に目が冴えている意識の間に作られ、その結果、超心の領域に、つまり人間と神性の相

互関係の連結領域に入り込む内住の人格がかねて決定と選択によって完全に承認したその意志それのみを、まどろみの期間に達成しようと試みる。

110:5.4 (1208.3) 人間の宿主が眠る間、調整者は、物質的な心のより高い段階における自分達の創造を登録しようするし、また、あなたの奇怪な夢の幾つかは、調整者の効果的な接触の失敗を示している。夢の人生の不条理は、言外の感情の圧力を証明するだけでなく、調整者により提示される精霊的概念の表現の酷い歪みの証言ともなる。あなた自身の情熱、衝動と他の生来の傾向は、自分自身を絵に形を変え、内住者が、無意識の睡眠の間、精神の記録に載せる努力をしている神性の申し送りを言外の願望に置き換える。

110:5.5 (1208.4) 夢の人生の内容を調整者に関して仮定することは非常に危険である。調整者は、睡眠のあいだ働いてはいるが、あなたの通常の夢の経験は純粋に生理的、心理的現象である。同様に、人間の良心の表明の幾分なりとも、連続的かつ意識的な受け入れから調整者の概念の登録の分化を試みることは危険である。これらは、個々の

識別と個人の決定で解決されなければならない問題である。しかし人間は、人間の心の反応を神の威厳の世界へと高めることで大失敗するよりは、それを純粋に人間の経験であると信じることにより調整者の表現を拒絶することにおいて失敗する方が良いであろう。覚えていなさい、思考調整者の影響は、完全ではないが、だいたいにおいて超意識の経験である。

110:5.6 (1208.5) あなたは、精神の回路を昇るにつれ、時々直接的に、しかし、しばしば間接的に、調整者と様々に、しかもますます通じ合うのである。しかし、人間の心で起こるあらゆる新概念が、調整者の口述であるという考えを抱くのは危険である。大抵、あなたの系列の存在体の場合、あなたが調整者の声と受け入れるものは、現実には、あなた自身の知性の放射である。これは、危険な領域であり、あらゆる人間は、生来の人間の知恵と超人的な洞察に従って、自分自身でこれらの問題に決着をつけなければならない。

110:5.7 (1208.6) この意志疎通がなされている人間の調整者は、調整者の内面臨場のいかなる外向きの発現に対して、主

にこの人間のほとんど完全な無関心のためにそのような広い活動範囲を味わう。人間が全体の手順に関し意識的にまったく無関心でいるということは、実に幸いである。人間は、その時代と世代の非常に経験豊富な調整者の1名を持つにもかかわらず、人間の心の中のこの万能の調整者の臨場に関する現象へのその受け身の反応、それに不活性の関心事は、将来の目標の保護者による稀で思いがけない反応であると断言される。そして、このすべてが、好ましい、すなわち、健康、効率、および平静の見地からのより高度の行為の範囲の調整者、そして人間の共同者の両者にとり好ましい連携的影響を構成している。

6. 7つの精神回路

110:6.1 (1209.1) 物質界における人格実現の全体は、人間の可能性の7つの精神回路の連続した克服の範囲内にある。第7回路へ入ることは、真の人間の人格機能の始まりを印す。最初の回路の完成は、必滅の存在体の相対的な成熟を意味する。宇宙規模の成長の7つの回路の縦断は、調整者との融合に等しくはないが、これらの回路に熟達す

るということは、調整者融合に先立つそれらの段階到達を印している。

110:6.2 (1209.2) 調整者は、7回路の到達—人間のかなりの成熟への到達—においてあなたの対等の共同者である。調整者は、7番目から1番目の回路まであなたと共に昇りはするものの、人間の心の積極的協力から全く独立している最高の地位と自主的活動へ進歩している。

110:6.3 (1209.3) 精神の回路は、全く知的でもなく、完全にモロンチア的でもない。それらは人格の状態、心の到達、魂の成長、および調整者との同調と関係がある。これらの段階の成功の横断は、単にある1局面からではなく、全人格の円滑的機能を要求する。部分的成長は、全体の本当の成熟に等しくはない。部分は真に自己全体の—全自己の—物質的、知的、精霊的な拡大に比例して成長する。

110:6.4 (1209.4) 知的本質の展開が、精霊的本質のそれよりも速く進むとき、そのような状況は、思考調整者との意志の疎通を難しくも危険にもする。同様に、過度の精霊的展開は、神性内住者の精霊の導きの狂信的で異常な解釈を

生じる傾向がある。精霊的な容量不足は、より高度の超意識における精霊の真実の居住者をそのような物質的知性に伝播することを非常に難しくする。そのような存在体の真の福祉に対する現世の最小限の危険あるいは危機を伴い、—肉体的、精神的、精霊的な力が、発展の三位一体の調和にあるとき—最大限の光と真実が、清白な習慣の、安定した神経エネルギー、そして均衡のとれた化学物質の機能をもつ肉体に住まう完全な平静の心に与えられる。人は、そのような均衡的成長によって惑星進行の回路を一つずつ、7番目から1番目まで昇るのである。

110:6.5 (1209.5) 調整者は、つねにあなたの近くにおり、あなたのものであるが、別の存在としてあなたに直接話すことは滅多にできない。あなたの知的決定、道徳的選択、精霊的な発展は、回路ごとにあなたの心で機能するために調整者の能力に拍車をかけている。あなたは、それによって、回路ごとに調整者との繋がりと心の同調の低い段階から昇り、その結果、調整者は、この神を求める心-魂の進化的意識に溌剌さと確信を増大させることで目標の絵画化の登録がますます可能になる。

110:6.6 (1210.1) あなたのあらゆる決定が、調整者の機能を妨げたり、容易にする。同様に、他ならぬこれらの決定は、人間の達成の回路においてあなたの前進を決定するのである。決定の優越性、それとの危機の関係は、その回路形成の影響と大いに関係があるというのは本当である。それでも、決定の数、頻繁な繰り返し、持続的反復は、そのような反応の習慣性にとっても不可欠である。

110:6.7 (1210.2) これらの段階が人格的であるという理由から人間の進行の7段階を正確に定義することは難しい。それらは、各個人にとり変化しており、明らかにそれぞれの人間の成長容量に従って決定される。宇宙進化のこれらの段階の克服は、3つ方法で映し出される。

110:6.8 (1210.3) 1. 調整者同調。精霊化している心は、回路到達に比例して調整者臨場に近づく。

110:6.9 (1210.4) 2. 魂の進化。モロンチア魂の出現は、回路への熟達の程度と深さを示す。

110:6.10 (1210.5) 3. 人格現実。自己現実の程度は、回路征服により直接に決定される。人格は、人間存在の7番目から最初の段階へと昇るにつれてより本物になる。

110:6.11 (1210.6) 回路が縦断されるにつれ、物質進化の子供は、不滅の可能性の成熟した人間に成長する。第７回路者の胎児の本質の影の現実は、地方宇宙市民の現れつつあるモロンチアの本質のより明確な発現に移行している。

110:6.12 (1210.7) 人間の成長の7段階、すなわち精神回路を正確に定義することは不可能であるが、最小限の、そして最大限の成熟実現のこれらの段階を示すことは許されている。

110:6.13 (1210.8) 第7回路。人間が、精霊的な個性到達のために人格的選択、個人の決定、道徳的責任、および容量の力を発現させるとき、この段階に入る。これは、知恵の精霊の指示に基づく7名の補助の心-精霊の結合的機能、聖霊の影響における必滅の創造物の回路接続、そして、ユランチアにおいては、人間の心の思考調整者の受け入れと共に、真実の聖霊の1番目の機能を意味する。第7回路

へ入ることは、必滅の創造物を地方宇宙の真に潜在的な国民にする。

110:6.14 (1210.9) 第3回路。調整者の働きは、人間の上昇者が第3回路に達し、将来の目標の個人的な熾天使の保護者を迎えた後、はるかに効果的である。調整者と熾天使の保護者間では努力の上での明らかな協調はないのだが、それにもかかわらず、熾天使の個人的な付添人の課題の後の宇宙的達成と精霊的開発のすべての局面における紛れもない改善は、観測されることになっている。第3回路に達すると、調整者は、人間の残りの寿命の間、人の心をモロンチア化し、残りの回路を作ろうと努力するし、また、自然の死が類稀れな共同関係を取り消す前に神性-人間のつながりの最終段階を成し遂げようと努力する。

110:6.15 (1210.10) 第1回路。調整者は、あなたが、進歩的な人間の達成の最初と最終的な回路に達するまで、通常、直接に、すぐにあなたと話すことはできない。この段階は、物質的肉体の衣服から、進化しているモロンチア魂の解放の前に、人間の経験における心-調整者関係の最高に

可能な実現を表す。心、感情、および宇宙洞察に関しては、第1の精神回路のこの達成は、人間の経験における物質的な心と精神調整者の最も可能な接近である。

110:6.16 (1211.1) 恐らく必滅者の前進のこれらの精神的回路は、宇宙段階—現れている崇高なるものとの進化する魂の初期の関係のモロンチア意識への進歩的な接近の意味の実際の把握と価値の認識—と命名されるほうがよいであろう。そして、宇宙回路の意味について物質的な心に完全に説明することをいつまでも不可能にするのが、まさしくこの関係である。これらの回路到達は、神-意識だけに比較的関連している。7番目か6番目の回路者は、2番目か1番目の回路者とほとんど同様に本当に神-知ること—息子関係意識—ができるのだが、そのような下側の回路の存在体は、崇高なるものとの経験的な関係について、宇宙市民権について断然意識していない。もしかれらが、自然の死以前にそのような達成に失敗するならば、これらの宇宙回路の到達は、大邸宅世界での上昇者の経験の一部になるであろう。

110:6.17 (1211.2) 信仰の動機づけは、神との人の息子性の完全な認識を経験的にするが、行動は、決定の完遂は、崇高なるものの宇宙現実に伴う進歩的な関係の意識の進化の達成に不可欠である。信仰は、精霊世界での可能性を現実性に変えるが、可能性は、選択-経験の実現によってのみ、またその実現を通してのみ崇高の有限領域で現実になる。しかし、神の意志を為すことを選ぶということは、人格行動における物質的決定に精霊的信仰を結びつけ、その結果、神-飢餓の人間的、物質的なてこの作用のより効果的な機能に神性の、そして精霊の支点を供給する。物質的な力と精霊的な力のそのような賢明な協調は、崇高の宇宙実現と楽園神性のモロンチア理解の両方を大いに増大させる。

110:6.18 (1211.3) 宇宙回路の支配は、モロンチア魂の量的成長、最高の意味の理解に関連がある。しかし、この不滅の魂の質的状況は、人間は、永遠なる神の息子であるという楽園の潜在的事実-価値の生きた信仰の把握に完全に依存している。したがって、7番目の回路者は、ちょうど1番目、もしくは2番目の回路者のように宇宙規模の

成長の一層の量的実現に達するために大邸宅世界に進むのである。

110:6.19 (1211.4) 宇宙回路到達と実際の精霊的宗教経験の間には、間接的な関係があるにすぎない。そのような到達は、相互的であり、したがって、互いに有益である。純粋に精霊的な発展は、惑星の物質的繁栄にほとんど無関係であるかもしれないが、回路到達は、常に人間の成功と死を免れない達成の可能性を増大させる。

110:6.20 (1211.5) 第7回路から第3回路までは、モロンチア段階への経験のさらなる導入前に人間の心を物質的生活手段の現実へのその依存から引き離す任務にある7名の心精霊の補佐の増大され、統一された働きが起こる。第3回路から先における補佐の影響は、次第に減少する。

110:6.21 (1211.6) 第7回路は、人格経験として最高に純粋に動物的段階から自意識の最も低い実際の接近のモロンチア段階におよぶ人間経験を受け入れる。第一の宇宙回路の支配は、前モロンチアの人間の成熟の達成を際立たせ、心-精霊の補佐の結合的活動の終了が、人間の人格における心の活動の独占的影響であることを示している。第1

回路の向こうで、心は、進化のモロンチア段階の知性に、宇宙心と地方宇宙の創造霊の超補佐の授与が結合された活動に、ますます類似してくる。

110:6.22 (1212.1) 調整者の個々の経歴のすばらしい時代は、次の通りである。最初に、人間の対象が、第3代精神回路を突破し、そうして、訓戒者の自主的活動と機能の増加した範囲を保証するとき。(内住者がまだ独立的でなかったならば)。次には、人間の共同者が、第一精神回路に達し、その結果、少なくともある程度、互いの通信が、可能にされるとき。そして、最後に、双方が最終的に永遠に融合されるとき。

7. 不死への到達

110:7.1 (1212.2) 7つの宇宙回路の達成は、調整者融合に等しくはない。彼らの回路に達したユランチアで生活する多くの人間がいる。しかし、融合は、それが思考調整者に居住しているように、神の意志との死すべき者の意志の最終的かつ完全な同調への到達によるさらに他のよりすばらしく、より高尚な精霊的達成が前提である。

110:7.2 (1212.3) 人間が宇宙的達成の回路を成就したとき、さらにまた、人間の意志の最終的選択が、進化的かつ物理的な生命の間、調整者にモロンチア魂との人間の自己性のつながりの完成を可能にさせると、それから、魂と調整者のそのような完成された連携を独自に大邸宅世界へと進み、調整者とモロンチア魂の即座の融合に備えるユヴァーサからの命令が発せられる。物理的生命の間のこの融合は、即座に物質的肉体を消費する。そのような光景を目撃するかもしれない人間は、移動している人間が「炎の戦車で」姿を消すのを観測するだけであろう。

110:7.3 (1212.4) ユランチアからその対象を移したほとんどの調整者は、極めて経験豊富であり、他の球体の多数の死すべき者の前の内住者として記録していた。思い出しなさい。調整者は、貸し出しの系列の惑星で貴重な内住経験を獲得するということを。調整者は、生残に失敗するそれらの人間の対象者において高度な仕事のために経験を積むだけということにはならない。

110:7.4 (1212.5) 人間との融合の後、調整者は、あなたの将来の目標と経験を共有する。彼らはあなた方である。モロン

チア魂と対応する調整者の融合の後、一方のすべての経験とすべての価値は、ついには他方の所有となるので、二者は実は1つの実体である。ある意味では、この新存在は、永遠の未来はもとより永遠の過去のものである。かつて生残する魂の中の人間的であった全てと調整者の中の経験上は神性である全てが、新しく絶えず上昇する宇宙人格の実際の所有物になる。しかし、各宇宙段階では、調整者は、新しい創造物にその段階の重要で価値ある特性だけを授けることができる。神性訓戒者との絶対の一致、調整者の授与の完全な枯渇は、常にこれらの神性の贈り物の源である宇宙なる父、精霊の父、の最終的な到達後に永遠において達成し得るだけである。

110:7.5 (1212.6) 進化している魂と神性の調整者が最終的に永遠に融合されると、各々は、他方の経験しうる資質のすべてを得る。この調和された人格は、かつては先祖の人間の心に保持され、次にはモロンチア魂の中にすんでいた生存した経験的記憶のすべてを保持しており、それらに加えて、この潜在的終局者は、過去にわたり必滅の居住の間、調整者のすべての経験的記憶を盛り込む。しかし、調整者にとり神性訓戒者が際限のない過去からもた

らすす意味と価値を人格の共同者に常に徹底的に与えるるということは、際限のない未来を必要とするであろう。

110:7.6 (1213.1) しかし、圧倒的多数のユランチア人の場合、調整者は、我慢強く死の救出の到来を待ち受けなければならない。あなたの生活の物質系列からのほとんど完全なエネルギーの型と化学の力の支配から現れつつある魂の解放を待ち受けなければならない。あなたがあなたの調整者との接触で陥る主要な困難は、この非常に固有の物質的特質にある。実にわずかの人間が、真の思想家である。あなたは精霊的に神性調整者との好ましい連結のところまで自分の心を発展させたり訓練しない。人間の心の耳は、調整者が慈悲の父の愛の普遍的な放送からの様々な情報を翻訳する精霊的請願にほとんど耳を傾けない。調整者には、あなたの物理的本質に固有の化学的、電気的力にあまりに完全に支配されている動物の心のこれらの奮い立たせる精霊の導きを登録することはほとんど不可能であることがわかる。

110:7.7 (1213.2) 調整者は、人間の心に接触することを喜ぶ。しかし、彼らは、動物性の抵抗を切り抜けられず、直接にあなたと通じ合うことができない長年の静かな滞在期間中、我慢強くなければならない。思考調整者が、奉仕の度合で高く昇れば昇るほど、彼らは、より効率的になる。しかし、あなたが大邸宅世界で実際に心と心を合わせて思考調整者を識別するときに彼らが挨拶するようには、思考調整者は、肉体のあなたには決して完全で、同情的で、表現豊かな同じ愛情で応じることはできない。

110:7.8 (1213.3) 必滅の命の間、物質の肉体と心は、調整者からあなたを引き離し、自由な意思の伝達を妨げる。死後、永遠の融合の後、あなたと調整者は1つであり—あなたは別の存在として区別可能ではない—だから、あなたがそれを理解したようには意志の疎通の何の必要性もない。

110:7.9 (1213.4) 調整者の声が、あなたの中にずっとある間、あなた方のほとんどは、生涯の間にそれを滅多に聞かないであろう。到達の第３と第２回路の下の人間は、最高の

願望の瞬間や最高の状況、そして最高決定後を除いては、めったに調整者のじかの声を聞かない。

110:7.10 (1213.5) 未来の目標予備兵の人間の心と惑星監督との接触の工作と断絶の間では、時として内住する調整者は、人間の共同者に申し送りをすることが可能になるように場所を定める。つい近頃、ユランチアにおいて、そのような申し送りが、独立的調整者により将来の目標の予備軍団の一員である人間の仲間へ送られた。この申し送りは、次の言葉で紹介された。「さて、私の熱心な献身の対象への負傷あるいは危険を与えることなく、また、は私のために、過剰な懲罰を与えたり、阻止する意図なしに、彼に対する私の請願を記録しなさい。」それから、美しく感動的で魅力的な訓戒が続いた。とりわけ、調整者は、嘆願した。「かれが、より誠実に真剣な協力をし、より快活に私が委せた課題に耐え、より忠実に私の取り決めの案を行動に移し、より我慢強く私の選択の試みを経験し、より粘り強く、より陽気に私が選ぶ道を踏んで通り、より謙虚に私の絶え間ない努力の結果生じるかもしれない信用を受ける—このようにして私の訓戒を私が内住する者に送る。彼に、私は、最高の献身

と神性の愛情を授ける。そして、さらに私は、私のいとしい対象にまさに最後まで、地球の最後の苦闘が終わるまで、知恵と力の機能を発揮すると言いなさい。私は私の人格の信頼に誠実である。また、私は、彼に私を失望させることのないように、私の我慢強く激しい葛藤の報酬を奪うことのないように、生き延びることを勧める。我々の人格達成は、人間の意志にかかっている。回路ごとに、私は我慢強くこの人間の心を昇ってきて、私の系列の主任の承認を満たしているという証言をする。回路ごとに、私は裁きに近づいている。私は、未来の目標の点呼を喜び、憂慮せず待ち受ける。私は、高齢者達の裁きにすべてを提出する用意ができている。」

110:7.11 (1214.1) ［オーヴォントンの単独使者による提示］

論文 111
調整者と魂

111:0.1 (1215.1) 人間の心の神性調整者の臨場は、科学または哲学のいずれかが、人間人格の進化する魂の満足な理解に達することを永遠に不可能にする。モロンチア魂は、単に宇宙の子であり、宇宙洞察と精神的な発見を通してのみ真に知られることができる。

111:0.2 (1215.2) 魂と内住する精霊についての概念は、ユランチアにとって新しくはない。それは惑星の思考体系の様々な方式に頻繁に登場した。西洋の信仰の幾つかはもとより東洋の多くの信仰もまた、人が遺伝において人間であるのみならず遺産において神性であるということを認識してきた。神格の外部遍在に加え内部臨場は、長い間、多くのユランチア宗教の一部をなしてきた。人は、人間性の範囲内で成長している何か、この世の人生の短い間を越えて持続する運命にある何か重大なものがあると、長い間信じてきた。

111:0.3 (1215.3) 人が、進化する魂は、神性の霊により創られたと気づく前には、魂は、異なる身体的的な器官—目、肝臓、腎臓、心臓、後には脳—に住んでいると考えられていた。未開人は、魂を血液、息、影、それに水の中の自身の反映に関連づけた。

111:0.4 (1215.4) アトマンの概念において、ヒンズ一教教師は、調整者の本質と臨場の真価の認識に実際に近づいたのだが、進化的、かつ潜在的に不滅の魂の共同臨場の識別はできなかった。しかしながら、中国人は、陽と陰、魂と

精霊の人間の2局面を認識した。エジプト人と多くのアフリカ種族は、2つの要素、カー、バーを信じた。精霊だけは前存在であり、魂は、通常、前存在であるとは信じられてはいなかった。

111:0.5 (1215.5) ナイル渓谷の住民は、好まれた各個人には、出生時に、もしくはその後に、彼らがカーと呼んだ守りの精霊を授与されたと信じた。彼らは、この守護霊が生涯にわたって人間の対象と共にあり、その人間より先に未来の場所へと向かうと教えた。アメンホテプ三世の生誕が描かれているルクソールの寺院の壁には、幼い王子がナイル神の腕に描かれ、王子の近くには外見上は王子に似た別の子供がおり、それは、エジプト人がカーと呼んだその実体の象徴である、この彫刻は、紀元前15世紀に完成された。

111:0.6 (1215.6) カーは、対応する人間の魂をこの世の生活のより良い軌道へと誘導することを、さらに具体的に言えば、人間の対象の今後の運勢に影響することを望む優れた精霊の感化を与えるものであると考えられた。この時代には一人のエジプト人が死ぬと、その人のカーが、三

途の川の反対側でその人を待っていると予想された。最初は、王だけにカーがいると思われたが、やがて、すべての公正な人にはカーがいると信じられた。一人のエジプトの支配者が、自分の心の中のカーについて「私はその話を無視しなかった。その先導に違反することを恐れた。それによって、私は大いに成功した。それが私にさせてくれたお蔭で私は、このように成功した。私はその先導により特徴づけられた。」と言った。多くの者が、カーは「神からのお告げを伝えるもので皆の中に」いると信じた。彼らが「あなたの中の神の好意で喜びに満ちた心で永遠に過ごすことになっている」と信じた。

111:0.7 (1216.1) ユランチアの進化的人間のあらゆる人種には、魂の概念に相当する言葉がある。多くの原始民族は、魂が人間の目を通して世界の外を見ると信じた。この為、かれらは、邪眼の悪意を憶病にもとても恐れたのであった。彼らは、長い間、「人の霊は主の明かりである。」と信じてきた。リグヴェーダは、「私の心は私の核心と話す」と伝える。

1. 選択の心の領域

111:1.1 (1216.2) 調整者の仕事は、本質的には精霊的であるが、必然的に、知的な基盤においてすべての仕事をしなければならない。心とは、精霊訓戒者が、内住する人格の協力に従いモロンチア魂を発展させなければならない人間の土壌である。

111:1.2 (1216.3) 宇宙の中の宇宙のいくつかの心の段階には、宇宙統一がある。知的な自己には、星雲が、宇宙空間の宇宙エネルギーに起源があるのとほぼ同様に、宇宙の心にその起源がある。知的自己の人間の(したがって、個人的)段階において、精霊進化の可能性は、そのような人間の自己の絶対価値の実体-点の創造的な存在と共に人間の人格の精霊の贈り物のために優位になる。しかし、物質の心のそのような精霊の支配は、2つの経験を条件とする。この心は、7名の心-精霊の補佐の活動を通して発展してきたに違いなく、物質的(人格的)自己は、モロンチアの自己、すなわち進化の、潜在的に不滅の魂を創り出し、育てるに当たっては内住調整者との協力を選択しなければならない。

111:1.3 (1216.4) 物質の心は、人間の人格が、生きているか、自意識が強いか、決定をするか、神を選ぶのか、または神を見捨てるか、自分自身を永遠化するのか、もしくは滅ぼす領域なのである。

111:1.4 (1216.5) 物質的進化は、あなたに生命の機械、すなわちあなたの身体を提供した。父自身は、あなたに、宇宙で知られている最も純粋な精霊現実を、つまりあなたの思考調整者を授けた。しかし、あなたの手には、あなた自身の決定を条件とする心が与えられており、あなたが生きるか、死ぬかは心によるのである。そして、それは、この心の中で、またこの心をもってあなたが調整者に似ること、そして、神に似ることが達成できる道徳的判断をさせるのである。

111:1.5 (1216.6) 人間の心は、物質的な生涯の間、使用目的のために人間に貸与される一時的な知性の組織であり、人間がこの心を使用する間、かれらは、永遠の存在の可能性を順応するか、またはそれを拒絶している。手にしている宇宙現実のなかであなたの意志の支配下にあるのは、心だけであり、また魂—モロンチア自己—は、人間の

自己がしているこの世の決定の収穫を忠実に描写するであろう。人間の意識は、電気化学的構造上に穏やかに寄りかかり、精霊-モロンチア　エネルギー構造下に微妙に触れている。これらの2構造のいずれをも、人間はかつて、その必滅の人生において完全に意識してはいない。したがって、人間は、心で働かなければならず、それを意識している。またそれは、心が生存を保証することを理解することではなく、むしろ心が、生存保証の理解を望むことである。それは、心が似ることが、精霊の自己性を構成するのではなく、むしろ心が似るように努力することが、精霊の自己性を構成するのである。それは、人が神を意識することではなく、むしろ神を慕うことが人に宇宙上昇をもたらす。あなたが今日何者であるかということではなく、むしろあなたが日毎に、また永遠になろうとしていることが重要なのである。

111:1.6 (1217.1) 心とは、人間の意志が破壊の不協和音を演奏することができる宇宙の楽器、あるいはこの同じ人間の意志が、神識別とその後の永遠の生存の絶妙の旋律を生み出すことができる宇宙の楽器である。人に授与される調整者は、要するに、悪に動じず、しかも、罪を犯すこと

ができないが、人の心は、道理に反する罪深い企みや人間の身勝手な意志によって歪み、歪曲され、邪悪にそして醜くなることがある。同様に、この心は、髪を知る人間の精霊に照らし出される意志に従って、気高く、美しく、本当で、善に—本当に素晴らしく—されることができる。

111:1.7 (1217.2) 進化する心は、宇宙の知性の二つの極端なもの—完全に機械化されたものと完全に精霊化されたもの—に現れるときにだけ、完全に安定し、信頼できるのである。純粋な機械的支配と真の精霊の特質の間には、その安定性と平静が、人格の選択と精霊識別に依存している進化し上昇する心の巨大な集団が介在する。

111:1.8 (1217.3) だが人は、消極的にも、従属的にも調整者に自分の意志を引き渡しはしない。むしろ、そのような導きが、人間の自然な心の願望や衝動と意識的に異なるとき、積極的に、肯定的に、また協力的に調整者の導きに従うことを選ぶのである。調整者は、巧みに扱いはするが、意志に反して人の心を決して支配はしない。調整者にとっては人間の意志が主権を有する。そして、調整者

は、進化する人間の知性のほとんど無限の活動領域において思考の調整と人格変化の精霊的な目標達成に向けて努める間、人間の意志をそのように見なし、重んじる。

111:1.9 (1217.4) 心はあなたの船であり、調整者はあなたの水先案内人であり、人間の意志は船長である。人間の船の主は、神の水先案内人が上昇する魂を永遠の生存のモロンチア港へと誘導すると信じる知恵がなければならない。身勝手さ、怠惰、罪深さだけが、人の意志に、そのような情愛深い水先案内人の導きを拒絶させ、ついには拒絶された慈悲の悪の浅瀬や抱き込んだ罪の岩礁で人間の前途を難破させることができるのである。あなたの同意で、この誠実な水先案内人は、神性の心のまさしくその源へと、そしてその向こう側へと、さらには調整者の楽園の父へとあなたを運ぶであろう。

2. 魂の本質

111:2.1 (1217.5) 宇宙の知性ある心の機能を通して、心全体は、知的機能部分に優位である。心は、要するに機能的な統一体である。したがって、心は、たとえ見当違いの自己の賢明でない行動と選択に、妨げられて邪魔されようと

も、この構成統一体を必ず明らかにする。そして、心のこの統一は、つねに意志の尊厳と上昇特権をもつ自己とのその連合の全段階における魂の調整を追求する。

111:2.2 (1217.6) 人間の物質的な心は、内住する思考調整者が、永続的な価値と神性の意味の宇宙の特徴—究極の目標と終わることのない経歴、潜在的終局者の生残している魂—の精霊の型を織り混ぜるモロンチアの織物を携行する宇宙の織機である。

111:2.3 (1218.1) 人間の人格は、物質的な肉体の生命による機能的な関係で結合された心と精霊とが連動される。そのような心と精霊のこの機能的関係は、心と魂の特質あるいは属性の何らかの組み合わせをもたらすのではなく、むしろ潜在的に永遠の持続性にある完全に新しく、独創的かつ独自の宇宙の価値、つまり魂をもたらす。

111:2.4 (1218.2) そのような不滅の魂の進化的創造には2つではなく3つの要因がある。モロンチアの人間の魂のこれらの3つの先行要素は次の通りである。

111:2.5 (1218.3) 1. 人間の心とその心に先行し、しかも、それに加えて影響を及ぼす宇宙の影響すべて

111:2.6 (1218.4) 2. 人間の人生に関連するすべての精神的影響と要素と共に絶対的精神性のそのような断片に固有であるこの人間の心とすべての可能性に宿る神性精霊

111:2.7 (1218.5) 3. 物質の心と神性精霊間の関係、それは、そのような関係に貢献している要因のいずれにも見い出せない価値を暗示し、意味をもつ。この独特の関係にある現実は、物質的でも精霊的でもなくモロンチア的でもない。それは魂である。

111:2.8 (1218.6) 中間被創造者は、長い間、人のこの進化する魂を、下級であるかまたは物質的な心と、上級であるかまたは宇宙の心と対比して中間-心と呼んできた。この中間-心は、物質界と精霊界の間の領域に存在しているので、本当にモロンチア現象である。そのようなモロンチア進化の可能性は、心の2つの宇宙的衝動に固有である。神を知り、創造者の神性に至ろうとする被創造者の有限の心の衝動と人間を知り、被創造者の経験に至ろうとする創造者の無限の心の衝動。

111:2.9 (1218.7) 進化する不滅の魂のこの崇高なやりとりは、人間の心が、第一に人格的であり、第二に超動物の現実に接触しているがゆえに可能にされる。それは、道徳的判断のできる徳性の進化を保証する宇宙の恩恵である超物質の贈り物を所有し、その結果、関連する精神的活動と内住する思考調整者との真実かつ創造的な接触をもたらす。

111:2.10 (1218.8) 人間の心のそのような接触の精霊化の必然の結果は、全創造の他ならぬ神の実際の断片—神秘訓戒者—の総括的管理下にある宇宙の精霊的根源力と関係して働く神を知ることを切望する人間の意志で占められている補助の心の結合の子孫である魂の段階的な誕生である。そして、その結果、自己の物質的で必滅の現実は、物理的な生命機械の一過性の限界を超え、自己の連続性のための進化媒体、すなわちモロンチアの魂と不滅の魂において新しい表現と新しい同一性に到達する。

3. 進化する魂

111:3.1 (1218.9) 人間の心の誤りと行為の過失は、それが一度創造物の同意によって内住する調整者によって開始されて

しまうとそのようなモロンチア現象を妨げることはできないものの、魂の発展を著しく遅らせるかもしれない。しかし、人間の意志は、人間の死の前のいかなる時点でもそのような選択を無効とし、生存を拒絶する権限が与えられている。生き残りの後でさえ、上昇する人間は、永遠の命を拒絶するほうを選ぶこの特権を依然と保持している。いつでも調整者との融合前、進化し上昇している創造物は、楽園の父の意志を放棄するほうを選択できる。調整者との融合は、上昇する人間が、父の意志を為すことを永遠に、遠慮なく選択をしたという事実を際立たせている。

111:3.2 (1219.1) 生身の人生の間、進化している魂は、人の心の超物質的決定を補強する力を与えられる。超物質である魂は、人間の経験の物質的段階においてそれ自体の機能はしない。調整者のような神格の何らかの精霊の共同なくしては、この準精霊の魂も、モロンチア段階を上回る機能することはできない。この物質の心は、関連する機能のそのようなモロンチア魂に自由に、また進んでそのような権威を委託しない限り、魂は、人間の心との物質的関係から死、または移動が離すまで最終的決定をしな

い。生涯を通して、人間の意志、決定-選択の人格の力は、物質的な心の回路に居住している。この自己は、この世の人間の成長が進むにつれ、選択の極めて貴重な力に従って、新生のモロンチア-魂の実体とますます一体感を連動させる。死後と大邸宅世界復活の後、人間の人格は、モロンチア自己と完全に連動される。魂は、このように、人格同一性の将来のモロンチア媒体の胎児である。

111:3.3 (1219.2) この不滅の魂は、最初は本質的に完全にモロンチアであるが、それは、神格の精霊との融合、つまり通常はそのような創造的現象を起こした宇宙なる父と同じ精霊との融合の価値の真の精霊段階へと常に昇るようなそのような発展の能力を備えている。

111:3.4 (1219.3) 人間の心と神性調整者の両者は、進化している魂の臨場と異なる本質を—調整者は完全に、心は部分的に—意識している。魂は、それ自身の発展的成長に比例して、ますます心と関連する自己性として調整者の意識するようになる。魂は、人間の心と神霊の両方の特質をいくぶん帯びているが、その働きの意味が精霊の真価と

調整しようとする心の機能の促進を通して、精霊の支配と神の支配の拡大の方へ持続的に進化する。

111:3.5 (1219.4) 人間の経歴は、つまり魂の進化は、保護観察ではなくむしろ教育である。最高価値の生存を信じることが、宗教の核心である。本物の宗教経験は、宇宙の現実の実現として、最高の価値と宇宙的意味の結合にある。

111:3.6 (1219.5) 心は量、現実、意味を知っている。しかし、質—価値—は感じられるものである。魂が感じるものは、心と関連する魂との相互的創造であり、心は知り、その魂は現実化する。

111:3.7 (1219.6) 真、美、善により神-意識の価値-認識として人の進化するモロンチア魂が浸透するようになる限り、そのような結果として生じる存在は、破壊できなくなる。人の進化している魂に永遠の価値の生存がないならば、人間の生活には意味がなく、人生自体は悲惨な幻想である。しかし、それは永遠に真実である。時間で始めることは確かに永遠に終わるであろう—終わる価値があるならば。

4. 内面生活

111:4.1 (1219.7) 認識とは、個人の記憶の型に外界から受け取られた感覚的印象をはめ込む知的過程である。理解とは、これらの認識された感覚的印象と関連するそれらの記憶の型が、法則の動的な網状組織に統合されるか、または体系づけられたということを意味する。

111:4.2 (1220.1) 意味とは、認識と理解の組み合わせから引き出される。意味は完全に知覚の世界には、または物質の世界には実在しない。意味と価値は、人間の経験の内側あるいは超物質界で認められるだけである。

111:4.3 (1220.2) 本当の文明の進歩のすべては、人類のこの内側の世界で生まれる。真に創造的であるのは内面の人生である。文明は、いかなる世代であろうともその若者の大多数が、その関心と精力を知覚の、または外界の物質追求に向けるとき、ほとんど進歩することはできない。

111:4.4 (1220.3) 内面世界と外面世界には、異なる価値がある。いかなる文明も、その3/4の若者が物質主義的職業に就き、外面世界の感覚の活動の追求に専念するとき、危険にさらされている。文明は、若者が、倫理学、社会学、

優生学、哲学、美術、宗教、宇宙学への興味をなおざりにするとき、危険にさらされている。

111:4.5 (1220.4) あなたは、それが、人間の経験の精霊の領域に影響を与えるように、より良く、より永続する文明を建設することに貢献する効を奏する支配的な型と関連するそれらのより高い概念を超意識の心のより高い段階においてのみ見つけることができる。人格は、本来創造的であるが、個人の内面生活においてのみこのように機能する。

111:4.6 (1220.5) 雪の結晶は、常に六角形であるが、2つとして決して同じではない。子供は型に従うが、2人として、双子の場合でさえ、全く同じではない。人格は型に従うが、常に他とは異なる。

111:4.7 (1220.6) 幸せと喜びは、内面生活に起源がある。あなたは一人きりで本当の喜びを経験することはできない。孤独の生活は、幸福にとっては致命的である。家族や国でさえ、それを他と共有するならば一層生活を楽しむであろう。

111:4.8 (1220.7) あなたは、外界—環境—を完全には制御できない。あなたの人格が先行する因果関係の法則の足枷からそれほどまでに大幅に解放されるので、内面世界の創造性こそがあなたの方向づけに最も支配されている。意志の有限の主権は、人格に関連づけられている。

111:4.9 (1220.8) 人のこの内面生活が誠に創造的であるので、この創造性が自然発生的であり、その上完全に場当たり的であるか、あるいは制御され、指示され、その上建設的になるかどうかの選択責任は、各人の肩にかかっている。機能する舞台が、偏見、憎しみ、恐怖、憤り、報復、偏狭にすでに心が奪われているとき、創作への想像力はいかにして価値ある子供を生み出すことができるのか。

111:4.10 (1220.9) 考えは、外界の刺激に起源があるかもしれないが、理想は、内界の創造の領域だけで生まれる。今日、世界の国々は、過剰の考えを持つ人に導かれているが、かれらは、理想においては極貧である。それが、貧困、離婚、戦争、人種的憎悪についての説明である。

111:4.11 (1220.10) これは問題である。自由意志の人間に内なる心の創造性の力が与えられているならば、我々は、自由意志の創造性が自由意志の崩壊性の可能性を迎え入れると認めなければならない。そして、創造性が破壊性に向けられるとき、あなたは、悪と罪の荒廃—圧迫、戦争、破壊—と直面している。悪は、創造性に対しての崩壊と最終的な絶滅に向かう傾向の妨害である。内面生活の創造的機能を妨げるという点で、すべての闘争は、邪悪である—それは、人格における内戦の一種である。

111:4.12 (1221.1) 内面的創造性は、人格統合と自己統一を通じて性格の品位を高めることに貢献する。それは永遠に真実である。過去は不変である。未来だけは、内側の自己の現在の創造性の活動によって変わることができる。

5. 選択の奉献

111:5.1 (1221.2) 神の意志を為すことは、内面生活を神—内面の意味-価値のそのような創造物の生活を可能にしたまさしくその神—と共有するという創造物の意欲の提示に他ならない。共有は、神—神性—に似た行為である。神は、すべてを永遠なる息子と無限なる精霊と共有する

が、彼らは、次に、すべての物を宇宙の神性の息子と精霊の娘と共有する。

111:5.2 (1221.3) 神を摸倣することは、完全性への鍵である。神の意志を為すことは、生存の秘密であり、生存における完全性である。

111:5.3 (1221.4) 人間は神の中に生き、同じように神は、人間の中に生きることを決意した。人が神を信頼するように、神は同じように—最初に—自分の一部が人といることを確信した。人間の意志を前提として人の内に生き、人の中に宿ることを同意した。

111:5.4 (1221.5) この人生における平和、死からの生存、来世における完全性、永遠における奉仕—これらはすべて、(精霊的に)いま、創造物の人格が、父の意志に創造物の意志が従うことに同意する—選ぶ—とき、達成される。そして、父は、すでに、神自身の断片が、創造物の人格の意志に従うことを選んだのであった。

111:5.5 (1221.6) 創造物のそのような選択は、意志の降伏ではない。それは、意志の奉献　、意志の拡大、意志の賛美、

意志の完成である。また、そのような選択は、創造物の意志を世俗の重要性の段階から創造物の息子の人格が精霊の父の人格と親しく交わる高い段階へと高める。

111:5.6 (1221.7) たとえ一時代が、創造物の息子が、実は楽園の神の実際の臨場にたつかもかもしれない前に過ぎなければならないとしても、父の意志のこの選択は、人間による精霊の父の精霊的な発見である。この選択は、「あなたの意志が為されるということが、私の意志である。」という創造物の肯定的な確認ほどには、「私の意志ではなく、あなたの意志が為される」という創造物の意志の否定ではない。そして、この選択がなされるならば、遅かれ早かれ神-選択の息子は、内在する神の断片との結合(融合) —人の意志と神の意志の永遠の別の協調関係の誕生—を見い出すであろし、一方、この同じ完成に近づいている息子は、創造的属性が表現の各自の意志に基づく相互関係に永遠に参加している人の人格とその造物主の2つの人格の崇拝と親交における崇高な人格的満足を見い出すであろう。。

6. 人間の矛盾

111:6.1 (1221.8) 人間の世俗的問題の多くは、人間の宇宙との二つの関係から芽生える。人は自然の一部である—自然の中に存在する—なおかつ、自然を超えることができる。人は有限であるが、無限の火花が内住している。そのような二重状況は、可能性を悪に提供するだけではなく、大きな不確定要素と大いなる不安をはらむ多くの社会的、道徳的状況をも引き起こす。

111:6.2 (1222.1) 自然の征服をもたらし、自らを超越することを求める勇気というものは、自負の誘惑に屈するかもしれない勇気である。自己を超えることができる人間は、自意識を神聖視する誘惑に屈するかもしれない。人間の窮地は、　人が自然に束縛され、同時に独自の自由—精霊的な選択と行動の自由—をもつという二重の事実にある。物質的段階では、人は、自然に副次的あることに気づくが、精霊的段階では、自然、そして一時的かつ有限な全てのものに対して勝利を収めている。そのような矛盾は、誘惑、潜在的悪、決断上の誤りから切り離せないものであり、また、自己が誇り高くなったり、横柄になるとき、罪が展開するかもしれない。

111:6.3 (1222.2) 罪の問題は、有限の世界においては独立的存在ではない。有限性の事実は、邪悪でも罪深くもない。有限の世界は、無限の創造者によって作られた—それは、その神性の息子の業である—したがって、それは良いはずである。悪と罪に起源を与えることは、有限の誤用と歪みと堕落である。

111:6.4 (1222.3) 精霊は、心を支配することができる。同様に心は、エネルギーを制御することができる。しかし、心は、原因と結果の物理的領域の数学段階に固有である変成の可能性のそれ自身の知的操作を通してだけエネルギー制御ができる。被創造物の心は、本来エネルギーを制御しない。それは神性特権である。しかし、被創造物の心は、物理宇宙のエネルギーの秘密の熟練者者になる限りにおいてエネルギーを操ることができるし、そうする。

111:6.5 (1222.4) 人が物理的現実の修正を願うとき、それが自分自身かその環境であることにかかわらず、人は、物質を制し、エネルギーを導く方法と手段を発見するまでに功を奏する。助けを受けない心は、自身の物理的な仕組を

除いては、物質的な何物にも影響を及ぼすことができない。しかし、肉体の仕組みの知的な活用を通して、この心が、ますます制御することができ、宇宙におけるその物理的段階を支配することさえできるその活用により、心は、他の仕組みを、エネルギー関係と生命関係さえも創造することができる。

111:6.6 (1222.5) 科学は事実の源であり、心は事実なしで作動はできない。それらは、人生経験が知恵の建設においてセメントで結合される建築用ブロックである。人は、事実なしで神に対する愛を見つけることができ、愛なしで神の法を発見することができるが、人は、神の法と神の愛を見つけ、進化している宇宙哲学において経験的にこれらを統一するまでは、第一根源と中枢の全包括的な自然に属する無限の対称性、崇高な調和、絶妙の充実さを決して評価し始めることができない。

111:6.7 (1222.6) 物質的知識の拡大は、思考の意味と理想の価値へのより優れた知的評価を可能にする。人間は、自分の内面の経験において真実を発見することはできるが、真実にの個人の発見を日常生活の冷酷なまでに実用的な要

求に適用するための事実に関する明確な知識を必要とする。

111:6.8 (1222.7) 人間は、一時的で有限なすべての事に完全に卓越した精神力をもつ一方で、動きがとれないほどに自然に縛られる自分自身を眺めるとき不安定な気持ちに悩ませられるということはもっともなことである。ただ宗教上の確信—生きている信仰—だけが、人をそのような難しく、面倒な問題の真ん中で支えることができる。

111:6.9 (1223.1) 人の必滅の本質を脅かしたり、精霊的清廉さを危険にさらす全ての危険の中では、誇りというものが最も大きなものである。勇気は勇しいが、自惚れは虚栄が強く自滅的である。理に適った自信を遺憾に思うことはない。自身を超える人の能力こそが、動物界と人を区別する一つのものである。

111:6.10 (1223.2) 誇りは、個人、集団、人種、または国家に見られるか否かに関係なく、欺きであり、陶酔であり、罪の養育である。「おごれる者久しからず」ということは文字通り本当である。

7. 調整者の問題

111:7.1 (1223.3) 保障の不確実性は、楽園冒険の本質である—時間の、そして心の不確実性、展開する楽園上昇の事象に関する不確実性。精霊と永遠における安全性、すなわち、宇宙なる父の神性の思いやりと無限の愛における創造物の息子の無条件の信頼における安全性。宇宙の未経験な公民としての不確実性。全能の、全賢の、そしてすべてを愛する父の宇宙の大邸宅を上昇する息子としての保障。

111:7.2 (1223.4) あなたの魂への調整者の誠実な呼び出しである遠くからの木魂に心を留めるようにあなたに訓戒してもよいであろうか。内住する調整者は、止まることができないし、あなたの経歴の時間の中での戦いを実質的には変更さえできない。調整者は、あなたが労苦のこ現世で旅をする間、人生の苦難を減少させることはできない。それが、あなたの惑星で住んでいるように、人生であなたが生きるために戦う間、神性内住者は、ただ我慢することしかできない。だが、あなたは、ただ望みさえすれば—あなたが働き、気を揉みつつ、戦い、骨折りながらも—勇敢な調整者があなたと共に、またあなたのために戦うことを許す。あなたが、あなたの現在の物質界の平

凡な問題とのすべての上りの闘いであるこの難しい真の動機の絵、最終的目標の絵、そして、その永遠の目的の絵を絶えずもたらすことを調整者に許しさえすれば、あなたはとても慰められ奮起させられ、とてもに魅了され、好奇心をそそられることができる。

111:7.3 (1223.5) 奮闘を要する物質的なこれらのすべての努力の精霊的な類似体をあなたに見せる任務において調整者を支援してはどうか。あなたが創造物の生活の一時的な困難と取り組んでいる間、あなたはなぜ、調整者に宇宙の力の精霊の真実であなたを強くさせないのか。あなたが過ぎ行く時間の問題を当惑してじっと見つめる間、あなたはなぜ調整者に宇宙の人生の永遠の前途からくる明確な見通しであなたを元気づけさせてはどうか。あなたが時間の不利な条件の中でこつこつと働き、人生旅行を悩ます不確実性の迷路でもがく間、あなたはなぜ、宇宙の視点に啓発され、奮い立たせられることを拒むのか。たとえあなたの足は現世の努力の物質的進路を踏み均さなければならないとしても、あなたはなぜ調整者にあなたの考えの精霊化を許してはどうか。

111:7.4 (1223.6) ユランチアのより高等の人類は複雑に混合される。それらは、異なる起源をもつ多くの人種と民族の混合である。この合成の特質は、訓戒者が、生涯を通じて効果的に働くことをきわめて難しくし、死後確実に、調整者と保護者である熾天使の両者の問題を増やす。私はつい先頃サルヴィントンにいて、人間の対象に役立つ難しさの軽減について、将来の目標の保護者の正式声明を聞いた。この熾天使は言った。

111:7.5 (1223.7)「私の困難の多くは、私の対象の2つの特質、動物的怠惰に相対する野心の衝動、の果てしない対立が原因であった。劣性人種の本能に妨げられた優れた民族の理想。原始的遺産の衝動に敵対される偉大な心の高い目的。時間の創造物の近視に歯止めをかけられる先を見ている訓戒者の長期的視点。物質的性質の願望と切望に変更される上昇する存在体の進歩的計画。進化する人種の化学エネルギーの必要性に取り消される宇宙の知性の閃き。動物の感情の妨害をうける天使の意欲。本能の傾向に無効にされる知力の養成。人種の蓄積された傾向に妨害される個人の経験。最悪の者達の偏流に暗くされる最善の者達の目標。凡庸の引力に中和される才能の飛翔。

悪しき者達の不活発さに遅らされる善き者達の進歩。悪の存在に汚される美の芸術。病気の衰弱に中和される健康の回復力。恐れの毒に汚染される信仰の泉。悲しみの海に苦しめられる喜びの泉。実現の苦さに幻滅させられる期待の喜び。死の悲しみに常に脅かされる生きる喜び。そのような惑星でのそのような人生であることよ。だがこの魂は、思考調整者の絶えず存在する助けと意欲のために、かなりの程度の幸福と成功を成し遂げ、大邸宅界の審判の大広間に今でも上昇した。」

111:7.6 (1224.1) ［オーヴォントンの単独使者による提示］

論文 112
人格救済

112:0.1 (1225.1) 進化的惑星は、人類起源の領域、つまり上昇していく必滅者の経歴の最初の世界である。ユランチアが、あなたの出発地点である。ここであなたとあなたの神性の思考調整者が、一時的和合により結ばれる。あなたには完璧な案内者が賦与されている。それゆえ、もしあなたが、真剣に時の競走をし、信仰の最終目標を得るならば、何世紀もの時の報奨というものはあなたのものとなるであろう。あなたは、内住するあなたの調整者と

永久に和合されるであろう。次には、あなたの現在の必滅状態へのほんの入り口にすぎない真の生活、すなわち上昇する生活が始まるであろう。次には、あなたの前に展開する永遠において終局者としての高揚の、前進的な使命が始まるであろう。そして、これらの引き続く時と進化の成長の全段階を通して、絶対に不変であるあなたの一部分があり、それこそが、人格—変化の存在における不変性—である。

112:0.2 (1225.2) 人格の定義を試みることは差し出たことではあるが、それについて知られているもののいくつかの列挙は、参考になるかもしれない。

112:0.3 (1225.3) 1.人格とは、実は宇宙なる父自らにより、あるいは父の代理を務める結合活動者により授けられるその特性である。

112:0.4 (1225.4) 2.それは、心または精霊を含むいかなる生きたエネルギー体系にも与えられるかもしれない。

112:0.5 (1225.5) 3.それは、完全に先行する因果関係の枷を条件とするものではない。ある程度創造的であるか、または協同創造的である。

112:0.6 (1225.6) 4. それは、進化する物質創造物に授けられるとき、精霊が、心の沈思を経てエネルギー体系の把握に努めさせる。

112:0.7 (1225.7) 5.人格は、同一性を欠くと同時に、いかなる生けるエネルギー体系の同一性をも統合できるのである。

112:0.8 (1225.8) 6.それは、重力への質的、量的反応を示す３種類のエネルギーと対比して、人格回路に対し質的反応のみを示す。

112:0.9 (1225.9) ７．人格は、変化に臨んで不変である。

112:0.10 (1225.10) ８．それは、神への贈り物にすることができる - 神の意志を為すことへの自由意志の献身。

112:0.11 (1225.11) ９．それは、道徳により特徴づけられる - 他の人間との関係の相対性の認識。それは、行為の水準を明察し、選択的にそれを区別する。

112:0.12 (1225.12) 10.人格は、無類、絶対的に無類である：時と空間において無類である。それは、永遠において、楽園において無類である。それは授けられるとき、比類がなく—複製はない。存在のどの瞬間においても特異である。それは、神との関係において無類である—神は、人格体の差別待遇をしないが、それらを一まとめにもしない。なぜなら、それらは加えうるものではない—関連可能ではあるが、合計不可能である。

112:0.13 (1226.1) 11.人格は、直接に他の人格存在に反応する。

112:0.14 (1226.2) 12.それは、精霊に追加されうる1つのものであり、それゆえ息子との関係における父の卓越を例証している。 (心は精霊に加えられる必要はない。)

112:0.15 (1226.3) 13.人格は、生残する魂の中で自己同一性をもって必滅の死を生き残るかもしれない。調整者と人格は、不変である。双方の (魂の中の)関係は、変化、すなわち継続的進化以外の何物でもない。そして、この変化(成長)が止むならば、魂は止むであろう。

112:0.16 (1226.4) 14.人格は、無類に時を意識し、これは、心または精霊の時間認識以外の何かである。

1. 人格と現実

112:1.1 (1226.5) 人格は、普遍なる父が、潜在的に永遠の贈与として被創造物に与える。そのような神性贈り物は、下等の生物から最上の準絶対まで、さらには絶対の境界にまでの連続する宇宙段階で機能するよう意図されている。人格はそれゆえ、宇宙の３平面上、あるいは宇宙の３段階において機能する。

112:1.2 (1226.6) １．位置状況。人格は、地域宇宙、中央宇宙、そして中央宇宙において平等に、かつ効果的に機能する。

112:1.3 (1226.7) ２．意味状況。人格は、有限、準絶対に、そして絶対に接触さえして、効果的に能力を発揮する。

112:1.4 (1226.8) 3.価値状況。人格は、物質、モロンチア、精霊の進歩的領域において経験的に認識できる。

112:1.5 (1226.9) 人格には、広大無辺で次元的機能をもつ領域がある。有限の人格の次元には3種類があり、およそ次の通りに機能的である:

112:1.6 (1226.10) 1.「長さ」は、方向と進行の性質を表す—空間経由と時間に準じた動き—進化。

112:1.7 (1226.11) 2.「深さ」は、有機体の衝動と態度、つまり自己実現の異なる水準と環境に対する反応の一般的現象を擁している。

112:1.8 (1226.12) 3.「幅」は、調整、提携、自我組織の領域を擁する。

112:1.9 (1226.13) ユランチアの人間に授けられた人格の型には、7様相の自己表現あるいは人間-実現の可能性がある。これらの次元的現象は、有限段階での3様相、準絶対段階の3様相、絶対段階の1様相として実現可能である。下位の絶対段階では、この7番目の、あるいは全体の様相は、人格の事実として経験可能である。この最高の次元は、集合可能な絶対的なものであり、無限ではな

いが、絶対的なものの準無限の浸透において次元的に潜在的である。

112:1.10 (1226.14) 人格の有限的次元は、宇宙の長さ、深さ、幅に関係がある。長さは意味を、深さは価値を意味し、幅は洞察力を擁する—宇宙現実に関わる挑戦不可能な意識を経験する能力。

112:1.11 (1227.1) 物質段階のこれらの有限的次元のすべては、モランチア段階において大いに高められ、またある新たな次元の価値は実現可能である。モランチア段階のこれらのすべての拡大された次元の経験は、モタの影響を通して、そしてモランチアの数学の貢献によっても、最高の、または人格の次元で見事に表現されている。

112:1.12 (1227.2) もし有限の創造物が、次元的段階と精霊的段階は経験的な人格実現において調整されていないということを思い出すならば、人間の人格学習において自らが経験した多くの問題は避けられることができるであろう。

112:1.13 (1227.3) 生命は、まさに有機体(自己性)とその環境の間に起こる作用である。人格は、この有機体-環境の関連性に同一性の価値と連続性の意味を与える。このように、それは、完全な状況における要因として機能することから、刺激-反応の現象が単なる機械的作用でないということが分かるであろう。その構造は、本来受動的であるということは、つねに本当である。有機体は本質的に能動的。

112:1.14 (1227.4) 物理的生命は、有機体の中においてというよりは、むしろ有機体と環境の間で行われる作用である。そして、そのようなあらゆる作用は、そのような環境への反応の有機体の形態を創造し、確立する傾向がある。すべてのそのような指示的形態は、目標選択において非常に影響力がある。

112:1.15 (1227.5) それは、自己と環境が意味ある接触を行うという心の仲介によってである。環境（衝動への反応）とそのような重要な接触をする有機体の能力と自発的意志は、全人格の態度を意味している。

112:1.16 (1227.6) 人格は、孤立しては十分に機能できない。人は、生まれながらにして社会的創造物である。かれは、帰属意識の渇望に支配されている。「人は、自分のためだけに暮らしてはいない」というのは文字通り本当である。

112:1.17 (1227.7) しかし生きており、機能している創造物全体の意味としての人格の概念は、関係の集積よりはるかに多くを意味する。それは、現実のすべての要因、ならびに関係の調整の統一を意味する。関係は、2個の対象間に存在するが、3個以上の対象では体系が生じ、そのような体系は拡大した、あるいは複雑な関係以上のものである。この区別は重大である、なぜならば、個人である構成員は、宇宙体系においては、全体に関して、また全体の個性を介しての関連を除いては、互いに結びつけられないのであるから。

112:1.18 (1227.8) 人間の有機体におけるその部分の総和は、自己性—個性—を構成するが、そのような過程は、人格とは何の関わりもなく、それは、宇宙の現実に関連するこれらの全要素を統合するものである

112:1.19 (1227.9) 集合体において部品は加えられる。体系において、部分は整えられる。体系は、組織のために重要である—位置的価値。良い体系においては、すべての要素が普遍の位置にある。悪い体系においては、何かが欠けているか置き換えられている—乱れている。人間の体系においては、すべての活動を統一し、そうすることにより同一性と創造性の質を明らかにするのは、人格である。

2. 自己

112:2.1 (1227.10) 自己性の研究において次のことを念頭に置くことは役に立つであろう。

112:2.2 (1227.11) 1.物理的体系は下位であるということ。

112:2.3 (1227.12) 2.知的体系は同位であるということ。

112:2.4 (1227.13) 3.人格は上位であるということ。

112:2.5 (1227.14) 4.内在する精霊の根源力は、潜在的に指示的であるということ。

112:2.6 (1228.1) 自己性に関するすべての概念において命という事実がまずあり、あとにその評価または解釈がくるということが認識されるべきである。人間の子供は、まず生き、次に自分の生きるということについて考える。宇宙の営みにおいては、洞察が先見に先行する。

112:2.7 (1228.2) 神が人間になることについての宇宙事実は、永遠にすべての意味を変え、また人間の人格のすべての価値を改めた。言葉の真の意味において愛は、人間または神、または人間と神性であるにせよ、全人格の相互間の考慮を暗示する。自己の内なる部分は、多方面—考えること、感じること、望むこと—において機能するかもしれないが、全人格の連携された属性だけが、知的活動において集中する。そして人間が、心から、そして利他的に他の存在体を、人間または神性を愛するとき、これらの力のすべてが、人間の心の精霊的な贈り物と関連しているのである。

112:2.8 (1228.3) 現実の人間の全概念は、人間の人格の現実性の仮定に基づいている。超人的な現実の全概念は、ある種の関連する精霊の実体と神性の宇宙の現実との、またそ

の中における人間の人格の経験に基づいている。人格を除く人間の経験における非精霊的なすべては、目的を達するための手段である。必滅の人間の他の人格体—人間または神性—とのすべての真の関係は、それ自体が目的である。そして、神格の人格とのそのような親交は、宇宙上昇の永遠の目的である。

112:2.9 (1228.4) 人格を有するということは、人格の自己性と自意識の統一が超物質界の授与であるがゆえに、人間を精霊的存在体であると見極める。人間の物質主義者が、超物質界の存在を否定できるという他ならぬ事実それ自体が、人間の心の精霊統合と宇宙的意識の存在を立証し、またその働きを示す。

112:2.10 (1228.5) 物質と思考の間には広大無辺の割れ目があり、しかもこの割れ目は、物質的な心と精霊的な愛の間で計り知れないほどにより大きいのである。意識は、自意識は言うまでもなく、電子の機械的結合のいかなる理論、あるいはエネルギーの物質現象によっても説明し得ないのである。

112:2.11 (1228.6) 心が、現実をその元素分析にまで追求するとき、物質は、物質感覚に消え失せるが、心にはまだ現実として留まるかもしれない。精霊的洞察が、物質の消滅の後に留まり、また元素分析までその現実を追求するとき、現実は、心に消えせるが、精霊の洞察は、宇宙の現実と精霊本質の崇高の価値をまだ知覚することができる。したがって科学は、哲学に譲歩し、同時に哲学は、本物の精霊的な経験に内在する結論に屈しなければならない。思考は、知恵に屈し、知恵は、啓発された内省的な崇拝に残される。

112:2.12 (1228.7) 科学において人間の自己は、物質界を観察する。哲学は、物質界のこの観察についての観察である。宗教、すなわち真の精霊的経験は、時間と空間のエネルギー物質のすべてのこの相対的統合の観察に関する観察の宇宙現実の経験的認識である。排他的な唯物主義に関して宇宙の哲学を築くということは、物質である全ての物は、人間の意識の経験において本当であるとまず最初に考えられるという事実を無視することである。観察者は、観察される物であるはずがない。価値評価は、評価されるものをそれなりに超越することを要求する。

112:2.13 (1228.8) やがて、思考は知恵につながり、知恵は崇拝につながる。永遠においては、崇拝は知恵に導き、知恵は思考の最終性に終わる。

112:2.14 (1229.1) 進化する自己統合の可能性は、その構成する要因の質に備わっている:基本的なエネルギー、支配的な細胞組織、基礎的な化学の間接的支配、崇高的な考え、至高的な動機、至高の目標、楽園贈与の神性の精霊—人の精霊的本質の自意識の秘密。

112:2.15 (1229.2) 宇宙進化の目的は、増加する精霊の優勢、すなわち思考調整者の教育と先導への意志に基づく行動による人格統合を達成することである。人格は、人間の、そして超人の双方は、「支配の進化」すなわち人格自体とその環境の支配の拡大と呼ばれるかもしれない宇宙の固有の特性により特徴づけられる。

112:2.16 (1229.3) 上昇するかつての人間の人格は、自己への、そしてその宇宙における意志に基づく一層の支配の大きな2段階を経験する。

112:2.17 (1229.4) 1. 宇宙問題解決とそれに伴う宇宙の支配とともに同一性の拡大と実現の技術により自己実現を増大する前終局者の経験、または神-探求の経験。

112:2.18 (1229.5) 2.神-類似の神性段階にいまだ達していない神-探求の知力ある者たちへ崇高なるものの経験の示現を通して、自己実現の創造的な拡大の前終局者の経験、または神-顕示の経験。

112:2.19 (1229.6) 下降する人格は、崇高者、究極者、絶対神格者の神性意志を確かめ、かつ実行するための拡大した能力を捜し求めて、様々な宇宙冒険を通じて類似の経験を達成する。

112:2.20 (1229.7) 物質的自己(人間同一性の自我-実体)は、物質生命体の連続する機能における物理的生活の間、つまり、ユランチアで生命という名を与えられたエネルギーと知性の不均衡の連続的存在に依存している。しかし、死の経験を超えることができる自己性、生存価値の自己性は、一時的な生命体—物質の肉体—からモロンチアの魂のより永続的かつ不滅の本質への、そして魂が精霊現実と融合されるようになり、ついには精霊現実の状態

に達するそれらの段階へと越えて進化する人格の同一性の位置を潜在的移動を行うことによってしか発展されないのである。物質的関連性からモロンチア連動性へのこの実際の移行は、人間創造物の神-探索の率直な、粘りのある、不動の決定によりもたらされる。

3. 死の現象

112:3.1 (1229.8) ユランチア人は、1種類の死だけを、生命エネルギーの物理的停止を一般的に認識する。しかし人格生存に関しては、実際には3種類がある。

112:3.2 (1229.9) 精霊的な(魂の)死。もし、人間が最終的に生存を拒絶するような場合、調整者と生存の熾天使の共同意見において精霊的に破綻しモロンチア的に破産したと言われたとき、そのような共同の助言がユヴァーサに記録されたとき、そして、検閲官とその思慮深い同僚が、これらの結果を確かめた後、オーヴォントンの支配者達は、そこで内在する監視官の即刻解除を発令するのである。しかし、調整者のこの解除は、その調整者に見捨てられた個人に関係している個人の、あるいは集団の熾天使の任務には少しも影響を及ぼさない。この種の死は、

肉体と心の仕組みに関わる生けるエネルギーの一時的な継続の如何にかかわらず、その意義においては確定的である。宇宙の見地から、この必滅者はすでに死んでいる。継続する生命は、単に宇宙エネルギーの物質的な勢いの持続を示唆するに過ぎない。

112:3.3 (1230.1) 2.知力な(心の)死。知力の異常のためや、もしくは脳の構造の部分的破壊のせいでより高位の補佐の不可欠の奉仕活動の回路が崩壊するとき、それに、もしこれらの状況が収拾不能のある限界点を通り過ぎるならば、内住の調整者は、ディヴィニントンへの出発のためにすぐ放たれる。宇宙記録上は、意志行動の不可欠の心の回路がいつ破壊されようとも、人間の人格は、死を遂げたと考えられる。そしてまた、これは、物体の生きる作用の継続的な機能にかかわりなく、死である。意志ある心を欠く肉体は、もはや人間ではないが、それ以前に人間の意志を選択したそのような個人の魂は、生き残るかもしれない。

112:3.4 (1230.2) 3.物理的な(肉体と心の)死。死が人間に追いつくとき、調整者は、知力ある作用として機能することを

止めるまで、つまりかなりの脳エネルギーが、生命のそのリズミカルな不可欠な脈拍を止めるおおよそその時まで、心の砦に留まっている。この解散後、調整者は、ちょうど何年も前にされた参入と同じように形式ばらずに消え失せる心から離れ、ユヴァーサ経由でディヴィニントンへと進む。

112:3.5 (1230.3) 死後、物質の肉体は、元来た元素の世界に戻るが、生存する人格の二つの非物質要素は持続して、先在の思考調整者は、人間の経歴の記憶の写しとともに、ディヴィニントンへと進む。そして、守護天使の保護のもとに、死んだ人間の不滅のモロンチア魂もそこに留まる。魂のこれらの局面と形、かつては動的、しかし、今は静的な同一性のこれらの型は、モロンチア界での再人格化に不可欠である。そして、それは、生き残っている人格を組み立て直す、すなわちモロンチアの目覚めの時点であなたを再度意識させる思考調整者と魂の再結合である。

112:3.6 (1230.4) 集団の管理者は、熾天使の個人的保護者をもたないもの達のために、忠実に、効率的に同一性の保護と

人格復活の同じ奉仕を施す。熾天使は、人格の再構築に不可欠である。

112:3.7 (1230.5) 死に際し、思考調整者は、同一性ではなく、人格を一時的に失う。人間の対象は、人格ではなく、同一性を一時的に失う。大邸宅界においては、両者とも永遠の顕現で再結合する。離れた思考調整者は、決して以前の内住の存在体として地球には戻らない。人格は、決して人間の意志なくしては現れない。そして、調整者離脱の人間は、決して死後に作動中の同一性を明らかにしたり、またはいかなる方法においても地球の生きている存在体と交信しない。そのような調整者離脱の魂は、死の長いか短い眠りの間、完全に、絶対に無意識である。生存達成の後まで、他の人格との交信に従事するいかなる類の人格あるいは能力の表明はない。大邸宅界に行くもの達は、最愛のもの達に通信することは許されていない。現在の天の配剤期間、そのような交信禁止が、全宇宙にわたっての方針である。

4. 死後の調整者

112:4.1 (1231.1) 物質的、知的、あるいは精霊的な性質の終わりが起こるとき、調整者は、人間の宿主に別れを告げ、ディヴィニントンに出発する。地方宇宙と超宇宙の本部から両政府の監督者との反応的な接触がとられ、監視官が、時の領域への進入記録の際と同じ番号により登録から外される。

112:4.2 (1231.2) 宇宙検閲官は、被内住の心の精霊的価値とモロンチアの意味に関わる調整者の複写に具体的に表明されているように、完全には理解されない何らかの方法で、人間の人生の概略を手に入れることができる。検閲官は、死んだ人間の生存する性格と精霊的な性質の調整者版を専有でき、そして、この資料のすべてが、熾天使の記録と共に、関係する個人の判決時に提出可能である。この情報も、惑星制度の正式な解雇の前に、大邸宅界に進む人間の解散の際、特定の上昇者たちがモロンチア経歴をすぐに始めることを可能にする超宇宙の命令を確認することにもまた使用される。

112:4.3 (1231.3) 肉体の死に続いて、生者の中から移される個人を除く、開放された調整者は、ただちにディヴィニント

ンの故郷の球体に行く。生残する人間の実際の再出現を待ち受ける間にその世界に起きることの詳細は、主には、その人間が、自身の個人の権利で大邸宅世界に昇るのか、または惑星時代の眠っている生存者の配剤上の召還を待ち受けるかによるのである。

112:4.4 (1231.4) もしその人間の仲間が配剤の終わりに再人格化される一集団に属するならば、その調整者は、以前の奉仕機構の大邸宅世界に直ちに戻りはしないが、選択により、次の一時的な任務の1つに着手するであろう:

112:4.5 (1231.5) 1.明きらかにされていない奉仕のために消えた監視官の階層に召集される。

112:4.6 (1231.6) 2.一定期間、楽園体制の観測に配属される。

112:4.7 (1231.7) 3. ディヴィニントンの多くの職業訓練校の1つに登録される。

112:4.8 (1231.8) 4. 楽園界の父の回路を構成する他の神聖な6球体の1つに学生の観察者としてしばらく配置される。

112:4.9 (1231.9) 5. 人格化された調整者の使者の奉仕に配置される。

112:4.10 (1231.10) 6. 無経験の集団に属する監視官の養成をするディヴィニントンの学校の準講師になる。

112:4.11 (1231.11) 7.人間の共同者が生存を拒絶したかもしれないと信じるに足る理由がある場合、奉仕が可能な世界の一集団に配属される。

112:4.12 (1231.12) 死があなたを襲うとき、もしあなたが第３の回路、またはより上の領域に達しており、その結果、専任守護天使の任務に配置されていたならば、また調整者により提出された生存者に関する要約の最終的な写しが守護天使に無条件に承認されるならば、—熾天使と調整者の両者が、人間の生活記録と推薦のあらゆる項目で基本的に合意するならば、—ユヴァーサの宇宙の検閲官とその反射提携者がこの資料を確認し、曖昧な表現または留保もなくそうするならば、その場合には、日の老いたるものは、サルヴィントンへの通信回路のうえの段階の任務を素早く送り出し、高い地位の告示を発信し、そしてこのように解放されたネバドンの主権者の裁決機関は、大邸宅世界の復活の大広間へ生残している魂の即時の通過を命じるであろう。

112:4.13 (1232.1) 人間の個人が滞りなく生き残るならば、私が教えられているように、調整者は、ディヴィニントンにおいて登録し、楽園にいる宇宙なる父へと進行し、すぐに戻り、超宇宙の任務と地方宇宙の任務にある人格化された調整者に迎え入れられ、ディヴィニントンの人格化された監視長の認知を受け、それから、すぐに、「同一性移行の実現」に移り、そして、将来の目標の守護天使により映し出された形で地球の人間の生存する魂の受け入れのために用意された実際の人格の形における第３期に、そして大邸宅世界にそこから、召還される。

5. 人間の自己の存続

112:5.1 (1232.2) 自己性とは、物質的、モロンチア的、あるいは精霊的であろうと宇宙の現実である。人格体の現実性とは、父自体または様々の宇宙機関を介しての宇宙なる父の贈与である。存在体が人格的であると言うことは、宇宙有機体の中のそのような存在の相対的な個人化を認識することである。生きている宇宙は、ほとんど無限に統合された実際の集合体であり、そのすべてが全体の目標に相対的に従っている。だが個人的であるそれらのもの

達は、目標の受諾か、または拒絶の実際の選択により授与されたのである。

112:5.2 (1232.3) 父から来るそれは、父のように永遠であり、これは、神の実際の断片である神性の思考調整者についても同じように、神が、自身の自由意志の選択により与える人格についてもまさに同じである。人の人格は永遠であるが、同一性に関しては条件つきの永遠の現実である。父の意志に応えて出現した人格は、神格の目標を達成するであろうが、人は、そのような目標到達の際に出席するかどうかを選ばなければならない。そのような選択がない場合は、人格は、直接経験の神格を達成し、そして崇高なるものの一部となる。その周期は、予め決められてはいるものの、人の参加は任意で、私的で、経験的である。

112:5.3 (1232.4) 人間の同一性は、宇宙の一時的な時間-人生の様相である。人格が継続的な宇宙現象になることを選ぶ限り、それは現実である。これは、人とエネルギー体系の本質的相違である。エネルギー体系は続かなければならず、何の選択肢もない。しかし、人には、自身の目標

を決定するすべてに関係している。調整者は、正に楽園への道であるが、人は自らの決定、すなわち自らの自由意志の選択により、その道を追求しなければならない。

112:5.4 (1232.5) 人間には、物質的な意味だけで同一性を備えている。自己のそのような特質は、知性のエネルギー体系において機能するように、物質の心により表現される。人には同一性があると言われるとき、人間の人格の意志による行為と選択に服従してきた心の回路を有しているとみなされる。しかし、これは、ちょうど人間の胎児が人生の一時的な寄生的段階であるように、物質的な、かつ純粋に一時的な顕現である。宇宙的観点から、人間は、生まれて、生き、時間の相対的な瞬間に、死ぬ。人間は永続しない。しかし、人間の人格は、それ自身の選択、一時的な物質的-知的体系から人格顕現のための新しい手段として、思考調整者と関連して作成されるより高いモロンチア-魂体系への同一性のその席を移す力、を備えている。

112:5.5 (1233.1) それは、人の最大の機会と最高の宇宙責任を構成するという選択の他ならぬこの力、自由意志をもつ生

物の宇宙の勲章である。未来の終局者の永遠の目標は、人間の意志の完全性に頼る。神性調整者は、永遠の人格のために人間の自由意志の誠実さにそ頼るのである。宇宙なる父は、新しい上昇の息子の実現のために、人間の選択の忠実さにこそ頼るのである。崇高なるものは、経験的進化の現実のために決心-行動の不動さと知恵にこそ頼るのである。

112:5.6 (1233.2) 人格成長の宇宙回路は、最終的には到達されなければならないとはいえ、もし、自らの誤りではなく、時間の不意の出来事や物質的生活の不利な条件が、出身惑星におけるあなたのこれらの段階に熟達するのを妨げるならば、あなたの意志と願望に生存価値があるならば、見習い期間の延長の命令が出される。あなたには、自分自身を証明するためのさらなる時間が与えられるであろう。

112:5.7 (1233.3) もし大邸宅世界に人間の同一性を進める適否に疑問があるならば、宇宙政府は、その個体の個人的な利益のために変わることなく統治する。それらは、新生のモロンチアの意図と精霊的な目的の観測を続ける一方

で、そのような魂をためらうことなく過渡期の存在体の状態に進める。このように、神性の正義は、成果を確信しており、神性の慈悲は、その奉仕活動を広げるためのさらなる機会が与えられる。

112:5.8 (1233.4) オーヴォントンとネバドンの政府は、人間の再人格化に向けての宇宙計画の詳細な活動において完璧であることを主張はしないが、忍耐、寛容、理解、慈悲深い思いやりの明示を主張し、実際にそうするのである。我々は、ある進化世界の一人の苦闘している人間から上昇経歴を追求する永遠の喜びを奪う危険を求めるよりは、むしろ体系的反乱の危険を引き受けるほうがよい。

112:5.9 (1233.5) これは、人間が最初の拒絶直面し、2度目の機会があるということを意味するわけでは毛頭ない。だが、それは、意志をもつすべての生物は、1つの確実な、自己を意識した、そして最後の選択をするための1つの真の機会を経験するということを意味するのである。宇宙の卓越した裁判官達は、最終的に、しかも完全にまだ永遠の選択をしていないいかなる人格状態も奪わない。人の魂には、その真の意図と目的を明らかにする

完全かつ十分な機会が与えられなければならないし、与えられる。

112:5.10 (1233.6) より精霊的で、宇宙的に高度である人間が死ぬと、かれらは、すぐに大邸宅界に進む。一般にこの対策は、個人的な熾天使の保護者を割り当てられたそれらのもの達の場合に機能する。他の人間は、自分達の事態の裁定終了のそのようなときまで引き止められるかもしれない、そして、大邸宅世界に進むかもしれないし、あるいは現在の惑星の分配の終わりに一まとめに再個人化される仮眠中の生存者集団に振り分けられるかもしれない。

112:5.11 (1233.7) まさに死に際してあなたに起こること、つまり離脱していく調整者とは異なる生存していくあなたについて説明する私の努力を妨げる2つの困難がある。その1つは、物理的な、およびモロンチアの領域の間の境界点での業務に関する十分な説明をあなたの理解の水準に伝える不可能さにある。他方は、ユランチアの統治する天の当局による真実の啓示者として私の職権に負わされた制限によりもたらされている。提示できるかもしれ

ない多くのおもしろい事項があるのだが、私は、あなたの直接の惑星の監督者の忠告によりそれらを差し控える。しかし、許可された範疇において、これだけは言うことができる:

112:5.12 (1234.1) 本物の何か、人間の進化に関する何か、神秘訓戒者へ添える何か、つまり死を生き残る何かがある。この新たに現れている実体は魂であり、それは、あなたの物理的な身体と物質的な心の双方の死を生き残っている。この実体は、人間のあなたと神性のあなたとの、つまり調整者とのつながりから生まれる結合の努力からの共同の子供である。人間と神性を発端とするこの子供は、地球起源の生残要素を構成する。それは、モロンチアの自己、つまり不滅の魂である。

112:5.13 (1234.2) 存続する意味と生残する価値のこの子供は、死から再人格化の期間はまったく無意識であり、待機のこの期間中、熾天使の高い目標の保護者の保護にある。死に続いて、あなたは、サタニアの大邸宅世界においてモロンチアの新しい意識に達するまで、意識的な存在としては機能しないであろう。

112:5.14 (1234.3) 人間の人格と関連する機能的な同一性は、死に際し、生命の運動の停止により途絶される。人間の人格は、その構成部分を移行する間、機能的な同一性に関してはそれらに依存している。生命の停止は、心の贈与のために脳の物理的形態を破壊し、心の途絶は、人間の意識を終了する。その創造物の意識は、再び同じ人間の人格が、生きたエネルギーとの関係において機能できるように宇宙の状況が準備されるまでその後再び現れることはできない。

112:5.15 (1234.4) 出身世界から大邸宅世界への生残する人間の移動中、かれらが、3期目の人格再構築を経験するか、または集団復活時点で上昇するかどうかに関わらず、人格構造に関する記録は、大天使により自らの特殊活動世界において忠実に保持される。これらの存在は、 (守護熾天使が魂のそれであるようには)人格の管理者ではないが、それにもかかわらず、人格のあらゆる識別可能な要素が人間生存のこれらの頼れる受託者の管理で有効に保護されているということは、本当である。死と生存の間に介在するとき、人間の人格の正確な所在に関し、我々は知らない。

112:5.16 (1234.5) 再人格化を可能にする状況は、地方宇宙の惑星を受け入れているモロンチア復活の大広間にもたらされる。ここ生命-構築のこれらの公式の間において、監督当局は、睡眠中の生存者の再意識化を可能にする宇宙エネルギー—モロンチアの、心の、および精霊の—のその関係を提供する。以前の物質的人格の構成部分の再構築が必要とするものは:

112:5.17 (1234.6) 1. 新たな生存者が非精霊の現実との接触ができ、またその中で宇宙心のモロンチア類形が巡回できる適切な形の構成、すなわちモロンチアのエネルギー形態。

112:5.18 (1234.7) 2. 待機中のモロンチア創造物への調整者の復活。調整者は、あなたの上昇する同一性の永遠の管理者である。あなたの監視官は、他者ではなくあなた自身が、あなたの人格の覚醒のために創造されるモロンチアの形を占有するという絶対的保証である。また調整者は、生存するあなたの自己にとっての楽園案内の役割を再度開始するためにあなたの人格再構築に居合わせるであろう。

112:5.19 (1235.1) 3.再人格化のこれらの前提条件が集められたとき、まどろみ中の不滅の魂のもつ可能性の熾天使の管理者は、この進化の子供を待機中の調整者との永遠の提携にゆだねるとともに、待機中のモロンチアに心-体の形をもつ多数の宇宙人格の助けを借りてこのモロンチアの実体を用いる。そして、これで再人格化、記憶、洞察、および意識—絶対的個人—の再構築を完了する。

112:5.20 (1235.2) 再人格化の事実は、覚醒の人間の自己による新たに隔離された宇宙心の回路に取り込まれたモロンチア段階の掌握にある。人格の現象は、宇宙環境に対する自己性反応の同一性の持続に不可欠である。そして、これは、心の媒体によってだけもたらすことができる。自己性は、自己のすべての構成要素における連続的変化にもかかわらず、持続する。物理的生活において、変化はゆるやかである。死において、また再人格化において、変化は突然である。すべての自己性(人格)の真の現実は、その構成部分の絶えない変化の効力により宇宙状況に敏感に機能することができる。停滞は、避け得ない死に終わる。人生とは、変らない人格の安定性により統一される人生の要素の無限の変化である。

112:5.21 (1235.3) ジェルーセムの大邸宅世界でこのように目が覚めるとき、あなたは、非常に変えられているから、精霊的な変化が非常に大きいから、最初の世界でのあなたの古い生命と新世界でのあなたの新しい生命とを完全につなぐあなたの思考調整者と運命保護者がいなかったならば、あなたは、新しいモロンチア意識を前の同一性の蘇る記憶に関連づけることに最初は苦労をするであろう。個人の自己性の連続性にもかかわらず、人間生活の多くが最初は、あいまいかつ朦朧とした夢であるかに思えるであろう。しかし、時は、人間の多くの関係を明らかにするであろう。

112:5.22 (1235.4) 思考調整者は、思い出し、あなたの宇宙経歴の一部であり、要点であるそれらの記憶と経験のみをあなたのために繰り返すであろう。調整者が、人間の心の何かの進化の提携者としてずっときたのであれば、これらの価値ある経験は、調整者の永遠の意識の中に生き残るであろう。しかし、精霊的な意味もモロンチアの価値もどちらも持っていないので、あなたの過去の生活とその思い出の多くは、物質の脳とともに滅ぶであろう。物質的経験の多くは、モロンチア段階へとあなたに橋を架

けたので、もはや宇宙においては目的を果たさない以前の足場として去るであろう。しかし、人格と、それに人格間の関係は、決して足場ではない。人格関係についての人間の記憶は、宇宙的価値を持っているし、持続するであろう。あなたは、大邸宅世界において、短いが興味をそそるユランチアの生活における以前の仲間を知るであろうし、それ以上に思い出すであろうし、以前の仲間に知られるであろうし、それ以上に思い出されるであろう。

6. モロンチアの自己

112:6.1 (1235.5) 人間の本当の人格は、ちょうど蝶が毛虫の段階から現れて来るように、かつて物質の肉体に覆い隠されたものから離れて初めて明らかにされ、大邸宅世界に現れるであろう。地方宇宙におけるモロンチア経歴は、最初のモロンチア段階の魂の存在から最終的なモロンチア段階の進歩的な精神性までの人格構造の連続的上昇と関係がある。

112:6.2 (1235.6) 地方宇宙経歴のためにあなたのモロンチア人格の類型に関してあなたに教授することは難しい。あなた

には人格顕示性のモロンチアの類型が授けられるであろうし、これらは、結局のところ、あなたの理解を超える衣服である。そのような形態は、ことごとく真実であるが、あなたが現在理解している物質系列のエネルギーの類型ではないのである。しかしながら、人間の生誕の惑星においてあなたの物質の肉体のように、それらは、地方の宇宙世界において同じ目的を果たすのである。

112:6.3 (1236.1) ある程度まで、物質的な肉体-形態の見た目は、人格同一性の特徴に敏感に反応している。肉体は、限られた範囲内において人格に固有の本質の何かを反映する。モロンチアの形態がそうするのは、なおさらである。物理的生活において、人間は、内面的には魅力がなくても、外面的には美しいかもしれない。人格形態は、モロンチアの生活においては、またますますそのより高い段階においては、直接的に内面的個人の本質により異なるであろう。より高い精霊段階において、外見と内的本質は、完成な識別に近づき始め、そしてそれは、より高い精霊段階においてますます完全になる。

112:6.4 (1236.2) 上昇する人間には、モロンチアの状態においては、オーヴォントンの熟練の精霊からのネバドンの用の宇宙心の贈与が授けられる。人間の知力は、そのようなものとして滅びてしまった、つまり、創造的精霊の心の未分化の回路からは離れた局地化された宇宙の実体としての存在を止めてしまった。しかし、人間の心の意味と価値は滅びはしなかった。心のある局面は、生残する魂の中で続いている。元の人間の心のある経験的価値は、調整者により保持されている。肉体で生きたありのままの人間の生活記録が、上昇する人間の最終評価に関係する数多くの存在体、つまり熾天使から宇宙検閲官までの、それに加えておそらくはそれを越えた究極者までの幅広い圏内の存在体の中に現存する登録簿と共に、地方宇宙に存在する。

112:6.5 (1236.3) 創造物の意志は、心なくしては存在し得ないが、それは、物質的知性の喪失にもかかわらず、存続はするのである。生存直後の間、上昇する人間は、人間生活から引き継がれる性格類型により、またモロンチアモタの新たに現れている機能により、大きく導かれる。そして、マンソニアへのこれらの案内役は、モロンチア

生活の前段階とモロンチアの意志の出現に先立ち、上昇する人格の成熟した意志表現として適正に機能を発揮する。

112:6.6 (1236.4) 地方宇宙の経歴においては、人間の存在に関わる7名の心-精霊の補佐に匹敵して影響を及ぼすものはない。モロンチア心は、この宇宙心が、地方宇宙の知性の創造的な源—神性活動者—により変更され、変換されてきたように、宇宙心との直接の接触により進化しなければならない。

112:6.7 (1236.5) 人間の心は、死の前に、調整者臨場からは自我を自覚して独立している。補佐の心は、それが作動可能にするための関連する物質的-エネルギーの類型だけを必要とする。しかし、物質的-心の構造が奪われるとき、モロンチアの魂は、超補佐であるので、調整者なしでは自意識を保持しない。しかしながら、この進化する魂は、その以前の関連する補佐の心の決定に由来する継続的な特徴を備え、またこの特徴は、その様式が、帰還した調整者によりエネルギー化されるとき、活発な記憶となる。

112:6.8 (1236.6) 記憶の持続は、最初の自己性の同一性の保持を証明している。人格の連続と拡大の自意識を完成することは重要である。調整者なしで昇るそれらの人間は、人間の記憶の再構成のために熾天使の提携者の指示に依存している。さもなければ、精霊-融合の人間のモロンチア魂に制限はない。記憶の型は魂で持続するが、この型は、継続的記憶としてすぐに自己-実現可能になるように前の調整者の臨場を要求する。かつての存在の意味と価値についての記憶意識を再探索し、再学習するために、つまり回復するためには、調整者なくしては、かなりの時間を必要とする。

112:6.9 (1237.1) 生存に値する魂は、自己性の同一性のかつての台座である物質的知性の質的量的活動と質的量的動機の双方を忠実に反映する。真、美、善を選ぶに当たり、人間の心は、知恵の精霊の誘導に基づき統一される心精霊の7名の補佐の指導の下に、その前モロンチアの宇宙経歴を始める。その後、前モロンチアの7回路の到達後、補佐の心へのモロンチア心の贈与の上乗せが、地方宇宙発展の前精霊の経歴、あるいはモロンチア経歴に着手する。

112:6.10 (1237.2) 自分の出身惑星を去るとき、創造物は、補佐の奉仕活動を後に残して、もっぱらモロンチア知性に依存するようになるだけである。地方宇宙を去るとき、上昇者は、モロンチア段階を超えており、精霊の存在段階に達したのである。そして、この新たに現れている精霊の実体は、オーヴォントンの宇宙心の直接の奉仕活動に慣れるようになる。

7. 調整者融合

112:7.1 (1237.3) 思考調整者の融合は、以前には単に潜在的であった人格に永遠の現実性を与える。このうちの新贈与物については言及されてよいかもしれない:神格の質の固定、過去-永遠の経験と記憶、不死性、および資格のある潜在的絶対性の局面。

112:7.2 (1237.4) あなたは、当面の形態のあなたのこの世の針路を進むとき、より良い世界の岸で目を覚ますことになっており、やがては、あなたの忠実な調整者と永遠の抱擁で結合するであろう。この融合は、神と人間を1つにする謎、つまり有限の創造物進化の謎を構成するが、それは永遠に真実である。融合は、アセンディントンの神聖

な球体の秘密であり、創造物は、神格の精霊との融合を経験したもの達を除いては、時間の創造物の同一性が、永遠に楽園の神格の精霊と1つになるとき、結合される実際の価値の本物の意味を理解することはできないのである。

112:7.3 (1237.5) 上昇者が自らの地方体系内で居住する間、調整者との融合は、通常成立する。それは、自然の死の超越として出身惑星において起こるかもしれない。それは、大邸宅世界いずれか1つにおいても、または体系の本部において起こるかもしれない。それは、星座滞在の時まで遅れさえするかもしれない。または、特例で、上昇者が地方宇宙首都に着くまで、それは成就されないかもしれない。

112:7.4 (1237.6) 調整者との融合がもたらされると、そのような人格の永遠の経歴には将来の何の危険もあるはずはない。天の存在体は、長い経験を通して試されるが、人間は、進化世界およびモロンチア世界における比較的短くかつ集中的な試験を経験する。

112:7.5 (1237.7) 超宇宙からの命令が、人間性が、永遠の経歴のために最終的かつ取り消し不能の選択をしたと言明されるまで、調整者との溶融は決して起こらない。これは、一つになることの認可であり、それが発行されとなると、その認可は、融合された人格が、遂には地方宇宙の境界を去り、いつか超宇宙本部への前進のための決済の権限を設定し、時間の巡礼者は、この場所から、遠い未来においてハヴォーナの中央宇宙と神格冒険への長い飛行のために第二熾天使に包み込まれるであろう。

112:7.6 (1238.1) 自己性は、進化世界においては物質的である。宇宙にあっては、物であり、またそういうものとして物質存在の法則の支配を受ける。それは時間にあっては事実であり、その変化に対応する。生存決定は、ここで明確に述べなければならない。モロンチア状態において、自己は新しくてより永続的な宇宙現実になり、またその継続的な成長は、宇宙の心と精霊の回路へのその増大する調和に基づいている。生存決定が今、確認されている。自己が精霊的な段階に達するとき、それは宇宙の安定した価値となり、この新しい価値は、生存決定がなされたという事実に基づいており、この事実は思考調整者

との永遠の融合により目撃された。そして、創造物、は、真の宇宙の価値の状態に至り、最高の宇宙価値—神—探求へ向けての潜在能力で自由になるのである。

112:7.7 (1238.2) そのような融合された存在体は、その宇宙反応において二重性である。それらは、かならずしも熾天使と違わない個々のモロンチアの個人であり、また楽園終局者の系列の可能性を秘めた存在体でもある。

112:7.8 (1238.3) 融合された個人は、本当に1人格であり、1存在体であるが、その一体性は、宇宙のいかなる知性による分析のすべての試みをも不可能にする。それから、そのうちのどの機関も、一方を他方から離して人間または調整者を見分けることができなかった地方宇宙の裁決機関の最も低いものから最も高いものの通過後、あなたは、最終的にはネバドンの君主、つまりあなたの地方宇宙の父の前に連れて行かれるであろう。そこで、あなたの人生の事実を可能にした時間のこの宇宙の創造的な父性である他ならぬ存在体の手から、やがては宇宙なる父を求めるあなたの超宇宙経歴が始められる権利を与えるその信任状があなたに与えられるであろう。

112:7.9 (1238.4) 勝利を収めた調整者が、人類に対するすばらしい奉仕により人格を勝ち得たのか、それとも果敢な人間が、調整者相似を得るための誠実な努力で不死を獲得したのか。どちらでもない。かれらは、つねに役に立ち、誠実かつ有能であると分かる者、すなわちさらなる成長と進歩の候補者、である上昇する究極者の人格の無類の系列に属する1構成員の進化をともに勝ち得たのである。かれらは、ハヴォーナの7つの回路を通過し、そして地球を起源とするかつての魂が、楽園の父の実際の人格の敬謙な承認を受けるまでは、つねに上へと向かい、決して堂々たる上昇を止めないのである。

112:7.10 (1238.5) 思考調整者は、このすべての壮麗な上昇を通して、上昇する人間にとっての未来の、しかも完全な精霊の安定化のための神の誓約である。一方、人間の自由意志の存在は、永遠の回路を神性の、無限の本質の解放に向けて調整者に提供するであろう。今、これらの2つの同一性が1つになるのである。時間、あるいは永遠のどんな出来事も、人と調整者を切り離すことはできない。それらは、不可分、つまり永遠に融合されている。

112:7.11 (1238.6) 調整者-融合世界においては、神秘訓戒者の目標は、上昇する人間—楽園の終局者部隊—のものと同じである。そして、調整者も人間も、他方の完全な協力と誠実な助けなくしてはその独特の目標に達することはできない。この並はずれた連携は、この宇宙時代のすべての宇宙現象の中の最も心を奪う、しかも驚きに値する1つである。

112:7.12 (1239.1) 調整者融合時から上昇者の地位は、進化する創造物のそれである。人間の部分は、人格を教授する最初であり、したがって、人格認識に関するすべての問題で調整者の上位に立つ。この融合された存在体の楽園本部は、ディヴィニントンではなく、アセンディントンであり、神と人間のこの特異な組み合わせは、ずっと終局者部隊まで上昇する人間として位置づけられる。

112:7.13 (1239.2) 調整者がいったん上昇する人間と融合すると、その調整者の数は、超宇宙の記録から削除される。ディヴィニントンの記録に何が起こるかを私は知らないが、その調整者の登録簿は、終局者部隊の代理隊長であ

るグランドファンダの中庭の秘密の回路に移されると憶測する。

112:7.14 (1239.3) 調整者融合で、宇宙なる父は、物質創造物への自分の贈り物の約束を完了した。宇宙なる父は、約束を果たし、人類への永遠の神性贈与の計画を実現した。現在、このように事実化された神との崇高な連携関係に固有である無限の可能性を実現し、行動にうつす人間の試みが始まる。

112:7.15 (1239.4) 生残している人間の現在知られている目標は、終局者の楽園部隊である。またこれは、人間の伴侶との永遠の結合で加わえられるすべての思考調整者のための目標方向でもある。現在のところ、楽園の終局者は、多くの取り組みで壮大な宇宙全体で働いているが、7超宇宙が光と生命で安定した後、また有限の神がいまこの崇高なる神格を囲む神秘からついに出て来たとき、かれらには、遠い未来に実行するための他の、そしてさらに崇高な任務につくであろうと我々は皆、推測する。

112:7.16 (1239.5) あなたには、ある程度中央宇宙、超宇宙と地方宇宙の組織と要員について教えられてきた。あなたに

は、現在これらの広範囲の創造を指示する様々ないくつかの人格の性格と起源について何かが伝えられてきた。最初の宇宙空間において、壮大な宇宙の周辺のはるか向こうの広大な銀河宇宙が、組織の過程にあるともあなたには知らされてきた。これらの物語の中で、崇高なる存在体が、外部空間の現在は地図にないこれらの領域においてかれの非啓示の自第三機能を明らかにすることになっているということが、暗に示されもした。また、楽園部隊の終局者が、崇高者の経験の子供であるともあなたには伝えられた。

112:7.17 (1239.6) 我々は、調整者融合の人間が、宇宙の外部空間の最初の段階の行政において何らかの方法で、その終局者の仲間と共に機能するように方向づけられていると、信じる。我々は、そのうちに、これらの巨大な銀河が、生息宇宙になるであろうということを少しも疑わない。そして、我々は、性質が、被創造物と創造者の混合する宇宙的結果である楽園の終局者を行政者の中に見つけられると、等しく確信している。

112:7.18 (1239.7) 何という冒険。何という恋愛。崇高者の子供ら、すなわち人格化され人間化されたこれらの調整者、すなわち調整者化され永遠化たこれらの人間、すなわち第一根源と中枢の本質の知られている最も高い顕現と宇宙なる父を理解することができ、またその父に到達可能である知的生命の最も低い形態の本質とのこれらの神秘的な組み合わせ、および永遠のつながりにより治められるはずの巨大な創造。我々は、そのような併合の存在体、創造者と被創造物のそのような提携関係が、最初の空間段階のこれらの未来の宇宙全体に生まれるかもしれないりと知的生命のあらゆる形の素晴らしい統治者、無双の行政者、理解ある、しかも思いやりのある責任者になるであろうと想像する。

112:7.19 (1240.1) 確かである、あなた方人間は、地球の、動物の起源のものであるということは。あなたの枠組みは、実に粉塵である。しかし、あなたが実際にそうするならば、あなたがもし本当に望むならば、確実に時の遺産はあなたのものであり、いつかは真の自身—経験の崇高なる神性の子供らとすべての人格の楽園の父からの神性の息子ら—の性格で宇宙の至る所で奉仕するであろう。

112:7.20 (1240.2) [オーヴォントンの単独使者による提示]

論文 113
将来の目標の熾天使の保護者 9

113:0.1 (1241.1) 我々は、時間の活動精霊と空間の使者軍勢の物語を提示し終えたので、個々の死すべき者への活動に捧げられる熾天使である守護天使についての考察に至る。精霊的な進行の大々的な生存計画のすべてが、個々の死すべき者のための高揚と完全性のために提供された。ユランチアの過去の時代において、これらの目標の守護者は、認識されていた唯一の天使集団であった。いかにも、惑星熾天使は、生き残る者達に仕えるために送られた奉仕する精霊である。付き添うこれらの熾天使は、過去と現在のすべてのすばらしい出来事において必滅の人間の精霊的な助手として機能してきた。非常に多くの啓示で「言葉が天使によって語られた。」天の訓令の多くが、「天使の活動を通じて受け取られた。」

113:0.2 (1241.2) 熾天使は、天の伝統的な天使である。それらは、あなたのとても近くにあり、あなたのために多くのことを行う奉仕をする精霊である。熾天使は、人知の最も初期からずっとユランチアで活動してきた。

1. 守護天使

113:1.1 (1241.3) 守護天使に関する教えは、神話ではない。ある人間集団には、個人付き天使が実際にいる。イエスが天の王国の子供について話したのは、この事実を認識してであった。「これらの小さい者の一人をも軽んじぬよう気をつけなさい。あなたがたに言うが、彼らの御使いたちは、私の父の精霊の臨場を仰いでいるのである。」

113:1.2 (1241.4) 当初、熾天使は、別々のユランチアの人種に明確に割り当てられた。だが、マイケルの贈与以来、それらは、人知、精霊性、将来の目標に従って割り当てられている。知力の上で、人類は、3階級に分類される。

113:1.3 (1241.5) 1. 普通以下の関心をもつ者—通常の意志の力を発揮しない者。平均並みの決定をしない者。この階級は、神を理解することができない者達を含む。それらには、神格への知的崇拝のための容量が欠如している。ユランチアの普通以下の存在体には、その存在体の世話をしたり、その球体での生活の苦闘において正義と慈悲が拡大されるということを見届けるために割り当てられる天使童子の1大隊と共に熾天使の1軍団がある。

113:1.4 (1241.6) 2. 人間の心の平均的、普通の型。熾天使の活動の見地から、ほとんどの男女は、人間の進歩と精霊的成長の回路の形成における各状態に応じて7階級に分類される。

113:1.5 (1241.7) 3. 普通以上の関心をもつ者—精霊的達成の立派な決定と疑う余地のない潜在性。内住する調整者との接触を多少なりとも楽しむ男女。将来の目標に向かう様々な予備兵団の構成員。人間がたまたまどのような層に居ようとも、もしそのような個人が、将来の目標のいくつかの予備部隊いずれかに入団するようになれば、すぐにその場で、個人付きの熾天使が配属され、その人間は、その時から地球での経歴が終わるまで守護天使の連続の活動と止むことのない世話を味わうであろう。どんな人間でも最高の決定をするとき、調整者との本当の婚約関係にあるとき、個人付きの守護者はすぐに、その魂に配属される。

113:1.6 (1242.1) いわゆる通常の存在体への活動において、熾天使の任務は、知性と精霊性の回路の人間の到達に従って与えられる。あなたは、第7回路において人間の衣服で

あるあなたの心で着手し、自己理解、自己克服、自制に関する仕事の内部へ旅する。そしてあなたは、内住する調整者との部分的接触と親交の第一の、あるいは内面の回路に達するまで(自然死が、あなたの経歴を終わらせないで、あなたの苦闘を大邸宅世界へ移さないならば)回路ごとに、進んでいく。

113:1.7 (1242.2) 最初の回路すなわち第7回路の人間には、1,000人の人間の世話と後見を任される補助の天使童子の1団とともに1名の守護天使がいる。第6回路には、天使童子の1団とともに1組みの熾天使が、１集団が500人のこれらの上昇をする人間を誘導するために配属される。第5回路に達すると、人間は、およそ100人の集団に分けられ、天使童子の1団とともに1組みの守護熾天使が配属される。第４回路の到達に際し、必滅の存在体は、10人ずつに集められ、再度、天使童子の1団の支援を受ける1組の熾天使に任される。

113:1.8 (1242.3) 人間の心が動物の名残りの不活発さを打ち破り、人間の知性とこれまで培ってきた精霊性の回路に達するとき、一名の個人付きの天使は(現実には2名)、完

全に、しかも専属的にこの上昇する人間に尽くす。その結果、人間のこれらの魂は、絶えず臨場する、またますます手際のよい内住する思考調整者に加え、第3回路を終え、第2回路を越え、第1回路に達するという魂の全努力において将来の目標の個人付きの守護者の専心的援助を受ける。

2. 将来の目標のための守護者

113:2.1 (1242.4) 熾天使は、3つの成就の1つ、あるいは、それ以上の実現をした人間の魂のつながりに割り当てられるそのような時まで目標の守護者として知られていない。神のようになるという最高の決定をしたか、第3回路に入ったか、または将来の目標の予備部隊の1つに召集されたという3つの成就。

113:2.2 (1242.5) 将来の目標の守護者は、人種の進化につれ征服しなければならない回路に達する一番最初の存在体に割り当てられる。ユランチアにおいて個人付きの守護者を確保した最初の人間は、遠い昔の赤色人種の賢明な男性ラントウォクであった。

113:2.3 (1242.6) 天使のすべての任務は、志願する１集団からの熾天使に委ねられ、これらの指名は、常に人間の必要性に基づき、また天使の組の状態—熾天使の経験、技能と知恵を考慮に入れて—に関係している。長期に渡る勤務の熾天使だけは、つまり経験豊富で試された型は、将来の目標のための守護者として選任される。多くの守護者が、非調整者の融合集団であるそれらの世界で、非常に貴重な経験を積んだ。調整者のように、熾天使は、一度の生涯のためにこれらの存在体に付き添い、そして新任務のために解放される。ユランチアの多くの守護者は、他の世界においてこれまでのこれ以前の実際的経験をしてきた。

113:2.4 (1243.1) 人間が生き残れないとき、それぞれの個人付き、あるいは集団の守護者は、繰り返し同じ惑星で同程度の資格をもって仕えるかもしれない。熾天使は、個々の世界との感傷的な関心を育み、またとても密接に、親しく交わってきた必滅の創造物の特定の人種と型に対して特別な愛情を抱いてきた。

113:2.5 (1243.2) 天使は、それぞれの人間の仲間に対しいつまでも続く愛情を育む。そして、あなたは、熾天使を想像できさえするならば、それらに対する暖かい愛情を育むであろうに。あなたは、物質的肉体を剥奪され、精霊の型が与えられ、人格の多くの属性において天使にとても近くなるであろう。かれらは、あなたの感情の大部分を共有し、さらに若干のものを経験する。彼らの理解にはいくらか難しいあなたを動かす唯一の感情は、ユランチアの平均的住民の精神生活におけるおおきく膨れる動物的恐怖の遺産である。天使には、あなたが、なぜ自身のより高い知力、また信仰さえもそれほどまでに恐怖に支配されるのか、つまり畏怖と懸念の軽はずみな狼狽に完全に混乱させられるのか、を理解することは実に困難なことなのである。

113:2.6 (1243.3) あらゆる熾天使は、個別の名前をもつものの、世界奉仕への任務記録にはしばしばそれぞれの惑星番号にて表されている。宇宙本部においては、名前と番号によって登録される。この接触による意思疎通に用いられる人間の対象の目標守護者は、ネバドン熾天使軍の182,314番の37軍勢6軍団384部隊126大隊17隊3群であ

る。ユランチアとこの人間の対象へのこの熾天使の惑星の現在の任務番号は364万1,852である。

113:2.7 (1243.4) 熾天使は、個人付き守護の活動における目標守護者としての天使の任務において常に奉仕を志願する。訪問を受けるこの都市では、最近ある人間が、将来の目標の予備部隊への入隊が認められ、そのような人間すべては、守護天使に個人的に付き添われることから、資格のある100名以上の熾天使が、任務を得ようとした。惑星の管理者は、12名の経験豊富な個人を選び、次いで彼らがその生涯を通じてこの人間を案内するに最適であると選んだ熾天使を任命した。すなわち、かれらは、同等に資格のある熾天使の特定の一組を選んだ。この熾天使の一組のうちの一名が、いつも任務に就くのである。

113:2.8 (1243.5) 熾天使の任務には休みはないかもしれないが、天使の組のいずれかは、付き添いの全責務から免除されることができる。天使童子と同様、熾天使は、通常一組で仕えるが、それほど高度でない仲間とは異なり時おり単独で働く。実際、人間とのすべての接触において個人として機能することができる。両天使は、宇宙のより高

度の回路での情報伝達と奉仕のためだけに必要とされる。

113:2.9 (1243.6) 熾天使の一組が守護の任務を受け入れると、彼らは、その人間の残りの人生の間役目を果たす。補体(2名の天使の1名)は請け負い仕事の記録係になる。これらの補充の熾天使は、進化的世界の人間の記録係の天使である。記録は、いつも熾天使の守護者に対応する天使童子(天使童子とサノビム)の組によってつけられるが、これらの記録は、いつも熾天使の1人が引き受ける。

113:2.10 (1244.1) 守護者は、休息と宇宙回路の生命エネルギーの再充電の目的のために自身の補体に定期的に交代してもらい、留守中は対応する天使童子が、記録係として機能し、それは、補足の熾天使が同様に不在にする際も同じである。

3. 他の精霊の影響との関係

113:3.1 (1244.2) 目標守護者が、人間の対象のためにする最も重要なことの1つは、進化する物質的な創造物の心と魂に宿り、囲み、それに影響を与える無人格的精霊の幾多の影響の個人的調整をもたらすことである。人間は人格で

あり、無人格の精霊と前人格の実体が非常に物質的であり、別々に人格的であるそのような心に直接に接触することはきわめて難しい。守護をしている天使の活動におけるこれらの影響のすべては、多少なりとも統一され、進化する人間の人格の拡大している道徳的本質によりほぼはっきりと感知できる。

113:3.2 (1244.3) 特に、この熾天使の守護者は、物理的管理者の領域と心-精霊の補佐から神性聖職者の聖霊へと、それに楽園の第三根源と中枢の遍在精霊の臨場にまでおよぶ無限の精霊の様々な代理者との影響を相関させることができるし、そうするのである。このようにして無限の精霊のこれらの広大な活動を統一し、より個人的にした後で、熾天使は、次に連合活動者のこの統合影響を父と息子の精霊臨場との相互的関連づけを引き受ける。

113:3.3 (1244.4) 調整者は父の臨場である。真実の精霊は息子の臨場である。これらの神の授与は、守護者熾天使の活動による人間の精霊的経験の下方段階で統一され、調整される。天使の奉仕者は、必滅の創造物への働き掛けにお

ける父の愛と息子の慈悲の結合において巧みなのである。

113:3.4 (1244.5) なぜ熾天使の守護者が、結局は、物理的な死とモロンチア復活のその間の人間の生存者心の型、記憶の手法、魂の現実の個人的管理者になるかという理由がここに明らかにされる。無限の精霊の奉仕している子供だけが、このように宇宙の1段階から、 他の、しかもより高い段階へのこの変遷期を通して人間のために機能することができた。あなたが、最終の遷移の微睡みについているときでさえ、つまり、時間から永遠への通過の際、高い超熾天使は、創造物の自己性の管理者と人格の全体性の保証として同じようにあなたと通過を共にする。

113:3.5 (1244.6) 精霊的段階において熾天使は、人格の、さもなければ非個人の、そして前人格である多くの宇宙の活動をする。彼らは調整者である。知性の段階においては、それらは、心とモロンチアを相関させる者である。それらは、通訳者である。そして、物理的段階においてかれらは、主たる物理管理者との連携をして、また中間的被創造者の協力的活動を通して地球の環境を操作する。

113:3.6 (1244.7) これは付き添いの熾天使の多種多様の、しかも複雑な機能の詳説である。しかし、人類の宇宙段階のわずかに上に創造されたそのような従属的天使の人格は、いかにそのような困難で複雑なことをするのか。我々は、本当には知らないが、この驚異的な活動は、時間と空間の進化的宇宙の実現化する神格である崇高なるものの認識されていないし、明かされていない働きによって容易にされる何らかの秘密に付された方法にあると推測する。崇高なるものの中に、また全体にわたる進歩的な生存の全領域のいたるところで、熾天使は継続する人間進歩の主要部分である。

4. 熾天使の活動範囲

113:4.1 (1245.1) 守護者熾天使は、人間の心に源を与える同じ源から、創造的精霊から湧き出るものの、心ではない。熾天使は、心を刺激する者である。熾天使は絶えず、人間の心の回路に至らせる決定の促進に努めている。彼らは、これを調整者のように魂の内側から、また魂を通じて操作するのではなく、むしろ外部から内部へと人間の社会的、倫理的、道徳的環境を介してする。熾天使は、

宇宙なる父の神性調整者の魅力ではないが、無限の聖霊の活動の個人的代理として機能するのである。

113:4.2 (1245.2) 調整者の指導を受ける人間は、熾天使の指導にも従順である。調整者は、人の永遠の本質の心髄である。熾天使は、人の進化する本質の教師である—この人生における人間の心、次の人生におけるモロンチア魂。大邸宅界では、あなたは、熾天使の教官に気付き知ってはいるが、最初の人生において人は、通常、彼らに気づいていない。

113:4.3 (1245.3) 熾天使は、新しくて進歩的な経験の道へ人間の人格の足どりを誘導することにより人の教師として機能する。熾天使の導きを受け入れるということは、安楽の生活に達することをそれほどまでに意味しない。あなたは、この導きに続くにあたり、またあなたが勇気を持っていれば、道徳的選択と精霊的進展のの起伏の多い丘に遭遇し、越えて行くことは確実である。

113:4.4 (1245.4) 崇拝の衝動は、調整者の導きに補強されたより高い心の補佐の精霊の促しに主に源を発している。しかし、神を意識する人間が、そのようにしばしば経験する

祈りの衝動は、熾天使の影響の結果として頻繁に起こる。守護の熾天使は、そのような生存候補者が、内住する調整者の臨場の強化された認識が得られるように、そして、その結果、神性臨場の精霊的な任務とのさらなる協力を可能にする終わりまで人間上昇者の宇宙洞察を増大させる目的で、人間の環境を絶えず操作している。

113:4.5 (1245.5) 内住する調整者と取り巻く熾天使の間での意志伝達が明らかにない一方で、かれらは、つねに完全な調和と絶妙の一致で働いているようである。守護者は、調整者が最小に活動的であるときに最も活動的であるが、不思議なことにそれぞれの活動は、何らかの方法で関連がある。そのような見事な協力は、とても偶然でも、付帯的でもあるはずがない。

113:4.6 (1245.6) 守護熾天使の奉仕している人格、内住する調整者の神の臨場、聖霊の回路経由の行為、真実の精霊の息子-意識は、人間の人格において、またそれへの精霊的活動の重要な統にすべて神々しく関連している。異なる起源と異なる段階の出身ではあるが、これらの天の影響

は、包んだり、進化している崇高なるものの臨場にすべて統合されている。

5. 人間への熾天使の活動

113:5.1 (1245.7) 天使は、人間の心の尊厳を侵さない。人間の意志を操らない。内住する調整者と直接的に接触もしない。目標の守護者は、あなたの人格の尊厳と呼応し、あらゆる可能な方法であなたに影響を及ぼす。どんなことがあってもこれらの天使は、人間の意志の自由な行為を妨げはしない。天使も宇宙人格のいかなる他の系列も、人間の選択の特権を抑えたり、弱めたりする力、あるいは権限をもたない。

113:5.2 (1246.1) 天使は、とてもあなたの近くにいて、かれらが、比喩的に「あなたの故意の狭量と頑固さに涙する。」ほど感慨深さをもってあなたに関心がある。熾天使は物理的な涙を流さない。それらには、物理的な肉体がない。翼もない。しかし、熾天使は、精霊の感情をもち、また、どこか人間の感情に匹敵する精霊の本質の気持ちと感情を経験する。

113:5.3 (1246.2) 熾天使は、あなたの直接の訴えからは全く独立してあなたのために行動する。彼らは上司の命令を実行し、またこのようにして、あなたの一時の気紛れや気分の変化にかかわらず機能する。これは、あなたが、かれらの任務をより簡単にしたり、　より難しくすることができるということよりも、むしろ天使は、あなたの訴え、あるいはあなたの祈りに直接関心がないということを意味しないのである。

113:5.4 (1246.3) 肉体の生活において、天使の知力は、人にとって直接に利用はできない。かれらは、大君主でも監督でもない。単に守護者である。熾天使は、あなたを護衛する。かれらは、直接あなたに影響を及ぼそうとはしない。あなたは、自身の進路を計画しなければならないが、これらの天使は、その後、あなたが選んだ進路を最大限に活用するように行動する。かれらは、(通常)任意に人間の人生の通常の事柄に干渉しない。しかし、これらの守護者が、何らかの並でない功績を実行するようにとの上司から指示を受けるとき、あなたは、これらの者がこれらの命令を実行するいくつかの方法を見つけることが確実であると安心するかもしれない。したがって、

彼らは、緊急時を除いては、その時でも、通常は上司の直接命令以外には人間劇の絵には押し入らない。かれらは、長い間あなたについて来る存在であり、将来の仕事と人格のつながりへの手引きをこのように受けている。

113:5.5 (1246.4) 熾天使は、ある情況下の人間に奉仕するとき、物質的活動者として機能できるのであるが、この適応力におけるそれらの行為は、非常にまれなことである。それらは、実際に人類と接触さえするために中間的被創造者と物理管理者の助けを借りて、人間のために広範囲にわたる活動において機能できるのだが、そのような出来事はたいへんに珍しい。危険を伴う状況が、人間の進化の連鎖における極めて重要な関連に生じ、それに対して熾天使の守護者が、自発的に、適切に行動してきたものの、大抵の場合、物質界の状況は、熾天使の活動により不変に進行する。

6. 死後の守護天使

113:6.1 (1246.5) 肉体での生活期間の熾天使の活動についての何かを話してきたので、私は、かれらの人間の仲間の臨終の時点の目標の守護者の行為に関してあなたに知らせる

努力をするつもりである。あなたの死に際し、あなたの記録、自己性の詳述、人間の魂のモロンチア実体—人間の心と神性調整者の活動により共に進化された—は、立ち去る調整者と人格の実在により代表される継続的な存在の自己性以外は、目標守護者によってあなたの将来の存在、あなたを構成する全てに関連する他のすべての価値と共に、本物のあなたに誠実に保存される。

113:6.2 (1246.6) 熾天使が調整者の臨場と結びつく精霊の明度である人間の心の種火が消滅するその瞬間、付き添いの天使は、直接に命令を与える天使に、次には隊、大隊、部隊、軍団、軍勢の集団に報告する。そして、時間と空間の最終的な冒険のために順当に登録された後に、そのような天使は、この宇宙上昇候補者の熾天使の軍隊を統率する宵の明星(または、ガブリエル直属の他の中尉)に報告するために熾天使の惑星長官による証明を受ける。そのような目標の守護者は、最も高い組織単位の指揮官からの許可を受けると、最初の大邸宅界まで進み、そこで意識をとり戻しつつある以前の肉体の被後見人を待ち受ける。

113:6.3 (1247.1) 人間の魂が、個人付きの天使の任命を受けた後に生存を達成できない場合、付き添いの熾天使は、そこで予め報告された通りに自分の補体の完全な記録を証言するために地方宇宙の本部へと進まなければならない。次に、彼女は、自分の対象の生存失敗に関する咎めから放免されるために大天使の法廷の前に行く。それから、彼女は、上昇可能な別の人間に、または熾天使の活動の他のある分割に割り当てられるために再び世界に戻る。

113:6.4 (1247.2) しかし、天使は、個人的、および集団的保護の奉仕は別として、多くの方法で進化する創造物に働き掛ける。自分の対象がすぐには大邸宅界に行かない個人付きの守護者は、天の配剤の判断の点呼を待ち受けてそこに安閑として滞在しない。それらは、宇宙全体で多数の奉仕任務に再選任される。

113:6.5 (1247.3) 守護熾天使は、不在の調整者が、そのような不滅の宇宙の存在体の自己性であるように、必滅の人間の眠っている魂の生存価値の管理受託者である。これらの2者が、モロンチアの型と関連して大邸宅界の復活広間

で協力するとき、人間上昇者の人格の構成要素の再組み立てが起こる。

113:6.6 (1247.4) 調整者は、あなたを見分ける。守護熾天使は、あなたを再人格化し、それから、あなたの地球時代の誠実な訓戒者にあなたを再び差し出すであろう。

113:6.7 (1247.5) それにしても、惑星の時代が終わるとき、人間の達成の下方の回路のそれらのものが集められるとき、大邸宅球の復活広間で彼らを組み立て直すのは、彼らの集団の守護者である。あなたの記録でさえ述べている。「彼は、大いなる声で天使をつかわし、地の果てから果てに至るまでその選民を呼び集めるであろう。」

113:6.8 (1247.6) 正義の手法は、個人付きのまたは集団の守護者が、すべての非生存の人格のために天啓点呼に応じることを求める。そのような非生存者の調整者は戻らず、そして名簿が読み上げられるとき、熾天使は返答するが、調整者は答えない。これは、「不当の復活」、言い換えれば創造物の存在体の休止への正式認識を意味する。正義のこの点呼は、いつもすぐに、慈悲の点呼、眠っている生存者の復活の後にくる。しかし、これらは生存価値

の最高の、しかも、すべてを知る裁判官だけに重要な事柄である。そのような裁定問題は我々には本当に関係がない。

113:6.9 (1247.7) 集団の守護者は、くる時代くる時代に惑星で奉仕し、そのうちに何千人もの眠っている生存者の微睡みの魂の管理人になるかもしれない。それらは、復活対処が大邸宅界に起こるので、与えられた体系で多くの異なる世界においてそのように奉仕ができる。

113:6.10 (1247.8) ルーキフェレーンスの反逆で身を誤ったサタニア系の個人付きの、また集団のすべての守護者は、多くのものたちは自己の愚かさを真摯に悔いたにもかかわらず、反逆の最終的判決までジェルーセムに拘留されることになっている。すでに宇宙検閲官は、これらの反抗的で不誠実な守護者から彼らの魂の全局面を任意に取り除き、篤志の第二熾天使の後見の保護のためにこれらのモロンチア現実を預けた。

7. 熾天使と上昇の経歴

113:7.1 (1248.1) 誠にそれは、上昇する人間の経歴上の本当の新時代、大邸宅界の岸でのこの最初の目覚めである。初め

て、長らく愛し、つねに臨場する地球時代の天使の仲間に、そこで実際に会うために。また地球であなたの心にとても長く内住した神性訓戒者の自己性と臨場を本当に、そこで意識するために。そのような経験は、栄光の目覚め、本当の復活を構成する。

113:7.2 (1248.2) モロンチア球においては、付き添いの熾天使(2名いる)は、あなたの公然の仲間である。これらの天使は、あなたが、過渡期の世界における経歴を前進する間、モロンチアと精霊状態の習得にあたりあなたをあらゆる可能な方法で補助しながら、あなたと交わるだけでなく、大邸宅界で維持される進化する熾天使のために公開学校での勉強によって向上する機会をかれらも利用する。

113:7.3 (1248.3) 人類は、天使の系列のより単純な型よりもほんの少し低く創造された。したがって、モロンチア生活のあなたの最初の課題は、肉体の絆からのあなたの解放後にあなたが人格意識に達するとき、待ち受けている差し迫った仕事における熾天使の助手としてであろう。

113:7.4 (1248.4) 大邸宅界を去る前には、すべての人間は、永続する熾天使の仲間か守護者をもつであろう。そして、あなたがモロンチア球を昇る間、最終的には思考調整者とのあなたの永遠の結合の命令を目撃し確信するのは、熾天使の守護者である。一緒に、それらは、時間の世界から肉体の子供としてあなたの人格の自己性を打ち立ててきた。また、成熟したモロンチアのあなたの地位到達に際し、彼らは、ジェルーセムと関連する体制の進歩と文化の世界中をあなたに同伴する。その後、かれらは、あなたとエデンチアと高度な社会化のその70の球体に行き、その後、メルキゼデクへとあなたを案内し、宇宙本部世界の素晴らしい経歴の間ずっとあなたに続くであろう。そして、あなたが、メルキゼデクの知恵と文化を学び終えるとき、彼らは、あなたをサルヴィントンに連れ行き、そこで、あなたは全ネバドンの君主と対面するであろう。そして、長いハヴォーナ飛行に向けてあなたが最終的に第二熾天使を包むまで留まっているこれらの熾天使の案内者は、依然として超宇宙の小規模領域と大規模領域を経てユヴァーサの受け入れの世界へとあなたに同行する。

113:7.5 (1248.5) 人間の経歴の間の配属の目標守護者の数名は、ハヴォーナを通して上昇する巡礼者の進路をたどる。他のものは、長年の人間の仲間に一時的な別れを告げ、次に、これらの人間が、中央宇宙の回路を通過する間、これらの目標守護者は、熾天使球の回路に達する。そして、守護者達は、人間の仲間が、楽園の岸で時間の最後の過渡期の睡眠から永遠の新経験へ目覚めを待ちうけているであろう。そのような上昇する熾天使は、その後終局者部隊と熾天使の終了部隊の互いに異なる奉仕に入る。

113:7.6 (1248.6) 人と天使は、永遠の奉仕において再結合するか、あるいはしないかもしれないが、その任務が熾天使をいずこへ連れていこうとも、熾天使はつねに進化的世界の先の被後見人、つまり時間の世界の上昇する人間と連絡をする。人間の起源の領域での親密なつながりと慈愛深い絆は決して忘れられることはなく、完全に断ち切られるというわけではない。永遠の時代に、人と天使は、時間の経歴において協力したように神の奉仕においても協力するであろう。

113:7.7 (1249.1) 熾天使にとり楽園の神性に至る最も確かな方法は、首尾よく進化を伴う起源の魂を楽園の入り口に案内することである。したがって、目標守護者の任務は、最も高く重んじられる熾天使の義務である。

113:7.8 (1249.2) 目標守護者のみが、主要な、あるいは人間の、終局者部隊に召集され、そのような組は、自己性の同一性の最高の冒険に従事してきた。2つの存在は、終局者部隊への受け入れに先立ち熾天使界の精霊的な2つの統一を成し遂げた。この経験で、全宇宙機能において非常に補充的である2天使の本質は、楽園の父の非調整者の断片の受け入れ、またそれとの融合のための新しい受け入れ能力に影響を与えて二つが一つの究極の精霊へと達する。こうして、時間のあなたの愛ある一部の熾天使の仲間は、永遠においてはあなたの終局者の仲間、つまり崇高なるものの子供と楽園の父の完成された息子になるのである。

113:7.9 (1249.3) [ユランチア駐留の熾天使の長官による提示]

論文 114
熾天使の惑星政府

114:0.1 (1250.1) いと高きものは、多くの天の部隊と機関を通して、だが主に熾天使の活動を通して人の王国で統治する。

114:0.2 (1250.2) 今日正午におけるユランチアの上の惑星の天使、守護者、およびその他の点呼は、5億123万4,619組の熾天使であった。200名の熾天使の軍勢—5億9,719万6,800組の熾天使、または11億9,439万3,600名の個々の天使が、私の指揮下に配属された。しかしながら登録は、10億246万9,238名の個人を記す。したがって、1億9,192万4,362名の天使が輸送任務、使者の任務、および死の任務でこの世界にはいなかったということになる。(ユランチアにあっては、熾天使と天使童子は、ほぼ同数であり、同じように組織されている。)

114:0.3 (1250.3) 熾天使とその関連する天使童子は、惑星、特に反逆によって孤立した世界の超人間の政府の細部と多くの関係がある。中間者に巧みに補助される天使は、居住する総督とすべての仲間と部下の委任を実行する超物質の実際の奉仕活動者としてユランチアで機能する。一階

級としての熾天使は、個人の、および集団の保護の任務以外の多くの任務に従事している。

114:0.4 (1250.4) ユランチアは体系、星座、宇宙支配者からの適切で効果的な指揮がないわけではない。しかし、惑星政府は、全ネバドンにおいてさえ、サタニア系における他のどの世界のそれとも異なっている。あなたの統轄計画におけるこの独自性は、いくつかの変わった情況によるものである。

114:0.5 (1250.5) 1. ユランチアの生命変化の状態

114:0.6 (1250.6) 2. ルーキフェレーンスの反逆の緊急事態。

114:0.7 (1250.7) 3. アダームの不履行による途絶

114:0.8 (1250.8) 4. ユランチアが、宇宙君主の贈与世界の1つであったという事実から生じる変則。ネバドンのマイケルは、ユランチアの惑星王子である。

114:0.9 (1250.9) 5. 24名の惑星監督の特別機能。

114:0.10 (1250.10) 6. 大天使回路の惑星上の位置。

114:0.11 (1250.11) 7. 代理権力を行使する惑星王子として人間の姿をしたかつてのメルキゼデクのマキヴェンタのより最近の指名。

1. ユランチアの主権

114:1.1 (1250.12) ユランチアの最初の主権は、サタニア系の主権者による委託で維持された。それは、彼によってメルキゼデクと生命運搬者の共同委員会への代表として最初に派遣され、またこの集団は、定期的に任命された惑星王子の到着までユランチアにおいて機能した。カリガスティア王子の破綻後、ルーキフェレーンスの反逆時点、ユランチアには、肉体におけるマイケルの贈与の終了時、つまりマイケルが日々の和合のものによりユランチアの惑星王子に任命される時まで、地方宇宙とその行政部との確実で定着した関係はなかった。そのような宣言は、保証的かつ原則的にあなたの世界状態を永遠に定着させたが、実際には君主たる創造者の息子は、ユランチア政府と他のすべての隔離する惑星の体制を代理する権威をもつ元ユランチア人24名のジェルーセム委員会の設立を除いて、惑星の個人的管理の行為をしなかった。こ

の協議会の1つは現在、居住する総督としてユランチアに常駐している。

114:1.2 (1251.1) 惑星王子としてのマイケルの代理をする代行権威者は、最近、メルキゼデクのマキヴェンタを訪ねたが、地方宇宙のこの息子は、居住する総督の連続した政権の現在の惑星体制を変更へのほんのわずかの行動も起こさなかった。

114:1.3 (1251.2) 代理惑星王子がその肩書き上の責任を担うために到着しない限り、何の著しい変更も現在の天の配剤期間にユランチア政府でなされるという見込みはほとんどない。我々の一定の仲間は、24名の相談役のうちの総督の役割りを果たす1名をユランチアに送るという計画が、いつか近い将来、ユランチアの主権代理人の命令によるメルキゼデクのマキヴェンタの正式到着により入れ替えられると思っている。代理の惑星王子としてメルキゼデクのマキヴェンタは、間違いなくルーキフェレーンスの反逆の最終裁決まで、おそらくは、遠い未来の光と生命への惑星の定着へと進み続けるであろう。

114:1.4 (1251.3) 一部のものは、マキヴェンタは、現配剤の終了までユランチア情勢の個人的な指示をするようにはならないと信じている。他のものは、マイケルがまだ肉体でいるときに約束したようにユランチアにいつか戻るまで代理人王子としては来ないかもしれないと信じている。この語り手を含むさらに他のものは、どんな日でも、何時でもメルキゼデクの出現を期待している。

2. 惑星管理委員会

114:2.1 (1251.4) あなたの世界におけるマイケルの贈与の時代以来、ユランチアの一般的管理は、24名の元ユランチア人のジェルーセムに関する特別集団に委ねられてきた。我々は、この委員会の会員資格については知らないが、このようにして任命されたもの全員がサタニア系の崇高なるものの拡大主権への貢献者であることを観測してきた。彼らは、本来ユランチアで機能するとき、皆実際の指導者であり、これらの指導力(マキヴェンタ　メルキゼデクを除く)は、大邸宅界の経験でさらに増大され、ジェルーセム市民の養成によって補完された。会員は、ラナフォーゲの内閣により24名に推薦され、エデンチアのいと高きものに指示され、ジェルーセムの配属監視員に

承認され、マイケルの命令に基づきサルヴィントンのガブリエルにより任命される。一時的な被任命者は、特別な監督のこの委員会の常任委員と同様に完全に機能する。

114:2.2 (1251.5) 惑星監督のこの委員会は、マイケルがここで最終贈与を経験したという事実から生じるこの世界での、それらの活動管理に特に関係があった。惑星監督らは、人間贈与の初めから終わりまでイエスに伴った同じ存在である特定の輝かしい宵の明星の連携活動によりマイケルとの親密で即座の接触が保たれる。

114:2.3 (1252.1) 現代においてあなた方には「洗礼者」として知られているヨハネという人は、ジェルーセムでの開会中のこの協議会の議長である。しかし、この協議会の職権上の責任者は、サルヴィントンの副検査官、つまりオーヴォントンの最高行政官の直接的で個人的な代表であるサタニアの配属監視員である。

114:2.4 (1252.2) 元ユランチア人のこの同じ委員会の会員も、体系の36の他の反逆の結果孤立した世界の顧問監督として務める。会員は、まだ多少ノーラティアデクの星座の父

の総括的管理下にあるこれらの惑星の問題に関する詳細で共感的情報に通じており、体系君主であるラナフォーゲと非常に価値ある奉仕を実行する。これらの24名の相談役は、個々の孤立する惑星に、特にユランチアに個人として頻繁な旅行をする。

114:2.5 (1252.3) 他の孤立した各々の世界は、その以前の住民の類似した、しかも異なる規模の委員会から忠告を受けるが、これらの他の委員会は、24名のユランチア集団より下位である。後者の委員会の構成員は、サタニアの各孤立世界における人間の進歩のあらゆる局面にこのように活発に興味を持っているが、なかでも特にユランチアの必滅の人種の福祉と前進に対する関心がる。というのも、ユランチア以外は、惑星のどの情勢にもすぐに、しかも直接には監督しないし、それらの権威はここでさえも人間生存に関するある一定の領域を除いては完全なものではないがゆえに。

114:2.6 (1252.4) 誰も、これらの24名のユランチアの相談役がどれほどの期間宇宙活動の定期的な活動からは離れた現在の状態で継続するのかを知らない。彼らは、天の配剤の

終わり、マキヴェンタ　メルキゼデクによる完全な権限の執行、ルーキフェレーンスの反逆の最終的裁決、またはその最終的贈与の世界におけるマイケルの再現などのような惑星の状態の結果として起こる何らかの変化まで間違いなくそれぞれの現在の資格で奉仕をし続けるであろう。ユランチアの現在住の総督は、サタニア系が星座回路に返されると、すぐにマキヴェンタを除くすべてが楽園上昇のために解放されるかもしれないという意見の傾向にある。しかし、他の意見もまた通用している。

3. 駐留総督

114:3.1 (1252.5) ユランチア時間の100年毎に24名の惑星監督のジェルーセム部隊は、行政代表としての役割を果たすために、あなたの世界での滞在に仲間の一人を指名する。これらの報告の準備期間中に、19番目に仕えていたものが20番目に引き継がれ、この執行官は交替した。惑星の現監督の名前は、人間は、並はずれた同胞と超人的な上司を崇拝する、神聖視さえする傾向にあるので、明かされていない。

114:3.2 (1252.6) 駐留総督は、24名のジェルーセム相談役の代表としての立場を除いては、世界情勢の取り扱いにおいて個人的な何の実実上の権威も持ってはいない。かれは、超人の行政進行係として務め、尊敬される長官でありユランチアで機能する広く認識された天の存在体の指導者である。結合した中間者が、一連の総督を本当に自分達の惑星の父として見る一方、天使の軍勢の全系列は、最初の1-2-3　の出発以来、24名中の相談役の一名を自分達の調整する監督と見なす。

114:3.3 (1253.1) 総督は、その惑星についての実際の、かつ個人的な権威を備えていないが、関係するすべての人格に最終的なものとして受け入れられる多くの判決と決定を毎日言い渡す。かれは、厳密な支配者であるよりもはるかに父親らしい助言者である。ある意味で、惑星王子であるかのように機能するが、その統治は、物質の息子のそれにかなり密接に似ている。

114:3.4 (1253.2) ユランチア政府は、取り決めに従って復帰の総督が、惑星王子の体制君主の内閣の一時的な成員としてジェルーセムの協議会において代表を務める。マキヴェ

ンタは、代理王子と称された時、サタニアの惑星王子の協議会ですぐに役割を引き受けると期待されていたが、これまでのところ、この方向に向けての何の素振りも見せてはいない。

114:3.5 (1253.3) ユランチアの超物質政府は、地方宇宙のより高い段階とのあまり緊密な有機的な関係を維持しない。ある意味で、居住総督は、マイケルとガブリエルを直接代表している24名の相談役に代わって行動するのであるから、サルヴィントンならびにジェルーセムを代表している。そして、惑星の総督はジェルーセム公民であるので体制君主の広報担当官として機能することができる。ヴォロンダデクの息子、すなわちエデンチアの観察者は、星座当局は、直接的に代理を務める。

4. いと高きもののための観察者

114:4.1 (1253.4) ユランチアの主権は、惑星当局の以前の任意の押収がもとで、惑星反逆の直後にノーラティアデク政府によりさらに複雑になる。エデンチアのいと高きものの観察者であり、マイケルによる直接行動がない場合、惑星の主権の受託者であるヴォロンダデクの息子は、ユラ

ンチアにまだ居住している。現在のいと高き観察者(そして、かつての評議委員)は、ユランチアにこうして奉仕する23番目である。

114:4.2 (1253.5) いまだにエデンチアのいと高きものの管理下、ルーキフェレーンスの反逆時点での問題に対し手にした司法権下にある惑星問題に関係する特定の集団がある。これらの事態における権威は、ヴォロンダデクの息子、つまり惑星の監督との非常に緊密な顧問関係を維持するノーラティアデクの観察者により行使される。人種委員達は、ユランチアで非常に活発であり、様々な集団の長官らは、顧問監督として務める居住しているヴォロンダデク観察者に非公式に配属されている。

114:4.3 (1253.6) 政府の実際の、一定の純粋に精霊的な事柄を除く危機に際しての最高の長官は、現在観察任務のエデンチアのこのヴォロンダデクの息子である。(これらの全く精霊的な問題とある種の純粋に個人的な問題における最高権威は、最近ユランチアで確立されたその系列の師団司令部に配属されている指令大天使に帰属しているようである。)

114:4.4 (1253.7) 深刻な惑星の危機に際しては、いと高き観察者は、自らの裁量判断において、惑星政府を占拠するための権限が与えられ、そして、それはユランチアの歴史において33回起こったと記録にある。こうした時にいと高き観察者は、大天使の分割的組織だけを除く惑星に居住するすべての奉仕活動者と管理者に絶対的権威を行使し、いと高き摂政として機能する。

114:4.5 (1253.8) 人間の王国の問題で星座支配者の優れた知恵を差しはさむいと高きものは、随時、棲息界の問題に立ち入ることができるので、ヴォロンダデク摂政は、反逆孤立の惑星に特有という訳ではない。

5. 惑星の政府

114:5.1 (1254.1) ユランチアの実際の統治を説明することは誠に難しい。例えば立法、行政、司法といった宇宙組織の線に沿った形式的な政府は存在しない。24名の相談役が、惑星政府の立法府に最も近いものである。総督は、暫定的で、助言的な最高責任者であり、拒否権はいと高き観察者にある。そして、惑星には、絶対的に権威をもつ司法権力者はいない—ただ調停委員会のみ。

114:5.2 (1254.2) 熾天使と中間者にかかわる大多数の問題は、相互同意の上で、総督により決定される。しかし、24名の相談役の命令表明の場合を除き、総督の裁定はすべて、調停委員会、惑星の機能のために構成される地方自治体、さらにはサタニアの体制君主への控訴対象である。

114:5.3 (1254.3) 惑星王子の有体部下とアダームの息子と娘の物質的体制の不在は、熾天使の特別な奉仕活動により、また中間被創造者の異例の奉仕によって部分的に埋め合わされた。惑星王子の不在は、大天使、いと高き観察者、および総督の三位一体の存在により効果的に補填される。

114:5.4 (1254.4) このむしろ大まかに組織され、幾分か個人的に統治された惑星政府は、大天使の時間節約の援助と絶えず用意のできている回路のお陰で予想以上に効果的であり、その回路は、惑星の非常事態と行政上の困難時にかなり頻繁に利用されている。厳密な意味で、惑星は、ノーラティアデク回路においていまだに精霊的に隔離されているが、非常時にはこの不利な条件は、大天使回路の利用により現在は回避することができる。惑星の孤立

は、1,900年前に真実の精霊からすべての人間に注がれて以来、もちろん個々の人間にとってそれほどの関心事ではない。

114:5.5 (1254.5) ユランチア上の行政の日々は、諮問会議で始まり、それには総督、大天使の惑星長官、いと高き観察者、監督している超熾天使、生命運搬者の長官、そして宇宙の神性に近い息子達の中からの招待客、またはその惑星にたまたま逗留しているかもしれない学生訪問者の中からの招待客が参加する。

114:5.6 (1254.6) 総督の直轄行政内閣は、12名の熾天使、惑星の進歩と安定に関する超人の直接の統括者として機能する特別な天使の12集団の代理長官から成る。

6. 惑星監視の熟練の熾天使

114:6.1 (1254.7) 真実の精霊の流出と同時に、最初の総督のユランチア到着の際、総督には特別熾天使の12軍団、つまり、すぐにある特別な惑星奉仕に配属された熾天使球の卒業生が、随伴していた。これらの高位の天使は、惑星監視の熟練の熾天使として知られており、いと高き観察

者の総括的管理は別として、駐留総督の直接指揮下にある。

114:6.2 (1255.1) これらの天使の12集団は、駐留総督の一般監督下で機能しながら、12名の熾天使協議会、すなわち各集団の代理長官から指示を受ける。この協議会は、また駐留総督の有志内閣として役目を果たす。

114:6.3 (1255.2) 熾天使の惑星長官として私は、熾天使長官のこの協議会の議長を務め、またカリガスティア分離に際して履行を怠った惑星の天使軍勢の以前の長官の後継者としてユランチアで役目を果たす第一系列の志願超熾天使である。

114:6.4 (1255.3) 熟練の熾天使の惑星監視の12部隊は、ユランチアにおいて次のように機能する。

114:6.5 (1255.4) 1. 現時代の天使。これらは現時代の天使、すなわち天啓集団である。これらの天の奉仕活動者は、問題が起こる時代のモザイクに適合するようになっており、各世代の問題に関わる監視と指示を任せられている。ユランチアで役目を果たしている画期的な天使の現在の部

隊は、天の現配剤の期間中に惑星に配置された3番目の集団である。

114:6.6 (1255.5) 2. 前進的天使。これらの熾天使には、連続する社会の時代の進化を起こす課題が、委ねられている。それらは、進化の被創造物に固有の進歩的な性向の開発を促進する。それらは、事態が本来あるべきようにするために絶え間なく働く。現在任務についている集団は、惑星に割り当てられる2番目である。

114:6.7 (1255.6) 3. 宗教的な守護者。これらは、「教会の天使」であり、今そうであり、今までそうであった事に対し熱心な競争者である。彼らは、一時代から他の時代へ倫理的価値の安全輸送のために生存してきたその理想維持のために努力をする。かれらは、天使の進歩に逆らう手詰めであり、ずっと一世代から他の世代へと古い、しかも手渡している不滅の価値の様式を新しい、従ってそれほど安定していない思考と素行の型へ変換しようとずっと摸索している。これらの天使は、精霊的な形を求めて闘うが、極端な派閥の起源や自称宗教家の無意味な論争の的

となる分裂ではない。現在ユランチアで機能している部隊は、このように5番目に働いている。

114:6.8 (1255.7) 4. 国民生活の天使。これらは、「トランペットの天使」、ユランチアの国民生活の政治遂行の責任者である。国際関係の総括的管理において現在機能中の集団は、この惑星の4番目の軍団である。「いと高きものは、人の王国で統治する」のは、特にこの熾天使の分隊の奉仕活動を介してである。

114:6.9 (1255.8) 5. 人種の天使。政治上の縺れや宗教上の組み分けにかかわることなく時間の進化的人種の保護のために働くそれらのもの達。ユランチアには、現代の人々に混ざり合い、結合してきた9人種の残りがいる。これらの熾天使は、人種委員会の奉仕活動に密接に関連があり、ユランチアの現在の集団は、五旬節の日のすぐ後に惑星に配属された最初の部隊である。

114:6.10 (1255.9) 6. 未来の天使。これらは、計画の天使であり、新たに前進する天の配剤のより良い事態の実現のために未来の時代と計画を予測する。彼らは、連続する時代の

建築家である。今この惑星にいる集団は、現在の配剤の始まり以来このように機能している。

114:6.11 (1256.1) 7. 啓蒙の天使。ユランチアは、現在、惑星での教育助成に捧げられる熾天使の3番目の部隊の支援を受けている。これらの天使は、個人、家族、集団、学校、共同体、国家、および人種全体に関係して精神的、道徳的訓練に専念している。

114:6.12 (1256.2) 8. 健康の天使。これらは、健康促進と疾病防止を主な活動とするそれらの人間の媒体に配置される熾天使の奉仕活動者である。現部隊は、この配剤期間に勤務する6番目の集団である。

114:6.13 (1256.3) 9. 家庭の熾天使。ユランチアは、現在、家庭、つまり文明の基本的な制度の維持と前進に専念する天使の奉仕活動者の5番目の集団の勤労を享受している。

114:6.14 (1256.4) 10. 産業の天使。この熾天使集団は、ユランチア民族の間の産業開発の促進と経済状態の改善に関係がある。この部隊は、マイケルの贈与以来7回交代されてきた。

114:6.15 (1256.5) 11. 気分転換の天使。これらは、遊び、ユーモア、および休息の価値を育てる熾天使である。彼らは、これまでに人間の休養のための気晴らしを高め、このように人間の余暇のより有益な利用を促進しようとする。現部隊は、ユランチアで奉仕活動をするその系列の3番目の集団である。

114:6.16 (1256.6) 12. 超人の奉仕活動の天使。これらは、天使の中の天使、すなわち惑星における他のすべての超人の奉仕活動に、一時的、または永久的に、配属される熾天使である。この部隊は、現配剤の始まり以来勤務してきた。

114:6.17 (1256.7) 熟練の熾天使のこれらの集団が、惑星の方策、あるいは手段の問題で意見が一致しないとき、かれらの違いは、通常総督によって調整されるが、そのすべての裁決は、不一致に関わる問題の性質と重大さに従い上訴の対象である。

114:6.18 (1256.8) これらの天使集団のいずれも、自分の任務の領域での直接の、あるいは任意の支配はしない。かれらは、行動に伴うそれぞれの領域の問題を完全に制御でき

るというわけではないが、それらが配属されている人間の活動範囲に有利に影響を及ぼすために惑星状況を操ることができるし、状況を関連づけることもできるし、そうする。

114:6.19 (1256.9) 惑星監視の熟練の熾天使は、自分達の任務遂行のために多くの媒体を利用する。それらは、概念の情報収集所、心の焦点者、および事業推奨者として機能する。人間の心に新たで、より高い概念を吹き込むことはできないが、人間の知性の中に既に現れた何らかのより高い理想を強めるためにしばしば行動する。

114:6.20 (1256.10) にもかかわらず、積極的行為のこれらの多くの方法は別として、熟練の熾天使は、重大な危険に対し、将来の目標の予備部隊の動員、訓練、そして維持を通して惑星の進歩を保証する。これらの予備兵の主要な機能は、進化的前進の機能停止から守ることである。それらは、天の勢力が意表の出来事に対して立てた対策である。これらの予備兵は、災難に対する保証である。

7. 将来の目標の予備部隊

114:7.1 (1257.1) 将来の目標の予備部隊は、世界問題情勢に関わる超人の行政の特別奉仕に認められた地上の男女で構成されている。この部隊は、進化世界における時間の子供への慈悲と知恵の奉仕行為を援助するためにその領域の精霊指導者によって選ばれる各世代の男女で構成されている。それは、彼らが、そのような責任を担うことに有能で、信頼できるようになるや否や、意志をもつ人間のこの連結活用を始めることは、上昇計画の問題に関する一般的慣習である。従って、男女が十分な精神能力、十分な道徳状態、および必要な精霊性を伴い、時の行動の舞台上に現れるや否や、男女は、人間の連絡係として、つまり人間の助力者として惑星の人格の適切な天の集団に直ちに割り当てられる。

114:7.2 (1257.2) 人間が、惑星の将来の目標の庇護者として選ばれるとき、世界の行政者が、遂行中の計画において極めて重要な個人になるとき、その時、熾天使の惑星の長官は、熾天使部隊への一時的配属を確認し、これらの人間の予備兵と共に役目を果たすように目標の個人付きの守保護者を任命する。総ての予備兵には自己を自覚する調

整者がおり、予備兵の大多数は、知的な業績と精霊的な達成のより高い宇宙回路で機能する。

114:7.3 (1257.3) 領域の人間は、次の理由から棲息界の将来の目標の予備部隊の奉仕のために選ばれる。

114:7.4 (1257.4) 1. 世界情勢の様々な活動に起こり得る数々の緊急任務のために秘かに稽古をつけられるための特別な能力。

114:7.5 (1257.5) 2. 人間の認識や報酬なしで奉仕する意欲と相まった何らかの特別な社会的、経済的、政治的、精霊的、または他の動機への心からの献身。

114:7.6 (1257.6) 3. 並はずれた多能の思考調整者の占有と惑星の困難に対処し、差し迫る世界緊急事態と闘うことの前ユランチアのあり得る経験。

114:7.7 (1257.7) 天界存在体の惑星奉仕の各分隊は、将来の目標の身分をもつこれらの死すべき者の連携部隊の権利をもつ。平均的棲息世界は、将来の目標の個別の70の部隊を抱えもち、それは、世界情勢の超人的な現在の方法に緊密に関係がある。ユランチアには、将来の目標の12団の

予備部隊には、それぞれに熾天使の監視の惑星の１集団がある。

114:7.8 (1257.8) 将来の目標のユランチア予備兵の12集団は、地球の多数のきわめて重要な位置のために予行演習をしてきており、惑星の起こりうる非常時に行動する準備を整えている状態に保たれている球体の人間住民で構成されている。この複合部隊は、現在、962人から成る。最小部隊は41人、最大部隊は172人を数える。20人足らずの接触する人格は別として、この独特の集団の団員は、ある一定の惑星の危機で考えられる機能に対する自分達の準備に全く気づいていない。これらの人間の予備兵は、選ばれた兵団にそれぞれに配属され、同様に、かれらは、思考調整者と熾天使の守護者奉仕活動の結合的手法により心の奥で訓練され、予行演習を受けた。しばしば多数の他の天の人格が、この無意識の訓練に参加し、そして、このような特別な準備において中間者は、貴重で不可欠の奉仕を実行する。

114:7.9 (1258.1) 多くの世界においてより、よく適合している二次中間被創造者は、調整者の宿りの心への巧みな浸透を

通して特定の好ましく形成された人間の調整者との程度の異なる接触に達することができる。(そして、これらの顕示が、ユランチアにおいて英語で具体化されたということは、まさしく宇宙調整のそのような思いがけない組み合わせによってであった。)進化世界のそのような潜在的接触の人間は、多数の予備部隊に動員され、そしてある程度は、精霊的な文明が進められ、いと高きものが、人の王国で統治することができるということは、将来を視野に入れた人格のこれらの小集団を介してである。将来の目標のこれらの予備兵団の男女は、こうして、中間被創造者の介在する奉仕活動を通して調整者との様々な度合いの接触をする。しかし、これらの同じ死すべき者達は、これらの予備の人格が進化的文化の崩壊、あるいは、生ける真実の光の消滅防止のためにまれな社会的非常時と精霊的なそれらの緊急事態で機能するという点を除いては、その仲間にはほとんど知られていない。ユランチアでは、将来の目標のこれらの予備兵は、滅多に人間の歴史書において明るく照らされてはいない。

114:7.10 (1258.2) 予備兵は、無意識に重要な惑星情報の保存者として務める。しばしば瀕死の予備兵の心からより若い後継者への特定の重大な情報を移行が、二名の思考調整者の連携によって行われる。これらの予備兵団に関し、調整者は、疑う余地なく我々には知られていない他の多くの方法で機能している。

114:7.11 (1258.3) ユランチアにおいて将来の目標の予備分隊には、永久的な頭はいないものの、その支配をしている組織を構成する自身の常設の協議会がある。これらには、司法協議会、歴史協議会、政治的主権に関する協議会、それに他の多くの協議会がある。折に触れ、部隊組織に関し、全予備部隊の名義上(人間)の長官が、特定の機能のためにこれらの常設協議会によって任命された。そのような予備兵の最高者の任期は、手元の何らかの特定課題の成就に制限されており、通常はせいぜい２、３時間である。

114:7.12 (1258.4) ユランチア予備部隊は、アダーム系とアンド系時代に最大数の団員がおり、紫の血統の希釈と共に減

退し、そして五旬節の頃にその低点に至り、その時以来予備部隊の構成員数は着実に増加してきた。

114:7.13 (1258.5) (ユランチアの宇宙を意識している公民である宇宙予備部隊は、宇宙公民的洞察が、彼らの地球の住まい範囲をはるかに越える現在1,000人以上の人間がいるが、私は、生きている人間のこの他とは異なる集団の機能の本当の性質を明らかにすることを禁じられている。)

114:7.14 (1258.6) ユランチアの死すべき者は、宇宙放棄、あるいは惑星孤児の気持ちを生む地方宇宙のいくつかの回路から自分達の世界の精霊の部分的な的孤立を許すべきではない。世界問題と人間の将来の目標に対する非常に明確で有効な超人の監視は、この惑星において作動している。

114:7.15 (1258.7) だが、あなたには、せいぜい、理想的な惑星政府についての貧弱な考えしか持つことができないというのは本当である。惑星王子の初期の時代から、ユランチアは、世界と人種の発展の神性計画の失敗に苦しんできた。サタニアの忠誠的な棲息世界は、ユランチアのよ

うには治められない。それでも、あなたの惑星政府は、他の孤立世界と比較してそれほど劣ってはいない。1つか2つの世界だけがより悪いと言われるかもしれないし、そして幾つかはわずかに良いかもしれないが、大多数はあなたと同等である。

114:7.16 (1259.1) 地方宇宙の誰も、惑星行政の未解決状態がいつ終わるのかを分かってはいないらしい。ネバドンのメルキゼデクは、マイケルのユランチアへの2度目の個人の到着まで惑星の政府と行政にはほとんど変化が起こらないという意見に傾いている。疑う余地なく、今のところは、以前にそうでなかったならば、大改革が惑星管理にもたらされるであろう。しかし、世界行政のそのような変更の本質に関しては、誰も、推測さえできるようには見えない。ネバドンの宇宙の棲息界のすべての歴史にはそのような出来事についての先例は何もない。ユランチアの将来の政府に関して、理解しにくい多くのものの中で際立つものは、回路の惑星と大天使の師団司令部の位置である。

114:7.17 (1259.2) あなたの孤立世界は、宇宙の評議会に忘れられてはいない。ユランチアは、罪により烙印を押されたり、反逆により神性の世話から閉じ込められた宇宙孤児ではない。彼らは皆、ユヴァーサからサルヴィントンへ、そしてジェルーセムへと下へ、ハヴォーナと楽園においてでさえ我々がここにいることを知っている。そして、不忠の惑星王子が一度もその球体を裏切ったことがなかったかのように、ユランチアに居住のあなた方人間は、愛情を込めて可愛がられ、同じように誠実に見守られている。「父自身があなたを愛している」ということは永遠に本当である。

114:7.18 (1259.3) [ユランチア駐留の熾天使の長官による提示]

論文 115
崇高なるもの

115:0.1 (1260.1) 父たる神との息子性は、すばらしい関係である。崇高なる神との達成は、地位への前提条件である—人は、何かであり何かをしなければならない。

1. 概念の枠組みの相対性

115:1.1 (1260.2) 考えるための宇宙の枠組みを形成するためにすべての、高い、または低い、心の生来の能力がなければ、部分的で、不完全で、進化的知力は、主たる宇宙においては無力であろう、つまり最初の理論的思考形態を形成することができないであろう。もし心が結論を測り得ないならば、真の起源に達し得ないならば、そのような心は、心で作り上げられたこれらの結論の枠の中で論理的思考の手段を持つことができるように絶えず結論を仮定し、起源を作り上げるであろう。被創造物の思考のための宇宙のそのような枠は、合理的な知的操作に不可欠ではあるが、それらは、例外なく、大なり小なり誤っている。

115:1.2 (1260.3) 宇宙の概念上の枠組みは、相対的にのみ本当である。それらは、やがては宇宙についての拡充的な理解の拡大に譲らなければならない実用的な足場である。真、美、善、道徳、倫理、義務、愛、神性、起源、存在、目的、将来の目標、時間、空間、それに神格さえも、相対的にのみ本当である。神は、はるかに父以上のものであるが、父は、人の神に対する最高の概念である。それでもなお、創造者-被創造者の関係の父-息子の

描写は、オーヴォントン、ハヴォーナ、楽園において達成される神格について超必滅のそれらの概念によって増大されるであろう。人は人間の宇宙の枠内で考えなければならないが、それは、思考が起こり得る他の、そしてより高い枠を思い描くことができないということを意味するわけではない。

115:1.3 (1260.4) 宇宙の中の宇宙に対する人間の理解を容易にするために、宇宙現実の多様な段階は、有限的、準絶対的、しかも絶対的なものとして呼ばれてきた。これらのうち、絶対の段階だけが、無条件に永遠であり、真に実存的である。準絶対なものと有限なものは、無限の起源の、かつ根本的な現実の派生の、変更の、制限の、そして希釈のものである。

115:1.4 (1260.5) 有限のものの領域は、神の永遠の目的によって存在している。上級にしろ下級にしろ、有限の創造物は、宇宙経済における有限のものの領域の必要性に関して、理論を提起できるかもしれないし、そうしてきたが、最後の分析においては、神がそう望んだが故に、それは存在している。宇宙についての説明はできないし、

有限の創造物は、先祖の存在体、つまり創造者、または親の以前の行為と先在的な意志に求めずして個々の存在に対して合理的な理由を提供することもできない。

2. 至高性のための絶対的基礎

115:2.1 (1261.1) 実存的見地から、全銀河に新たな何も起こり得ない、というのも私はあるに固有の無限の完成は、七絶対者に永遠に存在しており、三結合体に機能的に関連しており、３名組に転送の上で関連しているがゆえに。しかし、無限が、これらの絶対的な関係にこのように実存的に存在するという事実は、宇宙の新しい経験を実現することをいかなる場合も不可能にはしない。有限の創造物の観点から、無限は、可能であるものの多くを、現在の現実よりもむしろ将来の可能性の系列にある多くを含んでいる。

115:2.2 (1261.2) 価値は、宇宙現実に特有の要素である。我々は、無限で神性な何かの価値が、一体全体いかに増大できるかを理解してはいない。しかし我々は、無限の神格の関係さえ増大させられないとしても、意味が変更されることができると気づく。経験的宇宙にとっては、神性

の価値さえ、現実の意味の拡大的理解による現実として増大される。

115:2.3 (1261.3) 経験の全段階における宇宙創造と進化の全構想は、明らかに実在への可能性の転換の問題である。この変化は、空間の可能性、心の可能性、および精霊の可能性の領域と等しく関係がある。

115:2.4 (1261.4) 宇宙の可能性が、実在へともたらされる明白な方法は、それによって段階から段階へと異なり、準絶対の有限的かつ経験的進化における経験的進化である。実存的な無限は、全包括性において実に無条件であり、このすべての包括性そのものは、必然的に、進化する有限経験のために可能性さえ包含しなければならない。そして、そのような経験による成長の可能性は、崇高なるものの上に、また崇高なるものの中に影響を与えている3名組関の係を介して宇宙現実になる。

3. 起源的、実存的、潜在的

115:3.1 (1261.5) 絶対の宇宙は、概念的には限りがない。この第一の現実の範囲と本質を定義することは、無限性に制限を設け、永遠の純粋な概念を減じることである。無限-

永遠、永遠-無限についての考えは、広がりにおいては無限であり、事実においては絶対である。ユランチアの過去、現在、または未来の言葉に無限の現実、あるいは現実の無限を言い表すための適切な言葉がない。人は、つまり無限の宇宙の中の有限の創造物は、実に自分の理解の能力を超える限りない、広大無辺の、決して始まりのない、決して終わりのない存在に対する歪められた考えと弱力化した概念に満足しなければならない。

115:3.2 (1261.6) 心は、まずそのような現実の統一を壊そうとするすることなく絶対の概念の理解をすることを決して望むことはできない。心はすべての相違の統一であるが、心は、そのような相違の不在そのものにおいて、洞察に満ちた概念の定式化を試みる何の基盤も見つけない。

115:3.3 (1261.7) 無限の根本的静止は、理解への人間の試みに先立つ細分化を要する。これらの論文で私はある—被創造物の心の最高の基礎条件—として表現されてきた無限には統一がある。しかし、創造物は、この統一というものが、いかに二重性、三重性になるのか、また、絶対の統一性にありながらも多様性であるのかということを決し

て理解することができない。人は、神の複数個人化と平行して三位一体の専心された神格を止まって熟考するとき、類似した問題に遭遇する。

115:3.4 (1262.1) この概念が1つの言葉として表現される原因は、無限からの人の距離に他ならない。無限は、一方では統一であるが、他方では、終わりも限界もない多様性である。無限は、有限の知力によって観測されるとき、生物哲学と有限形而上学に見られる最大の逆説である。人の精霊的な本質は、無限である父への崇拝経験に達しはするが、人の知的な理解能力は崇高なるものの最大の概念に消耗される。崇高なるものを超えて、概念は、ますます名称である。それらは、いよいよ現実の真の意味を失う。それらは、ますます超有限に向けての創造物の有限的理解の投影になる。

115:3.5 (1262.2) 絶対段階の1つの基本的な概念は、三相の基礎的な公理を含む。

115:3.6 (1262.3) 1. 本来のもの。第一根源と中枢、すなわち、すべての現実が起源を取る私はあるの源の顕現についての無条件の概念。

115:3.7 (1262.4) 2. 実在のもの。現実の3絶対者の結合、すなわち、第二根源と中枢、第三根源と中枢、楽園の根源と中枢。永遠なる息子、無限の精霊、および楽園の小島のこの3名組は、第一根源と中枢の独創性の実際の顕示を構成する。

115:3.8 (1262.5) 3. 可能性のあるもの。可能性の3絶対の結合、すなわち神格、無条件者、そして宇宙絶対者。実存的な可能性のこの3名組は、第一根源と中枢の独創性の潜在的顕示を構成する。

115:3.9 (1262.6) 本来のもの、実際のもの、可能性のあるものの相互提携は、全宇宙成長の可能性となる無限の中に緊張をもたらす。そして、成長は、七重なるもの、崇高なるもの、究極なるものの本質である。

115:3.10 (1262.7) 神格絶対者、宇宙絶対のもの、無条件絶対のもののつながりにおいて、現実は新興的である一方、潜在性は絶対的である。第二根源と中枢、第三根源と中枢、楽園の根源と中枢のつながりにおいて可能性は絶対であり、現実は新興的である。第一根源と中枢の独創性

において、我々は、現実性か潜在性が存在するとも突発的であるとも言うことができない—父は存在する。

115:3.11 (1262.8) 時間の視点からは、実際のものは、あったし、ある。可能性のあるものは、なりつつあり、いずれなる。本来のもののは存在する。永遠の観点からは、本来のもの、実際のもの、可能性のあるものの違いは、このように明らかではない。これらの三位一体の特質は、楽園-永遠段階においてはそれほど識別されない。永遠においては、すべてはある—時間と空間においては、総ては、まだ明らかにされていない。

115:3.12 (1262.9) 創造物の観点から、現実は実質である、可能性は能力である。現実は、真ん中に存在しており、そこから周辺無限に拡大する。可能性は、無限の外周から内部に至り、万物の中心で一点に集まる。独創性は、可能性から実際のものへの、そして既存の実際のもののに可能性をもたせる現実変化の周期の二元的運動を最初に引き起こし、次に均衡をとるということである。

115:3.13 (1262.10) 可能性の３絶対者は、純粋に永遠の宇宙段階において機能しており、それゆえに、準絶対的段階にお

いてはそのように決して機能しない。現実の下降段階における可能性の３名組は、究極なるものとともに、また崇高なるものに顕れる。可能性は、何らかの準絶対段階の部分的には時間-顕在化に失敗するかもしれないが、総体的には決してそうではない。神の意志は最終的には、常に個人に関係するというわけではなく、必ず全体性に関係があり広く行き渡る。

115:3.14 (1263.1) 宇宙に実在するものが、その中心を持つことは、現実の3名組においてである。精霊であろうと、心であろうと、またはエネルギーであろうと全ては、息子、精霊、楽園のこのつながりに集まる。精霊の息子の人格は、全宇宙の全人格のための支配的なひな型である。楽園の小島の本質は、ハヴォーナが完全であり、超宇宙が完成しつつある顕示の支配的ひな型である。連合活動者は、精霊段階の意志の目的と動機との宇宙エネルギーの心の起動、精霊の目的の概念化、そして物質段階の数学的な原因と結果の全く同時に結合である。息子、精霊、楽園は、崇高なものに条件づけられ、限定される点において有限宇宙の中で、また、それに向かって、究極なるものの中で、また、それに向かって機能する。

115:3.15 (1263.2) 現実性(神格の)は、人が楽園上昇において求めるものである。可能性(人間の神格の)は、人がその探索において発展させるものである。本来のものは、人の実際のもの、人の可能なもの、人の永遠のものの共存と統合を可能にするものである。

115:3.16 (1263.3) 宇宙の最終的原動力は、可能性から現実性への現実の継続的な移動に関係がある。理論的には、この変化には終結があるかもしれないが、事実上、可能性のあるものと実際のものの双方が、本来のもの(私はある)の回路にあり、その上、この識別が、宇宙の発達上の信仰をに制限を置くことを永遠に不可能にしているのでそのようなことは不可能である。私はあるの可能性の現実性は、絶対であり、また私はあるの実際のものの可能性も絶対であるから、私はあると同一視されるものは何であれ前進への終結を決して見つけることはできない。実際ののものは、つねに今まではどうにもならない可能性の実現の新たな方法ををいつも切り開く—あらゆる人間の決定は、人間の経験において新現実を実現するだけではなく、人間の成長のための新能力をも切り開く—であ

ろう。人は、あらゆる子供の中に生きており、モロンチア前進者は、神を知る成熟した人間に居住している。

115:3.17 (1263.4) 成長における静止は、成長のための基礎—絶対可能性—が無条件であるが故に、また成長のための可能性—絶対的可能性—が無制限であるが故に、決して宇宙全体に生じることはできない。実際的な視点から、宇宙の哲学者達は、終わりというようなものはないという結論に達した。

115:3.18 (1263.5) 制限的視点からは、誠に、多くの終わり、活動の多くの終了があるが、より高い宇宙段階のより大きい視点からは、最後はなく、単に局面から別の局面への移行があるに過ぎない。主たる宇宙の主要な年代は、いくつかの宇宙時代、ハヴォーナ、超宇宙、および外の宇宙時代に関係がある。しかし、連続関係のこれらの基本的な境界でさえ、永遠の果てしない幹線道路上の相対的な目印以上のはずがない。

115:3.19 (1263.6) 崇高なるものの真、美、善の最終的な、洞察は、真、美、善の概念段階を越えてある究極の神格のそ

れらの準絶対の本質を進歩している創造物に開けることができるだけである。

4. 崇高なる現実の源

115:4.1 (1263.7) 崇高なる神の起源についてのいかなる考慮すべき事柄も、崇高なるものは神格に由来するとともに三位一体は起源の神格であるので、楽園の三位一体から始めなければならない。崇高なるものの成長についてのいかなる考慮も、すべての絶対の現実性とすべての無限の可能性(第一根源と中枢とに関連した)を包含するがゆえに、実存的な3名組を考慮しければならない。そして、進化的な崇高なものは、存在の有限段階の中に、またその上における実在のものへの可能性の変化—変形—の頂点を極める、そして人格的に意志中心である。実際の、可能の、2つの3名組、は、宇宙における成長の相互関係の全体を含んでいる。

115:4.2 (1264.1) 崇高なるものの源は、楽園三位一体にある—永遠の、実際の、そして、分割されていない神格—にある。崇高なるものは、まず第一に精霊人格であり、この精霊人格は、三位一体に由来する。しかし、崇高なるも

のは、第二に成長—進化的成長—の神格であり、この成長は、2集団の実際の、可能の3名組に由来する。

115:4.3 (1264.2) 無限の3名組は、有限段階で機能できるということを理解するのが難しいならば、まさしくその無限が、有限の可能性を本来含まなければならないと考えるために立ち止まりなさい。無限は、最も低く最も適切な有限存在から最も高く、しかも無条件に絶対の現実へおよぶ万物を含む。

115:4.4 (1264.3) 無限が有限を含むということを理解することは、この無限が実際には有限に一体どのように表れるかを理解するほどには難しくない。しかし、人間に宿る思考調整者は、絶対の神(絶対として)さえ実は意志をもつ宇宙の創造物のすべての最低で最小のものとさえ実際直接に接触することができるという永遠の証明の1つである。

115:4.5 (1264.4) 実際のものと可能性のあるものをまとめて取り囲む3名組は、崇高なるものとともに有限段階上で明らかである。そのような顕現の方法は、直接的、かつ間接的である。3名組関係が、崇高なるものに直接にもたら

す限りにおいては直接的であり、準絶対の終結段階を経て引き出される限りは間接的である。

115:4.6 (1264.5) 完全な有限現実である最高の現実は、外空間の無条件の可能性と万物の中心の無条件の実在の間の活動的成長過程にある。有限領域は、こうして、楽園の準絶対媒体と時間の崇高なる創造者人格の協力で事実化される。すばらしい潜在の３絶対の絶対の可能性を完成する行為は、主たる宇宙の建築者達とその先験的な仲間達との準絶対機能である。そして、これらの展開が、完成の特定の点に達したとき、崇高なる創造者の人格は、進化する宇宙を現実存在へと運び込む長年の課題に従事するために楽園から現れる。

115:4.7 (1264.6) 崇高性の成長は3名組に由来する。三位一体からの崇高なものの精霊の人物。しかし、全能者の力の特権は、七重の神の神格成功に基づいており、高なる神の精霊の人との全能の崇高者の力の特権の結合接続は、この進化の神格における結合要因としての崇高なるものの心を贈与する連合活動者の奉仕活動の効力により起こる。

5. 楽園三位一体との崇高なものの関係

115:5.1 (1264.7) 崇高なるもののは、その人格的、精霊的本質の現実に関しては楽園三位一体の存在と行動に絶対的に依存している。崇高のものの成長が、3名組関係の問題である一方で、崇高なる神の精霊人格は、崇高なものの進化的成長が、次第に展開する完全かつ無限の安定性の絶対的中心-源としてずっと留まる楽園の三位一体に依存しており、またそれに起源がある。

115:5.2 (1265.1) 三位一体の機能は、崇高性の機能段階を含め総て (全体)の段階で機能しているので、その機能は、崇高なものの機能に関連している。しかし、ハヴォーナの時代が超宇宙の時代に代わる間、即座の創造者として三位一体の認識できる行為は、楽園の神格の子供の創造的な行為に取って代わる。

6. 3名組との崇高なものの関係

115:6.1 (1265.2) 現実の3名組は、後ハヴォーナ時代に直接機能し続ける。楽園の引力は、物質的存在の基本単位を把握し、永遠なる息子の精霊引力は、精霊存在の基本的価値

に直接作用し、また連合活動者の心の引力は、知的な存在のすべての重大な意味を的確に掴む。

115:6.2 (1265.3) にもかかわらず、創造的な活動の各時期が、未知の空間を進むとき、それは、中央の定置—楽園の絶対の小島と無限の神格のそこでの常駐—の創造的な力と神性の人格による直接行動からより遠くへと取り除かれた状態で機能し存在する。宇宙存在の　これらの連続する段階は、したがって、無限の3絶対のもの可能性の中で、発展にますます依存するようになる。

115:6.3 (1265.4) 崇高なるもののは、永遠なる息子、無限の精霊、あるいは楽園の小島の無人格の現実では明らかに表されない宇宙奉仕活動のための可能性を迎え入れる。この表明は、これらの3つの基本的な現実の絶対性を考慮にいれつつも、崇高なるものの成長は、神格と楽園のこれらの現実に基づくだけでなく、神格、宇宙、無条件絶対者の中でも発展に関与している。

115:6.4 (1265.5) 崇高なるものは、進化する宇宙の創造者と被創造物が神のようになることを成し遂げるためだけに育つだけではなく、この有限の神格は、壮大な宇宙の有限の

可能性に向けての被創造物と創造者の支配の結果としての成長をも経験する。崇高なものの運動は二重的である。集中的に楽園と神格へ向け、また広範囲に可能性の絶対の無限に向けて。

115:6.5 (1265.6) 現在の宇宙時代のこの二元的運動は、壮大な宇宙の下降したり上昇する人格に明らかにされる。崇高なる創造者の人格とすべての彼らの神性の仲間は、崇高なるものの外側への拡散運動の外部を反映し、一方7超宇宙からの上昇する巡礼者は、崇高性の内側への集結傾向を示している。

115:6.6 (1265.7) 常に、有限の神格は、楽園とそこから神格に向かう内側への、そして無限と楽園の絶対に向かう外側への絶対者の方へ、二元的な相関関係を追求している。創造者なる息子において人格化し、力の統括者において力を発展させる楽園-創造の神格の強力な爆発は、可能性の領域への崇高性の広大な外へのうねりを意味し、一方、壮大な宇宙の上昇する創造物の果てしない行列は、楽園神格との統一に向かう崇高性の強力な内へのうねりを目撃する。

115:6.7 (1265.8) 人間は、不可視の動きが可視のものに対するその効果を観測することによって時として識別できるということを習得してきた。そして、宇宙の我々は、そのような進化の効果の観察をすることにより、壮大な宇宙の人格と型に崇高性の変化と傾向を見つけることを、ずっと以前に学んだ。

115:6.8 (1266.1) 確かではないものの、我々は、崇高なものが、楽園の神格の有限反映として外部空間への永遠の進行に従事していると信じる。しかし、外部空間の3絶対の可能性の特定としてこの崇高なるものは、つねに楽園の一貫性を捜し求めている。これらの二元的運動が、現在組織化されている宇宙における基本的な活動の大部分を説明しているように思える。

7. 崇高なものの本質

115:7.1 (1266.2) 崇高なものの神格に、父-私はあるは、地位の無限性、存在の永遠精、本質の絶対性に固有の制限からの比較的完全な解放を成し遂げた。しかし、崇高な神は、宇宙機能の経験的限定をうけるようになったことだけで、全ての実存経験から開放された。したがって、経

験のための能力に達する際に、有限の神も、経験のための必要性を被るようになる。永遠からの解放を成し遂げる際、全能なるものは、時間の障壁に遭遇する。そして、崇高なるものは、存在の部分性と本質の不完全性の結果として成長と発達を知ることができるに過ぎない。

115:7.2 (1266.3) このすべてが、努力面での有限進歩、忍耐面での創造物達成、信仰面での人格開発に基づいた父の計画通りでなければならない。このようにして、崇高なものの経験-進化を定め、父は、有限の創造物が、宇宙に存在することを、また経験の進行により、そのうちに崇高性が神格に達することを可能にしてきた。

115:7.3 (1266.4) 7絶対者の無条件の価値を除く崇高なものと、さらには究極なるものを含むすべての現実は、相対的である。崇高性の事実は、楽園の力、息子の人格、結合的行動に基づくが、崇高なものの成長は、神格絶対、無特性絶対者と宇宙絶対にかかわる。そして、この統合し、統一する神格—崇高の神—は、楽園の父、第一根源と中枢の不可解な本質の無限の統一による壮大な宇宙に斜めに落とす影の人格化である。

115:7.4 (1266.5) 有限段階で直接作用するという程度まで、3名組は、絶対的実際のものと絶対的可能なものの本質である有限の特定の宇宙総和と神格焦点化である崇高なるものに影響を与える。

115:7.5 (1266.6) 楽園の三位一体は、絶対的必然性であると考えられた。主たる七精霊は、明らかに三位一体の必然性である。崇高なものの力-心-精霊-人格の実現化は、進化上の必然性であるに違いない。

115:7.6 (1266.7) 崇高なる神は、特性のない無限において回避不能であったようには思えないが、すべての関連段階にいるように思える。崇高なる神は、自らの神格本質における現実知覚のこの方法の結果を有効に統一する進化的経験の不可欠の集中者であり、要約者であり、抱擁者である。このすべてを、彼は、崇高なる神の必然の実現化の現れ、すなわち超経験と超有限の顕現に貢献する目的のためにしているようである。

115:7.7 (1267.1) 崇高なるものは、源、機能、将来の目標への考慮なくして、すなわち源を発する三位一体、活動の宇

宙、即座の目標の三位一体の究極なるものへの関係真価を十分に認めることはできない。

115:7.8 (1267.2) 崇高なものは、進化的経験の総括の過程により、有限と準絶対を結びつけ、連合活動者の心のように、人格の息子の神性の精霊性と楽園の型の不変のエネルギーと統合し、また宇宙の絶対の臨場のように神格の起動を無限性の反応と統一する。そして、この統一は、森羅万象の第一の父の原因と根源の型の原点の統一の看破されていない働きの顕示であるに違いない。

115:7.9 (1267.3) [ユランチアに一時的に滞在する強力な使者による後援]

論文 116
全能の崇高なもの

116:0.1 (1268.1) もし人が、創造者—かれの直接の監督者—が、神性であるとともに有限でもあると、また、時間と空間の神が、進化し非絶対の神格であると気づくならば、そこで俗世の不平等の矛盾は、宗教上の深刻な逆説ではなくなるであろう。もはや、信仰は、社会的に剥奪状態にある不運な犠牲者への自制的な忍従を促すだけに役目を

果たすことはないと同時に、幸運な者達への社会的な独り善がりの促進に悪用されないであろう。

116:0.2 (1268.2) ハヴォーナのこの上なく完全な球体を見るとき、それらが、完全かつ無限の、その上絶対の創造者により作られたと信じることが妥当でもあり、論理的でもある。だが、ユランチアの混乱、不完全さ、不公平を見るとき、その同じ理由と論理が、どんな正直者でも強要しなければ、あなたの世界が準絶対の、前無限の、ほぼ不完全な創造者によって作られ、かつ管理されていたと結論づけることを余儀なくさせるであろう。

116:0.3 (1268.3) 経験的成長は生物-創造者の協力関係—神と人のつながり—を意味する。。成長は、経験的神格の目印である。ハヴォーナは、成長したのではなかった。ハヴォーナはあり、常にあった。それはその源である永遠に続く神のように実存的である。しかし、成長は、壮大な宇宙を特徴づけている。

116:0.4 (1268.4) 全能の崇高なものは、生きており、かつ進化している力と人格の神格である。その現在の領域、壮大な宇宙は、力と人格の発達するの領域でもある。その目標

は完全性であるが、その現在の経験は成長と不完全状態の要素を包含する。

116:0.5 (1268.5) 崇高なるものは、一次的に精霊人格として中央宇宙において機能する。二次的には、全能の神、力の人格として壮大な宇宙の中において。主たる宇宙における崇高なものの三次的機能は、現在は、潜在的であり、単に心の未知の可能性として存在している。だれも、崇高なるもののこの3番目の展開が明らかにするものがまさに何であるかを知らない。あるものは、崇高なるものは、超宇宙が光と命に定着するとき、外側の宇宙の超全能者として力を拡大しつつ、壮大な宇宙の全能の、そして経験的君主としてユヴァーサから機能するようになると信じる。他のものは、崇高なるものの3段階目が、神格顕現の第3段階にかかわると推測する。だが、我々のだれも本当には知らない。

1. 崇高な心

116:1.1 (1268.6) あらゆる進化している創造物の人格の経験は、全能の崇高なるものの経験の段階である。超宇宙のあらゆる物理的部分の知的な征服は、全能の崇高なるものの

成長的支配の一部である。力と人格の創造的統合は、崇高な心の創造的衝動の一部であり、崇高なるものの統一の進化的成長のまさしくその本質である。

116:1.2 (1269.1) 崇高なものの力と人格特質の結合は、崇高な心の機能である。そして、全能の崇高なるものの完成された進化は、1つの統一された人格の神格—神性の特質の緩く調整されたつながりのどれにおいてでもなく—になるであろう。より広い観点から、崇高なものから離れた全能、全能から離れた崇高なものは存在しないであろう。

116:1.3 (1269.2) 崇高なものの物理的な力の可能性は、進化の時代を通して崇高な力の7統括者に授けられ、また心の可能性は、主たる七精霊に置かれる。有限の心は、無限の精霊の機能である。宇宙の心は、主たる七精霊の奉仕活動である。崇高な心は、壮大な宇宙の調整において、また七重の神の顕示と達成との機能的なつながりにおける実現化の過程にある。

116:1.4 (1269.3) 時-空間の心、宇宙の心は、7つの超宇宙においては異なって機能しているが、それは、崇高なるものの

何らかの未知の関連した方法によって調整される。壮大な宇宙の全能の支配は、専ら物理的かつ精霊的とは限らない。7超宇宙においては、それは、主に物質的で精霊的であるが、知的、精霊的のいずれでもある崇高なものの現在の現象もまたある。

116:1.5 (1269.4) 我々は、この進化する神格のいかなる他の局面に比べ崇高性の心についてあまり知らない。それは、壮大な宇宙にわたって疑いなく活発であり、広大な大きさである主たる宇宙の機能の潜在的運命をもつと思われている。ところが、我々は次のことについて知っている。体格は完全な成長に達するかもしれない、また、精霊は発達の完全性を実現するかもしれないのに対して、心は、進歩を決してやめない—それは、終わりのない進歩の経験的方法である。崇高なものは、経験的神格であり、それゆえ心の成就の完成を決して果たすことはない。

2. 全能と七重の神

116:2.1 (1269.5) 全能者の宇宙力存在の現れは、進化的超宇宙の高位の創造者と支配者の宇宙活動の舞台へ同時に登場する。

116:2.2 (1269.6) 崇高な神は、楽園の三位一体からの自分の精霊と人格の特質を引き出しているが、かれは、創造者の息子、日の老いたるもの、主たる精霊の行為において力の実現化をしており、また、その全体的活動は、7超宇宙へと、またその中での全能の君主として高まる力の源である。

116:2.3 (1269.7) 無特性の楽園の神格は、時間と空間の進化的創造物には不可解である。永遠と無限は、時-空間の創造物が理解しえない神格現実の段階を暗示する。神格の無限性と君主の絶対性は、楽園の三位一体に固有であり、三位一体は、幾分か人間の理解を越える現実である。時-空間の創造物は、宇宙関係を把握し、神格の意味する価値を理解するために起源、関連性、将来の目標をもたなければならない。それ故、楽園の神格は、神格の余分な外楽園の人格化を減らし、さもなければ限定し、こうして、崇高な創造者とその仲間を存在に導く。両者は、

進化の世界での贈与の息子の地球の人生において、生命の光が、その最も遠方の、そして美しい表情を見つけるまでそれをその楽園の源からより遠くに常に運ぶ。

116:2.4 (1270.1) そして、これが、7重の神の起源であり、人間は、この連続する段階において次の順序で遭遇する。

116:2.5 (1270.2) 1. 創造者の息子(そして、創造的精霊)

116:2.6 (1270.3) 2. 日の老いたるもの

116:2.7 (1270.4) 3. 主たる七精霊

116:2.8 (1270.5) 4. 崇高なるもの

116:2.9 (1270.6) 5. 結合活動者

116:2.10 (1270.7) 6. 永遠なる息子

116:2.11 (1270.8) 7. 宇宙なる父

116:2.12 (1270.9) 最初の3段階は、崇高な創造者である。最後の3段階は、楽園の神格である。崇高なものは、楽園三位一体の経験的な精霊人格化として、また楽園神格の創造者の子のもつ進化的全能の力の経験に基づく焦点として

ずっと介入する。崇高なるものは、7超宇宙への、そして現在の宇宙時代の神格の最大の顕示である。

116:2.13 (1270.10) 人間の論理方法により、七重の神の最初の3段階の連携行為の経験上の再統一が、楽園の神格の段階に相当すると推論されるかもしれないが、そうではない。楽園の神格は、実存的神格である。崇高な創造者は、力と人格との神格統一においては、経験的神格の新しい力の可能性を構成し、かつ表現している。経験的起源のこの力の可能性は、三位一体起源—崇高なるもの—の経験的な神格との必然の、不可避の結合を見つける。

116:2.14 (1270.11) 崇高な神は、楽園の三位一体ではなく、機能的な活動が彼の進化しているその全能の力を実際に統合するそれらの超宇宙の創造者のうちの一人でもなく、またその全員でもない。崇高な神は、三位一体に起源をとる一方で、七重の神の最初の3段階の連携機能を通じてのみ、力の人格として進化の創造物に明らかになる。全能の崇高なものは、ちょうど永遠において連合活動者が、宇宙なる父と永遠なる息子の意志により突然にもたらされるように、今、時間と空間において崇高な創造者

の人格活動を介して事実化している。七重の神の最初の3段階のこれらの存在体は、全能の崇高なものの力の他ならぬその本質と源である。したがって、これらの存在体は、常に全能の崇高なものの行政行為に加わり、支えなければならない。

3. 全能の、楽園の神格

116:3.1 (1270.12) 楽園の神格は、壮大な全宇宙の重力回路において直接に行動するだけではなく、様々の媒体との他の顕現を通しても機能する。例えば、

116:3.2 (1270.13) 1. 第三根源と中枢の心の焦点化。エネルギーと精霊の有限領域は、結合活動者の心の臨場により文字通り結合される。これは、超宇宙の反映の精霊を通しての地方宇宙の創造的精霊から壮大な宇宙の主たる精霊に至るまで真実である。これらの様々な知性の焦点から発する心の回路は、創造物選択の宇宙の活動領域を表す。心は、被創造物と創造者が非常に容易に操ることのできる柔軟な現実である。それは、物質と精霊をつなぐ重要な連結である。第三根源と中枢の心の贈与は、崇高な神の精霊人格と進化の全能者の経験的な力とを統一する。

116:3.3 (1271.1) 2. 第二根源と中枢の人格顕示。結合活動者の心の臨場は、神性の精霊をエネルギーの型と統一する。永遠の息子と楽園の息子の贈与の具現化は、創造者の神性の本質を被創造物の進化する本質と統一する、実際に融合する。崇高なものは、創造者、被創造者の両方である。かれが、それである可能性は、永遠の息子とその同位の息子と下位の息子の贈与活動において明らかにされる。マイケルの息子達とアヴォナルの息子達の贈与の体系は、進化の世界での実際の被創造物の生命生活により我が物となった本物の被創造物の本質によってその神性の本質を実際に増大させる。神格が人間のようになるとき、この関係に固有なことは、人間が神性になることができるという可能性である。

116:3.4 (1271.2) 3. 第一根源と中枢の内住する臨場。心は、精霊の原因作用とエネルギー反応を統合する。贈与活動は、神性下降と創造物上昇を統合する。そして、宇宙なる父の内住する断片は、進化する創造物を実際に楽園の神と統合する。人格の夥しい系列に宿る父のそのような多くの臨場があり、必滅の人間におけるこれらの神の神性の断片は、思考調整者である。人間にとっての神秘訓戒者

は、崇高なるものにとっての楽園三位一体である。調整者は、絶対的基盤であり、絶対の基盤上に、自由意志の選択は、人の場合は終局者の本質、崇高な神の場合は神格の本質である神性現実を進化させることができる。

116:3.5 (1271.3) 楽園の息子関係の系列の創造物の贈与は、神性の息子が、宇宙の創造物の実際の本質の獲得によって人格の質を高めることを可能にするが、そのような贈与は、絶えず創造物自体に神格到達の楽園の道を示す。宇宙なる父の調整者の贈与は、かたい意志をもつ創造物の人格を父が自身に引きつけることを可能にする。そして有限宇宙のすべてのこれらの関係において、結合活動者は、これらの活動がおこるその効力による心の奉仕活動の遍在の源である。

116:3.6 (1271.4) 進化が、空間の旋回する惑星で展開する間、また、それらが、ついにすべての進化の崇高なものの人格の発現にいたる間、楽園の神格は、これらと他の多くの方法において時間の進化に参加する。

4. 全能の創造者と崇高なものの創造者

116:4.1 (1271.5) 崇高な全体性の統一は、有限部分の進歩的な統一に依存している。崇高なものの実現化は、至高の要因—宇宙の創造者、創造物、知性あるもの、エネルギー—の他ならぬこれらの統一の結果であり、産物である。

116:4.2 (1272.1) 崇高なものの主権がその時間の発展中にあるその期間、崇高なものの全能の力は、七重の神の神格活動に依存しており、一方、崇高なるもの、そして結合活動者と合わせてその第一の人格、すなわち主たる七精霊との間には特に緊密な関係があるように思える。結合活動者としての無限の精霊は、進化する神格の不完全を補填する多くの方法で機能し、崇高なものとの非常に緊密な関係を継続する。関係のこの近さは、主たる精霊のすべてにより幾分かは共有され、特に主たる第7精霊によって共有され、かれは、崇高なものを代弁する。崇高なものを、この主たる精霊は、知っている—崇個人的接触がある。

116:4.3 (1272.2) 創造の超宇宙計画の早期事業において、主たる精霊は、49名の反映の精霊の共同創造において、出自の三位一体と結びつき、そして同時に、崇高なるものは、

楽園の三位一体と楽園神格の創造的な子供の連合活動の頂点を究めるものとして創造的に機能した。威儀仙は出現し、以来ずっと、崇高な心の宇宙臨場を局地化して、一方主たる精霊は、宇宙の心の広範囲の奉仕活動のための源-中心として続く。

116:4.4 (1272.3) しかし、主たる精霊は、反映の精霊の監督を続ける。第七の主たる精霊は、(中央宇宙からのオーヴォントンの監督全般において)ユヴァーサにいる7名の反映の精霊と個人的接触中であり、(またそれを支配する。)かれの相互間-内部の超宇宙支配と行政において、かれは、各々の超宇宙首都にある彼自身の型の反映の精霊と反射の精霊との意識的な接触中である。

116:4.5 (1272.4) これらの主たる精霊は、崇高性の主権の支持者と増補者であるだけではなく、代わりに崇高なものの創造的目的の影響を受ける。通常、主たる精霊の総体的な創造は、類似-物質の系列(力の統括者)の創造に属するが、その個々の創造は、精霊の系列(超熾天使など)の創造である。しかし、主たる精霊が、崇高なるものの意志と目的に対応して第七回路の精霊を全体的にでもたらし

たとき、この創造的行為の子らが、物質あるいは類似-物質ではなく、精霊的であるという点である。

116:4.6 (1272.5) それが超宇宙の主たる精霊との場合、これらの超創造の三位一体の支配者—日の老いたるもの—との場合と同じである。時間と空間における三位一体の正義-判断の化身は、崇高なもののもつ起動している全能の力のための領域の支点であり、時間と空間の領域における三位一体主権の進化に向けて七重の焦点として役立っている。楽園と進化する世界の中間の視点から、これらの三位一体-起源の主権者達は、両方向を見て、知り、そして調整している。

116:4.7 (1272.6) だが、地方宇宙は、宇宙的に総計されるとき、崇高なものが経験において、そしてそれによって神格進化を成し遂げている実際の基礎を構成する心の実験、星雲の冒険、神格の展開、人格進行がその中でなされる真の実験室である。

116:4.8 (1272.7) 地方宇宙においては創造者さえ進化する。結合活動者の臨場は、生き生きとした力の焦点から宇宙なる母精霊の神性人格の状態へと進化する。創造者の息子

は、実存的な楽園神格の本質から崇高な主権の経験的本質へと進化する。地方宇宙は、真の進化の出発点、つまりなろうとしている自分自身の共同創作者になる自由意志の選択が授与された真の不完全な人格の産卵所である。

116:4.9 (1273.1) 進化の世界への贈与において権威ある息子達は、物質の人間性の最高の精霊価値と経験に基づく統一において楽園の神格を表す本質をついには獲得する。そして、これらと他の贈与を通して、創造者マイケルは、実際の地方宇宙の子らの本質と宇宙観点を同様に獲得する。そのような主たる創造者の息子は、準崇高な経験の終了に接近している。そして、地方宇宙の主権が、割り当てられた創造の精霊を受け入れるために拡大されるとき、それは、進化する壮大な宇宙の現在の可能性の中で至高の限界に近づくためであると言えるかもしれない。

116:4.10 (1273.2) 贈与の息子が、神を見つける人のために新しい方法を明かす時、かれらは、は神格到達のこれらの道を創造しているのではない。かれらは、むしろ、崇高な

ものの臨場を通して楽園の父の人格へと導く進行のための永遠の幹線道路を照らしているのである。

116:4.11 (1273.3) 地方宇宙は、神から最遠にいるもの達、そして、それゆえ宇宙の最大限の精霊的上昇を経験することができる、つまり自分自身の共同創造の経験的参加の最大限を成し遂げることができるもの達の出発点である。これらの同じ地方宇宙は、下降する人格のために経験の最大可能な深さを同様に提供し、かれらは、進化する創造物にとり楽園上昇が重要であるのと同じくそれらにとり重要な何かをそれによって達成する。

116:4.12 (1273.4) 人間は、この神格の集団が、実現化する崇高なものになるのと同様に、七重の神の完全な機能にとって必要であるように見える。崇高なものの全能の力の進化に等しく必要である宇宙の人格の他の多くの系列があるが、この描写は、人間の啓発のために提示されており、それゆえ必滅の人間と関係のある七重の神の進化において作用しているそれらの要因に主に制限されている。

5. 全能の統括者と七重の統括者

116:5.1 (1273.5) あなたは、崇高なるものへの七重の神の関係を教えられてきており、今あなたは、七重者が、統括者ならびに壮大な宇宙の創造者を受け入れるということに気づくべきである。壮大な宇宙のこれらの七重の統括者は、次を抱擁する。

116:5.2 (1273.6) 1.主たる物理の制御者

116:5.3 (1273.7) 2. 崇高な力の中心者

116:5.4 (1273.8) 3. 崇高な力の統括者

116:5.5 (1273.9) 4. 全能の崇高なるもの

116:5.6 (1273.10) 5. 活動の神—無限の精霊

116:5.7 (1273.11) 6. 楽園の小島

116:5.8 (1273.12) 7. 楽園の根源—宇宙なる父

116:5.9 (1273.13) これらの7集団は、機能上、七重の神からは不可分であり、この神格のつながりの物理的な制御段階を構成する。

116:5.10 (1273.14) エネルギーと精霊の分岐(永遠なる息子と楽園の小島との結合臨場に端を発している)は、主たる七精霊が、総体的な創造の最初の行為に連合して従事する際、超宇宙の意味に象徴された。この出来事は、崇高な力の7統括者の登場を目撃した。これに付随し主たる精霊の精霊の回路は、対照的に力の統括者の監督の物理活動から区別され、すぐに宇宙の心が、物質と精神を調整する新たな要因として現れた。

116:5.11 (1274.1) 全能の崇高なるものは、壮大な宇宙の物理的な力の支配者として進化している。現在の宇宙時代においては、物理的な力のこの可能性は、崇高な力の7統括者の中心に置かれているようであり、かれらは、力の中心の固定された位置で、そして物理的な制御者の移動臨場を通して作動する。

116:5.12 (1274.2) 時間の宇宙は、完全ではない。それは、将来の目標である。完全のための戦いは、知的で精霊的な段階だけではなく、エネルギーと質量の物理的段階にも関係する。光と生命の7超宇宙の定着は、物理的な安定性の到達を前提とする。そして、物質的な均衡の最終的な

達成が、全能者の物理的な支配の完成された進化を意味すると推測される。

116:5.13 (1274.3) 宇宙建築の初期においては楽園の創造者でさえ、主に物質的均衡に関心がある。地方宇宙の型は、力の中心の活動の結果としてばかりではなく、創造の精霊の空間臨場のためにも具体化する。そして、地方宇宙建設のこれらの初期に渡り、創造者の息子は、物質的支配のわずかに理解されている特性を示し、地方宇宙の総体的平衡が確立されるまでは自分の首都惑星を去らない。

116:5.14 (1274.4) 詰まるところ、すべてのエネルギーは心に対応し、物理的支配者は、楽園の型の活性体である心の神の子供である。力の統括者の知性は、物質的支配をもたらす仕事に絶え間なく専念している。エネルギーの関係と質量の動きに対する物理的支配のための統括者らの闘いは、活動のそれぞれの永久的領域を構成するエネルギーと質量への有限の勝利を成し遂げるまで決して止むことはない。

116:5.15 (1274.5) 時間と空間の精霊の闘いは、(人格の)心の仲介により、物質への精霊の支配の進化に関係がある。宇宙

の物理的な(無人格の)進化は、精霊の支配に従う心の均衡概念との調和に宇宙エネルギーをもってくることに関係がある。壮大な宇宙全体の全面的進化は、エネルギーを制御している心と精霊が連携している知性との人格統一の問題であり、崇高なものの全能の力の完全な出現で明らかにされるであろう。

116:5.16 (1274.6) 活動的な均衡状態に到る困難さは、発展中の宇宙の事実に固有である。物理的創造の確立した回路は、新しいエネルギーと新しい質量の登場により絶えず危うくされている。発展する宇宙は、不安定の宇宙である。故に、宇宙全体のいかなる部分も、7超宇宙の物質的完成を目撃する然るべき時期まで、本当の安定性を見つけることはできない。

116:5.17 (1274.7) 光と生命の安定した宇宙には、予想外の物理的な大きく重要な出来事は起こらない。物質的創造の比較的完全な支配は、成し遂げられた。それでも、進化している宇宙への安定した宇宙の関係の問題は、宇宙の力の統括者の技術に挑戦し続ける。しかし、壮大な宇宙が進化の表現の頂点に接近するに従い、これらの問題は、

新たな創造的活動の縮小とともに徐々に消え失せるであろう。

6. 精霊の支配

116:6.1 (1275.1) 進化の超宇宙におけるエネルギー - 物質は、人格を除いては、支配的であり、そこで、心の仲介による精霊が、支配のために奮闘している。進化の宇宙の目標は、心によるエネルギー-物質の征服、心と精霊との調和、そして人格の創造的、かつ統一的臨場の効力よるこのすべてである。ここのように人格に関係して、物理的体系は従属的となり、心の体系は調和するようになり、また精霊の体系は指示するようになる。

116:6.2 (1275.2) 力と人格のこの結合は、神格段階で、また崇高なものの中、それに、崇高なものとして表われる。しかし、精霊支配の実際の進化は、壮大な宇宙の創造者と創造物の自由意志の行為に基づく成長である。

116:6.3 (1275.3) 絶対段階においてエネルギーと精霊は、一つである。しかし、瞬間の離脱が、そのような絶対段階からなされると、違いが現れ、そして、エネルギーと精霊が楽園から空間へ移るにつれ、二者間の深淵は、地方宇宙

において全く異なるようになるまで拡大する。それらはもはや同じではなく、似てもいないし、それに、心は、相互に関係づけて介入しなければならない。

116:6.4 (1275.4) 支配者人格の活動が、エネルギーを方向づけができるということは、心の活動に対するエネルギーの反応性を明らかにする。これらの同じ制御する実体の活動が、質量を安定することができるということは、心の臨場が形成する系列に対して質量の反応性を示す。また、意志をもつ人格における精霊自体がエネルギー-物質の支配に対する心を通して努力できるということは、すべての有限創造の潜在的統一を明らかにする。

116:6.5 (1275.5) すべての根源力と人格の相互依存が、宇宙の中の宇宙の至るところにある。創造者の息子と創造の精霊は、宇宙の組織において力の集中所と物理的統括者の協力的機能に依存する。力の崇高な統括者は、主たる精霊の支配なくしては不完全である。人間の場合、物理的生命の仕組みは、(個人)の心の命令に、幾分明敏である。他ならないこの心は、引き続き、目的がある精霊の導きに支配されるようになり、そのような進化的発展の結果

は、崇高なものの新たな子供、つまり宇宙現実の幾つかの種類の新しい人格統一の産出である。

116:6.6 (1275.6) そして、それには部分があるように、それには全体がある。崇高なものの精霊人格は、神格の完成を遂げること、また三位一体のつながりの目標を達成することを全能者の進化の力を必要とする。時間と空間の人格は努力を払うが、この努力の最高点と達成は、全能の崇高なるものの行為である。全体の成長は、このように部分の集合的な成長の総体であるが、等しく、部分の進化は、全体の目的がある成長の分かれた反映であるということになる。

116:6.7 (1275.7) 楽園において、モノタと精霊は、一体—名前以外では区別がつかない—としてある。ハヴォーナにおいて、物質と精霊は、区別がつくほどに異なるが、同時に、本質的に調和している。7超宇宙においては、しかしながら、大きな相違がある。宇宙エネルギーと神性の精霊の間には広い隔たりがある。したがって、物理的な型と精霊の目的と調和させ、やがては統一することにおいて心の活動のより大きな経験的可能性がある。空間の

時間の中で展開する宇宙においては、神格のますますの減衰、解決されるべきより難しい問題、それらの解決の経験を得るより大きい機会がある。そして、この全体の超宇宙状況は、宇宙経験の可能性が、生物と創造者に—崇高なる神格にさえ—同じく利用可能となる進化的存在物のより大きい活動領域を生む。

116:6.8 (1276.1) 絶対段階では実存的である精神の支配は、有限段階と７つの超宇宙において進化的経験になる。そして、必滅の人間から崇高なるものまで、この経験は、すべてによって一様に共有される。その達成において、すべては、努力し、個人的に努力する。その将来の目標において、すべては、参加し、個人的に参加する。

7. 壮大な宇宙の生物

116:7.1 (1276.2) 壮大な宇宙は、物理的雄大さの物質的創造、精霊の極致、知的な高潔さだけでなく、それはまた、素晴らしくて、明敏な生物でもある。活気に満ちた宇宙の膨大な創造の仕組みを通して脈動する実際の生命がある。宇宙の物理的現実は、崇高なる全能者の知覚できる現実を象徴している。この物質的、かつ生きている有機体に

は、ちょうど人体に神経感覚経路の網目が縦走しているように、知性回路が透過している。この物理的宇宙は、ちょうど人体が吸収可能な栄養のエネルギー生成物の循環分配によって給養され活力が与えられているように、物質的創造を効果的に起動するエネルギー通路によって浸透される。広大な宇宙は、人間の仕組みの精巧な化学的制御装置と比較されるかもしれないすばらしい支配の調整的集中所を欠いているわけではない。しかし、あなたが力の集中所の造りについて何かを知ってさえいたならば、我々は、類推法によって、物理的宇宙についてあなたにもっと話すことができるのであるが。

116:7.2 (1276.3) 壮大な宇宙もまた、人間が生命維持のために太陽エネルギーに目をむけるのと全く同様に、空間の物質的活動と宇宙の動きを継続するために楽園の下からの変わることのないエネルギー放射に依存している。

116:7.3 (1276.4) 心は、それによってかれらが、自己性と人格を自意識するようになるかもしれない死すべき者に与えられてきた。そして、心は、—崇高なる心さえ—宇宙のこの現れつつある人格の精霊がずっとエネルギー-物質

の支配を求めて努力するそれによって全有限体に贈与されてきた。

116:7.4 (1276.5) 人間は、壮大な宇宙が、永遠なる息子の広範囲にわたる精霊-重力の把握すなわち時間と空間の有限宇宙にある全創造の永遠の精霊的価値の超物質宇宙の結合に応じるように、精霊の導きに応じる。

116:7.5 (1276.6) 人間は、完全で不滅の宇宙現実との永続する自己同一化—内住する思考調整者との融合—ができる。同様に、崇高なものは、最初の神格、楽園の三位一体の絶対的安定性に永久に依存する。

116:7.6 (1276.7) 楽園の完全性のための人間の衝動、つまり神-到達のための人間の努力は、不滅の魂の進化によってのみ解決可能な生きている宇宙において本物の神格緊張を引き起こす。これが、一必滅創造物の経験において起こることである。しかし、壮大な宇宙のすべての被創造物とすべての創造者が、神-到達と神性-完成のために同様に努力するとき、万物の進化している神、つまり崇高なるものの精霊の人格との全能の力の崇高な統合において

のみ解決を見い出せる深遠な宇宙の緊張が、構築されている。

116:7.7 (1277.1) [ユランチアに一時的に滞在する強力な使者による後援]

論文 117
崇高な神

117:0.1 (1278.1) 我々が宇宙のいかなる持ち場でその存在を送ろうとも、神の意志をするという程度にまで、崇高なものの全能の可能性は、その程度にまで、もう一歩現実的になる。神の意志は、３絶対者に可能性を秘め、永遠なる息子に人格化され、宇宙の活動のために無限の精霊に結合され、そして楽園の永続する型に永遠化されているように、第一根源と中枢の目的である。そして、神崇高な神は、神の全意志の最も高い有限顕現になっている。

117:0.2 (1278.2) すべての壮大な宇宙人達が、神の意志の完全な生活を相対的に達成するならば、そこで、時-空間の創造は、光と生命に落ち着き、次には全能者が、つまり崇高性の神性の可能性が、崇高な神の神性人格の出現で事実になるであろうに。

117:0.3 (1278.3) 進化する心が、宇宙心の回路に調和するようになるとき、進化する宇宙が、中央宇宙の型に従って安定するようになるとき、前進する精霊が、主たる精霊の結合した奉仕活動に接触するとき、上昇する人間の人格が、内住する調整者の神性の先導に最終的に調子を合わせるとき、それから崇高なものの現実性は、宇宙においてもう1度現実となった。そのとき、崇高性の神性は、宇宙実現に向かってもう一歩前進した。

117:0.4 (1278.4) 壮大な宇宙の部分と個人は、崇高なものの進化すべての反射として進化し、一方、崇高なものは、壮大な宇宙の全進化の総合的累計である。人間の観点からは、双方が、進化的、かつ経験的相互作用である。

1. 崇高なるものの本質

117:1.1 (1278.5) 崇高なものは、物理的調和の美、知的な意味の真実、精霊的価値の善である。崇高なものは、真の成功の甘味と永遠と続く達成の喜びである。崇高なものは、壮大な宇宙の大霊、有限宇宙の意識、有限現実の完成、そして創造者-被創造者の経験の人格化である。全将来

の永遠を通して崇高な神は、神格の三位一体関係における意志の経験の現実を表明するであろう。

117:1.2 (1278.6) 神は、崇高な創造者の人々において、父の探求においてそこに上昇することができる楽園-到達能力をもつ創造物をそこで創造し、進化させるために楽園から時空間の領域へ降りてきた。神を顕示する降下する創造物の宇宙行列と神を探す上昇創造物は、崇高なものの神格進化の天啓であり、降下者と上昇者の双方は、理解の相互関係性、永遠の、宇宙の兄弟愛の発見を成し遂げる。崇高なるものは、こうして、完全な創造者の因由と完成する被創造者の反応の経験の有限的統合になる。

117:1.3 (1279.1) 壮大な宇宙は、完全な統一の可能性を含み、そして、常にそれを求めており、これは、この宇宙存在が、絶対の統一性である楽園の三位一体の創造的な行為と力の委任から生じる。有限宇宙を眺めるにあたり、他ならぬこの三位一体の統一は、宇宙が三位一体の同一化の最大の段階に到達するとき、崇高なもののの現実がますます明らかになる彼において表される。

117:1.4 (1279.2) 創造者の意志と被創造者の意志は、質的に異なるものの、創造者と被創造者は、宇宙の完全性達成において協働できるがゆえに経験的にも似通っている。人は、神と連係して働くことができ、その結果、永遠の終局者の共同創造をすることができる。神は、自分の息子の肉体化における人間性としてさえ働くことができる。その結果、息子たちは、生物経験の崇高性を達成する。

117:1.5 (1279.3) 崇高なるものにおいて、創造者と被創造者は、その意志が１神性人格を表現している１神格で結ばれている。そして、ちょうどネバドンの主たる息子の最高意志が、現在、神格と人間性の意志の組み合わせ以上の何かであるように、崇高なもののこの意志は、被創造者、もしくは創造者のいずれかの意志以上の何かである。楽園の完全性と時空間経験の結合は、現実の神格段階の新しい意味の価値をもたらす。

117:1.6 (1279.4) 崇高なものの進化する神性の本質は、壮大な宇宙における全被創造者と全創造者の無比の経験の忠実な描写になる。崇高なものにおいて、創造性と被創造性が一体となってある。かれらは、完全さの探求と不完全さ

の足枷からの解放において永遠の経路を追求するにつれ、すべての有限創造をにつきまとう多様々な問題解決に付帯する変化からくるその経験により、永遠に結合される。

117:1.7 (1279.5) 真、美、善は、精霊の奉仕活動、楽園の壮大さ、息子の慈悲、そして崇高なものの経験において相互に関係する。神格のこれらの概念は、概念的経験における有限最大限を意味するがゆえに、崇高なる神は、真、美、善である。神格のこれらの三位一体の特質の不変の源は超有限段階にあるが、創造物は、超-真実、超-美、超-善としてのそのような源を思いつくことができるに過ぎない。

117:1.8 (1279.6) 1創造者であるマイケルは、地上の我が子のために創造者の神性愛を明らかにした。そして人は、この神性の愛情に気づき、受け入れ、生身のかれらの同胞にこの愛をしめすことを切望できる。そのような創造物の愛情は、崇高なものに対する愛の本物の反映である。

117:1.9 (1279.7) 崇高なものは、釣り合いよく包括的である。第一根源と中枢は、すばらしい3絶対者に可能であり、つ

まり楽園において、息子において、精霊において現実である。しかし、崇高なものは、現実でもあり、また可能性でもある、つまり人格の崇高性と全能の力の存在であり、被創造者の努力と創造者の目的に等しく反応的である。宇宙への自主行動と宇宙全体への自己反応的であり、そして同時に、最高の創造者と最高の被創造者である。崇高なものは、現実でもあり、また可能性でもある。崇高性の神格は、全ての有限体の全体をこのように表現している。

2. 進化的成長の源

117:2.1 (1280.1) 崇高なものは時間における神である。時間における創造物の成長の秘密は、崇高なものに属する。また、不完全な現在の克服と完成しつつある未来の成就もまた崇高なものに属する。そして、すべての有限成長の最終的果実は、人格の統一的、創造的臨場の力で精霊による心を介しての制御される力である。すべてのこの成長の頂点到達の結果は、崇高なるものである。

117:2.2 (1280.2) 人間にとって、存在は成長に相当する。そして、それは本当に、より大きい宇宙の意味においてでさ

え、精霊主導の存在のためであることが、経験的成長—地位の昇格—をもたらすらようである。しかしながら、我々は、現在の宇宙時代に生物存在を特徴づける現在の成長が崇高なものの機能であるということを長い間、保持してきた。我々は、この種類の成長が崇高なものの成長の時代に特有であり、それが崇高なものの成長の完成に終わるであろうということを等しく考えるする。

117:2.3 (1280.3) 創造物-三位一体化の息子の地位を考慮しなさい。かれらは、現宇宙時代に生まれ暮らしている。心と精霊の授与とともに彼らには、人格がある。彼らには経験とその記憶があるが、上昇者のようには成長しない。これらの創造物-三位一体化の息子は、現在の宇宙時代にいるが、本当は次の宇宙時代—崇高なものの成長の完成に続く時代—にいるということが、我々の信念と理解である。それゆえに、かれらは、不完全さとそれに伴う成長のかれの現状に関して崇高なものの中にはいない。このように、彼らは、現在の宇宙時代の成長には不参加であり、次の宇宙時代に向けての予備に控えている。

117:2.4 (1280.4) 三位一体に抱かれている私自身の系列は、つまり強力な使者達は、現在の宇宙時代の成長には不参加である。ある意味では、我々は、実際に三位一体の駐留の息子のように前の宇宙時代の状態にある。1つのことが確かである。我々の状態は、三位一体の抱擁により固定されており、成長は、もはや経験によってもたらされない。

117:2.5 (1280.5) これは、終局者にも、崇高なものの成長過程の関係者であるいかなる他の進化的、かつ経験的系列にも当てはまらない。楽園到達と終局者の地位を切望するかもしれないユランチアに現在生活するあなた方必滅者は、あなたが崇高なものにあり、また崇高なものに属しており、それゆえ崇高なものの成長周期の関係者であるということを、そのような将来の目標はただ実現可能であるということを理解しなければならない。

117:2.6 (1280.6) 崇高なものの成長には、いつか終わりが来るであろう。崇高なものの状態は、完成(エネルギー-精霊の意味における)を実現するであろう。また、崇高なものの進化のこの終端は、崇高性の一部として創造物進化の

結末もまた示すであろう。どういった成長が外部空間宇宙を特徴づけるのか、我々は知らない。しかし、それが、7超宇宙の進化の現代に見られる何かとは非常に異なるものであると、我々は強く確信している。それは、疑う余地なく、外部-空間者に崇高性の成長のこの奪取を補償するための壮大な宇宙の進化的公民の機能になるであろう。

117:2.7 (1280.7) 崇高なるものは、現宇宙時代の完成に際し実存するように、壮大な宇宙の経験の主権者として機能するであろう。外部-空間者—次の宇宙時代の公民—は、後超宇宙の成長の可能性、つまり全能の崇高なものの主権を前提とする進化的到達のための能力を持つであろう。したがって、現在の宇宙時代の力-人格統合への創造物参加を除く。

117:2.8 (1281.1) したがって、それが、現在の宇宙の生物-創造の進化の成長を可能にするので、崇高なものの不完全さは美徳と考えられているかもしれない。空虚には、経験的に満たされ得るのでその美徳がある。

117:2.9 (1281.2) 有限の哲学において最も好奇心をそそる問題の1つが、これである。崇高なるものは、壮大な宇宙の進化に対応して実現するのか、または、この有限の宇宙は、崇高なもののゆるやかな実現化に対応して次第に進化するのか。もしくは、自らの進化のために相互に依存しているということ、各々が他方の成長の口火を切り、進化の互恵にあるということが可能であるのか。次の事に関して我々は確信している。創造物と宇宙、上と下は、崇高なるものの中で進化しており、またかれらは、進化して、この宇宙時代のすべての有限活動の統一された全体に現れている。そして、すべての人格にとっての崇高な神格の全能の力の発展は、崇高なるものの出現である。

3. 宇宙の創造物にとっての崇高なものの重要性

117:3.1 (1281.3) 崇高なるもの、崇高な神、全能の崇高なものとさまざまに呼ばれる宇宙の現実は、登場しつつあるすべての有限現実の局面の複雑で普遍的統合である。永遠のエネルギー、神性の精霊、そして宇宙の心の広範囲の多様化は、有限の最大の成就の神格段階において自己実現

をしたすべての有限成長の全体である崇高なものの進化において有限の頂点に到達する。

117:3.2 (1281.4) 崇高なものは、時間の世界の素晴らしい人格の劇、心の調停を介してのエネルギー-物質の精霊征服の劇が、起こる空間の銀河の全景に結晶化する3名組の創造的な無限がそれを介して流れる神性回路である。。

117:3.3 (1281.5) イエス曰く、「私は生ける道である」と。イエスは、実に自己意識の物質的段階から神-意識の精霊の段階への生ける道である。また、ちょうどイエスが自身から神への上昇のこの生ける道であるように、崇高な者は、有限意識から意識の超越への、準絶対性の洞察にさえ向かう生ける道である。

117:3.4 (1281.6) この宇宙進行軌道の縦断の満足感を個人的に経験したのであるから、あなたの創造者の息子は、実際に人間性から神性への、ヨシュア・ベン・ヨセフ、つまり人の息子の本物の人間性から無限の神の息子ネバドンのマイケルの楽園の神格への、実際にそのような生きている回路になることができる。同様に、崇高なるものは、有限の限界の超越への宇宙接近として機能することがで

きる、というのも、かれは、全創造物の進化、進行、精霊化の実際の具象化であり個人の典型的な例であるがゆえに。楽園から降下する人格の壮大で素晴らしい宇宙経験でさえ、時間の巡礼者の上昇経験の全体に補完的である崇高なるものの経験のその部分である。

117:3.5 (1281.7) 必滅の人間は、類似的以上に神をひな型にして作られている。物理的見地から、この表明はほとんど正しくないが、特定の宇宙の可能性に関しては、それは事実である。進化の到達の同じ劇の何かが、人類において起こるように、宇宙の宇宙の中においてさらに大規模に展開しているのである。人は、意志の人格は、調整者と、つまり無人格の実体と連結して、崇高なものの有限的可能性の前で創造的になり、その結果は不滅の魂の開花である。宇宙における時間と空間の創造者の人格は、楽園の三位一体の無個人的な精霊との連結で機能し、それによって神格現実の新しい力の可能性を生み出すようになる。

117:3.6 (1282.1) 創造物である必滅の人間は、神格である崇高なるものにそっくりではないが、人間の進化は、いくつか

の点で崇高なものの成長に類似している。人は物質から自身の決意の固さ、力、固執により精霊的なものに向け意識的に成長する。また、思考調整者が精霊の段階からモロンチア魂の段階に届くための新方法を見いだすにつれて、かれも成長する。そして、いったん魂が生まれると、それはそういうものとして成長し始める。

117:3.7 (1282.2) これは、いくらか崇高なるものが拡充する様式に似ている。その主権は、崇高な創造者の人格の行為と業績の内と外で発展する。それは、壮大な宇宙の支配者としてのかれの力の威厳の進化である。かれの神格の本質は、楽園三位一体の存在前の統一に同様に依存している。しかし、崇高な神の進化にはさらに別の局面がある。かれは、単に創造者によって進化し、三位一体から来たのではない。自己進化と自己起源でもある。崇高な神自身は、自分自身の神性実現の意志をもつ創造的な参加者である。人間のモロンチア魂は、同様にそれ自身の不滅化の意志の、共同創造的な共同者である。

117:3.8 (1282.3) 父は、楽園のエネルギーの操作にあたり、またこれを崇高なものに対して反応をする結合活動者と協働

する。父は、やがて崇高なものの主権に達する創造者の人格の産出において永遠なる息子と協力して働く。父は、崇高なものの完成された進化がその主権を担う資格を得るそのような時まで壮大な宇宙の支配者として機能するための三位一体人格の創造において息子と精霊とともに働く。父は、崇高なものの進化の促進においてこれらの、また他の多くの方法において神格と無神格の同格者と協調するが、かれも、これらの問題で単独で機能する。そしてかれの単独機能は、思考調整者とその関係する実体の奉仕活動で最も良く明らかにされるであろう。

117:3.9 (1282.4) 神格は、三位一体においては統一的で実存的であり、崇高なものにおいては経験的であり、また死すべき者においては調整者の融合において創造物に実現化されている。必滅の人間への思考調整者の臨場は、宇宙の不可欠の統一を明らかにする。なぜなら、宇宙人格の最も低い可能性のある型である人間は、自分の中で最も高く、永遠の現実の、つまりすべての人格の最初の父さえの、実際の断片を含んでいるのであるから。

117:3.10 (1282.5) 崇高なるものは、楽園の三位一体との連結により、その上その三位一体の創造者と行政者の子供の神格の活躍の結果において進化する。人の不滅の魂は、楽園の父の神性臨場との関連により、また、人間の心の人格決定に従いそれ自身の永遠の目標を展開させる。崇高な神にとり三位一体に当たるものが、進化する人にとっての調整者である。

117:3.11 (1282.6) 現在の宇宙時代において、時間と空間の創造的媒体が、活動の有限的可能性が使い果たさしてしまうそのような場合を除き、崇高なるものは、創造者としては直接には機能できないらしい。宇宙歴史上これまでのところ一度を除き、これは起こったことがない。宇宙反射の問題に関する有限の活動の可能性が、消耗してしまうと、その時、崇高なものの機能は、すべての先行する創造者の活動の創造的な頂点を究めるものとして機能をしたのである。我々は、先行する創造者性が、創造的活動の適切な周期を完了したときはいつでも、崇高なるものが、今後長年頂点を究めるものとして再び機能すると信じている。

117:3.12 (1283.1) 崇高なるものは、人間を創造はしなかったが、人間は、文字通り崇高なものの可能性から創出されたし、まさにその生命はそこに基づいていたのであった。崇高なるものは、人を進化させもしない。それでも、崇高なものは、自身の進化の本質そのものである。有限の見地から我々は、崇高なものの内在の中に実は生き、動き、本質を有している。

117:3.13 (1283.2) 崇高なものは、明らかに最初の原因を開始することはできないが、すべての宇宙の成長触媒であるらしく、一見したところ、すべての経験的-進化的存在体の目標に関しては全体性の頂点を提供する運命にあるらしい。父は有限宇宙の概念をもたらす。創造者の息子は、時間と空間においてこの考えを創造の精霊の同意と協力で事実化する。崇高なものは、完全な有限性を頂点に至らせ、準絶対の目標とのその関係を樹立する。

4. 有限の神

117:4.1 (1283.3) 状態の完全性と存在体の神格のための生物創造の絶え間ない闘いを見るにつれ、我々は、これらの果てしない努力が、神の自己実現のための崇高なものの絶え

ない闘いを表すと信じざるを得ない。崇高な神は、有限の神格であり、その言葉の完全な意味における有限性の問題に対処しなければならない。空間の進化における時間の変化との我々の闘いは、可能性の最も外側の境界へと広がりつつある進化的本質である活動球体の中での自己の現実と主権の完成を成し遂げるその努力の反映である。

117:4.2 (1283.4) 壮大な宇宙全体に渡り、崇高なものは、表現のために奮闘する。かれの神性の進化は、幾分か存在するあらゆる人格の知恵-働きに基づいている。人間が永遠の生存を選ぶとき、かれは、将来の目標を共同創作している。そして、有限の神は、この上昇する人間の人生において人格自己実現の増大された程度と経験の主権の拡大を見つける。しかし、生物が、永遠の経歴を拒絶するならば、この生物の選択に依存した崇高なもののその部分は、避けられない遅れ、つまり代わりの、または対応する経験によって埋め合わせられなければならない剥奪を経験する。非生存者の人格について言えば、それは、創造の大霊に吸収され、崇高なものの神格の一部になる。

117:4.3 (1283.5) 神は、保護と自己実現のために人間の手にさえ自分の神性部分を与えるほどに信じ、愛情に満ちている。父の本質、つまり調整者の臨場は、死すべき者の選択のいかんを問わず不滅である。そのような心得違いをしている自己統一の可能性を秘める人格は、崇高性の神格の要素として持続しているにもかかわらず、崇高なものの子は、すなわち進化している自己は滅ぼされ得る。

117:4.4 (1283.6) 人間の人格は、生物の個体性を本当に破壊することができ、そのような宇宙的自殺の人生において価値のあったすべては存続するものの、これらの特色は、個々の生物としては持続しないであろう。宇宙の創造物の中に、崇高なものは、決してその特定の人物としてではなく、表現を再び見つける。非上昇者の独特の人格は、1滴の水が海に戻るように崇高なものに戻って行く。

117:4.5 (1284.1) 有限の人格部分のいかなる単独活動も、崇高全体性の最終的登場にとっては比較的無関係ではあるが、それでもなお全体は、様々な部分の総体的行為に依存している。個々の人間の人格は、崇高性の全体に直面する

際は微々たるものであるが、それぞれの人間の人格は、有限の置き換えられない意味-価値を表す。一度表現された人格は、その生ける人格の継続的存在を除き、決して同一の表現を再度見つけることはない。

117:4.6 (1284.2) そのようにして、我々が自己表現のために努力するとき、崇高なものは、神格表現のために我々の中で、そして我々と共に努力している。我々が父を見つけるとき、崇高なものも、万物の楽園の創造者を再度見つけた。我々が、自己実現の問題を克服するように、経験の神も、時間と空間の宇宙において全能の崇高性を達成するのである。

117:4.7 (1284.3) 人類は宇宙において苦もなく上昇することはなく、崇高なものも意図的、かつ知的活動なくしては進化しない。創造物は、単なる受動性によって完全性には達しないし、崇高性の精霊も有限創造への絶えない奉仕活動なくして全能者の力を具体化できない。

117:4.8 (1284.4) 崇高なものとの人の一時的関係は、宇宙道徳、つまり義務への宇宙的感性、それに義務の受理である。これは、相対的な善と悪に対する世俗感覚を超える道徳

である。それは、経験の神格に対する経験的義務の自己意識をする創造物の認識に直接に基づく道徳である。必滅の人間と他のすべての有限の創造物は、崇高なもののもつエネルギー、心、精霊の生きた可能性から創造される。調整者-人間の上昇者は、終局者の不滅かつ神性の品性の創造のために崇高なものを元手とする。調整者が、人間の意志の同意で、神の上昇する息子の永遠の本質の型を編むのは、崇高なもののまさしくその現実からである。

117:4.9 (1284.5) 人間の人格の精霊化と永遠化における調整者の向上の進化は、直接に崇高なものの主権の拡大を生み出す。人間の進化におけるそのような業績は、同時に、崇高なものの進化の実現における業績である。創造物は、崇高なものなくしては進化できないということは真実であるが、崇高なものの進化は、全創造物の完成された進化から独立しては決して完全に達することができないということもまた、おそらく本当であろう。ここに自己を意識する人格の重大な宇宙責任がある。その崇高な神格は、ある意味で、人間の意志の選択しだいである。また、創造物の進化と崇高なものの相互の進行は、宇宙反

射力の計り知れない仕組みについて日の老いたる者に忠実に、そして完全に示される。

117:4.10 (1284.6) 必滅の人間に与えられてきた大きな挑戦はこれである。あなたは、宇宙の経験可能な価値の意味を自分自身の進化している自己性に人格化すると決めるであろうか。あるいは、生存を拒絶することにより、あなたは、有限の神の進化への創造物の貢献をいつかまた自分の方法で試みる他の生きものの活動を待ち受けている休眠状態の崇高性のこれらの秘密を許すであろうか。しかし、それはあなたのものではなく、崇高なものに対する貢献になるであろう。

117:4.11 (1284.7) この宇宙時代の大きな闘い—そのすべてによる実現のための追求は、まだ表現されていない—は、可能性と現実性の間にある。必滅の人間が、楽園の冒険を続けるならば、かれは、時間の動きについて行き、そしてそれは、永遠の流れの中の流水のように流れる。必滅の人間が永遠の経歴を拒絶するならば、かれは、有限宇宙における出来事の流れに逆らって動いている。機械的な創造は、楽園の父の展開する目的に従って厳然と進む

が、意志の創造は、永遠の冒険への人格参加の役割を受け入れるか、または拒絶する選択がある。必滅の人間は、人間存在の最高価値を破壊することはできないが、かれは、自身の個人の経験においてこれらの価値の進化をじつに確かに防止することはできる。人間の自己は、こうして楽園上昇に参加することを拒否するという程度まで、まさしくその程度にまで、崇高なものは壮大な宇宙での神性表現の達成において遅れるのである。

117:4.12 (1285.1) 人間を保つことに、楽園の父の調整者の臨場のみならず、崇高なものの未来に属する極小片の将来の目標の支配力もまた、必滅の人間に与えられてきた。なぜなら、人が、人間の将来の目標に達する時、同じく崇高なものは、神格段階の将来の目標を達成するからである。

117:4.13 (1285.2) こうして、それが、かつて我々各人を待ち受けたように、決定が、あなた方各人を待ち受ける。有限の心の決定にそれほどまでに依存している時間の神を、あなたは失望させるのであろうか。動物的な後退の怠惰さにより宇宙の崇高な人格を失望させるのであろうか。

あなたは、各々の創造物にそれ程までに依存しているすべての創造物は、偉大な兄弟を失望させるのであろうか。宇宙経歴—楽園の父の神性発見と崇高性の神の追求への、崇高性の神の進化における神性の参加—の魅惑的な展望があなたの前に横たわるとき、あなたは自分自身が、まだ実現されていないものの領域に移ることを許すことができるのか。

117:4.14 (1285.3) 神の贈り物—現実の神の贈与—は、神自身からの分離ではない。神は、創造を自から遠ざけはしないが、楽園を旋回する創造においては緊張を設定した。神は、まず人を慈しみ、不死の可能性—永遠の現実—を与える。そして、人が神を愛するように、人は実際には永遠になる。そして神秘はここにある。人が愛を通してより密接に神に近づけば近づくほど、その人の現実—現実性—は、　より大きい。人が神から引き下がれば引き下がるほど、かれは、ますます非現実—存在の停止—に接近する。人がその意志を父の意志を為すことに奉げるとき、持てるすべてを神に与えるとき、そこで、神は、人をいま以上にこしらえるのである。

5. 創造の大霊

117:5.1 (1285.4) 偉大な崇高なものは、壮大な宇宙の宇宙大霊である。彼において宇宙の質と量は、その神格の反映を見つけるのである。崇高なものの神格の本質は、進化する宇宙を通してすべての創造物-創造者の本質の巨大さ全体モザイク合成物である。そして、崇高なものは、進化する宇宙の目的を包含する創造的な意志を表している現実化する神格でもある。

117:5.2 (1285.5) 有限の知的、潜在的に個人である自己は、第三根源と中枢から現れ、崇高なものにおいて有限の時空間の神格統合を成し遂げる。創造者の意志に従うとき、創造物は、その人格を埋もれさせたり、明け渡したりしない。有限の神の実現化における個々の人格参加者は、そのように機能することでそれぞれの意志の個性を失うことはない。むしろ神格のこの大冒険への参加により次第に増大されるような人格である。人は、神格とのそのような統一によりその進化する自己を至高のまさにその敷居へと高め、豊かにし、精霊化し、統一する。

117:5.3 (1286.1) 人の進化している不滅の魂、物質の心と調整者の共同創造は、そのように楽園に昇り、その後、終局性

の部隊に召集されると、終局者の超越として知られている経験方法により永遠なる息子の精霊-重力回路と何らかの新方法で提携するようになる。そのような終局者は、このように崇高の神の人格として経験的認識の条件に適う候補者になる。そして、終局者の部隊の明かされていない将来の課題におけるこれらの人間の知力が精霊存在体の7段階目に達するとき、そのような二元的な心は、三位一体になるであろう。これらの2つの調和する心、人間と神性は、その時の実現化された崇高なるものの経験の心と一体となり賛美されるようになるであろう。

117:5.4 (1286.2) ちょうど宇宙なる父が、イエスの地球の人生において明らかにされたように、永遠の未来において、崇高な神は、上昇する人間の精霊化された心、つまり不滅の魂において実現化される—創造的に表現され、精霊的に描写される—であろう。

117:5.5 (1286.3) 人は、崇高なものと結合したり、自己の人格の自己性を埋もれさせたりはしないが、すべての人の経験からくる宇宙の影響は、このように、崇高なものの神性

経験をする一部を形成する。「行為は我々のもの、結果は神のものである。」

117:5.6 (1286.4) それが、宇宙の上昇段階を通り抜ける間、進歩している人格は、実現化された現実の跡を残す。心、精霊、またはエネルギーであることにかかわらず、時間と空間の拡大する創造は、それらの領域で人格の進行によって変更される。人が行動するとき崇高なものは反応するし、またこのやりとりは、進行事実を構成する。

117:5.7 (1286.5) エネルギー、心、精霊の大回路は、決して上昇する人格の永久的所有物ではない。これらの奉仕活動は、永遠に崇高性の一部のままである。人間の経験において、人間の知力は、補佐の心-精霊の律動的な脈動の中に住まい、この奉仕活動の回路接続により生産される活動舞台の中でその決定に作用する。免れぬ死に際し、人間の自己は、補佐回路と永久的に分離される。これらの補佐は、決して1つの人格から別の人格までの経験を伝えているようには見えないが、七重の神から崇高な神に決定-活動の無個人的な影響を伝えることができる

し、そうする。(少なくとも、これは崇拝と知恵の補佐に当てはまる。)

117:5.8 (1286.6) したがって、精霊の回路の場合もそうである。人は宇宙における自身の上昇においてこれを利用するが、自身の永遠の人格の一部としては決してそれを所有していない。しかし、精霊の奉仕活動のこれらの回路は、真実の精霊、聖霊、または精霊の超宇宙臨場にかかわらず、上昇する人格に現れつつある価値に対し受容性があり、反応しており、またこれらの価値は、七重者を経て崇高なものに忠実に伝えられる。

117:5.9 (1286.7) 聖霊と真実の精霊のような精霊的影響は、地方宇宙の奉仕活動あるが、それらの指導は、特定の局部的創造の地理的制限にまったく限定されない。自身の起源の地方宇宙の境界を通り越すとき、上昇する人間は、物質とモロンチアの世界の哲学的迷宮をそれほどまでに止むことなく教え誘導してきており、上昇のあらゆる危機に際し、「これが道である。」とずっと言い、楽園の巡礼者をつねに案内してきた真実の精霊の奉仕活動を完全に奪われるという訳ではない。あなたが、登場しつつあ

る崇高なるものの精霊の奉仕活動を通して地方宇宙の領域を去るとき、また、超宇宙反射の準備により、あなたは、まだ神の楽園の贈与の息子の元気づける指示的な精霊に楽園上昇において誘導されていることであろう。

117:5.10 (1287.1) いかにして宇宙奉仕活動のこれらの様々な回路は、進化的経験の意味、価値、および事実を崇高なものに印象づけるのか。我々は、必ずしも確かではないが、時間と空間のこれらの回路の即座の贈与者である楽園起源の崇高な創造者を通して、この印象づけが起こると信じる。知力の物理的段階へのそれらの奉仕活動において、7名の補佐の心-精霊の心-経験の集積は、神性聖職者の地方宇宙経験の一部であり、この創造の精霊を通して、かれらは、おそらく崇高性の心に登録を見い出すであろう。同様に、真実の精霊と聖霊との人間の経験は、おそらく同様の方法により崇高性の人格に登録されるであろう。

117:5.11 (1287.2) 人と調整者の経験でさえ崇高な神の神格における反響を見つけなければならない。なぜならば、調整者が経験するとき、かれらは崇高なものに似ており、必

滅の人間の進化している魂は、崇高なものの中でそのような経験の潜在的な可能性から創造されるのである。

117:5.12 (1287.3) この様に全創造の種々の経験は、崇高性の進化の一部になる。創造物は父に向けての上昇につれ単に有限の質と量を利用するだけである。そのような利用の無人格的な結果は、活発な宇宙、つまり崇高な人格の一部分のままである。

117:5.13 (1287.4) 人自身が個人財産として共に携えて行くものは、楽園上昇における壮大な宇宙の心と精霊の回路を用いた経験からの個性の結果である。人が決めるとき、そして活動中にこの決定を極点まで高めるとき、人は経験し、またこの経験の意味と価値は、有限から最終までの全段階における自分の永遠の性格の一部である。宇宙的規模での道徳的かつ神性的な精霊の性格は、真剣な崇拝に照らされ、知的な愛に賛美され、兄弟らしい奉仕において達成される人格決定からくる創造物の資本蓄積を意味する。

117:5.14 (1287.5) 進化している崇高なものは、宇宙の中の宇宙との限られた経験接触より多くのものを成し遂げるため

に、最後には有限創造物のいつでも無能さを補うであろう。創造物は、楽園の父に至ることはできるが、進化する心は、有限であるが故に、無限の、そして絶対の父を本当に理解することはできない。だが、全創造物は、崇高なものを経験し、また崇高なものの一部分であるが故に、全創造物が、最終段階の有限存在に達し、全宇宙開発が実際の神性臨場としてそれらの崇高な神の到達を可能にした後、それ故、総合経験との接触は、そのような接触の事実に含まれる。時間の有限は、それ自体の中に永遠の種子を包含している。そして、我々は、進化の充実が宇宙成長の能力の疲労困憊を経験するとき、完全な有限は、究極なるものとして父の探索において永遠の経歴の準絶対の局面に乗り出すということを教えられる。

6. 崇高なものの探求

117:6.1 (1287.6) 我々は宇宙に崇高なものを探し求めるが、探し出せない。「動き静止するあの方は、万物の内外におられる。神秘に包まれ見分けのつかないあの方は、遠方に、しかも近くにおられる。」全能の崇高なものは、「未だ形をなさない形のもの、未だ創造されていない形」である。崇高なものは、あなたの宇宙の家庭であ

り、あなたがかれを見つけるとき、それは家に帰るようなものであろう。崇高なものはあなたの経験の親であり、人間の経験の場合のように、神性の親の経験において成長した。全能の崇高なものは、創造者のようであるように創造物のようであるのであなたを知っている。

117:6.2 (1288.1) あなたが、神を見つけることを本当に望むならば、崇高なものの意識を心に留めおかずにはいられないはずである。神があなたの神性の父であるように、崇高なものはあなたの神性の母であり、あなたはその母の中で宇宙の創造物として一生を通じて養育される。「崇高なものはなんと普遍的であることか—四方八方におられる。創造の無限の事象は、一生崇高なものの臨場を頼みとしており、なにも拒否はされない。」

117:6.3 (1288.2) ネバドンにとりマイケルに当たるものが、有限の宇宙にとっての崇高なものである。崇高なものの神格は、父の愛が全創造物に外に向きに注ぎ出る重要な大通りであり、愛である父への探索において有限の創造物が内部に向け通って行く重要な大通りである。思考調整者は、崇高なものと関係がある。原本質と神格において思

考調整者は、父に似ているが、空間宇宙における時間の相互作用を経験するとき、思考調整者は、崇高なもののようになる。

117:6.4 (1288.3) 創造物が創造者の意志をするほうを選ぶ行為は、宇宙的価値であり、調和の明かされていないが、遍在する力、おそらく崇高なるものの絶えず拡大する活動機能によって直ちに反応を受ける宇宙的意味を持っている。

117:6.5 (1288.4) 進化している人間のモロンチア魂は、実際には宇宙なる父の調整者の活動の息子と崇高なるもの、つまり宇宙なる母の宇宙的反応の子供である。母の影響は、発達する魂の地方宇宙の幼年期に渡り人間の人格を支配する。神格の両親の影響は、調整者融合の後と超宇宙経歴の間、より等しくなるものの、時間の創造物が、永遠の中央宇宙を通過し始めると、父の本質は、ますます明らかになり、宇宙なる父の認識と終局者の部隊への入隊と同時にその山場に達する。

117:6.6 (1288.5) 終局者到達の経験において、またそれを通して、上昇する自己の経験の母の特質は、永遠なる息子の

精霊臨場と無限の精霊の心の臨場との接触と注入に大いに影響を受けるようになる。そして、壮大な宇宙における終局者の活動領域にわたり、崇高なものの潜在的な母性の可能性の新しい目覚め、経験上の意味の新しい認識と上昇経歴全体の経験上の価値の新統合が現れる。崇高なものの母の継承が、父の調整者の継承との有限の共時性に達するまで、自己のこの実現は、第6段階の終局者の宇宙経歴に続くようである。壮大な宇宙機能のこの興味をそそる期間は、上昇し完成された人間の継続的な成人の経歴を意味する。

117:6.7 (1288.6) 第6段階の存在体の完成に際し、また第7の最終段階への精霊の地位の入場に際し、豊かにする経験、熟する知恵、また神格実現の前進する時代が、おそらく起こるであろう。終局者の本質において、これは、精霊の自己実現、つまり有限の可能性の限界内での上昇する人間-本質と神性の調整者-本質との連携完成のための心の争いの完全達成におそらく等しいであろう。そのような素晴らしい宇宙自己は、創造された、創造中の、あるいは進化中の万物の有限者の行政に関するいかなる活動もしくは仕事における宇宙と人格の父母の両者を代表する

資格をもつ宇宙自己は、こうして、母なる崇高なものの永遠の宇宙の子供はもとより楽園の父の終局者の永遠の息子になる。

117:6.8 (1289.1) 魂を発展させている人間すべてが、文字通り父たる神と崇高なるものである母たる神の進化する息子である。しかし、必滅の人間が、神性遺産の魂を意識するようになるそのような時まで、神格の親類関係のこの保証は、実現される信仰でなければならない。人間の人生経験は、崇高なるものの宇宙贈与と宇宙なる父の宇宙臨場(そのいずれも人格ではない)が、時間のモロンチア魂と宇宙の目標と永遠の奉仕の人間-神性終局者の性格を進化させている宇宙の繭である。

117:6.9 (1289.2) 人間は、神が人間の存在において最も素晴らしい経験であるということをあまりにも頻繁に忘れる。他の経験は、その本質と内容に制限されるが、神の経験は、創造物の理解能力の制限は別として、何の制限もなく、他ならないこの経験それ自体が、能力を拡大している。を捜し求めるとき、人はすべてを捜し求めているのである。神を見つけるとき、人はすべてを見つけたので

ある。神の探究は、贈与されるための新たで、　よりすばらしい愛の驚くべき発見を伴う惜しみない愛の贈与である。

117:6.10　(1289.3)　すべての真の愛は神からであり、自身が仲間にこの愛を与えるとき人は神の愛情を受けている。愛は動的である。それは決して捕らえられない。それは生き生きとしており、自由であり、感動的であり、つねに動いている。人は、決して父の愛を占領したり、心の中にそれを閉じ込めたりはできない。かれが、次にはこの愛を仲間に贈与するときにその人間の人格を通過することによってのみ、父の愛は、必滅者にとって真実になり得る。愛の大回路は、父から息子を経て兄弟へと、そこから崇高なものへと至る。父の愛は、内住する調整者の奉仕活動により人間の人格に現れる。そのような神を知る息子は、宇宙の同胞にこの愛を顕にし、然も、この兄弟愛は、崇高なものの愛の本質である。

117:6.11　(1289.4)　経験を通す以外に崇高なものへの接近はなく、現在の創造時代においては崇高性への創造物の接近は3通りしかない。

117:6.12 (1289.5) 楽園の公民は、永遠の小島からハヴォーナへ降下し、そこで楽園-ハヴォーナ現実の差異の観察を通して、それに、主たる精霊から創造者の息子におよぶ崇高な創造者の人格の多様な活動についての探索発見により崇高性理解のための能力を修得する。

117:6.13 (1289.6) 崇高な創造者の進化する宇宙から上がってくる時空間の上昇者は、楽園の三位一体の統一の増大している認識に備えハヴォーナ通過において崇高なものに接近する。

117:6.14 (1289.7) ハヴォーナ出身者は、楽園からの下降する巡礼者と7超宇宙からの上昇する巡礼者との接触により崇高なものへの理解力を身につける。ハヴォーナ出身者は、本質的には永遠の小島の公民と進化の宇宙の公民の基本的に異なる観点を調和させるため立場にある。

117:6.15 (1290.1) 進化する創造物にとり、宇宙なる父に向けての7つの素晴らしい接近手段があり、これらの楽園上昇のそれぞれが、主たる7精霊の1つの神性を通過する。そして、そのような接近の一つ一つは、創造物が、その主たる精霊の本質の超宇宙の反映における奉仕の結果とし

て生じる経験の感受性の拡大により可能になる。これらの7つの経験全体は、崇高な神の現実と現実性についての創造物の意識に関する現在の既知の範囲を構成する。

117:6.16 (1290.2) 人が有限の神を見つけることを妨げているのは、人の自身の限界だけではない。それはまた、宇宙の不完全さでもある。全創造物—過去、現在、未来—の不完全ささえ崇高なものを近づき難くする。神類似の神性段階に達したいかなる個人も、父たる神を見つけることができるが、そのはるかに遠くの時までは、すなわち全創造物が、完全性の宇宙規模の達成を通して、同時に崇高な神を見つける時まで、崇高な神は、いかなる1創造物にも人格的には決して発見されないであろう。

117:6.17 (1290.3) あなたが、父、息子、聖霊を見つけることができるように、また、そのうちそうするようには人格的に崇高な神を見つけることができないという事実にもかかわらず、楽園上昇、およびその後の宇宙経歴は、あなたの意識に宇宙存在の認識と全経験の神による宇宙活動を徐々に創造するであろう。人間の経験において崇高な

ものが実現可能であるという点において精霊の果実は、崇高なものの実体である。

117:6.18 (1290.4) 崇高なものの人のそのうちの到達は、楽園神格の精霊との融合の結果として生じる。ユランチア人の場合、この精霊は、宇宙なる父の調整者の臨場である。そして、神秘訓戒者は、父からきており、また父に似てはいるが、我々は、そのような神性の贈り物でさえ、有限創造物に無限の神の本質を明らかにする不可能な課題の達成ができるということを疑う。我々は、調整者が将来の第7段階の終局者に明らかにすることは、崇高な神の神性と本質であろうと推測する。また、絶対存在体にとっての無限の顕示であろうものが有限の創造物にとってのこの顕示であろう。

117:6.19 (1290.5) 崇高なものは、無限ではないが、おそらく有限の創造物がいつか本当に理解できる無限のすべてを抱擁している。崇高なものを、またそれを越えて理解するということは有限以上である。

117:6.20 (1290.6) すべての経験的創造は、運命のそれぞれの実現化において互いに依存している。実存的な現実のみ

が、自己充足的であり自存している。ハヴォーナと7超宇宙は、最大の有限到達を果たすために互いを必要とする。同様に、それらはいつか、有限超越のための外部空間の未来宇宙に依存するであろう。

117:6.21 (1290.7) 人間の上昇者は、父を見つけることができる。全宇宙における経験状況にかかわりなく,神は、実存的で、したがって現実である。しかし、一人の上昇者も、すべての上昇者が、同時にこの発見に参加する資格を得るその最大の宇宙円熟度に達してしまうまでは、決して崇高なものを見つけないであろう。

117:6.22 (1290.8) 父は分け隔てをしない。かれは、宇宙の個人として上昇する息子達を扱う。崇高なものも同様に分け隔てをしない。経験的な子らを一宇宙総体として扱う。

117:6.23 (1290.9) 人は、自分の心に父を発見できるが、他のすべての人の心に崇高なものを捜し求めなければならないであろう。そして、全創造物が、崇高なものの愛を完全に顕示するとき、その時すべての創造物にとっての宇宙現実になる。言い換えると、それは、単に宇宙が光と命の中に定着されるということである。

117:6.24 (1291.1) すべての人格による完成された自己実現への到達と、さらに宇宙全体の完成された均衡への到達は、崇高なのものへの到達に等しく、不完全な存在の限界からすべての有限現実の解放を目撃する。すべての有限の可能性のそのような枯渇は、崇高なものの完成された到達をもたらし、さもなければ、崇高なるもの自身の完成された進化の実現として定義できるかもしれない。

117:6.25 (1291.2) 人は、地震が岩石に割れ目を入れるように突然に崇高なものを見つけるのではなく、川が、音もなく土の下をすり減らすように、ゆっくりと、根気よく見つけるのである。

117:6.26 (1291.3) あなたが父を見つけるとき、あなたは、精霊の上昇についての大いなる原因を宇宙で見つけるであろう。崇高なものを見つけるとき、あなたは、楽園進行の経歴の見事な結果を発見するであろう。

117:6.27 (1291.4) しかし宇宙の旅において神を知る人間は誰も、孤独ではあり得ない。なぜならば、かれは、横断しているまさしくその道が崇高なものの存在であるととも

に、父が一歩ごとに自分の横を歩いていることを知っているのであるから。

7. 崇高なるものの未来

117:7.1 (1291.5) すべての有限可能性の完成された実現は、すべての進化的経験の実現の成就に相当する。これは、宇宙における全能神格の臨場としての崇高なのものの最終的出現を示す。我々は、崇高なものは、この発展段階において、現在の宇宙時代の頂点において、永遠なる息子のように別々に人格化され、楽園の小島のように具体的に力を与えられ、結合活動者のように完全に統一されるであろうと、そしてこの全てが崇高性の有限の可能性の限界内で達成されたということを信じる。

117:7.2 (1291.6) これは崇高なものの未来についての完全に適切な概念であるが、我々は、この概念に固有の一定の問題に注意を向けたい。

117:7.3 (1291.7) 1. 崇高なものの無条件の監督者は、完成された進化に先立つどの段階においてもほとんど神格化できなかったが、依然として、これらの同じ監督者は、今なお

制限つきで光と命の定着する宇宙に関する崇高性の主権を行使する。

117:7.4 (1291.8) 2. 崇高性は、完全な宇宙状態の現実を成し遂げるまでは、三位一体の究極なるものにおいてほとんど機能することができなかったが、三位一体の究極なるものは、今なお限定的現実であり、また、あなたは、究極なるものの条件付きの代理の存在について知らされてきた。

117:7.5 (1291.9) 3. 崇高なものは、宇宙創造物にとり完全には実感のあるものではないが、楽園の宇宙なる父から地方宇宙の創造者の息子と創造の精霊までの七重の神格にとっては実に真実であるということを推論する多くの理由がある。

117:7.6 (1291.10) 時間が超越された時間と結合する有限の上限において、曖昧で混ざり合う何らかの連続するものがあるかもしれない。崇高なものは、これらの超時間の段階への自らの宇宙臨場を予測し、そしてこの未来の予測される不完全者の親密性として作成された段階へ映し出すことにより今後の進化を限られた度合で予期することが

できるかもしれない。そのような現象は、すべての永遠を通じ人間の未来宇宙における到達の紛れもない予測である思考調整者による内住の人間の経験の場合のように、有限が超有限と接触するところではどこであろうとも観測されるかもしれない。

117:7.7 (1292.1) 楽園の終局者部隊に入隊を認められるとき、人間上昇者は、楽園三位一体に誓いを立て、また忠誠のこの誓いを立てる際、すべての有限創造物の人格が理解しているように三位一体である崇高な神への永遠の信義を誓約する。その後、終局者の仲間が、進化する宇宙全体で機能するとき、地方宇宙における光と命の定着の多事の時まで、かれらは、単に楽園起源の命令に従う義務がある。これらの完成された創造の新政府組織は、崇高なものの新生の主権を反映し始め、我々は、外側の終局者の仲間が、そのような新政府の司法上の権威をそのとき承認するのを観測する。崇高な神が、終局者の進化の部隊の統一者として進化しているように見えるが、究極なる三位一体の一員として崇高なものによりこれらの7部隊の永遠の目標に指示が与えられるということは大いにあり得るのである。

117:7.8 (1292.2) 崇高なるものは、宇宙顕現のための超有限の3つの可能性を有する。

117:7.9 (1292.3) 1. 最初の経験的三位一体における準絶対提携。

117:7.10 (1292.4) 2. 第2次経験的三位一体における絶対関係。

117:7.11 (1292.5) 3. 三位一体の三位一体における共同無限の参加、我々には、しかしながら、これが本当に意味することについては満足できる何の概念もない。

117:7.12 (1292.6) これは、崇高なものの未来についての一般に受け入れられた仮説の1つであるが、光と命の状態のその到達の後に、現在の壮大な宇宙に対する崇高なものの関係には多くの推測もある。

117:7.13 (1292.7) 超宇宙の現在の目標は、あるがままのように、またそれらの可能性の範囲内でそうなるように、ハヴォーナでさえもそうであるように、完全になることである。この完全性は、物理的達成と精霊的達成に、行政上、政治上、友愛上の進展にさえ、関係がある。それは、来る時代に、不調和、不調整、不適応に向けての可能性が最終的には超宇宙で枯渇すると信じられている。

人格の臨場のにおいて、精霊が心の支配を実現する一方で、エネルギー回路は、完全な均衡状態にあり、また心への完全な従属をしているであろう。

117:7.14 (1292.8) このはるかに遠い時代に、崇高なものの精霊人格と全能なるものの達成された力は、調和的発展を遂げるであろうということ、そして崇高な心にあり、しかも崇高な心によって統一されているように、双方が、崇高なるもの、つまり宇宙における成就された現実—全創造物により観測可能になる、全創造物の知性により反応を受ける、すべての精霊の実体に調整される、そしてすべての宇宙人格により経験される現実の崇高なるものとして具体化されるであろう現実—として具体化されるであろう。

117:7.15 (1292.9) この概念は、壮大な宇宙の中の崇高なものの実際の主権を含意する。全体として、現在の三位一体の管理者は、その代理者として継続しそうではあるが、我々は、7超宇宙の間での現在の境界が徐々になくなるであろうと、また壮大なすべての宇宙が、完成された全体として機能するであろうと信じる。

117:7.16 (1292.10) その時、崇高なものは、個人的にはオーヴォントンの本部であるユヴァーサに居住している場合があるかもしれないし、そこから時間の創造の行政を指示するが、これは誠に推測にすぎない。しかしながら、神格臨場の偏在性は、おそらく宇宙の中の宇宙に浸透し続けるであろうが、確かに、崇高なるものの人格は、確実に何らかの特定地域に接触可能になるであろう。我々は、崇高なものにとりその時代の超宇宙公民の関係がどうなるかは知らないが、ハヴォーナ出身者と楽園の三位一体との現在の関係のようなものかもしれない。

117:7.17 (1293.1) 未来の時代の完成された壮大な宇宙は、現在あるものからは大いに異なるであろう。空間の銀河組織の緊張をともなう冒険、時間の不確実な世界における命の植え付け、混沌からの調和、可能性からの美、意味からの真実、および価値からの善の発展は、過ぎ去る。時間の宇宙は、有限の将来の目標の実現を達成し終えるであろう。恐らくしばらくの間、休息、すなわち進化する完全性に向けての長年の争いからの緩和があるだろう。しかし、長い間ではない。確かに、確実に、冷酷に、究極の神の現れつつある神格の謎は、ちょうど奮闘してい

る進化の祖先が、かつて崇高な神への探索によって挑戦を受けたように定着した宇宙の完成された公民市民に挑戦するであろう。宇宙の将来の目標の幕は、被創造物経験の究極に明らかにされる新たで、より高い段階で宇宙なる父への到達を追求する魅惑的な準絶対探索の類のない壮大さを明らかにするために開くであろう。

117:7.18 (1293.2) [ユランチアに一時的に滞在している強力な使者による後援]

論文 118
崇高と究極—時間と空間

118:0.1 (1294.1) 神のいくつかの本質に関し次の事が言えるかもしれない。

118:0.2 (1294.2) 1. 父は自存の自己である。

118:0.3 (1294.3) 2.息子は共存の自己である。

118:0.4 (1294.4) 3. 精霊は結合存在の自己である

118:0.5 (1294.5) 4. 崇高なものは進化的経験の自己である。

118:0.6 (1294.6) 5. 七重者は自己分配の神性である。

118:0.7 (1294.7) 6. 究極なるものは先験的経験の自己である。

118:0.8 (1294.8) 7. 絶対者は実存的経験の自己である。

118:0.9 (1294.9) 七重者の神は、崇高なものの進化的到達に不可欠である一方、崇高なものもまた究極なるものの来るべき出現に不可欠である。そして、崇高なものと究極なるものの二重の臨場は、準絶対で派生の神格の基本的な連結を成す、なぜならば、かれらは、将来の目標達成において互いに補足し合う。ともに両者は、主たる宇宙のすべての創造的成長の開始と終了をつなぐ経験の橋を構成する。

118:0.10 (1294.10) 創造的成長は、終わりがない、つまり果てしないが、常に満足のいくものであるが、宇宙の成長、宇宙探検と神到達の新冒険への起動準備行為としてとても効果的に役目を果たす一時的目標到達のそれらの人格-満足の瞬間に常に中断される。

118:0.11 (1294.11) 数学の領域は、質的限界に悩まされるが、それは、有限の心に無限について熟考する概念うえの基礎を提供する。数には、有限の心の理解力においてさえ量

的制限はない。思いつく数がいかに大きくても、あなたはもう一つ加えられる数を常に思い描くことができる。また、あなたは、それが無限には不十分であるということが理解できる。なぜならば、この加算を幾度繰り返そうが、常にさらにもう一つ付け加えることができのであるから。

118:0.12 (1294.12) それと同時に、無限の連続は、いかなる点においてもこの合計(より適切に、小計) は、特定の時と状況における特定の人に目標到達の甘さの豊かさを提供する。しかし、遅かれ早かれこの同じ人は、新たでより大きい目標を渇望し、熱望し始め、また、成長のそのような冒険は、いつまでも、然るべき時と永遠の周期においてずっと現れ続けるであろう。

118:0.13 (1294.13) 各連続する宇宙時代は、宇宙成長の次の時代の控の間であり、各宇宙時代は、すべての前の舞台のために直接的目標を提供する。ハヴォーナは、それ自体で、完全だが、完全性を制限された創造である。進化する超宇宙へと外に拡大するハヴォーナの完全性は、宇宙

の目標のみならず、進化前の存在の限界から解放をも見い出す。

1. 時間と永遠

118:1.1 (1295.1) 宇宙との神格の関係についてすべての可能な理解に達することは、人の宇宙への方向付けに役に立つ。絶対的神格は、本質的には永遠であるが、神々は、永遠における経験として時間に関係づけられる。進化する宇宙においては、永遠は、一時的恒久性—永遠に続く現在—である。

118:1.2 (1295.2) 必滅の創造物の人格は、父の意志を為す選択をする手段により内住する精霊との自己同一化により永遠化できるかもしれない。意志のそのような奉献は、目的の永遠-現実の実現に等しい。これは、創造物の目的が瞬間の連続に関し固定されたということ、言い替えれば、瞬間の連続は、創造物の目的に何の変化も見ないであろうということを意味する。100万、あるいは10億の瞬間による差は生じない。数字は、創造物の目的に関して意味をもたない。こうして、創造物の選択、さらに神の選択は、神の子らと楽園なる父の永遠の奉仕において

神の精霊と人の本質との決して終わることのない統一の永遠の現実に至るのである。

118:1.3 (1295.3) いかなる特定の知性にも成熟度と時間の意識の単位の間に直接的な関係がある。時間の単位は、1日、1年、またはより長い期間であり得るが、必然的に、それは、意識する自己が、生活情況を評価し、また思考している知性が束の間の生活事実を測定し評価する判断基準である。

118:1.4 (1295.4) 経験、知恵、判断は、人間の経験において時間の単位の伸張には付きものである。人間の心が過去へと後方に思いを馳せるとき、それは、それを現状に応用する目的のために過去の経験を評価している。心が未来へと手を伸ばすとき、それは、ありうる行動の将来の意味の評価を試みている。こうして経験と知恵の両者を考慮に入れた後、人間は、現在における判断決定を発揮し、過去と未来でこうして生まれる行動計画は、存在へと至る。

118:1.5 (1295.5) 発展途上の自己の成熟段階において、過去と未来は、現在の真の意味を照らすために合わせられる。自

己が成熟すると、それは、経験のためにより遠く過去へと至り、同時にその知恵の予測は、より深く未知の未来へと入り込もうとする。そして想像している自己が、この範囲をさらに過去と未来の両方に広げるにつれ、判断もまた瞬間的な現在に次第に依存しなくなるのである。このように、決定-行動は、過去と未来の意味の側面を獲得し始める間、動いている現在の足枷から逃れ始めるのである。

118:1.6 (1295.6) 時間の単位の短い必滅者は、忍耐というものに悩まされる。真の成熟度は、真の理解から生ずる慎みにより忍耐を超越する。

118:1.7 (1295.7) 成熟するようになるということは、より熱烈に現在に生きることであり、同時に現在の限界から逃れることである。過去の経験に基づく成熟の計画は、未来の価値を高めるような方法で現在実現しつつある。

118:1.8 (1295.8) 未熟な時間の単位は、現在へではない—過去-未来—へではないその本当の関係の現在との縁を切るためにそのような方法で意味と価値を現在の瞬間へと集結する。成熟の時間の単位は、自己が出来事全体に関する

洞察を獲得し始めるために、均衡化された過去-現在-未来の等位関係を明らかにするために、広げられた地平線の全景展望から時間の風景を見始め、恐らく、始まりのない、終わりのない永遠の連続を、つまり時間と呼ばれる断片を推し測り始める。

118:1.9 (1296.1) 無限と絶対の段階における現在の瞬間は、すべての未来のみならずすべての過去をもまた含む。私はあるは、私はいた、それに、私はいるであろうをも意味する。そして、これは永遠性と永遠の我々の最高の概念を意味する。

118:1.10 (1296.2) 絶対と永遠の段階において可能な現実は、ちょうど実際の現実と同じほどに意味がある。有限段階上、そして時間に束縛を受ける創造物にだけそのような広大な違いがあるらしい。絶対としての神にとっては、永遠の決定をした上昇する人間は、既に楽園の終局者である。しかし、宇宙なる父は、内住する思考調整者を通して、認識においてこのように限られてはおらず、それどころか、動物のような生活段階から神のような生活段

階への創造物上昇の問題に関わるあらゆる俗世の闘いについてまた知ることもできるし、加わることもできる。

2. 遍在と無処不在

118:2.1 (1296.3) 神格の偏在が、神性遍在の崇高性と混同されてはならない。崇高なもの、究極なるもの、絶対なるものは、彼の時空の遍在、宇宙の、絶対の臨場との時空間の普遍と時空間超越の遍在を補填し、調和し、統一されるということが、宇宙なる父の意志である。神性の遍在は、あまりにも頻繁に空間に関連づけられるかもしれないが、あなたは、必ずしも時間に条件づけられるという訳ではないということを心すべきである。

118:2.2 (1296.4) 人間とモロンチア上昇者としてあなたは、七重の神の奉仕活動を通して次第に神について感知する。ハヴォーナを通してあなたは崇高な神を発見する。楽園においては、あなたは、人格として神を見つけ、次にあなたは終局者として、究極なるものとしての神をやがて知ろうとするであろう。終局者であることは、究極なるものに達した後に追求するわずかに一針路だけがあるらしく、また、それは、絶対なるものの探求を始めるのであ

ろう。最高の、究極の上昇の終わりに父なる神に遭遇したのであるから、どんな終局者も、神格絶対到達の不確実さに妨害されることはないであろう。そのような終局者は、神発見に成功するとしても、同じ神を、より無限に、そして普遍に近い段階に現れる楽園の父を発見していると、疑うことなく信じるであろう。疑いようもなく絶対不変の神への到達は、人格の終局なる父はもとより宇宙の最初の親も明らかにするのであろう。

118:2.3 (1296.5) 崇高な神は、神格の時空間遍在の実証ではないかもしれないが、文字通り神の遍在の顕現ではある。創造者の精霊臨場と創造の物質的顕現の間には、至る所での発生—進化する神格の宇宙出現—の広大な領域が存在する。

118:2.4 (1296.6) 崇高な神が時間と空間の宇宙の直接支配をずっと担うならば、我々はそのような神格行政は、究極なるものの間接的支配下で機能すると確信している。そのような出来事において、究極の神は、全能の崇高なものの行政機能に関する超時間と超空間の間接的支配をする先

験的全能(全知全能)として時間の宇宙に登場し始めるであろう。

118:2.5 (1297.1) 人間の心は、ちょうど我々がするように、つぎの質問をするかもしれない。壮大な宇宙の行政権への崇高な神の進化が、究極の神の増大された顕現を伴なうならば、外部空間の仮定的宇宙における究極の神の対応的出現が、同様の、また高められた絶対の神が伴うのであろうか。だが、我々は実際には知らない。

3. 時-空間の関係

118:3.1 (1297.2) 空間は関連する点の体系であるが、時間は瞬間の連続であることから、神格は、遍在のみにより有限概念に時間-空間の顕現を統一することができた。あなたは、結局のところ、分析により時間を、統合により空間を知覚する。あなたは人格の統合洞察によりこれら2つの異なる概念を組み合わせ関連づける。すべての動物世界の中で人だけがこの時-空間の知覚力を所有している。動物にとり動きは、意味を持つが、動きは、人格の地位の創造物だけに価値を示す。

118:3.2 (1297.3) 物事は時間に条件づけられるが、真実は時間を超越している。あなたは、真実を知れば知るほどより真実であり、過去を理解することができればできるほどより未来を理解できる。

118:3.3 (1297.4) 真実は、揺るがし得ず—すべての一時的な変化から永久に免除されており、決して死んではおらず、正式でありものの、常に活気にあふれ順応性があり—輝くばかりに生き生きとしている。しかし、真実が事実に結びつくようになると、次には、時間も空間もその意味を制約し、その価値を関連づける。事実に結びつけられた真実のそのような現実は、概念となり、結果的に、宇宙の相対的現実の領域にそれに応じて分類される。

118:3.4 (1297.5) 有限で一時的創造物の事実に基づく経験との創造者の絶対かつ不朽の真実のつながりは、崇高なものの新たで出現しつつある価値をもたらす。崇高なものの概念は、有限で、変わり続ける下界との神性で、不変の天界の連携に不可欠である。

118:3.5 (1297.6) 空間は、すべての非絶対的なものの中で最も絶対に近くなる。空間は明らかに、絶対に究極である。

我々が物質段階の空間の理解における本当の難しさは、物体が空間にある一方、空間もまたこれらの同じ物体に存在しているという事実にある。絶対である空間については多くの局面があるが、それは、空間が絶対であると意味する訳ではない。

118:3.6 (1297.7) あなたが、空間は、ある意味では全ての物体の属性であると推測するならば、それは、結局は、空間関係の理解に役立つかもしれない。したがって、肉体が空間を移動するとき、それは、肉体とともにそのすべての属性を、そのような運動体において、またそれ自身の空間さえも運ぶ。

118:3.7 (1297.8) 現実のすべての型は物質段階の空間を占めるが、精霊の型は、空間に関連して存在するに過ぎない。それらは、空間を占有せず、置換せず、それを包蔵もしない。しかし我々にとって、空間の主な謎は、一つの考えの型に属する。我々は、心の領域に入るとき、多くの謎に遭遇する。考えの型—現実—は空間を占めるのか。考えの型が空間を含まないと確信してはいるものの、我々には実際には分からない。それにしても、非物

質的なものは、常に非空間的であると仮定することが確実とは言いがたい。

4. 第一と第二の原因

118:4.1 (1298.1) 神学上の問題と必滅の人間の形而上学の板挟みの多くは、神格の人格についての人の配置の誤りと下位の神格への、そして進化する神格への無限と絶対の属性の結果として生じる課題によるものである。あなたは、本当に真の第一原因があるが、多くの対等かつ従属的原因、すなわち等位の、副次の原因も双方あるということを忘れてはいけない。

118:4.2 (1298.2) 第一原因と第二原因間の極めて重要な違いは、第一原因が、いかなる先行原因からのいかなる要素の継承とは無関係である独自の効果をもたらすということである。第二原因は、常に他の先行する原因からの継承を示す影響を与える。

118:4.3 (1298.3) 無条件絶対者に固有の純粋に静止した可能性は、楽園三位一体の活動によって生み出される神格絶対のそれらの原因に反応する。宇宙なる絶対者の臨場に際し、これらの原因となる含浸の静的可能性は、変化をも

たらすある種の、先験的媒体の影響に、そこから積極的で反応し易くなる。媒体の活動は、発展に向けての真の宇宙の可能性、つまり実現された成長に向けての能力へのこれらの起動された可能性の変化に至る。壮大な宇宙の創造者と支配者が宇宙進化の決して終わらない演劇を成立させるのは、そのような熟した可能性である。

118:4.4 (1298.4) 原因は、実存を除き、その基本的構成は三重である。それは、この宇宙時代と7超宇宙の有限段階に関係して作動しているように、次のように考えられるかもしれない。

118:4.5 (1298.5) 1. 静止した可能性の起動。無特性絶対者における、また無条件絶対者に、加えて、楽園三位一体の意志の命令に作用する神格絶対の活動による宇宙の絶対における将来の目標の構築。

118:4.6 (1298.6) 2. 宇宙能力の実現化。これは隔離され定義された計画への未分化の可能性の変換にかかわる。これは、神格の崇高性と先験的段階の多種多様の媒体の行為である。主たる宇宙全体の将来の必要性を完全に見越してそのような行為がある。それは、主たる宇宙の建築者達

は、宇宙の神格概念の紛れもない具体化として存在するという可能性の隔離に関係している。彼らの計画は、最後に主たる宇宙についての概念上の外周により空間的には限られているようであるが、計画としてその他の点では、時間、あるいは空間によって条件づけられてはいない。

118:4.7 (1298.7) 3. 宇宙現実の創造と進化。可能性を生産する神格の崇高性の臨場が可能性を創り出すと、を宇宙に用意ができると、崇高な創造者は、経験的現実へ熟した可能性を長期に渡り変化をもたらすために宇宙に働きかける。主たる宇宙の中での可能性のある現実の全実現化は、発展のための究極の能力により制限され、また出現の最終舞台において時空間に条件づけられている。楽園から出向く創造者の息子は、実際には、宇宙的意味合いにおいては変化させる創造者である。しかし、これは決して創造者としての創造者の息子ついての人の概念を無効にするものではない。有限の観点からは、創造者の息子は確かに、創造できるし、そうする。

5. 全能性と両立性

118:5.1 (1299.1) 神格の全能性は、できないことをする力を意味しない。時空間の枠内において、そして人間の理解の知的基準点からは、無限の神でさえ正方形の円を作成はできないし、本質的によい悪を産出することはできない。神は、神らしくないことを行なえない。哲学用語のそのような矛盾は、非実在に相当する物であり、このようにしては何も創造されないことを意味する。人格の特徴は、同時に神らしくあり、また神らしくないということはあり得ない。両立性は、神性の力に本質的である。そして、このすべてが、全能が本質をもつものをつくるだけでなく、万物の本質に起源をも与えるという事実に由来する。

118:5.2 (1299.2) 始まりにおいては父はすべてをするが、無限の意志と命令に対応して永遠の全景が展開するとき、創造物は、人間さえも、将来の目標完了の実現化における神の協力者になるということがいよいよ明らかになる。そして、これは生身の人生においてさえ真実である。人と神が協力関係に入るとき、いかなる制限もそのような協力関係の将来の可能性に置き換えられることはできない。人が、宇宙なる父は永遠の進行における自分の協力

者であると気づくとき、内住する父の臨場と融合するとき、精神的には、かれは、時間の枷を壊し、すでに宇宙なる父を求める永遠の進行を始めたのである。

118:5.3 (1299.3) 人間の意識は、事実から意味へと、そして価値へと進む。創造者の意識は、思考-価値から言葉の意味を経て、行動の事実へと進む。常に、神は、実存の無限に固有の絶対の統一性の行き詰まり状態を壊すために行動しなければならないのである。常に、神格は、すべての準神格の創造がそのために努力する原型の宇宙、完全な人格、最初の真実、美、善を提供しなければならない。常に、神は、後に神を見つけるかもしれない人間を最初に見つけるはずである。常に、宇宙の息子の資格とそれに伴う宇宙の兄弟愛が存在する以前に宇宙なる父がいるはずである。

6. 全能と万物の造出

118:6.1 (1299.4) 神は本当に全能であるが、万物を造出しない—為されるすべてを神自身が為すのではない。全能は、全能の崇高なものの力の可能性と崇高なるものを包含して

いるが、崇高な神の意志行為は、無限の神の個人的行為ではない。

118:6.2 (1299.5) 最初の神格の万物造出を提唱することは、行動をともにする創造的な仲間の他の様々な系列の無数の軍勢は言うまでもなく、100万近くの楽園の創造者の息子から権利を剥奪するに等しいであろう。全宇宙においてただ一つ自存の原因がある。他のすべての原因は、この1つの偉大なる第一根源と中枢の派生物である。そして、この哲学のいずれも、広大な宇宙に散在する無数の神格の子の自由意思に何の暴力も振るうものではない。

118:6.3 (1299.6) 局部的枠内で、意志は自存の原因として機能するように見えるかもしれないが、それは、絶えず独自の、本来の、そして絶対の第一原因との関係を確立する継承要素を示している。

118:6.4 (1299.7) すべての意志は相対的である。発生の意味の観点からは、父-私はあるだけが、意志の究極性を持っている。絶対の意味の観点からは、父、息子、精霊のみが、時間に無条件の、空間に無制限の意志の特権を示す。必滅の人間は、自由意志、選択力に恵まれており、

またそのような選択は絶対ではないものの、それは、有限段階においてどちらかといえば最終的であり、選択する人格の将来の目標に関係がある。

118:6.5 (1300.1) 絶対的なものに満たないいかなる段階の意志も、選択力を行使する他ならぬその人格で構成する限界にぶつかる。人は、選択可能である範囲を超えて選ぶことはできない。例えば、人間以上になることを選べることは別にして、人間以外であることは選べない。かれは、宇宙上昇の航海乗り出す方を選ぶことはできるが、これは、人間の選択と神性の意志が偶々この点で一致するからである。そして、息子が望み、父が願望することは、確かに起こるであろう。

118:6.6 (1300.2) 人間生活において、選択のある振る舞いの進路は、絶えず開閉しており、選択が可能である間、人間の人格は、これらの多くの行動方針のいずれかを絶えず決定している。俗世の意志は、時間に結び付けられており、また、それは、表現の機会を見つけるために時間の経過を待たなければならない。精霊的意志が、時間の枷からの解放を経験し始め、時間の連続からの部分的脱出

を成しとげ、そしてそれは、精霊的意志が、神の意志で自己確認しているからである。

118:6.7 (1300.3) 意志は、選択行為は、より高くより重要な選択に応じて実現された宇宙の枠内で機能しなければならない。人間の意志の全ての範囲は、1つを除いては厳密には有限にとって制限的である。人が神を見つけ、神に似ることを選ぶとき、そのような選択は、超有限である。ただ永遠だけは、この選択が、超準絶対であるかどうかを明らかにできる。

118:6.8 (1300.4) 神格の全能を認識することは、宇宙公民の経験における安全性の確保を楽しむこと、つまり、楽園への長い道のりにおける安全の保障を持つことである。しかし、万物造出の虚偽を受け入れるということは、汎心論の途方もない間違いを迎え入れることである。

7. 全知と宿命

118:7.1 (1300.5) 壮大な宇宙において、創造者の意志と創造物の意志の機能は、限界内において、主たる建築者達により確立された可能性に従って働く。これらの最大限度のこの約束事は、しかしながら、これらの境界内において、

創造物の意志の主権を少しも弱めない。究極の予知もまた—すべての有限の選択のための十分なゆとり—有限意志の廃止を構成しない。成熟し明敏な人間は、最も正確に一部の若い仲間の決定を予測できるかもしれないが、この事前情報は、その決定そのものの自由と真正さから何も奪わない。神は、未熟な意志の活動範囲を賢明に制限したが、それにもかかわらず、これらの明確な限界内の未熟な意志こそが真の意志である。

118:7.2 (1300.6) すべての過去、現在、未来の選択の崇高の相関関係でさえ、そのような選択の確実性を無効にしない。それは、むしろ、宇宙の運命づけられた趨勢を示し、また全現実の経験実現化の貢献部分になるかもしれない、もしくは、ならないかもしれない意志をもつもの達の予知を示唆する。

118:7.3 (1300.7) 有限の選択の際の誤りは、時間の拘束と制限である。それは、ただ時間の中に、そして崇高なるものの進化している臨場に限って存在することができる。そのような誤った選択は、時間的に可能であり、また、(崇高なものの不完全さの外に)現実との自由意志の接触に

よる宇宙進行を楽しむために未熟な生物に授けられなければならないあ一定の範囲の選択を暗示している。

118:7.4 (1301.1) 時間に条件づけられた空間における罪は、有限の意志の一時的解放を—認可さえも—明確に示している。罪は、宇宙公民の最高の義務と任務を認めることができない一方で、人格の比較的に自主の意志の解放に幻惑される未熟さを描写する。

118:7.5 (1301.2) 有限の領域での不正行為は、神未確認の全ての自己性の一時的現実を明らかにする。創造物は、単に神に確認されるようになる程度まで、宇宙において本当に本物になるのである。有限の人格は、自己創造ではないが、超宇宙の選択領域においては、それは将来の運命を自ら決定する。

118:7.6 (1301.3) 生命の授与は、物質-エネルギー・システムの永続、自己普及、そして自己適応を可能にする。人格の贈与は、生物に自己決定、自己進化、神格の融合精霊との自己同一化のさらなる特権を与える。

118:7.7 (1301.4) 人格より下位の生き物は、最初に物理的制御者として、次には補佐の心-精霊としてエネルギー物質を動かす心を示す。人格贈与は、父から来ており、生物系への選択の独特の特権を与える。しかし、人格には現実識別の意志の選択を行使する特権があり、そして、これが本当の自由の選択であるならば、そこで、進化する人格は、自己を混乱させ、自己を妨害し、自滅的になる可能性のある選択もまた持たなければならない。進化している人格が、有限意志の行使において本当に自由であるならば、宇宙自滅の可能性を避けることはできない。

118:7.8 (1301.5) それゆえ、存在の下級段階に渡って人格選択の範囲を狭くすることで増大された安全性がある。選択は、宇宙を昇るにつれますます自由になる。選択は、上昇する人格が、地位の神格、宇宙の目的への奉納の崇高さ、宇宙の知恵の到達成就、そして神の意志と神への道との自己同一化の終局性を達成するとき、やがては神性の自由に近づく。

8. 支配と総括的管理

118:8.1 (1301.6) 時空間の創造において、自由意志は、抑制で、つまり制限で束縛される。物質生命の進化は、最初は機械的であり、次には心により稼働され、そして(人格の贈与の後)、それは精霊に導かれるようになるかもしれない。棲息界の生物進化は、生命運搬者の最初の物理的生命着床の可能性によって物理的に制限される。

118:8.2 (1301.7) 人間は機械、生ける機械装置である。その根底は、本当にエネルギーの物質界にある。多くの人間の反応は、本質的には機械的である。人生の大部分は、機械のようなものである。しかし、人(機械装置)は、実に機械以上のものである。人には心が授けられ精霊が住んでいる。そして、その物質的生活全体においてその生存の化学的、電気的仕組みから決して逃げることはできないが、内住する思考調整者の精霊的な衝動の実行に人間の心を奉げる過程を経ることにより、ますます物理的生命の機械を経験からくる行為指示型の知恵に従属させる方法を学ぶことができる。

118:8.3 (1301.8) 精霊は、意志の機能を自由にし、身体的な機能は、それに制限をかける。不完全な選択は、不制御の身

体的機能、いない同一化して精霊は、危険で不安定である。機械的支配は、進歩を犠牲にして安定性を保証する。精霊の同盟は、選択を物理的段階から解放すると同時に、増大された宇宙洞察とさらなる宇宙理解により生み出される神の安定性を保証する。

118:8.4 (1302.1) 人生の機械装置の枷からの解放を達成する際の創造物を取り巻く大きな危険は、かれは、精霊との仕事上の円滑な関係をもたらすことにより安定性のこの損失を埋め合せる。創造物の選択は、　機械の安定性から比較的解放されるとき、より偉大な精霊同一化の如何にかかわらず一層の自己解放を試みるかもしれない。

118:8.5 (1302.2) 生物進化の決定的原則は、原始人にとり、克己の何か大きい特質をもって棲息界に登場することを不可能にする。したがって、同様に進化を目標としたある同じ創造的な下絵は、時間と空間、飢餓と恐怖、そのような無教育な創造物の準精霊の選択範囲を制限するそれらの外部的抑制を提供する。また、人の心が、ますます難しい障害を首尾よく乗り越えるにつれ、この同じ創造的な下絵は、言い換えれば、痛々しく得た経験上の知恵の

人種的な遺産の緩やかな蓄積にも備えてきた。減少する外部の抑制と増大する内部の抑制の間の調整維持のために。

118:8.6 (1302.3) 進展、つまり人間の文化的進歩の緩慢さは、進歩の危険な速度を遅らせるために非常に効果的に機能するその歯止め—物質的惰力—の効果を立証する。したがって、時間自体は、さもなければ致命的結果を人間の行動に対する次に取り囲む障害からの時期尚早の逃避から保護し、分配するのである。文化が過度に早く進む時のために、物質的達成が、崇拝知恵の進化を上まわるとき、そのときこそ、文明は、それ自体に後退の種子を含んでいるのである。そして、経験上の知恵の迅速な拡大によって支えられない限り、そのような人間社会は、高度ではあるが時期尚早の段階の到達からは退くであろうし、知恵の空白期間の「暗黒時代」は、自己解放と自制の間の不均衡の容赦ない回復を証明するであろう。

118:8.7 (1302.4) カリガスティアの重大な不正は、進歩的な人間の解放の時間の調速機の迂回—障害阻止不要の破壊、バリアを制止する必要のない破壊、それらの時代の人間の

心が、経験上優位に立つことがなかった障害—であった。

118:8.8 (1302.5) 時間と空間の部分的な短縮をもたらすことのできるその心が、他ならぬこの行為により克服された抑制の障害の代わりに効果的に役立つことのできる知恵の種子を保有するそれ自体を立証する。

118:8.9 (1302.6) ルーキフェレーンスは、同様に地域体制における時期尚早のある種の特権到達への抑制において機能する時間の調速機を同様に混乱させようとした。光と生命に定着した1地域の体制というものは、まさしくその領域の定着時代以前に崩壊的、破壊的である多くの方法の活動を可能にするそれらの観点と洞察を経験上実現した。

118:8.10 (1302.7) 人が恐怖の枷を払いのけるにつれ、機械で陸と海に架橋をし、記録で世代と世紀に橋を架けるにつれ、かれは、人間の広がり行く知恵の道徳上の命令に従って新しく、しかも自発的に想定された抑制をそれぞれの超えた抑制に代入しなければならない。これらの自主規制は、人間文明のすべての要因で最も強力で、最も希

薄なもの—正義の概念と兄弟愛の理想の概念—の双方である。思い切って仲間を愛するとき、人は、慈悲の抑制する衣に相応しい自らに資格を与えさえしてそして、自身に与えられるその扱いを仲間に与えることを選ぶとき、神がかれらに与えるであろうと想像するその扱いの程度にまで精霊的な兄弟愛の始まりを達成する。

118:8.11 (1303.1) 自動的な宇宙の反応は、何らかの形において、安定しており、宇宙で継続している。神を知りその意志をすることを望む、つまり精霊の洞察力を持つ人格は、神のように安定しており永遠に存在する。宇宙での人の大冒険は、機械的静止の安定性から精霊的原動力の神格への人間の心の通過にあり、「あなたの意志がなされることが私の意志である」と宣言するそれぞれの人生の立場における自身の人格決定の力と恒久性によるこの変化を成し遂げる。

9. 宇宙の仕組み

118:9.1 (1303.2) 時間と空間は、主たる宇宙の結合された仕組みである。時間と空間は、それによって有限の創造物が無限者と宇宙での共存が可能にされる工夫である。有限の

創造物は、時間と空間により絶対段階から効果的に分離される。しかし、それなくしてはいかなる人間も存在できないこれらの分離媒体は、有限の行為の範囲を制限するために直接機能する。かれらななしで創造物は行動できなかったが、さりとて、かれらにより、あらゆる創造物の行為は、確実に制限されるのである。

118:9.2 (1303.3) より高度の心によりもたらされる仕組みは、創造的な源を解放するが、すべての下位の有識者の行為をある程不変に制限する。宇宙の創造物にとってこの制限は、宇宙の機構として明らかになる。人には束縛のない自由な意志はない。選択の範囲には限界があるが、この選択の半径内では、その意志は、相対的に非常に優れている。

118:9.3 (1303.4) 人間の人格の生命構造、つまり人体は、超人間の創造的な下絵の産物である。したがって、人自身は決してそれを完全に制御することはできない。上昇する人間が、融合された調整者との連携において、人格表現のための仕組みを自己創造するときに限り、完成された仕組みの支配を達成するのである。

118:9.4 (1303.5) 壮大な宇宙は、機械的であると同時に有機的である、つまり機械的であり、生きている。崇高な心により稼働され、崇高な精霊と調整し、崇高なるものとしての力と人格の統一の最上段階における発見表現の生ける仕組みである。しかし、有限創造の仕組みを否定することは、事実を否定し、現実を無視することである。

118:9.5 (1303.6) 仕組みは、心の産物であり、宇宙の可能性に働きかけ、またその中で作用している創造的な心である。仕組みは、創造者の考えの固定的結晶化であり、結晶化に与える意志の概念に誠実に常に機能する。しかし、いかなる仕組みの目的もその機能にではなく、その原点にある。

118:9.6 (1303.7) これらの仕組みは、神格の活動を制限すると考えられるべきではない。むしろ他ならぬこれらの仕組みにおいて、神格が、永遠の表現の1局面を達成したというのは本当である。宇宙の基本的仕組みは、第一根源と中枢の絶対の意志に応じて生まれたのであり、したがって、かれらは、無限者の計画との完全な調和で永遠に機

能するであろう。実に、仕組みは、他ならぬその計画の無意志の型なのである。

118:9.7 (1303.8) 我々は、楽園の仕組みが、どのように永遠なる息子の人格に関連している何かを理解している。これは、結合活動者の機能である。そして、我々には、無条件の理論的な仕組みと神格絶対者の可能性に関して宇宙なる絶対者の働きに関する見解がある。しかし、我々は、進化している崇高なものの神格と究極なるものの神格に関して、ある無人格の局面が、実はそれぞれの意志の対応者と結合されていると観測するし、そしてこのように、型と人との新しい関係が進化している。

118:9.8 (1304.1) 過去の永遠において父と息子は、無限の精霊の表現の統一に結合を見出した。もし、未来の永遠において、時間と空間の地方宇宙の創造者の息子と創造の精霊が、外部空間の領域で創造的統一に達するならば、それらの統一は、それぞれの神性本質の結合的表現として何を創造するのであろうか。それは、我々が、究極なる神格、つまり新型の超宇宙行政者のこれまで非啓示の顕現を目撃するということであろう。そのような存在は、人

格の創造者、無人格の創造の精霊、必滅の創造物の経験、神性聖職者の進歩的人格化の統一であるので人格の独自の特権を迎え入れるであろう。そのような存在は、人格と無人格の現実を迎え入れるという点で究極であり得るかもしれないが、同時にそれらは、創造者と創造物の経験を結合するであろう。外部空間創造のこれらの仮定される機能をする三位一体のそのような第三者の属性が何であろうとも、かれらは、無限の精霊が、宇宙なる父と永遠なる息子にする関係を彼らの創造者たる父と創造の母に対する同じ関係についての何かを維持するであろう。

118:9.9 (1304.2) 崇高な神は、すべての宇宙経験の人格化、すべての有限進化の集中化、すべての創造物現実の最大化、宇宙に関する知恵の成就、時間の星雲の調和的美の具体化、宇宙の心の意味の真実、精霊の最高の価値の善である。そして、崇高な神は、ちょうど、今、楽園の三位一体の絶対段階において実存的に統合されているように、永遠の未来において、これらのさまざまな有限の多様性を経験上意味深長な1つの全体に組成するであろう。

10. 摂理と機能

118:10.1 (1304.3) 神意は、神が我々のために万物についてあらかじめ決めたということを意味しない。それは、宇宙専制も同然であり、神はそれができないほどに我々を愛している。人には、相対的選択力がある。神の愛は、人の子を過保護にし、甘やかすような近視眼的愛情でもない。

118:10.2 (1304.4) 父、息子、精霊は、—三位一体としての—全能の崇高なものではないが、全能の崇高性は、それらをなくしては明らかにし得るはずがない。全能の成長は、現実の絶対者に集中され、可能性の絶対者に基づく。しかし、全能の崇高なものの機能は、楽園の三位一体の機能に関連している。

118:10.3 (1304.5) 崇高なるものに、宇宙活動の全局面が、この経験的神格の人格により部分的に再結合されているようである。したがって、我々は、三位一体を一柱の神と見ることを望むし、また現在知られている、しかも組織化された壮大な宇宙にこの概念を制限するならば、我々は、進化している崇高なるものが楽園の三位一体の部分的肖像画であるとということを発見する。その上、我々

は、この崇高な神格が、壮大な宇宙の有限物質、心、精霊の人格統合として進化しているということにさらに気づく。

118:10.4 (1304.6) 神には属性があり、三位一体には機能があり、そして、三位一体のように神意には、宇宙の中の宇宙の人格以外の調整の合成物である機能が、すなわち、全能者の力でにおいて七重者の統合する進化段階から神格の崇高性の先験的領域まで広がる機能がある。

118:10.5 (1304.7) 神は、子供としてそれぞれの創造物を愛しており、その愛は、すべての時間と永遠にわたりそれぞれの創造物を覆う。神意は、全体に関わって機能し、そのような機能が全体に関連があり、どんな創造物の機能にも対応する。いかなる存在に関する神意の介入も、何らかの全体の進化の成長についてはその存在体の機能の重要性を暗示している。そのような全体は、全人種、全国家、全惑星、またはより高度の全体でさえあるかもしれない。それは、人としての創造物の重要性ではなく、神意の介入を引き起こす創造物の機能の重要性である。

118:10.6 (1305.1) それにもかかわらず、人としての父は、全く神の意志に基づき、神の叡知と協和し、神の愛に動機づけられるように宇宙の出来事の流れの中にいつでも父親らしい手を差し挟む。

118:10.7 (1305.2) しかしながら、人が神意と呼ぶものは、あまりにしばしば人自身の想像、機会の状況の偶然の並列、の産物である。しかし、宇宙存在の有限の領域には、真の、現れつつある神意、空間のエネルギーの本当の、実現しつつある相関関係、時間の動き、知性の思考、性格に関する理想、精霊の本質の願望、進化する人格の目的ある意志行為がある。物質の領域の状況は、崇高なものと究極なるものの連動する臨場において最終的な有限統合を得る。

118:10.8 (1305.3) 壮大な宇宙の仕組みが、心の調整を通して最終的な精度の点にまでに仕上げられにつれ、また創造物の心が、完成された統合を通して精霊と共に神格到達の完全性に昇るにつれ、そして、崇高なものが、すべてのこれらの宇宙現象の実際の統一者として現れるにつれ、神意もますます認識できるようになるのである。

118:10.9 (1305.4) 時おり進化の世界で広まっている驚くほどに偶然の状況のいくつかは、崇高なものの徐々に現れる臨場のため、すなわち、今後の宇宙活動の前触れのためかもしれない。人間が神意であると呼ぶもののほとんどが、そうではない。そのような問題についての人間の判断は、生活情況の真の意味対して先見の明のある洞察力の欠如により、非常に障害となる。人間が幸運と呼ぶものは、本当は不運であるかもしれない。不相応な余暇と値しない富を与える幸運の女神の微笑は、人間の最大の苦悩であるかもしれない。一部の苦しんでいる人間に苦難を積み上げる片意地な運命の明らかな残酷さは、実は未熟な人格の軟鉄を真の個性の鍛えられた鋼に変形する焼き戻しの炎であるかもしれない。

118:10.10 (1305.5) 進化する宇宙には神意があり、それは、進化する宇宙の目的に気づく能力に達したというまさにその程度にまで創造物により発見される得る。宇宙の目的を明察する完全な能力は、創造物の進化の成就に等しく、さもなければ、不完全な宇宙の現状の範囲内で崇高なものの到達として別の方法で表現されるかもしれない。

118:10.11 (1305.6) 父の愛は、他のすべての個人の行為あるいは反応に関係なく個人の胸の中で直接働く。関係は、個人的である—人と神。神格の無人格 (全能の崇高なものと楽園の三位一体)は、部分にではなく、全体に配慮する臨場。崇高性の調整の神意は、宇宙の連続部分が、有限の将来の目標到達において進歩するにつれ、ますます明らかになる。崇高なものは、体系、星座、宇宙、超宇宙が、光と生命に定着するにつれ、発散するすべての重要な相関者として次第に現れ、一方、究極なるものは、万物の先験的統一者として徐々に現れる。

118:10.12 (1306.1) 進化の世界の始めまりにおいて、物質系列の自然の出来事と人間の個人的願望は、しばしば対立しているように見える。進化する世界で起こる多くは、必滅の人間にとりかなり理解し難い—自然の法則は、人間の理解において真実で、美しく、善であるすべてにしばしば明らかに残酷であり、無情であり、無関心である。しかし、人類が惑星の進行において進歩するとき、我々は、この視点が、次の要因によって変更されることを目にする。

118:10.13 (1306.2) 1. 人の拡大する洞察力—かれが生きる世界についての増大する理解。時間の物質的事実、思考に関する重要な考え、精霊的な洞察の価値ある理想を理解するための拡大する能力。物質的性質の物差しだけで測定する限り、人は、時間と空間に統一を見つけることは決して望めない。

118:10.14 (1306.3) 2. 人の拡大する支配—物質界の法則に関する知識、精霊存在の目的、そしてこれらの2つの現実の哲学的調整の可能性に関する段階的な蓄積。人は、未開人は、自然の力の猛攻撃の前に無力であり、自身の内面の恐怖の残酷な支配の前に卑屈であった。半文明人は、自然の領域の秘密の倉庫を開錠し始めており、その科学は、ゆっくりではあるが有効に自身の迷信を破壊しており、同時に、哲学の意味と真の精霊的経験の価値の理解のために新たで、拡大した事実を根底におく基礎を提供する。人は、文化的であるものは、そのうちに、その惑星の物理的力の相対的支配を達成するであろう。その胸の内の神への愛は、同胞への愛として効果的に流出されるであろうし、同時に、人間生活の価値は、人間の可能性の限界に近づいているであろう。

118:10.15 (1306.4) 3.人の宇宙統合—人間の洞察力の増進、くわえて人間の経験の業績の増加は、人に崇高性の統一的臨場—楽園の三位一体と崇高なるもの—とのより厳密なさらなる調和をもたらす。。そして、これは、長い間光と生命に定着した世界での崇高なものの主権を確立することである。そのような高度に進んだ惑星は、実に調和の詩、つまり宇宙の真実の追求を通して獲得した善からくる美の絵である。そして、もしそのようなことが惑星に起こり得るならば、それらも、有限の成長にむけての可能性の枯渇を示す定着にいたるときに、より大きなことが、壮大な宇宙の体系とより大規模な部隊に起こり得る。

118:10.16 (1306.5) この進化した系列の惑星において神意は、現実になり、生活情況は相互に関連してはいるものの、これは、単に人がその世界の物質的問題を支配するようになったからではない。それは、人が宇宙の趨勢に従って生き始めたからでもある。人は、宇宙なる父の到達への崇高性の経路に続く。

118:10.17 (1306.6) 神の王国は人の胸中にあり、この王国が、世界のあらゆる個人の胸中で現実となるとき、そのとき神の法則は、その惑星で現実となったのである。そして、これは崇高なるものの獲得した主権である。

118:10.18 (1306.7) 時間の領域において神意に気づくには、人は、完全性実現の課題を達成しなければならない。しかし人は、万物が善、あるいは悪であることにかかわらず、すべてのものの父を求める自らの探索において神を知る人間の前進のために共に働いているという宇宙事実を熟考するにつれ、今でも、その永遠の意味におけるこの神意を前もって味わうことができる。

118:10.19 (1306.8) 神意は、人が物質段階から精霊段階へと上に達するにつれ、ますます認識できるようになる。完成された精霊的洞察の達成は、上昇する人格にそれ以前は混沌であったものに調和を探知することを可能にする。モロンチアのモタさえこの方向の真の進歩に至る。

118:10.20 (1307.1) 神意は、幾分かは、不完全な宇宙に表される不完全な崇高なものの婉曲的支配であり、それは、したがって次の通りであるに違いない。

118:10.21 (1307.2) 1. 部分的である—崇高なるものの実現化の不完全性故に、そして、

118:10.22 (1307.3) 2. 予測不可能である—創造物の態度における変動の結果、それは、段階により常に異なり、その結果、崇高なものにおける明らかに可変な相互的対応を引き起こすが故に。

118:10.23 (1307.4) 人が、生活情況への神の介入を祈願するとき、しばしば、祈りのへ答えは、生活に対する自身の変えられた態度である。しかし、神意は気紛れではなく、空想的でも、魔力でもない。それは、有限宇宙の強力な主権者の緩慢で確かな出現であり、進化する創造物はその宇宙進行においてその主権者の厳然たる臨場を時おり探知する。摂理は、永遠の目標、すなわちまず崇高なもの、そして究極なるものと、ことによると絶対者の中の目標に向けての空間の銀河と時間の人格の確実で確かな行進である。そして、無限の中に、我々は、同じ摂理があると信じるし、そして、これが、宇宙に宇宙の中の宇宙の全景にこのように動機づけしている楽園の三位一体の意志であり、行動であり、目的である。

118:10.24 (1307.5) [ユランチアに一時的に滞在する強力な使者による後援]

論文 119
キリスト・マイケルの贈与

119:0.1 (1308.1) ネバドンの宵の明星の長官は、すなわち私は、ネバドンのマイケルである宇宙なる君主の7贈与の物語を明らかにする任務にあるガブリエルによりユランチアに配属されたもので、名前はギャヴァーリアである。この発表に当たり、その任務に課された制限を厳守するつもりである。

119:0.2 (1308.2) 贈与の特質は、宇宙なる父の楽園の息子に固有である。自分達の下位の生物の生活経験に近づくという願望において、楽園の息子の様々な系列は、楽園の両親の神の性質を反映している。時間と空間からのグランドファンダと最初の巡礼者の上昇期間に、楽園三位一体の永遠なる息子は、ハヴォーナの７回路に自分を７度与えてこの贈与の実践で先頭に立った。そして、永遠なる息子は、マイケルの息子とアヴォナルの息子という代表者達を介して空間の地方宇宙に自分を贈与し続ける。

119:0.3 (1308.3) 永遠なる息子が計画された地方宇宙に創造者の息子を贈与するとき、その創造者の息子は、彼の7つの創造物の贈与が、首尾よく成就され、そして管轄の超宇宙の日の老いたるものに保証されるまで、新たな創造の完全主権を握らないという永遠の三位一体への厳粛な誓いを含むその新宇宙の完成、支配、平静さへの完全な責任を負う。この義務は、宇宙の組織と創造に従事するために楽園から出かけることを志願するそれぞれのマイケルの息子が引き受ける。

119:0.4 (1308.4) これらの創造物の肉体化の目的は、そのような創造者が賢明で、同情的で、廉直で、しかも理解ある主権者になることを可能にする。これらの神性の息子は、当然公正であるのだが、連続するこれらの贈与経験の結果として、理解をもって慈悲深くなる。息子達は当然慈悲深いのであるが、これらの経験が、新たで付加的方法でそれらを慈悲深くする。これらの贈与は、神性の正義と公正な判断によって地方宇宙を統治する崇高な任務のための教育と訓練における最終的段階である。

119:0.5 (1308.5) これらの贈与により影響を受けたり利益を得る宇宙有識者の異なる系列はもちろん、様々な世界、体系、星座に多数の付帯的利益が生まれるが、それでも、贈与は、そもそも創造者の息子自身の個人的な訓練と宇宙教育を終了するように計画されている。これらの贈与は、地方宇宙の賢明、公正、かつ効率的管理に不可欠ではないが、様々な生命の型と知的ではあるが不完全なその無数の生物に満ち溢れているそのような創造における偏りのない、慈悲深い、しかも理解ある管理に絶対に必要である。

119:0.6 (1308.6) マイケルの息子らは、かれらが創造したさまざまの系列や存在体に対する十分かつ公正な共感をもって宇宙組織の仕事を始める。息子らは、これらの総ての異なる創造物に多大の慈悲を持ち、誤りの、そして利己的な創造の泥濘にもがく者達を哀れみさえする。しかし、公正と正義のそのような贈与は、日の老いたるものの評価においては十分ではないであろう。超宇宙のこれらの三位一体の支配者は、それらの存在の環境において、またまさに生物自身として実際の経験を通して自身の生物の視点を本当に習得するまで、創造者の息子が、宇宙君

主として決して認知しないであろう。この方法で、そのような息子らは、知力の優れた理解ある支配者になる。かれらは、自身が宇宙の権限で支配し、行使する様々な集団を知るようになる。生きた経験により、かれらは、経験上の生物の存在から生じる実際的な慈悲、公正な判断、忍耐を収得する。

119:0.7 (1309.1) ネバドンの地方宇宙は、自身の贈与の奉仕を完了した創造者の息子が現在統治されている。かれは、進化し完成しつつあるその宇宙の広大な全領域を公正で慈悲深い崇高性で統治している。ネバドンのマイケルは、時間と空間の宇宙の永遠なる息子の611,121回目の贈与であり、およそ4千億年前にあなたの地方宇宙の組織化を始めた。マイケルは、10億年前、ユランチアがその現在の型をとりつつあったその頃に最初の贈与冒険に備えた。その贈与は、およそ1億5,000万年の間隔で起きており、最後の贈与は、1,900年前にユランチアでなされた。私は今、これらの贈与の性質と特徴を私の任務の許す限り詳細に述べよう。

1. 第一の贈与

119:1.1 (1309.2) 召集されたネバドン宇宙の複数の管理者と長官達が、明かされてはいない任務でマイケルが不在の間、兄イマヌエルが、まもなく、ネバドンで権限を引き受けるとの発表を聞かされたのは、およそ10億年前のサルヴィントンでの厳粛な出来事であった。星座の父への送別の放送を除き、この対応に関し他には何の発表もされなかった。数ある指示の中で、「そして、この期間、私は楽園の父の言いつけを果たしに行く間、イマヌエルの世話と保護の下にあなた方を置く。」とマイケルは言った。

119:1.2 (1309.3) この送辞の放送後、マイケルは、単独で来たことを除いてはちょうど以前何度となくユヴァーサ、あるいは楽園に向け出発準備をした時のようにサルヴィントンの派遣専用場所に現れた。次の言葉で出発の声明を締めくくった。「ほんの短い間、あなたを置いて行く。あなた方の多くが共に行くことを望んでいるということを知っているが、私の行くところへあなた方は来ることはできない。私がしようとしていることはあなた方にはできない。私は楽園の神格の意志をしに行き、任務を終え、この経験をしたとき、あなた方の中の自分の場所に

戻るつもりである。」このように話し終えネバドンのマイケルは、集合した全員の視界から消え、標準時間で20年間、二度と現れなかった。全サルヴィントンで神性聖職者とイマヌエルだけが、起こりつつあることを知っており、日々の和合のものは、宇宙の最高責任者のガブリエル、すなわち輝く明星とだけ自分の秘密を共有した。

119:1.3 (1309.4) サルヴィントンの全住民と星座本部と体系本部の世界に住む者達は、創造者の息子の任務と所在について何らかの知らせを受けることを望み、宇宙情報のために各受信拠点周辺に集合した。マイケル出発後の３日目まで、何の重要な報告も受けられなかった。この日、一通信がメルキゼデク圏、すなわちネバドンのその系列本部からサルヴィントンに届けられ、この並はずれた、しかも以前には決して聞かれたことのない業務が記録された。「本日正午、見馴れないメルキゼデクの息子が、我々に属してはいないが、完全に我々の系列のような者が、この世界の受信専用場に現れた。かれは、メルキゼデクのこの新たな息子が、我々の系列に受け入れられ、ネバドンのメルキゼデクの非常時の勤務に配属されるよう指示をする日の老いたるものからの、加えてサルヴィ

ントンのイマヌエルの同意を得た信任状をユヴァーサから携え、我々の長官宛ての命令を提示した単独の全天使を一名伴った。そして、それはその通りに命令され、それは為された。」

119:1.4 (1310.1) これが、最初のマイケルの贈与に関するサルヴィントンの記録に現れるすべてに関するものである。それ以上は、ユランチア時間の100年後まで、マイケルの帰還の事実と宇宙業務の指揮についての通告なしの事実が記録されるまで、何も現れていない。しかし、不慣れな記録、その時代の非常時の軍団のこの他とは異なるメルキゼデクの息子の勤務についての詳説が、メルキゼデク界に見つけられる。この記録は、現在父メルキゼデクの自宅の前景を占める簡素な寺院に保持されており、宇宙非常時の24件の任務に関するこの一時的なメルキゼデクの息子の勤務についての物語を包括している。そして、私がつい最近見直したこの記録は、次のように終わる。

119:1.5 (1310.2) この日の正午、事前の発表はなく、わずか３名の同胞の立ち会いで、我々の系列のこの訪問中の息子

は、来た時のように単独の全天使に伴われ、我々の世界からいなくなった。そして、この記録は、この訪問者が、メルキゼデクとして生き、メルキゼデクの姿でメルキゼデクとして働いたという証明で現在閉じられており、また、我々の系列の非常時の息子としてその義務を忠実に果たした。非常時の息子は、その無比の知恵、崇高の愛、本分への見事な献身により我々の愛と崇敬を得て、全世界の同意を得て、メルキゼデクの長官となった。かれは、我々を愛し、理解し、我と共に役目を果たしたし、また、我々は、いつまでも、彼の忠実で熱心なメルキゼデクの仲間である。これゆえに、我々の世界のこの見知らぬ者は、いま、永遠にメルキゼデクの本質をもつ宇宙の公使となった。」

119:1.6 (1310.3) これが、マイケルの最初の贈与について私があなたに伝えることを許された全てである。我々は、もちろん、10億年前にとても不可思議にメルキゼデクとともに尽くしたこの見知らぬメルキゼデクが、最初の贈与の任務での肉体化したマイケル以外の何者でもないことを完全に理解している。記録は、この無類で腕利きのメルキゼデクがマイケルであったとは明確に述べてはいない

が、彼であったと一般に信じられている。おそらく、その事実についての実際の記述は、ソナリントンに関する記録の外には見つけることはできないし、その秘密の世界についての記録は、我々に公開されてはいない。肉体化と贈与の神秘は、神性の息子のこの神聖な世界にだけ完全に知られている。我々は皆、マイケル贈与の事実を知っているが、それらがいかに行われているかについては理解していない。我々は、宇宙の支配者、メルキゼデクの創造者が、そのように突然に、しかも不思議なことに彼らのうちの１名として加えられ、100年間メルキゼデクの息子として彼らの間で生きて、働くことができるかについては知らない。だが、それは起きた。

2. 第2の贈与

119:2.1 (1310.4) マイケルのメルキゼデク贈与後のほぼ1億千万年の間、星座37の体制11において問題が生じ始めたとき、ネバドンの宇宙においては全てが順調に進んでいた。この問題は、ラノナンデクの息子、すなわち体制君主の誤解により生じ、そしてそれは、星座の父が裁き、日々の忠誠なるもの、つまりその星座への楽園の相談役が承認したが、異議を申し立てをしている体制君主は、

その裁定に完全には甘んじてはいなかった。100年以上の不満の後、体制君主は、かつてネバドンの宇宙で扇動した創造者の息子の主権に対し最も広範囲の、しかも悲惨な反逆の一つへと、すなわち、かなり以前にユヴァーサの日の老いたるものの行動により裁決され終結された反逆へとその仲間を導いた。

119:2.2 (1311.1) この反逆心のある体制君主ルテンチアは、ネバドン標準時間の20年以上自分の本部惑星に君臨した。そこでいと高きものは、ユヴァーサからの承認でルテンチアの隔離を命じ、また棲息界の不和で引き裂かれ混乱したその体制の方向づけを引き受けるために新しい体制君主の指名をサルヴィントンの支配者に依頼した。

119:2.3 (1311.2) 同時に、サルヴィントンでのこの要請の受理とともに、マイケルは、「楽園の父の言いつけを実行する」目的のために宇宙本部を留守にするという意向の二度目の希な宣言を始めた。「しかるべき時機が来れば戻る」と約束し、楽園の兄であるイマヌエル、日々の和合のものに全権を託した。

119:2.4 (1311.3) それからマイケルは、メルキゼデクの贈与に関わる出発時点で観測された同じ方法で再び本部圏から離れた。この説明のない暇乞いの3日後、新入りの、知られていない1構成員は、ネバドンの第一ラノナンデクの息子達の予備兵団に現れた。この新しい息子は、新主権者の任命を待つ体制君主の代理として完全な権限をもち、退位させられたルテンチアの後継者として星座37、体制11に配属を命ずるイマヌエルの認証を受け、ユヴァーサの日の老いたるものからの信任状を持つ単独の第三天使に伴われ、通告なく正午に現れた。

119:2.5 (1311.4) 宇宙時間の17年間以上、この馴染みのない、知られていない一時的な支配者は、賢明に困難を処理し、混乱し、風紀の乱れたこの地方体制の政を執った。どの体制君主も、切に愛されたり、広く敬服されたり、また尊重されることは、決してなかった。正義と慈悲とを持って、この新任の支配者は、労を惜しまず全ての臣下の世話をしつつ、不穏な体制の治安を回復し、反逆的な前任者にさえ、その無分別をイマヌエルに謝りさえすれば、体制の権力を共有する恩恵を申し出さえした。しかし、ルテンチアは、この新しい、見知らぬ体制君主が、

つい最近自分が拒んだ他ならぬその宇宙支配者であるマイケルそのものであることをよく承知していたので、これらの慈悲の申し出を拒絶した。しかし、何百万人もの誤って導かれ、欺かれた追随者は、パロニア体制の救世君主としてその時代に知られていたこの新支配者の許しを受け入れた。

119:2.6 (1311.5) 次に、職を追われたルテンチアの永続的後継者として宇宙当局が新たに任命した体制君主が到着する重大な日がやって来て、全パロニアが、ネバドンがそれまでに知る最も高潔で最も親切な体系支配者の出発を悲しんだ。体系支配者は、すべての体系で慕われ、ラノナンデクの息子の全集団の団員に崇敬された。体系支配者の出発は、儀式張らないものであった。体系本部を去るに当たり、すばらしい祝賀の手配がされた。道を誤ったその前任者でさえこの伝言を送った。「総てにおけるあなたの流儀は、なんと正当で公正であることよ。私は楽園支配に対し拒絶を続けるが、あなたが正当で慈悲深い行政者であることを認めずにはいられない。」

119:2.7 (1312.1) 次いで、反逆体制のこの一時的な支配者は、行政上の短期滞在の惑星から離れ、その後3日目に、マイケルは、サルヴィントンに現れ、ネバドン宇宙の指導を再開した。すぐに、マイケルの主権と権限に関わる躍進的管轄権について、ユヴァーサの第三の宣言が、続いた。最初の宣言は、マイケルのネバドン到着時点に、2番目はメルキゼデク贈与の完了直後に発表され、今、3番目が、2番目の任務、つまりラノナンデクの任務終了に際し続く。

3. 第3の贈与

119:3.1 (1312.2) サルヴィントンの最高協議会は、星座61、体制87、惑星217における生命運搬者からの物質の息子の援助派遣要求につての検討をちょうど終えたところであった。現在この惑星は、別の体系君主が、道をはずした棲息界の一体系に位置しており、全ネバドンでそのような反逆は、その時までに2度目であった。

119:3.2 (1312.3) マイケルの要求に応じて、この惑星の生命運搬者の陳情に対する処分は、イマヌエルと彼の報告と考察の提出を待って延期された。これは不規則な手順であっ

たし、私は、我々全員がいかに何か珍しいものを予期していたかをよく覚えており、我々は、長らく気を揉むことはなかった。マイケルは、宇宙の指揮をイマヌエルに託し、一方ガブリエルに天の勢力を任せ、このように自分の行政責任を整理し、宇宙の母なる精霊に別れを告げ、前の2件の出来事のようにサルヴィントンの派遣専用場から姿を消した。

119:3.3 (1312.4) そして、予想されていたかもしれないように、第61星座、第87体系の本部世界に、単独の第二熾天使に伴われ、ユヴァーサの日の老いたるものに信任され、サルヴィントンのイマヌエルに認証された見知らぬ物質の息子が、その後3日目に発表なしに、現れた。すぐに、代理体制君主は、この新入りの、謎の物質の息子を第217世界の代理惑星王子に任命し、この指名は直ちに第61星座のいと高きものに承認された。

119:3.4 (1312.5) こうして、この類まれな物質の息子は、惑星時間でまる1世代のために単独で働き、外の宇宙との何の直接的通信のない窮地にたつ体系に位置する分離と反逆の隔離された世界における難しい経歴を始めた。この非

常時の物質の息子は、不履行の惑星王子とその全部下に悔悟と教化をもたらし、地方宇宙に確立したように楽園支配への惑星の忠誠的奉仕の回復を目撃した。やがて、物質の息子と娘が再生され回復された世界に到着し、また目に見える惑星の支配者として正式に任命されたとき、一時的、あるいは非常時の惑星王子は、正式の休暇をとり、ある日の正午に姿を消した。その後3日目に、マイケルは、サルヴィントン自分のいつもの場所に現れ、まもなく宇宙放送は、ネバドンでのマイケルの主権の一層の前進を発表する日の老いたるものの4回目の宣言を伝えた。

119:3.5 (1312.6) 私は、この物質の息子が、忍耐、不屈、技能でこの混乱状態の惑星において苦しい状況に対処したことを語る許可がないことを残念に思う。この孤立した世界の開発は、全ネバドンの救済年代記で最も美しく感動的な一章である。この任務終了までには、何らかの最愛の支配者が、下位の系列の知力ある存在体の型に似せてたび重なるこれらの贈与に従事することを選んだ理由に関して全ネバドンに明白となった。

119:3.6 (1313.1) メルキゼデクの息子として、それからラノナンデクの息子として、次には、物質の息子としてのマイケルの贈与のすべては、　相等しく謎めいており、説明しかねる。マイケルは、各事例において突如として、そして、完全に贈与集団の開発された個人として現れた。そのような肉体化の神秘は、ソナリントンの神聖な圏に関する記録の側近集団に近づく手段を持つ者達を除いては決して知られないであろう。

119:3.7 (1313.2) いまだかつて、孤立と反逆の世界の惑星王子としてのこの驚くべき贈与以来、ネバドンのいずれの物質の息子、または物質の娘も、各自の課題に対する不満、あるいは、その惑星任務の困難の粗探しの気持ちを持ったことはなかった。物質の息子達は、ちょうど、自分達が試され吟味されたように、宇宙の創造者の息子が、「すべての点において試され、吟味された。」者である理解ある君主と同情的な友人をもっているということをいつまでも知っている。

119:3.8 (1313.3) 宇宙起源のすべての天の知力ある者達の間に、奉仕と忠誠の拡大する時代が、これらの任務の一つ一つ

の後に続き、後の各贈与時代が、宇宙行政のすべての方法と政府のすべての手法による進歩と改善で特徴づけられていた。この贈与以来、かつて、どの物質の息子、または娘もマイケルに反逆して意図的に参加することはなかった。かれらは、マイケルを意識して拒絶するにはあまりにも献身的に愛し尊敬している。より高度の反逆的人格の型が、詐欺と詭弁だけによりその後のアダーム一家を惑わしたのであった。

4. 第4の贈与

119:4.1 (1313.4) マイケルがネバドンの政府をイマヌエルとガブリエルの手に委ねたのは、ユヴァーサの千年毎の定期的な1つの点呼の終わりであった。もちろん、そのような行動の後の過去に起こったことを思い出し、贈与の４番目の任務に際しては、我々は全員、マイケルの出発に備え、またマイケルがまもなくサルヴィントンへの派遣専用場へと出向き視界からいなくなったので、長らく待たされもしなかった。

119:4.2 (1313.5) この贈与失踪後の３日目に、我々は、ユヴァーサへの宇宙放送においてネバドンの熾天使の本部からの

この重要な報道項目に注目をした。「単独の超熾天使とサルヴィントンのガブリエルに伴われた未知の熾天使の発表なしの到着を報告する。この未登録の熾天使は、ネバドンの系列にふさわしい資格を得て、またサルヴィントンのイマヌエルに公認されたユヴァーサの日の老いたるものの信任状を得ている。この熾天使は、地方宇宙の天使の最高系列にふさわしい成績を収め、すでに教育相談役の部隊に割り当てられた。」

119:4.3 (1313.6) 熾天使の贈与の間、マイケルは、宇宙標準年の40年以上、サルヴィントンを留守にしていた。この間マイケルは、あなたが個人秘書と命名するかもしれない熾天使の教育相談役として22個の異なる世界で機能する26名の異なる熟練の教師に配属された。マイケルの最後の、または最終の課題は、相談役と助力者としてネバドン宇宙の星座3、体制84の世界462における三位一体の教師たる息子の贈与任務であった。

119:4.4 (1314.1) 決して、この課題の7年にわたり、三位一体の教師たる息子は、自分の熾天使の仲間の正体に関し、完全に納得してはいなかった。実に、その期間のすべての

熾天使は、独特な関心と精査で見られていた。我々は全員、愛すべき君主が熾天使に変装し、その宇宙にいるということを十分に知っていたが、その正体を決して確信することはできなかった。決して、かれは、この三位一体の師としての息子の贈与任務への配属の時まで明確には正体を特定されることはなかった。しかし、最高の熾天使は、我々のうちの誰もが、知らずに創造物贈与の任務上の宇宙の君主をもてなしていたということのないようにこの時代を通していつも特別な配慮で見られていた。したがって、天使に関しては、創造者と支配者は、「すべての点において熾天使の人格に似せて試され、吟味されてきた」ということは、永遠に真実となった。

119:4.5 (1314.2) これらの連続した贈与が、いよいよ宇宙生命の下級の型の性質を帯びるにつれ、ガブリエルは、ますますこれらの肉体化の冒険の仲間になり、贈与されたマイケルと代理の宇宙支配者イマヌエルと連携して機能した。

119:4.6 (1314.3) さて、マイケルは、自分の創造した宇宙の息子の３系列、メルキゼデク系、ラノナンデク系、物質の息

子系の贈与の経験をした。次に、マイケルは、時空間の進化の人間である意志をもつ創造物の最も低い型の上昇経歴の様々な局面に注目を向ける前に、最高の熾天使として天使の生命に似せて人格化して降りる。

5. 第5贈与

119:5.1 (1314.4) ユランチアで計算されるような時間で3億年をわずかに越える昔、我々は、イマヌエルへの宇宙権威の譲渡のもう一つを目撃し、マイケルの出発準備を観察した。この出来事は、目的地がオーヴォントンの超宇宙本部のユヴァーサであると発表したという点において前のものとは異なっていた。やがて我々の君主は、出発したが、超宇宙の放送は、日の老いたるものの宮廷へのマイケルの到着に決して言及しなかった。サルヴィントンからの彼の出発直後、ユヴァーサの放送で次の重要な発表があった。「本日、サルヴィントンのイマヌエルに公認され、ネバドンのガブリエルに伴われた人間起源である未発表で無番号の上昇巡礼者が、ネバドンの宇宙から到着した。この未確認の存在は、真の精霊の身分を提示し、我々の親交に受け入れられた。」

119:5.2 (1314.5) 今日ユヴァーサを訪問するようなことがあれば、あなたは、エヴェントヅがそこへ滞在した時代についての話しを詳しく聞くことであろうし、時間と空間のこの特定、かつ無名の巡礼者は、ユヴァーサにおいてその名で知られている。また、この上昇する人間(少なくとも正確に類似する上昇する人間の精霊段階のずば抜けた人格)は、オーヴォントン標準時間の11年をユヴァーサで生き、機能した。この存在者は、課題を受け入れ、オーヴォントンの様々な地方宇宙からの仲間と同様に精霊の人間の義務を果たした。「すべての点で、ちょうど仲間と同じように吟味され、試された。」そして、あらゆる機会に、上司の信用と信頼に応え、同時に仲間の精霊の敬意と変わらぬ賛美を意のままにした。

119:5.3 (1315.1) 我々は、この高ぶらず無番号の巡礼の精霊が、我々の地方宇宙の贈与された支配者以外の何者でもないということを、ガブリエルの臨場により熟知しており、サルヴィントンにおいてこの精霊の巡礼者の経歴をこの上ない関心をもって後をつけた。人間進化の1段階の役割で肉体化されるマイケルのこの初登場は、全ネバドンを震えさせ魅了した出来事であった。そのような事を聞

いてはいたが、今、我々はそれらを凝視した。マイケルは十分に進化し、完全に訓練された精霊の人間としてユヴァーサに現れ、またそういうものとして上昇する人間集団のハヴォーナ到達時までその経歴を続けた。そこで彼は、日の老いたるものと対話をするとすぐに、ガブリエルとともに、ユヴァーサに突然の、儀式張らない別れをし、その後まもなくサルヴィントンの自分のいつものところに現れた。

119:5.4 (1315.2) マイケルが、最も高いメルキゼデクから時間と空間の進化の世界の肉体の人間までの宇宙人格の様々な系列に似せて肉体化するためにたぶん出掛けていくであろうということが遂に我々に分かったのは、この贈与のわずかに完了直前であった。この頃、メルキゼデクの大学は、肉体の人間としてのマイケルの肉体化のそのうちの可能性を教え始め、またそのような解釈し難い贈与の考え得る方法に関する多くの憶測が生まれた。そのマイケルは、地方宇宙と超宇宙の全行程における生物進行の計画全体に新たで、さらなる興味を与える上昇する人間の役を本人自らが演じた。

119:5.5 (1315.3) 依然として、これらの連続する贈与の方法は、謎のままであった。ガブリエルでさえ、それによってこの楽園の息子と宇宙の創造者が、意のままに、人格を請け、彼自身の従属の生物の一人として生活を送ることができる方法を理解できないということを告白している。

6. 第6の贈与

119:6.1 (1315.4) 全サルヴィントンが、差し迫る贈与の準備に慣れている今となって、マイケルは、本部惑星の一時逗留者を招集し、初めて、肉体化の残りの部分を明らかにし、星座5号の本部惑星のいと高き父の宮廷においてモロンチアの人間の経歴を担う目的で自分は間もなくサルヴィントンを離れるのだと発表した。次いで、我々は、どこかの進化の世界でマイケルの第７の、最終的な贈与が人間の姿でなされるであろうという発表を初めて聞いた。

119:6.2 (1315.5) マイケルは、第６の贈与のためにサルヴィントンを去る前、集められたその圏の住民に講演し、単独の熾天使とネバドンの輝く明星に伴われ皆の見ている中を

出発した。宇宙の統治は、再びイマヌエルに任せられたが、行政責任のより幅広い配分があった。

119:6.3 (1315.6) マイケルは、上昇する身分の完全なモロンチアの人間として星座5号の本部に現れた。私は、この無番号のモロンチアの人間の経歴の詳細を明らかにすることを禁じられていることを残念に思う、というのも、それがユランチアでの劇的かつ悲惨な滞在を除外しなくとも、マイケルの贈与経験の中で最も並はずれて驚くべき時代の1つであったので。しかし、この依頼の受諾に当たり、私に課されている多くの制限の中で禁じられている一つは、エンダンツムのモロンチアの人間としてのマイケルのこの素晴らしい経歴の詳細を展開することである。

119:6.4 (1316.1) マイケルがこのモロンチア贈与から戻ってきたとき、我々の創造者は、仲間の創造物になったということ、宇宙君主は、自分の領域の創造された知力の最低の型の友人であり、同情的な助手でさえあったということが我々全員には明白であった。我々は、これ以前、それが徐々に明らかになりつつあったので、宇宙行政におけ

る創造物の観点についてのこの進歩的な習得に気づいたのだが、モロンチアの人間贈与の成就後、ユランチアにおける大工の息子の生活からの帰還後はより明らかになった。

119:6.5 (1316.2) 我々には予めモロンチア贈与からのマイケルの解放についてガブリエルから知らされており、それに応じて、我々は、サルヴィントンでの相応しい歓迎会の手配をした。何百万もの存在体が、ネバドンの星座本部界から集められ、またサルヴィントンに隣接する世界の逗留者の大部分が、マイケルがその宇宙の統治者の地位にもどることを歓迎するために集められた。我々の多くの歓迎の挨拶と彼の創造物にきわめて興味を持つ君主に対する感謝の表現に応じて、「私は単に父の仕事に携わっていたに過ぎない。私は単に自分達の創造物を愛し、理解することを切望する楽園の息子の喜ぶことをしているに過ぎない。」と、マイケルは答えるだけであった。

119:6.6 (1316.3) だが、その日から人の息子としてユランチア冒険に乗り出すその時間まで、全ネバドンは、マイケルの滞在の星座全体の物質界から集合した仲間のようにすべ

ての点で試され、進化的上昇のモロンチアの人間の贈与の肉体化としてエンダンツムで機能するとともに、自分達の主権支配者の多くの功績について議論し続けた。

7. 第７の、最後の贈与

119:7.1 (1316.4) 何万年もの間我々は全員、マイケルの7番目の最後の贈与を楽しみにしていた。ガブリエルは、この終わりの贈与が人間の姿で為されることを教えてくれていたのだが、我々は、この最高点に達する冒険の時間、場所、方法についてはまったく知らなかった。

119:7.2 (1316.5) マイケルが最後の贈与の舞台にユランチアを選んだという公示が、アダームとハヴァーの不履行について我々が知った直後に発表された。その結果、3万5千年以上の間、あなたの世界は、全宇宙の協議会において非常に目立つ位置を占めた。ユランチア贈与にはいかなる段階に関わる秘密(肉体化の謎は別として)もなかった。初めから終わりまで、最高の宇宙君主としてサルヴィントンへのマイケルの最終の、勝利の帰還まで、小さいが、大いに栄誉を与えられたあなたの世界で発生したすべてについての宇宙への全面的な公表があった。

119:7.3 (1316.6) 我々は、これが方法であろうと思う一方、その出来事自体が起こるまで、マイケルが、領域の無力な幼児として地球に現れるということを決して知らなかった。それ以前、マイケルは、贈与選択の人格集団に属する完全に発達した個人としていつも現れており、ベツレヘムの赤ん坊が、ユランチアで生まれたと言うサルヴィントンからの放送は、興奮させる発表であった。

119:7.4 (1316.7) そのとき、我々は、我々の創造者であり、友人である者が、その全経歴で最も心許ない方法を取っていると、明らかに自分の位置と権威を無力な幼児として危険にさらしていると分かったばかりではなく、この最終の、人間の贈与における経験は、ネバドンの宇宙の当然、かつ最高の主権者として彼を永遠に王座につけるであろうということも理解した。地球時間の3分の1世紀の間、この地方宇宙の全域の全ての目がユランチアに集中した。すべての有識者が、最後の贈与が進行中であると認識し、また、サタニアでのルーキフェレーンスの反逆とユランチアでのカリガスティアの不満を我々が長い間知っていたので、我々の支配者が、人間の肉体の低い型

と外見でユランチアで肉体化に身をおとすときに起こるであろう苦闘の激しさを、我々はよく理解していた。

119:7.5 (1317.1) ユダヤ人の赤ん坊ヨシュア・ベン・ヨセフは、この特定の赤子が楽園の神性の息子であり、この地方宇宙の万物の創造者であるネバドンのマイケルの肉体化であったということを除いては、以前に、そしてそれ以来、ちょうど他のすべての赤子のように懐妊され、世界に生まれてきた。そして、イエスの人間の型の中の、そうでなければ、世界の自然の起源の、神格の肉体化のこの謎は、永久に未解決のままであろう。永遠においてさえ、あなたは、創造物の型と外見における創造者の肉体化の手法と方法を決して知ることはないであろう。それは、ソナリントンの秘密であり、そのような謎は、贈与経験を経たそれらの神性の息子に限られた財産である。

119:7.6 (1317.2) 地球の特定の賢者達は、マイケルの迫りくる到着を知っていた。1世界の他の世界との接触により、精霊的な洞察をもつこれらの賢者には、ユランチアにおけるマイケルの到来しつつある贈与について分かっていた。また、熾天使は、中間の創造物を通して、指導者が

アーヅノンであるハルダイアの聖職者集団に告知した。これらの聖人は、新生の子供を訪ねた。イエスの出生に関連した唯一の超自然の出来事は、第一の園でのかつてのアダームとハヴァー付きの熾天使によるアーヅノンとその仲間へのこの告知であった。

119:7.7 (1317.3) イエスの人間の両親は、その時代のその世代の普通の人々であり、また、この肉体を与えられた神の息子は、このようにして女性から生まれ、その人種と年令の子供の普通の方法で育てられた。

119:7.8 (1317.4) ユランチアにおけるマイケルの滞在の話、あなたの世界での創造者の息子の人間贈与の物語は、この語りの部分の範囲と目的を超える内容である。

8. マイケルの贈与後の地位

119:8.1 (1317.5) マイケルは、ユランチアでの最後の、好結果の贈与の後、日の老いたるものにネバドンの主権支配者として受け入れられたばかりではなく、自身の創造である地方宇宙の確立された管理者として宇宙なる父にも認められた。サルヴィントンへの帰還と同時に、このマイケル、人の息子と永遠なる息子は、ネバドンの定められた

支配者であると宣言された。マイケルの主権の８番目の宣言は、ユヴァーサから来ており、同時に、宇宙の唯一の首長である神と人のこの結合をし、サルヴィントン配属の日々の和合のものに楽園に引き下がる意志表明を指示する宇宙なる父と永遠なる息子の共同声明が楽園から来ていた。星座本部の日の忠実なるものは、いと高きものの協議会から退くように命じられた。しかし、マイケルは、助言と協力からの三位一体の撤退に同意しようとしなかった。マイケルは、皆をサルヴィントンに集め、いつまでもネバドンの勤務に残ることを個人的に要請した。皆は、楽園において自分達の管理者の要請に応じたいという願望を表明し、その後まもなく、ネバドンのマイケルの宮廷に永久に配属された中央宇宙のこれらの息子を楽園から分離する命令が出された。

119:8.2 (1318.1) マイケルの贈与経歴を終了し、彼自身の創造の宇宙における最高権威の最終的な確立に効果をもたらすには、ユランチア時間でおよそ10億年を要した。マイケルは、創造者として生まれ、管理者にと教育され、経営者にと訓練されたものの、自分の主権に関しては経験によって得なければならなかった。その結果、あなたの小

世界は、マイケルが、自身の作である宇宙の無制限の支配と監督が与えられる前に、あらゆる楽園の創造者の息子に要求される経験を終了した活動領域としてネバドン中で知られるようになった。地方宇宙を昇るとき、あなたは、マイケルの以前の贈与に関する人格の理想についてさらに学ぶであろう。

119:8.3 (1318.2) 創造物の贈与を成就するに当たり、マイケルは、自身の主権を確立するだけでなく、崇高な神の進化する主権をも増大させていた。これらの贈与の過程において創造者の息子は、創造物の人格の様々な本質の下降する探検に従事するばかりではなく、楽園の神格のさまざまに多様化された意志の顕示もまた達成し、その合成的な統一は、崇高な創造者により明らかにされているように崇高なるものの意志の天啓である。

119:8.4 (1318.3) 神格のこれらの様々な意志の局面は、主たる7精霊の異なる本質に永遠に人格化され、マイケルのそれぞれの贈与は、これらの神格顕現の1つの特異の天啓であった。マイケルは、メルキゼデク贈与の際には、父、息子、精霊の統合した意志を、ラノナンデクの贈与の際

には父と息子の意志を明らかにした。アダームの贈与の際には、父と精霊の意志を、熾天使の贈与の際には、息子と精霊の意志を顕示した。ユヴァーサの人間贈与の際には、結合活動者の意志を、モロンチアの人間贈与の際には、永遠なる息子の意志を描写した。また、ユランチアの物質贈与の際には、宇宙なる父の意志を生き、人間の血肉としてさえ生きた。

119:8.5 (1318.4) これらの7つの贈与の完了は、マイケルの最高主権を自由にし、ネバドンでの崇高なものの主権のための可能性をも創造した。贈与のいずれにおいてもマイケルは、崇高な神を明らかにはしなかったものの、7つの贈与全体は、崇高なるもののネバドンの新顕示である。

119:8.6 (1318.5) マイケルは、神から人への下降経験において、顕示の部分的な可能性から有限の活動の至高性と準絶対の機能のための可能性の解放への上昇を付随的に経験していた。創造者の息子マイケルは、時空の創造者であるが、七重の主たる息子マイケルは、三位一体の究極なるものを構成する神格部隊の1員である。

119:8.7 (1318.6) 三位一体の七重の主たる精霊を明らかにする経験を経て、創造者の息子は、崇高なものの意志を明らかにする経験をした。崇高性の意志の啓示者として機能する際、マイケルは、他のすべての主たる息子とともに永遠に崇高なものと自分を同一視した。この宇宙時代に、マイケルは、崇高なものを明らかにし、崇高性の主権の実現化に参加する。しかし、我々は、次の宇宙時代にマイケルが、外部空間の宇宙に向けて、またその中で、最初の経験の三位一体において崇高なるものと協力しているであろうと信じる。

119:8.8 (1319.1) ユランチアは、全ネバドンの心情的神殿、1千万の棲息界の主要な世界、キリスト・マイケルの人間の家、全ネバドンの君主、領域へのメルキゼデクの聖職者、体制救世主、アダームの贖い主、熾天使の仲間、上昇精霊の仲間、モロンチアの前進者、人間の肉体の人の息子、ユランチアの惑星王子である。そして、この同じイエスが、いつか最後の贈与の世界に戻ると約束したと述べるとき、あなたの記録は、真実を告げている。

119:8.9 (1319.2) [キリスト・マイケルの7つ贈与を描写するこの論文は、人間の姿でのマイケルの地上出現時までのユランチアの歴史を描いており、数々の人格の後援による一連の提示の63番目である。これらの論文は、マンツーチアのメルキゼデクの指揮下に行動する12名のネバドン委員会から認可を受けた。我々は、ユランチア時間の西暦1935年に我々の上司に認可された方法によりこれらの物語を英語で文字にした。]

ウランティア・ブック

第IV. 部 キリストの教えとその生涯について

論文 120
ユランチアにおけるマイケルの贈与

120:0.1 (1323.1) ユランチアにおいて、そして人間の姿でのマイケルの生涯の再陳述を監督することをガブリエルから任された天啓委員会のメルキゼデクの指揮者である私は、宇宙贈与体験の最終段階への船出のために創造者たる息子が、ユランチア到着の直前に起きたある出来事の提示を託されている。自分が創造した知的生物に彼が課すのと同様の生活を送るということ、すなわち被創造物の

諸々の団体に自ら身を投じるということは、自己が創造した宇宙万物界での最高主権の為にいかなる創造者たる息子もが支払わなければならない代価の一部なのである。

120:0.2 (1323.2) 私が詳細に描写しようとする出来事の前に、ネバドンのマイケルは、知的な創造物の彼の多様な創造の異なる6団体の姿を装い自分自身を6度贈与した。それから、かれは、意志をもつ知的創造物の最下位の人間の姿で、そして宇宙の中の宇宙の神性である楽園の支配者の命に従い、宇宙主権獲得劇の最終幕において演じるために前述の物質界の人間としてユランチアにおりる準備をした。

120:0.3 (1323.3) 前述のこれらの各々の贈与過程において、マイケルは、自分が創造した生物の一群の有限体験だけでなく、楽園の協力を得て、この体験の中であるいはこの体験自体が、自らが創造した宇宙の主権者に自身を任ずることにさらに貢献するであろう不可欠な経験をも得た。全地域の宇宙時間のいつ何時においても、マイケルは、創造者の息子としての独自の主権の主張ができたし、自

己の選択後、創造者の息子として自分の宇宙を統治する事ができた。そのような出来事の際、イマヌエルと連携の楽園の息子は、その宇宙を離れた。しかしマイケルは、創造者の息子として単に独自の権利でネバドンを治めたくはなかった。かれは、楽園の三位一体への協力的従属による実際の体験を通じて宇宙段階のその高位置への上昇を熱望し、そこでかれは、自身の宇宙を治める資格が得られるようになり、いつか崇高なるものの高められた統治において特性となる洞察の完全性と実行の叡智をもってその業務を行う。かれは、創造者の息子として統治の完全さを志すのではなく、宇宙叡智と崇高なるものの神性体験の具体化にむけての行政の至高性を切望した。

120:0.4 (1324.1) マイケルは、それゆえに、自分の宇宙創造物の多種の系列にこれらの七贈与をするにあたり二重の目的があった。第一に、マイケルは、完全な主権を引き受ける前に、全ての創造者の息子に求められる創造物理解のための経験を完了しているところであった。創造者の息子は、自己の権利で自分の宇宙をいつでも支配するかもしれないが、七贈与過程後に限り、楽園の三位一体の最

高代表として統治することができる。第二に、かれは、地域宇宙における独自の、直接の行政実行可能な楽園の三位一体の最大限の権威を代表する特権を切望していた。したがって、各々の宇宙贈与の経験の間、マイケルは、楽園の三位一体の人格の多様な結合におけるさまざまに構成された意志に首尾よく受け入れられるように自ら進んで従属的であった。つまり、最初の贈与に関して、かれは、父、子、精霊の結合意志に従属的であった。第二の贈与は、父と子の意志に。、第三の贈与は、父と精霊の意志に。第四の贈与は、子と精霊の意志に。第五の贈与は、無限の　精霊の意志に。第六の贈与は、永遠なる息子の意志に。ユランチアにおける第七の、最終の贈与の間には、宇宙の父の意志に。

120:0.5 (1324.2) マイケルは、それ故、自分の地域宇宙の創造物の経験と創造者の七重の神性意志を自身の個人の主権に結びつける。このようにマイケルの行政は、全ての意図的な占拠は奪われるが、最大に可能な権力の典型となった。彼の力は、楽園の神格との経験豊かな結合に由来するがゆえに無限である。かれの権限は、宇宙の創造物の姿での実際の経験を通して得たがゆえに、問題とはなら

ない。マイケルの主権は、楽園の神格の七重の観点と時空の生物の観点とを同時に包み込んでいるがゆえに至高である。

120:0.6 (1324.3) 最終贈与の時を定め、この驚異的な出来事が起こる惑星を選び出し、マイケルは、ガブリエルと通常の前贈与の協議をし、それから兄であり楽園顧問であるイマヌエルの前に立った。マイケルは、ガブルエルには今までに与えられなかった宇宙行政に関する全権力をイマヌエルの管理にいま託したのであった。そして、マイケルのユランチアにおける具現への出発前に、イマヌエルは、ユランチア贈与の間の宇宙管理を引受け、マイケルがユランチアにおいて人間として間もなく成長する時の、具現の先達となる贈与の助言を伝えに赴いた。

120:0.7 (1324.4) これに関して、マイケルが楽園の父の意志に従い、人間の身体でこの贈与実行を選択したのだという事が、心に留めておかなければならない。宇宙主権獲得という唯一の目的のためにこの具現を果たすにあたり、誰かからの指示を必要とはしていなかったが、創造者の息子は、楽園の神格の多様な意志と協力的な機能にかかわ

る崇高者の顕示の計画へと乗り出したのであった。このように、しかも、遂に、独自に得られる時、かれの主権は、現に崇高の中で極に達していると同様に、神格の七重の意志に包括的であるはずである。　それゆえ、諸々の楽園の神格とその連携の直接の代表者に前もってに回教授された。そして今、かれは、宇宙なる父に代わり、ネバドンの地域宇宙への楽園の三位一体の大使である日々の和合のものに教えられた。

120:0.8 (1325.1) この強大な創造者の息子の意志の結果、より自発的に自分自身を楽園の神格の意志に従がわせる即座の利点と絶大な代償が、今度は宇宙なる父のそれに、今一度もたらされた。そのような連合的従属をもたらすためのこの決意により、マイケルは、この具現、人間の資質ばかりではなく全ての楽園の父の意志において体験しようとしていた。　そしてさらに、マイケルは、ユランチア贈与のための自分の留守中に、イマヌエルが、楽園の父の全権威において彼の宇宙の行政執行にあたるばかりではなく、超宇宙の日の老いたるものが、全贈与の期間を通して自分の領域内の安全を命じたという慰める情報で、この類い希な贈与を始めることができたのである。

120:0.9 (1325.2) そしてこれが、イマヌエルが七度目の贈与委任を提示した際の背景であった。イマヌエルのこの前贈与委任から、その後のユランチアにおいてナザレのイエス(キリスト・マイケル)となった宇宙君主までの以下の抜粋提示が、私に許された。

1. 第七の贈与の委任

120:1.1 (1325.3) 「私の創造者の弟よ、私は、君の七度目の最終的な宇宙贈与を目撃しようとしている。君は、先の六回の委任をなんと忠実に、完璧に実行した。私は、君が最終の主権贈与に意気揚揚であると信じて疑わない。これまで君は、選択した系列の完全に発達した生物として自分の贈与圏にこれまで現れてきた。今、君は、ユランチア、君が選んだ、十分には進化していない生物であるばかりか哀れな赤子である乱れた物騒な惑星へ現れようとしている。これは、我が僚友よ、君にとって新しくかつて試されたことのない体験となるだろう。君は、贈与の全代価を支払おうとしているし、生物の姿をして創造主具現の完全な悟りを体験しようとしている。

120:1.2 (1325.4) 自身の以前の各贈与を通して、君は、楽園の神格３名とその神聖の相互連合の意志に沿って任意に自身を被験者と選んできた。崇高者の意志の七段階のうち、君は、先の贈与において楽園父の人格の意志以外は全て自分自身を被体験者としてきた。君が、七贈与を通じて専ら父の意志に完全に従うと決めた今、私は、我々の父の直々の代表者として君の具現の時のために、君の宇宙において無条件の管轄権を引き受ける。

120:1.3 (1325.5) ユランチア贈与の着手にあたり、君は、自らが創出するどんな生物によってでも差し出されるかもしれない援助全ての惑星外からの援助や特別の助力を自発的に退けた。君が創りだしたネバドンの息子らが、自分達の宇宙経歴を通じ、安全指導のために君に全く依存するように、君は、次に起こる君の人間としての経歴において、未だ明かされていない人生の転変の中での安全指導を、今、全く素直に楽園の父に委ねなけらばならない。そして　この贈与体験終了時に、君は、地域宇宙の創造者であり父としての君との彼らの近しい関係の一部として修得することを全ての君の創造物に全く変わらず要求

するところの信仰-信頼の完全な意味と豊かな意義を実に深く知るであろう。

120:1.4 (1326.1) ユランチア贈与を通して、君は、楽園の父との破られることのない交わりただ一つだけを考慮する必要がある。そして、君の贈与の世界が、さらには君の創造の全ての宇宙が、君の父と私の父、全てのものの宇宙なる父の新しくてより理解できる啓示をみるのは、そのような関係の完成によってである。君の懸念は、それゆえ、ユランチアでの私生活に関わることだけである。権限の自発的な放棄のその瞬間から楽園が承認した宇宙の主権者として我々の元に戻るまで、君が今私に手渡した代理の権利ではなく、それどころか最高権力そして支配権を私の手から受け取るまで、私は、君の宇宙の安全と途切れることのない行政を完全に手際よく効率的に引き受ける。

120:1.5 (1326.2) そこで、いま約束をしている(自分の言葉を忠実に履行するための全楽園の保証であるということをよく承知している) 私には、全てを行なう権限を委ねられているということを君は確信をもって知っているかもし

れない。君の自発的な贈与の期間を通して、ネバドンで全ての信仰に関する危険を防止するユヴァーサの日々の老いたるものの指示が丁度私に通知されたことを私、私は発表する。君が意識を引き渡す瞬間から、つまり人間への化身の開始から、即座に君自身の創造と組織化のこの宇宙の崇高で無条件の主権者として我々のところに戻るまで全ネバドンでは重大な事は何も起こり得ない。この贈与での肉体化の間、私は、あなたの留守中ネバドンの宇宙における反逆、またはあえて反乱を扇動しようとするいかなる者の即時の、かつ自動的消滅の処置を無条件で委ねる日々の老いたるものの命令を、私は携えている。弟よ、私の臨場において、またユヴァーサの判決命令により増強される楽園の権威の立場から、　君の宇宙とその全ての忠実な創造物は、君の贈与間、安全を保証されるであろう。君は、一つの考えだけ—君の宇宙の人間に我々の父の強化された顕示—をもって君の使命に赴いてよろしい。

120:1.6 (1326.3) 私は、先の各贈与時のように兄である受託人として君の宇宙の管轄での享受者であるということを君に思い出させる。私は、君の名において全ての権威を行使

し、全ての力を奮う。私は、楽園の父がそうするように、しかも前述のように君に代わって働けという君の明確な要請通りに勤める。これが、事実であるから、全てのこの委任された権威は、いつでも君が行使するに良いと思うときに再度君のものとなる。君の贈与は、ずっと完全に自発的である。君は、天上の付与なしに人間としてその領域にいるが、全ての返上した力は、再び君自身に宇宙の権限を執ることを選べる。君が、力と権限により復権することを選ぶなら、それは、全く個人的な理由によるものであるということを覚えておきなさい。私は生きた至高な盟約であり、私の立合いと父の意志に沿い、君の宇宙の安全な行政の保証をする。君がサルヴィントンを留守にしている間、ネバドンで3度起こったような反逆は、起こるはずはない。日の老いたるものは、ユランチア贈与の期間、ネバドンの反逆は、直接的で即刻の自滅の種に封じ込められていると布告した。

120:1.7 (1326.4) 君が、この最終でしかも並外れた贈与で留守の間中、私は、(ガブリエルの協力で) 君の宇宙の誠実な管理を誓う。そして、神の顕示のこの聖職の引き受けと、完成された人間の理解のこの体験するように君に委任す

るとき、私は、私の父と君の父のために行動し、君に次のような助言を申し出る。その助言は、君が、肉体での継続的な滞在である神性の奉仕に関し、徐々に自己意識が強くなるにつれ、地上での君の生活において先達となるはずである。

2. 贈与の限界

120:2.1 (1327.1) １．慣習に従い、そしてソナリントンの技術と一致して—楽園の永遠なる息子の委任に応じて—私は、君がまとめ、ガブリエルが私の保護下においた計画と調和して、この人間贈与にあたり即時の登場のためにあらゆる点で準備した。君は、領域の子供としてユランチアで育ち、人間としての教育を終え—始終楽園の父の意志に服して—すでに決心したようにユランチアでの生活を送り、惑星逗留を終え、そして自分の宇宙の最高主権を父から受け取るために父の元への上昇に備えるであろう。

120:2.2 (1327.2) ２．双方に付随することではあるのだが、地上における使命と宇宙の啓示は別として、私は、君が、神性の同一性を十分に自己意識をしたうえで、サタニア機

構におけるルシファ－の反逆を基本的に終結させるという付加の任務の引受けることを、しかもこの全てを人の息子として行なうことを勧める。このように、領域の必滅の創造物として、父の意志への信仰・従順によって弱点を力強いものに変え、この罪深く不当な反逆の始まりにおいて、君がそのように賦与されているとき、身勝手に繰り返し全力で成し遂げることを拒んできた全てを丁寧に果たすことを提案する。君が、神の息子、君の宇宙の崇高な主権者ならびに人の息子、ユランチアの惑星王子として我々の元に戻るならば、私は、それを君の人間贈与の極致にふさわしいとみなすであろう。ネバドンの知性ある生物の最下級の人間として、カリガスティアとルシファ－の不敬な野望に向かい合い、裁決しなさい。そして、卑しい身分を引き受けている間、堕落した光の子達の恥ずべき詐称の決着を永久につけてしまいなさい。君の創造特権の行使を通して、これらの逆徒の評判を落とすことを断固として拒んできたが、君が創造した最下級生物の姿でこれらの堕落した息子の手から支配力を捩じ取るというのは、今こそふさわしいことである。あなたの全地域宇宙は、公平にみて慈悲があなたに独断

的権力でしないように戒めるそれらの事柄を生身の役割で行う君の正義を明らかに、そして永遠に認識するであろう。そして、君は、ネバドンにおける崇高者の主権の可能性を君の贈与で確立し、この業績の認識に関係する時間の大小のずれにもかかわらず、過去の全ての暴動における未裁決事項に実質的に終結をもたらすであろう。この行為により、君の宇宙の未整理の紛争は、実質的には決済するであろう。そして自身の宇宙の至高主権の賦与の後には、君独自の偉大な創造のいかなる部分においてもその主権に対して類似した挑戦は決して繰り返されることはない。

120:2.3 (1327.3) 3. 君が、ユランチア離脱の終結に成功した時、疑う余地なくするであろうが、私は、最終の贈与体験である君の宇宙による不変の承認として、ガブリエルからの「ユランチアの惑星王子」の肩書きの贈与の受け入れを助言する。そして、君は、贈与の主旨に一致して、カリガスティアの裏切りと以降のアダムの不履行が、ユランチアにもたらす悲しみと混沌を償う全ての事をさらにすることを勧める。

120:2.4 (1328.1) 4. 君の要請に従い、ガブリエルと関係者すべては、一時代の終了、睡眠中の生残者の回生、そして授けられた真実の精霊の配剤の設立をともなって、領域での配剤の判決表明とユランチア贈与の終了を願う君の望みについて協力するであろう。

120:2.5 (1328.2) 5. 君が贈与の惑星と君が人間として滞在している間にそこに生きている人間の目前の世代に関して、私は、君に教師の役割で大いに機能するように助言する。まず、人間の精霊的な資質の解放と鼓吹に注目しなさい。次に、陰った人知を照らし、人間の魂を癒し、人心を長年の恐怖から解放しなさい。それから、君の人間としての知恵に従い、生身の兄弟姉妹の身体の福利と物的慰めに仕えなさい。全ての君の宇宙の感化と強化のために理想的な信仰生活を送りなさい。

120:2.6 (1328.3) 6. 贈与の惑星において、反逆し分離した者を精神的に解放しなさい。ユランチアで、崇高者の主権にさらに貢献しなさい、そうすることにより、君の独自の創造の幅広い領域の津々浦々にこの主権の設立を拡大する。これ、つまり人の姿での物理的な贈与において、

時・空の創造者の最終啓発の経験、つまり楽園の父の意志をもって、人間の資質範囲で働く二元的経験をするところである。有限の創造物の意志と無限の創造者の意志は、ちょうど彼らが、崇高なるものの進化する神格と一体になるように、君の現世の命で一つとなる。君の贈与する惑星に真実の精霊を注ぎ、そうして隔離されたその球体の全ての普通の人間が、すぐに、完全に、我々の楽園の父の分離した存在体、つまりその領域の思考調整者の聖職奉仕に近づき易くしなさい。

120:2.7 (1328.4) 7. 贈与の世界で君が行うかもしれない全てにおいて、君の全宇宙の教示と啓発のために生きているのだと常に心掛けなさい。君は、人間化身のこの生涯をユランチアに贈与しているのだが、君は、そのような人生を、行政領域の広大な銀河の一部としてすでに形をなしたか、今なしているか、あるいはこれから形作っていくあらゆる生息界にかつて住み、今存在する、あるいはその最中にあるかもしれない超人的な英知とあらゆる人間の精神鼓舞のためにそのような生活を、今まさに送ろうとしているところである。地球における人の姿での君の一生は、人間のための実例を設定するため、または　ユ

ランチアの人間、あるいは他のいかなる世界のどの次世代のために生きるのでもない。むしろユランチアにおけるの肉体の人生は、来たるすべての世代を通して全ネバドン界の全てにとっての人生の示唆となるべきである。

120:2.8 (1328.5) 人間化身で実現され体験されるべき君の大いなる使命は、楽園の父の意志を行う、神すなわち君の父を、肉体でしかも取り分け創造物に、明かすということに一心不乱に動機づけられて人生を送るという決心に含まれている。　同時に、君は、新たな昂揚をもって我々の父を全ネバドンの超人間達に、解釈を与える働きをするであろう。人間と超人の型の心に楽園の父の増大された解釈と新しい顕示の使命を携えて、君も、等しく、神に人間の新顕示をするという役目を果たすであろう。全ネバドンではこれまで見られなかった生身での君の一度の短い人生において、生物存在の短い経歴のあいだに、神を知る人間による超越的で達成し得る可能性を示しなさい。そして、ネバドンのすべての超人的な知力あるもののために、また全時代のために、人間とその惑星生活における浮沈にかかわる新しくて啓示的な解釈をもたらしなさい。君は、必滅の肉体に似せてユランチアへ降り

て行き、人間として、その時代に、またその世代に生きようとしており、君の宏大な創造の情勢の至高な約束において完成された理想の技を君の全宇宙に示すことができるように機能するであろう。人間を求め、探し当てる神の成就と、神を求め、探し当てる人間の現象。そして相互の満足のためにこれの全てをし、生身での一度の短い生涯人生でこれをするということ。

120:2.9 (1329.1) 9. 実際君が、領域の普通の人間となる一方、潜在的には楽園の父の創造者の息子のままでいるということを絶えず心に留めおくように注意する。人の息子として暮らし、立ち振る舞うのであるが、化身の間中ずっと、君独自の神格の創造的な特質は、ソルヴィントンからユランチアまでついていく。その化身を終了するのは、思考調整者の到着後のいつでも君の意志の力の範囲内となる。その調整者の到着と受け入れに先立ち、私は、君の人格の整合性を保証する。だが、調整者の到着後と君の贈与任務の性質と意義に対する漸進的な認識と同時に、人格の臨場からのこれらの属性の不可分であるがゆえに、君の創造者の特権は、人間の人格と結合して留まるであろうという事実を考慮したいかなる超人の達

成、業績、または力のための意志の形式化も、君は、慎むべきである。だが、自覚と思慮ある意志の行為により君が、全人格の選択に終わる全面的な決意をしない限り、いかなる超人の反響も、楽園の父の意志は別として地上における君の経歴に寄り添うことはないのである。

3. 更なる勧告と助言

120:3.1 (1329.2) 「さて、弟よ。贈与の一般的な行動に関する指導の後、ユランチアへの準備をする君を後にするに当たり、ガブリエルとの協議において達した、そして人間生活のあまり重要でない部分に関し、特定の助言の提示をさせてもらいたい。 我々は更に提案する。

120:3.2 (1329.3) 1. 人間の地球での生活の理想の追求において、君の仲間の人々に実践的で即有用ないくつかの事柄の実現と実例にいくらかの気配りをするということ。

120:3.3 (1329.4) 2. 家族関係については、彼らが君の贈与の時代と世代に確立されるのを見たように、受入れられた家族生活の慣例を優先にさせなさい。君が現れることに決めた人々の習慣に従って家族生活や共同生活を送りなさい。

120:3.4 (1329.5) 3. 社会秩序に対する君の関係において、主に努力を精霊的な蘇生と知的な解放に限ることを助言する。君の時代の経済構造と政治的信条のすべての紛糾を避けなさい。ユランチアでの理想的な信仰生活に一層専念しなさい。

120:3.5 (1329.6) 4. いかなる状況下においても、微小なりとも、ユランチア民族の平常で規則正しい漸進的な進化を妨害すべきではない。しかしこの禁止は、肯定的な信仰倫理の恒久の、改善された制度をユランチアにもたらす君の努力を限定するものだと解釈すべきではない。君には、配剤の息子として、世界人類の精霊的で宗教的な地位の向上に関してある種の特権が授けられている。

120:3.6 (1330.1) 5. 自分にあったやりかたで、君は、ユランチアで見つかるかもしれない既存の宗教的、精霊的な動勢と行動をともにすべきであるが、組織化された団体、結晶化された宗教、あるいは人間の隔離された倫理集団化の形式的な設立をあらゆる方法で避けることに努めなさい。君の生涯と教えは、全ての宗教と全ての民族の共同財産となろうとしている。

120:3.7 (1330.2) 6. 我々は、ユランチアの宗教的信条、あるいは他の型の非進行性の宗教的な忠誠のそのあとに続く偏見的な機構の創造に不必要に貢献しないようにとの目的で、さらに君に忠告する。その惑星に著作を残さないように。後々まで残る材質への全ての書き込みを慎みなさい。仲間に君自身の絵姿や他の摸倣物を製作しないように命じなさい。出発時にその惑星に偶像的な崇拝のおそれのあるものが残されないことを確かめなさい。

120:3.8 (1330.3) 7. ありきたりの男性一個人として、その惑星での普通で平均的な社会生活を送る間、君は、まったく尊敬すべきで、かつ君の贈与と一致している結婚関係にはおそらく入らないであろう。だが、ソナリントンの化身の任務の一つは、いかなる惑星にも楽園出身の贈与の息子による人間子孫が残されることを禁じているということを。私は、君に思い出させなければならない。

120:3.9 (1330.4) 8. 近づいてくる贈与の他の全ての詳細において、我々は、内住する調整者を導き、人間を先導をする常に居合わせている神性について教え、そして代々の贈与からの拡大する人間の心の理由・判断を君に依託す

る。創造物と創造者の特質とのそのような交わりというものは、いかなる一世界において(ましてユランチアにおいては)、いかなる世代の一個人によって必ずしも完全だとみなされるばかりでなく、より高度に完成され、また完成されつつある遠く離れた君の宇宙の世界において全く絶大に充実したと評価され、君が我々ために惑星圏において完全な人間生活を送ることを可能にするであろう。

120:3.10 (1330.5) 君が我々のもとを去り、人格の意識の放棄を果たした瞬間から、人間の姿に化身した神性同一性の認識を徐々に回復する間、そしてユランチアでの君の贈与経験のすべてを経て、肉体からの解放と父の主権の腹心となるための昇天まで過去の履行において、我々をずっと支えてくれた君の父と私の父が、君の案内をし、支えて、ともにいてくれますように。私が、サルヴィントンで再び会う時、我々は、君自身が創り、仕え、完全に理解をしたこの宇宙の至高で無条件の主権者として君の帰還を歓待する。

120:3.11 (1330.6) 君に代わり、今、私は治める。ユランチアでの七度目の人間贈与の間、全ネバドンの代理主権を引き受ける。君に、ガブリエルよ、人の息子そして神の息子として、権力と栄光を携え私の元へ戻されるまで、やがて人の息子になろうとしている者の保護を委託する。そしてガブリエル、マイケルがこのように帰還するまで私が君の主権者である。」

120:3.12 (1330.7) ついですぐに、集められた全サルヴィントンを前にして、マイケルは我々のもとから立ち去った。彼が、ユランチアにおける贈与経歴の完了後、至高でしかも直々の宇宙の君主として戻るまで、いつもの場所にマイケルをもう見かけなかった。

4. 化身—二つを一つに

120:4.1 (1331.1) そして、このようにして、創造者の父が、利己的に君主の地位を求め、創造者の息子が、惑わされた宇宙への従属的な創造物の理性的でない忠誠により、勝手に、専制的に権力を維持したという仄めかしに耽けったマイケルの子供というにはあたらない特定の者達は、神の息子が人の息子としてこの時始めたこの献身的な奉仕

生活により—常に「楽園の父の意志」に従って—永久に沈黙させられ、困惑させられ、幻滅させられたままになろうとしていた。

120:4.2 (1331.2) しかし、間違えてはいけない。キリスト・マイケルは、実に二重の本源の存在ではあるが、二重人格ではなかった。かれは、人と連携した神ではなく、むしろ人間に化身した神であった。そして、常に確かに結合されたものであった。そのように理解され難い関係において唯一の進歩的な要因というものは、　神であり人間であるというこの事実の進歩的自意識の実現と認識(人の心による)であった。

120:4.3 (1331.3) キリスト・マイケルは、徐々に神になったのではない。イエスの地球人生の幾つかの重要な場面において、神が人になったのではない。イエスは、神であり人間であった—何時でも、さらには今後永久に。そしてこの神とこの人間は、ちょうど三存在体である楽園の三位一体が、実際には一つの神格であるように、一つであったし、今そうである。

120:4.4 (1331.4) マイケルの贈与の至高な精霊的な目的が、神の顕示を強化することであった事実を決して見失ってはならない。

120:4.5 (1331.5) ユランチアの人間は、奇跡的な事柄に対し様々な概念を持っているが、地域宇宙の住民である我々には、奇跡は数が少なく、これらの中でも群をぬいて興味深いものは、楽園の息子の化身での贈与である。君の世界における、またそこへの神性の息子の明らかに自然の過程での出現を、我々は、奇跡—我々の理解を超越した普遍的な法則の作用—とみなす。　ナザレのイエスは奇跡の人であった。

120:4.6 (1331.6) この驚異的な体験の全てを通じて、あるいはその中で、父なる神は、いつも通り自分自身を表示することを選んだ—いつもの方法で—普通で、自然で、頼れる神のやり方で。

論文 121
マイケルの贈与の時代

121:0.1 (1332.1) 我々の系列の議長、そして記録に載るメルキゼデクの共同の後援によりユランチア中間者の連合同胞組

合の12名の委任の監督下で働く私は、使徒アンドリューへの以前の配属の二次中間者であり、地上の創造物の私の系列がナザレのイエスの生涯を観察し、かつ私の属する序列のものが目撃したままの、また私の現世の保護の被験者が、その後部分的に記録したままの、ナザレのイエスの生涯の足跡の物語を記録にのせる権限を与えられている。主が、いかに慎重に書面の記録を残すことを避けたかを知りつつ、アンドリューは、自らが書面にした物語の記録を増やすことを固く拒んだ。イエスの他の使徒側の同様の態度は、キリストの福音の著述を大いに遅らせた。

1.キリスト後１世紀の西洋

121:1.1 (1332.2) イエスは、精霊的には頽廃時代の間、この世界に来なかった。イエス誕生の際のユランチアは、すべての後アダムの歴史以前には知られていなかったような、それ以来のどの時代にも経験されていなかったような精霊的な思考や宗教生活の復活を経験していた。マイケルが、ユランチアで肉体化した時、世界は、これまでに普及した、あるいはそれ以来勝ち得た創造者の息子の贈与にとり最も好都合な状態を呈していた。ちょうどこれら

の時代より何世紀も以前、ギリシア文化やギリシア語が、西洋と東洋の近くで普及しており、レヴァント人種であり、本来部分的には西洋でもあり東洋でもあるユダヤ人は、東西の双方の新宗教の効果的な波及のために、そのような文化的言語的背景を役立てることに抜きんでて適していた。これらの最も有利な状況は、ローマ人により地中海世界の寛容な政治支配によりさらに強化された。

121:1.2 (1332.3) 世界状況のこの全ての組合わせは、自らはローマ市民でありながら、宗教文化においては純然たるヘブライ人であるポールの活動、ユダヤの救世主の福音をギリシア語で公布した活動、によりみごとに例示されている。

121:1.3 (1332.4) 以前あるいはそれ以後の西洋では、イエスの時代の文明のようなものは見られていない。欧州文明は、破格の三重の影響のもとに統一され調和されていた。

121:1.4 (1332.5) 1.ローマ人の政治的かつ社会的組織

121:1.5 (1332.6) 2. ギリシア人の言語と文化—そしてある程度の哲学

121:1.6 (1332.7) 3. ユダヤ教と道徳教育の急速な普及の影響

121:1.7 (1332.8) イエス生誕時、全地中海の世界は、統一帝国であった。良い道路は、世界歴史上初めて多くの主要中心地を相互に接続していた。海からは海賊が排除され、交易と旅が急速に進んでいた一つの偉大な時代であった。欧州は、キリスト以後19世紀までそのような旅と交易の時期を二度と味わうことはなかった。

121:1.8 (1333.1) グレコ・ローマ世界の内部の平和と表面的な繁栄にもかかわらず、帝国の大多数の住民は、汚染と貧困に苦しんだ。小数の上流階級は裕福で、哀れで貧困な下流階級は平民を含んでいた。幸福で繁栄的な中流階級は、そのころ存在しなかった。それは、まさにローマ社会に出現しようとするところであった。

121:1.9 (1333.2) 拡大していくローマとパルティア列国間の最初の争いは、最近決着がつき、シリアは、ローマ人の手に委ねられた。イエスの時代、パレスチナとシリアは、繁

栄、相対的な平和、東と西の両側との広範囲な通商の時代を味わっていた。

2. ユダヤ人

121:2.1 (1333.3) ユダヤ人は、昔のセム族の一部であり、それは、バビロニア人、フェニキア人、より比較的最近のローマの敵であるカルタゴ人をも含む。キリスト後の一世紀初頭、ユダヤ人は、セム族の民族で最も有力な集団であり、かれらは、その当時交易のために支配され組織されていたように、世界において偶然にも特に重要な地理的位置を占有していた。

121:2.2 (1333.4) 古代の国々を結ぶ主要な街道の多くは、パレスチナを貫いており、それゆえ、それは、三大陸の会合場所、または交差点であった。旅、交易、それとバビロニア、アッシリア、エジプト、シリア、ギリシア、パルティア、ローマの軍隊は　パレスチナに連続して通り過ぎた。太古から、東洋からの多くの隊商路は、地中海の東端の少ない良港へとこの地域の一部を通過しており、そこから船は、貨物を全ての西洋の海域へと輸送した。そ

して往来するこの隊商の半分以上が、ガリラヤのナザレの小さい町を、または近くを通りぬけていった。

121:2.3 (1333.5) パレスチナは、ユダヤ人の宗教文化の故郷であり、キリスト教の発祥の地であったが、ユダヤ人は、多くの国々に居住して国外におり、ローマやパルティア列国の各地方で商いをしていた。

121:2.4 (1333.6) ギリシアは、言語と文化を提供し、ローマは道路を敷設し、帝国を統一したが、ユダヤ人のこの分散は、二百以上の教会堂とローマ世界の至る所に点在する見事に組織された宗教的な共同社会をもって、天の王国の新たな福音が、そこに最初の受け入れを見つけ、またそこからその後の世界の果てまで広がることになる文化の中心地を提供したのであった。

121:2.5 (1333.7) 各ユダヤの教会堂は、非ユダヤ人信者の非主流派、つまり「信心深い」または「神を怖れる」人間に寛容であったし、ポールが、キリスト教へ早期に改宗させた者の大半もこの非主流派大半の中からであった。エルサレムの寺院でさえ、非ユダヤ人のその凝った中庭を構えていた。エルサレムとアンチオキアの文化、商業、礼拝

の間には非常に緊密な関係があった。アンチオキアでのポールの使徒達は、最初は「キリスト教徒」と呼ばれていた。

121:2.6 (1333.8) エルサレムにおけるユダヤ寺院における礼拝集中化は、一神教の生き残りの秘密と万国の一つの神と全人類の父という新しく、しかも拡大された概念の育成と世界への送出の望みと同様に構成されていた。エルサレムの寺院での礼拝は、非ユダヤ人の国家的君主と民族迫害者の継承の失墜に直面しての宗教文化概念の生存を意味した。

121:2.7 (1334.1) この時代のユダヤ民族は、ローマの宗主権下にあったにもかかわらず、かなりの自治を味わっており、ユダ・マカバイと身近な継承者達による救出のごく最近の英雄的功績を覚えており、より偉大な救済者、すなわち長らく待ち望んでいたメシアの即座の出現の期待に震えていた。

121:2.8 (1334.2) 半独立国としてのパレスチナ、つまりユダヤの王国の存続の秘密は、ローマ政府のその外国政策に含まれており、そしてそれは、シリアとエジプト間の往来の

パレスチナ街道と、おなじく東洋と西洋間の隊商道の西の終点の支配と維持を望んだ。ローマは、これらの地域において自国の拡張を抑制するかもしれないレヴァントの地でのいかなる権力勃興をも望まなかった。セレウコスのシリアとプトレマイオスのエジプトを互いにけしかけるという陰謀目的の方針が、隔離的かつ独立した国としてのパレスチナの促進を余儀なくした。ローマの政策、エジプトの退廃、パルティアの拡大する力の前にして、セレウコスの進展的弱体化は、なぜ幾世代もの間ユダヤの小弱な集団が、北のセレウコス朝と南のプトレマイオス朝双方に対しその独立を維持することができたのかを明かしている。ユダヤ人は、周辺の、またより強力な政治原則からのこの幸運な自由と独立を「選ばれた民族」だという事実、ヤハウェの直接介在とみなした。そのような民族優越の態度は、ローマの宗主権が遂にこの地を襲った時、それを堪え忍ぶことをより難しくした。だがその嘆かわしい時にさえ、ユダヤ人は、世界への自分達の使命が、政治的ではなく精霊的なものだと知ることを拒んだ。

121:2.9 (1334.3) イエスの時代、ローマの支配者達に賢く取り入り、ユダヤの主権を握った当時部外者であったイヅミア人ヘロデに支配されていたことから、ユダヤ人は、いつになく怖れて勘ぐっていた。ヘロデは、ヘブライの儀式遵守への忠誠を明言したにもかかわらず、多くの異神のための寺院建築に着手した。

121:2.10 (1334.4) ヘロデとローマの支配者の友好関係は、ユダヤ人の旅にとっての世界を安全にし、こうしてローマ帝国内のはるか遠くにさえ、また天の王国の新しい福音をもつ外国の条約国へとその滲透拡大への道を開いた。ヘロデの統治は、またヘブライとギリシア哲学のさらなる融合へと大いに貢献した。

121:2.11 (1334.5) ヘロデは、カエサレアの港を建設し、それは、パレスチナが文明世界の十字路となることをさらに助けた。かれは、紀元前4年に死亡し、息子ヘロデ・アンティパスは、イエスの青年時代と聖職時代から西暦39年までのガリラヤとペレアを支配した。アンティパスは、その父と同様に偉大な建築家であった。かれは、セ

フォリスの重要な交易総合施設を含む多くのガリラヤの都市を再建した。

121:2.12 (1334.6) ガリラヤ人は、エルサレムの宗教指導者やラビの師達からは好意的にみられなかった。イエス生誕時、ガリラヤには、ユダヤ人よりも非ユダヤ人が多くいた。

3. 非ユダヤ人の中にあって

121:3.1 (1334.7) ローマの社会と経済状態は、最盛期ではなかったが、広範囲にわたる国内平和と繁栄は、マイケルの贈与にとり好都合であった。キリスト後の一世紀、地中海世界の社会は、5段階の明確な層から成っていた。

121:3.2 (1335.1) 1. 貴族 金と職権をもつ上流階級、すなわち特権を与えられた支配集団

121:3.3 (1335.2) 2. 商業集団 豪商、銀行家、商人—大手の輸出入業者—つまり国際的な商人

121:3.4 (1335.3) 3. 小さな中流階級 この集団は、まことに小さいが、とても影響力をもち、初期のキリスト教会の道徳的な背景を提供し、それは、これらの集団が各種の技能や

商業で存続することを奨励した。パリサイ人の多くは、ユダヤ人の間でこの商人階級に属した。

121:3.5 (1335.4) 4. 自由な下層階級 この集団にはほとんど社会的地位はなかった。自らの自由を誇りとしたが、奴隷労働との競争を強いられたので、非常に不利な立場に置かれた。上流階級は、この集団を軽蔑し、「繁殖目的」以外は役立たずとみなした。

121:3.6 (1335.5) 5. 奴隷 ローマの人口の半分は、奴隷であった。多くは、優れた者で、自由な下層階級へと、さらには商人へと素早く我が道を進んだ。大多数は、平凡であるか、非常に劣るかであった。

121:3.7 (1335.6) 優れた民族のものでさえも、奴隷制度は、ローマ軍征服の特徴であった。奴隷に対する主人の力は、絶対であった。初期のキリスト教会は、主に下層階級とこれらの奴隷から成っていた。

121:3.8 (1335.7) 優秀な奴隷は、しばしば賃金を受けとっていたし、その貯えで自由を買い取る事ができた。そのような解放された奴隷の多くは、国、教会、実業界において高

い地位へと昇った。そしてそのような可能性こそが、この緩和された奴隷形態に対し初期のキリスト教会を非常に寛容なものとした。

121:3.9 (1335.8) キリスト後の１世紀、広範囲にわたる社会問題は、ローマ帝国にはなかった。民衆の大部分は、偶々生まれてきたその集団に自分が帰属すると考えた。常に優秀で有能な個人がローマ社会の下層から上層への門戸の開放があったが、人々は、一般的に自分の社会的地位に満足していた。かれらは、階級意識もなく、これらの階級差を不当だとか間違っているとは見ていなかった。キリスト教は、いかなる場合もその目的のために抑圧された階級の苦難の改善の経済運動ではなかった。

121:3.10 (1335.9) 女性は、パレスチナでのその制限された位置においてローマ帝国内中のより多くの自由をで味わったが、ユダヤ人家族の献身と自然の情愛は、非ユダヤ人世界のそれよりもはるかに超えていた。

4. 非ユダヤ人の哲学

121:4.1 (1335.10) 非ユダヤ人は、道徳的見地からはユダヤ人より幾分劣っていたが、より高潔な非ユダヤ人の心には、

キリスト教の種が芽生え、徳性と精霊到達の豊かな収穫が可能な天性の善の豊かな土壌があり、潜在的な人間の情愛があった。非ユダヤ人の世界は、当時四種類の大きな哲学に支配されており、全てが、多少なりともギリシアの初期のプラトンの哲学に由来していた。　これらの哲学学派は、

121:4.2 (1335.11) 1. エピクロス主義この一派は、幸福の追究に専念した。良いエピクロス主義者は、官能的な不節制に傾注をしなかった。少なくともこの教義は、ローマ人を運命論の致命的な形態から救いだす手助けをした。それは、人間は、地球での現状の改善にむけて何かをすることができることを教えた。それは、無知な迷信と有効に闘った。

121:4.3 (1336.1) 2. ストア主義 ストア主義は、上の階級の優れた哲学であった。ストア学者は、制御的な理由-運命が、万象を支配すると信じた。人の魂は、神性であると、物質的な悪の身体に閉じ込められたものであると教えた。人の魂は、自然と、つまり神と調和して生きることにより自由をかち得た。かくして美徳は、それ自体が報償と

なった。ストア主義は、崇高な道徳に発展させ、哲学のどの純粋な人間組織も、その後理想を越えられなかった。ストア学派は、「神の子孫」であると明言する一方、神を知り損ね、したがって神を見つけることができなかった。ストア主義は、哲学に留まった。決して宗教にはならなかった。その支持者は、自分の心を普遍の心の調和との一致を追い求めたが、自分自身を愛情ある父の子だと想像することはできなかった。ポールが、「私は、いかなる状態にいようともそれに満足することを学んだ。」と書いた時、ストア主義に大きく傾いていた。

121:4.4 (1336.2) 3. キニク学派キニク哲学は、アテネのディオゲネスまで遡るが、かれらは、メルキズィデクのマキヴェンタの教えの遺物から教義の多くを導き出した。キニク哲学は、かつては哲学的であるよりも宗教的であった。少なくとも、キニク学者は、その宗教 - 哲学を民主的にした。かれらは、「人は、望むなら自らを救うことができる。」と広場や市場で頻繁に自らの教理を説いた。 かれらは、人々に質朴、美徳、を説き、怖れずに死を迎えることを促した。さすらいのこれらのキニク伝道者は、精霊的に熱望する民衆に後のキリスト教の宣教師への準

備をさせることに大いに役立った。人気のある説教のかれらの計画は、ポールの書簡の様式や表現法に倣っていた。

121:4.5 (1336.3) 4. 懐疑派 懐疑主義は、知識は誤りであり、確信や保証は不可能であると断言した。それは、全く否定的態度であり、決して普及しなかった。

121:4.6 (1336.4) これらの哲学は、半ば宗教的であった。それらは、しばしば爽やかで、倫理的で、昂揚的であったが、通常一般人を越えたものであった。　キニク主義は除外できようが、かれらは、貧民や弱者にさえ救済の宗教ではなく強者や賢者にとっての哲学であった。

5.非ユダヤ人の宗教

121:5.1 (1336.5) 前の時代を通して、宗教は、主に種族や国家の関心事であった。それは、しばしば個人にとっての問題ではなかった。神は、種族的、国家的であり、個人的なものではなかった。そのような宗教の仕組みは、平均的な人間の精霊的な願望に対してほとんど満足をもたらすことはなかった。

121:5.2 (1336.6) イエスの時代の西洋の宗教は、以下を含む。

121:5.3 (1336.7) 1. 異教徒の崇拝集団 これらは、ギリシアとラテンの神話と愛国心、それに伝統の組合わせであった。

121:5.4 (1336.8) 2. 皇帝崇拝 国家の象徴としてのこの人間の神格化は、ユダヤ人や初期のキリスト教徒をまことに本気で憤慨させ、直接ローマ政府による両教会の激しい迫害へと導いた。

121:5.5 (1337.1) 3. 占星術 バビロンのこの疑似科学は、グレコローマン帝国中で宗教へと発達していった。20世紀においてさえ人間は、迷信から完全に救い出されなかった。

121:5.6 (1337.2) 4. 神秘的宗教 そのような精霊的に渇望的な世界に、レヴァントからの新たで馴染みのない宗教である神秘的な礼拝集団が、氾濫し、それは、一般人の心を奪い、かれらに個々の救済を約束した。これらの宗教は、急速にグレコローマン世界の下層階級の意にかなった信仰となった。そしてそれは、はるかに優れたキリストの教えの急速な普及への道を開くのに大いに役立った。それは、聡明者には興味をそそる神学と関連して厳かな神

格の概念を、そして当時の無知ではあるが精神的に渇望する平均的な人々を含むすべてのものには、深遠な救済を提示した。

121:5.7 (1337.3) 神秘的な宗教は、国家信仰の終焉を招き、多数の私的な教団を生み出すに至った。神秘的な宗教は多かったが、全ては以下の如く特徴づけられた。

121:5.8 (1337.4) 1. 神話的伝説、不可思議な話—その名の由来。ミスラ信仰の教えに例示されるように、概してこの不可思議な話は、ある神の生と死と蘇りにかかわるものであり、そしてそれは、キリスト教のパウロの新興教団と同時期に起こり、しばらくは、競争相手でもあった

121:5.9 (1337.5) 2. 不可思議な話は、非国家的で、異人種間であった。それらは、宗教的な友愛団体と多数の派閥社会を引き起こし、個人的でかつ友愛的であった。

121:5.10 (1337.6) 3. 礼拝において、それらは、開始の念入りな儀式や崇拝の印象的な儀式によって特徴づけられた。秘密の儀式や祭礼は、時おり気味悪く背反的であった。

121:5.11 (1337.7) 4. だが、その式典の性質またはやり過ぎの度合がどうであろうとも、これらの不可思議な話は、信奉者に必ず「悪からの救出、死後の生存、この悲哀と奴隷世界の向こうの至福の領域での永続する命」の救済を約束した。

121:5.12 (1337.8) しかしイエスの教えを不可思議な話と混同するという間違いを犯してはならない。不可思議な話の人気は、人の救済に対する疑問を明らかにし、このように個人の宗教と正義への真の渇望を描写している。不可思議な話は、この渇望を適切に満足させることに失敗したものの、命のパンと水を本当にこの世にもたらしたイエス以降の出現への道を開いた。

121:5.13 (1337.9) 神秘宗教のより良い形への広範にわたる固執を利用する努力において、パウロは、数多くの予期される改宗がより容認できるようにするために、イエスの教えにいくらかの脚色を施した。だが、イエスの教え(キリスト教)のパウロの妥協でさえ、以下の理由で秘教よりはるかに勝っていた。

121:5.14 (1337.10) 1. パウロは、道徳上の償還、つまり倫理救済を教えた。キリスト教は、新しい生活を指示し、新たな理想を明示した。パウロは、奇術儀式や儀式的魔術を捨てた。

121:5.15 (1337.11) 2. キリスト教は、悲哀からの、さらには死からさえ提供された救済だけではなく、永遠の生存の性質をもつ正義の特徴の付与に続く罪からの救済の約束をして、人間の問題への最終的解決と取り組む宗教を提示した。

121:5.16 (1338.1) 3. 秘教は、神話に基づいて築かれた。パウロがそれを説いたように、キリスト教は、人類へのマイケル、神の息子の贈与という歴史的事実に基づいていた。

121:5.17 (1138.2) 非ユダヤ人の間の道徳は、哲学または宗教に必ずしも関係はなかった。パレスチナ国外に、宗教の聖職者が道徳的な生活を送るものだということを、人々は必ずしも思いつかなかった。ユダヤ人の宗教とその後にはイエスの教えは、そして後のパウロの進化していくキリスト教は、宗教家に道徳と倫理の双方に目を向けるこ

とを強調し、片手を道徳に、もう一方の手を倫理に置いた最初のヨ - ロッパ宗教であった。

121:5.18 (1338.3) イエスは、哲学のそのような不完全な体系に支配され、宗教のそのような複雑な儀式に惑わされた人間のそのような世代にパレスチナで生まれた。そして、かれは、個人の宗教である自分の福音—神との息子性—をその後この同世代に与えた。

6. ヘブライの宗教

121:6.1 (1338.4) 西暦紀元前一世紀の終りまでには、エルサレムの宗教的思想は、ギリシアの文化的な教え、その哲学によってさえ甚だしく影響され、幾らか修正された。エルサレムと西洋とレヴァントの残りは、ヘブライ思想の東洋と西洋の学校の間の長きにわたる見解の争いにおいて、西部のユダヤ、または改変されたギリシアの観点を採用した。

121:6.2 (1338.5) イエスの時代パレスチナでは、3言語が普及していた。庶民は、アラム語の何らかの方言を話し、僧侶とラビは、ヘブライ語を話し、大方のユダヤ人の教育を受けた階級と上層階級の者は、ギリシア語を話した。ア

レクサンドリアにおいてヘブライ経典のギリシア語への初期の翻訳は、ユダヤ人の文化と神学に関するギリシア側の後の優越性に大きく責任があった。そしてキリスト教師の著作は、同じ言語でまもなく表示されるところであった。ユダヤ教の復興は、ヘブライ経典のギリシア語の翻訳から始まる。これは、後にパウロのキリスト教集団が東方へではなく、西方への移動を決定したきわめて重大な影響であった。

121:6.3 (1338.6) ギリシア化したユダヤの信条は、エピクロス派の教えにほとんど影響されなかったが、プラトンの哲学とストア派の自己否定教義にまことに著しく影響を受けた。ストア主義の大々的な侵入は、マカバイ書の第四書に示されている。プラトンの哲学とストア派の教義双方の浸透は、ソロモンの知恵に例証されている。ギリシア化したユダヤ人は、ヘブライの神学と、かれらが敬うアリストテレスの哲学との適合に困難を見い出さなかったそのような寓意的な解釈をヘブライ経典にもたらすほどであった。しかしこの全ては、これらの問題がアレクサンドリアのフィロンにより取り扱われるまで壊滅的な混迷へと至り、フィロンは、ギリシア哲学とヘブライ神学

を宗教的な信念と実践の簡潔でかなり一貫した体系への調和と組織化をはじめた。そしてイエスが生きて、教えた時にパレスチナで普及したのが、ギリシア哲学とヘブライの神学が結合されたこの後の教えであり、またパウロは、キリスト教の自己のさらに進歩し啓発する儀式を作り上げる基盤としてこの教えを役立てた。

121:6.4 (1338.7) フィロンは、偉大な師であった。モ－ゼ以来、西洋世界の倫理的、宗教的な思想に対するそのような重大な影響を及ぼした者はいなかった。倫理、宗教の教えの同時代の体系のより良い要素の組合せに関しては、それまでに７人、セツアード、モーゼ、ゾロアスター、老子、釈迦、フィロン、パウロの傑出した師がいた。

121:6.5 (1339.1) パウロは、ギリシアの神秘的な哲学とローマのストア教義をヘブライの法律尊重主義の神学と結びつけるフィロンの努力からきた全てではないが多くの矛盾に気づき、賢明にも自分の前キリスト教の基礎の神学から除去した。フィロンは、ユダヤの神学において長期間の潜伏状態にあった楽園の三位一体の概念を復活させるために先導し、パウロは、より完全にそれをした。パウロ

には、フィロンと歩調を合わせたり、またはアレクサンドリアのこの裕福で学のあるユダヤ人の教えを超えることができないというただ一つの問題があった。それは、償いの教義であった。フィロンは、流血のみによる許しの教義からの救出を教えた。またかれは、おそらく思考調整者の現実と出現をパウロよりも明らかに垣間見た。しかしパウロの原罪の理論、つまり、代々の罪と生来の悪とそれからの救出の教義は、部分的にミスラ教に起源があり、ヘブライの神学、フィロンの哲学、またはイエスの教えとの共通点はほとんどない。原罪と償いに関するパウロの教えのいくつかの局面は、パウロ自身によるものであった。

121:6.6 (1339.2) イエスの生涯に関する物語の最後であるヨハネによる福音書は、西側の民族に向けられており、またフィロンの教えの使徒でもある後のアレキサンドリアのキリスト教信者の視点に大いに照らしてその話を提示している。

121:6.7 (1339.3) キリストの時代頃、ユダヤ人への感情の奇妙な逆戻りがアレキサンドリアで起こり、このユダヤの旧本

拠地から迫害の毒性のうねりが及び、ローマにさえ及び、そこから何千人もが追放された。しかしそのような誤伝の作戦は、一時的であった。帝政は、まもなく帝国中にユダヤ人の奪われた自由を完全に回復した。

121:6.8 (1339.4) 世界全域にわたり、たとえいずこでユダヤ人が、商業または弾圧により離散しようとも、皆いっせいにその心をエルサレムの聖なる寺院に集中し続けた。ユダヤ人の神学は、エルサレムで解釈され慣行されたように生残した。それは、特定のバビロニアの師達の時宜にかなった介入によって忘却から何回も救われはしたものの。

121:6.9 (1339.5) これらの分散した250万ものユダヤ人は、その国家宗教的な祭典のためにエルサレムに行くのが常であった。東側のバアビロニアと西側のギリシアのユダヤ人の神学または哲学の相違にもかかわらず、かれらは皆、その礼拝の中心地はエルサレムであると合意し、メシアの到来をずっと心待ちにしていたのであった。

7. ユダヤ人と非ユダヤ人

121:7.1 (1339.6) イエスの時代までにはユダヤ人は、その起源、歴史、運命についての定着した概念にたどりついていた。かれらは、自分達と非ユダヤ人の世界の間に分離の堅い壁を築いてしまっていた。かれらは、非ユダヤ人の全慣行を決定的に蔑視していた。ユダヤ人は、法律条文を崇拝し、直系であることへの誤った自尊心に則った独善的形式に耽けっていた。かれらは、約束されたメシアについての先入観を形成し、これらの期待の大部分は、国家的、民族的な歴史の一部として来るメシアというものを心に描いた。それらの時代のヘブライ人にとりユダヤ人の神学は、取り消せない、永遠に決定されたものであった。

121:7.2 (1339.7) 寛容性と親切に関するイエスの教えと実行は、自分達が他の民族であるとみなした他民族に向けてのユダヤ人の長年の態度に相反していた。何世代もの間、ユダヤ人は、人間の精霊的な友愛についてのあるじの教えの受入れを不可能にした外界に対する態度を培ってきた。ヤハウェを非ユダヤ人と平等に共有することは、彼らにとり不本意であったし、そのような新たで未知の教

義を教えたものを神の息子として受け入れることは同様に不本意であった。

121:7.3 (1340.1) 律法学者、パリサイ人、そして僧職者は、儀式主義や法律尊重主義のすさまじい束縛、すなわちローマの政治規則のそれよりもはるかに真に迫った束縛でユダヤ人を押えつけた。イエスの時代のユダヤ人は、法律服従に抑制されるだけでなく、私的、社会的な生活のあらゆる領域に関係し、侵害する伝統からの盲目的要求にも等しく束縛された。これらの綿密な行動規制は、あらゆる忠実なユダヤ人につきまとい支配した。自分達の神聖な伝統をあえて無視し、長らく守られた社会的行為の規制をあえて侮辱する自分達の一人を敏速に拒絶したことは不思議ではない。かれらは、父アブラハム自身が制定したとみなす教義との激突を躊躇しない者の教えを決して支持することはできなかった。モーゼは、ユダヤ人に法を与え、ユダヤ人は妥協しようとはしなかった。

121:7.4 (1340.2) キリスト後の１世紀までに著名な師、法学者による口頭での法解釈は、法文それ自体よりも高い権威をもつようになった。そしてこの全ては、ユダヤ人の特定

の宗教指導者が、新たな福音の受諾を人々にそろって反対させることを容易くした。

121:7.5 (1340.3) これらの状況は、ユダヤ人が、宗教の自由と神性の解放の新しい福音の使者としての自分達の神性の運命を満たすことを不可能にした。かれらは、伝統の枷を打ち壊すことができなかった。エレミヤは、「人の心に書かれる法律」、エゼキエルは、「人の魂に住む新たな精霊」と話し、詩篇作者達は、神が、「健全な心を内に創造し、善良な精神を取り戻す」ようにと祈った。しかし、善行と法への奴隷のユダヤ宗教が伝統主義的惰性の停滞の犠牲となった時、宗教的進化の動きは、欧州民族へと西に向かった。

121:7.6 (1340.4) そしてそれ故、異なる民族には、進展する神学を、すなわちギリシア人の哲学、ローマ人の法律、ヘブライ人の道徳、そして人格の気高さと精神の解放に関するパウロによって編み出されたイエスの教えに基づく福音を包含する教えの体系を、世界へ送り出すことを求められた。

121:7.7 (1340.5) パウロのキリスト教の礼拝集団は、ユダヤ人の母斑としてその道徳性を表している。ユダヤ人は、歴史を、神の摂理—ヤハウェの業、と見た。ギリシア人は、永遠の命のより明確な概念に新しい教えを持ち込んだ。パウロの教義は、イエスの教えばかりではなく、プラトンやフィロンの教えによっても神学と哲学における影響をうけた。倫理に関しては、キリストばかりでなくストア学者にも感化を受けた。

121:7.8 (1340.6) アンチオキアのキリスト教のパウロの儀式に表現されたように、イエスの福音は、以下の教えと混合された。

121:7.9 (1340.7) 永遠の命に関するかれらの概念の幾つかを含むユダヤ教へ改宗したギリシア人の哲学的論法

121:7.10 (1340.8) 2. 主な神秘的宗教の魅力的な教え、特に償い、ある神の犠牲による救済のミスラ教の教理

121:7.11 (1340.9) 3. 確立したユダヤ教の不屈の道徳

121:7.12 (1341.1) イエスの時代の地中海ローマ帝国、パルティア王国、近隣の民族は全て、世界地理、天文、健康、疾

患に関して粗末で原始的な考えを持っており、当然ながらナザレの大工の新しく驚くべき表明に仰天した。善と悪の精霊所有に関する考えは、単に人間だけに適応するのではなく、あらゆる岩や木の数だけ精霊があると信じられた。これは、魔法をかけられた時代であり、誰もが奇跡は当たり前の出来事と信じていた。

8. 過去の文書

121:8.1 (1341.2) 可能な限り、我々の任務と一貫して我々は、ユランチアのイエスの生涯に関する既存の記録を利用し、ある程度調整しようと努めてきた。我々は、使徒アンデレの失われた記録入手に恵まれ、そしてマイケルの贈与期間中、地球にいた天の存在体の巨大な集団の、(今はマイケルの個人付きの調整者を含む)協力から利益を得てきたが、いわゆるマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音を有用させることもまた我々の目的であった。

121:8.2 (1341.3) これらの新約聖書の記録は、以下の状況においてそれらが起源であった。

121:8.3 (1341.4) １．マルコによる福音書。ヨハネ・マルコは、一番早く、(アンデレの記録を除く)、最も短く、最も簡

潔なイエスの生涯を書いた。かれは、あるじを聖職者として、人間の間の人として提示した。マルコは、自身が描く場面の多くをあちこち歩きまわる若者であったが、その記録は、実際にはシモン・ペテロによる福音である。マルコは、早期にはペテロと後にはパウロと交わった。マルコは、ペテロの扇動と切実なローマの教会の請願に応えてこの記録を書いた。地上にあってしかも生身の時、あるじが一貫していかに自分の教えを書き上げることを拒んだことについて分かってており、マルコは、伝導者や他の先導的な使徒達と同じく文書にすることを躊躇った。しかしピーターは、ローマの教会がそのような文章化された物語の援助を必要としていると感じ、そこで、マルコはその準備をすることに同意した。かれは、紀元67年のピーターの死の以前に多く書きとめ、ピーターが承認した概要通りに、またローマの教会のために、ピーターの死後書き始めた。福音書は、紀元68年の終盤近くに完成された。マルコは、ひたすら自分とピーターの記憶に基づいて書いた。記録は、多数の分節が取り除かれたり、複写される以前に本来の原稿から紛失した後半五分の一を埋め合せるために何らかの後の内容が

最初の福音の最後に追加され、その後かなり変わった。マルコによるこの記録は、アンデレとマタイの覚え書きとともに、イエスの生涯と教えの描写をしようとしたこの後に続くすべての福音書物語の基礎となった。

121:8.4 (1341.5) 2. マタイによる福音書。 いわゆるマタイによる福音書は、ユダヤ人のキリスト教徒の啓発のために書かれたあるじの生涯の記録である。この記録の作者は、その生涯においてイエスがした多くが、「予言者が語ったことが満たされるかもしれない」ということを絶えず示そうとしている。マタイの福音書は、イエスをダビデの息子として描写し、法と予言者に大いなる敬意を示すように彼を描いている。

121:8.5 (1341.6) 使徒マタイは、この福音書を書かなかった。それは、マタイの弟子の一人であるイサドレによって書かれ、かれは、これらの出来事に関するマタイの個人的な回想だけでなく、磔刑直後にイエスの教えを自らがとった特定の記録もまたその仕事の助けとして持っていた。マタイによるこの記録は、アラム語で書かれている。イサドレは、ギリシア語で書いた。マタイの創作である

とだますつもりはなかった。その時代は弟子が、このようにその師を重んずるのが習わしであった。

121:8.6 (1342.1) マタイの本来の記録は、かれが福音伝道に関わるためにエルサレムを出発する直前の紀元40年に編集され、追加された。それは、個人的な記録であり、最後の複写は、紀元416年にシリアの修道院の火事で焼けた。

121:8.7 (1342.2) イサドレは、ティトゥスの軍隊による市の包囲後の紀元70年に、マタイの覚え書きの複写を携えてエルサレムからペラへと逃れた。イサドレは、71年にはペラに住みながら、マタイによる福音を書いた。かれも、マルコの物語の最初の五分の四を持っていた。

121:8.8 (1342.3) 3. ルカによる福音書。ピシディアのアンチオキアの医者ルカは、パウロの非ユダヤ人改宗者であり、全く異なるあるじの生涯の話を書いた。ルカは、パウロを追って紀元47年にイエスの教えと生涯について知り始めた。ルカは、これらの事実をパウロや他の人々から収集通りに、自身の記録中で「主イエス・キリストの恩恵」を多分に温存している。ルカは、あるじを「収税吏と罪人の友」であると述べている。ルカは、パウロの死後ま

で福音書に自分の多くの覚え書きを体系的にまとめなかった。82年にアンチオキアで書き込んだ。かれは、キリストとキリスト教の歴史を扱う3冊の本を計画したが、丁度これらの2冊目の「使徒言行録」を終える直前の紀元90年に死亡した。

121:8.9 (1342.4) 福音書編纂のための材料としてまずルカは、パウロがルカに話した通りのイエスの生涯の話に依存した。ルカの福音書は、それ故ある意味ではパウロによる福音である。しかしルカは、他の情報源を持っていた。かれは、記録をとるイエスの生涯の数多くの挿話の多くの目撃者と面談するだけでなく、五分の四がイサドレの物語りであるマルコの福音の写しと、セデスという名の信者が紀元78年に書いた簡潔な記録も持っていた。ルカも、使徒アンドレによるといわれる削除されたり、多分に手を加えられた幾つかの記録の写しも持っていた。

121:8.10 (1342.5) 4. ヨハネによる福音書。ヨハネによる福音書は、多くがユダヤにおける、あるいはエルサレムの周辺での他の記録にはないイエスの働きに及んでいる。これは、いわゆるゼベダイの息子、ヨハネによる福音書であ

るが、ヨハネは、書きはしなかったが、示唆した。その最初の文書は、ずっとヨハネ自らが書いてきたようにみせるために何回も手が加えられた。この記録がなされた時、ヨハネは、他の幾つかの福音書を持っており、かれは、多くが削除されていることに気づいた。したがって、紀元101年に、かれは、カエサリアからのギリシア系ユダヤ人である仲間のナタンに書き始めるように励ました。ヨハネは、記憶から、そして既存する3種類の記録への言及により自分の材料を供給した。自らの文書記録はない。「ヨハネの第一の手紙」 として知られる書簡は、ヨハネの指示のもとにナタンが実行していた仕事のための前置きの手紙としてヨハネ自身によって書かれた。

121:8.11 (1342.6) これらの全ての作者は、彼らが見て、覚え、あるいは知ったままのイエス像と、またキリスト教に関するパウロの神学のその後の擁護が、これらの遠のいた出来事に関する彼らの概念に影響したままに、イエス像を提示した。そして、これらの記録は、不完全ではあるが、およそ二千年間のユランチア歴史の針路を変更するには十分である。

121:8.12 (1343.1) [承認： ナザレのイエスの教えを換言したり、その活動を再述する私の任務を実行するにあたり、全ての記録と地球の情報源を存分に参考にした。私の主な動機は、現在生きている人間の世代に啓蒙的であるばかりでなく、すべての未来の世代に役立てるかもしれない記録を用意することである。私が手に入れられる膨大な情報の貯えから、この目的遂行に最適であるものを選んだ。出来る限り、私は、人間から情報を得た。そのような情報源で果たせない時、超人間のそれらの記録の助けを借りた。イエスの生涯と教えについての考えや概念が、人間の心により何とか表現された時、私は、そのような人間の思考形式を明らかに優先した。私は、あるじの生涯と教えの真の意味と内容に関する我々の概念をより良く適合させるために言語表現の調整を追求はしつつも、私の物語すべてにおいて実際の人間の概念と思考形式に出来る限り、固執してきた。私は、人間の心からくるそれらの概念が、他の全ての人間の心によく受け入れられ、役立つことを立証するであろうことをよく心得ている。私は、人間の記録の中、あるいはその表現の中に必要な概念が見つけられない場合、次に地球の創造物の

私自身の系列である中間者達の記憶の資源にたよった。そしてその第二の情報源が不十分であるとき、私は、躊躇せずに超惑星情報源に頼った。

121:8.13 (1343.2) 私が収集し、そしてイエスの生涯とその教えを準備したこの覚え書きは—使徒アンドレアの記録の記憶は別として—イエスの時代からこれらの顕示、より正確には言い直し、を書き綴る時代までの二千年以上を生きた人間達の結集されたイエスの教えの思考の玉石と優れた概念を包含している。啓示的な許可は、人間の記録と概念が、適切な思考形式を供給できない時に限って用いられた。私の天啓委員会は、必須の概念上の表現を単に人間から引き出す努力に失敗したと証言できるそのような時まで、情報、あるいは表現のいずれかを人間以外の情報源に頼ることを私に禁じた。

121:8.14 (1343.3) 11名の中間者の仲間の協力と、メルキズィデクの記録の監督下にあって、私は、その効果的な順序の私の概念に従い、また具体的な表現の選択に応じてこの物語を描写してきたが、それでも、私がこのように有用してきた大部分の考えや、いくらかの効果的な表現でさ

え、この仕事の時点でまだ生きている人々にいたるまでの地上で既に生きた中間の世代、多くの民族の人間の心が起源であった。多くの点において私は、最初の語り手であるというよりはむしろ収集家、編集者として勤めた。私は、それらの考えや概念、望ましくは人間の、考えや概念を躊躇せず用いて、そして、それは、私が、イエスの生涯の最も効果的な描写法を可能にし、また最も衝撃的に有用でかつ普遍的に昂揚的な表現法においてイエスの無比の教えを再述を容易にしてくれた。ユランチア中間者の連合同胞組合に代わって、私は、地球上におけるイエスの生涯の再陳述のさらなる推敲に用いられてきた全ての記録や概念の資料への恩恵に深く感謝するものである。]

論文 122
イエス誕生と幼少期

122:0.1 (1344.1) マイケルの贈与のための地としてパレスチナを選択に導いた多くの理由、特にこの神の息子のユランチア出現のための直接の場として、ヨセフとマリヤの家族が選ばれた正確な理由を完全に説明することは、およそ不可能であろう。

122:0.2 (1344.2) ガブリエルとの協議において、メルキズィデクにより用意された隔離された世界の状態についての特別報告の研究の後、マイケルは、かれの最終贈与を実施する惑星としてようやくユランチアを選んだ。この決定の後にガブリエルは、ユランチアを私的に訪れ、人間の集団についての研究とその世界とその民族の精神的、知性的、人種的、地理的特徴の調査の結果、ヘブライ人が贈与民族として選択を正当化したそれらの相対的な利点を備えていると決定した。この決定へのマイケルの同意を受けて、ガブリエルは、ユダヤの家庭生活調査の任務を依託される宇宙の人格の高序列の中から選ばれた12名の家庭委員を任命し、ユランチアへ急派した。この委員会がその役務を終えた時、ガブリエルは、ユラアンチアにおり、マイケルの予定されている具現のための贈与家族として、３組の可能な夫婦、委員会の意見で、等しく好ましいとの推薦報告をうけた。

122:0.3 (1344.3) ガブリエルは、候補にあげられた３組の夫婦からヨセフとマリヤを選んだ。続いてマリヤの前に自ら現れ、贈与する子の地上の母に選ばれたという喜ばしい知らせをその際彼女に伝えた。

1. ヨセフとマリヤ

122:1.1 (1344.4) イエス(ヨセフの息子ヨシュア)の人間の父ヨセフは、その祖先の女系から時々家系図に加えられた多くの非ユダヤの民族的な血筋をもたらしたが、純粋なヘブライ人であった。イエスの父方の祖先は、アブラハムの時代へ、そしてこの敬うべき家長からシュメール人やノド人へ繋がる継承の初期の家系ノウダイツ族へ、また古代青色人種の南の種族からアンドンとフォンタへと遡った。ダヴィデとソロモンは、ヨセフの家系の直系でもなく、アダムまで直接遡るヨセフの家系でもない。ヨセフの直接の祖先は建築業者、大工、石工、鍛冶屋などの職人であった。ヨセフ自身は、大工で後には請負人であった。その家族は、庶民の高潔で長く続いた傑出した家系に属しており、ユランチアの宗教進化に関連して際だち、非凡な人物達の出現により時おり目立っていた。

122:1.2 (1345.1) イエスの人間の母マリヤは、ユランチアの人種的な歴史における最も注目に値する女性の多くを有する類希な祖先の長く続いた子孫であった　。マリヤは、かなり通常の気質をもつ当事の世代の平均的な女性ではあったが、　祖先の中には、アノン、タマラ、ルツ、バテ

シバ、アンシエ、クロア、エバ、　エンタ、ラッタのようなよく知られた女性がいた。共通の、あるいは１祖先のより幸運な血筋の始まりまで遡っても、当時のユダヤ人の女性の誰一人として、より歴々たる血筋を持っている者はいなかった。マリヤの家系は、ヨセフの家系と同様、強いが平均的な個人の優性により特徴づけられており、文明の行進と宗教の漸進的進化において数多くの傑人達が時おり際だっていた。人種的に考えて、マリヤをユダヤ人とみなすのはまず妥当ではない。文化と信仰面において、彼女は、ユダヤ人であったが、遺伝的付与においては、シリヤ、ヒッタイト、フェニキア、ギリシア、エジプトよりであり、人種的遺産は、ヨセフのそれよりさらに一般的であった。

122:1.3 (1345.2) マイケルの計画された贈与の時代、ヨセフとマリヤは、パレスチナに住む全ての夫婦の中で、広範にわたる人種的な関係と平均をはるかに越える人格付与の最も理想的な組み合わせを有していた。一般人が、彼を理解し受け入れることができる普通の人間として地上に現れるのがマイケルの計画であった。それ故に、ガブリエ

ルは、ちょうどヨセフとマリヤのような人が贈与の両親となることを選んだ。

2. ガブリエル、エリザベスに現われる

122:2.1 (1345.3) ユラチアでのイエスの一生の仕事は、事実上は洗礼者ヨハネによって始められた。ヨハネの父ザカリヤは、ユダヤ人の僧職にあり、一方母のエリザベスは、イエスの母マリヤも属する同じ大家族集団の最も盛んな分家の一員であった。ザカリヤとエリザベスは、長年連れ添っていたが子なしであった。

122:2.2 (1345.4) 後にマリヤに知らせに立ったように、ある日の正午ガブリエルがエリザベスの前に現れたのは、ヨセフとマリヤの結婚からおよそ3ヶ月後の紀元前8年、6月下旬であった。ガブリエルは言った。

122:2.3 (1345.5)「そなたの夫ザカリヤが、エルサレムの祭壇の前に立ち、集った人々が救出者の到来を祈る傍ら、私ガブリエルは、程なくこの神性の師の先触れ人となるべく息子をそなたが産むことを知らせに来た、そなたは、その息子をヨハネと呼ぶように。その子は、そなたの神である主に生涯を献じて成長するであろうし、また機が熟

した時には多くの魂を神へ向けさせるので、そなたの心を喜ばせるであろうし、そなたの民族の魂を癒す者、全人類の精霊解放者の到来をも布告するであろう。そなたの親類のマリヤは、この約束の子の母になるはずだし、私はその者にも現れる。」

122:2.4 (1345.6) エリザベスは、この光景に大いに恐れた。ガブリエルが去った後、この経験を心の中で熟考し、威厳のある訪問者の言葉について長らく考え込んだが、翌年の２月初旬に、マリヤを次に訪れるまで夫のほかには誰にも天啓について話さなかった。

122:2.5 (1345.7) しかしながら、エリザベスは、夫にさえも５ヶ月のあいだ秘密を漏らさなかった。ザカリヤは、ガブリエルの訪問について明かすことに対して非常に懐疑的で、何週間も経験全体を疑った。ただ子を待ち設けている妻をもはや見咎めることが出来なくなってから、あまり気乗りのしないままガブリエルの訪問を信じると納得した。ザカリヤは、エリザベスが将来の母であることに関して大変に惑わされたが、自身の高齢にもかかわらず妻の清廉さを疑わなかった。ザカリヤが、エリザベスが

来たるべきメシアのための道を開くはずの宿命の息子の母となることを、印象的な夢の結果として、完全に納得するには、ヨハネ誕生の６週間前までかかったのであった。

122:2.6 (1346.1) ガブリエルは、紀元前８年11月中旬、ナザレの家で働いているマリヤに現れた。マリヤは、自分が母になるところだということを疑いなく知って後、エリザベスを訪ねるためエルサレムの6.4キロメートル西の丘にあるユダの町へ旅させるようにヨセフを説得した。ガブリエルは、妊婦の各々に自分の出現を知らせておいた。当然ながら二人は、会合を念じ、経験を照らし合わせ、また息子達のあり得べき未来について語った。マリヤは、この遠戚の元に３週間留まった。エリザベスは、ガブリエルの出現に関するマリヤの信念を多いに強め、その結果、マリヤは、この世界の平均的で普通の幼児、いたいけな幼子としてもうすぐ世に提示する運命の子の母の招請に応じて充分専念するために帰宅した。

122:2.7 (1346.2) ヨハネは、紀元前７年３月25日、ユダの町で生まれた。ザカリヤとエリザベスは、ガブリエルの予言通

りに息子が誕生したことを大いに喜び、８日目にその子を割礼に出した際、事前に指示されていた通り正式にヨハネと命名した。ザカリヤの甥は、ヨハネと名付けられるはずの息子が生まれたとエリザベスからマリヤへの伝言をたずさえてすでにナザレへ出発していた。

122:2.8 (1346.3) ヨハネは、最も初期の幼少から、精神的な指導者であり宗教の師となるように成長するという考えを両親から巧みに刻みつけられていた。ヨハネの心の土壌は、そのような暗示的な種を撒くことにずっと応えたのであった。子供の時でさえ父の礼拝期間中、かれは、寺院でしばしば見掛けられたし、自分が目にしたもの全ての重大さにとてつもなく感動した。

3. マリヤへのガブリエルの告知

122:3.1 (1346.4) ある日没時、ヨセフの帰宅前、ガブリエルは、低い石台の側のマリヤに現れ、彼女が落ち着きを取り戻すと、「私のあるじであり、そなたが愛し育てるはずの方の使いで私はきた。マリヤよ、天において定められてそなたが受胎すると、そしてそのうち時がきて息子の母になるであろうとそなたに嬉しい知らせを持ってきた。

その子をヨシュアと呼びなさい。その子は、地上と人々の間に天の王国を開始するはずである。そなたの親類のエリザベスとヨセフの外には、この一件について語るでない。私はエリザベスにもすでに姿を見せて、彼女もまた、ヨハネと名付けられ、そなたの息子が、偉大な力と深い信念で人々に宣するはずの救済の知らせのための道を構える息子を間もなく産むであろう。マリヤよ、私の言葉を疑うでない。このために運命の子が命を持つ者の住いとしてこの家が選ばれた。私の祝福をそなたに申し渡す。いと高きものの力がそなたを強くするであろう。そして全ての地上の主がお前を見守るであろう。」と言った。

122:3.2 (1346.5) マリヤは、身ごもっていると確信するまで、夫にこれらの尋常でない出来事をあえて明かす前に、何週間も秘かにこの訪問について考えを思い巡らせた。ヨセフはこの全てを聞いた時大いに悩み、マリヤに大きく信頼を置きつつも幾夜も眠れなかった。ヨセフは、最初ガブリエルの訪問を疑った。それからマリヤが、本当に神の使者の声を聞き、その姿を見たということをほぼ納得した時、そのような事がどうしてありうるかと考え込ん

でしまい、心は千千に乱れた。何で人の子が神の運命の子でありうるのか。来たるべき救済者には、神の資質があるということはユダヤの概念にはまず無かったものの、ヨセフは、数週間の考えの後、自分達二人とも、メシヤの両親に選ばれたのだという結論に至るまで、決してこれらの相反する考えを受け入れることが出来なかった。この重大な結論に到達し、マリヤは、エリザベスを訪れるべく出発を急いだ。

122:3.3 (1347.1) マリヤは、帰宅すると両親のヨアヒムとハナを訪ねた。勿論この時点でガブリエルの訪問について誰も何も知らなかったが、2人の兄弟と2人の姉妹達も両親同様に、常にイエスの神性の任務について非常に懐疑的であった。しかしマリヤは、サロメには自分の息子は偉大な師になると思うと打ち明けた。

122:3.4 (1347.2) マリヤへのガブリエルの告知は、イエスの受胎の翌日になされ、約束の子の妊娠と分娩という全経験に関する超自然の唯一つの出来事であった。

4. ヨセフの夢

122:4.1 (1347.3) 自分が非常に印象的な夢を経験をするまでヨセフは、マリヤが人並外れた子の母になるという観念を受け入れることができなかった。この夢で燦々たる天界の使者が、ヨセフに現れ、あれこれ言ったうえに、「ヨセフよ、私は、今天に君臨する神の命令で現れ、　またマリヤが産み偉大な世の光となる子についてお前に教えるよう申しつけられた。その子は命を得て、その生涯は人類の光となる。かれは、まず自身の人々の元にやってくるが、かれらは、それをまず受入れないであろうが、受け入れる者達には神の子等であるということを明かすであろう。」と言った。この経験の後、ヨセフは、ガブリエルの訪問とまだ生まれていない子が、地上への神の使者になるという約束のマリヤの話を決して二度と疑わなかった。

122:4.2 (1347.4) これらの訪問の中でダヴィデの家については、何も言及されなかった。イエスが、「ユダヤ人の救済者」になる、長く待望まれたメシアになるということさえ、何の暗示もされなかった。イエスは、ユダヤ人が予期していたそのようなメシアではなく、地上の救済者で

あった。その使命は、全ての人種、民族へであって、何か特定の集団へではなかった。

122:4.3 (1347.5) ヨセフは、ダヴィデ王の血統ではなかった。マリヤには、ダヴィデ側からの先祖がヨセフよりもいた。ヨセフは、ローマの国勢調査の登録のために確かにダヴィデの町のベツレヘムへ行ったが、ヨセフの父側の先祖6世代前は孤児であったので、ダヴィデの直結の子孫であったサドクという者に養子にもらわれた。そのゆえに、ヨセフもまた、「ダヴィデ家」として報告されていた。

122:4.4 (1347.6) 旧約聖書のいわゆるメシヤに関する予言は、その地上生活のずっと後、イエスに当てはまるように作られた。何世紀もの間、ヘブライの予言者達は、救済者の到来を公言し、歴代を通してこれらの約束は、ダヴィデの王座に座る、モーゼの奇跡的だといわれる手段によって、全ての外国支配からの自由、力強い国家としてパレスチナにユダヤの設立を始めるであろう新任のユダヤ人の支配者に言及し、解釈されてきた。また、ヘブライ教典に見られる多くの比喩的文章は、イエスの生涯の任務

に、後に誤用された。多くの旧約聖書の引用は、あるじの地上での生涯の幾つかの挿話に当て嵌まるように歪められた。イエス自身、ダビデの王室へのいかなる関係もかつて公的に否定した。　「乙女が、息子を産むであろう。」というこの件さえ、「処女が、息子を産むであろう。」と作られた。これも、マイケルの地上での経歴の後に作り上げられたヨセフとマリヤの双方の多くの系図についても同様に事実であった。これらの血統の多くは、あるじの家系の多くを含むが、概して本当ではなく、事実に基づいていないかもしれない。イエスの初期の追随者のすべてが、主君で、あるじの生涯において全ての昔の予言的な語調の誘惑に余りにもしばしば屈した。

5. イエスの地上の両親

122:5.1 (1348.1) ヨセフは、物柔らかな男で頗る誠実で、かつ宗教的慣習や民族習慣のあらゆる点において忠実であった。無口で黙考であった。ユダヤ民族のひどい窮境は、ヨセフを深く悲しませた。８人の兄弟姉妹の中の若者として、かれは、陽気な方であったが、結婚生活の初期(イエスの幼児期)は、軽度の落胆期にあった。これらの

気質の表れは、自身の早世の直前、それと家族の経済状態が、大工から順調な請負人への自己の栄進により強化された後、改善された。

122:5.2 (1348.2) マリヤの気質は、夫のそれとは正反対であった。彼女は、常に陽気で滅多に鬱に落ち入らず、常に明るい気性であった。マリヤは、自己感情の自由で頻繁な表現を思いのままにし、ヨセフの突然の死後まで悲嘆に暮れているところは決して見られなかった。そして、この衝撃から立ち直るやいなや、彼女には、驚嘆している目前で実に急速に繰り広げられていく長男の途方もない使命によって起こされる懸念や疑問が押し寄せた。しかしマリヤは、このようなすべての変わった経験の間、風変わりでよく理解されていない長男とその生き残りの弟妹達との関係において落ち着き、勇ましく、かなり賢明であった。

122:5.3 (1348.3) イエスは、自己の人間資質の中の希な穏やかさと信じられないほどの思いやりのある理解を父から受けた。かれは、偉大な師として、そして義憤への途方もなく大きな度量の贈り物を母から受け継いでいた。イエス

は、成人期の生活環境に対する感情的な反応において、ひところは父のようであり、黙想的で敬虔的で、時にはあきらかな悲しみにより特徴づけられた。だが、しばしば母の楽観的で断固たる気性にならって突き進んだ。全般的に見て、成長し、成人期の重要な段階へ突入するにつれてマリヤの気質が、神の子の経歴を支配し勝ちであった。ある点においては、イエスは、両親の特徴の混合であった。他の点においては、一方の親の特質をみせた。

122:5.4 (1348.4) イエスは、ヨセフからはユダヤ人の儀式の習わしにおける厳しい教育とヘブライ経典の並外れの知識を、マリヤからは信仰生活のより幅広い視点と個人の精霊的な自由のより進歩主義の概念を得た。

122:5.5 (1349.1) ヨセフとマリヤの双方の家族は、その時代としては立派な教育を受けた。ヨセフとマリヤは、時代と身分のわりには、はるかに平均以上の教育を受けていた。前者は思考家であった。後者は計画家であり、適合性に優れており、即時の実行において実践的であった。ヨセ

フは黒目で褐色肌、マリヤは茶目のほとんど白肌であった。

122:5.6 (1349.2) ヨセフが生きていたならば、疑いなく天命の任務の長男の断固たる信者となっていたであろう。マリヤは、他の子供、友達、親戚の取る立場に大いに影響され、信じることと疑うことを繰返したが、常に、その子を宿した直後のガブリエルの出現の記憶に最終的には落ち着くのであった。

122:5.7 (1349.3) マリヤは、機織りの名手で、その当時の家事全般にわたって平均以上の手腕をもち、誠に良い家政婦であり、最高の主婦であった。ヨセフとマリアは、共に良い先生であり、子供等が、その時代に学習可能な事柄を熟知するように配慮した。

122:5.8 (1349.4) ヨセフは若い時、マリヤの父が家の増築工事をする際に雇われていた。そしてイエスの両親になるべきこの二人の求愛関係が実際に始まったのは、マリヤが中食時にヨセフに１杯の水をもたらした時であった。

122:5.9 (1349.5) ヨセフが21歳の時、二人は、ナザレ近郊のマリアの家でユダヤの習慣に則って結婚した。この結婚は、およそ2年間にわたる通常の求愛関係を締めくくった。程なく二人は、ヨセフが二人の兄弟の助力を得て建てたナザレの新しい家に引っ越した。その家は、近郷を魅惑的に見渡す高地の麓近くに位置していた。特別に用意されたこの家で、待ち望んでいる若い両親は、ユダヤのベツレヘムの家を留守にしている間、宇宙のこの重大な出来事が起ころうとしているとは気づかず、約束の子を歓迎しようと考えた。

122:5.10 (1349.6) ヨセフの家族の大部分は、イエスの教えの信奉者となったが、マリヤの身内は、イエスがこの世を去るまで信じる者は極めて少なかった。ヨセフは、待ち臨まれるメシアの信仰理念の方により傾いていたが、マリヤとその家族、特に父親は、現世の救済者であり、政治的統治者であるメシアの考えにしがみついていた。

122:5.11 (1349.7) ヨセフは、東方またはバビロニヤよりのユダヤ宗教を強烈に信じていた。マリヤは、より自由の、幅

広い西方の、またはギリシアの律法と予言者の解釈の方に強く傾倒していた。

6. ナザレの家

122:6.1 (1349.8) イエスの自宅は、町の東の地域に位置する村の泉から少し離れ、ナザレの北寄りにある高い丘からそう遠くない所にあった。イエスの家族は、市の郊外に住み、これが後に、彼が、郊外での頻繁な散策を楽しんだり、東方へ続くタボル山脈とほぼ同じ高度のネイン丘陵を除くガリラヤ南方の全丘陵の中で最も高いこの近くの台地の頂への旅を容易にした。家は、この丘の南の岬の少し南東寄りに、そしてこの高台のふもととナザレを経てカナに続く道のおよそ中間に位置していた。この丘に上る以外のイエスの好んだ散策は、セフォリスへの道路へ繋がる地点へむかう北東方向の丘の麓をくねる狭い小道を辿ることであった。

122:6.2 (1350.1) ヨセフとマリヤの家は、平屋と動物を収容する建物と隣合わせの１部屋の石造りであった。家具の内訳は、低い石の食台、陶器、石皿、壷、織機、灯火台、幾つかの少さな腰掛け、それに石の床で眠るため敷物であ

った。動物小屋近くの裏庭には、かまどと穀物を挽く臼を被った小屋があった。この型の臼を扱うには、１人が臼を回しもう１人が穀物を入れる操作で２人の人間を要した。少年だったイエスは、母が引く側でしばしば穀物をこの臼に注ぎ足した。

122:6.3 (1350.2) 後年家族が増えるに従い、かれらは、同じ皿や壺からの食べ物を取って食事を楽しむために拡大された食台の周りに皆が据わったものだった。冬期、夕食の食台にはオリーブ油を満たした少さくて平らな陶磁の明かりが、灯されたものだった。マルタの誕生後ヨセフは、昼間は大工仕事、夜間は睡眠用の大きな部屋の増築をした。

7. ベツレヘムへの旅

122:7.1 (1350.3) 紀元前８年３月 (ヨセフとマリヤが結婚した月) に、アウグストゥス皇帝は、国勢調査が有利な課税をもたらすように、ローマ帝国の全住民は、番号を付されなければならないと布告した。ユダヤ人は、「人民番号制度」のいかなる形にもつねに大いに偏見をもっていた。ユダヤの王ヘロデは、これと深刻な国内問題とも関系し

て、１年間ユダヤ王国におけるこの国勢調査実施の延期を企んだ。紀元前７年に行われたヘロデのパレスチナ王国を除き、この人口調査は、１年後の紀元前８年に全ローマ帝国でなされた。

122:7.2 (1350.4) マリヤは、登録のためにベツレヘムに行く必要はなく—ヨセフが、家族の登録を許可された—だが、冒険的で積極的であるマリヤは、同行をすると言って譲らなかった。彼女は、ヨセフの留守中に子が生まれはしないかと一人残されるのを怖れ、その上ベツレヘムはユダの町からそう遠くないこともあり、縁戚のエリザベスとのありうる楽しい会話を期待した。

122:7.3 (1350.5) ヨセフは、実際にマリヤの同行を禁じたが、無駄であった。3、4日分の旅用の食料が用意され詰め込まれた時、彼女は、２倍の食べ物を用意し、旅仕度はすでにできていた。しかし現実には出立前、ヨセフは、マリヤの同伴は仕方がないと考え、二人は、夜明けにナザレを陽気に出発した。

122:7.4 (1350.6) ヨセフとマリヤは、貧乏で、たった一頭の役畜しか持っておらず、ヨセフが、動物を曳いて歩き、身重

であったマリヤは食料を載せたこれに乗った。父が最近身体障害者になったので、両親への援助もあり、家の建築と調度は、ヨセフにとり大変な経済負担であった。こうしてこのユダヤの夫婦は、紀元前７年８月18日早朝、ベツレヘムへの旅へと質素な家を発った。

122:7.5 (1351.1) 旅の初日は、ギルボア山麓の丘あたりまで行き、ヨルダンの川岸で夜を過ごすべくそこで野宿をし、ヨセフは、宗教の師の考えに固執し、マリヤは、ユダヤ人のメシア、ヘブライ国家の救世主の考えを持続し、二人にどのような子が生まれてくるのかあれこれと億測に耽けった。

122:7.6 (1351.2) ８月19日の明るい早朝、ヨセフとマリヤは、再び旅路にあった。二人は、ヨルダン渓谷を見下ろすサータバ山の麓で昼食をとり、夜までにエリコに辿り着くよう旅を続け、そこで町の郊外の街道沿いの宿をとった。夕食後、ナザレの旅人は、ローマ支配の圧政、ヘロデ、国勢登録、それとユダヤ人の学問と文化の中心地としてのエルサレムとアレクサンドリアの相対的影響を多いに討論した後、その夜の眠りに就いた。８月20日早暁、か

れらは、旅を再開し、昼前にエルサレムに到着し、寺院を訪問して目的地に向けて進み、午後の半ばにベツレヘムに着いた。

122:7.7 (1351.3) 宿は込み合っていた。そこでヨセフは、遠戚との同宿を求めたが、ベツレヘムのどの部屋も超満員であった。その宿の中庭に戻る途中、かれは、岩石の横腹を削りとって造った丁度宿の下に位置する隊商用の厩が、宿泊人受け入れのために動物が追い出され、掃除されていると知らされた。ヨセフは、驢馬を中庭に放置し、衣類と食料の入った二人の袋を担いでマリヤと宿舎へと石段を下りた。二人は、厩舎と飼葉小屋の前に通じるかつては穀物倉庫であった場所にいた。天幕は吊るされており、そのような心地良い休息場所を得て幸だと考えた。

122:7.8 (1351.4) ヨセフは、すぐ外に出掛けて登録することを考えたが、マリヤは、疲労し、かなり苦しんで側にいるように嘆願したので、ヨセフは、そうした

8. イエスの誕生

122:8.1 (1351.5) その夜マリヤは、一晩中落ち着けず、二人ともよく眠れなかった。夜明けまでには出産の激痛は明らか

で、紀元前７年８月21日、正午、マリヤは、女性の旅の道連れの援助と懇切な介添えで男児を出産した。ナザレのイエスが世に生まれ、マリヤがそのような非常事態に備えて携えてきた布に包まれて近くの飼い葉桶に横たえられた。

122:8.2 (1351.6) その前後の全ての稚児が、この世に生まれてきたのと同じ様に、約束された子は、生まれた。八日目、ユダヤの習慣に則り、かれは、割礼をうけ、正式にヨシュア(イエス)と名付けられた。

122:8.3 (1351.7) イエス誕生の翌日、ヨセフは登録をした。以前エリコで二晩語った男に出会い、ヨセフは、その宿に部屋を取っていた裕福な友のところへ連れていかれると、この者は、ナザレの夫婦と快く部屋を交換すると言った。その日の午後夫婦は、宿に上がって行き、ヨセフの遠戚の家に宿泊先を得るまでの約３週間ここに住んだ。

122:8.4 (1351.8) イエス出生後の二日目、マリヤは、子が生まれたとエリザベスに伝言をすると、エルサレムまで来てザカリヤとこの問題全般について話そうというヨセフへの誘いの返事をもらった。ヨセフは、翌週ザカリヤに相談

するためにエルサレムに行った。ザカリヤとエリザベスの双方共に、イエスは、誠にユダヤ人の救済者メシヤになり、自分達の息子ヨハネは、側近の長、運命の右腕の男となるはずだという真摯な確信の虜となった。そしてマリヤは、同様の考えを持っていたので、イエスが、全イスラエルの王座のダヴィデの後継者になるように成長していけるように、ダヴィデの町のベツレヘムに留まるようヨセフを説き伏せるのに苦労はなかった。そいう訳で、ヨセフが大工業に携わり、１年以上ベツレヘムに留まった。

122:8.5 (1352.1) 監督者達のもとに集合したユランチアの熾天使は、イエスの正午の誕生に、ベツレヘムの厩舎の上方で栄光を讃え聖歌を歌ったが、これらの讃賞の発声は、人間の耳には聞こえなかった。ザカリヤに遣わされたウルからのある僧達が到着する日まで、羊飼いも他の人間も誰としてベツレヘムの稚児に敬意を払いにきた者はいなかった。

122:8.6 (1352.2) メソポタアミアからのこれらの僧は、「命の光」が赤ん坊として地上に、そしてユダヤ人の間に出現しよ

うとしていると、夢の中で知らされたのだと、以前その国の見知らぬ宗教の師に言い聞かされていた。そこでこれらの３人の師は、その方角へこの「命の光」を探しに出た。エルサレムでの何週間もの空しい探索の後、ウルに戻ろうとしているところで、ザカリヤは、その者達に出会い、イエスこそが探し求めているものであると明かし、ベツレヘムへ彼らを向かわせたのであった。そこで３人は、赤ん坊を見つけ、地上の母マリヤに自分達からの贈物を残していった。彼らの訪問の際、その赤ん坊は、生後ほぼ３週間であった。

122:8.7 (1352.3) これらの賢者は、ベツレヘムに案内する星見なかった。ベツレヘムの星の美しい伝説は、このようにして始まった。イエスは、紀元前７年８月21日、正午に生まれた。紀元前７年５月29日、魚座の配列の中で木星と土星の並みはずれた連結が起きた。そして同年９月29日と12月５日に類似の結合が発生したということは、注目に値する天文事実である。これらの驚異的であるが、全く自然の出来事の基盤に、それ以降の善意の熱狂者達が、ベツレヘムの星の魅力的な伝説を作り、敬慕する東方の三博士は、それにより飼葉小屋へと導かれ、そこで

稚児を見て、崇拝した。東方や近東の心は、お伽話を楽しみ、かれらは、宗教指導者や政治上の英雄の生涯についてのそのような美しい作り話を絶えず紡ぎ出しているのである。印刷物がなく、一世代から別世代へとほとんどの人間の知識が口伝えされる時、作り話が伝統となり、伝統が、次第に容認された事実となることは、誠に容易いであった。

9. 寺院いおける献上

122:9.1 (1352.4) モーゼは、どの長男も主に属すると、そして異教徒の習慣であった犠牲の代わりに、もし親が公認の僧に5シケルを支払い、その子を買い戻せば、そのような息子は生きることが許されると、ユダヤ人に教えた。また一定の期間を過ごした後、清めのために母自身(あるいは代わって適当な捧げものをする誰か)が、寺院に参ることを指導したモーゼの条例もあった。同時にこの双方を行なうのが慣例であった。依ってヨセフとマリヤは、イエスを僧達に渡し、その買い戻しの実行とマリヤのいわゆる分娩の汚れからの浄めのための適切な犠牲を払うためにエルサレムの寺院へ参った。

122:9.2 (1353.1) 寺院の中庭あたりを絶えず徘廻する唄い手シメオンと詩人アナの注目に値する二人の人物がいた。シメオンは、ユダヤ人であったが、アナは、ガリレア人であった。この一組は、しばしば一緒にいて、そして両者とも、僧ザカリヤの親友であり、この僧は、二人にヨハネとイエスの秘密を打ち明けた。シメオンとアナの両者は、メシアの到来を待望み、ザカリヤに対する信頼は、イエスが期待されるユダヤ民族の救済者だと二人に思わせた。

122:9.3 (1353.2) ザカリヤは、ヨセフとマリヤが、イエスと寺院にみえる予定の日を知っており、真っ直に挙げた手で、長子の行列の中のイエス指し示すことをシメオンとアナとに事前の手はずを整えた。

122:9.4 (1353.3) アナは、この機会のために詩を書き、シメオンが歌うと、ヨセフ、マリヤ、そして寺院の中庭に集った者全員が、大いに驚いた。またこれは、長男買い戻しの讃美歌であった。

122:9.5 (1353.4) 主なるイスラエルの神は讃むべきかな

122:9.6 (1352.5) 神はその民を顧みてこれをあがなわれたのだから。

122:9.7 (1353.6) 私達全員のために救いの角を

122:9.8 (1353.7) 下僕ダヴィデの家にお立てになった。

122:9.9 (1353.8) 聖なる予言者達の口によってお語りにもなったように—

122:9.10 (1353.9) 敵から、また私達を憎む全ての者の手からの救済を。

122:9.11 (1353.10) 私達の父祖達に慈悲を示され、その聖なる盟約を覚えていられて—

122:9.12 (1353.11) 父祖アブラハムにお立てになった誓い

122:9.13 (1353.12) 私達を敵から救い出し

122:9.14 (1353.13) 恐れなく仕えさせてくださるのである

122:9.15 (1353.14) 生きている限り清く正しく。

122:9.16 (1353.15) おお、幼子よ、約束の子よ、いと高きものの予言者と呼ばれるであろう。

122:9.17 (1353.16) その王国を築くため主のみ前に先立って行き、

122:9.18 (1353.17) 罪の許しによる救いを

122:9.19 (1353.18) その民に知らせるのであるから。

122:9.20 (1353.19) 神の優しい慈悲を喜べ

122:9.21 (1353.20) 今、啓示の光が上から私達を望んだのであるから。

122:9.22 (1353.21) 暗黒と死の陰とに住む者を照らし

122:9.23 (1353.22) 私達の足を平和の道へ導くであろう。

122:9.24 (1353.23) 主よ、今こそあなたはみ言葉通りにこの下僕を安らかに去らせてくれますように

122:9.25 (1353.24) この救いはあなたが万民の前にお備えになったもので

122:9.26 (1353.25) 異邦人をも照らす啓示の光

122:9.27 (1353.26) み民イスラエルの栄光であります。

122:9.28 (1353.27) ベツレヘムへの帰途、ヨセフとマリヤは、混乱し威圧され、沈黙していた。マリヤは、年老いた詩人アナの別れの挨拶に大変当惑し、ヨセフは、イエスが待ち臨まれているユダヤ民族のメシヤだと印象づけるこの時期尚早の努力に調和していなかった。

10. ヘロデ行動す

122:10.1 (1353.28) しかしヘロデの監視人達は、行動をとらずにはいなかった。監視人達が、ウルからの僧達のベツレヘム訪問を通報すると、ヘロデは、これらのカルデア人に出頭するよう命令を出した。ヘロデは、これらの賢者にしきりと「ユダヤの王」について尋ねたが、かれらは、赤ん坊を産んだ母は、夫と共に国勢調査登録にベツレヘムに下りてきたものだと説明したが、彼に些さかの満足も与えるものではなかった。ヘロデは、この返事に満足せず、賢者達が、その子の王国は宗教的であって現世のものではないと宣言したのであるから、自分もその子に会って崇めることができるよう探し出すようにと彼らに財布を与え、指示をして送り出した。だが賢者たちが戻らないので、ヘロデは疑い始めた。これらを心に思い起こしていると、通報者達が、戻ってきて、イエスの買い

戻しの儀でシメオンが歌った部分の写しを持参し、寺院での最近の出来事の全てを報告をした。だが彼らは、ヨセフとマリヤを追うことができず、夫婦が、稚児をどこへ連れていったのか応答できずにいると、ヘロデは、非常に怒った。そこでヨセフとマリヤの居場所を突き止める捜索隊を派遣した。ナザレ家族のヘロデの探策を知り、ザカリヤとエリザベスは、ベツレヘムから遠のいたままでいた。男の稚児は、ヨセフの親戚に隠された。

122:10.2 (1354.1) ヨセフは、仕事を探すことを怖れたし、僅かな貯えは急激に消えていった。寺院での浄めの儀式の際でさえ、ヨセフは、モーゼが窮民の母達の清めの儀式に指示したように、マリヤのために２羽の小鳩の供え物を正当化するほどに自分は貧乏であると考えた。

122:10.3 (1354.2) １年以上の探索の後、ヘロデの密偵は、まだイエスの居所が掴めずにいた時、その上幼児は、まだベツレヘムに隠されているという疑惑から、組織的なベツレヘムの各家の捜索がなされ、２歳以下の全ての男の幼児は殺すようにとの命令を準備し、そしてこの方法により「ユダヤ人の王」にならんとするこの子供が滅ぼされ

ることを確実にしたかった。こうしてユダのベツレヘムでは１日に16人の男の幼児が殺された。しかし、陰謀と殺人は、当の彼自身の家族内でさえ、ヘロデの宮廷においては当り前であった。

122:10.4 (1354.3) これらの幼児の大殺戮は、イエスが１歳を少し過ぎた紀元前６年の10月の半ばに起きた。しかしヘロデの宮廷の随行員の中にさえメシヤの到来を信じる者がおり、そのうちの一人は、ベツレヘムの男の幼児虐殺命令を知ると、ザカリヤに伝え、続いてザカリヤは、ヨセフに使いを送り、ヨセフとマリヤは、幼児と共に殺戮前夜エジプトのアレクサンドリアに向けて出発した。注意を逸らすために、かれらは、イエスと単独でエジプトへの旅をした。かれらは、ザカリヤが与えてくれた資金でアレクサンドリアへ行き、そこでマリヤとイエスが、ヨセフの裕福な家族に身を寄せている間、ヨセフは、自分の仕事をした。かれらは、アレキサンドリアにまる2年逗留し、ヘロデの死後までベツレヘムには戻らなかった。

論文 123
イエスの幼年期

123:0.1 (1355.1) ベツレヘム滞在の不確実性と不安から、マリヤは、アレクサンドリアに無事にたどり着くまで離乳せず、そこで家族は、通常の生活に落ち着くことができた。かれらは、親類と共に暮らし、ヨセフは、到着直後に仕事を確保したので、自分の家族を養うことができた。かれは、数ケ月間大工として雇われ、その後幾つかの公共建築物の一つに携わる大きな労働者集団の長に昇進した。この新たな経験は、ナザレに戻ってからのヨセフに、請負人になる一案を持たらした。

123:0.2 (1355.2) イエスの心もとない幼年早期を通じて、マリヤは、幸福を危うくするかもしれない、あるいはいかなる形での地上での使命を妨害する何かが我が子に降り懸からないように長い監視を続けた。彼女ほどに、我が子に献身したものはいなかった。イエスがたまたま居ることになった家庭には、他に同じ年頃の子供が二人おり、近隣には遊び仲間として年の合う子供が、他に六人いた。最初マリヤは、イエスを身近に置こうとした。彼女は、他の子供と庭で遊ぶのを許せば何か起こりはしまいかと恐れたが、ヨセフは、同じ年頃の子供に順応する方法を学ぶ有用な経験を奪い取ると、縁者の加勢を得て、マリ

ヤを説得することができた。そしてマリヤは、そのような過保護の指導と通常でない養護は、自意識の強い、幾分自己中心的にする傾向があるかもしれないと気づき、約束の子を他の子供と同じように成長させる方策に納得した。彼女は、この決定に従順である傍ら、家の周りや庭で小さい子等が遊んでいる間は何時も必ず見守っていた。嬰児と幼少初期のこれらの年月、マリアが、息子の安全を念じ続けたこの重荷というものは、愛情深い母のみが知ることができるのである。

123:0.3 (1355.3) イエスは、アレクサンドリアでの２年間の滞在を通して健康に恵まれ、普通に成長し続けた。数人の友と、親類は抜きにして、誰もイエスが「約束の子」だとは告げられなかった。ヨセフの縁者の一人は、メンフィスのイクナトンの遠い子孫である幾人かの友人にこれを明かし、かれらは、アレクサンドリアの信者の小集団とともに、ナザレの家族の無事を願い、その子に敬意をはらうためにパレスチナに戻る少し前にヨセフの親類の篤志家の宮殿のような自宅に集った。この折に集まった友は、イエスにヘブライ教典の完全なギリシア語訳を提示した。しかしこのユダヤの聖なる書の写本は、イエスと

マリヤの両人が、エジプトに残るようにとのメンフィスとアレクサンドリアの友人達の招待をようやく断わるまでヨセフの手に渡されなかった。これらの信者は、運命の子が、パレスチナのいかなる指定された場所よりもアレクサンドリアの住人としての方がはるかに大きな世界的影響を及ぼすことができると主張した。ヘロデの死報を受けた後、これらの説得が、パレスチナへの彼らの出発をしばらく遅らせた。

123:0.4 (1356.1) ヨセフとマリヤは、友人のエズラエオンの小舟でアレクサンドリアをようやく離れ、ヨッパに向かい、紀元前４年８月下旬にその港に着いた。かれらは、直接ベツレヘムへ行き、そこに留まるべきか、あるいはナザレに戻るべきかを友人や縁者と談義し、９月のまる一月をそこで過ごした。

123:0.5 (1356.2) マリヤは、イエスが、ダヴィデの町ベツレヘムで育つべきだという考えを完全に諦めなかった。ヨセフは、息子がイスラエルの王のような救済者になるとは、実際に信じなかった。その上、かれは、自身が、本当はダヴィデの子孫ではないということを知っていた。自分

が子孫にみなされているのは先祖の一人のダヴィデの家系への養子縁組によるものであった。勿論マリヤは、ダヴィデの町こそがダヴィデの王座の新候補者が育て上げられるに最適の場所であると考えたが、ヨセフは、アーカラウスとよりもアンティパス・ヘロデとの賭けを望んだ。ヨセフは、ベツレヘム、あるいはユダの他の市における子供の安全性に大きな懸念を抱いた。ガリラヤのアンティパスよりも、アーカラウスの方が、父ヘロデの威嚇的な政策を進めそうだと推測した。そしてこれらの理由以外にヨセフは、子を養い教育するのにはガリラヤの方が良いと自分の好みをあからさまにしたが、マリヤの反対を押し切るのに３週間を要した。

123:0.6 (1356.3) ヨセフは、10月１日までにナザレに戻ることが自分達にとって最善であると、マリヤやすべての友人を説得した。そこで、紀元前４年10月初旬、ベツレヘムからリッダ、スキトポリス経由でナザレに出発した。ある日曜日の早朝、ヨセフと同伴の5人の親類が、徒歩で進む一方、マリヤとその子供は、新たに手に入れた役畜に乗り出発をした。ヨセフの親族は、ナザレまでの単独旅行を許そうとしなかった。連中は、エルサレム、ヨルダ

ン渓谷経由でガリラヤへ行くことを怖れたし、西の経路は、幼い子を連れた二人きりの旅人にとり必ずしも安全ではなかった。

1. ナザレに戻る

123:1.1 (1356.4) 旅の４日目、一行は、無事に目的地に着いた。かれらは、知らせることもなく家に到着し、そこにはヨセフの既婚の兄弟の一人が、３年以上も住んでおり、かれは、一行を見て誠に驚かされた。かれらは、すべきことをひっそりと為し、ヨセフとマリヤどちらの家族もアレクサンドリアを出発したことさえ知らなかった。あくる日ヨセフの兄弟は、家族を引っ越しさせ、マリヤは、イエスの誕生以来初めて我が家での生活を味わうべく小家族とともに落ち着いた。ヨセフは、一週間足らずで大工仕事を確保し、家族はこの上なく幸せであった。

123:1.2 (1356.5) イエスは、ナザレに帰着時点でおよそ３歳と２ヶ月であった。かれは、全てのこれら旅によく耐えたし、駆け回ったり、楽しめる自分の家があり、健康に優れ、稚拙な歓喜と興奮に満ちていた。しかしかれは、ア

レクサンドリアの遊び友達との交わりを大いに懐かしんだ。

123:1.3 (1356.6) ヨセフは、ナザレへの途中、ガリラヤの友人や縁者の間でイエスが約束の子であると言い触らすのは賢明ではないとマリヤを説き伏せていた。かれらは、これらの件についての全ての言及を誰からも差し控えることに同意した。そして双方共に、この約束遵守にとても忠実であった。

123:1.4 (1357.1) 全年を通してイエスの４年目は、通常の身体発育と心的活動の期間であった。一方かれは、ヤコブという近隣の同じ年頃の少年に非常に近い愛着を覚えるようになった。イエスとヤコブは、二人で遊びを楽しむとともに、優れた友人、忠実な、たいそう睦まじい友へと成長していった。

123:1.5 (1357.2) このナザレの家族生活における次の重要な出来事は、紀元前３年４月２日の早朝の次男ヤコブの誕生であった。イエスは赤ん坊の弟を持つという思いに興奮し、赤子の最初の動きを観察するために何時間も立っていたのであった。

123:1.6 (1357.3) ヨセフが村の泉と隊商の停留場近くに小さな作業場を建てたのは、同じ年の真夏のことであった。これ以降、かれは、昼間の大工仕事はごくわずかしかしなかった。彼には、仲間として２人の兄弟と他に幾人かの職人がおり、自身は、仕事場に残り軛や鋤を作ったり他の木工作業をしながら彼らを働きに出した。かれは、革、綱、粗布でも工作をした。イエスの方と言えば、成長とともに、学校のない折には、　世界の隅々からの隊商案内人や旅行者の会話や世間話を聞いたりする一方で、家の仕事で母を手伝い、仕事場で父の働き振りを観察したりと、父母の間での時を均等に過ごした。

123:1.7 (1357.4) イエスが４歳になる１ヶ月前のこの年の７月に、隊商の旅人との接触による悪性腸疾患の発生が、ナザレ中に広がった。マリヤは、イエスがこの伝染病に晒される危険をとても警戒し、二人の子供を着物にくるみ、ナザレの数キロメートル南のサリド近くのメギド道沿いにある自分の兄弟の田舎の家に逃れた。かれらは、２ヶ月以上もナザレに戻らなかった。イエスは、この最初の農場経験を大いに楽しんだ。

2.　５年目(紀元前２年)

123:2.1 (1357.5) ナザレへの帰還の一年余の後、少年イエスは、何かにおいて個人的で、しかも心の底からの最初の道徳決意の年齢に到達した。楽園の父からの神性の贈物である思考調整者は、先に人間の肉体に似せた超人存在の化身のメルキズィデクのマキヴェンタに仕え、こうして経験を積み、彼に内住するためにやってきた。これは紀元前２年２月11日に起きた。心の内に住み、　心の究極的な崇高化と進化している不滅の魂の永久生存のために働くこれらの思考調整者を受け入れたそれ以前、またその時代以降の幾百万という他の子供達と同様に、イエスは、神性の訓戒者の到来に気づかなかった。

123:2.2 (1357.6) ２月のこの日、マイケルの子供に似せた具現の完全な状態に関連があり、宇宙の支配者の直接かつ個人的な監督は、終わった。展開していく人間の具現の期間、その瞬間から、イエスの後見は、この内住する調整者、そして惑星の上司の指図に従い、ある種の決められた任務の履行を割り当てられた中間創造物の代理者により、時おり補充される関連する熾天使等の任務と定められている。

123:2.3 (1357.7) この年の８月イエスは５歳であった。それゆえ我々は、その一生の５年目(数え年)と言おう。この年、紀元前２年、５年目の誕生日の１ヶ月余り前、７月11日の夜生まれた妹のミリアムの到来がイエスを非常に喜ばせた。翌日の夕方、生物の中の様々な集団が、別々の個人としてこの世界に生まれてくる様について、イエスは、父と長い話をした。イエスの初期教育の最も貴重な部分は、深く考え、追い求めるイエスの探求に対しての両親からの答えから確保された。ヨセフは、少年の数多くの質問に充分の労力や時間を費やすことを決して怠らなかった。５歳から10歳までの時期、イエスは質問の塊であった。ヨセフとマリヤが答えられない時、２人は、充分討論したり、または少年の利発な心が仄めかした問題に対して満足のいく解決に至る努力をするイエスを他の可能な限りの方法で助力することを決して怠ったことはなかった。

123:2.4 (1358.1) ナザレからの帰郷以来、家族は忙しく、ヨセフは、新しい仕事場の建設や本来の仕事の再出発に殊の外追われてきた。かれは、それ程までに仕事にかまけていたので、ジェイムズのための揺りかごを作る時間さえな

かったが、これは、ミリアムが生まれるかなり前に改められていたので、この稚児には、家族が、可愛がるのに寄り集まってくるとても心地の良い赤ちゃん用のベッドがあった。　幼いイエスは、心から、自然で普通の家庭経験に入った。かれは、弟や赤ん坊の妹をとても可愛がり、マリヤの育児に大いに役立った。

123:2.5 (1358.2) 当時のガリラヤのユダヤ人の家庭ほどに子供により知的で、道徳的で、良い宗教教育を与えられる家庭は、非ユダヤ人の世界にはほとんど無かった。これらのユダヤ人は、子育てや教育のための系統だった段階があった。子供の生涯を７段階に分けていた。

123:2.6 (1358.3) 1. 新生児、最初の８日まで

123:2.7 (1358.4) 2. 授乳児

123:2.8 (1358.5) 3. 離乳児

123:2.9 (1358.6) 4. 母に依存の期間、５年目終了まで続く

123:2.10 (1358.7) 5. 子供の独立の始まり、息子の場合父は、その教育の責任を持つ

123:2.11 (1358.8) 6. 思春期の少年と少女

123:2.12 (1358.9) 7. 成年男女

123:2.13 (1358.10) 子供の躾の責任は、5回目の誕生まで母が担うのが、ガリラヤのユダヤ人の習慣であり、それからは、もしそれが男の子ならその時点から父親が、少年の教育責任を負う。イエスは、したがって、この年ガリラヤのユダヤ人の子供の第5段階に当たり、それに応じて紀元前2年8月21日、マリヤは、更なる教導のためにイエスを正式にヨセフに手渡した。

123:2.14 (1358.11) 今度はヨセフが、イエスの知性と宗教教育を直接引受けるのであるが、母は、まだその子の家庭教育に関心を持っていた。彼女は、地所をぐるっと取り囲む庭園の塀のまわりに育つ蔦や花について知り、世話をすることを彼に教えた。彼女はまた、イエスが地図を描き出したり、アラム語、ギリシア語、後にはヘブライ語を書くことで、彼の初期の練習の多くをした砂入りの数個の浅い箱を家の屋根の上(夏の寝室)に用意をした。そしてかれは、流暢な3言語すべての読み、書き、話すことを学んだ。

123:2.15 (1358.12) イエスは、身体的にほとんど完璧な子供に見えたし、精神的にも感情的にも通常の成長を続けた。この年(数えの5歳)の後半、軽い消化不良、最初の軽い病気を経験した。

123:2.16 (1359.1) ヨセフとマリヤは、度々長子の将来について語り合ったが、もしそこに君がいたとしたならば、その時代と場所における普通の健康で伸び伸びとした、だが極めて好奇心の強い子の育つところを観察するに過ぎなかったであろう。

3. 6年目の出来事(紀元前1年)

123:3.1 (1359.2) すでに、イエスは、母の助力でアラム語系のガリラヤ方言を会得していた。さて今度は父が、ギリシア語を教え始めた。マリヤは、ギリシア語をほとんど話さなかったが、ヨセフは、アラム語とギリシア語双方の流暢な話し手であった。ギリシア語学習のための教科書は、ヘブライ教典—詩篇をふくむ法律と予言者の完全版—の写しであり、それは、エジプトを立つ際に贈呈されたものであった。ギリシア語の完全な写本は、ナザレ中に2冊だけであり、大工の家族によるその中の1冊の所

有は、多くの訪問客がヨセフの家を求める場所にすると同時に、イエスの成長につれ、ほとんど絶えることなくひたむきな生徒達や誠実な真の探求者達に会わせることが出来たのである。その年の暮れる前に、イエスは、この極めて貴重な写本の管理をしており、6回目の誕生日には、聖なる書は、アレクサンドリアの友人と親類からイエスに贈られたものだと告げられ、そしてかれは、短い間ですぐその写本を読めるようになった。

123:3.2 (1359.3) まだ6歳にもならない時、イエスの若い人生の最初の大きな衝撃が起こった。父は、—少なくとも父母共に、—全てを知っていると少年には思われた。それ故、かれが、父にたった今起こった弱震についてその原因を尋ねた折、「息子よ、私は余り知らないよ。」とヨセフがいうのを耳にしたこの聞きたがりの子供の驚きを想像してみよ。こうしてイエスには、この地上の両親が、全賢全知ではないことが分かると、長くて混乱させるような幻滅が、始まった。

123:3.3 (1359.4) ヨセフの最初の考えは、地震は神によって起こされたとイエスに言おうとしたが、そのような答えは、

より厄介な質問の挑発になると、瞬間の反射がヨセフを諭した。幼いころでさえ迂闊に神か悪魔どちらかの責任にして、物理的あるいは社会現象についてのイエスの質問に答えるのは誠に難しかった。ユダヤ人の普通の信念と調和して、イエスは、心的、精神的現象の可能な説明として善霊と悪霊の教えを長らく快諾していたが、そのような目に見えない作用は、自然界の物理現象によるものであるとずっと前から疑わしくなっていた。

123:3.4 (1359.5) イエスが6歳になる前の紀元前1年の初夏、ザカリヤ、エリザベスとその息子のヨハネが、ナザレの家族を訪ねて来た。イエスとヨハネは、二人の記憶の中での最初の訪問であるこの時を楽しんだ。訪問者は、ほんの数日しか居られなかったが、親達は、息子達の将来の計画を含む多くの事を話し合った。こうして親達が、談話している間、少年達は、屋上の砂で積木で遊んだり、他にもいろいろと実に男の子らしい様子で遊んでいた。

123:3.5 (1359.6) イエスは、エルサレムから来たヨハネに会って、イスラエルの歴史に尋常でない興味を表し、安息日の儀式、会堂での説教や繰り返される祝賀の馳走の意味

について詳細を尋ねるようになった。父親は、この全ての時期について説明した。最初は、第一夜に１本の蝋燭から始まり、翌晩にもう１本追加していく八日間続く真冬の祝いの灯明であった。これは、ユダ・マカバイが、モーゼの追悼式の復興後、寺院への奉納を祝ったものであった。次は、エステルの饗宴と彼女によるイスラエル救出の祭、すなわち早春のプリムの祝賀であった。この後に続くのは、厳粛な過ぎ越しの祭りであり、大人達は、都合のつく時にいつでもエルサレムで祝う一方で、子供達は、家でまる一週間酵母のパンを食べられないことを注意するのであった。その後に初物の祭、つまり農作物の収穫があり、最後に最も荘厳な新年の祝い、償いの日があった。これらの祝賀の一部と遵守は、イエスの幼い心には理解しがたいものであったが、かれは、真剣にそれらについて考えた上で、葉の仮小屋で野営をした笑いと娯楽の全ユダヤ人の慣例の休暇時期の会堂の饗宴の喜びに完全に入り込んでいった。

123:3.6 (1360.1) ユセフとマリヤは、この年のずっとイエスの祈りに困惑した。イエスは、まるで地上の父親ヨセフに話すように天国の父に話すと言って譲らなかった。神格と

の厳粛で敬虔な交わりの手段からのこの離別は、両親に、特に母にいささかの心の動揺を与えたが、変わるようにと彼を説得することはなかった。かれは、教えられてきた通りにお祈りを唱え、その後に「少し天国の僕の父と話」をすると主張した。

123:3.7 (1360.2) この年の6月ヨセフは、ナザレの仕事場を男のきょうだいに譲り、建築業者として正式に仕事を始めた。年が終わる前には、家族の収入は3倍以上となった。ヨセフの死後まで二度と再びナザレの家族が貧困の危機を感じることは決してなかった。家族は、より大きく膨らみ、余分の教育や旅行に多額を費やしたが、ヨセフの増収入は、増額出費との足並みをそろえていた。

123:3.8 (1360.3) 続く数年間、ヨセフは、ナザレ内外での建築と併行して、カナ、ガリラヤのベツレヘム、マグダラ、ネイン、セフォリス、カペルナム、エンドルでかなりの仕事をした。ジェイムズが、家事や幼い子供達の世話の手伝いができる年齢に成長するにつれ、イエスは、父と家を離れ、これらの近隣の町村への頻繁な旅をした。イエスは、鋭い観察者であり、これらの旅で多くの実用的な

知識を得た。かれは、人間とその地上の生き様について勤勉に知識を蓄えた。

123:3.9 (1360.4) この年、自己の強い感情と強烈な衝動を家族の協力や家庭教育の要求に合わせることにイエスは、大きく前進した。マリヤは、愛情ある母であったが、かなり厳しい規律励行者であった。しかしヨセフは、いつも少年と腰を下ろし、様々な点において、家族全体の幸福と平穏のために個人的な欲望の節制の必要性について真実の、しかも根本理由について充分に説明するのが常であったので、イエスに対する大きな影響力を振るった。その状況が説明されると、イエスは、つねに聡明に、かつ快く親の願いや家庭のきまりに協力的であった。

123:3.10 (1360.5) 母が家の手伝いを必要としない時の余暇の多くは、昼間は花と植物、夜間は星の考察に費やされた。かれは、この秩序立ったナザレ一家の就寝時間のずっと後に、横になり不思議そうに星空を見上げるといったやっかいな傾向を明らかにした。

4. 7年目(紀元1年)

123:4.1 (1361.1) これは、イエスの生涯で多事の年であった。1月初旬、ガリラヤで大きな吹雪が起きた。61センチメートルの深さの雪が降り、イエスがその一生で見た中で最大の降雪であり、ナザレで百年間に降った中でも最も深いものであった。

123:4.2 (1361.2) イエスの時代のユダヤ人の子供の遊びは、むしろ限定的であった。子供達は、あまりにしばしば年上の者がしているのを見てその中で真剣な事をして遊んだ。かれらは、しばしば目にし、いかにも壮観な儀式である結婚式や葬式の真似事をよくした。かれらは、踊ったり、歌ったりしたが、後の時代に子供達がよく楽しんだ決まりを伴うような遊びはそれほどなかった。

123:4.3 (1361.3) イエスは、隣の少年と、後にはジェイムズと共々に、大工の仕事部屋の一番奥の角での遊びを楽しんだ。そこでかれらは、鉋屑や木片で大いに面白く遊んだ。　安息日に禁じられている特定の遊びの害悪について理解することは常に難しかったが、かれは、両親の意に即さないことは決してしなかった。イエスは、ユーモアと戯れの能力を持っていたが、その時代と世代の環境

においてそれを表現する機会はほとんどなかったものの、14歳まではたいてい陽気で気楽であった。

123:4.4 (1361.4) マリヤは、家と隣接した動物小屋の上に鳩小屋を置いてあり、家族は、鳩の売却から得た利益から十分の一を差し引きそれを特別慈善基金として会堂の役員に渡した後、イエスが残りを管理した。

123:4.5 (1361.5) この時までにあった事故らしい事故は、粗布製の屋根の寝室に続く裏庭の石段での転倒であった。それは、東からの突然の７月の砂嵐の際に起きた。熱風は、通常は雨季に、特に３月と４月に粒砂の突風をもたらした。そのような嵐が７月にあるというのは、番外なことであった。　嵐が襲ってきた時、イエスは、乾燥期の大半は、これが遊戯場であったので例によって屋根で遊んでいた。かれは、階段を下りているとき砂で目つぶしにあい倒れた。この事故の後ヨセフは、階段の両側に手摺を設けた。

123:4.6 (1361.6) この事故を予め防ぐ方法はなかった。現世の中間の保護者達、つまりこの少年の見守りを任されていた正、副の中間者の怠りであるとは、責められなかった。

守護天使の責任にも問えなかった。ただ単に避け得られるものではなかった。だが、ヨセフのエンドルへの留守中に起きたこの些細な事故は、心に多大の不安を広げていったので、マリヤは、無分別にも何ヶ月もの間、自分の極近くにイエスを居させようとした。

123:4.7 (1361.7) 物理的災害、物理自然のありふれた出来事には、天界の人格は濫りに手出しをしない。普通の情況下においては、中間の被創造物のみが、宿命の男性、女性である人間達を護るために物質状況に介入することができるのであり、特別の状況においてさえ、これらの存在体でさえ上司の特定の指図に限って行動できる。

123:4.8 (1361.8) そして、これは、この好奇心と冒険心に溢れた若者の上にその後起きたそのような軽い事故の中の一つにすぎない。活発な少年の平均的な幼少時代や青春時代を心に思い描けば、あなたは、イエスの若々しい経歴に関するかなりはっきりとした見当がつくであろうし、彼が、両親に、特に母親にいかほどに憂慮させたか想像できるであろう。

123:4.9 (1362.1) ナザレの家族ヨセフに、４番目の家族が、紀元１年３月、水曜日の朝生まれた。

5. ナザレの学校時代

123:5.1 (1362.2) イエスは、今や、ユダヤの子供の教会堂の学校において正規の教育が始まる年齢の７歳となった。そこでかれは、この年の８月、ナザレでの波瀾万丈の学校生活に踏み入った。この少年は、すでにアラム語とギリシア語の二つの言語の流麗な読み手、書き手、話し手であった。かれは今度は、ヘブライ語の読み、書き、話すことの学習課題に習熟しようとするところであった。そしてかれは、目前にある新しい学校生活を本当に熱望していた。

123:5.2 (1362.3) かれは、３年間—10歳まで—ナザレ教会堂の小学校に通った。かれは、この３年間ヘブライ語で書かれた法典の基本を学んだ。次の３年間は、その上の学校で学び、神聖な法律のより深い教えを反復朗読により記憶することに集中した。かれは、13歳の年にこの会堂の学校を卒業し、会堂司達から「戒律の息子」として、この後イスラエル国家の責任ある国民として、エルサレムで

の過ぎ越しの祝いへの出席を課され、　教育を受けたとして両親に引き渡された。依ってかれは、その年父母と共に最初の過ぎ越しの祝いに参加した。

123:5.3　(1362.4)　ナザレでは、生徒達は、床に半月になって座り、一方先生、つまりハザン、教会堂役員は、生徒に向かい合って座った。かれらは、レビ記に始まり、他の法典の学習、それに予言者、詩篇と次々に学習していった。ナザレの教会堂は、ヘブライ語の経典の完全な写本を所有していた。　12年目までは旧約聖書のみの学習であった。夏間の学習時間は、大幅に短縮された。

123:5.4　(1362.5)　イエスは、早々とヘブライ語の熟練者となった。際だった訪問者がたまたまナザレに逗留していなかったりすると、若者として、会堂での通例の安息日の礼拝に集った忠実な支持者にしばしばヘブライ語の教典を読むことを頼まれるのであった。

123:5.5 (1362.6) これらの会堂学校に、勿論教科書はなかった。指導にあたっては、ハザンが声に出し、生徒達がその後について復唱するというものであった。学生は、その書物を手にする時は、朗読と不断の復誦により学んだ。

123:5.6 (1362.7) イエスは、更なる正規の学習に加えて、方々の土地からの人間が父の修理場に出入りするにつれ、あらゆる方面からの人間性と接触し始めた。かれは、成長すると、休憩や食事のために泉の近くに滞在する隊商人と自由に交わった。ギリシア語が堪能な話者あるかれは、大部分の隊商の旅人や案内人との談話にほとんど苦労はなかった。

123:5.7 (1362.8) ナザレは、隊商の中間駅であり、分岐点であり、構成人口は主に非ユダヤ人であった。同時にそれは、ユダヤ人の伝統的な法律の自由な解釈の中心地としても広く知られていた。ユダヤ人は、ユダでよりもガリラヤにおいてより非ユダヤ人と自在に混じった。ナザレのユダヤ人は、非ユダヤ人との接触からくる堕落の恐怖に基づく社会規制の解釈においてガリラヤの全都市の中で最も寛大であった。これらの状況が、エルサレムに「ナザレから何か良い事が起こり得るか。」という諺を引き起こした。

123:5.8 (1363.1) イエスは、主に家庭において修身と精神的な修養を受けた。ハザンからは、知的かつ神学上の教育の多

くを得た。だが真の教育—人生における難題と取り組む実際の試練のための心と情感の素養—は、同胞に混じることで得た。人類を知る機会をイエスにもたらしたのは、老若の、ユダヤ人と非ユダヤ人であるこれらの仲間の人々とのこの親しい交友であった。イエスは、人間を完全に理解し、心から愛したという点において大いに教育を受けた。

123:5.9 (1363.2) 会堂での歳月を通じて、かれは、聡明な生徒で、3言語に精通しており、大いなる利点を備えていた。ナザレのハザンは、イエスの学校での課程修了に際し、「少年に教える事が出来た」よりも自分は、「イエスの探究的な質問からもっと学んだ。」とヨセフに打ち明けた。

123:5.10 (1363.3) イエスは、修業課程を通して多くを学び、会堂における定例の安息日の説教から多大の激励を得た。ナザレでは、安息日に立ち寄った著明な訪問者に会堂での演説を依頼するのが慣例であった。イエスは、成長するにつれ、全ユダヤ世界の偉大な思想家達が意見を述べるのを聞いたし、ナザレの会堂は、ヘブライの思想と文

化の先進で自由主義の中心地であったことから、多くの者もまたほとんど保守的なユダヤ人ではなかった。

123:5.11 (1363.4) 7歳の入学時に、(この時期ユダヤ人は、義務教育法を開始したばかりであった)、その学習を通して手引きとなる適切な教え「誕生日の文章 」を選ぶことが慣行であり、生徒達は、13歳の卒業の際にそれについてしばしば詳細に述べた。イエスが、選択した原文は、予言者イザヤからの「主なる神は我上にあり。主は我に油を塗られ給われたから。弱き者に良き報せをもたらすために、傷ついた者を癒すために、捕われた者へ自由を宣言するために、精神の囚人を解き放つために、あの方を遣わされた。」であった。

123:5.12 (1363.5) ナザレは、ヘブライ国家に24ヶ所ある僧の中心地の一つであった。しかしガリラヤの僧門は、伝統的な法の解釈においてユダヤの代書人やラビよりも寛大であった。ナザレにおける安息日遵守は、より自由であった。ヨセフは、それ故、安息日の午後、イエスを散歩に連れ出すのが慣習であり、彼らの気に入りの小旅行の一つは、家の近くの高い丘に上ることであり、そこからは

ガリラヤの全景が臨めた。晴れた日には、北西の方角に海へと続くカルメル山の長い尾根が見えた。そしてイエスは、父が、ヘブライ予言者の長い系列の最初の一人であるアハブを叱責し、バールの僧達を暴き出したエリヤの話をするのを幾度も聞いた。北には、ハーモン山が、堂々たる華麗さでその雪の頂を高くして、万年雪で白く煌くおよそ910メートルの上向きの稜線を占有していた。また遠く東には、ヨルダン渓谷とはるか先にはマオブの岩の多い丘が横たわるのが見えた。南と東には、太陽が、大理石の壁を照らしており、円形劇場と人目を引く寺院のあるデカポリスのグレコローマンの市街が見えた。彼らが、日の沈む方向へ散策していくと、西には遠い地中海に帆船を見てとることができた。

123:5.13 (1364.1) イエスには四方からナザレに出入りする隊商が見え、南の方角にはギルボア山とサマリアへと続く広大で肥沃なエスドラエロンの平原が見下ろせた。

123:5.14 (1364.2) 遠景を見渡す高さまで登らない時は、かれらは、近郷を逍遥し、季節にそって様々な自然の趣を注視

した。家庭的団欒の他に、イエスの初期の教育は、敬虔で思いやりのある自然との触れ合いに関係があった。

123:5.15 (1364.3) イエスは、８歳前には、ナザレの全ての母親や若い女性に知られており、彼女たちには家から遠くなく、町全体の接触と噂話の中心地の一つである泉で出会い、話したことがあった。この年イエスは、家族の雌牛の搾乳や他の動物の世話の方法を習った。この年とその翌年には、チーズ作りと機織りも学んだ。10歳のかれは、織機操作の名手であった。イエスと隣の少年ヤコブが渾々たる泉の近くで働く陶工と大の親友となったのは、この頃であった。二人は、ろくろの上の粘土を形作るナタンの巧妙な指を見て、成長したら陶工になると何度となく心に誓った。ナタンは、この少年達が気に入り、粘土を与え、色々な物や動物を競って形にすることを提案し、二人の独創的な想像力を刺戟しようとした。

6. ８年目(紀元２年)

123:6.1 (1364.4) この年は、学校での興味深い年であった。イエスは、変わった生徒ではなかったが、勤勉な生徒で三分の一のより進んだ集団に属しており、よく勉強をしたの

で、毎月一週間休みを許されるほどであった。通常この一週間は、マグダラ近くのガリラヤの湖岸の漁師のおじか、それともナザレの８キロメートル南の農場のもう一人のおじ(母の兄弟)と過ごした。

123:6.2 (1364.5) 母は、イエスの健康と安全を過度に案じるようになったが、これらの旅を次第に仕方がないと思うようになった。叔父や叔母達も全員イエスを非常に気に入り、この年とそれ以降、家々の間では、月々の自分達の仲間の確保のための活発な競争が起きた。おじの農場での第１週目の逗留(幼児以来)　は、この年の１月であった。ガリラヤ湖での最初の週の漁の経験は５月であった。

123:6.3 (1364.6) イエスは、この頃ダマスカスからの数学の先生に会い、数の扱いのいくらかの新方法について学び、数年の間、数学に多くの時間を費やした。数、距離、割合に関しての鋭い感覚を身につけた。

123:6.4 (1364.7) イエスは、弟のジェイムズをとても可愛がるようになり、この年末までには弟に文字を教えるようになった。

123:6.5 (1364.8) この年イエスは、乳製品を竪琴の授業料と引き換える段取りをつけた。かれは、音楽の全てに対し尋常でないほどの好みがあった。後にかれは、若い仲間の間において声楽への関心を強めた。かれは、11歳までには上手な竪琴奏者で、並外れた解釈と巧みな即興で家族と友達の両方をもてなすことを大いに楽しんだ。

123:6.6 (1365.1) イエスは、学校で羨ましがられる程の進歩を続ける傍ら、両親や先生達にとっては全てが円滑にいくというわけではなかった。イエスは、科学、宗教の双方に関する、特に地理と天文に関して当惑させる多くの質問をすることに固執した。かれは、特に、何故パレスチナでは乾期と雨期があるのか知りたがった。繰り返し、ナザレとヨルダン渓谷との大きな温度差の説明を求めた。かれは、そのような利口な、しかし面倒な質問を決して簡単には止めなかった。

123:6.7 (1365.2) 3番目の弟シモンが、この年紀元2年4月、金曜日の夕方に生まれた。.

123:6.8 (1365.3) 2月にラビのエルサレム学院の先生の一人ナホルが、イエスを観察するためにやってきて、エルサレム

の近くのザカリヤの家に類似の使命を帯びていた。かれは、ヨハネの父にそそのかされてナザレにきた。最初かれは、イエスの率直さと宗教的な事柄に自身を結びつける型破りな態度に幾らか驚かされたが、それはガリラヤが、ヘブライの学問と文化の中心地から遠いせいであるとし、イエスをユダヤ文化の中心地で教育と実習の利点があるエルサレムに彼とともに連れ帰ることをヨセフとマリアに勧めた。マリヤは半ば説得させられた。彼女は、長男が、メシア、ユダヤの救済者になるのだと確信していた。ヨセフは躊躇した。同様にかれは、イエスが、運命の人になるために成長すると納得させられていたが、その運命が如何ようなものになるのか全く不確かであった。しかしかれは、息子が地上においてある大きな使命を果たすということを決して疑わなかった。かれは、ナホルの助言を考えれば考えるほど、提案されたエルサレム滞在の妥当性をますます疑問に思うのであった。

123:6.9 (1365.4) ナホルは、ヨセフとマリヤのこの意見の食い違いのために、この問題すべてをイエスに任せる許可を要請した。イエスは、注意して聞き、ヨセフ、マリア、そ

れにその息子が自分の気に入りの遊び相手である隣人の石工のヤコブと話し、それから二日後、両親と助言者の間にそのような意見の差があり、どちらにも強く感じることはなく、また自分自身が、そのような決定責任をもつに足るとは思わないので、全体の情況を見て、かれは、「天国の父と話す」とついに決めた。かれは、その答えに完全には自信がないので、むしろ「父母と」家に留まるべきだと感じていると報告告した上で、「私のことをそれ程に愛している二人の方が、私の身体だけが見え、そして私の心を観察はできるが、私を本当には知ることのできない他人よりも、私のためにより多く出来るし、より安全に導くことができるはず。」だと付け加えた。皆は、驚嘆し、ナホルは、エルサレムへと戻っていった。イエスが家を離れることが再び検討事項となるのは、何年も先のことであった。

論文 124
イエスの幼年後期

124:0.1 (1366.1) イエスは、ガリラヤにおいてよりもアレキサンドリアで学校教育のより良い機会を享受することができたもしれないが、最小限の教育的指導で自身の人生問題

を解決をし、同時に、文明世界の各地域からのあらゆる階級の多くの男女との不断の接触からの大きな利点を味わうというそのようなすばらしい環境は、あり得なかったかもしれない。イエスが、アレキサンドリアに留まっていたならば、彼の教育は、ユダヤ人によって、またユダヤ人の線に沿って排他的に指導されていたであろう。イエスは、ナザレにおいて教育を確かなものとし、非ユダヤ人を理解するように許容的な態度で準備ができたし、ヘブライ神学の解釈における東方またはバビロニアと、西洋またはギリシャの相対的長所についてのより良く均衡のとれた考えが得られる教育を受けた。

1. イエスの９年目(紀元３年)

124:1.1 (1366.2) 重病をしたとはほとんど言えないが、この年イエスは、弟達と赤ん坊の妹と幼年期の軽い病気の幾つかに罹った。

124:1.2 (1366.3) 学校は引き続きあり、かれは、いまだに好評な生徒で、毎月１週を自由に行動しており、また引き続いて隣接する都市への父との旅行、ナザレの南の叔父の農

場での滞在、マグダラからの遠出の漁とにおよそ等分の時を分けて過ごした。

124:1.3 (1366.4) すべての像、絵画、および素描は、事実上は偶像崇拝であるという教えに関して、イエスが敢えてカザンに挑戦した時、学校での最も重大な問題が、晩冬に起ころうとしていた。イエスは、陶芸用の粘土でさまざまな物を形にするのと同じく、風景描写を楽しんだ。その類の全ては、ユダヤの法により厳しく禁じられていたが、かれは、これまでは、これらの活動を続けることを許されるまでに両親の異議を緩めることがなんとかできていた。

124:1.4 (1366.5) しかし、より遅れている生徒の一人が、教室の床の上のイエスが描いた教師の木炭画を発見した時、問題は、学校で再び巻き起こされた。それは、一目瞭然でそこにあり、そこで委員会は、長男の無法を抑圧するために何かが為されることを要求するためにヨセフを呼ぶ前に、長老の多くがその絵を見ておいた。多才で活発な子供の行動に関してヨセフとマリヤに苦情が初めて来たということではなかったが、これは、これまで訴えられ

た苦情の中で最も深刻なものであった。イエスは、裏口のすぐ外の大きな石に据わり、暫く自分の芸術的努力に対する告発を聞いていた。イエスは、彼らの申し立てた自分の悪行で父を非難することに憤慨した。そこでかれは、堂々と歩いていき、恐れることなく告発するもの達に立ち向かった。長老達は、混乱に陥った。一人か二人は、少年が冒涜そのものではないとしても冒涜的だと考る一方、何人かは、滑稽な出来事と看做そうとした。ヨセフは困惑し、マリヤは憤慨していたが、イエスは、言いたい事を言い、勇敢に自分の視点を守り、争点の的となる他の全ての問題と同様にこれに関しても父の決定を受け入れる、と完璧な自制をもって発言した。そこで長老委員会は、黙して解散した。

124:1.5 (1367.1) マリヤは、イエスが、学校でこれらの疑わしい活動の何も続けないと約束するならば、家での粘土形成を許可するようヨセフに働き掛けると努力したが、ヨセフは、第２の戒律の律法学者の教義の解釈が優先されるべきだと決定せざるを得ないと感じた。それでイエスは、その日から父の家に住む限り、何かに似せて描写も形作りもしなかった。しかしかれは、自分のした事が悪

いとか、若い人生の大いなる試みの一つを構成したそのように好きな楽しみをあきらめることに納得してはいかなかった。

124:1.6 (1367.2) 6月の後半、イエスは、父共々タボル山の頂上に初めて登った。晴れた日で、眺めは上々であった。この9歳の少年にとり、インド、アフリカ、およびローマを除く全世界を本当に眺めたように思えたのであった。

124:1.7 (1367.3) イエスの2番目の妹マルタが、9月13日、木曜日の夜に生まれた。マルタが生まれて3週間後、ヨセフは、しばらく家にいたが、仕事場と寝室を一つにする家の増築を始めた。イエスのために小さい作業台が作られ、イエスは、初めて自分自身の道具をもった。かれは、長年折々に、このベンチで作業し、くびき作りに関しては大いに技術を高めるようになった。

124:1.8 (1367.4) この冬と翌年は、ナザレの数十年の間で最も寒かった。　イエスは、山で雪を見たことがあったし、ナザレにも何度か雪は、降ったことがあり、ほんの短い間地面に残った。しかしかれは、この冬まで氷を見たことはなかった。水が、固体、液体、蒸気として存在し得る

という事実—かれは、長らく煮え立つ深鍋からの蒸気について考えた—は、若者に、物質界とその構成について多くを考えさせた。とはいえ、この成長する若者に具体化した人格は、この間ずっと広大な宇宙のこれら全ての物の実際の創造者であり組織者であった。

124:1.9 (1367.5) ナザレの気候は、厳しくなかった。1月は、最も寒い月で、平均気温は摂氏10度前後であった。最も暑い月の7月と8月は、24度から32度の間を上下した。山岳からヨルダン川と死海の谷まで、パレスチナの気候は、極寒から炎熱にまで及んだ。それ故、ある意味でユダヤ人は、ありとあらゆる世界の異なる気候条件で住む準備ができていた。

124:1.10 (1367.6) 最も暑い夏の数カ月でさえ、涼しい海風は、通常午前10時から午後10時頃まで西から吹いた。だが、時おり東の砂漠からすさまじい熱風が、全パレスチナに吹いた。この熱い爆風は、通常雨期の終わり近くの２月と３月に襲ってきた。当時雨は、11月から４月まで爽やかなにわか雨であり、降り続くものではなかった。パレスチナには夏と冬、乾期と雨期の２つの季節しかなかっ

た。１月に花が咲き初め、４月末までには国中が、１つの広大な花園であった。

124:1.11 (1367.7) イエスは、この年の５月におじの農場で初めて穀物の収獲を手伝った。かれは、13歳までにナザレ周辺で働く男女の仕事に関する金属工作を除くほとんど全てについて何かを知ることができおり、成長してからは、父の死後、鍛冶屋の仕事場で数カ月を過ごした。

124:1.12 (1368.1) 仕事と隊商移動の低調時、イエスは、カナ、エンドル、ナイン近くへ父と娯楽や仕事で多く旅をした。若者の時でさえ、かれは、ナザレから北西へほんの５キロメートルほどの、そして紀元前４年から紀元25年頃までガリラヤの首都であり、またヘロデ・アンチパスが住居の一つであったセフォリスを頻繁に訪れた。不文律

124:1.13 (1368.2) イエスは、身体的に、知的に、社会的に、精霊的に成長し続けた。　家から離れる旅行は、家族へのイエスのより良く、より寛大な理解に大いに役立った。そしてこの頃までには、両親でさえ彼に教えると同時に彼から学び始めていた。青春期にさえイエスは、独創的

な思考者であり、巧みな教師であった。かれは、いわゆる「不文法」と絶えず衝突したが、常に家族の習慣に適応しようとした。かれは、同年令の子供等とうまくやったが、彼らの行動の鈍い心に度々落胆するようになった。　10歳前には、成年者—身体的、知的、宗教的—の技能の促進のための一団となった７人の少年団の団長になっていた。これらの少年の中にあって、イエスは、多くの新しい遊びと身体の気晴らしのための様々の改善された方法の導入を果たした。

2. 10年目(紀元４年)

124:2.1 (1368.3) 父との田舎での散策の際、イエスが、特異な性質を帯びる自分の生涯の使命についての自意識を持ち始めたと暗示するような気持ちと考えを初めて表現したのは、７月５日、月の最初の安息日であった。ヨセフは、息子の極めて重要な言葉を注意して聞いたが、ほとんど意見を述べなかった。ヨセフは、進んで情報提示をしなかった。あくる日イエスは、同様の、しかしより長い話をマリヤとした。マリヤは、同じように若者の表明に聞き入ったが、こちらもまた情報を提示しようとはしなかった。イエスが、人格の本質と地上での任務の特性に関

する自身の意識内でのこの拡大する顕示について再び両親と話すまでにはおよそ2年の間があった。

124:2.2 (1368.4) 8月に教会堂の上の学校に入学した。かれは、質問することに固執し、学校で絶えず問題を引き起こした。ますますかれは、おおよそすべてのナザレを騒ぎに閉じ込めた。両親は、これらの不穏な質問を禁じることには気が進まなかったし、担任教師は、この若者の好奇心、洞察と知識に対する渇望に殊の外好奇心をそそられた。

124:2.3 (1368.5) 遊び仲間は、イエスの行為に超自然的なものは何も見なかった。ほとんどの点においてかれは、皆と同じであった。勉強に対する彼の関心は、いくらか平均以上であったが、並外れてというほどではなかった。彼は、学級の他の者より多く質問をした。

124:2.4 (1368.6) 恐らくイエスの最も希有に目立つ気質は、自分の権利のための争いには不本意なことであった。年の割りにはそのようなよく発達した若者であったので、不当な、あるいは個人攻撃を受けた時でさえ、防御に気が進まないということは、遊び仲間には奇妙に見えた。事は

うまく運び、１歳年上の隣人の少年ヤコブとの友情のお蔭で、イエスは、この特徴のために多くは苦しまなかった。ヤコブは、イエスのすばらしい崇拝者であり、ヨセフの商売仲間である石工の息子であった。イエスは、身体的な争い事には反感を持っていたので、ヤコブは、イエスへの手出しを誰にも許さないようにすることを自分の仕事とした。数倍年上で粗野な若者達は、イエスの評判の従順性を頼みにして攻撃をしたが、いつも自薦の覇者であり、常備の護衛者である石工の息子、ヤコブの手による迅速で確実な報復に悩んだ。

124:2.5 (1369.1) イエスは、その時代と世代のより高い理想を表するナザレの少年の中で一般に認められた指導者であった。ただ単に公平であるばかりではなく、愛を示し慎重な恩情に接し、稀で理解ある思いやりもあったので、かれは、若い仲間に本当に慕われた。

124:2.6 (1369.2) この年、年上の者への際立った好みを示し始めた。かれは、年長の人間との文化的、教育的、社会的、経済的、政治的、宗教的な事柄ついての話し合いを楽しんだし、かれの論理の深さと観察の鋭さは、常に話たが

るほどに大人を魅了した。両親は、彼が、家の援助の責任を持つようになるまで、そのような嗜好を明示する年上の、より博識のある個人とよりも、むしろ同年令の、またはイエスの年に近い者と付き合うように影響を与えようとしていた。

124:2.7 (1369.3) この年の終わり、ガリラヤ湖の叔父と2ケ月間の漁経験をし、非常に成果もあった。成人前に、かれは、有能な漁師となっていた。

124:2.8 (1369.4) イエスの身体的な発達は続いた。かれは、学校では上級にいて特権を与えられた生徒であった。イエスは、弟妹達とかなり仲が良く、弟妹のうちの一番年上と較べても3歳半も上の利点があった。かれは、小癪であり過ぎるとか、適切な謙遜さと若々しい慎みを欠くとイエスについて評価する鈍感な子供の何人かの親達を除き、ナザレではよく思われた。かれは、若い仲間の遊戯の活動を、より真剣でかつ考え深い方向へ導く傾向をつよく表した。イエスは、生まれながらの教師であり、遊びといえども、教師として機能することを簡単には抑えることができなかった。

124:2.9 (1369.5) ヨセフは、イエスに生計を立てる多様な手段を指導し始め、早くに産業と貿易に比較しての農業の利点をいた。ガリラヤは、ユダヤよりも美しく、繁栄している地区であり、エルサレムやユダヤで暮らすのとでは、わずか４分の１ほどの費用しか掛からなかった。それは、5千以上の人口をもつ200以上の町と1万5千以上の人口をもつ30の町を含む農村であり、盛んな産業都市の行政区であった。

124:2.10 (1369.6) イエスは、ガリラヤの湖での漁業を観察するために父との初めての旅で、漁師になるともう少しで決心するところであった。だが、父の職業との近い関係が、後に大工になる影響を与えた。さらに後の影響の組み合わせが、彼を新しい社会の宗教的な教師になるという最終的な選択へと導いた。

3. 11年目(紀元５年)

124:3.1 (1369.7) この年を通じて、若者は、父と家から離れて旅を続けたが、頻繁におじの農場も訪ね、自分の本拠地を町の近くに設けたおじと漁のために時折マグダラへ行った。

124:3.2 (1369.8) ヨセフとマリヤは、しばしばイエスに何らかの特別な依怙贔屓を示すか、あるいは、約束の子、運命の子であるという自分達の知識をもらす誘惑にかられた。だが両親は共に、全てのこれらの事柄において並み外れて物分かりがよく賢明であった。数回、彼らが少年に対していかなる方法でもいかなる贔屓でもしたときに、少年は、全てのそのような特別な配慮を、ほんの僅かにしろ、即座に拒否した。

124:3.3 (1370.1) イエスは、隊商用の供給場でかなりの時間を過ごし、世界各地からの旅行者と話すことにより年のわりには驚きに値いするほどの国際的な事柄に関する情報を蓄えた。これは、自由な遊びと若い喜びを満喫する最後の年であった。これ以降、この若者の人生には困難と責任が急速に増えた。

124:3.4 (1370.2) 紀元５年６月24日、水曜日の夕方、ユダが生まれた。７番目の子供のこの出生には合併症が伴った。マリヤは、ヨセフが数週間も家に留まるほどの重体であった。イエスは、父の使い走りと母の重病からくる多くの任務でとても忙しかった。この若者は、自分の早年の無

邪気な態度には決して２度と戻れないことを悟った。母が病についた時点—11歳の直前—から最初に生まれた息子としての責任を引き受け、通常これらの重荷が自分の責任となるはずの１年あるいはたっぷり２年前にはこのすべてをすることを強いられた。

124:3.5 (1370.3) カザンは、イエスと毎週一晩過ごし、イエスのヘブライ経典の習得の手助けをした。かれは、有望な生徒の進歩に大いに興味があった。したがって、あらゆる面で喜んで援助してくれた。このユダヤ人教師は、この発達する心に大きな影響を及ぼしたが、学識のあるラビの下で教育を続けるためにエルサレムに行く見込みに関してイエスがすべての自分の提案に対しあまりにも無関心である理由を決して理解をすることができなかった。

124:3.6 (1370.4) ５月の中頃、若者は、デカポリスの主要なギリシアの都市、すなわちベツ-シアンの古代のヘブライの都市であるスキトポリスへ出張する父に同伴した。　途中ヨセフは、サウル王、ペリシテ人、それにイスラエルの混乱以降の出来事の古の歴史の多くを詳しく話した。イエスは、このいわゆる異教徒の都の清潔な外観と秩序

立った佇いに非常に感銘を受けた。かれは、戸外劇場に驚嘆したり、「異教徒」の神々の崇拝のために捧げられた美しい大理石の寺院に見とれた。ヨセフは、若者の熱意に非常に戸惑い、エルサレムのユダヤ人の寺院の美と壮大さを褒めそやすことにより、これらの好感を打ち消そうとした。イエスは、ナザレの丘からこのすばらしいギリシアの都市をしばしば物珍しそうに見つめて、その大規模な公共事業と華麗な建物に関して何度も尋ねたが、父は、いつもこれらの質問への答えを避けようとしたのであった。今、かれらは、この非ユダヤ人の都市の美しさに向かい合い、ヨセフは、イエスの質問を体よく無視することができなかった。

124:3.7 (1370.5) ちょうどこの時、デカポリスのギリシアの都市対抗の恒例の腕力競技大会と公開実演が、スキトポリスの円形劇場で進行中であり、イエスは、競技を見に連れて行くように父にせがみ、ヨセフは、イエスのあまりのしつこさに拒否をためらった。少年は、競技にぞくぞくし、身体発達と運動技能の誇示の精神に心の底からのめり込んでいった。ヨセフは、「異教徒」の強い虚栄心に見入る息子の熱狂振りを目にし、言い表せないほどの衝

撃を受けた。　競技終了後、イエスが競技への賛意と、健全な野外活動からの利益が得られれば、ナザレの青年達の為に良いかもしれないとの提案を耳にした時、ヨセフは、生涯での驚きを受けた。ヨセフは、本気で、しかもそのような習慣の不道徳な特質についてイエスと長く話したが、少年が納得していないことはよく分かっていた。

124:3.8 (1371.1) イエスがこれまでに父が立腹しているのを見たのは、その夜宿の部屋での長話の中で、少年が、ユダヤ人の考えの傾向を全く忘れたうえで、家に戻りナザレに円形劇場の建設のために働くことを提案した時のこの一度きりであった。ヨセフは、長男が、そのような非ユダヤ人的な感情を表明するのを聞くと、普段の穏やかな態度を忘れ、イエスの肩を掴み、「息子よ、お前が生きている限り決してそのような不道徳な考えを２度と口にして私に聞かせるでない。」と立腹し、声高に言った。イエスは、父の感情表示に驚いた。かれは、今まで父の憤りに個人的な痛みを一度も感じさせられたことがなかったので、表現できないほどに驚き、かつ衝撃を受けた。「良く分かりました。お父さん、そう致します。」とだ

け答えた。少年は、父の生きている間、わずかな態度でさえも、ギリシア人の競技と他の競技の活動について触れることはなかった。

124:3.9 (1371.2) 後にイエスは、エルサレムでギリシアの円形劇場を見て、そのようなものがユダヤ人の見解からはいかに憎むべきものであるかを知った。それでもその人生を通じて、ユダヤ人の慣例が許す範囲において、十二使徒のための定期的な活動の後の予定に、かれは、健康的な娯楽の考えを個人の計画に、取り入れることに努力した。

124:3.10 (1371.3) この11年目の終わり、イエスは、活発でよく発達した、適度にユーモラスで、またかなり気楽な若者であったが、またこの年以後は、ますます深い瞑想と真剣な熟考の独特の時期として過ごした。かれは、世界での使命の要求に従順であると同時に、家族への義務をどのようにして果たそうとするのかについて考えるのに多くの時間を費やした。かれは、すでに自分の聖職活動は、ユダヤ民族の改善に限られてはいないと心に受けとめていた。

4. 12年目(紀元6年)

124:4.1 (1371.4) これは、イエスの人生で多事多端な年であった。ますますそれによって人間が生計を立てる方法の研究を遂行する一方で、イエスは、学校では進歩をし続け、自然についての研究では疲れを知らなかった。かれは、家の大工場での定期の仕事を始め、ユダヤ人の家族では非常に変わった取り決めであったが、自分自身の所得の管理を許された。この年、そのような問題を家族の秘密にしておく知恵も学んだ。かれは、村で問題を引き起こした方法を意識するようになっており、これからは仲間とは異なるとみなされるかもしれない全てを隠すことにますます慎重になった。

124:4.2 (1371.5) この年を通して、かれは、自分の使命の本質に関し、実際の疑いとまではいかないとしても、長期にわたる不確実性の時期を経験した。自然に育む自身の人間の心は、イエスの二元的な現実をまだ完全には把握していなかった。自分には一つの人格があるという事実は、彼が、その同一人格と関連する特質を構成する要素の二重の起源の認識を難しくした。

124:4.3 (1371.6) かれは、この後ずっと弟妹達とより仲良くなった。かれは、ますます手際よく、つねに情け深く思いやりがあり、彼らの利益と幸福において公的任務の始まりまで弟妹達との良い関係を楽しんだ。より明確に、かれは、ジェームス、ミリアムと二人のより幼い(まだ生まれていない)子供たち、アモスとルツと仲良くした。かれは、いつもマーサととても仲がよかった。イエスの家庭での問題は、主にヨセフとユダ、特に後者との摩擦から起きた。

124:4.4 (1372.1) ヨセフとマリヤにとり神格と人間性のこの前例のない組み合わせの育みを請け負うことは、苦しい経験であり、それでいてかれらは、親の責任をとても忠実に、首尾よく履行したのですばらしい名誉に値する。徐々に、イエスの両親は、超人的な何かがこの長男の中に住んでいると理解したが、約束のこの息子が、本当にこの地域宇宙の物質と生命の実際の創造者であるということを、決して夢にさえ思わなかった。ヨセフとマリヤは、自分達の息子イエスが、本当は死ぬべき運命の肉体に化した宇宙の創造者だということを決して知ることなく終わった。

124:4.5 (1372.2) この年、イエスは、これまでよりも多く音楽に注意を払い、弟妹のために自宅教育を続けた。若者が、自分の使命の本質に関してヨセフとマリヤの間での視点の違いを鋭く意識するようになったのは、およそこの頃であった。イエスは、両親の異なる意見について多くを考え、かれが熟睡していると思い二人が、議論しているのをしばしば聞いた。ますます、かれは、父の視点に傾き、そのため母は、息子の人生の経歴に関する問題における自分の指導を徐々に拒絶しているという実感に傷つく運命にあった。そして時が過ぎるにつれ、この理解の隙間は広がった。ますますマリヤは、イエスの使命の意義を理解しなかったし、このいい母親は、気に入りの息子が、彼女の好む期待を実現させないことに愈々傷つくのであった。

124:4.6 (1372.3) ヨセフは、イエスの使命の精霊的な特徴に対して発達する自分の信念を楽しんだ。そして、他の、より重要な理由がなければ、ヨセフがイエスの地上での贈与の概念の遂行を見るまでいきることができなかったことは、不運に思われる。

124:4.7 (1372.4) 学校での最後の年、12歳の時、イエスは、家の出入りの都度、戸口の側柱に釘づけされた一片の羊皮紙に触り、触れたその指に口づけをするユダヤの習慣に関して父に抗議した。この習慣の一部として、「主は、これから、さらには永久に、我々が出かけ、また入るのを守ってくださりますように。」と言うのが習わしであった。ヨセフとマリヤは、そのような創造が、偶像崇拝的な目的に使用されるかもしれないと説明して、像形を作らない、あるいは絵を描かない理由について繰り返し教えてきた。イエスは、像形と絵に対する二人からの禁止を完全に理解したという訳ではないが、一貫性への高い概念を持っていたので、側柱の羊皮紙に対するこの習慣的儀礼は、本質的には偶像崇拝的であると父に指摘した。そこでヨセフは、イエスが抗議した後、羊皮紙を除去した。

124:4.8 (1372.5) 時が経過するにつれて、イエスは、家族の祈りやその他の習慣の宗教的な慣行を修正のために多くのことをした。その礼拝堂が、有名なナザレの教師ホゼによって例示される自由主義のラビの学校の影響を受けてい

たので、ナザレでそのような多くのことをすることは、可能であった。

124:4.9 (1372.6) この年と次の２年間、イエスは、彼の宗教的実践と社会的快適さへの個人的な視点を両親の確立した信念に合わせるために、恒常的な努力の結果として、かなりの精神的苦悩を被った。自身の信念に忠誠であろうとする衝動と両親への忠実な服従の良心的な訓戒との対立に心が乱れた。イエスの最高の対立は、若々しい心の中で最優先する重大な二つの指令の間にあった。一つは、「真実と正義に関する自身の最も高い信念の命令に忠実であれ。」他方は、「生命を与え、養育をしたので、父母を敬え。」であった。しかしながら、かれは、個人の自分の信念と家族に対する義務への忠誠のこれらの領域で必要とされる日々の調整をする責任を決して回避することなく、忠誠、公正、寛容性と愛に基づく集団連帯の見事な観念に個人の信念と家族の義務のますます調和した混合をもたらす満足感を成し遂げた。

5. イエスの13年目(紀元７年)

124:5.1 (1373.1) この年、ナザレの若者は、少年時代から若い成人時代へと移行した。声は変化し始め、心身の他の特徴は、青年期の接近の徴候を示した。

124:5.2 (1373.2) 紀元７年１月９日、日曜日の夜、赤ん坊の弟アモスが生まれた。ユダは、まだ二歳にも達しておらず、赤ん坊の妹ルツは、まだ生まれていなかった。それで父が翌年事故死を遂げた時、イエスには小さい子供のいる相当に大きい家族の世話が任されたということが理解できるであろう。

124:5.3 (1373.3) 人間の啓蒙と神の顕示の地上における使命を行う運命にあると、イエスが、人間の能力で確信し始めたのは、２月の中頃であった。遠大な計画に結びつけられた重要な決定は、外見的にはナザレの普通のユダヤ少年であるこの若者の心の中で定式化されていた。この全てが、いま青春期にある大工の息子の考えと行為において展開し始めるにつれ、全ネバドンの知的な生命体は、強い興味と驚きで傍観していた。

124:5.4 (1373.4) 紀元７年３月20日、その週の第１日目、イエスは、ナザレの礼拝堂と関係のある地元の学校の訓練課程

から卒業した。これは、どんな意欲的なユダヤ人の家庭生活においても、長男が「戒律の子」および、主である神の買い戻された長子、「いと高きものの子」および、全地球の主の召使いと宣言されるすばらしい日であった。

124:5.5 (1373.5) その前の週の金曜日、ヨセフは、この喜ばしい行事への参加のために、新しい公共建築物の作業を担当していたセフォリスから戻ってきていた。イエスの教師は、注意深く、勤勉な自分の生徒が、何らかの傑出した経歴、何らかの顕著な任務に運命づけられると堅く信じた。長老たちは、イエスの規範から外れた傾向による自分達との全ての悶着にもかかわらず、少年を非常に誇りに思い、有名なヘブライの専門学校で教育を続けるためにイエスがエルサレムに行けるよう既に計画を立て始めていた。

124:5.6 (1373.6) イエスは、これらの計画が時々議論されているのを聞くにつれ、ラビの元での学習のためにエルサレムには決して行かないことをますます確信するようになった。しかし、かれは、現在5人の弟と3人の妹、ならびに

母と自分とから成る大家族の扶養と指揮の責任を負うことによって起こるそのようなすべての計画の放棄が確実となる悲劇がそれほど早く起こるとは夢にさえ思わなかった。イエスには、この家族を養うにあたり、父のヨセフに与えられたよりもひと回り大規模で、より長期間の経験をした。かれは、自分自身が設定した基準、すなわちあまりにも突然に悲しみに見舞われた、あまりにも不意に取り残された、この家族—自分の家族—の賢明で、我慢強い、理解ある、有能な教師であり一番年上の兄弟となることを適えたのであった。

6. エルサレムへの旅

124:6.1 (1374.1) いまは成人の入り口に達し、ユダヤ教の礼拝堂学校から正式に卒業したイエスには、両親と最初の過ぎ越しの祭りに参加するためにエルサレムに行く資格があった。この年の過ぎ越しの祭典は、紀元７年４月９日、土曜日に当たった。４月４日、月曜日の朝、相当数の仲間(103人)のナザレからエルサレムへの出発準備は、できた。かれらは、サマリアへと南に旅をし、ジェズリールに達するとサマリア通過を避けるために東に向かい、ギルボア山を回り、ヨルダン渓谷へと行った。ヨセフと

その家族は、ヤコブの井戸とベテルを経てサマリアを下りて行く方が楽しめたのであろうが、サマリア人を相手にするのが嫌なユダヤ人の一行は、ヨルダン渓谷を通り、近郷の者達と連れだって行くこととした。

124:6.2 (1374.2) 非常に恐れられたアーケラウスは免職されており、かれらは、エルサレムへのイエス同行を恐れる必要がなかった。最初のヘロデがベツレヘムの赤子を滅ぼそうとして以来、12年が過ぎていた。そして、現在、誰も、その件をナザレのこの無名の少年に関連づけて考えるものはいなかった。

124:6.3 (1374.3) ジェズリールの合流点に到達前、かれらは、旅を続け、間もなく左側に、シュネムの古代の村を見て通り過ぎていくと、イエスは、かつてそこに住んでいたイスラエル中で最も美しい少女について、またエリシアがそこで為した素晴らしい行動について再び聞いた。ジェズリールを通る際、イエスの両親は、アハブとイゼベルの行いとエヒュウの手柄について詳しく話した。かれらは、ギルボア山を周回しながら、この山の斜面で自殺し

たサウル、ダヴィデ王、それにこの歴史的な場所に関する多くについて語った。

124:6.4 (1374.4) ギルボアの麓を一周すると、巡礼者達は、右の方にスキトポリスのギリシアの都市を見ることができた。皆は、遠方から大理石の建造物を見つめたが、自分たちを汚し、今度のエルサレムでの過ぎ越しの厳粛かつ神聖な礼式に参加できなくならないように非ユダヤ人の都市の近くには行かなかった。メアリは、ヨセフもイエスもなぜスキトポリスについて話さないかを理解できなかった。かれらは、この挿話を一度も明らかにしたことがなかったので、マリヤは、前年のかれらの論争については知らなかった。

124:6.5 (1374.5) さて、道は、熱帯のヨルダン渓谷へと真下に通じた。イエスは、死海に流れ下りながら煌き、波を立て、果てしなく曲がりくねるヨルダン川への驚嘆の眼差しをさらすこととなった。荘厳な姿で歴史的な谷を見下ろしている膨大な雪を頂くヘルモン山が遠く北に聳える一方、かれらは、この熱帯の渓谷の旅を南へに下がるにつれ、外套を側に置いて、豊かな穀物平野と桃色の花を

ふんだんにつけた美しい夾竹桃を楽しんだ。スキトポリスの反対側から３時間余りの旅をして、かれらは、湧泉にやってきて、その夜は星明りの天の下で野営した。

124:6.6 (1374.6) 旅の２日目、かれらは、ヤッボク川が、東からヨルダン河に流入するところを通り過ぎ、東にこの河の谷間を見上げて、ミデアン人が、この領域の土地に溢れて殺到したギデオンの時代について詳しく語った。２日目の旅の終わり近く、かれらは、そこでヘロデが妻の一人を投獄し、自分の絞め殺された二人の息子を埋葬したサータバ山、つまりアレクサンドリアの砦が頂上を占領している、ヨルダン渓谷を見下ろす最も高い山の麓近くで野営した。

124:6.7 (1375.1) ３日目、かれらは、最近、ヘロデによって建てられ、その優れた構造と美しいシュロの庭で注目されている二つの村を通過した。日暮れまでには、エリコに達し、そこに翌日まで留まった。ヨセフ、マリヤ、イエスの３人は、その夕方、ユダヤ人の言い伝えでは、ヨシュアが、(この人に因んでイエスが命名された)名高い功績

を上げた古代のエリコの遺跡まで2.4キロメートル歩いた。

124:6.8 (1375.2) 旅の４日目で最後の日までには、道は、巡礼者の絶え間ない行列であった。かれらは、今や、エルサレムに繋がる丘を登り始めた。頂上に近づくにつれ、山を後ろにヨルダン川を、また南の遠くに死海の流れのゆるい水域を見ることができた。エルサレムまでのおよそ中間当たりで、イエスは、オリーブ山(自分のその後の人生でとても多くの一部である地域)を初めて目にし、そこでヨセフは、聖都が丁度この尾根の向うにあると教えると、少年の胸は、やがて我が天の父の都と家を見る喜びの期待に速く鼓動した。

124:6.9 (1375.3) かれらは、オリーブ山の東斜面にあるベタニヤと呼ばれる小さな村の境界で、一息入れた。親切な村人達は、もてなすために巡礼者のもとにどんどんやってきて、ヨセフとその家族は、たまたまイエスとほぼ同じ年頃のマリヤ、マルタ、ラザロの三人の子をもつサイモンという者の家の近くで止まった。その家族は、ナザレ一家を飲食に招き入れ、２家族間の生涯の絆がうまれ、そ

の後しばしば、波瀾万丈の人生で、イエスは、この家に立ち寄った。

124:6.10 (1375.4) かれらは、 突き進み、すぐオリーブ山の縁に立っており、イエスは、初めて(自身の記憶で)、聖都、尊大な宮殿、そして感激的な父の寺院を見た。この４月の午後、オリーブ山のそこに立ち、エルサレムの初めての眺望に深く感じ入り、この上なく完全に魅了されたこの時の純粋に人間的なそのような心の震えを経験したことは、その人生のいかなる時においても、イエスにはかつてなかった。そして、イエスは、天の師の中の最後の、最も素晴らしいもう一人の予言者を拒絶しようとしていた都を、後年、この同じ場所に立ち、泣いて悲しんだ。

124:6.11 (1375.5) だがかれらは、エルサレムへと急いだ。もう木曜日の午後であった。都に到着し、かれらは、寺院を通り過ぎた。イエスは、決して人間のそのような群れを見たことがなかった。これらのユダヤ人が、世間に知られている最も遠い場所からここにどのように集合したかについて深く考えた。

124:6.12 (1375.6) かれらは、ほどなく、事前に手配されている過ぎ越しの週間の宿泊場所に、マリヤの裕福な親類の、ヨハネとイエスの両人の初期の歴史について、ザカリヤを通して何かを知る者の大きい家に着いた。あくる日、準備の日、かれらは、過ぎ越しの安息日に適う祝賀のための準備をした。

124:6.13 (1375.7) エルサレム中が過ぎ越しの準備にざわめいている間、ヨセフは、２年後規定の15歳に達し次第、すぐに教育を再び始めるための手配をしてあった学院を訪問するために、息子を連れまわる時間の都合をつけた。慎重にこれらの練られた計画全てに、イエスがいかに僅かしか関心がないかを明らかのするのを見て、ヨセフは、誠に当惑した。

124:6.14 (1375.8) イエスは、寺院とそれに関する全儀式や他の活動に深く感動した。４歳以来初めて、多くの質問をするために思索に夢中になり過ぎていた。イエスは、それでも、天なる父は、なぜそれほどに多くの罪のない無力な動物の殺戮を要求するのか、困惑する幾つかの質問を(以前にしたように) 父にした。そしてこの父には、自分

の答えと説明への試みは、深い考えと鋭い論理的思考をもつ息子には不満足であったと、若者の顔の表情からよく分かった。

124:6.15 (1376.1) 過ぎ越しの安息日の前日、精霊的な照明の上げ潮は、イエスの人間の心に広まり、古来の過ぎ越しの祝賀のために集まった精霊的に盲目で、道徳的に無知な群衆への溢れんばかりの慈愛深い哀れみでイエスの人間の情愛が満たされた。これは、肉体をもつ神の子が、過ごした最も驚異的な日の一つであった。そして、その夜、地球経歴で初めて、イマヌエルに委任されたイエス付きのサルヴィントンからの使者が現れ、「時が来た。あなたの父の用向きを始める時です。」と言った。

124:6.16 (1376.2) そして、ナザレ家族の思い責任が若い肩にのしかかってくるよりもずっと以前に、天の使者は、まだ13歳にもなっていないこの若者に、宇宙の責務の再開を始める時がきたと気づかせるためその時到着した。これは、ユランチアにおける息子の贈与の成就と「人間-神の肩上の宇宙政府」を取り替えにおいてついに最高点に達する一連の長い行事の最初の行為であった。

124:6.17 (1376.3) 時の経過につれ、肉体化の神秘は、我々全員にとり、ますます測りしれないものとなった。ナザレのこの若者が、すべてのネバドンの創造者であるということを、我々は、ほとんど理解することができなかった。同様に我々は、最近、この同じ創造者たる息子の精霊とその楽園の父の精神がどのように人間の魂に関係しているかをも理解してはいない。時の経過とともに、我々は、彼が、肉体をもって生きる傍ら、宇宙の責務をその両肩に担っているにもかかわらず、その人間の心は、ますますそれについて明察していることを知ることができた。

124:6.18 (1376.4) こういう具合でナザレの若者の経は、終わり、その思春期の青年—ますます自意識の強い神の人間—の物語を始まる。広がっていく人生の目的を両親の願望、家族への義務、およびその時代と世代の社会の望みとを統合するよう努力につとめ、かれは、自分の世界での経歴への熟考を始める。

論文 125
エルサレムでのイエス

125:0.1 (1377.1) イエスの多事多端な地上での生涯における出来事の中で、　　記憶にあるエルサレムへの最初の訪問ほど、魅力あり人間らしく感動的なものはなかった。一人で寺院での討論に参加した経験に特に刺激され、それは長い間、幼年後期と思春期初期の大きな出来事として彼の記憶の中で際立った。これは、気兼ねも制約もなく、陽気な出入りの、数日間の独立生活を楽しむ最初の機会であった。過ぎ越しの祭りの翌週の間、この短期間の指示を受けない生活は、かれが、責任から離れて今までに楽しんだ初めての完全な自由であった。そして、再び、たとえ短期間でも、同様のすべての責任感からの自由な期間を持ったのは、その後何年も先のことであった。

125:0.2 (1377.2) 女性は、滅多にエルサレムの過ぎ越しの祭りに行かなかったし、臨場は必要とされなかった。しかしながら、もし母が同行しなければ、イエスは、行くことを実質的に拒否した。そして、母が、行くと決めた時、多くの他のナザレ出身の女性が旅をすることになったので、これまでになくナザレからの過ぎ越しの祭りの一行は、男性に比較してかなりの女性の数であった。エルサ

レムへの道すがら、皆は、ときおり、詩篇第130を繰り返し歌った。

125:0.3 (1377.3) ナザレを発ったときからオリーブ山の頂上に着くまで、イエスは、期待に満ちた予想からの一つの長いある種の圧迫感を経験した。楽しい幼児期、かれは、エルサレムとその寺院について敬虔に聞いてきたが、現実に、今すぐそれらを見るところであった。オリーブ山から、そして外からのより詳細な寺院の観察では、寺院は、イエスが期待していた以上のものであった。しかし、一度その神聖な正門を入ると、かなりの幻滅が始まった。

125:0.4 (1377.4) イエスは、イスラエルの市民として奉げられようとしていた新生の戒律の息子のその集団に加わるために、両親と共に寺院の境内を通り抜けた。かれは、寺院での群集の一般的な態度に少し失望したが、母が、女性用の桟敷へ行く途中で暇乞いをしたとき、その日の最初の大きな衝撃があった。母が奉納式に同伴することになっていないなどとは、決して思いもつかなかった。そして、イエスは、母がそのような不当差別に苦しまされた

ので、すっかり憤慨していた。かれは、強くこれに憤慨したが、父への抗議のいくつかの意見は別として、何も言わなかった。しかし、代書人と教師への質問が１週間後に明らかにしたように、イエスは、深く考えに考えた。

125:0.5 (1377.5) イエスは、奉納儀式を終えたが、その形式的で単調な特質に失望した。かれは、ナザレの礼拝堂の儀式を特徴づけた個人の関心の欠落を寂しく感じた。それからイエスは、母を迎えに戻り、寺院、その様々な中庭、回廊、および廊下の周りでの最初の見物に父に同行する準備をした。寺院の境内は、１度に20万人以上の礼拝者を収容することができ、これらの建築物の広大さ—これまでに見てきたものとの比較において—は、イエスの心に大いに感銘を与える一方で、かれは、寺院での儀式とそれに関する崇拝の精霊的な重要性の熟考に興味をそそられた。

125:0.6 (1378.1) 寺院の儀式の多くは、彼のの美と象徴の感覚に非常に感動的に感銘を与えたが、イエスは、多くの注意深い質問に両親が答えて提示するこれらの儀式に関する

真の意味の説明につねに失望した。イエスは、信念を神の復讐、または全能の神の激怒に関係づけた崇拝と宗教的な献身の説明を単純には受け入れようとはしなかった。寺院訪問の終了後、これらの質問に関する更なる議論において、父が正統的なユダヤ人の信仰の受諾を承認するということにいささか固執するようになったとき、イエスは、突然両親に向かい、訴えるように父の目を覗き込んで言った。「父よ、本当であるはずがない—天国の父は、地上の誤りを犯す子を気にしないはずがない。天の父は、あなたが私を愛しているほどに自分の子供を愛さないはずがない。そして、私はよく知っている。たとえ私が浅はかなことをしようとも、あなたは決して私に激しい怒りをぶちまけないであろうし、怒りを発散もしないであろう。地球の父であるあなたが、そのような人間の神からの反映を所持しているならば、いわんや、天の父は、ずっと多く善に満たされ、慈悲に溢れているはずである。私は、天国の父が、地球の私の父ほどには私を愛していないと信じることを拒否する。」

125:0.7 (1378.2) ヨセフとマリヤは、長男のこれらの言葉を聞いて安堵した。そして、かれらは、決して二度と神の愛と

天の父の慈悲深さに関し、彼の気持を変えようとはしなかった。

1. イエス寺院を見る

125:1.1 (1378.3) イエスは、通過した寺院の中庭のいたる所で目撃した不敬の精神に衝撃を受け、うんざりさせられた。寺院における群集の行為は、「我が父の家」でのそれらの存在と矛盾すると考えた。しかし、父に連れられて非ユダヤ人の中庭へいった時、イエスは、両替商や生贄用の動物や他の商業商品の商人の存在が知れる羊の鳴き声とガヤガヤという雑音が、滅多やたらと入り混じったその騒々しいわけの分からない言葉、声高な話振りやののしりに、若い人生での衝撃を受けた。

125:1.2 (1378.4) だが、ちょうどセフォリス訪問の際にごく最近に見た塗りたてた女性のような軽薄な娼婦が、寺院のこの管区内をこれ見よがしに歩く光景に、イエスの礼節に対する観念が、とりわけ侵害された。寺院におけるこの冒涜は、彼のすべての若い憤りを完全に刺激し、ヨセフに自己を思いのままに表現することをためらわなかった。

125:1.3 (1378.5) イエスは、寺院の風情と礼拝を賞賛したが、数多くのとても軽率な礼拝者の表情に見た精霊的な醜さに衝撃を受けた。

125:1.4 (1378.6) かれらは、動物の群れの屠殺と青銅の噴水で屠殺役を勤める僧達がその手の血を荒い流すのを見物するために、祭壇が設けられた寺院前の岩棚の下にある僧の中庭へ下りていった。血みどろの舗道、僧達の血なまぐさい手、それに瀕死の動物の鳴き声は、この自然を愛する若者の我慢の域をはるかに越えるものであった。凄まじい光景は、ナザレのこの少年をうんざりさせた。かれは、父の腕を掴み、連れ去るように懇願した。かれらは、非ユダヤ人の中庭を通過して引き返したが、そこで聞いた下品な笑いや不敬の冗談さえ、たった今目にした光景に較べれば救いであった。

125:1.5 (1379.1) ヨセフは、息子がいかに寺院の儀式の光景に吐き気を催したかを見て、賢明にもイエスをコリントの青銅で作られた芸術的な門、「麗しの門」を見に連れていった。しかし、イエスは、すでに寺院での最初の訪問を十二分に味わっていた。かれらは、上部の中庭のマリヤ

のところに戻り、群衆から離れ、野外においてアシュマナンの宮殿、ヘロデの大邸宅、およびローマの警備員の塔を見て一時間歩き回った。この散策の間、ヨセフは、エルサレムの住民だけが、寺院での毎日の生贄の目撃を許可されており、またガリラヤの住人は、過ぎ越しの祭り、五旬節(過ぎ越しの祭りの後の7週間)の祭り、10月の仮庵の祭りの１年に３回だけ寺院での礼拝参加のためやって来る、とイエスに説明した。これらの祭りは、モーゼによって定められた。かれらは、それから宮清めの祭りとプリムの祭りのその後に確立された二つの祭りについて論じた。その後、かれらは、宿泊所に行き、過ぎ越しの祭りの祝いの準備をした。

2. イエスと過ぎ越しの祭り

125:2.1 (1379.2) ナザレの５家族は、ベタニヤのサイモンの家族の過ぎ越しの祭りの客または仲間であり、サイモンは、一行のために小羊を購入してあった。寺院訪問の際イエスに大きく影響を与えたのは、それほどまでの膨大な数に及ぶこれらの小羊の虐殺であった。マリヤの親類と過ぎ越しの祭りの食事をする予定であったが、イエスは、ベタニヤに行く招待に応じるよう両親を説得した。

125:2.2 (1379.3) その夜、かれらは、過ぎ越しの祭りのために集まり、無発酵のパンと苦い香草と焼かれた肉を食べた。契約の新生の息子であることから、イエスは、過ぎ越しの祭りの起源を詳しく話すように頼まれ、これを上手にしたのだが、つい最近見聞きしたことで、若い、しかし考え深い心に印象を穏やかに反映する多数の意見を含めたことで両親をいくらか狼狽させた。これが過ぎ越しの祭りの祝宴の7日間の儀式の始まりであった。

125:2.3 (1379.4) そのような問題に関して両親には何も言わなかったが、イエスは、この早期においてでさえも、屠殺された小羊なしの過ぎ越しの祭りを祝う正当性を心の中で考えを巡らせていた。かれは、心中で、天の父は、この生贄の供え物の光景を喜んでいないということが確かであると感じたし、歳月が経過するにつれ、いつか無血の過ぎ越しの祭りの祝賀を打ち建てようとますます決心するようになった。

125:2.4 (1379.5) その夜イエスは、ほとんど眠らなかった。イエスの睡眠は、殺戮と苦悩との不快な夢に大いに妨げられた。かれの心は、取り乱れ、またユダヤ人の儀式の全体

系に関する神学の矛盾と不条理に引き裂かれるのであった。両親も同様にほとんど眠らなかった。かれらは、終わったばかりのその日の出来事に大いに当惑した。かれらにとっては奇妙で断固に取れる若者の態度に完全に、その心は、動揺した。マリヤは、宵のうち、神経質に動揺し、ヨセフは、等しく困惑していたが、穏やかなままでいた。かれらが、敢えて彼を励ましたならば、イエスは、両親と快く話したであろうが、双方共にこれらの問題に関して率直に若者と話すことを恐れた。

125:2.5 (1379.6) 寺院での翌日の礼拝は、イエスにとりむしろ容認できるものであり、不快な前日の思い出を取り除くには大いに役立った。翌朝、若いラザロは、イエスを手元におき、かれらは、エルサレムとその近郊の計画的な探検を開始した。　その日が終わる前に、イエスは、教育と質問会議が進行中の寺院の周辺に様々な場所を発見し、分離のための被いの後ろに本当にあるものに興味を持ち、目で確かめるために最も聖なるいくつかの訪問は別として、これらの教育会議で寺院の周辺で時間の大部分を費やした。

125:2.6 (1380.1) 過ぎ越しの祭りの週を通して、イエスは、戒律の新生の息子達の間に身を置いた。これは、イスラエルの完全な市民でないすべての人々を隔離した柵の外に、イエスが着席しなければならないことを意味した。このように青春期を意識させられたので、かれは、心に湧き立つ多くの質問を差し控えた。少なくとも過ぎ越しの祭りの祝賀が終わるまでは差し控えた。そして、新たに奉納された若者達に対するこれらの制限は解除された。

125:2.7 (1380.2) 過ぎ越しの祭りの週の水曜日、イエスは、ベタニヤで夜を過ごすためにラザロと一緒の帰宅が許された。この夜、ラザロ、マルタとマリヤは、イエスが、現世と永遠、人間と神の問題について論じるのを聞き、またその夜以来、三人全員が、まるで自分達の兄弟であったかのようにイエスを愛した。

125:2.8 (1380.3) その週末までにイエスは、外側の中庭で行なわれている公開協議のいくつかには出席したが、寺院の議論集団の外側の円陣にさえ入場の資格はなかったので、ラザロをあまり見かけなかった。ラザロは、イエスと同年令であったが、エルサレムでは、若者は、満13歳にな

るまで、戒律の息子の奉納の儀には滅多に許されなかった。

125:2.9 (1380.4) 再三、過ぎ越し祭りの週の間、両親は、その若い頭を両手で抱えて一人離れて座り、深く考え込んでいるイエスを見かけた。かれらは、このように振る舞うイエスを一度も見たことがなく、今の経験にどれほどイエスの心が混乱し、精神が煩わされたかを分からずにひどく当惑した。かれらは、どうすべきか分からなかった。二人は、過ぎ越し祭りの週の日々が経過するのを歓迎し、奇妙に行動している息子のナザレへの無事な帰還を切望した。

125:2.10 (1380.5) イエスは、自分の問題について日々考え抜いていた。かれは、週末までには多くの調整をした。しかし、ナザレに戻る時がくると、イエスの若い心は、まだ当惑に満ち、多くの答えのない疑問と未解決の問題に悩まされていた。

125:2.11 (1380.6) イエスのナザレの教師とともにエルサレムを去る前に、ヨセフとマリヤは、ラビで最も有名な学院の1つで長期に渡る教化過程を始めるために、イエスが、

15歳に達したときに戻ってくる明確な取り決めをした。イエスは、両親と教師との学校訪問に同行したが、三人の言動のすべてにいかにも無関心らしそうな彼の様子に三人共心を痛めた。マリヤは、エルサレム訪問に対するイエスの反応で深く苦痛を感じ、ヨセフは、若者の奇妙な意見と変わった行為に心から当惑した。

125:2.12 (1380.7) 最終的には、過ぎ越しの祭りの週は、イエスの人生の大きい出来事であった。かれは、奉納の候補仲間である多くの同じ年頃の数十人の少年達との一堂に会する機会を楽しみ、またローマの極西部地域の場合のようにメソポタミア、トルキスタン、パルチアに如何ように人々が住んでいるかを知る手段としてそのような接触を利用した。イエスは、エジプトとパレスチナ近くの他の領域の若者の成長の仕方には既にかなり精通していた。この時のエルサレムには何千人もの若者がおり、ナザレの若者は、個人的に、150人以上と会い、多少広範囲に質問をしたり意見をきいたりした。かれは、特に極東と遠い西側諸国出身の若者に興味を持った。この接触の結果、若者は、同胞である様々な集団が、暮らしのた

めにどのように精を出して働いているかを知る目的で世界を旅する願望を抱き始めた。

3. ヨセフとマリヤの出発

125:3.1 (1381.1) ナザレの一行は、過ぎ越し祭りの終了後の週の１日目の午前半ばに寺院の周辺に集まると申し合わせていた。皆は集合し、ナザレへの復路の旅を開始した。両親が旅仲間の集合を待ち受ける間、イエスは、議論を聞くために寺院に入った。まもなく一行は、出発の準備をし、エルサレムの祭への往復の旅の習慣通りに、男の１集団と女の１集団に分かれた。イエスは、エルサレムへは母と女性達と上っていった。今は奉納の青年であり、ナザレには父と男性達と共に戻るはずであった。しかし、ナザレの一行がベタニヤの方へ進んだとき、イエスは、寺院で天使に関する議論にすっかり夢中になっており、両親の出発時間が過ぎたことにまったく不注意であった。そして、寺院の会議の昼の散会まで、取り残されてしまったとは気付かなかった。

125:3.2 (1381.2) ナザレの旅人達は、イエスを取り残したのではなかった。というのも、マリヤは、イエスは男性と共に

旅をすると推測し、ヨセフの方は、エルサレムにはマリヤのロバを引いて女性連と上ったので女性とともに旅すると考えたので。皆は、ジェリコに達し、その夜の滞在準備に入るまで、イエスの不在が分からなかった。ジェリコに到着する最後の班に問い合わせをし、そのうちの誰も息子を見なかったと分かり、夫婦は、不眠の夜を過ごし、息子に起こったかもしれないことに思いを馳せ、過ぎ越し祭りの週の出来事に対するイエスの珍しい変わった反応の多くを列挙し、一行がエルサレムを去る前に、集団の中にイエスを確かめなかったことを互いを穏やかにたしなめた。

4. 寺院における初日と２日目

125:4.1 (1381.3) その間、イエスは、午後ずっと寺院に留まり、議論に聞きいり、過ぎ越し祭りの週の沢山の群衆が去ろうとしているより静かで落ち着いた雰囲気を楽しんだ。そのいずれにも参加はしなかった午後の議論の終結時に、イエスは、ベタニヤへ赴き、サイモンの家族の夕餉の準備ができたちょうどその時に到着した。３人の若者は、イエスを迎えて大喜びであった。その夜、イエス

は、サイモンの家に留まった。かれは、夕方ほんのわずかの訪問しかせず、時間の多くを一人庭で瞑想をした。

125:4.2 (1381.4) 次の日早々、イエスは、起きて寺院へ向かった。オリーブ山の崖縁で休止し、目にした光景—精霊的に貧困な民族、伝統による束縛、ローマ軍団の監視下での生活—に涙した。午前の前半には、議論に参加すると決心したイエスが、寺院に居た。一方ヨセフとマリヤもまたエルサレムへの来た道を辿るつもりで夜明け早くに起きていた。まず最初にかれらは、過ぎ越し祭りの週の間、家族として宿泊していた親類の家へと急いだが、問い合わせは、イエスを誰も見なかったという事実に終わった。一日中捜して、何の足跡も見つからず、二人は、夜親類の家に戻った。

125:4.3 (1382.1) イエスは、二日目の会議において大胆な質問をすると決めており、　非常に驚くべき方法で、しかも常に若者らしさを保つ態度で寺院の討議に参加した。イエスの鋭い質問は、　時々ユダヤ法の学識をもつ教師達にはいくらか厄介であったが、イエスが、知識への明白な飢餓と相挨って、率直な公平さのそのような精神を明示

したので、大部分の寺院の教師は、あらゆる考慮でイエスを遇したいという気になった。しかし、非ユダヤ人用の中庭の外を逍遥し、知らず知らずのうちに禁制の、神聖な境内に入った酔った非ユダヤ人を処刑する正義について大胆に質問をした時、より偏狭な教師の一人は、若者が暗示している批評に苛立ち、イエスを睨んで年令を問い質した。イエスは、「13歳にほんの4カ月あまり足りない。」と返答した。「では、」今怒っている教師は、「法の息子の年でもないのに、お前はなぜここにいるのか。」と応えた。そして、イエスが、過ぎ越しの祭りの間に奉納を受けており、ナザレの学校を終えた学生であると説明した時、教師達は、こぞって「分かっていたはずだ。あいつは、ナザレの出だ。」と嘲笑的に答えた。しかし、指導者は、13歳ではなく12歳で、ナザレの礼拝堂の統治者が卒業させたのであれば、技術的にはイエスが非難される立場にはないと主張した。数人の中傷者は、立ち上がって去ったにもかかわらず、若者が寺院の議論の生徒として邪魔されずに続けてよいと決定された。

125:4.4 (1382.2) これが、つまり寺院の2日目が終わったとき、イエスは、その夜またベタニヤへ行った。そして、かれは、再び思索し、祈りのために庭へ出た。イエスの心が、重大な問題の熟考に関心を持ったことは明らかであった。

5. 寺院の３日目

125:5.1 (1382.3) 寺院での代書人と教師とのイエスの３日目は、この若者のことを聞きつけ、法の賢者達を混惑させるところを見て楽しむためにやってきたガリラヤからの多くの観衆をもたらした。サイモンも、少年が何をしていたかを知るためにベタニヤから下りて来た。ヨセフとマリヤは、イエスを案じてこの日ずっと探索を続け、何度か寺院にも入りさえしたが、一度イエスの魅力的な声が聞こえる距離までほとんど来たが、二人は、幾つかの討論集団を詳細に調べようとは思わなかった。

125:5.2 (1382.4) その日が終わる前に、寺院の主な討論集団の全体の注意は、イエスによる質問に集中するようになった。多くの質問の中には、以下のもがあった。

125:5.3 (1382.5) 1.ベールの後ろに、最も聖なるものに本当は何が存在するのか。

125:5.4 (1382.6) 2. イスラエルの母達は、なぜ男性の寺院礼拝者から分離されなければならないのか。

125:5.5 (1382.7) 3. 神がその子供を愛している父であるならば、神の恩顧を得るための全てのこの動物屠殺は何故なのか—モーゼの教は誤解されてしまったのか。

125:5.6 (1382.8) 4. 寺院は天国の父の崇拝に捧げられているのに、非宗教的な物々交換と売買に従事する者達の臨場を許すことは首尾一貫しているのか。

125:5.7 (1382.9) 5. 期待される救世主は、ダヴィデの王座に着く現世の王子になることになるのか、あるいは精霊の王国設立における命の光として機能することになっているのか。

125:5.8 (1383.1) 一日中聴いていた人々は、これらの質問に驚嘆した。そして、サイモンほど驚いた者は他にいなかった。４時間以上、このナザレの若者は、ユダヤのこれらの教師の思考を刺激し、心を探る問題を積み重ねた。イ

エスは、年長者の所見に関してほとんど批評はしなかった。イエスは、問い掛けの質問で自己の教えを伝えた。器用で巧妙な質問の言い回しによって、かれは、全く同時にかれらの教えに疑問を呈し、自身の教えを示唆するのであった。かれの質問する態度には、彼の若々しさに多少憤慨した者達にさえ慕わせる聡明さとユーモアの魅力的な組み合わせがあった。これらの鋭い質問をするに当たり、常にきわめて公平で、思いやりがあった。寺院のこの日の盛り沢山な午後、イエスは、後の公の任務の全体に特徴となった相手の弱みにつけいることへの躊躇、その同じ躊躇を示した。若者として、そして後に男性としてイエスは、単に仲間に対する論理的な勝利を経験するためだけに議論に勝つような利己的な欲望がないようであった。ただ一つのものに、つまり永遠の真実を公布し、その結果、永遠の神の　最大限の顕示をもたらすことにだけこの上なく関心があった。

125:5.9 (1383.2) その日が終わりにサイモンとイエスは、ベタニヤへとゆっくり戻った。道中の大部分男と少年の双方は、黙っていた。イエスは、再度オリーブ山の崖に立ち

止まったが、都とその寺院を見ても泣きはせず、無言の敬虔に頭を下げるだけであった。

125:5.10 (1383.3) ベタニヤでの夕食後、イエスは、そのように再び陽気な円陣に加わることを辞退したが、その代わりに庭に出て、そこで夜遅くまで長居し、一生の仕事の問題への取り組みの何らかの明確な計画をよく考えるために、また精霊的に盲目になる同国人に天の父についてより美しい概念を示すために、法律、慣習、礼式、かび臭い伝統のひどい束縛から彼らを解放し、いかに最適に働くかを決めるために虚しく、努力した。しかし、鮮明な明かりは、真実を探求している若者のもとには来なかった。

6. 寺院の4日目

125:6.1 (1383.4) イエスは、奇妙にも地上の両親には無頓着であった。朝食時でさえ、彼の両親は、その頃までには家に着くに違いないとラザロの母が言っても、イエスは、彼の長居に、皆がいくらかなりとも心配していることを理解した様子はなかった。

125:6.2 (1383.5) イエスは、再び寺院への途中であったが、オリーブ山の崖で思索のために止まらなかった。午前の議論の中で、多くの時間が法と予言者に費やされた。教師達は、イエスが、ギリシア語とヘブライ語の聖書になじみ深いのに驚かされた。しかし、かれらは、イエスの真実に関する知識よりもその若さに驚嘆していた。

125:6.3 (1383.6) 午後の会議で指導者が、若者に進み出るように誘い、指導者は彼の横に座ると、祈りと崇拝に関する若者自身の視点を語ることを勧めた時、かれらは、若者の祈りの目的の問いに答え始めようとするところであった。

125:6.4 (1383.7) その前屋夜、イエスの両親は、法の解説者達ととても手際よく論争したこの奇妙な若者について聞かされたが、この若者が自分達の息子であるとは思いもよらなかった。二人は、イエスが、エリザベツとヨハネに会うためにそこへ行ったかもしれないと考えたので、ザカリヤの家へ旅することを決めるところであった。かれらは、ザカリヤは恐らく寺院にいると思い、ユダの町へいく途中、そこに立ち止まった。二人が、寺院の中庭をそ

ぞろ歩きで通っていると、行方不明の若者の声を聞きつけ、寺院の教師達の間に座っている彼を見たときの夫婦の不意の驚きを想像してみなさい。

125:6.5 (1384.1) ヨセフは言葉も出なかったが、マリヤは、今驚いている両親を迎えるために立ち上がっている若者に突進していき、長く鬱積した恐怖と心労をさらけ出し、「我が子よ、我々をなぜこのように扱ったのか。父と私が嘆きながらお前を捜し求めて、はや3日以上である。我々を見捨てる何かにとりつかれたのか。」と言った。それは、緊張の瞬間であった。イエスが言うことを聞こうとすべての目が、注がれた。父は、咎めるようにイエスを見たが、何も言わなかった。

125:6.6 (1384.2) イエスは青年であると看做されていることを思い起こされなければならない。かれは、通常の子供の学校教育を終え、法の息子として認められ、イスラエルの国民として奉納を受けた。それでも、母は、若い一生の最も重大で崇高な努力の最中に、全群集の前で穏やかとは言えない調子でイエスを叱責し、その結果、真実の教師、正義の伝道者、天の父の情愛深い性格の啓示者とし

て機能するために与えられる最大の機会の一つを不名誉な終結にしてしまった。

125:6.7 (1384.3) しかし、若者は、状況に対応した。この状況を作り上げた全ての要因を公平に考慮にいれるとき、あなたは、母の予想外の叱責に対する少年の返事の妥当性を計る準備ができているであろう。寸時の考えの後に、イエスが母に「それほど長い間私を探していたのは、なぜであるのか。父の用向きをすべき時が来たので、父の家で私を見つけるとは思ってもらえなかったのか。」と答えて言った。

125:6.8 (1384.4) 誰もが若者の物言いに驚いた。皆は、黙って撤退し、立って一人だけ両親とともいるイエスを残した。まもなく青年は、静かに、「両親よ。来なさい。誰もが一番良いと考えたことをした。我々の天国の父は、これらのことを定められた。家に向けて出発しよう。」と言ったとき、三人全ての困惑を取り除いた。

125:6.9 (1384.5) かれらは、黙って出発し、その夜の宿泊のためにジェリコに到着した。一度だけ、かれらは止まり、あのオリーブ山の例の崖の上で若者は、自分の棒を高く掲

げ、頭の先から爪先までを激しい感情で震わせて言った。「ああ、エルサレムよ、エルサレム、そしてその人々よ、お前達はどんなに奴隷であることよ—ローマのくびきと自身の伝統の犠牲者に追従している—しかし、私は、そこの寺院を浄化し、この束縛から我が民衆を救い出すために戻ってくる。」

125:6.10 (1384.6) ナザレへの3日間の道中、イエスは、ほとんど言葉を発っしなかった。両親もまたイエスの前では多くを言わなかった。かれらは、長男の行動の理解に本当に途方に暮れていたが、たとえ完全にそれらの意味を理解できなかったとしても、かれらは、イエスのいうことを自分達の心の宝とした。

125:6.11 (1384.7) 家に着くと、イエスは、両親への愛情を保証し、自分の行いのために再び苦しむと、彼らが怖れる必要はないと暗示して、簡潔な声明を提示し、かれは、「我が天の父の意志をしなければならない一方、我が地上の父にも従順である。私は自分の時間を待ち受ける。」と、この重大な声明を終えた。

125:6.12 (1384.8) しかしイエスは、心で、自分の考える順路を押し進むため、あるいは地球での仕事の計画設定のために、両親の善意ではあるが見当違いの努力への同意を何度も拒否するのであった。それでも、かれは、あらゆる方法で楽園の父の意志の実行への献身と一貫しており、地球の父の願望に、そして肉体をもつ家族の慣習に最も潔く従った。かれは、同意できないときでさえ、従うために可能な全てをしたのであった。イエスは、自分の義務への専念と家族への忠誠と社会奉仕に対する責務との調整に関し達人であった。

125:6.13 (1385.1) ヨセフは困惑したが、マリヤは、これらの経験を振り返り安らぎを得て、結局、オリーブ山におけるイエスの言葉を、イスラエルの救済者としての息子のメシアの使命の予言とみなした。彼女は、イエスの考えを愛国的かつ国家主義の方向へ成形するために、新しくされた精力で、イエスの気に入りのおじ、自分の兄弟の努力の助けを得た。そして、イエスの母は、長男が、ダヴィデの王座を回復し、永遠に政治的な束縛である非ユダヤ人のくびきを解き放つ者達の指揮を引き受ける準備をする仕事に、他のあらゆる方法で、自らが取り組んだ。

論文 126
重大な２年間

126:0.1 (1386.1) イエスの全地上生活経験の中で、14年目と15年目は、極めて重要であった。かれには神格と運命に対する自意識が起こり始め、また内在する調整者との大きな意思疎通を成し遂げる前のこの２年間は、ユランチアにおける波乱万丈の人生で最も辛い年であった。この期間こそ、大試練、本当の誘惑の２年間と呼ばれるべきである。人間の若者の誰も、青春の初期の錯乱と調整問題をの経験に際して、イエスが、幼年時代から青年時代への移行の間に通過したそれよりも重大な試練をこれまでに経験をしなかった。

126:0.2 (1386.2) イエスの若い成長に関わるこの重要な期間は、エルサレム訪問終結とナザレへの帰還で始まった。最初マリヤは、もう一度我が息子を返してもらったと、イエスが従順な息子になるために帰宅したと—かつてそうではなかったという訳ではない—そして、今後イエスの将来に対する自分の計画に息子がより協力的であるだろうという考えで幸せであった。しかし、彼女は、母親の妄想と認識されていない家族の誇りのこの日の光に長いあ

いだ浴することはなかった。間もなく、彼女はより完全に幻滅されることになっていた。少年は、いよいよ父といることが多くなった。かれは、次第に自分の問題を母に相談しなくなった。一方両親は、この世界の事柄と天の父のための仕事に対するイエスのたび重なる熟考をますます理解できなかった。率直に言ってイエスを理解してはいなかったが、かれらは、彼を本当に愛していた。

126:0.3 (1386.3) 成長と共に、ユダヤ民族に対するイエスの哀れみと愛は、深まった。しかし、時の経過につれて、政治的に任命された僧侶の父の寺院での存在に膨らむ正義の憤りが、心で発達した。イエスには、誠実なパリサイ人と正直な代書人に対する大いなる敬意があったのだが、偽善的なパリサイ人と不正直な神学者をたいへん軽蔑した。かれは、誠実でない全てのそれらの宗教指導者を軽蔑の目で見た。イスラエルの指導部を詳細に見るとき、かれは、ユダヤ人が期待する救世主になる可能性を好意をもって見たくなったが、そのような誘惑に決して屈しなかった。

126:0.4 (1386.4) エルサレムの寺院の賢者の間でのイエスの手柄の話は、ナザレ中を、特に礼拝堂学校のイエスの元教師にとり満足させるものであった。しばらくの間、イエスへの称賛が皆の口にのぼった。村中が、かれの幼い頃の知恵と賞賛に値する行為について話題にし、イエスが、イスラエルの偉大な指導者になる運命にあると予測した。遂に真に偉大な師が、ガリラヤのナザレから出現しようとしていた。そして、かれら全員は、イエスが、定期的に礼拝堂で安息日に聖書を読むことを可能にする15歳の年を楽しみにしていた。

1.イエスの14年目(紀元８世紀)

126:1.1 (1387.1) これは、イエスの14回目の誕生日の年である。かれは、良いくびき職人になり、帆布と革の両方でよく働いていた。また、急速に専門の大工と家具職人に成長していた。この夏、かれは、祈りと思索のためにナザレの北西にある丘の頂上への頻繁な少旅行をした。かれの地上における自己の贈与に対する自意識は、徐々に強くなっていた。

126:1.2 (1387.2) この丘は、100年余も以前に、「バールの高き所」であった。そして、今やそれは、シメオンの墓、イスラエルの評判の聖人の遺跡であった。イエスは、シメオンのこの丘の頂上からナザレと周囲の国土を見渡した。かれは、メギドを見つめ、アジアでその最初のすばらしい勝利を得ているエジプトの軍の話を思い出すのであった。そして、後に、別のそのような軍隊が、いかにユダヤのヨシア王を破ったか。それほど遠くない所には、デボラとバラクがシセラを破ったターナクを見ることができた。遠くには、ドーサンの丘を望むことができ、かれは、そこでヨセフの兄弟が、ヨセフをエジプトの奴隷として売ると教えられていた。それから、かれは、視線をエバルとゲリズィム山に移して、アブラハム、ヤコブ、アビメレフの伝統を列挙するのであった。このように、父ヨセフの民族の歴史的、伝統的な出来事を思い出し、考えを巡らせた。

126:1.3 (1387.3) かれは、礼拝堂の教師の下で上級の読書課程を続け、また弟妹が適当な年齢に達するまでその家庭での教育を続行した。

126:1.4 (1387.4) この年の前半、ヨセフは、ナザレとカペルナウム所有地からの収入をエルサレムでのイエスの長い学習課程の支払いのためにとっておく手配をしており、翌年の15歳の8月にエルサレムに行くという計画になっていた。

126:1.5 (1387.5) この年の初めまでに、ヨセフとマリヤの両者は、頻繁に長男の運命に疑問を抱いた。イエスは、誠に才能豊かで愛らしいかったが、とても理解し難く、推し量り難い子供であり、そして驚異的または奇跡的なものは決して起こらなかった。息子を誇りに思う母は、息を弾ませ、何らかの超人的な、または奇跡的な離れ技を行う息子を見ることを期待しているのだが、望みは、いつも残酷な失望に打ち砕かれた。こういうことは、まったくの落胆であり、気が滅入った。当時の敬虔な人々は、予言者と約束の人が、常に天職を示し、奇跡を起こし、驚くべき成果を収め、神の権威を確立すると本当に信じた。しかし、イエスは、このいずれもしなかった。そういう訳で、イエスの将来を深く考える時、両親の混乱は着実に増加した。

126:1.6 (1387.6) ナザレ家族の改善された経済状態は、家庭内でのあらゆる点で、特に、筆記用石盤として使われた炭で良く書ける滑らかな白い板の増加数に反映された。イエスには、音楽の稽古の再開も許された。かれは、ハープの演奏を大変に好んだ。

126:1.7 (1387.7) この年ずっと、イエスは、「神と人から愛されるようになった」と、本当に言うことができる。家族の見通しは良かったし、未来は明るかった。

2. ヨセフの死

126:2.1 (1388.1) ヨセフが、知事の住居の作業中、荷装置の落下によりひどく傷ついたという悲惨な報せをセフォリスからの飛脚が、このナザレの家にもたらした9月25日、火曜日のその運命的な日まで、全ては、とても順調よくいった。セフォリスからの使者は、ヨセフの家への途中、店に立ち寄り父の事故をイエスに知らせ、そこでかれらは、マリヤに悲報を伝えにともに家に行った。イエスは、すぐ父の元に行くことを望んだが、マリヤは、自分が夫の側に急がなければならないと言い、何も聞こうとはしなかった。マリヤは、ヨセフが、どれくらいひどく

負傷したのか分からないので、自分が戻るまでイエスが幼い子供と家に残り、当時10歳のジェームスが、セフォリスへ同伴すべきだと指示した。しかし、ヨセフは、マリヤが到着する前にその怪我で死んだ。かれらは、ヨセフをナザレに連れて戻り、かれは、その翌日その父の側に埋葬された。

126:2.2 (1388.2) 見通しは良く、未来は明かるかったちょうどその矢先、明らかに容赦のない手が、このナザレの家長を襲った。この家庭の諸事は崩壊し、イエスのための凡ゆる計画と今後の教育は覆された。たった今14歳になったばかりのこの大工の若者は、地球上において、しかも肉をもつ身で神性を明らかにするという天の父からの委任を実現させるだけでなく、この若い人間は、未亡人の母と7人の弟妹の—もう一人はまだ生まれていない—責任を担わなければならないという現実に気づいた。ナザレのこの若者は、今や、突然にとり残されたこの家族の唯一の支えと安らぎになった。この様に、非常に早い時期に、人間の家族の長に伴う責任、自身の弟妹の父となり、母を支え守る、この世で知ることになっている唯一の家である父の家庭の後見人として役目を果たす、きつ

いが、教育的、訓育的な責任を負うこの運命の青年を強要するユランチアにおける自然秩序によるそれらの出来事の発生が可能とされた。

126:2.3 (1388.3) イエスは、あまりにも突然に押しつけられる責任を喜んで引き受け、それを最後まで忠実に担った。人生の少なくとも1つの重大な問題と予想された困難は、悲劇的に解決された—かれは、いまラビの下での勉学のためエルサレムに行く見込みはなかった。イエスが、「如何なる人間にも従属しない。」というのは常に本当であった。イエスは、かつて本当に無邪気な小さい子供からさえ学ぶことを望んでいたが、真実を教えるために決してその権限を人間に求めることはなかった。

126:2.4 (1388.4) かれは、出生前の母へのガブリエルの訪問についてまだ何も知らなかった。公のための宗教活動を始めるにあたり、自分の洗礼の日にヨハネから初めてこれを知らされた。

126:2.5 (1388.5) 数年が経過し、ますますナザレのこの若い大工は、社会のあらゆる制度とあらゆる宗教の慣習を不変の分析方法で測定した。それは、人間の魂のために何をす

るのか。人に神を連れて来るのか。それは、神に人を連れて来るのか。この青年は、人生の娯楽的、また社会的な局面を完全に無視はしなかったが、ますます、ただ2つの目的に時間と活力を傾けた。すなわち家族の世話と、地上において天の父の意思を行動に移す準備に。

126:2.6 (1389.1) この年、冬の夕方にイエスのハープの演奏や、話 (若者は物語りの名手であったので)を聞いたり、またギリシア語の聖書を読むのを聞いたりするために立ち寄るということが、隣人達の習慣となった。

126:2.7 (1389.2) ヨセフの死の時点で、家族の経済状況は、相当の金額があったので、かなり滑らかに運んだ。イエスは、早くも鋭い経営判断と財政的な聡明さの所持を示した。かれは、寛容であるが、質素であった。倹約はするが、気前がよかった。かれは、父の財産の賢明で有能な管理者であるところをみせた。

126:2.8 (1389.3) イエスとナザレの隣人が、家に歓声を運び込むために凡ゆることをしたにもかかわらず、マリヤは、および子供達さえ、悲しみで陰欝になっていた。ヨセフは、もういなかった。ヨセフは、並筈れた夫であり父親

であったので、皆は、彼を恋しがった。彼と話したり、別れの言葉を聞くことができないままに彼が死んだと思うことは、一入悲観的に思えた。

3. 15年目(紀元９年)

126:3.1 (1389.4) この15年目の半ばまでには—ユダヤの年によるのではなく、我々が数える20世紀の暦で—イエスは、家族の切り回しというものをしっかりと把握していた。この年が暮れる前、一家の貯蓄は、尽きようとしており、隣人のヤコブと共有していたナザレにある家の1つを処分する必要に直面した。

126:3.2 (1389.5) 西暦9年4月17日、水曜日の夕方に、末っ子のルツが生まれた。そして、イエスは、能力のおよぶ限り、この格別に嘆かわしい試練の間、母に安らぎを与え世話をすることで父の代理の努力をした。ほぼ20年もの間(公の宗教活動の開始まで)、イエスが、幼いルツを世話したほどには、どんな父親も、愛情を込め、まめやかに自分の娘を可愛がり、養育することはできなかったであろう。イエスは、残りの家族全員にとっても等しく良い父親であった。

126:3.3 (1389.6) この年を通して、イエスは、後に使徒に教え、多くに「主への祈り」として知られるようになった祈りをまず定式化した。ある意味でそれは、家族祭壇の進化であった。彼らには、称賛と幾つかの正式な祈りの多くの形があった。父の死後、イエスは、年長の子供達のお祈りの際、自己表現をすること—自身がそうすることをとても楽しんだ—を個別に教えようとしたが、弟妹達は、イエスの考えを理解することができず、いつも決まって自分達の暗記した祈りの形に戻るのであった。年長の弟妹は、個人的な祈りをするようにと動機づけるこの努力の中で、イエスは、示唆に富んだ言い回しで、それとなく導こうとした。やがて、皆は、イエスの意図しないところで教えられたこれらの示唆に富んだ言葉から大幅に確立された祈りの形式を用いるようになった。

126:3.4 (1389.7) 遂にイエスは、各人に自然発生的な祈りを明確に述べさせるという考えを諦めた。そして、10月のある晩に、低い石の食卓の小さい明かりの側に座り、およそ46センチメートル四方の滑らかな杉板の上に炭で、その後ずっと家族の習慣となる祈りを書いた。

126:3.5 (1389.8) この年、イエスは、混乱した考えに非常に悩んだ。家族への責任は、彼に「父の用向きに従事する」ためにエルサレム訪問に応じるためのいかなる計画の即座の実行も実に効果的に取り除いてしまった。イエスは、地球の父の家族の保護と世話が、すべての任務に優先しなければならないと、家族の扶養が、自分の最初の義務にならなければならないと、正しく結論づけた。

126:3.6 (1390.1) この一年間、イエスは、ユランチアにおける贈与任務の呼称として、後での採用に影響を及ぼす「人の息子」をいわゆる「エノク書」の中の一節を見つけた。かれは、ユダヤ人のメシアの考えを徹底的に考察し、自分はそのメシアにはならないと完全に確信した。かれは、父の民を助けることを切望したが、パレスチナの外国支配を打倒するためにユダヤ軍を導くとは決して思っていなかった。かれは、エルサレムでダヴィデの王座に決して着かないことを知っていた。かれは、自分の任務は、単にユダヤ民族だけの精霊的救済者、または道徳の師のいずれでもないと強く信じた。それ故、イエスの一生の任務は、決して激しい切望や、期待されているヘブライ経典のメシアの予言の遂行ではありえなかった。少なく

とも、かれは、ユダヤ人が理解している予言者のこれらの予測のようなものではなかった。かれは、同様に予言者ダニエルに表現された「人の息子」としては決して現れることはないと確信していた。

126:3.7 (1390.2) しかし、世界の教師として出て行く時がきた時、自分自身を何と呼ぶのか。かれは、自己の任務に関し、どんな主張をすべきか。自分の教えを信じる者達に何と呼ばれるのか。

126:3.8 (1390.3) すべてのこれらの問題を心で思い巡らせている間、かれは、ナザレの礼拝堂の図書館で勉強していた黙示録の書物の中に「エノク書」と呼ばれるこの原稿を見つけた。それは、昔のエノクによって書かれはしなかったと確信していたものの、非常に好奇心をそそるものであったので、繰り返し何度も読んだ。特に感銘を与える一節「人の息子」という言葉があった。エノク書と呼ばれるこの書の作者は、この「人の息子」について話しを続け、「人の息子」が地上でする働きについて述べ、人類に救済をもたらすためにこの地球に降りる前に、この「人の息子」が、神聖な栄光の中庭をその父、全てのも

のの父、とともに歩いたということ、そして、貧しい民衆に救済を公布するために、地球におりて来るために、この全ての壮大さと栄光に背をむけたという説明を続けた。これらの文節を読むにつれて、(これらの教えと混合されるようになった東方神秘主義の多くが誤っていることをよく理解しながらも)イエスは、部分的に公認されるだけのこの「エノク書」の中に押し込められたこの話ほどには、ヘブライ経典のすべてのメシアの予言も、ユダヤの救世者に関するすべての理論のいずれも、真実ではないと感情で反応し、心で認識した。そして、かれは、就任の称号として「人の息子」を採用するとその場で決めた。そして、後に公の仕事を始めたとき、イエスは、実際にこうした。イエスには、真実を認識する的確な能力があり、それが、いかなる源から生じてこようとも、決して真実の受け入れを躊躇うことはなかった。

126:3.9 (1390.4) この時までにかれは、世界のために来たるべき仕事に関して多くのことをかなり徹底的に決定していた。しかし、かれは、頑強にまだユダヤ人の救世主である考えをもっている母にはこれらの問題について何も言わなかった。

126:3.10 (1390.5) イエスのより若い日の大いなる混乱が、そのときに起きた。地球での任務の本質に関し何かを安定させ、かれは、「父の用向きに従事する」ために—全人類に父の情愛深い本質を示すために—国家の救済者、ユダヤ人の教師または王の来ることについて言及した経典の中の多くの論述についての熟考を改めて始めた。どんな出来事に、これらの予言は言及しているのか。かれは、ユダヤ人ではないのか。ダヴィデ家の者か、あるいは、そうではないのか。母は、そうであると断言した。父は、そうではないと決定した。イエスは、そうではないと決めた。しかし、予言者は、メシアの本質と任務を混同してしまったのか。

126:3.11 (1391.1) 結局、母が正しかったのかもしれないのか。過去に意見の相違が起きたとき、母は、ほとんどの場合に正しかった。彼が新しい教師であり、メシアでなかったならば、そのような者が、地球任務の期間中にエルサレムに現れるならば、自分はどのようにこのユダヤのメシアを見分けるべきか。さらに、このユダヤのメシアと自分の関係は何であるべきか。そして、一生の任務に着手した後の家族との自分の関係は何であるべきか、ユダ

ヤ共和国と宗教との関係や、ローマ帝国との、また非ユダヤ人とそれらの宗教との関係は何であるべきか。この若いガリラヤ人は、自分自身、母、および他の空腹な8人の子供の生計を立てるために大工用の長椅子で取り組み続けながら、これらの重要な問題の各々を心で練り、真剣にじっくり考えた。

126:3.12 (1391.2) この年が暮れる前、マリヤは、家族の資金の減少を知った。彼女は、鳩の販売をジェームスに引き継いだ。まもなく、かれらは、2頭目の牛を買い、ミリアムの援助でナザレの隣人に牛乳の販売を始めた。

126:3.13 (1391.3) 深遠な思索の期間、祈りのために丘の上への頻繁な小旅行、加えて、時おり提示されるイエスの多くの奇妙な考えは、母をすっかり警戒させた。時々彼女は、若者が我を忘れていると思い、結局、イエスは、約束の子であり、何かしら他の若者と異なるということを思い出し、自分の恐れを静めさせるのであった。

126:3.14 (1391.4) しかし、イエスは、世界に、母にさえも、自分の考えの全てを提示しないということを学んでいるところであった。この年以降、心で起こっていたことに関

するイエスの発表は、着実に減少した。つまり、平均的な人が理解できない、そして、それが、イエスの存在を普通の人より独特であるか、または異なると見なす方向に導きそうな事柄に関してあまり話さなかった。かれは、自分の問題を理解できる誰かを切望したが、見たところ、平凡で型通りになった。かれは、信頼できて秘密を守る友人を切望したが、イエスの問題は、人間の仲間が理解できないほどに複雑であった。変わった状況の特異性は、かれに単独で自分の重荷に耐えることを強要した。

4.礼拝堂における最初の説教

126:4.1 (1391.5) 15回目の誕生日を迎えると、イエスは、安息日に礼拝堂の説教壇を公式に占有することができた。前に何度も、話者が不在の場合、イエスは、聖書を読むように頼まれたが、今、法律により礼拝を行うことができるその日が来た。従って、15回目の誕生日の後の最初の安息日に、カザンは、イエスが礼拝堂の朝の礼拝を執り行う手配をした。そしてナザレのすべての忠実な信者達が集まった時、青年は、教典の選択をして立ち上がって読み始めた。

126:4.2 (1391.6) 「主が私を塗油されたので、主なる神の魂が私にある。朗報を従順な者にもたらすために、傷心な者に包帯をするために、捕虜へ自由を宣言するために、そして、精霊的な囚人を解放するために、神の恩恵の年と我々の神の罪の報いを受けるべき日を宣言するために、神は私をつかわされた。全ての嘆く人を慰めるために、灰の代わりに美を、悲しみの代わりに喜びの油を、悲しみの気分の代わりに称賛の歌をを与え、それによって神が賛美されるかもしれない主の植え付けられた正義の木と呼ばれるように。

126:4.3 (1392.1) 「生き永らえるため、悪ではなく善を求めなさい。主、万軍の神が、あなたと共にいるでしょう。悪を憎み、善を愛しなさい。門内にて思慮分別を定着させなさい。恐らく、主なる神はヨセフの生き残りの者に哀れみを示すであろう。」

126:4.4 (1392.2) 「自分自身を洗いなさい。自分自身を清めなさい。私の目の前であなたの行いの悪を片づけなさい。悪行を止め、善行を学びなさい。正義を求め、被虐者を救い、父無し子を護り、そして寡婦の弁護をしなさい。」

126:4.5 (1392.3) 「全地球の主の前に進み行くために、何をもって、主の前に来るのであるか。焼いた供物、１歳の子牛と共に彼の前に来た方がいいでしょうか。主はラム数千、羊数万、または油の川に喜ばれるでありましょうか。私の罪のために長子を、私の魂の罪のために私の身体の果物を差し上げるべきでしょうか。いいえ、人々よ、主は、お見せくださった、何が良いかを。そして、主は単に公正に取扱い、慈悲を愛し、神と謙虚に歩くこと以外に何を要求されるというのか。」

126:4.6 (1392.4) 「それからあなたは、だれに、地球の環に座る神を例えるだろうか。目を上げて、誰がこれらのすべての世界を構築したか、誰が数多くの人間を創り、誰がそれらの全てをその名前で呼ぶか見なさい。神は、力の偉大さでこれらの全てのことをし、力が強いからこそ、誰もそれからもれない。神は、力を弱者に与え、そして疲れきっている者達に強さを増やす。恐れないで、私があなたと共にいるので。うろたえないで。私があなたの神であるから。あなたを強くし、助ける。はい、わたしは、あなたの主なる神であるので、私の正義の右手であ

なたを支える。そして、あなたの右手を握り、助けるので、恐れるないで、と言うのです。」

126:4.7 (1392.5) 「そして、あなたは、私の目撃者である。皆が、私を知り、私を信じるように、私が永遠なる神だと理解するように、私が選んだ使用人である。私は主でさえあり、私の他に、救世主はいない。と主がおっしゃる。」

126:4.8 (1392.6) そして、かれは、このように読み終えて座った。その後、それほど丁重に読んで聞かされた言葉を深く考えながら、人々は家に帰った。町の衆は、イエスが、そのように堂々と厳かであるところを見たことがなく、それほど熱心で、それほど誠実な声を聞いたことがなかった。かれらは、とてもりりしく毅然とし、威厳のある彼を見たことがなかった。

126:4.9 (1392.7) この安息日の午後イエスは、ジェームスと共にナザレの丘に登り、帰宅すると、炭で2枚の滑らかな板にギリシア語で十戒を書き上げた。その後、マルタが、これらの板に色付けをして飾った。そして、それは、ジ

ェームスの小さな作業台の上の壁に長らくぶら下がっていた。

5. 財政的苦闘

126:5.1 (1392.8) 徐々に、イエスと家族は、早年の簡素な生活に戻った。衣服や食物さえより質素になった。家族は、牛乳、バター、およびチーズを多く消費した。旬には、庭の農作物を楽しんだが、1カ月経過する度に、　かれらは、さらなる倹約の実行を要した。家族の朝食は、非常に質素であった。最も良い食物は、夕食用に取っておいた。しかしながら、これらのユダヤ人の富の欠如は、社会的下位を意味しなかった。

126:5.2 (1392.9) すでにこの若者は、人がその当時どう生きたかをほぼ理解していた。そして、家庭、田畑、および作業場の生活をいか程に理解したかは、人間の経験の全局面との親密な接触を明らかにするその後の教えにより充分過ぎるほどに示されている。

126:5.3 (1392.10) ナザレのカザンは、イエスが偉大な師に、おそらくエルサレムの有名なガマリアルの後継者になるという確信に執着し続けた。

126:5.4 (1393.1) 明らかに、経歴のためのイエスの全計画は、阻まれた。問題がそのとき進展していて、未来は明るくなかった。しかし、かれは、たじろぐことはなかった。かれは、落胆しなかった。イエスは、日々、即座の義務をよく履行し、人生における拠点の身近な責任を忠実に果たしながら、生活を続けた。イエスの人生は、すべての失望した理想主義者達の永遠の安らぎである。

126:5.5 (1393.2) 通常の日傭い大工の賃金は、徐々に減少していた。イエスは、年末まで早くから遅くまで働いても、1日あたりおよそ25セント相当しか得ることができなかった。翌年までには、家族は、礼拝堂査定分と1/2シケルの寺院の税は言うまでもなく、民間税の支払いさえも難しいと分かった。収税吏は、年内にハープを取ると脅かしさえしてイエスから追加収益を絞り取ろうとした。

126:5.6 (1393.3) ギリシア語の経典が収税吏に発見され、押収されるかもしれないと恐れ、イエスは、15回目の誕生日に、ナザレの礼拝堂図書館に主への成人の供え物としてそれを提出した。

126:5.7 (1393.4) ヨセフの事故死で受理すべき金額の論争上告に対するヘロデの決定を受けるためにセフォリスに赴いた際、イエスの15年目の大なる衝撃が襲った。セフォリスの会計係が些細な金額を提示した時、イエスとマリヤは、かなりの金額の受領を期待していた。ヨセフの兄弟達が、ヘロデに直接上告をしていた。そして、そのとき、イエスは、宮殿に立っており、父の死の時点で何の支払い義務もなかったというヘロデの宣告を聞いた。そのような不当な決定のために、イエスは、ヘロデ・アンティパスを決して信じなかった。イエスが、一度ヘロデについて「あのキツネ」と触れたことは、意外ではない。

126:5.8 (1393.5) この年とその後の数年間、大工の長椅子の緻密な仕事が、隊商人との交じわりの機会をイエスから奪った。家族の供給場は、おじに既に買収されており、イエスは、概して家にある店で働き、そこは、マリヤや家族を助けるには手近であった。およそこの頃、イエスは、世界の情報を集めにジェームスをラクダの用地まで送り始め、このようにしてその日のニュースと接触を保ち続けようとした。

126:5.9 (1393.6) イエスは、成長して大人になるにつれ、その前後の時代の平均的な若者が耐えたそれらの全ての闘争と混乱を経験した。そして、家族を養う厳しい経験は、安逸な思索のため、または神秘的傾向のための過度の時間消費に対する確かな安全装置であった。

126:5.10 (1393.7) これは、イエスが、丁度家の北部に位置するかなりの土地を借りした年であり、それは家族の菜園として分割された。年長児の各々には個々の菜園があり、皆は、農業努力において激しい競争を始めた。一番年上の兄は、野菜耕作の季節の間、毎日、菜園で、皆と若干の時間を過ごした。イエスは、菜園で弟妹達と働く間、皆が足枷のない人生の解放と自由を楽しむことのできる田舎の農場にいるという願望をしばしば抱いた。しかし、皆は、田舎で成長しているうのではなかった。そしてイエスは、理想主義者であると同時に徹底的に実用的な若者であり、問題を見つけると知的に活発にそれに着手し、自分と家族の状況を現実に調整し、個々の、また家族としての望みに対して最も高く可能な満足に、自分達の状況を適合させるためにあらゆる限りのことをした。

126:5.11 (1393.8) 一時イエスは、ヘロデの宮殿の作業のために父に支払われるべきかなりの金額を得ることができるならば、小さい農場の購入を保証するための充分な資力が得られることをかすかに望んでいた。かれは、家族を田舎へ移すこの計画を本当に真剣に考慮した。しかし、ヘロデが、ヨセフへの当然の支払いのいずれをも拒否した時、田舎での家の所有の望みを諦めた。彼らには、そのとき数羽の鳩に加えて３頭の牛、４頭の羊、鶏の群れ、ロバと犬の各一匹がいたので、農場生活の経験の多くを楽しむ工夫をした。幼い子供達にさえ、このナザレ家族の家庭生活を特徴づけた経営者側のよく整った計画を実行すべき一定の任務があった。

126:5.12 (1394.1) イエスは、この15年目の終わりに、人間生活におけるその危険で難しい期間、幼児期のより満足した年と高潔な性格発達における先進的な経験の習得に向けて増大したその責任と機会の成年期へ近づく意識との間の移行期間横断を完了した。心身の成長期間は終わり、そのときナザレのこの青年の真の経歴が始まった。

論文 127
青年期

127:0.1 (1395.1) 思春期に入るにつれ、イエスは、家族の長であり、唯一の支柱となっていた。父の死後の数年内に家族の全財産は、なくなった。時の経過と共に、かれは、自己の前存在をますます意識するようになった。同時に、かれは、楽園の父を人間の子等に示す特別の目的のために肉体で地球にいるということをより完全に認識し始めた。

127:0.2 (1395.2) この世界あるいは他の世界に住んだ、またはそのうち住むであろうどんな思春期の若者も、解決すべきより多くの重大な問題、若しくは、解くべきより複雑な困難に決して直面しなかった。どんなユランチアの若者も、イエス自らが奮闘努力の15歳から20歳の間に耐えた以上の多くの試練の闘争、または苦境を潜り抜けるよう要求されることは、決してないであろう。

127:0.3 (1395.3) このように人の子は、悪に取り捲かれ、罪に取り乱された世界において思春期の実際の生活経験を味わい、ネバドンの全領域の若者の人生経験に関する完全な知識を備え、その結果、かれは、永遠に、全ての時代、

地域宇宙の全世界で苦悩し当惑している若者の理解ある避難所となった。

127:0.4 (1395.4) ゆっくりではあるが確実に、その上実際の経験によりこの神の息子は、宇宙の主権者として、全地域宇宙の世界における全ての創造された知力を有する者の疑いのない、最高の支配者として、全時代の生き物と個人的な資質と経験の全ての段階における理解ある避難所になる権利をかち得ているのである。

1. 第16年目(紀元10年)

127:1.1 (1395.5) 肉体化した息子は、幼少時代を経て、問題のない幼児期を経験した。それから、かれは、幼児期と成人初期の間の試練と苦しい変遷段階を脱して来た—思春期のイエスとなった。

127:1.2 (1395.6) この年、かれは、完全な身体的成長を遂げた。力強く立派な青年であった。かれは、ますます冷静で真剣になったが、親切で、思いやりがあった。目は、親切であったが、鋭かった。微笑は、いつも人を引き付け、安心させるようであった。声は、音楽的ではあるが、威厳をもっていた。挨拶には、心がこもり気どりがなかっ

た。常に、最も平凡なふれ合いにおいてさえ、２重の資質、つまり人間と神性の接触が目立っているようであった。かれは、思い遣る友人と威厳ある教師のこの組み合わせをずっと示した。そして、この人格の特性は、早くに、これらの思春期の年においてさえ、明らかになりつつあった。

127:1.3 (1395.7) この身体的に逞しく強健な若者は、人間の思考の豊かな経験ではなく、そのような知的な発展の能力の充満である人間の知性の完全な成長をも成した。かれは、健康でよく均整のとれた肉体、鋭く分析的な心、親切で思いやりのある気質、やや変動はするが積極的な気質を持ち合わせ、その全ては、強い、際だった、そして魅力的な個性にと整合されていった。

127:1.4 (1396.1) 母や弟妹には、時の経過とともにイエスを理解することは、 より難しくなった。 皆は、イエスの言行を誤解した。母は、弟妹達に、イエスはユダヤ人の救世者となるべく運命づけられているということを理解するように指導していたので、これらの言行は、長兄の人生には不適切であった。マリヤから家族秘密としてそのよ

うな通告を受けた後に、イエスの全てのそのような考えと意志を端的に否定する時の皆の混乱を想像してみよ。

127:1.5 (1396.2) この年サイモンは入学し、家族はもう一つの家を売らざるをえなかった。ジェームスは、そのとき３人の妹の教育を担当した。そのうちの二人は、真剣な勉強を始めるに足る年齢であった。　成長するやいなや、ルツは、ミリアムとマルタからの世話を受けた。通常、ユダヤ人の家族の少女はほとんど教育を受けなかったが、イエスは、少女は少年と同じように学校に通うべきであると主張し、（そして母も同意した。）そして、礼拝堂の学校が彼女たちを受け入れなかったので、特に家での授業をするほかなかった。

127:1.6 (1396.3) この年を通して、イエスは、作業台に閉じ込もった。幸いにも、沢山の仕事があった。イエスの手によるものは、その地方でどんなに仕事が低調であろうとも、決して暇などないほどに優れた品質であった。時には、ジェームスが助けるほど沢山にあった。

127:1.7 (1396.4) この年末までに、かれは、家族を養い、かれらが結婚するのを見届けた後、真実を教える教師として、

また世界へ天の父を明かす者として公的に仕事を始める決心をもう少しでするところであった。かれは、期待されるユダヤの救世主とはならないことを理解しており、母とこれらの問題について議論することはほとんど無役であると結論を下した。かれは、過去に伝えた全てが、彼女にはまず何の印象も与えなかったし、その上父が、母の気持を変えるために決して何事も言えなかったことを思い出し、彼女がいかなる考えを抱こうとも為すがままにさせようと決心した。この年以降、これらの問題について、かれは、徐々に母または他の誰とも話さなくなった。地球に生きる誰も、その実行に関しての助言を与えることができない程に、その任務は独特であった。

127:1.8 (1396.5) かれは、家族にとり若くはあったが本当の父であった。かれは、子供達と可能な限りの時間を過ごし、皆も実に彼を愛した。母は、とても懸命に働いている彼を見て嘆き悲しんだ。母は、彼が、あれほど他愛なく計画したラビとのエルサレムでの修学の代わりに、家族のために生計を立て、日々大工用の台でこつこつ働いていることを憂いた。息子について理解できないことが沢山

あったが、マリヤは、息子を非常に愛しており、喜んで家庭の責任を背負う態度にこの上なく感謝した。

2. 第17年目(紀元11年)

127:2.1 (1396.6) およそこの時期、特にエルサレムとユダヤにおいて、ローマへの納税に対する抵抗を支持してかなりの動揺があった。やがてゼロテ派と呼ばれる強い国家主義的な団体が生まれた。パリサイ人と異なり、ゼロテ派は、メシアの接近を待つ気はなかった。彼らは、政治的反乱の決定を強いた。

127:2.2 (1396.7) エルサレムからの一団の主催者は、ガリラヤに到着し、ナザレ到着まで調子の良い前進をしていた。彼らが会いに来た時、イエスは、慎重に彼らの話を聞き、多くの質問もしたが、党に加わることは拒んだ。かれは、入党しない理由を明らかにすることを完全に断ったので、ナザレの若い仲間の多くを党から遠避ける結果となった。

127:2.3 (1397.1) マリヤは、イエスに入党するよう説得するために最善をつくしたが及ばなかった。彼女は、国家主義的な目的を擁護する真剣な依頼への拒否は反抗である、エ

ルサレムからの帰省の際の両親に従順であるという誓約への違反であるとまで仄めかした。しかし、このそれとない皮肉に答えて、かれは、彼女の肩に優しく手を置いて、顔を覗き込みながら、「母よ、どうしてそんなことができるのか。」と言うだけであった。そこで、マリヤは、自分の言葉を取り下げた。

127:2.4 (1397.2) イエスのおじ(マリヤの兄弟サイモン)の一人は、この集団にすでに加わっており、後にガリラヤ分団の幹部となった。数年間、イエスとこのおじの間には、ある種の疎遠があった。

127:2.5 (1397.3) しかし、問題は、ナザレで起ころうとしていた。これらの問題に対するイエスの態度は、町のユダヤの若者の間での不一致を生む結果となった。およそ半分は、国家主義的な組織に加わり、残る半分は、対立するより穏健な集団に編成を始め、イエスが指揮を引き受けることを期待した。かれが、理由として家族への重い責任を訴え、差し出された名誉を拒否したとき、かれらは、驚き、そして皆は、それを容認した。しかし、やがて裕福なユダヤ人イサク、異教徒への金貸しが、イエス

に道具を置いてこれらのナザレ愛国者の指揮を引き受けるならば、イエスの家族を養うことに同意すると進み出た時、状況はさらに複雑になった。

127:2.6 (1397.4) イエスは、当時かろうじて17歳、人生早期において最も微妙かつ困難な状況の1つに直面した。愛国的な問題は、特に税収集の外国の抑圧者が複雑にするとき、精霊的な指導者にとって自分自身を関係づけることは常に困難であるし、この場合、ユダヤ人の宗教が、ローマに対してこの抵抗に関与していたことから、二重にそうであった。

127:2.7 (1397.5) 母とおじ、弟のジェームスまでもが、国家主義運動に加わるように促したので、イエスの立場は、　より難しくなった。ナザレの全ての善良なユダヤ人は、入党した。そして運動に加わらなかった青年全員は、イエスが考えを変えた瞬間、すぐにも加入したことであろう。だが、イエスには、ナザレ中でただ一人の賢明な助言者、ナザレの市民委員会が公開の審判に対するイエスの答えを求めに来たとき、委員会への自分の返事に関して助言をくれた年老いた師、カザンがいた。イエスの若

い人生全てにおいて、これは、かれが公的な戦略に意識的に向かったまさしく最初であった。それ以前、つねにかれは、状況をはっきりさせるために真実の率直な声明を頼みとしたが、今度は、完全な真実を宣言することができなかった。かれは、自分が人間以上のものであるということを仄めかすことができなかった。かれは、より円熟した人格到達が待たれる任務に関わる自分の考えを明らかにすることができなかった。これらの制限にもかかわらず、彼の宗教的な忠誠と国民的な忠誠に、直接に疑問が呈された。家族は、騒乱状態、若い友人達は分裂、町の全ユダヤ人の集団は大騒動であった。そして、それが全て彼の所為であると感じていたとは。だが彼は、どんな類の問題も、まして、この種類の騒動を起こすといういかなる意図に関してもなんと潔白であったことか。

127:2.8 (1397.6) 何かが為されねばならなかった。かれは、自分の立場を述べなければならず、勇敢に、外交的に多くの者を、全ての者にではないが、満足させて、これを果たした。そればかりではなく、かれは、第一の義務は、家族に対してあるということ、未亡人の母と８人の弟妹

は、単なる金銭で購入できる—生活のための物理的必需品—以上の何かを必要としたということ、家族には父の保護と指導が与えられる権利があるということ、そして、かれは、潔白な心で、残酷な事故が突き出した義務から自分を解放することができなかったという立場を維持して、自分の本来の申し立ての条件を厳守した。かれは、自分を進んで放免してくれるという母とすぐ下の弟に感謝の意を述べたが、物質援助のためにどんなに多くの金銭が間に合ったとしても、亡父への忠誠が家族を去ることを禁じると繰り返して言い、「金は、愛することができない。」という生涯忘れられない言葉を述べた。この話の中で、イエスは、自分の「人生の任務」について幾つかの不明瞭な言及をしたが、それが、軍事的な思想に矛盾している可能性の有無にかかわらず、自己の人生における他の全てと共に、自分が忠実に家族に対する義務を果たせるために、それはあきらめたということを説明した。ナザレの誰もが、彼が家族にとって良い父であることをよく知っており、これは、あらゆる高潔なユダヤ人の情愛に非常に優しく訴える事柄であったことから、イエスの嘆願は、聞き手の多くの心から感謝の反応

を得た。また、この点に関心のない者達は、予定にはなかったジェームズのこの時の演説に和らげられた。まさしくその日、カザンは、ジェームスに演説の予行をさせてあったのだが、それは、かれらの秘密であった。

127:2.9 (1398.1) ジェームスは、自分が家族のために責任を負えるほどの年齢であったならば、イエスは、その民族解放の手助けをするはずだと確信するし、もし皆が、イエスは、「父と教師であるために、我々と家に留まることに同意さえしてくれれば、ヨセフの家族からはただ一人の指導者でなく、ほどなく、世間は、５人もの忠誠な民族主義者を手に入れるであろう。なぜなら、父親代わりの兄の指導で成長し、我々の国家に仕えるためにやってきたのは５人の男の子ではなかったのか。」と述べた。そして、このようにこの若者は、非常に緊張し、険悪な状況にかなり平穏な結末をもたらしたのであった。

127:2.10 (1398.2) 一応、危機は終わったが、この事件は、ナザレでは決して忘れられなかった。動揺は持続し、イエスは、二度と皆のお気に入りではなかった。感情の分裂は、決して完全に克服されなかった。そして、他の、ま

たその後の出来事により増大されるこれは、かれが、後年カペルナムに移った主な理由の1つであった。この後、ナザレは、この人の子に関する感情の分裂を引きずった。

127:2.11 (1398.3) ジェームスは、この年学校を卒業し、自宅の大工の工房での専業に従事した。イエスが、より多く家の仕上げや飾り棚専門の作業をより開始する一方で、ジェームスは、道具の賢明な遣い手となり、今や、くびきと鋤の製造を引き継いだ。

127:2.12 (1398.4) この年、イエスは、心の統合において大きく前進した。徐々に、かれは、神と人間性を統合し、このすべての知性の統合を彼自身の決定力と内住する訓戒者の、丁度すべての贈与後の世界にいるすべての通常の死すべき運命にある者がその心の中に持っているような訓戒者の援助だけで実行した。今までのところ、エルサレムでの夜、兄のイマヌエルにより派遣された使者が、自分の前に１度現れた訪問以外には、この青年の生涯で超自然であるものは何も起こってはいなかった。

3. 第18年目(紀元12年)

127:3.1 (1398.5) この年の間に、家屋と庭を除く家族のすべての持ち物が処分された。既に抵当に入っていたカペルナムの所有地の最後の一画が、(他の分の所有権を除き)売却された。収益は、税金、ジェームス用の幾つかの新しい道具の購入のために、それにジェームスが家続きの店で働き、マリヤの家事を助けられほどの年齢であったので今やイエスが買い戻すと提案した隊商用地の近くにある古い家庭用品店兼修理店の支払いとに使われた。このようにしばらくのあいだ財政的な圧迫が緩和されることから、イエスは、ジェームスを過ぎ越し祭りに連れて行くことに決めた。二人は、単独になるようにサマリア経由で1日早くエルサレムに向かった。かれらは、歩き、イエスは、父が5年前同様の旅において教えてくれたように、途中の歴史的な場所についてジェームスに話した。

127:3.2 (1399.1) サマリアを通過する際、かれらは、多くの奇妙な光景を目にした。この旅で、かれらは、個人的、家族的、また国家的な問題の多くについて論議した。ジェームスは、非常に信仰の厚い型の若者であった。そして、ほんの僅かしか知らないイエスの一生の仕事に関する計画について完全には母に同意してはいない一方で、かれ

は、イエスがその任務を始められるように、自分が家族のために責任を負うことができる時を楽しみにしていた。かれは、イエスが過ぎ越しの祭りに連れて行ってくれることを非常に感謝した。二人は将来についてこれまで以上によく話し合った。

127:3.3 (1399.2) イエスは、サマリアの道すがら多くのことを、特にベテルでのことやヤコブの井戸の水を飲む時について考えた。彼と弟は、アブラハム、イサク、ヤコブの伝統について検討した。かれは、エルサレムで目撃しようとしていたことのためにジェームスに準備させる多くのことをし、こうして、自身が最初の寺院訪問で経験したそのような衝撃を少なくしようとした。しかし、ジェームスは、これらの幾つかの光景にそれほど敏感ではなかった。かれは、数人の聖職者の任務実行の際のおざなりで冷たい態度を批評したが、概してエルサレムでの滞在を大いに楽しんだ。

127:3.4 (1399.3) イエスは、過ぎ越しの夕食にジェームスをベタニヤに連れて行った。サイモンは、すでにその父と共に埋葬されていた。イエスは、寺院から過ぎ越しの祝いの

子羊を持参しており、過ぎ越し祭りの家族の長としてこの家庭の主人役をした。

127:3.5 (1399.4) 過ぎ越しの夕食後、マルタ、ラザロとイエスは、深夜まで話したが、マリヤは、ジェームスと話すために座った。翌日、かれらは寺院の礼拝に出席し、ジェームスはイスラエルの共和国に受け入れられた。その朝、かれらは、寺院を見るためオリーブ山の崖に立ち止まり、ジェームスが驚嘆する旁らで、イエスは、エルサレムを黙って見つめていた。ジェームスは、兄の態度を理解できなかった。その夜、かれらは、再びベタニヤに戻り、翌日は家に向けて立つところであったが、ジェームスが、教師達の話を聞ききたいと説明し、寺院に戻ると言い張った。そして、これは本当ではあったが、かれは、心の中では秘かに母から聞いたようにイエスが議論に参加するのを聞きたかったのであった。従って、かれらは、寺院に行き、議論を聞いたが、イエスは、質問をしなかった。それは、すべて人と神のこの目覚めた心にとりあまりに子供じみて無意味に思えた—それらを哀れむことしかできなかった。ジェームスは、イエスが何も言わないことに失望した。彼の質問に対してイエスは、

「私の時間はまだ来ていない。」と答えるだけであった。

127:3.6 (1399.5) その翌日、かれらは、家に向けてエリコとヨルダン渓谷を旅し、イエスは、13歳の時のこの路上の旅をも含む道中での多くのことについて詳しく話した。

127:3.7 (1399.6) ナザレに戻ると同時に、イエスは、家族の古い修理工房で仕事を開始し、国や周辺の全域からの多くの人々に毎日会えることができ、大いに励まされた。イエスは、本当に人々—ただのありふれた人々—を愛した。かれは、毎月ジェームスの助けで店の支払いをし、家族への仕送りを続けた。

127:3.8 (1399.7) 年に何度かそのような機能を果たす訪問者がいない時、イエスは、礼拝堂で安息日の聖書を読み続けた。そして、何度も教訓に関する注釈をしたが、通常、注釈不要な節を選択していたのでそれは不要であった。かれは、一つが他方を解明するように様々な章段の朗読の順を取りまとめるほどに巧みであった。天気さえよければ、安息日の午後、かれは、自然の中での散策に弟妹を連れ出すことを欠かすことはなかった。

127:3.9 (1400.1) カザンは、この頃、哲学的な議論のための青年同好会を発足させ、異なる構成員の自宅において、またしばしば自身の家でも会合をもち、イエスは、この会の際立った一員となった。この手段により、最近の民族主義的な論争の際に失った地域における信望の回復が可能となった。

127:3.10 (1400.2) 制限をうけていた間、イエスの社会生活は、完全に軽視されてはいなかった。ナザレの青年と若い女性の両方に多くの暖かい友人と忠実な賞賛者がいた。

127:3.11 (1400.3) 9月に、エリザベツとヨハネは、ナザレ家族を訪問した。イエスが、大工仕事か他の仕事を始めるためにナザレに残るように勧めない限り、ヨハネは、父を失っており、農業と羊の養育に従事するためにユダの丘に戻るつもりであった。かれらは、ナザレ家族が実質的に無一文であることを知らなかった。マルヤとエリザベツは、息子達について話せば話すほど、２人の青年が共に働き、またより互いに会う方が良いと確信するようになった。

127:3.12 (1400.4) イエスとヨハネは、多く語り合った。そして、非常に親密で個人的な幾つかの問題についても話した。この訪問を終えた時、彼らは、彼らの仕事に「天の父が召喚をかけ」、 社会奉仕で出会うまで再び会わないと決めた。ヨハネは、母の扶養のために家に戻り働くべきであると考えるにいたるまでに、ナザレで見たものにこの上もなく感動した。かれは、イエスの生涯の任務の一役をかうことになると確信するようになった。しかし、かれは、イエスが、何年間も家族の扶養に従事することになっていることを知った。したがって、家に戻り、小さい農場の作業と母の必要に応えるために落ち着くことに大いに満足した。そして、ヨハネとイエスは、人の子が洗礼のためにヨルダン川の側に出向くその当日まで、決して互いを見かけることはなかった。

127:3.13 (1400.5) この年の12月３日、土曜日の午後、再び死が、このナザレ家族を襲った。幼いアモス、赤ん坊の弟が、高熱で1週間の病気の後に死んだ。マリヤは、ただ一人の支えである長男とこの時の悲しみをくぐり抜けた後で、遂に、しかも最も満ちた気持ちでイエスを家族の

本当の長と認めた。そしてかれは、実にふさわしい指導者であった。

127:3.14 (1400.6) 4年の間に家族の生活水準は、着実に減退していた。年々、かれらは、増大する貧困の危機を感じた。この年の暮れまでには、全て困難な闘いのうちの最も難しい経験の1つに直面していた。ジェームスはまだ多くを稼ぎそうにはなく、他のすべての上に重なる葬儀費用が、家族をぐらつかせた。しかし、イエスは、心配し悲嘆している母にただ言うのであった。「母、マリヤ、悲しみは我々を助けはしない。我々は皆、最善をつくしている。そして、おそらく母の微笑というものは、　我々がより首尾よくする気にさえするかもしれない。日増しに、我々は、より楽しい先の日々への望みによってこれらの課題に向かって元気づけられている。」イエスの剛健で実際的な楽観主義は、誠に伝染的であった。全ての子供が、　より楽しい時代とより良いものへの期待の雰囲気の中で暮らしていた。そして、家族の貧困の抑うつ性にもかかわらず、この希望に満ちた勇気は、強健で高貴な性格の開発に非常に関与した。

127:3.15 (1400.7) イエスは、目前の課せられた仕事に、心、魂、身体のすべての力を効果的に駆使する能力を備えていた。かれは、解決したい一つの問題に対して深い、考える心を集中することができた。そしてこれが、自身の不屈の忍耐と関連して、穏やかに死すべき者の困難な試練に耐え—まるで「目に見えない神を見ている」かのように生き—させた。

4. 第19年目(紀元13年)

127:4.1 (1401.1) この頃までには、イエスとマリヤは、とても折り合いが良くなっていた。彼女は、もうそれほどイエスを息子と見なさなかった。それよりもイエスは、彼女の子供等の父となった。毎日の生活は、実際的で目前の困難でいっぱいであった。二人は、イエスの生涯の仕事について頻繁に話さなくなった。というのも時の経過につれ、二人の思いのすべては、互いに４人の少年と３人の少女の支えと躾に捧げられていたので。

127:4.2 (1401.2) イエスは、この年明けまでに、子供の教育方法—悪行を禁じるユダヤの古い流儀の代わりに善を行なう肯定的な命令—に関して母の容認を完全に勝ち得てい

た。家庭においても、公の教えの経歴を通じても、イエスは、変わることなく肯定的な形式の勧告を用いた。いつも、そしていたる所で、「これをしなさい—それをすべきである。」と言ったのである。イエスは、古代の禁制に由来する教育の否定的な方法を決して採用しなかった。悪の禁止の強調を控え、一方で善の実行を高揚した。この家庭の祈りの時間は、家族の福祉に関するありとあらゆる事柄について議論するための機会であった。

127:4.3 (1401.3) イエスは、弟妹に賢明な躾をかなり早い時期に始めたので、彼らからの即座の、または心からの服従を得るための罰は、僅かしか必要とされなかったか、あるいは皆無であった。唯一の例外は、ユダであり、イエスは、いろいろな機会にこの子供には家庭での規則違反に対して処罰を課すのが必要であると認めた。３度にわたる明白で故意の家族内の規則違反に対し、ユダを罰する必要があると考えた時、その罰は、　年長児の一致した決定により、しかも、それが課せられる前にユダ自身の同意があった。

127:4.4 (1401.4) イエスは、為すこと全てにおいてとても秩序があり系統だっていたが、管理支配においては、父親代わりの兄を動かした正義の精神が、子供達全員を大いに印象づける爽快な判断の融通性と適合性の個性を持ち合わせていた。かれは、弟妹を決して気紛れに躾ることはなく、そのような均一な公正さと個人的考慮の理由故に家族全員に慕われた。

127:4.5 (1401.5) ジェームスとサイモンは、好戦的で時には怒りをぶつける遊び仲間を宥めるというイエスの計画に従おうと成長し、かなり成功もしていた。しかし、ヨセフとユダは、家でそのような教えに同意しながら、仲間に襲われると防御しようと慌てた。特にユダは、これらの教えの精神に違反する罪を犯した。しかし、無抵抗は、家族の原則ではなかった。個人的な教えに対する違反に罰は、なかった。

127:4.6 (1401.6) 一般に、全ての子供、特に少女達は、まるで愛情深い父親にするように、イエスに幼年期に関わる問題を相談もし、また託しもするのであった。

127:4.7 (1401.7) ジェームスは、均衡のとれた、冷静な若者に成長したが、イエスのようにはそれほど精霊的に傾斜はしなかった。かれは、忠実な労働者である一方、精霊的にあまり気を配らないヨセフよりはるかに良い学生であった。ヨセフは、こつこつと働く者であり、他の子供の知的水準には及ばなかった。サイモンは、善意の少年であったが、あまりにも夢想家であり過ぎた。かれは、人生で落ち着くのに時間がかかり、イエスとマリヤにとってかなりの不安の種であった。しかし、かれは、いつも善良で善意の若者であった。ユダは、火つけ役であった。最も高い理想を持っていたが、気質が不安定であった。かれは、母の決断力と攻撃性の全てを、それ以上を備えていたが、母の釣り合いの感覚と判断の多くを欠いていた。

127:4.8 (1402.1) ミリアムは、高貴で精霊的なものへの鋭い認識をもつ分別があり、穏健な娘であった。マルタは、思案と行動の鈍さにもかかわらず、非常に信頼できる有能な子供であった。赤ん坊のルツは家の陽光であった。言葉について考えはしないが、心は最も誠実であった。兄であり父である人をまさに崇拝していた。しかし、家族

は、彼女を甘やかしはしなかった。彼女は、可愛い子供であったが、家族の中で、都で一二を争うほどの美人であったミリアムほどの顔立ちではなかった。

127:4.9 (1402.2) 時の経過とともに、イエスは、安息日の遵守と他の多くの宗教面に関連した家族の教えと習慣を自由にし、また変更のために多くのことをし、マリヤは、これらのすべての変化に心から同意した。この頃までにイエスは、疑いのない家長となった。

127:4.10 (1402.3) この年、ユダは入学した。そして、これらの費用の負担のためにイエスは、ハープを売る必要があった。したがって最後の娯楽の楽しみが消えた。心や身体が疲れると、かれは、ハープの演奏を非常に好んだが、ハープは、収税吏による没収からは少なくとも安全であると考えて自分を慰めた。

5. レベッカ、エズラの娘

127:5.1 (1402.4) イエスは、貧しくはあったが、ナザレでの社会的な地位は決して損なってはいなかった。かれは、主要な青年の一人であり、大半の若い女性に非常に高く評価されていた。豪商でもあり貿易業者でもあるナザレのエ

ズラの長女レベッカは、イエスが、強健かつ知的な男らしさのすばらしい雛形であり、また精霊的指導者としてのその評判を考えるとき、自分が徐々にこのヨセフの息子に恋心を抱いていくのが分かっても不思議ではなかった。彼女は、まずミリアムに自分の愛情を打ち明けた。ミリアムは、次に母とこのすべてを徹底的に話し合った。マリヤは、強く興奮した。今や不可欠の家長となった我が息子を失おうとしているのか。悩み事は決して止まないのか。何が次に起こるというのか。そしてマリヤは、結婚がイエスの将来の経歴にどんな効果をもたらすかを熟考するために佇んだ。度々ではないが少なくとも時々、彼女は、イエスが「約束の子」であったという事実を思い出した。彼女がミリアムとこの問題を徹底的に話しあった後、二人は、イエスがそれを知る前にレベッカのもとに直接行き、全体の話を提示し、そして正直にイエスが運命の息子である、偉大な宗教指導者、恐らくメシヤになることになっている、という自分達の信念を話し、食い止める努力をすると決めた。

127:5.2 (1402.5) レベッカは熱心に聴いた。彼女は、詳細な説明に興奮を覚え、自分が選んだこの男性と運命を共にし、

指導者の生涯を共有するとますます決心していた。彼女は、そのような男性こそ忠実で有能な妻をいっそう必要とすると(自分自身に)言い聞かせた。彼女は、自分を思い切らせるマリヤの努力を家長と家族の唯一の支えを失う畏怖への自然な反応と解釈した。しかし、彼女は、大工の息子への自分の思いに父が賛成したことを知っており、彼が、イエスの収益の損失分を補償するために家族に完全に十分な収入を快く供給すると正しく判断した。父がそのような計画に同意した時、レベッカは、改めてマリヤとミリアムと談合をした。そして、二人の支持が得られなかったとき、彼女は、あえてイエスの元に行った。彼女は、父の協力を得てこれをし、その父は、レベッカの17回目の誕生日の祝賀のためにイエスを家に招待した。

127:5.3 (1403.1) イエスは、最初に父、そしてレベッカ自身からのこれらの詳述を注意深く、好意的に聴いた。イエスは、如何なる金額も父の家族を直接養う自分の義務、「すべての人間の最も神聖であるものを実現すること—自分自身の肉親への忠誠」の代理をすることはできない、という趣旨の思いやりのある回答をした。レベッカ

の父は、イエスの家族への献身の言葉に深く感動し、談合から退いた。自分の妻マリヤへのたった一言は、「我々は、あの人を息子として得られない。自分達には立派過ぎる。」であった。

127:5.4 (1403.2) そしてレベッカとのあの重大な話が始まった。ここまで、イエスは、少年と少女、青年と若い女性をほとんど区別してこなかった。彼の心は、人間の結婚における個人の愛の達成を真剣に考慮をするには、実際的な現実のさし迫った問題と「父の用向き」に関わる自己の最終的な経歴への興味をそそる瞑想とにあまりにいつも没頭し過ぎてきた。しかしその時、彼は、あらゆる平均的な人間が直面し決断しなければならないそれらの問題のもう一つに直面していた。誠にもってかれは、「君のように全ての点において試された」のであった。

127:5.5 (1403.3) 注意深く聴いた後かれは、レベッカからの表明された賛美に心から感謝し、「それは、私の生涯においてずっと私を励まし、慰めてくれる。」と付け加えた。彼は、単純なきょうだい関係と純粋な友情以外のいかなる女性との交友も自由に始めることはできないと説明し

た。最初の、そして最高の義務は、自分の父の家族の扶養であり、それが達成されるまで結婚を考えることができないと明らかにした。次に、イエスは、「私が運命の息子であるならば、運命が明らかになるその時まで生涯持続する義務を負ってはいけない。」と付け加えた。

127:5.6 (1403.4) レベッカは悲嘆にくれた。父がセフォリスに越すことを最終的に同意するまで、慰めを拒絶し、父にナザレを去るようううるさく頼んだ。後年、求婚した多くの男性に対して、レベッカには1つの答えしかなかった。彼女は1つの目的だけのために生きた—自分にとりこれまでに存在した最も偉大な男性が、真実の教師としてその経歴を始めるその時を待つこと。そして、彼女は、その日イエスが勝ち誇ってエルサレムへ乗って行ったときも(イエスには気付かれずに)、居合わせており、イエスの波瀾万丈の公のための労務の間中、献身的に追従した。そして、レベッカにとり、天上の数え切れない世界にとっても同じく、「1万の中の最もいとおしく偉大な人」である人の子が十字架に磔けられた運命の悲惨なその午後に、彼女は、マリヤの側で「他の女性達」の中に立っていた。

6. イエスの第20年目(紀元14年)

127:6.1 (1403.5) イエスへのレベッカの愛の物語は、ナザレで、後にはカペルナムで囁かれ、それゆえ続く数年間、多くの女性は、男性達が愛しんだように彼を愛し、かれは、二度と別の立派な女性からの個人的な献身の申し出を拒絶しなければならないようなことはなかった。この後ずっとイエスへの人間の愛情は、敬虔かつ崇拝的な性質を伴なった。男女双方は、自己満足や愛情からくる独占欲の色合いではなく、彼がそうあったという理由でイエスを献身的に愛した。しかし、何年もの間、イエスの人柄の話がされる時はいつでも、レベッカの献身が詳細に語られた。

127:6.2 (1404.1) ミリアムは、完全にレベッカの事件を知っており、また兄がいかに美しい少女の愛さえ見捨ててしまったかを知り、(彼の運命の将来の経歴の要素がわからずに)イエスを理想化し、感動的で深遠な感情で父として兄として愛するようになった。

127:6.3 (1404.2) 家族は、ほとんどそれをする財政的な余裕はなかったが、イエスは、過ぎ越し祭りにエルサレムまで行

きたいという不思議な強い思いがあった。母は、レベッカとの最近の経験を知っており、イエスに旅をするよう賢明に促した。かれは、それを明らかに意識してはいなかったが、最も望んだことはラザロと話し、マルタとマリヤと雑談する機会であった。自身の家族の次に、かれは、とりわけこの三人が好きであった。

127:6.4 (1404.3) エルサレムへのこの旅の際、かれは、メギド、アンチパトリス、ロド経由で行き、そして、彼がエジプトからナザレに連れ戻された時と同じ道筋の一部を辿った。かれは、過ぎ越し祭りに行くのに４日間を費やし、パレスチナの国際的な戦場のメギドとその周辺で生じた過去の出来事について多くを考えた。

127:6.5 (1404.4) イエスは、エルサレムを通過し、寺院と集いくる参拝者を見るためにだけ休止した。かれは、ヘロデが建築したこの寺院と政治的に任命されたその聖職者を嫌悪していた。かれは、何よりもラザロ、マルタ、マリヤに会いたかった。ラザロは、イエスと同年齢で今は家の長であった。この訪問までには、ラザロの母もまた、埋葬されていた。マルタは、イエスより1歳あまり上であ

ったが、マリヤは、2歳若かった。そして、イエスは、三人にとり偶像的理想であった。

127:6.6 (1404.5) この訪問中、伝統に対する反抗のそれらの周期的な発生の一つ—イエスが天の父を誤って描写していると考えるそれらの儀式的な習慣に関する憤りの表現—が起きた。ラザロは、、イエスが来ていることを知らずにエリコ街道沿いにある村の友人と過ぎ越し祭りを祝う段取りをしていた。そのときイエスは、自分達のいる所、ラザロの家で饗宴を祝おうと提案した。「しかし、」とラザロは言った。「過ぎ越しの祝いの小羊がない」。そこでイエスは、天の父はそのような子供じみた無意味な儀式に本当に関係していなかったという趣旨の長い説得力のある講説を始めた。彼らは、厳粛で熱心な祈りの後に立ち上がり、イエスが言った。「モーゼが指導したように、私の人民の幼稚で暗い心を彼らの神に仕えさせよ。彼らがするのは良いのだが、命の光を見てしまった我々が、死の暗闇を父をに近づけさせるようなことをしてはならない。父の永遠の愛の真実を知って自由になろう。」

127:6.7 (1404.6) その晩薄明かりのころ、この四人は、着座をし、敬虔なユダヤ人による子羊なしの最初の過ぎ越し祭りの祝宴の相伴をした。無発酵のパンとワインが、この過ぎ越し祭りのために用意され、イエスは、自らが「命の糧」と「命の水」と名づけたこれらの象徴の品を仲間に出し、彼らも、たった今与えられた教えに厳粛に従って摂った。以降ベタニヤ訪問ではいつも、この聖餐の儀式に従うことがイエスの習慣であった。家に帰るとこのすべてを母に伝えた。母は、まず驚いたが、イエスの視点が徐々に見えてきた。それでも、彼が、家での過ぎ越し祭りにはこの新しい考えを取り入れない意図を保証すると、彼女は大いに安心した。家では子供達とともに「モーゼの法により」年ごとに過ぎ越しの食事を続けた。

127:6.8 (1404.7) マリヤが結婚に関してイエスと長談義をしたのは、この年であった。マリヤは、家族への責任がなければ結婚するかどうかイエスに率直に尋ねた。イエスは、目前の義務が自分の結婚を禁じているので、その問題についてあまり考えたことがないと説明した。かれは、結婚生活に入るということには疑念があると述べた。全てのそのような事は、「私の時間」、つまり「私の父の仕事

が始まらなければならない」時を待たなければならないと言った。肉体をもつ身で子供の父にはならないと既に決心していたので、かれは、人間の結婚問題を余り考えなかった。

127:6.9 (1405.1) この年、かれは、自己の人間と神の本質を簡単で有効な人間の個性になお一層織り込む新たな任務にとりかかった。そして、かれは、道徳面と精霊的な理解において成長し続けた。

127:6.10 (1405.2) ナザレの全財産(家を除く)は無くなったが、この年、かれらは、カペルナムの不動産の持ち分の販売から些さかの財政的な潤いがあった。これは、ヨセフの全地所の最後であった。カペルナムのこの不動産取引は、ゼベダイという名の船大工とであった。

127:6.11 (1405.3) ヨセフは、この年、礼拝堂の学校を卒業し、家の大工工房の小さな台での仕事を開始する準備をした。父の地所は尽きてしまったが、三人が、定期の仕事に従事していたので首尾よく貧困を退ける見通しがあった。

127:6.12 (1405.4) イエスは、急速に大人に、単なる青年ではなく、大人になっている。かれは、責任を担うことをよく学んだ。かれは、失望に直面し、先に進む方法を知っている。かれは、計画が阻まれ、目的が一時的に覆される時、勇敢に耐える。かれは、不公平に直面してでさえいかに公正であるかを学んだ。かれは、精霊的な生活の理想を地上での生活要求に合わせる方法を学んでいる。かれは、必要性からくるより間近で即座の目標達成のために精を出して働く傍ら、理想主義の、より高く、遠い目標の達成をいかに計画するかを学んでいる。かれは、人間のありふれた要求に自己の切望を調整する術を着実に習得している。かれは、精霊駆動の活力を物理的達成の方法に転じて活用する術をほぼ習得した。かれは、地球での生活を続ける一方、天国にいるような生活を送る方法をゆっくり学んでいる。かれは、地球での家族の子供を導き、また指示する父親の役割を引き受けつつ、ますます天の父の究極的指導に依存している。かれは、敗北の状態から巧みに勝利をもぎ取ることにかけて経験豊富になりつつある。かれは、時間の困難を永遠の勝利に変える方法を学んでいる。

127:6.13 (1405.5) 年が経過するに従い、ナザレのこの青年は、このようにして時空の世界での命あるものとして人生を経験し続ける。かれは、ユランチアにおいて代表的で、豊富な充実した人生を送る。かれは、自己の創造した生物が潜り抜ける最初の人生、肉体での人生の短くて奮闘的な歳月の間に通過する経験において熟したままでこの世を去った。そして、このすべての人間の経験は、宇宙主権者の永遠の所有である。かれは、我々の理解ある兄であり、思いやりのある友であり、経験豊かな主権者であり、慈悲深い父である。

127:6.14 (1405.6) かれは、子供として知識の巨大な量を蓄積し、青年としてこの情報を選別し、分類し、相関させた。そして今領域の人間としてかれは、この世界、全ネバドン界の他のすべての居住圏の仲間の人間のための次に始まる自分の教育、宗教活動、奉仕における活用の前に精神的な財産の統合化を始める。

127:6.15 (1405.7) この領域の赤子として生まれ、幼年期の生活をし、少年と若者の引き続く時期を通り抜けた。かれは、人間生活への経験が豊かに、人間性への理解に満

ち、人間性のもろさへの同情に溢れ、今、完全な成人の敷居に立っている。全ての時代と段階における限りある命を有する者へ天国の父を明らかにする神性芸術に熟練しつつある。

127:6.16 (1406.1) そして今、成熟した人間—この世界の成人—としてかれは、人に神を顕示し、人を神に導く最高の任務を続ける準備をする。

論文 128
イエスの成人早期 4 3

128:0.1 (1407.1) ナザレのイエスは、成人期の初期に入り、地球での通常かつ平均的な人間の生活を送ってきたし、送り続けた。イエスは、ちょうど他の子供が来るように、この世界に生まれた。かれは、自分の両親の選択には無関係であった。かれは、7番目の最後の贈与、人間の肉体に似せての顕現実行のための惑星としてこの特定の世界を選びはしたが、しかし他の点においては、自然な方法でこの世界に入り、ちょうど、この世界の、あるいは同様の世界の死すべき運命にある者達がするようにこの領域の子供として育ち、またその環境の変化に取り組んだ。

128:0.2 (1407.2) ユランチアにおけるマイケルの贈与の二重目的をいつも心に留めて置きなさい。

128:0.3 (1407.3) 1. 肉体での完全な人間生活を送る経験の習得、すなわちネバドンでの主権の完了。

128:0.4 (1407.4) 2. 時間と空間世界の命ある居住者への宇宙なる父の顕示、およびこれらの同じ者が、宇宙なる父をより良く理解するためのより効果的な先導。

128:0.5 (1407.5) 他のすべての被創造物の恩恵と宇宙の利点は、付帯的であり、人間贈与のこれらの主要な目的に較べれば二次的なものであった。

1. 第21年目(紀元15年)

128:1.1 (1407.4) 成人期に至るとともに、イエスは、最も低い知的生物の型の人生の知識を習得する経験を完了する課題にひたむきに、最大限の自意識で開始し、そうすることにより最後に、そして完全に、自己創造の宇宙の無条件の統治の権利を獲得するのである。かれは、完全に自己の二元的な本質を認識しているこの驚くべき課題に取り組んだ。しかし、かれは、事実上、この二つの本質を一

人—ナザレのイエス—に一体化をすでに効果的にしていたのであった。

128:1.2 (1407.5) ヨシュア・ベン・ヨセフは、自分が男であり、死すべき運命の人間であり、女から生まれたものであるということを熟知していた。これは、最初の肩書「人の子」の選択に示されている。かれは、実に血肉をもつ参加者であり、そして、今でさえ最高の権威で宇宙の運命を取り仕切るとき、自力で得た多数の称号の中にまだ人の子を携えている。宇宙なる父の創造的な言葉—創造者の息子—が、「ユランチア領域の人として肉体を与えられたうえで住んだ。」ということは文字通り本当である。かれは、労働し、疲労し、休息し、眠った。腹を空かせそのような渇望を食物で満たした。喉の渇きを覚えその渇きを水で癒した。人間の全ての気持ちと感情を経験した。かれは、「君と同様すべての事柄で試され」、そして苦しんで死んだ。

128:1.3 (1407.6) かれは、ちょうど領域の他の死すべき者がするように、知識を得て、経験を重ね、これらを知恵に結合した。洗礼後まで、かれは、超自然力も用いなかった。

ヨセフとマリヤの息子として、かれは、人間の資質の一端にいかなる助けも使用しなかった。

128:1.4 (1408.1) 自分の前人間存在の属性に関しては、+かれは、すべて後にした。公の仕事の開始前、かれは、人と出来事に関する知識に関して、完全に自らを制限していた。かれは、人間の間の本物の人間であった。

128:1.5 (1408.2) それは、とこしえに見事に真実である。「我々には、虚弱さに心を動かされる高位の支配者がいる。我々には、我々同様すべての点において試され、誘惑された、しかしいまだ罪の無い主権者がいる。」そして、自らが、試され試み、受難したので、その人は、混乱し、困窮している者を理解し、力を貸すことができる。

128:1.6 (1408.3) ナザレの大工は、その時自分の目前にある仕事を完全に理解したが、その自然な流れの水路において人間生活を送ることを選んだ。そして、これらの問題のいくつかでは、記録さえされているように、かれは、誠に自己が創りだした限りある命をもつ者にとっての模範である。「神の本質をもち、神と対等であることを奇妙でないと思ったイエス・キリストの中にもあるこの心を受

け入れよ。しかし、かれは、自ら被創造物のかたちをとり、自らをとるに足りないものとし、人間の姿で生まれてきた。そして、このように人間の姿で、自分を低くし、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで、かれは、従順であった。」

128:1.7 (1408.4) かれは、ちょうどすべての他の人間家族が送ることができるように、死を免れない人生を送り、「生身での日々においては、すべての悪から救うことのできる方に頻繁に、強い感情と涙とをもって、祈りと願いを捧げ、そして彼の祈りは、信じたがゆえに聞き入れられた。」それゆえに、かれが、それらの者の上で慈悲深く理解ある主権を有する支配者になれるようにあらゆる点で兄弟姉妹のように作られているのは当然であった。

128:1.8 (1408.5) かれは、自己の人間性を決して疑いわなかった。それは、自明であり、自分の意識の中につねに存在していた。しかし、自分の神性には、疑問と推測の余地がつねにあり、少なくともこれは、自身の洗礼行事のその時まで事実であった。人間の見地から、神格の自己実現は、ゆっくりと、自然な進化的目覚めであった。神性

のこの目覚めと自己実現は、エルサレムにおいてまだ13歳にもならないとき、人間生活での最初の超自然の出来事と共に始まった。そして、神性の自己実現に関するこの経験は、肉体をもつ身でありながら2番目の超自然の経験時点、ヨルダン川でのヨハネによる洗礼に伴う公の聖職と教育の経歴の始まりを記した出来事の際に完了した。

128:1.9 (1408.6) 天からのこれらの２つの訪問の間には、１つは13年目、もう一つは洗礼、この肉体を与えられた創造者の息子の人生において超自然的、または超人的なことは何も起こらなかった。にもかかわらずベツレヘムの赤子、ナザレの少年、若者、男性は、実際は肉体を与えられた一宇宙の創造者であった。しかし、かれは、決して一度もこの力を用いなかったし、自分の守護天使は別として、ヨハネによる洗礼の日まで自己の人生の生き方において、天界の人格の指導を利用しなかった。このように証言する我々は、何を話しているかが分かっている。

128:1.10 (1408.7) しかも、かれは、生身の人生の間ずっと実に神性であった。かれは、実際に天国の父の創造者の息子

であった。かれは、一度公的な経歴に入ると、統治権獲得のための純粋に人間としての経験の技術的な完成の後に、自分が神の息子であることを公的に認めることを躊躇わなかった。かれは、「私はアルパであり、オメガである。初めであり終わりである、1番目であり最後である。」と宣言することを躊躇わなかった。後年かれは、全世界の全ての名にまさる名を持つ栄光の主、宇宙の支配者、全創造の主なる神、イスラエルの聖なる者、すべての主、我々の主で我々の神、宇宙の全能、この創造の宇宙の心、知恵と知識の全宝物を隠しもっているもの、万物を満たすものの豊かさ、永遠なる神の永遠なる言葉、万物の前にあり万物がその中に存在するもの、天地の創造者、宇宙を支えるもの、全地球の裁判官、永遠の命を与えるもの、真の羊飼い、世界の救世者、救済の船長、と呼ばれたとき何の抗議もしなかった。

128:1.11 (1409.1) かれは、自分の純粋な人間生活の発現から後年の人類における、人類の為の、そしてこの世界と他の全ての世界にとっての神性の公職に関する自意識の後に適用されたこれらの称号のいずれにも決して反対はしなかった。イエスは、適用された1つの称号だけには反対

した。一度イマヌエルと呼ばれたとき、「私ではない、それは兄である。」と単に答えた。

128:1.12 (1409.2) 常に、地球でのより重大な人生に入って後にさえ、イエスは、天の父の意志に誠に服従的であった。

128:1.13 (1409.3) 自身の洗礼後、かれは、誠実な信者と謝意にあふれた追随者が自分を崇拝することを許すことなど考えもしなかった。かれは、家族のための生活必需品を賄うために貧困と闘い、こつこつ手で働く間さえ、神の息子であるという意識は拡大していった。かれは、自分が、天空と人間生活を全うしているまさしくこの地球の制作者でであることを知っていた。そして、大きな、傍観している宇宙を通した天の存在体の集団は、ナザレのこの男性が、最愛の主権者であり創造者-父であることを同様に知っていた。この数年間ずっと、深い緊張感が、ネバドンの宇宙に広がった。すべての天の目は、絶え間なくユランチアに—パレスチナに—焦点が合わせられた。

128:1.14 (1409.4) この年イエスは、過ぎ越しの祭りを祝うためにヨセフとエルサレムに行った。かれは、奉納のために

ジェームスを寺院に連れて行ったので、ヨセフを連れて行くのは自分の義務であると考えた。イエスは、家族の扱いに決して些さかの依怙贔屓もしなかった。かれは、ヨセフと通常のヨルダン渓谷経由でエルサレムには行ったが、アマツースを貫く東ヨルダン経路でナザレに戻った。イエスは、ヨルダン川を下りながらヨセフにユダヤ人の歴史を語り、帰路においては伝説的に川の東の領域に住んでいたルーベン、ガド、ギレアデの評判の部族達の経験について話した。

128:1.15 (1409.5) ヨセフは、イエスの生涯の使命に関する多くの誘導尋問をしたが、これらの問いの大部分に、イエスは、「私の時間はまだ来ていない。」と答えるだけであった。しかしながら、ヨセフが以降の歳月の感動的な出来事の間に覚えていた多くの内容は、これらの親密な議論で仄めかされていた。イエスは、いつもエルサレムでこれらの祭礼祝賀に出席の際するように、ベタニヤでヨセフと３人の友とこの過ぎ越し祭りを過ごした。

2. 22年目(紀元16年)

128:2.1 (1409.6) これは、イエスの弟妹が青春の問題と再調整に特有である試練と苦難に直面していた数年間の1つであった。イエスには、そのとき７歳から18歳におよぶ弟妹がおり、かれは、彼らの知的、そして感情的な生活の新たな目覚めに順応するための力添えに忙しくしていた。かれは、弟妹の生活で明らかになったとき、青春期の問題とこのように取り組まなければならなかった。

128:2.2 (1410.1) この年、サイモンは、学校を卒業し、イエスの少年時代の遊び仲間であり、またいつでも擁護者であった石工のヤコブと仕事を始めた。何回かの家族会議の結果、少年全員が大工に従事することは、賢明でないという決論に達した。商売の多角化することにより、自分達が全体の建造物を建てるための契約を取る準備ができるかもしれないと考えた。また、３人が専任大工として働き続けてきたので、彼らは、それほど忙しくなかった。

128:2.3 (1410.2) イエスは、この年、家の仕上げと指物細工を続けたが、隊商修理場で大部分の時間を過ごした。ジェームスは、イエスと交替で修理場の店番を始めていた。この年の後半、ナザレ近辺での大工仕事が低調であったと

き、イエスは、鍛冶屋と一緒に働くためセフォリスに行っている間、修理工場をジェームスに、家の仕事場をヨセフに任せた。かれは、6カ月間金属に取り組み、金床に関するかなりの技能を取得した。

128:2.4 (1410.3) イエスは、セフォリスで新しい仕事を始める前に、定期的な家族会議を開き、その時18歳を過ぎたばかりのジェームスを粛として家族の代理の長としてつかせた。かれは、心からの支持と全面的協力をこの弟に約束し、家族の各自からはジェームスへの正式な服従の約束を取り立てた。イエスが弟へ週ごとの支払いをする一方、この日からジェームスは、家族に対する完全な財政的な責任を担った。イエスは、その後決してジェームスの手から手綱を取り戻すことはなかった。セフォリスで働いている間、かれは、必要なら毎晩徒歩で家に戻れたが、天気や他の理由を口実に意図的に遠のいていた。しかし、真の動機は、家族責務に関係してジェームスとヨセフを訓練することにあった。家族を乳離れさせる緩やかな行動を開始した。イエスは、新計画の進み具合いを観測するため、助言を与えもし有用な提案を示すため、

安息日ごとに、また時々必要に応じて平日にナザレに戻った。

128:2.5 (1410.4) セフォリスでの6カ月の大部分の暮らしは、さらに非ユダヤ人の生活の見方に詳しくなる新たな機会をイエスに提供した。かれは、非ユダヤ人と働き、非ユダヤ人と暮らし、あらゆる可能な方法において非ユダヤ人の生活習慣やその心を細心で労をいとわず学んだ。

128:2.6 (1410.5) ヘロデ・アンティパスの故郷である都市の道徳的な水準は、隊商の都市ナザレのそれさえもはるかに劣っていたので、イエスは、セフォリスでの6カ月の滞在の後ナザレに戻る言い訳を見つけることは嫌ではなかった。イエスが働いていた集団は、セフォリスとティベリアスの新都市の両方の公共仕事に従事することになっており、イエスは、ヘロデ・アンティパスの管理下のいかなる種類の雇用であろうと関係があることには気が向かなかった。その上、イエスの意見では、ナザレに戻るさらに他の賢明な理由があった。かれは、修理場に戻っても、家族の問題に関する指揮を2度ととらなかった。かれは、店でジェームスと協同で働き、家庭の監督に関し

てもできるだけ彼に続けさせた。ジェームスの家族の支出と予算管理は、そのままであった。

128:2.7 (1410.6) イエスが、家族活動の活発な参加からついには引き下がるための準備をしたのは、まさしくそのような賢明で思慮深い計画によってであった。ジェームスが、家族の代理として2年間の経験をしたとき、ヨセフは、家庭の財政役に据えられ、家の一般的な管理を委ねられ—まる2年後に、ジェームスは、結婚することになっていた。

3. 23年目(紀元17年)

128:3.1 (1411.1) この年、財政的な圧迫は、４人が仕事に携わっていたことからわずかに和らいだ。ミリアムは、ミルクとバターの販売でかなりの収入を得た。マーサは、有能な織り手になった。修理工場の購入価格の1/3余りが支払われた。そのような状況であったので、イエスは、サイモンを過ぎ越しの祭りにエルサレムに連れていくために仕事を３週間休んだ。これは、父の死以来、日々の労苦から離れて楽しんだ最も長い期間であった。

128:3.2 (1411.2) かれらは、デカポリス経由でペラ、ゲラサ、フィラデルフィア、ヘスボン、エリコを通ってエルサレムへと旅した。戻りは、海岸沿いに感動的なロド、ヨッパ、カエサレア、そこからカーメル山まわりでプトレマイオス、そしてナザレであった。イエスは、この旅でエルサレム地区の北部のパレスチナ全体についてかなり知った。

128:3.3 (1411.3) イエスとサイモンは、エルサレムの自分の本部に留まるように主張するまでにナザレの二人にかなりの好感をもったダマスカスからの商人との面識をフィラデルフィアで得た。サイモンが寺院に出席をする一方、イエスは、世界事情に通じたこの教養ある旅慣れた男性と話して多くの時間を費やした。この商人は、４千頭の隊商用のラクダを所有していた。かれは、ローマ世界全域に関心を抱き、そのときはローマへの途中であった。かれは、イエスにダマスカスに来て自分の東洋輸入業務に参入することを提案したが、イエスは、家族からそれほど遠ざかって行くことは差し障りがあると説明した。とはいうものの、帰途では、これらの遠方の都市と、それよりさらに遠く離れた極西、極東の国々、すなわち隊商

隊の旅客や案内人が話すのを度々聞いた国々について多くを考えた。

128:3.4 (1411.4) サイモンは、エルサレム訪問を大いに楽しんだ。かれは、戒律の新しい息子のための過ぎ越しの祭りの奉納で、イスラエルの共和国に順当に受け入れられた。サイモンが過ぎ越しの祭式に出席する間、イエスは、参詣者の群衆に混じったり、数多くの非ユダヤ人の改宗者との多くの興味深い個人的な会話をした。

128:3.5 (1411.5) 恐らくすべてのこの接触で最も注目に値するものは、ステパノというギリシア人的な若者とであった。この青年は、エルサレムを初めて訪れ、過ぎ越しの祭りの週の木曜日の午後に偶然にイエスに出会った。両者がアシュマナン宮殿を見ながら逍遥する間、イエスは、何気ない会話を始め、互いに関心を持つようになり、ついには、生き方、真の神、神の崇拝に関する４時間の議論につながった。ステパノは、イエスの言うことにすばらしく感動したのであった。かれは、イエスの言葉を決して忘れなかった。

128:3.6 (1411.6) そして、これが後にイエスの教えの信奉者となり、そしてこの初期の福音を説く際のその大胆さがもとで、怒るユダヤ人の投石で死ぬという結果におわった同じステパノであった。新しい福音の自身の視点の宣言におけるステパノの驚異的な大胆さの一部は、イエスとのこの早期の会談が、直接的原因であった。だが、ステパノは、およそ15年ほど前に話をしたガリラヤの人物が、後に世界の救済者であると彼が宣言した人と全く同じ人であることを、また、自分がその人のためにそれほど早く死に、その結果、新たに進化しているキリスト信仰の最初の殉教者になることになっていたとは決して推側さえしなかった。ステパノが、ユダヤの寺院とその伝統的習慣に対する攻撃への代価として自己の命を委ねたとき、タルソスの市民のサウルという者がそばにいた。そして、サウルは、このギリシア人が、いかに自己の信仰のために死ぬことができたかを目撃すると、ステパノがそのために死んだ主義を終には信奉するように自分を導く感情が、心を刺激した。後にかれは、唯一の創設者、キリスト教の、でないとしても、攻撃的で不屈のパウロ、哲学者、となった。

128:3.7 (1412.1) 過ぎ越し祭りの週後の日曜日、サイモンとイエスは、ナザレへの帰途についた。サイモンは、イエスがこの旅で教えたことを決して忘れなかった。かれは、いつもイエスを慕っていたが、今は、父であり兄であるイエスを知り始めた自分に気づいた。かれらは、国を旅し、道の旁らで食事を作ったりしながら、多くの隠し立てのない話をした。木曜日の正午家に到着し、サイモンは、自分の経験に関する話で家族をその夜遅くまで釘づけにした。

128:3.8 (1412.2) エルサレムで、イエスが「見知らぬ、特に遠国からの人々と雑談するのに」大部分の時間を費やしたというサイモンの報告に、マリヤは非常に動揺した。家族は、イエスの人々への格段の関心を、つまり人々と雑談し、その生活方法を学び、また何を考えているのかを見つけるというイエスの衝動を、決して理解することができなかった。

128:3.9 (1412.3) ナザレの家族は、ますます自分達の即座の、また人間くさい問題に取り紛れるようになった。イエスの未来の使命についてそれほど言及されることはなく、イ

エスも、滅多に自分の将来の経歴について口にすることはなかった。母は、まれにイエスが約束の子であることを思い浮かべた。彼女は、イエスが地球上で神のどんな任務も実現させることになっているという考えを徐々に諦めていた。それでも時々、子の生まれる前のガブリエル訪問を立ち止まって思い出すと、その信念が蘇るのであった。

4. ダマスカスでの出来事

128:4.1 (1412.4) エルサレムへの途中、イエスは、最初にフィラデルフィアで出会った商人の客人としてダマスカスでこの年の最後の４カ月を過ごした。この商人の代理人は、ナザレを通過する際にイエスを捜したうえでダマスカスへと送っていった。このユダヤ混血の商人は、ダマスカスで宗教哲学の学校設置のために桁外れの金額を奉仕すると申し出た。かれは、アレキサンドリアを負かすほどの学問の中心地の創設を計画した。そして、イエスがこの新計画の先導者になる準備のために、世界の教育の中心地への長い見学旅行を即刻始めるべきであると提案した。これは、純然たる人間の経歴において、イエスがこれまでに直面した最大の誘惑の1つであった。

128:4.2 (1412.5) まもなくこの商人は、この新たに計画された学校の支持に同意した12人の商人と銀行家の一団をイエスの前に連れて来た。イエスは、提案された学校に対する深い関心を表し、その組織の計画の手助けをしたが、自分の述べてはいないが、他の優先する責務が、そのような覇気満々の企ての指揮の受け入れを妨げるという懸念を表明した。この自称後援者は、執拗であり、彼、妻、息子達、娘達が、差し出した名誉を受け入れるようにイエスを説き伏せようとする一方、かれは、かれの家での若干の翻訳にイエスにとり有利になるように雇った。しかし、イエスは同意しなかった。かれは、地球での使命は学習団体に支えられるないことをよく承知していた。かれは、どんなに善意であろうとも、「人間の評議会」に指示されることを少したりとも義務づけてはならないことを知っていた。

128:4.3 (1412.6) 指導力を示した後にさえ、エルサレムの宗教指導者に拒絶されたかれは、ダマスカスの実業家かつ銀行家に主たる師と認められ、迎え入れられ、しかもこのすべてが、ナザレの人目につかない無名の大工であったときに。

128:4.4 (1412.7) かれは、この申し出について家族には決して話さず、この年末にはまるでダマスカスの友人達の口上手な申し入れに一度も誘惑されたことがなかったかのように、ナザレでの日々の務めに従事していた。またダマスカスのこれらのいずれの男性も、すべてのユダヤ人に動揺を与えたカペルナムの後の市民を自分達の結合された富が手にしたかもしれない名誉をあえて拒否したナザレの元大工とを結びつけなかった。

128:4.5 (1413.1) イエスは、世界の目で、決して一個人の行いとして関連づけられるようなことのないように、自分の人生の様々な挿話を分離することを最も賢く、しかも意図的に案出した。その後の数年間、かれは、アレキサンドリアに対抗する学校をダマスカスに設立する好機を斥けた奇妙なガリラヤ人についてのこの同じ話が語られるのを何度となく聞いた。

128:4.6 (1413.2) かれが、地上での経験におけるある種の特徴を隔離しようとしたとき、イエスの心にあった1つの目的は、その後の世代が、彼が生きて教えた真実に従う代わりに、その師を崇拝する原因になるような多才で華々し

い経歴の構築を防ぐことであった。イエスは、自分の教えに注意を引くようなそんな人間の功績の記録を確立したくなかった。とても早くからイエスは、自らが世界に公布するつもりであった王国の福音の競争相手になるかもしれない自分に関する宗教を、追随者達が打ち立てようという気になると気がついた。従って、かれは、自分の波瀾万丈の一生の間、教えを公布する代わりにその師を高めるような人間のこの自然の傾向の助けになるかもしれないすべてを一貫して抑圧しようとしていた。

128:4.7 (1413.3) また、この同じ動機が、この世界での彼の多様な人生の多岐にわたる時期に、異なる称号で知られることをなぜ許容したかをも説明している。一方、家族や他の者達の正直な信念に反して彼をを信じさせるように彼らを導く少しの不都合な威圧も欲しなかった。かれは、常に人間の心の不当な、または不公平な弱みに乗じることを拒否した。彼らの心が、自分の教えで明らかにされる精霊的な現実に共鳴しない限り、人々に自分を信じて欲しくはなかった。

128:4.8 (1413.4) ナザレの家庭は、この年の暮れまでにはかなり順調に進んでいた。子供は成長していたし、マリヤはイエスの留守に慣れてきた。かれは、即座の個人的な費用のために家族扶養のために自己の収益をジェームスに与え続け、ほんの一部だけを手元に残した。

128:4.9 (1413.5) 数年が経過すると、この男性が地球の神の息子だと認識することは、より難しくなった。かれは、全く領域の一個人のように、丁度他の人間と同じようにみえた。また天国の父により、贈与がまさしくこのように展開すべきであると定められた。

5. 24年目(紀元18年)

128:5.1 (1413.6) これは、家族責任から比較的に自由であったイエスの最初の年であった。ジェームスは、イエスの助言と財政援助で家庭の管理を非常に首尾よくやっていた。

128:5.2 (1413.7) この年の後半、パレスチナ海岸のどこかでイエスとアレクサンドリアのユダヤ人の集団の間での会合の手配のために、アレキサンドリアからの一青年が、この年の過ぎ越しの祭りの次の週に、ナザレにやってきた。この会議は、6月中旬に予定され、イエスは、主要な礼

拝堂のカザンの補佐の地位をまず誘因として提案し、イエスが宗教教師として自分達の都市で確立するように強く求めたアレキサンドリアの５人の著名なユダヤ人に会うためにカエサリアへ出向いた。

128:5.3 (1414.1) この委員会の代表者らは、アレキサンドリアが、全世界のためのユダヤ文化の本拠地になる運命にあると、すなわちユダヤの情勢のヘレニズム動向は、事実上バビロニアの学派をはるかに引き離したとイエスに説明した。かれらは、エルサレムにおける、そして全パレスチナでの反逆の不吉な鳴動をイエスに思い出させ、パレスチナのユダヤ人のいかなる暴動も国家自尽に等しいと、ローマの鉄の手は３カ月で反逆を粉砕するであろうと、エルサレムは破壊され、寺院は取り壊され一つの石も残されないだろうと、確信をもって彼に言った。

128:5.4 (1414.2) イエスは、皆が言うべきことのすべてを聞き、彼らの信頼に感謝し、アレキサンドリア行きを断るに当たり、大まかに、「私の時間はまだ来ていない。」と言った。かれらは、与えようとした名誉に対するイエスの明白な無関心に困惑した。イエスにいとまごいをする前

に、アレクサンドリアの友人の尊敬の印として、また、打ち合わせのためにカエサレアに来る時間と費用の補償として財布を差し出した。しかし、「ヨセフの家は、施し物を一度も受けたことがないし、私には強い腕力があり、弟達が働ける限り、我々は他人のパンを食べることはできない。」と言いつつ同様に金をも拒否した。

128:5.5 (1414.3) エジプトからの友人達は、家に向けて出帆した。そして、その後数年間、パレスチナにおいてあれほどの騒動を引き起こしていたカペルナムの船大工の噂を聞いたとき、それが成人したベツレヘムの赤子で、アレキサンドリアでの偉大な師になる招待をあっさり断った奇妙な振る舞いのガリラヤ人と同じだと推察したのは、わずかの者だけであった。

128:5.6 (1414.4) イエスはナザレに戻った。残るこの年、全生涯の中で最も問題のない6カ月であった。かれは日常の解決すべき問題や乗り越える困難からのこの一時的な中断を味わった。かれは、天国の父と多く交わり、自分の人間の心の支配において相当の進歩を遂げた。

128:5.7 (1414.5) しかし、時間と空間の世界における人間社会の諸事は、長くは順調に進まない。ジェームスは、12月にナザレの若い女性エスタと非常な恋仲であると説明し、段取りがつけばいつか結婚したいとイエスに打ち明けた。ジェームスは、ヨセフがもうすぐ18歳になり、家族の代理の長として務める機会をもつことは、ヨセフのために良い経験であるという事実に注意を向けた。イエスは、ジェームスが、家の指揮実行に当たるヨセフに適切な訓練がその間に与えられるのであればという条件で、2年後の結婚に同意した。

128:5.8 (1414.6) そしてこのとき、事が動き始めた—結婚の気配があった。結婚へのイエスの同意を得るためのジェームスの成功は、ミリアムを勇気づけて、彼女の心積もりを父親代わりの兄に働き掛けさせた。若い石工、ヤコブ、かつてのイエスの自薦覇者、今はジェームスとヨセフの仕事仲間は、長い間ミリアムとの結婚許可を得ようとしてきた。イエスは、ミリアムが彼女の計画を提示したとき、ヤコブが正式な申し入れをしに来るべきだと指示し、マルタが、長女としての義務を引き受けるに充分だ

と感じ取り次第、すぐに結婚のための祝福をするという約束をした。

128:5.9 (1414.7) 在宅中かれは、1週間に３回、夜間の授業を教え続け、安息日にはしばしば礼拝堂で聖書を読み、母と雑談し、子供達に教え、大抵は、イスラエル共和国の立派で尊敬されるナザレの市民として一般的に振舞った。

6. 25年目(紀元19年)

128:6.1 (1415.1) この年ナザレ一家は皆、健康な状態で始め、マルタがルツのためにしなければならない特定の仕事を除いては、すべての子供の通常の学校教育の修了をみた。

128:6.2 (1415.2) イエスは、アダムの時代から地上に現れた成人の最も強健で洗煉された男らしさの雛形のうちの一人であった。身体の発達は、見事であった。心は活発で、鋭敏で、洞察力があった—同時代の人の平均的心理と比べて、それは、巨大な規模での発達であり—かつ、その精神は誠に人間的に神性であった。

128:6.3 (1415.3) 家族の財政は、ヨセフの地所の消失からは最高の状態にあった。隊商修理場に対する最終的な支払い

は、すでにおわり、誰からの借金もなく、数年ぶりに初めて若干の資金があった。こういう事情であり、他の弟を各々の最初の過ぎ越し祭りの式にエルサレムに連れて行ったことでもあり、イエスは、ユダ(礼拝堂学校を卒業したばかり)の最初の寺院訪問に同行すると決めた。

128:6.4 (1415.4) イエスが、弟をサマリア経由で連れて行く際の揉め事を案じたことから、ヨルダン渓谷に沿う同じ道をエルサレムへ行き、また戻った。ユダは、すでにナザレで強い愛国感情と結合した短気な性癖のために何度か些細な悶着に陥ったことがあった。

128:6.5 (1415.5) かれらは、そのうちにエルサレムに到着し、ユダの魂の深層を掻き混ぜ、ぞくぞくさせたまさにその光景の寺院への最初の訪問の途中、たまたまベタニヤのラザロに出会った。イエスがラザロと話し、過ぎ越し祭りの共同祝賀の準備の相談をしているとき、ユダは、皆にとって深刻な問題を起こしていた。通りがかりのユダヤの少女に不適当な発言をしたローマの護衛兵が、すぐ近くに立っていた。ユダは、火のような憤りで紅潮し、兵士に聞こえる範囲内で、直接そのような無礼に対する自

分の憤懣の表明に時間をかけなかった。さて、ローマの軍人は、何にでもユダヤ人からの軽蔑の類には非常に敏感であった。従って、護衛兵は、即座にユダを拘禁した。これは、若い愛国者には手に負えず、イエスが警告の一瞥で注意を促すことができる前に、ユダは、鬱積した反ローマ感情を能弁に罵詈をあびせた。そのすべてが、悪い状況を悪くするだけであった。ユダは、側によるイエスとともに、すぐに軍の刑務所に連行された。

128:6.6 (1415.6) イエスは、ユダの即座の公聴会か、さもなくばその晩の過ぎ越し祭りの祝賀に間に合う釈放のいずれかを得ようと努めたが、この試みに失敗した。翌日がエルサレムでの「聖なる集会」であったので、ローマ人でさえ、敢えてユダヤ人に対する告訴を聞くつもりはなかった。従って、ユダは、逮捕後の2日目の朝まで監禁されたままであり、イエスは、ともに刑務所に留まった。かれらは、戒律の息子をイスラエルの完全な市民に迎え入れる儀式のとき寺院にはいなかった。ユダは、数年間、次回の過ぎ越し祭りとゼロテ党、自分が属し、彼が非常に活動的であった愛国的な組織の宣伝業務に関してエルサレムに入るまでこの正式な儀式に参加しなかった。

128:6.7 (1415.7) 刑務所での２日目の翌朝、イエスは、ユダのために軍の治安判事の所に出向いた。イエスは、弟の若さを謝罪し、弟を逮捕へと導いた出来事の挑発的な性質に関しさらなる説明、しかも思慮深い申し立てで、この事件に対処したので、行政長官は、若いユダヤ人の乱暴な激発には何らかの可能な口実があったかもしれないという意見を述べるほどであった。そのような軽率な罪を犯さないようユダに警告した後、二人を罷免する際にイエスに言った。「その若者を監視するほうがよい。かれは、お前達にとって多くの問題を起こす傾向にある。」そして、ローマの裁判官の言ったことは真実であった。ユダは、イエスにとりかなりの問題を起こし、そして、いつもこれと同じ類の問題—考えのない、賢明でない、愛国的な爆発による行政当局との衝突—であった。

128:6.8 (1416.1) イエスとユダは、その夜を過ごすためにベタニヤまで歩き、なぜ過ぎ越し祭りの夕食の約束を果たせなかったかを説明し、翌日ナザレに向けて出発した。イエスは、エルサレムでの弟の逮捕に関して家族には話さなかったが、帰宅のおよそ３週間後にこの出来事についてユダと長い話をした。イエスとのこの話の後、ユダ自身

が、家族に話した。かれは、父親代わりの兄が、このつらい経験の全体を通して示した忍耐と寛容を決して忘れなかった。

128:6.9 (1416.2) これは、イエスにとり家族の一員を伴って参加した最後の過ぎ越し祭りであった。ますます人の子は、自身の血縁との近い交わりから切り離されるようになっていた。

128:6.10 (1416.3) 深い思索の季節であるこの年は、しばしばルツとその遊び仲間に妨害された。イエスは、エルサレムへの様々な旅行の経験に関する話に決して聞き飽きることのないこれらの子供のあどけない楽しみや幼年期の喜びを共有するために、世界と宇宙のための自分の将来の仕事についての熟考を延期する準備がいつでもできているのであった。子供たちも、動物と自然に関するイエスの話を大いに楽しんだ。

128:6.11 (1416.4) 子供達は、いつも修理場で歓迎された。イエスは、工房の側に砂、煉瓦、および石を用意し、子供の一団は、楽しむためにそこに群れた。遊びに飽きると、その中の大胆な子らは、工房を覗き見し、経営者が忙し

くないと、「ヨシュアおじさん、出て来て長い話をしてよ。」と大胆に入って行って言うのであった。それから、彼らは、子供らが、地面で彼の前に半円になり、イエスが店の隅のお気に入りの岩の上に座るまで手をぐいと引いて連れ出していくのであった。幼子達は、ヨシュアおじさんをどれほどまでに楽しんだことであったか。かれらは、笑うこと、それも心から笑うことを学んでいた。最も幼い一人か二人の子供が、膝に登ってきて座るのがお決まりであり、話をするときの表情に富んだ彼の顔を驚いて見上げるのであった。子供達は、イエスを慕い、イエスは子供達を可愛がった。

128:6.12 (1416.5) 友人達にとり、イエスの知的な活動の範囲を理解すること、また政治、哲学、宗教の深遠な議論から５歳から10歳の間のこれらの幼児の気楽で喜ばしい遊びの態度にいかしてそのように唐突にしかも完全に揺らめくことができるのかを理解することは、難しかった。イエスは、弟妹の成長につれ、彼が多くの余暇を得るにつれ、かつまた、孫が生まれる前に、これらの幼い者達へ大きな注意を払った。しかしかれは、大いに孫を楽しむほどにはこの世に長く生きなかった。

7. 26年目(紀元20年)

128:7.1 (1416.6) この年が明けるとともに、ナザレのイエスは、自分が広範囲にわたる潜在的な力を備えていることを強く意識するようになった。しかし、この力は、少なくとも時の来るまでは、人の子としての人格による使用はされないと、彼は完全に心得ていた。

128:7.2 (1417.1) このとき、かれは、天の父と自分の関係に関して多くを考えたが、ほとんど口にはしなかった。そして、このような考えの結論は、かつて丘の上での祈りで、「自分が何者であるのか、そしていかなる力を行使するのか、しないかにかかわらず、常に楽園の父の意志に従順であったし、これからもそうである。」と表現された。しかし、この男性が、仕事の往き帰りにナザレ周辺を歩くとき、「知恵と知識のすべての宝物が彼の中に隠されている」ということ—広大な宇宙に関係があることから—は、文字通り本当であった。

128:7.3 (1417.2) 家族に関しては、この年いっぱい、ユダを除いては順調であった。長年、ジェームスは、仕事に落ち着く様子もなく、家の費用に対する分担責任を果たすこと

もない最年少の弟で苦労をした。家に同居する間、ユダは、家族維持のための自分の割り当て分を稼ぐことに関し誠実ではなかった。

128:7.4 (1417.3) イエスは、平和の人であり、ときどきユダの好戦的な離れ技と数多くの愛国的な爆発に手を焼いた。ジェームスとヨセフは、彼の追い出しを支持していたが、イエスは同意しなかった。彼らの忍耐が激しく試されるとき、イエスは、助言するだけであった。「我慢しなさい。弟がまずより良い道を知り、次にそこで君達に従がえるように抑制するよう助言に関しては賢明であり、人生に関しては雄弁でありなさい。」イエスの賢明で情愛深い助言は、家族の亀裂を防いだ。家族は、一纏まりのままでいた。しかしユダは、結婚後まで決して冷静な感覚に目覚めなかった。

128:7.5 (1417.4) マリヤは、イエスの将来の使命についてあまり話さなかった。この主題に及ぶといつでも、イエスは、「私の時間はまだ来ていない。」と、返答するだけであった。イエスは、自分の人格の目前の臨場の依存を家族に止めさせる難しい任務をほぼ完了した。イエスは、人

間のための本当の公務へのより活発な先触れを始めるために、このナザレの家を矛盾なく離れることのできるその日のために素早く準備をしていた。

128:7.6 (1417.5) 第7の贈与における主要な任務が、被創造者の経験習得、ネバドンの主権の達成であったという事実を決して見失ってはならない。そして、まさにこの経験の蓄積において、イエスは、ユランチアに、そして全地域宇宙に楽園の父の最高の顕示をした。これらの目的に付随して、この惑星の複雑な問題は、明けの明星の反逆に関連があったことから、彼もその問題解決をも引き受けた。

128:7.7 (1417.6) この年、イエスは、通常の余暇以上に楽しみ、修理場の経営におけるジェームスと家庭内の管理におけるヨセフの養成に多くの時間を捧げた。マリヤは、イエスが自分達から離れていく用意をしていると感じた。自分達を残してどこに行くのか。何をするために。イエスが救世主であるという考えをあきらめようとしている彼女であった。彼を理解できなかった。彼女は、長男を全く理解できなかった。

128:7.8 (1417.7) イエスは、この年、家族の銘々と多くの時間を過ごした。かれは、彼らを丘の上や田舎を通り抜ける長い頻繁な散策に連れ出すのであった。収穫前に、かれは、ユダをナザレの南の農夫のおじの元へ連れていったが、ユダは、収穫後ずっと留まってはいなかった。かれは、逃げ出し、後にサイモンが、漁師といる彼を湖で見つけた。サイモンが家に連れ戻ったとき、イエスは、この逃走少年といろいろと話し合い、ユダが、漁師になりたがっていたので、共にマグダラに出掛け親類の漁師に預けた。そこでユダは、非常によく働き、しかも結婚するまでずっと働き、結婚後も漁師にとどまった。

128:7.9 (1418.1) 遂に弟全員が、生涯の仕事を選び、それぞれに落ち着くその日が来た。舞台は、イエスの出発のために設定されていた。

128:7.10 (1418.2) 11月に、二組の結婚式があった。ジェームスとエスタ、そしてミリアムとヤコブが、結婚した。実に嬉しい出来事であった。マリヤでさえ、イエスが遠ざかる準備をしていると理解した時々を除いては、もう一度幸福であった。彼女は、大きな不安に苦しんだ。少年の

時のように、イエスが座り、自由にすべてを話しさえしてくれればと思うのだが、かれは、一貫して打ち解けなかった。かれは、将来についていたく寡黙であった。

128:7.11 (1418.3) ジェームスとその花嫁エスタは、父からの贈り物であるこぢんまりとした町の西側の小さい家に越した。ジェームスは、母の家の援助を続けたが、その分担は、結婚のために半分に減らされ、またイエスは、家族の長として正式にヨセフを任命した。ユダは、毎月、割り当て分の金額を非常に忠実に送ってきていた。ジェームスとミリアムの結婚式は、ユダに非常に有益な影響をもたらした。そして彼が、二組の結婚式のその翌日漁場に向けて発つとき、「私の全義務を果たすし、必要であればそれ以上に、」と自分に頼ることができるということをヨセフに確約した。そして、その約束を守った。

128:7.12 (1418.4) すでに父であるヤコブは先祖と共に埋葬されており、ミリアムは、マリヤの隣のヤコブの家で生活した。マルタは、家でミリアムの代わりをし、新家庭の状況は、その年の暮れるまでには順調であった。

128:7.13 (1418.5) この二組の結婚式の翌日、イエスは、ジェームスと重要な話をした。かれは、家を出る準備をしていると密かにジェームスに伝えた。かれは、ジェームスに修理場の全権利を提示し、正式に、ヨセフの家の長から厳かに退位し、そして弟のジェームスを「父の家の長と保護者」として最も感動的に定めた。イエスは、修理場を与える返礼に、ジェームスが、今後家族に対する全財政的な責任を負い、こうして、これらの事柄におけるこれ以後の全ての義務からイエスを自由にすると明文化された秘密の同意書を作成し、二人は署名した。契約の署名後、イエスから何の貢献なく、予算が、家計の支出実費と合致するように調整された後、イエスが、ジェームスに言った。「だが、息子よ、私の時間が来るまで毎月いくらか送り続けるつもりであるが、それは必要に応じて、お前が用いるべきものである。私の金は、家庭の必需品、または娯楽に用いなさい。病気、あるいは家族の誰に降り掛かってくるかもしれない予期されない非常事態に適用しなさい。」

128:7.14 (1418.6) このようにして、イエスは、父の用向きで公の中に入って行く前の成人期の第2の、しかも家から離れた段階を始めようと準備をした。

論文 129
イエスの成人後期

129:0.1 (1419.1) イエスは、自身をナザレ一家の家事の管理から、また個々の家族の直接的指導から遂に完全に切り離した。かれは、洗礼の出来事の直前まで、家族の財源に貢献し、　また弟妹一人一人の精霊的福祉に対する強い個人の関心を持ち続けた。その上つねに、未亡人である母の安らぎと幸せのために人間的に可能な限りのすべてをする用意ができていた。

129:0.2 (1419.2) 人の子は、そのとき永久にナザレ一家から離れるためのあらゆる準備をし終えた。これは、彼にとって容易くなかった。イエスは、当然のことながら自分の民族を愛していた。家人を愛しており、この自然な愛情が、彼らへの並はずれた献身によってすばらしく増大された。我々は、自分をより完全に仲間に授与すればするほど、より彼らを愛するようになる。そして、イエス

は、それほどまでに完全に自分を家族に捧げていたが故に、大いなる熱い情愛で皆を愛していた。

129:0.3 (1419.3) すべての家族は、イエスが家族を去り行く準備をしているという実感に徐々に気づいた。予期した別離の悲しみは、家族に意図された出発の発表の準備をさせるこの段階的な方法によって抑えられたに過ぎない。かれらは、　彼がこの最後の別離の計画を立てていることに４年以上気づいていた。

1. 27年目(紀元21年)

129:1.1 (1419.4) この年、西暦21年1月、雨の日曜日の朝、イエスは、形式張らずに暇ごいをし、ティベリアスに行き、ガリラヤ湖周辺の他の都市を訪ねまわる予定だと説明するだけであった。そして、このようにして、二度とその家庭の正員になることなく皆を後にした。

129:1.2 (1419.5) かれは、セフォリスに代わりまもなくガリラヤの首都となる新しい都市ティベリアスで1週間を過ごした。そして、ほとんど興味を感じなかったので、かれは、引き続きマグダラ、ベツサイダからカペルナムへと移り、そこで父の友人のゼベダイを訪問するために立ち

止まった。ゼベダイの息子は漁師であり、自らは船大工であった。ナザレのイエスは、設計と建築両方の専門家であった。かれは、木工の名人であった。ゼベダイも、ナザレの職人の技を長く知っていた。長い間、ゼベダイは、改良された船を作ることを考えていた。かれは、その時、イエスの前にその計画を示し、この訪問中の大工に自分の事業に加わるように誘うと、イエスは、直ちに同意した。

129:1.3 (1419.6) イエスは、ゼベダイとほんの1年間余り働いたが、その期間、新式の船を造成し、またまったく新しい船作りの方法を確立した。イエスとゼベダイは、優れた技術と板を蒸す大いに改良された方法によって、湖で航行する古い型よりもはるかに安全な大変優れた型の船の製造を始めた。数年間、ゼベダイは、これらの新式の船の生産をし、小企業が扱える以上の沢山の仕事があった。５年未満で、実質的に湖上のすべての船は、カペルナムのゼベダイの作業場で造られていた。イエスは、新船の設計家としてガリラヤの漁師仲間によく知られるようになった。

129:1.4 (1420.1) ゼベダイは、適度に裕福な男であった。カペルナムの南の湖に造船場を持ち、住居は、ベツサイダの漁場本拠地近くの湖岸の下手にあった。イエスは、カペルナムにいた1年余をゼベダイの家で暮らした。この世界で長い間単独で、すなわち父なしで、働いてきて、かれは、父親代わりの共同者とのこの労働期間を大いに楽しんだ。

129:1.5 (1420.2) ゼベダイの妻サロメは、ほんの8年前に退位したばかりで、まだサダカイ教徒で最も影響力をもつエルサレムのかつての高僧アンナスの親類であった。サロメは、イエスの偉大な崇拝者となった。自身の息子、ジェームス、ヨハネ、ダヴィデを愛すると同様にイエスを愛し、一方４人の娘は、イエスをまるで長兄のようにみなした。イエスは、ジェームス、ヨハネ、ダヴィデとよく釣りに出かけ、また彼らは、彼が経験豊富な漁師であり専門の船大工であることを知った。

129:1.6 (1420.3) この年ずっとイエスは、月毎にジェームスに金を送った。かれは、10月にマルタの結婚式に出席するためにナザレに戻ったが、サイモンとユダの二組の結婚式

の直前に戻るまで、再び2年以上もナザレを留守にした。

129:1.7 (1420.4) イエスは、この年ずっと船を造り、人が地球でいかに生きるかを観察し続けた。かれは、カペルナムが、ダマスカスから南への直通路であることから、隊商の拠点地訪問のために頻繁に下りて行くのであった。カペルナムは、強固なローマ軍の任地であり、駐屯部隊の指揮官は、ユダヤ人がそのような改宗者を「敬虔な人間」と呼ぶのを常としたヤホエを信仰する非ユダヤ人の信者であった。この士官は、ローマの裕福な家族の出であり、カペルナムに美しい礼拝堂を建設することを引き受けた。そして、それは、イエスがゼベダイと暮らすようになるほんの少し前にユダヤ人に寄贈された。この年イエスは、この新しい礼拝堂の礼拝式の半分以上をとり行い、そして、たまたま出席した隊商の中の何人かは、ナザレからの大工としてのイエスを覚えていた。

129:1.8 (1420.5) 納税時期に至り、イエスは、「カペルナムの熟練職人」と登録した。この日より地球での人生の終わりまでカペルナムの住人として知られた。かれは、様々な

理由から他の者が、彼の住居をダマスカス、ベタニヤ、ナザレ、またアレキサンドリアにあてがっても許諾はしたものの、決していかなる他の届け出住所の申し立てはしなかった。

129:1.9 (1420.6) イエスは、カペルナムの礼拝堂において図書室の大きい箱の中に多くの新しい本を見つけ、そして、1週間あたり少なくとも五夜を猛烈な研究で過ごした。かれは、ある夜は、年老いた人々との社会生活に捧げ、またある夜は、若年層と時を過ごした。イエスの人格には、若者を引きつける何か優しくて奮い立たせるものがあった。かれは、自分の周りにいる彼らを絶えず安心させた。恐らく、彼らとうまくいく大きな秘密は、いつも彼らがしていることに興味を持ち、一方、求められない限りめったに忠告を申し出ないという二つの事実にあった。

129:1.10 (1420.7) ゼベダイ家の人々は、イエスをほぼ崇拝し、イエスが、勉学のために礼拝堂に行く前に、毎晩夕食後の質疑応答に決して欠かすことなく出席した。若い隣人達も、夕食後のこれらの会に出席するために頻繁にやっ

てきた。これらの小さい集会で、イエスは、彼らが理解できる範囲において多様で高度な教授をした。かれは、全く自由に彼らと話した、政治学、社会学、科学、哲学に関する自分の考えや理想を述べたが、宗教—神との人間の関係—について議論する時を除いては、決して権威を伴う結末を話すつもりはなかった

129:1.11 (1421.1) ゼベダイには多くの従業員がいたので1週間に1度、イエスは、家族全体、そして作業場と岸の助手達との会合を開いた。イエスが最初に、「先生」と呼ばれたのは、これらの労働者のあいだでのことであった。全員が、イエスを愛した。イエスは、カペルナムでのゼベダイとの作業を楽しんだが、ナザレの大工の工房の脇での子供達の遊びを懐かしく思った。

129:1.12 (1421.2) ゼベダイの息子ではジェームスが、師として、哲学者としてのイエスに最も関心をもった。ヨハネは、イエスの宗教に関する教育と意見を最も好んだ。ダヴィデは、整備士としてのイエスを尊敬したが、宗教的観点や哲学的な教えにはあまり価値を見い出さなかった。

129:1.13 (1421.3) ユダは、しばしばイエスの礼拝堂での話しを聞きに安息日にやって来て、雑談のために留まるのであった。かれは、長兄を目にすればするほど、イエスが本当に偉大な人であるとますます確信していった。

129:1.14 (1421.4) この年イエスは、自己の人間の心の優勢な支配においてかなりの進歩をし、内在する思考調整者との意識的な接触の新たで高い段階に到達した。

129:1.15 (1421.5) これは、落ち着いた生活の最後の年であった。イエスは、この後、一ヶ所または一つの仕事に丸一年を過ごすことは決してなかった。地上での巡礼の日々は、急速に接近していた。激しい活動の時代は、遠い将来ではなかったが、今や、数年の大規模な旅行と非常に多様な個人的な活動が、過去の簡潔だが非常に精力的な生活とさらに激しく、骨の折れる公的務めとの間に介入しようとしていた。かれが、神とユランチア贈与の超人間段階の完成された神-人としての教導と説教の経歴を始める前に、領域の人間としての彼の教育が完了されなければならなかった。

2.28年目(紀元22年)

129:2.1 (1421.6) 紀元22年３月、イエスは、ゼベダイとカペルナムに別れをつげた。かれは、エルサレムまでの費用を賄う小額の支払いを頼んだ。ゼベダイと働いている間、イエスは、小額だけを引き下ろしてきた。そして、それを毎月ナザレの家族に送り届けていたのであった。ある月はヨセフが、金のためにカペルナムにやってきて、翌月はユダがきてイエスから金を受け取りナザレに持ち帰るのであった。ユダの漁場の本拠地は、カペルナムのわずか数キロ南にあった。

129:2.2 (1421.7) ゼベダイの家族を離れるとき、イエスは、エルサレムに過ぎ越し祭りまで留まることに同意した。そして、家族全員は、その催しに出席すると約束した。彼らは、一緒に過ぎ越し祭りの夕食をする打合せさえした。イエスが去ると彼らは全員、特にゼベダイの娘達が嘆いた。

129:2.3 (1421.8) カペルナムを去る前に、イエスは、新知の友であり、近しい仲間でもあるヨハネと長い話をした。かれは、「私の時が来る」まで広範囲にわたる旅行を考えているとヨハネに伝え、自分に支払われるべき金額が尽き

るまで、自分に代わって毎月若干の金をナザレの家族に送る件を頼んだ。ヨハネはこう約束をした。「先生、あなたの用向きに取り組み、世界での仕事をしてください。この件、あるいは、いかなる他の事柄でもあなたの代理をします。私自身の母親を養い、私自身の弟妹達を世話するようにあなたの家族をお世話します。私は、あなたの指示通りに、彼らが必要になるかもしれないとき、私の父が管理しているあなたの資金を支出しますし、その資金が底を尽き、あなたからもさらに受け取ることもなく、あなたの母上が困っているようなときには、私自身の稼ぎを分けるつもりです。安心してお進みください。私は、このすべての件についてあなたの代行をします。」

129:2.4 (1422.1) 従って、イエスがエルサレムに出発した後、ヨハネは、イエスに支払われるべき金に関して父のゼベダイに相談した。そしてかれは、その高額に驚いた。かれらは、イエスがその件を完全に二人の手に委ねたので、これらの資金を土地に投資し、その収入をナザレ一家の補助に当てるほうが良い計画であると同意した。ゼベダイは、抵当で売りにでているカペルナムの小さい家を知

っていたので、イエスの金でこの家を買い、友のためにその所有権を保持するようにヨハネに指示した。そこで、ヨハネは、父の助言に従った。２年間、この家の賃貸料は抵当に当てられ、そして、家族の必要に応じて使うようにイエスからヨハネにやがて送られてくる一定の大きな基金によって増やされる額は、この負債とほぼ同額であった。ゼベダイは、差額を補い、その結果ヨハネは、期限に達した残額を完済した。それによって、この２部屋家屋の完全な所有権を確保した。こうにしてイエスは、カペルナムの家の所有者になったが、それに関して知らされてはいなかった。

129:2.5 (1422.2) ナザレの家族は、イエスがカペルナムを立ったと聞き、ヨハネとのこの財政的な取り決めを知らずに、イエスからの援助はこれ以上無い時が遂にやってきたと思っていた。ジェームスは、イエスとの契約を覚えており、弟達の助力を得て、直ちに家族の世話の全責任を担った。

129:2.6 (1422.3) それはさておき、エルサレムのイエスの様子を見に戻ろう。およそ２カ月間、イエスは、ラビの諸々の

学校への時折の訪問に加えて、その多くの時間を寺院での議論を聞くことに費やした。かれは、安息日の大半をベタニヤで過ごした。

129:2.7 (1422.4) イエスは、元高僧のアンナスに「私の息子同様である者」と紹介するゼベダイの妻サロメからの手紙をエルサレムへ携えてきた。アンナスは、彼と多くの時間を共に過ごし、エルサレムの宗教教師の養成所の多くを訪問するためにイエスを連れまわった。イエスは、これらの学校を徹底的に調べ、慎重にその教授法を観察したが、決して人前ではただ一つの質問さえしなかった。アンナスは、イエスを偉人と見なしてはいたものの、彼に対しての助言方法に関して困惑した。かれは、エルサレムの学校のいずれかに学生として入学を勧めるのは愚かであることに気づきはしたものの、これらの学校で一度も訓練を受けない限り、イエスが常任教師の身分では決して受け入れられないこともよく知っていた。

129:2.8 (1422.5) やがて、過ぎ越し祭りの時は近づき、ゼベダイとその家族全員が、各方面からの群衆とともにカペルナムからイスラエルへと到着した。彼ら全員は、アンナス

の広々とした家を訪れ、そこで、幸せな1家族として過ぎ越し祭りを祝った。

129:2.9 (1422.6) この過ぎ越し祭りの週が終わる前、イエスは、裕福な旅行者と17歳くらいのその息子と、まったくの偶然で行き会わせた。インド出身これらの旅行者は、ローマや地中海の他の様々な場所への途中にあり、二人のために通訳をし、息子の個人教授ができる誰かを見つけることを望んで、過ぎ越し祭りの間にエルサレムに到着する段取りをつけていた。父親は、イエスが彼らと旅をすることに固執した。イエスは、自分の家族について話し、必要とするかもしれない時におよそ2年間も遠ざかるのは全く公平ではないと告げた。すると東洋からのこの旅行者は、家族の困窮の際の擁護のために、イエスの友人達にそのような基金を任せられるように一年間の賃金をイエスに前払いすると申し入れた。そこで、イエスは旅に同意した。

129:2.10 (1423.1) イエスは、この高額をゼベダイの息子ヨハネに引き継いだ。そして、ヨハネがいかにこの金をカペルナムの不動産の抵当の清算に適用したかは、既に述べた

通りである。イエスは、この地中海旅行に関する秘密をゼベダイには完全に打ち明けたが、他の者には、肉身にさえも漏らさぬように堅く口止めをした。そしてゼベダイも、およそ２年のこの長い期間、イエスの所在に関して決して明らかにはしなかった。イエスのこの旅行からの帰還前、ナザレの家族は、もう少しでイエスが死んだとあきらめるところであった。時折、息子ヨハネとナザレに来るゼベダイがくれる保証だけが、マリヤの心の望みを繋いだ。

129:2.11 (1423.2) この間、ナザレ一家は、非常にうまくやっていた。ユダは、自分の負担分を格段に増加しており、しかもこの特別な負担を結婚するまで引き受けた。彼らは、ほとんど援助を必要としなかったが、イエスが指示したように毎月マリヤとルツに手土産を持っていくのが、ヨハネとゼベダイの決まり事であった。

3. 29年目(紀元23年)

129:3.1 (1423.3) イエスの29年目全体は、地中海周辺の旅の締め括りに費やされた。主な出来事は、(我々にこれらの経

験を明らかにする許可がある限り)すぐこの次に続く論文での主題を構成する。

129:3.2 (1423.4) ローマ世界のこの周遊旅行を通して、多くの理由から、イエスは、ダマスカスの筆記者として知られていた。しかしながら、戻りの旅のコリントと他の滞在地では、ユダヤ人の個人教授として知られていた。

129:3.3 (1423.5) これは、イエスの人生で盛り沢山の期間であった。この旅行中、多くの人々と接触したが、この経験は、家族の誰にも、また使徒達にも決して明かすことのなかったイエスの人生の局面である。イエスは、生身の人生を送り、(ベツサイダのゼベダイは別として)彼がこの大規模な旅行をしたことを知る者はなくこの世を去った。数人の友は、彼がダマスカスに戻ったと思った。他のものは、インドに行ったと思った。一度副カザンになる目的でそこにくるよう誘われたことがあることを知っていたので、イエスの家族は、アレキサンドリアにいると信じがちであった。

129:3.4 (1423.6) パレスチナに戻ったとき、イエスは、エルサレムからアレキサンドリアに行ったという家族の意見を変

えようともしなかった。パレスチナを留守にしている間中、その都市での学習と教養に時間を費やしていたと彼らに信じ続けさせた。ベツセイダの船大工ゼベダイだけが、これらの件に関する事実を知っており、ゼベダイは、誰にも告げなかった。

129:3.5 (1423.7) 君は、ユランチアでのイエスの人生目的を解読しようと精一杯の努力において、マイケルの贈与の動機に留意しなければならない。彼の明らかに奇妙な行為の多くの意味を理解しようとするならば、君は、彼の君の世界での滞在目的について見極めなければならない。かれは、過度に魅力的で、注目をむさぼるような個人的な経歴を確立することのないように一貫して慎重であった。かれは、同胞に稀有な、あるいは強烈な印象を与えることを望まなかった。かれは、死を免れない仲間に天の神を明らかにする仕事に専念し、同時に、地球での限りある命をもつ人生にあってこの同じ天なる父の意志にずっと服従しながら崇高な任務に自己を捧げた。

129:3.6 (1424.1) もしこの神性の贈与について知ろうとする全ての人間の学習者が、イエスは、ユランチアでこの顕現の

生活を送ると同時に、自分の全宇宙のためにそういう生活を送ったということを思い起こすならば、それも常に地上での彼の生活の理解に役立つであろう。ネバドンの全宇宙の至る所で生命を有する一つ一つの球体のために人間の特徴である肉体をもって彼が生きたということには、何か特別で奮起させるものがあった。また、波瀾万丈のユランチアでのイエスの滞在以来、棲息可能となったそれらのすべての世界についても等しく真実である。そして、この地域宇宙の未来の全歴史の意志を持つ被創造物が生息するようになるかもしれない全ての世界にとっても同様に、負けず劣らず真実であろう。

129:3.7 (1424.2) ローマ世界のこの旅行期間中、またその経験を通して、人の子は、当時の世界の様々な民族との教育的な接触-訓練をほとんど完了した。かれは、ナザレへの帰還までに、人がユランチアでいかに生き、またその生活を達成したかを、この旅行-修行を介しておおよそ学んだのであった。

129:3.8 (1424.3) 地中海盆地周辺の彼の旅の真の目的は、人を知ることにあった。かれは、この旅で何百人もの人間とと

ても近しくなった。貧富のある、上下のある、黒い肌と白い肌の、教育有無の、教養有無の、肉慾的また精神的な、宗教心のある、また無宗教な、道徳的また不道徳なというあらゆる種類の人間に出合い、そして愛した。

129:3.9 (1424.4) この地中海旅行において、イエスは、物質的かつ必滅者の心を習得する人間としての任務においてかなりの進歩をし、一方内在する調整者は、この同じ人間の知性の上昇とまたその精霊制覇において大きく前進した。この旅の終わりまでにイエスは、自分が神の子、宇宙なる父の創造者の息子であるということを—あらん限りの人間の確実性で—事実上知った。調整者は、人の子がネバドンのこの地域宇宙を体系化し、管理するためにやってくる前の神の父との天国での朧気な経験の意識を人の息子の心にますます蘇させることができた。このように調整者は、ほとんど永遠の様々な時代に、彼の以前の、神性の存在のそれらの必要な思い出をイエスの人間の意識に少しずつもたらしたのであった。調整者によって持たらされる「前-人間」経験の最後の叢話は、意識している人格をユランチア顕現着手のために引き渡す直前のサルヴィントンのイマヌエルとの送別の会議であっ

た。そして、「前-人間」存在のこの最後の記憶の絵は、ヨルダン川のヨハネによる洗礼のまさしくその日にイエスの意識に明らかにされた。

4. 人間イエス

129:4.1 (1424.5) 地域宇宙の見物中の天の有識者にとり、この地中海の旅は、凡ゆるイエスの地球での経験の中、少なくとも磔と人間としての死の出来事までの全経歴の中で最も目を離せないものであった。これは、すぐ次の時代の公的使命とは対照的に個人的使命の魅力的な期間であった。この特有な挿話は、このときまだ彼が、ナザレの大工、カペルナムの船大工、ダマスカスの筆記者であったという理由から、一段と心を魅かれるものであった。かれは、まだ人の子であった。かれは、まだ自分の人間の心の完全な支配を達成していなかった。調整者は、イエスの自己同一性を完全に征服もしておらず、それに対応したというわけでもなかった。それでも、彼は人間であった。

129:4.2 (1425.1) 人の子の純粋な人間の宗教経験—個人の精霊的な成長—は、この29年目にその成就の最高潮に達した。

精霊発達のこの経験は、彼の思考調整者到着の瞬間から人間の物理的な心と精霊から贈られた心との間での自然で正常な人間関係の完了と確認—これらの二つの心を一つにする現象、人の子がヨルダンでの洗礼の日、この領域の肉体を与えられた死すべき者として完了し、究極に到達する経験—のその日まで一貫してゆるやかな成長であった。

129:4.3 (1425.2) これらの数年の間、かれは、天の父と正式な親交にそれほど多くの季節を通じて従事したようすはない一方で、楽園なる父の内在する精霊の臨在との個人的な意志疎通をはかるますます効果的な方法を完成させた。かれは、肉体をもつ実生活、充実した、自然で、平均的人生を送った。かれは、個人の経験を通じて、時と空間の物質界での人間生活の全体と本質の現実に相当するものを知っている。

129:4.4 (1425.3) 人の子は、絶佳の喜びから深遠な悲しみに亙る人間の感情を広範囲にわたり経験した。かれは、喜びの子であり、稀にみる上機嫌の人であった。同様に、「悲しみの人であり悲嘆をよく知る人」であった。精霊面に

関していえば、かれは、人間生活の足の先から頭の天辺まで、最初から最後までを生き抜いた。物質的観点からは、かれは、人間生活において社会の両極端を生き抜くことを避けたように見えるかもしれないが、知的観点では、全ての人類の経験にすっかりなじみ深くなっていた。

129:4.5 (1425.4) イエスは、思考と感情、 誕生から死に至るまでのこの領域の進化し上昇していく命に限りある者達の衝動や衝撃について知っている。かれは、物理的、知性的、精霊的な個性の始まりから幼児、幼年、青年、成人期までの人間生活—死という人間の経験さえも—を送った。知的かつ精霊的な進歩のこれらの普通で身近な人間の段階を経験するだけでなく、かれは、また、ほんの僅かなユランチアの人間しか到達しない人間と調整者とのより高く、より高度な和睦の段階をも完全に経験した。このようにして、かれは、君の世界で送られているだけではなく、時と空間を有する他のすべての進化的世界で送られるように、さらには最も高度で、最も進歩した光と命の全世界で送られているように、完全な人間生活を経験した。

129:4.6 (1425.5) 人の姿に似せて送ったこの完全な生活は、彼の仲間である人間、つまり、たまたま彼の地球の同時代人であった人々の無条件の、満場一致の承認を受けてはいなかったかもしれないが、肉体で、そしてユランチアで送ったナザレのイエスの人生は、まさしく同時に、まさしくその同じ人格-人生の中で、人間への永遠の神の完全な顕示と、無限なる創造者を満足させるための完成された人間の人格の提示を成しているとして宇宙なる父による完全で、無条件の承認を受けたのであった。

129:4.7 (1425.6) そして、これが彼の本当の、最高の目的であった。かれは、その時代、またはいかなる他の時代においても、いかなる子供または大人、あるいはいかなる男または女のための完全かつきめ細やか手本としてユランチアで生活するために下りてはこなかった。完全で、豊かで、美しく、高潔な人生に、我々は皆、絶妙に模範的で、神々しく感情をかき立てるものをたくさん見つけるかもしれないということは本当に事実ではあるが、これは、彼が本当に、純粋に人間の生活を送ったという理由に依る。イエスは、他のすべての人間が真似る手本を示すために地球での生活を送らなかった。君達全員が、地

球で人生を送ることができる同様のその慈悲ある恩恵により、かれは肉体でこの人生を送った。そして、彼の時代に、自身の人間生活を彼らしく送ったので、その結果として、我々すべてに我々の時代に自身の生活を我々らしく送る模範を設定した。君は、彼が送った生涯を切望することはできないが、彼が生きたように君の人生を送ると、また同じ方法で生きると決心することはできる。イエスは、この地域宇宙の全領域のあらゆるの時代のすべての人間にとり具体的な、詳細な手本でないかもしれないが、最初の上昇世界から宇宙の中の宇宙、それにハヴォナから楽園へと前進するすべての天国巡礼者にとっての永遠の激励であり先達である。イエスは、人から神への、部分から完全への、地球から天への、時間から永遠への新たな生きた道である。

129:4.8 (1426.1) 29年目の終わりまでには、ナザレのイエスは、人の姿で一時逗留者として人間に課される人生を事実上送り終えた。かれは、神の完全性を人間に明らかにするために地上にやって来た。かれは今や、神の前に明らかになる時を待ち受けて人間としてほとんど完全となった

のである。そして、かれは、30歳前にこの全てを成したのであった。

論文 130
ローマへの途中にて

130:0.1 (1427.1) ローマ世界における回遊は、イエスの地上生活における28年目の大部分と29年目の全部を費やした。イエスとインド出身の2人、ゴノドとその息子ガニドは、西暦22年４月26日、日曜日の朝エルサレムを出発した。彼らは、計画に沿って旅をし、イエスは、翌年の西暦23年12月10日に、ペルシャ湾のキャラックスの都で父子に別れを告げた。

130:0.2 (1427.2) 彼らは、エルサレムからヨッパ経由でカエサレアに行った。彼らは、カエサレアでアレキサンドリア行きに乗船した。アレキサンドリアからはクレタ島のラセーアに向け出航した。クレタ島からキレーネに立ち寄りカルタゴに出航した。カルタゴでナポリ向けの船に乗り、マルタ、シラクサ、メッシーナに寄港した。ナポリからカプアへ行き、そこからローマへのアッピア街道を旅した。

130:0.3 (1427.3) ローマでの滞在後、かれらは、陸路をタレントゥームへと行った。そこでニコポリスとコリントに止まり、ギリシアのアテネに向けて船出した。アテネから、トロアス回りでエフェソスに行った。エフェソスから、途中ロードス島に入港しキプロスへと出帆した。キプロスで訪問や休息をしながらかなりの時間を過ごし、次に、シリアのアンチオケに向けて出帆した。アンチオケから、シドンに向け南へと旅し、それからダマスカスに行った。そこから、タプサカスとラーリッサを通過し、隊商と共にメソポタミアへと移動した。バビロンでしばらく過ごし、ウルや他の場所を訪れ、シューシャンに行った。シューシャンから、キャラックスに旅し、ゴノドとガニドはそこからインドへと乗り出した。

130:0.4 (1427.4) イエスがゴノドとガニドの話す言語の基本を身につけたのは、ダマスカスで4カ月働いている間のことであった。そこに滞在中、かれは、ギリシア語からインド言語の中の1つへの翻訳作業に多くの時間を費やし、ゴノド家の故郷の出身者の援助をうけた。

130:0.5 (1427.5) この地中海の回遊において、イエスは、日々のおよそ半分をガニドの教授とゴノドの業務会議や社交の通訳とに費やした。自由になった日々の残る時間を仲間との親密で個人的な社交、この世界の人との懇親的交流に専念した。この交流は、丁度公務に先行するこれらの数年間の彼の活動を著しく特徴づけた。

130:0.6 (1427.6) イエスは、直の観察と実際の接触により、西洋とレバント地方のより高度の物質文明と知的文明に精通した。かれは、ゴノドと才気あふれる息子からインドと中国の文明、文化に関する多くを学んだ。というのも、自身がインド国民であるゴノドは、黄色人種の帝国への３回にわたる大々的な旅行をしたからであった。

130:0.7 (1427.7) 青年ガニドは、この長く、親密な関係においてイエスから多くを学んだ。彼らは、互いへの大いなる愛情を育んだ。若者の父は、共にインドに行くように幾度も説得を試みたが、イエスは、いつもパレスチナの家族の元に戻る必要性を申し立てて辞退した。

1. ヨッパにて-ヨナに関する講話

130:1.1 (1428.1) ヨッパでの滞在中、イエスは、サイモンというなめし革業者のために働くペリシテ人の通訳ガジャに出会った。メソポタミアのゴノドの代理人は、このサイモンと多くの商取引きをしていた。そこでゴノドと息子は、カエサレアへの途中で彼を訪ねたかった。ヨッパでの滞在中、イエスとガジャは、心和やかな友となった。この若いペリシテ人は、真実探求者であった。イエスは、真実提供者であった。かれは、ユランチアのその同時代人のための真実そのものであった。偉大な真実探求者とその提供者が出会うとき、結果は、新たな真実経験からの大いなる解放的啓蒙誕生となる。

130:1.2 (1428.2) ある日の夕食後、イエスと若いペリシテ人は、海辺を散策していると、ガジャは、この「ダマスカスの筆記者」が、ヘブライの伝統にとても精通しているということを知らずに、ヨナが、タルシシへの不運な航海に乗り出したことで有名な船着場をイエスに指し示した。そして意見を述べ終えて、かれは、「でも、大きい魚が本当にヨナを飲み込んだと思いますか。」イエスにこう質問をした。イエスは、この青年の人生が、この伝統にひどく影響され、伝統への熟考が、義務から逃げようと

する愚かさを刻み込んだと認めた。従ってイエスは、実際の生活に対するガジャの現在の動機の地盤を突然破壊するようなことは何も言わなかった。この質問に答えて、イエスは言った。「我が友よ、神の意志に従って生きる生活に関しては我々は皆ヨナである。度ある毎に遠くの誘惑へ逃げ、生きることの現在の義務から逃れようとすると、その結果、真実の力と正義の勢いに導かれることのないそれらの影響の直接支配のもとに自分自身を置いている。義務からの逃避は、真実の犠牲である。まさにその絶望の深層にいる時でさえ、そのような神を見捨てるヨナのような者達が、神と神の素晴らしさを捜し求めない限り、光と命の活動からの逃避は、結局は、暗黒と死につながる自分本位の難しいクジラとの痛ましい闘争をもたらすだけである。そして、そのような落胆する魂が、心から神—真実への飢餓と正義への渇き—を捜し求めるとき、それらを更なる監禁状態にしておけるものは何もない。いかに大きな深層に堕落しようとも、全心で光を求めるとき、天の主なる神の精霊が、それらを監禁状態から救い出すであろう。人生における凶悪な

情況は、彼らを一新された奉仕活動やより賢明な生活のための新たな機会である陸地へと吐き出すだろう。」

130:1.3 (1428.3) ガジャは、イエスの教えに非常に動かされ、それから二人は、海辺で夜遅くまで長く語り、下宿に戻る前には、一緒に、しかも互いのために祈った。これが、ピーターの後日の説教を聞き、ナザレのイエスの造詣深い信者となり、またドルカスの家においてある晩ピーターと忘れ難い議論をした同じガジャであった。そして、ガジャは、キリスト教を受け入れる裕福な革商人のサイモンのための最終決定に深く関わった。

130:1.4 (1428.4) (この地中海見学での人間の仲間との個人的な活動に関するこの物語において、我々は、与えられた許可に従い、イエスの言葉をこの発表時点でのユランチアの現代の言い回しで自由に変換するつもりである。)

130:1.5 (1429.1) ガジャとのイエス最後の話しは、善悪に関する議論であった。この若いペリシテ人は、世界には善と共に悪が存在するために不公平感に非常に煩わされていた。彼は言った。「神が無限に善であるならば、我々が悪の不幸に苦しむのをどうして許すことができるのです

か。結局、だれが悪を創造するのですか。」その頃、多くの者は、神が善と悪の双方を創造するとまだ信じていたが、イエスは、そのような誤りを決して教えなかった。この質問に答えて、イエスは言った。「我が弟よ、神は愛である。従って彼は、よいにちがいないし、彼の善は、悪の小さくて非現実的なものを含むことができないほどに非常に大きくて真実である。神は絶対に良いので、その中には断じて否定的な悪のいる場所はない。悪は、善に抵抗し、美を拒絶し、真理に対して不誠実である者の未熟な選択と軽率な過失である。悪は、単に未熟さ故の不適合か、または無知からの破壊的、歪曲的影響である。悪は、光の浅はかな拒絶のすぐ後についてくるる必然の暗黒である。暗くて虚偽の悪、意識的に受け入れられ、故意に是認されるときの悪は、罪となる。

130:1.6 (1429.2) 「君に真実と誤りを選ぶ力を授けることにより、天の君の父は、光と命の積極的な道に潜在的な陰性を創った。しかし、知的創造物が、生き方の誤選による自己の存在を望むときまで、悪のそのような誤りは、実際には不在である。そして、そのような悪は、そのような意図的かつ反逆的な生物が、知りつつ、しかも故意に

選択することにより後に罪に引き揚げられる。これは、ちょうど自然が小麦と毒草を収穫まで並んで育てさせるように、天の我々の父が、人生の終わりまで善と悪とが共に行くことを許容する理由である。」彼らのその後の議論が、きわめて重大なこれらの陳述の真の意味を彼の心に明らかにしたので、ガジャは、彼の質問へのイエスの答えに完全に満足した。

2. カエサレアにて

130:2.1 (1429.3) 乗り込むつもりであった船の巨大な操縦用の櫂の1本が割れる恐れがあると分かり、イエスと友人等は、想定以上にカエサレアに留まった。船長は、新しいものが作られる間、港に残ると決めた。熟練した木工職の不足があり、イエスは、援助を申し出た。夜間、イエスと友人等は、港のあたりの遊歩道として用いられた美しい壁の上を散策した。ガニドは、都市の水道装置と、街路と下水を洗い流すために潮が用いられる技術に関するイエスの説明を大いに楽しんだ。インドのこの若者は、小高い場所に建つローマ皇帝の巨大な像の乗っているアウグストゥスの寺院に非常な感銘を受けた。滞在２日目の午後、３人は、２万人収容可能の巨大な円形劇場

での公演に出席し、その夜は、劇場でのギリシア演劇を見に行った。これらはガニドが目撃したことのない初めての種類の見せ物であり、かれは、イエスにそれらについて多くの質問をした。カエサレアは、パレスチナの首都であり、またローマの行政長官の住居地でもあったことから、彼らは、3日目の朝、知事の宮殿への正式訪問をした。

130:2.2 (1429.4) 彼らの滞在している宿にはまた、モンゴルからの商人が宿泊しおり、この極東人は、ギリシア語をかなり上手に話すので、イエスは、何度か彼を長時間訪ねた。この男は、イエスの人生哲学に非常に感銘を受けたし、また「天の父の意志への日々の服従による天国にいるような地上での人生」に関するイエスの知恵の言葉を決して忘れなかった。この商人は道教信者であった。それによりかれは、宇宙の神格の教義の強い信者となっていた。モンゴルに帰国すると、かれは、これらの進んだ真理を隣人や商売仲間に教え始めた。そして、そのような活動の直接的な結果として、その長男は、道教の聖職者になると決めた。この青年は、その一生を通じて進んだ真理のために大きな影響を及ぼし、一神—天の最高支

配者—の教義は、同様に献身的に忠誠である息子と孫息子により引き継がれた。

130:2.3 (1430.1) フィラデルフィアにその本部を置いてあることから、早期のキリスト教会の東方分会が、エルサレムの信者よりもイエスの教えに忠実であった。王国の新しい福音の種子を植えるにはとても好ましい精霊的土壌である中国にペトロのような者が行ったり、インドにもパウロのような者が入国しなかったのは残念であった。フィラデルフィアの人々が解釈したこれらのイエスの教えこそ、西洋でのペテロやパウロの説教がもたらしたような直接的、効果的な魅力を精霊的に餓えていたアジア民族の心にもたらしたことであったろう。

130:2.4 (1430.2) イエスと共に操縦用の櫂作りに携わっていた青年の一人は、ある日、イエスが造船所で精を出して働きながら時々刻々口にした言葉に大層興味をもつようになった。イエスが、天国の父が地球の子等の幸福に興味を持っていると仄めかすと、この若いギリシア人アナクサンドが言った。「神々が私に興味があるならば、彼らはなぜこの作業場の容赦のない、不当な親方を免職しない

のですか。」イエスの返答に、かれは大変驚いた。「君が厚情の道を知り、正義を重んじるので、恐らく神は、君がより良い方向に導くことができるようにこのさ迷っている男性を近くに連れて来たのであろう。多分君は、この兄弟を他のすべての人間ともっと意気投合させるようにする塩であろう。まだ君がその味を失っていなければのことだが。現状のままでは、彼の邪道が君に好ましくない影響を及ぼすという点で、この男性は君の主人である。なぜ善の力で悪の上に優位に立ち、その結果、君達二人の間の全ての関係における師とならないのか。もし君が公正で生きた機会を彼に与えるならば、私は、君の善が、彼の悪を封じることができると予測する。人間の生活の過程で、誤りと悪との昂然たる戦いの1つにおいて精霊的な活力と神の真理との物理的人生の共同者となる感動を楽しむことほど夢中にさせる冒険はない。精霊の暗闇に座る人間への精霊的な光の生きた回路となることは、驚くべき、しかも著しい変様の経験である。君の方がこの男性よりも真実でより祝福されているならば、彼に欠落するところが君を刺戟すべきである。確かに君は、海岸で泳げないで死ぬ仲間を見てただ立ってい

ることのできる臆病者ではない。水におぼれる彼の身体に比べて、暗闇でもがいているこの男性の魂の方がどれほど価値のあることか。」

130:2.5 (1430.3) アナクサンドはイエスの言葉に甚だしく感動した。ほどなくイエスの言ったことを上司に話した。そしてその夜、双方共に自分の魂の健全さに関しイエスの忠告を求めた。そして後に、キリスト教の趣意が、カエサレアにおいて宣言された後、この両者(一人はギリシア人、他方はローマ人)が、フィリップの説教を信じ、彼が設立した教会の重立った人材となった。その後、この若いギリシア人は、ローマ百人隊長のコーネリアスの執事に任命され、このコーネリアスは、ピーターの聖職活動を通して信者となった者である。アナクサンドは、カエサレアでのポールの投獄の日々、苦悩し、死に果てる者達に神について知らせているとき、2万人のユダヤ人大虐殺の最中、思いがけなく事故で死ぬまで暗闇に座る者達へ光を与え続けた。

130:2.6 (1431.1) ガニドは、この時までに、いかに自分の家庭教師がその余暇を仲間のために特異で直接の聖職行動に費

やしたかを知り始めた。そして、若いインド人は、これらの絶え間ない活動の動機を見つけ出しにかかった。彼は、「なぜ、あなたはそれほどまでに見知らぬ人との交流にかまけているのですか。」と尋ねた。そこで、イエスは答えた。「ガニド、誰にとっても神を知る者は見知らぬ人ではない。天の父を捜し当てる経験を通じて、すべての人間は、君の兄弟姉妹であるということに気づく。そこで新たに見つけた兄弟に会う興奮を楽しむということが奇妙に見えるか。自分の兄弟姉妹と面識をもち、かれらの問題を知り、彼らを愛するために学ぶということこそ、最高の生活経験である。」

130:2.7 (1431.2) この談合は、その夜かなり遅くまで続き、そのなかで、青年は、神の意志と人間の心による選択行為、いわゆる人間の意志との違いを教えるようイエスに求めた。イエスは大体以下のようなことを言った。『神の意志は、神の道であり、いかなる可能な選択肢に直面の際の神との提携である。神の意志をするということは、従って、ますます神のようになっていくという進歩的経験であり、また、神は、善、美、真である全ての源であり、究極目標である。人の意志は、人の道であり、命は

かない者が選び行う全体の骨子である。意志は、知的な反射に基づく決定行為に導く自意識をもつものの自発的選択である。』

130:2.8 (1431.3) 午後、イエスとガニドは、非常に悧巧な牧羊犬との遊びを楽しんでいた。ガニドは、犬は精神をもつのかどうか、意志があるのかどうかを知りたく思った。その疑問に応えてイエスは、言った。「犬には、有形な人間、すなわち彼の主人を知りうる心はあるが、霊であるところの神を知ることはできない。したがって、犬は精神的資質を持たず、精神的な経験も楽しむことはできない。犬には、本性からくる、また訓練により増大される意志があるかもしれないが、そのような心の力は精神的な力でもなく、それは、反射的でない—それは、　より高い、そして道徳的な意味を見分けたり、または精神的で永遠の価値を選ぶ結果ではない—ので、人間の意志にも匹敵しない。それは、そのような精神的識別力の所有と真理の選択が、必滅の運命にある者を道徳的存在者、つまり精神的責任と永久生存の可能性を与えられる生き物にするのである。」イエスは、動物のそのような精神力の欠如こそが、やがて動物世界での言語を開発した

り、あるいは永遠に人格生存に同等な何かを経験するというようなことをとこしえに不可能にすると説明を続けた。この日の教授の結果ガニドは決して、二度と人間の動物の体への輪廻の信仰を抱かなかった。

130:2.9 (1431.4) 翌日、ガノドは、このすべてについて父と語り合い、また、ゴノドの質問に答えて、イエスは、次のように説明した。「動物的存在の物質問題に関して現世の決定を下すことにのみ専心している人間の意志は、ゆくゆく滅ぶ運命にある。心からの道徳的な決定と絶対的な精神的選択をする者達は、このようにして次第に内在し神性である精霊と同一視され、その結果、ますます永遠に生存する価値ある者として変容—神のような奉仕がいつまでも続く進行—していく。」

130:2.10 (1431.5) 我々が、現代の言葉で大体次のようなことを意味する重大な真理を初めて耳にしたのは、この同じ日であった。「意志は、主観的な意識をそのままに客観的に表現し、神のようであることを切望する現象を経験することを主観的な意識が可能にする人間の心のその現れである。」そして、それは、あらゆる思慮深くて精神的

に関心がある人間が、創造的になることができるというこの同じ意味合いである。

3. アレキサンドリアにて

130:3.1 (1432.1) カエサレアの旅は盛り沢山なものであった。船の準備ができたある日の正午、イエスと2人の友人は、エジプトのアレキサンドリアへと出発した。

130:3.2 (1432.2) 三人は、アレキサンドリアへの誠に快い航路を楽しんだ。ガニドは船旅を楽しみ、イエスを質問攻めにした。都市の港に接近するにつれ、青年は、アレクサンダーが防波堤で本土に繋いだ島、にあるファロスのすばらしい灯台に感動した。灯台は、2つの立派な港をこうして造築した結果、アレキサンドリアをアフリカ、アジアそしてヨーロッパの海の商業十字路地点とした。このすばらしい灯台は、世界の7不思議の1つであり、またすべてのその後の灯台の先駆けでもあった。彼らは、この見事な人工の救命装置を見るために朝早く起き、イエスは、感嘆の真只中にいたガニドに言った。「ところで息子よ、インドに帰ったなら、たとえ父が永眠した後でさえ、君は、この灯台のようなものであろう。君は、暗闇

に座る者達にとって人生の光のようになるであろうし、無事に救済の港に辿り着く航路を望む全ての者に示すであろう。」ガニドは、イエスの手を握りしめながら、「そうします。」と言った。

130:3.3 (1432.3) そして我々は、キリスト教の初期の教師等が、排他的にローマ世界の西洋文明に注意を向けたとき、重大な間違いをしたと再度意見を述べる。1世紀のメソポタミアの信者に支持されたように、イエスの教えは、アジアの宗教家の様々な集団に容易に受け入れられていたであろうに。

130:3.4 (1432.4) かれらは、上陸後の4時間目までには、人口100万人のこの都市の西の境界へと伸びる幅30メートル、長さ8キロメートルの長く広い大通りの東端近くに落ち着いた。この都市の主要な施設—大学(博物館)、図書館、アレクサンダーの王立の陵、宮殿、海神の神殿、劇場、競技場—の最初の調査の後、イエスとガニドが世界で最大の図書館に行く間、ゴノドは商用にとりかかった。ここには全ての文明世界からのおよそ100万の原稿が、集められていた。ギリシア、ローマ、パレスチナ、

パルチア、インド、中国、そして日本からさえ。ガニドは、この図書館で、インド文学の全世界最大の集成を目にした。彼らは、アレキサンドリアでの滞在中、ここで毎日何時間かを過ごした。イエスは、この場所でヘブライ経典からギリシア語への翻訳に関してガニドに話した。二人は、世界のすべての宗教について再三検討し、イエスは、この若い心に各宗教の真理を指し示そうと努力をし、常に付け加えて言った。「しかし、ヤハウェは、メルキゼデクの顕示とアブラハムの契約から発達した神である。ユダヤ人は、アブラハムの子であり、その後、メルキゼデクが生きて教えた、そして、彼が、そこから全世界に教師達を送ったまさにその地を占居した。そして結局、彼らの宗教は、他のどの世界宗教よりも、明確な天の宇宙なる父としてのイスラエルの主なる神の認識を描写した。」

130:3.5 (1432.5) それらの宗教は、多かれ少なかれ従属的な神々をも認識するかもしれないが、ガニドは、イエスの指導の下で、宇宙なる神格を認識する世界の全ての宗教の教えを収集した。多くの議論の後に、イエスとガニドは、ローマ人の宗教には本当の神がいないと、皇帝崇拝以上

でもないと決論づけた。２人は、ギリシア人には哲学があるにもかかわらず、ほとんど人格的な神の宗教をもたなかったと結論した。彼らは、多様性からくる混乱を理由に、そして神格に対する様々な概念が、他からの、または古い宗教から派生したような理由から、神秘的宗教は切り捨てた。

130:3.6 (1433.1) これらの翻訳は、アレキサンドリアでなされたが、ガニドは、ローマでの滞在の終了近くまで、最終的にこれらの選択を整理しなかったし、個人的な結論も加えなかった。世界の聖なる文献著作者の最も優れた全てが、多かれ少なかれ明確に永遠の神の存在を認めており、また神の特徴や人間との関係に関して非常に一致していることを発見して大変に驚いた。

130:3.7 (1433.2) イエスとガニドは、アレキサンドリアに滞在中、博物館で多くの時間を過ごした。この博物館は、稀有な収集物というより、むしろ美術、科学、および文学の集合体というものであった。ここの学識ある教授達は、毎日講義をし、また当時、ここは、西洋世界の知性の中心地であった。日々、イエスはガニドに講義を説明

した。2週目のある日、青年は声高に言った。「ヨシュア先生、あなたはこれらの教授より物知りです。立ち上がって、あなたが話してくれた素晴らしいことを話すべきです。彼らは、多くの考えで五里霧中です。私が、父に話し、その段取りをつけてもらいます。」イエスは、「君は、師にうっとりしている生徒であるが、これらの教師は、私達が教えることを気にとめはしないであろう。非精霊化された学問の誇りは、人間の経験の中で欺瞞的なものである。真の教師は、ずっと学習者のままでいながら知的な清廉さを維持するものである。」とにこやかに言った。

130:3.8 (1433.3) アレキサンドリアは、西洋の混合された文化都市であり、ローマに次いで世界で最大の、最もすばらしい都市であった。ここには、世界最大のユダヤ教の礼拝堂があり、70人の支配する年長者、アレキサンドリアのサンヘドリンの政府の所在地であった。

130:3.9 (1433.4) ゴノドが商取引をした数多くの男性の中に、当時有名な宗教哲学者であるフィロンを兄弟にもつアレクサンダーというあるユダヤ人の銀行家がいた。フィロン

は、ギリシア哲学とヘブライの神学を和合させる称讃すべき、しかし極めて難題な仕事に従事していた。ガニドとイエスは、フィロンの教えについてかなり話し合い、彼の講演のいくつかに出席する心積りであったが、この有名なギリシア風のユダヤ人は、アレキサンドリアでの彼らの滞在中ずっと病床にあった。

130:3.10 (1433.5) イエスは、ギリシア哲学とストア主義について多くをガニドに推奨したが、イエスの民族のいくつかの不明確な教えのような信念のこれらの体系は、人が神を見つけ、また常しえなるものを知りつつ生活経験を楽しむように導くという点においてのみ宗教であるという真実で若者に感銘を与えた。

4. 現実に関する講話

130:4.1 (1433.6) アレキサンドリアを去る前夜、ガニドとイエスは、プラトンの教えの講義をした大学の政治学の教授の一人と長い時間話した。イエスは、学識あるギリシア人教師の通訳をしたが、ギリシア哲学に対する自分自身の反駁の教えは織り込まなかった。ゴノドは、その夜商用でいなかった。従って、教授が去った後、師と生徒は、

プラトンの教義に関し長らく腹蔵なく話した。世界の物質的なものは、不可視ではあるが、より実質的で精霊的な現実の暗い反映であるという理論と関係のあるギリシアの教えのいくつかに条件付きの賛意を与える一方、イエスは、若者の思考のためにより信頼できる基盤を示そうとした。そこで、かれは、宇宙の現実の本質に関する長い論述を始めた。現代の言い回しでイエスがガニドに言った骨子は、次の通りである。

130:4.2 (1434.1) 宇宙現実の根源は、無限である。限りある創造の具体的なものは、楽園形態の時・空間の影響であり、永遠の神の宇宙なる心である。物質界の因果関係、知的世界の自意識、精霊世界の前進していく自己性—宇宙の規模で投影され、永遠の相関性組み込まれ、質の完全性と価値における神性が経験されるこれらの現実—は、崇高なるものの現実を構成する。しかし、変化し続ける宇宙において、因果関係、知性、および精霊の経験をもつ根源なる人格は、不変かつ絶対である。無限の価値と神の本質をもつ永遠の宇宙でさえ、絶対なるもの、物理的状件、知的抱擁、または絶対である精霊の本質以外の万物は、変化するかもしれないし、しばしば変化する。

130:4.3 (1434.2) 限りある生物が到達しうる最高の段階は、宇宙なる父の認識と崇高なるものを知ることである。その段階においてでさえ、終極目標に達したそのような存在体は、物質界の動きとその物質的な現象における変化を経験し続ける。同様に、彼らは、自らの精霊的宇宙の継続的な上昇における自己性の前進と、知的宇宙への深まる評価において膨らんでいく意識と反応に気づいた状態にある。被創造物は、意志の完全性、調和、合意だけで創造者と一つになることができる。そして、生物が、時間と永遠の中で生き続けることと、有限の個人の意志と創造者の神性意志との一貫性のある合致によってのみ、神性のそのような状態が極められ、保たれる。常に父の意志をするという願望は、魂で最高でなければならないし、神の上昇する息子の心で優位でなければならない。

130:4.4 (1434.3) 片目の人は、遠近の深度を視覚化することを決して望めない。単眼の物質科学者も、さらには単眼の精霊的神秘主義者や寓話作家も、宇宙の現実を正確にとらえ、適切にその真の奥行きを理解することはできない。被創造物の経験のすべての真の価値は、認識の深層に隠されている。

130:4.5 (1434.4) 思慮のない原因は、粗雑なものや単純なものから高尚なものや複雑なものに発展させることはできないし、精霊を伴わない経験は、時間に生きる人間の物理的な心を永遠の生存の神性特質へと発展することはできない。無限の神格をかくも独占的に特徴づける宇宙の1つの特質は、進歩的な神格到達で生残できる人格のこの果てしない創造的贈与である。

130:4.6 (1434.5) 人格は、その宇宙授与であり、宇宙現実のその段階であり、無制限な変化との共存ができ、同時に、その後いつまでもそのようなすべての変化の存在においてのその同一性を保持することができる。

130:4.7 (1434.6) 生命は、宇宙状況で必要なものと可能性に対する宇宙の根本原因の適合であり、宇宙なる心の機能と、精霊である神の精霊の火花の起動により生じる。命の意味は、その適応性にある。人生の価値はその発展性—神-意識の高さまでも—にある。

130:4.8 (1434.7) 自意識の強い生活の宇宙への不適合は、宇宙不調和をもたらす。宇宙の趨勢からの人格意志の最終的な分岐は、知性の隔離、人格分離に終わる。内在する精霊

の案内者の喪失は、結果として現存の精霊の休止を起こす。それ故、知的で進歩する生活は、それ自体神性の創造者の意志を表現する意図をもつ宇宙の存在の明白な証明になる。そして、この人生は、　全体として、その最終目標である宇宙なる父を念頭におき、より高い価値へと奮闘している。

130:4.9 (1435.1) 人は、知性のより高く、準精霊的な援助は別として、僅かに動物水準を超える心をたしかに備えている。従って、動物(崇拝、知恵を持たない)は、超高度の意識、つまり自己を意識する意識、を経験することができない。動物の心は、客観的な宇宙を意識しているに過ぎない。

130:4.10 (1435.2) 知識は、物質または事実を識別する心の領域である。真理は、神を知得していることを意識している精霊的に授けられた知性の領域である。知識は、証明可能である。真理は、経験される。知識は、心の所有物である。真理は、魂の、前進する自己の、経験である。知識は、非精霊的な段階の機能である。真理は、宇宙の心-精霊の位相である。物理的な心の目は、実際の知識の

世界を知覚する。精霊的に意味を与えられた知性の目は、真価の世界について明察する。連結され、調和されたこの2つの視点は、知恵が進歩的個人の経験に関して宇宙の現象を解釈する現実の世界を明らかにする。

130:4.11 (1435.3) 誤り(悪)は、不完全さに与えられる罰である。不完全さの質、あるいは不適合の事実は、物質的段階では批判的な観察や科学的分析により、道徳的段階では人間の経験により明らかにされる。悪の存在は、心の誤りと、進化する自己の未熟の証明となる。悪は、従って、宇宙を解釈するうえで、不完全さの尺度でもある。誤りを犯す可能性は、知恵、部分的かつ一時的なものから完全であるものと永遠のものへと、相対的かつ不完全なものから最終的で完成されたものへと進歩する体系の獲得に内在する。誤りは、楽園到達への人の上昇する宇宙行路で絶対に起こる相対的な不完全さの陰翳である。誤り(悪)は、実際の宇宙の特性ではない。それは、崇高なるものと究極なるものの上昇する段階への不完全な有限体の欠陥に関わる際の相対性の観測にすぎない。

130:4.12 (1435.4) イエスは、若者の理解力に最適な言語でこのすべてを伝えたが、ガニドは、議論終了後には目が重くなり、すぐ深い眠りについた。かれらは、クレテ島のラセーアに向かう船に乗るために、翌朝早く起床した。しかし乗船前、若者は、悪についてのさらなる疑問があり、それに応えてイエスが答えた。

130:4.13 (1435.5) 悪は相対的概念である。それは、そのような宇宙が、無限なるものの限りない現実の宇宙における表現である命の光を暗くするものとして、事物と存在体の有限宇宙によって投じられた影に現れる不完全さの観測から起こる。

130:4.14 (1435.6) 潜在的悪は、無限と永遠の時-空間での制限された表現として神の啓示に不可避の不完全さに固有である。完全性の存在における部分性の事実は、現実の関連性を構成し、知的選択の必要性をつくり出し、精霊認識と反応の価値水準を確立する。一時的、かつ限りある被創造物の心に固守される無限なるものの不備で有限な概念は、それ自体が、潜在的悪である。しかし、これらの本来固有の知的な不協和と精霊的な不十分さの理にかな

った修正における増大する誤りは、実際の悪の実現に等しい。

130:4.15 (1436.1) すべての動きのない、死に至った概念は、潜在的に悪である。相対的かつ生きた真実の有限の影は、絶えず動いている。不活発な概念は、つねに科学、政治、社会、宗教の進歩を遅らせる。不活発な概念は、一定の知識を意味するかもしれないが、それらは、知恵が不足しており、真理を欠いている。しかし、宇宙心の支配の下の宇宙の同調と、崇高なるもののエネルギーと精霊によるその安定した制御の認識に失敗することのないように、相対的概念に、君を誤らせる機会を与えてはならない。

5. クレテ島にて

130:5.1 (1436.2) 旅行者等のクレテ行きの目的は、ただ1つであった。それは、遊び、島の中を歩き回り、山に登ることであった。その当時のクレテ人は、周囲の民族からはよく見られていなかった。にもかかわらず、イエスとガニドは、多くの人々をより高度の考えと生き方へと向けかえさせ、その結果、エルサレムから最初の伝道者達が到

着したときにはその後の福音の教えの迅速な受け入れへの基礎が敷かれていた。その後かれらの教会の再編成のためにタイタスを島に送った時、ポールがクレタ人について述べた厳しい言葉に反して、イエスは、これらのクレタ人を愛していた。

130:5.2 (1436.3) イエスは、クレタ島の山腹で、宗教に関してゴノドと最初の長い話をした。この父は、「あなたの言うこと全てを少年が信じるのも当然です。しかし、エルサレムのようなところに、ましてやダマスカスのようなところにまでそのような宗教があるとはついぞ知りませんでした。」と言って、非常に感動した。島での滞在中、ゴノドがまず、共にインドに戻ることをイエスに提案し、ガニドは、イエスが、そのような手筈を承諾するかもしれないという考えに喜んだ。

130:5.3 (1436.4) ある日、ガニドが、なぜ公の教師の仕事に専念しなかったかを尋ねると、イエスは言った。「息子よ。すべては、その時間の接近を待たなければならない。君は世界に生まれてくるが、いかなる心配の量もどのような苛立だちの表現も、君の成長を助けはしないだろう。

全てのそのような事柄に関しては、時期を待たなければならない。時間だけが、木に緑の果物を熟させる。季節は季節に続き、ただ時の経過だけで日没が日の出に続く。私は、現在君と君の父と共にローマへ行く途中であり、今日は、それで十分である。私の明日は、完全に天国の私の父の掌中にある。」それからかれは、モーシェと注意深い待機と継続的な下準備の40年間について話した。

130:5.4 (1436.5) ガニドが決して忘れなかった1つが、「美しい港」の訪遊中に起きた。この挿話に関する記憶は、故郷インドの階級制度を変えるために何かできたらと彼に常に願わせた。酔っ払いの変質者が、公道で奴隷の少女を襲っていた。イエスは、少女の苦況を見て突進し、狂人の襲撃から少女を引き離した。怯えている子供が彼にしがみつく一方、イエスは、憐れな輩が、怒りの強打を空に振り回してくたくたになるまで怒り狂った男を伸ばしきった強力な右腕で安全な距離に押さえとどめた。ガニドは、イエスの事件の扱いを助ける強い衝動を覚えたが、父は禁じた。かれらは、少女の言語を話すことはできなかったが、家に送っていく途中、少女は、３人の情

けある行為を理解することができ、心から感謝をした。イエスの肉体の人生を通じて、おそらくこれが、個人的な交戦に近いものであった。しかし、その晩、ガニドに酔っぱらいを強打しなかったかを説明をすることは難しかった。ガニドは、この酒酔い男は少なくとも少女を殴った回数だけ殴られるべきだと思った。

6. 恐れる青年

130:6.1 (1437.1) 山での滞在中、イエスは、恐れ、意気消沈の青年と長話をした。仲間との安らぎや勇気を得られないこの若者は、丘での孤独を求めた。かれは、無力と劣等感をもって成長してきた。これらの生まれながらの傾向は、成長につれ、とりわけ、12歳のときに父の喪失に遭遇してからの数々の困難な情況により増大した。彼らが出会うと、イエスは、次のように言った。「やあ、友よ。このように美しい日になぜそれほど塞ぎ込んでいるのか。たまたま君を苦しめるような何かがあるのなら、私は、恐らく何らかの方法で助力できるであろう。ともかく、尽力を提供するのは私の喜びとなる。」

130:6.2 (1437.2) 青年は、話したがらなかった。そこで、イエスは、この青年の魂への２度目の接近をして、「君が人々から逃げてこれらの丘に上って来るのが分かる。だから、勿論、私と話したくはないだろうが、君がこれらの丘に詳しいかどうかを私は知りたい。これらの道がどこへ続くか知っているか。フェニックスへの最も良い道順を教えてはくれないか。」と言うと、この若者は、これらの山に非常に精通しており、フェニックスへの道を教えることに非常に興味をもつようになり、すべての道を地面に書き記し、あらゆる詳細を完全に説明するほどであった。しかし、イエスが、別れを告げ、まるでその場を去る振りをした後、突然振り向いて言ったことに若者は、はっとして好奇心をそそられた。「君が、一人やるせない気分で放っておいてもらいたいのはよく知っている。しかし、フェニックスへの最善の道について寛大な尽力を受けながら、山腹のここに留まり、運命の目標への最善の道を心の中で探し求めている君に、軽率に君を置き去りにし、また答える何の努力もしない私は、親切でも公平でもない。君がフェニックスへの道を熟知しているように、私は、何度も横断したので君の失望とくじ

かれた大志の都への道をよく知っている。そして、私に助けを求めたのだから、私は君を失望させはしない。」若者は、もう少しで圧倒されるところであったが、「でも私は、あなたに何も求めていません」と吃ってなんとか言えた。そこでイエスは、肩に優しい手をあてて言った。「いや、息子よ、言葉ではなく、私の心に切望の眼差しで求めたのだ。わが息子よ、仲間を愛する者には、落胆と絶望の君の面持ちに助けを求める雄弁な訴えが分かる。私が、自己の悲しみから人間の兄弟愛における、また天の神の奉仕における愛の活動の喜びへと導く奉仕の道や幸福の街道について君に話す間、ともに座りなさい。」

130:6.3 (1437.3) 青年は、この時までにはイエスとの話しを非常に望んでおり、個人の悲しみと敗北の世界からの脱出路を示すよう切に助けを求め、その足元に跪いた。イエスは言った。「友よ、立ちなさい。男らしく立ち上がりなさい。小さな敵に取り囲まれ、多くの障害に阻まれているかもしれないが、この世界と宇宙の大きな物や本当の物は、君の味方である。太陽は、毎朝、それが地球の最強かつ全盛の男にするちょうどその時、君に挨拶するた

めに昇る。見よ—君には強い体と強力な筋肉がある—体つきは平均よりも良い。当然のことながら、山腹のここに座り、自己の本当ではあるが想像上の不運を悲嘆する限り、それはほとんど無益である。だが、素晴らしい事がなされるのを待ちうけているところに取り急いで行くならば、その身体で素晴らしい事ができるはずである。君は、不幸な自己から逃げようとしているが、それはできない。君と君の生活問題は本当である。生きている限り、それらから逃げることはできない。しかし、再度注目しなさい。君の心ははっきりしており、能力がある。君の強い身体には、それを指示する知的な心がある。その問題を解決するために注意を向けなさい。自分のために働くように知性を教導しなさい。考えのない動物のようにこれ以上恐怖に支配されることを拒否しなさい。今までのようなみじめな恐怖の奴隷であったり、憂うつさや敗北にある契約雇用人であるよりも、君の心は、むしろ人生問題の解決のための勇敢な味方であるべきなのだ。しかし、君の真の達成の可能性、最も価値あるものは、君の中に生きている精霊であり、もし君が恐怖の足枷からそれを解き放ち、その結果、生きた信仰の

力と臨場により、精霊的な資質が、無活動の悪からの救出開始を可能にするならば、それは、それ自体を制御し、体を起動させるように心を刺激し、奮い立たせるであろう。そして、このことから、直ちに、この信仰は、君の心の中に生まれてきた神の子であるという意識ゆえに、溢れんばかりに速やかに君の魂を満たす仲間に対するその新生の、全てを支配している愛の有無を言わせない存在によって人の恐怖を打ち負かすであろう。

130:6.4 (1438.1) 「この日、息子よ、君は、生まれ変わり、信仰、勇気、人への献身的奉仕に生きる男として、神のために、再起しようとしている。そして、自身の中ですっかり人生に再調整されると、君は、同様に宇宙にも再調整されるようになる。君は、再び誕生した—精霊から生まれた—のだ。これから先、君の全生涯は、勝利達成の1つとなるのである。悩みは、君に活力をあたえるであろう。失望は、君を駆り立てるであろう。困難は、君に挑戦するであろう。そして、障害は、君を刺激するであろう。立ち上がれ、青年よ。すくむ恐怖と逃れる腰抜けの人生に別れを告げよ。取り急ぎ義務に戻り、神の息子、つまり地球での人間への高潔な奉仕に専念し、とこ

しえに神への素晴らしく、永遠の奉仕に運命づけられた限りある命をもつ者として生身の君の人生を送りなさい。」

130:6.5 (1438.2) そして、この青年エウツュヒオスは、その後、クレテ島のキリスト教徒の指導者となり、またクレテ島の信者の向上のためのティーツスの活動のための親しい仲間となった。

130:6.6 (1438.3) 旅行者達は、北アフリカのカルタゴへの出航準備ができた時点のある日の正午頃、しっかり休息をとり、活力を得ており、途中キレネに2日間止まった。イエスとガニドが、積み荷の牛車の破壊で傷ついたルーフスという若者に応急処置を与えたのは、ここであった。かれらは、彼の母の元へと家まで運び、彼の父のサイモンは、後にローマ兵の命令で自分が運んだ十字架にかかる男がかつて自分の息子を助けたこの見知らぬ人だとは夢にだに思わなかった。

7. カルタゴにて—時間と空間に関する講話

130:7.1 (1438.4) イエスは、カルタゴへの途上の大半を社会、政治、商業の問題について仲間の旅行者達と語った。宗教

に関してはほとんど言及されなかった。ゴノドとガニドは、イエスが上手な語り手であることを初めて知り、ガリラヤでの以前の生活に関する話をずっと聞き出していた。また、イエスが、エルサレムまたはダマスカスのいずれかで育ったのではなく、ガリラヤで育ったことも聞き知った。

130:7.2 (1438.5) 出会う機会のあった人の大部分が、イエスに引きつけられるのに気づき、ガニドが、友人を作るには人は何をすべきか質すと、師は言った。「仲間に関心をもつようになりなさい。どのように彼らを愛すかを会得し、彼らがされたいと君が確信する何かをする好機を窺いなさい。」そして、「友を持たんとする者は、自ら親しみをみせよ。」という古いユダヤの諺を引用した。

130:7.3 (1439.1) イエスは、カルタゴで不死について、時間と永遠についてミトラ教の神官と長く忘れ難い話をした。このペルシア人は、アレキサンドリアで教育され、イエスから学ぶことを本当に望んでいた。イエスは、大体のところ次のように現代の言葉に置き換えて、彼の多くの質問に答えて言った。

130:7.4 (1439.2) 時間は、生物の意識により知覚される連続する一時的な出来事の流れである。時間は、出来事が認識されたり、隔離されるそれによって継承-配列に与えられる名称である。空間の宇宙は、楽園の決まった住まいの外のどんな内部の位置からでも見えるように、時間に関連した現象である。時間の運動は、時間の現象として空間で動かない何かと関連して明らかにされるにすぎない。宇宙の中の宇宙では、楽園とその神格は、時間と空間の両方を超越する。棲息界においては、人間の人格（楽園の父の精霊が内在し、方向づける）は、時間の出来事の物質的連鎖を超越することのできる物理的に関連した唯一の現実である。

130:7.5 (1439.3) 動物は、人間のようには時間を感じないし、人にとってさえ、自己の部分的かつ制限的視点のため、時間は、出来事の連続にみえる。しかし、人間の上昇につれ、内部への進歩につれ、この事象の列の拡大する眺めは、その全体の中でますます明察されるようなものである。以前には出来事の連続と見えたそれは、そこでは全体として、しかも完全に関連する循環とみなされるであ

ろう。このように、円形の同時性は、事象の線系連続の以前の意識をますます置き換えるであろう。

130:7.6 (1439.4) 時間で制限されるとき、7つの異なる空間概念がある。空間は、時間により測定されるが、時間は、空間により測定はされない。科学者の混同は、空間の現実を認識しないことから起こる。空間は、単に宇宙物体の関連性における変化の知的概念ではない。空間は、空ではなく、しかも、空間を部分的に超えることさえできることを人が分かる唯一が、心である。心は、物質の空間-関連性の概念の如何にかかわらず機能することができる。空間は、相対的に、比較的に、生物状態のすべての存在にとり有限である。7つの宇宙次元の自覚に意識が接近すればするほど、可能な空間の概念は、ますます究極に近づく。しかし、空間の可能性は、絶対水準においてのみ真に究極である。

130:7.7 (1439.5) 宇宙の現実は、宇宙上昇と完成水準に拡大しており、常に相対的な意味をもつということが、明らかであるにちがいない。終極的に、生存している人間は、7次元の宇宙において同一性を成し遂げる。

130:7.8 (1439.6) 物質起源の心の時-空間の概念は、意識をし、思いを心に抱く人格が、宇宙の段階を上昇するとき、連続する拡大を経る運命にある。人が、存在の物質と精霊面の間に介在する心を達成するとき、時-空間に関する彼の考えは、知覚の質と経験の量に関して途方もなく広げられるであろう。前進する精霊人格の拡大する宇宙概念は、洞察の深さと意識の範囲の双方の増大による。そして人格が、上向きに、そして内側へと神格-類似の超越的な段階に進んでいくと、時-空間の概念は、ますます絶対者の時間も空間もない概念に近づくであろう。相対的な、そして超越的な達成に則り、絶対段階のこの概念は、究極目標の子等により心に描かれることになっている。

8. ナポリとローマへの途中にて

130:8.1 (1440.1) イタリアへの最初の寄港地は、マルタの島であった。ここでイエスは、この上もなく落胆しているクラウヅスという名の若者と長く話した。この男は、ずっと自殺を考えてきたのであったが、ダマスカスの筆記者と話し終えると言った。「私は男らしく人生に向き合います。臆病者を演じるのは終わりです。国に戻り、もう一

度やり直します。」まもなくかれは、キニク学派の熱心な伝道者になったが、それでも後にローマとナポリでのピーターのキリスト教公布に際し彼と手を握り、ピーターの死後、福音を説きつつスペインへと行った。だが、かれは、マルタで自分を奮起させた男性が、後に世界の救世者であると宣言したイエスであることをついぞ知らなかった。

130:8.2 (1440.2) 彼らは、シラクサでまる1週間を過ごした。ここでの滞在中の注目に値する出来事は、イエスとその仲間が立ち寄った居酒屋を切り盛りする堕落したユダヤ人、エズラの改心であった。エズラは、イエスの接近に魅せられ、彼がイスラエルの信仰を取り戻す手伝いを頼んだ。かれは、絶望を表し「私は、アブラハムの真の息子となりたいが、神を見つけられない。」と言った。イエスは、「神を本当に見つけたいならば、願望そのものが、すでに彼を見つけたという証拠である。父は君をすでに見つけているのであるから、神を見つけられないということが問題ではなく、君の問題は、神を知らないということである。予言者エレミヤをまだ読んだことがないのか。『心を尽くして私を捜し求めるなら、私を見つ

けるだろう。』またこの同じ予言者が言ってはいないか。『私が主であることを知る心をお前達に与える。お前達は私の民となり、私はお前達の神となる。』そして、また、教典で『彼は、人々を上から見ている。そしてもし誰かが、私は罪を犯し、正しいことを歪めた。それは私に利をもたらさなかった。そこで、神は、暗黒からその男の魂を救い出し、彼は光を見る。』というくだりも読んではいないのか。」エズラは、神を見つけ、自己の魂の満足をも見つけた。後にこのユダヤ人は、裕福なギリシアの改宗者と共同で、シラクサに最初のキリスト教会を建設した。

130:8.3 (1440.3) かれらは、メッシーナには1日だけ止まったが、それは、イエスが果物を買い、その代わりに命の糧を供給した果物売りの小さい少年の人生を変えるには充分の長さであった。少年は、自分の肩に手を置いて言ったイエスの言葉と、同時に見せた優しい眼差しを決して忘れなかった。「さらば、少年よ。男らしく成長するように大いに勇気を持ちなさい。体を養った後には、いかに魂を養うかも学びなさい。そして、天の私の父は、君とともにおり、また君の前を行くだろう。」少年は、ミ

トラ教の帰依者となり、後にはキリストの信仰に変わった。

130:8.4 (1440.4) ついに彼らは、ナポリに到着し、目的地のローマからは遠くない思いがした。ゴノドは、ナポリで処理すべき多くの商用があっり、イエスが通訳として必要とされる時間は別として、彼とイエスは、都市見学や探査に余暇を費やした。ガニドは困っている様子の人々を見つけることが巧くなっていた。この都市ではひどい貧困が目につき、かれらは、多くの施し物を分配した。しかし、ガニドは、イエスが通りの乞食に硬貨を一枚与えた後、時間をとり慰めとなるようにこの男に話すのを拒否した時のイエスの言葉の意味を決して理解しなかった。イエスは、「人の意味することを解しない者になぜ無駄に言葉を使うのか。父の精霊は、子としての容量をいささかも持たない者に教えて救うことはできない。」と言った。イエスが意図したところは、この男が正常な心ではなかったということ。つまり先導する精霊に応じる能力がなかったということであった。

130:8.5 (1441.1) ナポリでは、目立った経験はなかった。イエスと青年は、都市を徹底的に調べ、何百人もの男女、子供等に多くの微笑と陽気を振り撒いた。

130:8.6 (1441.2) ここから彼らは、3日間の滞在をしたカプア経由でローマに行った。かれらは、荷役用の動物を側らに、アッピア街道を通りローマに向けて旅を続け、3人ともに、この帝国の女王の、世界で最大の都市を見ることを切望していた。

論文 131
世界の宗教

131:0.1 (1442.1) イエス、ゴニド、ガニド達のアレクサンドリア滞在中、この青年ガニドは、神と人間とのその関係に関する教えの収集に多くの時間と父の多額の金を費やした。ガニドは、神格に関わる世界の宗教教義のこの撰集作成に60人以上の博識の翻訳者を雇った。一柱の神—いと高きもの—の教義を広げるためにそのシャレム本部から最果ての地へまでも行ったメルキゼデクのマキヴェンタの教師達の説教から、直接的に、あるいは間接的に、一神教を描写しているこれらのすべての教えが大きく引

き出されたということが、この載録に当たり明瞭にされるべきである。

131:0.2 (1442.2) ガニドがアレキサンドリアとローマにおいて準備し、その死後何百年間もの間インドで保存されていた原稿からの抜粋は、ここに添えて提示される。彼が10項目の表題で集成したものは、以下の通りである

1. キニク主義

131:1.1 (1442.3) ユダヤ宗教に固執するものは別として、メルキゼデクの弟子達の残存する教えが最もよく保存されたものが、キニク派の教理にある。ガニドの撰集は次を含む。

131:1.2 (1442.4) 「神は最高である。天地のいと高きものである。神は、永遠の完全なる円であり、宇宙の中の宇宙を治める。天上と地上における唯一の創造主である。神がものを命じるとき、そのものはある。我々の神は一神であり、情け深く、慈悲深い。全ての気高いもの、聖なるもの、真実であるもの、美しいものは、神のようである。いと高きものは、天地の光である。神は東、西、南、北の神である。

131:1.3 (1442.5) 「地球が終わろうとも、崇高なるものの煌びやかな表面、正面は、威厳と栄光のままであろう。いと高きものは、すべての最初と、最後であり、始まりと終わりである。この唯一の神の他に神はなく、その名は真実である。神は、独立的存在であり、怒りと敵意が全くない。不滅で、無限である。我々の神は、全能であり、寛大である。神は多くの明示をするが、我々は、神だけを、神そのものを崇拝する。神は、全て—我々の秘密や発言—について知っている。また我々一人一人が何を受けるに値するかが分かっている。彼の力には、すべての事をする能力がある。

131:1.4 (1442.6) 「神は、平和提供者であり、神を恐れ信頼する者すべての保護者である。神に仕える者すべてに救済を与える。すべての創造は、いと高きものの力の中にある。その神性愛は、神の力の神聖さから溢れ出で、情愛はその偉大さの力から生まれる。いと高きものは、肉体と魂の統合を命じ、人に自身の精霊を授けた。人間のすることは終わらなければならないが、創造者がすることは、永遠に続く。我々は、人間の経験から知識を会得するが、いと高きものの沈思からは叡智を引き寄せる。

131:1.5 (1443.1) 「神は地球に雨を注ぎ、発芽する粒の上に太陽を輝かせ、この人生での善なるものの豊かな収穫と来たるべき世界での永遠の救済を我々に施す。神は大いなる権威を持つ。その名は、優秀であり、その特質は測り知れない。病のときに人を癒すのはいと高きものである。神は、すべての人間に対して善に満ち満ちている。いと高きもののような友は、我々にはいない。彼の慈悲はすべての場所を満たし、彼の善はすべての魂を包み込む。いと高きものは不変である。かれは、必要とする度の我々の援助者である。祈るためいずれを振り向こうともそこにはいと高きものの顔があり、神の開かれた耳がある。人間は、他者から身を隠すことができるが、神からはできない。神は、我々から途轍も無く離れた距離にはいない。神は遍在する。神は、すべての場所を満たし、その聖なる名を恐れる者の心の中に生きる。創造は、その創造者の中にあり、創造者は、その創造の中にある。我々は、いと高きものを捜し求め、そして心の中にいと高きものを見つける。人は、親愛なる友の探索に入り、そして自分の魂の中に彼を発見する。

131:1.6 (1443.2) 「神を知る者は、すべての人間を等しく見なす。彼らは、その人の同胞である。利己的な者達は、すなわち自分等の生身の兄弟を無視する者達は、報酬として疲れしかない。仲間を愛し、純粋な心を持つ者達は、神を見るであろう。神は、決して誠意を忘れない。神は、真実であるので、心の正直な者を真実な者に導くであろう。

131:1.7 (1443.3) 人生において、生ける真実の愛により誤りを打倒し、悪を克服せよ。全ての人間関係において悪に対して善をもたらせ。主なる神は、慈悲深く、情愛深い。神は寛大である。神を愛そう、なぜならば、神が最初に我々を愛したから。神の愛で、神の慈悲で、我々は救われるであろう。貧者と富者は兄弟である。神は、かれらの父である。被りたくない悪を他者にしてはならない。

131:1.8 (1443.4) 「いつも神の名を口にせよ。その名を信じていくにつれ、人の祈りは聞かれるであろう。いと高きものを崇拝するということは、何というすばらしい名誉であることか。全世界と全宇宙は、いと高きものを崇拝する。そして、すべての祈りの中で、感謝をせよ—礼拝の

ために、昇れ。祈りに満ちた崇拝は、悪を避け、罪を禁じる。つねにいと高きものの名を称賛しよう。いと高きものに避難する者は、自分の欠陥を宇宙から隠す。神の前に清らかな心で立つとき、全創造を恐れなくなる。いと高きものは、情愛深い父と母のようなものである。かれは、我々を、地球の子等を、本当に愛している。神は、我々を許され、救済の道へと我々の足どりを導かれるであろう。かれは、我々の手を取り、自分の方へと導かれるであろう。神は神を信じる者を救う。かれは、彼の名に仕えることを人に強要はしない。

131:1.9 (1443.5) いと高きものの信仰が心に入ってしまえば、人は、生涯ずっと恐れずに暮らして行くであろう。不信心者の繁栄のために苛立ってはいけない。悪を企む者達を恐れるな。魂を罪から遠ざけるようにしむけ、救済の神を完全に信頼せよ。さすらう死すべき者の疲れきった魂は、いと高きものの腕の中に永遠の安らぎを見つける。賢者は、神の抱擁を切に求める。地上の子は、宇宙なる父の腕の平安を切望する。高潔な者は、死すべき者の魂が崇高なるものの精霊との混和するその高い状態を捜し求める。神は公明正大である。我々は、この世での植え

付けから受け取らずにいる実を次の世界で受け取るであろう。」

2. ユダヤ教

131:2.1 (1444.1) パレスチナのケニ人は、メルキゼデクの教えの多くを救い上げ、これらの記録から、ユダヤ人によって保存され変更されたものから、イエスとガニドは、次の選択をした。

131:2.2 (1444.2) 「初めに、神は天と地と、またそこに万物を創造した。見よ、創造したすべてが実に良かった。主は、その方は、神である。天の上にも地の下にも他には誰もいない。したがって、主である神を全心で、全魂で、全力で愛しなさい。水が海をおおい、地球は主についての知識で満たされるであろう。天は神の栄光を讃え、天空は神の技を披露する。昼は昼へ話を伝える。夜は夜へ知識を示す。声が聞かれないところには声も言語もない。主の業は偉大である。叡知で万物を作られた。主の偉大さは測りしれない。神は星の数を知っている。それらをそれぞれの名で呼ぶ。

131:2.3 (1444.3) 主の力は遠大であり、その理解力は無限である。主は言われる。『天が地よりも高いように、私の道はあなた方の道よりも高く、私の思いはあなた方の思いよりも高い。』光と住んでいるので、神は、深く密かな事を明らかにする。主は慈悲深く優しい。かれは、辛抱強く、善と真実に富んでいる。主は素晴しく、清廉である。従順な者は、公義に導かれる。主の素晴らしさを味わい、これを見つめよ。神を信じる者は祝福される。神は我々の避難所であり力であり、難儀の際そこにある助けである。

131:2.4 (1444.4) 「主の慈悲は、神とその正義をを恐れる者に、我々の子供のその子供にさえ、永遠から永遠へとおよぶ。主は優しく情け深い。主は全ての者に親切であり、その穏やかな慈悲は、全ての創造の上にあり、傷心した者を癒し、傷口に包帯を巻きつける。神の精霊から私はどこへ行くのであろうか。神性の存在から私はどこへ逃げるのであろうか。このように、永遠の住まいに住むいと高く崇高なるものが、その名が聖なるものが、かように言う。『私は高く聖なる場所に住んでいる。また、心砕かれ、へりくだった者とともに住む。』神から隠れる

ことのできるものは一人としていない、なぜなら神は天地に満ちているので。天を喜ばせ地を歓喜させよ。万民に言わせよ、主は支配すると。その慈悲はとこしえに続くので、神に感謝せよと。

131:2.5 (1444.5) 「天は神の義を告げ、全ての民が神の栄光を見た。我々を作ったのは神であり、我々自身ではない。我々は神の民、神の牧草地の羊である。その慈悲は永遠であり、その真理はすべての世代へと持続する。神は、国々の支配者である。その栄光は地に満ちわたれ。かれらは、主の素晴らしさと人の子等への神の素晴らしい贈り物のために主を賛美せよ。

131:2.6 (1444.6) 神は、人を神性よりもやや劣るものに創り、愛と慈悲で報いた。主は正しい者の道を知るが、不信心な者の道は滅び失せる。主への恐怖は、知恵の始まりである。崇高なるものへの知識は、理解である。全能の神は、『我が前を歩み、完全になれ。』と言う。自負心が破壊に先行し、傲慢が破滅に先行するということを忘れてはならない。自らの精神を支配する者は、都を手にする者に勝る。主なる神である聖なるものは、『自らの精霊

の安らぎに立ち返る者は救われるであろう。落ち着きと自信に人の力となる。』主に仕える者は、その力を一新するであろう。鷲のような翼を身につけるであろう。彼らは走っても疲れ果てることはないであろう。歩いても弱らないであろう。主は、人の恐怖を取り除くであろう。主は、『恐れるでない、私が共にいるので。うろたえるでない、私がお前の神だから。私はお前を強め。助ける。我が義の右手で守る。』

131:2.7 (1445.1) 「神は我々の父である。主は我々の贖い主である。神は、宇宙の軍勢を創造し、皆を保護する。神の正義は山のようであり、その判断力は巨大な海溝のようである。かれは、我々に彼の楽しみの川を飲ませ、我々は、神の光の中に光を見るであろう。主に感謝し、いと高きものに讃美の歌を捧げることは、良いことである。朝に愛ある優しさを、夕べに神の真心を示すことは。神の王国は永遠の王国であり、その統治は世代を通して続く。主は私の羊飼いである。私は欲しがらない。主は緑の牧草に私を横たえさせる。かれは、私を穏やかな泉のほとりに伴われる。私の魂を生き返らせる。義の道へと導かれる。そうです、たとえ死の影の谷を通りて抜けよ

うとも、私は、いかなる悪も恐れない。神が共にいられるので。まことに、善と慈悲とが私の命の日の限り私を追ってくるであろう。そして、私はとこしえに主の家に住まうであろう。

131:2.8 (1445.2) ヤハウェは私の救いの神である。従って、私は神の名を信頼する。私は、心の底から主を信じる。私は、自らの理解するところに頼らない。私は、行く先々で神を認めます、そうすれば神は私の道を真っ直にされるであろう。主は誠実である。主に仕える者との誓いを守られる。正しい者は、信仰によって生きる。人が正しく振る舞わないならば、それは、罪が戸口で待ち伏せをしているからである。人は、自らが耕す悪と撒く罪を収穫する。悪を行う者に腹を立てるな。心で邪悪を尊ぶなら、主はその者の声を聞かないであろう。神に背くなら、自らが自らの魂をも虐待する。善であれ悪であれ、神は、あらゆる秘め事について全ての人の働きを裁かれるであろう。人が心で考えるとき、人は考えている通りのものである。

131:2.9 (1445.3) 「主は、心を尽くし、誠意で呼び求める者全ての近くにいる。夜には涙が宿っても、朝には喜びがやってくる。陽気な心は、薬のように健康にする。神は、正しく歩く者に良いことを与えずにはおられない。神を恐れ、その戒律を守れ。これが人にとって全てであるから。このように天を創造し、地を造形した主が、このように言う。『正義の神と救い主である私の他に神はない。地の全ての者よ。私を頼りにして救われよ。心を尽くして私を捜し求めるならば、私を見つけるであろう。従順なる者は、地を受け継ぎ、平和の充溢をに大いに喜ぶであろう。誰であろうと不正をまく者は災いを刈り取り、風をまく者等は、つむじ風を刈り取る。

131:2.10 (1445.4) 「『さあ、来たれ、論じ合おう。』」と主は言われる。『たとえあなたの罪が緋のようであっても、雪のように白くなる。たとえ紅のように赤くとも、羊の毛のようになる。』だが、悪しき者には平安がない。あなたから良い物を差し控えたのはあなた自身の罪である。神は、私の顔色の良さであり、魂の喜びである。永遠の神は私の力である。神は我々の住居であり、下には永遠に続く腕がある。主は傷心した者の近くにいる。主は無邪

気な精神を持つ者すべてを救う。義ある物の苦悩は多いが、主はそのすべてから彼を救う。あなたの道を主に委ねよ—主を信頼せよ—主が成し遂げるであろう。いと高きものの隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。

131:2.11 (1445.5) 「自身を愛するように隣人を愛せよ。復讐してはならない。自分が嫌うことは何であれ人にしてはならない。兄弟を愛しなさい。なぜなら主は『私は自由に子供を愛する。』と言われた。義ある者の道は、完全な日が来るまでますますまぶしい光としてある。思慮深い者は、大空の光明のように輝き、多くの者を義に向かわせる者は、世々限りなく星のように輝く。悪しき者は己の非行の道を、不法者は己のはかりごとを捨て去れ。主は言われる、『皆を私に戻らせなさい。そうすれば、私は皆に慈悲をかけるであろう。私は大いに許すであろう。』と。

131:2.12 (1446.1) 「神は、天地の創造者は、言われる。『私の法を愛する者にはすばらしい平和がある。私の戒律は次の通りである。全心で私を愛せよ。あなたには、私の外に他の神々があってはならない。みだりに私の名を用いて

はならない。安息日を覚え、これを聖なる日とせよ。父と母を敬いなさい。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。欲しがってはならない。』」

131:2.13 (1446.1) 「また、こよなく主を愛し自分を愛するように隣人を愛するすべての者に、天の神は言われる。『私は墓からあなたを解き放つ。死からあなたを請け戻す。私は、公正であると共に、あなたの子孫に慈悲深くある。地球の私が創り出した者達に言及してはこなかったか。私は、お前達は生ける神の子等であると言わなかったか。永遠の愛をもってあなたを愛してはこなかったか。私のようになり、いつまでも共に楽園に住むことを呼び掛けてはこなかったか。』」

3.仏教

131:3.1 (1446.3) ガニドは、仏教が、神なくして、つまり人格と宇宙なる神格なくして、いかに偉大で美しい宗教に近づいたかを発見し、衝撃を受けた。しかしながら、かれは、仏陀の時代までさえインドにおいて仕事を続けたメルキゼデク宣教師の教えの影響を反映した一定の初期の

信念に関する若干の記録を見つけた。イエスとガニドは、仏教徒の文献から次の論述を蒐集した。

131:3.2 (1446.4) 「純粋な心から、喜びは無限なる者へと溢れ出る。私の全生命が、この超人間の歓喜で安まる。私の魂は満足感に満たされ、心は和やかな信頼感の至福にあふれる。私には何の恐怖もない。私には心配がない。私は安堵の気持ちで暮らし、敵は私を動揺させることはできない。私は自信からくる果実に満足する。不滅のものへの接近が簡単であることがわかった。私を長旅で支えるために信仰を祈願する。私は、彼方からの信仰が私の期待を裏切らないことを知っている。私は、同胞が、不滅のものの信仰、忍耐を作る信仰さえも、そして謙遜、正直さ、知恵、勇気、知識を吹き込まれるならば、彼らは成功すると知っている。悲しみを振り捨て、恐怖と縁を切ろうではないか。信仰で真の正義と本物の人間らしさを掴もう。正義と慈悲に思いを巡らせることを学ぼう。信仰は人の真の富である。それは、美徳と栄光の授与である。

131:3.3 (1446.5) 「不義は侮蔑に値する。罪は卑劣である。悪は、考えであろうが、行為であろうが、下劣である。埃が風に続くが如く、痛みと悲しみが悪の道に続く。影が形あるものの実体に従うように、心の幸福と平和は純粋な考えと徳の高い生活に従う。悪は誤って誘導された思考の結果である。罪のないところに罪を見ることは、悪である。罪あるところに罪を見ないことは、悪である。悪は偽りの教義の道である。あるがままの物を見ることにより悪を避ける者達は、その結果、真実を迎え入れることによる喜びを獲得する。罪を嫌悪するで自らの憂い事を終えよ。気高きものを見上げるとき、全心で罪に背を向けよ。悪について謝罪をしてはならない。罪について弁解をしてはならない。過去の罪を償う努力により、あなたは、将来のそれに抵抗する強さを身につける。慎みは悔悟から生まれる。如何なる過ちといえども気高きものに告白せよ。

131:3.4 (1447.1) 「陽気さと喜びは、見事な行為と不滅のものの栄光への報酬である。誰とても自分の心の自由を奪い取ることはできない。信仰がその心を解放したとき、心が、山のように固定し不動であるとき、そのとき、魂の

平和は、大河のように静かに流れるであろう。救済を確信する者達は、欲望、妬み、憎しみ、富の惑いにとこしえに因われない。信仰は、より楽しい人生の活力であるが、それでも、人は忍耐をもって自身の救済の解決に当たらねばならない。自身の最終的な救済を確信したいならば、心からすべての正義を果たすことを確実にせよ。内から湧き出で、心の保証を培い、その結果、永遠の救済の極みを楽しむようになりなさい。

131:3.5 (1447.2) 「不精で、怠惰で、薄弱で、何もせず、恥知らずで、身勝手であることに固執する宗教家は、不滅の知恵の啓蒙に達することを望まないかもしれない。しかし、まだ地上に生きている間でさえも、思いやりがあり、分別があり、思慮深く、熱心な者は、神性の叡知の平和と自由の最高の啓蒙に達するかもしれない。心せよ、あらゆる行為は、その報酬を受け取るのである。悪は悲しみをもたらし、罪は痛みに終わる。喜びと幸せは、良い生活の結果をうむ。悪人でさえ、悪行の完熟期前の恩赦の季節を楽しむが、必然的に悪行の完全な報いの時が来るのである。『不正行為の罰は私には近寄らない。』と心で言って、誰にも軽く罪を考えさせてはいけ

ない。人がすることは、その人になされるのである、叡知の判断において。仲間への人の不正は、その人に戻る。被創造者は、自分の行為の運命から逃がれることはできない。

131:3.6 (1447.3) 「愚かな者は、心の中で『悪は私を襲わない。』と言ってきた。だが、魂が叱責を切望し、心が知恵を求める時にだけ安心が得られる。賢者は、敵の直中にあって友好的であり、混乱の中にいて穏やかであり、守銭奴の中にいて気前の良い気高い魂である。自己への愛は、出来の良い土地の雑草のようなものである。私心は深い悲しみにつながり、絶え間ない心配は殺す。素直な心は幸福をもたらす。自分に打ち勝ち、服従する者は、最も偉大な戦士である。自制は、何事においても良い。徳を尊重し、義務を厳守する者だけが、優れた人である。怒りや憎しみを征服せよ。誰についても厳しく話してはならない。満足は最もすばらしい富である。賢明に与えられる物はよく保たれる。されたくない事を他の者にもしてはならない。悪に善で報いよ。悪を善で克服せよ。

131:3.7 (1447.4) 「正なる魂は、全地球の主権よりもはるかに望ましい。不死は誠意の目指すものである。死は軽はずみな生活の終わり。真剣な者は死なない。浅薄な者は、すでに死んでいる。不死の状態についての洞察力を持つ者は、幸いである。生ける者を責め苛む者は、死後の幸せはまず見つけないであろう。利己的でない者は、天国に行き、そこでは無限の自由の至福に歓喜し、貴い寛大さを増大し続ける。正しく考え、堂々と話し、無欲に行動するすべての死すべき者は、この短い人生の間にここで美徳を味わうだけではなく、肉体の分解後に天の喜びをもまた味わい続けるのである。」

4. ヒンドゥー教

131:4.1 (1447.5) メルキゼデクの宣教師は、何処へ旅しようとも一神の教えを携えた。この一神の教義の多くは、他の、また過去の概念と共に、ヒンドゥー教のその後の教えで具体化されるようになった。イエスとガニドは、次のような抜粋をした。

131:4.2 (1448.1) 「あの方は、あらゆる点において最高で、偉大な神である。万物を包み込む主である。宇宙の中の宇宙

の創造者であり、制御者である。神は唯一の神である。かれは、単独でいる。唯一である。そして、この唯一の神は、我々の造物主であり、魂の最後の目的地である。崇高なるものは、筆舌に尽しがたく輝かしい。神は光の中の光である。凡ゆる心と凡ゆる世界が、この神の光に照らされている。神は、我々の防護者である—被創造者の側に立つ—そして、神を知ることを学ぶ者は、不滅となる。神は、活力の偉大な源である。偉大なる魂である。すべてに対する普遍的な支配を働かせる。このい唯一の神は、情愛深く、荘厳で、敬慕できる。我々の神は、最高の力を持ち、最高の屋敷に住まわれている。この真の人格は、永遠であり神性である。天の第一の主である。すべての予言者は、この方を迎え、この方は、我々に自らを明らかにされた。我々はこの方を崇拝する。崇高なる人格よ、存在する者の源、創造の主、そして宇宙の支配者、私達に、あなたの被創造者に、あなたが内在されておられる力でお示しください。神は太陽と星を作られた。神は、明るく純然とし、自存している。その果てしない知識は、神々しく賢明である。永遠なるものは、悪に貫通されない。宇宙は神から生じたのであ

るから、神は適切にそれを統治する。神は創造の基因であり、したがって万物は、神の中に確立されている。

131:4.3 (1448.2) 「神は、あらゆる善人が困っているときの確かな避難所である。不滅なるものは、すべての人類を労る。神の救済は強烈であり、その親切さには情がある。かれは、情愛深い防護者、祝福された擁護者である。主は、『私は知恵の光として銘々の魂の中に住んでいる。私は素晴らしい者達の中の素晴らしさそのものであり、善人の中の善そのものである。２人か３人の集うところに私もいるのである。』と言う。被創造者は、創造者の前から逃げることができない。主は、すべての死すべき者の絶えざる瞬きを数えさえする。そして、我々は、分離できない仲間としてこの神性である者を崇拝している。神は、全支配的で、豊富で、遍在で、無限に優しい。主は、我々の支配者、避難所、最高の制御者であり、その太古の精霊が、人間の魂の中に住んでいる。悪と美徳の永遠なる目撃者は、人の心の中に住んでいる。敬慕でき神性である生気を与えるものについて長らく思索しよう。その精霊が、完全に我々の考えを導きますように。この非現実的な世界から、我々を真実へと導きま

すように。暗黒から、我々を光へと導きますように。死から不死へと案内してくれますように。

131:4.4 (1448.3) 「心のすべての憎しみを一掃し、永遠なるものを礼拝しよう。神は祈りの主である。神は神の子等の叫び声を聞く。すべての者の意志を神に、勇断なるものに、服従しよう。我々が祈りを捧げる主の気前のよさを大いに楽しもう。祈りを内心の友とし、崇拝を魂の支えとしなさい。永遠なるものは、『愛をもって私を単に崇拝するならば、私に達するように知恵を与えるであろう。なぜならば、私の崇拝は、被創造者すべてに共通の美徳であるから。』と言う。神は暗いものの照明器具であり、か弱い者達の力である。神が強い友であるので、我々にはもう恐怖はない。我々は、決して征服されたことのない征服者の名前を称賛する。彼が人の忠実で永遠の援助者であるので、我々は、神を崇拝している。神は、我々の確かな指導者であり変わらぬ案内人である。天と地の偉大な親であり、無制限の活力と無限の叡知を備えている。かれの輝きは崇高であり、その美は神々しい。神は、宇宙の最高の避難所であり、永続する法の不変の保護者である。神は命の主であり、すべての人間の

慰安者である。人類の恋人であり、困窮する者の援助者である。我々に生命を与える方であり、人間の群れの良き羊飼いである。神は、我々の父であり、きょうだいであり、友である。我々は、我々の内側の存在者であるこの神を知ることを切望する。

131:4.5 (1448.4) 「我々は、心からの切望により信仰を得ることを学んだ。感覚の管理により知恵に至り、知恵により崇高なるものに平和を経験した。内側の自己が神に一心であるとき、信仰に満ちる者は、心から崇拝している。神は外套として天空を纏う。また6つの広く開けた他の宇宙に居住する。神はすべての上に、そしてすべての中で最高である。我々は、仲間への過ちのすべてに対して主からの許しを切望し、また、我々が被った不正から友人を解放する。我々の精霊はすべての悪をきらう。それ故、主よ、我々を罪のすべての汚れから解放してください。我々は、慰める人、防護者、救世者としての神—我々を愛している方—に祈る。

131:4.6 (1449.1) 「宇宙の番人の精霊は、単純な被創造者の魂に入る。唯一の神を崇拝するその者は、賢明である。完全

性を求めて努力する者は、崇高なる主を知らなければならない。崇高なるものの至福の保証を知る者は、決して恐れない、なぜなら、崇高なるものが、『恐れるでない、私が共にいるので。』と仕える者に言うので。摂理の神は我々の父である。神は真実である。そして、被創造者が神を理解する—真実を完全に知るようになる—ということが、神の望みである。真実は永遠である。それは宇宙を支える。我々の最高の願望は、崇高なるものとの合一である。偉大な制御者は、万物の発動機である—総てが神に端を発する。そして、これが義務の大意である。いかなる人にも、その人にとり厭わしいことを他者にさせてはならない。悪意を抱かず、自分を打つ者を打たず、慈悲をもって怒りを征服し、慈善をもって憎しみに打ち勝てよ。神は、懇切な友であり、この世での我々の違反を許される情けある父であるが故に、我々はこのこの総てを為すべきである。

131:4.7 (1449.2) 「神は我々の父であり、地球は我々の母であり、宇宙は我々の生まれ故郷である。神がいなければ、魂は囚人である。神を知ることは、魂を解放する。神への思索により、神との合一により、悪の幻想からの救助

とすべての物質的束縛からの究極の救出がある。人が1枚の革のように空間を巻き上げるとき、人は、神を見つけたので、悪の終わりが来る。神よ、地獄の三重の破滅—色欲、憤怒、物欲—からお救いください。魂よ、不死の精霊の戦いに身構えよ。人間の人生の終わりが来るとき、より適当で美しい型のためにこの肉体を見捨ることを、恐怖、悲しみ、飢え、渇き、または死のない崇高なるものと不滅なるものの領域で目覚めることを躊躇ってはいけない。神を知るということは、死の綱を切ることである。神を知る魂は、牛乳の上に乳脂肪が現れるように、宇宙の中で上昇する。我々は、神、総てにおいて働く方、偉大なる魂、全被創造者の中に席を占めている方を崇拝している。そして、神が人間の心の中で王位にあると知る者は、神のように—不滅に—なる運命にある。悪はこの世に置き去りにされなければならないが、美徳は天へと魂に従う。

131:4.8 (1449.3) 邪な者だけが次のように言うのである。「宇宙には、真実もなければ支配者もいない。我々の欲のために設計されたに過ぎない。そのような者は、自分の知識の微小さに欺かれる。彼らはその結果、自らの欲望の享

受に身を委ね、魂から美徳の喜びと正義の快楽を奪う。罪から救済を経験することよりも素晴らしい何があり得ようか。崇高なるものを見た者は、不滅である。肉体の人間の友は、死を生き残ることはできない。美徳だけが、楽園の喜ばしい、陽の当たる野外に向けて前進する旅において人の側を歩く。」

5.ゾロアスター教

131:5.1 (1449.4) ゾロアストレスは、初期のメルキゼデク宣教師の子孫に自ら直に接触しており、彼等の一神主義は、ゾロアストレスが、ペルシアで創立した宗教の中心の教えとなった。ユダヤ教は別として、当時のいかなる宗教も、これらのサレムの教えの多くを包含していなかった。この宗教の記録から、ガニドは次を抜粋した。

131:5.2 (1450.1) 「万物は、すべてに賢明であり、善であり、義であり、聖であり、華麗であり栄えある唯一の神から来ており、この神に属している。これは、我々の神は、すべての光明の源である。神は、創造者であり、すべての良い目的の神であり、宇宙の正義の防護者である。人生における賢明な行路は、真実の精霊と調和して行動する

ことである。神は、総てを見ており、悪者の悪行と善者の善行の双方を見ている。神は、燐く目で万物を観察する。その接触は、癒しの接触である。主は、全能の後援者である。神は、義である者にも悪なる者にもその慈悲深い手を差し伸べる。神は、世界を築き、善にも悪にも報酬を定めた。すべてに賢明な神は、清い考えをもち正しく行動する敬虔な者に不死を約束した。人は、崇高に望むとき、その通りになるであろう。太陽の光は、宇宙で神を明察する人々への知恵のようなものである。

131:5.3 (1449.6) 「賢明なるものの喜びを求めることにより、神を称賛せよ。賢明なるものの啓示宗教により定められた道を嬉々として歩くことによって、光の神を崇拝せよ。崇高なる神しか、光の主しかいない。我々は、水域、植物、動物、地球、および天を作られた方を崇拝する。神は、最も情け深い主である。我々は、最も麗しいもの、永遠の光が与えられた気前のよい不滅なるものを崇拝している。神は、我々から最も遠くに、同時に、我々の魂の中に住んでいるという点で、最も近くにいる。神は、神聖であり最も聖なる楽園の精霊であり、なおかつ全被創造者の中の最も好意的である者よりも好意的である。

我々は、全事業のこの最大事、つまり神について知るということにおいて、神の補助を最も受けている。神は、非常に敬慕できる公正な友である。我々の知恵であり、命であり、魂と肉体の精力である。賢明な創造者は、我々の良い考えを通して、我々が神の意志をすることを可能にし、その結果、我々は、神のように完全であるすべての実現を達成する。

131:5.4 (1449.7) 「主よ、精霊の次の人生に備えている間、生身でのこの人生を送る方法を教えてください。我々に話しかけてください、主よ、そうすれば、あなたの言いつけ通りにいたします。良い道を教えてください、そうすれば、正しく進みます。我々のあなたとの合一を叶えてください。我々は、正義との合一に導く宗教は、正しいということを知っています。神は、我々の賢明な本質であり、最善の考えであり、正しい行為である。神精との和合と神の中での不死を与えてくださいますように。

131:5.5 (1449.8) 「賢明なるもののこの宗教は、あらゆる悪の考えと罪深い行為から信者を清める。私は、考えや言葉、または行為で—故意に、または意図せずに—怒ったと

したならば、悔悟の態度で天の神にぬかづき、慈悲と許しを乞い、祈りを捧げる。もし二度と悪い事をしないことを目標にすれば、私は、告白をするとき、私の魂から罪が取り除かれるということを知っている。私は、許しが罪の束縛を取り去るということを知っている。悪を行う者は、罰を受けるが、真実に続く者は、永遠の救済の至福を味わう。優美さを通して我々をしかと捉え、我々の魂に救いの力を与えてください。我々は、完全性に達することを、神のようになることを切望していますので、慈悲を要求します。

6. スヅアン教(ジャイナ教)

131:6.1 (1450.5) インドにおいて1神の教義を保存した宗教信者の３番目の集団—メルキゼデクの教えの生存—は、当時、スヅアン教徒として知られていた。後にこれらの信者は、ジャイナ教の信奉者として知られるようになった。彼らは次のように教えた。

131:6.2 (1450.6) 「天の主は最高である。罪を犯す者は、天上には昇らないが、義の道を歩く者は、天に場所を見つける。真実を知るならば、我々は、この後の生命を確信す

る。人の魂は、最も高い天国で本当の精霊的な特徴を発達するために、完全性に達するために、そこに昇るかもしれない。天国での状況が、罪の束縛から人を救い出し、最終的至福をもたらす。正しい者は、すでに罪の終わりと災いとのすべてのその関わりを経験してきた。自己は、人の打ち勝ち難い敵であり、自己は、人の4つの最大の激情として表れる。怒り、自惚れ、偽り、欲張り。人の最大の勝利は、自身の征服である。人が許しのために神に目を向けるとき、また、敢えてそのような自由を味わうとき、かれは、それによって恐怖から救われる。人は、自らが扱われたいと思うように仲間の人間を扱いながら人生の旅を進むべきである。」

7. 神道

131:7.1 (1451.1) ごく最近、この極東の宗教の写本が、アレクサンドリアの図書館に入れられた。それは、ガニドがこれまで聞いたことのない世界宗教の1つであった。次の要約に示されるように、この信仰もまた早期のメルキゼデクの教えの名残りを収録していた。

131:7.2 (1451.2)「主は言われる。『人は皆、私の神性の力の拝受者である。全ての者は、私の慈悲の祝福を味わう。私は、遍くところでの正しい者の増加に大きい喜びを味わう。自然の美と人の美徳の双方において天の王子は、自分を明らかにしようと努めるし、公正な本質を示そうとしている。昔の者は、私の名を知らなかったので、私は、目に見える存在としてこの世に生まれ自らを現わし、人間が私の名を忘れないほどに私は卑下を我慢した。私は天地の造物主である。太陽、月、すべての星は、私の意志に従う。私は、陸地と4つの海のすべての生き物の支配者である。私は偉大で最高であるが、それでも最貧の人間の祈りに注意を払う。被創造者が、私を崇拝するならば、私はその祈りを聞き、心の思いを満たす。』

131:7.3 (1451.3)「『人が不安に屈する度に、人は、心の精霊の導きから一歩逸れる。自負心は神を見えなくする。』天の助けを得たいならば、自負心を捨て去るように。一本一本の自負の髪は、まるで大きな雲で救いの光を遮断するかのようである。内面が明かるくなければ、外面のために祈ることは無益である。『私が祈りを耳にしたなら

ば、それは、人が虚偽と偽善を持たないきれいな心で、鏡のように真実を映す魂で私の前に来るからである。もし不死を獲得したいのならば、世界を見捨てて私のところに来なさい。』」

8. 道教

131:8.1 (1451.4) メルキゼデクの使者達は、遠く中国に入り込み、1 神の教義は、いくつかの中国宗教の初期の教えの一部となった。最も長く持続し、その上、一神教の真実の大部分を含んでいる宗教は、道教であり、ガニドはその創設者の教えから次のようなものを集めた。

131:8.2 (1451.5) 「崇高なるものは、何と純粋で穏やかであり、また何と強力で、偉大であることか。何と深く測り知れないことか。天のこの神は、万物の尊敬される先祖である。永遠なるものを知っているならば、人は、悟っており賢明である。永遠なるものを知らないならば、そうすると、無知は、それ自体が悪として現れ、それ故、罪の激情が生じる。この不思議な存在者は、天地が存在する以前にいた。かれは、本当に精霊的である。かれは、単独であり、変化しない。実に世界の母であり、全創造が

その周りを動く。この偉大なるものは、自分自身を人間に与え、それにより人間は、卓越したり生き残りを可能にする。少しの知識しかないとしても、それでも人は、崇高なるものの道に入ることができる。天の意志に従うことができる。

131:8.3 (1452.1) 真の奉仕の全ての良い働きは、崇高なるものから来る。万物は、命を偉大なる源に依存する。偉大な崇高なるものは、その贈与に対し何の賞賛も求めない。かれは、最高の力をもつが、我々の視線からは隠されたままである。被創造物を完成させながらも絶えず自分の属性を変える。絶妙な理あるものは、その設計において緩慢であり忍耐強いが、その遂行は確かである。崇高なるものは、宇宙を一面に覆い、それを支えている。その溢れんばかりの影響と引き付ける力の何と大きく偉大であることよ。真の善は、その中ですべてに恵みを与え、何も害しないという点で、水のようなものである。そして、水のように、真の善は、最も低い場所、他のものが避けるそれらの段階さえ探し求めており、それは、それが、崇高なるものと似通っているからである。崇高なるものは、万物を創造し、それらの本質を養い、精霊的に

それらを完成させる。そして、崇高なるものが自分を強制することなくいかに被創造者を育て、保護し、完成させるのかは、神秘である。かれは、誘導し、指示はするが、独断的ではない。前進を促すが、支配はしない。

131:8.4 (1452.2) 「賢明な者はその心を普遍化させる。生兵法は大けがのもと。偉大さを求める者は、自らを慎むことを学ばなければならない。創造において、崇高なるものは、世界の母となった。人の母を知ることは、人の息子の関係を認めることである。全体の観点から各部に注意する者は、賢者である。まるでその立場にいるかのように自身を全ての人と関わりをもたせるようにしなさい。親切で怪我に報いるように。人々を愛しているならば、人々は、その人に近づくであろう—彼等の支持を得ることに何の苦労もしないであろう。

131:8.5 (1452.3) 「偉大な崇高なるものは、全般に行き渡っている。かれは、左側と右側にいる。かれは、全創造を支持し、すべての真の存在体に宿る。人は、崇高なるものを見つけることができないし、彼がいない場所に行くこともできない。もし人が自分の悪のやり方を認め、心から

罪を悔いるならば、そこで許しを求めることができる。かれは、罰を免れるかもしれない。かれは、災難を天恵に変えるかもしれない。崇高なるものは、全創造にとり安全な避難所である。かれは、人類の保護者と救世主である。毎日彼を捜し求めるならば、人は彼を見つけるであろう。崇高なるものは罪を許すことができるので、かれは、すべての人にとって最も大切である。神は、人のすることに対して与えるのではなく、その人が何であるかに報酬を与えるということを常に覚えていよ。したがって、報酬という考えをもたずに仲間への助力を広げるべきである。自己への利益を考えることなく善行を施すように。

131:8.6 (1452.4) 「永遠なるものの法を知る者は、賢明である。神の法についての無知は、惨めで災いである。神の法を知る者は、寛容の気質がある。永遠なるものを知っているならば、肉体は滅ぶとも、精霊の奉仕において人の魂は、生き残るのである。自分の瑣末さを認めるとき、人は本当に賢明である。永遠なるものの光に留まるならば、人は崇高なるものの啓蒙を味わうであろう。崇高なるものに献身する者は、永遠なるもののこの探求におい

て喜ぶ。「人が死ぬと、精霊の存在体は遠大な家路への旅に向けその長距離飛行を開始する。」

9. 儒教

131:9.1 (1452.5) 神を最小に認めている世界の重要な宗教でさえ、メルキゼデク宣教師の一神教と彼らの不断の後継者達を認めた。ガニドの儒教に関する概要は、次の通りであった。

131:9.2 (1452.6) 「天が定めることに誤りはない。真実は、本当であり神性である。すべては天から始まり、偉大なる天は何の誤りも犯さない。天は、劣る被創造者の指導と高揚を助けるために多くの配下を任命してきた。天から人を治める唯一の神は、偉大、非常に偉大である。神は、権力において荘厳であり、裁きにおいて厳格である。しかし、この偉大なる神は、多くの劣る人々にさえ道徳心を与えた。天の恩恵は、決して止まない。慈善は、人への天の極上の贈り物である。天は、その尊さを人の魂に贈与した。人の美徳は、天の気高さのこの授与の実りである。偉大な天は、全てに見識が高く、人の全行為において共に行く。そして、偉大なる天を我々の父母と呼ぶ

とき、我々は首尾よくする。我々がこのように神の先祖の使用人であるならば、我々は、天に自信をもって祈ることができる。つねに、そしてすべてにおいて、天の壮大さの畏怖をもって立とう。神よ、いと高き方そして主権ある実力者よ、裁決はあなた次第であり、すべての慈悲は神の心から生じるということを我々は、認識します。

131:9.3 (1453.1) 「神は我々と共にいる。したがって、我々の心には何の恐怖もない。もし私の中になんらかの美徳が見つかるならば、それは、私といる天神の顕現である。しかし、私の中のこの天神は、私の信仰にしばしば難しい要求をする。神が私といるならば、私は、心にいかなる疑いも持たないと決心した。信仰は、物の真理に非常に近いはずであるし、私には、人がこの立派な信仰なくして生きられるのか分からない。善と悪は、原因なくして人に起こらない。天神は、その目的に応じ人の魂に対処する。自分が悪いと気づくとき、誤りを認めることを躊躇わず、速く改めよ。

131:9.4 (1453.2) 「賢明な者は、単なる生計を捜し求めるのではなく、真実探索に専念している。天神の完全性に達することが、人の目標である。優れた者は、自己調整の習慣をもち、不安や恐怖がない。神は人と共にいる。心に疑問を持ってはいけない。あらゆる善行には報酬がある。優れた者は、天神に対し不平を言わず、人に遺恨を抱かない。自分にされたくないことを、他者にしてはならない。すべての罰の一部に同情が示されますように。あらゆる点で、罰を天恵とすることに努めよ。それが偉大なる天神の方法である。すべての生物は、死んで地に戻らなければならないが、高潔な者の精霊は天上で示され、最終的な明るさの栄光の光に昇るために進み行く。」

10. 「我々の宗教」

131:10.1 (1453.3) 楽園なる父に関する世界宗教の教えのこの編集を達成する困難な作業の後に、ガニドは、イエスの教えの結果として神に注目するに至ったという確信の概要であると考えたことを定式化する任務を自らに与えた。この青年には、そのような信条を「我々の宗教」として言及する習慣があった。これが彼の記録であった。

131:10.2 (1453.4) 「主である我々の神は、唯一の主であり、人は、自身を愛するがごとく、主のすべての子を愛するために最善をつくす一方で、心と精霊を尽くして主を愛すべきである。この唯一の神は、我々の神々しい父であり、万物がその中にあり、その精霊が宿ることによりすべての真摯な人間の魂に神が宿る。そして、神の子である我々は、真実の創造主に自分の魂を委ねる方法を学ばなければならない。全てが、天なる父には可能である。かれは、万物と全生物を作った創造主であるが故に、それは、そうあるはずである。我々は、神を見ることはできないが、知ることはできる。そして、天の父の意志に順じて日々生きることにより、我々は、同胞に神を明らかにすることができる。

131:10.3 (1453.5) 「神の特質である神性の豊かさは、無限に深く永遠に賢明であるに違いない。我々は、知識で神を捜し出すことはできないが、個人の経験により心の中に神を知ることができる。神の正義は、測り難いかもしれないと同時に、その慈悲は、地上の最も謙虚な者により受け取られるかもしれない。父は、宇宙を充満する間、我々の心の中にも生きている。人の心は、人間的で、必滅で

あるが、人の精霊は、神性で、不死である。神は全能であるだけでなく全てに賢明でもある。誤りの多い傾向にある我々の地球の両親が、いかように我が子を愛し、また良い贈り物を与えるかを知っているならば、天の良き父が、いかに地上の我が子を賢明に愛し、適切な天恵を授けるかを知っているはずである。

131:10.4 (1454.1) 「その子が、父を見つける願望を持ち、真に父のようになることを切望するならば、天の父は、地球の子の一人として滅ぼすことを容赦しない。父は、邪悪な者さえ愛しており、恩知らずな者に常に親切である。より多くの人間が、神の良さを知りさえできれば、必ずや自分達の邪道を悔いるように、罪と知る全てを見捨てるように導かれるであろうに。すべての良いことは、光の父から下りてくるし、光の父には変化も、変化の翳りもない。本当の神の精霊は、人の心にある。かれは、すべての人間が兄弟となることを意図している。人間が神を探り始めるとき、それは、神が人間を見つけ、また人間が神についての知識を求めているという証拠である。我々は、神の中に生き、神は我々の中に宿る。

131:10.5 (1454.2)「私は、神が、すべての私の民の父であるということを信じることにもはや満足しない。これからは、神はまた私の父でもあると、私は信じる。つねに私は、真実の精霊の助けを借りて神を崇拝しようとしており、それは、私が本当に神を知るようになったとき、私の援助者である。しかし、まず第一に、私は、地球で神の意志を成す方法を学ぶことにより神崇拝の実行をするつもりである。つまり、神が処遇してもらいたいであろうと私が考えるそのままを、仲間である人間一人一人への扱いに最善をつくすつもりである。そして、肉体でのこの種の人生を送るとき、我々は、神について多くの事を問うかもしれず、神は、仲間への貢献に一層準備できるという我々の心の願いを適える。そして、神の子のこの情愛深い奉仕のすべてが、天の悦び、つまり天の精霊の活動の高度の喜びを受け入れたり経験する我々の能力を拡大する。

131:10.6 (1454.3)「私は、毎日、言語に絶する神からの贈り物に対して感謝をする。私は、人の子等への彼の驚くべき業を称賛する。私にとり神は、全能者、創造者主、権力者、そして恩恵者であるが、何よりもよいことは、彼

は、私の精霊の父であり、神の地上の子として私がいつか神に会いに先に進むということである。私の個人的教師は、神を捜し求めることにより私が神のようになると言った。神への信仰により、私は神と平和に到達した。我々のこの新宗教は、非常に喜びに満ちており、永続する幸福を生む。私は、死ぬまで信心深くあると、そして永遠の命の王冠を必ず受けると確信している。

131:10.7 (1454.4)「私は万事を見分け、良いものを堅く守ることを学んでいる。人からしてもらいたいことは何事であろうとも、私も仲間にそうする。この新たな信仰によって、私は、人が神の息子になるかもしれないということを知っているが、すべての人間が兄弟であるということを立ち止まって考えると、どうかするとそれは、恐怖であるが、しかしそれは、事実であるに違いない。人間の兄弟関係の受け入れを拒否する一方で、神の父性愛をいかにして喜ぶことができるかについて、私には分からない。主の名を呼び求める者は、誰であろうと救われる。もしそれが真実であるならば、すべての者が私の兄弟であるに違いない。

131:10.8 (1454.5)「今後私は、密かに善行をするつもりである。また、一人でいるときに最も多く祈るつもりである。私は、仲間に対して不公平ではないと判断するつもりはない。私は、敵を愛することを学ぶつもりである。私は、神のようであることのこの実践をまだ本当に習得してはいない。これらの他の宗教に神を見るが、より美しく、情愛深く、慈悲深く、個人的で、積極的である方として、私は、『我々の宗教』に神を見い出す。しかし、何よりもこの偉大で荘厳な存在者が、私の精霊的な父であり、私はその子供である。そして、彼のようになるという私の正直な願望以外には、私には、徐々に神を見つけ、永遠に神に仕える方法は他にはない。ついに私には、神、驚異の神のいる宗教があり、そしてかれは、永遠の救済の神である。

論文 132
ローマ滞在

132:0.1 (1455.1) ゴノドが、ローマの支配者ティベリウスへのインドの王子からの挨拶状を携帯したので、2人のインド人とイエスは、ローマ到着後の3日目に彼の前に現れた。気難しい皇帝は、この日は異常に上機嫌で、長い

間、三人組と雑談をした。３人が退席したとき、皇帝は、自分の右に立っている補佐官にイエスに関して述べた。「わしが、あいつの王らしい物腰と優雅な態度を身につけていたら真の皇帝であるんだがなあ、そうだろう。」

132:0.2 (1455.2) ガニドは、ローマ滞在中、都市周辺の興味ある場所の訪問に一定の時間を過ごした。父は、多くの商取引きがあり、息子が自分の大規模な商業の経営管理のふさわしい後継者になるように成長することを望んでおり、少年を実業界に導き入れる時が来たと思った。ローマには多くのインド市民がおり、ゴノドの従業員の一人は、イエスが一日中自分の時間が過ごせるように通事として再々彼に同行するのであった。これは、200万の住民のこの都市を徹底的に知るようになる契機を彼に与えた。政治の、法律の、そして商業の生活の中心地である大広場で、頻繁に彼の姿が見かけられた。かれは、しばしばカピトリウムの丘に登っていき、ジュピター、ユノ、およびミネルヴァに捧げられたこのすばらしい寺院に見入りながら、これらのローマ人が捕われた無知の束縛というものについてつくづく考えた。また、パラティ

ヌスの丘で多くの時間を過ごし、そこには皇帝の住居やアポロの寺院、またギリシアやラテン語の図書館があった。

132:0.3 (1455.3) この時代、ローマ帝国は、南ヨーロッパ、小アジア、シリア、エジプト、北西のアフリカの全てを包括していた。そして、その住民は、東半球のあらゆる国の住民を含んでいた。ユランチアの人間のこの国際的な集合体を研究し、またこれらと交じわるというイエスの願望が、この旅行に同意した主な理由であった。

132:0.4 (1455.4) イエスは、ローマで人間について多くを学んだが、その都市での6カ月の滞在中の多方面にわたる全経験で最も貴重なものは、帝国の首都の宗教指導者との接触であり、また彼等へ与える自分の影響であった。イエスは、　ローマでの最初の1週が終わる前に、キニク学派、ストア学派、密儀宗派、そのうちの特にミースラ派の手応えのある指導者達を捜し求め、知り合った。ユダヤ人が彼の使命を拒絶しそうであったことがイエスにとって明らかであろうとなかろうと、かれは、やがて使者達が、天の王国を公布しにローマに来ることをきわめて

確かに予見した。それ故、使者達の伝達ためのより良い、しかもより確かな受け入れの道を用意するために最も驚くべき方法でとり掛かった。かれは、主要なストア学派から５人、キニク学派から11人、密儀宗派の16人の指導者達を選り抜き、約６ヵ月間をこれらの宗教教師との親密な付き合いで余暇の多くを費やした。そして、かれは、一度として誤りを攻撃したり、あるいは彼等の教えの欠陥にさえ言及なかった。これが、イエスの指導方法であった。イエスは、この真実の高揚が非常に短期間で関連的な誤りを効果的に押し出し、次に彼らの心にあるこの真実を潤色し、また光彩を添えるように彼らが教える真実をそれぞれに選択するのであった。このようにして、イエスに教わったこれらの男女は、初期のキリスト伝導の教えにおいてその後に付加される真実、または類似の真実の認識のために用意ができていた。それは、ローマとその帝国一円におけるキリスト教の急速な普及にその強力な弾みをつけた福音伝道者のこの初期の教えの受理であった。

132:0.5 (1456.1) ローマでイエスに教わった32人の宗教指導者のうち、わずかに２人が、実を結ばなかったという事実を

記すとき、この注目に値いする行為の意味をより理解できる。30人は、ローマのキリスト教創設の重要な人物となり、そのうちの何人かは、主要なミースラ寺院をその都市の最初のキリスト教会に転ずる助力をした。舞台裏から、また19世紀という時に照らし合わせて人間の活動を見る我々は、全ヨーロッパにおけるキリスト教の急速な伝播のための早期の舞台設定における最高価値の3要素を的確に認める。そして、それらは次の通りである。

132:0.6 (1456.2) 1．使徒としてのサイモン・ピーターの選抜と保持

132:0.7 (1456.3) 2．その死がタルソスのシャウールを勝利に導いたステパノとのエルサレムでの会談

132:0.8 (1456.4) 3．ローマと帝国一円における新興宗教の以降の指導のためのこれら30人のローマ人の下準備

132:0.9 (1456.5) ステパノも選抜された30人もいずれも、その名前が、やがて自分達の宗教の教えの主題となるまさにその人物とかつて話したことがあったなどとは、彼等の全経験を通じて、一向に気づかなかった。最初の32人のた

めのイエスの仕事は、完全に私的なものであった。ダマスカスの筆記者は、これらの個人のための働きにおいて、たいていは１人ずつ教え、２人以上というのは稀であり、１度に４人以上とは決して会わなかった。そして、これらの男女は、伝統に束縛されていなかったことから、かれは、宗教教育のためのこの立派な仕事を果たすことができた。彼らは、その後の全ての宗教発展に関し固定的先入観の犠牲者ではなかった。

132:0.10 (1456.6) ローマにいたピーター、ポール、およびキリスト教師らは、自分達に先行し、また、彼らが新しい福音と共に来るための道をそれほど明らかに (彼らは、無意識に思ったが)準備したダマスカスのこの筆記者に関して数年間にわたり幾度となく聞かされた。ポールは、ダマスカスのこの筆記者の身元を決して推測することはなかったが、自分の死の前の短い期間、容姿記述の類似性を理由に、「アンチオケの天幕職人」が、「ダマスカスの筆記者」でもあったという結論に達したのであった。ある時、ローマで説教している時、サイモン・ピーターは、ダマスカスの筆記者の記述を聞いて、この人物がイエスであったかもしれないと推量したが、あるじは、ロ

ーマに行ったことがないとよく知っていたので(彼がそのように考えた)、すぐにその考えを退けた。

1. 真の価値

132:1.1 (1456.7) イエスがローマ滞在中の早期、終夜談話をしたのは、ストア学派の指導者アンガモンとであった。この男性は、後にポールの親友となり、ローマのキリスト教会の強い支持者の一人であることが分かった。イエスがアンガモンに教えた要旨は、現代の言い回しで次のようなものであった。

132:1.2 (1457.1) 真の価値基準は、精霊界において、また永遠の真理の神性の水準で探されなければならない。上昇者にとり、すべての下級の標準と物質的標準は、一時的であり、部分的であり、しかも劣ると認識されなければならない。科学者は、科学者として物質的な事実の関連性の発見に限られている。厳密に言って、実利主義者または理想主義者のいずれかであると断言する権利は、彼にはない、なぜなら、そうすることにより、態度のいかなる、そしてすべての主張が、哲学のまさしく本質そのも

のであるがゆえに、物の科学者の態度を捨て去ることになる。

132:1.3 (1457.2) 人類の道徳的な洞察と人類の精霊的な達成が釣りあって増大しない限り、純粋に物質的文化の無制限な進歩は、とどのつまり文明への脅威となるかもしれない。純粋に物質的な科学は、それ自体の中にすべての科学的な努力の破壊への潜在的種子を匿っている。というのは、まさしくこの態度こそが、その道徳価値の感覚を捨て、その到達という精霊的な目標を否認した文明というものの究極の崩壊の前兆となるからである。

132:1.4 (1457.3) 物質科学者と極端な理想主義者は、常に対立するように運命づけられている。これは、高い道徳的価値と精霊的試練の水準の共通標準を併せ持つそれらの科学者達や理想主義者達には当てはまらない。あらゆる時代に科学者と宗教家は、人間の要求に係わる法廷において自分達は裁判にかけられていると気づかなければならない。彼らは、人間の進歩のための奉仕への高められた献身により自分達の途切れない生存を正当化するように勇敢に努力する傍ら、自分たちの間のすべての戦争を避け

ねばならない。いかなる時代のいわゆる科学、あるいは宗教が誤っているならば、それは、より本当の、またよりふさわしい理法の物質科学、あるいは精霊的宗教の出現以前に、その活動を浄化するか、または消え去らねばならない。

2. 善と悪

132:2.1 (1457.4) マーズスは、ローマのキニク学派の定評ある指導者であり、ダマスカスの筆記者の親友となった。毎日毎日、かれは、イエスと会話し、来る夜も来る夜もイエスの高邁な教えに耳を傾けた。マーズスとのより重要な議論の中でもこの誠実なキニク主義者の質問に答えるために意図されたものが、善と悪に関するものであった。イエスの要旨は、20世紀の言い回しで以下のようなものであった。

132:2.2 (1457.5) 兄弟よ、善と悪は、単に観察可能な宇宙を人間が理解する際の相対的な水準を象徴する言葉にすぎない。人は、倫理的に怠惰であり、社会的に無関心であるならば、人間の善の基準として現在の社会慣習を受け入れることができる。精霊的に怠惰で、道徳的に非進歩的

であるならば、自身の善の標準として同時代人の宗教慣習と伝統を取り入れてもかまわない。しかし、時を生き残り、永遠へと羽化する魂は、天の父が人の心の中に宿るために送った神精により確立される精霊的基準の真の価値で彼らが測定されたように、善と悪の間における生きた、しかも本人の選択をしなければならない。この宿る精霊は、人格生存の基準である。

132:2.3 (1457.6) 真実と同様に、善は、つねに相対的であり、絶えず悪と対比される。それは、人間の進化している魂が、永遠の生存に不可欠な選択のこれらの個人的決定を可能にする善と真理の特性の識別である。

132:2.4 (1458.1) 科学的指図、社会慣習、および宗教教義に論理的に従う精霊的に盲目の個人は、自身の道徳的な自由を犠牲にし、かつ精霊的な自由を失うという由々しい危険にさらされている。そのような魂は、知的なオウム、社会的ロボット、および宗教権威への奴隷になる運命にある。

132:2.5 (1458.2) 善は、道徳的な自己実現と精霊的な人格達成—内在する調整者の発見とそれとの一体感—の拡大する自

由の新たな段階へ発展している。美への認識を高め、道徳的な意志を増大し、真理の洞察力を強化し、仲間を愛し貢献する能力を拡大し、精神的理想を高め、時間に生きる人間の最高の動機と内在する調整者の不朽の計画を統一するならば、経験というものは、良くあり、そのすべてが、父の意志をなすという増加された願望に直接導き、それにより、神を見つけ、さらに彼に似るようにという神性の情熱を促進する。

132:2.6 (1458.3) 生物発展の宇宙段階を昇るにつれ、人は、自身の善・経験と真理・認識のための完全に釣り合って増加する善と減少する悪があることを理解するであろう。上昇する人間の魂が最終的な精霊水準に到達するまでは、誤りを受け入れたり、あるいは悪を経験する能力は、完全には失われないであろう。

132:2.7 (1458.4) 善は、生きており、相対的で、常に前進し、つねに個人の経験であり、真と美の認識と相関している。善は、人間の経験において、否定的相対物—潜在的悪の影—と対比されなければならない精霊的な水準の肯定的な真実-価値の認識に見られる。

132:2.8 (1458.5) 君が楽園段階に達するまで、善は、常に所有というよりも探求ということであり、到達の経験というよりも目標ということである。しかし、人は、正義を渇望する時でさえ、人の善の部分的到達における増加する満足感を経験する。世界の善と悪の存在は、存在のそれ自体の確証であり、人間の道徳意志、すなわち人格の現実である。このようにして、それは、これらの価値を識別し、また、どちらかを選ぶこともできる。

132:2.9 (1458.6) 楽園到達までには、自身を真の精霊価値と同一視のための上昇する死すべき運命にある者の能力は、完全な命の光の獲得達成における結果として、甚だ拡大される。楽園の無限の支配者からの神性の光の鋭い光輝に照らし出される時、そのような完成された精霊の人格は、そのような正義の精霊が、潜在的悪のいかなる否定的な影も投げかけるという余地をいささかもとどめないほどに、真、美、善、の確かで最高の特質と統合され、完全に、神々しく、精霊的になる。善は、すべてのそのような精霊的人格においては、もはや部分的ではなく、対照的であり、比較的である。それは、神のように完全

となり、精霊的に充実された。それは、崇高なるものの純粋さと完成に接近する。

132:2.10 (1458.7) 悪の可能性は、その現実性ではなく、道徳的な選択が必要である。影は、ただ単に相対的に本当である。実際の悪は、個人の経験として必要ではない。潜在的悪は、精霊的な発達の下級の段階において道徳的な進歩の領域の決定刺激物として等しく働く。道徳的な心が悪をその選択とする場合にだけ、悪は、個人の経験の現実となる。

3. 真理と信仰

132:3.1 (1459.1) ナボンは、ギリシア系ユダヤ人で、ローマの主だった密儀主義、ミースラ派の指導者の中で傑出していた。ミースラ教のこの高僧がダマスカスの筆記者と多く談合をした中で、かれは、ある晩の二人の間での真理と信仰の議論に何よりも永久に影響を受けた。ナボンは、イエスを転向させようと考えていたし、またイエスにミースラ教師としてパレスチナに戻ることさえ仄めかした。ナボンは、イエスが王国に関する福音への初期の転向者の一人になるように彼に準備させているとは少しも

気づいていなかった。現代の言い回しに置き換えて、イエスの教えの骨子は、次の通りであった。

132:3.2 (1459.2) 真理は、生きることだけによって言葉で定義することはできない。真理は、つねに知識以上のものである。知識は、観察されるものに関係するが、真理は、知恵と調和し、また人間の経験のような、はかれない物を、精霊的かつ生きた現実でさえ、受け入れるという点において純粋に物質的な段階を超越する。知識は科学から生まれる。叡知は真の哲学から。真理は、精神的生活における宗教経験から。知識は事実に対処する。叡知は関係に。真実は現実価値に。

132:3.3 (1459.3) 人は、生活の進歩的な闘いに適応する際、精神的に怠惰であり、未知をこの上もなく恐れており、科学を結晶化させ、哲学を定式化し、真実を教義化する傾向がある。自然の人間は、考える習慣と生活技術の変化の開始が、緩やかである。

132:3.4 (1459.4) 明らかにされた真理、つまり個人的に発見された真理は、人間の魂の最高の喜びである。それは、物質的な心と内在する精霊の共同の創造である。この真実へ

の洞察力のある、美を愛好する魂の永遠の救済は、父の意志を為し、神を見つけ、彼のようになる目的に一心に導く善に対する切望と熱望により保証される。対立は、真の知識と真理の間には決して存在しない。知識と人間の信念、、物質的な発見あるいは精霊の発達の新事実に直面することに対する恐怖に支配されている偏見に彩られ、恐怖に歪んだ信念との間に、対立はあるかもしれない。

132:3.5 (1459.5) しかし、真理は、信仰の実践なくしては決して人間の所有物とはなり得ない。人の思考、叡知、倫理、および理想が、彼の信仰、つまり崇高な望みよりも高く上昇しないのであるから、これは真実である。そして、そのような真の信仰すべては、深遠な回顧、誠実な自己批判、妥協のない道徳意識に基づく。信仰は、精霊化された創造性豊かな想像力の鼓舞である。

132:3.6 (1459.6) 信仰というものは、人の心に生き、永久生存の可能性をもつ神性の火花、すなわち不滅の胚芽の超人的な活動を放つために機能する。植物と動物は、1世代から別の同分子へと伝える方法により時間の中で生き残

る。人間の魂(人格)は、この内在する神格の火花との同一性関係により人間の死を生き残る。それは、不滅であり、人間の人格が進歩的な宇宙存在の継続的でより高い段階へと恒久化するために機能する。人間の魂の隠された種子は、不滅の魂である。魂の２世代目は、精霊的、かつ前進する生存の人格顕現の継承の最初のものであり、それは、その存在の根源、全存在の人格の根源、すなわち神、宇宙なる父に到達するときにだけ終える。

132:3.7 (1459.7) 生命は、続く—生き残る—なぜならそれは、宇宙機能、神を知る任務、があるので。人の魂を起動する信仰は、運命のこの目標達成を中止することはできない。この神性の目標を一度達成すると、神のように—永遠の—なっているので、決して終わることはできない。

132:3.8 (1460.1) 精霊的進化とは、悪の可能性に伴う同等であり、累進的な善の減退の増加し、かつ自発的な選択の経験である。善のための選択の最終的な達成と真理評価のための完成した能力の到達を伴って、正義が潜在的悪の概念にさえ出現する可能性を永遠に禁止する美と神聖の完成が生まれる。そのような神を知る魂は、神性の善の

それほどまでに高い精霊的段階で機能するとき、いかなる悪の疑いの影も投げかけはしない。

132:3.9 (1460.2) 宇宙なる父のこの不滅で内在する精霊の火花との同一性を果たそうとする魂ごとに、人の心の楽園からの精霊の存在は、神性進行における永遠存在の啓示の約束と信仰の誓約を構成する。

132:3.10 (1460.3) 宇宙進歩は、それが、自己理解とそれに伴う任意の克己のさらに高い段階の進歩的な到達に関連づけられるので、人格の自由を増加することにより特徴づけられる。精霊的克己の完全性への到達は、宇宙の自由と個人の自由の完全さに相等しい。信仰は、そのように広大な宇宙における人の初期での方位決定の際の混乱の真っ只中において人の魂を育み、擁護しており、一方、祈りは、創造的な想像力の様々な閃きのすばらしい統一する者の内在し、関連する神性存在の精霊の理想とを同一化しようとする魂の信仰の衝動となる。

132:3.11 (1460.4) ナボンは、イエスとの対談の度に、これらの言葉に大いに感銘を受けた。これらの真理は、ナボンの

心の中で燃え続け、イエスの福音の後に到来する伝道者にとっての大きな援助であった。

4. 個人的な奉仕活動

132:4.1 (1460.5) ローマ滞在中イエスは、やがて来る王国で将来の弟子となる男女に準備させるこの仕事に自分のすべての閑暇を捧げたというわけではなかった。かれは、世界で最大であり、最も国際的なこの都市に生きる民族と階級のすべての人間に関する詳細な知識獲得のために、多くの時間を過ごした。これらの多数の人間とのそれぞれの接触において、イエスには二重の目的があった。かれは、生身で生きている生活への彼らの対応を学ぶことを望んだし、また、その人生をより豊かでより価値あるものにするために何かを言うか、行なうつもりでいた。この数週間の彼の宗教的な教えは、12人の師として、また民衆への説教者としてその後の人生を特徴づけたものとはいささかも異なるものではなかった。

132:4.2 (1460.6) その伝言の要旨は、いつも次の通りであった。人がこの同じ愛の神の信仰の息子であるという朗報と合わせて、天の父の愛の事実とその慈悲の真実。イエスの

社会的接触の常套手段は、彼等への質問で人々を打ち解けさせ、自分との会話に向かわせることであった。談話は、通常彼らへの質問から始まり、彼らのイエスへの質問で終わるのであった。イエスは、質問をしたり、答えたりすることによっても、等しく教育に熟達していた。原則として、彼がよく教えた者達に対しては、控え目に言った。彼の個人的貢献からもっとも恩恵を受けた者達は、同情的で理解ある聞き手に、またそれ以上の人物に魂の重荷をおろす機会に多大の安心を得ることになる、負担過重の、心許ない、打ちしおれた者達であった。そして、これらの調整不十分な人間が、イエスに彼らの問題に関して話すとき、かれは、現下の安らぎと即座の慰めの言葉を口にすることを怠らなかったとはいえ、現実問題の解決に実用的かつ即座に役立つ提案をつねに示すことができるのであった。そして、かれは、変わることなく、これらの苦しむ者に神の愛について話し、あらゆる手段で、彼らはこの天にいるやさしい父の子であるという情報を伝えるのであった。

132:4.3 (1461.1) この様に、ローマでの滞在中、イエスは、市の500人以上の人間との慈愛深く向上的な個人的交流を得

た。このようにして、かれは、エルサレムでも、アレキサンドリアにおいてでさえも決して得ることのできなかった人類の異なる人種についての知識を得た。イエスは、地上の人生における同様の期間に比較し、常にこの６カ月を最も豊かで最も教育的なものの1つと見なした。

132:4.4 (1461.2) 予測されたかもしれないように、何らかの業務、または、しばしば教育、改革、または宗教運動の何らかの事業のために彼の尽力を手に入れようと望む多数の人々が、そのような万能かつ積極な人物に働き掛けることなく、彼は、６カ月間世界の大都会で機能しないでいるはずはなかった。10回以上ものそのような申し入れがあり、かれは、その都度、適切な言葉で、もしくは何らかの親切な奉仕で精神的品位の高まる何らかの考えを与えるための好機として利用した。イエスは、いろいろな人々のために事を為すということ—小事さえも—が、とても好きであった。

132:4.5 (1461.3) かれは、政治や政治手腕について元老院議員と話し、イエスとのこの1つの接触が、この立法者に強い

印象を与え、政府が人々を支配し、食べさせるという考えから、民衆が政府を支えるという考えに同僚達を説得しようと虚しく残りの人生を費やしてしまった。イエスは、ある晩、裕福な奴隷所有者と過ごし、神の息子としての人間について話すと、翌日、この男クラウディウスは、117人の奴隷を自由にした。イエスは、ギリシア人の医師との夕食に訪れた。患者達には肉体があると同様に心と魂があるということを話したところ、この有能な医者は、さらに同胞により行き届く奉仕を試みるようになった。イエスは、あらゆる職業の様々なろ人と話した。彼がローマで訪問しなかった唯一の場所は、公衆浴場であった。かれは、広まった性的混乱のため、友人達との風呂への同伴を拒んだ。

132:4.6 (1461.4) 彼等がティベリス川に沿いに歩いたとき、イエスは、ローマ兵に言った。「手と同様に心も勇敢であれ。思いきり正義を為し、慈悲を示すほどに寛大であれ。上司に従うように、下級の本質が上級の本質に従うよう強いるように。善をあがめ、真理を賞賛せよ。醜悪のかわりに美を選ぶように。全心で仲間を愛し、神に手

を差し出すように努めよ、なぜならば、神は君の天国の父であるから。」

132:4.7 (1461.5) かれは、公開広場で演説者に言った。「きみの雄弁さは、気持ちがよく、きみの論理は、賞賛に値し、きみの声は快いが、きみの教えは真実にはほど遠い。君が、精霊の父として神を知ることに奮い立つ満足を味わうことができさえすれば、暗黒の束縛と無知の奴隷制度から君の仲間を解放するために演説の威力を駆使できるかもしれないであろうに。」これは、ピーターがローマで説教するのを聞き、その後、かれの後継者になったマーカスであった。サイモン・ピーターが磔刑にされたとき、ローマの迫害者に逆らい、大胆に新しい福音を説教し続けたのは、この男であった。

132:4.8 (1462.1) 不正に起訴された貧しい男に会い、イエスは、彼と共に行政長官の前に行き、彼のために出頭する特別許可を受け、素晴らしい演説をした。「正義は、国を偉大にする。国が偉大であればあるほど、不正行為が、その最もみすぼらしい市民にさえ起こらないようにするであろう。法廷で金銭や勢力を持つ者だけが正義を保証す

ることができるとき、いかなる国といえども禍なるかな。有罪者を懲罰するだけでなく、無実の者を放免することは、行政長官の神聖な責務である。国の生存は、法廷の不偏さ、公正さ、健全性にかかっている。ちょうど真の宗教が慈悲に基づいているように、民政は、正義に基づいている。」裁判官は、再審理をし、証拠が厳密に再調査されると、かれはその囚人を釈放した。これらの直接の奉仕活動に携わる日々におけるイエスの全活動の中で、これが、公に姿を見せたことに最も近いものであった。

5. 富豪への助言

132:5.1 (1462.2) アンガモンに紹介されていたローマ市民でストア派のある富豪は、イエスの教えに大いに関心をもつようになった。多くの親密な談話の後、この裕福な市民は、もし富があったらそれで何をするかをイエスに尋ねた。そこで、イエスは、「私なら、物質的な人生の充実のためには物質的な富を与えるであろう。知的生活の向上、社会生活の昂揚、精霊生活の前進のためにはそれぞれ知識、叡知、精霊的奉仕を与えるように。私は、次とそれに続く世代の利益と昂揚のために、1世代の資源の

賢明で有能な受託人として物質的な富を管理するであろう。」と答えた。

132:5.2 (1462.3) しかし、金持ちは、イエスの答えに完全には満足しなかった。敢えて重ねて尋ねた。「しかし、あなたは、私の立場のような者は、その富で何をすべきだと思われますか。その富を保つべきであるか、または与えてしまうべきでしょうか。」彼が、神への忠誠と人々への義務に関して一層の真実を知ることを本当に望んでいると知覚したとき、イエスは、さらに答えて言った。「良き友よ、君が、誠実な叡知の探求者であり、正直な真理の愛好者であると見分ける。従って、私は、富の責任に関する君の問題の解決に対し、私の考えの呈示をしようと思う。助言を求められたのでするが、この忠告を与えるに当たり、私は、他のどの金持ちの富にも関係がない。すなわち、助言を君にだけ、そして個人的な指導のために忠告を提供しようとしているのである。君が、富を本当に信託として望むならば、君の蓄積された富の賢明で有能な執事になることを誠に願望するならば、その富の出所を次のように分析することをぜひ助言したい。この富がどこから来たのかを自身に問い、正直な答えを

見つけるよう最善をつくしなさい。そして、莫大な財産の出所を検討する助けとして、物質的な富の蓄積に関して次のような異なる10の方法を心に留めおくことを提案したい。

132:5.3 (1462.4) 1. 相続による富—両親や他の先祖からの財産

132:5.4 (1462.5) 2. 発見による富—母なる大地の未開墾の資源から得た財産

132:5.5 (1462.6) 3. 通商による富—物的商品の物々交換における正当な利益として得た財産

132:5.6 (1462.7) 4. 不当な富—不当な搾取か仲間を奴隷状態にすることで得た財産”

132:5.7 (1463.1) 5. 利子による富—投資された資本が生み出した公平で正当な収益からの収入

132:5.8 (1463.2) 6. 才能による富—人間の心の創造的で発明的な特質の報酬から生じた財産

132:5.9 (1463.3) 7. 偶然による富—仲間の気前のよさ、または生活環境の豊かさからの財産

132:5.10 (1463.4) 8. 盗みによる富—不当、不正直、窃盗、または詐欺により取得された財産

132:5.11 (1463.5) 9. 信託資金—現在または将来何らかの特定の使用のために仲間によって託された財産

132:5.12 (1463.6) 10. 報酬による富—自身の直接の労働から得た財産、心身での日々の尽力による正当な報酬。

132:5.13 (1463.7) そこで友よ、神の前で、そして人に貢献して莫大な財産の誠実で正当な執事でありたいならば、自分の富を大まかにこの10の主要な部門に分割せねばならず、次に、正義、公平さ、公正、および真の実効における賢明で正当な法の解釈に従って、各部分の管理に着手せよ。たとえ、時おり間違えたとしても、天の神は、君を咎めはしないであろうし、疑わしい状況においては、人生の不幸な情況で苦しむ犠牲者の苦悩への慈悲深くて寡欲な思いやりの側に立たれるであろう。物質的状況の公平さと正義にあからさまな疑いがある際は、必要としている者に、受けるに値いしない艱難の不運に苦しむ者に目をかけなさい。」

132:5.14 (1463.8) 数時間にわたりこれらの事柄を論議した後、イエスは、さらに詳細な指示を求める富豪の要求に応じて詳しく忠告を拡大し続けた。その要旨は、「富に対する君の態度に関して更なる提案を提供する傍ら、私の助言が、君と君の個人的な指導のためにだけ与えられたものとして受け取るよう諫める。探求心旺盛の友人としての君と自分にだけ話す。他の富める者がその富をいかように考えるべきか、君が独裁者とならないことを厳命する。君に助言しよう。

132:5.15 (1463.9) 1. 相続による富の執事として、その出所を考慮すべきである。現世代の恩恵のために公正な代価を差し引いた後、君は、続く世代への正統の富の正直な移行において過去の世代を代表するという道徳的責任の下にいる。しかし、先祖による富の不正な蓄積に関係するいかなる不正も恒久化させる義務はない。相続した富のいかなる部分といえども詐欺や不正によるものと判明したとき、自己の正義、寛大さ、賠償への信念に従い払い戻しをしてもよい。正当に引き継いだ富の残りは、公明正大に使ってもよいし、安全に世代から世代への受託人として移行してもよい。賢明な識別と適正な判断で、後継者

に対する富の遺贈物に関する君の決定を書き記すべきである。

132:5.16 (1463.10) 2. 発見の結果としての富を享楽する者は誰であろうとも、1個人は、地球に短期間だけ住むことができるのだということを心すべきである。それ故、あらん限りの同胞の最大数の可能性によるこの発見の共有のための適切な準備をするべきである。発見者は、発見の努力に対し、すべての報酬が否定されるべきではないが、蔵匿された自然資源の発見から得たすべての利点と天恵を身勝手に主張しようとつけこむべきでもない。

132:5.17 (1464.1) 3. 人間が、貿易や物々交換により世界で事業を行うことを選ぶ限り、公明正大で合法の利益を得る資格がある。すべての商人が、その活動に対する賃金の受け取りに値する。商人は、その手間賃を受ける権利がある。世界の組織化された経済活動における貿易の公正さと仲間へのそれ相応の正直な扱いは、異なる多くの種類の富の利益を生み出し、これらのすべての富の源が、正義、清廉、公正さの最も高い原則に基づいて判断されなければならない。清廉な商人は、同様の取り引きで相手

業者に喜んで供与するのと同じ利益を取るのをためらうべきでない。商取り引きが大規模に行われるとき、この種の富は、個々に稼いだ収入とは同じではないが、同時に、そのような正直に蓄積された富は、その後にくる富の分配の際、その所有者に相当の分け前分の発言力を与える。

132:5.18 (1464.2) 4. 神を知り、神性の意志を為そうとする人間は、富の抑圧に身を屈して従事することはできない。気高い者は、生身の同胞を奴隷状態、または不当な搾取によって富を蓄積したり、富による権力を築いたりしないであろう。富は、圧迫された人間の汗に由来するとき、道徳的な呪詛であり、精神的恥辱である。そのような富のすべては、このようにして、強奪されたそれらの者へ、または、それ等の子へ、それ等の子の子へと還元されるべきである。永続する文明は、労働者の手間賃を騙し取る実践に基づいて築きあげることはできない。

132:5.19 (1464.3) 5. 清廉な富は、利息を得る資格がある。人が貸借する限り、貸した元金が合法な富であるならば、正当な利息の回収が許される。利息の要求以前に、まず自分

の元金を浄化せよ。暴利の営業に身を落とすほど狭量になったり、欲深くなってはいけない。奮闘している仲間に対し、不正に有利な立場をとるような金力を用いるほどに決して利己的になってはいけない。財政的困窮にいる兄弟から高利を取るような誘惑に負けてはいけない。

132:5.20 (1464.4) 6. 才能の飛躍により富を手に入れるようなことがあるならば、つまり財産が独創的な資質からくるものであれば、そのような報酬の不当な分け前を主張してはならない。才能は、何かをその先祖と子孫双方に負っているのである。それは、自分が働き、発見を成し遂げたのは、人々の間にあって普通の人間としてであるということにも、それは、気づくべきである。才能から富のすべての増加分を奪うことは、等しく不当であろう。人間が富の公正分配に関するこのすべての問題に原則や規定を確立することは、到底不可能であろう。まず君は、人を自分の兄弟であると気づかねばならない。そして、人に施すであろうことを、君がして欲しいと正直に望むならば、正義、清廉、公正の平凡な命令は、経済報酬と社会正義のあらゆる再発問題の正当で公平な解決に君を導くであろう。

132:5.21 (1464.5) 7. 運用で得られる正当かつ合法の報酬を除いては、誰も時間と機会がもたらす富に対する所有権を主張すべきではない。偶然の富は、人の社会的、もしくは経済集団の利益のために費やされる信託のように見なされるべきである。そのような富の持ち主は、そのような不労による資産の賢明かつ有効な分配の決断において主要な発言権が与えられるべきである。文明人は、必ずしもすべてを直接かつ私的所有物として支配すると見ているというわけではない。

132:5.22 (1465.1) 8. 財産のいずれかの部分が故意に詐欺によって得られたとしたならば、富の何にせよ不正直な実践か不公平な手段によって蓄積されたとしたら、富が、仲間との不当な商取引の結果であるとしたら、これらのすべての不正な利得を然るべき所有者に即座に還元せよ。完全な代償をし、こうして、すべての不正直な富を浄化しなさい。

132:5.23 (1465.2) 9. 他者の利益のための1個人の富の信託職務は、厳粛かつ神聖な責務である。そのような信託で危険を犯したり、またそれを危険にさらしてはいけない。す

べての正直な人間が認めるもののみを信託から自分のものとしなさい。

132:5.24 (1465.3) 10. 自身の精神的、かつ肉体的努力—その仕事が公平と公正さで行われてきたのであるならば—からくる報酬を代表する財産のその部分は、本当に、君自身のものである。もしこの権利の行使が他の人間へ害を及ぼさないと君が思うなら、誰もそのような富を保持し、使用する君の権利を否定することはできない。」

132:5.25 (1465.4) イエスが助言を終えたとき、この裕福なローマ人は、長椅子から立ち、その夜の別れを告げるに当たり、このような約束をした。「良き友よ、あなたは、すばらしい知恵と善の人だと見受けます。だから、私は、明日、助言に従って私のすべての富の管理を始めます。」

6. 社会的奉仕活動

132:6.1 (1465.5) ここローマでも、宇宙の創造者が、迷い子を案じる母親の元に連れ帰るのに数時間を費やすという感動的な事件が、起きた。この男の子は、家から遠くさ迷い歩いており、困って泣いているのをイエスが見つけた。

ガニドと図書館に行く途中であったが、二人は、その子供を家に連れ帰ることに専念した。ガニドは、イエスの評言を決して忘れなかった。「ガニドよ、大方の人間は、迷い子のようなものだ。ちょうどこの子供が、家からほんの少しのところにいる時のように、人は、実のところ、安全と保護からほんの短い距離に居る時、恐怖に泣き、悲しみに苦しむことに多くの時間を費やすのである。そして、真実の道を知り、神を知ることの確信を楽しむそれら全ての者達は、生活の満足感を見つける努力において仲間に指導を提供することを義務ではなく、特権であることを尊重すべきである。我々は、子供をその母に連れ戻るこの奉仕をこの上なく楽しまなかったか。同じように、人を神に導く者は、人間の奉仕の最高の満足を経験し、楽しむのである。」その日以後の余生を、ガニドは、家に帰せるかもしれない迷い子等の見張りをずっとしたのであった。

132:6.2 (1465.6) 夫が期せずして死んだ5人の子持ちの未亡人がいた。イエスは、事故で父を失ったことをガニドに話し、ガニドが、食物と衣類を提供するために父親に金を求める一方、二人は、何遍もこの母と子供を慰めに行っ

た。二人は、最年長の少年が家族の世話の手伝いができるような働き口を見つけるまで努力をやめなかった。

132:6.3 (1465.7) その夜、これらの経験談を聞き、ゴノドは、愛想よくイエスに言った。「私の方は、息子を学者か実業家にするつもりですが、あなたの方は、哲学者か博愛家の育成にと取り掛かるのですね。」そこで、イエスは、微笑みながら返答した。「恐らく、我々は、その４通りに仕立て上げるだろう。そうすれば、かれは、人生において４倍の満足感を味わうことができる。人間の美しい音調を聞き分ける耳で1つの代わりに4つの音色を聴くことができるではないか。」その時、ゴノドが言った。「あなたは、本当に哲学者であると認めます。未来の世代のために本を書かなければなりません。」そこでイエスが答えた。「本ではない—私の使命はこの世代、そして全世代のために人生を送ることである。私は、、、。」しかし、かれは中止した。「息子よ、もう就寝の時間である。」とガニドに言って。

7. ローマ周辺の旅

132:7.1 (1466.1) イエス、ゴノド、ガナドは、ローマから周辺領域内の興味ある地点へと遠く離れて5度旅をした。北イタリアの湖への訪問の際、イエスは、神を知ることを望んでいない者に神について教えることは無理であることに関してガニドと長く話した。湖までの旅の最中、たまたま考えの足りない異教徒に出会い、イエスが、その男を自然に精霊的な問いかけの議論へと導く会話につかせる慣例に従わなかったことに、ガニドは驚いた。なぜこの異教徒へそれほどまでに小さい関心しか示さないかを師に尋ねると、イエスが答えた。

132:7.2 (1466.2) 「ガニド、あの男は真実に飢えていなかった。自分自身に不満ではなかった。助けを求める用意ができていなかったし、心の目は、魂のための光を受けるために開いてはいなかった。あの男には救済の収穫のための機が熟していなかった。かれは、　人生の試練と困難に備えるための叡知とより高い学問の受け入れに準備するためのより多くの時間を必要としている。または、我々と同居させることができるならば、我々の人生を通じて彼に天国の父を見せることができるかもしれないし、その結果、かれは、我々の父について質すことを余儀なく

されるほどに、神の息子として生きる我々に引きつけられるようになるであろう。神を捜し求めない者に神を示すことはできない。気のすすまない者達を救済の喜びに導くことはできない。人は、生活経験の結果として真実に飢えるようにならなければならない、または別の人間がそのような仲間を天の父へと導く手段として行動する前に、神性の父と知り合っている者達の人生との接触の結果として神を知りたいと望まなければならない。神を知っているならば、地上での我々の真の本務は、父が彼そのものの明示を可能にさせるほどに生きることである。このようにして、すべての神を探して求めている者は、父を目にし、また我々の人生でこのような振舞の神についてさらに探し当てようとするに当たり我々の助力を求めるであろう。」

132:7.3 (1466.3) イエスが、まる一日、父と息子の両者と仏教について話をしたのは、スイスへの旅の山中でのことであった。ガニドは、イエスに何回も仏陀に関する率直な質問をしたのだが、いつもやや回避的な回答しか得られなかった。今度は、父が、イエスに息子の面前で仏陀に関する直接の質問をし、率直な回答を得た。ゴノドが言っ

た。「あなたが仏陀について知っていることを本当に知りたいのです。」そこで、イエスが答えた。

132:7.4 (1466.4) 「君の仏陀は、君の仏教よりもはるかに勝っていた。仏陀は、偉人で、その人民にとって予言者でさえあったが、彼は親のない予言者であった。私が意味するところは、かれは、早くに精霊の父、天の父を見失った、ということである。彼の経験は痛ましかった。かれは、神なしで、神の使者として生き、教えようとした。仏陀は、救済の船を安全な港の間近まで、人間救済の安息地の入り口の間近まで誘導した。そして、そこで、不完全な航行図のせいで、良い船は座礁した。そこで、これらの多くの世代が、静止し、ほぼ絶望的に足止めされたままでいる。君の民族の多くが、幾星霜もの間、その上に留まっていることよ。休息の安全水域の声の届く範囲内に生きてはいるが、良い仏陀の高貴な船が港のすぐ外で坐礁の不運に遭ったので、彼らは、入るのを拒否している。そして仏教徒等は、予言者の哲学的技巧を放棄し、高貴な精神を掌握しない限り、この港に決して入らないであろう。君の民族が、仏陀の精神に忠実であり続

けていたならば、君は、ずっと以前に精霊の平静、魂の休息、救済の保証の港に入っていたことであろうに。

132:7.5 (1467.1) いいか、ゴノド、仏陀は、精霊では神を知っていたが、心での発見では明確に失敗をした。ユダヤ人は心で神を発見したが、精霊ではあまり知らなかった。今日、仏教徒は、神なしに哲学でもがいており、これに反し我が民族は、人生と自由の救済哲学なしに痛ましいほどに神への怖れの俘となっている。君には神なしで哲学がある。ユダヤ人には神がいるが、神に関係づけられた生きるための哲学なしでいる。精霊として、父としての神の想像に失敗し、仏陀は、自身の教えにおいて、民族を変え、国を高めるつもりならば宗教が保持しなければならないところの道徳的な活力と精霊的な機動力の提供に失敗した。

132:7.6 (1467.2) その時ガニドが、強調して言った。「先生、あなたと私とで新しい宗教を作りましょう。インドにとって充分に立派なもの、ローマにとって充分に大きいもの、そうすれば、おそらくユダヤ人のヤハウェと交代できるかもしれない。」そこで、イエスが返答した。「ガ

ニド、宗教というものは作られない。人の宗教は、長い期間にわたり発展するが、神の顕示は、仲間へ神を明らかにする人間の生活において地球を瞬間的に照らし出す。」しかし、彼らは、この予言的な言葉の意味を理解しなかった。

132:7.7 (1467.3) その夜、退座した後、ガニドは眠ることができなかった。長い間父と話してようやく言った。「だから、父上、私は、時々ジャシュアが予言者だと思います。」そこで父は、「息子よ、他にもいるよ。」と眠たげに答えるだけであった。

132:7.8 (1467.4) この日以来、ガニドは、余生を自身の宗教を発展させ続けた。かれは、イエスの寛大さ、公正さ、忍耐に甚だしく感動した。哲学と宗教のすべての議論において、この若者は、憤りの感情、若しくは敵意の反応など決して経験しなかった。

132:7.9 (1467.5) 宇宙の創造者に新興宗教を提唱しているインドの若者のこの光景を目にすることは、天の智者達にとっては何という光景であることか。そして、青年はそれを知らなかったのだが、彼らは、直ぐにその場で新たで、

永遠の宗教—救済のこの新しい方法、イエスを通しての、またイエスの中の神の顕示—を作っていたのであった。若者が最もしたかった事を実際には無意識のうちにしていたということ。そして、それは、これまでにそうであったし、その結果、現在、未来もそうである。精霊的な教えと、心から、また非利己的に先導したり、そうあることを啓発する人間の想像力は、父の意志を神のように行う人間の献身度合に従い、はっきりと創造的になる。人が神と協力して行くとき、すばらしいことが起こるかもしれないし、起こるのである。

論文 133
ローマからの帰還

133:0.1 (1468.1) ローマを去る準備をしているとき、イエスは友人の誰にも別れを告げなかった。ダマスカスの筆記者は、前触れなしにローマに現れ、同様に姿を消した。彼を知り愛していた人々が、再び彼に会う望みを諦めるまでには、まる1年かかった。２年目が終わる前、彼を知る小集団は、イエスの教えの共通の関心事と彼との楽しい時代の思い出を仲立ちとして互いに惹かれていることに気づいた。そして、ストア派、キニク派、密儀主義の

小集団は、これらの不規則で非公式の会合をキリスト教の最初の伝道者がローマに出現する直前まで持ち続けた。

133:0.2 (1468.2) ゴノドとガニドは、タレンツムへの荷車ですべての所有物を送るほどに、アレキサンドリアとローマで多量に物品を購入し、一方３人の旅行者は、ゆっくりとイタリア中を歩き、大きなアッピア街道へと歩いた。この旅行で、彼らは、いろいろな人間に遭遇した。多くの高貴なローマ市民とギリシアの移住民が、この道路に沿いに住んでいたが、相当数の下位の奴隷の子孫が、すでに出現し始めていた。

133:0.3 (1468.3) ある日、昼食で休息している間、タレンツムへの半道ほどで、ガニドは、インドのカースト制度に関するイエスの考えをじかに質問した。イエスは言った。「人間は、各々が、あらゆる点において異なるが、神の前と精霊界では、すべての死すべき者は、相等しい基盤に立っている。神の目には人間の2つの集団しかない。彼の意志を為すことを望む者とそうでない者達と。宇宙が、棲息界に注目するとき、2つの立派な階級について

も同様に明察する。神を知る者とそうでない者と。神を知ることができない者は、いかなる領域の動物の中にでも、動物の一人とみなされる。人類は、物理的、精神的、社会的、職業的、道徳的に見られる異なる能力に応じて適切に多くのまとまりに分割ができる。それらは、、しかし、人間のこの異なる種類が、神の審判の法廷に現れるとき、彼らは、相等しい基盤に立つ。神は本当に人々を差別しない。知的、社会的、道徳的事柄において他と異なる人間の能力と天与の才能の認識から逃がれることはできないが、神の前で崇拝のために集まるとき、人間の精霊的なきょうだい関係をそのように区別をすべきではない。」

1. 慈悲と正義

133:1.1 (1468.4) ある日の午後、彼らがタレンツムに近づいたとき、非常におもしろい事件が路傍で起きた。乱暴で弱いもの苛めの少年が、残酷にも小さい少年を攻撃しているのを目撃した。イエスは、襲われた少年の助太刀へと急いだ。彼を救ったとき、イエスは、小さい方が逃げるまで攻撃した者をしっかり掴んでいた。イエスが小さい弱い者いじめを放した瞬間、ガニドは、少年に飛びかか

り、したたかに打ちすえ始めた。ガニドが驚いたことに、イエスは、即座に妨害した。ガニドを押しとどめ、怯えている少年を逃した後に、青年は、楽に息ができるようになるや否や、興奮して言った。「理解できません、先生。慈悲が、小さい方の少年を救うことを義務づけるならば、正義は、悪さをしている大きい方の少年を罰することを要求してはいませんか。」答えてイエスが言った。

133:1.2 (1469.1) 「ガニド、理解できないということは本当であろう。慈悲の奉仕活動は、つねに個人の働き掛けであるが、正義の懲罰は、社会的、政の、または宇宙管理集団の機能である。個人として、私は慈悲を示す恩義がある。私は襲われた少年の救出に行かなければならないし、一貫して攻撃者を抑止するに足る力を行使できるかもしれない。そして、私がしたことは、まさにそれである。私は襲われた若者の救出を成し遂げた。それは、慈悲行為の仕上げであった。それから私は、揉め事に弱い方が逃げるに足りる間、強制的に攻撃者を留めおいた。私は、その後で事件から退いた。私は、攻撃者を裁く役にまわらず、このように彼の動機を審判すること—仲間

への攻撃に至ったことすべてに判決を下すこと—そして、彼の悪行に対する償いとして私の心が命じるかもしれない程度の懲罰を実行することを引き受けなかった。ガニド、慈悲は気前がよいかもしれないが、正義は正確である。君は、二人の人間が適法の要請を満たす懲罰に同意しそうにはないということが認識できないのか。むち打ちを、１人は40 回、別の者は20 回を課し、また他の者は正当な罰として独房監禁を勧めるであろう。この世界でそのような責任は、集団に任されるか、集団の選ばれた代表に与えられるほうが良いと見ることはできないか。宇宙では、判断は、すべての悪行ならびにその動機づけの前例を完全に知っている者に帰属する。文明社会や組織化された宇宙では、裁判は、公平な判断の結果として生じる公正な判決を言い渡すことを前提とし、そして、そのような特権は、世界の司法集団と、全創造の、より上の宇宙の全てを知る管理者達に授けられる。」

133:1.3 (1469.2) 彼らは、慈悲の顕現と処罰の問題に関して何日も話した。そしてガニドは、少なくともある程度は、イエスがなぜ個人の格闘に従事しないかを理解した。しか

し、ガニドは、1つの最後の質問をし、それに対する完全に満足できる答えは決して受けることはなかった。そして、その質問は次の通りであった。「でも先生、より強く、怒りっぽい者が襲いかかり、あなたを滅ぼすと脅かしたならば、どうされますか。防御のためのなんの努力もしないのですか。」楽園の父の愛が宇宙を見物中の例証として彼(イエス)が地球に住んでいるということをガニドに明らかにすることを望まないことから、イエスは、完全にしかも満足のいくように若者の質問に答えることができなかったが、これだけは言った。

133:1.4 (1469.3) 「ガニド、この問題の一部がいかにお前を当惑させるかについてよく理解できる、そこで、その質問に答える努力をするつもりである。まず最初に、私の身に起こるかもしれないすべての攻撃に関し、私は、攻撃者が神の息子—肉体をもつ我が弟—であるかどうかを判断するであろう。もしそのような者が、道徳的判断力と精霊的理性を保持していないと思うならば、私は、攻撃者への結果にかかわらず抵抗のために躊躇なく力の及ぶ限り我が身を守るであろう。しかし、自衛上とは言え、息子としての資格をもつ仲間をこのように強襲はしな

い。つまり、私は、私に対する襲撃に対する判断なしに前もって罰しはしない。私は、あらゆる可能な術策で、彼がそのような攻撃をしないように阻み、思いとどまらせ、またその打ち切りに失敗の際は、攻撃を和らげるための努力をするであろう。ガニド、私は、天の父の加護を絶対に信頼すしている。私は、天の父の意志をすることに捧げている。本当の害が私に及ぶとは思わない。敵が私に加えたいかもしれない何事によっても、私の畢生の仕事が危険にさらされ得るとは思わないし、我々の友人からは誓ってどんな暴力も加えられない。全宇宙が私に友好的である—この全能の真実を、私は、すべての外観にかかわらず、心からの信頼をもって信じている—まったく確信している。」

133:1.5 (1470.1) しかし、ガニドは、完全に満足したというわけではなかった。彼らは何度も、これらの問題について論議したし、イエスは、少年時代の経験を幾つか話し、そのうえ石工の息子ヤコブについても話した。ヤコブが自分をいかにイエス防御ために任じたかを知り、ガニドガ言った。「ああ、分かり始めました。まず第一に、いかなる常人も、あなたのように優しい人を攻撃したくはあ

りません。そのような事をするほどに軽率であったとしても、ちょうどあなたが、だれか困っている人を見かける度に救出に行くように、あなたの援助に飛んで行く他の人間が近くにいることは、全くもって確かです。先生、心では、私は、同意見です。でも、頭では、私がヤコブであったなら、彼らが、あなたは自分を防御しないだろうと考えたから攻撃しようと思った無礼な奴を罰するのを、私は、やはり楽しんだろうと思います。あなたは、他のものを助け、苦難の仲間に貢献して多くの時間を費やしているので、人生の旅路においてかなり無事であると思います—そうですねえ、あなたを守る誰かが、たぶん常に身近にいるでしょう。」そこで、イエスが答えた。「その試練はまだ来ていない。ガニド、それに、その時がきたら、我々は、父の意志に従わねばならない。」そして、それが、若者が、自衛と無抵抗のこの難しい主題について師から引き出し得た全てであった。別の機会に、かれは、組織化された社会は、その正当な委任の遂行において、力の行使のあらゆる権利があるという意見をイエスから得た。

2. タレンツムでの乗船

133:2.1 (1470.2) 船着き場でゆっくりしている間、積荷を降ろすのを待っている間、旅行者等は、ある男がその妻を虐待しているのを見た。習慣通り、イエスは、攻撃を受けている人のために仲裁に入った。かれは、怒っている夫の後ろに歩み寄り、そっと肩を叩いて言った。「もしもし、少し内緒で話しをしてもよろしいか。」立腹している男は、そのような接近に困惑し、寸時の当惑の躊躇の後に吃って言った。「ええ、まあ、はい、何か用ですか。」イエスが彼を脇に導いて、言った。「友よ、私は、何かとんでもない事が君に起こったに違いないと見てとる。それほどまでの強者が、自分の子供の母である妻を、こともあろうに、ここで、皆の目前で攻撃する何事があったのかぜひとも教えてもらいたい。この攻撃に何らかの正当な理由が君にはあるはずだと確信する。あの女は、夫からのそのような扱いを受けるに値する何をしたのか。よく見ると、君は慈悲を示すという願望まではいかないが、私は、君の顔に正義への愛が見えていると思う。道ばたで強盗に攻撃される私を見つけたならば、君は、躊躇なく救出に突進してくるであろうと、私は、はばかりながら言おう。君は、人生でそのような多

くの勇敢なことをしてきたと敢えて言う。さて、友よ、どうしたのか言ってくれ。女が何か不都合をしたのか、あるいは、君が愚かにも取り乱し、軽率に女を襲ったのか。」この男の心を打ったのは、イエスが言った言葉そのものではなく、イエスの所見の締めくくりの際に、彼に与えた親切な表情と同情的な微笑みであった。男は言った。「あなたは、キニクの僧であるとお見受けします。そして、私を引き止めてくれたことに感謝します。家内がとんでもない不都合をした訳ではありません。良い女でありますが、私は人前で私の粗探しをする態度に苛立ち、かっとなるのです。自分の自制の無さを残念に思います。また、何年か前により良い道を教えてくれたあなたの兄弟の一人にした誓いに従って行動するよう努めると約束します。きっと約束します。」

133:2.2 (1471.1) そこで、別れを告げるに当たり、イエスが言った。「兄弟よ、女性が喜んで、しかも自発的にそのような権限を与えない限り、男性には女性に対して如何なる権限もないということを常に覚えていなさい。君の妻は、生涯を通して、君の人生の闘いに助太刀し、子を生み育てる負担のはるかに大きな一端を担うと決めてい

た。だから、子供を身篭もり、生み、保育しなければならない配偶者としての女性に、男性が、この特別な奉仕のお返しとして、与えることのできるその特別な保護を女性が受けるということは公平であるというほかない。男性が妻子に進んで与える情愛深い世話や思い遣りは、その男性の創造的かつ精霊的な自意識のより高い段階への到達の尺度である。君は、男女は、不滅の魂の可能性を所有するように成長する存在体をつくり出す点において神との共同者であるということを知っているか。天の父は、宇宙の子等の聖霊なる母を自分と等しいものとみなしている。君の子供たちの人生において自分達を再生させるという精霊の経験を本当に完全に共有する母でもある伴侶と君の人生とそれに関連するすべてを同等の条件で分け合うことは、神のようである。神が君を愛するように、君が子供たちを愛することができさえすれば、天の父が無限なる聖霊、つまり広大な宇宙のすべての精霊の子供の母を大いに敬い、高めるように、君も妻を愛し、大切にするであろう。」

133:2.3 (1471.2) 船に乗り込むと、彼等は、無言で抱き合って立っている涙の目をした夫婦を振り返った。イエスの男へ

の言い置きの後半を耳にしたゴノドは、一日中それについての思索にふけった。そして、インドに帰国したとき、かれは、自分の家庭の変革を決意した。

133:2.4 (1471.3) ニコーポリスへの旅は快いものであったが、風の具合いが思わしくなく、遅速であった。３人は、ローマでの経験を語り、また、最初にエルサレムで会ってからその身に起きたすべての追憶にふけり、多くの時間を過ごした。ガニドは、個人的な奉仕活動の精神に染まるようになっていた。かれは、船の執事に接近し始めたが、２日目、宗教の水の苦境に陥ると、ジャシュアに助けを求めた。

133:2.5 (1471.4) 彼等は、オーグストゥスが、戦さの前に軍隊と野営をした土地であるこの場所にアクティオンの戦いを記念して「勝利の都」としておよそ50　年前に設立した都市ニコーポリスにおいて数日を過ごした。彼等は、船舶で出会ったユダヤ信仰のギリシア人改宗者ジャラミーの家に泊まった。使徒パウロは、３度目の伝道の旅の途中、同じ家で冬の間ずっとジャラミーの息子と過ごし

た。彼らは、ニコーポリスからローマのアハイア州の首都であるコーリントスへと同じ船で航海をした。

3. コーリントスにて

133:3.1 (1471.5) 彼らがコーリントスに達する頃には、ガニドは、ユダヤ人の宗教にたいへん関心をもつようになっていたことから、ある日、彼らがユダヤの礼拝堂を通りかかったとき、人々が入っていくのを見て、彼がイエスに礼拝に連れていくように頼んでも不思議ではなかった。当日、彼らは、博識のラビの「イスラエルの運命」についての講話を聞き、礼拝の後、この礼拝堂の統治者の長であるクリスポスに会った。彼らは何度となく礼拝に行ったが、主な狙いは、クリスポスに会うことであった。ガニドは、クリスポス、その妻、それと5人の子供がとても好きになった。かれは、ユダヤ人がどう家族生活を送るかを観測することをとても楽しんだ。

133:3.2 (1472.1) ガニドが家庭生活を学んでいる間、イエスは、より良い宗教生活の道をクリスポスに教えていた。イエスは、この前向きなユダヤ人と20　回以上の学習の機会をもった。何年も後に、パウロがまさにこの礼拝堂で説

教していた時、ユダヤ人がパウロの趣意を拒絶し、礼拝堂でさらに説教することを禁止ずることを票決した時、そして、パウロが非ユダヤ人のところへ行った時、クリスポスと全家族は、その新宗教を迎え入れたということ、また、クリスポスは、パウロが後にコーリントスで組織化したキリスト教の主だった擁立者のうちの1人になったということは、驚きに当たらない。

133:3.3 (1472.2) コーリントスで説教した18カ月間、シーラスとティモセオスが後に加わり、パウロは、「インド商人の息子のユダヤ人家庭教師」に教えを受けた他の多くの者に会った。

133:3.4 (1472.3) コーリントスで、彼らは、３大陸からのあらゆる民族の人々に出会った。アレキサンドリアとローマに次いで、それは、地中海帝国の最も世界的な都市であった。この都市には人の注意を引きつける多くのものがあり、ガニドは、海抜およそ600メートルに立つ要塞を訪ねることに決して飽きなかった。かれは、礼拝堂の周辺とクリスポスの家でも多くの余暇を過ごした。かれは、ユダヤ人の家庭での女性の立場に最初は驚かされたが、

のちには魅了された。それは、この若いインド人には意外なことであった。

133:3.5 (1472.4) イエスとガニドは、しばしば別のユダヤ人の敬虔な商人ジュースツスの家の客人となった。その者は、ユダヤの礼拝堂のそばに住んでいた。後に、しばしば使徒パウロは、この家に滞在したとき、インドの若者とユダヤ人の家庭教師とにかかわるこれらの訪問の詳しい話を何回となく聞いたとき、同時にパウロとジュースツス双方ともに、そのような賢明で才気あふれるヘブライ人教師が一体どうなったのか不思議に思った。

133:3.6 (1472.5) ローマでガニドは、イエスが彼等とともに公衆浴場に行くことを拒否するのに気がついた。青年は、何度かその後、男女関係のイエスの言及を引き出そうと更に試みた。若者の質問に答えはするものの、かれは、決してこの問題を長々と検討する気はなさそうであった。ある晩、コーリントス外辺の海へと続く要塞の壁の近くを逍遥していると、二人は、娼婦二人に話しかけられた。ガニドは、イエスが、高い理想の男性であるということ、また、汚れや悪を味わったものと共にすることを

嫌悪するという考えを、正しく吸収していた。従って、かれは、これらの女性にきつく口をきき、立ち退くように粗雑に合図した。これを見て、イエスが言った。「君はよかれと思ってしているが、たまたま間違いを犯している子供等であるといえども、神の子に向かってそのように話すべきだと思ってはならない。これらの女性に裁きを下す我々は一体何者であるのか。彼女らが暮らしを立てているそのような方法に向かわせた事情のすべてを知っているのか。これらの問題について話す間、私とここに居なさい。」娼婦等は、ガニドに言われたことよりもイエスの言ったことに驚いた。

133:3.7 (1472.6) 皆が月明かりの中でそこに立ったとき、イエスは、続けて言った。「人間の心の中には天の父の贈り物である神精が宿っている。この良い精霊は、我々を神にずっと導く、つまり神を見つけ神を知る手伝いに努めている。しかし、人間の中には、創造主が個人とその民族の幸福を促進するために与えた自然の肉体的な傾向も多くある。さて、しばしば、男女は、自分自身を理解する努力において、また大幅に利己主義と罪が支配する世界での生計を立てるための多種多様の困難と格闘すること

において混乱する。ガニド、私には、これらの女性のどちらも望んで邪であるとは見えない。彼女らは、多くの不幸を味わったと言うことが顔で分かる。二人は、明らかに残酷な運命の手にかかり、非常に苦しんできた。故意にこの類の人生を選びはしなかった。彼女らは、まったく絶望的に、時間の圧力に降伏し、絶望的に見えた状況から抜け出る最良の道として生計を得るためにこの不愉快な方法を受け入れた。ガニド、一部の人間の心は本当に邪悪である。かれらは、故意に卑しいことをすることを選ぶが、言ってみなさい、涙に濡れたこれらの顔を覗き込んで何か不愉快なものや邪悪なものが見えるか。」そこでイエスが返答を待っていると、吃って答えるガニドの声は、詰まっていた。「いいえ、先生、見えません。だから、私の無礼を二人に謝ります。二人の許しを懇願します。」その時、イエスが言った。「私は、天の父がすでに二人を許したということを代弁すると同時に、また二人がすでに君を許しているということを二人に代わって伝える。さあ、みんな、私の友人の家に一緒に行き、そこで軽い食事を求めて、そして新しく、より良い将来の人生計画を立てよう。」この時まで、驚く

女達は、一言も声を発っしなかった。二人は、互いに見合い、案内する男達の後に黙って続いた。

133:3.8 (1473.1) そんなに遅い時刻に、イエスがガニドと二人の見知らぬ者と現れ、こう言った時のジュースツスの妻の驚きを想像して見よ。「こんな時間に来る我々を許してくれるでしょうが、ガニドと私は、軽い食事がしたいし、これらの私達の新たな友達と分け合いたいし、二人もまた栄養を必要としている。　また、こういうことの他に二人の女性の人生の再出発の手助けの最善の方法について、あなたが、我々二人と一緒に助言することに関心をもつだろうという考えで来たのでもある。女性たちは、事情を話すことができるが、多くの苦労をしたと私は推測しているし、また、あなたの家、ここに二人が直接現れたこと自体、彼女等が、いかほどまでにひたすらに善良な人々を知りたいと切望しているかを証明しているし、また、二人が誠に健気で高潔な女性になり得るかをいかに喜んで全世界—天の天使さえ—に示す好機を迎え入れることであろう。」

133:3.9 (1473.2) ジュースツスの妻マールタが、食物を配膳し終えると、イエスは、不意の暇乞いをしながら言った。「遅くなって来たし、この青年の父が我々を待ち受けていることでもあるので、あなた方—3人の女性達—いと高きものの愛し子達をここに残し、我々二人は失礼させてもらう。君達が、地球での新たでより良い人生、また、はるか彼方での永遠の生活のための計画を立てる間、私の方は、君等の精霊の導きのために祈るつもりである。」

133:3.10 (1473.3) イエスとガニドは、このように女性等と別れた。2人の娼婦はずっと何も言わないままであった。同様に、ガニドも無言であった。その上、しばらくの間マールタもそうであった。が、ややあってマールタは、難局に対処し、この見知らぬ者のためにイエスが望んだ全てをした。2 人の女性のうちの年長者は、永遠の生存という明るい望みをもってその後間もなく死亡した。若い方の女性は、ジュースツスの職場で働き、後にはコーリントスで最初のキリスト教会の永久会員になった。

133:3.11 (1473.4) イエスとガニドは、クリスポスの家で、後にパウロの忠誠な支持者となったガイウスというものに幾度か会った。コーリントスでのこの2カ月間、彼等は、意味のある何十人もの個人との親密な会話をし、明らかにさり気ない全接触の結果、半分以上の非常に影響を受けた者達が、その後のキリスト教の共同体の一員となった。

133:3.12 (1473.5) パウロは、コーリントスに最初に行ったとき、長逗留するつもりはなかった。しかし、かれは、ユダヤ人の家庭教師が、自分の仕事への道をいかによく準備していたかを知らなかった。さらに、かれは、すでに大きな関心が、アクヴィラとプリースキラにおきていたということが分かった。アクヴィラは、ローマでイエスが接触したキニク派の1人であった。この二人は、ローマからのユダヤ難民であり、パウロの教えを速く受け入れた。二人が天幕職人であったので、パウロは、両者と同居し、共に働いた。パウロがコーリントスでの滞在を長引かせたのは、こういった状況によるものであった。

4. コーリントスにおける個人的公務

133:4.1 (1474.1) イエスとガニドは、コーリントスにおいてさらに多くの興味深い経験をした。二人は、イエスから受けた訓示から大いに利益を受けた相当数の人々と親しく話した。

133:4.2 (1474.2) かれは、人間の仲間の虚弱者や衰弱者でさえも神々しい人生の困難な事柄を容易に受け取ることができるように人生経験の製粉場で真実の穀物をすり砕くことに関して製粉業者に教えた。イエスは言った。「精霊的認識においては赤子である者達に真実の乳を与えよ。君の生きた情愛深い奉仕活動において、魅力的な形で、それぞれの尋問者の感受性の容量に合った精霊の糧を供給しなさい。」

133:4.3 (1474.3) ローマの百人隊長に言った。「ケーサーのものはケーサーに返し、神のものは、神へ。」ケーサーが、神格のみが主張できるその敬意を大胆に横取りしようとしない限り、神への誠実な奉仕とケーサーへの忠勤は、衝突しない。神を知るようになるならば神への忠誠は、尊敬に値いする皇帝への君の献身をより忠誠に、より忠実にするであろう。」

133:4.4 (1474.4) ミースラ信仰の熱心な指導者に言った。「君は、永遠の救済の宗教を確かに捜し求めているが、人為の神秘主義と人間の哲学の間でそのような栄光の真実の探索をするということは誤っている。永遠の救済の神秘は、君自身の魂の中に住んでいるということを知らないのか。天の神が君の中に住まうために彼の精霊を送ってきていること、またこの精霊が、全ての真実を愛する人間と神に仕える人間をこの世から死の入り口を通過し、神がその子等を待ち受ける永遠の光の高さまで引率していくということを知らないのか。そして、決して忘れれてはいけない。神のようになることを本当に願うならば、神を知る者は神の息子である。」

133:4.5 (1474.5) かれは、エピクーロス派の教師に言った。「最良を選び、最善を尊ぶことを確かにしているが、人間の心の神の存在の認識に由来する精霊の領域に表現される人間の生活のよりすばらしいものを認めることができないとき、君は賢明であるのか。すべての人間の経験における素晴らしいものは、その精霊が君に内住し、我々の共通の父、全創造の神、宇宙の主の個人的な存在を達成

するその長くてほとんど無限の旅において先へと導こうとしている神を知ることの実現である。」

133:4.6 (1474.6) ギリシア人の契約者と建築業者に言った。「友よ、人間の物質の建築物を築くように、君の魂の中に神精に似たもので精霊的な特質を育てなさい。時間に生きる建築業者としての君の業績を天の王国の精霊の息子としての君の達成に優先させることのないように。他者のために時の世界の大邸宅を建設するが、君は、自分のための永遠の大邸宅への権利の確保を怠ってはならない。常に覚えていなさい。その地盤が正義と真実である都というものがあり、また、その建築者と建設者は、神であると。」

133:4.7 (1474.7) ローマの裁判官に言った。「人を裁く際、きみ自身もいつの日か宇宙の支配者達の法廷に裁きを受けることを覚えておくように。正当に、慈悲深くさえ、裁きなさい。いつか、君も、このように最高調停者からの慈悲深い斟酌を同様に切望するであろう。同様の状況下で自らが裁かれたいと思うように、文字通りにでなく、法の精神によって手引きされて裁きなさい。そして、全て

の地球の裁判官の前にいつか君が立つ時、君の前に引かれて来る者の必要の照らして公正さに支配される正義を与えるように、慈悲により和らげられる正義を期待する権利が、君にもあるであろう。」

133:4.8 (1475.1) ギリシアの宿屋の女将に言った。「いと高きものの子供をもてなす者として君の親切なもてなしをしなさい。人々の心の中に住むために下ってきた神精が宿る人々の中の神に働きかけるという増加する体現を通して、日々の骨折り仕事を美術の高い段階へと高め、それによって、彼らの心を変えることを追い求め、神精が与えられたこれらのすべての贈り物の楽園の父に関する知識へと導くようにしなさい。」

133:4.9 (1475.2) イエスは、ある中国商人を頻繁に訪ねた。別れ際に彼を諭した。「神を、君の真の精霊の先祖だけを、崇拝しなさい。父の精霊がいつも君に宿り常に魂の向きを天へ示すということを覚えていなさい。この不滅の精霊の無意識の導きに従うならば、神を見つける高められた道において前進し続けるのは確かである。そして君が天の父に達するとき、それは、神を探すことにより君が

ますます神に似てきたからであろう。では、チャン、元気で、だが、ほんの一時季だけ。なぜなら、我々は、父が楽園に向かう者のために多くの楽しい停止場所を設けている光の世界で再会するのであるから。

133:4.10 (1475.3) イギリスからの旅人に言った。「兄弟よ、君は、真実を捜し求めていると見てとる。私は、すべての真実の父の霊が君の中に住むかもしれないと暗示する。かつて、君は、自身の魂の精霊と話すことを心から努力したか。そのようなことは、本当に難しく、成功の意識をあまり与えない。だが、内在する精霊と通じ合おうとする物質的な心のあらゆる地道な試みは、 確実な成功をもたらす。それでも、そのようなすべての壮大な人間の経験の大部分が、神を知るそのような人間の魂の中に意識を越えた記録として長く残らなければならない。」

133:4.11 (1475.4) 家出少年に言った。「覚えていなさい、人には逃げ出すことのできない2 つのものがある—神と自分自身。どこへ行こうとも、自身と君の心の中に住む天の父の精霊とを連れている。息子よ、自身を騙そうとすることをやめなさい。落ち着いて人生の事実に直面する勇敢

な実践を始めなさい。教えたように、神との関係における息子の資格の保証と永遠の命の確実性にしっかり掴まりなさい。この日から真の男、勇敢に、明敏に人生に直面すると決心をした男になることを目的としなさい。

133:4.12 (1475.5) 最期の時間の死刑囚に言った。「兄弟よ、君は、悪の時代に当たってしまった。君は迷った。次第に犯罪の網に縛れた。君との話しから、君がその現世の命を犠牲にするつもりがなかったことがよく分かる。しかし、君は確かにこの悪を犯し、仲間は、有罪であると判決を下した。すなわち彼らは、君が死ぬべきだと評決した。君あるいは私は、その自己選択の方法において国のこの自衛権を否定できない。君の悪行の刑罰から人間的に逃がれる方法はなさそうである。仲間は君のしたことで君を判断せざるを得ないが、君が許しを懇願できる裁判官がおり、かれは、君の本当の動機とより良い意図によって君を裁くであろう。君の悔悟が本物であり、信仰が誠実であるならば、神の裁きに合うということを恐れる必要はない。人間によって君の誤りが死罪に値すると課せられた事実そのものは、天の法廷の前で、君の魂が

正義を得て、慈悲を味わう機会に対して偏見をもつものではない。

133:4.13 (1476.1) イエスは、熱望する多くの人々との数多くの、この報告書に記すには多過ぎるほどの、個人的会談を楽しんだ。３人の旅行者は、コーリントスでの滞在を味わった。教育の中心地としてより有名であったアテネを除き、コーリントスは、これらのローマ時代を通してギリシアで最重要都市であり、この繁栄する商業の中心地での２カ月間の滞在は、３人全員に多くの貴重な経験をする機会を提供した。この都市での彼らの滞在は、ローマからの帰途のすべての停留において最も興味あるものの1つであった。

133:4.14 (1476.2) ゴノドは、コーリントスにかなりの興味があったが、仕事は遂に終了し、皆は、アテネに向けて出帆の準備をした。コーリントスの港の1つから陸路16キロメートルの距離の他所へ運ぶことのできる小型船で旅をした。

5. アテネにて—科学に関する講話

133:5.1 (1476.3) 皆は、まもなくギリシアの科学と学習の昔の中心地に到着した。ガニドは、その境界を故郷のインドの地にまでも広げた嘗てのアレクサンドリア帝国の文化の中心地アテネにいるという考え、ギリシアにいるという考えに興奮していた。商取引は、ほとんどなかった。それでゴノドは、多くの興味ある場所を訪ねたり、若者と多才な師との間で交わされる興味深い議論を聞いたりして時間の大部分を二人と共に過ごした。

133:5.2 (1476.4) 立派な大学はアテネにまだ発展しており、三人組は、頻繁にその講堂を訪れた。アレキサンドリアの博物館での講演に出席したとき、イエスとガニドは、プラトンの教えを徹底的に議論をしたことであった。皆は、ギリシアの芸術を楽しみ、その例は、まだこの都市周辺のあちこちで見つけられた。

133:5.3 (1476.5) 父と息子の両者は、イエスが、ある晩彼等の宿でギリシア人の哲学者と科学について議論をしたのを大いに楽しんだ。この学者ぶる者がほぼ3 時間話した後、そして、彼が講和を終えたとき、現代の概念に置き換えて、次のようにイエスが言った。

133:5.4 (1476.6) 科学者は、引力のエネルギー、または力の発現、光、および電気をいつか測定するかもしれないが、これらの同じ科学者は、これらの宇宙現象が何であるかを決して(科学的に)話すことができない。科学は、物理的エネルギー活動を取り扱う。宗教は、永遠の価値を取り扱う。真の哲学は、これらの量的、質的な観察を相関させるために最善をつくす知恵から起こる。純粋に物理的な科学者は、精霊的な盲目は言うまでもなく、数学上の自尊心と統計的自惚れに苦しめられるようになるかもしれないという危険が常に存在する。

133:5.5 (1476.7) 論理は、物質界において妥当であり、その運用を物理的な事象に制限されるとき、数学は、頼りとなる。しかし、生活問題に適用される場合、双方ともに完全に信頼もできないし、絶対確実でもない。生活は、全く物質的でない現象を包含する。算術は、1 人の男が10分で羊を刈ることができるとしたら、10 人の男だと1 分でそれを剪断することができると提示する。それは数学らしく響くが、真実ではない。なぜなら、10 人は、そうはできないからである。仕事が大いに遅れるほどにお互いが邪魔となるであろう。

133:5.6 (1477.1) 数学は、1 人が知的で道徳的な1 単位の価値を表すならば、10 人が10 倍のこの価値を表すことを断言する。しかし、人間の人格を扱う際、そのような人格は、単純な算術合計よりむしろ方程式に関係がある人格の数の二乗と等しいという方が真実により近いであろう。連携した労働の協調のある人間の社会的集団は、その部分の単なる合計よりもはるかに大きい力を表す。

133:5.7 (1477.2) 量は事実として確認されることができ、その結果、科学的な画一性となる。心の解釈の問題である質は、価値の見積りを表す。従って、個人の経験に留まらなければならない。科学と宗教の両方が、より独断的でなくなり、批判に対しより寛容になるとき、哲学は、明敏な宇宙の理解において統一を達し始めるであろう。

133:5.8 (1477.3) あなたが、その操作について実際に明察することさえできるならば、広大無辺の宇宙には統一がある。真の宇宙は、永遠なる神のあらゆる子供に好意的である。真の問題は、人の限られた心が、思考における論理の、真実の、照応する統一をどのように実現できるか、ということである。量的事実と質的価値は、楽園の父に

共通の原因があるということを単に心に抱くだけで、心のこの宇宙を知る状態を持つことができる。現実のそのような概念は、宇宙現象の意味深い統一に対するより広い洞察をもたらす。それは、進歩的な人格到達への精霊的な目標を明らかにさえする。そして、これは、絶えず非個人的な関係を変え、個人的な関係を発展させる生きている宇宙の変らない背景を感じることができる統一の概念である。

133:5.9 (1477.4) それらに介在する物質、精霊、状態には、真の宇宙の真の統一における相互に結合し、関連する３段階がある。事実と価値の宇宙現象がどのように拡散的に見えるかにかかわらず、それらは、結局崇高なるものの中に統一される。

133:5.10 (1477.5) 物質的存在の現実は、目に見える物質だけでなく、認識されないエネルギーにも付随する。宇宙のエネルギーが、非常に低下し、運動に必要な度合を獲得すると、次には好ましい状況下において、これらの同じエネルギーは質量となる。そして、忘れてはいけない。見た目の現実の存在を知覚できる心だけでも、それ自体本

当である。そして、エネルギー-質量、心、精霊のこの宇宙の基本的な原因は、永遠である—それは、存在し、また宇宙なる父とその絶対的調整者の性質と反応にある。

133:5.11 (1477.6) 彼等は全員、イエスの言葉に大変驚き、ギリシア人が皆に暇乞いをすると、イエスが、「ついに、私の目は、人種的な優越以外に何かを考え、宗教以外に何かを話すユダヤ人を見た。」と言った。そこで、かれらは就寝した。

133:5.12 (1477.7) アテネでの滞在は快く、有益であったが、それは、人間交流においては特に実りあるというものではなかった。ギリシアに栄光があり、その人民の心に叡知があった初期の下位の奴隷の子孫であったので、その時代のあまりに多くのアテネ人は、過去の彼らの評判を知的に誇りに思ったか、精神的に愚かで無知であった。その時でさえ、アテネの市民の間にはまだ多くの鋭敏な心の者がいた。

6. エペソスにて—魂に関する講話

133:6.1 (1477.8) アテネを去るに当たり、旅人達は、ツロアス経由でアジアのローマ行政区の首都エペソスへ行った。彼らは、都からおよそ3キロメートルのエペソス人のアルテミスの有名な神殿を何度も訪れた。アルテミスは、全小アジアで最も有名な女神であり、古代のアナトリア時代のさらに以前の母神が永続化したものであった。彼女の崇拝の為に奉納された巨大な神殿に展示された粗末な偶像は、天から落下してきたと言われた。神性の象徴としての像を敬うガニドの以前の習慣が根絶されるというわけではなかったので、ガニドは、小アジアのこの豊饒と多産の女神に敬意を表し、小さい銀の社を購入するのが最善であると考えた。その夜、彼らは、人間の手で作られたものへの崇拝に関し長々と話した。

133:6.2 (1478.1) 滞在の3日目、彼らは、港口の浚渫を観察するために川に沿ってを歩いた。正午に、皆は、里心を起こし、気落ちした若いフェニキア人と話した。かれは、自分を飛び越えての昇進をした特定の青年を、とりわけ妬んでいた。イエスは、元気づける言葉を伝え、昔のヘブライの諺を提示した。「人の贈り物は、その人の為に道を開き、偉人の前に彼を導く。」

133:6.3 (1478.2) 地中海のこの旅行で訪問した大都市訪問のうち、彼らは、キリスト教宣教師のその後の仕事にとって些細なことをここで達成した。キリスト教は、主にパウロの努力でエペソスにその発足を確実なものとした。パウロは、ここに2年以上住み、生計のために天幕を作り、毎晩ツランノスの学校の本講堂で宗教と哲学についての講義をしたのであった。

133:6.4 (1478.3) この地元の哲学の流派に関係がある進歩的な思想家がおり、イエスは、この人物との何度かの有益な会談をした。イエスは、これらの会談において「魂」という言葉を繰り返し用いた。この学識あるギリシア人は、最後に「魂」の意味を問い、イエスが答えた。

133:6.5 (1478.4) 「魂とは、人間を永々と動物世界の上の段階に高める自己反射的で、真実について洞察力のある魂を認識する人の部分である。自意識は、それ自体は、魂ではない。道徳的な自意識は、真の人間の自己実現であり、人間の魂の基礎を構成しており、そして魂は、人間の経験の潜在的生存価値を有する人のその部分である。道徳的な選択と精霊的な達成、神を知る能力と神に似ること

への衝動は、魂の特徴である。人の魂は、道徳的思考と精霊的活動から離れて存在することはできない。澱んだ魂は、死にかかっている魂である。しかし、人の魂は、心の中に住む神精とは全く別なものである。神精は、人間の心の最初の道徳的な活動と同時に到着し、それは、魂の誕生の時である。

133:6.6 (1478.5) 魂の救済あるいは喪失は、道徳的な意識が、その関連する人間の精霊の贈与との永遠の同盟を通して生存状態に達するかどうかに関係する。救済は、道徳的な意識による自己実現の精霊化であり、その結果、生存価値を備えるようになる。魂対立のすべての形は、道徳的または、精霊的な自意識と、純粋に知的な自意識の間の不調和にある。

133:6.7 (1478.6) 人間の魂は、熟し、高尚し、精霊化されるとき、それが物質的なものと精霊的なものの間、物質的な自己と神精の間にある実体に近づくという点において、天にいるような状態に到達する。物質的な調査法でも精霊的な立証法でも発見できないことから、人間の進化する魂は、描写が困難であり、立証するのはそれ以上に難

しい。物質科学は、魂の存在を示すことができないし、純粋な精霊の吟味もできない。人間の魂存在の発見に関する物質科学と精霊標準の両方の失敗にもかかわらず、道徳的に意識的なあらゆる人間は、本当の、実際の個人的な経験として、自己の魂の存在を知っている。」

7. キプロス滞在—心に関する講話

133:7.1 (1479.1) やがて旅人達は、ロードス島に止まり、キプロスに出帆した。彼らは、長い水路の旅を楽しみ、目的の島に到着し、身体を休め精力を回復した。

133:7.2 (1479.2) 地中海の旅の終わりに近づいていたので、キプロスで本当の休息と遊戯の期間を楽しむことが、皆の計画であった。パポスに着陸し、近くの山での数週間の滞在に備えすぐに物資の収集に取り掛かった。到着後の 3 日目、彼らは、荷を満載した動物達と丘を目指して出発した。

133:7.3 (1479.3) 2 週間、三人組は大いに楽しんでいたが、何の徴候もなく、若いガニドが、いきなり、ひどい病気に掛かった。かれは、2 週間激しい熱に悩まされ、しばしば錯乱状態となった。イエスとゴノドの両者は、病の少年

の付き添いで忙しくしていた。イエスは、巧みに、そして優しく若者の面倒をみた。父は、患っている青年に対するイエスのすべての奉仕に明らかにされる温厚さと熟練の様に驚嘆した。彼らは、住宅地からは遠くにいたし、少年は動くことができないほどの病気であった。従って、二人は、山中のその場所で健康を回復するためのできる限りの看病をした。

133:7.4 (1479.4) ガニドの 3 週間の回復期間、イエスは、自然とその多様な情趣について多くの興味ある事柄を彼に話した。また、彼らは、山頂を歩き回り、少年が質問し、イエスがそれに答え、また傍らで父親が全体の成り行きに驚嘆し、彼らは、いかに楽しんだことであったか。

133:7.5 (1479.5) 山に滞在の最後の週、イエスとガニドは、人間の心の機能について長らく話した。数時間の議論の後、若者は、この質問をした。「しかし、先生、人がより高等動物よりもより高度の自意識形態を経験するとは、どういうことですか。」そこで、現代の言い回しで、イエスが答えた。

133:7.6 (1479.6) 息子よ、私は、すでに人の心とそこに住む神精に関する多くを教えたが、今は、自意識が現実のものであると強調させてくれ。どんな動物でも自意識するとき原始の人間となる。そのような達成は、非人間的なエネルギーと精霊を想い描く心の間での機能の調整から生じ、人間の人格のための絶対の焦点、すなわち天の父の精霊の授与を保証するのが、この現象である。

133:7.7 (1479.7) 考えは、単に感覚に関する記録ではない。考えは、感覚と個人的な自己の反射的な解釈である。そして、自己とは、自身の感覚の集合体以上のものである。進化している自己における統一への接近の何かになることが始まり、その統一は、そのような自意識の強い動物起源の心を精霊的に活動させる完全統一の一部である内在するものに由来する。

133:7.8 (1479.8) 単なる動物は、時間を通しての自意識を持つことができない。動物には、関連する感覚認識とその記憶の生理的な調整があるが、知的で反射的な人間の解釈の結論で表れるようには、動物は、意味のある感覚の認識を経験しなし、これらの結合した物理的経験の意味深い

関係をも示さない。そして、彼のその後の精霊的な経験の現実に関連づけられる自意識の強い存在のこの事実は、人に宇宙の潜在的息子の素質を与え、宇宙の崇高なる統一の最終的な達成の前触れとなる。

133:7.9 (1480.1) また人間の自己性は、単に意識の連続状態の集合体でもない。効を奏する意識選別人や交友者の働きなくして、自己性の指定を保証するに足りる統一は存在しないであろう。そのような非統一の心は、人間の地位の意識段階にほとんど達することができないであろう。意識の関係がただ偶然であるならば、すべての人の心は、精神の狂気のある段階の抑制されない、無作為の関係を示すであろう。

133:7.10 (1480.2) ただ単に物理的感覚の意識から単独に確立される人間の心は、精霊的段階に決して達することができなかった。この種の物質的な心は、ある意味で全く道徳的価値を欠いており、時間内の調和した人格達成に不可欠であり、また永遠の人格生存に不可分である精霊優位の指針感覚なしでいるであろう。

133:7.11 (1480.3) 人間の心は、早くに、超物質である性質を明らかにし始める。本当に熟考する人間の知性は、完全に時間の限界に縛られるというわけではない。その個人が人生の遂行において甚だ異なるということは、遺伝の様々な授与や環境の異なる影響だけでなく、自己が獲得した父の内在する精霊との統合の度合、一方と他方との結合の尺度をも暗示する。

133:7.12 (1480.4) 人間の心は、二重の忠誠の対立にうまくは耐えられない。善と悪の両方に仕える努力の経験を経ることは、魂に対する厳しい重圧である。この上なく幸福で有効的に統一された心は、天の父の意志を為すことに完全に捧げられるものである。未解決の対立は、統一を破壊し、心の分裂で終わるかもしれない。しかし、魂の生存の資質は、どんな犠牲をはらっても心の平和を保証しようと試みることより、高潔な切望を諦めることにより、そして精霊の理想の妥協により促進はされない。むしろ、そのような平和は、真実である勝利に達するという確固たる主張により到達されるのであり、この勝利は、善の強大な力で悪に打ち勝って獲得されるのである。

133:7.13 (1480.5) 彼らは、翌日サラミスに出発し、そこからシリア海岸のアンチオケに向かった。

8. アンチオケにて

133:8.1 (1480.6) アンチオケはシリアのローマ行政区の首都であり、ここには帝国の知事の住居があった。アンチオケには50万人の住民がいた。それは、帝国で３番目の人口規模であり、不正と極悪の不道徳に関しては最悪の都市であった。ゴノドには、扱うべきかなりの仕事があった。従って、イエスとガニドは、大方二人きりであった。彼らは、ダフネの林を除く、この多言語の街の周辺のすべてを訪れた。ゴノドとガニドは、この悪名高い恥ずべき神殿を訪れたが、イエスは、同行することを断った。そのような場面は、インド人にとりそれほど衝撃的ではなかったが、理想主義的なヘブライ人には反感を抱かせるものであった。

133:8.2 (1480.7) パレスチナに近づくにつれ、そして旅の終わりになるにつれ、イエスは、冷静にまた反映的になった。かれは、アンチオケではあまり人々と雑談しなかった。かれは滅多に街を歩き回らなかった。ガニドは、師がな

ぜアンチオケに対する関心を示さなかったのかという質問の後に、イエスからようやく次のような言葉を引き出した。「この都はパレスチナから遠くない。おそらく、いつか私はここに戻るつもりである。」

133:8.3 (1481.1) ガニドは、アンチオケで非常におもしろい経験をした。この青年は、自分自身が利発な生徒であることを証明して、既にイエスの教えのいくつかの実用化を始めた。アンチオケで父親の商売に関係し、解雇を考えるほど非常に不快で不満になったインド人がいた。ガニドがこれを聞いたとき、自ら父親の仕事場へ行き、この同国人と長い談合をした。この男は、場違いな仕事に就かされていたと感じていた。ガニドは、天の父について話し、様々な意味でこの人物の宗教の視点を広げた。しかし、ガニドが言った全ての中でも、ヘブライの諺の引用が最も効果を示した。そしてその知恵の言葉は、「手がすることを見つける何であろうと、全力でそれをせよ。」

133:8.4 (1481.2) ラクダの隊商のために彼らの荷物を準備をすると、彼らは、さらにシドーンへ、そこからダマスカスま

で進み、３日後には、砂漠を越える長い苦しい旅の用意をした。

9. メソポタミアにて

133:9.1 (1481.3) 砂漠横断の隊商の旅は、旅行経験豊富なこれらの男達にとり新体験ではなかった。ガニドは、師が20頭のラクダの積載を手伝うのを見て、また自分達の動物の扱いを申し出るのを見て、「先生、何かあなたができないというようなことがありますか。」と驚いて大声で言った。イエスは、微笑むだけであった。そして、「勤勉な生徒の目には師は確実に名誉である。」と言った。そして、 彼らは、古代のウルの都に向かった。

133:9.2 (1481.4) イエスは、アブラハムの出生地ウルの初期の歴史に非常に興味を持っており、同時にシューシャンの遺跡と伝統にも等しく魅了されていたので、ゴノドとガノドは、イエスが更に調査を行える時間を提供するために、また自分達と共にインドに戻るように彼を説得するさらに良い機会を得るために、これらの地域における滞在を３週間延ばした。

133:9.3 (1481.5) ガニドが知識、知恵、真実の違いに関してイエスと長談義をしたのはウルであった。ガニドは、ヘブライ人の賢者の言葉に大いに魅了された。「知恵は、主要なものである。それ故、知恵を得よ。知識の探求でもって理解を得よ。知恵を高めよ。さすれば、それが人を押し進めるであろう。知恵を迎え入れれば、それが、人に名誉をもたらすであろう。」

133:9.4 (1481.6) ついに、別れの日が来た。彼らは皆、特に若者は、勇敢であった。しかし、それは辛い試練であった。彼らは、涙ぐんだ目をしていたが、勇ましい心情であった。師に別れを述べる際、ガニドが言った。「さようなら、先生、でも永遠にではなく。再びダマスカスに来るとき、私は、あなたを探します。私はあなたを慕っています。なぜなら天国の父は、あなたに似ているに違いないと思いますので。少なくとも、あなたが神に言い及んできたことが、あなたによく似ているのが私には分かります。教えを覚えていますが、特に、あなたのことを決して忘れはしません。」父は、「我々をより良くし、神を知るのを助けてくれた方、偉大な先生、さようなら。」と言った。そして、イエスは、「君達に平和を。

天の父の祝福あれ。」と返した。そして、イエスは、岸に立ち、碇泊している船に小舟が二人を乗せていくのを見た。このようにしてハラクスでインドの友から立ち去ったあるじは、この世で二度と彼等には決して会わなかった。二人の方も、後でナザレのイエスとして現れた男性が、たった今別れた自分達の師であるこの同じ友人であったと知ることは、この世では一度もなかった。

133:9.5 (1481.7) インドでは、ガニドは、影響力のある男性になるように、著名な父のふさわしい後継者になるように成長し、そして最愛の師イエスから学んだ気高い真実の多くを広めた。人生の後半で、ガニドが、十字架上に人生を終えたパレスチナの見知らぬ教師について聞いたとき、この人の息子に関する福音と自分のユダヤ人の家庭教師の教えとの類似点を認めはしたものの、この２人が実際に同じ人物であったとは決して思いつかなかった。

133:9.6 (1482.1) このように、師ジャシュアの使命と称されるかもしれない人の息子の人生における章を終える。

論文 134
変遷の歳月

134:0.1 (1483.1) 地中海の旅行中、イエスは、出会った人々と通過した国々をじっくり調査してきた。そして、この時期に地球での人生の残りに関する最終的な決定に達した。パレスチナでユダヤ人の両親に生まれたと予め定められたその計画を十分に考慮し、今や最終的に承認した。従って公のための真実の教師として自分の一生の仕事の始まりを待ち受けるためにわざわざガリラヤに戻った。かれは、父親ヨセフの身内のその土地で公的な経歴の計画を立て始めた。また、イエスは、彼自身の自由選択でこれをした。

134:0.2 (1483.2) イエスは、地球での人生の終章設定をし、最終場面を演じるために、パレスチナが、ローマ世界で最善の場所であることを個人的に人生経験を通して知った。初めて、故郷のパレスチナのユダヤ人と非ユダヤ人の間で公然と自己の本質を表し、また自己の神性の正体を明らかにする計画に完全に満足していた。かれは、無力な赤子として人間生活に入った同じ土地で確実に地球での人生を終え、限りある命の自己の使命を全うすると決めた。彼のユランチア経歴はパレスチナのユダヤ人の中で

始まり、かれは、パレスチナのユダヤ人の中でその人生を終えることを選んだ。

1. 第30年目(紀元24年)

134:1.1 (1483.3) ハラクスでゴノドとガニドに暇乞いをした後(西暦23年、12月)、イエスは、ウル経由でバビロンへ戻った。そこで、彼は、ダマスカスへ行く途中の砂漠の隊商隊に合流した。ダマスカスからナザレに行き、ほんの数時間カペルナムに寄り、ゼベダイの家族を訪問した。そこで、かれは、以前いつか自分の代わりにゼベダイの船の作業場に働きに来た弟のジェームスに会った。ジェームスとユダ(また偶然カペルナムにいた)と話した後に、ゼベダイ・ヨハネがなんとか買うことができた小さい家をジェームスに引き渡した後に、イエスは、ナザレに進んだ。

134:1.2 (1483.4) 地中海旅行の終わりに、イエスは、ほぼ公のための職務の始まりまでには、生活費用を満たすに足りる金額を受領していた。しかし、カペルナムのゼベダイとこの並はずれた旅で会った人々は別として、世間は、イエスがこの旅行をしたことを全く知らなかった。家族

は、彼がこの時期アレキサンドリアで研究して勉強に費やすと常に考えていた。イエスはこれらの思い込みを決して確かめなかったし、そのような誤解を公然と否定もしなかった。

134:1.3 (1483.5) 数週間のナザレでの滞在中、イエスは、家族や友人と雑談し、修理工場で弟ヨセフと若干の時を過ごしたが、大部分はマリヤとルツへ注意を注いだ。ルツは当時15歳ほどであり、年若い女性となってからは、これが彼女と長く話すイエスの最初の機会であった。

134:1.4 (1484.1) サイモンとユダの両者は、少し前から結婚したかったのであるが、イエスの同意なくしては嫌であった。従って、長兄の帰りを期待して、彼らは、この行事を延期していた。ほとんどの事柄に関してジェームスを家族の代表と見なしてはいたものの、結婚するに当たっては、彼らは皆、イエスの祝福を望んだ。それで、サイモンとユダは、この年西暦24 年、3 月上旬に二組の結婚式を挙げた。年上の子供達が今や皆結婚した。一番年下のルツだけが、マリヤと家に残った。

134:1.5 (1484.2) イエスは、家族の個々人と全く普通に自然に雑談したが、皆が揃ったときは、それほど話さなかったので、かれらは、それに気づき、感想を述べ合うほどであった。マリヤは、特に長子の息子のこの異常に独特な振舞いに当惑した。

134:1.6 (1484.3) イエスがナザレを去る準備をしていた頃、都を通過していた大隊商隊の案内人が、激しい病にかかった。そこで外国語に通じたイエスが、その代役を買って出た。この旅行は1年間の彼の不在を必要とする理由で、その上すべての弟が結婚しており、母はルツと家にいたので、イエスは、家族会議を召集し、母とルツには、つい最近ジェームスに与えたカペルナムの家に移り住むことを提案した。従って、イエスが隊商隊と去った数日後、マリヤとルツは、カペルナムに移り、かれらは、イエスが用意した家でマリヤの余生の間を暮らした。ヨセフとその家族は、古いナザレの家に引っ越した。

134:1.7 (1484.4) これは、人の息子の内面的経験におけるより変わった年の1つであった。人間の心と内在する調整者と

の間の有効な調和をもたらす素晴らしい進歩が見られた。調整者は、遠くない将来の大きな出来事に対する考えの再編成と心の習熟に活発に従事していた。イエスの人格は、世界に対する自己の心構えにおける大きな変化に備えていた。これらは、変わり目の時、神が人として姿を現す人生を始め、今人が神として地球でのその人生を完了しようと準備をしている過渡期であった。

2. カスピ海への隊商旅行

134:2.1 (1484.5) イエスがカスピ海地域への隊商旅行でナザレを去ったのは、西暦24年4月1日であった。イエスがその案内人として加わった隊商隊は、エルサレムからダマスカスとウルミア湖経由で、アッシリア、メディアおよびパルチアを通過し、南東のカスピ海地方に行く予定であった。かれが、この旅行から戻るまでにはまる1年かかった。

134:2.2 (1484.6) イエスにとってのこの隊商の旅は、探査と直接奉仕のもう一つの冒険であった。隊商隊の家族—乗客、番人、ラクダの御者達—との面白い経験をした。隊商の沿道に住む何十人も多くのの男女、および子供等は、あ

りふれた隊商の並はずれた案内人であるイエスとの接触の結果、より豊かな人生を送った。彼の個人的奉仕の機会を全ての者が楽しんだ訳ではないが、彼と出合い話したかなりの人々は、自然の余生がより良くされた。

134:2.3 (1484.7) 彼のすべての世界旅行のうち、このカスピ海旅行が、東洋の最も近くにイエスを移動させ、また極東民族をより理解することを可能にした。かれは、赤い民族を除いてユランチアに生き残っている各種族との親密かつ直接的な接触をした。かれは、等しくこれらの様々な種族、混合した民族のそれぞれへの個人的な奉仕を楽しんだし、彼らは皆、イエスの携えてきた生きた真実を受け入れた。極西部地方からのヨーロッパ人と極東からのアジア人はみな同じで、望みと永遠の命のイエスの言葉に注目し、かれが、自分達の間でとても慈悲深く暮らしたイエスの愛の奉仕と精神的活動の人生によっても等しく影響を受けた。

134:2.4 (1485.1) 隊商旅行はあらゆる面で成功であった。この年ずっと物資の責任を委ねられ、また隊商を構成している旅行者の安全な指揮の責任ある経営伎倆において機能し

たので、これは、イエスの人間生活での最も興味深い挿話であった。そして、彼は、最も忠実に、効率的に、賢明に自分の複数の職務を履行した。

134:2.5 (1485.2) カスピ海地方からの戻り、イエスは、ウルミア湖で隊商の指揮をあきらめ、そこに2　週間余り滞在した。彼は、後発の隊商の乗客としてダマスカスに戻った。そこでは、ラクダの所有者達が、彼等の業務活動に留まるよう懇願した。この申し出を断り、隊商の行列とカペルナムへと旅を続け、西暦25 年4 月1 日到着した。もはや、かれは、ナザレを故郷とは見なさなかった。カペルナムは、イエス、ジェームス、マリヤ、およびルツの家となった。しかし、イエスは、決して家族と再び暮らさなかった。かれは、カペルナムでは、ゼベダイ家を自分の家庭とした。

3. ウルミア講演

134:3.1 (1485.3) カスピ海への途中、イエスは、ウルミア湖西岸のウルミアの古いペルシアの都市で休息と回復のために数日間留まった。ウルミア近くの沖合にある一群の島の中で最大のものには、「宗教の霊」に捧げた大きい建物

—講議用円形劇場—があった。この建物は、実は宗教の哲学の寺院であった。

134:3.2 (1485.4) この宗教寺院は、ウルミアの豪商とその3 人の息子により建設された。この男は、キンボイトンといい、先祖は多くの多様な民族を含む。

134:3.3 (1485.5) この宗教学校での講義と討議は、平日毎朝10 時に始まった。午後の集会は3　時に始まり、夜の討論は8 時に開かれた。キンボイトンか3 人の息子のうちの一人は、いつも教育、議論と討論のこれらの集会の議長をした。この異色の宗教学校の創設者は、一度も自分の個人的な信仰を明らかにすることなく生きて、死んだ。

134:3.4 (1485.6) 時折、イエスは、これらの議論に参加し、そしてウルミア出発前に、キンボイトンは、帰路には2 週間自分達と滞在し、「人間の兄弟愛」に関して24　　回講議し、そして特に彼の講義に関して、また全体を通しての人間の兄弟愛に関する質問、議論と討論の12　回にわたる夜の集会を開くための打ち合わせをイエスとした。

134:3.5 (1485.7) この取り決めに従って、イエスは、帰路の途中に立ち寄り、これらの講義をした。これは、ウランチアでの全てのあるじの教えの中でも最も系統だった、正式なものであった。人間の兄弟愛に関わるこれらの講義と議論に含まれた1つの主題についてこれほどまでに多くを言ったことは前にも後にも決してなかった。これらの講義は、事実上、「神の王国」と「人間の王国」についてであった。

134:3.6 (1486.1) 30以上の宗教と宗派は、宗教的な哲学のこの寺院の教授陣に見受けられた。これらの教師は、選ばれ、支持され、またそれぞれの宗教集団によって完全に公認された。このとき、教授陣にはおよそ75　人がおり、かれらは、12　人程度収容できる小家屋に住んでいた。この集団は、新月毎に、多くの顔ぶれと入れ換えられた。寛容のなさ、争い好きな態度、また共同体の滑らかな運営を妨げるような他のいかなる他の気質も、問題のある教師の即時、即刻の解雇をもたらすのであった。その教師は、形式ばらずに解雇され、控えの補欠がすぐに、その位置に就任するのであった。

134:3.7 (1486.2) 様々な宗教のこれらの教師は、かれらの宗教が、この人生と次の世界の人生における基本的な事に関していかに相似しているかについて示すかなりの努力をした。この教授陣に席を得るために受け入れなければならないわずかに1 つの主義—すべての教師が、神、ある種の最高の神格、を認識する宗教を代表しなければならない—が、あった。組織化された宗教を代表しない5 人の独立した教師が教授陣にいた。そして、イエスが現れ出向いたのは、そういう独立した教師達であった。

134:3.8 (1486.3) [我々ミッドウエイヤーがウルミアでイエスの教えに関する概要を最初に準備したとき、ユランチア啓示のこれらの教えを含む知恵に関する教会の熾天使と進歩する熾天使との間に、相違いが、起きた。これらの世界機能が20世紀に存在するようには、ウルミアであるじの教えを神の王国と人の王国の問題に適合させるのは誠に困難なことであったように、宗教と人間の政府の両方で優勢である20　世紀の状況は、イエスの時代の優勢さとはかなり異なっている。我々は、惑星政府のこれらの熾天使の両集団が満足できるあるじの教えを系統立てて述べることができなかった。最終的に、天啓委員会のメ

ルキゼデク議長は、ユランチアに関する20世紀の宗教上の、そして政治状況に適合するように、あるじのウルミアの教えの視点を準備するために我々の集団からの3 名の委員会を任命した。従って、我々3　名の二次中間者は、イエスのそのような教えの翻案を完成し、現代の世界情勢に適用して彼の公式見解を言い換えて、天啓委員会のメルキゼデク議長によって編集された後に、我々は、あるがままのこの声明をいま提示する。]

4. 主権—神性と人間

134:4.1 (1486.4) 人間の兄弟愛は神の父性に基づく。神の家族は、神の愛に由来しており—神は愛である。神なる父は、その子等全てを神々しく愛している。

134:4.2 (1486.5) 神の政府、天の王国は、神の主権、神は霊である、という事実に基づく。神は精霊であるので、この王国は精霊的である。天の王国は物質的でもなく、単に知的でもない。それは、神と人との精霊的な関係である。

134:4.3 (1486.6) 異なる宗教が神なる父の精霊主権を認識するならば、すべてのそのような宗教は平和のままであろう。1 つの宗教が、他のすべてよりもいくらか優れている、

また他の宗教の上に独占的な権限を保持すると仮定する時だけ、そのような宗教は、他の宗教を受け入れないないか、または他の宗教信者を敢えて迫害することになるであろう。

134:4.4 (1487.1) 宗教平和—兄弟愛—は、全宗教が、全ての教会の権威を完全に剥奪し、精霊主権の全ての概念を完全に放棄することを進んでしない限り、決して存在し得ない。神のみが精霊主権者である。

134:4.5 (1487.2) 全ての宗教が、何らかの超人的段階に、神自身への全ての宗教主権の譲渡に同意しない限り、宗教戦争無しには、宗教(信仰の自由)の間に平等はあり得ない。

134:4.6 (1487.3) 人間の心の天の王国は、宗教統一(必ず一様であるというわけではない)を生み出すであろうから、そのような宗教信者から成るすべての宗教団体は、教会の権限—宗教主権の全て—のすべての概念から自由になるであろう。

134:4.7 (1487.4) 神は精霊であり、神は人の心に住むために自分の精霊の破片を与える。精霊的に、全ての人間は平等で

ある。天の王国には、カースト制度、階級、社会的水準、および経済集団がない。皆が、同胞である。

134:4.8 (1487.5) しかし、人が、神なる父の精霊主権を見失うその瞬間、ある1 つの宗教は、他の宗教の上にその優越について主張し始めるであろう。そうなると、地球の平和と人の間の善意の代わりに、不和、非難の逆襲、宗教戦争さえ、少なくとも宗教家の間の戦争、が始まるであろう。

134:4.9 (1487.6) 自身を同等のものと見なす自由意志を持つ者たちは、いくらかの超主権を、自身の上に何らかの権威を条件として相互に認めない限り、遅かれ早かれ、他の人々や集団の上に力と権威を獲得するため彼等の手腕を試用したくなる。平等の概念は、「超主権」のいくらかの支配過剰の影響の相互認識を除いたのでは、平和を決してもたらさない。

134:4.10 (1487.7) ウルミアの宗教家たちは、宗教主権に関する全ての概念を完全に放棄したので、比較的平和に平静に共存した。精霊的に、彼らは全員、主権を有する神を信じた。社会的には、議長—キンボイトンに完全かつ非-

挑戦の権力を委任した。かれらは、仲間教師の上に立とうとした教師に、何が起こるかを熟知していた。すべての宗教集団が、神の偏愛、選ばれた人々、宗教主権に関する全ての概念を惜しげなく放棄するまで、ユランチアに持続する宗教平和をもたらすことはできない。神なる父が最高となるときにだけ、人間は、地球で宗教の兄弟となり平和に共存するようになるのである。

5. 政治主権

134:5.1 (1487.8) [神の主権に関するあるじの教えは、真理—世界の宗教の中で彼に関するその後の宗教の台頭によって複雑になったに過ぎない—であるとともに、政治的な主権に関する彼の発表は、この1,900 年間もその上も、国の生活の政治的進化によって非常に複雑になった。イエスの時代の世界には、2大強国—西洋のローマ帝国と東洋の漢帝国—しかなく、これらは、パルティア王国、そしてカスピ海とトルキスタン領域に介在する他の国々とにより遠く切り離されていた。我々は、従って、ウルミアでの政治主権に関するあるじの教えの要旨からは、次の提示においてより遠く離れてしまった。同時に、それらが、キリスト以後の20 世紀に政治的主権の発展の格

別に重要な段階に適用できるような教えの移入の叙述を試みる。]

134:5.2 (1487.9) 国が無制限な国家主権の錯覚に基づく概念に執着する限り、ユランチアにおける戦争は決して終わらないであろう。棲息世界には2　局面の相対的主権しかない。一個人の精神的な自由意志と人類の総体的な主権。個々の人間の局面と人類総体の局面の間では、すべての分類づけと集団は相対的であり、一時的であり、また個人と惑星全体—個人と人類—の福祉、幸福、進展を高める限りにおいては価値がある。

134:5.3 (1488.1) 宗教教師は、神の精霊的主権が、全ての介在する精霊的忠誠心と取って代わるということをつねに思い出さなければならない。いつか市民の統治者は、いと高き者が人の王国で統治するということを知るであろう。

134:5.4 (1488.2) 人の王国におけるいと高き者のこの統治は、いかなる人間の、殊に贔屓された集団の特別な利益ではない。「選民」というようなものはないのである。いと高き者達の統治、政治的進化の過度の統制者達は、すべて

の人間の最大多数のための最長期間にわたる最善を促進するように考案された規則である。

134:5.5 (1488.3) 主権は、力であり、組織化により成長する。政権組織のこの成長は、人類全体の絶えず拡大する部分を含む傾向があることから、好ましく、適切である。しかし、政治団体のこの同じ成長は、政権の初期で自然の組織—家族—と政治的な成長の最終的成就—全人類による、そして全人類のための全人類の政府—の間に介入するあらゆる段階で問題を生じさせる。

134:5.6 (1488.4) 政治的主権は、家族集団において親の力で始め、家族が様々な理由のために血縁の一族と重なり部族に合一—超血族の政治上の分類づけ—するように、組織化により進化する。そして、取引、商業、および征服により、部族は国として統一され、国自体は時おり帝国により統一されるようになる。

134:5.7 (1488.5) 主権がより小さい集団からより大きい集団へと移行するにつれ、戦争は減少する。すなわち、小国間の小戦争は減少するが、複数の国が主権を拡大するにつれ、より大きな戦争の可能性が増大する。やがて、全世

界が調査され、占領されてしまうとき、国が少なく、強く、強力であるとき、これらの強大で、おそらくは主権をもつ国々が国境を接するとき、その上海洋だけがそれらを切り離すとき、重大な戦争、世界的な紛争のために舞台が設定されるであろう。いわゆる主権国家というものは、紛争を引き起こすことなく、戦争を起こすことなく、交流はできない。

134:5.8 (1488.6) 家族から全人類への政治主権の進化の困難は、介在する全ての段階において示される慣性抵抗にある。時々家族は、その一族に逆らってきたし、一族と部族は、しばしば地方国家の主権を覆してきた。政治主権のそれぞれの新たで前向きの進化は、政治団体の過去の開発の「足場段階」によって躊躇し、妨げられるし、(今までもずっとそうであった)。そして、これは、いったん動かされた人間の忠誠心は、変えにくいので本当である。部族の発展を可能にする同じ忠誠は、「超部族」—領国—の発展を難しくする。そして、領土の状態の進化を可能にする同じ忠誠心(愛国心)は、すべての人類の政府の進展的発達を非常に複雑にする。

134:5.9 (1488.7) 政治主権というものは、まず、家族内個人により、それから部族やより大きい分類分けに関わる一族による自己決定主義の降伏から生まれる。より小さいものから非常に大きい政治団体へのこの進歩的な自己決定の移行は、明とムガール王朝の確立以来、東洋においては概して衰えずに続行した。西洋においては、不幸な後退する動きが、多数の小集団の潜んでいた政治主権をヨーロッパに再確立することによってこの通常な傾向を一時的に覆したとき、世界大戦の終わりまでの1,000年以上これを手にしていた。

134:5.10 (1489.1) ユランチアは、いわゆる主権国家が、主権を賢明にかつ完全に人間の兄弟の手—人類政府—に引き渡さない限り長続きする平和を味わないであろう。。国際主義—国際連盟—は、人類に永久的平和を決してもたらすことはできない。世界規模の国家同盟は、小規模戦争を効果的に防ぎ、小国をまずまず制御するであろうが、世界大戦を防いだり、最も強力な3、4、または5 つの政府を抑制はしないであろう。実際の紛争に直面の際、これらの大国の1つは、同盟から脱退し、戦争を宣言するであろう。国家主権の妄想の害毒に感染状態でい

る限り、国同士の戦争をくい止めることはできない。国際主義は、正しい方向への一歩である。国際的警察力は、多くの小戦争を防ぐであろうが、それは、大きな戦争、地球の相当の軍事政府同士の闘争を防ぐに当たっては効果的ではなかろう。

134:5.11 (1489.2) 本当に主権国家(強国)の数が著しく減少するに従い、人類政府ののための機会と必要性の双方も、増加する。ほんのいくつかの本当の主権の(強力な)国家が存在する時、国家(帝国)覇権のための生死の争いに乗り出さなければならないか、さもなくば、主権の特権の自発的な引き渡しにより、かれらは、全人類の真の主権の始まりとして役目を果たす超国家力の不可欠な中枢を設けなければならない。

134:5.12 (1489.3) すべてのいわゆる主権国家が全人類の代理政府手に戦争を起こすその力を引き渡すまで、ユランチアに平和は来ないであろう。政治主権は、世界の民族に本来備わっている。ユランチアの全民族が世界政府を創設するとき、彼らにはそのような統治主権を握る権利と力がある。そして、そのような代表または民主主義の世界

の強国が、世界の陸、空、海軍を支配するとき、地球の平和、および人の間の善意の波及が可能となる—だが、それまでは、、、。

134:5.13 (1489.4) 重要な19 世紀と20 世紀の具体例を用いるために: アメリカ連邦国家の48 州が長い間、平和を享受してきた。彼等の間に戦争は、もうない。連邦政府に自分達の主権を放棄し、戦争の仲裁を経て、自決の妄想に対する全ての要求を断念した。各州がその内政事情を管理する旁ら、外交関係、関税、出入国管理、軍事、または各州間の商業には関わらず、個々の州も、市民権の問題に関係しない。連邦政府の主権が何らかの危険にさらされるときだけ、48 州が戦争による損害を被る。

134:5.14 (1489.5) これらの48 州、主権と自決の対の詭弁を捨て、州の間の平和と安らぎを楽しむ。同様に、ユランチアの国々は、それぞれの主権を地球の政府—人間の兄弟の主権—の手に自由に明け渡すとき、平和を味わい始める。ロードアイランドの小さい州がニューヨークの人口の多い州、またはテキサスの大きい州と全く同等にアメリカ議会に2 人の上院議員がいるように、この世界国家

においては、小さい国々は、大きい国々と同じくらい強力であろう。

134:5.15 (1490.1) この48州の限られた(州の)主権は、人間により人間のために創出された。アメリカ連邦政府の超州的(国家的)主権は、最初の13州により自州のために、そして人間のために創出された。いつか、人類の惑星政府の超国家主権は、国家により自国の利益と全ての人間のために同じように確立されるであろう。

134:5.16 (1490.2) 国民は政府のために生まれない。政府は、人のために設立され、考案される組織である。全人類の主権政府の出現を達成するまでは政治主権の発展に終わりのあるはずはない。他のすべての主権は、価値においては相対的であり、意味においては中間的であり、状態においては従的である。

134:5.17 (1490.3) 科学の進歩と共に、戦争は、ほとんど民族的に自滅状態になるまでますます破壊的になるであろう。人間が、人類の政府を設立を望み、永久的平和と善意の安らぎ—世界規模の善意の祝福—を享受し始めるまでに、どれくらいの世界大戦が戦われなければならないの

か、そして、どれくらいの国際連盟が失敗しなければならないのか。

6. 法、自由、主権

134:6.1 (1490.4) 1 人の人間が解放—自由—を切望するならば、他の全ての人間も同じ自由を熱望するということに気がつかねばならない。そのような自由を好む人間集団は、全ての仲間の人間に等しい自由を保証すると同時に、各人に同程度の自由を与えるそのような法、規則、条例に従属することなくして安らかに共存することができない。1　人の人間が絶対に自由になるつもりであるならば、他者は、完全な奴隷にならなければならない。そして、自由の相対的な本質は、社会的に、経済的に、政治的に存在する。自由は、法の施行によって可能になる文明の贈り物である。

134:6.2 (1490.5) 宗教は、人間の兄弟愛がわかることを精神的に可能にするが、人間の幸福と能率のような目標に関連した社会的、経済的、政治的な問題を調整するための人類政府を必要とするであろう。

134:6.3 (1490.6) 世界の政治主権が、分割され、１群の民族国家により不当に保持される限り、戦争や戦争の噂を聞くだろう—国は国に敵対して立ち上がるであろう。それぞれの主権をあきらめ、イギリスに置くまで、イングランド、スコットランド、ウェールズは、つねに互いに戦ってきた。

134:6.4 (1490.7) もう一つの世界大戦は、主権国家と呼ばれる国々にある種の連邦を形成することを教え、その結果小規模戦争、つまり弱国間での戦争を防ぐための機構を設定することであろう。しかし、人類の政府が創設されるまで、世界戦争は続くであろう。全世界の主権は、世界的な戦争を防ぐであろう—他の何もできない。

134:6.5 (1490.8) 48 のアメリカの自由な州は、平和に共存する。絶えず交戦中のヨーロッパの国々に住んでいる様々な国籍と民族の全てが、この48　州の国民の間にいる。これらのアメリカ人は、全世界のほとんどすべての宗教、宗派、およびカルトを代表するが、ここ北アメリカでは、平穏に共存している。そして、この48　州がその主権を

引き渡し、想定された自決権の全概念を断念したので、この全てが可能になる。

134:6.6 (1490.9) それは、軍備または武装解除の問題ではない。世界規模の平和を維持するこれらの問題を決するのは、徴兵制または自発兵役制のどちらのでもない。強国からあらゆる形の近代軍備とすべての型の爆発物を取りあげるならば、かれらが国家主権の神授の王権の妄想に執着する限り、彼らは拳、石、棒切れで戦うであろう。

134:6.7 (1491.1) 戦争は、人間のたいへんで恐ろしい病気ではない。戦争は、兆候、結果である。本当の病気は国家主権の病原菌である。

134:6.8 (1491.2) ユランチアの国々には、本当の主権を備えていなかった。彼らには、世界大戦の破壊行為と荒廃から彼らを保護することのできた主権は決してなかった。人類の世界的な政府の創設において、今後すべての戦争から完全に保護することのできる真の、正真正銘の、長続きする世界主権を実際に確立しているほどには、国家は、主権を放棄してはいない。地方の問題は、地方自治体が

取り扱うであろう。国家の問題は、国家の政府が、国際問題は、世界的な政府が管理するであろう。

134:6.9 (1491.3) 条約、外交、外国政策、同盟、力の均衡、または他のいかなる型のその場限りの国家主義の主権の操作でも、世界平和を維持することはできない。世界法の誕生が必然であり、世界政府によって施工されねばならない—全人類の主権。

134:6.10 (1491.4) 個人は、世界政府の下ではるかに多くの自由を楽しむであろう。今日、列強の国民は、ほとんど圧政的に課税され、規制され、支配されており、中央政府が、その主権を国際的な問題に関しては世界政府の手へ進で移行するとき、現在のこの個々の自由に対する干渉の多くが消滅するであろう。

134:6.11 (1491.5) 世界政府の下、本物の民主主義の個人の自由に気づき、味わう真の機会が、国家集団に与えられるであろう。自決の誤りは終わるであろう。金銭と貿易の世界的な規制とともに、世界平和の新時代が来るであろう。やがて世界共通言語が進化し、少なくとも何時か世

界的な宗教—または、世界的観点をもつ宗教—を得る幾らかの望みがある。

134:6.12 (1491.6) 集合体が、すべての人類を含むまで、決して集団安全保証は平和をもたらさないであろう。

134:6.13 (1491.7) 人類が代表する政府の政治主権は、地球に恒久平和をもたらすであろうし、人の精神的な兄弟愛は、すべての人間の間の善意を永遠に保証するであろう。そして、地球平和と人の間の善意を実現され得る如何なる方法も他にはない。

134:6.14 (1491.8) キンボイトンの死後、息子達は、温和な教授陣の維持において大変な困難に遭遇した。もしウルミア教授陣に加わった後のキリスト教の教師陣が、より多くの知恵を示し、より多くの寛容を行使させていたならば、イエスの教えの影響は、はるかに大きかったであろう。

134:6.15 (1491.9) キンボイトンの長男は、フィラデルフィアでアブネーに助けを求めたが、教師達は、頑固で、容易に妥協しないと判明したので、アブネーの教師の選択は最

も不運であった。これらの教師は、自分たちの宗教を他の信仰の上に優位にしようとした。かれらは、しばしば言及された隊商案内人の講演は、イエス自身のものであったということを決して推測しなかった。

134:6.16 (1491.10) 教授陣の中での混乱が拡大するにつれ、3 兄弟は、資金援助を撤回し、5 年後には、学校が閉鎖した。その後、それは、ミスラ寺院として再開され、遂には自分達の組織の祝賀の際に焼失した。

7. 第31年目(紀元25年)

134:7.1 (1492.1) イエスがカスピ海への旅から戻った時、かれは、自分の世界旅行はほとんど終わりだと知っていた。かれは、パレスチナの外へのもうひとつの旅行だけをした。それは、シリアへであった。かれは、カペルナムへの短い訪問後、数日の訪問のためにナザレに立ち寄った。4 月中旬、かれは、テュロスへ向けてナザレを立った。そこから北へと旅を続け、シドーンに数日間留まりはしたものの目的地はアンチオケであった。

134:7.2 (1492.2) これは、パレスチナとシリアを通過するイエスの単独の放浪の年である。この旅の年を通して、かれ

は、この地域の異なる地域で様々な名前で知られていた。ナザレの大工、カペルナムの船大工、ダマスカスの筆記者、及びアレキサンドリアの教師。

134:7.3 (1492.3) 人の息子は、アンチオケで働き、観察し、学習し、訪問し、奉仕し、そして、人はどのように生きるのか、自分は、どのように考え、感じ、また人間の存在の環境に反応するのかを学びながら2カ月以上暮らした。かれは、この期間の3 週間、天幕職人として働いた。この旅行で訪問した他のどの所よりもアンチオケに長く滞留した。10　年後、使徒パウーロスがアンチオケで説教をしていたとき、信奉者達がダマスカスの筆記者の教義について話すのを聞いたとき、自分の生徒達があるじそのものの声を聞いたとは、あるじ自身による教えを聞いたとは、ほとんど知らなかった。

134:7.4 (1492.4) イエスは、アンチオケから海岸沿いを南にカエサレアへと旅した。そこで、数週間滞在し、海岸をヨッパへと進んだ。ヨッパからイアムニア、アシュドド、ガザへと内陸を旅した。ガザから、ベーシェバへと内陸路を取り、そこに 1 週間留まった。

134:7.5 (1492.5) イエスは、それからパレスチナの中心を通り、南のベーシェバから北のダンまで行く一個人としての最終的な歴遊を始めた。この北方への旅では、ヘブロン、ベスレヘム(自分の出生地を見た所)、エルサレム(ベサニアは訪問しなかった)ベールス、レボナハ、シハー、シェケム、サマリア、ゲバ、エンガニエム、エンドール、マードに立ち寄り、マグダラとカペルナムを通過し、北へと旅を続けた。そしてかれは、メロム湖の東を通りカラフタ経由でダン、すなわちカエサリア・ピリピに行った。

134:7.6 (1492.6) 内在する調整者は、その時イエスに人間の居住地域を見捨て、かれが、人間の心を習得する仕事を終え、地球での一生の仕事の残りに完全な献身を果たす任務を遂行できるようにヘルモン山に行くように導いた。

134:7.7 (1492.7) これは、ユランチアにおけるあるじの地球人生における稀で驚異的な時代の1　つであった。もう一つの、非常に似通ったものは、彼が洗礼の直後、ペラの近くの丘を一人で通過した経験であった。ヘルモン山の隔離のこの期間は、純粋に人間の経歴の終了、すなわち、

厳密には人間贈与の終了の特性を現し、一方後の隔離は、贈与におけるより神の局面の始まりを示したが。イエスは、6　週間ヘルモン山の斜面で一人で神と暮らした。

8. ヘルモン山での滞在

134:8.1 (1492.8) カエサリア・ピリピの近隣で若干の時を過ごした後に、イエスは、物資の準備をし、荷役用の動物とティグラスという若者を確保し、西ダマスカス道路沿いに、ヘルモン山麓の丘のかつてベイト・ジェンとして知られた村に向かった。西暦25年8月の中旬近く、かれは、本拠地をここに設立し、ティグラスの管理のもとに物資を残し、孤立した山の斜面を上った。ティグラスは、この初日イエスに指定された標高およそ1,800　メートルの地点へ同伴し、2人は、ティグラスが1　週間に 2 度食物を置くはずのこの場所に石の容器を造った。

134:8.2 (1493.1) 1日目、ティグラスを残した後、祈りのために止まったとき、イエスは、まだほんの少ししか山を上っていなかった。他の事柄と合わせて、かれは、「ティグラスといる」ための後見熾天使を送り返すように父に頼

んだ。彼は、人間生活における現実との最後の戦いまで一人で進むことを容認されることを要請した。そして、要請は受け入れられた。イエスは、彼を誘導し、支えるために内在する調整者とだけで大試練に突入した。

134:8.3 (1493.2) 山にいる間、イエスは質素に食した。食物を口にしない日は1 日か2 日に抑えた。彼が、この山で立ち向かってきた超人的生物に精神で格闘し、力で破ったのは本当であった。かれらは、サターニア系の彼の大敵であった。かれらは、現実と紊乱した心の幻影との区別ができない弱化し空腹な人間の知的な気まぐれから発展する想像力の幻影ではなかった。

134:8.4 (1493.3) イエスは、ヘルモン山で8 月の最後の3 週間と9 月の最初の3 週間を過ごした。これらの数週間、彼は、心の理解と人格制御の環を成し遂げる人間としての任務を終えた。天なる父とのこの期間の親交を通し、内在する調整者も、課された仕事を完了した。この地球の被創造物の人間の目標は、そこで遂げられた。心と調整者との調和の最終局面だけが完成されないまま残った。

134:8.5 (1493.4) 楽園の父との5 週間以上におよぶ中断することのない交わりの後、イエスは、彼の本質と時空間の人格顕現の物質的段階における勝利の確実性で絶対的に確信するようになった。かれは、神の資性が人間の資性に優勢となることを完全に信じ、断言することを躊躇わなかった。

134:8.6 (1493.5) イエスは、山での滞在の終わり近く、人の息子として、ヨシュア・ベン・ヨセフとしてサターニアの敵との協議の開催を許可されないものかどうかを父に尋ねた。この要求は承諾された。ヘルモン山での最後の週、途轍も無い誘惑、宇宙規模の試練が起きた。魔王(ルーキフェレーンスを代表する)と反抗的な惑星王子カリガスティアが、イエスとともにいて、イエスに完全に見えるようにした。そして、この「誘惑」、反逆的人格の詐称に直面した人間の忠誠心のこの最後の試練は、食物、寺院の尖塔、または僭越行為と関係するものではなかった。それは、この世界の王国に関するものではないが、広大かつ素晴らしい宇宙の主権に関するものであった。記録の象徴するところは、　世界の子供らしい考えの無教育な時代のために意図された。そして、後の世代は、

人の息子がヘルモン山でのその波瀾万丈の日に如何に途轍もない戦いをくぐり抜けたかを理解するべきである。

134:8.7 (1493.6) ルーキフェレーンスの密偵からの多くの提案と対案に、イエスは、単に、「楽園の父の意志が打ち勝ちますように。そして、お前達を、我が反逆の息子達を、日の老いたるものが神らしく審判しますように。私は、お前達の創造者たる父である。おそらく私には公正にお前達を裁けないし、お前達はすでに私の慈悲を拒んだ。私は、お前達をより大きい宇宙の裁判官達の採決に委ねる。」と答えただけであった。

134:8.8 (1494.1) ルーキフェレーンスに提案された全ての妥協と一時凌ぎに対し、肉体化の贈与に関するそのような全てのまことしやかな提案に対し、イエスは、「楽園の父の意志は為される。」と単に答えた。そして、つらい試練が終わったとき、分離されていた後見熾天使はイエスの側に戻り、彼に力をかした。

134:8.9 (1494.2) 晩夏のある午後、木立ちの中で、自然の静けさの中で、ネバドンのマイケルは、自己の宇宙の疑いのない主権を勝ち取った。任務を完遂したその日、時と空間

の進化の世界で人間の肉体に似せた化身の生活を完全に送るため創造者たる息子のもとへと出発した。この重大な業績の宇宙発表は、その後何カ月も、彼の洗礼の日までされなかったが、それは、すべて、その日山で本当に起きたのであった。そして、イエスがヘルモン山から下りて来たとき、サターニアのルーキフェレーンス反逆とユランチアのカリガスティア脱退事実上決着がついた。イエスは、自分の宇宙の主権を獲得するために課された最後の代価を払った。そして、それは、すべての反逆者の地位を管理し、今後の全てのそのような大変動(もし起こるならば)が、即座に、有効に対処されるように確定する。従って、イエスのいわゆる「大いなる誘惑」がその出来事のすぐ後ではなく、彼の洗礼前に行われたということが分かるかもしれない。

134:8.10 (1494.3) 山でのこの滞在の終わりに、イエスが下山していると、ティグラスが食物を持って会いに来るのに行き掛かった。彼に帰らせながら、「休息の時期は終わった。私は父のための仕事に戻らなければならない。」とだけ言った。かれらが、ダンへの戻る旅の間、イエスは、口数少なく全く変わった人であった。かれは、その

場所で若者に別れを告げ、ロバを与えた。それから前来た道を南へカペルナムへと進んで行った。

9.待機の時間

134:9.1 (1494.4) それは、夏の終わり近くの贖罪の日と礼拝堂の祝宴の頃であった。イエスは、安息日の間にカペルナムで家族会議を開き、翌日ゼベダイの息子のヨハネと湖の東方へ行き、ゲラーサ経由でヨルダン渓谷を下がりエルサレムに出発した。道中、同伴者と多少の会話をしているうちに、ヨハネは、イエスの大きい変化に気づいた。

134:9.2 (1494.5) イエスとヨハネは、ベサニアのラザロとその妹達のところで一夜を過ごし、翌朝早くエルサレムに行った。かれらは、少なくともヨハネは、その都市周辺で3週間ほど過ごした。イエスが近辺の丘を散策し、何日も天の父との精霊的な交わりに従事する間、ヨハネの方は、何日も単独でエルサレムに入った。

134:9.3 (1494.6) 贖罪の日の厳粛な礼拝の儀式には両者ともに出席した。ヨハネは、ユダヤ人の宗教儀式における最も重要な日の儀式に非常に感動したが、イエスは、終始考え深く黙っている見物人でいた。人の息子にとって、この

儀式の執行は、哀れで無念であった。彼は、その全てを天の父の性質と属性の不正確な表現として見た。無限の慈悲の神の正義と真実に関わる事実の茶番劇だと傍観した。かれは、父の優しい性質と宇宙におけるその慈悲深い行為につい燃えるほどに漏らしたかったのだが、誠実な訓戒者は、彼の時間はまだ来ていないと諭した。しかし、その夜イエスは、ベサニアでヨハネが大いに不安になる数多くの所見を漏らした。しかもヨハネは、その晩自分達の聞いたイエスが言ったことの真の意味を決して完全に理解はしていなかった。

134:9.4 (1495.1) イエスは、ヨハネと神殿の祝宴の週を通して留まる予定をした。この祝宴は、全パレスチナの毎年の休日であった。ユダヤ人の休暇の時であった。イエスは、この時の歓楽に参加はしなかったが、老若の気楽で楽しい奔放さを見るにつけ喜びを得て、満足を経験したのは明白であった。

134:9.5 (1495.2) 祝賀の週の真っ只中、祭礼が終わる前、イエスは、楽園の父とのよりよい心の交わりができる丘に退きたいと言ってヨハネと別れた。ヨハネは一緒に行きたか

ったであろうが、イエスは、「人の息子の重荷に耐える必要はない。都が安らかに眠る間、番人だけが不寝番をしなければならない。」と、彼に祭礼のあいだ留まるように言い張った。イエスは、エルサレムに戻らなかった。かれは、ベサニア近くの丘に一人でほぼ1 週間いた後にカペルナムへと出発した。帰り道では、シャウール王が自身の命を取った場所近くのギルボアの斜面で、単独で一　　昼夜を過ごした。カペルナムに到着したときは、かれは、ヨハネをエルサレムに残した時よりも明かるく見えた。

134:9.6 (1495.3) イエスは、翌朝ゼベダイの仕事場に置いてあった手回り品の入った箱の場所に行き、前掛けをつけて仕事の構えで現れ、「私の時間が来るのを待つ間、忙しくしているのが当然である」と言った。かれは、翌年の1月まで数カ月、船小屋で弟ジェームスの横で働いた。イエスとの作業のこの期間の後、例え如何ような疑いが人の息子の生涯の仕事に対するジェームスの理解を曇らせようとも、かれは、イエスの任務に対する信念を決して二度と完全に諦めることはなかった。

134:9.7 (1495.4) 船小屋でのイエスの仕事のこの最後の期間、いくつかの大型船の内装仕上げに時間の大部分を費やした。全ての手仕事にかなりの苦心をし、立派な作品を完成したとき、かれは、人間の業績の満足感を経験するように思えた。かれは、瑣事には時間を無駄にはしなかったが、与えられたいかなる仕事の本質的な事に関しては、骨身を惜しまない労働者であった。

134:9.8 (1495.5) 時が経つにつれ、ヨルダン川で悔悟者を洗礼しながら説教しているヨハネという者の噂がカペルナムに届いた。ヨハネは、「天の王国は近い。悔悟し、洗礼をうけよ。」と説いた。ヨハネが、エルサレムに最も近い川の浅瀬からヨルダン渓谷をゆっくり説教しながら進むに間、イエスは、これらの報告を聞いた。しかし、イエスは、ヨハネが、翌年、西暦26年の1 月にペラ近くに川を上ってくるまで船を作り働き続け、自分の道具を置いて、「私の時が来た。」と宣言し、やがて、洗礼のためヨハネのもとに赴いた。

134:9.9 (1495.6) しかし、大きい変化が、イエスの上に起きていた。国を往来するごとに、彼の訪問や奉仕活動を受けて

きた人々のうちの僅かしか、過ぎ去った歳月に1 個人として知り合い、慕ってきた同じ人物が、公の師だとはその後ずっと気づかなかった。そして、早期の受益者達が、公の、権威ある教師の後の役割でイエスと気づかないこの失敗には理由があった。それは、心と精神のこの変化は、長年にわたり進行しており、ヘルモン山での重要な滞在中に終わった。

論文 135
洗礼者ヨハネ３３

135:0.1 (1496.1) ガブリエルが前年の6 月エリサベツにした約束に基づき、洗礼者ヨハネは、紀元前7 年3 月25 日に生まれた。エリサベツは、ガブリエル訪問の秘密を5 カ月間保った。彼女が、夫のザハリーアスに告げると、かれは、大いに当惑し、ヨハネ出生のおよそ6 週間前に奇妙な夢をみて、ようやく彼女の話を完全に信じた。ガブリエルのエリサベツ訪問とザハリーアスの夢を除いては、洗礼者ヨハネの出生に繋がる奇妙なこと、または超自然なことは何もなかった。

135:0.2 (1496.2) 8 日目、ユダヤ人の習慣に順じヨハネは割礼された。エルサレムのおよそ4 マイル西のユダの町として

知られた小さい村で、かれは、日を重ね年を重ね、普通の子として成長した。

135:0.3 (1496.3) ヨハネの幼年期前半での最も重大な出来事は、両親と共に、イエスとナザレ一家を訪問したことであった。この訪問は、彼が6 歳を少し過ぎた紀元前1 年の6月であった。

135:0.4 (1496.4) 両親は、ナザレからの帰宅後、若者に系統だった教育を始めた。ユダヤ教会の学校はこの小さい村にはなかった。しかしながら、聖職者であるザハリーアスは、かなり良い教育を受け、またエリサベツは平均的なユダヤ女性よりもはるかに良い教育を受けていた。「アーロンの娘達」の子孫である彼女もまた、聖職者の家の出の者であった。ヨハネは、一人子であったので、二人は心と精神面の鍛練にかなりの時間をかけた。ザハリーアスは、多くの時間を息子の教育に専念できるように、エルサレムの寺院ではほんの短い礼拝の期間を受け持った。

135:0.5 (1496.5) ザハリーアスとエリサベツは、羊を育てた小さい農場を持っていた。この土地では生計をほとんど立て

なかったが、ザハリーアスは、聖職者に献納された寺院の資金からの定期の手当てを受領した。

1.ヨハネナジル人となる

135:1.1 (1496.6) ヨハネには14歳で卒業する学校はなかったが、正式のナジル人の誓いを立てるように、両親が適切な年としてこの年を選んでいた。そのため、ザハリーアスとエリサベツは、息子を死海近くのエンゲディに連れて行った。これは、ナジル人友愛会の南の本部であり、そこで、若者は、人生のためのこの集団に正式に、厳かに入会させられた。これらの儀式と全ての酒類を慎むこと、髪を伸ばすこと、死者に触れるのを控えるという誓いを立てた後に、家族は、エルサレムへと進み、そこで、エルサレムの寺院の前で、ヨハネは、ナジル人になる者に要求される捧げ物をし終えた。

135:1.2 (1496.7) ヨハネは、有名な先人であるサムソンと予言者サミュエルに宣誓されたものと同じ生涯の誓いを立てた。終身ナジル人は、神聖化され、そして聖なる人格と見られた。ユダヤ人は、ナジル人というものをほとんど尊敬および崇拝を持って、高僧相応で重んじ、これは、

高僧を除く、生涯の献身をするナジル人のみが、最も神聖な寺院に入ることを許された唯一の人々であったということから奇妙なことではなかった。

135:1.3 (1497.1) ヨハネは、父の羊の世話をするためにエルサレムから戻り、高潔な性格の強者に成長した。

135:1.4 (1497.2) 16歳のとき、ヨハネは、エーリージャに関する読書の結果、カーメル山の予言者に大いに感動し、その服装を採用すると決めた。その日から、ヨハネは、いつも革の腰ひもで毛の深い衣服を着た。かれは、16　歳で1.8　メートル以上もあり、ほとんど成長していた。ゆったり流れる髪と特異な服装で絵に描いたような若者であった。そして、両親は、この一人息子、約束の子、ナジル人に素晴らしいものを期待した。

2. ザハリーアスの死

135:2.1 (1497.3) ザハリーアスは、数カ月の病気の後に、丁度ヨハネの18歳が過ぎた、西暦12年7月に死んだ。ナジル人の誓いが死者との接触を、たとえ自分の家族であろうとも、禁じていたので、これはヨハネにとり格別に妨げな困惑の時であった。死者による汚染に関し誓いの制限に

順じる努力はしたものの、完全にナジル人の修道会の要求に従順であるということを疑問に思った。従って、父の埋葬後、かれは、エルサレムに行き、そこで女性用の中庭にあるナジル人用の一遇で、清めに必要とされる生贄を捧げた。

135:2.2 (1497.4) この年9月に、マリアとイエスを訪ねるためにナザレに旅行をした。ヨハネは、生涯の仕事に踏み切るとほぼ決心するところであったが、家に帰り、母の世話をし、「父の時間の来ること」を待ち受けるというイエスの言葉にだけではなく、手本にも諭された。この楽しい訪問の終わりにイエスとマリアに別れを告げた後、ヨハネは、ヨルダン川での洗礼まで再びイエスに会うことはなかった。

135:2.3 (1497.5) ヨハネとエリサベツは、家に戻り将来の計画を立て始めた。ヨハネが寺院の資金からの聖職者用の手当ての受領を拒否したので、まる2 年経と経たないうちにほぼ家をなすところであった。それで二人は、羊の群れとともに南に行くことにした。これにより、ヨハネの20歳の夏、ヘブロンへの引越しがあった。ヨハネは、いわ

ゆる「ユダヤの荒野」のエンゲディの死海へと大きく流れ込む支流の小川に沿って羊の世話をした。エンゲディ植民地は、終身ナジル人や期限付きの奉献のナジル人だけでなく、それぞれの群れと共にこの領域に集まり、ナジル人友愛会と親しく交わる他の多数の禁欲的な牧夫も含んでいた。彼らは、羊牧や裕福なユダヤ人からの会への贈り物で生活をした。

135:2.4 (1497.6) 時の経過につれて、ヨハネは、次第にヘブロンに戻らなくなり、より頻繁にエンゲディを訪れた。ナジル人の大多数とは似ても似つかない程で、友愛会との親交は、彼には非常に難しいとはっきりと分かった。しかし、かれは、エンゲディの植民地の指導者で長でもあるアブネーが非常に気に入っていた。

3. 羊飼いの生活

135:3.1 (1497.7) ヨハネは、この小さい川の狭間に沿って、積み重ねた石の少なくとも12ヶ所の避難所と夜のための柵囲いを造り、そこで羊とヤギの群れを監視し保護することができた。羊飼いとしてのヨハネの生活は、彼に思考のためのかなりの時間を与えた。母に会うためや羊の売却

のためヘブロンに行ったりするとき、また安息日の礼拝のためエンゲディにいったりするとき、群れの世話をするある意味で養子にしたようなベス-ズールの孤児、エズダとよく話した。ヨハネと若者は、羊肉、ヤギの乳、自然の蜂蜜、その地方の食用のイナゴを食し、非常に質素に暮らした。これは、二人の通常の食事は、時おりヘブロンとエンゲディからの食料で補足された。

135:3.2 (1498.1) エリサベツは、パレスチナ人と世界情勢を逐次ヨハネに知らせた。そして、旧体制が終わる時がどんど近づいているという、新時代の、つまり「天の王国」接近の伝令者に自分がなろうとしている彼の信念は、だんだんと深まっていった。この無骨な羊飼いは、予言者ダニエルの文章を特に好んだ。かれは、ザハリーアスが世界の偉大な王国史を表わしていると教えたバビロンに始まりペルシア、ギリシア、遂にはローマに至る壮大な画像に関するダニエルの記述を1,000　回読んだ。ヨハネは、ローマがすでに数ケ国語を話す人種と民族で構成されているということから、強く結合され、堅く統合された帝国には決してなり得ないということを察知した。かれは、ローマは、その時でさえシリア、エジプト、パレ

スチナ、および他の行政区として分割されていると信じた。ヨハネは、さらに読み進んだ。「これらの王の時代に、天の神は決して破壊されることのない王国を築く。そして、この王国は、他の人々に与えられないが、これらの全ての王国を粉々に破壊し、食い潰すであろう。そして、それは、とこしえに立っているであろう。」「全ての民族、国家、言語が彼に仕えるように、統治権、栄光、王国が彼に与えられる。彼の統治権は滅ぶことのない永遠の統治権であり、彼の王国は決して破壊されないであろう。」「そして、王国と統治権と全天界の下の王国の偉大さが、いと高き者の聖者の人々に与えられるであろう。その王国は、永遠の王国であり、全自治領が彼に仕え従うであろう。」

135:3.3 (1498.2) ヨハネは、イエスに関し両親から聞いたことや、経典で読んだこれらの章句によってもたらされる混乱を決して完全に乗り越えることができなかった。ダニエルのなかに、「夜、幻影を見た。そして、見よ。天の雲と共に、人の息子らしき者が来た。そして統治権と、栄光と、王国がその者に授けられた。」を読んだ。しかし、予言者のこれらの言葉は、両親に教えられたことと

相入れなかった。18　歳の訪問の際のイエスとの会話とも、教典の文のいずれにも一致しなかった。この混乱にもかかわらず、彼が困惑している間中、母は、遠い従兄、ナザレのイエスが、本当の救世主であるということ、デヴィッドの王座に着くことになっているということ、ヨハネが、イエスの事前の伝令者と主要な援助者になるということを、受け合うのであった。

135:3.4 (1498.3) ヨハネは、ローマの不道徳と邪悪、そして帝国の放蕩と道徳的な不毛について聞いた全てから、ヘローデス・アンティパスとユダヤの知事の悪行について自分の知っていることから、時代の終わりが迫っていると信じようとした。無骨で気高いこの自然児にとは、人間の時代の終わりと新しい神の時代の夜明け—天の王国—のために世界は準備ができたように思われた。ヨハネの心の中で、自分は従来の予言者の最後の者で、新しい予言者の最初の者になるという気持ちが広がっていった。そして、全ての人の前に出て行き、次のように宣言するしたいという高まる衝動にすっかり心が震えた。「悔悟せよ、神と正しい関係にあれ。終わり備えよ。地球の新

たで永遠の秩序、天の王国の現出のために自身の準備をせよ。」

4. エリサベツの死

135:4.1 (1499.1) 西暦22年8月17日、ヨハネが28 歳のとき、母は突然亡くなった。死者との接触に関するナジル人の制約、たとえ自分の家族でさえ、について知るエリサベツの友人が、ヨハネを呼びにやる前に、　エリサベツの埋葬をすべて手配した。母の死の報せを受け取ると、ヨハネは、エズダに群れをエンゲディに追いやるように指示し、ヘブロンに出発した。

135:4.2 (1499.2) 母の葬儀からエンゲディに戻り、自分の群れを友愛会に進呈し、そして、しばらくの間、断食して祈る傍ら、外の世界から自分を引き離した。ヨハネは、神性への接近の古い方法だけを知っていた。エーリージャ、サムエル、ダニエルというような記録だけを知っていた。エーリージャは、予言者の彼の理想であった。エーリージャは、予言者と見なされたイスラエルの最初の教師であった。そしてヨハネは、自分が本当に天の使者の

この長くて傑出した列の最後となることを本当に信じた。

135:4.3 (1499.3) 2年半、ヨハネは、エンゲディに住み、「時代の終わりは差し迫っている。」「天の王国が出現しようとしている。」と大半の友愛会を説得した。彼の全ての早期の教えは、非ユダヤ人の支配からユダヤ国家を救う約束された救世主という当時のユダヤ人の考えと概念に基づくものであった。

135:4.4 (1499.4) この期間、ヨハネは、ナジル人エンゲディの家で見つけた神聖な著作物をしきりに読んだ。その時点までの最後の予言者であるイザヤとマラキエに特に感銘を受けた。かれは、イザヤの最後の5 章を繰り返し読み、これらの予言を信じた。マラキエでは次の部分を読み取るのであった。「見よ、私は、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、予言者エーリージャを遣わす。父の心を子に向けさせ、子の心を父に向けさせる。それは、私が呪いで地球を打ち壊しに来ないためである。」そして、ヨハネに来たる王国の説教と、同胞のユダヤ人に激しい怒りから逃れるように勧めるために出て行くことを思い留

まらせたのは、エーリージャが戻るというマラキエのこの約束だけであった。ヨハネは、来たるべき王国の通知の宣言の用意ができていたが、エーリージャ到来のこの予想が2 年以上も彼を押しとどめた。かれは、自身がエーリージャでないことを知っていた。マラキエは、何を意味したのか。予言は文字通りであるのか、または比喩的であったのか。どのように彼は、真実を知ることができたのか。ヨハネは、最終的に、最初の予言者がエーリージャと呼ばれたので、結局最後の名前も同じ名前が知られるべきであると、敢えて考えた。それでも疑いに疑って、かれは、自身をエーリージャと名乗らなかった。

135:4.5 (1499.5) ヨハネに同時代人の罪と悪への直接的でぶっきらぼうな攻撃方法を採らせたのはエーリージャの影響であった。彼は、エーリージャに似せて装おうとし、エーリージャのように話す努力をした。あらゆる外観の面において、かれは、昔の予言者に似ていた。かれは、まったくもって勇敢で絵に描いたように見事な自然の子、まったくそのように恐れ知らずで大胆な正義の伝道者であった。ヨハネは、文盲ではなかった。ユダヤ人の神聖な著作をよく知ってはいたものの、まったく教化されてい

なかった。かれは、明確な思想家、力強い話者、熱烈な弾劾者であった。かれは、全く年相応の模範者ではなかったが、雄弁な叱責者であった。

135:4.6 (1499.6) ついに、かれは、新時代、神の王国の宣言方法を考えついた。彼は、救世主の伝令者になることに落ち着いた。かれは、すべての疑いを一蹴し、西暦25年3 月のある日、公の伝道者として短いが輝かしい経歴を始めるためにエンゲディを出発した。

5. 神の王国

135:5.1 (1500.1) ヨハネの前触れを理解するためには、彼が活動の舞台に現れた当時のユダヤ民族の状況報告におよばなければならない。全イスラエルが、およそ100 年間も途方に暮れてきた。非ユダヤ人の君主への連続的服従の解釈に戸惑っていた。モーシェは、正義がつねに繁栄と力で報いられると教えなかったか。神に選ばれた民ではなかったのか。　ダーヴィドの王座はなぜ寒々しく空虚であったのか。モーシェの教義と予言者の指針に照らし合わせてみるとき、ユダヤ人は、長く続いた国家の荒廃の説明の難しさに気づいた。

135:5.2 (1500.2) イエスとヨハネの時代のおよそ100 年前、宗教教師、黙示信仰者の新しい学校が、パレスチナに現れた。これらの新しい教師は、国家が犯した罪のために人々が報いを受けているとユダヤ人の受難と屈辱の説明をする信仰の方法を発展させた。かれらは、過去のバビロニアと他の監禁状態を説明するためにあてがわれた周知の理由へと後退した。しかし、黙示録の信仰者たちは、イスラエルは勇気づけられるべきである、苦悩の日々はほとんど終わりに近い、神に選ばれた人々の試練はほぼ終わろうとしている、神の異教の外国人に対する忍耐はほとんど尽き果てている、と教えた。ローマ支配の終わりは時代の終わり、ある意味では世の終わりと同義であった。これらの新しい教師は、ダニエルの予言の方に大きく傾いており、創造がその最期の段階に移ろうとしていると一貫して教えた。この世の王国は、神の王国になろうとしていた。当時のユダヤ人の心にとって、これは、次の言い回し—天の王国—を意味し、それはヨハネとイエスの両者の教えに終始一貫している。パレスチナのユダヤ人にとり、「天の王国」という言い回しは、神、救世主が、ちょうど天国で統治したように—

「天国でのように、あなたの意志が地球で為される。」—力の完全さで地上の国々を統治する絶対に公正な状態という1 つの意味しかなかった。

135:5.3 (1500.3) ヨハネの時代全ユダヤ人が、「王国はいつ来るだろうか。」と心待ちに尋ねていた。非ユダヤ人の国々の支配の終わりが近づいているという一般的な感覚があった。その世代の生涯の間には、全てのユダヤ人に、長い年月の願望達成が起こるという活気的な望み強い期待が満遍なくあった。

135:5.4 (1500.4) ユダヤ人は、来たる王国の性質の推定において大いに異なりはしたものの、間近に、ほんの戸口まで差し掛かっているという信念においては同じであった。旧約聖書を読む者の多くが、その敵から開放され生まれ変わるユダヤの国のために、そしてダヴィド王の後継者にとってかわるパレスチナの新しい王を、全世界の正当で公正な支配者としてすぐに承認される救世主を、文字通り心待ちに探した。小さくはあったが、敬虔なユダヤ人の別の集団は、神のこの王国に関しおびただしく異なる視点を持った。彼らは、来たる王国が現世のものでない

こと、世界は確かにその終わりに近づいていると、そして、「新しい天国と新しい地球」は、神の王国の設立の到来を告げることであったと教えた。この王国は、永遠の自治領であり、罪は終わろうとしていると、新しい王国の国民は、この無限の至福の享受のなかで不滅になろうとしていると教えた。

135:5.5 (1500.5) 皆は、粛清する、あるいは浄化する若干の徹底的な規律が、地球上における新しい王国の設立に当然先行することについて同意していた。直解主義者は、すべての無神論者を滅ぼす世界規模の戦争が起き、そして信仰に忠実な者が、普遍で永遠の勝利に瞬時に進行すると教えた。精神主義者は、王国が、邪悪な者を罰と最終的な破壊のふさわしい裁きに追いやる神の偉大な裁決により到来を告げられるであろうと、そして同時に、選民の中の敬虔な聖者を、神の名前で解放された国の支配をする人の息子のいる名誉と権威の高い席に上げると、教えた。そして、この後者の集団は、多くの敬虔な非ユダヤ人が新しい王国の仲間に認められるかもしれないとさえ考えた。

135:5.6 (1501.1) ユダヤ人の何人かは、神が、ことによると直接的、また神らしい介入によってこの新しい王国を樹立するかもしれないという意見を抱いたが、圧倒的多数は、彼が代表するある中継ぎ、救世主を間に入れると考えた。そして、それは、ヨハネとイエスの世代のユダヤ人の心にあり得た救世主という言葉の唯一可能な意味であった。救世主は、単に神の意志を教えたり、あるいは正義の生き方の必要性を宣言する者について言及し得るものではなかった。救世主は、予言者以上のものを意味した。そのような全ての聖なる人々には、ユダヤ人は予言者の称号を与えた。救世主は、新しい王国、神の王国の樹立をもたらすことであった。これを成し得なかった者は、伝統的なユダヤ人の感覚において救世主ではあり得なかった。

135:5.7 (1500.7) この救世主はだれであるのだろう。又もや、ユダヤ教師達の意見は異なった。古参者は、ダヴィドの息子の教義に執着した。新参者は、新しい王国は、天の王国であるので、新支配者は、神の人格、天で長く神の栄誉の座にいた者であるかもしれない、と教えた。奇妙に聞こえるかもしれないが、このように、新しい王国の支

配者を想像した者は、人間の救世主としてではなく、単なる人間としてではなく、このように長く待たれている、新しくなる地球の支配権を持つ「人の息子」—神の息子—天の親王として彼を見た。ヨハネが、「悔悟せよ、天の王国が間近いので。」と広布に向かったとき、ユダヤ世界の宗教的な背景はそのようなものであった。

135:5.8 (1500.8) それ故、来たるべき王国のヨハネの情熱的な説教を聞いた人々の少なくとも6 人の心の中で異なる意味を持ったという事が明らかになる。しかし、かれらが、いかなる重要性をヨハネが使った言葉に置こうとも、ユダヤ王国を期待する者のこれらの様々な集団は、この正義と悔悟を説く誠実で、熱心で、粗っぽい伝道者の広布に興味をそそられ、そしてその伝道者は、非常に厳かに「迫る神の怒りから逃がれる」ことを聞き手に熱心に説いた。

6. ヨハネ説教を始む

135:6.1 (1501.4) 西暦25年3 月初め、ヨハネは、死海の西海岸周辺、そしてジャシュアとイスラエルの子孫等が最初に約束の地に入ったとき通った古代の浅瀬ジェリーホの反対

側のヨルダン川に旅行した。そして、川の反対側に渡り、浅瀬への入り口近くに自分の場所を決め、川を往来する人々に説教を始めた。全ヨルダン川の横断点でこれが最も往来の激しい地点であった。

135:6.2 (1501.5) 彼が伝道者以上の者であったということは、ヨハネの声を聞いた全ての者にとって明らかであった。ユダヤの荒野から来たこの見知らぬ男の言うことを聞いた人々の大多数は、自分達は予言者の声を聞いたと信じながら遠ざかった。これらの疲れて期待に満ちたユダヤ人の魂が、そのような現象にかき乱されたのは当然であった。全ユダヤ歴史を通して、アブラハムの敬虔な子供等はそれほどまでに「イスラエルの安らぎ」にあこがれ続けたり、また熱烈に「王国の回復」を予期しなかった。全ユダヤ歴史を通して、ヨルダン川のこの南の横断地点の土手の上に非常に神秘的に現れたまさしくその時の「天の王国は間近い」というヨハネの言葉ほど、深く一般的な魅力を与えたものは決してなかった。

135:6.3 (1502.1) 彼はアモスのように牧夫であった。古風なエリヤのようないでたちで、「エリヤの精神と力」で訓告を

大喝し、激しく警告を浴びせた。旅行者が、彼が説教している情報をヨルダン川沿いに広く伝えたので、この奇妙な伝道者が、全パレスチナを勢いのよい騒ぎに至らせたのは驚くに足りない。

135:6.4 (1502.2) このナザレの伝道者の仕事に関し、もう一つの新たな特徴があった。彼は「罪を赦すために」ヨルダン川で信者一人一人の洗礼を施した。洗礼はユダヤ人の間の新しい儀式ではなかったが、ヨハネがその時したようなものは一度も見たことがなかった。非ユダヤ人の改宗者を寺院の外庭の仲間へと洗礼することは、このように長く実行したが、ユダヤ人自身が悔悟の洗礼を受けることは一度も要求されたことはなかった。ヨハネが説教と洗礼を開始とヘローデス・アンティパスの扇動による彼の逮捕と投獄との間にはほんの15　カ月しかなかったが、かれは、この短期間に10　万人をはるかに越える悔悟者に洗礼を施した。

135:6.5 (1502.3) ヨハネは、ヨルダン川の北での開始前、ベタニアの浅瀬で4　カ月間説教をした。多少の好奇心のある者、だが多くの真剣で真面目な者からなる何万人もの聴

衆が、ユダヤ、ペライア、サマリアの全地域から聞きにやって来た。幾人かは、ガリラヤからさえも来た。

135:6.6 (1502.4) この年の5 月、彼はベタニヤの浅瀬にまだ長居していたが、聖職者とレビ族は、ヨハネが救世主であると主張しているのかどうか、また誰の権威のもとに説教しているのか問い質すための代表団を出した。ヨハネはこれらの質問者に答えた。「予言者が言ったように、『荒野で呼ばわる者の声』を聞いたと、また『主の道を用意し、神のためにその道を真っ直にせよ。全ての谷は埋められ、全ての山と丘とは低くされ、盛り上がった地は平地に、でこぼこ道は平らとなる。こうして、あらゆる人が、神の救いを見る。』と聞いたと主人の元にいって伝えよ。」

135:6.7 (1502.5) ヨハネは、勇ましいが駆け引きを知らない伝道者であった。ある日、かれがヨルダン川の西の堤で説教をし洗礼していると、パリサイ人の集団と数人のサドカイ人が洗礼のためヨハネの前に進み出た。かれは、川の中へ導いて行く前に、かれらの一団に向かって言った。「誰が、お前達に炎の前の毒蛇のように近づく復讐から

逃げるように警告したのか。お前達を洗礼するつもりであるが、罪の赦しを受けるつもりなら、真剣な悔悟にふさわしい成果をもたらすように警告する。アブラハムがお前達の父であるなどと言わないでくれ。神は、お前達の前にあるこの12個の石をアブラハムにふさわしい子供を育て上げることができると断言する。そして、この瞬間、まさにその木々の根に斧が横たえられている。良い実をつけない木は全部切り倒され、炎に投げ込まれる運命にある。」(彼が参照した12個の石は、彼らが最初に約束の地に入った時、「12　の部族」の交差の記念のためにまさしくにこの地点にジャシュアによって並べられた評判の記念の石であった。)

135:6.8 (1502.6) ヨハネは、弟子達のために授業を行ない、その過程で彼等の新たな人生の細部にわたる教授をし、多くの質問に答える努力をした。教師達には法の精神ならびに法律の文言を教えることを助言した。かれは、金持ちには貧乏人に食べ物を与えることを教え、税徴収人には、「割り当てられた以上に強要してはならない。」と言った。兵士に「暴力を揮わず、不当に何も強要してはならない—自分の賃金に満足せよ。」と言った。皆に助

言をするとともに、「時代の終わりに備えよ—天の王国は間近である。」と説いた。

7. ヨハネ北に旅す

135:7.1 (1503.1) ヨハネは、来たるべき王国とその王についてまだ混乱した考えのままでいた。長く説教すれば説教するほど、ますます混乱するようになったが、来たるべき王国の性質に関わるこの知的な不確実性は、王国の即時の出現の確実性に関わる彼の信念を少しも減じなかった。ヨハネは、心では混乱したかもしれないが、精神においては決してそうではなかった。かれは、来たるべき王国に疑いはないが、イエスが、その王国の統治者であることになっているかどうかに関しては全く確信がなかった。ヨハネが、ダヴィドの王座の回復の考えにしがみつく限り、ダヴィドの市に生まれたイエスが、長く待たれている救出者となるという両親の教えは一貫しているようであったが、彼が精霊的な王国の教義と地球の現世の終わりの教義に傾けば傾くほど、イエスがそのような出来事で一役果たすということには大いに疑いがあった。時おり全てに疑問を持ったが、長い間ではなかった。か

れは、従兄と隈なく話せることをこの上なく願ったが、それは交した約束に反することであった。

135:7.2 (1503.2) ヨハネは、北へ旅をしながらイエスのことをよく考えた。ヨルダン川に沿って旅しながら12　ヶ所以上で立ち止まった。「あなたが救世主ですか。」と尋ねた弟子の直接の質問に答えて、「私の後に続く別の方」と最初に言及したのはアダムという所であった。そして、続けて言った。「私より偉大な方が私の後に来られるだろう。その方のサンダルの紐を屈んで解く価値も私にはない。私は水で洗礼するが、その方は聖霊で洗礼されるであろう。そして、脱穀の床を完全に洗うために、シャベルがその方の手にある。自分の穀倉に小麦を集められるが、もみ殻は判決の炎で焼き尽くされるであろう。」

135:7.3 (1503.3) 弟子の質問に応じて、ヨハネは、自分の教えを広げ続け、日々、自分の初期の謎めいた意見に比べ、「悔悟し、洗礼されよ。」と、有用かつ元気づけとなるものをさらに付け加えた。ガリラヤとデカポリスからの群衆が、この時までに到着していた。何十人もの熱心な信者が、自分達が崇拝する教師と毎日長居した。

8. イエスとヨハネの談合

135:8.1 (1503.4) 西暦25 年の12 月までには、ヨハネがヨルダンへの旅でペライア付近に辿り着いたとき、その名声は、パレスチナ中に広がっており、彼の仕事は、ガリラヤ湖周辺の全ての町での会話の主要な話題になった。イエスはヨハネの教えを褒めており、これが、悔悟と洗礼のヨハネの儀式にカペルナムからの多くの者が加わる結果となった。ヨハネがペライアの近くに説教の場所を取った直後の12 月、ジェームスとゼベダイの漁師の息子達が、そこへ行き洗礼を申し出た。彼らは、1 週間に1 度ヨハネに会いに行き、伝道者の最新の、直接の報告をイエスの元へもたらした。

135:8.2 (1503.5) イエスの弟のジェームスとジュードは、洗礼のためにヨハネの元に行くことを話し合っていたことであり、ジュードが安息日の礼拝にカペルナムにやって来た今、二人は、礼拝堂でのイエスの講義を聞いた後、自分達の計画をイエスに相談することにした。これは、西暦26年1月12日、土曜日の夜のことであった。イエスは、翌日までの議論の延期を要求し、その際二人に答えると言った。彼はその夜ほとんど眠らず、天の父との近い交

わりをした。かれは、弟達と正午の食事をとり、ヨハネによる洗礼に関し彼らに忠告する手配をしてあった。その日曜日の朝、イエスはいつものように船小屋で働いていた。ジェームスとジュードは、弁当をもって到着し、まだ正午の休憩時間ではなく、イエスがそのような事柄に非常に規則正しいことを知っていた二人は、材木小屋で待っていた。

135:8.3 (1504.1) 昼の休憩直前、イエスは、道具を置き、仕事用の前垂れを脱ぎ、部屋に一緒にいた3 人の労働者に単に「私の時間が来た。」と告げた。かれは、弟のジェームスとジュードのところへ出掛け、「私の時間が来た—ヨハネのところへ行こう。」と繰り返した。そして、彼らはすぐペライアに出発し、旅をしながら昼食をとった。これは、1 月13 日、土曜日であった。彼らは、夜ヨルダン渓谷に滞在し、翌日正午頃にヨハネの洗礼の場所に到着した。

135:8.4 (1504.2) ヨハネは、ちょうどその日の志願者の洗礼をし始めたところであった。ヨハネの来たるべき王国の説教を聞き信奉者となった熱心な男女のこの列にイエスと2

人の弟が並んだとき、何十人もの悔悟者が、自分達の順番を待ち並んで立っていた。ヨハネは、ゼベダイの息子達にイエスのことを以前から尋ねてきた。自分の説教に関するイエスの意見を聞いており、また日を追うごとにその場所にイエスが来るのを期待してはいたものの、洗礼志願者の列に迎え入れるとは思っていなかった。

135:8.5 (1504.3) そのような多くの転向者の素早い洗礼の詳細で夢中になっており、ヨハネは、人の息子が目の前に立つまでイエスを見上げなかった。ヨハネが、イエスに気づき生身の従兄弟に挨拶し、「それにしても、私に挨拶するのに何故水の中に入ってくるのですか。」と尋ねる間、儀式は暫く中断された。そこで、イエスは、「君の洗礼を甘受するために。」と答えた。ヨハネが応答した。「しかし、私の方が、あなたに洗礼されるべきであります。あなたがなぜ私の方に来られるのですか。」そこでイエスがヨハネに囁いた。「今は、我慢してくれ。私とここに立っている弟達のために君と二人でこの例を設けることになるし、人々が、私の時間が来たのを知るかもしれない。」

135:8.6 (1504.4) 断固たる、権威ある響きがイエスの声にはあった。西暦26 年1 月14 日、月曜日の正午にヨルダン川でナザレのイエスの洗礼の準備をしたとき、ヨハネは、感きわまってぶるぶる震えていた。このようにして、ヨハネは、イエスとその弟ジェームスとジュードを洗礼したことであった。ヨハネは、この3 人を洗礼すると、翌日正午に洗礼を再開すると発表し、その日は他の者達を帰させた。人々が去り行くとき、まだ水の中に立っている4 人の男は、奇妙な音を聞いた。やがて、イエスのすぐ頭上に命名しようのないものが少しの間現れた。彼らは、「これが誠に喜ばしい我が愛しい息子である。」と言う声を聞いた。イエスの顔付きが大きく変化し、黙って水から出て来ると、かれは、彼等に別れを告げ、丘に向かい東の方へ行った。誰も、40日間イエスを再び見なかった。

135:8.7 (1504.5) ヨハネは、母の口から幾度となく聞いた、イエスも自分もまだ生まれる前のガブリエルの母の訪問の話をイエスに伝えるためその後を適当な間隔で追っていった。「今、確実にあなたが救出者であることが分かりました。」と言い、イエスが先に進むままにした。

9. 40日間の説教

135:9.1 (1505.1) ヨハネが弟子達のところに戻ると、(今や、彼のところに泊まる25人、あるいは30人程が絶えずいた)、弟子達は、イエスの洗礼に関してたった今起きたことについて話し合い、熱心な会議の最中であった。ヨハネが弟子達にイエス生誕前のガブリエルのマリア訪問の話をしたとき、またこのことを告げた後にさえイエスが一言も言わなかったことを明らかにしたとき、彼らは一入驚いた。その晩雨はなく、この 30 人以上のこの一団は、星明りの夜に入るまで長く話し込んだ。かれらは、イエスがどこに行ったのか、そして、いつ再び会えるのかと疑問に思った。

135:9.2 (1505.2) この日の経験の後、来たるべき王国と期待される救世主に関するヨハネの説教には、新しいある種の調子を帯びてきた。それは、緊張の時間、イエスの帰りを待つ、緊張の40日間であった。しかし、ヨハネは、かなりの強力に説教し続け、一方弟子達は、この頃にヨルダン川でヨハネのまわりに集まった溢れんばかりの人だかりに説教し始めた。

135:9.3 (1505.3) この40日の待機の間、多くの噂が田舎周辺、またティベリアスやエルサレムにさえ流布した。ヨハネの野営場に数千もの人数が、新たな呼び物、評判の救世主を見に来るのだが、イエスは見えなかった。ヨハネの弟子達が、見なれない神の子が丘に行ったと主張したとき、多くの者は、話全体を疑った。

135:9.4 (1505.4) イエスがそれらの元を去ったおよそ3週間後、ペライアに、エルサレムからの聖職者とパリサイ人の新たな代表団が到着した。彼らは、ヨハネがエリーヤであるか、それともモーシェが約束した予言者であるのか直接ヨハネに尋ねた。「私ではない。」とヨハネが言うと、かれらは、敢えて「救世主であるか。」と聞き、「私ではない。」と、ヨハネが答えた。そこでエルサレムからの者たちが言った。「エリヤでも予言者でも救世主でもないならば、なぜ人々に洗礼を施し、こうした騒ぎを引き起こすのか。」ヨハネが返答した。「私がだれであるかを言うのは私の声を聞き、私の洗礼を受けた人々でなければならないが、私が水で洗礼をするのに反して、聖霊で洗礼するために戻ってこられる方が我々の中にいるということをはっきり言おう。

135:9.5 (1505.5) この40日間、ヨハネとその弟子達にとっては困難な期間であった。イエスへのヨハネの関係は何であるのか。多くの質問が議論となった。政治と利己的優先が台頭し始めた。激しい議論は、救世主のいろいろな考えと概念を中心に大きくなっていった。かれは、軍幹部やダヴィド王になるのだろうか。ジャシュアがカナーン人にしたように、かれは、ローマ軍を強打するのだろうか。または、精霊的な王国をうちたてに来るのだろうか。天の王国の樹立のこの任務に何が組込まれたいることになっているのか心の中では全体が明確であったというわけではないが、むしろヨハネは、イエスが天の王国の樹立のために来たのだという小数派に言えば同意見であった。

135:9.6 (1505.6) これらの日々は、ヨハネの経験の中で非常に骨の折れるものであり、ヨハネはイエスの帰りを祈った。弟子の数人が、イエス探索のいくつかの偵察隊を組織したが、ヨハネは禁じた。「我々の時は、天の神の掌中にある。かれは、選ばれた息子を指示するであろう。」

135:9.7 (1505.7) 朝食の最中、ヨハネの仲間が、北の方を見上げ自分達の方に来るイエスを見たのは、2月23日の安息日の早朝であった。イエスが接近してくると、ヨハネは大きい岩に立ち上がり、朗々たる声を張り上げて言った。「神の息子よ。世界の救済者よ。これが、『私の後に来られる方は、私よりすぐれた方である。わたしよりも先におられたからである。』と私が言ってきたお方である。このためにこそ、わたしは、天の王国が近いと広布し、悔悟を説き、水で洗礼するために荒野から出て来た。そして、今、聖霊で洗礼を施す方が来られる。また、私はこの方の上に神の霊が降臨するのを見たし、神の声が、『これが私がとても満足している愛しい息子である。』と宣言するのを聞いた」

135:9.8 (1506.1) イエスは、弟のジェームスとジュードがカペルナムに帰ったので、ヨハネと食べるために座る間、皆には食事の続きに戻るように言った。

135:9.9 (1506.2) 次の日朝早く、かれは、ヨハネと弟子達に暇乞いをし、ガリラヤに戻った。かれは、再びいつ会うかについては一言も言わなかった。自身の説教と任務に関す

るジョンの問い合わせに、「私の父が過去にそうしてきたように、そなたを現在、未来、と導くであろう。」と、イエスは言っただけである。そして、この2 人の偉人はその朝ヨルダンの堤で別れた。互いに生身の姿で再び会うことはなかった。

10. ヨハネ南に旅す

135:10.1 (1506.3) イエスがガリラヤへと北に行ったので、ヨハネは、彼の足跡を辿り南方に導かれる思いがした。従って、3 月3 日日曜日の朝、ヨハネと弟子の残りは、南への旅を始めた。ヨハネの近い追随者のおよそ四分の一が、イエスを求めてガリラヤへ出立していた。ヨハネには混乱の悲しみがあった。かれは、イエスを洗礼する前に説教したようには、決して二度と説教をしなかった。来たるべき王国の責任が、もはや自分の肩の上にはないと何となく感じた。自分の仕事はほとんど終わったと感じた。かれは、侘しく、孤独であった。しかし、彼は洗礼し、説教し、南へと旅を続けた。

135:10.2 (1506.4) アダムの村近くで、ヨハネは数週間とどまり、別の男の妻を不法に連れて行ったアンティパス・ヘ

ローデスに対する忘れ難い攻撃をしたのはここであった。この年(西暦26 年)の6 月までに、ヨハネは、来たるべき王国について一年以上も前に説教を開始したヨルダン川のベタニヤの浅瀬に戻っていた。ヨハネは、イエスの洗礼に続く数週間のうちに、新たな激しさをもって腐敗した政治と宗教支配者達を公然と批難するとともに、その説教は、一般大衆への慈悲の宣言へと徐々に変化していった。

135:10.3 (1506.5) ヘローデス・アンティパスは、ヨハネが説教していたその領域において、ヨハネと弟子が反逆をしかけないかと心配になった。ヘロデは、自分の内政へのヨハネの公的批判にも憤慨した。このすべてを鑑みて、ヘロデは、ヨハネを投獄することに決めた。従って、6 月12 日の朝早く、群衆が説教を聞き、洗礼を目撃しに到着する前に、ヘロデの手下達がヨハネを拘禁した。何週かが過ぎ、ヨハネが釈放されなかったので、弟子達は、全パレスチナに離散し、その多くが、イエスの追随者に合流するためにガリラヤに入った。

11. 獄中のヨハネ

135:11.1 (1506.6) ヨハネは、獄中の孤独でやや苦い経験をした。僅かの追随者しか、彼に会うことを許されなかった。イエスに会いたいと切望したが、人の子の信者となった自分の追随者達を通して彼の働き振りを聞くことに満足しなければならなかった。かれは、しばしばイエスと自分の神の任務を疑う誘惑にかられた。イエスが救世主であるならば、なぜこの耐え難い監禁から救い出す何もしなかったのか。神が創造された野外に慣れたこの無骨な男は、1 年半もその上もその卑しむべき牢獄で苦しんだ。そして、この経験は、イエスへの信頼、および忠誠に対する大きな試練であった。実に、この全体の経験は、神へのヨハネの信頼に対する大きな試練でさえあった。かれは、幾度となく自身の使命と経験の真正さえ疑う誘惑にかられた。

135:11.2 (1507.1) 入獄から数カ月後、彼の弟子の一団がやって来て、イエスの公の活動に関する報告をした後で言うことには、「わかりますか、先生。あなたとヨルダン川の上流にいた人が成功しており、彼の元に来る者全てを受け入れています。かれは、収税人や罪人とさえ馳走を楽しんでいます。あなたは勇敢に彼を援護されましたが、

彼はあなたの救出のために何事もしてはいません。」しかしながら、ヨハネは友等に答えた。「天の父から彼に与えられていない限り、この方は何もすることができない。」お前達は、『私は救世主ではない。しかし、来られる前にその方のために道を準備するために送られて来た者である。』ということを私が言ったのをよく覚えている。そしてそれを私はした。花嫁がいる者は花婿である。しかし、近くに立ち、彼の声を聞く花婿の友人は、花婿の声に大いに喜ぶ。したがって、これで、私の喜びは実現する。彼は大きくなり、私は小さくならなければならない。私はこの地球にいて、自分の趣意を宣言した。ナザレのイエスは、天から地上に降りて来られ、我々全ての上におられる。人の息子は神より下降して来られ、そうして神の言葉をお前達に宣言されるであろう。なぜなら、天の父は、自身の息子に限定して精霊を与えられはしない。父はその息子を愛しておられ、そのうち、この息子の手に全てを載せられるであろう。息子を信じる者は、永遠の命を持つ。そして、私が話すこれらの事は本当であり、不変である。」

135:11.3 (1507.2) これらの弟子は、ヨハネの表明に非常に驚き、黙って出発する程であった。ヨハネもまた予言を口にしたと認め、非常に動揺した。彼は、決して二度とイエスの使命と神性をいささかも疑わなかった。しかし、イエスからなんの知らせもないということ、会いに来ないということ、牢獄から自分を救い出すためのなんの力も用いないということが、ヨハネにとっては極度の失望であった。ところが、イエスはこれに関してすべてを知っていた。イエスが、自分の神性に関する認識を持つそのとき、そしてヨハネがこの世を離れる際のヨハネのために備えられた大きな事を完全に知り、またヨハネのこの世での仕事が終わったということを知っていたことから、イエスは、ヨハネを非常に愛していたものの、立派な伝道者かつ予言者の生涯の自然な仕上がりに干渉しないように自己を抑制した。

135:11.4 (1507.3) 獄中でのこの長い不安は、人間にとって耐え難かった。自分の死のわずか数日前、ヨハネは、再び信頼する使いの者達をイエスの元へ送った。「私の仕事は終わったのですか。私はなぜ獄中で苦しい生活を送っているのですか。本当に、あなたは救世主であられます

か。あるいは別の方を私達は探すべきですか。」と尋ねた。そしてこれらの2 人の弟子が、この言伝をイエスに伝えると、人の息子が答えた。「忘れてはいない。我々二人にとって全ての正義を満たすことが適しているのであるから、私共々これに耐えよ。とヨハネのところに戻って伝えよ。お前達が見聞きした事—良い知らせが貧しい者達に説教されているということ—を戻ってヨハネに伝えよ、そして、最後に「私を疑ったり、私に躓いたりしなければ、来る時代に夥しく祝福されるであろう、と愛すべき我が地上での使命の伝令者に伝えよ。」これが、ヨハネがイエスから受け取った最後の言葉であった。この言葉は、彼を大いに慰め、彼の信頼を非常に安定させ、この忘れ難い出来事のすぐ後に早くも迫っていた肉体の悲惨な彼の人生の終わりのための準備をさせた。

12. 洗礼者ヨハネの死

135:12.1 (1508.1) ヨハネは、捕らえられた時ペライアの南で働いていたので、すぐマカイロスの砦の牢に連れて行かれ、処刑時までそこに投獄された。ヘロデは、ガリラヤのみならずペライアも統治し、当時ペライアのユーリア

スとマカイロスの両地に住居を維持した。ガリラヤでは、公邸がセフォーリスから新しい首都ティベリアスに移されていた。

135:12.2 (1508.2) ヘロデは、反逆を扇動しないかとヨハネの釈放を恐れた。何千ものペライア人が、ヨハネは聖なる人物、予言者であると信じたので、首都での群衆が暴動を起さないかとヨハネの死刑を恐れた。依って、他に打つ手を知らず、ヘロデは、ナザレの伝道者を獄中に留めた。ヨハネは、何度か、ヘロデの前に出たが、釈放されたとしても、ヘロデの領地を去ることにも、全ての公の活動を差し控えることにも決して同意しようとはしなかった。そして、着実に増大していたナザレのイエスに関するこの新しい動揺は、ヨハネを自由にする時ではないことをヘロダに諭した。その上、ヨハネは、ヘロディアス、つまりヘロデの不法な妻の激しく辛辣な憎悪の犠牲者でもあった。

135:12.3 (1508.3) ヘロデは、何度となく天の王国に関しヨハネと話した。そして、時々その言葉に真剣に感銘を受けながらも牢獄からの釈放を恐れていた。

135:12.4 (1508.4) ティベリアスではまだ多くの建築が進んでいたことから、ヘロデは、ペライアの邸でかなりの時を過ごし、その上、マカイロスの砦を特に好んだ。ティベリアスの全ての公共建築物と公邸が完全に仕上がるまでにはまだ数年もあった。

135:12.5 (1508.5) 自分の誕生日の祝賀で、ヘロデは、ガリラヤとペライア政府の主要な役人達と評議会の他の部下のためにマカイロス宮殿で盛大な祝宴を開いた。ヘロディアスは、ヘロデへの直訴ではヨハネに死をもたらせることができなかったので、今や、悪賢い計画により自らがヨハネを死に至らせる任につく決心をした。

135:12.6 (1508.6) 宵の祭礼と座興の中で、ヘロディアスは、宴会客の前での踊りのために彼女の娘を紹介した。ヘロデは、少女の踊りに大層満足し、自分の前に呼んで言った。「そなたは、魅力的である。非常に嬉しいぞ。わしのこの誕生日にそなたの望んでいることを何でも申してみよ。王国の半分であろうと与えるぞ。」ヘロデは、多量のワインに酔ってこのすべてをした。若い娘は、脇に引っ込みヘロデに何を求めるべきか母に尋ねた。ヘロデ

ィアスは、「ヘロデに行って、洗礼者ヨハネの首を頼みなさい。」と言った。そこで、若い娘は、宴会の席に戻り、「大皿の上に洗礼者ヨハネの首をすぐに戴きとう存じます。」と、ヘロデに言った。

135:12.7 (1508.7) ヘロデは恐れと悲しみで一杯になったが、誓いのためと、共に食卓についた全ての人々の手前、要求を否定しようとしなかった。そして、ヘローデス・アンティパスは、兵士を差し向け、ヨハネの首を持って来るように命じた。それで、ヨハネは、その夜刑務所で首をはねられ、兵士は、大皿の上の予言者の首を持って来て、宴会場の背後で若い娘に提示した。少女は、その大皿を母に与えた。ヨハネの弟子達がこれを聞くと、刑務所にヨハネの身体を取りに行き、墓に横たえた後、イエスの元に行って伝えた。

論文 136
洗礼と40日間

136:0.1 (1509.1) イエスは、ヨハネの説教に対する大衆の関心が最も高いときに、また、パレスチナのユダヤの人々が熱心に救世主の出現を期待しているときに、公のための仕事を始めた。ヨハネとイエスの間には、かなりの違いが

あった。ヨハネは、熱烈でひたむきな労働者であったが、イエスは、穏やかで幸福な労働者であった。かれは、全生涯を通じて急いだのはほんの数回というほどであった。イエスは、世界にとって心地よい安らぎであり、幾分か模範でありもした。ヨハネは、ほとんど安らぎでも模範でもなかった。かれは、天の王国を説いたが、その幸福感をほとんど経験しなかった。イエスは、ヨハネについて旧体制の予言者の中で最も立派な者と語ったが、同時に、新しい道の見事な光を見、それによって天の王国に進んだ中で最も低い者の方が、ヨハネよりも実に立派であるとも言った。

136:0.2 (1509.2) ヨハネが来たるべき王国を説いたとき、その趣意は次の通りであった。悔い改めよ。来たる激怒から逃がれよ。イエスが説教し始めたとき、悔悟への勧告は残存していたが、そのような言葉の後にはいつも新しい王国の喜びと自由の良い知らせ、福音が続いた。

1. 期待される救世主の概念

136:1.1 (1509.3) ユダヤ人は、期待される救出者についての多くの考えを抱いた。そして、これらの異なる救世主教育の

各学校は、それぞれの論点の裏付けとしてヘブライ経典での陳述を指摘することができた。ユダヤ人は、一般的に、国史をアブラーハームから始め、遂には救世主と神の王国の新時代に達すると見なした。初期において、かれらは、この救出者を「主のしもべ」として、それから、「人の息子」として把握し、最近では、救世主を「神の息子」と言及するまでに至った。しかし、たとえ「アブラーハームの子孫」と呼ばれようが、「ダーヴィドの息子」と呼ばれようが、救世主、「聖油を注がれた者」であるということには皆が同意した。このように、この概念は、「主のしもべ」から「ダーヴィドの息子」、「人の息子」、「神の息子」へと展開していったのであった。

136:1.2 (1509.4) ヨハネとイエスの時代、学識のあるユダヤ人は、「主のしもべ」としての予言者、聖職者、王、の三重の任務を兼ねる完成した代表的イスラエル人としての来たるべき救世主の考えをもった。

136:1.3 (1509.5) モーシェが驚くべき奇跡によってエジプトの束縛から祖先を救出したように、ユダヤ人は、来たるべき救世主も、さらに大きい力の奇跡と人種的勝利の驚異の

行為によりユダヤ民族をローマ支配から救い出すであろうと心から信じた。ユダヤ教のラビ達は、来たる救世主の予言的なものを明言した経典から、それらの見た目の矛盾にもかかわらず、およそ500 の文章を集めた。そして、時、技法と機能のこれらのすべての詳細の真っ只中に、彼等は約束された救世主の人格をほぼ完全に見失った。彼らは、ユダヤ国家の栄光の回復を探していた—世界の救済よりも、むしろ、イスラエルの一時の高揚を。従って、ナザレのイエスがユダヤ人の心のこの物質的救世主の概念を決して満たすことができなかったということが明白になる。もし評判の救世主の予測の多くが、これらの予言的な発言を異なる角度から観察していたならば、一時代の終結者として、また新たでより良い慈悲の配剤と万国救済の開始者としてイエスを認識するために誠に自然に心の準備をしたことであろう。

136:1.4 (1510.1) ユダヤ人は、シェキーナの教義を信じるように育てられた。しかし、神臨場のこの評判の象徴は、寺院では見られることにはなっていなかった。彼らは、救世主の接近がその回復を実行すると信じた。かれらは、民族的な罪と人の想定された悪の性質についての混乱させ

る考えを抱いた。ある者達は、アダムの罪が人類を呪っていると、また救世主がこの呪いを取り除き神の恩恵を回復すると、教えた。他の者達は、人を創造するに当たり、神が善悪二つの性質を入れたと、またこの計いの結果を観測し大いに失望したと、「このように人間を造ってしまったということを後悔した。」と、教えた。そして、これを教えた者達は、救世主がこの先天的悪の性質から人を身請けしに来ることになっていると信じた。

136:1.5 (1510.2) 大方のユダヤ人は、国家の罪のため、非ユダヤ人の改宗者の不熱心のせいでローマ支配下で苦しみ続けると思っていた。ユダヤ国家は、心から後悔していなかった。したがって、救世主は来るのを遅らせていた。多くの話が、悔悟に関してあった。だからこそ、「悔い改め、洗礼を受けよ。天の王国が間近である故。」というヨハネの強力で直接的説教が心を引きつけた。そして、天の王国はどんな敬虔なユダヤ人にも1つのことしか意味し得なかった。救世主の接近。

136:1.6 (1510.3) マイケルの贈与には救世主のユダヤ人の概念に全く無縁な1つの特徴がり、それは、二つの特質、人間

と神性の合一であった。ユダヤ人は、完成された人間として、超人間として、また神性としてさえ様々に救世主を想像しはしたものの、人間と神の合一の概念を決して心に抱かなかった。そして、これはイエスの初期の弟子達が大きな障害であった。弟子達は、早期の予言者によって提示されたようにダーヴィドの息子としてまた、ダニエルの超人的な考えや、後の数人の予言者によって提示されたような人の息子としての、また更には、イーノックの書の作者によって、この作者のある同時代人達によって描写されたように神の息子としてさえ人間である救世主の概念を理解した。しかし、一瞬たりとも地上の一つの人格における二つの性質、人間と神性の合一の真の概念を一度も心に抱くことはなかった。生物形態における創造者の肉体化は、予め明らかにされてはいなかった。それはイエスにだけ明らかにされた。世界は、創造者たる息子が肉体をもち、人間界に住むまでそのようなことは何も知らなかった。

2. イエスの洗礼

136:2.1 (1510.4) イエスは、パレスチナが、ヨハネの知らせ—「神の王国は間近い」—に期待で燃えんばかりのとき、

全てのユダヤ人が慎重に厳粛に自省しているときのヨハネの説教の絶頂時に洗礼を受けた。ユダヤ人が感じる人種的連帯意識は、非常に深遠であった。ユダヤ人は、父の罪が子を苦しめるかもしれないと信じるだけでなく、一　個人の罪が国を呪うかもしれないと堅く信じた。従って、ヨハネの洗礼を受け入れた全ての者が、ヨハネが非難した特定の罪で自身が有罪であると考えたわけではなかった。多くの敬虔な者達は、イスラエルの利益のためにヨハネによる洗礼を受けた。彼らは、無知からのある種の罪が、救世主の到着を遅らせるかもしれないと恐れた。かれらは、有罪で、罪に呪われている国に属していると感じ、洗礼することで民族の懺悔の産物を明らかにできるかもしれないと洗礼に出向いた。従って、イエスは決して悔悟の儀式もしくは罪の許しのためとしてヨハネの洗礼を受けなかったということは、明白である。ヨハネからの洗礼を受け入れることにより、イエスは、多くの敬虔なイスラエル人の例に倣ったに過ぎなかった。

136:2.2 (1511.1) ナザレのイエスが洗礼のためにヨルダン川に行ったとき、彼は、心の征服、そして自己同一化に関連す

る全ての問題において、精霊と人間の進化の上昇のその頂点に達した領域の者であった。かれは、その日、時間と空間の進化の世界の完成者をヨルダン川に立たせた。完全な同時性と完全な意思疏通は、イエスの人間の心と内在する精霊調整者、つまり楽園の父の神性の贈り物との間で確立した。イエスの調整者は、事前にこの特別任務のために同様に人間に似せて肉体化された内在する他の超人、メルキゼデクのマキヴェンタによって準備されていたそれを除いては、全てのユランチアの普通の人間には、まさにそのような調整者が、宿るのである。

136:2.3 (1511.2) 通常、領域の人間が、そのような高い人格完成の段階に達するとき、関連する神性の調整者と人間の発達しきった魂の最終的な融合が終わる精霊的な向上の予備的現象が起こる。そのような変化は、ヨハネの洗礼を受けるために2 人の弟とヨルダン川に行ったまさしくその日に、ナザレのイエスの人格経験において明らかに生じるはずであった。この儀式は、ユランチアにおける彼の純粋に人間の生涯での最終的な行為であり、多くの超人の観察者は、調整者とその棲家となった心の融合の目撃を期待したが、彼らは皆、失望を受ける運命にあっ

た。何か新しくてより大きいことが起こった。洗礼のためにヨハネがイエスの上に手を挙げると、内在する調整者は、ジャシュア・ベン・ヨセフの完成された人間の魂に最後の別れを告げた。そして、しばらくするとこの神性の実体は、専属調整者かつネバドンの全地域宇宙の自分の種類の長としてディヴィニントンから戻った。このようにして、イエスは、個人化された型で自分の元へ戻ると、自身のそれ以前の神の霊が下降しているのを見たのであった。そして、かれは、「これが、私がとても喜んでいる愛しい息子である」と楽園起源のこの同じ精霊が話すのをそのとき聞いた。そして、ヨハネもまた、イエスの2 人の弟とこれらの言葉を聞いた。水際に立つヨハネの弟子達は、これらの言葉を聞かなかったし、専属調整者の幻影らしきものも見なかった。イエスの目だけが専属調整者を見た。

136:2.4 (1511.3) 帰還し、その時、昂揚した専属調整者がこのように話したとき、何の音もなかった。一方彼らの内の4人が川の中で手間取っていると、イエスは、すぐ近くの調整者を見上げて祈った。「天で支配される父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が天

で行なわれるように地でも行われますように。」彼が祈ったとき「天は開かれた」、そして人の息子は、今は専属調整者であるものにより呈示された人間の姿に似せて地上に来る前の神の息子としての、また肉体化された人生が終わるべき時になる自分自身の姿を見た。この神々しい姿は、イエスだけが見た。

136:2.5 (1512.1) 調整者は楽園の父より来ており、またそのように振舞うのでヨハネとイエスが聞いたのは、宇宙なる父の代わりに話している専属調整者の声であった。イエスの地上での余生を通して、この専属調整者は、イエスの全ての労働に関わった。イエスは、この昂揚された調整者との絶え間ない交わりをもった。

136:2.6 (1512.2) 受洗礼したとき、イエスは何の悪行も悔いなかった。罪の告白もしなかった。彼の洗礼は、天の父の意志を果たすための献身のものであった。かれは、洗礼のときに紛れもない父の呼び出し、父のための仕事の開始のための最終召喚を聞き、そこでこれらの多種多様の問題を熟考するために40日間人里離れた場所へ一人立ち去った。このようにして、ユランチアにかつて居た、同時

に今居るイエスは、地球の仲間との積極的人格の交流から一時期引き下がり、上昇する人間が、モロンチア世界で宇宙なる父の内側の存在者と融合するときはいつでも起こるまさにその手順に従っていた。

136:2.7 (1512.3) 洗礼のこの日純粋にイエスの人間の人生が終わった。神の息子は父を見つけ、宇宙なる父は肉体をもつ息子を見つけ、そしてお互いに相手と話す。

136:2.8 (1512.4) (洗礼を受けた時、イエスは、ほぼ31歳半であった。一方ルーカスは、イエスはティベリウス・ケーサリーア治世の15　年目の年に受洗し、それは、オーグストゥスが西暦14 年に没しているので西暦29 年になり、ティベリウスは、オーグストゥスの死の前の2 年半は彼と共に皇帝であり、オーグストゥスに敬意を表し硬貨が西暦11　年に造幣されたということが思い起こされるべきであると言っている。彼の実際の統治の15年目は、従って、まさしくこの西暦26　年、イエスの洗礼の年であった。そして、これは、ポンティウス・ピーラツスがユダヤの知事としての支配を始めた年でもあった。)

3. 40日間

136:3.1 (1512.5) イエスは、洗礼前の6 週間ヘルモン山の露に濡れて自身の人間贈与における大きな試練に耐えていた。そこでヘルモン山で、領域の助けなしの人間として、かれは、ユランチアの王位を狙うカリガスティア、この世界の王子に出会い、打ち破った。その波瀾万丈の日、宇宙記録では、ナザレのイエスは、ユランチアの惑星王子となった。ネバドンのまもなく最高の主権者であると宣言されるこのユランチア王子は、計画を立て、人の心に神の新しい王国を宣言する方法を決めるために、そのとき40日間の隠遁に入った。

136:3.2 (1512.6) かれは、洗礼後、調整者の専属化により引き起こされる世界と宇宙の変化した関係へのの自己調整40日間に入った。ペライアの丘でのこの孤立の期間、かれは、自分が始めようとしている地球人生の新しく、しかも変更された局面で探求されるべき政策と採用されるべき方法を決断した。

136:3.3 (1512.7) イエスは、断食の目的や魂の苦悩のために隠遁に入らなかった。かれは、禁欲主義者ではなく、神への接近に関するそのようなすべての概念を永久に破壊する

ために来た。この隠遁を求める彼の理由は、モーシェとエリヤを、また洗礼者ヨハネさえ動かしたものとは、似ても似つかないものであった。イエスは、自身の作成の宇宙への、そして宇宙の宇宙への関係に関し、完全に自意識があり、楽園なる父、天の父によって監督されていた。彼は、そのとき、ユランチアの具現化を始める前に兄イマヌエルに指示された贈与の責任とその指令を完全に思い出した。かれは、その時全てのこれら広範囲にわたる関係を明確に、完全に理解するとともに、この世界のために、そして自分の地域宇宙にある他の全ての世界のために、公の仕事の実行についての計画を案出し、手順を決めることができるように落ち着いた思索の時間を求めて離れることを望んでいた。

136:3.4 (1513.1) 丘を散策して適当な避難所を探している間、イエスは、自分の宇宙の最高業務執行者であるガブリエル、ネバドンの明けの明星に遭遇した。ガブリエルは、そのとき宇宙の創造者たる息子との個人的な意思疎通を再確立した。かれらは、マイケルがユランチア贈与に乗り出す前にエデンティアに行く時、サルヴィントンで同僚ににいとまごいをして以来、初めて直接会った。イマ

ヌエルの指示とユヴァーサの日の老いたるものの権限により、ガブリエルは、そのとき宇宙の完成された主権の獲得とルシファーの反逆の終結に関する限り、ユランチアでの贈与経験が事実上完了されたと示す情報をそのときイエスの前に置いた。前者は、調整者の専属化が、イエスの人の姿での贈与の完全さと完成を裏づけした洗礼の日に達成され、後者は、その日イエスが、待っている若者ティグラスに加わるためにヘルモン山から下りてきたときの歴史的事実であった。地域宇宙と超宇宙の最も高い権威に基づいて、イエスは、主権と反逆に関して彼の個人的身分に影響をおよぼす限り、贈与の仕事は完了されたということをそのとき知らされた。かれは、洗礼の際の映像において、また内在する調整者の専属化の現象において、楽園からこの保証をすでに受けていた。

136:3.5 (1513.2) 彼がガブリエルと話して山にいる間、エデンティアの星座の父は、イエスとガブリエルに直接現れて言った。「記録は完成されている。ネバドンの宇宙におけるマイケル611,121番の主権は、宇宙なる父の右側に完成されている。私は、ユランチア具現のための後援者でもある君の兄イマヌエルの贈与からの解放を君にもたら

す。君は、現時点、またこの後いつでも肉体化贈与を終えること、父の栄誉の座に昇ること、自身の主権を受けとること、全ネバドンの当然の報いとしての無条件の統治者の地位に就くことに関する選択方法において自由である。君の宇宙における全ての罪の反逆終了に関して、また将来すべてのそのようなありうる動乱に対処する完全で無制限な権威を君に授けて、日の老いたるものの認可により、私も、超宇宙の記録完成を証言する。ユランチアでの、また人間の姿での君の仕事は事実上終わっている。これから先の進路は君自身が選ぶ問題である。」

136:3.6 (1513.3) エデンティアのいと高き父が去ると、イエスは、宇宙の福祉に関しガブリエルと長く話し、イマヌエルに挨拶をし、ユランチアで着手しようとしていた仕事においても、サルヴィントンで与えられた贈与前の管理に関して受けた助言を忘れず心に留め置くという自分の保証を提示した。

136:3.7 (1514.1) この孤立の40日の間ずっと、ジェームスとゼベダイの息子ヨハネは、イエス捜しにかかっていた。何度

となくイエスのいた場所から遠くないところにいたが、彼等は、どうしてもイエスが見つけられなかった。

4. 公の仕事の計画

136:4.1 (1514.2) 丘の上で日々、イエスは、ユランチア贈与の残りの計画を作成していた。かれは、ヨハネと同時には教えないとまず決めた。ヨハネの仕事が、その目的を実現するまで、または禁固により突然ヨハネが押し止められるまで、かれは、隠遁に近いままでいるつもりであった。イエスは、ヨハネの大胆不敵の、掛け引きを知らない説教がやがて民間支配者の恐怖と敵意を喚起するのをよく知っていた。ヨハネの不安定な状況を考慮に入れ、イエスは、広大な宇宙の中の全棲息界のために、自分の民族と世界のために、公のための作業予定を確実に計画し始めた。マイケルの人間贈与は、ユランチアでのことであるにもかかわらず、ネバドン全世界に関わることであった。

136:4.2 (1514.3) ヨハネの動きと自分の一通りの調整計画について考え抜いた後、イエスがまずしたことは、心の中でのイマヌエルの指示の見直しであった。労役の方法に関係

し与えられた忠告、またこの惑星に永久的な文章を残さないという忠告を慎重に熟考した。イエスは、この後、決して砂以外には何にも書かなかった。弟ヨセフにとっての非常な悲しみは、イエスが、次にナザレを訪れた際、大工小屋周辺の板の上に保存されていた、また古い家の壁に掛けられていた自身の書き物のすべてを破壊したことであった。それから、イエスは、彼が見つける世界の経済、社会、政治に対する自分の姿勢に関するイマヌエルの忠告について深く考えた。

136:4.3 (1514.4) イエスは、この40日間の孤立の間、断食をしなかった。彼が最も長い期間食物なしで過ごしたのは、考えに夢中になり食べることをすっかり忘れた丘での最初の2日間であった。しかし、3日目は食物を探しに行った。この期間、かれは、この世界やいかなる他の世界を拠点にする悪霊や反逆的人格に誘惑されることは決してなかった。

136:4.4 (1514.5) これらの40日は、人間と神の心との最終的合議の機会、あるいは、むしろこれら二つの、今は一つとなった心の最初の本当の機能の時であった。この重要な思

索の時間の結果は、神の心が勝ち誇り、また精霊的に人間の知性を支配したということを決定的に示した。この後人の心は神の心となり、人の心の自己性は遍在するが、この精霊的になった人間の心は、いつも、「私のではなくあなたの意志がなされる。」と言のである。

136:4.5 (1514.6) この重大な時間の出来事は、飢えて弱められた心の空想的な幻影でもなく、「荒野のイエスの誘惑」としてその後に記録された混乱した幼稚な象徴主義でもなかった。むしろ、これは、ユランチア贈与の全体的、重要かつ様々な経歴を熟考するための、また反逆孤立した他の全ての天界の改善にも何かを貢献しつつ、この世界に最も奉仕するさらなる仕事のためのそれらの計画を慎重に準備するための時期であった。イエスは、アンドンとフォンタの時代から、アダムの不履行を経てサレムのメリキゼデクの活動に至るユランチアの人間の歴史全体を熟考した。

136:4.6 (1514.7) ガブリエルは、イエスが、ユランチアにしばらく留まる方を選ぶかもしれない場合、自己を世界に明らかにするかもしれない2 つの方法があることを彼に思い

出させた。そして、この問題に関する選択が、彼の宇宙主権にも、ルシファー反逆の終結にも無関係であることが、イエスに明らかにされた。世界のための奉仕活動のこの2 つの方法は次の通りであった。

136:4.7 (1515.1) 1. 自身の方法—この世界の即座の必要性と彼自身の宇宙への現在の啓発の見地から最も快適で有益と思えるかもしれない方法

136:4.8 (1515.2) 2. 父の方法—宇宙中の宇宙の楽園管理の高い人格により想像、される生物の生活のための先見的な理想の例示。

136:4.9 (1515.3) 地球での人生の残りを采配できる2 つの方法のあることが、このようにイエスに明らかになった。この各々の方法には、即座の状況に照らし合わせて考えられるように、それぞれ利点があった。人の息子は、行為の選択のこの2 つの方法が、自分の宇宙主権の受領とは無関係であることを明らかに見た。それは、宇宙の中の宇宙の記録上ですでに解決され、公認された事柄であり、あとは自らの要求が待たれるのみであった。しかし、かれが、常に父の意志に服従し、それを立派に始めたの

で、と同様に、もしその肉体での地上の経歴を終えるの適当だと見るならば、楽園の兄イマヌエルに格段の満足を与えるであろうということがイエスに示された。この孤立の3日目、イエスは、地球での経歴を終えるために世界に戻り、そして、いかなる2 つの方法にかかわる状況においても、終始父の意志を選ぶと決心した。そして、かれは、いつもその決心通りに地球での人生の残りを全うした。かれは、苦渋の最後までさえ変わることなく彼の主権を天の父の主権の下に置いた。

136:4.10 (1515.4) 山野での40日間は、大いなる試練の期間というよりは、むしろあるじの大いなる決断の期間であった。この期間、自分自身との、また父の直の臨場—専属調整者(もはや私的な熾天使の後見者を併せもっていなかった) —との孤立した親交において、イエスは、自分の方針を整理し、地上での経歴の残りの指揮に掛かる大いなる決断に順々に到達した。その後、大いなる試練の伝説は、ヘルモン山の奮闘の断片的な物語の混同と、さらには、すべての偉大な予言者と人間の先達が、公の経歴を断食と祈りのこれらの想定された時期を経ることから始めるのが習慣であったことから、混乱して孤立のこ

の一時期と関連付けられるようになった。いかなる新たな、あるいは重大な決定に直面するとき、神の意志を知ろうとすることができる彼自身の精霊との親交のために引き篭もるのがイエスの習慣であった。

136:4.11 (1515.5) 地球での余生のためのこの全計画において、イエスは、いつも2 つの相反する行為の進路に彼の人間の心は苦しんだ。

136:4.12 (1515.6) 1. かれは、彼を信じ、新しい精神的な王国を受け入れるように民衆—そして世界—を説き伏せることを強く心に抱いた。かれは、来たるべき救世主に関する民衆の考えをよく知っていた。

136:4.13 (1515.7) 2. かれが、父は承認すると自分が承知しているように、生きて、働くこと。必要としている他の世界のために仕事をすること。王国の樹立において父を明らかにし自分の愛の神性の特質を明示し続けること。

136:4.14 (1515.8) この重大な日々を通して、イエスは、古代の岩の洞窟で、かつてベイトアーディスと呼ばれた村の近

くの丘の斜面の避難所で過ごした。かれは、この岩の避難所近くの丘の斜面から来る小さい泉の水を飲んだ。

5. 最初の重大決断

136:5.1 (1516.1) この期間、自分との、また専属調整者とのこの談合の開始から3　日目、最愛の君主の意志を待つために、彼らの指揮官が送ったネバドンの集合された天の軍団の光景がイエスに示された。この強力な軍勢は、熾天使の12　の軍団と宇宙の有識者の凡ゆる集団からの釣り合いのとれた数を迎え入れた。イエスの孤立の最初の重要な決定は、ユランチアにおける公の仕事に関連して続いて起こる取り組みにこれらの強力な人格を用いるか否かということであった。

136:5.2 (1516.2) イエスは、これが父の意志であったことが明白にならない限り、この巨大な集団の一つの人格をも利用しないと決めた。この一通りの決定にもかかわらず、巨大の軍勢は、イエスの地上での余生のあいだ共に残り、君主の意志の微妙な表現につねに従う準備でいた。イエスは、これらの付き添いの人格を自分の人間の目で絶え

ず捉えはしなかったが、専属調整者は、彼等の全てを見もし、通信もできた。

136:5.3 (1516.3) 40日間の丘の隠遁から下りて来る前、イエスは、先ごろ専属化した調整者に宇宙の人格者達のこの付き添いの大軍の直々の指揮を命じ、そしてユランチア時間の4 年以上、宇宙の知者組織、情報部の各分隊からのこの選ばれた人格達は、従順に、かつ敬意をもってこの高位の、経験豊富な専属神秘訓戒者の賢明な指導の下で機能したのであった。この強力な集会の指揮を引き受けるに当たり、楽園の父の一度限りの、また部分であり本質である調整者は、いかなる場合も、父がそのような干渉の意図に発展しない限り、これらの超人の機関が仕えることが認められたり、イエスの地上の経歴に関し、あるいはイエスの地上の経歴のために、彼ら自身が現れたりということがないことをイエスに保証した。このように、父が、息子の地球での労役のいくらかの特定の行為または挿話に参加することを独自に選ばない限り、イエスは、1つの重大な決定により、自己の人間としての経歴に関する全ての問題において、自分自身からあらゆる超人的な協力を自発的に奪い去った。

136:5.4 (1516.4) キリスト・マイケルに付き添い宇宙の軍勢のこの指揮を引き受け入れるに当たり、専属調整者は、宇宙生物のそのような集団が、彼等の宇宙活動が彼らの創造主の代表として派遣された権威者によって制限されるかもしれない一方で、そのような制限は、時間における彼らの機能に関して効果的ではないとイエスに指摘するためにかなりの苦心をした。そして、彼等が一度専属化されるならば、この制限は、調整者が「非時間」の存在であるという事実に依存していた。従って、イエスは、指揮の下におかれた有識者、情報部に対する調整者の制御が、空間に関わる全ての問題に関して終了し、完全にされる傍ら、時間に関しては同様の完全な制限を強いることはできないということを悟された。調整者は、言った。「私は、楽園の父が、君の選ぶ彼の神性意志が達成されるために、そしてそれらにおいて、父がそのような代理を放つことを私に指示する場合と、そして君が、時間に関して本来の地球の秩序からの逸脱、出発を巻き込むだけの君の神-人間の意志に関わるいかなる選択、または行動に取り組むかもしれない場合を除いては、君の指示どうりに、君の地球での経歴に関するいかなる方法

でもこの付随する宇宙、情報部、有識者の軍勢の使用を、命、禁じる。全てのそのような出来事において、私は無力であり、力の完全性と力の団結のもとにここに集合したあなたの創造物も同様に無力である。あなたの結合した本質が一度そのような願望を抱くと、あなたの選択によるこれらの命令は直ちに、実行されるだろう。そのようなすべての問題における君の願望は、時間短縮の構成要素となるだろうし、また意図される事柄は起こる。私の指揮のもとで、これは、君にの潜在的主権に押しつけられる最大の制限となる。私の自意識に時間は実在せず、従って、私はそれに関連する君の生きものの何でも制限することはできない。」

136:5.5 (1517.1) このように、イエスは、人の間の人として生き続けるという決断を努力して承知した。彼は、一回の決断により、時間にのみ関係するような問題を除いては、引き続いて起こる自分の公のための任務に参加することから様々な有識に付随する宇宙の軍勢のすべてを除外した。したがって、天の父が明確に別の方法で統治しない限り、イエスの仕事に関係して考えられるあらゆる超自然の、または真偽のほどは分からないが超人的な出来

事、付属物も完全に時間の除去に関係してくることが明白となる。明白に述べられた時間の問題を除いては、地上でのイエスの残りの労役に関して起こるいかなる奇跡も、慈悲の働きも、または他の起こりうる出来事も、彼がユランチアで生きたような人間の問題において確立され、または普通に作用している自然の法測を超える行為の本質でも特質でもあえなかった。勿論、「父の意志」の明示に何の限界も、認められないかもしれない。宇宙のこの潜在的君主の表明された願望に関する時間の除去は、問題となる行為または出来事に関連して、その時間が短縮されたり除去されないという趣旨でこの神-人間の意志の直接で明白な行為によってのみ避けることができた。イエスには、明らかな時間の奇跡の発現を防ぐために、絶えず時間を意識し続けることが必要であった。確かな願望の慰みに関して、彼の方の時間的意識のどのような経過も、この創造者たる息子の心で、時間の介入なしに、考えられた事の実施に等しかった。

136:5.6 (1517.2) 連帯する専属化の調整者の監督的支配を通して、空間に関する彼個人の地球活動を制限することは、マイケルにとって完全に可能であった。しかし、人の息

子が、ネバドンの潜在的君主として時間に関して新しい地球での身分をこのようにして制限することはできなかった。そして、これが、ユランチアでの公の任務に取り掛かるときのナザレのイエスの実際の状況であった。

6. 第2の決断

136:6.1 (1517.3) 創造した情報機関の全階級の全人格に関して自身の方針に決着をつけ、これが彼の神性の新しい状態の固有の可能性から見て決定することができる限り、イエスは、そのとき自分の考えを自分自身に向けた。今やこの宇宙に存在する完全に自意識のある万物と生物の創造者は、人の間での活動再開のためにガリラヤに戻るとすぐ対峙するであろう人生で再び起こる状況において、かれは、この創造者の特権で何をするのであろうか。実際すでに、この人里離れた丘にいるちょうどそこで、この問題は、食物入手に関連して強引に表面化した。孤独な思索の3日目までには、人間の体は空腹を覚えた。常人がするように食物を探すべきか、または単に通常の創造力を駆使し、かつ手元で準備ができる適当な身体の滋養物を生産すべきか。あるじのこの重大な決断は、誘惑として—彼が、「これらの石がパンのかたまりになるよう

に命令する」という想定上の敵に挑戦を受けたとして—描かれてきた。

136:6.2 (1518.1) イエスは、このように地球での仕事の残りのためにもう一方の、一貫した方針に決めた。個人的な必要性に関する限り、押し並べて、他の人格との関係においてでさえ、かれは、そのとき通常の地球の人間の道を進むことを意図的に選んだ。かれは、自身の確立した自然の法則を超えたり、違反したり、侵犯するような方針には断固たる反対の決意をした。しかし、これらの自然の法則は、一定の認識され得る事局においては、専属調整者が既に警告したように大いに加速されないかもしれないということを、イエスは、自分自身に約束することができなかった。原則として、イエスは、生涯の仕事が自然の法則に基づき、既存の社会的組織と調和して、組織され実施されなければならないと決めた。あるじは、それに関して奇跡や驚くべきことに反対の決定に相当する生活案を選んだ。またしても、「父の意志」を支持して決断した。またしても、全てを楽園の父の手に委ねた。

136:6.3 (1518.2) イエスの人間性は、第一の義務は自己保全であることを必要とした。それは、時間と空間の世界での自然な人間の通常の態度であり、従って、ユランチアの人間の正統な反応である。しかし、イエスは、単にこの世界とその生物に関心をもったのではなかった。つまり、かれは、広範囲にわたる宇宙の多種多様の生物を導き、奮い立たせるように考案された生活を送っていた。

136:6.4 (1518.3) 洗礼の際の啓示、照光の前、かれは、天の父の意志と導きに完全な服従をして生きてきた。かれは、父の意志へのまさにそれほどまでの暗黙の人間の依存をし続けていくことを断固と決めた。かれは、不自然な行程をたどることを目標とした—自衛を求めないと決めた。かれは、身を守ることを拒否する方針を取り続けることを選んだ。かれは、人間の心になじみのある教典の言葉で自分の結論を明確に述べた。「人はパンのみで生きるのではなくして、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるものである。」食物に対する渇望に表現されるように、肉体の欲望に関してこの結論に達する際に、人の息子は、肉体の他のすべての衝動や人間性の自然の衝動に関して最終的な決定を下した。

136:6.5 (1518.4) 事によると他人のために超人力を用いるかもしれないが、断じて。本人のためには用いない。そして、彼は一貫してまさにその終わりまでこの方針を進め、「他のものを救った。　自分は救えない。」と嘲って言われたとき、—それは彼がそうしようとしなかったからである。

136:6.6 (1518.5) ユダヤ人は、砂漠のような場所の岩から水を出し、荒野で祖先に天から与えられた食物を食べさせたと評判であったモーシェよりもさらに偉大な驚くべきことをする救世主を期待していた。イエスは、同胞が待っていた種類の救世主を知っていた。そして、彼等の最も楽天的な期待に適うために全ての力と特権があったが、そのようなすばらしい力と栄光の計画に不利な決定を下した。イエスは、期待される奇跡のそのような運用は、無知な魔法と昔日と未開の祈祷師の品位を落とす実践に立ち返るものだと見なした。ことによると、自分の創造物の救済のために、かれは、自然の法則を加速するかもしれないが、彼自身の法則を超えること、自分の利益のためあるいは仲間の威圧のためにはしないだろう。そして、あるじの決定は最終的であった。

136:6.7 (1518.6) イエスは彼の民族のために嘆いた。彼らが「地は10、000 倍にその果実をもたらし、1 本のつるは1,000 本の技になり、それぞれの枝には1,000 個の房が実り、それぞれの房には1,000 個のブドウの粒を着け、それぞれの粒は3.8リットルのブドウ酒を生産するであろう」という時への期待に導かれてきたかを完全に理解した。救世主が奇跡豊富の時代に案内するとユダヤ人は、信じた。ヘブライ人は長い間、奇跡と驚きの伝統のもとに養育されてきた。

136:6.8 (1519.1) イエスは、パンとワインを増やしに来ている救世主ではなかった。一時の必要なものだけを施しに来なかった。かれは、誠実な努力において天の父の意志を為して生きるように地球の子等に自分に加わらせようとするとともに、天の父を彼等に明らかにするためにきた。

136:6.9 (1519.2) この決定において、ナザレのイエスは、個人の強化のための、または全く利己的な利得や称賛のための神性能力と神から与えられた能力を悪用する愚かさと罪を傍観している宇宙に描き示した。それは、ルーキフェレーンスとカリガスティアの罪であった。

136:6.10 (1519.3) イエスのこの重要な決定は、利己的な満足感と感覚的な満足感が、一人の、そして自分自身の、進化する人間に幸福を授けることができないという真実を非常に効果的に描写する。人間の存在にはより高い価値—知的精通と精神的達成—がある。人の単なる物理的欲求と衝動が要する満足感をはるかに卓越するもの。人の本来の才能と能力の贈与は、主に心と精神のより高い力の進展と品位に捧げられるべきである。

136:6.11 (1519.4) イエスは、宇宙の被創造者に新たでより良い暮らしの方法、すなわち生活のより高い道徳的な価値と空間世界における進化の人間生活におけるより深い精神的な満足感をこのように顕にした。

7. 第3 の決断

136:7.1 (1519.5) 物質的肉体が必要とする食物や身体の表明のような問題に関する決断の後、自分自身と仲間の健康の解決すべきさらなる他の問題が残っていた。個人の危険に直面しているとき、彼の態度はどんな風であるのだろうか。人間としての安全に関し通常の注意を払い、肉体の人生経歴において時宜を得ない終了を防止するが、生身

の人生の危機に際しては、すべての超人的な介入を控えるために理にかなう予防措置をとることに決めた。この決断をしているとき、イエスは、自分の前に突き出ている岩棚の木陰に座っていた。彼は、出っ張りから空間へと身を投じることができ、ユランチアにおける生涯の仕事に立ち向かい天の有識の介入に訴えないという最初の重要な決断を取り消すならば、彼に危害が加えるようなことは何も起こらないし、自己保存に対しての彼の態度に関する2 番目の決断を取り消しても何も生じないということを完全に理解した。

136:7.2 (1519.6) イエスは、同国人が自然の法則を超えて存在する救世主を期待しているのを知っていた。かれは、その教典を確かに教えられてきた。「災いはあなたにふりかからず、疫病もあなたの住いに近づかない。なぜなら、かれは、御使いに命じてすべての道であなたを見守らせるので。かれらは、あなたが足に石をぶつけないように、手であなたを支える。」この種の推定が、重力の父の法則に対してのこの挑戦が、起こり得る危害から身を守るため、あるいは、おそらく、誤って教えられたり取り乱した人々の信頼を勝ち取るために正当化されるであ

ろうか。徴候を求めているユダヤ人にとり満足であろうとも、そのような進路は、父の顕示ではなく、宇宙の中の宇宙の確立した法則に関わる疑わしく軽率以外の何ものでもない。

136:7.3 (1519.7) このすべてを理解し、その上あるじが、個人的な行為に関する限り自己が確立した自然の法則を無視して働くことを拒否したのを知ったので、彼が決して水面を歩かなかったし、世界を司どる物質界への暴挙となる他の何事もしなかったということが君達には、確かに分かる。勿論、依然として、専属調整者の管轄権の下に置かれたそれらの事柄に関して、時間の要素に対する支配力の欠如から彼が完全に救い出される方法は、見つけられていなかったということを始終心に留めながらも。

136:7.4 (1520.1) 地球での全人生を通して、イエスは、この決断に一貫して忠実であった。パリサイ人が徴候を求めて彼を罵っても、または、カルバリで番人が十字架から下りてきてみろと言っても、かれは、山腹でこの時の決断を固く守ったのであった。

8. 第4の決断

136:8.1 (1520.2) この神-人間が取り組み、ほどなく天の父の意志に従い決断を下した次の重大な問題は、自分の超人的な力を仲間の人間の注意を引き付けたり、信奉を得る目的に使われるべきかどうかという問いに関していた。ユダヤ人がしきりに欲しがる見せ物や驚くべき事に満足を与えるためにいかなる方法でも宇宙の力を用いるべきなのか。彼は、そうしてはならはないと決めた。自分の使命に人の注意を集める方法としてのすべてのそのような習慣、実行を排除する行動方針に落ち着いた。そして、一貫してこの重要な決定を貫いた。慈悲の奉仕において幾度にもわたる時間短縮の示威行動をしたときでさえ、かれは、いつもきまって治癒施しの受容者に自分達が受けた恩恵を誰にも告げないように窘めた。そして、かれは、神格の証しと表示のために「印を見せろ」という敵の嘲りの挑戦をつねに拒否したのであった。

136:8.2 (1520.3) イエスは、奇跡の業と驚きの実行は、物質的な心の威圧による外面向きの忠誠のみを引き出すであろうということを非常に賢明に予見した。そのような芸当は、神を明らかにすることもなく、人も救わないであろう。彼は、単なる驚きの施し人になることを拒否した。

かれは、一つの任務—天の王国の設立—だけに専念すると決意した。

136:8.3 (1520.4) 深く考え込むイエスのすべてのこの重要な自身との対話の間、質問と疑問に近い人間の部分が、神であると同時に人であることから、あった。奇跡的なことを行なわなければ、ユダヤ人は、彼を救世主として決して認めないのは明白であった。さらに、ほんの1 つ不自然なことを行うことに同意するならば、イエスの人間の心は、それが本当に神の心に追従していることを確実に知るであろう。神性の心が人間の心の疑いの性質にこの譲歩をすることは、「父の意志」と一致することになるのであろうか。イエスは、

136:8.4 (1520.5) それが、そうではないと、また専属調整者の臨場を人類と協力する神性の十分な証しとして言及すると決断を下した。イエスは多くの旅をした。かれは、ローマ、アレキサンドリア、ダマスカスを思い出した。世界の方法—妥協と外交による政治や商業において人々が目標を達する方法—を知っていた。かれは、地球での任務促進においてこの知識を利用するのだろうか。かれは、

王国の設立における世界の知恵と富の影響の全ての妥協に対して同様に反対する決心をした。かれは、父の意志のみを頼みにすることを再び選んだ。

136:8.5 (1520.6) イエスは、自分の力の1 つが可用であることを百も承知していた。かれは、国と世界の注意を自分にすぐにも集中させ得る多くの方法を知っていた。まもなく、過ぎ越しの祭りがエルサレムであった。都は訪問者でいっぱいになった。イエスは、寺院の小尖塔に昇り、うろたえる群衆の前で空中を歩き出ることができた。それが、彼らが探している救世主の種類であった。しかし、かれは、ダーヴィドの王座を回復しに来たのではなかったので、結果として皆を失望させたであろう。また、かれは、神の目的を達成する自然で、緩やかで、確かな方法を追い抜こうとするカリガスティアの手口の無益さを知っていた。またもや、人の息子は、父のやり方、父の意志に素直に服従した。

136:8.6 (1521.1) イエスは、自然で、変哲のない、難しい、しかも骨の折れる方法で、ちょうど地球の子等が天の王国の拡大、延長の仕事で従わなければならないようなそのよ

うな方法で人類の心に天の王国を樹立することを選んだ。なぜなら、人の息子は、それが「全ての時代の多くの子等が王国に入るという多大の苦難を経る」ということを熟知していたがゆえに。イエスは今や、力を持ち、しかもその力を純粋に利己的であるか個人的な目的にそれを用いることを断固としてと拒否する文明人の大きな試練を通過していた。

136:8.7 (1521.2) 人の息子の人生と経験の君の考慮において、神の息子は、20　世紀の、または他の世紀の人間の心にではなく、1 世紀の人間の心で肉体化されたということが心に留め置かれるべきである。よって、我々は、イエスの人間の贈与が自然な修得という考えを伝えるつもりである。かれは、先天的、かつ時間の環境の要素、加えて自らの訓練と教育の影響の所産であった。その人間性は、本物で、自然であり、完全にその時代と世代の実際の知的事情と社会的かつ経済的状況の先例に由来しており、それらにより育てられた。この神-人間の経験において、神性の心が人間の知力を超えるという可能性がつねにありつつも、彼の人間の心が機能するとき、それ

は、本当の人間の心がその時代の人間環境の条件のもとでそうするように機能した。

136:8.8 (1521.3) イエスは、専横な、任意の権威を示す目的のために人工の状況を作るか、または道徳的な価値を高めるか、または精神的進歩を速める目的のために特別な力を欲しいままにする愚かさを自分の広大な宇宙の全世界に描写した。イエスは、マッカビーウス、一族の治世の失望の繰り返しに地上での自分の任務を貸さないと決めた。過分な人気を得る目的、もしくは政治上の威信を得るために神の属性の悪用を拒否した。かれは、神性の、または創造的なエネルギーを国力、あるいは国際的な名声への変化を支持しようとはしなかった。罪との交わりは言うまでもなく、ナザレのイエスは、悪との妥協を拒否した。あるじは、その他の地球と一時的な考慮よりも父の意志への忠節を得々と優先した。

9. 第5の決断

136:9.1 (1521.4) かれは、自然の法則と精霊の力に対する彼の個々の関係に属するそのような方針の質問に決着をつけ、神の王国の公布と設立において採用される方法の選

択に注意を向けた。ヨハネは、すでにこの仕事を始めていた。イエスは、いかにして知らせを広め続けられるのか。かれは、どのようにヨハネの任務を引き継ぐべきか。かれは、どのように効果的な努力と知的な協力のために追随者を組織すべきなのか。イエスは、さらに自分自身をユダヤ人の救世主、少なくとも当時一般に考えられていたような救世主と見なすことを禁じる最終的な決断にそのとき達していた。

136:9.2 (1522.1) ユダヤ人は、イスラエルの敵の力を低下させ、世界の支配者としてのユダヤ人を確立し、貧困や圧迫から自由にする奇跡の力をもって来る救出者を心に描いていた。イエスは、この望みが決して現実にならないことを知っていた。天の王国は、人の心の中における悪の打倒に関係しており、イエスは、それが純粋に精神に関わる問題であということを知っていた。かれは、輝かしくまばゆいような力の誇示で精霊の王国を開始する適否をよく考え—そのような針路は、マイケルの司法権内で完全に許されたことであろう—しかし、かれは、完全にそのような計画に反対する決心をした。カリガスティアの革命の方法に妥協しようとはしなかった。かれは、父の

意志への服従により実質的には世界を勝ち取り、そして、自分がそれを始めたので、また人の息子して自分の仕事を終えるつもりであった。

136:9.3 (1522.2) そのとき天と地において事実上全ての力を所有するこの神-人間が、一度主権の旗印を広げることを、また、驚きを為す大隊を整列させることを決めたならば、ユランチアで起こったであろうことを君は、ほとんど想像することなどできないのである。しかし、彼は妥協しようとはしなかった。かれは、神への崇拝がおそらくそこから導き出されるかもしれない悪に仕えようとはしなかった。かれは、父の意志に従おうとした。かれは、傍観している宇宙に宣言した。「主を、神を崇拝せよ。また彼にだけ仕えよ。」と。

136:9.4 (1522.3) 日が経つにつれ、ますます明確に、イエスは、自分がどんな真実の啓示者になろうとしているかを知覚した。神の道が簡単そうでないことを認識した。かれは、人間の経験の残りの杯がことによると苦いかもしれないと悟り始めたが、それを飲むと決めた。

136:9.5 (1522.4) 彼の人間の心さえダーヴィドの王座に別れを告げている。一歩一歩、この人間の心は、神性の道に従っている。人間の心はまだ質問するが、つねに無条件に父の永遠かつ神性の意志をすることに服従しながら、世界の人間としてこの結合された人生の最終的な裁定として間違いなく神の答えを受け入れる。

136:9.6 (1522.5) ローマは西洋世界の女主人であった。人の息子は、現在、孤立とこれらの重大決定を達成するにあたり、世界統治権を獲得するユダヤ人にとって、天の軍団に命じ、自由になる天の軍勢で、最後の機会であった。しかし、そのような絶大な知恵と力をもつこの地上生まれのユダヤ人は、自己の強化、または自分の民族の王座獲得のためには宇宙の授与の使用を拒んだ。かれは、「この世の王国」を比喩的に見ており、またそれを手に入れる力を備えていた。エデンティアのいと高きもの達は、これらのすべての力を彼の手に委ねていたが、かれは欲しなかった。地上の王国は、宇宙の創造者と支配者の関心を引くには取るに足りないものであった。かれには、1 つの目的、つまり人へのさらなる神の顕示、王国の設立、人間の心における天の父の支配だけがあった。

136:9.7 (1522.6) 戦闘、抗争、虐殺についての考えは、イエスにとりとても不快であった。かれは、そのいずれももっていなかった。かれは、愛の神を明らかにする平和の王子として地球に来るつもりであった。洗礼の前、かれは、ローマの制圧者への反逆のために彼らの指揮をというゼローテースの申し出を再度拒否した。そのとき、次のような母が教えてくれたそれらの経典に関して、最終的な決定をした。「主は私に、『お前は私の息子である。この日、お前を生まれさせた。私について尋ねなさい。そうすれば、相続のために異教徒を、属領としては地球の最大部分をお前に与えるつもりである。お前は鉄の棒でかれらを砕くだろう。陶芸家の船のようにそれらを粉微塵に打ち砕くだろう。』」

136:9.8 (1522.7) ナザレのイエスは、そのような発言は彼に言及しなかったという結論に達した。ついに、最終的に、人の息子の人間の心は、全てのこれらの救世主の困難と矛盾—ヘブライ経典、親の躾、カザンの教育、ユダヤ人の期待、人間の野心的な切望—を一掃した。かれは、進むべき道をきっぱりと決めた。かれは、ガリラヤに戻り、

静かに王国の公布を始め、詳しい手順については日々、父(専属化の調整者)に頼ることにした。

136:9.9 (1523.1) 性霊的な問題の証明のために物質的な基準を当て嵌めることを拒否するとき、無遠慮に自然の法則に挑むことを拒否するとき、これらの決心により、イエスは、広漠たる宇宙のあらゆる世界における全ての人間のためにふさわしい例を設定した。そして、精霊的な栄光の前兆として束の間の権力を拒否するとき、かれは、奮いたたせる宇宙忠誠と道徳的気高さの模範を示した。

136:9.10 (1523.2) かれが、洗礼後に丘に上がったとき人の息子に自分の任務とその性質について何らかの疑問があったとしても、孤立と決定の40日間の後、仲間の元に戻ったときはなにもなかった。

136:9.11 (1523.3) イエスは、父の王国の設立のための計画案を立てた。かれは、民衆の物理的満足感に迎合しようとはしない。かれは、最近それがローマでされているのを見たようには、群衆にパンを分配しない。たとえユダヤ人がまさしくその種の救済者を待っているとしても、かれは、奇跡のような働きにより自分に注意を引きつけよう

とはしない。また、かれは、政治権力、またはこの世の、一時的な力による誇示で精霊的な知らせの受け入れをしようとはしないだろう。

136:9.12 (1523.4) 期待しているユダヤ人の目に来たるべき王国を強化するこれらの方法を拒絶することにより、かれは、この同じユダヤ人が、権威と神性への彼の請求のすべてを確かに、しかも最終的に拒絶すること確信していた。このすべてを知りながら、イエスは、長く初期の追随者が救世主として彼について触れることを防ごうとした。

136:9.13 (1523.5) 公のための任務を通して、絶えず再発する3 つの状況、食べさせろという騒ぎ、奇跡の強調、最後は追随者が彼を王にするという要請、を扱う必要性に直面した。しかし、イエスは、ペラリアの丘での孤立の日々における決定から離れることは決してなかった。

10. 第 6 の決断

136:10.1 (1523.6) この忘れ難い孤立の最終日に、ヨハネとその弟子達に合流するために山を下り始めるにあたり、人の息子は、最後の決断をした。そして、この決定を専属調

整者に次の言葉で伝えた。「そして、他のすべての事柄に関して、いまこのような決定-記録として、私は、父の意志に従うことをあなたに誓います。」このように話すと、かれは、山を下りて行った。その顔は、精霊的な勝利と道徳的業績の栄光で輝いた。

論文 137
ガリラヤでの滞在期間

137:0.1 (1524.1) 西暦26 年2 月23 日、土曜日の早朝、イエスは、ペラで露営していたヨハネの仲間に再び加わるために丘から下りてきた。イエスは、その日、ずっと群衆と交じわった。かれは、転んでけがをした若者に力を貸し、そして安全に両親の手元に連れて行くためにペラ近くの村へと旅をした。

1. 最初の4 人の使徒選出

137:1.1 (1524.2) この安息日の間、ヨハネの先導的主要な弟子の二人は、イエスと多くの時間を過ごした。ヨハネの全追随者のうち、アンドレアスという者が、最も深くイエスに感銘を受けた。かれは、負傷した少年をペラに連れて行くイエスに同行した。ヨハネとの合流のために戻る途

中、アンドレアスは、イエスに多くの質問をし、目的地到着の直前に、二人は会話をするために立ち止まった。その際アンドレアスは、「カペルナムに来られてからずっとあなたを観てきて、あなたは、新しい師であると思っています。あなたのすべての教えを理解をしてはいないのですが、断然あなたに従って行くと決心しました。謙虚な生徒となり、新しい王国について全ての真実を学びたいのです。」と言った。そこでイエスは、人の心の中に新しい神の王国を設立する仕事で共に働くことになる12人の１団の1番目の使徒として、アンドレアスを歓迎した。

137:1.2 (1524.3) アンドレアスは、ヨハネの寡黙な観察者、忠実な信者でもあり、また彼にはシーモンというヨハネの傑出した弟子の一人の非常に有能で熱心な兄弟がいた。シーモンがヨハネの主要な支持者の一人であったと言うのは誤ってはいないであろう。

137:1.3 (1524.4) イエスとアンドレアスがキャンプに戻るとすぐに、アンドレアスは、兄弟のシーモンを捜し出し、脇へ連れていき、自身はイエスが偉大な師であるという思い

に落ち着いたこと、また弟子として誓約したことを告げた。続けて、イエスが自分の奉仕の申し出を受け入れたこと、新しい王国のための奉仕をする仲間に彼(シーモン)も同様に参加の申し出をすることを提案した。シーモンが言った。「この方がゼベダイの店で働くようになってから神が送られた方だと信じてきたのだが、ヨハネはどうするのか。彼を見捨てることになるのだろうか。これは正しい行為なのだろうか。」そこで、二人は、すぐにヨハネに相談しに行くことにした。ヨハネは、有能な助言者と最も有望な弟子二人を失うという思いに悲しんだが、敢然として質問に答えて言った。「これはほんの始まりである。やがて私の仕事は終わり、我々は皆、あの方の弟子になるであろう。」そこで、アンドレアスは、兄弟が新しい王国のための奉仕に加わることを望んでいることを取り次ぐと同時に、イエスには傍らに引っ込むように合図した。そして、2 番目の使徒としてシーモンを歓迎するにあたり、イエスは、「シーモン、そなたの熱意は立派であるが、王国の仕事にとっては危険である。言論に関してはもっと考え深くなるように訓戒しておく。そちの名前をペトロスとしたい。」と言った。

137:1.4 (1525.1) ペラに住む負傷した若者の両親は、イエスにその夜我が家のつもりで泊まるようにと懇願し、イエスはその約束をしていた。アンドレアスとその兄弟を後にする前に「明日早くに、我々はガリラヤに行く。」と、イエスが言った。

137:1.5 (1525.2) イエスが夜ペラに戻った後、アンドレアスとシーモンが、来たるべき王国の設立における奉仕の性格について依然として検討中、ゼベダイの息子のジェームスとヨハネは、丘での長くて無益なイエスの探索からちょうどその場に戻り着いたところであった。シーモン・ペトロスが、いかにして彼と彼の兄弟(アンドレアス)が新しい王国の最初に受け入れられた助言者になったか、また翌朝、新しいあるじと二人がガリラヤにむけて発つことになっていると聞き、ジェームスとヨハネの二人は悲しんだ。ジェームスとヨハネは、しばらくの間イエスを知っており、愛してもいた。二人は丘で何日も彼を捜していて、戻ってみると自分達よりも他の者達が優先されていたことを知ったのである。かれらは、イエスがどこに行ったかを尋ね、急いで捜しに行った。

137:1.6 (1525.3) 住まいに達すると、イエスは眠っていたが、二人は、彼を起こして言った。イエスは、「大層長い間共に暮らしてきた我々が丘であなたを探している間、他のものを贔屓にし、新しい王国でのあなたの最初の仲間としてアンドレアスとシーモンを選ぶというのはどういうことですか。」イエスは、「心を穏やかにして、『人の息子が父の用向きに携わろうとするとき、誰がお前達に捜さねばならないと指示したか』自分に尋ねなさい。」と応じた。丘での長い探索の詳細を語ると、イエスはさらに悟して言った。「丘ではなく、自身の心の中に新しい王国の秘密を捜し求めることを学ぶべきである。探していたものは、すでにお前達の魂の中に存在していた。お前達は実に私の同胞であり、—私に受け入れられる必要はなく—すでにお前達は王国の者であった。だから、元気を出し、明日我々と一緒にガリラヤに行く準備をもすべきである。」「しかし、ご主人様、アンドレアスとシーモンと時を同じくして、ジェームスと私は新しい王国の仲間になるのですか。」と次に、ヨハネが敢えて尋ねた。そこで、イエスはそれぞれの肩に手を置いて言った。「兄弟よ、他のこれらの者が受け入れられる要求を

する前にさえ、王国の精神においては、お前等はすでに私と共にいたのであるぞ。友よ、王国に入るのに要請は必要ではない。お前達は最初から私と共に王国にいた。人の目には、他の者達がお前達よりも先んじているかもしれないが、お前達がまだこの要請をする前に、私も王国の協議会において心でお前達を数に入れたのである。そして、そうであったとしても、善意だが、独り決めの任務の迷っていない者の探索に従事していなかったとしたならば、人の目にはお前達が先んじて見えるかもしれない。来たるべき王国においては、心配を助長するような事柄に留意せず、むしろ絶えず天にいる父の意志をすることだけに関わるように。」

137:1.7 (1525.4) ジェームスとヨハネは、快く叱責を受け入れた。かれらは、アンドレアスとシーモンをもう決して妬むことはなかった。そして、彼らは、2 人の仲間の使徒と翌朝のガリラヤへの出発の準備をした。この日から、使徒という用語は、後に彼に追従した信じる弟子の夥しい数の群衆からイエスの助言者の一門を区別をするために用いられた。

137:1.8 (1525.5) その夕方遅く、ジェームス、ヨハネ、アンドレアス、シーモンは、洗礼者ヨハネと親しく談話をし、頑強なユダヤの予言者は、涙ぐんだ目ではあるが、ゆるぎない声で、自分の主要な弟子二人を来たるべき王国のガリラヤの王子の使徒になるために行かせた。

2. フィリッポスとナサナエルの選出

137:2.1 (1526.1) 西暦26年2月24日、日曜日の朝、イエスは、ペラ近くの川のそばで洗礼者ヨハネと別れ、その後生身の姿では彼に二度と会うことはなかった。

137:2.2 (1526.2) その日、イエスと4人の弟子の使徒がガリラヤに出発したとき、ヨハネの追随者の野営ではかなりの騒ぎがあった。最初の大きな分裂が起ころうとしていた。その前日、ヨハネは、イエスが救出者であるという積極的な見解をアンドレアスとエズラにしたのであった。アンドレアスはイエスに続くと決めたが、エズラは、ナザレの温厚な大工を拒絶して、仲間に宣言した。「予言者ダニエルは、人の息子が、力と素晴らしい栄光において、天の雲と共に来ると断言している。このガリラヤの大工、このカペルナムの船大工が、救出者であるはずが

ない。神のそのような贈り物がナザレから来るようなことがあるだろうか。このイエスは、ヨハネの親類であり、我々の師は、心の優しさ故に騙されているのである。この偽の救世主から遠のいていようではないか。」ヨハネが、これらの発言のためにエズラを叱責すると、彼は多くの弟子と共に離れて南へと急いだ。そして、この１団は、ヨハネの名の下に洗礼し続け、やがてヨハネを信じイエスの受け入れを拒否した人々の宗派を創設するに至った。この名残の１団は、今日までメソポタミアに存続している。

137:2.3 (1526.3) この問題がヨハネの追随者の中でふつふつと起ころうとする一方で、イエスとその4　人の弟子の使徒は、ガリラヤへのかなりの距離を行く途中であった。ナイン経由でナザレへ行くためにヨルダン川を横断する前、道のはるか前方を見ていたイエスは、ベツサイダのフィリッポスという者が友と自分達の方にやってくるのを目にした。イエスは、フィリッポスを以前から知っており、またフィリッポスも新しい使徒4 人全員によく知られていた。かれは、噂の来たるべき神の王国についてさらに学ぶためにペラにいるヨハネを訪問するために、

友人ナサナエルと行く途中であり、喜んでイエスに挨拶をした。フィリッポスは、イエスが初めてカペルナムに来て以来その賛美者であった。しかし、ガリラヤのカナに住んでいたナサナエルは、イエスを知らなかった。フィリッポスは、ナサナエルが道端の木陰で休む間、自分の友人達への挨拶のために進み出た。

137:2.4 (1526.4) ペトロスがフィリッポスを脇に連れて行き、全員、つまり自分自身、アンドレアス、ジェームス、ヨハネは、来たるべき王国のイエスの仲間になったところだと説明し始め、フィリッポスに奉仕を志願するよう強く促した。フィリッポスは困惑した。何をすべきなのか。ここで—ヨルダン川近くの路傍において—何の予告もなくして、生涯で最も重大な問いへの即座の決断に直面した。イエスは、この時まで、ガリラヤ経由のカペルナムへの旅行についてジェームスに略述をしており、フィリッポスは、ペトロス、アンドレアス、ヨハネとの熱心な会話をしていた。最後に、アンドレアスが、「先生に尋ねないか。」とフィリッポスに提案した。

137:2.5 (1526.5) イエスが本当に偉大な人物、ことによると救世主であるかもしれないと、フィリッポスは、突然に気づき始め、この件でイエスの決定を受け入れると決めた。そこで、真っ直にイエスのところに行き「先生、ヨハネの元に行くべきでしょうか、それともあなたに続く友に加わるべきでしょうか。」と尋ねた。そこで、イエスは、「私についてきなさい。」と答えた。フィリッポスは、救済者を見つけたという確信にぞくぞくした。

137:2.6 (1526.6) フィリッポスは、そのとき仲間の全員には今の場所に留まるよう合図し、自分が耳にした洗礼者ヨハネ、来たるべき王国、期待される救世主に関する多くの事柄をあれこれと心の中で考えながら、まだ桑の木の下にいる友人ナサナエルに新たな決心を打ち明けるために、急いで戻った。フィリッポスは、これらの思索を遮り、大声で「救世主を見つけた、モーシェと予言者が書き、ヨハネが宣言した方を。」と言った。ナサナエルは、見上げて、「この師はどこから来られるのか」と問い質した。そこでフィリッポスは、「ナザレのイエス、ヨセフの息子、最近カペルナムに住んでいる大工である。」と答えた。そこでいくらか衝撃を受けたナサナエ

ルは、「そのような何か良い事がナザレから来るはずがあろうか。」と尋ねた。しかし、フィリッポスは、ナサナエルの腕を取り、「見に来なさい。」と言った。

137:2.7 (1527.1) フィリッポスがナサナエルを連れて行くと、イエスは、誠実な懐疑者の顔を穏やかに見つめがら「本物の、偽りのないイスラエル人を見なさい。私についてきなさい。」と言った。そこで、ナサナエルは、フィリッポスの方を振り向いて言った。「君は正しい。あの方は本当に人のあるじである。私もついていく。もし私がそれに値するなら。」そこでイエスは、ナサナエルに頷いて再び「私についてきなさい」と言った。

137:2.8 (1527.2) イエスは、そのとき将来の近しい仲間の半分の人数を、知り合いの5 人と見知らぬ1 人ナサナエルを集めた。更なる遅滞なしで、その夕方遅く、皆は、ヨルダン川を渡り、ナインの村のそばを行き、ナザレに到着した。

137:2.9 (1527.3) かれらは全員、イエスの少年時代の家でヨセフと夜を過ごした。イエスの仲間は、見い出さればかりの師が、家のまわりに残る十戒、他の標語、諺のすべての

自筆の痕跡を完全に破壊することに何故それほどまでにこだわるのかほとんど理解しなかった。しかし、この処置は、皆がその後イエスの書くところを—埃か砂以外には—決して見なかったという事実とともに心に深い印象を与えた。

3. カペルナム訪問

137:3.1 (1527.4) 皆がその町の際だった若い女性の結婚式に招待されたので、イエスは、翌日使徒をカナに行かせ、自分は弟ユダに会うためにマグダラに寄り、カペルナムの母を急いで訪問する準備をした。

137:3.2 (1527.5) ナザレを経つ前、イエスの新しい仲間達は、つい最近の素晴らしい出来事についてヨセフと他のイエスの家族に話し、イエスが長く期待されている救世者であるという自分達の確信をを自由に表した。イエスの家族は、このすべてを徹底的に話し合った。そして、ヨセフが、「多分、とどのつまり、母は正しかった—おそらく、我々の奇妙な兄は、きたるべき王なのであろう。」と言った。

137:3.3 (1527.6) ユダは、兄ジェームスとイエスの洗礼の場に居合わせて、イエスの地上での任務の確固たる信者になった。ジェームスとユダの両者は、兄の任務の性質に関して非常に当惑したが、母は、救世主、ダーヴィドの息子としてイエスに関する彼女のすべての初期の望みを復活させた。そして、かのじょは、イスラエルの救済者として兄を信じるように息子達を奨励した。

137:3.4 (1527.7) イエスは、月曜日の夜カペルナムに到着したが、ジェームスと母の住む自宅には帰らず、直接ゼベダイの家に行った。カペルナムの友人の全員が、彼にすばらしい、快い変化を認めた。もう一度、比較的に愉快であり、ナザレでの早年の彼自身のようであった。ちょうど洗礼前後の孤立期間までの長年、彼はますます真剣で打ち解けない感じであった。皆には今、全く以前の彼に見えた。いくぶん厳然とした重要性と高められた様相が見られたが、再び気軽で楽し気であった。

137:3.5 (1528.1) マリアは期待にぞくぞくした。かのじょは、ガブリエルの約束の遂行に近づいていると予期した。かのじょは、ユダヤ人の超自然的な王として我が息子の奇跡

的な顕示に全パレスチナ人が間もなくびっくり仰天するのを待ち望んだ。しかし、母、ジェームス、ユダ、ゼベダイからの数多い質問のすべてに、イエスは、ただ微笑んで答えるだけであった。「私は、しばらくここに滞在した方が良い。天にいる父の意志をしなければならない。」

137:3.6 (1527.9) その翌日、火曜日に、かれらは全員、ナオミの結婚式のためにカナに旅した。式はその明くる日行われることになっていた。そして、「父の時間が来る」まで何人にも自分のことを話さないというイエスの度重なる警告にもかかわらず、皆は、救世主を見つけたという知らせをこっそりと方々へ広めると言って譲らなかった。かれらは各々、イエスがまじかのカナでの結婚式でメシアの権威の就任を開始する、また偉大な力と崇高な威厳でそれを為すだろうという確信をもって期待した。かれらは、イエスの洗礼の際に起きた現象について話されてきたことを覚えていたし、超自然の驚くべき事柄と奇跡の実演の徴候を増加することにより、地上でのイエスの将来の進路が示されるであろうと信じた。それに応じ

て、田舎全体は、ナオミとナサンの息子ヨハブの婚礼の祝宴にカナに集まる準備をしていた。

137:3.7 (1527.10) マリアは、長年あまり楽しくなかった。彼女は、息子の戴冠式を目撃するために向かう皇太后の思いでカナに旅した。イエスの13 歳以来ずっと、家族や友人は、仲間の願いや要求に対しとても思いやりがあり理解があり、また心に触れるほど同情的であり、屈託のないほどに幸福な風を見ていなかった。そんな訳で、彼らは全員、何が起こるのかと疑問に思い、小さい群れになって囁いた。この不思議な人は、次に何をするのだろうか。来たるべき王国の栄光、栄光の到来をどのように開幕、告げるするのか。彼らは全員、イスラエルの神の威力と迫力の顕示を目撃するために出席しているという考えに興奮していた。

4. カナでの婚礼

137:4.1 (1528.4) 水曜日の正午までには、婚礼の祝宴に呼ばれた4 倍以上の数に達するほぼ1,000 人の客がカナに到着した。水曜日に婚礼を祝うことがユダヤの習慣であり、招待は式の一ヶ月前に方々に送られていた。午前と午後の

前半は、結婚式よりもイエスための公の歓迎会のように見えた。誰もが、この最近有名なガリラヤ人に挨拶をしたがり、イエスの方も、老いも若きも、ユダヤ人、非ユダヤにもとても誠心誠意で対応した。そして、イエスが、予備結婚行式の行列を率いるのに同意すると、皆は歓喜するのであった。

137:4.2 (1528.5) イエスは、そのとき自身の人間生活、自身の先在の神性、そして自身の人性と神性の結合、または融合の状態に関し、完全に自意識があった。かれは、完全な平静さで、一瞬のうちに人間の役を演じるか、または即座に神性の人格特権を引き受ける、みなすことができた。

137:4.3 (1528.6) 時間、日が経つにつれ、イエスは、自分が何らかの驚きに値いする行為を演じることを人々が期待していることをますます意識するようになった。特にかれは、家族と6 人の弟子である使徒が何らかの驚異的で超自然の顕現によって来たるべき王国を適切に発表することを楽しみに待っているのに気づいた。

137:4.4 (1529.1) 午後早々、マリヤは、ジェームスを呼び出し、そこで皆は一緒に、結婚式に関連して、自分を明白にする計画をたてていた「超自然の者」としていつ、どの時点でどの程度までの自信で秘密を彼等に打ち明けるかを問うために大胆にもイエスに近づいた。かれらが、これらの事柄について話すやいなや、イエスの独特の憤りを刺激してしまったのを皆は見た。彼は、「私のことを思うなら、私が天にいる父の意志を待つ間、喜んで共にいてもらいたい。」とだけ言った。だが叱責の雄弁さは、その表現にあった。

137:4.5 (1529.2) 人間イエスにとり母のこの行動は大きな失望であり、また彼自身がいささかの神性示威を楽しむという母の思わせ振りの提案に対する自分の反応に非常に冷静になった。丘でのつい最近の孤立の際、自分がしないと決めた中の1つがまさしくそれであった。数時間、マリヤは、非常に落胆していた。かのじょは、「あの子が分からない。全てはどういうことなの。あの子の奇妙な行動に終わりがないのだろうか。」と、ジェームスに言った。ジェームスとユダは、母を慰めようとしたが、イエ

スは、1 時間の隔離のために引き下がった。しかし、かれは、参集に戻り、もう一度快活に楽しんだ。

137:4.6 (1529.3) 婚礼は期待の静寂のうちに続いたが、全体の儀式は、貴賓からの動きも言葉もなく終わった。そうすると、ヨハネが「救世主」として発表した大工であり、船大工が、その手の内を晩のお祭り騒ぎの際、おそらく結婚式の夕食で見せるという噂が流れた。しかし、かれが、結婚披露宴の直前に使徒を集め、「好奇のもの満足感のためや疑うものの思い込みのために何らかの奇跡的な業をしにこの場所に来たと思わないでくれ。むしろ、我々は天にいる我々の父の意志を待つためにここにいるのである。」と真剣に言ったとき、そのような全ての示威への期待は、6 人の弟子の使徒の心から有効に取り除かれた。しかし、イエスが仲間と相談しているのを見ると、マリヤと他のものは、驚異的な何かが起ころうとしていると思い込んでしまった。そこでかれら全員は、結婚式の夕食と祝いの親交の夕べを楽しむために座った。

137:4.7 (1529.4) 花婿の父は、婚礼の祝宴に招かれたすべての客のために沢山のワインを用意していたのだが、息子の結

婚が、メシアの救世者としてのイエスの期待される顕現と密接に関連づけられることになるなどとどうして知り得ることができたであろうか。客の中に名の知れたガリラヤ人を含む名誉を喜んだが、婚礼の食事の終了前に、使用人達は、ワインが不足してきているという狼狽する知らせを伝えた。正式の食事が終わり、客が庭のあたりを遊歩していた頃、花婿の母は、ワインの供給が尽きることをマリヤに打ち明けた。そこでマリヤは、自信をもって言った。「息子に話すので心配しないで。力を貸してくれます。」ほんの数時間前の叱責にもかかわらず、かのじょは、大胆にもこのようにしたのであった。

137:4.8 (1529.5) 何年もの間ずっと、ナザレでの家庭生活のあらゆる危機に面しイエスに助けを求めてきたので、今回も彼を思い浮かべることはマリヤにとって自然なことに過ぎなかった。しかし、この野心的な母には、このとき長男に訴えるさらに他の動機があった。イエスが庭の角に一人立っていると、「息子よ、ワインが無いよ。」と近づいて言った。イエスが答えた。「善良な女よ。それが私にどう関係があるのか。」マリヤは、「でも、私は、あなたの時間が来たと思う。私達を助けられないの。」

と言った。イエスは、「私は、このような事をするために来たのではないと再度断言する。なぜまたこれらの問題で私を煩わすのか。」と答えた。するとマリヤは、わっと泣き崩れ、懇願した。「でも、息子よ。私は、あなたが助けてくれると彼らに約束した。私のために何かしてくれないか。」そこで、イエスが言った。「女よ。そのような約束などして一体どうしたのか。二度とそれをしないように頼むよ。我々は、全ての件に関して天の父の意志を待たなければならない。」

137:4.9 (1530.1) イエスの母マリヤは、打ちひしがれた。唖然とした。かのじょが、顔に涙を流しながら動かずに自分の前に立っていると、イエスの心は、肉体をもつ自分を生んだ女性への同情に襲われた。そして、かれは、前屈みになり、彼女の頭に優しく手をのせて言った。「まあ、まあ、母マリヤよ、私の明らかにきつい言葉に嘆かないように。天の父の意志をするためにだけ私が来たということをあなたにしばしば話さなかったかな。それが父の意志の一部であるならば、あなたが私に言いつけることは何でも大いに喜んでするよ。」そこで、イエスは急に止まり、躊躇った。マリヤがは、何かが起こっていると

感じているようであった。飛び上がって、かのじょは、イエスの首の周りに腕を素早く回し、口づけをし、使用人の宿舎へ急いで立ち去り、「息子が何を言っても、それは起こる。」と言った。ところが、イエスは何も言わなかった。かれはそのとき気づいた。すでに言ってしまった—あるいは、むしろ望みたっぷりに考えた—考え過ぎたと。

137:4.10 (1530.2) マリヤは、歓喜に小躍りした。ワインがどう生産されるのかは知らなかったが、彼女は、彼の権威を主張すること、敢えて進みでて身分を主張し、メシアの力を示すことを長子の息子を説得したと自信をもって思った。そして、特定の宇宙の力と人格の臨場と連合のため、それについては出席者全員が完全に無知であったが、彼女が失望することにはなっていなかった。マリヤが望み、、神-人であるイエスが人間らしい思いで、また同情的に望んだワインは、まさに現れようとしていた。間に合った。

137:4.11 (1530.3) すぐ近くに、それぞれにほぼ70リットルの水で満たされた石の水瓶が、6 個あった。この水は、引続

く婚儀の祝賀における最後の清めの儀式に使用される予定であった。活発な母の指揮の下でのこの巨大な石の容器についての使用人達の騒動は、イエスの注意を引いたので、かれが、行ってみると皆が水差し満杯にワインを次々に汲み出しているのが観えた。

137:4.12 (1530.4) 何があったのか、イエスには徐々に分かってきた。カナの結婚の祝宴の全出席者のうち、イエスが最も驚いた。他の者は、彼が驚くことをすると期待していが、それは目標にしていないことであった。そこで、人の息子は、丘での専属思考調整者の訓戒を思い出した。時間から解放された創造者の特権を奪ういかなる力、または人格の不能であることに関して、いかに調整者が、彼に警告したかを考え直した。力の変換者達、中間者達、および他のすべての必要とされる人格が、この時その水や他の必要な要素の近くに集合し、宇宙創造君主の発露の願望のもとに、ワインの瞬時の存在が起こるのは逃がれようのないことであった。また、専属調整者が、息子の願望の実行は、決して父の意志に違反でないことを示したことから、この出来事は二重に確実になった。

137:4.13 (1530.5) しかし、これは、いかなる意味合いからも奇跡というものではなかった。自然の法則は、改変されたり、廃棄されたり、または超越されたりはしなかった。ワイン生産に必要な化学要素の超人による組み合わせに関連して、時間の抑止以外は、何も起こりはしなかった。この時カナでは、創造者の代理人達は、時間に関係なく、また必要な化学成分の空間の組み合わせにおける超人の介入によりそれをしたことを除いては、ちょうど彼らが普通の自然の過程によってするようにワインを作った。

137:4.14 (1531.1) その上、このいわゆる奇跡の実施が、楽園の父の意志に反しなかったということは明白であった。さもなくば、イエスがすでにすべての事で父の意志に服従していたので起こりはしなかったであろう。

137:4.15 (1531.2) 使用人が、この新しいワインを汲み、新郎の付き添い役に運んだとき、「祝宴のきまり」、そして彼がそれを味見したとき、かれは、花婿に呼びかけて言った。「最初に良いワインで始まり、客がすっかり酔っぱらうと劣った葡萄の実のワインを持って来るのが習慣で

ある。だが、君は極上ワインを祝宴の最後まで取って置いた。」

137:4.16 (1531.3) マリヤと弟子達は、イエスが意図しそれを実行したと考えた勘違いの奇跡に大いに喜んだが、イエスは、庭の木々の覆い被さった隅に引き下がり、しばらく重大な考えに従事した。この出来事は、現情況下では自分個人で抑え切れないことである、父の意志に反しないことであり、必然であると、イエスは、最終的に踏ん切りをつけた。彼が皆のところに戻ると、人々は畏敬をもってかれを見た。かれらは全員、彼を救世主と信じた。しかし、イエスは、彼らが今うっかり見てしまった異状な出来事のためだけで自分を信じるというのを知り、ひどく当惑した。イエスは、全体を考えられるようしばらくの間また屋根に退いた。

137:4.17 (1531.4) このような度重なる事件の原因となる同情や哀れみに耽けることのないように、かれは、絶えず警戒しなければならないということをそのとき完全に理解した。けれでも、人の息子が肉体での人生の最終的な別れまでには多くの同様の出来事が起きた。

5. カペルナムに戻る

137:5.1 (1531.5) 客の多くは、結婚の祝いの週の間中留まったが、イエスと新しく選ばれた弟子である使徒—ジェームス、ヨハネ、アンドレアス、ペトロス、フィリッポス、ナサナエル—は、誰にも別れを告げずに翌朝極めて早くカペルナムへ出発した。イエスの家族やカナの全ての友人は、かれが突然に皆のもとを去ったので非常に心を痛めた。そこで、イエスの一番下の弟ユダが彼を探しに出発した。イエスと使徒は、直接にベスサイダのゼベダイの家に行った。この旅行でイエスは、選ばれたばかりの仲間と来たるべき王国の多くの重要な事柄について論議し、特に水がワインに転じたことに言及しないように警告した。かれはまた、今後の仕事においてセフォーリスとティベリアスの都市を避けるように忠告した。

137:5.2 (1531.6) その晩の夕食後、イエスの地球での全経歴で最も重大な会議の1つが、ゼベダイとサロメのこの家で開催された。この会議には6人の使徒だけが出席していた。ユダは、彼らが解散しようとするときに到着した。この6人の選ばれた男達は、カナからベスサイダまでをまるで空中を歩いているかのようにイエスと旅をした。

皆は、期待で生き生きとし、また人の息子の親密な仲間として選ばれたという思いに感動した。しかし、イエスが自分は誰であり、地上での任務が何であるか、またそれがどう終わりそうであるかということを明らかにすると、皆は呆然とした。かれらは、彼が話していることを理解できなかった。皆は口もきけないでいた。ペトロスでさえ、表現し難いほどに押し潰された思いであった。ただ深く考えるアンドレアスだけは、イエスの勧告の言葉に思い切って応じた。イエスは、皆が自分の趣意を理解していないと気づいたとき、ユダヤの救世主に関する彼らの考えがあまりに完全に具体化されたのを見たとき、自分は弟ユダと歩いて話す傍ら皆には休ませた。ユダは、イエスに暇乞いをする前に強い感情で言った。

「父であり兄である人よ、私はあなたを一度も理解したことがない。母が教えてくれたあなたかどうか確かには分からない。また私は、来たるべき王国についても完全に理解したいうわけではないが、あなたが神のような強力な人であることは分かります。私は、ヨルダン川であの声を聞きましたし、あなたが誰であろうとも私はあな

たの信者です。」かれは、話し終えるとマグダラの自宅に向けて出発した。

137:5.3 (1532.1) その夜、イエスは眠らなかった。かれは、夜用の肩掛けを纏い、翌日の明け方まで考えながら湖岸に座った。その夜の思索の長い時間の中で、かれは、長く期待された救世主として以外に追随者達に自分を見せることは決してできないということを明確に理解した。ついに、彼は、ヨハネの予言の実現として、またユダヤ人が探し求めている者としてあること以外には、王国に関する自分の主旨発信の開始をする方法はないと気づいた。結局、彼は、ダーヴィドのような救世主の型ではなかったが、より精神的に気を配る実に昔の予言者の予言的発言の実現であった。決して二度と、かれは、救世主であることをまったく否定しなかった。かれは、父の意志の仕事を果たすことにこの複雑な状況の最終的な解決を委せることに決めた。

137:5.4 (1532.2) 翌朝、イエスは、友人達との朝食に合流したが、皆は、元気のない集団であった。かれは、雑談し、食事の終わりに自分の周りに皆を集めて言った。「この

あたりにしばらく留まるのが父の意志である。お前たちは、ヨハネが、王国への道を開きに来たと言うのを聞いている。従って、ヨハネの説教の成就を待ち受けることが、我々に相応しい。人の息子の前触れをする者が彼の仕事を終えたとき、我々は、王国の良い知らせの宣言を始めるつもりである。」イエスは船の作業場にゼベダイと行く用意をする一方で、使徒達にはそれぞれの漁仕事に戻るよう指示し、自分が話すことになっている会堂で翌日会うことを約束し、その安息日の午後かれ等との会合をもつことを決めた。

6. 安息日の出来事

137:6.1 (1532.3) 洗礼に続くイエスの最初の公の場への出現は、西暦26年3月2日、安息日のカペルナムの会堂であった。会堂は溢れんばかりに混雑していた。ヨルダン川での洗礼の物語は、そのとき水とワインのカナからのほやほやの報道によりますます増大していた。イエスは上座を6人の使徒に与え、彼らと共に座したのが人間の兄弟のジェームスとユダであった。前夜ジェームスとカペルナムに戻った母も、会堂の婦人の区画に着席していた。全聴衆はいらいらしていた。彼らは、その日話そうとしてい

る者の資質と威権に適する証明である何らかの並はずれた神通力の明示を目撃することを期待した。しかし、かれらは、失望する運命にあった。

137:6.2 (1532.4) イエスが立ち上がると、会堂の主宰は経巻を手渡した。そこでイエスは、予言者イザヤから読んだ。「このように主は言われる。『天は私の王座。地は私の足台。私のためにあなたが建てる家は、いったいどこにあるのか。私の住む場所はいったいどこにあるのか。これらすべては、私の手が造ったもの。』主は言われる。『だが、私が目を留める者は、貧しく、へりくだって心砕かれ、私の言葉におののく者だ。』恐れおののく者達よ、主の言葉を、聞け。『あなた方の同胞は、あなた方を憎み、私の名のためにあなた方を押しのけた。』だが、主に栄光を現させよ。主はあなた方の楽しみを見にこられる。彼等は恥を見る。町からの声、寺院からの声、主からの声が言う。『彼女は、産みの苦しみをする前に身篭もった。陣痛の起こる前に男の子を産み落とした。』誰がそのようなことを聞いたことがあるか。地は1日の陣痛で産み出されようか。また、国は一瞬にして生まれようか。しかし主はこう仰せられる。『見よ、私

は、川のように平和を延ばし広げよう。また、非ユダヤ人の栄光さえ溢れる流れのようにしよう。母に慰さめられる者のように、私はあなたを慰める。だから、あなたはほかならぬエルサレムで慰められるようになる。「そして、あなたがこれらのものを見るとき、あなたの心は喜ぶであろう。』」

137:6.3 (1533.1) この朗読を終えると、イエスは、巻き物を持ち主に戻し、座る前に簡単に言った。「辛抱しなさい、そうすれば神の栄光を見るであろう。私と共に居る者達すべても正にその通りで、このようにして天にいる父の意志を為すことを学ぶべきである。」皆は、このすべての意味が何であるのか不思議に思いつつ各々の家に帰った。

137:6.4 (1533.2) イエスは、その午後使徒のジェームスとユダと小舟に乗り、岸に沿って少し漕ぎ、そこで、来たるべき王国について彼らに話すあいだ投錨した。そして二人は、木曜日の夜よりも多くを理解した。

137:6.5 (1533.3) イエスは、「王国の時間が来る」まで通常の義務に着手するように命じた。そして、二人を勇気づけるた

めに、かれは、規則正しく船小屋に戻り働く模範を示した。かれらが今後の仕事のために毎晩3 時間を研究と準備に費やすべきであると説明し、イエスは、さらに言った。「父が、お前達を呼ぶよう私に命じるまで、我々は皆、このあたりに残るつもりである。まるで何も起こらなかったかのように、各人がいつもの仕事に戻らねばならない。私のことを誰にも話してはいけないし、私の王国は騒ぎや魅惑と共に来ないということを銘記しなさい、しかし、むしろ父が、お前達の心と王国の協議会に加わるために召喚される者の心において働く大きな変化を通して来なければならない。そなた等は我が友である。信頼しているし、愛しくも思っている。そなた等は、まもなく私の個人的な仲間になろうとしている。我慢強く、優しくあるように。いつも、父の意志に従順でありなさい。王国の召喚に備えるように。多くの者が王国に入るのは多くの苦難を通してだけであると私が警告するのであるから、父への奉仕における大きな喜びを経験する間、難局に対しても心構えをするように。しかし、王国を見つけた者達にとり、喜びは満たされ、彼等は、全地球上のの祝福されたものと呼ばれるであろう。

しかし、誤った望みをいだくでない。世界は私の言葉に躓くであろう。そなた達でさえ、我が友よ、君達の混乱した心に私が繰り広げているものを完全には気がついてはいない。間違うでない。我々は、徴候を求める者の世代のために働きに出て行く。かれらは、私が父によって送られたということの証しとして奇跡的な業を要求するであろうし、父の愛の顕示における私の任務の信任に気づくには時間がかかるであろう。」

137:6.6 (1533.4) その晩、かれらが、岸に戻ると、帰途に向かうに当たり、イエスは、水際に立ち、「父よ、私は、彼らの疑いにもかかわらず、今でさえ信じているこれらの幼い者達のために感謝いたします。そして、彼らのために、私は、あなたの意志をするため自分を引き離してきました。そうして、いま私達が一つであるように、彼らが一つであることを学びますように。」と祈った。

7. 4カ月の修行

137:7.1 (1533.5) 4ヶ月間—3月、4月、5月、6月—の長い待機期間が続いた。イエスは、これらの6 人の仲間と自分の弟ジェームスとの愉快で楽しくはあったが、100回 以上に

も及ぶ長い熱のこもった会合をもった。家人の病気のために、弟のユダは、これらのクラスにあまり出席することができなかった。イエスの弟ジェームスは、彼への信頼を失わなかったが、マリヤは、遅れと無活動のこの数カ月間に、もう少しで息子をあきらめるところであった。カナでそのような高さにまで上げられた彼女の信念は、そのとき新たな低レベルに沈んだ。彼女は、「彼を理解できない。すべては何を意味するのか分からない。」と、しばしば繰り返す突発の言葉に頼ることしかできなかった。しかし、ジェームスの妻は、マリヤの勇気への肩入れのために多くのことをした。

137:7.2 (1534.1) この4カ月を通して、人間の弟を含む7人の信者が、イエスと知り合うようになった。彼等はこの神-人と一緒に暮らすという考えに慣れてきた。かれらは、彼を律法学者と呼びながらも、彼を恐れないことを学び取っていた。イエスは、皆がその神性にうろたえることなく、かれが皆の間で生きることを可能にする並ぶもののない人格的気品を持ち合わせていた。彼らは、必滅の姿の似せた神、「神と親しい友」であることが実に簡単であることが分かった。この待機の期間は、信者の全集団

を厳しく試した。何事も、断じて奇跡的な何事も、起こらなかった。かれらは、日増しに、自分達の通常の仕事に取り組み、同時に連夜、イエスの足元に座った。かれらは、彼の優れた人柄により、またくる夜もくる夜も彼が話した仁愛深い言葉により、結合された。

137:7.3 (1534.2) この待機と教育期間は、特にシーモン・ペトロスにとって困難なものであった。彼は、ヨハネがユダヤで説教し続ける間、イエスにガリラヤで王国を説くこと始めるように繰り返し説得しようとした。しかし、ペトロスへのイエスの返事は、いつも次の通りであった。「辛抱せよ、シーモン。進歩せよ。父に呼び出されるとき、我々は少しも準備をし過ぎたということはない。」アンドレアスは、自分のより熟練した、また哲学的な助言でペトロスを時おり宥めるのであった。アンドレアスは、イエスの人間らしい自然さに甚しく感動した。神にそれほどまでに近く生きることのできる者が、何故そのように人に親しみ深く思いやりがある得るのか方法を考えることに、かれは決して飽きることがなかった。

137:7.4 (1534.3) この全期間中、イエスは、二度しか会堂で話さなかった。この何週間もの終わるまでには、彼の洗礼とカナでのワインにまつわる噂が静まり始めた。また、イエスは、この期間、明白な奇跡がそれ以上起こらないように気をつけた。ベスサイダで全く静かに暮らしていたのだが、イエスの奇妙な行ないについての報告は、アンティパス・ヘロデまで届けられており、彼はイエスが何をしようとしているのか見定めるためにスパイを次々と送った。ところが、ヘロデは、ヨハネの説教の方がより心掛かりでありイエスには危害を加えないと決め、イエスの仕事は、カペルナムで非常に静かに続行していた。

137:7.5 (1534.4) この待機の期間、イエスは、彼の仲間の態度が、様々な宗教団体とパレスチナの政党に対してどうあるべきかを教えようと努力をした。イエスの言葉は、つねに、「我々は、彼等全部を説き伏せようとしているが、我々は彼等の何者ものでもない。」ということであった。

137:7.6 (1534.5) 筆記者と律法学者は、まとめてパリサイ人と呼ばれた。彼らは、自らを「仲間」と呼んだ。様々な意味

で、彼等は、ユダヤ人の中の進歩的集団であり、後の予言者であるダニエルのみが言及した主義、たとえば死者復活の教義などのヘブライ経典の中には明確に見つけられない多くの教えを採用した。順番

137:7.7 (1534.6) サドカイ人は、聖職と特定の裕福なユダヤ人から成った。彼らは、法執行の詳細にそれほどまでの喧し屋でなかった。パリサイ人とサドカイ人は、宗派というよりは、むしろ党派であった。

137:7.8 (1534.7) エッセネ派は、本当の宗派であり、マカバイ戦争中に始まり、その必要条件は、いくつかの点でパリサイ人のそれより厳しいものであった。彼らは、多くのペルシアの信仰と習慣を採用していたし、僧院では兄弟関係として生活し、結婚は、控えて、全ての物を共有した。かれらは、天使についての教えを専門とした。

137:7.9 (1535.1) ゼロテ派は、猛烈なユダヤ人の愛国者の集団であった。ローマ帝国の支配の束縛から逃げるための戦い、努力においてはありとあらゆる方法が正当化されると主張した。

137:7.10 (1535.2) ヘロデ党は、ヘロデ王朝の回復により直接のローマ支配からの解放を主唱したまぎれもない政党であった。

137:7.11 (1535.3) パレスチナのまさしく真ん中で、ユダヤ人の教えと多くの同様の視点を保持しながらも「ユダヤ人が全然関わりをもたない」サマリア人が住んでいた。

137:7.12 (1535.4) 小規模のナザレの同胞を含むこれらの党派のすべてが、いつか来る救世主を信じた。彼らは皆、国家の救済者を探した。しかし、イエスは、自分と弟子達が、これらの教えや習慣の学校のいずれにも関連するようにはならないと断言することに、非常に積極的であった。人の息子は、ナザレ人の一員にもエッセネ派の一員にもなるつもりはなかった。

137:7.13 (1535.5) ヨハネがしたように、イエスは、使徒達に福音を説き、信者に教えて出て行くすべきだと後に指示して、「天の王国の良い知らせ」の公布を強調した。「愛、哀れみ、同情を示さ」なければならないということを仲間に絶えず認識させた。天の王国とは、人の心における

神の崇拝、着座と関係がある精霊的な経験であると、早期に信奉者に教えた。

137:7.14 (1535.6) 積極的な公の説教に乗り出す前にこのように待機している間、イエスと7 人は、ヘブライ経典の研究において各週に2 晩会堂で過ごした。激しい公の仕事の季節からの後年、使徒達は、この４カ月間があるじとの全交流において最も貴重で有益なものであったと振り返った。イエスは、これらの者が同化することのできるすべてを教えた。教育過剰の誤りを犯さなかった。かれは、彼らの理解能力をはるかに超える真理の提示による混乱を引き起こさなかった。

8. 王国についての説教

137:8.1 (1535.7) 彼らが６月22日の安息日に初の説教の巡歴に出掛ける直前、そしてヨハネ投獄のおよそ10日後、イエスは、使徒達をカペルナムに連れて来てから2 度目の会堂の説教壇に立った。

137:8.2 (1535.8) 「王国」についてのこの説教の数日前、イエスが船小屋で仕事をしていると、ペトロスが、ヨハネの逮捕に関する情報をもたらした。イエスは、もう一度道具を

置き、前掛けをはずし、ペトロスに言った。「父の時間が来た。王国の福音を公布する用意をしよう。」

137:8.3 (1535.9) イエスは、西暦26年6月18日のこの火曜日に、大工台での最後の仕事をした。ペトロスは、大急ぎで仕事場を飛び出し、昼下がりまでにすべての仲間を集め、岸辺の木立に皆を残してイエスを探しに入った。しかし、かれは、祈りのために違う木立に行っていたあるじを見つけることができなかった。かれらは、イエスがその夜遅くゼベダイの家に戻り食物を求めるまで彼に会わなかった。その翌日、イエスは、次の安息日に会堂で話す特権を得るために弟ジェームスを行かせた。会堂の主宰者は、イエスが、礼拝式を再び行なう気があることを非常に喜んだ。

137:8.4 (1536.1) イエスは、神の王国についてこの忘れ難い説教の前に、すなわち公的な経歴の最初の野心的な努力に際し、経典の中からこれらの章句を読んだ。「皆は、私のとっての祭司の王国、聖なる国民となる。ヤハウェは、我々の裁判官であり、立法者であり、王である。我々を救う。ヤハウェは私の王であり私の神である。すべての

地球上の大王である。この王国において慈愛は、イスラエルの上にある。主の栄光を祝福せよ。彼は王であるから。」

137:8.5 (1536.2) 読み終えたとき、イエスは言った。

137:8.6 (1536.3) 「私は父の王国の設立を宣言するためにやって来た。そして、この王国は、私の父が偏ることをせず、その愛と慈悲が全ての上にあるので、ユダヤの、そして非ユダヤの、貧富の、自由の身や拘束の身の、これらの礼拝している者達を含んでいる。

137:8.7 (1536.4) 天の父は人の心に宿るように彼の精霊を送り、私が地上での仕事をし終えるとき、同様に、真実の聖霊も全ての者に注がれるであろう。そして、父の精霊と真実の聖霊は、あなたを精霊的理解と神の正義の来たるべき王国に定着させるのである。私の王国はこの世のものではない。人の息子は、権力のための王座、または世俗的栄光のための王国の設立のために軍隊を戦いに導かない。私の王国が来るとき、あなたは、人の息子を平和の王子、永遠の父の啓示として知るであろう。この世界の子供等は、この世界の王国の設立と拡大のために戦う

が、私の弟子は、彼らの道徳的な決定と精神の勝利によって天の王国に入るであろう。そして、一度そこに入ると、彼らは、喜び、正義、永遠の命を見つけるであろう。

137:8.8 (1536.5) このように父のそれのような特質の気高さを求めて努力し始めて、王国に入るろうとする人々は、必要である他の全てをやがて手にする。しかし、私は、嘘偽りなく言う。幼子のような信頼と疑うことのない依存で王国への入り口を探さない限り、入場獲得はあり得ないであろう。

137:8.9 (1536.6) 王国がここにある、王国がそこにあると言って来る者達に誤魔化されてはいけない、なぜならば、父の王国は、目に見えるものや物質的なものには関係ないのである。この王国は、今でさえあなた達の中に存在する、なぜならば、神の精霊が人の魂に教え導くところには実際には天の王国があるから。そして、神のこの王国というものは、正義、平和、そして聖霊の喜びである。

137:8.10 (1536.7) なるほどヨハネは、悔悟の象徴として、そして罪の許しのために洗礼を施したが、あなたは、天の王国に入るとき、聖霊で、と、洗礼されるであろう。

137:8.11 (1536.8) 父の王国には、ユダヤ人も非ユダヤ人もなく、ただ奉仕による完全性を追い求める者達がいるであろう、なぜならば、父の王国で立派である者は、まずすべての者達への奉仕者でならなければならないと私が宣言するから。もし仲間に仕えることを望むならば、あなたは、私がやがて父と共にその王国で座るのと同様に、被創造者のような姿での奉仕により私と共に私の王国に座るであろう。

137:8.12 (1536.9) この新しい王国は、良い土壌の畑に芽を出す種子に似ている。それはすぐには完全な果物にはならない。人の魂の王国の設立と、王国が発展し永遠の正義と永遠の救済の完全な成就に至るその時までには時間の隔たりというものがある。

137:8.13 (1536.10) そして、私が宣言するこの王国というものは、力と豊かさの治世ではない。天の王国は、肉や飲み物の問題ではなく、むしろ天にいる父への向上する奉仕

における進歩的な正義と増加する喜びの人生である。なぜならば、父は、『私が完全であるように、皆もついには完全になることが私の意志である。』と地上の子供等について言ったのではなかったか。

137:8.14 (1537.1) 私は王国のうれしい知らせを説くために来た。この王国に入る人々に重い負担を加えるために来たのではない。私は新たでより良い道を宣言し、来たるべき王国に入ることのできる者達は、神性の安静を味わうであろう。また、世事に関する問題でいかなる犠牲を払おうとも、また、たとえ天の王国に入るためにいかなる犠牲を払おうとも、あなたは、この世での、また永遠の命の時代においても一層の喜びと精神的進歩を受けるであろう。

137:8.15 (1537.2) 父の王国への入り口は、行進する軍隊も、この世の滅ぼされた王国も、繋がれたくびきの破壊も待ってはいない。天の王国は真近であり、そこに入る者はすべて豊かな自由と悦ばしい救済を得るであろう。

137:8.16 (1537.3) この王国は永遠の統治である。王国に入る人々は父へ向かって上昇するのである。かれらは、楽園

において確かに父の栄光の右側に達するであろう。また、天の王国に入るすべての者は、神の息子となり、来たる時に父の元に昇るのである。私は、独り善がりの公正な者ではなく、罪人と、神の完全な正義に飢え渇望するすべての者を呼びにきたのである。

137:8.17 (1537.4) ヨハネは、そなた達に王国への準備をさせるために悔悟を説いてやって来た。今度は、私が、天の王国への入国代価としての神の贈り物である信仰を公布しにやってきた。父が無限の愛であなたを愛しているということだけを信じるならば、あなたは、神の王国にいるのである。」

137:8.18 (1537.5) このように話すと、かれは座った。彼の言葉を聞い者は皆、非常に驚いた。弟子達は驚嘆した。ところが、人々は、この神-人の唇から朗報を受け入れる用意ができていなかった。完全にそれを理解できたというわけではないが、話を聞いた者のおよそ1/3が彼の知らせを信じた。およそ1/3は、心の中で期待される王国がそれほどまでに純粋に精神的である概念を拒絶するために身構え、これに反して残りの1/3は、その教えを理解

することができない一方で、この中の多くが、イエスは、「少しおかしい」と思っていた。

論文 138
王国の使者の訓練

138:0.1 (1538.1) 「王国」について説教をした後の午後、イエスは、6 人の使徒を集め、ガリラヤの海やその周辺の都市を訪問する計画を明らかにし始めた。弟のジェームスとユダは、この会議に呼ばれず、とても傷ついた。二人は、これまで自分たちはイエスの仲間の中枢部に属すと考えてきた。しかし、イエスは、王国の使徒の指導官からなるこの部隊の構成員に親族縁者を組み入れない予定であった。カナでの出来事以来、母から見た彼のよそよそしさと合わせて、選ばれたわずかの人数の中にジェームスとユダを含まなかったこの失敗は、イエスとその家族との間での絶えず拡幅する溝の出発点であった。この状況は公務の間中ずっと続き—家族はほぼイエスを拒絶した—そして、これらの相違は、彼の死と復活の後まで完全に取り除かれなかった。母は、変動する信仰と望みの感情と、増加する失望、屈辱、絶望の感情との間で迷

った。最も若いルースだけは、父でも兄でもある人に変わりのない忠誠のままでいた。

138:0.2 (1538.2) 復活後まで、イエスの全家族は、ほとんど彼の公務に関係しなかった。予言者が国で敬われなければ、家族でも理解ある評価は得られないものである。

1. 最終的な指示

138:1.1 (1538.3) その翌日、西暦26年6月23日、日曜日、イエスは、最終的な指示を6 人に与えた。王国の喜ばしい知らせを教えるために、かれは、二人ずつで赴くように指示した。かれは、洗礼を禁じ、大衆への説教を勧めた。かれは、後日彼らに公然と説教するのを許可するが、しばらくの間、また多くの理由から、個人的に同胞に接する実際の経験を得ることを望んでいると説明し続けた。イエスは、皆の最初の巡歴を完全に個人的な仕事の一つとすることを目標とした。この発表は使徒にはある種の失望ではあったが、それでも、かれらは、王国の公布のこのようにして始まるイエスの理由が、少なくとも幾分かは分かり、元気良く自信に満ちた熱意で始めた。イエスは、ジェームスとヨハネをケリサへ、アンドレアスとペ

トロスをカペルナムへ、一方フィリッポスとナサナエルをタリヘアへと二人ずつ送り出した。

138:1.2 (1538.4) この最初の2 週間の活動開始の前、イエスは、自分の出発後に王国の仕事を続けるための12　人の使徒に任命したいということを発表し、計画された使徒団の会員資格のために初期の改宗者の中から各自が、1 人を選ぶ権限を与えた。ヨハネは、率直に尋ねた。「でも、あるじ様、この6 人が、我々の真っ只中に割り込んできて、ヨルダン川以来あなたと共にいて、王国のための最初の働き、これに備えてあなたのすべての教えを聞いてきた我々とが、全てを等しく分け合うのですか。」そこで、イエスが答えた。「そうだよ、ヨハネ。そなたが選ぶ一人が我々と一つになり、私がお前達に教えたように王国に関するすべてをその者達に教えるのだ。」このように言うと、イエスは皆を残して去った。

138:1.3 (1539.1) 6 人は、銘々が新しい使徒を選ぶべきであるというイエスの指示に関わる議論で多く意見を取り交わすまで、仕事のために離散しようとはしなかった。アンドレアスの助言が最後には勝ち、それぞれの仕事に出掛け

た。アンドレアスの言った要旨は、「あるじは正しい。この仕事を成就するには我々の人数は少な過ぎる。より多くの教師が必要であり、あるじは、この6 人の新しい使徒を選ぶことを我々に委ねる程に我々に対する多大の信用を明らかにした。」であった。この朝、それぞれの仕事に向かうために別れるとき、わずかの隠された憂うつさが、各人の心中にあった。かれらには、イエスの不在で寂しくなりそうであると知っていたし、自分達の恐れと小心さとは別に、これは、彼らが描いた天の王国が開始される方法ではなかった。

138:1.4 (1539.2) 6 人は、2 週間働き、その後、会議のためゼベダイの家に戻る申し合わせであった。その間、イエスは、ヨセフ、シーモン、およびその界隈に住む自分の他の家人を訪ねるためにナザレへ行った。イエスは、父の意志を為すことに専念し、家族への信用と愛情を保ち続け、人間の力の及ぶ限りの全てをした。この件に関しては、完全な義務を果たし、またそれ以上のことをした。

138:1.5 (1539.3) 使徒がこの任務で出掛けている間、イエスは、そのとき獄中にいるヨハネのことを多く考えた。それ

は、釈放のために潜在的力を用いるという大変な誘惑に駆られたが、もう一度、「父の意志を待つ」ことに譲った。

2. 6 人の選出

138:2.1 (1539.4) 6 人のこの最初の伝道の旅は、著しい成功であった。皆は、人々との直接かつ個人的な接触に格段の価値を見い出した。結局、宗教とは、純粋に、かつ完全に個人的な経験に関わる問題であるということを十分に悟り、イエスのもとに戻っていった。かれらは、庶民が、いかに宗教的な安らぎと精神的な歓喜の言葉を聞きたがっているかを感じ始めた。イエスの周りに集う時、皆は間髪を入れずに話したがったが、アンドレアスが、係を引き受け一人ずつに命じると、皆は、あるじに正式な報告をすると共に、6 人の新しい使徒のために各自の指名を提示した。

138:2.2 (1539.5) 各自が新しい使徒の選出を提示した後で、イエスは、他の者達に指名に関して投票するよう求めた。このようにして、6 人のすべての新しい使徒が、 従来のすべての6 人全員に正式に受け入れられた。イエスは、そ

こで、皆でこれらの候補を訪ねて活動への呼び出しを掛けると発表した。

138:2.3 (1539.6) 新たに選出された使徒は次の通りであった。

138:2.4 (1539.7) 1. マタイオス・レービー、カペルナムの税関徴収人、かれの役所は、市の真東、バタネア境界近くにあった。アンドレアスに選ばれた。

138:2.5 (1539.8) 2. トーマス・ディーディモス、タリヘアの漁師で、以前はガダラの大工であり石工であった。フィリッポスに選ばれた。

138:2.6 (1539.9) 3. ジェームス・アルフェウス、ケリサの漁師であり農夫であり、ジェームス・ゼベダイに選ばれた。

138:2.7 (1539.10) 4. ユダ・アルフェウス、ジェームス・アルフェウスの双子の兄弟、やはり漁師で、ヨハネ・ゼベダイに選ばれた。

138:2.8 (1540.1) 5. シーモン・ゼローテースは、イエスの使徒に加わるためにあきらめたゼロテ党の愛国組織の高位置の役員であった。シーモンは、ゼロテ党に加入する前は商人であった。ペトロスに選ばれた。

138:2.9 (1540.2) 6. ユダ・イスカリオ―テスは、ジェリコに住む裕福なユダヤ人の両親の一人息子であった。サドカ派の両親は、洗礼者ヨハネを慕うようになった彼を勘当した。イエスの使徒たちが見つけたとき、彼は、これらの地方で職を探しており、財政に関する経験を主な理由に、ナサナエルが、仲間に加わるように誘った。ユダ・イスカリオ―テスは、12人の使徒の中の唯一のユダヤ人であった。

138:2.10 (1540.3) 弟子達が詳しく語るべき多くの興味深く有益な経験をしたこともあり、イエスは、彼らの質問に答えたり、報告の詳細を聞いたりして、6 人とまる1日を過ごした。かれらは、より断言的な、物々しい公の働きを始める前に、ひっそりと個人的な態度で働くように自分達を送り出すあるじの計画の賢明さをそのとき理解した。

3. マタイオスとシーモンの招喚

138:3.1 (1540.4) 翌日、イエスと6 人は、関税徴収人のマタイオスを訪ねに出掛けた。マタイオスは、貸借を対照させ、役所の事務を兄弟に引き渡す準備をし終え、皆を待ち受

けていた。料金徴収所に近づくと、アンドレアスは、イエスと前進し、そこでイエスは、マタイオスの顔を覗き込んで、「私についてきなさい。」と言った。マタイオスは、立ち上がりイエスと使徒達と共に自分の家に行った。

138:3.2 (1540.5) マタイオスは、その晩のために準備しておいた宴会の件をイエスに告げ、せめてイエスが同意し、主賓になることを承諾してくれるなら、家族と友人にそのような晩餐を設けたいと告げた。そこで、イエスは、同意の相槌を打った。その時ペトロスは、マタイオスを脇に連れて行き、自分がシーモンという者を使徒に加わるように誘い、その同意を得たこと、またシーモンもこの宴会に招かれるということを説明をした。

138:3.3 (1540.6) マタイオスの家での真昼の昼食会の後、皆は、ペトロスと一緒にゼロテ党員のシーモンを訪ねて行き、その時は甥が切り回している彼の古い、びた仕事場に彼を見つけた。ペトロスがシーモンのところにイエスを案内していくと、あるじは、情熱的な愛国者に挨拶し、「私についてきなさい。」と言うだけであった。

138:3.4 (1540.7) かれらは、マタイオスの家に帰った。そこでは、夕食の時間まで政治と宗教について多くを語った。レビ家は、長らく事業と税収集に従事してきた。それ故、マタイオスがこの宴会に招いた客の多くは、パリサイ人がその場にいれば「居酒屋の主人と罪人」と呼んだことであったろう。下の文との関係

138:3.5 (1540.8) その当時、著名な人物のためにこの種の歓迎の宴が催されるとき、興味をもつ全ての者達が、食事中の客達を観察し、主賓の会話や弁舌を聞くために宴会場の周りで長居するのが習慣であった。因って、カペルナムのパリサイ人の大部分は、この変わった社交の集いでイエスの行状を観察するためこの場に臨んでいた。

138:3.6 (1540.9) 晩餐が進歩むにつれ、正餐客の喜びは、最高の域にまで達した。だれもが非常に素晴らしい時を過していたので、見物中のパリサイ人等は、イエスのこれほどまでに気楽で呑気な社交の場への参加を、心の中で批評し始めた。その晩遅く、皆の演述の最中、より悪意のあるパリサイ人の中の一人は、ペトロスにイエスの行為を批評するまでに至った。「居酒屋の主や罪人と共に食

し、このように軽率な快楽行為にそのような場面にいるこの男が正義であるとどうして大胆にも教えるのか。」と言った。イエスが集い来た者達に別れの祝福を述べる前に、ペトロスは、この批判をイエスにささやいた。イエスは、話し始めて言った。「今宵マタイオスとシーモンを仲間として迎え入れるためにここに来るに当たり、あなた方の気安さと社交的陽気さを目撃して喜ばしく思うが、君達の多くが精霊の来たるべき王国への入口を見つけるので、尚さらに君達は歓喜すべきであり、そこで天の王国の良い事をもっと豊かに楽しむであろう。そして、私がこれらの友人と遊興のためにここに来たので心の中で私を批判して立っている者に、私は、社会的に虐げらている者に喜びを、道徳の虜となっている者に精神の自由を知らせにきたと言わせてもらおう。丈夫な者に医者はいらない、いるのは病人であるということを思い出させなければならないのか。私は、正義あるものにではなく、罪人に呼び掛けに来た。」

138:3.7 (1541.1) かつ、正義の性格と気高い感情の人物が、自由に嬉々として一般人と居酒屋の主や評判の罪人などの無宗教的で快楽を求める群衆とさえに混じり合うのを目に

することは、すべてのユダヤ文化において本当に奇妙な光景であった。シーモン・ゼローテースは、マタイオスの家のこの集会で演説することを望んでいたが、イエスは、来たるべき王国とゼロテ党の動きとが混乱することを望んでいないことを知り、アンドレアスは、いかなる公的所見の発表も控えるように彼を説き伏せた。

138:3.8 (1541.2) イエスと使徒は、その夜マタイオスの家に留まり、そして家に帰ると、人々はただ1つのことだけ、イエスの長所と親しみやすさについて話した。

4. 双子の招喚

138:4.1 (1541.3) 翌日、9 人全員は、次の2 人の使徒、ジェームスとヨハネ・ゼベダイの指名するアルフェウスの双子の兄弟であるジェームスとユダの正式の呼び出しのために小舟でケリサに行った。漁師の双子は、イエスと使徒を心待ちにしていたので、岸で一行を待ち受けていた。ジェームス・ゼベダイが、ケリサの漁師達を紹介すると、あるじはじっと見つめて頷いて、「私についてきなさい。」と言った。

138:4.2 (1541.4) 共に過ごしたその午後、イエスは、祝いの集会の出席に関して逐一指導し、所見を結論づけて言うことには、「すべての人は、私の兄弟である。天の父は、我々が創造するどんな生物も軽蔑しない。天の王国は、すべての男女に開かれている。人は、そこへの入り口を探し求めるかもしれない空腹の魂に対して慈悲の扉を閉めてはいけない。我々は、王国について聞きたいと望む者すべてと食事につくのである。天の我々の父が上から見るとき、人間はみな同じである。したがって、パリサイ人や罪人、サドカイ人や居酒屋の主人、ローマ人やユダヤ人、金持ちや貧乏人、自由の身や束縛の身であろうと食事を共にすることを拒んではいけない。王国の扉は、真実を知ろうとする者や神を見つけようとする者ののために広く開け放たれているのである。」

138:4.3 (1541.5) その夜、アルフェウス家での簡単、質素な夕食の場に、双子は、使徒の家族に受け入れられた。その晩遅く、イエスは、使徒達に不純な精霊にかかわる起源、特徴、宿命に関する最初の教授をしたが、かれらは、教えられた内容の重要性を理解することができなかった。かれらは、イエスを慕い敬うのは非常に簡単であるが、

その教えの多くを理解することは非常に難しいとわかった。

138:4.4 (1542.1) 一夜の休息後、その時11人となった一行は、タリヘアまで小舟で行った。

5. トーマスとユダの招喚

138:5.1 (1542.2) 漁師のトーマスと放浪者のユダは、タリヘアの漁船用の船着場でイエスと使徒達に会い、トーマスは、近くの自分の家に一行を案内した。フィリッポスは、その場で使徒候補としてトーマスを指名し、ナサナエルは、同様の栄誉のためにユダヤ人、ユダ・イスカリオテを指名した。イエスはトーマスを見て言った。「トーマス、信仰が足りない。でも君を受け入れよう。私についてきなさい。」ユダ・イスカリオテに、あるじは言った。「ユダ、我々は皆同一の肉体をもつ者である、そして、私が君を我々の中に受け入れるように、いつも君のガリラヤの同胞に忠誠であることを祈る。私についてきなさい。」

138:5.2 (1542.3) 皆が元気を取り戻すと、イエスは、彼らと祈り、聖霊の性質と働きを伝受するために一期間12人を隔

てたが、またもや、彼らは、イエスが教えようと努めたそれらの素晴らしい真理の意味を理解することに大きく失敗した。ある者が1つの主旨を掴み、またある者が別の主旨を悟りはしたものの、誰として教えを包括的に理解することはできなかった。常に、かれらは、イエスの新しい福音を自分達の古い信仰の型に合わせようとする過ちを犯すのであった。イエスが救済の新たな福音を宣言し、神を見つける新たな方法を証明するために来たという考えを掴み取ることができなかった。かれらは、イエスが天の父の新しい顕示であると気づかなかった。

138:5.3 (1542.4) 翌日、イエスは、12人の使徒をそっとしておいた。皆が、互いによく知り合うようになり、自分の教えたことについて話し合うことを望んだ。あるじは、晩の食事に戻り、夕食後の数時間熾天使の職務に関し彼らに話し、使徒の何人かは、その教えを理解した。かれらは、一夜休息し、翌日小舟でカペルナムに発った。

138:5.4 (1542.5) ゼベダイとサロメは、自分達の大きい家をイエスと12人の使徒に引き渡せるように、息子ダーヴィドと暮らすために出発していた。ここで、イエスは、選ばれ

た使者と静かな安息日を過ごした。かれは、王国の公布のために注意深く計画し、行政当局とのどんな衝突も避ける重要性を十分に説明して言った。「もし民間統治者を叱責しなければならないような状態になるならば、その仕事は私に任せなさい。君たちは、ケーサーやその奉公人の公然たる非難をしないということを心しなさい。」ユダ・イスカリオテが、ヨハネを牢獄から連れ出すための何もなされない訳を質すためにイエスをわきへ連れていったのがこの同じ晩であった。そして、ユダは、イエスの態度に完全には満足していなかった。

6. 集中教育、特訓の週

138:6.1 (1542.6) 翌週は、激しい研修に専念した。6人の新しい使徒達は、毎日、王国の仕事に備えて学び経験したすべての徹底的な復習のためにそれぞれの指名者の手に委ねられた。従来の使徒達は、新しい6 人のためにその時までのイエスの教えを慎重に見直した。夕べには、全員が、イエスの指示を受けるためにゼベダイの庭に集合した。

138:6.2 (1542.7) イエスが休養と気晴らしのために週半ばの休日を設置したのは、この時であった。そして、皆は、イエスのこの世での余生を通して毎週1日間、この案を実行した。かれらは、概して水曜日には決して通常の活動をしなかった。この毎週の休日に、イエスは、「子供達よ、1 日遊びに行きなさい。王国のための辛い作業を離れ体を休め、以前の職業に戻ることからくる、または新しい娯楽的活動の類からくる気分の爽快さを楽しむように。」と言い、通常は皆から離れるのであった。イエス自身は、地球人生のこの期間に休息のこの日を実は必要とはしなかったが、それが彼の人間の仲間に最も良いのを知っていたので、この案に従った。イエスは、教師、あるじであった。彼の同僚は生徒、使徒であった。

138:6.3 (1543.1) イエスは、彼の教えと使徒の間の彼の人生と、後に起こるかもしれない自分に関する教えの間の違いを明らかにすることに努力を払った。イエスは、「私の王国とそれに関連する福音は、君達の知らせの要旨である。私と、私の教えに関する説教で脇道に逸れてはならない。王国に関する福音を公布し、天の父に関わる私の顕示を描写しなさい。しかし、私の信念と教えに関する

伝説を創り出したり、宗派を築いたりするような脇道に誤り導いてはならない。」しかし、かれらは、またもや、イエスがなぜこのように話すかを理解しなかったし、誰もなぜそのように自分達に教えるかを敢えて尋ねなかった。

138:6.4 (1543.2) これらの初期の教えにおいてイエスは、天の父の概念に関わる間違った概念以外には、使徒との論争をできるだけ避けようとした。すべてのそのような問題において、かれは、誤った信念を修正することを決して躊躇わなかった。ユランチアでのイエスの洗礼後の人生においてただ1 つの動機があり、それは、より良くてより真実の楽園の父の顕示であった。イエスは、神への新たでより良い道、信仰と愛への開拓者であった。使徒への勧告は、いつも、「罪人を捜し求めに行きなさい。落胆している者を見つけ、憂える者を慰めなさい。」であった。

138:6.5 (1543.3) イエスは、状況を完全に把握をしていた。自分の任務推進において利用されたかもしれない無限の力を備えていたが、大部分の人々が、不十分であると考えた

り、無意味であると見なしたりする手段や人格にまったく満足していた。途轍も無い劇的な可能性をもつ任務に従事していたが、かれは、最も静かで非劇的な方法で父の用向きに取り組むと主張した。かれは、すべての力の表示を慎重に避けた。そして、かれは、その時、少なくとも数カ月、ガリラヤ湖周辺で12人の使徒と静かに働く予定であった。

7. もう一つの失望

138:7.1 (1543.4) イエスは、5 カ月の個人的な仕事の地味な、静かな伝道活動の計画を立てた。かれは、これがどれくらい続くのかを使徒に告げなかった。かれらは、週ごとに働いた。そして、この週の初日早くに、かれが、ちょうどこれを12人の使徒に発表しようとしているとき、シーモン・ペトロス、ジェームスゼベダイとユダ・イスカリオテが、私的な会話のためにやって来た。ペトロスは、イエスを脇へ連れ行き、敢えて次のように言った。「あるじ様、王国に入る機が今や熟したのかどうか、仲間の命令を受けて窺いに参りました。また、あなたは、カペルナムで王国を公布されるのですか、あるいは我々は、エルサレムに移動することになっているのでしょうか。

それと、我々各々は、王国設立においてどの位置に着くのか分かるのはいつのことでしょうか。」ペトロスは、更に質問をし続けたのであろうが、イエスは勧告的な手を上げて、彼を止めた。そして、彼らに加わろうと近くに立っている他の使徒に合図して言った。「私の幼子達よ、私は、どれだけお前達のことを耐え忍ばなければならないのか。私の王国は、この世のものでないことを明確にはしなかったか。ダーヴィドの王座に着くために来たのではないと何回も言ってきのに、今、銘々が、父の王国でどの位置を占めるのかを尋ねるというのは一体どういうことなのか。そなた達は、私が、精神の王国の大使としてお前達を召集したということが悟れないのか。間もなく、本当に間もなく、ちょうど私が、いま天の父の代理をしているように、そなた達は世界において、王国の宣言において、私の代理をすることになっているということが分からないのか。私が王国の使者としてお前達を選び教えてきたが、人の心の神性の卓越したこの来たるべき王国の性質と重要性を理解しないということがあり得るのだろうか。友よ、もう一度私の言うことを聞きなさい。私の王国が力の支配あるいは栄光の治世であ

るというこの考えを心から払いのけなさい。確かに、天国と地球上のすべての力がやがて私の手に与えられるが、我々がこの時代に自分達を賛美するためにこの神の賦与を用いることは、父の意志ではない。他の時代に、君たちは私と共に力と栄光の座に本当に着くだろうが、今は、父の意志に従い、父の命令を実行するために謙虚な服従において進むことが当然である。」

138:7.2 (1544.1) 仲間は、再度衝撃を受け唖然とした。イエスは、祈りのために2 人ずつ行かせ、正午には自分のところに戻るように求めた。このきわめて重大な午前中、かれらは、それぞれに神を見つけようとし、互いに励まし、元気づける努力をし、言いつけられた通りにイエスの元に戻って行った。

138:7.3 (1544.2) イエスは、そのときヨハネの来ること、ヨルダンでの洗礼、カナの婚礼の宴、最近の6 人の選出、自分の肉身の弟達の退出について皆に詳しく話し、また王国の敵が彼等を引き離そうともするであろうと警告した。この短いが誠意のこもった話の後、使徒は全員、ペトロスの指導の下に立ち上がり、あるじへの不滅の献身を宣

言し、「それが何であろうとも、たとえ完全にそれを理解しなくても来たるべき王国に。」とトーマスがそれを言い表したように王国への不動の忠誠を誓った。その教えを完全に理解したというわけではないが、彼らは全員、本当にイエスを信じた。

138:7.4 (1544.3) イエスは、彼らがどのくらいの金を持っているのかをその時尋ねた。また、各自の家族のために何をしたかを問い質した。自分達を2 週間も支えることができないほどの資金であると分かったとき、イエスは、「我々がこのような状態で仕事を始めるのは父の意志ではない。我々は、海のそばのそこに2 週間留まり、漁をするか、または見つける何でもするつもりである。一方、最初に選ばれた使徒のアンドレアスの指導の下に、今後の仕事で、すなわち現在の個人的な活動と、また後に、福音を説き、信者に教えるために私が君達を任命するときのための必要なものすべてを用意するよう皆が団結するように。」皆は、この言葉に大いに励まされた。これは、イエスが、　より積極的で断定的な公のための努力を後に始めるように設計した最初の明確で積極的な通告であった。

138:7.5 (1544.4) 使徒は、漁に専念すると決めたので、自分達の組織化の終了や翌日の漁の始まりに向け、舟やら網の調達完了にその日の残りを費やした。彼らの大半は漁師であったし、イエスでさえ経験豊富な船方であり漁師であった。次の数年間、皆が使用する舟の多くは、イエス自身の手によるものであった。そして、それらは、立派で頼りになる舟であった。

138:7.6 (1544.5) イエスは、皆が2 週間漁に専念するように申しつけ、「それから、君達は、人の漁師になるために先へ進むであろう」と言い足した。かれらは、3班に分かれて漁をし、イエスは、毎夜、異なる班に伴った。彼らは皆、イエスといることを非常に楽しんだ。イエスは、良い漁師であり、陽気な仲間であり、刺激的な友であった。共に働けば働くほど、かれらは、さらに彼を愛していた。マタイオスは、ある日「一部の人を理解すれば理解するほど、ますます尊敬しなくなるが、この方は、理解しなくなればなるほど、より好きになる。」と言った。

138:7.7 (1545.1) 2 週間のこの漁業の計画と2 週間の王国のための個人的な仕事をすることは、5カ月以上も延長され、ヨハネ投獄の後の弟子達に向けられたそれらの特別な迫害の停止の後まで、この年西暦26年の終わりまでも続いた。

8. 12 人の最初の仕事

138:8.1 (1545.2) 2 週間の漁を終えると、12 人の会計係として選ばれたユダ・イスカリオテは、扶養家族の世話の基金はすでに備えられていたので、使徒の基金を6等分した。そして、西暦26年の8月中旬近く、アンドレアスが割り当てた野外での仕事に二人ずつが、出掛けて行った。イエスは、最初の2　週間、アンドレアスとペトロスと行き、次の2 週間はジェームスとヨハネと行く、といった具合に、彼らが選んだ順に他の組と出掛けて行った。このように、公の活動の始まりに向けて皆を召集する前に、かれは、少なくとも各組と一度は出かけることができた。

138:8.2 (1545.3) イエスは、苦行も犠牲もなく神への信仰による罪の許しを説くことを、また天の父は、平等の永遠の愛

で全ての子供を愛しているということを教えた。かれは、使徒に次のような事項についての議論を控えることを言いつけた。

138:8.3 (1545.4) 1. 洗礼者ヨハネの仕事と禁固。

138:8.4 (1545.5) 2. 洗礼の際の声。イエスは、「声を聞いた者達だけがそれについて言及してもよい。私から聞いたことのみを話しなさい。どんな伝聞も話すではない。」と言った。

138:8.5 (1545.6) 3. カナでのワインが水に変わったこと。イエスは、「水とワインに関して誰にも話すな」と言って、真剣に託した。

138:8.6 (1545.7) 漁師として2 週間交代に働いたこの5、6ヶ月間、皆は、素晴らしい時を過ごした。そして、それによって、2 週間の野外での王国の布教活動を支えることができる金を得た。

138:8.7 (1545.8) 一般人は、イエスと使徒の教えと布教に驚嘆した。ラビ達は、長い間、無知な者は、敬虔でも正しくもあるはずがないとユダヤ人に教えてきた。しかし、イエ

スの使徒は、敬虔であり、公正であった。しかし、彼らは、ラビ達の学習と世界の知恵の多くをに関して晴れやかに無知であった。

138:8.8 (1545.9) イエスは、ユダヤ人が教えるようないわゆる良い働きの悔悟と信仰による心の変化—新生—王国入場の代価としてイエスが求める—との違いを使徒達に分かり易くした。かれは、父の王国に入ることへの唯一必須の信仰について使徒に教えた。ヨハネは、「悔悟—近づく復讐から逃げるために」を教えた。イエスは、「信仰は、神に対する現在の完全かつ永遠の愛に至るために開いている扉である。」と教えた。イエスは、予言者、つまり神の言葉を宣言しに来る者のようには話さなかった。かれは、権威を持つ者として自分のことを話すようであった。イエスは、奇跡追求の心から内在する神の愛の精霊と救いの恵みへの満足感と保証における真実の、また個人的な経験の発見に彼らの心を転換させようとした。

138:8.9 (1545.10) 使徒は、あるじが、出会うあらゆる人間に深遠な敬意と思いやりの気持をみせるということを早くに

知った。そして、かれらは、かれが、いろいろな男女子供にじつに一貫して与えたこの均一で偏重のない思いやりにすばらしく感銘を受けた。イエスは、心身の重荷を背負った通りすがかりの女性を元気づけようと道路に出るために意味深い講演の真っ最中に中断するのであった。かれは、割り込んでくる子供と親しく交わるために使徒との重大な会議を中断するのであった。イエスにとり、たまたま自分の面前にいる個々の人間ほど非常に重要なものはないようであった。かれは、あるじであり同時に教師であったが、それ以上のものであった—友であり隣人であり、理解ある同志であった。

138:8.10 (1546.1) イエスの公への教えは、主に寓話と短い講話であったが、使徒には変わることなく質疑応答で教えた。かれは、後の公への講話では誠実な質問に答えるために、必ず一息入れるのであった。

138:8.11 (1546.2) 使徒は、最初は女性へのイエスの対応に衝撃をうけたが、すぐ慣れていった。かれは、王国では女性は男性と等しい権利を浴することになっていると、彼らに非常に明確にした。

9. 5カ月間の試練

138:9.1 (1546.3) 漁業と個人的な仕事の交互のこの何かしら単調な期間は、12人の使徒には疲れ果てる経験であると判明したが、かれらは、試練に耐えた。かれらは、不平、疑念、一時的な不満を感じながらもあるじへの献身と忠誠の誓いに誠実なままでいた。それは、彼ら全員が(ユダ・イスカリオテを除く)、審判と磔刑の暗黒の時間にさえ彼に忠誠であり、誠実であったように、慕ったのは、この試練の数カ月間のイエスとの個人的な付き合いであった。真の人間は、イエスのようにそれほど身近に暮らし、それほどまでに彼らに捧げた尊敬されていた教師を実際には簡単に見捨てることができなかった。あるじの死の暗黒の時間を通して、これらの使徒の心において、すべての理由、判断、論理は、ただ1つの並はずれた人間の感情—友情・忠誠の最高の感情—に従って、服従して取り除かれた。イエスとの仕事のこの5カ月は、この使徒の各自が、イエスを全世界の親友であると考えさせた。そして、王国に関する福音の宣言の復活と更新の後までも彼等を結合したものこそ、イエスのずば

抜けた教えや驚異の行いではなく、この人間の感情であった。

138:9.2 (1546.4) 静かな仕事のこの数カ月が使徒にとり大いなる試練、乗り切った試練であったばかりでなく、公への不活発のこの期間は、イエスの家族にとってもい大いなる試練であった。イエスが公の仕事の開始準備が整うまでに、(ルースを除く)家族全体は、実際に彼を見捨てた。かれらは、ほんのいくつかの機会に、彼とのその後の接触を試みたことではあるが、それは、イエスは気がおかしいと皆が信じるほどまでになったので、共に家に帰るように説得するためであった。単に彼らは、彼の哲学を理解できず、その教えも把握できなかった。それは、同じ血肉を分かつ者にとり、あまりにも手に負えないものであった。

138:9.3 (1546.5) 使徒達は、カペルナム、ベスサイダ-ユーリアス、コラズィン、ゲラサ、ヒップス、マグダラ、カナ、ガリラヤのベスレヘム、イオータパタ、ラマハ、サフェド、ギシャーラガダラ、アビラでの個人的な仕事を続けた。かれらは、これらの町以外の多くの村や田舎でも働

いた。この期間の終わりまでには、12　人は、それぞれの家族の世話のためにかなり満足できる計画を考えた。使徒の大半は結婚しており、何人かには数人の子供もいたが、使徒の基金からの僅かばかりの援助があり、家族の財政的保護を心配せず、あるじの仕事に全精力をささげることができるような取り計らいをしておいた。

10 人の組織

138:10.1　(1547.1)　使徒は、早々に次のように自分たちを組織した。

138:10.2 (1547.2) 1. アンドレアスは、最初に選ばれた使徒は、12人の議長と、事務総長として任命された。

138:10.3 (1547.3) 2. ペトロス、ジェームス、ヨハネは、イエスの個人的な話相手に任命された。身の回りや雑用に手を貸すために、また天の父との夜通しの祈りと神秘的な親交をするそんな夜と、昼夜付き添うことになっていた。

138:10.4 (1547.4) 3. フィリッポスは集団の執事と考えられた。食料供給をし、またその訪問者や、時には多数の聴衆にまで食べ物があるか確認するのが彼の義務であった。

138:10.5 (1547.5) 4. ナサナエルは、12人の家族の必要なものの世話をした。各使徒の家族の要求に関し、定期的な報告を受け、会計係のユダに必要としている者に毎週基金を送る要求書を作成した。

138:10.6 (1547.6) 5. マタイオスは、使徒の団体の財務代理人であった。予算の均衡を点検し、基金の補給をするのが彼の義務であった。相互支援のための資金が間に合わないとき、また、この団体の維持に十分な寄付金が受領されないとき、マタイオスは、12　人を一時期漁に戻す権限が与えられた。しかし、公の仕事の開始後、これは決して必要ではなかった。活動のための資金調達ができる程度の資金が、つねに財政係の手にはあった。

138:10.7 (1547.7) 6. トーマスは、旅程の幹事であった。教育と説教のためのおおよその場所を選んだり、宿の手はずをしたり、円滑で迅速な旅行の保証にかかわった。

138:10.8 (1547.8) 7. アルフェウスの双子の息子ジェームスとユダは、群衆の管理に割り当てられた。かれらは、説教の間の群衆の秩序の維持に十分な補佐の数の案内係を任命する仕事であった。

138:10.9 (1547.9) 8. シーモン・ゼロテには、休養と遊びの係が与えられた。かれは、水曜日の日程を管理し、また毎にち２，３時間の骨休めと気分転換をもたらそうとした。

138:10.10 (1547.10) 9. ユダ・イスカリオテは、会計係に任命された。かれは、鞄を所持した。かれは、すべての費用を支払い、帳簿を管理した。マタイオスのために週ごとの予算見積りをし、またアンドレアス用に週報を作成した。ユダは、アンドレアスの認可のもとに基金を払い戻した。

138:10.11 (1547.11) このように、12 人は、自分達の初期の組織から裏切り者ユダの脱走により必要になる再編成の時期まで機能した。イエスが西暦27年1月12日日曜日、皆を召喚し、正式に王国の大使として、またそのうれしい知らせの伝道者として定めるまで、あるじと弟子・使徒達は、この簡単な様式で続けた。そして、すぐその後、かれらは、エルサレムとユダへの最初の公布に赴く準備をした。

論文 139
12人の使徒

139:0.1 (1548.1) イエスは、繰り返し使徒の望みを粉微塵に打ち砕き、個人の高揚に対するあらゆる野心をかき乱したにもかかわらず、ただ1　人だけが彼を捨てたということは、イエスの地球での人生の魅力と正しさを雄弁に証明している。

139:0.2 (1548.2) 使徒は天の王国についてイエスから学び、イエスは人の王国、ユランチアと時間と空間の他の進化する世界に住む人間性について彼等から多くを学んだ。この12　人は、多くの異なる型の人間の気質を代表しており、学校教育によらないが故に、同じようには形成されていなかった。これらのガリラヤの漁師の多くは、100年前にガリラヤの非ユダヤ人の人口の強制的な改宗の結果、非ユダヤ人の家柄の濃い血、重圧を伝えた。

139:0.3 (1548.3) 使徒を無知で無学であると見誤ってはいけない。アルフェウスの双子を除く全ての者は、ヘブライ経典とその当時広まった知識の多くを徹底的に仕込まれた会堂学校の卒業生であった。7 人は、カペルナムの会堂学校の卒業生であり、それは、ガリラヤのいずれにもこれより優れたユダヤの学校はなかった。

139:0.4 (1548.4) 記録が、「無知で無学」であると王国のこれらの使者に言及するのは、彼らが素人であったという考えを伝えることが意図されており、ラビの知識を伝習しておらず、経典の律法学者的解釈を研修していないということであった。かれらは、いわゆる高等教育が欠けていた。現代においては、かれらは、確かに、無教育で、社会のある集団では無教養でさえあると考えられるであろう。1 つのことが確かである。使徒は、同一の堅苦しく型にはまった教育課程を経験しなかった。かれらは、青春時代からずっといかに生きるかを学ぶ別々の経験を味わった。

1. アンドレアス、１番目に選ばれた者

139:1.1 (1548.5) アンドレアス、王国の使徒団の議長は、カペルナムで生まれた。かれは、家族の子供5 人—彼自身、弟シーモン、3人の妹—の最年長であった。今は亡き父は、カペルナムの漁港ベスサイダで干物業でゼベダイとの共同経営者であった。使徒になるとき、アンドレアスは、未婚であったが、既婚の弟シーモン・ペトロスと家を建設した。両人ともに漁師で、ゼベダイの息子であるジェームスとヨハネとの共同者であった。

139:1.2 (1548.6) 西暦26年、使徒として選ばれた年、アンドレアスは、33 歳であり、イエスよりもまる1 歳上で、使徒の中で最年長であった。かれは、優秀な先祖の血統の出であり、12　人の中で最も有能な人物であった。雄弁さを除いては、かれは、ほとんど全ての想像可能な能力において仲間と同等であった。イエスは、アンドレアスにあだ名、兄弟のような名称を決して与えなかった。しかし、すぐにイエスをあるじと呼び始めたように、使徒たちは、アンドレアスにもまた「長」に均しい呼び名をつけた。

139:1.3 (1549.1) アンドレアスは、より良い管理者であったが、それよりも良き組織者であった。かれは、4 人の使徒の中枢部の1 人であったが、他の3 人があるじとの非常に近い交わりを楽しむ間、イエスが、かれを使徒集団の代表として任命したことが、　かれを他の仲間と共に任務に携わるままでいることを必要とした。まさしくその終わりまで、アンドレアスは、使徒軍団の重鎮のままでいた。

139:1.4 (1549.2) アンドレアスは、決して有能な伝道者ではなかったが、有能な個人の働き手であり、王国の草分けの宣教の1 番目に選ばれた使徒として、後に王国の最も偉大な説教者の一人となる弟シーモンをイエスの元にすぐに連れて来るような人物であった。アンドレアスは、イエスが12　人を王国の使者に養成する手段として個人の仕事の取り組みを利用するイエスの方針の主な支持者であった。

139:1.5 (1549.3) イエスが使徒に個人的に教えたか、または群衆に説教したかにかかわらず、アンドレアスは、つねに何が起きているかに通じていた。かれは、理解ある経営者であり有能な管理者であった。問題を自分の権限の域を超えるものであると見なさない限り、その場合はまっすぐイエスに訴えるが、自分にもたらされるあらゆる事柄に関する即座の決定をした。

139:1.6 (1549.4) アンドレアスとペトロスは、性格と気質において非常に異なっていたが、見事に反りのあった二人の名誉として永久に記録されなければならない。アンドレアスは、ペトロスの雄弁さに決して嫉妬しなかった。アン

ドレアスのような型の年上の男性が、　年下の若くて有能な弟に対しそのように甚深な影響を及ぼしているのはあまり見かけないであろう。アンドレアスとペトロスは、互いの能力にも業績にも全く嫉妬しているようには見えなかった。主としてペトロスの活気に満ちた奮い立たせる説教により2,000　人が王国に加えられた五旬節の日の夕方遅くに、アンドレアスが弟に言った。「私にはできなかったが、できる弟がいて嬉しい。」それに答えて、「しかし、あなたがあるじのところへ私を連れて来ず、しかもあなたの物事に動じない様が私を彼のところに留め置くことがなければ、こうする私はここにいるはずがありません。」とペトロスが言った。アンドレアスとペトロスは、兄弟といえどもともに平和に暮らし、ともに効果的に働くことができると証明する例外であった。

139:1.7 (1549.5) 五旬節後、ペトロスは、有名になり、残りの人生を「シーモン・ペトロスの弟」として紹介されて過ごすことになったが、それは年上のアンドレアスを決していらだたせはしなかった。

139:1.8 (1549.6) 全使徒の中で、アンドレアスは、一番人を見る目があった。他の何れもが会計係が何かおかしいと疑わなかったときでさえ、ユダ・イスカリオテの心で問題を企てていることがわかっていたが、かれは、自分の怖れを誰にも話さなかった。アンドレアスの王国へのすぐれた働きは、福音宣言のために派遣される最初の宣教師選出に関するペトロス、ジェームス、ヨハネへの忠告や、また、これらの初期の指導者への王国の行政諸事の組織だった管理に関する助言においてであった。アンドレアスは、若年層に隠された資力や潜在する才能を発見するすばらしい才能を持っていた。

139:1.9 (1549.7) イエス昇天後まもなく、アンドレアスは、去ったあるじの言行の多くの個人的記録に着手した。アンドレアスの死後、この個人的な記録の写しが他に作られ、キリスト教会の初期の教師間で自由に回覧された。アンドレアスのこれらの非公式記録は、地球でのあるじの人生のかなり連続した物語を捏造するまで、その後編集され、修正され、変更され、また追加されたりした。原本が最初に選ばれた12人の使徒によって、について書かれ

たおよそ100年後、これらの変更され修正された数少ない写本の最後のものは、アレクサンドリアで炎焼した。

139:1.10 (1550.1) アンドレアスは、明確な洞察、論理的思考、ゆるぎない決断の男であり、その性格的な強みは、ずば抜けた安定性で形成されていた。気質上の妨げとなるものは、情熱に欠けることであった。何度となく賢明な称賛により仲間を励ますことができなかった。そして、友の値打ちのある成果を称賛しないこの寡黙さは、お世辞と不誠実に対する憎悪へと、からつながった。アンドレアスは、便利屋で、冷静で、独立独行の、小規模事業の成功者の一人であった。

139:1.11 (1550.2) どの使徒もイエスを愛したが、特に心を引きつけるある種の特別の人格の特徴ゆえに、12人の各々が、彼に引かれたというのは本当のままとしてある。アンドレアスは、一貫した誠意、ごく自然な尊厳さの理由からイエスを敬慕した。人は、一度イエスを知ると、友人に彼のことを知らせたいという衝動に動かされた。かれらは、全世界に本当に彼を知って欲しかった。

139:1.12 (1550.3) 後の迫害がエルサレムからようやく使徒を離散させたとき、アンドレアスは、アルメニア、小アジア、マケドーニアを通って旅し、最後にはアハイアで逮捕され、パトライで磔刑にされた。この強壮な男が十字架で息絶えるまでにはまる2 日間かかった。しかも、これらの悲劇の時間を通して、かれは、天の王国の救済の良い知らせを効果的に宣言し続けた。

2. シーモン・ペトロス

139:2.1 (1550.4) 使徒に合流したときシーモンは30歳であった。かれは、結婚し3人の子持ちで、カペルナムの近くのベスサイダで生活していた。兄アンドレアスと妻の母とが同居していた。ペトロスとアンドレアスの両人は、ゼベダイの息子等の漁船の共同経営者であった。

139:2.2 (1550.5) アンドレアスが使徒の2番目として彼を紹介する前に、あるじはすでにシーモンを知っていた。イエスがシーモンをペトロスと名を与えたとき、彼は微笑んでそれをした。それはあだ名のようなものであった。シーモンは、全ての友人には不安定で衝動的な仲間として知

られていた。後に、本当に、イエスは、この容易く与えたあだ名に新しく重要な意味を添えることになった。

139:2.3 (1550.6) シーモン・ペトロスは、衝動的で楽天的な人物であった。かれは、自分の強い感情を自由に満足させつつ成長した。かれは、飽くまで考えずに話すことに固執したので、絶えず問題に陥った。そしてまた、この種の考えの無さが、友人や仲間のすべてに絶え間のない問題をもたらし、あるじから多くの軽い叱責を受ける原因でもあった。ペトロスが、軽はずみな談話のためにさらに多くの困難に至らなかった唯一の理由は、かれが、あえて提案を公表する前に、兄アンドレアスと多くの計画や措置について話し合うことを非常に早くに身につけたからであった。

139:2.4 (1550.7) ペトロスは、能弁な話者であり、感動的な飛躍的であった。かれは、人の自然かつ鼓舞する指導者であり、理解の早い思考家でもあったが、深い理論家ではなかった。かれは、使徒全員よりも多くの質問をし、この大部分は見事で、関連した質問であったが、軽率で愚かな多くの質問もあった。ペトロスには深く考える心がな

く、しかもその心についてよく知っていた。したがって、かれは、迅速な決断と突然の行為にでる人物であった。他の者は、海辺にいるイエスを目にした驚きを話すが、ペトロスは、あるじに会うために岸へと泳いだ。

139:2.5 (1551.1) ペトロスが最も賞賛してイエスにみた1つの特徴は、崇高な優しさであった。ペトロスは、決してイエスの忍耐力を静観することに飽きることがなかった。かれは、7 回だけでなく、77回も罪人を許す教訓を決して忘れなかった。かれは、高僧の中庭においてイエスを軽はずみに故意でなく否定した直後の暗い陰気な日々、あるじの寛大な性格のこれらの印象について多く考えた。

139:2.6 (1551.2) シーモン・ペトロスは痛ましく揺れていた。かれは、突然極端から極端に揺れ動くのであった。まずイエスに我が足を洗わせることを拒否し、次にあるじの返答を聞くと、洗ってくれるように請うのであった。しかし、イエスは、詰まるところ、ペトロスの欠点は心ではなく頭であることを知っていた。かつて地球上に生きた中で勇気と臆病の最も不可解な組み合わせの人間であった。彼の性格のすばらしい長所は、忠誠と友情であっ

た。ペトロスは、実に、実にイエスを愛した。それにしても、この偉大な献身の強さにもかかわらず、かれは、使用人の少女にからかわれ、主君あるじを否定させられるほどに、とても不安定で気まぐれであった。ペトロスは、迫害とその他の形態の直接の攻撃にも耐えることができたが、嘲笑の前には萎縮した。正面攻撃に直面するとき、かれは、勇敢な軍人であったが、後部からの襲撃に驚くとき、恐怖に竦む臆病者であった。

139:2.7 (1551.3) ペトロスは、サマリア人の間でのポール、非ユダヤ人の間でのパウーロスの仕事を守るために進み出るイエスの使徒のうちの最初の者であった。それでいて後に、嘲るユダヤ化した人々にアンチオケにおいて直面したとき、自説を翻して非ユダヤ人から一時的に引き下がり、パウーロスから不敵の告発を受けるばかりであった。

139:2.8 (1551.4) かれは、イエスの複合の人間性と神格について心からの告白をした最初の使徒であり、また、ユダを除くイエスを否定したのも最初であった。ペトロスは、それほど夢想家ではなかったが、恍惚の雲と芝居じみた気

ままな熱意から現実の平凡でありのままの世界に下りることを嫌った。

139:2.9 (1551.5) イエスの後を追うに当たり、文字通り、また比喩的にも、かれは、行列を率いたか、さもなければ他に遅れをとる—「離れて遠く後に続く」かであった。しかし、かれは、王国を樹立し、その使者を1 世代における地球の隅々へ送るために、パウーロスは別として、12 人の中では他の誰よりも多くのことをした伝道者であった。

139:2.10 (1551.6) 無分別なあるじの否定後、かれは、我に戻り、使徒達が、磔刑の後に何が起ころうとしているのかを見定めるために留まる間、アンドレアスの同情的で理解ある指導で、かれは、再び漁業の道へと引き返した。イエスが彼を許し、また、彼があるじの囲いの中に迎え入れられたことを完全に確信すると、王国の炎は、魂の中で非常に明るく燃え、暗闇に座わる数千もの人間へのすばらしい救いの光となるほどであった。

139:2.11 (1551.7) エルサレムを去り、パウーロスが非ユダヤ人のキリスト教会の間で指導的人物となる前、ペトロス

は、広範囲に旅をした。パウーロスによって育成された教会の多くにさえ訪れ、奉仕をした。ペトロスとパウーロスは、気質と教育において、神学においてさえ非常に異なったが、後年教会を築き上げるために一緒に円滑に働いた。

139:2.12 (1552.1) 部分的にルカスにより記録された説教に、それとマルコスの福音書には、ペトロスの様式と教育の何かが見られる。その力強い様式と教えは、ペトロスの手紙　第１として知られる彼の手紙でよりよく窺える。少なくとも、それが、後にパウーロスの弟子によって変更される前は、これは本当であった。

139:2.13 (1552.2) しかし、ペトロスは、イエスが、詰まるところ、実に誠にユダヤの救世主であるとユダヤ人に納得させようとする誤りを犯すことに固執した。ちょうど彼の死の日まで、シーモン・ペトロスは、ユダヤの救世主としてのイエス、世界の贖い主としてのキリストと、い神の顕示としての人の息子、全人類の情愛深い父の概念との間で心の中で混乱し続けた。

139:2.14 (1552.3) ペトロスの妻は非常に有能な女性であった。長年、かの女は、女性団体の構成員として充分の働きをし、ペトロスがエルサレムを追放されると、彼の伝道のためのすべての遠出をはじめとし、教会へのすべての旅に同行した。そして、有名な夫がその命を明け渡した日、かの女は、ローマの競技場の野獣に放り投げられた。

139:2.15 (1552.4) かくして、イエスの親友、中枢部の側近の1 人であるこの男性ペトロスは、力と栄光で彼の伝道の拡充が成し遂げられるまで、王国の喜ばしい知らせを宣言しながらエルサレムから前進して行った。捕獲者が、彼のあるじが死んだように—十字架上で—彼も死ななければならないと告げると、かれは、自分を高い名誉の受領者と見なした。このようにして、シーモン・ペトロスは、ローマで磔刑にされた。

3. ジェームス・ゼベダイ

139:3.1 (1552.5) イエスが「雷の息子」の愛称で呼んだゼベダイの二人の使徒の息子のうちの兄ジェームスは、使徒になるとき30歳であった。結婚しており、4 人の子持ちで、カ

ペルナムの郊外ベスサイダで両親の近くで生活していた。かれは、漁師で、弟ヨハネと一緒にアンドレアスとシーモンと共同して仕事に励んだ。ジェームスと弟ヨハネは、他の使徒の誰よりも長くイエスを知っている利点を味わった。

139:3.2 (1552.6) この有能な使徒は、気質上は矛盾するものであった。かれは、本当に二つの性質を備えているらしく、その両方は、強い感情に動かされていた。かれは、一度憤りが完全に刺激されると、特に荒々しかった。かれは、一度相応に挑発されると、燃えるような気質であり、嵐が止むと、それが全く義憤の表明であったという見せかけで怒りを正当化し弁解するのが習慣であった。怒りのこの周期的な大変動を除いては、ジェームスの個性は、非常にアンドレアスのそれのようであった。かれは、人間性ではアンドレアスの思慮深さや洞察力を持っていなかったが、はるかに優れた演説家であった。ペトロスに次いで、しかしマタイオスを除いて、ジェームスが12 人の中で最良の大衆演説家であった。

139:3.3 (1552.7) ジェームスは、決してむら気とは言えないが、ある日は静かで無口であり、その翌日は非常な饒舌家となり、語り手となり得た。通常イエスと自由に話したが、かれは、12　人の間で続けて何日も黙っている男性であった。彼の大きな弱点は、この説明のつかない沈黙の期間であった。

139:3.4 (1552.8) ジェームスの個性の傑出している特徴は、考察に関し各方面から考える能力であった。全12　人中、かれは、イエスの教えの真の重要性と意味を最も近く理解した。彼もまた、最初あるじの意味するところの理解に時間が掛かったが、彼らの訓練の終了までにはイエスの言葉の優れた概念を習得した。ジェームスは、広範囲の人間性を理解することができた。かれは、多才なアンドレアス、激しいペトロス、控え目な弟ヨハネとよく気が合った。

139:3.5 (1553.1) ジェームスとヨハネは、一緒に働こうと苦労をしたが、二人がいかによく気が合ったかを観測するのは感激的であった。アンドレアスとペトロスほどにはあまりうまくいかなかったが、通常2 人の兄弟、特にそのよ

うな強情で断固な兄弟に期待されるよりもずっと良かった。しかし、奇妙に見えるかもしれないが、ゼベダイの2　人の息子は、見知らぬ人に対してよりもお互いに対し、はるかに寛容であった。かれらは、互いにすばらしい愛情を感じた。かれらは、つねに楽しい遊び仲間であった。あるじに対する軽蔑を示すことを敢えてしたサマリア人を滅ぼすために天国から砲撃を加える命令を欲しがったのはこの「雷の息子」であった。しかし、ジェームスの時ならぬ死が、弟ヨハネの激しい気質を大いに変えた。

139:3.6 (1553.2) ジェームスが最も賞賛したイエスのその特徴は、あるじの同情的な愛情であった。無名人、有名人、貧者、富者に対するイエスの理解ある関心に、ジェームスの心は、引きつけられた。

139:3.7 (1553.3) ジェーム・スゼベダイは、均衡のとれた思想家と立案者であった。アンドレアスと共に、かれは、使徒団の中ではより分別のあるものの1　人であった。かれは、活発な個人であったが、決して急がなかった。かれ

は、ペトロスにとっては平衡力を保つ素晴らしいてん輪であった。

139:3.8 (1553.4) かれは、慎み深く、穏やかで、日々仕える人であり、控え目な労働者であり、一旦王国の本当の意味の何かを掴むと、どんな特別報酬も求めなかった。息子達にイエスの左右の栄誉の座が与えられるのか尋ねたジェームスとヨハネの母についての話にさえ、この要求をしたのは母であったということを思い出さなければならない。そして、二人がそのような責任を負う準備ができているということを示したとき、かれらが、ローマ支配に対するあるじの想定された反乱を伴う危険性を認識していたと気づくはずだし、かれらが、その代償を喜んで払う気もあったと認めなければならない。イエスが、その杯を飲みほす準備ができているかどうかを尋ねたとき、彼らはできていると返答した。そして、ジェームスに関しては文字通りそうであった—殉教を経験した最初の使徒であり、ヘロデ・アグリッパに早くに剣で死に追いやられたことを考えるとき、彼はあるじと共に杯を飲みほした。ジェームスは、このように、王国の新しい戦線で命を犠牲にする12　人のうちの最初のものであった。へ

ロデ・アグリッパは、他のすべての使徒の誰よりもジェームスを恐れた。ジェームスは、多くの場合本当に静かで黙っていたが、自分の信念がそそられ挑戦されると、勇敢で決然としていた。

139:3.9 (1553.5) ジェームスは、十分にその人生を送り、そして終わりが来たとき、裁判と処刑に立ち会った告発し密告をした者でさえ、非常に心を打たれイエスの弟子達に合流するためにジェームスの死の場面から急いで離れるほどに、そのような優美さと剛毅を保った。

4. ヨハネ・ゼベダイ

139:4.1 (1553.6) 使徒になったとき、ヨハネは、24歳で12人中で最年少者であった。かれは、未婚でベスサイダで両親と暮らしていた。かれは、漁師であり、アンドレアスとペトロスと協同で兄ジェームスと働いていた。使徒になる前後、ヨハネは、イエスの個人的な世話係としてあるじの家族の世話に関わり、イエスの母マリアが生きる限りこの責任を担い続けた。

139:4.2 (1553.7) ヨハネは、12人中最も若く、イエスの家族の件にとても密接に関係したので、かれは、あるじにとり非

常に大切ではあったが、「イエスが愛していた弟子」であったとは正直言えない。あなたは、イエスのような度量の大きい人格が、依怙贔屓を示す、ある者を他よりも愛するなどと決して邪推しないであろう。ヨハネが、兄ジェームスと共に、他の使徒より長くイエスを知っていたことは言うまでもなく、イエスの3人の側近の一人であったという事実が、この間違った考えにさらなる色を添えた。

139:4.3 (1554.1) 使徒になった直後、ペトロス、ジェームス、ヨハネは、イエスの個人的な側近として選任された。12人の選出直後、またイエスが集団の責任者者として務めるように任命したとき、イエスは、アンドレアスに言った。「さて、私と居て、側に留まり、気持ちを和らげてくれ、日々の用を足してくれる2、3人の仲間を選任して欲しい。」そこで、アンドレアスは、この特別任務には、次の3人の最初の使徒に選ばれる者が一番良いと考えた。かれは、自分自身そのような恵まれた奉公に志願したかったが、自分には既にあるじから任務が与えられていた。それで、かれは、ペトロス、ジェームス、ヨハネにイエス付きになるようすぐに指示した。

139:4.4 (1554.2) ヨハネ・ゼベダイの性格には多くの魅力ある特色があったが、それほど魅力的でないものは、過度ではあるが、通常は上手に隠された自惚れであった。イエスとの長い付き合いは、性格に多くの大きい変化をもたらした。この自惚れはかなり減少したが、老いて多少子供っぽくなるとある程度再び現れ、現在自分の名前が記されている福音書を書くネイザンに指示するほどであり、老いた使徒は、自分を「イエスが寵愛した弟子」と繰り返し照会することを躊躇しなかった。ヨハネは、他のどの地球の人間よりも最も近くイエスの親友になったということ、かなり多くの事柄に関して選ばれた個人的な、人格的な代表人であったという事実から見て、イエスがごく頻繁に心を許した弟子であることをヨハネが最も定かに知る以上、自身を「イエスが寵愛した弟子」と考えようになったのは、奇妙ではないであろう。

139:4.5 (1554.3) ヨハネの性格で最大の特徴は、その信頼性であった。かれは、迅速、勇敢、忠実、献身的であった。最大の弱点は、この特有の自惚れであった。かれは、父親の家族の最年少であり、使徒集団の最年少者でもあった。おそらく、かれは、ほんの少し甘やかされていた。

恐らく機嫌を取られ過ぎてきた。しかし、後年のヨハネは、24歳でイエスの使徒の集団に合流した自惚れで気まぐれな青年とは非常に異なった種類の人間であった。

139:4.6 (1554.4) ヨハネが最も評価したイエスの特徴は、あるじの愛と利己心の無さであった。この特徴が彼に非常に強い印象を与えたので、その後の彼の人生全体が、愛の感情と兄弟の献身に支配されるほどであった。かれは、愛について話し、愛について書いた。この「雷の息子」は、「愛の使徒」となった。そして、エウフラーテスで、老年のこの司教が椅子で教会まで運ばれなければもはや聖壇に立ち説教することができなくなったとき、そして礼拝の終わりに信者への二言、三言を頼まれたとき、長年のあいだ唯一発した言葉は、「幼子達よ、互いを愛せよ。」であった。

139:4.7 (1554.5) ヨハネは、気分が奮い立つ時以外は口数の少ない男であった。かれは、よく考えるが、ほとんど口に出さなかった。老いてくるにつれ、その気質は、より控え目で、より制御されるようになったが、かれは、話す気の無さを決して克服しなかった。この寡黙さを完全に克

服したというわけではなかった。しかし、かれは、顕著で創造的な創造力に恵まれていた。

139:4.8 (1555.1) 人がこの静かで内省的な型にはみつけそうもないもう一つの面が、ヨハネにはあった。かれは、いくらか偏屈で、過度に偏狭であった。この点で彼とジェームスは、非常に似通っていた—両者は、無礼なサマリア人の頭上に天国から砲撃を加える命令を欲しがった。ヨハネがイエスの名前で教えている数人の見知らぬ者に遭遇したとき、かれは、即座に彼らに禁じた。しかし、この種の自尊心と優越意識に染まった者は、12人中彼一人ではなかった。

139:4.9 (1555.2) ヨハネは、イエスが母と家族の世話にいかに忠実に準備をしたかを知っていたので、ヨハネの人生は、イエスが家なしで済ませる光景にものすごく影響された。また、家族が彼を理解せず徐々に彼から退いているのに気づいているヨハネは、イエスにも深く同情した。この全体の状況、　併せて、イエスが自分のほんの僅かの望みにさえ常に天の父の意志に従い、またイエスの疑うことのない信頼の日常生活のさまとが、ヨハネに、性

格における著しく永久的な変化、その後の人生に体の現れた変化、をもたらすほどの深遠な印象を与えた。

139:4.10 (1555.3) ヨハネには、他の使徒の少数しか備えていない平静で大胆な勇気があった。かれは、イエスの逮捕の夜、絶えず後に続き、まさしくその死地にあえて同行した使徒こそ、彼であった。かれは、イエスの地球での最後の時間の直前まで側に居合わせ、イエスの母に関する彼の責任を忠実に実行に移し、かつ、あるじの死を免れない命の最後の瞬間に与えられるかもしれないそのようなさらなる指示も受ける準備ができていた。1つ確かなことがある。ヨハネは徹底的に信頼できた。ヨハネは、12 人が食事をとる際、通常、イエスの右側に座った。本当に完全に復活を信じた12 人のうちの1 番最初が彼であり、復活後、海岸の彼等のところに来たあるじを最初に見分けたのも彼であった。

139:4.11 (1555.4) ゼベダイのこの息子は、キリスト教運動の初期期の活動においてペトロスと非常に密接に関係した。そして、エルサレム教会の主要な支持者の一人になっ

た。かれは、五旬節の日のペトロスの腹心の援護者であった。

139:4.12 (1555.5) ジェームス殉教の数年後、ヨハネは、兄の未亡人と結婚した。人生最後の20年間、かれは、情愛深い孫娘の看護を受けた。

139:4.13 (1555.6) 別の皇帝がローマの政権に就くまで、ヨハネは、獄中に何度か入り、4　年間パトモス島に追放された。ヨハネが、如才なく賢明でなかったならば、より率直な兄ジェームスのように確かに殺されていたであろう。数年が経過し、ヨハネは、主の弟ジェームスと民間行政長官の前に現れたとき、賢明な和解の実践を学んだ。二人は、「柔らかな答えは憤りを静める。」ということを知った。また、彼らは、「天の王国」としてよりもむしろ「人類の社会奉仕に専念する精神的兄弟愛」としての教会を代表することも学んだ。かれらは、統治力—王国と王—よりも愛の奉仕を教えた。

139:4.14 (1555.7) パトモスでの一時的な流罪生活において、ヨハネは、かなり短縮され歪曲された形で読者が手にするところの黙示録を著わした。この黙示録は、広範囲にわ

たる顕示の残存する断片を収録しており、その大部分が失われたり、ヨハネの執筆後に他の部分が取り除かれている。それは、ただ断片的で品質が落とされた形で保存されている。

139:4.15 (1555.8) ヨハネは、非常に旅行をし、絶え間なく働き、またアジアにある教会の司教になった後は、エウフラーテスに落ち着いた。エウフラーテスで99歳のとき、仲間のネイザンに、いわゆる「ヨハネによる福音書」の文章の中で指示した。12人の全使徒の中では、結局ヨハネ・ゼベダイが、傑出した神学者となった。かれは、西暦103年、エウフラーテスにおいて101歳で自然死を遂げた。

5. 好奇心のフィリッポス

139:5.1 (1556.1) フィリッポスは、イエスと最初の4人の使徒がヨハネの集結地点ヨルダンからガリラヤのカナに行く途中で召集された5 番目の使徒であった。ベスサイダに住んでいたので、フィリッポスは、イエスをしばらくの間知っていたが、ヨルダン渓谷で、「私についてきなさい。」と言われるその日まで、イエスが本当に偉大な人

物であったとは思いつきもしなかった。フィリッポスも、アンドレアス、ペトロス、ジェームス、ヨハネ等が、救済者としてイエスと認めた事実にいくらかの影響を受けた。

139:5.2 (1556.2) 使徒に加わったたとき、フィリッポスは、27歳であった。かれは、近々に結婚したが、そのとき子供はいなかった。使徒が彼に与えたあだ名は、「好奇心」を意味した。フィリッポスは、つねに立証を求めた。かれは、いかなる提案も非常に深く見抜くようには決して見えなかった。かれが、必ずしも鈍いという訳ではないが、想像性に欠けた。この想像性不足が、性格上の大きな弱点であった。かれは、ありふれた、事務的な個人であった。

139:5.3 (1556.3) 使徒が奉仕のために組織化されるとき、フィリッポスは、執事にされた。食糧が常に供給されているかを見るのが、彼の義務であった。そして、彼は良い執事であった。彼の性格上の最大の長所は、入念な徹底性であった。かれは、数学的で、かつ系統的であった。

139:5.4 (1556.4) フィリッポスは、3人の男、4人の女の7人の兄弟姉妹の家族の出であった。かれは、上から2 番目で、復活後に、王国入りのために家族全体に洗礼を施した。フィリッポスの身内は、漁に携わる人々であった。父は、非常に有能な男性で深い思想家であったが、母は、非常に平凡な家族の出であった。フィリッポスは、大きいことをすると期待できる男ではなかったが、小さい、些細な事を大きくできる、手際よく、気に入られるようにできる男であった。全員の需要を満たす食物を手元に置くことに、4 年間でほんの数回しか失敗しなかった。かれらが、暮らした生活に付帯する多くの非常時の要求にさえ、不備であるということは稀であった。使徒の世帯の供給部は、明敏に効率的に経営された。

139:5.5 (1556.5) フィリッポスの長所は、几帳面な信頼性であった。かれの性格上の短所は、想像性のまったくの欠如、物証事実をもとにして結論に至る能力の欠如であった。かれは、理論上では数学的であるが、想像性においては建設的ではなかった。かれには、特定の種類の想像性がほぼ完全に欠落していた。かれは、真に典型的な平凡な普通の男性であった。イエスが教え説教するのを聞きに

くる多くのそのような男女が群衆の中におり、かれらは、自分たちのような者が、あるじの協議会の名誉ある位置に登用されるのを観察することでものすごい安らぎを得た。自分等に似た者が、高い場所を王国に関する問題においてすでに見つけたという事実から勇気を得た。そして、とても我慢強くフィリッポスの愚かな質問を聞き、執事の「証明してくれ」という要求に何回となく応じることで、イエスは、ある人間の心の機能の仕方についてよく分かった。

139:5.6 (1556.6) フィリッポスがそれほどまでに続けて賞賛したイエスについての1つの特性は、あるじの不断の寛大さであった。フィリッポスは、イエスに何の狭量で、しみったれた、けちな部分を決して見つけることができなかったし、このつねに存在し、変わることのない寛大さを敬った。

139:5.7 (1557.1) フィリッポスの個性に関しては、あまり印象的でないところがあった。かれは、「アンドレアスとペトロスが暮らす町ベスサイダのフィリッポス」としばしば言及された。かれは、洞察力がほとんどなかった。かれ

は、与えられた状況の劇的な可能性を理解することができなかった。かれは、悲観的ではなかった。単に平凡であった。かれは、精霊的な洞察も大いに不足していた。あるじの最も奥深い講話のうちの1つの真最中に、かれは、明らかに愚かな質問のためにイエスを中断することを躊躇わないのであった。しかし、イエスは、そのような思慮の無さを決して叱責しなかった。かれは、教えのより深い意味を理解するフィリッポスの無能さに心棒強く思いやりがあった。イエスは、これらの煩わしい質問をするフィリッポスを一度叱責したならば、この正直者を傷つけるだけでなく、そのような叱責は決して自由に二度と質問をしないほどに苦痛を与えるであろうことをイエスはよく知っていた。イエスは、類似した反応の遅い数えきれない多数の人間が、空間世界にいることを知っていた。そして、かれは、彼を頼り、いつも自由に自分達の問いや問題をもって会いにくることを督励したがっていた。詰まる所、イエスは、説いている説教よりも、フィリッポスの愚かな質問にほんとうに興味を持っていた。イエスは、この上もなく人間、すべての種類の人間に興味を持っていた。

139:5.8 (1557.2) 使徒である執事は、良い演説者ではなかったが、非常に説得力があり、成功した個人の労働者であった。かれは、簡単に落胆しなかった。かれは、地道な努力家で、引き受けた何事においても非常に粘り強かった。かれは、「来なさい」と言う素晴らしくまれな才能を持っていた。彼の最初の転向者ナサナエルは、ナザレスとイエスの長所と短所について議論したかったが、フィリッポスの功を奏す返答は、「来て見なさい」であった。かれは、聞き手に「行くように」—これをせよ、あれをせよ—、と強く勧める押しつけがましい伝道者ではなかった。かれは、「来なさい。」「共に来なさい。道を示すつもりである。」と自分の仕事で起こるすべての状況に応じた。そして、それは、いつも教えにおけるすべての形と局面の効果的技法なのである。両親でさえ、「これをしに行きなさい、それをしに行きなさい」ではなくむしろ、「良い方法を示し、教えてあげる間一緒に来なさい。」と子供に言うより良い方法をフィリッポスから学ぶかもしれない。

139:5.9 (1557.3) フィリッポスが新しい状況に適応できないことは、エルサレムでギリシア人が彼のところに来たときに

よく示された。「先生、イエスに会いたいのです。」そのとき、フィリッポスは、そのような質問をするどんなユダヤ人にも「来なさい」と言ったところであろう。ところが、これらの男性は外国人であり、フィリッポスは、そのような事柄に関し目上からのいかなる指示も思い出せなかった。そこで唯一つできることは長であるアンドレアスに相談することであった。そして、両者は、イエスのところへと好奇心旺盛なギリシア人に付き添っていった。同様に、信者への説教と洗礼のためにサマリアに行ったとき、あるじに教えられていたので、真実の聖霊を受け入れたことの印しとしての転向者に手を置くことを控えた。これは、母教会のために彼の仕事を観察するためにほどなくエルサレムからやって来たペトロスとヨハネによって行われた。

139:5.10 (1557.4) フィリッポスは、あるじの死のつらい時代を通し、12 人の再編に参加し、差し迫るユダヤ人集団の外の人々を王国に加入させるために旅立った最初の人物であり、サマリア人のための自分の仕事と、福音のためのすべての自分のその後の作業において最も成功した。

139:5.11 (1557.5) 婦人団体の有能な構成員であったフィリッポスの妻は、エルサレムでの迫害からの脱出後、夫の福音伝道者の仕事に活発に関わるようになった。フィリッポスの妻は、恐れを知らない女性であった。かの女は、夫の殺人者にさえ喜ばしい知らせを宣言するように奨励して、フィリッポスの十字架の足元に立ち、彼の力が萎えると、自らがイエスへの信仰による救済の詳述を始め、怒るユダヤ人達に突進され死ぬまで石を投げられ、とうとう黙らされた。長女レアは、彼らの仕事を続け、後にヒエラーポリスの名高い女予言者となった。

139:5.12 (1558.1) 12 人のかつての執事フィリッポスは、行くところどこで信者を得て、王国での強力な人物であった。そして、かれは、その信仰のために遂には磔刑にされ、ヒエラーポリスに葬られた。

6. 正直なナサナエル

139:6.1 (1558.2) 使徒の6番目で、かつ最後にあるじ自身に選ばれるナサナエルは、友人フィリッポスにイエスの元に連れて来られた。かれは、いくつかの企業でフィリッポス

と関係があり、二人がイエスに遭遇したときは、ともに洗礼者ヨハネ会いに行く途中であった。

139:6.2 (1558.3) ナサナエルが使徒に合流したときは25歳であり、その集団の中では２番目に若かった。7 人兄弟姉妹の中で最も若く未婚であり、老いて虚弱な両親の唯一の扶養者で、両親とカナに住んでいた。兄や姉は結婚しているか、または死亡しており、誰もそこには住んでいなかった。ナサナエルとユダ・イスカリオテは、12 人中2人の最高の教育を受けた男性であった。ナサナエルは、商人になろうと考えていた。

139:6.3 (1558.4) イエスは、ナサナエルに直接あだ名をつけなかったが、12　人はすぐに、正直、誠意を意味する言葉で彼について話し始めた。かれは、「狡猾さなし」であった。そして、これは、彼の大きな美徳であった。かれは、正直で、誠実であった。その性格上の弱点は、高慢さであった。かれは、家族、自分の都市、自己の評判、自国を非常に誇りに思っており、それは、度が過ぎていなければ、その全てが立派である。しかし、ナサナエルは、個人的な偏見で極端に走る傾向があった。かれは、

個人的な見解により、個人を事前に判断する傾向にあった。イエスに出会う前にさえ、かれは、「何か良いことが、ナザレスから来ることがあろうか。」などと質問するのに時間を掛けなかった。しかし、ナサナエルは、たとえ誇り高かったとしても、頑固ではなかった。かれは、一度イエスの顔を覗き込むと、自分を翻すことに迅速であった。

139:6.4 (1558.5) あらゆる点でナサナエルは、12人の中で奇異な天才であった。かれは、使徒哲学者であり夢想家であったが、非常に実用的な類いの夢想家であった。かれは、深遠な哲学の期間と稀でひょうきんな滑稽の期間とを行き来した。気分が乗ると、かれは、たぶん12　人中で最も上手な語り手であった。イエスは、ナサナエルが、真剣なことと軽薄なことの両方のに関する講話を聞いて大いに楽しんだ。次第に、ナサナエルは、イエスと王国をより真剣に受け止めたが、自分を決して真剣に受け止めることはなかった。

139:6.5 (1558.6) 使徒は全員、ナサナエルを愛し尊敬した。また、かれも、もユダ・イスカリオテを除く皆と、見事に

うまくやっていった。ユダは、ナサナエルが十分真剣に使徒の資格を得たと思わなかったし、一度、秘かにイエスの元に行きナサナエルに対する不満を無鉄砲申し立てた。イエスが言った。「ユダ、足元に注意しなさい。自分の職務を過大視しないように。我々のだれがその兄弟を裁く能力があるのか。子供等が人生の重大事にだけ参加することが、父の意志ではない。繰り返させてくれ。生身の我が同胞が、喜び、嬉しさを得て、より豊かな人生を過ごせるようになるために私は来た。だから、ユダ、行きなさい、そして任せられたことをしっかりやり、神への報告は、兄弟ナサナエル自身に任せなさい。」そして、多くの同様の経験と共にこの記憶は、長い間ユダ・イスカリオテの自己欺瞞の心の中に長く続いた。

139:6.6 (1559.1) 何回も、イエスが、ペトロス、ジェームス、ヨハネと遠く山に離れているとき、そして使徒間で緊張し、縺れてくるとき、そして、アンドレアスでさえ悲嘆にくれる同胞に言うべきことが定かでないとき、ナサナエルは、いささかの哲学、あるいは閃きのユーモアで緊張を和らげるのであった。上機嫌も。

139:6.7 (1559.2) ナサナエルの義務は、12人の家族の世話をすることであった。かれは、使徒の協議会をしばしば休んだ。何故ならば、自分の受け持ちの1つに何か尋常でないことが起こったと聞くと直ちにその家に行くからであった。12　人は、それぞれの家族の保護がナサナエルの手で安全であるという認識ですっかり安心していた。

139:6.8 (1559.3) ナサナエルは、イエスの寛大さを最も尊敬した。かれは、人の息子の包容力と寛大な同情について熟考することに決して飽きることがなかった。

139:6.9 (1559.4) ナサナエルの父(バトロメーオス)は、五旬節の直後、この使徒が王国のうれしい知らせを宣言し、信者達の洗礼を施しにメソポタミアとインドに行った後、に死んだ。ナサナエルの同胞は、かつての自分達の哲学者、詩人、ユーモアの持ち主がどうなったかついぞ知らなかった。しかし、たとえその後のキリスト教会の組織に参加しなかったとしても、かれも、王国の偉人であり、あるじの教えを広げるために多くのことをした。ナサナエルは、インドで死んだ。

7. マタイオス・レービー

139:7.1 (1559.5) マタイオス、7 番目の使徒は、アンドレアスに選ばれた。マタイオスは関税徴収人か、または居酒屋の主の家族の者であったが、自身は、在住していたカペルナムの関税徴収人であった。かれは、31歳で、結婚しており、4 人の子持ちであった。適度の富の男で、使徒団に属する中の唯一の資力を持つ人物であった。遣り手の実業家であり、上手な社交家であり、また人と親しくなり、かなりのさまざまな人間とうまくやっていく器量に恵まれていた。

139:7.2 (1559.6) アンドレアスは、マタイオスを使徒の財政の代表に任命した。ある意味で、マタイオスは、使徒組織の財政代理人と広報代弁者であった。かれは、人間性の鋭い判者で非常に有能な布教者であった。その人柄については説明し難いが、非常に熱心な弟子であり、イエスの使命と王国の確実性をますます信じる者であった。イエスは、レービーに決してあだ名をつけなかったが、仲間の使徒は、俗に「金をせしめる者」と呼んだ。

139:7.3 (1559.7) レービーの長所は、目的への心からの傾倒であった。彼、居酒屋の主人が、イエスと使徒に受け入れら

れたということは、歳入徴収者にとり圧倒的な感謝の要因であった。しかしながら、他の使徒、特にシーモン・ゼローテースとユダ・イスカリオーテスは、居酒屋の主人を自分達の真っ只中に受け入れることにしばらくの時間を必要とした。マタイオスの弱点は、人生に対しての先見の明の無さと物質的な物の見方であった。しかし、数カ月経つにつれ、すべてのこれらの問題において、かれは、おおきく前進した。勿論、資金補充をし続けるのが義務であったので、かれは、最も貴重な教えの期間の多くを欠席せざるを得なかった。

139:7.4 (1559.8) マタイオスが最も感謝したのは、あるじの寛大な気質であった。かれは、神を見つける仕事おいては、信仰のみが必要であるとを詳述することを決して止めないのであった。かれは、つねに「この神を見つける仕事」として王国について話すことを好んだ。

139:7.5 (1560.1) マタイオスは、過去をもつ男であったが、素晴らしい記録を打ちたて、また時間が経つにつれ、仲間は、居酒屋の主人の実績を誇りに思うようになった。かれは、イエスの話に関して広範囲に書きとった使徒の一

人であり、これらの記録は、イエスの言動に関してのイザドルのその後の物語の基礎として使われた。そして、それは、マタイオスによる福音書として知られるようになった。

139:7.6 (1560.2) カペルナムの実業家であり、関税徴収人のマタイオスの立派で役立つ人生は、その後の時代を通し、何千人もの他の実業家、公務員、政治家を導いたり、またこれらの者が、「私についてきなさい」と言うあるじのその魅力的な声を聞くための手段となっていた。マタイオスは、本当に鋭い政治家であったが、イエスに非常に忠誠であり、来たるべき王国の使者への十分な融資を確実にする責務にこの上なく専念した。

139:7.7 (1560.3) 12人中のマタイオスの存在は、宗教の安らぎの領域が、長らく自分たちにはないとみなしている落胆し追放された者へ、王国の扉を広く開け放たれるように保つ手段であった。追放され絶望的な男女は、イエスを聞くために群がってきたが、かれは、断じて誰も締め出さなかった。

139:7.8 (1560.4) マタイオスは、弟子達を信じ、あるじの教えの直接の傍聴者が自由に申し出た提供物を受け取りはしたが、群衆には決して基金を公然と求めなかった。かれは、すべての財政的な仕事を静かに個人的な方法で行ない、より安定した階級の関心をもつ信者に金銭の大部分を募った。事実上自己のささやかな富の全てをあるじと使徒の仕事に与えたが、この全てを知るイエスを除いては、かれらは、この寛大さをついぞ知らなかった。マタイオスは、イエスと仲間が自分の金を汚れたものと見なすかもしれないという恐れから、使徒の基金に貢献することを公然と躊躇った。そこでかれは、他の信者の名前で多くを付与した。早期の数カ月間、皆の中に居るのは多かれ少なかれ試験であると知っている時、マタイオスは、日々の糧はしばしば自分の基金で賄われたということを仲間に知らせたいと強く誘惑の念にかれたが、それには屈っしなかた。居酒屋の主人への軽蔑の証拠が表面化するようになると、レービーは、彼らに寛大さを示したくてたまらなかったが、いつもなんとか抑えることができた。

139:7.9 (1560.5) その週の基金が見積もり額に満たないとき、レービーは、しばしば自身の個人の財源に頼るのであった。また、時折イエスの教えに大いに興味をもつと、必要な基金の勧誘不履行の埋め合わせを自分持ちにしなければならないと知りつつも、留まって教えを聞く方を選んだ。しかし、レービーは、イエスが金銭の多くは自分の懐からでていることを知ってくれる、かもしれないことを非常に願った。かれは、あるじがそれについて全てを知っているとはほとんど知らなかった。使徒は皆、マタイオスが、迫害の開始後に王国の福音を宣言しに行くとき、実際には文無しで、彼らにとっての恩人であったとは知らずに、死んでいった。

139:7.10 (1560.6) これらの迫害が、信者にエルサレムを見捨てさせたとき、マタイオスは、北へと旅し、王国の福音を説き、信者に洗礼を施した。かつての使徒仲間は、彼の行方を全く知らなかったが、シリア、カッパドキア、ガラティア、ビティニア、ツラーケ中で説教をし、洗礼を施した。そして、ある不信心なユダヤ人達が、彼を死においやるためにローマ兵達と共謀したのは、ツラーケのリシマヘイアであった。そして、この再生の居酒屋の主

人は、最近の地球での滞在中のあるじの教えからとても確実に学んだ救済の信仰をもって、誇らしげに死んだ。

8. トーマス・ディーディモス

139:8.1 (1561.1) トーマスは、8 番目の使徒であり、フィリッポスに選ばれた。後には「疑い深い人」として知られるようになったが、仲間の使徒は、彼を常習的に疑う人とはほとんど見ていなかった。かれのものは、論理的で疑い深い心であることは本当であるが、彼には親しく知る者に、彼をささいな懐疑論者と見ることを禁じる勇気ある忠義いうものがあった。

139:8.2 (1561.2) 使徒に加わったとき、トーマスは、29歳であり、結婚しており、4 人の子供がいた。かれは、以前は大工であり石工であったが、最近漁師になったところで、ガリラヤの海へと注ぐヨルダン川の西の堤に位置するタリヘアに住み、この小さな村の指導的な市民と見られていた。かれは、ほとんど教育を受けなかったが、鋭い、論理的思考の心を持ち、ティベリアスに住む優れた両親の息子であった。トーマスは、12　人中、本当に分

析する心をもつ者であった。使徒団において、かれは、本当の科学者であった。

139:8.3 (1561.3) トーマスの早期の家庭生活は、不幸であった。両親の結婚生活は、必ずしも幸せではなく、これが、トーマスの成人の経験に反映された。かれは、非常に不愛想で喧嘩好きの性質で成長した。妻でさえ、使徒に合流する彼をみて喜んだ。この女は、悲観的な夫がほとんど家を留守にするだろうという考えで安心した。トーマスも、穏やかに彼とうまくやっていくことを非常に困難にする一筋の猜疑があった。ペトロスは、最初は、トーマスに多いに動揺して、「意地悪で、醜く、いつも疑わしげである」と兄アンドレアスに不平を言った。しかし、仲間は、トーマスを知れば知るほどより好きになった。かれらは、彼が、無類に正直で怯むことなく忠誠であるとわかった。かれは、文句なしに誠実で疑いなく正直であったが、生まれながらの粗探し屋で、真の悲観論者に成長した。その分析する心は、疑念で苦しめられるようになった。12　人と交わり、このようにイエスの高貴な性格と接触し始めたとき、トーマスは、急速に仲間の人間への信用を失っているところであった。あるじとのこ

の交わりが、トーマスの全体の性質を変え、仲間への彼の精神的な反応に大きな変化をもたらし始めた。

139:8.4 (1561.4) トーマスの大きな強みは、怯むことのない勇気と結合するずば抜けた分析的な心であった—一度決心すると。大きな弱点は、怪しく疑うことであり、生身の生涯を通して、決して完全に打ち勝ったというわけではなかった。

139:8.5 (1561.5) トーマスは、12人の組織内で旅程の手はずをし、管理をする役に当てられ、使徒団の仕事と活動の有能な責任者であった。かれは、よい役員であり、優れた実業家であったが、非常なむら気により不利な立場にいた。かれは、前日と翌日では別の男であった。使徒に加わったとき、かれは、憂うつに塞ぎ込みがちであったが、イエスと使徒との接触が、大幅にこの病的内省を治した。

139:8.6 (1561.6) イエスは、トーマスをたいへん楽しみ、多くの長い個人の会談をした。たとえかれらが、イエスの教えの精神的、哲学的局面に関し完全にすべてを理解することができなかったとしても、使徒の間の彼の存在は、す

べての正直な疑り深い者にとっての大きな安らぎであり、また多くの当惑する心が、王国に入る奨励ともなった。12　人中のトーマスの会員資格は、イエスが、正直な疑い深い者さえ好きであったという動かない表明であった。

139:8.7 (1562.1) 他の使徒は、何らかの特別で傑出している特性ゆえにイエスを尊敬したが、トーマスは、見事に均衡のとれた性格ゆえにあるじを尊敬した。トーマスは、とても優しく情け深い、それでいて毅然と公明正大である人をますます賞賛し尊敬した。とても断固としているが、決して頑固ではない。とても穏やかであるが、決して無関心ではない。とても助けとなり同情的ではあるが、決しておせっかいでも横暴でもない。とても強いが、同時に、とても優しい。とても前向きであるが、決して手荒くもなく粗雑でもない。とても柔和であるが、決して迷いがない。とても純粋で汚れがないが、同時に大人であり、積極的であり、説得力がある。とても勇敢であるが、決して無鉄砲ではない。本当に自然の愛好者であるが、自然を崇敬する全ての傾向には囚われない。とても面白く茶気があるが、軽率さや軽薄さが全くない。それ

は、トーマスを魅了したこの無比の人柄の均整さであった。トーマスは、12　人の中の誰よりもイエスの最も高い知的理解と性格評価をおそらく楽しんだであろう。

139:8.8 (1562.2) 12人の協議会では、トーマスは、最初に安全方針を提唱していつも用心深かったが、もしその保守主義が否決されるか、または却下されたならば、恐れることなく常に決定された計画実行にかかる1 番最初の者であった。かれは、何度も無鉄砲で無遠慮に企てに抵抗するのであった。とことん討論するのであるが、アンドレアスが提案を採決しようとしたり、また自分が強固に反対した事を12人がすると選んだ後では、「しよう。」と、最初に言うのは、トーマスであった。かれは、見事な敗者であった。かれは、恨みを残さず傷ついた感情を抱かなかった。再三再四、かれは、イエス自身を危険にさらさせることに反対したが、あるじが、そのような危険を冒すと決めると、「さあ、仲間よ、彼と行って共に死のう。」と勇敢な言葉で使徒を奮い起こすのは、いつもトーマスであった

139:8.9 (1562.3) トーマスは、いくつかの点でフィリッポスに似ていた。かれも、「示される」ことを欲したが、懐疑に関する彼のあからさまな表現は全く違った知的な活動に基づいていた。トーマスは、単に疑い深いのではなく、分析的であった。個人の肉体上の危険を伴う勇気に関する限り、かれは、12人中で、最も勇敢な1人であった。

139:8.10 (1562.4) トーマスには、非常に悪い日が何日かあった。時には、気がふさぎうなだれた。9 歳のとき双子の姉妹を喪失したことが、若い彼に多くの悲しみを与え、後の人生での問題をさらに悪化させた。トーマスの気が沈んでくると、回復を助けたのは、時にはナサナエルであり、時おりはペトロスであり、アルフェウスの双子のうちの一人であったことも稀ではなかった。最も意気消沈したとき、トーマスは、残念なことにいつもイエスとの直接の接触を避けようとした。しかし、トーマスが意気阻喪に苦しみ、疑念に悩んでいるとき、あるじは、これについて全てを知っており、この使徒に理解ある同情を持っていた。

139:8.11 (1562.5) 時々、トーマスは、アンドレアスに1日か2日間一人で出かける許可を得るのであった。しかし、そのような方針が賢明でないことをすぐに知った。落胆したとき、かれは、仕事に密着し、仲間の近くに留まることが最善であることが早くに分かった。しかし、感情的な生活に何が起ころうとも、かれは、使徒であり続けた。実際に前進するときがくると、いつも「行こう」と言ったのは、トーマスであった。

139:8.12 (1562.6) 疑問を持ち、それに直面し、そして勝つ人間の見事な例は、トーマスである。彼には、すばらしい心があった。かれは、口喧しい批評家ではなかった。論理的な思考家であった。かれは、イエスと仲間の使徒にとり厳しい考査であった。イエスと彼の仕事が本物でなかったならば、それは、初めから終わりまでトーマスのような人間を保持することはできなかったであろう。かれは、事実に対する鋭く確かな感覚を有していた。誤魔化しや欺瞞の最初の表面化でトーマスは、彼等を皆見捨てていたことであろう。科学者は、地球でのイエスとその仕事を完全に理解しないかもしれないが、心が本物の科学者のそれであった人物—トーマス・ディーディモス

—は、あるじとその人間の仲間と暮らし、働き、そしてかれは、ナザレスのイエスを信じた。

139:8.13 (1563.1) トーマスには、公判と磔刑の数日間の苦しい時があった。かれは、絶望のどん底の季節にいたが、勇気を奮い起こし、使徒達にへばり付き、ガリラヤ湖でのイエスの歓迎に皆と出席した。しばらく、かれは、疑いの抑鬱に屈したが、ついには信仰と勇気を結集した。かれは、五旬節の後、使徒に賢明な助言を与え、迫害が信者を離散させると、王国の喜ばしい知らせを説き信者を洗礼しながらキプロス、クレタ、北部のアフリカの海岸、シチリアへと行った。そして、かれがローマ政府の手先の者達に逮捕され、マルタで殺されるまで、トーマスは、説教と洗礼を続けた。死のわずか数週間前に、かれは、イエスの生涯と教えについて書き始めていた。

9、10. ジェームスとユダ・アルフェウス

139:9.1 (1563.2) アルフェウスの息子のジェームスとユダは、ケリサ近くに住む双子の漁師は、9 番目と10 番目の使徒であり、ジェームスとヨハネ・ゼベダイに選ばれた。かれ

らは、26 歳で結婚しており、ジェームスには3 人、ユダには2 人の子供がいた。

139:9.2 (1563.3) 2 人の平凡な漁師に関し言うべきことはあまりない。二人はあるじが非常に好きであり、イエスも彼らが好きであったが、かれらは、質問のために決してイエスの講義を中断したりはしなかった。かっらは、使徒仲間の哲学論議も神学討議もほとんど理解しなかったが、自分達が、そのような一団に数えられることに気づき大いに喜んだ。この2 人の男性は、容姿、心的特徴、精神的な感覚の範囲がほとんど同一であった。1 人について言えるかもしれないことは、もう片方についても記録されるべきである。

139:9.3 (1563.4) アンドレアスは、群衆の警備する作業を彼らに任せた。かれらは、説教時間の主な案内係であり、事実上、12　人の雑用係で使い走りの小僧であった。かれらは、物資でフィリッポスの手伝いをし、ナサナエルのために金をその家族に運び、使徒の誰にでもいつでも援助の手を貸す準備ができていた。

139:9.4 (1563.5) 民衆は、自分達と変わらない二人が、使徒の間の名誉ある場所にいるのを見て、大いに励まされた。使徒としてのこの平凡な双子の他ならぬ受理が、多くの弱い心の信者を王国に連れてくる結果となった。そして、また民衆は、まったく自分たちと変わらない公式の案内係に導かれ、管理されているという考えに一層気持ちよく感じた。

139:9.5 (1563.6) サッダイオスとリッバイオスとも呼ばれたジェームスとユダには、長所も短所もなかった。弟子達から与えられたあだ名は、平凡な性質の良い呼称であった。かれらは、「使徒のうちでいと小さき者」であったが、それを知り、愉快に感じた。

139:9.6 (1563.7) ジェームス・アルフェウスは、特にあるじの平易さが気に入った。双子達は、イエスの心を理解できなかったが、かれらは、あるじの心との気の合う絆を掴んだ。二人の心は、高位のものではなかった。かれらは、敬意の念で愚かだと呼ばれさえしたかもしれないが、精神性においては本物の経験をした。かれらは、イエスを信じた。二人は、神の息子と王国の人であった。

139:9.7 (1564.1) ユダ・アルフェウスは、あるじの衒いのない謙虚さに引かれた。そのような個人の尊厳に繋がるそのような謙虚さは、ユダに大きく訴えた。イエスがつねに自己の普通でない行為に関して沈黙を強いるという事実が、この自然の純真な子供に大きな印象を与えた。

139:9.8 (1564.2) 双子は、気立てが良く純真な助っ人であり、誰もが彼らが非常に好きであった。その他のそのような単純で恐れに支配された数知れない数百万の魂が空間世界にはおり、その者達を同じように彼と流出された真実の聖霊との活発で信ずる親交に迎え入れたいので、イエスは、王国における個人的な職員の名誉の位置にこれらの1つの才能をもつ青年達を歓迎した。イエスは、些少さを軽蔑せず、悪と罪だけを見下した。ジェームスとユダは、幼くはあったが、同時に誠実であった。かれらは、単純で無知であったが、気が大きく親切で気前がよかった。

139:9.9 (1564.3) そして、あるじが、ある金持ちの男を自分の財産を売り貧者を援助しない限り伝道師として受け入れることを拒否したあの日、これらの謙虚な男達がいかに誇

りに思ったことか。人々がこれを聞き、また助言者の中に双子を見たとき、彼らは、イエスが人間を差別する人でないことを確信した。だが、神の施設—天の王国—は、これまでにそのような平凡な人間の基盤に建設されることができたのであった。

139:9.10 (1564.4) イエスとのすべての付き合いの中で1 度か2 度だけ、人前で質問するという冒険をこの双子がした。あるじが世界に公然と正体を明らかにすることについて話したとき、ユダは、イエスに一度質問する好奇心にそそられた。かれは、12　人の間にそれ以上の秘密がなくなるという些かの失望を感じ、敢えて尋ねた。「しかし、あるじ様、このように自分を世界に表明されると、あなたの特別な善の表明を我々にどのように与えてくださるのですか。」

139:9.11 (1564.5) 双子は、最期まで、磔刑、絶望と公判の暗黒の日まで、忠実に仕えた。かれらは、イエスへの心の信頼を決して失うことなく、ヨハネを除いては、二人が最初に彼の復活を信じた。だが、彼らは、王国の設立を理解することができなかった。あるじが磔刑にされた直

後、かれらは、家族と網に戻り、二人の仕事は終わった。彼らには、王国のより複雑な闘いにおいて先へ進む能力がなかった。しかし、かれらは、４年近くの神の息子、宇宙の君主である創造者との個人的関係をもつ光栄に浴し、また祝福されたという意識で生活し、死んでいった。

11. 熱狂者、ゼロテ党シーモン

139:11.1 (1564.6) シーモン・ゼローテース、11番目の使徒は、シーモン・ペトロスに選ばれた。かれは、立派な祖先をもつ有能な男であり、カペルナムで家族と暮らしていた。使徒に属したとき、かれは28歳であった。かれは、火のような扇動者であり、よく考えずにものを言う人物でもあった。ゼロテ党の愛国組織に全ての注意を払う前、かれは、カペルナムの商人であった。

139:11.2 (1564.7) シーモン・ゼローテースは、使徒団の楽しみと気晴らしのための任を与えられ、かれは、遊びと12人の娯楽活動の非常に有能なまとめ役であった。

139:11.3 (1564.8) シーモンの長所は、その鼓舞的忠誠心であった。王国に入ることに躊躇い、もがいている男女を見つ

けると、使徒は、シーモンを呼びにやるのであった。全疑問に決着をつけ、すべての躊躇いを取り除き、「信仰の自由と救済の喜び」に新生の魂を見るために、神への信仰による救済のこの熱心な主唱者は、通常、わずか15分程を必要とした。

139:11.4 (1565.1) シーモンの大きな弱点は、その物質志向にあった。かれは、ユダヤ国家主義者から精神的に関心のある国際主義者へと早く変わることができなかった。そのような知的、感情的変化をするには、4 年という歳月は短か過ぎたが、イエスは、彼に対していつも寛容であった。

139:11.5 (1565.2) イエスについてシーモンが非常に敬服したことは、あるじの沈着さ、確信、平静さ、説明のつかないゆとりであった。

139:11.6 (1565.3) シーモンは、過激な革命家、大胆不敵な扇動の火付け役であったが、「地球の平和と人間相互の善意」の強力かつ有能な伝道者になるまでには徐々にその火のような性癖を抑圧した。シーモンは、偉大な論客であった。口論するのが好きであった。そして、教育ある

ユダヤ人の法的思考やギリシア人の知的な言い逃れに対処するとき、その仕事はいつもシーモンに割り当てられた。

139:11.7 (1565.4) かれは、生来の反逆者であり、修練による因襲破壊者であったが、イエスは、シーモンを天の王国のより高い概念へと至らせた。つねに抗議をする連中と行動をともにしてきたが、そのとき、前進する連中、精霊と真実の無制限で永遠の進行に加わった。シーモンは、猛烈な忠誠心と暖かい個人的に献身する男性であり、イエスを心から愛した。

139:11.8 (1565.5) イエスは、実業家、肉体労働者、楽天主義者、悲観論者、哲学者、懐疑論者、居酒屋の主人、政治家、愛国者と行動をともにすることを恐れなかった。

139:11.9 (1565.6) あるじは、シーモンと会談を多くしたが、この熱心なユダヤ国家主義者を国際主義者へと変えることに決して完全には成功しなかった。イエスは、社会的、経済的、政治的秩序に改善を見たいということは、妥当であるとシーモンにしばしば話したが、つねに付け加えて、「それは、天の王国の本務ではない。我々は、父の

意志を為すことに捧げなければならない。我々の本務は、天の性霊的政府の大使であり、我々が担う信任状の政府の先頭に立つ神性の父の意志と性格の代表以外には、我々は、直接何も関心をもってはならない。」と言った。すべてを理解するには難かったが、シーモンは、徐々に、あるじの教えの意味の何かを掴み始めた。

139:11.10 (1565.7) エルサレムの迫害による分散後、シーモンは、一時的な隠遁に入った。かれは、文字通り押し潰された。国家主義的愛国者として、かれは、イエスの教えに降伏し服従してきた。そのとき、すべてが失われた。かれは、絶望していたが、数年間のうちに望みを奮い起こし、王国の福音を宣言するために前進した。

139:11.11 (1565.8) かれは、アレキサンドリアに行き、ナイル川沿いに上った後、アフリカの中心部に入り込み、至る所でイエスの福音を説き、信者を洗礼した。かれは、こうして老人となり、微弱となるまで働いた。そして、かれは、死んでアフリカの中心部に埋葬された。

12. ユダ・イスカリオテ

139:12.1 (1565.9) ユダ・イスカリオテ、12 番目の使徒は、ナサナエルに選ばれた。南イェフーダの小さい町ケリヨースに生まれた。彼が若者のとき、両親はイェリーホに移り、かれは、そこで暮らし、洗礼者ヨハネの説教と仕事に興味を持つようになるまで父の様々な事業に従事していた。ユダの両親は、サドカイ人で、息子がヨハネの弟子に加わったとき縁を切った。

139:12.2 (1566.1) ナサナエルがタリヘアで会ったとき、ユダは、ガリラヤ湖の南端にある干物業に職を求めていた。使徒に加わったとき、かれは、30歳で未婚であった。かれは、おそらく12人中で最高の教育を受けた男であり、あるじの使徒一門で唯一のユダヤ人であった。ユダには外面に現れる文化的、習慣的修練の特徴は多くあったが、目立つ人的長所としての特性はなかった。かれは、すぐれた思考家ではあったが、常に真に正直な思考家ではなかった。ユダは、自分自身を本当に理解していなかった。かれは、自分に対し真に誠実ではなかった。

139:12.3 (1566.2) アンドレアスは、ユダにぴったりの位置、12人の会計係に任命し、ユダは、あるじを裏切る時間まで、正直に、忠実に、最も効率的に役目を果たした。

139:12.4 (1566.3) 人を引きつけ、また絶妙に魅力のあるイエスの人柄を一般的に敬う以外に、ユダにはイエスに関する何の特性も見い出ものはなかった。ユダは、ガリラヤの仲間に対する自分の中のユダヤ人の偏見を決して乗り越えることができなかった。かれは、心の中でイエスに関して多くのことを批判さえしたのだあった。11　人の使徒が完全な男性として、「1　万の中で魅力があり最高である者」として見なした人を、この自己満足のユダヤ人は、敢えて自身の心でしばしば批評した。かれは、イエスが臆病で、彼自身の力と権威を主張することをいくらか恐れていたという考えを本当に抱いていた。

139:12.5 (1566.4) ユダは、優れた実業家であった。イエスのような理想主義者の財務を管理するということ、数人の使徒の雑な商法に取り組むということは言うまでもなく、気転、能力、忍耐と、勤勉な献身を必要とした。ユダは、実に偉大な経営者、また先見の明のある有能な財政

家であった。そして、かれは、組織、制度にうるさい人間であった。12　　人の誰もユダを決して批判しなかった。彼らが見ることができる限り、ユダ・イスカリオテは、並ぶもののない会計係、学問のある男、忠実な(時々批判的ではあるが)使徒であり、あらゆる言葉の意味において大成功者であった。使徒はユダを愛していた。彼は本当に使徒の1人であった。かれは、イエスを信じたに違いないが、我々は、彼が本当に全心であるじを愛したかどうか疑問に思う。ユダの場合は、次のことわざの真実を例示する。「人の目には真っ直に見える道がある。その道の終わりは死の道である。」罪と死の道への心地よい調整の平和的な欺瞞の犠牲になることは、概して可能である。ユダがいつも財政上あるじと使徒仲間に忠誠であったことは、保証する。金が、あるじへのユダの裏切の動機では決してありえなかった。

139:12.6　(1566.5)　ユダは、賢明でない両親の一人息子であった。とても幼いとき、かれは、可愛がられ、過保護にされた。かれは、甘やかされた子供であった。成長すると、かれは、自惚れについての考えを誇張した。かれは、負けっぷりが悪かった。彼には公正さについての甘

くて歪められた考えがあった。かれは、憎しみと疑いに耽けった。かれは、友人の言葉と行為を曲解するで専門家であった。かれは、自分を不当に扱った気に入った者にさえ仕返しをする習慣を全人生を通して培った。彼の価値と忠誠の観念には欠陥があった。

139:12.7 (1566.6) イエスにとり、ユダは、信仰の冒険であった。最初から、あるじは、この使徒の弱点を完全に理解し、また仲間へ受け入れることの危険性を熟知していた。しかし、救済と生存のために完全で等しい機会をあらゆる被創造者に与えることは、神の息子の特徴である。イエスは、被創造物の王国への献身の実意と誠意に関し疑問が存在するとき、疑ぐり深い候補者を完全に受け入れることは、人の裁判官の不変の実行であるということをこの世の必滅の者だけでなく、他の無数の世界の見物人にもそれを知って欲しかった。永遠なる命への扉は、すべてに開け放たれている。「望むものは誰でも来てよい。」来るものの信仰以外には、何の制限も資格もない。

139:12.8 (1567.1) これこそがイエスが、ユダにその終わりまで行くことを許し他他ならぬ理由であり、そしてこの弱く混乱した使徒を変え、また救うために、常にすべての可能なことをした。しかし、光が正面に迎え入れられず、背かれるとき、それは、魂の中で暗闇になりがちである。ユダは、王国についてのイエスの教えに関して知的には成長したが、他の使徒が為した精神的特質の習得においては前進しなかった。かれは、精神経験において満足に個人的な前進ができなかった。

139:12.9 (1567.2) ユダは、ますます個人的な失望で黙考する者となり、最終的には憤りの犠牲者となった。感情は何度となく傷つき、かれは、親友に、あるじにさえ異常に疑ぐり深くなった。やがて、かれは、仕返し、何らかの報復、そう、仲間とあるじへの裏切りの考えにさえとりつかれるようになった。

139:12.10 (1567.3) しかし、この邪で危険な考えは、感謝する女性がイエスの足元で高価な香箱を壊す日まで明確な形を取らなかった。これは、ユダには無駄に思えた。そして、自分の公の抗議が、皆の聞いているまさにそこで、

イエスにあのように全面的に認められなかったとき、それは、もうひど過ぎるるものであった。その出来事は、つのる嫌悪、苦痛、悪意、偏見、嫉妬、生涯の報復の全てを決定し、仕返しの相手が誰であるかさえ知らずに決意した。しかし、イエスは、たまたま光の進歩的な王国から自ら選んだ暗黒の領域への通過を記録した挿話の主役であったので、ユダは、自身の不幸な人生の汚れた芝居全体において、1人の罪のない人に自身の性格のすべての悪を具体化したのであった。

139:12.11 (1567.4) あるじは、個人的にも公的にも滑り落ちているとユダにしばしば警告したが、神の警告は冷酷な人間性に対処する際、通常、役に立たない。イエスは、人の道徳的な自由と矛盾せず、ユダが間違った道へ行くことの選択を防ぐために可能な全ての事をした大いなる試練が、ついに来た。憤りの息子は、しくじった。かれは、誇張された自惚れの、誇り高い復讐心に燃えた心のひねくれた、賤しい命令に譲り、混乱、絶望、そして堕落へと迅速に突入していった。

139:12.12 (1567.5) それからユダは、君主でありあるじに対する背信行為のために卑しく恥ずべき陰謀に身を投じ、すばやく邪悪な計画実行に移った。怒りを孕んだ反逆的裏切りの計画の実行の間、かれは、後悔と恥の瞬間を経験し、そしてこの平穏な時期には、イエスがことによると土壇場でその力を出し自分を救出するかもしれないという考えを、心の中で自衛として、いくじなく抱くのであった。

139:12.13 (1567.6) 卑劣で罪深い仕事がすべて終わると、自己が長らく暖めた復讐への渇望を満たすために30片の銀で容易く友人を売ることを考えた人間であるこの裏切り者は、飛び出し、この世の生活の現実から逃げる劇において最後の行為をとった—自殺。

139:12.14 (1567.7) 11人の使徒は、ぞっとし、唖然とした。イエスは、裏切り者を哀れみだけで見た。世界は、ユダを許し難いと知り、彼の名は、遠く離れた宇宙の至る所で避けられるようになった。

論文 140
12 人の聖別式

140:0.1 (1568.1) 西暦27年1月12日、日曜日の正午直前、イエスは、王国の福音の公の伝道者としての聖別式のために使徒を集めた。12人は、いつでも呼び出されることを期待していた。それで、この朝、岸から遠くへの漁には出なかった。そのうちの数人は、網の修理をしたり、漁具をもてあそんだりして岸近くに長居していた。

140:0.2 (1568.2) イエスは、使徒を呼びながら海岸へ下り始めると、まず岸近くで釣をしていたアンドレアスとペトロスに手を振った、を呼んだ。次に、父親ゼベダイを訪ね、ほど近い船の中にいて網の修理をしていたジェームスとヨハネに合図した。かれは、他の使徒も二人ずつ呼び集め、12　人全員が集まると、カペルナム北部の高地に彼等と旅行し、そこで正式の聖別式に備え彼らに教え始めた。

140:0.3 (1568.3) 使徒の12人全員が一度だけ静かであった。ペトロスさえ熟考する雰囲気であった。長く待たれていた時が、ついに来たのであった。父の王国の接近の宣言のために、あるじを代表する神聖な仕事への個人と集団の献

身とある種の厳粛な儀式に参加するためにあるじと供に出発しようとしていた。

1. 事前の指導

140:1.1 (1568.4) 正式の聖別式の前に、イエスは、自分の周りに座る12 人に話した。「同胞よ、王国のこの時が来た。私は、王国の大使として父に紹介するためにそなた達をここに連れて来た。そなた達の何人かは、最初に呼ばれたとき、私が会堂でこの王国について話すのを聞いた。各人が、ガリラヤ湖やその周辺都市で私と共に働いてきたので、父の王国についてさらに学んできた。だが、たった今、私は、この王国についてさらに話すことがある。

140:1.2 (1568.5) 「私の父が、地上の子等の心に設立しようとしている新たな王国は、永遠に続く統治である。神性意志を為すことを望む者の心における父のこの支配にはいかなる終わりもないはずである。父は、ユダヤ人の神でも非ユダヤ人の神でもないと、そなたたちに断言する。アブラハムの子の多くは、人の子の心の聖霊支配のこの新たな兄弟関係に入ることを拒否する間、多くは、父の王国に我々と座を供にするために東西から来るのである。

140:1.3 (1568.6) この王国の力は、軍隊の強さや富の力においてではなく、むしろこの天の王国の生まれ変わった住民、つまり神の息子の心に教え、情を支配するようになる神の精神の栄光の中にある。これは、正義がそなた臨する兄弟関係であり、そしてその掲げる合い言葉は、地の上には平和が、全ての者には善意がある。そなた達が直ちに宣言しにいくことになっているこの王国は、あらゆる時代の善人の望み、地球全体の希望、全予言者の賢明な約束の遂行なのである。

140:1.4 (1569.1) だがそなた達には、子供等よ、この王国へとそなた達について来る他の全ての者にも厳しい試練が設定される。信仰だけがその入り口を通させるが、前進する神性親交の人生で昇り続けようとするならば、そなたは、父の霊に実をつけなければならない。誠に、誠に言っておく。『主よ、主よ、』と言う者すべてが、天の王国に入るわけではないのだ。むしろ天にいる父の意志を為す者が、入るのである。

140:1.5 (1569.2) 世界へのそなた達の知らせは次の通りである。最初に神の王国とその正義を求めよ。これを見つけるこ

とにより、永遠に生き残りに不可欠の他のすべてのものが、共に確かとなる。そして、私は今、父のこの王国が見せ物とも、見苦しい実演会とも共には来ないということを、明らかにしておく。因ってそなた達は、『ここにある』とか『そこにある』とか言って、この王国の宣言に向かうのではない。そなた達が説教するこの王国は、そなた達の中にいる神であるのだから。

140:1.6 (1569.3) 誰でも父の王国で優れてくる、好きになる、と全ての者への公使となる。また、そなた達の中で1 番になる誰であろうと、その同胞に仕える者にさせよ。しかし、天の王国でいったん国民として実際受け入れられると、もはや使用人ではなく、息子、生きる神の息子なのである。そして、それが、すべての障壁を壊し、すべての人間に父を知らせしめ、また私が宣言しにきた救済の真実を信じさせるまで、この王国は、世界で発展していくのである。今でさえ、王国は手元にあり、そなた等の一部は、神の治世の偉大な力を見るまでは死なないであろう。

140:1.7 (1569.4) そして今、やがて地球全体が父の称賛で満たされるまで、そなた等が見ているこれが、すなわち12人の平凡な男のこの小さな始まりが、増大し成長するのである。そして、人はそなたらが私といて、王国の真実を学び知ったということを、その言葉でよりも送る生活によりよく分かるのである。そなた等の心に苛酷な重荷を横たえるつもりはなく、今、肉体をもって送っているこの生活で父の代理を私がしているように、私がほどなく去るとき、世界で私の代理をする厳粛な責任をそなた等の魂に置いていこうとするところである。話し終えると、かれは、立ち上がった。

2. 聖別式

140:2.1 (1569.5) イエスは、王国に関する表明を聞いたばかりの12　人の死すべき者にそのとき、自分の周りに輪になって跪くように言った。それから、あるじは、それぞれの使徒の頭に手を置き、ユダ・イスカリオテに始まり、アンドレアスで終わった。かれは、皆を祝福すると、手を伸ばして祈った。

140:2.2 (1569.6) 「父よ、私は今、これらの者、使者をあなたの元に連れて参ります。地上の我々の子供の中から、あなたの代理をしに私が来たように、私は、私の代理をしに旅立つこの12　人を選びました。私を愛し共にいてくださったように、これらを愛し共にいてやってください。そして、いま、父よ、私が来たるべき王国のすべての事柄を彼らの手に置くとき、これらの者に叡知を与えてくださいますように。そして私は、それがあなたの意志であるならば、この者達の王国のための仕事の手助けのため地球に留まります。そして、父よ、これらの者のために感謝いたします。また、与えられた仕事を私が続けていく間、この者達をあなたの保護にゆだねます。」

140:2.3 (1570.1) イエスが祈り終えたとき、使徒はそれぞれがその場で俯したままであった。そして、ペトロスでさえ、あるじを見るために敢えて目を上げるまでには何分もかかった。一人ずつイエスを抱きしめたが、誰も何も言わなかった。天の軍勢がこの厳粛で神聖な光景を見下ろす間、大いなる沈黙がこの場所に瀰漫した—人間の心の指示の元に人間の神性の兄弟関係に関する事柄を委ねる宇宙の創造者。

3. 聖別式の説教

140:3.1 (1570.2) それからイエスは話した。「父の王国の大使である今、そなたらはそれによって地球の他のすべての者とは別の異なった人間の種類となった。そなたらは、今や人の間にいる人としてではなく、この暗い世界の無知な生物の中にいる別の、天の国の開眼している国民としてある。これ以前のそなた等の生き方では十分ではない。今後は、より良い人生の栄光を味わった者として、新たな、より良い世界のそなた主の大使として、地球に送り戻された者として生きなければならない。教師は、生徒よりも期待される。あるじは、下僕よりも期待される。天の王国の国民は、地上の王国の国民よりも必要とされる。今から伝えようとする事柄の幾つかは、困難に思えるかもしれないが、私が今父の代理をしているように、この世界で私の代理をすることは、そなたらが選んだことである。そして、地球の私の代理人として、そなたらは、私が理想とする空間世界での人間生活を反映し、また我が地上生活で天にいる父を明らかにする私が例示する教えと習慣を受け入れ期待に応える義務がある。

140:3.2 (1570.3) 「精霊的に捕虜となっている者達へ自由を、つまり恐怖に捕われた者へ喜びを宣言し、天の父の意志に従い病人を癒すためにそなた達を送りだす。私の子供が困っているのを見掛けたら励まして次のように話し掛けなさい。

140:3.3 (1570.4) 「心の貧しい者、へりくだる者は幸いである。天の王国の宝物は彼等のものであるから。

140:3.4 (1570.5) 「義に飢え渇く者は幸いである。満たされるであろうから。

140:3.5 (1570.6) 「柔和な者は幸いである。地を相続するであろうから。

140:3.6 (1570.7) 「心の清い者は幸いである。神を見るであろうから。

140:3.7 (1570.8) 「そして、たとえそうだとしても、精神の安らぎと約束のこれらの更なる言葉を私の子供等に伝えなさい。

140:3.8 (1570.9)「悲しむ者は幸いである。慰められるであろうから。涙する者は幸いである。悦びの霊を受けるであろうから。

140:3.9 (1570.10)「哀れみ深い者は幸いである。哀れみを受けるであろうから。

140:3.10 (1570.11)「平和を作る者は幸いである。神の子と呼ばれるであろうから。

140:3.11 (1570.12)「義のために迫害される者は幸いである。天の王国は彼等のものであるから。罵られ迫害され、ありもしない事で悪口雑言を言われるときそなた等は幸いである。喜び、殊のほか、喜びなさい。天におけるそなた等の報いは大きいのであるから。

140:3.12 (1570.13)「我が同胞よ、そなた等を送り出す、そなた等は地の塩である、味を助ける塩である。しかし、もしこの塩がその味を失ったならば、何をもって塩味を付けるのであろうか。それは、何の役にも立たず、捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。

140:3.13 (1570.14)「そなた等は世界の光である。丘の上にある町は隠されることができない。蝋燭を点けても、誰も升の下には置かず、燭台に立てる。そうすれば、それは家にいる全員を照らす。このようにそなた等の光を人々の前で輝かせ、人々がそなた等の良い行いを見て天にいる父を崇めるようにしなさい。

140:3.14 (1571.1)「私は、私の代理をし、父の王国の大使として務めるようにそなた等を世界へ差し向ける。そして、良い知らせを公布しに行くに当たり、そなた等を使者として送る父を信頼しなさい。不正に対し無理に抵抗してはならない。肉の腕に頼ってはならない。隣人が右頬を打つならば、他方も向けなさい。自分達の間で法に訴えるよりも進んで不正に苦しみなさい。苦しんだり必要としているすべての者へ優しさと情けの奉仕をするように。

140:3.15 (1571.2)「言っておく。敵を愛し、そなた等を嫌う者に善を施し、呪う人々を祝福し、悪意をもって利用する者のために祈りなさい。私が人にするであろうとそなたが信じることは何でもしなさい。

140:3.16 (1571.3)「天のあなたの父は、善人の上と同じように悪人の上にも太陽を照らす。同様に正者にも不正者にも雨を降らせる。そなた等は、神の息子である。さらに、今は父の王国の大使である。神が慈悲深くあるように、情け深くありなさい。そうして、天の父が完全であるように、王国の永遠の未来において、あなたは完全になるのである。

140:3.17 (1571.4)「そなた等は人を裁くためにではなく、救うために任命された。地球での人生の終わりに、そなた等は、皆慈悲を期待するだろう。したがって、必滅の運命にある人生の中で肉体をもつ同胞のすべてに慈悲を示すことをそなた等に要求する。光線が目に当たっているときに同胞の目の中の塵を取り出そうとする過ちを犯さないように。目の光線を除けてはじめて同胞の目の中の塵の粒子が見えて取り除くことができる。

140:3.18 (1571.5)「はっきりと真実を見分けなさい。恐れずに正しい生活を送りなさい。そうしてそなた等は私の使徒となり、私の父の大使となる。そなた等は、こう言われているのを聞いた。『もし盲人が盲人を導くならば、両者

は穴に落ちこむであろう。』王国に他のものを案内するのならば、そなた自身が、生きた真実の透明な、明るい光の中を歩かなければならない。王国のすべての仕事において、私は、そなた等に正しい判断と鋭い知恵を示すことを強く勧める。聖なるものを犬に与えてはならない。また豚に真珠を投げやるな。珠玉を足で踏みにじり、向き直りそなた等を引き裂きにくるであろうから。

140:3.19 (1571.6) 羊の衣を着て近づいてくるが、その内側は強欲なオオカミである偽の予言者について警戒する。そなた等は、その実によって彼等を見分けるであろう。人は、茨からブドウを、あざみからイチジクを採取するであろうか。たとえそうだとしても、このように、あらゆる良い木は良い実をつけるが、腐った木は悪い実をつける。良い木が悪い実を結ぶことはないし、腐った木が良い実を結ぶことはできない。良い実を結ばない木は、やがてことごとく切り倒され、火に投げ込まれる。天の王国への入り口を獲得するには、動機こそが肝心である。父は、人々の心の中を見て、彼等の内側の切望と至誠の意志により判断をする。

140:3.20 (1571.7) 王国の大いなる判決の日に、多くの者は、『私達はあなたの名前で予言し、あなたの名前で多くの立派な働きをしませんでしたか。』と私に言うであろう。だが私は、『お前達を決して知らなかった。偽教師共、行ってしまえ。』と言わざるを得ないであろう。しかし、ちょうど私が父の代理をしたように、この批難を聞き入れ、私の代理をする任務を誠実に実行する者は、我が奉仕と天の父の王国への大きく開いた入り口を見つける。」

140:3.21 (1571.8) 使徒達は、これまでイエスがこのように話すのを一度も聞いたことがなかった。というのは、かれは、最高権威を持つ者のように話したので。かれらは、日没頃に山を下りたが、誰もイエスに質問をしなかった。

4. そなた等は地の塩である

140:4.1 (1572.1) いわゆる「山上の垂訓」はイエスの福音ではない。多くの助けとなる訓示を含んではいるが、それは、12人の使徒に対するイエスの聖別の委託であった。それは、ちょうど自分が父をそれほどまでに雄弁に、また完

全に代表したように、人間の世界で福音を説き、自分の代理を切望し続けようとしている者へのあるじの個人的委任であった。

140:4.2 (1572.2) 「そなた等は地の塩である、味を助ける塩である。しかし、もしこの塩がその味を失ったならば、何をもって塩味を付けるのであろうか。それは、何の役にも立たず、捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。」

140:4.3 (1572.3) イエスの時代、塩は貴重であった。金の代用とさえされた。現代の言葉「給料」は、塩に由来する。塩は食物に風味をつけるばかりでなく、防腐剤でもある。それは、他のものをよりおいしくするし、このように消費されることにより役目を果たす。

140:4.4 (1572.4) 「そなた等は世界の光である。丘の上にある町は隠せない。蝋燭を点けても、誰も升の下には置かず、燭台に立てる。そうすれば、家にいる全員を照らす。このようにそなた等の光を人々の前で輝かせ、人々がそなた等の良い行いを見て天にいる父を崇めるようにしなさい。」

140:4.5 (1572.5) 光は、暗黒を晴らすと同時に、混乱させ挫折させるほどに非常に「目をくらます」こともできる。仲間が、高められた生活の新しくて、神を敬う道へと導かれるために、我々は、光をとても輝かせるように悟される。我々の光は、自己に注意を引きつけないために、ように輝きを放つべきである。人の職業でさえも、人生のこの光の普及のために有効な「反射鏡」として利用されることができる。

140:4.6 (1572.6) 強い性格は、悪事を働くことからではなく、むしろ正行から得る。利己心の無さは、人間の偉大さの徽章である。自己実現の最も高い段階は、崇拝と奉仕により到達できる。幸福で有能な人は、悪行の恐怖にではなく、正行への願望に動機づけされる。

140:4.7 (1572.7) 「その実によって、あなたがたは彼らを知るであろう。」人格は基本的に不変である。変化する—成長する—ものは、徳性である。現代宗教の主な誤りは、否定主義である。実を結ばない木は切り倒され、「火に投げ込まれる。」単なる抑圧—「すべきではない」という命令に従うこと—から道徳的価値は得られない。恐れと恥

は、宗教生活には価値のない動機である。神の父性を明らかにし、人の兄弟愛を高めるときにだけ、宗教は有効である。

140:4.8 (1572.8) 生活ための実効的な哲学は、宇宙洞察の組み合わせと社会、経済環境への人の感情的な反応の統合により形成される。忘れるでない。継承した衝動が基本的に修正されることはできないが、そのような衝動への感情的な反応を変えることはできる。従って、道徳的な性質は、変更されることができ、性格は改善することができる。強い性格において、感情的反応は、統合され、調整されるし、その結果、統一された個性が生み出される。不十分な統一は、道徳的性質を弱め、不幸を生む。

140:4.9 (1572.9) 立派な目標がなければ、人生は、無目的で無益になり、多くの不幸が結果として生じる。12人の聖別式でのイエスの講義は、長としてふさわしい人生哲学を構成する。イエスは、経験に基づく信仰を行使するように追随者に勧めた。かれは、単なる知的な同意、軽信、確立された権威を頼りにしないように訓戒した。

140:4.10 (1573.1) 教育は、我々の自然で、引き継がれた衝動を満足させるより良い方法を学ぶ(発見する)ための手段となるべきである。そして、幸せは、感情的な満足感のこれらの強化された方法の結果として起こるものである。望ましい境遇は、大いにそれに貢献するかもしれないが、幸せは、境遇にほとんど依存していない。

140:4.11 (1573.2) あらゆる死すべき者は、実に完全な人間であること、父が天で完全であるように同じく完全であること、を切望する。そして、そのような達成は、結局「宇宙は本当に父親のようである」が故に可能なのである。

5. 父親らしく、兄弟らしい愛

140:5.1 (1573.3) 山上の説教に始まり最後の晩餐の講話まで、イエスは、追随者に兄弟の愛よりむしろ父親らしい愛を表明することを教えた。兄弟愛は、自分自身を愛するように隣人を愛するであろうし、それは、「黄金律」の適切な遂行となる。しかし、父親らしい愛情は、イエスがあなたを愛するようにあなたが仲間の人間を愛することを要求する。

140:5.2 (1573.4) イエスは二元的な愛情で人類を愛する。二つの人格—人間であり神である—として地球に住んでいた。かれは、神の息子として、父性愛をもって人を愛する—かれは、人の創造者であり、宇宙の父である。人の子の息子として、イエスは兄弟として死すべき者を愛する—かれは、実に人間の人であった。

140:5.3 (1573.5) イエスは、追随者に兄弟愛の不可能な顕現を達成することを期待はしなかったが、神に似るように努力すること—天の父が完全であるように完全であること—を実に期待し、神が彼の創造物を見るように、彼らが人を見始めることができ、それにより、神が彼らを愛するように人を愛し始めることができるようにということ。12人の使徒へのこれらの勧告の中で、イエスは、多数の環境社会的な調整をするに当たり、ある種の感情的な態度に関連して父性愛のこの新概念を明らかにしようとした。

140:5.4 (1573.6) あるじは、単なる兄弟愛の限界に対比させて、父性愛に関する卓越し、かつ至高の反応の次の４項の描

写への前触れとして、4種類の信仰態度への注意を促すことによりこの重要な講話を紹介した。

140:5.5 (1573.7) 彼はまず、精神的に自信のない、正義に飢えた、素直に忍従している者、そして心の純粋である者について話した。そんな精霊明察の死すべき者は、父のような愛情の驚くべき威力を奮うことができるほどに神の無我のそのような段階に達することが期待できる。嘆き悲しむ状態にあってでさえ、かれらは、慈悲を示し、平和を促進し、迫害に耐える力を与えられ、そして、これらの苦しい状況のすべてを通して、父性愛で魅力のない人間さえ愛するであろうということ。父の愛情は、兄弟の愛情を測り知れないほど超える献身の段階に到達することができる。

140:5.6 (1573.8) 信仰とこれらの至福の愛は、徳性を強化し幸福を生む。恐れと怒りは、品格を弱め、幸福を破壊する。この重大な説教は、幸福の主題で始まった。

140:5.7 (1573.9) 1.「心貧しき者—へりくだる者—は、幸いである。」子供にとり、幸せは、即座の快楽の熱望を満たすことである。大人は、増大された幸せのその後に収穫す

るために自制の種子をまくことを望む。イエスの時代とその後ずっと、幸せは、あまりにも頻繁に富の所有の考えに関連づけられてきた。寺院で祈るパリサイ人と居酒屋の主の話では、一人は精神が豊かであると感じた—利己的。他方は、「心が貧しい」と感じた— 謙虚。一人は自給自足していた。もう一方は教えやすく、また真実を求めていた。心の貧しい者は、精神的な豊かさの目標を—神を—捜し求める。。そして、そのような真実探求者は、遠い将来に報酬を待つ必要はない。報酬は、いま与えられる。かれらは、自身の心の中に天の王国を見つけ、いまそのような幸せを経験する。

140:5.8 (1574.1) 2.「義に飢え渇く者は幸いである。満たされるであろうから」。精霊的に貧しいと感じる者だけは、つねに正義を切望するであろう。謙虚な者だけは、精霊のの強さを捜し求め、精霊的な力を切望するのである。だが、精霊的な資質への自己の欲望増進のために故意に精霊的な断食に従事することは、最も危険である。肉体的断食は4、5日後には危険に陥る。人は、食物に対するすべての欲求を失う傾向がある。長期の断食は、肉体的にせよ、精神的にせよ、飢えを破壊する傾向がある。

140:5.9 (1574.2) 体験的正しさは、義務ではなく、喜びである。イエスの正しさは、動的な愛—父親らしい、兄弟らしい愛情—である。それは、否定でも、汝してはならぬ型の正義でもない。人はどうして何か否定的なこと—何か「しない」こと—を切望できようか。

140:5.10 (1574.3) この最初の２つの至福を子供の心に教えることは、それほど簡単ではないが、成熟した心は、その意味を理解すべきである。

140:5.11 (1574.4) 3.「柔和な者は幸いである。地を相続するであろうから。」真に柔和な者は、恐怖とは関係がない。それはむしろ神との人の協力の態度である—「あなたの意志は為される。」それは忍耐と慎みを迎え入れ、合法的、友好的宇宙への固い信頼によって動機づけられる。それは神の導きに対して反逆するすべての誘惑を支配する。イエスは、ユランチアの理想的に柔和な男性であり、広大な宇宙を引き継いだ。

140:5.12 (1574.5) 4.「心の清い者は幸いである。神を見るであろうから。」精神の純度は、否定的な性質がない、疑念と報復を欠くということ以外に。純粋さについて議論する

際、イエスは、人間の性に対する態度に対処つもりは全くなかった。かれは、人がその仲間である人間に持つべき信頼についてより多く言及した。親が子に抱く信頼、そしてその信頼は、父親が彼らを愛するように、人に仲間を愛することを可能にするということ。父性愛は、甘やかす必要はなく、悪を容赦せず、それでいて常に反冷笑的である。父性愛には、単一目的があり、いつも人にとっての最善を探す。これこそが、本当の親の態度である。

140:5.13 (1574.6) 神を見るということ—信仰により—は、本当の精神的な洞察力を取得することを意味する。そして、精神的な洞察力は、調整者の指導を強化し、これらは結局、神-意識を増大させる。そして、父を知るとき、人は、神性の息子の資格への自信が確実となり、単なる兄弟としてではなく—兄弟愛で—しかし、同時に父親として—父親らしい愛情で—生身の兄弟のそれぞれをますます愛すことができる。

140:5.14 (1574.7) 子供にさえこの注意を教えることは、簡単である。子供は自然に人を信じており、そこで両親は、子

供がその素朴な信頼を失わないようにしなければならず、子供を扱う際に、すべてのごまかしを避け、疑念の暗示を差し控えるべきである。彼らが、自身の英雄を選び、彼ら自身の一生の仕事を選択するのを賢明に助けよ。

140:5.15 (1574.8) そして、イエスは、奮闘している人間のすべての闘いの主要な目的の理解—完全性—神性到達さえも、に関し追随者に教授し続けた。かれは、つねに彼らに訓戒した。「完全でありなさい。天の父が完全であるように。」かれは、12人に、彼ら自身を愛すると同じように隣人を愛するようには勧めなかった。それは、価値ある達成となったではあろうが。それは、兄弟愛の成就を示すことになったであろうが。かれは、むしろ、自分が使徒達を愛したように人々を愛するように—兄弟らしい愛情だけでなく父親らしく愛すること—訓戒した。そして、かれは、父性愛の4 つの最高の反応を指し示してこれを説明した。

140:5.16 (1575.1) 1.「悲しむ者達は、幸いである。慰められるであろうから。」いわゆる常識、あるいは最善の論理は、幸福が悲しみから得られるとは決して示唆しない。しか

し、イエスは、外面の、または、これみよがしの悲しみについて言及はしなかった。かれは、思いやりの感情的な態度について触れた。優しさを表したり、あるいは心情的感覚や肉体的な苦しみの形跡を示すことは男らしくないと少年や青年に教えることは、重大な誤りである。同情は、女性と同様に男性にとっても立派な属性である。男らしくあるために、無感覚である必要はない。これは勇敢な人間を形成するには間違った方法である。世界の偉人は、嘆くことを恐れなかった。モーシェ、嘆く者は、シムソンやゴリアテよりも偉大な男性であった。モーシェは、ずば抜けた指導者であったが、素直な男性でもあった。人間の必要性に対して感じ易く敏感な反応を示すことは、本物で長続きする幸福を生み出す一方、そのような親切な態度は、怒り、憎しみ、猜疑の破壊的な影響から精神を保護する。

140:5.17 (1575.2) 2.「哀れみ深い者達は、幸いである。哀れみを受けるであろうから。」ここでいう哀れみとは、真の友情の高さ、深さ、幅—慈愛—を意味する。哀れみは、時折受け身であるかもしれないが、ここでは、それは活発で豪快—最高の父親らしさ—である。愛する親は、

何回であろうとも、子供を許すことにほとんど困難を感じない。そして、甘やかされていない子供においては、苦しみを和らげようとする衝動は、自然である。実際の状況を評価するに十分の年齢に達しているとき、子供は、通常親切で、同情的である。

140:5.18 (1575.3) 3.「平和を作る者は幸いである。神の子と呼ばれるであろうから」イエスの聴衆は、平和を作る者ではなく、軍事的救出を切望していた。しかし、イエスの平和は、穏やかで否定的な種類のものではない。裁判と迫害をものともせず、かれは、「あなた方に私の平安を残して行く」と、言った。「心を煩わさせてはいけない、恐れさせてもいけない。」これは、破壊的な闘争を防ぐ平和である。個人の平和は、人格を統合する。社会的平和は、恐怖、欲深さ、怒りを防ぐ。政治的平和は、民族対立、国家間の不信感と戦争を防ぐ。和平、は不信と疑心の治療である。

140:5.19 (1575.4) 子供は、調停者として機能することを容易に教えることができる。かれ等は、集団活動を楽しむ。一緒に遊ぶことを好む。あるじは別の機会に言った。「自

分の命を救うものは誰でもそれを失うが、自分の命を失うものは誰でも、それを見つけるであろう。」

140:5.20 (1575.5) 4.「義のために迫害される者は幸いである。天の王国は彼等のものであるから。罵られ迫害され、ありもしない事で悪口雑言を言われるときそなた等は幸いである。喜び、殊のほか、喜びなさい。天におけるそなた等の報いは大きいのであるから。」

140:5.21 (1575.6) 非常に多くの場合、迫害は平和に続く。しかし、若者と勇敢な大人は、困難、または危険を決して避けない。「友のために命を捨てる者の愛ほど大きい愛はない。」そして、父性愛は、自在にこれらすべてのことが—兄弟愛がほとんど成就できない事柄をが—できる。そして、進歩は、常に迫害の最終的な報いであった。

140:5.22 (1575.7) 子供は、いつも勇気の挑戦に応じる。青春期は、いつも「挑戦に応じる」気がある。そして、あらゆる子供は、犠牲について早くに学ばなければならない。

140:5.23 (1575.8) 従って、説教の至福についての山上の説教は、法—倫理と義務—についてではなく、信仰と愛についてであるということが明らかにされる。

140:5.24 (1575.9) 父性愛は、悪に対する善の報い—不正に報いる善行—を満悦する

6. 聖別式の晩

140:6.1 (1576.1) 日曜日の夕方、カペルナムの北の高地からゼベダイの家に着くと、イエスと12 人は、簡単な食事を相伴した。その後、イエスは海岸沿いに散歩に行ったが、12 人は仲間同志で話した。短い会議の後、双子が暖と灯りをとるために小さな火を起こす一方、アンドレアスは、イエスを探しに出かけた。彼に追いついたとき、言った。「あるじさま、仲間は、王国についてあなたの言ったことを理解することができません。あなたが、さらに指示を与えてくれるまでこの仕事を始めることができないと感じています。庭で我々に合流し、我々があなたの言葉の意味の理解できる助けをお願いしに参りました。」そこで、イエスは、使徒に会うためにアンドレアスと一緒に行った。

140:6.2 (1576.2) 庭に入ると、かれは、自分の周りに使徒を集め、さらに教えて次のように言った。「新しい教えを直接古い教えの上に建てようとするから私の趣意の受け入れが難しいのであるが、私は、そなた等は生まれ変わらなければならないと断言する。そなた等は、幼子として新たに出直し、進んで私の教えを信じ、神を信じなければならない。王国の新しい福音を現状に従わせることはできない。そなた等は、人の息子と地上でのその使命について考え違いをしている。だが、法と予言者を除外するために私が来たと思い誤ってはならない。私は破壊するためにではなく、成し遂げ、拡大し、照らすために来たのである。法に背くためにではなく、むしろこれらの新しい戒律をそなた等の心の平板に記しに来たのである。

140:6.3 (1576.3) 施し、祈り、断食によって父の恩恵を得ようとする人々の正義を上回る正義をそなた等に要求する。王国に入ろうとするならば、愛、慈悲、真実からの正義—天の父の意志を為すという心からの願望—をもたねばならぬ。」

140:6.4 (1576.4) その時、サイモン・ペトロスが、「あるじさま、あなたに新たな戒律があるならば、私達はそれを聞きたいのです。新たな道を示してください」と言った。イエスはペトロスに答えた。そなた等は、「法を教える人々が、『殺すな。殺す者は誰でも裁判を受けねばならぬ』と言うのは聞いているところである。しかし、私は、動機を見つけるために行為以上のものを見る。兄弟に立腹する者は誰でも、厳しい非難の危険にさらされていると断言する。心に憎しみを抱き、心で復讐を企む者は、裁決の危険性に立つ。そなた等は、仲間をその行為によって判断しなければならない。天の父は、人の意図によって判断する。

140:6.5 (1576.5) 「そなた等は、法の教師達が、『姦淫するな』と言うのは聞いているところである。しかし、私は、色欲の意図をもって女性を見る者は、すべてその心の中ではすでに姦淫を犯したと伝えておく。そなた等は、その行為によって人を判断することができるだけであるが、父は、その子供等の心の中を見て、慈悲をもって、彼らの意図と本当の願望に相応して裁く。」

140:6.6 (1576.6) イエスは、他の戒律について議論し続ける気でいたが、ジェームス・ゼベダイが遮って尋ねた。「あるじさま、離婚に関しては何を人々に教えましょうか。モーシェが指示したように、我々は男性に妻との離婚を許しましょうか。」この質問を耳にしたイエスが言った。「私は法を制定するためにではなく、教化するために来た。この世の王国を改革するためにではなく、天の王国を樹立しに来たのである。私が、今日は良いかもしれないが、他の時代の社会には当て嵌まらなくなるであろう政治、通商、社会的行動の規則をそなた等に教える誘惑に負けることは、父の意志ではない。私は、単に心を安らげ、精神を解放し、魂を救うためだけに地上にいるのである。しかし、この離婚の質問に関して、モーシェは、そのようなことを支持したが、アダムの時代やその園ではそうではなかったと、私は言っておく。」

140:6.7 (1577.1) 使徒が短い時間話した後、イエスは続けた。「つねに、全ての人間の行為に関し2　つの視点—人と神、肉体の道と精神の道、時間の評価、推定と永遠での視点—を認めなければならない。」教えられたすべてを

理解できたというわけではなかったが、12人は、実際この教授に助けられた。

140:6.8 (1577.2) 次に、イエスが言った。「しかし、そなた等は、文字通りに私の教えを解釈し慣れているので、私の教えに躓くであろう。そなた等、私の教えの精神を悟るのに時間がかかる。そなた等は、私の使者であるということを再度思い出さなければならない。私が精神で生きたように、そなた等も生きる恩顧を被っている。そなた等は私の個人的、人格代表である。しかし、すべての人が、あらゆる事項について、そなた等がするように生きると期待する間違いを犯してはいけない。また、私がこの群れに属さない羊を連れているということ、また、私が必滅の性質の人生を送る間、その終わりまで、神の意志を為す様式を彼等に提供しなければならいという恩義を受けているということを覚えていなければならない。」

140:6.9 (1577.3) その時、ナザニエルが尋ねた。「あるじさま、正義に場所を与えないのでしょうか。」モーシェの法は、『目には目を、歯には歯を』とあります。「私達は何

と言いましょうか。」そこで、イエスが答えた。「悪を善で迎えるべきである。我が使者は、人と争うことなく、すべてに穏やかでなければならない。仕返しがそなたらのやり方であってはいけない。人間の支配者は、そのような法を持つかもしれないが、王国ではそうではない。慈悲は、いつも人の判断の基盤となり、また人の行為を好む。そして、これらが困難に聞こえるなら、そなた等は、今でも、折り返すことができるのである。使徒の資格の必要条件が難し過ぎると思うならば、そなた等は、それほど厳しくない弟子の身分の小道に戻ることができるのである。」

140:6.10 (1577.4) 驚くべきこれらの言葉を聞き、使徒達は、しばらく退いていたがすぐに戻り、ペトロスが、言った。「あるじさま、私達はあなたと続けます。我々1 人として折り返しはいたしません。特別、追加価格を払う用意が完全にできています。杯を飲みほします。単に弟子ではなく、使徒になります。」

140:6.11 (1577.5) イエスはこれを聞いて言った。「では、よろこんで自分の責任を引き受け、私についてきなさい。秘か

に善行を施しなさい。施しをするとき、右手がすることを左手に分からせてはいけない。そして、祈るときは一人になり、無駄な反復と無意味な句を用いてはならない。尋ねる前に、すでに父は、そなたが必要とすることを知っていることを必ず思い出しなさい。そして、人に見られるための悲しい相貌で、断食しがちになってはならない。選ばれた使徒として、今、王国の奉仕に赴き、地球で自分のための宝物を貯えず、しかも、寡欲な奉仕による、天での自分のための宝物を蓄えなさい。何故ならそこにそなた等の宝物があり、また、そこに、そなた達の心があるのであるから。

140:6.12 (1577.6) 肉体の明かりは目である。したがって、目が寛大であるならば、全身は光に溢れるであろう。しかし、目が利己的であるならば、全身は暗闇に満ちるであろう。自身のその明かりそのものが闇に向けられるとならば、その暗闇はどれほどのものであることか。」

140:6.13 (1577.7) そこでトーマスが、自分達は「すべてを共用し続ける」べきであるかどうかを尋ねた。あるじは、「そうだよ。我々同胞は、理解し合う1つの家族として共存

すべきである。そなた等には大きな仕事が任されている。だから、私はそなた等の全面的な奉仕を切望する。それがよく言われてきたことは知っているであろう。『人は2 人の主人に仕えることはできない。』人は、心から神を崇拝し、また同時に、心から富の神に仕えることはできない。王国の仕事で無条件に徴募した今、命を危ぶむではない。まして、何を食べ、何を飲むべきか心配するな。また、身体にこだわるな。いかなる衣を身に纏うべきかを。既に、進んでしようとする手とひたむきな心は空腹にならないということを学んだではないか。さて、活力のすべてを王国の仕事に捧げる準備をするとき、父がそなた等の需要に無頓着でないということを確信せよ。まず神の王国を求めなさい。そうすればその入り口を見つけたとき、そなたには、すべての必要なものが与えられるであろう。したがって、明日のことを過度に心配するでない。1 日の苦労は、その日1 日で十分である。」

140:6.14 (1578.1) かれらが、質問するために徹夜をする気でいるのを見ると、イエスは言った。「同胞よ、そなた等は土製の船である。翌日の仕事ができるように、休息する

のが最良である。」しかし、睡眠は彼らの目から去っていた。ペトロスは、「ほんの少し個人的な話があります。」とあるじの要請に相対して言った。「同胞に秘密にしたいというわけではないのですが、心が煩わされているのです。おそらく、もしあるじさまからの叱責に値するならば、　二人きりのほうがそれに耐えられるでしょうから。」そこで、家へと先導し「ペトロス、共に来なさい。」と、イエスが言った。ペトロスが、あるじの元から戻ると、大いに元気づき励まされており、ジェームスは、イエスに話しに行くと決めた。そこで、早朝の数時間まで、他の使徒達は、あるじと話すために一人つずつ入っていった。寝入ってしまった双子を除き、皆が個人的な相談をしたとき、アンドレアスが入っていってイエスに言った。「あるじさま、双子は庭の火の側で寝入ってしまいました。二人が話したいかどうか尋ねるために起こしましょうか。」そこでイエスは、「二人は大丈夫である。煩わすでない」と、微笑んで言った。その時、夜は明けようとしていた。明くる日の陽光が差すところであった。

7. 聖別式の翌週

140:7.1 (1578.2) 数時間の睡眠後、12人がイエスとの遅い朝食に集められたときかれは、「今や、そなた等は、喜ばしい知らせを説いて、信者を導く仕事を始めなければならない。エルサレムに行く用意をせよ。」と言った。イエスが話した後、トーマスは、勇気を奮い起こして言った。「今、仕事を始める準備ができていなければならないと、あるじさま、分かってはおりますが、私は、我々が、この大きな仕事をまだ実行にうつすことができないと恐れるのであります。王国の仕事を始める前に、あと数日このあたりでの滞在に同意してください。」イエスは、使徒のすべてがこの同じ恐怖に襲われているのを見て言った。「要求通りになる。我々は安息日が終わるまで、ここに留まろう。」

140:7.2 (1578.3) 数週間、熱心な真実探求者の小さな幾つかの集団は、好奇心の強い観衆とイエスに会いにベスサイダにてい来た。すでに、イエスに関する話は田舎にまで広がっていた。詮索好きな者達は、テュロス、シドーン、ダマスカス、ケーサレーア、エルサレムの遠くの都市からやって来た。イエスは、これまで、このような人々に挨拶して、王国に関して教えてきたのだが、そのときある

じは、この仕事を12　人に任せた。アンドレアスは、使徒の一人を選び、訪問者の一集団に割り当てるのであるが、時には12人全員が同じように従事した。

140:7.3 (1578.4) かれらは、日中は教え、夜遅く個人的な談合をもち、2日間働いた。3日目、「釣りをしに行くか、呑気な気分転換を探すか、あるいは、家族を訪問する」ようにと使徒を送り出し、イエスは、ゼベダイとサロメを訪ねた。木曜日、かれらは、更に3日間の教育に戻った。

140:7.4 (1578.5) この予行演習の週、イエスは、自分の地球での洗礼後の任務の2つの大きな動機について使徒に何度も繰り返した。

140:7.5 (1578.6) 1.父を人に明らかにすること。

140:7.6 (1578.7) 2. 人を息子としての自覚をもつように導くこと—いと高きものの子供であると信仰により気づかせること。

140:7.7 (1579.1) この様々な経験の1 週間は、12人に多くのことをもたらした。数人は、自信過剰になりさえした。最後の談合、安息日後の夜には、ペトロスとジェームスがイ

エスのところにやって来て、「準備ができています—すぐに、王国を手に入れに先へ進みましょう。」と言った。それに対し「皆の知恵が熱意に吊り合い、勇気が無知を埋め合わせられますように。」と、イエスが答えた。

140:7.8 (1579.2) 使徒達は、その教えの多くを理解しなかったが、彼がともに暮らした魅力的に美しい人生の意味は把握した。

8. 湖の木曜日の午後

140:8.1 (1579.3) イエスは、使徒達が自分の教えを完全には我がものにしていないことを心得ていた。かれは、ペトロス、ジェームス、ヨハネにいくらかの特別な教授を与えることに決め、かれらが、仲間の考えをはっきりさせてくれることを望んだ。かれは、12　人が精霊的な王国の理念に関するいくつかの特徴を理解している一方で、これらの新しい精霊の教えを直接ダーヴィドの王座の回復として天の王国、それに、地球での一時的威光としてのイスラエルの再建という古くて不動の文字通りの概念に縛りつけることに頑として固執するところを見た。従っ

て木曜日の午後、イエスは、王国の諸事について論議するために、ペトロス、ジェームス、ヨハネとボートで岸を離れた。これは、何十もの質問と答えを含む4 時間にわたる教育的会談であり、サイモン・ペトロスが、翌朝、弟アンドレアスに与えたこの重大な午後の概要を再編成してこの記録に載せることは、最も有益であるかもしれない。

140:8.2 (1579.4) 1. 父の意志を為すこと。天の父の上からの加護に対する信頼というイエスの教えは、盲目かつ受動的な運命論ではなかった。この午後、かれは、是認して古いヘブライの諺から引用した。「働かざる者食うべからず。」かれは、自己の教えの十分な評釈として自身の経験を指し示した。父を信じることについての彼の教訓は、現代、または、いかなる他の時代の社会的、経済的状況によって判断されてはならない。彼の教授は、すべての時代、すべての世界で神に近く生きるための理想的な原則を包含している。

140:8.3 (1579.5) イエスは、3 人に使徒と弟子との責務の違いを明らかにした。そして、その時でさえ、12　人の思慮分

別と将来への思慮の行使を禁じなかった。彼が説教したことは、先見に対してではなく、憂慮、つまり思い悩みに対してであった。かれは、積極的で注意深い神の意志への服従を教えた。倹約と節約に関する彼らの質問の多くに答えて、単に大工、船大工、漁師としての自己の人生、それと12　　人の彼の慎重な組織に注意を向けさせた。かれは、世界は敵として見なされるべきでないということを明らかにしようとした。人生の情況は、神の子供と神の摂理の一緒の働きが構成要素となるということを。

140:8.4 (1579.6) イエスは、自身の無抵抗の個人の習慣を彼らに理解させることに大いに苦労した。かれは、身を守ることを断固として拒否した。そして、自分達がその同じ方針を取れば、イエスが喜ぶように使徒達には見えた。悪へ抵抗、不正、そして傷害と戦わないように教えたのであり、悪行への受動的寛容を教えたのではなかった。また、この午後、悪人と犯罪者に対する社会的刑罰に賛成すること、そして民間政府が、社会秩序の維持と正義の遂行において時には力を用いなければならないということを明らかにした。

140:8.5 (1579.7) かれは、弟子に報復の悪習について警告することを決してやめなかった。かれは、復讐、すなわち報復観念を容認しなかった。かれは、恨みを抱くことを嘆いた。かれは、目には目を、歯には歯の考えを禁じた。これらの事柄は民間政府に帰するものとする一方、もう片方では神の判断に帰するものとしつつ、私的一身上の報復の考え全体には賛成しなかった。彼の教えは、国家にではなく、個人に適用されるのだと3 人に断言した。これらの問題に関し、その時までの彼の教授を以下のようにまとめた。

140:8.6 (1580.1) 敵を愛せよ—人間の兄弟愛の道徳的な主張を銘記せよ。

140:8.7 (1580.2) 悪の無益さ:悪、誤りは復讐によっては正されない。敵と同じ手段による悪との戦いの過ちを犯すな。

140:8.8 (1580.3) 信仰を持て—神の正義と永遠の善の最終的勝利への確信

140:8.9 (1580.4) 2. 政治的な態度。かれは、ユダヤ民族とローマ政府間にその時存在していた張りつめた関係に関して、

発言において使徒が慎重であるようにと警告した。かれは、彼等がこれらの困難にどんな形であれ、巻き込まれることをを禁じた。イエスは、常に敵の政治てき罠を避けることに慎重であり、いつも応えて「ケーサーのものはケーサーに、神のものは神に返しなさい。」と言った。かれは、救済の新しい方法を確立する任務から注意をそらすことを拒否した。かれは、他の何事にも関知、心配しようとしなかった。かれは、個人生活において、いつもすべての市民の法と規則をよく守り、公へのすべての自分の教えにおいては、市民、社会、経済の領域を無視した。かれは、人の内面と個人的精霊的な生活の原則だけに関心があるのだと3人の使徒に話した。

140:8.10 (1580.5) イエスは、従って、政治的な改革者ではなかった。かれは、世界の再編成に来たのではなかった。もし彼がこれを行なっていたとしても、それは、その時代と世代だけに通用したであろう。にもかかわらず、かれは、最善の人生の道を人に示したし、いかなる世代も、イエスの人生をそれ自身の問題に最もよく適応させる方法を発見する努力からは免除さてはいない。しかし、イエスの教えをいかなる政治の、または経済の理論とも社

会的、または産業体制とも同一視する誤りを決して犯してはならない。

140:8.11 (1580.6) 3. 社会的な態度。ユダヤ人の律法学者は、長い間、この問いについて論じ合ってきた。隣人とはだれであるのか。イエスは、能動的、自発的な親切、つまり仲間へ向ける愛というものが、本物であるので、隣人というものが全世界を包含し、その結果、すべての人間を隣人へと発展する愛の考えを示しに来た。このすべてにも関わらず、イエスは、集団にではなく、個人だけに興味を持っていた。社会学者ではなかったが、イエスは、利己的な孤立のすべての形を破壊するために努めた。かれは、純粋な共感、同情を教えた。ネバドンのマイケルは、慈悲に支配された、主動の息子である。同情は、まさしく彼の本質である。

140:8.12 (1580.7) あるじは、人は、決して友人を食事に招くべきではないとは言わなかったが、追随者には貧乏人と恵まれない者に馳走を設けるべきであると言った。イエスには安定した正義感があったし、それは、つねに慈悲で緩和された。かれは、使徒に、社会的寄生体、あるいは

専門の施し探求者に強要されることを教えなかった。彼がしてきた社会学的表明に最も近いものは、「人を裁くな。自分が裁かれないためである。」と言ったことである。

140:8.13 (1580.8) 無差別の親切心は、多くの社会的弊害で非難されるかもしれないことを明らかにした。イエスは、使徒の基金が自分の要求、あるいは、使徒の2 人の共同陳情による以外は、施しものとして配られないということをはっきりとユダに翌日指示した。このすべての事柄に関し、いつも「蛇と同じくらい賢明であるが、鳩と同じくらい無害であれ。」と言うのが、イエスの習慣であった。すべての社会的状況における忍耐、寛容、許しを教えることが、彼の意図のように見えた。

140:8.14 (1581.1) イエスの人生哲学において、家族というものがまさにその中心を占有した—ここと、そしてこの後。かれは、ユダヤ人の先祖への過剰敬意の傾向を修正しようとする一方、家族の上に神に関する自分の教えの基礎を形成した。かれは、家族生活を最も高い人間の義務として褒めはしたが、家族関係が宗教義務を妨げてはなら

ないことを明瞭にした。かれは、家族が一時的組織であるという事実に注意を促した。それは死を生き残らないということ。イエスは、家族が父の意志に反したとき、自分の家族を諦めることを躊躇わなかった。より新しく、より大きな人間の兄弟関係—神の息子達—を教えた。イエスの時代、パレスチナとローマ帝国での離婚の慣習は、緩いものであった。かれは、結婚と離婚に関する法の制定を繰り返し拒否したが、初期の支持者の多くは、離婚に関する強い意見を持ち、その意見がイエスによるものだとすることをを躊躇しなかった。ヨハネ・マークを除く新約聖書の著者は全員、離婚に関するこのより厳しく進歩的な考えに固執した。

140:8.15 (1581.2) 4. 経済的態度。イエスは、世界を見つけた通りにこの世界で、働き、住み、商いをした。かれは、経済改革者ではなかったが、富の不平等な分配の不正にしばしば注意を促した。しかし、かれは、救済のいかなる提案も申し出なかった。使徒は、財産を持たないことになってはいたが、富と財産に対してではなく、単にその不平等で不公平な分配に対して説教しているのだということを3 人に明確にした。かれは、社会的正義と産業的公

正さの必要を認めたが、その達成に対して何の規則も提供しなかった。

140:8.16 (1581.3) かれは、支持者に現世での所有、財産を避けることを決して教えず、12人の使徒だけに教えた。医者のルカスは、社会的平等の強い信奉者であり、イエスの言葉を自己の個人的信念と調和させて、解釈のために多くのことをした。イエスは、支持者に生活の共同様式を採用するように決して個人的に命じなかった。かれは、そのような事柄に関していかなる種類の表明もしなかった。

140:8.17 (1581.4) イエスは、「人の幸せは、物質的所有の豊富さにあるのではない」と断言し、聴取者に慾深さについて頻繁に警告した。かれは、「人が全世界を得ても、自身の魂を失うならば、何の徳になろうか。」と絶えず繰り返した。財産所有へのいかなる直接攻撃もしなかったが、かれは、まず精神的な価値の優先が、永遠に重要であると主張した。後の教えの中では、公への奉仕の過程において提示した多数の寓話を語ることにより、ユランチアの数多くの誤った人生観を修正しようとした。イエ

スは、決して経済理論を定式化するつもりはなかった。各時代が既存の問題のためにそれ自体の改善措置を発展しなければならないことを、かれはよく知っていた。そして、今日もしイエスが、地球にいたならば、生身の姿で生活していたならば、かれは、現代の政治的、社会的、あるいは経済的論争のいずれにも肩入れしないであろうから、単純にこの理由のために、大方の善男善女にとっては大きな失望となるであろう。純粋に人間の問題の解決のために、幾重にもより有能にするためにあなたの内側の精霊的な人生を完成する方法をあなたに教える一方で、かれは、壮大なまでに超然と離れたままでいるであろう。

140:8.18 (1581.5) イエスは、すべての人間を神のように作りかえ、次に、これらの神の息子が、政治、社会、経済問題を解決する間、同情して傍観しているのである。彼が公然と批難したのは富ではなく、富がその熱愛者の大多数にもたらす事柄であった。この木曜日の午後、イエスは最初に、「受けるより与える方が幸いである。」と仲間に話した。

140:8.19 (1581.6) 5. 個人的宗教。使徒がしたように、イエスの人生によるその教えをより理解すべきである。イエスは、ユランチアで完成された生活を送った。そしてイエスの人生がその直接の背景上に思い描かれるとき、彼の独自の教えを理解することができる。12　人への教訓でも、あるいは民衆への説教でもなく、彼の人生というものが父の神の性格と愛する人格を明らかにすることにおいて最も手助けとなるであろう。

140:8.20 (1582.1) イエスは、ヘブライの予言者やギリシアの道徳家達の教えを攻撃しなかった。あるじは、これらの偉大な教師達が表した多くの良いことを認めたが、追加する何かを、「神の意志への人間の意志の自発的服従」を教えるために地球に降りて来た。イエスは、単に宗教人、完全に宗教感情に捕らわれた、そして、精神的衝動によってのみ動機づけられた人間というものの産出を欲したのではなかった。ほんの1 目だけ彼を見ることが出来たら、イエスがこの世の物事に関してかなりの経験をもつ真の人間であることを知ることができたのだが。イエスの教えはこの点で甚だしく曲解され、西暦の何世紀にもわたり長い間相当に誤り伝えられている。また、人

はあるじの従順さと謙虚さについて歪んだ考えを保持してきた。彼が人生で意図したことはずば抜けた自尊心であったように見える。彼は、本当に発揚するためにへりくだることを人に教えただけである。彼が本当に意図したことは、神へ対しての真の謙虚さであった。誠意--純粋な心、に大いなる価値を置いた。誠実さは彼の性格評価において主徳であり、勇気は彼の教えのまさしくその中心であった。「恐れるな」は　、彼の合言葉であり、我慢強い忍耐は性格の強さにおける彼の理想であった。イエスの教えは武勇、勇気、英雄精神の宗教を構成する。そして、まさしくこれが、自分の個人的な代表としてその大半が粗野で、力強い、男々しい漁師である12人の平凡な男性を選んだ理由である。

140:8.21　(1582.2)　イエスは彼の時代の社会的悪に関して言うことはあまりなかった。滅多に、道徳的過失についての言及をしなかった。真の美徳の積極的な教師であった。教育の否定的方法を慎重に避けた。悪の宣伝を拒否した。道徳改革者でさえなかった。人類の官能的衝動が、宗教的戒めでも法的禁止でも抑圧されないということをよく知っていたので、そのように使徒達に教えた。彼の数少

ない告発は主に自尊心、残酷さ、圧迫、偽善に対して向けられた。

140:8.22 (1582.3) イエスはヨハネのようにはパリサイ人さえ激しく糾弾しなかった。心の直ぐい多くの筆記者やパリサイ人を彼は知っていた。彼らが宗教伝統への束縛の俘になっていることを理解した。イエスは、「最初に、木を良くすること」を、大いに強調した。あるわずかな特別の美徳だけでなく、イエスは一生涯を評価するということで3 人を強く印象づけた。

140:8.23 (1582.4) ヨハネがこの日の教えから1 つ得たことは、イエスの宗教の中心は、天の父の意志をする動機づけられた人格と結び合わされた情け深い性格の習得にあるいうことであった。

140:8.24 (1582.5) ペトロスは、自分達が宣言しようとしていた福音は、人類全体のための誠に新鮮な始まりであるという考えを理解した。彼は後にこの印象をポールに伝え、ポールは、そこから「第2 のアダム」として彼のキリストの主義を明確に述べた。

140:8.25 (1582.6) ジェームスは、イエスが地球の自分の子供等がまるで既に完成した天の王国の市民であるかのように生きることを望んでいるという心踊る真実を理解した。

140:8.26 (1582.7) 人は異なることを理解していたので、イエスは使徒達にそう教えた。何らかの固定した様式に弟子や信者達を形づくろうとするのを控えるよう彼等に絶えず勧めた。彼は、神の前で完成していく、そして別々の個人で展開するそれぞれの魂をそれ自身の道で成長させようとした。ペトロスの多くの質問の1つに答えてあるじは言った。「幼い子供として新たでより良い人生に改めて出発できるように人を自由にしたい。」イエスは、真の善は無意識であらねばならない、慈善を施す際右手のすることを左手に知らせることのないようにと常に主張した。

140:8.27 (1583.1) この午後、あるじの宗教が精神的自省のための何の用意もしないと気づいたとき、3 人の使徒は驚いた。イエスの前後の時代の全ての宗教は、キリスト教でさえ、慎重に良心的自省をもたらす。だが、ナザレのイエスの宗教はそうではない。イエスの人生哲学は、宗教

内省なしなのである。大工の息子は、性格作りをついぞ教えなかった。天の王国は芥子菜の種子に似ていると宣言し、性格の成長を教えた。だが、イエスは、思いあがりの我質の防止として自己分析を禁止する何も言わなかった。

140:8.28 (1583.2) 王国に入る権利は、信仰、個人的な信念を条件とする。王国の進展的上昇に残るためには、すなわち、高価な真珠を得ることは、人の持つすべてを売って得るということである。

140:8.29 (1583.3) イエスの教えは、皆のための、ただ単に病弱者や奴隷のためではない、宗教である。彼の宗教は、(彼の滞在期間中)決して教義や神学の法に具体化しなかった。彼は後に1 行の文章といえども残さなかった。全世界の全ての時代の霊的な指導と道徳的な教育に適した霊感的、理想主義的な遺産として彼の人生と教えが宇宙に遺贈された。今日でさえすべての宗教、それらの1つ1つが生きる望みではあるが、イエスの教育はそういうものとは差違がある。

140:8.30 (1583.4) 宗教が人の唯一のこの世での追求であるとは使徒達に教えなかった。それは神に仕えるユダヤ人の考えであった。しかし、彼は、宗教は12 人の専業であると主張した。イエスは、彼の信者達の本物の文化追求を妨げる何も教えなかった。エルサレムの伝統に縛られた宗教学校から逸らしただけである。彼は自由で、心が広く、博識で、寛大であった。彼の正しい生き方の哲学には自意識の強い敬虔さの存在すべき場所はなかった。

140:8.31 (1583.5) あるじは、自身の時代にも、またその後の時代にも宗教に無関係の問題にはどんな解決策も提供しなかった。イエスは永遠の現実に関する精神的な洞察を発展させ、生活の独創性における先導性を刺激することを願った。彼は、徹底的に人類の基礎をなす、永久的な精神の必要性に関与した。彼は、善が神と等しいことを明らかにした。彼は、愛—真実、美、善を高めた。—神の理想と永遠の現実として。

140:8.32 (1583.6) あるじは、人の中に新たな精神、新たな意志を創造しに来た。—真実を知るための、情けを経験するための、また、善を選ぶための新しい収容能力を与えに

—天の父が完全であるのと同じく、完全になるように永遠の衝動に結びつけられた、神の意志と和合するという意志。

9. 献身の日

140:9.1 (1583.7) 次の安息日、聖別をした高地に旅して戻りつつ、イエスは使徒達に専念した。そして、そこで激励のための長くて美しく感動的な自らの伝言の後で、12 人の厳粛な献身の行事に従事した。この安息日の午後、イエスは山の中腹で自分の周りに使徒を集め、この世にそれらを残すことを強制されるその日に備え、天の父の手に彼等を授与した。この折、新たな教えはなく、まさに歓談と親交だけであった。

140:9.2 (1584.1) イエスはこの同じ場所で伝えた聖別式の説教の多くの特徴を再検討し、自分の前に一人ずつ召喚しながら、自分の代表として世界へ前進することを委託した。あるじの奉納委託は次の通りであった。「全世界に進入し王国の喜ばしい知らせを説きなさい。精神の虜となっている者を解き放ち、圧迫されている者を慰め、苦しん

でいる者に力を貸しなさい。惜しげなく受け取ったのであるから惜しげなく与えなさい。」

140:9.3 (1584.2) イエスは、「労働者はその手間賃に値する。」と言い、金も余分な衣服も手に入れないよう忠告した。そして、最後に言った。「見よ、まるで狼の真只中にいる羊のようにお前達を送り出す。だから、蛇のように賢く鳩のように無害でありなさい。しかし、敵はユダヤの礼拝堂でそなた等を懲戒する傍ら、彼らの協議会にそなた等を呼び立てるので用心しなさい。この福音を信じるという理由で、知事と支配者の前に連れていかれるであろう。そして、彼等へのあなたのその供述こそが私にとっての目撃者になるだろう。彼らがあなたを判断に導くとき、何を言うべきか案ずるでない。我が父の霊があなたに宿っておりそのような時にはあなたを通して話すであろうから。そなた等の何人かは殺されるであろうし、地上の王国を設立する前に、この福音のために多くの民族に嫌われるであるろう。だが、恐れるでない。私が共にいるし、我が霊がそなた等が全世界に行くその前を行くのである。それに、あなたがまずユダヤ人、それから異

教人のところへ行く間、父の霊が共にとどまるであろう。」

140:9.4 (1584.3) そして、山から下りてくると、ゼベダイの家である自分達の家に戻っていった。

10. 奉納後の夜

140:10.1 (1584.4) 雨が降り始めていたのでその晩家での教えの中でイエスは、何をすべきか、何をすべきでないかを12人に示そうと長々と話した。彼らは正義に達する方法として確たる事を行なうことを課した宗教だけを知っていた—救済。しかし、イエスは、繰り返し言うのであった。「王国では仕事をするためには正しくあらねばならない。」「したがって、完全でありなさい。天のあなた方の父が完全であるように。」と何度も何度も繰り返した。あるじがずっと狼狽えている使徒達に説明していたことは、単に信じることにより、簡単で真摯な信頼により、世界にもたらされる救済というものを自分が持ってきたのだということであった。イエス曰く:「ヨハネは悔悟の洗礼、古い生き方に関する嘆きを説いた。そなた達は神との親交の洗礼を宣言するのである。そのような教

えを必要として立つ者等に悔悟を説きなさい。但し既に二心のない王国への入り口を探している者等には扉を大きく開き、神の息子等の喜ばしい親交に加わるよう命じなさい。」しかし、王国で信仰により公正であるということは、地球の人間の日常生活で正義の行ないが先行しなければならないということをこれらのガリラヤの漁師達を説得するのは難しい仕事であった。

140:10.2 (1584.5) 12 人を教えるこの仕事でのもう一つの大きな困難は、宗教真理の理想主義的で霊的な原則を高度に解釈し、個人的行為の具体的な規則にそれらを作り変えるという彼等の傾向であった。イエスは魂の姿勢である美しい精神を差し示すのであったが、彼らは、そのような教えを個人的な振舞いの規則に訳解すると言い張った。何回も、あるじの言ったことを確実に覚えようとするとき、彼が言わなかったことは忘れるの所かであった。しかし、教えたことは全て自身が実行したのでその教えを徐々に自分達のものとしていった。口頭教授から得られないことは、共に生活する中で次第に習得していった。

140:10.3 (1585.1) あるじが、広範囲の宇宙の各世界における各時代の各人のために霊的鼓吹の生活を送ることに従事していたのは、使徒には明らかではなかった。折々伝えたにもかかわらず、イエスがこの世だけでなく彼の広大な創造における他のすべての世界のために働いているという観念を使徒達は理解しなかった。イエスは、この世だけの男女のために人間生活の個人的な模範を設定するのではなく、むしろすべての世界のすべての人間のために高い精神的で鼓舞する理想を作成するためにユランチアで彼の肉体の姿の生活を送った。

140:10.4 (1585.2) この同じ夜トーマスがイエスに尋ねた。「あるじさま、父の王国への入場を獲得できる前に我々は幼い子供のようにならなければならないと言われ、その上偽の予言者に騙されず、豚の前に真珠を投げかける罪を犯すなとあなたは警告されました。今、私は正直なところ当惑しています。あなたの教えが理解できません。」イエスがトーマスに答えた。「どれだけ、あなたのことを耐え忍びましょうか。あなたは、いつも私が教える全てを文字通りに解釈したがる。王国に入る代価として幼い子供のようになるよう求めたとき、簡単に誤魔化された

り、　何でも喜んで信じる気持、あるいは見知らぬ者を信用する性急さに参照しなかった。説明から集約して欲しかったことは子と父の関係であった。そなたは子であり、またそなたが入ろうと探し求めるところはそちの父の王国である。すべての普通の子とその父の間には理解し情愛深い関係を保証し、父の愛と慈悲のために駆け引きをするすべての気質を排除するそんな自然な愛情がある。そして、あなたが説教に向かおうとしている福音はまさしくこの永遠の子と父の関係の信仰認識から成長する救済と関係がある。」

140:10.5 (1185.3) イエスの教えの1つの特徴は、彼の哲学の道徳性が個人と神との私的関係に基づくということであった。-まさしくこの子と父の関係。イエスは民族でも国家でもなく、個人を強調した。夕食をとる間、イエスはマシューとの話で、どんな行為の道徳性も個人の動機により判断されると説明した。イエスの道徳はいつも肯定的であった。イエスによって言い直される黄金律は能動的な社会接触を要求する。古い否定的規則は孤立して従うことができた。イエスは、すべての規則と儀式から道

徳を剥ぎ取り、それを霊的な考えと真に公正な生き方の威厳のある段階へと高めた。

140:10.6 (1585.4) イエスのこの新しい宗教は、 その実用的な含みがないわけではないが、実用的な政治上、社会上、あるいは経済上の価値の彼の教えに見られるものは何であろうとも、本物の個人的宗教経験の自然発生的な日々の仕事における精神の果実の表れとしてのこの内側の魂の経験の自然な働きなのである。

140:10.7 (1585.5) イエスとマシューが話し終えた後、サイモンゼローテースが、「しかし、あるじさま、すべての人間が神の息子なのですか」と尋ねた。そこで、イエスが答えた。「そうだよ、シーモン。すべての人間が神の息子である。そしてその良い知らせをそなたが宣言しにいこうとしている。」しかし、使徒達はそのような主義を理解することができなかった。それは新しくて、奇妙で、瞠目に値する発表であった。そして、彼等にこの真実を印象づけたいという願いのためにイエスは、追随者達に彼らの兄弟としてすべての人を扱うことを教えた。

140:10.8 (1585.6) アンドレアスの質問に対応し、あるじは彼が教える道徳は彼の生活宗教から不可分であると断言した。彼は人の性質というものに基づいて教えたのではなく、人の神への関係に基づいて道徳を教えた。

140:10.9 (1585.7) ヨハネは、「あるじさま、天の王国とは何ですか」とイエスに尋ねた。そこで、イエスが答えた:「天の王国はこれらの3つの基礎で成る。1番目、神の主権事実の認識； 2番目、神の息子の資格への真実への信念；3番目、神の意志を為すという最高の人間の望みの有効性への信頼--神に似るように。そして、これが福音に関する朗報である:信仰によりすべての死すべき者にはこれらの全ての救済の基礎が得られるということ。」

140:10.10 (1586.1) そして、今や待期の週は終わり、皆は翌日エルサレムに出発する準備をした。

論文 141
公のための仕事開始

141:0.1 (1587.1) 西暦27年1月19日、その週の最初の日、イエスと12 人の使徒は、ベスサイダ本部からの出発準備をした。４月に過ぎ越し祭りの饗宴の出席のため4 月にエル

サレムまで行く、そして、それはヨルダン渓谷経由の予定であるという以外、かれらは、あるじの計画について何も知らなかった。使徒の家族や弟子の中の幾人かが、別れを告げ、そして、皆が始めようとしている新しい仕事での成功を祈るためにやってきたので、正午近くまでゼベダイの家を出立しなかった。

141:0.2 (1587.2) 去る直前、あるじの行方が分からず、アンドレアスが探しに出かけた。短い探索の後、かれは、岸辺に座り涙しているイエスを見つけた。あるじが嘆き悲しんでいるように見えたり、重大な問題に没頭している瞬間を12　人はしばしば目にしてきたことだが、誰も、彼が泣くのを見たことはなかった。アンドレアスは、あるじがエルサレムへの出発の宵にこのように動じているのを見ていささか驚き、あえてイエスに近づいて尋ねた。「この素晴らしい日に、あるじさま、父の王国を宣言するためエルサレムに出発しようとする時に泣かれるのは何故ですか。我々の誰が怒らせたのですか。」イエスは、12　人と合流するためアンドレアスと戻りながら答えた。「君等の誰も私を悲しませてはいない。ただ父のヨセフの家族の誰も道中の安全を述べに来ることを忘れ

ていたのが悲しいだけだよ。」このとき、ルースは、ナザレの兄ヨセフを訪問中であった。家族の他の者は、傷ついた気持ちのせいで、誇り、失望、誤解、それに心の狭さからくる憤りに溺れ、遠ざかっていた。

1. ガリラヤを去る

141:1.1 (1587.3) カペルナムはティベリアスから遠くなく、イエスの名声は、ガリラヤ全土と、その先の地域にさえ広がり始めた。イエスは、ヘロデがすぐ自分の仕事に注意し始めるのが分かっていた。それ故、使徒と南へ、そしてユダヤへと旅するのが良いと考えた。100 人以上の信者の一隊が共に行くことを望んだが、イエスは、彼らと話し、使徒集団に伴いヨルダン川を下りて行かないように懇願した。信者らは、後に残ることに同意したものの、彼らの多くは、数日内にあるじの後に続いた。

141:1.2 (1587.4) 初日イエスと使徒は、タリヘアまで旅しただけで、その夜はそこで休んだ。翌日、ヨハネが約1 年前に説教し、イエスが洗礼を受けたペラ近くのヨルダン川の地点に進んだ。かれらは、ここに教えたり説教をしたりで2 週間余り留まった。1 週目の終わりまでには、数百

人が、イエスと12　人が寝起きしている場所近くの野営地に集まり、そして、かれらは、ガリラヤ、フォイニキア、シリア、デカーポリス、ペライア、ユダヤから来たのであった。

141:1.3 (1588.1) イエスは公への説教をしなかった。アンドレアスは、群衆を分け、説教者を午前と午後の集会に割り当てた。夕食後、イエスは、12　人と話した。かれは、新しいことは何も教えず、以前の教えの復習だけをし、また多くの質問に答えた。その中の1 晩、この場所近くの丘で過ごした40日間について12 人に話した。

141:1.4 (1588.2) ペライアとユダヤから来た人々の多くは、ヨハネによる洗礼を受けて、イエスの教えについて一層の興味を持っていた。使徒は、ヨハネの説教をどんな形であれ損なうことがなく、今回は新しい弟子にさえ洗礼をしなかったので、使徒は、ヨハネの弟子への教えにおいて多く前進した。ところが、イエスが、もしヨハネの発表通りの者であるならば、彼が獄舎から救い出すための何もしないということは、ヨハネの追随者には常に躓きの石であった。ヨハネの弟子は、イエスがなぜ彼らの敬愛

する指導者の残忍な死を防止しないのかについて決して理解することができなかった。

141:1.5 (1588.3) くる夜もくる夜も、アンドレアスは、洗礼者ヨハネの追随者と円満に暮らしていくきめ細やかで難しい課題を仲間の使徒に慎重に教授した。イエスの公の奉仕のこの最初の年に、彼の追随者の3/4人以上は、以前にヨハネの後を追い洗礼を受けていた。西暦27年のこの年全体は、事無くペライアとユダヤでのヨハネの仕事の引き継ぎに費やされた。

2. 神の法と父の意志

141:2.1 (1588.4) かれらがペラを去る前夜、イエスは、使徒に新しい王国に関して更なる指示を与えた。あるじは言った。「君等は、来たる神の王国を探すことを教えられてきた。そして、今、私は、この長く待ち望まれた王国が真近であると、そしてそれが、すでにここに、我々の真っ只中にあるとさえ知らせて来た。あらゆる王国には、王座に着き、領土の法律を布告する王がいなければならない。そして、君等は、救世主がダーヴィドの王座にいる地球のすべての民族の上のユダヤ国家の賛美された支

配として、また全世界の法律を発布しているこの奇跡の権力の場所から天の王国の概念を発達させてきた。しかし、我が子よ、君等は信仰の目で見ず、精霊の理解力でも聞いてはいない。私は、天の王国は、人の心の中での神の支配の実現と認識であると宣言する。この王国に王がいるというのは本当である。そして、その王は、我が父であり君の父である。我々は実に彼の忠臣であるが、彼の息子であるという超越していく真実こそがその事実をはるかに超える真実である。私の人生において、この真実は、すべての者に明らかにされるのである。また、我々の神は、王座に座ってはいるが、人が手で作った物ではない。無限者の王座は、天国の中の天国の父の永遠の居住地域である。かれは、宇宙の中の宇宙に万物を満たし、法を宣言する。そして、父は、人間の魂の中で生きるために送った霊により地球の子等の心の中でも支配する。

141:2.2 (1588.5) この王国の忠臣であるとき、君は、いかにも宇宙の支配者の法律を聞かされる。しかし、私が宣言しに来た王国の福音のために、君が、息子としての自分を信仰によって発見するとき、今後君は、全能の王の法に服

従する生物として自分を見るのではなく、愛する、また神性の父の特権のある息子として見る。誠に、誠に、私は言おう。父の意志が人の法律であるとき、人はほとんど王国にはいない。しかし、父の意志が本当に人の意志になるとき、それにより、人の中に王国が確立された経験となるからであるから、人は実際には王国にいるのである。神の意志が人の法であるとき、人は気高い従属臣下である。しかし、人が、神の息子の資格のこの新しい福音を信じるとき、父の意志は、人の意志となり、人は、神の自由な子の高い位置に、王国の解放された息子にと高められる。」

141:2.3 (1589.1) 使徒の何人かは、この教えの何かを掴んだが、誰とても、おそらくジェームス・ゼベダイの他は、この途轍も無く重大な発表の重要性の全体を理解しなかった。だが、これらの言葉は、全員の心に根づき、後年の奉仕の仕事を充実させるようになった。

3. アマススでの滞在

141:3.1 (1589.2) あるじと使徒は、３週間程アマススの近くに留まった。使徒は、１日２回、群衆への説教を続け、イエ

スは、各安息日の午後に説教した。水曜日の息抜きの時間を持ち続けることは、不可能になった。したがって、安息日の礼拝中は、全員が任に着くとともに、残る6日間で2 人ずつが休息をとるべく、アンドレアスが手配した。

141:3.2 (1589.3) ペトロス、ジェームス、ヨハネは、公への説教の大部分をし、フィリッポス、ナサナエル、トーマス、シーモンは、対人的な仕事を多くし、特別な照会者の団体のための授業を行なった。アンドレアス、マタイオス、ユダは、各々に宗教の仕事もかなりしたのだが、3人で一般的な経営委員会へと発展させていく一方で、双子は、一般的な取り締まりの指揮を続けた。

141:3.3 (1589.4) アンドレアスは、ヨハネの弟子とイエスの新しい弟子との間に絶えず再発する誤解とくい違いを調節する任務につねに忙しかった。深刻な状況が数日ごとに起こるのであったが、アンドレアスは、使徒仲間の援助で少なくとも一時的に争い合う連中をなんとかある種の合意に導くことができた。イエスは、これらのどの合議の参加も拒否し、またこれらの問題に対する適切な調整に

関するいかなる忠告も与えようとしなかった。使徒がいかにこれらの複雑な問題を解決すべきか1 度として提案を申し出なかった。アンドレアスがこれらの質問をしに来ると、イエス、いつも言うのであった。「主人役が、客の家族問題に関わるのは賢明ではない。賢明な親というものは、自分の子供達の些細な口喧嘩に決して一方側に片寄って味方をしない。」

141:3.4 (1589.5) あるじは、使徒と弟子のすべての取り扱いに素晴らしい知恵を示し、また完全な公正さを明示した。イエスは、まことに人間の間のあるじであった。かれは、人格の結合した魅力と力で仲間の人間に大いなる影響を与えた。剛強で、遊牧的で、かつまた住居なしの彼の人生には、微妙に威厳のある影響力があった。彼の威厳ある教え方、明快な論理、推理の力、賢明な洞察、心の注意深さ、無類の平静さ、崇高な寛容性には、知的な魅力と精霊的に引きつける力があった。かれは、淳朴で、凛々しく、正直かつ不敵であった。あるじの風采にはこの肉体的かつ知的な影響のすべてに明らかであるとともに、彼の人格に伴うようになった特徴のそれら精神的な

魅力の全て—忍耐、優しさ、従順さ、穏やかさ、謙遜—でもあった。

141:3.5 (1589.6) ナザレのイエスは、誠に強い説得力をもつ人格であった。かれは、知力と精神の要塞であった。その人格は、支持者の間の精霊的に関心を持つ女性達だけではなく、教育があり知性的なニコーデモスや、十字架の警備に配置されあるじが死ぬのを見終えたとき「本当に、これは神の息子であった。」と言った隊長、頑丈なローマ軍人の心をも惹きつけた。また男らしい、無骨なガリラヤの漁師達は、彼をあるじと呼んだ。

141:3.6 (1590.1) イエスについての描写は、最も不運である。キリストのこれらの絵は、若者に悪影響を及ぼした。かれが、芸術家達が一般に表現したような男であったとしたならば、寺院の商人達は、ほとんどイエスの前から逃げなかったであろうに。彼の男らしさには、威厳があった。かれは、立派で、しかも自然であった。イエスは、温和で、和やかで、優しく、親切な神秘主義者としての姿勢をとらなかった。その教えは、感動的に豪快であっ

た。かれは、良く意図するだけではなく、実際に良く為ようと歩き回った。

141:3.7 (1590.2) あるじは、「怠惰な者、夢みる者は皆来れ。」とは決して言わなかった。しかし、何度も、「働く者は皆来れ。そうすれば、休息を与えよう—精神の強さを。」と言った。あるじのくびきは、実に簡単であるにもかかわらず、それを決して押しつけない。あらゆる個人は、自身の自由意志のこのくびきを取らなければならない。

141:3.8 (1590.3) イエスは、犠牲による征服、誇つまり誇りと私心の犠牲を描いた。慈悲を示すことにより、かれは、すべての遺恨、不平、怒り、利己的な力と報復への欲望からの精神的な救出を描こうとした。そして、かれが「悪に抵抗するな」と言うとき、罪を大目にみたり、または仲間に不正をすすめることを意味しないと、彼は後に説明した。かれは、むしろ許しの教え、「人の人格に対する悪行への抵抗、個人の尊厳のその人の感情に対する悪害への抵抗」を意図した。

4. 父についての教え

141:4.1 (1590.4) アマススに逗留中、イエスは、新しい神の概念に関し教えて使徒に多くの時間を過ごした。かれは、再三、神は父であると、全創造の正当な裁判官として彼が後に彼らを裁くとき、彼らに対して用いられるべき罪と悪の記帳係、地球上の間違えている子供に対して損害を与える記帳係に主として従事している有能で最高の帳簿係ではないということを教え、使徒達に感銘を与えた。ユダヤ人は、神をすべての上の王として、国家の父としてさえ長い間、思い描いてきたが、かつて数多くの人間は、個人の情愛深い父としての神の考えを決して抱いたことはなかった。

141:4.2 (1590.5) トーマスの質問「王国のこの神はどなたですか。」に対し、イエスが答えた。「神は君の父であり、宗教—私の福音—は、君が、彼の息子であるという真実の認識を信じること以外の何ものでもない。そして、私の人生と教えにおいてこの両方の考えを明らかにするために、私は、実際にあなたの間のここにいる。」

141:4.3 (1590.6) イエスはまた、宗教義務として動物の贄を捧げる考えから使徒の心を解放しようとした。しかし、日々

の供え物の宗教で訓練されたこの男性達は、イエスの意図の理解に時間が掛かった。それでも、あるじは、その教えにおいて飽きることはなかった。1 つの具体例によって使徒全員の心に達することができないとき、かれは、明確にする目的で趣意を言い直し別の種類の寓話を用いるのであった。

141:4.4 (1590.7) この同じ時にイエスは、「苦しむ者を慰め病む者を世話すること」の任務に関し、さらに詳しく12人に教え始めた。あるじは、全人間—個々の男性または女性を形成する体、心、精霊の統合—について多く教えた。イエスは、仲間が遭遇するであろう3 つの形の苦悩について話し、人間の病の悲しみに苦悩する全ての者に対しどのように奉仕すべきかを説明し続けた。彼らに以下の事を認識することを教えた。

141:4.5 (1591.1) 1. 肉体の病気—一般に身体の病気と考えられているそれらの苦悩

141:4.6 (1591.2) 2. 悩む心—後に感情的かつ精神的な撹乱として見られていたそれらの非身体的苦悩

141:4.7 (1591.3) 3. 悪霊の憑依

141:4.8 (1591.4) イエスは、その時代に、しばしば汚れた霊とも呼ばれたこれらの悪霊の起源に関する性質や何かを時おり使徒に説明した。あるじは、悪霊の憑依と狂気の違いをよく知っていたが、使徒はそうではなかった。ユランチアの初期の歴史に関する彼等の限られた知識から考えても、イエスが、完全にこの件を理解させることを引き受けることも可能ではなかった。だが、これらの悪霊について暗示しながら、かれは、しばしば言った。「私が天の父の元に昇ったとき、私が自分の精霊をそれ等の時代のすべての者に注いだ後、王国が大いなる力と精霊の栄光に到達するとき、それらは、もう人に危害を加えないであろう。」

141:4.9 (1591.5) 週ごと月ごとに、この年を通して、使徒は、病人の治療の奉仕にますます注意を向けた。

5. 精霊的統一

141:5.1 (1591.6) アマススでの毎晩の会議の中で最も重大なものの1つは、精霊統一の議論に関するものであった。ジェームス・ゼベダイは、「あるじさま、我々は同じように

見て、その結果、我々の間にある調和を楽しむことをどのように会得すればよいのでしょうか。」と尋ねた。この質問を聞くと、イエスは、精神がかき混ぜられ、「ジェームス、ジェームス、同じく見るべきであるといつ私が教えたか」と答えたほどであった。私は、神の前で死すべき者に独創性と個々の自由な生活を送る権限が与えられるように精霊的な自由を宣言するためにこの世に来た。私は、社会的調和と友愛の平和が、自由な人格や精神の独創性の犠牲によって買い入れられることを望まない。私が君等に要求することは、使徒達よ、精霊の統一であり、天の私の父の意志を心からすることを君の結合した献身の喜びにそれを経験することができる。精霊的に同じくあるために、同じく見たり、同じく感じたり、あるいは、同じく考えたりさえする必要はない。精霊的統一は、天の父の精霊の贈り物が君達それぞれに宿っており、ますます支配されていくという意識からくる。使徒としての調和は、各人の精霊の望みが、起源、性格、運命において同じであるという事実から起こらなければならない。

141:5.2 (1591.7) 「このように、君たちは、各人の内在する楽園の精霊の同一性の相互意識から成長する精霊目的と精霊理解の完全な統一を経験することができる。そして、君たちは、理性的な考え、気質上からくる感情、社会的な行為の個々の態度の最大の多様性のまさしくその表層においてこの深遠な精神的統一のすべてを楽しむことができる。人格は、爽やかに多様であり、著しく異なっているかもしれないが、一方で、神性崇拝と兄弟愛の精霊的本質と精霊の実りは、一現化されるので、君の生活を凝視する者すべてが、この精霊の同一性と魂の統一を認める保証するかもしれない。君たちが私と一緒にいて、それによって、そして満足に、天の父の意志を如何に為すかということを、彼らは、学んできたと気づくであろう。心、体、魂の本来の資質の手法に応じて、そのような奉仕をする間でさえも、神への奉仕の統一を達成することができる。

141:5.3 (1592.1) 「精神の統一は、常に個々の信者の人生において調和すると分かるであろう2 つのことを意味する。まず最初に、君は、人生奉仕のための共通の動機をいだいている。君は全員、何よりも天の父の意志をすることを

望んでいる。第2には、人は皆、共通の目標がある。人は皆、天の父を求める目的があり、その結果、彼のようになるということを宇宙に立証する。」

141:5.4 (1592.2) 12人の研修中、イエスは、何度となくこの主題に立ち帰った。繰り返し、かれは、彼を信じる人々が、たとえ良い人の宗教解釈によるものでも教義化されたり、規格化されるようになるべきであるというのは、自分の願望ではないと彼らに言った。再三、かれは、使徒に王国に関する福音で信者を誘導し、制する方法として教義の定式化と伝統の体制化を避けるよう注意した。

6. アマススにおける最後の週

141:6.1 (1592.3) アマススでの最後の週の終わり近く、シーモン・ゼローテースは、ダマスカスで商業に携わるペルシア人のテヘルマという者をイエスのもとに連れて来た。テヘルマは、イエスについて耳にし、カペルナムに会いに来て、そこで、イエスが使徒とエルサレムへ向かいヨルダン川に沿って行ったと知ったので、探しに出向いたのであった。アンドレアスは、教授のためにテヘルマをシーモンに会わせた。シーモンは、「拝火者」としてペ

ルシア人を見ているが、テヘルマは、火が純然かつ聖なるものに見える象徴にすぎないと説明するのにかなりの苦心をした。イエスと話した後、ペルシア人は、教えを聞き、説教を聞くために数日間残る意志を表した。

141:6.2 (1592.4) イエスと二人きりのとき、シーモン・ゼローテースは、あるじに尋ねた。「私が彼を説得できなかったのは何故でしょうか。私にはそれほどまでに抵抗し、あなたにはとても容易に耳を貸したのは何故でしょうか。」イエスが答えた。「シーモン、シーモン、何かを救済を求める人々の心から取り出すようなすべての努力を控えるように私は何度教えてきたことか。幾度私は、これらの飢えた魂に何かを入れるためだけに働くように言ってきたことか。人を王国に導きなさい。そうすれば、王国の大いなる、また生きる真実が、やがて、すべての重大な誤りを追い出すであろう。君が、神は父であるという良い知らせを人間に提示したとき、彼が本当に神の息子であるということを彼により簡単に説き伏せることできる。そして、君は、それをし終えることにより暗闇に座るものに救済の光を持って来たのである。シーモン、人の息子が、君たちのところに最初に来たとき、

モーシェと予言者を非難して、そして、新しくより良い生き方を宣言して来たか。いや、私は、人が祖先から得たものを持ち去るのではなく、祖先が一部だけ見たもののその完成された展望を示しに来た。シーモン、王国についての教えを説きに行きなさい。そして、君が、王国内に安全に確実に一人の人間を伴っているとき、そしてそのような者が、君のもとに質問に来るとき、その時こそが、神の王国の内で魂の漸進的進歩と関係づける指導を与える時である。」

141:6.3 (1592.5) シーモンは、これらの言葉に驚いたが、イエスの命じた通りにした。そして、このペルシア人テヘルマは、王国に入った人々の数のうちに数えられた。

141:6.4 (1592.6) その夜、イエスは、王国の新しい人生について使徒に語った。その一部「王国に入るとき、人は生まれ変わっている。君達は、肉体だけが生まれ変わった者には精霊の深いものを教えることはできない。最初に、精霊の高度な道を教えようとする前に人が精霊的に生まれ変わっているかを見定めよ。まず寺院に連れて入るまで、人に寺院の美しさを示そうとしてはいけない。君は

神の父性と人の息性との教義について話す前に、人を神の息子として神に紹介せよ。人と争うではない—つねに忍耐強くあれ。それは、君の王国ではない。君は大使にすぎない。単に宣言をしに旅立ちなさい。これは、天の王国である—神は君の父であり、君はその息子である。そして、この朗報は、心からそれを信じるならば、君の永遠の救済である。」

141:6.5 (1593.1) 使徒は、アマススでの滞在中、大きく前進した。しかし、イエスがヨハネの弟子の扱いに関し提案を与えないことにとても失望していた。洗礼の重要な件に関してさえ、イエスが言った全ては、次の通りであった。「ヨハネは、確かに水で洗礼したが、天の王国に入るとき、君達は精霊者で洗礼されるのである。」

7. ヨルダン先のベサニアにて

141:7.1 (1593.2) 2月26日、イエス、使徒、追随者の大集団は、ヨハネが来たるべき王国の宣言を最初にした場所のベサニアの近くの浅瀬のペライアに向けてヨルダン川を旅した。イエスと使徒は、ここに留まり、エルサレムへ進む前の4週の間、教育と説教をしていた。

141:7.2 (1593.3) ヨルダンの先のベサニア滞在の2週目、イエスは、3日間の休息のためにペトロス、ジェームス、ヨハネを連れて川向こうの、そしてイェリーホの南の丘に行った。あるじは、3人に天の王国に関する多くの新しく高度な真実を教えた。この記録の目的のために、我々は、次のようにこれらの教えを再編成し、分類する。

141:7.3 (1593.4) イエスは、弟子達が王国のみごとな精霊の現実を味わい、人間が弟子達の生活を見ることにより、王国を意識するようになり、そこから、王国の道に関心をもつ信者達の世界に住むようになるということを強く望むと分からせようとした。その永遠で、神々しい精霊の現実で王国への入国を保証する信仰の贈り物の喜ばしい知らせを聞くことは、全てのそのような誠実な真実の探求者には常に嬉しいことである。

141:7.4 (1593.5) あるじは、王国に関する福音の全教師の唯一の仕事は、個々の人間に彼の父として神を明らかにすること—この個々人が息子としての意識をもつようになるよう導くこと—であると、そして、その信仰をもつ息子としてこの同じ人間を神に紹介することを彼等に銘記させ

ようとした。この不可欠な双方の顕示が、イエスに達成されている。かれは、本当に、「道、真実、命」となった。イエスの宗教は、完全に地球での彼の贈与の人生生活に基づいた。イエスがこの世を去って行くとき、個人の宗教生活に影響する本も、法も、あるいは人間組織の他の形式も後には残さなかった。

141:7.5 (1593.6) イエスは、他の全ての人間関係よりも永遠に優先すべき人間との個人的かつ永遠の関係を樹立するために来たのだということを明らかにした。そして、かれは、この親密な精霊的親交は、全世代、全民族の間の全社会的条件におけるすべての人々に拡大されることになっていると強調した。彼が子供等に約束した唯一の報酬は次の通りであった。現世においては—精霊的な喜びと神の交わり。来世においては—楽園の父に属する神性の精霊現実の進展における永遠の命。

141:7.6 (1593.7) イエスは、王国に関する教えの最重要の２つの真実を大いに強調した。それは、つぎの通りである。真実の真摯な認識を通して、人間の自由達成のための画期的教育に関連づけられる信仰による、信仰のみによる救

済の達成である。「人は、真実を知り、そして、真実は人を自由する。」イエスは、物質的に現された真実であり、天の父の元への帰還後に、自分のすべての子供の心の中に真実の聖霊を送ると約束した。

141:7.7 (1594.1) あるじは、地球上の全ての時代のために、使徒に真実の要点を教えていた。かれらは、実際は彼の言うことが他の世界の感化や啓発を目的とした教えを、しばしば聞いた。かれは、人生の新しく独創的な計画を例示した。、人間の見地から、かれは、本当にユダヤ人であったが、領域の死すべき者として全世界のためにその人生を送った。

141:7.8 (1594.2) 王国計画の展開における父の認識を保証するために、イエスは、「地球の偉人」を意図的に無視したと説明した。かれは、貧しい者達、つまり先行する時代の大部分の進化の宗教によって甚だ無視されてきたまさにその階級の中で自分の仕事を開始した。かれは、人を軽蔑しなかった。彼の計画は、世界規模であり、宇宙規模でさえあった。かれは、これらの発表において非常に大胆で断固としていたので、ペトロス、ジェームス、ヨハ

ネでさえ、彼がことによると気が狂っているかもしれないと考えたくなるほどであった。

141:7.9 (1594.3) かれは、小数の地球の被創造者のために模範を示すためではなく、彼の全宇宙の中の全世界の全民族のために人間生活の基準を確立し、示すためにこの贈与任務についたという真実を使徒に穏やかに伝えようとした。そして、この基準は最も高い完全さに、宇宙なる父の究極的善にさえ働きかけた。しかし、使徒は、彼の言葉の意味を理解することができなかった。

141:7.10 (1594.4) かれは、師として、物質的な心に精霊の真実を提示するために天から送られた教師として機能するために来たのだと発表した。そして、これは、まさしく彼がしたことである。かれは伝道者ではなく教師であった。人間の観点から、ペトロスは、イエスよりはるかに効果的な伝道者であった。イエスの説教は、思わずつり込まれる雄弁さ、あるいは感情に訴えるという理由では余りなく、無比の人柄故にとても効果的であった。イエスは、直接人の魂に話した。かれは、人の精神の、だが心を通しての教師であった。かれは、人と共に生きた。

141:7.11 (1594.5) イエスは、地球での彼の仕事は、ある点に関して、「高いところにいる仲間」の委任によりすなわち、楽園の兄弟、イマヌエルの前贈与の指示に言及して、制限されるということをピーター、ジェームス、ヨハネに仄めかした。父の意志を為すため、父の意志のみを為すために来たということを告げた。このようにして心からの目的への専念に動機づけられていたので、世界の悪に思い悩み苦しんではいなかった。

141:7.12 (1594.6) 使徒達は、イエスの気取らない友情を認識し始めていた。あるじは、近づき易くはあったが、いつもすべての人間から独立し、すべての人間の上に生きていた。一瞬たりとも、単なるどういった人間の影響、あるいは脆い人間の判断に支配されなかった。世論に全く注意を向けなかったし、称賛に影響されなかった。滅多に誤解を正すためや、または誤伝に憤慨するために止まらなかった。どんな人にも決して忠告を求めなかった。自分の為に祈ることを決して要求しなかった。

141:7.13 (1594.7) イエスがいかに始めから終わりまで見えているように思えてジェームスは驚いた。あるじは、驚いて

いるようには滅多に見えなかった。決して興奮もせず、困りもせず、また混乱もしなかった。どんな人にも決して謝らなかった。時には悲しんだが、決して挫折しなかった。

141:7.14 (1594.8) 神の全贈与にもかかわらず、結局イエスは人間であると、より明確にヨハネは、認めた。イエスは、人として人の中に生き、人を理解し、愛し、また人の扱い方を知っていた。個人的な人生においては、非常に人間的であり、しかも欠点なぞなかった。その上、いつも寡欲であった。

141:7.15 (1595.1) ピーター、ジェームス、ヨハネは、イエスがこの時に言ったことをあまり理解することはできなかったが、その優しい言葉は心の中に残り、また磔刑と復活後、かれらは、後の彼等の聖職活動を大いに豊かにし、晴れやかにした。かれらが、あるじの言葉を完全理解しなかったというも不思議ではない。かれが、新時代の計画を使徒に映し出していたのであるから。

8. イェリーホでの働き

141:8.1 (1595.2) ヨルダンの先のベサニアでの4週間の滞在を通して、アンドレアスは、使徒の二人組を毎週何度か、1日または2日間イェリーホに行くように命じるのであった。ヨハネには、イェリーホに多くの信奉者がおり、その大多数が、イエスと使徒達のより先進の教えを歓迎した。これらのイェリーホ訪問の際、使徒は、とりわけ病人にイエスの教えを聖職活動に当てはめて実行し始めた。彼らは、都市のあらゆる家を訪問し、あらゆる苦しめられている人を慰めようとした。

141:8.2 (1595.3) 使徒は、イェリーホで若干の公の仕事をしたが、彼らの努力は、　より静かで個人的性質のものであった。そのとき彼らは、王国に関する朗報は病人にとって非常に元気づけるもの、自分達の言葉が苦しめられている者にとり癒しであることが分かった。そして、王国の喜ばしい知らせを説き、苦しめられている者への聖職活動という12人のイエスからの任務が最初に完全な効果をみたのは、イェリーホであった。

141:8.3 (1595.4) 彼らは、エルサレムへの途中イェリーホに立ち寄り、イエスと協議するために来ていたメソポタミアか

らの代表団に追いつかれた。使徒は、ここで1日だけ過ごす計画であったが、東洋からのこれらの真実探求者が到着すると、イエスは、彼らと3日間を過ごし、真実探求者は、天の王国の新たな真実に関する知識に満足し、ユーフラテス川沿いのそれぞれの家に戻った。

9. エルサレムへの出発

141:9.1 (1595.5) 月曜日に、3月の最後の日、イエスと使徒は、エルサレムへの旅に向かい丘へと登り始めた。ベサニアのラーザロスは、イエスに会いに二度ヨルダンまで行ったことがあり、あるじと使徒がエルサレムに留まることを望む限り、ラザロとその姉達は、本部作りのためにあらゆる手筈をとっていた。

141:9.2 (1595.6) ヨハネの弟子達は、群衆に教え洗礼し、ヨルダンの先のベサニアに滞在していので、ラザロの家に到着したとき、イエスは、12 人だけを従えていた。ここで、イエスと使徒は、5 日間留まり、過ぎ越しの祭りのためにエルサレムに進む前に元気を取り戻した。弟の家にあるじとその使徒を受け入れるということは、そこで

彼らの必要を満たせることができ、マールタとマリアの人生でのすばらしい出来事であった。

141:9.3 (1595.7) 4月6日、日曜の朝、イエスと使徒は、エルサレムに出掛けて行った。そして、これは、あるじと12　人全員がそこに一緒に居た最初であった。

論文 142
エルサレムでの過ぎ越しの祭り

142:0.1 (1596.1) 4月、イエスと使徒は、エルサレムで働き、毎夕ベサニアで夜を過ごすために都を出ていた。イエス自身は、エルサレムのギリシア系ユダヤ人、フラーヴィオスの家で毎週1 晩か2 晩を過ごし、そこには、多くの著名なユダヤ人が、彼との会見のために秘かにやって来た。

142:0.2 (1596.2) エルサレムでの初日、イエスは、以前の高僧で、ゼベダイの妻サロメの親類でもある何年か前の友人ハナンジャーを訪問した。ハナンジャーは、イエスとその教えについてずっと聞いており、高僧の家を訪問したときは、イエスは、あまり歓待されなかったた。イエスは、ハナンジャーの冷たさを感じ取ると、早急に立ち去

った。去るにあたり、「恐怖は、人の主な奴隷化に追いやるものであり、誇りは、人の大きな弱点である。あなたは、自分をこの喜びと自由の破壊者双方の束縛へと陥れるつもりなのか。」と言った。しかし、ハナンジャーは、返答をしなかった。あるじは、人の息子の裁判で義理の息子と座っている彼を目にするまで、再び会うことはなかった。

1. 寺院での教え

142:1.1 (1596.3) この月を通して、イエスか使徒の一人が寺院で毎日教えた。過ぎ越しの祭りの群衆が、寺院での教えのための入り口を見つけることができないほどに膨れあがると、使徒は、神聖区域の外で教える多くの班を受け持った。要旨は、次の通りであった。

142:1.2 (1596.4) 1. 天の王国は近い。

142:1.3 (1596.5) 2. 神の父性に対する信仰によって、天の王国に入ることができ、その結果、神の息子になる。

142:1.4 (1596.6) 3. 愛は、王国の中で暮らすための規律—自分自身を愛するように隣人を愛するとともに神に対する最高の献身である。

142:1.5 (1596.7) 4. 父の意志への服従は、個人的な人生において精神の果実をもたらすことは、王国の法である。

142:1.6 (1596.8) 過ぎ越し祭りの祝いのために来た群衆は、イエスのこの教えを聞いた。そして、何百人もが朗報に喜んだ。ユダヤ人の主要な聖職者と支配者は、イエスと使徒に非常に関心をもつようになり、彼らをどうすべきか議論し合った。

142:1.7 (1596.9) 寺院とその周りで教えること以外に、使徒と他の信者は、過ぎ越し祭りの群衆の中で多くの個人の仕事に従事していた。関心を持つこれらの男女は、イエスの言葉に関する知らせをこの過ぎ越し祭りの祝賀からローマ帝国の最果て、また東洋までも伝えた。これは、王国に関する福音の外の世界への伝播の始まりであった。もはや、イエスの仕事は、パレスチナに閉じ込められてはいなかった。

2. 神の怒り

142:2.1 (1597.1) ジャアコブというクレタからの裕福なユダヤ商人が、エルサレムの過ぎ越し祭に参列しており、イエスに個人的に会いたいと申し入れをし、アンドレアスのところにやって来た。アンドレアスは、イエスとのこの内密の会合を翌晩フラーヴィオスの家でする手配をした。この男性は、あるじの教えを理解することができず、神の王国についてより完全に尋ねたいと望んで来たのであった。ジャアコブがイエスに言った。「しかし、先生、モーシェと昔の予言者達は、ヤハウェが嫉妬の神、大いなる怒りと激しい憤怒の神であると言っています。予言者達は、かれは、悪人を嫌い、法に従わない者に復讐すると言います。あなたと弟子は、あなたがとても近いと宣言している天の王国のこの新しい王国に彼らを歓迎するほどに、神は、すべての人間を愛する優しい情け深い父であることを我々に教えています。」

142:2.2 (1597.2) ジャアコブが、話し終えると、イエスが答えた。「ジャアコブ、きみは、その時代の知識に従ってその世代の子等に教えた昔の予言者達の教えをよく述べた。楽園の我々の神は不変である。しかし、その本質の概念は、モーシェの時代からアモスの時代、さらには予

言者イザヤの世代に至るまで拡大し、成長してきた。そして、今私は、新しい栄光で父を明らかにし、すべての世界のすべての人に父の愛と慈悲を指し示すために生身の姿で来たのである。生気と善意のその言葉で世界中のすべての人にこの王国の福音が広がっていくとき、万国の家族の中に改善されたより良い関係が育つであろう。時間が経過するにつれ、父親とその子等は、より互いを愛し、その結果、天の父の子への愛に対しさらに良い理解をもたらすであろう。心しなさい、ジャアコブ。良い、そして本物の父というものは、家族を一纏まりとして—一家族として—愛するだけではなくて、家族の個々人を本当に愛し、愛情を込めて気にかけているのである。」

142:2.3 (1597.3) 天なる父の特質に関するかなりの議論の後、イエスは、息をついで言った。「ジャアコブ、子だくさんの父であるから、きみは、私の言葉の真実がよく分かっている。」そこで、ジャアコブが言った。「しかし、あるじ様、私が6人の子の父であると誰が言いましたか。どうしてこれを知ったのですか。」そこで、あるじが答えた。「父と息子は、すべてのことを知っていると言う

だけで十分であろう。彼等は本当にすべてを見るのであるから。地球で父として自分の子供を愛する君は、今、自身のために天なる父の愛を現実のものとして受け入れなければならない—アブラーハムの全ての子供のためだけでなく、君のために、君の一個人の魂のために。」

142:2.4 (1597.4) そこでイエスは続けた。「子供が非常に幼く、未熟であるとき、そして制裁しなければならないとき、子供は、父が立腹し恨みの憤怒に満ちていると思うかもしれない。彼らの未熟さは、父の明敏で正しくしようとする愛情を弁え罰を見破ることができない。しかし、この同じ子供等が、成人の男女になるとき、彼等が、父に関対して、この早期の誤った考えに執着することは、愚かではなかろうか。成人した男女として、今や、このすべての初期の躾における父の愛について明察すべきである。何世紀もが移り去ると共に、人類は、天の父の真の本質と愛する特質をより理解するようになるべきではないか。モーシェと予言者が、見たような神を見ることに固執するのであれば、精霊的啓発の続く世代からどんな利益が得られるのか。ジャアコブ、お前に言おう。この時間の明るい光の下で、過去の誰とて見たことのない父

が、君には見えるはずである。そうして彼に会い、きみは、そのような慈悲深い父が統治する王国に入ることに歓喜すべきであり、その後は彼の愛の意志が自分の人生を支配するよう追い求めるべきである。」

142:2.5 (1598.1) そこで、ジャアコブが答えた。「先生、信じます。私を父の王国に導いてくれることを望みます。」

3. 神の概念

142:3.1 (1598.2) 12人の使徒は、（彼等のほとんどが、この神の特質の議論を聞いていた。）その夜、イエスに天の父について多くの質問をした。これらの質問に対するあるじの答えは、現代の言い回しで次の概要により最も良く提示される。

142:3.2 (1598.3) イエスは、大まかな内容で穏やかに12人を叱責した。君たちは、ヤハウェの理念の発展に関連するイスラエルの伝統を知らないのか。また、神の教義に関する聖書の教えに無知であるのか、と大まかな内容で。そして、あるじは、ユダヤ民族の進化過程の中での神格の概念の進化について使徒への訓示に進んだ。神の理念の次の発達段階に注意を促した。

142:3.3 (1598.4) 1.、ヤハウェ—シナイ一族の神。これは、モーシェがイスラエルの神なる主のより高い段階にまで高揚させた神の原始の概念であった。神格の概念がどんなに粗雑であろうが、あるいは、いかなる名前でその神性の本質を象徴しようが、天の父は、決して地球の子等の誠実な崇拝の受け入れに失敗しない。

142:3.4 (1598.5) 2. いと高きもの。天の父のこの概念は、メルキゼデクがアブラーハムに示し、後にこの拡大し発展した神の理念を信じた人々がシャレムから遠くへと伝えた。アブラーハムとその弟は、太陽崇拝の確立のためにウールを去り、メルキゼデクのエル・エリョン—いと高き神—の教えの信者となった。彼等のものは、古いメソポタミアの考え、そして、いと高きものの教義の混合からの神の合成概念であった。

142:3.5 (1598.6) 3. エル・シャッダイ。初期の間、ヘブライ人の多くは、ナイル地方での捕われの身の間に学んだエジプト人の天の神の概念であるエル・シャッダイを崇拝していた。メルキゼデクの時代からずっと後、神のこれら3

つの全概念は、創造者の神、イスラエルの神なる主の教義形成のために結びつけられるようになった。

142:3.6 (1598.7) 4. エロヒーム。アダムの時代から、楽園の三位一体の教えは、持続した。聖書が、「初めに、神々が天地を創造した」と主張して始まっているのを思い出さないか。これは、その記録がなされたとき、3 柱の神が一つであるという三位一体概念が、我々の先祖の宗教に位置を見出してていたことを示している。

142:3.7 (1598.8) 5. 最高のヤハウェ。イェシャジャの時代までには、神に関するこれらの信念は、同時に全能であり、全く慈悲深いという宇宙の創造者の概念へと拡大していった。そして、我々の父の宗教の中で、この進化し、拡大する神の概念は、事実上以前のすべての神格の理念に取って代わった。

142:3.8 (1598.9) 6. 天の父。 さて、我々は、天の父として神を知っている。我々の教えは、信者が神の息子であるところの宗教を提供する。それは、天の王国の福音に関する朗報である。息子と聖霊は、父と共存しており、これらの楽園の神格の本質と聖職活動の顕示は、神の上昇する息

子達が永遠の精霊的進歩の無限の時代を通して拡大し輝き続けるであろう。すべての時代とすべての世代において、いかなる人間の真の崇拝—個人の精霊的進歩に関する—は、天の父に与えられる敬意として内在する霊に認識される。

142:3.9 (1599.1) 使徒は、前の世代のユダヤ人の心の神の概念の発展に関するこの詳述を聞いたほどには、かつてそのように衝撃を受けたことはなかった。かれらは、質問ができないほどにうろたえていた。イエスの前に皆が黙して座ると、あるじが続けた。「そして、聖書を読んだことがあるならば、これらの真実は知っていたであろう。サムエルの中でこう言っているのを読んだことはないのか。『そして、主の怒りは、イスラエルに対して燃え上がり、イスラエルとユダの人口を数えよ、と言ってダーヴィドを動かすほどであった。』と。また、サムエルの時代には、アブラーハムの子等は、ヤハウェが、善、悪の両方を作ったと本当に信じたので、これは不思議ではなかった。ところが、後の筆者が、神の本質に対するユダヤ人の概念の拡大後においてこれらの出来事を述べるとき、悪をヤハウェへの所為にする勇気がはなかった。

したがって、彼は言った。『さて、魔王は、イスラエルに立ち向かい、ダーヴィドを挑発して、イスラエルの人口を数えさせた。』聖書でのそのような記録が、1　世代から次世代へと神の本質の概念がどのように発展し続けたかについてあきらかに示しているのが、君達は認識できないのか。

142:3.10 (1599.2)「一方、君達は、神性のこれらの拡大していく概念を完全に維持していくことにおいて神の法の理解の発達について明察すべきであった。イスラエルの民が、ヤハウェの拡大した顕示の前の時代にエジプトから脱出して来たとき、彼らには、シナイを目前にして野営するときまでまさに法律として用いられた十戒があった。これらの十戒は、次の通りであった。

142:3.11 (1599.3)「1.他のいかなる神も崇拝してはならない、なぜならば、主は嫉妬深い神である。

142:3.12 (1599.4)「2. 偶像を作ってはいけない。

142:3.13 (1599.5)「3. 種を入れないパンの祭りを守ることを怠ってはならない。

142:3.14 (1599.6)「4. 人間の息子であれ、家畜の雄であれ、初子は私のものであると主が言われる。」

142:3.15 (1599.7)「5. 6日間働いてよいが、7日目は安息せよ。

142:3.16 (1599.8) 「6.最初の実と年の終わりの収穫祭を行なわなければならない。

142:3.17 (1599.9)「7. 生贄の血を種を入れたパンに添えて捧げてはいけない。

142:3.18 (1599.10)「8. 過ぎ越し祭りの祝宴の生贄は朝までおいてはいけない。

142:3.19 (1599.11)「9. 土地でできた初収穫の1番最初の実をあなたの神である主の家に持って来なければならない。

142:3.20 (1599.12)「10.子ヤギをその母の乳で煮てはならない。

142:3.21 (1599.13) そして、次に、モーシェは、シナイの雷と稲妻の中で、君達全員が、神格の拡大しているヤハウェの概念に伴うより価値のある発言であると同意するであろう新しい十戒を与えた。そして、これらの戒律が聖書に２度記録され、エジプトからの解放が、安息日の遵守の

理由として割り当てられるという最初の場合であり、後の記録においては、我々の祖先の発展する信仰が、安息日の遵奉の理由として創造事実の認識に変えられることを要求したということに決して注意を払わなかったのか。

142:3.22 (1599.14) そして、君達は、これらの10 条の否定的な戒律—イザヤの時、より優れた精霊的な啓蒙において—は、優れた肯定な愛の法、つまり、この上なく神をそして隣人を自分自身のように愛する命令に変えられたことを再び思い出すであろう。そして、私は、神と人に対する愛のこの最高法こそが、人の全責務を構成するとも明言しておこう。」

142:3.23 (1600.1) 話し終えたとき、誰も彼に質問をしなかった。皆は、それぞれ眠りについた。

4. フラーヴィオスとギリシア文化

142:4.1 (1600.2) ギリシア系ユダヤ人のフラーヴィオスは、割礼も施されず、洗礼もされていない改宗者であった。かれは、芸術と彫刻美の愛好家であったので、エルサレムに滞在の際の家は、美しい建築物であった。この家は、世

界旅行の際にあちこちで集めた極めて貴重な宝物で絶妙に飾られていた。イエスを家に招待することを最初に考えたとき、かれは、あるじがこれらのいわゆる偶像を見て怒るかもしれないと恐れた。しかし、イエスが家に入ったとき、家のあちこちに置かれたこれらの偶像崇拝物と言われるものの所持を非難する代わりに、かれは、フラーヴィオスが、好きな像のすべてを示して部屋ごとに案内していると、全ての収集物に大きな関心を明らかにして、各々の品物について多くの鑑賞眼のある質問をしたことに、フラーヴィオスは、快く驚かされた。

142:4.2 (1600.3) あるじは、亭主が芸術に対する彼の好意的な態度に当惑するのを見た。したがって、全体の収集を見終えたとき、イエスが言った。「父により創造され、人の芸術的な手により形成されたものの美を鑑賞するという理由で、なぜあなたは避難されると思わなければならないのか。モーシェがかつて、偶像崇拝と誤りの神の崇拝と闘おうとしたという理由で、なぜ全ての人が、優雅さと美の再生に難色を示さなければならないのか。フラーヴィオス、モーシェの民は、彼を誤解し、今では、天地の事物に似せたものや、偶像や画像の彼が禁止さえして

いる誤りの神々を作っているのだよ。だが、たとえモーシェが、そのような制限をその頃の陰った心に教えたとしても、天の父が宇宙全体の聖霊支配者として明らかにされる今日、それが一体何の関係があろうか。そして、フラーヴィオス、来たる王国では、『これを崇拝するな、あれを崇拝するな』とは、もはや教えないと、私は宣言する。もはや、これを慎んだり、あれをしないようにと注意の命令を心配せず、むしろすべての者が、1つの最高責務に関心をもつのである。そして、人のこの責務は、2つの大きな特権、すなわち無限の創造者、楽園の父への心よりの崇拝、そして仲間の人間へ授与される情愛深い奉仕で言い表される。自身を愛するが如く隣人を愛するならば、それは、神の息子であることを本当に知ったいるのである。

142:4.3 (1600.4) 父がよく理解されなかった時代には、モーシェの偶像崇拝に抵抗する試みは正当化されたが、来たる時代においては、父は息子の人生の中で明らかにされであろう。そして、この神の新しい顕示は、創造の父を石の偶像や金銀の画像と混同することを永久に不要とするであろう。今後、賢明な人間は、そのような美の物質的鑑

賞と楽園の父、万物の神と混同することなく芸術の宝物を楽しむかもしれない。」

142:4.4 (1600.5) フラーヴィオスは、イエスが教えたすべてを信じた。その翌日、かれは、ヨルダン川の先のベタニアに行き、ヨハネの弟子達に洗礼を施された。これをしたのは、まだイエスの使徒が信者達への洗礼をしていなかったからであった。フラーヴィオスは、エルサレムに戻ると、イエスのために立派な宴を設け、友人60　人を招待した。そして、これらの客の多くが、来たるべき王国の知らせの信者となった。

5. 保証についての講話

142:5.1 (1601.1) イエスがこの過ぎ越し祭りの週に寺院で説いた際だった説教の1つは、聴衆の一人、ダマスカスからの男性の質問への答えにあった。この男性はイエスに尋ねた。「しかし、先生、あなたが神によって送られ、また、あなたとあなたの弟子が真近にあると宣言するこの王国に本当に入れるという確実性を、我々は、どのように知るのでしょうか。」そこで、イエスが答えた。

142:5.2 (1601.2) 「私の言葉と弟子の教えに関しては、その実で判断すべきである。我々が精霊の真実を宣言するならば、君の心の精霊は、我々の言葉が本物であることを目撃するであろう。王国と、天なる父による受諾の確信に関しては、息子を家族や父の心の情愛に関し心配させたり、はらはらさせる状況に置くのと、それとも安心できる場所に保つのとでは、君達の間のどんな父親が、相応しく情け深いかを聞かせてもらおう。君達の地球の父は、君達の人間の心の彼等に対する永続的な愛に関し、自分の子供を不安な状態において拷問することを楽しむであろうか。天の君達の父もまた、王国での彼らの位置に関して、精霊の忠実な子等を疑わしい不安の状態に放っては置かない。神を父として受け入れるならば、それで事実上、君達は、実際に神の息子なのである。そして、息子であるならば、そこで、君達は、永遠の、また神の息性に関係するすべての位置と地位が確かなものとなる。私の言葉を信じるならば、私を送った神を信じることになり、また、このように父を信じることにより、天の市民権を確かにしたのである。天の父の意志を為す

ならば、君達は、神の王国における永遠の進歩の命の達成において決して失敗しないのである。

142:5.3 (1601.3) 「崇高なる聖霊は、君達が確かに神の子であるということを君達の精霊と共に目撃するであろう。そして、神の息子であるならば、それで、君達は、神の精霊の生まれなのである。また、神の精霊の生まれのものは誰でも、すべての疑問に打ち勝つ力を備え持っている。そして、これこそが、すべての不安を克服する勝利であり、信仰でさえある。

142:5.4 (1601.4) 「今の時代に言い及んで、予言者イェシアジァが言った。『精霊が上から我々に注がれると、そこで義の業は、永遠に平和、平穏、確信をもたらす。』そして、この福音を本当に信じるものすべてにとり、私は、父の王国での永遠の慈悲と永続する命の受け入れの身元引受者となるであろう。君は、この言葉を聞き、王国に関するこの福音を信じる者は、その時に、神の息子である。そして、君君達には永続する命がある。また、君達が霊の生まれであるという全世界への証しは、君達が、心から互いを愛しているということである。」

142:5.5 (1601.5) 聞き手の群衆は、何時間もイエスと共にいて、質問したり、元気づける答えを注意深く聞いた。使徒さえ、イエスの教えによりさらに多くの力と確信で王国の福音を説くことを励まされた。エルサレムでのこの経験は、12　人への格段の刺戟であった。そのような巨大な群衆との初めての接触であり、その後の仕事において素晴らしい助力となる多くの貴重な教訓を学びとった。

6. ニコーデモスの訪問

142:6.1 (1601.6) ある晩フラーヴィオスの家に、ニコーデモスというユダヤ系サンヘドリンの裕福で初老の会員が、イエスに会いに来た。かれは、このガリラヤ人の教えについて多くを聞いており、そこで、かれは、イエスが寺院の中庭で教えていたので、ある午後その声を聞きに行った。かれは、イエスが教えるのを度々聞きに行ったことであろうが、教えに出席している人々に見られることを恐れ、と言うのも、すでに、ユダヤの支配者達は、イエスと甚だ相違していたので、サンヘドリンの会員は、公然と彼と同一視されたくなかったのである。従って、ニコーデモスは、個人的に、またこの特定の夕方の日の落ちた後にイエスに会うことをアンドレアスと打ち合わせ

ておいた。面談が始まった時、ペトロス、ジェームスとヨハネは、フラーヴィオスの庭にいたが、後に会話が続けられている家の中に入っていった。

142:6.2 (1602.1) ニコーデモスを迎えるに当たり、イエスは、特別の敬意を示さなかった。彼と話す際、妥協または過度の説得力も見せなかった。あるじは、秘密主義の訪問者に対し嫌悪感を与えようとも、皮肉も用いなかった。著名な訪問者とのすべてのやりとりにおいて、イエスは、穏やかで、熱心かつ荘厳であった。　ニコーデモスは、サンヘドリンの公式の代表者ではなかった。かれは、完全に個人的に、また心からのあるじの教えへの関心故に、イエスに会いに来たのであった。

142:6.3 (1602.2) フラーヴィオスに紹介されると、ニコーデモスが言った。「先生、神が共にいない限り、一介の人間がそのようには教えることができないのですから、我々には、あなたが神によって送られた師であることが分かります。だから私は来たるべき王国についてあなたの教えをさらに知りたいのです。」

142:6.4 (1602.3) イエスは、ニコーデモスに答えた。「実に、実に言っておく、　ニコーデモス。天からの生まれでない限り、人は神の王国を見ることはできない。」その時、ニコーデモスが「しかし、年老いて人は、どのように生まれ変われるのですか。もう一度、母の子宮に入ることはできません。」と応じた。

142:6.5 (1602.4) イエスは言った。「それでも、精霊の生まれの人間を除き、人は神の王国を見ることはできない、と宣言する。肉から生まれるものは肉であり、精霊から生まれるものは精霊である。だが、私が上から生まれなければならないと言ったからといって、驚嘆すべきではない。風が吹くと葉の擦れる音を聞くが、風は見えない。—　どこから吹いてくるのか、もしくは、どこへ吹いて行くのか—霊の生まれの誰も、そうである。君は、肉の目で精霊の顕現を見ることはできるが、実際に霊を明察することはできない。」

142:6.6 (1602.5) ニコーデモスが答えた。「でも、分かりません—それはどういうことでしょう。」イエスは、「イスラエルの教師であるというのに、これに関して全く無知で

あるとは。物質界の現れだけを見分ける人々に、これらのことを明らかにすることは、精霊の現実を知る人々の義務となる。しかし、我々が天の真実について告げるとして、あなたは我々を信じるであろうか。ニコーデモス。天から降りてきた者を、人の息子をさえ信じる勇気があるのか。」と言った。

142:6.7 (1602.6) そこで、 ニコーデモスが言った。「しかし、王国に入るに備え、私を作り変えるこの精霊をいかに掴み始めることができるのでしょうか。」イエスが答えた。「すでに、天の父の精霊が君の中に宿っている。精霊に導かれるならば、きみは、間もなくその精霊の目で見始めるであろう。その時、生活における唯一の目的は天にいる父の意志をすることであるから、きみは、精霊指導の心からの選択により、精霊の生まれとなるであろう。そして、このように自分が精霊の生まれであり、神の王国で幸福であることを知り、日常生活において精霊の実を多く結び始めるであろう。」

142:6.8 (1602.7) ニコーデモスは、まったく誠実であった。かれは、深く感銘したが当惑して立ち去った。ニコーデモス

は、自己開発、克己、高い道徳的な特質さえ達成した。かれは、洗練され、自己本位でしかも愛他的であった。しかしかれは、神である父の意志への服従の仕方を、小さい子供が、賢明で情愛深い地球の父の案内や指導に喜んで服従するように、それによって実際に神の息子になること、永遠の王国の進歩的な相続人になることを知らなかった。

142:6.9 (1603.1) しかし、ニコーデモスは、王国を掴むに足る信仰を奮い起こした。サンヘドリンの同僚が、イエスのための聴聞会を開かずに非難しようとしたとき、かれは、僅かに抗議をした。そして、アリマセアのヨセフと共に、かれは、後に大胆にも自分の信仰を認め、弟子の大半が、あるじの最後の苦しみと死の場面から恐怖で逃れたときでさえも、イエスの亡骸を要求した。

7. 家族についての教え

142:7.1 (1603.2) 教えの忙しい期間とエルサレムの過ぎ越し祭りの週の個人の仕事の後、イエスは、その次の水曜日をベサニアで使徒と費やして過ごした。その午後、トーマスは、長くて教育的な答えを引き出す質問をした。トーマ

スが言った。「あるじさま、私達が王国の大使として離された日に、あなたは、我々に多くのことを言われ、訓示されましたが、私達は、群衆に何を教えるべきでしょうか。王国がより完全に到来した後、これらの人々は、どのように生きることになるのですか。弟子達は、奴隷を所有するのですか。信者達は、貧困を求め、財産を避けるのですか。我々は、法も正義も持たず、慈悲だけが波及するのですか。」イエスと12 人は、午後ずっと、それと夕食後の終夜、トーマスの問題について論議して過ごした。この記録のために、我々は、あるじの指示の次の概要を提示する。

142:7.2 (1603.3) イエスは、彼自身が、肉体での特有な生活を送って地球にいるということ、また、12　人は、人の子のこの贈与経験に参加するために呼ばれたということを使徒にまず明らかにしようとした。そして、そのような協力者として、彼らもまた、全体の贈与経験の特別な制限と義務の多くを分担しなければならない。人の息子は、同時に、神のまさしく心の中を、そして人の魂のまさしくその深層を見ることができた地球で生活を送った唯一のものであったという覆われた仄めかしがあった。

142:7.3 (1603.4) イエスは、天の王国とは、ここ地球に始まり、連続した生命拠点を経て楽園へと前進する進化的経験であると、非常に分かり易く説明した。その晩のうちに、かれは、王国開発における若干の将来の段階で、精霊的な力と神の栄光におけるこの世界を再訪すると確かに述べた。

142:7.4 (1603.5) かれは、次に、「王国の概念」は、神との人の関係を例示するには最善の方法ではないと説明した。ユダヤ民族が、王国を期待しているし、ヨハネが来たるべき王国という言葉で説教していたので、かれは、そのような修辞的表現を使うということを説明した。イエスは、「家族関係を表する用語で提示されるとき—人が、宗教を神の父性と人の兄弟愛、つまり神との息子性についての教えとして理解するとき—別の時代の人々は、王国に関する福音をより理解するであろう」と言った。それから、あるじは、天の家族の具体例として地球の家族についてかなり長く語り、生活の2 つの基本法則を再び述べた。家族の長である父に対する1番目の愛の戒め、そして、子供の間での、つまり自分を愛するようにその兄弟を愛する2番目の相互の愛の戒め。そこで、兄弟らしい

愛情のそのような特性は、寡欲で情愛深い社会奉仕において必ず自然に現れると説明した。

142:7.5 (1603.6) その後、家族生活の基本的な特徴と、神と人の間に存在する関係への彼等の適用に関する忘れ難い議論があった。イエスは、本当の家族というものは次の7 つの事実に基づくと述べた。

142:7.6 (1604.1) 1. 存在の事実。自然の関係と人間の類似性の現象は、家族内で結ばれている。子供は親の一定の特性を引き継ぐ。子供は両親に起源がある。人格存在は、親の行為に依存している。父と子の関係は、すべての自然に固有であり、すべての生活生存に広がる。

142:7.7 (1604.2) 2. 安全と喜び。本物の父は、子供の必要に応じることに大きい喜びがある。多くの父は、子の単なる必需品を供給することに満足するのではなく、それどころか、子供の喜びに備えることもまた楽しむ。

142:7.8 (1604.3) 3. 教育と訓練。賢い父は、慎重に息子と娘の教育と十分な訓練の計画を立てる。子供等は、若い間に後の人生でのより大きな責任に向けて備える。

142:7.9 (1604.4) 4. 規律と制限。 明敏な父も、うら若く未熟な子に必要な規律、指導、修正、時には制限に備える。

142:7.10 (1604.5) 5. 親交と忠誠。慈愛深い父は、子供との親密で情愛深い関係をもつ。かれは、常に子供の訴えに耳を傾けている。彼等の困難を共有し、かれは、常に難事克服の援助の準備ができている。父は、子孫の進歩的な福祉にこの上もなく興味を持っている。

142:7.11 (1604.6) 6. 愛と慈悲。情け深い父は、無制限に寛大である。父は子に対して執念深い記憶を固守しない。父は裁判官、敵、あるいは債権者のようでもない。本当の家族は、寛容、忍耐、許しの上に築かれる。

142:7.12 (1604.7) 7. 将来への備え。この世の父は、息子のために遺産を残すのが好きである。家族は、世代からもう一つ世代へと存続する。死は、別の始まりを印すために1世代を終えるだけである。死は、個々の人生を終結はするが、必ずしも家族を終わらせるというわけではない。

142:7.13 (1604.8) 何時間も、あるじは、これらの家族生活の特徴を楽園の父である神と地上の子である人間との関係へ

の適用について検討した。そして、これが彼の結論であった。「父への息子のこの関係全体を、私は、完全に知っている、なぜなら、永遠の未来において君達が手に入れなければならない息子性を、私は、すでに達成したのであるから。人の息子は、父の右手に昇る用意ができており、その結果、今すべての者が、栄光の進行を終える前に、天の父が完全であるように、君達が完全になるために、神に会うための道は、より広くいま私の中に開いているのである。」

142:7.14 (1604.9) 使徒がこれらの驚くべき言葉を聞いたとき、かれらは、ヨハネがイエスの洗礼時にした表明を思い出し、また、あるじの死と復活の後に、自分達の説教と教えに関連してこの経験をありありと思い出した。

142:7.15 (1604.10) イエスは神の息子、宇宙なる父の完全な信頼にある者である。かれは、ずっと父といて、完全に彼を理解していた。かれは、今や父が、完全に満足をする地球生活を送り、生身のこの化身は人を理解することを完全に可能にした。イエスは、人の極致そのものであった。すべての本物の信者が、彼の中に、また彼を通して

到達する運命にあるような、まさしくそのような完全性に、かれは、達していた。イエスは、人に完全である神を示し、自分自身で領域の完成された息子を神に提示した。

142:7.16 (1605.1) イエスは数時間論じたが、トーマスは、まだ満足していなかったので、「しかし、あるじさま、我々は、天の父がいつも親切に慈悲深く扱うということが分かりません。幾度となく地球で嘆き苦しんでも、我々の祈りがいつも聞き届けられるというわけではありません。どこで、あなたの教えの意味を掴み損ねたのでしょうか。」と言った。

142:7.17 (1605.2) イエスが答えた。「トーマス、トーマス。精霊の耳で聴く能力を身につけるまでにどれだけ掛かるのか。この王国が精霊の王国であり、また、私の父が精霊的な存在であることを見分けるのにどれだけ掛かるのか。私が、天の、その長である父が無限で永遠の霊である、精霊の家族の精霊の子供として教えているとは、きみは理解しないのか。私の教えを具体的な事にそれほどまでに文字通りに適用せずには、地球家族を神の関係の

例証として用いさせてはくれないのか。君の心の中では、王国の精霊の現実をこの時代の物質的、社会的、経済的、政治的問題から切り離せないのか。私が精霊の意味を話すとき、私が説明のためにあえて月並みで文字通りの関係を使うからといって、なぜ私の意味するところを肉体の意味に置き換えたがるのか。子供達よ、精霊の王国の教えを奴隷制度、貧困、家、土地の金銭にあさましい問題へと、そして人間の公平さと正義の物質的な問題への適用をやめるように、君達に嘆願する。これらの一時的問題は、この世界の人間の懸念であり、それがある意味ですべての者に影響をもたらす一方で、君達は、ちょうど私が父の代理をしているように、この世界で私の代理をするために呼ばれたのである。きみ達は、精霊の王国の精霊的な大使、精霊の父の特別な代表者である。この時までには、私が精霊王国の成熟した人間として君達に命令することが可能なはずである。私は、単に子供として君達に話し掛けねばならないのか。決して精霊的識別力をもって成長してはもらえないのか。それでも私は、君達を愛しており、肉体の人生のまさにその終わりまでさえも、君達のことを耐え忍ぶつもりである。

そして、その時でさえ、私の精霊は、君達の前を全世界へと向かうのである。」

8. 南ユダヤにて

142:8.1 (1605.3) 4月末までにパリサイ人とサドカイ人の間のイエスに対する反対勢力が、甚だしく目立つようになったので、あるじと使徒は、ベツレヘムとヘブロンで働くために南を目指し、しばらくエルサレムを去ると決断した。5 月中は、これらの都市と周囲の村の人々の間で個人の仕事をして過ぎた。この旅行では、公の説教は一切なしで戸別の訪問だけであった。この時の一部、使徒が病人に福音を教えたり奉仕をする傍ら、イエスとアブネーは、ナジール人の植民地を訪れのエンゲディで過ごした。洗礼者ヨハネは、この場所から出て行き、アブネーはこの集団の長であった。ナジール人の団体の同志の多くは、イエスの信者になったが、イエスが断食と他の形式の自己犠牲を教えなかったので、これらの禁欲的で風変わりな男達の大半は、天から送られてきた教師として彼を受け入れるのを拒否した。

142:8.2 (1605.4) この地域に住む人々は、イエスがベツレヘムで生まれたことを知らなかった。大半の弟子のように、かれらは、あるじがナザレで生まれたと常に思っていたが、12 人は事実を知っていた。

142:8.3 (1605.5) ユダヤの南でのこの滞在は、労働の安らかで実り多い季節であった。多くの人々が王国に加えられた。6 月の初旬までには、エルサレムでのイエスに対する扇動が静まり、あるじと使徒は、信者に教え、慰めるために帰っていくほどであった。

142:8.4 (1605.6) イエスと使徒は、エルサレム、またはその近くで6 月全部を過ごしたが、この期間の公への教育はしなかった。かれらは、ほとんどの場合、天幕で暮らし、それは、当時ゲスセマニとして知られていた木陰の公園や庭園に張られた。この公園は、キドローンの小川から遠くないオリーヴ山の西の斜面に位置していた。かれらは、安息日の週末には、通常ベタニアでラザロとその姉妹と過ごした。イエスは、エルサレムの壁内へはほんの数回入ったが、多くの興味をもつ尋問者は、彼との雑談するのためにゲッセマネに出て来た。ある金曜日の夕

方、ニコーデモスとアリマセアからきた者は、思い切ってイエスに会いにやってきたのだが、あるじのテントへの入り口の前に立っていたにもかかわらず、恐怖心のために引き返していった。そして、勿論、かれらは、イエスが二人の行為の全てを知っているとは気づかなかった。

142:8.5 (1605.7) ユダヤの支配者達は、イエスがエルサレムに戻ったということを知ると逮捕する準備をした。しかし、イエスが公への説教を何一つしないと知ると、彼が、自分達の前の扇動で怯えるようになったと結論づけ、さらなる妨害なしで、この直接的な方法での教えを続けさせると決めた。その結果、情勢は、６月の下旬まで、サンヘドリンの一員であるシーモンという者が、ユダヤ人の支配者達の前でイエスの教えを公的に支持すると宣言するまで静かに過ぎた。直ちに、イエス捕縛への新たな扇動が起こり、それは、あるじが、サマリアとデカポリスの幾つかの都市へ退くと決断するほどに強くなった。

論文 143
サマレイアを通過して

143:0.1 (1607.1) 西暦27年6月末、ユダヤの宗教支配者の増大する反対のため、イエスと12　人は、ベサニアのラーザロスの家に保存されるための天幕や個人の手回り品を送った後にエルサレムを出発した。かれらは、サマレイアへと北に入り、安息日の間ベセールに滞在した。ここでは数日間、ゴープナとエフライェムから来た人々に説教した。アリマセアとタムナからの市民集団は、彼らの村を訪れるようにとイエスを誘いに来た。あるじと使徒は、この地域のユダヤ人とサマレイア人に教えて2 週間以上を過ごしたが、かれらの多くは、王国に関する朗報を聞くために、遠くはアンティパトリスからやって来た。

143:0.2 (1607.2) 南サマレイアの人々は、喜んでイエスの話を聞いた。ユダ・イスカリオーテスを除く使徒は、サマレイア人に対する自分達のもつ偏見の多くを取り除くことに成功した。ユダにとりこれらのサマレイア人を愛することは、非常に困難であった。7 月のイエスと仲間の最後の週は、ヨルダン川の近くのファサイリスとアーヘライダの新しいギリシアの都市へ向かうための準備をした。

1. アーヘライダでの説教

143:1.1 (1607.3) 使徒の一行は、８月前半にその本部をアーヘライダとファサイリスのギリシアの都市に設け、そこで、ほとんどが異教徒—ギリシア人、ローマ人、シリア人—の集団に説教を—というのは、これらの2つのギリシアの町にはわずかなユダヤ人しか住んでいなかった—するという彼等にとり最初の経験をした。これらのローマ市民との接触において、使徒は、来たるべき王国の知らせに関する宣言において新たな困難に遭遇し、イエスの教えに対する新たな反論に出くわした。使徒との数多い夜の談合の1つで、12 人が個人の仕事で被体験者との経験を繰り返し報告するなかで、イエスは、王国の福音へのこれらの反論を注意深く聞いた。

143:1.2 (1607.4) フィリッポスによる質問は、かれらの問題に特有であった。フィリッポスが言った。「あるじさま、これらのギリシア人やローマ人は、そのような教えは虚弱者と奴隷だけに適合していると、我々の知らせを軽んじております。異教徒の宗教の方が、強く、強健で、攻撃的な性格の習得を刺激するので、我々の教えよりも優れていると断言しています。かれらは、我々が、地上からすぐ滅尽する受動的な非抵抗者の衰弱した雛形へと全て

の者を変換するのだと、断言しています。彼らは、あるじさま、あなたが好きであり、あなたの教えは、天来のようであり、理想的であると率直に認めてはおりますが、真剣に我々を受け止めようとはしません。かれらは、あなたの宗教は、この世界のためのものではないと、つまり、人はあなたが教えるようには生きいけない、と主張しています。さて、あるじさま、これらの異教徒に何と言えば良いのでありましょうか。」

143:1.3 (1607.5) 王国の福音への同様の反論が、トーマス、ナサナエル、シーモン・ゼロートースおよびマタイオスによって示されるのを聞き、イエスは12人に言った。

143:1.4 (1608.1) 「私は、父の意志を行ない、また父の慈しむ特質を全人類に明らかにするためにこの世に来た。それが、　　我が同胞よ、私の任務である。そして、この時代、あるいは別の世代のユダヤ人や非ユダヤ人による私の教えに対する誤解のいかんにかかわらず、私は、この1つの事をするのである。しかし、神の愛でさえその厳しい規律があるという事実を見落とすべきではない。息子に対する父の愛情は、考えの足りない子の賢明でない

行為を押しとどめることをしばしば父に強制する。子は、いつも父の賢明で情愛深い拘束的な躾の動機を理解するというわけではない。しかし、我が楽園の父は、人を感動させずにはおかない愛の力によって宇宙の中の宇宙を統治するということをあなた達に宣言する。愛は、すべての精霊の現実の中で最も偉大である。真実は解放する顕示であるが、愛は最高の関係である。そして、あなたの仲間が今日の世界管理においていかなる大失敗をしようとも、来たる時代には、私が宣言するこの福音が、まさにこの世界を統治するであろう。人間の進歩の究極の目標は、神の父性の敬虔なる認識と人間の兄弟愛の具体化である。

143:1.5 (1608.2) しかし、誰が、私の福音が奴隷と虚弱者のためだけに意図されていると言ったのか。君達は、選ばれた使徒よ、虚弱者に似ているのか。ジョンは虚弱者に似ていたか。私が恐怖の俘になっていると見るのか。本当である、この世代の貧者や被抑圧者に福音が説かれたのは。この世界の宗教は、貧しい者を無視してきたが、我が父は、人々を差別はしない。そのうえ、今日の貧者は、悔悟の呼び掛けと息子性の受け入れに心を留める最

初の者である。王国の福音は、すべてのユダヤ人、非ユダヤ人、ギリシア人、ローマ人、富める者、貧しい者、自由の身、束縛される者に—かつ、老若、男女にも同等に—説かれようとしている。

143:1.6 (1608.3) 父は、愛と喜びの神であり、慈悲を施すのであるから、王国の奉仕が単調な寛ぎであるという考えを吸収してはいけない。楽園上昇は、いまだかつてない最高の冒険、永遠への険しい到達である。地球上の王国の奉仕は、君と同僚が、駆り集めることのできるすべての勇気ある人間らしさを要求するであろう。君の多くは、この王国の福音への忠誠のために処刑されるであろう。勇気が、戦闘の仲間の存在により強化されるとき、実戦で死ぬのは容易い。しかし、人間の心の中に秘められた真実の愛のために穏やかにただ一人で命を横たえることは、より高く、より深遠な人間の勇気と献身の形を要求する。

143:1.7 (1608.4) 今日、信じない者達は、無抵抗と非暴力の人生に関する福音を説くあなた方を軽蔑するかもしれないが、君達は、これらの教えへの壮烈な献身により全人類

を驚かせるこの王国の福音の誠実な信者の長い列の最初の奉仕志願者である。世界のどんな軍隊も、朗報—神の父性と人の兄弟愛—を宣言しに全世界に向かう君達とその忠実な後継者達が写し出すほどの度胸と勇気をこれまでに見せたことがない。生身の度胸は、勇気の最も低い形である。心の勇敢さは、より高い種類の人間の勇気であるが、最高かつ至上であるのは、深遠な精霊的な真実に対する啓発された信念への妥協のない忠誠心である。そして、そのような勇気は、神を知る人間の勇壮さを成す。そして、君達は全員、神を知る人間である。実際、君達は人の息子の個人的な仲間である。」

143:1.8 (1608.5) これがイエスがその折に言った全てということではないが、これは、彼の演説の序論であり、そして、かれは、この表明の詳述と例証を長々と続けた。これは、イエスがこれまでに12　人に向けた最も熱のこもった講演の1つであった。あるじは、滅多に歴然とした強い気持ちで使徒に話さなかったが、これは、著しい感情の伴った明白な真剣さで話した数少ない出来事の1つであった。

143:1.9 (1609.1) 使徒の公への説教と個人の仕事の結果は、すぐにあらわれた。まさにその日から、彼らの言葉は、新しい勇ましい勝利の音色を帯びた。12　人は、王国の新しい福音の積極的な攻勢の精神を帯び続けた。この日以降、彼らは、否定的な美徳とあるじの多面的な教えの否定的な長所と受動的な命令の説教にそれほどまでには占有されなかった。

2. 克己についての教訓

143:2.1 (1609.2) あるじは、人間の克己の完成された雛形であった。かれは、罵られても罵りはしなかった。かれは、苦しむとき、苦しめる者に対し何の脅しも発しなかった。かれは、敵に糾弾されたとき、まったく天の父の公正な判断に身を委ねた。

143:2.2 (1609.3) 夕方の会議の1つで、アンドレアスがイエスに尋ねた。「あるじさま、ヨハネが我々に教えたように、我々は自己犠牲を実行するのでしょうか。それともあなたが教える克己を求めて努力するのでしょうか。どの点で、あなたの教えは、ヨハネのものとは異なるでしょうか。」イエスが答えた。「祖先の光と法に従っていかに

もヨハネは正義の道を教えた。そして、それは、自省と自己犠牲の宗教であった。しかし、私は、無私無欲と自制の新しい伝言をもってきた。私は、天の父によって私に明らかにされたような生き方を示すのである。

143:2.3 (1609.4) 「まことに、まことに、君に言おう。自らを治める者は、町を占領する者よりも偉大である。克己は、人の道徳的な性格の基準と精精的な開発の指標である。古い秩序では、人は断食し、祈った。精神再生の新しい生物として、人は、信じ、歓喜することを教えられる。父の王国では、人は、新たな被創造物となる。古いものは廃ることになる。見なさい。万物がどのように新しくなるかを私が見せる。そして、人は、互いへの愛により、束縛から自由に、死から永遠の生命に進んだことを世界に信じさせることである。

143:2.4 (1609.5) 「昔のやり方では、人は、抑圧すること、服従すること、生活の規則に従うことを追求する。新しいやり方では、人は、真実の聖霊により変えられ、その結果、絶え間ない心の精霊的更新により魂の内面で強化される。このようにして、人は、神の優しく、許容でき

る、そして完全な意志を確かで喜ばしく実行する力に恵まれるのである。忘れるでない—それは、人が神性の参加者になることを確実にする神のきわめて偉大で貴重な約束に対する人の個人の信仰である。このように、人の信仰と精怜の変化でにより、人は実際は神の寺院となり、彼の精霊は実際に人の中に住むのである。それから、もし精霊が人の中に住むならば、人は、もはや肉体の奴隷ではなく、精霊の自由で解放された息子である。精霊の新しい法は、自己束縛の恐怖と自己否定の奴隷の古い法に代わって自制の自由を授ける。

143:2.5 (1609.6) 「しばしば、人は、悪をしでかしたとき、実際には、自身の本来の傾向で惑わされてきたにもかかわらず、自分の行為を悪者の影響のせいにしようと考えてきた。ずっと以前に予言者エレミヤは、人間の心が、何ものにもまして欺瞞的で、時には絶望的に邪でさえあると言わなかったか。人は、なんと容易く自己欺瞞になり、それにより、愚かな恐れ、種々の欲望、隷属的な楽しみ、悪意、妬み、そして執念深い憎しみにさえ陥るのである。

143:2.6 (1610.1) 「救済は、肉体の独善的行為によるのではなく、精霊の再生によるのである。きみは、肉の恐れと自己否定によってではなく、信仰により義とみとめられ、神の恵みにより仲間に歓迎される、とはいえ、精霊の生まれである父の子等は、自己と、肉体の欲望に関係する全てにとってのこれまでずっと、そして常に主人である。信仰によって救われるということを知るとき、人には、神との真の平和がある。そして、この妙なる平和の道に続く者はすべて、永遠の神の絶えず前進する息子の永遠の奉仕へと浄められる運命にある。これからは、神の愛に完全性を捜し求める一方で、心身のすべての悪から自分を浄化することは、人の義務ではなく、むしろ高い特権である。

143:2.7 (1610.2) 息子性は信仰に基づき、人は、恐怖に動揺することなく変わらずにいることである。人の喜びは、神性の言葉への信仰からくるものであり、それ故に父の愛と慈悲の現実への疑いに導かれはしない。それは、人を正真正銘の悔悟に導く神の善そのものである。自己支配の秘密は、常に愛でによって働く内在する精霊への信仰に結びついている。この救済する信仰でさえ、自分自身か

らは得ない。それも、神の贈り物である。そして、この生きた信仰の子供であるならば、人は、もはや自己の奴隷ではなく、むしろ自分自身の勝利を収めた主人、解放された神の息子なのである。

143:2.8 (1610.3) そこで、子供等よ、人が精霊の生まれであるならば、自己否定の人生と肉体の欲望を警戒する人生における自意識の強い束縛から永久に救われる。そして、精霊の喜びの王国に連れられ、そこでの日常生活において自然に精霊の実をしめす。そして、精霊の果実は、真の克己の本質であり、地球の人間の到達の最も高い型でさえある。」

3. 気分転換と息抜き

143:3.1 (1610.4) おそらくこの頃、かなり神経質で感情的な緊張状態が、使徒とその近い弟子仲間の間に展開した。かれらは、一緒に暮らし働くことになかなか慣れなかった。かれらは、ヨハネの弟子との調和した関係の維持にますます困難を経験していた。非ユダヤ人とサマレイア人との接触は、これらのユダヤ人にとりかなりの試煉であった。その上、これらのほかに、イエスの最近の発言は、

かれらの心の不安状態を増大した。アンドレアスは、ほとんど我を忘れていた。かれは、次になすべきことが分からず、問題と当惑を抱えてあるじの元へ行った。イエスは、この使徒の長が、問題を告げるのを聞いて言った。「アンドレアス、人がそのような関係の段階に至るとき、そして、それほど多くの人々が強い感情で関わり合っているとき、君は、説得してその当惑を思いとどませることはできない。私には君の頼みをすることはできない—私は、これらの私的な社交問題に参加するつもりはない—が、3日間の骨休めと息抜きの享受には参加するつもりである。同胞のもとに行き、全員が、私とサールタバ山に行くことになっていると知らせてきなさい。私は、そこで1日か2日休息したい。

143:3.2 (1610.5) きみは、ただちに11人の同胞のところに行き、個人的に次のように伝えるべきである。『あるじが、一とき休み、寛ぐために我々と一緒に行くことを望んでいる。我々は全員、最近相当精神のいらだちと心の緊張感を経験したので、この休日の間、多くの試煉や問題についていかなる言及もしないことを提案する。この件で皆をあてにしてもよいか。』このように、ひそかに個人的

に同胞の各人に働きかけなさい。」そこで、アンドレアスは、あるじの命令通りにした。

143:3.3 (1611.1) それぞれの経験上、これは素晴らしい機会であった。彼らは、山に上ったこの日を決して忘れなかった。全旅行を通して、自分達の問題に関し一言も言われなかった。山頂に着くと、イエスは皆を周りに座らせて言った。「同胞よ、君達は皆、休息の価値と気晴らしの効果を会得しなければならない。何らかの縺れた問題を解決する最良の方法は、しばらくそれらを見捨てることであると気づかねばならない。それから、休養あるいは崇拝からさっぱりして戻ると、毅然たる心は言うまでもなく、君達は、より鮮明な頭とより確かな手で問題に体当たりすることができる。また、心と身体を休ませる間、幾度となく問題の規模や割合が縮まっているのが分かる。」

143:3.4 (1611.2) 翌日、イエスは、議論の議題を12人各自に一つ割り当てた。その日まる１日、彼らの宗教の仕事には関連しない回想と諸事についての話し合いに徹した。イエスが皆の真昼の食事のためにパンをちぎったとき、感謝

を—口頭で—捧げることさえ怠ったとき、彼らはほんのしばらく驚いた。彼が、そのような形式的な手続きを怠るところを見るのは、彼らには初めてであった。

143:3.5 (1611.3) 山に登ったとき、アンドレアスの頭は問題でいっぱいであった。ヨハネは過度に心が当惑していた。ジェームスはひどく魂が煩わされた。マタイは、彼らが非ユダヤ人の間に逗留していたので資金面で切羽詰まっていた。ペトロスは、神経が高ぶり、最近いつもより怒りっぽくなっていた。ユダは、過敏さと自己本位からくる周期的な発作に苦しんでいた。シーモンは、自分の愛国心と人間の兄弟愛とを調和させる努力において異常に動揺していた。フィリッポスは、事の成り行きにますます困惑した。ナサナエルは、非ユダヤ人の住民との接触以来、あまり剽軽ではなくなっており、トーマスは、ひどい意気消沈の時期にいた。双子だけは、平常通りで、平静であった。彼らは全員、ヨハネの弟子と穏やかに暮らしていく方法に関し非常に迷っていた。

143:3.6 (1611.4) 3日目、山を下り野営地に戻りかけたとき、皆に大きな変化が起きた。かれらは、多くの人間の難問が

実際は存在しない、また多くの差し迫った問題が、誇張された恐怖の創作物であり、増大された不安の結果であるという重要な発見をした。そのようなすべての当惑は振り捨てることが最善であることを学んだ。自分達が出掛けて行くことにより自然に解決するようにそのような問題を置き去りにしたのであった。

143:3.7 (1611.5) この休暇からの帰還は、ヨハネの追随者との大いに改善された関係の期間の始まりを記した。12人の多くは、皆の心の変化に気づき、規則的生活義務からの3日間の休暇の結果、過敏な短気からの解放に気づいたとき、本当に陽気づいた。人間関係の単調さが、悩みの種子を増殖し困難を拡大するという危険がつねにある。

143:3.8 (1611.6) アーヘライダとファサイリスのギリシアの2都市の非ユダヤ人の多くが、福音を信じたというわけではなかったが、12人の使徒は、もっぱら非ユダヤ人の集団との初めての広範囲な仕事で貴重な経験をした。その月半ばの月曜日の朝、イエスは、アンドレアスに言った。「我々はサマレイアに入る。」そこで、皆は、ヤコブの井戸の近くのシハーの都市にむけてすぐに出発した。

4. ユダヤ人とサマレイア人

143:4.1 (1612.1) 600 年以上もの間、ユダヤのユダヤ人、後にはガリラヤのユダヤ人も、サマレイア人に敵意を抱いてきた。ユダヤ人とサマレイア人の間のこのわだかまりは、このようにして起きた。紀元前700年頃、アッシリアの王サーゴーンは、中部パレスチナの反乱鎮圧に当たり、イスラエルの北の王国から2万5千人あまりのユダヤ人を連れ去り、捕虜とし、その代わりにほとんど同数のクティーテース、セファーヴィー、ハマティーテースの子孫を定着させた。後に、オスナッパーは、サマレイアに住まわせるためにさらに他の移住団を送った。

143:4.2 (1612.2) ユダヤ人とサマレイア人の間の宗教上の反目は、バビロン人の監禁状態からのユダヤ人の復活から、すなわちサマレイア人がエルサレムの再建妨害に立ち働いているときに始まった。その後、アレクサンダー軍への好意的援助の拡大により、かれらは、ユダヤ人を怒らせた。彼らの友好と引き換えに、アレクサンダーは、サマレイア人にゲリージーム山に寺院建設の許可を与え、そこで、彼らは、ヤハウェと部族神を崇拝し、エルサレムの寺院の礼拝順序を真似て生贄を提供した。かれら

は、少なくとも、ヨハネ・ヒルカノスがゲリージーム山の彼らの寺院を破壊するマッカビーウスの時代までこの崇拝を続けた。使徒フィリッポスは、イエスの死後のサマレイア人のための労働において、この古いサマレイアの寺院の跡地で多くの会合を開いた。

143:4.3 (1612.3) ユダヤ人とサマレイア人の間の敵意は、謂れのある歴史上のものであった。アレクサンダーの時代以来、かれらは、互いにいかなる関係も持たなかった。12人の使徒は、デカーポリス、シリアのギリシアの、また他の非ユダヤ教徒の都市での説教に反対ではなかったが、「サマレイアに入ろう」と、イエスに言われたとき、それは、あるじに対する忠誠の手厳しい試煉であった。しかし、1 年もその上もイエスといるうちに、かれらは、イエスの教えへの信頼さえ、またサマレイア人に対する自分達の偏見さえ超える個人的な忠誠心の形を開発した。

5. シハーの女

143:5.1 (1612.4) あるじと12人がヤコブの井戸に到着したとき、彼らは、しばらくこの付近に逗留したかったので、フィ

リッポスがシハ一から食物とテントを持って来る手伝いのため使徒達を連れて行っている間、旅で疲れきっていたイエスは、井戸の側に留まった。ペトロスとゼベダイの息子達は、イエスと残っていたことであろうが、イエスは、仲間と一緒に行くように要求して、言った。「私のために恐れなくてよい。これらのサマレイア人は、親しみやすい。我々の同胞のみが、つまりユダヤ人のみが、我々に危害を加えようとする。」イエスが使徒の帰りを待つために井戸の側に座ったのは、この夏の夕方6時頃であった。

143:5.2 (1612.5) ヤコブの井戸の水は、シハ一にある数ある井戸水より鉱物が少なく、従って、飲み水として非常に重宝された。喉が乾いていたが、イエスにはいかようにも井戸から水を手にする方法がなかった。そこでシハ一の女性が、水差しを持ち井戸から汲み取る準備をしていると、「一杯おねがいします。」と、イエスは言った。サマレイアのこの女性は、見かけや出立ちからイエスがユダヤ人であることが分かり、またその訛りからガリ一ラのユダヤ人であると推測した。彼女は、名はナルダといい、美しい女性であった。彼女は、井戸でユダヤ人の男

性にそのように話しかけられ、水を求められたことに非常に驚いた。というのは、当時自尊心をもつ男性が人前で女性に話すのは、ふさわしくないと考えられており、ましてやユダヤ人がサマレイア人と会話することははるかに少なかったので。それ故、ナルダは、「ユダヤ人でありながら、なぜ私に、サマレイア人の女に飲み物を求めるのですか。」と尋ねた。イエスは答えた。「私は、確かに飲み物を求めはしたが、もしあなたが理解することができたなら、私に生ける水を一飲み求めるであろうに。」その時、ナルダが言った。「でも、だんなさま、あなたには汲み取るものもなく、それに井戸は深いのです。それと、その生ける水をどこから手に入れるのですか。あなたは、この井戸を与えてくれた私達の先祖ヤコブよりも偉い方ですか。ヤコブ自身、その子等も、その家畜もこの井戸から飲んだのです。

143:5.3 (1613.1) イエスが返答した。「この水を飲む誰でも再び喉が渇くであろうが、生ける精霊の水を飲む者は、誰であろうとも決して喉が渇くことはない。また、この生ける水は、その人のうちにて、とこしえの命にさえ至る湧き出で爽快にする井戸となる。」次に、ナルダが言っ

た。「渇くことがなく、また、はるばるここに汲みに来なくてよいようにその水をください。そのうえ、サマレイアの女がこのように立派なユダヤの方から何であれ頂戴できれば喜びであります。」

143:5.4 (1613.2) ナルダは、自分に快く話すイエスの気持ちをいかように解釈してよいか分からなかった。彼女は、あるじの顔、清廉で聖者のような男性の表情に見入ったが、優しさをありきたりの親しみと誤解し、彼の比喩的表現を自分への言い寄りと曲解した。そして、彼女は、品行に欠ける女性であったので、おおっぴらに浮つく気分になるつもりでいたが、イエスが女性の目を真っ直ぐ覗き込み、命令口調で、「婦人よ、夫の元へ行きここに連れて来なさい。」と言ったとき、この命令がナルダを正気にさせた。彼女は、あるじの優しさについての自分の誤りに気づいた。その話し振りを誤解したと気づいた。彼女は怯えた。風変わりな人の面前に立っていると悟り始め、彼女は、心の中で相応しい返事を手探りしながら、かなり混乱し、「でも、私は夫を連れてこれません、私にはいないので。」と言った。その時、イエスが言った。「そなたは真実を話した。かつて夫がいたかもしれ

ないが、今一緒に生活している者は夫ではないのだから。私の言葉を軽々しく扱うのを止め、私がこの日に持つ生ける水を捜し求める方が良かろう。」

143:5.5 (1613.3) この時までに、ナルダは冷静になっており、彼女の良い部分が呼び覚まされていた。彼女は、まったく好んで不道徳な女性となったのではなかった。夫に冷酷に、また不当に捨てられて苦境に陥り、結婚せずに、妻としてあるギリシア人と暮らすことに同意した。彼女は、あまりにも軽率にイエスに話したことを今や大変に恥じ、また深く後悔し、あるじに言った。「主よ、あなたが聖なる方、あるいは予言者であると悟り、あなたに対する口のきき方を後悔しております。」そして、彼女は、多くの者達が過去にもその後にもしてきたように—神学と哲学の議論に変えて個人的な救済問題を避けて、—あるじに直接の、個人的な助けを求めようとしていた。その時、彼女は、すばやく自身の必要から会話の向きを神学上の論争へと変えた。ゲリージーム山の方を指して、彼女は続けた。「私達の祖先はこの山で礼拝しましたが、でも礼拝すべき場所はエルサレムだとあなたは

言われます。では、神の適切な礼拝場所はどちらですか。」

143:5.6 (1613.4) イエスは、魂の製作者との直接の、探し求める接触を避ける女性の魂の試みを見て取ったが、その魂により良い生き方を知る願望があるのも見た。結局のところ、ナルダの心には、生ける水への本当の渇きがあった。したがって、かれは、根気よく彼女に対処して言った。「女よ、この山でもエルサレムのどちらでも父を崇拝しない日がやがて来ると言わせてもらおう。しかし、いま人は、自分が分からないもの、すなわち多くの異教の神々の宗教と非ユダヤ教的哲学の混合物を崇拝している。ユダヤ人は、少なくとも誰を崇拝するかについて知っている。彼らは、1柱の神、ヤハウェに崇拝を集中することによりすべての混乱を取り除いた。しかし、すべての誠実な崇拝者が、精霊と真理をもって父を崇拝するときが来るとき—今でさえ—、というのも、父は、まさにそのような崇拝者を求めているのであるから。　神は精霊であり、彼を崇拝する者は、精霊と真理で崇拝しなければならない。救済とは、他の者がいかに、あるいは、いずこで崇拝すべきかを知ることではなく、私がた

った今進呈しようとするこの生ける水を人の心の中へ受け入れることから得られるのである。」

143:5.7 (1614.1) しかし、ナルダは、地上での自分の都合の悪い私生活と神の前での自己の魂の状態についての話を避けて、さらに努力するのであった。彼女は、もう一度、一般的な宗教の質問に向かって言った。「はい、私は、救出者と呼ばれている改心させる人の接近、そして、その方が来られるとすべてのことを私達に明言するということをヨハネが説教したのを知っています。」そこで、イエスは、ナルダを遮り、瞠目に値する確信をもって言った。「あなたに話している私がその者である。」

143:5.8 (1614.2) これは、イエスが地球でした神性と息子性の最初の直接かつ積極的な、また、公然の表明であった。そして、それは、女性に、サマレイアの女性に、しかもこの瞬間まで人の目には問題のある性格の女性に、だが、神の目には彼女自身が望んだ以上の罪を犯してきた女性として映った女性に、また今は、救済を望み、心から誠意をもって望む人間の魂に、為されたのであった。そして、それで十分であった。

143:5.9 (1614.3) ナルダが、より良いこと、そしてより立派な生き方の彼女の本当の、個人的な切望を口にしようとした時、つまり心の本当の願望を話そうとしたちょうどその時、12　人の使徒は、シハーから戻り、イエスがこの女と親しげに話している—このサマレイアの女と、しかも、たった二人でいる—この場面に行き合わせ、皆は驚いたどころではなかった。彼等は、すばやく物資を置いて脇へ寄り、誰も向こう見ずにイエスを咎めようとはしなかった。一方イエスがナルダに言った。「女よ、行きなさい。神はそなたを許した。今後、そなたは、新しい人生を送るであろう。そなたは、生ける水を受け取り、新たな喜びは、そなたの魂の中に湧き出で、そなたは、いと高きものの娘となるであろう。」そこで、女性は、使徒達の難色に気づき、水差しを置き去りにして都へと逃げた。

143:5.10 (1614.4) 彼女は、都に入ると会う人ごとに呼び掛けた。「ヤコブの井戸に出かけなさい。早く行きなさい。そこで私がかつてしたすべてを言い当てた人に会うでしょう。もしかしたら、この人が改心させる人かもしれません。」そして、陽が沈む前に、大群衆は、イエスの話

を聞くためにヤコブの井戸に集合した。そこで、あるじは、生命の水、内在する精霊の贈り物についてさらに話した。

143:5.11 (1614.5) 使徒は、女、いかがわしい性格の女、不道徳である女とさえ喜んで話すイエスの気持に衝撃を受けずにはいられなかった。女が、いわゆる不道徳な女でさえも、父として神を選ぶことができる魂を持ち、それによって神の娘となり、生命、永遠に続く命の候補者になると使徒に教えることは、イエスにとって非常に困難であった。19 世紀経た後でさえ、多くの者は、あるじの教えを理解することに、同様の不本意を見せる。キリスト教でさえ、キリストの人生の真実の代わりに、その死の事実の周りに執拗に確立されてきた。世界は、彼の悲惨で悲しい死よりも彼の幸福で神が顕な人生に関心を持たなければならない。

143:5.12 (1614.6) ナルダは、その翌日、使徒ヨハネにこの全ての話をしたが、彼は、他の使徒に決してそれを完全に明らかにせず、イエスも12 人にそれを詳細には話さなかった。

143:5.13 (1615.1) ナルダは、イエスが「私がかつてしたすべて」を言い当てたとヨハネに告げた。ヨハネは、ナルダとの話についてイエスに何度も尋ねたかったが、ついぞしなかった。イエスは、彼女の事ではただ1つだけ彼女に言ったのだが、イエスの彼女の目を見入る様子や扱いが、直ちに彼女の波瀾万丈の人生の全景を心にもたらしたので、彼女は、過去の人生のこの見直しの全てをあるじの様子と言葉に関連づけたのであった。イエスは、彼女には５人の夫がいたとは決して言わなかった。夫に捨てられてから４人の異なる男性と暮らしてきた。そして、イエスが人の姿をした神であると気づいた瞬間、これが、すべての彼女の過去と共に、心の中にありありと浮かんだので、イエスは、本当に自分に関する全てを話したと後にヨハネに繰り返して言うほどであった。

6. サマレイアの宗教復活

143:6.1 (1615.2) ナルダが、イエスに会いにくる群衆をシハーから引き寄せた晩に、12人は、ちょうど食物を持って帰ったところであった。彼らは、一日中食べずに空腹であったので、イエスに人々と話す代わりに自分達と一緒に食事をするように懇願した。しかし、イエスには、暗闇

が、すぐに彼らに覆いかぶさると分かっていた。従って、人々を帰す前に彼らに話す決意に固執した。アンドレアスが、群衆に話す前に一口食べるように説得しようとした時、イエスは、「私にはきみが知らない食べる肉がある。」と言った。これを聞いた使徒達が互いに言った。「誰かが、何か食べものを持って来たのであろうか。あの女が飲み物と一緒に食物を上げたということがあろうか。」彼ら同士が話しているのを聞いて、イエスは、人々に話す前に脇に回って12人に言った。「私の肉というのは、私をつかわされた方の意志を為し、その方の御業を為し遂げることである。もはや収穫までこれこれしかじかの時であると言うべきではない。我々の話しを聞くためにサマレイアの都市から来るこれらの人々を見なさい。言っておく。畑はすでに色づき刈り入れを待っていると。刈る者は、報酬を受けて永遠の命に至るこの実を集める。よって、蒔く者も刈る者も共に喜ぶ。ここに『一人が蒔き、一人が刈る』という諺が本当となる。私は、君達がまだ働いたことのないところで刈り取らせるために今遣わせるところである。他の者達は働いた。

そして、彼等の仕事を君達が始めようとしている。」これは、洗礼者ヨハネの説教に言及したのであった。

143:6.2 (1615.3) イエスと使徒は、シハーに入り、ゲリージーム山で野営に入る前に2日間説教をした。シハーの住民の多くは、福音を信じ洗礼を求めたが、イエスの使徒は、洗礼をまだ実行しなかった。

143:6.3 (1615.4) ゲリージーム山での初めての野営の夜、使徒は、ヤコブの井戸での女性に対する自分達の態度を批難されると予測したが、イエスは、その件に関しては何も言わなかった。その代わり、かれは、「神の王国での主要な現実」について注目すべき話をした。どんな宗教においても、人が宗教について考えるとき、価値が不均衡になることを容認し、また事実が真理の場所を占有することは非常に容易いことである。十字架の事実は、その後のキリスト教のまさにその中心となった。だが、それは、ナザレのイエスの人生とその教えから来るかもしれない宗教の中心の真理ではない。

143:6.4 (1615.5) ゲリージーム山でのイエスの教えの主題は、次の通りであった。すべての人に、ちょうど彼(イエス)

が、兄弟-友人であったように、神を父-友人として認めてもらいたということ。そして、ちょうど真実が、これらの神性関係の観察の最大の表明であるのと同じように、かれは、繰り返し、愛が、世界で—宇宙で—最も優れた関係であるということを彼らに銘記させた。

143:6.5 (1616.1) イエスは、安全にそうすることができたし、それに二度とサマレイアの中心を訪れ王国に関する福音を説くことはないと知っていたので、サマレイア人に完全に自身を表明した。

143:6.6 (1616.2) イエスと12人は、ゲリージーム山で８月末まで野営した。かれらは、日中は町中でサマレイア人に王国—神の父性—の朗報を説き、夜は野営場で過ごした。これらのサマリアの都市でのイエスと12人の仕事は、多くの魂を王国へもたらし、イエスの死と復活後、また、エルサレムでの信者達への痛烈な迫害による使徒達の地の果てへの分散後のこれらの領域でのフィリッポスの驚異的な仕事への道の開拓に大いに役立ったのであった。

7. 祈りと崇拝に関する教え

143:7.1 (1616.3) ゲリージーム山での夜の談合で、イエスは、多くのすばらしい真実を教えた。特に、次のことを強調した。

143:7.2 (1616.4) 真の宗教は、創造者と自意識関係における個々の魂の行為である。組織化された宗教は、個々の宗教家の崇拝を社会化する人の試みである。

143:7.3 (1616.5) 崇拝—精霊的熟考—は、奉仕、物質的な現実との接触と交互になされなければならない。仕事は、遊びと交互になされるべきである。宗教は、ユーモアと調和されなければならない。深い哲学は、律動的な詩によって和らげらなければならない。生活の重圧—人格の時間的緊張—は、崇拝の安らぎでほぐされるべきである。宇宙の中での人格孤立の恐怖から来る不安感は、父を信仰する静観によって、また、崇高なるもののを認識する試みによって中和されなければならない。

143:7.4 (1616.6) 祈りは、人にあまり考えさせないで、より悟るように考案されている。それは、知識を増大させるためではなく、むしろ洞察が展開されるように考案されている。

143:7.5 (1616.7) 崇拝は、未来により良い人生を予想し、これらの新しい精霊的な意味を今ある生活への反映が意図されている。祈りは、精神的に支えているが、崇拝は、神々しく創造的である。

143:7.6 (1616.8) 崇拝は、多くの者への奉仕の気持を奮い立たせるために一つなるものに向かう手法である。崇拝は、物質的宇宙からの魂の分離、並びに、全創造の精霊的現実への魂の同時の、確実な執着を測定する物指しである。

143:7.7 (1616.9) 祈りは、自己を思い出させること—崇高な考え—である。崇拝は、自己を忘れること—超思考—である。崇拝は、努力を要しない注目、本当の、理想的な魂の休息、安らかな精神努力の形態である。

143:7.8 (1616.10) 崇拝は、部分がそれ自体を全体と同一視する行為である。有限者が自身と無限者を、息子が自身と父を、足並みを揃える行為における時と永遠を同一視する行為である。崇拝は、神性の父、との息子の個人的な親交行為、つまり人間の魂-精霊による壮快で、創造的で、そして兄弟らしくて空想的な態度である。

143:7.9 (1616.11) 使徒は、野営場での教えのほんのいくつかしか把握しなかったが、他の世界では理解されたし、また、地球の他の世代はするであろう。

論文 144
ギルボーアとデカーポリスにて

144:0.1 (1617.1) 9月と10月は、ギルボーア山の傾斜地の奥まった野営に隠遁して過ごされた。イエスは、使徒と9月をここで過ごし、王国の真実を彼らに教え、指導した。

144:0.2 (1617.2) イエスと使徒が、この時期サマレイアとデカーポリスの境界に隠遁していたのには、幾つかの理由があった。エルサレムの宗教的な支配者達は非常に敵対的だあった。ヘローデス・アンティパスは、ヨハネとイエスが、何らかの方法で関連していると疑念を抱き続けると同時に、ヨハネを放免するのも処刑するのも恐れながら、まだ獄中に拘留していた。これらの状況のもと、イェフーダかガリラヤのどちらかで積極的な仕事に対して計画を立てることは賢明ではなかった。第3の理由があった。信者の数が増加するにつれ、ヨハネの弟子の指導者達とイエスの使徒達の間にゆっくりと増大する緊張感が悪化していた。

144:0.3 (1617.3) イエスには、教育と説教の下準備の時期は、ほぼ終わり近くであるということ、次の行動は、地上での人生の完全で最終的な努力の始まりにかかわってくるということが分かっており、かれは、洗礼者ヨハネにとって困難である、または恥ずかしいようないかなる方法でもこの仕事の着手を望まなかった。従って、イエスは、使徒に温習をさせながら隠遁して、若干の時を過ごし、連合のための努力においてその後ヨハネが処刑されるか、釈放されるまでデカーポリスの町で静かに仕事をすると決めた。

1. ギルボーア野営地

144:1.1 (1617.4) 時の経過と共に、12 人は、一層イエスに傾注し、ますます王国の仕事に専念するようになった。その献身は、大いに個人的な忠誠心によるものであった。彼らは、イエスの多面的な教えを把握しなかった。かれらは、イエスの性質や地球での贈与の意味を完全に理解したというわけではなかった。

144:1.2 (1617.5) イエスは、3つの理由により隠遁することを使徒に明らかにした。

144:1.3 (1617.6) 1. 王国の福音への彼等の理解と信念を確認するため。

144:1.4 (1617.7) 2. イェフーダとガリラヤ両所における彼等の仕事への反対が鎮まるのを待つため。

144:1.5 (1617.8) 3. 洗礼者ヨハネの運命を待ち受けるため。

144:1.6 (1617.9) ギルボーアに滞在中、イエスは、自分の早期の人生とヘルモン山での経験に関して12　人によく話した。また、洗礼直後の40日間に丘で起こったことを幾分明らかにした。かれはまた、父のもとに戻るまでこれらの経験に関して何人にも話すべきではないと、彼らに直接に命じた。

144:1.7 (1618.1) イエスがまず奉仕をするようにとの要請をして以来、９月のこれらの週に、皆は休息し、訪問し、自分達の経験について詳しく語り、また、あるじが今までに教えてくれたことを整合させるひたむきな努力をした。多少なりとも彼らは全員、これが長期にわたる休養の最後の機会であると感じた。彼らには、イェフーダかガリラヤのどちらかでの来たるべき王国の最終的な布告の始

まりを記すと分かっていたが、王国が来たとしてもそれが一体何であるのか、それに関する考えはほとんどなく、また定着した考えなども全くなかった。ヨハネとアンドレアスは、王国はすでに来たと思った。ペトロスとジェームスは、まだ来ていないと思った。ナサナエルとトーマスは、当惑していると率直に認めた。マタイオス、フィリッポス、シーモン・ゼローテースは、確信がなく困惑していた。双子は、論争についてこのうえなく幸福で知らずにいた。ユダ・イスカリオーテスは、黙して曖昧であった。

144:1.8 (1618.2) イエスは、この時期の大半、山の野営場近くに一人きりでいた。時折、かれは、ペトロス、ジェームス、ヨハネを伴ったが、度々祈るか、または親交のために一人で立ち去った。洗礼とペライアの丘での40日間後、父との交わりのこの期間を祈りと呼ぶことは、決して妥当ではなく、また崇拝していると呼ぶことも矛盾しているのだが、父との個人の親交としてこの期間に触れることは全く正しい。

144:1.9 (1618.3) 9 月全体を通しての議論の本題は、祈りと崇拝であった。彼らが数日間崇拝について議論した後、イエスは、「あるじさま、祈る方法を我々に教えてください。」というトーマスの要請に答えて、ようやく祈りに関する忘れ難い講義をした。

144:1.10 (1618.4) ヨハネは、祈りを、来たるべき王国における救済のための祈りを、弟子に教えた。イエスは、彼の追随者がヨハネの祈りの形式を用いることを決して禁じはしなかったが、使徒は、あるじが、一定の、正式な祈りをする習慣を完全に是認していないとかなり早くに察知していた。にもかかわらず、信者は、絶えず祈り方を教えてくれるように頼み込んだ。12人は、イエスがどんな祈りの形を承認するかを切望した。そして、イエスが、トーマスの要請に答えて示唆に富んだ祈りの形式を教えることにこの時同意したのは、主に一般人のための何らかの簡単な祈りの必要性のためであった。イエスは、ギルボーア山滞在中の３週目のある午後、この授業をした。

2. 祈りに関する講話

144:2.1 (1618.5) 「ヨハネは、簡単な祈りの形式を確かに教えた。『父よ、罪を洗い流してください。あなたの栄光をお示しくださり、精霊に私達の心を永遠に浄めさせてください。アーメン。』かれは、あなたが、民衆に何か教えることがあるようにとこの祈りを教えた。かれは、祈りにおける魂の表現としてそのような一纏まりの、そして正式の祈りを用いるべきだとは意図しなかった。

144:2.2 (1618.6) 「祈りは、精霊に向かう完全に個人的で自然発生的な魂の態度の表現である。祈りは、息子性の精霊的交わりと仲間であることの表現でなければならない。精霊により書き綴られるとき、祈りは、協力の精霊の進歩につながる。理想的な祈りは、理性的な崇拝につながる精霊的な親交の形である。真実に祈ることは、理想成就のために天に向かって手を伸ばす至誠の態度である。

144:2.3 (1619.1) 祈りは、魂の息吹であり、父の意志を確かめる試みにおいて不断であるよう導くべきである。この中の誰かに隣人がいるとして、真夜中に行き、『友よ、３塊のパンを貸してください。友達が旅先から会いに来たのですが、何も出すものがないのです。』と言った場合、

隣人が、『面倒を掛けないでくれ。もう戸は閉めており、いま子供等と寝ている。だから、起きて、パンをあげることはできない。』と答えるとしたら、きみは、友人が空腹であると、そして、差し出す何の食物もないと説明し、しきりに頼むであろう。君達に言う、隣人は、友人であるという理由からは起きてパンを与えないだろうが、しつこさのために起きあがり、必要な数のパンを出してくれるであろう。それでは、もしも、執拗さが、必滅の人間からさえ好意を得られるならば、君の精霊の執拗さは、どれくらい君のために天の父の喜んで渡す手から命のパンを勝ち得ないことがあろうか。重ねて言う。求めよ。さすれば、与えられるであろう。探せよ。さすれば、見い出すであろう。叩けよ。さすれば、開かれるであろう。誰でも求める者は受け、探す者は見い出す。そして戸を叩く者には開かれるであろう。

144:2.4 (1619.2) 息子が浅はかにも求めるとして、子の不完全な願いに文字通り応えるよりも、むしろ親らしい知恵に従い応えることを、父親である君達の誰が、躊躇うであろうか。子供がパンを必要とするのに、ただ浅はかにそれを求めるという理由で、石を与えるであろうか。息子が

魚を必要とするのに、魚と一緒に蛇がたまたま網にかかり、その子供が愚かに蛇を求めるという理由だけで、水蛇を与えるであろうか。このように、死を免れず有限である君が、祈りに答え、子供に好ましく適切な贈り物を与える方法を知っているならば、なおのこと、天の父が、求める者に精霊と多くの附加の恩恵を与えないことがあろうか。人は、いつも祈るべきであり、また挫折しないようにすべきである。

144:2.5 (1619.3) 邪悪な都に住んでいたある裁判官の話をしよう。この裁判官は、神を恐れず、人を敬いもしなかった。さて、貧乏な未亡人が、その都におり、繰り返しこの不当な裁判官の元に来ては、『敵から保護してください。』と言った。しばらくの間、彼女に耳を貸そうともしなかったが、やがて、かれは、自分に『私は、神を恐れもしなければ、人を敬いもしないが、この後家が、渡しを煩わすのをやめないので、絶えずやって来ては私をくたくたに疲れさせるのをやめさせるために彼女を擁護しよう。』と言った。私は、君が祈りに徹することを奨励し、また君の請願が正当で公正な上にいる父を変えることはないということのためにこれらの話をしている。

しかしながら、君の粘り強さというものは、神の機嫌をとるためではなく、地球での君の心構えを変え、精霊の受容性のために魂の能力を拡大することである。

144:2.6 (1619.4) 「しかし、君が祈るとき、ほんの少しの信仰しか実践していない。本物の信仰というものは、魂の拡大と精霊的な進歩の通り道にたまたま横たわるかもしれない物質的な困難の山を取り除くであろう。」

3. 信者の祈り

144:3.1 (1619.5) しかし、使徒はまだ満足していなかった。かれらは、新しい弟子達に教えることのできる手本となる祈りをイエスから与えられることを望んでいた。祈りに関するこの講話を聞いた後、ジェームス・ゼベダイオスが言った。「とても、素晴らしいです。あるじさま、でも、私たちに頻繁に懇願する新しい信者達が望む『天の父に適切に祈る方法を教えてください。』というような祈りの形を私達は望んでいるのではありません。

144:3.2 (1619.6) ジェームスが話し終えると、イエスが言った。「もし、それならば、君達がまだそのような祈りを望ん

でいるのなら、ナザレスで私の弟妹達に教えたものを紹介しよう。」

144:3.3 (1620.1) 天国にいます我らの父よ、

144:3.4 (1620.2) 御名が崇められますように。

144:3.5 (1620.3) 御国が来ますように、御心が

144:3.6 (1620.4) 天で行なわれるとおり地でも行なわれますように。

144:3.7 (1620.5) 日々の糧を今日もお与えください。

144:3.8 (1620.6) 魂を命の水で新たにしてください。

144:3.9 (1620.7) 我々が債務者を許しましたように、

144:3.10 (1620.8) 私達の負債の一つ一つをお許しください。

144:3.11 (1620.9) 誘惑から救い、悪からお救いください。

144:3.12 (1620.10) そして、私達を愈々あなたのように完全にしてくださいますように。

144:3.13 (1620.11) 使徒が、信者のための手本の祈りを自分達に教えることをイエスに望んでいたのは奇妙ではない。洗礼者ヨハネは、いくつかの祈りを彼の追随者に教えた。すべての偉大な教師は、生徒のための祈りを定式化した。ユダヤの宗教教師は、ユダヤの礼拝堂や通りの曲がり角でさえ唱えた25 か30 種類の幾つかの纏まった祈りがあった。イエスは、人前で祈るのが殊の外嫌いであった。これまで、12 人は、彼がほんの数回祈るのを聞いた。かれらは、彼が祈りか崇拝に夜を徹して過ごしているのに気づいたし、その祈りの方法、または型を知ることに強い好奇心をもった。ヨハネが弟子に教えたように、群衆が祈りの方法を教えてもらいたいと頼むとき、12 人は、本当に何と答えるか知っておくように迫られていた。

144:3.14 (1620.12) イエスは、つねに12 人に密かに祈ることを教えた。かれらが、祈りに従事するとき、自然の静かな環境の中に立ち去るか、それぞれの部屋に入り、戸を閉めることを。

144:3.15 (1620.13) イエスの死、そして父の元への上昇後、「主イエス・キリストの名において」というこのいわゆる主の祈りの附加で終えるのが多くの信者の習慣になった。その後もさらに、書写の際、２行が失われ、余分な節がこの祈りに加えられた。「王国と力と栄えは、とこしえにあなたのものでありますから。」

144:3.16 (1620.14) イエスは、ナザレスの家で祈ったような集団の形で使徒に祈りを授けた。かれは、集団、家族、または社会的な請願だけを教え、正式の個人的な祈りは決して教えなかった。また、かれは、決してそれをしようと申し出もしなかった。

144:3.17 (1620.15) イエスは、効果的な祈りは次のようなものであることを教えた。

144:3.18 (1620.16) 1. 利己的でない—自らのためではない。

144:3.19 (1620.17) 2. 信じる—信仰に従って。

144:3.20 (1620.18) 3. 誠実である—正直な心。

144:3.21 (1620.19) 4. 理性的である—光に従って。

144:3.22 (1620.20) 5. 信じて疑わない—父のすべての賢明な意志へ服従して。

144:3.23 (1620.21) イエスが山で祈って全夜を過ごすのは、主に弟子、特に12　人のためであった。あるじは、自分のためにはほとんど祈らなかった、楽園の父との理解にもとづく親交における性質の崇拝に多く従事はしたが。

4.祈りに関してさらに

144:4.1 (1620.22) 使徒は、祈りに関する講話後の何日間、この非常に重要で、敬虔な実践についてあるじに質問をし続けた。祈りと崇拝に関する最近の使徒に対してのイエスの指示は、現代の言い回しで次のように纏められ、言い換えられるかもしれない。

144:4.2 (1621.1) いかなる祈願のひたむきで切望する復誦も、そのような祈りが神の子の誠実な表現であり、また、誠実に発せられるとき、いかに無分別であろうと、直接の答が不可能であろうとも、精霊的な受容性の魂の能力を広げることに決してしくじることはない。

144:4.3 (1620.10) すべての祈りにおいて、息子聖性は、贈り物であるということを心しなさい。子共は、息子あるいは娘の身分を得るために何もする必要はない。地球の子等は、その両親の意志により生まれて来る。まさにそのように、神の子は、天の父の意志により神の恵みと新しい精霊の命に入るのである。それ故、天の王国—神の息子性—は、小さい子供がするように、受け入れられねばならない。人は正義—進歩的な性格の開発—を獲得するが、息子性は、神の恵みによりまた信仰を通して受け取る。

144:4.4 (1620.11) 祈りは、宇宙の中の宇宙の崇高な支配者達と共にイエスを彼の魂の超-親交にまで導いた。祈りは、地球の死すべき者を真の崇拝の親交にまで導くであろう。受容性の魂の精霊的能力は、個人的に適切で意識的に認識できる天の恩恵の量を決定する。

144:4.5 (1620.12) 祈りとその関連した崇拝は、人生の日々の日課からの、つまり物質的な存在の単調な骨の折れる仕事からの離脱の技である。それは、精霊化された自己実現

の達成と理性的で宗教的な達成の個性への接近方法である。

144:4.6 (1620.13) 祈りは、有害な内省に対する解毒剤である。少なくとも、あるじの教えたように祈りは、魂にへのそのような慈善的な宗教活動である。イエスは、一貫して人が仲間のために祈る有益な影響を用いた。通常、あるじは、単数形ではなく、複数形で祈った。自分の地上生活の大危機にだけ、イエスは、自分のために祈ったのであった。

144:4.7 (1620.14) 祈りは、人類の物質文明の真っ只中にある精霊生活の息吹である。崇拝は、死すべき者の喜びを追求している世代のための救済である。

144:4.8 (1620.15) 祈りが、魂の精神の電池を再充電に例えられるかもしれないように、崇拝は、宇宙なる父の無限の精霊の宇宙放送を受信するために魂の波長を合わせる行為に例えられるかもしれない。

144:4.9 (1620.16) 祈りは、精霊の父への子供の誠実で切望している様である。それは、人間の意志を神性意志と交換す

る心理過程である。祈りは、そうあるべきものへと変更する神性の計画の一部である。

144:4.10 (1620.17) 不寝番で長い夜をイエスに度々伴ったペトロス、ジェームス、ヨハネが、イエスの祈りを決して聞いたことがなかった理由の一つは、祈りを滅多に言葉として口にしなかったからである。イエスの祈りのすべては、実際に精神と心で行われた—静かに。

144:4.11 (1620.18) 全ての使徒の中でうち、ペトロスとジェームスは、祈りと崇拝についてのあるじの教えの理解に最も近づいた。

5. 他の祈りの形

144:5.1 (1621.11) 時々、地上のイエスの残りの間、かれは、祈りのさらに幾つかの形に使徒の注意を向けさせたが、これは、ただ他の事柄の例証としたに過ぎず、これらの「教訓的な祈り」を群衆には教えるべきではないと命じた。それらの多くは、他の棲息惑星からのものであったが、イエスは、この事実を12　人には明らかにしなかった。つぎは、これらの祈りの中からのものであった。

144:5.2 (1622.1) 宇宙の領域がそのうちに存在する我々の父よ、

144:5.3 (1622.2) 御名とあなたのすべての栄光の特質が高められますように。

144:5.4 (1622.3) あなたの臨場が我々を包み、あなたの栄光が明らかにされる、

144:5.5 (1622.4) 高きにては完全に、我々を通しては不完全に。

144:5.6 (1622.5) 光の生気を与える力をこの日にお与えください。

144:5.7 (1622.6) 我々の空想の邪悪な脇道に迷い込ませないでください。

144:5.8 (1622.7) 栄えある内在者、永続する力は、あなたのものであり、

144:5.9 (1622.8) 私達には、あなたの息子の限りない愛の永遠の贈り物。

144:5.10 (1622.9) そのように、永久に真実であります。

144:5.11 (1622.10) 創造の御親よ、あなたは宇宙の中心におられる。

144:5.12 (1622.11) あなたの特質と性格をお授けください。

144:5.13 (1622.12) お恵みによりあなたの息子と娘にしてくださり、

144:5.14 (1622.13) 私達の永遠の獲得、業績で御名を賞賛させてください。

144:5.15 (1622.14) うちに生き、宿るために調整し統制する精霊をお与えください。

144:5.16 (1622.15) 天使達が命じられたことを光の中でするように、私達がこの世であなたの意志ができますように。

144:5.17 (1622.16) 真実の道に沿っての進行をこの日に支えてください。

144:5.18 (1622.17) 惰性、悪、すべての罪深い違反からお救いください。

144:5.19 (1622.18) 私達が仲間に慈愛を示すように、私達に対して寛容でありますように。

144:5.20 (1622.19) 創造物である私達の心に慈悲の精霊を広く放ってください。

144:5.21 (1622.20) 御手により、一歩一歩、覚束ない人生の迷路でお導きください。

144:5.22 (1622.21) そして、私達の終わりが来るとき、私達の忠実な霊を自身の御胸に受け入れてくださいますように。

144:5.23 (1622.22) それよりも何よりも、あなたの意志が行われますように。

144:5.24 (1622.23) 完璧で公正である天なる父よ、

144:5.25 (1622.24) この日に私達の道程を導き、指示してください。

144:5.26 (1622.25) 私達の歩みを浄め、考えを整えてください。

144:5.27 (1622.26) 永遠の進展の道へいつもお導きください。

144:5.28 (1622.27) 力の充満に、叡知で満たしてください。

144:5.29 (1622.28) そして、無限の活力で元気づけてください。

144:5.30 (1622.29) 熾天使の軍勢の臨場と指導の神性の意識で

144:5.31 (1622.30) 奮い立たせてください。

144:5.32 (1622.31) 光の道へと上へといつもお導きください。

144:5.33 (1622.32) 大審判の日に完全に正しいと私達の弁明をしてください。

144:5.34 (1622.33) 永遠の栄光で私達をあなたのようにしてください。

144:5.35 (1622.34) そして、天においてあなたの限りない奉仕に迎え入れてくださいますように。

144:5.36 (1622.35) 神秘の中の父よ、

144:5.37 (1622.36) あなたの聖なる性格を私たちに明らかにしてください。

144:5.38 (1622.37) 道、光、真実を見るために、地上の子に

144:5.39 (1622.38) 今日という日に、お与えください。

144:5.40 (1622.39) 永遠の進歩の小道をお示しください。

144:5.41 (1622.40) そして、その中で歩く意志をお与えください。

144:5.42 (1622.41) 私達の中に神性の王位を打ちたててください。

144:5.43 (1622.42) そして、それによる完全な自己支配をお授けください。

144:5.44 (1622.43) 暗闇と死の道へと迷い込ませないでください。

144:5.45 (1622.44) 命の水の側へと永久にお導きください。

144:5.46 (1622.45) あなたのために私達のこれらの祈りをお聞きください。

144:5.47 (1622.46) 私達をますますあなたのようにすることをお喜びください。

144:5.48 (1623.1) 最後に、神の息子のために

144:5.49 (1623.2) 私達を永遠の腕の中に迎えてください。

144:5.50 (1623.3) それよりも何よりも、あなたの意志が行われますように。

144:5.51 (1623.4) 一つの御祖に結合されている栄光の父と母よ、

144:5.52 (1623.5) 私達は、あなたの神性に忠実であります。

144:5.53 (1623.6) 私達の中に、また私達を通して再び生きるあなた自身

144:5.54 (1623.7) あなたの神霊の贈り物と贈与によって、

144:5.55 (1623.8) あなたが高きにては完全で荘厳であられるとき、

144:5.56 (1623.9) この世ではこのようにあなたを不完全に再生させます。

144:5.57 (1623.10) 日々、心地よい兄弟愛の仕事をお与えください。

144:5.58 (1623.11) そして、刻一刻、愛の奉仕の道にお導きください。

144:5.59 (1623.12) いつも私達に我慢強くあってください。

144:5.60 (1623.13) 私達があなたの我慢強さを子供達に示すように

144:5.61 (1623.14) 万事を首尾よくする神性の知恵を、

144:5.62 (1623.15) 万物に優しくある無限の愛をお与えください。

144:5.63 (1623.16) 私達の慈善が、この世の弱者を包み込むことができるように

144:5.64 (1623.17) 忍耐と慈愛をお授けください。

144:5.65 (1623.18) 私達の経歴が終わるとき、それをあなたの名前の誉とし、

144:5.66 (1623.19) あなたの善霊の喜びに、また私達の魂の介助役にとっての満足としてください。

144:5.67 (1623.20) 情愛深い父よ、私達の願いとしてではなく、死の運命にあるあなたの子等の永遠の利益を望むものとして、

144:5.68 (1623.21) このようになりますように。

144:5.69 (1623.22) 我々の完全に忠実な源、そして全能の中枢よ、

144:5.70 (1623.23) すべてに優美な息子の御名が敬虔で神聖でありますように。

144:5.71 (1623.24) あなたの恵み深さと祝福が私達に注がれました。

144:5.72 (1623.25) このように、あなたの意志を実行し、あなたの命令を実行する権限が与えられました。

144:5.73 (1623.26) 刻々、生命の木の養分をお与えください。

144:5.74 (1623.27) 日々、その川の生きた流れで我々に活力を与えてください。

144:5.75 (1623.28) 一歩一歩、暗闇から神の光の中にお導きください。

144:5.76 (1623.29) 内在する精霊の変化により心を一新させてください。

144:5.77 (1623.30) そして、命の終わりが遂にやって来るとき

144:5.78 (1623.31) 私達を迎え入れて、永遠へとお送りください。

144:5.79 (1623.32) 天の実り多い奉仕の王冠をお授けください。

144:5.80 (1623.33) そして、我々は、父、息子と聖なる影響を賞賛します。

144:5.81 (1623.34) それよりも何よりも、全宇宙中で永遠にそのようにいたします。

144:5.82 (1623.35) 宇宙の秘かな場所に住んでおられる私達の神よ、

144:5.83 (1623.36) あなたの御名が讃えられ、慈悲が敬われ、審判が尊ばれますように。

144:5.84 (1623.37) 真昼に正義の太陽をお照しくださり、

144:5.85 (1623.38) 薄明かりでぐらつく足取りもお導きください。

144:5.86 (1623.39) あなた自身が選ぶ方行に、我々の手を取りお導きくださり、

144:5.87 (1623.40) 行く手が困難で暗いとき、我々を見捨てないでください。

144:5.88 (1623.41) 私達がたびたびあなたを無視し忘れるようには、我々を忘れないでください。

144:5.89 (1623.42) むしろ、慈悲深くあり、我々が、あなたを愛したいと望んでいるように、我々を愛してください。

144:5.90 (1623.43) 優しく見守り、慈悲をもってお許しください、

144:5.91 (1623.44) 我々を苦しめ傷つける者を義をもって我々が許すように。

144:5.92 (1624.1) 威厳のある息子の愛、献身、贈与が、

144:5.93 (1624.2) あなたの無限の慈悲と愛で永遠の命が得られますように。

144:5.94 (1624.3) 宇宙の神が、精霊を豊かにお授けくださいますように。

144:5.95 (1624.4) この精霊の先導に逆らうことのない恩恵をください。

144:5.96 (1624.5) 熱心な熾天使の軍勢の情愛深い活動によって

144:5.97 (1624.6) 息子が、この時代の終わりまで我々を案内し、導きますように。

144:5.98 (1624.7) 私達をいつもあなたに似るようにしてください。

144:5.99 (1624.8) そして、我々の終わりに、永遠の楽園の抱擁に迎えてください。

144:5.100 (1624.9) それよりも何よりも、贈与の息子の名にかけて。

144:5.101 (1624.10) そして、崇高なる父の名誉と栄光のために。

144:5.102 (1624.11) 使徒が、これらの祈りの教えを勝手に公にすることは許されなかったが、個人的な宗教経験においてこれらの示現のすべては、とても彼らの役に立った。イエスは、12 人の詳細な指示に関する具体例としてこれらの祈りと他の祈りの型を利用した。そして、この記録にこの7つの雛形の祈りが転写される特定の許可が、与えられた。

6. ヨハネの使徒との会議

144:6.1 (1624.12) 10月1日頃、洗礼者ヨハネの数人の使徒に会ったとき、フィリッポスと数人の仲間の使徒は、近くの村に食品の買い出し中であった。市場でのこの偶然の出会いの結果、イエスの先例に従い、ヨハネが最近彼の使徒になるべき12人の指導者を任命していたので、３週間の会合が、ギルボーアの野営地でイエスの使徒とヨハネの使徒の間でもたれた。ヨハネは、自分に忠誠な支持者の中の長であるアブネーの強い勧めに応じてこれをした。イエスは、最初の週、このギルボーアの野営地での合同会議にずっと臨席していたが、あとの2　週間は欠席した。

144:6.2 (1624.13) この月の2週目の初めまでに、アブネーは、仲間全員をギルボーアに集合させ、イエスの使徒との協議会に入る準備をした。３週間にわたり、この24人の男達は、１日３回の会合を毎週6日間開いた。第１週、イエスは、午前、午後、夕方の会合の合間で皆と交わった。かれらは、あるじに会い、共同審議の統括を望んでいた。しかし、イエスは、３度の特別な機会に話すことには同意したものの、議論への参加は堅く拒否した。イエ

スによる24　人へのこれらの会談は、共感、協力、寛容についてであった。

144:6.3　(1624.14)　アンドレアスとアブネーは、使徒２集団の共同会議の議長に交替して当たった。これらの使徒には、議論すべき多くの困難と解決すべき多数の問題があった。かれらは、再三、自分達の問題をイエスに示すのであったが、イエスが言う次の事を聞くだけであった。「私は、君達の個人的で純粋に宗教的な問題にだけ関心がある。私は、集団にではなく個人への父の代表である。君が、神との関係における個人的な困難があるならば来なさい。そこであなたの話を聞き、問題解決について助言しよう。しかし、宗教的な質問に関する異なる人間の解釈の調整と、宗教の社会化を始めるとき、君は、すべてのそのような問題を自身の決断で解決する運命にある。にもかかわらず、私はいつも好意的で、関心があり、君が精霊的に関係しない重要なこれらの問題を論じて結論に達するとき、ただし全員が合意する場合に限って、はじめて、私は、あらかじめ完全な承認と心からの協力を誓約する。さて、審議の妨げをしないよう、私は、君達のもとを2 週間離れる。心配しないでくれ、戻

ってくるから。私は、父の用向きに関わる、我々にはこの世の他に世界があるのだから。」というだけであった。

144:6.4 (1625.1) このように言ってから、イエスは、山腹を下りて行き、皆はまる2 週間一目たりとも彼を見なかった。そして、かれらは、この間、彼がどこに行ったか、何をしたのか決して分からなかった。24　人が、問題を真剣に考えるために落ち着くことができるまでには幾らかの時があり、あるじの不在に非常に当惑していた。しかしながら、1 週間以内には再び自分達の議論の真っ只中におり、助けを求めてイエスの元に行くことはできなかった。

144:6.5 (1625.2) 一団が同意した最初の項目は、つい最近イエスに教えられた祈りの採用であった。それは、両集団の使徒により信者に教えられるものとして、この祈りの受け入れに満場一致で可決された。

144:6.6 (1625.3) かれらは、牢獄の内外にかかわらずヨハネが生きている限り、12人の使徒の両集団が、彼らの仕事を続

けるということ、1週間の合同会議が、時々の同意の場所で3カ月毎に開かれるということを次に決めた。

144:6.7 (1625.4) しかし、彼等の全ての問題で最も重大なものは、洗礼の件であった。イエスがこの問題に関しいかなる声明も拒否したので、彼らの困難は、以前にも増して深刻化した。彼らは最終的に同意した。ヨハネが生きている限り、または、この決定を共同で変更するまでは、ヨハネの使徒だけが、信者を洗礼し、イエスの使徒だけが、新しい弟子を最後に教える。これにより、共同審議会は、洗礼が、王国の事柄と外向き同盟における第一歩になると満場一致であったので、その時からヨハネの死後まで、ヨハネの2 人の使徒が、信者の洗礼のためにイエスとその使徒に同行した。

144:6.8 (1625.5) 次に同意されたのは、ヨハネの死に際しては、ヨハネの使徒がイエスに赴き、彼の指示に従うようになること、また、イエスか彼の使徒に認可されない限り、これ以上洗礼を施さないということであった。

144:6.9 (1625.6) それから、ヨハネの死に際しては、イエスの使徒達は、神性の聖霊の洗礼の表象として水での洗礼を始

めるということを票決した。悔悟が、洗礼の説教に添えられるべきであるか否かに関しては、任意のままにされた。団体を拘束する何の決断もなされなかった。ヨハネの使徒は「悔い改めよ、そして洗礼されよ。」と説教し、イエスの使徒は「信じよ、そして洗礼されよ。」と公布した。

144:6.10 (1625.7) そして、これは、異なる努力を調整し、意見の相違を組成し、外面上の儀式を制定し、個人の宗教的実践を社会化するイエスの追随者の最初の試みの物語である。

144:6.11 (1625.8) 多くの他のさほど重要でない問題が考慮され、解決策が満場一致で可決された。問題に取り組み、イエスなしで困難を和らげることが強いられたとき、この24人の男達は、2 週間で本当に著しい経験をした。かれらは、意見の異なること、議論すること、論争すること、祈ること、妥協すること、そして、そのすべてを通して、他者の観点に共感しつつ、自分の正直な意見に対し少なくとも幾らかの寛容性の維持を学んだ。

144:6.12 (1625.9) イエスは、財政に関する質問の最終的な議論の午後に戻り、皆の審議や決定を聞いて言った。「これらが、それでは、君達の結論である。だから、私は、一丸となった君達の決定の精神を実行にうつす手助けをするつもりである。」

144:6.13 (1626.1) この時から2カ月半後に、ヨハネは処刑された。この期間を通して、ヨハネの使徒は、イエスと12人と留まった。彼ら全員は、この仕事の期間、デカーポリスの街々で一緒に働き、信者を洗礼した。西暦27年11月2日、ギルボーアの野営は解散された。

7. デカーポリスの街々で

144:7.1 (1626.2) 11月と12月を通して、イエスと24人は、デカーポリスのギリシアの街々、主にシソポリス、ゲラーサ、アビラで静かに働いていた。これは、実にヨハネの仕事と組織の引き継ぎのその予備期間の終わりであった。常に、新たな、意外な顕示という社会化される宗教は、救おうとする以前の宗教の確立した型と慣習の妥協の代価を支払うのである。洗礼は、イエスの追随者が、宗教団体として、洗礼者ヨハネの追随者を組み入れるために支

払った代価であった。ヨハネの追随者は、イエスの追随者に加わる際に、水での洗礼を除くほとんど全てを諦めた。

144:7.2 (1626.3) イエスは、デカーポリスの街々での伝道において公への教えをしなかった。かれは、かなりの時間を24人への教えに費やし、ヨハネの12　人の使徒との多くの臨時会をもった。そのうちに、かれらは、イエスが、なぜ獄中のヨハネの訪問に行かないのか、また、なぜその釈放の確保の何の努力もしないのかをよく理解するようになった。しかし、かれらは、イエスが、なぜ驚異の業を施さないのか、なぜ神の権威の可視的な印をもたらすことを拒否するのかについては、決して理解することができなかった。ギルボーアの野営に来る前、彼らは、主としてヨハネの証言によりイエスを信じていたが、すぐ、あるじとその教えとの直接接触の結果として信じ始めていた。

144:7.3 (1626.4) この２カ月間、一団は、イエスの使徒とヨハネの使徒の中からの二人ずつの組になってほとんど働いていた。ヨハネの使徒が洗礼し、イエスの使徒が教授し、

一方自分達の理解に従って、両者が王国の福音を説いた。そして、彼らは、これらの非ユダヤ人と信仰を捨てたユダヤ人の多くを説き伏せた。

144:7.4 (1626.5) アブネー、ヨハネの使徒の長は、イエスの敬虔な信奉者になり、後にはあるじが福音を説くように任命した70人の教師の主長となるほどであった。

8. ペラの近くの野営で

144:8.1 (1626.6) 12月後半、彼らは皆、ペラ付近のヨルダン川近くへ行き、そこで、再び教えたり説教を始めた。ユダヤ人と非ユダヤ人の双方が、福音を聞きにこの野営地に来た。ヨハネの特別な友人の何人かが、洗礼者からの初めての、そして最後の伝言をあるじにもたらしたのは、イエスが、群衆に教えていたある午後であった。

144:8.2 (1626.7) ヨハネは、そのとき獄中に1年半もおり、イエスは、この間大半を非常に静かに働いた。従って、ヨハネが王国について訝るようになるのは、不思議ではなかった。ヨハネの友人達、イエスの教えを中断して「洗礼者ヨハネが、我々を尋ねに来させました。—本当に、あ

なたが救出者であるのか、それとも、他に探すべきかを。」と言った。

144:8.3 (1626.8) イエスは、中断し、ヨハネの友人達に言った。「戻って、忘れられてはいないとヨハネに言いなさい。君達が見聞きしてきたこと、貧者には説き諭された良い知らせがあるということを告げなさい。」そして、イエスがヨハネの使者達にさらに話し、再び群衆の方に向き直って言った。「ヨハネが、王国の福音を疑っていると思ってはいけない。彼は、私の弟子でもある彼の弟子に確認の問い合わせをしているに過ぎないのである。ヨハネは虚弱者でない。ヘローデスが投獄する前に、ヨハネが、説教するのを聞いたのは誰か。ヨハネに何を見たか—風に揺られる葦であったか。不安定の情趣で柔らかい衣を着ている男であったか。概して豪華に着飾る者や、華奢に暮らす者は、王の宮廷や金持ちの大邸宅にいる。だが、ヨハネを見たとき、何を見たか。予言者か。そうだ。予言者以上のものであると、私は君達に言う。ヨハネについて書かれていた。『見よ、私は、私の使者を遣わす。彼はあなた方の前に道を整える。』

144:8.4 (1627.1) 「誠に、誠に、君達に言う。女性から生まれた者の中で、洗礼者のヨハネよりすぐれた者は出なかった。それでも、天の王国で小さいものは、精霊の生まれであり、神の息子になったということを知っているので、より偉大である。」

144:8.5 (1627.2) その日イエスの言うことを聞いた多くの者が、ヨハネの洗礼を受け、それにより、公的に王国への入国を表明した。そして、ヨハネの使徒は、その日以後イエスにしっかりと結びつけられた。この出来事は、ヨハネとイエスの追随達の真の結束を記した。

144:8.6 (1627.3) 使者達は、アブネーとの談話の後、このすべてをヨハネに伝えるためにマカイロスに出発した。かれは、は大いに慰められ、その信仰は、イエスの言葉とアブネーに関する伝言により強化された。

144:8.7 (1627.4) この午後、イエスは、続けて教え、こう言った。「しかし、この世代を何に例えようか。君達の多くは、ヨハネの知らせも私の教えも受け入れようとはしないであろう。君達は、仲間に呼びかけて言う市場で遊んでいる子供のようなものだ。『笛を吹いてやったのに、

君達は踊ってくれなかった。悲しんで泣いても、悲しまなかった。』君達の一部の者は、それと同じである。ヨハネは、食べもせず、飲みもしなかった。そこで、人々は、彼には悪魔がいると言った。人の息子は、食べもし飲みもしながら来る。そして、この同じ人々は言う。『見よ、大食いで大酒飲み、居酒屋の主人達と罪人達の仲間だ。』本当のところ、知恵は、その子供達によって証明される。

144:8.8 (1627.5) 天の父は、これらの真実の幾つかを赤子に示す傍ら、賢く強慢な者からは隠しているようである。しかし、父は、全ての事をよくされる。父は、彼自身が選ぶ方法によって宇宙に自分を明らかにする。だから、働いている者、重荷を背負う者は皆来なさい。そうすれば、魂に安らぎが来るであろう。神のくびきを負いなさい。そうすれば、人知では到底測りしれない神の平安を経験するであろう。」

9. 洗礼者ヨハネの死

144:9.1 (1627.6) 洗礼者ヨハネは、西暦28年1月10日の夕方、ヘローデス・アンティパスの命により処刑された。マカイ

ロスに行っていたヨハネの弟子の数人は、その翌日処刑を聞きつけ、ヘローデスの元に行き遺骸を要求し、それを墓所の中に置き、後にセバステのアブネーの家で埋葬した。その翌日の1月12日、彼らは、ペラ近くのヨハネとイエスの使徒の野営地に向け北へと出発した。そして、かれらは、イエスにヨハネの死を告げた。報告を聞いたイエスは、群衆を解散させて、24人を集めて言った。「ヨハネが死んだ。ヘローデスが打ち首にした。今夜、共同審議に入り、それに応じてそれぞれの仕事を整理しなさい。もはや遅延はない。公然と、そして力をもって王国を宣言する時が来た。明日、ガリラヤ入りをする。」

144:9.2 (1627.7) そこで、西暦28年1月13日の朝早く、イエスと使徒は、25人ほどの弟子とともにカペルナムに進み、その夜、ゼベダイの家に投宿した。

論文 145
カペルナムの多事多端の4日間

145:0.1 (1628.1) イエスと使徒は、1月13日火曜日の晩にカペルナムに到着した。いつも通り、かれらは、ベスサイダのゼベダイオスの家に自分達の本部を置いた。洗礼者のヨ

ハネを死に追いやられたそのとき、イエスは、ガリラヤを皮切りに初の公開の説教のための旅行を始める準備をした。イエスが戻ったという便りは、急速に街中に広まり、翌日早々に、イエスの母マリアは、息子ヨセフを訪ねるためにナザレへと急いだ。

145:0.2 (1628.2) イエスは、使徒に初めての大規模な公への説教旅行の準備を命じ、ゼベダイオス家で水曜日、木曜日、金曜日を過ごした。かれもまた、個人や団体の双方からくる多くの熱心な尋問者を迎えて、教えた。アンドレアスを通して、かれは、来たる安息日にユダヤの会堂で話す手配をした。

145:0.3 (1628.3) 金曜日の夕方遅く、一番下の妹ルースが、イエスを秘かに訪問した。かれらは、岸近くに投錨された舟の中でおよそ1 時間共に過ごした。誰も、ジョン・ゼベダイオスを除いては、この訪問について知らなかっし、イエスは、他言しないよう彼を窘めた。ルースは、彼女の最も早期の精霊的意識の時代からイエスの多事多端の伝道、死、復活、昇天まで一貫して、また躊躇うことなく地球任務の神性を信じたイエスの家族の唯一人であっ

た。そして、彼女は、肉体での超自然の父であり兄の任務の特質を一度も疑うことなく、ついには次の世界へと進んだ。裁判、拒絶、磔刑のつらい試練の間、地球の家族に関しては、末っ子ルースが、イエスの主な安らぎであった。

1. 一網の漁獲

145:1.1 (1628.4) この同じ週の金曜日の朝、イエスが海辺で教えていると、水際近くにまで人々が押し合ったので、かれは、近くの舟に乗っている数人の漁師に助けに来るよう合図した。舟に乗り、イエスは、集ってきた群衆に2 時間以上も教え続けた。この舟は、「シーモン」と命名された。それは、シーモン・ペトロスの嘗ての漁船であり、イエス自身の手によって造られた。この特別な朝、ダーヴィド・ゼベダイオスと2人の仲間が、この舟を使っており、湖での不漁の夜から岸近くに寄ってきたところであった。イエスが、援助に来るよう要求したときは、かれらは、網の掃除や修理をしていた。

145:1.2 (1628.5) イエスは、人々に教え終えた後でダーヴィッドに言った。「私を助けに来てくれて遅れたので、今度

は、君達と働かせてもらおう。漁に行こう。向こうの深いところへ行き、一網下ろそう。」しかし、ダーヴィドの助手の一人であるシーモンが、答えた。「あるじさま、それは無益でございます。我々は夜通し、こつこつ働いて、何の漁もありませんでした。でも、仰せの通り網を仕掛けてみましょう。」そこで、シーモンは、主人のダーヴィドの合図があったのでイエスの指示に従った。イエスに指定された場所に進むと、かれらは、網を沈めたが、その網が破れるのではないかと恐れるほどの魚の群れを封じ込め、陸の仲間に応援の合図を送るほどであった。３隻全てが沈むほどに魚で満たされたとき、このシーモンは、イエスに跪いて言った。「私から離れてください、あるじさま。私は罪深い者でありますから。」シーモンとこの挿話に関係があった全員は、漁獲量に驚いた。その日から、ダーヴィド・ゼベダイ、このシーモン、そしてその仲間は、網を捨ててイエスの後を追った。

145:1.3 (1629.1) しかし、これはいかなる点からも、奇跡の漁獲ではなかった。イエスは、自然に密接した学生であった。彼は、経験豊富な漁師であり、ガリラヤ海の魚の習

性を知っていた。かれは、この場合、単に通常魚が日中この時刻に見られる場所にこれらの男を向けさせたに過ぎない。しかし、イエスの追随者は、常にこれを奇跡と見なした。

2. 礼拝堂での午後

145:2.1 (1629.2) 次の安息日、会堂での午後の礼拝の際、イエスは、「天の父の意志」について説教をした。午前中、シーモン・ペトロスは、「王国」について説いた。アンドレアスは、会堂での木曜日の晩の会合で教え、彼の課題は、「新たなる道」についてであった。この特定の時期、地球上のいかなる都市でよりもカペルナムの多くの人々は、イエスを信じた。

145:2.2 (1629.3) イエスがこの安息日の午後会堂で教えるに当たり、習慣に従いまず法律から内容を選び、出エジプト記から読んだ。「そして、あなた方の主に、神に仕えなさい。主は、あなた方のパンと水を祝福し、全ての病が除き去るであろう。」かれは、予言書からの第 2 の本文を選び、イェシァジァから読んで、「起きて輝きなさい。あなたの光が来たのだから。そして主の栄光が、あなた

の上に輝いている。闇が地を覆い、真っ暗闇が諸国民を覆うかもしれないが、主の精霊は、あなたの上に輝き、精霊の栄光は、あなたに見られるであろう。非ユダヤ人さえこの光に来るであろう。そして、多くのすばらしい心は、この光の明るさに降伏するであろう。」

145:2.3 (1629.4) この説教は、宗教が個人的経験であるという事実を明らかにするためのイエスの側の努力であった。とりわけ、あるじは、次のように言った。

145:2.4 (1629.5) 君達は、情け深い父が、全体として家族を愛するとともに、その家族の個々の構成員への強い愛情ゆえに、皆を一集団と見なしているということをよく知っている。君達は、もはやイスラエルの子供としてではなく、神の子として天の父に近づかなければならない。君達は、集団としては本当にイスラエルの子であるが、個人としては、各々が神の子である。私は、父をイスラエルの子等に明らかにしに来たのではなく、むしろ本物の個人の経験として個々の信者に神についてのこの知識と彼の愛と慈悲の顕示を携えて来たのである。予言者は全員、ヤハウェが民を労ると、神がイスラエルを非常に好

きであると教えてきた。しかし、私は、後の予言者の多くも理解したよりすばらしい真実を、神があなたを—あなた方一人一人を—個人として愛していると宣言しに来た。今までのすべての世代のあなた方には、国家の、または人種の宗教があった。今は、私は、個人の宗教を与えに来たのである。

145:2.5 (1630.1) しかし、これさえ新しい考えではない。予言者の何人かが、そのように教えてきたので、君達の間の精霊的に関心のあるものの多くは、この真実を知っていた。聖書で予言者エレミヤのこの文を読んだことはないのか。『その頃には、かれらはもう、父が酸い葡萄を食べたので、子供の歯が浮くとはもう言わない。人はそれぞれ自分の咎のために死ぬ。誰でも酸い葡萄を食べる者は、歯が浮くのである。見よ、その日が、我が民と新しい契約を結ぶ時がくる。私がエジプトの国から連れ出した日に彼らの祖先と結んだような契約によるのではなく、新たな道に従って、私は、彼らの心に私の律法を書き記しさえする。私は彼らの神となり、彼らは私の民となる。その時代には、ある人が隣人に、主を知っている

かとは聞かない。いや、そうではない。それは、身分の低い者から高い者までが皆、私を知るからである。

145:2.6 (1630.2) これらの約束を読んではいないのか。聖書を信じていないのか。予言者の言葉が、あなたが他ならぬこの日に見ているものに実現されているとは思わないのか。エレミヤは、宗教を心の問題として扱うことを、個人として自分自身を神に関係づけることを勧めはしなかったか。預言者は、天の神があなたの個々の心を追求するとは言わなかったか。また、本来の人間の心は、何ものにもまして、人を誤らせ、しばしば絶望的に邪であると警告されなかったのか。

145:2.7 (1630.3) エゼキエルが、宗教は、個々の経験において現実のものにならなければならないとあなたの祖先にさえ教えた個所をまだ読んではいないのか。きみは、『父が酸い葡萄を食べたので、子供の歯が浮く』という諺をもう決して用いないようになる。『私は誓って言う。』と主なる神は言う。『見よ、全ての命は私のものである。父の命も、息子の命も私のもの。罪を犯す者のみが死ぬ。』そこでエゼキエルは、神のために話してこの日に

さえ予見して、『私は新たな心も与え、あなた方のうちに新たな精霊を授けよう。』と言った。

145:2.8 (1630.4) 「これ以上、神が、個人の罪のために国を罰すると恐れるべきではない。天の父は、国の罪のために信じる子供等の一人を罰しはしないであろう。どんな家族の個々の構成員も、しばしば家族の誤りや集団による罪の具体的な結果に悩まなければならないが、良い国—あるいは良い世界—の希望が、個人の進歩と啓蒙に結びついているとは、気づかないのか。

145:2.9 (1630.5) 人間がこの精霊的な自由を考慮した後に、地上の子等が、創造者を見つけ、神を知り、神のようになることを追い求める楽園経歴の永遠の上昇 (これは、内在する霊からくる神性の衝動への被創造物の意識的な反応に含まれる)を始めることを天の父が望んでいるということをあるじは描写した。

145:2.10 (1630.6) 使徒は、この説教に大いに助けられた。彼らは全員、王国の福音が国ではなく、個人に向けられる知らせであると、より完全に理解した。

145:2.11 (1630.7) カペルナムの人々は、イエスの教えに詳しくはあったが、この安息日の説教には驚いた。かれは、代書人としてではなく、いかにも、権威を持っている者として教えた。

145:2.12 (1630.8) イエスが話し終えたそのとき、イエスの言葉に非常に動揺した会衆の一人の若者が、激しい癲癇の発作に襲われ大声で叫んだ。発作の終わりに、意識を戻すとき、かれは、夢見の状態で言った。「ナザレのイエス、いったい我々は、あなたと何の関係があるのですか。あなたは、神の聖なる者である。我々を滅ぼしに来たのですか」イエスは、人々に静かにするように命じ、青年の手を取って言った。「出て来い」—そこで、青年は、即座に目を覚ました。

145:2.13 (1631.1) この青年は、不浄の霊や悪霊にとりつかれたのではなかった。普通の癲癇の犠牲者であった。しかし、青年は、自分の患難は、悪霊憑依によるものであると教えられてきた。彼は、この教えを信じ、自分が思うことや言うことは全てその病に従って振る舞った。人々は皆、そのような現象が、不浄な霊の存在に直接起引し

ていると信じた。従って、かれらは、イエスがこの男から悪霊を追い出したと信じた。しかし、イエスは、その時、癲癇を治しはしなかった。当日の日没後まで、この男性は、本当には癒されなかった。ペンテコステの日のずいぶん後に、イエスの行為について書く最後の使徒ヨハネは、これらのいわゆる「悪魔の追放」の行為のすべての言及を避け、そして、かれは、そのような悪霊憑依の事例は、ペンテコステ以後決して起こらなかったという事実からこれをしたのであった。

145:2.14 (1631.2) この当たり前の事件の結果、イエスが男から悪霊を追放し、午後の説教の締め括りの際に礼拝堂で奇跡的に彼を癒したという話が、カペルナム中に広められた。安息日は、そのような驚くべき噂を急速に効果的に拡散するにはまさに最適の日であった。また、この話は、カペルナムの周辺のすべての小さい居留地にまで伝えられ、人々の多くがそれを信じた。

145:2.15 (1631.3) イエスと12 人が本部を置いたゼベダイオスの大きい家では、ほとんどの場合シーモン・ペトロスの妻とその母が、料理と家事をした。ペトロスの家は、ゼベ

ダイオス家の近くにあった。そして、ペトロスの妻の母が、数日間寒気と熱に病んでいたので会堂からの帰途、イエスと友人達は、そこに立ち寄った。さて、イエスが、この病の女性をしっかり見つめ、手を握り、眉をなで、安らぎと勇気づけの言葉をかけていたとき、偶然、熱が引いた。会堂で奇跡は施してはいなかったと使徒に説明する時間が、イエスにはまだなかった。使徒の心にはこの事件がとても鮮やかで生き生きとしており、またカナでの水と葡萄酒の件も思い出しながらもう一つの奇跡として、かれらは、この偶然の一致をとらえ、使徒の何人かは、都中にこの知らせを広めに飛び出した。

145:2.16 (1631.4) ペトロスの義母アマタは、マラリア熱に苦しんでいた。このとき、イエスが奇跡的に治癒させたのではなかった。ゼベダイオス邸の前庭で起きた並はずれの出来事の数時間後まで、つまり日没後まで、彼女の治癒は、起こらなかった。

145:2.17 (1631.5) そしてこれらの事例は、驚きを探している世代と奇跡志向の人々が、イエスが別の奇跡を行なったと

宣言する口実として、すべてのそのような偶然の一致に必ず飛びつく態度の典型である。

3. 日没の治癒

145:3.1 (1631.6) この多事多端の安息日の終わり近く、イエスと使徒が夕食に加わる準備をするまでには、全カペルナムとその近郊では、これらの評判の治癒の奇跡に興奮していた。そして、病気や悩める者は皆、陽が落ちるとすぐにイエスのところへ行くか、友人達にそこへ運ばれていく準備を始めた。ユダヤの教えでは、神聖な安息日の間、健康を求めることさえ許されてはいなかった。

145:3.2 (1632.1) したがって、地平線に太陽が沈むや否や、何十人もの悩む男女、子供等が、ベスサイダのゼベダイオスの家に向かって進み始めた。1 人の男が、太陽が隣人の家の後ろに沈むとすぐに、麻痺している娘と出発した。

145:3.3 (1632.2) 全日の出来事が、この並はずれた日没場面の舞台準備をした。イエスが午後の説教に使用した本文さえ、病気が払いのけられなければならないと仄めかしていた。かれは、先例のない力と権威で話してきた。その言葉は、とても無視できなかった。かれは、いかなる人

間の権威にも訴えることなく、同時に人の良心と魂に直接話した。論理、法的こじつけ、賢明な格言に頼ることなく、聞き手の心に強力で、直接的な、明確で、個人的な訴えをした。

145:3.4 (1632.3) その安息日は、イエスの地球での人生で、さよう、宇宙の人生での、格別な日であった。すべての地域宇宙の意図と目的にとって、カペルナムの小さなユダヤの都市は、ネバドンの実質の首都であった。カペルナムの会堂の一握りのユダヤ人が、イエスの説教の重要な最後の表明を聞く唯一の存在ではなかった。「憎しみは恐怖の影である。復讐は臆病の仮面である。」聴衆もまた、「人は悪魔の子ではなく、神の息子である」と宣言する彼の祝福の言葉を忘れることができなかった。

145:3.5 (1632.4) 日の入り後間もなく、イエスと使徒達がまだ夕餉の食卓の周りに長居していると、ペトロスの妻が、前庭に声を聞きつけ、扉へ向かって行くと、大きな病人の一隊を、またカペルナムからの道路は、イエスの手による治癒を求めて集いくる人々で混雑しているのを見た。

彼女は、この光景を見るや否やすぐ夫に知らせ、夫はイエスに告げた。

145:3.6 (1632.5) ゼベダイ家の表口から踏み出てみると、あるじは、傷つき、苦む人々の隊列を目にした。かれは、およそ1,000人の病気や病気がちの人間を見つめた。少なくとも、それは、彼の目の前に集まった人数であった。居合わせる者すべてが苦しんでいるというわけではなかった。一部の者は、この努力において治療を確実にするために愛しい者達を補助しながらやって来た。

145:3.7 (1632.6) 宇宙行政にあたる彼自身の信託された息子達の誤りと悪行の結果として、大いに苦しんでいるこれらの悩める人間達、女、男、子供等の光景が、特にイエスの人間の心の部分に触れるとともに、この情け深い創造者たる息子の神性の慈悲を刺激した。しかし、かれは、純粋に物質的な驚異の土台の上に永続する精霊的な動勢を築き上げることは決してできないことをよく心得ていた。自身の創造者の特権を示すことを控えることは、彼の一貫した方針であった。カナ以来、超自然の、あるいは奇跡の教えは、彼の教えに伴うことはなかった。それ

でも、苦しむこの群衆は、彼の同情的な心に触れ、彼の理解ある愛情に力強く訴えるのであった。

145:3.8 (1632.7) 前庭からの声が叫んだ。「あるじさま、話しください。私達の健康を取り戻してください。病気を治してください。魂を救ってください。」これらの言葉が発せられるや否や、この肉体をもつ宇宙の肉体化の創造者にいつものように伴っている熾天使、物質制御者、生命伝送者、中間者の巨大な数の随員は、君主が合図を送るならば、創造する力で行動する準備ができていた。これは、人の息子が判断に当たり神性の叡知と人間の同情が絡み合ったので、イエスの地上経歴において父の意志への訴えにおいて避難を求めるというそういった瞬間の1つであった。

145:3.9 (1632.8) ペトロスが、救いを求める叫び声に注意するようにあるじに懇願すると、イエスは、苦しんでいる群れを見下ろして答えた。「私は父を明らかにし、その王国を設立するためにこの世界にやって来た。この目的のためにこそ、この時間まで生きてきたのである。従って、もし、それが私を寄越したあの方の意志であり、また、

天の王国の福音公布への私の献身に矛盾していなければ、私の子供が完全にされるのを見ることを望み、—そして—」しかし、それから先のイエスの言葉は、騒ぎで掻かき消された。

145:3.10 (1633.1) イエスは、この治療決定の責任を父の裁定に任せた。イエスの専属思考調整者の指揮下に働いている天の人格の集団が勢いよく活動していたとき、あるじは、ほとんど言葉を発していなかったので、明らかに父の意志は異議を挟まなかった。夥しい数の随員は、苦しめられているこの人間の群れの中に降りて行き、瞬時に683人の男女、子供等が完全になった、すなわち、すべての身体の病気と他の具体的な異状が完全に癒された。そのような場面は、その日以前も、その日以降も、地球では決して目撃されなかった。そして、治療のこの創造的なうねりを見るためにいた我々にとって、それは感動的な光景であった。

145:3.11 (1633.2) しかし、超自然の回復のこの突然で予想外の発生に驚いた全ての存在の中でも、イエスが、最も驚いた。彼の人間的興味と同情が、目前に広がる悩み苦しん

でいる光景に焦点が合わせられた瞬間、かれは、創造者たる息子の特定の状態や状況のもとでの創造者の特権である時間要素を制限できないことに関して専属調整者の勧告的な警告を自分の人間の心に留めおくことを怠った。イエスは、もし父の意志がそれによって侵されないのであれば、これらの苦しむ人間が完全に癒されるのを見ることを望んでいた。イエスの専属調整者は、創造的なエネルギーのそのような行為が、そのとき楽園の父の意志を逸脱しないと即座に判断し、そして、そのような決定により—治療願望のイエスの先行する表現があったことから—創造的行為があった。創造者たる息子が望むことは、何であろうがその父が望むことなのである。そのような一纏めの人間の肉体治療は、その後のイエスの地上生活のすべてにおいて行なわれなかった。

145:3.12 (1633.3) 予想されていたかもしれないように、カペルナムのベツサイダでの日没のこの治療の評判は、ガリラヤとユダヤ中に、そして地方へと広まった。再び喚起されたのはヘロデの恐怖であり、かれは、イエスの活動と教えに関する報告をすること、また彼がナザレの元大工

であるのか、それとも洗礼者ヨハネが死から復活したものなのかを見張り人に確かめに行かせた。

145:3.13 (1633.4) 主にこの意図しない肉体的な治療の披露ゆえに、これからずっと残りの地球経歴の間、イエスは、伝道者であるととも医師にもなった。彼が教え続けたのは本当であるが、使徒が、公への説教と信者への洗礼をする一方、イエスの個人的な仕事は、大部分は病人と困窮する者への奉仕であった。

145:3.14 (1633.5) しかし、神性エネルギーのこの日没の超自然の、創造的な身体的な治療の享受者の大半は、慈悲のこの驚異的徴候により永久に精神的に恩恵を被った訳ではなかった。少数の者は、この身体的恩恵に本当に教化されたのだが、精霊の王国は、時間を超越した独創的治療のこの驚くべき現象によっては人の心に進入しなかった。

145:3.15 (1633.6) 地球でのイエスの任務に沿って時おり起きた治療の奇跡は、王国公布の計画の一部ではなかった。それらは、神性の慈悲と人間の同情の先例のない組み合わせに関連したほとんど無制限の創造者の特権の神性存在

体を必然的に地球に固有に備わっていたことによる。しかし、そのようないわゆる奇跡は、偏見を高める評判をもたらし、多くの求めていない悪評を提供したので、イエスに多くの迷惑をもたらした。

4. その晩

145:4.1 (1634.1) この大々的な治療後の晩ずっと、悦びと幸せな群集は、ゼベダイオスの家に溢れ、イエスの使徒は、感情的な熱意で最高に緊張していた。人間の見地から、これは多分、イエスとの彼らの全ての関わりの中で最高の日であった。ついぞ、後にも先にも彼等の望みは、確信に満ちたそのような期待の極みにまで高まることはなかった。イエスは、ほんの数日前に、まだサマリアの境界内にいるとき、王国が政権を握る時が来たと彼らに言い、使徒は、そのとき目にしたことが、その約束の実行だと思った。かれらは、治療の力のこの驚くべき現象が、ほんの始めであるならば、来ることになっている光景にわくわくするのであった。イエスの神性に対するかれらの持続する疑いは、払いのけられた。かれらは、戸惑いの魅惑の頂点に文字通り酔っていた。

145:4.2 (1634.2) かれらは、イエスを捜したが、見つけることができなかった。あるじは起きてしまったことに非常に狼狽した。さまざまの病気が癒されたこれらの男女、子供は、夜遅くまで長居し、感謝を伝えられるかもしれないとイエスの帰りを望んでいた。使徒は、数時間が経過し、隠遁したままのあるじの行為を理解することができなかった。あるじの打ち続く不在を除けば、彼らの喜びは、いっぱいで完全であったのだろうが。イエスが彼らのもとに戻ったときには、時刻は遅く、治癒の出来事の受益者のほぼ全員は、各自の家に帰っていた。イエスは、 12人と彼に挨拶するために長居していた他の者達の祝辞と敬愛を拒み、「父は肉体を癒す力があると喜ぶのではなく、魂を救う力があると喜びなさい。明日は父の用向きをするのであるから骨を休めよう。」と言った。

145:4.3 (1634.3) またもや12 人は失望し、当惑し、心嘆く男等は、それぞれの休息についた。双子以外は、その夜ぐっすり眠った者はあまりいなかった。あるじは、使徒の魂を励まし心を喜ばせる何かをするやいなや、彼らの望みを即座に粉々に打ち砕き、勇気と熱意の基盤を完全に取

り壊すように思えた。この戸惑う漁師達が互いの目を覗き込むとき、彼らには「彼を理解することができない。このすべては何を意味するのか。」という1つの考えしかなかった。

5. 日曜日の早朝

145:5.1 (1634.4) イエスもまたその土曜日の夜、あまり眠らなかった。世界には物理的苦悩が満ち、物質的な困難がはびこっていると、かれは、はっきりと知り、そして、病人や苦しんでいる者に時間の多くを注がざるをえないので、人の心の中に精霊の王国を設立するという自分の任務が妨げられるか、あるいは、少なくとも物理的なもののための活動に従属されるという重大な危険の思索に耽けった。夜間、イエスの人間の心を占めたこれらの考え、また同様の考えのために、その日曜日の夜明けのはるか前に起き、父との親交のために一人で好きな場所の1つに出掛けた。この早朝のイエスの祈りの主題は、かれが、人間の苦しみを前にして、自身の人間の同情が、自身の神性の慈悲とつながれて、自分にそのような訴えをすることを許させないかもしれないということ、自分の時間のすべてが、物理的な奉仕で占められ、精霊的な

奉仕を怠るということへの叡知と判断のためのものであった。かれは、必ずしも病人の世話を避けることを願ったというわけではなかったが、精霊的な教育と宗教的な訓練のより重要な仕事もしなければならないということを知っていた。

145:5.2 (1635.1) イエスは、一意専心に適した個室がなかったので丘に何度も祈りに出かけた。

145:5.3 (1635.2) ペトロスは、その夜眠ることができなかった。それで、かれは、非常に早く、イエスが祈りに出かけた直後に、ジェームスとジョンを起こし、3 人であるじを探しに行った。1 時間以上の探索の後、かれらは、イエスを見つけ、彼の奇妙な行為の理由を教えてくれるように懇願した。かれらは、すべての人間が大喜びし、また使徒が大いに喜んでいるときに、かれはなぜ、治癒の精霊の強力な注入に悩んでいるように見えるのかを望んでいた。

145:5.4 (1635.3) 4 時間以上イエスは、これらの3 人の使徒への何があったかの説明に努めた。かれは、生じた事について教え、そのような徴候の危険性を説明した。イエス

は、祈るためにやって来た理由を打ち明けた。父の王国が、なぜ驚異の働きや身体の治療に基づいて建てることができないのか本当の理由を仲間に明確にしようとした。しかし、彼らは、その教えを理解することができなかった。

145:5.5 (1635.4) 一方、日曜日の早朝、苦しんでいる者や物珍しさを求める他の群衆が、ゼベダイの家の周りに集まり始めた。かれらは、イエスに会おうと騒ぎ立てた。アンドレアスと使徒は、とても当惑しており、シーモン・ゼローテースが会衆に話す間、アンドレアスは、数人の仲間とイエスを探しに出た。3 人の仲間といるイエスの居場所をつきとめると、アンドレアスが言った。「あるじさま、群衆になぜ我々を置き去りになさるのですか。ご覧ください。全ての者が、あなたを追い求めております。これまで決してこれほど多くの者が、あなたの教えを求めたことはございません。今も、家は遠近からやってきた者達に取り囲まれております。かれらに教えに私たちと戻ってもらえませんか。」

145:5.6 (1635.5) これを聞いたイエスが答えた。「アンドレアス、私の地球の任務は、父の顕示であり、私の知らせは、天の王国の発布であることを、私は、お前やこれらの者に教えてはこなかったか。どうして、では、物見高い者を喜ばせ、兆しや驚異を捜し求める者の満足のために私の仕事から横を向かせたいのか。我々は、この数カ月ずっとこれらの人の中にいなかったか。彼等は、王国に関する朗報を聞くために大勢で押し寄せて来たか。かれらは、なぜ今、我々を取り巻きに来たのか。魂救済のための精霊的真実の享受の結果としてではなく、むしろ彼らの身体の治癒のためではないのか。人が驚異的な兆候のために我々に引きつけられるとき、彼らの多くが、真実と救済を求めてではなく、むしろ身体の疾患治癒を求めて来たり、物質的困難からの確実な救済を得るためにやって来るのである。

145:5.7 (1635.6) 「私がカペルナムにいるこの間中、会堂でも、海辺でも、私は、真実を聞く耳と受け入れる心を持つすべての者に王国の朗報を説いてきた。精霊的なものを排除し、これらの好奇心の強い者の要求を満たし、身体の事柄のために忙しく立ち回るために君達と戻ることは、

父の意志ではない。福音を説き病人に力を貸すために君達を聖別したが、私は、私の教えを廃除して、治療に没頭するようなことになってはいけない。いや、アンドレアス、ともに帰るつもりはない。我々が教えたことを信じ、神の息子等の自由を喜ぶようにと人々に伝えなさい、そして、ガリラヤの他の都市へ向かう我々の出発にそなえなさい、そこでは、すでに王国の良い知らせを説く道が、用意できている。父の元から私が来たのは、この目的のためである。行きなさい、そして、私が帰りを待ち受けている間、我々の即時の出発に備えなさい。」

145:5.8 (1636.1) イエスが話し終えると、アンドレアスと仲間の使徒は、ゼベダイオスの家に悲しそうに戻っていき、集ってきた群衆を解散させ、イエスの指示通りに旅仕度をした。そして、西暦28年1月18日、日曜日の午後、イエスと使徒は、ガリラヤの都市での自分達の最初の、本当に公のための、公然の伝道遊歴に旅立った。かれらは、この最初の遊歴に当たり王国の福音を多くの都市で説いたが、ナザレへは行かなかった。

145:5.9 (1636.2) その日曜日の午後、イエスと使徒が、リッモーンに向けて発った直後に、弟のジェームスとユダが、彼に会いにゼベダイオスの家を訪問した。当日正午頃、ユダは、兄ジェームスを捜し出し、二人でイエスの元に行こうと主張した。ジェームスがそれに同意する頃には、イエスはすでに出発していた。

145:5.10 (1636.3) 使徒達は、カペルナムで刺激された遠大な関心を後にすることには気が進まなかった。ペトロスは、少なくとも1,000人の信者が王国へと洗礼されるかもしれないと見込んだ。イエスは、我慢強くそれらを聞いたが、戻ることには同意しないのであった。一時期、沈黙が広がり、そこで、トーマスは、仲間の使徒に講演して「行こう。あるじは話された。天の王国の神秘を完全に理解することができないとしても、我々は1つの事を確信している。我々は自分のためにいかなる栄光をも求めない師について行くのだ。」と言った。そこで、皆は、しぶしぶ、良き知らせを説きにガリラヤの都市へと出掛けた。

論文 146
ガリラヤでの初の説教遊歴

146:0.1 (1637.1) 西暦28年１月18日、日曜日、ガリラヤでの初の公開伝道遊歴が始まり、それは、およそ2カ月間続き、３月17日にカペルナムへの帰還で終わった。ヨハネの元使徒の援助を受けてイエスと12人の使徒は、この遊歴中、リッモーン、イオタパタ、ラマハ、ゼブールーン、イロン、ギシャーラ、ホラズィン、マードン、カナ、ナイン、エンドールで福音を説き信者達を洗礼した。これらの都市で逗留し教え、一方、他の多くのより小さい町では通過する際に王国の福音を公布した。

146:0.2 (1637.2) イエスが仲間に自由に説教することを許諾したのは、これが初めてであった。かれは、この遊歴で3 回だけ彼らに警告をした。ナザレに近づかないことと、カペルナムとティベリアスを通過するときは慎重であるように訓戒した。それは、使徒にとり、遂に自由に説いて規制なしで教えることができると感じる大きな満足感の源であり、かれらは、福音の説教、病人への奉仕、信者の洗礼の仕事に打ち込んだ。

1. リッモーンでの説教

146:1.1 (1637.3) リッモーンの小さい都市は、かつてバビロンの空気の神、ラッマンが崇められていた。初期のバビロン人と後のゾロアスターの教えの多くが、まだリッモーン人の信仰に迎え入れられていた。従って、イエスと24人は、多くの時間、これらの以前の信仰と新しい王国の福音との違いを明確にする課題に専念した。ここでペトロスは、彼の早期の経歴の幾つかの立派な説教の1つ「アーロンと金の子牛」を説いた。

146:1.2 (1637.4) リッモーンの市民の多くがイエスの教えの信奉者になったが、かれらは、後年その同胞に大きな問題をもたらした。一つの人生の短い間に、自然崇拝者を精霊的な理想の崇拝完の全な親交に転向させることは、困難である。

146:1.3 (1637.5) 光と闇、善と悪、時と永遠の考えについてのバビロンとペルシアのより良いものの多くは、いわゆるキリスト教の教義に後に取り入れられ、それらの包含は、近東の民族がキリスト教の教えをすぐに許容できるようにした。同様に、多くのプラトンの理想的な精霊の型、あるいは、すべての可視で物質的なものの不可視な型の

包含は、後にフィロンによってヘブライの神学に適合させられるように、パウーロスのキリスト教の教えを西方のギリシア人が受諾することをより簡単にした。

146:1.4 (1637.6) トダンが、最初に王国の福音を聞いたのはリッモーンであり、彼は、後にこの知らせをメソポタミアへ、そしてさらにその先へと伝えた。かれは、ユーフラテス川以遠に住む人々に朗報を説く最初の者達の一人であった。

2. イオタパタにて

146:2.1 (1638.1) イオタパタの一般人は、喜んでイエスと使徒の言葉を聞き、多くが王国の福音を受け入れたが、イオタパタでの任務を際だたせるのは、この小さい町での滞在2晩目の24人へのイエスの講話であった。ナサナエルの心では、祈り、感謝の祈り、崇拝に関するあるじの教えが混乱していた。そこで、彼の質問に応えて、イエスは、かなりの長さでこの教えのさらなる説明をした。この講話は、現代の言葉遣いにまとめて、次の点を強調して示すことができる。

146:2.2 (1638.2) 1.人の心の中における不正への意識的かつ執拗な顧慮は、祈る者の魂の回路、その製作者との精霊的意志疏通の回路の接続を徐々に滅ぼす。当然、神は、その子供の陳情を聞くのだが、人間の心が不正の概念を故意に、そして持続的に抱くとき、徐々に、地球の子供とその天の父との個人的な親交の消失が結果として起こる。

146:2.3 (1638.3) 2.既知の、しかも確立した神の法に矛盾するその祈りは、楽園の神格に対する憎悪である。精霊、心、物質の法則において、神々が、被創造者に話すようには、人が神々の言うことを聞こうとしないならば、被創造者による作為ある意識的な侮蔑行為そのものが、そのような無法かつ反抗的な人間の個人の陳情を聞くことから精霊的人格の耳を遠ざけるのである。イエスは、使徒に予言者ザハリーアから引用した。「だが、彼らは聞こうともせず、肩を怒らし、耳をふさいで聞き入れなかった。さよう、彼らは、予言者達を通して我が精霊により送った法と言葉を聞き入れないために、心を石のように硬くした。したがって、彼らの邪な考えの結果、大きな怒りが、邪な考えをもつ者の上におりてきた。そして彼らは、慈悲を求めて泣くこととなったが、何も聞かれな

かった。」 そこでイエスは、「神の法を聞こうとしない者は、その祈りさえ忌み嫌われる。」と賢者の言った諺を引用した。

146:2.4 (1638.4) 3.神-人の意思疏通経路の人間側の端を開けることにより、必滅の運命にある者達は、すぐに、世界の被創造物への神性の働き掛けであるいつまでも続く流れを利用できるようにする。人が心の中の神の精霊が話すのを聞くとき、神がその人の祈りを同時に聞くという事実は、そのような経験に固有なことである。罪の許しさえこの同じ的確な様式で作動する。天の父は、人が請うことを思いつく前にさえ許した。しかし、そのような許しは、自身が仲間を許すそのような時まで、個人的な宗教経験において可能ではない。神の許しは、仲間を許すことを実際条件とはしないが、経験において、それは、全くそのように条件づけられている。そして、神と人間の許しのこの同時性の事実は、このように認識され、また、イエスが使徒に教えた祈りで結びつけられた。

146:2.5 (1638.5) 4. 慈悲が法を回避するのに無力である宇宙には、正義の基本的な法がある。楽園の寡欲な栄光は、時

間と空間の領域の完全に利己的な被創造者による受領は可能ではない。神の無限の愛でさえ、生き残りを選ばない人間に永遠の生存の救済を押しつけることはできない。慈悲には、宏大な贈与の柔軟性があるが、結局は、慈悲と結合される愛でさえ効果的に取り消すことのできない正義の命令がある。イエスは再びヘブライの聖書から引用した。「私は呼んだが聞こうとしなかった。手を差し延べたが誰とて注目しなかった。人は、私のすべての助言を無視し、叱責を拒絶し、この反抗的な態度のため、私を訪ねても答えを受けとれないということが回避不能となってくる。生き方を拒絶したので、苦しんでいるとき、一所懸命に私を探すかもしれないが、見つけられないであろう。」

146:2.6 (1639.1) 5.慈悲を受ける者は、慈悲を示さなければならない。自分は裁かれることはないと判断してはいけない。人が他者を裁く態度で人はまた裁かれるであろう。慈悲は宇宙の公正さを完全には取り消さない。最後には、それは、本当であると判明するであろう。「貧者の叫びに耳を貸さない者は誰であろうといつかは泣いて助けを求めるだろうが、だれもその声を聞かないであろ

う。」どんな祈りの誠意も、聞かれることの保証である。どんな陳情に対しても、精霊の叡知と宇宙の一貫性が、時、方法、答えの度合の決定者である。賢明な父というものは、無知で未経験な子の愚かな祈りには文字通り応じない、とはいえ、子は、そのような不合理な陳情に多大の喜びと魂の真の満足を得るかもしれないが。

146:2.7 (1639.2) 6.天の父の意志を為すことに完全に献身するとき、人の祈りは父の意志と完全に一致するし、また父の意志は、その広大な宇宙のの至る所で常に明白であるので、すべての誓願への答えが用意されるであろう。真実の息子が望むことは、無限の父が望むことである。そのような祈りが答えられないままでではありえない、だが、他のいかなる類の請願も、おそらく詳細に答えられるというわけではない。

146:2.8 (1639.3) 7.公正な者の叫びは、善、真、慈悲の父の倉の戸を開く神の子の信仰の行為であり、これらの見事な贈り物は、息子の接近と個人的充当を長く待っていたのである。祈りは、人への神の態度を変えはしないが、不変の父への人の態度を変える。祈る者の社会的、経済的、

または外向きの宗教の地位ではなく、祈りの動機が、神の耳への優先権を与える。

146:2.9 (1639.4) 8.祈りは、時間の遅れを避けたり、空間の障害を卓越することには許されない。祈りは、自己を増大したり、仲間よりも不公平な利点を獲得するための手段として考案されてはいない。徹底的に利己的な魂は、言葉の持つ本当の意味で祈ることができない。イエスは、「神の特質をあなたの最高の喜びとしなさい。そうすれば、神は心からの願いを必ず聞き届けるであろう。」「道を神に委ねなさい。神を信頼しなさい。そうすれば、彼は行うであろう。」「主は貧しい者の叫びを聞き、困窮している者の祈りに注目するのだから。」と言った。

146:2.10 (1639.5) 9.「私は父からやって来た。だから、父に尋ねることに関して疑うなら、私の名前で願いなさい、そうすれば、私は、あなたの本当の必要と願望と、また父の意志に従って、願いを提示するつもりである。」祈りで自己中心になるという重大な危険を警戒しなさい。自分のために多く祈ることを避けなさい。同胞の精霊的な進

展のためにより祈りなさい。物質的な祈りを避けなさい。精霊の中に祈り、精霊の贈り物の豊かさのために祈りなさい。

146:2.11 (1639.6) 10.病人や困苦する者のために祈るとき、君の願いが、この苦しむ者達の必要なとする物への優しくて知的な奉仕にとって代わると期待してはいけない。家族、友人、仲間の幸せを祈りなさい、しかし、特にあなたを罵る人々のために祈りなさい、そして、あなたを迫害する者のために情愛深い請願をしなさい。「だが、いつ祈るかを言うつもりはない。内に宿る精霊のみが、精霊の父とのあなたの内側の関係を表すそれらの願いの言葉へとあなたを動かすかもしれない。」

146:2.12 (1640.1) 11.多くの者が困ったときだけに祈りに訴える。そのような習慣は、軽はずみで紛らわしい。本当である、悩むときに祈るのは良いというのは、だがすべてが魂とうまくいくときでさえも、父の息子として話すことを心に留め置くべきである。自分の真の誓願はいつも秘密にして置きなさい。個人的な祈りを人に聞かせてはならない。感謝の祈りは、集団での崇拝に適してはいる

が、魂のための祈りは私事である。全ての神の子にとり適切である唯一の祈りの型があり、それは、「それでも、あなたの意志は為されます。」である。

146:2.13 (1640.2) 12.この福音の全ての信奉者は、心から天の王国の拡大を心より祈るべきである。ヘブライ聖書のすべての祈りのうち、イエスは、詩篇作者の申し立てにもっとも同意して注解した。「神よ、私に清い心を造り、私のうちにある良い精神を新たにしてください。秘めた罪から私を一掃し、あなたのしもべを傲慢の罪に近寄らせないでください。」イエスは、「主よ、私の口に見張りを置き、私の唇の戸を守ってください。」と引用して、かなりの時間にわたって祈りと不注意で問題のある言論との関係について評した。「人間の舌は、」と、イエスは言った。「わずかな者しか慣らすことのできない身体の一部である。しかし、宿る精霊は、この手に負えない一員を寛容で慈悲を奮い立たせる親切な声へと変えることができる。」

146:2.14 (1640.3) 13.イエスは、この世の人生の道における神の導きを求める祈りは、父の意志についての知識のための

嘆願に続いて重要なものだと教えた。実際は、これは、神の叡知を求める祈りを意味する。イエスは、人間の知識と特別な技術が祈りによって獲得できるということを決して教えなかった。しかし、かれは、祈りが、神性の精霊の臨場を受ける人の能力の拡大における要因であることを教えた。イエスが精霊と真実において祈ることを仲間に教えるとき、切実に、そして人の啓蒙に従って祈ることに、つまり心から理性的に、切々と断固としてと祈ることに言及したと説明した。

146:2.15 (1640.4) 14.イエスは、祈りが極度に修辞的な反復、雄弁な言葉遣い、断食、苦行、または犠牲によってより効果を生むというような考えを避けるように追随者に警告した。感謝を通して真の崇拝へ導く方法としての祈りを用いるように、信者に強く勧めたのであった。イエスは、追随者の祈りと崇拝における感謝の態度があまりにも少なすぎることを嘆いた。この機会に聖書から引用して言った。「主に感謝し、いと高きものの名を褒めて歌うこと、朝毎にその愛の優しさを、夜毎にその真実を言い表わすことは、良い事である、というのも、神が為さ

れたことで私を喜ばせてくださいましたので。神の意志通りに、全てに感謝いたします。」

146:2.16 (1640.5) 15.イエスは続けた。「通常の必要なものについて絶えず心配し過ぎてはいけない。地球での存在問題について気づかうではない、だが、誠実な感謝の態度で、祈りと懇願により、これら全てにおいて、必要な事柄を天にいる父の前に広げなさい。」そこで、かれは、聖書から引用した。「私は歌で神の名を誉め称え、感謝の祈りで崇めます。それは、角と蹄をもつ雄牛、または若い雄牛の生贄にまさって主に喜ばれるでしょう。」

146:2.17 (1641.1) 16. イエスは、父への祈りをするとき、耳を傾けている魂に内在する精霊が話す良い機会を与えるために、しばらく静かな受け入れの状態にいるべきであると信奉者に教えた。人間の心が本当の崇拝の態度にあるとき、父の精霊は、人と最もよく話す。我々は、内在する父の精霊の援助と真実の奉仕を通しての人間の心の照明によって神を崇拝する。イエスは、崇拝とは、ますます人を崇拝されるもののに似せていくものだと教えた。崇

拝は、有限者が次第に無限者に接近し、最終的に無限者の臨場に達する変換経験である。

146:2.18 (1641.2) そして、イエスは、神との人の親交について他の多くの真実を使徒に話したのであったが、彼らの多くのは、彼の教えを完全には理解できなかった。

3.ラマハへの立ち寄り

146:3.1 (1641.3) イエスは、科学と哲学が人間の経験の需要を満たすに十分であると教えた老いたギリシアの哲学者とのラマハでの忘れ難い議論をした。イエスは、忍耐と共感をもってこのギリシア教師の言うことを聴き、教師が話し終えたとき、語られた多くの真実を認めながらも、イエスは、人間の存在の議論について「どこから、なぜ、どこへ」についての説明がなかったことを指摘してつけ加えた。「あなたが止めたところで、我々は始まる。宗教とは、心だけでは決して発見することができなかった、あるいは完全に理解することのできなかった精霊の現実を扱う人の魂の顕示である。知的な努力は、人生の事実を明らかにするかもしれないが、王国の福音は、存在の真実を繰り広げる。あなたは、真実の物質的な影に

ついて検討してきた。これらの人間存在の物質的事実のつかの間の影を投げかける永遠かつ精霊的な現実について話す間、今度は、君が聴いてくれるだろうか。」1　時間以上、イエスは、王国の福音の救済の真実についてこのギリシア人に教えた。年老いた哲学者は、あるじの接近の態様を容易に受け入れ、心から正直であったので、すぐにこの救済の福音を信じた。

146:3.2 (1641.4) 使徒は、イエスがこのギリシア人の多くの命題に公然と賛成する様子に少し当惑したが、イエスは、そののち彼らに個人的に言った。「わが子よ、ギリシアの哲学に寛容であったからといって驚くではない。真の、本物の内面的確実性は、少しも外面的分析を恐れることなく、真実もまた正直な批判に憤慨することはない。人は、不寛容が、人の信念の真実性に関して秘密の疑念を抱くことを覆い隠す仮面であるということを決して忘れるべきではない。心から信じるその真実を完全に信頼するとき、だれも決して隣人の態度により邪魔をされない。勇気は、人が信じることを公言するそれらの事柄への完全な正直さへの確信である。誠実な人間は、自らの

本当の信念と高潔な理想に対する批判的な考査を恐れない。」

146:3.3 (1641.5) ラマハでの2 晩目、トーマスは、イエスにこの質問をした。「あるじさま、あなたの教えの新しい信者達は、どのようにして王国のこの福音の真実に関し本当に知り、確信できるのですか。」

146:3.4 (1641.6) そこで、イエスはトーマスに言った。「人が、父の王国の家族に入ったという、また王国の子等とともに永遠に生き残るだろうという人の保証は、完全に個人的な経験—真実の言葉への信頼—の問題である。精霊的な保証は、神性の真理の永遠の現実における個人の宗教経験に相当しており、さもなければ、人の真理の現実の理性的な理解に精霊的な信仰を加え、あなたの正直な疑問を引いたものに等しいのである。

146:3.5 (1642.1) 「息子は、父の命を自然に賦与されている。父の生きる精霊を賦与されているので、あなたは、それゆえ神の息子である。あなたは、父の生きる精霊、永遠の命の贈り物と同一視されるので、肉体の物質界において人生を乗り切る。多くの者が、本当に、私が父の元から

来る前にこの人生を過ごし、そして私の言葉を信じたので、もっと多くの者がこの精霊を受けた。しかし、私が父のもとへ戻るとき、すべての人の心の中へ父がその精霊を送ると、私は断言する。

146:3.6 (1642.2) 「あなたは、神霊の心で働きを観察することができないが、天の父のこの内在する精霊の教えと指導にあなたの魂の力の制御を委せた度合いを知る実用的な方法があり、そしてそれは、仲間に対するあなたの愛の度合いである。父のこの精霊は、父への愛の性質があり、人を支配しつつ、神性の崇拝と仲間への思いやりの愛の方向へとつねに導くのである。私の教えは、父の内在する存在の内面からの指導を、君により意識させるようになったので、君は、まず神の息子であると信じている。しかし、やがて真実の聖霊は、すべての人に注がれ、私が今君達の中に生き、真実の言葉を話しているように、それは、人の中に生き、すべての人に教えるであろう。この真実の聖霊は、君の魂の精霊的な贈与を代弁して、神の息子であることをあなたが認識する手助けをするであろう。真実の聖霊は、現在一部の人のなかに住んでいるように、その時には全ての人間の中に住む父の内在す

る存在を絶えず証言するし、君の精霊は、君が神の息子であるということを君に伝える。

146:3.7 (1642.3) この精霊の導きに従う地球のあらゆる子共は、遂には神の意志を知り、父の意志に降伏する者は、永遠に生きるのである。地球の生活から永遠の身分状態への道は、あなたには明らかにされていないが、道はあり、またつねにあったのであり、私は、その道を新たに、しかも活気のあるものにするために来た。王国に入る者は、すでに永遠の命をもつ—決して滅びない。しかし、あなたは、この多くを私が父の元へ帰った後により一層理解するであろうし、また、回顧して現在の経験を見ることができる。」

146:3.8 (1642.4) そして、これらの祝福の言葉を聞いた者全ては、大いに励まされた。ユダヤ人の教えは、正しい者の生存に関して混乱していて不確かであって、イエスの信奉者には、全ての本物の信者が永遠に生存に関わるこれらの非常に明確で積極的な保証の言葉を聞くのは、爽快で、奮い立たせるものがあった。

146:3.9 (1642.5) 使徒は、戸別訪問の慣例を続け、意気消沈した者を安らげ、病苦の者に力を貸し、信者を説いたり洗礼をし続けた。イエスの使徒の各々が、その時ヨハネの使徒を仲間としていたので、使徒の組織は拡大された。アブネーは、アンドレアスの仲間であった。そして、次の過ぎ越し祭りためにエルサレムに行くまで、この策が取られた。

146:3.10 (1642.6) ゼブールーンでの彼らの滞在中、イエスが与えた特別な指示は、主に王国での相互の義務に関するさらなる議論と関係があり、それは、個人の宗教経験と社会の宗教義務の友好の違いを明確にするように考案された教育を包含した。これは、あるじがかつて宗教の社会的局面を議論したという数少ない機会の1つであった。地上での全人生を通じて、イエスは、宗教の社会化関して追随者にごく僅かしか教授しなかった。

146:3.11 (1643.1) ゼブールーンには混合民族がいて、殆どユダヤ人、あるいは非ユダヤはおらず、彼等は、カペルナムでの病人の治癒について聞いたにもかかわらず、少数の者しかイエスを本当には信じなかった。

4. イロンでの福音

146:4.1 (1643.2) ガリーラとイェフーダの小さな多くの都市でさえそうであるように、イロンには会堂があり、イエスの活動の初期には、安息日に会堂で話すのが彼の習慣であった。時々、かれは、朝の礼拝で話し、そして、ペトロスか他の使徒の一人が午後の礼拝で説教するのであった。イエスと使徒は、会堂で平日の夜の集会でしばしば教えもし、説教もしたのであった。エルサレムの宗教指導者達は、ますますイエスに敵対的になったが、かれらは、その都市の外の会堂には直接支配の行使はしなかった。かれらが、会堂での教導に対しほぼ全般的な閉鎖をもたらすために彼に対しそのような広範囲にわたる感情を巻き起こすことができるのは、イエスの公の活動の後期であった。この当時は、ガリーラとイェフーダの全ての会堂が彼に開かれていた。

146:4.2 (1643.3) イロンは、その頃大規模な鉱物現場であり、イエスは、坑夫の生活に一度も加わったことがなかったので、イロンでの滞在中、時間の大部分を鉱山で過ごした。使徒が、家庭訪問をして、公の場で説教をする間、イエスは、これらの地下労働者と鉱山で働いていた。癒

す人としての名声は、この遠くの村にさえ広まっており、多くの病人や苦に悩む者が、援助を求め、多くの者が、その治療の奉仕に大いに恩恵を受けた。しかし、かの癩病患者の件を除き、これらの事例のいずれにおいても、いわゆる奇跡というものは起こさなかった。

146:4.3 (1643.4) イロンでの3日目の午後遅く、鉱山からの戻り、イエスは、宿への途中でたまたま狭い脇道を通り抜けた。ある癩病の男のむさ苦しいあばら屋に近づくと、癒す者としての彼の名声について聞いていたこの苦しんでいる者は、戸を通り過ぎていくイエスの前に大胆にも近づき、跪いて話し掛けた。「主よ、あなたがなさろうと思うならば、私を清くしてください。私はあなたの弟子の知らせを聞きました。そして、清くなるのであれば、王国に入ります。」ユダヤ人の間では、癩病人は会堂に出席すること、あるいは、公の崇拝に従事することさえ禁じられていたので、癩病患者はこのように言った。この男は、癩病の治療法を見つけることができなければ来たるべき王国に受け入れられないと本当に信じていた。そして、イエスがその苦悩してい彼を見て、しがみつかんばかりの信頼の言葉を聞いたとき、彼の人間の

心は、動かされ、神の心は同情をかき立てられた。イエスが見ると、男は跪き伏し拝んだ。そこで、あるじは、手を差し伸ばし彼に触れて言った。「しよう—きれいになれ。」そうすると、すぐに、回復した。癩病は、もはや彼を苦しめなかった。

146:4.4 (1643.5) イエスが男を抱え上げて立たせると、男に託して言った。「気をつけて、治癒については誰にも話さず、静かに自分の用向きに取り組みなさい。自分の浄めの証しのために、行って聖職者に自分を見せ、モーシェが命じた供え物を奉げなさい。」しかし、この男性は、イエスの命令通りにしなかった。その代わりに、イエスが自分の癩病を治したと街中に公表し始めた。そして、男はすべての村で知られていたので、人々は、その病の浄められたことが明らかに見てとれた。イエスが訓戒したようには聖職者達のところへは行かなかった。かれが、イエスが癒したというこの知らせを広めた結果、病人が群がったので、あるじは、翌日早く起き、村を去るのを余儀なくされるほどであった。イエスは、町には二度と入らなかったが、鉱山近くの周辺に２日間留まり、信じる坑夫達に王国の福音に関してさらに教え続けた。

146:4.5 (1644.1) 癩病人のこの浄化は、この時が、意図的に、また故意にイエスが実行した最初のいわゆる奇跡であった。そして、これが本当の癩病の事例であった。

146:4.6 (1644.2) かれらは、イロンからギシャーラに行き、福音の宣言に2日間を費やして、それかれホラズィンに出発し、そこでは朗報を説いておよそ1 週間を過ごした。だがホラズィンでは王国への多くの信者を得ることができなかった。イエスが教えた場所で、そのような全般的な拒絶を受けたことはなかった。ホラズィンでの滞在は、大方の使徒には非常に気落ちのするものであり、アンドレアスとアブネーは、仲間の勇気を高めることにとても苦労した。そこでかれらは、静かにカペルナムを通過して、マードンの村に進んだが、そこではあまりうまくいかなかった。つい最近訪れたこれらの町での好評を得なかった原因は、教育と説教において治癒する者として言及することを差し控えるようにとのイエスの主張のためであったという考えが、大方の使徒の心で広がった。使徒達は、別の癩病患者を浄めるか、あるいは他の方法で人々の注意を引きつける力を表すことをいかに願ったこ

とであったか。しかし、あるじは皆の熱い衝動に冷静であった。

5.カナへの帰着

146:5.1 (1644.3) 「明日、カナに行く」と、イエスが発表したとき、使徒の仲間は大いに励まされた。かれらは、イエスが、カナではよく知られていたので、思いやりのある傍聴がいると知っていた。３日目に、息子が危篤状態の部分的に信者であるタイタスというカペルナムのある著名な市民が、カナに到着したとき、彼らは人々を王国にもたらす仕事を一所懸命にしていた。彼は、イエスがカナにいると聞いた。それで彼に会うために急いできた。イエスは、どんな病気も癒すことができるとカペルナムの信者達は考えていた。

146:5.2 (1644.4) この貴族は、カナでのイエスの居場所を突き止めると、イエスにカペルナムへと急ぎ、苦しむ息子を癒すことを懇願した。使徒は、息を殺し期待して傍観していると、イエスは、病の少年の父を見て言った。「どれだけそなたことを耐え忍ぶのであろうか。神の力はそなたの真ん中にあるのだが、君は、兆しや不思議なことを

見ることを期待はしても、信じることは拒否する。」ところが貴族は、イエスに嘆願した。「主よ、私は信じています。でも子供が死ぬ前に来ました。私が彼を置き去りにして出てきた時はすでに死に瀕していましたので。」そこで、イエスが静かな思索にしばらく頭を下げていたが、突然に言った。「家に戻りなさい。息子は生きるであろう。」タイタスは、イエスの言葉を信じカペルナムへと急いだ。戻りかかっているところへ、会いに出てきた使用人が、「お喜びください。ご子息がよくなられました—生きておられます。」と言った。そこでタイタスが、少年は何時に回復し始めたかを尋ねると、使用人が「昨日7　時頃、熱が引き始めました。」と答えると、その父は、それはイエスが「息子は生きるであろう。」と言ったおよそその時刻であったと思い出した。それでタイタスは、その後全心で信じ、また自分の全家族も信じた。この息子は、王国の強力な聖職者となり、後にはローマで苦しむ人々に自分の人生を捧げた。タイタスの世帯全体、その友人達、および使徒達さえ、この挿話を奇跡と見なしたが、そうではなかった。少なくともこれは、身体の病気治療の奇跡ではなかった。それ

は、単に自然法の経過に関する予備知識、洗礼後にイエスが頻繁に頼ったまさしくそのような知識に関する例であった。

146:5.3 (1645.1) この村での活動に伴うこの種の2 度目の挿話への妥当性を欠く注目のために、イエスは、再びカナから急いで遠ざかることを余儀なくされた。町民は、あの水とワインを覚えており、今、はるか遠くの貴族の息子を癒したと思い、人々は、病人や、苦しむ者を連れてくるだけでなく、苦しむ者を癒すことさえ要求して遠くから使いの者を送るのであった。そこで、イエスは、田舎全体が興奮しているのを見ると、「ナインに行こう。」と、言った。

6. ナインと未亡人の息子

146:6.1 (1645.2) これらの人々は前兆を信じた。かれらは、驚きを求める世代であった。この時までにガリラヤの中部と南の人々は、イエスとその個人の活動を奇跡の目で見るようになった。ただの精神異状や情緒障害に苦む数多くの、何百もの正直な人々が、イエスの前にやってきては、イエスが癒したと友人達に触れ回りながら帰宅する

のであった。そして、そのような精神的な治癒の場合、素朴でお人よしの人々は、肉体的治療、奇跡的な療法と見なした。

146:6.2 (1645.3) カナを立ちナインに行こうとしたとき、大多数の信者と好奇心の強い多くの人々が、イエスのあとに続いた。彼らは、奇跡と驚きを見る決意をしており、失望する予定にはなかった。イエスと使徒が、都市の出入り口界隈に近づくと、ナインの未亡人の一人息子を近くの墓地へ運んで向かう葬列に出合った。この女性は非常に尊敬されており、村の半分はこのおそらく死んだ少年の棺架の運搬人の後に続いていた。葬列がイエスと追随者に近づくと、未亡人とその友人達は、あるじに気づき息子を生き返らせるように懇願した。彼らの奇跡への期待は、非常な高さにまで上がり、イエスはどんな人間の病気も治療できるのであるから、そのような治療者が死者を生き返せないことがあろうかと思うほどであった。このようにしつこく強請される間、イエスは前進し、棺架の覆いを上げ少年を調べた。青年が本当に死んでいないのに気づき、かれは、自分がそこにいることで避けることのできる悲劇を察知し、それで、母に振り向いて言っ

た。「泣くでない、息子は死んではおらず眠っている。息子はあなたの元に戻されるであろう。」そして、青年の手を取り、「目覚めなさい、そして立ちなさい。」と、言った。そこで、死んでいたはずの若者は、ややあって座り、話し始めたので、イエスは、彼らを家に送り返した。

146:6.3 (1645.4) イエスは、群衆をなだめる努力をし、若者は本当は死んでいなかったし、墓から連れ戻してもいないと空しく説明したのだが無駄であった。後を追ってきた群衆、それにナインの村全体が、感情的な熱狂の最高度にまで湧き立っていた。恐怖は多くの者を捕らえ、狼狽は他の者を捕らえ、そして他の者達は、罪のために祈り嘆き悲しんだ。そして、騒ぎ立てる群衆を分散することができたのは、日暮れもずっと後のことであった。そして、勿論、少年が死んでいなかったというイエスの申し立てにもかかわらず、誰もが、奇跡が為され、死者さえも生き返ったと主張した。少年は、単に深い眠りについていたのであると説明しても、かれらは、それがイエスの話し方であり、常に自分の奇跡を隠そうと、とても控

え目であるという事実の方へ注意を促すのであると説明した。

146:6.4 (1646.1) イエスが未亡人の息子を死から甦らせたという報道が、ガリラヤ中に、そしてユダヤに流れ、この知らせを聞いた多くは、それを信じた。目を覚まさせ立ち上がらせたとき、未亡人の息子は、実は死んでいなかったということを決して完全には全使徒にさえ理解させることはできなかった。しかし、イエスは、自分に関係ある挿話であると記録したルカスの記録を除いては、その後のすべての記録に入れないように十分に彼らに刻みつけた。そして、イエスが医師として再び取り巻かれたので、翌日早くにエンドールへと出発したのであった。

7. エンドールにて

146:7.1 (1646.2) エンドールでは、イエスは、身体治癒を求めて騒ぎ立てる群衆から数日間逃れた。この地域での滞在中、あるじは、使徒への教授のためにシャウール王とエンドールの魔女の話を詳しく語った。イエスは、しばしば死者の霊と思われるものになりすました脇にそれ反逆的な中間者達は、もうこれらの奇妙なことができないよ

うに規制されるということを使徒にはっきりと告げた。イエスは、彼が父の元に帰った後、また、彼らが自分達の精霊をすべての人間に注いだ後、そのような準精霊—いわゆる不浄な霊—は、もはや人間の中の微弱な者や邪心の者に取り憑かないのだと話した。

146:7.2 (1646.3) イエスは、人間を去った精霊は、生きている仲間との意思疏通のために自分達の本来の世界には戻らないのだとさらに説明した。前進する人間の精霊は、神の配剤の時代の成就後、例外的な場合、惑星の精霊的な管理の一部としたその時にだけ、地球に戻るのが可能である。

146:7.3 (1646.4) かれらが2 日間休養すると、イエスは、使徒に言った。「明日、田舎が静まっている間、滞在し、教えるためにカペルナムに戻ろう。郷里は、もうこの類の興奮から醒めているであろう。」

論文 147
エルサレムへの中途訪問

147:0.1 (1647.1) イエスと使徒は、３月17日、水曜日、カペルナムに到着し、エルサレムに向けて発つ前に、ベスサイダ

本部で2 週間を過ごした。この2 週間、イエスは、父の仕事に関し丘で多くの時間を一人で過す間、使徒は海辺で人々に教えた。イエスは、この期間中、ジェームスとヨハネ・ゼベダイオスを同伴してティベリアスへ2 度秘密の旅行をし、そこで信者達に会い、王国の福音を教えた。

147:0.2 (1647.2) ヘロデの屋敷の多くの者は、イエスを信じ、これらの会合に参加した。イエスに対するこの支配者の敵意を和らげるのを助けたのは、ヘロデの表向きの家族のこれらの信者の影響であった。ティベリアスのこれらの信者は、イエスが宣言した「王国」が、政治上の思惑ではなく、自然で精霊的なものであるとヘロデに詳細に説明した。ヘロデは、むしろ一家のこれらの者を信じていたので、イエスの教えや治療に関係する報告が広く行き渡ることに不必要な心配を受け入れようとしなかった。かれは、癒す者、または宗教教師としてのイエスの仕事に対して意義はなかった。多くのヘロデの顧問官や、ヘロデ自身でさえ、好意ある態度であったにもかかわらず、エルサレムの宗教指導者達に非常に影響を受け、イエスとその使徒に対し痛烈で威嚇的な敵であり続け、ま

た後には彼らの公の活動を妨げる多くのことをしたヘロデの部下の一集団がいた。イエスにとっての最大の危険は、ヘロデではなく、エルサレムの宗教指導者達であった。イエスと使徒がかなりの時間を過ごし、公への説教の大部分をエルサレムやユダヤでよりも、むしろガリラヤでしたというのはまさしくこの理由によるのであった。

1. 百人隊長の下僕

147:1.1 (1647.3) 彼らが過ぎ越し祭りの祝宴にエルサレムに行く準備をしていた前日、カペルナムに駐屯するローマ人の護衛、百人隊長、すなわち兵隊長であるマングスは、会堂の支配者達のところへ赴き「私の忠実なしもべが病気になり、死の寸前なので、代理でイエスの元に行き、使用人を癒すよう頼んでくれますか。」と言った。ローマの隊長は、ユダヤ人指導者達ならイエスにより幅が利くと思ったのでこうした。そこで長老達がイエスに会いに行き、代弁者が言った。「師よ、カペルナムに行き、ローマの百人隊長の気に入りの使用人を救ってくださるように、我々は、切にお願いいたします、隊長は、非常に我が国を思ってくれ、その上、あなたが何回となく話し

をした他でもないあの会堂さえ建てましたので、あなたの注目を得るに値するのです。」

147:1.2 (1647.4) イエスは話を聞くと、「一緒に行こう。」と、言った。百人隊長の家に一緒に行き、彼らが庭に入る前に、このローマ軍人は、イエスを迎えるために友人達を行かせ、次のことを告げるように頼んだ。「主よ、私の家にあなた自身がわざわざ入らないでください。私は、私の屋根の下に来てもらうに相応しい者ではありませんので。私があなたの方に参るのもまた相応しいとは考えませんでした。そういう訳で、あなた民族の長老を送らせていただきました。ところが、私は、あなたが立っておられるその場で言葉を話し、私の下僕を癒すことができるということを存しております。なぜなら、私自身、他者の命令下にあり、また私の下には兵隊達がおり、この中の一人に行けと言うと行き、また、他の者に来いというと来ます。それに、私の使用人達にこれをせよ、あれをせよと言うと、皆はします。」

147:1.3 (1648.1) イエスは、これらの言葉を聞くと、使徒や共にいた者達に向き直って言った。「非ユダヤ人の信仰には

驚嘆する。誠に誠に言っておく。私は、それほどまでに厚い信仰を見たことがない。いや、イスラエルにはない。」イエスは、家を背にして、「では、行こう」と、言った。そこで、百人隊長の友人達は、家に入って行き、イエスの言ったことをマングスに言った。すると、その時間から使用人は、回復し始め、結局、通常の健康と機能を取り戻した。

147:1.4 (1648.2) しかし、我々は、ちょうどこの時に起こったかについて決して分からなかった。これは単なる記録であり、目に見えない存在が、百人隊長の使用人の治療に当たったかどうかに関しては、イエスに同伴した人々には明らかにされなかったということである。我々は、使用人の全快の事実を知るだけである。

2. エルサレムへの旅

147:2.1 (1648.3) 3月30日、火曜日の朝早く、イエスと使徒の一行は、過ぎ越しの祭りのためにヨルダン渓谷経路でエルサレムへの旅を始めた。かれらは、4月2日、金曜日の午後到着し、いつも通り、ベサニアに本部を設けた。イェリーホ通過の際、ユダが家族の友人の銀行で何某かの

皆の共通基金の預金をする間、かれらは、休息のために止まった。ユダが余剰金を持ち運んだのは、これが初めてであり、この預金は、イエスの裁判と死の直前にエルサレムへの最後の、そして波瀾万丈の旅で再びイェリーホを通過まで手つかずのままであった。

147:2.2 (1648.4) 一行は、エルサレムへ平穏無事に旅したが、ベサニアではほとんど落ち着けなかった。身体の治療、煩わされた心の慰め、魂の救済を求めに遠近から来る者達が、非常にたくさん集まり始めたので、イエスには、休息のための時間がほとんどなかった。従って、彼らは、ゲッセマネにテントを張り、あるじは、絶えず群がりくる群衆を避けるために、ベサニアからゲッセマネへと往復するのであった。使徒の一行は、エルサレムでおよそ3 週間過ごしたが、イエスは、彼らに公開の説教ではなく、個人的な教育、および個人的な仕事だけをするように申しつけた。

147:2.3 (1648.5) かれらは、静かに過ぎ越し祭りをベサニアで祝った。そして、イエスと12人が血を見ることのない過ぎ越し祭りの祝宴に加わるのは、これが初めてであった。

ヨハネの使徒は、イエスとその使徒と過ぎ越しの祭りの食を共にしなかった。彼らは、アブネーと、そしてヨハネの説教の初期の信者達と宴を祝った。これは、イエスがエルサレムで使徒と共に祝った2 度目の過ぎ越し祭りであった。

147:2.4 (1648.6) イエスと12人のカペルナムへの出発の際、ヨハネの使徒は、ともに戻らなかった。アブネーの指示に従い、かれらは、エルサレムと周辺の地域に留まり、王国の拡大のために静かに働き、一方イエスと12人は、働くためにガリラヤに戻った。70人の伝道者が任命され送り出されるほんの少し前まで、24人全員は、決して 2 度と一緒にはならなかった。しかし、2集団は協力的であり、相互の意見の相違にもかかわらず、最高の感情が勝った。

3. ベセスダの池にて

147:3.1 (1649.1) エルサレムでの2 度目の安息日の午後、あるじと使徒が寺での礼拝に参加しようとしていると、ヨハネが「共に来てください。あるものをお見せしたいのです。」とイエスに言った。ヨハネは、エルサレムの門の

1 つを通りイエスをベセスダと呼ばれる大池へと案内した。この池の周囲には、5 つの柱廊玄関の構築物があり、その下には大集団の苦しむ者が治療を求めてたむろしていた。これは、赤みがかった水が、池の下の岩石の洞窟におけるガス蓄積の結果、時おり不規則な間隔で泡立つ温泉であった。この周期的な暖かい水域の撹拌は、超自然の影響によるものだと多くに信じられ、また、そのような撹拌後の水に入った最初の者は、どのような疾患であろうとも癒されるというのが一般的信仰であった。

147:3.2 (1649.2) 使徒は、イエスから強要された規制の下で幾らか落ち着かずにいた。そして、12 人中、最も若いヨハネは、この束縛に特にいら立っていた。かれは、あるじが、集まった苦しむ者達の光景に強く同情を引かれ、奇跡の治療の実行へと心が動かされ、それにより、全エルサレムが仰天し、やがて、それ等は説き伏せられて王国の福音を信じるであろうと考えたうえで、イエスを大池に連れてきた。ヨハネが言った。「あるじさま、これらの苦しんでいる者達をご覧ください。我々が何かしてやれることはないのでしょうか。」そこで、イエスは答え

た。「ヨハネ、なぜ私が選んだ道から逸れるように私を唆そうとするのか。なぜ永遠の真実の福音の宣言の代わりに、驚異の働きや病人の治療に置き換えることを望み続けるのか。息子よ、そなたの望みに沿うようなことはしないかもしれないが、大いなる歓呼と永遠の慰めの言葉が掛けられるように、これらの病人と苦しむ者達を集めなさい。」

147:3.3 (1649.3) この集まってきた者達にイエスが話した。「あなた方の多くが、長年の誤った生活のために病気であったり、苦しんだりしてここにいる。ある者は時の災難に、他の者は祖先の誤りの結果に苦しむ一方、君達の一部は、この世での束の間の生活の不完全な状態の困難な条件下で苦しんでいる。ところが、私の父は働いており、また、私は、あなた方の地上での状態を改善するために、それどころか、とりわけ永遠の身分を保証するために働くのである。天の父がそう望んでいると発見しない限り、我々の中の誰も、人生の困難を変えるために大いに役立つことはできない。結局、我々は全員、永遠なるものの意志を為す恩義を受けている。もしあなた方が、全ての肉体の苦悩が癒されれば、確かに驚嘆するで

あろうが、すべての精霊的な病が浄められ、すべての道徳的な虚弱さが癒されたと気づくならば、それのほうがはるかに素晴らしいことである。あなた方は、皆神の子である。天なる父の息子である。時間の束縛が苦しめているように思えるかもしれないが、永遠の神は、あなたを愛している。また、審判の時が来るとき、恐れてはいけない、あなた方すべてが、正義ばかりではなく、慈悲の豊かさを見い出すであろう。本当に、本当に、あなた方に言おう。王国の福音を聞き入れ、神と息子性のこの教えを信じる者は、永遠の命を有している。そのような信者達は、すでに審判と死から光と命へと移っており、また、墓にいる者達さえ復活の声を聞く時が来ているのである。」

147:3.4 (1649.4) 聞いた人々の多くは、王国の福音を信じた。苦しむ者の幾人かは、非常に元気づけられ精霊的に生き返され、自分達の疾患もまた癒されたと宣言して歩きまわるのであった。

147:3.5 (1649.5) 不安な心の疾患に長年伏さぎ込み苦しんできた一人の男が、イエスの言葉に喜んで家に帰り、安息の日

ではあったが、寝床をあげた。この苦しむ男は、誰かが助けてくれるのをこれらの年月ずっと待っていたのであった。それほどまでに自己の無力の犠牲者であったので、かれは、自身を助けるという考えを一度も持ったことがなかったのだが、回復のために彼がすべきことは1つのこと—寝床を片付けて歩くこと—であったと分かった。

147:3.6 (1650.1) その時、イエスがヨハネに言った。「司祭長等と代書人等がやってきて、我々がこれらの苦しんでいる者に生命の言葉を話したと怒る前に出立しよう。」そこで、仲間に加わるために寺院に戻り、まもなくベサニアで夜を過ごすために出発した。しかし、ヨハネは、この安息日の午後のイエスとのベサニアの大池のこの訪問について、ついぞ他の使徒に話さなかった。

4. 生活の原則

147:4.1 (1650.2) ベサニアで、この同じ安息日の夕方に、イエス、12 人、それに一団の信者が、ラーザロスの庭で火を囲んで集まっていると、ナサナエルが、イエスにこう質問をした。「あるじさま、我々が自分にしてもらいた

と思うことを他の者にそうするべきであると訓示され、古い生活規則の前向きな所見を我々に教えてくださいましたが、私はどのようにそのような命令をいつも守ることができるか完全に理解したわけではりません。好色で、それ故、邪に内縁関係を結ぼうと企む男の例を引用することで、私の主張を例示させてください。我々は、人にしてもらいたいと思うことを人に施すということを、この悪を企む男にどう教えることができるでしょうか。」

147:4.2 (1650.3) ナサナエルの質問を聞くと、イエスは、すぐに立ち上がり使徒達に指さして言った。「ナサナエル、ナサナエル、心でいかような考えをしているのか。私の教えを精霊の生まれの者として受け取りはしないのか。知恵ある者、また精霊的なものを理解する者として真実を聞かないのか。人にしてもらいたいことを人に施せと諭すとき、私の教えを悪行の奨励認可へと捻曲げようとする者にではなく、高い理想の人間に私は語り掛けている。」

147:4.3 (1650.4) あるじが話し終えると、ナサナエルは、立ち上がって言った。「しかし、あるじさま、私が、あなたの教えのそのような解釈に賛成すると思うべきではありません。多くのそのような人間が、あなたの諫言をこのように誤解するかもしれないと推測したのでお尋ねしたのです。そこで、これらの問題に関して我々に一層の指示を与えていただきたいのです。」そうしてナサナエルが座ると、イエスは、話し続けた。「よく分かっている、ナサナエル。そのようなどんな悪の考えもそなたの心には無いということを。だが、君達全員が、しばしば私の常套の教えに、つまり、人間の言語で、しかも人間が話すはずの言語で与えねばならない教えに、純粋に精霊的な解釈をし損ねるのには失望している。生活のこの原則、『人にしてほしいと望むことを人に施せ』というこの訓戒の解釈に与えられる意味の異なる段階に関し教えよう。

147:4.4 (1650.5) 1. 肉体の段階。かくのごとく全く利己的で淫らな解釈は、あなたの質問の仮定によってよく例示されているであろう。

147:4.5 (1650.6) 2. 感情の段階。この段階は、肉体のそれよりも1段階高くて、共感と哀れみが、生活のこの原則に関する人の解釈の度合を高くすることを意味する。

147:4.6 (1650.7) 良い判断は、生活のそのような原則が、深遠な自尊の気高さに具現される高い理想主義に一致して解釈されるべきであることを要求する。

147:4.7 (1651.1) 4. 兄弟愛の段階。仲間の福祉へのさらに高い寡欲な献身の段階に気づく。神の父性に対する意識とその結果からくる人の兄弟愛の認識から生じる心からの社会奉仕のこのより高い段階においては、この生活の基本的な原則の新しくてはるかに美しい解釈が発見される。

147:4.8 (1651.2) 5. 道徳的段階。すると、解釈の真の哲学の段階に達するとき、物事の正誤に対する真の洞察力を持つとき、そして人間関係の永遠の適合性を知覚すとき、高潔で、理想主義的で、賢明かつ公平な第三者が、あなたの人生状況への調整の個人的問題に適用するそのような訓令を考え、解釈するであろうと、人が想像するような解釈のそのような問題を考え始めるであろう。

147:4.9 (1651.3) 6. 精霊的な段階。そうすると遂に、神が人間を扱うであろうと我々が心に抱くように、全ての人間を遇するこの神性の命じる生活のこの法を我々に強いて気づかせる精霊の洞察と精霊的な解釈の段階に、我々は達する。それは、宇宙の人間関係の理想である。そして、人の最高の願望が、常に父の意志を為すことであるとき、これは、すべてのそのような問題に対する人の態度である。私は、それ故、同様の情況において私がするでろうと弁えることをすべての人にしなければならないい。」

147:4.10 (1651.4) イエスがこの時までに使徒に言った何も、これほどまでに彼らを驚かせなかった。彼らは、あるじが退いた後もずっとその言葉について検討し続けた。ナサナエルは、イエスが自分の質問の意図を誤解したという億測から立ち直るのに時間が掛かったが、他のものは、哲学的な仲間の使徒が、そのような思考を刺激する質問をする勇気に対し十二分に感謝していた。

5. パリサイ人サイモンを訪ねる

147:5.1 (1651.5) サイモンは、ユダヤ人のサンヘドリンの一員ではなかったが、影響力のあるエルサレムの有力なパリサ

イ人であった。かれは、不熱心な信者であり、そのために厳しく批評されるかもしれないが、あえてイエスとその個人的な仲間であるペトロス、ジェームス、ヨハネを社交を兼ねた食事に家へと招待した。サイモンは、今まであるじを観測してきて、その教えに、それ以上に彼のひととなりに非常に心を動かされた。

147:5.2 (1651.6) 裕福なパリサイ人等は、慈善に没頭しており、自分達の博愛に関し公表を回避しなかった。ある乞食に慈善を施そうとするとき、時折はトランペットさえ吹くのであった。貴賓のために宴会を開くとき、食事をしている人達の長椅子の後方の部屋の壁に沿って立ち、宴会客が、彼らに投げるかもしれない食物の一部を受けるために通りの乞食さえ入ってくることができるように家の戸を開け放すことが、これらパリサイ人の習慣であった。

147:5.3 (1651.7) サイモンの家でのこの特別の機会に、通りから来る者の中に最近王国の福音の朗報の信者になった道徳的に芳しくない評判の女性がいた。この女性は、非ユダヤ人の寺院の中庭のすぐ近くに位置するいわゆる高級売

春宿の中の一つの元管理人としてエルサレム中によく知られていた。彼女は、イエスの教えを受け入れ、邪悪な商売の場を閉鎖して、自分に関連した女性の大部分が福音を受け入れて生活様式を変えるように仕向けた。これにもかかわらず、彼女は、まだパリサイ人にかなり軽蔑されたままで、また髪を下ろしたままでいること—売春の象徴—を強要されていた。この無名の女性は、匂い入りの塗布用洗浄水の大きな瓶をもってきてイエスの後ろに立っており、イエスが食卓の方に寄り掛かると、その足を塗布し始めると共に、感謝の涙でも足を濡らし、自分の頭髪でそれを拭った。そして、この塗布を終えても、彼女は、足に涙を流しつつ口づけを続けた。

147:5.4 (1652.1) サイモンがこのすべてを見て、「この人がもし予言者であるならば、自分に触れるこの女が何者でどんな様子であるか、つまり悪名高い罪人であることを見て取るであろうに。」と思った。イエスは、サイモンの心で何が起きているかが分かり、はっきり言った。「サイモン、君に言いたいことがある。」サイモンが答えた。「先生、お続けください。」そこで、イエスが言った。「ある裕福な金貸しには、2 人の債務者がいた。一人は

500 デナリウス銀貨を、他の一人は50 のデナリウス銀貨を借りた。さて、二人のどちらとも支払う何もないとき、彼はその両方を許した。そのうちのいずれが、サイモン、その男をより愛しているであろうのう。」サイモンが答えた。「その男、多額を許された男の方だと思います。」「そなたはまともに判断した。」と、イエスは言い、女性を指差しながら続けた。「サイモン、この女性をよく見なさい。私は招待客として君の家に入ったが、私の足にはいささかの水ももらわなかった。この謝意を示す女性は、涙で私の足を洗い、それを彼女の頭髪で拭いた。君は親しみのこもった挨拶の口づけの一つもしなかったが、入って来てからずっとこの女性は、私の足に口づけするのをやめなかった。、君は私の頭に塗油するのを怠ったが、彼女は、貴重な洗浄水を私の足に塗った。そこで、このすべての意味は、何であるのか。単に、その意味は、彼女の多くの罪が許されてきたということ、そしてこれが、彼女を非常に愛するように導いてきた。だが、ほんの少ししか許しを受けなかった者達は、少ししか愛さないのである。」それから、女性の方に振り向きその手を取り、彼女を立たせながら言った。

「あなたは本当に自分の罪を悔いたので、それらは許された。仲間の軽はずみで不親切な態度にがっかりしてはいけない。天の王国の喜びと自由で前進しなさい。」

147:5.5 (1651.9) サイモンと食事の席に着いていたその友人達がこれらの言葉を聞くとさらに驚き、自分たち同志で「罪を許しさえものともしないこの男は誰であろう。」とひそひそと話し始めた。そして、このように呟やかれていているのを聞くと、イエスは、女性を帰すために「婦人よ、安心して行きなさい。あなたの信仰がそなたを救った。」と言った。

147:5.6 (1651.10) イエスが友人達と去ろうと立ち上がりながらサイモンに向かって言った。「君の心は分かっている、サイモン。いかに信仰と疑いの狭間で取り乱し、いかに恐怖に取り乱し、また誇りに煩わされているかを。しかし、私は、王国の福音が、招かれも歓迎もされない客の心ですでに生じた凄まじい変化に匹敵するような、ちょうどそのような強力な心と精神の変化を人生の自分の拠点において君が光に譲り、経験することができるように君のために祈る。そして、私は、父が天の王国に入る信

仰を持つ者すべてにその入り口を開いたと、そして、地上の最も卑賤な者、またはおそらく紛れもない罪人に対してさえ、それが入り口を心から求めるならば、誰も、あるいは人間のいかなる結社も、これらの入り口を閉じることはできない、と君達すべてに宣言する。」そして、イエスは、ピーター、ジェームス、ヨハネとともに、主人に暇乞いをし、ゲッセマネの庭で宿営をしている使徒に加わるために戻って行った。

147:5.7 (1653.1) 同夜、イエスは、使徒にとって長期にわたり記憶することになる神との地位の相対的価値と楽園への永遠の上昇における進展について演説をした。イエスが言った。「子供達よ、子と父との間に本当の、また生きた関係が存在するならば、子供は、父の理想に向かって絶え間なく進歩することは確かである。本当に、子供は、最初は遅い前進をするかもしれないが、それでもなお、進歩は確かである。重要なことは、進歩の敏速性ではなく、むしろその確実性である。進歩の方向が神へ向かうという事実ほどには、実際の業績は、それほど重要ではない。今日、あなたが何であるかよりも、日々無限になることの方がより重要なのである。

147:5.8 (1653.2) 「君達の一部が、今日サイモンの家で見たこの変化した女性は、現在、サイモンやその善意の仲間のずっと下の生活水準で暮らしている。しかし、これらのパリサイ人が、無意味の儀式的な礼拝のまやかしの段階の通過に関する幻想の偽りの進展に専念する一方で、この女性は、真剣に、神の長くて波瀾万丈の探索を始め、天への彼女の道は、精神的な自負や道徳上の自己満足に妨げられてはいない。この女性は、人間の立場で言えば、サイモンよりも神からははるか遠くにいるが、その魂は、進歩的な動きをしている。彼女は、永遠の目標に向かって行く途中である。この女性には、将将来への凄まじい精霊的可能性がある。一部の君達は、魂と精霊の実際の水準の高さには立っていないかもしれないが、神への開かれた生きる道で、信仰を通して、毎日前進している。君達等の一人一人には、未来に絶大なる可能性がある。「不活発な俗世間の智慧の蓄えと精霊的な不信仰の優れた知性を備えていることよりも、小さいが、生きていて発達する信仰を持つ方がずっとよい。」

147:5.9 (1653.3) しかし、イエスは、父の愛に甘える神の子供の愚かさを避けることを使徒にくれぐれも注意した。かれ

は、天の父が、いつでも罪を容赦し、無謀を許そうとするような、手ぬるい、しまりのない、または愚かに寛大ではない親であると断言した。父と子の例証を、軽はずみな子供の道徳的な破滅をもたらす地球の愚かな者と共謀し、その結果、自身の子供らの非行と早期の堕落に確実に、直接的に教唆する甘やかし過ぎて、賢明でない両親が神が似ていると誤って適用しないように聞き手に警告した。イエスは言った。「私の父は、すべての道徳的な成長と精霊的な進歩にとって自己破壊的で、自滅的である自分の子の行為と習慣を寛大に容赦はしない。そのような罪深い習慣は、神の目には忌まわしいことである。」

147:5.10 (1653.4) ようやく使徒とカペルナムに出発する前、イエスは、エルサレムの身分の高い者や低い者、金持ちや貧乏人との他の多くの半ば私的な会合や宴会に出席した。実に、多くの者が、王国の福音の信者となり、やがては、エルサレムとその周辺で王国の利益を促進するために後に残ったアブネーとその仲間によって洗礼された。

6. カペルナムへの帰着

147:6.1 (1653.5) ４月最後の週、イエスと12人は、エルサレム近くのベサニア本部から出発し、イェリーホとヨルダンを通りカペルナムへの帰路ついた。

147:6.2 (1654.1) 主要な聖職者とユダヤ人の宗教指導者は、イエスをどう扱うべきか決めるために多くの秘密の会合を開いた。彼の教えを終わらせるための何かをすべきであると皆が同意するのであったが、その方法については意見がまとまらなかった。彼らは、ヘロデがヨハネを死に追いやったように、行政当局がイエスを処分することを望んでいたが、イエスが、ローマ当局が彼の説教をあまり警戒しないほどの仕事をしていたことが分かった。従って、カペルナムへのイエスの出発前日に開かれた会合では、かれは、宗教上の罪で捕縛され、サンヘドリンによる裁判にかけられなければならないと決められた。したがって、イエスの後をつけ、その言葉と行動を観察し、法律違反と冒涜の十分な証拠を収集したところで、エルサレムに報告をもって戻るための6 人の密偵委員会が任命された。これらの6 人のユダヤ人は、30 人ほどの使徒の一行にイェリーホで追いつき、弟子になるのを望むと見せかけイエスの追随者の家族に加わり、ガリラヤでの

2　回目の説教巡行の始まるまでその集団に留まっていた。そこで、そのうちの3 人は、主要な聖職者とサンヘドリンに報告するためエルサレムに戻った。

147:6.3 (1654.2) ペトロスは、ヨルダン川の向こうで群衆に説教し、翌朝、彼等は、アマススに向かい川を上った。かれらは、カペルナムに真っ直進みたかったのであるが、それほどまでの群衆がここに集まったので説教し、教え、洗礼をし、3 日間留まった。かれらは、安息日の朝、つまり5 月1 日まで、家に向けて進まなかった。エルサレムの密偵は、イエスが、安息日にあえて旅行を始めるつもりであったので、そのときイエスに対する最初の罪状—安息日の違反—を手にしたたと確信していた。しかし、かれらは、失望する運命にあった、というのも、出発直前、イエスは、アンドレアスを面前に呼び入れ、そして皆の前で、ユダヤの安息日の法的に許される道程であるほんの1,000　メートル足らずの距離を進むように命令したからであった。

147:6.4 (1654.3) だが、密偵は、イエスとその仲間を安息日違反で告訴する機会を長く待つには及ばなかった。一行が細

い道に沿って通っていると、ちょうど実のついたばかりの波うつ小麦が、両側の手近にあり、使徒達の数人は、空腹であったので、熟れた粒をむしって食べた。旅人が道路に沿って行くとき、穀物を自由に取ることは慣例であり、従って、そのような行為に悪行という考えなどは決して結びつけられなかった。しかし、密偵は、イエスを責めたてる口実としてこれに飛びついた。かれらが、アンドレアスが手の中で穀物を擦るのを見て歩み寄って言った。「安息日に粒を毟り、擦るのは不法であることと知らないのですか。」そこで、アンドレアスが答えた。「といっても、我々は空腹であり、必要分しか擦っていない。それと、いつから、安息日に穀物を食べるのは罪となったのですか。」しかし、パリサイ人は言った。「食べることは悪くはないが、粒を毟り、手の中で擦ると法を破ることになる。まさか、あなたのあるじは、そのような行為をよいとは思わないであろう。」その時、アンドレアスが言った。「しかし、粒を食べるのが悪くなければ、我々の手の間での摩擦は、あなたが許す粒の咀嚼より大きな仕事ではない。そのようなつまらないことでなぜとやかく言うのか。」アンドレアスが、

彼らが揚げ足取りであると仄めかすと、彼らは憤慨し、イエスがマタイオスと話しながら歩いているところに急いで戻り、抗議して言った。「先生、見てください。使徒が安息日に不法なことをしています。穀物を毟り、擦って、それを食べています。あなたが、彼等を止めるよう命令するのを確信しています。」その時、イエスは、批難する者達に言った。君達は、実に法に熱心であり、また、安息日を神聖に保つこともよく覚えている。だが、ある日ダーヴィドが空腹で、共にいた者達と神の家に入り、供え物のパンを食べたが、それは、聖職者達を除き、誰にも合法ではないというのを聖書で読んだことはないのか。そして、ダーヴィドもまた、共にいた者達にこのパンを与えた。また、安息日に多くの必要なことをするのが合法的であると我々の法律を読みとってはいないのか。そして、私は、日が終わる前に君達がこの日に必要な持参物を食べるのを見はしないのであろうか。良い部下よ、君達は安息日にとても熱心でありはするが、仲間の健康と幸福を見守ることをより上手にするほうが良かろう。私は、安息日のために人が作られたのではではなく、人のために安息日が作られたと断言する。

そして、私の言葉に注意して共にここにいるならば、人の息子は、安息日にさえ主であると公然とに宣言する。」

147:6.5 (1655.1) パリサイ人は、彼の眼識と叡知の言葉に驚き困惑した。その日の残りは、かれらは、自分達だけでいて、それ以上の質問は敢えてしなかった。

147:6.6 (1655.2) ユダヤの伝統と隷属的な、盲目的な、儀式に対するイエスの反目は、いつも積極的であった。それは、彼がしたこと、そして確言したことに表された。あるじは、ほとんど否定的な批難に時間を費やさなかった。彼は、神を知る人々は、罪を犯す許可により自分を騙すことなく生きる自由を楽しむことができるということを教えた。イエスは使徒に言った。「人は、真実によって教えられ、本当に自分がしていることを知っているならば、幸せである。だが、もし神の道を知らなければ、不幸であり、すでに法を破る者である。」

7. カペルナムに帰着

147:7.1 (1655.3) イエスと12人が舟でタリヘアからベスサイダに来たのは5月3日、月曜日の正午頃であった。かれら

は、旅をともにしていた人々から逃がるために舟で移動した。しかし、翌日までには、エルサレムからの正式の密偵を含む他の人々が、再びイエスを見つけた。

147:7.2 (1655.4) 火曜日の夕方、イエスが質疑応答の通例の授業をしていると、６人の密偵の首領が言った。「私は、今日、あなたの授業に付き添ってここにいるヨハネの弟子の一人と話していました。そして、我々は、あなたが、なぜあなたの弟子達に、我々パリサイ人やヨハネの追随者が断食するように、また祈るように決して命じないのか合点がいきませんでした。」そこでイエスは、ヨハネの声明を参照して、この質問者に答えた。「花婿が一緒にいるとき、花嫁の部屋にいる息子達は、断食をしますか。花婿が共にいる限り、彼らはほとんど断食することはできない。しかし、花婿が連れ去られるときはやって来るし、その時には、花嫁の部屋の子達は、疑う余地なく断食も祈りもするであろう。祈ることは、光の子供にとって自然であるが、断食は、天の王国の福音の一部ではない。賢明な仕立屋は、それが濡れて、縮んで酷い綻びを作らないように、古着に新しく、まだ縮んでいない

1　切れの布を縫いつけないということを思い出しなさ

い。人は、また、新しい葡萄酒が皮を破裂させ、葡萄酒と皮の両方を悪くするといけないので、新しい葡萄酒を古い皮に入れはしない。賢明な人は、新葡萄酒を新皮に入れる。したがって、王国の福音の新しい教えに古い規律をあまり多く持ち込まないということで、私の弟子は、賢明さを示しているのである。師を失ったあなた方には一時、断食が正当化されるかもしれない。断食は、モーシェの法の適切な部分であるかもしれないが、来たる王国では、神の息子達は、恐怖からの自由と神性の精霊に喜びを経験するのである。」これらの言葉を聞くと、ヨハネの弟子は慰められ、パリサイ人は、より混乱に陥った者であった。

147:7.3 (1656.1) それからあるじは、すべての古い教えは、完全に新しい教義に取り替えられるべきであるという概念を抱くことに対し聴衆に警告し始めた。イエスは言った。「古く、真実であるものは留まらなければならない。同様に、新しいが、間違っているものは拒絶されなければならない。しかし、新しく、真実であるものを受け入れる信仰と勇気を持ちなさい。それが書かれているのを思い出しなさい。『新しい友は、旧友に匹敵しないのであ

るから、旧友を見捨ててはならない。新しいワインとても、新たな友人と同じである。それが古くなれば、あなたは喜んでそれを飲むであろう。』」

8. 精霊的な善の祝宴

147:8.1 (1656.2) その夜、普通の聴衆が退散したかなり後に、イエスは、使徒に教え続けた。予言者イザヤからの引用することからこの特別な教示を始めた。

147:8.2 (1656.3) 「『なぜ断食したのか。圧迫に喜びを見つけ、不正な扱いを楽しみ続ける傍ら、いかなる理由で魂を苦しめるのか。見よ、断食をするのは、争いと論争のためであり、不法に拳を打ちつけるためである。しかしながら、いと高きところで声を聞いてもらうためには、このように断食すべきではない。

147:8.3 (1656.4) 「私が選んだ断食は—人が魂を苦しめる日は—このようなものであろうか。それは、葦のように頭を垂れ、粗布と灰に腹這うこであろうか。あえてこれを断食と呼び、主の目にとって満足の日と呼ぶのであろうか。私が選ぶ断食は、これではないのか。邪な絆を解き、重い負担の結び目を緩め、虐げられた者を自由の身とし、

全てのくびきを壊すこと。飢える者にパンを分け与え、家の無い者や貧しい者を私の家に連れてくることではないのか。そして、裸者を目にするとき、私はそれらに着せるつもりである。

147:8.4 (1656.5) そのとき、暁のようにあなたの光が差し出で、あなたの調子はすみやかに上がる。あなたの義は、あなたの前に進み、主の栄光が、あなたのしんがりとなる。あなたが乞うと、主は答え、あなたが叫ぶと、私はここにいる、と仰せられる。そして、あなたが抑圧、非難、虚栄を慎めば、主はこの全てをするであろう。父は、むしろ、あなたが、飢える者に心を配り、悩む者に働き掛けることを望んでいる。そうすると、あなたの光は闇の中に光り輝き、あなたの暗闇さえ真昼のようになる。そして、主は、絶えずあなたを導き、魂を満たし、強さを更新する。あなたは潤された園のようになり、水の枯れない泉のようになる。そして、これらのことをする者達は、ふいになった栄光を回復する。かれらは、多くの世代の礎を築き直すであろう。かれらは、崩壊された壁の再建者、住めるように往来を回復する者、と呼ばれるであろう。」

147:8.5 (1656.6) それから、長く夜遅くまで、イエスは、弟子に現在と未来の王国で確実にするのは彼らの信仰であり、魂の苦悩でも肉体の断食でもないという真実を提議した。かれは、使徒に少なくともこの昔の予言者の考えに従うことを熱心に説き、また、イザヤや、それより以前の予言者達の理想さえもはるかに超えて進歩するという望みを述べた。彼のその夜の締め括りの言葉は次の通りであった。「あなたが神の息子であるという事実を把握し、同時に誰もがきょうだいであると認識するその生きる信仰により、神の恵みで豊かになりなさい。」

147:8.6 (1656.7) イエスが話すのを止め、皆が眠りについたのは朝の2時過ぎであった。

論文 148
ベスサイダでの伝道者の訓練

148:0.1 (1657.1) 西暦28年5月3日から10月3日まで、イエスと使徒の一行は、ベスサイダのゼベダイオス邸に居住していた。この乾期の5カ月間を通して、ゼベダイオスの屋敷近くの海辺に巨大な野営が維持されており、それは、イエスの増加する家族の収容のために大幅に拡大されてきた。真実探求者、治療志願者、好奇心に動機づけられ

た信奉者などの変わり続ける人口に占拠され、この海辺の野営は、500 人から1,500 人の数にのぼった。天幕でなりたつこの町は、ダーヴィド・ゼベダイオスの全般的監視下にあり、アルフェウスの双生児が、支援した。野営地は、その全般的管理はもとより、規律、衛生において一つの模範であった。異なった種類の病人は、隔離され、信者である医師エルマンというシリア人の指揮下に置かれた。

148:0.2 (1657.2) この期間、使徒は、少なくとも1 週間に1 日は漁に行き、その獲物を海辺の野営地での消費のためにダーヴィドに販売するのであった。このようにして受領される金は、集団の資金に回された。12 人は、家族か友人と毎月1 週間を過ごすことが許された。

148:0.3 (1657.3) アンドレアスは、使徒の活動の全般的監督を続けたが、ペトロスは、伝導者の学校の全てを任された。使徒は皆、毎日午前中、伝導者集団の教育を分担し、午後は教師と生徒の両方が民衆に教えた。夕食後、1 週間に5 夜、使徒は、伝導者のために質問中心の授業をし

た。1 週間に1 度、イエスは、この質問の授業を取り仕切り、前回の授業から持ち越されてきた質問に答えた。

148:0.4 (1657.4) 5カ月のうちに、数千人がこの野営地に出入りした。関心をもつ人々が、ローマ帝国全地域とユーフラテス川の東の国々から頻繁に出席した。これは、あるじの教えで最も長く定住し、また、よく組織された期間であった。イエスの近親は、この時期ナザレかカナで大部分を過ごした。

148:0.5 (1657.5) 野営地の集団は、使徒の家族のようには、共通の利害の共同体として実行されなかった。それは、ダーヴィド・ゼベダイオスがこの大天幕都市を管理したので、誰も一度も追い払われることなく自己持続型の企業となった。この変わり続ける野営は、ペトロスの福音伝道者の訓練学校の不可欠な特徴であった。

1. 予言者のための新たな学校

148:1.1 (1657.6) ペトロス、ジェームス、アンドレアスは、伝道者の学校への入学志願者を判定するためにイエスによって任命された委員であった。ローマ世界と東洋、遠くはインドまでの全民族と国々が、この新しい予言者の学校

の生徒達に見受けられた。この学校では、学習と実行の計画に基づき指導された。学生は、午前中に学んだことを午後には海辺で会衆に教えた。夕食後、かれらは、午前の学習と午後の教育の両方について形式ばらずに議論した。

148:1.2 (1658.1) 各々の使徒教師は、自身の王国の福音の視点を教えた。かれらは、同様に教えるためのいかなる努力をしなかった。標準化された、あるいは教義化された神学理論の定式化もなかった。各使徒は、同じ真実を教えたが、あるじの教えに関する自身の個人的な解釈を提示した。そして、イエスは、王国の事柄の個人的経験この多様性の提示を是認しており、週ごとの質疑の時間で福音についてのこれらの多くの、異なる視点を絶えず調和し、調整した。教育問題におけるこの大幅な個人の自由の度合にもかかわらず、シーモン・ペトロスは、伝道者の学校の神学において優位を占めがちであった。ペトロスについで、ジェームス・ゼベダイオスが最大の個人的影響を及ぼした。

148:1.3 (1658.2) 100人以上の伝導者がこの海辺での5カ月間に訓練された人材であり、後にその中から(アブネーとヨハネの使徒達を除く)70人の福音の教師と伝道者が選ばれた。伝道学校においては、12　人のようには、全てを共有しなかった。

148:1.4 (1658.3) これらの伝導者は、福音を教えて説きはしたが、イエスに王国の70人の使者として後に任命され委嘱されるまで信者を洗礼を施さなかった。この場所の日没の場面には、数多く癒されたうちの7人だけが、これらの福音伝道者の間に見受けられた。カペルナムの貴族の息子は、ペトロスの学校で福音活動のために訓練された者の1人であった。

2. ベスサイダの病院

148:2.1 (1658.4) 海辺の野営地に関しては、シリア人の医師のエルマンが、25人の若い女性と12人の男性部隊の援助で、王国の最初の病院と見なされるべきものを組織し、4カ月間運営した。主な天幕の町の南にほど近い距離に位置するこの診療所において、かれらは、祈りと信仰奨励の精霊的な実行を初めとし、すべての既知の物理的な方法

に従って病人の手当てをした。イエスは、少なくとも1週間に3 回この野営地の病人を訪問し、苦しむ者それぞれとの個人的接触をした。我々が知る限り、快方に向かったり、または回復してこの診療所から去った1,000 人の中の煩ったり病んだりする者達に、超自然的な治療のいかなる、俗にいう奇跡も起こらなかった。しかしながら、恩恵を被ったこれらの個人の大多数は、イエスが癒したと宣言するのを止めなかった。

148:2.2 (1658.5) イエスが、エルマンの患者のために自身の活動の一部に関連してもたらした治療の多くは、本当に、奇跡の業に似ているように見えたが、聖職活動の恐怖を払いのけ、不安を破壊する、強いかつ積極的で慈悲深い人柄の直接的で、鼓舞する影響のもとにいる期待に満ち、信仰に支配される人々の経験で起こる場合があるかもしれないように、我々は、それらが、ちょうど心と精神のそのような変化にすぎないということを教えられた。

148:2.3 (1658.6) エルマンとその仲間は、「悪霊の憑依」に関してこれらの病める者に真実を教える努力をしたが、あまり成功を収めなかった。いわゆる不浄な霊の居住により、

肉体の病と精神の錯乱が病人の心、もしくは身体に引き起こされるという信念は、ほとんど一般的である。

148:2.4 (1659.1) 病人や苦しんでいる者とのすべての関係において、処置技術または未知の疾患原因の顕示に関しては、イエスは、ユランチアへの肉体化の冒険に乗り出す前に与えられた楽園の兄イッマーヌエルの指示を無視しなかった。これにもかかわらず、病人の世話をした者達は、イエスが病人や受難者の信仰と自信を奮い立たせる様子を観測することにより多くの有用な教訓を得た。

148:2.5 (1659.2) 寒気と高熱の拡大する季節が近づく少し前、野営は解散した。

3. 父の用向き

148:3.1 (1659.3) この期間、イエスは、野営地で12回足らずの一般礼拝を行い、ガリラヤへの公開説教に際し、新たに教習を受けた伝導者達との出発前の2　度目の安息日に1度だけカペルナムの会堂で話した。

148:3.2 (1659.4) 洗礼以来、あるじは、ベスサイダでのこの伝導者の教習の野営地のこの期間ほどには、それほど一人で

いたことはなかった。使徒のうちの誰かが、なぜそれほどまでに自分達から遠のいているのか思い切ってイエスに尋ねるたびに、「父の用向きに関して」と必ず答えるのであった。

148:3.3 (1659.5) この不在期間中、イエスは、2 人の使徒だけを伴った。かれは、100 人以上の数にのぼる新しい福音伝道の候補者達を訓練する仕事に参加できるように、一時的にペトロス、ジェームス、ヨハネを個人秘書としての任務から解放した。あるじが、父の用向きに関し丘に行くことを望むときは、同行のためのたまたま暇な使徒二人を呼び寄せるのであった。このようにして、12 人はそれぞれにイエスとの身近な関係と密接な接触の機会を楽しんだ。

148:3.4 (1659.6) この記録の目的のためには明らかにされてはいないが、我々は、あるじが、丘でのこの孤独な時期の多くを宇宙業務に関する多くの統轄者との直接的かつ行政的な関係にあったという判断に導かれた。おおよそ洗礼の時以来ずっと、我々の宇宙のこの肉体を与えられた君主は、ますます、しかも意識的に特定の宇宙行政の局面

にむけて積極的になってきていた。地球の業務への参加が減少したこの数週間、かれは、彼の側近の仲間には何かしら明らかにされていないが、広大な宇宙の営みに従事するそれらの高い精霊の有識者達の指導に従事しており、また人間イエスは、彼のそのような活動を「父の用向き」と称することを選んだという意見を、我々は、常に保持してきた。

148:3.5 (1659.7) 何時間も一人でいるとき、それでもいつも近くには２人の使徒がいるとき、かれらは、イエスが言葉を聞きはしないのだが、その相貌が、急速にしかも多様に変化をするのを観測した。そのうちの何人かが、その後に目撃したようなあるじとの意思疏通があったかもしれない天に存在体のいかなる可視的徴候の観察もしなかった。

4. 悪、罪、邪悪

148:4.1 (1659.8) ゼベダイオスの庭のある閑静で雨覆いされた片隅において、話しを望む個人達と1 週間に2 晩、特別の会話をするのが、イエスの習慣であった。トーマスは、非公式のこれらの晩の会話の中であるじにこう質問し

た。「人が王国に入るためになぜ精霊が生まれる必要があるのですか。悪の支配から逃げるのに生まれ変わることが必要なのですか。あるじさま、悪とは何ですか。」イエスは、これらの質問を聞くとトーマスに言った。

148:4.2 (1660.1) 「悪と悪者を、より正確には、邪悪な者とを取り違えてはならない。君が悪者と呼ぶ者は、利己心の息子であり、故意に、父とその忠誠な息子の律法に対して入念な反逆に及ぶ高地位の管理者である。しかし、私は、すでにこれらの罪深い反逆者を征服した。父とその宇宙に対するこれらの異なる態度を心の中で明らかにしなさい。父の意志へのこれらの法の関係を決して忘れてはいけない。

148:4.3 (1660.2) 悪は、神の法への、つまり父の意志への、無意識の、または意図しない違反である。悪は、同様に父の意志の服従に対する不完全性の尺度である。

148:4.4 (1660.3) 罪は、神の法、つまり父の意志を意識し、知った上での作為の違反である。罪は、神の力に導かれ、精霊的に指導されることへの不本意の尺度である。

148:4.5 (1660.4) 「邪悪は、神の法、つまり父の意志への意図的で、断固とした執拗な違反である。邪悪は、人格生存のための父の情愛深い構想と救済のための息子の慈悲深い活動に対する持続的拒絶の尺度である。

148:4.6 (1660.5) 精霊の再生に当たり、必滅の人間は、生来の悪の傾向を受け易いのであるが、そのような自然な素行欠陥は、罪でもなく邪悪でもない。人間は、楽園の父の完全さへの長い上昇を始めたばかりである。本来の資質においての不完全であることや、部分的であることは、罪ではない。人は、実に悪の影響をうけるが、知りつつ、しかも故意に、罪の道と邪悪の人生を選ばない限り、決して悪の子ではない。悪は、この世の自然な秩序に固有であるが、罪は、精霊的な光から真の闇に落下した者によってこの世にもたらされた意識的反逆の態度である。

148:4.7 (1660.6) 「トーマス、君は、ギリシア人の教義とペルシア人の誤りに惑わされている。悪と罪の関係を理解していないというのは、君が、完璧なアダームと共に地球が始まり罪により現在の嘆かわしい状態に急速に堕落したと人類を見ているからである。なぜ君は、アダームの息

子カインが、ノドの国に行き、そこで妻を得たという記録の意味を理解することを拒否するのか。まなぜた、神の息子が人間の娘の中で妻を見つけると描く記録の意味を解釈することを拒否するのか。

148:4.8 (1660.7) 人間は、実に、本来悪であるが、必ずしも罪深いというわけではない。新たに生まれること—精霊の洗礼—は、悪からの救出に不可欠であり、天の王国への入国に必須であるが、このいずれによっても人が神の息子であるという事実が損なわれはしない。人は、何らかの不可解な方法で、異星人、外国人、または継子として天の父から遠ざかっているので、父による法的縁組を何らかの手段で捜し求めなければならないというこの潜在的悪の固有の存在もまた意味しない。すべてのそのような考えは、まず、父に対する誤解、次に人間の起源、本性、および運命に対しての無知から生まれた。

148:4.9 (1660.8) 「ギリシア人や他の者達は、人が、信心深い完全性から忘却または破壊の方向へ着実に下降していると君達に教えてきた。私は、人が、王国への入国により、確かに神と神性の完全性へと上昇しているということを

示しに来た。どんな方法であろうが、神的、かつ精霊的な永遠の父の意志の理想に達しないものは誰でも、悪の可能性を秘めてはいるが、そのような者が必ずしも罪深いわけではないし、まして邪悪であるわけではない。

148:4.10 (1661.1) トーマス、聖書でこのように書かれているのを読んだことはないのか。『あなた方は、神である主の子である。』『私は、彼の父になるであろうし、彼は私の息子になるだろう。』『私の息子になるように、彼を選んだのである。私は彼の父になる。』『私の息子等を遠くから、私の娘等を地の果てから連れて来なさい。私の名で呼ばれるあらゆる者さえも、私の栄光のために私が彼等を創造したのであるから、』『あなたは生きる神の息子である。』『神の精霊を持つ者は、本当に神の息子である。』自然の子には人間の父の物質的な部分があるが、王国のすべての信仰の息子には天なる父の精霊的な部分がある。」

148:4.11 (1661.2) イエスは、このすべてと、より多くのことをトーマスに言い、またその多くを使徒は理解した。尤もイエスは、「私が父の元に戻る後まで、これらの問題に

関する事を他のものに話さないように」と訓戒した。そして、あるじがこの世から出発する後まで、トーマスは、この会談について言及しなかった。

5. 苦悩の目的

148:5.1 (1661.3) ナサナエルは、庭での別の私的な会談の中で、イエスに尋ねた。「あるじさま、あなたが、やたらに治療の実施を拒否する訳は分かりかけてきたのですが、私は、あまりにも多くの地上の子が、数々の苦悩を受けるのをなぜ天の情愛深い父が放っているのか理解に苦しんでいます。」あるじは、ナサナエルに答えて言った。

148:5.2 (1661.4) 「ナサナエル、この世界の自然の秩序が、父の意志に対する特定の手に負えない反逆者の罪深い冒険に幾度となくかき乱されてきたことを理解していないから、君や他の多くの者は、このように当惑している。だから、私はこれらの整理をしに来たのである。しかしながら、宇宙のこの部分を元の軌道に戻し、その結果、罪と反逆の余分の負担から人の子等を解放するには、多くの時代を必要とするであろう。人の上昇には、悪の存在

それだけで十分な試練である—生き残りにとって罪は必須ではない。

148:5.3 (1661.5) 「しかし、息子よ、父は、子供を故意に苦しめはしないということを知るべきである。人は、神性意志のより良い道に入ることを執拗に拒絶する結果、自分自身に不要な苦悩をもたらす。悪には苦悩が潜在するが、その多くは罪と邪悪によって生みだされる。多くの稀有な出来事が、この世で生じてきたことであるし、思考力のある者皆が、目撃する苦難や苦悩の光景に当惑するのは奇妙ではない。しかし、1つのことを確信してよい。父は、悪行への任意の罰として苦悩を送りはしない。悪の欠点と障害は、内在的である。罪への刑罰は、必然である。邪悪への破壊の結果は変えられない。人は、生きるために選ぶ自然な生活の結果であるそれらの苦悩を神のせいにすべきではない。人は、それがこの世界で送られるような人生の一部であるそれらの経験について不平を言うべきでもない。必滅者が、地球での自分の地位の向上に向かい持続的に一貫して取り組むべきであるということが、父の意志である。賢明な精励は、人が俗世の災いの多くに打ち勝つことを可能にするであろう。

148:5.4 (1662.1) 「ナサナエル、人が、様々な物質的な問題の解決をするためによく準備し、心を奮い立たせることができるように、かれらが、精霊的な問題を解決することを助け、こうしてかれ等の心を活気づけることは、我々の任務である。私は、君が聖書を読んだときの混乱を知っている。あまりにも頻繁に、無知な人間が、理解できないすべてに対する責任を神のせいにする傾向が、広まってきた。人が理解しないかもしれない全てに対して、父に直接責任があるわけではない。父の定める何らかの正当で賢明な法が、たまたま人を苦しめるという理由だけで、父の愛を疑ってはいけない、人がそのような神の法令を何気なく、または、故意に破ったのであるから。

148:5.5 (1662.2) しかし、ナサナエル、識別力をもって読みさえすれば、君に教えていたであろう多くのことが聖書には載っている。それが書かれているのを思い出さないのか。『我が子よ、主の懲らしめをないがしろにするな。その叱責をも厭うでない。ちょうど父が我が子を叱るように、主は愛するものを叱る。』『主はすすんで苦しめはしない。』『苦しみに会う前に、私は誤った道に行きました。しかし今は、法に従います。』『神性の掟をそれによ

って学ぶかもしれませんので、苦悩は私にとって幸いでした。』『私はあなたの悲しみを知っています。永遠なる神は、人の避難所であり、永遠の腕が下方にあります。』『主は虐げられた者の避難所、苦しみの際の休憩所でもある。』『主は病めるものを床で支えられる。主は病人をお忘れにならない。』『父が子供等に情の深さを示すように、主は彼を恐れる者に情け深いのである。主はあなたの身体を知っており、私達が塵であることを心に留めておられる。』『あの方は、心の傷を癒し、傷口に包帯をする。』『あの方は、貧者の希望、心を痛める貧窮者の力、嵐からの避難所、そして、痛烈な熱気を避ける影である。』『あの方は、弱り果てた者には力を与え、力のない者には強さをつける。』『あの方は、傷つく葦を折ることなく、くすぶる亜麻を消すこともない。』『あなたが苦悩の川を過ぎるとき、私はあなたと共におり、逆境の川が氾濫するとき、私はあなたを見捨てはしない。』『あの方は、心傷ついたものを癒すために、捕われ人を解放するために、嘆く者全てを慰めるために私を遣わされた。』『苦しみには是正がある。苦悩は塵からは生まれない。』」

6. 苦脳に関する誤解 — ヨブについての講話

148:6.1 (1662.3) 非常に多くの明らかに罪のない人々が、なぜそれほど多くの病に苦しんだり、それほど多くの苦悩を経験するのか、ヨハネがまたイエスに尋ねたのは、ベスサイダでのこの同じ晩であった。ヨハネの質問に答え、他の多くの事柄も添え、あるじが言った。

148:6.2 (1662.4) 「息子よ、君は、逆境の意味または苦悩の目的を理解していない。セム文学のかの傑作—ヨブの苦悩の聖書の物語—を読んだことがあるのか。神の下僕の物質的繁栄の詳述から始まるこの素晴らしい訓話を思い出さないのか。ヨブは、子供、富、尊厳、身分、健康、それに人がこの一時的人生で重んじる他の何もかもにおいて祝福されていたのを君はよく覚えている。アブラーハームの子孫の古くからの教えによると、そのような物質的繁栄は、神の引立てのすべての十分な証拠であった。しかし、そのような物質的所有と現世の繁栄は神の引立てを示していない。天の父は、金持ちを愛するのと全く同様に貧乏人を愛している。父は人間を差別をしない。

148:6.3 (1663.1) 神の法への違反は、遅かれ早かれ罰の報いに則るが、人は、確かに撒いた種子をとどのつまりには刈り取りはするが、人間の苦悩がいつも先行する罪に対する処罰罰ではないということを知るべきである。ヨブとその友人達のいずれもが、自分達の難問に対しての本当の答えを見つけることができなかった。そして、現在光を享受している君は、この独特の訓話の中で演じる役をまずサタンか神のいずれにもほとんど割り当てないであろう。ヨブは、苦しみを通して、知的問題の解決、あるいは、哲学上の困難の解決策を見つけはしなかったが、見事な勝利を成し遂げた。自己の神学弁護の行き詰まりに直面してでさえ、かれは、『自分を憎悪する』、と心から言うことのできる精霊的な高さに昇った。その時、神の姿の救済がヨブに下された。このように苦しみの経験から、ヨブは、誤解したが、道徳的理解と精霊的な洞察の超人的段階に昇った。神に忠実なこの苦脳する者が神の姿を目にするとき、すべての人間の理解を超える魂の平和があとに続く。

148:6.4 (1663.2) 「ヨブの友人の最初のものエリーファズは、自身の繁栄の日々に他の者達に処方した同じ不屈の精神を

示すように苦しむ者に勧めた。この間違った慰安者は言った。『あなたの宗教を信じなさい、ヨブ。苦しむ者は、邪な者であり正しい者ではないということを思い出しなさい。あなたはこの罰に相当するに違いない。さもなくば、苦しめられはしないであろう。神の目にはいかなる人間も正しくあるはずがないことを君はよく知っている。悪者は決して本当に繁栄しないことを君は知っている。とにかく、人は、憂悶する運命のようであるし、恐らく主は、君自身のために制裁しているに過ぎない。』哀れなヨブは、人間の苦脳の問題そのような解釈から多くの安らぎを得られなかったのは当然である。

148:6.5 (1663.3) 「しかし、２人目の友人ビルダデの助言は、当時受け入れられた神学の見地からのその堅実さにもかかわらず、さらに憂鬱であった。ビルダデが言った。『神は不当であるはずがない。君の子供達は死んだので罪人であったに違いない。君は、間違っているにちがいない。でなければ、それほどまでに苦しめられはしないだろう。また、君が本当に正しければ、神は苦悩から間違いなく救い出すであろう。人間との神の関係の歴史か

ら、全能者は、悪人だけを滅ぼすということを学ぶべきである。』

148:6.6 (1663.4) 「そこで、君は、ヨブがどのように友人達に答えたかを思い起こす。『私は、神が助けを求める私の叫びを聞かないということのをよく分かっている。どのように神は公正であり、同時に私の無実をそれほどまで完全に無視できるのか。私は、全能者に哀願することからは、いかなる満足も得られないことを思い知っている。君達は、神が悪人による善人の迫害を許容するということを認識することはできないのか。そして、人は非常に弱いものであるから、全能の神の手からの斟酌のどんな見込みがあるというのか。神は、私が今あるように造られ、神が私を急に襲うとき、私は無防備である。なぜ神はこんな惨めな恰好で苦しむためだけに私を創造されたのか。』

148:6.7 (1663.5) 「そこで、友人等の助言と彼の心を占めた神についての誤った考えを考慮して、誰が、ヨブの態度に挑戦することができるか。あなたは、ヨブが、人間の資質をもつ神を切望したということ、つまり、公正な者が、

人の死を免れない状況を知っており、また長い楽園上昇のこの最初の人生の一部として、しばしば頑是なく受難しなければならないことを理解している神性存在者と親しく交わることをヨブが熱望したということが分らないのか。そういう訳で、人の息子は、今後ヨブの苦悩に耐えることを要求されるそれらの全ての者を慰め、救援することができるように、そのような肉体での生涯を送るために父のもとからきたのである。

148:6.8 (1663.6) 「ヨブの３番目の友人ツォファーは、その時、さらに慰めの少ない言葉を掛けた。『このように苦しめられているのだから、君が正しいと主張するのは愚かである。だが、私は、神のやり方を理解するのは不可能であることを私は認める。おそらく君の全ての災いには何らかの隠された意図がある。』そして、ヨブは３人全員の友人の言うことを聞くと、かれは、直接神に助けを求めて、『女から生まれる人は、わずかの時と難儀に満ちている』という事実を訴えた。

148:6.9 (1664.1) それから２回目の友人達との話し合いが始まった。エリーファズは、より厳しくなり、批難し、皮肉た

っぷりであった。ビルダッドは、友人達へのヨブの軽蔑に憤慨するようになった。ツォファーは、沈鬱な忠告を繰り返した。ヨブは、この時までには友人達に嫌悪感を覚えるようになり、再び神に訴えた。そのとき、かれは、友人達の哲学に表現され、彼自身の宗教態度においてさえ守られている不公平な神に対して、公平な神に訴えた。次にヨブは、人間生活での不公平が、より公正に調整されるかもしれない来世の安らぎに逃避した。人間からの助けの失敗は、ヨブを神へと追いやる。次には、心の中の信仰と疑念の間での大いなる闘いが起きた。遂には、人間の苦しむ者は、命の光を見始める。拷問された魂は、望みと勇気の新しい高さに昇る。苦しみ続け、そして死にさえするかもしれないが、開眼した魂は、今その勝利の叫び『私の擁護者は生きている。』を発するのである。

148:6.10 (1664.2) 「両親を罰するために子供を苦しめるという教義に挑んだとき、ヨブは、全く正しかった。ヨブはかつて、神が公正であることを認める用意があったが、何らかの魂を満足させる永遠なるものの人格的特質の顕示を切望していた。そして、それは地球上の我々の任務であ

る。苦しむ人間は、これ以上神の愛を知り、天の父の慈悲を理解する安らぎを否定されることはないのである。つむじ風から話される神の言葉は、その発言された時代には厳然とした概念であったが、君は、父が自らを明らかにせず、むしろ人間の心の中で、『これが、道である。そこを歩きなさい。』とかすかな細い声で、話すということをすでに学んだ。神が人の中に住むということ、彼があなたのようになるということ、あなたが彼のようにするということをあなたは理解していない。

148:6.11 (1664.3) それから、イエスは、この最終的な声明した。「天の父は、好んで人の子を苦しめはしない。人は、まず、時間の偶然性と不完全な物理的存在の悪の欠点に苦しむ。次に、かれは、容赦のない罪の結果—生命と光の法則への違反—に苦しむ。そして、最後に、人は、地球上で天の公正な規則に反抗して、自己の邪悪な持続性の報いを収穫する。しかし、人の惨めさは、神の裁決からくる直接的な天罰ではない。人は、現世の苦しみを大いに減少できるし、するであろう。しかし、これを最後に、神が悪者の命令を受けて人を苦しめるという迷信から開放されなさい。良い人でさえ、どれだけ多く

の間違った考えを抱くかもしれないということを単に発見するために、ヨブ記を検討しなさい。そして、そのような誤った教えにもかかわらず、痛々しいほどに苦しんだヨブでさえ、どのように安らぎと救済の神を見つけたかに気づきなさい。ついに、彼の信仰は、癒しの慈悲と永遠の正義として父から溢れくる命の光を見分けるための苦しみの雲を突き通した。」

148:6.12 (1664.4) ヨハネは、これらの言葉を心で何日も熟考した。あるじとの庭でのこの会話の結果、彼の余生全体が、著しく変わり、彼は、平凡な人間の苦悩の源や、特質、それに目的に対する使徒の観点に変化をもたらすために後に多くのことをした。だが、ヨハネは、あるじが立ち去る後までこの会議について決して話さなかった。

7. 手の萎えた男

148:7.1 (1664.5) イエスは、使徒と新しい伝道者の一団が、再度ガリラヤへの説教旅行に立つ2週間前の安息日に、「正しい生活の喜び」についてカペルナムの会堂で話した。イエスが話し終えると、不具になったり、足が不自由であったり、病気であったり、苦しんでいる者の大集団

が、治療を求めて彼の周りに混みあった。この集団には、使徒、多くの新しい伝道者、それにエルサレムからのパリサイ派の諜報者達もいた。イエスのいく所はどこでも、(丘での父の用向きに関する時以外) エルサレムの６人の密偵が、必ず後を追った。

148:7.2 (1665.1) 密偵中のパリサイ派の指導者は、イエスが人々と話して立っていたので、萎える手の男にイエスに近づき、安息日に癒されるのは合法であるかどうか、あるいは他の日に頼むべきか尋ねるように誘導した。イエスは、この男性を見て、その言葉を聞き、また彼がパリサイ派に送られてきたと察知して言った。「質問をするので進み出て来なさい。もし君が羊を飼っていて、安息日にそれが穴に落ちたなら、手を伸ばし、それを掴んで、持ち上げて外に出しますか。安息日にそのようなことをすることは、合法ですか。」そして、男が答えた。「はい、あるじさま、安息日にこのように良いことをするのは合法です。」その時、イエスは皆に向かって言った。「君が、なぜこの男性を私の前に寄こしたか分かっている。安息日に慈悲を示す気にさせることができるならば、君は、私に違反の原因を見つけるであろう。君は、

安息日にさえ、穴から不運な羊を救い出すのは合法であると、あなた方は皆、同意した。君達が、安息日に慈愛を動物に示すだけでなく、人にも示すことは合法であると証言することを求める。人は、どれだけ羊より貴重であることか。私は、安息日に人に善行を施すことが合法であると宣言する。」そして、彼ら全員が、イエスの前に黙って立っていると、イエスは、手の萎えた男に向けて言った。「皆が見えるように私の側にきてここに立ちなさい。そして、あなたは、今、安息日に良い行いをすることは、父の意志であることを知ることができる。癒されるという信仰をあなたがもつならば、手を伸ばしなさい。」

148:7.3 (1665.2) そして、この男性が萎えている手を差し伸ばすと、それは癒された。人々はパリサイ人を襲いたいと思ったが、イエスは、静まるように言い、「安息日に良い行いをすること、命を救うことは、合法的であると言ったばかりであるが、危害を加えたり、殺す欲情に屈するようにとは教えなかった。」怒ったパリサイ人達は、立ち去った。安息日であったにもかかわらず、彼らは、直ちに、ティベリアスへと急ぎ、ヘローデスと相談し、イ

エスに対する味方としてヘローデス一党を抱き込み、ヘローデスの偏見をそそろうとできる限りのことをした。ところが、ヘローデスは、エルサレムに苦情を持ち込むようにと忠告して、イエスを阻止しようとの働きかけを拒否した。

148:7.4 (1665.3) 敵の挑戦に応じて、イエスが為した初めての奇跡がこれであった。そして、あるじは、自分の治療の力量の誇示としてではなく、全人類に、宗教の安息日の休養を無意味な制限の真の束縛にすることに対する効果的な抗議として、このいわゆる奇跡を実行した。この男性は、石工の仕事に戻り、感謝と公正の生活による治癒が持たらされた者達の一人であることを証明した。

8. ベスサイダでの最後の週

148:8.1 (1665.4) ベスサイダ滞在の最後の週、イエスとその教えに対するエルサレムの密偵の態度は、大きな分裂が生じるようになった。これらのパリサイ派の3 人は、自分達の見たり聞いたりしたことに甚だ感動した。一方、エルサレムでは、若くて有力なサンヘドリンの一員アブラーハームが、公然とイエスの教えを信奉し、シロアーの池

でアブネーの洗礼を受けた。エルサレム中がこの出来事に興奮し、密偵中のパリサイ派の6人の召喚のために、即座に、使者が遣わされた。

148:8.2 (1666.1) 前回のガリラヤ巡歴の際、王国へと説き伏せられたギリシア人の哲学者は、アレキサンドリアのある裕福なユダヤ人と戻ってきた。そして、もう一度、彼らは、診療所とともに哲学と宗教併設の学校の設立目的でイエスに街に来るように誘った。しかし、イエスは丁重に招待を断った。

148:8.3 (1666.2) この頃、バグダッドから恍惚状態の予言者キルメットがベスサイダの野営に到着した。この予言者と思われていた者は、恍惚状態のとき特異な光景を見たり、睡眠が妨害されるとき、空想的な夢を見た。かれは、野営地でかなりの騒動を引き起こし、シーモン・ゼローテースは、自己欺瞞の詐称者をかなり手荒く扱いをしかったのだが、イエスが介入し、数日間完全な行動の自由を容認した。キルメットの説教を聞いた者すべては、その教えが、王国の福音によって判断されるような健全なものではないことが分かった。彼は、まもなく6人の情緒

不安定で突飛な者だけを連れて、バグダッドに帰った。しかし、イエスがバグダッドの予言者のために取りなす前に、自薦の委員会の助けをかりたダヴィド・ゼベダイオスが、キルメットを湖へと連れ出し、繰り返し水中に突っ込んだ後、そこから発つように—自身の野営隊を組織し設立するよう—忠告した。

148:8.4 (1666.3) この同じ日に、フェニキア女性のベス・マリオンが、非常に熱狂し気が狂い、水上を歩行しようとして溺れそうになった後、友人達に遠ざけられた。

148:8.5 (1666.4) エルサレムの新しい転向者であるパリサイ派のアブラーハームは、この世での財産のすべてを使徒の基金に寄附し、この寄附は、100人の新たに訓練された伝道者の即座の派遣を可能にするほどの大きなものであった。アンドレアスは、すでに野営地の閉鎖を発表したので、皆は家に帰るか、伝道者に続きガリラヤ行きの準備をした。

9. 中風患者の治癒

148:9.1 (1666.5) 10月１日、金曜日の午後、イエスが、ゼベダイオス邸の広々とゆったりした表の部屋で、この集会の前

列に着席するエルサレムからのパリサイ派の６人、それに使徒、伝道者、野営解散作業時の他の指導者達と最後の会合をしているとき、イエスの地球の全生涯において最も奇妙で特異な挿話の１つが生まれた。あるじは、この時、雨季のこれらの集会に対応するために作られたこの大きい部屋に立って話していた。家は、イエスの講話の何らかの部分を聞き取るために耳を澄ましている夥しい人の群れで完全に囲まれていた。

148:9.2 (1666.6) 家にはこのように人々が群がり、また、切望する聴者に完全に囲まれていたが、長い間中風に苦しんでいる男性が、カペルナムから小さい寝椅子に乗せられ友人達に運ばれてきた。この中風患者は、イエスがベスサイダを去るところだと聞き、併せて、つい最近快癒したばかりの石工のアーロンと話したことでもあり、治療を頼めるイエスの前に連れていってもらおうと決意した。友人達は、ゼベダイオスの表と裏の双方の出入り口に辿り着こうとしたが、あまりに多くの人が空き間のないほどに混み合っていた。しかし、中風患者は、諦めようとはしなかった。かれは、イエスが話している部屋の屋根に昇るための梯子を調達するように友人に指示し、彼等

は、瓦を外し、患っている者があるじの目前の床に届くまで大胆にも寝椅子の上のこの病める男を縄で下げた。彼らがしでかしたことを見ると、イエスは、話すのをやめた。一方、部屋にいた人々は、病気の男とその友人等の根気に驚嘆した。中風患者が言った。「あるじさま、あなたの教えの邪魔をしたくはありませんが、私は、完全な身体にしてもらうと決心しています。私は、治療を受けてもすぐにあなたの教えを忘れた人々とは違います。天の王国で仕えることができるように完全な身体にしていただきたいのです。」さて、この男の苦悩は彼自身の無駄に送った人生によってもたらされたにもかかわらず、その信仰を見てとり、イエスは、麻痺患者に言った。「息子よ、恐れるでない、そなたの罪は許される。そなたの信仰がそなたを救うであろう。」

148:9.3 (1667.1) 座している他の筆記者や法曹達といたエルサレムからのパリサイ派の者達等が、イエスのこの宣告を聞くと、彼等は、それぞれ次のように思い始めた。「この男は、よくもこのような口をきくことだ。そのような言葉が、冒とくであることが分からないのか。誰が、神以外に罪を許すことができるものか。」かれらののそれぞ

れの心の中や自分達同志でこのように理由づけているのをイエスの中の精霊が知覚して、彼らに話しかけた。「なぜそのように心の中で理由づけているのか。私を批判するとは一体何者であるのか。私がこの中風患者に、罪は許される、あるいは、立て、床をとりあげて歩け、と言おうが、何の違いがあるというのだ。しかし、このすべてを目撃するあなた方が、人の息子にはこの世で罪を許すための権威と力があるということを遂に知ることができるように、私は、この苦しむ男に、立て、床をとりあげて歩け、と言うつもりである。」そして、イエスがこのように言うと、中風患者は立ち、彼らが道をあけると、皆の前を大股で退いた。この出来事を目にした者達は、驚くばかりであった。ペトロスは、散会させたが、多くの者は神に祈り、賛美するとともに、そのような奇妙な出来事を一度も見たことがないことを告白するのであった。

148:9.4 (1667.2) そして、サンヘドリンからの使者達が、６人の間者にエルサレムへの帰還を命じるために到着したのは、およそこの頃であった。この知らせを聞くと、彼等の間でまじめな討論が始まった。そして、議論が終わる

と、首領とその２人の仲間は、使者とエルサレムに帰った。そして、探っていたパリサイ派の３人は、イエスに対する信仰を認め、すぐ湖に行き、ペトロスの洗礼をうけ、使徒等は、王国の子として兄弟の交わりをした。

論文 149
2 度目の説教遊歴

149:0.1 (1668.1) 2度目のガリラヤにおける公開の説教巡歴は、西暦28年10月３日、日曜日に始まり、およそ３ヵ月続き、12月30日に終わった。この努力に関与したのは、新たに募集された117人の伝道者集団と多数の他の関心をもつ者に助けられたイエスとその12人の使徒であった。かれらは、この旅で、ガダラ、プトレマイス、ジャフィア、ダバリッタ、メギッド、ジズリール、スキトイポリス、タリヘア、ヒップス、ガマラ、ベスサイダ-ユーリアスと他の多くの都市や村を訪れた。

149:0.2 (1668.2) この日曜日の朝の出発の前、アンドレアスとペトロスは、最終的な指令を新伝道者に与えるようにイエスに要請したが、あるじは、他のものが満足にできるそれらのことをすることは、自分の領域ではないと言って辞退した。十分な熟考の後、ジェームス・　ゼベダイオ

スがその任を司るべきであると決められた。ジェームスの締めくくりの言葉の後、イエスは、伝道者に言った。「要請に従って仕事をするために前進しなさい。後に、有能で忠実であることを示したとき、王国の福音を説くために君達を任命するつもりである。」

149:0.3 (1668.3) この遊歴においては、ジェームスとヨハネだけが、イエスとともに旅をした。ペトロスと他の使徒は、それぞれが、12　人ほどの伝道者を伴い、説教と教えの仕事に携わりながら近密な関係を保った。信者達が王国に入る準備ができるのと同じ程の速さで、使徒達は、洗礼を行うのであった。イエスと2 人の仲間は、伝道者の仕事を観測し、王国設立のための努力をする彼らを奨励するために、しばしば1日に2都市を訪問し、この3カ月間に広範囲に旅をした。この2度目の説教遊歴全体は、主に、この新しく訓練された117人の伝道集団に実践経験を提供する努力であった。

149:0.4 (1668.4) この期間を通して、そしてその後、イエスと12人の最後のエルサレムへの出発の時まで、ダーヴィド・ゼベダイオスは、王国の仕事のためにベスサイダの父の

家に常設本部を維持した。これはイエスの地球での仕事のための情報本部であり、ダーヴィドがパレスチナや隣接する領域の様々な地域での労働者間で取り続ける使者の活動ための中継拠点であった。かれは、率先してこの全てをしたが、アンドレアスの承認は得た。ダーヴィドは、急速に拡大伸張していく王国の仕事でのこの情報部門で、40人から50人の使者を抱えた。このように忙しくすると共に、自分の従来の漁業に時間の一部を費やして、自分の暮らしを支えた。

1. イエスの広範な名声

149:1.1 (1668.5) ベスサイダでの野営が解散される時までには、イエスの名声は、特に治療者としての名声は、全パレスチナ、全シリア、それに周囲の国々へと広まった。病人は、彼らが、ベスサイダを後にしてから数週間後も到着し続け、あるじが見つからなくてどこにいるかをダーヴィドから教えられると、後を探し求めて行くのであった。この旅でイエスは、いわゆる奇跡の何も意識しては実行しなかった。にもかかわらず、何十人もの苦む者達は、療治を求めに追いたてる激しい信仰からの復興力の結果として健康と幸福の回復を得た。

149:1.2 (1669.1) この活動の頃に現れ始めた—そして、イエスのこれ以降の人生でずっと続いた—のが、独特の、そして説明し得ない一連の治癒現象であった。この3カ月間の旅行中、ユダヤ、イヅマイア、ガリーラ、シリア、タイヤ、シドーンおよび、ヨルダン川の向こうからの100人以上の男女、子供が、イエスによるこの無意識の回復の受益者であり、皆は、自分達の家に帰り、イエスの名声拡大に加わった。イエスは、自然発生的なこれらの治癒の1つを観測する度に、受益者に「誰にも言うな」と直接託したにもかかわらず、彼らは人に告げてしまうのであった。

149:1.3 (1669.2) 自然発生的、あるいは無意識の治癒に一体何が起こったのか、我々には決して明らかにされなかった。あるじは、これらの治療がどのように作用するのかを使徒に決して説明しなかった。数回、単に「力が私から出て行ったのが分かる。」と言ったのを除いては。かれは、ある時、病んでいる子供に触れられると、「生命が私から出て行ったのが分かる。」と述べた。

149:1.4 (1669.3) 自然発生的な回復に関するこれらの出来事の本質に関して、あるじからの直接の言葉がないとき、いかに達成されたのかを説明することを我々が引き受けることは差し出がましいことであるが、そのような全治療現象に関する我々の意見を記録することは、差し支えないであろう。イエスの地上での任務の間に起きた多くのこれらの見かけ上の治癒の奇跡は、以下次の３種類の強力で、影響力の強い、相互影響の混在の結果であると我々は思う。

149:1.5 (1669.4) 1.執拗に回復を追求する人間の心の中の強い、優勢の、生きている信仰の存在にくわえて、そのような治癒が、純粋に物理的な回復よりもむしろその精霊的な恩恵のために望まれたという事実。

149:1.6 (1669.5) 2.ほぼ無制限で永遠の創造的な治癒力と特権を実際に自身の中に持つ肉体化され、慈悲に支配された創造者たる神の息子の大きな哀れみと恩情の存在、くわえてそのような人間の信仰。

149:1.7 (1669.6) 3. 被創造者の信仰と創造者の人生と共に、この神-人が父の意志の擬人化された表現であるということ

は、留意されるべきである。もし、父が別に望まなければ、人間の必要性とそれに応じる神性の力の接触において２つが１つになり、人間には無意識のうちに治癒が起こったのだが、イエスにはその神性によりすぐに認識された。そこで、これらの多くの治癒に関する説明は、長らく我々が知る偉大なる法に、すなわち創造者たる息子の望むことが、永遠の父の意志である、ということに見い出されなければならない。

149:1.8 (1669.7) 次に、人間の深い信仰の特定の型は、イエスの直接の臨場において、その時人の息子に非常に関係していた特定の創造的な力と宇宙の人格の治癒の顕現に、文字通り、本当に人を感動させずにいられなかったというのが、我々の意見である。従って、それは、イエスが、たびたび目の前で、人間が力強い個人の信仰により自分自身を癒させたという記録の事実になる。

149:1.9 (1670.1) 多くの他の者は、まったく利己的な目的のために治療を求めた。付添いを連れたタイヤからの金持ちの未亡人は、自分の数多くの疾患を癒してもらおうとやって来た。彼女は、イエスをガリラヤ中追い回し、まるで

最高入札者によって神の力が購入されるものであるかのように、ますます多くの金を提供し続けた。しかしながら、彼女は、決して王国の福音には関心をもつようにはならなかった。彼女が求めたものは、ただ身体の病の治癒であった。

2. 民衆の態度

149:2.1 (1670.2) イエスは、人の心を理解した。かれは、何が人の心にあるかが分かっており、もし彼の教えが人々に提示されたままで残されていたならば、彼の地球の人生に提供されている奮い立たせる解釈を唯一の解釈として残していたならば、すべての国とすべての宗教は、王国の福音を速やかに迎え入れたことであったのだが。特定の国々、民族、宗教が、彼の教えをより容認できるように、彼の教えを言い換えるイエスの初期の追随者善意の努力は、あまり容認できるものではない結果をもたらしただけであった。

149:2.2 (1670.3) 使徒パウロスは、自分の時代の好ましい特定集団にイエスの教えをもたらす努力において指導と訓戒の多くの手紙を書いた。イエスの福音の他の教師も同様に

したが、イエスの教えの現れとして発表する者によって、これらの手紙の幾つかが後にまとめられるとは、彼らの誰も理解してなかった。そして、いわゆるキリスト教が、他のどの宗教よりもあるじの福音を多くのものを含んではいるのだが、同時に、イエスが教えなかった多くも含んでいる。ペルシアの秘教とギリシアの哲学の多くから初期のキリスト教への多くの教えの編入とは別に、2つの重大な誤りがあった。

149:2.3 (1670.4) 1. 福音の教育を直接にユダヤ人の神学に関連づける努力。償いのキリスト教の教義に例証されるような—イエスが父の厳しい正義を満たし、神の怒りを静める犠牲の息子であったという教え。これらの教えは、信じないユダヤ人が、王国の福音をより許容できるようにする賞賛に値する努力から始まった。必ず、ユダヤ人の勝ち取りに関する限り、これらの努力は、失敗はしたものの、以降のすべての世代において多くの正直な人間を混乱させたり、遠ざけることはしなかった。

149:2.4 (1670.5) 2. あるじの初期の追随者の2 番目の大きな失態、そして、その後のすべての世代が恒久化させたこと

は、あまりにも完全にイエスという人に関してのキリスト教育をまとめることであった。キリスト教の神学におけるこのイエスの人物偏重は、彼の教えを不明瞭にしてしまい、このすべてが、ユダヤ人、イスラム教徒、ヒンズー教徒、および他の東洋の宗教家等にとりイエスの教えの受け入れをますます難しくした。我々は、彼の名前がついているかもしれない宗教で、イエスの人としての位置を過小評価したくはないのだが、彼の奮い立たせる人生に影を落としたり、神の父性と人の兄弟愛という彼の救済の言葉に取って代わるそのような考慮を許さない。

149:2.5 (1670.6) イエスの宗教の教師は、宗教間の違いに大いに重点をおくことを控えつつ、共通して保持する真実の認識(その真実の多くは直接、または間接的なイエスの言葉から来る)によって他の宗教に接近すべきである。

149:2.6 (1671.1) その特別な時期に、イエスの名声は、主に医師としての信望に支えられながらも、それがずっと続いたということにはならない。時の経過につれて、かれは、ますます精霊的な助けのために求められた。しかし、一

般人に最も直接に即座に訴えたのは、肉体的な治療であった。イエスは、道徳的な奴隷状態と精神的な悩みをもつ犠牲者によりますます必要とされ、いつも決まって救出の道を彼らに教えた。父親達は、息子達の扱いに関する忠告を求め、母親達は、娘達の指導における助けを求めた。かれは、暗闇に座する者達がやって来ると、彼らに人生の光を明らかにした。彼の耳は、人類の悲しみにいつも開かれており、かれは、助けを求める者をつねに助けた。

149:2.7 (1671.2) 人間の姿に似せて来た創造者自身がこの世にいるとき、幾つかの驚異的な事が起こることは、不可避であった。しかし、あなたは、これらのいわゆる奇跡の出来事を通じて決してイエスに近づくべきではない。イエスを通して奇跡に接近することを学びなさい、しかし、奇跡を通してイエスに近づく誤りを犯してはならない。そして、この訓戒は、ナザレのイエスが、地球で物質超越を果たした唯一の宗教創設者であったにもかかわらず、正当化される。

149:2.8 (1671.3) 地球のマイケルの任務で最も驚異的かつ革命的特徴は、女性に対する態度であった。男性が、公的な場所で自分の妻にさえ挨拶をしない時代や世代において、イエスは、敢えてガリラヤの３度目の旅に福音の教師として女性達を伴った。そして、彼には、「法の言葉は、女に伝えられるよりも焼かれるほうがましである。」と断言する律法学者の教えに直面するに当たり、完全な勇気があった。

149:2.9 (1671.4) 1 世代のうちに、イエスは、女性を不敬な忘却と長年の奴隷のような骨折り仕事から向上させた。イエスの名前を敢えて取る宗教の1つの恥ずべきことは、その後の女性への態度においてこの尊い例に続く道徳的な勇気を欠いたことである。

149:2.10 (1671.5) イエスと交じわるにつれ、人々には、彼が当時の迷信に全く囚われていないということが分かった。かれは、宗教的な偏見がなかった。かれは、決して偏狭的ではなかった。かれは、心に社会的反目に類似する何も持っていなかった。祖先の宗教の美点に応ずると共に、迷信と束縛の人為的な伝統の無視を躊躇わなかっ

た。自然の大災害、時の異変、他の悲惨な出来事は、神罰や神の摂理の不可解な行いではないということを敢えて教えた。かれは、無意味な儀式への奴隷的な執着を非難し、物質的な崇拝の誤りを暴いた。かれは、大胆に人の精霊的な自由を宣言し、肉体をもつ人間が本当に、確かに、実際に生きる神の息子であるということを敢えて教えた。

149:2.11 (1671.6) 大胆に真の宗教の印として清い手の代わりに清い心を用いたとき、イエスは、先祖のすべての教えにまさった。かれは、伝統と真実を入れ替え、虚栄と偽善のすべての見せ掛けを払いのけた。それでも、神のこの恐れ知らずの男性は、破壊的な批判を表明せず、その時代の宗教的、社会的、経済的、政治的な慣習への完全な無視を明らかにしなかった。かれは、好戦的な革命家ではなかった。かれは、進歩的な進化論者であった。かれは、同時に本来そうあるべき優れたものを仲間に提供する時にだけ同時に破壊に従事した。

149:2.12 (1672.1) イエスは、それを強いることなく、追随者の服従を得た。個別の呼び出しを受けた3　人の男性だけ

は、弟子の身分の招待に応じることを拒否した。かれは、特有の聴衆動員力を奮ったが、独裁的ではなかった。彼は信用を博し、誰も与えられる命令に決して憤慨しなかった。弟子に対する絶対的権限を得たが、誰も決して反対しなかった。かれは、追随者達が彼をあるじと呼ぶことを受け入れた。

149:2.13 (1672.2) あるじは、根深い宗教偏見を抱く者、または彼の教えに政治的危険性を認めると思う者を除くすべての人から賞賛をうけた。人は、彼が教える独創性と信頼すべき権威に驚いた。彼らは、無教養の、煩わしい尋問者達への扱う際のあるじの忍耐に驚嘆した。かれは、自分の仕事の影響を受けるすべての者の心に望みと自信を注入した。彼に会ったことのない者だけは、あるじを恐れ、また、彼を真実の覇者と看做す者、その真実により覆される運命にある悪と誤りをいかなる犠牲を払おうとも心に保持すると決意した者だけが、彼を嫌った。

149:2.14 (1672.3) 友人と敵の両者に、強く、一風変わった魅力的な影響を及ぼした。人の群れは、ただ彼の情けある言葉を聞き、その簡素な生活を見るために彼に数週間つい

て行くのであった。献身的な男女は、ほとんど超人的な愛情でイエスを愛していた。かれらは、彼を知れば知るほど、より彼を愛していた。そして、このすべてが、今なお真実である。今日でさえ、そして全ての未来に、人は、この神-人を知れば知るほど、ますます彼を愛し、彼に続くであろう。

3.宗教指導者達の敵意

149:3.1 (1672.4) イエスとその教えに対する一般人の好ましい受け入れにもかかわらず、エルサレムの宗教指導者は、ますます不安になり、敵対的になった。パリサイ派は、系統的で独断的な教義を明確に述べた。イエスは、時に応じて教えた教師であった。かれは、系統だてた教師ではなかった。イエスは、たとえ話により人生から教えるほどにはあまり法からは多く教えなかった。(そして、趣意の例示のために寓話を用いるとき、その目的のために話の中でただ1つの特徴を利用するように工夫した。イエスの教えに関する多くの誤った考えは、彼の寓話から寓話を作ろうとすることによりもたらされたのかもしれない。)

149:3.2 (1672.5) エルサレムの宗教指導者は、若いアブラハムの最近の転向、それにペトロスの洗礼を受け、そのとき伝道者等とガリラヤでのこの2 度目の説教遊歴に出掛けた3人の諜報員の脱党の結果、ほとんど半狂乱になっていた。ユダヤの指導者は、恐怖と偏見でますます目がくらみ、心の方も、王国の福音の興味をそそる真実への継続的な拒絶によって堅くされた。人が心の中に住む精霊への訴えを止めるとき、自らの態度を修正することはほぼできない。

149:3.3 (1672.6) イエスが、ベスサイダの野営で伝道者達に初めて会ったとき、演説を終える際に言った。「心身で—感情的に—人は、個別に反応するということを心すべきである。人についての唯一画一なものは、内在する精霊である。神霊は、資質と経験の範囲においていくらか異なるかもしれないが、すべての精霊的な訴えに一様に反応する。「この精霊を通して、またこの精霊に訴えることによってだけ、いつか人類は、統一と兄弟愛を勝ち得る。」しかし、ユダヤ人の指導者の多くは、福音の精神的な訴えに、彼らの心の扉を閉じた。この日から、彼らは、あるじの破壊のための計画や陰謀をやめなかった。

彼らは、イエスが宗教犯罪者、つまりユダヤの神聖な法の中心的な教えの違反者として逮捕され、宣告を受け、処刑されなければならないと確信していた。

4. 説教の旅の進展

149:4.1 (1673.1) イエスは、この説教遊歴において公の仕事をほとんどしなかったが、ジェームスとヨハネと共にたまたま滞在したほとんどの村や町で数多くの夜間の授業において信者達を指導した。これらの夜の会の1つで、若い伝道者の一人が、怒りに関する質問をイエスにして、あるじは他の事柄も含めて返答した。

149:4.2 (1673.2) 「怒りは、一般的に、精霊的な特質が、統合された理性と肉体の性質の制御を得ることに失敗する度合を表す物質的徴候である。怒りは、寛大な兄弟愛の不足、加えて、自尊と自制の不足を示す。怒りは、健康を減少させ、心の質を下げ、人の魂の精霊の師を不利な立場におく。聖書で、『怒りは愚かな男を殺す。』また、その男が『己の怒りに苦しむ。』『容易に怒らない者は、優れた理解者である、』が、『気短かな者は愚かさを高める』とあるのを読んだことはないのか。あなた方は皆、

『穏やかな受け答えは、怒りを逸らす。』また、いかに『酷い言葉が怒りを煽る。』かを知っている。『思慮分別は、怒りを据え置く。』一方、『自己を支配できない者は、壁のない無防備の都市に似る。』『怒りは残酷で、苛立は言語道断である。』『立腹する者は、争いを煽り、怒り狂う者は、違犯を増やす。』『精神を苛立てはならない。苛立は、愚かな者の胸に留まるのであるから。』イエスは、話しをやめる前にさらに言った。「精霊の導きが、神の息子の身分に矛盾する動物的な怒りの爆発に捌け口を見い出す傾向からあなたを救い出す際に、あまり苦労がないように心を愛で占めなさい。」

149:4.3 (1673.3) この同じ時、あるじは、良く釣り合いのとれた性格を備えている好ましさについて一団に話した。かれは、ほとんどの人間が何らかの職業の熟達に専念することが必要であると認めたが、生活活動における狭量や制限される方への専門化のし過ぎに向かう全ての傾向を遺憾に思った。かれは、どんな美徳といえども、極端に推し進めれば、悪癖になりうるという事実に注意を促した。イエスはつねに節度を説き、また一貫性—人生問題に応じた調整—を教えた。過剰な共感と哀れみは、深刻

な情緒不安定に陥れるかもしれないと指摘した。熱意は、狂信に追いやるかもしれないということを。かれは、想像が空想へと、また非実用的な仕事へ道を踏み外したかつての仲間の一人について検討した。同時に、過剰の保守的な凡庸性における無味乾燥の危険に対して警告した。

149:4.4 (1673.4) そして、イエスは、勇気と信仰の危険性について、彼らが、いかに軽率な人間達を時おり無謀さとでしゃばりに導くかについて論述した。かれはまた、度が過ぎると、いかに慎重さと思慮深さが臆病と失敗につながるかを示した。かれは、奇抜さに進む全ての傾向を回避するとともに、独創性に向けて努力することを聴者に熱心に説いた。かれは、感傷的でない同情、独善的態度のない信心を嘆願した。かれは、恐れと迷信のない崇敬を教えた。

149:4.5 (1674.1) 彼自身の人生は、その教えを雄弁に例示している事実ほどには、釣り合いのとれた性格についてのイエスの教えは、仲間をそれほど感動させてはいなかった。イエスは、圧迫と攻撃の真っただ中に住んでいたが、決

して動揺しなかった。敵は、絶えず罠を仕掛けたが、決して罠にはめることができなかった。賢明で学識ある者は、躓かせようと努めたが、彼は躓かなかった。彼らは、討論に巻き込もうとしたが、彼の答えは、いつも啓蒙的で威厳があり、決定的であった。講話が種々雑多の質問で遮られるとき、彼の答えは、いつも意味深く最終的なものであった。虚偽の、不当で邪悪なあらゆる類の攻撃方法の行使を躊躇わない敵の絶え間ない圧力に対し、かれは、決して卑劣な戦術に訴えなかった。

149:4.6 (1674.2) 多くの男女が、生計のための職業として何らかの確かな仕事に勤勉に専念しなければならないのは本当であるとともに、それでも、人間が地球で実際に人生を送って広範囲の文化的な憧れを培わなければならないということは、全くもって望ましい。真に教養のある者は、仲間の人生と行ないに不案内のままでいることに満足しない。

5. 満足に関する教訓

149:5.1 (1674.3) イエスが、サイモン・ゼローテースの指揮の下に働いている伝道者の一団を訪問しているとき、夜の会

議中にサイモンが、あるじに尋ねた。「なぜ一部の人は他よりもはるかに幸福で満足しているのですか。満足とは宗教的な経験の問題ですか。」他にもある中から、特にサイモンの質問に答えて、イエスは言った。

149:5.2 (1674.4) 「サイモン、一部の人は他よりも自然に幸せである。その多くは、非常に多くは、人の中に生きる父の精霊に導かれ指示される人の意欲に依存している。聖書で賢者の言葉を読んだことはないのか。『人の精霊は主のともしび、腹の底まで探りだす。』また、そのような精霊主導の死すべき者は言う。『測り綱は私の好む所に落ちた。まことに、素晴らしい私への譲りの地だ。』『一人の正しい者の持てる僅かなものは、多くの悪者の豊さにまさる。』なぜなら『善人は自分の中に満足している。』『心に喜びがあれば、顔色を良くし毎日が宴会である。』『僅かなものをもっていて主を恐れるのは、多くの財宝をもっていてそれに伴う苦労があるのにまさる。野菜を食べて愛しあうのは、肥えた牛を食べて憎みあうのにまさる。』『不正をして多くの富をもつより、正しくあって少しの富をもつ方が良い。』『陽気な心は薬のような

働きがある。』『過多の精神の悲しみと苦痛を担うよりも、一握りの平静がある方がよい。』

149:5.3 (1674.5) 「人の悲しみの多くは、野心からくる失望と傷ついた自負から生まれる。人は、地上での人生を最大限に生かす義務を負うが、このように心から努力し、自分の境涯を受け入れ、手にするものを多いに生かすように独創性を働かすべきである。人の問題のあまりにも多くが、自身の本来の心にある恐怖の土壌に起源がある。『誰も追いかけないとき、悪者は自由である。』『悪者は、荒れ狂う海のようなものだ。静まることができず、泥と土を吐きだすからだ。』『悪者には平安がない、と神は仰せられる。』

149:5.4 (1674.6) 「だから、偽りの平安と一時の喜びを求めるのではなく、むしろ精霊に平静、満足、喜びをもたらす神性の息子性の保全を求めなさい。」

149:5.5 (1675.1) イエスは、この世界を「涙の谷」とは、少しも考えなかった。むしろ、それを楽園上昇ための永遠かつ不滅の精霊の誕生球体、「魂形成の谷」と見なした。

6. 「主への恐れ」

149:6.1 (1675.2) 夜の会議中、フィリップがイエスに次のように言ったのは、ガマラでであった。「あるじさま、あなたなら、私達に恐れずに天の父に向けさせるでしょうに、『主を恐れよ』と聖書が教えているのは何故ですか。我々は、これらの教えを一致させるにはどうしていくのでしょうか。」そこで、イエスが、フィリップに応えて言った。

149:6.2 (1675.3) 「子供等よ、そのような質問をしても私は驚かない。初めに人が崇敬を学ぶことができたのは、恐怖を通してだけであった。しかし、息子の情愛深い認識と父の深く完全な愛のやり取りによる永遠なるものへの崇拝に引きつけられるように、私は、父の愛を顕示しにきたのである。私は、嫉妬し激怒する王のような神へのうんざりする奉仕へ駆り立てる盲目的な恐れへの束縛から君達を救いたいのである。優しく公平で慈悲深い父である神へのその高尚で崇高な自由の崇拝を喜び、それに導かれるように、神と人間の間の父と息子の関係を君達に教えたい。

149:6.3 (1675.4)『主への恐れ』は、恐怖に始まり、苦悶と畏怖を経て、畏敬と崇敬へと相次ぐ時代において異なる意味をもっていた。そして、現在、私は、崇敬から、認識、実感と評価を経て愛へと君を上へと導きたい。神の業だけを認識するとき、人は、至高なるものに対する恐れへと導かれる。だが、人が、生きる神の人格と特質を理解し経験し始めるとき、かれは、ますます、そのような善で、完全で、普遍的な永遠の父を愛するように導かれる。そして、地球上での人の息子の使命を構成するこれこそが、神への人のこの関係の変化なのである。

149:6.4 (1675.5)「その手から良い贈り物を受け取るかもしれないように、知性ある子等は、父を恐れない。しかし、息子と娘への父の愛情の命じるところによって与えられる豊富な良いことをすでに受けたので、これらの大いに愛された子供は、そのような物惜しみをしない恩恵への敏感な認識と感謝で父を愛するように導かれる。神の善は、悔悟へ導く。神の恩恵は奉仕へ導く。神の慈悲は救済へ導く。また神の愛は、賢明で自由な心の崇拝に導く。

149:6.5 (1675.6) 「あなたの先祖は、神が強大で神秘的であるがゆえに恐れた。君は、彼のすばらしい愛、豊富な慈悲、栄光の真実ゆえに神を崇拝するであろう。神の力は、人の心に恐怖を引き起こすが、その人格の気高さと正しさは、崇敬、愛、および自発的な崇拝を生じさせる。忠実で優しい息子は、強血からで気高い父さえ恐れたり畏怖しない。私は、恐怖の代わりに愛、悲しみの代わりに喜び、畏怖の代わりに自信、隷属的束縛と無意味な儀式の代わりに愛の礼拝と感謝の崇拝へ向けるためにこの世界に来たのである。しかし、『主への恐れは、知恵の始まりである。』ということは、闇に座る者達にとってまだ本当である。しかし、光がより完全に来たき、神の息子達は、神が何をするかということを恐れるよりも、神が何であるかということで無限なるものを称賛するために導かれる。

149:6.6 (1675.7) 「子供が幼く軽率であるとき、かれらは、両親を尊敬するように必ず諭されなければならない。しかし、彼らが、大きくなり親の援助と保護の恩恵をいくらか感謝するようになると、理解ある敬意と増大する愛情を通して、両親が何をしたかということよりも、何であ

るかということのために、実際に両親を愛する経験段階へと導かれる。父は自然に子を愛しているが、子は、父が何ができるかという恐怖から、畏敬、畏怖、依存、および崇敬を通しての愛の評価と情愛深い姿勢へと父に対する愛を育まなければならない。

149:6.7 (1676.1)「『それが人の全てであるがゆえに、神を恐れ、その命令に従う』べきであるということを君達は教えられてきた。しかし、私は、新しくより高い戒律を与えにきた。私は、『それが神の解放された息子の最高の特権であるので、神を愛し、その意志を為す』ことを教えたい。祖先は、『神—強大なる王』を恐れることを教えた。　私は、『神—全く慈悲深い父』を愛することを教える。

149:6.8 (1676.2)「天の王国には、私は、それを宣言するためにきたのだが、高く強大ないかなる王もいない。この王国は、神の家族である。遍く認識され制限されることなく崇拝される中心であり、知的な存在体のこの広範囲の兄弟愛の先頭は、私の父でありあなた方の父である。私は彼の息子であり、あなたも彼の息子である。したがっ

て、あなたと私は、天国のような状況での同胞であるというのは永遠に本当であり、我々が地球での肉体をもつ人生で同胞となったからには、それは、より一層永遠に真実である。そこで、神を王として恐れたり、または、あるじとして仕えることを止めなさい。創造者として崇敬することを学びなさい。彼を、あなたの精霊の青年時代の父として敬いなさい。慈悲深い擁護者として愛しなさい。そして、最後に、あなたのより成熟した精霊的な実現と感謝する愛情深く全てに賢明な父として彼を崇拝しなさい。

149:6.9 (1676.3) 「天の父に対する誤った概念から謙虚さに対する誤った考えが育まれ、偽善の多くが生ずる。人は、本来埃の虫であるかもしれないが、父の精霊が内に住むようにになると、その人は神性になる運命にある。父が贈与する精霊は、確実に神の源と宇宙段階の起源に戻るであろう。そして、この内在する精霊の生まれ変わる子供になった人間の魂は、まさしく永遠の父の面前へと神の精霊と確かに昇るのである。

149:6.10 (1676.4)「謙虚さは、本当に、天の父からすべてのこれらの贈り物を受け取る必滅の人間に適しており、そこで、天の王国の永遠の上昇のそのようなすべての信仰の候補者に関連した神の尊厳がある。これみよがしの偽りの謙虚さの無意味でくだらない行使は、救済の源への評価と精霊生まれの魂の目標の認識とは相容れない。神の前の謙虚さは、心の深さにあってこそ適切である。人の前の謙虚さは、称讃に値する。しかし、自意識と注目を切望する謙虚さの偽善は、王国の開眼している息子には子供じみて、相応しくない。

149:6.11 (1676.5)「神前で素直であり、人前での自制はとてもよいのだが、その素直さは、独善的正義の自意識の感覚からくる自己欺瞞の誇示ではなく、精霊の源からくるものにしなさい。『へりくだって神と歩め』と言ったとき、予言者は、慎重に話した、というのは、天の父が無限なるものであり、永遠なるものであると同時に、『悔恨する心と謙遜な姿勢をもつ者とともに』住んでもいるのであるから。父は自負心を軽侮し、偽善を嫌い、不正を憎悪する。そして、それは、天の王国の精霊の現実への人間の入国に不可欠である心構えと精霊の反応の例証とし

て、私は、幼子にたびたび言及してきたのは、天なる父の情愛深い支持と誠実な指導において真心と完全な信頼の価値を強調するためであった。

149:6.12 (1677.1) 「予言者エレミヤが『口では神に近いが、心では遠い。』と言ったとき、多くの死すべき運命にある者をよく描写した。また、『祭司たちは代金をとって教え、予言者たちは金のために占いをする。同時に、彼らは、敬虔を公言し、主が彼等とともにいると宣言する。』君達は、『心に悪さを胸に抱く旁らで、隣人へ平安を語る』それらの者、『心が表裏反覆である旁らで、唇でおだてあげる』それらの者に対して充分に警告されなかったのか。信じている人の凡ゆる悲しみの中でも、誰も信頼されている友人の家で傷つけられることほど酷いことはない。」

7. ベスサイダへの帰着

149:7.1 (1677.2) アンドレアスは、サイモン・ペトロスとの協議とイエスの承認により、遊歴中の様々な集団に説教を終えて12月30日、木曜日のいつかベスサイダに戻るように使者を急派するようにベスサイダでダーヴィドに命令し

た。その雨の日の夕食時間までには、使徒集団と教育伝道者は皆、ゼベダイオスの家に到着した。

149:7.2 (1677.3) 一団は、ベスサイダと近くのカペルナムの家々に収容され、安息日の間ともに居た。その後全体は、家族の元に帰ったり、友を訪問したり、または釣りをするために 2 週間の休みが許された。一緒にいたベスサイダでの2、3日は、実に、爽快で感激的であった。老年の教師達さえ、それぞれの経験を話す若い伝道者に啓発された。

149:7.3 (1677.4) ガリラヤのこの2 度目の旅に参加した117 人の伝道者のうちわずか75　人程が、実際の体験の試練を乗り切り、2 週間の休息の終わりに活動を割り当てられるために控えていた。イエスは、アンドレアス、ペトロス、ジェームス、ヨハネと、ゼベダイオスの家に残り、王国の福祉と拡大に関する協議に多くの時間を過ごした。

論文 150
3 度目の説教遊歴

150:0.1 (1678.1) 西暦29年1月16日、日曜日の夕方、アブネーは、ヨハネの使徒と共にベスサイダに到着し、翌日アンドレアスとイエスの使徒との共同会議に入った。アブネーと仲間は、ヘブロンに本部を設け、これらの会議のために定期的にベスサイダに行くのが習慣であった。

150:0.2 (1678.2) この共同会議で考慮される多くの案件の中には、治癒の祈りの際の特定の油を病人に注ぐ習慣であった。またもやイエスは、議論への参加、あるいは彼等の結論に関する意見表明を断った。ヨハネの使徒は、その活動の中で病苦の者にいつも塗布油を使用しており、これを両団体の一律の実践として定めようとしたが、イエスの使徒は、そのような規則で縛られることを拒んだ。

150:0.3 (1678.3) １月18日火曜日、24人のガリラヤへの３度目の説教遊歴への派遣に先だち、考査済みの伝道者およそ75人が、ベスサイダのゼベダイオス家で合流した。この３度番目の任務は、７週間続いた。

150:0.4 (1678.4) 伝道者は、５人ずつの組み分けで送り出され、イエスと12　人はたいてい一緒に旅行しながらも、使徒は、2 人ずつが必要に応じ信者の洗礼に出掛けた。ほぼ

３週間、アブネーと仲間も、この集団と共に働き、福音伝道者に助言したり、信者に洗礼を施した。彼らは、マグダラ、ティベリアス、ナザレス、それにガリラヤの中部と南部の主要都市や集落、また以前に訪ねたことのあるすべての場所と他の多くの土地を訪ねた。北部の地域を除き、これが、ガリラヤへの最後の知らせであった。

1. 女性の福音伝道者隊

150:1.1 (1678.5) 地球の生涯に関係するイエスの全ての大胆な行為の中で最も驚くべきことが、１月16日の夕方、「明日、我々は、王国の奉仕活動のために10人の女性を別に任命するつもりである。」という彼の突然の発表であった。2 週間区切りの最初に、使徒と伝道者が休暇でベスサイダから離れようとしている時、イエスは、ダーヴィドに家に彼の両親を呼び出し、またベスサイダに数人の使者に急いで前の野営や天幕の診療の運営で活躍した10人の敬虔な女性を呼びにいかせることを頼んだ。これらの女性は皆、若い伝道者に託された指示を聞いてきたものの、イエスが、病人に王国の福音を教えたり、奉仕することを敢えて女性に命じるとは、女性自身もその教師達にも決して思いつかなかった。イエスに選ばれ、任命

されたこの10人の女性は、次の通りであった。ナザレスの会堂の元教会堂役員の娘シューシャン、ヘロデ・アンティパスの執事であるフーザスの妻ジョーアンナ、ティベリアスとセーフォリスの裕福なユダヤ人の娘エリサベツ、アンドレアスとピーターの姉マールサ、あるじの肉身の弟ユダの義理の妹レイチェル、シリア人の医師エルマンの娘ナサンタ、使徒トーマスのいとこミルカ、マタイオス・レーヴィーの長女ルース、ローマ百人隊長の娘ケールタ、ダマスカスの未亡人アガマン。その後、イエスは、この一団に２人の他の女性、メアリ・マグダーリンとアリマセアのヨセフの娘レベッカを加えた。

150:1.2 (1679.1) イエスは、彼女らに女性自身の組織を作る認可を与え、ユダに設備と荷駄用の動物用意のための基金を提供するように指示した。10　人は、その長にシューシャンを、会計係にジョーアンナを選出した。その後ずっと自身の資金を供給し、二度とユダには援助を求めなかった。

150:1.3 (1679.2) 女性が、会堂の主要階の床の間に許されさえしない(女性用回廊に限定)その当時、新しい王国の福音の

権限を与えられた教師として見られるということは、肝を潰すほど驚くに値することであった。福音教育と活動のために女性を別個に配置するにあたり、イエスがこれらの10人の女性に与えた責任は、全時代を通して全女性を自由にするという解放宣言であった。もはや、男性は、女性を精霊的に劣勢であると見てはいけなかった。これは、12人の使徒にさえ明らかな衝撃であった。天の王国には、金持ちも貧乏人も、自由も束縛も、男性も女性もなく、すべてが等しく神の息子と娘である。」と、あるじが言うのを幾度となく聞いてきたにもかかわらず、宗教教師としてこれらの10人の女性を任命し、一緒に旅することさえ許すと正式に提案したとき、彼等は、文字通り唖然とした。この行為に国中が騒ぎ立ち、イエスの敵はこの動きに乗じたが、至る所で、朗報を信じる女性信者は、選ばれた姉妹の後ろにしっかりと立ち、宗教活動における女性の位置のこの遅れた承認への確たる賛意を口にした。この女性解放は、つまり当然の認識を彼女等に与えるということは、あるじの出発直後、使徒によって実行された。とはいえ、その後の世代では昔の習慣へと後退したのだが。キリスト教会の初期を通し

て、女性の教師と宗教活動者は、婦人執事と呼ばれ、一般的な認知をえていた。だがポールは、理論的にはこれをすべて容認していたという事実にもかかわらず、彼自身の態度にはそれを決して本格的には組み入れず、個人的にも実際に実行が難しいとわかった。

2. マグダラでの一時停止

150:2.1 (1679.3) 使徒一行のベスサイダからの旅の際、女性達は後部に続いた。彼女等は、会議時間中はいつも一団となって話者の前方と右側に位置した。王国の福音の信者になる女性達はますます増え、彼女等が、イエスまたは使徒達のうちの一人と個人的な話をしたいと望むとき、おおくの困難の原因となり、困惑につきないものがあった。このとき、このすべてが変わった。女性信者の誰かが、あるじに会いたいと思ったり、使徒と協議したいと望むとき、彼女等は、シューシャンのところに行き、12人の女性伝道者の一人を伴い、直ちにあるじか使徒の一人のところに行くのであった。

150:2.2 (1680.1) 女性が最初に自身の有用性を発揮し、自らが選ぶ賢明さを立証したのはマグダラでのことであった。ア

ンドレアスは、女性との、特に疑わしい性格の者達との対人的な仕事に関して、かなり厳しい規則を仲間に押しつけていた。一行がマグダラに入ると、10　人の女性は、いかがわしい場所に入ることも、直接そこの全被収容者に喜ばしい知らせを説くことも自由であった。また、病人を訪問する時、これらの女性は、苦しんでいる姉妹達にその活動で親密に近づくことができた。この場所でのこの10人(その後12人の女性として知られる)の女性の活動の結果、マリア・マグダーリンが王国へと説得された。この女性は、不運の連続とそのような判断の誤りを犯す女性に対する標準的社会がとる態度の結果として、マグダラの邪悪な盛り場の1つにいた。彼女のような者にさえ王国の数ある扉が、開かれていることをマリアに明らかにしたのは、マーサとレイチェルであった。マリアは、朗報を信じ、翌日、ピーターにより洗礼を受けた。

150:2.3 (1680.2) マリア・マグダーリンは、12人の女性伝道団の中で最も有能な福音教師となった。彼女は、イオータパタでの自身の転向の約4 週間後、レベッカとともにそのような活動に選ばれた。マリアとレベッカは、この集団

の他のものと共に虐げられた姉妹の啓蒙と向上のために忠実に、効果的に働き、イエスの地球での人生の残りを通して進み続けた。そして、イエスの人生劇中の最後の、しかも、悲劇的な挿話が起きているとき、一人を除く全使徒が逃げたにもかかわらず、これらの女性は、皆居合わせ、一人として彼を否定したり裏切ったりはしなかった。

3. ティベリアスでの安息日

150:3.1 (1680.3) 安息日の使徒一行の礼拝は、イエスの指示でアンドレアスにより女性の手に委ねられていた。もちろん、これは、彼らが新しい会堂でできないことを意味した。女性達は、この行事の任にジョアナを選び、会合は、ヘロデがペライアのユーリアスの官邸に住み不在であったので、その新宮殿の宴会部屋で行われた。ジョアナは、イスラエルの宗教生活における女性の働きに関して聖書から読み、ミリアム、デボラ、エスター、および他の者達に言及した。

150:3.2 (1680.4) その夕方遅く、イエスは、男女連合の一行に「魔法と迷信」について忘れ難い話をした。その頃、明

るい、おそらくは新しい星出現は、地上に偉人が生まれたことを示す象徴と考えられていた。そのような星が近年観測されていたので、アンドレアスは、これらの思い込みが根拠のあるものかどうかをイエスに尋ねた。あるじは、アンドレアスの質問に対する長い答えの中で、人間の迷信について主題全体に関して徹底的な議論を始めた。イエスのこのときの論述は次の現代の言い回しにまとめられるかもしれない。

150:3.3 (1680.5) 1. 天上の星の軌道は、地球の人間生活の出来事と少しの係わりもない。天文学は、適切な科学の追求であるが、占星術は、王国の福音には属さない迷信的誤りの積み重ねである。

150:3.4 (1680.6) 2. 最近殺された動物の内臓検査では、天候、将来の出来事、または、人事の成り行きなど何も明らかにすることはできない。

150:3.5 (1680.7) 3. 死者の霊は、生存中の家族、またはかつての友人との情報交換のためには戻らない。

150:3.6 (1681.1) 4. 魔除けや遺品は、病気を治したり、災害を避けたり、あるいは悪霊に影響を及ぼすには無力である。精霊の世界に影響を及ぼすすべてのそのような物質的手段に対する信奉は、はなはだしい迷信にすぎない。

150:3.7 (1681.2) 5. 賽を投げるのは、多くの小さな困難に決着をつける便利な方法であるかもしれないが、神の意志を明らかにするように考案された方法ではない。そのような結果は、まったく物質的偶然の問題である。精霊的世界との交じわりの唯一の方法は、注がれた息子の精霊と無限なる精霊の遍在する影響と共に人類の精霊の贈与、つまり内在する父の精霊に迎え入れられることである。

150:3.8 (1681.3) 6. 占法、呪術、幻術は、魔法の妄想がそうであるのと同様に、無知な心の迷信である。数に対する魔法の信奉、好運の前兆、不運の前触れは、純然たる根拠のない迷信である。

150:3.9 (1681.4) 7. 夢の解釈は、主に無知で空想的な推測がなす迷信深く根拠のない方式である。王国の福音は、原始宗教の占い師である祭司と共通するものは何もない。

150:3.10 (1681.5) 8. 善か悪の霊は、粘土、木、または金属の物質的象徴の中に住むことはできない。偶像は、作られているその物質以外の何ものでもない。

150:3.11 (1681.6) 9. 催眠術師、魔術師、呪術師の慣習は、エジプト人、アッシリア人、バビロニア人、および古代カナーン人の迷信によるものであった。善霊の保護や想像上の悪霊を祓い除けるための護符や全ての呪文の類は、無益である。

150:3.12 (1681.7) 10. イエスは、呪縛、苦難、幻惑、祟り、前兆、マンドレーク、結ばれた紐、および他のすべての無知でとりこにする迷信の形態における皆の信奉を暴露し、批難した。

4. 使徒2名ずつの派遣

150:4.1 (1681.8) 翌晩12人の使徒、ヨハネの使徒、それに新たに任命された女性集団を集めて、イエスが言った。「君達には、収穫は豊富であるが、労働者はわずかであることがわかっている。よって、労働者を主の畑地にもっと送り出すように収穫の主に祈ろう。若い教師達を慰め、教えるために、私が残る間、まだ好都合で平和であるうち

に、従来から使徒を２人ずつ王国の福音を説いて、全ガリラヤを素早く通過できるように送り出したい。」そして、彼らに行供養に求めたので、かれは、使徒を２名ずつ任命した。それらは次の通りであった。アンドレアスとペトロス、ジェームスとヨハネ・ゼベダイオス、フィリッポスとナサナエル、トーマスとマタイオス、ジェームスとユーダス・アルフェウス、シーモン・ゼローテースとユダ・イスカリオーテス。

150:4.2 (1681.9) イエスは、12人のためのナザレの会合の日取りを決めて、別れに際して言った。「この任務では如何なる非ユダヤ人の都市にも行ってはいけない、サマリアにも入ってはいけないが、その代わりにイスラエルの家の迷える羊のところ行きなさい。王国の福音を説き、人が神の息子であるという救済の真実を宣言しなさい。弟子は、そのあるじの上ではなく、使用人がその主より優れてもいないということを心しなさい。弟子はあるじと同等であること、使用人は主と同じ様になることで十分である。もし一部の者が、家のあるじをあえてベエルゼブブの仲間と呼ぶとしたならば、かれらは、その世帯の者達をどれほど大きく見るであろうか。だが、君達は、こ

れらの不信心な敵を恐れるべきではない。私は、明らかにされようとしない何もないと断言する。知られるべきでない隠されたものは何もない。私が、個人的に教えてきたこと、それを知恵をもって公然と説きなさい。私が奥の部屋で明らかにしてきたこと、それを君達は屋根から来たるべき季節に公布することになっている。また、友人と弟子達よ、君達に言う。身体を殺すことはできるが、魂を滅ぼすことのできない者達を恐れてはいけない。むしろ身体を支え、魂を救うことのできるあの方を信じなさい。

150:4.3 (1682.1) 「2羽の雀は1ペニーで売られるではないか。しかも、私は、そのいずれも神の視界では忘れられないと言い切る。あなたの頭髪さえすべて数えられているということを知らないのか。だから、恐れるでない。あなた方は、かなり多くの雀よりもっと価値がある。私の教えを恥じるでない。平和と善意を公布しに行きなさい。ただし、欺かれてはならない—平和は、常にあなたの説教に伴うわけではない。私は地球に平和をもたらすために来たが、人が私の贈り物を拒絶するとき、分裂と混乱は起こる。家族の全てが、王国の福音を受け入れると

き、平和は、本当にその家に留まる。しかし、その家族の幾人かが王国に入り、他のものが福音を拒絶するとき、そのような分裂は、悲痛と悲嘆だけをもたらす。人の敵が自身の家庭のものにならないように、家族全員を救うために、ひたむきに働きなさい。だが、あなたが各家族の全員のために最善を尽くしても、この福音よりも父か母を愛する者は、王国にふさわしくないと私は、言い切る。」

150:4.4 (1682.2) 12人は、これらの言葉を聞き終えると、出発の準備をした。そして、皆は、あるじが手配したようにナザレでイエスと他の弟子に会うための集合の時まで、再び一緒にはならなかった。

5. 救われるために何をすべきか

150:5.1 (1682.3) シュネムでのある晩、ヨハネの使徒達がヘブロンに戻った後、そしてイエスの使徒が2 人ずつ送り出された後、あるじが、ヤコブの指示のもとに働く12人の若い伝道者の一行と12人の女性に教えているときに、レイチェルは、イエスにこの質問をした。「あるじさま、女性が、救われるためには何をするのか、尋ねられたとき

どう答えましょうか。」イエスは、この質問を聞いて答えた。

150:5.2 (1682.4) 「救われるために何をすべきかと男女が尋ねるとき、この王国の福音を信じなさい、神の許しを受け入れなさい、と答えなさい。信仰により、内在する神の精霊に気づきなさい、その受け入れが、あなたを神の息子にする。聖書で、次のようにあるのをまだ読んだことはないのか。『ただ主にだけ、正義と力がる。』また、父が言うところでは、『私の正義は近い』とある。『我が救いはすでに出ており、私の腕は民を抱える。』『私の魂は、神の愛に喜ぶ。神が、私に救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせて下さったから。』『主を我々の正義と呼ぶべきだ』とその名に言い及んだ父についてもまた読んではいないのか。『一人よがりの汚らわしいぼろの着物を持ち去り、我が息子に神の正義と永遠の救いの衣をまとわせなさい。』『正義は信仰によって続くであろう。』というのは永遠に本当である。父の王国への出入りは、完全に自由であるが、進歩—神の恵みにおける成長—は、そこでの存続に不可欠である。

150:5.3 (1682.5) 「救済は父の贈り物であり、その息子達によって明らかにされる。あなたの側での信仰による受理が、あなたを神性の性質の参加者、神の息子または娘にする。あなたは、信仰に罪がないとして許される。信仰によりあなたは救われる。そして、この同じ信仰により、あなたは進歩的で神性の完全性の道において永遠に前進させられる。アブラーハームは、信仰により罪がないとして許され、メルキゼデクの教えにより救済に気づかされた。全ての時代を通して、この同じ信仰が人の息子を救ってきたが、今、息子が、救済をより本格的に、また受け入れ可能にするために父の元からやって来たのである。」

150:5.4 (1683.1) イエスが、話すのをやめたとき、これらの情け深い言葉を聞いた人々には大きな悦びがあり、皆は、新たな力と更新された活力と熱意をもって次の日から王国の福音を宣言しながら前進し続けた。そして、女性達は、地球での王国設立のためのこれらの計画に自分達が含まれていることを知りますます歓喜した。

150:5.5 (1683.2) 最後的な声明を要約する際に、イエスは言った。「救済を買うことはできない。正義を獲得することはできない。救済は神の贈り物であり、正義は、王国の息子性の精霊生まれの人生の自然の果実である。あなたは、正しい生活を送るという理由で、救われるということではない。むしろ、あなたが既に救われ、神の贈り物としての息子性に気づき、地球の人生の最高の喜びとしての王国での活動に気づいたので正しい生活を送るということである。この福音、神の善の顕示を信じるとき、人は、すべての既知の罪の自発的悔悟に導かれるであろう。息子性の実現は、罪を犯す願望とは相容れない。王国の信者は、義に飢え、神の完璧さに渇いている。」

6. 夜間の授業

150:6.1 (1683.3) イエスは、夜の議論で多くの課題について話した。この遊歴の残りの期間—皆がナザレで合流する前に—「神の愛」「夢と展望」「悪意」「謙遜と従順さ」「勇気と忠誠」「音楽と崇拝」「奉仕と服従」「自負と傲慢」「悔悟に関係する許し」「平和と完全性」「悪口と嫉み」「悪、罪、誘惑」「疑念と不信仰」「叡知と崇拝」についてイエスは論じた。従来の使徒が遠くにいっており、男女双方のこの

若い集団は、より自由にあるじとのこれらの議論に入った。

150:6.2 (1683.4) 12人の伝道者の1 集団と2、3日を過ごした後、イエスは、ダーヴィドの使者達によるすべてのこれらの労働者の所在と動きに関して知らされ、もう一つの集団に加わるために進むのであった。これが女性達の初の遊歴であり、彼女等はイエスと多くの時を共にした。各集団は、使者の働きで、遊歴の進捗を完全に知らされており、他の集団からの情報入手は、常に点在し離れ離れの労働者達にとっての励みの源であった。

150:6.3 (1683.5) 彼等の分散の前に、12人の使徒が、伝道者や女性部隊と共に、３月４日、金曜日に、あるじに会うためにナザレに集合するということが決められていた。従って、ほぼこの頃、ガリラヤの中部や南部の全域からこれらの使徒と伝道者の様々な集団が、ナザレへ向かい始めた。午後の中頃までには、早く到着した者が用意したこの都市の北部の高地に位置する野営に、最後の到達者であるアンドレアスとピーターが、到着した。そして、イ

エスが公の活動の始まり以来ナザレを訪れたのは、これが初めてであった。

7. ナザレでの滞在

150:7.1 (1683.6) この金曜日の午後、イエスは、全く見られもせず、完全に気づかれもせずナザレを歩き回った。かれは、幼年時代の家と大工の仕事場のそばを通り、若者時代あれほどまでに楽しんだ丘で30分を過ごした。ヨルダン川のヨハネによる洗礼の日以来、人の息子は、魂の中をかき混ぜるそのような人間の感情の奔出を感じたことはなかった。下山の間、かれは、ナザレでの成長の少年時代に幾度も幾度も耳にしたように、日没を知らせる馴染みのあるトランペットの轟音を聞いた。野営に戻る前、かつて通学した会堂のそばを歩き、幼年期の多くの思い出に心を満足させた。その日早く、イエスは、安息日の朝の礼拝での説教のために、トーマスに会堂の支配者との打ち合わせに行かせていた。

150:7.2 (1684.1) ナザレの人々は、敬虔と正しい生活における評判が、決して良くはなかった。年の経過と共にこの村は、近くのセーフォリスの低い道徳的基準によってます

ます悪影響を受けるようになった。その少年時代と若者時代を通して、ナザレではイエスに関する意見の分裂があった。かれが、カペルナムに移ると、彼に対する多くの憤りがあった。ナザレの住民は、元大工の行ないについて多く聞いてはいたが、初期のいずれの説教遊歴にも自分の出身の村を一度も含んだことがないと怒っていた。かれらは、イエスの名声について確かに耳にしていたが、彼が若者時代の都市ですばらしい働きの一つとしてなかったので、市民の大部分は、怒っていた。ナザレの人々は、何カ月もの間イエスについて相当に議論していたが、その意見は、概して彼にとって好ましくはなかった。

150:7.3 (1684.2) このように、あるじは、歓迎されず、明らかな敵対的で、酷評の空気の只中にいる自分に気づいた。しかし、これが、全てではなかった。敵は、彼がナザレでこの安息の日を過ごすことになっていることを知り、会堂で話すであろうと想定し、彼を執拗に悩ませ、あらゆる可能な方法で問題を引き起こすために多数の荒々しく粗野な者等を雇っていた。

150:7.4 (1684.3) 少年時代の会堂役員の溺愛的な師を含み、イエスのかつての友人の大方は、　死ぬか、またはナザレを去っていたし、より若い世代は、強い嫉妬で彼の名声に憤慨する傾向にあった。かれらは、父親の家族へのイエスの早くからの献身を記憶してはいなかったし、ナザレ在住の弟や結婚している妹達への訪問の怠慢を痛烈に批評した。イエスに対するその家族の態度もまた、市民のこの険悪な感じを増加させる傾向にあった。ユダヤ人の間の正統派は、イエスがこの安息日の朝に会堂へ行くのに速く歩き過ぎるという理由であえて批評さえした。

8. 安息日の礼拝

150:8.1 (1684.4) この安息日は、美しい日であった。全てのナザレ人（友と敵）は、町の会堂でこの元市民の講話を聞くこととなった。使徒の随員の多くは、会堂の外に残らなければならなかった。彼の声を聞きにきた者すべてのための場所がなかった。イエスは、青年時代この崇拝の場所でしばしば話した。そして、この朝、会堂の支配者が、彼に聖書の教えを読むための神聖な書の巻物を手渡したとき、これはイエスがこの会堂に寄贈したまさにそ

の写本であるということを居合わせた誰も思い出すようには見えなかった。

150:8.2 (1684.5) この日の礼拝は、ちょうどイエスが少年として出席した時のように執り行われた。かれは、会堂の支配者と講壇を昇り、礼拝は、２つの祈りの朗唱で始められた。「誉め称えよ、世界の王である主を。光をつくり、闇をつくり、平和を生みだし全てを造る主を。慈悲をもって、地上とそこに住まう者に光を与える方、善をもって、一日一日と毎日、創造の業を新たになさる方。誉め称えよ、神なる主を、御業の栄光のため、賛美のために作られた光明を与える明かりのために。セラ。誉め称えよ、光を作られた神なる主を。」

150:8.3 (1685.1) 一瞬の休止の後、かれらは、再び祈った。「すばらしい愛をもって、我々の神である主は、我々を愛し、溢れんばかりの多大の哀れみをもって、父であり我々の王は、彼を信じた我々の祖先のために我々を哀れんできた。あなたは、人生の掟を彼らに教えた。我々に慈悲をお示しください。法に向けて我々の目を開いてください。あなたの戒律に心を従わせてください。御名を

愛し恐れるように我々の心を一つにしてください、末代までも、我々が恥をみないように。あなたは救済を用意する神であり、全ての国と言語の中から我々を選ばれ、我々が、愛情を込めてあなたの統一を称賛することができるように実際、偉大な御名—セラ—の近くに我々を連れて来られました。誉め称えよ、愛でイスラエルの民を選んだ主を。」

150:8.4 (1685.2) 会衆は、それから、ユダヤ人の信仰の教義、シェマを朗唱した。この儀式は、法からの多数の章句の繰り返しから成り、崇拝者が天の王国のくびき、また、昼夜適用される戒律の任を負うことを示した。

150:8.5 (1685.3) それから、3番目の祈りに続いた。「あなたは、ヤハウェ、我々の神であり、我々の祖先の神であるというのは本当です。我々の王であり祖先の王、我々の救済者であり、祖先の救済者、我々の創造者であり救済者の岩、我々の助力者であり救出者であります。御名は永遠から来ており、あなたの他に神はいません。救出された者達が海辺で歌う新たな歌は御名を称えた。皆は共

に王を称賛し認めて言う。ヤハウェは治め、世界に終わりはないと。誉め称えよ、イスラエルを救う主を。」

150:8.6 (1685.4) 会堂の支配者は、次に、神聖な書物を入れた箱舟、または櫃の前の自分の場所に行き、19の祈りの賛辞、または祝福の朗唱を始めた。しかし、このとき、貴賓が講話のためにより多くの時間を持つことができるように礼拝を短くするのが望ましかった。そのため、祝福の１番と最終だけが朗唱された。１番目は次の通りであった。「我々の神である主、我々の祖先の神、アブラーハームの神、イサク神、ヤコブの神を称賛せよ。偉大で、強大で、凄まじい神、慈悲と親切を示る方、万物を創造する方、先祖への情けある約束を思い出し、その子々孫々に自身の御名ゆえに愛をもって救世主を連れて来る方。王よ、介添人よ、救世主よ、盾よ。誉め称えよ、ヤハウェよ、アブラーハームの盾よ。」

150:8.7 (1685.5) そこで最後の祝福が続いた。「おお、イスラエル人に大いなる平和をお与えください、あなたは、全ての和平の王であり主であられますので。そして、いつでも、そして毎時間、イスラエルに平和を与えるのは、あ

なたの目に良い。讃えよ、平和で民イスラエルを満たす方、ヤハウェを。」会衆は、支配者が祝福を朗唱するときに彼を見なかった。祝福に続き、かれは、この機に適った形式ばらない祈りを捧げ、これが終わると、会衆一同がアーメンを唱えた。

150:8.8 (1685.6) 次に、会堂役員は箱舟に行き巻き物を取り出し、聖書の教えを読むことができるようにそれをイエスに渡した。少なくとも法の3節を読むように7人を指名するのが慣例であったが、この訪問客は、自身の選択による教えを読むことができるようにこの実行は、この時は見送られた。イエスは巻き物を取り、立ち上がって申命記から読み始めた。「この日私が与えるこの戒律は、あなたから隠されてもいないし、また、遠くかけ離れたものでもない。これは天にあるのではないから、誰が、私達のために天に上り、それを取って来て、私達に聞かせて行なわせようとしているのか、と言わなくてもよい。また、これは海の彼方にあるのではないから、誰が、私達のために海のかなたに渡り、戒律を取って来て、私達に聞かせて行なわせようとしているのか、と言わなくてよい。まことに、命の言葉は、あなたが知るこ

とができ、それに従うことができるように、あなたのごく身近にあり、あなたの面前にさえ、また心の中にさえある。」

150:8.9 (1686.1) 法の書から読むのをやめたとき、かれは、イェシァジァの方に向いて読み始めた。「主の御霊が私の上にある。主が、貧者に良い知らせを説くようと私に油を注がれたので。主は、捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために、虐げられている人を自由にするために、主の恵みの年を知らせるために私を遣わされた。」

150:8.10 (1686.2) イエスは、本を閉じ、会堂の支配者にそれを返した後に、座って人々に語り始めた。「今日、これらの言葉は、満たされた。」と始めた。それからおよそ15分間「神の息子と娘」について話した。人々の多くは、この講話に満足し、その仁恵と叡知に驚嘆した。

150:8.11 (1686.3) 正式な礼拝の終了後、会堂では興味あるかもしれない人々が質問できるように演説者が残ることが、慣例であった。従って、この安息日の朝、イエスは、質問のために押し寄せた群衆の方へ下りていった。この集

団の中には悪戯を企む心の多くの不穏な個人がおり、この人だかりの周辺には、イエスに対して問題を引き起こすために雇われた劣悪な者達が、歩き回っていた。外に留まっていた弟子と伝道者の多くは、今や会堂の中に位置しており、難儀が企てられていることにすぐ気づいた。皆はあるじを連れ去ろうとしたが、彼は一緒に行こうとしなかった。

9. ナザレの拒絶

150:9.1 (1686.4) イエスは、会堂で敵の大勢の群集と小数の仲間に取り囲まれているのを知り、彼らの失礼な質問と邪悪な冷やかしに応えて滑稽交じりに言った。「はい、私は、ヨセフの息子である。大工であり、あなたが、『医者は、己が身を治す』という諺を私に、思い出させても、カペルナムで私がしたと聞いたことをナザレで私にさせようと挑んでも、私は驚きはしない。しかし、『予言者は、自分の郷里やその人々を除いてはどこでも敬われるものだ。』と聖書でさえはっきり記しているのを君達が目撃するよう呼び掛ける。」

150:9.2 (1686.5) しかし、彼らは、イエスを押しのけ、批難し指して言った。「あなたは、自分がナザレの人々よりも良いと思っている。あなたは我々から立ち去ったが、あなたの弟は普通の労働者であり、妹達もまだ我々の中で暮らしている。我々は、あなたの母、マリアを知っている。彼らは今日どこにいるのですか。あなたの大した働きについて聞くが、戻ってくると驚きをに値することをしないということに気づいた。」イエスは、彼等に答えた。「私は、私が育った街に住む人々を愛している。そして、あなた方が皆、天の王国に入るのを見て私は歓喜するであろうが、神の業をすることは、私が決定することではない。恩恵の変化は、受益者である者達の生きている信仰に応じてもたらされる。」

150:9.3 (1686.6) 彼自身の使徒の一人であるシーモン・ゼローテースが、若い伝道者のうちの一人ナホーの助けで群衆の中のイエスの友人の一団を集めて、あるじの敵がそこから行くのを通知しておき、好戦的態度を取るという戦術的な失敗がなかったならば、イエスは、穏やかに群衆を扱い、乱暴な敵さえ有効に武装を解いていたことであろう。イエスは、柔らかい答えは、怒りをそらすというこ

とを長い間使徒に教えてきたが、追随者は、喜んであるじと呼んだ最愛の師が、そのような非礼と軽蔑で待遇されることを見ることには慣れていなかった。それは、彼等には非常に耐え難く、かれらは、気づくと、激しく猛烈な憤懣を表現しており、そのすべては、単にこの不信心で粗野な集会での群集心理をそそりがちであった。そして、金銭目当てに働く者の指導の下に、これらの悪党は、イエスを掴み、会堂から急いで近くの険しい丘の崖っぷちに追い立て、そこで縁から下へと死に押しやろうとした。しかし、彼らが崖の縁の上で彼を押そうとしていたちょうどそのとき、イエスは、突然に捕獲者の方に向きをかえ、彼らを直視し、静かに腕を組んだ。イエスは、何も言わなかったが、彼が前方に歩き始めると、暴徒が間を開け、危害を加えず通り過ぎさせることに、彼の友人達はこの上もなく驚いた。

150:9.4 (1687.1) イエスは、野営に行き、弟子達も後に続き、そこでこのすべてが詳しく語られ。その晩、彼らは、イエスが指示した通りに、翌日早くカペルナムに戻るための用意をした。この３度目の公の説教遊歴の荒れ狂う結末は、イエスの追随者全員に冷静な効果をもたらした。彼

らは、あるじのいくつかの教えの意味を理解し始めていた。王国は、多くの悲しみと苦々しい失望を通してだけ来るでという事実に気づいていた。

150:9.5 (1687.2) かれらは、この日曜日の朝ナザレを発ち、異なる経路で旅をし、最終的には3月10日、木曜日の正午までには、全員がベスサイダに集合した。彼らは、意気揚揚の十字軍の熱心で全てを征服している一隊としてではなく、真実の福音の幻滅している伝道者の冷静かつ真剣な一行として集まった。

論文 151
海辺での滞在と教え

151:0.1 (1688.1) 説教をし教育する全集団は、3月10日までにベスサイダに集まった。木曜日と金曜日の夜、彼らの多くは、漁に出かけ、安息日には、父アブラハムの栄光に関するダマスカスの年老いたユダヤ人の講話を聞きに会堂に出席した。イエスは、この安息日の大半を一人丘で過ごした。その土曜日の夜、あるじは、「逆境での使命と失望の精神的価値」について集ってきた幾つかの集団に1 時間以上話した。これは、忘れ難い機会であり、聞き手は、与えられた教えを決して忘れなかった。

151:0.2 (1688.2) イエスは、先頃のナザレでの拒絶の悲しみから完全に立ち直ってはいなかった。使徒は、イエスの普段の快活な振舞いに混じっている独特の悲しみに気づいていた。ペトロスは、新伝道者の一団の福祉と指示に関わる多くの責務に深く拘わっていたので、ジェームスとヨハネがたいてい彼と共にいた。エルサレムの過ぎ越し祭りの開始を待つこの期間、女性達は、個別訪問をし、福音を教え、カペルナムや周辺の町村の病人の奉仕に時を費やした。

1. 種を蒔く人のたとえ話

151:1.1 (1688.3) およそこの頃、イエスは、頻繁に自分の周りに集まりくる群衆に教えるために初めてたとえ話の方法を採用し始めた。イエスが夜遅くまで使徒と他の者達に話したので、この日曜日の朝、一行のほんの僅かしか朝食に起きてこなかった。そこで、かれは、海辺へ出かけ、いつも自分の好きに使用しているアンドレアスとペトロスの古い漁船に一人座り、王国を広げる仕事の次の行動について熟考した。しかし、あるじは長らく一人にされてはいなかった。間もなく、カペルナムや近隣の村落からの人々が到着し始め、その朝10時までには、およそ

1,000人が、イエスの船の岸近くに集まり、大声で注目を求めた。ペトロスは、そのとき起きており、船に向かい、「あるじさま、私が彼らに話しましょうか。」とイエスに言った。しかし、「いや、ペトロス、私が一つ話をしよう。」と答えた。そして、イエスは、後に続いた群衆に教えた長い一連のそのようなたとえ話の最初の1つである種を蒔く人の詳述を始めた。この船には高くされた席があり、(教えるときには座るのが、習慣であったので)、イエスは、岸に沿って集まった群衆に話す間、そこに座った。ペトロスが少し話した後で、イエスが次のように言った。

151:1.2 (1688.4) 「種を蒔く人が、出掛けて行き蒔いていると、ある種子は、道端に落ち足もとで踏まれて空からきた鳥に食べられてしまった。他の種子は、あまり土のない岩場に落ち、すぐに芽を出したが、土に深さがなかったので太陽が照ると、水分を得る根がなかったのですぐに枯れた。別の種子は、茨の間に落ち、茨が成長し種子を塞いでしまったので、実を結ばなかった。さらに他の種子は、良い地に落ち成育し、30倍、60倍、100倍の実をも

たらした。」イエスは、このたとえ話を終えると、「聞く耳をもつ者は聞くがよい」と、群衆に言った。

151:1.3 (1689.1) イエスがこのように人々に教えるのを聞いたとき、使徒や使徒と共にいた者達は、大いに当惑した。長らく自分等達だけで話した後に、マタイオスは、その夜ゼベダイオスの庭でイエスに言った。「あるじさま、群衆に提示された難解な意味合いは何ですか。真実を求める人々になぜたとえ話をされるのですか。」そこで、イエスが答えた。

151:1.4 (1689.2) 「いままで忍耐強く君達に教えてきた。君達には天の王国の神秘が知らされているが、洞察力に欠ける群衆や我々を破壊しようとする人々には、これから先、王国の神秘はたとえ話によって示されるであろう。そうして、我々は、王国入りを本当に望む人々が、教えの意味が分かり、その結果、救済を見つけることができるようにするようにし、同時に、我々を陥れるためだけに聴く人々は、　見ずして見、聞かずして聞くことにより、さらにまごつくするかもしれない。我が子等よ、持てる者には更に与えられるので豊富にある、しかし持たざる

者からは、その持てるものさえ取り上げられるという精霊の法を君達は認めるか。したがって、私は、我々の友人や真実を知ることを望む人々が、探すものを見つけることができるように、最後まで大いに比喩で今後話すつもりであり、一方、我々の敵や真実を好まない人々は、理解せずに聞くかもしれないが。これらの人々の多くは、真実の道を踏襲しない。予言者は、実にそのようなすべての洞察を欠く者達を描写して言った。『この民の心は、鈍くなり、その耳は聞こえにくく、その目は閉じている、それは、真実を識別したり、心で理解しないようにしているがためである。』」

151:1.5 (1689.3) 使徒達は完全にあるじの言葉の意味を理解したというわけではなかった。アンドレアスとトーマスが更にイエスと話す一方で、ペトロスと他の使徒は庭の別の方に引き下がり、熱心な、しかも長い議論に入った。

2. たとえ話の解釈

151:2.1 (1689.4) ペトロスとその周りにいる仲間は、種を蒔く人のたとえ話は比喩であり、各細目には何らかの隠された意味があるという結論に至り、イエスのところに行き説

明を求めることにした。そこで、ペトロスは、あるじに近づいて言った。「我々はこのたとえ話の意味を看破することができませんし、王国の神秘を知らされると言われ、それについての説明をお願いします。」イエスがこれを聞くと、ペトロスに言った。「息子よ、私は、何も差し控えるつもりはないが、まず、何を取り沙汰していたのか、話ししてもらいたい。たとえ話の君の解釈は何なのか。」

151:2.2 (1689.5) しばらくの沈黙の後、ペトロスが言った。「あるじさま、我々はたとえ話についてかなり話しました。そして、これが私の行き着いた解釈です。種を蒔く人は、福音伝道者であり、種子は神の言葉です。路傍に落ちた種子は、福音の教えを理解しない人々を表します。固まった地面に落ちた種子を素早く取った鳥は、魔王、または邪悪なものを表し、それは、これらの無知な者の心に蒔かれたものを知らぬ間に奪い去ります。岩場に落ち、急速に成長した種子は、朗報を聞くと喜んで知らせを受け入れる浅薄で軽率な人々を代表します。でも、真実というものには、彼等がより深く理解する本当の根がないので、苦難と迫害を目前にすると、その献身は短命

であります。問題が迫ると、これらの信者は躓きます。誘惑されると離れます。茨に落ちた種子は、進んで言葉を聞きますが、浮世の心配と、真実の言葉を窒息させる富の虚偽に気を許すので、不毛となる人々を表しています。さて、良い土地に落ち、30倍、60倍、100倍の実をつけるために芽を出した種子は、真実を聞いたときに、様々な角度からの感謝でそれを受け—これらの異なる知的な授与によって—これらの異なる宗教経験の角度を明かにする人々を表しています。」

151:2.3 (1690.1) イエスは、ペトロスのたとえ話の解釈を聞いた後に、他の使徒にもまた提案がないか尋ねた。この招きに、ナサナエルのみが応じて言った。「あるじさま、サイモン・ペトロスの解釈には多くの良いものを認めながらも、完全には同意いたしません。このたとえ話についての私の考えは、こうです。種子は、王国の福音を表し、種を蒔く人は、王国の使者を意味します。固まった地面の路傍に落ちた種子は、福音をあまり聞いたことのない人々、また、知らせに無関心である者、心を堅くした者を表しています。路傍に落ちた種子を引ったくる空の鳥は、人の人生での習慣、悪の誘惑、肉体の欲望を意

味します。岩の間に落ちた種子は、新たな教えを受け入れることに迅速で、この真実に従って生活する困難や現実に直面するときも同様に素早く真実をあきらめるような感情的な人間を表しています。彼等は精霊的な認識を欠いています。茨に落ちた種子は、福音の真実に引きつけられる者達を表しています。その教えに服従するつもりでいますが、かれらは、人間の存在の人生に関わる自負、嫉妬、羨望、懸念に妨げられます。良い土壌に落ち、成長し芽を出し、30倍、60倍、100倍となった種子は、さまざまな精霊の啓発の贈与を保持する男女の真実を理解し、その精霊的な教えに反応する能力の自然で様々な度合いを表します。」

151:2.4 (1690.2) ナサナエルが話し終えると、ある者達は、ペトロスの解釈の正しさを求めて争い、ほとんど同数の者は、たとえ話に対するナサナエルの説明を擁護しようとし、使徒とその仲間は深刻な議論になり、熱心な討論に入った。一方、ペトロスとナサナエルは、家に撤退し、そこで、双方が、相手を説き伏せ互いの考えを変えようと活発で断固とした努力を払っていた。

151:2.5 (1690.3) あるじは、この混乱が、表現の激烈な頂点を過ぎるまで容認した。それから、かれは、手をたたいて自分の周りに皆を呼んだ。かれら全員が、もう一度まわりに集まると、「これから私がこのたとえ話について話す前に、誰か何か言うことがあるか。」と聞いた。一瞬の沈黙の後、トーマスがはっきりと言った。「はい、あるじさま、少々発言したいのです。あなたがかつて、他でもないこの件に注意するようにと我々に言われたのを、私は思い出します。あなたは、説教に具体例を用いるとき、我々は作り話ではなく、人々に教えたいと思う1つの中心となる重大な真実の実例に最適な物語を選択するべきであるということ、また、そのように話を用いた後では、物語での展開される重要でない詳細のすべてに対して精霊的な解釈を試みるべきではない、と我々に教えられました。私は、ペトロスとナサナエルの二人は、このたとえ話を解釈する試みにおいて間違っていると思います。私は、これらのことをする彼等の能力を賞賛はしますが、私は、そのすべての特徴で自然のたとえ話を精神的な類似にもたらす全てのそのような試みは、そのようなたとえ話の本当の目的に混乱と重大な誤解をもたら

すだけであるということを等しく確信します。このたとえ話に関する異なる意見を持ち、私の考えでは、あなたが、このたと話を群衆に提示したときは、素晴らしい真実を心にもっており、1　時間前には我々の心は1つでありましたが、その後、あなたが、我々にその注釈を求めると、我々は、いま2つの別々の集団に分かれ、このたとえ話に関する異なる意見を持ち、私の考えでは、完全に理解するための我々の能力を妨げかねないほどに、ひたすら真剣にそのような意見をもつという事実によって、私が正しいということは、十分に証明されます。」

151:2.6 (1691.1) トーマスの話した言葉は、全ての者を落ち着かせる効果があった。かれは、皆にイエスが以前に教えてくれた事を思い出させ、そして、イエスが話を再開する前にアンドレアスが立ち上がって言った。「私は、トーマスが正しいと説き伏せられました。そこで、彼がこの種子を蒔く人のたとえ話にどんな意味を添えるか話してもらいたいです。」イエスが話すように合図した後、トーマスは言った。「同胞よ、この議論を長引かせたくはないが、もしそう望むのであれば、このたとえ話は1つのすばらしい真実を我々に教えるために話されたと思う

と私は言います。そして、それは、我々が、神からの使命をいかに忠実に効率的に実行しようが、王国の福音についての我々の教えは、異なる成功の度合を伴うということである。結果のそのようなすべての違いは、直接、我々の支配の及ばない活動情況そのものに固有の事情に依るものであります。」

151:2.7 (1691.2) トーマスが話し終えると、仲間の伝道者の大半は、今にも同意するところであった。ペトロスとナサナエルさえトーマスに話しに行くところであった、そのとき、イエスが立ち上がって言った。「でかした、トーマス。たとえ話の本当の意味についてそなたは明察した。しかし、ペトロスとナサナエルの両者も、私のたとえ話から比喩を作成する仕事の危険性をそれほどまで完全に示したという点において同様によかった。心の中で、君達は、そのような思索的な想像の飛躍にしばしば有利に従事するかもしれないが、公の教えの一部としてそのような結論を提供しようとするとき、間違いを犯す。」

151:2.8 (1691.3) 緊張感はなくなり、ペトロスとナサナエルは、互いにそれぞれの解釈への喜びを述べあい、アルフェウ

スの双子を除いては、使徒の各々は、その夜の就寝前に種を蒔く人のたとえ話の解釈に挑んだ。ユダ・イスカリオテさえ、非常にもっともらしい解釈を提供した。その後12人は、内輪で、しばしば、あるじのたとえ話を比喩として理解しようとしたのであったが、決してそのような思索を真剣には受け止めなかった。これは、使徒とその仲間にとっての非常に有益な集まりであり、これ以後、イエスが、公への教えにますますたとえ話を用いたので特に有益であった。

3. さらにたとえ話に関して

151:3.1 (1691.4) 使徒は、たとえ話志向であったので、その翌晩ずっとたとえ話のさらなる議論に費やされるほどであった。イエスは、次の言葉で夜の会議に入った。「最愛なる者よ、君は、真実の提示を向かいあっている知性と感情に適合するように、教える際にはいつも変化をつけなければならない。さまざまな知性と気質の群衆を前にして立つとき、それぞれの聞き手の種類に合わせて異なる言葉を話すことはできないが、君の教えの伝達のために物語を告げることはできる。そして、各々の集団は、各個人でさえ、知的かつ精神的な資質に従い君のたとえ話

に対する自身の解釈ができるであろう。君は、自身の光を輝かせるが、知恵と思慮深さでそうしなさい。誰も、灯りを点すとき、容器でそれを覆うか、または寝台の下に置いたりはしない。かれは、皆が光を見ることができる台の上に灯りを置く。天の王国には、明らかにされるべきではないものはないということを言っておく。最終的に知られるべきではないどんな秘密もない。結局、全てのこれらのものが明るみに出るのである。群衆だけを、しかも彼らがどう真実を聞くかを考えてはいけない。君が、どのように聞くのか、自身にも注意を払いなさい。私が、何回も言ってきたことを思い出しなさい。持っている人にはもっと与えられ、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。」ということを。

151:3.2 (1692.1) たとえ話に関する継続的な議論と彼らの解釈に関するさらなる教えは、現代の言い回しで次のようにまとめられ、表現されるかもしれない。

151:3.3 (1692.2) 1. イエスは、福音の真実を教える際に、作り話、比喩の双方の採用に対しての忠告をした。かれは、

自由なたとえ話の使用、特に自然のたとえ話を推薦した。かれは、真実を教える手段として自然界と精霊界の間に存在する類似を利用することの価値を強調した。かれは、頻繁に「精霊の現実から来る非現実的ではかない影」として自然のものについて言及した。

151:3.4 (1692.3) 2. イエスは、ヘブライの教典から3篇か4篇のたとえ話を述べた上で、この教授方は全く新しくないという事実に注意を促した。しかしながら、それは、かれが、この後ずっと用いたのでほとんど新教授法となった。

151:3.5 (1692.4) 3.たとえ話の価値を使徒に教えるに当たり、イエスは、次の点に注意を促した。

151:3.6 (1692.5) たとえ話は、心と精霊の夥しく異なる段階に同時に訴えることを可能にする。たとえ話は、想像力を刺激し、識別力に挑戦し、批判的な思考法を刺激する。それは、対立を喚起することなく共感を促進する。

151:3.7 (1692.6) たとえ話は、認識されている事柄から未知の認識へと進む。たとえ話は、精霊と超物質を導入する方法として、物質と自然を利用する。

151:3.8 (1692.7) たとえ話は、公平な道徳上の決断を刺激する。たとえ話は、多くの偏見を回避し、新たな真実を率直に心に収め、個人の憤りの自衛の最小限の喚起によりこの全てをする。

151:3.9 (1692.8) たとえ話の類推に含まれる真実を拒絶することは、人の正直な判断と正しい決定を真っ向から無視する意識的な知的行動を要する。たとえ話は、聴覚を通しての思考の強制に役立つ。

151:3.10 (1692.9) たとえ話の教育形態の採用は、主に伝統と確立された権威とのすべての論争と明らかな衝突を避けると同時に、教師が、新しく、さらに驚異的な真実さえ提示することを可能にする。

151:3.11 (1693.1) たとえ話にはまた、同じ馴染み深い場面にその後に遭遇するとき、教えられた真実に関する記憶を刺激する利点がある。

151:3.12 (1693.2) このように、イエスは、公への教育にたとえ話をますます用いる彼の実践に基礎をなす多くの理由を追随者に知らせようと努めた。

151:3.13 (1693.3) 夜の教えでの終わり近く、イエスは、種を蒔く人のたとえ話について初めての注釈を与えた。かれは、たとえ話は２つのことに言及していると言った。まず最初に、それは、その時までの彼自身の活動への回想と、地球での残りの人生の間の自分の前に横たわっているものへ予測であった。２番目は、王国の使徒と他の使者達が、代々引き続いてその活動において予期するかもしれないことへの暗示でもあった。

151:3.14 (1693.4) また、イエスは、彼の仕事のすべてが、悪霊の援助と悪魔の王子によって行われると教えるエルサレムの宗教指導者の周到な努力への最大限に可能な反証として、たとえ話の使用に訴えた。当時の人々は、すべての自然現象を霊的な存在と超自然力の直接行為の成果と見ていたので、自然への訴えは、そのような教育の違反であった。かれはまた、敵が彼に対する違反や批難の原因を見つける機会をより少なくしつつ、同時により良い

道を知りたい人々に重大な真実を宣言することを可能にするので、この教授方法に決定していた。

151:3.15 (1693.5) その夜一行を解散させる前に、イエスは言った。「さて、私は種を蒔く人のたとえ話の最後を話すつもりである。どうこれを君達が受け止めるかを知るために考査したい。天の王国もまた、地球で良い種子を撒く者に似ているのである。そして、彼が夜は眠り、日中は仕事をする間に、種子は、芽生え、成長し、彼は、それが、どう起こったかを知らないが、植物は実を結んだ。最初に葉が出、次に穂が、それから穂に豊かな粒が。そして、粒が熟れると、かれは、鎌で刈り取り、それで収穫は終わった。聞く耳を持つ者には聞かせよ。」

151:3.16 (1693.6) しばしば使徒は、この格言を心の中で熟考したが、あるじは、種を蒔く人のたとえ話へのこの追加へのさらなる言及を決してしなかった。

4. 海辺でのさらなるたとえ話

151:4.1 (1693.7) 翌日、イエスは、船から人々に再び教えた。「天の王国は、畑に良い種子を蒔いた人に似ている。しかし、この人が眠っている間に敵が来て、雑草を小麦の

中に蒔いて急いで離れた。そうして、若い葉が出て、後に実をつけようとするとき、雑草もまた生えてきた。それから、この世帯主の使用人達が来て言った。『旦那さま、あなたは、畑に良い種子を蒔きませんでしたか。これらの雑草はどこから来るのでしょうか。』そこでかれは、使用人に答えた。『敵がこうしたのである。』すると使用人が尋ねた。『私達にこれらの雑草を引き抜かせてください。』しかし、主人は言った。『だめだ。雑草を抜くかたわらで小麦も根こそぎにするといけない。むしろ、収穫の時まで共に成長させ、その時、刈り手に、まず雑草を集め、燃やすために縛り、次に、小麦を集め、納屋に貯蔵するようにと、私が言います。』」

151:4.2 (1693.8) 人々がいくつかの質問をした後、イエスは、別のたとえ話をした。「天の王国は、人が畑に蒔く辛子菜の一粒の種子のようなものである。今、辛子菜の種子は、極小であるが、それが成熟すると、すべての野菜の中でもいちばん大きくなり、木に似ているので、その枝に空から鳥達がやって来て休息することができる。」

151:4.3 (1694.1) 「天の王国はまた、女性がそれを取り3 杯の粗挽き粉に隠すパン種のようなもので、こうすると、粗挽き粉全てが発酵するのである。」

151:4.4 (1694.2) 「天の王国はまた、畑に隠され人に発見された宝物に似ている。喜びのあまり、この人は、畑を買うための金を得るために持ち物全てを売り払いに行くようなものである。」

151:4.5 (1694.3) 「天の王国はまた、上質の真珠を探している商人にも似ている。商人は、1 粒の高価な真珠を見つけると、出掛けていき、並はずれた真珠を購入できるかもしれないほどの所有物すべてを売った。」

151:4.6 (1694.4) 「また、天の王国は海に投げ込まれ、あらゆる種類の魚を捕獲する一振りの網に似ているのである。網が一杯になると、漁師達は岸に引き揚げ、そこに腰を下ろし、魚の仕分けをし、良いものは入れ物へ、悪いのは投げ捨てるのである。」

151:4.7 (1694.5) イエスは、群衆に他の多くのたとえ話をした。事実、この時以来、かれは、この方法以外では大衆に滅

多に教えなかった。たとえ話で一般聴衆に話した後、かれは、夜の授業の間、より完全により明白に自分の教えを使徒と伝道者達に説明するのであった。

5. ケリサ訪問

151:5.1 (1694.6) 群衆は、その週を通して増え続けた。安息日にイエスは、離れて丘へと急いだが、日曜日の朝が来ると、群衆は、戻ってきた。イエスは、ペトロスの説教の後、昼過ぎに群衆に話し、話し終わると使徒達に言った。「私は、人だかりに疲れた。我々が1日休めるように向こう側に渡ろう。」

151:5.2 (1694.7) 湖の反対側へ向かう途中、特に１年のうちのこの時期、ガリラヤ湖に特有の激しい突然の暴風の1つに遭遇した。この水域は、海面から約210メートル下にあり、特に西側の高い堤に接して囲まれている。湖から丘へと導く急な谷間があり、湖上のへこみから日中熱せられた空気が上昇すると、日没以降、谷間の冷却空気が湖上に急降下する傾向がある。これらの強風は、急速に来て、時々同じ速さで突然遠ざかる。

151:5.3 (1694.8) この日曜日の夕暮れ、舟が、向こう岸にイエスを運んで行くのが見られたのは、ちょうどそのような夕方の強風であった。数人の若い伝道者を乗せた他の3 隻の舟が、あとについていた。西岸では嵐の形跡はなく、この湖の領域に限られておりはしたが、この暴風雨は激しかった。風は非常に強く、波が舟に打ち上げ始めた。強風は、使徒が巻く間もなく、帆を引き裂いてしまい、かれらは、2 キロ半の距離を、苦労して岸に向かい、そのとき全くこの櫂に依存していた。

151:5.4 (1694.9) その間、イエスは、小さい頭上の雨覆いの下で舟の後部で横になって眠っていた。ベスサイダを後にしたとき、あるじは、疲れきっていたし、反対側への横断航行の指示は、休息を確保するためであった。これらの元漁師は、強く、経験豊かな漕手であったが、これは彼らが、それまでに遭遇した最悪の強風の1つであった。風と波は、まるでそれが玩具の舟であるかのように激しく揺らせたが、イエスは、邪魔されることなく眠っていた。ペトロスは、後部近くの右の櫂についていた。舟が水でいっぱいになり始めたとき、櫂を手離し、イエスのところに急ぎ、目を覚まさせるために力強く揺さぶっ

た。そして、イエスが目を覚ますと、ペトロスは言った。「あるじさま、激しい嵐に合っているのを知らないのですか。あなたが救ってくれなければ、我々は全員、死んでしまいます。」

151:5.5 (1695.1) イエスが雨の中に出て来ると、まずペトロスを見て、次に、奮闘している漕手のいる暗黒をのぞき込み、動揺してまだ自分の櫂に戻っていないサイモン・ペトロスに一瞥を返して言った。「皆はなぜそのように恐がっているのか。信仰はどこにあるのか。穏やかに、静かにしなさい。」イエスが、ペトロスや他の使徒を叱責するや否や、ペトロスに騒ぐ魂を落ち着け、安らぎを求めるように命じるや否や、乱れた空気は、その平衡が定まり非常に穏やかになった。短い驟雨を降らせた暗雲が消えると共に、荒波はほとんどすぐに静まり、空の星は頭上に輝いた。我々が判断できる限り、このすべては、全く偶然の一致であった。しかし、使徒、特にサイモン・ペトロスは、この出来事を自然の奇跡と見なすことをやめることは決してなかった。当時の人々にとって自然の奇跡を信じることは、特に簡単であった、なぜな

ら、すべての自然が、精霊の力と超自然的な存在体の直接の支配下の現象であると堅く信じたので。

151:5.6 (1695.2) イエスは、憂悶する彼等の精神に話しかけ、恐怖に漂う彼らの心に立ち向かったということ、暴風雨に自分の言葉に従うように命令はしなかったということを12人にはっきりと説明したが、無駄であった。あるじの追随者は、常に、そのようなすべての偶然の出来事に対して自身の解釈をすることに固執した。この日から、彼らは、あるじが、自然の力の上に絶対的な力を持っていると考えると言ってゆずらなかった。ペトロスは、いかに「風と波さえ彼に従うか」を語ることに決して飽きなかった。

151:5.7 (1695.3) イエスと仲間が岸に着いたのは、夜も遅く、穏やかで美しい夜であったので、皆は、舟の中で休み、翌朝日の出直後まで岸へは行かなかった。皆、全部でおよそ40人が、集合したとき、「父の王国の課題をじっくり考える間、あそこの丘に上って、数日滞在しよう。」とイエスが言った。

6. ケリサの精神異常者

151:6.1 (1695.4) 湖の東岸近くの大部分は、高地に向かって緩やかな上り坂になっており、この特定の場所では、岸の所々は、湖へと切り立った状態であった。近くの丘の斜面を指して、イエスは、「朝食のためにこの山腹を上り、避難所の幾つかで休んで話そう。」と言った。

151:6.2 (1695.5) この山腹全体は、岩石を削って作られた岩屋に覆われていた。この場所の多くは、古代の墓であった。山腹のほぼ中ほどの小さくて比較的平らな場所にケレサという小さい村の墓地があった。イエスと仲間がこの埋葬地の近くを通っていると、山腹のこれらの洞窟に住んでいる精神異常者が、皆の方へ急いできた。この狂った男性は、以前は足枷と鎖で岩穴の1つに閉じ込められていたので、この辺りではよく知られていた。かなり以前に、かれは、枷を壊してから、そのときは、墓や放棄された塚の間を自由に移動していた。

151:6.3 (1696.1) この男性は、名前をアーモーセと言い、周期的な型の狂気に苦しめられていた。何らかの衣類を見つけ、仲間の間でかなりよく振る舞うかなりの期間があった。かれは、このような正気の合間にベスサイダに行っ

たことがあり、そこで、イエスと使徒の説教を聞き、その時、王国の福音の本気とはいえない信者となった。しかし、間もなく激しい病の様相が現れ、彼は墓場に逃げ、そこで呻き、大声で叫び、偶々出会う者すべてを恐れさせたのであった。

151:6.4 (1696.2) アーモーセがイエスに気づくと、その足元に倒れ伏し、「イエスさま、私は、あなたを存しております。でも私は、多くの悪魔に取りつかれています、あなたが、私を苦しめないよう嘆願します。」と叫んだ。この男性は、自分の周期性の心の病は、それが起こる時は、悪い、または不浄な霊が自分の中に入り込み、その心と身体を支配しているという事実のためであると本当に思っていた。彼の問題は、大部分が、感情—脳はまったく病的ではなかった—からくるものであった。

151:6.5 (1696.3) イエスは、足元に動物のようにかがんでいる男性を見下ろし、手を伸ばして男性の手を取り、立たせて言った。「アーモーセ、君は悪魔に取りつかれてはいない。君が神の息子であるという良い知らせを君はすでに聞いた。この呪縛から出て来ることを君に命ずる。」ア

ーモーセが、イエスのこれらの言葉を聞くと彼の知性に非常な変化が起こり、すぐに健全な心と感情の通常の制御を回復した。この時までには、近村からのかなりの群衆が集合しており、そして高地からの養豚者達も加わって増大したこれらの人々は、精神異常者が、正常な心でイエスとその追随者と自由に談話しているのを見て驚愕した。

151:6.6 (1696.4) 養豚者が従順になっている精神異常者の報を広めるために慌てて村に行くと、数匹の犬が、小さな、放置された30頭ほどの豚の群れに突進し、そのほとんどを絶壁から海へと追い込んでしまった。そして、イエスの臨場と精神異常者の思い違いの奇跡的な回復に関連して、イエスが、アーモーセから多数の悪魔を追放することにより彼を直したということ、これらの悪魔が、豚の群れに入り込んだということ、直ちに豚を下方の海への真っ逆さまの破滅へ追いやったということに伝説の起源を与えたのが、この偶発事件であった。この日が終わる前に、この出来事は、豚の番人達により広く公にされ、村全体がそれを信じた。アーモーセは、この話をすっかり信じた。煩わされた心が静まった直後に、かれは、豚

が丘の崖っぷちを転がり落ちていくのを見たことでもあるし、それほどに長い間自分を悩まし、苦しめていた他でもないその悪霊を連れていったと常に信じた。そして、これは、彼の治癒の永続性と大変に係わりがあった。イエスの使徒達(トーマスを除く)全員が、豚の挿話をアーモーセの治癒に直接関係があるとおもっていたというのは、相等しく真実である。

151:6.7 (1696.5) イエスは求めていた休息を得なかった。その日の大半は、アーモーセが回復したという知らせに反応して来た者達に、そして、魔物が、精神異常者から出て豚の群れに入ったという話によって引きつけられた人々の押し掛けにあった。そして、たった一晩の休息の後の火曜日の朝早々、イエスと友人達は、イエスに彼らの中から離れることを促すためにきた養豚者のこれらの非ユダヤ人の代表団に起こされた。代弁者は、ペトロスとアンドレアスに言った。「ガリラヤの漁師さん、我々から離れ、あなた方の予言者を連れて行きなさい。聖なる人であることを知っているが、我々の国の神はあの人を知らないし、我々は、多くの豚を失うという危機に立っている。我々は、あなた方への恐怖に急襲されたので、ここ

を去るように懇願します。」イエスが代表者達の話を聞くと、「我々の場所に戻ろう。」と、アンドレアスに言った。

151:6.8 (1697.1) 皆が出発しようとしていると、アーモーセは、皆と一緒に行く許しをイエスに切に願ったが、あるじは、同意しなかった。アーモーセに言った。「あなたは神の息子であるということを忘れるでない。自身の人々のもとに戻り、神があなたのためにどんな素晴らしいことをしたかを彼らに教えなさい。」そこでアーモーセは、イエスが、自分の惑乱した魂から悪魔を追い払ったということ、そして、これらの悪霊は豚の群れに入り、それらを素早い撲滅に追いやったということを広めてまわった。そして、イエスは、デカーポリスの全ての都市に入るたびに、自分のためにしたすべての偉大なことを公言した。

論文 152
カペルナムでの危機に導く出来事

152:0.1 (1698.1) ケリサの精神異常者アーモーセ治癒の話が、すでにベスサイダとカペルナムに達しており、その火曜日の昼前、イエスの船が上陸したときには、大勢の群衆が

待っていた。この群れの中に、エルサレムのサンヘドリンからの新たな監視者達が、あるじの逮捕と有罪判決の原因を見つけるためにカペルナムにやってきていた。イエスが、挨拶に集まった人々と話していると、ヤイロス、会堂の支配者の一人は、群衆の間を擦りぬけ、彼の足元に伏し、手を取り、急いで一緒に来るように懇願した。「あるじさま、私の幼い一人子の娘が、死の間際にあり、我が家で横たわっております。あなたが彼女を癒しに来るのを私は念じています。」と言った。イエスは、この父親の要求を聞くと、「一緒に行こう。」と言った。

152:0.2 (1698.2) イエスがヤイロスと行くと、この父親の懇願を聞いていた大群衆は、何が起こるかを見るために後に続いた。まもなく支配者の家に到着する前に、かれらが、狭い通りを急いで通っており、群衆が彼を押し除けたとき、イエスは、突然止まり、「だれかが私に触れた。」と声高に言った。近くにいた者達が触れていないと否定すると、ペトロスは、大声で言った。「あるじさま、あなたにはこの群衆があなたを押し、我々を押し潰しているのが見えています。それでも『だれかが私に触れた。』

とはどういうことですか。」そこでイエスが言った。「生命のエネルギーが私から出て行ったと知覚したので、誰が触れたかを尋ねた。」イエスは、周りを見渡し、近くの女性に目を止めた。その女性は、進み出て、足元に跪いて言った。「長年、難儀な出血に苦しんでおります。多くの医師に掛かり多くの治療に苦しみました。全資産を費やしたきましたが、誰も私を治すことはできませんでした。そうしているうちに、あなたのことを聞き、あの方の衣類の裾に触れでもすれば回復するに違いないと思ったのです。私は、人波の移動と共に前に詰め寄り、あなたの近くに立ったとき、あるじさま、私が、あなたの衣類の縁に触れたのです。そして、私は元通りになりました。私は、病が癒されるいるのが分かるのです。」

152:0.3 (1698.3) イエスは、これを聞くと女性の手を取って立たせながら言った。「娘よ、あなたの信仰があなたを元通りにしたのです。安心して行きなさい。」彼女を元通りしたのは、接触そのものではなく、その信仰であった。そして、この事例は、イエスの地球での経歴に伴う、だが意識的には決意しなかった多くの見かけは奇跡的な治

癒の良い実例である。時間の経過は、この女性の疾患が本当に治されたことを立証した。彼女の信仰は、あるじの人間に内在する創造力を直接につかんだ種類のものであった。彼女の持つ信仰で、あるじに単に近づくことだけが必要であった。衣類に触れることは、全く必要ではなかった。それは単に彼女の信心の迷信的な部分に過ぎなかった。イエスは、彼女の心に長引くかもしれない、またこの治癒を目撃した人々の心に残るかもしれない2つの誤りの是正のために、この女性、ケーサレーア・フィリッピーのヴェーローニカを自分の前に呼んだ。イエスは、治癒を盗みとる試みに対する彼女の恐怖が守られたと考えながら、若しくは、衣類への接触と治療の効果を関連づける迷信を思い描きながら彼女に立ち去らせたくはなかった。彼女の純粋で、しかも生きている信仰が治癒をもたらしたということを全員に分からせたかった。

1. ヤイロスの家にて

152:1.1 (1699.1) ヤイロスは、勿論、帰宅のこの遅れに実に耐えられなかった。そこで、彼等は、そのとき早い速度で急いだ。支配者の庭に入る前に、使用人の一人が出て来た

言った。「あるじさまを煩わせないでください。お嬢さんは亡くなられました。」しかし、イエスは、使用人の言葉を意に介さないようであった。なぜなら、ペトロス、ジェームス、ヨハネを連れて行きながら、「恐れるでない、ただ信じなさい。」と、悲しみにうちひしがれる父に向かって言ったので。家に入ると、かれは、見苦しい騒ぎをしている嘆く者達と共に、すでにそこにフルート奏者達を見つけた。親類達は早くもすすり泣いたり号泣していた。そこで、イエスは、嘆く人全てを出し、父親、母親、３人の使徒と部屋に入った。かれは、少女は死んではいないと会葬者達に告げたが、かれらは嘲り笑った。イエスは、今度は母親に向いて言った。「娘さんは死んではいない。眠っているだけである。」家の中が静まったとき、イエスは、子供の横たわっているところに行き、その手を取り言った。「娘よ、さあ、目を覚まして立ちなさい。」この言葉を聞くと少女は、すぐに起き上がり、部屋の反対側に歩いた。まもなく少女が呆然自失から回復すると、イエスは、長らく食べていないので、何か食べるものを彼女に与えるべきだと指示した。

152:1.2 (1699.2) カペルナムではイエス対するかなりの動揺があったので、かれは、少女は長びく熱のあと昏睡状態にいたのだと、そして自分は、ただ目を覚まさせただけであり、死者の中から甦えらせたのではないのだと家族を集めて説明した。かれは、同様にこのすべてを使徒に説明したが、無駄であった。皆は、幼女を生き返らせたと信じた。イエスがこれらの見た目の奇跡の多くの説明において言ったことは、追随者達には殆ど効果がなかった。彼らは、奇跡志向であり、もう一つの驚くべきことをイエスのものとする機会を逃さなかった。イエスは、誰にも言うべきではない、と皆にはっきり言い渡し、使徒とベスサイダに戻った。

152:1.3 (1699.3) かれが、ヤイロスの家から出て来ると、唖の少年に導かれて２人の盲目の男が、イエスの後を追って、大声で治療を求めた。この頃、癒す人としてのイエスの評判は、その絶頂にあった。行く先々で、病苦に悩む者達が彼を待っていた。あるじは今や、すっかりやつれて見え、友人は皆、イエスが実際に倒れる時点まで教育や治療の仕事を続けないようにと気遣い始めていた。

152:1.4 (1699.4) 庶民は言うまでもなく、イエスの使徒は、この神-人の本質と属性を理解することができなかった。その後のいずれの世代も、人としてのナザレのイエスに地上で生じたことを評価することができなかった。また、そのような並はずれた状況はこの世界でも、またはネバドンの他のどの世界においても決して再び起こりえないという単純な理由でのために、科学、あるいは宗教もにも、これらの注目に値する出来事を調べる機会は、決して起こりえない。決して二度と、この全宇宙のいかなる世界にも、人間の姿での、同時に、時間とほとんどの他の物質的ば限界を超える精霊的贈与に結合した創造エネルギーのすべての属性を具体化するものは、出現しないであろう。

152:1.5 (1700.1) イエスが地球にくる以前、あるいはそれ以来ずっと、人間の男女の強くて生きた信仰に伴う結果を直接的に、ありありと得ることは、決して可能ではなかった。これらの現象を繰り返すために、我々は、創造者であるマイケルの面前に行き、その頃の彼—人の息子—を見つけなければならなかったであろう。同様に、今日、彼の不在がそのような物質的な兆候を防止する間、

人は、彼の精霊的な力の可能な表示にいかなる種類の制限も置くことを慎むべきである。あるじは、具体的な存在として不在であるが、人の心の精霊的な影響として臨場している。この世界から去ることよって、イエスは、全人類の心に宿る父のそれと一緒に彼の精霊が生きることを可能にした。

2. 5,000 人の給食

152:2.1 (1700.2) イエスは、夜は使徒と伝道者に教え、日中は人々に教え続けた。過ぎ越し祭りの間エルサレムに行く準備をする前の数日間、全ての信奉者が、帰宅するか、友人を訪ねられるように、かれは、金曜日に1 週間の休暇を言い渡した。しかし、弟子の半分以上が彼のもとを去ることを拒否し、そして、群衆の数は日毎に増大し、ダーヴィド・ゼベダイオスは、新しい宿営を設立したいほどであったが、イエスは拒否した。あるじは、過ぎ越し祭りの間あまり休息しなかったので、3 月27日、日曜日の朝、人々から逃がれようとした。数人の伝道者は群衆に話ことを任され、同時にイエスと12人は、湖の対岸に気づかれずに逃げることを計画し、そこでベスサイダ-ユーリアスの南にある美しい公園でたっぷり必要な休

息を取ることを提案した。この地域は、カペルナムの人々の気に入りの行楽地であった。皆は、これらの東岸の公園に馴染みが深かった。

152:2.2 (1700.3) だが人々は、そうはさせなかった。彼らは、イエスの舟の行く先を目にし、利用可能なあらゆる舟を雇い追跡を始めた。舟を入手できない者達は、湖の上手の縁に沿って徒歩での旅についた。

152:2.3 (1700.4) 午後遅くまでには、1,000人以上の人々が公園の1つにあるじの居場所を突き止めた。あるじは、人々に簡単に話し、ペトロスがその後を受けて話した。人々の多くは、食物を持参してきており、夕食後、小集団で散在し、イエスの使徒と弟子が彼らに教えた。

152:2.4 (1700.5) 月曜日の午後には、3,000人以上にまで膨らんだ。そして、さらに—夕方までずっと—凡ゆる種類の病人を連れ、人々は群らがり続けた。何百人もの関心のある者は、過ぎ越し祭りへの途中にイエスを見たり聞いたりするためにカペルナムに寄る計画を立て、しかも簡単に諦めようとはしなかった。水曜日の正午までには、およそ5,000人の男女、子供が、ここ、ベスサイダ-ユー

リアスの南のこの公園に集った。この地方は梅雨の終わり頃にあって、天気は心地良いものであった。

152:2.5 (1700.6) フィリッポスは、すでにイエスと12人のための３日間の食物を用意しており、雑役少年マルコス少年がそれを管理していた。この群衆のほぼ半分は、３日目に入り、この午後までには、人々が持参して来た食物は、ほとんで消費されていた。ダーヴィド・ゼベダイオスには、群衆に食事をさせ、かつ収容するための宿営生活のできる町がここにはなかった。フィリッポスもまたそのような大人数のための食料の準備をしていなかった。しかし、空腹ではあったが、人々は立ち去ろうとはしなかった。イエスが、ヘロデとエルサレムの両者の指導者達との揉め事の回避を望み、戴冠される王の適切な場所として全ての敵の管轄外のこのひっそりとした場所を選んだのだと、静かに噂が流れ、人々の関心は、時間ごとに高まっていった。勿論、イエスには一言も告げられなかったが、彼には事の次第が全て分かっていた。12　人の使徒さえ、まだそのような考えに汚されていた。特に若手の伝道者達が。イエスが王であると宣言するこの試みを支持した使徒は、ペトロス、ヨハネ、シーモン・　ゼ

ローテース、ユダ・イスカリオーテスであった。計画に反対した者は、アンドレアス、ジェームス、ナサナエル、トーマスであった。マタイオス、フィリッポス、アルフェウスの双子は、どっちつかずであった。王にするこの策略の首謀者は、ヨアブ、若い伝道者の一人であった。

152:2.6 (1701.1) これが、イエスが、アンドレアスとフィリッポスを呼び出すようにジェームス・アルフェウスに頼んだ、水曜日の午後5 時頃の舞台設定であった。イエスが言った。「群衆をどうしようか。多くの者が、もう3日も我々と共におり、空腹である。食物も持っていない。」フィリッポスとアンドレアスは、視線を交わし、次にフィリッポスが答えた。「あるじさま、これらの人々が、村の周辺に行き食物を買うことができるように追い払うべきです。」アンドレアスは,そこで、王にする計画の具体化を恐れ、すぐにフィリッポスと合流して言った。「はい、あるじさま、ご自身のしばしの休息を確保する間、群衆は、食物を買えるように解散させるのが最善だと思います。」12人の他のものは、この時までには会議に参加していた。そしてイエスが言った。「しか

し、彼らを空腹状態で送り出したくはない。食べさせてはやれないのか。」これは、フィリッポスの手には負えなかったので、すぐに、はっきりと言った。「あるじさま、この田舎の地で、この群衆のためにどこでパンが買えますか。200デナリウス相当では昼食には足りません。」

152:2.7 (1701.2) 使徒達が、思っていることを言う前に、イエスは、アンドレアスとフィリッポスの方に向いて言った。「人々を追い払いたくない。彼らはここで、羊飼いのない羊のようにいる。食べさせたい。我々にはどんな食物があるのか。」フィリッポスが、マタイオス、そしてユダと話している間、アンドレアスは、食料の蓄えがどれ程あるかを確かめるために若者マルコスを捜した。アンドレアスは、イエスのところに戻って言った。「若者には５つの大麦パンと２匹の干し魚しか残っていません」—すかさず、「我々は今夜まだ食べていません。」と、ペトロスが言い添えた。

152:2.8 (1701.3) 一瞬、イエスは黙って立っていた。はるか彼方を見ている目付きであった。使徒達は何も言わなかっ

た。イエスは、突然アンドレアスの方に向いて言った。「そのパンと魚を持ってきなさい。」アンドレアスがイエスに篭を持って来ると、あるじは「群衆に100人ずつの隊になり草の上に座らせ、各隊の長を一人ずつ任命し、また同時に伝道者全員をここに連れてきなさい。」と言った。

152:2.9 (1701.4) イエスは、パンを手にして感謝を表した後、それをちぎって使徒達に与え、彼らは、それを伝道者達に渡し、伝道者達は次にこれを群衆へと運んだ。イエスは、同様に魚を分け与えた。そこで、この人の群れは、食べて満たされた。群衆が食べ終えたとき、イエスは、弟子達に言った。「無駄にならないように残っているパンの欠片を集めなさい。」そこで、欠片を寄せ集めてみると12篭分あった。この飛び切りの馳走を食べたのは、男女、子供、およそ5,000人にのぼった。

152:2.10 (1702.1) そして、これは、イエスが、意識して事前に計画した結果実行した最初で最後の自然の奇跡である。弟子達が、そうではない多くの事柄を奇跡と呼ぶ傾向にあったのは事実であるが、これは、本物の超自然の働き

であった。我々はそう教えられたのであるが、この場合、マイケルは、時間要因と可視の生命回路は別として、いつもするように食物要素を増加したのであった。

3. 王に仕立て上げる挿話

152:3.1 (1702.2) 超自然的エネルギーによる5,000 人の給食は、人間の哀れみと創造力が、もたらしたそれらの事例のもう一つの例であった。群衆は充分に満たされ、そしてイエスの名声が、その時そこでこの途轍も無い驚きにより増大させられたので、あるじを差し止めたり、彼が王であると宣言する企ては、これ以上の個人の指示を必要としなかった。その考えは、伝染のように群衆の間で広まるようであった。群衆の身体的要求へのこの突然の劇的な供給に対する彼らの反応は、深くて圧倒的であった。長い間、ユダヤ人は、ダーヴィドの息子である救世主が来るときは、再び陸を牛乳と蜂蜜で溢れさせると、また荒野で天の恵みのマナが、祖先に降ると考えられていた生命のパンが与えられると、教えられていた。そして、この期待の全てが、そのときまさしく目前で実現されたのではなかったのか。この空腹の、栄養不足の群衆が、奇跡の食物で腹を満たし終えたとき、ただ一つの満場一

致の反応しかなかった。「ここに、我々の王がいる。」イスラエルの驚異を為す救出者は来た。食べ物を与える力は、この単純な人々の目には統治する権利と関連づけられた。従って、群衆が、馳走になり終えたとき、一団となって立ち上がり、「王にしよう。」と叫んだのは当然であった。

152:3.2 (1702.3) この強大な叫び声は、イエスが、統治の権利を主張するのを見る望みをまだ保持していたペトロスと使徒の何人かを夢中にさせた。しかしながら、これらの空頼みは、長くは続かなかった。間近の岩に反響する群衆のこの強大な叫びが、ちょうど止み、イエスは、巨大な岩に上がり、注目を促すために右手を上げて、言った。「我が子よ、君達は、よかれと思ってしているが、近視で物質志向である。」短い沈黙があった。この信念の強いガリラヤ人は、その東の薄明かりの魅惑的な輝きの中に荘厳衣にそこにいた。固唾をのむこの群衆に話し続けるにつけ、かれは、どこから見ても王に見えた。「君達が私を王にしたいのは、その魂が偉大な真実で点されたからではなく、腹がパンで満たされたからである。我が王国はこの世ではないということを何度君達に教えてき

たことか。我々が公布する天のこの王国は、精霊的兄弟愛であり、誰も有形の王座に着き、これを支配はしない。天の父は、地上の神の息子この精霊的兄弟愛の全知、全能の支配者である。君達が生身の姿の息子を王にしたい程までに、私は精霊の父を君達に明らかにするのに失敗してしまったのか。直ちに、全員ここから自分の家に帰りなさい。君達に王がいなければならないならば、光の父を万物の精霊の支配者として各人の心の王位に就かせなさい。」

152:3.3 (1702.4) イエスのこれらの言葉は、群衆を唖然とさせ落胆させて去らせた。彼を信じた多くの者が彼に背を向けその日からもう彼を追わなかった。使徒達は、口もきけなかった。かれらは、食物の欠片入りの12　個の篭の周りに集まり、黙して立っていた。雑役少年の若者マルコスだけが、「そして、あの方は、我々の王であることを断った」と言った。イエスは、丘で一人になるために出発する前に、アンドレアスに向かって言った。「仲間をゼベダイオスの家に連れ戻り、一緒に祈りなさい。特にあなたの弟、シーモン・ペトロスのために。」

4. シーモン・ペトロスの夜の幻視

152:4.1 (1703.1) あるじ抜き—自分達だけ—で出発させられた使徒達は、舟に乗り、沈黙して湖の西岸のベスサイダに向けて漕ぎ始めた。12人の誰も、サイモン・ペトロスほどには押し潰され、意気消沈してはいなかった。殆ど言葉は、話されなかった。彼らは皆、丘に一人いるあるじのことを考えていた。かれは、自分達のことを見捨てたのか。かれは、自分達を追い払い、ともに行くことを拒んだことはついぞなかった。この全ては、何を意味するのか。

152:4.2 (1703.2) 前進をほとんど不可能にする強い逆風が起こり、暗黒が皆の上を覆っていた。数時間の暗黒と困難な漕艇において時が経過するにつれ、ペトロスは、すっかり嫌になり、疲労困憊の深い眠りに陥った。アンドレアスとジェームスは、詰め物をした舟の後部の腰掛けにペトロスを休ませた。ペトロスは、他の使徒が風波に向かけ刻苦していす旁らで夢を見た。かれは、海上を歩いて自分達の方に来るイエスの姿を見た。あるじが、舟の側を歩いているように見えたとき、ペトロスは、「我々をお救いください。あるじさま、我々をお救いください。」と大声で叫んだ。そして、舟の後部にいた者達

は、この言葉のいくつかを聞いた。夜間のこの幻影がペトロスの心で続く中、かれは、イエスがこう言うのを聞く夢を見た。「元気を出しなさい。私である。恐れることはない。」これは、ペトロスの動揺した魂にはギラードの香油のようなものであった。それは、当惑した精神を落ち着かせたので、 (夢の中で) あるじに大声で叫んだ。「主よ、本当にあなたであるなら、来てあなたと共に水の上を歩けとお命じください。」そこで、ペトロスが水上を歩き始めると、騒々しい波が彼を怯えさせた。そして、かれは、沈みそうになったとき、「主よ、救ってください。」と大声で叫んだ。12人の多くが、かれのこの叫びを聞いた。次に、ペトロスは、イエスが救助に来て手を差し伸ばし、自分を掴んで持ち上げて「ああ、信仰薄き者よ、お前は何故に疑ったのか。」という夢を見た。

152:4.3 (1703.3) ペトロスは、夢の後半で眠っていた場所から立ち上がり、実際に船外へ踏み出して水の中に入った。そこで、アンドレアス、ジェームス、ヨハネが手を差し出し海から引き上げると、かれは夢から目覚めた。

152:4.4 (1703.4) ペトロスにとって、この経験は、常に本当であった。かれは、イエスがその夜自分達のところに来たと心から信じた。ペトロスは、ヨハネ・マルコスを一部納得させたに過ぎず、それは、マルコスがなぜ一部を自身の物語から省いたかについて説明している。これらの問題を慎重に検索した医師ルカスは、この挿話は、ペトロスの幻視であるとの結論を下し、それ故、彼の物語の下準備においてこの話の採択を拒否した。

5. ベスセイダにて

152:5.1 (1703.5) 木曜日の朝、日の出前、かれらは、ゼベダイオス家の近くの沖合に投錨し、正午頃まで睡眠しようとした。アンドレアスがまず起き、海辺に散歩に出掛けると、雑役少年を連れて水際の石の上に座るイエスを見つけた。群衆の中からの多くの者と若い伝道者達が、夜通し、そして翌日の大半をかけて東の丘の周りを捜したがのだ、イエスとマルコス少年は、真夜中の直後に、湖周を歩き、川向こうへとベスサイダに戻り始めていたのであった。

152:5.2 (1704.1) 奇跡的に食物を与えられ、腹が満たされ心が空のときはイエスを王に据えたがった5,000人のうちのほんの500人程が、彼のあとに続くことに固執した。しかし、彼がベスサイダに戻っているという知らせをこれらの者が受け取る前に、イエスは、「皆に話しがしたい。」と言って女性を含む12人の使徒とその仲間を集めるようにアンドレアスに求めた。そして、すべてが整うとイエスは、言った。

152:5.3 (1704.2) 「私は、どれだけ耐え忍ばねばならないのか。君達は皆、精霊的な理解が遅く、信仰生活が不足しているのか。私は、この数カ月ずっと王国の真実を教えてきたのだが、君達は、依然として精霊的な問題の代わりに物質的な動機に支配されるのか。モーシェが、『恐れるでない。動かずに立ち、主の救済を見よ。』と、不信心なイスラエルの民に熱心に説いた聖書の部分を、君達は、未だ読んだことはないのか。歌い手が言った。『主を信じなさい。』『耐えなさい。主を待ち、勇気をもちなさい。主があなたの心を強くするであろう。』『重荷を主に投げなさい。そうすれば主は、あなたを支えるであろう。いかなるときにも神を信頼し、神に心を注ぎなさ

い。神はあなたの避難場所なのだから。』『いと嵩きものの秘密の場所に住む者は、全能者の影に宿るであろう。』『人間の王子に信用を置くよりも主を信じる方が良い。』

152:5.4 (1704.3) 「そしていま、奇跡の業と物質的な驚きの実行が、精霊的な王国のために魂を勝ち得ないということが、皆には分かるか。我々は、食べさせはしたが、生命のパンへの飢えにも、精霊の正義の水域への渇きへも群衆を導きはしなかった。飢餓が満たされると、かれらは、天の王国への入り口を探さず、むしろ、骨身を削ることなくパンを食べ続けられるためにだけ、この世の王にあやかって人間の王の息子を公表しようとした。多かれ少なかれ、君達の多くが参加したこの全ては、天の父を明らかにもせず、また地上でのその王国を進めるための何もしない。我々は、民間の支配者達までも疎外しそうにならなくても、国の宗教指導者の間にすでに十分な敵はいないのか。私は、父が、あなたを見えるようするためにあなたの目に塗布し、あなたを聞こえるようにするためにあなたの耳を開き、、遂には、私が教えた福音

をあなたが完全に信じることができるようにと、祈る。」

152:5.5 (1704.4) それから、過ぎ越し祭りのためにエルサレムに行く準備をする前に、イエスは、数日間の休息のために使徒と撤退したいと報じ、弟子も群衆もついてくることを禁じた。そこで、イエス、使徒、そして弟子は、2、3日の休息と睡眠のために舟でゲッネサレツ地方へ行った。イエスは、地球での自分の人生の大きな危機に備えていたので、天の父との親交に時間の多くを費やした。

152:5.6 (1704.5) 5,000人の給食とイエスを王にする試みの知らせは、ガリラヤとユダヤ中の宗教指導者と民間支配者双方の間に広がった好奇心を喚起し、恐怖を掻き立てた。この大いなる奇跡は、物質志向の、本気でない信者の魂に王国の福音をさらに促進するための何事もしないと同時に、それは、イエス直々の家族の奇跡を追求し、王を切望する傾向の使徒と間近の弟子を頂点に至らせる目的に適ったのであった。この劇的な挿話は、教育、修練、治療の初期期の時代を終わらせ、その結果、王国の新たな福音—神の息子の身分、精霊の解放、永遠の救済—

のより高く、より精霊的な局面を宣言するこの最後の年の開始への道を準備した。

6. ゲッネサレツにて

152:6.1 (1705.1) ゲッネサレツ地方の裕福な信者の家で休んでいる間、イエスは、午後にいつも12人との略式の談合を開いた。王国の大使は、幻滅した者達の真剣で、冷静で、懲らしめられた一行であった。しかし、そのすべてが起こった後でさえ、また、その後の出来事が明らかになるにつれても、これら12人の男達は、ユダヤの救世主の到来に関する生得の、また永らく心に抱いた考えからまだ完全に救われたというわけではなかった。数週間前の出来事は、驚かされたこれらの漁師にとって完全な意味を掴むことができないほど迅速に動いた。基本的な社会的行為、哲学的態度、および宗教信念の概念を徹底的、また大規模な変化を男女にもたらすには、時間を必要とする。

152:6.2 (1705.2) イエスと12人がゲッネサレツで休息している間、群衆は、離散した。一部は家に戻り、他の者は過ぎ越し祭りのためにエルサレムへとさらに進んだ。ガリラ

ヤだけでも５万人以上を数えたイエスの熱心でおおっぴらな追随者は、１カ月足らずの間に500人足らずにまで萎んだ。イエスは、大衆人気の変わり易さを使徒に経験させ、彼等だけに王国の仕事を任せた後、そのような一時的な宗教の病的興奮の徴候への依存に誘惑されないということを教えたかったのだが、この努力は部分的にしか成功しなかった。

152:6.3 (1705.3) ゲッネサレツ滞在の２晩目、あるじは、使徒に再び種を蒔く人の話をし、以下のことを加えた。「ほら、子供等よ、人間の心情への訴えは一時的であり、全く期待はずれである。人の知性のみへの訴えは同様に空しく、不毛である。持続する成功を遂げることを望み、また信仰の光—天の王国—への精霊の誕生により疑心の暗黒からこのように救われる全ての者の日常生活における精霊の本物の果実の豊富な実りにやがて示される人間の性格のそれらの驚異の変容を成し遂げることを望むことができるのは、ただ人間の心の中に住む精霊に訴えることによってだけである。

152:6.4 (1705.4) イエスは、知性ある興味を引き、集中させる技法として感情への訴えを教えた。かれは、このように喚起され、生気を吹き込まれた心が、魂への入り口であると明示しており、魂には真実を認識し、真の性格の変化の永久的結果を提供するために福音の精霊的な訴えに応じなければならないという人のその霊精的な資質が住んでいる。

152:6.5 (1705.5) イエスは、間近かに迫る衝撃—わずか数日後のイエスへ対するの大衆の態度における危機—に対し使徒に準備させるためにこのように努力をした。彼は、エルサレムの宗教支配者が、自分達に破壊をもたらすためにヘローデス・アンティパスと共謀するであろうと12人に説明した。12人は、イエスがダーヴィドの王座に着かないつもりだ、と完全に　(最終的ではないが)理解し始めた。かれらは、精霊的真実は、物質的驚異により進められないことであるとより完全に悟った。かれらは、5,000人の給食やイエスを王にする大衆受けの運動が、民衆による奇跡探求、驚異の業への期待の頂点であったと認識し始めた。精霊的な篩い分けと容赦のない逆境の迫りくる時をばく然と認め、ぼんやりと予見した。これ

らの12人の男性は、王国の大使として真の自らの任務の本質の実現に次第に目が覚め、また地上でのあるじの活動の最後の年の苦しくてつらい試煉に備え始めた。

152:6.6 (1706.1) 彼らがゲッネサレツを去る前に、イエスは、彼らにこの並はずれた創造力の顕現に係わった理由を話し、またそれは「父の意志に従う」ということを確かめるまで群衆への同情に譲ったのではないということを確信させ、5,000人の奇跡の給食に関し彼等に教えた。

7. エルサレムにて

152:7.1 (1706.2) 4月3日、日曜日、イエスは、12人の使徒だけを伴い、ベスサイダからエルサレムへの旅を始めた。彼等は、群衆を避け、できるだけ注意を引きつけないようにゲラーサとフィラデルフィア経由で旅をした。かれは、この旅行でのいかなる公への教へも禁じた。かれは、エルサレムでの滞在中、教えることも説教することも許可しなかった。一行は、4月6日、水曜日の夕方遅く、エルサレム近くのベサニアに到着した。この一夜は、ラーザロス、マールサ、マリアの家に止まったが、かれらは、翌日分散した。イエスは、ベサニアのラザロの家近くの

サイモンという信者の家にヨハネと身を寄せた。ユダ・イスカリオテとサイモン・ゼローテースは、数人の友達とエルサレムに留まり、残りの使徒は、異なる家に二人ずつが滞在した。

152:7.2 (1706.3) イエスは、この過ぎ越し祭りの間に一度だけエルサレムに足を踏み入れたが、それは、祝宴の最高の日であった。エルサレム信者の多くは、ベサニアでイエスに会うためにアブネーに連れ出された。このエルサレムでの滞在中、12　人は、あるじに対していかに苦々しいしい感情を大衆が抱き始めたかが分かった。皆は、危機が迫っていると考えてエルサレムを出発した。

152:7.3 (1706.4) ４月24日、日曜日に、イエスと使徒は、エルサレムを立ち、ヤフォ、カエサレア、プトレマイスの海岸の街を通ってベスサイダへ向かった。そこから、陸路でラマハとホラズィン経由し、４月29日、金曜日にベスサイダに到着した。家に到着するとすぐに、イエスは、翌日が安息日であるので、午後の礼拝で話す許可を礼拝堂の長に求めるようにアンドレアスを急派した。そして、

イエスは、それが、カペルナムの会堂での話すことが許可される最後の時となることをよく知っていた。

論文 153
カペルナムでの危機 ２５，６

153:0.1 (1707.1) 金曜日の夜、ベシサイダ到着の日と安息日の朝、使徒は、イエスが真剣に何らかの重大な問題に専念しているのに気づいた。かれらは、あるじが、ある重要事項について尋常ではない思索に耽けっているのを認識した。かれは、朝食をとらず、正午にもほとん食べなかった。安息日まる一日と前の晩、12　人とその仲間は、家の周りや、庭の中、そして海岸沿いに幾つかの小集団で集められた。彼ら全員には不安からの緊張と憂慮からの懸念があった。エルサレムを出て以来、イエスは、彼等にあまり口をきいていなかった。

153:0.2 (1707.2) かれらは、あるじがそれほどまでに没頭し、無口であるのを何カ月も見掛けなかった。シーモン・ペトロスさえ、意気消沈とまではいかなくても、元気がなかった。アンドレアスは、打ち萎れた仲間達のために何をすべきか分からずに途方に暮れた。ナサナエルは、自分達は「嵐の前の静けさ」の真っ只中にいるのだと言っ

た。トーマスは、「並外れている何かが起ころうとしている」という意見を述べた。フィリッポスは、「あるじの考えていることが分かるまで、群衆への給食や投宿の計画を忘れてくれ」とダーヴィド・ゼベダイオスに助言した。マタイオスは、資金補給のために努力していた。ジェームスとヨハネは、会堂での来たるべき説教について論議し、その可能な論題の特徴と範囲に関して推測した。シーモン・ ゼローテースは、「天の父は、その息子の擁護と援護のための何らかの予期されない方法で干渉しようとしているかもしれない」という信念、実際には望みを表明した。一方、ユダ・イスカリオーテスは、おそらくイエスは、「5,000 人にユダヤ人の王であると宣言する度胸と勇気がなかった。」という後悔に塞ぎ込んでいるのだという大胆な考えに耽けってた。

153:0.3 (1707.3) この美しい安息日の午後、イエスがカペルナムの会堂における画期的な説教をするために赴いたのは、そのような気が滅入り陰鬱な追随者の集団の中からであった。側近の追随者からの快い挨拶、若しくは、成功を願う唯一の言葉は、疑わないアルフェウスの双子の一人からであり、かれは、イエスが会堂へと家を出たとき、

陽気に挨拶をして、「父があなたの力となり、今まで以上の大群衆が迎えられますように、我々は祈ります。」と言った。

1. 舞台設定

153:1.1 (1707.4) すぐれた会衆は、この素晴らしい安息日の午後3 時にカペルナムの新会堂でイエスを迎えた。ヤイロスが、司会を勤めて、イエスの読む聖書を手渡した。その前日、53人のパリサイ派とサッヅカイオス派が、エルサレムから到着しており、また30人以上の近隣の会堂の指導者や支配者も出席していた。これらのユダヤの宗教指導者は、エルサレムのシネヅリオンからの命令の下で直接に行動しており、かれらは、保守的な先鋒を構成し、イエスと弟子に対して公然たる戦争開始のために来ていた。会堂の名誉の席に、これらユダヤ人の指導者の側に着席していたのは、ヘローデス・アンティパスの公式の監視者達であり、かれらは、兄弟フィリッポスの領地において、イエスがユダヤ人の王だと宣言するための民衆による企てがあったという不穏な報告に関して真実を確かめるように指示されていた。

153:1.2 (1708.1) イエスは、増加する敵の公言、公然たる直々の戦争布告に直面したと理解し、大胆に攻勢をとることに決めた。かれは、5,000人に給食することで、物質的な救世主についての彼らの考えに挑戦した。そのときかれは、ユダヤ人の救出者の概念を攻撃することを公然と再び選択した。この危機、5,000人の給食に始まり、この安息日の午後の説教で終わったこの危機は、大衆の評判と賞賛の流れを外向きに転回するものであった。これからは、王国の仕事は、人類の真に宗教的な兄弟愛のために長続きする精霊的な転向者を勝ち得るより重要な任務にますます関わりがあった。この説教は、議論、論争、決定の時期から公然の戦いと最終的承認、あるいは最終的拒絶への移行における難局を記している。

153:1.3 (1708.2) あるじは、追随者の多くが、ゆっくり、しかし確実に自分を最終的に拒絶する心の準備をしているのをよく知っていた。かれは、弟子の多くが、疑いに打ち勝ち、王国の福音に対する成熟した信仰を勇敢に断言することができる心の訓練と魂の鍛錬を通してゆっくりではあるが、確実に進んでいることを同様に知っていた。イエスは、人が、どのように善と悪の繰り返しの状況の間

で反復選択の遅い過程により、危機直面の際の決断と勇敢な選択の突如の行為の実行のために覚悟するかを完全に理解していた。イエスは、選ばれた使者達に度重なる失望の演習を課し、精霊的試煉の出会いに際しての善悪間の選択のための度々の試験的機会を提供した。かれは、かれらが最後の試煉に遭遇するとき、彼らが事前の、並びに習慣的な心の態度と精霊の反応に従って、必要不可欠な重大決定をすることを追随者に依存できるということを知っていた。

153:1.4 (1708.3) イエスの地球の人生のこの危機は、5,000人の給食に始まり、会堂でのこの説教で終わった。使徒の人生の危機は、会堂でのこの説教から始まり、丸一年続き、あるじの裁判と磔刑まで終わらなかった。

153:1.5 (1708.4) イエスが話し始める前のその午後、かれらが、会堂で座っていると、ただ一つのすばらしい謎、ただ一つの最高の質問が皆の心に浮かんだ。イエスの味方と敵の双方が、ただ一つの考えに耽けった。それは、「何故、彼自身は、大衆の熱意のうねりにそれほどまで故意に、しかも効果的に背を向けたのか。」そして、この説

教の直前直後に、不満な支持者達の疑いと失望が無意識の反抗となり、遂には、事実上の憎しみに変わったのであった。ユダ・イスカリオテが、初めて見捨てるという意識の考えを抱いたのは、会堂でのこの説教の後であった。だが当分の間、かれは、すべてのそのような傾向を上手に扱った。

153:1.6 (1708.5) 誰もが当惑状態にあった。イエスは、彼らが唖然として混乱するままにしておいた。かれは、最近、全経歴を特徴づける最も高度の超自然力の示威に従事していた。5,000人の給食は、ユダヤ人の待ち望まれる救世主の概念に最も訴えた彼の地球人生における一つの出来事であった。しかし、王にされることを即座に、明確に拒否したことによって、この並はずれた利点は、すぐに、しかも説明無しに相殺された。

153:1.7 (1709.1) 金曜日の夕方、そして再び安息日の朝、エルサレムの指導者達は、イエスの会堂での話しを妨げるために長くひたむきにヤイロスと努力をしたが、それは無益であった。この嘆願に対するヤイロスの唯一の回答は、

「私はこの要求を承諾したことであるし、自分の言葉に背くつもりはない。」であった。

2. 画期的な説教

153:2.1 (1709.2) イエスは、申命記に見つけられる法を朗読することでこの説教に入った。「だが、もし神の声に耳を傾けなければ、違背の呪いが、必ずこの民に襲い来る。主は、あなた方が敵に打ちひしがれるようにする。あなた方は、地球のすべての王国に移されるであろう。そして、主は、あなた方とあなた方が祭り上げた王を見知らぬ国の手に任せるであろう。あなた方は、万国の間の恐怖となり、物笑いの種となり、笑い草となるであろう。息子や娘達は、捕われの状態になるであろう。あなた方のうちの在留外国人は、あなた方の上にますます高く上っていき、あなた方は、ますます低く下がっていく。これらの事は、永遠にあなた方やその子孫の上にある、なぜなら、あなた方は、神の声に耳を傾けないので。それゆえ、あなた方に向かってやって来る敵に仕えるようになるのである。あなたは、飢餓と渇きに耐え、この外国人の鉄のくびきを着けるのである。主は、あなたに対して遠くの、地の果てから国を、言葉が分からない国を、

激しい表情の国を、ほとんどあなた方を重んじない国にあなた方を襲わせる。そして、彼らは、あなた方が頼みとしていた高く固められた壁が崩壊するまで、すべての町であなた方を包囲するであろう。そこで、全領土が彼らの手に落ちるのである。また、敵が押さえつける厳しさ故に、この包囲の期間、あなた方は、自身の肉体の果実、つまり、あなた方の息子と娘の肉を食べざるをえないようなことが起こるであろう。」

153:2.2 (1709.3) そして、イエスがこの朗読を終えると、預言者に転じ、イレミアスから読んだ。「『私が送ったしもべの予言者達の言葉に耳を傾けないならば、この家をシーロフのようにし、この町を地の万国の呪いとする。』そして、聖職者と教師達は、主の家でイレミアスがこれらの事を言うのを聞いた。そして、イレミアスが、主が全民衆に伝えよと命じたすべてを話し終えた時、祭司と教師等が、イレミアスを捕らえて言った。『あなたは必ず死ぬであろう。』そこで、全民衆は、主の家でイレミアスの周りに群がった。そして、これらを聞くと、ユダの王子等が、イレミアスを裁いた。その時、祭司と教師達は、王子や全民にこう言った。『この男は死に値する。

我々の町に対し、あなた方が自らの耳で聞いた通りの予言をしたからだ。』そこで、イレミアスは、すべての王子とすべての人々に言った。『主は、あなたが聞いたすべての言葉をこの宮とこの町に対して予言させに私を遣わされた。よって、あなたに向かって宣言された災いから逃がれられるようにあなたの行ないと業を改め、あなたの神、主の声に従いなさい。この通り、見なさい。私は、あなたの手の中にある。あなた方が良いと思うよう、正しいと思うように私としなさい。ただ、もし私を殺すならば、自分達とこの人々とに無実の血の報いを及ぼすということをはっきり知っておきなさい。本当に主が、これらのすべての言葉をあなた方の耳にいれるために私を遣わされたのであるから。』

153:2.3 (1710.1) 「当日の司祭と教師達は、イレミアスを殺そうとしたが、裁判官達は、イレミアスの警告の言葉のために同意しようとしなかった、とはいえ、彼等は、イレミアスを土牢の泥濘に腋が沈むまで紐で沈めた。差し迫る政治上の失墜について同胞に警告せよとの主の命令に従ったとき、この民族が予言者イレミアスにしたことがこれである。今日、私は、あなたに方に尋ねたい。この民

族の主要な聖職者と宗教指導者は、精霊の運命の日について敢えて警告する男をどうするのであろうか。そして、あなた方は、敢えて主の言葉を公布し、天の王国への入口に通ずる光の道を歩むあなた方の拒否を指摘することを恐れない教師を殺そうとするのであろうか。

153:2.4 (1710.2) 「あなたが、、地球での私の任務に関する証拠として探すものは何であるのか。我々は、貧者賤民に朗報を説く間、あなたの勢力と権限の立場を妨害することなくやってきた。我々は、あなたが崇敬するものに対し敵対的な攻撃をせず、むしろ人の恐怖に支配された魂の新しい自由を宣言してきた。私は、父を明らかにし、地球に神の息子の精霊的兄弟愛、天の王国を樹立するためにこの世にやって来た。そして、我が王国は、この世のものではないと、幾度となく念を押してきたにもかかわらず、父は、それでも、あなた方にさらなる証明の精霊的な変化と蘇生に加えて多くの物質的な驚くべき顕示をしてきた。

153:2.5 (1710.3) あなたが、私の手に探している新しい兆しは何なのか。私は、あなた方が決定をすることができる十分

な証拠を既にもっていると宣言する。誠に、誠に、私が、この日私の前に座る多くの者に言っておく。あなたは、どの道を行くのか選ぶ必要性に直面していると。また、私は、ヨシュアがあなた方の祖先に言ったように、「あなたが仕えるお方をこの日選びなさい。」と言う。今日、あなた方の多くが、別れ道に立っている。

153:2.6 (1710.4) あなた方が、対岸での群衆への給食の後に私を見つけることができなかったとき、あなた方の一部が、私の追跡のためにティベリアス漁船団(それは、１週間前、嵐の間近くに避難しにきていた)を雇ったのは何のためか。真実と正義のためにではなく、仲間にいかに仕え、力を貸すかをよく知るためでもなかった。いや、それは、むしろ働かずしてもっとパンを得るためであった。それは、命の言葉で魂を満たすことではなく、ただ容易いパンで腹を満たすことができるためであった。長い間、あなた方は、救世主が来るとき、すべての選ばれた人々に人生が愉快で容易になるそれらの驚くべきことを為すということを教えられてきた。このように教えられてきたあなた方が、それ故、パンと魚を切望しても不思議ではない。しかし、私は、それが人の息子の任務で

はないと断言する。私は、精霊的な自由を宣言し、不朽の真実を教え、生きた信仰を促進しにきたのである。」

153:2.7 (1710.5) 「我が同胞よ、滅失する肉に憧れるのではなく、むしろ永遠の命にさえも栄養を与える精霊的な食物を捜し求めよ。そして、これこそが、それを手に取り食する者すべてに息子が与える命のパンである、なぜならば、父が限りなくこの命を息子に与えたのであるから。そして、あなたが、『神の業を実践するために何を為すべきか。』と訊くとき、私は、『これが神の業である。遣わされた彼を信じること。』であるとはっきりと言う。」

153:2.8 (1710.6) イエスは、その時、この新しい会堂の横木を飾り付けてあった葡萄の房で装飾されたマナの模様の壷を指差して言った。「あなた方は、荒野で祖先がマナ—天のパン—を食べたと思ったが、これは地球のパンであったと告げよう。モーシェは、天からのパンをあなたの祖先に与えはしなかったが、私の父は、今、命の本当のパンをあなた与える準備ができている。天国のパンというものは、神からもたらされ、この世の人に永遠の命を与

えるものである。あなたが、私にこの生きるパンをくれと言うとき、私は答えよう。私がこの命のパンである。私の元に来る者は、腹がへらず、私を信じる者は決して喉が渇かない。あなたは、私に会い、私とともに暮らし、私の仕事をじっくり見てきた、それでも、私が父から来たと未だに信じていない。しかし、信じる者達よ—恐れるでない。父に導かれるすべての者は、私の元に来るであろうし、私の元に来る者は、全く追放されない。

153:2.9 (1711.1) 「また、今、きっぱりと宣言させてもらおう。私は、私自身の意志ではなく、私を寄越されたあの方の意志でこの地球に下りてきたのだと。そして、これは、私を送られたあの方の最終的な意志、私に与えられたすべてのもののうち、1 人も失ってはならないという最終的な意志である。そして、これが父の意志である。息子を見る、また信じる者は皆、永遠の命を得るであろう。つい昨日、私は、肉体のためにパンをあなたに食べさせた。今日、私は、飢えた魂のために命のパンをあなたに勧める。あの時非常に喜んでこの世のパンを食べたように、今、精霊のパンを取りますか。」

153:2.10 (1711.2) イエスが一瞬止まり、会衆を見回すと、エルサレムからの教師の一人(サンヘドリン派の成員)が、立ち上がって尋ねた。「あなたが天から下りるパンであり、モーシェが荒野で我々の祖先に与えたマナはそうではなかったとあなたは言われるのですか。」そこで、イエスは、「あなたは正しく理解している。」とパリサイ人に答えた。すると、パリサイ人が言った。「でも、あなたは、ナザレのイエスであり、ヨセフの息子であり、大工ではないのですか。あなたの父と母は、あなたの弟妹と同様に、我々の多くが、知ってはいませんか。では、あなたが、ここ、神の家に現れ、天から下りたと宣言するというのはどういうことですか。」

153:2.11 (1711.3) この時までには、会堂にはかなりの呟きがあり、騒ぎの恐れがあったので、イエスは、立ち上がって言った。「辛抱しよう。正直な試験は、決してを真実を妨害しない。私は、あなたが言う通りであるが、それ以上である。父と私は一つである。息子は父が教えることだけをして、息子は、父から息子に与えられる全ての者を受け入れるであろう。あなたは、こう預言者に書かれているところ個所を読んだことがある。『あなた方は

皆、神に教えられるであろう。』また、『父の教えを聞く者は、その息子をも聞くであろう』と。内在する父の精霊の教えに屈する者全てが、遂には、私の元に来るであろう。誰とても父を見たというわけではないが、父の精霊は実に人の中に生きる。そして、天から下りてきた息子は、確かに父に会った。そして、本当にこの息子を信じる者は、すでに永遠の命を有している。

153:2.12 (1711.4) 「私はこの命のパンである。あなたの祖先は荒野でマナを食べて死んでいる。だが、神からくるこのパンは、人がそれを食べれば、精霊的に決して死ぬことはない。繰り返す。私はこの命のパンである。そして、神と人のこの結合した本質に目覚めるすべての者は、永遠に生きるのである。私がすべてに与えるこの命のパンを受ける者は、私自身の生ける、また結合した本質である。息子の中の父と、父と一体の息子—それが、世界への生命を与える顕示であり、万民への私からの救済の贈り物である。」

153:2.13 (1711.5) イエスが話し終えると、会堂の支配者は会衆を解散させようとしたが、かれらは、去ろうとはしなか

った。他の者が呟き、また、議論する間、　彼等はさらに多くの質問をするためにイエスの周りに群がった。そして、この状況は3 時間以上続いた。聴衆がとうとう離散するまでには、7 時をはるかに過ぎていた。

3. 会談後

153:3.1 (1712.1) この会談後、イエスへの質問は数多くあった。幾つかは、当惑した弟子が尋ねたが、大方は、イエスを困らせ罠にかけようと粗捜しをする懐疑者達によるものであった。

153:3.2 (1712.2) 燭台に立つ訪問中のパリサイ派の一人が、大声でこの質問をした。「あなたは、命のパンだと言われる。あなたは、私達があなたの肉を食べ、また、あなたの血を飲むために、どのように我々に与えることができるのですか。それを実行することができないならば、あなたの教えにはどんな効果があるのですか。」そこで、イエスはこの質問に答えて言った。「私は、私の肉が命のパンであるとも、私の血がその水であるとも教えはしなかった。しかし、私の肉体の命は、天のパンの贈与であると言った。肉体に与えられた神の言葉の事実と人の

息子が神の意志に服従する現象は、神性の食物に等しい経験の現実を構成する。あなたは、私の肉を食べることも、私の血を飲むこともできないが、ちょうど私が精霊で父と1つであるように、あなたは精霊で私と1つになることができる。あなたは、神の永遠の言葉によって給養されることができる。そして、それこそが誠に命のパンであり、人間の体に似せた者に贈与されてきたものである。そして、あなたの魂には、神の精霊により水が与えられることができる。そして、それこそが本当に命の水である。父は、すべての人に宿り、導くことをいかに望んでいるかを示すために私を世界に送った。そして、私は、この肉体の生活で、全ての人が私と同じように絶えず内在する天なる父を知り、その意志を為すように奮い立たせるために過ごしてきた。」

153:3.3 (1712.3) 次に、イエスと使徒を見張ってきたエルサレムの間諜の一人が、「我々は、あなたもあなたの使徒もパンを食べる前に適切に手を洗わないのに気づきました。あなた方は、穢た洗わない手で食べるそのような習慣は、昔の人々の掟に違反することをよく知っているはずです。あなた方は、杯も食器も適切に洗わない。あなた

が、祖先の伝統と昔の人々の法に対してそのような無礼を働くのはなぜですか。」イエスはこれを聞き、答えた。「あなた方が、伝統の法によって神の戒律に背くのはなぜであるのか。戒律は、『父母を敬え』とあり、必要とあらば、物質を分かち合うことを指示している。ところが、あなた方は、不誠実な子供が、両親が助けられたかもしれない金が、『神へ捧げられた』と言うことを可能にする伝統の法を制定する。子供等が、自身の安らぎのためにそのようなすべての金を後に使用するにもかかわらず、昔の人々の掟は、そのような狡猾な子等をこのようにその責任から解き離つ。このように自身の伝統で戒律を無効にするのは何故であるのか。イエシァジァが、あなた方偽善者についてこのように適切に予言している。『この民は口さきでは私を敬うが、その心は私から遠く離れている。かれらは、人間の戒めを教えとして教示して無意味に私を拝んでいる。』

153:3.4 (1712.4) 「あなたは、あなたが、いかに人間の伝統に固執しながら戒律を捨てているかを知ることができる。要するに、あなたは、自身の伝統を維持しながら、神の言葉を進んで拒絶している。そして、他の多くの方法で、

法と予言者を超えて、自身の教えを敢えて主張している。」

153:3.5 (1712.5) それから、イエスは、全出席者へ向けて自分の所見を述べた。「だが、全員、注意して耳を傾けなさい。口から入るものが、精霊的に人を汚すのではいない。むしろ口から、あるいは心から出るものが、精霊的に人を汚すのである。」しかし、使徒でさえ、完全にその言葉の意味を理解したというわけではなかった。というのも、シーモン・ペトロスも、「聞き手の何人かが不必要に怒らないように、これらの言葉の意味を我々に説明してください。」と尋ねたので。そこで、イエスがペトロスに言った。「君もまた理解できないのか。天なる父が植えなかった植物は、みな抜き取られるであろうということを知らないのか。いまは、真実を知りたい人々へ君の注意を向けなさい。君は、真実を愛するように人を強いることはできない。これらの多くの教師は、盲目の案内人である。盲人が盲人を導けば、双方が穴に落ちるということを、君は知っている。しかし、人を道徳的に汚し、精霊的に悪影響を及ぼすそれらの事柄に関する真実を私が話す間、耳を傾けなさい。口から体に入った

り、または目や耳をから心に接近するものが、人を汚すのではないと、私は断言する。人は、おそらく心からくる、またそのような不浄な人々の言葉と行為に表現されるその悪によって汚されるだけである。悪い考えや、殺人、窃盗、姦通のの危険な企て、それに嫉妬、自負心、怒り、報復、悪態、嘘の証言は、心からくるということを知らないのか。まさにそのようなものが人を汚すのであって、儀式で汚い手でパンを食べるということではない。」

153:3.6 (1713.1) エルサレムにあるシネヅリオンのパリサイ派の委員達は、そのとき、イエスが、冒涜の罪、あるいはユダヤ人の神聖な法を嘲る罪で逮捕されなければならないとほぼ確信していた。そんな訳で、かれらは、昔の人々の法、または、いわゆる国の不成文律の幾つかの討論にイエスを巻き込む、できれば攻撃する努力をした。水がいかに不足していようとも、伝統的に俘にされたこれらのユダヤ人は、毎度の食前に所定の儀式的な手洗いを決して怠らない。「長老の戒律に背くより死ぬ方がましである」というのが彼等の信念であった。イエスが、「救済とは、清い手より、むしろ清い心の問題である」と言

ったと報告されていたので、間諜等は、この質問をしたのであった。しかし、そのような信念が、一度自分の宗教の一部となると、抛擲し難い。この日から何年後でさえも、使徒ペトロスは、清潔、不清潔なものに関するこれらの伝統の多くへの恐怖の束縛にまだ捕らわれており、驚異的で鮮明な夢を経験することによって最終的に救われたのであった。これらのユダヤ人は、洗わない手で食べることは、売春婦を買うのと同様に看做し、双方共に、等く破門の罰に相当するということが思い起こされるとき、この全てがより理解できる。

153:3.7 (1713.2) その結果、あるじは、不成文律—昔の人々の伝統、その全てが、聖書の教えよりもユダヤ人をより神聖で、より拘束する、この法に代表されるラビの規則や規約の全体系の愚かさについて議論し、暴くことにしたのであった。そして、イエスは、これらの宗教指導者との公然の断裂を防止する以上の何もできない時が来たのを知っていたので、余り控えることなくはっきりと意見を述べた。

4. 会堂における最後の言葉

153:4.1 (1713.3) この会談後の議論の真っ最中、エルサレムからからのパリサイ派の一人が、手に負えない反抗的な霊に取りつかれて逆上している若者をイエスの元に連れて来た。かれは、この狂った若者をイエスのところへ案内して、「あなたはこのような苦悩のために何ができますか。悪魔を追放できますか。」と言った。あるじは、若者を見たとき、同情して心が動かされ、若者に来るように合図し、その手を取って言った。「君は、私が誰であるかが分かっている。出て来なさい。そして、君の忠義な仲間の一人に君が戻ってこないのを見届けることを託す。」そうすると、若者はすぐに平常で、正気になった。これは、イエスが、人間から「悪霊」を本当に追い払った最初の例である。以前の全ての事例は、思い込みの悪魔の憑依に過ぎなかった。

153:4.2 (1714.1) しかし、これは、あるじが、これらの僅かな天の反逆者が、特定の不安定な型の人間のそのような弱みに乗じることを永遠に不可能にし、時々起きたそのような時でさえ、当時、そして、あるじの精霊が全ての人に注がれたまさしく五旬節のその日まで、悪魔の憑依の本物の例であった。人々が驚くと、パリサイ派の一人は、

イエスがこれらの事ができるのは悪魔と同盟しているということ、イエスと悪魔が互いに知っているということを、イエスがこの悪魔を追放する際に使った言葉で認めたことになるということだと、立ち上がって告発した。そして、かれは、エルサレムの宗教教師と指導者達は、イエスが悪魔の王子であるベエルゼブブの力でいわゆる奇跡を施すことを決めたのだと続けて述べた。パリサイ人は、「この男と関係してはいけない。魔王と協力している。」と言った。

153:4.3 (1714.2) すると、イエスが言った。「どうして魔王が魔王を追放することができるのか。内部で分かれ争う王国は成立できず、もし家が内輪で分かれ争うならば、それは、まもなく荒廃をもたらす。町というものが、一体となっていなければ包囲に耐えることはできるのか。もし、魔王が魔王を追い出すならば、それは、内輪で分かれ争うことになる。それからどのように、その王国は立ち行けようか。しかし、君は、まずその頑強な者を力ずくで負かし縛っておかない限り、誰も頑強な者の家に入り、品物を強奪できないということを知るべきである。そして、私がベエルゼブブの力で悪魔を追い出すなら

ば、あなた方の息子等は、誰によって悪魔を追い出すのであろうか。それにより、彼らがあなたの裁判官になるであろう。しかし、神の精霊によってもし私が、悪魔を追放するならば、本当に、神の王国はあなたに方の上に来たのである。あなたが偏見に目をくらまされていなければ、恐怖と自負心に迷わされていなければ、あなたは、悪魔よりも偉大な者が、あなたの真ん中に立っているのに容易に認めるであろう。あなたは、私と共にいない者は、私に反対する者であり、私と集まらない者は、方々に散る者であると宣言することを私に強要している。目を見開き、計画的な悪意をもって、故意に神の働きを悪魔の行為のせいだと思うあなた方に厳粛な警告をさせてもらおう。誠に、誠に、言っておく。あなたの全ての罪は、あなたの全ての冒涜さえも、許されるであろう、だが、熟考と邪な意図で神を冒涜する者は誰であろうと、決して許しを得ることはないと。そのような執念深い邪悪な労働者は、決して許しを求めもしないし受けもしない。かれらは、神の許しを永遠に拒絶する罪で有罪である。

153:4.4 (1714.3) 「あなたの多くは、今日、別れ道にやって来た。あなたは、父の意志と自らが選んだ暗黒の道の間の回避不能の選択をする出発点に来た。そして、あなたは、いま選んで、やがてはそうなるのである。あなたは、木を良くし、その果実を良くしなければならない、さもなければ、木は腐りその実も腐るであろう。父の永遠の王国では、木はその実で分かると、私は断言する。しかしながら、君達の中の毒蛇のような者が、すでに悪を選んでいるのでは、いかにして、良い実をつけることができるのか。とどのつまり、あなたの口は、心の悪の豊かさから話すのである。」

153:4.5 (1714.4) その時、パリサイ派の別の者が立ち上がって言った。「先生、あなたの権威と教える権利の確立とみなして、同意する予め定められた印を我々に下さい。そのような取り決めに同意してもらえますか。」これを聞いたイエスが言った。「この不信仰で兆しを求める時代は、印を探すが、あなたがすでに持っているもの、それと人の息子があなたを後にするときに見るであろうそれ以外は、前兆は、与えられはしない。」

153:4.6 (1714.5) 話し終えると、使徒は、イエスを囲んで会堂から連れ出した。黙ってかれらは、ベスサイダへと帰った。かれらは、突然のあるじの教えの変化に驚嘆し、やや恐怖に襲われていた。そのような好戦的な態度をとるあるじを見ることに、かれらは全く不慣れであった。

5. 土曜日の夜

153:5.1 (1715.1) イエスは、繰り返し使徒の望みを粉微塵に打ち砕いてきた。かれは、繰り返し彼等の最も気に入りの期待を押し潰してきたが、いかなる失望の時、あるいは悲しみの季節も、そのとき襲っていたそれに、匹敵するものは決してなかった。そして、このときかれらの安全に対する本当の恐怖は、憂鬱と混ざっていた。使徒は全員、民衆の放棄の突然さと完全さに非常に驚いた。かれらは、エルサレムからやってきたパリサイ派が示した予想外の大胆さと断定的な決意にも、いくらか怯え、まごついていた。しかし、彼らは、イエスの戦術の急転に最もうろたえた。普通の情況下では、かれらは、このより好戦的な態度の様子を歓迎したことであろうが、あまりに予期しなかった多くのこととしかも、このように起きたことが、皆を驚かせた。

153:5.2 (1715.2) さて、これらの心配の全ての上に、イエスは、家に着いたとき食べることを拒否した。何時間も、かれは、階上の1 室に孤立した。伝道者の指導者ヨアブが、戻ってきて、仲間のおよそ1/3 が運動を見捨てたと報告したのは真夜中頃であった。忠誠な弟子達は、夜通し行き来し、カペルナムでのあるじへの嫌悪感は、一般的であったと報告した。エルサレムからの指導者達は、この不満感をつのらせること、また、あらゆる可能な方法でイエスとその教えから遠ざける動きの促進にぐずぐずしてはいなかった。この試煉の時、12人の女性は、ペトロスの家での会議にいた。彼女等は、非常に動揺したが、一人として離れなかった。

153:5.3 (1715.3) イエスが上の部屋から下りてきて12 人とその仲間、合わせておよそ30 人の間に立ったのは、真夜中を少し過ぎてであった。イエスが言った。「この王国のふるいにかけることが、君達を苦しめていると分かるが、それは、避けられない。それにしても、全ての訓練を受けてきた後に、なぜ躓くべきなのか、何らかの適当な理由があったのか。王国が、これらのいい加減な群衆や熱のない弟子達を除去しているのを見るとき、恐怖と狼狽

に満ちているのは何故なのか。新しい日が、天の王国の精霊的な教えの新たな栄光で輝き放つために明けようとしているのに、なぜ嘆き悲しむか。この試煉に耐えるのが難しいと分かるならば、人の息子が父の元に戻らなければならないとき、何をするのか。そこからこの世に来た場所に私が昇る時に、いつ、また、いかように準備するつもりなのか。

153:5.4 (1715.4) 「愛しい者達よ、命を与えるのは精霊であることを思い出さねばならない。肉とそれに伴う全ては、ほとんど益をもたらさない。私が話してきた言葉は、精霊であり命である。元気を出しなさい。私は君達を見捨ててはいない。多くの者が、最近の率直な話しぶりに機嫌を損ねているであろう。すでに君達は、弟子の多くが背を向けたと聞いた。彼らはもう私と共に歩まない。最初から、私には、これらの本気でない信者が落伍することが分かっていた。私は、君たち12人を選び、王国の大使として確保しなかったか。そして、今、このような時に、君達も見捨てたいのか。君達の1 人が重大な危険にさらされているので、各人が自身の信仰に目をむけなさい。」イエスが話し終えると、シーモン・ペトロスが言

った。「はい、ご主人さま、私達は悲しくて当惑していますが、あなたを決して見捨てるつもりはございません。あなたは、永遠の命の言葉を教えてくれました。私達は、あなたを信じ、この間ずっとあなについて参りました。我々は、背を向けるつもりはありません。あなたが神によって送られてきたのが分かっていますので。」ペトロスが話しを止めると、皆は、忠誠の誓いに賛成して一斉に頷いた。

153:5.5 (1716.1) そこで、イエスが、「休みなさい。忙しい時が待ち構えている。多忙な日々は、すぐ先にある。」と言った。

論文 154
カペルナムの最後の数日

154:0.1 (1717.1) 波瀾に満ちた４月30日、土曜日の夜、イエスが安らぎと勇気の言葉を意気消沈してうろたえている弟子へ述べているとき、ティベリアスでは、ヘローデス・アンティパスとエルサレムのシネヅリオン派を代表する特別委員の一団との間で、協議会が開かれていた。これらの筆記者とパリサイ派は、ヘロデにイエスを逮捕するよう迫っていた。彼等は、イエスが、意見の相違、謀反

へさえと、大衆を掻き立てているとヘロデを納得させるために全力を尽くした。しかし、ヘロデは、政治犯としてイエスに立ち向かう行為を拒否した。ヘロデの顧問達は、王の宣言をすることへの人々の要請に、また、イエスが、その提案をいかように拒絶したときの湖の対岸での出来事を正しく報告済みであった。

154:0.2 (1717.2) 妻が女性活動団体に属するフーザスというヘロデの幕僚の一人は、イエスは、地球上の統治問題への干渉が意図ではなく、信者の精神的兄弟愛、イエスが天の王国と呼ぶ兄弟愛の確立だけに関心があるということをヘロデに報告していた。ヘロデは、フーザスの報告をとても信用しており、イエスの活動を妨げることを拒否するほどであった。またこのとき、洗礼者ヨハネへの迷信的な恐れによりイエスに対する態度において、ヘロデもまた影響を受けていた。ヘロデは、何も信じないと同時に、全てを恐れた背教のユダヤ人の一人であった。かれは、ヨハネを殺したことを疚しく思っており、イエスに対するこれらの陰謀に巻き込まれたくなかった。イエスにより明らかに癒された多くの病気の事例を知ってお

り、予言者か、あるいは比較的害のない宗教狂信者のどちらかであると見なした。

154:0.3 (1717.3) ヘロデは、これらのユダヤ人が、反逆の対象者を保護しているとケーサーに報告すると脅かしたとき、彼らに協議室から出て行くように命じた。という訳で、問題は1 週間放置され、イエスは、この間追随者に切迫した分散に対する準備をさせた。

1. 1 週間の協議

154:1.1 (1717.4) 5月1日から5月7日まで、イエスは、ゼベダイオス邸において追随者との親密な協議をした。これらの会議には、頼りになり信頼できる弟子だけが許された。このとき、パリサイ派の反対に対して勇敢に立ち向かい、公然とイエスへの忠誠を宣言する道徳的な勇気を持つ者はおよそ100人の弟子だけであった。イエスは、午前、午後、夜間にこの集団との会合を開いた。毎午後、質問者の小集団は、湖畔に集合し、そこでは、数人の伝道者か使徒が、講演をした。これらの一団は、50人を滅多に越えなかった。

154:1.2 (1717.5) この週の金曜日、カペルナムの会堂の支配者達により、イエスとそのすべての追随者への神の家の閉鎖という公式の行動が取られた。この動きは、エルサレムのパリサイ派に扇動されてとられた。ヤイロスは、最高支配者として公然とイエスに同調した。

154:1.3 (1718.1) 湖畔での最後の会合は、５月７日、安息日の午後にもたれた。イエスは、そのとき集合していた150人足らずの者に話した。この土曜日の夜、イエスとその教えに対する大衆の注目の傾向は、最低調を記した。その時以来、確実で緩慢な、だがより健康で信頼できる好もしい感情の増大があった。精霊的信仰と真の宗教経験においてより地に足のついた新しい随員達が増えた。追随者がもつ王国の唯物的概念と、イエスが教える理想主義的かつ精霊的な概念の間での多少の合成と妥協している変遷時期は、そのとき確実に終わった。これから先、大規模で広範囲の精霊的意味合いにおける今まで以上の公然たる王国の福音の公布があった。

2. 1 週間の休息

154:2.1 (1718.2) 西暦29年、５月８日、日曜日、エルサレムにおいて、シネヅリオン派は、パレスチナの全会堂をイエスとその追随者に対して閉ざす法令を可決した。これは、エルサレムのシネヅリオン派による権威の新たな、前例のない強奪であった。その時まで、各会堂は、崇拝者の独立した集会団体として存在し、機能しており、それ自体の支配者達の規則と指示のもとにあった。エルサレムの会堂だけが、シネヅリオン派の承認を受けてきた。シネヅリオン派のこの即決行為の後に、その５人の委員の辞任が続いた。この法令を伝え、実施するために、100人の使者が、即刻、派遣された。2 週間の短期間に、ヘブロンの会堂を除くパレスチナのあらゆる会堂が、シネヅリオン派のこの宣言書に屈した。ヘブロンの会堂の支配者達は、自分達の集会に対するそのような司法権を行使するシネヅリオン派の権利を認めることを拒否した。エルサレムの命令に応じるここの拒否は、イエスの主張への共感というよりもむしろ会衆の自治の主張に基づくものであった。その後まもなく、ヘブロンの会堂は、火事で崩壊した。

154:2.2 (1718.3) この同じ日曜日の朝、イエスは、1 週間の休暇を宣言し、弟子の全員に家に帰るか、友人のもとに行くかして、弱った魂を休ませ、愛しい者達に励ましの言葉を掛けるようにと、言い渡した。「王国の拡張を祈る間、遊ぶか、釣りをするために処々方々に行きなさい。」と、言った。

154:2.3 (1718.4) この休息の週、イエスは、湖畔の多くの家族や団体を訪問することができた。また、時折ダーヴィド・ゼベダイオスと釣りに出掛けが、単独で歩き回るときは、ダーヴィドに最も信用された2、3人が、いつも近くに潜み、かれらは、イエスの護衛に関し頭から絶対の命を受けていた。いかなる類の公開の教えも、この休息の週にはなかった。

154:2.4 (1718.5) これは、ナサナエルとジェームス・ゼベダイオスが、軽いとは言えない病気に苦しんだ週であった。3 昼夜、二人は、痛みを伴う消化障害に激しく煩わされた。3 晩目、イエスは、ジェームスの母サロメを休ませ、苦しむ使徒を介抱した。もちろん、イエスは、即座にこの 2 人を癒すことはできたが、それは、時空の進化

する世界における人間の子のこれらのありきたりの困難や苦悩の対処における息子の方法でも父の方法でもない。かつて一度として、イエスは、肉体での波瀾万丈の全人生を通して、地球の家族のいかなる成員、あるいは直々の追随者のためにどんな種類の超自然の世話にも係わらなかった。

154:2.5 (1719.1) 必滅の創造物の進化している魂は、その成長と発達、つまり進歩的な完全性に対して与えられた経験修練の一部として、宇宙の困難に直面し、惑星の障害に、対処しなければならない。人間の魂の精霊化は、広範囲にわたる本当の宇宙問題を教育的に解決する直接的な経験を必要とする。意志をもつ被創造物の動物の性質と下級の形態は、環境の容易さの中では都合よくは進歩しない。勤労の刺激に結びつく問題ある状況は、人間の進歩にふさわしい目標達成と精霊の目標のより高い段階の到達に甚だしく貢献する心、魂、精神のそれらの活動を起こすことを企てる。

3. 第2のティベリアス会議

154:3.1 (1719.2) 5月16日、エルサレムとヘローデス・アンティパス双方の権威者の間のティベリアスでの2 回目の会議が召集された。エルサレムからの宗教と政治双方の指導者達が出席していた。ユダヤの指導者達は、ガリラヤとイェフーダの両方の全ての会堂が、イエスの教えに対し実際に閉じられたと、ヘロデに報告することができた。ヘロデにイエスを逮捕させる新たな努力がなされたが、ヘロデは、彼等の言いなりになることを拒んだ。しかしながら、5月18日、ヘロデは、そのような取り決めへのイェフーダのローマ支配者の同意を条件に、シネヅリオン当局が、イエスを捕え宗教上の罪で審理されるためにエルサレムに移すことを許可する計画に同意した。一方、イエスの敵は、ヘロデがイエスに敵対的になったと、またその教えを信じる者全てを撲滅する気つもりだという噂をガリラヤ中に勤勉に広めていた。

154:3.2 (1719.3) 5月21日、土曜日の夜、エルサレムの民間当局は、イエスが、ユダヤ国家の神聖な法の無視の容疑で捕らえられ、シネヅリオン派の前における裁判のためエルサレムへ連れていかれるというヘロデとパリサイ派の協定に何の異議もないという知らせが、ティベリアスに届

いた。それに応じて、この日の真夜中直前に、ヘロデは、シネヅリオンの役員達が、自分の領地内でイエスを捕まえ力ずくで裁判のためにエルサレムへ連れていく権限を与える命令書に署名した。この許可を与えることに同意する前に、多方面からの強い圧力がヘロデに加えられた。そして、かれは、エルサレムでは、イエスにとって厳しい敵の前での公正な裁判を期待することができないことをよく知っていた。

4. カペルナムの土曜日の夜

154:4.1 (1719.4) この土曜日の同じ夜、指導的立場にある50人のカペルナムの市民団体は、重要な問題を議論するために会堂で会った。「イエスをどうするか。」かれらは、夜中過ぎまで話し、議論し合ったが、賛同のための何の共通基盤も見い出せなかった。イエスが救世主、少なくとも聖なる人、または恐らく予言者であるかもしれないという信念に傾きがちの数人は別として、集会は、イエスについての以下の視点を保持するほぼ同数の４つの集団に分割された。

154:4.2 (1719.5) 1. かれが、惑わされた無害な宗教的な狂信者であったこと。

154:4.3 (1719.6) 2. かれが、反逆を巻き起こすかもしれない危険で腹黒い扇動者であること。

154:4.4 (1720.1) 3. かれが、悪魔と同盟している、悪魔の王子でさえあるかもしれないこと。

154:4.5 (1720.2) 4. かれが、我を忘れ、気が狂い、精神的に均衡を失っていること。

154:4.6 (1720.3) 一般人にとっては衝撃的なイエスが唱道する主義について、多くの話があった。敵は、イエスの教えが非実用的であり、皆がその考えに従って正直に生きる努力をするならば、全てが瓦解すると主張した。また、その後の何世代もの人間が、同じことを言った。多くの知的で善意の人々は、これらの顕示がより教化された時代にさえ、現代文明が、イエスの教えに基づいては築かれ得なかったかもしれないと主張し、—そして、彼等は部分的に正しい。しかし、そのような全ての懐疑者達は、はるかに優れた文明が、彼の教えの上に築きあげること

ができたかもしれないということを忘れており、そして、いつかは、そうなるのである。この世界は、いわゆるキリスト教と呼ばれる主義に従う生半可な試みがなされたにもかかわらず、大規模にイエスの教えを本気で実行しようとしたことがなかった。

5.多事多端な日曜日の朝

154:5.1 (1720.4) 5月22日は、イエスの人生で多事な日であった。この日曜日の朝、夜明け前、ダーヴィドの使者の一人は、ティベリアスから大急ぎで到着し、シネヅリオン派の役員によるイエスの逮捕をヘロデが認可したか、または認可するところであるという知らせを携えてきた。この切迫した危険の知らせの受領は、ダーヴィド・ゼベダイオスが、使者を起こし、そしてすべての地方の弟子集団のもとに彼らを遣わせ、その朝7 時に緊急協議のために彼らを呼び出させることとなった。ユダ(イエスの弟)の義理の姉妹が、このただならぬ報告を聞くと、急いで近くに住まうイエスの全家族に知らせ、直ちにゼベダイオス邸に集合するように勧めた。そして、この急の呼び出しに応じ、やがて、マリア、ジェームス、ヨセフ、ユダ、ルースが集まってきた。

154:5.2 (1720.5) この早朝の会合で、イエスは、集った弟子に送別のための指図を与えた。つまりかれは、カペルナムからすぐに追い払われることを熟知していたので、さしあたって皆に別れを告げた。結果に関係なく、かれは、神に指導を仰ぎ、王国の仕事を続けるよう二全員に指示した。伝道者は、召喚されるかもしれないそのような時だと思う時まで働くことになっていた。イエスは、自分に同行する12人の伝道者を選出した。12人の使徒には、たとえ何が起ころうとも自分と共にいることを命じた。かれは、12人の女性には、召集されるまでゼベダイオスとペトロスの家に残るように命じた。

154:5.3 (1720.6) イエスは、ダーヴィド・ゼベダイオスの全国的な使者活動の続行に同意し、ダーヴィドは、やがてあるじへに暇乞いをして言った。「仕事にお進みください、あるじさま。偏狂者に掴まることなく、使者があなたの後について行くということを決して疑わないでください。私の部下は、決して連絡を絶つことはありませんし、彼らを通じて、他の地域での王国について知ることができますし、私達は全員、あなたについて知ることができます。私の身に何が起ころうとも、1 番目と2 番目

の、さらには3 番目の指導者を指名してありますので、この活動を妨害するものは何もありません。私は教師でもなく伝道者でもありませんが、こうすることを非常に望んでおり、何も私を止めることはできません。」

154:5.4 (1720.7) この朝の7:30頃、イエスは、話を聞くために屋内に集まった100人ほどの信者への送れの挨拶を始めた。これは出席者全員にとり厳粛な機会であったが、イエスは、殊のほか愉快そうに見えた。もう一度、普段のイエスのようであった。何週間もの物々しさは去り、イエスは、信仰、望み、勇気の言葉で皆を元気づけた。

6. イエスの家族到着す

154:6.1 (1721.1) イエスの地球での家族の5人が、ユダの義理の姉妹の緊急召喚に応じて現場に到着したのは、この日曜日の朝の8　時頃であった。肉体の体をもつ全家族の中で、ルース一人だけが、イエスの地球における神性の任務を心から信じ続けた。ユダ、ジェームス、ヨセフは、まだイエスに対し非常な信頼を寄せてはいたが、その自負心は、より良い判断と真の精霊的な傾向に干渉することをゆるした。マリアは、愛と恐怖の間で、母性愛と家

族の誇りの間で同様に悩んだ。疑念に悩みはしたが、彼女は、イエス誕生前のガブリエルの訪問を決して完全に忘れることができなかった。パリサイ派は、イエスが、我を忘れ、発狂しているとマリアの説得に努力していた。かれらは、彼女に息子達を伴って行き、公開の教えでのこれ以上の努力をイエスに思いとどまらせるように訴えた。かれらは、イエスの健康は直ぐに崩れると、また、イエスを先へ進ませることにより、家族全体が単に不名誉と恥辱を受けるだけだとマリアに請け合って言うのであった。そうしたことから、ユダの義理の姉妹から知らせが来たとき、マリアの家に集まりその前の晩にパリサイ派に会った5 人全員は、ゼベダイオスの家にすぐに出発した。かれらは、エルサレムの指導者達と夜遅くまで話し、多少イエスが奇妙に行動していると、ここのところ奇妙に振る舞っていると、思い込まされた。ルースは、イエスの行為のすべてを説明することはできなかったが、彼がいつも家族を公正に扱っていたと主張し、これから先の仕事を彼に思いとどまらようとする計画に同意しなかった。

154:6.2 (1721.2) ゼベダイオスの家への途中、家族は、これらのことについて話し合い、イエスを家に連れ帰るように説得しようと同意した。マリアの理由は、「息子が帰って来て私の言うことを聞きさえすれば、息子の影響を及ぼすことができるのが分かっている。」であった。ジェームスとユダは、裁判のためにイエスを逮捕しエルサレムに連れて行く計画の噂を聞いていた。また、二人は、自分自身の安全も気遣った。イエスが大衆に人気のある人物である限り、家族は、事をなるがままにしておくことができたが、今は、カペルナムの人々とエルサレムの指導者達が突然イエスに敵対し、家族は、厄介な立場での想定される不名誉の圧力を鋭く感じ始めていた。

154:6.3 (1721.3) 家族は、イエスに会い、彼を脇へ連れていき—緒に家に帰るように迫ることを当て込んでいた。かれらは、彼自身に問題をもたらし、家族に不名誉をもたらすだけの新しい宗教を説こうとする愚かさを諦めさえするならば、家族に対するイエスの無視を自分達は忘れる—許すし、忘れる—ということを彼に確信させようと考えた。このすべてに対しルースは、「私は、兄さんが神の人であり、邪悪なパリサイ派が説教を止めさせる前に、

進んで死ぬことを兄さんに望んでいると言うつもりである。」と言うのであった。ヨセフは、他の者がイエスに働き掛ける間、ルースを静かにさせると約束した。

154:6.4 (1721.4) 彼らが、ゼベダイオスの家に着いたとき、イエスは、弟子への送別の演説をしている真っ最中であった。かれらは、家に入ろうとしたが、人で溢れんばかりに混雑していた。ようやく裏の縁側に場所を得て、かれらは、そこで、人から人へとイエスに言葉を伝えたので、それは、遂にサイモン・ペトロスからイエスに囁かれ、かれは、イエスの話を中断するつもりで、「ご覧ください。母上と弟妹が外にいて、しきりに話しをされたいと願っています。」と言った。母は、追随者へのこの別れの言葉を送ることがいかに重要であるかを思いもせず、またこの演説が、イエスを捕縛しようとする者の到着によって打ち切られそうであることも知らなかった。彼女は、どう見ても長い疎遠の後に、自分と弟達が好意をみせて、実際に彼のところへ来たという事実を考慮して、イエスが、待っているという知らせを受けた瞬間に話しを止めて自分たちのところへ来ると本当に考えていた。

154:6.5 (1722.1) これは、イエスが父の用向きに関わらねばならないということを地上の家族が理解できなかったというそれらの実例のもう一つであった。マリアと弟達は、イエスが、申し送りを受け取るために話しを中断せず、挨拶のために大急ぎで来る代わりに、美声を高くして次のように話すのを聞いたとき、深く傷ついた。「私を気遣って恐れるべきではない、と私の母と弟に言いなさい。私をこの世界に遣わされた父は、私を見捨てはしない。私の家族に何の危害も起こりはしない。勇気をもち、王国の父を信頼するように告げなさい。しかし、詰まるところ、誰が私の母で、誰が私の弟であるのか。」かれは、部屋に集う弟子の全ての方に手を差し伸べて言った。「私には母もいない。弟もいない。私の母を見なさい。私の弟妹を見なさい。天にいる私の父の意志を行う者は誰でも、私の母、私の弟、私の妹と同じであるから。」

154:6.6 (1722.2) マリアは、この言葉を聞くとユダの腕の中に崩れた。イエスが別れの挨拶の締めくくりを伝える間、彼らは、彼女を回復させるために庭へ運び出した。それから、イエスは、母と弟に打ち合わせに行ったことであろ

うが、ティベリアスからの使者が、シネヅリオンの役員達がイエスを逮捕し、エルサレムへ移す権限を携えてやって来る途中であるという知らせを持って急いで到着した。アンドレアスは、この知らせを受けて、イエスを遮り、そのことを告げた。

154:6.7 (1722.3) アンドレアスは、ダーヴィドがゼベダイオス家の周囲に25人ほどの見張りを立てたということ、そして、誰も彼らを不意に襲うことができないということを知らなかった。それで、かれは、何をすべきかをイエスに尋ねた。「私に母はいない。」という言葉を耳にした母親が庭で衝撃から回復する間、あるじは、そこに黙って立っていた。丁度この時、部屋にいた一人の婦人が、「あなたを生んだ子宮、あなたを授乳した乳房は幸いです。」と立ち上がり大声で言った。イエスは、この女性に応じるためにアンドレアスとの会話から一瞬を横を向いて言った。「いや、むしろ幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守り通す者である。」

154:6.8 (1722.4) マリアとイエスの弟達は、イエスが自分達を理解しないと、自分達への関心を失くしたと思い、イエス

を理解しないのは本人達であるということにはあまり気づかなかった。イエスは、人が、その過去を断ち切るということがいかに難しいかを完全に理解していた。人間がいかに説教者の雄弁さに動かされるか、また心が論理と理由に応じるように、良心が、いかに感情的な訴えに応じるかを知っていたが、それにしても、人間に過去との縁を切らせるように説得することが、どれほどはるかに難しいかも知っていた。

154:6.9 (1722.5) 誤解されるか、または感謝されていないと思うかもしれない者全てが、イエスに同情する友、理解ある助言者とを感じるということは、永遠に本当である。かれは、人の敵が、自身の家庭の者である場合があるということを使徒達に警告してきたが、この予測が、いかに身近に自身の経験となるということにはほとんど気づいていなかった。イエスは、父の仕事をするために地球の自らの家族を見捨てはしなかった—家族が彼を見捨てた。後に、あるじの死と復活後、ジェームスは、早期のキリスト教の運動に関わるようになったとき、この早期のイエスとその弟子との関係を喜んで迎え入れなかった自己の失策の結果に測りしれないほど苦しんだ。

154:6.10 (1723.1) これらの出来事を通過する際、イエスは、自分の人間の心に関する限られた知識によって導かれること選んだ。かれは、仲間との経験をただの人間として経験することを望んだ。そして、かれが、去る前に家族に会うことは、イエスの人間の心の中においてであった。かれは、講話の最中に止まり、このように、非常に長い別離の後、最初の会合を公の出来事にしたくなかった。かれは、演説を終え、去る前に、家族に会うつもりであったが、この計画は、すぐ後に続く陰謀の出来事によって阻まれた。

154:6.11 (1723.2) 急遽の脱出は、ダーヴィドの使者の一行が、ゼベダイオス邸の裏の出入り口に到着したことにより速められた。使者によって起こされた騒ぎは、使徒を恐がらせたし、これらの新たな到着は、自分達の捕縛者達かもしれないという考えに仕向け、そして、即座の逮捕の恐怖に、待っているいる舟へと表の入り口から急いだ。そして、この全ては、イエスが、なぜ裏の縁側で待っている家族に会わなかったかということを説明している。

154:6.12 (1723.3) しかし、急な脱出で乗船しつつ、イエスは、ダーヴィド・ゼベダイオスに言った。「皆の到来には感謝しているし、会うつもりであったと母と弟達に伝えてくれ。私に感情を害することなく、むしろ、神の意志に関する知識と、栄光と勇気のためにその意志を為すことを追求せよと悟してくれ。」と言った。

7. 急な脱出

154:7.1 (1723.4) そうして、イエスが、12人の使徒と12人の伝道者と共に逮捕され、冒涜と他のユダヤ人の神聖な法に対する違反の罪で、裁判のためにエルサレムに連行するために、ヘローデス・アンティパスからの権限を得たベスサイダへの途中にいたシネヅリオンの役員からの急な脱出をしたのは、西暦29年5月22日のこの日曜日の朝であった。25人のこの一行が、櫂をとりガリラヤ湖の東岸へ漕いだのは、この美しい朝の8時半頃であった。

154:7.2 (1723.5) あるじの舟に続くのは、もう一艘の小さ目の舟で、ダーヴィドの6人の使者を含んでおり、かれらは、イエスとその仲間との接触を維持し、その所在と安全に関する情報が、王国の仕事のための本部の役をしばらく

前から果たしていたベスサイダのゼベダイオスの家に、定期的に伝えられることを見届ける指示を受けた。しかし、イエスは、決して二度とゼベダイオス邸を住まいとはしなかった。これから先、地球での人生の残りを通じて、あるじは、本当に、「頭を横たえるところがなかった。」この先、定住の住まいに似たものさえなかった。

154:7.3 (1723.6) 彼等は、ケリサの村近くへと漕ぎ、舟を友人に託し、あるじの地球の人生のこの多事多端の最後の年の放浪を開始した。しばらくかれらは、フィリポスの領地に踏み留まり、カエサレアからケーサレーア-フィリッピーへ、そこからフェニキアの海岸へと進んだ。

154:7.4 (1723.7) 群衆は、この2 艘の舟が湖上を東岸に向けて進んでいるのを見ながらゼベダイオス邸の周りに長居しており、エルサレムの役員等が急いでやってきてイエスの捜索を始めるときには、２艘は、かなりの距離を行っていた。エルサレムの役員達は、イエスが逃れたと考えることを拒否し、パリサイ派とその補佐達は、イエスとその一行がベサニアから北へ旅する間、イエスを捜索してカペルナム近隣で無駄にほぼまる1 週間を過ごした。

154:7.5 (1724.1) イエスの家族は、カペルナムの家に戻り、話し、議論し、祈っておよそ1　週間を過ごした。かれらは、混乱と狼狽で満たされていた。かれらは、ルースがゼベダイオス家の訪問から戻る木曜日の午後まで心の平穏は一切なく、彼女は、ダーヴィドから、父親代わりの兄が無事で健康であり、フォイニキア海岸に向かう途中であることを知らされた。

論文 155
ガリラヤ北方逃避行

155:0.1 (1725.1) この多事の日曜日、イエスと24人は、ケリサ近くに上陸直後、北へ少し行き、ベスサイダ-ユールアスの南にある美しい公園で夜を過ごした。過ぎし日に立ち寄ったことがあったので、皆にはこの野営場所は馴染み深かった。就寝前、あるじは、追随者を自分の周りに呼び寄せ、ベタニアと北ガリラヤを経てフェニキアの海岸への予定されている遊歴の計画について話し合った。

1. 異教徒はなぜ激怒するのか

155:1.1 (1725.2) イエスは言った。「このような時に言い及んで、詩篇の作者がいかに言ったかを思い出すべきであ

る。『なぜ異教徒は激怒し、民衆は虚しく謀るのか。地の王達は立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油を注がれた者とに逆らって言う。慈悲の枷を打ち砕きし、愛の綱を解き捨てよう。』

155:1.2 (1725.3) 「今日、君は、これが目の前で果たされるのを見る。しかし、君には、詩篇の作者の残りの予言が実現するのは分からないであろう、というのも、作者は、人の息子とその任務に関し誤った考えを抱いたので。我が王国は、愛に基づいて設立され、慈悲をもって公布され、私心のない奉仕によって樹立される。我が父は、異教徒を愚弄し、笑って天国に座してはいない。かれは、ひどい不快感に激怒はしない。息子が、これらのいわゆる異教徒(実際には無知で教えられていない仲間)を継承するという約束は、本当である。そして、私は、慈悲と愛情の両手を広げてこれらの異教徒を迎えるのである。全てのこの親愛は、勝利を収めた息子が、『鉄の杖で彼等を打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』と仄めかす記録の不幸な宣言にもかかわらず、いわゆる異教徒に示された。詩篇作者は、『恐れつつ主に仕える』ことを君に勧める—私は、信仰に神性の息子性の高い特権に

進み入るように告げる。彼は、君におののきつつ喜べと命じる。私は、確信して喜べと命じる。彼は言う、『息子に口づけせよ、彼が、怒り、彼の怒りが燃えようとするときお前達が滅びないために。』と。しかし、私と一緒に暮らしてきた君達は、憤りや激怒が、人の心の中の天の王国の設立の一部ではなということをよく知っている。しかしながら、この訓戒を終える際に、彼が、『息子を信頼する者を誉め称えよ。』と言ったとき、詩篇の作者は、本当の光ちらりとを見た。」

155:1.3 (1725.4) イエスは、24人に教え続けた。「異教徒が、我々に怒るとき、口実がない訳ではない。なぜなら、彼等の見通しは、小さくて狭いので、その活力を一心に集中することができる。その目標は、近く、多少なりとも目に見える。そういう訳で、かれらは、勇敢で効果的な実行で努力する。天の王国への入国を表明した君達は、教育行為において全く弱腰で不明確である。異教徒は、直接その目標にとびかかる。君達には、あまりにも多くの慢性の切望の悪い習慣がある。君達が王国に入ることを望むならば、ちょうど異教徒が街を包囲攻撃するように、なぜ精霊の攻撃によってそれをしないのか。活動に

おいて大いに過去を後悔し、現在を愚痴り、虚しく未来に期待する態度があるとき、君達は、王国にはほとんどふさわしくない。なぜ異教徒は、激怒をするのか。かれらは、真実を知らないからである。君達は、なぜ無駄な憧れに苦しむのか。真実に従わないからである。無役な切望をやめ、王国の樹立に関わることをして、勇敢に前進しなさい。

155:1.4 (1726.1) 「すべての行動において、一方的で、偏らないようにしなさい。我々の撲滅を求めるパリサイ派は、神の活動をしていると本当に思っている。かれらは、伝統によって非常に狭隘しており、偏狭で目をくらまし、恐怖で硬化している。ユダヤ人が、科学なしの宗教を持つのに反し、宗教なしで科学を持つギリシア人について考えなさい。そして、人がこのように偏狭で混乱したの崩壊を受け入れることに惑わされるとき、唯一の救済の望みは、真実で連携するようになること—改宗されること—である。

155:1.5 (1726.2) 「この不朽の真実を強調しよう。真実の共同作用により、もし君達が、人生において正しさのこの美し

い完全さを例示することを学ぶならば、同胞は、そのとき、君達のそうして得たものを獲得するために君達を追い求めるであろう。真実探求者が引きつけられる基準は、あなたの真実の授与、あなたの正しさの度合を表している。知らせを人々に知らせなければならない範囲は、ある意味で、君達が完全な、または公正な人生、真実で調和された生活不履行の尺度である。」

155:1.6 (1726.3) そして、彼らが就寝の挨拶を述べ枕上に安らぎを得る前に、あるじは、使徒と伝道者に他の多くの事柄を教えた。

2. ホラズィンの伝道者達

155:2.1 (1726.4) 5月23日、月曜日の朝、イエスは、ペトロスに12人の伝道者とホラズィンに行くように指示し、一方かれは、11 人とともにヨルダン川を経由し、ダマスカス-カペルナム街道へ、そこからケーサレーア-フィリッピーへの分岐点へと北東にとり、それから街へ入り、そこに2 週間滞在し教えた。かれらは、5月24日、火曜日の午後到着した。

155:2.2 (1726.5) ペトロスと伝道者は、小規模ではあるが熱心な信者の一行に王国の福音を説いて２週間ホラズィンに滞在した。だが、かれらは、多くの新しい転向者を獲得することはできなかった。ホラズィンほどに人々を王国にもたらさなかった都市は、ガリラヤ中のどこにもなかった。ペトロスの指示に従い12人の伝道者は、治療—物理的なこと—に関してあまり語ることはなく、天の王国の精霊的な真実を増大された力で説いたり教えたりしたが。ホラズィンでのこの２週間は、これまでの彼らの経歴において最も難しく実を結ばない期間であったという点において、12人の伝道者にとり真の逆境の試煉となった。このように王国のために魂を得る満足感を奪われ、各人は、新しい人生の精霊の道における自身の魂とその進展をますます本気で正直に検討した。

155:2.3 (1726.6) ペトロスは、人々が王国への入国を求める気がないと見ると、６月７日、火曜日、仲間を集めてイエスと使徒に合流するためにケーサレーア-フィリッピーに出発した。かれらは、水曜日の昼頃に到着し、ホラズィンの無神論者の間での自分達の経験を詳細に語り夕べをまるごと過ごした。この談論の中でイエスは、種を蒔く

人の寓話に更に言及し、生涯の仕事の見た目の失敗の意味について多くを教えた。

3. ケーサレーア-フィリッピー

155:3.1 (1727.1) ケーサレーア-フィリッピー近辺でのこの2週間の滞在中、イエスは、公のための仕事を何もしなかったが、使徒は、この街での頻繁で穏やかな夜の会合を開き、また信者の多くは、あるじと話すために野営にやって来た。この訪問の結果は、ほんのわずかの者が信者の一団に追加されたにすぎない。イエスは、毎日使徒と話し、またかれらは、天の王国を説く仕事の新たな局面が今始まっているということをより明らかに認識した。かれらは、「天の王国は、肉でも飲み物でもなく、神の息子としての承認の精霊的な喜びを知ることである」ということを理解し始めていた。

155:3.2 (1727.2) ケーサレーア-フィリッピーの滞在は、11人の使徒に対する本当の試煉であった。それは、彼らにとり、生き抜くことの難しい2 週間であった。かれらは、ほとんど落胆し、またペトロスの意欲旺盛な人格からの時折の刺激を受けられなかった。この時期に、イエスを

信じそのあとに続くことは、本当に、大きな試煉の冒険であった。この2 週間、わずかの転向者しか得られなかったが、かれらは、あるじとの日々の会合により非常に有益なことを多く学んだのであった。

155:3.3 (1727.3) 使徒は、ユダヤ人が真実を信条に結晶化させたので精霊的に停滞し、滅びかけていることを学び取った。真実が、精霊の先導と進歩の道標として役目を果たす代わりに、独りよがりの排他的境界線として定式化されるようになるとき、そのような教えは、創造的で命を与える力を失い、結局は、単なる保存化と化石化になるということ。

155:3.4 (1727.4) ますますかれらは、時間と永遠における人格の可能性に関する人間の人格を見ることをイエスから学んだ。かれらは、多くの人間が、見ることのできる同胞をまず愛することにより、見えない神を愛することができるように導かれるということを学んだ。それは、この点について、仲間への寡欲な奉仕に関するあるじの発表に新しい意味が加えられた。「私の同胞の最弱の一人にそ

れをする限りにおいて、あなたは私にそれをしたのである。」

155:3.5 (1727.5) カエサレアでのこの滞在の最も素晴らしい教訓の１つは、宗教伝統の起源、すなわち、非神聖なもの、共通の考え、あるいは日常の出来事につながる神聖さの、感覚を許すという重大な危険性と関係があった。かれらは、真の宗教とは、最高の、そして最も本当の信念への人の心からの忠誠心であるという教えを一つの会合から持ち帰った。

155:3.6 (1727.6) イエスは、自然に対する知識を増やすことは、もし彼らの宗教的な切望が単に物質的であるならば、事物の想定された超自然起源の進歩的な置換によって、神への信仰を奪うと信者に警告した。だが、宗教が精霊的であるならば、自然科学の進歩は、永遠の現実と神の価値に対する彼等の信頼を決して妨害することはできなかった。

155:3.7 (1727.7) かれらは、宗教の動機が完全に精神的であるとき、それは、全ての生活をより価値あるものにし、高い目的で満たし、卓越する価値で威厳を与え、素晴らしい

動機で奮い立たせ、その間ずっと、崇高で持久する望みで人間の魂を慰めるということを学んだ。真の宗教は、存在の重圧を和らげるように考案されている。それは、日々の生活と利己心のない活動のための信仰と勇気を放つ。信仰は、精霊的活力と正しい結果の良さを促進する。

155:3.8 (1727.8) イエスは、文明が、その宗教の最善の状態を損失したのでは生き延びることができないことを繰り返し使徒に教えた。またかれら、12　人に宗教的な経験の代わりに宗教的な象徴と儀式を受け入れるという大きな危険を指摘することに決して飽きることがなかった。イエスの地球での全人生は、宗教の凍てついた型を啓発された息子性の流動する自由への解凍する任務に一貫して捧げられた。

4. フォイニキアへの道中にて

155:4.1 (1728.1) 6月9日、木曜日の朝、真実の25人の教師のこの一行は、王国の進展に関する知らせをベスサイダからのダーヴィドの使者から受けとると、フォイニキアの海岸への旅を始めるためにケーサレーア-フィリッピーを発

った。かれらは、ルーズ経由で、湿地帯の周辺を通過して、マグダラ-レバノンの小道の分岐点へ、そこからシドーンの道との交差点に金曜日の午後到着した。

155:4.2 (1728.2) ルーズ近くの張出した岩陰で昼食のために休止をする間、イエスは、彼との交りのすべての歳月を通じて使徒が聞いた最も顕著な演説の1つをした。食事のために皆が座るや否や、サイモン・ペトロスは、イエスに尋ねた。「あるじさま、天の父は全てをご存じであり、また、地上の天の王国の確立においてはその精霊が私達の後ろ盾でありますのに、我々は何故に敵の脅威から逃げるのですか。我々は、なぜ真実への敵に立ち向かうことを拒むのですか。」ところが、ペトロスの質問に答え始める前にトーマスが割り込んで尋ねた。「あるじさま、私は、エルサレムの敵の宗教の何が悪いのか、とても知りたいのです。彼等の宗教と我々のとの本当の違いは何ですか。我々は皆、同じ神に仕えるというときに、そのような信仰の多様性に行きあたるのは何故ですか。」トーマスが言い終えると、イエスが、「ペトロスの質問を無視したくはないが、まさにこの時、ユダヤの支配者との公然の衝突を避ける私の理由をいかに容易く

誤解するかもしれないと良く承知しているので、却って、トーマスの質問に答えれば、皆にはもっと役立つであろう。だから、昼食を終えたら、改めてそれについて話そう。」と言った。

5. 真の宗教に関する講話

155:5.1 (1728.3) 現代の言い回しに要約され、再述された宗教に関するこの忘れ難い講話は、次の真理を表した。

155:5.2 (1728.4) 世界の宗教には二重の起源—自然と天啓—があるが、いかなる時も、いかなる民族間でも、宗教上の献身の3つの明確な型がある。宗教への衝動の 3 つの顕現は、次の通りである。

155:5.3 (1728.5) 1. 原始の宗教。神秘的なエネルギーへの恐怖と卓越する力への崇拝、主として物理的な自然への宗教、すなわち恐怖への宗教への半自然で本能的な衝動。

155:5.4 (1728.6) 2. 文明の宗教。文明化する民族の前進する宗教概念と習わし—心の宗教—確立された宗教的な伝統の権威の知的な神学。

155:5.5 (1728.7) 3.、真の宗教—啓示の宗教。超自然的な価値の啓示、永遠の現実に関する部分的洞察、天の父の無限の特質である善と美の一瞥—人間の経験に示される精霊の宗教。

155:5.6 (1729.1) あるじは、このあまりにも原始的な崇拝形態が、人類のより知的な民族の宗教形態に留まる事実を遺憾に思いはしたが、物理的感覚の宗教と本来の人間のもつ迷信深い恐怖をみくびることを拒否した。イエスは、心の宗教と精霊の宗教間の大きな違いは、前者が教会の権威に支えられ、後者が完全に人間の経験に基づくということであると、明らかにした。

155:5.7 (1729.2) そこで、あるじは、教育の時間にこれらの真実を続けて明らかにした。

155:5.8 (1729.3) 民族がより高度に知的になり、より完全に文化的になるまで、原始で後れた民族の進化する宗教的習慣に非常に特色的であるそれらの幼稚で迷信深い儀式の多くは、持続するであろう。人類が精霊的な経験の現実のより高くより一般的な認識の段階に進むまで、多数の男女が、進歩的な人間の経験の厳しい現実と格闘する信仰

上の冒険における心と魂の活発な参加を伴う精霊の宗教とは対照的に、知的な同意だけを必要とする権威の宗教のための個人の選択を示し続けるであろう。

155:5.9 (1729.4) 権威に基づく伝統的な宗教の承認は、精霊的な本質への切望に満足感を求める人間の衝動のために簡単な出口を提示する。権威が定着し、結晶化され、確立された宗教は、恐怖に悩まされ、不安に攻められるとき、分別を失い取り乱している人の魂が逃れられる手早い避難所を提供する。そのような宗教は、満足感と保証に対して支払われる価格として、その信者に受け身の、そして純粋に知力の同意のみを必要とする。

155:5.10 (1729.5) そして、宗教の安らぎをこのように保証することを好むであろう臆病で、恐れ、躊躇う個人は、長らく地球に生きるであろう。にもかかわらず、このように権威の宗教と運命を共にする際、かれらは、人格の主権を危険に曝し、自尊心の尊厳を落としめ、最も感動的で、奮い立たせる人間のすべての可能な経験に参加する権利を完全に明け渡す。真実の個人的探求、知的な発見の危険に直面する際の陽気さ、個人の宗教経験の現実探

査への決意、それが、全人類存在の最高の冒険—自分自身のために、そして、自分自身として、神を探し求め、神を見いだす人間の冒険—において公正に勝ち取るような、精霊的な信仰の知的疑問に対する事実上の勝利の実現における個人的功績を経験する最高の満足感。

155:5.11 (1729.6) 精霊の宗教は、努力、奮闘、闘争、対立、信仰、決断、愛、忠誠、進展を意味する。心の宗教—権威の神学—は、その形式的な信者からこれらの努力を少しか、あるいは全く求めない。進歩的な人間の心によって発見され、また進化している人間の魂によって経験されるかもしれない精霊の現実のより遠い岸の探索における未踏の真実の公海への大胆な冒険のそれらの信仰の船旅に伴う精霊の奮闘と精神的な不安を本能的に回避するような恐怖に満ち、乗り気でないそれらの人間にとり、伝統は、安全な避難場所であり、容易い経路である。

155:5.12 (1729.7) イエスは、続けた。「エルサレムでは、宗教指導者は、彼らの伝統的な教師や他の時代の予言者達の様々な教義を知的な信条、権威の宗教の確立した体系に定式化してきた。全てのそのような宗教の訴えは、主に

心に向けてである。そして、今、我々は、新たな宗教—現代の言葉の意味における宗教ではない宗教、人の心の中に住む私の父の神霊にその主な呼び掛けをする宗教。その権威が、確かに誠にこのより高い精霊的な親交の真実の信者になるすべての個人の経験にとても確かに現れるその受け入れの成果に由来する宗教—の大胆な公布をまもなく始めるので、そのような宗教との決定的な闘争に入ろうとしているのである」

155:5.13 (1730.1) 24 名をそれぞれに指し示して、名を呼び、イエスは言った。「さて、天の王国の永遠の真実と崇高な壮大さにおける個人の、生きた経験の現実の美しさを自分のために発見する満足感に気づくと共に、人に救済のより良い道を宣言する任務の困難と迫害に苦しむよりも、むしろエルサレムでパリサイ派により守られるように確立され化石化された宗教への服従のこの簡単な道を、君達の誰が、選びたいであろうか。君達は、恐れており、弱々しく、安易さを求めているのか。真実の神の手の中での未来を信じるのが恐いのか、神の息子達よ。父に不信を抱いているのか、神の子供よ。君達は、伝統的な権威の宗教の確心と知力の定着した容易な道に戻る

か、または、精霊の宗教、人の心の天の王国の新たな真実を宣言する不確かでやっかいな未来へと私と共に進む用意をするのであろうか。」

155:5.14 (1730.2) イエスがこれまでにした感情的訴えの数少ない一つであるこれに対し、結束した、忠実な反応を意味するつもりで、聞き手である24人全員が、立ち上がったが、イエスは手を上げて止めた。「解散しなさい、各人が単独で父と共におり、そこで私の質問に感情的でない答えを見い出し、魂のそのような本当の、誠実な態度を見つけたとき、愛のその無限の命は、我々が宣言する宗教のまさしくその精神である私の父であり、あなたの父である方に自由に大胆にその答えを伝えなさい。」

155:5.15 (1730.3) 伝道者と使徒は、しばらく単独で離れて行った。彼らの意気は高揚し、心は奮い立ち、感情はイエスの言葉にひどく煽られていた。しかし、アンドレアスが皆を呼び集めたとき、あるじは、「旅を続行しよう。しばらく待つために、しばしフォイニキアに入り、皆は、心身の感情をより高い心の忠誠とより満足のいく精霊の

経験に変えるために父に懇願するべきである。」とだけ言った。

155:5.16 (1730.4) 24人は、旅を続ける間黙していたが、やがて、一人が他の者に話し始め、午後3 時までには、かれらは、それ程遠くまで行くことができなかった。彼らは停止し、ペトロスが、イエスのところに行って「あるじさま、あなたは生命と真実の言葉を話されました。我々はもっと聞きたいのです。何とぞこれらの事柄についてさらにお話し下さい。」と言った。

6. 宗教に関する2 度目の講話

155:6.1 (1730.5) したがって、山腹の日陰で一休みしながら、イエスは、精霊の宗教に関する教えを続けた。大体の内容は、次の通りである。

155:6.2 (1730.6) 君達は、心の宗教に満足しているままの方を選ぶ仲間、保安を切望し、一致を好む仲間から出て来た。君達は、威厳がある確実性の感情を冒険的で進歩的な信仰の精霊の保証と交換することに決めた。組織の宗教の厳しい束縛に不服を唱え、現在、神の言葉と考えられている記録の伝統の権威を拒絶を敢えてした。父は、モー

シェ、エーリージャ、イェシャジァ、アーモーセ、ホゼアを通して本当に話したが、昔のこれらの予言者が発言を終了したとき、かれは、世界に真実の言葉の活動を止めなかった。私の父は、真実の言葉が、１時代には与えられ、もう1時代には控えるという民族や世代の公平を欠く方ではない。完全に人間であるものを精霊と呼ぶ愚行を犯すでない、そして、想定上の霊感の伝統的な宣託を通さずに来る真実の知らせの識別をしくじるではない。

155:6.3 (1731.1) 私は、君達が、再び生まれることを、精霊から生まれることを強く呼び掛けてきた。私は、君達を権威の暗黒と伝統の無気力から、自分で人間の魂のために可能の限りの最大限の発見—自身の個人の経験における事実として自分のために、自分の中に、自身で神を見つけ、そしてこのすべてを行う崇高な経験—をする可能性の実現の無比の光の中へと呼び出した。そして、君達が、死から命へと、伝統の権威から神を知る経験へと移行できますように。このように、暗黒から光へと、受け継がれた人種的な信仰から実際の経験により達成される個人の信仰に移るのである。そして、それによって、

君達は、先祖から伝えられた心の神学から永遠の贈与として魂に確立される精霊の宗教へと進歩するのである。

155:6.4 (1731.2) 君達の宗教は、伝統的な権威に対する単なる知的な信念から神の現実と父の神霊に関連する全てを把握することのできる生きた信仰の実際の経験へと変化するのである。心の宗教は、君達を救い難く過去に結ぶ。精霊の宗教は、進歩的な啓示から成り、精霊的な理想と永遠の現実においてより高度のより至純の達成に向けて君達につねに手招きをする。

155:6.5 (1731.3) 権威の宗教は、定着した安全の現在の感情を与えるかもしれないが、君達は、そのような一時的な満足感のために精霊的な自由と信仰の自由の喪失を代償とする。私の父は、天の王国に入る代価として、精霊的に不快で、不浄で、不誠実であるものへの信念に君達に敢えて同意することを要請しない。慈悲、正義、真実の君達自身の感覚が、宗教形態と儀式への廃れた服従により侵害されるというようなことは君達に要求されることはない。精霊の宗教は、精霊があなたをどこへ導こうとも、あなたが、永々と自由に真実に続くままにさせる。そし

て、誰が判断できるであろうか、—恐らく、この精霊は、他の世代が聞くことを拒否してきたものをこの世代に与えることがあるかもしれない。

155:6.6 (1731.4) 飢えた魂を薄暗がりへと、遥か彼方へと引きずろうとする偽の宗教教師達よ、恥を知り、彼らを放置しているのである。これにより、これらの不幸な人々が、あらゆる新しい真実の顕示にまごつきながら、あらゆる新しい発見に怯えるように運命づけられている。「神と居続ける者の心は、完全な平穏に保たれる」という言った予言者は、権威的な神学の単なる知的な信者ではなかった。この真実を知る人間は、神を見つけた。かれは、単に神について話したのではなかった。

155:6.7 (1731.5) 私は、常に昔の予言者を引き合いに出し、イスラエルの英雄を称賛する習慣を諦め、代わりにいと高きものの生きている予言者となり、来たるべき王国の精霊的英雄になることを切望するように君達に諭す。神を知る過去の指導者達を尊敬することは、まことに価値があるかもしれないが、何故、そうしながらも、自分のため

に神を見つけ、自身の魂に神を知るという人間存在の最高の経験を犠牲にしなければならないのか。

155:6.8 (1732.1) 人類のあらゆる人種は、人間の存在に関するそれ自身の精神的な見解を持つ。それ故、心の宗教は、常にこれらの様々な人種的な視点に忠実でなければならない。権威の宗教は、決して統一に立ち至ることはできない。人間の和合と必滅の兄弟の愛は、精霊の宗教の付加された贈与により、またそれを通してのみ、達成が可能である。人種の心は異なるかもしれないが、全人類には同じ神性と永遠の精霊が宿している。人間の兄弟愛の望みは、異なる心の権威の宗教が、精霊の統一して、気高くする宗教—個人の精霊的な経験の宗教—をしみ込ませ、それによって影が薄くなるときにだけ、または、そうしながら実現される。

155:6.9 (1732.2) 権威の宗教は、人を分割し、互いに対して良心的隊列に配置できるに過ぎない。精霊の宗教は、人を次第に接近させ、互いが理解をもって思いやるようにさせる。権威の宗教は、信念における人の一様性を要求するが、これは現在の世界状態においては実現不可能であ

る。信念の多様性を完全に考慮に入れる精霊の宗教は、経験の合一性—崇高な目標の同一性—のみを必要とする。精霊の宗教は、視点と展望の同一性ではなく、洞察の均一性だけを必要とする。精霊の宗教は、知的な見解の均一性を要求するのではなく、精霊感覚の統一だけを要求する。権威の宗教は、生気のない教義に結晶化する。精霊の宗教は、高揚させる愛のこもった奉仕と慈悲深い活動行為を増大する喜びと自由へと成長する。

155:6.10 (1732.3) しかし、君達の誰も、アブラーハームの子孫が、伝統的な不毛のこれらの悪い時代に出合ったからといって軽蔑して見ないように注意しなさい。我々の祖先は、執拗に、しかも情熱をもって献身的に神を追求し、自身が神の息子としてこれを熟知するアダームの時代からずっと他の全人類が知らないような神を見い出した。私の父は、モーシェの時代以来ずっと、神を探し神を知るイスラエルの長い、不屈の戦いへの注意を怠ってはいない。ユダヤ人には、疲れきった数代にわたり、神についての真実の発見にさらに近づくために骨を折り、汗をかき、呻き声を上げ、苦労をし、そしてまた受難に耐え、誤解され、軽蔑された民族のその悲しみの経験の止

むことはなかった。そして、イスラエルのすべての失敗と怯みにもかかわらず、モーシェからアーモーセとホゼアの時代へと、我々の祖先は、永遠の神のずっと明確でより真実の姿を次第に全世界へ明らかにした。そして、召喚された君達が共有するために、父のさらに素晴らしい顕示への道が用意されたのである。

155:6.11 (1732.4) 生きている神の意志を発見する試みよりも満足のいく感動的な冒険はないし、それが、その神の意志を正直に為そうとする崇高な経験であることを決して忘れてはならない。また、地球のどんな職業においても神の意志を為すことができるということを忘れてはならない。ある職業は神聖ではなく、他のものは世俗的である。全てのものは、生霊に導かれる、すなわち、真実に従属し、愛に高揚され、慈悲に支配され、そして公正さ—正義—に抑制される者の生活において神聖である。父と私が世界に送る精霊は、真実の聖霊だけではなく、理想主義的な美の精霊でもある。

155:6.12 (1732.5) 君達は、神学の権威の昔の記録の紙面にのみ神の言葉を捜し求めることをやめなければならない。神

の精霊の生まれの者は、起源の如何にかかわらず、神の言葉をこれから明察するのである。その贈与の経路が明らかに人間的であるからということで、神性の真実を無視してはならない。同胞の多くは、神の存在を精霊的に認識できずにいるが、神の理論を受け入れる心をもっている。そして、それは、天の王国が、誠実な子供の精霊的な態度を得ることによって最も良く認識できると、私が、頻りに君達に教えてきたまさにその理由である。君達に推薦することは、子供の心の未熟さではなく、むしろそのように容易く信じ、完全に信頼する幼い者の精霊的な単純さである。君達が、神の存在を感じる能力においてますます成長するべきであるということほどには、神の事実を知るということはあまり重要ではない。

155:6.13 (1733.1) 一度魂の中に神を発見し始めると、君達は、ほどなく他の人間の魂に、遂には広大な宇宙の全ての生物と創造物に神を発見し始めるであろう。しかし、そのような永遠の現実の思慮深い静観にほとんど、あるいは、全然時間を与えない人の魂の最高の忠誠心と神性の理想の神として、父は、どんな機会に現れなければなら

ないのか。心が精霊的な自然の場所ではないが、それは、誠にそこへの出入口なのである。

155:6.14 (1733.2) しかし、神を見つけたと他の人間に立証しようとする誤りを犯してはいけない。そのような有効な証明を意識的に引き起こすことはできない、とはいえ、君が神を知っているという事実の2つの明確かつ強力な実証がある。それは、次の通りである。

155:6.15 (1733.3) 1. 日々の通常の生活の中で見えている神の精霊の成果。

155:6.16 (1733.4) 2. 現世においてその存在を予め経験した永遠の神を発見する望みを追求において死後の生存の冒険のために、君達が、また君達が持つ物全てを無条件に危険に晒すという積極的な証拠を提供する全ての人生計画という事実。

155:6.17 (1733.5) さて、間違えてはいけない。父は、信仰の最も微かな揺らめきにいつも応じるであろう。かれは、原始人の物理的で迷信深い感情に注目される。そして、父は、信仰がとても弱く、権威の宗教に同意する受け身の

態度と少しばかり余計に知的な合致をする正直だが恐怖に満ちている者達を、自分に届こうとする全てのそのような弱い試みさえ重んじて、育てるために油断なくいつも気を配っている。しかし、暗黒から光に呼ばれた君達には、全心で信じることが期待されている。君達の信仰は、身体、心、精霊の結合の態度を支配する。

155:6.18 (1733.6) 君達は私の使徒であり、君達にとって宗教は、精霊的な進展と理想主義的な冒険の厳しい現実に直面することを恐れて逃れることのできる神学の避難所にはならないであろう。だが、むしろ、君達の宗教は、神が君達を見つけ、理想化し、高揚させ、精霊化したということ、また、君達が、このように君達を見つけ、君達を息子の地位においた神を探す永遠の冒険に徴募したと証言する真の経験の事実になるであろう。

155:6.19 (1733.7) イエスは、話し終えると、アンドレアスに合図して、フォイニキア方面の西を指し、「旅程に就こう。」と言った。

論文 156
タイヤとシドーンでの滞在

156:0.1 (1734.1) 6月10日、 金曜日の午後、イエスと仲間は、シドーン近郊に到着し、そこでは、イエスが大衆から人気の絶頂にいた時代のベスサイダ病院の患者であった裕福な女性の家に止まった。伝道者と使徒は、すぐ隣のこの女性の友人に宿を提供してもらい、安息日の間これらの爽やかな環境の中で骨休めをした。かれらは、北の海岸都市を訪れる準備前のおよそ2 週間半をシドーンとその近隣で過ごした。

156:0.2 (1734.2) この6月の安息日は、非常に安穏なものであった。伝道者と使徒は、シドーンへの途中で聞いた宗教に関するあるじの講話に関して深い考えに完全に没頭していた。彼らは、言われたことに関する何かに感謝することはできたが、全員の誰とても教えの重要性を完全に理解したというわけではなかった。

1. シリアの女性

156:1.1 (1734.3) 偉大な医師や教師としてイエスについて多くのことを耳にしていたシリア人の女性は、あるじが宿泊したカールスカの家の近くに住んでおり、この安息日の午後、幼い娘を連れてやって来た。子供は、12歳位で、痙

攣や他の痛ましい症状によって特徴づけられる重傷の神経障害に苦しめられていた。

156:1.2 (1734.4) イエスは、休息を望んでいると仲間に説明し、カールスカ邸での滞在を誰にも告げないように託していた。かれらは、あるじの指示に従ったが、カールスカの使用人は、イエスが自分の女主人の家に泊まっていることを知らせにこのシリア女性のノラーナの家に行き、苦しんでいる娘を治療に連れて来るように心配しているこの母に促した。この母は、もちろん、子供が悪霊、不浄の霊に取りつかれていると信じていた。

156:1.3 (1734.5) ノラーナが娘と到着したとき、アルフェウスの双子は、あるじが休息しており、邪魔はできないと通訳を通して説明した。すると、ノラーナは、あるじが休息を終えるまで子供とそこに留まると答えた。ペトロスもまた、家に帰るように彼女の説得に努めた。かれは、イエスが、多くの教えと治療で疲れていると、またフェニキアへは一時の静寂と休息のために来たのであると説明した。しかし、それは無駄であった。ノラーナは去ろうとはしなかった。ペトロスの切願に対し、彼女は、「あ

なたのあるじさまにお会いするまで、出発するつもりはありません。あの方が、私の子供から悪霊を追い払うことができるのを知っていますし、あの治療なさる方が私の娘を看るまで去るつもりはありません。」と言うだけであった。

156:1.4 (1734.6) そこでトーマスが、この女性を追い立てようとしたが、失敗に終わった。彼女は、トーマスに言った。「あなたのあるじさまは、私の子供を苦しめるこの悪霊を追い払うことができると信じています。ガリラヤでのあの方の素晴らしい働きについて聞いています。そして、あの方を信じています。あなた方、あの方の弟子達は、一体どうしたというのでしょうか。あるじの助けを求めに来る人々を追い立てたりして。」この女性がこう言い終えると、トーマスは引き下がった。

156:1.5 (1735.1) その時、サイモン・ゼローテースが、ノラーナを諌めに前に出て言った。「婦人よ、あなたはギリシア語を話す非ユダヤ人である。目をかけている世帯の子供からパンを取り上げ、犬に投げ与えることを、あるじに期待するのは筋ではない。」しかし、ノラーナは、サイ

モンの攻撃に立腹しようとはしなかった。ただ「はい、先生、話は分かります。ユダヤ人の目には私はただの犬ではありますが、あなたのあるじさまにとっては、私は信心ある犬であります。私は、あの方が娘を見さえすれば癒されると、私は信じていますので、娘をお見せすると決心しているのです。ねえ、あなたでさえも、たまたま子供の卓から落ちるパン屑を得る特権を犬から奪うことを敢えてすることはないでしょう。」と応じた。

156:1.6 (1735.2) 丁度この時、幼女が皆の前で激しい痙攣に襲われ、母は叫んだ。「ほら、あなたは、私の子供が悪霊にとりつかれているのを目の辺りにしています。私達の困窮があなたに印象づけなくても、全ての人を愛し、異教徒が信じるとき敢えて癒しさえすると告げられたあなたのあるじさまには訴えるでしょう。あなたは、あの方の弟子には相応しくありません。私は、我が子が癒されるまで去るつもりはありません。」

156:1.7 (1735.3) 開いた窓を通してこの会話のすべてを聞いていたイエスは、皆が驚いたことには、そのとき外に出て来て言った。「婦人よ、あなたの信仰は、すばらしいもの

である。あなたの望むことを与えずにはいられない程にすばらしい。平穏に帰路に着きなさい。あなたの娘はすでに癒された。」幼女は、その時から具合いが良くなった。ノラーナとその子が去るとき、イエスは、この出来事を誰にも言わないように頼んだ。仲間はこの要求に応じたが、この母と子は、田舎中に、またシドーンにおいてさえも幼女の回復の事実を知らせまわるのを止めなかったので、イエスは、数日内に宿舎を変えるのが賢明であると思うほどであった。

156:1.8 (1735.4) 翌日、イエスは、使徒に教えるに当たり、シリア女性の娘の治癒についての意見を述べた。「ずっと、そうであった。天の王国の福音の教えにおいて、君達は、非ユダヤ人が、いかに救済の信仰を実践できるかを自分の目で確かめる。誠に、誠に、アブラーハームの子孫がそこに入るに足る信仰を示すつもりがないならば、父の王国は、非ユダヤ人によって握られるであろうと君達に言っておく。」

2. シドーンでの教え

156:2.1 (1735.5) シドーンに入る際、イエスと仲間は、自分達の多くにとって初めての橋を渡った。この橋を渡りながら、とりわけ、イエスは、「現世は、橋に過ぎない。その上を通り過ぎるかもしれないが、住まいをその上に建てようと考えるべきではない。」と言った。

156:2.2 (1735.6) 24 人がシドーンでの作業を始めると、イエスは、寄宿のために、その市の真北にあるユースタとその母ベルニースの家に行った。イエスが毎朝ユースタの家で24 人に教えると、皆は、教えたり説教するために午後と夕方シドーン周辺に出掛けた。

156:2.3 (1735.7) 使徒と伝道者は、自分達の知らせを受け入れるシドーンの非ユダヤ人の態度に大いに励まされた。短い滞在中に多くの者が王国に加えられた。フェニキアのおよそ6 週間のこの期間は、魂を呼び覚ます仕事の非常に実り多い時であった。しかし、福音書の後のユダヤ人の筆者達は、自身の民衆の非常に多くがイエスに敵意をもっていたまさにこの時、イエスの教えに対する非ユダヤ人によるこの暖かな歓迎に関する記録を軽くやり過ごしたのであった。

156:2.4 (1736.1) 様々な意味で、これらの非ユダヤ人の信者達は、ユダヤ人よりも完全にイエスの教えを評価した。ギリシア語を話すこれらのシリアフェニキア人の多くは、イエスが神のようであるというだけでなく、神がイエスに似ているということもまた知るようになった。これらのいわゆる異教徒は、この世界と宇宙全体の法の均一性に関するあるじの教えの十分な理解に達した。かれらは、神は、人や人種、または国を差別しないという教え、宇宙なる父は、偏愛をしないという教え、宇宙は、完全に、常に遵法で、確実に頼れるという教えを理解した。これらの非ユダヤ人は、イエスを恐れなかった。かれらは、その言葉を受け入れる勇気があった。人間は、幾世代もの間、イエスを理解できずにいたのではなかった。かれらは、理解することを恐れてきた。

156:2.5 (1736.2) イエスは、敵に立ち向かう勇気が欠如していたので、ガリラヤから逃げたのではないと24　人に明らかにした。かれらは、イエスが、確立した宗教との公然の衝突への構えがまだ出来てはおらず、また殉教者になるつもりはないということを理解した。「天地は去れども、我が真実の言葉は去らず。」と、あるじが最初に弟

子達に言ったのは、ユースタ家でのこれらの会議の1つにおいてであった。

156:2.6 (1736.3) シドーン滞在中のイエスの教導の主題は、精霊的な進歩であった。かれは、静止していることはできないのだと教えた。かれは、正しさで進まなければならない、さもなければ、悪と罪へと後退しなければならないと言った。かれは、「王国のより大きな現実を迎え入れるために突き進む一方、過去であるそれらの事柄を忘れる」ように訓戒した。福音の中の自分達の幼年期に満足するのではなく、精霊との親交と信者間の連帯で神の息子性の完全な高さへの到達に向けて努力することを懇願した。

156:2.7 (1736.4) イエスは言った。「私の弟子は、悪を行うのをやめるだけでなく、善を行うことを学ばなければならない。全ての意識的な罪から清められなければならないだけでなく、罪悪感さえ抱くことを拒否しなければならない。君達が、罪を認めるならば罪は許される。従って、責められることのない良心を保たなければならない。」

156:2.8 (1736.5) イエスは、これらの非ユダヤ人が示す鋭いユーモアの感覚を大いに楽しんだ。あるじの心に触れ、その慈悲に訴えたのは、シリア女性ノラーナの素晴らしい不断の信仰だけでなく、彼女が示したそのユーモアの感覚であった。イエスは、自己の民族—ユダヤ人—のユーモアのあまりの乏しさに大いに心外であった。かれは、かつてトーマスに言った。「我が民族は、あまりにも真剣に考え過ぎる。ほとんどユーモアの感覚に欠けている。パリサイ派のやっかいな宗教は、ユーモア感覚をもつ民族の中に一度も根を下ろすことがができなかった。彼らも、一貫性を欠いている。かれらは、ブヨを漉し出し、ラクダを飲み込んでいる。」

3. 沿岸北上の旅

156:3.1 (1736.6) 6月28日、火曜日、あるじとその仲間は、シドーンを発ち、ポルピュリオンとヘルヅアへと海岸づたいに行った。かれらは、非ユダヤ人に歓迎され、多くの者達が、教育と説教のこの週に王国に追加された。使徒は、ポルピュリオンで説教し、伝道者はヘルヅアで教えた。24　人がこのように仕事に携わる一方、イエスは、しばらく皆を残し、3、4日ベイルートの海岸都市を訪問

し、その前の年にベスサイダにいた信者のマラキというシリア人を訪ねた。

156:3.2 (1737.1) ７月６日、水曜日、かれらは、シドーンに戻り、日曜日の朝までユースタの家に滞在し、タイアに向けサレプタ経由で海岸沿いに南に下り、７月11日、月曜日、タイアに到着した。この時までに、使徒と伝道者は、これらのいわゆる非ユダヤ人、実際には、ずっと以前のセム系起源からの主に初期のケナーン族の子孫である者達の間で働くことに慣れていた。これらの民族は皆、ギリシア語を話した。使徒と伝道等は、これらの非ユダヤ人の福音を聞こうとする熱意を観察して、また、多くの者が自分達を快く信じようとすることに驚かされた。

4. ツロにて

156:4.1 (1737.2) かれらは、ツロで7月11日から7月24日まで教えた。使徒は各人、伝道師の一人を連れて行き、こうして２人ずつが、ツロ全域とその近郊で教えたり説いたりした。多言語を話すこの賑わしい海港の住民は、快く彼らの話を聞き、また多くの者が、王国の外側へ向かう親交

へと洗礼を受けた。イエスは、ダーヴィドとセロモの時代にタイアの都市国家の王であったヒーラームの墓から遠くないタイアの５キロメートルか、６キロメートルほど南に住んでいたヨセフというユダヤ人の信者の家にその本部を維持した。

156:4.2 (1737.3) この２週間あいだ毎日、使徒と伝道師は、小会合のためにアレクサンダーの防波堤経由でタイアに入り、彼らのほとんどは、毎夜、都市の南のヨセフの家での宿営地に戻るのであった。毎日、信者は、イエスと話すために街からその休憩所へやって来た。全人類に父の愛に関して、そして全人種へ父を明らかにするという息子の任務に関して信者に教えた時、あるじは、７月20日の午後、タイアで一度だけ話した。メルカース寺院の門戸が、あるじに対して開かれるほどに、これらの非ユダヤ人のあいだには王国の福音への多大の関心があったし、また後年、この古代寺院のまさしくその跡地にキリスト教会が建てられたということをこの機会に記録することは興味深いことである。

156:4.3 (1737.4) ツロとシドーンを世界中に知らしめ、また、その世界的規模の商業に非常に貢献し、それに伴う富をもたらした染料であるツロの紫色の製造に関わる指導者の多くが、王国を信じた。その後まもなく、この染料の元となる海の動物の供給が減少し始めると、これらの染料製造者は、これらの甲殻類の新たな生息地を求めて先へと進んだ。そして、このように、彼らは、地の果てまでも移動して、神の父性と人間の兄弟愛に関する知らせ—王国の福音—を携えていった。

5. イエスのツロでの教え

156:5.1 (1737.5) この水曜日の午後、イエスは、講演の中で、暗くされた地下のへどろや堆肥にその根を張りつつも、雪のように真っ白な頭を日差しに高く持ち上げる白百合の話をまず追随者にした。「同様に」と、イエスは言った。「人間は、動物的土壌の中に人間性の根源と本質を持ちつつ、その精霊の性質を天の真理の日差しに掲げ、実際に精霊の気高い実をつけることができる。」

156:5.2 (1738.1) イエスが自身の職業—大工仕事—と関係のある最初で最後のたとえ話を用いたのは、この同じ説教にお

いてであった。「精霊資質の高潔な性格の成長の土台を立派に造る」という訓戒の中で、かれは、言った。「精霊の果実をもたらすためには、精霊の生まれでなければならない。仲間の間で精霊に満たされた生活を送りたいのであれば、精霊に教えられ、導かれなければならない。しかし、虫食いの、あるいは中の腐った材木を角材にし、測定し、滑らかにして貴重な時間を浪費し、ぐらつく梁に全労働力をこのように注いだ後に、時間と嵐に耐える建築物の土台にするには不適当だとそれを拒絶しなければならない愚かな大工の誤りを犯してはならない。知的かつ道徳的な性格基盤が、拡大し高潔にする精霊の性質の上部構造を適切に擁立するよう、そして、このように精霊の性質が人の心を変え、次に、その作り直された心との共同で不滅の運命をもつ魂の展開を達成することを全ての人に徹底させなさい。君達の精霊の性質—連繋して創造された魂—は、生きた成長であるが、個人の心と倫理は、土壌であり、そこから人間の発展のこれらのより高い顕現と神性の目標が芽生えなければならない。進化している魂の土壌は、人間的でかつ物質的

であるが、心と精霊のこの複合生物の目標は精霊的であり、神性である。」

156:5.3 (1738.2) この同じ日の夕方、ナサナエルは、イエスに尋ねた。「あるじさま、私達は、神がそのようなことを決してしないとあなたの顕示によりよく知っていますのに、神が我々を誘惑に導かないように私達が祈るのは何故ですか。」イエスは、ナサナエルに答えた。

156:5.4 (1738.3) 「私が父を知るように、初期のヘブライの予言者達が、非常に幽かに見たようにではなく、君達が、父を知り始めている点からみて、そのような質問をするのは奇妙ではない。君達は、我々の祖先がどのように起こること全てに神を見たことをよく知っている。かれらは、全ての自然の出来事に、そして人間の経験の凡ゆる珍しい挿話に神の手を探した。かれらは、神を善と悪の双方に関係づけた。我々の祖先は、神がモーシェの心を和らげ、ファラオの心を堅くすると考えた。善、または悪の何かをする強い衝動があるとき、人は、この徒ならぬ感情をつぎのように説明して、『主は、このようにしなさい、そのようにしなさい、または、ここ行きなさ

い、そこへきなさいと言われた。』という癖がある。したがって、人間は、非常に多くの場合、また非常に激しく誘惑に走るため、神が、試したり、罰したり、または強化するためにそこへ自分等を導くのだと信じるのが祖先の習慣となった。しかし、君達には、本当に、今、もっと分別がある。君達は、人間が、自身の自分本位の衝動と動物的な性癖の衝動によってあまりにも頻繁に誘惑に導かれるということを知っている。このように誘惑されるとき、君達が、それをあるがままに正直に、心から誘惑を認めるとともに、より高い回路へ、またより理想的な目標へ表現をもとめている精霊と心と体の活力を聡明に傾けるということを、私は君達に諭す。このように、動物的な、そして精霊的な資質間のこれらの無駄な、そして、弱化する闘争をほとんど完全に回避する間、君達は、自分の誘惑を高揚する人間の働きの最高の型へと変えることができるのである。

156:5.5 (1738.4)「しかし、人間の単なる意志の力を通して1つの欲求を他の欲求に、おそらく優れた欲求に代える努力によって誘惑に打ち勝とうとする愚かさについて注意しておこう。君は、理想的なこれらの行為には下級であり、

劣性である君が誘惑と認識するものの代わりに望むそれらのより高い、より理想の行為の形に関心と愛を本当に、心から育てたところで、精霊的に有利なその場所に至るはずである。君達は、人間の欲求の誤魔化しの抑制を抱えすぎるよりは、むしろ、精霊的な変化を通してこのように自由になるであろう。古いものと劣るものは、新しいものと優れたものへの愛に忘れ去られるであろう。美は、常に真実の愛に照らされる者すべての心の中の醜さの上に勝利を収める。新たで真摯な精霊的な愛情の排出的活力には強大な力がある。そこで、もう一度言うが、悪に打ち負かされず、むしろ善で悪を克服せよ。」

156:5.6 (1739.1) 使徒と伝道者は、夜遅くまで質問を続けた。その多くの答えの中から、現代の言い回しで次の考えを再度提示したい。

156:5.7 (1739.2) 力強い野心、理性的な判断、熟した知恵は、社会での成功の基礎である。指導力は、生まれながらの能力、思慮分別、根性、決断力に依存している。精霊の目標は、信仰、愛、真実への専心—正義への飢えと渇き

—神を求め、神のようになることへの心からの願望である。

156:5.8 (1739.3) 自分が人間であるという発見に挫けてはいけない。人間の性質は、悪に傾むくかもしれないが、本来は罪深くはない。遺憾な経験のいくつかを忘れられないことで完全に塞ぎ込まないようにしなさい。時間的に忘れられない誤りは、永遠に忘れられるであろう。君達の目標、君達の経歴の宇宙拡大の遠距離展望を敏速に取得することで魂の重荷を軽くしなさい。

156:5.9 (1739.4) 心の不完全さや肉体の欲望により魂の真価の見積もりを誤るな。人間の一つの不幸な出来事を基準にして魂を判断せず、その将来の目標の評価もしてはいけない。君達の精霊の将来の目標は、精霊的な切望と目的だけに条件づけられる。

156:5.10 (1739.5) 宗教は、神を知る者の進化している不滅の魂の占有的に精霊的な経験であるが、道徳的な力と精霊的な活力は、困難な社会状況の扱いや、複雑な経済問題の解決の際に利用されるかもしれない強大な力である。こ

れらの道徳的で精霊的な資質は、人間の生活の全段階をより豊かにより意義深くする。

156:5.11 (1739.6) 自分を愛する人々だけを愛することを学ぶならば、君達は、狭く、つまらない人生を送る運命にある。人間の愛は、実に相互的であるかもしれないが、神の愛は、その満足追求の全てにおいて外向的である。いかなる被創造物の性質においても愛が少なければ少ないほど、それは、より愛を必要とし、神性の愛は、そのような必要性をより満たそうとする。愛は、決して身勝手ではなく、また自己に与えることはできない。神性の愛は、自己充足的であるはずがない。それは、非-利己的に与えられなければならない。

156:5.12 (1739.7) 王国の信者は、正義の確かな勝利において絶対的な信仰、すなわち全魂の信念を備えるべきである。王国の建設者は、永遠の救済の福音についての真実を疑ってはならない。信者は、いかに人生の多忙さから脇に寄る—物質的存在の悩みから逃げる—かを、ますます学ばなければならない。敬虔な交りにより、魂を生き生きとさせ、心を奮い立たせ、精霊を新しくする。

156:5.13 (1739.8) 神を知る者は、不幸や失望に落胆しない。信者は、純粋に物質的な大変動からくる憂うつさに動じない。精霊生活者は、物質界の出来事に混乱させられない。永遠の命の候補者は、人間生活の全ての変遷や悩みに直面の際、爽快で建設的技術の実務者である。真の信者は、毎日生きており、正しいことをすることはより簡単であるとわかる。

156:5.14 (1740.1) 精霊的な生活は、真の自尊を甚だしく増大させる。しかし、自尊は、自己称讃ではない。自尊は、つねに仲間への愛と奉仕と調和している。君達が、隣人を愛する以上に自分を尊敬するということは可能ではない。一方は、もう一方のための容量の尺度である。

156:5.15 (1740.2) 時の経過とともに、あらゆる真の信者は、仲間を永遠の真実の愛へ誘うことにより巧みになる。君達は、人類に善を明らかにすることにおいて、昨日よりも今日の方が機知に富んでいるか。君達は、去年よりも今年の方がより良い正義の推薦者であるのか。君達は、飢える魂を精霊の王国に導く技術においてますます芸術的になっているのか。

156:5.16 (1740.3) 君の考えが、人間の仲間に関連して地球で機能するために君達を有用な市民にするほどに実用的であると同時に、君達の理想は、自分の永遠の救済を保証するに足りる十分な高さにあるのか。精霊においては、君達の市民権は天にある。肉体においては、君達は、まだ地上の王国の住民である。物質的なものはケーサレーアに、精神的なものは神に返しなさい。

156:5.17 (1740.4) 進化している魂の精霊的な容量の尺度は、真実への信念と人への愛であるが、人間の性格の長所の尺度は、遺恨の把持に抵抗する能力であり、深い悲しみに直面して思い悩むことに耐える能力である。敗北は、真の自己を正直に見ることのできる本当の鏡である。

156:5.18 (1740.5) 長きにわたり年をとり、王国の情勢においてより経験を重ねていくうちに、君達は、厄介な人間との仕事においてより手際がよく、頑固な仲間との起臥においてより寛容になっているか。機転は、社会的な影響力の支柱であり、寛容さは、素晴らしい魂の目印である。これらの希有で魅力ある贈り物を所有しているならば、日の経過に従い、君達は、すべての不要な社会的な誤解

を避けるために相応しい努力をする際に、より注意深く、巧みになるであろう。そのような賢明な魂は、感情的な不調整に苦しむ者達、成長することを拒否する者達、そして優雅に老いることを拒否する者達の部分であることが確かである問題の多くを避けることができる。

156:5.19 (1740.6) 真実を説き、福音を宣言するすべての努力において不正直、不公平であることを回避せよ。妥当でない認識を求めてはならないし、値しない情けも切望してはならない。愛を、功績のいかんにかかわらず、神と、人間の双方からの愛を自由に受け入れなさい、そして、返礼として自由に愛しなさい。しかし、名誉と追従に関する他の全てにおいては、正直に自分に属するものだけを求めなさい。

156:5.20 (1740.7) 神を意識する人間は、救済を確信している。かれは、人生を恐れない。かれは、正直であり、一貫している。かれは避けられない苦しみに勇敢に耐える方法を知っている。かれは、不可避的な困難に直面するとき、不平を言わない。

156:5.21 (1740.8) 本物の信者は、ただ阻まれるからという理由で善行に疲れきるようにはならない。困難は、真実を強く求める者の熱意をそそり、障害は、勇敢な王国建築者の努力に挑戦するだけである。

156:5.22 (1740.9) また、イエスは、皆がツロからの出発準備をする前に、他の多くのことを教えた。

156:5.23 (1740.10) ツロからガリラヤ湖地域への帰還の前日、イエスは、仲間を呼び集め、12人の使徒と自分が取るものとは異なる経路で戻るように12人の伝道者に指示した。ここを去った後、伝道者は、イエスとは二度とそれほど親しく関係しなかった。

6. フォイニキアからの帰還

156:6.1 (1741.1) ７月24日、日曜日の正午頃、イエスと12人は、ツロの南のヨセフの家を後にしてプトレイスへの海岸を下った。かれらは、ここに１日間滞在し、そこに居住する信者達に安らぎの言葉をかけた。ペトロスは、７月25日の夜、彼らに説教した。

156:6.2 (1741.2) 火曜日、かれらは、プトレマイオスを発ち、ティベリアス街道経由でイオータパタ近くまで東の内陸を行った。水曜日、かれらは、イオータパタで止まり、信者に王国の事柄をさらに教えた。木曜日、イオータパタを発ち、ラマハ経由でゼブールーン村へとナザレ-レバノン山道を北へ行った。かれらは、金曜日、ラマハで会合を開き、安息日まで残った。31　日、日曜日、ゼブールーンに着き、かれらは、その夜会合を開き翌日出発した。

156:6.3 (1741.3) ゼブールーンを発ち、ギシャーラ近くのマグダラ-シドーン街道との十字路へと旅をし、そこからカペルナムの南に位置するガリラヤ湖西岸のゲッネサレツへと進み、そこは、ダーヴィド・ゼベダイオスに会う約束をしており、また、王国の福音を説く仕事における次の行動を決めるための協議予定場所であった。

156:6.4 (1741.4) ダーヴィドとの短い談合中、多くの指導者がケリサ近くの湖の反対側に集められると知らされ、そのために、その夜かれらは、一曹の舟で湖を横切った。かれらは、一日丘で静かに休み、翌日あるじがかつて5,000

人に食べさせた近くの公園に行った。かれらは、ここで3日間骨休みをし、毎日会議を開いた。この会議には、カペルナム、およびその近郊に居住するかつての多数の信者の残党であるおよそ50人の男女が出席した。

156:6.5 (1741.5) イエスがカペルナムとガリーラを離れている間、フォイニキアでの滞在期間、イエスの敵は、全活動が解散されたとみなし、しかも、イエスの性急な撤退は、彼がすっかり怯え、自分達を悩ませに戻ることがないことを示していると結論を下した。イエスの教えに対するすべての活発な反対勢力は、ほぼ静まっていた。信者は、もう一度公開の集会を開き始めており、また、福音信者が大きな篩いに掛けられ苦難を経た真の生存者の緩やかではあるが、効果的な合併が起ころうとするところであった。

156:6.6 (1741.6) ヘロデの兄弟フィリッポスは、イエスの本気ではない信者になっており、彼の領地内であるじが暮らし、働くことが自由であるという知らせを送った。

156:6.7 (1741.7) イエスの教えとそのすべての追随者に全ユダヤ人の会堂を閉ざす命令は、筆記者とパリサイ派に逆に作

用した。イエスが、論争対象としての自分を除去するとすぐに、全ユダヤ人の間に反応が起こった。パリサイ派とシネヅリオン派の指導者に対する全般的な遺恨が、エルサレムにはあった。会堂の支配者達は、自分達の会堂を秘かにアブネーとその仲間に解放し始めており、これらの教師が、イエスの弟子ではなくヨハネの追随者であると言った。

156:6.8 (1741.8) ヘローデ・アンティパスでさえ、気持ちに変化を生じ、イエスが、兄弟フィリップの領地内の湖の向こうを旅していると知るや、イエスへ知らせを送り、ガリラヤでの逮捕令状に署名はしたが、ペライアでは逮捕を認可しなかったし、このように、ガリラヤの外に留まるならば、イエスには危害が加えられないということを示した。また、かれは、この同じ采配をエルサレムのユダヤ人にも通知した。

156:6.9 (1742.1) これが、西暦29年、８月１日頃、あるじがフェニキアの任務から戻り、離散し、試され、消耗した勢力の再編成を地上の任務のこの最後の、また、波瀾万丈の年に始めた状況であった。

156:6.10 (1742.2) あるじとその仲間が、新しい宗教、人の心に住む生きている神の精霊の宗教についての公布開始の準備とともに、戦いの問題は、明らかであった。

論文 157
ケーサレーア-フィリッピーにて

157:0.1 (1743.1) イエスは、12 人をケーサレーア-フィリッピー付近での短い滞在に連れ出す前、ダーヴィドの使者を通して家族に会うために8月7日、日曜日、カペルナムに行く手配をした。この対面は、ゼベダイオス家の船大工小屋でする手配をしてあった。ダーヴィド・ゼベダイオスは、ナザレの家族全員—マリアとイエスの弟妹全員—が、居合わすせるようにイエスの弟ユダと打ち合わせをしてあり、イエスは、この約束を果たすためにアンドレアスとペトロスとともに行った。確かに、マリアと子供は、この約束を守るという意向であったが、イエスがフィリッポス領の湖の反対側にいるのを偶々知ったパリサイ派の一集団は、その居場所を知るためにマリアを訪れることにした。このエルサレムの密偵の到着は、マリアを大いに混乱させ、また、密偵は、家族全体の緊張と神経の過敏さに気づき、イエスの訪問が待たれているに違

いないと結論を下した。従って、かれらは、マリアの家に腰を据え、援軍召喚要求をした後で気長にイエスの到着を待った。そして、これは、もちろん家族の誰といえどもイエスとの約束の成就を事実上妨げた。1 日のうち何度か、ユダとルースの二人が、イエスに知らせを送るためにパリサイ派の警戒を避ける努力をしたが、無益であった。

157:0.2 (1743.2) 午後早々に、ダーヴィドの使者達は、パリサイ派が、母の家の戸口の階段に陣取っているとの知らせをイエスにもたらしたことから、かれは、家族訪問を試みなかった。そしてまた、いずれの不手際ではなく、またもやイエスとその地球での家族は、接触し損ねた。

1. 寺院の徴税人

157:1.1 (1743.3) イエスがアンドレアスとペトロスと船大工小屋近くの湖の側にいると、寺院の徴税人は、3人に出くわし、イエスと分かると、ペトロスを脇に呼んで言った。「あなたのあるじは、寺院に税金を納めないのですか。」ペトロスは、イエスが、不倶戴天の敵の宗教活動維持に貢献すべきであるという仄めかしに憤りを示した

かったのだが、徴税人の妙な顔の表情に気づき、エルサレムの寺院擁立のための通例の半シェケル支払いを拒否する行為で自分達を罠にかけるのが目的であると正しく推察した。そこで、「勿論、あるじは税金を支払います。門の側で待っていてくれ。私がやがて、納税金を持ってくるから。」と返答した。

157:1.2 (1743.4) そのとき、ペトロスは、軽率に答えてしまった。ユダは、基金を運んで湖の反対側にいた。ペトロスも、兄も、イエスも、金を持ち合わせていなかった。そして、パリサイ派が自分達を探しているのを知っていたので、かれらは、金の入手のためにベスサイダに首尾よく行くことができなかった。ペトロスが、徴税人と金の支払い約束のことをイエスに話すと、イエスは言った。「約束をしたのならば、支払うべきである。しかし、何をもって約束を果たすつもりなのか。約束の履行のために再び漁師になるつもりなのか。それでも、ペトロス、この情況においては、我々は税を支払うのがいい。我々の態度でこれらの者にいかなる違反の口実も与えないようにしよう。君が舟で出掛け漁をする間、我々はここで

待つ、それを向こうの市場で売ったら、徴税人に我々3人分を払いなさい。」

157:1.3 (1744.1) このすべては近くに立っていたダーヴィドの密者に立ち聞きされ、この密者は、岸近くで釣りをしていた仲間にすぐ来るように合図した。ペトロスが舟で漁に出かける準備をすると、この使者とその漁師の友人は、魚の入った数個の大きい篭をペトロスに差し出し、二人は、近くの魚商までそれを運ぶ手伝いをし、そしてこの商人は、この獲物を十分な額で買い取った。これにダーヴィドの使者が加えたものとで3　人の寺院の税に足りた。徴税人は、税金を、しばらくガリラヤを離れていた分を免除した額を、受け取った。

157:1.4 (1744.2) あなたには、ペトロスが、シェケルを口に含んだ魚を捕らえる記録があるのは奇妙ではない。その時代、魚の口の中に宝物を見つけるという多くの話があった。奇跡に近いそのような話は、ありふれていた。それで、ペトロスが二人を残し舟に向かっているとき、イエスは、滑稽まじりに言った。「王の息子等が貢ぎをせねばならないというのは奇妙である。ふつうは、宮廷維持

のために税をかけられるのは余所者であるが、我々は、その筋にいかなる障害をも与えない必要がある。ここから行きなさい。多分、口にシェケルのある魚を捕まえるであろう。」イエスがこのように話した後、ペトロスがあまりにも早く寺院の徴税人と現れたので、その物語が、マタイオスの福音書の筆者によって記録されているように、後に奇跡に発展しても意外ではない。

157:1.5 (1744.3) イエスは、アンドレアスとペトロスと海岸べりで日没近くまで待った。使者は、マリアの家がまだ監視下にあるという知らせをもってきた。そこで、待っていた3 人は、暗くなってから舟に乗り、ガリラヤ湖の東岸に向かいゆっくりと漕ぎ出した。

2. ベスサイダ-ユーリアスにて

157:2.1 (1744.4) 8 月 8 日、月曜日、イエスと12人の使徒がベスサイダ-ユーリアスの近くのマガダン公園で野営する間、100人以上の信者、伝道者、女性団体、および王国設立に興味を持つ他の者達がカペルナムから会議のためにやって来た。そして、パリサイ派の多くの者も、イエスがそこにいることを知りやって来た。この時までに

は、サッヅカイオスの数人は、イエスを罠にかける努力においてパリサイ派と団結した。イエスは、信者との非公開の会議に入る前、パリサイ派も出席する公開会合を開いた。パリサイ派は、あるじをやじりまくるか、さもなければ集会を妨害しようとした。妨害者の中の先導者は、言った。「先生、教えるためのあなたの権威の印を示して欲しいのです。そこで、同じことが起こるならば、すべての者は、あなたが神によって送られたのであるということを知るでありましょう。」イエスが答えた。「あなたは、夕暮れだと、空が赤いので快晴になると言うし、朝だと、空が赤くどんよりしているので、悪い天気になると言うであろう。あなたは、西で雲が上昇しているのを見るとにわか雨になり、南から風が吹くと、灼熱が来ると言うであろう。あなたは、天空の様相を見分ける方法をよく知っているのに、時代の動向をまったく見分けられないのであるか。真実を知りたい者にはすでに印が与えられている。しかし、悪意をもち、偽善的な世代には何の印も与えられないであろう。」

157:2.2 (1745.1) イエスは、このように話すと引き下がり、追随者との晩の会議に備えた。この会議で、イエスと12　人

がケーサレーア-フィリッピーへの意図された訪問から戻り次第、デカーポリスの全都市と村々で連合した任務を引き受けることが決定された。あるじは、デカーポリス任務のための計画に参加し、集会の解散に当たって言った。「パリサイ派とサッヅカイオス派の潜勢力を警戒するように。彼らの多くの学習の表示に、宗教形式に対する深い忠誠心に誤魔化されてはいけない。ただ生ける真実の精霊と真の宗教の力に関心をもちなさい。君達を救うのは、死んでいる宗教への恐怖ではなく、むしろ王国の精霊の現実における生活経験への信仰である。偏見で目をくらまされたり、恐怖で無力にされないようにしなさい。また、目が見ず、耳が聞かないほど理解を歪めるような伝統への崇敬を許してはならない。真の宗教の目的は、単に平和をもたらすことではなく、むしろ、進展を保証することである。そして、あなたが、心から真実、永遠の現実の理想に愛情を抱かない限り、心の平和も精神の進歩もあるはずがない。生死の問題—永遠の公正な現実に対する時の罪深い喜び—が、君達の前に提示されている。まさに、今、信仰と希望の新しい命の生活に入るにあたり、恐れと疑いの束縛からの救いを見つけ

始めるべきである。そして、あなたの魂に仲間への奉仕の気持ちが起こるとき、それを押し殺してはいけない。仲間が本当に必要としている理性ある活動において、心の中で隣人への愛の感情が溢れ出るとき、愛情のそのような衝動を表現しなさい。

3. ペトロスの告白

157:3.1 (1745.2) 火曜日の早朝、イエスと12人の使徒は、フィリッポスの領地のテトラケスの首都、ケーサレーア-フィリッピーへとマガダンを出発した。ケーサレーア-フィリッピーは、素晴らしい景観地域にあった。それは、ヨルダン川が、地下洞穴から勢いよく流れ出る景色の良い丘の間にある魅力的な谷に抱かれていた。北にはヘルモン山の頂上の全景があり、いっぽう、すぐ南の丘からはヨルダン川上流とガリラヤ湖の絶景があった。

157:3.2 (1745.3) イエスは、王国の仕事上、早期の体験でヘルモン山に行ったことがあり、そして、自分の仕事の最後の時代に入ろうとしていたこのとき、試煉と勝利のこの山に戻ることを望み、そこではかれは、使徒が責任に対する新たな展望を得て、目前にあるつらい時代のために新

たな強さを身につけることを望んだ。道沿いの旅をしてメロムの泉の南を通過する頃、使徒は、フォイニキアや他の場所での最近の経験を話し、自分達の言葉がどう受け取られてきたか、また異民族があるじをどう見なしたかを話した。

157:3.3 (1745.4) 昼食のために止まると、イエスは、12人に、かつてしたことのない自分に関する質問を突然突きつけた。「人は私が誰であると言っているのか。」とこの不意の質問をした。

157:3.4 (1746.1) イエスは天の王国の特徴と性質に関して使徒に訓練をして長い月を過ごし、そして、彼自身の本質と王国との個人の関係についてさらに教え始めなければならない時、その時が来たことをよく知っていた。さて、かれらが、桑の木の下に座をしめたので、あるじは、選ばれた使徒との長い付き合いにおいて最も重要な会議の1つを開く準備をした。

157:3.5 (1746.2) 半分以上の使徒が、イエスからの質問の答えに参加した。かれらは、イエスを知る者全てに予言者か、あるいは並はずれた人だと見られていると言った。悪魔

達の王子と同盟しているという告発によりイエスの力を説明して、敵でさえイもエスに大いに恐れている、と言った。使徒は、イエスとは面識のないイェフーダとサマレイアの何人かは、イエスが、洗礼者ヨハネの死からの甦りであると個人的に信じていると話した。ペトロスは、イエスがいろいろな時、また様々な人々によってモーシェ、エーリージャ、イェシャジャ、イレミアスと比較されたと説明した。イエスがこの報告を聞くと、かれは、まっすぐに立ち、自分の周りに半円になって座っている12　　人を見下ろしながら、瞠目に値する強い調子で、片手で水平に弧を描く身振りで皆を差して尋ねた。「だが、君達は私が誰であると言うのか。」張り詰めた沈黙の瞬間があった。12　人は、あるじから決して目を離さなかった。すると、シーモン・ペトロスが、すくっと立ち上がり勢いよく叫んだ。「あなたは救出者、生きている神の息子であります。」そこで、座っていた11 人の使徒が、一斉に立ち上がった。そうすることにより、ペトロスが全員を代弁したことを示した。

157:3.6 (1746.3) イエスは、彼らに再び座るように合図し、自分はまだ立ったままで言った。「これは、父によって君達

に明らかにされた。私に関して真実を知るべき時が来た。しかし、当分の間はこれを誰にも言わないよう託す。さあ、ここから行こう。」

157:3.7 (1746.4) そして、かれらは、ケーサレーア-フィリッピーへの旅を再開し、その晩遅く到着し、彼らを待ち受けていたケルサス家に泊まった。使徒は、その夜ほとんど眠らなかった。かれらは、自分達の人生と王国の仕事におけるすばらしい出来事が起こったと感じられたようであった。

4. 王国に関する話

157:4.1 (1746.5) ヨハネによるイエスの洗礼と、カナでの水をワインへ変えた時以来、使徒は、いろいろな時に、事実上イエスを救世主として認めていた。短い期間、使徒の何人かは、イエスが期待された救出者であると本当に信じていた。だが、そのような望みは、心に湧きあがるが早いか、あるじが、何らかの打ちひしぐ言葉で、さもなければ期待はずれの行為によってそれらを粉々に打ち砕くのであった。長い間かれらは、精神に抱いた期待される救世主の概念と、こころに抱えたこの並はずれた男性と

の並はずれた共同の経験との葛藤からくる混乱状態にいた。

157:4.2 (1746.6) 使徒が昼食のためにケルサスの庭に集合したのは、この水曜日の昼前であった。その朝起きて以来、その夜の大半、シーモン・ペトロスとシーモン・ゼローテースは、皆があるじを心から、単に救世主としてではなく生ける神の神性の息子として受け入れる時点へと至らせるために同胞に熱心に働きかけていた。二人のシーモンは、イエスの人物評価においてほとんど一致し、同胞が自分達の見方を完全に受け入れるように勤勉に働いた。アンドレアスが、使徒軍団の事務総長としてとどまる一方、弟シーモン・ペトロスは徐々に、また、全員の同意で、12 人の代弁者となっていた。

157:4.3 (1747.1) おおよそ正午にあるじが現れたとき、かれらは、庭で座っていた。かれらは、威厳のある厳粛さの表情を保ち、あるじが近づくと立ち上がった。イエスは、追随者が真剣に考えすぎたり、またはいくつかの出来事が起こっているときには、彼特有のその親しみある友愛の微笑によって緊張をほぐした。イエスは、威厳のある

身振りで、皆に座るように指示した。12　人は、自分達の前に現れるあるじを二度と立って迎えるようなことはしなかった。かれらは、あるじが、そのような外観的な敬意に賛成しないことを見てとった。

157:4.4 (1747.2) 食事を共にし、デカーポリスへのこの次の旅行計画の議論を交わした後、イエスは、突然に顔を上げ皆の顔を見つめて言った。「君等が、人の息子の正体に関してシーモン・ペトロスの宣言に同意してからまる１日が過ぐた今、まだその決定を保持しているかどうか尋ねたい。」これを聞くと、12人は立ち上がり、シーモン・ペトロスは、イエスの方に数歩進み出て言った。「はい、あるじさま、我々は、あなたが生ける神の息子であると信じます。」それから、ペトロスは、同胞と座った。

157:4.5 (1747.3) 立ったままのイエスは、12 人に言った。「君達は、私が選んだ大使であり、私には、君達が単なる人間の知識の結果としてこの信念を抱くことができなかったということを、そういう事情で知っている。これは、君の一番奥の魂への父の精霊の顕示である。従って、君の

中に住む父の精霊の洞察により、君が、この告白をするとき、私は、この基礎の上にこそ天の王国の兄弟愛を築くのであるということを宣言するように導かれるのである。精霊的な現実のこの岩の上に、私は、父の王国の永遠の現実に精霊的な親交の生ける寺を建設するのである。すべての悪と罪の軍勢は、神性の精霊のこの人間の兄弟愛に打ち勝つことはないのである。父の精霊は、この精霊親交の絆に入るすべての者の神の案内人、また、良き師となるが、私は、君と君の後継者達に外向きの王国の鍵—世事に対する権威—王国の仲間としての男女のこの団体の社会的かつ経済的特徴、ものとしての鍵をいま引き渡す。」そしてかれは、自分が神の息子であることを差し当たり誰にも言うべきでないと、もう一度託した。

157:4.6 (1747.4) イエスは、使徒の忠誠と清廉さを信じ始めていた。あるじは、最近経験したことに耐えることのできた自分の選んだ代理人達の信仰が、新配剤の新たな光へと、すぐ先にある、また彼らのすべての望みの明らかな残骸から出現し、それによって暗闇に座る世界を啓発するために先へ行くことのできる火のような試煉に必ずも

ちこたえられる信仰を見受けた。この日あるじは、1 人を除く使徒達の信仰を信じるようになった。

157:4.7 (1747.5) そして、この日以来この同じイエスは、神性の息子性のその同じ永遠のの基盤の上にその生ける寺を建ててきており、それによって神の自意識のある息子になるそのような者達は、精霊の永遠の父の叡知と愛を誉め称え敬意を表するために建てるこの生ける寺院を構成する息子性をもつ人間の石なのである。

157:4.8 (1747.6) イエスは、このように話すと、夕食の時間まで、知恵、強さ、精神的な導きを求めるために12 人に単独で丘に行くように指示した。かれらは、あるじの訓戒通りにした。

5. 新たな概念

157:5.1 (1748.1) ペトロスの告白における新たで重大な特徴は、イエスが神の息子である、その疑いのない神性という画然たる認識であった。イエスの洗礼とカナの結婚式以来、これらの使徒は、まちまちにイエスを救世主と見なしてきたが、国家の救出者が神性であるということは、ユダヤ人の概念の一部ではなかった。ユダヤ人は、救世

主が神性から生じるということは教えなかった。かれは、「塗油された者」であることになってはいたが、かれらは、まず「神の息子」であるとは考えなかった。2 回目の告白では、結合された特徴、人の息子であり神の息子であるという崇高な事実が、より強調された。そして、イエスが天の王国を建設すると断言したのは、神性の性質と人間性の結合のこのすばらしい真実の上にであった。

157:5.2 (1748.2) イエスは、地球での人生を送り、人の息子として贈与任務を完了しようとした。追随者は、イエスを待ち望まれる救世主と考えたかった。救世主への皆の期待を決して実現させることができないということを承知しており、かれは、その期待を部分的に満たすように皆のもつ救世主の概念にそのような修正をもたらす努力をした。しかし、かれは、そのような方策を首尾よく運ぶことはほとんどできないとそのとき気づいた。従って、かれは、大胆にも3 番目の方策を明らかにすること—おおっぴらに、自己の神性を発表すること、ペトロスの告白の真実性を承認すること、そして自分が神の息子であると12 人に宣言すること—にした。

157:5.3 (1748.3) 3年間、イエスは、自分が「人の息子」であると宣言し続けており、同時にこの同じ3年間、使徒は、イエスが待ち望まれているユダヤ人の救世主であるということをますます主張してきた。イエスは、神の息子であることをその時明らかにし、人の息子と神の息子の結合された特徴の概念に基づいて天の王国を築くと決心した。かれは、自分が救世主ではないと納得させる一層の努力を控えることに決めた。かれは、その時豪胆に、自分が何であるかを明らかにし、救世主とみなす使徒の決断を無視するつもりであった。

6. 翌日の午後

157:6.1 (1748.4) イエスと使徒は、ケルサスの家にもう1日踏みとどまり、使者が、ダーヴィド・ゼベダイオスからの資金をもって到着するのを待った。大衆の間でのイエスの人気の崩壊に続き、多大な収入低下があった。彼らがケーサレーア-フィリッピーに着いたとき、基金は底をついていた。マタイオスは、そのような時にイエスと同胞を捨て置くことには気が進まず、かと言って、過去に何度となくしてきたようにはユダに引き渡す些かの資金の持ち合わせもなかった。しかしながら、ダーヴィド・ゼ

ベダイオスは、有り得るこの収入減少を見通しており、それゆえに、イェフーダ、サマレイア、ガリーラ通過の際、追放された使徒とあるじに転送されるべき金の収集者として機能するべきであることを使者達に命じておいた。そういう次第で、この日の夕方までにこれらの使者は、デカーポリス旅行に乗り出すために帰還するまで使徒を支えるに足りる基金を携えてベスサイダから到着した。マタイオスは、その頃までには、カペルナムの最後の不動産の販売から金を手にすることを見込んで、この資金は、匿名でユダに引き渡すべきであると手はずを整えていた。

157:6.2 (1749.1) ペトロスも他の使徒も、イエスの神性に関してあまり十分な概念をもっていなかった。かれらは、これが地球上のあるじの経歴の新しい時代の初め、つまり、この教師・治療師が、新たに発案された救世主—神の息子—になろうとしている時だとはほとんど理解していなかった。この後ずっと、新たな音色が、あるじの知らせで見かけられた。この後、イエスの生活での1つの理想は、父の顕示であり、同時に教育での1つの考えは、生きることでのみ理解できる最高の知恵の体現を自分の宇

宙に提示することであった。かれは、みんなが、命を得て、それをより豊かにできるように来たのであった。

157:6.3 (1749.2) イエスは、その時肉体での人生の４度目の、しかも最後の舞台に上がった。最初の舞台は、その幼年期、人間としての起始点、特質、運命をほんのかすかに意識していただけの数年であった。第２の舞台は、青春期と前進する成年、ますます自意識をもつ歳月、また、自分の神性と人間の任務をより明確に理解するようになった歳月であった。この第２の舞台は、自己の洗礼に関連した経験と顕示で終わった。あるじの地球経験の第３の舞台は、洗礼から、教師、また治療師としての活動の時代を経て、ケーサレーア-フィリッピーでのペトロスの告白のこの重要な時間にまで広がった。あるじの地球生活のこの第３の期間は、使徒と直接の追随者が、彼を人の息子として知り、また救世主と見なした時を含んだ。地球経歴の第４の、また最後の期間は、ここケーサレーア-フィリッピーに始まり、磔刑におよんだ。彼の活動のこの舞台は、神性についての自身の認識に特色づけられ、肉体での最後の年の労働を包含した。第４の時期、あるじは、大部分の追随者にはまだ救世主と考えら

れていたが、使徒には神の息子として知られるようになった。ペトロスの告白は、ユランチアの上の、そして全宇宙のための贈与の息子としての崇高な活動における真実のより完全な認識、そして選ばれた大使達による、少なくともぼんやりと、その事実の認知の新時代の始まりを印した。

157:6.4 (1749.3) このように、イエスは、教えたこと、つまり生きた進歩の技による精霊の特質の成長を人生で例示した。かれは、後の追随者のようには、魂と体の絶え間ない争いを強調しなかった。むしろ、精霊は、双方に対する容易な勝者であり、またこの知的でかつ本能的な交戦状態の多くの有効な和解に効果的であることを教えた。

157:6.5 (1749.4) 新しい意味が、、この時点からイエスの教えのすべてに付随する。ケーサレーア-フィリッピー以前、かれは、その主要な師として王国の福音を提示した。ケーサレーア-フィリッピー以後、かれは、単に教師としてではなく、この精霊の王国の中心であり円周である永遠の父の神性の代表として現れ、そして、それは、イエ

スが人間として、人の息子としてこの全てをするということが要求されていた。

157:6.6 (1749.5) イエスは、教師として、それから教師兼医師として追随者を精霊の王国に導く心からの努力をしたのであったが、かれらは、それを受け入れようとしなかった。イエスは、自分の地球任務が、ユダヤ民族の救世主の期待を実現させることができないことを、よく知っていた。昔の予言者達は、イエスが決してなり得ない救世主を描いていたのであった。かれは、父の王国を人の息子として確立しようとしたが、追随者は冒険をしてまで進もうとはしなかった。これを見て、イエスは、信者と妥協することを選び、そうすることにより神の贈与の息子の役割を公然と引き受けるための準備をした。

157:6.7 (1750.1) 従って、使徒には、イエスがこの日庭で話した多くが、非常に新しく聞こえた。そして、これらの表明の一部は、彼らにさえ奇妙に聞こえた。他の驚くべき発表の中では、次のようなものを聞いた。

157:6.8 (1750.2) 「今後ずっと、もし誰かが我々との親交を望むならば、その者に息子性の義務を引き受けさせ、私につ

いて来させなさい。そして、私がもう君とはいなくなるとき、世界は、あるじがした以上にはよく待遇してくれると考えるてはいけない。私を愛しているならば、君は、崇高な犠牲を払う意欲でこの愛情を立証する用意をしなさい。」

157:6.9 (1750.3) 「また、私の言葉によく注目しなさい。私は、正しき者にではなく、罪人に呼び掛けるために来たのである。人の息子は、力を貸してもらうためにではなく、すべてのために力を貸し、自分の命を贈り物として与えるために来た。私は、迷える者を探し、そして救うために来たのだと断言する。」

157:6.10 (1750.4) 「父からやって来た息子を除いては、この世界の何者も、いま父を見てはいない。だが、この息子が押し上げられるならば、すべての者を自分の方に引きつけるであろうし、この息子の結合された特質のこの真実を信じる者は誰でも、不変の命を授けられるのである。」

157:6.11 (1750.5) 「我々は、人の息子が神の息子であるということを公然とはまだ明らかにしないかもしれないが、君には示されてきたことである。だからこそ、大胆にこれら

の神秘に関して、君に話すのである。この肉体でもって君の前に立っているが、私は、父なる神から来たのである。アブラーハーム以前に私はいる。君が私を知っているように、私は、この世界へ父からやって来て、私は、やがて、この世を離れ、父の仕事に戻らなければならないと宣言する。」

157:6.12 (1750.6) そして、いま、救世主を思い描いた君の祖先の期待を満たしはしないという私の警告に直面して、君の信仰は、これらの宣言の真実を、理解することができるか。私の王国は、この世界にはない。キツネには穴があり、空の鳥には巣があるが、私には頭を横たえるところがないという事実に直面して、君は、私に関する真実を信じることができるか。」

157:6.13 (1750.7)「それでも、私は、父と１つであると言おう。私を見た者は、父を見たのである。私の父は、私とこれらのすべての事で働いているし、君がやがてこの福音を世界中に広めに行くとき、私が君を決して見捨てないように、父は、決して任務に拘わる私を放っておかないのである。

157:6.14 (1750.8) 「そして、君を呼び寄せた人生の栄光を、君が、理解し、壮大さを把握できるようにしばらくの間、私とともに、そして君達だけでいられように、私は、いま君を連れ出してきた。すなわち、人類の心の中に父の王国を設立する信仰上の冒険、この福音を信じるすべての者の魂との生きた関係の親交をうち立てる人生。」

157:6.15 (1750.9) 使徒は、これらの大胆かつ驚異的な声明を黙って聞いた。かれらは、唖然とした。それから、かれらは、あるじの言葉を議論し熟考するために小班に分散した。かれらは、イエスが神の息子であることを認めたが、自分達が導かれてきたことに対し完全な意味を理解することはできなかった。

7. アンドレアスの会議

157:7.1 (1750.10) その晩アンドレアスは、同胞各自との個人的かつ探求のための会議の開催を自ら進んで引き受け、ユダ・イスカリオテを除く仲間全部との有益で元気づける会談をした。アンドレアスは、他の使徒とのようにユダとそのように親密で個人的な関係を一度も享受したことがなかったので、ユダが、使徒軍団の団長と自由に、ま

た内密に関わったことが決してなかったということを重大なことだとは考えていなかった。しかし、アンドレアスは、そのときユダの態度を非常に心配したので、その夜遅く、使徒全員がぐっすりと眠った後、イエスを捜し出し、心配の理由をあるじに示した。イエスは、「アンドレアス、この件で私のところに来たのは不都合ではないが、これ以上我々ができることは何もない。この使徒に精一杯の信頼をもち続けなさい。そして、私とのこの話を仲間には何も言ってはいけない。」と言った。

157:7.2 (1751.1) そしてそれは、アンドレアスが、イエスから聞き出し得た全てであった。つねに何らかの不調和が、このユダヤ人とそのガリラヤの同胞の間にあった。ユダは、洗礼者ヨハネの死で衝撃を受け、時折あるじの叱責にひどく傷つき、イエスが王になることを拒否したとき失望し、イエスがパリサイ派から逃げたとき辱しめられ、パリサイ派からの印の挑戦の受け入れを拒否したときに悔しがり、力の明示の訴えへのあるじの拒否にうろたえ、そして、そのとき、つい最近、空の財政に気重になり、時折は落胆した。また、ユダは、群衆からの刺激のなさを寂しく思った。

157:7.3 (1751.2) 他の使徒の各々は、幾分か、また異なる度合いで、同様にこれらの試煉や苦難に影響されはしが、イエスを愛した。少なくとも、ユダよりもあるじを愛してきたに違いない、なぜならそれらの者は、苦渋の終わりまでイエスと共に堪え忍んだのであるから。

157:7.4 (1751.3) イェフーダ出身であることから、ユダは、「パリサイ派のパン種に注意する」こととというイエスの使徒への最近の警告に個人的に立腹していた。かれは、この声明を覆い隠された自分への言及と見なす傾向にあった。しかし、ユダの重大な誤りは次の通りであった。再三再四、イエスが、使徒だけを祈らせるために行かせようとしたとき、ユダは、宇宙の精霊の力との真心の親交に従事する代わりに、報復の感情を抱く不幸な傾向に屈し、イエスの使命に関し、かすかな疑念を抱くことに拘ると同時に人間の恐怖の考えに耽けった。

157:7.5 (1751.4) そして、今度は、イエスが、ヘルモン山へ使徒を連れて行こうとし、そこで神の息子としての地上の任務の第４の局面を開始することに決めていた。使徒の一部は、ヨルダン川での洗礼のときに出席していて、人の

息子としての経歴の始まりを目撃しており、かれは、そのうちの幾人かもまた神の息子の新たで公の役割を引き受けるための正当性を聞くために出席することを望んでいた。従って、８月12日、金曜日の朝、イエスは12人に言った。「食料を買い込み、向こうの山への旅仕度をしなさい。そこでは、精霊が、地上での私の仕事の仕上げのために授けられに行くように求めている。そして、私とこの経験を潜り抜ける試煉の時に向けて強められるように同胞を連れて行きたいのである。」

論文 158
変貌の山

158:0.1 (1752.1) あるじが、ユランチアの精霊上の運命に決着をつけ、ルーキフェレーンスの反逆を実質的に終結させるために一人山に昇っている間、一度若者ティグラスの待っていたまさにその場所近くのヘルモン山の麓にイエスと仲間がヘルモン山の麓に到着したのは、西暦29年、８月12日、金曜日の午後、日没近くであった。かれらは、直ちに起ころうとしている出来事に対する精霊的な準備のために２日間ここに滞在した。

158:0.2 (1752.2) イエスは、山で何が起ころうとしているか予め大抵のことは知っていたし、全使徒がこの経験を共有できるということを非常に求めていた。かれが、使徒と山麓に留まったのは、自身のこの顕示に彼らを馴染みをもたせることであった。しかし、かれらは、地球に間もなく現れようとしている天の存在体の訪問に対して最大限の経験に自分を完全に晒すことを正当とするほどの精霊的な水準に達することができなかった。仲間の全員を同伴できなかったので、かれは、そのような特別な徹夜に同伴する習慣にあった３人だけを連れていくと決めた。従って、ペトロス、ジェームス、ヨハネだけが、この独得な経験の一部なりともをあるじと共有した。

1. 変貌

158:1.1 (1752.3) ８月15日、月曜日の朝早く、イエスと3人の使徒は、ヘルモン山へ登り始めた。これは、ペトロスが路傍の桑の木の下での注目すべき真昼の告白の6日後のことであった。

158:1.2 (1752.4) この経験が自身の創造した宇宙に関連があったので、肉体での贈与の進捗と関係がある重大事項の処理

のために、イエスは、一人になり山上への召還を受けていた。この途方もない出来事が、イエスと使徒が非ユダヤ人地域にいる間に起こるように調節されたこと、そして実際に非ユダヤ人の山上で生じたということは、意味深いことである。

158:1.3 (1752.5) 正午少し前、山へのほぼ半分の目的地に着き、昼食を取る間、イエスは、洗礼直後のヨルダンの東にある丘での経験について、またこの人里離れた隠遁所へのこの前の訪問の際のヘルモン山での経験についてももう少し3人の使徒に伝えた。

158:1.4 (1752.6) 少年の頃、イエスは、家の近くの丘に登り、エスドラエロン平野での過去の幾つかの帝国軍隊の戦いの幾つかを空想したことであった。今度は、ユランチアの贈与劇の最終場面を演じるためにヨルダン平野へ降りたつ準備のための恩恵を受けにヘルモン山に登った。あるじは、この日ヘルモン山での闘いを放棄して自分の宇宙領域の支配に戻ることができたのだが、楽園の永遠なる息子の命令に迎え入れられる神性の息子性の系列の必要条件を満たすことを選ぶだけでなく、楽園の父の現在の

意志を最終的に、しかも完全に満たすことを選んだのであった。８月のこの日、３人の使徒は、イエスが、完全な宇宙権威の付与を辞退するのを見た。使徒は、天の使者達が、人の息子と神の息子として地球での人生を終えるために彼を後に残し、出発するのを驚きで見ていた。

158:1.5 (1753.1) 使徒達の信仰は、5,000人の給食時が頂点であり、それからは、急速にほとんどゼロまで下降した。あるじ自身の神性告白の結果、そのとき、12人ののろい信仰は、次の数週間、その最高位にまで上がったが、進行的下降をもたらすだけであった。彼等の３度目の信仰復活は、あるじの復活の後まで起こらなかった。

158:1.6 (1753.2) イエスが3人の使徒に別れたのは、この美しい午後の３時頃であった。「父とその使者と親しく交わる時のために、私は一人離れて行く。私の帰りを待ち受ける間、君達にはここに留まり、人の息子の一層の贈与任務に関連する君達の全経験において父の意志が為せるように祈ることを言いつける。」こう言った後、イエスは、ガブリエルと父メルキゼデクとの長い協議のために退き、6 時頃まで戻らなかった。自分の長の不在を懸念

する使徒を目にしたとき、イエスが言った。「なぜ恐れていたのか。君は、私が父の用向きに就かねばならないことをよく知っている。私が共にいないとき、どんな理由で疑うのか。人の息子は、君達の中の1人として全人生に臨むことを選んだと、私は、いま断言する。元気を出せ。私の仕事が終わるまで、お前達を置き去りにするつもりはない。」

158:1.7 (1753.3) 粗末な夕食を共にしているとき、ペトロスは、「同胞と離れてどのくらいこの山に留まるのですか。」とあるじに尋ねた。イエスは「君達が、人の息子の栄光を見て、私が宣言してきたことは何でも本当であることを知るまで。」と答えた。そして、かれらは、赤々と燃える残り火の周りに座り、その朝かなり早く旅を始めたこともあり、闇が使徒の目を重くするまでルーキフェレーンスの反逆ついて話した。。

158:1.8 (1753.4) 3人が30分程熟睡していると、パチパチという近くでの音に突然起こされ、周りをよく調べ非常に驚き狼狽したことは、天界の光の衣裳を纏った2名の光輝くものと親密にしているイエスを目にしたことであった。

イエスの顔と姿は、天界の光の明るさで輝いた。この3名は、耳慣れない言語で話していたが、話された特定の言葉から、ペトロスは、誤ってイエスといるもの達はモーシェとエーリージャであると推測した。実際には、かれらは、ガブリエルと父メルキゼデクであった。物理的制御者は、使徒がイエスの要求のためにこの場面を目撃するように手配をしていた。

158:1.9 (1753.5) 3使徒は、ひどく怯え、正気を取り戻すのに時間が掛かるほどであったが、目もくらむばかりの光景が目前から消えてなくなり、一人立つイエス見て、最初に我にかえったペトロスが言った。「イエスさま、あるじさま、ここにいて良かったです。私達は、この栄光を見て喜んでおります。恥ずべき浮き世に戻る気がいたしません。よければ、私達をここに留め置いてください。そうすれば、幕屋を3つ、あなたに1つ、モーシェに1つ、エーリージャに1つ造るつもりです。」ペトロスは、ちょうどこの時混乱し他には何も思いつかずにこう言ったのであった。

158:1.10 (1753.6) ペトロスがまだ話している間、銀色の雲が近づいて４人を覆った。使徒は、そのとき大いに怯え、礼拝のために俯いていると、声、イエスの洗礼の折に発した同じ声を聞いた。「これは私の愛しい息子である。彼に注目しなさい。」雲が消え失せると、イエスは、再び３人とともにあり、彼らに手を差し下ろし、触れて言った。「立ち上がりなさい。恐れるでない。これより素晴らしいものを見るであろう。」しかし、使徒は、本当に恐れていた。真夜中少し前に下山の準備をしながら静かで物思いに沈む三人組であった。

2. 下山

158:2.1 (1754.1) 下山のおよそ半分の距離の間、一語の言葉も話されなかった。イエスは、そこで話を始めた。「人の息子が甦るまでこの山で見たり聞いたりしたことを誰にも、同胞にさえ話さないことを確実にしなさい。」３人の使徒は、「人の息子が甦る」までというあるじの言葉に衝撃を受け、うろたえた。３人は救出者、神の息子としてのイエスへの信仰をつい最近再確認し、栄光で変貌しているところを目の辺りにしたばかりであるのに、そ

のときまた、イエスは、「死から甦る」と話し始めるのであった。

158:2.2 (1754.2) ペトロスは、あるじが死ぬという考え—心に抱くにはあまりにも不愉快な考えであった—に震え上がりそして、ジェームスかヨハネがこの声明に関し何らかの質問をするかもしれないと恐れ、気を紛らわす会話を始めるのが最善だと考え、他の何を話してよいかが分からず、最初に心に浮かんだ考えを口にした。「あるじさま、救世主の出現前にエーリージャがまず先に来なければならないと筆記者達がいうのは何故ですか。」イエスは、ペトロスが自分の死と復活への言及を避けようとしているのを承知して答えた。「エーリージャは、多くの苦しみを受け最後には拒絶されるはずの人の息子のための道の準備をしに確かに最初に来る。だが、エーリージャは、すでに来たが、人々は、それを受け入れずに自分等の望むがままの仕打ちをしたと言っておく。」そうすると、3人の使徒は、イエスが、洗礼者ヨハネがエーリージャだと述べていると受けとった。もし彼らが、自分を救世主と見なすのであれば、次には、ヨハネが予言者

エーリージャであるはずだと主張するということを、イエスは知っていた。

158:2.3 (1754.3) イエスは、そのときは救世主として受け入れられているということ、奇跡を施す救出者という誤った概念をいかなる程度であろうと満たすという考えを培おうとは思わない理由から、自分の復活後の栄光の先取り的な目撃に関して沈黙を命じた。ペトロス、ジェームス、ヨハネは、心でこの全てをじっくり考えたが、あるじの復活後まで誰にもそれについて話さなかった。

158:2.4 (1754.4) 下山を続けながら、イエスは言った。「君は、人の息子として私を受け入れようとしていない。それ故、私は君の辿りついた決断に応じて受け入れられることを応諾したのである。だが、間違えるでない。私の父の意志は広く行き渡らなければならない。自分自身の意志の傾きに従うことを選ぶならば、君は、多くの期待外れに苦しみ、多くの試煉の経験を覚悟をしなければならない。だが、私が与えてきた教練は、自身が選ぶこれらの悲しみを通してさえ、君には意気高らかに持ち堪えさせるに十分のはずである。」

158:2.5 (1754.5) 他の使徒よりもいかなる意味においても起こったことを目撃する準備ができていたので、または、精霊的にそのような稀な特権を楽しむことが適任であったので、イエスは、変貌の山にペトロス、ジェームス、ヨハネを連れて行ったのではなかった。とんでもない。かれは、12　人の誰も精霊的にはこの経験に資格がないことをよく知っていた。故に、孤独な親交を楽しむために単独になりたいとき、かれは、同伴するために選ばれた3人の使徒だけを連れて行った。

3. 変貌の意味

158:3.1 (1755.1) ペトロス、ジェームス、ヨハネが変貌の山で目撃したそれは、ヘルモン山でのあの盛り沢山な日の天の展示の束の間の一瞥であった。変貌は次の出来事であった。

158:3.2 (1755.2) 1. 楽園の永遠なる母-息子によるユランチアにおけるマイケルの肉体での贈与完了の受諾。永遠なる息子の要求に関する限り、イエスは、履行の保証をそのとき受けた。そして、ガブリエルは、その保証をイエスにもたらした。

158:3.3 (1755.3) 2. 人間の肉体に似せたユランチア贈与の完了に関する無限なる聖霊からの満足感の供述。無限なる聖霊の宇宙代表、すなわちサルヴィントンのマイケルの近い仲間であり、また臨場し続ける同輩は、父メルキゼデクを通してこの時に話した。

158:3.4 (1755.4) イエスは、永遠なる息子と無限なる聖霊の使者達に提示された地球任務の成功に関するこの証言を歓迎したが、父が、ユランチア贈与が終了したことを差し示さなかったことに気づいた。父の見えない臨場だけは、イエスの専属調整者を通して証言した。「これは私のいとしい息子である。息子に注目しなさい。」とだけ言った。そして、また、3人の使徒にも聞こえるように、これは言葉で話された。

158:3.5 (1755.5) イエスは、この天からの訪問後、父の意志を知ろうとし、そして人間の贈与のその自然の終わりまで追求すると決めた。これがイエスにとっての変貌の重要性であった。それは、3人の使徒にとり、神の息子と人の息子として地球の経歴の最終的な局面にあるじの入り口を記す出来事であった。

158:3.6 (1755.6) ガブリエルと父メルキゼデクの正式訪問後、イエスは、これらの聖職に携わる自分の息子との非公式の会話をし、宇宙の情勢に関して語り合った。

4. 癲癇の少年

158:4.1 (1755.7) イエスと仲間が使徒の野営に到達したのは、この火曜日の朝、食時の直前であった。かれらが近づくと、使徒のまわりに集まった相当の群衆がいるのが分かり、やがて50人ほどのこの集団の口論や論争の大声が聞こえ始めた。この群衆は、9人の使徒と、ほぼ同数のエルサレムの筆記者とマガダンからの旅でイエスとその仲間を追ってきた信じる弟子達を有していた。

158:4.2 (1755.8) 群衆は幾多の議論に従事したが、主要な論争は、前日イエスを求めて到着したティベリアスからのある市民に関するものであった。この男性、サフェドのジェームスには、酷い癲癇に苦しむ14歳ほどの一人子の息子がいた。この若者は、この神経性疾患に加えその時地球にいて抑制されていなかった放浪しており悪戯で反逆的な中間者の1人に憑かれており、若者は、癲癇持ちで、かつ悪霊にも憑りつかれていた。

158:4.3 (1755.9) およそ2週間、この憂える父、ヘロデ・アンティパスの下位の役人は、フィリッポス領の西の境界を彷徨して、この病める息子を癒すことを懇願できるかもしれないとイエスを探していた。かれは、イエスが3人の使徒と山にいたこの日の正午頃まで使徒の一行に追いつかなかった。

158:4.4 (1756.1) イエスを探していた40人ほどの他の人々とともに来たこの男性に突然出くわしたとき、９人の使徒は、非常に驚きかなり狼狽えた。この一行の到着時点で、９人の使徒は、少なくともその大半が、従来の誘惑—来たる王国でだれが最も偉大であるかと議論—に屈した。９人は、個々の使徒に割り当てられそうな職務についてせわしなく議論していた。かれらは、救世主の物質的任務に関わるかねてからの望みの考えから完全に、自分たちを簡単に、自由にすることができなかった。そして、彼が本当に救出者であるという使徒達の告白をイエス自身が受け入れたそのとき—少なくとも自身の神性の事実を認めた—あるじとのこの分離期間、心で最優先している望みと野心について話すことは、彼等にとって当然のことであった。そして、使徒達は、イエスを探して来たサ

フェドのジェームスとその仲間の探求者達に遭遇したとき、これらの議論に従事していた。

158:4.5 (1756.2) アンドレアスは、この父と息子を迎えるために歩み寄って「だれを探していますか。」と言った。ジェームスは、「きみ、私は、あなたのあるじを捜し求めております。苦しむ息子の治療を求めております。イエスに子供にとりついているこの悪魔を追い出してもらいたいのです。」と言った。そして、父は、息子が、これらの悪性の発作の結果、何回となくもう少しで命を失うほどに患っているのだと使徒達へ詳しい話を始めた。

158:4.6 (1756.3) 使徒達が聴いていると、シーモン・ゼローテースとユダ・イスカリオテが父の前に進みでて言った。「我々は、息子さんを治せます。あるじの戻りを待つ必要はありません。我々は、王国の大使であり、もはや、これらの事を秘密にしません。イエスは救出者であり、王国の鍵は我々に届けられているのです。」この時までに、アンドレアスとトーマスは、片側で協議中であった。ナサナエルと他の者は、驚いて傍観していた。彼らは全員、シーモンとユダの、厚かましくないとしても、

突然の大胆さにがく然としたのであった。その時、父親が、「これらの仕事があなたに任されていたのでしたら、この束縛から私の子供を救い出すそれらの言葉を話してくださいますように念じます。」と言った。するとシーモンが前進して子供の頭に自分の手を置き、真っ直にその目を覗き込んで命じた。「出て来い、不浄の霊よ、イエスの名において、我に従え。」しかし、若者にはより激しい発作しか起こらず、筆記者達は、嘲笑して使徒を馬鹿にする一方で　、失望した信者達は、これらの友好的でない批判者の嘲りに苦しんだ。

158:4.7 (1756.4) アンドレアスは、この無分別な努力とその惨憺たる失敗に心からくやしがった。かれは、会合と祈りのために使徒達を傍らに集めた。思索のこの期間の後に、かれらは、敗北の痛みを鋭く感じ、自分達の上にある屈辱を味わい、アンドレアスは、悪霊追放を試みたが、2度目の失敗にしか過ぎなかった。アンドレアスは、率直に敗北を認め、自分達と夜を共にするか、それかイエスが戻るまで留まるよう父親に頼み、「恐らくこの類は、あるじの直接の命令以外には出ていかないであろう。」と言った。

158:4.8 (1756.5) そして、イエスが熱狂的で有頂天のペトロス、ジェームス、ヨハネと下山する間、9 人の同胞も混迷と意気消沈の屈辱感に同様に不眠状態であった。使徒達は、打ち萎れ、仕置きを受けた一団であった。しかし、サフェドのジェームスは、諦めようとはしなかった。イエスがいつ戻るのか使徒には見当もつかなかったが、サフェドのジェームスは、あるじが戻るまで留まると決めた。

5. イエス少年を癒す

158:5.1 (1757.1) イエスが近づくと、9人の使徒は、この上もなイエスを歓迎して安心し、また、ペトロス、ジェームス、ヨハネの表情に機嫌の良さと常と異なる熱意を見受け大いに勇気づけられた。彼らは全員、イエスと 3 人の同胞を迎えるため前方に急いだ。かれらが挨拶を交わしていると、群衆が迫ってきており、イエスは、「我々が近づいてきたとき、何を言い争っていたのか。」と尋ねた。しかし、当惑し、恥ずかしめられた使徒が、あるじの質問に答えることができるよりも先に、苦しめられている若者の案じる父親が、進み出てイエスの足元に跪いて言った。「あるじさま、私には、息子が、悪霊にとり

つかれた一人子がいます。かれは、恐怖に大声で叫び、口に泡をふき、発作の際には死人のように倒れるだけでなく、しばしばこのとりついた悪霊は、彼を痙攣で引き裂き、また時には水や、炎の中にさえ投げやるのです。酷い歯軋りや、多くの打ち傷に我が子は衰弱しております。この子の人生は死よりも悪いのです。この子の母と私は、悲しい心と失意にあります。あなたを捜して、昨日の昼頃お弟子さん達に追いつきました。そして、あなたを待つ間、あなたの使徒様が、この悪魔を追い出そうとしましたが、果たせませんでした。あるじさま、今すぐ、私たちのためにそれをしてくださいますか。息子を癒してもらえますか。」

158:5.2 (1757.2) イエスがこの話を聞くと、手近の使徒に探るような目を向けるとともに、跪いている父に触れ、立つように言った。それから自分の前に立っている者すべてに、「なんと不信仰で曲がった世代であろうか。私は、いつまでお前たちを我慢しなけらばならないのだろうか。いつまで一緒にいるのだろうか。信仰の業は不信仰の命令からは生まれない、ということを知るのにどれほどかかるのか。」とイエスは言った。それから、イエス

は、うろたえている父親の方を指して、「こちらに息子を連れて来なさい。」と言った。そこで、ジェームスがイエスの前に若者を連れて来ると、かれは、「いつ頃からこのように苦しめられているのか。」と尋ねた。父親は、「とても小さい時からです。」と答えた。二人が話していると、この若者は、歯軋りをし、口から泡を出しながら激しく襲われ、二人の真ん中に倒れた。かれは、激しい痙攣の後、死人のように彼等の前に横たわった。さて、父親は、再びイエスの足元に跪き、あるじに嘆願して「あなたが息子を治せるのでしたら、我々に同情してこの苦悩から救い出してくださるよう懇願いたします。」と言った。イエスはこれらの言葉を聞くと、父親の気が気でない顔を見下ろして、「父の愛の力を疑うでない。誠意とそなたの信仰の範囲だけを問いなさい。本当に信じる者には、すべてが可能である。」と言った。するとサフェドのジェ　ームスは、長く覚えられることとなる信仰と疑念の混じり合うそれらの言葉、「ご主人さま、信じます。不信仰な私をお助けください。」と言った。

158:5.3 (1757.3) これらの言葉を聞くとイエスは、前進し若者の手を取って言った。「私は、父の意志に従い、生ける信仰のためにこれをするのである。息子よ、立て。服従しない霊よ、出て来い、そして戻ってくるでない。」そして、かれは、若者の手を父の手に置いて言った。「帰りなさい。父はあなたの魂の願いを聞き入れられた。」そこにいたもの全てが、イエスの敵さえも、目撃したことに驚いた。

158:5.4 (1757.4) つい最近、変貌の場面と経験において精霊的な絶頂を享受した3 人の使徒にとり、仲間の使徒のこの敗北と挫折の場面にこのように早く戻るということは実に幻滅であった。しかし、それは、王国のこの12人の大使にとって、ずっとそうであった。かれらは、人生経験において高揚と屈辱の間を耐えず行き来するのであった。

158:5.5 (1758.1) これは、二重の苦悩、身体の病いと精神疾患の、本当の治癒であった。そして、若者は、その時から永久に回復した。ジェームスが回復した息子と共に出発すると、「さあ、ケーサレーア-フィリッピーに行くぞ。すぐに、用意しなさい。と」イエスが言った。そして、

一行は、静かに南に向けて旅をして、その後に群衆が続いた。

6. ケルサスの庭にて

158:6.1 (1758.2) かれらは、ケルサスのもとに一泊し、その晩食事をとり休息した後、12　人は、庭でイエスの周囲に集まり、そしてトーマスが言った。「あるじさま、私達は、山で何が生じたか存じないままで、そして、あなたと共にいた同胞が、非常に励まされている一方で、私達は、今は山で起こったそれらのことを明らかにすることができないのを見て、我々の敗北に関し話してくださるとともに、これらの事柄に関し教えていただきたいと切に願います。」

158:6.2 (1758.3) すると、イエスがトーマスに答えた。「同胞が山で聞いた全ては、しかるべき時機に明らかにされるであろう。しかし、とても浅はかに試みたことにおける敗北の原因は、いま示すつもりである。あるじと仲間、あなたの同胞が、父の意志についてより大きな知識をもとめ、また、その神性の意志を効果的に為すための知恵のより豊かな付与を乞いに、昨日向こうの山に昇っている

間、精霊的な洞察の心を得て、父の意志のより完全な顕示のために我々と祈るように努力せよとの指示で、ここを見守るために居残った者達は、君の指揮での信仰の行使に失敗し、そのうえに、誘惑に屈し、天の王国での自身のための好みの場所—君が思索に耽けることに固執する物質的、現世の王国—を捜し求める従来の悪い傾向に陥った。そして、私の王国がこの世のものでないという反復宣言にもかかわらず、君は、これらの誤った概念に執着している。

158:6.3 (1758.4) 「君の信仰が人の息子の正体を把握するや否や、世俗的昇進に対する利己的願望が後ろに忍び寄り、君がそれを心に描くことを執着するようには存在しない、これからも存在することのない王国、天の王国で、誰が最も偉大であるべきかを、君達は、議論し始めるのである。私は、精霊的な兄弟愛の父の王国で最も偉大な者は、小さく見えなければならず、このように、同胞の奉仕者とならなければならないと言ってはこなかったか。精霊的な偉大さは、自己高揚のための物質的な力の行使の楽しみにあるのではなく、理解ある神のような愛にある。君が試みたことにおいて、君があまりにも完全

に失敗したことにおいて、その目的は、純粋ではなかった。その動機は、神性ではなかった。その理想は、精霊的ではなかった。その野心は、利他的ではなかった。その手順は、愛に基づかず、その達成の目標は、天の父の意志ではなかった。

158:6.4 (1758.5) そのような事が父の意志に従っているとき以外、君は、確立した自然現象の過程を時間短縮することができないということ、また、精霊的な力なくして精霊的な働きもできないということが分かるのにどれだけ時を要するのか。そして、可能性があるとくでさえ、その３番目の重要な人的要因なしに、つまり、生ける信仰の保持の個人の経験なしに、君は、これらのいずれもすることはできない。王国の精霊的な現実とっての魅力として、君にはいつも物質的表示がなければならないのか。君は、稀れな業の可視の展示なくして、私の任務の精霊的な意味を把握することができないのか。すべての物質的な顕現の様子に関係なく、君が、王国のより高く、より精霊的な現実に忠実であることを何時当てにできるのか。」

158:6.5 (1759.1) イエスは、12人にこのように話し、付け加えて言った。「さあ、休みなさい。明日は、マガダンに戻り、デカーポリスの町や村での我々の任務について相談するので。そして、この日の経験の終わりに臨んで、山で君の同胞に話したことを各人へはっきり伝えておこう、そしてこれらの言葉を深く心に留めておくように。人の息子は、今、最後の贈与段階に入る。我々は、それらの労働を始めるところであり、私の破滅を求める者の手に私が届けられるとき、それらの労働は、やがては君の信仰と献身の大きく、最終的な試煉につながるであろう。そして、私が言うことを覚えていなさい。人の息子は殺される、だが、再び甦る。」

158:6.6 (1759.2) かれらは、悲哀に満ちて床に就いた。かれらは、当惑した。かれらは、これらの言葉を理解することができなかった。そして、言われたことに関して何か尋ねることを恐れたが、イエスの復活後にその全てを思い出した。

7. ペトロスの抗議

158:7.1 (1759.3) この水曜日の朝早々に、イエスと12人は、ケーサレーア-フィリッピーからベスサイダ-ユーリアス近くのマガダン公園に向けて出発した。使徒は、その夜ほとんど眠らなかったので、早く起きて出掛ける用意ができた。鈍感なアルペイオスの双子でさえ、イエスの死に関するこの話に衝撃を受けた。南に旅をし、メロムの滝を超えてすぐにダマスカス街道に来て、イエスは、筆記者や他の者が、追ってやがてくるであろうと知り、彼等を避けることを望み、ガリラヤヤをつき抜けるダマスカス街道経由でカペルナムに進むようにと指示した。かれは、これらの者は、自分と使徒が、ヘロデ・アンティパスの領土の通り抜けを恐れると判断した上で、東ヨルダン街道を進むであろうことを知っていたので、こうしたのであった。かれは、この日使徒とだけいられるように自分の批判者と後をつけてきた群衆を避けようとした。

158:7.2 (1759.4) 一行は、昼食時をかなり過ぎて気分回復のために日陰に立ち寄るまでガリラヤを旅し続けた。そして、かれらが食事をともにした後、アンドレアスがイエス言った。「あるじさま、同胞は、あなたの奥深い言葉を理解していません。我々は、あなたが神の息子であると完

全に信じるようになりましたのに、今度は、私達を残す、死ぬというこれらの奇妙な言葉を聞いています。私達は、あなたの教えを理解していません。あなたは寓話で話しているのですか。真っ直に平凡な形で話すようお願いします。」

158:7.3 (1759.5) アンドレアスに答えて、イエスは言った。「同胞よ、私が神の息子であることを君が認めたので、私は、地球での人の息子の贈与の終わりについての真実を明かし始めることを強いられたのである。君は、私が救世主であるという信念に執着すると主張し、また救世主がエルサレムで王座につかなければならないという考えを断念しないであろう。それゆえに、人の息子は、やがてエルサレムに行き、多くのことに苦しみ、筆記者、年長者、主な聖職者に拒絶され、そして、これらのすべての後に殺され、死から甦なければならないということをあくまでも主張し続けるのである。そして、私は寓話など話していない。それらが我々を突然襲うとき、君はこれらの出来事に覚悟ができるという事実を話している。かれがまだ話しているのに、シーモン・ペトロスは、イエスに猛烈に向かっていき、あるじの肩に手をかけて言

った。「あるじさま、あなたに挑むつもりは毛頭ありませんが、私は、これらのことが、あなたに決して起こらないと断言します。」

158:7.4 (1760.1) ペトロスは、イエスが好きであったのでこう言った。しかし、あるじの人間性は、善意の愛情のこれらの言葉に、楽園なる父の意志に従って地球贈与の終わりまで従事する自分の方針を変えるという誘惑の微妙な提案を認識した。そして、優しく、かつ忠誠な友でさえ、自分を思い切らせようと仄めかすという危険性を見破ったので、ペトロスと他の使徒の方に向いて言った。「私の後ろにさがれ。おまえは、敵、誘惑者の精神のにおいがする。おまえがこの様に話すとき、私の側にではなく、むしろ我々の敵側にいる。このように、おまえは、私に対する愛情を私が父の意志を為す際の躓く石にしているのである。人の道ではなく、むしろ神の意志に気を配りなさい。」

158:7.5 (1760.2) 彼らが、イエスの辛辣な非難の最初の衝撃から回復した後、そして旅を再開する前、あるじはさらに話した。「もし誰かが私の後に続きたいのであれば、自分

自身にかまうことなく、日々自分の責任に応え、私について来なさい。利己的に自分の命を救う者は誰でも、それを失うが、私と福音のために命を失う者は誰でも、それを救うのである。全世界を得て、自身の魂を失う者に何の利益があるというのか。人は、永遠の命と引き換えに何を与えるであろうか。すべての天の軍団の面前で、栄光のうちに父の前に出向くとき、私が君を承認することを恥ずかしくないのと同様に、この罪深くて偽善の時代に私と私の言葉を恥じるでない。それでも、現在私の前に立つ君達の多くは、この神の王国が力とともにくるのを見るまでは死を経験しないであろう。」

158:7.6 (1760.3) このように、イエスは、自分の後に続きたいのであれば辿らねばならない苦痛で相剋の道を12人に明らかにしたのであった。地上の王国での自分たちの名誉ある位置を夢みることに固執するガリラヤの漁師達にとり、これらの言葉は、何という衝撃であったことか。しかし、彼らの忠誠な心は、この勇ましい訴えに掻き立てられ、そのうちの誰とてもイエスを見捨てる気にはならなかった。イエスは、彼等だけを争いに送り出してはい

なかった。イエスは、彼らをを導いていた。イエスは、彼らに勇敢に続くことだけを求めていた。

158:7.7 (1760.4) 次第に12人は、イエスが自分の死の可能性についての何かを言っているという考えを理解し始めていた。イエスの死に関して言ったことを、皆はただばく然と理解はしたが、死から蘇るという彼の声明は、全く心に残らなかった。時が経過するにつれ、ペトロス、ジェームス、ヨハネは、山での変貌の経験を思い出し、これらのうちのある事柄に対してはより完全な理解に到達した。

158:7.8 (1760.5) あるじとのすべての関係において、12人は、ペトロスと他の者にこの時与えられたような燃えたつばかりの目を見たり、速やかな叱責の言葉を聞くのは、ほんの数回であった。イエスは、人間の短所に常に我慢強かったが、自分の残りの地上経歴に関わる父の意志の完全な実行計画に差し迫る脅威に直面しては、そうではなかった。使徒は、文字通り唖然とした。かれらは、仰天し、ぞっとした。自分達の悲しみを述べるための言葉が見当たらなかった。あるじが耐えなければならないこと

を、そして自分達も共にこれらの経験に直面しなければならないことが次第に分かり始めたが、かれらは、これらの来たるべき出来事の現実には、イエスの後半の時代に差し迫っている悲劇のこの早期の示唆のずっと後まで気づかなかった。

158:7.9 (1761.1) イエスと12人は、黙してマガダン公園の野営を目指して出発し、カペルナム経由行った。アンドレアスはあるじと話したが、午後が経過するにつれ、かれらは、イエスとは話さなかったが、自分たちだけでよく話した。

8. ペトロスの家にて

158:8.1 (1761.2) 黄昏れ時カペルナムに入り、夕食のために人通りのない往来から直接シーモン・ペトロスの家に行った。ダーヴィド・ゼベダイオスは、湖の向こうに連れていく用意をしたが、彼らがシーモンの家に長居していると、イエスは、ペトロスと他の使徒を見上げて尋ねた。「今日の午後一緒に歩いたとき、君達は非常に熱心に何を話していたのか。」かれらは、来たる王国で自分等がどんな位置につくか、誰が最も偉大であるか等について

ヘルモン山で始めた議論を続けていたので、使徒の多くが黙っていた。イエスは、当日、彼らの考えを占めていたものを知っていたので、ペトロスの幼子の1人に手招きして、自分達の間に置いて言った。「まことに、まことに言いきかせておこう。向きを変えてもっとこの子供のようにならなければ、君達の天の王国での進歩はほとんどないであろう。誰でも謙虚にし、この幼子のようになるものは、天の王国で最も偉大な者となる。そのような幼子を受け入れる者も、私を受け入れるのである。また、私を受け入れる者は、私を遣わしたあの方をも受け入れるのである。最初に王国に入りたいならば、肉体の君の同胞にこれらの素晴らしい真実で仕えることを求めなさい。しかし、これらの幼子の一人を躓かせる者は誰でも、臼石がその首のまわりに掛けられ海中に投げられようとも、それがその者にとっては良いであろう。手ですること、または目で見ることが王国の進展に障害を与えるのであれば、これらの大事にしている偶像を犠牲にせよ、これらの偶像にしがみついたり、王国から締め出されるよりも、人生の愛着あるものの多くを無くして王国に入るほうがよいのであるから。しかし、何よりも、

君がこれらの幼子の一人として蔑まないということを確実にしなさい、幼子等の天使は、いつも天の軍勢の顔を見ているのであるから。」

158:8.2 (1761.3) イエスが、話し終えると、皆は舟に乗りマガダンに向けて出帆した。

論文 159
デカーポリス遊歴

159:0.1 (1762.1) イエスと12人がマガダン公園に到着すると、かれらは、女性団体を含むおよそ100人の伝道者と弟子の集団が待ち受けていると分かった。そこで、かれらは、早速デカーポリスの都市での教育と説教の旅の開始の準備ができた。

159:0.2 (1762.2) 8月18日、この木曜日の朝、あるじは、追随者を集め、使徒各人が12人の伝道者の一人と交じわること、また他の伝道者は、デカーポリスの町や村で働くために12班に分かれて出掛けなければならないと指示した。かれは、女性団体と残りの者は、自分と残るように言いつけた。イエスは、この旅に4週間を割り当て、追随者にはマガダンに戻るのは9月16日、金曜日までに戻

るように指示を与えた。かれは、この間、彼らをしばしば訪ねると約束した。この月の間、この12班は、ゲラーサ、ガマラ、ヒップス、ツァフォン、ガダラ、アビラ、エヅレイ、フィラデルフェィア、ヘシュボン、　ディーオン、スキトイポリスと他の多くの都市で働いた。この旅を通して、治療や他のいかなる並はずれた出来事は、起こらなかった。

1. 許しについての説教

159:1.1 (1762.3) ヒップスでのある晩、イエスは、弟子の質問に答えて許しについて教えた。あるじは言った。

159:1.2 (1762.4)「情けある男が100頭の羊を飼っており、そのうちの1頭が迷い出ていなくなったならば、99 頭を残し、かれは、すぐに迷い出た1頭を探しにいかないか。もしこの男が良い羊飼いであるならば、かれは、それを見つけるまで迷った羊の探索を続けないであろうか。そして、羊飼いが、その迷える羊を見つけたら、自分の肩に担ぎ家に帰り、喜んで友人や隣人を大声で呼び、「喜んでくれ、いなくなった羊を見つけたから。」と言うであろう。私は、悔悟を必要としない99人の正しい者より

も、後悔をする1人の罪人の上により多くの喜びが天にはあると断言する。それでもまだ、これらの幼子の1人でも迷うようなこと、ましてや滅びるようなことは、私の父の意志ではない。君の宗教では、神は、悔悟する罪人を受け入れるかもしれない。王国の福音では、父は、真剣に悔悟を考える前にさえそういう者達を見つけに行くのである。

159:1.3 (1762.5) 「天の父は自分の子供を愛している。だから、君達は互いに愛することを学ぶべきである。天の父は、君を許し、君の罪を許す。だから、君は、互いに許すことを学ぶべきである。兄弟が背くならば、君は、彼のところに行き、気転と忍耐をもってその欠点を示しなさい。また、この全ては単に二人の間でしなさい。かれが、君の言うことを聞き入れるならば、君は兄弟を勝ち得たのである。しかし、彼が、君の言うことを聞き入れないならば、つまり自分の誤りったやり方に固執するならば、君は、君の証言の裏付けをし、怒っている兄弟を公正に、慈悲深く扱ったという事実を証明するために2人の、または3人の証人さえも得られるように、1人か2人の互いの友人を伴って、再び彼のもとに行きなさい。

ところで、彼が、君の同胞の言うことを聞こうとしないならば、君は、会衆に全体の話をしてもよくて、そこで、彼が、兄弟の言うことを聞こうとしないならば、皆が、賢明であると考えるような行動を取らせなさい。そのような手に負えない者は、王国からの追放者にさせなさい。仲間の魂を裁判にかけることを主張することはできないけれども、そして君は、罪を許さないし、あるいは、別の方法で、出しゃばりにも天の軍勢の監督者の特権を奪わないが、同時に、地上の王国で俗世の秩序を維持すべきことは、君の手に命じられている。永遠の命に関して神の命令に干渉することはできないが、彼らが、地球の兄弟の一時的な福祉に関して、君は、行為に関する問題を決定するであろう。そうして、兄弟関係の規律に関するこのすべての問題で君が地球で命じる何であろうとも、天で認識されるであろう。君は、個人の永遠の運命を決定することはできないが、集団の行為に関しては制定することができる、なぜならば、君達の２人か３人が、これらの問題のうちどれかに関して同意し、私に尋ねるならば、それは、もし天の父の意志に反しない陳情であるならば、聞き入れられるからである。そして、

このすべてはいつも本当である、というのも、２人か３人の信者が集まるところには私もいるのであるから。」

159:1.4 (1763.1) シーモン・ペトロスは、ヒップスで労働者達を担当した使徒であり、イエスがこのように話すのを聞いて尋ねた。「主よ、兄は私に何度罪を犯し、そして、私は何度許すのでか。７回までですか。」イエスは、ペトロスに答えた。「7　回どころか77　回さえも。したがって、天の王国は、執事達と財政的な計算を命令したある王にたとえられるかもしれない。彼らが、この計算書の点検を始めたとき、家臣の一人が、王に1 万タラントの負債があると告白しに王の前に連れて来られた。そのとき、宮廷のこの役員は、困窮に遭遇したと、またこの負債の支払い方法がなかったと訴えた。そこで、王は、財産を没収し、その子供等を債務返済のために売るように命令した。この厳しい上意を聞くと、この執事長は、王の前に顔を伏せ、慈悲を示すよう、また、もっと時間をくれるように哀願した。「主よ、もう少し我慢してください。そうすれば、私は、すべてを支払います。」と言った。すると、王がこの怠慢な使用人とその家族を見た

とき、かれは、同情を掻きたられた。かれは、この使用人を釈放し、貸付金は全て免除するように命令した。

159:1.5 (1763.2) 王の手から慈悲と許しを受けたこの執事長は、仕事に取り組み、わずか100デナリオスの借りのある部下の執事の一人を見ると、彼を掴み、つまり喉を掴んで、『私からの借りを全部支払え。』と言った。すると、この執事仲間は、執事長の前に伏せて懇願して言った。『少しだけ我慢してください。そうすれば、まもなく支払えるのです。』ところが、この執事長は、慈悲を示すどころか債務を返済するまで彼を投獄した。仲間の使用人が事の起こりを見て、非常に零落し、主であり支配者である王に告げた。王が執事長の振る舞いを聴くと、この恩知らずで容赦のない男を召喚して言った。『そなたは、意地悪で価値のない執事である。同情を求められたとき、私はそなたの全債務を完全に免除した。私がそなたに慈悲を示したように、そなたもなぜ仲間の執事に慈悲を示さなかったのか。』そして、当然の支払いを済ませるまで引き留めておけるように恩知らずな執事長を獄吏に手渡した。同じように、天なる父は、仲間に惜しみなく慈悲を示す者により多くの慈悲を示すのである。君

は、これらの同じ人間が脆さという罪があるとして同胞を責め慣れているとき、自身の短所の斟酌を求めにどうして来れるのか。君たち全員に言う。自由に、君は王国の良いことを受けてきた。したがって、自由に地球の仲間に与えなさい。」

159:1.6 (1764.1) このように、イエスは、危険性を教え、仲間への私的な判断を下す不公平さを例示した。規律は維持され、正義は管理されなければならないが、このすべての事柄において、兄弟愛の叡知は勝たなければならない。イエスは、立法と司法の権威を個人にではなく団体に与えた。団体の権威のこの授与でさえ、個人的な権威として行使させてはいけない。個人の決定が偏見に歪められるか、または激情に捩じ曲げられるかもしれないという危険が、つねにある。集団による判断は、より危険を取り除き、個人の偏見の不公平さを排除する。イエスは、常に不公平、報復、復讐の要素を最小にしようと努めた。

159:1.7 (1762.9) [慈悲と寛容の具体例としての用語77の使用は、息子ツーバル-カイーンの優れた金属兵器を敵のものと比較して、レメクが、「もしカインに、武器を手に

せず、7　倍復讐があれば、私には今77倍復讐がある。」歓喜のうちに言及した聖書に由来した。]

2. 奇妙な伝道者

159:2.1 (1764.3) イエスは、ヨハネとそこでヨハネと働いている人々を訪問するためにガマラに行った。その晩、ヨハネは、質疑応答の後イエスに言った。「あるじさま、昨日、私は、あなたの名前で教え、悪魔を追い払うことができると主張さえする男に会いにアシュテロースに行ってきました。さて、此奴は、我々といたことは一度もなかったし、後について来てもいないのです。それで、私は、そのようなことをするのを禁じたのです。」イエスは言った。「禁じてはいけない。君は、この王国の福音が、やがて全世界に公布されると認めないのか。福音を信じる者全てが、君の指示に服従するとどうして期待することができるのか。すでに我々の教えが、我々の個人の影響の範囲を超えて現れ始めたことを大いに喜びなさい。ヨハネ、分らないのか、私の名で大きな働きをする者は、結局は、我々の主義を支持しなければならないということが。かれらは、きっと私の悪口をすぐに言いはしないであろう。息子よ、この種の問題で、我々に反対

しない者は、我々の味方であると考えたほうが、君にとっては良いであろう。来る世代では、全く相応しくない多くの者が、私の名で多くの奇妙なことをするが、私はそれらを禁じるつもりはない。喉の渇いている者に1 杯の冷水が与えられるときでさえ、父の使者は、愛のそのような行ないを記録するであろうと言っておく。」

159:2.2 (1764.4) この指示は、ヨハネを大いに当惑させた。あるじが「私と共にいない者は、私に相対しているのである」と言うのを、自分は確かに聞いたのであろうか。かれは、この場合イエスが、王国の精霊的な教えに対する人の個人の関係に言及すると同時に、もう一方では、結局は来たるべき世界規模の兄弟関係を構成する他の集団の仕事の上に、信者の1 集団の行政管理問題と司法権に関して、信者の表面的かつ広範囲の社会的関係に言い及んだことに気づかなかった。

159:2.3 (1765.1) だが、ヨハネは、王国のためにその後の作業に関してこの経験について詳しく話した。それでも使徒達は、大胆にもあるじの名前で教える人々に幾度となく立腹したのであった。イエスの足元に一度も座ったことの

ない者達は、敢えてイエスの名で教えることは、使徒達にはいつも不適切に思えた。

159:2.4 (1765.2) イエスの名前で教えたり働くことをヨハネに禁じられたこの男は、使徒の命令を意に介さなかった。かれは、まっしぐらの努力を続け、メソポタミアに進行する前にカーナタでかなりの信者仲間を奮い立たせた。この男アデンは、イエスがケリサ近くで癒し、またあるじが放逐した想定上の悪霊が、豚の群れに入り、崖の上から真っ逆さまに撲滅へと追いやられたとまったくの自信をもって信じる発狂者の証言からイエスを信じるようになった。

3. 教師と信者のための教示

159:3.1 (1765.3) トーマスと仲間が働いたエヅレイで、イエスは、夜の討議において、真実を説く人々を導くべき、また、王国の福音を教える者すべてに弾みをつけるべき根本理念を説明した。現代の言い回しに纏めて、イエスは次のように教えた。

159:3.2 (1765.4) 常に人の人格を尊重せよ。義は、決して力ずくで進められるべきではない。精霊的な勝利は、精霊的な

力によってのみ得られる。物質的な圧力の使用に対するこの訓令は、物理的な力だけでなく精神力にも言及する。強烈な議論と精神的な優勢は、男女に王国を強制するために用いられることになってはいない。人の心は、論理の単なる重さで潰されたり、抜け目のない雄弁さで威圧されることになってはいない。人間の決定要因としての感情を完全に排除することはできないが、王国の大義を進める人々の教えにおいて直接訴えられるべきではない。人の心に住む神の神霊に直接呼び掛けよ。恐れ、哀れみ、または単なる感傷に訴え掛けるでない。人に訴えるに当たっては、公正であり、自粛をし、然るべき抑制を示しなさい。自分の生徒の人格に対する適切な敬意を示しなさい。「見よ、私は扉の外に立って叩き、誰かが開くならば、入っていく」と私が言ったことを思い出しなさい。

159:3.3 (1765.5) 王国に人を連れて来る際、彼らの自尊心を薄らげたり損ねたりするな。過度の自尊心は、適度の謙虚さを損ない、誇り、自惚れ、傲慢に終わるかもしれないが、自尊心の損失は、しばしば意志の麻痺に終わる。自尊心を失った者にそれを回復させ、自尊心を持っている

者にそれを抑制させるのが、この福音の目的である。生徒の人生での不正を非難するだけであるという誤りを犯してはいけない。彼らの人生で最も賞賛に値することに寛大な認識を与えるように銘記せよ。自尊心を失いそれを取り戻すことを本当に望む者には回復のための手を貸すということを忘れてはいけない。

159:3.4 (1765.6) 臆病で恐れている人間の自尊心を傷つけないように注意せよ。お人よしの我が同胞を犠牲にした皮肉にふけってはいけない。恐怖に支配されている我が子に対して冷笑的でないように。怠惰は、自尊心を破壊する。したがって、自分が選んだ仕事にずっと精を出すように同胞に諭しなさい。そして、職なしでいる者に仕事を保証するあらゆる努力をしなさい。

159:3.5 (1766.1) 男女を脅して王国へと仕向けるような価値のない戦術とういう罪を決して犯さないように。情愛深い父というものは、正当な要求に従わせようとして子供を脅かさない。

159:3.6 (1766.2) 王国の子等は、情感の強い感覚が、神霊の導きに等しくないと、いつか理解するであろう。何かをした

り、または、ある場所に行くことを強く、また妙に感じるということは、そのような衝動が、必ずしも内在する精霊の導きであるというわけではない。

159:3.7 (1766.3) 肉体で送る人生から精霊で送る高度な人生へと移り過ぎる者全てが横断しなければならない衝突のへりに関して全信者に前もって警告せよ。いずれの領域内においても完全に生きる者にはほとんど衝突も混乱もないが、多かれ少なかれ生活の2つの領域の間で移行の時代の不確実性を経験することが、全ての者に運命づけられている。王国に入る際、君は、その責任から逃げたり、その義務を避けたりすることはできないが、覚えていなさい。福音のくびきは、簡単であり、真実の負担は軽いのである。

159:3.8 (1766.4) 世界は、生命のパンのまさしくその存在で飢える空腹な人間で満たされている。人は、内に住むまさしくその神を捜し求めて死ぬ。人は全て、生きた信仰の即座の把握の範囲で憧憬心と疲れきった足で王国の宝物を捜し求める。宗教にとり信仰は、船にとっての帆である。それは、人生のさらなる重荷ではなく、力の追加で

ある。王国に入る者にとり1つの戦いしかなく、それは、信仰のために立派に戦うことである。信者には、1つの戦いしかなく、それは、懐疑—不信仰—に対してである。

159:3.9 (1766.5) 君は、王国の福音を説く際、単に神との友情を教えている。そして、男女とも彼らの特徴的な切望と理想を最も本当に満たすそれを見つけるという点で、この親交は、同様に男女に訴えるであろう。私は、私の子供等の感情に優しく接しており、そのもろさに我慢強いが、罪には無情であり、不正も受け入れないと、私の子供等に伝えなさい。父の前で私は、本当に素直で謙虚であるが、同時に、天の父の意志に対する故意の悪行や罪深い反逆があるところでは執拗に容赦しない。

159:3.10 (1766.6) 君達は、自分の師を悲しみの男として描かないであろう。将来の世代は、我々の喜びの輝き、我々の善意の高揚、我々の上機嫌の精神的刺激を知るであろう。我々は、その変換力に影響し易い朗報を公布する。我々の宗教は、新しい人生と新しい意味で鼓動している。この教えを受け入れる者は、喜びに満ちており、心

ではつねに喜びに促されている。幸福を増大することは、常に神について確信がある全員の経験である。

159:3.11 (1766.7) すべての信者に間違った同情の不安定な支柱にもたれ掛かることを回避するように教えなさい。自己憐憫の甘やかしからは、強い性格を開発することはできない。正直に、惨めさを伴う単なる親交において間違った影響を正直に避ける努力をしなさい。生活の試練の前にただ浮腰で立つ臆病者には、過剰なあわれみを差し控えると共に、勇敢で勇ましい者には同情を差し伸べなさい。自分の問題を前にして闘わずして横たわる者に慰めを示してはならない。お返しに同情してくれるかもしれないからと単に同情するでない。

159:3.12 (1766.8) 私の子供がいったん神性の存在の確信を自覚するとき、そのような信仰は、心を広げ、魂を高潔にし、人格を強化し、幸福を増大させ、精霊的な認識を深め、愛し愛される力を高める。

159:3.13 (1767.1) 王国に入る者は、それによって時の災禍、あるいは普通の自然の大災害から免がれることにはなっていないということを教えなさい。福音を信じることは、

苦境に陥ることを防ぎはしないが、それは、苦境が襲うとき、恐れなくなることを保証する。もし私を信じる勇気があり、心から私のあとについてくるならば、君は、そうすることにより苦境への確かな道に間違いなく踏み入るであろう。私は、逆境の水域から君を救い出すとは約束はしないが、それらの全てを君と共に行くと約束する。

159:3.14 (1767.2) そして、その夜の睡眠に備える前、イエスは、この信者集団にさらに多をく教えたのであった。これらの話を聞いた彼らは、心でそれを大事にし、それが話されたとき出席していなかった使徒や弟子の教化のためにしばしばそれを復唱するのであった。

4. ナサナエルとの話

159:4.1 (1767.3) それからイエスは、ナサナエルとその仲間が働いていたアビラに行った。ナサナエルは、一般的に知られるヘブライ聖書の権威を損なうように思えるイエスの表明のいくつかに非常に悩まされた。そのため、この夜、通常の質疑応答の後、ナサナエルは、イエスを他の者から連れ去って尋ねた。「あるじさま、私は、聖書に

関し真実を知っていると信じてくださいますか。私は、聖典—私の意見では最高である—の部分だけをあなたが教えているのに気づいており、また、アブラーハームとモーシェの時代以前にすら神と共に天国に存在していた法の言葉は神の言葉そのものであるという趣旨でユダヤ教の教師の教えを拒絶していると推し計っています。聖書に関する真実は何でありますか。」イエスが当惑している使徒の質問を聞いて答えた。

159:4.2 (1767.4) 「ナサナエル、君は、正しく審判している。私は、ユダヤ教師のようには聖書を見てはいない。この教えを受ける用意のできていない君の同胞には話さないことを条件に、この事柄に関し話すつもりである。モーシェの法の言葉と聖書の教えは、アブラーハーム以前には存在していなかった。ごく最近になって、現在あるような教典が集成されたのである。それは、ユダヤ民族のより高い考えと切望の最高のものを含むとともに、天の父の特徴と教えを代表することからはほど遠い多くのことも含んでいる。それゆえ、私は、王国の福音のために収集されることになっているそのような真理をより良い教えの中から選ばなければならないのである。

159:4.3 (1767.5) これらの著作は人の業である。彼らの一部は聖人であり、他の者はそれほど神聖ではない。これらの本の教えは、それらが起源を持つ時代の視点と啓蒙の範囲を代表している。真実の顕示としては、最初のものよりも最後のものがより信頼できる。聖書は、誤りっており、起源が、まったく人間的ではあるが、思い違いをしてはならない、それは、この時点では、全世界で探し得る宗教的な知恵と精霊的な真実の最高の収集を構成している。

159:4.4 (1767.6) これらの本の多くは、それに名前のある人々によっては書かれなかったが、収録されている真実の価値は、決して損なわれてはいない。ヨナの物語が事実でなくとも、たとえヨナが生きなかったとしても、この物語の深遠な真実、つまりニネウイへの神の愛、そして、いわゆる異教徒への神の愛は、仲間を愛する全ての者の目には、それでもやはり貴重である。聖書は、神を捜し求め、正義、真実、神聖さの最高概念をこれらの書物に記録として残す人間の思考と行為を提示しているが故に、神聖である。聖書は、たいへん多くの真実を収録しているが、君の現在の教えに照らし合わせるとき、これらの

著作は、同時に、天の父を、私が全世界に明らかにしに来た情愛深い神を、誤って伝える多くのものを含んでいることが、君は知っている。

159:4.5 (1768.1) ナサナエル、愛の神が、全ての敵—男、女、子供等—を殺しに戦いに行くように祖先を導いたと教える聖書の記録を決して一瞬たりとも信じてはいけない。そのような記録は、あまり神聖ではない者の言葉であり、神の言葉ではない。聖書は、いつもそれらを作成する者達の知的で、道徳的で、精神的な状態を反映させるし、こらからも常にそうである。予言者が、サミュエルからイェシャジャまでの記録の作成の際、ヤハウェの概念が、美と栄光で成長することに気づかなかったのか。また、聖書は、宗教的な訓令と精神的な指導を意図しているということを心得るべきである。それは、歴史家か哲学者のいずれの作品でもない。

159:4.6 (1768.2) 「最も嘆かわしいことは、単に聖書の記録の絶対の仕上げとその教えの絶対確実性のこの誤った考えではなく、むしろ伝統の虜となったエルサレムの筆記者とパリサイ派によるこれらの神聖な著作の紛らわしい曲解

である。そして、今、王国の福音のより新しい教えに耐える断固たる努力において、聖書の激励となる教義の概念とその曲解の両方を用いるであろう。ナサナエル、決して忘れてはいけない、父は、いかなる1　世代、または、いかなる1民族への真実の顕示を制限などしていない。多くの熱心な真実探求者は、聖書のこれらの完全性主義に混乱し、落胆して、また、そうあり続けるであろう。

159:4.7 (1768.3) 真実の権威は、その生きた表現に内在する精霊そのものであり、別の世代の、　あまり光彩のない、おそらく霊感を受けた者達の死んだ言葉ではない。そして、たとえ昔のこれらの聖人達が、啓示を受けて精霊に満たされた生活を送ったとしても、それは、彼らの言葉が同様に精霊的に示唆されたことを意味しない。私が去った後、君達が、私の教えに関する解釈の多様性の結果として、真実の競争相手となるいろいろな集団に速やかに分裂しないように、今日、我々は、王国のこの福音の教えの記録を作らない。記録の作成を避けると共に、我々がこれらの真実の生活を送ることが、この世代にとって最も良い。

159:4.8 (1768.4) 私の言うことをよく聞きなさい、ナサナエル、人間性が影響した何も、絶対確実とは見なせない。人の心を通して神性の真実は、本当に光り輝くかもしれないが、それは、いつも相対的な純粋さと部分的な神性さなのである。被創造物は、確実性を切望することはできるが、創造者だけがそれを所有しているのである。

159:4.9 (1768.5) しかし、聖書についての教えで最たる誤りは、神秘と知恵の教えが、密封され、国の賢者だけが、あえて解釈をするという教義である。神性の真実の顕示は、人間の無知、偏狭さ、狭い心の不寛容は別として、封印されてはいない。聖書の光は、偏見にぼかされ、迷信に暗くされるだけである。神聖さの誤った恐怖は、宗教が常識によって保護されることを防いだ。過去の神聖な著作の権威に対する恐怖は、今日の正直な者達が、福音の新たな光、別の世代の神を知るこれらの他ならぬ人間が見ようと激しく望んだ光、の受け入れを事実上妨げている。

159:4.10 (1769.1) 「しかし、すべての中で最も悲しい特徴は、この伝統主義の神聖の教師の数人が、まさにこの真実を知

っているという事実である。かれらは、多かれ少なかれ聖書のこれらの限界を熟知しているが、道徳上の臆病者であり知的に不正直である。かれらは、神聖な著作に関して真実を知っているが、人々にそのような不穏な事実を与えずにいることを好む。その結果、彼らは、他の世代の神を知る人間の道徳上の知恵、宗教上の刺激、精霊的な教えの宝庫としての神聖な著作に訴える代わりに、日常生活の隷属的な詳細と非精霊的な事柄での権威としての案内にして、聖書を曲解し、歪めているのである。

159:4.11 (1769.2) ナサナエルは、あるじの表明に啓発され、しかも衝撃を受けた。かれは、魂の奥深いところで長らくこの話をよく考えてみたが、イエスの上昇後までこの談合に関して誰にも言わなかった。そして、その時でさえ、あるじの教えの全容を伝えることを懸念した。

5. イエスの宗教の肯定的本質

159:5.1 (1769.3) ジェームスが働いていたフィラデルフェィアで、イエスは、王国の福音の肯定的本質に関し弟子に教えた。その所見の中で、聖書の一部が、他よりも多くの真実を含んでいると仄めかしたり、かれの聞き手が、魂

に精霊的な糧を供給すると訓戒していると、ジェームスが、あるじを遮って尋ねた。「あるじさま、私達の個人の啓発のために聖書からよりよい良い章句をいかに選べるかを示唆してもらえますか。」イエスは答えた。「よろしい、ジェームス、聖書を読むときは、次のような永遠に真実で、神々しく美しい教えを探しなさい。

159:5.2 (1769.4)「主よ、私に清い心をお作りください。

159:5.3 (1769.5)「主は私の羊飼い。私は欲しがりません。

159:5.4 (1769.6)「自分を愛するように隣人を愛せよ。

159:5.5 (1769.7)「私が、あなたの主である神が、あなたの右手を堅く握り、恐れるな、と言っている。私があなたを助ける。

159:5.6 (1769.8)「そして、国々は、もはや戦争のことも学ばない。」

159:5.7 (1769.9) そして、これは、イエスが日々、追随者の教訓と王国の新しい福音の教えへの編入のためにヘブライ聖書の最良部分を当てた方法の実例である。他の宗教は、神の近さの考えを人に示唆してきたが、イエスは、依存

する子供等の繁栄に対する情愛深い父の心遣いのような人に対する神の気遣いを示唆し、そして、これを自分の宗教の礎石とした。このように、神の父性は、人の兄弟愛の実行を避けられなくした。神の崇拝と人の奉仕は、イエスの宗教の要点となった。イエスは、王国の福音の新しい教えでユダヤ人の宗教の最良部分を取り入れ、それを相応しい環境に移した。

159:5.8 (1769.10) イエスは、ユダヤ人の宗教の受動的な教義に明確な行動の気勢を組み入れた。イエスは、儀式的な必要条件の否定的な迎合性の代わりに、自分の新しい宗教を受け入れた者に要求される積極的な行動を言いつけた。イエスの宗教は、単に信じることではなく、福音が要求するそれらのことを実際にすることで成り立った。かれは、自分の宗教の本質が、社会奉仕にあるということを教えはしなかったが、むしろその社会奉仕は、真の宗教の精霊のもつ特定の影響の1つであった。

159:5.9 (1770.1) イエスは、聖書の低劣な部分を拒絶する一方、より良い半分を躊躇わずに流用した。かれは、素晴らしい訓戒、「隣人をあなた自身のように愛せよ」を、「自民

族の子孫に復讐をしてはならず、あなた自身のように隣人を愛せよ。」とある聖書からとった。イエスは、聖書の否定部分を退け、積極的な部分を流用した。かれは、否定的であるか、まったく受動的な無抵抗にさえ反対した。かれは、「敵があなたの頬を打つとき、そこに無言で立ち、受け身でおらず、積極的な態度でもう片方の頬をも向けてやりなさい。つまり、誤っている兄弟を悪の道から正しい生活のより良い道へと積極的に導く可能な限り最善のことをしなさい。」イエスは、あらゆる人生状況に前向きに積極的に反応することを追随者に要求した。他の頬を向けるということ、または、それが象徴するかもしれないどんな行為も、自発性を要求し、信者の人格の活発で、行動的で、勇敢な表現を必要とする。

159:5.10 (1770.2) イエスは、悪への無抵抗の実践者に押しつけることを故意に求めるかもしれない者達の侮辱への否定的な服従の習慣についてではなく、むしろ、善で効果的に悪に打ち勝てる目標への善の迅速で積極的な反応において、自分の追随者が、賢明であり、注意深くあるべきであるということを提唱したのであった。忘れてはいけない。本当に良いことは、最も悪質な悪よりもつねに屈

強である。あるじは、正義の積極的な基準を教えた。「誰でも私の弟子になりたい者は、自分自身を捨て、日毎私についてくるための最大限の責任を負いなさい。」そして、「巡り歩いて良い業をなした。」という点で、自らが生きた。そして、福音のこの局面は、彼が、追随者に後に話した多くの寓話によって見事に例示された。かれは、決して我慢強く堪えることではなく、むしろ精力と熱意をもって人間の責任と神の王国における神の特権に最大限に従って生活することを追随者に勧めた。

159:5.11 (1770.3) ある者が不当に外套を取るならば、かれらは、他の衣類も差し出すべきであると使徒に教えるとき、イエスは、「目には目」などの報復するという昔の忠告の代りに、悪事を働く者を救うために何か積極的なことをするという考えほどには、文字通りに2番目の外套に参照はしなかった。イエスは、報復や、ただ受け身の被害者、あるいは不正の犠牲者になるという考えを嫌った。この時、イエスは、悪に挑み、抵抗する3つの方法を教えた。

159:5.12 (1770.4) 1. 悪には悪を報いること—積極的な、しかし、邪悪な方法。

159:5.13 (1770.5) 2. 苦情なしに、抵抗なしに悪に苦しむこと—まったく否定的な方法。

159:5.14 (1770.6) 3. 悪に善を報いること、状況の支配者になるように意志を断言すること、善で悪に打ち勝つこと—積極的で公正な方法。

159:5.15 (1770.7) 使徒の一人がかつて尋ねた。「あるじさま、見知らぬ人が私に彼の荷物を1.6キロメートル強制的に運ばせようとするならば、私は何をすべきでしょうか。」イエスは答えた。「小声でその見知らぬ人を叱りつける間、座って安堵を望むではならない。正義は、そのような受け身の態度からは生まれない。」それ以上有効に積極的な何も考えつかないならば、君は、少なくとも3キロメートル以上荷物を運べる。確実性のその意志は、邪で無信仰の見知らぬ人に難詰する。」

159:5.16 (1770.8) ユダヤ人は、悔悟の罪人を許し、その悪行を忘れ去ろうとする神について聞いたことはあったが、イ

エスが来るまでは、迷える羊を探しに行く神、率先して罪人を探しに行く神、喜んで父の家に戻る気持ちであると分かったとき、歓喜する神については聞かなかった。イエスは、宗教におけるこの肯定的な調子を自分の祈りにさえ伸張させた。また、否定的な黄金律を人間の公正さのための明確な訓戒に変えた。

159:5.17 (1771.1) 全ての教えにおいて、イエスは、気を散らす詳細を絶えず避けた。かれは、美辞麗句を避け、言葉をもて遊ぶ単なる詩的表現を避けた。かれは、大きい意味を小さな表現へと習慣的に当て嵌めた。説明の便宜上、イエスは、塩、パン種、漁、幼子などの多くの用語のこれまでの意味を翻した。微細なことを無限なことなどに比較して、正反対のものを最も効果的に用いた。その描写は、「盲人が盲人を導く。」のように際立っていた。しかし、彼の実例となる教えの中で見つかる最も優れた長所は、その自然さであった。イエスは、宗教の哲学を天から地上にもたらした。かれは、新たな洞察と愛情の新贈与で魂の基本的な必要性を描いた。

6. マガダンへの帰着

159:6.1 (1771.2) デカーポリスでの４週間の任務は、それなりに成功していた。何百もの人々が王国に受け入れられ、使徒と伝道者は、イエスの直接の個人の臨場の刺激なしに仕事を続ける中で貴重な経験をした。

159:6.2 (1771.3) ９月16日、金曜日、労働者の全部隊は、事前の打ち合せに基づいてマガダン公園に集合した。安息日に、100人以上の信者の協議会が開かれ、王国の仕事を拡大するための将来計画が、充分に考慮された。ダーヴィドの使者が出席しており、イェフーダ、サマレイア、ガリラヤと隣接している地区のすべての信者の福利に関する報告をした。

159:6.3 (1771.4) イエスの追随者の僅かしか、使者部隊の奉仕活動の優れた価値をこのとき完全には評価しなかった。また、使者は、パレスチナ中の信者間、それと信者とイエスと使徒との互いの接触を取り続けるだけでなく、これらの暗い日々、イエスとその仲間の生計と、それぞれ12人の使徒と伝道者の家族の擁立のための基金の集金人としての役目も果たした。

159:6.4 (1771.5) およそこの頃、アブネーは、嫁働基地を、ヘブロンからベツレヘムへと移したが、後者は、ダーヴィドの使者のイェフーダの本部でもあった。ダーヴィドは、エルサレムとベスサイダ間で夜通しの中継使者の活動を維持した。これらの走者は、毎晩エルサレムを出発し、シハーとスキトイポリスで中継し、翌朝の朝食時までにベスサイダに到着した。

159:6.5 (1771.6) そのときイエスと仲間は、王国のための働きにおける最後の時代に着手する前に、１週間の休息を取る準備をした。これは、皆の最後の休息であった、というのも、ペライア地域での任務が、皆のエルサレム到着とイエスの地球経歴の終わりの挿話上演のその時までに広げた説教と教えの運動へと展開していったからであった。

論文 160
アレキサンドリアのロダン

160:0.1 (1772.1) 9月18日、日曜日の朝、アンドレアスは、翌週には何の仕事も計画されないと発表した。ナサナエルとトーマスを除く使徒全員は、家族を訪ねるか、友人の家に滞在するために帰省した。この週、イエスは、ほぼ完

全な休息の時を楽しんだが、　　ナサナエルとトーマスは、アレキサンドリアからのロダンという名のギリシア哲学者との討論に非常に忙しった。このギリシア人は、アレキサンドリアで派遣団を指揮していたアブネーの仲間の一人の教えを通じて最近イエスの弟子になったところであった。ロダンは、イエスの新宗教の教えに自分の人生哲学を調和させる仕事に、そのとき本気で従事しており、あるじが、これらの問題を自分と話し合うことを望み、マガダンにやって来た。かれは、イエスか使徒の1 人のいずれかから、直接の、信頼すべき権威ある福音の報告を手に入れることも望んでいた。あるじは、そのような会談に入ることを断ったが、ロダンを丁重迎に迎え、ロダンが言うべきすべてを聞き、代わりに福音について話すようにナサナエルとトーマスにすぐに指示した。

1. ロダンのギリシア哲学

160:1.1 (1772.2) 月曜日の早朝、ロダンは、ナサナエル、トーマス、そして、たまたまマガダンにいた25人ほどの信者への一連の10本の演説を始めた。この講演は、凝縮され、

組み合わされ、現代の言い回しに置き換えられ、考察のために次の考えを提示する。

160:1.2 (1772.3) 人間生活は、大きな3種類の駆動力から成る—衝動、願望、魅力。強い性格、つまり凛とした人格は、生きることへの平凡な魅力が、未探査の考えや未知の理想のより高い領域に移行されなければならないと同時に、生命の自然の衝動を社会的生活術に変換することにより、現在の願望を永続的達成が可能であるそれらのより高い切望に変えることによってのみ身につく。

160:1.3 (1772.4) 文明が複雑になればなるほど、生活技術はより難しくなるであろう。社会慣習における変化が急速であればあるほど、性格開発はより複雑になるであろう。10世代毎の人類は、進歩が続くようであるならば、生きる技術を改めて学ばなければならない。そして、人間が、社会の複雑さにより拍車をかけて巧妙になるならば、生活技術は、より少ない時間、恐らく各世代ごとに再習得される必要がでてくるであろう。生活技術の進化が、生計の方法と足並を揃えることができないならば、人間は、単なる生活衝動—現時点の願望の満足到達—に速

く逆戻りするであろう。このように、人間は、未熟のままであろう。社会は、成長における完全な成熟に失敗するであろう。

160:1.4 (1773.1) 社会の成熟度は、その達成が、永久の目標への漸進的な進歩のより豊かな満足感を与えるそれらのより高い渇望の歓待のために、人が、単なる一時的な現在の願望の満足感を喜んで諦めるその度合に相等しい。しかし、社会の成熟度の本物の印は、民族が、確立された信条や不穏なものに対する従来の考えからの誘惑の容易さを促進する規範、そして理想主義的、精霊的な現実のまだ気づいていない目標到達のための未探検の可能性の追求への活力を要する魅力の下で、穏やかに満足して生きる権利を手渡す意欲である。

160:1.5 (1773.2) 動物は、生命の衝動に立派に反応するが、人類の大多数が生きたいという動物的衝動を経験するだけであるとはいえ、人だけは、生きる技術を極めることができる。動物は、この盲目的、本能的な衝動だけを知っている。人は、この衝動を自然な機能へと超えさせることができる。人は、知的な技術の高い平面で、天の喜びと

精霊的な極みの平面でさえ生活することを選ぶことができる。動物は、生活の目的にいかなる問い掛けもせず、それ故、決して心配せず、また自殺もしない。人間に起こる自殺は、そのような存在物が、存在の動物段階から単に羽化したということ、そして、そのような人間の探検努力が人間経験の技術的段階に達しなかったという更なる事実に現れた証拠となる。動物は、生活の意味を知らない。人は、価値の認識と意味の理解のための能力を備えているだけではなく、意味の意味するところを意識もしている—洞察に対する自意識がある。

160:1.6 (1773.3) 人が、冒険的な技術と不確かな論理の一つのために自然な熱情の人生を敢えて見捨てるとき、かれらは、少なくとも知的で感情的成熟のいくらかの到達点に至るまで、感情障害—闘争、不幸、不確実性—に伴う危険を受ける覚悟をしなければならない。挫折、懸念、怠惰は、道徳的未熟さの明白な証拠である。人間社会は、２つの問題に直面している。個人の成熟の達成と民族の成熟の達成。成熟した人間は、やがて優しい気持ちと寛容の感情をもって他の全ての死すべき運命にある者

を見始める。成熟した人間は、両親が我が子に抱く愛と慰めをもって未熟な人々を見やる。

160:1.7 (1773.4) 成功した生活は、共通の問題解決のための信頼できる技術の習熟する技以外の何ものでもない。あらゆる問題解決の第一歩は、困難を見つけ、問題を特定し、率直にその性質と重大さを認めることである。重大な誤りは、生活問題が我々の深遠な恐怖を起こさせるとき、我々がそれらを認識することを拒否するということである。同様に、我々の困難の承認が、多年の自惚れの縮小、嫉妬の自認、または根深い偏見の放棄を必要とするとき、平均的な人間は、安全の古い幻想と多年の誤った安心感にしがみつくことを好む。勇敢な人だけは、誠実で論理的な心が発見するものを自発的に正直に認め、恐れず立ち向かう。

160:1.8 (1773.5) いかなる問題の賢明かつ効果的な解決も、心が、偏り、激情、そして問題解決のためにそれ自体が提示している実際の問題要因の公平無私の調査を妨げるかもしれない他のすべての純粋に個人的な偏見を持たないことを要求する。生活問題の解決は、勇気と誠実を要す

る。正直で勇敢な個人だけが、恐れを知らない心の論理が導くかもしれない困らせ、混乱させる生活の迷路を勇敢に通過することができる。そして、心と魂のこの解放は、宗教的な熱意に接する賢明な熱意の推進力なしには決して生まれることはできない。難しい物質的な問題と様々の知的な危険に悩まされる目標の追求へと人を努力させるには、すばらしい理想の魅力を必要とする。

160:1.9 (1774.1) たとえ人生の窮状の対処に充分に備えているとしても、君は、仲間の心からの支持と協力を得ることを可能にする人格の心と魅力の知恵を備えていない限り、ほとんど成功を期待することができない。仲間を説得し、人を説き伏せる方法を学ばない限り、君は、世俗的、または宗教的な仕事における大幅な成功を期待することはできない。君は、単に気転と寛容性がなければならない。

160:1.10 (1774.2) しかし、私にある問題解決のすべての方法で最もすばらしいものは、イエスから、君のあるじから学んだ。私は、イエスがそれほどまでに一貫して行い、とても誠意をもって君に教えた、敬虔な思索の隔離に言及

しているのである。天の父との親交のために頻繁に一人で出掛けるイエスのこの習慣には、生活の普通の対立への強さと賢明さを結集するだけではなく、道徳的かつ精霊的な特徴のより高度の問題解決のための活力を充用する技術が見つけられる。しかし、問題解決の正しい方法でさえ、人格の本来の欠陥を補わず、あるいは、真の正義への飢餓と渇きの欠如の埋め合せはしないであろう。

160:1.11 (1774.3) 生活問題の孤独な探求にこれらの時期に従事するために、社会奉仕での多種多様の要求に応ずるための知恵と活力の新たな補給を捜し求めるために、神性との接触意識を全人格に実際に経験させることによって生活の最高の目的を速め深めるために、変わり続ける生活状況に順応する新たでより良い方法の掌握のために努力するために、価値があり真実であるすべてに対する教化された洞察に非常に不可欠である人の個人の態度の極めて重大な再建と再調整をもたらすために、そして、神の栄光のみを意図してこのすべてをするために—誠意であるじの好む祈り「自分の意志ではなく、あなたの意志が為されるように。」を口に出すために、一人離れていくイエスの習慣に、私は深く感銘を受けている。

160:1.12 (1774.4) あなたのあるじのこの敬虔な実践は、心を取り戻す寛ぎ、魂を奮い立たせる照明、人間の問題に勇敢に直面することを可能にする勇気、衰弱させる恐怖を消す自己理解、神のようにあることをあえてすることを可能にする保証を準備させる神性との合一の意識をもたらす。あるじが実践する崇拝の寛ぎ、あるいは精霊的親交は、緊張を和らげ、対立を除去し、人格の全資源を勢いよく増大させる。そして、私がそれを理解するように、この哲学全てが、加えて王国の福音が、新しい宗教を構成する。

160:1.13 (1774.5) 偏見は、真実の認識に対して魂を惑わせ、偏見は、仲間のすべてを抱擁し、包括する基因の崇敬への魂の誠実な献身によってのみ取り除くことができる。偏見は、不可分に利己主義に関連がある。偏見は、単に自己本位の放棄により、代わりに、自己より偉大であるばかりでなく全人類よりもさらに偉大なもの—神の捜索、神性の達成—に基因にもたらす満足感の探索によって根絶することができる。人格の成熟の証しは、最も高く最も神々しく本当であるそれらの価値の実現化を絶えず捜し求めた結果、人間の願望の変化の中にある。

160:1.14 (1774.6) 絶えず変化している世界において、つまり発展する社会秩序の真っ唯中に、運命の固定され確立された目標を維持することは、不可能である。人格の安定性は、無限の到達への永遠の目標として生きている神を発見し、迎え入れる人々だけが、経験することができる。このように、人の目標を時間から永遠、地球から楽園、人間から神性へと移すということは、人が再生され、変換され、再度生まれてくることを必要とする。すなわち、人が神霊の再形成された子供になること、天の王国の兄弟関係への入り口を獲得すること。これらの理想にそわないすべての哲学と宗教は、未熟である。私が教える哲学は、あなたが説く福音に結びつけられ、成熟の新しい宗教、将来の全世代の理想を代表している。そして、我々の理想が最終的であり、確実であり、永遠であり、普遍的であり、絶対であり、無限であるので、これは本当である。

160:1.15 (1775.1) 私の哲学は、真の達成すなわち成熟度の目標の現実に向けての探究という衝動を私に与えた。しかし、私の衝動は、無力であった。私の探究は、駆動力を欠いた。私の探求は、方向づけの確実性の欠如に苦しん

だ。そして、これらの不足は、イエスのこの新しい福音によって、その洞察の強化、理想の高度化、目標の固定によって豊かに供給された。疑念と危惧がなく私は今、心から永遠の冒険的事業に乗り出すことができる。

2. 生活技術

160:2.1 (1775.2) 死すべき者が共存できるただ２つの道がある。物質の、すなわち動物の道と精霊の、すなわち人間の道。合図と音の使用により、動物は、限られた方法で互いに伝達ができる。しかし、そのような伝達形態は、意味、価値、または考えを伝えない。人と動物の間の１つの違いは、人は、最も確かに意味、価値、考え、さらには理想さえ明示し、識別する記号によって仲間との伝達ができるということである。

160:2.2 (1775.3) 動物は、考えを互いに伝えることができないので、人格を開発することができない。人は、このように考えと理想の両方に関して仲間との伝達ができるので人格を開発する。

160:2.3 (1775.4) 人間の文化を構成し、社会交流を通して、人が文明を築くことを可能にするのが、意味を伝え合い共有

するこの能力なのである。知識と知恵は、これらの財産を後の世代に伝える人の能力のため累積するようになる。それによって、民族の文化的な活動：芸術、科学、宗教、および哲学が起こる。

160:2.4 (1775.5) 人間同志の記号伝達は、社会集団を存在させることを先決している。総ての社会集団で最も効果的なものは、家族であり、特に２人の両親である。個人の愛情は、これらの物質的な交流を結合する精霊的な絆である。そのように効果的な関係は、本物の友情の献身において誠に豊かに例証されるように、同性の2人の人間の間でも可能である。

160:2.5 (1775.6) 生きる技術のより高い水準の次の不可欠要因を奨励し促進するので、友情と互いの愛情のこれらの交流は、社会化し、高揚させる。

160:2.6 (1775.7) 1. 相互の自己表現と自己理解。気高い人間の表現を聞く者はだれもいないので、多くのそのような人間の衝動は、消える。誠に、人が単独でいることは良くない。幾分の認識とある程度の評価は、人間の性格の発達には不可欠である。家庭に対する本物の愛情なしには、

子供は、通常の性格の完全な発達を成し遂げることができない。性格は、単なる心と道徳以上の何かである。性格を発達するための意図された全ての社会的関係の中で、最も効果的で理想的なものは、相互の容認による賢明な結婚生活での男女の愛ある、そして理解ある友情である。結婚は、その多様な関係上、強い性格の発達に不可欠のそれらの貴重な衝動や、より高いそれらの動機を引き出すようように最適に意図されている。私は、それ故、家族生活の賛美を躊躇わない、なぜならば、あなたのあるじは、王国のこの新しい福音のまさにその礎石として賢明にも父子関係を選んだのであるから。そして、時の最高の理想を抱く男女の、そのような無類の共同体関係は、その所有のために必要などんな代償にも、どんな犠牲にも値するとても貴重で満足のいく経験である。

160:2.7 (1776.1) 2. 魂の結合—知恵の動員。すべての人間は、遅かれ早かれ、この世の特定の概念と次の世界の特定の展望を身につける。今、人格交流を通して、現世の存在と永遠の見通しに関わるこれらの展望を結合させことが可能である。従って、一人の心は、もう一人の洞察の多くを得ることによってこそ、その精霊的価値を増大させる

のである。このように、人は、それぞれの精霊的な財産を蓄えることによって魂を豊かにする。同様に、この同じ方法で、人は、展望の歪曲、偏見的見解、視点の偏見、そして判断の狭さの犠牲に陥るその常に存在する傾向を避けることが可能となる。恐怖、嫉妬、自惚れは、他の心との親密な接触によってのみ防ぐことができる。あるじは、王国拡大のために働かせるためにあなたをだけを決して派遣しないという事実に、私はあなた達の注意を促す。あるじは、つねに二人ずつであなた方を送る。そして、知恵が知識以上のものなので、知恵の結合において、社会的な小さいか、または大きい集団が、互いにすべての知識を共有するいうことになる。

160:2.8 (1776.2) 3 .生活に対する熱意。孤立は、魂の充電された活力を使い果たす傾向がある。仲間との交流は、人生に対する熱意の更新に不可欠であり、人間生活のより高い段階への上昇の結果として起こるこれらの戦いを交える勇気の維持に不可欠である。友好は、喜びを高め、人生の勝利を賛美する。優しく、親密な人間の交流は、その悲しみから苦しみを、そのつらさから多くの悲痛を奪う傾向がある。友の存在は、すべての美を高め、あらゆる

善を高める。人は、知性の記号によって、その友人の鑑賞力を速め拡大することができる。人間の友情のこの上ない素晴らしさの１つは、想像力の相互の刺激のこの力と可能性である。精霊の大きな力は、共通の目的への心からの献身、宇宙の神格への互いの忠誠心の意識に備わっている。

160:2.9 (1776.3) 4. 悪のすべてに対する強化された防御。 人格交流と相互の愛情は、悪に対する効率のよい保険である。困難、悲しみ、失望、敗北は、　一人で堪え忍ぶとき、より苦痛で落胆的である。交流は、悪を正義に変えはしないが、それは、刺し傷をはるかに減少する際に援助をする。もし友が慰めるために身近にいれば、「悲しむ者達は幸いである」と、あなたのあるじは言った。あなたが、他の人々の幸福を生き甲斐にするという、そして、これらの他の人々があなたの福祉と進歩を生き甲斐にするために同様にいきるという知識には前向きな強さがある。人は、孤立していたのでは苦しむ。地上の一時的なやりとりだけを眺めるとき、人間は、絶えず妨げられるようになる。現在は、過去と未来から分離されると、腹立たしいほどに瑣末になる。永遠の環を垣間見ることだ

けが、人に最善をつくす気にさせることができ、全力を尽くすように挑戦することができる。そして、人がこのように最善の状態にあるとき、他の者のために、時間の中、そして永遠の中に滞在する仲間のために最も利他的に生きる。

160:2.10 (1777.1) そのような奮い立たせ高尚にする交流は、人間の結婚関係にその理想的可能性を見つけると、私は繰り返す。多くのことは、結婚以外で達成されるし、多くの結婚は、これらの道徳的かつ精霊的な果実を全然実らせることができないのは本当である。人間の成熟のこれらの優れた付属物よりも低い他の価値を探す人々が、あまりにも数多く結婚生活に入る。理想的な結婚は、感情の動揺や単なる性的魅惑の気紛れよりも何か安定したものの上に基づいていなければならない。それは、本物の、互いの個人の献身に基づかなければならない。このように、もしあなたが、人間の交流のそのような信頼ができて効果的な小さな構成単位を確立することができれば、これらが集合で組み立てられるとき、世界は、すばらしい、賛美の社会構造、すなわち、人間成熟の文明を見るであろう。そのような民族には、「地球の平和と人

間の間の善意」というあるじの理想について何かが分かり始めるかもしれない。そのような社会が完全ではなく、悪から全く自由ではないとしても、少なくとも成熟の安定化には近づくであろう。

3. 成熟の魅力

160:3.1 (1777.2) 成熟のための努力は、働きを要し、働きは活力を要する。このすべてを成し遂げる力はどこから来るのか。物理的なものは、当然のことと思うかもしれないが、あるじは、「人はパンのみで生きることはできない。」とよく言った。通常の肉体と良い健康が与えられて、我々は、次に、人の眠る精霊的な根源力を誘い出す刺激として機能するそれらの魅力を探さなければならない。イエスは、人の中に神が生きるということを我々に教えた。では、我々は、いかにして人に神格と無限のこれらの魂に結びついた力を解放させることができるのか。神が、外へ向かいながら、我々の魂の回復へと飛び出し、それから他の無数の魂を啓発し、高揚し、祝福する目的にかなうように、我々は、いかにして人が神を放つように動機づけるか。あなたの魂で休眠状態にあるこれらの潜在的な善行の力をいかに見事に目覚めさせるこ

とができるのか。私が確信している１つのこと：感情的興奮は、理想上の精霊的な刺激ではない。興奮は、活力を増大させない。それは、むしろ心と身体の両方の力を消耗させる。では、これらの素晴らしい事をするための活力はどこからくるのか。あなたのあるじに注目しなさい。今でも、我々が活力をここで消費している間、かれは、力を取り込むために丘にいる。このすべての問題の秘密は、精霊的な親交、つまり崇拝に包まれている。人間の見地から、それは、結合された思索と緩和の問題である。思索は、心と精神との接触を成す。緩和は、精霊的な感受性の容量を決定する。そして、弱さのための強さ、恐怖のための勇気、自己の心のための神の意志この置き換えは、崇拝を構成する。少なくとも、それは、哲学者の見方である。

160:3.2 (1777.3) これらの経験が頻繁に繰り返されるとき、かれらは、習慣、強さを与えかつ信心深い習慣へと具体化し、そのような習慣は、ついには、それ自体を精霊的な性格へと系統だてていき、また、そのような性格は、成熟した人格として仲間に最終的に認められる。これらの実行は、初めのうちは難しく手間がかかるが、習慣的に

なると、すぐに安らぎを与え時間の節約となる。社会が複雑になればなるほど、そして文明の魅力が増せば増すほど、神を知る個人にとり、それらの精霊的な活力を節約し、増大するようになっているそのような保護的、習慣的な慣例を形成する必要が緊急となるであろう。

160:3.3 (1778.1) 成熟到達のもう一つの必要条件は、変わり続ける環境への社会集団の協力の調整である。未熟な個人は、仲間の敵意を喚起する。成熟した者は、仲間の心からの協力を得て、それによって生活努力の成果を何倍にも増やす。

160:3.4 (1778.2) 私の哲学は、必要ならば、正義の概念の防衛のために戦わなければならない時があるときもあると私に告げるのだが、人格のより成熟した種類であるじが、気転と寛容性の優れた、魅力のある技術によって簡単に、しかも優雅に等しい勝利を獲得するであろうと確信する。あまりにしばしば、我々が、正義のために戦うとき、勝者と敗北者の双方が、敗北を味わうことになる。つい昨日私は、あるじが、「賢明な者は、施錠された戸から入ろうとするとき、その戸を壊さず、むしろ錠をは

ずすために鍵を探そうとするであろう。」と言うのを聞いた。あまりに頻繁に我々は、恐れていないと自分達を単に納得させるために戦いに従事している。

160:3.5 (1778.3) 王国のこの新たな福音は、より高度の生活へのより新しくより豊かな誘因を供給する生活技術に多大に貢献する。それは、運命の新しく発揚的な目標、最高の生活の目的を提示する。永遠の、神性の存在目標のこれらの新概念は、それ自体が崇高な刺激の中にあり、人のより高い本質の中に住む最良の反応を引き起こしている。知的な思考のあらゆる山頂には、心のための緩和、魂のための強さ、精霊のための親交が発見されることになっている。高度な生活のそのような有利な地点から、人は、思考の下部の段階の者の物質的な苛立たしさ—心配、嫉妬、羨望、報復、未熟な人格の自負心を越えることができる。これらの高く登って行く魂は、生活の小事からの逆流的な対立集団から自身を救い出し、そうして、精霊的な概念と天の意思伝達のより高い流れの意識に達することができるようになるのである。しかし、生活の目的は、安易で一時的な達成を捜し求める誘惑から極めて用心深く警護されなければならない。同様に、そ

れは、狂信の破壊的な脅威に動じなくなるように育てられなければならないのである。

4. 成熟の均衡性

160:4.1 (1778.4) あなたは、永遠の現実到達に集中すると同時に、この世の生活に必要なものに対する準備をしなければならない。精霊が我々の目標であると同時に、肉体は事実である。時折、生活必需品は、偶然に手に入るかもしれないが、一般的には、我々は、それらのために明敏に働かなければならない。生きる2つの重大な問題は、次の通りである。この世での生計と永遠の生存を成就すること。そして、生計を立てる問題でさえ、その理想的な解決のためには宗教を必要とする。これらは双方共に、非常に個人的な問題である。事実、真の宗教は、個人を離れては機能しない。

160:4.2 (1778.5) 現世の生活に不可欠なものは、私が見るのでは、次の通りである。

160:4.3 (1778.6) 1. 良い身体的な健康

160:4.4 (1778.7) 2. 清廉潔白な考え

160:4.5 (1778.8) 3. 能力と技術。

160:4.6 (1778.9) 4. 富—人生の福利

160:4.7 (1778.10) 5. 敗北に耐える能力。

160:4.8 (1778.11) 6. 文化—教育と知恵。

160:4.9 (1779.1) それらがあるじの教えの宗教的な視点から見るとき、肉体の健康と能力の物理的な問題さえ最良に解決される。人の体と心は、神の贈り物、すなわち人の精霊になる神の精霊の居住場所であるということ。こうして、人の心は、物質的なものと精霊的な現実の間の調停者となる。

160:4.10 (1779.2) 人生に望ましいものの持ち分を確保するには、知性を必要とする。日々の仕事をする際の誠実さが、富の報酬を保証すると仮定することは、まったく誤っている。富の時折の、また偶然の獲得は差し置いて、現世の生活の物質的な報酬は、特定のよく組織化された経路に流れると判るし、これらの経路に近づく手立てを持つ者だけは、一時の努力に対して充分に報酬が与えられると思っているかもしれない。貧困は、孤立して独自

の経路で富を追い求める多くのすべての人間にとっての運命であったに違いない。賢明な計画は、従って、現世の繁栄にとって不可欠なものとなる。成功は、仕事への専心だけでなく、人は、物質的な富の経路の何か一つの一部としても機能すべきである。もしあなたが賢明でないならば、あなたの世代のために物質的な報酬なしに献身的な人生を捧げることができる。富の流れの偶然の受益者であるならば、仲間のために価値あることを何もしなかったしても、あなたは、贅沢に溺れるかもしれない。

160:4.11 (1779.3) 能力は受け継ぐものである一方、技能は修得するものである。人生は、巧妙に、上手に何か１つのことができない人にとっては、本当ではない。技能は、生活の満足感の真の原泉の一つである。能力は、先見、洞察の才能を含意する。不正直な業績の魅惑的な報酬にだまされてはならない。正直な努力に固有のその後の見返りのために精を出して働く気になりなさい。賢明な人間は、手段と目的の区別ができる。さもなければ、未来のための過度の計画は、時としてその本来の高い目的を打ち負かす。喜びを求める者として、あなたは、つねに消

費者であると同時に生産者であることを目指すべきである。

160:4.12 (1779.4) 聖なる受託において、人生の強さを与え、価値ある出来事を保持するためにあなたの記憶力を修行しなさい、そして、あなたは、喜びと啓発のためにそれを自由に思い出すことができる。このように、自分のために、また自分の中に、美、善、および芸術的な雄大さを積み重ねる画廊を確立しなさい。しかし、すべての記憶の中で最も貴いものは、並外れた友情の素晴らしい瞬間の大切にされた回想である。そして、これらの記憶の宝物のすべては、精霊的な崇拝の解放する接触の下に最も貴重で発揚する影響を広げる。

160:4.13 (1779.5) しかし、潔く失敗する方法を学ばなければ、人生は、存在の重荷になるであろう。気高い魂が常に身につける敗北には、芸術がある。あなたは、晴れやかに負ける方法を知らなければならない。あなたは、失望を恐れるようではいけない。決して失敗を認めることを躊躇ってはいけない。欺きの微笑と明るい楽天主義の陰に失敗を隠そうとしてはならない。成功を強く主張するこ

とは、常によく聞こえるが、結果は凄まじいのである。そのような技法は、直接、非現実世界の創造へと、そして終極的な幻滅の回避不能な崩壊へとつながる。

160:4.14 (1779.6) 成功は勇気を生み、自信を促進するかもしれないが、知恵は人の失敗の結果への調整の経験だけから生まれる。現実よりも楽観的な幻想を好む人は決して賢明になることはできない。事実を直視し、理想に合わせる人のみが、知恵に到達することができる。知恵は、事実と理想の双方を迎え入れ、従って、哲学の実を結ばない両極端—事実を除外する理想主義者と精霊的な展望を欠く物質主義者—からその熱愛者を救う。成功に対する持続性の間違ったった幻想の助けによって人生の戦いを続けることができるだけであるそれらの臆病な人間は、失敗に苦しみ、自身の想像の夢の世界から最後には目を覚ますとき、敗北を経験するように運命づけられている。

160:4.15 (1780.1) そして、それは、失敗に直面し、宗教の遠大な展望がその最高の影響をおよぼす敗北に適応するこの営みにある。失敗は、宇宙探検の永遠の冒険を始めた神

を追い求める人間の経験における単に教育的な挿話—知恵の習得における文化的な実験—である。そのような人間にとり、敗北は、宇宙現実のより高い段階到達への新しい道具にすぎない。

160:4.16 (1780.2) この世での人生の全事業は、惨敗に見えるかもしれないとしても、神を追い求める人間の経歴は、それぞれの人生の失敗が知恵と精霊達成の収穫をもたらす限り、永遠の光の観点からは大成功であると判明するかもしれない。知識、教養、知恵を混同するという誤りを犯すしてはいけない。それらは、人生に関係があるが、夥しく異なる精霊価値を表しており、知恵は常に知識を支配し、また、いつも教養を称賛する。

5. 理想の宗教

160:5.1 (1780.3) あるじは、本物の人間の宗教を精霊的な現実に接した個人の経験と考えると、あなたは、私に言った。私は、宗教を、全人類の敬意と献身に値すると考える何かに反応する人の経験として考えてきた。この意味において、宗教は、我々の現実理想の最高の概念と精霊的な

達成の永遠の可能性に向かう我々の心の最も遠い範囲を表す我々の最高の献身を象徴する。

160:5.2 (1780.4) 人が部族的、国家的、または人種的な感覚で宗教に反応するとき、それは、自分達の集団に属さないものを本当の人間的ではないと見るからである。我々は、常に、我々の宗教的な忠誠心の対象をすべての人の崇敬に値するといつも見る。宗教は、決して単なる知的な信念または哲学論法の問題ではありえない。宗教は、つねに、永遠に、人生の状況に反応する方法である。それは行為の種類である。宗教は、我々が、普遍的な崇拝に値すると考える何らかの現実に恭しく向かう思考、感覚、行動を包含する。

160:5.3 (1780.5) 何かが、あなたの経験において宗教になったならば、あなたが、全人類、全宇宙の知者の崇拝に値するものとあなたの宗教の最高の概念を考えるので、あなたが既にその宗教の積極的な福音者になったということは、自明である。もしあなたが、宗教の積極的で伝道の福音者でないならば、あなたが宗教と呼ぶものは、単に伝統的な信念か、または知的な哲学の単なる組織にすぎ

ないという点で、あなたは、自己欺瞞に陥っている。あなたの宗教が精霊的な経験であるならば、あなたの崇拝対象は、あなたの全ての精霊化された概念の普遍的な精霊的な現実と理想でなければならない。私は、恐怖、感情、伝統、哲学に基づく全ての宗教を知的な宗教と名付け、本当の精霊的な経験に基づくものを真の宗教と名付ける。宗教的な献身の対象は、物質的か、精霊的か、真実か、虚実か、人間的か、または神性であるかもしれない。故に宗教は、良いか、または邪悪であり得る。

160:5.4 (1780.6) 道徳と宗教は、必ずしも同じではない。道徳の体系は、崇拝対象を理解することによって宗教になるかもしれない。宗教は、忠誠心と至高の献身にその普遍的な魅力を失うことにより哲学体系、または道徳規範に発展するかもしれない。宗教的な忠誠の最高の理想を構成し、そして礼拝者の宗教的な献身の受け手であるこの物、存在体、状態、存在体の位格、または、達成の可能性は、神である。精霊の現実のこの理想に適用される名前に関係なく、それは神である。

160:5.5 (1781.1) 真の宗教の社会的特徴は、それが常に、個人を変え、世界を変えようとする事実にある。宗教は、文明の最も成熟している制度の最高度の社会慣習にさえ表される倫理と道徳の既知の標準をはるかに超越する未知の理想の存在を意味する。宗教は、未知の理想、未踏の現実、超人的な価値、神性の叡知、そして真の精霊達成のために努力する。真の宗教は、このすべてを為す。他のすべての信念は、この名に相応しくない。永遠の神の最高の、そして崇高な理想なくして本物の精霊的な宗教を持つことはできない。この神のない宗教は、人の発明、つまり生気のない知的信仰と無意味な感情的な儀式の人間の制度である。宗教は、その献身の対象として、大きな理想を要求するかもしれない。だが、非現実性のそのような理想は、達成することができない。そのような概念は、錯覚である。人間の達成を可能にする唯一の理想は、永遠の神の精霊的な事実に住まう無限の価値の神性の現実である。

160:5.6 (1781.2) 神という言葉、神の理想と対比される神についての考えは、その宗教がたまたまいかに幼稚であろうが、誤っていようが、どんな宗教の一部にでもなり得

る。そして、神についてのこの考えは、それを心に抱く人がそうすることを選ぶかもしれない何にでもなることができる。低度の宗教は、人間の心の自然な状態を満たすために神についての考えを形づくる。高度の宗教は、人間の心が真の宗教の理想の求めに応ずるために変わることを要求する。

160:5.7 (1781.3) イエスは、無限の現実の理想として父を描くだけでなく、価値のこの神性の源と宇宙の永遠の中心が、地上の天の王国に入る方を選び、その結果、神との息子性と人間との兄弟愛の受け入れの認識をする個々の被創造者によって本当に、個人的に達成できるということを明らかに断言するという点において、イエスの宗教は、崇拝についての我々の以前の全ての概念を超えている。私は、それは、これまでに世界に知られる最高度の宗教概念である、と提案すると同時に、またこの福音が、現実の無限性、価値の神性、普遍的到達の永遠性を含むのでこれ以上高度の概念は決してあり得ない、と断言する。そのような概念は、最高と究極の理想主義の経験達成を構成する。

160:5.8 (1781.4) 私は、あなたのあるじのこの宗教の完全な理想に好奇心をそそられるだけでなく、精霊現実のこれらの理想が、達成可能であると、あなたと私は、楽園の入り口に我々の究極の到着の確実な彼の保証でこの長くて永遠の冒険を始めることができるという、かれの声明に対する信念を明言するように強く魂を動かされているのです。同胞よ、私は信者であり、私は乗り出した。私は、あなたと共にこの永遠の冒険的事業の途中である。あるじは、父から来られ我々に道を示すと言われる。私は、あるじが真実を話していると完全に説き伏せられている。私は、永遠である宇宙なる父は別として、達成可能などんな現実の理想、あるいは完全な価値もないと最終的に確信している。

160:5.9 (1781.5) 私は、そこで、万物の神ではなく、すべての未来の万物の可能性の神を単に崇拝する。従って、その理想が本当であるならば、最高の理想へのあなたの献身は、すべての事物と生存物の過去、現在、未来の宇宙のこの神に対する献身でなけらばならない。そして、他のいかなる神も存在しない。他のいかなる神も存在しない、なぜなら、他のどの神も存在しえないのであるか

ら。他のすべての神は、空想上の作り事、人間の心の幻想、間違った論理の歪曲、それらを捏造する者の自己欺瞞の偶像である。そう、あなたには、この神なしで宗教は有り得るが、それは何も意味しない。生ける神のこの理想の現実を神という言葉を代えようとするならば、あなたは、理想、つまり神性の現実の代わりに考えを置くことにより自己を欺いたことになる。そのような信条は、単に物欲しそうな空想の宗教である。

160:5.10 (1782.1) 私は、イエスの教えに最高の宗教を見ている。この福音は、我々が本当の神を探し、そして見つけることを可能にする。しかし、我々は、天の王国へのこの入り口の代価を支払う気があるのか。我々は、再度生まれる、作り変えられる気持ちがあるのか。。我々は、自滅と魂再建のこの凄じい試煉の過程を受ける気があるのか。あるじは次のように言わなかったか。「自分の命を救おうと思う者は、それを失わなけらばならない。私が平和をもたらすためにきたと考えるのではなく、むしろ、魂の闘争を起こしに来たと思いなさい。」父の意志に専念する代価の支払い後、もしこれらの奉げられた生

活の精霊の道を歩き続けるならば、本当に、我々は、素晴らしい平和を経験する。

160:5.11 (1782.2) 現在、我々は、神性現実のより高い理想主義の精霊界における未来の冒険生活の存在に属する未知の、未踏の系列の魅力の探求に無条件に捧げる間、存在の知られている系列の魅力を本当に見捨てている。我々は、イエスの宗教の理想主義の現実のこれらの概念を仲間の人間に伝えようとする意味のそれらの象徴を求めて、そして、全人類が、この崇高な真実の共同の展望に感激するその日のために祈ることをやめない。父に対する我々の集中化された概念は、ちょうど今、我々の心に保持されているように、神は精霊である。またそれは、我々の仲間に伝えられているように、神は愛である。

160:5.12 (1782.3) イエスの宗教は、生活と精霊の経験を要求する。他の宗教は、伝統的な信条、感情的な感情、哲学的な意識とそのすべてで成るかもしれないが、あるじの教えは、真の精霊的な進行の実際の高さへの到達を必要とする。

160:5.13 (1782.4) 神のようになる衝動の意識は、真の宗教ではない。神崇拝の喜怒哀楽の感情は、真の宗教ではない。自身を捨て、神に仕えるという信念に関する知識は、真の宗教ではない。この宗教がすべての中で最高であるという論理の妥当性は、個人の、精霊的な経験としての宗教ではない。真の宗教は、信仰が心から受け入れたその現実と理想主義にだけではなく、達成の運命と現実への参照がある。そして、このすべてが、真実の精霊の顕示によって我々に個人的にならなければならない。

160:5.14 (1782.5) このようにして、その民族の最も偉大な一人、イエスの福音の信者となったギリシアの哲学者の講説は終わった。

論文 161
ロダンとの更なる討論

161:0.1 (1783.1) 西暦29年９月25日、日曜日、12使徒と伝道者はマガダンに集った。その夜仲間との長い会合の後、イエスは、12使徒と会堂での饗宴に出席するために翌朝早くエルサレムに出発すると告げて皆を驚かせた。かれは、伝道者にはガラリヤの信者達を訪ね、女性班にはしばらくベツセイダに戻るように指示をした。

161:0.2 (1783.2) エルサレムへの出発の際、ナサニエルとトーマスは、アレクサンドリアのロダンとまだ討論の真っ最中であり、数日マガダンに留まるためにあるじの許しを得た。そして、イエスと10人がエルサレムに向かう一方、両者は、ロダンとの白熱の論議にふけった。ロダンは、その前の週自分の哲学を説明し、トーマスとナサニエルは、このギリシアの哲学者に王国の福音を交互に提示したのであった。ロダンは、自分のアレクサンドリアでの師で、また前使徒の一人であった洗礼者ヨハネにより自分、自分がイエスの教えをよく教え込まれていたのだということに気づいた。

1. 神の人格

161:1.1 (1783.3) ロダンと両使徒との間での意見の一致をみない神の人格についての一事項があった。ロダンは、神の属性に関して提示された全てを躊躇いなく受け入れたが、天にいる父は、人間が人格を考えているような人格体ではないと、人格体であるはずがないと強く主張した。神は人格体であると証明する試みに使徒が、難しさを覚える一方、ロダンの方は、神は人格体ではないと証明することはなお更に難しいと悟った。

161:1.2 (1783.4) ロダンは、人格の事実は、平等の存在体、すなわち同情的な理解力をもつ存在体の間の完全で相互の意志伝達の共存する事実にあると強く主張した。ロダンは言った。「人であるために、神は、接触しようとする者にとり完全に理解されるような精霊的な意志伝達の象徴を持たなければならない。しかし神は、無限かつ永遠であり、他のすべての存在の創造主であるが故に、平等の存在に関しては、神だけが宇宙において唯一である。神に等しいものはなく、対等なものとして神と意志伝達できるものはない。神は、誠に全ての人格の源であるかもしれないが、神は人格を越えたものである。」

161:1.3 (1783.5) この主張は、トーマスとナサニエルを大いに苦しめた。そこで二人は、イエスに助けを求めたが、あるじは、この討論への参加を拒否した。トーマスに言った。「君が、父の無限と永遠の性格の理想を精霊的に知る限り、君が抱く父に関する考えなど大した事ではない。」

161:1.4 (1784.1) トーマスは、神は人間と通じ合うと、したがって、ロダンの定義内でさえも、父は人であると主張し

た。このギリシア人は、神は自ら正体を見せない、神は未だに謎であるという理由でこれを拒んだ。そこでナサニエルは、神に接した自らの経験に訴えた。するとロダンは、自分も同じような経験をしたと同意して認めたが、これらの経験は、単に神の実在性であり人格ではないと争った。

161:1.5 (1784.2) 月曜日の夜までには、トーマスはあきらめた。だが、ナサニエルは、火曜日の夜までに神の人格をロダンに信じさせた。かれは、次の理論過程においてギリシア人の見方を全く変えた。

161:1.6 (1784.3) 1. 楽園の父は、自分自身に完全に等しく、全く自分のようである少なくとも二つの他の存在体—永遠なる息子と無限の精霊—との意思疎通を享受する。このギリシア人は、三位一体の教義を考慮して、宇宙なる父の人格可能性を認めることを余儀なくされた。それは、12人の使徒の心の三位一体の拡大した概念へと導いたこれらの議論のその後の考察であった。

161:1.7 (1784.4) 2. イエスは父と同等であったことから、またこの息子は、地上の子らへの人格の明示を成し遂げたこと

から、そのような現象は、神の三位すべてによる人格所有の事実の証明、可能性の明示を構成し、そして人間との神の意思疎通の能力、また神との人間の意思疎通の可能性に関する問いを永遠に解決した。

161:1.8 (1784.5) 3. イエスは、人間との共済の間柄にあり、完全な意思疎通の関係にあったということ。イエスは神の息子であったということ。息子と父の関係は、意志伝達の平等と共感のある理解の相互関係を前提としたということ。イエスと父は、一つであったということ。イエスは、神と人間双方との理解に向けての意志伝達を同時に保持したということ、そして、神と人間の双方が、イエスの意志伝達の象徴の意味を理解するので、連絡能力の必要条件に関する限り、神と人間の双方は、人格の特質を備えていたということ。それが、人間の中の神の存在を決定的に証明すると同時に、イエスの人格が、神の人格を立証したということ。同じものに関連がある二つの事柄は、互いに関係するということ。

161:1.9 (1784.6) 4.人格は、人間実在と神性の価値についての人間のもつ最高概念を表すということ。神もまた、神性実

在と無限の価値についての人間のもつ最高概念を表すということ。それゆえ神は、現実には、たとえ無限にかつ永遠に人格についての人間の概念と定義を卓越しているが、それでも常に、普遍に人格であるところの神性と無限の人格でなければならないということ。

161:1.10 (1784.7) 5．全ての人格の創造主であり、全ての人格の目標であるがゆえに、神は、人格でなければならないということ。ロダンは、「完全であれ、天国の父が完全であるように。」というイエスの教えに絶大に影響を受けた。

161:1.11 (1784.8) ロダンはこれらの反論を聞くと、「私は確信した。もし超人的、卓越的、崇高的，無限的、永遠的、究極的、普遍的というような一連の拡大された価値を人格の意味に補足にすることによりそのような信念の限界を認めてくれるならば、私は人としての神を認めよう。私は、神は、無限に人格以上でなければならないと同時に、それ以下の何でもあるはずがないといま確信した。私は、この議論を終え、イエスを父の個人的啓示として、また論理、理由、哲学における満たされていない全

ての要因を満足させるものとして受け入れる事に満足する。」

2. イエスの神性

161:2.1 (1785.1) ナサニエルとトーマスが、王国の福音についてのロダンの見解を完全に認めたので、イエスの神性の本質に関する教え、ごく最近、公に発表された教義に関する議論点だけが残った。ナサニエルとトーマスは、あるじの神性に関する自分達の観点を共同で提示した。次の論述は、凝縮され、再整理され、換言された自分たちの教えである。

161:2.2 (1785.2) 1. イエスは、彼の神性を認め、我々は彼を信じる。彼が、人間の子であると同時に神の子であるということを信じることによってのみ我々が理解することのできるイエスの奉仕活動に関し多くの注目に値する事が起きた。

161:2.3 (1785.3) 2. 我々との彼の友交関係の生活は、人間の友交関係の理想を例証する。神性の存在体だけが、そのような人間の友であり得た。かれは、我々が今までに知るもっとも本当に利己的でない人である。かれは、罪人にさ

え友である。敵を恐れることなく愛する。我々に非常に忠実である。叱ることを辞さない一方、かれが我々をこころから愛しているということは、明白である。人は、彼を知れば知るほどより彼を愛するであろう。あなたは、イエスの不動の献身に魅せられるであろう。彼の使命に関する我々の積年の無理解にもかかわらず、彼はずっと誠実な友であった。へつらうことのない一方、かれは、我々を等しく親切に待遇する。かれは、変わることなく優しく情け深い。かれは、生活と他の全てのものを我々と共有した。我々は、幸せな共同体である。全てのものを同様に分かち合う。我々は、単なる人間が、そのような苦境の下でそのような非の打ちどころのない人生が送れるとは思わない。

161:2.4 (1785.4) 3. 我々は、イエスが悪事を決して働かないので神性であると思う。かれは、間違いをしない。イエスの英知は驚異的である。彼の敬虔さは見事である。かれは、父の意志と完全に一致して日々を生きる。父の法のどれ一つとして犯さないがゆえに、悪事を悔いることは決してない。かれは、我々のために、そして我々と共に祈るが、彼自身のための決して我々に祈りを求めない。

我々は、彼が一貫して潔白であると信じる。我々は、ただの人間である者が、そのような人生を送ることを明言したとは思わない。かれは、完全な人生を送ると主張し、我々は、彼がそうすると認める。我々の敬虔さは後悔より生まれるが、イエスの敬虔さは正義より生まれる。かれは、罪を許すと明言し、病を癒しもする。単なる人間は、誰も罪を許すなどと正気で主張はしないであろう。それは、神性の特権である。そしてかれは、彼との我々の最初の接触以来、彼の正しさにおいてこのように完璧であるように思われた。我々は恩恵をうけ、そして真理の知識において成長するが、あるじは、最初から正しさの円熟を示す。全ての人間、善者と悪者は、イエスに善のこれらの要素を認める。それでいて、イエスの敬虔さは、決して押しつけがましくなく、仰々しくもない。かれは、柔和でもあり、怖さも知らない。かれは、彼の神性に対する我々の信念を認めているようである。かれは、自らがそうであると称するものであるか、さもなければ古今を通して最悪の偽善者かいかさま師のいずれかである。我々は、彼がそうであると主張しているものそのものだと確信している。

161:2.5 (1785.5) 4. 彼の性格の特徴と感情抑制の完成は、彼が人間性と神性の結合であるということを我々に納得させる。かれは、必ず人間の要求のありさまに対応する。かれは、決して苦悩を見逃すことはない。彼の思いやりは、身体的な苦痛、心の苦痛、あるいは精霊的な苦悶によって同様に動かされる。かれは、同胞の信仰、あるいは他の美徳の現れの見分けが早く、それらの認知において寛大である。かれは、公明正大であり、同時にとても慈悲深く、思いやりがある。かれは、人々の精霊的な頑固さを嘆き、人々が真実の明かりを見ることに同意するとき、大いに喜ぶ。

161:2.6 (1786.1) 5． かれは、人間の心の考えを知り、胸中の憧れを察するようである。常に我々の荒れた精神に好意的である。かれは、人間の全ての感情を備えもっているらしいが、それらは、堂々とみごとに輝いている。かれは、強く善を愛し、等しく罪を憎む。かれは、神性の存在について超人間の意識を備えている。かれは、人間のように祈るが、神のように行う。かれは、物事を予知するようである。かれは、自分の死について、自分の未来の栄光についての何らかの謎めいた言及をし、いま敢え

て語る。かれは、親切であり、豪胆かつ勇敢でもある。かれは、自己の義務遂行に決して躊躇わない。

161:2.7 (1786.2) 6. 我々は、彼の超人的な知識の現象に、常に感動する。その場に居合わせていなくても何が起きているのか分かっているという事を明らかにする事柄が起こらずに、１日が過ぎ去ることが、あるじには滅多にない。かれはまた、仲間の考えについても分かるようである。かれは、疑う余地なく天上の人格と交わりを持っている。かれは、議論の余地なく地上の我々のはるか上の天上の水準で生きている。彼の独特な理解は、全てに通じているようである。かれは、我々に話をさせるために質問をするのであって、情報を得るためではない。

161:2.8 (1786.3) 7.あるじは、最近、自身の超人性の主張を躊躇わない。使徒としての聖職授任の日から最近まで、かれは、自分が天なる父からきたということを否定していなかった。かれは、神性教師の権威をもって話す。あるじは、今日の宗教上の教えに反論することを、確固たる権威で新たな福音を宣言することを躊躇しない。かれは、断定的で、肯定的で、権威的である。イエスの話しを聞

くとき、洗礼者ヨハネでさえ、彼が神の息子だと断言した。イエスは、他を頼りにしていないようである。かれは、多勢の支持を切望せず、人間の意見を意に介しない。かれは、勇敢で、かつ自惚れからはほど遠い。

161:2.9 (1786.4) 8.かれは、自分のする全てに絶えず臨場の提携者として絶えず神について語る。かれは、善行を施して歩き回り、神が彼の中にいるようである。かれは、もし彼が神性でなかったならば、不合理であろう陳述を、自らと地上での使命についてこの上なく驚くべき主張をする。かれは、かつて「アブラハムがいたそれ以前に私はいる。」と宣言した。かれは、断言的に神性を主張した。神と提携関係にあることを公言する。かれは、天なる父との親密な提携の主張の繰り返しにおいて、言語の可能性をほとんど使い果たしている。イエスと父は一体であるとさえ敢えて断言する。かれは、自分に見たものは誰でも父を見たのだという。かれは、これらの驚異的な事を子供のような自然さで言ったり行ったりする。彼と我々との関係の言及において、かれは、同様に彼と神との関係にさり気なく触れる。かれは、神について実に

確信しているようで、そのような事実に即した方法でこれらの関係について話す。

161:2.10 (1786.5) 9. 祈りの生活において、かれは、直接父と意思疎通をするように思われる。我々は、彼の祈りをわずかしか聞いたことはないが、これらの数少ない中でもまるで神と向かい合って話をしているという兆しがあった。かれは、過去と将来についても知っているようである。人間以上の何ものでない限り、かれは、この全てであるはずもなく、またこれらの非凡な事柄をし得るはずがない。我々は、彼が人間であるということを知っており、それに自信があるのだが、神性であるということもほぼ同様に確信がある。我々は、彼が神性だと信じる。彼が人間の子であり、神の子であると、我々は確信している。

161:2.11 (1787.1) ナサニエルとトーマスがロダンとの会見を終えると、かれらは、仲間の使徒に加わるためにエルサレムへと急ぎ、その週の金曜日に着いた。これは、三人全ての信者の一生にとってのすばらしい経験であったし、

他の使徒は、ナサニエルとトーマスのこれらの経験の詳述から多くを学んだ。

161:2.12 (1787.2) ロダンは、アレクサンドリアへの道を戻り、そこでメガンタの学校で自分の哲学を長い間教えた。かれは、天の王国に関するその後の情勢の強力な人物となった。かれは、迫害の真っ最中、ギリシアにおいて他のもの達とともにその命を諦めて、地上での終わりの日まで忠実な信者であった。

3. イエスの人間と神性の心

161:3.1 (1787.3) 神性についての意識は、自らの洗礼のときまでにはイエスの心の中で徐々に成長した。かれは、自身の神性、前人間の存在、宇宙の特権を完全に自意識するようになってから、その神性についての自らの人間の意識をさまざまに制限する力を備えていたようである。洗礼から磔まで、人間の心にのみ依存するのか、人間と神の心の双方の知識を利用するのかは、全くイエスの任意であったと、我々には思える。時には、かれは、人間の知性に宿る情報のみを役立てたようであった。他の機会には、かれは、神性意識の超人的な部分の活用によっての

み得られる知識と英知のそのような豊かさをもって行動しているようであった。

161:3.2 (1787.4) 我々は、彼が、意志により、神性意識の自己制限をすることができるという理論を受け入れることによってのみ、彼の特有の行為を理解できる。我々は、彼が、しばしば出来事の事前情報を仲間から差し控えたということ、また仲間の考えや計画の性質に気づいていたということを十分認識している。仲間の考えを認識し、計画を見抜いたりできるということを彼らに余り知られたくなかったということを、我々は理解している。かれは、使徒や弟子の心に抱かれているような人間に関する概念というものから余りはみ出さないことを望んだ。

161:3.3 (1787.5) 我々は、神性意識の自己制限の実行、そして自分の予知力と思考の洞察力を仲間から隠す方法との差別化に全く窮している。我々は、彼が二つの方法を用いたと確信しているのであるが、彼が所定の例において、用いたかもしれない方法を必ずしも特定できるわけではない。我々は、彼が人間の意識の部分のみで行動しているのをしばしば目にした。そして我々は、宇宙の天の部隊

の指揮官達との討議中の彼を見たし、また神性の心の疑う余地のない機能を認めたのであった。そして、それが、人間と神性の心の明らかな完全統一により起動されるように、我々は、ほとんど無数の出来事に人間と神のこの統合人格の働きを目撃したのであった。これが、そのような現象についての我々の知識の限界である。実は、この謎についての十分な真実を我々は知らないのである。

論文 162
会堂の祭りにて

162:0.1 (1788.1) イエスは、エルサレムへの10人の使徒との出発に当たり、それが短い道程であることからサマリア経由を計画した。したがって、湖の東岸沿いにスキトイポリス経由でサマリアの境界に入った。日暮れ近く、イエスは、仲間の宿泊所の確保のためにギルボーア山の東の傾斜地にある村にフィリッポスとマタイオスを遣わせた。平均的なサマリア人よりも、偶々これらの村人は、ユダヤ人に対し大いに偏見を持っており、非常に多くのユダヤ人が会堂の祭りに行く途中であったことから、この感情は、この特別な時に高まった。これらの人々は、イエ

スについてほとんど知らなかった。そしてかれらは、イエスとその仲間がユダヤ人であったので宿泊を拒否した。マタイオスとフィリッポスが憤りを明らかにし、イスラエルの聖なる者への持てなしを断っているのだということをこれらのサマリア人に知らせると、激怒した村人は、棒と石で小さい町から彼らを追い出した。

162:0.2 (1788.2) フィリッポスとマタイオスが仲間のところに戻り、村から如何ように追い出されたかを報告した後、ジェームスとヨハネは、イエスに歩み寄って言った。「あるじさま、これらの横柄で改悛しないサマリア人を滅ぼすために、炎が天から下りてくるように命ずる許可を下さるよう懇願致します。」しかし、復讐のこれらの言葉を聞くと、イエスは、ゼベダイオスの息子等の方に直接向き直り厳しく叱責した。「君が、どういう態度をとっているのか君には分かっていない。復讐は、天の王国の展望を持ってはいない。議論するよりも、ヨルダン川の浅瀬近くの小さい村まで旅しよう。」このように、宗派の偏見のため、これらのサマリア人は、宇宙の創造者たる息子へのもてなしの名誉を否定した。

162:0.3 (1788.3) イエスと10人は、その夜、ヨルダン川の浅瀬近くの村に止まった。翌日早々に、かれらは、川を横切り東部のヨルダン街道経由でエルサレムへと旅を続け、水曜日の夜遅くベサニアに到着した。ロダンとの会談で遅れたトーマスとナサナエルは、金曜日に到着した。

162:0.4 (1788.4) イエスと12人は、翌月(10月)の終わりまで、およそ4週間半エルサレム付近に留まっていた。イエス自身は、ほんの数回街に入り、これらの短い訪問は、会堂の祭りの数日間に為された。かれは、ベツレヘムではアブネーとその仲間と10月の大半を過ごした。

1. エルサレム訪問の危険

162:1.1 (1788.5) ガリラヤからの脱出のずっと以前、追随者は、イエスの知らせがユダヤの文化と学問の中心で説かれてきたことから威信を得ることができるように王国の福音の宣言にエルサレムに行くことを嘆願した。ところが、いまイエスが実際にエルサレムに教えに来たので、かれらは、イエスの命を危ぶんでいた。シネヅリオン派が、裁判のためにイエスをエルサレムへ連れていこうとしていることを知り、使徒は、死を被らなければならないと

いうあるじの最近繰り返した宣言を思い起こし、会堂の祭りに出席するという突然の決定に文字通り唖然とした。かれは、エルサレムに行くという皆の以前の全ての懇望には、「時は未だ来たらず。」との答であり、今度は、皆の怖恐からの抗議に「だが、時は来たれり。」と答えるだけであった。

162:1.2 (1788.6) イエスは、会堂の祭りの間、大胆にも時折エルサレムに赴き寺院で公に教えた。使徒の諌止の努力にもかかわらず、かれはそうした。かれらは、エルサレムで彼の知らせを宣言するように長らく訴えてきたが、律法学者とパリサイ派が、イエスに死をもたらせようと決心しているのを熟知しており、今となっては、イエスが街に入っていくのを見ることを恐れた。

162:1.3 (1788.7) エルサレムでのイエスの大胆な様は、追随者を以前にもまして混乱させた。多くの弟子は、そして使徒のユダ・イスカリオテでさえ、イエスが、ユダヤ人指導者とヘロデ・アンティパスを恐れたのでフェニキアまで急いで逃れたと考えるほどであった。かれらは、あるじの行動の重要性を理解することができなかった。追随者

の忠告に反してまでものイエスのエルサレムでの会堂の祭りの出席は、恐怖と臆病に関する全ての囁きに終止符を打つには十分であった。

162:1.4 (1789.1) 会堂の祭りの間、ローマ帝国全地域からの何千人もの信者は、イエスの教えを聞き、また多くの者は、各出身地域における王国の進歩に関しイエスと打ち合わせるためにベサニアにまで旅をした。

162:1.5 (1789.2) 祭りの数日にわたりイエスが寺院の中庭で公然と説教ができた多くの理由があり、その主なものは、シネヅリオン派の役員各自の位階における秘かな感情の分裂の結果から生まれた恐怖であった。シネヅリオン派の成員の多くが、秘かにイエスを信じるか、または、断じて祭りの際の逮捕に反対であったという事実があり、そして、それほど多くの人がエルサレムに居合わせるとき、その中の多くは、イエスを信じるか、あるいは、イエスが主催する精霊的な運動に少なくとも好意的であった。

162:1.6 (1789.3) アブネーとその仲間の全ユダヤにおける努力は、王国に有利な感情を強めることに大いに役立ち、イ

エスの敵が反対の態度をあまり明らさまにできない程であった。これは、イエスが公然とエルサレムを訪問し、生き残ることができた1つの理由であった。この1、2ケ月前に、イエスは、確実に殺されていたことであろう。

162:1.7 (1789.4) しかし、エルサレムに公然と現れるイエスの不敵な豪胆さは、敵を畏怖させた。かれらは、そのような大胆な挑戦への備えがなかった。シネヅリオン派は、この月に何度かあるじを拘禁する微弱な試みをしたが、これらの努力からは何も生じなかった。敵は、エルサレムでのイエスの予想外の公の場への出現に不意を突かれ、イエスが、ローマ当局による保護を約束されているに違いないと億測するほどであった。シネヅリオン派の成員は、フィリッポス(ヘロデ・アンティパスの兄弟)が、ほぼイエスの追随者であったことを知っており、フィリッポスが敵からのイエスの保護の約束を保証したと推測した。エルサレムでのイエスの突然で大胆な出現が、ローマの役人との秘かな同意によるものであるという思い込みに気づく前に、イエスは、それらの管内から離れてしまっていた。

162:1.8 (1789.5) 12人の使徒だけは、マガダンを出発したとき、イエスが会堂の祭りに出席するつもりであることを知っていた。あるじが、寺院の中庭に現れ、公に教え始めると、他の追随者は大いに驚き、ユダヤの当局は、寺院で教えていると報告されたとき、表現し難いほどに驚いた。

162:1.9 (1790.1) 弟子は、イエスの祭りへの出席を期待はしていなかったが、イエスについて聞いたことのある遠方からの大多数の巡礼者は、エルサレムで彼にあえるかもしれないという望みを抱いた。そして、かれらは失望しなかった、というのは、イエスは、幾度もソロモンの回廊や寺院の中庭の他の場所で教えたので。これらの教えは、本当にユダヤ民族と全世界へのイエスの神性の公式の、または正式の発表であった。

162:1.10 (1790.2) あるじの教えを聞いた群衆の意見は、分かれていた。ある者は、イエスが良い人であると言い、ある者は、予言者であると言い、ある者は本当に救世主であると言い、他の者は、奇妙な教義で人々を惑わせている悪戯好きのお節介屋であると言った。イエスの敵は、彼

の好意的な信者を恐れ、公然と糾弾することを躊躇い、一方イエスの友人達は、シネヅリオン派が、彼を死に追いやる固く決心していることを知っており、ユダヤの指導者達を恐れ、公然と承認することを懸念した。しかし、彼がユダヤ教の律法者の育成学校で教育を受けていないことを知るその敵でさえも、イエスの教えに驚嘆した。

162:1.11 (1790.3) イエスがエルサレムに行く度に、恐怖が使徒を襲った。イエスが地上での任務の本質に関してますます大胆な表明を聞くにつれ、かれらは、日々ますます恐れた。彼の友人の間で説教する時でさえ、イエスがそのような積極的な要求と驚くべき主張を聞くことに、かれらは不慣れであった。

2. 寺院での最初の講話

162:2.1 (1790.4) 寺院で教えた最初の午後、大勢の人は、新しい福音と自由と良い知らせを信じる者の喜びについて描写するイエスの言葉を座って聞いていると、好奇心の強い聴取者が、彼を遮って、「先生、あなたはユダヤの師からの教育を受けていないと聞いていますが、なぜそれほ

ど流暢に聖書を引用したり人々に教えることができるのですか。」と尋ねた。イエスは答えた「誰も、私が表明する真実を教えてはくれなかった。またこの教えは、私のものではなく、私を送ったあの方のものである。誰かが、本当に父の意志を為すことを望むならば、それが神の教えであろうが、私が自分に関して話す教えであろうが、その人は、私の教えを確かに知るであろう。自分のために話す者は、自身の栄光を求めているが、父の言葉を表明するとき、私は、それによって私を送られたあの方の栄光を求めている。しかし、新たな光に入ろうとする前に、あなたは、むしろすでに持っている光の後を追うべきではないのか。モーシェは法を与えたが、あなた達のどれほど多くの者が、その要求を正直に満たそうとしているのか。モーシェは、この法で『殺してはならない』と命じているにもかかわらず、あなた方の一部は人の息子を殺そうとしている。」

162:2.2 (1790.5) これらの言葉を聞くと、群衆は口論を始めた。ある者は、イエスは気が狂っていると言い、ある者は、彼には悪魔がいると言った。他のものは、これが、本当に筆記者とパリサイ派が長い間殺そうとしていたガリラ

ヤの予言者であると言った。ある者は、宗教当局は危害を加えるのを恐れていると言い、他のものは、彼らが彼の信者になったので逮捕しないと思った。かなりの議論の後、群衆の一人が、前進してイエスに尋ねた。「支配者達はなぜあなたを殺そうとするのですか。」そこで、イエスが答えた。「王国の朗報、つまり、これらの教師が、どうしても支持すると決めている形式的な宗教儀式の人の重荷になっている伝統から人を解放する福音に関する私の教えに憤慨するが故に、支配者達は、私を殺そうとしている。かれらは、安息日の法に沿って割礼を施すが、私が、一度安息日に苦悩に束縛されている男性を解放したというので私を殺したいのである。彼らは、安息日に見張りのために私の後をつけるが、私が、別の機会に、痛ましい傷ついた男性を安息日に完全に癒すことにしたので、私を殺したいのである。あなたが正直に信じ、思い切って私の教えを受け入れると、伝統的な宗教形態が覆される、永遠に崩壊されるであろうということを充分に知っているので私を殺そうとするのである。このように、かれらは、この新しく、より栄えある神の王国の福音を受け入れることを断固として拒否するので、

自分達の人生を注いだ権威を奪われるのである。さて、今度は、私が、あなた方一人一人に訴える。外観で判断するのではなく、これらの真の教えの精霊によって判断しなさい。公正に判断しなさい。」

162:2.3 (1791.1) その時、別の尋問者が言った。「はい、先生、私達は救世主を探していますが、救世主来るとき、その見かけは、神秘であるということを知っています。私達は、あなたが何処からいらしたか知っています。始めからあなたはあなたの同胞の中におられます。救出者は、ダーヴィドの王国の王座を再建すために政権を携えて来ます。あなたは、救世主であると本当に主張されるのですか。」そこで、イエスが答えた。「あなたは私を知り、また、どこから来たかを知ると主張する。私は、あなたの主張が本当であったならばと思います、なぜならば、あなたは、本当に、その知識によって豊かな人生を発見するであろうから。だが、私は、自分自身ではあなたの所に来なかったと断言する。私は父によって送られ、私を送られた方は、真実で誠実である。私の言うことを拒否するということは、私を寄こされたあの方の受け入れを拒否しているのである。もしこの福音を受け入

れるならば、あなたは、私を送られた方を知るようになるであろう。私は、父を知っている、というのも、私は、彼について宣言し、示すために父の元から来たのであるから。」

162:2.4 (1791.2) 律法者の間者達は、イエスを逮捕を欲したのだが、多くの者が彼を信じていたことから群衆を恐れた。洗礼以来のイエスの働きは、すべてのユダヤ人によく知られるようになり、また、これらの人々が、これらのことについて詳しく話すとき、彼らの間で、「この師は、ガリラヤの出身ではあるが、また我々の救世主への期待のすべてに当て嵌まるという訳ではないが、救出者が来るとき、かれは、このナザレのイエスがすでにした以上に本当に何か素晴らしいことをするのか疑問に思う。」と言うのであった。

162:2.5 (1791.3) パリサイ派とその間者は、人々がこのように話しているのを聞くと、指導者達と相談し、寺院の中庭におけるイエスのこれらの公けの出現を阻止するために直ちに何かをすべきだと評決した。一般に、ユダヤ人の指導者は、ローマ当局が、捕縛免除を彼に約束したと信じ

て、イエスとの衝突を避ける傾向にあった。かれらは、さもなければ、このときのエルサレムへの到来のイエスの大胆さを説明することができなかった。しかし、シネヅリオン派の役員は、この噂を全く信じなかった。かれらは、ローマの支配者がそのようなことを秘かに、またユダヤ国家の最高首脳部に知れずにはしないと推論した。

162:2.6 (1791.4) 従って、シネヅリオン派の然るべき役員エベーが、２人の助手を伴いイエスの逮捕に派遣された。エベーがイエスに向かって進んでいる間、あるじは言った。「私に近づくことを恐れてはいけない。私の教えを聞きながら近づきなさい。あなたが、私の逮捕のために送られてきたのは分かっているが、その時が来るまで人の息子には何も起こらないということを理解するべきである。あなたは私に相対して配置されてはいない。あなたは、ただ主人の言いつけ通りにするために来たのであり、また、秘かに私の滅亡を求めるとき、ユダヤのこれらの支配者達さえ神への奉公をしていると本当に思っている。

162:2.7 (1792.1) 私は、何の悪意もあなたに抱いてはいない。父はあなたを愛しており、私は、それ故、偏見の束縛と伝統の暗黒からのあなたの解放を切望しているのである。私は、命の自由と救済の喜びをあなたに提示している。私は、新しくて生きた道、悪からの救出と罪の束縛の破壊を宣言する。私は、あなたが命を得られるように、永遠に得られるように来た。あなたは、私と不安にさせる私の教えを取り除こうとしている。あなたが、私はあなたとほんの少しだけいることになっていると、分かることができさえすればよいのだが。ほんのわずかの時間で、私は送られたあの方の元に行くのである。そして、それから、あなたの多くは、勉めて私を探すが、私が行こうとしているところへあなたは来ることができないのだから、私を探し当てはしないであろう。しかし、本当に私を見つけようとする者すべては、私の父につながる人生にいつか到達するであろう。」

162:2.8 (1792.2) 嘲笑者の何人かは、仲間うちで言った。「我々が見つけることのできないいずこにこの男は行くのだろうか。ギリシア人の間に暮らしに行くのだろうか。自滅

するつもりなのだろうか。すぐに我々から離れると宣言するのは一体どういうことか。」

162:2.9 (1792.3) エベーとその助手達は、イエスの逮捕を拒否した。かれらは、イエスを連れずに自分達の会合場所に戻っていった。イエスを連れて来なかったので、主だった祭司とパリサイ派が、エベーとその助手を咎めると、エベーは単に、「我々は、多くの者がイエスを信じているので群衆の真っ只中で逮捕するのを恐れました。また、我々は、この男のように話す者を決して聞いたことがありません。この先生には並外れた何かがあります。あなた方全員、彼の話を聞きに行かれた方がいいでしょう。」と言った。すると主だった支配者は、これらの言葉を聞くと驚いて、エベーに嘲って言った。「お前も惑わされたのか。この詐欺師を信じようとしているのか。我々学識ある者や支配者の誰かが、彼を信じたと聞いたのか。筆記者やパリサイ派の誰かが、彼の巧みな教えに騙されたと聞いたのか。なぜ、法も予言者達も知らないこの無知な群衆の振舞いに影響されるのか。教育を受けていないそのような者達は、呪われているのを知らないのか。」すると、エベーが答えた。「例えそうだとして

も、ご主人様、この男は、慈悲と希望の知らせを群衆に伝えております。落胆者を励ましておりますし、その言葉は、我々の魂にとってさえ慰めであります。聖書の救世主ではないかもしれなくても、これらの教えの何が間違いであり得ましょうか。そして、それでも、我々の法は、公正を必要とはしていませんか。あの男の言うことを聞く前に非難するのですか。」すると、シネヅリオン派の長は、激怒してエベーに向かって言った。「気が狂ってしまったのか。もしかするとお前もガリラヤの出か。聖書をよく見てみろ。そうすれば、ガリラヤからは予言者は出ず、ましてや、救世主など出てはこないということが分かるであろう。」

162:2.10 (1792.4) シネヅリオン派は、混乱して解散し、イエスは、その夜ベサニアに撤退した。

3. 姦淫の場で捕らえられた女

162:3.1 (1792.5) その告発者とイエスの敵が、悪い評判の一人の女性を彼の元に連れて来てイエスが対処したのは、エルサレムのこの訪問中のことであった。この出来事についての歪曲された記録は、この女性が、筆記者とパリサイ

派によってイエスの前に連れて来られたということ、そしてイエスが、これらのユダヤ人の宗教指導者が、不道徳の罪を犯したかもしれないと暗示しているかのように彼らを扱ったということを示唆している。イエスは、これらの筆記者とパリサイ派が、精霊的に盲目であり、伝統への忠誠心で知的に偏見を抱くと同時に、その時代と世代の最も徹底的に品行方正である人々のなかに数えられるということをよく知っていた。

162:3.2 (1793.1) 本当に起こったのは、こうであった。祭りの3日目の早朝、イエスが寺院に近づいていると、一人の女性を引き摺っているシネヅリオン派に雇われた間者の一団が、会いにきた。彼らが近づくと、代表者が言った。「先生、この女は姦淫—まさにその行為—で捕まりました。さて、モーシェの法は、そのような女には投石をするべきであると命じています。あなたは、この女に何をすべきだと言われますか。」

162:3.3 (1793.2) 敵の企みは、イエスが、自白した違反者に投石を要求するモーシェの法を支持すれば、ローマ裁判所の承認なしで死刑を課すユダヤ人の権利を否定したローマ

の支配者達との困難に彼を巻き込むことであった。彼が、女に投石することを禁じれば、かれらは、シネヅリオン派の前でモーシェとユダヤ人の法より上に彼自身をもち上げたとして告訴するつもりであった。かれらは、彼が、黙したままでいるならば、臆病者だと批難するつもりであった。ところが、あるじは、全体の陰謀がそれ自体の浅ましい重さで粉々になるように状況を取り仕切った。

162:3.4 (1793.3) かつて器量の良かったこの女は、彼の若い時代ずっとイエスに対して揉め事を起こしていたナザレの野卑な市民の妻であった。この女と結婚した男は、不届きにも妻の身体で商売をさせ、自分達の生計を立てることを強要したのであった。男は、財政的な収益のために、妻がこうして肉体的な魅力を売ることができるようにエルサレムの祭にやって来たのであった。その結果、営利化された悪習でこのように妻に対する背信行為のためにユダヤ人支配者達の金目当てに働く者達と契約を結んでいた。そこで、間者の一団は、イエス対して逮捕に際して使用できる何らかの申し立てを作り、イエスを罠には

める目的のために女とその犯罪の相手とやって来たのであった。

162:3.5 (1793.4) イエスは、群衆を見渡して女の夫が群衆の後ろに立っているのを見た。それがどういう男であるかを知っており、卑劣な取り引きに関係していると知った。イエスは、まずこの堕落した夫の立っている近くを歩き回り、そして砂に幾つかの言葉を書くと、男は急いで去って行った。次に、かれは、この女の前に戻り、自称の告発人達のために、再び地面に書いた。イエスの言葉を読むと、かれらは、また、一人ずつ立ち去った。あるじが3度目に砂に書くと、この女性の悪事の相手は出発した、それで、この書く動作から立ち上がると、あるじは、自分の前に一人で立つ女性を見た。イエスは、「女よ、告発者達はどこにいるのか。誰もあなたに石を投げるために残らなかったのか。」と言った。すると、女性は目を上げて、「誰も居ません、ご主人様」と答えた。そこで、イエスは、「私はあなたについて知っている。私もあなたを非難はしない。穏やかに行きなさい。」そして、この女性、ヒルダナは、邪悪な夫を見捨て王国の弟子に仲間入りした。

4. 会堂の祭り

162:4.1 (1793.5) スペインからインドまでの既知の世界の全域からの人々の出席は、イエスにとり会堂の祭りをエルサレムで初めて公的に全福音を宣言する理想的な機会にした。人々は、この祝祭日に多くの時を野外で、枝葉でできた仮小屋で生活をした。この時がそうであったように、それは、収穫の祭であり、涼しい秋の到来であったし、冬の終わりの過ぎ越し、あるいは、夏の始めの五旬節よりもより広範囲にわたって世界からのユダヤ人が出席していた。使徒は、全世界の前で地球での自分の任務について、あるじが、大胆な発表をするのを遂に目にした。

162:4.2 (1794.1) 他の祝日には何の生贄も捧げなかった埋め合わせが、この時にすることが出来たので、これは、祭の中の祭であった。これは、寺院への捧げ物の受領の時であった。それは、宗教的な崇拝の厳粛な儀式と休暇の喜びの組み合わせであった。ここには、生贄、レビ族の聖歌、祭司の銀のトランペットの厳粛な吹奏音の入り混じる民族的な歓喜の時であった。夜、寺院とその巡礼者の群れの感動的な光景は、女性用の中庭で明るく燃えるす

ばらしい枝つきの燭台と、寺院の中庭の周囲に立つ何十個ものかがり火の煌めきに鮮やかに照らされた。全市は、アントニアのローマの城以外は華やかに飾りつけがされており、また厳しい対照でこの祝祭と信心深い光景を見下ろしていた。そしてユダヤ人は、このつねに存在するローマのくびきの名残りをいかに嫌ったことか。

162:4.3 (1794.2) 異教の70ヶ国の象徴である70頭の去勢牛が、祭中に生贄として捧げられた。水のほとばしりの儀式は、神霊のほとばしりを象徴した。祭司とレビ族の日の出の行列の後には、水のこの儀式が続いた。礼拝者達は、銀のトランペットの連続する吹奏音と共に、イスラエルの中庭から女性専用の中庭へと繋がる階段を下りていった。そうして、忠実な信者達は、美しの門に向かって行進した。その門は、非ユダヤ人の中庭に通じていた。ここで、かれらは、西に向いて聖歌を繰り返し、象徴的な水の方角に行進を続けるために向きを変えた。

162:4.4 (1794.3) 祭の最終日、レビ族の数に相当するおよそ450人の祭司は、役目を務めていた。夜明けには、巡礼者の各々が、左手にギンバイカと柳と棕櫚の枝の束を、右手

にはヤマ林檎—シトロン、または「禁断の果実」の枝を抱え街の全域から集まった。これらの巡礼者は、この早朝の儀式のために３集団に分かれた。1つの集団は、朝の生贄の儀式に出席するために寺院に残った。別の集団は、生贄の祭壇の飾りつけ用の柳の枝を切るためにエルサレムを下ってマーザ近くへと行進すると同時に、３番目の集団は、銀のトランペットの音に合わせてオペルから噴水門のあるシロアー近くに向かう象徴的な水を堪えた金色の水差しを持つ水祭司の後に続いて寺院から行進した。金の水差しがシロアーの池で満たされた後、行列は、寺院へと行進し手戻り、水の門に入り、司祭の中庭に直接行き、そこで飲み物の提供のためにワインを持つ祭司が、水差しを持つ祭司と合流した。それから、この２人の祭司は、祭壇の土台に通じる銀の漏斗に向かって行き、そこに水差しの中身を注いだ。ワインと水を注ぐこの儀式の遂行は、集まった巡礼者に詩篇の113から118までの詠唱をレビ族と交互に始める合図であった。かれらは、これらの節を繰り返しながら、祭壇に束を振って合図をした。それからかれらは、祭りの最終日の詩篇82

であることから当日の詩篇の反復に関連づけて5節目の詩で始めてその日の生贄の儀式を執りった。

5. 世界の光についての説教

162:5.1 (1794.4) 祭りの最終日の前夜、場面が枝つき燭台と松明の灯りで鮮やかに照らされているとき、イエスは、集いきた人々の真っ只中に立ち上がって言った。

162:5.2 (1795.1) 「私は世の光である。私について来る者は暗闇を歩まず、命の光を持つであろう。あなた方は、私を裁判にかけ、私の裁判官として座ると決め込んでおり、もし私が自分自身の証言をしても、私の目撃者が本当であるはずがないと宣言する。しかし、被創造者が創造者を裁判することは決してできない。たとえ私が自分自身の証言をしたとしても、その証言は永久に本当である、なぜならば、私は自分がどこから来て、誰であるか、どこへ行くのかを知っているのであるから。人の息子を殺したい者は、私がどこから来て、誰であるのか、どこへ行くのかを知らない。あなた方は、肉体の外見から判断するだけである。あなた方は、精霊の現実を認めない。私は、誰をも、宿敵さえも審判しない。しかし、私が、裁

くことを選ぶならば、私は単独ではなく、私を世界に送り出し、すべての真の審判の源である私の父と共同して裁くので、私の審判は、真実で、公正であるだろう。あなた方は、頼りになる2人の目撃者が受け入れられることを許しさえする—さて、それから、私は、これらの真実の証言をする。それでまた、天の私の父も、またそうされる。そして、私が、昨日これを伝えたとき、あなたは、暗闇で『あなたの父はどこにいるのか。』と私に尋ねた。確かに、あなた方は、私も私の父も知らない。もし私を知っていたならば、父も知っていたであろうから。

162:5.3 (1795.2) 私は、私が立ち去る予定であるということ、そして、あなた方が私を探すが、私が行くところへは来られないので、私を見つけないということを、すでに伝えてきた。この光を拒む者は、下から来た者である。私は上から来たのである。暗闇に座ることを好む者は、この世の者である。私は、この世の者ではなく、光の父の永遠の光の中に生きている。あなた方全員には、私が誰であるかを学ぶ有り余るほどの機会があったが、人の息子の正体を確認する他の証拠は、まだまだあるであろう。私は命の光であり、故意に、また知りつつこの救いの光

を拒絶する者は誰でも、罪で死ぬのである。私には、言わなければならないことが、たくさんあるが、あなた方は私の言葉が受け入れられない。しかしながら、私を送られた方は真実であり、誠実であられる。私の父は、自分の過ちを犯している子供さえ愛される。父が話されたその全てを、私もまた世界に宣言する。

162:5.4 (1795.3) 「人の息子が上げられるとき、あなたは全員、私がその者であり、私が何も勝手にしたのではなく、父が私に教えられた通りにしたのだということを知るであろう。私はこれらの言葉をあなたと、その子供達に話す。また、今でも、私を送られた方は、私と一緒におられる。私がいつも父の目に喜ばしい事をするので、あの方は、私を放ってはおかれなかった。」

162:5.5 (1795.4) 多くの者は、イエスが寺院の中庭で巡礼者にこのように教えた通りに信じた。そして、誰もイエスを敢えて捕らえようとはしなかった。

6. 命の水に関する講話

162:6.1 (1795.5) 最終日、祭りの重要な日、シロアーの池からの行列が寺院の庭を通り抜け、祭司が祭壇で水とワインを

注いですぐ後に、イエスは、巡礼者の間に立って言った。「誰でも喉が渇いているならば私のところに飲みに来させなさい。上におられる父から、私が命の水をこの世に持って来る。私を信じる者は、この水が意味する精霊に満たされるであろう、なぜなら聖書にさえ『あの方から生ける水が流れ出すであろう。』とある。人の息子が、地球での仕事を終えたとき、真実の聖霊は、すべての肉体に注がれるのである。この精霊を受ける者は、決して精霊的な渇きを知らないのである。」

162:6.2 (1795.6) イエスは、これらの言葉を話すために礼拝を中断しなかった。ハレルの唱和直後、イエスは、祭壇前で枝を振るのに合わせて詩篇からの交読文を礼拝者に述べた。生贄が準備される間の丁度ここでひと一区切りあり、巡礼者は、あるじが、魅力的な声で自分が精霊に渇きを覚えるあらゆる魂に生ける水を与える者であると宣言するのを聞いたのが、このときであった。

162:6.3 (1796.1) この早朝の礼拝のまとめに当たり、イエスは、さらに群衆に続いて教えた。「あなたは、聖書の以下の部分をまだ読んではいないのか。『見よ、水が乾いた地

面に注がれ、からからの土壌に広がるように、私はあなたの子供に、あなたの子供のその子供にまでも聖なる精霊を与えよう。』人間の習わしで魂に水を注ごうとしながら、儀式用の壊れた水差しで注ごうとしながら、あなたは、なぜ精霊の活動に渇望するのであろうか。あなたがこの寺院の周りで起きていることを見ることは、あなたの父が信仰の子等に神霊の贈与を象徴しようとする手段であり、あなた達はこれらの象徴を、この世代にまでも、よく永続きさせてきた。しかし、今、精霊の父の顕示が、息子の贈与を通してこの世代にやって来ており、そして、この全ては、人間の子等への父と息子の精霊の贈与に確実に続くであろう。信仰を持つあらゆる者には、精霊のこの贈与が、永遠の命に通じる道への、地上の王国での、そして、あちらの父の楽園での真の命の水に通じる道への真の教師になるであろう。」

162:6.4 (1796.2) そして、イエスは、群衆とパリサイ派の両方の質問に答え続けた。ある者は、イエスが予言者であると思い、ある者は救世主であると信じた。他の者は、彼が、ガリラヤの出身であったこと、また救世主は、ダーヴィドの王座を回復しなければならないということか

ら、キリストであるはずがないと言った。それでも、彼らは、イエスを逮捕する勇気がなかった。

7. 精霊的な自由に関する講話

162:7.1 (1796.3) 祭の最終日の午後、そして、使徒が、エルサレムから逃げるようイエスの説得の努力に失敗した後、イエスは、教えるために再び寺院に入った。かれは、ソロモンの回廊に集合した信者の大集団を見つけて話した。

162:7.2 (1796.4) 「私の言葉があなたにとどまり、私の父の意志をする気があるならば、あなたは、本当に私の弟子である。あなたは真実を知るであろうし、真実はあなたを自由にする。私には、あなたがどう答えるかが分かっている。我々は、アブラーハームの子孫であり、誰にも束縛されてはいない。では、我々はどのように自由になるのであろうか。だとしても、私は、他者の命令への実際の隷属について話しているのではない。私は、魂の自由に言及している。誠に、誠に、言っておく。罪を犯す者は誰でも、罪の奴隷である。そして、あなたは、奴隷が、あるじの家にいつまでも留まりそうにないということを知っている。あなたは、息子が、父の家に留まるという

ことも知っている。従って、もし息子があなたを自由にするならば、あなたを息子にするというのであれば、あなたは、本当に自由になるであろう。

162:7.3 (1796.5) 私は、あなたがアブラーハームの子孫であることを知っているが、あなたの指導者達は、彼らの心の中で私の言葉が変わる影響を許さなかったので、私を殺そうとするのである。指導者達の魂は、偏見によって堅く閉ざされ、高慢な報復に目がくらんでいる。これらの騙された教師達が、この世の祖先だけから学んだことをしようとする一方で、私は、永遠なる父が私に示す真実をあなたに宣言する。そして、あなたが、アブラーハームが父であると答えるとき、あなたがアブラーハームの子孫であるならば、そこで、私は、アブラーハームの業をするようにあなた教えるのである。あなた方の一部は、私の教えを信じるが、他の者達は、私が神から受ける真実を話したので、私を滅ぼそうとする。だが、アブラーハームは、神の真実をそのように扱わなかった。私は、あなた方の中の何人かが、邪悪な者の働きをすることを決意していると察知する。神があなたの父であるならば、あなたは、私を知り、私が明らかにする真実を愛す

るであろうに。私が、父からやって来たということ、神に遣わされたということ、自分勝手にこの仕事をしていないということが分かってもらえないであろうか。私の言葉をなぜを理解してくれないのか。それは、悪の子になる方を選んだからなのか。あなたが闇の子であるならば、あなたは、私が明らかにする真実の光の中を歩くことはほぼないであろう。悪の子は、詐欺師であり、いかなる真実ももって生まれなかったので真実を支持しなかった自分達の父の方法だけに続いていく。しかし、いま、真実を語り真実に生きる人の息子が訪れるているのに、あなた方の多くは、信じることを拒否している。

162:7.4 (1797.1) 「あなた方のうちの誰が、私に有罪判決を下すのか。それから、私が、父によって示された真実を宣言し、真実に生きるならば、あなたは、なぜ信じてくれないのか。神と共にいる者は、快く神の言葉を聞く。あなたは、神と共にいないこの理由から、あなたの多くは、私の言葉を聞かない。あなたの師は、私が悪魔の王子の力で仕事をすると決めつけて言いさえしてきた。私の近くにいる者は、私には悪魔がいると、悪魔の子であると言ったところである。しかし、正直に自身の魂に対処す

るあなた方全員には、私が悪魔ではないということがよくわかっている。あなたは、私を恥しめる間さえ、私が父を敬うということを知っている。私は、私自身の栄光ではなく、楽園なる父の栄光だけを求める。そして、私は、あなたを裁きはしない。私の代わりに裁く方がおられるので。

162:7.5 (1797.2) 「私は、人が、真実のこの言葉をその心に生かし続けるならば、その人は、決して死を味わうことはないと福音を信じる者に、誠に、誠に、はっきりと言っておく。いまちょうど私の側では、筆記者が、アブラーハームが死んでおり、予言者も死んでいることから私には悪魔がいる、とこの声明が立証していると言っている。そして、かれは、『ここに敢えて立ち、お前との約束を守る者は、誰とても死を経験しないと言うまでにお前はアブラーハームと予言者達よりもはるかに偉大であるのか。大胆不敵にもそのような不敬な言葉を発するとは自分が誰であるというのか。』と尋ねている。私は、自分自身を讃美しているのであれば、栄光など何一つないと皆に言う。だが、私を誉められるのは、父、他ならぬあなたが神と呼ぶ同じ父である。しかし、あなたは、この

あなたの神であり私の父を知ることができなかった、そこで、私は、本当に神の息子になる方法をあなたに示すためにやって来た。あなたは父を知らないが、私は本当に父を知っている。アブラーハームでさえ私の時代を見ることを喜び、そしてかれは、信仰によりそれを見て、喜んだのであった。」

162:7.6 (1797.3) この時までに集まってきた懐疑的なユダヤ人とシネヅリオン派の間者達は、これらの言葉を聞くと騒ぎ立て、「お前は50歳ではないのにアブラーハームに会うということを話す。お前は悪魔の子だ。」と叫んだ。イエスは、講話を続けることができなかった。出発に際し、かれは、「誠に、誠に、私は、アブラーハーム以前に私はいるとあなたに言う。」とだけ言った。信じないものの多くは、イエスに投げようと急いで石を取りに、また、シネヅリオン派の間者は、イエスを捕縛しようとしたが、あるじは、素早く寺院の廊下を擦りぬけ、マールサ、マリア、ラーザロスの待ち受けるベサニア近くの密会場所へと逃れた。

8. マールサとマリアを訪問

162:8.1 (1797.4) ユダヤ当局が再びイエス逮捕の計画に大胆になっていたので、イエスにはラーザロスとその妹達と友人の家に宿泊するという手配がされ、使徒達は、小班で散在するこれらの予防措置がとられた。

162:8.2 (1797.5) 長年、イエスが偶々訪問するときはいつも、この３人は、すべてを差し置いてその教えを聞くのが習慣であった。両親を亡くしたことで、マールサは、家庭生活の責任を引き受けてきており、この時も、ラーザロスとマリアは、元気づける教えに深く聞き入りイエスの足元に座ったが、マールサは、夕食の用意をした。マールサは、数多くの不必要な仕事で余計に必要以上に気が散り、また、多くの些細な心配事で苦労すること、それが、彼女の気質であるということが理解されるべきである。

162:8.3 (1798.1) マールサは、これらのすべての想定した任務で忙しくしており、マリアが何も手伝わないので不安になっていた。したがって、彼女は、イエスのところに行って「あるじさま、妹が給仕の支度の全てを私一人に任せているのを気になさらないのですか。来て手伝うように

命じてもらえませんか。」と言った。イエスは答えた。「マールサ、マールサ、何故いつもそんなに多くのことを気に掛けたり、多くのつまらないことに煩わされるのか。1つのことだけが、本当に価値があるのだよ。そして、マリアは、この良くて必要な部分を選んだので、私は、彼女からそれを取り上げるつもりはないよ。それにしても、あなた方二人は、私が教えたように生き、協力して仕え、調和して二人の魂を新たにすることをいつ学ぶのであろうか。すべてには時間があるということ—人生の小事は、天なる王国のより重要な事柄に道を譲るべきであるということ—を学ぶことができないのかい。」

9. ベツレヘムにてアブネーと

162:9.1 (1798.2) 多くの信者が、会堂の祝宴の翌週を通してベサニアに集まり、12人の使徒から指示を受けた。シネヅリオン派は、イエスが出席していなかったので、これらの集会に危害を加える努力をしなかった。イエスは、この間ずっと、アブネーとその仲間と共にベツレヘムで働いていた。祭り終了の翌日、イエスは、ベサニアに出発し、エルサレムへのこの訪問の間、寺院では二度と教えなかった。

162:9.2 (1798.3) この時、アブネーは、ベツレヘムに本部を置いており、そしてそこからユダヤと南のサマリアの都市へ、また、アレキサンドリアにさえ多くの労働者を送り出していた。イエスとアブネーは、イエス到着の数日中に使徒の2集団の仕事の整理統合の手筈を終了した。

162:9.3 (1798.4) 会堂の祭りへの訪問中、イエスは、ベサニアとベツレヘムにほぼ等分の時間を配分した。かれは、ベサニアでは、かなりの時間を使徒と過ごした。ベツレヘムでは、アブネーと他の元ヨハネの使徒に多くを教えた。そして、これらの者にイエスを信じるように最終的導いたのは、この親密な接触であった。洗礼者ヨハネのこれらの元使徒は、イエスのエルサレムでの公の教えで示した勇気と、ベツレヘムでの個人的な教えで経験した思いやりのある理解によっても影響を受けた。これらの影響は、最終的に、そして完全にアブネーの仲間をそれぞれの王国の心からの受け入れとそれへの踏み出しの含意へと引き入れた。

162:9.4 (1798.5) 遂にベツレヘムを去る前、あるじは、肉体での地球経歴の結末に先立ち皆が一丸となって払う努力で自

分に合流するように手配をした。それは、アブネーとその仲間が、近い将来マガダン公園でイエスと12人に合流しようとの同意であった。

162:9.5 (1798.6) この同意に従い、11月上旬、アブネーとその11人の仲間は、イエスと12人と運命を共にし、磔刑までずっと1組織として働いた。

162:9.6 (1798.7) 10月後半、イエスと12人は、エルサレムの近隣地域から引き上げた。10月30日、日曜日、イエスとその仲間は、イエスが数日間一人離れて休息していたエフライェムの街を出発し、西ヨルダン街道経由で真っ直ぐにマガダン公園に向かい、11月２日、水曜日の午後遅くに到着した。

162:9.7 (1799.1) 使徒達は、あるじが親しみのある土地に戻り、大いに安心した。これ以上、かれらは、王国の福音の公布のためにエルサレムに行くことをあるじに急き立てることはなかった。

論文 163
マガダンでの70人の聖職授任式

163:0.1 (1800.1) イエスと12人のエルサレムからマガダンへの帰着の数日後、アブネーと約50人の弟子が、ベツレヘムから到着した。この時、マガダンの宿営地に福音伝道者団体、女性団体、パレスチナ全域からの約150人の真の、また試煉を経験した弟子も集合していた。数日間、宿営地訪問と再調整に専念した後、イエスと12人は、信者のこの特別な集団のために集中研修講座を始め、それからあるじは、よく訓練を受け経験豊かなこの弟子の集合体の中から70人の教師を選び、王国の福音公布のために送り出した。この定期の教育は、11月４日、金曜日に始まり、安息日の11月19日まで続いた。

163:0.2 (1800.2) イエスは、毎朝、この仲間に講演をした。ペトロスは、公衆への説教方法を教え、ナサナエルは、教えるための技術を教え、トーマスは、質問への応答方法を説明し、マタイオスは、自分達の団体資金の調整を指導した。他の使徒も、各自の特有の経験と生まれながらの才能に従うこの研修に参加した。

1. 70人の聖職授任式

163:1.1 (1800.3) 70人は、マガダン宿営所において11月19日、安息日の午後、イエスによる聖職の任命をうけ、アブネーは、これらの福音伝道者と教師の長とされた。この70人の部隊は、アブネーと10人のヨハネの元使徒、初期の51人の伝道師、王国の仕事において自らを際だたせた他の8人の弟子で構成されていた。

163:1.2 (1800.4) ダーヴィドとその使者団の大多数の到着で増大した400人を超える信者の一行が、この安息日の午後2時頃、にわか雨の中をぬって、70人の聖職授任式に列席するためにガリラヤ湖岸に集合した。

163:1.3 (1800.5) イエスは、福音の使者として引き離すために70人の頭に手を置く前に、演説した。「収穫物は実に豊富であるが、労働者は僅かである。従って、収穫の主が、さらに他の労働者を主の収穫にもたらすように祈りることをあなた方すべてに勧める。私は、王国の使者としてあなたを引き離すところである。私は、狼の中の子羊としてあなたをユダヤ人と非ユダヤ人に向けて送り出すところである。2人ずつ進むに当たり、私は、この最初の任務で進むのはほんの短い期間なので、財布も余分な衣

類も携帯しないよう指示する。道中では誰にも挨拶をせず、自分の仕事だけに気を配りなさい。家に逗留するときはいつでも、その家庭に平和があるように、とまず言いなさい。平安を好む者達がそこに住んでいるならば、あなたは、そこにとどまるであろう。そうでなければ、あなたは出発するであろう。そして、その家を選んだら、差し出されるものは何でも飲食し、その町での滞在中、そこに留まりなさい。働き手が報酬を受けるのは当然であるから、あなたはこれをする。より良い宿が提供されるかもしれないという理由で家から家へと移ってはいけない。覚えていなさい、地球の平和と人の間の善意を宣言して進みながら、自己欺瞞の仇敵と競わなければならないということを。それ故、あなたも蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。

163:1.4 (1801.1) そして、どこにあなたが行っても、『天の王国は近い。』と説教し、心、または体のいずれかを病んでいるかもしれない全ての者に力を貸しなさい。あなたは自由に王国の良いものを受け取った。自由に与えなさい。どこかの町の人々があなたを受け入れるならば、かれらは、父の王国への大きな歓迎を見るであろう。しか

し、もしどこかの町の人々がこの福音の受け入れを拒否するならば、君がその不信心な地域を離れる際に、君の教えを拒否する者達に、『あなた方が真実を拒絶するにもかかわらず、神の王国があなた方の間近に来たことに変わりはない。』と君の知らせを宣言しなさい。あなたの話を聞く者は、私の話を聞いている。また、私の話を聞く者は、私を送られたあの方の言うことを聞いている。あなたの福音の言葉を拒絶する者は、私を拒絶する。そして、私を拒絶する者は、私を送られたあの方を拒絶するのである。」と言った。

163:1.5 (1801.2) イエスは、70人にこう話し終えると、アブネーから始まり輪になって跪いている各自の頭の上に自分の手を置いていった。

163:1.6 (1801.3) 翌朝早々、アブネーは、70人の使者をガリラヤ、サマリア、ユダヤの全都市に遣わせた。そして、この35組は、およそ6週間の説教と教えに赴き、12月30日、金曜日、ペライアのペラ近くの新たな宿営に戻っていった。

2. 富裕な青年とその他

163:2.1 (1801.4) 70人の聖職授任と起用への資格を求めた50人以上の弟子は、これらの候補者を選ぶためにイエスに任命された委員会により拒絶された。この委員会は、アンドレアス、アブネーと福音伝道団の代表者から成った。この3人からなる委員会が満場一致でないすべての場合、イエスの元に候補者を連れて来た。あるじは、福音使者として聖職授任を切望する者は、誰一人としてついぞ拒絶はしなかったが、10人以上の者が、イエスとの会談後、福音の使者になることをもう望まなかった。

163:2.2 (1801.5) １人の熱心な弟子がイエスのところにやって来て、「あるじさま、私はあなたの新しい使徒の一人になりたいのですが、父は非常に年老いており、死も間近です。父の埋葬に戻ることは許されますか。」と訊いた。この男性に、イエスは言った。「息子よ、キツネには穴が、天の鳥には巣があるが、人の子にはその頭を横たえる場所はない。あなたは忠実な弟子であり、家に戻り愛する者達に仕える間もそうあり続けることができる。だが、私の福音の使者達はそうではない。福音の使者達は、私に続くため、王国を公布するために全てを見捨ててしまった。もし、聖職授任される師になりたいのであ

れば、あなたは朗報の発表に進み、死者の埋葬は他の者に任せなければならない。」すると、この男性は大いに失望して立ち去った。

163:2.3 (1801.6) 別の弟子が来て、「聖職授任の使者になりたいのですが、家族を慰めに少しの間我が家に帰ってきたいのですが。」と言った。そこでイエスは、「聖職授任されたいのであれば、進んで全てを見捨てなければならない。福音の使者は、愛情を分割はできない。誰であろうと、鋤に手を掛けてしまって折り返すのであれば、王国の使者になるには相応しくない。」と答えた。

163:2.4 (1801.7) そして、アンドレアスは、敬虔な信者であり、聖職授任を望むある金持ちの青年をイエスの元に連れて来た。この青年マタドームスは、エルサレムのシネヅリオン派の会員であった。かれは、イエスが教えるのを聞き、後にはペトロスと他の使徒達によって王国の福音を教えられた。イエスは、聖職授任の必要条件についてマタドームスと話し、また、この問題についてより深く考慮するまで決断を延期することを要請した。翌朝早くイエスが散歩に出掛けようとしていると、この青年が、近

づいてきて話しかけた。「あるじさま、私は永遠の命の保証についてあなたから知りたいのです。青春期からからすべての戒律を守ってきた私は、永遠の命を獲得するためにしなければならないことを知りたいのです。」この質問に答えてイエスは言った。「あなたが、すべての戒律—姦淫するな、殺すな、盗むな、偽りの証言をするな、騙し取るな、両親を敬え、—を守ればよく振る舞っているが、救済は、信仰への報いであり、単に働きへの報いではない。あなたは、王国のこの福音を信じるているのか。」すると、マタドームスは答えた。「はい、あるじさま、私はあなたとあなたの使徒が教えてくれた全てを信じています。」そこでイエスは、「ならば、あなたは本当に私の弟子であり王国の子である。」と言った。

163:2.5 (1802.1) そこで、青年が言った。「しかし、あるじさま、私は、あなたの弟子であることに満足してはいません。私は、あなたの新しい使者の一人になりたいのです。」イエスは、これを聞くと、大きな愛で青年を見下ろして言った。「もし喜んで代償を払うならば、あなたに欠ける1つのものを補うならば、使者の一人にしよ

う。」マタドームスは、答えた。「あるじさま、あなたに続くことができるならば、何でもするつもりです。」イエスは、跪いている青年の額に接吻をして言った。「私の使者になりたいのであるならば、持ち物全てを売りに行きなさい。そして、その収益を貧者かあなたの同胞に与えてしまってから私の後について来なさい。そうすれば、天の王国で宝を得るであろう。」

163:2.6 (1802.2) これを聞くとマタドームスの顔色が沈んだ。かれは、立ち上がり、悲しい気持で立ち去った、多くの資産を所有していたからである。この裕福な若いパリサイ人は、富は神の引立ての印であると信じるように育てられきた。イエスには、この青年は自己への愛とその富から自由ではないということが分かっていた。あるじは、必ずしも富に限らず、富への執着から彼を救い出したかった。イエスの弟子達は、各自の全財産を手放した訳ではなかったが、使徒と70人はそうであった。マタドームスは、70人の新使者の一人になることを望んでいた。だからこそ、イエスは、現世での全資産を手放すことを要求したのであった。

163:2.7 (1802.3) ほとんど全ての人間には、寵愛の悪としてしかとしがみつく物、そして、それを天の王国への入り口で入国の代価の一部として要求される何か１つの物がある。もしマタドームスがその富を手放してしまったならば、それはおそらく70人の会計係として管理のために彼の手に戻されていたことであったろうに。その後、エルサレムの教会設立後、その時には70人の中での会員資格を楽しむには遅過ぎたはしたものの、マタドームスは、あるじの命令に従った。そして、かれは、エルサレムの教会、主の肉親の弟のジェームスが長であった教会の会計係となった。

163:2.8 (1802.4) このように、人は、自身の決定に到達しなければならない。それは、いつもそうであったし、永遠にそうである。必滅者が、行使するかもしれない選択の自由における特定の範囲がある。精霊的な世界の力は、人を強制しない。精霊的な世界の力は、自身が選ぶ方法を進むことを許す。

163:2.9 (1802.5) イエスは、その富をもつマタドームスが、すでに福音のために全てを見捨ててしまった聖職授任者の仲

間になることができないと予見した。同時に、富がなくとも、マタドームスは、すべての仲間の中での最高の指導者になるのが分かった。しかし、イエス自身の同胞と同様に、かれは、王国で決して偉大になることはなかった、というのも、イエスが求めたまさしくそのことを、そして、かれは、数年後に実際に行ったことをそのとき進んでしていたならば、自分の経験となり得たあるじとの親密で個人的な関係を、自分から奪ったのであったから。

163:2.10 (1803.1) 富は、天の王国への入国には直接に関係はないが、財産への執着は、関係がある。王国への精霊的な忠誠心は、物質的な富への隷属性と相容れない。人は、精霊的な理想に対する崇高な忠誠心と物質の執着心を共有することはできない。

163:2.11 (1803.2) イエスは、財産所有が間違っているとは決して教えなかった。かれは、12人と70人だけに彼らの現世の全所有物を共通の目的に捧げるように要求した。その時でさえ、使徒マタイオスの例のように、かれらは、それぞれの資産の有利な清算を配慮した。イエスは、ロー

マの裕福な男性に教えたように、何度も裕福な弟子達に忠告した。あるじは、過剰な収益の賢明な投資を将来の、しかも避けられない逆境に対する保険の合法的な形態と見なした。使徒の資金が溢れんばかりのとき、ユダは、収入の減少に苦しむかもしれない後のために用いられるように貯蓄して基金を置いた。これをユダは、アンドレアスと相談の上した。イエスは、喜捨金の支払いを除いては使徒の財政とは決して個人的に何の関係もなかった。ただし、イエスが何回となく批難した経済上の1つの虐待があり、それは、強く、鋭く、より知的な仲間が、脆弱で、無学で、運に恵まれない人々の不当な搾取であった。イエスは、男性、女性、子供へのそのような非人間的な扱いは、天の王国の兄弟愛の理想とは相入れないと断言した。

3. 財産に関する議論

163:3.1 (1803.3) イエスがマタドームスと話し終わる頃には、ペトロスと数人の使徒は、イエスの周りに集まってきており、金持ちの青年が去ろうとしているとき、イエスは、使徒に振り向いて言った。「富を有する人々にとり、完全に神の王国に入るということが如何に難しいかが分か

る。精霊的崇拝は、物質的な執着心とは相入れない。人は、２人のあるじに仕えることはできない。『異教徒が永遠の命を受けるよりも、ラクダが針の目を潜り抜ける方が容易い。』という諺がある。このラクダが針の目を潜り抜けるのが容易いように、これらの自己満足の裕福な者が、天の王国に入るのも簡単であると、私は加えて宣言する。」

163:3.2 (1803.4) ペトロスと使徒は、これらの言葉を聞くと非常に驚き、「では、主よ、誰が救われることができるのですか。富を持つ者はすべて、王国の外に留められるのですか。」とペトロスが言った。そこで、イエスが答えた。「そうではない、ペトロス。だが、富に頼る者の全ては、まず永遠の進歩に通じる精霊的な生活にはほとんど入れない。しかし、それでも、人に不可能である多くは、天の父の力の及ぶ範囲にある。むしろ、我々は、神とならば全ての事が可能であるということを認識すべきである。」

163:3.3 (1803.5) 彼らが単独で出発するとき、イエスは、マタドームスを非常に愛していたので彼がともに残らなかった

ということを大いに悲しんだ。湖沿いに歩き、水辺に座ったとき12人の代わりに(この時までには全員がいた)、ペトロスが言った。「私達は、金持ちの青年へのあなたの言葉に悩んでおります。あなたの後に続きたい人々にその全財産を諦めるように求めるべきしょうか。」すると、イエスは言った。「いや、ペトロス。使徒になりたい者だけに、あなた方がしているように、それと１家族のように私と同居することを望む者だけに。しかし、父は、子供達の愛情が純粋であり分裂的でないことを必要とする。あなたと王国の真の愛の間に割り込む何事も何人も、引き渡されなければならない。人の財産が魂の境界域内に侵入しなければ、それは、王国に入ることを望む人の精霊的な人生において重要ではない。」

163:3.4 (1804.1) そこで、ペトロスは、「しかし、あるじさま、私達は、あなたに続くためにすべてを放棄しました。それで、私達は、何を得るのでしょうか。」と言った。そこで、イエスは、12人全員に話した。「誠に、誠に、言いきかせておこう。私のためや天の王国のために財産、家、妻、同胞、両親、または子供を置き去りにする者は誰でも、この世界にあって恐らくいくつかの迫害と共

に、その幾倍かを受けない者はなく、やがて行く世界で永遠の命を受けない者はないのである。しかし、先の者が後になり、後の者がしばしば先になることが多いのである。父は、被創造者の必要性に従い、また、宇宙の福祉ために慈悲深く情愛深い思いやりの公正な法の遵奉において彼等に対処する。

163:3.5 (1804.2) 「天の王国は、沢山の雇い人を抱え、朝早くブドウ園の労働者を雇いに出かける世帯主に似ている。１日当たり１デナリオスの支払いを約束し、その労働者達をブドウ園に送った。その後世帯主は、９時頃に出かけ、他の者が市場で立っているのを見て言った。『君達も私のブドウ園に行って働きなさい。働きに応じて支払うつもりである。』そこで、かれらは、早速出かけて行った。世帯主は、また12時と３時頃に出かけて同様にした。午後５時頃また市場に行くと、何もせずに立っている者達を見たので、かれは、『何もせずに何故一日中立っているのか。』と尋ねた。するとその人々は、『誰も雇ってくれなかったからです』。と答えた。すると、世帯主が言った。『君達も私のブドウ園に行って働きなさい。働きに応じて支払うつもりである。』

163:3.6 (1804.3) 夕方になるとブドウ園のこの所有者は、執事に言った。『労働者達を呼びなさい。最後に雇われた者から始め、最初に来た者が最後になる順番で賃金を支払いなさい。』5時頃に雇われた人々が来て、それぞれに1デナリオスを受け取り、他の労働者達も同じであった。その日の始めに雇われた者達は、後から雇われた者達がどの程度支払われたかを見て、同意した以上の受け取りを期待した。しかし、他の者同様に、誰もが１デナリオスだけを受領した。そして、各々が自分の賃金を受け取ると、彼等は、世帯主に不平をもらした。『最後に雇われた者達は、ほんの1時間しか働かなかったのに、灼熱の中での1日の仕事を担った私達と同じ支払いを受けました。』

163:3.7 (1804.4) 世帯主はその時、答えた。『友よ、私は、あなた方に対し不正をしてはいない。あなた方各人は、1日あたり1デナリオスの約束をしませんでしたか。自分の取り分をもらって行きなさい、私は、最後に来た人々にもあなた方と同様に払いたいのである。自分の物を自分がしたいようにするのは当たり前ではありませんか。そ

れとも、私が善くあり、情けをみせるので、あなた方は私の気前のよさを妬んでいるのですか。』」

4. 70人への決別

163:4.1 (1804.5) 70人が最初の任務に赴いた日は、マガダンの宿営にまつわる感動的な時であった。その朝早く、70人への最後の話の中でイエスは、次の点を強調した。

163:4.2 (1804.6) 1. 王国の福音は、全世界に、非ユダヤ人にならびにユダヤ人に公布されなければならない。

163:4.3 (1804.7) 2. 病人に奉仕する傍らで、奇跡の期待を持つ教えは控えよ。

163:4.4 (1805.1) 3. 現世の権力と物質的な栄華の外面的な王国ではなく、神の息子の精霊的な兄弟愛を公布せよ。

163:4.5 (1805.2) 4. 福音を説くことへの心からの献身が損なわれるかもしれない過度の社交的な訪問や他の些細な事での時間の損失を避けよ。

163:4.6 (1805.3) 5.本部に選ばれる最初の家が相応しい家であると分かるならば、その都市での滞在中はそこに留まるように。

163:4.7 (1805.4) 6. エルサレムのユダヤ人の宗教指導者との公然の決別の時がもう来たことをすべての忠実な信者に明らかにせよ。

163:4.8 (1805.5) 7. 人の義務の全ては、心と魂を尽くして神を愛し、あなた自身のように隣人を愛せよ、というこの１つの戒めに要約されているということを教えよ。(これは、彼等が、パリサイ派によって述べられた生活の613の原則に代わる人の全義務として教えることになるもの。)

163:4.9 (1805.6) イエスがこのように使徒と弟子の全員の前で70人話し終えると、シーモン・ペトロスは、70人を連れ去り、彼らに聖職授任の説教をした、そしてその説教は、王国の使者として手を置いて彼らを引き離した際に、あるじから与えられた訓示を詳細にしたものであった。ペトロスは、70人が体験する際に次の長所を大事にするように勧めた。

163:4.10 (1805.7) 1. 献身的帰依。つねに福音の収穫に向けより多くの労働者が送り出されることを祈ること。人がそのように祈るとき、「ここに、私はいます。私をお送りください。」と祈っているのであるということを説明した。かれは、日々の崇拝を無視しないように諭した。

163:4.11 (1805.8) 2. 真の勇気。かれは、彼等が、敵意に直面し、そして、迫害を受けるのは確かであると警告した。ペトロスは、彼等の任務は、臆病者のための仕事には向かないと伝え、また、恐れている者は、着手する前に身を引くように忠告した。しかし、誰も引き下がらなかった。

163:4.12 (1805.9) 3. 信仰と信頼。かれらは、この短い任務で必要なものが全く用意されないまま出て行かなければならない。かれらは、食物、避難所、および他のすべての必要なものについては父を信じなければならない。

163:4.13 (1805.10) 4. 情熱と自発性。 かれらは、情熱と知的な熱意に動かされなければならない。かれらは、厳しくあるじの用向きに気を配らなければならない。東洋の挨拶は、長くて入念な儀式であった。そこで、かれらは、「道端では人に挨拶しない」ようにと命じられてきてお

り、それは、むだな時間をなくして仕事に取り組む一般的な方法であった。それは、友好的な挨拶の問題とは無関係であった。

163:4.14 (1805.11) 5. 親切と礼儀。あるじは、社会的な儀式における時間の不必要な浪費を避けるように命じたが、彼等が接触するであろう全ての人々に対する礼儀を命じた。かれらは、自分たちが家で持てなしをうけるかもしれない者に対してあらゆる親切を示すことになっていた。より快適であるか、または有力である者の家で楽しむために慎ましい家を去ることを避けるように厳しく注意された。

163:4.15 (1805.12) 6. 病人への奉仕。70人は、心身を病む者を求め、疾患の緩和、または治癒をもたらすためにできる全てをすることをペトロスに課された。

163:4.16 (1805.13) このように任され、指示されると、かれらは、2人ずつに組み、ガリラヤ、サマリア、ユダヤでの任務に赴いた。

163:4.17 (1806.1) ユダヤ人は、時おり異教の国が70ヶ国あることを思って、70という数に独得の考えをもち、また、これらの70人の使者は、すべての民族に福音をもたらすことになってはいたが、我々が認識する限りにおいては、この一団が丁度70人であったのは単なる偶然であった。イエスは、少なくとも他の6人ほどを確かに受け入れたことであろうが、それらの者には、富と家族を見捨てるという代償を払う気がなかったのである。

5. ペラへの宿営移動

163:5.1 (1806.2) イエスと12人は、あるじがヨルダン川で洗礼されたペラ近くのペライアにおいて、そのとき、最後の本部を設ける準備をした。11月の最後の10日間は、マガダンでの協議会に費やされ、12月 6 日、火曜日には、およそ300人の仲間の全員は、ペラ近くの川の側でその夜の宿泊のために夜明けに持ち物を携え出発を始めた。泉の側のこれは、洗礼者ヨハネが何年も前に陣取っていた同じ場所であった。

163:5.2 (1806.3) マガダン宿営の解体後、ダーヴィド・ゼベダイオスは、ベスサイダに戻り、すぐに、使者活動の縮小に

取り掛かった。王国は、新局面を迎えていた。巡礼者は、日々,全パレスチナ、そしてローマ帝国の遠域からさえもやって来た。信者は、時にはメソポタミアとチグリス川の東の土地から訪れた。従って、12月18日、日曜日、ダーヴィドは、以前湖岸のベスサイダの宿営を指揮った際の宿営装具を、父の家に格納していた宿営装具を、使者団の助けを借り荷物用の動物に載せた。ベスサイダに当分の間の別れをし、湖岸とヨルダン川沿いに使徒の宿営の北のおよそ800メートル程の地点へと下り続け、そして、1週間足らずで約1,500人相当の巡礼者のもてなしの用意ができていた。使徒の宿営所にはおよそ500人を収容することができた。そのとき、パレスチナでは梅雨時に当たり、これらの宿泊施設においては、イエスに会いに、また教えを聞きにペライアにくる大部分はまじめで絶えず増加する求法者達の世話をすることが求められていた。

163:5.3 (1806.4) マガダンでフィリッポスとマタイオスと相談はしたものの、ダーヴィドは、この全てを率先的にした。この宿営所を指揮するに当たり、かれは、かつての使者団の大半を助手として採用した。そのとき、通常の使者

の任務には20人足らずを利用した。12月下旬近く、そして70人の帰還前、およそ800人の訪問者が、あるじの周りに集められ、彼等は、ダーヴィドの宿営所に宿を見つけた。

6. 70人の帰還

163:6.1 (1806.5) 12月30日金曜日、イエスは、ペトロス、ジェームス、ヨハネと近くの丘へ行き留守にしていたが、70人の二人ずつの使者は、多数の信者を連れてペラ本部に到着していた。５時頃イエスが宿営所に戻ると、70人全員が、教育の場所に集められた。王国の福音のためのこれらの熱心な者達がそれぞれの経験談をしているうちに、夕食は１時間以上も遅れた。ダーヴィドの使者達は、前の数週間にわたりこの消息の多くを使徒に知らせていたが、熱望しているユダヤ人や非ユダヤ人に自分達の知らせがどう受け入れられたかをこれらの新たに聖職授任された福音の教師達が直接に伝えるのを聞くことは、誠に心が奮い立つのであった。遂にイエスは、自分の個人の臨場なしで、人々が、朗報を広めに出掛けるのを目にすることができた。あるじは、そのとき、王国の進歩を

由々しく妨げることなくこの世を去ることができると分かった。

163:6.2 (1807.1) 70人は、自分達にいかに「悪魔でさえ服従した」かという説明に関連しては、神経障害の犠牲者の例で取り組んだ素晴らしい療法に言及した。それでも、これらの活動者に救済された本当の霊的憑拠に関する幾つかの事例があった。そこで、これらについてイエスは言及した。「私が天から魔王が稲妻のように落ちるのを見るのに照らし合わせるとき、これらの反抗的な下位の霊が、君達に服従することは奇妙ではない。しかし、これをそれ程までに喜んではいけない、というのは、私が父の元に戻るとすぐに、我々は、もうこれ以上これらの失われた少数の精霊が、不幸な死すべき者の心に入ることができないように、我々は、まさに人々のその心に我々の精霊を送ると断言する。あなたに人を目覚めさせる力があるということは嬉しいが、この経験をもとに得意になるのではなく、あなたの名が天の名簿に書かれているということ、そして、その結果、あなたは、精霊的勝利の終わりのない経歴に向かおうとしていることに歓喜しなさい。」

163:6.3 (1807.2) そして、共に晩の食事をする直前、追随者が時折目撃した感情的な恍惚状態のこれらの稀な瞬間を、イエスが経験したのは、この時であった。かれは言った。「感謝致します、天地の主である父、この素晴らしい福音が、賢者や独善者から隠されるとともに、王国のこれらの子供へのこれらの精霊的な栄光を明らかにされたことを。はい、父上、こうすることは、御心に適ったに違いなく、私は、私があなたの元に、また果たすべき仕事に戻った後に、朗報が、全世界に広まるということを知り喜んでいます。私は、私の手に全権が委ねられようとしていること、あなただけが、本当に私が誰であるかを知るということ、私だけが本当にあなたを知るということに気づき、強く心を動かされています。また、私があなたを明らかにした者達だけが、あなたを知っています。そして、私は、肉体をもつ我が同胞へのこの顕示を終えたとき、高所にいるあなたが創造された者達にその顕示を続けていきます。」

163:6.4 (1807.3) イエスは、父にこのように話し終えると、使徒と奉仕者達に話すために横を向いた。「これらの事を見る目と聞く耳は、幸いである。過ぎ去った時代の多くの

予言者と偉人は、あなた方がいま目にしていることを見ることを望んでいたが、それは許されなかった。そして、そのうちにやって来る光の多くの世代は、これらの事を聞くとき、それらを聞いたり見たりしたあなた方を羨むであろう。」

163:6.5 (1807.4) ついで、かれは、全ての弟子に向かって言った。「あなた方は、多くの町や村がいかに王国に関する朗報を受け入れたかを、また、私の活動者と教師が、いかにユダヤ人と非ユダヤ人の両方に受け入れられたかを聞いた。そして、本当に幸せであるのは、王国の福音を信じることを選んだこれらの共同体である。しかし、これらの使者をよく受け入れなかったホラズィン、ベスサイダ-ユーリアス、カペルナムの町の光を拒絶している住民は、不幸である。これらの場所で行われた力強い働きが、ツロとシドーンで行われていたならば、いわゆる異教徒の都市の人々は、ずっと以前に悲しみに沈んで悔悟していたことであろう、と私は断言する。裁きの日には、ツロとシドーンにとり実に耐え易いものであろう。」

163:6.6 (1807.5) 翌日は安息日であり、イエスは、70人とともに出掛けて行き彼らに言った。「君達が、ガリラヤ、サマリア、ユダヤ中に散在しているそれほど多くの人の王国の福音の受け入れの朗報を携えて戻ったとき、私は、君と共に本当に喜んだ。だが、なぜ君達は、そんなに驚くほどに意気揚々としたのか。伝達が力を明らかにすると予想はしなかったのか。その効果に驚いて戻るほどには、この福音をあまり信用せずに旅立ったのか。今、私は、歓喜の君達の悦びの意気を抑えたくない一方で、驕り、精霊的な驕りの微妙さについて警告したい。不法者ルーキフェレーンスの失脚を理解することができるならば、あなた方は、すべての精霊的な驕りのすべての形態を粛として避けるであろう。

163:6.7 (1808.1) 「君達は、彼が神の息子であることを人に教えるこの素晴らしい仕事についた。私は君達に道を示してきた。君の義務を果たしに先へ進みなさい、そして首尾よくすることに飽きることのないようにしなさい。あなたに、またあなたの道を世々代々にわたり進むもの全てに言っておく。私は、いつも近くに立っている、そして重荷を背負い苦しんでいる者は、皆私の元に来なさい、

休ませてあげよう、私は、真実で誠実であるのだから私のくびきを負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたの魂に休みが与えられるであろう、というのが、私の招待の言葉であり、また、それは永遠である。

163:6.8 (1808.2) かれらは、イエスの約束を試してみると、あるじの言葉が、真実であると分かった。また、数え切れない程の人々が、その日以来ずっとこれらの同じ約束を試し続け、また、その確かさを立証し続けた。

7. 最終任務のための準備

163:7.1 (1808.3) ペラ宿営での次の数日は忙しい時であった。ペライア任務のための準備が完了されつつあった。イエスとその仲間は、3カ月の全ペライアの巡行の最後の任務に着手するところであった。あるじが、地球でのその最終的な作業のためにエルサレムに入るまでは終わらないこの期間、イエスと12人の使徒の本部は、ここペライア宿営所に維持された。

163:7.2 (1808.4) イエスが人々に教えるために広範囲に行く必要はもはやなかった。そのとき、毎週、全地域から、パレスチナからだけでなく全ローマ世界および近東からイエ

スの元にやって来る人々の数が、増えていた。あるじは、70人とペライアの巡歴に参加したが、ペライア宿営所で群衆への教えと12人への指示に自分の時間の多くを過ごした。この３カ月を通して、使徒の少なくとも10人が、イエスと共に残っていた。

163:7.3 (1808.5) 女性団体もまた、ペライアのより大きい町で２人ずつ70人と働くために出かける準備をした。この当初の12人の女性部隊は、家庭訪問の仕事と病人や苦しむ者に奉仕する技術に関してつい先ごろ50人の女性のより大きい部隊を訓練をした。シーモン・ペトロスの妻であるペルペツアは、この新しい女性部隊の一員となり、アブネーの下で拡大した女性の仕事の統率を任された。五旬節の後、彼女は、有名な夫の宣教の旅の全てに同伴した。そして、ペトロスがローマで磔刑にされた日、彼女は、競技場の野獣に餌として与えられた。また、この新女性部隊には、成員としてフィリッポスとマタイオスの妻達、それにジェームスとヨハネの母もいた。

163:7.4 (1808.6) 王国の仕事は、そのとき、イエスの直接指揮の下に、その最終局面に入る準備をした。そして、この現

局面は、過去のガリラヤでの人気のある時代にあるじの後に続いた奇跡に関心があり、驚くべきことを求める群衆とは対照的に、精霊的な奥深さのあるものであった。しかし、物質志向の、そして天の王国が、神の普遍的父性の永遠の事実に基づく人の精霊的な兄弟愛であるという真実を把握しない多数の追随者が、いまだにいた。

論文 164
奉献の祭にて

164:0.1 (1809.1) ペラ宿営所が設立される間、イエスは、奉献の祭に出席するためナサナエルとトーマスを連れ秘かにエルサレムへ行った。彼らがベサニアの浅瀬でヨルダン川を渡るまで、2人の使徒は、あるじがエルサレムに進んでいるのに気づかなかった。彼が、奉献の祭に出席するのが真意と分かると、かれらは、切々と抗議し、またあらゆる類の議論を駆使し、思い切らせようと努めた。しかし、彼らの努力は、効果がなかった。イエスは、エルサレムを訪問すると決心していた。彼らのあらん限りの嘆願に、そして自分をシネヅリオン派の手近に晒すという愚かさと危険性を強調する全警告に対し、かれは、単

に「私の時間が来る前にもう一度イスラエルのこれらの教師に機会を与えたい。」と答えるのであった。

164:0.2 (1809.2) 3人は、エルサレムに向かい、そして2人の使徒は、恐怖の気持ちを表明し、そのような明らかに僭越な企てに関する自分達の疑問を声に出し続けた。3人は、およ4時半過ぎにイェリーホに達し、夜はそこで泊まる準備をした。

1. 良きサマリア人の話

164:1.1 (1809.3) その晩、かなりの来客が、質問のためにイエスと2人の使徒の周りに集まり、使徒は、その質問の多くに答え、あるじは、他の質問を論じた。その夜の進行の中で、ある律法学者は、評判を落とすような論争にイエスを巻き込もうとして、「先生、永遠の命を受けるには一体何をすべきかを尋ねたいのです。」と言った。イエスは、「何が律法だと預言者には書かれていますか。あなたは、聖書をどのように読みますか。」と答えた。律法学者は、イエスとパリサイ派双方の教えと知った上で答えた。「心をこめて、魂をこめて、力をつくして主なる神を愛せよ。また、自分を愛するように隣人を愛せ

よ。とあります。」すると、イエスが言った。「あなたは正しく答えた。あなたが本当にすれば、これが、永遠に続く命へと導くであろう。」

164:1.2 (1809.4) しかし、律法学者は、この質問にまったく誠実ではなく、自分を正当化したいのと、また、イエスを当惑させたいのとで別の質問で挑んだ。かれは、あるじに少し近づいて、「しかし、先生、一体誰が私の隣人であるか教えてください。」と、言った。律法学者は、人の隣人を「その民族の子孫」と定義したユダヤの法に違反する論述をさせ、イエスを罠にかける目的でこの質問をした。ユダヤ人は、他の全ての人々を「非ユダヤ人の犬」と見ていた。この律法学者は、イエスの教えに幾らかの馴染みがあり、従って、あるじが異なる考えであることを心得ていた。このように、かれは、神聖な法に対する攻撃として解釈できる何かを言う方向へイエスを導きたいと願っていた。

164:1.3 (1810.1) しかし、イエスは、律法学者の動機を明察し、罠に陥る代わりに聞き手に物語を、あらゆるイェリーホの聴衆が十分に真価を認めるであろう物語を始めた。イ

エスは言った。「ある人がエルサレムからイェリーホへ下っていく途中、非道な強盗が、この人を襲い、略奪し、裸にして殴打し、半殺しにしたまま逃げ去った。間髪を入れず、偶々その道を下ってきた一人の祭司が、負傷した男性に出くわし、気の毒な有り様を見たが、道路の向こう側を通り過ぎた。また同様に、一人のレービイ人が、通り掛かりこの男性を見たが、道路の向こう側を通り過ぎて行った。さて、丁度この頃、あるサマリア人が、イェリーホまで旅をしていて、この負傷した男性に出くわした。かれは、略奪され、打ちのめされた様を見て気の毒に思い、男性に近寄って行き、傷に油とワインを注ぎ包帯をし、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行き介抱をした。翌日、かれは、幾らかの金を取り出し、それを宿の主人に与え、『私の友人の世話をよくしてあげてください。もし、もっと費用が掛かるなら、帰りに返済します。』と言った。さて、あなた方に尋ねたい。この３人のうち誰が強盗に襲われた人の隣人であったと思いますか。」そこで、自身の罠に掛かったと悟った律法学者は、「その男性に慈悲を示した者」と答えた。そこ

で、イエスは、「あなたも同様にしにいってください。」と言った。

164:1.4 (1810.2) 律法学者は、サマリア人、というその不愉快な言葉を差し控えることができるように「慈悲を示した者」と答えた。「誰が私の隣人であるか。」という質問への答えを、律法学者が答えることをイエスが望んでいた質問への答えを、イエスがもしそう述べたならば、直接イエス自身を異端の告発に巻き込んだであろう同じ答えを、律法学者は、与えざるをえなかった。イエスは、不正直な律法学者を困惑させたばかりでなく、全追随者にとっては美しい訓戒であり、同時に全ユダヤ人にとってはサマリア人に対する彼等の考えてもみないほどの叱責の話を聞き手に語った。そして、この話は、後にイエスの福音を信じたすべての者の間での兄弟愛の促進を続けた。

2. エルサレムにて

164:2.1 (1810.3) イエスは、帝国の全域からの巡礼者に福音を宣言できるように会堂の祭に出席した。イエスは、そのとき、ただ1つの目的のために、シネヅリオン派とユダヤ

の指導者達に光を見させる今一度の機会を与えるために奉献の祭に行った。エルサレムでのこの数日間の主な出来事は、金曜日の夜ニコーデモスの家で起きた。ここにはイエスの教えを信じるおよそ25人のユダヤ人指導者が、集められた。この集団の中には、その時、あるいは最近までシネヅリオン派に属していた14人ほどの男性がいた。この会合にはエベル、マタドームス、それにアリマセア出身のヨセフが出席していた。

164:2.2 (1810.4) この場合、イエスの聞き手は、皆学識ある者で、これらの学識者も2人の使徒共に、あるじがこの著名な集団に示した所見の幅と深さに驚いた。イエスは、アレキサンドリア、ローマ、および地中海の島々で教えていた時代から、そのような学識を披露したり、人事に関わるそのような理解を俗人にも宗教人にも示していなかった。

164:2.3 (1810.5) この小談合が解散されると、全員は、あるじの人格に当惑し、優しい態度に魅せられ、その人に愛情を抱いて立ち去った。彼らは、シネヅリオン派の残りの者達を獲得したいというイエスの願望に関して彼に忠告し

ようとした。あるじは、注意深く、しかも黙って皆のすべての提案に耳を傾けた。彼にはそのいずれの計画もうまくいかないことが分かっていた。かれは、大部分のユダヤ人の指導者が、王国の福音を決して受け入れないということを推測していた。それでも、彼ら全員に選択するこのもう一つの機会を与えたのであった。だがその夜、かれは、宿泊のためにナサナエルとトーマスとオリーヴ山へ出掛けるときにはシネヅリオン派の注目をもう一度自分の仕事に引きつける努力をする方法をまだ決めてはいなかった。

164:2.4 (1811.1) その夜、ナサナエルとトーマスは、ほとんど眠らなかった。かれらは、ニコーデモスの家で聞いたことにあまりにも驚いていた。かれらは、イエスが、シネヅリオン派の以前の、また現在の構成員とともに70人の前に行くという申し出に対するイエスの最後の言葉に思いを巡らせた。あるじは言った。「いや、同胞よ、それは、まったく無駄であろう。君は、自身の頭に叩きつけられる怒りを増すであろうが、彼等が私に抱く憎悪を少しも和らげはしないであろう。父が指示するかもしれない方法で、私が彼らに王国をもう一度注目させる間、

銘々で出掛けなさい、精霊が君を導くに任せて父の用向きに。」

3. 盲目の乞食を癒す

164:3.1 (1811.2) 翌朝３人は、ベサニアのマールサの家に朝食に行き、それから、すぐエルサレムに入った。この安息日の朝、イエスと２人の使徒が寺院の近くに差し掛かると、皆によく知られた生まれながらにして盲目の一人の乞食が、彼のいつもの場所に座っているのに遭遇した。乞食たちは、安息日に施しを求めたり、受け取りはしなかったが、通常の場所に座ることは許された。イエスは止まって、この乞食を見た。かれは、生まれつき盲目のこの男性を見つめると、どのようにシネヅリオン派や他のユダヤ人の指導者および宗教教師の注意を地球での自分の任務にもう一度払わせるかという考えが浮かんだ。

164:3.2 (1811.3) あるじが深い考えに没頭し、そこで盲目の男性の前に立っていると、ナサナエルは、この男性の盲目に関するありうる原因を考えていて尋ねた。「あるじさま、誰が罪を犯したためですか。この男ですか、それとも両親ですか。この男が生まれつき盲人であるのは。」

164:3.3 (1811.4) 律法学者は、生まれついて盲目であるそのようなすべての例が、罪によって引き起こされると教えた。子供が、罪をもって受胎されて生まれてくるばかりではなく、その父が犯した罪によって何らかの具体的な罰として盲の子供が生まれることがあると教えた。かれらは、この世界に生まれる前に子供自身が罪を犯すかもしれないとさえ教えた。また、そのような障害は、妊娠中にその母が何らかの罪、あるいは他の道楽に起因する場合があるとも教えた。

164:3.4 (1811.5) この全域にわたり、転生に関するなかなか去らない信仰があった。年老いたユダヤ教師達は、プラトン、フィロン、およびエッセーノス派の多くと共に、人は、前世で植えつけたものを１度の回生で刈り取れるという理論を許容していた。このように、１度の人生で、人は、前世で犯した罪を償うと信じられた。あるじは、彼等の魂が以前に存在しなかったと人間に信じさせることが難しいと知った。

164:3.5 (1811.6) それにしても矛盾しているようではあるが、そのような盲目は、罪の結果であると思われる一方で、ユ

ダヤ人は、これらの盲目の乞食に施し物を与えることは、高度に賞賛に値すると考えた。通行人へ絶えず「心優しい方よ、盲を補助されご利益を得られよ。」と唱えるのが、これらの盲人の習わしであった。

164:3.6 (1811.7) イエスは、ナサナエルとトーマスとこの件について議論を始めたが、それは、単に自分の任務にユダヤの指導者の注意をもう一度顕著に向けさせるその日の方法としてこの盲目の男性を利用すると早くも決めたばかりでなく、かれは、自然であるか、または精霊的なすべての現象の真の原因を捜すことをつねに使徒に奨励したからでもあった。かれは、ありふれた物理的な出来事に精霊的な原因を当てる世間並みの傾向を避けるように使徒にしばしば警告した。

164:3.7 (1812.1) イエスは、その日の仕事の計画でこの物乞いを利用すると決めたが、名をヨシアという盲目の男性のために何かをする前に、ナサナエルの質問に答え始めた。あるじは言った。「両親でもなく、この男性が罪を犯したのでもなく、神の御業というものが彼に現れるためである。この盲目は、自然な事の成り行きでこの男性の身

に生じたが、我々は、私を遣わされた方の業を今、昼の間に施さねばならない、これからしようとする事ができなくなる夜という時がたがうことなくやって来るので。世界にいるとき、私は世界の光であるが、間もなく私は、君達と共にはいなくなる。」

164:3.8 (1812.2) 話し終えるとイエスは、「人の子の告訴を追い求めている筆記者とパリサイ派が、充分な機会が得られるようこの安息日にこの盲人に視力を呼び起こそう。」と、ナサナエルとトーマスに言った。ついで、かれは、前屈みになり、地面に吐いた唾を粘土と混ぜて、このすべてが、盲目の男性に聞こえるように言い、ヨシアのところに行き見えない目の上に粘土を置いて言った。「行きなさい、息子よ。シロアーの池でこの粘土を洗い流しなさい、そうすれば、すぐに、視力を得るであろう。」そして、ヨシアがシロアーの池でその通りに洗うと見えるようになり、友人と自分の家族のところに戻っていった。

164:3.9 (1812.3) 今までずっと乞食であり、ヨシアは、他の何も知らなかった。それゆえ、視力の回復行為の最初の興奮

が去ると、いつもの自分の施しを乞う場所に戻っていった。友も、隣人も以前の彼を知る者は皆、ヨシアが見えることに気づくと、「これは、盲の乞食ヨシアではないのか。」と言った。ある者はそうだと言うし、他の者は、「いや、そのようではあるが、この男は見える。」と言った。しかし、皆がこの当人に尋ねると、「私です。」と答えた。

164:3.10 (1812.4) 彼らが、どうして見えるようになったのかを訊き始めると、「イエスと呼ばれる男性がこちらにやって来て、その友人達と私のことを話していると、唾で粘土を作り私の目に塗りシロアーの池に行って洗うように指示されました。私は、この男性に言われた通りにしました。すると、すぐに、視力を得ました。しかも、それは、ほんの数時間前のことです。私は、見るという意味の多くをまだ知らないのです。」と答えた。すると、ヨシアの周りに集まり始めた人々が、彼を癒したその不思議な人物をどこで見つけられるのかと尋ねると、ヨシアは、知らないとしか答えられなかった。

164:3.11 (1812.5) これは、すべてのあるじの奇跡で最も奇妙なことである。この男性は治療を乞いはしなかった。ヨシアは、自分にシロアーで洗うように指示し、視力を約束したイエスが、天幕の祭りの間、エルサレムで説教していたガリラヤの予言者であることを知らなかった。この男性は、自分が視力を受け取るということをほとんど信じなかったが、当時の人々は、偉大な人か聖人の唾の効力に大いなる信仰を持っていた。そして、ナサナエルとトーマスとのイエスの会話から、ヨシアは、自分の恩人となろうとしている人は、偉人か学識ある教師、または聖なる予言者であると結論を下していた。それ故に、イエスの指示通りにしたのであった。

164:3.12 (1812.6) イエスは、3つの理由で粘土と唾を利用し、また、象徴的シロアーの池で洗うように命じた。

164:3.13 (1812.7) 1. これは、個人の信仰への奇跡による返答ではなかった。これは、自身の目的のために実行をイエスが選んだ、しかも、そこから、この男性が、持続する恩恵を引き出せるように取り計らった驚きに値いする業であった。

164:3.14 (1813.1) 2. 盲人が治癒を求めず、彼の持つ信仰が微かであることから、物質的なこれらの行為は、彼を励ます目的のために示された。盲人は、唾の効力の迷信を本当に信じ、シロアーの池が幾らか敬虔な場所であることは知っていた。しかし、塗布の粘土を洗い流すことが必要でなかったならば、なかなかそこには行かなかったであろう。盲人の行動を引き起こすためのやり取りにはまさにぴったりの儀式であった。

164:3.15 (1813.2) 3. しかし、イエスには、この特異な駆け引きに関してこれらの物質的な手段に訴える第3の理由があった。これは、全く自分自身の選択に従って為された奇跡であり、そしてそれによって、当時の、またすべての以降の時代の追随者が、病人の回復における物質的な手段を軽蔑したり、無視することを控えるように教えることを望んでいた。かれは、奇跡を人間の病気を治療する唯一の方法と考えることを止めなければならない、と皆に教えたかった。

164:3.16 (1813.3) イエスは、この全行為をシネヅリオン派、全ユダヤ教師と宗教指導者への公然の挑戦を主要目的とし

て、この安息日の朝エルサレムの寺院近くで、奇跡の運用によりこの男性に視力を与えた。これは、イエスのパリサイ派との公の絶縁を宣言する方法であった。かれは、為すこと全てにおいていつも積極的であった。そして、この安息日の午後早く、この男性のところに２人の使徒を連れ来て、奇跡をパリサイ派に気づかせ、故意にそれらの議論を引き起こし、シネヅリオン派の前にこれらの問題をもたらすことが、イエスの目的であった。

4. シネヅリオン派の前のヨシア

164:4.1 (1813.4) 午後の半ばまでに、ヨシアの治癒は、寺院の周りでの議論を高めたので、シネヅリオン派の指導者達が、その通常の寺院の会所で会議を開くと決めるほどであった。そして、かれらは、安息日にシネヅリオン派の会合を禁じた定款に違反してこれをした。イエスは、最後の試煉が来るときは、安息日への違反が主な罪状の1つであることを知っており、慈悲あるこの行為に対してイエスを裁くユダヤの高等裁判所のまさにその会議が、自らが課した法に直接違反し、安息日にこれらの問題を熟慮するように、盲目の男性を安息日に癒した罪で裁定

のためにシネヅリオン派の元に引かれて行くことを望んでいた。

164:4.2 (1813.5) しかし、かれらは、イエスを召喚しなかった。そうすることを恐れていた。代わりに、かれらは、直ちにヨシアを呼びにやった。幾つかの予備質問の後、約50人が出席するシネヅリオン派の代弁者は、ヨシアに何が起こったのかを話すように命じた。その朝の治癒以来、トーマス、ナサナエル、および他の者から、パリサイ派が安息日に治療を施すことに立腹するということ、また係わりのある全ての者に問題を起こしそうであるということを教えられていたが、ヨシアは、イエスが救出者だと呼ばれているとはまだ気づいていなかった。そこで、パリサイ派が質問すると、「この人がやって来て、私の目に粘土を着け、シロアーに洗いに行くように言われ、そして、今、私は見えるのです。」と言った。

164:4.3 (1813.6) 年上のパリサイ派の一人は、長い発言の後、「この男性は、安息日を祝わないと分かるので、神から来たはずがない。安息日に、まず粘土を作り、次に洗うためにこの乞食をシロアーに送ったり、法に違反してい

る。そのような者が神から送られた教師であるはずがない。」と言った。

164:4.4 (1813.7) そのとき、秘かにイエスを信じる若者の一人が言った。「この男が神から遣わされていないのならば、どうしてこれらのことができるのだろうか。我々には、普通の罪人が、そのような奇跡を果たせないことうが分かっている。我々は皆、この乞食が盲目に生まれたと知っている。今かれは、見える。あなたは、それでもこの予言者が、悪魔の王子の力でこれらのすべての驚きの業をすると言われますか。」すると、イエスを敢えて起訴し、糾弾するパリサイ派の各成員にむかって、一人が、もつれさせ恥ずかしめる質問をするために立ち上がろうとするので、彼らの間に深刻な分裂が生じた。議長は、主意から逸れるのを見てとり、議論を静めるために直にこの男性へのさらなる質問の用意をした。ヨシアに向かって、「お前はこの男、このイエスについて何か述べることがあるか。お前の目を見えるようにした者は、誰であるとお前は言うのか。」と訊いた。すると、ヨシアは、「予言者だと思います。」と答えた。

164:4.5 (1814.1) 指導者達は、大いに困惑し、為すべきことを知らず、ヨシアが本当に生まれつき盲目であったかどうかを知るために両親を呼びにやると決めた。かれらは、その乞食が癒されたと信じることを嫌った。

164:4.6 (1814.2) イエスがユダヤ教の全会堂への出入りを拒まれているばかりか、その教えを信じる者全ても同様に会堂から追放され、イスラエルの集会から破門されているということは、エルサレム周辺でよく知られていた。そして、これは、生活の必需品を買う権利を除くユダヤ人としてのすべての権利と特権の否定を意味した。

164:4.7 (1814.3) したがって、ヨシアの両親、貧しく恐怖に悩む二人は、威厳のあるシネヅリオン派の指導者達の前に現れたとき、率直に話すことを恐れていた。法廷の代弁者が、「これは、そなた等の息子であるか。我々が、この男が盲で生まれたと理解して間違いはないのだな。これが本当ならば、なぜ今は見えるのであるか。」と尋ねた。そこで、ヨシアの父は、ヨシアの母の賛同を受けて答えた。「これは私共の息子であり、盲で生まれたとは存じておりますが、どのようにして見えるようになった

か、また、誰が見えるようにしたかは存じません。これにお尋ねください。これ自身に述べさせてください。」

164:4.8 (1814.4) それでもう一度、かれらは、ヨシアを呼び出した。かれらは、正式の審問を開く計画においてあまり反りが合ってはいなかった。そして、何人かは、安息日にこれをすることについて奇妙であると感じ始めていた。従って、ヨシアを再召喚したとき、かれらは、異なる攻撃方法により彼を罠にはめようと試みた。法廷の役員は、元盲目の男性に向かって言った。「お前は、なぜこれに対して神に栄光を与えないのか。起こったことについて全真実を何故我々に話さないのか。我々は皆、この男が罪人であることを知っている。お前は、なぜ真実を見極めることを拒否するのか。お前もこの男も両方が、安息日への違反を犯したと、お前には分かっている。目が、この日に見えるようにされたとまだ主張するならば、神をお前の治療者として認め、罪を償おうとしないのか。」

164:4.9 (1814.5) しかし、ヨシアは、口がきけないのでもなく、滑稽さを欠いてもいなかったので、法廷の役員に答え

た。「私は、この男性が罪人であるかどうかは知りませんが、私が確かに知っていることがあります—私は盲でありましたが、今は見えるということです。」かれらは、ヨシアを罠にかけることができなかったので、さらに質問しようとして、「一体どのようにお前の目を見えるようにしたのか。お前に実際には何をしたのか。かれは、何と言ったのか。自分を信じるようにお前に頼んだのか。」と言った。

164:4.10 (1814.6) ヨシアは些さか苛立って返答した。「私は、全て起こったままをお伝えしました。そこで、私の証言を信じないならば、なぜまた聞こうとされるのですか。もしかすると、あなた方もそ人の弟子になられたいのですか。」ヨシアがこのように話し終えると、シネヅリオン派の者は、混乱し、ほとんど暴力的に、指導者達がヨシアに殺到し、声高に「お前はこの男の弟子であるかのように話すことができるが、我々は、モーシェの弟子であり、神の法の教師である。」と立腹して言い、ほとんど暴力的に解散した。「我々は、神がモーシェを通して話されたということを知っているが、この男イエスに関しては、どこから来たのかを知らない。」

164:4.11 (1814.7) その時、ヨシアは、三脚椅子の上に立ち、聞くことができた全員に叫んで言った。「耳を傾けてください、全イスラエルの教師であると主張するあなた方は、あなたは、この男性がどこから来たかを知らないと認め、そして聞いた証言から、彼が私の目を開いたと確かに知っているので、私は、ここに不思議なことがあると言明します。私達は全員、神は、不信心な者にはそのような業を示されないということ、神が真の崇拝者—崇敬されるにふさわしく、公正な者—の要請に対してのみそのようなことを為されるということを知っています。あなたは、世界が始まって以来、盲に生まれついた者の目が見えるようになったということを聞いたことがないのを知っている。そこで、皆さん、私をご覧ください、そして、この日エルサレムで為されたことに気づいてください。もしこの男性が神から来ていないならば、私は、彼がこうすることができなかったと言います。」すると、シネヅリオン派の者が、怒りと混乱で立ち去りながらヨシアに叫んだ。「お前は、まったく罪ある者に生まれながら、我々に教えようとしているのか。お前は、おそらく本当に盲には生まれなかったのであろう。ま

た、目が安息日に開いたとしても、これは、悪魔の王子の力で行われたのである。」そして、かれらは、ヨシアを追放するためにすぐにユダヤ教の会堂に行った。

164:4.12 (1815.1) ヨシアは、イエスと自分の治癒の本質についての乏しい考えでこの裁判に参加した。審問が、そのような不公平で不当な線に沿って進行するにつれ、非常に賢明に勇敢に伝えた大胆な証言の大部分は、全イスラエルのこの最高裁判所においてヨシアの心の中で発達していったのであった。

5. ソロモンの回廊での教え

164:5.1 (1815.2) 寺院の１室でのシネヅリオン派のこの安息日に違反しての会議の進行中イエスは、ずっと近くを歩き回り、ソロモン回廊で人々に教え、そして、神の王国での神の息子としての地位の自由と喜びに関する朗報を彼らに伝えることができるようにシネヅリオン派の前に召喚されることを望んでいた。しかし、かれらは、イエスを呼びにやることを恐れていた。かれらは、エルサレムへのイエスの突然の、しかも公の出現につねに当惑していた。彼らがそれほどまでに一心に求めてきたまさにその

機会をイエスが、その時与えたが、かれらは、シネヅリオン派の前に、イエスを目撃者としてさえ連れて来ることを、ましてや逮捕することはそれ以上に恐れた。

164:5.2 (1815.3) この時エルサレムは真冬であり、人々は、ソロモンの回廊に完全とはいえない避難所を求めた。そして、イエスが長居していたので、群衆は、多くの質問をし、かれは、２時間以上教えた。数人のユダヤ人教師は、公の前で罠に掛けようと質問した。「いつまで我々に気を揉ませるのですか。あなたが救世主であるならば、はっきりと言ってくれませんか。」イエスは言った。「私は、しばしば自分と父に関してあなた方に話してきたが、あなたは私を信じようとしない。父の名によって為す私の業が、私を証していると理解できないのですか。それにしても、あなた方の多くは、私の会衆に属しないので信じないのである。真実の教師は、真実に飢え、正義に渇望する者のみを引きつける。私の羊は私の声を聞きつけ、また、私には彼等が分かり、彼等は私に続く。そこで、私は、私の教えに続く者全てに永遠の命を与える。かれらは、決して死なず、私の手から彼等をひったくる者は誰もいない。これらの子を私に与えてく

ださった私の父は、全てにまさるので、誰も父の手から彼らを毟り取ることはできない。父と私は１つである。」一部の不信心なユダヤ人は、イエスに投げる石を拾うために建設中の寺院へと急いだが、信者等が制止した。

164:5.3 (1815.4) イエスは、教えを続けた。「父からの多くの情愛深い業を私は示してきた。そこで尋ねたいのだが、それらの良い業の中のどれのために私を石で打ち殺そうとするのか。」すると、パリサイ派の一人が、答えた。「良い業のためにではなく、冒涜のために、人であるお前が、大胆不敵にも自分を神と対等にする限り、我々は石を投げるのである。」すると、イエスは答えた。「私が、神によって送られたと宣言したとき、あなた等は、私を信じるのを拒否したが故に、人の息子を冒涜の罪で告発するという。もし私が神の業を行なわないならば、私を信じるでない、だが、もし私が神の業をするならば、あなたが私を信じなくとも、私は、あなたはその業を信じると考える。しかし、私が宣言することをあなたが確信できるように、父は私の中におられ、私は父の中にあり、そして、父が私の中に住まわれているように、

この福音を信じる全ての者の中に父が住むということを、私は、重ねて断言しておく。」人々がこれらの言葉を聞くと、多くの者は、投げるための石を手にいれるために飛び出したが、イエスは、寺院の境内を通って出て行った。そして、かれは、シネヅリオン派の会議に付き添っていたナサナエルとトーマスに会い、ヨシアが会議室から出て来るまで寺院の近くで待った。

164:5.4 (1816.1) イエスと2人の使徒は、ヨシアが会堂から追放されたと聞くまで、ヨシアを探しに家へは行かなかった。彼らがヨシアの家に行きトーマスが庭でヨシアを大声で呼ぶと、イエスが訊いた。「ヨシア、神の息子を信じるか。」すると、ヨシアは答えた。「私が信じるかもしれないという方が誰であるかを私に教えてください。」イエスは言った。「あなたはその者を見て、その声をも聞いた。そして、今あなたに話しているのが、その者である。」そこで、「主よ、私は信じます」と、ヨシアが言い、ひれ伏し、拝んだ。

164:5.5 (1816.2) ヨシアは、彼が会堂から追放されたと知ると、最初は大いに塞ぎ込んだが、イエスが、すぐに自分達と

一緒にペラの宿営に行く準備をしなければならないと指示すると、非常に勇気づけられた。エルサレムのこの質朴な男性は、本当に会堂から追放された、だが、その時代と世代の精霊的な気高さに連がるようにヨシアを先導する宇宙の創造者を注視せよ。

164:5.6 (1816.3) そして、そのとき、イエスは、エルサレムを去り、この世を去る準備の頃まで二度と戻ってこなかった。あるじは、２人の使徒とヨシアとペラに帰っていった。そして、ヨシアは、王国の福音の生涯を通じての伝道者になり、あるじの奇跡の活動の実り多い享受者の一人であることを証明した。

論文 165
ペライアの任務始まる

165:0.1 (1817.1) 西暦30年１月３日、火曜日、洗礼者ヨハネの12人の使徒のかつての長、ナズィール派であり、以前はエーンゲディーのナズィール派の学校の代表であり、そのときは王国の70人の使者の長であったアブネーは、仲間を集め、彼らをペライアの都市と村々すべてへの任務に送るにあたっての最終的な指示を与えた。このペライア任務は、ほぼ３カ月続き、あるじの最後の活動であっ

た。イエスは、人の姿での最終的な体験をするためにこれらの活動からエルサレムに直接向かった。イエスと12人の使徒の定期的な作業の補助を受ける70人は、ツァフォウン、ガダラ、マカヅ、アーベラ、ラマス、エヅレイ、ボソーレ、カスピン、ミツペ、ゲラーサ、ラガバ、スッコス、アマスス、アダ　ーム、ペヌエル、カピトーリアス、ディーオン、ハチタ、ガッダ、フィラデルフィア、イオーグベハ、ギラード、ベス-ニムローン、ティーロス、エレアレー、リーヴィアス、ヘシュボン、カッリッロン、ベス-ペウル、シッティーム、シブマ、メデバ、ベス-メウン、アレオポリス、アロウエルのこれらの市や町、それにおよそ50の村落で働いた。

165:0.2 (1817.2) ペライアのこの巡歴を通して、そのとき62人を数える女性部隊は、病人の世話の大部分を受け持った。これは、王国の福音のより高い精霊面開発の最後の一区切りであり、依って、奇跡の業は不在であった。パレスチナの他のいかなる地域もイエスの使徒と弟子による徹底した扱いをうけなかったし、また善い市民の階級が、全般的にあるじの教えを受け入れたのは、他の地域ではなかった。

165:0.3 (1817.3) ユダ・マッカベーウスの時代のユダヤ人は、これらの地域から一般的には移動を余儀なくされており、このときペライアでは、非ユダヤ人とユダヤ人は相等しい数であった。ペライアは、全パレスチナで最も絵のように美しい地方であった。それは、通常、「ヨルダンの向こうの陸」とユダヤ人に呼ばれた。

165:0.4 (1817.4) イエスは、この期間を通してペラでの宿営と、教え説いて廻る様々な都市での70人の補助に当たる12人との旅に時間を費やした。イエスが託した訳ではなかったが、70人は、アブネーの指示の下にすべての信者に洗礼を施した。

1. ペラの宿営地にて

165:1.1 (1817.5) 1月半ばまでには1,200人以上の人がペラに集められ、イエスは、宿営所に住んでいるときは、雨に防げられない限り通常午前９時にはあ話を始め、毎日少なくとも一度はこの群衆に教えた。ペトロスと他の使徒は、毎日午後に教えた。イエスは、12人と他の上級の弟子との通常通りの質疑応答のために夜はあけておいた。夜の集団は、平均して50人ほどであった。

165:1.2 (1817.6) 3月中旬までには、すなわち、イエスがエルサレムへの旅を始めるときまでには、イエスかペトロスの説教を聞く大聴衆は、毎朝4,000 人以上いた。自分の知らせに対する人々の関心が頂点に達したとき、あるじは、王国の進展のこの第２、または奇跡を伴わない段階の下での最頂点において地球での仕事を終えることを選んだ。群衆の3/4は、真実探求者であったのだが、たくさんの懐疑者や難癖をつける者と共にエルサレムや他の場所からの多くのパリサイ派が、居合わせていた。

165:1.3 (1818.1) イエスと12人の使徒は、ペラ宿営地に集まった群衆に多くの時間を注ぎ込んだ。12人は、時々アブネーの仲間の訪問のためにイエスと出掛ける以外、野外の仕事にはまず注意を向けなかった。アブネーは、これが、元主人である洗礼者ヨハネがその仕事の大部分をした地域であったので、ペライア地区には非常に馴染み深かった。ペライア任務開始後、アブネーと70人は、ペラ宿営地には二度と戻らなかった。

2. 良い羊飼いについての説教

165:2.1 (1818.2) エルサレムの人々、パリサイ派と他の人々からなる300人を超える一行は、イエスが奉献の終わりにユダヤの管区から遠くへと急ぎ離れたとき、ペラのある北へとイエスの後を追った。そして、イエスが「良い羊飼い」について説教をしたのは、これらユダヤ人の教師と指導者が出席し、12人の使徒も傍聴している時であった。30分間の非公式の議論の後、イエスは、およそ100人の集団に話した。

165:2.2 (1818.3) 「今夜あなた方に伝えることがたくさんある。そして、あなた方の多くが私の弟子であり、またある人達は仇敵であるので、それぞれが自分のために心に受け入れられるように私の教えを寓話で提示するつもりである。

165:2.3 (1818.4) 「今宵、ここには、私の前には、私のために、そして王国のこの福音のために喜んで死ぬであろう者、また、数年のうちに自らを提供するであろう者がおり、そして、伝統の奴隷であるあなた方の一部は、エルサレムから私を追ってきたり、陰欝で、欺かれたあなた方の指導者達と共に人の息子を殺そうとしている。私が今肉

体で送る人生は、本当の羊飼いと偽の羊飼いのあなた方の両方を判断する。もし偽の羊飼いが盲目であるならば、その者に罪はない。だが、あなたは、目が見えると主張する、あなたは、イスラエルの教師だと公言する。従って、あなたの罪はあなたにある。

165:2.4 (1818.5) 「本物の羊飼いは、危険に際し夜は群れを囲いの中に集める。そして、朝が来ると、かれは、出入り口から囲いに入り羊を呼ぶと、羊はその声を知っている。羊の囲いへの進入を門からではなく、いかなる他の方法によって為すあらゆる羊飼いは、泥棒であり強盗である。本物の羊飼いは、門番が彼のために門を開けた後に囲いに入る。そして、羊は、その声を知っているので言葉に従って出てくるし、このようにして自分の羊が連れ出されると、本者の羊飼いは、それらの前に行く。彼は道を示し、羊は彼について来る。それらの羊は、彼の声を知っているので、彼について来る。それらは、見知らぬ人にはついていこうとはしない。羊は、その声を知らないので見知らぬ人からは逃げようとする。我々の周りのここに集うこの群衆は、羊飼いのいない羊のようなものである。しかし、我々が話し掛けるとき、彼らは、羊

飼いの声を知っており、我々のあとに続く。少なくとも、真実に飢え、正義に渇きをおぼえている人々はそうする。あなた方のうちのある者は、私の囲いのものではない。私の声も知らないし、私についても来ない。また、偽の羊飼いであるので、羊は、あなた方の声も知らないし、あなた方に続かないであろう。」

165:2.5 (1819.1) イエスがこの寓話を話し終えたとき、誰も質問をしなかった。しばらくして、かれは、再び話し始め寓話について検討し続けた。

165:2.6 (1819.2) 「私の父の群れの見習いの牧人になろうとする者は、相応しい指導者であるばかりでなく、良い食物を群れに食べさせなければならない。緑の牧草地と溜まり水へと群れを導かないようでは、あなたは本物の羊飼いではない。

165:2.7 (1819.3) 「今、あなた方の一部が、あまりに簡単にこの寓話を理解するといけないので、私は、父の羊小屋への門であると同時に私の父の群れの本物の羊飼いでもあると断言する。私なしで囲いに入ろうとするすべての羊飼いは失敗するし、羊はその者の声を聞かないであろう。

私は、ともに奉仕する人々といる私は、戸である。私が作成し、定めた手段で永遠の道に乗り出すあらゆる人間は、救われ、楽園の永遠の牧草地到達へと前進できるであろう。

165:2.8 (1819.4) 「私も、羊のために喜んで我が命を捨てさえする本物の羊飼いである。泥棒は、単に盗み、殺し、破壊するために囲いに押し入る。だが、私は、あなた方が皆命を得られるように、しかも、それをより豊かに持つことができるようにとやって来た。金銭ずくで働く者は、危険が起こると逃げ、羊は散り散りになり全滅されるがままにするであろう。しかし、本物の羊飼いは、オオカミが来ても逃げない。かれは、群れを保護し、必要なら、羊のために自分の命を捨てるであろう。誠に、誠に、あなた方友人にも敵にも言う、私は、本物の羊飼いであると。私は、私自身を知っており、私自身は私を知っている。私は、危険に際し、逃げはしない。私は、私の父の意志成就のこの仕事を終えるつもりであり、父に保つことを委ねられたこの群れを見捨てるつもりはない。

165:2.9 (1819.5) 「私にはこの囲いに属さない他の多くの羊がいるが、これらの言葉は、この世に限って当て嵌まるのではない。これらの他の羊も私の声を聞き、私を知っている。私は、彼らの全てが1つの囲いの中に、神の息子の1つの兄弟愛の中に連れて来られることを父に約束をした。そして、あなた方は全員、1人の羊飼い、本物の羊飼いの声を知り神の父性を知るのである。

165:2.10 (1819.6) 「そこで、あなたは、父がなぜ私を愛し、この領域の群れの全ての保護を私の手に委ねたかが分かるであろう。父は、私が羊小屋の保護にたじろがず、羊を見捨ず、必要ならば、多種多様の群れの仕事に私の命を捨てることを躊躇わないということ知っているからである。しかし、もし私が命を捨てるなら、私は、再びそれを取り上げるということを心しなさい。誰も、他のどんな被創造物も、私の命を奪い去ることはできない。私には、自分の命を横たえる権利と力があり、再びそれを始める同じ権威と力がある。あなたはこれを理解することができないが、私は、この世界が存在する以前にさえ私の父からのそのような権威を授かった。」

165:2.11 (1819.7) 彼らがこれらの言葉を聞くと、使徒は混乱し弟子は驚き、一方エルサレムやその周辺からのパリサイ派の人々は、夜道へと出ていき、「気が狂っているか、または彼には悪魔がいる。」と言った。しかし、エルサレムの教師の何人かさえ、「彼は権威を持つ者のように話す。そのうえ、生まれついての盲人の目を開いたり、この男がしてきたような全ての驚くべき事をする者を、一体誰が、見たことがあるか。」と言った。

165:2.12 (1819.8) 翌日、これらユダヤ人教師のおよそ半分は、イエスを信じると明言し、残る半分は、狼狽しエルサレムの各自の家に戻った。

3. ペラでの安息日の説教

165:3.1 (1819.9) 安息日の午後の群衆の数は、１月の終わりまでにはおよそ3,000人に達した。１月28日、土曜日、イエスは、「信用と精霊的準備」について注目すべき説教をした。まずシーモン・ペトロスが所見を述べた後、あるじは言った。

165:3.2 (1820.1) 「何度も使徒と弟子に言ってきたことを、私は、今しもこの群衆に宣言する。これらのパリサイ派の

多くは、心が正直で、そのうちの何人かが私の弟子としてここに留まるが、偽善で、偏見をもつ親から生まれ、伝統の束縛で養育されるパリサイ派のパン種、すなわち偽善に気をつけなさい。現在、明らかにされないものは何もないのであるから、やがて、あなた方すべてが、私の教えを理解するであろう。人の息子が、肉体での地上の任務を完了したとき、今はあなたから隠れているものは、すべて明らかにされるのである。

165:3.3 (1820.2) 「すぐ、本当にすぐ、我々の敵が今秘かに暗闇で計画していることが、明るみに引き出され、屋根で言い広められるであろう。しかし、言っておく、友よ。彼らが人の息子を滅ぼそうとするとき、彼等を恐れてはいけない。肉体を殺すことはできるかもしれないが、その後、あなたに対するどんな力を及ぼすことのないそれらの者を恐れることはない。私は、あなたが天においても地においても何をも恐れず、すべての不正からあなたを救い出し、宇宙の裁判席の前に非のうちどころがないあなたを呈する力を持つ方を知ることを喜ぶように訓戒する。

165:3.4 (1820.3) 「５羽の雀は、２ペニーで売れられているではないか。しかも、これらの鳥が食物探索のために飛び廻るとき、その１羽として父に忘れ去られて存在しているものはない。熾天使の後見人には、あなたの頭のその髪の毛さえ数えられている。そして、このすべてが真実であるならば、あなたは、なぜ日常生活で出合う多くの些細なことを恐れて生きなければならないのか。恐れるではない。あなたには沢山の雀よりはるかに価値がある。

165:3.5 (1820.4) 「人の前で私の福音への信仰を公表す勇気を持つあなた方のすべてを、私は、やがて天の天使達の前で認めるつもりである。しかし、人の前で故意に私の教えの真実を否定する者は、天の天使達の前で天命の後見者によって否定されるであろう。

165:3.6 (1820.5) 「人は、人の息子について何を言おうが、許されるであろう。しかし、大胆に神を冒涜する者は、決して許されないであろう。人が、神の行いと知りつつ、断然悪の力の所為にする場合、そのような周到な反逆者は、その罪への許しを全く求めないであろう。

165:3.7 (1820.6) 「そして、我々の敵が、会堂の支配者や高い権威者の前にあなたを連れて行くとき、何を言うべきかを心配せず、また質問にどう答えるべきかに煩わされてはいけない、あなたに宿る精霊が、王国の福音の名誉において何を言うべきかを他ならぬその時に確かに教えてくれるのであるから。

165:3.8 (1820.7) 「あなたは、決断の谷間にいつまでぐずついているのか。なぜ２つの意見にどっちつかずでいるのか。なぜユダヤ人または非ユダヤ人は、彼が永遠の神の息子であるという良い知らせの受け入れを躊躇わなければならないのか。嬉々として精霊的な相続への参加をあなたを説得させるのに我々はどれだけ掛かるのであろうか。私は、あなたに父を明らかにし、あなたを父に導くためにこの世に来た。私は、最初の事をしたが、しかし、最後のことはあなたの同意なしにはできない。父は、どんな人にも王国に入ることを決して強要しない。招待は、今までずっとあり、これからも常にある。誰でも望む者は、来させて自由に命の水を相伴させなさい。」

165:3.9 (1820.8) イエスは、話し終えると、彼が残っている人々の質問を聞いている間、多くの者は、使徒の洗礼を受けにヨルダン川へ向かった。

4. 遺産の分配

165:4.1 (1821.1) 使徒が信者を洗礼する間、あるじは留まった人々と話した。ある青年が言った。「あるじさま、私の父は、多くの財産を私と兄弟に残して死にましたが、兄弟達は、私の取り分をくれようとしません。そこで、この遺産を分配するように兄弟に言ってくれませんか。」イエスは、この物質に執着する若者が議論の場にそのような質問をするということに憤りを覚えたが、更なる訓示の提示のためにその機会を利用しようとした。イエスは、「私をあなたの調停人にしたてた人、私がこの世の物質的な事象に注意を向けるという考えをどこで得たのか。」と言った。それから、周りにいる者達に向いて言った。「欲深さに注意を払い、自由でありなさい。人の命は、所有しているかもしれない豊かさにはないのである。幸福は財産の力からは来ず、また、喜びは財宝から起こらない。財産は、本来、呪いはないが、富への執着は、しばしばこの世事での執着へと導くので、魂は、神

の王国の美しい精霊的な現実の魅力や天上における永遠の命の喜びが判別がつかなくなる。

165:4.2 (1821.2) 「豊作をもたらす土地を持つある金持ちの話をしよう。この人は、大金持ちになったとき、あれこれと考え始めた。『私のすべての富をどうしようか。収納する場所もないくらい豊富にある。』と言った。『こうしよう。倉を取り壊しより大きいのを建てれば、収穫物や財産を格納するゆったりした場所ができる。そこで自分の魂に言える。魂よ、長年にわたり沢山の富を蓄えてきた。さあ、安心せよ。食べて、飲んで、陽気でいなさい、お前は豊かで食糧も増えたのだから。』

165:4.3 (1821.3) 「だが、この金持ちもまた愚かであった。心と身体の物質的な必要性に備えるに当たり、精霊の満足と魂の救済のために天の宝物を蓄え損ねた。それでも、かれは、蓄えた財産を消費する喜びを楽しむことはなかった、なぜならば、まさしくその夜、その人の魂は彼から取り去られたので。その夜、山賊が、彼を殺しに家に押し入ってやって来て、倉を略奪し、残りは燃やした。そして、強盗から免れた財産は、相続人の間で争われた。

この男性は、自分のために地球の宝物を蓄えたが、神に向かっては豊かではなかった。」

165:4.4 (1821.4) 青年の問題は、翌深さにあると分かっていたので、イエスは、青年とその遺産にこのように対処した。もしこれが本当でなかったとしても、あるじは、使徒は言うに及ばず、弟子の世事にさえ決して干渉しなかった。

165:4.5 (1821.5) イエスが話し終えると、別の男性が立ち上がって尋ねた。「あるじさま、あなたに続くために使徒達が自分のすべての俗世の所有物を売り払い、またエッセーノス派のように全ての物を共有しているということを知っていますが、あなたは、我々皆を弟子と同様にさせたいのですか。正直な財産を持つことは罪でありますか。」すると、イエスはこの質問に答えて「友よ、立派な財産を持つことは罪ではない。しかし、物質的な財産が、あなたの関心を吸収し、また王国の精霊的な探索からあなたの愛を変えるかもしれない宝物に変換するならば、それは罪である。あなたの宝が天にあるならば、地球にまともに手にした所有物があることには何の罪もな

い、なぜならば、あなたの宝があるところには、あなたの心もあるのだから。欲深さと利己主義に繋がる財産、そして世俗的なものをふんだんに持つ者の豊かさと、王国の仕事にすべての活力を捧げる者の指示にまったく惜しみなく貢献する人々による慈善事業の精神で保持され分与される富との間には、大きな違いがある。財産のある気前のよい男女が、そのような目的のためにあなた方の主催者ダーヴィド・ゼベダイオスに資金を与えたので、ここにいて、金を持たないあなた方の多くは、あちらの宿営生活をしている町で食べさせてもらい宿を与えられた。

165:4.6 (1822.1) 「しかし、財産は、詰まるところ、持続しないということを決して忘れてはならない。財産への執着は、あまりにも頻繁に精霊的な洞察力を被い隠し、破壊さえする。財産が、あなたの使用人ではなく、あなたの主人となる危険性を認識し損うことのないようにしなさい。」

165:4.7 (1822.2) イエスは、浪費、怠惰、家族のために物理的な必需品を提供することへの無関心、または施し物への依

存などを教えもせず、是認もしなかった。しかし、物質的で一時的なものは、天の王国での魂の福祉と精霊的な性質の進展に従属しなければならないということを教えた。

165:4.8 (1822.3) それから、人々が洗礼を目撃するために川の側に降りて行くと、遺産に関しイエスが厳しく自分を扱ったと思ったので、最初の男性は、イエスのところに秘かにやって来た。そして、あるじが再び彼の声を聞くと答えた。「息子よ、強欲な気質を満足させるためにこのような日に命のパンを食べるる機会をなぜ逃すのか。あなたが会堂の法廷に苦情を持ち込めば、ユダヤ人の遺産に関する法が公正に執行されるということを知らないのか。私の仕事は、あなたの天の遺産に関してあなたが知るということを確実にすることと関係があるということが、あなたには分からないのですか。聖書を読みませんでしたか。『慎重さと相当の締め付けで富を増す者がおり、そして、その富はその人の報酬分である。この人は、私は休らぎを見つけ、今は絶えずに食べることができると言うが、自分に何が起こるのか、そのうえ死ぬ時にはこれらのすべてのものを他の者に残さなければなら

ないということが分かっていない。』『欲しがってはならない。』と戒律にあるのを読んではいないのですか。また、『彼らは食べて、満ち足り、肥え太り、そして他の神々に振り向いた。』とある。詩篇に『主は、強欲な者を嫌う。』とあり、『一人の正しい者のもつ僅かな物は、多くの悪者の豊かさにまさる。』とあるのを読みましたか。『富が増えても、それに心を奪われてはならない。』イレミアスが、『富める者はその富を誇るな。』と言うところを読んでいないのですか。そして、『彼等は、口では愛しているふりをするが、心では利己的利得を追っている』と、イェゼケイルが真実を語っている。」

165:4.9 (1822.4) イエスは、「息子よ、全世界を獲得しても、あなた自身の魂を失うのであれば、何の益があろうか。」と言って青年を行かせた。

165:4.10 (1822.5) 裁きの日に富はいかに評価されるかを尋ねた近くに立つ別の者に答えて、イエスは、「私は、金持ちも貧しい者も裁きに来たのではなく、人が送る生活が、全てを裁くのである。裁きに際して富者が関わるかもしれないその他の何も、巨大な富を得る全ての者が答えな

ければならない少なくとも３つの質問があり、これらの質問は次の通りである。

165:4.11 (1822.6) 1. どれだけの富を蓄積したのか。

165:4.12 (1822.7) 2. どのようにこの富を得たのか。

165:4.13 (1822.8) 3. いかにその富を用いたのか。

165:4.14 (1822.9) それから、イエスは、夕食の前にしばらく休むために天幕に入った。洗礼を終えてしまうと、使徒達も、やって来て、地球の富と天での宝物に関しイエスと話したかったのだが、イエスは、眠っていた。

5. 富についての使徒への話

165:5.1 (1823.1) その晩の夕食後、イエスと12人が日課の会議のために集まったとき、アンドレアスは、尋ねた。「あるじさま、我々が信者を洗礼している間、あなたは、長居していた群衆へ我々が聞かなかった多くの話をされました。我々のためにこれらの話を繰り返してもらえますか。」そこで、イエスは、アンドレアスの要求に応えて言った。

165:5.2 (1823.2) 「よし、アンドレアス、私は、富と自給のこれらの問題について話そう。だが、君達は、単に私に続くのではなく、王国の大使として定められており、全てを見捨ててしまっているのであるから、私が君達弟子に話すことは、群衆に話した事とはいくらか異なっていなければならない。すでに、君達には、数年の経験があり、君達が宣言する王国の父は、君達を見捨てないということを知っている。君達は、自分の人生を王国の活動に捧げてきた。だから、この世での生活のこと、あるいは身体のことで何を食べるか、あるいは何を着るかと心配したり思い悩んではいけない。魂の福祉は、飲食以上のことである。精霊における進歩は、衣類の必要性をはるかに超えるものである。君達が、パンの確かさを疑いたくなるとき、大烏に思い及びなさい。種子も撒かず、収穫もしない。倉庫も、納屋も持たない。それでも父は、探す一羽一羽に食物を与えられる。そして、君達は、多くの鳥よりもどれだけ価値のあることか。おまけに、心配や苛々する疑問のすべては、物質的な必要性を満たすための何もできない。君達のうちの誰も、心配することでその身長に手幅の長さを、その人生に１日を、加えるこ

とはできない。そのような問題は、君達の支配の下にはないのに、なぜこれらを憂慮するのか。

165:5.3 (1823.3) 百合が、どのように成長するかを考えなさい。精を出して働かず、紡ぎもしない。それでも、あなたに言っておく。栄華をきわめたセロモでさえ、これらの花の１つほどにも着飾ってはいなかった。もし神が、今日は生き、明日は切り倒され火に投げ込まれる野の草にさえそのように装わせるのであれば、天の王国の大使である君達に、それ以上によく着せないことがあろうか。ああ、信仰薄き者よ。心から王国の福音の宣言に専念するとき、君達は、自分や見捨てた家族の支持に関して疑わしい心でいてはいけない。本当に福音に一生を捧げるならば、君達は、福音で生活するであろう。信じているだけの弟子であるならば、君達は、自身の生計をたて、しかも教えて説教し、癒すすべての者の生計に貢献しなければならない。糧と水が気がかりであるならば、君達は、そのような必要なものを非常に勤勉に探す世界の諸国民とどこで違いがあるのか。父と私の双方は、君達がこれらを必要とするということを分かっていると信じて、自分の仕事に専念しなさい。あなたが人生を王国の

仕事に捧げるならば、真に必要なものは全て供給されると、これを最後に保証しておこう。より素晴らしいものを求めなさい、そうすれば、劣るものがそこに見つけられるであろう。天なるものを求めなさい、そうすれば、地球なるものが含まれている。影が実体に続くということは、確かである。

165:5.4 (1823.4) 「君達は、小さい集団にすぎないが、信仰があるならば、恐怖で躓かないならば、私は、この王国を君達に与えることが父にとっての喜びであると断言する。君達は、財布が古くならないところで、泥棒が奪い取ることができないところで、そして蛾が台無しにすることができない宝物を蓄えてきた。そして、私が人々に告げたように、君達の宝物があるところに君達の心もまたある。

165:5.5 (1824.1) 「しかし、我々のすぐ前にある仕事、そして私が父のもとに行った後、君達のために残っている仕事で、君達は、傷ましいほどに裁かれるであろう。君達は全員、恐怖と疑問に用心しなければならない。君達一人一人が、心の腰に帯を締め、明かりを灯し続けなさい。

主人が婚宴から帰りきて戸を叩くとき、すぐ開けてあげようと待つ者のようにしなさい。それほどまでに行き届いた使用人は、そのような大切な瞬間に忠実であることを見抜く主人に祝福される。そして、その主は、使用人を座らせ、主人自らが、給仕をするであろう。君達の人生には危機が迫っていると、本当に、本当に、言っておく。そして、君達にはそれを待ち受けて用意をしておく必要がある。

165:5.6 (1824.2) 「君達は、泥棒がいつ来るか分かっていれば、誰も家への侵入に悩まないということをよく理解している。君達も心構えをしておきなさい、思いがけない時に思いがけない様で、人の息子は、出発するのであるから。」

165:5.7 (1824.3) 数分間、12人は沈黙して座った。これらの警告の幾つかは、以前に聞いていたが、この時に提示された内容ではなかった。

6. ペトロスの質問への答え

165:6.1 (1824.4) 彼らが考えながら座っていると、シーモン・ペトロスが、尋ねた。「この寓話を話されるのは、あなた

の使徒である我々にですか、それとも、全ての弟子のためですか。」すると、イエスが答えた。

165:6.2 (1824.5) 「試煉に際し、人の魂は、明らかにされる。試煉は、本当に心にあることを明らかにする。使用人が試され、合格するとき、家の主人は、そのような使用人を世帯の中に置き、自分の子供等が食事を与えられ、保育されると安心して委せることができる。同様に、私は、私が父のところに帰るとき、私の子供の福祉をだれに任せられるか直に分かる。一家の主が、真の、そして試された使用人に家事を委ねるように、私は、私の王国の情勢に関し、この試煉の時に耐える者達をこそ賞揚するのである。

165:6.3 (1824.6) 「しかし、使用人が怠惰であり、心で、『主人の帰りが遅い。』と思い、仲間の使用人を虐待し、酔っ払い達と飲食し始めるならば、主人が、予想もしていないときにやってきて、その使用人が不誠実であることが分かり、不名誉のうちに彼を追放するであろう。したがって、君達は、突然に、そして予想外の方法で訪れるその日のために十分に備えなければならない。覚えていなさ

い、君達には多くが与えられてきた。したがって、多くのことが要求される。火のような試煉が、君達に近づいている。私には、受けねばならない洗礼があり、それを受けるまでは警戒をしている。君達は、地球の平和を説くが、私の任務は、人の物質的な情勢に平和をもたらしはしない—少なくとも、しばらくは。家族のうちの２人が私を信じ、３人がこの福音を拒絶するような結果からは、分裂しか起こらない。友人、親類、愛する者達は、君達が説く福音に相対するように運命づけられている。これらの信者の各々には心に素晴らしくて持続する平和があるが、地球の平和は、すべての者が進んで信じ、神との息子の資格の栄光の遺産を受け入れるまでは来ないということは本当である。それでも、全ての国に、あらゆる男性、女性、子供にこの福音を宣言しに全世界に向かいなさい。」

165:6.4 (1824.7) これが、盛り沢山で忙しい安息日の１日の終わりであった。翌日、イエスと12人は、アブネーの指揮下にこれらの地域で働いていた70人を訪れるために北ペライアの町々に入った。

論文 166
北ペラリアへの最後の訪問

166:0.1 (1825.1) ２月11日から20日まで、イエスと12人は、アブネーの仲間と女性団員が働いていた北ペライアの全町村を旅した。彼らにはこれらの福音の使者が成功を収めていることが分かり、イエスは、王国の福音が奇跡と驚きの付属物なしで広がることができるという事実に注意を払うように繰り返し使徒を促した。

166:0.2 (1825.2) ペライアでの３カ月のこの全任務は、12人の使徒の助けをほとんど受けずに首尾よく運ばれ、福音は、これ以後、あまりイエスの人格ではなく、その教えとして反映した。しかし、追随者は、イエスの死と復活直後、イエスの教えから離れ、奇跡の概念と神・人間の人格の賞賛された記憶を中心に初期の教会の建設を始めたので、長くはその教えに従わなかった。

1. ラガバのパリサイ派

166:1.1 (1825.3) ２月18日、安息日に、イエスは、ラガバにいた。そこにはナサナエルという裕福なパリサイ派に属する人が住んでいた。そして、パリサイ派の仲間が、国中

をイエスと12人の後を追けていたので、ナサナエルは、この安息日の朝、数にしてほぼ20名全員のために朝食を作り、イエスを主賓として招待した。

166:1.2 (1825.4) イエスがこの朝食に到着するまでには、大部分のパリサイ派が、２人か３人の律法の専門家と共に既にそこにおり、食卓についていた。あるじは、手を洗いに水盥のところへは行かずに、すぐにナサナエルの左側の席についた。パリサイ派の多くは、特にイエスの教えを好ましく思う者達は、イエスが清潔の目的のためにだけ手を洗うことを、すなわち単なる儀式的な履行を嫌っているということを知っていた。従って、イエスが手を二度洗わずに直接食卓に来ても驚きはしなかった。だが、ナサナエルは、パリサイ派の厳しい習慣を満たすことへのあるじのこの不履行に衝撃を受けた。イエスは、パリサイ派のように料理の各コースの後と食事の終わりにも手を洗わなかった。

166:1.3 (1825.5) ナサナエルと友好的でないパリサイ派の間でのかなりのひそひそ話の後、また、反対側に座る者達がひどく眉を上げたり嘲笑って唇をゆがめている後に、イエ

スは遂に言った。「私は、あなたが、私と食事をし、神の王国の新しい福音の宣言に関しておそらく私に質問するためにこの家に招待したと思っていた。しかし、あなたは、自分の独善への傾倒の儀式を披露するのを目撃させるために私をここに連れて来たと見受ける。あなたは、今私にその努力をしてくれたのだが、客としての私に今度は何で敬意を表してくれるのであろうか。」

166:1.4 (1826.1) あるじがこのように話すと、皆は、食卓の上に目を落とし黙ったままでいた。そして、誰も話さないので、イエスが続けた。「あなた方パリサイ派の多くは、友人として私とここにおり、何人かは私の弟子でさえあるが、パリサイ派の大多数は、福音の仕事が偉大な力を彼らの前にもたらしているときでさえも、光を見て、真実を承認することを頑固に拒否している。精霊的な糧の器が不潔で汚れているのに、あなたは、何と慎重に杯や皿の外側を洗うことよ。人々に敬虔で信心深い外観を確実に提示しようと努めているが、あなた方の内側の魂は、独善で、欲張りで、強要的で、そしてあらゆる種類の精霊的な邪悪で満たされている。あなた方の指導者は、敢えて人の息子の殺害さえ企んでいる。あなた方愚

かな人々は、天の神が、外側の見せかけとその信心ぶった職業だけでなく、魂の内側の動機も見るということを理解しないのか。布施の付与と十分の一税の納入が、不公正から清めたり、万人の審判官の面前で汚れがなくあなたが立つことを可能にすると考えてはいけない。忌まわしいものだ、命の光の拒絶に固持してきたパリサイ派。あなたは、十分の一税に非常に注意深く、また施しにおいては仰々しいが、故意に神の訪問を拒み、その愛の顕示を拒絶する。あなたが、これらの軽い義務への注意を払うのは問題ないが、これらのより重大な要件を放っておくべきではなかった。忌まわしいものだ、正義を避け、慈悲を拒み、真実を拒絶する全ての者は。忌まわしいものだ、会堂で主要な席を求め、市場で媚びの挨拶を切望しつつ父の顕示を侮る全ての者は。」

166:1.5 (1826.2) イエスが去るために立ち上がろうとすると、食卓にいた律法学者の一人が言った。「しかし、あるじさま、あなたの声明の幾つかにおいて、あなたは、我々をも非難しています。筆記者にも、パリサイ派にも、律法の専門家にも何も良いものはないのですか。」すると、イエスは、立ち上がって律法学者に答えた。「あなた

は、パリサイ派のように、人の肩に耐えがたい重荷を負わせながら、祝宴においては良い席、また長い礼服を着て大喜びしている。そして、人々の魂がこれらの重荷の下でたじろいでいるとき、あなたは、指の１本で持ち上げようとさえしない。忌まわしいものだ、あなた方の祖先が殺した予言者のための墓を建てることを大変楽しんでいるあなた方は。そして、予言者達がその時代にしたこと—神の正義を宣言し、天なる父の慈悲を明らかにすること—を今日しにきた者達をあなた方が今殺そうと計画するとき、あなた方は、祖先のしたことに同意しているということを明らかにしているのである。しかし、すべての過去の世代のうち、この片意地で独善的な世代の予言者と使徒の血の責任が、問われるであろう。忌まわしいものだ、世間の人々から知識の鍵を取り上げたあなた方全律法学者は。あなた自身は、真実の道へ入ることを拒否するばかりか、同時に、そこに入ろうとする他の全ての者を妨げようとしている。だが、あなた方は、そのようにして天の王国の戸を閉ざすことはできない。

我々が入る信仰を持つすべての者にこれらの戸を開いてきており、これらの慈悲の入り口は、外部は美しく見え

るが、内部は死人の骨とあらゆる精霊的に汚れたもので一杯の白く塗られた墓のような偽の教師と不実の羊飼いの偏見と傲慢さによって閉ざされることはない。」

166:1.6 (1826.3) そして、イエスは、ナサナエルの食卓で話し終えると、食事の相伴をすることなく家を出た。また、これらの話を聞いたパリサイ派のうち何人かは、イエスの教えの信奉者になり王国入りをした。しかし、大半の者は、エルサレムのシネヅリオン派の前に審理と判決の連れ出しに用いることができる幾つかのイエスの言葉が得られるかもしれないと、尚更に暗黒の道で待ち伏せすることに固執するようになった。

166:1.7 (1827.1) パリサイ派が特別の注意を向けたまさに3事項があった。

166:1.8 (1827.2) 1. 厳しい十分の一税の実行

166:1.9 (1827.3) 2. 浄めの法への綿密な遵守

166:1.10 (1827.4) 3. すべての非パリサイ派との交流の回避

166:1.11 (1827.5) 非パリサイ派との社交の拒絶を叱責するために考案された意見をこれらの同じ手勢の多くと再び食事

するその後の別の機会まで留保しながらも、イエスは、このとき、最初の２つの慣習における精霊的な不毛を暴こうとしたのであった。

2. 10人の癩病人

166:2.1 (1827.6) その翌日、イエスは、12人とサマリア境界近くのアマススへ行った。町に近づこうとしているとき、かれらは、この場所近くに滞在している10人の癩病の一団に遭遇した。このうちの９人は、ユダヤ人で、１人はサマリア人であった。通常これらのユダヤ人は、このサマリア人とのすべての交際や接触を控えたのでろうが、彼らの共通の苦悩は、全ての宗教的な偏見を封じるには十分過ぎるほどのものであった。イエスとその早期の治癒の奇跡について多く聞いており、また70人が、12人とのこれらの巡歴中のイエスの予定された到着時を発表する習わしにあったので、10人の癩病人は、彼がこの頃この付近に現れる予定であると気づいていた。そこで、かれらは、イエスの注意を引き、治療を求めて、町の郊外のここに居場所を定めていた。癩病人は、イエスが自分達に近づいてくるのを見て、彼には、敢えて近づこうとはせず遠くに立って哀訴した。「あるじさま、慈悲をお示

しください。私達の苦悩からお浄めください。他の人々に癒したように、私達を癒してください。」

166:2.2 (1827.7) イエスは、ちょうどこの時、より正統的で、その上、伝統の束縛を受けたユダヤのユダヤ人達よりも、何故、ペライアの非ユダヤ人が、あまり正統でないユダヤ人と共に70人の説教による福音を進んで信じたがっているかを12人に説明していた。かれは、70人の知らせが、同様にガリラヤ人に、そしてサマリア人にさえ、より容易に受けいれられたという事実に注意を促した。しかし、12人の使徒は、長く軽蔑されてきたサマリア人に対してまだ親切な感情を抱くまでには至っていなかった。

166:2.3 (1827.8) このため、シーモン・ゼローテースは、癩病人の中のサマリア人を見ると、癩病人との挨拶を交わさないことに躊躇いもせず、あるじを町へと通り過ぎさせようとした。イエスは、シーモンに言った。「しかし、ユダヤ人が神を愛するように、サマリア人が神を愛しているとすればどうなのか。我々は仲間を裁かなければならないのか。誰が言えるのか。我々がこれらの10人の男性

を癒すなら、恐らく、サマリア人は、ユダヤ人よりもずっと感謝するであろう。シーモン、自分の意見に確信があると感じるか。」そこで、シーモンは、「あなたが彼等を浄めれば、すぐに分かることです。」と即答した。するとイエスは、「その筈であろう。シーモン、君にはすぐ、人の謝意と神の情愛深い慈悲に関して真実が分かるであろう。」と答えた。

166:2.4 (1827.9) イエスは癩病人に近づいて言った。「もし癒されたいならば、モーシェの法に要求されているように、直ちに聖職者のところに行き、見てもらいなさい。」すると病人達は、行く間に癒された。しかし、自分が癒されていると分かると、サマリア人は、後戻りをしてイエスを探しに行き、大声で神を賛美し始めた。そして、あるじを見つけると、かれは、その足元に跪き、浄めのために感謝をした。他の９人のユダヤ人も、自分達の回復に気づき、浄めを大変有難く思ったが、聖職者に会いにいく道中を続けた。

166:2.5 (1828.1) サマリア人が依然としてイエスの足元に跪いていると、あるじは、12人を見渡し、特にシーモン・ゼロ

ーテースに言った。「10人が浄められたのではなかったか。では、どこに他の９人、ユダヤ人はいるのか。ただ１人、この異国人だけが、神を称えに戻ってきた。」それからかれは、サマリア人に「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを癒したのである」と言った。

166:2.6 (1828.2) この余所者が出立すると、イエスは、再び使徒達を見た。伏し目のシーモン・ゼローテースを除く使徒は皆、イエスを見た。12人は一言も言わなかった。イエスも話さなかった。イエスが話す必要はなかった。

166:2.7 (1828.3) これら10人の男性の全員は、共に癩病に掛かっていると本当に信じていたが、４人だけがこのように苦しめられていた。他の６人は、癩病と間違えられた皮膚病が治されたのであった。しかし、サマリア人は、本当に癩病に掛かっていた。

166:2.8 (1828.4) イエスは、12人に癩病患者の浄めに関して何も言わないように言いつけ、アマススへと進みつつ言った。「家の子供が、父の意志に反抗的なときでさえも、自分達の恩恵をいかに当然のこととして受け止めるかが

君達には分かる。父からの治療の施しに感謝を忘れても、かれらは、それが大したことではないと考えるのだが、知らない人達が、家長から贈り物を受けるとき、かれらは、驚きに満ち、授けられた良いことを認めて感謝を捧げずにはいられないのである。」それでも、使徒は、あるじの話の答えには何も言わなかった。

3. ゲラーサでの説教

166:3.1 (1828.5) イエスと12人が、ゲラーサで王国の使者達と雑談したとき、イエスを信じるパリサイ派の一人がこう質問をした。「主よ、本当に救われるのは僅かの者ですか、多くの者ですか。」そこで、イエスは答えて言った。

166:3.2 (1828.6) 「あなたは、アブラーハームの子供だけが救われると、非ユダヤ人の改宗者だけが救済を期待することができると、教えられてきた。エジプトから出た全ての大群の中からカーレブとヨシュアだけが、約束の地に入るために生きたと聖書に記録があるので、あなた方の一部は、天の王国を探す人のうち比較的少数の者だけが、そこへの入り口を見つけると推論してきた。

166:3.3 (1828.7) 「あなた達にはもう一つ言い伝えがあり、それには多くの真実がある。永遠の命へと導く道は、真っ直ぐで狭く、そこへ導く戸は、同様に狭いがゆえに、救済を求める人々の僅かな者しか、この扉の入り口を見つけることはできない。あなた達には、破壊につながる道は広く、そこへの入り口は広く、この方向に行くことを選ぶ多くの者がいるという教えもまたある。そして、この諺には意味がある。しかし、私は、救済は、まずあなたの個人的な選択の問題であると断言する。たとえ命への戸は狭くても、それは、切に入ろうとする者すべてを受け入れるには充分に広い、私がその戸であるから。そして、息子は、信仰によりその息子を通して父を見つけようとする宇宙の一人の子に対しても入国を決して拒絶はしない。

166:3.4 (1829.1) しかし、未熟な快楽を追求し、利己主義を満足させ続けている間、王国への入国を引き延ばそうとしている全ての者に対する危険性がここにある。精霊的な経験として王国に入ることを拒否した後で、より良い道の栄光が明らかにされるようになるとき、彼らは、その後そこへの入り口を探すかもしれない。それ故、私は、私

が人間の姿でやってきた時に王国を拒んだ人々が、神性の姿で王国が顕れるや、そこへの入り口を探そうとするそのような利己的な全ての者にその時に言うつもりである。私は、あなたがどこから来たのか知らない。あなたには、この天の公民の身分に備える機会があったが、慈悲が差し出すそのような全てを拒否した。あなたは、開戸されている間、すべての招待を拒絶した。今、救済を拒否したあなたへの戸は閉ざされている。この戸は、利己的な栄光のために王国に入ろうとする人々に開かれてはいない。救済は、父の意志を為すことへの心からの献身の代価を進んで支払わない人々のためのものではない。私は、あなたが父の王国に精霊と魂で背いてしまい、心身でこの戸の前に立ち、その戸を叩き、「主よ、開けてください。我々も王国で卓越したいのです。」と言っても、それは無駄である。私は、その時、お前は私の囲いの者ではないと断言する。私は、信仰において善戦し、地球の王国での寡欲の奉仕への報酬を得た人々の間にあなたを受け入れるつもりはない。また、あなたが、『私達はあなたと共に飲食しませんでしたか、あなたは、私達の大通りで教えられはしませんでしたか。』

と言うとき、私は、あなたを精霊的に知らない人であると、すなわち、我々は、地球での父の慈悲の活動においての召使いの仲間ではなかったと言うであろう。そして、私は、あなたを知らないと、またしてもはっきりと言う。そこで、全地球の審判官が、『我々から立ち去りなさい。不正の働きを楽しんだすべての者達よ。』とあなたに言うであろう。

166:3.5 (1829.2) 「恐れるでない。神の王国への入国により永遠の命を見つけることを心から望む凡ゆる者は、そのような永遠の救済を確かに見つける。しかし、この救済を拒否するあなたは、いつか、アブラーハームの種子の予言者達が、この栄えある王国で命の糧を分け合い、命の水で元気を回復するために非ユダヤ人の国の信者と共に座るのを見るであろう。そして、精霊的な力で、そして生ける信仰の不断の強襲によって王国をこのように受け入れる者は、東西南北から来るであろう。そして、見よ、最初の多く人の人々が、後になり、最後の人々が、多くの場合先になるのである。」

166:3.6 (1829.3) これは、本当に、正道の暮らし方に言い及ぶ、古くて身近な諺の新しく馴染みのない解釈であった。

166:3.7 (1829.4) ゆっくりと、使徒と弟子の多くは、イエスの「再度生まれ精霊から生まれない限り、神の王国に入ることはできない。」という早期の宣言の意味を学んでいた。それにもかかわらず、心が正直で信仰に誠実であるもの全てにとり、それは、永遠に真実のままである。つまり、「視よ、私は、人の心の戸に立って叩いており、もし誰かが私に向かって戸を開けるならば、入っていって夕食を共にし、その人に命の糧を食べさせるつもりである。このようにして、我々は、目的において精霊と1つであり、楽園の父の長く実り多い探求活動において、我々は常に同胞である。」ということである。したがって、少数の者、あるいは多数の者が救われることになっているかどうかは、要するに、少数の者、あるいは多数の者が、「私は戸である、私は新しい、そして生ける道であり、永遠の命のための終わり無き真実探求へと乗り出すことを望む者は誰でも、入ることができる。」という招待を意に介すかどうかによるのである。

166:3.8 (1829.5) 使徒でさえも、肉体的的な抵抗を切り抜ける目的のために精神力を行使することや、神の解放された息子としての新しい人生のすべての重要な精霊的な価値を把握するための道に偶然に立塞がるかもしれないあらゆる世俗的な障害を乗り越えるための必要性に関わる彼の教えを完全に理解できなかった。

4. 事故に関する教え

166:4.1 (1830.1) ほとんどのパレスチナ人が1日当たり2食だけをとったが、旅行中、正午にも休息と軽い飲食のために止まるのがイエスと使徒の習慣であった。そして、トーマスがイエスに尋ねたのは、フィラデルフィアへの途中でのそのような正午の休息の時であった。「あるじさま、私は、今朝の道中であなたの解釈を聞いてから物質界の奇妙で並はずれた出来事の創作において精霊的な存在体に関わりがあるかどうか、さらには、天使や他の精霊の存在体が事故を防ぐことができるかどうかお尋ねしたいのです。」

166:4.2 (1830.2) トーマスの問いに答えてイエスは言った。「非常に長いあいだ一緒にいたのに、まだそのような質問を

し続けるのか。人の息子が、あなたとともに生きる者として、いかに一貫して個人の糧のために天の力を使うことを拒否するかを注意して見てはこなかったのか。我々は皆、すべての人が存在するのと同じ手段で生きてはいないのか。父の顕示と彼の苦しめられている子供の時折の治癒を除き、精霊界の力が現世の物質的な生活の中に明らかであるの君にはわかるか。

166:4.3 (1830.3) 「あまりにも長い間、あなたの祖先は、繁栄は神の承認の印であると、逆境は神の不満の証である、と信じてきた。私は、そのような信心は迷信であると断言する。あなたは、はるかに多くの貧者が、嬉々として福音を受け入れ、すぐに王国に入っているのを見てはいないのか。もし富が神の好意を明示するならば、なぜ金持ちは、それほどまでに幾度となく天国からのこの朗報を信じることを拒否するのか。

166:4.4 (1830.4) 「父は、正なる者にも不正なる者にも雨を降らせる。太陽は、義なる者をも不義なる者をも同様に照らす。君は、ピラトゥスが、その血を生贄の血と混ぜたそれらのガリラヤ人のことを知っているが、これが彼らに

起きたからといって、どう見ても仲間のガリラヤ人の誰よりもも罪人であるとはいえないと言っておく。君は、シロアーの塔が、頭上に落ちて死んだ18人の男のことも知っている。このように滅ぼされたこれらの人が、エルサレムのすべての同胞以上に罪人であると思ってはいけない。これらの人々は、時間の偶然の事故の単なる犠牲者に過ぎない。

166:4.5 (1830.5) 君の人生で起こるかもしれない3種類の出来事がある。

166:4.6 (1830.6) 1. 君は、あなたと仲間が地球上で送る生活の一部であるそれらの通常の出来事を経験するかもしれない。

166:4.7 (1830.7) 2. そのような出来事が、いかなる場合にも決して前もって手はずを整えられたり、領域の精霊の力によってもたらされないということをよく承知してはいるが、君は、偶然に自然の出来事の1つの、人の不運の1つの犠牲となるかもしれない。

166:4.8 (1830.8) 3. 君は、世界を定めている自然の法則に従う直接の努力の収穫をするかもしれない。

166:4.9 (1830.9) 自分の庭園にイチジクの木を植えた人がいて、何度もその木に実を探したが見つからず、自分の元にブドウの園丁を呼んできて、『わしは、3年間も実を探しにここに来たが、今だに見当たらない。実を結ばないこの木を切り倒してしまえ。なぜ土地をふさがなければならないのか。』と言った。すると、園丁長は、主人に答えた。『もう1年そのままにしておいてください。その周りを掘って肥料をやってみますから。そうして、もし来年実をつけなければ切り倒しましょう。』そこで、結実の法則に従ったところ、木が生きていたので豊作で報われた。

166:4.10 (1831.1) 「病と健康に関しては、これらの身体の状態が、物質的な原因の結果であることを知るべきである。健康は、天国の微笑ではなく、苦悩は、神の渋面でもない。

166:4.11 (1831.2) 「父の人間の子には、物質的な恩恵の授与に等しい能力がある。だからこそ、かれは、物理的なものを

人の子に差別なく賦与するのである。精霊的な贈り物の賦与に関しては、父は、これらの神の資質を受理する人の能力に制限される。父は、人を分け隔てはしないが、精霊的な贈り物の賦与においては人の信仰と、常に父の意志を守る意欲に制限されている。」

166:4.12 (1831.3) イエスは、フィラデルフィアへの旅を続けながら、事故、病気、奇跡について教え、質問に応じ続けたが、かれらは、この教えを完全には理解することができなかった。1時間の教育は、生涯の信念を完全には変えないので、イエスは、彼等が理解してくれるように願っていると再三伝えることが、つまり、自分の言葉を繰り返すことが必要であると認識した。それでも、かれらは、死と復活の後までイエスの地球での任務の意味を理解することができなかった。

5. フィラデルフィアでの集会

166:5.1 (1831.4) イエスと12人は、フィラデルフィアで説教し、教えているアブネーとその仲間を訪問する途中であった。ペライアの全都市のうち、フィラデルフィアのユダヤ人と非ユダヤ人の最大の集団は、富者も貧者も、学問

のある者も無い者も、70人の教えを迎え入れ、その結果、天の王国入りをした。フィラデルフィアのユダヤ教の会堂は、エルサレムのシネヅリオン派の管理に服従したことがなく、因ってイエスとその仲間の教えに対しても一度も閉ざされたことがなかった。丁度この時、アブネーは、フィラデルフィアのユダヤ教の会堂で１日３回教えていた。

166:5.2 (1831.5) まさしくこの会堂が、後にキリスト教会となり、福音の東部地域全体の普及のための伝道本部であった。それは、長い間あるじの教えの拠点であり、キリスト教学習の中心として何世紀もにわたりこの地域にただ一つぽつねんと立っていた。

166:5.3 (1831.6) エルサレムのユダヤ人は、常にフィラデルフィアのユダヤ人と揉めてきた。また、イエスの死と復活後、主の弟ジェームスが長であったエルサレム教会には、フィラデルフィアの会衆に伴う重大な困難が起こり始めた。アブネーは、フィラデルフィア教会の長となり、また死ぬまでそうであった。エルサレムとのこの疎遠が、なぜ新約聖書の福音書の記録にアブネーとその仕

事について伺い知ることが何もないかを説明しているのである。エルサレムとフィラデルフィアとのこの不和は、ジェームスとアブネーの生涯を通じて持続し、エルサレムの破壊後にもしばらく続いた。アンチオケが北と西の本拠地であったように、フィラデルフィアは、実際上、南と東での初期の教会本部であった。

166:5.4 (1831.7) 初期キリスト教会の指導者全員との不一致は、アブネーにとり明白な不幸であった。アブネーは、エルサレム教会の運営と支配権に関してペトロスとジェームス(イエスの弟)と争った。かれは、哲学と神学の違いからパウーロスと別れた。アブネーは、哲学ではギリシャ的であるよりもバビロニア的であり、加えて、パウーロスが、まずユダヤ人へ、それからグレコローマンの秘教信者にとって好ましくないものをあまり提示しない目的でイエスの教えを作り変える全ての試みに頑に抵抗した。

166:5.5 (1832.1) このように、アブネーは、孤立の生活を余儀なくされた。エルサレムの認めていない教会の長であった。かれは、敢えて主の弟ジェームスを無視した。この

弟は、後にペトロスの支持を受けた。そのような行為は、元仲間のすべてからアブネーを事実上切り離した。そうなると、かれは、あえてパウーロスに抵抗した。かれは、パウーロスの非ユダヤ人への働き掛けには全く同情的であり、また、エルサレム教会との抗争においても彼を支持したが、パウーロスが説くことにしたイエスの教えの説明には激しく反対した。人生の後年においてアブネーは、「生ける神の息子ナザレのイエスの生涯を通じての教えの利口な退廃者」としてパウーロスを糾弾した。

166:5.6 (1832.2) アブネーの後年、またその後、フィラデルフィアの信者は、地球の他のいかなる集団よりもイエスが生き、また教えたようにイエスの宗教を厳密に保持した。

166:5.7 (1832.3) アブネーは、89歳まで生き、西暦74年11月21日にフィラデルフィアで死んだ。まさにその終わりまで、かれは、天なる王国の福音の忠実な信者であり教師であった。

論文 167
フィラデルフィア訪問

167:0.1 (1833.1) 少なくとも2人の使徒が、ペラ宿営地での群衆への教えのために残されるのが習慣であるので、ペライア任務のこの期間中、原則として、10人しか彼と共にいなかったということが、70人が働いていた様々な場所を訪れるイエスと使徒の訪問の言及に関しては、思い出されるべきである。イエスが、フィラデルフィアに進む準備をする一方で、シーモン・ペトロスとその兄アンドレアスは、ペラ宿営地に集合する群衆に教えに戻っていった。あるじが、ペライア周辺の訪問のためにペラ宿営地を出発するとき、300人から500人の野営する者が、あるじに続くことは、珍しくなかった。フィラデルフィアに到着の際には、600人以上の追随者がいた。

167:0.2 (1833.2) 奇跡は、デカーポリス内での最近の説教旅行では起こらず、また、10人の癩病患者の浄めを除いては、これまでのところ、このペライアでの任務には何の奇跡もなかった。これは、福音が、奇跡を伴わず、直接イエスか、あるいは使徒さえ居合わせずに、力で宣言された期間であった。

167:0.3 (1833.3) イエスと10人の使徒は、２月22日、水曜日にフィラデルフィアに到着し、この最近の旅と労働からの寛ぎのために木曜日と金曜日を費やした。その金曜日の夜、ジェ　ームスは、会堂で話し、総合協議会は、次の晩に招集された。皆は、フィラデルフィアとその近郷での福音の進展に非常に喜こんだ。ダーヴィドの使者も、アレキサンドリアとダマスカスからの朗報と同様にパレスチナ中の王国の一層の前進の知らせをもたらした。

1. パリサイ派との朝食

167:1.1 (1833.4) アブネーの教えを受け入れた非常に裕福で有力なパリサイ派の一人が、フィラデルフィアに住んでおり、この人は、安息日の朝イエスを朝食に招いた。このときイエスがフィラデルフィアにいる予定であるということが知れていたので、たくさんのパリサイ派を交じえた多くの訪問者は、エルサレムと他の場所から来ていた。従って、およそ40人のこれらの主な男性と数人の律法学者は、あるじに敬意を表し、事前に申し合わせたこの朝食に招待された。

167:1.2 (1833.5) イエスがアブネーと話しながら戸のそばに佇み、そして、主人役が着席した後、シネヅリオン派の構成員であるエルサレムの指導的パリサイ派の一人が、部屋に入って来た。そして、自分の習慣通りに主催者の左側の上座に真っ直ぐ向かって行った。しかし、この場所はあるじに、またその右にはアブネーが予定されていたので、この家の主人は、このエルサレムのパリサイ派の人物には4席左へ座るように合図した。そこで、この高位聖職者は、上座を受けなかったので非常に怒った。

167:1.3 (1834.1) 全員は、間もなく席に着き、そして出席者の大部分がイエスの弟子であり、そうでなくても福音に好意的である者で占めていたので、互いの交わりを楽しんでいた。敵だけは、食べに座る前に儀式的な手の洗浄をイエスが順守しなかったという事実に注意を払った。アブネーは、給仕中ではなく、食事前に手を洗った。

167:1.4 (1834.2) 食事の終わり近く、長い間の慢性の病気と現在は水腫疾患で苦しんでいる男性が通りから入って来た。この男性は、最近アブネーの仲間により洗礼された信者であった。イエスに治癒のための何の要求もしなかった

が、この苦しんでいる男性は、イエスに群がりくる群衆から逃げることにより、おそらくイエスの注意を引きつけるであろうと望みつつ、この朝食にこうして来たということが、あるじにはすっかり分かっていた。この男性は、そのときは奇跡があまり起こされていないことを知っていた。しかしながら、かれは、心では、自分の哀れな苦況がことによるとあるじの同情を引くかもしれないと推論した。そして、彼に間違いはなかった、なぜなら、彼がその部屋に入ったとき、イエスとエルサレムからの独りよがりのパリサイ派の人物の両者がこの男性に注意を向けたので。パリサイ派の人物は、そのような者が部屋に入ることが許されるということへの憤懣を声に出すのにぐずぐずしていなかった。しかし、イエスは、病気の男性を見て、非常に親切に微笑んだので、病の男性は、近づいてき床に座った。食事が終わると、あるじは、客の仲間をざっと見回し、次に水腫の男性を意味ありげに見てから言った。「友よ、イスラエルの教師と学問のある律法学者よ、あなた方に尋ねたい。安息日に病で苦しめられている者を癒すのは合法であるか、あるいは不合法であるか。」だが、そこに出席している者達

は、イエスを知り過ぎていた。皆は黙っていた。質問に答えなかった。

167:1.5 (1834.3) その時、イエスは、病気の男性のところに行き、手を取って言った。「立ち上がって行きなさい。あなたは、癒すことを頼みはしなかったが、あなたの心の願望と魂の信仰が私には分かる。」イエスは、男性が部屋を出る前に席に戻り、食卓にいる者達に話し掛けた。「父は、王国にあなたを誘い入れるためではなく、既に王国にいる者達に自分を明らかにするためにそのような働きを為されるのである。あなた方は、まさにそのようなことをすることは、父に似ていると認めることができる、なぜなら、もし好きな動物が安息日に井戸に落ちたなら、あなた方の誰が、すぐに引き上げに行かないことがあろうか。」そして、だれも答えないので、また主人役が起きていることに明らかに賛成しているので、イエスは、立ち上がってすべての出席者に話した。「我が同胞よ、結婚の宴に招待される時は、主だつ席に座ってはいけない。おそらく、あなたより名誉を与えられた人が招待されていて、主人があなたの座っている場所をこの名誉ある客人に与えることを要求しなければならないこ

とのないように。この場合、あなたは恥じつつ下座の場所に移ることを要求されるであろう。祝宴に招待される時、主人が客を見渡し『友よ、なぜ末席に座っているのか。もっと上座の方に来なさい。』ということができるように祝いの席に到着し、最も低い場所を捜し、そこにあなたの席を取ることは、知恵というものであろう。このようにすると、相客の前でそのような人にとっては栄えあることとなる。忘れてはならない、自分を引き上げる者は誰でも、低くされるが、自分を本当に低くする者は、引き上げられるであろう。だから、あなたが、響応したり夕食を提供するときは、返礼に宴に招待されることを考えに入れ、いつも友人、同胞、血族、あるいは、金持ちの隣人を招待することのないようにしなさい。宴を設けるときは、時々、貧乏人、不具者、盲人を招きなさい。このようにして、あなたの心は、祝福されるのである、なぜならば、あなたは、足の不自由な者が、情愛深いあなたの活動に報いることはできないということを、よく知っているのであるから。」

2. 豪華な夕食の寓話

167:2.1 (1835.1) イエスが、パリサイ派に属する者の朝の食卓で話し終えると、出席している律法学者の一人は、沈黙を破りたいと思い、その当時一般的に言われていること「神の王国でパンを食べるものは祝福される。」と軽率に言った。すると、イエスは、好意的なその家の主人さえ肝に銘じざるをえなかった寓話を話した。

167:2.2 (1835.2) 「ある支配者は、多くの客を招待し豪華な夕食を設けた。招待された者達に『お越しください。すべて準備ができましたので。』と言いに夕食時に使用人を遣わせた。すると皆がこぞって弁解を始めた。最初の人は言った。『私はちょうど農場を買ったところで、それを調べに行く必要があります。願わくば、失礼させていただきたい。』別の人は、『5頭の雄牛を購入し引き取りに行かなければなりません。願わくば、失礼させていただきたい。』また別の人は、『妻をめとったばかりで、お伺いできません。』そこで使用人は、これを報告しに主人の元に戻った。家の主は、これを聞くと、非常に立腹し、使用人に言った。『私はこの結婚の宴を用意した。肥畜は殺され、すべては客のために準備されているが、かれらは、私の招待をはねつけた。彼らは、あらゆる人

の土地と商品を求めて、祝宴に来るように言う私の使用人への礼さえ欠いた。早く町の大路小路、街道や間道に出かけ、婚儀の饗宴に客が参席するように、貧者や浮浪者、盲人や足が不自由な者達をこちらに連れて来なさい。』そこで使用人達は、主人の言いつけ通りにしたが、それでもまだ多くの客のための場所があった。その時、使用人達へ主人が言った。『今度は、道路と田舎に出かけ、私の家が一杯になるほどにそこにいる者達を強制的に連れてきなさい。最初に招待された者の誰も私の夕食を口にしないと断言する。』そして、使用人達は、主人の命令に従い、家は一杯となった。」

167:2.3 (1835.3) かれらは、これらの話を聞き終えると去った。全員がそれぞれの家に帰った。その朝出席していて嘲笑ったパリサイ派の中で少なくとも一人は、この寓話の意味するところを理解していた、なぜならば、かれは、当日洗礼され王国の福音における自分の信仰を公表していたので。アブネーは、その夜、信者の総合協議会でこの寓話を説いた。

167:2.4 (1835.4) 翌日、使徒は全員、すばらしい夕食のこの寓話の意味を解釈しようと哲学的課題に取り組んだした。イエスは、興味をもってこれらの異なる解釈のすべてを聴いたが、寓話の理解における更なる助けを提供することは固く拒否した。「あらゆる人に、自分のために、そして自身の魂でその意味を見い出させなさい。」と、言うだけであった。

3. 虚弱の精神をもつ女性

167:3.1 (1835.5) アブネーは、シネヅリオン派の言いつけにより彼の教えにすべてが閉ざされて以来のこの安息日に、あるじが会堂で教える手筈を整えていた。イエスが初めて会堂に現れた。礼拝の終わりに、イエスは、自分の前に萎れて、塞ぎ込んだ気配の年配の婦人を見た。この婦人は、長い間恐怖に支配されていて、すべての喜びはその人生から去ってしまっていた。イエスが演台を降り、その婦人のところに行き、曲げられた恰好のその肩に触れて言った。「ご婦人よ、信じさえすれば、その虚弱な精神から完全に放たれることができるであろう。」すると、18年以上もの間恐怖からくる鬱病に屈し、縛りつけられてきたこの婦人は、あるじの言葉を信じ、信仰によ

り体が真っ直ぐになった。自分が真っ直ぐにされたのが分かると、この女性は、声を上げ神を賛美した。

167:3.2 (1836.1) この女性の苦悩は、完全に精神的なものであったにもかかわらず、彼女の曲がった様は、塞ぎ込んだ心からくるものであったので、人々は、イエスが本当の身体の障害を癒したと思った。フィラデルフィアの会堂の会衆は、イエスの教えに対して好意的ではあったが、会堂管理者は、友好的でないパリサイ派であった。そして、かれは、イエスが身体の障害を癒したことに会衆と同じ意見であったが、イエスが、安息日にそのようなことを敢えてしたことに憤慨し、会衆の前に立ち上がって言った。「人が凡ゆる労働をするのは6日間ではないのか。安息日にではなく、これらの労働の日に来て治してもらいなさい。」

167:3.3 (1836.2) 友好的ではない管理者が話し終えると、イエスは、この話し手のいる壇上に戻って言った。「なぜ偽善者の役割を演じるのか。あなた方は誰でも、安息日であっても雄牛を放ち、水を飲ませに連れていくではないか。安息日にそのような活動が許されるならば、18年も

の間悪に縛られていたアブラーハームの娘であるこの女性をこの安息日にさえその束縛から解いてやり、自由と命の水を相伴すべきではないのか。」そして、女性が神を賛美し続けたので、管理者は、自分のした批評で恥をかかされ、会衆は、婦人の回復に大喜びした。

167:3.4 (1836.3) 公でのこの安息日のイエスに対する批判の結果、会堂管理者は、免職となり、イエスの追随者がこの地位につけられた。

167:3.5 (1836.4) イエスは、頻繁にそのような虚弱の精神から、心の落ち込みから、恐怖の束縛からくる不安に戦く犠牲者を救った。しかし、人々は、そのようなすべての苦悩は、身体障害か悪霊の憑拠のいずれかであると考えていた。

167:3.6 (1836.5) イエスは、日曜日に会堂で再び教えた。そして、多くの人が、その日の正午、町の南を流れる川でアブネーによる洗礼をうけた。エルサレム近くのベサニアの友人達からのイエスへの急報を持って来たダーヴィドの使者の一人が到着しなければ、イエスと10人の使徒

は、翌日ペラ宿営地へ戻るところであったが、そうはならなかった。

4. ベサニアからの知らせ

167:4.1 (1836.6) 2月26日、日曜日の夜もかなり遅く、マールサとマリアからの「主よ、あなたが愛する者が重病であります。」と言う知らせを携えたベサニアからの伝令者が、フィラデルフィアに到着した。この知らせは、夕べの会議の終わりに、しかも使徒に夜の暇乞いをしているときにイエスに届いた。最初イエスは、何の返事もしなかった。自分の外の、および自分を超えた何かとの意志伝達をはかっている時のような奇妙な合間の1つが起きた。そして、次に、上を見ながら、使徒に聞こえるように使者に言った。「この病気は、本当に死に至るものではない。それは、神を賛美し、息子を高めるのに役立つということを疑うでない。」

167:4.2 (1837.1) イエスは、マールサ、マリア、その兄弟ラーザロスがとても好きであった。熱い愛情をもって彼らが好きであった。イエスの最初の、そして人間的な思考は、すぐに彼らの援助に行くことであったが、別の考えがそ

の結合した心に起きた。かれは、エルサレムのユダヤ人の指導者達が、王国を受け入れるという望みをもう少しであきらめるところであったが、それでもかれは、自分の人々を愛しており、そして、その時、それによってエルサレムの筆記者とパリサイ派が彼の教えを受け入れるもうひとつの機会があるかもしれない計画が浮かんだ。そこで、かれは、父が望んでいるならば、地球での全経歴の最も深遠かつ素晴らしい外に向けての業であるこの最終的な働きかけをエルサレムに対してすることを決意した。ユダヤ人は、驚異的な業を為す救出者の考えに執着した。そして、物質的な驚きの業、あるいは政治力の一時的な表示の実践に身を落とすことは拒否したが、彼は今や、自分がこれまでに披露したことのない生死に関わる力の顕現のために父の同意を求めた。

167:4.3 (1837.2) ユダヤ人には、逝去のその日に死者を埋葬する習慣があった。これは、そのような暖かい気候に必要な習慣であった。墓に単に昏睡状態である者を置いておくと、２日目に、あるいは３日目にさえそのような者が、墓から出て来るようなことがい度々起きた。しかし、霊か魂が、２日か３日間、体の近くに長居するかもしれな

いが、それは、３日目以後は決してとどまらないということ、腐敗は、4日目までにはかなり進んでいるということ、またそのような期間の経過の後に墓から戻ってきた者は、かつてなかったというのが、ユダヤ人の信念であった。そして、これらの理由からベサニアへの出発準備をするまでに、イエスは、まる2日間フィラデルフィアに滞在した。

167:4.4 (1837.3) このため、イエスは、水曜日の朝早く、「すぐに、再びユダヤに入る準備をしよう。」と使徒に言った。使徒は、あるじがこうを言うのを聞くと互いに相談をするためにしばらく単独で引き下がった。ジェームスは、会議の指揮の任につき、そして彼らは皆、イエスに再びユダヤに入ることを許するのは愚か以外の何でもないと同意し、一丸となってそのように知らせに戻った。ジェームスは言った。「あるじさま、あなたは、数週間前エルサレムにおられました。指導者達は、あなたを死においやろうとしましたし、人々は、あなたに投石をしようとしました。その時あなたは、真実を受け入れる機会をこれらの者達に与えました。ですから、我々は、あ

なたが再びユダヤに入ることを認めるつもりはありません。」

167:4.5 (1837.4) その時、イエスは言った。「だが、１日に12時間という安全に仕事ができる時間があると君達は思わないか。人が昼歩くならば、光がある限り躓くことはない。夜歩くならば、かれは、光をもっていないので躓きやすい。私の日の続く限り、私は、ユダヤに入ることを恐れるものではない。私は、これらのユダヤ人のためにもう１つ強力な仕事がしたい。私は、彼等が信じるためのもうひとつの機会、彼等の言う通りの条件であろうとも—目に見える栄光状態と父の力と息子の愛の可視の顕現—を彼らに与えたい。「それに、我々の友人ラーザロスは、寝入っており、私が彼をこの睡眠から起こしに行くとは君達は思わなのか。」

167:4.6 (1837.5) その時、「あるじさま、ラーザロスが寝入ってしまっているのでしたら、確実に回復します。」と使徒の一人が言った。当時、睡眠の型として死について話すのがユダヤ人の習慣であったが、この使徒は、ラーザロスは、すでにこ世を去ったということをイエスが意味し

たとは理解しなかったので、今度は分かり易く、「ラーザロスは死んでいる。そして、私は、君達のために、つまり君達が、私を信じる新しい理由が今はあるということを、私がその場に居合わせなかったことを喜んでいる。そして、他の人がそれによって救われなくとも、君達のために、私は喜んでいる。そして、君は、目撃することによって、私が君にいとまごいをして、父の元へ行くその当日に備えて君達は皆、強くなるべきである。」とイエスは、言った。

167:4.7 (1838.1) ユダヤに行くことを差し控えるように彼を説得できないとき、また、数人の使徒が同伴することさえ好まないとき、トーマスは、仲間に話しかけた。「我々の恐怖をあるじにお伝えしたが、かれは、ベサニアに行くと決心されておられる。私は、それが結論を意味するということで満足する。かれらは、確実にあるじを殺そうとするが、それがあるじの選択であるならば、我々も勇気ある者のように振る舞おう。我々も共に死ぬために行こう。」そして、それは、ずっとそうであった。周到で、持続的勇気を必要とする事柄では、トーマスは、常に12人の使徒の大黒柱であった。

5. ベサニアへの道中にて

167:5.1 (1838.2) ユダヤへの道中では、友と敵のおよそ50人の一団が、イエスの後に続いた。水曜日の昼食時、イエスは、使徒と追随者のこの一団に「救済の条件」について話し、この教えの終わりにパリサイ派と居酒屋の主人(収税吏)の寓話を話した。イエスは言った。「だから、分かるであろう、父は人の子等に救済を与えるということ、そして、この救済は、神性の家族の息子性を受けるという信仰をもつ者全てへの無料の贈り物である。人が、この救済を得るためにできることは何もない。　独善的な働きでは、神の恩恵を買うことはできず、人前でそれほど祈ることは、心の生ける信仰の欠如を埋め合せはしない。人は、外向きの活動によって騙すことができても、神は、人の魂を覗き込んでいるのである。私があなたに話していることは、祈りのために寺院にいったパリサイ派の男性と居酒屋の主の2人の男性によく例示されている。パリサイ派の男性は、立って心で祈った。『ああ、　神さま、私は、他の人のような貪欲な者、無学な者、不正な者、姦淫する者、あるいは、この居酒屋の主のような者でないことに感謝いたします。私は、1週

間に２度断食しますし、得る全ての十分の一を税として捧げています。』ところが、居酒屋の主は、遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず胸を打ちながら『神さま、罪人の私をお許しください。』と言った。神の承認を得て家に帰ったのは、パリサイ派の男ではなく、居酒屋の主であったと君達に言っておく。おおよそ自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。」

167:5.2 (1838.3) その夜イェリーホでは、友好的でないパリサイ派が、その仲間が一度ガリラヤでしたように、結婚と離婚についての議論に誘導し、あるじを罠にかけようとしたが、イエスは、離婚に関する法との葛藤に巻き込む彼らの努力を巧みに避けた。居酒屋の主人とパリサイ派は、よい宗教と悪い宗教を例示したように、友好的でないパリサイ派の離婚の習わしは、ユダヤの法典の良い結婚法とパリサイ派をこれらのモーシェの離婚法令に対するパリサイ派の解釈の恥ずべきゆるみとの対照に役立った。パリサイ派の男性は、最低の基準で自分を判断し、居酒屋の主は、最高の理想で自分を律した。パリサイ派の男性にとっての信心は、独善的な無活動と誤った精霊

的な安全性の保証の誘導手段であった。居酒屋の主にとっての信心は、信仰による悔悟、告白、慈悲深い許しの受理の必要性の認識へと魂を奮い立たせる方法であった。パリサイ派の男性は正義を求め、居酒屋の主は慈悲を求めた。宇宙の法とは、求めよ、さすれば与えられ、探せよ、さすれば見つかる、である。

167:5.3 (1838.4) イエスは、離婚に関してパリサイ派の論争に引き込まれることを拒否はしたものの、結婚に関して最高の理想の肯定的な教えを宣言した。イエスは、全ての人間関係の最も理想的で最高なものとして結婚を高めた。同様に、かれは、当時、料理下手であるとか、不完全な主婦であるとかきわめて些細な理由により、または、器量のよい女性に惚れたという以外には別に理由なくして、妻の離縁を男性に許したエルサレムのユダヤ人のいい加減で不当な離婚の習わしに強い難色を仄めかした。

167:5.4 (1839.1) パリサイ派は、ユダヤ人に、特にパリサイ派に、この安易な離婚の種類の恩典があると教えるところまでさえも行った。そこで、イエスは、結婚と離婚問題に関する発表を拒否しながらも、結婚関係におけるこれ

らの恥ずべき嘲りを非常に激しく非難し、女性と子供達への不当な取り扱いを指摘した。かれは、女性よりも男性への何らかの利点を与える離婚の実践を決して認めなかった。あるじは、男性と女性に平等を与える教えだけを是認した。

167:5.5 (1839.2) イエスは、結婚と離婚を決定する新しい指図を提供はしなかったが、ユダヤ人に彼ら自身の法とより高い教えに従うことを促した。これらの社会的次元に沿って習慣を改善する努力において、かれは、記された経典に繰り返し言及した。イエスは、このように高く理想的な結婚の概念を支持しながら、成文法、または彼らの非常に大事にしてきた離婚の特権に表された社会的習慣に関して質問者との衝突を巧みに避けた。

167:5.6 (1839.3) あるじが、科学、社会、経済、政治上の問題に関して積極的な公式見解の発表に気乗りしないことを理解することは、使徒達にとり非常に難しいことであった。かれらは、あるじの地球での任務が、もっぱら精霊的な真実と宗教の真実の顕示に関係するものだとは十分に理解していなかった。

167:5.7 (1839.4) イエスが結婚と離婚に関して話した後、使徒は、その夜更けに個人的にさらに多くの質問をし、これらの問いに対する彼の答えは、彼らの心の多くの誤解を取り除いた。イエスはは、この会議の終わりに言った。「結婚は尊重すべきであり、すべての人に望まれることである。人の息子が地球の任務だけを追求するという事実は、願わしい結婚を全く非難してはいない。そのように働くということが父の意志であり、しかもこの同じ父が、男女の創造を指示したということであり、また男女が、子供を授かり、そして躾けるための家庭の確立に当たっては、天地の製作者と共同者になるこの両親の創造において、最高の奉仕、それに伴う喜びを見い出すことが神性の意志である。このために男は父母から離れ、妻に愛情深く結びつき、そして、2人は1つとなるのである。」

167:5.8 (1839.5) このように、イエスは、使徒の結婚についての多くの心配事を取り除き、離婚に関する多くの誤解を除いた。同時に、かれは、社会的な結びつきの理想を高め、女性と子供と家に対する彼らの敬意を増大させるために多くのことをした。

6. 幼子を祝福すること

167:6.1 (1839.6) 結婚と子供の幸福についてのイエスの言葉は、その晩イェリーホ中に広まり、そのため、翌朝、イエスと使徒が出発準備をするずっと前、朝食の前にさえ、何十人もの母親が、子供を抱いたり、手を引いたりしてイエスの宿泊所にやって来て、幼子達の祝福を望んだ。使徒は、子供連れのこの母の集まりを見に出てきた時、追い払おうと努力したが、これらの女性は、あるじが子供等に手を置き祝福するまで出発を拒否した。そして、使徒が声高にこれらの母を窘めると、騒ぎを聞いたイエスは、憤然として出て来て、彼らを叱責して、「子供達をこさせなさい。止めてはならない、天の王国は、そのような者の国である。まことに、まことに、言いきかせておこう。幼子のように王国を受け入れる者でなければ、精霊的に完全に大人として成長するためには、誰も、決してそこには入れない。」

167:6.2 (1840.1) あるじは、使徒に話し終えると、母親達に勇気と希望の言葉を掛ける一方で、子供の頭に手を置き子供全員を受け入れた。

167:6.3 (1839.8) イエスは、しばしば天の大邸宅について使徒に語り、神の前進する子供は、この世で子供が肉体的に成長し、そこで精霊的に成長しなければならないということを教えた。この日にこれらの子供と母が、イェリーホの子供達が宇宙の創造者と遊んでいることにほとんど気づかなかったように、ネバドンの観察中の有識者達が、見ているような神聖な出来事は、しばしば通常の出来事のように見える。

167:6.4 (1839.9) パレスチナの女性の地位は、イエスの教えにより非常に改善された。したがって、彼の追随者が、苦心して教えられたことからそれほどまでに外れることがなかったならば、世界中がそうなったことであろうに。

167:6.5 (1839.10) 神の崇拝の習慣における子供の初期の宗教教育の議論に関連して、イエスが、礼拝への衝動に、特に子供を導く影響として、美の大きな価値を使徒に銘記させたのも、イェリーホであった。あるじは、教訓と例により創造の自然環境の中で創造者を崇拝することの価値を教えた。かれは、木立ちの中で、自然界の低級の生物の間で、天なる父との親交を好んだ。かれは、創造者た

る息子の星の領域の奮い立たせる光景を通して父に深い思いを馳せることを喜んだ。

167:6.6 (1839.11) 自然の会堂で神を崇拝することができないとき、人は、人間の感情の最高のものが、神との精霊的な交わりへの知的な接触に関連して起こされるように、美の家、すなわち魅力的な単純さと芸術的な装飾の聖域を提供するために最善をつくすべきである。真実、美、神聖さは、真の崇拝への強力で効果的な援助である。しかし、精霊的な親交は、人の入念かつ仰々しい芸術による単なる大規模な華麗さと過剰な装飾によって押し進められない。美は、最も単純で自然らしくあるときに最も宗教的である。美の魅力を完全に欠き、元気のある歓声と奮い立たせている神聖のすべての提案が全く空である冷たくて味気ない部屋で、幼子が、公共の崇拝についての概念への最初の導入を受けろということは何と不幸なことであろうか。子供は、自然の屋外で、日々居住する家でのように、後には親に伴われて少なくとも物質的に魅力的で公的宗教の集会のための家屋で、また、芸術的に美しい家として崇拝に導かれるべきである。

7. 天使に関する講話

167:7.1 (1840.6) かれらが、イェリーホからベサニアまで丘を旅したとき、ナサナエルは、道中のほとんどをイエスの横を歩き、そして、天の王国に関する子供の議論は、間接的に天使の任務の考察になった。ナサナエルは、あるじにこの質問をようやくした。「高僧がサッヅカイオス派であるので、しかも、サッヅカイオス派は天使を信じないので、我々は、天の聖職者に関し、人々に何を教えればよいのでしょうか。」すると、イエスは、他の事柄と合わせて言った。

167:7.2 (1841.1) 「天使の軍勢は、被創造者の別の体制である。必滅の生物の物質体制とは似ても似つかないもので、宇宙有識者の異なる集団として機能する。天使は、聖書で「神の息子」と呼ばれるその被創造者の集団ではない。かれらは、天の大邸宅を進歩し続けた人間の栄光を授かった精霊でもない。天使は、直接的創造であり、繁殖はしない。天使の軍勢には、人類との精霊的な関係しかない。人は、楽園の父に向けての旅で進歩するのに応じ、ある時点で天使の状態に似た状態を縦断するが、決して天使にはならない。

167:7.3 (1841.2) 「天使は、決して人が死ぬようには死なない。天使は、たまたま、ルーキフェレーンスの欺瞞に巻き込まれた一部がそうであったように、罪に巻き込まれない限り、不滅である天使は、天の精霊の奉公者であり、完全に賢くもなく、また全能でもない。しかし、忠誠な天使は全員が、本当に純粋で、神聖である。

167:7.4 (1841.3) 「そして、もし精霊的な目を浄められたならば、あなたは次には、天が開かれるのを見て、そして神の天使達の上昇や下降が見えるということを、かつて私があなたに言ったことを覚えていないのか。1つの世界が他の世界との接触を保っていられるということは、天使の働きによるものであり、それゆえ、私は、この囲いに属さない他の羊を連れていると繰り返し言わなかったか。そして、これらの天使は、あなたを監視し、父にあなたの心の考えを告げたり、肉体の行為に関して報告をしに行く精霊界の諜報者ではない。彼自身の精霊があなたの中に生きるので、父にはそのような奉公は不要である。しかし、これらの天使の精霊は、宇宙の他の、しかも遠い場所での行ないに関係がある天の創造の一部を知らせ続けるために機能している。そして、天使の多く

は、父の施政と息子の宇宙で機能している間、人類への奉公に配置されている。私は、これらの熾天使の多くが手を貸す精霊であると教えるとき、比喩的な言い回しでも詩的な旋律で話したのでもない。そして、そのような問題の理解に対するあなたの困難さには関係なく、このすべてが真実なのである。

167:7.5 (1841.4) これらの天使の多くは、人の救出の仕事に従事しており、それゆえ、私は、1つの魂が罪を犯すことを止め、神を求め始めることを選ぶときの熾天使の喜びについてあなたに言わなかったか。私は、悔悟する1人の罪人に天の天使の臨場でもたらす喜びについてあなたに伝えさえし、そうすることで、同様に、精神の幸福に参加し、人間の神性の進歩に関わる他の高い天の存在者達の体制の存在を示した。

167:7.6 (1841.5) 「また、これらの天使は、人の精霊が、肉体の仮の小屋から解放され、そして、彼の魂が、天の中継所へと護衛されていくその方法に大いに関わりがある。天使は、人の魂が、肉体の死と精霊の住まいの新しい命に

介在する未知で、不確定の期間の天の確実な案内人である。

167:7.7 (1841.6) そしてかれは、天使の働きについてナサナエルにさらに話したことであろうが、東の丘を昇っている彼を観測した友人達に、イエスがほぼベサニアに近づいていると知らされたマールサに遮られた。マールサは、すぐさま挨拶をしようと急いだ。

論文 168
ラーザロスの復活

168:0.1 (1842.1) イエスがベサニア近くの丘の崖に差し掛かると、マールサが出迎えのために走り寄ったのは、正午の直後であった。弟ラーザロスが死んでから４日が過ぎ、かれは、日曜日の午後遅く、庭の遠くの端にある私有墓地に横たえられていた。墓の入り口の石は、この日、木曜日の朝、本来あるべき場所に戻されていた。

168:0.2 (1842.2) マールサとマリアが、ラーザロスの病気に関してイエスに伝言をしたとき、二人は、あるじがそれに関して何かをすると確信していた。彼女等には、兄弟が絶望的な病気であることが分かっており、イエスが自分達

の援助に来るために教えも説教の仕事からも辞してきてくれるとは到底望むつもりはなかったが、二人は、病気を治すイエスの力を非常に信じていたので、ただ病に効く言葉を言えば、ラーザロスは、すぐに回復するであろうと考えていた。そして、使者がベサニアからフィラデルフィアへ向かった数時間後にラーザロスが死んだとき、二人は、あるじに知らせが届いたときには、すでに死亡してから数時間経過しており、遅過ぎたのであったろうと結論づけた。

168:0.3 (1842.3) しかし二人は、ベサニアに達した伝令者が火曜日の午前にもたらした知らせに、信心深い友人全員と同様に大いに当惑した。使者は、イエスが、「この病気は死に至るものではない。」と言うのを聞いたと言い張った。二人は、なぜイエスが何の知らせもくれず、助力も提供してくれないのかを理解することができなかった。

168:0.4 (1842.4) 近くの村落からの多くの友人やエルサレムからの他の人々は、悲しみに傷ついた姉妹を慰めに来た。ラーザロスとその姉妹は、ベサニアの小さい村の主導的住人であった裕福で尊敬すべきユダヤ人の子女であった。

３人が共に長い間イエスの情熱的な追随者であるにもかかわらず、かれらは、彼らを知るすべての者にとても尊敬されていた。かれらは、この界隈に大規模なブドウ園とオリーブ園を継承しており、自身の屋敷内に私有の埋葬墓地を都合できるという事実によって、裕福であるということがさらに証明された。両親共が、すでにこの墓に横たえられていた。

168:0.5 (1842.5) マリアは、イエスが来るという考えを捨て、深い悲しみに任せていたが、マールサは、イエスが来るであろうと、墓前の石を転がせ、入り口を封鎖したちょうどその朝でさえも来るだろうという望みにしがみついていた。それでも、隣人の少年に丘の険しい頂上からベサニアの東に至るイェリーホ街道を見張るように指示した。そしてイエスとその友人達が近づいているとマールサに知らせをもたらしたのは、この少年であった。

168:0.6 (1842.6) マールサは、イエスに会うとその膝元にひれ伏し、「あるじさま、あなたがここにいてくれていましたなら、兄弟は死ななかったでしょう。」と大声で言った。多くの恐れがマールサの心をよぎったが、何の疑問

も表現せず、また、敢えてラーザロスの死に関連するあるじの行為を批判したり問い質そうとはしなかった。彼女が話し終えると、イエスは、手を伸ばしてマールサを立ち上がらせて、「ただ信仰をもちなさい。マールサ、兄弟は蘇る。」と言った。その時、マールサは、「私は、兄弟が最後の日の復活で再び立ち上がることを知っています。そして、今でも、あなたが神に求めることは何であろうと、我々の父があなたに与えられると信じております。」と答えた。

168:0.7 (1843.1) その時、真っ直ぐマールサの目を覗き込んで、イエスは言った「私が、復活であり、命である。私を信じる者は、死ぬが、それでもなおかつ生きるのである。実のところ、生きていて私を信じる者は、決して死ぬことはない。マールサ、これを信じるか。」すると、マールサは、「はい、私は長い間、あなたが救出者、生ける神の息子、その方は、この世界にまで来られるということを信じてきました。」と答えた。

168:0.8 (1843.2) イエスがマリアとの面会を求めたので、マールサは、すぐさま家に戻り、妹に囁いて、「あるじさまが

ここにいて、あなたを呼んでいます。」と言った。マリアは、これを聞くと、すぐに立ち上がり、急いでイエスに会いに行った。イエスは、マールサが彼を迎えた家からいくらか離れた同じ場所にいた。慰めようと一緒にいた友人達は、マリアが急に立ち上がり出かけるのを見たとき、泣くために墓にいくのだと思いマリアについて来た。

168:0.9 (1843.3) 居合わせた者の多くは、イエスの不倶戴天の敵であった。それ故マールサは、イエスに会いに一人で出ていかなければならなかったし、マリアに知らせに秘かに入ったのであった。マールサは、イエスに会いたいと切望しながらも、エルサレムの大集団の敵の真っ只中へのイエスの突然の到来が、引き起こすかもしれないあらゆる気まずさを避けたいと望んでいた。マリアがイエスに挨拶しに行っている間、友人達と家に残るというのがマールサの意志であったが、そうはいかなかった。皆は、マリアの後に続き不意にあるじに出くわしたのであった。

168:0.10 (1843.4) イエスの元へとマールサに導かれたマリアは、彼を見ると足元にひれ伏して、「あなたがここにいてさえくれたら、兄は死ななかったでしょう。」と叫んだ。イエスが、皆がどれほどにラーザロスの死を嘆き悲しんでいるかを見たとき、その魂は哀れみに引かれた。

168:0.11 (1843.5) 会葬者達は、マリアがイエスに挨拶しに行くのを見ると、マールサとマリアが、あるじと話し、更なる慰めの言葉と父に対する強い信仰保持と神性の意志への完全な服従を熱心に進める間、少し離れた所にいた。

168:0.12 (1843.6) イエスの人間の心は、ラーザロスと遺族の姉妹への愛と、不信心かつ殺意あるこれらのユダヤ人の一部による上辺の愛情表現に対する軽蔑と侮りの間の争いに甚だしく動かされた。イエスは、そのような偽の悲しみが、自分への不倶戴天の敵意に関連しているために、友と名乗るこれら数人によるラーザロスにむけての不自然で上辺の弔いの見世物に憤然とした。しかしながら、これらのユダヤ人のうちの数人は、二心のない悲しみにあった、なぜならば、かれらは、その家族の本当の友人であったので。

1. ラーザロスの墓にて

168:1.1 (1843.7) 会葬者から離れ、イエスがマールサとマリアを慰めて少し時間を費やした後、かれは、「どこに横たえているのか。」と尋ねた。そこで、マールサは、「見に来てください。」と言うと、あるじは、嘆く２人の姉妹に黙って続きながら涙した。三人の後に続いた好意的なユダヤ人がイエスの涙を見たとき、そのうちの一人が言った。「どんなに彼を愛していたか見てみなさい。盲人の目を開いた彼が、この人が死なないようにはできなかったのか。」この時までにかれらは、庭の一番端のおよそ10メートル上の岩棚にある自然の小さい洞窟、下り勾配の家族の墓地の前に立っていた。

168:1.2 (1844.1) イエスがなぜ泣いたのかを人間の心に的確に説明することは難しい。結合した人間の感情と神性の考えの登録を利用できるが、専属調整者の心の記録されているままのこれらの感情表現の真の事由に関して、我々は、完全に確信がある訳ではない。我々は、イエスが涙したのはこのとき心をよぎる次のような多くの考えと感情からだと思いたい。

168:1.3 (1844.2) 1. かれは、マールサとマリアのために偽りのない悲哀に満ちた同情心をもった。かれには、兄弟を失った姉妹に対しての深い人間の情があった。

168:1.4 (1844.3) 2.ある者は誠実で、ある者は単に上辺だけの会葬者の群衆の臨場に、彼の心が混乱した。かれは、常にこれらの上辺の悲しみの表現に憤慨した。かれは、姉妹がその兄弟を愛しているのを知っており、また信者達の生存を信じた。これらの相反する感情が、彼が墓の近くに来たときなぜ呻いたかをおそらく説明しているのかもしれない。

168:1.5 (1844.4) 3. イエスは、ラーザロスを人間の生活に連れ戻すことを本当に躊躇った。姉妹は、本当にラーザロスを必要としたのが、イエスは、ラーザロスが、人の息子のもつ神性の力を全て誇示する最大の対象である結果に耐えなければならないこと、イエスが熟知しているその苛酷な迫害を経験するために友人を呼び戻さなければならないことを残念に思った。

168:1.6 (1844.5) 現在、我々は、興味深く教訓的な事実に関連させることが許される。この物語は、人間の事柄の中で明

らかに自然で通常の出来事として繰り広げられながらも、それには若干の、非常に関心ある側面的特徴がある。使者が日曜日にイエスの元に行き、ラーザロスの病気について知らせる一方、イエスの方は、「死なない」という知らせを送り、同時に、自らがベサニアに赴き「どこに埋葬したのか。」と姉妹に尋ねさえした。このすべてが、この人生の生き様と人間の心の限られた知識にあるじが従って進んでいることを示しているらしいとしても、イエスの専属調整者が、ラーザロスの死後、この惑星のラーザロスの専属調整者の無期拘留のための指示を出し、この指示が、ラーザロスの息絶えるちょうど15分前に出されたということを、宇宙に関する記録が明らかにしている。

168:1.7 (1844.6) ラーザロスが死ぬ前にさえ、イエスの神性の心は、彼がラーザロスを死から蘇らせると知っていたのか。我々は知らない。我々は、ただここに記録であることだけを知るに過ぎない。

168:1.8 (1844.7) 敵の多くは、イエスの愛情表現を嘲りたい思いで互いに言った。「この男をそれほどまでに思うのな

ら、何故ベサニアに来るのをこんなに遅らせたのか。皆が言うほどの者であるなら、なぜ親愛の友を救わなかったのか。愛する者達を救えないのなら、ガリラヤの見知らぬ者達を癒しても何になろうか。」そして、他の多くの方法で、かれらは、イエスの教えと働きを愚弄し軽んじた。

168:1.9 (1844.8) こうして、この木曜日の午後2時半頃、イエス自身の復活は、人間としての居住の束縛からの解放後に起こったので、ネバドンのミカエルの地球任務に関係ある全ての偉大な業、肉体化の間の偉大な神力の顕現を演じるための舞台が全て、ベサニアのこの小村に設定された。

168:1.10 (1845.1) ラーザロスの墓前に集う小さな一団は、ガブリエルの指揮の下に集合し、イエスの専属調整者の指示によりそのとき待機していた天の存在体の全系列の大合流団が、彼らの最愛の君主の命令実行にたいする期待と気構えとにわくわくしながら、すぐ近くにいることに気づかなかった。

168:1.11 (1845.2) イエスの「その石を除けなさい。」という命令の言葉で、集合する天の軍勢は、肉体の姿のラーザロスの復活劇を実行に移す用意ができていた。そのような復活の形は、モロンチアの形における必滅の創造物の復活の通常の技術をはるかに超える実行の困難を伴い、同時に、より多くの天の人格と宇宙仕組みのはるかに巨大な組織を必要とする。

168:1.12 (1845.3) 墓石を転がすように指示するイエスのこの命令を聞くと、マールサとマリアは、相反する感情に満たされた。マリアは、ラーザロスが生き返らされることを望んだが、マールサは、妹とある程度の信仰を共有しながらも、ラーザロスの姿がイエスや使徒、また友人達の前に出せるようなものでないだろうという恐怖に支配されていた。マールサは、「石を転がさなければならないのですか。弟は死んで既に４日にもなりますので、今では腐敗が始まっています。」と言った。マールサは、あるじの石の除去の要求の理由に確信がなかったことからもこう言った。彼女は、おそらくイエスは、ただラーザロスを最後に１目見たかったのだろうと思った。マールサの態度は、落ち着かず定まらなかった。皆が石を転が

すのを躊躇っていると、イエスが言った。「私は、最初にこの病気は死には至らないと言わなかったか。私は、約束を実現しに来なかったか。私が来てから、信じさえすれば神の栄光が見られると言わなかったか。なぜ、疑うのか。信じて従うのにどれだけ掛かるのか。」

168:1.13 (1845.4) イエスが話し終えると、使徒は、自発的な隣人の応援を得て、石をしっかり掴み墓への入り口からそれを転がしてのけた。

168:1.14 (1845.5) 死神の刀の先の胆汁の滴が、３日目の終わりまでには作用し始めるというのが、ユダヤ人の共通の信仰であったので、４日目には完全に効力を発揮するということであった。かれらは、人の魂は、３日目の終わりまで死体を生き返らせようとして墓の周りに長居しているかもしれないと考えた。しかし、かれらは、そのような魂は、４日目が始まる前に、精霊の去った住まいへ行ってしまったと堅く信じた。

168:1.15 (1845.6) 死者と死者の精霊の出発に関するこれらの信条と意見は、これが嘘偽りなく、「復活と命」である断言した者の直接の業による死者の生き返りの例であるこ

とを、そのときラーザロスの墓に居合わせた全ての者、その後に起ころうとしていたことを耳にするかもしれない全ての者の心の中に確実にすることに役立った。

2. ラーザロスの復活

168:2.1 (1845.7) ほぼ45人の死すべき者の仲間が墓前に立っている中で、埋葬洞穴の右下の窪みに横たえられている麻の包帯に巻かれたラーザロスの姿が微かに皆に見えた。これらの地球の被創造物が、固唾をのんで沈黙しそこに立つ間、天の存在体の広大な軍勢は、指揮官ガブリエルによって与えられる際の作業の合図に答える予定の持ち場に素早く移動した。

168:2.2 (1846.1) イエスは目を上げて言った。「父よ、私の要求を聞かれ、承諾していただき感謝しています。いつも私の言うことを聞いてくださることは分かっていますが、ここに共に立つ者のために、あなたが私をこの世界に送られたということ、また我々がしようとしていることにあなたが私と共に為されているということを彼等が知ることができるようにという理由から、私はこのように話

しております。」祈り終えると、イエスは、大声で「ラーザロス、出てきなさい。」と叫んだ。

168:2.3 (1846.2) これらの人間の見物人は、じっとしていたが、広大な天の全軍勢は、創造者の言葉に服従して統一された動作でいた。地球時間のちょうど12秒で、これまで生気のないラーザロスの姿が動き始め、やがて、静止していた石棚の縁に体を起こした。その身体は、死装束で覆われ、その顔は、一片の布で覆われていた。ラーザロスが皆の前に立ち上がると—生き返ると—「解いてやり帰らせなさい。」と、イエスは言った。

168:2.4 (1846.3) マーールサとマリアと使徒を除く全員が、家に逃げ帰った。かれらは、恐怖に青ざめ、驚きに圧倒された。何人かは残り、多くは、それぞれの家へと急いだ。

168:2.5 (1846.4) ラーザロスは、イエスと使徒に挨拶をして、死装束の意味と庭で目覚めた理由について尋ねた。マーールサがラーザロスに彼の死、埋葬、および復活について話す間、イエスと使徒は、片脇に寄った。ラーザロスには死んで眠りについている意識がなかったので、マーールサ

は、日曜日に死に、そのとき木曜日に生き返ったと説明しなければならなかった。

168:2.6 (1846.5) ラーザロスが墓から出て来るとき、イエスの専属調整者、そのときは、この地方宇宙の長が、そのとき待っていたラーザロスの元調整者に復活した男性の心と魂に再度住むようにとの指令を出した。

168:2.7 (1846.6) ラーザロスは、姉妹とイエスのところに行き、神に感謝をし、賛辞を捧げるためにあるじの足元に跪いた。イエスは、手を取り、ラーザロスを立ち上がらせて言った。「息子よ、君に起こったことは、より栄光の形で復活するものを除いて、この福音を信じる全ての者が経験するであろう。私は、復活したものであり、命である、と私が話した真実の生きている目撃者に、君はなるであろう。しかし今は、皆が家に入り、これらの物理的身体のために養分を取り入れよう。」

168:2.8 (1846.7) 彼らが家の方へ歩いていると、ガブリエルは、天の軍勢の臨時部隊を解散させるとともに、必滅の創造物は、人の姿をした肉体の死からユランチアにおいて最初で、最後の復活を記録を作成した。

168:2.9 (1846.8) ラーザロスは、起きたことをほとんど理解することができなかった。かれは、重病であったことは分かっていたが、寝込んでしまい目を覚ましたということだけを思い出すことができた。完全に無意識であったので、かれは、墓での４日間については決して何も言えなかった。死の眠りについている者に時間は実在しない。

168:2.10 (1846.9) この大仕事の結果、多くの者はイエスを信じたが、他の者はイエスを拒絶するために頑になるだけであった。翌日の正午までに、この話は、エルサレム中に広がった。多くの男女が、ラーザロスを見に、また話しをするためにベサニアに行き、そして不安を感じ、当惑したパリサイ派は、これらの新展開にいかに対処すべきかを決定できるように急いでシネヅリオン派の会合を召集した。

3. シネヅリオン派の会合

168:3.1 (1847.1) 死者から蘇ったこの男性の証言は、王国の福音の信者集団の信仰の教化においては役立ったが、イエスを滅ぼしその仕事を阻止するという決定を急がせること

を除いては、エルサレムの宗教指導者と支配者の態度には、殆ど、あるいは何の影響も与えなかった。

168:3.2 (1847.2) 翌日、金曜日の１時、シネヅリオン派は、「ナザレのイエスをどうするか。」という問いをさらに審議するために集った。2時間以上の論議と辛辣な討論の末、パリサイ派のある者が、イエスは全イスラエルにとり脅威であると主張し、裁判無しの、かつ先例を無視した死の決定をシネヅリオン派が正式に誓約をする決議を提示した。

168:3.3 (1847.3) この威厳のあるユダヤ人指導者の一団は、冒涜の罪とユダヤ人の神聖な法を無視する他の罪状によりイエスが逮捕され、告発されることを再三再四命じた。かれらは、イエスが死ななければならないとかつて断言したことはあったが、裁判に先立ってイエスの死を命じることを望んで記録にしたのはこの時が初めてであった。しかし、そのような前代未聞の行動が提案されたときシネヅリオン派の14人が一団となって脱会したことから、この決議は、採決されなかった。これらの脱会は、正式には約２週間効力はなかったが、その日シネヅリオン派

を脱退したこの14人の一団が、二度と協議の席に着くことは決してなかった。その後これらの脱会が実現すると、他の５人の成員がイエスに向かって好意的な気持ちを抱いていると信じられ、仲間に追い出された。シネヅリオン派は、これらの19人の追放で満場一致に近い結束で、イエスを裁判にかけ死においやる立場にあった。

168:3.4 (1847.4) ラーザロスとその姉妹は、翌週シネヅリオン派の前に召喚された。三人の証言を聞くと、ラーザロスが、死から蘇ったということに疑いの余地はなかった。シネヅリオン派の対応では、事実上ラーザロスの復活を認めはしたが、記録では、イエスによるこれと他のすべての驚きの業は、イエスが同盟関係にあると断言されたその悪魔の王子の力の精にする決定を伝えた。

168:3.5 (1847.5) これらのユダヤ人指導者は、イエスの驚きの業の力の源が何であろうとも、即刻イエスを阻止しなければ、間もなく全ての一般人が、彼を信じると確信させられた。そして、さらには、非常に多くの信者が、イエスを救世主、イスラエルの救出者と見なしているので、ローマ当局との重大な事態が起こるだろうと。

168:3.6 (1847.6) 高僧のカイアファスが幾度となく繰り返したユダヤの古い諺を最初に表現したのが、シネヅリオン派のこの同じ会合であり、それは、「共同体が崩壊するよりも1人が死ぬ方が良い。」であった。

168:3.7 (1847.7) この暗黒の金曜日の午後、かれは、シネヅリオン派の行動に関する警告を受けてはいたが、すこしも狼狽することなく、安息日の間ベサニア近くの村落ベスファゲで友人との休息を続けた。日曜日の朝早々、イエスと使徒は、事前の打ち合わせによりラーザロスの家に集合し、そしてベサニアの家族と別れ、ペラの宿営への旅に戻った。

4. 祈りへの答え

168:4.1 (1848.1) ベサニアからペラへの道中、使徒は多くの質問をした。あるじは、死者の復活の詳細を除いては、その全てに率直に答えた。そのような問題は、使徒の理解の範囲を超えていた。したがって、これらの問題についての議論は拒否したのであった。かれらは、秘かにベサニアを経ったので、自分達だけであった。この為、イエス

は、10人がすぐ先にある試練の日々に備えるであろうと考えて、多くの事について告げる機会を受け入れた。

168:4.2 (1848.2) 使徒は、心を刺激され、そして祈りとそれへの答えに関連させ最近の経験を話し合いかなりの時間を費やした。かれらは全員、「本当にこの病気は死には至らない」と、イエスが、フィラデルフィアでベサニアの使者にはっきりと言った言葉を思い起こした。だが、この約束にもかかわらず、ラーザロスは実際に死んだ。その日一日、かれらは、再三、祈りに対する答えのこの質問に関する議論に戻った。

168:4.3 (1848.3) 使徒の多くの質問に対するイエスの答えは、次の通りに纏められるかもしれない。

168:4.4 (1848.4) 1. 祈りは、無限者に接近する努力の限りある心の表現である。祈りをすることは、したがって、知識、知恵、限りある者の属性によって制限されなければならない。同様に、それへの答えは、無限者の展望、目的、理想、特権によって条件づけられねばならない。祈りをすることとそれへの精霊的な十分な答えの受け入れの間

での物質的な現象の完全な連続性の観測は、決してできない。

168:4.5 (1848.5) 2.祈りが明らかに未解答であるとき、遅れは、何らかの理由で大いに遅れているのであろうが、しばしばより良い答えを示唆する。イエスが、ラーザロスの病気は本当に死には至らない、と言ったとき、ラーザロスは既に死んで11時間が経過していた。精霊的な世界の優れた見方が、より良い答え、すなわち人の単なる心の祈りと比べて人の精霊の嘆願に合う答えが案出されたとき以外は、真摯な祈りに対し、答えは否定されない。

168:4.6 (1848.6) 3. 時の祈りは、精霊によって組成され、信仰で表現されるとき、それへの答えは、永遠だけに与えられることができるようにしばしば非常に広大で包含的である。限りある嘆願は、答えが、受領のための適切な容量の作成を待ち受けるために長い間延期されなければならないほどに、無限者をとても理解しているのである。信仰の祈りは、答えが、楽園だけで受けることができるように、とても広範囲にわたるかもしれない。

168:4.7 (1848.7) 4. 人間の心の祈りへの答えは、往々にして、その同じ祈る心が、不死の状態に達した後にだけ受け取り、認識することができるそのような性質のものである。物質的な存在体の祈りは、そのような個人が、精霊の域に進んだときにだけ答えられる。

168:4.8 (1848.8) 5. 神を知る人の祈りは、無知により非常に歪められ、迷信により非常に変形されているかもしれないので、それへの答えは、非常に好ましくないであろう。そのような時は、介在する精霊の存在は、答えが届くとき、そのような祈りを、嘆願者が自分の祈りへの答えであると全く気づかないように翻訳しなければならないのである。

168:4.9 (1848.9) 6. すべての真の祈りは、精霊的な存在に差し向けられ、そのようなすべての陳情は、精霊的な面で答えられなければならないし、そのようなすべての答えは、精霊的な現実から成らなければならない。聖霊者達は、有形物といえどもその精霊的な陳情に物質的な答えを与えることはできない。物質的な存在体は、「精神で祈る」ときに限って効果的に祈ることができる。

168:4.10 (1849.1) 7. 精霊の生まれであり、信仰によって養育されなければ、いかなる祈りも答えを期待することはできない。あなたの真摯な信仰は、あなたの信仰が、描くその至高の叡知とその神性の愛に従って祈るそれらの存在体をつねにやる気を起こさせるように、あなたが、実質的にその祈りの聞き手にあなたの陳情に答える完全な権利を事前に与えたことを意味する。

168:4.11 (1849.2) 8. 親に思い切って請願するとき、子供は、いつもその権利内にいる。そして、親の優れた知恵が、子の祈りの答えを遅らせるか、変更するか、分けるか、超えられるか、または精霊的な上向の別の段階へと延期されるかを命じるとき、親は、いつも未熟な子供への親の義務の範囲内にいる。

168:4.12 (1849.3) 9. 精霊への渇望の祈りを躊躇ってはいけない。あなたの嘆願への答えを受けるということを疑ってはいけない。これらの答えは、実際の宇宙到達のそれらの未来の精霊的な段階のあなたの成就を待ち受けて、貴方の初期の時期を失した嘆願に対して長く待ちうけている答

えを認識し対応することが可能になるこの世界、あるいは他の世界で蓄積されるであろう。

168:4.13 (1849.4) 10. すべての本物の精霊からの嘆願は、答えが確実である。求めよ、さらば、与えられるであろう。しかし、あなたは、時間と空間の進歩的な被創造物であるということを心すべきである。それ故、多様な祈りと嘆願への完全な答えの個人の受け入れの経験において、時間と空間の要素について絶えず考慮しなければならない。

5. ラーザロスのその後

168:5.1 (1849.5) ラーザロスは、シネヅリオン派がイエスの死を命じたという警告を受けたとき、真摯な信者の多くと好奇心の強い数多くの個人にとり大変に興味のある中心地であるベサニアの家に、イエスの磔刑の週まで留まった。ユダヤ人の支配者達は、イエスの教えのこれ以上の波及を制止すると決意し、もしラーザロスが、驚きの業のまさにその絶頂を表示する者が、生きて、そして、イエスが死から蘇らせたという事実の証明をするならば、イエスを死刑にしても無駄であるとよく判断した。すで

に、ラーザロスは、彼等からの痛烈な迫害を経験していた。

168:5.2 (1849.6) したがって、ラーザロスは、ベサニアの姉妹に慌しい別れを告げ、イェリーホからヨルダンを横断して逃れ、フィラデルフィアに着くまで決して長い休息をとらなかった。ラーザロスは、アブネーをよく知っており、ここなら、邪悪なシネヅリオン派の殺意の陰謀の心配がないと感じた。

168:5.3 (1849.7) このすぐ後、マールサとマリアは、ベサニアの土地を処分して、ペライアで兄弟と合流した。その間、ラーザロスは、フィラデルフィアで教会の会計係になっていた。かれは、パウーロスとエルサレム教会との論争においてアブネーの強い支持者となり、結局、若いときにベサニアで自分を奪い去った同じ病気で67歳で死んだ。

論文 169
ペラでの最後の教え

169:0.1 (1850.1) 3月6日、月曜日の夜遅く、イエスと10人の使徒は、ペラ宿営所に到達した。これは、そこでのイエス

滞在の最後の週であり、イエスは、群衆に教えたり、使徒に指示したりと非常に活発であった。かれは、毎日午後は群衆に説教をし、夜は、宿営所に住む使徒と、それに弟子の中でも上級の数人の質問に答えた。

169:0.2 (1850.2) ラーザロスの復活に関する情報は、あるじの到着2日前に宿営に達しており、会衆は、待ち遠しい思いでいた。5,000人への給食以来、人々の想像力をそそるほどの何事も起きてはいなかった。そのため、イエスがこの短い1週間をペラで教え、それから、エルサレムにおける最後の週の決定的かつ悲惨な経験につながる南ペライアへの旅を計画したのは、王国の公への活動の第二の局面の真っ最中であった。

169:0.3 (1850.3) パリサイ派と主要な聖職者達は、告訴を明確にし、告発を具体化し始めた。かれらは、あるじの教えに次の根拠に基づいて反対した。

169:0.4 (1850.4) 1. 居酒屋の主達と罪人達の友人である。不敬な者達を受け入れ、それらの者と食事さえする。

169:0.5 (1850.5) 2. 冒**涜**者である。神について我が父のように語り、神と同等であると思っている。

169:0.6 (1850.6) 3. 法律違反者である。安息日に病**気**を治し、多くの他の方法でイスラエルの神聖な法を無視する。

169:0.7 (1850.7) 4. **悪魔**と同盟している。驚くべき業を**為**し、**悪魔**の王子ベエルゼブブの力により見た目の奇跡を起こしているようである。

1. 迷える息子の寓話

169:1.1 (1850.8) 木曜日の午後、イエスは、「救**済**の恩**恵**」について群衆に話した。この**説教**の中で、迷える羊と失われた硬貨の話を再び語り、次には、お**気**に入りの放蕩息子の寓話を加えた。イエスは言った。

169:1.2 (1850.9) 「人は、神を求める—**真実**を**捜**し求めるべきであると、サミュエルからヨハネまでの予言者が訓戒してきた。いつも、彼らは、『主を求めよ、お**会**いできる間に。』と言った。全てのそのような**教**えが心に取り入れられなければならない。しかし、私は、あなたが神を見つけようとする間、神が、同**様**にあなたを見つけようと

しているということを教えに来たのである。いなくなった1頭の羊を見つけに行く間、99頭の羊を囲いに残し、その迷える羊を見つけたとき、それを肩に乗せ、優しく囲いまで運び戻した善良な羊飼いの話を、私は、何回となくしてきたではないか。そして、善良な羊飼いは、迷った羊が囲いに戻されると友人を呼び集め、失われた羊の発見を喜んでくれるように言ったのを、あなたは思い出す。私は、1人の罪人が悔い改めるなら、99人の悔悟を必要としない正しい人々にもまさる喜びが天にはあるのだともう一度言っておく。魂が失われるという事実は、天の父の関心を増加させるばかりである。私は、父の言いつけを実行するためにこの世界に来た。そして、人の息子は、本当に居酒屋の主や罪人の友であると言われてきた。

169:1.3 (1851.1) 「あなたは、神の受理は、悔悟の後、そして、あなたの犠牲と悔悟の全行為の結果として起こると教えられてきたが、父は、あなたが悔悟する前にさえあなたを受け入れ、大いに喜んであなたを見つけ、息子性の王国と精霊的な進歩の囲いに連れ戻しに息子とその仲間を行かせるのであるということをはっきり告げておく。あ

なた方は皆、失われた羊のようなものであり、私は、そのような失われた者を探し、また、救いに来たのである。

169:1.4 (1851.2) 「そして、10枚銀で装飾用の首飾りを作らせ、その1枚を失くし、明かりを点し、一生懸命に家を掃き、いかに無くなった銀を探し続けたかという婦人の話もまた覚えておくべきである。そして彼女は、なくした硬貨を見つけるなり、『ともに喜んでください。失くした銀貨が見つけましたから。』と言って、友人と隣人を呼び集めた。そして私は、父の囲いに戻る1人の罪人の上の天の天使達の集いには、常に喜びがある、と繰り返し言っておく。そして、父とその息子は、迷える者達を捜しに行き、そしてこの探索において、我々は、迷える者、すなわち救済を必要としているすべての者を探すための勤勉な努力において、援助を与えることのできる全影響力を駆使するということを、私はあなたに銘記させるために話すのである。このように、人の息子は、道に迷う羊を捜しに荒野に出かけるが、家の中で失われれた硬貨も捜すのである。羊はつい逸れ、硬貨は時という埃に覆われ、人の蓄積物によって隠される。

169:1.5 (1851.3) そして今度は、あなたに、故意に父の家を出て、異郷の地へと去り、そこで多くの苦難に陥った裕福な農夫の軽はずみな息子の話がしたい。あなたは、羊がうっかり道に迷ったのを思い起こすが、この若者は、家を計画的に出た。それは、こうであった。

169:1.6 (1851.4) ある人には2人の息子がいた。下の息子は、気楽で、呑気で、いつも座興を求め義務を怠り、一方上の息子は、真面目で、地味で、勤勉で、進んで責任を担った。さて、この2人の兄弟は、余り気が合わなかった。二人は、常に喧嘩し、口論していた。下の若者は、陽気で活発であるが、怠惰でいい加減であった。上の息子は、着実で、勤勉で、同時に自己中心で、無愛想で、自惚れが強かった。若い方の息子は、遊びは楽しんだが、仕事は避けた。上の方は、仕事に専念したが、滅多に遊ばなかった。この関係は、全く相容れないものとなり、下の息子は、父の元に行き遂に言った。『お父さん、あなたの財産のうち私がいただく分である1/3を下さり、私自身の幸運と富を求めに世間に出かけて行くことを許してください。』若者が家で、また兄とのことでいかに

愁いていたかを知る父は、この要求を聞くと財産のうちから若者の割り当て分を与えた。

169:1.7 (1851.5) 「青年は、数週間の内に自分の全資金を集め、遠い地へと出発したが、実入りが良く、同時に楽しいことは何も見つからず、放蕩生活に全相続分を浪費した。彼が全てを使い果たしたとき、その地では長期の飢饉が起こり、かれは、食べることにも窮した。そんな具合で、かれは、飢えに苦しみ、窮状が酷くなってきたとき、その土地の住民の一人に雇われ、この人は、豚の餌やりにとに彼を原っぱに行かせた。青年は、豚用の穀類の殻で腹を満たしたいと思うほどであったが、誰も彼には何も与えようとはしなかった。

169:1.8 (1852.1) ある日、非常に空腹であったとき、青年は、我に返って言った。『父には食べ物があり余っている使用人が大勢いるというのに、私はここ他国で豚に餌を与えながら飢えで死ぬところである。私は、立ち上がって父の元に行き、お父さん、私は天とあなたに対し罪を犯しました。最早あなたの息子と呼ばれる資格はありません。どうか、せめて使用人の一人にしてください、と言

おう。』青年は、こう決めると立ち上がり父の家へと飛び出した。

169:1.9 (1852.2) さて、この父は、息子のことで非常に深く悲しんでいた。かれは、軽はずみではあるが、愉快な若者がいなくて淋しく思っていた。この父は、この息子を愛しく思い、いつもその帰還に目を配っていたので、父は、息子が自分の家に近づいた日、まだ遠くにいるのに息子を見て、哀れに思い走り寄り、情愛深い言葉を掛け抱きしめて口づけをした。このようにして二人が会ったあと、息子は、父の涙ぐんだ顔を見上げて言った。『お父さん、私は天とあなたに対し罪を犯しました。最早あなたの息子と呼ばれる資格はありません。』—しかし、若者は、大喜びの父が、この時までには駆け寄ってきた使用人達に話していたので心の思いを言い終える機会がなかった。父は、『さあ、私がとっておいた最上の着物を早く持って来なさい。そして息子にそれを着せ、指輪をさせ、また履物をとって来なさい。』

169:1.10 (1852.3) それから、幸福な父は、足を痛めて疲れきっている若者を家に案内してから使用人に呼びかけた。

『肥えた子牛を引いてきて屠りなさい。食べて祝おう。死んでいたこの息子が、生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』そこで皆は、息子の再起を祝うために父親の周りに集まった。

169:1.11 (1852.4) 「この頃、皆が祝いをしていると、上の息子は、畑での一日の仕事から戻り、家の近くにくると音楽や踊りの音が耳に届いた。そして、裏口に行くと、かれは、使用人の一人を呼びこの祭り騒ぎの訳を問い質した。そこで、使用人が、『長らく行方不明であったあなたの弟が帰って来られ、父上が、無事な帰りを祝うために肥えた子牛を殺しました。父の家に戻られた弟に挨拶し、迎えることができるようにお入りください。』と言った。

169:1.12 (1852.5) 「しかし、兄はこう聞くと、非常に傷つき立腹し、家に入ろうとしなかった。弟の歓迎に対する兄の憤りを聞くと、父は彼に願いに外に出た。しかし、上の息子は、父の説得に折れようとせず、答えて言った。『私は、あなたの些細な言いつけにも一度も背くことなく何か年も仕えてきましたのに、友人と楽しむために子山羊

一頭もくださったことはありません。私は、何年もの間あなたのお世話をするためにここに留まってきましたが、私の忠実な働き振りを祝ってはくれませんでした。でも、遊女どもとあなたの身代を浪費したこの息子が帰ってくると、あなたは、急いで肥えた子牛を殺させ彼のために祝っています。』

169:1.13 (1852.6) この父親は、息子の両方を本当に慈しんでいたので、上の息子を説き伏せようとした。『しかし、息子よ、お前は私とずっといたし、私の持っている物は全部お前のものである。友と大はしゃぎしようと思えば、いつでも子山羊を得ることができたではないか。それにしても、弟が帰ってきたのであるから、私と共に喜び陽気にするのは、当然のことにすぎない。考えてみなさい、息子よ、あなたの弟は、いなくなっていた。かれは、生きて我々のもとに戻ってきたではないか。』」

169:1.14 (1853.1) これは、今までイエスが天の王国への入り口を探す者全てを受け入れる父の気持ちを聞き手に印象づける全ての寓話の中で最も感動的で効果的な1つであった。

169:1.15 (1853.2) イエスは、同時にこの３つの話をすることを非常に好んだ。人が、人生の道から意図せずに逸れるとき、父は、そのような迷える者を心に留めて忘れることなく、群れの本物の羊飼いである息子と迷える羊を探しに出かける、ということを教えるために、イエスは、迷える羊の話を提示した。次にかれは、神が、混迷し、さもなければ、人生での物質上の心配事や物質の蓄積によって精霊的に目がくらんでいる者達をいかに徹底的に探し求めているかということを例証するために、家の中でなくした硬貨の話をするのであった。それから、父の家と心に迷える息子をいかにものの見事に歓迎するかということを示すために、この迷える息子、帰宅する放蕩者の寓話を加えるのであった。

169:1.16 (1853.3) 幾年にもわたる教えの中で、イエスは、幾度となくこの放蕩息子の話をした。この寓話と善良なサマリア人の話は、父の愛と人の隣人らしさを教えるに当たりイエスが特に好む手段であった。

2. 抜け目のない執事の寓話

169:2.1 (1853.4) ある夕方、シーモン・ゼローテースは、イエスの声明の1つについて注解して、「あるじさま、今日あなたが話された中で、この世の子供の多くは、不正の富と友達になるのに巧みであるので王国の子供よりも賢明であると今日言われたのは、どういう事でしたか。」と聞いた。イエスは答えた。

169:2.2 (1853.5) 「王国に入る前、あなた方の一部は、仕事仲間への対応において非常に抜け目がなかった。不当で、度々不公平であったとしても、それでもなお、あなたは、自分の現在の利益と将来の安全のみを考慮して仕事を行ったという点において慎重で明敏だったのである。あなたは、同様に、天における将来の宝物の楽しみが確かに蓄積されると共に、王国での生活が、現在の喜びをもたらすように采配すべきである。自己のために働くとき、自分のための儲けの増大にとても勤勉であるならば、いま人の兄弟愛の使用人と神の執事なのに、王国のために魂を獲得する際に、なぜあまり勤勉さを発揮してはいないのか。

169:2.3 (1853.6) 「あなた方は皆、抜け目のない、だが不当な執事を召し抱える金持ちの話から教訓を学ぶことができるのである。この執事は、利己的な利得のためにあるじの顧客を圧迫してきたばかりか、あるじの資金をも直接に無駄にし浪費した。この全てが、とうとう主人の耳に達したとき、あるじは、執事を召喚してこれらの噂の意味するところを尋ねて、即座に執務報告を提出し、あるじに関する事務を別の者に引き渡す準備をしなければならないと命じた。

169:2.4 (1853.7) そのとき、この不誠実な執事は、独り言を始めた。『「どうしようか、この執事の職を失おうとしている。土を掘るには力がないし、物乞いをするのは恥ずかしい。この執事職を辞めさせられるとき、あるじと取引きのある者達の家に歓迎されることを確実するであろう。』そこで、主人の負債者者の一人一人を呼び出し、『私の主人にどれだけの負債がありますか。』と最初の者に言った。『油100樽です』と答えた。すると、執事は、『あなたの蝋板の証書を取り、早く座り、それを50樽に書き変えなさい。』と言った。次に、もう一人の負債者に言った。『負債はどれだけですか。』『小麦100石で

す。』と返答した。これに対し、『あなたの証書を取り、80石と書き変えなさい。』と言った。執事は、他の多くの負債者にもこのようにした。この不正直な執事は、解雇後の自分のためにこのようにして友人を作ろうとした。後にこれを知った主人でもある雇い主は、不誠実な執事が、前途の必要性と逆境に備えようとした態度に少なくとも機敏さを示したということを認めざるをえなかった。

169:2.5 (1854.1) 「そして、それは、このように、この世の息子達が、光の子供達よりも未来に備えて一層の知恵を時おり示すということである。私は、天で宝物を得ようとしていると表明するあなた方に言う。不正の富と親しくなる者達から学び、同様に、この世でのすべてが破綻するとき、永遠の居住地に嬉々として受け入れられるために正義の力で永遠の親交を結べるようにあなたの人生を導きなさい。

169:2.6 (1854.2) 「私は、また、少事に忠実な者は、大事にも忠実であるが、少事に不忠実な者は、大事にも不忠実であるということを断言する。あなたが、世事において先見

と保全を示していなかったとしたら、天の王国の真の富の執事の職を任されるとき、忠実で、慎重であり得ることをどうして望むことができるであろうか。あなたが、もし良い執事でなく、また忠実な銀行家でなく、他人に属するものに忠実でないらば、誰が、あなた自身の名前ですばらしい宝物をあなたに与えるほどに愚かであろうか。

169:2.7 (1854.3)「私は、誰も2人のあるじに仕えることはできないと繰り返し断言する。一方を嫌い、他方を愛するか、さもなくば、一方に親しみ、他方を疎んじるからである。人は、神と富に仕えることはできない。」

169:2.8 (1854.4) 居合わせたパリサイ派は、これを聞くと、富の獲得に大変に執着しているので冷笑し、揶揄しはじめた。これらの友好的でない聞き手は、イエスを無益な議論に引き込もうとしたが、イエスは、敵との討論を拒否した。パリサイ派が、仲間内での口論し始めると、その喧しい話し声は、そこら辺で宿営している群衆の多くの目を引きつけた。そして、これらの群衆が互いに論議し

始めると、イエスは睡眠のために引き下がり、天幕に行った。

3. 金持ちと乞食

169:3.1 (1854.5) 会議が騒がしくなり過ぎたとき、シーモン・ペトロスは、立ち上がって責任を引き受けて言った。「諸君、同胞の皆さん、自分達でこのように論争し合うのはよくない。あるじは、話し終えました、その言葉をじっくり考えた方が良いでしょう。そして、これは、あるじが宣言した新しい教義ではない。あなた方は、金持ちの男と乞食に関するナザレの寓話を聞いたことはないのですか。洗礼者ヨハネが、富に執着し、不正な富を貪る人々への警告であるこの寓話を大喝するのを我々の一部は、聞いた。そして、この古い寓話は、我々が説く福音と一致はしないが、天の王国の新たな光を理解するそのような時まで、あなた方全員がその教訓を心に留めおく方が賢明である。ヨハネの話の筋は、次のようなものであった。

169:3.2 (1854.6) 「紫の衣や立派な麻を着て、毎日陽気に華やかに暮らしているディーヴェスというある金持ちの男がい

た。ラーザロスというある乞食がおり、かれは、この金持ちの男性の門前に横たわり、傷傷だらけでこの金持ちの食卓からのおこぼれで飢えを凌ごうと望んでいた。実に犬さえ来て、そのでき物を舐めるほどであった。そして、乞食が死に、天使達にアブラーハームの懐で休むために連れていかれた。それから程なく、この金持ちの男も死に、壮大な儀式と王侯のような華麗さで葬られた。金持ちがこの世を出発し、冥界で目覚め、激しい痛みに気づき、目を上げると、遠くにアブラーハームとその懐にいるラーザロスが見えた。そこで、ディーヴェスは、大声で泣き叫んだ。『父アブラーハームよ、私に慈悲をお示しください。ラーザロスをお遣わしになり、その指先を水で濡らし私の舌を冷やさせてください。私は罰で苦しみに悶えています。』すると、アブラーハームが返答した。『息子よ、お前が良いものを楽しむ一方で、ラーザロスは同様に悪に苦しんでいた生前を思い起こすべきである。だが、お前が苦しみ悶えている間、ラーザロスが慰められるので、現在、このすべては、すっかり変わっている。そればかりか、我々とお前の間には大きな谷間があり、我々はお前の方に行けないばかりか、お前

は我々の方にこれない。』すると、ディーヴェスは、アブラーハームに言った。『私には5人の兄弟がおり、こんな苦しい所に来させたくありませんので、願わくば、ラーザロスを父の家に遣わせそのように報告させてください。』だが、アブラーハームは、『息子よ、彼らにはモーシェと予言者がついている、兄弟達には彼らの言うことを聞かせなさい。』と言い、そして、ディーヴェスが答えた。『いいえ、いいえ、父アブラーハーム、死者の中から一人行ってくれる方が、兄弟達は悔い改めるでしょう。』そこで、アブラーハームが言った。『モーシェと予言者の言うことを聞かないのなら、例え死人の中から蘇る者がいたとしても、兄弟達はその勧めを聞き入れはしないであろう。』」

169:3.3 (1855.1) ペトロスがナザレの兄弟愛のこの古代の喩え話を披講し終えると、群衆が静まったので、アンドレアスは、立ち上がり夜に備えて皆を解散させた。使徒と弟子の双方は、頻繁にディーヴェスとラーザロスについての寓話に関してイエスに質問をしたが、かれは、決してその評釈に応じなかった。

4. 父とその王国

169:4.1 (1855.2) イエスは、神の王国の設立を宣言する使徒に、天の父が王ではないと説明するのにいつも苦労した。イエスが地球に住み、人の姿で教えていたとき、ユランチアの人々は、国政に関しては王と皇帝について大部分を知っており、ユダヤ人は、神の王国の接近を長い間考えていた。これらと他の理由により、あるじは、人の精霊的な兄弟愛を天の王国として、そしてこの精霊の兄弟愛の長を天の父と名称づけるのが最善と考えた。イエスは、決して父を王と称しなかった。使徒との気のおけない話では、かれは、自分自身を人の息子として、また、彼らの兄として言及した。かれは、すべての追随者を人類の使用人として、そして王国の福音の使者として描写した。

169:4.2 (1855.3) イエスは、天の父の人格と属性に関して使徒に系統的な授業を決してしなかった。かれは、人に父を信じることを決して求めなかった。かれは、人がそうすることを当然のことと思った。イエスは、父の実在証明の議論をすることによって決して自分を卑下しなかった。父に関する教えでは全て、自分と父が1つであること、息子を見た者は父を見たということ、息子と同様に、父

は万物について知り、息子だけが、そして、息子が父を明らかにしようとする者だけが、本当に父を知っているということ、息子を知る者は父をも知るということ、そして、父は、自分達の結合した特質を明らかにし、共同の仕事を示すために彼を世界に送ったということを宣言の中心に置いた。かれは、サマリア女性にヤコブの井戸で「神は精霊である」と宣言したとき以外、父に関して他の表明を決してしなかった。

169:4.3 (1856.1) 人は、その教えによって学ぶのではなく、イエスの人生の神性を観測することによって神について学ぶ。あるじの人生から、精霊的で神性である現実、真実であり永遠である真理を察知する能力の基準を表す神の概念を各自が、自分のものにすることができる。無限者が、ナザレのイエスの人生の有限の経験が、時空の人格に焦点が合わせられる場合を除き、有限の者は、無限の者の理解をすることは決して望むことはできない。

169:4.4 (1856.2) イエスは、現実の経験でのみ神を知ることができるということをよく知っていた。かれは、単なる心の教育では決して神を理解することはできない。イエス

は、使徒が、決して神を完全に理解することはできないが、ちょうど人の息子を知ったように、確実に彼を知ることができるということを使徒に教えた。人は、イエスが言ったことによってではなく、イエスが何であったかを知ることによって神を知ることができる。イエスは、神の顕示そのものであった。

169:4.5 (1856.3) ヘブライ語聖書の引用の際は別として、イエスは、２つの名前だけによって神に言及した。神と父。そして、あるじが神として父に言及するとき、ユダヤ部族の神の進歩的概念を表したヤハウェという言葉ではなく、複数神(三位一体)を意味するヘブライ語を通常用いた。

169:4.6 (1856.4) イエスは、決して父を王と呼ばなかったし、また王国回復のユダヤ人の望みと来るべき王国のヨハネの宣言は、彼が提案した精霊的兄弟愛を天の王国と呼ばざるを得なかったことを大変残念に思った。1つの例外—「神は精霊である」という宣言を除いては、イエスは、楽園の第一根源と中枢との自己の直接的な関係を説明するにあたり決して神性に言及しなかった。

169:4.7 (1856.5) イエスは、神性の概念を明示するために神という語を、また神を知る経験を明示するために父という語を用いた。神を明示するために父という語を用いるとき、それは、その最大で可能な限りの意味で理解されなければならない。神という語は、定義し得ないが故に、父についての無限の概念を表し、一方、父という用語は、部分的な定義が可能であり、死を免れない存在であると同時に人間と交わることから神性の父に関する人間の概念を表すために用いることができる。

169:4.8 (1856.6) ユダヤ人にとり、エロヒームは、神の中の神であったが、ヤハウェは、イスラエルの神であった。イエスは、エロヒームの概念を受け入れ、この最高の存在体を神と呼んだ。かれは、民族的な神、ヤハウェの概念に代えて、神の父性と人間の世界的兄弟愛の考えを伝えた。かれは、神格化された民族的な父ヤハウェの概念を全人類の子の父、個々の信者の神性の父の考えに高めた。さらに、かれは、宇宙のこの神と全人類のこの父は、同一の楽園の神性であることを教えた。

169:4.9 (1856.7) イエスは、自分が人間の姿のエロヒーム(神)の顕現であると決して主張しなかった。かれは、自分がエロヒーム(神)の世界への啓示であるとは決して断言しなかった。かれは、自分に会った者が、エロヒーム(神)を見たとは決して教えなかった。しかし、かれは、自分を肉体での父の啓示であると宣言し、自分を見たものは誰でも父を見たのだとはっきり言った。かれは、神の息子として、父だけの代理をすると主張した。

169:4.10 (1857.1) 実に、かれは、エロヒーム神の息子でさえあった。しかし、そのような啓示が人間に分かる限りにおいて、かれは、必滅の肉体の姿で、神の必滅の息子達に父の特質の描写に制限して顕示することを選んだ。楽園の三位一体の他の人称の特質に関しては、我々は、彼らが、肉体化した息子、ナザレのイエスの人生における個人的肖像画法で明らかにされてきた全く父のようであるという教えに満足しなければならない。

169:4.11 (1857.2) イエスは、地球での人生において天なる父の本質を明らかにはしたが、彼についてあまり教えはしなかった。実際、2つのことだけを教えた。自分の中にい

る神は精霊であるということと、自身の創造物との関係のすべてのにおいて自分が父であるということ。この夜、かれは、「私は父から発現し、この世界にやって来た。再び、この世界を去り父の元に行くのである。」と宣言をしたとき、イエスは、神と自己との関係の最後の表明をしたのであった。

169:4.12 (1857.3) だが、注目しなさい。イエスは、決して「誰でも私の声を聞いた者は神を聞いた。」とは言わなかった。が、「私を見た者は父を見た。」とは言った。イエスの教えを聞くことは、神を知っていることとは同じではないが、イエスを見ることは、それ自体が、魂への父の啓示の経験というものである。宇宙の神は、遠く離れた創造を統治するが、人の心の中に住むためにその精霊を送り出すのは、天の父である。

169:4.13 (1857.4) イエスは、見えない方を物質的な被創造物に見えるようにする人間類似の精霊的なレンズである。イエスは、天の軍勢さえ敢えて完全に理解することのできない無限の属性の存在を人に知らせる肉体の姿をした人の兄である。しかし、このすべては、個々の信者の個人

的経験でなければならない。精霊である神は、精霊的な経験としてのみ知ることができる。精霊の領域の神性の息子は、物質界の限りある息子に神を、父としてのみ、明らかにすることができる。人は、父として永遠なる者を知ることができる。人は、宇宙の神として、全生存体の無限なる創造者として、神を崇拝することができる。

論文 170
天の王国

170:0.1 (1858.1) 3月11日、土曜日の午後、イエスは、ペラでの最後の説教をした。これは、天の王国についての十分かつ徹底した議論を含む公への宣教の中で注目に値する演説に属するものであった。かれは、自分が互換がきくものとして贈与任務の名称に使用した「天の王国」と「神の王国」の用語の意味と重要性に関し、使徒と弟子達の心の中の混乱に気づいていた。用語、天の王国そのものは、地球の王国とこの世の政治とのすべての関係から切り離したものを表すに足りるはずであったが、そうではなかった。ユダヤ人のこの世の王についての考えは、一世代で除去するにはその心にあまりにも深く根ざしてい

た。そのために、イエスは、初めのうちは、この長く養われてきた王国の概念に公然とは反対しなかった。

170:0.2 (1858.2) この安息日の午後、あるじは、天の王国についての教えをはっきりさせようとした。かれは、あらゆる観点から問題を検討し、用語が使用された多くの異なった観念を明らかにする努力をした。この報告では、以前イエスがした数多くの声明に加え、また、同日の夜の議論の中での使徒だけに与えた幾つかの所見を含んで詳述するつもりである。我々は、また、後のキリスト教会に関連して、王国の考えのその後の発展に関しても幾つかの注釈を確実にするつもりである。

1. 天の王国の概念

170:1.1 (1858.3) イエスの説教の詳述に関し、ヘブライ語聖書を通して天の王国の二つの概念がある点に留意する必要がある。予言者達は、次のように神の王国を提示した。

170:1.2 (1858.4) 1. 現時点の実現、また、

170:1.3 (1858.5) 2. 未来の希望として—救世主の出現により王国が完全に実現される時。これは、洗礼者ヨハネが教えた王国の概念である。

170:1.4 (1858.6) イエスと使徒は、そもそもの初めから両方の概念を教えた。心に留めおかれるべき王国の他の2つの考えがあった。

170:1.5 (1858.7) 3. 超自然の源と奇跡的な正式の開始からくる世界的、かつ超越的な王国に関する後のユダヤ人の概念。

170:1.6 (1858.8) 4. 世の終わりに際し、悪に対する勝利の成就として、神の王国の設立を描くペルシア文化の教え。

170:1.7 (1858.9) 地球上のイエスの出現直前に、ユダヤ人は、王国に関するこれらのすべての考えを、ユダヤ人の勝利の時代、地球の神の最高の支配である新しい世界の永遠に続く時代、全人類が、ヤハウェを崇拝する時代を設立するために救世主到来に関する黙示の概念に結びつけて混同した。天の王国のこの概念を採用するに当たり、イエスは、最も重大で、また頂点に達しているユダヤ人とペルシアの両宗教の遺産を充用することを選んだ。

170:1.8 (1859.1) それがキリスト紀元の世紀を通して理解され、しかも誤解されているように、天の王国は異なる４集団の考えを含んだ。

170:1.9 (1859.2) 1. ユダヤ人の概念

170:1.10 (1859.3) 2. ペルシア人の概念

170:1.11 (1859.4) 3. イエスの個人の経験の概念—「人の内なる天の王国」

170:1.12 (1859.5) 4. 世界に銘記させようとしたキリスト教創設者と公布者達の持つ複合的かつ混乱した概念。

170:1.13 (1859.6) イエスは、公への教えに際し、異なる時に、そして異なる状況において、「王国」に関する多くの概念を示したように見えるかもしれないが、使徒には、地球の仲間との、そして天の父との関係における個人の経験を迎え入れるものとしての王国を常に教えた。王国に関係する締め括りの言葉は、常に「人の内に王国がある」であった。

170:1.14 (1859.7) 用語「天の王国」の意味に関する何世紀にもわたる混乱は、3つの要因にある。

170:1.15 (1859.8) 1. イエスと使徒によるその作り直しにおける様々な進歩的な段階を経るにつれ、「王国」の考えを観測することによって引き起こされる混乱。

170:1.16 (1859.9) 2.ユダヤ人から非ユダヤ人の土壌への早期のキリスト教移植と不可避に関係した混乱。

170:1.17 (1859.10) 3. キリスト教が人としてのイエスを中心に組織化された宗教になったという事実に固有の混乱。王国の福音は、ますますイエスに関する宗教になった。

2.王国についてのイエスの概念

170:2.1 (1859.11) あるじは、天の王国が、神の父性の真実と人の兄弟愛の関連事実の二元的概念に始まらなければならないし、それに集中しなければならないことを断言した。イエスが宣言したそのような教育の受け入れは、動物的な恐怖の古い束縛から人を解放し、同時に、次のような精霊的な自由の新しい人生の付与で人間の生活を豊かにするであろう。

170:2.2 (1859.12) 1. 新たな勇気と増大された精霊的な力の所有。王国の福音は、人を解放し、永遠の命へ勇気をもって望むように奮い立たせることであった。

170:2.3 (1859.13) 2.福音は、すべての人への、貧乏人にさえの、新たな自信と真の安らぎに関する言葉を伝えた。

170:2.4 (1859.14) 3. それは、道徳価値の新基準、人間の行為を測定するための新しい倫理的な物差しがそれ自体にあった。それは、人間社会の新しい秩序から来る理想を描いた。

170:2.5 (1859.15) 4. それは、物質と比較しての精霊的なものの優位性を教えた。それは、精霊的な現実を称賛し、超人的な理想を発揚した。

170:2.6 (1860.1) 5. この新しい福音は、真の生き方の目標として、精霊的な到達を示した。人間の人生は、道徳的な価値と神の威厳の新しい付与を受けた。

170:2.7 (1860.2) 6. イエスは、永遠の現実が、この世での正しい努力の結果(報酬)であると教えた。地球での死を免れな

い人の滞在は、貴い目標の認識の結果として起こる新しい意味をもたらした。

170:2.8 (1860.3) 7. 新しい福音は、人間の救済が、神の救われた息子達の限りない奉仕からくる未来の目標で成し遂げられ、実現されるために遠大な神の目的の顕示であることを断言した。

170:2.9 (1860.4) これらの教えは、イエスが教えた王国の拡大された考えを含んでいる。この重要な概念は、洗礼者ヨハネによる王国の基本的な教えの中にはほとんど含まれず、しかも混乱していた。

170:2.10 (1860.5) 使徒は、王国に関してあるじの発言の真の意味を理解することができなかった。新約聖書に記されているように、イエスの教えのその後の歪みは、福音著者達の概念がイエスがほんの短い時間だけ世界を離れていたという確信でに色付けされていることにある。彼が力と栄光で王国を樹立するためにすぐに戻るだろうということ—彼が、人間の姿で自分達と共にいる間に彼らが抱いていたようなちょうどそのような考え。しかし、イエスは、王国設立をこの世界への帰還の考えと繋ぎ合わせ

はしなかった。何世紀もが「新時代」の登場なくして過ぎていったということは、いかなる点においてもイエスの教えと調和している。

170:2.11 (1860.6) この説教に表現される大きな努力は、天の王国の概念を神の意志を行うという考えの理想に変換する試みであった。あるじは、長い間、「王国は来る。あなたの意志が為される。」と祈ることを追随者に教えた。そして、このとき、かれは、より実際的な同等な物、つまり神の意志の代用となるように神の王国という語の使用の断念を説得しようとした。しかし、成功しなかった。

170:2.12 (1860.7) イエスは、王国、王、臣下についての考えを、天の家族、天なる父、仲間への楽しく自発的な奉仕と父なる神への崇高かつ知的な崇拝に従事する神の解放された息子達の概念に置き換えることを望んでいた。

170:2.13 (1860.8) この時点までに、使徒は、王国に対して二つの観点を得ていた。かれらは、次のように考えた。

170:2.14 (1860.9) 1. 真の信者の心にある個人の、そのときの経験の問題

170:2.15 (1860.10) 2. 民族的であるか、あるいは世界現象の問題。王国は未来に存在し、楽しみとする何かであるということ。

170:2.16 (1860.11) かれらは、パン生地のパン種、またはカラシナの種の成長のようにゆるやかな変化として人の心の王国の接近を見た。かれらは、民族的、世界的意味における王国の到来は、突然、かつ壮観であると信じた。イエスは、天の王国が、精霊的な生活のより高い特質にいたる個人の経験であるということ、精霊的な経験のこれらの現実が、神性の確実性と永遠の壮大さの新しくより高い段階に次第に移されるということを使徒達に伝えることに決して飽きることはなかった。

170:2.17 (1860.12) この日の午後、あるじは、次の二局面を描写して王国の二重の特質の新概念を明確に教えた。

170:2.18 (1860.13)「第一に、現世の神の王国、神の意志を為すという最高の願望、倫理的かつ道徳的な行為の良い成果をもたらす人の寡欲な愛。

170:2.19 (1861.1)「第二に、天の神の王国、死すべき運命にある信者の目標、神への愛が完全にされる状態、そこで神の意志がより神らしくされる状態。」

170:2.20 (1861.2) イエスは、信仰により、いま信者が王国に入るということを教えた。かれは、様々な講話において王国への信仰の入り口への不可欠なの2つことがあることを教えた。

170:2.21 (1861.3) 1. 信仰、誠意。幼子として来ること、贈り物として息子性の付与を受けること。問わずして、かつ父の叡知への完全な信用と本物の信頼をもって父の意志を為すことを承服すること。偏見と先入観をもたずに王国に入ること。甘やかされていない子供のように心を開いてよく教えをきくこと。

170:2.22 (1861.4) 2.真実への切望。正義への熱望、心の変化、神に似ることと神を見つけることへの動機の獲得。

170:2.23 (1861.5) イエスは、罪が、欠陥ある性質の子ではなく、むしろ従順でない意志に支配されることを承知した心の子であると教えた。罪に関して、かれは、神が許したということを教えた。我々が、仲間を許す行為によってそのような許しを個人的に利用できるようにするということ。肉体の兄弟を許すことにより、自身の悪行に対して神の許しの現実の受容のために自身の魂に収容能力をつくる。

170:2.24 (1861.6) 使徒ヨハネが、イエスの人生と教えについての話を書き始める頃には、初期のキリスト教徒は、迫害の育成者としての神の王国の思想との多くの問題を経験したので、用語の使用を大幅に諦めた。ヨハネは、「永遠の命」について多く語っている。イエスは、それについて「命の王国」としばしば言っていた。かれはまた頻繁に、あなたの内の神の王国」として言及した。イエスは、かつて「父なる神との家族の親交」としてそのような経験について話した。イエスは、王国の代わりに多くの用語を用いようとしたがいつもうまくいかなかった。他に使用した用語の中には、神の家族、父の意志、神の友人、信者の親交、人の兄弟愛、父の羊の群れ、神の

子、信仰に厚い者の親交、父への奉仕、神の解放された息子などがあった。

170:2.25 (1861.7) だが、イエスは、王国思想の使用を逃れることができなかった。王国のこの概念が、永遠の命の信仰に変化の始まりは、急速に広がり、結晶化するキリスト教会が、その社会的、かつ制度的な局面を攻略したとき、50年以上も、すなわちローマ軍によるエルサレムの破壊後までなかった。

3. 正義に関連して

170:3.1 (1861.8) イエスは、使徒と弟子が、信仰を通じて、筆記者とパリサイ派の一部が非常に自惚れて世界に顕示した隷属的行為の正義を超える正義を身につけなければならないということを常々彼らに印象づけようとした。

170:3.2 (1861.9) イエスは、信仰が、純真で無邪気な信念が、王国の戸への鍵であることを教え、また、一旦その戸を入ったならば、信じるすべての子供が、神の強健な息子の最大限の背丈にまで成長するために昇らなければならない正義の進歩的な段階があるということを教えた。

170:3.3 (1861.10) 神の許しを受ける手段を考慮に入れるとき、王国の正義の到達が明らかにされる。信仰は、神の家族へ入るために支払う代価である。しかし、許しは、信仰を参入料として受け入れる神の行為であり、王国の信者による神の許しの受領は、明白で実際の経験を伴い、次の4段階、つまり王国の内的正義の段階がある。

170:3.4 (1862.1) 1. 神の許しは、人がその仲間を許す限りにおいて実際に得られ、個人的に経験される。

170:3.5 (1862.2) 2. 人は、自分を愛するようにその仲間が好きでない限り、本当には彼等を許さないであろう。

170:3.6 (1862.3) 3. このように、自分を愛するように隣人を愛することは、最も高い倫理である。

170:3.7 (1862.4) 4. 道徳的行為は、真の正義は、こうして、そのような愛の自然の結果となる。

170:3.8 (1862.5) したがって、王国の真の、かつ内側の宗教は、絶えず、ますます社会奉仕の実際的な手段に現れる傾向があるということが明白である。イエスは、その信者が、愛からの奉仕行為に従事せずにはいられないような

生ける宗教を教えた。だが、イエスは、倫理を宗教に代置しなかった。動因としての宗教と、結果としての倫理を教えた。

170:3.9 (1862.6) どんな行為の正義も、動機によって評価されなければならない。したがって、善の最高の形態は無意識である。イエスは、道徳、あるいは倫理といったものに決して関与しなかった。かれは、人に対する外向きの、そして情愛深い奉仕としてそれ自体が非常に確かに、そして直接現れる父なる神との内向きの、そして精霊的な親交に完全に関与した。かれは、王国の宗教は、人が自分の中に含むことのできない本物の個人の経験であること、信者の家族の一員である意識は、必然的に家族行為に関する教訓の実行、つまり、兄弟愛を高め拡大する努力において人の兄弟姉妹への奉仕に通じるということを教えた。

170:3.10 (1862.7) 王国の宗教は、直接的であり個人的である。その実は、その結果は、家族的で社会的である。イエスは、共同体と対比しての個人の神聖さを高めることを決して怠らなかった。しかし、かれは、人が、寡欲な奉仕

によってその性格を開発する、仲間との愛する関係において自分の道徳的な本質を繰り広げる、と認めもした。

170:3.11 (1862.8) イエスは、王国は内にあるという教えにより、個人を高めることにより、真の社会正義の新しい配剤の到来をもたらし、古い社会に致命的な打撃を与えた。世界は、天の王国の福音の原理を実践することを拒否したので、この社会この新しい秩序についてほとんど知らなかった。そして、精霊的な優越性のこの王国が、地球に出現するとき、それは、単なる改善された社会的、および物質的な状況で明らかにされるのではなく、むしろ、改善された人間関係と進歩する精霊的な達成の接近時代に特有の高められ豊かにされた精霊的な価値の栄光で表されるであろう。

4.王国に関するイエスの教え

170:4.1 (1862.9) イエスは、決してはっきりした王国の定義を与えなかった。一時は、王国の１局面について教え、別の機会には、人の心における神の支配の兄弟愛の異なる面について議論したのであった。イエスは、この安息日の

午後の説教の中で少なくとも王国の5つの局面、または時代に言及したが、それらは次の通りであった。

170:4.2 (1862.10) 1. 父なる神との個々の信者の親交の精霊的な生活における個人的で内なる経験。

170:4.3 (1863.1) 2. 福音の信者の拡大する兄弟愛、個々の信者の心における神の精霊の支配からくる高められた道徳と速められた倫理の社会的局面。

170:4.4 (1863.2) 3. 地球と天国において優勢である目に見えない精霊的な存在体の超必滅者の兄弟愛、神の超人的王国。

170:4.5 (1863.3) 4. 神の意志のよる完全な遂行の見込み、改善された精霊的な生活に関する新しい社会秩序の夜明けに向けての前進—人間の次の時代。

170:4.6 (1863.4) 5. 全てが満たされている王国、地球の光と命の将来の精霊的な時代。

170:4.7 (1863.5) それ故に、我々は、イエスが、用語天の王国を使用する際に参照しているかもしれないこれらの５つの局面を確かめるためにあるじの教えをいつも考察しなければならない。徐々に変化する人の意志のこの過程によ

り、また、このように人間の決定に影響をおよぼすことにより、ミカエルとその仲間は、人間の発展、社会の発展、またはその他の発展の全過程を同様に徐々に、しかも確実に変えている。

170:4.8 (1863.6) あるじは、この時に王国の福音の基本的な特徴を表して次の5点を強調した。

170:4.9 (1863.7) 1. 個人の優越性。

170:4.10 (1863.8) 2. 人の経験における決定要因としての意志。

170:4.11 (1863.9) 3. 父なる神との精霊的な親交。

170:4.12 (1863.10) 4. 人への愛ある奉仕の最高の満足感。

170:4.13 (1863.11) 5. 人間の人格における物質的なものに対する精霊的なものの超越

170:4.14 (1863.12) この世界では、イエスの天の王国の教義についてのこれらの豪快な考えと神の理想を決して真剣に、心からまたは正直に試したことがなかった。しかし、人は、ユランチアにおける王国の考えの明らかに遅い進展に落胆すべきではない。漸進的な進化の秩序は、物質と

精霊の両方の世界における突然の、予想外の終期的な変化を免れないということを心しなさい。肉体を与えられた息子としてのイエスの贈与は、世界の精霊的な生活において、まさにそのように奇妙で予期されない出来事であった。また、王国の時代の実現を探すにあたり、自身の魂にその設立をしないという致命的な過ちを犯してはいけない。

170:4.15 (1863.13) イエスは、王国の１局面が未来にあると言って、そのような出来事が、世界危機の一部として現れるかもしれないということを数多くの機会に仄めかしたのであった。そしていつかユランチアに戻ると確かに、幾度も、はっきりと約束はしたが、イエスは、これらの２つの考えを決して明確には結びつけなかったということが、記録されなければならない。かれは、地上に、そして将来、新しい王国の顕示を約束した。また、かれは、自らがいつかこの世界に戻るとも約束した。しかし、これらの２回の出来事が同義であるとは言わなかった。我々が知る限りにおいて、これらの約束は、同じ出来事を示しているかもしれないし、そうではないかもしれない。

170:4.16 (1863.14) 使徒と弟子は、これらの２つの教えを最も確かに結びつけた。彼らは、期待したようには王国が具体化しなかったとき、あるじの未来の王国に関する教えを思い出し、再び来るという約束を思い起こし、これらの約束が同じ出来事に言及しているという結論に飛びついた。したがって、その完全さと力と栄光で王国樹立のために、イエスの即座の再臨の望みに生きた。そして、後続の信じる世代も、奮い立たせはするが、期待はずれの同様の望みを抱いて地球で生きた。

5. 王国についての後の考え

170:5.1 (1864.1) 天の王国に関するイエスの教えを纏めたことであり、我々には王国の概念に添付されたその後のある考えを述べること、来たる時代に発展するように王国の予言的な予測に従事することが許される。

170:5.2 (1864.2) キリスト教徒の宣伝の最初の世紀を通して、天の王国についての考えは、当時急速に普及していたギリシア理想主義の概念、精霊の影としての自然なものについての考え—永遠によって映し出された時の影としての時間の中の出来事—に非常に影響された。

170:5.3 (1864.3) しかし、ユダヤ人から非ユダヤ人の土へのイエスの教えの移植を印した大きな一歩は、王国の救世主が、教会、つまりパウーロスとその後継者の活動からなる、またフィロンの考えと善と悪に関するペルシアの教義によって補足されたようにイエスの教えに基づいた社会的な、そして宗教的な組織、の贖い主になったときであった。

170:5.4 (1864.4) 王国の福音の教えに表現されるイエスの思想と理想は、追随者が徐々にイエスの表明を歪めたとき、もう少しで実現をし損なうところであった。あるじの王国の概念は、大いなる2つの趨勢により著しく変更された。

170:5.5 (1864.5) 1. ユダヤ人の信者は、イエスを救世主と考えることに固執した。かれらは、イエスがすぐに戻り、実際に世界規模の、そして多少なりとも物質的な王国を樹立すると信じた。

170:5.6 (1864.6) 2. 非ユダヤ人のキリスト教徒は、非常に早くパウーロスの教義を受け入れ始め、それは、イエスが教会の子供の贖い主、王国の純粋に精霊的な兄弟愛という初

期の概念における新しい、制度上の後継者であるという一般的な信念にますます導いた。

170:5.7 (1864.7) 教会は、王国の社会的な派生物であり、全く自然で望ましくさえあった。教会の悪は、その存在ではなく、むしろイエスの王国の概念にほぼ完全に取って代わったことであった。パウーロスの組織化された教会は、イエスが宣言した天の王国の事実上の代用品になった。

170:5.8 (1864.8) しかし、疑ってはいけない、あるじが信者の心に存在すると教えたこの同じ天の王国は、まだこのキリスト教会に向けて、さらには地球の他のすべての宗教、民族、国家に向けて—すべての個人にさえも—宣言されるということを。

170:5.9 (1864.9) イエスの教える王国、個々人の正義の精霊的な理想と神との人の神性的な親交の概念は、社会化された宗教共同体の贖い主-創造者としてのイエスそのものの神秘的な概念に徐々に浸透するようになった。このように、正式の、また制度上の教会は、個々人が王国の精霊に導かれる兄弟愛の代用品となった。

170:5.10 (1864.10) 教会は、イエスの人生と教えからくる必然かつ有用な社会的結果であった。悲劇は、王国の教えへのこの社会的反応が、イエスがそれを教え、そして生きたように本当の王国の精霊的な概念をあまりにも完全に置換したという事実にあった。

170:5.11 (1865.1) 王国は、ユダヤ人にとってはイスラエルの共同体であった。非ユダヤ人にとっては、キリスト教会となった。イエスにとっての王国は、神の父性に対する信仰を告白し、それにより神の意志への心からの専念を宣言し、その結果、人の精霊的な兄弟愛の構成員となった個人集団であった。

170:5.12 (1865.2) あるじは、特定の社会的な結果が、王国の福音の広がりの結果として世界に現れると完全に理解していた。しかし、かれは、そのようなすべての望ましい社会現象が、この個々の信者の内面の経験からの、すなわち、この純粋に精霊的な親交とすべてのそのような信者に宿り、また起動させる神性の精霊との交わりからの無意識の、かつ必然の派生物、すなわち自然な実として現れるように意図した。

170:5.13 (1865.3) イエスは、社会的組織が、または教会が、真の精霊的な王国の進展に続くということを予見しており、またそれは、彼が使徒によるヨハネの洗礼の儀式の実施に対し決して反対しなかった理由である。かれは、真実を愛する魂は、正義を、つまり神を渇望する者は、信仰によって精霊の王国入りが許されるということを教えた。同時に、使徒は、そのような信者が、洗礼の外向きの儀礼によって弟子の社会的な組織に入ることを認められるということを教えた。

170:5.14 (1865.4) イエスの直属の追随者が、個々の信者の精霊の支配と指導による人の心の王国の設立に関わるあるじの理想の実現を彼らの部分的な失敗に気づいたとき、かれらは、王国のあるじの理想を目に見える社会的組織、キリスト教会の段階的な創設に代えることにより彼の教えの完全な喪失の防止にかかった。そして、かれらは、一貫性を維持し、王国の事実に関するあるじの教えの認識への道を開くために、代替のこの計画を達成したとき、かれらは、王国の将来を思い描いた。それが確かに設立されるやいなや、教会は、王国が、本当にキリスト

教時代の頂点に、キリストの再臨時に、実際に現れるのだと教え始めた。

170:5.15 (1865.5) このように、王国は、時代の概念、将来の天恵の思想、そしていと高きものの聖者の最終的な救済の理想になった。初期の キリスト教徒(並びに、後のあまりにも多くの者)は、概して王国についてのイエスの教えで具体化された父と息子の思想を見失い、そして、教会のよく組織された社会的な親交に置き換えた。教会は、概してこのように精霊的な兄弟愛のイエスの概念と理想を効果的に置換した社会的な兄弟愛の主たるものとなった。

170:5.16 (1865.6) イエスの理想的な概念は、大幅に失敗したが、あるじの個人の生涯と教えの基礎に立ち、ギリシアとペルシアの永遠の命の概念に補われ、また世俗的な出来事を精神性に対比させたフィロンの教義によって増大され、パウーロスは、ユランチアにかつて存在した中で最も進歩的な人間社会の1つを構築するために先に進んだ。

170:5.17 (1865.7) イエスの概念は、世界の高度な宗教の中に未だに生きている。パウーロスのキリスト教会は、イエスが天の王国がそうであることを意図したもの—そして、確かにこれからそうなるもの—の社会的にされた、また人間化された影である。パウーロスとその後継者は、永遠の命の問題を個人から教会へと部分的に移し換えた。キリストは、このように王国の父の家族の個々の信者の兄であるよりも、むしろ教会の代表となった。パウーロスとその同時代人は、彼自身と個々の信者全員に関してイエスの精霊的な含意を信者集団としての教会に適用した。こうすることにより、かれらは、個々の信者の心にある神性の王国のイエスの概念に致命的な打撃を与えた。

170:5.18 (1866.1) そして何世紀もの間キリスト教会は、王国のそれらの神秘的な力と特権、つまりイエスとその精霊的な信者である同胞の間だけで行使し、経験することのできる力と特権を敢えて主張したので、相当の困難に苦しんだ。そして、このように教会の会員資格が必ずしも王国での親交を意味するという訳ではないことが、明らか

になる。一方は精霊的であり、他方は主に社会的である。

170:5.19 (1866.2) 遅かれ早かれ、別のより偉大な洗礼者ヨハネが、「神の王国は近い」—王国は、信者の心で支配し卓越している天なる父の意志であると宣言したイエスの高い精霊的な概念への復帰を意味する—を宣言しに、そして、目に見える地上の教会、若しくは、キリストの予想された再臨にどんな形であれ言及することなくこのすべてをしに立ち上がるはずである。イエスの実際の教えの復活が、つまりミカエルの地球滞在の事実に関わる信念についての社会哲学の体系を作成しようと行ったイエスの初期の追随者の仕事を元に戻すような言い直しが、なされなければならない。まもなく、イエスについてこの話の教えは、イエスの王国の福音の説教にもう少しで取って代わるところであった。このように歴史的宗教は、イエスが人の最高の道徳的な考えと精霊的な理想を未来—永遠の命—のために、人の最も崇高な望みと混ぜ合わせた教えを置き換えた。そして、それは、王国の福音であった。

170:5.20 (1866.3) イエスの福音が非常に多面的であったことから、イエスの教えに関する記録の学習者達が、数世紀の内に非常に多くの宗派と党派に分裂されるようになったことは、当然である。キリスト教徒のこの嘆かわしい細分化は、彼の無類の人生の神性の同一性をあるじの多様性をもつ教えを認識することへの怠慢から生じる。しかし、いつか、不信心者の前にあって、イエスの本物の信者の態度は、このように精霊的に分かれないであろう。常に、我々には知的な理解と解釈の多様性が、程度の異なる社会化さえ、あるかもしれないが、精霊的な兄弟愛の欠如は、許し難く非難すべきである。

170:5.21 (1866.4) 誤ってはいけない。考える人の心には永遠に実を結ばないままでいるということを許さない不朽の性情があると、イエスの教えの中にはある。イエスが発想したような王国は、地球では大部分が失敗をした。しばらくの間、外向きの教会がそれに取って代わった。しかし、この教会は、妨害された精霊の王国の幼虫の時期であり、それは、この物質的な時代を通して、そしてあるじの教えが発展のためのより最大限の機会を得ることのできるより精霊的な配剤へと運ぶであろうということを

理解すべきである。このようにして、いわゆるキリスト教会は、イエスの概念の王国が、今眠る繭になっているのである。神性の兄弟愛の王国は、まだ生きており、ついには、そして確かに、この長い潜航から出現するであろう。まるで蝶が、その変成の発展のそれほど魅力的でない生物から美しく展開する物としてついに羽化するのと同じほど確実に。

論文 171
エルサレムへの道中

171:0.1 (1867.1) 「天の王国」についての忘れ難い説教の翌々日、イエスは、自分と使徒が、途中南ペライアの多くの都市を訪問しながらエルサレムの過ぎ越しに向けてその翌日出発すると発表した。

171:0.2 (1867.2) 王国についての講演と過ぎ越しに行く予定であるという発表は、イエスが、この世の王国でのユダヤ人主権の座に就くためにエルサレムまで行くのであると全ての追随者に思わせた。イエスが王国の非物質性に関して何を言っても、かれは、救世主がエルサレムに本部を置く何らかの国家主義的な政府を設立するという考えを

ユダヤ人の聴衆の心から完全に取り除くことはできなかった。

171:0.3 (1867.3) イエスが安息日の説教で言ったことは、追随者の大半を混乱気味にしたに過ぎなかった。ほんの僅かな者が、あるじの講話に啓発された。指導者達は、内面の王国に関する教え、「人の内にある天の王国」について何かを理解し、同時に、イエスがもう一つのことと未来の王国について話したことも分かっており、これこそが、彼がエルサレムにその時設立しに行くと彼等が思い込んだこの王国であった。かれらは、この期待に失望したとき、イエスがユダヤ人に拒絶されたとき、そして後にエルサレムが文字通り破壊されたとき、あるじが約束された王国設立のために偉大な力と威厳ある栄光でこの世界にすぐ戻ると心から思い、まだこの望みに固執していた。

171:0.4 (1867.4) ジェームスとヨハネ・ゼベダイオスの母サロメが、東洋の主権者に近づくように、使徒である２人の息子と共にイエスのところに行き、自分のどんな要求も予めイエスに承諾させようとしたのは、この日曜日の午後

であった。しかし、あるじは約束しようとはせず、その代わりに、「私に何をしろと言うのですか」と彼女に尋ねた。その時、サロメは、「あるじさま、あなたが王国を築きにエルサレムに行く予定なので、一人はあなたの右側に座らせ、もう一人は、あなたの左側に座らせ息子達が光栄を浴するよう前もっての約束をお願したいのです。」と答えた。

171:0.5 (1867.5) サロメの要求を聞くと、イエスは「ご婦人、あなたには自分の尋ねていることが分かっていない。」と言った。それから、栄誉を求める2人の使徒の目を真っ直ぐに見つめて言った。「私が長い間君達を知り愛しもしてきたから、私が君達の母の家に住みさえしたから、アンドレアスがいつも私といるように君を選任してきたから、それゆえ君達は、母が秘かにこの見苦しい要求をしに私のところに来ることを承知するのか。だが、尋ねさせてくれ。君達は、私が飲みほそうとしている杯を飲みほすことができるのか。」と訊いた。そして、考える時間も取らずに、ジェームスとヨハネは、「はい、あるじさま、できます。」と答えた。イエスは、言った。「我々がエルサレムに行く理由を、君達が理解しないこ

とは、嘆かわしい。私の王国の本質を理解しないのが悲しい。私にこの要求をする母を連れて来るということに失望している。しかし、私は、君達が心で私を愛していることを知っている。だから、君達が、本当に、私の苦い杯を飲んで、私の屈辱を共有するだろうと断言するが、私の右側と左側に座るということは私の与えるものではない。そのような名誉は、私の父に指定された者達のために予約されている。」

171:0.6 (1868.1) この時までには、誰かがペトロスと他の使徒にこの会合の内容を伝えており、かれらは、ジェームスとヨハネが皆の中から二人を抜擢させようとしていること、またそのような要求をしに秘かに母と行ったことに非常に憤慨していた。彼らが論議を始めると、イエスは皆を一斉に呼んで言った。「君達は、非ユダヤ人の支配者達がいかに臣下に威張っているか、また、偉大である者達がいかに権限を行使するかをよく理解している。しかしながら、天の王国ではそうはならない。誰であろうと君達の中で素晴らしい者をまず君達の使用人とさせなさい。最初に王国入りする者を君達の奉仕者にさせなさい。人の子は、奉仕されるためにではなく奉仕するため

に来た、そして、私は今、父の意志を為すために、同胞への奉仕のために命を捨てにエルサレムに行くということをきっぱりと言う。」これらの言葉を聞くと、使徒は、祈るために退いた。その晩、ペトロスの努力に応え、ジェームスとヨハネは、10人に相応しい謝罪をし、歓心を買った。

171:0.7 (1868.2) ゼベダイオスの息子等は、エルサレムでのイエスの右側と左側の場所を求めた際、最愛の師が、片側には死にかかっている泥棒、その反対側にはもう一人の罪人と一緒に1カ月足らずのうちにローマ人の十字架に掛かるとは少しも知らなかった。そして、磔刑の際その場にいた彼らの母は、使徒である息子達の栄誉をそれほどまで浅はかに求め、ペラでイエスにした愚かな要求をまざまざと思い出した。

1. ペラからの出発

171:1.1 (1868.3) 3月13日、月曜日の午前、イエスと12人の使徒は、ペラ合宿所から最終的に撤退をし、アブネーの仲間が働いている南ペライアの街々へと向かった。かれら

は、70人を訪問して２週間以上を過ごし、それから過ぎ越しのために直接エルサレムに行った。

171:1.2 (1868.4) あるじがペラを経つとき、使徒と共に宿営したほぼ1,000人にのぼる弟子が後を追った。この集団のおよそ半分は、イエスがヘシュボンに戻ろうとしているところだと知り、また彼の「費用の計算」の説教の後に、イェリーホへの路上のヨルダンの浅瀬でイエスのもとを去った。かれらは、エルサレムへと進み、他の半分は、南ペライアの町を訪問して２週間イエスについていった。

171:1.3 (1868.5) 一般的にイエスの直属の追随者の大多数は、ペラの宿営が放棄されたことを理解したが、これは、あるじがエルサレムに行き、遂にダーヴィドの王座を主張するつもりであることを意味すると本当に思った。追随者の大部分は、天の王国のいかなる他の概念も決して理解することができなかった。イエスが彼等に何を教えようとも、かれらは、王国に関するのこのユダヤ人の考えを諦めようとはしなかった。

171:1.4 (1868.6) ダーヴィド・ゼベダイオスは、使徒アンドレアスの指示に基づき、３月15日、水曜日にペラの訪問者用の宿営を閉鎖した。このとき、およそ4,000人の訪問者が居住しており、これは、教師用として知られている合宿所に使徒と寄留し、イエスと12人と共に南に向かった1,000を越える人数を含んではいない。ダーヴィドは、そうすることは大いに嫌ったが、全装備を大勢の買い手に販売し、エルサレムに資金を持参し、次いでユダ・イスカリオテに金を引き渡した。

171:1.5 (1869.1) ダーヴィドは、悲惨な最後の週エルサレムにおり、磔刑後には母をベスサイダに連れ帰った。ダーヴィドは、イエスと使徒を待つ間、ベサニアのラーザロスの所に寄り、パリサイ派が、ラーザロスの復活以来、彼を虐げ、悩ましはじめた様子にひどく興奮した。アンドレアスは、使者の活動を中止するようにダーヴィドに指示した。そして、これは、初期のエルサレムの王国設立の徴候として全ての者に解釈された。ダーヴィドは、仕事をなくしたように感じるとともに、義憤で気遣いを向けている対象者が、やがてフィラデルフィアに急いで逃げたときには、自薦のラーザロスの擁護人になろうと決断

するところであった。従って、復活後のいつか、それと母の死後に、かれは、マールサとマリアの不動産の処分をまず援助した後、フィラデルフィアへ行った。そして、そこで、アブネーとラーザロスとともに、かれは、アブネーの生涯の間、彼等のフィラデルフィアでの中心であった王国の彼らの大きな全関心事である財政的監督者になり、残りの人生を過ごした。

171:1.6 (1869.2) フィラデルフィアは、エルサレム破壊後の短期間にアブネーの天の王国の拠点のままであり、アンチオケは、パウーロスのキリスト教本部になった。アンチオケからのイエスの教えとイエスについてのパウーロスの解釈は、全西洋世界へと広がった。イエスの教えに関して妥協しないこれらの使者がのちにイスラム教の急騰に打ちひしがれるまで、フィラデルフィアからの天の王国に関するアブネーの解釈の伝道は、メソポタミアとアラビア中で広まった。

2. 費用の計算に関して

171:2.1 (1869.3) イエスとおよそ1,000人の追随者の一団が、ヨルダン川の、時にはベサバラと呼ばれたベサニアの浅瀬

に到着したとき、イエスは、直接エルサレムには行かないのだと弟子達は理解し始めた。皆が躊躇い議論している一方で、イエスは、巨大な石に登り「費用の計算」として知られるようになったその講話をした。あるじは言った。

171:2.2 (1869.4) 「これからずっと私について来ようとする者は、私の父の意志への心からの献身という代価を支払う気がなければならない。私の弟子であろうとするならば、父、母、妻、子、兄弟、姉妹を見捨る気がなければならない。今君達の誰か1人が私の弟子であろうとするならば、ちょうど人の息子が、地球で、しかも生身で父の意志を為す任務達成のためにその命を捧げようとしているように、君達も喜んで命を諦める気がなければならない。

171:2.3 (1869.5) 価格通りの支払いを望まないならば、私の弟子ではあり得ない。君が先に進む前に、それぞれが座って私の弟子であることの費用を計算すべきである。君達の中の誰が、まず座って、遂行するに足りる金があるかどうか費用の算定をすることなく、見張り搭の建設を引き

受けようとするであろうか。費用の計算をこのようにし損ねたならば、基礎を築いた後に、君は、始めてしまったことを終えることができないと分るかもしれない、そこで、すべての隣人が君を馬鹿にして、『見ろ、この男は、建て始めたが、その仕事を終えることができなかった。』と言う。また、他の王と戦いを交えようとするとき、どんな王が、まず座り、１万人で２万人を迎え撃つことができるかどうか考えないことがあろうか。もし見込みがなければ、その王は、講和を求めてかなり遠方であってもこの相手の王へ使者を遣わす。

171:2.4 (1879.1) 「さて、そこで、君達銘々は、座って私の弟子である費用を見積もらなければならない。今後、君は、我々の後について来て、教えを聴き、また働きを見ることはできないであろう。君は、辛い迫害に直面し、この福音が大きな失望に対峙する時、福音のために有利に証言することを要求されるであろう。君であることをすべて放棄し、君が持てる物すべてを捧げる気がないならば、その時、君は、私の弟子には相応しくない。すでに君自身の心の中で自分を征服したのであるならば、人の息子が、祭司長等とサッヅカイオス派に拒絶され、嘲る

不信仰な者達の手に渡されるとき、君は、やがて獲得しなければならないその表面的な勝利のためにいかなる恐怖も抱く必要はない。

171:2.5 (1879.2) 「今、君は、私の弟子であるための動機を見つけるために自身を考査すべきである。名誉と栄光を求めるならば、俗物的な心でいるならば、君は、その味を失ってしまった塩のようである。そして、その塩気のために評価される物が、その味を失ったとき、何によって味が取り戻されるのであろうか。そのような調味料は役に立たない。それは、ただ廃物の中に捨てられるのが相応しい。準備されている杯を共に飲み乾す気がないならば、私は、静かに家に戻るように君にいま警告した。私は、再三、私の王国はこの世界のものではないと言ってきたが、君は私を信じようとしない。聞く耳を持つ者に、私の言うことを聞かせなさい。」

171:2.6 (1879.3) これらの言葉を言い渡した直後、イエスは、12人を導き、ヘシュボンへと出発し、そして、およそ500人が後に続いた。少し遅れて、群衆の残りの半分が、エルサレムへと進んだ。イエスの使徒は、主だった弟子と

共に、これらの言葉について多く考えてみたが、それでも、自分達のかねての望みに沿って、逆境と試練の短い期間の後に王国が幾らかなりとも確かに設立されるであろうという信念に執着していた。

3. ペライア巡歴

171:3.1 (1870.4) 2週間以上も数百人の弟子の群れが後に続いているイエスと12人は、70人が勤労した全ての町を訪問し、南ペライア周辺を旅した。多くの非ユダヤ人がこの一帯に住んでおり、エルサレムの過ぎ越しには僅かの者しか上京しなかったので、王国の使者は、早速自分達の教えと説教の仕事を続けた。

171:3.2 (1870.5) イエスは、アブネーにヘシュボンで会い、アンドレアスは、70人の仕事が過ぎ越しによって中断されてはならないと指示した。イエスは、使者がエルサレムで起ころうとしていることを度外視して、その仕事を進めるべきであると忠告した。また、少なくとも女性部隊が、望んでいるのであれば、過ぎ越しにエルサレムに行くことを許諾するようにアブネーに助言した。そして、これは、アブネーが肉体のイエスを見た最後の機会であ

った。アブネーへのイエスの送別は、次の通りであった。「息子よ、君は、王国に忠実であるということが私には分かっている。また、君が同胞を愛し、理解できるように賢明さを授けるように、私は父にお祈りする。」

171:3.3 (1870.6) 都市から都市を旅するにつれ、追随者の多くがエルサレムへ行くために逸脱したので、後に続く者達の数は、日を追うにつれイエスが過ぎ越しに向かう頃には、200人足らずに減少していった。

171:3.4 (1871.1) 使徒は、イエスが過ぎ越しのためにエルサレムに行くつもりであると理解した。かれらは、イエスには死の判決が下されており、シネヅリオン派が、その居所を知る者は誰でもシネヅリオン派に通報しなければならないとイスラエル中に触れ回っていることを知っていた。それでも、かれらはこういう事態にもかかわらず、イエスが、ラーザロスに会いにベサニアに行く予定であるとフィラデルフィアで皆に知らせた時ほどには、驚き気遣ってはいなかった。激しい恐怖から静かな期待の状態へのこの態度の変化は、主としてラザロの復活に依るものであった。かれらは、イエスが、非常時に際し、そ

の神性の力を主張し、敵に恥をかかせるかもしれないという結論に達した。この望み、あるじの精霊的至高性に対する彼等のより深遠で成熟した信仰に結びつくこの望みは、イエスが死ななければならないというシネヅリオン派のおおっぴらな宣言をものともせず、イエスに続いてエルサレムに行く準備ができている直属の追随者の示した表向きの勇気を明らかにした。

171:3.5 (1871.2) 使徒の大半と弟子の多くは、イエスが死ぬことはあり得ないと信じた。イエスが「復活と命」であると信じ、イエスが不滅であり、すでに死に対して勝利を収めていると考えた。

4. リーヴィアスでの教え

171:4.1 (1871.3) 3月29日、水曜日の夕方、南ペライアの都市の巡歴終了後、イエスと追随者は、エルサレムへの途中のリーヴィアスで露営した。シーモン・ゼローテースとシーモン・ペトロスが、自分達の居場所で100本を超える剣を納めさせることを企て、これらの武器を受け取り、外套の下に隠しもつことを承諾する者全てに配布したのは、リーヴィアスでのこの夜のことであった。シーモ

ン・ペトロスは、あるじへの裏切りの夜、庭で自分の剣をまだ差していた。

171:4.2 (1871.4) 木曜日の朝、他の者が目覚める前に、イエスは、アンドレアスを呼んで言った。「同胞を起こしなさい。皆に言うことがある。」イエスは、剣のことと、使徒のうちの誰が、これらの武器を受け取り身につけているかを知っていたが、皆にそのようなことを知っているとは決して明らかにしなかった。アンドレアスが仲間を起こし、自分達だけで集合すると、イエスが言った。「私の子等よ、君達は長い間私と共におり、そして、このときのために必要な多くを教えてきたが、私は、我々の前に横たわる苦しみと試練に対する肉体の不確実性や人の防御の脆さのいずれをも信用することのないようにいま警告したい。我々は、エルサレムに歩み寄ろうとするところであり、そこで人の子はすでに死を言い渡されたということを君達は知っているということをもう一度はっきり伝えるために，私は、君達をここに単独に呼んだのである。私は、人の息子は、祭司長達と宗教支配者達の手に引き渡されるということ、そしてかれらは、彼を非難して、それから非ユダヤ人の手に引き渡すという

ことを再度君達に伝えているのである。そして、彼らも人の息子を嘲り、唾を吐きかけたり、鞭で打ちさえし、その上、死に至らせるために引き渡すであろう。そして、彼らが人の息子を殺すとき、うろたえてはいけない。３日目には人の息子は立ち上がるのであるから。自分自身に気をつけて、私が前もって警告したことを思い出しなさい。」

171:4.3 (1871.5) またもや、たいへん驚愕する使徒であった。しかし、かれらは、イエスの言葉は文字通りであると考える気にならなかった。かれらは、あるじが言ったままを意味したとは理解できなかった。かれらは、本部がエルサレムにある地球の俗世間の王国への持続的な信念に目をくらまされていたので、イエスの言葉を文字通りであると受け入れることが、ただ単にできなかった—しようとしなかった。かれらは、あるじが、そのような奇妙な発表によって意味することは何であるのかとその日一日中よく考えた。しかし、誰もこの声明に関する質問を敢えてしなかった。これらのうろたえている使徒は、あるじが、自分の磔刑の予想を明らかに、直接自分達に話したという認識をあるじの死後まで気づけなかった。

171:4.4 (1872.1) 朝食の直後、ある好意的なパリサイ派の者達が、イエスのところに来て次のように言ったのは、ここリーヴィアスであった。「これらの地域から急いで逃げてください。ヘロデが、ちょうどヨハネを探したように、今あなたを殺すために探していますので。かれは、人々の暴動を恐れ、あなたを殺すと決めました。我々はあなたが逃げられるようにこの警告をしに来たのです。」

171:4.5 (1872.2) そして、これは部分的に本当であった。ラーザロスの復活がヘロデを恐れさせ、警戒させ、その上シネヅリオン派が、裁判に先立ってさえ敢えてイエスの有罪判決を下したことを知ったので、ヘロデは、イエスを殺すか、さもなければ、自己の領土から追い出すと決心した。ヘロデは、死刑を強要されないことを望むほどにイエスをとても恐れていたので実のところ後者の執行を望んでいた。

171:4.6 (1872.3) イエスは、パリサイ派が言いたかったことを聞くと、答えた。「私には、ヘロデとこの王国の福音についてのヘロデの恐怖がよく分かっている。だが、誤って

はいけない。ヘロデは、人の息子がエルサレムに行き苦しみ、司祭長達の手にかかり死ぬ方をはるかに好むであろう。かれは、ヨハネの血ですでに自分の手を汚しているので、人の息子の死を引き受けることになっても心配はしていない。人の息子は、今日はペライアで説き、明日はユダヤに行き、数日後には地球での任務を果たし父のところへと昇る準備がされているとあのキツネのところに行って伝えなさい。」

171:4.7 (1872.4) 次に使徒の方に向いて、イエスは言った。「昔から、予言者達は、エルサレムで死んだ。だから、人の息子が、人間の偏狭の代価として、また、宗教的な偏見と精霊的な盲目の結果として提供されるために父の家のある都へと行くことだげが相応しいのである。ああ、エルサレム、予言者達を殺し、真実の教師達に投石をするエルサレムよ。ちょうど雌鳥がその翼の下に自分の雛を集めるように、私は、幾たびあなたの子供達を集めようとしてきたことか。だが、あなたは、そうさせようとはしない。見よ、あなたの家は荒れて見る影もなくなろうとしている。あなたは、私に何度も会いたがるであろうが、そうはならないであろう。それから、私を探そう

とするが、見つからないであろう。」イエスは、話し終えると、自分の周りにいる者に向いて言った。「それでも、我々は、エルサレムに行き過ぎ越しに出席し、天の父の意志を実現するに相応しいことをしよう。」

171:4.8 (1872.5) この日イエスの後についてイェリーホに入った信者集団は、混乱してうろたえた。使徒は、王国に関するイエスの宣言に最終的な勝利の確かな響きしか認めることができなかった。かれらは、差し迫る挫折の警告を勇気をもって理解するその位置に自分たちを導くことができなかった。イエスが「3日目によみがえること」について話したとき、かれらは、ユダヤ人の宗教指導者との不快な前哨戦の直後の王国の確かな勝利を意味するとしてこの声明に飛びついた。「3日目」とは、「やがて」、または、「その後すぐに」を意味するユダヤ人の一般的表現であった。イエスが「よみがえりり」について話したとき、かれらは、「王国の勃興」について言及していると考えた。

171:4.9 (1872.6) イエスは、これらの信者に救世主として受け入れられており、しかもユダヤ人は、苦しむ救世主に関し

ではあまり、または何も知らないのであった。かれらは、イエスがその人生によって一度も実現されたことがない多くのことを彼の死によって達成しようとしていることを理解しなかった。使徒にエルサレム入りの力をつけたのは、ラーザロスの復活であったが、贈与のこの試練の期間にあるじを支えたのは、変容の記憶であった。

5. イェリーホの盲目の男性

171:5.1 (1873.1) 3月30日木曜日の午後遅く、およそ200人の追随者の一隊の先頭にいたイエスと使徒は、イェリーホの壁に接近していた。街の入口近くに来たとき、かれらは、青年時代から盲目であった年配の男性バーティマイオスという者のいる乞食の群集に遭遇した。この盲目の乞食は、イエスについて多くを聞いており、エルサレムで盲目のヨシアを回復させたことも全て知っていた。ベサニアに進むまで、かれは、イェリーホへのイエスの最後の訪問を知らなかった。バーティマイオスは、視力回復を訴えることなく、イエスのイェリーホ訪問は、決して二度とないと決め込んでいた。

171:5.2 (1873.2) イエスの到来に関する知らせは、イェリーホ中で先ぶれされ、何百人もの住民が、彼に会うために群がってきた。この大群衆があるじを護衛して街へ戻ったとき、群衆の踏みつける重い音を聞きつけ、バーティマイオスには、何かいつもと違うことが起こっているのが分かり、近くに立っている者達に何が起こっているのか尋ねた。すると乞食の一人が、「ナザレのイエスが通っている。」と答えた。バーティマイオスは、イエスが近いと聞くと、「イエスさま、イエスさま、私に慈悲をお示しください。」と大声で叫び始めた。そして、ますます大声で叫び続けると、イエスの近くにいる者のうち何人かがこの男のところに行き咎め、静かにするよう求めた。しかし、それは無駄であった。男は、いよいよ大声で叫ぶのであった。

171:5.3 (1873.3) 盲人が大声で叫んでいるのを聞いた時、イエスは、じっと立っていた。そして、この男性を見ると、男性の友人達に、「私のところに連れてきなさい。」と言った。そこで、かれらは、バーティマイオスのところに行き、「元気を出しなさい。あるじさまが、君を呼んでいるので一緒に来なさい。」と言った。バーティマイオ

スが、これらの言葉を聞くと、かれは、外套を脇へ投げ捨てて、道路の真ん中に向かって跳び出して行き、その間、近くの人々は、彼をイエスの方へ誘導していた。イエスは、バーティマイオスに話し掛け、「私に何をして欲しいのですか。」と言った。すると、この盲目の男性は、「私の視力を回復させてもらいたいのです」と答えた。イエスがこの要求を聞きつけ、またその信仰が分かると、「あなたの視力は、回復するであろう。行きなさい。あなたの信仰があなたを回復させた。」と言った。すぐにかれは、視力を回復し、あるじが、翌日エルサレムに出発するまで神を賛美してイエスの近くに留まり、そして群衆の前に行き、イェリーホでいかに視力を回復したかをすべての人に発表した。

6. ザカイオスへの訪問

171:6.1 (1873.4) あるじの一行がイェリーホに入ったのは日没近くであり、かれは、夜そこに留まるつもりであった。イエスが税関のそばを通っていると、収税人または収税史の長ザカイオスが、たまたま居合わせており、かれは、非常にイエスに会いたいと望んだ。この収税史の長は、非常に裕福で、ガリラヤのこの予言者について多くを聞

いていた。かれは、イエスが、次にイェリーホを訪れるようなことがあれば、どんな人間であるか知りたいと心に決めていた。従って、ザカイオスは、群衆を押し分けて進もうとしたが、それは強すぎて、しかも、かれは、身長が低く、人々の頭越しに見ることはできなかった。そこで収税史の長は、自分の住んでいるところから遠くない街の中心近くに来るまで群衆と後を追い続けた。かれは、群衆の中に入り込むことができないことが分かると、併せてイエスが止まることなくただ街を通り抜けて行くだけかもしれないと考え、先を走り、道路の上に覆いかぶさって広がる無花果の木に登った。ザカイオスは、この方法だとあるじが通り過ぎるときよい見通しが得られることを知っていた。そして、ザカイオスは、失望することはなかった、というのも、イエスは、通り過ぎるようとするとき、止まってザカイオスを見上げて言ったので。「急ぎなさい、ザカイオス。私は、今夜あなたの家に泊まらなければならないので下りてきなさい。」ザカイオスは、これらの驚くべき言葉を聞いたとき、木から速く下りようとして危うく落ちそうになり、そしてイエスのところに行き、あるじが家に進んで止ま

ることを望んでいるということに大喜びであると述べた。

171:6.2 (1874.1) かれらは、すぐにザカイオスの家に行き、また、イェリーホに住む人々は、イエスが、収税史長と留まることに同意しようとすることに非常に驚いた。あるじと使徒が、ザカイオスと家の戸の前に佇んでいる時でさえ、近くに立っていたイェリーホのパリサイ派の一人は、「見よ、この男は、罪人であり、つまり自分の民族のゆすり屋であるアブラーハームの信仰を捨てた息子の家に宿を取るために行った。」と言った。イエスは、これを聞くとザカイオスを見下ろして微笑んだ。その時に、ザカイオスは、腰掛けに立って言った。「イェリーホの人々よ、聞きなさい。私は、収税史で罪人であるかもしれないが、偉大な先生が来られ私の家に滞留される。先生が入られる前に言っておきます。私は、明日から、私の全所有物の半分を貧者に与えるつもりであると。もしどんな人からでも不当に取り立てたならば、4倍にして返すつもりであると。私は、真心をもって救済を求め、神の目からみた正義を行うことを学ぶつもりです。」

171:6.3 (1874.2) ザカイオスが話すのを止めると、イエスは言った。「今日、この家には救済が起こり、あなたは、本当にアブラーハームの息子になった。」それから、自分達の周りに集まった群衆の方に言った。「私の言うことに驚いたり、私のすることに腹を立てることのないように、なぜならば、私は、人の息子は、失われたものを探し、また救うために来たのであるとずっと宣言してきたのであるから。」

171:6.4 (1874.3) かれらは、その夜ザカイオスの家に宿泊した。翌日彼らは、起き、エルサレムの過ぎ越しの道中をベサニアへの「強盗街道」を進んでいった。

7.「イエスが通り過ぎるとき」

171:7.1 (1874.4) イエスは、行く先々で人々の間に陽気さを広めた。かれは、恵みと真実に溢れていた。仲間は、イエスの口から発し続けられる優しい言葉に驚かされ続けた。人は、優雅さを教化することはできるが、慈悲深さは、愛で飽和した魂から発する友情の芳香である。

171:7.2 (1874.5) 善は、常に敬意を強要するが、優しさに欠けると、それは、しばしば愛情をはね返す。善は、遍く優し

さを伴うときにだけ魅力的である。善は、魅力的であるときにのみ効果的である。

171:7.3 (1874.6) イエスは、本当に人間を理解した。したがって、本物の慈悲を表すことができたし、心からの同情を示すことができた。しかし、滅多に哀れみにふけることはなかった。イエスの慈悲に限りはなかったが、その同情は、実際的で、個人的で、建設的であった。苦しみへの慣れは、イエスに決して無関心を起こさせなかったし、かれは、自己憐憫を増加させることなく苦悩する魂を助けることができた。

171:7.4 (1874.7) イエスは、誠に心から人々を愛したので、とても多くの人を助けることができた。かれは、実に、一人一人の男性を、一人一人の女性を、一人一人の子供を愛した。かれは、際立つ洞察力をもつ—人の感情や心に何が起こっているかを完全に知っていた—が故に、そのように本当の友人であり得た。イエスは、関心をもつ鋭い観察者であった。かれは、人間の必要性の理解の専門家であった。かれは、人間の切望の探知において聡かった。

171:7.5 (1874.8) イエスは、決して急がなかった。「通り過ぎるとき」彼には仲間を慰める時間があった。また、かれは、友人をつねに安心させた。かれは、人を惹きつける聞き手であった。かれは、決して仲間の魂のお節介な探りに関わらなかった。彼が、飢える心を慰め、渇きを覚える魂を導くとき、イエスの慈悲の享受者は、彼に告白しているとはあまり感じることなく相談しているように感じた。自分達をとても信じているのが分かったので、かれらは、イエスを限りなく信用していた。

171:7.6 (1875.1) かれは、人々に関して決して物見高くは見えなかったし、人に指示したり、管理したり、または絶えず注意しているという願望を決して表さなかった。かれは、彼との交際を楽しむ全ての者に深い自信と確固たる勇気を起こさせた。イエスが、人に好意をもって微笑むとき、その人間は、彼の多種多様の問題を解決する大いなる器量を経験した。

171:7.7 (1875.2) イエスは、非常に、また大変賢明に多くの人を愛していたので、情況が要求する際、彼らに対して厳しい規律を決して躊躇わないほどであった。かれは、自分

が助けを求めることによって、頻繁に人を助けようとした。このように、かれは、興味を刺激した、つまり人間の資質にある善なるものに訴えかけた。

171:7.8 (1875.3) あるじは、自分の衣の裾に触ることによって治癒を求めた女性の甚だしい迷信に対する救済の信仰を見分けることができた。たった1人の必要性に、幼子の必要性にさえ、奉仕するためにいつでも説教を止めるか、または群衆を止め置く用意があったし、そう望んでいた。すばらしい事が起きたのは、単に人々がイエスを信じたからではなく、イエスもまた非常に彼らを信じたからである。

171:7.9 (1875.4) イエスの言動の大部分の本当に重要なことは、「通り過ぎるときに」偶然起こるように見えた。あるじの地球での活動は、それほど専門的であったり、よく計画されたり、または意図的なものではなかった。かれは、生涯を通しての旅において、自然に親切に健康を施し、幸福を振り撒いた。「彼は善行をして回った」というのは文字通り本当であった。

171:7.10 (1875.5) そして、あるじの追随者が、「通り過ぎる」ときに奉仕をすること—日々の義務に取り組むような寡欲な善行をすること—を、すべての時代に学ぶことが相応しい。

8. ポンドの寓話

171:8.1 (1875.6) その前夜、イエスがザカイオスとその家族に王国の福音を教える一方で、皆は遅くまで起きていたので、かれらは、正午近くまでイェリーホを出発しなかった。群衆は、イエスと使徒達がその夜オリーヴ山に留まるつもりであることを知らずにエルサレムへと移動の最中、イエスの一行は、ベサニアへの上り坂の半ば辺りで昼食のために止まった。

171:8.2 (1875.7) ポンドについての寓話は、全ての弟子のためにだけ意図されたタラントについての寓話とは異なり、むしろ使徒だけに向けて話され、また主には、アーヘラオスの経験とユダヤ王国の支配権獲得のためのアーヘラオスの空しい試みに基づいていた。これは、実際の歴史上の人物に基づく数少ないあるじによる寓話の１つである。イェリーホのザカイオスの家は、アーヘラオスの凝

った宮殿のほど近くにあり、アーヘラオスの水路は、皆がイェリーホから出発した道路沿いに走っていたのであるから、皆がアーヘラオスを気にとめたということは、奇妙なことではなかった。

171:8.3 (1875.8) イエスは言った。「君は、王国を受けるために人の息子がエルサレムに行くと考えているが、君は失望の運命にあると断言しておく。ある王子が王国を受領しに遠国に入ったが、彼が帰国するまえに、心でこの王子をすでに拒絶しているその領域の民等は、使節を遣わせ、『この男に我々を治めさせはしない。』といわれたある王子を覚えているか。この王の現世の支配が拒絶されたように、人の息子の精霊的な支配が拒絶されようとしている。再度、私は、我が王国がこの世のものではないと断言する。しかし、人の息子が彼の民族の精霊的な支配を授けられていたならば、彼はそのような人の魂の王国を受け入れたであろうし、人間の心のそのような統治権に君臨したことであろうに。人々は、私の精霊的な支配を拒絶しているにもかかわらず、私は、再び戻り来て、いま私が支配することを否定しているそのような精霊の王国を他のものから受けるつもりである。君は、い

ま人の息子が現在拒絶されるのを見るが、別の時代においては、アブラーハームの子孫が現在拒絶していることが、受け入れられ、高められるであろう。

171:8.4 (1876.1) 「さて、この寓話の拒絶された貴族のように、私は、私の12人の奉仕者、特別な執事を呼び、1ポンドをそれぞれの手に与えたい。私が戻って君達の決算報告が要求されるとき、君の執事職を正当化できるように私の留守中、信託資金で勤勉に取り引きするように、との私の指示によく気を留めることを言い渡したい。

171:8.5 (1876.2) 「そして、この拒絶された息子が戻らなくても、別の息子が、この王国を受け取るために送られるであろうし、それからこの息子は、執事職の君の報告を受け、君の利得を喜ぶために君達全員を呼びにやるであろう。

171:8.6 (1876.3) 「そして、これらの執事が後に会計のために共に呼び集められると、最初の者が進み出て、『ご主人さま、あなたのお金でさらに10ポンドを稼ぎました。』と言うと、『でかした、 お前は、良い使用人である。この件で忠実であると分かったので10の町を支配させよ

う。』と言った。2番目の者が来て、『お預りしましたお金で、ご主人さま、5ポンドを稼ぎました。』と言うと、『それならば、5つの町を支配させよう。』と言った。最後の使用人が説明のために召喚され報告するまでずっとこういう具合であった。最後の使用人は、『ご主人さま、これが、あなたのお金でございます。このふくさに大切に包んでおきました。このようにしましたのも、私はあなたを恐れたからでございます。私は、あなたが置かない所で拾い上げたり、撒かない場所で収穫しようとされるのを見てきて、あなたが道理を弁えないと思ったからです。』と報告した。主人は、『この怠慢で不誠実な使用人、お前自身の言葉通りに裁こう。お前は、私が明らかに撒かない場所で収穫するというのを知っていた。ならば、この決算が求められることを知っていた。これを知っていたのなら、私が戻って来たときにそれなりの利子が得られるように、私の金を少なくとも金融業者に預けるべきであった。」と言った。

171:8.7 (1876.4) それから、この支配者は、側に立つ者達に言った。『この怠惰な使用人から金を取り上げ、10ポンドを持つ者に与えなさい。』皆が、そんな者には既に10ポン

ドがあることをあるじに念を押すと、「持てる者にはさらに与えられるが、持たざる者からは持てる物までも取り上げられるであろう。」と言った。

171:8.8 (1876.5) そこで使徒は、この寓話と先のタラントの寓話との意味の違いを知ろうとしたが、イエスは、彼らの多くの質問に答えて、「各人がそれらの本当の意味を探し当てながら心の中でこれらの言葉をよく考えなさい。」と言うだけであった。

171:8.9 (1876.6) 後年これらの２つの寓話の意味を非常によく教えたのは、ナサナエルで、かれは、次の結論の形でイエスの教えを要約した。

171:8.10 (1876.7) 能力は、人生の機会に対する実際の尺度である。人は、決して能力を超える成果に責任を負わないであろう。

171:8.11 (1876.8) 忠実さは、人間の信頼度の誤りのない尺度である。また、些細な事に忠実な者は、与えられた資質に一致する全ての事柄に忠実さを示し勝ちでもある。

171:8.12 (1876.9) 3. 機会が同様であるとき、あるじは、 より小さい忠実さにはより少ない報酬を与える。

171:8.13 (1877.1) 4. 機会がより少ないときは、同様の忠実さに対しては、同様の報酬を与える。

171:8.14 (1877.2) イエスは、昼食を終えたとき、そして追随者である群衆が、エルサレムに向かって進んだ後に、路傍の突き出た岩の日陰で使徒の前に立ち、晴れ晴れとした威厳と優しい尊厳さで西の方を指を差して言った。「来なさい、同胞よ。我々を待ち受けるものを受けにそこへ。エルサレムへと進み続けよう。そうして、天の父が意図するすべての事を実現させるのである。」

171:8.15 (1877.3) そして、イエスと使徒は、これを、すなわち、エルサレムへの人間の姿でのあるじの最後の旅を、再開した。

論文 172
エルサレム入り

172:0.1 (1878.1) 西暦30年 3 月31日、金曜日の午後4時直後、イエスと使徒は、ベサニアに到着した。ラーザロス、その姉妹、そして友人等は、皆を待ち受けていた。そして、

非常に多くの人が復活についてラザロと話すために毎日やって来たので、隣接している信者シーモンという者、ラザロの父の死以来小さい村の主導的な住民の家に滞在する手配がされているとイエスは知らされた。

172:0.2 (1878.2) その夜、イエスは、訪問者を多く迎え、ベサニアとベスファゲの一般の人は、イエスが歓迎されていると感じられるようにと最善をつくした。多くの者は、イエスが、シネヅリオン派の死の命令をものともせずユダヤの王であると宣言するために今やエルサレム入りをしていると思ったが、ベサニアの家族—ラーザロス、マールサ、マリアは、あるじが、その類いの王ではないと完全に理解していた。かれらは、これがエルサレムとベサニアへのイエスの最後の訪問であるかもしれないとぼんやりと感じた。

172:0.3 (1878.3) 祭司長達は、イエスがベサニアに泊まると知らされたが、友人の間でイエスを差し押えることは試みないのが一番だと考えた。かれらは、エルサレムに来るのを待ち受けると決めた。イエスにはこのすべてが分かっていたが、厳然として冷静であった。友人等は、イエス

が、これほどに落ち着き、しかも意気投合の様をかつて見たことがなかった。使徒でさえ、シネヅリオン派が全ユダヤ民族にイエスの引き渡しを要求したときのイエスの全くの無関心振りには驚いた。その夜あるじの睡眠中、使徒は、あるじを2時まで見張り、彼らの多くが剣を差していた。次の朝早々、かれらは、安息日にもかかわらず、イエスと死から蘇ったラーザロスに会いにやってきたエルサレムからの何百人もの巡礼者に目を覚まされた。

1. ベサニアでの安息日

172:1.1 (1878.4) ユダヤの外部からの巡礼者、同じくユダヤの権威者達は皆、「どう思うか。イエスは祝宴にやって来るだろうか。」と尋ね続けてきた。したがって、イエスがベサニアにいると聞いたとき、それらの者は喜んだが、祭司長達とパリサイ派は、幾らか当惑した。自分達の管轄下にイエスがいるのは喜ばしかったが、彼の大胆さには少しばかり当惑した。かれらは、先だってのイエスのベサニア訪問、ラザロの死からの蘇生を思い起こし、その上、ラーザロスは、イエスの敵への大きな問題になってきていた。

172:1.2 (1878.5) 過ぎ越し祭りの6日前、安息日の後の晩、ベサニアとベスファゲ中の者が、シーモン家での公開の宴会でイエスの到着を祝うのに参加した。この夕食は、イエスとラーザロスの両方に敬意を表するものであった。それは、シネヅリオン派を無視するものであった。マールサは、料理の給仕を指示した。女性が公の宴会に出席することは、ユダヤ人の習慣に反することであったので、姉妹のメリーは、女性の見物人の中にいた。シネヅリオン派の手先の者は、出席していたが、イエスの友人達の間で捕縛することを恐れた。

172:1.3 (1879.1) イエスは、自分と同名の昔の人物ヨシュアについてシーモンと話し、また、いかにヨシュアとイスラエル人がイェリーホを経由してエルサレムに来たかを語った。崩壊するイェリーホの壁に関する伝説に言及して、イエスは、「私はそのようなレンガと石の壁など気になどしてはいない。だが、私は、すべての人への父の愛のこの説教で偏見、独善、憎しみの壁を崩壊するであろう。」と言った。

172:1.4 (1879.2) 使徒全員が珍しく素面であったことを除いては、宴会は、非常に陽気で普通の様で進行していた。イエスは、殊のほか朗らかで、食卓に就く時間まで子供達と遊んでいた。

172:1.5 (1879.3) ラーザロスの妹マリアは、宴のほぼ終り近くに女性の見物集団の中から前に進み出て、イエスが主賓として寄りかかっているところに上がって、誠に稀で高価な軟膏の大きい雪花石膏の壷を開け始めた。そして、あるじの頭に塗布した後、彼女は、軟膏をあるじの足に注ぎ始め、自分の下ろした髪でそれを拭くまでは何ら常と変わることは起こらなかった。家全体が軟膏の匂いで満たされ、出席する誰もが、マリアのしたことに驚いた。ラーザロスは何も言わなかったが、数人の者が、とても高価な軟膏がこのように使用されなければならないことに憤りを示して呟いたとき、ユダ・イスカリオテは、アンドレアスが凭れているところに踏み出て言った。「この軟膏は、なぜ売られずに、しかも、その金が貧乏人が食べるめに与えられなかったのですか。君は、そのような無益を叱責するようにあるじに話すべきです。」

172:1.6 (1879.4) イエスは、彼らの考えたことを知り、言ったことを聞き、自分の側に跪いているマリアの頭に手を置き、優しい面持ちで言った。「皆さん、彼女には構わないでおきなさい。貴方達は、彼女が心で良いことをしたのがわかっていながら、なぜ彼女をこれで煩わすのですか。この軟膏が売られ、その金が貧しい人に与えられるべきであったと呟く者に、あなたには貧しい人がいつも近くにいるということ、自分にとって良いと思う時いつでも彼らに奉仕できるということを伝えたい。しかし、私は、君達といつも居る訳ではない。私は、間もなく父の元へ行く。この女性は、私の身体が埋葬されるときのために長い間この軟膏を取っておいた、そして、今、私の死を予想して塗布をするに良いと思えたのであるから、そのような彼女の履行は否定されはしない。マリアは、こうすることで、私の死と天の父への上昇に関して私が言ったことへの信仰を示すこの行為で君達全員を咎めた。この女性は、今宵してしまったことで咎められてはならない。むしろ、私は、来る時代に、この福音が世界中のどこで説かれようとも、この女性がしたことは、彼女を記念して話されるであろう、といっておく。」

172:1.7 (1879.5) ユダ・イスカリオテが、これを個人的な非難とみなし、傷ついた感情に対する復讐の機会を求めると遂に決心したのが、この叱責であった。しばしば、かれは、潜在意識でそのような考えを抱いてきたが、そのとき大胆に、覆いのない意識的な心でそのような悪い考えをもった。そして、この軟膏の値段が、1人の男性の年間当たりの収入に相当する額—5,000人のためにパンを賄うに十分な額—であったがために、他の多くの者は、イスカリオテのこの態度を助長した。しかし、マリアは、イエスを愛していた。彼女は、死ななければならないと自分達に予め警告したときのイエスの言葉を信じていたので、イエスの死の際、その身体の防腐処置のためにこの貴重な軟膏を用意しておいた。しかしながら、彼女が、気が変わり、まだ生きているうちにあるじにこれを授ける方を選んでも否定されることではなかった。

172:1.8 (1879.6) ラーザロスとマールサは、マリアがこの甘松油の壷を買うために長い間金を貯めていたことを知っており、彼女の心がそのような事を望んですることに心から賛成した。自分達は、裕福でもあり、そのような贈り物をする余裕も簡単であったので。

172:1.9 (1880.1) 祭司長達は、イエスとラーザロスのためのベサニアでのこの夕食について聞くと、ラーザロスに関して何をすべきかの相談を始めた。やがて、かれらは、ラーザロスも死ななければならないと決めた。かれらは、死から蘇ったラーザロスが生きることを許すのであれば、イエスを死に追い遣っても無駄であると軽く結論を下した。

2. 使徒との日曜日の朝

172:2.1 (1880.2) シーモンの美しい庭でのこの日曜日の朝、あるじは、自分の周りに12人の使徒を呼び集め、エルサレムに入るまえに最終的な指示を与えた。自分は父の元に戻る前におそらく多くの演説をしたり、教えたりするであろうが、使徒には、この過ぎ越しの滞在の間、エルサレムではいかなる公の仕事も差し控えるように忠告した。かれは、自分の近くに留まり、「じっと見て、祈る」ように命じた。イエスは、使徒と直属の追随者の多くが、その時でさえも、剣を隠し持ち歩いているのを知っていたが、この事実に対しては何の言及もしなかった。

172:2.2 (1880.3) この朝の指示は、カペルナム近くでの聖職受任の日からエルサレム入りの準備をしたこの日までの活動の寸評を含んだ。使徒は黙って聴いた。かれらは、質問をしなかった。

172:2.3 (1880.4) その朝早く、ダーヴィド・ゼベダイオスは、ペラ宿営の備品の販売で得た資金をユダに引き渡し、ユダは、エルサレム入りの緊急事態を予想して保管のためにこの金の大部分を主人のシーモンに手渡した。

172:2.4 (1880.5) 使徒との会議の後、イエスは、ラーザロスと会話し、シネヅリオン派の執念深さに彼の人生を犠牲にすることのないように命じた。数日後、シネヅリオン派の役人がラーザロスの逮捕に行かせたとき、ラーザロスが、フィラデルフィアに逃げたのは、この訓戒への服従であった。

172:2.5 (1880.6) ある意味で、イエスの追随者は全員、切迫した危機を感じたが、あるじの常にない朗らかさと異例の上機嫌が、その由々しさを彼らに十分に察知させることを阻んだ。

3.エルサレムへ向けて

172:3.1 (1880.7) ベサニアは、寺院からはおよそ３キロメートルのところにあり、イエスがエルサレムへの出発準備ができたのは、その日曜日の午後１時半であった。イエスには、ベサニアとその純真な人々への深い愛情の気持ちがあった。ナザレ、カペルナム、エルサレムは、イエスを拒絶してきたが、ベサニアは、彼を受け入れ、彼を信じていた。そして、地球贈与の最も強大な仕事、つまりラーザロスの復活を実行するのを選んだのは、ほとんどすべての男性、女性、子供等が信者であったこの小さい村であった。村人が信じるかもしれないからではなく、むしろすでに信じていたので、イエスは、ラーザロスを蘇らせた。

172:3.2 (1880.8) イエスは、午前中ずっとエルサレム入りを考えていた。これまで、かれは、救世主としての自分へのすべての公の大歓迎を抑える努力を常にしてきたが、その時は違っていた。かれは、肉体での経歴の終わりに近づいており、その死はシネヅリオン派によって発令されており、正式かつ表立った入京を選ぶならば起こるかもしれないような自由な感情表現を弟子達に許すことからは、何の危害も起こり得なかった。

172:3.3 (1881.1) イエスは、最後の努力をして民衆の指示を受けるためにも、力の最後の獲得のためにも、この表立ったエルサレム入りをするとは決めなかった。そして、かれは、人間である弟子と使徒の切望を完全に満たすためにそれをすることもなかった。イエスは、空想的な夢想家が抱くようないかなる幻も心に抱きはしなかった。彼には、この訪問の結果がどうなるかということがよく分かっていた。

172:3.4 (1881.2) あるじは、公的なエルサレム入りをすると決めて、そのような決心を実行する適切な方法を選ぶ必要性に直面していた。イエスは、いわゆる救世主の多くの多少相容れない予言の全てについて熟考したが、彼にとって踏襲するのが全く適切であるのはただ１つであるように思われた。大部分のこれらの予言的な発言は、ダーヴィドの息子であり後継者であり、外国支配の束縛から全イスラエルを救う大胆で攻撃的な現世の救出者である王について表現していた。しかし、彼の任務の精霊的な概念をより保持する人々が、救世主に時おり関連づけた１つの聖書があり、それは、イエスが、計画されたエルサレム入りの手引きとして一貫して用いることができると

考えた。この聖書は、ザハリーアで見つかり、「大いに喜べ、シオンの娘よ。叫べ、エルサレムの娘よ。見よ、あなたの王が、あなたのところにやって来る。この方は、正しい方で救済をもたらす。この方は、卑賤の身なりで、ロバに乗ってやって来る。」とある。

172:3.5 (1881.3) 将軍は、いつも馬に乗って都入りした。平和と友好の使命をもつ王は、いつもロバに乗った。イエスは、馬上の男としてエルサレムに入るつもりはなく、ロバに乗る人の息子として穏やかに善意をもって入ることを望んでいた。

172:3.6 (1881.4) イエスは、自分の王国は現世のものではなく、純粋に精霊的な問題であるということを使徒と弟子に銘記させるために、直接の教えを長い間試みてきた。しかし、この努力は成功しなかった。かれは、明白かつ直接的な教えで失敗したことを、そのときは、象徴的な呼びかけによって達成しようとした。従って、イエスは、正午の昼食直後にペトロスとヨハネを呼び、本道からは少し逸れたベサニアの北西に短距離で隣接する村ベスファゲに向かうように指示した後でさらに言った。「ベスフ

ァゲに行きなさい。君達が道路の交差地点に差し掛かるとき、そこにロバの子が繋がれているのが見えるであろう。ロバの子を放して連れてきなさい。もし、誰かがなぜそんなことをするのかと尋ねるならば、単に『あるじが必要としている』と言いなさい。そこで、2人の使徒が、あるじの言いつけ通りにベスファゲに行くと、往来で、しかも、母ロバの近くに繋がれている子ロバを角の家の近くで見つけた。ペトロスが子ロバを解き始めると、その持ち主が来て、なぜそのようなことをしているのか尋ねるので、ペトロスは、イエスに言われた通りに答えると、、この男は「あなたのあるじがガリラヤからのイエスであるならば、ロバの子をお与えください。」と言った。したがって、二人は、ロバの子を連れ帰った。

172:3.7 (1881.5) この時までには、数百人の巡礼者が、イエスと使徒の周りに集まってきていた。過ぎ越しへ向かう通り掛かりの訪問者達は、午前の半ばから留まっていた。一方、ダーヴィド・ゼベダイオスと元使者仲間の何人かは、エルサレムへと急いで行くことに決め、そこで、ナザレのイエスが都に凱旋するという報告を寺院周辺の訪

問中の巡礼者の群れに効果的に広めた。従って、数千人の訪問者は、この大変話題となっている予言者であり、驚きの業を為す人、ある者達は救世主であると信じた人に挨拶するために先へと群らがった。エルサレムからのこの大勢は、オリーブ山の崖を通過し、都へと下り始めた直後、都に入ろうとしているイエスと群集とに遭遇した。

172:3.8 (1882.1) 行列がベサニアから出発したとき、祭気分の弟子、信者、そしてガリラヤやペライアからの多くの巡礼者からなる群衆の間には、多大の熱意があった。かれらの出発の直前、数人の仲間に伴われた元の女性部隊の12人の女性が、到着し、嬉々として都に向けて移動するこの独特の行列に合流した。

172:3.9 (1882.2) かれらが出発する直前、アルフェウスの双子は、自分等の外套をロバにつけ、あるじが跨がる間ロバを掴んでいた。行列がオリーヴ山の頂上に向けて進んだとき、祭の群衆は、約束された救世主、王の息子を運ぶロバのために名誉の敷物を作るために、自分達の衣類を地面の上に放り投げ、近くの木から枝を持って来た。陽

気な群衆は、エルサレムへ進み、詩篇「ホサナ、ダーヴィドの息子へ：主の名にかけて来る方には祝福がある。ホサナ、いと高きところに。天国から下りる王国に祝福があるように。」と一斉に歌った、と言うよりむしろ叫び始めた。

172:3.10 (1882.3) 彼らが進行し、都と寺院の塔が完全な視野に入るオリーヴ山の崖に来るまで、イエスは、気楽で上機嫌であった。そこで、あるじは、行列を止め、そして、彼らがあるじが涙しているのを視たとき、重い沈黙が起きた。夥しい人の群れがあるじに挨拶しに都から来るのが下方に見えると、あるじは、多くの感情と涙声で言った。「ああ、エルサレム、せめてお前だけでも、平和をもたらす物を、少なくともこのお前の日に、知っていたならば、そして、とても自由に持つことができた物を知っていたならば。しかし、今、それらの栄光は、お前の目から隠されようとしている。お前は、平和の息子を拒絶し、救済の福音に背を向けようとしている。やがて、敵がおまえの周りに堀を巡らせ、四方から攻め落とす日が来るであろう。敵は1つの石の上に他の石が残されることのないまでに完全にお前を滅ぼすであろう。それも

これもお前が神性の訪れの時を知らなかったので、このすべてが降りかかるのである。お前は神の贈り物を拒絶しようとしており、すべての人は、お前を拒絶するであろう。」

172:3.11 (1882.4) あるじが話し終え、彼らが、オリーヴ山を下降し始めると、ほどなくエルサレムから来た訪問者の群れが、椰子の枝を振りホサナと叫び、さもなければ、喜びと親交を表現しながら合流してきた。あるじは、これらの群衆が自分たちに会うためにエルサレムから出て来るようにというような計画はしなかった。それは、他の者達のしたことであった。かれは、決して劇的な事を事前に計画はしなかった。

172:3.12 (1882.5) あるじを歓迎するために殺到してきた群衆と共に、多くのパリサイ派と他の敵も、またやって来た。かれらは、大衆のこの突然の、そして予期しない勃発的な歓迎に非常に狼狽させられたので、あるじを逮捕するそのような行動は、民衆のあからさまな反乱を引き起こすと恐れた。かれらは、イエスについて多く聞いてき

た、しかもその多くの者が、イエスを信じている非常に多くの訪問者の態度を大いに恐れた。

172:3.13 (1882.6) エルサレムに近づくにつれ、群衆は、ますます感情を露わにするようになったので、パリサイ派の何人かが、イエスの横側に進んできて言った。「先生、あなたの弟子を叱責し、もっとそれらしく振る舞うように勧めなければなりません。」イエスは答えた。「これは、単純に、司祭長等が拒絶した平和の息子をこれらの子供が歓迎するのに適っている。彼等を止めても、代わりに路傍のこれらの石が叫ぶといけないから無駄であろう。」

172:3.14 (1882.7) パリサイ派は、寺院で開会中のシネヅリオン派に再び合流するために行列の前の方へと急いで行き、そして彼らは、仲間に報告した。「見てくれ、我々がすることはすべて役に立たない。我々は、このガリラヤ人に混乱させられている。民衆は、彼にのぼせあがっている。これらの無知な者を止めないと、全世界が彼を求めるであろう。」

172:3.15 (1883.1) 大衆の熱狂性からくるこの表面的で自然発生的な興奮に結びつけられる深い意味は、本当にはなかった。喜ばしく心からのものではあったが、この歓迎は、祭騒ぎのこの群衆の心に何の本当の、または根深い信念も示してはいなかった。これらの同じ群衆は、シネヅリオン派が、かつてイエスに対し断固たる態度を取ると決めたとき、そして、かれらが、幻滅し始めたとき—イエスは、自分達のかねての期待にそって王国を設立するつもりではないと気づいたとき—この週の後半に、負けず劣らずイエスを進んで拒絶した。

172:3.16 (1883.2) しかし、都市全体は非常に掻きたてられ、皆が、「このい人は誰であるか。」と尋ねるほどであった。そこで群衆は、「これがガリラヤの予言者、ナザレのイエスである。」と答えた。

4. 寺院周辺の訪問

172:4.1 (1883.3) アルフェウスの双子がロバをその所有者に返す間、イエスと10人の使徒は、側近の仲間から離れ、過ぎ越しの準備を見て寺院の周辺をそぞろ歩いた。シネヅリオン派は、人々を大いに恐れ、イエスに危害を加える何

の試みもしなかったが、それは、結局、イエスが群衆にこのように歓迎させることとなった理由の1つであった。これが、都入りに当たり、イエスの即座の逮捕の防止において効果的であり得た唯一の人間の手順であると、使徒は、ほとんど思わなかった。あるじは、福音を聞き、平和の息子を受け入れる機会をもう一度最後に、もし彼等が望むのであれば、エルサレムの住民に、身分の高い者や低い者、何万もの過ぎ越しの訪問者にも同様に与えることを望んでいた。

172:4.2 (1883.4) そして、夕方が近づき、群衆が食べ物探しに出掛け、イエスと側近の追随者は自分達だけになった。何と奇妙な一日であったことか。使徒は、考え込んでいたが、無言であった。かつて、イエスとの長年の付き合いにおいて、そのような日に遭遇したことは決してなかった。暫く、かれらは、金銭収納箱の側に座り、寄付をする人々を見ていた。金持ちは、受領箱にたくさん入れていたし、皆がそれぞれの財産に応じて何かを与えていた。最後に、薄着の貧しい未亡人がやって来て、2ミテ(小銅貨)を漏斗状の容器に投げ入れるのを見た。イエスはその時、使徒に未亡人への注意を促して言った。「た

った今見たことをよく心に留めておきなさい。この貧しい未亡人は、他の全ての者以上に投げ入れた。他の全ての者にとっては過分の中から些細な物を贈呈物として投げ入れたが、この貧しい女性は、不足しているにもかかわらず、持っているすべてを、生活費さえ、与えた。」

172:4.3 (1883.5) 宵が近づくにつれ、皆は黙って寺院の中庭を歩き回り、イエスがもう一度これらの馴染み深い光景を見渡してから、それ以前の訪問も含めた前回の何度かの訪問のときの感情を思い起こしながら、「ベサニアに休息しに上がろう」と言った。イエスは、ペトロスとヨハネと共にシーモンの家に帰ったが、他の使徒は、ベサニアとベスファゲの友人宅に宿泊した。

5. 使徒達の態度

172:5.1 (1883.6) この日曜日の晩、イエスは、ベサニアに戻るとき使徒の前を歩いていた。かれらがシーモンの家に到着し、解散するまで、言葉は交わされなかった。王国のこれらの大使の心と魂をそのとき急に駆けめぐったそのような様々の、不可解な感情というものを、かつて12人の人間が経験したことはなかった。これらの頑強なガリラ

ヤ人は、混乱し、当惑した。かれらは、次に何を期待してよいかを知らなかった。かれらは、非常に恐れ、あまりにも驚いた。かれらは、あるじの翌日の計画について何も知らなかったし、質問もしなかった。かれらは、各自の宿に行ったが、双子を除いてはあまり眠らなかった。それでも、かれらは、シーモンの家でのイエスを武装して見張りを続けなかった。

172:5.2 (1884.1) アンドレアスは、すっかり当惑しており、ほとんど混乱していた。かれは、人気の爆発的な賞賛のを深刻に評価をしなかったただ1人の使徒であった。かれは、群衆の高らかなホサナという叫びの意味、または重要性を考慮するには、使徒軍団の長としての責任の考えにあまりに心を奪われていた。アンドレアスは、興奮状態の間、感情に流されるかもしれないと恐れて何人かの仲間を、特にペトロス、ジェームス、ヨハネ、シーモン・ゼローテースを見守ることに忙しかった。この日とその直後の日々ずっと、アンドレアスは、徒ならぬ疑問に悩んだが、これらの危惧のいずれも使徒仲間には決して表明しなかった。かれは、剣で武装していると知っている12人のうちの一部の態度を心配はしたが、自身の弟

ペトロスが、そのような武器を携行しているとは知らなかった。そして、エルサレムへの行列は、アンドレアスには比較的上滑りの印象を与えた。かれは、他の事で影響されるには事務的な責任で忙し過ぎた。

172:5.3 (1884.2) シーモン・ペトロスは、熱狂のこの人気の兆候に、初めはもう少しで夢中になるところであった。しかしその夜、皆でベサニアに戻るまでには、かれは、かなり冷静になっていた。ペトロスは、あるじが何をしているのかただ理解することができなかった。かれは、イエスが幅広い人気のこの波をある種の公式声明で補足しないことにひどく失望した。ペトロスは、彼らが寺院に到着したとき、イエスが、なぜ大衆に話さなかったのか、さもなければ、少なくとも使徒の一人に群集に演説することを許可しなかったのかを理解することができなかった。ペトロスは、偉大な説教者であり、またかれは、そのように受容性があり熱心な多くの聴衆を見逃すことを見るのは嫌であった。かれは、寺院のまさにそこにいるその群集に王国の福音を本当に説きたかった。しかしあるじは、エルサレムのこの過ぎ越しの週の間、教えたり説いたりしないようにしかと命じていた。都への壮観な

行列からの反応は、シーモン・ペトロスにとって悲惨であった。かれは、夜までには落ち着きを取り戻し、言い表せないほどに悲しんだ。

172:5.4 (1884.3) この日曜日は、ジェームス・ゼベダイオスにとり当惑と深い混乱の１日であった。かれは、起きていることの意味を理解することができなかった。かれは、寺院に到着の際、あるじが、この荒々しい歓迎を許したり、人々へ一言でも発することを拒否するあるじの目的を理解できなかった。ジェームスは、エルサレムへの行列がオリーヴ山を下りるとき、取り分け、あるじを歓迎するためにどんどんやって来る何千人もの巡礼者に会ったとき、自分が目にしたものに対して意気揚々の感情と満足感、それと、寺院への到達時に起こるであろうことに対する深い恐怖感との相反する感情に酷く苦しんだ。そして、かれは、イエスがロバから下り、寺院の中庭をゆっくり歩き始めると、意気消沈し、失望感に圧倒された。ジェームスは、王国を宣言するそのような素晴らしい機会を無駄にする理由が理解できなかった。夜までには、その心は、悲惨で、ひどい不安に固く襲われていた。

172:5.5 (1884.4) ヨハネ・ゼベダイオスは、イエスがなぜこうしたのかをほぼ理解する範疇にいた。少なくとも、かれは、エルサレムへのいわゆるこの凱旋の精霊的な意味をある程度理解した。群衆が寺院へと移動しているとき、そしてヨハネが、子ロバに跨がりそこに座っているあるじを見ていたとき、かれは、イエスがかつて聖書からのザハリーアの発言の件の引用を聞いたことを思い出し、そしてそれは、穏やかな人、そして、エルサレムへとロバに乗って行く救世主の到来を記述したものであった。ヨハネは、この聖書を心の中でめくり、この日曜日の午後の行事の象徴的な意味を理解し始めた。少なくとも、自分がこの出来事を味わったり、凱旋行列の無目的な結末に過剰に気が滅入るのを防ぐに事足りるこの聖書の意味を把握した。ヨハネは、自然のうちに象徴性で考えたり感じたりする心の傾向があった。

172:5.6 (1885.1) フィリッポスは、観衆の突発的、自発的な爆発に完全に動揺していた。オリーヴ山の下りの道中、かれは、すべての示威運動の意味について何らかの落ち着いた考えに至るために自分の考えを十分に纏めることができなかった。あるじが名誉の状態にあったので、かれ

は、ある意味でこの挙行を楽しんだ。彼らが、寺院に達する頃には、イエスが、ことによると群衆に食べ物を与えるように自分に言いつけるかもしれないという考えにうろたえていたので、群衆から離れて悠長に歩いているイエスの振る舞いは、それは大部分の使徒をこの上なく失望させはしたが、フィリッポスには大きな安堵であった。12人の世話係にとり、大衆は時々大きな試練であった。群衆の物質的必要性に関するこれらの個人の恐怖から解かれた後、フィリッポスは、群衆に教えるための何事も為されないという失望の表現においてはペトロスと同じであった。その夜、フィリッポスは、これらの経験を熟考し始め、王国の全体の考えについて疑う気持ちになった。かれは、全てのこれらが何を意味し得るのかと正直のところ驚いたが、誰にもその疑問を表現しなかった。かれは、イエスをあまりに愛し過ぎた。かれは、あるじにすばらしい個人的な信仰を持っていた。

172:5.7 (1885.2) ナサナエルは、象徴的で予言的な局面は別として、過ぎ越しの巡礼者からの人気の支持ある助けを得るあるじの理由を理解する最短距離にいた。ナサナエルは、エルサレムへのそのような明確に示す入都なくして

は、彼らが寺院に着く前に、イエスは、都に入るなりシネヅリオン派の役人に捕らえられ投獄されたことであろうと理由づけた。したがって、一度都の壁の内に入ってしまい、即座の逮捕を控えさせるほどにユダヤの指導者を強引に印象づけてしまえば、あるじが、声援する群衆をそれ以上必要としなかったことには少しも驚かなかった。ナサナエルは、あるじがこのように都入りする本当の理由を理解し、イエスのその後の行為に平静さをもって自然のうちに続き、他の使徒よりも、それほど混乱させられたり、失望はしなかった。ナサナエルは、窮状に対するイエスの機敏さと巧妙さばかりでなく、人への理解も大きく信頼していた。

172:5.8 (1885.3) マタイオスは、初め、この行列挙行に困惑した。彼もまた、王が救済を携え子ロバに乗って来たのでエルサレムが歓喜している様に言及した予言者ザハリーアの聖書の部分を思い出すまで、自分の目で見ている物が、何を意味するのかを理解しなかった。行列が都の方行に動き、次には寺院に近づいたので、マタイオスは、夢中になった。この叫び声を上げる群衆の先頭にいるあるじが、寺院に到着するとき、かれには、何か驚異的な

ことが起こると確信があった。パリサイ派の一人が、イエスを愚弄して「皆さん、注目。ここに来る者を見よ。ユダヤ人の王がロバに乗ってやって来る」と言った。マタイオスは、自身を強く抑制をするだけで、そのパリサイ派に手出しをしなかった。その晩のベサニアへの道中、12人の誰も、彼ほどには意気消沈していなかった。シーモン・ペトロスとシーモン・ゼローテースに次いで、かれは、最も高い神経質な緊張を経験し、夜までには、疲労困憊の状態にあった。しかし、朝までには、マタイオスは、大いに励まされた。かれは、結局は陽気な敗北者であった。

172:5.9 (1886.1) トーマスは、12人中もっともうろたえ、当惑した者であった。大抵の場合、かれは、ただずっと後に続き、光景を眺め、そのように風変わりな示威運動に参加するあるじの動機が何であるのか、正直のところ不思議に思うのであった。心の深いところでは、挙行全体を少し子供っぽく、さもなくば全く愚かであると考えた。かれは、このように振る舞うイエスを一度も見たことがなく、この日曜日の午後のその奇妙な行いを説明するのに困っていた。トーマスは、寺院に達するまでにはこの人

気ある示威行動の目的は、シネヅリオン派をこの上なく怯えさせ、彼らがすぐには強引にあるじを逮捕させないようにするためであると推論した。トーマスは、ベサニアへの途中、よくよく考えたが、何も言わなかった。就寝時までには、騒然としたエルサレム入りの演出におけるあるじの巧妙さは、いくらかのユーモラスな魅力をみせ始め、かれは、この反応に非常に励まされた。

172:5.10 (1886.2) この日曜日は、シーモン・ゼローテースにとり素晴らしい日として始まった。かれは、次の数日間、エルサレムにおける素晴らしい業の光景を目にし、そして、かれは、そのことにおいて正しかったのだが、シーモンは、イエスをダーヴィドの王位に据わらせ、ユダヤ人の新国家統治の設立を夢みた。シーモンは、王国が発表されるなり、そして自らは新王国の集まりくる軍隊の最高指揮の地位にあるのを、そして国家主義者が急に活気づくのを見た。オリーヴからの下山途中、かれは、シネヅリオン派とその同調者のすべてが、当日の日没前の死さえ心に描いた。かれは、素晴らしい何かが起こりつつあると、本当に信じた。かれは、全群衆の中で最も騒がしい者であった。かれは、その日の午後5時までには

静かで、押し潰され、幻滅した使徒であった。この日の衝撃の結果、かれは、根づいた抑鬱から決して完全には回復しなかった。少なくともあるじの復活のずっと後まで。

172:5.11 (1886.3) アルフェウスの双子にとって、これは、絶好の日であった。二人は、実にその日の最後まで楽しみ、寺院の周りでの穏やかな訪問の時にはいなかったので、あっけない結末の民衆の大騒ぎの大部分からは逃がれていた。二人は、その晩ベサニアに戻ったとき、塞ぎ込んだ使徒達の様子をまったく理解できなかった。双子の記憶の中で、これは、二人にとって常に地球での最も天国に近い日であった。この日は、二人の使徒としての全経歴で満足のいく最高潮の日であった。そして、この日曜日の午後の意気揚々たる記憶は、この波瀾万丈の週の悲劇の全てを通して、まさしく磔刑の時間まで支え続けた。それは、双子が発想できた最も相応しい王の入場であった。かれらは、全行その記憶を大事にした。

172:5.12 (1886.4) 全使徒の中で、ユダ・イスカリオテは、エルサレムへのこの行列入場に最も悪影響を受けた。その心

には、シーモン家の祝宴でのマリアの塗布に関して、前日のあるじの叱責からくる不愉快な動揺があった。ユダは、全光景にうんざりした。彼にとって、それは、子供じみた、または本当に笑止千万に見えた。この執念深い使徒は、この日曜日の午後の進行を傍観したとき、イエスは、彼にとって王というよりも道化師に見えた。かれは、全挙行に心から憤慨した。かれは、ロバや子ロバに乗ることに同意する者は誰でも軽蔑するギリシア人とローマ人と観点を共にした。凱旋行列が都に入る頃には、ユダは、そのような王国の考えを放棄する決心をするところであった。かれは、天の王国を樹立するそのような茶番じみた全ての試みを放棄することをほぼ決心した。それから、かれは、ラーザロスの復活、また他の多くの事柄を考えて、少なくともう１日12人と残ると決めた。その上かれは、袋を運んでおり、使徒の資金を所持しており、義務を放棄しなかった。その夜のベサニアへの道中、使徒全員が、等しく意気消沈し、黙っていたので、ユダの挙動は、奇妙には見えなかった。

172:5.13 (1887.1) ユダは、サッヅカイオス派の友人の嘲笑におそろしく影響された。イエスが都の入口に着いたちょう

どそのとき起こった特定の出来事ほどには、イエスと仲間の使徒を見捨てる彼の最終的な決断において、他のいかなる一要因も、彼にそれほどの強力な影響を及ぼしはしなかった。一人の著名なサッヅカイオス派(ユダの家族の友人)は、悦に入った嘲りの態度でユダのところに駆けつけてきて、背中を叩いて言った。「なぜそんな困り切った顔付きをしているのだ、よき友よ。彼がロバに乗り、エルサレムの門を通り抜ける間、ユダヤ人の王であるこのナザレのイエスを我々が歓呼するのに、元気を出して参加しろよ。」ユダは、決して迫害から尻込みをしたことはなかったが、この種の嘲笑には耐えられなかった。嘲笑のこの致命的な恐怖、自分のあるじと仲間の使徒が恥ずかしめられるひどくて恐ろしい感情の恐怖が、長らく培ってきた報復感情とが、そのとき混ざり合った。心では、聖職を授けられたこの大使は、すでに脱走者であった。あるじとの開いた亀裂のために何らかのもっともらしい言い訳を見つけることだけが、彼に残されていたのであった。

論文 173
エルサレムの月曜日

173:0.1 (1888.1) この月曜日の朝早く、事前の打ち合せにより、イエスと使徒達は、ベサニアのシーモンの自宅に集合し、短い会議の後、エルサレムに向けて出発した。寺院に向かう旅の間、12人は妙に静かであった。かれらは、前日の経験から立ち直っていなかった。かれらは、期待し、恐れ、そして、この過ぎ越し祭りの週を通して公の教えに従事しないという指示と結びついた戦術に対するあるじの急転からくるある種の疎外感に強く影響を受けていた。

173:0.2 (1888.2) この一行がオリーヴ山を下るとき、イエスは先導し、使徒は、深く考えに耽け、黙って真近かに続いて行った。ユダ・イスカリオテを除くすべての者の心の中には、最優先のただ1つの考えがあり、そしてそれは、あるじは、今日、何をするのだろうか、ということであった。ユダを夢中にさせていた1つの考えは、次の通りであった。どうしよう。イエスと仲間と共に進み続けるのか、あるいは引き下がるのか。そして、止めるのであるならば、いかに関係を切るのか。

173:0.3 (1888.3) これらの男が寺院に到着したのは、この美しい朝の9時頃であった。皆は、早速、イエスが度々教えた大きい中庭の方に行き、待ち受けていた信者達に挨拶をした後、イエスは、教壇の1つに上がり群衆に話し始めた。使徒は、近くに撤退して成り行きを待った。

1. 寺院の浄め

173:1.1 (1888.4) 膨大な商業取り引きが、寺院での崇拝における礼拝と儀式に関連して発展してきていた。様々な生贄に適した動物を提供する商売があった。崇拝者が、自身の手で供え物を提供することは許されてはいたが、この動物には、レビ族の法の意味において、また寺院の公式検査官の解釈するいかなる「傷」もあってはならないということが、依然として事実であった。多くの崇拝者は、おそらくは文句なしの動物を寺院の試験官に拒絶される屈辱を経験した。従って、生贄の動物を寺院で購入することが、より一般的となり、また、購入できる幾つかの場所が近くのオリーヴ山上にあったのだが、直接寺院の檻からこれらの動物を買うことが流行になった。徐々に、生贄用の動物すべてが、寺院の中庭で売られるこの習慣が発展した。その結果、巨大な利益が上がる広範囲

の商売が生み出された。これらの利得の一部は、寺院の資金のために保留されたが、かなりの部分は、間接的に支配的な立場にある高聖職者等の家族の手に入った。

173:1.2 (1888.5) 寺院のこの動物販売は繁昌した、というのは、価格はいくらか高いかもしれないが、崇拝者がそのような動物を購入すると、それ以上の料金を支払わなくてよかったし、その上、意図された生贄が本当の、または厳密な意味で傷を持つという理由では拒絶されないのを確信できるからであった。いつの頃か、法外に不当な高値の制度が、特に国家の大きな祝宴の間、一般人に対して実施された。一時は、貪欲な司祭達が、数ペニーで販売されるはずの１対の鳩を貧しい人々に１週間の労働に値する額を要求するところまでいった。「ハナンージャの息子達」は、すでに寺院の境内における市を、寺院自体の崩壊の３年前に暴徒による最終的な打倒の時まで固持したまさしくそれらの商品市場を確立し始めていた。

173:1.3 (1889.1) しかし、寺院の中庭が汚された習わしは、生贄の動物と種々の商品取り引きばかりではなかった。このとき、こともあろうに寺院の境内で行なわれた金融業と

商取り引きの広範囲な制度が促進された。そして、これはすべて、次の方法で起こった。ハスモネアノス王朝時代、ユダヤ人は、自身の銀貨を鋳造しており、寺院の賦課金として1/2シェケルが要求されるようになり、また、すべての他の寺院の料金が、このユダヤ硬貨で支払われる習慣となった。この規則は、パレスチナとローマ帝国の他の行政区一円で流通している様々の通貨をこの正統的なユダヤ人造幣のシェケルに交換するということが、両替商に認可されるという必要性を生じた。女性、奴隷、未成年者を除く全てに課される寺院の人頭税は、1/2シェケルで、およそ10セント硬貨の大きさで、厚さは2倍であった。イエスの時代までには、聖職者は、寺院税の納付からも免除されていた。したがって、過ぎ越しの前の月の15日から25日まで、彼らのエルサレム到着後、ユダヤ人が寺院の適切な納付金が支払える目的のために、公認の両替商等は、パレスチナの主要な都市でそれぞれに仮小屋を立てた。この10日の期間の後、これらの両替商は、エルサレムに移動し、寺院の中庭に交換用の台の設置にとりかかった。およそ10セント相当の硬貨の交換には3セントから４セントほどの手数料の請求が

許され、より高額の硬貨の交換に際しては、２倍の額の徴収が許された。同様に、これらの寺院の金融業者は、生贄用の動物の購買、そして、誓約の支払いと供え物の提供を目的とする全ての金の交換から利益を得たのであった。

173:1.4 (1889.2) 寺院のこれらの両替商は、訪問の巡礼者がエルサレムに定期的に持ち込む20種類以上の金銭交換における利益のための通常の金融業務を行うだけでなく、金融業務に属する他の全種類の取り引きにも従事していた。寺院の資金とその支配者達の双方が、これらの商業活動から相当の利益を得た。一般人が貧困に苦しみ、これらの不当な課税を払い続ける一方、寺院の資金の所有が、1,000万ドルを越えることは珍しくなかった。

173:1.5 (1889.3) 両替商、商人、家畜販売人等のこの騒々しい集合体の真っ只中にあって、イエスは、この月曜日の朝、天の王国の福音を教えようとした。寺院のこの冒涜に憤慨するのは、イエス一人ではなかった。一般人、特に他の地域からのユダヤ人の訪問者達も、自分達の国家的な崇拝の家に対するこの荒稼ぎの神聖冒涜に心から憤慨し

た。このとき、シネヅリオン派自体は、商業と物々交換のこの全ての騒めきと混乱に取り囲まれた会議所でその定期的な会合を開いた。

173:1.6 (1890.1) イエスが、講演を始めようとしていたとき、彼の注意を捕らえる２つの事が、偶然起きた。近くの両替商の交換台では、乱暴で激しい議論が、アレキサンドリアからの一人のユダヤ人の不当な価格の申し立てに関して起こっており、時を同じくして、動物の檻の１区画から別の区画に追いやられていた100頭ほどの雄の子牛の群れの喚き声で空気がつんざかれた。イエスが躊躇い、静かに、しかし考え深く商業と混乱のこの光景を見つめていると、近くに単純なガリラヤ人が、イエスがジロンで一度話しをしたことのある男性が、高慢で自称すぐれたユダヤ人達に嘲られ、小突き回されていたのを見た。そして、このすべては、イエスの魂で、奇妙な周期的な憤慨の感情の高まりを生じた。

173:1.7 (1890.2) 真近かに立ち、間もなく起ころうとしていることへの参加を控えている使徒が驚いたことには、イエスは、教壇から下り、庭を突っ切り、家畜を追っている若

者のところに行き、むちを取り上げ、寺院から素早く動物を追い立てた。しかし、それが全てではなかった。イエスは、寺院の中庭に集まった数千人の不思議そうな凝視の中を最も遠くの家畜の檻に大股で厳然と歩いていき、あらゆる露店の出入り口を開け、封じ込められた動物を追い払い出した。この頃には、集まった巡礼者は、衝撃を受け、騒々しい叫び声をあげて市場の方へ進み、両替商の台をひっくり返し始めた。５分もしないうちに、すべての商売は寺院から一掃された。近くのローマの歩哨達がその場に現れるまでには、すべては静かで、群衆は整然となっていた。講演者の台に戻ったイエスは、群衆に話した。「あなた方は、聖書に書かれていることをこの日に目撃した。『私の家は、万国の祈りの家と呼ばれるべきであるのに、あなた方はそれを強盗の巣窟にした』。」

173:1.8 (1890.3) しかし、次の言葉を発する前に、大群衆から称賛のホサナという叫びが突然に起こり、まもなく若者の集団が、不敬で、不当収益にかかわる商人達が神聖な寺院から追放されたことへの感謝の賛美歌を歌うためにその群衆の中から出てきた。この時までには、聖職者の幾

人かは、この場に到着しており、その中の一人が「あなたはレーヴィイ族の子孫が言っていることを聞かないのか。」とイエスに言った。すると、あるじは、「『幼い子供の口から賛美が完成された』とあるのを読んだことがないのか。」と答えた。そして、残りのその日はイエスが教える間ずっと、人々により配置された見張りが、あらゆるアーチ道に警備に立ち、かれらは、空の容器といえども誰にも寺院の中庭を通って運ぶことを許そうとはしなかった。

173:1.9 (1890.4) 司祭長達と筆記者達は、これらの出来事について聞くと唖然とした。あるじを恐れれば恐れるほど、かれらは、ますますあるじを滅ぼすと決心をした。しかし、かれらは、途方にくれた。かれらは、神聖を汚す不当利得者を打倒するイエスを是認してあからさまに物を言う群衆を大いに恐れたので、イエスを死に至らせる方法を知らなかった。そして、この日ずっと、寺院の中庭の静かで平穏な1日、人々は、イエスの教えを聞き、文字通りその言葉にしがみついた。

173:1.10 (1890.5) イエスのこの不意の行為は、使徒の理解を超えていた。かれらは、あるじの突然の、予想外の行動に非常に驚いたので、出来事の間中、演説者用の台の近くに雑然と集まったままでいた。かれらは、寺院のこの浄化を進めるために少しの労も決してとらなかった。もし、この壮観な出来事が、その前日、都の入口を通過する騒然とした行列の終了の、この間中ずっと群衆の騒々しい歓迎を受けて、イエスの凱旋の寺院到着時点で起こっていたならば、そのための準備ができていたことであろうが、実際は、そのように起こってしまったので、使徒は、全く参加する用意ができていなかった。

173:1.11 (1891.1) 寺院のこの浄化は、宗教実践の商業化へのあるじの態度、ならびに貧者と無学な者を犠牲にした不当の、悪徳商法のあらゆる形式への嫌悪を明らかにしている。この出来事は、政治的、財政的、あるいは宗教団体の力の後ろにいる地歩を固めることができるかもしれない不正の少数者の不当かつ強慾な実践に対するある特定の人間集団の大多数を保護するための力の行使の拒否をイエスが満足して見ていなかったことをも示証明している。抜け目がなく、邪悪で腹黒い者が、自らの理想主義

の理由のために、自己保護、あるいは称賛に値する人生課題の推進に気が向かないない者達を搾取したり、圧迫する目的のために組織化することを許してはいけない。

2. あるじの権威への挑戦

173:2.1 (1891.2) 日曜日のエルサレムへの凱旋入都は、イエスの逮捕を控えさせるほどにユダヤ人の支配者達を威圧した。当日、寺院のこの壮観な浄化は、あるじの憂慮を同じく効果的に延期した。日毎に、ユダヤ人の支配者等は、イエスを滅ぼそうとますます決意を固めるようになっていたが、それでも襲撃時の遅延をもたらした２つの恐怖に心を取り乱していた。司祭長と筆記者等は、群衆が激しい怒りをぶつけてくるかもしれないことを恐れ、公然とイエスを逮捕する気がなかった。かれらは、ローマの歩哨達が、民衆の暴動を鎮めるために呼び出される可能性も恐れた。

173:2.2 (1891.3) シネヅリオン派の正午の会議では、あるじの友人は一人も、この会合に出席していなかったので、イエスは即刻滅ぼされなければならないとの満場一致の意見であった。しかし、いつ、いかように拘引されるべきか

に関しては、同意に至ることができなかった。かれらは、ようやくイエスをその教えに陥れるか、さもなければ、その教示を聞く人々の目前でイエスの評判を落とすために人々の間に出かける5集団を指名することに同意した。そのため、2時頃、イエスがちょうど「息子の資格の自由」について語り始めたとき、イスラエルのこれらの長老の一団が、イエスの近くに進んできて、慣習的な態度で話の邪魔をして「いかなる権威によってこれらのことをするのか。だれがこの権威をあなたに与えたか。」とこう質問をした。

173:2.3 (1891.4) 寺院の支配者とユダヤ人のシネヅリオン派の役員は、イエスに特有であった並はずれた方法で大胆に教えたり、実践する者には誰であろうとも、特に寺院の全商業を取り除く先頃の行為に関して、この質問をすることは全く妥当なことであった。これらの商人と両替商は皆、最高支配者達からの直接の認可によって営んでおり、利益の歩合は、直接寺院の財務に入ることになっていた。権限は、全ユダヤ人の中心的な言葉であったということを忘れてはいけない。予言者達は、権限を持たずに、ユダヤ教師の学校で順当に教授を受け、その後シネ

ヅリオン派に定期的に命じられることなく、非常に大胆に教えていたので、常にもめ事を起こしていた。野心的な公の教えにおけるこの権限の欠如は、無知な傲りか、公然たる反逆のいずれかを示すと見られた。このとき、シネヅリオン派だけは、長老、または教師を任命することができ、そしてそのような儀式は、予めそのように任命された少なくとも３人の面前で行なわれなければならなかった。そのような聖職受任は、教師に「ラビ」の肩書きを与え、そのうえ「判決のために提示されるかもしれないそのような事例を締めつけたり、緩めたりすること」を裁判官として務める資格を与えた。

173:2.4 (1892.1) この午後、寺院の支配者は、その教えだけでなく、その行為にも疑問を呈するためにイエスのところに来た。イエスは、誰あろうこの男性たちが、教えのための彼の権限は、悪魔的であり、すべての強力な働きは、悪魔の王子の力によって為されたのだ、と長い間公然と教えていたことをよく知っていた。従って、あるじは、質問への彼の答えを逆に彼らに質問をすることによって始めたのであった。イエスは、「私も一つ質問がしたい、もし私に答えるならば、私もどんな権限でこれらの

働きをするかを同様に言うつもりである。ヨハネの洗礼、それはどこからきたのか。ヨハネは、天から、または人から彼の承認を得たのか。」と言った。

173:2.5 (1892.2) これを聞くと、質問者は、挙げ得るすべての答えを相談するために一方に引き下がった。かれらは、群衆の前でイエスを当惑させようと考えていたが、そのとき寺院の中庭に集まった者全ての前で、今度は、非常に混乱している自分達に気づいた。それから、イエスのところに戻り、「ヨハネの洗礼に関しては、我々は答えることができない。我々は知らない。」と言った時の質問者達の敗北は、ますます明らかであった。かれらは、次のように推論したので、あるじにそのように答えたのであった。もし我々が、天国からであると言えば、何故ヨハネを信じないのかと言うであろうし、おそらく、自分はヨハネから権限を受けたと付け足すであろう。また、我々が、人からであると言えば、群衆は、大方の者が、ヨハネは予言者であると考えてているのであるから、我々に逆らうかもしれない。そこで質問者達は、イスラエルの宗教教師と指導者達は、ヨハネの任務に関する意見を述べることができない、(したくない)と告白しにイ

エスと人々の前に来ざるを得なかった。そして、彼らが話し終えると、イエスは、彼等を見下ろして、「私も、どんな権限でこれらのことをするかを告げるつもりはない。」と、言った。

173:2.6 (1892.3) イエスは、決して自分の権限がヨハネからのものであると訴えるつもりはなかった。ヨハネは、シネヅリオン派に一度も任命されたことはなかった。イエスの権限は、自分と父の永遠の至上権によるものであった。

173:2.7 (1892.4) 敵の扱いにおいてこの方法を用いる際、イエスは、質問から身を交わすつもりはなかった。一見それは、巧みな回避のようかもしれないが、そうではなかった。イエスは、敵といえども決して不当に利用しようとは思わなかった。この外見上の回避において、かれは、自分の任務の背後にある権限に関して、パリサイ派の質問への答えを実に全ての聞き手に与えたのであった。かれらは、彼が悪魔の王子の権限で働くと主張した。イエスは、自分のすべての教えと働きが、天なる父の力と権限であると繰り返し主張した。ユダヤ人の指導者は、この受け入れを拒否した。かれらは、シネヅリオン派に一

度も認可されたことがなかったので無免許の教師であることを自認するようにイエスを追い詰めようとしていた。実際に答えたように、ヨハネからの権限を主張せずに、イエスは、彼らに答えるに際して、彼を罠に嵌めようとする敵の努力は、効果的に敵自身に向けられ、居合わせた人々の目にはパリサイ派の大変な不名誉であったという含みで人々を非常に満足させた。

173:2.8 (1892.5) そして、敵にイエスを非常に恐れさせたのは、敵の扱いにおけるあるじの天性の才能であった。彼らは、その日それ以上の質問を試みなかった。さらなる話し合いのために、かれらは退いた。しかし、人々は、ユダヤ人の支配者のこれらの質問における不正直さと不誠実さの見分けに時間をかけなかった。一般人でさえ、あるじの道徳的な威厳とその敵の腹黒い偽善を見分け損ねることはなかった。しかし、寺院の浄化をすることは、イエス滅亡計画の仕上げに当たり、サッヅカイオス派をパリサイ派側につかせることとなった。そして、サッヅカイオス派は、そのときシネヅリオン派の大多数を代表していた。

3. 2人の息子の寓話

173:3.1 (1893.1) 難癖をつけるパリサイ派がイエスの前に黙って立っていると、かれは、見下ろして彼らに言った。「あなたがヨハネの任務を疑っており、人の息子の教えと働きに対して敵意をもって勢揃いしているので、私が寓話を話す間、耳を貸しなさい。立派で敬われていたある地主には、２人の息子がおり、かれは、大きい地所の管理に息子達の助けを望んでいたので、１人の息子に言った。『息子よ、今日はブドウ園に働きに行ってくれ。』すると、この考えのない息子は、父に『いやです。』と答えたが、後で悔やんで出掛けていった。上の息子を見つけると、同様に、『息子よ、ブドウ園に働きに行ってくれ。』と言った。すると、この偽善的で不誠実な息子は、『はい、お父さん、参ります。』と答えた。だが、父が去ってしまうと、出掛けはしなかった。これらの息子のうちどちらが本当に父の意志をしたのか訊かせてもらいたい。

173:3.2 (1893.2) 人々は一斉に「最初の息子」と言った。そこでイエスは、「そうである。また、悔悟への呼び掛けを拒否しているように見えるが、取税人や娼婦達は、父の仕事をすることを拒否しながら天の父に仕えている振りをし

ているあなた方よりも、彼らの方が、生き方の誤りを分かるであろうし、先に神の王国に入るであろうと宣言する。ヨハネを信じたのはあなた方パリサイ派や筆記者ではなく、むしろ取税人や罪人であった。あなた方は私の教えをも信じないが、一般大衆は喜んで私の言葉を聞く。」

173:3.3 (1893.3) イエスは、個人的にパリサイ派とサッヅカイオス派を蔑ろにはしなかった。それは、彼が信用を落としめようと努力した彼等の教育と実践の体系であった。かれは、人間に対して敵意はなかったが、精霊の新しく、生きた新宗教とより古い宗教の儀式、伝統、権威との間に不可避の衝突が、ここに起こりつつあった。

173:3.4 (1893.4) この間12人の使徒は、あるじの近くに立っていたが、これらのやり取りにいかなる方法でも参加しなかった。肉体におけるイエスの終わりつつある任務のこの数日間の出来事に、12人の各々は、独特の方法で反応しており、同様にこの過ぎ越し祭りの週の間、すべての公の教えや説教を控えるというあるじの命令に従順なままでいた。

4. 不在の地主の寓話

173:4.1 (1893.5) 質問でイエスに絡もうとしたパリサイ派の長と筆記者達は、2人の息子の話を聞く羽目になってしまうとさらに相談するために引き下がった。そこで、あるじは、傾聴している群衆に注意をむけて、もう一つの寓話を語った。

173:4.2 (1893.6) 「家の主人であった善良な人がおり、ブドウ園を設けた。その周囲に生垣をめぐらせ、ブドウ圧搾のために穴を掘り、見張りのための物見櫓を設けた。それから、他国への長旅の間、このブドウ園を小作人達に貸した。そして、実をつける季節が近づいたとき、賃貸料の受け取りのために使用人達を小作人の元に遣わせた。しかし、談合をした小作人達は、主人への収穫代金の支払いを拒否し、代わりに使用人達に襲いかかり、一人を打ち据え、別の者には石を投げ、その他の者を手ぶらで追い返した。あるじは、このすべてを聞くとこれらの性悪の小作人への対応するために他の、もっと信頼できる使用人達を行かせたが、これらの者もまた傷つけられ、辱めを受けた。主人は、次に、気に入りの使用人、執事を送ったが、小作人達は彼を殺した。かれは、それでもま

だ、忍耐と寛容をもって他の多くの使用人を遣わせたが、小作人達は、誰も受け入れようとしなかった。彼らは、何人かを袋だたきにし、他の何人かを殺し、そうして主人がそのように扱われたとき、『小作人達は、使用人達には酷い扱いをするかもしれないが、愛しい我が息子にはさだめし敬意を示すであろう。』と言い、これらの恩知らずな小作人達に対処するために息子を送ると決めた。だが、これらの悔い改めない性悪の小作人達は、この息子を見ると考えた。『あれは跡取りである。さあ、殺そう。そうすれば、遺産は我々のものになるであろう。』そこで息子を掴まえ、ブドウ園から放り出した後で殺した。息子をいかように斥け殺したかを聞いたならば、ブドウ園の主人は、それらの恩知らずで性悪の小作人達に何をするであろうか。」

173:4.3 (1894.1) この寓話とイエスの質問を聞くと、人々は答えた。「それらの情けない者達を掃滅し、季節の収穫を収める他の正直な農夫達にブドウ園を貸すであろう。」と答えた。そして、話を聞いた者の一部は、この寓話がユダヤ国家とその予言者達の扱いに言及していると気づき、イエスと王国の福音への差し迫っている拒絶を悲し

んで言った。「神は、我々が、これらのことをし続けることを禁じている。」

173:4.4 (1894.2) イエスは、群衆の間を進んでくるサッヅカイオス派とパリサイ派の一団を目にし、彼等が接近するまでしばらく休止して、「あなた方は、父がどのように予言者を拒絶したか、また心で人の息子を拒絶する用意ができているかをよく知っている。」と言った。そして、イエスは、次に近くに立っている司祭と長老達を探る目つきで見て言った。「あなた方は、建築師が拒絶した石、そして、それを発見した時、人々が礎石にした石の記述を聖書で一度も読まなかったのか。そこで、もう一度警告する。あなた方が、この福音を拒絶し続けるならば、やがて神の王国は取り上げられ、そして、朗報を受け取り、精霊の実を結ぶ気持ちがある民族に与えられるであろう。そして、この石に関する神秘がある。誰であろうとその上に落ちる者は、それがために粉々に砕かれはするが、救われる。しかし、この石は、誰の上に落ちようとも、塵と砕かれ、その灰は、四方八方に撒き散らされるであろう。」

173:4.5 (1894.3) パリサイ派は、これらの言葉を聞くと、イエスが自分たちと他のユダヤ人指導者に言及していることを理解した。その場でイエスを捕らえることを大いに望んだが、群衆を恐れた。しかしながら、あるじの言葉に非常に立腹したので、かれらは、退いて、いかに彼の死を成就できるかを更に相談をするほどであった。その夜、サッヅカイオス派とパリサイ派の双方は、翌日イエスを罠にかける計画において手を握り合った。

5. 婚礼の宴の寓話

173:5.1 (1894.4) 筆記者と支配者達の撤退後、イエスは、再び群衆に向かって演説し、婚礼の宴の寓話を話した。

173:5.2 (1894.5) 「天の王国は、息子のために婚礼の宴を設け、『王宮での婚礼の夕食会の準備は全て整っている』と、前もって祝宴に招待された人々を呼びに使者達を差し遣わせたある王に例えられるかもしれない。さて、一度出席すると約束した人々の多くが、この時来ることを拒否した。王は、招待への拒絶を知ると、『招いた者全てに告げなさい。さあ、食事の用意ができました。牛も肥えた家畜もほふって、息子の結婚の祝賀の準備はすべて整っ

ている。』と言って他の使用人と使者達を送った。だが、浅薄な者達は、王のこの呼び出しを軽んじ、一人は畑に、一人は窯場に、他の者達は商売に出掛けた。それでも、その他のもの達は、このように王の呼び出しを侮辱するだけには満足せず、暴動を起こし、王の使者達を襲い、不届きにも虐待し、そのうちの一部を殺しさえした。そして、王は、選ばれた客、そしてその中の事前の招待に出席すると応じていた客でさえ、最後には呼び出しを拒絶し、暴動を起こし、使者達を強襲し殺したと知ると、非常に怒った。それからこの侮辱された王は、軍隊と同盟国の軍隊の出動を命じ、これらの反抗的な殺人者達を滅ぼし、その都市を焼き尽くすように命じた。

173:5.3 (1895.1) 「王は、招待を拒んだ人々を罰してしまうと、婚宴の日を更にもう一日定めて使者達に言った。『結婚式に最初に招かれた者達は、相応しくなかった。そこで、今度は、幾つかの道路や街道に別れ、都の境界を超えてさえ行き、見つけられる限りの人、見知らぬ人さえ来るように、そしてこの婚宴に出席するように命じなさい。』そこで使用人は、街道や辺鄙な場所に出かけ、善人も悪人も、富者も貧者も見つけられる限りの人々を集

めたので、結婚式場は、漸く喜んで出席する客で満たされた。王は、全ての準備が整うと、客の見えるところに出てきたが、非常に驚いたことに、一人の男性が婚礼用の衣類を身に纏っていないのであった。王は、全招待客のために婚礼用衣類を十分に準備していたのでこの男性に向かい、『友よ、この祝典に婚礼の衣服を着用せず来賓室にいるというのはどうしたことか。』と言った。すると、この準備ができていていない男性は、言葉もでなかった。その時、王は使用人に言った。『私のもてなしを拒み、また、私の呼び出しを拒絶した他のすべての者達と運命を共にするために、この考えの足りない客を家から追い出しなさい。私の招待に喜んで応じる者、全員に行き渡るように用意した客用の衣類を着て私に敬意を表する者以外は、誰もここにはいさせない。』」

173:5.4 (1895.2) この寓話を話した後に、思いやりのある信者が、群衆を擦りぬけてイエスに向かってやって来たとき、イエスは群衆を解散させようとしていた。「しかし、あるじさま、私達は、これらのことを如何ようにして知るのでしょうか。王様の招待にどのように準備ができるのでしょうか。あなたが神の息子であることを知る

ために私達に与えられる１つの印が与えられるであろう。」、と言った。そして、自身の身体を指差し、「この寺院を破壊しなさい。そうすれば、３日のうちに、私はそれを起こすであろう。」と続けた。しかし、かれらは、彼を理解せず、解散しながら、「この寺院が建てられるのにおよそ50年に掛かったというのに、それを破壊し、３日間のうちに建てるとあの方は言われる。」と言い合った。自身の使徒さえ、この発言の意味を解しなかったが、その後、イエスの復活後に彼が言ったことを思い出した。

173:5.5 (1895.3) この午後４時頃、イエスは、使徒に合図を送り、寺院を出て夕食と睡眠のためにベサニアに行くことを望むと示した。オリーヴ山への途中、イエスは、かれらが、翌日、過ぎ越し祭りの残り週の間住まうことができる野営所を都寄りに設けるべきであると、アンドレアス、フィリッポス、トーマスに指示した。次の朝、この指示に従い、ゲスセマニの公共野営公園の見晴らしのきく山腹峡谷の間に、ベサニアのシーモンの所有する土地一画に、自分達の天幕を張った。

173:5.6 (1896.1) またもや、この月曜日の夜オリーヴ山の西の傾斜を登ったのは、ユダヤ人の静かな一集団であった。この12人の男性達は、今までになかったように、何か悲惨なことが起ころうとしていると感じ始めていた。早朝の劇的な寺院の浄化は、あるじが自己を主張し、その強力な力を示すのを見るという12人の望みを喚起する一方で、ユダヤ人当局によるイエスの教えに対する確かな拒絶を示すという点において、午後の出来事全体は、逆転劇として作用したに過ぎなかった。使徒は、持続的な緊張感に陥り、ひどい不安状態にあった。かれらは、過ぎたばかりのその日の出来事と迫り来る運命の激突との間にせめて短い数日が介在してくれればと気づいた。彼らは全員、何か物凄いことが起ころうとしていると感じたが、何を待ち受ければよいかを知らなかった。かれらは、休息のために様々なところに行きはしたが、ほとんど眠らなかった。あるじの人生における出来事が迅速にその最終的頂点に向かっているという認識が、遂にアルフェウスの双子にさえ起きた。

論文 174
寺院の火曜日の朝

174:0.1 (1897.1) この火曜日の朝7時頃、イエスは、使徒、女性部隊、他の25人ほどの目だった弟子をサイモンの家で迎えた。かれは、この会合でラーザロスにペライアのフィラデルフィアに早く逃げさせることとなる指示を与えて別れを告げ、ラーザロスは、そこで後にその都に本部を置く伝道運動に関わることとなった。イエスは、高齢のサイモンにも別れを告げ、決して再び正式には述べることはなかったので、女性部隊に別れの際の助言を与えた。

174:0.2 (1897.2) この朝、イエスは、個人的に12人各自に挨拶をした。アンドレアスには、「すぐ先にある出来事で狼狽えてはいけない。同胞をしっかり掴まえ、君が意気消沈したとさとられないようにしなさい。」と言った。ペトロスには、「体の腕も鋼の武器も信用してはいけない。永遠の岩石の精霊的な基盤に自己をうち建てなさい。」と言った。ジェームスには、「外見ゆえに怯んではいけない。堅い信仰に留まりなさい。そうすれば、信じるその現実をすぐに知るであろう。」と言った。ヨハネには「穏やかでありなさい。敵をも愛しなさい。寛容でありなさい。そして、私が多くの事を君に任せてきたことを

思い出しなさい。」と言った。ナサナエルには「外見で判断をしないように。すべてが消失しているように見えるとき、堅い信仰を持ち続けなさい。王国の大使としての使命に忠実でありなさい。」と言った。フィリッポスには「すぐに迫りくる出来事に冷静でありなさい。例え道を見ることができなくても、揺るぎないままでいなさい。聖職の誓いに忠誠でありなさい。」と言った。マタイオスには「君を王国に受け入れた慈悲というものを忘れないように。君の永遠の報酬を誰にもだまし取らせないように。死すべき者の自然の性癖に耐えてきたように、意志をもち、不動でいなさい。」と言った。トーマスには「それがどんなに難しくても、まさしく今は、視覚ではなく、信仰によって歩かなければならない。私は、始めた仕事を終えることができるということ、そして、私が、遂には向こうの王国で、私の忠実な全ての大使に会うということを疑ってはいけない。」と言った。アルフェウスの双子には「理解できないことに潰されてはいけない。心にある愛情に誠実であり、そして、偉人や人々の態度の変化のいずれにも信用を置いてはいけない。同胞を支援しなさい。」と言った。シーモン・ゼロ

ーテースには、「シーモン、君は失望に押し潰されるかもしれないが、君の精霊は、君が出くわすかもしれないすべてを超越するであろう。私から学び損ねたことを私の精霊が君に教える。精霊の真の現実を求め、非現実的で物質的な影に引きつけられることをやめなさい。」と言った。そして、ユダ・イスカリオテには「ユダ、私は、君を愛してきたし、君がその同胞を愛するように祈ってきた。善を行うことに飽きないように。そして、私は、滑りやすい世辞の道や毒のある嘲笑の投げ矢に注意するように警告しておきたい。」と言った。

174:0.3 (1897.3) これらの挨拶を終えると、他の使徒は、その夜皆で向かおうとしていた、そしてあるじの肉体での人生の残りの間の自分達の本部を作るゲッセマネの宿営所設立に出発するとともに、イエスは、アンドレアス、ペトロス、ジェームス、ヨハネと共にエルサレムに出発した。オリーヴ山への坂の半道程でイエスは止まり、1時間以上も4人の使徒達と雑談した。

1. 神の許し

174:1.1 (1898.1) 数日間、ペトロスとジェームスは、罪の許しについてのあるじの教えに関する自分達の意見の相違を検討していた。二人は、イエスへの問題提示の同意に至り、ペトロスは、この時をあるじの助言を確保する好機として迎え入れた。それゆえサイモン・ペトロスは、「あるじさま、ジェームスと私は、罪の許しに関係するあなたの教えに一致していないのです。ジェームスは、我々が請う前にさえ、父はすでに我々を許すのだとあなたが教えていると主張します。私は、悔悟と懺悔が許しに先行しなければならないということを主張します。二人のうちどちらが正しいのですか。どうでしょう。」と切り出し、称賛と崇拝間の違いについての会話を遮った。

174:1.2 (1898.2) 暫しの沈黙後、イエスは、意味深長に4人全員を見て答えた。「我が同胞よ、君達は、被創造物と創造者、人と神の間の親密で情愛深い関係の本質を理解していないので、それぞれの意見で誤っている。君達には、賢明な親が、未熟で時々間違っている子供に抱くその理解ある同情心の把握というものができていない。賢明で情愛深い両親は、平均的で普通の子供を許すことを要求

されるかどうかは誠に疑わしい。愛の態度と関連した理解ある関係は、子供の悔悟と親の許しの再調整を後に必要とするようなすべてのそれらの疎遠を効果的に防いでいる。

174:1.3 (1898.3) 「あらゆる父の部分が子の中に住む。父は、親子関係関係がある全ての問題において、理解の優先権と優越性を楽しむ。親は、より発達した親の円熟さ、年を取った方のより熟した経験に照らし合わせて子供の未熟さを見ることができる。地球の子と天なる父とでは、神性の親は、無限で神性の同情と愛ある理解への度量がある。神の許しは、必然である。それは、神の無限の理解において、子の誤った判断や誤りの選択に関わるすべてにおける神の完全な知識において、固有で譲渡できないものである。神の正義は、永遠に正しいので、それは絶えることなく慈悲を具体化している。

174:1.4 (1898.4) 「賢者が仲間の内面の衝動を理解するとき、彼らを愛するであろう。そして、君達が兄弟を愛するとき、君達はすでに兄弟をを許したのである。人の本質を理解し、その見かけの悪行を許すこの能力は、神のよう

である。君が賢明な両親であるならば、これが、子供を愛し理解する態度、一時的な誤解が明らかに君を切り離してしまった時に許しさえする態度である。未熟で、父子関係の深さのより完全な理解を欠く子供は、父の完全な承認からの後ろめたい分離の感覚を頻繁に感じなければならないが、本物の父は、そのような分離を決して意識してはいない。罪は、被創造物の意識の経験である。それは、神の意識の一部ではない。

174:1.5 (1898.5) 「君の仲間を許す能力の無さ、あるいは不本意さは、未熟さの尺度、つまり、大人の同情心、理解、愛を得ることへの失敗の尺度である。君は、自分の子供と仲間の内面の本質と本当の切望への自己の認識不足に正比例して、恨みを抱いたり復讐心を暖めている。愛は、命への神性の緩やかな働きであり、内なる衝動である。それは、理解に基づき、寡欲な奉仕によって育てられ、知恵で完成する。」

2. ユダヤ人支配者による質問

174:2.1 (1899.1) 月曜日の夕方、筆記者、パリサイ派、サッヅカイオス派から選ばれたおよそ50人の追加の指導者とシネ

ヅリオン派との間での協議会が行われていた。一般人の好情を掴んでいるイエスを公然と逮捕することは危険であるというのが、この会合の総意であった。また、逮捕と告発の前に、群衆の目前でイエスの信用を落とすべく決然たる努力が払われるべきであるということも、大多数の意見であった。従って、学問のある者の幾つかの班は、翌朝、寺院に参上し、イエスを難しい質問で罠にかけたり、そうでなければ、人々の前で恥をかかせる任に選定された。遂に、パリサイ派、サッヅカイオス派、ヘローデス党さえも全てが、、過ぎ越し祭りの群衆の目前でイエスの信用を落とすこの努力において連合した。

174:2.2 (1899.2) 火曜日の朝、イエスが寺院の中庭に到着し教え始めた時、この目的のために予行演習をしていた学院からの若い学生班が進み出てきて、その代弁者が話かけたとき、イエスはまだわずかな言葉しか発していなかった。「あるじさま、我々は、あなたが公正な師だと知っていますし、、真実の道を宣言するということ、神だけに仕えているので誰をも恐れないということ、人々を差別する方でないということを知っています。私達は、学生にすぎません、そして、私達を煩わす問題について真

実を知りたいのです。私達の困難はこれです。私達がケーサーに納税することは律法に適っていますか。渡すべきですか、そうすべきではないのでしょうか。」イエスは、彼らの偽善と小賢しさを見抜いて言った。「何故そのように私を唆せに来たのか。私に納税の金を見せなさい。そうすれば、答えてあげよう。」そこで、彼らがデナリウス銀貨を手渡すと、それを見てイエスは、「この硬貨には誰の像と表記があるか。」と言った。そこで、「ケーサーのものです。」と、答えると、「ケーサーのものはケーサーに、神のものは神に提供しなさい。」とイエスは言った。

174:2.3 (1899.3) かれがこう答えると、これらの若い筆記者とヘローデス党の共犯者達は、イエスの前から撤退し、人々は、サッヅカイオス派でさえ、これらの者達の困惑を面白がった。罠にかけようと努めた若者達でさえ、あるじの答えの予想外の明敏さに大いに驚嘆した。

174:2.4 (1899.4) 前日、支配者は、教会の権限の問題で群衆の前でイエスを躓かせようとして失敗し、今度は、民間当局の議論に巻き込んで痛手を与えようとした。このとき、

ピラトゥスとヘロデの二人は、エルサレムにおり、イエスの敵は、イエスが敢えてケーサーへの納税の支払いに対して忠告するならば、すぐにローマ当局に行き、扇動の嫌疑で告発することができると推測した。これに反してはっきりと納税の支払いを勧めるならば、そのような見解がユダヤ人の聴衆の国家的な自負心を大いに傷つけ、その結果、群衆の善意と好情を疎外させると、敵は、正しく目算した。

174:2.5 (1899.5)「鋳造の権利は、それと共に徴税の権利を伴う」という裁決は、非ユダヤ人の国々に分散するユダヤ人の指導のために設けられたシネヅリオン派の有名な裁決であったので、イエスの敵は、この全てにおいて破られた。イエスは、この方法で彼らの罠を避けた。質問に「いいえ」と答えていたならば、反逆を教唆することと同じであったし、「はい」と答えていたならば、当時の根強い国家主義的な感情に衝撃を与えていたことであろう。あるじは、質問を決して回避しなかった。かれは、単に二重回答をする知恵を使ったに過ぎなかった。イエスは、決して回避的ではなかったが、自分を悩ませ滅ぼ

そうとする者とのやりとりにおいていつも賢明であった。

3. サッヅカイオス派と復活

174:3.1 (1900.1) イエスが教えを開始できる前に、別の集団が、今回は学識のある狡猾なサドカイ派の一団が、質問のために進み出てきた。その代表者は近づいてきて言った。「あるじさま、モーシェは、既婚の男性が子供もないままで死ぬようなことがあれば、その兄弟が、死んだ兄弟のために妻をめとり、子をもうけなければならないと言いました。さて、６人の兄弟を持つある男が子供のないまま死んだ例がありました。すぐ下の弟が兄の妻をめとりましたが、子無しですぐまた死んでしまいました。同様に、２番目の弟がその妻をめとり、また子のないまま死にました。同じように、６人全ての弟がその妻をめとり、子供のできないままで６人が皆亡くなりました。そして、全員の死後、女性自身も死んでしまいました。さて、私達が尋ねたいことはこれです。この兄弟７人全員が妻にしましたので、この女性は、復活の際、誰の妻となるのでしょうか。」

174:3.2 (1900.2) イエスは、そして人々も、そのような例は実際起こりそうにもないということから、これらのサドカイ派は、誠意をもってこの質問をしていないということが分かっていた。そのうえ、死んだ男性の兄弟が子供を儲けようとするこの習慣は、このときのユダヤ人の間では、実際上は廃れたものとなっていた。それでも、イエスは、彼らの悪戯な質問に威張ることなく答えた。かれは、「あなた方は聖書も、生ける神の力も知らないので、そのような質問に際し、皆、間違いをする。あなた方は、この世の息子が、結婚したり、縁づいたりもできるということは知っているようであるが、正しい復活で来たるべき世界に達するに相応しい者は、結婚も、縁づきもしないということは理解していないらしい。死者の中からの復活を経験する人々は、天上の天使に似ており、決して死なない。これらの復活した者は、永遠に神の息子である。かれらは、永遠の命の進展に復活する光の子供等である。そして、あなた方の父のモーシェでさえ、これを理解した、というのも、燃える柴の彼の経験に関して、『私はアブラーハームの神であり、イサクの神であり、ヤコブの神である。』と、父が言うのを聞い

たのであるから。そして、私は、モーシェと共に、父が死者の神ではなく、生ける神であると宣言する。あなた方全員は、神の中に生き、再生して、人間生活をする。」

174:3.3 (1900.3) イエスがこれらの質問に答え終えると、サドカイ派は、撤退し、「本当です、本当です、あるじさま、これらの不信心なサドカイ派によく答えてくれました。」とパリサイ派の数人は、我を忘れるほどに主張するほどであった。サドカイ派は、それ以上の質問を敢えてしようとはせず、一般人は、イエスの教えの知恵に驚嘆した。

174:3.4 (1900.4) イエスは、この宗教政治の宗派が、５書、いわゆるモーシェの書のみの正当性を承認していたことから、サドカイ派との対戦においてモーシェにのみ訴えた。かれらは、予言者の教えが、教理上の教義の基礎として容認しなかった。答えるに当たりあるじは、復活の手段による必滅の被創造物の生存事実を前向きに肯定しながらも、文字通りの人体復活というパリサイ派の信念についていかなる点においても賛成して話しはしなかっ

た。イエスが強調したかった点は、次の通りであった。父が、『私は、アブラーハームとイサクとヤコブの神である。』と、言ったことであり、彼らの神であったということではなかった。

174:3.5 (1900.5) サドカイ派は、公然の迫害が、群衆の心に最も確実にそれまで以上の同情を生み出すことを熟知しており、嘲笑によりイエスをひるませるようと考え抜いてきた。

4. 大いなる戒め

174:4.1 (1901.1) サドカイ派の別の一団が、天使に関する紛議を醸す質問をイエスにするように指示されていたが、復活に関する質問で罠にかけようとした仲間の運命を視たとき、非常に賢明にも黙っていることにした。かれらは、質問することなく引きさがった。まる一日をこれらの紛議を醸す質問で満たし、そうすることにより、人々の前でイエスを落としめ、同時にイエスが、不穏な教えの公布のためのいかなる時間をも得ることのないように効果的に防ぐことは、事前の打ち合せで盟約しているパリサ

イ派、筆記者、サドカイ派、ヘローデス党の計画であった。

174:4.2 (1901.2) それからパリサイ派の中の1集団が、悩ます質問をするために前方に来て、代弁者が、イエスに合図をして言った。「あるじさま、私は法律家であります。あなたの意見では、いずれが最も偉大な戒めであるかをお尋ねしたいのです。」イエスは答えた。「1つの戒めしかなく、それは何よりも偉大であり、その戒めは次の通りである。『イスラエルよ、聞け。私達の主である神は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、神である主を愛せよ。』これが、最初で、しかも偉大な戒めである。そして、第２の戒めは、この最初に似ている。いかにも、直接そこから発しており、『自分を愛するように隣人を愛せよ。』というものである。これらの戒めより偉大なものは他にはない。すべての法と予言者達とが、この2つの戒律に寄りかかっている。」

174:4.3 (1901.3) この律法学者は、イエスがユダヤ人宗教の最高の概念通りだけではなく、集いきた群衆の目にもまた賢

明に答えたと認めた時、あるじの答を公然と称賛することを勇気の大半であると考えた。従って、「あるじさま、その通りです。心を尽くし、思いをを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、神である主を愛せよ。』これが、最初で、しかも偉大なる戒めである。そして、第2の戒めは、この最初に似ている。いかにも、直接そこから発しており、『自分を愛するように隣人を愛せよ。』あなたは、神は唯一であり、他にはいないということ、そして、心と理解と強さの全てで神を愛すること、また自らを愛するように隣人を愛することが、最初で偉大な戒めであると、よく仰っしゃいました。私達は、すべての焼いた供物と犠牲によりもこの偉大な戒めに、はるかに敬意を払うべきであるということに同意します。」と言った。律法学者がこのように慎重に答えると、イエスは、彼を見下ろして、「友よ、私は、あなたが神の王国から遠くないところにいると見受ける。」と言った。

174:4.4 (1901.4) この律法学者に「王国から遠くない」と言及したとき、イエスは、真実を語ったのであった。というのは、まさしくその夜、この律法学者は、ゲッセマネ近くのあるじの宿営所に出かけ、王国の福音の信仰を告白

し、アブネーの弟子の一人ヨシアの洗礼を受けたのであった。

174:4.5 (1901.5) 筆記者とパリサイ派の他の２、３の他の団体が、出席しており、質問するつもりでいたが、律法学者へのイエスの答えによって武装を解かれたのか、または、罠に嵌めることを引き受けたすべての者の敗北に阻止されたかのいずれかであった。この後、誰もイエスに敢えて公然と質問をしなかった。

174:4.6 (1901.6) それ以上の質問が出るようすもなく、正午が近づいていたので、イエスは、教えを再開せず、単にパリサイ派とその仲間に質問することで満足していた。イエスは言った。「あなた方がもう質問をしないので、私の方から1つ尋ねたい。救出者をどう思われますか。すなわち、救出者は誰の息子ですか。」短い間をおいて、筆記者の一人が、「救世主は、ダーヴィドの息子です。」と答えた。そして、イエスは、救世主がダーヴィドの息子であったかどうかに関して盛んな討論があったこと、弟子の間でさえあったことを知っていたので、さらに次の質問をした。「救出者が本当にダーヴィドの息子であ

るならば、あなた方が認める詩篇で、ダーヴィド自身が、精霊に鼓舞されて話し、『主は私の主に言われた。私があなたの敵をあなたの足台にするまで、私の右の座に着いていなさい。』とは、どういう訳ですか。もしダーヴィドが、自身を主と呼ぶならば、では、かれは、どうして自分の息子であり得るのでしょうか。」支配者、筆記者、祭司長等は、この質問に答えず、同様に、イエスを困らせるためのそれ以上の質問をするのを控えた。イエスのこの質問に決して答えなかったが、かれらは、あるじの死後、救世主の代わりにアブラーハームに言及するためにこの詩篇の解釈を変えることによって困難を避けようとした。他の者達は、ダーヴィドが、いわゆるこの救世主の詩篇の作者であったということを認めないことで窮地から逃れようとした。

174:4.7 (1902.1) パリサイ派は、ほんの少し前、サドカイ派が、あるじに黙らされた様子を楽しんでいた。そのときサドカイ派は、パリサイ派の失敗を喜んでいたが、そのような競争は、ほんの瞬間のことであった。かれらは、イエスの教えと行動を止める連合努力において、自分達の古くからの違いを速やかに忘れた。しかし、民衆は、これ

らの経験のすべてを通じてイエスの言うことを快く聞いていた。

5. 好奇心の旺盛なギリシア人

174:5.1 (1902.2) 正午頃、フィリッポスは、その日ゲッセマネ近くに設けられた新しい宿営所のための必要物資の購入をしていると、見知らぬ代表団が、アレキサンドリア、アテネ、ローマからのギリシア人の信者の団体が、無遠慮に接近し、その代弁者がこの使徒に言った。「あなた方を知る人々に指し示されて、先生、私達は、あなたのあるじさま、イエスさまに会うという願いで来たという訳です。」フィリッポスは、市場でこれらの目立つ、しかも好奇心の旺盛なギリシアの非ユダヤ人にこのように出会い、不意を打たれ、また、イエスが過ぎ越し祭りの週の間、いかなる公けの教えにも従事しないように、あれほど明白に12人全員に託していたので、この件を扱う正しい方法にいささか当惑した。かれは、これらの男性が外国の非ユダヤ人であったのにも当惑した。彼らが、ユダヤ人または近くて馴染みのある非ユダヤ人であったならば、それほどまでに著しく躊躇しなかったであろうに。彼がしたことはこうであった。かれは、ギリシア人

がいたところにそのまま残るように頼んだ。フィリッポスが急いでその場を離れたので、ギリシア人達は、イエスを探しに行ったのだと思ったが、実際かれは、アンドレアスと他の使徒が昼食にきているのを知り、ヨセフの家へ急いだのであった。そして、アンドレアスを呼び出し、自分が来た目的を説明し、それから、アンドレアスに伴われ、待っているギリシア人の元に戻っていった。

174:5.2 (1902.3) フィリッポスは、物資購入もほとんど終わってたいたので、アンドレアスとともにギリシア人を連れてヨセフの家に帰り、そこで、イエスは、彼らを迎え入れた。そして、イエスが使徒とこの昼食会に集合した主だった弟子達に話す間、彼らは近くに座っていた。イエスは言った。

174:5.3 (1902.4) 「私の父は、人の子への父の慈愛を示すために私をこの世界に差し向けたが、私が最初に目差して来た人々は、私を迎えることを拒否した。本当に、本当に、あなた方の多くは、自分のために私の福音を信じてきたが、アブラーハームの子孫とその指導者達は、私を拒絶しようとしているし、そうすることにより、かれらは、

私を送ったあの方を拒絶しているのである。私は、この民族に救**済**の福音を率直に宣言してきた。精霊における**歓**喜と自由と、より豊かな生活を伴う息子性について話してきた。私の父は、恐怖に支配されているこれらの人の息子の間で、多くの素晴らしい働きをしてきた。しかし、本**当**のところ、次のように書いたとき、イェシャジャは、この民族に言及したのであった。『主よ、誰が我**々**の教えを信じていましたか。また、主は誰に示されましたか。』本**当**に、私の民族の指導者達は、彼らが見ないために自分達の目を故意にくらませ、信じもせず、救われないために心を堅くした。長年私は、彼らが、父の永遠の救**済**の享受者であり得るように彼らの不信心を癒そうとをしてきた。私は、全ての者が、私の期待を裏切った**訳**ではないことを知っている。あなたの一部は、本**当**に私の言葉を信じた。この部屋に、かつてのシネヅリオン派の構成員であったり、**国**の議**会**で高位にいた者達がいる、とはいえ、あなた方の一部は、彼らが、**会**堂からあなたを追放しないようにおおっぴらの**真実**の告白について逡巡している。あなた方の一部は、神の**栄**光よりも人の**栄**光を愛したがっている。しかし、私は、本**当**

に長く近くにいる者達の何人かについてでさえ、そしてとても真近に暮らした者達の安全と忠誠を気遣っているので、私は忍耐を示さざるを得ない。

174:5.4 (1903.1) 「この宴会の場に、同数のユダヤ人と非ユダヤ人が集まっていると見受け、私は、父のところに行く前に、王国の事柄について教えることのできる最初で最後のそのような集団としてあなた方に向けて言いたい。」

174:5.5 (1903.2) これらのギリシア人は、寺院でのイエスの教えの忠実な出席者であった。月曜日の夕方、ニコーデモスの家で会議を開催し、それは、その日の夜明けまで続き、そのうちの30人が王国に入ることにした。

174:5.6 (1903.3) このとき皆の前に立ったとき、イエスは、配剤の１つの終わりともう１つの始まりを知覚した。ギリシア人の方に注目して、あるじは言った。

174:5.7 (1903.4) 「この福音を信じる者は、単に私を信じるのではなく、私を送られたあの方を信じるのである。私を見るとき、あなたは、単に人の息子を見ているのではなく、私を送られたあの方をも見ている。私は世の光であ

り、私の教えを信じる者は誰でも、暗闇には留まらないのである。もしあなた方非ユダヤ人が、私の言葉を聞くならば、あなた方は、生命の言葉を受け取り、神との息子性の真実の喜ばしい自由の中へ直ちに入る。同国の仲間達が、ユダヤ人達が、私を拒絶し、私の教えを拒否することを選んでも、私は、彼等を裁きはしない。私は、世界を裁きにきたのではなく、世界に救済を申し出にきたのであるから。にもかかわらず、私を拒絶し、私の教えの受け入れを拒否する者達は、しかるべき時機が来れば、父、そして、慈悲の贈り物と救済の真実を拒絶する者達を裁くために父に任命された者達による審判に連れてこられるであろう。あなた方全員、覚えていなさい、私は自分自身について話してはいないということを、しかし、人の子等に明らかにすべきであるという父の命令をあなた方に忠実に宣言してきたということを。そして、父が、私に世界に向かって話せと指示されたこれらの知らせは、神性の真実、恒久の慈悲、永遠の命についての教えである。

174:5.8 (1903.5) だが、わたしは、人の息子が賛美される時が来ようとしていると、ユダヤ人と非ユダヤ人の双方に断言

する。あなたは、一粒の小麦が地に落ちて死ななければ、それは、一粒のままであるということをよく知っている。しかし、良い土壌で死ぬならば、それは、再び命を吹き返し多くの実をつける。身勝手に自分の命を愛しむ者は、それを失う危険に曝されている。しかし、私のため、また福音のために進んで命を捨てようとする者は、地上においてはより豊かな人生を、天においては永遠なる命を楽しむのである。本当に私について来るならば、私が父の元に行った後でさえ、あなたは、私の弟子となり、仲間の人間の誠実な召し使いになるのである。

174:5.9 (1903.6) 「わたしは、私の時間が近づいていることを知っており、当惑している。私の民族が断固として王国を拒もうとしていることを察知しているが、わたしは、光の道について尋ねに今日ここに来たこれらの真実を求める非ユダヤ人を迎えて喜んでいる。それでも、私の心は、私の民族のために痛み、私の魂は、すぐ前に待ち受けているそれによって取り乱されている。私が先を見、私に起ころうとしていることを見分けるにつけ、何と言ったらいいのか。このとんでもない時間から救ってくださいと父に言おうか。いや。まさしくこの目的のために

こそ、私は、この世界に来たのである、このような時にさえ。むしろ、私は、言うし、あなた方が私に加わるように祈る。父よ、あなたの名が崇められますように。あなたの意志がなされますように。」

174:5.10 (1904.1) イエスがこのように話したとき、洗礼前に内在していた専属調整者が、イエスの前に現れ、そしてイエスが目立って一瞬止まっている間、そのとき、父の代理の強力な精霊が、ナザレのイエスに話して、「わたしは、何回もあなたの贈与において自分の名に栄光をもたらしてきた。そして、わたしは、もう一度、それに栄光をもたらすつもりである。」

174:5.11 (1904.2) ここに集うユダヤ人と非ユダヤ人は、声を聞きはしなかったが、何らかの超人的な源から通信が来る間、あるじが話すのを止めてしまったということを認識することができた。彼らは皆、彼の側にいる者同志で、「天使が彼に話した」と言い合った。

174:5.12 (1904.3) それから、イエスは、話し続けた。「この全ては私のために起こるのではなく、あなた方のために起こった。私は、父が望んで私を迎え、あなた方のために私

の任務を受け入れるということを確かに知っているが、あなた方が、勇気づけられ、ちょうどすぐ先にある火のような試煉のために用意ができていることが必要である。勝利は、結局、世界を照らし、人類を解放するための我々の連合した努力に報いるということを、私が請け合う。古い秩序は、それ自体を裁きへともたらす。私は、この世界の王子を打倒した。そして、私が天の父の元に昇った後、すべての人が、すべての人に私が注ぐ精霊の光で自由になるのである。

174:5.13 (1904.4)「そして私が、もし地球で、そしてあなたの人生で持ち上げられるならば、私は、すべての人を私自身に、そして父との親交に引き寄せるということを、今あなたに断言する。あなたは、救出者がいつまでも地球にとどまると信じていたが、私は、人の息子が人に拒絶されるということ、また彼が父の元に戻るということを断言する。私は、ほんの少しの間だけあなたと共にいる。ほんの少しの時間だけ、生きた光が、この暗い世代の間にある。接近する闇と混乱があなたを襲うことのないように、この光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くかを知らないが、光の中を歩くこ

とを選ぶならば、本当に、あなた方は皆、神の解放された息子になるであろう。さて、我々は寺院に戻るので、あなた方は全員、私と共に来なさい。そして、私は、祭司長、筆記者、パリサイ派、サドカイ派、ヘローデス党、イスラエルの無知な支配者達に送別の言葉を伝える。」

174:5.14 (1904.5) このように話して、イエスは、エルサレムの狭い通りを先頭に立ち寺院へと戻っていった。これが、寺院での送別の訓話になるとあるじが言うのを聞き、かれらは、黙って、また深い思索でイエスの後に続いた。

論文 175
寺院での最後の講話

175:0.1 (1905.1) この火曜日の午後2時直後、11人の使徒、アリマセアのヨセフ、30人のギリシア人と特定の他の弟子を伴ったイエスは、寺院に到着し、神聖な建物の中庭での最後の演説を始めた。この講話は、ユダヤ民族への最後の訴えとして、そして猛烈な敵や、イエスを滅ぼそうと志す者達—筆記者、パリサイ派、サドカイ派、イスラエルの主っだった指導者達—への最終的な告発として意図されていた。午前を通して、様々な集団がイエスに質問

する機会があった。この午後は、誰も彼に質問をしなかった。

175:0.2 (1905.2) あるじが話し始めると、寺院の中庭は静かで整然としていた。両替商と商人達は、前日イエスと興奮した群衆に追い出されたので、敢えて寺院には再び入っていなかった。イエスは、偽教師への最後の告発と頑迷なユダヤの支配者達への最後の公然たる非難とともに、人類への慈悲を込めた公への送別の演説をそれほど速く聞くこととなったこの聴衆への講話の開始前に優しく見下ろした

1. 講話

175:1.1 (1905.3) 「私は、あなた方と長らく共にいて、人の子等への父の愛を宣言して国中を往来し、多く者は、信仰により光を見て天の王国入りをした。この教えと説教に関連して、父は、多くの素晴らしい業を、死者の復活さえも為された。多くの病人や苦悩する者は、信じたがゆえに癒された。しかし、真実のこの宣言と病の治癒の全てが、光を見ることを拒む者、王国のこの福音の拒絶を固く決めている者達の目を開いた訳ではなかった。

175:1.2 (1905.4) 「私と使徒達は、父の意志の実行と一致してあらゆる方法において、我々の同胞と平穏に暮らすために、つまりモーシェの法とイスラエルの伝統の道理に適った必要条件に適合するために、最善を尽くしてきた。我々は平和を持続的に求めてきたが、イスラエルの指導者達はそれを得ることはないであろう。神の真実と天の光を拒絶することにより、かれらは、自分たちの誤りと暗黒に加担している。平和が、光と暗闇の間、生と死の間、真実と誤りの間にあるはずがない。

175:1.3 (1905.5) 「あなた方の多くは、私の教えを思い切って信じ、すでに神との息子関係の意識の喜びと自由へと入っていった。そして、私は、全ユダヤ国家に、いま私の破滅を求める他ならぬこれらの男性達にさえ、神とのこの同じ息子関係を提供したということを証言するであろう。そして、今でさえ、彼らが、父に振り向いてその慈悲を受け入れさえすれば、私の父は、これらの目をくらんだ教師と偽善の支配者達を迎えるであろう。今でも、この人々が、天国の言葉を受け入れ、人の息子を歓迎することに遅過ぎることはない。

175:1.4 (1906.1) 「私の父は、長い間慈悲をもってこの民族を扱ってきた。代々、我々は、教えて警告するために予言者達を送り出し、代々、かれらは、この天与の教師達を殺してきた。そして、今度は、強情な高位の司祭と頑固な支配者達が、この同じことをし続けている。ヘロデが、ヨハネの死をもたらしたように、あなた方は、いま人の息子を滅ぼす準備をしている。

175:1.5 (1906.2) 「ユダヤ人が私の父の方に向き直り、救済を求めるという見込みがある限り、アブラーハーム、イサク、ヤコブの神は、あなた方に向かって慈悲の手を一杯に伸ばし続けるであろう。しかし、あなた方が、一旦焦燥感で杯を満たしてしまうと、一旦父の慈悲を拒絶してしまうと、この国家は、自らの思いのままの状態におかれ、それは、速やかに不名誉に終わるであろう。この民族は、世界の光になるために、神を知る民族の精霊的な栄光を示すために呼ばれたが、あなたの指導者達は、すべての人間への、またすべての時代のための神の贈り物—地球のすべての被創造物のための天の父の愛の顕示—を遂に拒絶する間際にいるので、すべての時代を通じ

て最高の愚行を犯そうとする程に神の特権の遂行からは全く遠退いてしまった。

175:1.6 (1906.3) 「そして、あなたが人に対する神のこの顕示を一度拒絶するとき、天の王国は、他の民族に、嬉々としてそれを受け入れる人々に与えられるのである。私を送った父の名において、あなたが不朽の真実の旗手として、また神性の法の管理人として世界での地位を失いかけているということを厳しく警告しておく。幼子のように、そして誠実な信仰によって、あなたが、天の王国の保安と救済に入るために真心をこめて神を求めるというあなたの意志を示すために、私は、たった今、あなたが、進み出てきて悔悟する最後の機会を申し出ているのである。

175:1.7 (1906.4) 「私の父はあなたの救済のために長く働いたし、私は、あなたの間で生きて、じかに道を示すために下りてきた。多くのユダヤ人とサマリア人双方、さらには非ユダヤ人さえが、王国の福音を信じたが、最初に進み出て、天の光を受け入れるために最初であるべき人々は、神の真実の顕示—人の中に明らかにされる神と神に

向かって高められる人—を信じることを断固として拒否してきた。

175:1.8 (1906.5) 「この午後、私の使徒は、あなた方の前のここに黙って立っているが、あなた方は、救済への呼び掛けと、生ける神の息子としてすばらしい王国と結合するための督促に鳴り響く彼らの声をまもなく聞くであろう。そして、私は、イスラエルとその支配者達に救出と救済を申し出たということを、彼らの側にいる見えない使者達だけではなく、私の弟子と王国の福音の信者のこれらの者が、目撃するように、いま一度呼び掛ける。しかし、あなた方は皆、父の慈悲がいかに軽んじられたり、また真実の使者達がいかに拒絶されるかをみる。にもかかわらず、これらの筆記者とパリサイ派は、モーシェの席にまだ座っていると、私はあなた方に注意しておき、したがって、私は、人の王国で統治するいと高きものが、最後にはこの国を滅ぼし、これらの支配者の場所を破壊するまで、あなた方が、イスラエルのこれらの長老に協力することを命じる。あなた方は、人の息子を滅ぼす計画への結束を要求されてはいないが、イスラエルの平和に関する全てにおいては、彼等の影響を受けること

になっている。これらの事柄全てにおいて、彼等が、あなた方に命じることは何でもして、法の骨子を守りなさい、だが、彼等の悪の働きを真似てはならない。覚えていなさい。これは、支配者達の罪である。かれらは、それを良いと言うが、実践をしない。あなた方は、これらの指導者が、いかにあなた方の肩にきつい重荷を負わせているか、その上、かれらは、これらの重荷を担うあなた方を助けるために1本の指といえどもそれに触れようとはしないことをよく知っている。かれらは、式典であなた方を押さえつけ、伝統によって奴隷にした。

175:1.9 (1907.1) 「その上、これらの自己中心の支配者達は、人に見られるために慈善行為をして楽しむ。これらの者は、聖句箱を広くし、自分達の公務の礼服の縁を大きくする。かれらは、祝宴では主要な席を欲しがり、会堂では主だった席を要求する。かれらは、市場で称賛を貪り、すべての人にラビと呼ばれることを欲している。そして、人にこのすべての名誉を求める傍らで、秘かに未亡人の家を差し押さえ、神聖な寺院の活動からの利益を取る。これらの偽善者は、見せかけのために人前で長い

祈りをし、仲間の注意を引きつけるために施し物をする。差し押さえ

175:1.10 (1907.2)「指配者を敬い、教師に敬意を表すべきではあるが、精霊的な意味合いにおいては、いかなる人をも父と呼ぶべきではない、なぜなら、あなた方の父はただ一人であり、神だけであるのだから。あなた方は、王国で、同胞に威張ろうとすべきでもない。心しなさい、私は、あなた方の中で最も偉大な者が、すべて人の奉仕者にならなければならないとあなた方に教えてきた。神の前で自分自身を高めるならば、あなた方は、確実に卑しめられる。しかし、本当に、謙遜である者は誰でも、確実に高められる。あなた方の日々の生活において、自己称賛ではなく、神の栄光を求めなさい。賢く天の父の意志に自身の意志を従属させなさい。

175:1.11 (1907.3)「私の言葉を間違えてはいけない。私は、私の破滅を今でも求めているこれらの司祭長と支配者に対して悪意を抱いてはいない。私には、私の教えを拒絶するこれらの筆記者とパリサイ派に何の悪意もない。私は、あなた方の多くが秘かに信じるということ、私の時間が

来れば、あなた方が、王国への忠誠を公然と表明することが分かっている。しかし、あなた方の律法学者は、神と話すと公言し、それから、世界に父を明らかにする者を敢えて拒絶し、滅ぼすと主張する以上、いかに自分自身を正当化するのであろうか。

175:1.12 (1907.4)「忌まわしいものだ、筆記者、パリサイ派、偽善者達。たまたま自分達の教える方法で学ばないという理由で誠実な人に対して天の王国の入口を閉ざそうとしている。あなた方は、王国入りを拒絶し、同時に、他の全ての者が入ることも妨げるために力の限りを尽くし全てをする。あなた方は、救済の入口に背を向けて立ち、そこに入ろうとする者全てと戦う。

175:1.13 (1907.5)「忌まわしいものだ、偽善者である筆記者とパリサイ派達。1人の改宗者を作るために陸と海を飛び回り、それに成功すると、その者が異教徒の子であったときの倍にも悪くなるまで満足しないのであるから。

175:1.14 (1907.6)「忌まわしいものだ、貧者の持ち物を抑え、モーシェが定めると自分達が考えるとき、神に仕える人々に重い賦課金を要求する司祭長と支配者達。慈悲を示す

ことを拒む者達、世界に慈悲が来ることを望むことができるのか。

175:1.15 (1907.7)「忌まわしいものだ、偽の教師、盲目の案内人達。盲人が盲人を導くとき、国に何を期待きるのか。双方が破滅の穴に落ち込むであろう。

175:1.16 (1907.8)「忌まわしいものだ、誓いを立てるときに偽り隠す者達。あなた方は、人は、寺院に誓いをし、その誓いを破ることを許すが、誰であろうと寺院の黄金をさして誓う者は、その誓いを果たさなければならないと教えるので、あなた方は詐欺師である。あなた方は、全て愚かで盲目である。自分の不正直さに矛盾さえしている、なぜなら、黄金と伝えられるところでは黄金を浄める寺院とではどちらが大切なのか。あなた方は、人が祭壇に誓うならば、それは何でもないと、だが、祭壇にあるり物に誓うならば、そこで債務者として留めるられるとも教える。あなた方は、贈り物より贈り物を浄める祭壇の方が大切であるのに、又もや、真実が分からないのか。天の神の目にどうしたらそのような偽善と不正直を正当化することができるのか。

175:1.17 (1908.1)「忌まわしいものだ、ハッカ、アニス、クミンを1/10税を収めているが、時を同じくして、法律—信仰、慈悲、思慮分別—のより重味のある問題を無視する筆記者とパリサイ派と他のすべての偽善者達。理にかなった範囲で、これをしなければならないが、他方もおろそかにしてはいけない。あなた方は、誠に盲目の案内人で馬鹿な教師である。あなた方は、ブヨはこして除くが、ラクダは飲み込んでいる。

175:1.18 (1908.2)「忌まわしいものだ、筆記者、パリサイ派と偽善者達。杯と大皿の外側を清めることには几帳面であるが、強要、過剰、欺瞞の汚物が中に残されている。あなた方は、精神的に盲目である。まず杯の内側を清め、そうすればこぼれる物それ自体が外側を清める方が、どれほど良いことだとは気づかないのか。邪悪な無頼漢達、魂は、不正に染まり、殺人で満たされる一方で、モーシェの法の字句に対するあなた方の解釈に適う目的で自分の宗教を外向けに演じる。

175:1.19 (1908.3)「忌まわしいものだ、真実を拒絶し、慈悲を拒む者達。あなた方の多くが、外側は美しく見えるが中に

は死人の骨やあらゆる不潔な物で一杯の白く塗られた墓のようなものである。それでも、神の勧告を故意に拒絶するあなた方は、人々には、外面的に聖者のようであり公正に見えるが、内面的にはその心は偽善と不正に満ちている。

175:1.20 (1908.4)「忌まわしいものだ、国の偽の先達達。かなたに殉教の予言者達の記念碑を建設し、傍らでは予言者達が伝えてくれた者を滅ぼす陰謀をたてている。あなたは、正者の墓を飾り、先祖の時代に生きていたならば予言者達を殺しはしなかったと得意がっている。それから、そのような独善的な考えにもかかわらず、あなた方は、予言者達が話した方を、人の息子を、殺す用意をする。これらのことをする限り、あなた方は、予言者達を殺した者達の邪悪な息子達であるという自分自身の目撃者である。先へ進みなさい、そして、あなた方の非難の杯を満たすがよい。

175:1.21 (1908.5)「忌まわしいものだ、悪の子達。ヨハネは、あなた方を本当に毒蛇の子と呼んだ、そこで、私は、ヨハ

ネがあなた方に下した判断から、あなた方は、いかにして逃がれることができるのかと尋ねる。

175:1.22 (1908.6)「しかし、今でも、私は、父の名にかけて慈悲と許しをあなた方に提供する。今でも、私は、情愛深い永遠の親交の手を差し出す。父は、賢者や予言者達を遣わした。あなた方は、ある者を迫害し、また、他の者を殺してしまった。そして、ヨハネは、人の息子の到来を宣言して現れ、多くの者が、その教えを信じると、あなた方は、ヨハネを滅ぼした。そして今度は、あなた方は、さらに罪の無い血を流す用意をしている。全地球の裁判官が、天のこれらの使者を拒絶し、迫害し、滅ぼした手段についての報告をこの民族に要求する時、罪の報いの恐ろしい日が来ることが、あなた方には分からないのか。あなた方は、最初の予言者が殺されてから拝殿と祭壇の間で殺されたザハリーアの時代に至るまでの全てのこの正義の血の説明をしなければならないということを理解しないのか。そして、あなた方が邪悪の道を進み続けるならば、この報告は、まさしくこの世代に要求されるかもしれないのである。

175:1.23 (1908.7)「エルサレムよ、あなたの元に送られた予言者達に石を投げ、教師達を殺したアブラーハームの子孫よ、今でも私は、雌鳥が翼の下に雛鶏を集めるようにあなたの子供を集めたいのに、あなた方はそれを望まない。

175:1.24 (1908.8)「そして今、私はあなた方を後にする。あなた方は、私の言葉を聞き決断した。私の福音を信じた人々は今でも、神の王国の中で安全である。私は、寺院で教えている私をあなた方はもう見ることはないということを、神の贈り物を拒絶することを選んだあなたに伝えておく。あなた方への私の仕事は完了した。見よ、私は今、私の子等と共に行き、そしてあなたの家は荒涼としたままあなたに残される。」

175:1.25 (1908.9) それから、あるじは、寺院から出発するように追随者に合図した。

2. 個々のユダヤ人の事情

175:2.1 (1909.1) ユダヤ国家の精霊的な指導者と宗教教師が、かつてイエスの教えを拒絶し、残酷な死をもたらそうと共謀をしたというその事実は、神の前に立つ個々のユダヤ

人の状況に少しの影響も与えない。そして、それは、仲間の人間としてのユダヤ人に対しキリストの追随者であると称する人々に偏見を抱かせるべきではない。ユダヤ人は、国家として、社会政治集団として、平和の王子を拒絶する甚だしい犠牲を完全に払った。ユダヤ人は、ずっと以前に人類諸民族へ神性の真実を明らかにする精霊的な松明持ちであることを止めたが、これは、自身がユダヤ人の生まれであるナザレのイエスの偏狭で、無価値で、頑固な追随者であると名乗る者達が、これらの昔のユダヤ人の個々の子孫を迫害し、苦しめる有効な理由とはならない。

175:2.2 (1909.2) 幾度となく、近代ユダヤ人に対するこの無分別で非キリスト的な憎しみと迫害は、イエスの時代に、彼の福音を心から受け入れ、心の底から信じたその真実のためにやがて怯むことなく死んだユダヤ人達のまさにその子孫にあたる罪のない、害のないユダヤ人の個人の苦しみへと、また死にへと追いやった。イエスの見せかけの追随者達が、天なる王国の福音の最初の殉教者として見事に命を捨てたペトロス、フィリッポス、マタイオスの、それに他のパレスチナのユダヤ人の近代の子孫を迫

害し、悩ませ、殺害さえして欲しいがままにしているのを目にする観察中の天の存在者達を何という恐怖の戦慄がよぎるとは。

175:2.3 (1909.3) 先祖の罪のために、完全な無知からくる悪行のために、責任の負いようのない事のために、罪の無い子孫を苦しみに追いやるということは、何とに残酷で無分別であることか。その上、敵さえ愛することを弟子に教えた方の名においてそのような邪悪な行為をするとは。イエスを拒絶し、ユダヤ人の仲間達が、彼に不名誉な死をもたらす企みの様子の描写が、イエスの人生のこの詳述において必要となったのだが、我々は、そのような歴史的な詳述の提示は、不当な憎悪を決して正当化しないし、非常に多くの者が、キリスト教徒は、何世紀もの間、個々のユダヤ人に対して維持していた心の不公平な態度を容赦もしないということをこの物語を読む全員に警告したい。王国の信者は、イエスの教えに続く人々は、イエスの拒絶と磔刑に関して有罪である者として個々のユダヤ人を不当に扱うことを止めなければならない。父とその創造者たる息子は、決してユダヤ人を愛することを止めたことがない。神は人々を差別をせず、か

つ、救済は、非ユダヤ人とユダヤ人のためのものでもある。

3. シネヅリオン派の運命的な会合

175:3.1 (1909.4) この火曜日の夜８時、シネヅリオン派の運命的な会合が招集された。ユダヤ国家のこの最高裁は、数多くの前回の会合でイエスの死を非公式に宣告してきた。この威厳をもつ管轄団体は、何度もイエスの仕事を止めさせることを表決してはきたが、ありとあらゆる犠牲をはらっても彼を捕縛し、死に追い遣ることは、かつて一度も決議したことがなかった。シネヅリオン派が、そこで会を成立させ、公式に、しかも満場一致でイエスとラザロ両者に死刑を言い渡すことを決議したのは、西暦30年４月４日、この火曜日の丁度真夜中前のことであった。これは、ほんの数時間前、寺院でユダヤの支配者へ最後に訴えた彼への返答であり、それは、これらの同じ司祭長や悔い改めないサドカイ派とパリサイ派に対するイエスの最後の、力強い摘発に向けてのシネヅリオン派の激しい憤慨の反応を意味するものであった。神の息子への死刑宣告を下すことは、(裁判前にさえ)、そのよう

な国としてユダヤ人の国に広げられる天の慈悲のじつに最後の申し出に対するシネヅリオン派の返事であった。

175:3.2 (1910.1) ユダヤ人は、純然たる人間の地位に従って、この後ずっとユランチアの国々の間に自分達の簡潔で短い国家生命の寿命を終えるままにされた。イスラエルは、アブラーハームとの盟約をした神のその息子を否認し、また、アブラーハームの子孫を世界への真実の光の運搬人にする計画を打ち砕いてしまった。神の盟約は、破棄され、ヘブライの国の終焉は速められた。

175:3.3 (1910.2) 翌朝早く、イエスの捕縛がシネヅリオン派の役員に命じられたが、彼が、公の前で捕らえられてはならないと言う指示であった。かれらは、望ましくは、突如夜間に秘密裏に捕らえる計画を立てるように言われた。イエスが当日(水曜日)寺院での教えには戻ってこないかもしれないと理解して、彼らは、シネヅリオン派のこれらの役員に「木曜日の真夜中になる前に、ユダヤの最高法廷に彼を連れて来る」ように命じた。

4. エルサレムの状況

175:4.1 (1910.3) 寺院でのイエスの最後の講話の結びにおいて、使徒は、再度、混乱と狼狽お状態におかれていた。あるじが、ユダヤの指導者への凄じい告発を始める前、ユダは寺院に戻ってきていたので、12人全員が、寺院でのイエスのこの最後の講話の後半を聞いた。ユダ・イスカリオテが、この別れの演説での慈悲の申し出の前半を聞けなかったことは、不運である。かれは、昼食を共にしたサッヅカイオス派の親類と友人達の特定集団との会議中であったので、またイエスと使徒仲間との関係を断つ最も相応しい方法に関して相談をしていたので、ユダヤ人の支配者へのこの最後の慈悲の申し出を聞かなかった。ユダが、最終的に、また完全に福音運動を放棄し、全体の事業から手を切る決心をしたのは、ユダヤ人の指導者と支配者へのあるじの最後の告発を聞いている最中であった。それでも、かれは、12人と共に寺院を出て、共にオリーヴ山に行き、仲間の使徒とエルサレムの破壊とユダヤ国家の最後についての運命的な講話を聞き、その火曜日の夜、ゲッセマネ近くの新しい宿営所に留まった。

175:4.2 (1910.4) ユダヤ人指導者への慈悲深い訴えから突然の、そして痛烈な、ほとんど無慈悲な告発に近い叱責へのイ

エスの移り変わりを聞いた群衆は、唖然とし、狼狽えた。その夜、シネヅリオン派が、イエスに死の裁判をし、一方あるじが、オリーヴ山で使徒と特定の数人の弟子と座り、ユダヤ人国家の終わりを予告している間、全エルサレムは、ただ1つの質問に関する重大かつ抑えられた議論にふけっていた。「かれらは、イエスをどうするのであろうか。」

175:4.3 (1910.5) ニコーデモスの家では、王国での秘かな信者である30人以上の著名なユダヤ人が、一堂に会し、シネヅリオン派との公然たる断絶が来る際、いかなる行動をとるかを討論した。出席者全員が、あるじの逮捕を知るまさしくその時間に、あるじへの忠誠の公の承認に同意した。かれらは、その通りにした。

175:4.4 (1911.1) そのときシネヅリオン派を制御し支配したサドカイ派は、次の理由でイエスを連れ去ることを願ってやまなかった。

175:4.5 (1911.2) 1. 大衆からのイエスへの増大する支援が、ローマ当局との可能な係わりによりユダヤ人の国家存立を危険に曝すことを恐れた。

175:4.6 (1911.3) 2. 寺院の改革に対するイエスの熱意は、直接その収入を襲い、寺院の浄化は、彼らの財布に影響を及ぼした。

175:4.7 (1911.4) 3. かれらは、社会秩序の維持に責任があると感じ、また人間の兄弟愛に関するイエスの奇妙で新しい教義の一層の普及の結果を恐れた。

175:4.8 (1911.5) パリサイ派には、イエスが殺されるのを見たいと欲する異なる動機があった。パリサイ派がイエスを恐れた理由は、

175:4.9 (1911.6) 1. かれは、人々に対する伝統的な支配に効果的な対抗の位置に立った。パリサイ派は、超保守的であり、宗教教師としての既得の威信へのこれらのおそらく急進的な攻撃にひどく憤慨した。

175:4.10 (1911.7) 2. パリサイ派は、イエスが、法律違反者であると、安息日と他の数多くの法的で儀式的な必要条件を全く無視したと、考えた。

175:4.11 (1911.8) 3. かれらは、イエスが神を自分の父として触れたので、冒涜の罪で告発した。

175:4.12 (1911.9) 4. そして、そのとき、かれらは、決別の辞の結びの部分として、この日寺院で伝えた痛烈な告発に関する最後の講話のために徹底的にイエスに立腹していた。

175:4.13 (1911.10) シネヅリオン派は、正式にイエスの死を命じ、また、その逮捕の指示を出し、イエスが裁判に連れて来られるべき罪状を明確にするために、高僧カイアファスの家で翌朝10時に会う約束をして、この火曜日の真夜中近くに散会した。

175:4.14 (1911.11) サドカイ派の小集団は、実はイエスを暗殺で処分しようと提案したが、パリサイ派は、そのような処置の是認を全く拒否した。

175:4.15 (1911.12) これが、この波瀾万丈の日のエルサレムと人々の間での状況であり、一方天の存在体の巨大な群衆は、地球のこの由々しき光景の上にいて、最愛の君主を助ける何かを切望していたが、指揮に当たっている上官達に効果的に拘束されていたので行うことができなかった。

論文 176
オリーヴ山の火曜日の夕べ

176:0.1 (1912.1) この火曜日の午後、イエスと使徒がゲッセマネ寺院から宿営所へと行く途中、マタイオスが寺院の工事に注意を促して言った。「あるじさま、これらの建物の様子をご覧ください。大きな石と美しい装飾を見てください。これらの建築物が破壊されることがあり得ましょうか。」オリーヴ山の方へ進みながら、イエスは言った。「君は、これらの石とこの大規模な寺院を見ている。本当に、本当に、言っておく。1つの石の上に他の石が残されることがなくなる日がやがて来るであろう。それらは、全て崩されるであろう。」神聖な寺院の破壊を表現するこれらの言葉は、あるじの後ろに続いて歩いていた彼らの好奇心を刺激した。かれらは、寺院の破壊を引き起こす世の終わり同然のいかなる出来事も急には想像できなかった。

176:0.2 (1912.2) キドローン谷に沿ってゲッセマネに向け通過していく群衆を避けるため、イエスと仲間は、オリーヴ山の西斜面の短い距離を登り、次に、公共の野営場の上の近距離に位置するゲッセマネ近くの自分達の私設の宿営所への道に続くつもりでいた。彼らが、ベサニアに通じる道へ向きを変えたとき、落日の光線に栄える寺院を見

た。そして、山上に留まる間、かれらは、都に明かりが現れるのを見たり、照らされた寺院の美しさに見入った。そして、イエスと12人は、そこで、満月の柔らかい光の下に座った。あるじは、彼らと話していた。まもなく、ナサナエルが、この質問をした。「教えてください、あるじさま。これらの出来事がいつ起ころうとしているかを私達はどのように知るのでしょうか。」

1. エルサレムの破壊

176:1.1 (1912.3) ナサナエルの質問に答えて、イエスは、言った。「よし、この民族が彼らの不正行為の杯を満たした時代について、正義が我々の祖先のこの都に急襲する時について話そう。私は君達を残して行くところである。私は父の元に行く。私が去った後、多くの者が救出者だと称してやってきて多くを迷わせるので、誰にも騙されないよう注意を払いなさい。戦争や戦争の噂を聞いても、煩わされてはいけない、全てのこれらが起こりはするが、エルサレムの最後は、まだ間近ではないのであるから。飢饉や地震に混乱すべきではない。民間当局に引き渡されたり、福音のために迫害されても心配すべきではない。君達は、会堂から放り出され、私のために投獄

されるであろう。その上、君達のうち何人かは殺されであろう。君が長官と支配者の前に連れて行かれるとき、それは、君の信仰証言のためであり、王国の福音への自身の不動性を示すためである。そして、裁判官の前に立つとき、前以って何を言うべきか心配しなくて良い、なぜならば、敵に答えるべき事をまさにその時、精霊が君に告げるのであるから。労苦のこれらの日々、親族さえ、人の息子を拒絶した人々の先導の下に、君を牢獄へ、そして死へと届けるであろう。しばらくは、君は、私のためにすべての人に嫌われるかもしれないが、これらの迫害でさえ、私は、君達を見捨てはしない。私の精霊は、君を見捨てない。我慢強くありなさい。この王国の福音が、遂には、すべての敵を打ち負かし、万国へと宣言されるということを疑ってはならない。」

176:1.2 (1913.1) イエスは、都を見下ろしながら、一息入れた。救世主の精霊的な概念の拒絶、期待された救出者の物質的な任務に対する持続的に、盲目的にしがみつく決断は、やがて、ユダヤ人を強力なローマ軍隊との直接的な衝突に導くということ、そしてそのような争いが、ユダヤ人の国家の最終的かつ完全な打倒をもたらし得るとい

うことが、あるじには分かっていた。彼の民族が、精霊的な贈与を拒絶し、それほどまでに慈悲深く彼を照らす天の光の受け入れを拒否するとき、その結果、かれらは、地球での精霊的な特別任務をもつ独立した民族としての自分達の運命を封じた。ユダヤ人の指導者達さえ、後には、それが、遂には彼らに破壊をもたらした不穏へと直接に導く救世主についてのこの世俗的な考えであると認めた。

176:1.3 (1913.2) エルサレムが初期の福音運動の揺りかごになろうとするところであったので、イエスは、エルサレムの破壊に関係してユダヤ民族に対する凄まじい打倒の際、その教師と説教者が、滅ぶことを望まなかった。それゆえに、かれは、追随者にこれらの指示をした。イエスは、弟子の何人かが、やがてやってくるこれらの反乱に関与し、エルサレムの没落でこうして死ぬことのないようにと大変心配した。

176:1.4 (1913.3) 次に、アンドレアスが質問した。「しかし、あるじさま、聖都と寺院が破壊されることになっているならば、そして、あなたが、私達の指示のためにここにい

ないのであるならば、私達は、いつエルサレムを見捨てるべきでありましょうか。」イエスは言った。「私が行った後、苦悩と厳しい迫害のこれらの時にもかかわらず、都に留まることができるが、偽の予言者達の反乱後、ローマ軍に包囲されるエルサレムを遂に見るとき、君達は、都の最後が近いということを知るであろう。君達は、そのときは、山に逃げなければならない。都やその周辺にいる何かを救うために留まらせてはいけないし、外にいる者を中に入れる危険を犯させてもいけない。これらの日々は、非ユダヤ人の復讐の日になるのであるから、格段の苦難となろう。そして、君達が都を捨てた後、この反抗的な民族は、刃に倒れ、捕虜となり、万国に連れて行かれるであろう。そして、エルサレムは、非ユダヤ人に踏み荒らされるであろう。その間、誤魔化されてはならないと警告しておく。『見よ、ここに救世主がいる。』とか、『見よ、あの方だ。』とか言って誰かが来ても、それを信じてはならない、多くの偽教師が現れ、多くの者が惑わされようとしているのであるから。だが、君達は、私が予めこのすべてを告げたのであるから、騙されるべきではない。」

176:1.5 (1913.4) あるじのこれらの驚くべき予言が、途方に暮れる彼らの心にしみ込む間、使徒は、月下に黙してかなりの時間座っていた。実際に信者と弟子の集団全体が、ローマ軍の初めての出現にエルサレムから逃げ、北の方角にあるペラでの安全な避難所を見つけたのは、実にこの警告と一致していた。

176:1.6 (1913.5) イエスの追随者の多くは、この明白な警告の後にさえ、救世主の再現が、新しいエルサレムの樹立、そして世界の首都になるための都の拡大をもたらすとき、エルサレムに明らかに起こる変化について言及していると、これらの予測を解釈した。これらのユダヤ人の心では、寺院の破壊を「世の終わり」であると決めつけていた。かれらは、この新しいエルサレムが、全パレスチナを占領すると信じた。世の終わりには、「新しい天と新しい地球」の即座の出現が続くということを。そこで、「あるじさま、私達は、新しい天地が現れるとき、万物が去るということを知っていますが、このすべてを引き起こすためにあなたがいつ戻られるのかをどのように知るのでありましょうか。」とペトロスが言っても、奇妙ではなかった。

176:1.7 (1914.1) これを聞いたイエスは、しばらく深く考えてから言った。「君は、常に新しい教えを古い教えに取りつけようとするので間違える。君は、私の全ての教えを誤解するつもりでいる。自分の確立した信念に則って、福音を解釈すると言ってゆずらない。それでも、私は君を教化する。」

2. あるじの再臨

176:2.1 (1914.2) イエスは、やがてこの世を去るつもりではあるが、聞き手が、天の王国の仕事を完了するために必ず確かに戻るであろう、と推し測るような声明を幾度もした。彼が自分達を後に残そうとしているという確信が、追随者の間で拡大するにつれ、そしてイエスがこの世を去った後、全信者が、戻るというこれらの約束を確実なものにしようとすることは、自然なことであった。キリストの再臨の教義は、キリスト教徒の教えにこのように早く取り込まれ、弟子のその後のほとんどあらゆる世代が、この真実を心から信じ、イエスがいつか来ることを秘かに心待ちにしていた。

176:2.2 (1914.3) 師であるあるじを手放すことになっているのならば、これらの最初の弟子と使徒は、戻るというこの約束をないっそう掴み、また時を移さずに、エルサレムの予測される崩壊とこの約束された再臨とを結びつけた。そして、あるじが、まさにそのような誤りを防ぐための特別の苦心をしたにもかかわらず、かれらは、オリーヴ山でのこの夜の教示の間、イエスの言葉をこのように解釈し続けた。

176:2.3 (1914.4) ペトロスの質問に対する更なる答えで、イエスは言った。「君は、なぜ 人の息子がダーヴィドの王座に着くことを求めたり、ユダヤ人の物質的な夢が実現することを期待するのか。これらの歳月、私の王国は、この世界のものではないと話してはこなかったか。君が現在見下ろしているものは、終わっているが、これは、王国の福音が全世界にむかい、そしてこの救済がすべての民族に広まる新たな始まりになるであろう。そして、王国がその実を結ぶとき、天の父が、この世界に暗黒の王子になった彼を、それからアダームを、次にはメルキゼデク、そして最近では人の息子をすでに授けたように、真実の拡大された顕示と正義の強化された示威で必ず君を

訪るということを確信しなさい。私の父は、この暗く、悪である世界にさえ慈悲を明らかにし、愛を示し続けるのである。父が私に全権力と権威を授けたように、私もまた、君の運命に続き、まもなく全ての肉体に注がれる私の精霊の臨場により、王国の事柄において道案内を続行する。精霊の形で君とこのようにいることになるが、私は、肉体でこの人生を送り、神を人に顕示し、同時に人を神に導く経験を達成したこの世界にいつか戻ると約束する。私は、すぐ君のもとを去り、父が私の手に任せた仕事を始めなければならないが、充分な勇気をもちなさい、私はいつか戻ってくるのであるから。そうしているうちにも、宇宙の真実なる私の聖霊が、あなたを慰め、誘導するのである。

176:2.4 (1915.1) 「あなたは、弱っている私、そして肉体の私をいま見ているが、私が戻るときは、それは力を備えており、精霊の形である。肉体の目は、肉体の人の息子を見ているが、精霊の目だけは、父に栄光を授けられ、彼自身の名前で地球に現れている人の息子を見るであろう。

176:2.5 (1915.2) 「しかし、人の息子の再現の時代は、楽園の委員会にのみに知られている。天国の天使さえ、これがいつ起こるかは知らない。しかしながら、この王国の福音が全民族の救済のために全世界に広められたとき、また時期が熟したとき、君達は、父が、別の配剤の贈与を君達に送るということ、さもなければ時代を宣告するために人の息子が戻るということを理解しなければならない。

176:2.6 (1915.3) 「さて、私が君に話したエルサレムの苦悩に関しては、私の言葉が成し遂げられるまでは、この時代さえ過ぎ去らないであろう。しかし、人の息子の再来に関しては、天や地の誰も、あえて話すことはできない。だが、君は、時代の成熟に関して賢明であらねばならない。君は、時代の前兆を明察するために注意深くあらねばならない。君は、イチジクがそのたおやかな枝を現わし、そして葉が芽吹くとき、夏が近いと分かる。同様に、世界が、物質志向の長い冬を越し、君が、新しい配剤の精霊的春の訪れを見分けるとき、君は、新しい夏の訪れが近づくのを知るはずある。

176:2.7 (1915.4) 「しかし、神の息子の接近に関係があるこの教えの重要性は、何であるのか。君達一人一人が、人生の戦いを横たえ、死の入り口を通過するために呼ばれるとき、即座の判決に臨むということ、そして、無限の父の永遠の計画の奉仕の新たな配剤の事実に直面するということを悟らないのか。全世界が時代の終わりの事実として立ち向かわなければならないことに、君達は、個人として、自然の生命の終わりに至り、それによって、父の王国の永遠の進行の次の顕示に固有の状況と要求に直面するために進むとき、個人の経験として君達各々が、最も確かに立ち向かわなければならない。」

176:2.8 (1915.5) あるじが使徒にした全講話の中で、エルサレムの崩壊と自身の再来の二つの主題に関するこの火曜日の夜、オリーヴ山で与えられたものほど使徒の心を非常に混乱させるものは、他になかった。したがって、あるじがこの特別の機会に言ったことに関する記憶に基づく以降の記述報告には、ほとんど一致がなかった。依って、その火曜日の夜に言われた多くに関する記録が、空白のままにされたとき、多くの言い伝えが生じた。そして、カリーグラ皇帝の法廷に勤務していたセルタという者が

書いた救世主に関するユダヤの黙示録は、２世紀のごく初期に丸ごとマタイオスの福音書に書き写され、その後一部が、マルコスとルカスの記録に加えられた。10人の処女の寓話が現れたのは、セルタのこれらの著作においてであった。福音の記録のいかなる部分も、かつてこの晩の教えのような混乱させる誤解を受けなかった。しかし、使徒ヨハネは、決してこのように混乱はしなかった。

176:2.9 (1915.6) これら13人の男達は、宿営所への旅を再開するに当たり、無言で、かなりの感情の緊張感があった。ユダは、とうとう仲間を捨てるという決断を確認した。ダーヴィド・ゼベダイオス、ヨハネ・マルコス、それに何人かの主な使徒が、イエスと12人を新しい宿営所に歓迎したのは時刻も遅かったが、弟子達は、眠ろうとしなかった。かれらは、エルサレムの崩壊、あるじの出発、そして世の終わりに関しさらに知りたいと思った。

3. 宿営所での後の議論

176:3.1 (1916.1) 20人程が焚き火の周りに集まっているとき、トーマスが、尋ねた。「あなたは父の仕事を終えに戻られ

ようとしていますので、あなたの留守中、我々の態度はどうあるべきでしょうか。」イエスは、焚火に映える皆に目をやって答えた。

176:3.2 (1916.2) 「君さえも、トーマス、私が言ってきたことを理解していない。王国との君の関係は、精霊的かつ個人的であると、君が神の息子であるという信仰-認識による精霊における個人的な経験の問題であると、私は、ずっと教えてはこなかったか。この上何を言おうか。国家の転落、帝国の急落、不信心なユダヤ人の破滅、時代の終わり、世の終わりですら、この福音を信じる者、そして永遠の王国の保証における人生を隠す者にこれらの事が何の係わりがあるというのか。神を知り福音を信じる君達は、すでに永遠の命の保証を受け取った。君の人生は、精霊で、しかも、父のために送られてきたのであるから、何も深い憂慮はあるはずがない。王国の建設者、天界の公認の民は、一時的な大変動、あるいは、この世の大災害に混乱させられることにはなっていない。君の命は、息子からの贈り物であり、それは、永遠に父の中で安全であるということを知っているのであるから、もし国々が覆り、時代が終わっても、あるいは、目に見え

る全てが滅んでも、この王国の福音を信じる君にとって何ということがあるものか。信仰をもって現世の人生を送り、仲間への愛ある奉仕の正義として精霊の果実をもたらしたのあるならば、君は、神との息子性における君の最初の、そして地球での冒険で切り抜けてきた同じ生存の信仰をもって、永遠の経歴における次の段階へと自信をもって楽しみにすることができる。

176:3.3 (1916.3) 「人の息子のあり得る帰還に関して、ちょうど、個々の信者が、必然の、絶えず切迫した自然死を考慮して一生の仕事を進めるように、信者の各世代が、各々の仕事を進め続けるべきである。君は、神の息子として信仰により一度自分を確立しするとき、生存の保証には他の何も、重要ではない。だが、誤ってはいけない、この生存の信仰は、生ける信仰であり、人間の心で最初にそれを奮い立たせたその神霊の果実をますます明らかにする。一度天の王国の息子性を受け入れたという事は、肉体をもつ神の息子達による進歩的な精霊の結実と関係のあるそれらの真実を意識的かつ執拗な拒絶に直面しては、君を救いはしないであろう。地球での父の仕事において私と共にいた君は、人類への父の奉仕の道が

好きでないと気づけば、王国を今でも見捨てることができるのである。

176:3.4 (1916.4) 「個人として、そして信者の世代として私が話す寓話を聞きなさい。ある偉人がおり、他国への長旅に経つ前に任せられる全使用人を呼び、全商品を手に託した。１人に５タラントを与え、別の者には２タラント、また別の者には１タラントを与えた。名誉を与えられた執事全体にこのようにして、それぞれが持つ幾つかの能力に応じて商品を委ね、旅に出た。主人が出発してしまうと、使用人は、任せられた財産から利益を得るために仕事に取り掛かった。５タラントを受け取った者は、すぐにそれで取り引きを始め、やがて５タラントの利益を上げた。同様に、２タラントを受け取った者は、間もなくもう２タラントを得た。１人の使用人を除いては、これらの全員が、同様に主人のために利益を得た。この使用人は、一人で出掛け地面に穴を掘り主人の金をそこに隠した。ほどなく、主人が、不意に戻り、執事達に決算を求めた。主人の前に全員が召喚されたとき、５タラントを任せられた者が追加の５タラントをも持参して進み出て言った。『ご主人様、５タラントを投資のために私

に与えられました。そして、私は、　私の利益としてもう５タラント差し出せますことを嬉しく存じます。』すると、主人が言った。『でかした、良い忠実な僕だ、そなたは、僅かなものに忠実であった。これからは多くのものを任せよう。ただちに主人の喜びをともに喜んでくれ。』２タラントを受け取った者が、進み出て言った。『ご主人様、私には２タラントが与えられました。ご覧ください、私は、　さらに２タラントを得ました。』そこで、主人が言った。『でかした、良い忠実な僕だ、そなたもまた僅かなものに忠実であった。これからは多くのものを任せよう。ただちに主人の喜びをともに喜んでくれ。』今度は、１タラントを受け取った者の決算の時がやってきた。この使用人は、進み出て、『ご主人様、私は、あなたを知っており、あなたは自分で働かない場所で利得を期待される抜かりのない方であると分かっておりました。それゆえ、私は、任された何にせよ危険を冒すことを恐れました。私は、あなたのタラントを安全に地中に隠しました。これが、あなたのお金がございます。』と言った。だが、主人は、言った。『そなたは、怠惰でものぐさな僕である。私が、勤勉な仲間の僕がこの

日報いたそのような理に適った利益決算を要求するだろうと、自身の言葉で知っていたと認めた。だったら、私の帰還の際、私の金と利息を受け取れるように少なくとも金を金融業者の手に委ねるべきであった。』それから、この主人は、執事長に『この無益な使用人からこの１タラントを取り上げ、それを10タラントを持つ者に渡しなさい。』と言った。

176:3.5 (1917.1) 「持てる者にはさらに与えられ、豊かになる。持たざる者からは持てる物までも取り上げられるであろう。あなたは永遠の王国の問題において静止していることはできない。父は、恩恵と真実に関する知識で成長することをすべての子に要求している。これらの真実を知るあなたは、精霊の果実の増加をもたらし、仲間の使用人の寡欲な奉仕への増加する献身を示さなければならない。そして覚えていなさい、私の同胞の最も小さい者の一人に奉仕する限り、あなたは、私に対してこの奉仕をしているのであるということを。

176:3.6 (1917.2) 「また、今、そしてこれから先、さらには未来永劫に、あなたは、父の用向きについてもそのように取

り組むべきである、私が来るまで続けなさい。任せられたことを忠実に行いなさい、そうすることにより、あなたは、死の精算のための呼び出しへの用意ができるであろう。そして、このように父の栄光と息子の満足のために生きて後、あなたは、喜びと非常に大きい楽しみをもって永続する王国の永遠の奉仕へと入るのである。」

176:3.7 (1917.3) 真実は生きている。真実の聖霊は、光の子を精霊的な現実と神性の奉仕の新しい領域に導いている。君には、決まった、安全かつ名誉ある形に結晶化するために真実を与えられてはいない。君の真実の顕示は、君個人の経験によって強化されなければならず、その結果、新たな美と実際の精霊的な獲得が、あなたの精霊的な果実を目にするすべての者に明らかにされ、それによって天にいる父を讃えるように導かれるのである。真実の認識においてこのようにして成長する者、またそれによって精霊的な現実に対する神性評価の能力を高めるそれらの忠実な使用人だけが、「完全に主の喜びに加わる」ことをいつでも望むことができる。後続する世代のイエスの見せかけの追随者が、神性の真実の執事職に関して次のように言うことは、何とも残念な光景である。「ここ

に、あるじさま、100年、あるいは1,000年も前にあなたが私達に委ねられた真実があります。私達は何も無くしてはいません。与えてださった全てを忠実に保ちました。教えてくださったことに何の変更もしてはいません。ここに、あなたが与えてくださった真実があります。」しかし、精霊的な怠惰に関するそのような請願は、真実の実を結ばない執事をあるじの面前で正当化はしない。君の手に委ねられた真実に従って、真実のあるじは、計算を要求するであろう。

176:3.8 (1918.1) 君は、来世においてこの世界での賦与と執事職の報告を求められるであろう。生まれつきの才能が、多かろうが少なかろうが、正当で慈悲深い清算に直面しなければならない。賦与が利己的な追求にだけ用いられ、それらが、人の絶えず広がる奉仕と神の崇拝において示されるような、精霊の果実の増加した収穫を得るための高い義務に何の考慮も与えられないならば、そのような利己的な執事は、自らの故意の選択の結果を受け入れなければならない。

176:3.9 (1918.2) 自分の怠惰を直接支配者の所為にした1タラントのこの不誠実な使用人は、利己的な多くの必滅者に何とよく似ていたことか。人は、自身の犯した誤りに対峙するとき、他の者に、しばしばそれに最も当て嵌まらない者に責任を負わせがちであることよ。

176:3.10 (1918.3) その夜皆が眠りにつこうとしたとき、イエスは言った。「君達は、自由に受け入れてきた。だから、君達は、惜しげなく天の真実を与えなければならない、そして、この真実が、与えることで、まさに君達が、それを与えることで、増加し、救済の恵みの増加する光を示すのである。」

4. マイケルの帰還

176:4.1 (1918.4) あるじのすべての教えのうち、自分でいつかこの世界に戻るという約束ほど、非常に誤解された事は他にない。領域の死すべき者として、マイケルが、7番目の、最後の経験をした惑星へいつか戻ることに関心を持つということは不思議ではない。今は広大な宇宙の主権を有する支配者であるナザレのイエスが、そのような特異な人生を送り、宇宙の力と権威の父の無限な贈与を遂

に勝ち得た世界へ1度ならず幾度も戻ってくることを信じるということは、実に自然である。ユランチアは、永遠に宇宙主権の勝利におけるマイケルの7つの生誕球の1つになる。

176:4.2 (1918.5) イエスは、多くの機会に、また多くの個人に、この世界に戻る自分の意志を明言した。あるじがこの世の救出者として機能しないつもりだという事実に目覚めたとき、また、エルサレム打倒とユダヤ国家没落の予言を聞いたとき、追随者は、最も自然にイエスの約束の帰りをこれらの壊滅的な出来事に連想し始めた。しかし、ローマ軍が、エルサレムの壁を崩し、寺院を破壊し、ユダヤのユダヤ人を分散させ、そしてその時でさえ、あるじが、その力と栄光で自分を明らかにしようとはしなかったとき、追随者は、結局、キリストの再臨を時代の終わりと、世界の終わりとさえ、関連づけたその信仰の公式化を開始した。

176:4.3 (1918.6) 父の元に昇った後、そして天と地における全権限が自分の手に置かれた後、イエスは、2つのことをすると約束した。まず世界に別の教師を、別の真実の聖霊

を自分の代わりに送ると約束し、これを五旬節の日にした。次に、かれは、いつかこの世界に自らが戻ると追随者に確かに約束した。だが、かれは、肉体での贈与の経験のためのこの惑星の再訪を、いつ、どこで、どのようにするかは言わなかった。あるとき、かれは、肉体でここに生きたとき肉体の目が彼を見たのに対し、帰還(少なくとも彼のありうる訪問のうちの1つ)に関しては、精霊的な信仰の目によってのみ認められる、ということを仄めかした。

176:4.4 (1919.1) 我々の多くが、イエスは、来る時代にしばしばユランチアに戻ると信じがちである。我々にはこれらの複数の訪問の明確な約束はないが、携えている幾つもの宇宙称号のうちユランチアの惑星王子という称号をもつ者が、そのような独自の称号を与えた自らが征服した世界を何度も訪れるということは、最もありえそうである。

176:4.5 (1919.2) 我々は、マイケル自らが、再びユランチアに来ると断じて信じてはいるが、いつ、いかなる方法で来ることを選ぶかということに関してはまったく何の考えも

ない。地球への2度目の降臨は、この現代の終末の審判に関連して、司法の子の出現に関係して、あるいは関係なくして、起こるように調節されるのであろうか。かれは、いつか後のユランチア時代の終末に関連して来るのであろうか。来訪を告げることなく、しかも孤立した出来事として来るのであろうか。我々は知らない。確信するただ1つのことは、彼が戻るとき、かれは、宇宙の最高支配者として来るのであり、ベツレヘムの名もない赤子として来るのではないので、全世界がそれを知るようであるということである。しかし、あらゆる目がイエスを見て、そして精霊的な目だけが彼の臨場を明察するのであるならば、その降臨到来は、長らく延期されなければならない。

176:4.6 (1919.3) あなたは、したがって、地球へのあるじの個人の帰還をありとあらゆる設定された出来事、あるいは一段落した時代からの分離を首尾よくやるであろう。我々には1つだけ確信がある。かれは、戻ると約束した。
我々はいつ、または、何に関連してこの約束を実現するのか分からない。我々が知る限り、かれは、いつでも地球に現れるかもしれないし、幾つもの時代が過ぎ、その

うえ、楽園部隊の連合する息子達による正しい判決が下されるまで来ないかもしれない。

176:4.7 (1919.4) マイケルの地球の再臨は、中間者と人間双方にとり相当に感傷的な価値のある出来事である。それ以外では、それは、中間者への差し迫った機会ではなく、死を免れない人間をこの同じイエス、我々の世界の主権を有する統治者の臨場につながる一連の宇宙の出来事の即時の把握へと必滅の人間をあまりに突然におとしいれる自然死の一般の出来事と同様に人間に対する実際的な重要性がある。光の子等は皆、イエスに会う運命にあるし、我々がイエスのところに行くか、または、まず彼が我々のところに来るかどうかは深く憂慮することではない。したがって、彼が、天であなたを歓迎する準備ができているように、いつでもイエスを地球に歓迎する準備をしておきなさい。我々は、自信を持ってイエスの栄光の出現を、度重なる降臨さえ予期するが、我々は、彼が、どのように、いつ、あるいは、何に関連して現れる予定であるのか完全に無知である。

論文 177
水曜日、休息日

177:0.1 (1920.1) 民衆に教える仕事が急を要しないとき、水曜日ごとに労働を休むことが、イエスと使徒の習慣であった。この特定の水曜日、皆はいつもよりいくらか遅い朝食をとり、しかも宿営所には不吉な沈黙が広がっていた。この朝食の前半、言葉はほとんど話されなかった。ついに、イエスが「今日は、皆に休息を望む。我々がエルサレムに来てからのことを思い返す時間をとり、併せてすぐ先にあることに、私が率直に伝えてきたことに、思いを巡らせなさい。真実が君の人生で待っているということ、また、君は恵みで日々成長しているということを確認しなさい。」と言い渡した。

177:0.2 (1920.2) 朝食後、あるじは、自分がその日休息するつもりでいるということをアンドレアスに知らせ、また使徒は、いかなる状況下においてもエルサレムの門内に決して行くべきではないということを除いては、自由に時間を過ごすことが許されることを提案した。

177:0.3 (1920.3) イエスが独りで丘に行く準備をしたとき、ダーヴィド・ゼベダイオスが近寄って話しかけた。「あなたはよくご存知です、あるじさま、パリサイ派と支配者達

が、あなたを滅ぼしにかかっているということを。なのにあなたは、独りで丘に行く準備をされています。それは、愚かな行為です。ですから、どんな害も起こらないことを見届けるために備えのできた３人を差し向けるつもりです。」イエスは、充分に武装し、たくましい３人のガリラヤ人をざっと見回して、ダーヴィドに言った。「よかれと思ってしているが、人の息子が護衛する何者をも必要としていないということを理解してないのが、君の過ちである。父の意志と一致して私の命を捨てる準備ができるその時間まで、誰といえども私には手を掛けない。これらの者は、私に同伴してはいけない。私は、父と語り合うために単独で行くことを望んでいる。」

177:0.4 (1920.4) この言葉を聞き、ダーヴィドと武装した護衛達は、撤退した。しかし、イエスが独りで出発しかかると、ヨハネ・マルコスは、食物と水の入った小さな篭を携えてきて、もしイエスが、一日中いないつもりならば、気づいたときには空腹であるかもしれないと仄めかした。あるじは、ヨハネに微笑みかけて、篭に手を延ばした。

1. 神との単独の1日

177:1.1 (1920.5) イエスがヨハネの手から昼食の篭を取ろうとしたとき、この若者は、思い切って言った。「でも、あるじさま、あなたは、祈りに向かう間、篭を下に置き、それを置いたまま行かれてしまうかもしれません。私が昼食を運んでお供をすれば、あなたはより自由に礼拝できるでしょうし、しかも私は、間違いなく黙っています。祈りのために一人になられる間、私は、質問もせず篭の側にいます。」

177:1.2 (1920.6) ヨハネは、近くの数人の聞き手を驚かせた向こう見ずのこの言葉の間、失礼を顧みず篭をしかと掴んでいた。ヨハネとイエスの両方が篭を持って立そこにっていた。やがて、あるじは、手を放し若者を見下ろしながら言った。「心から私と行きたがっているので拒まないよ。共に行って良い外出にしよう。心に浮かぶどんな質問をしても良いし、互いに慰め元気づけよう。弁当を運んで出発していいよ。疲れたときは手伝う。ついてきなさい。」

177:1.3 (1921.1) イエスは、その夕方、日没後まで宿営所に戻らなかった。あるじは、真実を渇望するこの若者と雑談

し、楽園の父と語りながら、地球でのこの最後の静かな日を過ごした。この出来事は、「青年が神と丘で過ごした日」として高い所では知られるようになった。永遠に、この出来事は、被創造者への創造者の親交意欲を示す良い例となる。心の願望が誠に至高であるならば、若者でさえも宇宙の神の注意を集め、情愛深い親交を受けることができるのであり、実際、丘で、しかも丸一日、神との単独の忘れ難い歓喜の経験をすることができる。そして、ユダヤの丘でのこの水曜日のヨハネ・マルコス特異な経験は、そのようなものであった。

177:1.4 (1920.8) イエスは、率直にこの世界や次の世界のことについてヨハネとよく話した。ヨハネは、使徒の一人であるにはその年齢に達していないことを非常に残念に思うとともに、フォイニキアへの旅を除いて、イェリーホ近くのヨルダンの浅瀬での最初の説教以来、皆と後に続くことを許されてきたことに多大な感謝をイエスに表した。イエスは、差し迫る出来事に落胆しないようにとヨハネに警告し、そして必ず王国の強力な使者になって生きていくようになるのだと若者に保証した。

177:1.5 (1920.9) ヨハネ・マルコスは、イエスとの丘でのこの日の記憶にわくわくしたが、彼らが、ちょうどゲッセマネ宿営所へ戻ろうとしている時に言われたあるじの最後の訓戒を決して忘れることはなかった。「さて、ヨハネ、良い外出であった。真の休息日であったが、君に言ったことを誰にも言わないよう心しなさい。」そんな訳で、ヨハネ・マルコスは、丘でイエスと過ごしたこの日に起きたことは何も決して明らかにしなかった。

177:1.6 (1920.10) イエスの地球人生の残りの数時間、ヨハネ・マルコスは、長い間あるじを視界の外におくようなことは決してしなかった。若者は、つねに近くに隠れ、イエスが眠るときだけ眠った。

2. 早期の家庭生活

177:2.1 (1921.5) この日のヨハネ・マルコスとの外出の間、イエスは、二人の早期の幼年時代と後期の少年時代の経験を比較して多くの時間を過ごした。ヨハネの両親は、イエスの両親よりもこの世での財産をより所有していたにもかかわらず、二人の少年時代には大変似通った多くの経験があった。イエスは、ヨハネが両親や家族の他の者を

理解する助けとなる多くのことを言った。若者が、どうして自分が「王国の強力な使者」になるということがあるじには分かるのかを尋ねると、イエスは言った。

177:2.2 (1921.6) 「これらの特質が、家庭での君のそのような早期の躾に基づいているとき、私は、君の現在の信仰と愛に依存できるので、君が王国の福音に忠誠であると証しを立てると分かるのである。君は、両親が互いへの愛情をもつ家庭の出であるので、自惚れを強くし、有害であるほどに過剰には愛されなかった。敵対し合う両親が、君の信頼と忠誠を勝ちとろうと愛に無縁の扱いの結果として、君の人格は、歪みも受けることもなかった。君は、称賛に値する自信を保証する愛、また正常な安心感を促進するその親の愛を味わってきた。両親が愛と同時に賢明さも備えていたという点で、君は幸いであった。君を近所の遊び友達と共に会堂の学校に行かせ、富で買うことのできるほとんどの多くの甘やかしや贅沢品を差し控えるように導かせたものは、両親のもつ知恵というものであった。そして、独自の経験をさせることによって、君が、この世界でどのように生きるかを学ぶことをも奨励した。君は、我々が説教をし、ヨハネが洗礼を施

した。ヨルダン川に若い友人アーモーセとやって来た。二人共、我々と一緒に来ることを望んだ。君がエルサレムに帰ったとき、両親は同意した。アーモーセの両親は拒絶した。彼の両親は、君が体験した、ちょうどこの日を楽しんでいるような祝福された経験をアーモーセに対して禁じるほどに、大変に息子を愛していた。アーモーセは、家出によって我々に合流できたであろうが、そうすることで愛を傷つけ、忠節を犠牲にしたことであろう。そのような過程が賢明であったとしても、経験、独立、自由の代償を払うには、散々たる代価となったことであろう。君の両親のような賢明な両親は、子供が君の年令に成長したとき、かれらは、独立心を開発するため、そして、爽快な気分にさせる自由を楽しむために愛を傷つけたり、忠節心を捨てる必要がないようにうまく取り計らっている。

177:2.3 (1922.1) ヨハネ、愛は、すべてに賢明な存在者達によって与えられるとき、宇宙の最高の現実であるが、人間の両親の経験で示されるように、それは、危険でしばしば多少利己的な傾向がある。結婚し、育てるべき君自身の

子供を持つとき、君の愛が、知恵に悟され、知性に導かれることに留意しなさい。

177:2.4 (1922.2) 「君の若い友人アーモーセは、君と同じくらいこの王国の福音を信じているが、私は、彼を完全に頼りにすることはできない。私には、アーモーセが何年か後に何をするのか定かではない。彼の早期の家庭生活は、完全に頼りになる人間を作り出すようなものではなかった。アーモーセは、尋常の、愛あるかつ賢明な家庭の躾を楽しむことができなかった使徒の一人にあまりにも似ている。君は、通常で規律のある家庭での最初の８年を過ごしたので、君の来世での全体は、幸福で信頼できるであろう。愛が行き届き、知恵に支配された家で成長したので、君は、強くてしっかりした性格を備えている。そのような幼年期の躾は、歩み始めた道をやり抜くことを私に確信させる一種の忠誠を生みだす。」

177:2.5 (1922.3) イエスとヨハネは、家庭生活のこの議論を１時間あまり続けた。あるじは、家族は、幼い子供が最初に知る得る人間、あるいは神性の関係すべてを彼に示すことから、子供が、いかにあらゆる知的、社会的、道徳

的、さらには精霊的な早期の概念のために両親、そして関りのある家庭生活に完全に依存しているかについてヨハネに説明し続けた。子供は、母の世話から宇宙の最初の印象を得なければならない。かれは、天なる父に関する最初の考えを完全に地球の父に依存している。子供のその後の人生は、初期の精神的、感情的生活に合わせて家庭でのこれらの社会的かつ精霊的関係によって条件づけられ、幸せであるか不幸であるか、簡単であるか困難であるかが決まる。人間の全ての来世は、生きている最初の数年間に起こることによって非常に影響を受ける。

177:2.6 (1922.4) イエスの教えに関する福音は、父子の関係のように築かれる福音は、現代の文化的な民族の家庭生活が一層の愛と知恵を受け入れるような時まで、全世界規模の受理を勝ちとることができないというのが、我々の心からの所信である。20世紀の両親は、家庭の改善や家庭生活を高めるすばらしい知識と進展した真実をもっているにもかかわらず、またイエスの福音の承認は、家庭生活の即座の改良をもたらすとはいえ、ガリラヤのイエスの家庭やユダヤのヨハネ・マルコスの家庭のように、少年や少女が、養育されるそのように良い場所は、近代的

家庭にはほんの僅かであるという事実が依然としてある。賢明な家庭生活の愛と本物の宗教への忠実な献身は、深遠の相互的な影響を及ぼす。そのような家庭生活は、宗教を強化し、本物の宗教は、常に家庭を讃える。

177:2.7 (1923.1) 昔のこれらのユダヤ人家庭における多くの成長を妨げる好ましくない影響と束縛する他の特徴が、実際にはよりよく規制された近代的な家庭の多くから排除されたというのは、事実である。本当に、より自然発生的な自由と一層の個人的な自由があるが、この自由は、愛に抑制されず、忠誠に動機づけされず、賢明さからくる明敏な躾にも指示されない。我々が、子供に「天国にいる神」に祈ることを教える限り、地球の全ての父は、大変な責任を負い、家庭に住み、纏めていくのであるから、父という言葉は、成長している子供の心と心情に相応しく深く留められるようになる

3. 宿営所での日

177:3.1 (1923.2) 使徒は、オリーヴ山を歩きまわり、共に合宿している弟子との雑談にこの日の大部分を費やしたが、午後早々になると、大変イエスの帰りを望むようになっ

た。時間が過ぎるにつれ、かれらは、ますますイエスの身の安全を案じるようになり、表現しえないほどに彼の不在を淋しく感じた。あるじが下働きの少年だけを連れ、一人で丘に行くことが許されるべきであったかどうかについて１日中かなりの討論があった。誰も、公然とは考えを表現せず、ユダ・イスカリオテを除いては、彼らの一人として、ヨハネ・マルコスの立場を願わない者はなかった。

177:3.2 (1923.3) ナサナエルが６人ほどの使徒と同人数の弟子「至上の希求」の演説をしたのは、昼下がりの頃のことであり、その結末は、「我々の大半の悪いところは、単に不熱心であるということである。我々は、あるじが我々を愛しているようには、あるじを愛してはいない。ヨハネ・マルコスと同じくらいに、我々が皆一緒に行きたかったのであれば、かれは、確かに我々を連れていってくれたことであろう。若者があるじに接近し、篭を差し出す傍らで、我々は傍観していたが、あるじがそれを掴んだとき、若者は、放そうとはしなかった。だから、あるじは、我々をここに残し、篭と少年と全てを携えて丘へと行かれた。」

177:3.3 (1923.4) ４時頃、イエスの母とベスサイダのダーヴィドの母からの知らせを携えた飛脚達が、ダーヴィド・ゼベダイオスの元に来た。ダーヴィドは、祭司長や支配者達がイエスを殺すつもりであると数日前に確信した。ダーヴィドは、彼らがあるじを滅ぼすという決心であることを知り、またイエスが自身を救うために神性の力を奮いもせず、追随者に防御のための力の行使を許しはしないとほとんど確信していた。かれは、これらの結論に至り、母にエルサレムにすぐ来るように、そしてイエスの母マリアとその家族全員を連れて来るように促す使者を急派した。

177:3.4 (1923.5) ダーヴィドの母は、息子の要請通りにし、そしてそのとき、飛脚達は、ダーヴィドの母とイエスの家族全体がエルサレムへの途中にあり、翌日遅くか、翌々日の早朝に到着するはずであるという知らせを携えて戻ってきた。ダーヴィドは、自らの率先でこうしたので、この件は自分だけに留め置くことが賢明であると考えた。イエスの家族がエルサレムに行く途中であるとは、従って誰にも告げなかった。

177:3.5 (1924.1) 正午直後、アリマセアのヨセフの家でイエスに会った20人を超えるギリシア人が、宿営所に到達し、ペトロスとヨハネは、彼等との会議に数時間を過ごした。これらのギリシア人は、少なくともその一部は、アレキサンドリアでロダンの教えを受けており、王国に関する知識はかなり高度なものであった。

177:3.6 (1924.2) その夜夕方、合宿所に帰着後、イエスは、ギリシア人達を訪ねた。そして、そのような過程が、使徒と多くの主な弟子を大いに動揺することがなかったならば、かれは、ちょうど70人にしたようにこの20人のギリシア人を叙階したことであったろう。

177:3.7 (1924.3) このすべてが宿営所で起こっている一方、エルサレムでは、祭司長と長老達は、イエスが群衆への演説に戻ってこないのに驚いていた。本当に、その前日、イエスは、寺院を出る際に「私は、家を荒れ果てたままあなたのに残す。」と言った。しかし、彼がなぜ、群衆の好意的な態度において確立した大きな利点を進んで諦めようとするのかが、彼らには理解できなかった。かれらは、イエスが人々の間に騒ぎを巻き起こすと恐れたが、

群衆へのあるじの最後の言葉は、「モーシェの席に座る者」達の当局にあらゆる理に適った態度で従わせるための勧告であった。しかし、それは、彼等が、同時に過ぎ越しの準備とイエスを滅ぼす計画の仕上げをする都での忙しい日であった。

177:3.8 (1924.4) イエスが毎晩ベサニアに出かける代わりに、そこに滞在するつもりでいることを知る者すべてが、その体制を用心深く秘密にしていたので、宿営所に来る人は、少なかった。

4. ユダと祭司長達

177:4.1 (1924.5) イエスとヨハネ・マルコスが宿営所を去った直後、ユダ・イスカリオテは、同胞から姿を消し、午後遅くまで戻らなかった。エルサレムに入ることを控えるというあるじの明確な要請にもかかわらず、この混乱した不満な使徒は、高僧カイアファスの家でのイエスの敵との約束を果たしに急いで出掛けた。これは、シネヅリオン派の非公式の会議であり、その朝、10時直後に設定されていた。この会議は、イエスに申し立てるべき罪の本質を議論し、また、彼らがすでに言い渡した死刑宣告に

必要な市民の承認を確保する目的のためにローマ当局の前にイエスを連れて来る際に使われるべき手順を決めるために開かれた。

177:4.2 (1924.6) その前日ユダは、イエスは、善意の夢想家であり理想主義者ではあるが、イスラエルの期待される救出者ではないという結論に達したということを親類の数人と、父の家族のサッヅカイオス派の友人達に明らかにした。ユダは、見苦しいことのないように全体の運動から引き下がる何らかの方法を何としてでも見つけたいと述べた。友人達は、ユダの離脱がすばらしい出来事としてユダヤ人支配者達に歓迎され、何の褒美も過ぎるということはないとお世辞で保証した。かれらは、ユダが、シネヅリオン派から直ちに栄誉を受けると、そして善意からの、だが、「無学なガリラヤ人との不幸な付き合い」という汚名をとうとう消す状況にあると思わせた。

177:4.3 (1924.7) ユダは、あるじの強大な業が、悪魔の王子の力によって為されたと完全に信じることができた訳ではなかったのだが、イエスは、自己拡大において彼のもてる力を発揮しないであろうと、そのとき完全に確信してい

た。イエスがユダヤの支配者に滅ぼされると遂に確信し、かれは、敗北の動きに結びつけられるという屈辱的な考えに耐えることができなかった。かれは、見た目の失敗についての考えを拒否した。かれは、ユダは、あるじの逞しい性格と堂々として慈悲深い心の熱意を完全に理解はしていたものの、親類の1人からの部分的な示唆に、イエスは、悪意のない狂信者ではあろうが、おそらく健全な心ではなく、いつも奇妙で誤解された人に見えたのだという考えにさえ、嬉々たるものを感じていた。

177:4.4 (1925.1) そして、ユダは、イエスが、より名誉ある位置にこれまで決して割り当ててくれなかったということに、この時、今までにはなかったほどに、妙に憤慨していいる自分に気づいた。かれは、使徒の会計係である名誉をずっと評価してきたが、そのとき、自分が正しく評価されていなかったと、自分の能力が認められていなかったと感じ始めた。かれは、ペトロス、ジェームス、ヨハネが、イエスとの近い関係にいる栄誉を浴してきたということで突然の憤りに襲われており、高僧の家に行く途中のこのとき、かれは、イエスに対する背信行為のどんな考えよりも、ペトロス、ジェームス、ヨハネに仕返

しすることに夢中であった。しかし、ちょうどその時、何ものにもまして新しく優位を占める考えが、ユダの意識の最も重要な位置を占有し始めた。かれは、自力で名誉を得ることにし、同時にこれで自分の人生に最大の失望をもたらした人々に仕返しすることができれば、一層良かった。かれは、混乱、誇り、自暴自棄、そして決断の凄まじい陰謀に襲われた。これで、ユダが、イエスへの裏切りの手配をするためにカイアファスの家に向かっていたのは、金のためではないということが明白であるに違いない。

177:4.5 (1925.2) カイアファスの家に近づくにつれ、ユダは、イエスと使徒仲間を見捨てるという最終的な決定に達した。このように、かれは、天の王国の目的を放棄すると決心し、最初にイエスと王国の新たな福音と自分とを同一視したとき、いつかは自分のものであると考えていたできる限りのあの名誉と栄光を手に入れると固く決心した。使徒全員が、かつてはユダとこの野心を共有したが、時の経過と共に、皆は、少なくともユダ以上に真実を称賛し、イエスを愛するようになった。

177:4.6 (1925.3) 裏切り者は、従兄弟によってカイアファスとユダヤ人の支配者達に紹介され、従兄弟は、ユダが、イエスの巧妙な教えに惑わされるがままにいたという自分の誤りに気づいたので、このガリラヤ人との付き合いを公的に、また正式に放棄し、同時に、ユダヤの同胞の信頼と親交復旧を請いたいという段階に至ったと説明した。ユダの代弁者は、イエスが拘引されるならば、イスラエルの平和にとって最善であろうと、ユダが気づいたということ、またそのような誤った活動参加へのユダの悲嘆の証しとして、またモーシェの教えに今戻ろうとしている誠意の裏付けとして、イエスを穏やかに拘留でき、また、そうすることにより群衆を扇情する危険を避け、あるいは、過ぎ越しの後まで逮捕を延期する必要性を避けるための使令を受けている護衛長と手筈を整えられる者として自分をシネヅリオン派に提供しにやって来たのであると、ユダに代わって説明し続けた。

177:4.7 (1925.4) 従兄弟は、話し終えるとユダを紹介し、ユダは、高僧の近くに進み出て言った。「私は、従兄弟が約束したこと全てをするつもりですが、あなたは、この働きに対して何をくれる気がありますか。」ユダは、冷酷

で虚栄心の強いカイアファスの顔を襲った軽蔑や嫌悪の表情さえ見分ける風もなかった。彼の心は、あまりにも自己の栄誉と自己高揚の満足への欲情に動かされていた。

177:4.8 (1926.1) そこで、カイアファスは、「ユダ、護衛長の元に行き、今夜か明日の晩、お前のあるじを連れて来る打ち合わせをその役人として、そしてお前が、彼を我々の手まで連れてきたとき、お前はこの働きの報酬を受け取るであろう。」と言う間、かれは、裏切り者を見下ろしていた。ユダは、これを聞くと司祭長と支配者達の前から去り、イエスが逮捕される方法について寺院の護衛長との相談に出掛けていった。ユダは、イエスがそのとき宿営所を留守にしていることを知っており、その晩いつ戻るか見当もつかないので、二人は、翌晩(木曜日に)、エルサレムの人々や訪問巡礼者の皆が夜退いてから、イエスを逮捕することに同意した。

177:4.9 (1926.2) ユダは、何日もの間持つことのなかった雄渾と栄誉という考えに酔い、宿営所の仲間の元に戻っていった。かれは、イエスがいつか新王国の偉人になることを

望んで徴募したのであった。かれは、予期していたそのような新しい王国は、来ないのだということに遂に気づいた。しかし、かれは、その時生き残ると信じ、そして支持したイエスと全てとを滅ぼすと確信した古い秩序における名誉と報酬の即座の実現と、期待される新しい王国での栄誉獲得の失敗からくる失望との交換において非常に賢明であったと喜んだ。意識的な目的のその最後の動機において、イエスへのユダの裏切りは、唯一の考えが、あるじと元仲間への自己の行為の結果がたとえ何であろうとも、自身の安全と賛美という利己的な脱走者の臆病な行為であった。

177:4.10 (1926.3) しかし、それはずっとそういう具合であった。ユダは、次第に心に蓄積していくこの用心深い、執念深い、利己的かつ復讐の意識、また報復と背信のこれらの悪意に満ちた邪な欲望の感情をもてあそんでいる意識に長い間、引き込まれてきた。イエスは、他の使徒を愛して信じたように、ユダを愛し信じたが、ユダは、返礼に忠誠を伴う信頼を育たり、心からの愛の経験をすることができなかった。それが、いったん完全に利己主義にこだわり、陰鬱で長く抑圧された復習に動機づけされ

るとき、いかに危険な野心になり得ることか。世俗の薄暗く消えゆく誘惑に視線を懲らし、神性の価値と精霊的な現実への永遠の世界への永続的な到達のより高く、より真実の業績に盲状態にされるそれらの愚かな人々の人生に対する失望は、何と圧砕するものであることよ。ユダは、心で世俗の名誉を切望し、心の底からこの欲求を愛するようになった。他の使徒は、心でこの同じ世俗の名誉を同様に切望はしたが、彼らは、心からイエスを愛し、イエスの教えた真実を愛することを学ぶために最善をつくしていた。

177:4.11 (1926.4) このとき、それに気づいてはいなかったが、ユダは、洗礼者ヨハネがヘロデに首をはねられて以来、ずっと潜在意識下のイエスの評論家であった。ユダは、心の奥深くで、イエスが、ヨハネを救わなかったという事実にいつも憤慨していた。あなたは、ユダが、イエスの追随者となる以前にヨハネの弟子であったということを忘れるべきではない。そして、ユダが、魂に憎しみの衣で横たえた人間の憤りと苦い失望のすべてのこれらの蓄積は、仲間の支援の影響から自分を一度あえて切り離すとき、同時にイエスの敵の賢いそれとない皮肉と微妙

な嘲笑に自身をさらすとき、ユダには、潜在的な心にいまよく整理され、自身を飲み込むために跳び上がる用意がそのときできていた。ユダが自分の望みを高まるにまかせる度に、イエスは、それを粉々にする何かをしたり言ったりして、つねにユダの心には苦い憤りの傷跡が残った。そして、これらの傷跡が増えるにつれ、やがてその心は、しばしば傷つき、善意の、だが臆病で自己中心の人格にこの不快な経験を与えた者へのすべての本当の愛情を失った。ユダにはそれが分かっていなかったが、彼は臆病であった。従って、力あるいは栄光が、明らかに容易な範疇にあるとき、イエスが、それらを手にすることを度々拒否する動機は、イエスが臆病であるせいにすることが、ユダの日頃からの傾向であった。そして、かつては本物であっても、結局は失望、嫉妬、長く継続した憤りのために、愛がいかに実際の憎しみに変わり得るかということをすべての人間は、充分に分かっている。

177:4.12 (1927.1) 遂に、司祭長と長老達は、２，３時間容易に息をすることができた。かれらは、公然とイエスを逮捕する必要はなく、過去に幾度もしたように、イエスが自

分達の管区から逃れられないようにユダを裏切りの味方として確保した。

5.最後の社交の時間

177:5.1 (1927.2) 水曜日だったので、この夜は、社交の時間に当てられた。あるじは、塞ぎ込んでいる使徒を励ます努力をしたが、それは、ほとんど不可能であった。彼ら全員は、当惑させる、破壊的な出来事が切迫していると理解し始めた。かれらは、あるじが彼らの長年の波瀾万丈の、また情愛深い関係について詳しく語ったときでさえ愉快にはなれなかった。イエスは、使徒の全家族に関し注意の行き届いた質問をし、それからダーヴィド・ゼベダイオスに目を向け、最近誰かが、イエスの母や最年少の妹や自分の他の家人から便りを受けたかどうかを尋ねた。ダーヴィドは、自分の足元を見た。答えることを恐れていた。

177:5.2 (1927.3) これは、追随者を群衆の支援に注意を促すイエスの警告の時であった。かれは、繰り返し自分達を熱狂的に追い回し、次には、まったくむげに背を向け、以前に信じ、生活していた道に戻った大群衆についてのガリ

ラヤでの自分達の経験について話した。それから、かれは、言った。「だから、寺院で我々の話を聞き、我々の教えを信じているように見える大群衆に欺かれてはいけない。これらの群衆は、真実を耳にし、心で表面的にそれを信じるが、その群衆の中の僅かの者しか、真実の言葉を生ける根と共に心に根づかせることはできない。心だけで福音を知る者や、心でそれを経験していない者には、本格的な問題の発生に際して、支援を頼ることはできない。ユダヤの支配者達が、人の息子を滅ぼす合意に達するとき、そして、こぞって襲撃するとき、激怒し、目のくらんだこれらの支配者達が、福音の真理の教師達を死に至らせる間、君達は、群衆が狼狽して逃れるか、さもなければ傍観しているのを見届けるであろう。そして、次に、逆境と迫害が君を急襲するとき、まだ真実を愛していると君が思う他の者が離散し、また数人は、福音を捨て、君を見捨てるであろう。我々に非常に近かった一部のものは、すでに見捨てると決心している。君は、今、我々に迫るその時に備えて、今日休んだ。だから、翌日、すぐ先にある数日間のために強くなれるように祈りなさい。」

177:5.3 (1927.4) 宿営所の空気は、不可解な緊迫感に満たされていた。無言の使者達は、出入りしてダーヴィド・ゼベダイオスとだけ意志伝達をした。夜が過ぎる前に、ある者達は、ラーザロスがベサニアから大急ぎで逃れたことを知った。ヨハネ・マルコスは、宿営所に戻った後、1日中あるじのお供で過ごしたにもかかわらず、不気味に黙っていた。話すように説得する凡ゆる努力も、イエスが、ヨハネ・マルコスに話さないように言ったことを明確にするだけであった。

177:5.4 (1928.1) あるじの機嫌の良さと常にない愛想の良ささえ、皆を怯えさせた。彼らは全員が、不意のすさまじさと不可避の恐怖に落ちると気づく恐ろしい孤立が、確かに迫り来るのを感じた。皆は、何かの接近を漠然と感じ、しかも、その試練に直面する準備ができているとは、誰も感じなかった。あるじは一日中離留守であった。かれらは、あるじがいなくてこの上なく寂しかった。

177:5.5 (1928.2) この水曜日の夜は、あるじの死の実際の時間までの皆の精神状態の干潮時であった。翌日は、悲惨な金

曜日に更に1日近づいたが、それでも、あるじは、彼らと居た。そして、かれらは、その不安な時間をより見苦しくないように過ごした。

177:5.6 (1928.3) 休眠のため解散させるに当たり、これが、地球での選ばれた家族と共に眠る最後の夜であると知って、イエスがこう言ったのは、真夜中直前であった。「眠りにつきなさい、私の同胞よ。朝起きるまで君達が平穏であるように。もう１日、父の意志を為し、我々が神の息子であると知っている喜びを経験するために。」

論文 178
宿営所での最後の日

178:0.1 (1929.1) イエスは、使徒と数人の忠誠で熱心な弟子と共に、この木曜日、肉体に具現した神の息子としての地球での最後の自由な日を過ごすことにした。この美しい暁の朝食時間の直後、あるじは、宿営所の上の少し離れた奥まった場所に皆を引き連れ、そこで多くの新たな真実を教えた。イエスは、当日夕方もまだ早い時刻、使徒に他の訓話をしたが、木曜日の午前中のこの話は、使徒とユダヤ人と非ユダヤの両方から選ばれた弟子との合同宿営集団への告別の辞であった。ユダを除く12人の使徒の

全員がいた。ペトロスと使徒の数人が、ユダの不在について意見を述べ、また、彼らの一部は、イエスが、何かの用で、おそらくは過ぎ越しの祝いのための細事を調整するために街に行かせたのだと思った。ユダは、昼下がりまで、イエスが最後の晩餐を相伴するために12人をエルサレムへ引率する少し前まで、宿営所に戻らなかった。

1. 息子性と市民性に関する講話

178:1.1 (1929.2) イエスは、信頼されている50人ほどの追随者に2時間ほど話し、また、天の天国とこの世界の王国との関係について、神との息子性と地球の政府の市民性との関係における20件ほどの質問に答えるこの講話は、答えと質問とともに、現代の言語で次のように要約され、言い換えることができるかもしれない。

178:1.2 (1929.3) 物質的なこの世界の王国は、法の執行や秩序維持のために物理的な力を用いることが必要であるとしばしば認めるかもしれない。天国の王国においては、本物の信者は、腕力の使用に頼らない。精霊生まれの神の息子の精霊的な兄弟関係にある天の王国は、精霊の力によ

ってのみ広められる。この手順の違いは、信者の王国と世俗政府の王国の関係に言及しており、手に負えない、また相応しくない構成員の序列を維持したり、規律を励行するために、信者の社会集団の権利を無効にすることはない。

178:1.3 (1929.4) 精霊の王国における息子性と宗教に関係のない、あるいは民間政府における市民権との間で両立しないものは何もない。ケーサーのものはケーサーに、神のものは神に返すのが信者の義務である。ケーサーが、神の特権を強奪し、そして精霊的な敬意と最高の崇拝が自分に与えられることを要求することに発展しない限り、一方は物質的で、他方は精霊的であるこれらの２つの必要条件には、相容れない何かがあるはずがない。この場合、君は、そのような誤って導かれた地上の支配者達を教化し、そしてこのようにして、彼らを天の父の認識へと導く一方で、神のみを崇拝すべきである。地上の支配者に精霊的な崇拝を与えるべきではないし、かつ地球の政府の物理的な力をもまた用いるべきではない。地上の支配者は、精霊の王国の任務を促進する仕事でいつか信者になるかもしれない。

178:1.4 (1930.1) 兄弟愛と奉仕が王国の福音の礎石であるが故に、文明進歩の見地から、王国における子息性は、君達が、この世界の王国の理想的な市民になる手助けをすべきである。精霊の王国の愛の呼び掛けは、地球の王国の不信心の、戦争志向の市民の憎しみの衝動に対する効果的な破壊者であると証明すべきである。しかし、君達が、個々の信者の人生経験における精霊の実を結ぶ自然の結果であるその寡欲な社会奉仕で彼らを真近に引き寄せない限り、暗闇のこれらの物質志向の息子は、君の真実の精霊的な光を決して知らないであろう。

178:1.5 (1930.2) 必滅であり物質的な人間として、君達は、実に地球の王国の住民であり、天の王国の生まれ変わった精霊の息子になったことでなおさら、良い住民であるはずである。天の王国の信仰に啓発され、精霊を解放された息子として、君達は、第３の、そして神聖な義務、つまり神を知る信者の兄弟関係への奉仕を自ら進んで引き受ける一方で、人間への義務と神への義務の二重の責任に直面している。

178:1.6 (1930.3) 君達は、世俗の支配者を崇拝しなくてもよいし、精霊的な王国の推進においてこの世の力を使うべきではない。だが、君達は信者にもそうでない者にも一様に愛の奉仕の公正な活動を示さなければならない。強力な真実の精霊は、王国の福音に住まい、そしてやがて私は、この同じ精霊をすべての肉体に溢れさせるつもりである。精霊の果実は、つまり君達の誠実で愛情のこもった奉仕は、暗闇の民族を向上させる強力な社会的梃であり、この真実の聖霊は、君達の力を増大する梃台となるであろう。

178:1.7 (1930.4) 不信心な民間支配者との関係において知恵を誇示し、賢明さを示しなさい。小さなくい違いの解決や、些細な誤解の調整には、思慮深さをもって専門家であることを自身が示しなさい。あらゆる可能な方法で—宇宙の支配者に対する君達の精霊的な忠誠を除く何ごとにも—穏やかにすべての人と生きるようにしなさい。常に蛇のように賢明であり、鳩のように無害でありなさい。

178:1.8 (1930.5) 君達は、王国の啓発された息子となる結果、非宗教の政府の一層良い市民となるべきである。同様に、

地上の政府の支配者も、天の王国のこの福音を信じる結果として、国内問題においてますます良い支配者とならなければならない。人の寡欲な奉仕態度と神への知的な崇拝は、王国の全信者をより良い世界市民にするはずであり、一方、誠実な市民性の考えと人の現世の義務への誠実な献身は、天の王国の息子性への精霊の呼び掛けにより、そのような市民が、より簡単に手が延ばされるように扶助するはずである。

178:1.9 (1930.6) 地上の政府の支配者が宗教独裁者の権限を行使しようとする限り、この福音を信じる君達を待ち受けるものは、難局、迫害、死だけである。しかし、君達が世界に運ぶまさにその光、そして、君達が王国のこの福音のために死ぬまさしくその態度ですら、結局は、それら自体が、全世界を啓発し、政治と宗教に段階的な分離をもたらすであろう。王国のこの福音の不断の説教は、いつか万国に新たで、信じ難い解放、知的な自由、そして信仰の自由をもたらすであろう。

178:1.10 (1931.1) 喜びと自由のこの福音を嫌う人々によるやがて来る迫害の下、君達は繁栄し、王国は成功するであろ

う。しかし、ほとんどの人が、王国の信者を褒め、そして高位につく多くの者が、天の王国の福音を名目上受け入れるその後の時代において、君達は、重大な危険を負うであろう。平和と繁栄の時代にさえ王国に忠実であることを学びなさい。安易に漂流している魂を救うように考案された愛ある躾としてやっかいな道へ君達を導くように君達の監督の天使達を唆してはいけない。

178:1.11 (1931.2) 王国のこの福音—神との息子性の信仰による認識の最高の喜びに係合する父の意志を為すという最高の願望—を説くために任命されたということを覚えていなさい、そして、君達は、この唯一の義務への献身をそらす何も許してはならない。全人類が、君達の情愛深い精霊活動、啓蒙的な知的な親交、そして高揚的な社会奉仕の満溢から恩恵を受けられるようにしなさい。しかし、これらの人道主義の労務のうちの何も、あるいは、それらの全ても、福音公布に取って代わるべきではない。これらの強力な援助は、生ける真実の聖霊により、そして永遠の神との生ける親交の保証を与えるという個人的な認識により、王国の信者の心にもたらされるより強力で崇高な援助と変化の社会的副産物である。

178:1.12 (1931.3) 真実を普及させたり、民間政府、あるいは世俗の掟の法令化によって正義を確立しようとしてはいけない。人の心を説得するために常に働くのはよいが、決して強制しようとしてはいけない。私が、肯定的な形で教えた人間の公正さのすばらしい法則を忘れてはいけない。君達が人にしてもらいたいと思う何であろうとも人にも同様にしてあげなさい。

178:1.13 (1931.4) 王国の信者が、民間政府への奉仕を求められるとき、そのような信者が、公務において市民性の普通の特性を示すべきであるとはいえ、永遠の神の内在する精霊との必滅の人間の心との高められる結合の精神的啓発によって強化されてきたように、そのような政府の世間的な国民としてそのような奉公につかせなさい。不信人者が、上級の公務員の資格を得ることができるならば、君達は、自身の心の真実の根源が、精霊的な親交と社会奉仕が結合された生ける水の不足で死ななかったかどうかを真剣に問い質すべきである。神との息子性にあるという意識は、人間の人格のすべての固有の力へのそのような強い刺激の持ち主になったあらゆる男女子供の生涯全体の奉仕を速めなければならない。

178:1.14 (1931.5) 君達は、受け身の神秘主義者や、面白味のない禁欲主義者であってはならない。生活必需品までも提供する架空の天祐を怠惰に信じ、夢想家や浮浪者になるべきではない。本当に、君達は、堕落した死すべき者との取り引きにおいては優しく、無知な者との交わりにおいては我慢強く、挑発の下では辛抱強くなるのである。しかし、君達はまた、正義の防衛においても勇敢で、真実の普及においても強く、王国のこの福音の説教においても、地球の果てにおいてでさえ、積極的になるのである。

178:1.15 (1931.6) 王国のこの福音は、生ける真実である。私は、それがパン生地のパン種に、芥子菜の種子に似ていると君達に言ってきた。そして、今、私は、それが生けるものの種子のようであると言明し、そしてそれは、同じ生ける種子のままで留まり、世代から世代へと、絶えずそれ自体が新の発現を展開し、それぞれの連続する世代の独特の必要性と状況への新しい適合の回路で受け入れられるように成長する。私が行なってきた顕示は、生ける顕示であり、そして、それが、精霊的な成長、向上、そして適応できる開発の法則に従い各個人と各世代

に適切な実を結ぶことを望んでいる。世代から世代へとこの福音は、増加する生命力を示し、精霊の力のより優れた深さを示さなければならない。それが、単に神聖な記憶、つまり私について、また我々が、現在生きている時代についての単なる伝統になることを許容されるようではいけない。

178:1.16 (1932.1) 忘れてはいけない。我々は、モーシェの席を占める人々や権威に直接的な攻撃をしてこなかった。我々は、新たな光を申し出たに過ぎず、彼らは誠に勢いよくそれを拒絶した。我々は、彼らが教え、保護していると称するまさしくその真実への彼等の精霊的な背信に対する公然の非難だけで彼等を攻撃してきた。我々は、彼等が、人の息子等への王国の福音の説教を直接に妨害したときに限り、確立し、認められたこれらの指導者と衝突した。そして、今でも、彼らを襲うのは我々ではなく、我々の破滅を求める者達である。この朗報のみを説きに先へ進むために君達が任命されたということを忘れてはならない。君達は、古い道を攻撃しようとしているのではない。君達は、古い信仰の真ん中に新しい真実のパン種を巧みに入れようとしているのである。真実の聖

霊に自身の仕事をさせなさい。真実を軽蔑する彼らが、君達にそれを押しつけるときにだけ論争を迎え入れなさい。だが、意図的な不信心者が攻撃するとき、君を救い浄めた真実の力強い防衛で立ち上がることを躊躇ってはいけない。

178:1.17 (1932.2) 人生の変遷を通して常に互いを愛することを心しなさい。人と、たとえ不信心者とでも争うではない。悪意を抱いて君達を虐待する者達にでさえ慈悲を示しなさい。自身が、忠誠な市民、清廉な職人、賞賛に値する隣人、献身的な血族、理解ある両親、父の王国の兄弟の間柄にあって誠実な信者であることを示しなさい。私の霊は、君達の上に、今、そして世の終わりまでもともにある。

178:1.18 (1932.3) イエスが教えを締め括った時は、ほぼ1時であり、かれらは、即刻ダーヴィドとその仲間が昼食を準備してあった宿営所へと戻った。

2. 昼食後

178:2.1 (1932.4) あるじの聞き手の多くの者は、午前の演説の一部すら理解することができなかった。あるじの話を聞い

た全てのうち、ギリシア人は、ほとんどを理解した。11人の使徒でさえ、未来の政治上の王国、また王国信者の後の世代への暗示にうろたえた。イエスの最も熱心な追随者の一部は、イエスの迫りくる地球任務の終わりを福音活動の長期にわたる将来へのこれらの言及に一致させることができなかった。これらのユダヤ人信者の数人は、地球の最大悲劇が起ころうとしていると感じ始めてはいたが、そのような差し迫った災害をあるじの快活で無関心な個人的な態度とも、夥しい連続する期間にわたって、また地球の多くの、連続する一時的な王国との関係を受け入れる天の王国の今後の活動について彼が繰り返し暗示した午前の講話とも一致させることができなかった

178:2.2 (1932.5) この日の正午までに、全ての使徒と弟子は、ベサニアからのラーザロスの慌ただしい逃走を知った。かれらは、イエスとその教えを撲滅するというユダヤ支配者達の恐ろしい決定を感じ始めた。

178:2.3 (1932.6) ダーヴィド・ゼベダイオスは、エルサレムでの自己の諜報部員達の活動を通して、イエスの逮捕と殺害

計画の進展に関して充分な勧告を受けた。かれは、この陰謀でユダの関わりについて全てを知っていたが、他の使徒にも弟子の誰にもこの知識を決して明らかにはしなかった。昼食直後、かれは、イエスを傍らに導き、大胆に、彼の周知の有無を尋ねた—が、ついぞ質問は終えられなかった。あるじは、手を上げて、ダーヴィドを制し、「そうだよ、ダーヴィド、私には全てが分かっているし、君が知っているということも承知しているが、決して誰にも言わないように注意しなさい。ただ、最後には神の意志が勝つということを疑わないように。」と言った。

178:2.4 (1933.1) ダーヴィドとのこの会話は、アブネーが、イエスを殺す陰謀について聞いたという知らせと、アブネーが、エルサレムに出発すべきかどうかを問い合わせるフィラデルフィアからの使者の到着によって中断された。走者は、アブネーへのこの知らせを携えフィラデルフィアへと急いだ。「仕事を続けなさい。肉体の私が君から離れていっても、それは、単に、私が精霊で戻ることができるということである。君を見捨てるつもりはない。最後まで君と共にいる。」

178:2.5 (1933.2) この頃、フィリッポスは、あるじのところに来て尋ねた。「あるじさま、過ぎ越しが近づいてきていますが、どこで私達に食べる準備をさせたいのですか。」イエスは、フィリッポスの質問を聞くと、「ペトロスとヨハネを連れてきなさい、それで、私が、今夜ともに取る夕食の指示を与えよう。過ぎ越しに関しては、まずこの夕食後に考えなければならない。」と答えた。

178:2.6 (1933.3) ユダは、あるじが、これらの件でフィリッポスと話しているのを小耳にはさむと、二人の会話を立ち聞きできるようにより近くに寄った。しかし、近くに立っていたダーヴィド・ゼベダイオスが、ユダを会話に引き入れる一方で、フィリッポス、ペトロス、ヨハネは、あるじと話しをするために片側に行った。

178:2.7 (1933.4) イエスは３人に言った。「すぐエルサレムに行きなさい。そこで門を入るとき水差しを持つ男性に出会うであろう。その人は、話し掛けてくるので彼についていきなさい。その人が、ある家に君を案内するときはついて行き、『あるじが使徒等と夕食を取るはずの客室はどこですか。』とその家の親切な人に尋ねなさい。そし

て、このように問い合わせたとき、この家長は、家具が調度され我々のために準備のできている大きい上階の部屋を見せるであろう。」

178:2.8 (1933.5) 使徒等が都に着くと、門近くで水差しを持つ者に出会い、その人の後に追いてヨハネ・マルコスの家に行き、そこでこの若者の父と会い、夕食の用意がされた上階の部屋を示された。

178:2.9 (1933.6) この全ては、あるじとヨハネ・マルコスが、二人きりで丘にいた前日の午後に了解し合った結果起きた。イエスは、妨害されることなく使徒とのこの最後の食事を取ることを確実にしたかったし、皆の集合場所をユダが予め知れば敵と自分の逮捕を手配するかもしれないと思い、ヨハネ・マルコスとのこの秘密の打ち合わせをした。このようにして、ユダは、イエスと他の使徒とともにそこに到着するまで会合場所を知らなかった。

178:2.10 (1933.7) ダーヴィド・ゼベダイオスには、ユダとのすべき事務処理が多くあり、かれは、ユダがつよく望んでいた、ペトロス、ヨハネ、フィリッポスの後をつけることを容易に妨げることができた。ユダが、食糧のために

一定額をダーヴィドに与えようとしたとき、ダーヴィドは、「ユダ、現在の状況下では、実際に要する以上の金を少し私に提供する方が良くはないだろうか。」と言った。ユダは、暫く考えて、「そうだね、ダーヴィド、それが賢明だと思う。事際、エルサレムの不安な状況から見て、すべての金を手渡すのが最善だと思う。彼らは、あるじに対して陰謀を企て、私に何か起きたとしても、君は阻止されないであろう。」と答えた。

178:2.11 (1934.1) したがって、ダーヴィドは、使徒の総貯蓄の全額と領収書を受け取った。使徒達は、翌日の夕方までこの引継ぎを知らなかった。

178:2.12 (1934.2) 3人の使徒が戻り、夕食が全て整ったことをイエスに知らせたときは、4時半頃であった。あるじは、すぐに12人の使徒をベサニアとエルサレムへの小道へと率いる準備をした。そして、これは、イエスの12人全員との最後の旅であった。

3. 晩餐への道すがら

178:3.1 (1934.3) 再び、キドローンの谷を通り抜け、ゲッセマネ公園とエルサレムを往復する群衆を避けるために、イエ

スと12人は、ベサニアから都へと通じる道に出るためにオリーヴ山の西の頂上を歩いた。イエスがエルサレムの崩壊を論じるために前の晩留まった場所に近づくと、かれらは、無意識のうちに止まり、黙って都を見下ろしていた。少し早めでもあり、日没後まで都を通り抜けることを望んでいなかったので、イエスは、仲間に言った。

178:3.2 (1934.4) 「私が、まもなく起こるはずのことに関して話す間、座って休みなさい。同胞として君達とこれらのすべての年月を共に送ってきて、しかも天の王国に関する真実を教え、またその神秘を明らかにしてきた。そして、私の父は、地球での私の任務に関し、実に多くの見事な業を施されてきた。君達は、すべてのこの目撃者であり、神と共にいる労働者である経験の参加者である。そして君達は、私が父から与えられた仕事にやがて戻らなければならない、としばらく警告してきたことを私に証すであろう。私は、王国の仕事を続けるために君達をこの世界に残していかなければならないとはっきりと言ってきた。私がカペルナムの丘に君達を置いて行くのはこの目的のためであった。私との経験を、君達は、いま他の者と共有する準備をしなければならない。父が私を

この世に送られたように、私は、私の代理として、また私が始めた仕事を終えさせるために君達を送り出すところである。

178:3.3 (1934.5) 「エルサレムの最後についての私の言葉を聞いたので、君達は、あそこの都を悲しみで見下ろしている。私は、エルサレムの崩壊で君達が死に、そのために王国の福音の公布が遅れることのないように前もって警告してきた。同様に、彼らが人の息子を捕らえにくるとき、不必要に自分を危険に晒すことのないように注意を払うように警告する。私は、行かねばならないが、ラーザロスが、神の栄光を明らかにするまで生きることができるように人の怒りから逃げるように私が指示したように、君達は、私が行ったあとこの福音を示すために残ることになっている。私が去り行くことが父の意志であるならば、君達は、神の計画を挫折する何もできはしないかもしれない。彼らが、君達をも殺すといけないので注意しなさい。福音をまもるために精霊の力によって君達の魂を勇ましくさせるが、人の息子を防御することにおいては、いかなる愚かな試みにも陥ってはならない。私は、人の手による防御を必要としない。天の軍隊は、今

でも間近にいる。しかし、私は、天の父の意志を為すと決心しており、したがって、我々は、じきに我々に起ころうとしていることに身を任せなければならない。

178:3.4 (1934.6) この都が破壊されるのを見るとき、君達が、絶えず前進する天の王国におけいて、天の天においてでさえ、無限の奉仕の永遠なる生涯にすでに入っていることを忘れてはいけない。君達は、父の宇宙と私の宇宙には多くのものが住んでいるということ、そして、神が建築者である街と、生活習慣が正義と喜びである世界が光の子等を待っているということを知らなければならない。私は、ここ地球の君達へ天の王国を持って来たが、信仰によりそこに入り、真実の生ける奉仕によりそこに留まる全ての者は、確実に高い世界に上昇し、我々の父の精霊の王国で私と共に座るのだということを宣言する。だが、君達は、まず体を引き締めて私と共に始めた仕事を終了しなければならない。君達は、まず多くの苦難を潜り抜け、多くの悲しみに耐えなければならず—そして、これらの試練が今でも我々の上にあり—そして、地球での仕事を終えたとき、君達は、私が地球での父の仕事を

終え、その抱擁に戻ろうとしているのと同様に、私の喜びに到達するであろう。」

178:3.5 (1935.1) あるじは話し終えると立ち上がり、彼らは、オリーヴ山を下り、都へとあるじの後に続いた。迫る暗闇の隘路に沿って進んでいる間、使徒のうち３人を除く誰も自分達の行くべき方向を知らなかった。群衆は、彼らを押していたが、その中の誰も彼らに気づかず、また神の息子が、王国の選ばれた大使とともに人間の最後の集結地点へ向かっていることを知らなかった。そしてまた、使徒達は、仲間の１人が敵の手にあるじを売る共謀にすでに身を投じたことを知らなかった。

178:3.6 (1935.2) ヨハネ・マルコスは、皆の後をつけて都に入り、彼らが門を入ったあと、彼らの到着の際、父の家に迎え入れるために別の通りへと急いだ。

論文 179
最後の晩餐

179:0.1 (1936.1) この木曜日の午後、フィリッポスが、あるじに過ぎ越しが迫っていることの念押しをし、その祝賀のためのあるじの計画に関し尋ねた。フィリッポスは、翌晩

の金曜日にとる過ぎ越しの晩餐を念頭においていた。過ぎ越し祝いの準備の開始は、前日の正午より遅くならないのが習慣であった。ユダヤ人は、日没をその日の始まりと見なしたので、これは、土曜日の過ぎ越しの晩餐は、金曜日の夜に、真夜中以前のいつかに食べられることを意味した。

179:0.2 (1936.2) 使徒達は、したがって、１日早く過ぎ越しを祝いたいというあるじの発表の理解に全く困り果てた。かれらは、少なくともそのうちの何人かは、あるじが、金曜日の夜の過ぎ越しの晩餐前に逮捕されると知っており、そのために、この木曜日の夕方に特別な晩餐のために皆を集めているのだと考えていた。他の者は、これは、単に通常の過ぎ越しの祝いに先行する特別な機会であると思った。

179:0.3 (1936.3) 使徒は、イエスが、子羊なしで過ぎ越しを祝ってきたことを知っていた。かれらは、あるじが、個人的にユダヤ式のいかなる生贄の儀式にも参加しないことを知っていた。客として何回も過越し祝いの子羊を相伴はしてきたが、常に、自分が主人役であるときは、子羊は

用意されなかった。かれらは、過ぎ越しの夜であろうとも、子羊が省かれることを使徒が見ても、それほどの驚きではなかったし、またこの晩餐が、1日早く与えられることから、子羊の欠如を何とも思わなかった。

179:0.4 (1936.4) ヨハネ・マルコスの父母の歓迎の挨拶を受けた後、イエスが、マルコスの家族と話すために後に残る間、使徒はすぐ上の部屋に行った。

179:0.5 (1936.5) あるじが、この機会を12人の使徒とだけで祝いをすると予め了承されていた。そのため使用人は、一人もかしずいてはいなかった。

1. 好みに対する願望

179:1.1 (1936.6) 使徒は、ヨハネ・マルコスに上階を案内されると、そこには夕食のために完全に準備されている大きくゆとりのある部屋にパン、ワイン、水、野菜が食卓の片端に全て準備されているのを目にした。パンとワインがのった端を除き、この長い食卓は、13脚の背もたれ付きの長椅子で囲まれており、ちょうど裕福なユダヤ人家庭の過ぎ越しの祝賀に備えたようなものであった。

179:1.2 (1936.7) この上階の部屋に入ると、12人は、戸のすぐ内側に埃まみれの足を洗うための水の入った複数の水差し、盥、布巾に気づいた。そして、この役をするための使用人は一人として置かれてはいなかったので、ヨハネ・マルコスが、皆を後にしていなくなると、使徒達は、互いを見て、それぞれに誰が我々の足を洗うのであろうかと心の中で考え始めた。そして、誰もが他の者の下僕のように振る舞うのは自分ではないと同様に思った。

179:1.3 (1937.1) かれらは、そこに立ち、心中で考えを巡らせ、食卓の座席の配列を見渡し、主人役のより高い長椅子と主人役の右のこの２番目の名誉の席の反対側の食卓を囲むように配置された11席に注目した。

179:1.4 (1937.2) あるじが今にも到着することを予想したが、かれらは、着席すべきか、または、あるじが来るのを待ち受け、彼のそれぞれの場所の割り当てに頼るべきかどうかで困惑した。彼らが躊躇っている一方で、ユダは、主人役の左側の上座へと近づき、好ましい客としてそこで凭れかかるつもりであることを示した。ユダのこの行為

は、すぐに、他の使徒の間で激しい論争を巻き起こした。ユダが上座を押さえるや否や、ヨハネ・ゼベダイオスがその次に好ましい席、主人役の右の席を主張した。シーモン・ペトロスは、ユダとヨハネの選択場所のこの横取りに激怒し、他の怒った使徒が見ていると、ヨハネ・ゼベダイオスが選んだ席の真逆の末席へと回りこんで自分の場所とした。他の者が上席を押さえたので、ペトロスは、最も低い席を選ぶことを考えた。ペトロスは、単に同胞の不作法な自惚れに対する抗議というよりは、イエスがやって来て末席にいる自分を見たとき、上座の方へ呼ぶび寄せ、自己に栄誉があると考える者とこのようにして置き換えるであろうという望みをもってこうしたのであった。

179:1.5 (1937.3) 最上席と最末席がこのように占拠され、残る使徒のうちある者はユダの近くに、ある者はペトロスの近くへと席を埋めていった。かれらは、寝椅子に凭れ掛かり、U字形の食台の周りに次の順で座を占めた。あるじの右にヨハネ、あるじの左にユダ、シーモン・ゼローテース、マタイオス、ジェームス・ゼベダイオス、アンド

レアス、双子のアルフェウス、フィリッポス、ナサナエル、トーマス、シーモン・ペトロス。

179:1.6 (1937.4) かれらは、少なくとも心では、モーシェよりも遡る祖先が、エジプトの奴隷であったときのしきたりを祝うために集った。この晩餐は、イエスとの最後の会合であり、しかも、そのような厳粛な設定の場においてさえ、使徒達は、ユダの主導のもとに今一度、名誉、優遇、個人の高揚に対する自分達の古い好みに屈する道へと導かれているのである。

179:1.7 (1937.5) あるじが戸口に現れたとき、かれらは、まだ立腹し、声に出し非難をし合っていた。あるじは、緩やかに忍び寄る自分の失望の顔色に少し躊躇った。かれは、意見をせず自分の場所に行き、皆の着席順を妨げなかった。

179:1.8 (1937.6) かれらは、そのとき晩餐への備えはできていたが、足はまだ洗われてはおらず、心は、不愉快感でいっぱいであった。皆は、あるじが到着したとき、それぞれの感情を公然と口に出すことを慎む感情抑制を持つ者の

考えについては言うまでもなく、まだ互いに無礼な言葉を言い合っている最中であった。

2. 晩餐の始まり

179:2.1 (1937.7) あるじが自分の場所に着いてしばらくの間は、誰も一言も発しなかった。イエスは、皆を見回し、微笑んで緊張を和らげて言った。「私は、皆とこの過ぎ越しの食事をしたいと切に望んでいた。受難の前にもう一度皆と食事がしたかったし、私の時間が来たと分かり、今夜ともにこの晩餐をとる手配をした、というのも、我々は皆、明日に関しては、私がその意志を実行するために来た父の手に託されているのであるから。それを為すためにこの世に遣わされたことを私が果たしたとき、父から与えられる王国で共に座るまで、私は、もう君達と共に再び食べないであろう。」

179:2.2 (1938.1) ワインと水が混ぜられて後、かれらは、イエスに杯を持って来て、イエスは、サッダイオスの手からそれを受け取り感謝をする間、それを握っていた。そして、かれは、感謝をし終えたときに言った。「この杯を取り、皆でそれを分け合い、それを相伴するとき、これ

が我々の最後の夕食であるから、私は、再び君達と葡萄の木の実を飲むことはないということを悟りなさい。我々が再びこの様に座るときは、来たる王国においてであろう。」

179:2.3 (1938.2) イエスは、自分の時間が来たことを知っていたので、使徒にこのように話し始めた。父の元へ戻る時が来たこと、そして地球での仕事がほぼ終えたと思った。あるじは、地球で父の愛を明らかにし、その慈悲を人類に示し、そして、地上にやってきた目的を果たしたということを、天と地でのすべての力と権威の受領をさえ知っていた。同様に、かれは、ユダ・イスカリオテが、その夜敵の手に自分を売ることを完全に決心したことを知っていた。かれは、この反逆的裏切りが、ユダの仕業であるということ、だが、それはまた、ルーキフェレーンス、魔王、および暗黒の王子カリガスティアを喜ばせるということを完全に理解していた。しかし、かれは、物理的な死を達成しようとした者達も精霊的な打倒を求めた者達も恐れはしなかった。あるじには、1つの気掛かりしかなく、それは、選ばれた追随者達の安全と救済に対するものであった。そこで、父が万事をイエスの権限

の下に置いたという完全な知識で、そのとき、兄弟愛の寓話を実行する支度をした。

3. 使徒の足の洗浄

179:3.1 (1938.3) 過ぎ越しの最初の杯を口にした後、主人役が食卓から立ち上がり自分の手を洗うのが、ユダヤ人の習慣であった。後には、食事中の２度目の杯の後、客の全員が、同様に立ち上がり、それぞれの手を洗った。あるじが儀式ばった手洗いのこれらの儀式を決して遵守しないのを知っていたので、使徒は全員、この最初の杯を相伴した後、イエスが食卓から立ち上がり静かに水差し、盥、布巾の置かれている戸の近くへと進んで行ったとき何をするつもりなのか興味しんしんであった。そして、あるじが上衣を脱ぎ布巾で自分を巻き、足盥の１つに水を注ぎ始めるのを見たとき、皆の好奇心は、驚きに変わった。彼が、シーモン・ペトロスが凭れている食卓の端の空いている祝宴の末席まで進んでいき、使用人の態度で跪きシーモンの足を洗う用意をするあるじを見たときの12人の、つい先ほど互いの足を洗うことを拒否し、食卓での名誉ある場所に関し非常に見苦しい言い合いをしていたこれらの男性の驚きを想像しなさい。あるじが跪

くと、12人全員がまるで１人の人間であるかのように立ち上がった。裏切り者のユダでさえ、仲間の使徒と共にこの驚愕、敬意、驚嘆の表現で立ち上がるほどに暫し自分の汚名を忘れた。

179:3.2 (1938.4) シーモン・ペトロスは、そこに立ち、あるじの上向けた顔を見下ろしていた。イエスは何も言わなかった。話す必要はなかった。イエスの態度は、単にシーモン・ペトロスの足を洗うことを意としているということを明らかにした。人間としての脆さにもかかわらず、ペトロスは、あるじが非常に好きであった。このガリラヤの漁師は、心からイエスの神性を信じ、その信仰を豊かに、また公にした最初の人間であった。そのうえ、ペトロスは、あるじの神性をその後一度も疑ったことがなかった。したがって、心の中で非常にイエスを畏敬し尊敬していたので、ペトロスの魂が、奴隷がするかのように召使の態度でイエスがそこで自分の前に跪き、足を洗おうと申し出るという考えに憤慨したことは、奇妙ではなかった。ペトロスは、やがて、あるじを記述するために自身の機知を十分に集めたとき、使徒仲間全員の心情を語った。

179:3.3 (1939.1) この甚だしい困惑の数秒後に、ペトロスは、「あるじさま、あなたは、本当に私の足を洗うつもりですか。」と言った。そこで、ペトロスの顔を見上げて、イエスが言った。「私がしようとしていることを完全に理解できないかもしれないが、この後、これらの全ての意味を知るようになるであろう。」その時、シーモン・ペトロスは、長く息を吸い、「あるじさま、私の足を決して洗わないでください。」と言った。すると、使徒の各々は、イエスの彼らに対するこのようなみすぼらしい態度を許せないというペトロスの断固たる表明に頷いて同意した。

179:3.4 (1939.2) この徒ならぬ劇的な訴えは、最初ユダ・イスカリオテの心にさえ触れた。しかし、その虚栄心の強い知性が、その光景を判断するに当たり、謙遜のこの身振りは、イエスが決してイスラエルの救出者として相応しくないということ、また自分があるじの目的を見捨てるという決定において誤りを犯さなかったということを最終的に立証するもう一つの挿話にすぎないと結論づけた。

179:3.5 (1939.3) 全員が、そこで息を殺して立っていると、イエスは言った。「ペトロス、断言しておく。私が君の足を洗わなければ、私が実行しようとしていることで、君は私との何の関係もないのであると。」この宣言を聞いたとき、ペトロスは、イエスが自分の足元に跪き続けたという事実と結びつけ、自分が尊敬し、愛した人の願望に応えて、盲目的な黙認のそれらの決定の一つをした。シーモン・ペトロスは、あるじの仕事との人の今後の関係を決定する何らかの重要性が、この申し出られた奉仕行為に結びつけられているということが分かり始め、イエスに足を洗ってもらうという考えに落ち着いたばかりでなく、彼独特の、そして激しい物腰で、「あるじさま、私の足だけでなく、私の手と頭も洗ってください。」と言った。

179:3.6 (1939.4) ペトロスの足を洗い始めようと仕度をしながら、あるじは言った。「すでに清い者は、足を洗わせるだけでよい。今宵私と座る君達は、清い—しかし、全員ではない。だが、食事のために私と座る前に君達の足の埃は洗われるべきである。そのうえ、ほどなく提示する

新しい命令の意味を例証するための寓話としてこの奉仕をしたいのである。」

179:3.7 (1939.5) 同様に、あるじは、ユダさえ素通りせず、12人の使徒の足を洗って食卓の周りを黙って回った。12人の足を洗い終えると上衣を着て、主人としての自分の場所に戻り、うろたえている使徒をざっと見渡してからイエスが言った。

179:3.8 (1939.6) 「私が君にしたことが本当に分かっているのか。私をあるじと呼び、またそれは言い得ている、私はそうなのであるから。そこで、そのあるじが君達の足を洗ったのに、君達は、互いの足を洗いたがらなかったのは、なぜなのか。同胞が互いにすることが不本意である働きというものをあるじが大いに喜んでするこの寓話から、君達は何を学ぶべきか。誠に、誠に、言っておく。下僕は主人に勝るものではない。遣わされた者が、遣わせた者に勝るものでもない。君達との人生での私の奉仕振りを君達はずっと見てきた。そのように仕える優しい勇気を持つ君達は、幸いである。しかし、何故に君達は、精霊の王国の素晴らしさの秘密が、物質界での力の

行使とは違うということを学ぶのにそれほど手間取るのか。

179:3.9 (1940.1) 「今宵この部屋に私が入ったとき、君達は、互いの足を洗うことを堂々と拒否することに満足しないばかりか、食卓で誰が名誉の場所を陣どるべきかに関して言い争う羽目になった。そのような栄誉は、パリサイ派やこの世界の子供が求めるが、天の王国の大使の間ではそうであってないけない。私の食卓には優先の場所などあるはずがないということを知らないのか。私は、他のものを愛するように、君達一人一人を愛しているとは思わないのか。私に最も近い場所は、人がそのような名誉を見なすようには、天の王国では、君達の位置に関して何も意味することができないことを知らないのか。君達は、非ユダヤ人の王等が、臣下の上に支配権を持ち、同時にこの権威を行使する者は、時折恩人と呼ばれるということを知っている。しかし、天の王国ではそうではない。君達の間で立派な者になりたいと思う者に年下とさせ、長になろうとする者を仕える者とさせなさい。食事の席につく者、あるいは、給仕する者、だれがより立派であるのか。食事の席につく者が、　より偉大であると

一般的に見なされてはいないか。しかし、君達は、私が仕える者として君達の間にいるのを観るであろう。「私と共に父の意志を為す下僕の仲間になること望ぶならば、君達は、未来の栄光の中で父の意志に従事して、来る王国で私と共に力の座につくであろう。」

179:3.10 (1940.2) イエスが、話し終えたとき、アルフェウスの双子は、最後の晩餐の次のコースのために、パンとワイン、それにほのかに苦い野菜と乾燥果実の練り物を持ってきた。

4. 裏切り者への最後の言葉

179:4.1 (1940.3) 数分間、使徒達は、黙って食べていたが、あるじの愉快な態度の影響を受け、すぐに会話に引き込まれていき、やがて、特別なこの機会のかなりの陽気さと社交の調和を妨げる異常なことはまるで起こらなかったかのように、食事は進んでいた。若干の時間が過ぎ、イエスは、2品目のこの食事の中頃で皆に目をやって言った。「私は、君達と一緒にこの晩餐をとるのをどれほど望んでいたかを告げ、その上、暗闇の悪の力が、どのように人の息子に死をもたらす共謀をしたかを知っている

ので、明日の夜までには、私は君達とは共にいなくなるので、この秘密の部屋で、過ぎ越しの1日前に共にこの晩餐をとると決心をしていた。私は、父の元に戻らなければならないと君達に繰り返し告げてきた。今、私の時間は来た、しかし、君達の1人が、私を敵の手へに渡す裏切りは、必要ではなかった。」

179:4.2 (1940.4) 足を洗う寓話とその次のあるじの訓話により自分達の無遠慮と自信の多くがすでに奪われていたので、12人は、これを聞くと、互いに見始め、落ち着きを失った語調で「それは私ですか。」と躊躇いがちに尋ねた。そして、全員がそのように尋ねたときに、イエスは言った。「私は父のところへ行かなければならないが、その父の意志を満たすために君達の1人が反逆者になる必要はなかった。これは、全魂で真実を愛し損ねた者の心に隠された悪の結実の接近である。精霊的な失墜に先行する知的自負心は、なんと不正直であることよ。今でさえ私のパンを食べている多年にわたる我が友は、進んで私を裏切ろうとしている。いま私と共に手で料理を掬い取りながら。」

179:4.3 (1940.5) そして、イエスがこう話すと、「それは私ですか。」と、かれらは、再度尋ねた。あるじの左に座っていたユダが、「それは私ですか。」と再び尋ねると、パンを野菜の皿に浸しつつ、「君が言った。」と言ってイエスはユダに渡した。しかし、他の者は、イエスがユダに言うのを聞かなかった。イエスの右側に凭れるヨハネは、屈んであるじに尋ねた。「それは誰ですか。私達は、信用に忠実でないと判明したものが誰かを知るべきです。」しかし、主人役の左隣に座る者にパン切れを与えるのがとても自然であったので、あるじは、極く明瞭に言ったにもかかわらず、誰もこれに気づかないほどであった。イエスは、「私はすでに言った、その者にさえスープを与えた。」と答えた。しかし、ユダは、自己の行為に関連づけたあるじの言葉の意味を痛々しいほどに意識しており、裏切り者であるということを今にも同胞に同様に気づかれはしないかと恐ろしくなった。

179:4.4 (1941.1) ペトロスは、言われたことに非常に興奮し、卓上に身を乗り出し、「それが誰であるかをあるじに尋ねるか、またはあるじが君に告げたのならば、裏切り者が誰か教えてください。」とヨハネに話しかけた。

179:4.5 (1941.2) イエスは、話して私語を止めさせた。「この悪が起こってしまったことを嘆くし、真実の力が、悪の欺瞞を打ち負かすことを望んでいたが、そのような勝利は、心からの真実の愛の信仰なしには得られないのである。私は、ここで、我々の最後の晩餐でこれらの事を言いたくはなかったのだが、これらの悲しみを警告すると同時に、いま我々を襲うことに備えるように求める。私が去った後、私が、これら全ての邪悪な企みを知っていたということ、私への裏切りについて君達に警告したということを君達が思い出すことを望むので、これを伝えたのである。私は、すぐ先に迫る誘惑と試練に対して君達が強くなれるようにこの全てをしているに過ぎない。」

179:4.6 (1941.3) イエスは、こう話すとユダの方に身を乗り出して、「しようと決めた事をすぐしなさい。」と言った。ユダは、この言葉を聞くと食卓から立ち上がり、急いで部屋を出て、達成しようと決心したことを為しに夜の闇へと出かけて行った。他の使徒は、ユダがイエスに話しかけられると急いで出ていくのを見て、彼がまだ袋を携行していたので、夕食のための何か追加する物を調達

に、さもなければ、あるじのためための用足しに行ったと思った。

179:4.7 (1941.4) イエスは、そのとき、ユダが反逆者になるのを妨ぐ何もできないことを知っていた。イエスは、12人と共に始めて—今では11人となった。イエスは、これらの６人の使徒を選び、ユダは最初に選んだ使徒の中におり、他のものの平和と救済のために働いてきたのと同様に、ユダを清め救うために可能な限りのことをまさにその時間までしてきた。

179:4.8 (1941.5) この晩餐は、その心暖まる挿話と宥めるやり口で、逸脱しようするユダほイエスの最後の訴えであったが、それは、無駄であった。警告は、概して最も手際よい方法で行われ、最も思いやりのある精神で伝えられるときでも、いったん愛が死んでしまうと、憎しみを強め、完全に自分自身の利己的な企てを実行するための悪の決断に点火するだけである。

5. 記念の晩餐の確立

179:5.1 (1941.6) かれらが、イエスに３杯目のワイン「祝福の杯」を持って来たとき、イエスは、杯を手にして長椅子から

立ち上がり、それを祝福して言った。「この杯をとり飲みなさい。私の記念の杯となるであろう。これは、恩恵と真実の新しい配剤の祝福の杯である。これは、君達にとって真実の神霊の贈与と聖職活動の表象となるであろう。そして、父の永遠の王国で新たな姿で君達と共に飲むときまではこの杯を再び共に飲まないであろう。」

179:5.2 (1942.1) 深遠な崇敬と完全な沈黙の中で祝福のこの杯を飲むとき、使徒は全員、ただならぬ何かが起きていると感じた。昔の過ぎ越しは、人種的奴隷制度の状態から個々人の自由への脱皮を祝った。そのとき、あるじは、隷属的な個人が、儀式主義と利己主義の束縛から生ける神の自由な信仰の息子の兄弟愛と親交の精霊的な喜びへと浮揚する新配剤の象徴として記念の晩餐を開始していた。

179:5.3 (1942.2) 記念のこの新しい杯を飲み乾すと、あるじは、パンを取り感謝を捧げた後でそれを小片に千切り、回すように指示して言った。「記念のこのパンを取りそれを食べなさい。私は、命のパンであると言ってきた。そして、この命のパンは、父と息子の贈り物の結合された命

である。父の言葉は、息子の中に明らかにされているように、本当に命のパンである。」彼らが、記念のパン、人間の体に具現された生ける真実の言葉の象徴を相伴したとき、全員が座った。

179:5.4 (1942.3) この記念の晩餐を設けるに当たり、あるじは、いつもの習慣通り、寓話と象徴に頼った。かれは、特定の素晴らしい精霊的な真実を教えたかったので、後継者達が、正確な解釈と明確な意味を彼の言葉に添えることを難しくするような方法で象徴を使用した。このように、彼は、後の世代が、自分の教えを結晶化したり、伝統と教義の死の連鎖によりその精霊的な意味を束縛することを防ごうとした。生涯の任務に関係する唯一の儀式、あるいは聖餐の確立において、イエスは、正確な定義に専念するよりも、むしろ彼の意味するところを示すためにかなりの苦心をした。イエスは、明確な形を確立することにより、神性親交の個人の概念を打ち壊すことを望まなかった。かれは、正式にそれを締めつけることにより、信者の精霊的な想像力を制限することも望まなかった。かれは、むしろ新たで、生きた精霊的な喜びの

翼をもつ人の生まれ変わった自由な魂を解放しようとした。

179:5.5 (1942.4) この新たな記念の聖餐を設立するあるじの努力にもかかわらず、その後の時代以来、彼に続いた者達は、肉体でのその最後夜のあるじの簡単な精霊的な象徴が、厳密な解釈に縮減され、ほとんど公式の数学的な正確性の対象とされたされたという点において、彼の明示した望みが、効果的に阻止されることを確実にした。すべてのイエスの教えのうち、伝統による標準化がなされたものは、他にはなかった。

179:5.6 (1942.5) この記念の晩餐は、息子を信じる者や神を知る者がそれを共にするとき、そのようなすべての機会にあるじが、実際に臨場しているので、神の存在の意味に関して人間の幼稚な曲解のどの象徴とも関連づける必要はない。記念の晩餐は、マイケルとの信者の象徴的な会合である。人がそのように精霊を意識するようになるとき、息子は、実際に臨場しており、また、その精霊は父の生ける断片と親しく交わっているのである。

179:5.7 (1942.6) 彼らがしばらく思索に耽けった後、イエスは、話しを続けた。「君達がこれらのことをする時、私が地球で君達と暮らしを共にしたことを思い起こし、かつまた、私は、この世で君達と生き続け、君達を通して奉仕し続けるということを喜びなさい。個人として、だれが最も偉大になるかに関して競うではない。同胞としての君達でありなさい。そして、王国が信者の大集団を抱えるようになるとき、君達は、同じく、そのような集団の間で偉大さを競ったり、または昇進を求めたりすることを控えるべきである」

179:5.8 (1943.1) この力強い出来事は、友人の上階の部屋で起きた。晩餐にも家屋にも聖なる形式、あるいは儀式的な奉納の何もなかった。記念の夕食は、教会の承認なくして設立された。

179:5.9 (1943.2) イエスは、こうして記念の晩餐を設立すると、使徒に言った。「これをする度に、私の記念としてそれ行いなさい。そして、私を思い出すとき、まず、肉体における私の人生を回想し、私がかつて君達と共に居たということを思い起こし、それから、信仰によって、君達

全員が、いつか父の永遠の王国で私と共に夕食をとるであろうということを認識しなさい。これは、私が君達に残す新しい過ぎ越し、私の贈与の人生の記憶であり、まさに不朽の真実の言葉である。そして、君達への私の愛であり、すべての人への私の真実の聖霊の注ぎである。」

179:5.10 (1943.3) そして、かれらは、新しい記念の晩餐の発足に当たり、一斉に詩篇第118章を歌い、古いが流血のない過ぎ越しのこの祝賀を終えた。

論文 180
送別の訓話

180:0.1 (1944.1) 最後の晩餐の終わりに詩篇を吟じた後、使徒達は、イエスがすぐ宿営所に戻る意向だと思っていたが、かれは皆に座るように指示した。あるじは言った。

180:0.2 (1944.2)「巾着も財布も持たず、その上、余分な衣服も携帯しないよう助言して君達を送り出したときのことをよく覚えているであろう。そして、君達は全員、何も不足しなかったと思い出すであろう。しかし、今は、やっかいな時節に遭遇してしまった。もはや、群衆の好意を

当てにすることはできない。今後、巾着を持っている者には、それを持たせなさい。この福音を宣言しに世の中に出かけるとき、最善と思われる状態で備えなさい。私は、平和をもたらすためにやって来たが、それは、しばらくは来ないであろう。

180:0.3 (1944.3) 「人の息子が賛美される時が今来た。そして、父は、私の中で賛美される。友よ、私は、ほんのあと少しだけ君達といることになっている。君達はすぐ、私を捜し求めるであろうが、見つけられないであろう、なぜなら、私は、君達がいまは来られない場所に行くのであるから。しかし、私が今私の仕事を終えたように、君達が地球での仕事を終えるとき、私が今父のところへ行く準備をするように、君達は私のところに来るであろう。私は、ほんの短時間のうちに君達を後に残し、君達は、もはや地球で私には会えないが、父が私に与えられた王国に昇る時代には私に会えるであろう。」

1. 新たな戒め

180:1.1 (1944.4) 少しの間の打ち解けた会話の後に、イエスは、立ち上がって言った。「君達にいかに進み、互いに仕え

合うべきであるかを示す寓話を演じたとき、私は、新たな戒めを与えたいと言った。だから、君達を後にしようとしている今、私は、そうしたい。君達は、互いを愛すようにと、自分を愛するように隣人を愛すようにと、教える戒めをよく知っている。しかし、私は我が子等によるその心からの献身にさえも完全には満足していない。私は、信じる兄弟愛の王国の愛からくるより大きい行為を君達にさせたい。そこで、私は、この新しい戒めを君達に与える。私が君達を愛したと同じように、君達は互いに愛し合いなさいと。そして、もしこのように互いが愛し合うならば、これにより、すべての人は、君達が私の弟子であるということを知るのである。

180:1.2 (1944.5) 「新たな戒めを示すとき、私は、君達の魂に少しの新たな負担も課してはいない。それどころか、新たな喜びを君達にもたらし、そして、君達が、仲間である人々へ君達の心の愛情を振り撒く喜びを知ることで新たな喜びの経験を可能にしているのである。私は、君達やその仲間である死すべき者達への愛情の贈与において外面的には悲しみに耐えているが、最高の喜びを経験しようとしている。

180:1.3 (1944.6) 「私が、君達を愛したように、君達が互いに愛し合うようにと誘うとき、私は、君達の前に最高規準の真の愛情を明らかにしており、誰も、これよりすばらしい愛を得ることはできないからである。つまり、友のために自分の命を捨てるということ。そして、君達は、私の友なのである。私が君達に教えたことを自発的に実行を望みさえすれば、君達は、私の友であり続ける。君達は、私をあるじと呼んできたが、私は、君達を下僕とは呼ばない。私が君達を愛するように互いを愛し合いさえすれば、君達は、私の友になるであろうし、私は、父が私に明らかにするそれを君達にいつも話すのである。

180:1.4 (1945.1) 「君達は単に私を選んだのではなく、私もまた君達を選び、私が君達と暮らし父を明らかにしたように、私は、君達が、仲間へ愛情の奉仕のその成果をもたらすために世界へ送り出すために、君達を叙階したのであった。父と私は君達と共に働くのであり、私が君達を愛したように、互いを愛するという私の戒めに従いさえすれば、君達は、神性の喜びの充満を経験するであろう。」

180:1.5 (1945.2) 君達は、あるじの喜びを分かち合うならば、彼の愛を共有しなければならない。そして彼の愛を共有するということは、彼の奉仕を分かち合うことを意味する。愛のそのような経験は、この世の困難から君達を救い出しはしない。新世界を創造しはしないが、それは、確かに古い世界を新しくはする。

180:1.6 (1945.3) 心に留めておきなさい。イエスが要求していることは、犠牲ではなく、忠誠である。犠牲の意識は、そのような情愛深い奉仕を最高の喜びとする心からの愛情の欠如を意味する。義務の考えは、君達が使用人気質であり、したがって、友人としての奉仕、または友人のための奉仕をする素晴らしい心の震えを逃していることを意味する。友情の衝動は、任務へのすべての信念を越え、友人への友人の奉仕を犠牲とは呼ばない。あるじは、使徒が神の息子であることを教えた。かれは、彼らを同胞と呼んできた。そして、いま使徒達を後にする前に友と呼ぶ。

2. 葡萄の木と枝

180:2.1 (1945.4) それから、イエスは、再び立ち上がり使徒への教えを続けた。「私は、真の葡萄の蔓であり、私の父は、農夫である。私は葡萄の蔓であり、君達はその枝である。父は、君達がたくさんの実をつけることだけを私に要求される。葡萄の蔓は、その枝での豊饒を増すためにだけ剪定される。父は、私から出て来て結実しないすべての枝を取り除くであろう。実をつける全ての枝を、父は、さらに実をつけるようにきれいにするであろう。すでに、君達は、私が話した言葉を通して清いのであるが、清いままでいなければならない。君達は私の中に、私は君達の中に留まらなければならない。枝は、蔓から切り離されたならば死ぬであろう。枝は、蔓に留まらなくしては実をつけることができないし、君達は、私の中にいる者を除き、愛の果実をもたらすこともまたできない。覚えていなさい。私は、本当の葡萄の蔓であり、君達は、生ける枝である。私の中に生きる者は、また、私がその者の中に生き、多くの精霊の果実をもたらし、この精霊の収穫をもたらす最高の喜びの経験をするであろう。私とのこの生ける精霊的な関係を維持するならば、君達は、豊富に実をつけるであろう。私の中に留まり、

また私の言葉が君達の中に住むならば、君達は、私と自由に親しく交わることができ、そこで、私の精霊が意図することを何でも尋ねることができ、父が我々の陳情を許すという保証でこの全てをすることができるように私の生ける精霊が君達に注ぐのである。このようにして父が讃えられる蔓には、多くの生ける枝があるということ、そしてあらゆる枝にたくさん実がなるということ。世界が、これらの実をつける枝—私が彼等を愛したように互いを愛し合う我が友人—を見るとき、すべての人は、君達が本当に私の弟子であることを知るであろう。

180:2.2 (1945.5) 「父が私を愛されたように、私は君達を愛してきた。私が父の愛に生きるように私の愛に生きなさい。私が君達に教えた通りにするならば、私が父の言葉に従い、その愛に変わることなく留まるように、君達は、私の愛に留まるであろう。」

180:2.3 (1946.1) 長い間ユダヤ人は、救世主が、ダーヴィドの祖先の「蔓から出てくる茎」であると教えていた。そして、この昔の教えの記念のために、葡萄と附随するその蔓の大きい表象が、ヘロデの寺院の入り口を飾ってい

た。この夜あるじが階上で自分達に話す間、使徒は皆、これらの事を思い出した。

180:2.4 (1946.2) しかし、あるじの祈りに対する言及への曲解の結果、後に大いなる憂いが、生じた。もし彼の正確な言葉が記憶されており、その後ありのままに記録されていたならば、これらの教えにさほど困難はなかったであろうに。しかし、記録されたように、信者達は、求めるものは何でも父から受け取ると考えた一種の最高の魔法を、やがてはイエスの名前における祈りと考えた。何世紀もの間、正直な魂をもつ者は、この躓きの石に向かいその信仰を破壊させ続けた。信者の世界は、祈りとは、自分の思い通りにする過程ではなく、むしろ父のやり方を取り入れる目論見であること、いかに父の意志を認識し、実行するかを知る経験であるということを理解するのにどれだけ時間が掛かるのであろうか。君の意志が、彼のものと本当に連合するとき、君は、その意志連合によって心に抱くことは何でも要請することができるし、叶えられるということはまったくもって本当である。そして、そのような意志連合は、蔓の命が生ける枝へと、

そして、その枝を通して流れるように、イエスにより、またイエスを通して生じる。

180:2.5 (1946.3) 神性と人類とのこの生きた繋がりがあるとき、人類が軽率に、無知に利己的な寛ぎや虚栄の成果を祈っても、神性の答えはただ1つ、精霊の実が、生きている枝の茎に一層の、そして増加の結実をもたらす以外の何もあり得ない。蔓の枝が生きているとき、そのすべての願いにはただ1つの答え、増加した葡萄の結実しかあり得ない。実際のところ、枝の唯一の存在目的は、実をつけ、葡萄をもたらす以外に何もない。真の信者もまた、精霊の実をつける目的のため、彼が神に愛されるように、人を愛するためだけに存在する。—ちょうどイエスが我々を愛したように、我々が互いを愛し合うべきであるということ。

180:2.6 (1946.4) そして、父の規律の手が蔓に置かれるとき、それは、愛をもって、枝に多く実をつけることができるようにされる。そして、賢明な農夫は、死んで実りのない枝だけを切り取る。

180:2.7 (1946.5) イエスは、使徒にさえ、祈りが、精霊に支配される王国において精霊生まれの信者の機能であると認めさせることに非常な困難を伴った。

3. 世界の敵意

180:3.1 (1946.6) 11人が、やっと蔓と枝の訓話に関する議論をやめると、あるじは、さらに話すことを望んでいたこと、また自分の時間の短いことを知って彼らに言った。「私が君達を去った後、世界の敵意に落胆してはいけない。気の弱い信者が、背をむけ、王国の敵と手を握り合っても意気消沈してはいけない。世界が君達を嫌っても、それは君達を嫌う前にすでに私を嫌っていたと思い出さなければならない。君達がこの世界のものであるならば、世界は、君達を愛するであろうが、そうではないのであるから、世界は、君達を愛することを拒否するのである。この世界にいるが、君達の人生は、俗世間らしいものではない。私は、君達が選ばれた世界にすら別の世界の精霊を代表させるためにこの世界から君達を選んだ。しかし、私が君達に話してきた言葉をいつも覚えていなさい。使用人は、その主人より偉くはない。あえて私を迫害するというのなら、かれらは、君達をも迫害するで

あろう。私の言葉が不信心な者を怒らせるというのなら、君達の言葉も不敬者を怒らせるであろう。そして、かれらは、私も私を送られた方をも信じてはいないのであるから、この全てを行うであろう。そして、君達も、私の福音のために多くの事で苦しむであろう。しかし、これらの苦難に耐えるとき、私もまた、天の王国のこの福音のために君達の前で苦しんだということを思い出すべきである。

180:3.2 (1947.1) 「君達を襲う人々の多くは、天国の光を知らないが、今我々を迫害する者達には、これは本当ではない。我々が真実を彼らに教えていなかったならば、かれらは、有罪宣告を受けることなく多くの奇妙なことをするかもしれないが、現在、かれらは、光を知っており、それを敢えて拒絶したので、自らの態度に何の弁解もない。私を嫌う者は、父を嫌う。そうでないはずがない。もし受け入れるならば君を救うその光は、故意にそれを拒絶するとき、必ず君を咎める。それほどに凄まじい憎しみをもって私を嫌うほどに、私がこれらの人間に一体何をしたというのだ。地上での親交と天での救済の提供以外には何もしてはいない。それにしても、君達は、聖

書に『理由なくして私を嫌った。』とあるのを読んだことはないのか。

180:3.3 (1947.2) 「だが、君達をこの世に放っておくつもりはない。すぐ、私が去った後、精霊の助手を君達に遣わす。真実の道を君達に教え続け、慰めさえする者が、私の代りに君達の間にいて君達とともにいるであろう。

180:3.4 (1947.3) 「心を煩わせるでない。君達は神を信じている。私をも信じ続けなさい。私は、去らなければならないが、君達からは遠くないところにいる。父の宇宙には滞在する場所が多くあると、私は、すでに君達に言ってきた。これが真実でなければ、私は、それについて繰り返し話しはしなかったであろう。私は、これらの光の世界に、君達がいつか昇る父の天国の拠点へと戻っていくのである。私は、これらの場所からこの世界に来た。そして、私が天界での父の仕事に戻らねばならないその時は、真近である。

180:3.5 (1947.4) 「このようにして、私が、君達より先に父の天の王国に行ったとしても、この世界の存在以前に神の人間の息子等のために用意された場所に君達が私といられ

るように、きっと君達を呼びに来させる。君達を後にしなければならないが、私は精霊の形で君達と共にいるであろうし、私がより大きい宇宙にいる父の元に昇ろうとしているように、君達は、結局私の宇宙にいる私の元に昇ってきたとき、私と居るようになる。そして、君達は、完全には理解できないとしても、私が君達に言ったことは本当であり、永続する。私が父のところに行き、そして君達は、今私について来ることはできないが、来る時代には確かに私に続くのである。」

180:3.6 (1947.5) イエスが座ると、トーマスが立って言った。「あるじさま、我々はあなたがどこに行かれるのか分かりません。勿論、その道が分かりません。でも、道を示してくだされば、まさしく今夜、我々は、あなたについて行きます。」

180:3.7 (1947.6) トーマスの言葉を聞いたイエスが、答えた。「トーマスよ、私がその道であり、真実であり、命である。私を通さずして、誰も父の元へは行かない。父を見つける者全てが、まず私を見つける。私を知るならば、

父への道を知る。そして、共に暮らしてきて、いま私を見ているのであるから、君は私を知っている。」

180:3.8 (1947.7) しかし、この教えは、使徒の多くにとり、特にフィリッポスには深過ぎ、かれは、ナサナエルと二言三言交わした後に立ち上がって言った。「あるじさま、父をお見せください。そうすれば、あなたの仰っしゃったことが全てはっきりします。」

180:3.9 (1947.8) フィリッポスが話し終えると、イエスは言った。「フィリッポス、私は長い間君と一緒にいなかったか、それでも今だに私を知らないのか。再びしかと言っておく。私を見た者はすでに父を見た。なのに、父を見せろなどと何故言えるのか。私は父の中におり、父は私の中にいるということを信じないのか。私の話す言葉は、私のものではなく、父の言葉であるということを教えてはこなかったか。私は、父のために話すのであって、自分のためではない。私は、父の意志を為しにこの世界に来たし、それを為した。父は、私に留まり、私を通して働かれる。父が私の中に、また私が父の中にいると言うときの私を信じなさい。でなければ、私が送った

その生活そのものに基づいて—仕事に基づいて—私を信じなさい。」

180:3.10 (1948.1) あるじが喉を潤すために脇に行くと、11人は、これらの教えに関する活発な議論に入り、イエスが戻り皆に席につくよう合図すると、ペトロスは、長い自分の意見を述べ始めた。

4. 約束された助手

180:4.1 (1948.2) イエスは教え続けた。「私が父の元へ行ったとき、私が君達のためにした地球での私の仕事を父が完全に受け入れた後、私自身の領域での最終的な主権を受け取った後、私は、父に伝えるつもりである。地球に私の子等を残してきて、彼らに別の教師を送ることが、私の約束に順じていますと。そうして、父が承認するとき、私はすべての肉体に真実の聖霊を注ぐのである。すでに、父の精霊は君達の心にあり、また、その日が来るとき、ちょうどいま君達に父がいるように、君達には私もいるであろう。この新しい贈り物は、生ける真実の精霊である。不信心者は、この精霊の教えを初めは聞かないであろうが、光の息子は皆、喜んで心の底から彼を受け

入れるだろう。そして、ちょうど君達が私を知ったように、彼が来るとき、君達は、この精霊を知るであろうし、心にこの贈り物を受け取り、そして、彼は、君達と留まるであろう。私は、助けと導きなしには君達を置き去りにするつもりでないということが、このようにして分かるであろう。今日、私本人が、君達といることができる。そのうちに、君達が何処にいようとも、私は君達と、また私の臨場を望む他のすべての人々と共に、しかも同時にそれぞれの者と共にいるであろう。私が立ち去る方が良いとは見極めないのであるか。私が精霊の中でより良く、さらに完全にいることができるように君達を肉体のままで残すことが良いというということ。

180:4.2 (1948.3) 「世界は、わずか数時間で私をもう見ないであろう。しかし、私がこの新しい教師、真実の精霊を遣わす前にさえ、君達は、心で私を知り続けるであろう。私が自ら君達と生きてきたように、私は君達の中に生きる。私は、精霊の王国での君達の個人的な経験をもって君達と１つになるであろう。そして、これが起こるとき、君達は、私が父の中にいることを、また、君達の命が父と共に私のうちに隠されている間、私が君達の中に

もいるということを確かに知るであろう。私は、父を愛し、父との約束を守ってきた。君達は、私を愛してきたし、私との約束を守るであろう。父がその精霊を私に与えてくれたように、私は、私の精霊を君達に与える。そして、私が君達に与えるこの真実の聖霊は、君達を導き、慰め、遂にはすべての真実へと導くのである。

180:4.3 (1948.4) 「今まさに我々を襲いくるそれらの試練に君達が耐える用意ができるようにと、私がまだ君達と居る間に、私は、これらのことを伝えているのである。そして、この新たな日が来るとき、君達には父だけでなく息子が住まうであろう。そして、1人の人間として、人の息子として、地上で、しかも君達のちょうど目の前で父と私が働いたように、天のこれらの贈り物は、ずっと他の贈り物とともに働くであろう。そして、この精霊の友は、君達の記憶に私が君達に教えたすべてを持って来るであろう。」

180:4.4 (1948.5) あるじがしばらく休止すると、ユダ・アルフェウスが、兄弟のどちらかがかつて人前でイエスに尋ねたことのある数少ない質問の1つを大胆にした。ユダは、

言った。「あるじさま、あなたは友人として我々の中でいつも生きてこられました。この精霊による手段を除き、もはや我々に姿を見せないとき、どのようにあなただと知るのでしょうか。世界があなたを見ないのであれば、我々は、あなたのことをどのように確信するのでしょうか。いかように我々にあなた自身見せてくださるのですか。」

180:4.5 (1949.1) イエスは、彼らを見下ろし微笑んで言った。「幼子達よ、私は立ち去る、父へと戻っていくところである。間もなく、君達は、生きた人間としてここで見ているようには私を見なくなる。私は、すぐに、この有形の肉体を除いた、ちょうど私のような私の精霊を君達に送るつもりである。この新しい教師は、心の中で君達各自と同居する真実の精霊であり、それ故、すべての光の子供が1つになり、互いに引き合うようになる。そして、まさしくこの方法で、父と私は、君達それぞれの魂のなかに、また互いを愛し合うことにより、ちょうど私がいま君達を愛しているように、自身の経験でその愛を本物にする全ての者の心の中でも生きることができる。」

180:4.6 (1949.2) ユダ・アルフェウスは、あるじの言ったことを完全に理解したという訳ではないが、新しい教師の約束を把握し、アンドレアスの表情から、自分の質問が満足に答えられたと悟った。

5. 真実の精霊

180:5.1 (1949.3) イエスが信者の心に送る、すべての肉体に注ぐと約束した新たな助手は、真実の精霊である。この神性の贈与は、真実の形式でもなければ法律でもなく、いずれも、真実の形、あるいはその表現としては機能しない。新しい教師は、つまり真の精霊の基準における真の意味の意識であり保証である真実の確信である。そして、この新しい教師は、生きた、発達する真実、すなわち拡大し、展開し、適応できる真実の精霊である。

180:5.2 (1949.4) 神性の真実は、精霊により明察された、しかも生きた現実である。真実は、神性の実現と神との親交意識の高い精霊的な段階にだけ存在している。人は、真実を知ることができるし、真実に生きることができる。人は、真実の成長を魂で経験し、その啓発の自由を心で楽しむことはできるが、真実を公式、規則、教義、あるい

は人間の行為の知的な規範に封じ込めることはできない。人は、人間が神性の真実の公式化を請け合うとき、それは即座に死ぬ。封じ込められた真実の死後の残存物は、よくても結局は、知的に扱われ賛美された知恵の実現に終わるに過ぎない。静止の真実は、死んだ真実であり、死んだ真実のみが、学説として保持できる。生きた真実は、動的であり、人間の心で経験的な存在だけを楽しむことができる。

180:5.3 (1949.5) 知性は、宇宙の心の臨場に照らされる物質的な存在から起こる。知恵は、意味の新段階に高められた知識の意識、そして知恵の援助である宇宙贈与の臨場により活動的にされた意識からなる。真実は、宇宙意識の超物質段階で機能する精霊受領者達が、そして真実の実現の後に、魂の中で生きて支配するためにその精霊起動を可能にする精霊受領者達だけが経験する精霊的な現実価値である。

180:5.4 (1949.6) 宇宙洞察の本物の子は、あらゆる名言に真実の精霊を探す。神を知る個人は、神性到達の生ける真実の段階へと絶えず知恵を高める。精霊的に進歩的でない魂

は、生ける真実を知恵の死ぬ段階へと、また単なる高尚な知識の領域へと引き摺っている。

180:5.5 (1949.7) 黄金律は、真実の精霊の超人的な洞察が剥ぎ取られるとき、高い倫理的行為の規則にしかならない。文字通り解釈されるとき、黄金律は、仲間への大きな違反手段になるかもしれない。人は、すべての人が心中にある全てを隠すことなく話すことを願ってやまないので、知恵に対する黄金律の精霊的な洞察がなければ、自身も遺憾なく赤裸々にその心の全思考を仲間の人間に話すべきであると理由づけるかもしれない。黄金律のそのような非精霊的な解釈は、明かされない不幸や終わりのない悲しみの結果をもたらすかもしれない。

180:5.6 (1950.1) 一部の人間は、人間の友愛の純粋に知的な確認として黄金律を裁量し、解釈する。他の人間は、人間の人格の穏やかな感情を心情的な満足感として、人間関係のこの表現を経験する。別の人間は、この同じ黄金律が全ての社会的な関係を判断するための尺度、社会的行為の基準であると認める。さらに他の人間は、この言葉に表現される道徳上の義務に関する最高の概念を全友愛関

係と見なすので、それを偉大な道徳的教師の明確な命令であると見る。そのような道徳的な人間の人生において黄金律は、彼等の全哲学の賢明な中心であり外周になる。

180:5.7 (1950.2) 神を知る真実の愛好者の信仰深い兄弟愛の王国においては、この黄金律は、信者間の接触から生まれる最高に可能な善を受ける仲間に自身を関連づけ合うことを要求して、あるじのこの命令を神の人間の息子達に見させる解釈のより高いそれらの段階において、精霊的な認識の生きた性質を引き受ける。これは、自分を愛するように隣人を愛するという真の宗教の本質である。

180:5.8 (1950.3) しかし、黄金律の最高の実現と最も正しい解釈は、そのような神性の宣言の持続し、生きた真実の精霊の意識にある。宇宙における関係の広大無辺の意味は、その精霊的な認識に、つまり必滅者の魂に宿る父の精霊への息子の精霊の行為の法解釈においてのみ明らかにされる。そして、そのような精霊に導かれた必滅者が、この黄金律の真の意味を認識するとき、好意的な宇宙における市民権の保証に満たされ、イエスが、我々皆を愛し

たように、皆が仲間を愛する場合に限り、精霊現実の彼等の理想は、満たされ、そしてそれは、神の愛の実現の現実である。

180:5.9 (1950.4) 神のあらゆる息子の個々の必要性と能力への神性の真実の生きた柔軟性のと広大無辺の適応性のこの同じ哲学は、あるじの教えと悪への無抵抗の実践を適切に理解できる前に理解されなければならない。あるじの教えは、基本的に精霊的な表明である。彼の哲学の物質的含意さえも、精霊的なそれらの相関関係から離れては、有用的には考えられない。あるじの命令の精神は、宇宙に対するのすべての利己的な反応の無抵抗にあり、真の精霊的な価値—神性美、無限の善、永遠の真実の価値—神を知り、ますます神のようになること—の正義の積極的かつ進歩的な段階への到達と結びつく。

180:5.10 (1950.5) 愛、私心の無さは、真実の精霊の先導に従い、関係性についての不断の、生きた、再度適応できる解釈に従わなければならない。それにより、愛は、愛される個人の最高の広大無辺の善の変化し続け、拡大する概念を把握しなければならない。それから愛は、宇宙の

他の公民への精霊主導の人間の愛からくる成長し、生ける関係によって影響を及ぼすことができた他のすべての個人に関してこの同じ態度をとり続ける。そして、愛の全てのこの生きた適応性は、現在の悪の環境、そして神性の運命の完全の永遠の目標の両方の光の中で作用しなければならない。

180:5.11 (1950.6) そして、我々は、黄金律も無抵抗の教えも、教義、あるいは教訓として適切に理解することができないと明らかに認めなければならない。それは、ただ生きることにより、すなわち、1人の人間を他の人間への愛ある接触へ向ける真実の精霊による生きた解釈での意味の理解によってのみ把握することができる。

180:5.12 (1951.1) そして、このすべては、旧宗教と新宗教の違いを明確に示す。古い宗教は自己犠牲を教え、新しい宗教は、ただ無私を、社会奉仕と宇宙理解に結合された自己実現を教える。古い宗教は、恐怖の意識により動機づけられた。王国の新しい福音は、真実の確信、永遠かつ普遍の真実の精霊により支配される。そして、いかなる敬虔の度合い、あるいは宗派の忠誠の度合いも、生きた

神の精霊生まれの息子を特徴づける自発的な、思いやりのある、心からの友情のある王国の信者の人生経験における欠落を埋め合せることはできない。伝統も形式的な崇拝体系のいずれも、仲間への正真正銘の思い遣りの不足を償うことはできない。

6. 去ることの必要性

180:6.1 (1951.2) ペトロス、ジェームス、ヨハネ、マタイオスからの多くの質問後、あるじは、送別の訓話を続けた。「君達が遭遇しようとしていることに備えができるように、重大な誤りに躓くことのないように、私が去る前にこのすべてを話しているのである。当局は、君達を単に会堂から追い出しても満足しないであろう。神に仕えていると考えるであろう者たちが君達を殺す時間が切迫していると、私は警告する。彼等は、父を知らないが故に君達や君達が天の王国に導こうとしている者達にこのすべてをするのである。彼らは、私を受け入れることを拒否することにより父を知ることを拒否した。そして、私が君達を愛したように、君達が、互いに愛し合うという私の新しい戒めを守るならば、彼らは、君達を拒絶し、私の受け入れを拒否するのである。私の時間がいま来た

ように、君達の時間が来るとき、私にはすべてが分かっているということ、そして、私と福音のための君達の受難のすべてには私の精霊が君達と共にいるという知識で君達が力づけられるようにこれらについて前もって教えているのである。私は、この目的のために、そもそも最初から非常に明らかに君達に話している。人の敵は、その人自身の家庭の者であるかもしれないとさえ警告してきた。王国のこの福音は、たがうことなく個々の信者の魂にすばらしい平和をもたらしはするが、人が心から私の教えを信じ、必滅の運命にある人生を送る上での主な意図として父の意志を為す習慣を定めるまでは、それは、地球に平和をもたらさないであろう。

180:6.2 (1951.3) 「今私が去るということ、私が父の元に行こうとするその時が来たことを知り、君達の誰一人として、何故去るのかを私に尋ねなかったことに驚いている。それでも、私は、各人の心ではそのような質問をしているのが分かる。私は、1人の友としてはっきりと言おう。私が離れていくということは、君達には誠に有益なことである。もし私が離れていかなければ、新しい教師は、君達の心に入ることができない。君の魂で生き、君の精

霊を真実に導くためにこの精霊の師を送り出すことができる前に、私は、この必滅の肉体を剥奪し、天の自分の場所に復位されなければならない。そして、私の精霊が君に宿ると、かれは、罪と正義の違いを照らし、それらに関して君の心で賢明に判断することを可能にするであろう。

180:6.3 (1951.4) 「更に言うことはたくさんあるが、君達は、今はもはや耐えられないであろう。とは言え、彼が、真実の精霊が来るとき、君が父の宇宙の多くの住まいを通り抜ける間、かれは、遂には君をすべての真実に導くのである。

180:6.4 (1951.5) 「この精霊は、自分について話しはしないが、父が息子に明らかにしたことを君達に宣言し、来るものを君達に教えさえするであろう。」まさに私が父を賛美したように、かれは、私を賛美するであろう。この精霊は、私から来るのであり、君達に私の真実を明らかにする。父がこの領域に持つすべては、現在、私のものである。それゆえに、私は、この新しい教師が、私のものを取り、それを君達に明らかにすると言ったのである。

180:6.5 (1952.1) 「もう少しで、君達を少しの間置いて行く。その後、君達が、再び私と会うとき、私は、すでに父の元へ行く途中であろうから、その時でさえ、君達は、私に長くは会わないであろう。

180:6.6 (1952.2) イエスが息継ぎをする間、使徒は、互いに話し始めた。「我々に言っている事は何なのか。『もう少しで、君達を置いて行く。』そして、『君達が、再び私と会うとき、私は、すでに父の元へ行く途中であろうから、長くは私に会わないであろう。』とはどういうことであろうか。我々に何を言っているのか分からない。」

180:6.7 (1952.3) イエスは、皆がこれらの質問をすることが分かっていたので言った。「私が間もなく君達とはいないであろうと、君達が再び私を見るときは、私は父の元に行く途中であると言ったとき、君達は、私が、何を意味したのかと互いに訊き合っているのか。私は、人の息子は、死ななければならないが、再び蘇るとはっきりと言った。君達は、私の言葉の意味を悟ることができないのか。君達は、最初は悲しくなるであろうが、後には、事が起きた後、これらの出来事を理解する多くの者と共に

喜ぶであろう。女性というものは、苦悩の時には本当に悲しむが、一度子供を産むと、人というものが世界に生まれたという認識の喜びに自分の苦悶をすぐにを忘れる。だから、君達も私の出発を悲しむであろうが、私は、すぐ再び君達に会うし、次には、君達の悲しみは、悦びに変えられるであろうし、その上、誰も決して君達から取り上げることのできない神の救済の新しい顕示が君達に来るであろう。そして、全世界は、死の克服をもたらす際の命のこの同じ顕示に祝福されるであろう。これまで、君達は、父の名においてすべての要求をしてきた。再び私に会った後は、君達は、私の名において求めることができ、そして私は、君達の声を聞くのである。

180:6.8 (1952.4) 「ここ地球において、私は、君達に諺を教え、寓話を話してきた。私は、君達が精霊においては子供に過ぎなかったので、そうした。しかし、私が父とその王国に関して明らかに話す時が近づいている。そして、父自身が、君達を愛し、より完全に自分を君達に明らかにされることを望むので、私はこうするのである。必滅者は、精霊の父を見ることができない。だから、私が、君達被創造者の目に父を見せるためにこの世界に来たので

ある。しかし、精霊の成長が完成するとき、その時、君達は、父自身に会うであろう。」

180:6.9 (1952.5) 11人は、話を聞き終わると互いに言った。「ほら、分かり易く話されている。確実に、あるじは、神から来られた。しかし、なぜ父の元に戻らなければならないと言われるのか。」そして、イエスは、皆が未だに理解していないことが分かった。この11人の男性は、ユダヤ人の救世主の概念に関する長く抱いてきた自分達の考えから逃がれることができなかった。救世主としてイエスを信じれば信じるほど、地球の王国の栄光の物質的な勝利に関するこれらの根深い概念は、ますます厄介になるのであった。

論文 181
最後の勧告と警告

181:0.1 (1953.1) 11人への別れの訓話の結びの後、イエスは、くだけて皆と会話をし、集団として、また個人としての彼等に関する多くの経験を詳しく話した。これらのガリラヤ人は、友であり師である人が去ろうとしているということにやっと気づき始めた。そして、彼らの望みは、しばらく後に再び彼と一緒になることであるという約束に

しがみつくのだが、この帰還訪問も、しばらく後のことであるということは忘れがちであった。使徒と主な弟子の多くは、短い期間(復活と上昇の短い間)で戻るこの約束とは、イエスが父へのほんの短い訪問のために立ち去り、それから王国設立のために戻ってくることを示すのだと本当に思った。そして、イエスの教えに対するそのような解釈は、彼等の先入観にとらわれた信念と切なる望みに一致するものであった。自分達の生涯の信念と願望遂行の望みがこのように一致したので、彼等が、自らの激しい切望を正当化するあるじの言葉の解釈を見つけることは難くなかった。

181:0.2 (1953.2) 送別の訓話が議論され、使徒の心が落ち着き始めた後、イエスは、再び彼らに注意を促し、最後の勧告と警告の提示に掛かった。

1. 最後の慰めの言葉

181:1.1 (1953.3) 11人が各自の席に着くと、イエスは、立って話しかけた。「肉体をもつ君達といる限り、私は、君達の中の、あるいは全世界の1個人でしかありえない。しかし、必滅者の自然の姿のこの衣服から自由にされると

き、私は、この王国の福音の君達の各人と他のすべての信者の精霊居住者として戻ることができるのである。このようにして、人の息子は、すべての本物の信者の魂の精霊的な具体化になるのである。

181:1.2 (1953.4) 「私が君達の中に生き、君達を通して仕事をするために戻る時、私は、この人生を通して君達をよりよく導くことができるし、天の中の天の未来の生活において多くの住まいごとに君達を案内することができる。父の永遠の創造における人生は、怠惰と利己的な安楽さの無限の休息ではなく、むしろ恩恵、真実、栄光における絶えざる進行である。父の家の数々の拠点のそれぞれは、停止場所、次にあるもののために君に準備をさせるように考案された生涯がある。したがって、光の子等も、まさに父がすべてにおいて完全であるように、精霊的に完成される神性位地に達するまで栄光から栄光へと進み続ける。

181:1.3 (1953.5) 「私が去った後、私のあとに続くならば、私の教えの精神に従い私の人生の理想—父の意志を為すこと—で生きる君達の熱心な努力を押し進めなさい。いやお

うなしに私がこの世界で課されたように、肉体での私の人生を模倣しようとする代わりに、これをしなさい。

181:1.4 (1954.1) 「父は私をこの世界に遣わされたが、君達の少数だけが、私を完全に受け入れることを選んだ。私は、自分の精霊をすべての肉体に注ぐつもりであるが、すべての人は、魂の案内人や相談役としてこの新しい教師を受け入れることを選ぶというわけではない。しかし、新教師を受け入れる人は、啓発され、浄められ、慰められるのである。そして、この真実の精霊は、彼らの中で永遠の命へ湧出する生ける水の泉となる。

181:1.5 (1954.2) さて、私が君達を残して行くにあたり、安らぎの言葉を伝えたい。私は平安を君達に残して行く。私の平安を君達に与える。私が与えるこれらの贈り物は、信仰心のない者達が与えるような—割り当て—ではなく、君達各人に与える。心を煩わせてはいけないし、恐れてもいけない。私は、世界に打ち勝ったのであり、君達は皆、私において信仰を通して勝利を収めるのである。私は、人の息子は殺されると警告してきたが、父の元に行く前に、ほんの少しの間ではあるが、私は戻ると

約束する。そして、私は、父へと昇った後、君と共にいて、まさしくその心に留まるために新しい教師をきっと送る。そして、君が、このすべてが起こるのが分かるとき、予めすべてを知っているのであるから、うろたえず、むしろ信じなさい。私は、大きな愛情で君達を愛してきたし、君達を置き去りにはしたくはないのだが、それが父の意志である。私の時間はやって来た。

181:1.6 (1954.3) 「迫害でここかしこに離散し、多くの悲しみに打ちひしがれた後でさえ、これらの真実のどれも疑ってはいけない。離散し、敵の手に人の息子を残すとき、君達が私の孤立が分かるように、私は、君達の孤立が分かるであろう。しかし、私は決して一人ではない。私は、常に父といる。そのような時にさえ、私は、君達のために祈る。君達に平和を、しかも、ふんだんにもたらすように、私は、これらすべてのことを話したのである。君達は、この世界で苦難に遭うが、元気を出しなさい。私は、この世界で勝利を収め、永遠の喜びと永遠の奉仕への道を君達に示してきた。」

181:1.7 (1954.4) イエスは、この物質界の喜びや満足の類ではなく、神の意志の実行者である仲間に安らぎを与えた。不信心な唯物論者と運命論者は、平和と魂のせいぜい2種類の安らぎの味わいしか望めない。かれらは、不可避の状態に直面し、最悪の状態に耐えることを不動の解決法と決意した禁欲主義者である。さもなければ、彼らは、決して本当には来ることのない平和に空しく憧れ、人間の胸に永遠に湧き出る望みに耽ける楽天家であるにちがいない。

181:1.8 (1954.5) 地球での生活を送る上である程度の禁欲主義や楽観主義の双方は、実用的ではあるが、そのいずれも、神の息子が肉体の同胞に与える素晴らしい平和にはいささかの関係もない。マイケルが地上の子等に与える平和は、肉体でしかも他ならぬこの世界で、自らが人間生活を送るときの自身の魂を満たしたまさしくその平和である。イエスの平和は、肉体での人間生活を送る間に、いかに神の意志を完全に為すかを学ぶ勝利を実現した神を知る個人の喜びと満足感である。イエスの心の平和は、神性の父の賢明かつ思いやりのある加護の実現における人間の完全な信仰に基づいて築かれる。イエスは、地球

で難題を抱え、誤って「悲しみの人」と呼ばれさえしたが、これらのすべての経験において、またそれを通じて、父の意志を達成するという完全な確信において人生の目的に進むために彼につねに力を与えたその自信からくる安らぎを味わった。

181:1.9 (1954.6) イエスは、決然とし、粘り強く、任務の遂行に完全に専念したが、無感覚に、冷淡に禁欲主義的ではなかった。かれは、人生経験の愉快な面を捜したが、盲目的で自己欺瞞の楽天主義者ではなかった。あるじは、そのすべてが自分に起ころうとしていることを知っていたし、恐れてはいなかった。追随者の各人にこの平穏を与えた後、かれは、「心を煩わせてはいけないし、恐れてもいけない。」と、一貫して言うことができた。

181:1.10 (1955.1) イエスの平和は、それゆえ、時間と永遠の中での自分の経歴が、全賢で、全てを愛し、全ての権能をもつ精霊の父の安全かつ完全な管理と保護にあると完全に信じる息子の安らぎと保証である。そして、これが、本当に、人間心の理解では測り知れないが、それは、本

当に、信じる人間の心によって完全に楽しむことができる平和である。

2. 個々人への送別の勧告

181:2.1 (1955.2) あるじは、集団としての使徒に送れを指示し、最後の勧告を終えた。それから、一人一人に別れを告げ、送別の祝福と共にそれぞれに個人的な忠告の言葉をかけた。使徒達は、最後の晩餐を共にするために最初に座ったときのように、まだ着席しており、あるじが、食卓の周りを話しながら回って歩きそれぞれに話し掛けると、各人は立ち上がった。

181:2.2 (1955.3) ヨハネに言った。「ヨハネ、君は、仲間の中で一番若い。君は本当に私の側にいて、また私は、父が息子達に与えると同じ愛で君達皆を愛するが、君は、私の近くにいつもいるべき３人のうちの１人としてアンドレアスに任命された。この他に、君は、私の代理をしてきたし、私の地球の家族に関係ある多くの事でこれからもそのように行動し続けなければならない。そして、ヨハネ、君が、肉体をもつ私の者達を監視し続けるという全幅の自信を持って、私は、父のところへ行くのである。

私の任務に関する彼らの現在の混乱が、私が肉体のままでいたならば、ちょうど私がするだろうというような思いやり、助言、援助の全てを彼等に差し伸べることをいかなる方法でも止めることのないよう心しなさい。そして、彼らが全員、光を見に来て完全に王国に入るとき、君達が皆、彼等を歓迎する間、ヨハネ、私に代わって彼らの歓迎を頼みたい。

181:2.3 (1955.4) 「さて、今、地球での経歴の終わりの数時間に入るに当たり、私は、私の家族に関して伝言できるように近くにいなさい。父によって私の手に任せられた仕事に関しては、私の肉体の死を除いて今終わり、私は、この最後の杯を飲みほす用意ができている。しかし、地球の父ヨセフが残した私の責任に関しては、私の人生のあいだ気を配ってはきたが、これからは私の代わってこのすべての事柄において務めることを君に頼らなければならない。最も若く、したがって多分これらの他の使徒よりも長生きするであろうから、ヨハネ、私の代わりにこれをしてくれるように君を選んだ。

181:2.4 (1955.5) 「かつて、我々は、君と君の兄弟を雷の息子達と呼んだ。我々が初めて一緒にいた頃、君は、勝気で偏狭的であったが、君が、無知で軽はずみな無信仰な人々の頭に炎を呼び下ろすように私に求めた時から、君は、かなり変わった。君は、さらに変化しなければならない。私が今夜与えた新たな戒律の使徒にならなければならない。まさに私が君を愛したように、互いに愛する方法を同胞に教えることに自分の人生を捧げなさい。」

181:2.5 (1955.6) ヨハネ・ゼベダイオスは、頬を伝う涙で上階の部屋に立ち、あるじの顔を覗き込んで言った。「そう致します、あるじさま。でも私は、同胞をさらに愛することをいかにして学ぶことができるのですか。」そこでイエスが答えた。「まず天の彼らの父をもっと愛することを学び、そして、君が本当に時間の世界と永遠の世界での彼等の幸福にさらに関心を持つようになった後、君は、同胞をもっと愛することを学ぶであろう。そして、そのようなすべての人間の関心は、理解ある思いやり、寡欲な奉仕、惜しみない許しによって育成される。誰も君の若さを侮蔑すべきではないが、年齢は、しばしば経験を意味し、人事における何事も実際の経験に代わるこ

とはできないという事実にしかるべき考慮をはらうことを君に勧める。平和的にすべての人間と、特に天の王国の兄弟愛で友人と生きるように努力しなさい。そして、ヨハネ、いつも覚えていなさい。王国を勝ちとろうと魂と競ってはいけない。」

181:2.6 (1956.1) そして、あるじは、自分の席を回りながら、ユダ・イスカリオテの場所近くでしばらく止まった。使徒達は、ユダが、これ以前に戻っていないことにむしろ驚いたし、裏切り者の空席のそばに立つイエスの悲しい相貌の意味を非常に知りたく思った。しかし、誰一人として、アンドレアスを除いては、イエスが宵に、そして夕食の間に仄めかしたように、自分達の会計係が、あるじを裏切るために出かけたなどと少しの考えさえ抱かなかった。当分の間、とても多くの事が引続き起きていたので、かれらは、自分達の中の一人が裏切るであろうというあるじの発表をすっかり忘れていた。

181:2.7 (1956.2) イエスは、そのときシーモン・ゼローテースのところに行った。シーモンは、立ち上がり、次のこの勧告を聞いた。「君は、真のアブラーハームの息子である

が、君をこの天の王国の息子にするためにどれほどの努力をしたことか。私は、君を愛しているし、君の同胞全員もそうしている。君が、私を愛しているということを、サイモン、また、王国を愛しているということを知っているが、いまだに、自分の好みによってこの王国を作ろうと決め込んでいる。私は、君がそのうちに、精霊の本質と私の福音の意味を理解し、その公布において勇敢な仕事をするということを充分承知しているが、私の出発の際、君に起こるかもしれないことを悩んでいる。私は、君が怯まないということが分かれば、喜ぶであろう。私が父の元に行った後、君が私の使徒であることをやめず、天の王国の大使として相応に振る舞うということが分かれば、私は喜ぶであろう。」

181:2.8 (1956.3) 火のような愛国者が目を拭いながら、「あるじさま、私の忠誠心を心配しないでください。地球のあなたの王国の設立に人生を捧げられるように、すべてに背を向けてきましたし、怯んだりしません。今までのところあらゆる失望を乗り切ってきましたし、あなたを見捨てません。」と答えたとき、イエスは、シーモン・ゼローテースへの話しをまだ止めてはいなかった。

181:2.9 (1956.4) そこで、イエスは、シーモンの肩に手を掛けて言った。「特にこのような時に、そのように話すのを聞くのは誠に爽快である。しかしながら、親友よ、君は、自分が何について話しているかが分かっていない。一瞬たりとも、私は、君の忠誠心を、献身を疑わない。私は、君が、すべてのこれらの他の者同様に、戦いにおいて先へと向い、私のためには死を躊躇わないであろうと心得る、(彼らは全員、力強く相槌を打った)、だが、それは要求されてはいない。我が王国は、この世界のものではないと、また私の弟子は、その設立実行のために戦わないと、私は繰り返し言ったきた。私は、これを何回も言ってきたが、シーモン、君は真実に直面することを拒否している。私は、私と王国への君の忠誠ではなく、私が立ち去り、私の教える意味を把握し損ねたと、また、君の誤解を他の現実や王国での精霊的な問題の範疇へと調整しなければならないという認識に遂に目覚めるとき、君が何をするのかを案じている。」

181:2.10 (1956.5) シーモンは、さらに話したかったのだが、イエスは、手を上げてシーモンを止めて言葉を続けた。「私の使徒は、君より誠実で、正直ではないが、私の出

発後、誰も君のようにはうろたえたり、がっかりはしないであろう。君が落胆している間ずっと私の霊が君と共にあり、また、これらの者は、君の同胞は、君を見捨てないであろう。父の精霊の王国での息子の関係に対応する地球での市民権の関係に関する私の教えを忘れないようにしなさい。ケーサーのものはケーサーに、神のものは神に提供することに関し君に言ったことすべてをよく考えなさい。シーモン、君の人生を捧げなさい、現世の国家権力への義務と王国の兄弟愛の精霊的な奉仕の同時的な認識に関する私の命令をいかに必滅者が満足に実現させられるかを示すことに。もし君が、真実の聖霊によって教えられるならば、現世の支配者が、神だけに属する敬意と崇拝をあえて要求しない限り、地球の市民権の必要条件と天での息子の資格の必要条件との間の衝突は、決してないであろう。

181:2.11 (1957.1)「さて、シーモン、君がこのすべてを遂に分かるとき、憂うつから回復し、大いなる力でこの福音を公布しに先へ進んだ後に、君の失望の季節の最中でさえ、私がずっと君と共にいたと、そして、まさにその終わりまで君と進み続けるのであるということを決して忘れて

はいけない。君は、常に私の使徒であり、そして、精霊の目で見て、天の父の意志に君の意志をより充分に従える気持ちをもつようになると、次には、私の大使として働きに戻り、そして私が君に教えた真実の理解の鈍さを理由に、誰も、私が君に与えた権威を取り上げたりはしないであろう。そして、シーモン、剣を持って戦う者は、剣と共に滅ぶということを、一方、精霊で働く者は、今ある王国で、来る王国で、喜びと平和と永遠の命を達成するということを、私は、もう一度警告しておく。そして、手に与えらた仕事が地球で終わるとき、君は、シーモン、私と向こうの私の王国で共に座るのである。切望した王国を、君は、見るのである、だが、この人生においてではない。私を、そして私が君に明らかにしたことを信じ続けなさい。そうすれば、君は、永遠の命の贈り物を受け取るであろう。」

181:2.12 (1957.2) シーモン・ゼローテースに話し終えると、イエスは、マタイオス・レーヴィイの方に踏み出して言った。「使徒集団の基金の備えは、もはや、君の任務ではないであろう。すぐ、本当にすぐ、君達は全員、離散するであろう。君は、一人の同胞とさえ、慰めと支えの交

流を楽しむことは許されないであろう。王国のこの福音を説いて前へ進んで、君は、自分の新しい仲間を見つけなければならないであろう。私は、君達の訓練中に、2人ずつ送り出したが、今は、私が君達を置いて行くこうとしている。君は、衝撃から立ち直ると、単独で、そして、奮い起こされた信仰を持つ人間は、神の息子であるというこの朗報を広めるために地の果てまでも出かけるであろう。

181:2.13 (1957.3) その時、マタイオスは「しかし、あるじさま、誰が我々を送り出し、また、我々はどうして行く先を知るのでありましょうか。アンドレアスが、道を示してくれるのでしょうか。」と言った。すると、イエスは答えた。「いや、レーヴィイ、アンドレアスは、もはや福音公布で君達を指示しないであろう。かれは、本当に、新しい教師が来るその日まで、友人であり助言者であり続けるであろう。それからは、真実の精霊が、王国拡大のために働く君達一人一人を先へと導くであろう。君達が私に続こうと最初に試みたあの日以来、多くの変化が、税関所で君達に起きた。しかし、友愛の付き合いにおいて、非ユダヤ人がユダヤ人の隣に席を占める兄弟愛の展

望を見ることができる前に、より多くの変化が起こらなければならない。しかし、君が完全に満足するまで、ユダヤ人の同胞を勝ち得るために意欲をもって続けなさい。それから、力を持って非ユダヤ人の方に向かいなさい。君が確信してもよい一つの事、レーヴィイ、君は、同胞の信頼と愛情を得ている。皆、君を愛している。」(そこで、10人全員があるじの言葉の黙認を表した。)

181:2.14 (1958.1)「レーヴィイ、私は、同胞が知らない基金を補給し続ける君の心配、犠牲、労働に関する多くのことを知っているし、その袋を運んだ者は不在であるが、収税史の大使が、王国の使者達と共に私の送別会でここにいるというのが私には嬉しい。私は、君が、私の教える意味を精霊の目で明察できることを祈る。また、君の心に新しい教師が来たとき、その導きに従い、人の息子に続き、そして王国の福音を信じることを敢えてした嫌われ者の収税史のために父ができることを同胞に—全世界にさえ—見せなさい。最初から、レーヴィイ、これらの他のガリラヤ人を愛したように、私は、君を愛していた。父も息子も、人を依怙贔屓をしないということをよく知っているのであるから、君の宗教活動を通して福音の信

者になる人々の中にそのようないかなる区別もすることのないように。そして、マタイオス、神は、人を差別しないということ、神の目において、王国の親交において、すべての人は平等であり、すべての信者は、神の息子であるということをすべての人に示すことにこれからの全人生を捧げなさい。。」

181:2.15 (1958.2) 次に、イエスは、演説の間黙って立っているジェームス・ゼベダイオスの方に踏み出して言った。「ジェームス、君と君の弟が、王国の栄誉で昇進を求めて一度私のところ来た時、そのような栄誉は、父が与えるものであると君に言い、私の杯が飲めるかどうかを尋ねると、両名ともそうすると答えた。たとえ君が、その時できなかったとしても、また現在できないとしても、君はすぐ、まもなく通過しようとしている経験によりそのような奉仕への備えができるであろう。そのような振舞いによって、君は、あの時、同胞を怒らせた。もし彼らが、すでに完全に君を許していなくても、君が私の杯を飲むのを見るとき、かれらは、君を許すであろう。君の聖職活動が長くても短かくても、魂を平静に保ちなさい。新しい教師が来るとき、私に対する崇高な信頼、そ

して父の意志への完全な服従から生まれる思いやりの沈着さと同情の寛容性を君に教えさせなさい。神を知る、そして息子を信じる弟子の人間愛と神性の尊厳が結合された示威運動に人生を捧げなさい。そして、このように生きる者全ては、彼らの死に様においてでさえ福音を明らかにするであろう。君と君の兄弟ヨハネは、異なる道を行くであろう。そして、そのうちの1人は、もう1人よりずっと早くに私と共に永遠の王国で座るかもしれない。真の知恵は、勇気と同様に思慮深さを包含するということを学ぶならば、それは、君を大変助けるであろう。君のもつ積極性に伴う賢明さを学ばなければならない。私の弟子達がこの福音のために命を捨てることを躊躇わない崇高な瞬間が来るであろうが、すべての普通の情況においては、君が生きて朗報を説き続けるということは、無信仰者の激怒をなだめることは、はるかに良いであろう。君の支配下にある限り、多くの歳月の君の人生が、天の王国のために勝ち取られた魂で実り多くなるように長く地球で生きなさい。」

181:2.16 (1958.3) ジェームス・ゼベダイオスに話し終えると、あるじは、アンドレアスが、座っている食卓の端へと回

り込み、自分の忠実な援助者の目を見て言った。「アンドレアス、君は、天の王国の大使の責任者代行として忠実に私を代表してきた。時々疑いをもち、またある時は危なっかしい憶病さを見せはしたが、それにしても、君は、仲間の扱いにおいて常に正しく、秀でて公正であった。君とその同胞の王国の使者としての聖職受任以来、私がこれらの選ばれた者の責任者代行として任命したこと以外、君は、集団管理において自主的に治めてきた。他のいかなる俗界の事柄において、私は、指示したり、君の決定に影響を与えるための行動をとらなかった。そして、私は、今後の集団の方向づけの全てにおいて君に指導力を備えるためにこれをした。私の宇宙において、そして宇宙の中の父の宇宙においては、我々の同胞-息子は、彼らの精霊的な関係すべてにおける個人として扱われるが、我々は、すべての集団関係において常に確かな指導力を提供する。

181:2.17 (1959.1) 「さて、アンドレアス、君は、私が任命した権威により同胞の長であるが故に、また私の個人の代理として役目を果たしてきたが故に、その上、私が今去ろうとしているので、これらの現世の、管理問題に関する全

責任から君を自由にする。今後、君が、精霊的な指導者として自分の手腕で勝ち得た、それ故に、同胞が腹蔵なく認識するもの以外、君は、同胞にいかなる支配権も行使することはできない。私が父の元に行った後、彼らが、明確な立法行為によるそのような支配権を君に戻さない限り、君は、この後、同胞にいかなる権威も行使することはできない。しかし、この一団の管理の代表者としての責任からのこの解放は、肉体の姿での私の出発と、君の心に生き、君を全真実に導く新しい教師を送り出すあいだ介在するはずのそれらの日々の試練の時、すぐ先にある試練の時間の間、しっかりとした、しかも情愛深い手で同胞を抱き抱える力で全てをするために君の道徳的な責任をいかなる方法においてもも軽減するものではない。私は、君達から去る準備をして、君達の中の一員としての私の臨場においてその開始と権威をもつ全ての管理責任から君を解放したい。これからは、私は、君の上に、そして君の中で精霊的な権威だけを行使する。

181:2.18 (1959.2)「もし同胞が、今まで通り君を助言者とすることを願うならば、私は、世間のことでも精霊的なことで

も、誠実な福音信者の様々な団体間の平和と調和の促進のために全力を尽くすべきであると君に指示する。人生の残りを同胞の間の兄弟愛の実践面を促進することに捧げなさい。彼らがこの福音を完全に信じるようになるとき、肉体をもつ私の兄弟達に親切でありなさい。西洋のギリシア人に、東洋のアブネーへの愛のある公平な献身を示しなさい。これらは、君が新しい教師である真実の精霊の到着を待つ間、使徒達は、すぐに地球の四隅へと追いやられるが、そこで、神との息子性の救済に関する朗報を公布するために、私の直接の臨場なしにこの福音信じることを学ばなければならない厳しい試練のその時期に皆を団結させることになっている。だから、アンドレアス、人の目には立派な働きをする役目が、君には回ってこないかもしれないが、そのようなことをする人々の師であり、助言者であることで満足しなさい。君は、死ぬまで地球での自分の仕事を続け、それから永遠の王国でこの聖職活動を続けるであろう。だからこそ、何回となく、私は、この群れでない他の羊を飼っていると、すでに言っただろ。」

181:2.19 (1959.3) それからイエスは、アルフェウスの双子の方に行き、その間に立って言った。「私の幼子よ、君達は、私のあとについて来ることを選んだ３組の兄弟の１組である。６人全員が、肉親と円満に働くためによくやったが、誰も君達には及ばなかった。困難な時が、我々のすぐ前にある。君達やその同胞に起こることを全て理解することができないかもしれないが、君達が一度王国の仕事に召集されたということを決して疑ってはいけない。しばらく、扱うべき群衆はないであろうが、がっかりするでない。君達の一生の仕事が終わるとき、私は、高いところで君達を迎えるであろう。そこで、栄光の中で、君達は、自己の救済について熾天使の大勢と高い神の息子の群衆に話すであろう。人生を月並みな骨折り仕事の高揚に捧げなさい。神への特別な奉仕である期間働くために召集された後、必滅者が、いかに朗らかで勇敢に日々の以前の労働に戻ることができるかをすべての地球の人間と天の天使に示しなさい。もし、当分の間、王国の可視的な問題における君達の仕事が成就するならば、君達は、神との息子の経験の新たな啓蒙で、また高揚された認識とともに、神を知る者にとってはありふれ

た労働、または世俗的な労役などというものはないという認識をもってかつての作業に戻らなければならない。私と共に働いてきた君達には、万物は神聖となり、地球での全作業が父なる神にさえ奉仕となった。そして、彼らが神を待ち、待つ間に仕える者のように、元の使徒仲間の行ないを耳にするとき、彼らと喜び、日常の仕事を続けなさい。君達は、私の使徒であったし、これからもずっとそうであろう、そして、私は、来たる王国で君達を覚えている。」

181:2.20 (1960.1) そして、次に、イエスは、立っているフィリッポスの方に行った。フィリッポスは、あるじからこの言い置きを聞いた。「フィリッポス、君は、多くの愚かな質問をしてきたが、私は、その一つ一つに答えるために最善を尽くした、そして、正直ではあるが、精霊的ではない君の心に浮かぶそのような質問の最後に、いま答えよう。私が絶えず君に接して来た間ずっと、君は、『もしあるじが我々から遠ざかり、この世界に置き去りにするのならば、私は何をするのであろうか。』と自分自身に言ってきた。ああ、何と信仰薄き者よ。それでもなお、君には、同胞の多くが持てる程の信仰を持ってい

る。君は良い執事であった、フィリッポス。君は、ほんの数回我々の期待を裏切った。そのうちの1つは、父の栄光を明らかにすることにおいてであった。君の執事役の職務は、ほとんど終わっている。　君は、するために呼ばれた仕事—王国のこの福音の説教—をすぐに、より完全にしなければならない。フィリッポス、君は、いつも示してもらいたがったが、間もなく、君は、すばらしいものを見るであろう。君は、信仰でこのすべてを見た方がはるかに良かったのであるが、君の物質的な見方でさえはるかに誠実であった。君は、生きながらに私の言葉が実現するのを見るであろう。そして、君が精霊的な洞察力に恵まれるとき、自分の仕事をしに前進し、人類が、神を捜し求め、物質的な心の目ではなく、精霊的な信仰の目で永遠の現実を探すために、人類を導く目的へと君の人生を捧げなさい。フィリッポス、覚えていなさい。君には地球での立派な任務がある。ちょうど君がそうであったように、世界にはそのような傾向のある者で満ちているのであるから。君には大きなな作業があり、それが信仰で遂行されるとき、君は、王国の私の元に来るであろうし、そして、私は、目が見ず、耳が聞か

ず、人間の心が受け止めなかったことを君に示して、私は、大きい喜びを感じるであろう。そうする間にも、精霊の王国の幼子のようになり、そして、精霊の王国で君を導くように、私を新しい精霊教師の精霊として容認しなさい。そして、このようにして、私が、この領域の必滅者として君と滞在する間、君のために達成できなかった多くのことをすることができるのである。そして、つねに覚えていなさい、フィリッポス、私に会った者は、父に会ったのである。」

181:2.21 (1960.2) それから、あるじは、ナサナエルのところに行った。ナサナエルが立ち上がったので、イエスは、着席するように命じ、その側に座って言った。「ナサナエル、私の使徒になって以来、君は偏見を越えて生きること、寛容の拡大に心掛けることを学んできた。しかし、君が学ぶことはまだまだ多くある。一貫した君の誠意によって悟されてきたので、君がいたことは、仲間にとって幸運であった。私が行ってしまうと、多分、君の率直さは、古くからの、また新しい同胞と仲良くしていく上での妨げとなるかもしれない。表現は、良い考えといえども聞き手の知的状態と精霊的な成長に応じて調整され

なければならないということを、君は、学ぶべきである。それが、思慮深さに熱心であるとき、誠実さは、王国の仕事において最も有用である。

181:2.22 (1961.1) 「同胞と共に働くことを会得するならば、君は、　より永続的なものを成し遂げるかもしれないが、君が、君のように考える者達を探索しに行くようなことがあれば、その場合、世界で単独であり、仲間の信者から完全に孤立しているときでさえ、神を知る弟子は、王国の建設者になることができると立証することに人生を捧げなさい。私は、君が最後まで忠実であることを知っており、私は、いつか、君を天にある私の王国の拡大された活動へと迎え入れるであろう。」

181:2.23 (1961.2) そこで、ナサナエルは、イエスにこう質問をした。「最初にこの王国の活動に召喚されて以来、私は、あなたの教えを聞いてまいりましたが、正直なところ、あなたが我々におっしゃる全ての完全な意味を理解できるという訳ではありません。私は、次に何を期待すればよいのかを知りませんし、大部分の同胞が、同様に当惑していると思いますが、かれらは、その混乱につい

て明らかにすることを躊躇っております。力になっていただけますか。」ナサナエルの肩に手をかけて、イエスは言った。「友よ、君は、ユダヤ人の伝統の先入観によって大変不利な条件にあり、また、筆記者やパリサイ派の教えに沿って私の福音を解釈するる君の意固地な傾向によって非常に混乱しているのであるから、私の精霊の教えの意味を理解しようとして当惑に遭遇するのは、不思議なことではない。」

181:2.24 (1961.3) 「私は、口頭で多くを教えてきて、また、君達の間で生活してきた。君の心を教化し、魂を解放するためにできる限りのことをしてきたのであるから、君は、いまこそ、私の教えと私の人生から得ることができなかったことをすべての教師のその師匠—実際の経験—の手から獲得する準備をしなければならない。そして、いま君を待ち受けているこの新しい経験のすべてにおいて、私は、君の前を行くし、真実の精霊は、君と共にいるのである。恐れるでない。君がいま理解しないということを、新しい教師が来れば、かれは、地球での君の残りの人生を通して、永遠の時を通して君に明らかにするのである。」

181:2.25 (1961.4) そして、あるじは、皆の方に向かって言った。「福音の完全な意味を理解しないことにうろたえるでない。君達は、限りある必滅の人間に過ぎず、私が君達に教えたことは、無限で、神性で、永遠である。まさに楽園の父が完全であるように、君には完全になる経験の進歩的な達成を続ける永遠の時代があるのだから、我慢強くあり、確信をもちなさい。」

181:2.26 (1962.1) そして、イエスが、トーマスの方に行くと、トーマスは、立ちあがってこう言われるのを聞いた。「トーマス、君は、しばしば信仰を欠いた。しかし、疑問の時期を過ごしたとき、一度も勇気を欠いたことがなかった。偽の予言者や見せ掛けの教師達は、君を騙さないということを私は、よく知っている。私が行った後、君の同胞は、新しい教えを見る君の批判的な態度を評価するであろう。また、君達全員が、来たる時代に地の果てまでも離散するとき、それでも君が私の大使であることを覚えていなさい。人生に精霊の果実をもたらし、ちょうど私が君を愛したように互いが愛し合う精霊生まれの男女の経験で営むように、生きた真実の顕現の実証に直面するとき、人の批判的で物質的な心が、いかに知的

な懐疑の不活溌性に勝利できるかを示す立派な仕事に人生を捧げなさい。トーマス、私は、君が我々に合流したことが喜ばしい。そして、短い当惑期間の後に、私は、君が王国の仕事で先へ進むことを知っている。君の疑問が同胞を当惑させはしたが、彼らは私を一度も煩わしたことがない。私は、君を信頼しているし、地球の果てまでも君の前を行くのである。」

181:2.27 (1962.2) それから、あるじは、シーモン・ペトロスの方に行った。イエスが話すと、ペトロスは立ち上がった。「ペトロス、君は私を愛し、自分の人生をユダヤ人と非ユダヤ人に王国のこの福音の公布に捧げるであろうということが、私には分かっている。しかし、私とのそのような緊密な付き合いの歳月の間に、君が、話す前に考えるということにもっと手を貸すことができなかったことに、私は心を痛めている。君の唇へ護衛を立てることを学ぶ前に、君はどんな経験を経なければならないのか。君の軽はずみな話しに、君の僭越な自信に、我々はどれだけ難儀を被ったことか。この短所を抑えないならば、君は、自分にとってより多くの問題を起こす運命にある。同胞は、この短所にもかかわらず君を愛している

ことが君には分かっており、そして、君は、この欠点が君への私の愛情を決して損なわないことも理解しているはずであるが、この欠点は、君の有用性を減少し、問題の発生を止むことは決してないのである。しかし、君は、まさしくこの夜受ける経験から疑う余地なく大いなる力添えを受け取るであろう。そして、私は、シーモン・ペトロス、いま君に、同様に、ここに集う君の同胞全員に言う。今夜、君達全員は、私に迫り来る重大な危機にある。君達は、『羊飼いは打ちひしがれ、羊は国外へ離散するであろう。』と、それが、書かれていることを知っている。私がいない間、君達の一部は、私の身に起こることのために疑心に屈し、躓くという大きな危険がある。しかし、私は、少しすれば戻るということを、それから、ガリラヤに君達の前を行くということをいま約束する。」

181:2.28 (1962.3) そして、ペトロスは、イエスの肩に手を置いて言った。「もし同胞全員が、あなたが原因で疑心に屈しようとも、あなたがするかもしれない何事にも躓かないと約束します。あなたと共に参り、必要ならば、あなたのために死にます。」

181:2.29 (1962.4) ペトロスが、そこであるじの前に立ち、激しい感情に全身を震わせ、イエスへの本物の愛に溢れる状態でいると、イエスは、ペトロスの涙ぐんだ目をまっすぐに見つめて言った。「ペトロス、今宵、君が3度か4度私を否定するまでは、雄鳥が鳴かないと誠に誠に言っておく。そして、このように、君が私との平穏な付き合いで会得しなかったことを、君は、多くの問題と多くの悲しみを通して学ぶであろう。この必要な教訓をしっかり学んだ後、君は、投獄され、恐らく父の王国建設における愛ある仕事の最高の代価を支払って私について来るかもしれないが、君は、同胞を元気づけ、この福音を説くことに捧げる人生を送り続けるべきである。

181:2.30 (1962.5)「しかし、私の約束を覚えていなさい。私が、生き返るとき、父の元に行く前に、ひと時、私は、君と留まるつもりである。そして、君達が今すぐにも通過しなければならないことのために、君達それぞれを元気づけるために、今宵さえ父に懇願するのである。私は、父が私を愛している愛で君達全員を愛している。だから、君達は今後互いに愛さなければならない。ちょうど私が君達を愛したように。」

181:2.31 (1962.6) それから、賛美歌を歌うと、かれらは、オリーヴ山での野営に出発した。

論文 182
ゲッセマネにて

182:0.1 (1963.1) イエスがエーリージャとマリア・マルコスの家からゲッセマネの野営場に11人の使徒を導いたのは、この木曜日の夜の10時頃であった。丘でのその日以来、ヨハネ・マルコスは、油断なくイエスに対する見張りを自分の仕事としていた。あるじが使徒達と共に上階の部屋にいる間、睡眠を必要としていたヨハネは、数時間の休息を得ていたが、皆が階下へいくのを聞くと、立ち上がり、すばやく麻の上衣を身に纏い、都を通り、キドローン川を渡り、ゲッセマネ公園に隣接した自分達の私用の野営へと皆の後を追った。ヨハネ・マルコスは、この夜と翌日を通してあるじのごく近くに身をおいていたので、すべてを目撃し、あるじがこの時から磔刑の時間までの間に言った多くを漏れ聞いた。

182:0.2 (1963.2) イエスと11人が野営場に戻ると、使徒は、ユダの長い不在の意味を訝り始め、自分達の1人が裏切るだろうというあるじの予測を互いに話し、そして初めて、

ユダ・イスカリオテの何かがおかしいと疑った。しかし、野営場に到着し、ユダが自分達を迎えるためにそこに待っていないことに気づくまで、ユダに関する率直な評注には至らなかった。皆が、ユダがどうなったのか知るためにアンドレアスを囲むと、「どこに居るかは知らないが、ユダは我々を見捨てたのではないかと恐れる。」と、彼らの長が言った。

1.集団の最後の祈り

182:1.1 (1963.3) 野営場到達のしばらくの後、イエスは言った。「同胞である友よ、君達との私の時間は今や実に短い。この時間に、そして今後、父の名において為さねばならない全ての仕事において我々を支える力を天の父に祈る間、我々だけで離れて行くことを、私は望んでいる。」

182:1.2 (1963.4) イエスは、こう言うと、オリーヴ山への短距離の道を先に立って歩き、エルサレムの全景が見える場所で聖職受任の日にしたように、大きい平たい岩の上に自分の周りに輪になって跪くように命じた。そして、かれは、皆の真ん中に立ち、柔らかい月光に讃えられ、目を上げて祈った。

182:1.3 (1963.5) 「父よ、私の時間は来ました。いま息子が、あなたの栄光をあらわすように、あなたの息子の栄光をあらわしてください。私は、あなたが、私の領域のすべての被創造物への完全な権威を私に与えられたことを存じており、私は、神の信仰の息子になるすべての者に永遠の命を与ます。そして、永遠の命とは、私の被創造物が、あなたを皆の唯一の真の神、また父として知るということ、そして、あなたがこの世界に送った者を信じるということであります。父よ、私は、地球であなたを高め、私に与えられた仕事を成し遂げて参りました。私は、我々自身の創造である子等への私の贈与をほとんど終えました。私には肉体の命を捨てることのみが残っております。そして、今、ああ、父よ、この世界が存在する以前に、私があなたと共に得た栄光を私にあらわし、もう一度、あなたの右手に迎えてください。

182:1.4 (1964.1) 「私は、あなたが、世界から選び私に与えた者達にあなたを明らかにしてきました。かれらは、あなたのものです—すべての生命が、あなたの手にあるように—あなたは彼らを私に与え、そして、私は、彼らの中に生き、生き方を教え、そして彼らは信じました。これら

の者は、私があなたの元から来たということ、私が肉体で送る人生は、父を世界に明らかにするためであるということを学んでいます。私は、あなたが私に与えられた真実を彼らに明らかにしました。これらの者、私の友人であり大使である者は、あなたの言葉を受け入れることを心から望みました。私は、あなたの元からやって来たのであると、あなたが、私をこの世に遣わされたのであると、それに、私は、あなたの元に戻るところであると、彼らに伝えました。父よ、私はこれらの選ばれた者のために祈ります。私は、私が世界のために祈るようには彼等のためには祈りませんが、まさしく私が肉体で留まる間、この世界であなたの代理をしてきましたように、私があなたの仕事に戻った後、世界で私の代理をするために世界から選んだそれらの者のために祈ります。これらの者は私のものです。あなたが、彼らを私にくださいました。しかし、これまで私のものである全ては、常にあなたのものであり、あなたのものであった全てが、今あなたは、私のものとしました。あなたは、私の中で高揚されました。そして、私は今、私がこれらの者の中で敬われるように祈ります。私はもはやこの世には

いられません。私は、あなたが私に与えられた仕事に戻るところです。私は、私達と、人の中の私達の王国を代表させるために、これらの者を残していかなければなりません。父よ、私が、肉体での人生を明け渡す準備をする一方で、これらの者を忠実にさせておいてください。これらの者が、私の友等が、ちょうどあなたと私が1つであるように、精霊で1つにしてください。私が彼等と居られる限り、彼等を見張り誘導することができるのですが、私は、いま去ろうとしているところです。父よ、彼等を慰め元気づけるために我々が新しい教師を遣わすことができるまで、彼らの近くにいてやってください。

182:1.5 (1964.2) 「あなたは、私に12人を与えられました。そして、私は、親交を持とうとしない報復の息子1人を除いては、全ての者を留めておきました。これらの者は、か弱く、脆くはありますが、私達は、彼らが信用できることを知っています。まさに私があなたを崇敬していますように、かれらは、私を愛しています。私のために苦しまなければならない間、私は、また、かれらが、天の王国における息子性の確証の喜びで満たされることを求めます。私は、あなたの言葉をこれらの者に与え、かつ真

実を教えました。世界は、ちょうど私を嫌ったように、彼等を嫌うでありましょうが、世界から彼等を取り除くのではなく、世界の悪から守ることだけをお願いたします。彼らを真実で浄めてやってください。あなたの言葉は、真実です。そして、あなたが私をこの世に遣わされように、私は、これらの者を世界に送り出すところです。私が教えた真実と私が明らかにした愛をじて彼等が浄められるように、彼らを鼓舞できるように、彼等のために、私は、人間の間に生きて、あなたの仕事に私の人生を奉げてきました。父よ、私は、よく存じております、私が去った後、これらの同胞を見守るようお願する必要は少しもないということを。私が愛するように、あなたが彼等を愛していることを知ってはいますが、彼等が、息子が愛するように父が人を愛しているとさらに気づくように私はこうするのです。

182:1.6 (1964.3) 「それから父よ、私は、この11人のためだけでなく、いま信じる者達、または、彼らの将来の聖職活動の言葉を通して王国の福音をこの後信じるかもしれない他の全ての者のためにも祈りたいのです。あなたが私の中におられ、わたしがあなたの中におります。私は、同

様にこれらの信者が、私達の中にいることを、私達の双方の精霊が彼らに宿ることを欲するのです。私達が1つであるように私の子等が1つであり、私があなたを愛しているように、彼等が互いを愛し合うならば、すべての者が、私があなたの元から来たと信じ、私がしてきた真実と栄光の顕示を喜んで受け入れるでありましょう。私は、あなたが下された栄光をこれらの信者に示しました。あなたが精霊で私とともに暮らしたように、私は、肉体で彼らとともに暮らしました。あなたが私と1つでありましたように、私は、彼等と1つでありました、そして、新しい教師も彼等と共にあり、かつ彼等の中にいるでしょう。父は、その息子が愛するように彼等を愛するということを、そして、あなたは、私の肉体をもつ同胞が、私を愛するように彼らを愛するということを知ることができるように、私はこの全てをされました。父よ、彼らが、やがて私と栄光を共にするために、それから楽園の抱擁にあなたに加わるために進んでいけるように、これらの信者を救うために私に協力してください。私は、人間姿での時間での種蒔きからの永遠の収穫として、屈辱に耐えて私とともに仕える者達を、彼等が私の

手に与えられたすべてを見ることができるように、ともに栄光の中につれていたいのです。私がこの世界を創設する前にあなたと持っていた栄光を私の地球の同胞にぜひ示したいのです。この世界はあなたのことをほとんど知りませんが、公平であられる父よ、私はあなたを知っており、これらの信者にあなたを明らかにしてきました、そして、彼らは、他の世代にあなたの名前を明らかにするでありましょう。そして、ちょうどあなたが私とおられましたように—誠に—、この世界であなたが、彼等と共におられると、私は、いま彼らに約束いたします。」

182:1.7 (1965.1) 11人は、立ち上がって静かに近くの野営場に戻るまでの数分間、イエスの周りにこの円形で跪いたままでいた。

182:1.8 (1965.2) イエスは、追随者の間での団結を祈りはしたが、均一性を望んではいなかった。罪は、邪悪な惰性の死んだ層を作るが、正義は、不朽の真実の生ける現実と父と息子の神精の進歩的交わりにおける個々人の経験の創造的な精神を養う。信者である息子と神性の父との精

霊的な親交において、教義上の終局性と集団意識の宗派の優越性は決してありえない。

182:1.9 (1965.3) あるじは、使徒達とのこの最後の祈りの中、父の名を世界に明らかにしたという事実について触れた。そして、それは、本当に肉体で遂行された人生を通じての神の顕示によってイエスがしたことである。天の父は、モーシェに自身を明らかにしようとしたが、かれは、父に「私はある」と言わせる以上のことを引き起こすことができなかった。そして、父自身の一層の顕示を強いたとき、「私はあるという者である。」と明らかにされるだけであった。しかし、イエスがその地球での人生を終えたとき、父の具現であるあるじが次のように言うことができるほどに、父のこの名前は、明らかにされていた。

182:1.10 (1965.4) 私は、命の糧である。

182:1.11 (1965.5) 私は、生きた水である。

182:1.12 (1965.6) 私は、世の光である。

182:1.13 (1965.7) 私は、すべての時代の願望である。

182:1.14 (1965.8) 私は、永遠の救済への開いた扉である。

182:1.15 (1965.9) 私は、永遠の生命の現実である。

182:1.16 (1965.10) 私は、良い羊飼いである。

182:1.17 (1965.11) 私は、無限の完全性への小道である。

182:1.18 (1965.12) 私は、復活と生命である。

182:1.19 (1965.13) 私は、永遠の生存の秘密である。

182:1.20 (1965.14) 私は、道であり、真理であり、生命である。

182:1.21 (1965.15) 私は、有限の子等の無限の父である。

182:1.22 (1965.16) 私は、真の葡萄の木であり、あなたは、その枝である。

182:1.23 (1965.17) 私は、生きた真実を知る者すべての望みである。

182:1.24 (1965.18) 私は、1つの世界からもう一つの世界への生きた橋である。

182:1.25 (1965.19) 私は、時間と永遠の生きたつながりである。

182:1.26 (1965.20) このようにイエスは、神という名の生ける顕示をすべての世代に拡大したのであった。神性の愛が、神の本質を明らかにするように、不朽の真実は、絶えず拡大する規模において彼の名を明らかにする。

2. 裏切りの前の最後の時間

182:2.1 (1966.1) 使徒は、野営地に戻りユダがいないと分かると大いに驚いた。11人が、反逆の仲間の使徒に関する熱い議論をしてしていたが、ダーヴィド・ゼベダイオスとヨハネ・マルコスは、イエスを片側に連れて行き、彼らが数日間ユダを監視していたこと、そして彼が、イエスを敵の手に渡し、裏切るつもりであることを彼等が知っているということを明らかにした。イエスは、彼らの言うことを聞いたが、「友よ、天の父がそう望まない限り、人の息子には何事も起こり得ないのである。心を煩わせてはいけない。万事は、神の栄光と人の救済のためにともに働くであろう。」と言うだけであった。

182:2.2 (1966.2) イエスの晴れやかな態度は弱まっていった。時間の経過と共に、かれは、ますます真剣で悲しそうであった。非常に動揺した使徒は、それぞれの天幕に戻るよ

うにあるじ自身に言われても気が進まなかった。イエスは、ダーヴィドとヨハネとの話から戻ってきて、11人全員に自分の締め括りの言葉を述べた。「友よ、休息しなさい。明日の仕事に備えなさい。心しておきなさい、我々は皆、天におられる父の意志に従うべきであると。私の平和を君達に残す。」このように話すと、それぞれの天幕へと合図を送り、皆が行くと、ペトロス、ジェームス、ヨハネに声を掛け、「君達にはしばらくの間ともにいて欲しい。」と言った。

182:2.3 (1966.3) 使徒達は、文字通り疲れ果てていたので寝入った。皆は、エルサレム到着以来の睡眠不足が続いていた。別々の寝室に行く前、シーモン・ゼローテースは、皆を剣や他の武器が収納されている自分の天幕に導き、銘々に戦闘具を支給した。ナサナエル以外は皆、これらの武器を受け取り身につけた。ナサナエルは、武装拒否をして言った。「同胞よ、あるじの王国はこの現世にはないと、自分の弟子は、その設立を果たすために剣で戦うべきでないと、あるじは、繰り返し我々に言われた。私はこれを信じる。あるじの防護において、あるじが我々に剣を使わせる必要があると、私は考えない。我々

は皆、あるじの強力な力を見てきたし、そう欲するならば敵から身を守ることができるということを知っている。彼が、敵に抵抗しないならば、それは、そのような進路が、父の意志を満たそうとする試みを意味しているに違いない。私は、祈るつもりではあるが、剣は振るわない。」アンドレアスは、ナサナエルの言葉を聞くと自分の剣を、シーモン・ゼローテースの手に戻した。従ってその夜皆が睡眠のために別れるときは、彼らのうちの9人が武装していた。

182:2.4 (1966.4) 反逆者であるユダへの当面の憤りは、使徒の心の中で他の全てを被い隠した。あるじのユダに関する意見は、最後の祈りの中で、ユダが自分達を見捨てたという事実に彼らの目を開かせた。

182:2.5 (1966.5) 8人の使徒がようやくそれぞれの天幕に行ったあと、ペトロス、ジェームス、ヨハネが、あるじの命令を受けるために待機していると、イエスは、ダーヴィド・ゼベダイオスを呼び、「最も速く、信頼できる使者を寄越してくれ。」と言った。ダーヴィドが、かつてエルサレムとベスサイダの間を夜通し走る使者の仕事に従

事していたヤコブという者を連れて来ると、イエスは、この使者に向かって言った。「全速で、フィラデルフィアのアブネーの元に行って伝えなさい。『君に平和の挨拶を送ると共に、あるじが、君に伝えていうことには、彼を死においやる敵の手に渡される時間が来てしまったが、かれは蘇り、すぐに君の前に現れるということ、次に、新しい教師が君の心に生きるようになる時までは、かれが、あなたに指導をするということです。』そして、ヤコブがこの伝言をあるじの満足のいくように復誦すると、イエスは、ヤコブを送り出して「誰が何かするかもしれないと、ヤコブ、恐れるではない。目に見えない使者が、今宵君の側を走るので。」と言った。

182:2.6 (1967.1) 次に、イエスは、ともに露営している訪問中のギリシア人の長の方に向き直って言った。「兄弟よ、私は、すでに警告したのであるから、これから起ころうとしていることに撹乱されてはならない。人の息子は、敵の司祭長等やユダヤ人の支配者等の唆しにより殺されるが、私は、父の元に行く前に、少しの間君と共にいるために甦るであろう。このすべてが起こるのを見るとき、神を讃え、君の同胞を元気づけなさい。」

182:2.7 (1967.2) 普通の情況下にあれば、使徒は、個人的に夜の別れの挨拶を述べたであろうが、この夜はユダの突然の逃走という認識に全く心を奪われ、また、あるじの送別の祈りの常にない人となりに完全に打ち負かされていたので、かれらは、あるじの別れの挨拶を聞いて黙って立ち去るだけであった。

182:2.8 (1967.3) イエスは、その夜アンドレアスが自分の側を去るとき、「アンドレアス、君が何をすることができても、私がこの杯を飲んだ後、私が再び戻って来るまで、君の同胞を引き留めておくためにできる限りのことをしなさい。私はもう全てを話したということを理解し、同胞を元気づけなさい。君に平安があるように。」と言った。

182:2.9 (1967.4) すでに夜はすっかり更けていたので、使徒のだれも、その夜変事が起こるとは思っていなかった。皆は、朝早く起き、最悪の事態に備えられるように睡眠しようと努めた。宗教に関係しない仕事が、過ぎ越しの準備の日の正午以降決して行われることはなかったので、かれらは、祭司長等が、あるじを逮捕するのは早朝であ

ろうと考えた。ダーヴィド・ゼベダイオスとヨハネ・マルコスだけが、まさしくその夜、イエスの敵がユダと来ていることを理解していた。

182:2.10 (1967.5) ダーヴィドは、その夜ベサニア-エルサレム街道に通じる上手の道を監視する打ち合わせをし、一方ヨハネ・マルコスは、キドローン峡谷経由でゲッセマネに至る道路沿いを見張る手配をした。ダーヴィドは、自らが課した前哨任務にたつ前に、イエスに別れを告げて言った。「あるじさま、私は、あなたとの活動で非常な喜びを経験いたしました。私の兄弟達は、あなたの使徒でありますが、私は、　果たされるべき事柄よりももっと小さい働きをしましたが、あなたが行かれてしまうと心の底から寂しく思います。」すると、イエスは、ダーヴィドに「ダーヴィド、息子よ、他のものは指示されたことをしてきたが、この仕事は、自身の心からくることを君はしてきた。そして、私は、その献身に無頓着ではいなかった。君も、また、いつか永遠の王国で私と共に仕えるであろう。」と言った。

182:2.11 (1967.6) そして、次に、ダーヴィドは、上手の小道での見張りに行く準備をしながらイエスに言った。「あるじさま、あなたは、私があなたの家族に使いを送ったことをご存じで、皆さんは、今宵イェリーホにいるという使者からの知らせを得ました。皆さんは、血なまぐさい道を夜来るのは危険でありますから、明日午前中に早くここに来られるでありましょう。」すると、イエスは、ダーヴィドを見下ろして「そのままでよい。ダーヴィド。」とだけ言った。

182:2.12 (1967.7) ダーヴィドがオリーヴ山に行ってしまうと、ヨハネ・マルコスは、小川沿いにエルサレムへ続く道路の近くで不寝番をしていた。ヨハネは、イエスの近くにいて起こっていることを知るという大きい願望がなければこの場に居続けるつもりであった。ダーヴィドが去った直後、イエスがペトロス、ジェームス、ヨハネと近くの峡谷の方に離れていくのを見掛けるとヨハネ・マルコスは、献身と好奇心が合わさった感情に負け、歩哨の役を捨てて彼等の後をつけていき、繁みに身を隠し、そこから、庭での最後の瞬間からユダと武装した番人達がイ

エスの逮捕に現れる直前までに起きた全てを見、立ち聞いた。

182:2.13 (1968.1) このすべてがあるじの野営場で進行中、ユダ・イスカリオテは、寺院の護衛長と会議中であり、この護衛長は、裏切り者の導きの下、イエス逮捕に出掛けるに当たり部下を召集した。

3. ゲッセマネにて一人

182:3.1 (1968.2) 野営場周辺ですべてが穏やかで静かになると、ペトロス、ジェームス、ヨハネを連れたイエスは、以前しばしば祈りと親交に出掛けた近くの峡谷へと少しの道のりを行った。３人の使徒は、イエスが悲しいほどに圧迫されていると気づかざるを得なかった。かつて、かれらは、非常に心配事が多く悲しい様子のあるじを一度も見たことがなかった。祈りと親交の場に到着すると、イエスは、自分が祈りにいく間、石を投げれば届くほどの距離に３人に座って見るように言いつけた。そして、イエスは、俯せになると祈った。「父よ、私は、あなたの意志を為すためにこの世界にきて、そのように致しました。私は、肉体のこの命を捨てる時の来たことが分かっ

ており、そこで怯んではいません。それどころか、この杯を飲むのがあなたの意志であると思いたいのです。ちょうど私の人生でそうしましたように、私の死があなたを喜ばせるという確信を私にお送りください。」

182:3.2 (1968.3) あるじは、しばらくの間祈りの姿勢のままでいたが、それから、使徒の方へ行きぐっすり眠っている3人を見つけた、というのも、彼らは眠くて目を覚ましていることができなかったのである。イエスは、彼らを起こして、「何ということだ。君達は、1時間も起きていることができないのか。私の魂は、甚だ悲しく、君達との交わりを切望しているのが分からないのか。」と言った。3人が微睡から覚めると、あるじは、再び離れて行き、地面に腹這い再び祈った。「父よ、この杯を避けることは可能である—あなたには万事が可能であります—ことは分かっておりますが、私は、あなたの意志をしに来ました。これは、苦杯でありますが、それがあなたの意志ならば、私は飲みます。」イエスがこのように祈ったとき、強力な天使が、イエスの側に下りてきて話しかけながら触れて力づけた。

182:3.3 (1968.4) イエスは、３人の使徒と話そうと戻ってくると、再びぐっすりと眠っている３人を見つけた。かれは、彼らを起こして言った。「君が私を見張り、共に祈るべき必要のある—誘惑に陥らないようさらに祈る必要がある—そのような時間に、私が君を置き去りにするとき、なぜ君は、寝入ってしまうのか。」

182:3.4 (1968.5) それから、あるじは、３度目に離れて行って祈った。「父よ、あなたは、私の眠っている使徒をご覧になっておられます。彼等に慈悲をお与えください。精神は本当に望んでいるのですが、肉体は虚弱であります。今、ああ、父よ、どうしても飲まずにはすまされない杯ならば、私は、進んでそれを飲みます。私の思いのままにではなく、あなたの思いのままになさってください。」そして、祈り終えても少しの間、かれは、地面にひれ伏していた。彼が、立ち上がりもう一度使徒の所に戻ってみると、３人は、またもや眠っていた。イエスは、３人を見渡し、哀れむ身振りで優しく言った。「いまは続けて眠り、休みなさい。決定の時間は終わった。人の息子が、裏切られ敵の手に渡る時が今迫っている。」かれは、彼らを揺すって起こすために手を延ばし

て、「起きなさい。私を裏切る者が手近にきているから、野営場に、戻ろう。そら、私の群れが分散するその時間が来た。ただし、これらの事は、私は、もうすでに話したことだ。」

182:3.5 (1968.6) イエスが追随者の間で暮らしたその歳月、彼らは、本当に、イエスの多くの神性の証を得たが、まさにこの時、イエスの人間性の新たな証を目撃しようとしているのであった。イエスの神性の全顕示の中の最大の出来事の直前、イエスの復活が、イエスの人間の本質の最大の証し、イエスの屈辱と磔刑が、今、来なければならない。

182:3.6 (1969.1) 庭で祈るたびに、その人間性は、彼の神性をゆるぎない信仰でとらえた。その人間の意志は、父の神性意志とより完全に１つになった。強力な天使が彼に話した他の言葉の中には、ちょうどすべての必滅の被創造物が、時間の存在から永遠の前進へと通過する際に物質的な分解を経験しなければならないように、父は、その息子が、生物の死の経験を潜り抜けることによって彼の地球贈与の終了を望んでいるという伝言であった。

182:3.7 (1969.2) その杯を飲みほすことは、宵の口にはそれほど難しくは思えなかったが、人間のイエスが使徒達に別れを告げ、休みにいかせると、試練は、凄まじくなった。イエスは、すべての人間の経験に共通するその自然な感情の起伏を経験し、ちょうどその時は仕事で疲れきり、長時間の精力的な作業と使徒の安全に関する苦痛を伴う心労で疲れ果てていた。必滅者は、このような時に、肉体をもつ神の息子の考えや気持ちを理解さえできない一方、我々は、大粒の汗が彼の顔を流れたので、イエスが甚だしい苦痛に耐え、計りしれない悲しみに苦しんだことが分かっている。イエスは、父が、出来事を自然の進行のままにしておくつもりであるとついに確信した。かれは、自分を救うために宇宙の最高者としての主権のいずれも使わないと完全に決心していた。

182:3.8 (1969.3) 広大な宇宙の集合した軍勢は、ガブリエルとイエスの専属調整者の一時的な共同指揮権下のこの場面の上にその時いた。天のこれらの軍隊の師団長達は、イエス自身が彼らに介入を命じない限り、地球でのこれらの業務を妨げないように繰り返し警告した。

182:3.9 (1969.4) 使徒との別離の経験は、イエスの人間の心にとり非常に重い負担であった。愛のこの悲しみは、彼に押し寄せてきて、自分を待ち受けていると熟知しているそのような死に直面することをより難しくした。かれは、使徒達が、いかに弱く、いかに無知であるかを実感し、そこで彼らの元を去ることを恐れた。かれは、出発の時が来たことを充分に承知はしていたが、その人間の心は、もしかして苦しみと悲しみのこのひどい状態から逃れる何らかの意に適う手段はないか探り当てたいと切に願った。そして、このように脱出を求め、失敗したときに、喜んで杯を飲むことを望んでいた。マイケルの神性の心は、12人の使徒のために自分が最善をつくしたことを知ってはいたが、イエスの人間の心は、世界に彼らを放りっぱなしにする前に、もっと多くのことをしてやれたらと願っていた。イエスの心は、押し潰されていた。かれは、本当に同胞を愛していた。かれは、肉体をもつ家族から孤立していた。選ばれた仲間の1人は、彼を裏切っていた。父ヨセフの親族は、彼を拒絶し、その結果、地球での特別な任務をもつ民族としてのその終わりを決定づけた。彼の魂は、困惑する愛と拒絶された慈悲

の拷問を受けた。それは、すべてが粉砕する残酷さと恐ろしい苦悶が押し寄せてくるように思えるそれらの人間のひどい瞬間の1つであった。

182:3.10 (1969.5) イエスの人間性は、個人の孤独、公共での恥、自分の目的の失敗の見た目のこの状況に無感覚ではなかった。すべてのこれらの感情が、例えようもない重さで押し寄せてきた。この大きい悲しみの中、彼の心は、ナザレでの幼年期の日々とガリラヤでの初期の仕事へと戻っていった。この大いなる試練の時、地球での任務のそれらの楽しい情景の多くが、心に浮かんだ。そして、彼の人間の心を強くして自分を宥め、とても早く自分を裏切る反逆者に直面する準備ができたのは、ナザレ、カペルナム、ヘルモン山、そして燐くガリラヤ湖の日の出と日の入りのこれらの過去の思い出からであった。

182:3.11 (1969.6) ユダと兵士達が到着する前に、あるじは、通常の落ち着きを完全に取り戻していた。精霊は、肉体を打ち負かした。信仰は、恐れたり疑いを抱くというすべての人間の傾向に優位を占めた。人間性の完全な認識の

最高の試験に直面し、無事に合格した。もう一度、人の息子は、無条件に父の意志を為すことに捧げた必滅の人間として平静に、完全な不屈の確信で敵に直面する用意ができていた。

論文 183
イエスへの裏切りと逮捕

183:0.1 (1971.1) イエスは、ペトロス、ジェームス、ヨハネをようやく起こし、彼らにそれぞれの天幕に行き、翌日の責務に備えて睡眠をとるように勧めた。しかし、３人は、このときまでにすっかり目覚めていた。かれらは、短い仮眠で活力を与えられ、その上、２人の興奮した使者が到着し、ダーヴィド・ゼベダイオスについて尋ね、面会を求め、ペトロスが彼の見張り場所を教えると、すばやく探しにいった彼らに励まされ刺激された。

183:0.2 (1971.2) ８人の使徒は、熟睡していたが、横で野営していたギリシア人達は、　さらなる難事を恐れ、危険発生に備えて警報をだす歩哨をたてるほどであった。これらの２人の使者が野営に急いで出掛けると、ギリシア人の歩哨は、同国の仲間の全員を起こしていた。８人の使徒を除き、今や全野営の者達は、起こされていた。ペトロ

スは、仲間を招集したかったが、イエスは、かたく禁じた。あるじは、各自の天幕に戻るように穏やかに諭したが、かれらは、その勧めに従う気がしなかった。

183:0.3 (1971.3) あるじは、追随者を解散させることができないので、彼らを残してゲッセマネ公園の入り口近くにあるオリーブ圧搾機の方に歩いて下りた。3人の使徒、ギリシア人、それに野営の他の成員は、あるじをすぐに追うことを躊躇ったが、ヨハネ・マルコスは、急いでオリーブの木々の周りを通り抜け、オリーブ圧搾機の近くの小屋に身を隠した。イエスは、捕縛者達が到着したときに、使徒達の邪魔をすることなく自分が逮捕されるために野営と友人達から退いた。あるじは、ユダの裏切りの光景が、使徒達に兵士へ抵抗させたり、自分と共に逮捕されるほどの敵意を喚起させないように、彼らが、目を覚ましたり、自分の逮捕の場に居合わせることを恐れた。かれは、もし彼らが共に捕らえられるならば、自分と共に死ぬことになるかもしれないと恐れた。

183:0.4 (1971.4) イエスには、自分への死の計画が、ユダヤの支配者達の委員会にその本元があると分かっていたが、全

てのそのような邪悪な企みにはルーキフェレーンス、魔王、カリガスティアの完全な承認があることもまた知っていた。そして、この領域のこれらの反逆者もまた、使徒全員が自分と共に掃滅されることを見て喜ぶことがよく分かっていた。

183:0.5 (1971.5) イエスは、一人でオリーブ圧搾機に座り、そこで裏切り者の到来を待ち受けていたが、このとき、ヨハネ・マルコスと無数の天の観察者の軍勢だけが、イエスを見ていた。

1. 父の意志

183:1.1 (1971.6) 肉体でのあるじの経歴の終了に関連した多くの言い伝えや出来事の意味を誤解するという重大な危険がある。無知な使用人達と冷淡な兵士達のイエスへの残酷な扱い、不公平な裁判の執行、見せかけの宗教指導者達の冷酷な態度と、イエスが、我慢強くこのすべての苦しみと屈辱に甘受して、真に楽園の父の意志をしているという事実とが、混同されてはならない。実際に本当に、息子が誕生から死までの必滅者の経験の杯をまるごと飲み干すことは、父の意志であったが、天の父は、あるじ

をひどく情け容赦なく拷問に掛け、無抵抗の肉体にそれほどに恐ろしく継続的な侮辱を幾度となく加えた文明的とされている人間達の野蛮な振舞いを扇動することとはまったく無関係であった。イエスが、必滅の人生の最後の数時間を耐えることを求めれらた無慈悲で衝撃的なこれらの経験は、いかなる意味においても父の神性意志、つまり疲れきった使徒が肉体的な疲労困憊で睡眠をとる間、彼が庭で詠んだ三重の祈りに示されるように、イエスの人間性が、神に対する人間の最終的な引き渡しの時点で実行する非常に誇らしげに誓約した神性意志、の一端ではなかった。

183:1.2 (1972.1) 天の父は、ちょうどすべての必滅者が、地球での肉体の生命を終えなければならないように、贈与の息子が地球での経歴を自然に終えることを望んだ。通常の男女は、特別な配剤により地球での最後の数時間、また、死に続いて起こる出来事が容易くあることを期待することはできない。従って、イエスは、自然の出来事の展開に合わせた方法で、肉体の命を横たえることを選び、そして、信じ難い屈辱と不名誉な死に向かう恐ろしい確実性にさっと押し流す非人間的な出来事の邪悪な陰

謀の容赦ない手中に陥ることからの脱出を堅く拒否した。そして、この驚くべき憎悪の現れやこの先例のない残酷さの示威の全てが、凶悪な人間と邪悪な必滅者達の仕業であった。天の神は、それを望んでいなかったし、イエスの宿敵も、考えのない邪悪な必滅者達が、贈与の息子をこのように拒絶することを保証するために多くのことをしたものの、それを望んではいなかった。罪の父でさえ、磔の場面の耐えがたい惨事からは顔を逸らした。

2. 都でのユダ

183:2.1 (1972.2) 最後の晩餐中、ユダは、あまりにも突然に食卓を離れ、まっすぐ従兄弟の家に行き、２人で一直線に寺院の護衛長のところに行った。ユダは、護衛長に兵を召集するように頼み、また自分が兵をイエスへと導く用意ができていると知らせた。ユダは、予定よりも少し早くその場に現れたが、まだ使徒と雑談をしているイエスを見つけられると期待するマルコスの家への出発に若干の遅れがあった。あるじと11人は、裏切り者と護衛が到着するたっぷり15分前にはエーリージャ・マルコスの家を出た。捕縛者達がマルコスの家に達するまでには、イエ

スと11人は、都の外壁をかなり離れてオリーヴ山の宿営地へと近づいていた。

183:2.2 (1972.3) ユダは、マルコスの屋敷において、そのうちの2人だけが武装している11人の男と一緒のイエスの発見のしくじりに非常に狼狽した。かれは、皆が野営を去る午後に、シーモン・ペトロスとシーモン・ゼローテースだけが剣を差しているのを偶然知った。ユダは、都がひっそりとしているときに、そして抵抗の見込みがほとんどないときに、イエスを連行したかった。裏切り者は、皆が宿営所に戻るのを待つならば、60人以上の忠実な弟子に遭遇することを恐れたし、シーモン・ゼローテースには十分な武器格納のあることも知っていた。ユダは、11人の忠誠な使徒が、自分をひどく嫌悪するかに思いを巡らし、ますます神経質になっており、皆が、自分を滅ぼそうとするであろうと恐れた。ユダは、不忠実であるだけでなく、心底からの臆病者であった。

183:2.3 (1973.1) 彼らが、イエスを上階に発見できなかった時点で、ユダは、寺院に戻るように護衛長に求めた。この時までに、支配者達は、当日の真夜中までにイエスの逮捕

を求めた謀反者との取り引きがあると分かっていたので、イエスの引き取りのために大祭司の家に集合し始めていた。ユダは、マルコスの家でイエスを逃したということ、そして逮捕のためにはゲッセマネに行く必要のあることを仲間に説明した。裏切り者は、60人以上の熱心な追随者がイエスと共に野営しており、全員が完全に武装していると述べ続けた。ユダヤの支配者達は、イエスは、いつも無抵抗を説いていたことをユダに念を押したが、ユダは、イエスの全追随者がそのような教えに従うことを当てにはできないと答えた。かれは、本当に自分の身を恐れていたので、敢えて40人の武装兵士の一団を要請した。ユダヤ当局は、その管轄下にそのような武力を保持しておらず、すぐにアントニアの砦に行き、この警備人員を自分達に託すようにローマ指揮官に要請した。しかし、彼らがイエスを逮捕するつもりであると知ると、かれは、要求に応じることを即座に拒否し、彼の上官を紹介した。このように、かれらは、ローマの武装歩哨兵の使役の許可を得るために1当局から別の当局へと行き、最終的にはピラト自身のもとに行く羽目になったときには1時間以上も費やしていた。彼らがピラトの

家に遅く到着すると、かれは、すでに妻と私室に退いていた。かれは、その企てへの何らかの関係を躊躇った。妻が要求を承諾しないように彼に頼んでいたのでなおさらであった。しかし、総督は、ユダヤ人のシネヅリオン派の議長が出席し、そしてこの援助を直接要求する限り、ユダヤ人がいかなる間違いをしようとも後で訂正できると考え、陳情を許可するのが賢明であると考えた。

183:2.4 (1973.2) 依って、ユダ・イスカリオテが11時半頃寺院を出発するときは、60人以上の者—寺院の護衛、ローマ兵、それと祭司長等と支配者の下で働く好奇心の強い使用人達—を同伴していた。。

3. あるじの逮捕

183:3.1 (1973.3) 松明と提灯を手にしたこの武装兵士と護衛が庭に接近すると、ユダは、イエスの仲間が防衛のために結集できる前に、捕縛者達が容易にイエスに手を掛けられるよう素早くイエスを識別するために隊列のかなり前に出た。ユダがあるじの敵の前にいることを選んだのには、さらに別の理由があった。ユダは、イエスの周りに集まる使徒と他のものが、すぐ後ろに迫る武装の護衛と

自分とを直接関係づけないように、自分が兵士よりも先にその場に到着したように見えるであろうと考えた。ユダは、捕縛者達の来ることを警告するために取り急ぐような態度をとることを考えさえしたが、この案は、イエスが裏切り者の挨拶を挫いたことで台無しとなった。あるじは、親切にユダに話し掛けたが、ユダは裏切り者として挨拶した。

183:3.2 (1973.4) ほぼ30人の仲間の宿営者と共にいるペトロス、ジェームス、ヨハネは、丘の崖の辺りに松明を持つ揺れ動く武装隊を見るなり、これらの兵士がイエスを逮捕しに来ていることを知り、あるじが一人月明りに座っているオリーブ圧搾機の近くへと殺到していった。兵士の一団が片側に近寄ると、３人の使徒とその仲間は、その反対側に接近した。ユダが近寄ってあるじに話しかけるために大股で歩くとき、動きのない２つの集団は、あるじを挟んで並んでおり、ユダは、あるじの額に裏切りの接吻をする用意をしていた。

183:3.3 (1974.1) 護衛をゲッセマネへと率いた後、単に兵士にイエスを指し示すか、せいぜい接吻で迎える約束を実行

し、すぐにその場から退くことができるというのが、裏切り者の望みであった。ユダは、使徒全員が居合わせるということ、そして、使徒達が、最愛の師への彼の大胆な裏切りへの報復攻撃の集中を大いに恐れた。しかし、あるじが裏切り者としての彼に挨拶したとき、ユダは、逃げる試みもしないほどに非常に混乱していた。

183:3.4 (1974.2) イエスは、裏切り者の手が自分に届く前に、実際の裏切りからユダを救おうと最後の努力をして、傍らに寄り左側の最前列の兵士のローマ軍の隊長に「だれを探しているのか。」と言った。隊長は、「ナザレのイエス」と答えた。すると、イエスは、役人の正面にすぐ歩み寄り、すべてのこの創造の神の穏やかな威厳で立ち、「私がそれである。」と言った。この武装隊の多くの者は、イエスが寺院で教えるのを聞いたことがあり、他の者は、その甚だしい働きについて知っており、そして、イエスがこのように大胆に身分を明かすのを聞くと、前方数列の者達は、突然後退した。かれらは、イエスの穏やかで厳然とした身分の発表に驚かされた。したがって、ユダは、裏切りの計画を続ける必要はなかった。あるじは、大胆にも正体をあかし、かれらは、ユダの援助

なしで彼を連行することができた。しかし、裏切り者は、この武装隊との自分の出現を説明すべく何事かをしなければならなかった。それに加えて、かれは、イエスを彼らの手に委ねるという約束に対する報償が積み上げられると自らが信じる大きな報酬と名誉に相応しくあるように、ユダヤ人の支配者達との裏切りの契約の実行を示したかった。

183:3.5 (1974.3) 護衛達が、イエスを見て、その常にない声の調子に対する初めての躊躇いから持ち直したので、そして使徒と弟子が近づいていたので、ユダは、イエスのところまで歩み寄り、イエスの眉に口づけをし、「万歳、あるじさま、先生。」と言った。ユダがこのように抱擁すると、イエスは、「友よ、これをするだけでは足りないのか。口づけでも人の息子を裏切りたいのか。」と言った。

183:3.6 (1974.4) 使徒と弟子は、自分達が見たことに文字通り唖然とした。暫くはだれも動かなかった。次に、イエスは、ユダの反逆の抱擁から自分を解き放ち、護衛と兵士達に歩み寄り、「だれを探しているのか。」と再び尋ね

た。そこで隊長は、再度、「ナザレのイエス」と言った。イエスは、また答えて「私がそうであるとすでに言った。だから、私を探しているのなら、これらの他の者を行かせなさい。私は、あなたと一緒に行く準備ができている。」

183:3.7 (1974.5) イエスは、護衛とエルサレムに戻る準備ができており、兵士の隊長は、３人の使徒とその仲間を穏やかに行かせることを望んでいた。しかし、かれらが出発できる前に、イエスが隊長の命令を待ち受けてそこに立っていると、ローマ隊長は、そのように縛るようにと指示していないにもかかわらず、マルホスという大祭司のシリア人の護衛が、イエスに近寄りその両手を後ろで括る構えをした。ペトロスと仲間は、あるじがこの侮辱を免れないことを見ると、もはや自分たちを抑えることができなかった。ペトロスは、剣を抜き、他とともに、マルホスを襲いに突進した。しかし、兵士達が大祭司の下僕の防衛に行くことができる前に、イエスは、ペトロスに向かい制止の手を上げ厳しく言った。「ペトロス、剣を戻しなさい。剣を取る者は剣で死ぬのである。私がこの杯を飲むことが、父の意志であるということが分からな

いのか。私がたった今、これらのわずかな者の手から私を救い出す天使とその仲間の10隊以上の軍団に命令できるということが、君にはなおもって分からないのか。」

183:3.8 (1975.1) イエスは、こうして追随者による身体的な抵抗のこの誇示を効果的に制する一方、それは、護衛隊長の恐怖を刺激するには十分であった。その護衛隊長はそのとき、兵士の助けでイエスに荒っぽく手を掛け、すぐに彼を縛った。彼らが重い紐で手を縛ったので、イエスは、言った。「あなたはまるで強盗を差し押えるかのように私に剣と杖で相対するのか。私は、公に人々に教え、あなたと共に毎日寺院にいたが、あなたは私を連れ去る努力もしなかったではないか。」

183:3.9 (1975.2) イエスが捕縛されてしまうと、隊長は、あるじを救おうとするかもしれないと恐れ、追随者達も捕らえる命令を出したが、イエスの追随者達は、捕らえよとの隊長の命令を漏れ聞いて、峡谷へと急いで逃げ戻ったので、兵士達は間に合わなかった。ヨハネ・マルコスは、この間ずっと近くの小屋に隔離状態でいた。護衛達がイエスを連れエルサレムへ向けて出発すると、ヨハネ・マ

ルコスは、逃げる使徒と弟子に追いつこうと小屋からそっと抜け出そうとした。しかし、出てきたところでちょうど、逃げる弟子達を追跡して戻りかかる最後の兵士の1人が、近くを通り掛かり、麻の上衣を着たこの青年を見て、後を追いかけほぼ追いついた。事実、兵士は、その上衣を掴み、ヨハネに十分近づいたが、青年は、衣類から自由になり、兵士が上衣だけを掴んでいるうちに裸で逃げた。ヨハネ・マルコスは、大急ぎで上手の道をダーヴィド・ゼベダイオスへと向かった。彼が、何があったかをダーヴィドに話すと、二人は、共に眠っている使徒の天幕に取り急いで戻り、８人全員にあるじへの裏切りと逮捕を知らせた。

183:3.10 (1975.3) ８人の使徒が起こされた時刻、峡谷に逃れた者は、帰還してきており、彼らは全員、すべきことについて討論するためにオリーブ圧搾機近くに集まった。そうしているうちにも、オリーブの木の間に隠れていたシーモン・ペトロスとヨハネ・ゼベダイオスは、無謀な犯罪者を導いてでもいるように、その時イエスをエルサレムへ引き戻していた兵士、護衛、使用人の暴徒の後をすでに追い掛けていった。ヨハネは、暴徒のすぐ後をつけ

たが、ペトロスは、遠くから続いた。兵士の手中からの脱出後、ヨハネ・マルコスは、シーモン・ペトロスとヨハネ・ゼベダイオスの天幕で見つけた外套を身に纏った。かれは、護衛がイエスをハナンージャ、名誉退職の大祭司の家に連れるつもりであると推測した。それで、かれは、オリーブ園に沿って行き、暴徒の先回りをし、大祭司の宮殿の門への入り口附近に隠れていた。

4. オリーブ圧搾機での議論

183:4.1 (1975.4) ジェームス・ゼベダイオスは、シーモン・ペトロスとその弟ヨハネとはぐれたと気づき、あるじの逮捕を考慮して、すべきことについてとくと考えるためにオリーブ圧搾機の側で他の使徒や宿営仲間にそのとき合流した。

183:4.2 (1975.5) アンドレアスは、使徒仲間の組織管理における全責任から解き放たれていた。したがって、かれは、自分達の人生の最大危機に際して黙していた。短い非公式の議論の後、シーモン・ゼローテースは、オリーブ圧搾機の側の石垣に立ちあがり、あるじと王国目標への忠誠のための熱のこもった訴えをし、急いで暴徒の後に続

き、仲間の使徒と他の弟子にイエスの救出を実行するように熱心に勧めた。シーモンが話し終えた瞬間に立ち上がり、しばしば皆に反復した無抵抗に関するイエスの教えに注意を向けさせたナサナエルの忠告がなかったならば、仲間の大半は、シーモンの攻撃的な指導力に続く気になったことであったろう。ナサナエルは、イエスが、まさしくその夜、皆に天の王国の福音の朗報を宣言して世界へ出て行く時のために、自分達の生命を保持するべきであると命じたことを彼等に思い出させた。ナサナエルは、この主張に関してあるじを逮捕から守るためにいかにペトロスと他の仲間が剣を抜き、また、イエスが、シーモン・ペトロスとその仲間の剣術使い達に鞘を納めるように命じたかをたった今話したジェームス・ゼベダイオスに勇気づけられた。マタイオスとフィリッポスも弁舌したものの、トーマスが、イエスは、ラーザロスに自らを死に晒さないように忠告したという事実に彼らの注意を促したこと、彼の友人達に自分を防衛をさせようとしない限り、また、人間の敵に対して神性の力の行使を控えることに固執しているので、あるじを救うための何事もし得ないということを指摘するまで、この議論か

らは確かな何も生まれなかった。トーマスは、ダーヴィド・ゼベダイオスが、一団のために広報機関と使者の本部維持のために宿営所に残るであろうと理解したうえで、各自が、身を守り、離散するように説得した。その朝２時半までには、この宿営所は、放置された。ただダーヴィドだけが、３、４人の使者と近くに留まり、他の者は、イエスがどこに連れて行かれたか、いかなる扱いを受けるのかについて確かな情報を得るために派遣されていた。

183:4.3 (1976.1) ５人の使徒、ナサナエル、マタイオス、フィリッポス、双子達は、ベスファゲやベサニアに身を隠した。トーマス、アンドレアス、ジェームス、シーモン・ゼローテースは、都に隠れた。シーモン・ペトロスとヨハネ・ゼベダイオスは、共にハナンージャの家へ行った。

183:4.4 (1976.2) 夜明け直後、打ち萎れ、深い絶望そのもののシーモン・ペトロスは、ゲッセマネの宿営へとさ迷い歩いて戻った。ダーヴィドは、ペトロスを使者に託し、エル

サレムのニコーデモスの家にいる彼の兄弟であるアンドレアスに合流させるために行かせた。

183:4.5 (1976.3) イエスの指示通り、磔のまさしくその終わりまで、いつも近くに残り、庭園の宿営所のダーヴィドの使者達に刻一刻の情報をもたらしたのは、ヨハネ・ゼベダイオスであり、そしてその情報は、潜伏中の使徒とイエスの家族に伝達された。

183:4.6 (1976.4) 誠に、羊飼いは打ちひしがれ、羊達は散り散りであった。イエスがまさしくこの状況について予め警告したと、彼らにはばく然とは分かるのであるが、あるじの突然の失踪に通常心を働かせるにはあまりにも激しい衝撃を受けた。

183:4.7 (1976.5) 夜明けの後間もなく、そして、ペトロスが兄弟に合流するために送り出された直後、また、イエスの残りの家族が到着する前、ほとんど息のできないありさまで、人間イエスの弟ユダは、宿営所に到達したが、あるじがすでに逮捕されたということを知ったに過ぎなかった。そこで、母と弟妹にこの情報を伝達するためにイェリーホ街道へと急いで戻った。ダーヴィド・ゼベダイオ

スは、ユダに託して、ベサニアのマールサとマリアの家に集まり、そこで使者が定期的にもたらす知らせを待ち受けるようにとイエスの家族に伝言を送った。

183:4.8 (1976.6) これが、使徒、主要な弟子、およびイエスの地球の家族に関する木曜日の夜の後半と金曜日の早朝の間の状況であった。そして、すべてのこれらの集団と個人は、ダーヴィド・ゼベダイオスが、ゲッセマネ宿営所の本部からの嫁働し続けた使者活動によって互いの連絡を取り続けた。

5. 大祭司の宮殿へ行く途中にて

183:5.1 (1977.1) 庭からイエスを連行する前に、寺院護衛のユダヤ人の隊長と兵士一団のローマ隊長の間で、イエスをどこに連れて行くかで揉め事が起きた。寺院の護衛隊長は、カイアファス大祭司の元へ連れるように命じた。ローマ兵隊長は、元大祭司でカイアファスの義父であるハナンージャの宮殿へ連れるように指示した。そして、これは、ローマ軍は、ユダヤ人の教会法の施行に関係する全ての問題において直接ハナンージャと対応する習慣にあったからそうしたのであった。そして、ローマ隊長の

命令に従った。かれらは、下検分のためにイエスをハナンージャの家に連行した。

183:5.2 (1977.2) ユダは、隊長達の言うこと全てを漏れ聞きながら、ただし言い合うこともなく彼らの近くをずっと行進した、なぜならば、ユダヤ人隊長もローマ将校も裏切り者には話しさえしなかったので—かれらは、ユダを非常に軽視した。

183:5.3 (1977.3) この頃、ヨハネ・ゼベダイオスは、いつも近くに留まるようにとのあるじの指示を思い出しながら、2人の隊長の間に沿って行進するイエスの近くへと急いだ。並んでついて来るヨハネを見て寺院の護衛指揮官は、下士官に言った。「この男を取り押さえて縛りあげよ。あいつは、こいつの追随者の一人である。」しかし、ローマ隊長は、これを聞き、ヨハネを見ると、辺りを見回し、この使徒は、自分の方に来させるように、また、危害を加えないようにとの命令を与えた。次に、ローマ隊長は、ユダヤ人隊長に言った。「この男は、反逆者でもなく臆病でもない。私は、彼に庭で出会ったが、我々に抵抗するために剣を抜きはしなかった。この男に

はあるじとともに居ようと進み出て来る勇気がある。そこで、誰も手出しをするではない。ローマ法は、どんな囚人にも少なくとも友人1人を法廷に控えさせることを許している。そして、この男が、そのあるじ、すなわちこの囚人の側に立つことを妨害させてはならない。」ユダは、これを聞くと、非常に恥じ凌辱を受けたので、行進者の後方に下がり、ハナンージャの宮殿に一人で近づいた。

183:5.4 (1977.4) そして、これが、なぜヨハネ・ゼベダイオスが、この夜とその翌日イエスの辛い経験の間、その近くに留まることを許されたかを説明する。ユダヤ人は、ユダヤ人の宗教法廷でのやりとりの観察者として機能するようにローマ人の相談役に指名されたような身分であったので、何にせよヨハネに言ったり、または何らかの方法で危害を加えることを恐れた。ハナンージャの宮殿の門で寺院の護衛隊長にイエスを引き渡す際、そのローマ隊長が、下士官に「これらのユダヤ人が、ピラトの同意なしにこの囚人を殺さないのを見届るためについて行くように。彼らがこの囚人を暗殺せぬよう、同時に、友人のガリラヤ人が側にいることが許されることを確かめ、

起こること全てを観察せよ。」と言ったとき、ヨハネの特権の位置は一層確実となった。ヨハネは、他の10人の使徒は、身を隠さざるをえなかったにもかかわらず、このようにして十字架でのその死の時間までイエスのごく近くにいることができた。ヨハネは、ローマの保護の下に行動しており、ユダヤ人達は、あるじの死後まで危害を加える勇気はなかった。

183:5.5 (1977.5) イエスは、ハナンージャの宮殿までずっと口を開かなかった。その逮捕の時からハナンージャの前に現われるまで、人の息子は、一言も話さなかった。

論文 184
シネヅリオン派の法廷において

184:0.1 (1978.1) ハナンージャの代表者達は、イエスの逮捕後、すぐにハナンージャの宮殿に連れて来るように秘かにローマ兵の隊長に指示していた。元大祭司は、ユダヤ人の主要な教会の権威者として自己の威信の維持を欲していた。かれはまた、イエスを自分の家に数時間引き留めるに当たり、別の目的があり、それは、シネヅリオン派の法廷に合法的に集合させるための時間の確保のためであった。寺院の朝の生贄奉納前にシネヅリオン法廷を召集

することは、合法的ではなく、この生贄は、午前３時頃に奉納された。

184:0.2 (1978.2) ハナンージャは、シネヅリオンの裁判官達が、娘婿のカイアファスの宮殿で待ちうけていることを知っていた。およそ30人のシネヅリオン派は、イエスが連行されてきたとき、裁ける態勢でいられるように真夜中までに大祭司の家に集まった。審理法廷を構成するには、23人だけを必要としたので、イエスとその教えに強硬にあからさまに反対する者達だけが集められた。

184:0.3 (1978.3) イエスは、逮捕されたゲッセマネの園から遠くないオリーヴ山のハナンージャの宮殿においておよそ3時間を過ごした。ヨハネ・ゼベダイオスは、ハナンージャの宮殿で自由であり、安全であったのは、ローマ隊長の言いつけばかりではなく、元大祭司は、自分達の母サロメの遠縁であったことから幾度も宮殿の客となり、兄ジェームスとヨハネも、　古くからの使用人によく知られていたからであった。

1. ハナンージャによる検分

184:1.1 (1978.4) 寺院からの収入で豊かになり、娘の夫が大祭司代理であり、またローマ当局との本人自身の関係において、ハナンージャは、誠にもって全ユダヤ社会における最も強力な個人であった。かれは、人当たりがよく、巧妙な計画者であり、陰謀者であった。かれは、イエスの処分問題における指揮を望んでいた。かれは、そのような重要な仕事を無愛想で攻撃的な義理の息子に完全に任せることを恐れた。ハナンージャは、あるじの裁判が確実にサドカイ派の指揮のもとにあることを欲した。かれは、実際にイエスの主義を信奉したシネヅリオン派のそれらの会員のほとんどが、パリサイ会員だったことが分かり、数人のパリサイ派の同情の可能性を恐れた。

184:1.2 (1978.5) あるじが、その家を訪問し、自分を迎えた際のその冷淡さと控え目な態度に気づきすぐに去って以来、ハナンージャは、数年間イエスに会ってはいなかった。ハナンージャは、この遠い昔の面識につけ込み、それにより、イエスが、自分の主張を捨ててパレスチナを去るように説得を試みようと考えた。かれは、善良な男の殺人に参加することには気が重く、また、イエスが、死ぬよりはむしろ国を去ることを選ぶかもしれないと推論し

た。しかし、逞しく決然たるガリラヤ人の前に立ったとき、ハナンージャは、すぐにそのような提案をすることは無益であることが分かった。イエスは、ハナンージャが記憶していたよりもはるかに厳然とし、まことに平静であった。

184:1.3 (1979.1) イエスの若かりしとき、ハナンージャは、彼に大きな関心を持ったことがあったが、そのときハナンージャの収入益は、イエスのごく最近の両替商や商人の寺院からの追放により脅かされていた。この行為は、イエスの教えによりもはるかに、元大祭司の敵意を喚起してしまった。

184:1.4 (1979.2) ハナンージャは、その広々とした謁見の間に入り、自らは大きい椅子に着席し、イエスを連れて来るように命じた。かれは、静かにあるじを検分し、少し間をおいてから言った。「あなたは、我が国の平和と秩序を妨げており、その教えに関し何かが為されねばならないと、あなたには、分かっている。」ハナンージャが不審そうにイエスを見ると、あるじは、ハナンージャの目に見入ったが、何の返答もしなかった。再びハナンージ

ャは、「扇動者シーモン・ゼローテースの外に弟子達の名前は、何であるか。」と、尋ねた。イエスは彼を見おろしていたが、答えなかった。

184:1.5 (1979.3) ハナンージャは、自分の質問に対するイエスの応答拒否にかなり動揺し、「私があなたに好意的であろうがなかろうが何の心配もないのか。来たるあなたの裁判問題での私の持つ決定力に何の注意も払わないのか。」と言うほどであった。これを聞いたイエスは、言った。「ハナンージャ、私の父に許されない限り、あなたが私の上にいかなる力も持ち得ないということをあなたは知っている。ある者は、無知であるが故に人の息子を滅ぼすであろう。彼らには分別がないが、あなたには、友よ、自分のしていることが分かっている。それなのに、どうして、あなたは神の光を拒絶することができるのか。」

184:1.6 (1979.4) イエスが親切に話す態度に、ハナンージャは、もう少しでうろたえるところであった。だが、かれは、心ではイエスがパレスチナを去るか、さもなければ、死ななければならないと、すでに決心していた。したがっ

て、ハナンージャは、勇気を奮い起こして、「あなたが人々に教えようとしているのは、いったい何であるのか。何を主張しているのか。」と尋ねた。イエスは答えた。「あなたは、私が公然と世界に話したことをよく知っている。私は、ユダヤ教の会堂や寺院で何回も教えた。そこでは、すべてのユダヤ人と多くの非ユダヤ人が私の話を聞いた。私は、秘密裏には何も話してはいないのに、なぜあなたは、私の教えに関して尋ねるのか。なぜ私の話を聞いた人々を呼び出し、その人々に尋ねないのか。考えてもみよ、たとえあなた自身は、これらの教えを傍聴しなくても、エルサレム中の者が、私の話したことを聞いた。」ところが、ハナンージャが回答できる前に、近くに立っていた宮殿の執事長が、「よくも、そのような言葉で大祭司に答えるとは。」と言って、その手でイエスの顔を打った。ハナンージャは、何の叱責の言葉も口にしなかったが、イエスは、「友よ、私が何か悪いことを言ったのならば、その悪い理由を言いなさい。しかし、私が真実を話したならば、なぜ私を打つのか。」とイエスは、事務長に向かって言った。

184:1.7 (1979.5) ハナンージャは、事務長がイエスを叩いたことを残念には思ったが、その事に注意を払うには誇りが高すぎた。かれは、混乱して別の部屋にいった、1時間ほど家の従者と寺院の護衛とにイエスを任せたままで。

184:1.8 (1979.6) 戻ってくるとあるじの方に上がって行き、かれは、「あなたは、救世主、イスラエルの救出者であると主張するのか。」と言った。イエスは、「ハナンージャ、あなたは、私の若い頃から私を知っている。あなたは、私が、私の父が拝命したもの以外の何も主張していないということ、また、私は、ユダヤ人と同様に非ユダヤ人のすべての人へ遣わされてきたということを知っている。」と言った。すると、ハナンージャは、「私には、あなたが、救世主であると主張したと伝えられている。それは本当であるか。」と言った。イエスは、ハナンージャを見たが、「そのように、あなたが言った。」と返答したに過ぎなかった。

184:1.9 (1980.1) この頃、イエスが何時にシネヅリオンの法廷に連れて来られるかを問い合わせるためにカイアファスの宮殿から使者達が到着した。そして、夜明けが近づきつ

つあったことから、ハナンージャは、寺院の護衛の保護のもと、縛られたイエスをカイアファスへ送るのが最善であると考えた。まもなく、ハナンージャ自らは、それらのあとについて行った。

2. 中庭のペトロス

184:2.1 (1980.2) 護衛と兵士の一隊が、ハナンージャの宮殿の入り口に近づきつつあるとき、ヨハネ・ゼベダイオスは、ローマ兵士の隊長の横を進んでいた。ユダは、幾らかの距離をおいて後退しており、シーモン・ペトロスは、はるか遠くから後をつけた。ヨハネが、イエスと護衛と共に宮殿の中庭に入った後、ユダは、門に近づいたが、イエスとヨハネを見掛けると、あるじの正式の裁判が後で行われることを知っていたカイアファスの家の方へと進んだ。ユダが去ったすぐ後、シーモン・ペトロスが到着し、門前に立っていると、イエスが宮殿に連行されようとしているまさにそのとき、ヨハネはペトロスを見た。門番をしていた女は、ヨハネを知っていて、ペトロスを入れてくれと頼むと、女門番は快く同意した。

184:2.2 (1980.3) ペトロスは、中庭に入ると同時に、その夜は冷え冷えとしていたので炭火の方に行き暖を取ろうとした。かれは、イエスの敵のその中にいて大変場違いに感じたし、本当に、場違いであった。あるじは、ヨハネに訓戒を与えたとき近くにいるようにと指示はしなかった。ペトロスは、他の使徒達といるはずであった。そして、その使徒達は、あるじの裁判と磔のこの期間、自分達の命を危険に曝すことのないようと明確に警告されていた。

184:2.3 (1980.4) ペトロスは、宮殿の門に近づく直前に剣を捨てていたので、ハナンージャの中庭へは非武装で入った。その心は、混乱の渦中にあった。かれは、イエスが逮捕されてしまったとほとんど理解することができなかった。かれは、現実—ここハナンージャの中庭におり、この大祭司の使用人の横で暖をとっているということ—を理解することができなかった。かれは、他の使徒が何をしているかと思い、ヨハネが宮殿に入ることをなぜ許されたのか考えを心で巡らせ、ヨハネが、ペトロスを入れるよう門番に求めていたので、使用人に知られていたのでそうなったのだと結論を下した。

184:2.4 (1980.5) ペトロスを入れた直後、そして、ヨハネが火で暖まっていると、女門番は、ペトロスの方にやってきて、「あなたも、この男の弟子の一人ではないの。」と悪戯っぽく言った。さて、女召使にペトロスの宮殿の門の通過を要求したのはヨハネであったので、ペトロスは、この認識に驚くべきではなかった。しかしながら、非常に緊張した神経状態であったので弟子としてのこの指摘は、ペトロスの平静さを失わせ、まず第一に心に浮かんだ1つの考えで—命を失わずに逃げるという考えで—「私は違う」と即座に女召使の質問に答えた。

184:2.5 (1980.6) まもなく、別の使用人が、ペトロスに近づいて尋ねた。「この仲間を逮捕したとき、庭であなたを見なかったかなあ。あなたもまたあの人の追随者の一人ではないのか。」ペトロスは、そのとき完全に驚いていた。かれは、これらの咎める者から安全に逃れる方法を思いつかなかった。したがって、かれは、「私は、この男を知らないし、その追随者の一人でもない」と言って、イエスとの全ての関係を激しく否定した。

184:2.6 (1980.7) この頃、女門番は、ペトロスを傍らに引き寄せて言った。「私にはあなたがこのイエスの弟子であるとちゃんと分かっている。その追随者の一人があなたを中庭に入れるよう私に命じたばかりか、ここにいる私の姉妹が、寺院でこの男といるあなたを見たのよ。なんでこれを否定するの。」ペトロスは、女召使の追求を聞くと、数多くの悪態とののしりでイエスに関するすべての知識を否定した。「私はこの男の追随者ではない。この男を知りもしない。以前に彼のことを決して聞きもしなかった。」

184:2.7 (1981.1) 中庭を歩き回る間、ペトロスは、しばらく炉端を離れた。かれは、逃げたかったが、自分に注意を引きつけると恐れた。冷たくなってきて炉端に戻ると、近くに立つ男の一人が言った。「確かに、あなたはこの男の弟子の一人である。このイエスは、ガリラヤ人であり、あなたもその話し振りで知れる。ガリラヤ人のように話しているから。」と言った。またまた、ペトロスは、あるじとのすべての関係を否定した。

184:2.8 (1981.2) ペトロスは、非常に狼狽し、火から遠ざかり、屋根つきの玄関に一人でいることで咎める者との接触から逃がれようとした。この孤立状態での1時間以上も後に、門番とその姉妹がたまたまペトロスと出会い、両者共に、イエスの追随者であることで再びからかって追求した。そして、またもやかれは、非難を否定した。かれが、イエスとのすべての関係をもう一度否定したちょうどそのとき、雄鳥が鳴いた。すると、ペトロスは、その宵に、あるじによる自分への警告の言葉を思い出した。心は重く罪の感覚に押し潰されて、彼がそこに立っていると、宮殿の門が開き、護衛達は、ペトロスの側を通り、カイアファスへの道へとイエスを導いていた。ペトロスの側を通り過ぎるとき、あるじは、かつて自信があり表面的には勇敢な使徒の顔に絶望の表情を松明の光で見た。イエスは、振り向いてペトロスを見た。生きている間っずっと、ペトロスは、そのようすを決して忘れることはなかった。必滅の人間が一度も見たことのないような哀れみと愛が混ざり合わさったたそのような一瞥が、あるじの顔にはあった。

184:2.9 (1981.3) ペトロスは、イエスと護衛達が宮殿の門を潜り抜けた後、後を追ったが、ほんの短い距離だけであった。かれは、それ以上は行けなかった。ペトロスは、道路の端に座り、さめざめと泣いた。そして、苦痛の涙を流した後、かれは、兄のアンドレアスを探そうと宿営地に向けて後戻りした。宿営地に到達すると、ダーヴィド・ゼベダイオスだけがいることが分かった。ダーヴィドは、ペトロスの弟のエルサレムでの潜伏場所をペトロスに教えるために使者を行かせた。

184:2.10 (1981.4) ペトロスの全経験は、オリーヴ山のハナンージャの宮殿の中庭で起こった。ペトロスは、大祭司カイアファスの宮殿へとイエスを追いかけてはいかなかった。都の中では家禽を飼うことは違法であったことから、ペトロスは、この全てがエルサレムの外で起こったということ、雄鳥の鳴き声によりあるじを繰り返し否定したという認識にいたった。

184:2.11 (1981.5) 雄鳥の鳴き声が、ペトロスに分別をもたらすまでは、かれは、暖かさを保つために車寄せで上がったり下がったりして、使用人達の究明をいかに賢く回避

し、イエスと自分とを同一視する彼らの目的を挫くかを考えるだけであった。当分の間、ペトロスは、これらの使用人にはこのように自分に質問する道徳的、あるいは法的権利もないと考えただけであり、身分が明かされ、また、ことによると逮捕と投獄から免れたと考え、返す返すも自分の方法に喜んだ。ペトロスは、雄鳥が鳴くまで自分はあるじを否定してきたということに考えがおよばなかった。かれは、イエスが自分を見るまで、王国の大使としての特権に従って行動し損ねたとは気づかなかった。

184:2.12 (1981.6) 妥協と最少の抵抗の道に沿う第一歩を踏みだしてしまったペトロスにとって明らかなことは、決意した行為の進行のまま先へ進む以外なかった。間違いからの出発から方向転換し、正しく進むには、すばらしく、かつ高潔な性格が必要とされる。一度誤りの道に入るとき、あまりにもしばしば、当人自身の心は、誤りの継続を正当化する傾向がある。

184:2.13 (1982.1) ペトロスは、復活後にあるじに会うまで、そして、否定のこの悲惨な夜の経験以前のように受け入れ

られるのを見るまで、自分は許されることができると決して完全には思っていなかった。

3. シネヅリオン会員の前において

184:3.1 (1982.2) 祭司長カイアファスが、シネヅリオンの査問委員会を召集し、正式な裁判のためにイエスを連れて来ることを要求したのは、この金曜日の朝、３時半頃であった。シネヅリオン派は、過去３回にわたり、違法行為、冒涜、そしてイスラエルの祖先の伝統を嘲る非公式の容疑により死に値すると定め、多数決によってイエスの死を決めてきた。

184:3.2 (1982.3) これは、シネヅリオン派の定期的に招集された会議ではなく、またいつもの場所、寺院にある切り石造りの部屋ではなかった。これは約30人のシネヅリオン派の特別な審判裁判であり、大祭司の宮殿に召集された。ヨハネ・ゼベダイオスは、いわゆるこの裁判を通してイエスと共にいた。

184:3.3 (1982.4) これらの祭司長、筆記者、サドカイ派、およびパリサイ派の数人は、イエス、自分達の地位の撹乱者であり権威の挑戦者が、今は、確実に自分達の手のうちに

あるとどれほど得意がったことか。かれらは、イエスが、自分達の執念深い拘束から決して生き逃びることがあってはならないと決議した。

184:3.4 (1982.5) 通常、ユダヤ人は、死に値する容疑の審理の際、細心の注意で進め、目撃者の選択と裁判の全運営においてあらゆる公正さの保護手段を提供した。しかし、この時、カイアファスは、偏見のない裁判官というよりは検察官であった。

184:3.5 (1982.6) イエスは、普段の服装で後ろ手でに縛られてこの法廷に現れた。全法廷が、イエスの堂々たる風采に驚き、些さか混乱した。皆は、いまだかつてそのような囚人を見つめたこともなければ、命にかかわる裁判における男にそのような沈着さを目にしたことがなかった。

184:3.6 (1982.7) ユダヤ人の法律は、囚人に対する告発以前に、少なくとも２人の目撃者が、いかなる点においても同意しなければならないことを前提とした。ユダヤ人の法律は、特に裏切り者の証言を明確に禁じていたので、イエスに対してユダを目撃者とすることはできなかった。20人以上の偽りの目撃者が、イエスに不利な証言をするた

めに近くにいたが、彼らの証言はあまりにも相容れないものであり、また、あまりにも明白に捏造されたものであり、シネヅリオンの会員自身がその振る舞いを非常に恥じた。イエスは、そこに立ってこれらの偽証者を優しく見ており、そして彼のまさしくその相貌は、嘘つきの目撃者達を当惑させた。このすべての誤りの証言中、あるじは、決して一言も述べなかった。かれは、彼らの多くの誣告に答えなかった。

184:3.7 (1982.8) ２人の証言からあがった初めての僅かに類似する意見は、イエスが、寺院での講話の1つで「手で作られたこの寺院を破壊し、３日のうちに手を用いずに別の寺院を建てる。」と言うのを聞いたと証言した時であった。この言葉を述べらるときに、それは自身の身体を指差したという事実はあったが、イエスが確かに言ったことではなかった。

184:3.8 (1982.9) 大祭司は、イエスに「これらの告発のいずれにも答えないのか。」と怒鳴りつけたが、イエスは口を開かなかった。これらの偽りの目撃者達が皆、それぞれの証言をする間、イエスはそこに黙って立っていた。嫌

悪、狂信、そして破廉恥な誇張は、証言それ自体が縺れ合うほどに偽証者達の言葉の特徴を描写していた。彼らの誣告への最良の反証は、あるじの穏やかで厳然とした沈黙であった。

184:3.9 (1983.1) 偽の目撃者の証言開始の直後、ハナン一ジャが、到着し、カイアファスの横の席を占めた。ハナン一ジャは、そのとき立ち上がり、寺院を破壊するというこの脅迫は、イエスに対して3件の告訴を正当化するに十分であると主張した。

184:3.10 (1983.2) 1. イエスは、人々にとり危険な中傷者であったこと。不可能なことを教えた、さもなければ、欺いたということ。

184:3.11 (1983.3) 2. 神聖な寺院に荒々しく手を掛けると唱道したという点において、彼が熱狂的革命者であるということ、でなければどのようにしてそれを破壊することができるのか。

184:3.12 (1983.4) 3. 新しい寺院を手を使わずに建てると約束したのであるから、かれは魔法を教えたということ。

184:3.13 (1983.5) すでに、全シネヅリオン派は、イエスがユダヤ人の法律に違反したことで死に値する罪があると同意していたが、かれらは、そのとき、ピーラトゥスの囚人への死刑宣告を正当化するイエスの行為と教えに関しての告発の展開により関心をもった。かれらは、イエスを法的に死においやることができる前に、ローマ総督の同意を確保しなければならないことを知っていた。そこで、ハナンージャは、イエスがあちこちで危険な教師であると人々に見せかける線に沿って事を進めようとした。

184:3.14 (1983.6) しかし、カイアファスは、 あるじが、申し分のない落ち着きと完全な沈黙でそこに立つ光景に耐えることがもはやできなかった。カイアファスは、その囚人が話す気になるかもしれない少なくとも1つの方法を知っていると思った。依って、かれは、イエスの側まで突き進み、あるじの顔に向かって非難する指を震わせながら「生きている神の名にかけて、厳命する。お前が救出者、神の息子であるかどうかを言ってみよ。」と言った。イエスは答えた。「私はそうである。まもなく父の

元に行く。そして、やがて人の息子は、力を身にまとい、もう一度天の軍勢を支配するのである。」

184:3.15 (1983.7) イエスがこれらの言葉を発するのを聞くと、大祭司は、至極立腹し、自分の外套を引き裂きながら大声で言った。「これ以上目撃者達から何を必要とするであろうか。見よ、今、君達は皆、この男の冒涜を聞いた。この法律違反者であり冒涜者である者をどうするべきであると思うか。」するとかれらは、「死に相応しい。磔にしよう。」と一斉に答えた。

184:3.16 (1983.8) イエスは、ハナンージャ、若しくはシネヅリオン派の前での贈与任務に関する一つの問題以外は、いかなる質問にも無関心を表した。神の息子であるのかと尋ねられると、即座に、明確に、そうだと答えた。

184:3.17 (1983.9) ハナンージャは、裁判がさらに続くことを、またその後のピーラトゥスへの提示のために、ローマ法とローマの機関とのイエスの繋がりに関わる罪状が明確にされることを望んでいた。過ぎ越しの準備の日であることや、正午以降に何の世俗的な仕事もすべきではないという理由のためだけではなく、ローマ人のユダヤの首

都ケーサレーアにピーラトゥスが過ぎ越しの祝賀でエルサレムにいたのでいつ戻るかもしれないと恐れるが故に、評議会員達は、これらの問題を迅速な終結へと運ぶことを切望していた。

184:3.18 (1983.10) しかし、ハナンージャは、法廷の収拾に成功しなかった。イエスがあまりにも不意にカイアファスに答えた後、大祭司は、前に踏み出て、手でイエスの顔を打った。ハナンージャは、法廷の他の成員が部屋から去る際に、イエスの顔に唾を吐き、その上、多くの者が嘲るようにその顔を手の掌でぴしゃりと叩くのに、実に衝撃をうけた。そして、そのような無秩序と、そのような前代未聞の混乱のうちに、イエスのシネヅリオン派による裁判のこの最初の会期は、４時半過ぎに終わった。

184:3.19 (1984.1) 偏見と伝統に目のくらんだ30人の偽りの裁判官達が、偽の目撃者とともに、大胆にも公正な宇宙の創造者を裁判にかけている。そして、これらの熱烈な告発者達は、この神-人の堂々とした沈黙と見事な態度に激怒している。彼の沈黙は、耐えるには凄まじく、その話し振りは、大胆に挑戦的である。かれは、脅しに対して

冷静で、攻撃に対して怯まなかった。人は神に判断を下すが、その時ですら神-人は、それらの者を愛し、そして、できれば救うであろう。

4.屈辱の時間

184:4.1 (1984.2) ユダヤ人の法律は、死刑判決を下すに当たり、２回にわたる開廷を義務づけた。この２回目の開廷は、1回目の翌日に行われることになっており、その間の時間、法廷の会員は、断食と弔いをして過ごすことになっていた。しかし、イエスが死ななければならないという自分達の決定確認のために、これらの男達は、翌日まで待てなかった。わずかに1時間待った。一方イエスは、寺院の護衛とともにいる大祭司の使用人に預けられて謁見の間に残されていた。それ等の者は、あらゆる種類の侮辱を人の息子に与えることを大いに楽しんでいた。かれらは、イエスを愚弄し、唾を吐き掛け、殴打した。かれらは、彼を繰り返し棒で顔を殴り、そして、言った。「預言してみよ、おい、救出者よ。お前を打ったのは誰か。」こうして、かれらは、丸1時間、ガリラヤのこの無抵抗な男を罵り、虐待し続けた。

184:4.2 (1984.3) 無知で無情な護衛兵と使用人を前にしての苦悩と愚弄の裁判のこの悲劇の時間、ヨハネ・ゼベダイオスは、隣接している部屋で孤独な恐怖で待った。最初にこれらの虐待が始まると、イエスは、うなずきの合図でヨハネに下がらなければならないと知らせた。あるじは、この使徒が部屋に留まりこれらの侮辱を目撃することを許すならば、その憤りが、非常な抗議の怒りを刺激して、おそらくはヨハネに死をもたらすであろうということをよく心得ていた。

184:4.3 (1984.4) この恐ろしい時間を通じて、イエスは一語も発しなかった。この全宇宙の神との人格関係に結合したこの優しく敏感な人間の魂にとり、このいわゆるシネヅリオン派の法廷の会員の手本により彼を虐待することに刺激をうけたこれらの無知で残酷な護衛と使用人の為すがままのこのひどい時間以上に屈辱の苦い杯はなかった。

184:4.4 (1984.5) 最愛の君主が、罪に陰げる不幸なユランチアの世界において無知で見当違いの人間の意志を甘んじて受けているこの光景を天の有識者達が目撃する傍らで、人

間の心は、広大な宇宙をさっと通過する憤りの身震いを想像することは到底できない。

184:4.5 (1984.6) 精霊的に、あるいは知的に達成できず、侮辱し肉体的に強襲したがるように導く人の内なるこの動物的な特性は何であるのか。半文明的な人間には、知恵や精霊的な達成に優れた者に捌け口を求めようとする邪悪な野蛮さ、それ自体がまだ潜んでいる。これらの自称文明人が、無抵抗の人の息子へのこの肉体的な攻撃から動物的な喜びのある種の形を導き出す間、彼らのその邪悪な粗雑さと残忍な凶暴さを目撃しなさい。これらの侮辱、嘲り、殴打がイエスを襲う時、イエスは、防備しようとしなかったが、無防備ではなかった。イエスは、負かされてはいなかった、単に肉体的な意味では抗争していなかった。

184:4.6 (1985.1) これらは、巨大で広範囲にわたる宇宙の製作者、支持者、救世主としての長く波瀾万丈のあるじの全経歴における最も偉大な勝利の瞬間である。神を人に明らかにする生活を完全に送り、イエスはいま、人を神に示す新たで先例のないことの顕示に従事している。イエ

スはいま、世界に被創造物の人格の孤立に対する全ての恐怖に対する最終的な勝利を示している。人の息子は、神の息子として自己性の実現を遂に成し遂げた。イエスは、自分と父が１つあると断言することを躊躇わない。そして、その最高かつ崇高な経験の事実と真実に基づき、自分とその父が１つであるように、王国の全信者が自分と１つになるように諭す。イエスの宗教における生きた経験は、精霊的に孤立し、広大無辺に孤独な地球の必滅者達が、孤立からの恐怖と関連する無力の感情のすべての結果がもたらす人格の孤立をそれにより避けることが可能となる確かで間違いのない技法となる。天の王国の友愛の現実においては、神の信仰の息子達は、自身、つまり個人的かつ惑星の双方の孤立からの最終的な救出を見つける。神を知る信者は、宇宙規模での精霊的な社会性—完全性達成の神の定めである永遠なる実現と関連する天の市民権—の極みと壮大さをますます経験する。

5. 第2の法廷会議

184:5.1 (1985.2) イエスは、５時30分に裁判官が再び召集され、隣接する部屋に連れていかれた。そこでは、ヨハネが待

っていた。ローマ兵士と寺院の護衛達は、ここでイエスを監視し、一方ピーラトゥスに提示されることになっていた罪状の明確化が、法廷で始まった。ハナンージャが、冒涜の罪は、ピーラトゥスにとり何の重要性ももたないと仲間に断言した。ユダは、この第２の法廷会議のあいだ出席していたが、何の証言もしなかった。

184:5.2 (1985.3) この法廷期間はほんの30分続き、ピーラトゥスの元に行くために閉廷したとき、かれらは、死に値するとして、次の３項目を基に、イエスの起訴状を作成した。

184:5.3 (1985.4) 1. イエスは、ユダヤ国家の倒錯者であったこと。かれは、人々を騙し、かつ反逆へと扇動したこと。

184:5.4 (1985.5) 2. ケーサレーアへの貢税の支払いを拒否することを人々に教えたこと。

184:5.5 (1985.6) 3.新しい種類の王国の王であり、創立者であると主張することにより、皇帝に対する反逆罪を教唆したこと。

184:5.6 (1985.7) この手順全体が不規則であり、ユダヤ人の法律とは完全に逆であった。寺院を破壊して、３日間後に再建するというイエスの陳述に関して証言した者達を除いては、２人の目撃者がいかなる件でも同意することはなかった。そして、その点に関してさえ、弁護側の目撃者はなく、その上、イエスが彼の意図した意味について説明することも求められなかった。

184:5.7 (1985.8) 法廷が一貫して裁くことができた唯一の点は、冒涜罪であり、それは、完全にイエス一人の証言に基づくものであった。冒涜に関してですら、かれらは、死刑宣告のための正式な票を投じなかった。

184:5.8 (1985.9) そのとき、かれらは、一人の目撃者もなく、また被告である囚人が不在のうちに同意された３件の告発を携えてピーラトゥスの前に行くために、大胆に明確化した。これがされると、パリサイ派の３人は、休暇を取った。かれらは、イエスが滅ぼされるところを見たくはあったが、目撃者なしで、しかもイエス不在での告訴を明確に述べたくはなかった。

184:5.9 (1986.1) イエスは、シネヅリオン派の法廷に再び現れることはなかった。かれらは、イエスの潔白な人生を裁く間、二度と彼の顔を見たくはなかった。イエスは、(人として) ピーラトゥスによる朗読を聞くまで、正式の罪状を知らなかった。

184:5.10 (1986.2) イエスは、ヨハネと護衛のいる部屋におり、そして、その第2の法廷会議の間、大祭司の宮殿の周囲に数人の女性が、その友人達と共に見知らぬ囚人を見にきており、その中の1人が、イエスに尋ねた。「あなたは救世主、神の息子でありますか。」すると、イエスは「私が言っても、あなたは私を信じないであろう。そして、私があなたに尋ねても、答えないだろう。」と応じた。

184:5.11 (1986.3) このシネヅリオン派の法廷が誠に不当に、また変則に命じた死刑判決の確認のために、イエスは、その朝午前6時にカイアファスの屋敷からピーラトゥスの前に現れるために率いられていった。

論文 185
ピーラトゥスの臨席の裁判

185:0.1 (1987.1) 西暦30年４月７日、この金曜日の朝6時過ぎて間もなく、イエスは、シリアの代官の直接監督下にあるユダヤ、サマリア、イヅマイアを治めるローマ行政官であるピーラトゥスの前に連れてこられた。あるじは、縛られ、寺院の護衛にローマ総督の前に連れられ、その際シネヅリオン派法廷(主にサッヅカイオス)、ユダ・イスカリオテ、大祭司カイアファスを含むほぼ50人の告発人と使徒ヨハネが同伴した。ハナンージャは、ピーラトゥスの前に現れなかった。

185:0.2 (1987.2) ピーラトゥスは、前夜、人の息子を逮捕するためにローマ兵を差し向けるという彼の同意を得た者達が、早速にもイエスを連れて来ると知らされていたので、この早朝の訪問者の1団を迎えるために起き、準備ができていた。この裁判は、ピーラトゥスとその妻がエルサレムに立ち寄るときに本部としたアントニアの要塞の増築部分のプラエトリュウムの前で行われる段取りであった。

185:0.3 (1987.3) ピーラトゥスは、イエスの検分の多くをプラエトリュウムの広間でしたが、公判は、正面玄関へ続く外

の階段で開かれた。これは、過ぎ越しのこの準備の日にパン種子が使用されるかもしれないいかなる非ユダヤ人の建物にも入ることを拒否するユダヤ人に対する譲歩であった。そのような行為は、儀式的にユダヤ人を不浄にし、それにより感謝の午後の祝宴の参加から除外されるだけでなく、過ぎ越しの夕食の相伴資格を得る前に、日没後の浄めの儀式への従属も必要とするのであった。

185:0.4 (1987.4) これらのユダヤ人は、イエスの不法の死刑をもたらす陰謀を企んだとき、気がとがめて悩まされることはまったくなかったが、それにもかかわらず、儀式上の清浄さと慣習的な規則性のすべてのこれらの問題に関して良心的であった。時間と永遠における人間の福祉に対する些細な事に細心の注意を払うとともに、神性の性質の高くて神聖な義務の認識を欠くということは、これらのユダヤ人が、ただ唯一の民族ではなかった。

1. ポンティウス・ピーラトゥス

185:1.1 (1987.5) ポンティウス・ピーラトゥスが、小地方のそれなりに良い総督でなかったならば、ティベリアスは、ピーラトゥスをユダヤの代官として決して10年間も留めて

おきはしなかったであろう。ピーラトゥスは、かなり良い管理者ではあったが、道徳的には臆病であった。かれは、ユダヤ人の総督としての任務の本質を理解する大きな度量のある男ではなかった。かれは、これらのヘブライ人が、本当の宗教、つまり進んで死ぬことを望む信仰、そして帝国中のここかしこに離散した何百万人の者が、信仰の神殿としてエルサレムに目をむけ、また世界の最高裁判所としてシネヅリオン派を尊敬しているという事実を理解することができなかった。

185:1.2 (1988.1) ピーラトゥスは、ユダヤ人を好まず、またこの根深い憎悪は、早くに現れ始めた。全てのローマの属州のうち、ユダヤほど治めるに難しい所はなかった。ピーラトゥスは、ユダヤ人の扱いに関する問題を一向に理解せず、その結果、総督としての非常に早い時期での経験において一連のほとんど致命的かつ自滅的な大失敗をしでかした。そして、ユダヤ人にそれほどまでに力を与えたのが、これらの大失敗であった。ユダヤ人がピーラトゥスの決定に影響を及ぼしたいた時にすべきことは、暴動を起こし、脅かすことであり、そうすればピーラトゥスは、即座に降伏するのであった。そして、行政長官の

この明らかな決断の無さ、あるいは道徳的な勇気の欠如は、主に彼がユダヤ人に持っていた多くの論争に関する記憶に基づくものであり、ユダヤ人がピーラトゥスをそれぞれの事例で負かしてきたであった。ユダヤ人は、ピーラトゥスが、自分等を恐れていること、ティベリアスの前にあって自分の地位を懸念していることを知っており、多くの機会に総督の大きな不利となるようにこの知識を利用した。

185:1.3 (1988.2) ピーラトゥスのユダヤ人疎外は、いくつかの不運な遭遇の結果として生じた。まず最初に、偶像崇拝の象徴としての全ての像に対するユダヤ人の根深い偏見を真剣に受け止めることができなかった。したがって、前任者の下でのローマ軍人の習慣であったように、兵士達の旗からケーサーの像を取り除くことなく、彼らのエルサレム入りを許した。ユダヤ人の大規模の代表団は、5日間ピーラトゥスを待ち、軍旗からこの像を取り除くように懇願した。かれは、その請願をにべもなく拒否し、即時の死で彼等を威嚇した。自身が懐疑論者であるピーラトゥスは、強い宗教感情をもつ者が、その宗教信念のために死ぬことを躊躇わないということを理解していな

かった。したがって、これらのユダヤ人が、宮殿前に挑戦的に立ち上がり、地面に顔を下げ、死ぬ用意ができていると知らせたとき、ピーラトゥスは、うろたえた。それから、ピーラトゥスは、行う気のない脅迫をしてしまったと気づいた。ピーラトゥスは、屈伏し、エルサレムの兵士の旗から像を取り除くように命令し、その日以来、実行することを恐れつつ脅しをかけるピーラトゥスの弱点をこのようにして発見したユダヤ人指導者達の気まぐれに、多かれ少かれ服従している自分に気づいた。

185:1.4 (1988.3) ピーラトゥスは、その後この失った威信回復の決断をし、そのために、ケーサー崇拝に一般的に使用された皇帝の盾をエルサレムのヘロデの宮殿の壁に掲げさせた。ユダヤ人が抗議したとき、かれは譲らなかった。自分達の抗議に耳を傾けることを拒否したとき、ユダヤ人達は、即座にローマに訴えた。すると皇帝は、問題となっている盾を取り除くように即座に命令した。それから、ピーラトゥスは、以前よりさらに低く評価された。

185:1.5 (1988.4) ユダヤ人を著しくうとんじたもう一つは、巨大な宗教的な祭礼の期間、エルサレムへの何百万人もの訪

問者のための給水支給拡大のための新水路建設費の支払いのために寺院の資金からの徴収を敢行したということであった。ユダヤ人は、シネヅリオン派だけが寺院の資金を支払うことができると信じ込み、この傲慢な支配のためにピーラトゥスを痛烈に非難して止まなかった。20件もの暴動と多くの流血が、この決定から生じた。由々しい一連の発生事件の最後は、祭壇での礼拝中に生じたガリラヤ人の大集団の虐殺に関係があった。

185:1.6 (1988.5) この動揺するローマの支配者が、ユダヤ人に対する恐怖と個人の立場の安全のためにイエスを犠牲にするとともに、寺院の器が埋められていると主張しゲリージーム山へと軍を率いた偽の救世主の提供に関連してサマリア人の不必要な虐殺の結果、最終的に免職させられたということは重要である。そして、偽の救世主が約束した通りに神聖な器物の隠されている場所を明らかにしなかったとき、この激しい暴動が勃発した。この事件の結果、シリアの総督代理は、ピーラトゥスにローマ行きを命じた。ピーラトゥスがローマに向かう途中、ティベリアスは死んだ。そして、ピーラトゥスは、ユダヤの行政長官には再任されなかった。かれは、イエスの磔に同

意してしまったという痛恨から決して立ち直らなかった。ピーラトゥスは、新皇帝からの何の好意も見い出せずにローザンヌ地方に退き、後にそこで自殺をした。

185:1.7 (1989.1) ピーラトゥスの妻クラウディア・プロクラは、王国の福音のフェニキア人信者である待女の話を通してイエスの多くの話を聞いていた。ピーラトゥスの死後、クラウディアは、朗報の普及に著しく同調するようになった。

185:1.8 (1989.2) このすべてが、この悲惨な金曜日の午前に起きた多くを説明している。なぜユダヤ人が、ピーラトゥスに指図しようとしたかを—イエスを裁くためにピーラトゥスを6時に起こしたこと—また、もしイエスの死をあえて求める彼らの要求を拒否したならば、彼らは皇帝の前でピーラトゥスを反逆罪で告発すると脅かすことをなぜ躊躇わなかったかということも、理解することは容易である。

185:1.9 (1989.3) ユダヤ人の指導者達と不利に関わらなかった立派なローマの総督ならば、これらの残忍な宗教狂信者が、冤罪で潔白だと自らが宣言した男に死をもたらすこ

すことを一度も許しはしなかったであろう。パレスチナ統治に二流のピーラトゥスを送ったとき、ローマは、大変な大失敗、現実情勢における遠大な誤りを犯した。ティベリアスは、帝国で最善の地方管理者をユダヤ人に送ったほうが良かった。

2.イエス、ピーラトゥスの前に出る

185:2.1 (1989.4) イエスと告発者達がピーラトゥスの法廷の正面に集まったとき、ローマ総督が、現れ、集まった一行に向け、「この者にどんな罪状をもってきたのか」と尋ねた。イエスを厄介払いすることを引き受けたサドカイ派と議員達は、ピーラトゥスの前に行き、イエスに申し渡した死刑宣告の承認を求めることを決心していた。どういった明確な罪の提示のないままに。したがって、シネヅリオン派の法廷の代弁者が、ピーラトゥスに答えた。「もしこの男が悪人でなかったならば、我々は、あなたのところに彼を引き渡しはしませんでした。」

185:2.2 (1989.5) ピーラトゥスは、彼らが、イエスの有罪の協議に夜通し従事していたと知ってはいたが、イエスに対する罪状を述べたがらないのを見てとると、彼らに答え

た。「お前たちは、何の明確な罪状の同意にいたっていないのだから。この男を連れて行き、自身の法により判決を下してはどうか。」

185:2.3 (1989.6) シネヅリオン派の法廷の書記は、ピーラトゥスに述べた。「誰であろうとも我々には死に追いやることは合法的ではありません、でも、我々の国に対してのこの妨害者は、言ったことやしたことのために死ぬにふさわしいのです。だからこそ、我々はこの判決確認のために参ったのです。」

185:2.4 (1989.7) 回避のこの企てをもってローマ総督の前に来ることは、シネヅリオン会員達のイエスへの悪意と不機嫌さと、ピーラトゥスの公正さ、名誉、威厳に対する敬意の欠如の両方を明らかにしている。地方総督の前に現れ、公正な裁判を与える前に、しかも明確な犯罪で告発すらせず、一人の人間に対して処刑の判決を求めるこれらの臣下である市民の何という厚かましさであろう。

185:2.5 (1989.8) ピーラトゥスは、ユダヤ人の間でのイエスの働きについて幾分知っており、告発されたのはユダヤ人の教会法への違反に関係があると推測した。したがって、

この事例を彼ら自身の法廷へ差し戻そうとした。またもや、ピーラトゥスは、ユダヤ人が、苦々しく妬みのある憎しみで軽蔑する自らの民族の１人にさえ死刑を宣告し、執行することに無力であることを彼らに公的に認めさせることを楽しんだ。

185:2.6 (1990.1) ピーラトゥスが、ユダヤ教の半転向者であり、後にはイエスの福音の立派な信者となった妻クラウディアからイエスとその教えに関しさらに聞いたのは、真夜中直前の、しかも、秘かなイエス逮捕の功を奏するためにローマ兵使役の許可を与えた直後の数時間前であった。

185:2.7 (1990.2) ピーラトゥスはこの公聴会を延期したかったのだが、ユダヤ人の指導者達は、この訴訟の進行を決め込んでいることがピーラトゥスには判った。これが、過ぎ越しのための準備の昼前であるばかりではなく、また、金曜日であるこの日は、ユダヤ人の休息と崇拝の安息日の準備の日でもあるということを、かれは知っていた。

185:2.8 (1990.3) これらのユダヤ人の無礼な接近の態度に非常に敏感であり、ピーラトゥスは、イエスに裁判なしで死刑

を言い渡すという要求に従うことを望まなかった。したがって、囚人に対するユダヤ人側からの罪状提示を待つしばらくの間、彼らに向いて言った。「私は、この男に裁判なしでの死刑を言い渡すつもりはないし、彼に対するお前達の告発を書面で示すまで彼を調べることにも同意するつもりはない。」

185:2.9 (1990.4) 大祭司と他の者は、ピーラトゥスがこうを言うのを聞くと法廷の書記に合図した。するとこの者は、イエスに対する罪状書をピーラトゥスに渡した。その罪状は次の通りであった。

185:2.10 (1990.5) 「我々は、シネヅリオン派の裁判所では、この男が次に関して国家の悪人と妨害者であるが故に有罪であると宣告します。

185:2.11 (1990.6) 「1. 国家を歪め、民を反乱へと撹乱させるということ。

185:2.12 (1990.7) 「2. ケーサレーアへの納税の支払いを人々に禁じること。

185:2.13 (1990.8)「3. 自分をユダヤの王と称し、新しい王国の設立を教えること。」

185:2.14 (1990.9) イエスは正式に審理されもせず、これらの罪状で合法的に有罪とされたのでもなかった。最初の陳述でこれらの罪状を聞いてさえいなかったが、ピーラトゥスは、衛兵に留めおかれていたプラエトリュウムからイエスを連れて来させた。それから、イエスの聞いている前でこれらの罪状が繰り返されることを主張した。

185:2.15 (1990.10) これらの罪名を聞いたとき、イエスは、ユダヤ人の法廷ではこれらの事柄を聞かされていなかったことをよく知っていたし、またヨハネ・ゼベダイオスと告発者達もよく知っていたが、かれは、冤罪に対して何も答えなかった。ピーラトゥスが、原告に答えるようにと命じたときにさえ、イエスは、口を開かなかった。ピーラトゥスは、全進行の不公平さに非常に驚き、また、イエスの静かで見事な振る舞いに非常な感銘を受けたので、囚人を広間に連れて入り個人的に調べることに決めた。

185:2.16 (1990.11) 沈黙の侮蔑ではなく、本物の哀れみと悲しげな愛情の表現で、殺気だつ告発者の前のそこで威厳をもって立ち、告発者達をじっと見つめるイエスの光景にピーラトゥスの心は乱され、その感情は、ユダヤ人を恐れ、その精神は非常に扇動された。

3. ピーラトゥスによる個人的検分

185:3.1 (1991.1) ピーラトゥスは、イエスとヨハネ・ゼベダイオスを私室に連れて入り、衛兵を部屋の外の廊下に立たせると、囚人には座るように求め、自らはイエスのそばに座り幾つかの質問をした。イエスに対する第1の罪状である国家の倒錯者と反逆扇動者ということを信じていないということを彼に知らせることにより、ピーラトゥスは、イエスとの話を始めた。彼は、「お前は、かつてケーサーへの捧げ物は拒絶すべきであると教えたか。」と尋ねた。イエスは、ヨハネを指し示し、「あの者に、あるいは誰か私の教えを聞いた他の者に尋ねなさい。」と言った。次に、ピーラトゥスは、捧げ物のこの問題に関してヨハネに質問し、ヨハネは、あるじの教えに関する証言をし、また、イエスとその使徒達がケーサーと寺院への税を支払ったと説明した。ピーラトゥスは、ヨハネ

に質問したとき、「私がお前と話したと誰にも言わないように。」と言った。ヨハネは、この事を決して明らかにしなかった。

185:3.2 (1991.2) それから、ピーラトゥスは、さらに質問するためにイエスの方に振り向いて、「今度は3番目の罪状についてだが、お前はユダヤ人の王であるか。」と訊いた。ピーラトゥスの声が誠実な問いの調子であったので、イエスは行政長官に好意を示して言った。「ピーラトゥス、自分のためにこれを尋ねているのか、それとも、他のもの達、私の告発者からのこの質問を採用しているのか。」と言った。すると、半分は憤りの調子で総督が答えた。「私はユダヤ人か。お前自身の民衆と祭司長等が、お前を引き渡して死刑を言い渡すように私に頼んだのだ。私は、彼らの罪状の正当性を問い質し、自らが、お前のしたことを調べようとしているだけである。言ってみよ、ユダヤ人の王であるとお前は言ったのか。また、新しい王国を設立しようとしたのか。」

185:3.3 (1991.3) そこで、イエスがピーラトゥスに言った。「私の王国は、この世界のものではないということが窺いし

れないのか。もし私の王国がこの世界のものであるならば、きっと私の弟子達は、私がユダヤ人の手に委ねられないように戦ったであろう。あなたの前でこれらの枷にあってここに私がいることが、私の王国は精霊的な統治圏であるということ、すなわち信仰を通じ、そして愛によって神の息子になる人の兄弟愛を、全ての人に示すに足るのである。そして、この救済は、非ユダヤ人とユダヤ人のためのものである。」

185:3.4 (1991.4)「では、結局そなたは王であるのか」と、ピーラトゥスは訊いた。そこで、イエスは答えた。「そうです、私はそのような王であり、我が王国は、天にいる私の父の信仰の息子達の家族である。この目的のために、すべての人に私の父を示し、また、神の真実の証言をするためにさえ、私はこの世に生まれ出でたのであった。今ですら、真実を慈しむ者は、誰でも私の声を聞くとあなたに断言する。」

185:3.5 (1991.5) するとピーラトゥスは、半ば嘲笑し、半ば真面目に、「真実、真実とは何か—誰が知っているのであるか。」と尋ねた。

185:3.6 (1991.6) ピーラトゥスは、イエスの言葉を計り知ることができなかったし、その精霊の王国の本質も理解することができなかったが、そのとき、囚人がいささかも死に相応しいことをしなかったということが、ピーラトゥスには確かであった。ピーラトゥスさえ、面と向かいイエスを一瞥するだけで、この優しくて疲れきってはいるが、堂々とした清廉な男は、イスラエルの現世の王座に自分を着かせようと切望した荒々しく危険な革命家ではないと納得させるに十分であった。ピーラトゥスは、「賢明な者は王である」と断言したストア学派の教えに詳しかったので、自分を王と呼ぶ時にイエスの意図したことに関して少し理解したと思った。ピーラトゥスは、イエスが、危険な扇動者であるというよりも無害な夢想家、悪意のない狂信者以外の何者でもないと完全に確信した。

185:3.7 (1991.7) あるじへの質問後、ピーラトゥスは、祭司長とイエスの告発者達のところに戻って言った。「この男を調べたが、何の落ち度もない。彼に対するそなた等の告発に関して有罪であるとは思わない。私は、この男は解放されるべきであると考える。」ユダヤ人は、こう聞く

と非常な怒りにかきたてれ、イエスが死ぬべきであると荒々しく叫ぶほどであった。そして、シネヅリオン会員の1人は、ピーラトゥスの側に大胆に歩み寄って言った。「この男は、民衆を撹乱します。ガリラヤに始まり、ユダヤ中に。かれは、人の仲を裂こうとする悪事を働く者であります。この邪悪者を自由にさせるならば、あなたは、それを長い間後悔するでありましょう。」

185:3.8 (1992.1) ピーラトゥスは、イエスをいかのすべきか全く考えにいたらず、ガリラヤでイエスの仕事が始まったと言うのを聞くと、かれは、事件に決断を下す責任回避を考え、その時過ぎ越しに出席するために都にいたヘロデのところにイエスを送ることにより、少なくとも思索のための時間稼ぎを考えた。ピーラトゥスは、この行為が、しばらく自分とヘロデの間に存在していた度重なる司法の問題上の誤解による何らかの苦い感情の矯正を助けるとも考えた。

185:3.9 (1992.2) ピーラトゥスは、衛兵を呼んで言った。「この男はガリラヤ人である。直ちに、ヘロデのところに連れて行け。そして、彼がこの男を調べ終えたら、判明した

ことを私に報告せよ。」そこで、かれらは、イエスをヘロデのところに連れて行った。

4. ヘロデの前のイエス

185:4.1 (1992.3) ヘロデ・アンティパスがエルサレムに立ち寄るときは、ヘロデ大王の古いマッカベーウス宮殿に住み、そのときイエスが寺院の衛兵に連行され、告発者達と増加する群衆がイエスの後をつけていったのが、先王のこの家であった。ヘロデは、イエスについて長く耳にしてきており、彼について非常に知りたかった。この金曜日の朝、人の息子が自分の前に立ったとき、邪悪なイヅマイア人は、公共建築物の1つの仕事中に事故で死んだ父に支払われるべき金銭に関する正当な決定を嘆願してセーフォリスで自分の前に出向いた先年の若者を一瞬たりとも思い出しはしなかった。かれは、イエスの仕事がガリラヤに集中していたとき、大いにイエスに関して思い煩ったが、ヘロデが知る限り、一度もイエスを見たことはなかった。ヘロデは、イエスがピーラトゥスとユダヤ人の保護下にいたので、将来どんな問題に対しても安全であると感じて、彼に会うことを願ってやまなかった。ヘロデは、イエスによる奇跡について多くを聞いてお

り、何らかの驚きに値いする業を行うところを本当に見たいと願った。

185:4.2 (1992.4) ヘロデの前にイエスが連れて来られると、四分領太守は、イエスの堂々とした風情と穏やかな相貌の平静さに驚いた。およそ15分間、ヘロデは、イエスに質問したが、あるじは答えようとはしなかった。ヘロデは、イエスを嘲り、奇跡を演じてみろと言ったが、かれは、その多くの質問に答えもしないし、その嘲りに応じようともしなかった。

185:4.3 (1992.5) すると、ヘロデは、祭司長とサドカイ派に振り向いて、彼らの告発に耳を傾け、ピーラトゥスが聞いた全てとそれ以上の人の息子の嫌疑のかかった悪行について聞いた。最後に、イエスが話をするつもりも奇跡を演じるつもりもないと確信して、ヘロデは、しばらく彼をからかった後、イエスに王の古い紫衣を着せ、ピーラトゥスに送り返した。ユダヤにおいては、ヘロデは、イエスに対する何の司法権もないことを承知していた。それにしても、とうとうイエスがガリラヤから取り除かれるということを信じて喜び、イエスを殺す責任を持つの

は、ピーラトゥスであるということを有り難く感じた。ヘロデは、洗礼者ヨハネ殺害からの呪われた恐怖から完全に立ち直ることはなかった。ヘロデは、ある時にはイエスが死から甦ったヨハネであると恐れさえした。そのとき、かれは、イエスが、率直に物を言ったり、自分の私生活を暴いたりして糾弾する熱烈な予言者とはかなり異なる種類の者であることを観測したので、その恐怖から解き放たれた。

5. イエス、ピーラトゥスの元に戻る

185:5.1 (1993.1) 衛兵がイエスをピーラトゥスのところに連れ戻ると、ピーラトゥスは、プラエトリュウムの正面階段に出ていった。そこには彼の判事席がすでに置かれており、ピーラトゥスは、祭司長とシネヅリオン会員とを共に呼び寄せて言った。「お前等は、民衆を堕落させ、納税を禁じ、ユダヤ人の王であると主張するという罪状でこの男を連れて来た。調べてみたがこれらの罪状に関する罪を認めることができない。実際、この男には何の罪もない。そこで、ヘロデのところに送ったが、四分領太守は、我々にこの男を送り返してきたので、同じ結論に達したに違いない。確かに、この男は、死に相応しい何

もしていない。もし、それでもこの男が罰せられる必要があると思うならば、釈放する前に喜んで彼を折檻しよう。」

185:5.2 (1993.2) ちょうどユダヤ人達が、イエスの放免に対する抗議の叫びを始めようとしたとき、夥しい規模の群衆が、過ぎ越しに敬意をはらい、ピーラトゥスに囚人の放免を求める目的でプラエトリュウムへと行進して来た。しばらくの間、過ぎ越しの時に赦免するために投獄されたり、有罪となった者を数人大衆に選ばせるのが、ローマ総督の習慣であった。そして、そのとき、この群衆が、囚人の放免を求めにやってきて、イエスは、最近ずっと群衆に非常に気に入られていたことから、また、そのときイエスは、判事席の前の囚人であったので、過ぎ越しの善意の象徴としてガリラヤのこの男を解き放つことをこの１団に提案することで、自分の難局から抜け出せるかもしれないということが、ピーラトゥスの心に浮かんだ。

185:5.3 (1993.3) ピーラトゥスは、群衆が建物の階段に押し寄せて来てバーアッバスという名前を大声で呼んでいるのを

聞いた。バー・アッバスは、祭司の息子で、最近、イェリーホ街道で強盗と殺人行為で逮捕された名の知れた政治運動家で殺人強盗であった。この男は、過ぎ越しの祭礼が終わり次第すぐ死ぬ宣告を受けていた。

185:5.4 (1993.4) ピーラトゥスは、立ち上がって群衆に向かってイエスが特定の罪状で彼を処刑させようとした祭司長等に連れて来られたということ、またこの男は、死に値すると、自分は考えないと説明した。ピーラトゥスは、「以上のことにより、この殺人者バーアッバスか、あるいは、ガリラヤのこのイエスのいずれの釈放を私に望むのか。」と言った。ピーラトゥスがこう話すと、祭司長とシネヅリオン派議員達は皆、「バーアッバス、バーアッバス」と声を限りに叫んだ。そして、祭司長達がイエスを殺させる気でいることを知ると、人々は、すぐにイエスの命を要求する騒ぎに参加し、バーアッバスの釈放を大声で叫んだ。

185:5.5 (1993.5) この数日前、群衆は、イエスを畏敬したのだが、現在、祭司長と支配者達に預けられており、ピーラトゥスの前で命にかかわる裁判中であると分かると、野

次馬は、神の息子であると主張した者を尊敬しなかった。人民の目には、イエスが両替商と商人達を寺院から追い払ったときは、英雄でありえたのだが、敵の掌中にあり、命がけの裁判にある無抵抗の囚人であるときは、そうではなかった。

185:5.6 (1993.6) ピーラトゥスは、祭司長等が、イエスの血を求めて大声で叫ぶ一方で、悪名高い殺人者の許しのために騒ぎ立てる光景に腹が立った。祭司長等の悪意と憎しみを見て、その偏見と嫉妬を知覚した。そこで、彼らに言った。「お前たちは、どうして、最悪の犯罪が自らを比喩的にユダヤ人の王と呼ぶこの男よりも殺人者の命を選べるのか。」しかし、これはピーラトゥスが述べるには賢明な所見ではなかった。ユダヤ人は、誇り高い民族で、現在は、ローマの政治の頚木に服従してはいるが、力と栄光の見事な顕示を伴い、非ユダヤ人の束縛から自分等を救い出す救世主の来ることを期待していた。ピーラトゥスが知り得る以上に、かれらは、現在逮捕されて死に値する罪に問われている奇妙な主義を教えるこの温和な態度の教師が、「ユダヤ人の王」と呼ばれなければならない仄めかしに憤慨していた。そのような一言は、

国家存在上、彼らが神聖かつ立派に保持したすべてに対する侮辱と見なし、したがって、彼らは全員、バーアッバスの釈放とイエスの死を求めて勢いのある叫び声を放つのであった。

185:5.7 (1994.1) ピーラトゥスには、イエスが告発された罪を犯していないことが分かっており、正当で勇敢な裁判官であったならば、彼を免罪し、自由にしていたことであろう。しかし、ピーラトゥスが、怒ったこれらのユダヤ人に逆らうことを恐れ、自分の義務を果たすことをためらっている間、使者が来て妻のクラウディアからの密封された伝言が彼に渡された。

185:5.8 (1994.1) ピーラトゥスは、事態進行を続ける前に、今受け取ったばかりの便りを読みたいと、自分の周りにいる者達に簡単に述べた。妻からのこの手紙を開封して読んだ。「この潔白で公正なイエスと呼ばれる人に、あなたが何の関係もないことを願っております。その人のために、私は今宵夢の中で多くの事に苦しんだのです。」クラウディアからのこの短い手紙は、ピーラトゥスを大いに動揺させ、そのために、この事件の判決を遅らせたば

かりではなく、それはまた、運悪く、ユダヤ人支配者達が自由に群衆の中を歩き回ってバーアッバスの釈放を求め、イエスの磔を求めるように人々に促すかなりの時間をも与えた。

185:5.9 (1994.2) 遂にピーラトゥスは、ユダヤの支配者達と恩赦を求める群衆の混合集会に「わしは、ユダヤ人の王と呼ばれる男をどうするのか。」と尋ね、もう一度自分に相対していた問題の解決に取り組んだ。すると、皆は、一斉に「磔だ、磔だ。」と叫んだ。雑多な群衆のこの要求の完全な一致が、ピーラトゥスを、不当で恐怖に支配されている裁判官を、驚かせ警戒させた。

185:5.10 (1994.3) そこでもう一度、ピーラトゥスは、「なぜこの男を磔にしたいのか。どんな悪をしでかしたのか。誰がこの男に不利な証言をするために進み出るのか。」と訊いた。しかし、ピーラトゥスがイエスの弁護をするのを聞くと、皆は、「磔だ、磔だ。」と一入大声で叫ぶばかりであった。

185:5.11 (1994.4) ピーラトゥスは、またもや、過ぎ越しの囚人釈放に関して群衆に訴えた。「もう一度尋ねる、この過

ぎ越しの機会にいずれの囚人を釈放しようか。」すると、再度、群衆は、「バーアッバスを放せ。」と叫んだ。

185:5.12 (1994.5) そこでピーラトゥスは言った。「殺人者、バーアッバスを釈放するのなら、イエスはいかにするのか。」群衆は、もう一度、「磔だ、磔だ。」と一斉に叫んだ。

185:5.13 (1994.6) ピーラトゥスは、祭司長とシネヅリオン派議員の直接の指揮の下に行動している暴徒の執拗な喧騒に威嚇されていた。それでも、かれは、少なくとも群衆を静め、イエスを救うもう一つの試みを決めた。

6. ピーラトゥスの最後の訴え

185:6.1 (1994.7) そのすべてが、この金曜日の早朝ピーラトゥスの前で、イエスの敵だけの参加で、起きていた。イエスの多くの友人は、まだ夜のうちの彼の逮捕も、早朝の裁判についても知らないか、そうでなくとも、かれらは、イエスの教えを信じているので、死に値するとして自身が逮捕されないように潜んでいた。今あるじの死を喧し

く要求する群衆の中には、イエスの不俱戴天の敵、そして容易く導かれる軽率な民衆だけがいた。

185:6.2 (1995.1) ピーラトゥスは、彼らの同情に最後の訴えをしようとした。かれは、イエスの血を求めて叫ぶこの惑わされた暴徒の騒ぎに逆らうことを恐れており、ユダヤ衛兵とローマ兵士にイエスを連れて行き、鞭打つように命令した。ローマ法は、磔で死ぬ刑を受けた者だけがこのように鞭打ちされると定められていたのであるから、これ自体が、不当で不法な手順であった。衛兵達は、この厳しい試練のためにイエスをプラエトリュウムの覆いのない中庭に連れていった。イエスの敵はこの鞭打ちを目撃はしなかったが、ピーラトゥスはした。そして、このひどい虐待が終わる前に鞭打ちを止めるように命じて、イエスを自分のところに連れて来るように指図した。処刑執行人達は、鞭打ち用の柱に縛りつけられたイエスに結び目のある鞭を打ち下ろす前に、再びイエスに紫衣を着せ、刺の王冠を編み、それを額の上に置いた。その上、まがいものの笏として手に葦を持たせると、かれらは、イエスの前に跪き、「万才、ユダヤの王様」と言って嘲った。それから唾を吐き掛け、イエスの顔を手で叩

いた。そのうちの1人は、イエスをピーラトゥスに返す前に、その手から葦を取り彼の頭を叩いた。

185:6.3 (1995.2) それからピーラトゥスは、この出血し、傷ついた囚人を連れ出してきて、雑多な群衆に示しながら「男を見よ。この男に何の罪も見つけなかったと、またもや宣言する。それに、鞭打ったので釈放しようと思う。」と言った。

185:6.4 (1995.3) そこには、優しい額を突き刺す茨の王冠に古い紫色の王衣を着せられたナザレのイエスが立っていた。その顔は血みどろで、その姿は苦しみと深い悲しみで前屈していた。しかし、激しい感情的な憎しみと宗教偏見への奴隷の犠牲者であるそれらの者達の無感覚な心には何も訴えることはできない。この光景は、広大な宇宙の領域に甚だしい戦慄を走らせたが、イエスの破滅をもたらす意を決した者達の心には触れなかった。

185:6.5 (1995.4) 群衆は、あるじの有り様を見る最初の衝撃から立ち直ると、前よりも大声でしかも長い間、「磔だ、磔だ、磔だ。」と叫ぶだけであった。

185:6.6 (1995.5) そして、そのとき、ピーラトゥスは、自分が思い込んでいた群衆の哀れみの気持ちに訴えることが無益であることを理解した。かれは、前進して、言った。「お前達は、この男を死なせる決心をしていると察するが、彼は死に値する何をしたのか。誰がこの男の罪状を申し立てるのか。」

185:6.7 (1995.6) そこで、大祭司自身が前に進み出て、ピーラトゥスのところに行き、立腹して申し立てた。「我々には、神聖な法があり、自らを神の息子に仕立て上げたが故に、この男は、その法により、死ぬべきであります。」ピーラトゥスは、これを聞くと、ユダヤ人ばかりではなく、妻の注意と神が地球に下りて来るというギリシア神話を思い出し、一層恐れ、イエスがことによると神の人の姿であるかもしれないという考えにそのとき震えた。ピーラトゥスは、イエスの腕をとり、さらに調べられるように建物の中に再び引き入れていきながら、平和の保持のために群衆に手を振った。ピーラトゥスは、恐怖に混乱し、迷信にうろたえ、暴徒の頑固な態度に悩んでいる最中であった。

7. ピーラトゥスの最後の接見

185:7.1 (1995.7) ピーラトゥスは、恐ろしい感情に震え、イエスの側に座りながら質問した。「お前はどこから来たのか。本当は、誰なのか。これはどういうことだ、お前が神の息子であると皆が言うのは。」

185:7.2 (1996.1) しかし、全ての罪状において無実であると宣言したときにさえ、その上、法に従い死の判決を下される前に鞭打ちにかけるほどに不当であった者、人を恐れ、弱気で動揺している裁判官のそのような質問に、イエスは、はほとんど答えることができなかった。イエスは、まっすぐピーラトゥスの顔を見たが、返答はしなかった。その時、ピーラトゥスが言った。「私に話すのを拒否するのか。私にはまだお前を釈放するか、もしくは磔にする力があるとは悟らないのか。」そこで、イエスが言った。「上から許されない限り、君に私を支配する力はない。天の父が許さない限り、君は、人の息子に対し権威を行使することはできない。だが、君は、福音を知らないのであるからそれほど罪はない。私を裏切った者、また君を私のところまで届けた者、彼らにはより大きな罪がある。」

185:7.3 (1996.2) イエスとのこの最後の接見は、ピーラトゥスをすっかり怯えさせた。この道徳上の憶病者、司法上の虚弱者は、イエスへの迷信的な恐れとユダヤ人支配者への非常な畏怖の二重の重みに苦しんでいた。

185:7.4 (1996.3) ピーラトゥスは、再び群衆の前に現れて言った。「この男は、宗教犯罪者に過ぎないことは確かである。この男を連れて行き、お前達の法律によって裁くべきである。この男がお前達の習わしと衝突してきたからという理由で、なぜ私にその死の承諾を期待しなければならないのだ。」

185:7.5 (1996.4) カイアファス、大祭司が、ピーラトゥスの顔に復讐に指を震わせながら臆病なローマの裁判官に近づいて、群衆全体が聞くことのできる立腹の言葉で言ったときには、ピーラトゥスは、イエスを釈放する用意がほとんどできていた。「もしこの男を釈放するのなら、あなたはケーサーの友人ではない。また、皇帝がすべてを知るようにするつもりである。」この公の脅迫は、ピーラトゥスの手に負えなかった。自分の個人の財産に対する恐怖が、そのとき他のすべての考慮すべき事柄を覆い隠

した。臆病な総督は、判事席の前にイエスを連れ出すように命じた。あるじがそれらの前にそこに立つと、ピーラトゥスは、イエスを指差して、「お前等の王を見よ。」と嘲て言った。すると、ユダヤ人達は答えた。「追い払え。磔だ。」そこで、ピーラトゥスは、たっぷりの皮肉と嫌味で「お前達の王を磔にしようか。」と言った。ユダヤ人達は、「そうだ、磔にしよう。我々には、ケーサー以外にどんな王もいない。」と答えた。ピーラトゥスは、ユダヤ人に逆らう気持がなかったので、イエスを救う何の望みもないと分かった。

8. ピーラトゥスの悲劇の降伏

185:8.1 (1996.5) そこに、人の息子として人間の姿をした神の息子が立っていた。神の息子は、告発なくして逮捕された。証拠なくして起訴された。証人なくして宣告された。評決なくして罰っせられた。そして、そのとき、何の罪も見いだせないと認めた不当な裁判官により、かれは、間もなく死の判決を下されるところであった。もしピーラトゥスが、「ユダヤ人の王」とイエスを呼ぶことにより彼らの愛国心に訴えようと考えたのであれば、彼は完全に失敗した。ユダヤ人は、少しもそのような王を

期待してはいなかった。「我々には、ケーサー以外にどんな王もいない。」という祭司長とサドカイ派の宣言は、考えのない大衆にとってさえ強い衝撃であったが、たとえ暴徒があるじの主義を信奉したとしても、そのときイエスを救うには遅過ぎた。

185:8.2 (1996.6) ピーラトゥスは、騒動または暴動を恐れた。エルサレムでの過ぎ越しの際にそのような攪乱の起こる危険を冒す勇気はなかった。かれは、最近ケーサーから叱責を受けたばかりであり、もう1つ危険を冒すつもりはなかった。ピーラトゥスがバーアッバスの釈放を命じると、暴徒は歓声をあげた。それから、かれは、盥と水を注文し、群衆の前で、手を洗いながら言った。「私には、この男の流血の罪はない。お前達は、彼を死なせる決心をしているが、私は、この男に何の罪も見つけなかった。自分達で始末をするがよい。兵士がこの男を引き連れて行く。」そこで、暴徒は、「彼の血が我々と子孫にかかってもよい。」と喝采して応じた。

論文 186
磔直前

186:0.1 (1997.1) イエスとその告発者達がヘロデに会うために出発し始めたとき、あるじは、ヨハネの方に向いて言った。「ヨハネ、これ以上私のために何もすることはできない。私の母のところに行き、私が死ぬ前に会いに連れて来なさい。」あるじの頼みを聞くと、敵の中に放っておくことには気が重かったが、ベサニアへと急いだ。そこには、イエスの全家族が、イエスが死から甦らせたラーザロスの姉妹マールサとマリアの家で待機のために呼び寄せられていた。

186:0.2 (1997.2) 午前中に何度か、使者達が、イエスの裁判の進行状態の知らせをマールサとマリアに届けて来た。しかし、殺される前に母に会うというイエスの要求を携え、到着するほんの数分前まで、イエスの家族は、ベサニアには達していなかった。ヨハネ・ゼベダイオスが、真夜中のイエスの逮捕以来起きたすべてを皆に伝えた後、イエスの母マリアは、長男に会うためにすぐにヨハネと出掛けた。マリアとヨハネが都に着くまでには、イエスは、磔にしようするローマ兵士に伴われて、すでにゴルゴサに到着していた。

186:0.3 (1997.3) イエスの母マリアが、ヨハネと息子の元へ行きかけると、妹ルースは、残りの家族と留まることを拒否した。彼女が母に同伴すると決心していたので、兄ユダは、彼女と一緒に行った。あるじの残りの家族は、ジェームスの指示のもとにベサニアに残り、ほとんど1時間毎に、ダーヴィド・ゼベダイオスの使者が、ナザレのイエス、一番年上の兄を死においやる恐ろしい出来事の進行状況に関する報告をもたらした。

1.ユダ・イスカリオテの最期

186:1.1 (1997.4) ピーラトゥスの前でのイエスの公聴会が終わり、あるじを磔にするローマ兵士の拘留に任されたのは、この金曜日の朝の８時半頃であった。ローマ人がイエスを獲得するとすぐに、ユダヤ衛兵長は、部下と寺院の本部へと行進して戻った。祭司長とそのシネヅリオン会員は、衛兵のすぐ後をつけ、直接に寺院の切り石の講堂にある通常の会合場所へと向かった。ここで、彼らは、他の多くのシネヅリオン会員が、イエスに何が為されてきたかを知るために待っているのが分かった。カイアファスが、シネヅリオン派にイエスの裁判と有罪宣告に関する報告をしていると、ユダは、あるじの逮捕と死

の宣告で果たした役割の報酬代金を要求するために皆の前に出向いた。

186:1.2 (1997.5) これらのユダヤ人は皆、ユダを嫌った。裏切り者を全くの軽蔑の感情だけで見た。ユダは、カイアファスの前でのイエスの公判中、それにピーラトゥスの前でのイエスの出頭の間、自己の反逆行為に関して良心の呵責を感じていた。そして、イエスへの裏切り者の働きに対する支払いとして受け取るはずの報酬に関しても幾らか幻滅を感じ始めていた。かれは、ユダヤ人当局の冷淡さと余所余所しさが気に入らないにもかかわらず、自分の臆病な行為に対して気前のよい報酬を期待していた。ユダは、シネヅリオン派全会員の前に呼び出され、立派な働きの印として相応しい名誉が与えられると共に、そこで称賛されることを予期した。したがって、高僧の使用人が、ユダの肩を叩き、講堂のすぐ外で呼び、次のように言ったときのこの利己的反逆者の格段の驚きを想像してみなさい。「ユダ、私は、イエスへの裏切りに対する支払いを任された。これがお前の報酬である。」こう言うとカイアファスの使用人は、ユダに30枚—使いもの

になる健康な奴隷の時価に相当—の銀の入った袋を手渡した。

186:1.3 (1998.1) ユダは、唖然として驚いた。かれは、講堂に入ろうと急いで戻ったが、門番に妨げられた。シネヅリオン派に訴えたかったのだが、彼らは、認めようとはしなかった。ユダヤ人のこれらの支配者達が、友人とあるじへの背信行為を仕向けておき、銀30枚を報酬として与えるということが、ユダには信じられなかった。ユダは、辱しめられ、幻滅を感じて完全に押し潰された。まるで、かれは、昏睡状態にあるかのように寺院から歩き去った。金の袋をポケットに、使徒の基金を入れ自分がずっと長い間運んでいたその同じポケットの奥深くに入れた。そして、かれは、磔を目撃しに行く途中の群衆の後ろについて都中を当てもなく歩き回った。

186:1.4 (1998.2) ユダは、彼らがその上にイエスを打ち付けた状態で上げる十字架の一部を遠方から見た。これを見て、かれは、寺院に急いで戻り、門番を押し退けて、気付くとまだ開会中のシネヅリオン派の前に立っていた。裏切り者は、息が切れるほどに非常に取り乱していたが、次

の言葉を吃ってなんとか言うことができた。「私は、潔白な血を陥れ罪を犯した。あなたは、私を侮辱した。あなたは、私の働きの報酬として金銭—奴隷の価格—を申し出た。私は、自分がしてしまったことを悔悟している。これは、あなたの金である。私はこの罪の行為から逃がれたい。」

186:1.5 (1998.3) ユダヤ人の支配者達は、ユダの言葉を聞くと嘲り笑った。立っているユダの近くに座っていたその中の1人は、講堂を出るようにという合図をして言った。「お前のあるじは、すでにローマ人に殺された。お前の罪に対して、それが我々に何であるというのか。自分で始末をつけろ—そして、立ち去れ。」

186:1.6 (1998.4) シネヅリオン派の広間を出るとき、ユダは、袋から30枚の銀を取り出し、寺院の床一ぱいに投げた。裏切り者は、寺院を出るとき気が狂わんばかりであった。ユダは、そのとき罪の真の特質の認識を経験をしているところであった。悪行のすべての魅力、魅惑、陶酔は消え失せた。悪を働く者は、そのとき幻滅、し、失望した自分の魂の裁きの決定に１人で直面していた。罪は、犯

すに当たっては魅惑的であり、冒険的であったが、そのとき、むき出しの、そして不様な事実の収穫に直面しなければならなかった。

186:1.7 (1998.5) 地球における天の王国のかつてのこの大使は、見捨てられ、孤独で、そのとき、エルサレムの路上を歩いて通り抜けた。彼の絶望感は、自暴自棄であり、ほぼ絶対的であった。かれは、都を通り抜け壁の外を旅しつづけ、凄まじく幽境であるヒッノムの谷へと下り、そこで急な岩を登り、外套の帯を取り、片端を小さい木に縛り、もう片方を自分の首の回りに結び絶壁から身を投じた。恐れる手で縛った結び目は、死に至る前に解け、裏切り者の身体は、のこぎりのような岩に落ちたとき、粉々に打ち砕かれた。

2. あるじの態度

186:2.1 (1999.1) 逮捕時に、イエスは、人間の姿での、地球での仕事が終わるのを知っていた。かれは、自分が遂げるであろう死の種類を完全に理解しており、いわゆる裁判の詳細にはあまり関心がなかった。

186:2.2 (1999.2) シネヅリオン派の法廷の前に、イエスは、偽証する目撃者の証言に答えることを拒否した。敵あるいは味方に尋ねられるか否かに関係なく、必ず答えを引き出すたった1つの質問しかなく、それは、地球でのイエスの任務の種類と神性に関するものであった。神の息子であるかと尋ねられると、イエスは必ず答えた。かれは、好奇心が強く腹黒いヘロデの面前では話すことをきっぱりと拒否した。ピーラトゥスの前では、自分が言うことによりピーラトゥス、あるいは他の誠実な人が、真実に関してより良い知識に助けられるかもしれないと思うときにだけ話した。イエスは、豚に真珠を投げ与える無駄を使徒に教えてきた。そして、かれは、そのとき自分が教えたことを敢行したのであった。このときのイエスの行為は、人間性の我慢強い服従と結びついた神性の堂々たる沈黙と厳かな威厳を例示した。イエスは、概して自分が告発をうけた政治的な告訴に関連するどんな問題についても—総督の司法権に属すとイエスが認めるどんな問題も—ピーラトゥスと論じる気があった。

186:2.3 (1999.3) イエスは、死ぬ運命にある他のあらゆる被創造者が、そうしなければならないように、人間の出来事の

自然で通常の出来事を甘んじて受けることが父の意志であると確信しており、それゆえ、社会的には近視眼的で、精霊的には盲目的である仲間の人間の陰謀の結果に影響を及ぼすために純粋に人間の力である説得力のある雄弁ささえ行使することを拒否した。イエスは、ユランチアで生きて、死んだが、人間としての初めから終わりまのその全経歴は、彼の創造と不断の支持をする全宇宙に影響をおよぼし、そして教えるように考案された光景であった。

186:2.4 (1999.4) 国家—イエスの地球の父自身の民族—の滅亡の場面に目を向けながらイエスが恐ろしいほどの沈黙でそこに立つ傍らで、これらの近視眼的なユダヤ人は、あるじの死を見苦しく騒ぎ立てていた。。

186:2.5 (1999.5) イエスは、継続的で理由のない侮辱に直面して、その落ち着きを維持し、その威厳を主張することができる種類の人間の資質を身につけていた。かれは、威圧されることはなかった。最初にハナンージャの使用人に攻め立てられたとき、かれは、正式に自分に対して証

言をできるかもしれない目撃者を喚問する適正さを提案するだけであった。

186:2.6 (1999.6) 最初から最後まで、ピーラトゥスの前でのいわゆるイエスの裁判では、見物中の天の軍勢は、宇宙に「イエスの前のピーラトゥスの裁判」の場面の描写を広報することを抑えることができなかった。

186:2.7 (1999.7) カイアファスの前で、そしてすべての偽証が崩れてしまったとき、イエスは、祭司長の質問に答えることを躊躇わなかった。その結果、彼らが冒涜による有罪宣告を下すための根拠として望んだ彼自身の証言を提供した。

186:2.8 (1999.8) あるじは、決して自分を釈放するためのピーラトゥスの善意からではあるが、熱心さに欠ける努力に少しの関心も示さなかった。イエスは、ピーラトゥスを本当に哀み、その暗い心を啓発することに心から努力を払った。イエスは、自分に対する告発を取り下げるというユダヤ人へのローマ総督の訴えに完全に受動的であった。すべての悲しい試練を通して、かれには、単なる威厳とひけらかすことのない壮大さがあった。「ユダヤの

王」であるのかと彼らが尋ねるとき、かれは、殺人者になりたがる者達へ邪な批難を投げつけようとはしなかった。彼等がイエスの拒絶を選びはしたものの、精霊的な意味においてさえ、自分が、真の国家指導力を彼らに提供する最後の者であろうということを知りつつ、ほとんど適切な説明なしにその称号を受け入れた。

186:2.9 (2000.1) イエスは、これらの裁判中ほとんど何も言わなかったが、人が、神との協力で完成することのできる人間の性格の種類をすべての必滅者に示すために、またそのような被創造者が父の意志を為すことを真に選ぶことで生きる神の活動的な息子になるとき、神が人間の生活において顕示することのできる方法を全宇宙に明らかにすることを充分に示した。

186:2.10 (2000.2) 無知な必滅者に対するイエスの愛は、粗野な兵士や軽率な使用人達の嘲笑、ちょうちゃく、連打をものともしないその忍耐とみごとな落ち着きによって完全に示されている。かれは、目隠しをされ、嘲笑的に顔を叩かれ、「お前を打ったのは誰か予言してみよ。」と叫ばれても立腹すらしなかった。

186:2.11 (2000.3) イエスの群衆の前でのむち打ちの後、ピーラトゥスは、イエスを紹介して「男を見よ。」と大声で言ったとき、自分が知る以上に本当に誠実に群衆に言い渡した。恐れに支配されたローマ総督は、まさしくその瞬間に、宇宙が、そのいとしい君主が、陰欝で品位を落とした人間の臣下の嘲りや強打に晒されているこの唯一無二の場面を見つめながら、不動の姿勢で耐えているとは、実に、夢にも思わなかった。そして、ピーラトゥスが言ったとき、「神と人を見よ」が、全ネバドンに反響した。宇宙の津々浦々、夥しい数の者が、その日以来ずっとその男を見続けており、一方、ハヴォナの神、宇宙の中の宇宙の最高支配者は、そのナザレの男を時間と空間のこの地域宇宙の理想の人間の実現として受け入れる。イエスは、その無比の人生で、人に神を明らかにすることを決して止めなかった。そのとき、彼の人間の経歴の最終的なこれらの出来事とその次にくる死において、イエスは、神に人の新たで感動的な顕示をした。

3. 信頼にできるダーヴィド・ゼベダイオス

186:3.1 (2000.4) イエスがピーラトゥスの前での審理の終わりにローマ兵士達に引き渡された直後、寺院の護衛兵の分隊

は、あるじの追随者達を分散させるか、逮捕するためにゲッセマネへと大急ぎで向かった。しかし、それらの到着のずっと以前に、これらの追随者達は、離散していた。使徒達は、指定された隠れ場所に退いた。ギリシア人達は、エルサレムの様々な家に別々に行った。他の弟子達は、同様に姿を消していった。ダーヴィド・ゼベダイオスは、イエスの敵が戻ってくると思っていた。そのため、あるじが祈りと崇拝のためにたびたび退いた峡谷近くで５、６張りの天幕を早目に取り払った。かれは、ここに隠れ、同時に使者活動のための本部、調整所を維持するつもりであった。ダーヴィドが、宿営所を去るやいなや、寺院の衛兵達が到着した。誰もそこに居ないと分かると、かれらは、野営場を燃やすことに満足し、それから寺院に急いで戻った。シネヅリオン派は、報告を聞くと、イエスの追随者が、何の暴動も、あるいは死刑執行人の手からイエスを救ういかなる試みもないほどにすっかり怯えて鎮圧されたことに満足した。彼らは、遂に楽に息ができるようになったので散会し、それぞれに過ぎ越しの用意のため帰っていった。

186:3.2 (2000.5) 一人の使者は、イエスが磔のためにピーラトゥスからローマ軍人に引き渡されるとすぐに、デヴィッドに知らせるためにゲッセマネへと急ぐと共に、５分以内に伝令走者が、それぞれにベスサイダ、ペラ、フィラデルフィア、シドーン、シェケム、ヘブロン、ダマスカス、アレキサンドリアへと向かった。これらの使者は、ユダヤの支配者のしつこい強要でイエスがローマ人に磔にされようとしているという知らせを伝えた。

186:3.3 (2001.1) この悲劇の１日中、ダーヴィドは、あるじが墓に横たえられたという知らせが最後に発せられるまで、使徒、ギリシア人、それにベサニアのラーザロスの家に集まったイエスの地球の家族等におよそ30分毎に使者を送った。イエスが埋葬されたという知らせを携えて使者達が出発する際、ダーヴィドは、彼らに日曜日の朝静かにニコーデモスの家で報告するように指示をし、過ぎ越しの祝賀と来る安息日のために地元の伝令走者隊を解散させ、自身は、ニコーデモスの家で数日間、アンドレアスとシーモン・ペトロスと共に潜んでいようと提案した。

186:3.4 (2001.2) この風変わりな気質のダーヴィド・ゼベダイオスは、死んで、「3日目に再び蘇る」というあるじのありのままの主張を文字通り簡単に受け入れようと思ったイエスの指導的な弟子の中の唯一の人物であった。ダーヴィドは、いったんこの予言を聞くと、文字通り受け取る傾向にあり、イエスが蘇えるならば、間近にいてその知らせを直ぐに伝えられるように日曜日の早朝、ニコーデモスの家に集まるように使者達にそのとき命じた。ダーヴィドは、追随者の誰1人としてイエスがそれほど早く墓から戻ることを期待していないとすぐに気づいた。したがって、金曜日の午前、遠方の街や信者の中心地に急派された伝令走者を除いては、自分の所信と日曜日の早朝の全使者隊の機動力について何も言わなかった。

186:3.5 (2001.3) したがって、エルサレムとその全近郊に離散していたイエスのこれらの追随者は、その夜過ぎ越しを相伴し、その翌日は隔離状態のままでいた。

4. 磔の準備

186:4.1 (2001.4) ピーラトゥスは、群衆の前で手を洗い、ユダヤ人支配者達の騒ぎに抵抗することを恐れ、磔にされよう

としている潔白な者を引き渡す罪悪感からこのように逃げようとした後、あるじをローマ兵士に引き渡すように命令し、すぐに磔にされることになっているのだとその隊長に命令した。イエスを引き取った兵士等は、彼を執政所の中庭に連れ戻り、ヘロデが着せた衣を脱がせ、イエス自身の衣類を着せた。兵士等は、イエスを馬鹿にし、嗤笑はしたが、さらなる体罰は与えなかった。イエスはそのとき、これらのローマ兵士とだけいた。友人等は身を隠していた。敵は、それぞれの方角に行き、ヨハネ・ゼベダイオスさえ最早その側にはいなかった。

186:4.2 (2001.5) ピーラトゥスが兵士にイエスを引き渡したのは８時少し後で、磔の場面に出発したのは９時少し前であった。この間の半時間以上、イエスは、決して一言も話さなかった。大宇宙の業務活動は、実際停止していた。ガブリエルとネバドンの主な支配者達は、ここユランチアに集められるか、さもなければ、ユランチアで人の息子に起きていることに関して助言を受ける努力において大天使の宇宙報告にしっかりと聞き入っていた。

186:4.3 (2001.6) 兵士がイエスとのゴルゴサへの出発準備ができる頃には、かれらは、イエスの稀なる落ち着きと並はずれた威厳、すなわち不平を伴わない沈黙に感銘を受け始めた。

186:4.4 (2001.7) 磔場所へのイエスとの出発の遅れの大部分は、死を言い渡された２人の盗賊を連れて行くという最後の瞬間の隊長の決定のためであった。イエスがその朝、磔にされることになっていたときから、ローマ隊長は、これらの２人が過ぎ越しの祭礼の終わりを待つのも、イエスと共に死ぬのも同じであると考えた。

186:4.5 (2002.1) 盗賊達は、用意ができるとすぐに中庭に導かれ、そこでイエスをじっと見つめた。２人のうち１人は初めてだあったが、他の１人は、寺院の中と何カ月も前にペラ宿営所の2か所でイエスが話すのをしばしば聞いたことがあった。

5. 過ぎ越しに関連してのイエスの死

186:5.1 (2002.2) イエスの死とユダヤ人の過ぎ越しとには何の直接的な関係はない。あるじが、この日ユダヤ人の過ぎ越しに向けての準備の日に、また寺院での過ぎ越しの子羊

の生贄を捧げる時間近くに肉体におけるその人生を捨てたのは本当である。しかし、この偶然の一致による出来事は、地球における人の息子の死が、ユダヤ人の生贄の制度との何らかの関係があるということをいかなる方法でも示してはいない。イエスは、ユダヤ人ではあったが、人の息子としてその領域の必滅者であった。あるじの差し迫る磔のこの時間までにすでに語られ、また次第に積み重ねられてきた出来事は、ほぼそのときイエスの死は、全く自然で、そして人がやってのけた出来事であるということを示すに充分である。

186:5.2 (2002.3) 十字架上でのイエスの死を計画し実行したのは、人であり神ではなかった。神が、ユランチアでの人間の事象の進行を妨げることを拒否するということは、本当であるが、それが、地球で実行されたようには楽園の父は、自分の息子の死を布告したり、要求したり、また、必要とはしなかった。遅かれ早かれ、何らかの方法で、イエスがその人間の肉体の自分自身を、すなわち、具現化の肉体を投げ出さなければならなかったことは、事実であるが、２人の盗賊の間の十字架上の死でなくとも、数え切れない方法でそのような課題が実行できたの

は事実である。この総ては、人の行為であり、神のものではなかった。

186:5.3 (2002.4) あるじの洗礼時点で、第７の、しかも最後の宇宙贈与の成就に必要な地球での、かつ肉体での必要な経験の技をすでに完成していた。まさしくこの時に地球でのイエスの義務が果たされた。その後にイエスが生きた全人生が、彼の死の手段でさえ、この世界と、次の世界の必滅の被創造者の幸福と高揚のための純粋にイエスの個人的な活動であった。

186:5.4 (2002.5) 信仰により、必滅の運命にある者が、神の息子であるということを精霊で認識するようになるかもしれないという朗報の福音は、イエスの死に依存をしてはいない。全く、本当に、王国のこの福音全てが、あるじの死によって非常に照らされてきているが、その人生によってはなおさらにそうである。

186:5.5 (2002.6) この世で人の息子が言ったり、あるいは為したすべては、神との息子性、そして人の兄弟愛の主義を大いに美化したが、神と人とのこれらの不可欠な関係は、彼の被創造者への神の愛と神性の息子本来の慈悲に固有

である。この世界での、また宇宙の中の他の宇宙の全てを通じて、人とその造物主との感動的で神々しく美しいこれらの関係は、無限の過去からずっと存在していた。かれらは、それぞれの地方宇宙に対する制限のない主権の最終的な獲得に支払わなければならない代償の一部として創造された有識者の本質と類似をこのように身につける神の創造者たる息子達のこれらの周期的な贈与の制定にいかなる点でも依存してはいない。

186:5.6 (2002.7) 人と神の協同のこの超越した提示の後にそうであったように、天の父は、ユランチアにおけるイエスの生と死の以前とまさしく同じく地球の人間を非常に愛していた。ユランチアの人間としてのネバドンの神の具現のこの強力な出来事は、永遠の、無限の、そして普遍の父の属性を拡大させることはできなかった。しかし、それは、ネバドンの宇宙の他のすべての管理者と被創造者を豊かにし、啓発した。天の父は、マイケルのこの贈与により、我々をより一層愛しはしないが、他のすべての天の有識者は、そうである。そしてこれは、イエスが人に神を顕示をするばかりではなく、神に、そして、宇宙

の中の宇宙の天の有識者に人の新しい顕示を同様にしたからである。

186:5.7 (2003.1) イエスは、罪のための犠牲として死ぬつもりでは毛頭ない。かれは、人類の生まれながらの道徳的な罪悪を贖おうとしているのではない。人類は、神の前にそのような何の人種的な罪の意識はない。罪悪は、純粋に個人的な罪の問題であり、そして、父の意志とその息子達の運営意志に対する周知の上の、故意の反逆の問題である。

186:5.8 (2003.2) 罪と反逆は、神の楽園の息子達の基本的な贈与計画とは無関係であるとはいえ、救助計画が贈与計画の暫定的な特徴であるように、我々には見える。

186:5.9 (2003.3) イエスが無知な必滅者の残酷な手によって殺されなかったとしても、ユランチアの死すべき者のための神の救済は、全く同じく効果的であったであろう。もしあるじが地球の死すべき者に好意的に受け入れられ、肉体でのその人生の自発的放棄によってユランチアを離れていたならば、神の愛と息子の慈悲の事実—神との息子関係の事実—は、少しも効果をもたらさなかったであろ

う。あなた方死すべき者は、神の息子であり、そのような真実を個人的な経験で事実にするただ１つのことが要求されており、それは、あなたの精霊から生まれる信仰である。

論文 187
磔

187:0.1 (2004.1) 兵士達は、2人の山賊の用意を済ませると、百人隊長の指示の下、磔場へと出発した。これらの12人の兵士担当の百人隊長は、前夜ローマ兵にゲッセマネでイエスの逮捕を指揮した同じ隊長であった。磔にされる者各自にに4人の兵士を充当するのがローマ軍隊の習慣であった。2人の山賊は、磔に連れ出される前に然るべく鞭打ちをうけたが、イエスには、さらなる体罰は与えられなかった。隊長は、有罪宣告以前にすら、イエスがもはや十分に、苦しめられたと疑う余地なく思った。

187:0.2 (2004.2) イエスと共に磔にされる2人の強盗は、バー アッバスの仲間であり、ピーラトゥスが過ぎ越しの恩赦としてバー　アッバスを釈放していなかったならば、その首領と後に殺されたであろうに。イエスは、こうしてバー アッバスの代わりに磔にされた。

187:0.3 (2004.3) イエスが今しようとしていることは、つまり十字架で死に服するということは、自身の自由意志によるものである。この経験を予言してイエスは言った。「私は自分の命を進んで捨てるので、父は私を愛し支えられる。しかし、私はもう一度それを得るつもりである。誰も私からその命を取りはしない—私は自分でそれを捨てるのである。私には、それを捨てる権威があり、それを得る権威がある。私はそのような命令を父から受けた。」

187:0.4 (2004.4) 兵士が執政所からゴルゴタにイエスを率いたのは、その朝９時直前であった。イエスに秘かに同情する多くの者がそれらのあとに続いたが、200人の、あるいはそれ以上のこの1団の多くは、単に磔の目撃の衝撃を楽しもうとするだけのイエスの敵か、若しくは好奇心の強い怠け者のいずれかであった。ユダヤ人の指導者の数人だけは、十字架上のイエスの死を見に出かけた。かれがピーラトゥスによってローマ兵士に引き渡されたということ、そして死の宣告を受けたということを知っており、ユダヤ人の指導者等は、寺院での会合で忙しくして

おり、その会合で追随者達をいかにすべきかについて議論した。

1. ゴルゴタへの道

187:1.1 (2004.5) 執政所の中庭を去る前、兵士は、横桁をイエスの肩に乗せた。有罪判決を受けた者に磔場まで強要して横桁を運ばせることは、習慣であった。そのような宣告を受けた者は、十字架全体ではなく、この短い方の材木だけを運んだ。３基の十字架の長い真っ直な材木の方は、兵士とその囚人到着までにはすでにゴルゴタに搬送され、しっかりと地面に立てられていた。

187:1.2 (2004.6) 習慣に従い、隊長は、炭で犯罪者の名前と宣告を受けた罪名が記された小さな白板を携行して行列を率いた。百人隊長の持つ２人の泥棒名のある掲示の下には、「山賊」と一つの言葉が記されていた。目撃者全員が、宣告を受けた者がいかなる犯罪で磔にされたかが知れるように、犠牲者が横桁に釘づけされ、縦桁上に掲げられた後、この掲示が、十字架の上端に、犯罪者の頭のすぐ上に釘打ちされるのが習慣であった。イエスの十字架につけるために百人隊長が運ぶ銘は、ピーラトゥス自

身が、ラテン語、ギリシア語、およびアラメーア語で次のように書いた。「ナザレのイエス—ユダヤ人の王」。

187:1.3 (2005.1) ピーラトゥスがこの銘を書くときにまだ出席していたユダヤ人当局者の何人かは、イエスを「ユダヤ人の王」と呼ぶことに対しさかんな抗議をした。しかし、ピーラトゥスは、そのような告発がイエスの非難の宣告理由に導いた罪の一部であることを彼らに思い出させた。ユダヤ人は、ピーラトゥスの意向を変えるように説き伏せることができないと分かると、少なくとも「『私はユダヤ人の王である。』と自称した。」と変更して書くように嘆願したが、ピーラトゥスは、頑固であった。かれは、書き換えようとしなかった。すべての重なる懇願に、「私が書いことは、私が書いたのだ。」と答えるだけであった。

187:1.4 (2005.2) 通常、多くの人が死刑囚を見ることができるように最長の道路経由でゴルゴタに行くのが、習わしであったが、かれらは、この日、都から北に伸びるダマスカスの門への最短の経路を通過した。そして、この道に沿ってエルサレムの公式の磔場であるゴルゴタにすぐに到

着した。ゴルゴタの向こうには、金持ちの別荘があり、その道路の反対側には多くの裕福なユダヤ人の墓があった。

187:1.5 (2005.3) 磔は、ユダヤ人の罰の様式ではなかった。ギリシア人とローマ人の両方は、この処刑方法をフォイニキア人から学んだ。ヘロデさえ、彼のすべての残酷さでもってしても、磔には頼らなかった。ローマ人は、決してローマ国民を磔にしなかった。奴隷と従属民族だけが、この不名誉な死の様式にかけられた。エルサレムの包囲の間、ちょうどイエスの磔の40年後、ゴルゴタのすべてが、来る日も来る日も、何千もの十字架で覆われ、ユダヤ人種の花がそこで枯れた。誠に、この日の種子蒔きからの残酷な収穫。

187:1.6 (2005.4) 死の行列がエルサレムの狭い通り沿いに行くと、元気で思いやりのあるイエスの言葉を聞いたことのある女性、そしてその愛ある活動の人生を知る心優しいユダヤ人女性の多くは、そのような卑劣な死へと導かれているのを見るとき、泣くのを抑えられなかった。イエスが通り過ぎるとき、これらの女性の多くは、深く悲し

み嘆いた。そして、その中の一部が、敢えてイエスの側によってついていくときでさえ、あるじは、彼らに頭を向けて言った。「エルサレムの娘達よ、私のために泣くでない。むしろ、自分のために、子供等のために泣きなさい。私の仕事は終わろうとしている—すぐに、私は父の元へ行く—だが、エルサレムへの凄まじい波瀾の歳月は、ちょうど始まっている。見よ、不妊の女と一度も子に授乳したことのない乳房は幸いだ、とあなたが言う日が接近している。その頃、あなたは、労苦の恐怖からあなたが解放されるように自分の上に丘の岩が落ちることを祈るであろう。」

187:1.7 (2005.5) 磔に引き連れられる者に好意的な感情を示すことは厳しく違法であったことから、エルサレムのこれらの女性は、実に勇敢にイエスへの同情を表したのであった。野次馬は、死刑囚を冷やかし、愚弄し、嘲笑することは許されたが、少しの同情も示すことは許されなかった。イエスは、自分の友が身を隠している一方で、この暗黒の時間の同情の表現を評価はしたが、これらの心の優しい女性達が、自分のために同情を示すことにより当局の不快を招いて欲しくはなかった。このような時でさ

えイエスは、自分自身のことはほとんど考えず、エルサレムと全ユダヤ国家にとっての凄まじい悲劇の時代だけを考えた。

187:1.8 (2006.1) あるじは、磔への道沿いを重い足取りで歩いているとき非常に疲れきって、ほとんど消耗しきっていた。かれは、エーリージャ・マルコスの家での最後の晩餐から食物も水も取っていなかった。かれは、一瞬の睡眠をとることも許されていなかった。肉体的な苦しみと流血を伴う虐待の鞭打ちは言うまでもなく、これに加えて、引き続く聴取が、有罪宣告の時間まであった。なおその上に、極端な精神的な苦悶、深刻な精霊的な緊張、人間の甚だしい寂寞感があった。

187:1.9 (2006.2) 都を出る門を通過した直後、横桁を運んでいるイエスがよろめいたとき、その体力がしばらく失われ、かれは重い荷の下敷になった。兵士は怒鳴りつけて彼を蹴ったが、イエスは立ち上がることができなかった。隊長はこれを見ると、イエスがすでに耐えてきたことを知っていて、兵士に止めるように命令した。それから、キレーネからのシーモンという通行人にイエスの肩から横

桁を取るように命じ、ゴルゴタまでの残りの道を運ぶように強いた。

187:1.10 (2006.3) この男シーモンは、過ぎ越しに出席するために北アフリカのキレーネからはるばる来ていた。ローマ隊長がイエスの横桁を運べと命令したときは、他のキレーネ人と都の壁のすぐ外側に滞在しており、寺院の礼拝に行く途中であった。シーモンは、多くの友人やイエスの敵と話をして、十字架上のあるじの死の時間の間ずっと居残っていた。シーモンは、復活後とエルサレムを去る前に、王国の福音の勇敢な信者となり、また帰省してからは、家族を天の王国に導いた。２人の息子のアレクサンダーとルーフスは、アフリカでの新しい福音の非常に有能な教師となった。しかし、シーモンは、代わって重荷を運んであげたイエスと、かつて負傷した息子を助けてくれたユダヤ人の家庭教師とが同一人物であることをついぞ知らなかった。

187:1.11 (2006.4) この死の行列がゴルゴタに到着したのは、９時直後であった。ローマ兵士は、２人の山賊と人の息子

をそれぞれの十字架に釘づけにする仕事に取り掛かった。

2. 磔

187:2.1 (2006.5) 兵士は、まず横桁にあるじの両腕を縄で縛り、次に両手を木に打ちつけた。杭にこの横桁を掲げたとき、そしてしっかりと十字架の縦の材木にそれを打ちつけた後、両足を貫通するように1本の長釘で木に打ちつけた。縦桁には、適当な高さに打ち込まれた大きな掛け釘があり、それは、体重を支えるための鞍のような役割をした。十字架は高くなく、あるじの足は地面からほんの1メートル足らずのところにあった。彼には、したがって、自分が嘲られて言われているそのすべてが聞こえ、その上、そのように軽率に自分を愚弄するすべての人の表情を明らかに見ることができた。また、そこに居合わせた人々は、長引く拷問とゆっくりの死の間にイエスが言った全てを容易に聞くことができた。

187:2.2 (2007.1) 磔にされる者からすべての衣服を脱がせるのが習慣であったが、ユダヤ人は、人間の裸体を公共に晒すことには大反対であったので、ローマ人はエルサレムで

磔にされるすべての者に対してはつねに適当な腰布を用意した。従って、イエスの衣服が脱がされた後、かれは、十字架につけられる前にそのように装っていた。

187:2.3 (2007.2) 磔は残酷で長引かせる罰を与えるために用いられ、その犠牲者は、時には数日間死なずにいた。磔に反対する著しい感情がエルサレムにあり、苦しみを減少させるために薬物を混合した葡萄酒を犠牲者に勧める目的で、常に磔場に代表を送るユダヤ人の女性の結社が存在した。しかし、イエスはこの麻痺させる葡萄酒の味見をしたとき、非常に喉が乾いていたにもかかわらず、かれは、それを飲むことを拒否した。あるじは、まさしくその終わりまで人間の意識を保つことを選んだ。かれは、死に応じることを、この残酷で無慈悲な形態にさえ応じることを、かつ完全な人間の経験への自発的な服従によってそれを征服することを望んでいた。

187:2.4 (2007.3) イエスが十字架につけられる前、２人の山賊は、すでにそれぞれの十字架にかけられており、その間ずっと、死刑執行人に悪態をつき、唾を吐き掛けていた、横桁に打ちつけられるときのイエスの唯一の言葉

は、「父よ、彼等をお許しください。自分達のしている事を知らないのですから。」であった。もし慈愛深い献身というそのような考えが寡欲の奉仕のイエスの全人生の主動力でなかったならば、それほどまでに慈悲深く愛情を込めて死刑執行人のために取りなすことはできなかったであろう。生涯についての考え、動機、熱望というものは、危機に際するとき公然と明らかになるものである。

187:2.5 (2007.4) あるじが十字架に掲げられたあと、隊長は、イエスの頭上に称号を釘で留めた。それには3言語で「ナザレのイエス—ユダヤ人の王」とあった。ユダヤ人は、これを侮辱と考えて激怒した。しかし、ピーラトゥスは彼らの無礼な態度に苛立った。かれは、脅迫され、辱しめられたと感じ、些細な報復のこの方法を取った。「イエス、反逆者」と書くことができたのであった。しかし、ピーラトゥスは、エルサレムのこれらのユダヤ人は、ナザレというその名前さえもいかに嫌悪していたかをよく知っていたので、こうして彼らを辱しめることを決意した。かれは、ユダヤ人が、処刑されるガリラヤ人

が、「ユダヤ人の王」と呼ばれるのを見て非常に深く傷つけられるであろうことも知っていた。

187:2.6 (2007.5) ピーラトゥスが、いかにイエスの十字架にこの銘文を取りつけるかによって自分達を嘲笑しようとしたかを知ったとき、ユダヤ人指導者の多くは、ゴルゴタへと急いで出掛けたが、ローマ兵士が警備して立っていたのでそれを敢えて取り除こうとはしなかった。これらの指導者は、称号を取り除くことができずに群衆に入り交じり、銘文に深刻な注意を払わないようにし、嘲笑と揶揄を掻き立てるために全力を尽くした。

187:2.7 (2007.6) イエスが十字架上に掲げらた直後、そして、ちょうど隊長があるじの頭上に称号を打ちつけているときに、使徒ヨハネが、イエスの母のマリア、ルース、ユダと到着した。ヨハネは、11人の使徒の中で磔を目撃する唯一の者であったが、イエスの母をその場面に連れて行き、そのすぐ後に自分の母とその友人達を連れ戻るためにエルサレムへと駈けつけたので、彼ですら、その場にはずっといなかった。

187:2.8 (2007.7) イエスは、ヨハネと弟妹といる母を見掛けると微笑んだが、何も言わなかった。あるじの磔に割り振られたた４人の兵士は、習慣通りに、イエスの着用品を、１人は履物、１人は頭布、１人は飾り紐、４人目は外套を分け合った。これで、チュニック、または膝近くまである縫い目のない衣服が残り、４片に裁断されようとするところであったが、兵士達は、それが何と珍しい衣類であるかが分かると籤で決めることにした。衣服を分け合う間、イエスは、兵士達を見下ろしており、考えの足りない群衆は、イエスを嘲った。

187:2.9 (2008.1) ローマ兵士があるじの衣服を手に入れたことは良かった。さもなければ、追随者達がこれらの衣服を手に入れていたならば、迷信的な遺品崇拝に向かったことであろう。あるじは、追随者達が、地球での彼の人生に何の物質的な物を関連づけないことを望んでいた。かれは、父の意志をすることに奉げられる高い精霊的な理想に捧げる人間の人生に関わる思い出だけを人類に残したかった。

3. 磔を見たもの達

187:3.1 (2008.2) この金曜日の朝の９時半過ぎ、イエスは、十字架に掛けられた。11時前、人の息子のこの磔の光景を目撃するために1,000人以上が集まっていた。彼が、被創造者の死に、死刑囚の最も不名誉な死にさえ面していたとき、宇宙の目に見えない軍勢は、恐ろしいこれらの時間を通して、黙って立って、創造者のこの異常な現象を見つめた。

187:3.2 (2008.3) 磔の間、前後合わせて十字架の近くに立っていたのは、マリア、ルース、ユダ、ヨハネ、サロメ(ヨハネの母)、それにクロパスの妻であり、イエスの母の姉妹であるマリア、マグダラのマリア、そして、かつてセーフォリスに居住したレベッカを含む熱心な女性信者の一団であった。イエスのこれらの人々と他の友人は、彼の格段の忍耐力と不屈の精神を目撃し、その激しい受難を見つめながら、無言でいた。

187:3.3 (2008.4) 通って行く多くの者は、首を振りイエスを罵倒して言った。「寺院を壊し３日間でそれを建て直す奴、自分を救ってみろ。神の息子なら、なぜ十字架から下りてこないのか。」同様に、ユダヤ人の支配者の何人か

は、「他人は救ったが、自分は救えない。」と言ってイエスを嘲った。「ユダヤ人の王なら、十字架から下りろ。そうすれば、お前を信じるぞ。」と他の者達は言った。また後には、「あいつは、自分を救ってくれると神を信じた。神の息子であるとさえ言い張った—今あいつを見ろ—２人の強盗の間で磔にされているぞ。」と言って、かれらは、さらに愚弄した。２人の強盗さえも、イエスを罵り非難を浴びせた。

187:3.4 (2008.5) イエスがどんな嘲りにも応じようせず、また特別な準備の日の正午に近づきつつあったことから、からかい嘲っていた群衆の大半は、11時半までにはそれぞれの途についた。50人足らずの者は、その場に留まった。長い臨終をみとるために落ち着いて、兵士達は、そのとき昼食をとり、安価で酸っぱい葡萄酒を飲む準備をした。かれらは、葡萄酒を相伴しながら嘲笑的にイエスに乾杯した。「万才、好運を。ユダヤ人の王に。」そして、兵士達は、その嘲笑と愚弄に対するあるじの寛容性にひどく驚いた。

187:3.5 (2008.6) 兵士達の飲食を見たとき、イエスは、彼等を見下ろして「喉が渇いた。」と言った。イエスが「喉が渇いた。」と言うのを聞いた護衛隊長は、自分の瓶から幾らかの葡萄酒を取り、投げ槍の先に浸した海綿の栓を刺し、からからに乾いた唇を潤すことができるようにイエスにそれを差しのべた。

187:3.6 (2008.7) イエスは、超自然の力に頼らず生きることを決意し、同様に、普通の必滅者として十字架で死ぬことを選んだ。人として生き、また、人として死ぬつもりであった—父の意志を為しつつ。

4. 十字架上の強盗

187:4.1 (2008.8) 山賊の1人は、「神の息子なら、お前は、なぜお前と俺達を救わないんだ。」とイエスを罵倒した。しかし、この山賊がイエスを責めると、あるじが教えるのをしばしば聞いたもう片方の強盗は、「お前は、神さえも恐れないのか。我々は自分の行いのために当然に苦しんでいるが、この男は、不当に苦しんでいるのが分からないのか。我々は、自分の罪と魂の救済のために許しを請うた方がいいぞ。」イエスは、この強盗がこうを言うの

を聞くと、顔を男の方に向けて満足げに微笑んだ。悪人は、イエスの顔が自分に向けられるのを見ると、勇気を奮いおこし、揺らめく信仰の炎を扇いで、「主よ、あなたの王国に入るとき私を思い出してください。」と言った。すると、イエスは、「 誠に、誠に、私は、今日君に言っておこう。君は、いつか楽園で私と共にいるであろう。」と言った。

187:4.2 (2009.1) あるじには、人間の死の激痛の直中にあって、信じる山賊の信仰告白を聞く時間があった。この強盗は、救済を得ようと努めるとき、救出を見つけた。これ以前に、かれは、幾度となくイエスを信じることを強いられてきたが、ただこの最後の意識の数時間にあるじの教えに全心で振り向いた。イエスが十字架上の死に直面する態度を見たとき、この盗賊は、人の息子は本当に神の息子であるという信念にもはや逆らうことができなかった。

187:4.3 (2009.2) イエスによる盗賊のこの改心と王国への受け入れの出来事の間、使徒ヨハネは、磔の場面に母とその友人を連れて来るため都に入っていたので不在であった。

ルカスは、後に、改宗したローマの護衛隊長からこの話を聞いた。

187:4.4 (2009.3) 使徒ヨハネは、磔に関する出来事を覚えているがままに、その出来事の2/3世紀後に伝えた。他の記録は、見聞したことから後にイエスを信じ、地球での天の王国の完全な親交へと身を投じた勤務に当たっていたローマ百人隊長の詳述に基づいた。

187:4.5 (2009.4) この若者、悔悛した山賊は、政治的な弾圧と社会的な不公正に対する効果的かつ愛国的な抗議としてそのような強盗稼業を持てはやす者達により暴力と悪行の人生へと導かれていた。そして、この種の教え、および冒険への衝動は、その他の点では善意の多くの若者達を、これらの大胆な強盗遠征に参加させた。この青年は、バー　アッバスを英雄として見てきた。かれは、そのとき間違いに気づいた。そこ、自分の横の十字架の上に、かれは、本当に偉大な男、本当の英雄を見た。そこには、情熱を燃やし、道徳的な自尊心の最高理念を奮い立たせ、勇気、男らしさ、勇敢さのすべての理想を掻き立てた英雄がいた。イエスを見つめていると、愛、忠

誠、真の偉大さの圧倒的な感覚が、青年の心に湧き上がった。

187:4.6 (2009.5) そして、嘲う群衆の中の他の誰かが、その魂の中で信仰の誕生を経験し、イエスの慈悲に訴えていたならば、信じている山賊に向けて示された同じ愛のこもった思いやりが受け入れられたことであっただろう。

187:4.7 (2009.6) 悔いた泥棒が、いつか楽園で会うであろうというあるじの約束を聞いた直後、ヨハネが、母と10人を越える女性信者の一団を連れて都から戻ってきた。ヨハネは、イエスの母マリアの身近に場所を定め、彼女を支えた。息子ユダは、反対側に立っていた。イエスがこの光景を見下ろしたときは真昼で、かれは、母に「婦人よ、あなたの息子を見なさい。」と言った、ヨハネには、「我が息子よ、あなたの母を見なさい。」と言った。それから両者に「あなた方が、この場から離れることを望む。」と言った。したがって、ヨハネとユダは、ゴルゴタからマリアを連れ去った。ヨハネは、自分がエルサレムで滞在した場所にイエスの母を連れて行き、それから、磔の現場に急いで戻った。マリアは、過ぎ越しの後

にベスサイダに戻った。そこで、彼女は、ヨハネの家で残りの人生を送った。マリアは、イエスの死後1年も生きていなかった。

187:4.8 (2010.1) マリアの出発後、他の女性達は、近くに引き下がり、十字架で息が絶えるまでイエスの側に付き添っていた。そして、あるじの体が埋葬のために引き下ろされる時まで、彼女達は、ずっと立っていた。

5. 十字架上の最後の時間

187:5.1 (2010.2) 季節としてそのような現象には早かったが、12時直後、空は、きめ細かい砂のせいで暗くなった。エルサレムの人々は、これがアラビア砂漠からの熱風を伴う砂嵐の接近を意意味することを知っていた。１時前には、太陽が隠れるほどの暗闇となり、残りの群衆は、急いで都へと戻った。あるじがこの時間のすぐ後にその命を諦めたとき、30人足らずの人がそこに居た。13人のローマ兵士と15人ほどの信者の一団だけが。あるじが息絶える直前にその場面に戻ったイエスの弟ユダとヨハネ・ゼベダイオスの２人を除いては、これらの信者は、皆女性であった。

187:5.2 (2010.3) 1時直後、イエスは、激しい砂嵐が暗黒を拡大していく中で人間の意識を失い始めた。イエスの最後の慈悲、許し、訓戒の言葉は、すでに話されていた。イエスの最後の願望—母の世話に関する—は、すでに示されていた。接近する死のこの時間、イエスの人間の心は、ヘブライの聖書、特に詩篇の多くの章句の反復に戻った。人間イエスの意識を伴った最後の考えは、現在は20番、21番、22番の詩篇として知られる詩篇の一部を心で反復することに集中した。唇はしばしば動くのだが、それほどまでに諳んじてよく知っているこれらの章句が心に浮かびくるままに言葉を発するには、彼は衰弱しきっていた。側に立つ者達にほんの数回聞かれた何らかの発声は、「主は塗布された者を救われるのを知っている。」「あなたの手は、私のすべての敵を見つけるであろう。」「私の神よ、私の神よ、何故に私を見捨てられたのですか。」というようなものであった。イエスは、父の意志に従って生きたということに一瞬たりとも些さかの疑問も抱かなかった。また、父の意志に従って肉体の命を、いま横たえようとしているということを決して疑わなかった。かれは、父が、自分を見捨てたとは感じ

なかった。消え去りつつある意識の中で聖書の多くの文章、中でも「私の神よ、私の神よ、何故に私を見捨てられたのですか。」で始まるこの22番の詩篇をただ諳じていたに過ぎなかった。そして、これは、側に立つ者達にはっきり聞こえるほどに発語された3種類の章句のたまたま1つであった。

187:5.3 (2010.4) 二度目に、「喉が渇いた」と言って人間イエスが自分の仲間への最後の要求は、およそ1時半過ぎであり、同じ護衛隊長は、そこで、その時代一般的には酢と呼ばれた酸味の葡萄酒を浸した同じ海綿で再びその唇を潤した。

187:5.4 (2010.5) 砂嵐は強さを増し、天空はますます暗くなった。兵士と小集団の信者達はまだ待機していた。兵士達は、十字架の近くに屈み、身を切るような砂から自分たちを保護するために共に群がった。ヨハネの母と他のものは、張出した岩でいくらか保護されている遠方から見ていた。あるじが遂に最後の息をひきとるとき、その十字架の足下には、ヨハネ・ゼベダイオス、イエスの弟ユ

ダ、ルース、マグダラのマリア、かつてセーフォリス居住のレベッカがいた。

187:5.5 (2011.1) イエスが、「終わりました。父よ、あなたの手に、私の精霊を委ねます。」と大声で叫んだのは、ちょうど3時前であった。イエスがこのように言い終えたとき、頭を下げ、生命の闘いをやめた。ローマ百人隊長は、イエスがどう死んだかを見たとき、自分の胸を打ち、「これは、実に正しい者であった。本当に、神の息子であったに違いない。」と言った。そして、その時から、イエスを信じ始めた。

187:5.6 (2011.2) イエスは王らしく—彼が生きたように—死んだ。かれは、その悲惨な日を通して率直に自己の王位を認めて、状況を制していた。選ばれた使徒の安全のために備えた後、かれは、進んでその不名誉な死に向かった。問題を起こすペトロスの暴力を賢明に抑止し、自分の人間生活の終わりまでヨハネを側近くにおいた。かれは、自分の本質を殺意あるシネヅリオン派に示し、神の息子としてその最高権威の源をピーラトゥスに思い出させた。かれは、横桁を運んでゴルゴタへと出発し、人間

が獲得した精霊を楽園の父へ引き渡すことにより、自己の愛ある贈与を終えた。そのような生涯—また、そのような死—の後にこそ、あるじは、誠に「終わりました。」と、言うことができた。

187:5.7 (2011.3) それが過ぎ越しと安息日の両方の準備の日であったので、ユダヤ人は、ゴルゴタでこれらの遺骸をさらすことを望まなかった。したがって、十字架から引き下ろし、日没前に犯罪者の埋葬の穴に投げ込めるようにこれらの３人の男の脚が折られ、殺されてよいか、ピーラトゥスに頼みに行った。ピーラトゥスは、この要求を聞くと、彼らの脚を折って片づけるために直ちに３人の兵士を遣わせた。

187:5.8 (2011.4) これらの兵士がゴルゴタに到着すると、命令に従い２人の泥棒にそれをしたが、兵士が非常に驚いたことには、イエスはすでに死んでいた。それでも、その死を確かめるために、兵士の一人が、槍でイエスの左側を刺した。磔の犠牲者が２日間、あるいは３日間も十字架の上で生き長らえるということは、一般的ではあったが、イエスの激しい感情の苦痛と鋭い精霊的な苦悩は、

５時間と30分足らずで、肉体での人間の生命に最期をもたらした。

6. 磔の後

187:6.1 (2011.5) 砂嵐の暗黒の最中、３時半頃にダーヴィド・ゼベダイオスは、あるじの死の知らせを届ける最後の使者を送った。ダーヴィドは、イエスの母とその残りの家族が止まると推測したベサニアのマールサとマリアの家に最終走者を急派した。

187:6.2 (2011.6) あるじの死後、ヨハネは、ユダに託してエーリージャ・マルコスの家へ婦人達を行かせた。そこでかれらは、安息日の終わるまで留まった。この頃までにはローマ百人隊長によく知られていたヨハネ自身は、ヨセフとニコーデモスが、イエスの遺骸を手に入れる許可をピーラトゥスから持参し、その場に到着するまでゴルゴタに残った。

187:6.3 (2011.7) このように、無数の有識者の広大な宇宙に対して終わった悲劇と悲嘆の１日は、最愛の君主の人間の肉体化の磔の衝撃的な光景にぞっとした。かれらは、人間の冷淡さと邪悪の顕示に唖然とした。

論文 188
墓の時間

188:0.1 (2012.1) イエスの必滅の身体が、ヨセフの墓に横たわる１日半、すなわち十字架上での死とその復活の間の期間は、我々にはほとんど知られていないミカエルの地球経歴における1章である。人の息子の埋葬を述べ、その復活に関連する出来事をこの記録に組み入れることはできるが、我々は、金曜日の午後３時から日曜日の朝３時までのおよそ36時間に本当に起きた確かな多くの情報を供給することはできない。あるじの経歴におけるこの期間は、ローマ兵士に十字架から引き下ろされる直前に始まった。イエスは、その死後およそ1時間十字架上にいた。２人の山賊の片付けに手間取らなければ、もっと早くに下ろされていたであろう。

188:0.2 (2012.2) ユダヤ人の支配者達は、イエスの遺体を都の南のゲ　ヒンノムの無蓋の埋葬穴に投げ入れさせる計画であった。磔の犠牲者をこのように処分するのが習慣であった。もしこの予定が実行されていたならば、あるじの遺体は、野獣に曝されていたことであろう。

188:0.3 (2012.3) そうしているうちにも、アリマセアのヨセフは、ニコーデモスに伴われてピーラトゥスの元に行き、適切な埋葬のためにイエスの遺体引き渡しを願い出た。磔にされた者の友人がそのような遺体所有の権利のためにローマ当局に賄賂を贈ることは珍しくなかった。ヨセフは、イエスの身体を個人の墓地に移行する許可の代価の支払いに必要な際に備えて、多額の金を持ってピーラトゥスの前に行った。しかし、ピーラトゥスは、このための金を取ろうとはしなかった。ピーラトゥスは、要求を聞くとヨセフがすぐにゴルゴタに赴き、あるじの遺体の即座の、かつ完全な所有を認可する命令書に署名した。そのうちに、砂嵐はかなり弱まり、シネヅリオン派を代表するユダヤ人の一団は、イエスの身体が山賊のそれらと一緒に無蓋の公共の埋葬穴に入れられることを確実にする目的でゴルゴタへと出かけていった。

1. イエスの埋葬

188:1.1 (2012.4) ヨセフとニコーデモスがゴルゴタに到着したとき、かれらは、兵士達が、十字架からイエスの身体を下ろしており、シネヅリオン派の代表が、追随者の誰もイエスの遺体を罪人の埋葬穴への到達を防げないことを傍

観しているのがわかった。ヨセフが、百人隊長にあるじの遺体を求めるピーラトゥスの命令書を提示すると、ユダヤ人達は、騒ぎたててその所有を喧しく要求した。かれらは、喚き散らし、遺体を乱暴に手に入れようとし、そしてこれを果たしたとき、百人隊長は、４人の兵士に自分の側に来るように命令するとともに、抜いた剣を手にして地面に横たわるあるじの遺体を跨いで立った。百人隊長は、激怒するユダヤ人暴徒を退けている他の兵士達に２人の泥棒を残すように命令した。状況が収まると、百人隊長は、ピーラトゥスからの許可証をユダヤ人に読み聞かせ、脇へ寄ってヨセフに「この遺体はお前が適当にしてよい。私と兵士が、誰も手出しをせぬよう待機しておるぞ。」と言った。

188:1.2 (2013.1) 磔にされた者は、ユダヤ人墓地に埋葬されることはできなかった。厳しい法律が、そのような手続きに対してあった。ヨセフとニコーデモスは、この法律を知っていた。そして、ゴルゴタの北の近い距離に位置し、サマリアに通じる道路の向かいの道のヨセフの家族の新しい墓、硬い岩石を切り出した墓にイエスを埋葬すると決めた。まだ誰もこの墓には横たえられていなかった。

二人は、あるじがそこに休息するのが適切であると考えた。ヨセフは、イエスが蘇ると本当に信じたが、ニコーデモスは、非常に疑わしく思った。シネヅリオン派のこれらの元成員は、多少なりともイエスへの信仰を秘密にしていたが、シネヅリオン派の仲間は、長い間、彼らが協議会から退く前からすでに疑っていた。この後二人は、エルサレム中で最も大胆に物を言うイエスの弟子であった。

188:1.3 (2013.2) ほぼ４時半過ぎ、ナザレのイエスの埋葬行列は、ゴルゴタから道の向こう側のヨセフの墓へと出発した。４人の男性がそれを運び、遺体は、麻布に包まれており、ガリラヤからの忠実な通夜の女性達がそれに続いた。イエスの形ある遺体を墓に運んだ者達は、ヨセフ、ニコーデモス、ヨハネとローマ百人隊長であった。

188:1.4 (2013.3) かれらは、ほぼ９平方メートルの墓室に遺体を運び、大急ぎで埋葬準備をした。ユダヤ人は、実際には死者を埋葬しなかった。かれらは、実際には腐敗処理を施した。ヨセフとニコーデモスは、大量のミルラとアロエを携帯してきており、これらの溶液を含ませた包帯で

さっそく遺体を包んだ。腐敗処理を終えると、かれらは、顔の回りに小片の布を結びつけ、身体には麻布を巻きつけて、うやうやしくそれを墓の棚に置いた。

188:1.5 (2013.4) 遺体を墓に納めた後、百人隊長は、兵士達に石戸を墓の入り口の前に転がすのを手伝うようにと合図した。兵士達は、それから盗賊の遺体と共にゲ　ヒンノムに出発し、他の者は、モーシェの法に従い過ぎ越しの祝いのためにエルサレムに、悲しみのうちに戻っていった。

188:1.6 (2013.5) これは、準備の日であり、安息日は速やかに近づいていたので、イエスの埋葬はかなり大急ぎであった。男達は都に急いで帰ったが、女達は、とても暗くなるまで墓の近くに留まった。

188:1.7 (2013.6) このすべてが進行する間、女達は、全てを観察し、あるじがどこに横たえられるのかを見届けるために近くに隠れていた。そのような時に男性との交わりが許されていなかったので、女性達は、このように身を隠した。これらの女性は、イエスが埋葬のために適切に支度を整えられていたとは思わなかった。そこで、自分たち

であるじの遺体を然るべく準備するためにヨセフの家に戻り、安息日の間休息し、香料と塗薬を用意し、日曜日の朝戻ることにした。この金曜日の夕方、墓に長居していた女性等は、次の通りであった。マグダラのマリア、クロパスの妻マリア、イエスの母のもう一人の姉妹であるマールサ、それにセーフォリスのレベッカ。

188:1.8 (2013.7) ダーヴィド・ゼベダイオスとアリマセアのヨセフは別として、イエスが3日目に墓から甦るはずであるということを本当に信じたり、または理解していたのは、弟子のほんのわずかであった。

2. 墓の護衛

188:2.1 (2014.1) イエスの追随者達が3日目に蘇る約束に無頓着であったとしても、敵は無頓着ではなかった。祭司長、パリサイ派、サドカイ派等は、イエスが死から蘇ると言う報告を受け取ったことを思い出した。

188:2.2 (2014.2) この金曜日の夜、過ぎ越しの夕食後の真夜中頃、一団のユダヤ人指導者は、カイアファスの家に集まり、死後3日目に甦るというあるじの主張に対する自分達の恐怖について語り合った。この会合は、イエスの友

人達が、不正に動かすことのないように、イエスの墓の前にローマの護衛兵が配置されるようにとのシネヅリオン派の公式要求を携え、翌日早くピーラトゥスを訪問すべく数人のシネヅリオン会員を任命して終わった。この委員会の代弁者は、ピーラトゥスに言った。「閣下、我々は、この詐欺師、ナザレのイエスがまだ生きている時に、『3日後に甦る。』と言ったことを覚えています。我々は、それ故、その追随者に対し、少なくとも3日後まで、墓を安全にする指示を出されることを要求しに参りました。我々は、弟子達が夜やってきてそれを盗み去り、次には、甦ったと人々に発表しないかと大いに恐れております。これを生じさせてしまいますと、この誤りは、奴を生きらせるよりもはるかに具合が悪いでありましょう。」

188:2.3 (2014.3) ピーラトゥスは、シネヅリオン会員のこの要請を聞くと、「10人の護衛兵を与える。戻って墓を守れ。」と言った。会員達は寺院に戻り、10人の護衛兵を確保し、それから、ユダヤ人のこれら10人の衛兵と10人のローマ兵士と共に、この安息日の朝にもかかわらず、墓の前にこれらの衛兵を配置するためにヨセフの墓へと

行進した。これらの男は、墓の前にもう一つの石を転がして行き、知らぬ間に妨害されるといけないのでこれらの石の周りにピーラトゥスの封印をした。ユダヤ人達は、彼らに食べ物と飲み物を運び、この20人の男は、復活の時間まで見張りに残った。

3. 安息日の間

188:3.1 (2014.4) 弟子と使徒は、この安息日中、隠れたままでおり、エルサレム全体では、十字架上でのイエスの死を論じ合われていた。このときエルサレムにはローマ帝国とメソポタミアのあらゆる地域からのおよそ150万人のユダヤ人が来ていた。これは、過ぎ越しの始まりの週であり、すべてのこれらの巡礼者は、この都にいてイエスの復活を知り、各自の家にその知らせを持ち帰ることになるのであった。

188:3.2 (2014.5) 土曜日の夜遅く、ヨハネ・マルコスは、11人の使徒に自分の父の家に来るように秘かに呼び出しを掛けて、かれらは、ほんの夜中近くに、２晩前にあるじと最後の晩餐をとった上階の同じ部屋に集合した。

188:3.3 (2014.6) イエスの母マリアは、ユダとルースと共に、この土曜日の夕方、ちょうど日没前にベサニアに戻り家族に合流した。ダーヴィド・ゼベダイオスは、使者達が日曜日の朝早々に集合する手筈をしていたニコーデモスの家に留まった。イエスの身体のなお一層の防腐処理をするために香料を準備したガリラヤの女性達は、アリマセアのヨセフ宅に滞在した。

188:3.4 (2014.7) ヨセフの新しい墓で横たわっているはずのこの１日半の間、我々は、ナザレのイエスにまさしく何が起こったのかを説明することは完全にはできない。明らかに、同じ情況においていかなる必滅者もそうであるように、イエスは、十字架上で同様の自然な死を遂げた。我々は、彼が、「父よ、あなたの手に、私の精霊を委ねます」と言うのを聞いた。我々は、イエスの思考調整者が、イエスの人間としての存在とは別にずっと以前に専属化され、維持されていたことから、完全にそのような声明の意味を理解するわけではない。十字架上の物理的な死によってあるじの専属調整者は、いかなる点においても影響を受けることはできなかった。イエスがしばらくの間父の手に委ねたことは、大邸宅世界への人間の経

験の写しの転送に備えるように、調整者が必滅者の心を精霊的にする早期の仕事の精霊の割り符であったに違いない。球体上の信仰が成長している必滅者の精霊の性質、あるいは魂に類似したイエスの経験において、何らかの精霊的な現実があったに違いない。しかし、これは、単に我々の意見である—我々は、イエスが父に何を委ねたかを本当に知らない。

188:3.5 (2015.1) 我々は、あるじの肉体が、日曜日の朝の3時頃までヨセフの墓で横たわっていたのを知っているが、36時間のその間、イエスの人格の状態に関しては全く確信がない。我々は、時々大胆にもこれらのことについて我々自身に次のような幾つかの説明をした。

188:3.6 (2015.2) 1.ミカエルの創造者の意識は、物理的な肉体に関連する人間の心から全体的には完全に自由であったに違いない。

188:3.7 (2015.3) 2. この期間中、そして集められた天の軍勢の直接の指揮をして、イエスの元思考調整者が地球にいたことを、我々は、知っている。

188:3.8 (2015.4) 3. 肉体の人生の間に確立されたナザレのその男性の身につけた精霊的主体性は、まずは思考調整者の直接努力により、後には、父の意志の決して止むことのない選択によってもたらされたように、必滅者の理想的な生活における物理的な必要性と精霊的な要求の間の彼自身の完全な調整により楽園の父の保護に委ねられていたに違いない。我々は、この精霊の現実が、復活した人格の一部になったかどうかは知らないが、そうなったと信じる。しかし、外周空間の体系化されていない領域の未だ創造されていない宇宙に関して明らかにされていない彼らの目標において、終局者のネバドン部隊の指導力を発揮するために後に解放されるイエスのこの魂の主体性が、現在「父の懐」に安息していると考える者達が、宇宙にはいる

188:3.9 (2015.5) 4. 我々は、イエスの人間の、または必滅の意識が、この36時間の間、眠ったと考える。我々には、人間イエスがこの期間、宇宙で生じたことを何も知らなかったと信じる理由がある。人間の意識には、何の時間の経過もなかったようであった。生命の復活は、ちょうど同じ瞬間に、死の眠りに続いた。

188:3.10 (2015.6) これが、墓でのこの期間のイエスの状態に関して我々が記録に残せる全てである。我々は、それらの解釈の着手に全く適してはいないが、言及できるいくつかの関連事実がある。

188:3.11 (2015.7) サタニアの第一大邸宅界の復活の広間の広大な中庭では、現在ガブリエルの紋章入りで「ミカエル記念碑」として知られるすばらしい有形-モランチア構造が、いま観測できる。この記念碑は、ミカエルがこの世界から出発した直後に作成され、次の碑文がある。「ユランチアにおけるナザレのイエスの必滅の変遷を記念して。」

188:3.12 (2016.1) この期間100名を数えるサルヴィントンの最高協議会は、ユランチアにおいてガブリエル主宰の下に行政委員会が開かれたという現存する記録がある。この時期、ユヴァーサの日の老いたるものが、ネバドンの宇宙の状況に関してミカエルと連絡をとったことを示す記録もある。

188:3.13 (2016.2) あるじの遺体が墓に横たわっている間、少なくとも１件の情報が、ミカエルとサルヴィントンのイマヌエルに交わされたことが我々には分かっている。

188:3.14 (2016.3) イエスの身体が墓で休んでいる間、召集されたジェルーセムの惑星王子の組織協議会において、何らかの人格が、カリガスティアの席に座ったと信じるに足る理由がある。

188:3.15 (2016.4) エデンチアの記録は、ノーランティアデクの星座の父が、ユランチにいたということ、そしてイエスがこの墓にいる間、ミカエルから指示を受けたということを示している。

188:3.16 (2016.5) そして外見上の物理的なこの死の間、イエスの人格のすべてが眠っていたのではなく、また無意識ではなかったと示唆する他の多くの証がある。

4. 十字架上の死の意味

188:4.1 (2016.6) イエスは、必滅の運命にある人間の民族的な罪を償うためや、あるいは、機嫌を損ね寛大でない神に何らかの効果的な接近法を提供するために十字架でこの死

を遂げたのではなかった。人の息子は、自身を神の激しい怒りを静めたり、罪深い者に救済を得る道を切り開く犠牲として提供したのではなかったが、それにもかかわらず、償いと宥めについてのこれらの考えは誤りであるとはいえ、見落とされてはならない十字架上のイエスのこの死に伴う重要性がある。ユランチアが「十字架の世界」として他の隣接する棲息惑星の中で知れ渡ったことは、事実である。

188:4.2 (2016.7) イエスは、ユランチアにおいて肉体での完全な人間生活を送ることを望んでいた。死は、通常、人生の一部である。死は人間の劇における最後の一幕である。十字架上の死の意味の誤った解釈の迷信的な誤りを逃れる善意の努力において、あなたは、あるじの死の真の重要性と本当の意味を認識しないという重大な誤りを犯さぬように慎重でなければならない。

188:4.3 (2016.8) 必滅の人間は、決して大詐欺師には属さなかった。イエスは、背教支配者の一団や球体の堕落の王子達の掌握から人を身請けをするために死んだのではなかった。天の父は、先祖の悪行のために人間の魂を要求する

そのような馬鹿げた不正を決して発想はしなかった。十字架上のあるじの死は、人類の民族が神に負うこととなった債務返済の努力の犠牲でもなかった。

188:4.4 (2016.9) イエスが地球に住む以前、人はそのような神を信じることが正当だったかもしれないが、あるじが人間の仲間の間で生きて死んでからはそうではなかった。モーシェは、創造者たる神の威厳と正義を教えた。しかし、イエスは、天の父の愛と慈悲を描写した。

188:4.5 (2016.10) 動物的な性癖—悪行に向かう傾向—は、遺伝であるかもしれないが、罪は、親から子供へと受け継がない。罪は、意志をもつ個々の生物による父の意志と息子の法に対する意識的かつ故意の反逆行為である。

188:4.6 (2017.1) イエスはこの1つの世界の民族のためだけでなく、１つの宇宙全体のために生きて死んだ。イエスがユランチアで生きて死ぬ以前にさえ、領域の必滅者には救済があったが、それでも、この世界に関するイエスの贈与が救済の方法を大いに照らしたことは、事実である。彼の死は、肉体における死後の人間生存の確実性を永久に明らかにするのに大いに役立った。

188:4.7 (2017.2) イエスを犠牲者、受け戻し人、または贖い主として話すことは、全く適切ではないが、救済者として言及することは全く正しい。かれは、永久に、救済(生存)の方法をより明確で確かにした。ネバドンの宇宙にある全世界の必滅者全ての救済の道をよりよく、より確かに示した。

188:4.8 (2017.3) 人は、本当の、そして情愛深い父としての神の概念、イエスがかつて教えた唯一の概念を一旦理解するとき、その主な悦びが、悪行をしている臣下を見つけ、自分にほぼ等しい何らかの存在が、彼らのために苦しむこと、すなわち彼らの代わりに死ぬことを志願しない限り、それらが適切に罰せられることを見届けるもの、怒る君主、厳格で万能の支配者としての神に関するすべてのそのれら原始的概念を、一貫して、直ちに完全に捨てなければならない。身受けと償いの全構想は、それがナザレのイエスによって教えられ、例示されたような神の概念とは相容れない。神の無限の愛は、神性における何物にも勝る。

188:4.9 (2017.4) 償いと犠牲の救済のこのすべての概念は、我欲に深く根を下ろしている。イエスは、仲間への奉仕が、精霊信者の兄弟愛の最高の概念であることを教えた。救済は、神の父性を信じる人々によって当然のことと思われなければならない。信者の主な関心は、個人の救済への利己的願望ではなく、むしろ愛することへの寡欲な衝動であり、したがって、イエスが必滅の人間に愛をもって仕えたように自分の仲間に仕えるべきものである。

188:4.10 (2017.5) 本物の信者もまた、罪に対する将来の罰にあまり悩んではいない。本物の信者は、神からの現在の分離への心配だけである。本物の、かつ賢明な父達は、息子達を罰するかもしれないが、かれらは、愛と矯正目的のためにこのすべてをする。かれらは、怒りで罰しもしないし、報復で制裁もしない。

188:4.11 (2017.6) 神が、正義が最高であると司る宇宙の厳しく合法的な君主であったとしても、潔白な被害者を罪ある犯罪者の代理をさせる子供っぽい画策に決して満足はしない。

188:4.12 (2017.7) 実際には人間の経験の豊かさと救済方法の拡大に関係があるように、イエスの死の素晴らしさは、その死の事実ではなく、死の遭遇に際しての見事な態度と無類の精神である。

188:4.13 (2017.8) 償いの身受けのこの全体の考えは、救済を非現実性の平面に配置する。そのような概念は、純粋に哲学的である。人間の救済は、本当である。それは、被創造者の信仰により理解され、それによって、個々の人間の経験に取り込まれる２つの現実、神の父性の事実とその相関する真実、人の兄弟愛に基づく。「ちょうどあなたが負い目のある者を許すように、あなたの負い目が許される」ということは、つまるところ、本当なのである。

5. 十字架からの教訓

188:5.1 (2017.9) イエスの十字架は、群れに相応しくない者達のためにさえ、真の羊飼いの最高度の無私の愛を描く。それは、家族の基礎の上に神と人とのすべての関係を永遠に配置する。神は父である、人はその息子である。愛は、息子への父の愛は、創造者と被創造者—悪行を働く

者の苦しみと罰に満足を求める王の正義ではなく—の宇宙関係の中心的な真実になる。。

188:5.2 (2018.1) 十字架は、罪人に向けてのイエスの態度が、非難でも償いでもなく、むしろ永遠の、情愛深い救済であることを永遠に示している。イエスは、彼の人生と死が、人間を善と義の生存に首尾よく引き入れるという点で本当に救世主である。その愛が人間の心にある愛の反応を目覚めさせるほどに、イエスは、非常に人を愛している。愛は、実に、伝播し易く、永遠に創造的である。十字架におけるイエスの死は、罪を許し、すべての悪行を飲み込むに十分に強く、神々しい愛を例示している。イエスは、道義—単なる法解釈上の善し悪し—よりも公正さの高い特質をこの世界に明らかにした。神の愛は、単に誤りを許すだけではない。神の愛は、それらを吸収し、実際に破壊する。愛の許しは、まったく慈悲の許しを超える。慈悲は、悪行の罪悪感を片側に押しやる。しかし、愛は、罪とそこから結果として生じるすべての弱さを永遠に破壊する。イエスは、生きる新たな方法をユランチアにもたらした。かれは、我々に悪に抵抗するのではなく、彼を通して悪を効果的に破壊する善を

見つけることを教えた。イエスの許しは、容赦ではない。それは、非難からの救済である。救済は、悪事を軽視しない。それらを正す。真の愛は、妥協もせず憎しみも容赦しない。それを破壊する。イエスの愛は、単なる許しでは決して満たされない。あるじの愛は、復帰、永遠の生存を暗に意味する。人がこの永遠の復帰を意味するのであれば、救済のことを贖いとして話すことは全く妥当である。

188:5.3 (2018.2) イエスは、人に対するその個人の愛の力によって罪と悪の支配力を破壊することができた。かれは、人を解放し、それによって生活のより良い道を選ぶことができるようにした。イエスは、それ自体が未来への勝利を約束する過去からの救出を描いた。許しは、救済をこのように提供した。人間が一度完全に心に受け入れられると、神性の愛の美は、とこしえに罪の魅力と悪の力を破壊する。

188:5.4 (2018.3) イエスの受難は、磔だけに限られてはいない。実際は、ナザレのイエスは、現実の、そして激しい人間存在の十字架の上で25年以上を費やした。十字架の真の

価値は、それが、彼の愛の崇高で最終的な表現、彼の慈悲の完成された顕示であったという事実にある。

188:5.5 (2018.4) 何百万もの棲息界では、道徳上のもがきを諦め、信仰のための努力を捨てるように誘惑されたかもしれない何十兆もの進化する被創造者が、いま一度十字架のイエスに目をやり、次に、先に進む、人の寡欲な奉仕への献身において具現された自分の命を横たえる神の光景により奮い立った。

188:5.6 (2018.5) 十字架上の死の勝利は、自分を攻める者へのイエスの態度の精神にすべて要約されている。「父よ、彼等をお許しください。自分達のしている事を知らないのですから。」と祈るとき、イエスは十字架を憎しみに対する愛の勝利と悪に対する真実の勝利を永遠の象徴とした。愛のその献身は、広大な宇宙の至るところで伝播した。弟子達は、あるじからそれを捕らえた。この奉仕において命を捨てることを求められた福音のまさしく最初の師は、人々に石で死に追いやられているとき、「この罪を彼らに負わせないでください。」と言った。

188:5.7 (2018.6) 十字架は、自己の人生を仲間への奉仕に進んで捨てる者を明らかにするので、人の最善部分に最高の訴えをする。これよりすばらしい愛を何人も持つことはできない。友のためにすすんで自分の命を横たえるであろうという愛—そして、イエスには、敵のためにすすんで自分の命を横たえようとするそのような愛、これまでに地球で知られた何よりもすばらしい愛があった。

188:5.8 (2019.1) 他の世界で、また同じようにユランチアで、ゴルゴタの十字架における人間イエスの死のこの荘厳な光景は、必滅者の感情を刺激するとともに、それは、天使達の最高の献身を掻き立てた。

188:5.9 (2019.2) 十字架は、神聖な奉仕のその高い象徴、つまり仲間の福祉と救済への人の人生における献身である。十字架は、罪人の代りや機嫌を損ねた神の激憤を静める潔白な人の息子の犠牲の象徴ではないが、それは、地球や広大な宇宙の至るところで、自らを善人が悪人に授与し、それによって他ならぬこの愛の献身によって悪人を救う神聖な象徴として永久にある。十字架は、無欲の奉仕、心からの奉仕活動における、死、十字架上の死に至

ってさえも、正しい人生の完全な贈与における最高の献身という高い形の象徴としてある。そして、イエスによる贈与の人生のこのすばらしい象徴の光景こそは、我々全員が、同様にしたいと真に奮い立たせる。

188:5.10 (2019.3) 考え深い男女が、十字架に自分の人生を捧げようとするイエスを見るとき、かれらは、人生の最も厳しい苦労にさえ、まして取るに足りない迷惑行為や彼らの完全に偽りの多くの苦情に関して、不平を言うことを決して再び自分に許さないであろう。イエスの人生は、非常に輝かしく、その死は昂然としており、我々皆が、両方を共有したいという意欲に魅惑される。その若者時代から十字架上の死のこの圧倒する光景までのミカエルの全贈与には、本当に引きつける力がある。

188:5.11 (2019.4) それゆえ、神の顕示として十字架を見るとき、人は、神を厳しい正義と厳正な法執行のきびしい君主と見なしていた原始人の目や後の野蛮人の視点で見ることのないように心しなさい。むしろ、広大な宇宙の必滅の人種へのイエスの贈与における人生の任務への愛と献身の最後の顕現を十字架に見るように心にしなさい。

むしろ、人間界の息子等に対し繰り広げる父の神性愛の極みを人の息子の死に見なさい。十字架は、そのような贈り物と献身の受け入れを望む者への自らの愛の献身と自発的救済贈与をこのように描写している。父が要求したものは、十字架には何もなかった—イエスがそれほどまでに進んで与えたもの、避けることを拒否したもの以外は。

188:5.12 (2019.5) イエスを認め、地球でのその贈与の意味を理解することができなくても、人は、人間イエスの受難の不幸を少なくとも理解することができる。誰も、創造者が現世の苦悩の性質や範囲を知らないと恐れることはできない。

188:5.13 (2019.6) 我々は、十字架における死というものが、神への人の和解に作用するものではなく、父の永遠の愛とその息子の果てしない慈悲への人間の認識を刺激し、そして、全宇宙にこれらの普遍の真実を伝えることであるということを知っている。

論文 189
復活

189:0.1 (2020.1) 金曜日の午後のイエスの埋葬直後、当時ユランチアにいたネバドン大天使長は、眠っている意志をもつ被創造者の復活協議会を招集し、イエスの復活のための可能な方法についての検討に入った。地方宇宙のこれらの集合した息子達、ミカエルの創造した者達は、自身の責任でこれをした。ガブリエルは、これらの者を召集しなかった。真夜中までには、被創造者等は、創造者の復活を容易にするための何事もできないという結論に達した。かれらは、ミカエルが、「自身の自由意志で命を横たえたので、自身の決断に応じて再びそれを始める力もある」と、教えたガブリエルの忠告を受け入れる気になった。被創造物の復活とモロンチア創造の仕事における大天使、生命運搬者、およびこれらの様々な仲間のこの協議会の延期の直後、イエスの専属調整者は、ユランチアに集合した天の軍勢の個人的な命令であることから、案じて待機している傍観者達に次のことを話した。

189:0.2 (2020.2) 「あなた方の誰1人として、創造者-父の復命への補助は何もできない。領域の必滅者として、イエスは、人間の死を経験した。かれは、宇宙の君主としてはまだ生きている。あなたが観測するそれは、肉体の人生

からモロンチアへの人生のナザレのイエスの必滅の変遷である。私が自分自身を彼の人格と切り離し、一時的にあなた方の統括者になったとき、このイエスのこの精霊の通過は終了した。あなたの創造者-父は、必滅の被創造者の全経験を潜り抜けることを、つまり物質界における生から自然な死とモロンチアの復活を経て、真の精霊存在の状態への復活を選んだ。あなた方は、この経験の一局面を見ようとするところであるが、それに参加することはできない。通常、あなたが被創造者のためにするそれらのことは、創造者のためにはできない。創造者たる息子は、自身が創造した息子達のどれにも似せて自分自身を与える力をもっている。彼は、観察可能な人生を捨てて、再びそれを始める力を持っている。そして、彼には、楽園の父の直接の命令ゆえにこの力があるので、私には自分が何を話しているのか承知している。」

189:0.3 (2020.3) 専属調整者がこのように話すのを聞くと、皆は、つまりガブリエルから始まり最も低い天使に至るまで気がかりな期待の態度になった。かれらは、イエスの必滅の肉体を墓で見た。かれらは、最愛の君主の宇宙活動に関わる活動の証拠を見つけた。そして、そのような

現象を理解することなく、かれらは、根気よく情勢を待った。

1. モロンチアの通過

189:1.1 (2020.4) 日曜日の朝、２時45分、明らかにされていない楽園の人格の７名からなる楽園の肉体化の委員が、現場に到着し、すぐに墓の周りの配置についた。３時10分前、物質活動とモロンチア活動の混合した激振が、ヨセフの新しい墓から出始めて、西暦30年４月９日、３時２分、この日曜日の朝、ナザレのイエスの復活したモロンチアの形態と人格が墓から出現した。

189:1.2 (2021.1) 甦ったイエスが埋葬墓地から出てくると、およそ36年間地球で生きて働いてきた生身の肉体は、ちょうどそれが金曜日の午後、ユセフと仲間に埋葬されたように墓所にまだそのまま横たわっていた。墓の入り口の前の石も少しも乱されてはいなかった。ピーラトゥスの封印は、まだ完全であった。兵士達は、まだ警備についていた。寺院の衛兵等は、引続き任務についていた。ローマ護衛兵は、真夜中に交代していた。これらの監視人の誰も、自分達の不寝番の対象が、新しく、より高度の形

態の存在でよみがえったということ、そして警備していた肉体は、救われて、復活するイエスのモロンチア人格とはいかなる関係もない今や放棄された外側の覆いであるということを疑いもしなかった。

189:1.3 (2021.2) 人類にとって、人格的にかかわるすべてにおいて、物質が、モロンチアの形骸であるということ、また両者ともに連続する精霊の現実に反射された影であることを知覚するには時間が掛かる。人が、時間を永遠の移動する像として、また空間を楽園の現実の儚い影として分かるのにどれだけの時間が掛かるのであろうか。

189:1.4 (2021.3) 我々が判断できる限りにおいて、この宇宙のいかなる生物も、別の宇宙からのいかなる人格も、ナザレのイエスのこのモロンチア復活には何も関係はなかった。かれは、金曜日にその領域の必滅者として命を横たえた。日曜日の朝、ノーランティアデクのサタニア系のモロンチアの者として、かれは再びそれを始めた。イエスの復活には我々の理解しないことが多くある。しかし、すでに述べてきたように、我々は、それが起きたことと、示してきたおよその時間を知っている。我々は、

この必滅者の変遷、または、モロンチア復活に関する知られているすべての現象がちょうどそこで、イエスの有形の遺骸が埋葬用布で巻かれたヨセフの新しい墓で起こったということをも記録することができる。

189:1.5 (2021.4) 我々は、地方宇宙の被創造物が、このモロンチアの覚醒に参加しなかったことを知っている。我々は、楽園の7名の人格が墓を囲んだと気づきはしたが、あるじの目覚めに関して彼らが何かをするところは何も見なかった。イエスが墓のすぐ上に、ガブリエルの横に現れるなり、楽園からの７名の人格は、ユヴァーサへの即座の出発の合図をした。

189:1.6 (2021.5) 次の報告をすることにより、イエスの復活の概念を永遠に明らかにさせよう。

189:1.7 (2021.6) 1. 彼の物質的、あるいは物理的な身体は、復活された人格の一部ではなかった。イエスが墓から出て来たとき、肉であるその身体は、乱されずにそのまま墓に残っていた。かれは、入り口の前の石を動かすことなく、ピーラトゥスの封印を剥がすことなく埋葬個所から現れた。

189:1.8 (2021.7) 2. イエスは墓から精霊としても、ネバドンのミカエルとしても現れなかった。かれは、以前にユランチアの必滅の肉体に似せて具現したようには創造者たる君主の姿で現れなかった。

189:1.9 (2021.8) 3. かれは、復活したモロンチアの上昇する人格として、サタニアのこの領域組織の最初の大邸世界の復活の広間から現れるそれらのモロンチアの人格にそっくり似せてヨセフのこの墓から出て来た。そして、第一大邸宅界の復活広間の広大な中庭の中心にあるミカエル記念堂の存在は、ユランチアにおけるあるじの復活は何らかの点で、ここ、大邸宅世界系の1番目で促進されたという推測へと我々を導く。

189:1.10 (2022.1) 墓から蘇る際のイエスの最初の行動は、ガブリエルを迎えて、彼にイマヌエルの下で宇宙諸事の担当を続けるように命じることであり、それに兄弟の挨拶をイマヌエルに伝えるようにメルキゼデクの長に指示した。それから、自己の必滅の変遷に関してエデンチアのいと高きものに高齢者達からの認証を頼んだ。そして、集団の被創造者としてその創造者に挨拶をし、歓迎する

ためにここに集う7個の大邸宅世界のモロンチア集団に向けて、人間経歴後の最初の言葉を話した。モロンチアのイエスは言った。「肉体での私の人生は終わった。上昇する被創造者の人生をより完全に知り、また、楽園の父の意志をさらに顕示できるように遷移の形態でしばらくここに留まりたい。」

189:1.11 (2022.2) イエスは、話し終えると専属調整者に合図をし、そして、復活目撃のためにユランチアに集められた宇宙有識者のすべては、それぞれの宇宙任務にすぐに派遣された。

189:1.12 (2022.3) イエスは、被創造者としてユランチアに短期間生きることを選んだ人生の必要条件を紹介され、モロンチア段階の接触をそのとき始めた。モロンチア界へのこの開始は、1時間以上の地球時間を必要とし、肉体の元仲間がエルサレムからやって来て、復活の証拠であると思われるものを発見するために空の墓を不思議そうに覗いたとき、彼等との意思疎通の彼の望みによって二度遮られた。

189:1.13 (2022.4) そのとき、イエスの必滅の変遷—人の息子のモロンチア復活—は、完了した。物質と精霊間の人格中間として、あるじの経験の一過性の経験は、始まった。かれは、固有の力で自分の中でこの全てをした。いかなる人格も、彼に何の援助も与えなかった。かれは、そのとき、モロンチアのイエスとして生き、そしてこのモロンチアの人生を始め、生身の有形の肉体が墓でそこにそのままの状態で横たわっている。兵士達は、まだ歩哨中で、岩の周りの総督の封印はまだ剥がされてはいない。

2. イエスの物質の肉体

189:2.1 (2022.5) ３時10分過ぎに、復活したイエスがサタニアの７つの大邸宅世界から集合してきたモロンチア人格と親しく交わっているとき、大天使達—復活の天使達—の長が、ガブリエルに近づき、イエスの人間の体を求めた。大天使長は、言った。「我々は、君主ミカエルの贈与経験のモロンチア復活に参加はできないかもしれないが、彼の人間の遺骸は、即座の溶解のための我々が預かりたい。我々は、非物質化の方法を使おうと提案はしない。我々は、加速した時間の促進処理の開始を単に願う。我々は、君主のユランチアでの生と死を見ただけで

十分である。天の軍勢は、宇宙の創造者と擁護者の人間の形の緩慢な腐敗の光景に耐える記憶を避け得るであろう。全ネバドンの天の有識者の名において、私は、ナザレのイエスの人間の体の保管とその即座の溶解を進める権限を我々に与えられる命令を求める。」

189:2.2 (2023.1) ガブリエルがエデンチアのいと高きものと協議すると、天の軍勢の大天使の代弁者は、思い定めたようにイエスの物理的残存物のそのような処置をとる許可が与えられた。

189:2.3 (2023.2) この要求が受諾されると、かれは、天の人格の全集団の代表の多くの軍勢と共に仲間の多くを援助に呼び出し、次に、ユランチアの中間者の助力でイエスの物理的な身体を手に入れるために赴いた。死のこの肉体は、純粋に有形創造であった。それは、文字通り物理的であった。復活のモロンチアの形が密封された墓所から逃がれることができたようには、それは墓から取り除かれることはできなかった。あるモロンチアの補助的な人格の援助により、モロンチアの形態は、ある時は、通常の事柄に無関心になれるように、精霊のようなものとし

て作られることができ、別の機会には、領域の必滅者のような物質的な存在に識別できたり、接触可能となることができる。

189:2.4 (2023.3) かれらは、荘厳かつ敬虔なほぼ瞬時の溶解処分をその体に施すにあたり、墓からイエスの体を移動させる準備をすると共に、二次のユランチア中間者達には、墓の入り口から石を転がすことが割り当てられた。これら２つのうちの大きい方は、まるで臼石のような巨大な円形の代物で、墓の開閉のために左右に回転できるようにのみで削り取られた岩石の溝に沿って動いた。見張りのユダヤ人の番人とローマ兵士達は、朝の薄明かりの中で、この巨大な石が、墓の入り口から見たところそれ自体が、回転し離れ始めるのを見たとき—そのような動きを説明する明白な手段はなくて—恐怖と狼狽に襲われてその場から急いで逃げた。ユダヤ人達は、それぞれの家に逃げ戻り、その後、これらの出来事を寺院にいる隊長に報告しに戻った。ローマ人等は、アントニアの要塞に逃げ、百人隊長が勤務に着くなり自分達の見たことを報告した。

189:2.5 (2023.4) ユダヤの支配者達は、反逆者ユダに賄賂を供与することによって、恐らくは意図をもってイエスを追い払う汚い取り引きを始め、今度は、この厄介な状況に直面して、持ち場を離れた衛兵への罰を考える代わりに、これらの衛兵とローマ兵士達の買収の方向に向かった。かれらは、この20人各自に纏まった金を支払い、全員に次のように言うように命じた。「我々が夜眠っている間に、弟子達が我々のところにやってきて遺骸を持ち去った。」そして、ユダヤ人の支配者達は、賄賂を受け取ったことが総督に知られるようなことになれば、ピーラトゥスの前で弁護をしてやると兵士達に固く約束をした。

189:2.6 (2023.5) キリスト教徒のイエス復活に対する信仰は、「空の墓」の事実に基づいた。墓は、いかにも空ではあったが、これが復活の真実ではない。最初の信者等が到着したとき、墓は本当に空であり、この事実が、あるじの疑う余地のない復活と関連づけられ、真実ではない信念の公式化、つまり物質的で必滅のイエスの肉体が墓から甦ったという教えへと導いた。精霊の現実と永遠の価値に関係ある真実は、見た目の事実の組み合わせによって必ずしも確立できるというわけではない。個々の事実

は、物質的に本当であるかもしれないが、一群の事実の関係が、真実の精神的な結論に必ずしもつながることにはならない。

189:2.7 (2023.6) ヨセフの墓は空であった。それは、イエスの体が回復されたり、復活したからではなく、天の軍勢が、時間の遅れの介入なしに、人間の腐敗と物質崩壊の普通の、可視の過程の活動なしに、特別で固有な溶解、つまり「塵から塵へ」をそれにもたらすという彼らの要求が承諾されたからであった。

189:2.8 (2024.1) 溶解のこの自然な方法が、時間の点で大いに早められた、ほとんど瞬間的になったこと以外は、イエスの必滅の遺骸は、地球のすべての人体を特徴づける基本的な崩壊と同様の自然過程を経た。

189:2.9 (2024.2) この教えが、復活するモロンチアのあるじに会い、はっきりと認識し、親交のあった領域の多くの必滅者の証言によって裏付けされているとはいえ、ミカエル復活の本当の証拠は、本質的には精霊的である。かれは、最終的にユランチアを去る前に1,000人ほどの個人の経験の一部となった。

3.配剤の摂理

189:3.1 (2024.3) この日曜日の朝、４時半の少し過ぎに、ガブリエルは、大天使達を呼び出し、ユランチアにおけるアダーム配剤終了である全般的な復活の開始準備をさせた。このすばらしい出来事に関わった熾天使と天使の夥しい軍勢が、適当な隊形に整列したとき、モロンチアの姿のミカエルは、ガブリエルの前に現れて言った。「私の父が自身の中に命を持つと同様に、息子にも自身の中に命を持つようにそれを与えられた。私は、まだ完全に宇宙管轄権の行使を再開したわけではないが、この自ら課した制限は、いかなる手段においても私の眠れる息子達の人生の贈与を制限はしない。惑星復活者の点呼を始めなさい。」

189:3.2 (2024.4) そこで、大天使の回路は、初めてユランチアを中心に活動した。ガブリエルと大天使の軍勢は、惑星の精霊極の場所に移動した。そして、ガブリエルが合図を与えると、ガブリエルの声は、体制の大邸宅世界の第１へと閃き、「ミカエルの委任により、ユランチア配剤の死者を甦らせよ。」と言った。すると、アダームの時代以来眠りに落ち入り、まだ裁きに移らなかったユランチ

アの人類の全ての生存者が、大邸宅世界の復活広間にモロンチア授与の準備を整えて現れた。そして熾天使と彼らの仲間は、瞬時に大邸宅世界への出発の準備をした。通常、かつて生残している人間の団体管理に充当されたこれらの熾天使の保護者達は、大邸宅世界の復活広間での彼らの覚醒時に出席するのであるが、イエスのモロンチア復活に関してここにはガブリエル出席の必要上、熾天使等は、その時この世界そのものにいた。

189:3.3 (2024.5) 個人的な熾天使の保護者達を持つ無数の個人と人格に必要な精霊的な到達に至った無数の者達は、アダムとハヴァ一時代の後の時代に大邸世界に移り、特別の、そして千年毎のユランチアの息子達の多くの復活があったにもかかわらず、これは、惑星点呼の３番目であり、同時に完全な配剤復活であった。最初は惑星王子の到着の際に起こり、２番目はアダームの時代、そして、３番目のこれは、ナザレのイエスのモロンチア復活、必滅の遷移を際立たせた。

189:3.4 (2024.6) 大天使の長による惑星復活の合図が受信されたとき、人の息子の専属調整者は、自分の権威をユランチ

アに集められた天の軍勢に引き渡し、地方宇宙のこれらのすべての息子を各指揮官の管内に帰した。これをし終えると、かれは、ミカエルの必滅の遷移完了を登録するためにイッマーヌエルと共にサルヴィントンへと出発した。そこでユランチアでの任務を必要とされないすべての天の軍勢が、すぐに専属調整者の後を追い掛けた。しかしガブリエルは、モロンチアのイエスとユランチアに留まった。

189:3.5 (2025.1) これが、部分的かつ限られた人間の視力からは自由に、実際に起きたがままの、それらを見かけた者達により観察されたがままのイエス復活に関わる出来事の詳述である。

4. 空の墓の発見

189:4.1 (2025.2) 我々が、この日曜日の朝早々のイエスの復活時刻に近づくとき、エーリージャとマリア・マルコスの上階の部屋で眠り、あるじと共に最後の晩餐中、凭れたまさにその寝椅子で休息している10人の使徒が、その家に滞在していたことが思い出されるべきである。この日曜日の朝、トーマス以外は全てそこ集まっていた。土曜日

の夜遅く、皆が最初に集合した時、トーマスは、数分間ともにいたが、イエスに起こったことについての考えと、合わせて使徒達の様子に耐えられなかった。かれは、仲間を見渡すとすぐに部屋を出ると、ベスファゲのサイモンの家に行き、そこで独り自分の問題を深く嘆く思いでいた。使徒は皆、懐疑と絶望にはさほどでもなく、恐怖、深い悲しみ、恥の点において大いに苦しんだ。

189:4.2 (2025.3) イエスのエルサレム弟子のうち際立つ12人から15人ほどは、ダーヴィド・ゼベダイオスとアリマセアのヨセフとともにニコーデモスの家に集められた。アリマセアのヨセフの家には、指導的な女性信者のうちの15人から20人ほどがいた。これらの女性だけは、ヨセフの家に住まい、安息日の数時間と安息日後の夜の間、互いに間近にいたので、墓の衛兵の監視を知らなかった。彼女達は、２番目の石が墓の正面で回転し、この両方の石がピーラトゥスの封印の下に置かれていたことも知らなかった。

189:4.3 (2025.4) この日曜日の朝、３時少し前、１日の最初の兆しが東に見えると、５人の女性は、イエスの墓へと飛び出した。特別の防腐処理用の洗浄剤を沢山用意し、また多くの麻の包帯も持っていた。イエスの死体により完全に塗布をし、新しい包帯でより慎重に包むことが彼女等の目的であった。

189:4.4 (2025.5) イエスの身体を塗布するこの任務にあたった女性は、次の通りであった。マグダラのマリア、双子アルフェウスの母マリア、ゼベダイオス兄弟の母サロメ、フーザスの妻ヨーアンナ、それに、アレキサンドリアのエズラの娘シューシャン。

189:4.5 (2025.6) 軟膏を背負い５人の女性が空の墓に到着したのは、およそ３時半過ぎであった。彼女たちは、ダマスカスの門から出るとき、多少慌てふためいた状態で逃げる多くの兵士に遭遇し、このため数分間足を止めた。しかし、それ以上何も起こらない時点で再び進み始めた。

189:4.6 (2025.7) 「誰が、石を転がすのを手伝ってくれるかしら。」とくる途中で言い合っていたほどなので、彼女達は、入り口から墓への石が転がされているのを見たと

き、大いに驚いた。彼女達は、重荷を下ろし、恐怖と非常な驚きで互いを見始めた。皆は、恐怖に震え、そこに立っていたが、マグダラのマリアは、小さい方の石の周りを躊躇い混じりに探索し、思い切って開いている墓に入った。ヨセフのこの墓は、道の東側の丘の庭にあり、それはまた、東に面していた。この時間までには、マリアがあるじの遺骸が横たえられた場所を振り返って見て、無くなっていると見分けられるに足りる新たな日の曙光が、十分にあった。マリアは、イエスが横たえられていた石の窪みのイエスの頭が休んでいた場所にたたまれた布巾と完全な状態で横たわって巻き付けられていたが、天の軍勢が、遺骸を移動する前に石の上に置かれたままの包帯だけを見掛けた。覆いの広い布は、埋葬の窪みの足元にあった。

189:4.7 (2026.1) しばらくの間墓の入り口に居た後、 (最初に墓に入った時にははっきりとは見えなかった) マリアは、イエスの遺骸が無くなっているのが分かり、その場所にはこれらの墓用の布があるだけで、マリアは驚きと苦悶の叫びを発した。女性全員は、殊のほか神経質になっていた。都の門での恐慌状態の兵士達との出合い以来、彼

女達は、緊張しており、マリアが苦悶のこの悲鳴を発したとき、皆は恐怖に打ちひしがれ、大急ぎで逃げた。彼女たちは、ずっと走りダマスカスで初めて止まった。ヨーアンナの良心は、この時までに、マリアを見捨ててしまったことに傷ついていた。彼女は、仲間を元気づけ、全員で墓に引き返した。

189:4.8 (2026.2) 皆が墓に近づいていくと、怯えているマグダラの人、墓から出て来たとき待っていた姉妹が見つけられず一層恐れていたこの人は、そのとき、全員の方へ突進してきて、「あそこにいない—彼らが持っていってしまった。」と興奮して叫んだ。彼女は皆を連れ戻り、そこで、皆は墓に入り、それが空であるのを見た。

189:4.9 (2026.3) それから５人の女性全員は、入り口近くの石に腰を掛けて、状況について話し合った。イエスが復活したとは皆の心にはまだ思い浮かんでいなかった。彼女達は、安息日の間自分たちだけでいたので、遺体は、別の安息所に移されたと推測した。しかし、そのような窮地の解決策を熟考したとき、墓用の布が整然と配置されているという説明に戸惑った。それが巻きつけられていた

包帯そのものが、埋葬棚の所定の位置に明らかに完全なまま残されているのでは、いかにして遺体を移動することができたのか。

189:4.10 (2026.4) この新しい日の夜明け前の数時間、これらの女性が、片側に目をやると、静かで動きのない見知らぬ人を見とめた。一瞬、皆は、再び怯えたが、マグダラのマリアは、まるでその人が庭の管理人かもしれないと思ってでもいるように、人物の方に突進して話し掛け、「あるじさまをどこに連れ去ってしまったのですか。皆は、あの方をどこに横たえたのですか。私達が行ってあの方を受け取れるよう教えてください。」と言った。見知らぬ人が答えないと、マリアは泣き始めた。その時、イエスは、彼女達に、「誰を探しているのですか。」と言った。マリアは、「私達は、ヨセフの墓に休息するために横たえられたイエスさまを捜しているのですが、おられないのです。彼らが彼をどこに連れて行ったかご存じですか。」と聞いた。その時、イエスは言った。「このイエスは、死ぬであろうが、再び甦ると、ガリラヤでさえ、あなたに言わなかったか。」これらの言葉は、女性達を驚かせたが、あるじは、非常に変化しており、彼

女達は、薄明かりに背を向けているあるじにまだ気づいていなかった。そして、皆があるじの言葉をじっくり考えていると、イエスが、「マリア」と聞き覚えのある声でマグダラの女性に話し掛けた。とても馴染みのある同情と情愛のある挨拶のその言葉を聞いたとき、彼女は、それがあるじの声であることを知り、「ご主人さま、あるじさま。」と叫びながらその足元に跪こうと急いだ。そこで、他の女性は皆、栄光に輝く姿で自分達の前に立つ人があるじであると気づき、その前にすぐに跪いた。

189:4.11 (2027.1) これらの人間の目にイエスのモロンチア姿を見ることが可能にされたのは、その時イエスに同伴していたあるモロンチア人格に加えて、変容者と中間者の特別奉仕に因ってであった。

189:4.12 (2027.2) マリアがその足を抱こうとしたとき、イエスは言った。「私に触れてはいけない、マリア。あなたが知っていた肉体の私とは違うので。父の元に昇る前に、私はこの姿でひととき留まるつもりである。だが全員、いま行きなさい。そして、使徒達に—そして、ペトロス

にも—言いなさい。私が甦り、あなた方は私と話した
と。」

189:4.13 (2027.3) これらの女性は、驚きの衝撃から回復すると、都へと、そしてエーリージャ・マルコスの家へと急ぎ、そこで起こった全てを10人の使徒に詳しく話した。だが、使徒達は、信じようとはしなかった。最初にかれらは、女性達が幻想を見たと思ったが、マグダラのマリアが自分達へのイエスの言葉を繰り返したとき、そのうえ自分の名前を聞いたとき、ペトロスは、大急ぎで墓にたどり着き、これらのことを自分の目で確かめようと上階の部屋を飛び出していき、ヨハネは、ぴたりとその後に続いた。

189:4.14 (2027.4) 女性達は、イエスとの話を他の使徒達に繰り返したが、かれらは、信じようとしなかった。また、ペトロスやヨハネのように自分達で調べようとはしなかった。

5. 墓でのペトロスとヨハネ

189:5.1 (2027.5) ２人の使徒がゴルゴタとヨセフの墓を目指して急ぐ間、ペトロスの考えは、恐怖と希望の間を行き来し

た。かれは、あるじに会うことを恐れはしたが、イエスが自分への特別な知らせを送ったという話に望みが喚起された。かれは、イエスが本当に生きていると半分は説得された。かれは、３日目に甦るという約束を思い出した。このように言うのは奇妙ではあるが、磔以来、エルサレム経由で北へと急ぐこの瞬間までこの約束が心に浮かんではこなかった。ヨハネが都の外へと急いでいるとき、魂に不思議な喜びと希望の法悦がこみ上げた。かれは、女性達が本当に甦ったあるじを見たのだと半分確信した。

189:5.2 (2027.6) ペトロスよりも若いヨハネは、彼を追い抜き最初に墓に到着した。ヨハネは、入口で墓を見ており、そして、それは、ちょうどマリアがそれについて説明した通りであった。シーモン・ペトロスは、すぐに勢いよく駆け上がり、中に入り、墓用の布があまりに異様に配置されている同じ空の墓を見た。そしてペトロスが出て来たとき、ヨハネも入り、すべてを自分の目で確かめ、次に、二人は、見たり聞いたりしたことの意味を熟考するために石に腰を下ろした。そこに掛けている間、かれらは、イエスに関して聞かされたすべてを心でじっくり考

えてみたが、起こったことを明確に気づくことができなかった。

189:5.3 (2027.7) ペトロスは、墓が荒されたと、敵が恐らく番人を買収して遺体を盗んだのだと、初めは示唆した。しかし、ヨハネは、遺体が盗まれたのならば、墓は、それほどまでに整然と放置されないはずだと推論し、またどうして包帯が、明らかに完全なままで置き去りにされるようなことになったのか、と疑問をもった。そして、もう一度、二人は、つぶさに墓用の布を調べるために墓に戻った。２度目に墓から出て来ると、マグダラのマリアが、戻ってきて入り口の前で泣いているのを見た。マリアは、イエスがよみがえったと信じて使徒のところへ行ったのであったが、皆が自分の報告を信じようとしなかったとき、意気消沈し、絶望的になった。彼女は、墓の近くに戻ることを切に望み、そこでイエスの懐かしい声を聞きたいと思った。

189:5.4 (2027.8) ペトロスとヨハネが行った後でマリアが長居していると、あるじが、再び現れて言った。「疑ってはいけない。自分の見たこと、聞いたことを信じる勇気を持

ちなさい。使徒のもとに戻り、私が甦ったと、私が彼らのもとに現れると、そして、約束したようにやがて彼らが着く前にガリラヤに行くと、再び知らせなさい。」

189:5.5 (2028.1) マリアは、マルコスの家に急いで戻り、イエスとまた話したと使徒に言ったが、かれらは、彼女のいうことを信じようとしなかった。しかし、ペトロスとヨハネが戻ってくると、皆は、嘲笑を止め、恐怖と憂慮に満たされた。

論文 190
イエスのモロンチア出現

190:0.1 (2029.1) 復活したイエスは、そのとき、領域の必滅者の上昇するモロンチア経歴を体験する目的で、短い期間ユランチアで過ごす準備をしている。モロンチアの生活のこの時は、人間の肉体具現の世界で過ごされることになっているが、それは、あらゆる点で、ジェルーセムの7つの大邸宅世界の進歩的なモロンチアの人生を通過するサタニアの人間の経験に対応するであろう。

190:0.2 (2029.2) イエスに固有のこのすべての力—命の天賦—は、そして、死からの復活を可能にしたものは、彼が、

王国の信者に与え、そして、自然の死の束縛から今でも復活を確実にする永遠の生命の他ならぬこの贈り物である。

190:0.3 (2029.3) 領域の必滅者は、イエスが、この日曜日の朝墓から甦った時の同じ変遷の型か、モロンチアの肉体で復活の朝に甦る。これらの体に循環する血液はなく、そのような存在者は、通常の物質的な食物を摂取しない。それでも、これらのモロンチアの形態は実在する。様々な信者が、復活後のイエスを見たとき、かれらは、本当にイエスを見たのである。かれらは、幻影や幻覚症状の自己欺瞞の犠牲者ではなかった。

190:0.4 (2029.4) イエス復活に関する不変の信仰は、初期の福音教育のすべての支流団体の信仰の基本的な特徴であった。エルサレム、アレキサンドリア、アンチオケ、フィラデルフィアにおいては、すべての福音教師が、あるじの復活に対するこの絶対的な信仰において団結した。

190:0.5 (2029.5) あるじの復活を宣言するマグダラのマリアの際立つ部分を考えるにあたり、ペトロスが使徒のそれであったように、マリアは、女性団体の主要な代表者であっ

たということが記録されなければならない。その長ではなかったが、マリアは、女性労働者の主要な教師であり公の代弁者であった。マリアは、とても慎重な女性となっていたので、ヨセフの庭の管理人であると思った男性に、彼女が話すというその大胆さは、単に墓が空であると分かり、いかにぞっとしたかを示すに過ぎない。それは、マリアの愛の深さと苦悩、熱情の豊さであり、それが、見知らぬ男性への接近をユダヤ女性に従来から禁止されていることを、しばらくの間、忘れさせた。

1. 復活の前触れ

190:1.1 (2029.6) 使徒達は、イエスが自分達を置き去りにすることを望まなかった。したがって、かれらは、甦る約束と合わせて、死ぬことに関するすべての声明を軽んじていた。それが起こったようには復活を期待していなかったし、かれらは、疑いようのない、強制的な証拠と自身の経験の絶対的な裏付けに直面するまで信じることを拒否した。

190:1.2 (2030.1) 彼らが、イエスに会い話をしたという５人の女性の報告を信じることを拒否したとき、マグダラのマリ

アは、墓に戻り、他は、ヨセフの家に戻り、そこで自己の経験を娘と他の女性達に伝えた。女性達は、その報告を信じた。6時直後、アリマセアのヨセフの娘とイエスに会った4人の女性は、ニコーデモスの家に行き、そこでヨセフ、ニコーデモス、ダーヴィド・ゼベダイオス、それに集合していた他の男性達にこれらの出来事すべてを伝えた。ニコーデモスと他の者は、女性達の話を疑った。かれらは、イエスが死から甦ったということを疑った。かれらは、ユダヤ人が遺体を取り払ったと推測した。ヨセフとダーヴィドは、その報告を信じる気があり、その思いがとても強く、墓を点検するために急いで行くほどであり、そうして女性達が説明した通りのすべてを見つけた。また、高僧が墓用の布を取り除くために寺院の衛兵の隊長を墓に行かせたので、墓所のその有り様を見たのはこの二人が最後であった。隊長は、それら全部を麻布に包み近くの断崖に放り投げた。

190:1.3 (2030.2) ダーヴィドとヨセフは、すぐに墓からエーリージャ・マルコスの家に行き、そこで、10人の使徒と上階の部屋で会合を開いた。ヨハネ・ゼベダイオスのみが、イエスが死から甦ったと、微かにではあるが、信じる傾

向にあった。ペトロスは、最初は信じたが、あるじが見つけられなかった時点で**険悪**な疑いに**陥**った。彼らは全員、ユダヤ人が遺体を取り除いたと信じようとした。ダーヴィドは、反論しようとはしなかったが、去るに**当**たり、「あなた方は使徒である。そして、これらのことを理解すべきである。私は、あなた方と**争**うつもりはない。それでも、私は、今朝、使者達に集まるように手配をしたニコーデモスの家にこれから**戻**り、皆が集合したところであるじの復活の告知者として、彼らを最後の任務に送るつもりである。死後３日目に甦るとあるじが言われたことを聞いたから、私は、あるじを信じる。」通信と情報のこの自薦の長は、このように悄**気**て心細い王**国**の大使達に話して、使徒達を後にした。かれは、上の部屋からの**帰**り、使徒の全基金入りのユダの袋をマタイオス・レーヴィイの膝に落とした。

190:1.4 (2030.3) ダーヴィドの26人中の最後の使者がニコーデモスの家に到着したのは、およそ９時半過ぎであった。ダーヴィドは、即座に**広々**とした中庭に皆を集めて講演をした。

190:1.5 (2030.4) 「諸君、同胞よ、君達は、私とお互いの誓いに基づき私に、そしてお互いにずっと仕えてきてくれた、そして私は、かつて誤った情報を君達の手に一度も発したことがないということをあなたに注目を促す。私は、王国の有志の使者として君達を最後の任務に送り出すと同時に、君達を誓いから解放し、それによって使者軍団を解散させるところである。諸君、私は、我々の仕事を終えたと宣言する。あるじは、これ以上人間の使者を必要としない。かれは、死から甦った。死んで3日目に再び甦ると、逮捕される前に我々に言われた。私は墓を見た—それは空であった。私は、マグダラのマリアと他の4人の女性と話した。その女性達は、イエスと話した。私は、今あなた方を解散させ、君達に別れを告げ、それぞれの任務に送り出す。そして、君達が信者として運ぶ知らせは次の通りである。『イエスは甦えられた。墓は空である。』」

190:1.6 (2030.5) 出席する大半の者が、これを実行しないようにダーヴィドを説得しようと努力した。しかし、かれらは、影響を及ぼすことができなかった。そこで、使者達に思い留まらせようとしたが、使者達は、疑いの言葉を

意に介そうともしなかった。そして、日曜日の朝、10時直前、この26人の走者は、復活したイエスの力強い真実-事実の最初の伝令者として出発した。そして、過去に多くの任務に着いたように、この任務に、ダーヴィド・ゼベダイオスと互いへの誓いの遂行に着いた。これらの男性は、ダーヴィドを格段に信頼していた。かれらは、イエスを見た人々と話すために留まりさえせずにこの任務へと出発した。使者達は、ダーヴィドの言葉をそのとおりに信じた。彼らの大多数は、ダーヴィドの言葉を信じ、いくぶん疑った者でさえ、同様に確かに、迅速に知らせを伝えた。

190:1.7 (2031.1) 使徒達、王国の精神霊的軍団は、この日上の部屋に集い、そこで恐怖を表し、疑いを明確にしたとは言え、これらの俗人は、恐れを知らない、有能な指導者のもと、あるじの人の兄弟愛の福音を社会化する初の試みをして世界と宇宙の甦った救世主を宣言するために先へ進む。そして、使者達は、白羽の矢がたてられた代表が、進んでイエスの言葉を信じたり、または目撃者の証言を受け入れようとする以前に、この多時多端の活動に従事する。

190:1.8 (2031.2) この26人は、ベサニアのラーザロスの家、南のベーシェバからダマスカスと北のシドーン、それに東のフィラデルフィアから西のアレキサンドリアへの信者の中心地のすべてにむけて派遣された。

190:1.9 (2031.3) ダーヴィドは、同胞に暇乞いをすると、母を訪ねてヨセフの家に回り、それから皆で、イエスの家族に合流するためにベサニアに向かった。かれらは、自分達の俗世の所有物を処分してしまうまで、マールサとマリアのいるベサニアに滞在し、フィラデルフィアにいる姉妹の兄弟ラーザロスに合流する二人の旅に同行した。

190:1.10 (2031.4) ヨハネ・ゼベダイオスは、この時から約１週間をかけてイエスの母マリアをベスサイダの自分の家へ連れて行った。ジェームス、イエスの一番上の弟は、家族とエルサレムに留まった。ルースは、ラーザロスの姉妹とベサニアに残った。残るイエスの家族は、ガリラヤに戻って行った。ダーヴィド・ゼベダイオスは、イエスの末の妹ルースとの結婚後、６月の初旬マールサとマリアとともにベサニアを発ってフィラデルフィアに向かった。

2.ベサニアでのイエスの出現

190:2.1 (2031.5) イエスは、モロンチア復活時から天上の精霊上昇時まで、地上の信者に見える姿で19回にわたり姿を現した。かれは、敵にも、可視の自分の姿の顕示を精霊的に役立てることのできない人々の前にも現れなかった。墓での５人の女性への出現が、最初であった。2回目も、マグダラのマリアに、墓においてであった。

190:2.2 (2031.6) ３回目の出現は、この日曜日の正午頃ベサニアで起きた。正午直後、イエスの最年長の弟ジェームスは、１時間ほど前にダーヴィドの使者によってもたらされた知らせに思いを巡らせながら、マールサとマリアの復活した兄弟の空の墓の前にあるラーザロスの庭に立っていた。ジェームスは、常に一番上の兄の地球での任務を信じる傾向にあったが、長らくイエスの仕事との接触が途絶えており、しかもイエスが救世主であるという使徒の後の主張に関して容易ならぬ疑問へと流されていった。使者がもたらした知らせに、家族全体が、動転し、本当に途方にくれた。ちょうどジェームスが、ラーザロスの空の墓の前に立ったいると、マグダラのマリアが、その場に到着し、早朝数時間のヨセフの墓での経験を家

族に興奮して伝えていた。話し終える前に、ダーヴィド・　ゼベダイオスとその母が到着した。ルースは、もちろん報告を信じ、ユダも、ダーヴィドとサロメと話した後で信じた。

190:2.3 (2032.1) その間、皆がジェームスを探し回り、彼を見つけ出す前に、ジェームスが墓近くの庭に立っていると、かれは、まるでだれかが肩に触れたかのような間近な存在に気づいた。彼が、振り返ると側に見なれない格好の緩やかな姿を見た。ジェームスは、話しをするには肝を潰し、逃れるにはあまりにも怯えていた。その時、見も知らぬ姿は、「ジェームス、私は君に王国の奉仕への呼び掛けに来た。同胞としっかり手を繋ぎ、私のあとについて行きなさい。」と言った。ジェームスは、自分の名前が口にされるのを聞いたとき、自分に話したのは一番年上の兄イエスであると分かった。彼らは皆、多かれ少なかれ、あるじのモロンチアの姿の認識に苦労をしたが、イエスが一度意思伝達を始めると、彼らの中の僅かの者だけが、その声を認識したり、さもなければ人を魅きつけるその人柄を確認するのに苦労をした。

190:2.4 (2032.2) ジェームスは、イエスが自分に話していると察すると、膝をつきながら、「私の父、私の兄上、」と大声で言ったが、イエスは、話しをしながらジェームスに立つように言った。それから、二人は、庭を歩き、３分ほど話した。過ぎ去った数日間の経験について語りあい、近い将来の出来事を予測をした。家に近づくとイエスは、「ではジェームス、お前達を一斉に迎えるまで。」と言った。

190:2.5 (2032.3) 彼らが、ちょうどベスファゲでジェームスを探しているときに、ジェームスは、家に走り、「たった今イエスに会い話したり、話した。死んではいない。甦っている。『では、お前達を一斉に迎えるまで。』と言って私の前から消えられた。」と大声で言った。ユダが戻ったとき、ジェームスは、ほとんど話し終えていた。そこでかれは、ユダのために庭でのイエスとの邂逅の経験を再び語った。彼らは全員、イエスの復活を信じ始めた。ジェームスは、そのとき、自分はガリラヤには帰らないと発表した。ダーヴィドは、大声で言った。「あの方は単に興奮している女性達だけに見られたのではない。強

い心の男達も会うようになった。私は、彼自身に会うのを期待する。」

190:2.6 (2032.4) ダーヴィドは、長い間待たなかった。イエスの地球の家族とその友人、全部で20人の前にありありと現れたイエスの人間認知への４回目の出現は、マールサとマリアの他ならぬこの家で、２時にほんの少し前に起きた。あるじは、開いている裏口に現れて言った。「君達の上に平和あれ。かつて肉体をもつ私の近くに居た者に挨拶を、それに、天の王国の私の兄弟姉妹のために親交を。どうして疑うのか。全心で真実の光について行くことを選ぶのに、なぜそれ程までに手間取るのか。来なさい、君達すべてが、父の王国の真実の精霊の親交へと。」彼らが、驚きの最初の衝撃から立ち直り、あたかも彼を抱くために近づくかに見えたとき、イエスは、皆の視覚から消え失せた。

190:2.7 (2032.5) かれらは、疑っている使徒に起きたことを告げるために都へ急行したく思ったが、ジェームスは押し止めた。ただ、マグダラのマリアだけが、ヨセフの家に戻ることを許された。ジェームスは、庭で話しを交わした

とき、イエスが言ったある事のためにこのモロンチア訪問の事実を広く発表することを禁じた。しかし、ジェームスは、この日ベサニアのラーザロスの家での甦ったあるじとのさらなる会話を決して明らかにしなかった。

3. ヨセフの家にて

190:3.1 (2033.1) 人間の目による認識へのイエスの5番目のモロンチア顕現は、アリマセアのヨセフの家に集まったおよそ25人の女性信者の面前で、この同じ日曜日の午後４時15分過ぎに起きた。マグダラのマリアは、この出現のわずか数分前にヨセフの家に戻っていた。ジェームス、イエスの弟は、ベサニアでのあるじの出現に関して使徒には何も伝えないようにマリアに頼んでおいた。かれは、姉妹信者への報告を控えるようには求めていなかった。従ってマリアは、女性全員に秘密の保守を約束させてから、ベサニアでつい最近イエスの家族といた間に起きたことを詳しく話しにかかった。突然で、しかも厳かな静けさが皆を襲ったとき、マリアは、この感動的な物語のそのただなかにいた。皆は、自分達のその真ん中に復活したイエスの目に見える完全な姿を凝視した。イエスは、皆に挨拶をして、「君達に平和あれ。王国の親交に

は、ユダヤ人も非ユダヤ人も、金持ちも貧乏人も、自由も束縛も、男も女もない。また、君達方は、天の王国の神と共に子息性の福音を通して人類を解放する朗報を発表するために召喚されている。この福音を公布し、福音への信仰を信者に確かめて全世界に行きなさい。そして、こうする間、病人への奉仕と気が弱く恐怖に支配されている者を力づけることを忘れてはいけない。私は、いつも地の果てまでさえも、君とともにいる。」と言った。そして、イエスは、このように話すと皆の視界からいなくなり、その間女性達は、顔を伏せて黙って礼拝した。

190:3.2 (2033.2) これまでに起きているイエスの５回のモロンチア出現のうち、マグダラのマリアは、４回目撃していた。

190:3.3 (2033.3) 午前の半ば頃、使者派遣の結果から、それにヨセフの家でのイエスのこの出現に関しての無意識の情報の洩れから、イエスが甦ったということ、多くの者が会ったと主張しているということが、都周辺で報告されていると、宵にユダヤの支配者達に情報が届き始めた。シ

ネヅリオン会員達は、この噂に完全に興奮していた。ハナンージャとの慌しい相談の後、カイアファスは、その晩８時にシネヅリオン派の会議を招集した。イエスの復活に言及した者は誰でも、ユダヤの会堂から追放する措置が採択されたのは、この会議であった。彼に会ったと主張する者は誰でも、死に追いやられるべきであるとさえ提案された。しかしながら、この提案は、会議が、事実上、恐慌状態に境を接するほどの混乱に陥ったので、裁決には至らなかった。彼らは、イエスとは関係ないと敢えて考えた。彼らには、ナザレの男との本当の問題が、ちょうど始まったところだということが、明らかになろうとするところであった。

4. ギリシア人への出現

190:4.1 (2033.4) ４時半過ぎ、フラーヴィオスという者の家で、あるじは、およそ40人のギリシア人信者への６回目のモロンチアの出現をした。あるじ復活の報告の議論に従事していると、戸はしっかりと閉じられているにもかかわらず、かれは、皆の真ん中に姿を現し、全員に向けて言った。「君達に平和あれ。人の息子は、地球でユダヤ人の間に現れはしたが、すべての人に仕えに来た。父の王

国には、ユダヤ人も非ユダヤ人もいない。君達は皆、同胞—神の息子—である。それ故、君達が王国の大使からそれを受けたように、救済のこの福音を宣言して全世界に向けて行きなさい。そして、私は、信仰と真実の父の息子達の兄弟の関係で君達と親交する。」このように皆に託すと、かれは、去っていき、もう見えなかった。彼らは、夜ずっと家に残っていた。彼らは、思い切って出ていくには、あまりにも畏敬と恐怖に打ち負かされていた。その夜、これらのギリシア人もまた眠らなかった。これらのことを議論し、あるじが再び訪れることを望みながら寝ずにいた。この一団の中には、ユダが口づけで彼を裏切り、兵士がイエスを逮捕したときにゲッセマネにいたギリシア人の多くがいた。

190:4.2 (2034.1) イエス復活の噂と追随者への数多い出現に関する報告は、忽ちのうちに広まり、全都は高い興奮状態にある。すでに、あるじは、自分の家族、女性達、およびギリシア人達に現れ、やがては使徒の間に現れる。シネヅリオン会員達は、ユダヤの支配者達にあまりにも突然に押しつけられたこれらの新しい問題の考慮を始めるところである。イエスは、使徒達のことを非常に考えては

いるが、訪ねる前に使徒達にさらに数時間の厳粛な反省と思いやりのある考察をさせることを願っている。

5. 2人の兄弟との散歩

190:5.1 (2034.2) エッマウスに、エルサレムのおよそ11キロメートル西に、羊飼いの2人の兄弟が暮らしていた。その羊飼い達は、生贄、儀式、祝宴に参列して、過ぎ越しの週をエルサレムで過ごした。年上のクレオーパスは、多少なりともイエスの信者であった。少なくとも、ユダヤの会堂からは追放されていた。弟のヤコブは、あるじの教えに関して聞いたことに非常に好奇心をそそられてはいたが、信徒ではなかった。

190:5.2 (2034.3) この日曜日の午後、5時には数分前に、2人の兄弟は、エルサレムからほぼ5キロメートルの道路に沿って重い足取りでエッマウスに向けて歩きながら大真面目にイエスのことを、その教え、仕事、とりわけその墓が空であるということや、ある女性がイエスと話したという噂について話していた。クレオーパスは、これらの報告を半分は信じる思いであったが、ヤコブは、おそらくは全部が誤魔化しであると言い張った。二人が、家へ

と向かいながらこのように口論し、議論していると、イエスのモロンチア顕現、その７回目の出現が、旅を続ける二人の横側で起きた。クレオーパスは、しばしばイエスが教えるのを聞き、数回エルサレムの信者達の家で共に食事をしたことがあった。しかし、クレオーパスは、あるじが自由に二人と話したときでさえあるじだとは気づかなかった。

190:5.3 (2034.4) 短い距離を共に歩いた後で、イエスは言った。「君達に遭遇したとき、二人は何を熱心に言い交わしていたのですか。」イエスが話すと、二人は、じっと立って、悲しげな驚きでイエス見た。クレオーパスは、「あなたはエルサレムに滞在されたのに、最近起きた事を知らないということがあり得るでしょうか。」と言った。すると、あるじは、「どんな事ですか。」と尋ねた。クレオーパスは答えた。「これらの事柄に関してご存じないならば、神と全ての人々の前で言葉と行動において強力な予言者であるナザレのイエスに関する噂を聞かなかったのは、エルサレムであなたがただ一人です。主要な祭司長と我々の支配者達は、イエスをローマ軍へ引き渡して磔を要求しました。我々の多くは、非ユダヤ人のく

びきからイスラエルを救い出す者が、彼であることを望んでいました。でも、それが全てではありません。磔にされてから今日が３日目であり、一部の女性達が、今朝とても早くに墓に行ってみますと、それが空であることがわかった、という申し立てに今日我々は、驚いているのです。そして、同じこれらの女性は、この男性と話したと主張するのです。イエスは、死から甦ったと主張するのです。そして、女性達がこれを男性達に報告しますと、２人の使徒が、墓に走って行き、同様にそれが空であることが分かったのです。」―ここで、ヤコブは、「でも、彼らは、イエスを見ませんでした。」と言って兄を遮った。

190:5.4 (2035.1) 一緒に歩きながらイエスは、二人に言った。「君達は、真実を理解するのに何と時間の掛かることか。君達が、この男性の教えと仕事に関すること、二人で議論をしたということを私に言うのであれば、私は、これらの教えに十二分に馴染みがあるので、君達に教示できるかもしれない。君達は、彼の王国が現世のものでないこと、神の息子であるすべての人が、天の父の愛の真実のこの新しい王国において愛ある奉仕を兄弟愛の親

交の精霊的な喜びに解放と自由を見つけなければならないと、このイエスがつねに教えたことを覚えてはいないのか。君達は、病人や苦しめられている者に仕え、また恐れに縛られている者や、悪の俘にされている者を解放するこの人の息子が、すべての人のためにどのように神の救済を宣言したかを思い出さないのか。君達は、ナザレのこの男性が、エルサレムに行かなければならないと、自分を殺そうとする敵に引き渡されなければならないと、また3日目に甦ると弟子に言ったことを知らないのか。このすべてを君達は伝えられていないのか。そして、ユダヤ人と非ユダヤ人に対する救済のこの日に関し、彼の中で地球のすべての家族が祝福されるということに言及する個所を聖書で一度も読んでいないのか。貧しい者の叫び声を聞き、彼を探す貧しい者の魂を救うということ、万国が、彼を祝福されている者と呼ぶであろうということ。そのような救出者は、うんざりする土地の巨大な岩石の影のようなものであるということ。かれは、腕に子羊を集め、胸で優しくそれらを運び、本当の羊飼いのように群れに餌を与えるであろうということ。かれは、精霊的に盲目な者の目を開き、絶望の虜を完全

な自由と光の中へ連れだすということ。暗闇に座る全ての者は、永遠の救済の大いなる光を見るということ。心傷ついた者に包帯を巻きつけ、罪の虜になった者に自由を宣言し、また恐怖の俘にされたり、悪に束縛される者の牢を開けるということ。かれは、悲しむ者を慰め、嘆きと重苦しさの代わりに救済の喜びを与えるということ。かれは、万国の願望と正義を求める者の永続する喜びとなるということ。真実と正義のこの息子は、癒しの光と救いの力を携え世界に甦るということ、人々をその罪から救いさえするということ。迷える者を本当に探し、救うということ。弱い者を滅ぼすのではなく、正義に飢え渇く全ての者に救済を施すということ。彼を信じる者は、永遠の命を得るということ。かれは、すべての肉体に自分の精霊を注ぐということ、そしてこの真実の精霊は、それぞれの信者の中で永遠の命へと湧き出る水の井戸となるということ。君達は、この男性が、君達に届けた王国の福音がどれほどに素晴らしいかということを理解していなかったのか。どれほどに素晴らしい救済がやってきたということを悟らないのか。」

190:5.5 (2035.2) この時までには、この兄弟の住む村に近づいていた。道沿いに歩きながらイエスが二人に教え始めてからずっと、この二人の男性は、一言も話していなかった。三人は、兄弟の粗末な住いの前にすぐ到着し、そこでイエスは、道を下り二人を後にするところであったが、兄弟は、イエスに入って留まるように強いた。二人は、日暮れ近くであるということと、自分達と留まることを主張した。ようやく、イエスは同意し、そこで、三人は、家に入るとすぐに食べるために座った。兄弟は、祝福するパンをイエスに与え、イエスがそれをちぎり二人に手渡すと、二人の目は開かれ、クレオーパスは、自分達の客があるじ自身であると気づいた。そして、彼が「あるじさまだ、」と言ったときは、モロンチアのイエスは、二人の視覚から消え去った。

190:5.6 (2036.1) そこで、「道路沿いに歩きながら話されているとき、心が熱くなり、聖書の教えを私達に分かり易く理解させたのも当然だ。」と二人は、お互いに言った。

190:5.7 (2036.2) 二人は、食べるために留まろうとはしなかった。二人は、モロンチアのあるじを見た。そして、家か

ら飛び出し、甦った救世主の朗報を広げるためにエルサレムへと急いで戻った。

190:5.8 (2036.3) その晩、９時頃、あるじが10人の前に現れる直前、この二人の興奮した兄弟が、上の部屋にいる使徒達に割り込み、イエスに会って話しをしたと主張した。そして、彼らは、自分達に言われた全てや、彼が誰であるかをパンをちぎるまで見分けていなかったこと全てを伝えた。

論文 191
使徒と他の指導者達への出現

191:0.1 (2037.1) 復活の日曜日は、使徒の人生においてひどい日であった。10人は、１日のかなりを扉に閂をかけた上階の部屋で過ごした。彼らは、エルサレムから逃げだせたかもしれないが、もしかして外で見つけられ、シネヅリオン派の回し者に捕らえられることを恐れていた。トーマスは、ベスファゲで一人自分の問題に思いをめぐらせていた。彼が、仲間の使徒とともに残っていたならば、うまくやっていけたであろうに、またより役立つ線に沿う議論を引き出す助けをしたであろうに。

191:0.2 (2037.2) ヨハネは、イエスが甦ったという考えを一日中是認した。あるじが再び甦るとそして３日目と、暗示したのは少なくとも３回であったと数え直した。異なる機会に少なくとも５回以上、ヨハネの態度は、皆に、特にジェームスとナサナエルの兄弟にかなりの影響を及ぼした。ヨハネが、一団の最年少者でなかったならば、彼らにさらに影響したことであったろう。

191:0.3 (2037.3) 各自の孤立は、各人の問題と非常に関係があった。ヨハネ・マルコスは、寺院周辺の情報と都で広まっている多くの噂を彼らに知らせ続けたが、イエスが、すでに現れた異なる集団信者からの情報収集ということは、彼には思い浮かばなかった。それは、これまでダーヴィドの使者によって与えられてきた活動の種類であったが、使者達は、エルサレムから遠く離れて住む信者集団に復活を触れ回る最後の任務で全員不在であった。王国の仕事に関する日々の情報においてどれほどまでにダーヴィドの使者に依存していたかを、使徒達は、これらの年月を経て初めて理解した。

191:0.4 (2037.4) ペトロスは、この日丸一日、あるじの復活に関して特徴的、感情的に信仰と疑問の間で揺れていた。ペトロスは、まるでイエスの体がちょうど墓用の布の中から蒸発したかのように、墓のそこにあるその布の光景から逃がれることができなかった。「しかし、」ペトロスは、「甦り、女性達に自分を見せることができるならば、なぜ我々使徒には見せないのか。」と考えた。彼が、ハナンージャの中庭でその夜、彼を否定したことであり、自分が使徒の間にいたので、イエスは、多分皆のところには来ないと考えるとき、ペトロスは、悲しくなるのであった。同時に、かれは、その女性によってもたらされた「行って使徒に—そして、ペトロスに—言いなさい。」という言葉に励まされるのであった。しかし、この報告から励みを得るには、女性達が本当に復活したあるじを見て聞いたということを彼が信じなければならないということを意味した。このように、ペトロスは、8時少し過ぎまで、思い切って中庭へ出るまで、一日中信仰と疑いの間を行き来した。ペトロスは、自分があるじを否定したことにより、イエスが使徒の前に来ること

を防げることのないようにと皆から立ち去ろうと考えた。

191:0.5 (2037.5) ジェームス・ゼベダイオスは、初めに、全員で墓に行くことを提唱した。神秘の真相を究明するための何かをすることを強く支持した。ジェームスの強い勧めに反応して人前に出かけることを防いだのはナサナエルであり、このとき命を過度に危険にさらさないようにとのイエスの警告を皆に思い出させることによりこうしたのであった。正午までに、ジェームスは、他の者と共に落ち着いて注意深く待機をしていた。ジェームスは、あまり口をきかなかった。かれは、イエスが自分達に姿を見せないのでひどく失望し、しかも他の集団や個人へのあるじの幾度もの出現を知らなかった。

191:0.6 (2038.1) アンドレアスは、この日多くのことに耳を傾けた。かれは、状況に甚だ当惑し、人一倍の疑いを持っていたが、少なくとも使徒仲間の指導的責任からの開放感を味わった。心を悩ます時がのしかかる前に、あるじが指導者の重荷から自分を釈放してくれたことに、かれは本当に感謝した。

191:0.7 (2038.2) この悲惨な日の長く、疲れる時間の中で、一度ならず、集団を維持する唯一の影響力は、ナサナエルの哲学的特徴の助言での頻繁な貢献であった。かれは、実に１日中、10人の中での操縦的な影響力であった。一度として、かれは、あるじの復活への信念、あるいは疑惑に関しても自己を表明することは決してなかった。しかし、時間が経つにつれ、かれは、イエスが再び甦るという約束を果たしたとますます信じる傾向にあった。

191:0.8 (2038.3) シーモン・ゼローテースは、議論に参加するには打ちひしがれ過ぎていた。かれは、壁に顔を向けて部屋の隅の寝椅子に凭れ掛かっていることが多かった。１日を通して話したは６回もなかった。彼の王国の概念は、音をたてて崩壊し、あるじの復活が実質的に状況を変えることができ得たことを認識できなかった。彼の失望は、非常に私的なものであり、復活のように途轍もない事実に直面してでさえ急には回復できないほどに切実なものであった。

191:0.9 (2038.4) 記録するには奇妙なことだが、平素は無表情なフィリッポスにしては、この日の午後は口数が多かっっ

た。午前中にはあまり口を開かなかったが、午後はずっと他の使徒に質問をした。ペトロスは、フィリッポスの質問にしばしば苛立ったが、他の者は、穏やかにその質問に対応した。イエスが本当に墓から甦ったのであるならば、その身体に磔の物的な跡形があるのかどうかを特に知りたいと願ってやまなかった。

191:0.10 (2038.5) マタイオスは非常に混乱していた。かれは、仲間の議論を聞いてはいたが、心では自分達の将来の経済問題に思いを巡らせながら大部分の時間を費やした。イエスの想定された復活にもかかわらず、ユダは、いなかった。そして、ダーヴィドは、マタイオスに気軽に基金を渡し、かれらは、信頼すべき権威ある指導者なしであった。復活に関する重大な考慮をする時間をもつ以前に、マタイオスは、すでにあるじに直接会っていた。

191:0.11 (2038.6) アルフェウスの双子は、これらの重大な議論にあまり加わらなかった。二人は、通常の奉仕でかなり忙しくしていた。フィリッポスに訊かれた質問への返答で、「復活については分からないが、母があるじと話し

たと言うのであるから母を信じる。」と言ったとき、二人のうちの一人は、両者の態度を示した。

191:0.12 (2038.7) トーマスは、絶望的な抑鬱の特徴的な発作の最中にいた。かれは、1日の一部を睡眠で、残りの時間を丘で歩き回って過ごした。再び仲間の使徒に再会したいという衝動を感じはしたが、一人でいる願望の方が強かった。

191:0.13 (2038.8) あるじは、多くの理由から使徒への最初のモロンチア出現を延期した。第一に、彼らが、自分の復活について耳にした後、まだ肉体の姿で共にいたときに、彼が死と復活について話したことについてよく考える時間を皆に望んでいた。皆の前に現れるに先だって、あるじは、ペトロスが彼に固有の幾つかの困難と取り組むことを望んだ。第二に、かれは、最初の出現時点でトーマスが居合わせることを望んでいた。ヨハネ・マルコスは、この日曜日の早朝ベスファゲのシーモンの家にトーマスの居場所をつきとめ、11時頃に使徒に知らせを持って来た。ナサナエルまたは他の2人の使徒が、この日のうちに迎えに行っていたならば、トーマスは、戻ってい

たことであろう。かれは、本当に戻りたかったのだが、その前夜の去り方が去り方であっただけに自ら戻るには自尊心が高すぎた。かれは、翌日までには非常に落ち込んでいて、回復するにほぼ1週間を要するほどであった。使徒達は、トーマスを待ち、トーマスは、同胞が自分を捜し出し、戻るように頼むことを待っていた。その結果、トーマスは、ペトロスとヨハネが、次の土曜日の夕方暗くなってからベスファゲにやって来て、彼を連れ戻るまで仲間から離れたままであった。これも、イエスが最初に使徒に姿を見せてからすぐにガリラヤに行かなかった理由でもある。かれらは、トーマスを伴わずには行こうとはしなかった。

1. ペトロスへの出現

191:1.1 (2039.1) イエスがマルコスの家の庭でシーモン・ペトロスに姿を現したのは、この日曜日の夜、８時半頃であった。これは、８回目のモロンチア顕現であった。ペトロスは、あるじを否定して以来、懐疑と罪悪感の重荷の下で生きていた。土曜日とこの日曜日のまる二日間、自分はもはや恐らく使徒ではないという恐怖と闘っていた。ユダの運命に身を震わせ、自分もまた、あるじを裏切っ

てしまった、と思いさえした。もちろん、もし本当に甦ったのであるならば、イエスが使徒の前に現れるのを妨げているのは自分の同席のせいかもしれないと、かれは、この午後ずっと考えていた。そして、イエスが現れたのは、打ち萎れたこの使徒が、そのような心境で、そのような魂の状態で花と潅木の中を逍遥していたペトロスにであった。

191:1.2 (2039.2) ペトロスが、ハナンージャの柱廊の玄関を通過した時、あるじの情愛深い表情を思いやったとき、また、その朝早々に空の墓から来た女性達が持たらした「「行って使徒に—そして、ペトロスに—言いなさい。」というその素晴らしい伝言に思いを巡らすとき—これらの慈悲の印を深く考えるとき、彼の信仰は、懐疑を打ち破り始め、かれは、静止し、拳を握りしめて、声高に言った。「私は、あの方が甦ったと信じる。同胞に告げに行こう。」こう言うと、正面に人の姿をした者が、突然現れ、耳慣れた声で言った。「ペトロス、敵は、君を手に入れようと願っていたが、私は君を諦めようとはしなかった。私には君が心から私との縁を切ったのではないことが分かっていた、だから、君が求める前にすら許し

ていた。しかし、暗闇に座る人々に福音の朗報を届ける準備をする間、いま君は、自分自身と現時点の問題について考えることを止めなければならない。もはや、自分が王国から得られるものに関心をもつよりも、むしろ、差し迫っている精霊窮乏の中で生きる人々に与えることができることに汗を流すべきである。仕度をしなさい、シーモン。新しい日の戦いのために、精霊の暗黒との戦い、そして人間本来の心の中の邪悪な懐疑での藻掻きのために。」

191:1.3 (2039.3) ペトロスとモロンチアのイエスは、庭を歩き、過去、現在、未来の事について5分間ほど話した。そして、あるじは、「それでは ペトロス。君の同胞と共に君に会う時まで」と言い、見つめているペトロスの前から消え去った。

191:1.4 (2039.4) しばらくの間、ペトロスは、復活したあるじと話したということ、まだ自分は王国の大使であり得るという認識に圧倒されていた。栄光に輝くあるじが、自分に福音を説き続けるように勧めるのをたった今聞いたのであった。そして、このすべてが心の中にこみ上げる状

態で、かれは、上の部屋へと、仲間の使徒のいるところへと急行し、息を切らせた興奮のまま、「あるじさまを見た。庭におられた。私は話をしたし、あの方は私を許された。」と大声で言った。

191:1.5 (2040.1) 庭でイエスを見たというペトロスの主張は、仲間の使徒に深い印象を与え、そこで、アンドレアスが、立ち上がり、彼らに弟の報告にあまり影響を受けないように警告したとき、皆には疑心を捨て去る用意がほぼできていた。アンドレアスは、ペトロスが、以前本当でないものを見たことがあると仄めかした。アンドレアスは、あるじが自分達の方に水の上を歩いて来るのを見たとペトロスが主張するガリラヤ湖上での夜の幻影には直接に言及はしなかったが、この事件を思い描いているということは、居合わせる者全てに示すには充分であった。シーモン・ペトロスは、兄の仄めかしに非常に傷つき、すぐさま元気のない沈黙に陥った。双子は、とても気の毒に思い、同情の念を表わし、自分等は、彼を信じており、また二人の母もあるじを見たと重ねて主張するためにペトロスの方に行った。

2. 使徒への最初の出現

191:2.1 (2040.2) その夜９時直後クレオーパスとヤコブの出発後、アルフェウスの双子は、ペトロスを慰め、ナサナエルは、アンドレアスを諌め、10人の使徒が、逮捕の恐怖に上階の部屋の全ての戸に閂をかけて集合していると、モロンチア姿のあるじが、皆の直中に突然現れて言った。「君達に平和あれ。まるで精霊でも見たかのように、私が現れるとなぜそのように怯えるのか。私は、生身で共にいる時、君達にこれらのことを話しはしなかったか。私は、殺すために祭司長と支配者達に引き渡されると、君達の一人が私を裏切ると、そして３日目に甦ると言わなかったか。女性達、クレオーパス、ヤコブの報告について、さらにはペトロスの報告についてさえ、いかなる訳での、君達全員の疑いと議論なのか。どれくらい、君達は、私の言葉を疑い、私の約束を信じるのを拒否するのであろうか。また君達は、いま実際に私を見ていて、信じてもらえるのか。今でも、君達の１人は不在である。もう一度、君達が集められるとき、　そして、人の息子が墓から甦ったと全員が確信してから、そこから、ガリラヤに向かいなさい。神を信じなさい。互いを信じなさい。そうして、天の王国の新しい奉仕に身を投

じなさい。ガリラヤに向かう用意ができるまで、私は、君達と共にエルサレムに留まるつもりである。私の平和を君達に残す。」

191:2.2 (2040.3) モロンチアのイエスは、話し終えると、すぐさま皆からは見えなくなった。彼らは全員、顔を伏せ、神を称賛し、消え去ったあるじを敬った。これがあるじの9回目のモロンチア出現であった。

3. モロンチアの被創造物と共に

191:3.1 (2040.4) 翌日、月曜日は、そのときユランチアにいたモロンチアの被創造物と共に費やされた。あるじのモロンチア変遷の経験における関係者として、100万人以上のモロンチア指導官や同僚が、サタニアの7大邸宅世界からの様々な序列の過渡期にある生き物とユランチアにやって来た。モロンチアのイエスは、これらのすばらしい有識者と40日間を共に過ごした。彼らに命令し、また、皆がモロンチア圏の体制を通過する間、かれは、サタニアの棲息界の生き物が横断する際、モロンチア変遷の生活を指導官達に学んだ。

191:3.2 (2041.1) この月曜日の真夜中頃、あるじのモロンチアの姿は、モロンチア進行の第二段階への変遷のために調整された。あるじが次に地球の人間の子供達に出現したとき、それは、第二段階のモロンチア存在体としてであった。あるじがモロンチア経歴における進歩とともに、モロンチア有識者とその変遷する仲間にとり、人間の目と物質的な目ではあるじを見ることが、技術的にますます難しくなった。

191:3.3 (2041.2) イエスは、４月14日、金曜日にモロンチアの第３段階への変遷を果たした。17日、月曜日、第４段階へ。22日、土曜日、第５段階へ。27日、木曜日、第６段階へ。５月２日、火曜日、第７段階へ。７日、日曜日、ジェルーセム市民へ。そして14日、日曜日にエデンチアのいと高きものの迎え入れに。

191:3.4 (2041.3) この様に、ネバドンのマイケルは、前の贈与に関連して星座の本部での滞在から超宇宙本部奉仕への、またそれを通じてさえの時空間の上向する必滅者の人生を完全に経験したので、宇宙経験の奉仕を終了した。そして、これは、ネバドンの創造者たる息子が、７回目

の、そして最後の宇宙贈与を本当に終え、しかも適切に終了したのは、まさしくこれらのモロンチア経験によってであった。

4. 第10の出現(フィラデルフィアにて)

191:4.1 (2041.4) 人間認識へのイエスの10回目のモロンチア顕現は、４月11日、火曜日の８時少し過ぎにフィラデルフィアで起こり、そこで、かれは、アブネー、ラーザロス、70人以上の福音伝道者軍団を含む150人ほどの仲間に姿を見せた。この出現は、ダーヴィドの使者によってもたらされたイエスの磔と、つい最近の復活の報告を議論するためにアブネーに召集された特別な会堂での会合の直後に起きた。復活したラーザロスが、現在この信者集団の構成員であるが故に、イエスが甦ったという報告を信じるのは、彼らには難くはなかった。

191:4.2 (2041.5) 信者の全聴衆があるじの姿が突然現れるのを見たとき、会堂での会合は、アブネーとラーザロスによって開かれたばかりで、二人は、聖壇に並んで立っていた。あるじは、アブネーとラーザロスの間に現れた場所

から進み出た。そのどちらも、イエスを見てはいなかった。イエスは、一行に挨拶をしながら言った。

191:4.3 (2041.6)「君達に平和あれ。君達は皆、我々には天に1人の父がおられるということ、そして、わずかに一つの王国の福音—人が信仰によって受ける永遠の生命の贈り物に関する朗報—しかないことを知っている。君達が、福音への忠誠を喜ぶように、心で同胞に対する新しく、よりすばらしい愛を広く注ぐために真実の父に祈りなさい。私が君達を愛していたように、君達はすべての人を愛するようになっている。私が君達にしたように、君達はすべての人に仕えるようになっている。理解に基づく思いやりと兄弟らしい愛情で、ユダヤ人であろうが、非ユダヤ人であろうが、あるいは、ギリシア人であろうがローマ人であろうが、ペルシア人であろうがエチオピア人であろうが、朗報の公布に捧げられるすべての同胞と親交を持ちなさい。ヨハネは、前もって王国を宣言した。君達は、力つよく福音を説いた。ギリシア人は、すでに朗報を教えている。私は、すぐに真実の精霊をこれらの全ての魂に、私の同胞に、人生を精霊の暗闇にある仲間の啓発に私心なく捧げた者達に送ることになってい

る。君達は皆、光の子である。したがって、必滅者の猜疑と人間の狭量の誤解の縺れに躓いてはいけない。また、君達が、信仰の恩恵により、無信仰者を愛するために気高くされるならば、信仰のはるかかなたの家庭にいる仲間の信者である者達をも同様に愛すべきではないのか。覚えていなさい、君達が互いに愛するとき、すべての人は、君達が私の弟子であることを知るであろう。

191:4.4 (2042.1) 「それから、神の父性と人の兄弟愛に関するこの福音を全ての国と民族に宣言しに行き、そして、人類の異なる民族と種族に朗報を提示する方法の選択において賢明であり続けなさい。君達は、自由にこの王国の福音を受け入れたし、自由に朗報を万国に伝えるであろう。私は君達と常に、時代の終わりまでさえも、ともにいるのであるから、悪の抵抗を恐れるではない。私の平和を君達に残す。」

191:4.5 (2042.2) 「私の平和を君達に残す。」と言ったとき、あるじは、彼らの視覚から消え去った。500人を越える信者がイエスを見たガリラヤでの出現の１つを除いては、フ

ィラデルフィアでのこの集団が、一度にイエスに会った人間の最多の数を擁していた。

191:4.6 (2042.3) 翌朝早く、トーマスの感情的な回復を待ち受けて使徒達がエルサレムで待っている間にさえ、フィラデルフィアのこれらの信者は、ナザレのイエスが甦ったと宣言しに出掛けて行った。

191:4.7 (2042.4) 翌日の水曜日、イエスは、間断なくモロンチア仲間との交流で時を過ごし、昼下がりの間、ノーランティアデクの星座の棲息圏のあらゆる地域体制の大邸宅世界からのモロンチア代表の訪問者を迎えた。皆は、宇宙の知性ある者達自身の序列の１つとして自分達の創造者を知って歓喜した。

5. 使徒への2度目の出現

191:5.1 (2042.5) トーマスは、オリーヴ山周辺の丘で単独で寂しい週を過ごした。かれは、この間シーモンの家に居た者達とヨハネ・マルコスだけを見た。２人の使徒が彼を見つけ、待合せ場所のマルコスの家に連れ戻ったのは、４月15日、土曜日の９時頃であった。翌日、トーマスは、あるじの様々な出現の話が語られるのを聞いたが、信じ

ることを堅く拒否した。ペトロスは、彼らにあるじを見たと考えるように夢中にさせたと主張した。ナサナエルは、説き伏せようとしたが無駄であった。習慣的な疑い深さに関連した感情的な頑固さがあり、この心の状態が、皆から逃げ出してしまったという無念さに結びつく、トーマス自身さえ完全に理解しなかった孤立状況を作り出す羽目となった。かれは、仲間から引き下がり、自身の方向に行き、皆のところに戻ってからも、無意識のうちに相容れないない態度をとる傾向があった。かれは、降伏するのに時間が掛かった。かれは、譲ることが嫌いであった。それを意図することなく、かれは、自分に向けられる注意を本当に楽しんだ。かれは、彼を納得させ、変えようとするすべての仲間の努力から無意識のうちに満足感を得ていた。かれは、まる１週間、皆がいないのを淋しく感じており、皆からの持続的な注目からかなりの喜びを得た。

191:5.2 (2042.6) トーマスの片側にペトロスが、その反対側にナサナエルが座り、「自分の目であるじを見、自分の指をその釘の跡に突っ込まない限り、私は信じない。」とこの疑っている使徒がこう言ったときは、６時を少しまわ

っており、皆は、夕食をとっていた。こうして彼らが夕食の座に着き、戸は確実に閉じられ、閂がかけられていたが、モロンチアのあるじは、食卓の湾曲部分に突然現れ、直接トーマスの正面に立って言った。

191:5.3 (2043.1) 「君達に平和あれ。全世界に出掛け、この福音を説く委託を聞くために皆が揃ったところでもう一度現れることができるように、私は、まる1週間、留まっていたのである。もう1度言う。父がこの世界に私を送られたように君達を送り出す。私が父を明らかにしたように、単に言葉ではなく、日々の生活の中で、君達は神の愛を明らかにする。君達が、人の魂を愛するためにではなく、人を愛するために、私は、君達を送り出す。神の贈り物として、信仰を通して、すでに永遠の生命を得たのであるから、君達は、日々の人生経験の中で単に天国の喜びを宣言するのではなく、神性の人生のこれらの精霊的な現実をも示すことになっている。信仰があるとき、天から力が、すなわち真実の精霊が、君達の上に来るとき、自分の光を閉じられた戸の後ろのここに隠さないであろう。君達は、神の愛と慈悲を全人類に明らかにするであろう。恐怖ゆえに君達はいま、不愉快な経験の

事実から逃げるが、真実の精霊で洗礼されるとき、神の王国の永遠の生命に関する朗報を宣言する新しい経験に遭遇するために、勇敢に、嬉々として先へ進むであろう。伝統主義の威光の誤った安定から生きた経験の最高の現実に対する事実、真実、そして信仰の権威の新秩序への変遷の衝撃から立ち直るする間、君達は、こことガリラヤに留まることができる。世界への君達の任務は、私が君達の間で神を顕示する生活を送ったという事実に基づいている。君達と他のすべての人々が、神の息子であるという真実に。そして、それは、君達が人の間で送る生活—人を愛し人に仕える、まさに私が君達を愛し、君達に仕えたような実際の、そして生きる経験—に成り立つのである。信仰に君達の光を世界へと明らかにさせなさい。伝統によりくらむ目を真実の顕示に開かせなさい。無知によって生み出される偏見を君達の愛ある奉仕に効果的に破壊させなさい。理解ある同情と寡欲な献身で君達の仲間に近づくことによって、君達は、彼らを父の愛の救済の知識へと導くであろう。ユダヤ人は善を絶賛した。ギリシア人は美を高めた。インド人は献身を説く。遠くにいる行者は敬意を教える。ローマ人は忠誠を

求める。「しかし、私は、弟子に生命を求める、肉体をもつ兄弟のために愛する奉仕の生活さえ。」

191:5.4 (2043.2) あるじはこう話すと、トーマスの顔をじっと見て言った。「そして、君、トーマスよ、私を見て、私の手の釘跡に指を置くことができるまで信じないと言った者は、いま私を見て、私の言葉を聞いた。私が、君もこの世を離れるときに持つ姿で甦ったので、私の手には何の釘跡も見ないが、きみは、同胞に何と言うのか。きみは、真実を認めるであろう、なぜならそれほど激しく自分の不信仰を断言した時にさえ、すでに心では信じ始めたのであるから。トーマス、君の疑念は、それがまさに崩れようとするとき、つねに最も頑として主張している。トーマス、私は、君が不信仰ではなく、信じることを命じる—そして、私は、君が信じると、全心で信じると知っている。」

191:5.5 (2043.3) これらの言葉を聞くと、トーマスは、モロンチアのあるじの前に跪き「信じます。ご主人さま、あるじさま」と大声で叫んだ。その時、イエスは、「トーマス、きみは、信じた、本当に私を見、私の声を聞いたの

で。来る時代の信じる者達は、肉体の目で見ず、必滅の耳でも聞かずに祝福される。」と言った。

191:5.6 (2043.4) それから、あるじの姿は、食卓の上座近くに移動し、全員に話し掛けた。「さあ、全員ガリラヤへ行きなさい。そこで、私はほどなく姿を現す。」こう言うと、皆の視覚から消え失せた。

191:5.7 (2044.1) 11人の使徒は、そのとき、イエスが甦ったと完全に確信した。そして、次の朝早々に、夜明け前に、ガリラヤへと出発した。

6. アレクサンドリアでの出現

191:6.1 (2044.2) 11人の使徒が、ガリラヤへの道にあり、４月18日、旅も終わりに近づいた火曜日の夜8時半過ぎ、イエスは、アレキサンドリアでロダンと80人ほどの他の信者に姿を見せた。これは、モロンチア姿のあるじの12回目の出現であった。イエスは、ダーヴィドの使者の磔に関する報告の終わりに、これらのギリシア人とユダヤ人の前に現れた。エルサレム-アレキサンドリア間の継走の５人目であるこの使者は、その午後遅くアレキサンドリアに到着し、そして彼がロダンに報告し終えると、使者

自身からのこの悲惨な言葉を伝えるためきくために信者達の招集が決められた。８時頃、この使者ブシリスのナサンは、この一行の前に来て、前走者によって伝えられたそのすべてを詳細に話した。ナサンは、これらの言葉で自分の感動的な話を終えた。「しかし、この知らせを我々に伝えるダーヴィドは、あるじが自分の死を予告する際に、再び甦ると宣言したと報告する。」ナサンが話したその時、モロンチア姿のあるじは、全員が見えるところに現れた。ナサンが座ると、イエスは言った。

191:6.2 (2044.3) 「あなた方に平和あれ。父が、世界に確立させるために私を送り出したものは、民族や国家にも、または教師や伝道者のいかなる特別集団にも属さない。王国のこの福音は、双方のユダヤ人と非ユダヤ人、富者と貧者、自由な者と縛られる者、男と女、そして小さい子にさえも属する。そして、あなた方全員が、肉体で送る生活により愛と真実のこの福音を広めようとしている。あなた方は、新しくて驚異的な愛情をもってお互いを愛するべきである、ちょうど私が、あなたを愛したように。あなた方は、新しくて驚くべき献身で人類に奉仕するべきである。ちょうど私が、あなた方に仕えたように。そ

して、あなた方がそのように人を愛するのを見るとき、また、あなた方がいかに熱烈に人に仕えるかを見るとき、人は、あなた方が、天の王国の信仰仲間になったと見て取るであろうし、永遠の救済の発見への、あなた方の人生に見受ける真実の精霊のあとについて行くであろう。

191:6.3 (2044.4) 「父が私をこの世界に送り出したように、私は、いまあなた方を同じように送り出す。あなた方は皆、暗闇に座る人々に朗報を届けるために呼ばれた。王国のこの福音は、それを信じるすべての者に属している。それは、聖職者だけの保護に委ねられることはない。追って真実の精霊が来て、あなた方をすべての真実に導くのである。だから、この福音を説いて全世界へと行きなさい、そして見なさい、私は、いつもあなた方と共にいる、時代の終わりまでさえも。」

191:6.4 (2044.5) そのように話し終えると、あるじは、皆の視覚から消え去った。その夜ずっと、これらの信者は、王国の信者として自分達の経験について詳しく語り、ロダンと仲間からの多くの話を聞き、そこに一緒に残った。そ

して、彼らは皆、イエスが甦ったと信じた。ダーヴィドの伝令使は、この２日後に到着し、自分の発表に対して、これらの信者が、復活に関して「はい、我々は、あの方に会ったので知っています。。かれは、我々におとといい姿を現されました。」と、答えたときのダーヴィドの伝令使の驚きを想像しなさい。

論文 192
ガリラヤでの出現

192:0.1 (2045.1) 使徒がエルサレムからガリラヤに向かう頃には、ユダヤの指導者達は、かなり静まっていた。イエスが王国の信者の家族にだけ現れ、また使徒は、身を隠し、いかなる公の説教もしなかったので、ユダヤの支配者達は、福音の運動が、結局は、効果的に鎮圧されたと結論を下した。指導者達は、もちろん、イエスが甦ったという噂の広まりに当惑したものの、追随者の徒党が遺体を移動したという話の繰り返しに対して、買収された衛兵達が、そのような全ての報告を効果的に妨げることを頼みとした。

192:0.2 (2045.2) この後ずっと、使徒が迫害の上げ潮によって分散するまで、ペトロスが、使徒部隊の一般に認められた

代表者であった。イエスは、そのような権限をペトロスに決して与えなかったし、仲間の使徒も、そのような責任ある位置に決して正式にペトロスを選出しなかった。ペトロスは、皆の同意により、また皆の主要な伝道者であったことからも自然にそれを引き受け、またそれを維持した。この後、公の説教が使徒の主な活動となった。ガリラヤからの帰着後、ユダの代理に皆が選んだマタイアスが、会計係となった。

192:0.3 (2045.3) エルサレムに滞在した１週間、イエスの母マリアは、多くの時間をアリマセアのヨセフの家に留まっていた女性信者と過ごした。

192:0.4 (2045.4) 使徒がガリラヤに出発したこの月曜日の朝早々、ヨハネ・マルコスは、皆と共に行った。都から後をつけ、皆がベサニアをはるかに過ぎたとき、かれは、送り返されはしないであろうと確信し、皆の間に大胆に近づいた。

192:0.5 (2045.5) 使徒達は、ガリラヤへの途中、甦ったあるじの話をするために何度か止まり、依って、水曜日の夜、かなり遅くなるまでベスサイダには到着しなかった。全員

が起きて朝食の相伴の用意をしたのは、木曜日の正午であった。

1. 湖畔での出現

192:1.1 (2045.6) 4月21日、金曜日の朝6時頃、ベスサイダの通常の上陸場所近くで舟が岸に近づくと、モロンチアのあるじは、10人の使徒の前に、13回目、ガリラヤでは初めて、姿を現した。

192:1.2 (2045.7) 使徒がゼベダイオスの家で待機し、木曜日の午後と夕方を過ごした後、シーモン・ペトロスは、漁に行こうと提案した。ペトロスが釣遊びを提案すると、彼らは全員賛同した。かれらは、夜通し、網で頑張ったが不漁であった。かれらは、不漁をあまり気にしなかった、というのも、エルサレムで自分達に起こきたつい最近の出来事を話す興味深い多くの経験をしたので。しかし、陽が昇ると、かれらはベスサイダに戻ることにした。岸に近づいたとき、皆は、船着場近くの波打ち際で炎のそばに立つ何者かを見た。かれらは初め、獲物を携える自分達を歓迎するためにやって来たヨハネ・マルコスであると思ったが、岸に近づくにつれ、間違いが分かった—

男性はヨハネにしては背が高過ぎた。岸の人があるじであるとは、誰の心にも浮かばなかった。なぜイエスが、先の集いの真っただ中、そして、恐怖、裏切り、死の悲惨な関係のあるエルサレムの閉じこもった環境から遠い、戸外の自然に触れる広場で皆に会いたかったのか、かれらは、完全には理解していなかった。あるじは、皆がガリラヤに行けばそこで会うであろうと告げてあり、その約束を果たそうとするところであった。

192:1.3 (2046.1) 錨を下ろし、岸に行くために小舟に乗る準備をしていると、「若者よ、何か捕ったか。」と岸の男が声を掛けた。そして、皆が、「いいえ」と答えると、「右舷に網を投げ入れなさい。魚がいるであろう。」と再び言った。指示したのがイエスだとは知らなかったが、言われた通りに皆が一斉に網を投げ入れると、それは一杯で網はいっぱいで引き上げられないほどにたくさんであった。そのとき、ヨハネ・ゼベダイオスは、気がついた。かれは、重く手応えのある網を見たとき、自分達に話していたのはあるじだと悟った。この考えが心に浮かぶなり、かれは、ペトロスの方に身を乗り出し、「あるじさまだ。」と囁いた。ペトロスは、いつも軽はずみな行為

と衝動的な献身の男性であった。したがって、ヨハネがこう耳に囁くと、急に立ち上がり、あるじの側に早く着くことができるように水の中へと飛び込んだ。小舟が岸に近付き、同胞は、魚の網を引っ張ってペトロスのすぐ後ろからやってきた。

192:1.4 (2046.2) この時までに、ヨハネ・マルコスは、起きており、使徒が重荷の網をもって岸に来るのを見て、迎えるために岸を駆け下りた。そして、10人ではなく11人の男達を見ると、本人とは気づかれていない方は、復活したイエスであると推測し、少し離れて驚いている10人が黙って立っていたので、若者は、あるじへと急ぎ、足元に跪いて、「ご主人さま、あるじさま」と言った。そのとき、イエスは、「君達に平和あれ」と皆を迎えたエルサレムのときのようにではなく、普通の語調でヨハネ・マルコスに話し掛けた。「さて、ヨハネ、再び君に会えて、また良い訪問ができる気楽なガリラヤにいて私は嬉しい。ヨハネ、我々と共にいて、朝食をとりなさい。」

192:1.5 (2046.3) イエスが青年と話すと、10人は、岸に魚の網を手繰り上げるのを忘れるほどに驚いた。そのとき、イエ

スは、「魚を引き上げ、そのうちの何匹かを朝食用に支度をしなさい。すでに火と沢山のパンもある。」

192:1.6 (2046.4) ヨハネ・マルコスは、あるじに敬意を払ったが、ペトロスは、渚で照り映えて燃えている石炭の光景にしばし衝撃を受けていた。その場面は、自分があるじを見捨てたハナンージャの中庭での真夜中の炭の炎をあまりにもまざまざと思い出させた。しかし、ペトロスは、全身を揺すり、あるじの足元に跪き、「ご主人さま、あるじさま」と叫んだ。

192:1.7 (2046.5) 次に、ペトロスは網を手繰る仲間に合流した。獲物の水揚げをし終え数えてみると153匹の大物があった。再び、これをもう一つの奇跡の漁獲と呼ぶことは、誤りであった。この出来事には何の奇跡もなかった。それは、単にあるじの予備知識の実行に過ぎなかった。かれは、魚がそこにいることが分かっており、このため、網を投げ入れる場所を使徒に指示した。

192:1.8 (2047.1) イエスは、「さあ、皆来なさい、朝食に。私が皆と雑談する間、双子も座りなさい。ヨハネ・マルコスが魚の下拵えをする。」と言った。ヨハネ・マルコス

は、７匹の大振りの魚を運び、それをあるじが炎にあてて、魚が出来上がると、若者は、それを10人に給仕した。そこでイエスは、パンを千切ってヨハネに手渡し、ヨハネは空腹な使徒に順番に給仕した。全員に行き渡ると、イエスは、自らが魚とパンを若者に給仕して、ヨハネ・マルコスに座るように命じた。そして、食べている間、イエスは、皆と雑談し、ガリラヤでの、そして、まさしくこの湖畔での自分達の多くの経験について詳しく話した。

192:1.9 (2047.2) これは、イエスが集団としての使徒に現れた３度目であった。イエスが、漁獲があったかを尋ねて最初に話し掛けたとき、通常近くにいるタリヘアの魚屋が、乾物用に新鮮な獲物の買い付けのためにこのように話しかけることは、ガリラヤ湖のこれらの漁師にとっての共通の経験であったので、皆は、岸に来たとき、彼が誰であるか気を回さなかった。

192:1.10 (2047.3) イエスは、10人の使徒とヨハネ・マルコスと１時間以上雑談し、それから、二人ずつ—教えのために最初に二人ずつ組ませた者同士ではない—を伴い、話し

ながら汀へと往きつ戻りつした。11人の全使徒がエルサレムから一緒にやって来たが、シーモン・ゼローテースは、ガリラヤに近づくにつれますます元気を失い、ベスサイダ到着時には同胞を見捨てて自分の家に戻るほどであった。

192:1.11 (2047.4) この朝、皆を残していく前に、イエスは、2人の使徒が家に行きシーモン・ゼローテースをその日のうちに連れて来るべきであると指示した。そこで、ペトロスとアンドレアスがそうした。

2. 使徒2人ずつとの会話

192:2.1 (2047.5) 彼らが朝食を終えたとき、他のものが火の側に座っている間、イエスは、波打ち際で散策しようとペトロスとヨハネに合図した。一緒に歩いていると、「ヨハネ、私を愛しているか。」とイエスが尋ねた。ヨハネが、「はい、あるじさま、心から。」と答えると、あるじは言った。「では、ヨハネ、狭量を捨て、私が君を愛してきたように人を愛することを学びなさい。世界で愛が一番すばらしいものであるということを分からせることに人生を捧げなさい。それは、人が救済を求めること

を推進する神の愛である。愛は、すべての精霊的な善の源、すなわち真と美の本質である。

192:2.2 (2047.6) イエスは、次にペトロスの方に向き、「ペトロス、私を愛しているか。」と尋ねた。ペトロスは、「ご主人さま、全ての魂であなたを愛しているのをあなたはご存じです。」と答えた。その時、イエスは言った。「私を愛しているならば、ペトロス、私の子羊に餌を与えなさい。弱者、貧者、若者に力を貸すことを怠ってはいけない。恐怖を持たず、贔屓もせずに福音を説きなさい。神は偏らないということをいつも覚えていなさい。私が君に仕えたように仲間に仕えなさい。私が君を許したように必滅の仲間を許しなさい。君の思索の価値と賢明な省察の力を、経験から学びなさい。」

192:2.3 (2047.7) 一緒に前方に少し歩いた後、あるじは、ペトロスの方に向き、「ペトロス、本当に私を愛しているか。」と尋ねた。すると、シーモンは、「はい、ご主人さま、私が、あなたを愛しているのをあなたはご存じです。」と言った。再びイエスは、「それなら、私の羊の世話をしなさい。群れの良い、また真の羊飼いになりな

さい。彼らの信用を裏切ってはいけない。敵の手による不意打ちを受けてはならない。いつも用心しなさい—目を覚まして祈りなさい。」

192:2.4 (2047.8) さらに数歩行ってから、イエスは、ペトロスに向き、「ペトロス、本当に、君は私を愛しているか。」と３度目に尋ねた。そこでペトロスは、あるじが自分を疑っているように見えてわずかに悲しみ、「ご主人さま、あなたは全てのことをご存じです、だから、私があなたを本当に、本当に愛しているのを知っておられます。」とかなりの感情を込めて言った。その時、イエスは言った。「私の羊に餌をやりなさい。群れを見捨てるでない。仲間の全ての羊飼いの模範となり、励ましとなりなさい。私が君を愛したように群れを愛し、君の幸福に私の人生を捧げたように彼らの幸福に自身を捧げなさい。そして、最期まで私のあとについてきなさい。」

192:2.5 (2048.1) ペトロスは、この最後の言葉—イエスの後に従い続けるべきであるということ—を文字通りに取った。そして、かれは、イエスに向き、ヨハネを指差して「私があなたの後に続くならば、この男には何をさせましょ

うか。」と尋ねた。そこで、ペトロスが自分の言葉を誤解したと分かり、イエスは言った。「ペトロス、同胞が何をするかに関して心配するな。君が去った後、私がヨハネを留めるとして、私が戻って来るときまでさえも、それが君にとって何であるというのか。君が私について来ることだけを確実にしなさい。」

192:2.6 (2048.2) この注意は、同胞の間に広まり、多くの者が考え望んでいたように、力と栄光で王国を樹立するためにイエスが戻る前に、ヨハネは死なないだろうという趣旨で、イエスの声明として受け取られた。シーモン・ゼローテースが奉仕活動に戻り、仕事に従事し続けたのは、イエスが言ったことに対するこの解釈からであった。

192:2.7 (2048.3) 他の者のところに戻ると、イエスは、アンドレアスとジェームスと散策し話しに出掛けた。しばらく行くと、イエスは「アンドレアス、私を信じるか。」と、アンドレアスに言った。すると使徒の元主長は、イエスがそのような質問をするのを聞くと、じっと立ち、「はい、あるじさま、私は確かにあなたを信じます。あなたは、私がそうしているとご存じです。」と答えた。その

時、イエスは言った。「アンドレアス、私を信じるならば、同胞をさらに信じなさい—ペトロスをさえ。私は、かつて君に同胞の指揮を託した。今、私が父のところに行くために君達を去るに当たり、君は、他のものを信じなければならない。厳しい迫害のために同胞が広く離散し始めるとき、肉体をもつ私の弟ジェームスが、負うには経験不足である重荷を課せられるとき、ジェームスの思いやりのある賢明な相談役になりなさい。そして、信じ続けなさい、私は君をがっかりさせはしないので。君が地球で終わるとき、君は私の元に来るであろう。」

192:2.8 (2048.4) それから、イエスはジェームスの方に向いて、「ジェームス、私を信じるか。」と尋ねた。もちろん、ジェームスは、「はい、あるじさま、心からあなたを信じています。」と答えた。その時、イエスは言った。「ジェームス、私をさらに信じるならば、同胞に対し短気でないようになるであろう。私を信じるならば、それは、君が信者の兄弟愛に親切であることを助けるであろう。君の言動の因果関係を量り知ることを学びなさい。刈り取りは植え付けに基づくことを心しなさい。精霊の平静と忍耐の育成のために祈りなさい。これらの恩恵

が、生きる信仰と共に犠牲の杯を飲む時間が来るとき君を支えるであろう。しかし、決して狼狽するでない。地球での人生が終わるとき、君も私といるために来るのである。」

192:2.9 (2048.5) イエスは、次にトーマスとナサナエルと話した。「トーマス、私に仕えるか」と尋ねた。トーマスは、「はい、ご主人さま、私は今も、そしていつもあなたに仕えます。」と答えた。その時、イエスは言った。「私に仕えるならば、私が君に仕えたように、肉体をもつ私の同胞に仕えなさい。そして、愛のこの奉仕のために神に任命されてきた者として、この善行に飽きることなく堪え忍びなさい。私との地球での奉仕を終えたとき、君は私と共に栄光のうちに仕えるであろう。トーマス、疑うことをやめなければならない。信仰において、真実に関する知識において成長しなければならない。子供のように神を信じなさい、ただし、そのように子供っぽく行動することはやめなさい。勇気を持ち、信仰に強く、神の王国で強力でありなさい。」

192:2.10 (2049.1) そして、あるじは、「ナサナエル、私に仕えるか。」と言った。使徒は答えた。「はい、あるじさま、一心不乱の愛情で。」その時、イエスは言った。「では、全心で私に仕えるならば、疲れを知らない愛情をもって必ずや地球の私の同胞の幸福に専念しなさい。君の友好と助言を取り混ぜて、愛を君の哲学に加えなさい。私が君に仕えたように、仲間に仕えなさい。私が君の世話をしたように、人に誠実でありなさい。あまり批判的でないように。一部の者にあまり期待をせず、そうすることで失望の程度を少なくしなさい。そして、ここでの仕事が終わるとき、君は、上で私と共に仕えるのである。」

192:2.11 (2049.2) この後、あるじは、マタイオスとフィリッポスと話した。フィリッポスに、「フィリッポス、私に従うか。」と、言った。フィリッポスは、「はい、ご主人さま、自分の生命をもってしてもあなたに従うつもりです。」と答えた。その時、イエスは言った。「私に従いたいのであるならば、非ユダヤ人の地に入り、この福音を宣言しなさい。予言者は、従うことは犠牲よりも良いと言った。信仰で、君は王国の神を知る息子になったの

である。従うためのただ1つの法がある—それは、王国の福音を宣言しに旅立たせる命令である。人を恐れるのをやめなさい。闇で苦しみ真実の光を切望する仲間に永遠の生命の朗報を説くことを恐れないようにしなさい。これ以上、フィリッポス、金と物資のために東西に奔走をしないように。君は今、ちょうど君の同胞がそうであるように、喜ばしい知らせを説くことにおいて自由である。そして、私は、君の先を行き、終わりまでも共にいるのである。」

192:2.12 (2049.3) それから、マタイオスと話し、あるじは、「マタイオス、心から私に従う気持ちがあるのか。」と尋ねた。マタイオスは、「はい、ご主人さま、私は、完全にあなたの意志を為すことに捧げています。」と答えた。その時、あるじは言った。「マタイオス、私に従うならば、王国のこの福音をすべての民族に教えに出掛けなさい。もはや君は、同胞に人生の物質的なものを手配はしないであろう。今後は、君も精霊救済の朗報を宣言することになっている。これから先、父の王国のこの福音を説く任務に従うことだけに注意を向けなさい。私が地球で父の意志を為したように、君は、神から委任された仕

事を実現させるであろう。覚えていなさい、ユダヤ人と非ユダヤ人の双方は、君の同胞である。天の王国の福音の救済の真実を宣言するとき、誰をも恐れるでない。そして、私が行くところに、君はやがて来るであろう。」

192:2.13 (2049.4) それから、あるじは、アルフェウスの双子ジェームスとユダと歩いて話した。かれは、両者に、「ジェームス、ユダ、私を信じるか。」と尋ねた。双方が、「はい、あるじさま、信じます。」と答えると、あるじは言った。「私は、まもなく君達を残して行く。生身の私は、すでに君達を残して行ったことが君達には分かっている。私は、父の元に行く前の短い間だけこの姿でいる。君達は、私を信じている—君達は、私の使徒であり、つねに使徒であるだろう。私が去るとき、また君達が私と暮らすために来る前に、おそらく君達の以前の仕事に戻ったあと、私との付き合いをずっと信じて覚えていなさい。外へ働きかける仕事における変化が、君達の忠誠に影響を及ぼすようなことを許してはいけない。地球での君達の終わりまで神に対する信仰をもちなさい。君達が信仰する神の息子であるとき、領域のすべての清廉な働きは、神聖であるということを決して忘れてはい

けない。神の息子がすることは何も普通ではありえない。だから、今後ずっと神のために働いているように仕事をしなさい。そして君達がこの世で終わるとき、私には、君達が私のために同様に働く他の、しかもより良い世界がある。そしてこの仕事のすべてにおいて、この世界と他の世界において、私は、君達と共に働くのであり、私の精霊は君達の中に住むのである。」

192:2.14 (2049.5) イエスがアルフェウスの双子との会話から戻ったのは、ほとんど10時であった。使徒達を後にするに当たり「では、叙階式をした山上で明日正午に君達全員に会うまで。」と言った。かれは、このように話すと、彼らの視覚から消え去った。

3. 聖職受任の山上にて

192:3.1 (2050.1) 4月22日、土曜日正午、11人の使徒は、申し合わせによりカペルナム近くの丘の上に集合し、そしてイエスが、彼らの間に現れた。この会合は、あるじが、使徒として、また地球の父の王国の大使として彼らを俗世から引き離したまさにその山であった。そして、、あるじの14度目のモロンチア顕現であった。

192:3.2 (2050.2) このとき、11人の使徒は、あるじの周りに輪になって跪き、あるじの訓令の繰り返しを聞き、王国の特別な仕事のために初めて引き離された時のように、聖職受任式の場面の再現を見た。あるじの祈りを除く、このすべては、彼らにとり父の奉仕への以前の奉納の記憶としてあった。あるじ—モロンチアのイエス—は、そのとき祈り、それは、使徒が、以前に一度も聞いたことのないような威厳の語調と力の言葉であった。あるじは、そのとき自身の宇宙の中にあり、すべての力と権威をその手に与えられた者として宇宙の支配者達と話した。そして、11人のこれらの男性は、大使職の先の盟約に対するモロンチアの再奉納であるこの経験を決して忘れなかった。あるじは、大使達とちょうど１時間この山で過ごした。そして、慈愛深い送れを告げると、かれは、皆の視界から消え去った。

192:3.3 (2050.3) そして、まる１週間、誰もイエスを見なかった。あるじが父のところに行ってしまったかどうかを知らずに、使徒は、何をしたらよいのか全く分からなかった。かれらは、覚束ないこの状態で、ベスサイダに滞在した。あるじが自分達を訪問し、また自分達も会う機会

を逃してはいけないと釣りに行くのを恐れた。この週ずっと、イエスは、地球のモロンチア生物とこの世界で自らが経験していたモロンチア変遷の事柄に忙しくしていた。

4. 湖畔の集会

192:4.1 (2050.4) イエス出現の知らせは、ガリラヤ中に広まっており、あるじの復活についての問い合わせや、噂されているこれらの出現についての真実を探り当てるためにゼベダイオスの家に到着する信者の数は、毎日増え続けていた。ペトロスは、この週の初め、次の安息日の午後3時に海辺で公開の会合がもたれるという知らせを送った。

192:4.2 (2050.5) 従って4月29日、土曜日、3時にカペルナム近郊からの500人以上の信者が、ペトロスの復活以来初めての一般のための説教を聞くためにベスサイダに集まった。この使徒は最良の状態にあり、その興味をそそる教話の終了後、聴衆のわずかな者しか、あるじの復活を疑わなかった。

192:4.3 (2050.6) ペトロスは、「我々は、ナザレのイエスが死んでいないことを断言する。墓から甦ったと宣言する。我々は、彼に会って話したと宣言する。」と言って説教を終えた。彼が、ちょうど信仰のこの宣言をし終えたとき、彼の側に、これらのすべての人々が見えるところに、モロンチア姿のあるじが現れ、馴染みのある口調で、「君達に平和あれ、私の平和を君達に残す。」と言った。このように現れそのように話すと、かれは、皆の視覚から消え去った。これは、復活したイエスの15度目のモロンチア顕現であった。

192:4.4 (2051.1) 聖職受任の山でのあるじとの談合の間に、使徒達は、11人に言われたあることのために、あるじが、やがてガリラヤの信者集団の前に公然の出現をするであろうと、そしてそうした後、自分達はエルサレムに戻ることになっていたという印象を受けた。従って、翌日早々に、４月30日日曜日に、11人は、ベスサイダからエルサレムへ向かった。ヨルダンへの途中、かれらは、相当の教えと説教をしたので、５月３日水曜日の遅くまでエルサレムのマルコス邸には到着しなかった。

192:4.5 (2051.2) これはヨハネ・マルコスにとり悲しい帰省であった。家に着くわずか数時間前、父エーリージャ・マルコスは、突然脳溢血で死亡した。死者復活の確実性の考えが、悲しみの使徒達の慰めに大いに役立ちはしたものの、同時に、かれらは、大問題と失望時でさえ信頼できる支持者でありつづけた良い友人の損失を本当に悲しんだ。ヨハネ・マルコスは、できることはすべてして母を慰め、母の代弁をして、母の家で自由にするように使徒を誘った。11人は、五旬節の日の後までこの上階の部屋を自分達の本部にした。

192:4.6 (2051.3) 使徒達は、ユダヤ当局に見られないようにわざわざ日暮れ以降にエルサレムに入った。エーリージャ・マルコスの葬儀に関しても公然とは現れなかった。次の日ずっと、かれらは、出来事の多いこの上の部屋に静かに引きこもっていた。

192:4.7 (2051.4) 木曜日の夜、使徒は、この上の部屋で素晴らしい会合を催し、トーマス、シーモン・ゼローテース、アルフェウスの双子を除く全員が、復活した主人の新しい福音について公開の説教に旅立つと誓約した。すでに、

王国の福音—神との息子性、そして人との兄弟愛—を変える第一歩、イエス復活の宣言へが始まっていた。ナサナエルは、自分達の公開の知らせの重荷のこの変更に反対したが、ペトロスの雄弁さに抵抗できなかったし、弟子達、特に女性信者の熱意に打ち勝つことができなかった。

192:4.8 (2051.5) したがって、ペトロスの活発な指揮の下に、またあるじが父の元に昇る前に、彼の悪意のない代表者達は、イエスの宗教をイエスに関する新しく、かつ変更された宗教の形に徐々に、しかも確かで巧妙な過程で開始した。

論文 193
最後の出現と上昇

193:0.1 (2052.1) イエスの16度目のモロンチア顕現は、５月５日金曜日、ニコーデモスの中庭で、夜９時頃に起きた。この夜エルサレムの信者は、復活以来初めての集まりを試みた。この時ここに集合したのは、多くのギリシア人を含む11人の使徒、女性団体とその仲間、それに、あるじのおよそ50人の他の主な弟子達であった。この信者の一行は、突然モロンチアのあるじが、全員が見えるところ

に現れてすぐに指示を与え始めたときから遡って半時間以上も非公式に訪問していたのであった。イエスは言った。

193:0.2 (2052.2) 「君達に平和あれ。これは信者の最も代表的な集団—使徒と弟子、男女双方—肉体からの私の解放の時以来、私が姿を見せてきた集団である。君達の間での私の滞在が、終わらなければならないと予め言ったことを君達が目撃することを、私は、いま君達に促す。私は、やがて父のところに戻らなければならないとあなたに言った。そして、祭司長とユダヤの支配者が、私を殺すためにいかにように引き渡そうとするかを、そして私が、墓から甦るということを、私は君達にはっきりと言った。では、それが起きたとき、なぜそれほどまでにこの全てに混乱させられるようなことになるのか。また、私が3日目に墓から甦ったとき、なぜそのように驚いたのか。君達は、その意味を理解せず私の言葉を聞いたので、私を信じられなかったのである。

193:0.3 (2052.3) 「そして、いま君達は、心での意味の理解に失敗する傍ら、心での私の教えを聞く誤りを繰り返さない

ように私の言葉を注意して聞かなければならない。私は、君達の1人としての私の滞在の最初から、1つの目的は、地球の子等に天の私の父を明らかにすることであることを君達に教えた。私は、君達が神を知る経歴を経験するかもしれない神を顕示する贈与の生活をしてきた。私は、神が、天の君達の父であると明らかにしてきた。私は、君達が、地球の神の息子であると明らかにしてきた。神が君達を、その息子を愛するのは、事実である。私の言葉への信仰により、この事実は、君達の心で永遠の、そして生きる真実になる。生きた信仰によりこの上なく神を意識するようになると、そのとき君達は、宇宙の中の宇宙を昇り、そして、楽園で父なる神を探す経験を達成する子としての光と命の、永遠の命さえの精霊の生まれである。

193:0.4 (2052.4) 「人間の間での君達の任務は、王国の福音—神の父性の現実と人の子息性の真実を宣言することであるということをいつでも心得ておくように諭す。救いの福音の一部だけではなく、朗報全体の真実を宣言しなさい。君達の伝えるべき主旨は、私の復活経験でにより変わってはいない。信仰による神との子息性は、まだ、王

国の福音の救いの真実である。君達は、神の愛と人の奉仕を説きに出掛けるところである。世界が最も知る必要のあることは次の通りである。人は、神の息子であり、信仰を通じて実際に認識することができ、高尚にするこの真実を日々経験できる。私の贈与は、すべての人は神の子供であることをすべての人が知ることを助けるはずであるが、彼らが、直に永遠の父の生きている精霊の息子であるという救いの真実を信仰して理解しなければ、そのような知識は十分ではない。王国の福音は、父の愛と地球のその子等の奉仕に関係がある。

193:0.5 (2053.1) 「君達の間ここで、君達は、私が甦ったという知識を共有するが、それは不思議ではない。私には自分の命を捨て、再びそれを拾い上げる力がある。父は、楽園の息子達にそのような力を与える。私がヨセフの新しい墓を去ったすぐ後に、君達の心は、過去の死者達が、永遠の上昇を始めたという知識にむしろそそられるはずである。ちょうど私が、君達を愛し、君達に仕えることで神の顕示をするようになったように、私は、いかに君達が、仲間に神の顕示をするかを示すために肉体での人生を送った。私は、君達と他の全ての人が、本当に神の

息子であることを知ることができるように、人の息子として君達の間で生きてきた。だから、天の王国のこの福音をすべての人に説くために、すぐに全世界へ出掛けなさい。私があなたを愛したように、すべての人を愛しなさい。私が君達に仕えたように君達の仲間の必滅者に仕えなさい。君達は自由に受け入れてきた。自由に与えなさい。私が父の元に行く間、そして真実の聖霊を君達に送るまで、ここエルサレムに留まりなさい。あの方は、君達を拡大された真実に導き、私は、君達と一緒に全世界に行く。私はつねに君達と共におり、私の平和を君達に残す。」

193:0.6 (2053.2) あるじは、皆に話し終えると、その視界から消え失せた。これらの信者が分散したのは、夜明け近くであった。かれらは、本気であるじの訓戒を討議し、自分達に起こったすべてをじっくり考えて夜通しともにいた。ジェームス・ゼベダイオスと他の使徒も、ガリラヤでのモロンチアのあるじとの経験について信者達に話し、またどのように自分達の前に3回姿を見せたかを詳しく語った。

1. シハーでの出現

193:1.1 (2053.3) 5月13日、安息日の午後4時頃、あるじは、シハーのヤコブの井戸近くでナルダとサマリア人のおよそ75人の信者の前に現れた。信者達は、この場所、イエスが命の水に関してナルダに話した場所の近くで会うのが習慣であった。この日、彼らが、報告された復活の議論をちょうど終えたとき、イエスは、彼らの前に突然現れて言った。

193:1.2 (2053.4) 「君達に平和あれ。君達は、私が復活であり生命であることを知って歓喜しているが、これは、君達がまず永遠の精霊の生まれであり、その結果、信仰により永遠の命の贈り物を所有するようにならない限り、何の役にもならない。父に対する信仰の息子であるならば、君達は、決して死なない。君達は滅ばない。王国の福音は、すべての人が神の息子であることを君達に教えてきた。地球の我が子に対する天の父の愛に関するこの朗報は、全世界へ届けられなければならない。君達が、ゲリージームでもエルサレムでもないところで、精霊的に、本当に、君達のいるところで、君達のあるがままに、神を崇拝するときがやって来た。君達の魂を救うのは、君達の信仰である。救済は、息子であると信じる者すべて

への神の贈り物である。しかし、騙されてはいけない。救済は、神の無料の贈り物であり、信仰によってそれを受け入れるすべての者に贈与はされるが、それが肉体で生きるように、この精霊の生活の実を結ぶ経験は、続くのである。神の父性の教義の受け入れは、君達もまた、人の兄弟愛の真実を自由に受け入れることを意味する。人が君の兄弟であるならば、かれは、君の隣人以上であり、それは、父が、その人を自分同様に愛することを君に求めているということである。君は、自身の家族であるので、家族の愛情をもって愛するだけでなく、自分自身に仕えるように兄弟に仕えもするであろう。私の同胞であり、私にこのようにして愛され仕えてもらったのであるから、君は、このように兄弟を愛しており、仕えるであろう。だから、行きなさい。あらゆる民族、種族、国家のすべての被創造者にこの朗報を伝えに全世界へと。私の精霊が君の先を行き、私は、君達共にいつもいる。」

193:1.3 (2054.1) これらのサマリア人は、あるじのこの出現に大いに驚き、近くの町や村へと急いだ。そこで、イエスを見たと、イエスが自分達に話したという知らせを広く発

表した。そして、これは、あるじの17度目のモロンチア出現であった。

2. フェニキア人への出現

193:2.1 (2054.2) あるじの18回目のモロンチア出現は、ツロでの５月16日、火曜日の晩、９時少し前であった。またもや信者の会合の終わりに皆が解散しようとしていたときに現れて、言った。

193:2.2 (2054.3) 「君達に平和あれ。君達は、それによって君達とその同胞もまた必滅の死を乗り切ることが分かったので、人の息子が甦ったということを知って歓喜している。しかし、そのような生存は、君達が前もって真実探求の、そして神探索の精霊で生まれてくることに依存している。命のパンと命の水は、真実への飢えと正義への渇き—神への—を切望する人々だけに与えられる。死者が復活するという事実は、王国の福音ではない。これらの偉大な真実と宇宙の事実のすべては、朗報を信じる結果の一部であり、信仰により、事実の中に、永遠の神の永続する息子になる者達のその後の経験において、そして真実の中に迎え入れられるというこの福音にすべて

が関連している。私の父は、すべての人に子息性のこの救済を宣言するために私を世に送り出された。したがって、私は、君達を子息性のこの救済の宣言のために広く送り出す。救済は、神の無料の贈り物であるが、精霊の生まれの者は、すぐに、仲間の被創造者への愛ある奉仕の際に精霊の果実を示し始めるであろう。そして、精霊生まれの、神を知る必滅者の人生でもたらされる神の精霊の果実は次の通りである。愛ある奉仕、寡欲な献身、勇敢な忠誠心、誠実な公正さ、啓発された清廉さ、不滅の望み、打ち明けることのできる信頼性、慈悲深い活動、変わることのない長所、快く許す寛容さ、永続する平和。公然たる信者が、その一生で神霊のこれらの実を結ばないならば、彼らは死んでいる。真実の精霊は、彼等の内にはいない。かれらは、生きている葡萄の木の無益な枝であり、やがて取り除かれるであろう。私の父は、たくさんの精霊の実をつけることを信仰の子に要求する。したがって、君達が実り多くなければ、かれは、君達の根の周りを掘り、また無駄な枝を切り取るであろう。神の王国で天に向かって前進するとき、君達は、ますます、精霊の実を与えなければならない。君は、子供

として王国に入るかもしれないが、父は、君が、神の恵みにより、精霊的な成人期の完全な背丈に成長することを要求している。そして、君達が、この福音に関する朗報を広く万国に告げに行くとき、私は、あなたの前を行くつもりである。そして、私の真実の精霊は、君達の心の中に留まるであろう。私の平和を君達に残す。」

193:2.3 (2054.4) そこで、あるじは、彼らの視界から姿を消した。翌日、この話を携える者達は、ツロからシドーンへと、そしてアンチオケとダマスカスにさえも出かけて行った。肉体を持つとき、イエスは、これらの信者と共にいて、そして、イエスがそれらの者に教え始めたとき、彼等は、イエスを見分けるのが速かった。彼の友人達は、モロンチアの姿を見せられたとき、その姿に容易に気づくことができなかったが、これらの者は、イエスに話し掛けられると、すぐに彼だと見分けがついた。

3. エルサレムでの最後の出現

193:3.1 (2055.1) 5月18日、木曜日の朝早々、イエスは、モロンチアの人格としての地球での最後の出現をした。11人の

使徒が、マリア・マルコスの家の上階の部屋で朝食の席につこうとしていると、イエスが現れて言った。

193:3.2 (2055.2) 「君達に平和あれ。私が父の元に昇るまで、すべての肉体にすぐに注がれる者、そして君に天からの力を付与する真実の聖霊を君に送るまでさえも、私は、君達にここエルサレムに留まるように頼んだことであった。」シーモン・ゼローテースは、イエスを遮り、「あるじさま、次に、あなたは王国を回復され、私達は、神の栄光が地球に示されるのを見るのですか。」と尋ねた。イエスは、シーモンの質問を聞くと答えた。「シーモン、君は、まだユダヤ人の救世主と物質的王国に関する古い考えに執着している。しかし、精霊が君の上に下りた後、君は、精霊的な力を受け、やがて、王国のこの福音を説きに全世界に赴くであろう。父が私をこの世界に送られたように、私も君達を送り出す。そして、私は、君達が互いに愛し信じ合うことを願う。その愛は冷め、君達を信じることを拒否したので、ユダは、もう君達、忠誠な同胞とはともにいない。君は『人が、一人でいることは良くない。自分一人で生きているものは誰もない。』と聖書に書かれているのを読んではいないの

か。また、『友を得ようとする者は、自らが打ち解けている様を示さなければならない。』ともある。私は、孤独にならないように、また孤立から悪戯や災いに陥らないように、君達を２人ずつ教えに送り出しさえしなかったか。君達もまた、私が、肉体でいたとき、私自身長い間一人きりにならないようにしていたことをよく知っている。我々の付き合いのそもそもの初めから、私は、いつも２人か３人を絶えず側に置いていたし、私が父と親交するときでさえ、非常に近くに置いていた。だから、信用しなさい、互いを信頼しなさい。そして、私は、この日、この世界に君達を置き去りにして行くのであるから、これは一層必要である。時は来た、私は、父の元に行くところである。」

193:3.3 (2055.3) 話し終えると、自分と一緒に来るように全員に合図をし、オリーヴ山へと誘い、そこで、ユランチアを離れるに先だち別れを告げた。これは、オリーヴへの厳粛な道行きであった。上階の部屋を出た時からイエスがオリーヴ山で皆と立ち止まるまで、誰一人として口を開く者はいなかった。

4. ユダの破滅の原因

193:4.1 (2055.4) かれは、社会からの、また、同胞からの隔離という危険性に対する厳粛な警告としてユダの喪失に言及し、裏切りの仲間の悲惨な運命を示すことが、使徒へのあるじの送別の言葉の第１部であった。あるじの所見とその後に続く何世紀もの蓄積された啓発に照らし合わせてユダの失墜の原因を簡潔に見直すことは、この時代と未来の信者にとって助けとなるかもしれない。

193:4.2 (2055.5) この悲劇を振り返るとき、我々は、ユダが、著しく孤立した人格、通常の社会的な接触から閉じ込もり、締め出した人格であるが故に失敗した、と考える。かれは、使徒に心を許したり、または自由に親しむことを強情に拒んだ。しかし、ユダの孤立した人格の型であることそれ自体は、愛を拡大し、精霊的な恩恵の中での成長に失敗しなければ、ユダにそれほどまでの悪害をもたらしはしなかったであろう。そしてこのことから、まるで悪い問題をさらに悪化させるかのように、かれは、執拗に悪意を抱いたり、復讐としてそのような心理的な敵を育くんだり、全ての失望に対し、しきりに誰かに「仕返しする」ことを総括的に導き出した。

193:4.3 (2056.1) 個人の特異性と精神的な傾向のこの不幸な組み合わせは、愛、信仰、信頼によってこれらの悪を抑圧し損ねた善意の男性を滅ぼすことを企んだ。ユダが方向を誤る必要がなかったことは、トーマスとナサナエルの例によく立証されている。両者は、この同じ種類の個人の傾向の過剰発達と猜疑に苦しめられた。アンドレアスとマタイオスさえ、この方向に多々傾いていた。しかし、他のすべての男性は、時の経過と共にイエスと仲間の使徒を、より以上に、より愛するようになった。かれらは、恩恵の中で、真実の知識の中で成長した。かれらは、ますます同胞を信じるようになり、徐々に仲間を信用する能力を高めた。ユダは、同胞を信用することを頑固に拒んだ。ユダは、感情の葛藤の蓄積により自己表現における安堵を求める必要に駆り立てられるとき、12人の献納された地球の大使の１人であった天の王国の精霊的な現実の福祉と進歩に無関心であったり、実際は敵対的である精霊的でない親類や偶然に出会うそれらの知人からの助言を求めたり賢明でない慰めをいつも受けた。

193:4.4 (2056.2) ユダは、個人の性向と性格の弱さからくる次の要素のために地球での彼の苦闘に敗れた。

193:4.5 (2056.3) 1. かれは、孤立型の人間であった。非常に個人主義であり、凝り固まった「閉じ込もり」と社交的でない種類の人になることを選んだ。

193:4.6 (2056.4) 2. 子供のとき、人生は彼にとりあまりにも妨害がなさ過ぎた。かれは、妨害にひどく憤慨した。いつも勝つことを期待した。負けっぷりが悪かった。

193:4.7 (2056.5) 3. かれは、失望遭遇に対する哲学的な手法を決して習得しなかった。かれは、人間の存在の通常の、在り来たりの特徴として受け入れる代わりに、自分のすべての個人的な困難と失望に、特に誰かを、または集団としての仲間をかならず非難した。

193:4.8 (2056.6) 4. かれは、遺恨を抱く傾向にあった。いつも報復の考えを抱いた。

193:4.9 (2056.7) 5. かれは、率直に事実に直面することを好まなかった。人生状況に向かう態度が不正直であった。

193:4.10 (2056.8) 6. かれは、個人的な問題を手近の仲間と協議することを嫌った。かれは、自分の難局について本当の友人や本当に愛してくれる人々と話し合うことを拒否し

た。あるじとの交わりの歳月の間、かれは、純粋に個人的な問題で一度もあるじのところに行かなかった。

193:4.11 (2056.9) 7. かれは、高潔な生活の本当の報酬が、結局は精霊的な恩賞であることを決して学ばなかった。恩賞は、肉体におけるこの短い人生の間に必ずしも分配されるわけではない。

193:4.12 (2056.10) 人格の永続的な孤立の結果、悲嘆は増え、悲しみは増加し、不安は増大し、絶望は、ほとんど耐久力を超えて深まった。

193:4.13 (2057.1) この自己中心的かつ極端に個人主義の使徒は、多くの心的、感情的、精霊的な苦労をしたが、主な困難は、次の通りであった。人格的に、かれは、孤立していた。心的には、疑い深く復讐的であった。気質的には、無愛想で執念深かった。感情的には、愛がなく、容赦がなかった。社会的には、委ねることがなく、ほとんど打ち解けなかった。精神的には、横柄で利己的に野心満々になった。人生においては、自分を愛する者達を無視し、そして、死に際しては孤独であった。

193:4.14 (2057.2) そこで、これらは、全体的に見て、なぜ善意の、それでなくとも、以前の誠実なイエスの信者が、変容する人格との数年間の親密な交流後にさえ、仲間を見捨て、神聖な根拠を否認し、神聖な職業を放棄して自分の神のあるじを裏切ったかを説明する心の要因と悪の影響である。

5. あるじの上昇

193:5.1 (2057.3) イエスが、静かで幾らか当惑した11人の使徒とオリーヴ山の西の斜面に到着したのは、５月18日、この木曜日の朝、７時半過ぎ頃であった。山への約2/3の道のりのこの位置からは、向こうにはエルサレムを、下方にはゲッセマネを見ることができた。イエスは、そのときユランチアを去る前に、使徒への最後の別れを告げる準備をした。彼がそこで皆の前に立っていると、かれらは、指示をされることなく円形になって跪いた。そこで、あるじが言った。

193:5.2 (2057.4) 「私は、君達が天からの力を授けられるまでエルサレムにいるように命じた。私は、いま君達を後にするところである。私は、父のところへ昇って行くところ

であり、すぐに、本当にすぐに、我々は、真実の精霊を私が滞在したこの世界に送るのである。そして、真実の精霊が来たとき、君達は、まずはエルサレムで、そして世界のもっとも遠い地域へと王国の福音の新しい宣言を始めるであろう。私が君達を愛した愛で人を愛し、ちょうど私が、君に仕えたように、君達の仲間である人間に仕えなさい。人生の精霊の果実によって、人が神の息子であるという真実、そして、すべての人が同胞であるという真実を信じることを魂に押し進めなさい。私が教えた全てと君達の中で送った生活を覚えていなさい。私の愛は、君達を囲み、私の精霊は君達と共に住み、私の平和は君に留まるのである。では。」

193:5.3 (2057.5) モロンチアのあるじは、このように話すと、皆の視界から消え去った。イエスのこのいわゆる上昇は、ユランチアでのモロンチア経歴の40日間の人間の視覚からのイエスの他の失踪とは、決して異なってはいなかった。

193:5.4 (2057.6) あるじは、ジェルーセム経由でエデンチアに行き、そこではいと嵩きものが、楽園の息子の観察の下

に、モロンチア状態からナザレのイエスを解放し、上昇の精霊回路を経て、楽園の子息性とサルヴィントンの最高の主権の状態へと彼を返した。

193:5.5 (2057.7) モロンチアのイエスが、父の右手への上昇開始のために、そこでネバドンの宇宙の完了された主権の正式な確認を受けるために11人の使徒の観察から姿を消したのは、この朝の７時45分頃であった。

6. ペトロス会合を召集する

193:6.1 (2057.8) ヨハネ・マルコスと他の者は、ペトロスの支持を行動に移し、マリア・マルコスの家に主な弟子を召集するために出掛けた。エルサレムに住むイエスの120人の傑出の弟子が、10時30分までには、あるじの送別の言葉の報告を聞き、その上昇を知るために集まっていた。この一行の中には、イエスの母マリアがいた。彼女は、使徒達が、最近のガリラヤ滞在から戻るとき、ヨハネ・ゼベダイオスとエルサレムに戻っていた。五旬節の直後、彼女はベスサイダのサロメの家に帰った。イエスの弟ジェームスもこの会合、イエスの惑星経歴の終了後に

召集されたあるじの弟子達の最初の会議に出席していた。

193:6.2 (2058.1) シーモン・ペトロスは、仲間の使徒の代弁を引き受け、あるじとの11人の最後の会合の感動的な報告をし、あるじの最後の送別とその上昇の失踪を最も感動的に描いた。それは、この世界でかつてなかったような会合であった。会合でのこの部分は、１時間足らず続いた。そして、ペトロスは、彼らが、ユダ・イスカリオテの後継者を選ぶと決め、この職務に推薦されたマタイアスとユースツスの２人のどちらにするかを決めるために、使徒達に休憩が与えられると説明した。

193:6.3 (2058.2) それから、11人の使徒は、階下に行き、そこでユダの代わりに仕える一人の使徒にいずれがなるべきかを決定するために籤を引くことに同意した。籤は、マタイアスに当たり、かれは新しい使徒であると宣言された。かれは、正当に職務に就任し会計係に使命された。しかし、マタイアスには、使徒のその後の活動において為すべきことがあまりなかった。

193:6.4 (2058.3) 五旬節直後、双子は、ガリラヤの自宅に戻った。シーモン・ゼローテースは、福音を説きに出て行く前に、しばらく退いていた。トーマスは、短期間煩悶し、それから教えを再開した。ナサナエルは、次第に王国の初期の福音を宣言する代りにイエスについて説教するというペトロスと言動を異にした。この不一致は、翌月の半ばまでには富に激しくなり、ナサナエルは撤退し、アブネーとラーザロスを訪ねるためにフィラデルフィアに行った。かれは、そこに１年以上留まった後、自分がそれをの理解のままに福音を説きにメソポタミアの向こうの土地へと進んだ。

193:6.5 (2058.4) これは、本来の12人の使徒のうち６人、ペトロス、アンドレアス、ジェームス、ヨハネ、フィリッポス、マタイオスだけがエルサレムでの福音の早期の宣言舞台での立役者となった。

193:6.6 (2058.5) 使徒達は、ちょうど正午頃に上階の部屋の同胞のところに戻り、マタイアスが新使徒として選ばれたと発表した。そして、ペトロスは、祈り、あるじが送ると

約束した精霊の贈り物を受ける用意ができるための祈りを信者全員に呼びかけた。

論文 194
真実の精霊の贈与

194:0.1 (2059.1) 1時頃、120人の信者が祈りに従事しているとき、彼らは全員、部屋での奇妙な存在に気づき始めた。同時に、これらの弟子は皆、新しく深遠な精霊的な喜び、安心感、確信の感覚を意識するようになった。精霊的な強さのこの新しい意識のあとに、王国の福音とイエスが甦ったという朗報を公に宣言するために出かけて行くという強い衝動が即座に起きた。

194:0.2 (2059.2) ペトロスは、これが、あるじが約束した真実の精霊の到来に違いないと立ち立ち上がって言明し、全員が寺院に行き、自分達の手に委ねられた朗報の公布を始めることを提案した。そこで、かれらは、ペトロスが勧めた通りにした。

194:0.3 (2059.3) これらの者は、説くべき福音は、神の父性と人の子息性であると訓練され、教えられてきたが、精霊的な恍惚感と個人の勝利感のちょうどこの瞬間に、最良の

告知、つまり最高の知らせについて考え得ることが、あるじ復活の事実であった。そこでかれらは、天からの力を授けられ、人々に朗報を—イエスを通しての救済さえ—説いて行ったが、かれらは、福音それ自体の代わりに福音に関連する事実のいくつかを用いる意図しない誤りに躓いた。ペトロスは、無意識にこの誤りの口火を切り、他のもの達は、ペトロスの後に続き、新たな朗報の解釈から新宗教を作り出したパウーロスへと続いた。

194:0.4 (2059.4) 王国の福音は、人の子息性-兄弟愛の結果として生じる真実と結びつく神の父性の事実である。その日から発展してきたキリスト教は、復活し、栄光に輝くキリストとの信者の親交の経験に関連した主イエス・キリストの父としての神の事実である。

194:0.5 (2059.5) 精霊を注ぎ込まれたこれらの者が、あるじを滅ぼし、その教えの感化を絶とうとした力に対する勝利の気持ちを表明するこの機会に飛びついたことは奇妙ではない。このような時、イエスとの個人的な交わりを思い出したり、またあるじがまだ生きていたということ、自分達の友情が終わっていなかったっということ、まさに

約束したように本当に精霊が自分達にやって来たといった確信に興奮するのは簡単であった。

194:0.6 (2059.6) これらの信者は、もう一つの世界、喜び、力、栄光の新しい生活に突然移されていると感じた。あるじは、王国は力と共に来ると教えており、そして、そのうちの何人かは、あるじが意味したことを理解し始めていると思った。

194:0.7 (2059.7) そして、このすべてを考慮に入れるとき、これらの者が、いかにして神の父性と人の兄弟愛のそれ以前の知らせの代わりに、イエスに関する新しい福音を説くようになったかを理解することは難しくない。

1. 五旬節の説教

194:1.1 (2060.1) 使徒は、40日間潜んでいた。この日はたまたまユダヤの五旬節の祭礼であり、エルサレムには世界の各所から何千人もの訪問者がいた。大勢がこの祝祭のために到着したが、大多数は、過ぎ越し以来都に滞在していた。さて、これらの怯えた使徒は、数週間の引き込もりから大胆にも寺院に姿を現わし、甦った救世主の新しい知らせをそこで説き始めた。すべての弟子は、洞察と力

の何らかの新しい精霊的な付与を受けたことを同じように意識していた。

194:1.2 (2060.2) あるじがこの寺院で最後に教えたまさしくその場所で、ペトロスが立ち上がったのは、２時頃であり、2,000人以上の魂の獲得にいたったその熱の込もった訴えを開始した。あるじは行ってしまったたが、使徒達は、人々が、あるじに関するこの話にかなりの力を感じたと突如として気づいた。イエスへの自分達のかつての献身を証明し、同時に人々にそれほどまでにあるじを信じることを抑制したその公布へと、さらに彼らが導かれたことは不思議ではなかった。6人の使徒が、この会合に参加した。アンドレアス、ジェームス、ヨハネ、フィリッポス、マタイオス。かれらは、1時間半以上話し、その上ギリシア語、ヘブライ語、アラメーア語で演説し、会えば言葉を交わす程度の他の言語でさえ述べた。

194:1.3 (2060.3) ユダヤの指導者達は、使徒の大胆さに驚いたが、使徒の話を信じた者のその数の多さの理由から彼らに危害を加えることを恐れた。

194:1.4 (2060.4) 4時半までには、2,000人以上の新しい信者が、シロアーの池まで使徒の後を追った。そこで、ペトロス、アンドレアス、ジェームス、ヨハネが、あるじの名においてこれらの者に洗礼を施した。彼らがこの群衆の洗礼を終わったときには、暗くなっていた。

194:1.5 (2060.5) 五旬節は、洗礼の重大な祭、モーシェの掟を守る義務のない改宗者、すなわち、ヤハウェに仕えることを望むそれらの非ユダヤ人の交流を深めるための時であった。この日に洗礼を受けることは、したがって、ユダヤ人と信仰を有する非ユダヤ人の双方にとり、なお一層容易なことであった。こうすることにより、かれらは、ユダヤの信仰から決して自分たちを分離してはいなかった。このしばらく後でさえ、イエスの信者は、ユダヤ教の中の1宗派であった。彼らは全員、使徒を含み、まだユダヤの儀式体系の要件に忠実であった。

2. 五旬節の意味

194:2.1 (2060.6) イエスは地球に住み、悪魔の子供であるという迷信から人を解放するという福音を教え、自分を神の信仰の息子の尊厳へと高めた。イエスがそれを説き、その

時代に真実に生きた通りのイエスの申し送りは、その声明のその時代の人の精霊的な困難のための有効な解決策であった。そして、今や本人はこの世を去り、かれは、代わりに真実の精霊を送り、真実の精霊は、地上に現れる必滅者のあらゆる新しい集団が、人の新たで様々な精霊的な困難に対して有効な溶媒であると証明するであろうちょうどそのような個人の啓蒙と集団的な指導である福音の新たで、時代に相応しい解釈が得られように新世代ごとに、人の中に生きて、イエスの申し送りを言い換えるように考案されている。

194:2.2 (2060.7) もちろん、この精霊の最初の任務は、真実を促進し、個人的な立場でとらえることである、というのも、これが、人間解放の最高の形を構成する真実の理解であるので。次にこの精霊の目的は、信者の孤児の身の上という気持ちを打ち砕くことである。イエスは人の間にいたことがあるので、すべての信者は、真実の精霊が人の心に住まなかったとしたら寂しさを経験するであろう。

194:2.3 (2061.1) 息子の精霊のこの贈与は、すべての人類への父の精霊(調整者)の普遍的なその後の贈与のためにすべての通常の人の心を効果的に準備させた。ある意味では、この真実の精霊は、宇宙なる父と創造者たる息子の両方の精霊である。

194:2.4 (2061.2) 注入された真実の精霊を強く知的に意識するようになることを期待する誤りを犯してはいけない。精霊は、決して自分自身についての意識を創るのではなく、マイケル、息子についての意識だけを創るのである。イエスは、最初から、精霊が精霊自身について話さないことを教えた。したがって、真実の精霊との人の親交の証しは、この精霊の意識にあるのではなく、むしろマイケルとの人の高められた親交の経験にある。

194:2.5 (2061.3) また精霊は、人が、地球でのあるじの人生を照らしたり、再解釈をすると同時に、あるじの言葉を思い出し理解する手助けのためにやって来た。

194:2.6 (2061.4) 次に、真実の精霊は、信者が、イエスの教えと彼が肉体で送ったその人生、そして神の精霊に満たされた息子達の通過していく各世代の個々の信者の間に、い

ま新たに再び送る人生の現実を証言するための助力にやって来た。

194:2.7 (2061.5) このように、真実の精霊が、すべての真実へと、神との永遠の、そして上昇する子息性の現実の生きている、そして成長している精霊的な意識の経験に関する拡大的な知識へと、すべての信者を真に導くために来ることが明らかになる。

194:2.8 (2061.6) イエスは、誰のためにも文字通りに後に続く企てのための模範ではなく、父の意志に従う者の顕示である生活を送った。十字架上での死とその後の復活を含む肉体におけるこの人生は、やがて、邪な1団から—不機嫌な神の非難から—このようにして買い戻すために支払われる身代金の新しい福音となった。しかしながら、福音は、大いに歪曲されるようにはなったが、イエスに関するこの新しい知らせは、王国の初期の福音に関する基本的な真実と教えの多くを伝えたという事実としてある。そして、遅かれ早かれ、神の父性のこれらの隠された真実と人の兄弟愛は、全人類の文明を効果的に変えるために浮上するであろう。

194:2.9 (2061.7) しかし、知性のこれらの誤りは、信者の精霊的な成長におけるすばらしい進歩を決して妨げなかった。真実の精霊の贈与から1カ月足らずの間に、使徒は、あるじとのほぼ4年間の個人的で、情愛深い交流以上の個々の精霊的な進歩をした。神との子息性に関する救いの福音の真実とのイエスの復活の事実のこの置換も、彼らの教えの急速な普及を何としても妨げなかった。それどころか、イエスの人物と復活についての新しい教えがイエスの意図を影で覆うことは、朗報の説教をとても容易にするかに見えた。

194:2.10 (2061.8) この頃、とても一般的に使用された言葉「精霊の洗礼」は、真実の精霊のこの贈り物の意志的な受領と神を知る魂により以前に経験された精霊的な影響のすべての拡大としてのこの新しい精霊的な力の個人の承認とを意味するにすぎなかった。

194:2.11 (2061.9) 真実の精霊の贈与以来、人は精霊の三重の送りものの教育と指導をまぬかれない。父の霊である思考調整者、息子の霊である真実の精霊、精霊の精霊である聖霊による贈与。

194:2.12 (2062.1) ある意味で、人類は、宇宙の精霊の影響の七重の魅惑を二重に受けている。人間の早期の進化的な民族は、地方宇宙の母なる精霊の7名の補佐の心霊の進歩的な接触がある。人が、知性と精霊的な認識の度合の点で進歩するにつれ、やがてより高い精霊的な7つの影響が、人の上にあり、また、人の間に住むようになる。進歩する世界のこれらの7精霊は次の通りである。

194:2.13 (2062.2) 1. 宇宙なる父からの贈与の精霊—思考調整者

194:2.14 (2062.3) 2. 永遠なる息子の精霊の臨場—宇宙の中の宇宙の精霊の引力とすべての精霊親交の確かな回路

194:2.15 (2062.4) 3. 無限なる精霊の精霊臨場—全創造の普遍的な精霊心、すべての進歩的な有識者の知的な親族的関係の精霊的源

194:2.16 (2062.5) 4. 宇宙なる父と創造者たる息子の精霊—真実の精霊、一般的に宇宙の息子の精霊と見なされる。

194:2.17 (2062.6) 5. 無限なる精霊の精霊と宇宙の母なる精霊—聖霊、一般に宇宙の精霊の精霊と見なされた。

194:2.18 (2062.7) 6. 宇宙の母なる精霊の心霊—地方宇宙の7名の補佐の心霊。

194:2.19 (2062.8) 7. 父、息子、そして精霊の精霊—楽園の思考調整者との精霊生まれの人間の魂の融合後、そしてそれに続く楽園の終局者部隊の神性と栄光の地位到達後のその領域の上向する人間の新しい名の精霊。

194:2.20 (2062.9) 真実の精霊の贈与は、それゆえ、神探索の上昇の支援をするように工夫された精霊の最後の贈与を世界とその民族にもたらした。

3. 五旬節での出来事

194:3.1 (2062.10) 多くの風変わりで奇妙な教えが、五旬節の日の初期の物語と関係するようになった。その後、真実の精霊つまり新しい教師が、人類と住むためにやって来たこの日の出来事は、激しい情緒本位の愚かな発生と混同されるようになった。父と息子のこの注出された精霊の主要な任務は、父の愛と息子の慈悲の真実に関して人に教えることである。これらは、人が、人格のすべての他の神の特徴よりも完全に理解することのできる神性の真実である。真実の精霊は、本来父の精霊の本質と息子の

徳性の顕示に関係がある。創造者たる息子は、肉体で人に神を明らかにした。真実の精霊は、心で人に創造者たる息子を明らかにする。人が、その人生で「精霊の果実」をもたらすとき、かれは、あるじが彼自身の地球での人生で見せた特性を本当に示しているのである。地球滞在の際、イエスは、1つの人格—ナザレのイエス—としてその人生を送った。内在する「新しい教師」の精霊として、あるじは、五旬節以来、再度その生活を真実を教えられたあらゆる信者の経験において送ることができた。

194:3.2 (2062.11) 人間の人生の間に起こる多くのことは、理解し難く、つまり真実が行き渡り、正義が勝利を収める宇宙というものであるという考えに調和させることは難しいのである。中傷、虚言、不正直、不義—罪—が、たびたび横行するようである。信仰は、結局、悪、罪に打ち勝つのか。勝つのである。そして、イエスの生と死は、善の真実と精霊に導かれる被創造者の信仰が、いつも擁護されるという永遠の証しである。かれらは、十字架上のイエスを「神が彼を救いに来るかどうかを見よう」と言って罵った。磔の当日は暗く見えたが、復活の

朝は見事に明るかった。五旬節の日には、さらに明るく、一層喜ばしかった。悲観的な絶望の宗教は、人生の重荷からの解放を得ようとする。それらは、無限のまどろみと休息における消滅を切望する。これらは、原始の恐怖と畏怖の宗教である。イエスの宗教は、奮闘する人間性に宣言する信仰の新しい福音である。この新しい宗教は、信仰、望み、愛に基づいている。

194:3.3 (2063.1) イエスにとっての現世の人生は、最も困難で、容赦のない、痛烈な一撃であった。そして、この男性は、信仰、勇気、および父の意志をする不動の決断をもってこれらの絶望の奉仕に相対した。イエスは、すべての凄まじい現実の人生に遭遇し、それを克服した—死においてさえ。イエスは、人生からの釈放として宗教を用いなかった。イエスの宗教は、次の世界のもう一つの存在の至福の享受のためにこの人生を逃がれようとはしない。イエスの宗教は、人がいま肉体で送る生活を充実し、高めるためにもう一つの精霊的な存在の喜びと平和をもたらす。

194:3.4 (2063.2) 宗教が人々への阿片剤であるならば、それは、イエスの宗教ではない。イエスは、十字架上で死を速める薬剤を飲むことを拒否し、全ての人に注がれたその精霊は、人を上へ導き、前方へ促す力強い世界的な影響である。前向きの精霊的衝動は、この世界に存在する最強の原動力である。真実を学ぶ信者は、地球において進歩的かつ積極的な魂をもつ者である。

194:3.5 (2063.3) イエスの宗教は、五旬節の日に国家の全制限と人種的な足枷を打破した。「主の精霊があるところに自由がある」というのは、とこしえに、本当である。この日に真実の精霊は、あるじからのすべての必滅者への個人の贈り物となった。この精霊は、より効果的に信者に王国の福音を説く資格を与える目的のために注がれたが、かれらは、注がれた精霊の受領の経験を彼らが無意識に定式化した新しい福音の一部と感違いをした。

194:3.6 (2063.4) 真実の精霊が、すべての誠実な信者に授与されたという事実を見過ごしてはいけない。この精霊の贈り物は、使徒だけに来たのではなかった。全世界遍く、すべての正直な者がそうであったように、上の部屋に集ま

った120人の男女全員が、新しい教師を迎えた。この新しい教師は、人類に授けられ、そしてあらゆる魂が、真実への愛と精霊の現実を把握し、理解するための能力に応じて新しい教師を受け入れた。ついに、新の宗教は、司祭の管理と神聖なすべての階級から救われ、人の個々の魂にその真の権限を見い出す。

194:3.7 (2063.5) イエスの宗教は、最高の人格の型を構築し、その人の神聖さを宣言する点において人間の文明の最高度の型を育成する。

194:3.8 (2063.6) 五旬節に真実の精霊の来ることは、急進的でも保守的でもない宗教を可能にした。それは、古いものでもなく新しいものでもない。それは、老人にも若人にも支配されるのでもない。イエスの地球での人生の事実は、時間の錨のための固定点を提供し、一方真実の精霊の贈与は、彼が生きた宗教と宣言した福音の永遠の拡大と無限の成長に備える。この精霊は、すべての真実へと導く。かれは、無限の進歩と神性展開の拡大し、成長し続ける宗教の教師である。この新しい教師は、求める信

者に人の息子の人格と特質にとても神々しく包まれている真実を永久に展開し続けるであろう。

194:3.9 (2064.1)「新しい教師」の贈与に関連する顕現、そしてエルサレムに集う多様な民族や国家の人々による使徒の説教の受け入れは、イエスの宗教の普遍性を示している。王国の福音は、特定の民族、文化、または言語に結びつけられるようにはなってはいなかった。五旬節のこの日は、ユダヤ人の引き継がれたその足枷からイエスの宗教を解放するための精霊の大いなる努力の部隊となった。使徒は、すべての肉体へ注ぐこの実演の後にさえ、最初は転向者達にユダヤ教の必要条件を押しつけようと努めた。パウーロスでさえ、非ユダヤ人をこれらのユダヤ人の習慣に服従させることを拒否したので、かれは、エルサレムの同胞との間で揉めた。何らかの国家の文化に浸透されたり、確立した人種的、社会的、または経済的習慣に関わるという重大な誤りが起こるとき、いかなる啓示宗教も全世界に広がることはできない。

194:3.10 (2064.2) 真実の精霊の贈与は、すべての様式、儀式、神聖な場所、およびその顕現を充分に受けた人々による

特別な行動から独立していた。精霊が上の部屋に集う者達にやって来たとき、皆は、単にそこに座り、ちょうど黙祷に従事していた。精霊は、田舎でも都市同様に授けられた。使徒達は、この精霊を受けるために長年孤独な思索の目的で孤立した場所に行く必要はなかった。五旬節は、永久に、特に良い環境の概念から精霊的な経験についての考えを分離する。

194:3.11 (2064.3) その精霊的な贈与と相まっての五旬節は、永遠に、物理的な力への全ての依存からあるじの宗教を解き放つように考案された。この新しい宗教の教師達は、現在、精霊的な武器を備えている。かれらは、尽きることのない許し、無類の善意、豊かな愛で世界を征服しに出かけるのである。教師達は、善で悪を克服し、愛で憎しみを負かし、勇気と生きる信仰で恐怖を打ち破る能力がある。イエスは、自分の宗教が決して受け身でないことを既に追随者に教えた。弟子が、その慈悲の活動において、また愛の顕現においていつも活動的であり、積極的であることを。もはや、これらの信者は、ヤハウェを「軍勢の主」として見ていなかった。かれらは、そのとき、永遠の神性を「主イエス・キリストの神と父」と考

えた。神が、あらゆるの個人の精霊的な父でもあるという真実をある程度まで完全には理解はしなくても、かれらには少なくとも、その進歩があった。

194:3.12 (2064.4) 五旬節は、最悪の不正の直中にあっても、個人的な損害を許し、友好関係を保ち、恐るべき危険に面し平然とし、そして愛と慎みの恐れを知らない行為によって憎しみと怒りの悪に挑戦する力を必滅者に授けた。ユランチアは、その歴史における大きく破壊的な戦争の惨害を経験した。これらの恐ろしい闘いの全ての関係者は、敗北に終わった。わずかに1人の勝者がいた。一層の評判をえてこれらの敵意の闘いから出てきた者がおり、—それは、ナザレのイエスと善で悪に打ち勝つ福音であった。より良い文明の秘密は、あるじの人の兄弟愛、つまり愛の善意と相互信頼の教えに結びつけられる。

194:3.13 (2065.1) 五旬節まで、宗教は、人が神を求めることだけを明らかにしてきた。五旬節以後、人はまだ神を捜し求めてはいるが、神もまた人を捜し求め、人が神を見つ

けるとその人間の中に住む神の精霊を送る光景が、世界の上に際立っている。

194:3.14 (2065.2) 五旬節で頂点に達したイエスの教え以前、古い宗教の教義における女性にはほとんど信仰上の地位はなかった。五旬節の後、女性は、王国の兄弟関係において男性と平等に神の前に立った。精霊のこの特別な訪れを受けた120人の中には多くの女性の門人がおり、これらの天恵を男性信者と等しく共有した。もはや、男性は、祭祀活動を独占することは考えられない。パリサイ派は、「女、癩病患者、または非ユダヤ人に生まれなかった」ことを神に感謝し続けるかもしれないが、イエスの追随者の間で、女性は、性に基づくすべての宗教上の差別からは永遠に自由の身となった。五旬節は、人種的な区別、文化的な違い、社会的な役割、または性的な偏見に基づくすべての宗教的な差別を抹消した。新しい宗教のこれらの信者が、「主の精霊がいるところに自由がある」と大声で叫ぶことは驚きに値しない。

194:3.15 (2065.3) イエスの母と弟は、120人の信者の中に居り、弟子のこの共通の集団の成員として、二人もまた、注ぎ

込まれた精霊を受けた。二人は、他の追随者よりも良い贈り物を受けたという訳ではなかった。何の特別な贈り物も、イエスの地球の家族に授けられはしなかった。五旬節は、神聖な家族の中での特別な聖職とすべての信仰の終わりを記した。

194:3.16 (2065.4) 五旬節以前、使徒は、イエスのために多くを諦めていた。かれらは、家庭、家族、友人、財産、身分を犠牲にしていた。五旬節で、かれらは、自分自身を神に捧げ、そして父と息子は、人に自分たちを与えること—人のあいだで生きるために精霊を送ること—で応えた。自己を失い、精霊を見つけるこの経験は、感情の一つではなかった。それは、知的な自己投降と心からの献身の行為であった。

194:3.17 (2065.5) 五旬節は、福音の信者の間での精霊的な統一への要請であった。精霊が、エルサレムで弟子達に下りてきたとき、同じ事が、フィラデルフィア、アレキサンドリアと真の信者の住む他のすべての場所で起きた。「おびただしい信者の間にただ1つの心と魂があった」ということは、文字通り本当であった。イエスの宗教は、

世界がこれまでに知っていた最も強力に統一する影響がある。

194:3.18 (2065.6) 五旬節は、個人、集団、国家、民族の独断性の減少のために設けられた。この独断の精神こそが、周期的に破壊的な戦争に陥る緊張を非常に増大するのである。人類は、精霊的な方法によってのみ統一されることができ、真実の精霊は、普遍的な世界的な影響である。

194:3.19 (2065.7) 真実の精霊の到来は、人間の心を浄化し、受け手に神の意志と人の福利の人生の一つの目的へと導く。自分本位の物質的な精霊は、無私のこの新たな、精霊的な贈与に飲み込まれてきた。五旬節は、その時も現在も、歴史のイエスが、生きた経験の神性の息子になったことを示している。それが人間の人生で意識的に経験されるとき、この注ぎ込まれた精霊の喜びは、健康の強壮剤、心の刺激、魂のための絶えることのない活力である。

194:3.20 (2065.8) 祈りは、五旬節当日に精霊をもたらしはしなかったが、個々の信者を特徴づける感受性の容量の決定に大いに関係があった。祈りは、神性の心を贈与の気前

のよさへと動かしはしないが、誠実な祈りと真の崇拝を通して製作者との切れ目ない親交維持を忘れない人々の心と魂に注ぐことができるように、より大きくより深い通路をたびたび掘り起こす。

4.キリスト教会の始まり

194:4.1 (2066.1) イエスがあまりにも急に敵に捕らえられ、直ちに2人の泥棒の間で磔にされると、その使徒と弟子は、完全に士気を挫かれた。逮捕され、縛られ、鞭打たれ、磔にされたあるじへの思いは、使徒の手に負えるものではなかった。かれらは、その教えと警告を忘れた。かれは、本当に、「神と全ての民の前で、業にも言葉にも力ある予言者」であったかもしれないが、決して彼らが望むイスラエルの王国を回復する救世主ではあり得なかった。

194:4.2 (2066.2) そして、復活は、絶望からの救出とあるじの神性への彼らの信仰に返報である。再三、かれらは、あるじに会い、話し、またあるじは、皆をオリーヴ山に連れて行き、そこで皆に別れを告げ、自分は父の元に戻るところであると告げる。かれは、力が授けられるまで—真

実の精霊が来るまで—エルサレムに留まるように彼らに言った。そして、五旬節のその日にこの新しい教師が来て、かれらは、新しい力で福音を説きに直ちに出かける。かれらは、生きている主の大胆で勇敢な追随者であり、死んでうち負かされた指導者達ではない。あるじは、これらの伝道者の心に生きている。神は、彼らの心の教義ではない。神は、皆の魂の生ける存在となった。

194:4.3 (2066.3) 「日々心を一つにして、絶えず寺院に集い、家ではパンをちぎる。神を賛美して、人々に好意を持たれ、喜びと真心とで食事をともにする。一同は、いっせいに精霊に満たされ、神の言葉を大胆に話した。信じた者の群れは、1つの心と思いを一つにした。そして、誰一人その持ち物を自分のものと言うことなく共有した。」

194:4.4 (2066.4) 王国の福音、神の父性、人の兄弟愛を説くためにイエスが任命したこれらの男性達に一体何が起きてしまったのか。かれらには、新しい福音がある。かれらは、新しい経験に燃えている。かれらは、新しい精霊的な活力で満たされている。彼らの趣意は、キリスト復活

宣言へと突如向きを変えてしまった。「ナザレのイエス、神が、偉大な働きと驚嘆の業により認められた方。神が定めた計画と神の予知とによって引き渡された方を、君達は、十字架につけて殺した。神がすべての予言者の口によって前触れしたことを、かれは、このようにして成し遂げた。このイエスを、神は甦らせた。神は、彼を主とキリストの両者にした。神の右手により高められ、父から精霊の約束を受け取り、イエスは、人が見て聞くこれを注ぎ込んだ。悔い改めなさい、罪を消し去ってもらうために。父が、人のために予め定めていたキリストを、万物の更新の時まで天に留めておかなけらばならない他ならぬイエスをさえ、遣わすために。」

194:4.5 (2066.5) 王国の福音、イエスの主旨は、突然に主イエス・キリストの福音に変えられた。かれらは、そのとき、イエスの人生、死、復活の事実を宣言して、彼が着手した仕事を終えるために、この世界へのイエスの迅速な帰還の望みを説いた。このように初期の信者達の主旨は、イエスの第1回の到来の事実についての説教をすることと、第2回の再臨の希望、彼らが非常に近いと考えた出来事を教えることに関係があった。

194:4.6 (2067.1) キリストは、急速に形を成している教会の教義になろうとしていた。イエスは生きている。イエスは人のために死んだ。イエスは精霊を与えた。イエスは再来する。イエスは、彼らのすべての考えを満たし、彼らの神と他のすべての新概念を決定した。かれらは、「神はすべての人の情愛深い父である、」あらゆる個人にとってさえ、という古い主旨にはあまり関知せず、「神は主イエスの父である」という新たな教義にあまりにも夢中になり過ぎた。本当である。兄弟愛と類例のない善意の現れは、信者のこれらの初期の共同体に起きた。しかしそれは、イエスの信者の親交であり、天の父の家族の王国における兄弟の親交ではなかった。彼らの善意は、必滅の人間の兄弟愛の認識からではなく、イエスの贈与の概念から生まれる愛から生じた。それでも、かれらは、喜びに満たされ、すべての人が、イエスに関する彼らの教えに引きつけられるというような新しく、独特の人生を送った。その福音のために、かれらは、王国の福音に生きた、例証的な注釈を用いるという重大な誤りを犯したが、それさえも、人類がこれまでに知った最も偉大な宗教を意味した。

194:4.7 (2067.2) 紛れもなく、新しい親交が世界に起きていた。「信じる多くの者が、使徒の教えと親交に、パンをちぎる際に、祈りに、しっかりと続いた。」かれらは、互いを兄弟、姉妹と呼び合った。かれらは、聖なる口づけで挨拶し合った。かれらは、貧者に奉仕した。それは、崇拝のみならず生きる親交であった。かれらは、法令による共同体ではなく、皆の所有物を仲間の信者と共有するという願望による共同体であった。かれらは、イエスが、自分達の世代の間に、父の王国の設立の完了のために戻っくると自信をもって待ち望んだ。世俗の財産の自然発生的なこの共有は、イエスの教えそのままの特徴ではなかった。それは、これらの男女が、イエスはその仕事を終え、王国を完成するために戻ると本当に心から、大変に自信をもって信じたがゆえに起きた。しかし、軽率な兄弟愛におけるこの善意の試みの最終結果は、破壊的で悲しみを繁殖させるものであった。何千もの熱心な信者は、その財産を売り払い、すべての資財と他の生産的資産を処分した。時の経過と共に、「等しい共有」というキリスト教徒のやせ細りの資力は、終わった。しかし世界は、終わらなかった。間もなく、アンチオケの信

者は、エルサレムの信者仲間を飢えから守るための徴収に着手していた。

194:4.8 (2067.3) その頃、かれらは、その設立の様式通りの聖餐を祝った。すなわち、親睦の社交的な食事のために集い、食事の終わりに聖餐を相伴した。

194:4.9 (2067.4) まず、かれらは、イエスの名において洗礼した。それは、彼らが「父と息子と聖霊の名」において洗礼し始めるおよそ20年前であった。洗礼は、信者の親睦への承認に必要なすべてであった。かれらには、まだ組織がなかった。それは、単にイエスの兄弟関係であった。

194:4.10 (2067.5) このイエスの一派は、急速に成長しており、サドカイ派は、もう一度彼らに注意を払った。パリサイ派は、その教えのどれ一つとしてユダヤ人の法の遵守を何らかの方法で妨げないことがわかり、その状況をあまり気にはしなかった。しかし、主なユダヤ教の教師の一人ガムリエルの、「これらの男から遠ざかり、放っておきなさい。この教え、あるいは、この仕業が人間から出たものならば、それは打倒されるであろうから。しか

し、もし神から出たものであるならば、それらを打倒することはできない。まかり間違えば、神と戦うことになるかもしれない。」という助言を受け入れるよう説き伏せられるまで、サドカイ派は、イエスの一派の指導者達を投獄し始めた。かれらは、ガムリエルの助言に従うと決め、そエルサレムには平穏と静けさが続き、その間に、イエスに関する新しい福音がたちまちのうちに広まった。

194:4.11 (2068.1) そして、大勢のギリシア人がアレキサンドリアからやって来るまで、エルサレムでは万事がうまくいった。ロダンの門弟の２人は、エルサレムに到着し、ギリシアの影響を受けた非ギリシア人の多くを転向させた。初期の転向者の中には、ステパノとバーバナスがいた。これらの有能なギリシア人は、ユダヤ人の視点をあまり持たなかったし、ユダヤ人の崇拝や他の儀式的習慣の流儀にそれほどまでには従わなかった。そして、イエスの同志の団体と、パリサイ派とサドカイ派との平和な関係を終結させたのが、これらのギリシア人信者の行ないであった。ステパノとそのギリシア人仲間は、イエスが教えたように説教し始め、これが、ユダヤ人の支配者

達との直接の対立に至らせた。ステパノの公への説教の１つで、講演が好ましくない部分に至ると、かれらは、裁判のすべての形式をとることなく、投石によりその場で死に至らせた。

194:4.12 (2068.2) エルサレムにおけるイエスの信者のギリシア植民団の指導者ステパノは、このように早期のキリスト教会の正式組織のための新しい信仰と特定の理由の最初の犠牲者となった。信者がユダヤ人の教義の中の一派としてもはや進むことができないという認識は、この新たな危機に直面した。かれらは、自らを無信仰の者達から切り離さなければならないという同意に至り、ステパノの死から1カ月以内には、エルサレムの教会が、ペトロスの統率のもとに組織化され、イエスの弟のジェームスが、その名義上の長として任命された。

194:4.13 (2068.3) そして、ユダヤ人による新手の、容赦のない迫害が勃発し、後にアンチオケでキリスト教と呼ばれたイエスについての新宗教の活発な教師達は、イエスを宣言しに帝国の果てまでも出向いて行った。この主旨を伝えるに当たっては、パウーロスの時代以前は、主導権は

ギリシア人の手にあった。そして、これらの最初の宣教師達は、後の者達も、ガザとツロを通りアンチオケに、そして次には、小アジアへ、そしてマケドニアを経て、ローマ、および帝国の最果ての地へと当時のアレクサンダーの行進の通り道をたどった。

論文 195
五旬節後

195:0.1 (2069.1) 五旬節の日のペトロスの説教の結果は、王国の福音を宣言する努力において大多数の使徒の将来の方針を決め、計画を決定するようなものであった。ペトロスは、キリスト教会の本当の創始者であった。パウーロスは、キリスト教の教義を非ユダヤ人に伝え、ギリシア人信者は、それを全ローマ帝国へと届けた。

195:0.2 (2069.2) 因襲に捕らわれ、祭司の支配を受けているヘブライ人は、1民族として、神の父性と人の兄弟愛についてのイエスの福音、それと復活についてのペトロスとパウーロスの宣言とキリスト(以降のキリスト教)の上昇のいずれも受け入れることを拒否したが、残りのローマ帝国は、進化するキリスト教の教えに受容的であることがわかった。西洋文明は、このとき知的であり、戦争に疲

れ、すべての既存の宗教と宇宙哲学にまったく懐疑的であった。西洋世界の民族、すなわちギリシア文化の受益者には、偉大な過去の崇められた伝統があった。かれらは、哲学、芸術、文学、政治上の進展において大きな成果の遺産に目を向けることができた。しかし、これらの全業績にもかかわらず、魂を満足させる何の宗教もなかった。かれらの精霊的な切望は満たされないままであった。

195:0.3 (2069.3) キリスト教の主旨に盛り込まれたイエスの教えは、人間社会のそのような舞台に突然に押し出された。生活の新秩序は、これらの西洋民族の飢える心にこのようにして提示された。この状況は、古い宗教的実践と、新しいキリスト教化されたイエスの世界への趣意との即時の対立を意味した。そのような対立は、新旧いずれかの明らかな勝利、さもなければ、幾分の妥協をしなければならない。歴史は、闘いが妥協で終わることを示して２世代で同化することは無理であった。それは、イエスが人の魂に提示してきたような単なる精霊的な訴えではなかった。それは、宗教儀式、教育、魔術、医療、芸術、文学、法律、政府、徳義、性的な規制、複婚、そし

て限定された度合での奴隷制にさえ関わる明確な態度を早くも取った。キリスト教は、単に新しい宗教—全ローマ帝国と全東洋が待っていた何か—として到来したのではなく、人間社会の新秩序として到来したのであった。それは、そのような主張として、時代の社会的風紀の衝突を突如として引き起こした。イエスの理想は、ギリシアの哲学により再解釈されたり、キリスト教に社会化されるとき、西洋文明の倫理、道徳、および宗教に表現される人類の伝統にそのとき大胆に挑戦した。

195:0.4 (2069.4) 最初キリスト教は、下層の社会経済階級のみを転向者とした。しかし2世紀初頭までには、最高のギリシア・ローマ文化は、キリスト教信仰のこの新しい秩序、生きる目的と生活目標のこの新概念へと変わっていった。

195:0.5 (2070.1) その生誕の地においてはほぼ失敗に終わったユダヤ人の起源のこの新しい知らせは、どのようにローマ帝国の最良の心をそれほどまでに急速に、効果的に捕らえたのか。哲学的な宗教と神秘礼拝集団に対するキリスト教の勝利は、次の理由からであった。

195:0.6 (2070.2) 1. 組織。パウーロスは、立派な組織者であり、その後継者達は、パウーロスの定めた歩調を維持した。

195:0.7 (2070.3) 2. キリスト教は、完全にギリシア化された。それは、ヘブライ神学の神髄はもちろん、ギリシア哲学の最良部分をも受け入れた。

195:0.8 (2070.4) 3. しかし、それは、新たでおおきな理想、すなわちイエスの生命贈与の反響と全人類のための救済に関するイエスの趣意の反映を最もよく包含した。

195:0.9 (2070.5) 4. キリスト教の指導者達は、支持者の半分の良い方をアンチオケの礼拝集団にうまく引き入れたようにミスラ主義との妥協をする気でいた。

195:0.10 (2070.6) 5. 同様に、次とその後のキリスト教指導者の世代が、異教思想とのそのようなさらなる妥協をしたので、ローマ皇帝コンスタンティーヌさえ新しい宗教に引き入れられるほどであった。

195:0.11 (2070.7) しかし、キリスト教徒は、ギリシア化されたパウーロスのキリスト教の受け入れを異教徒に強制する一方で、異教徒の儀礼的な華やかさを取り入れたという

点において、異教徒との抜け目のない取り引きをした。かれらは、ミスラ派との間よりも異教徒との間でより良い取り引きをしたのだが、その初期の征服者達との妥協においてさえ、ペルシアの神秘宗教の甚だしい不道徳、さらには多数の他の不届きな習慣を排除することに成功したという点において征服者以上であった。

195:0.12 (2070.8) 賢明にも、または浅はかにも、キリスト教のこれらの初期の指導者は、イエスの考えを保持し、推進する努力において故意にイエスの理想について妥協した。かれらは、目ざましい成功を収めていた。しかし、誤ってはいけない、これらの妥協的な理想は、あるじの福音にまだ潜在しており、その理想は、やがては完全な力を世界に明らかにするであろう。

195:0.13 (2070.9) キリスト教のこの異教徒化により、古い秩序は、多くの儀式的な性質の重要でない勝利を得たが、キリスト教は、次のような優位性を獲得した。

195:0.14 (2070.10) 1. 人間の品行徳義の新しく、非常に高度の調子を盛り込んだ。

195:0.15 (2070.11) 2. 神の新しく、大きく拡大した概念は、世界に与えられた。

195:0.16 (2070.12) 3. 不死の望みは、認められた宗教の保証の一部になった。

195:0.17 (2070.13) 4. ナザレのイエスは、人の空腹の魂に与えられた。

195:0.18 (2070.14) イエスによって教えられたすばらしい真実の多くは、これらの当初の妥協においてもう少しで失われるところであったが、それらは、人の息子の人生と教えに関するパウーロスの解釈に入れ替わった異教徒化されたキリスト教のこの宗教の中にまだ眠っている。そして、キリスト教は、それが異教徒化される前にさえ、最初に完全にギリシア化された。キリスト教は、多く、非常に多く、ギリシア人に負うところがある。それは、ニカイアでとても勇敢に立ち上がり、まったく恐れることなくこの集会に挑戦したので、世界は、彼の贈与の本当の真実を失わうという危険に晒したかもしれないイエスの資質の概念を曖昧にしなかったのが、エジプト出身のギリシア人であった。このギリシア人の名前は、アサナ

シオスで、この信者の雄弁さと論理がなければ、アレイオスの説得は、成功していたことであろう。

1. ギリシア人の影響

195:1.1 (2071.1) キリスト教のギリシア化は、使徒パウーロスが、アテネでアレイオスパゴスの議会の前に立ち、「知られざる神」についてアテネ人に伝えたその波乱の日に本格的に始まった。そこで、アクロポリスの影で、このローマ市民は、ガリラヤのユダヤ人の土地に起源をもつ新しい宗教の自説版をこれらのギリシア人に宣言した。ギリシア哲学とイエスの教えには、多くの点で妙に似ている何かがあった。これらには、共通の目標—双方共に個人の発現を目的とした—があった。ギリシア人には、社会的、政治的発現において。イエスには、道徳的、精神的発現において。ギリシア人は、政治的な自由につながる知的な自由主義を教えた。イエスは、信仰の自由につながる精霊的な自由主義を教えた。まとめられるこれらの２つの考えは、人間の自由のために新しくて強力な憲章を構成した。それらは、人の社会的、政治的、精神的な自由の前兆となった。

195:1.2 (2071.2) キリスト教は、主に２つの事から競い合うすべての宗教に打ち勝った。

195:1.3 (2071.3) 1. ギリシア人の心は、ユダヤ人からさえ新しく、良い考えを借り受けることを望んだ。

195:1.4 (2071.4) 2. パウーロスとその後継者達は、自発的だが、鋭く、賢明な妥協者達であった。かれらは、熱心な神学の交換者であった。

195:1.5 (2071.5) パウーロスが、「キリストと磔にされたあの方」を説いてアテネで立ち上がったとき、ギリシア人は、精霊的に飢えていた。かれらは、質問し、興味を持ち、精霊的な真実を実際に探していた。ギリシア人がそれを迎え入れる一方で、ローマ人は、最初キリスト教と戦ったということ、そして後にローマ人に文字通りこの新しい宗教を受け入れるように強要し、それからギリシア文化の一部として修正したのが、ギリシア人であったということを、決して忘れてはいけない。

195:1.6 (2071.6) ギリシア人は美を、ユダヤ人は神聖さを崇敬したが、両民族は、真実を愛した。何世紀ものあいだ、ギ

リシア人は、人間のすべての問題，宗教を除く、—社会的、経済的、政治的、哲学的—を真剣に考え、本気で議論してきた。ほとんどのギリシア人は、宗教に多く注意を払わなかった。かれらは、自身の宗教でさえそれほど真剣には受け止めなかった。何世紀もの間ユダヤ人は、宗教に心を捧げはしたが、他のこれらの分野についての考えを無視してきた。かれらは、自分達の宗教を非常に真剣に、あまりに真剣に受け止めた。イエスの趣意の内容に照らし出されているように、これらの２つの民族の何世紀もの間の考察の連合の所産は、そのとき、人間社会の新しい秩序と、ある程度は、人間の宗教的な信念と習慣の新しい秩序の推進力となった。

195:1.7 (2071.7) アレクサンダーが、ヘレニズム文明を近東の世界に広げたとき、ギリシア文化の影響は、すでに西地中海の地に浸透していた。小都市国家に生活する限り、ギリシア人は、宗教と政治を非常にうまく扱ったが、マケドニアの王が、アドリア海からインダス川まで伸ばし、ギリシアを帝国へとあえて拡大したとき、問題は始まった。ギリシアの芸術と哲学は、完全に帝国の拡大の課題に堪えたが、ギリシアの政治的支配、または宗教につい

てはそうではなかった。ギリシアの都市国家が、帝国へと拡大した後、度量の狭い神々は、むしろ、少々風変わりであった。ギリシア人は、古いユダヤ人の宗教のキリスト教化がギリシア人に入ってきたとき、 1柱の神、より偉大で、より優れた神を本当に捜し求めていた。

195:1.8 (2072.1) ヘレニズム帝国は、そういうものとして持ちこたえることができなかった。その文化的な支配は続いたが、それは、帝国管理のため、そしてローマの政治的な光彩を西洋から確保した後にだけ、そして、東洋から一柱の神が帝国の尊厳を備えた宗教を得た後にだけ、持ちこたえた。

195:1.9 (2072.2) キリスト後の１世紀に、ヘレニズム文化は、すでにその最高水準に達した。その後退は、始まっていた。学問は進んでいたが、光彩は減退しつつあった。キリスト教に部分的に具体化されたイエスについての考えと理想が、ギリシアの文化と学問の救難の一部になったのは、まさしくそんな時であった。

195:1.10 (2072.3) アレクサンダーは、ギリシア文明の文化的な贈り物をもって東洋に突進した。パウーロスは、イエス

の福音のキリスト教版で西洋を強襲した。そして西洋の至るところ、ギリシア文化が波及するところはどこでも、ギリシア化されたキリスト教が根づいた。

195:1.11 (2072.4) イエスの趣意の東洋版は、その教えにより忠実なままであったにもかかわらず、アブネーの妥協しない態度に従い続けた。それは、ギリシア化されたものが進歩したようには決して進歩せず、結局は、イスラム運動において失われていった。

2. ローマの影響

195:2.1 (2072.5) ローマ人は、政府の代わりに投票により代議政治を置いてギリシア文化を丸ごと引き継いだ。そして、やがてこの変化は、ローマが、不慣れな言語や民族、そして宗教に対してさえ新しい寛容性を西洋全体にもたらしたという点において、キリスト教を支持した。

195:2.2 (2072.6) ローマのキリスト教徒の早期の迫害の多くは、単に彼らの説教における用語「王国」の不運な用法によるものであった。ローマ人は、ありとあらゆる宗教において寛容であったが、政治抗争の趣をもつものは何に対しても非常に憤慨した。そういう訳で、主に誤解が原因

であるこれらの早期の迫害が、立ち消えしたとき、宗教的な宣伝の領域は、大きく開いていた。ローマ人は、政治的支配に興味があった。芸術も宗教もあまり好まなかったが、異常なまでに両方に寛容であった。

195:2.3 (2072.7) 東洋の法律は、厳しく専横的であった。ギリシアの法律は、流動的で芸術的であった。ローマ法は、荘厳で敬意を育成していた。ローマの教育は、前代未聞の、また鈍い忠誠心を養った。初期のローマ人は、政治に忠実で、崇高的に献身する個人であった。かれらは、正直で、熱心で、理想にひたむきではあったが、その名に相応しい宗教をもってはいなかった。彼らのギリシア人の教師が、パウーロスのキリスト教を受け入れるように彼らを説得することができたことは、少しも驚きではない。

195:2.4 (2072.8) これらのローマ人は、偉大な民族であった。かれらは、自らを治めたので、西洋を治めることができた。そのような他に類のない清廉さ、献身、頑強な自制心は、キリスト教の受容と成長には理想的な土壌であった。

195:2.5 (2072.9) これらのギリシア・ローマ人が、国家に政治的に尽くすのと同様に、組織的な教会に精霊的に尽くすようになることは容易であった。ローマ人は、国家の競争相手として教会を恐れるときにだけ、それと戦った。ローマは、国家の哲学、あるいは自国の文化をあまり持っていなかったことから、ギリシア文化を自身のものとして採用し、また、キリストを道徳哲学として大胆に受け入れた。キリスト教は、ローマの徳育とはなったが、そのような十把一絡げの態度で新宗教を迎え入れた人々の精霊的な成長における個々人の経験の意味での宗教ではなかった。誠に、いかにも多くの個人は、この国教すべての表面下に浸透し、自分達の魂の養分のためにギリシア化され、異教徒化されたキリスト教の潜在する真実に保持される隠された意味の真の価値を発見した。

195:2.6 (2073.1) ストア学派的である者と「自然と良心」への彼の強い働き掛けが、少なくとも知的意味において、キリストをより良く受け入れる準備だけを全てのローマ人にさせた。ローマ人は、生来的に訓練によっても法律家であり、自然法則さえも崇敬した。さてキリスト教において、彼は、神の法を自然法則で見分けた。キケローとヴ

ェルギリウスを生み出すことができた民族は、パウーロスのギリシア化されたキリスト教において熟した。

195:2.7 (2073.2) したがって、これらのローマ化されたギリシア人は、宗教を哲学化すること、その考えを調整し、その理想を体系化すること、宗教的実践を生活の既存の趨勢に適合させることをユダヤ人とキリスト教徒の両方に強いた。そして、このすべてが、ヘブライの聖書のギリシア語への翻訳と、ギリシア語への新約聖書の後の記録によって大いに助けられた。

195:2.8 (2073.3) ギリシア人は、ユダヤ人や他の多くの民族と対照的に長い間不死を、死後のある種の生存を幾らか信じており、またこれがイエスの教えのまさに核心であったので、キリスト教が強い魅力となったことは確かであった。

195:2.9 (2073.4) ギリシア文化の継承とローマの政治の勝利は、１言語と１文化で地中海地域を１帝国に統合し、また西洋の世界を１神への用意をさせた。ユダヤ教は、この神を提供はしたが、ローマ化されたギリシア人への宗教としては受け入れられなかった。フィロンは、それらの反

論を緩和する手助けをいくらかはしたが、キリスト教は、１神より一層好ましい概念を示し、ローマ化されたギリシア人は、それを容易に迎え入れた。

3. ローマ帝国の下

195:3.1 (2073.5) キリスト教徒は、ローマの政治支配の併合の後、そしてキリスト教の普及後、重要な宗教概念である一つの神をもつが、帝国をもたない自分達ことに気づいた。ギリシア・ローマ人は、偉大な帝国にいる、だが帝国崇拝と精霊統一の適切な宗教概念として仕えるための神をもたないことに気づいた。キリスト教徒は、帝国を受け入れた。帝国は、キリスト教を採用した。ローマ人は、政治支配の統一を、ギリシア人は、文化と学問の統一を、キリスト教は、宗教思想と実行の統一を提供した。

195:3.2 (2073.6) ローマは、国家主義の伝統を帝国普遍主義により克服し、歴史上初めて、少なくとも名目上は、異なる民族と国々が、1つの宗教を受け入れることを可能にした。

195:3.3 (2073.7) ストア学派の活発な教えと密儀宗派の救済保証の間の大きな論争中、キリスト教は、ローマにおいて迎えられた。キリスト教は、「非利己主義」にあたる言葉を持たない精霊的に飢えた人々に爽快な安らぎと解放する力を携えてやって来た。

195:3.4 (2073.8) キリスト教に最も優れた力を与えたものは、その信者が奉仕生活を送る態度であり、抜本的な早期の迫害の間にその信仰のために死に至る態度でさえあった。

195:3.5 (2073.9) 子供に対するキリストの愛の教えは、望まれない子供、特に女児を死にさらすという蔓延的な習慣に早速終止符を打った。

195:3.6 (2074.1) キリスト教崇拝の初期の構想は、主にユダヤ教の会堂から引き継がれ、ミスラ派の儀式によって変更され、後には、多くの異教の華やかな催しが加えられた。初期のキリスト教会の中枢は、キリスト教化したギリシア人のユダヤ教への改宗者から構成されていた。

195:3.7 (2074.2) キリストの後の２世紀は、優れた宗教が西洋世界において前進する世界の全歴史上での最盛期であっ

た。1世紀のキリスト教は、闘争と妥協により、それ自体が、定着し急速に広がる準備をしていた。キリスト教は、皇帝を採用し、その後、彼がキリスト教を採用した。これは、新しい宗教の普及にとり素晴らしい時代であった。信仰の自由があった。旅行は自在であり、思考は制約されなかった。

195:3.8 (2074.3) ギリシア化されたキリスト教を名目上受容する精霊的な刺激は、かなり進んでいた道徳的な低下を防止するか、すでに確立し、増加している人種的堕落を補正するにはあまりに遅くローマに到来した。この新宗教は、帝国のローマに文化的に必要であったので、より大きい意味における精霊的な救済の手段とならなかったことは極めて不運である。

195:3.9 (2074.4) 優れた宗教といえども、国家の情勢への個人の参加不足が招いた当然の結果から、過度の家父長主義、重税と著しい虐待的徴収、レヴァント地方との金排出の不均衡な通商、狂乱的な娯楽、ローマ化、女性の退廃、奴隷制と民族の退廃、身体の疫病、そして精霊的な不毛

地点近くまで制度化されようとしていた国教から偉大な帝国を救うことはできなかった。

195:3.10 (2074.5) しかしながら、アレキサンドリアでの状況は、それほど悪くなかった。初期の学校では、イエスの教えの多くを妥協のない状態に保ち続けた。パンタイノスは、クレメントを教え、その後インドでキリストを宣言するためにナサナエルに続いた。キリスト教の構築の際、イエスの理想のいくらかは犠牲にされる一方、2世紀末までには、実際にはギリシア・ローマ世界のほとんどすべてのすばらしい心が、キリスト教徒になったということが公正を期して記されるべきである。勝利は、成就に近づきつつあった。

195:3.11 (2074.6) そしてその崩壊後でさえ、このローマ帝国は、キリスト教の生存を保証するために十分に長く続いた。しかし、我々は、王国の福音が、ギリシアのキリスト教の代わりに受け入れられていたならば、ローマや世界で起こったであろうことを、しばしば億測してきた。

4. ヨーロッパの暗黒時代

195:4.1 (2074.7) 社会の付属物であり、政治の味方である教会は、いわゆるヨーロッパの「暗黒時代」の知性と精霊の低下を分担する運命にあった。この間に、宗教は、ますます禁欲化され、苦行化され、合法化された。精霊的な意味において、キリスト教は冬眠していた。この期間を通して、微睡みと非宗教化するこの宗教とともに、神秘主義、つまり非現実性に近く、哲学的に汎神論と同類の空想的かつ精霊的な経験の連続した流れが、存在した。

195:4.2 (2074.8) これらの暗黒で絶望的な世紀の間にまたもや宗教は、実質的に受け売り的になった。個人は、支配的な教会の権威、伝統、命令の前にもう少しで失われるところであった。そして、神の法廷で特別な影響を持つと思われ、また、それゆえに、有効に求められるならば、神々の前で人間のために仲裁することができる「聖者」の華やかな集まりの創造において新たな精霊的な脅威が起きた。

195:4.3 (2075.1) しかし、キリスト教は、暗黒時代の接近を過ごすには無力である一方、道徳的な暗闇と精霊的な淀みのこの長い期間を耐え抜く準備のために十分に社会的にな

り、異教徒的になった。そして、それは、西洋文明の長い夜を通して持続し、文芸の復興の際、世界において道徳的な影響としてまだ機能していた暗黒時代の通過後のキリスト教の甦りは、キリスト教の教え、人間の人格の知的、感情的、そして精霊的な特別な型に適している信条をもつ数多くの宗派をもたらす結果となった。これらの特別なキリスト教集団、または宗教家族の多くは、この発表の作成時点でまだ持続している。

195:4.4 (2075.2) キリスト教は、イエスの宗教をイエスについての宗教への意図しない変化から始まった歴史を示している。それは、経験豊かなギリシア化、異教徒化、世俗化、制度化、知性の低下、精霊的な退廃、道徳的な冬眠、消滅への恐怖、後の若返り、分裂、そしてより最近の相対的な回復をした歴史をさらに提示している。そのような経歴は、固有の活力と回復させる膨大な資力の保持を示している。そして、この同じキリスト教は、今、西洋民族の文明世界に存在し、支配のためのその過去の戦いを特徴づけたそれらの盛り沢山な危機よりもさらに不吉な存在協創に直面している。

195:4.5 (2075.3) 宗教は、現在、科学的な心と実利主義的な傾向の新時代の挑戦に直面している。世俗的な傾向と精霊的な傾向とのこの巨大な争いにおいて、イエスの宗教は、ついには、勝利を収めるであろう。

5. 現代の問題

195:5.1 (2075.4) 20世紀は、キリスト教と他のすべての宗教が解決すべき新たな問題をもたらした。文明が、より高まるにつれ、社会を安定させ、その物質的な問題解決を容易にする人の努力の全てにおいて、「最初に天の現実を探す」義務が、ますます必要となる。

195:5.2 (2075.5) 真実は、切断され、分離され、孤立し、分析され過ぎるとき、しばしば混乱が生じ、紛らわしくさえなる。生きる真実は、物質科学でも介在する芸術の閃きとしてでもなく、完全かつ生きた精霊的な現実として迎え入れられるときにだけ、真実探求者に正しく教える。

195:5.3 (2075.6) 宗教は、人間にとっての神性で、永遠の目標の顕示である。宗教は、純粋に個人的で精霊的な経験であり、次のような人の他の高い思索の型とは永遠に区別されなければならない。

195:5.4 (2075.7) 1. 物質的な現実の問題に対する人の論理的態度。

195:5.5 (2075.8) 2. 醜さに対照をなす美に対する人の美的鑑賞

195:5.6 (2075.9) 3.社会的義務と政治的義務に対する人の倫理的認識。

195:5.7 (2075.10) 4. 人間道徳に関する人の感覚さえ、それ自体、宗教ではない。

195:5.8 (2075.11) 宗教は、宇宙で信仰、信用、確信を呼び起こすそれらの価値を見つけるようになっている。宗教は、究極的には崇拝に至る。宗教は、魂のために心によって発見される相対的価値と対照であるそれらの最高の価値を発見する。本物の宗教経験を通じてのみ、そのような超人的な洞察が得られる。

195:5.9 (2075.12) 永続的な社会的体制は、重力のない太陽系が、それを維持できないのと同様に、精霊的な現実に基づく道徳なくしては維持できない。

195:5.10 (2076.1) 肉体の1つの短い人生で好奇心を満たしたり、魂に押し寄せてくるすべての潜在的な冒険を満足させな

いようとしてはいけない。我慢しなさい。くだらない、浅ましい冒険への無法な突入に耽ける誘惑に陥ってはいけない。活力を利用して情熱を抑えなさい。進歩的な冒険と感激的な発見の終わりのない経歴の壮大な展開を待ち受ける間、穏やかでありなさい。

195:5.11 (2076.2) 人間の起源についての混乱に際して、永遠の目標を見失わないようにしなさい。イエスが、幼子達さえ愛したということ、人間の人格の素晴らしい価値を永遠に明らかにしたということを忘れないようにしなさい。

195:5.12 (2076.3) 世界を見るとき、あなたが見る悪の黒点は、究極の善の白い背景に対して示されているということを思い出しなさい。悪の黒い背景に対して惨めに現れる善の白斑だけを見ているのではない。

195:5.13 (2076.4) 発表し、厳然と示す非常に多くの善の真実があるとき、ただ事実であるように見えるというだけで、人は、なぜ世界の悪についてくよくよしなければならないのか。真実の精霊的な価値の美しさは、悪の現象よりも楽しくて希望を与える。

195:5.14 (2076.5) ちょうど現代科学が実験技術を追求するように、イエスは、宗教において、経験の方法を主唱して従った。我々は、精霊的な洞察の導きを通して神を見つけるのだが、美への愛、真実の追求、義務への忠誠、神性の善の崇拝を通して魂のこの洞察に接近する。しかし、これらのすべての価値のうち、愛は真の洞察への本当の指針である。取り立て

6. 物質主義

195:6.1 (2076.6) 科学者は、人類を物質的な恐怖へと意図せずして陥れた。かれらは、時代の道徳的な銀行の思慮のない取りつけを始めたが、人間の経験のこの銀行には、巨大な精霊的な資源がある。人間の経験のこの銀行は、その要求に耐えることができる。思慮のない人だけが、人類の精霊的な資産に関して恐怖状態になる。唯物の非宗教的な恐怖が終わるとき、イエスの宗教は、破産していないと分かるであろう。天の王国の精霊的な銀行は、「あの方の名」でそれを引き出すすべての者に信仰、望み、道徳的な保全を払い戻すであろう。

195:6.2 (2076.7) 物質主義とイエスの教えとの明らかな対立が何であろうとも、人は、来る時代に、あるじの教えが完全に勝利すると安心することができる。実際は、真の宗教は、科学とのいかなる論争にも関与し得ない。それは、物質的なものと決して関係がない。宗教それ自体は、科学者には最高に関心がある傍らで、科学には好意的ではあるもののまったく無関心である。

195:6.3 (2076.8) 叡知の付帯的な解釈と宗教経験の精霊的な洞察なくしては、単なる知識の追求は、つまるところ、悲観主義と人間の絶望につながる。少しばかりの知識というものは、実に混乱させる。

195:6.4 (2076.9) この著作の時点では、物質主義の最悪の事態は終わっている。より良い理解の日は、すでに夜が明け始めている。科学世界のより高度の心は、哲学においてもはや完全に物質的ではないが、一般大衆は、以前の教えの結果として今なおその方向に傾いている。しかし、物理的な現実主義のこの時代は、人の地球の生涯のつかの間の短い話にすぎない。現代科学は、真の宗教—イエスの信者達の人生において訳されたようなイエスの教え—

を手つかずのままにしてきた。科学がしたすべては、人生に対する曲解の無邪気な幻想を破壊することである。

195:6.5 (2077.1) 地球上の人の人生に関しては、科学は量的経験、宗教は質的経験である。科学は、現象を、宗教は、起源、価値、および目標を扱う。物理的な現象の説明として、原因を割り当てるということは、究極についての無知を認めることであり、結局は、科学者を真っ直に最初の大きな原因—楽園の宇宙なる父—に導いているに過ぎない。

195:6.6 (2077.2) 奇跡の時代から機械の時代への激しい揺れは、人を全く混乱させるものだと分かった。機械観的な誤った哲学の巧みさと手際の良さは、その機械的な論点と一致しない。唯物論者の心の諦観した機敏さは、宇宙が盲目かつ目的のないエネルギー現象であるという自身の主張を永遠に論破している。

195:6.7 (2077.3) 一部のおそらく教養のある人の機械的な自然主義、そして一般人の考えのない世俗主義の双方は、ともに徹底的に物事に関心がある。かれらは、信仰、望み、および永遠の確信に欠けると同時に、すべての真の価

値、精霊的な資質の是認、精霊的な満足感に乏しい。現代生活の大きな問題の1つは、人が精霊的な思索と宗教的な献身に乗り出すには、あまりにも忙しいと思うことである。

195:6.8 (2077.4) 物質主義は、人を魂のぬけた自動人形へと引きずり下ろし、単に人を不粋で機械論的な宇宙の数式において助けのない場所を見つける算術記号にする。しかし、数学の大家なくして数学のこの広大な全宇宙がどこから来るのか。科学は、質量保存について詳細に述べるかもしれないが、宗教は、人の魂の保護を確実なものにする—それは、精霊的な現実と永遠の価値との人の経験に関している。

195:6.9 (2077.5) 現代の物質主義的な社会学者は、共同体を調査し、それについての報告をし、人々を見つけたままに後にする。1,900年前、無学なガリラヤ人は、人間の内面の経験への精霊的な貢献としての自らの命を与えるイエスについて調査し、それから出かけて行き、全ローマ帝国をひっくり返した。

195:6.10 (2077.6) しかし、宗教指導者達が、現代人を中世のトランペットの突発音で精霊的な戦いに呼び掛けようとするとき、重大な誤りを犯している。宗教は、それ自体に新しく現代的な標語を供給しなければならない。民主主義も他の政治的な万能策も精霊的な進歩の代わりはしないであろう。誤った宗教は、現実回避を意味すかもしれないが、イエスは、その福音で必滅者を精霊的な進行の永遠の現実の入り口そのものへと導き入れた。

195:6.11 (2077.7) 物質から心が「現れた」と言うことは、何も説明しない。宇宙が単に機械装置であったり、心が物質から区別されていなかったならば、我々には、観察された現象の2つの異なる解釈も決してないであろう。真、美、善の概念は、物理学や化学のどちらにも固有ではない。機械は、知ること、ましてや真実を知ること、正義を切望すること、善を慈しむことができない。

195:6.12 (2077.8) 科学は、物理的であるかもしれないが、真実を識別する科学者の心は、同時に超物質的である。物質は、真実を知らず、慈悲を好みもせず、精霊的な現実を楽しむこともできない。精霊的な啓蒙に基づき、人間の

経験に根づく道徳的な信念は、物理的な観測に基づく数学的な推論ほどに真実であり確かであるが、それらは別の、またより高い段階にある。

195:6.13 (2077.9) 人が単なる機械であるならば、物質的な宇宙に多少なりとも一様に反応するであだろう。個性は、まして人格は、実在しないであろう。

195:6.14 (2077.10) 宇宙の中の宇宙の中心の楽園の絶対なる機構の事実は、第二次根源と中枢の制限されない意志の臨場に際し、決定者達が宇宙の唯一の法則でないということを永遠に確かにする。実利主義はあるが、それは、独占的ではない。構造はあるが、それは、制限がない訳ではない。因果関係はあるが、それは、単独ではない。

195:6.15 (2078.1) 結局は、物質の有限的な宇宙は、結合された心と精霊の臨場を除いては均一で因果関係的になるであろう。宇宙心の影響は、物質界にさえも絶えず自発性を注ぐ。

195:6.16 (2078.2) 存在のいかなる領域の自由または独創力も、精霊的な影響と宇宙心の制御の度合いに正比例してい

る。つまり、人間の経験において、「父の意志」をする現実性の度合に正比例している。そして、人がいったん神を見つけに飛び出すとき、それは、神がすでに人を見つけたという決定的な証明である。

195:6.17 (2078.3) 真、美、善の真剣な追求は、神に通じる。あらゆる科学的な発見は、宇宙の自由と普遍性の両方の存在を示す。発見者は、発見をすることが自由である。発見されるものは、本物であり、明らかに一定不変であり、さもなければ、それは、ものとして知られるようにならなかったかもしれない。

7. 物質主義の脆弱性

195:7.1 (2078.4) 物質志向者が、真の宗教の個人の経験からくる広大な精霊的な資源を奪うような機械論的な宇宙のそのような弱い理論にまかせることは、いかにも愚かである。事実は、真の精霊的な信仰と決して争わない。理論は、そうするかもしれない。科学、宗教的な信仰—精霊的な現実と神性価値への人間の信念—の打倒を試みるよりも、むしろ迷信の破壊に捧げるべきである。

195:7.2 (2078.5) 科学は、宗教が人のために精霊的にすることを、人のために物質的にすべきである。生活の地平線を広げ、人格を拡大すべきである。真の科学は、真の宗教との永続的な不和はありえない。「科学的方法」は、物質的な冒険と物理的な業績を測定する知的な物差しに過ぎない。しかし、物質的であり完全に知的であることは、精霊的な現実と宗教的な経験の評価においては全く役に立たない。

195:7.3 (2078.6) 現代の機械論者の矛盾は、以下の通りである。もしこれが、単に物質的な宇宙であり、人間がただの機械であったならば、そのような人間は、自分がそのような機械であると見分けることが全くできないであろうし、同様にそのような機械人間は、そのような物質的な宇宙の存在の事実を全く意識していないであろう。機械科学に伴う物質主義的な狼狽と絶望は、科学者の超物質的な他ならぬ洞察が、物質宇宙のこれらの誤りの、自己矛盾の概念を明確に述べる科学者の精霊が宿る心の事実を認識し損ねてしまった。

195:7.4 (2078.7) 真、美、善の永遠かつ無限の楽園の価値は、時空間宇宙の現象の事実の中に隠されている。しかし、それは、これらの精霊的な価値を探知し、識別する信仰の目を精霊生まれの必滅者に要求する。

195:7.5 (2078.8) 精霊的な進展の現実と価値は、「心理学的な投射」—物質的な心の美化された単なる白昼夢—ではない。そのようなものは、内在する調整者、人の心に生きる神の精霊の精霊的な予想である。そして、かすかに覗かれた「相対性」の発見を弄ぶことにより、神の永遠性と無限性の概念を妨げさせないようにしなさい。そして、自己表現への必要性に関する人のすべての要求において、調整者の表現のために、すなわち真の、またより良い自己の顕現のための備えを怠るという誤りをしてはいけない。

195:7.6 (2079.1) これが物質的な宇宙にすぎないならば、物質的な人間は、そのような排他的に物質的な存在の機械的な特徴の概念に決して到着することはできないであろう。宇宙のこの非常に機械学的な概念は、本来心の物質現象であり、そしてそれが、いかに完全に物質的に条件づけ

られ、機械的に制御されているように見えても、すべての心は非物質起源である。

195:7.7 (2079.2) 必滅の人間の部分的に発展した精霊的な構造には、過剰に一貫性と知恵が与えられてはいない。人の自惚れは、しばしば自身の根拠を上まわっており、また自身の論理を回避している。

195:7.8 (2079.3) 最も悲観的な物質主義者のまさしくその悲観主義は、それ自体で、悲観論者の宇宙が完全に物質的ではないという十分な証明である。楽天主義と悲観主義は、双方共に事実だけでなく価値に対する心の気づきによる反応である。宇宙が、本当に物質者がそう見なすものであるならば、人間の機械としての人は、それゆえ、他ならぬその事実についての全ての意識的認知が欠けているということである。精霊生まれの心の価値に対する概念の意識がなければ、宇宙物質主義の事実と宇宙活動の機械学的な現象は、人には完全に認識されていないであろう。1台の機械は、もう1台の機械の性質、あるいは価値を意識するはずがない。

195:7.9 (2079.4) 科学は、物質と事実だけを認識し対処するので、人生と宇宙の機械学的哲学は、科学的であるはずがない。哲学は、必然的に超科学的である。人は、自然の物質的事実であるが、その人生は、心の制御的な属性と精霊の創造的な特性を示す点において自然の物質段階を超える現象である。

195:7.10 (2079.5) 機械論者になるための真摯な努力は、知的かつ道徳的な自殺行為をする人の空しい努力の悲惨な現象を意味する。しかし、人はそれをすることができない。

195:7.11 (2079.6) 宇宙が単に物質であり、人が単に機械であったならば、科学が、宇宙のこの機械化を仮定するために科学者を勇気づけはしないであろう。機械は、それ自体を測定し、分類し、評価することはできない。そのような科学的な作品は、超機械状態の何らかの実体だけにより作成されることができるであろう。

195:7.12 (2079.7) 宇宙現実が１台の広大な機械にすぎないならば、人は、そのような事実を認め、そのような評価の洞察を意識するようになるために、宇宙の外にあり、しかも、それから離れていなければならない。

195:7.13 (2079.8) 人が単に機械であるならば、この人間は、いかなる手段により自分が単に機械であるということを信じたり、主張したり、あるいは知るようになるのか。自身に関わる自意識評価の経験は、決して単なる機械の属性ではない。自意識と自認の機械論者は、機械主義にとり最良の答えである。物質主義が事実であるならば、自意識の強い機械技師がいるはずがないであだろうに。また、人は、不道徳な行為ができる前に、まず道徳的な人でなければならないないことも本当である。

195:7.14 (2079.9) 物質主義のまさしくその主張は、そのような教義をあえて主張する心の超物質的な意識を含意する。構造は悪化するかもしれないが、それは決して進歩することはできない。機械は、考えたり、創造したり、夢見たり、切望したり、理想化したり、真実に飢えたり、また正義に渇きを覚えたりはしない。機械は、他の機械に仕えたり、それらの永遠の進行の目標として神を見つけ、神に似るための高尚な仕事を選ぶために情熱をもって人生を動機づけはしない。機械は、決して知的でも、感情的でも、美的でも、倫理的でも、道徳的でも、精神的でもない。

195:7.15 (2079.10) 芸術は、人が機械学的でないと立証するが、それは、人が精霊的に不滅であると立証はしない。芸術は、必滅のモロンチア、人つまり物質の人間と、人つまり精霊的な人間との間に介在する領域である。詩は、物質の現実から精霊的な価値へと逃がれる努力である。

195:7.16 (2080.1) 高度文明における芸術は、本当の宗教—精霊的かつ永遠の価値の洞察—により精霊的にされる一方で科学には人間味を添える。芸術は、現実の人間と時空間の評価を表す。宗教は、宇宙価値の神の抱擁であり、精霊的な上昇と拡大における永遠の進行を内包する。この世界の芸術は、永遠が時間の現実の影として映す神の模範の精霊的な基準に盲目になるときだけに危険である。真の芸術は、生活の物質的なものの効果的な扱いである。宗教は、人生の物質的な事実を高潔にする変化であり、それは、芸術の精霊的な評価において決してやむことはない。

195:7.17 (2080.2) 自動制御装置が、自動作用の原理を発想できたと推定することがいかに愚かであることか、またその

ような他の概念や仲間の自動制御装置を形成すると敢えて考えることがいかに馬鹿げていることか。

195:7.18 (2080.3) 然るべき認識を科学者に提供しない限り、物質的宇宙のどんな科学的な解釈も無価値である。芸術家への認識がない限り、芸術の鑑賞は本物ではない。道徳家を含まない限り、道徳評価は価値がない。哲学者を無視するならば、哲学の認識は啓発的ではないし、宗教は、神を探し求め知ろうとしている宗教家のこの経験なくしては、また、経験を通しての宗教家の本当の経験なしには存在し得ない。同様に、わたしはあるというもの、すなわち、それを作り、絶えずそれを管理する無限の神というものから離れた宇宙の中の宇宙には意味がない。

195:7.19 (2080.4) 機械論者—人文主義者—は、物流に漂流する傾向がある。理想主義者と精霊主義者は、エネルギーの流れの明らかに純粋に物質的な流れを修正するために知性と活力で櫂を扱う。

195:7.20 (2080.5) 科学は、心の数理により生活をする。音楽は、感情の速度を表現する。宗教は、無限のより高く、

永遠の旋律との時空間の調和における魂の精霊的律動である。宗教経験は、本当に超数学的である人間の人生における何かである。

195:7.21 (2080.6) 言語において、表音文字は物質主義の構造を、表し、一方で、1,000の考え、壮大な思いつき、高尚な理想について—愛と憎しみ、気弱さと勇気について_—意味を表現す言葉が、物質と精霊の法律の両方によって定義され、人格の意志の主張によって指示され、固有の状況での贈与によって制限される範囲のなかで心の働きを表す。

195:7.22 (2080.7) 宇宙は、科学者が発見したり、あるいは科学と見なすようになる法測、構造、一様性などではなく、むしろこのように宇宙現象を観察し、創造の物質的な側面の機械学的段階に固有の数学的な事実を分類する好奇心が強く、思慮のある、選択していて、創造的で、組み合わさっていて、識別力のある科学者に似ている。

195:7.23 (2080.8) 科学ではなく、科学者は、エネルギーと物質の進化し前進する宇宙の現実を知覚する。芸術ではなく、芸術家は、物体存在と精霊解放とに介在する一時的

なモロンチア界の存在を示威する。宗教ではなく、宗教家は、永遠の進行過程で遭遇することになっている精霊現実と神性価値の存在を立証する。

8. 非宗教的な全体主義

195:8.1 (2081.1) しかし、物質主義と機械主義が、多少なりとも打ち負かされた後でさえ、20世紀の世俗主義の破壊的な影響は、まだ用心をしていない何百万人の精霊的な体験を挫くであろう。

195:8.2 (2081.2) 現代の世俗主義は、2つの世界的な影響によって促進されてきた。世俗主義の父は、19世紀と20世紀の心が狭く神を信じない態度のいわゆる科学—無神論の科学—であった。現代の世俗主義の母は、中世の全体主義のキリスト教会であった。世俗主義は、制度化されたキリスト教会よる西洋文明のほとんど完全な支配に対する興隆する抗議としての発端があった。

195:8.3 (2081.3) この意外な事実の時、欧米双方の生活の中心的な知的で哲学的な環境は、はっきりと世俗的—人文主義的—である。300年間、西洋の考えは、次第に非宗教化されてきた。宗教は、ますます名目上の影響、主に儀式

の役目を果たすようになった。西洋文明の大多数の見せかけのキリスト教徒は、無意識に、事実上は、世俗主義者である。

195:8.4 (2081.4) 西洋の民族の考えと生活を全体主義的な教会支配の萎縮させる把握から解放するためには、巨大な力、強力な影響を必要とした。世俗主義は、教会支配の拘束を断ち、いま引き続き、現代人の胸中と心の支配の神を信じない新たな形を設立すると脅かしている。専制的かつ独裁的な政治国家は、科学的な実利主義と哲学的な世俗主義の直接的な結果である。世俗主義は、組織化された教会支配から人を解放するやいなや、全体主義国家への独創性のない束縛へと売りつける。世俗主義は、政治的および経済的な奴隷制度の圧制への裏切りのためだけに人を教会の奴隷制度から解放する。

195:8.5 (2081.5) 物質主義は神を否定し、世俗主義は単に人を無視する。少なくともそれが初期の態度であった。最近では、世俗主義は、　　より好戦的な態度をとってきており、かつて世俗主義が抵抗した全体主義の農奴的な境遇の宗教を敢えてとった。20世紀の世俗主義は、人は神を

必要としないと断言する傾向にある。しかし、用心しなさい。人間社会のこの神を信じない哲学は、不安、憎しみ、不幸、戦争、および世界的な災禍に導くだけである。

195:8.6 (2081.6) 非宗教主義は、人類に平和をもたらすことは決してできない。何も人間社会において神の代理をすることはできない。しかし、よく注意しなさい。非宗教的反乱が教会の全体主義にもたらす恩恵的利益を迅速にあきらめてはならない。西洋文明は、今日、非宗教的反乱の結果、多くの自由と満足感を味わっている。世俗主義の重大な誤りは、これであった。世俗主義は、宗教権威による生活のほぼ完全な支配に対して反旗を翻す際に、そして、そのような教会の圧制からの解放に達した後に、神自身に対する反乱を、時としてはそれとなく、またある時には公然と主導し続けた。

195:8.7 (2081.7) アメリカ産業主義の驚くべき創造性と西洋文明の先例のない物質的な進展は、非宗教的な反乱に負うところがある。また、非宗教的な反乱の度が過ぎて神と真

の宗教を見失ったが故に、世界大戦と国際的な不安定の予期しない結果も続いた。

195:8.8 (2081.8) 現代の非宗教的な反乱からの恩恵、つまり寛容性、社会奉仕、民主的政府、市民的な自由を味わうために神への信仰を犠牲にすることは必要ではない。世俗主義者が、科学を促進し、教育を前進させるために真の宗教を組織することは必要ではない。

195:8.9 (2082.1) しかし、非宗教主義が、生活拡大におけるこれらのすべての最近の進歩の唯一の親ではない。20世紀の利得の背後には、科学と世俗主義だけではなく、認められず、承認されてもいないナザレのイエスの人生と教えによる精霊的な働きもある。

195:8.10 (2082.2) 神のない、宗教のない科学的な世俗主義は、その勢いを決して調整できずに、互いに異なり他に勝ろうとする関心、民族、愛国心を調和させることができない。その並ぶもののない物質的な達成にもかかわらず、この非宗教的な人間社会は、ゆっくり崩壊している。対立からくるこの崩壊に抵抗する主な結合力は、愛国心で

ある。そして、愛国心は、世界平和への主な障害である。

195:8.11 (2082.3) 世俗主義に固有の弱点は、政治と力のために倫理と宗教を捨てるということである。人は、神の父性を無視したり否定している間、容易く人の兄弟愛を確立することはできない。

195:8.12 (2082.4) 非宗教的な社会的かつ政治的な楽天主義は、幻想である。神がなければ、自由も解放も、財産も富も、平和へとは導かないであろう。

195:8.13 (2082.5) 科学、教育、産業、および社会の完全な非宗教化は、ただ破壊に通じるだけである。20世紀初頭の1/3の間、ユランチアの人々は、その時までのキリスト教統治の全時代に殺された数以上の人間を殺した。そして、これは、物質主義と世俗主義の恐ろしい収穫の始まりに過ぎない。より残酷な破壊は、いまだ来ていない。

9. キリスト教の問題

195:9.1 (2082.6) 数世紀もの間流れ続けている、物質的で非宗教的な時代の不毛の時勢にさえも、真実の川である人の精

霊的な遺産の価値を見落としてはならない。過去の時代の迷信的な教義から逃れる人のすべての価値ある努力において、不朽の真実を固く保持することを確実にしなさい。だが、忍耐をもちなさい。現在の迷信への背反が終わるとき、イエスの福音の真相は、新しく、より良い道を照らすために輝かしく持続するであろう。

195:9.2 (2082.7) しかし、異教徒化され、社交的にされたキリスト教は、妥協のないイエスの教えとの新しい接触を必要としている。それは、地球のあるじの生涯への新たな展望がないために萎れている。イエスの宗教の新しく、より完全な顕示は、物質的な世俗主義の帝国を征服し、機械学的な自然主義の世界支配を打倒する運命にある。ユランチアは、現在、社会的な対応、道徳の奮起、および精霊的な啓蒙の最も驚くべき魅惑的な時代のその1つのまさにその縁で揺れている。

195:9.3 (2082.8) 大いに変更されてはいるが、イエスの教えは、密儀宗派の誕生の時、そして暗黒時代の無知と迷信を乗り切り、そのうえ今でも、20世紀の物質主義、機械主義、世俗主義をゆっくりと打ち負かしている。そして、

大いなる試練と敗北に瀕したそのような時代は、常に偉大な顕示の時代なのである。

195:9.4 (2082.9) 宗教は、新しい指導者達、単にイエスと並ぶもののないその教えにあえて頼る精霊的な男女を必要とする。キリスト教が、社会的問題や物質的問題に忙しくし続けている間、その精霊的な使命を怠り続けているならば、精霊的な復興は、人の精霊の再生にもっぱら専念するイエスの宗教のこれらの新しい教師の到来を待ち受けなければならない。そして、これらの精霊生まれの者は、世界の社会的、道徳的、経済的、政治的な再編成に必要な統率力と閃きをすばやく供給するであろう。

195:9.5 (2083.1) 現代は、事実に矛盾して真、美、善のその最高の概念と調和しない宗教を受け入れることを拒否するであろう。現代の歪められ妥協したキリスト教—イエスの本当の人生と教え—の本当の、最初の基盤の再発見の時は、告げられている。

195:9.6 (2083.2) 原始人は、宗教的な恐怖に捕われた迷信深い生活を送った。現代の、文化的な人間は、強い宗教的な信念の支配を受けるという考えを恐れる。思慮ある者は、

つねに宗教に掴まれることを恐れてきた。強く、しかも心を動かす宗教が、自分を支配する恐れがあるとき、人は、合理化し、伝統化し、制度化しようとし、その結果、その制御を得ようとする。そのような手順によって、啓示宗教でさえ、人によって作られ、また人によって支配されるようになる。知性ある現代の男女は、それが、自分達に—そして自分達と共に—何をするかの恐れのためにイエスの宗教を回避する。すべてのそのような恐れは、根拠が十分にある。イエスの宗教は、まことに、人が、天の父の意志に関する知識を捜し求めて生きることに捧げることを要求し、生きる活力が、人の兄弟愛への寡欲な奉仕に奉げられることを要求して、その信者を支配し、変えさせる。

195:9.7 (2083.3) 利己的な男女は、今までに人間に提供された最もすばらしい精霊的な宝にさえそのような代価を簡単に支払いはしないであろう。人は、利己主義の愚かで誤魔化しの探求に付帯する悲しい当て外れに十分に幻滅し始めるときにだけ、そして形式化された宗教の不毛の発見の後にだけ、心から王国の福音、ナザレのイエスの宗教に振り向く気になるのである。

195:9.8 (2083.4) 世界は、より直接的な宗教を必要とする。キリスト教—20世紀の最高の宗教—でさえ単にイエスについての宗教ではなく、人が大幅に間接的に経験する宗教である。人は、受け入れた宗教教師達により完全に渡されたままに宗教を取る。世界は、もしイエスが地球に本当に住んでいるのを見たり、生命を与えるその教えを直接に知ることができさえしたら、目を覚ます経験をするであろうに。美しいものを描写する言葉は、見ることのようには感動させることができないし、信仰に関する言葉も、神の存在を知る経験のようには人の魂を奮い立たせることはできない。しかし、期待に満ちた信仰は、人の魂の望みの扉を向こうの世界の神の価値の永遠の精霊的な現実の入り口へと開いたままにするであろう。

195:9.9 (2083.5) キリスト教は、人間の欲深さ、戦争の狂気、力に対する欲望への挑戦の前に敢えてその理想を低くした。だが、イエスの宗教は、人の中にある最善なものに、動物進化のこれらのすべての遺産を超越すること、そして神の恵みにより本当の人間の運命の道徳的な高さに達することを呼びかけて、汚れなく、優れた精霊的な召集としてある。

195:9.10 (2083.6) キリスト教は、形式主義、過度の組織化、知性偏重、および他の非精霊的な傾向による緩やかな死に脅かされている。現代のキリスト教会は、イエスが、人類の後の世代の精霊的な変化に絶えず作用することを注文した活力に満ちた信者の兄弟関係にはない。

195:9.11 (2083.7) いわゆるキリスト教は、社会的で文化的運動、ならびに宗教的な信条と習慣になってしまった。現代のキリスト教の流れは、多くの古代の異教徒の沼沢池と多くの未開の沼地から排出している。古い文化の多くの分水嶺は、その唯一の源流であると考えられるガリラヤの高い台地と同様にこの現代の文化的な流れに排出している。

10. 未来

195:10.1 (2084.1) キリスト教は、誠にこの世界のために大きな貢献をしたが、現在最も必要とするものはイエスである。世界は、すべての人にあるじを効果的に示す精霊生まれの必滅者の経験において、イエスが再び地球で生きていることを見る必要がある。原始のキリスト教の復活について話すことは空しい。人は、自分を見つけるとこ

ろから進まなければならない。現代文化は、イエスの人生の新しい顕示で精霊的に洗礼され、そしてイエスの永遠の救済の福音に関する新しい理解で明るくされなければならない。そして、このように持ち上げられるようになるとき、イエスは、すべての人を自分に引きつけるであろう。イエスの弟子は、征服者以上でなければならないし、すべての人にとり溢れんばかりの閃きの源であり、増強された生活でさえなければならない。宗教は、それが、個人の経験における神の存在の現実の発見によって精霊的になるまでは、単に高められた人道主義にすぎない。

195:10.2 (2084.2) 地球でのイエスの人生の美と崇高性、人間性と神性、素朴さと特異性は、全ての時代の神学者と哲学者が、人の姿でのそのような超自然的な贈与からあえて教義を形成するか、または精霊的な束縛の神学体系を作成することを効果的に制止されなければならないというそのような衝撃的かつ魅力的な人-救済と神-啓示の絵を提示している。宇宙は、愛の精霊が物質的困難に打ち勝ち、物理的起源の事実に打ち勝つ人間をイエスにおいて形成した。

195:10.3 (2084.3) いつも心に留め置きなさい—神と人は互いを必要とすることを。双方は、宇宙の究極の神性の目標における永遠の人格の経験の完全で最終の到達に互いに必要である。

195:10.4 (2084.4) 「神の王国は、あなたの中にある」は、父が、生きており愛している精霊であるという宣言の次に、イエスの表明の中でおそらく最大のものであった。

195:10.5 (2084.5) あるじのために魂を勝ちとることにおいて、それは、人とその世界を変える強制的な最初の１キロメートル、すなわち義務または慣例ではなく、むしろ愛で同胞を理解し、また人間存在のより高い、しかも神性の目標に向かう精霊的な指導にしたがって押しやるために手を伸ばすイエスの信奉者を示す無料の奉仕と自由を好む献身の２キロメートル目である。キリスト教は、今でも進んで最初の1キロメートルを行くが、少数の本物の2キロメートル走者—生きて、愛し、そして仕えることを弟子達に教えたように本当に生きて、愛するイエスの追随者と名乗る僅かな者—しかいないので、人類は、道徳的な暗闇で苦しみ躓いている。

195:10.6 (2084.6) 王国に関するイエスの兄弟愛の精霊的な再生によって新しい、変容する人間社会を築く冒険への呼び掛けは、肉体の仲間として地球を歩き回った日々から人が奮起していなかったようにではなく、イエスを信じるすべての者を感動させなければならない。

195:10.7 (2084.7) 神の現実を否定する社会的、あるいは政治的体制は、人間の文明の前進にどのような建設的かつ永続的方法でも貢献できない。しかし、キリスト教は、今日それが、細分され俗化されるとき、その一層の進歩に最も重大なただ一つの障害を提示する。これは、特に東洋に関して真実である。

195:10.8 (2084.8) 教会主義は、天の王国の精霊的な交友において人の兄弟愛というイエスの信仰仲間のその生きた信仰、発達する精霊、および直接の経験とすぐには、また永遠に相容れない。過去に達成された伝統を保存するという賞賛に値する願望は、しばしば時代遅れの崇拝体系の防衛に通じる。古代の考えの仕組みを促進する善意の願望は、現代人の拡大し、前進する精霊的な切望を満たすように考案された新しい、適切な手段と方法の提供を

効果的に阻む。同様に、20世紀のキリスト教会は、立派に、しかし真の福音—ナザレのイエスの教え—の即座の進歩に対する完全に無意識の障害として立っている。

195:10.9 (2085.1) 福音のキリストに忠誠を快く与える多くの熱心な人々は、キリストの人生やその教えの精神をあまり示さず、またキリストが築いたと誤って教えてきた教会を熱狂的に擁立することが、非常に困難であるとわかる。イエスは、いわゆるキリスト教会を設立しなかったが、自分の本質と一致するあらゆる方法で、地上での生涯の仕事の最良の実在する主唱者としてそれを育てた。

195:10.10 (2085.2) もしキリスト教会が、敢えてあるじの取り組みを支持しさえすれば、何千人もの明らかに無関心な若者は、そのような精霊的な仕事に参加するために殺到し、この大いなる冒険をずっとなし遂げていくことを躊躇わないであろう。

195:10.11 (2085.3) キリスト教は、自身の標語の１つに表現される運命に深刻に直面している。「分かれ争う家は、立っていられない。」非キリスト教世界は、分派したキリスト教世界に決して降伏しないであろう。生きているイエ

スは、キリスト教のありうる統一の唯一の希望である。真の教会—イエスの同胞—は、見えない、精霊的な、そして必ずしも均一性によってではなく、統一によって特徴づけられる。均一性は、機械学的な自然の物質界の目印である。精霊的な統一は、生きているイエスとの信仰統一の産物である。見える教会は、神の王国の不可視の、精霊的な兄弟関係の進展を長く妨げることを拒否しなければならない。そして、この兄弟関係は、組織化された社会的な体制とは対照的に生体となるように運命づけられている。それは、そのような社会的な組織を利用するであろうが、それらによって取って代わられてはならない。

195:10.12 (2085.4) しかし、20世紀のキリスト教でさえ侮ってはいけない。それは、多くの時代の多くの民族の神を知る人間の道徳的な複合的洞察の所産であり、そしてそれは、本当に、善に対する地球の最も優れた力の1つであり、それゆえに、その固有の、後天性の欠陥にもかかわらず、誰もそれを軽視すべきではない。キリスト教は、いまだに強力な道徳感情で反応する人の心を何とかして動かしている。

195:10.13 (2085.5) しかし、商業と政治における教会の係わり合いには、弁解の余地はない。そのような邪悪な提携は、あるじへの極悪の裏切りである。そして、真実の本物の愛好者は、この強力な制度化された教会が、しばしば平気で新生の信仰を窒息させたり、正統でない衣類でたまたま現れた真実運搬者達を迫害してきたことを長らく覚えているであろう。

195:10.14 (2085.6) 人が世界に崇拝のそのような様式を好んでこなかったとしたならば、そのような教会は、残存しなかったということは、残念なほどに本当である。精霊的に怠惰な多くの人間が、儀式的かつ神聖な伝統をもつ古代の、権威ある宗教を切望する。人間の進化と精霊的な進展は、すべての人が、宗教権威を不要とするにはとても十分ではない。そして、王国の目に見えない兄弟関係は、人が本当に神の精霊に導かれる息子になることを望みさえすれば、様々な社会的、気質的な階級のこれらの家族集団を容易に包むかもしれない。しかし、イエスのこの兄弟関係においては、宗派の対立も集団の怨みも、さらには道徳的な優越性と精霊的な確実性の主張の場所はどこにもない。

195:10.15 (2086.1) キリスト教のこれらの様々な分類は、西洋文明の様々な民族の間で信者志望の多数の異なる種類に役立つかもしれないが、東洋の民族にイエスの福音を伝達しようとするとき、キリスト教世界のそのような分割は、深刻な弱点を提示する。これらの民族は、ますますイエスについての宗教となっているキリスト教から、やや違った、いくらか離れたイエスの宗教があるということをまだ理解していない。

195:10.16 (2086.2) ユランチアの大きな希望は、現代の自称の追随者の多くの家族を愛の奉仕において精霊的に結びつけるイエスの救いの知らせの新しく、拡大された提示によるイエスの新しい顕示の可能性にある。

195:10.17 (2086.3) いかに生活設計と性格発達に従事するかを若者に教える仕事により多く注意を向けようとするならば、非宗教的な教育さえ、このすばらしい精霊的な復興を助けることができる。全ての教育目的は、人生の最高の目的、堂々とし、均衡のとれた人格開発を促進することでなければならない。道徳的な規律の教育が、多大の自己満足の代わりにかなり必要である。そのような基盤

に、宗教は、その精霊的な誘因を人間生活の拡大と質向上に、さらには永遠なる人生の保安と強化にとってさえ貢献するかもしれない。

195:10.18 (2086.4) キリスト教は、即席に作られた宗教であり、したがって、それは、低速ギアで作動しなければならない。高速ギアの精霊的な作動は、イエスの真の宗教の新しい啓示とより一般的な受け入れを待たなければならない。しかし、磔にされた大工の平凡な弟子達が、300年でローマ世界を征服し、次には、ローマを打倒した野蛮人に勝利し続けたそれらの教えを広めたことを見るにつけても、キリスト教とは、強力な宗教である。この同じキリスト教は、ヘブライの神学とギリシアの哲学の全体の流れを征服した—吸収し、高めた。そして、次には、このキリスト教の宗教が、神秘と異教の過剰投与の結果1,000年以上もの昏睡状態になったとき、それ自体を復活し、実質的に全西洋世界を再奪取した。キリスト教は、イエスの教えを不滅にする教えを十分に含んでいる。

195:10.19 (2086.5) キリスト教がより多くのイエスの教えを把握することができさえすれば、現代人の新しく、ますます複雑な問題の解決の援助に当たり、それは、さらに多くのことができるであろうに。

195:10.20 (2086.6) 全世界の心に、西洋文明の社会制度、産業生活、道徳的な規範の一部として同一視されるようになってきたことから、キリスト教は、大きな悪条件の下で損なわれている。このように、キリスト教は、理想主義のない科学、主義のない政治、仕事のない富、抑制のない娯楽、人格を持たない知識、良心のない権力、道徳のない産業を黙認している罪の意識にぐらつく社会を無意識のうちに後援してきたように見える。

195:10.21 (2086.7) 現代のキリスト教の希望とは、キリスト教が、西洋文明の社会制度と産業政策の後援をやめ、同時にキリスト教が、非常に勇敢に賞揚する十字架の前に恐れ入って額づき、そこで必滅者がこれまでに聞くことができる最も偉大な真実—神の父性と人の兄弟愛に関する生きた福音—をナザレのイエスから新たに学ぶということである。

論文 196
イエスの信仰

196:0.1 (2087.1) イエスは、神に対する崇高で真心を込めた信仰を持っていた。かれは、人間生活の浮沈を経験したが、信仰上で神の加護と導きへの確実性を決して疑わなかった。彼の信仰は、神の臨場、内在する調整者の活動の洞察からの当然の結果であった。その信仰は、伝統的でもなく、単に知的でもなかった。それは、完全に個人的であり、純粋に精霊的であった。

196:0.2 (2087.2) 人間イエスは、神を真実で、美しく善であると同時に、神聖、正当、かつ偉大であると見た。神性のこれらのすべての属性を心の中で「天なる神の意志」として焦点を合わせた。イエスの神は、全く同時に「イスラエルの聖なるもの」と「天の生きていて情愛深い父」であった。父としての神に対するイエスの概念は、独自のものではなかったが、神の新しい顕示を遂げることにより、そしてあらゆる必滅の創造物は、愛のこの父の子、神の息子であると宣言することによりその考えを高尚な経験へと大きく向上させた。

196:0.3 (2087.3) イエスは、宇宙との戦いや、敵対的で罪深い世界との死闘に藻掻く人間がするように、神に対する信仰に執着しなかった。かれは、単なる困難の真っ只中の安らぎとして、または危機に直面している絶望の中の慰めとして信仰に向かわなかった。信仰は、不快な現実と生活の悲しみのための単なる幻影的な埋め合わせではなかった。人間生活のすべての当然の困難や現世の矛盾に直面するとき、かれは、神への最高かつ疑う余地のない信頼からの平静さを経験し、また、信仰により、天の父のまさしくその臨場で生きる途方もない喜びを感じた。そして、勝利を収めたこの信仰は、実際の精霊到達の生きた経験であった。人間の経験の価値に対するイエスの大きな貢献は、彼が、天の父についてのそれほど多くの新しい考えを明らかにしたということではなく、むしろ、とても壮大に、人間的に神への生きた信仰の新しくより高い型を示したということであった。いまだかつてこの宇宙の全世界において、人間のだれ一人の人生においても、神が、ナザレのイエスの人間の経験におけるようにそのような生ける現実になったものはこれまでになかった。

196:0.4 (2087.4) ユランチアでのあるじの人生において、局部的創造のこの世界と他のすべての世界は、新しくてより高度の型の宗教、すなわち宇宙なる父との個人の精霊的な関係に基づく、そして個人の本物の経験の最高権威によって完全に有効にされる宗教を発見する。イエスのこの生ける信仰は、知的な沈思以上のもであり、それは、神秘的な冥想ではなかった。

196:0.5 (2087.5) 神学は、信仰を固定し、定式化し、定義し、教義化するかもしれないが、イエスの信仰の人間の人生においては、個人的で、生きており、独創的で、自発的かつ純粋に精神的であった。この信仰は、伝統への畏敬でもなく、イエスが神聖な教義として保持した知的な信念でもなく、むしろ自分の中に確実に抱いていた崇高な経験であり、深遠な信念であった。かれの信仰は、まったく本物であり、すべてを包含しており、精霊的なあらゆる疑いも一掃し、また闘争的なあらゆる願望を事実上粉々にした。何も、この熱心で、崇高で、ひるまない信仰の精霊的な停泊からイエスを引き離すことはできなかった。明白な敗北に直面し、または失望や切迫する絶望の苦しみにさえ、かれは、恐れることなく、精霊的な無

敵を完全に意識して神性の臨場に冷静に臨んだ。イエスは、断固たる信仰をもつ爽快な保証を味わい、人生の試練の状況の各々ににおいて、父の意志に疑わない忠誠心を絶えず示した。そして、この見事な信仰は、不名誉な死の残酷かつ破壊的な脅威にさえ勇敢であった。

196:0.6 (2088.1) 宗教的な才能において、強い精霊的な信仰は、多くの場合、直接に破壊的な狂信へと、宗教的な自我の誇張へつながるが、イエはそうではなかった。かれは、この精霊的な高揚が、神との個人の経験のまったく無意識で、自然発生的な魂の表現であったので、かれは、その驚異的な信仰と精霊到達による実際の人生において不利に影響を受けなかった。

196:0.7 (2088.2) イエスのすべて燃え尽き、不屈である精霊的な信仰は、決して狂信的にはならなかった、というのも、それは、実用的で、通常の社会的、経済的かつ道徳的な生活状況に比例している価値に関し、均衡の良くとれた知的判断をもって当たり、決して逃げようとはしなかったから。人の息子は、見事に統一された人間の人格であった。かれは、神性の生命を完全に授けらた存在体であ

った。かれは、地球で一人格として機能する結合的な人間そして神性の存在体としてまもた、みごとに調和していた。あるじは、常に、魂の信仰と豊かな経験に基づく賢明な評価に調和させたのであった。個人の信仰、精霊的な望み、道徳的な献身は、鋭い現実の認識と人間すべての忠誠心—個人の名誉、家族愛、宗教的な義務、社会的義務、および経済上の必要性—神性さとの調和したつながりの無比の宗教統一において常に相関していた。

196:0.8 (2088.3) イエスの信仰は、神の王国に見つけられるものとしてすべての精霊価値を心に描いた。それゆえに、かれは、「最初に、天国の王国を探しなさい。」と言った。イエスは、王国の進歩的かつ理想の親交における「神の意志」の到達と実現を見た。彼が弟子に教えた祈りのまさしくその核心は、「あなたの王国は来る、あなたの意志は為される」ということであった。このように王国が神の意志から成ると考え、かれは、驚くばかりの無私無欲と限りない熱意でその大義実現に専念した。しかし、彼のすべての激しい任務と桁外れの人生を通じて、熱狂者の狂暴性も宗教的な自己中心主義者の上滑りな内容の無さも決して現れなかった。

196:0.9 (2088.4) あるじの全人生は、一貫してこの生きた信仰、この崇高な宗教経験に影響を受けた。この精霊的な態度は、完全に彼の考えと感情、信じることと祈り、教えと説教を支配した。息子の個人のこの信頼は、天の父の導きと保護の確信と安心感にある。精霊の現実である深遠な贈り物を彼の独特な人生に与えた。それでも、神性との緊密な関係のこの非常に深い意識にもかかわらず、このガリラヤ人、神のガリラヤ人は、良き師と呼び掛けられると、即座に「なぜ私を良いと呼ぶのか。」と応えた。我々は、そのように見事な無私無欲に直面すると、宇宙なる父がいかに、それほどまでにイエスに自分を完全に顕示し、イエスを通して自分を領域の必滅者に明らかにすることが可能であるかを理解し始める。

196:0.10 (2088.5) 領域の人間としてのイエスは、すべての捧げ物の最たる物、つまり神の意志を為すという厳然たる奉仕への献身と情熱を神に提示した。イエスは、完全に父の意志の観点から、つねに一貫して宗教を解釈した。人が、あるじの経歴を研究するとき、祈りや宗教生活の他のどの特徴に関しも、彼が教えたことよりも、彼がしたことに注目しなさい。イエスは、決して、宗教義務とし

て祈らなかった。イエスにとっての祈りは、精霊的な態度の真摯な表現、魂の忠誠の宣言、個人の献身的愛の詳述、感謝の祈りの表現、感情的な緊張の回避、対立の防止、思考過程の高揚、願望の高尚化、道徳的な決断の擁護、思考の強化、より高い意向への鼓舞、衝動の神聖化、視点の明確化、信仰の宣言、意志の超越的な付託、確信の崇高な表明、勇気の顕示、発見の宣言、至上の献身の告白、献身の確認、困難調整の手段、そして、利己主義、悪、罪に向かう人間の全性向に抵抗するための結合された魂の力の勢いの流動化であった。かれは、父の意志を為すまさにそのような祈りのこもった奉献の人生を送り、まさにそのような人生を勝利のうちに終わらせた。並ぶもののないその宗教生活の秘密は、神存在のこの意識であった。そして、かれは、悟性の祈りと偽りのない崇拝—神とのうち壊されることのない親交—そして、それは、魅惑するもの、声、直感、あるいは異常な宗教実践によるものではなく、神存在のこの意識によって遂げられた。

196:0.11 (2089.1) 地球のイエスの人生において宗教は、生きた経験、精霊的な崇敬から実践的な正義への、直接かつ個

人的な活動であった。イエスの信仰は、神性の精霊の卓越した実を結んだ。彼の信仰は、子供のそれのように未熟ではく、軽信に基づくものではないが、様々な意味で、疑いを知らない子供の心の信頼に酷似していた。かれは、子供が親を信じるように神を深く信じた。かれは、宇宙に対する深遠な信頼—まるで子供が、その親を中心とする環境に抱くような信頼を持っていた。宇宙の根本的な善に対するイエスの心からの信仰は、その地球環境の安全の点に対しての子供の信頼に非常に似通っていた。子供が俗世の親に寄り掛かるように、イエスは、天の父に頼り、その熱い信仰は、天の父の加護の確かさを決して一瞬も疑わなかった。かれは、恐怖、疑問、懐疑に由々しく妨害されなかった。不信仰が、イエスの人生における自由で独自の表現を抑制することはなかった。かれは、成熟した人間のたくましく、賢明な勇気、そして信じる子供の誠実で心を許す楽天主義とを抱き合わせてもっていた。彼の信仰は、恐怖を欠くほどの信頼の高さにまで成長した。

196:0.12 (2089.2) イエスの信仰は、子供の信頼の純粋さに達した。彼の信仰は、絶対かつ疑わないものであったので、

仲間との接触の魅力に、そして宇宙の不思議に反応するものであった。神への依存の彼の感覚は、非常に徹底しており、自信があったので、それは、絶対的な個人の確信の喜びと保証をもたらした。彼の宗教経験に、躊躇の素振りはなかった。成熟した人間のこの巨大な知性の中にある子供の信仰は、宗教意識に関連するすべての問題において最高に支配した。彼がかつて「幼子のようにならない限り、王国には入らないであろう」と言ったことは、奇妙ではない。イエスの信仰は、無邪気ではあったが、それは、すこしも子供じみたものではなかった。

196:0.13 (2089.3) イエスは、弟子にイエス自身を信じることを要求しないが、むしろ共に信じるために、神の愛の現実を信じ、そして天の父との息子性の保証の確信を十分の自信をもって受け入れることを求めた。あるじは、すべての追随者が、彼の卓越した信仰を完全に共有するべきであるということを望んでいる。イエスは、単に彼が信じたことを信じるだけではなく、彼が信じたように信じることを最も感動的に追随者に喚起した。これが、イエスの1つの至上要求「私に続きなさい」の完全な意味である。

196:0.14 (2090.1) イエスの地球での人生は、1つの重要な目的—父の意志を為し、信心深く、信仰にそって人間生活を送ること—に捧げられた。子供のそれのように、イエスの信仰は、信じて疑わないものであったが、全く図々しさのないものであった。かれは、たくましく男らしい決断をし、勇敢に様々の期待はずれに向かって、断固として驚異的な困難を乗り越え、怯むことなく義務の厳しい要求に直面した。イエスが信じたことやイエスが信じたように信じるということには、強い意志と不断の信頼を必要とした。

1. イエス—人間

196:1.1 (2090.2) 父の意志への献身と、人への奉仕へのイエスの献身は、実に人間の決意や決断力それ以上のものであった。それは、愛のそのような無条件の贈与への全心からの自己の奉献であった。マイケルの主権事実がいかに遠大であっても、人間イエスを人々から連れ去ってはならない。あるじは、人間として、同時に神として天上に昇った。あるじは人間に属し、人間はあるじに属している。奮闘している必滅者から人間イエスを連れ去るくらいに曲解されるようでは、その宗教そのものは、何と不

運であることか。キリストの人間性あるいはその神性に対する議論において、ナザレのイエスが、信仰によって、神の意志を知り、神の意志を為すことを達成した信心深い人であったという救いの真実を曖昧にさせてはならない。イエスは、これまでにユランチアで生活したことがある真に最も信仰の厚い人であった。

196:1.2 (2090.3) 神学の伝統と19世紀の宗教教義の中で、イエスの埋葬からの人間イエスの比喩的な復活を目撃するための時は熟している。ナザレのイエスは、栄光を受けたキリストのすばらしい概念のためにさえ、もはや犠牲にされてはならない。もしこの顕示によって、人の息子が、伝統的な神学の墓から取り戻され、イエスの名をもつ教会、そして他のすべての宗教に生きているイエスとして提示されるようであれば、何という卓越した奉仕であることか。キリスト教信者の親交は、父の意志を為すことや人の寡欲な奉仕への宗教的な献身のあるじの実生活の実例に、「後に続く」ことを可能にするような信仰の、そして生きる習慣のそのような調整を躊躇わないであろう。自称キリスト教徒は、自惚れの強さの露呈や、社会的な体面や利己的な経済不均衡の自給自足の、中途半端

な親交を恐れるのか。もしガリラヤのイエスが、個人の宗教生活の理想として必滅の人間の心と魂で復帰するならば、組織的なキリスト教は、伝統的な教会の権威の可能な危険性、さらには打倒を恐れるのか。本当に、もしイエスの生きた宗教が、イエスに関する神学の宗教に突然代わるならば、誠に、キリスト教の文明の社会的な再調整、経済変化、道徳的な回復と宗教的な修正は、抜本的であり、画期的であろう。

196:1.3 (2090.4)「イエスに続く」ことは、個人的にその宗教信仰を共有し、人への寡欲の奉仕のあるじの人生の精神に参加することを意味する。人間の生活で最も重要なものの1つは、イエスが何を信じたかを知り、彼の理想を見い出し、彼の高い人生目的への到達を目差して努力することである。全ての人間の知識の最大の価値であるそれは、イエスの宗教人生と彼がそれをどう生きたかについて知ることである。

196:1.4 (2090.5) 一般人は、快くイエスに耳を傾けたし、もしそのような真実が、再び世界に向けて宣言されるならば、かれらは、奉献された宗教的な動機づけの誠実な人間生

活の提示に再度応じるであろう。彼が人々の中の一人、控え目な俗人であったので、彼らは快く耳を傾けた。世界の最も偉大な宗教の教師は、実に俗人であった。

196:1.5 (2091.1) 肉体のイエスの外面的な人生を文字通り模倣することが、王国の信者の狙いであってはならず、むしろその信仰を共有することである。彼が神を信じたように神を信じ、彼が人を信じたように人を信じること。イエスは、神の父性も人の兄弟愛のいずれについても決して議論しなかった。かれは、一方の生ける実例であり、他方の奥深い実証であった。

196:1.6 (2091.2) ちょうど人が、人間の意識から神性の認識へ進まなければならないように、イエスは、人の本質から神の本質の意識へと昇っていった。あるじは、彼の人間の知性の信仰と内なる調整者の行為の結合の成就により人間から神性へのこの大いなる上昇を果たした。神格の全体性への到達の事実認識(完全に人類の現実をずっと意識している間) は、進歩的な神性化の信仰意識の7段階を伴った。進歩的な自己実現のこれらの段階は、あるじの

贈与経験において次の驚くべき出来事により区分された。

196:1.7 (2091.3) 1. 思考調整者の到着

196:1.8 (2091.4) 2. 12歳頃にエルサレムで現れたイッマーヌエルの使者

196:1.9 (2091.5) 3. 洗礼に付随する徴候

196:1.10 (2091.6) 4. 変容の山における経験

196:1.11 (2091.7) 5. モロンチア復活

196:1.12 (2091.8) 6. 精霊上昇

196:1.13 (2091.9) 7. 彼の宇宙の無制限の主権を授ける楽園の父の最終的な抱擁。

2. イエスの宗教

196:2.1 (2091.10) いつの日か、キリスト教会の改革は、我々の信仰の作者と完成者であるイエスの純粋な宗教の教えに戻ることができるほどに深く根を下ろすかもしれない。人は、イエスについての宗教を説くことはできるが、必

然的に、イエスの宗教生活を送らなければならない。五旬節の熱狂の中、ペトロスは、新しい宗教、復活と栄光のキリストの宗教を意図せずに開始した。使徒パウーロスは、後にこの新しい福音をキリスト教、自身の神学の観点を具体化し、ダマスカス街道でのイエスに接した自身の個人の経験を描写している宗教へと変えた。王国の福音は、ガリラヤのイエスの個人の宗教的な経験に基づいている。キリスト教は、ほとんど使徒パウーロスの個人の宗教的な経験だけに基づいている。新約聖書のほぼ全体は、イエスの意味深く訴えかける信仰生活の描写ではなく、パウーロスの宗教経験に関する議論とその個人の宗教的な信念の描写に注がれている。この論述の唯一注目に値する例外は、マタイオス、マルコス、ルカスからのある部分は別として、ヘブライ人への手紙とジェームスの使徒書簡である。ペトロスでさえ、その文書の中で、あるじとの個人の宗教生活に一度だけ振り向いたに過ぎない。新約聖書は、素晴らしいキリスト教の記録であるが、それは、ただ貧弱にイエス的である。

196:2.2 (2091.11) 肉体のイエスの人生は、原始の畏敬と人間の崇敬の初期の考えから最終的に父とのイエスの同一性の

意識のその高度で発揚された状態に到着するまでの長年の個人の精霊的な親交の宗教的な成長を描いている。そして、このように、イエスは、1つの短い人生において、人が、地球に始まり、そして通常は前-楽園経歴の連続する段階の精霊の訓練所においてその長い滞在の終わりにのみ到達する宗教的な精霊的な進行のその経験を踏破した。イエスは、個人の宗教経験の信仰の確信に対する純粋に人間的な認識から自身の神性の明確な実現の高尚な精霊の高さへ、そして宇宙の管理における宇宙なる父との近密な関係の意識へと進歩した。彼に良き師と呼び掛けた者に、かれは、「なぜ私を良いと呼ぶのか。神以外に良い者はいない」と即座に自然に言わせた人間的な依存の控え目な状態から「あなた方のうちの誰が私を有罪と宣告するのか。」と彼に叫ばせた神性到達のその高尚な意識へと進歩した。そして、人間から神性へのこの進歩する上昇は、もっぱら人間の到達であった。こうして、神性に達したとき、イエスは、まだ同じ人間イエス、人の息子ならびに神の息子であった。

196:2.3 (2092.1) マルコス、マタイオス、ルカスは、神性意志を確かめ、その意志を為すために見事な努力で携わる人間

イエスの絵について何かを保持している。ヨハネは、イエスが、完全な神格の意識で地球上を歩きながら勝利を収めた彼の絵を提示する。あるじの人生を研究した者達の重大な誤りは、一部の者が、完全な人間としてイエスを思いついたり、他の者が、単に神性として考えてきたということである。その全経験の中で、今でもそうであるように、イエスは、実に人間であり神であった。

196:2.4 (2092.2) しかし、最も重大な間違いは、人間イエスが宗教があると認められる一方で、およそ1夜のうちに神性イエス(キリスト)が、宗教になるということであった。パウーロスのキリスト教は、神性のキリストの崇拝を確かにはしたが、それは、個人の信仰の果敢さと内在する調整者の英雄的資質によって神性と1つになるために人間性の低い段階から昇り、こうして、すべての死すべき者が人間性から神性まで昇れるように新しい生ける道となったガリラヤの奮闘している勇敢な人間イエスをほぼ完全に見失った。精神性の全段階と全世界における人間は、最も低い精霊段階から最も高い神性価値へと、すべての個人の宗教経験の始めから終わりへと進歩するうち

に、イエスの個人の人生に自らを元気づけ奮起させるものを発見するかもしれない。

196:2.5 (2092.3) 新約聖書を著わす時点で、著者達は、上昇したキリストの神格を最も深く信じたばかりでなく、かれらは、天の王国を完成するためのキリストの地球への即座の帰りをひたむきに心から信じていた。あるじの即座の帰還に対するこの強い信仰は、あるじの純粋に人間としての経験と属性を描いたそれらの言及を記録から省略する傾向と非常に関係があった。キリスト教の全体の運動は、ナザレのイエスの人間の絵から復活したキリスト、栄光に輝く、間もなく戻りくる主イエス・キリストの高揚へと遠く離れていく傾向があった。

196:2.6 (2092.4) イエスは、神の意志を行動に起こし、人間の兄弟愛に仕えることで個人の経験の宗教を創立した。パウーロスは、栄光に輝くイエスが崇拝の対象になり、兄弟愛が神性のキリストの仲間の信者から成る宗教を設立した。イエスの贈与において、これらの2つの概念は、彼の神性-人間の人生に潜在的であり、そしてそれは、追随者が、イエスの地球人生で分かち難く結びつけられた

ように、また最初の王国の福音にとてもすばらしく提示されたように、あるじの人間と神性双方の本質に適切な認識を与えたかもしれない統一された宗教を創立できなかったことは、誠に遺憾なことである。

196:2.7 (2093.1) 彼が世界で最も一心不乱で、献身的な宗教家であったということを覚えてさえいるならば、人は、イエスの強い表明のいくつかに衝撃も受けず、撹乱もされないであろう。かれは、完全に奉げた人間、父の意志を為すことに素直に打ち込んだ必滅の人間であった。彼の明らかに厳しい発言の多くは、追随者への命令というよりは、個人の信仰告白であり、献身の誓約であった。そして、一つの短い人生で人間の心の征服におけるそのような並はずれた進歩をもたらすことができたのは、まさにこの目的一筋の、寡欲な献身であった。彼の宣言の多くは、すべての追随者に要求したというよりは、むしろ自分自身に要求した告白として考えられるべきである。王国の大義への献身において、イエスは背水の陣を敷いた。かれは、すべての愛着を父の意志を為すために犠牲にした。

196:2.8 (2093.2) イエスは、彼らが、通常、誠実で敬虔であったので貧者を祝福した。イエスは、彼らが、通常、奔放で無宗教であったので、富者を非難した。かれは、それと同時に無宗教な貧者を非難し、奉献し、信心深い富者を褒めたのであった。

196:2.9 (2093.3) イエスは、人が世界で満足するようにに導いた。かれは、禁制の奴隷状態から彼らを救い出し、世界が基本的に悪でないことを教えた。イエスは、地球の人生から逃げることを切望しなかった。かれは、肉体での生活の間、父の意志を受け入れてもらえるような形でする業を習得した。かれは、現実世界のまさにその真ん中で理想的な宗教生活に達した。イエスは、人類に悲観的なパウーロスの視点を共有しなかった。あるじは、人を神の息子と見なし、生存を選んだ人々のために壮大で永遠の未来を予見した。かれは、道徳的な懐疑論者ではなかった。かれは、人を否定的にではなく肯定的に見た。かれは、ほとんどの人が邪悪であるというよりも、むしろ弱いと、堕落しているというよりも、むしろ取り乱していると見た。しかし、その状況がいかようであろうとも、人は皆、神の子であり、自分の同胞であった。

196:2.10 (2093.4) かれは、時間と永遠において自身を重んじることを人に教えた。イエスが人に置いたこの高い評価のために、人類への不断の奉仕に自身を捧げることを望んだ。そして、それは、黄金律を彼の宗教における不可欠な要因にしたこの限りある者の無限の価値であった。イエスが持つこの並はずれた信仰に高揚されない人間がある得るであろうか。

196:2.11 (2093.5) イエスは、社会の前進に対する何の規則も提供しなかった。彼の任務は、宗教的な任務であり、宗教は、排他的に個々の経験である。社会の最高度の到達に対する究極の目標は、決して神の父性の認識に基づくイエスの人間の兄弟愛を超えることを望むことはできない。すべての社会的到達の理想は、この神性の王国の接近においてのみ実現できる。

3. 宗教の至高性

196:3.1 (2093.6) 個人の、精霊的な宗教経験は、人間のたいていの困難に有効な解決策である。それは、すべての人間の問題の効果的な選別者であり、査定者であり、調整者である。宗教は、人間の問題を取り除いたり、破壊しない

が、それらを分解し、吸収し、照らし、超えたりする。真の宗教は、すべての人間の必要条件に効を奏する調整のために人格を統一をする。信仰—内在する神性の存在の積極的な導き—は、神を知る人間が、宇宙なる第一原因をそれとして認識する知的な論理とこの第一原因が、かれ、つまりイエスの福音の天の父、人間救済の人格の神、であると断言する魂の明確なそれらの主張との間に存在する大きな隔たりに橋渡しをすることを間違いなく可能にする。

196:3.2 (2094.1) 普遍的な現実には３要素だけがある。事実、考え、関係。宗教的な意識は、これらの現実を科学、哲学、真実として確認する。哲学は、これらの活動を理由、知恵、信仰—物理的な現実、知的な現実、精霊的な現実—として見る傾向にある。我々は、これらの現実を事物、意味、価値として呼ぶ習慣がある。

196:3.3 (2094.2) 現実の進歩的な理解は、神接近と同じである。神の探求、現実との自己同一性の意識は、自己完成—自己全体、自己統合—の経験に相当する。全現実を経験す

ることは、神の完全な実現、神を知る経験の究極状態である。

196:3.4 (2094.3) 人間の生涯の完全な要約は、人は事実によって教育され、知恵によって気高くされ、そして宗教信仰によって救われる—正当化される—という知識である。

196:3.5 (2094.4) 物理的な確実性は、科学の理論にある。道徳的な確実性は、哲学の知恵に、精霊的な確実性は、本物の宗教上の経験の真実に。

196:3.6 (2094.5) 人の心は、それが完全に物質的ではないので、精霊的な洞察の高い段階と神性価値の対応する範囲を達成することができる。人の心には、精霊の核—神性臨場の調整者—がある。人間の心に宿るこの精霊の 3 つの別個の証がある。

196:3.7 (2094.6) 1. 人道的な親交—愛。純粋に動物の心は、自己保護のために社交的であるかもしれないが、精霊-内在の識者だけが、利己的ではなく愛他的で無条件に情愛深い。

196:3.8 (2094.7) 2.、宇宙の解釈—知恵。精霊-内在の心だけが、宇宙は、個人にとり好意的であるということが理解できる。

196:3.9 (2094.8) 3. 生活の精霊的な評価—崇拝。精霊-内在の人間だけが、神性臨場を認識し、この神性臨場に、またはこの神性臨場と共に最大限の経験を達成しようとすることができる。

196:3.10 (2094.9) 人間の心は、真の価値を創造しない。人間の経験は、宇宙洞察を与えない。人間の心が、洞察、道徳的な価値の認識、および精霊的な意味の認識に関してできるすべては、発見し、解釈し、選択することである。

196:3.11 (2094.10) 宇宙の道徳的な価値は、人間の心の3つの基本的判断、または選択で知的な所有物になる。

196:3.12 (2094.11) 1. 自己判断—道徳的選択。

196:3.13 (2094.12) 2. 社会的判断—倫理的選択。

196:3.14 (2094.13) 3. 神の判断—宗教的選択。

196:3.15 (2094.14) このように、すべての人間の進歩は、結合している顕示的な進化の方法に作用されているように見える。

196:3.16 (2094.15) 人の中に神性愛好者が住まない限り、人は利他的に、精霊的に愛せないであろう。心に通訳者が住まない限り、人は、宇宙の統一性に本当に気づくことができない。人は、評価者が共に住まない限り、ともすれば道徳的な価値を評価し、精霊的な意味を認めることができないであろう。そして、この恋人は、無限の愛のまさしくその源から来る。この通訳者は、宇宙統合の一部である。この評価者は、神性の、そして永遠の現実のすべての絶対価値の中枢と根源の子供である。

196:3.17 (2095.1) 宗教的な意味をもつ道徳的な評価—精神的な洞察—は、善と悪、真実と誤り、物質的と精霊的、人間と神性、時間と永遠の間における個人の選択を暗示する。人間の生存は、この精霊価値の選別者—内住する通訳者と統一者—により選択されたそれらの価値を選ぶことに、人間の意志が奉献することに大いに依存している。個人の宗教的な経験は、二相、人間の心における発

見と内住する神霊による顕示からなる。過度の洗練を通して、あるいは見せかけの宗教家の無宗教的な行為の結果、人は、あるいは人の1世代でさえ、内住する神を発見する彼らの努力を中断することを選ぶかもしれない。かれらは、進歩せず、神性の顕示には到達できないかもしれない。しかし、内住する思考調整者の存在と影響ゆえに、精霊的な非進行のそのような態度は、長く持続できない。

196:3.18 (2095.2) 内住する神性の現実のこの奥深い経験は、自然科学の粗野な物質主義的な技術を永遠に超える。人は、精霊的な喜びを顕微鏡の下に置くことはできない。人は、愛を秤に掛けられない。人は、道徳的な価値を測定することはできない。精霊的な崇拝の質を見積もることも、人は、できない。

196:3.19 (2095.3) ヘブライ人には、道徳崇高の宗教があった。ギリシア人は、美の宗教を発展させた。パウーロスとその相談相手達は、信仰、希望、慈善の宗教を創立した。イエスは、愛の宗教、人間の兄弟愛の奉仕におけるこの

愛を共有することからくる喜びと満足を伴う父の愛への安心感、を明らかにし、例証した。

196:3.20 (2095.4) 人は、熟考の道徳的な選択の度に、新たな神性の魂の侵入をすぐに経験する。道徳的な選択は、外的状況への内面の反応の動機として宗教を構成する。しかし、そのような本当の宗教は、まったく主観的な経験ではない。それは、総合的な客観性—宇宙とその創作者に対する意味ある知的な反応に携わっている個人の主観性の全体を意味する。

196:3.21 (2095.5) 愛し、愛される絶妙かつ並外れの経験は、純粋に主観的であるがゆえに、単なる精神性の幻想ではない。人間と関係している唯一の真に神性であり、客観的現実、つまり思考調整者は、排他的に主観的な現象として人間の観察に明らかに機能する。最高度の客観的な現実、神との人の接触は、神を知り、崇拝し、神の息子の関係に気づくという純粋に主観的な経験である。

196:3.22 (2095.6) 真の宗教的な崇拝は、自己欺瞞の空しい独白ではない。崇拝は、神のように本物であるもの、また現実のまさにその源であるものとの個人の親交である。人

は、　崇拝によってより良くあることを切望し、その結果ついには最善に到達する。

196:3.23　(2095.7)　真、美、善の理想化と試みの奉仕は、本物の宗教経験—精霊的な現実—の代用品ではない。心理学と理想主義は、宗教的な現実に相当しない。人間の知力の投影は、いかにも誤った神々—人の姿の神々—を考案するかもしれないが、本物の神-意識には、そのような起源はない。神-意識は、内住する精霊に常駐している。人間の宗教制度の多くは、人間の知識人の定式化から来るが、神-意識は、必ずしも宗教的な奴隷制度のこれらの異様な体制の一部であるというわけではない。

196:3.24　(2095.8)　神は、人の理想主義の単なる発明ではない。神は、すべてのそのような超動物の洞察と価値のまさにその根源である。神は、真、美、善の人間の概念を統一するために定式化される仮説ではない。かれは、これらの宇宙の顕現の全てが引き出される愛の人格である。人間界の真、美、善は、楽園の現実に向かって昇る必滅者の経験の増大する精神性によって統一される。真、美、

善の統一は、神を知る人格の精霊的な経験で実現され得るだけである。

196:3.25 (2096.1) 道徳は、個人の神-意識、つまり調整者の内面存在の個人の認識、の重要な先在的な土壌であるが、そのような道徳は、宗教経験の源や精霊的な洞察の結果ではない。道徳の本質は、超動物的ではあるが精霊以下である。道徳は、義務の認識、善と悪の存在の認識に等しい。道徳的な範囲は、モロンチアが、人格到達の物質界と精神界の間で機能するように、動物と人間の心の型の間に入る。

196:3.26 (2096.2) 進化の心は、法律、道徳、倫理を発見することができる。しかし、贈与された精霊、内住する調整者は、進化する人間の心に、立法者、つまり真実の、美しく善である全ての父なる源を明らかにする。そして、そのような照らされた人には、宗教があり、長くて冒険的な神捜索を始めるために精霊的に備えができている。

196:3.27 (2096.3) 道徳は、必ずしも精霊的であるわけではない。真の宗教が、すべての道徳的な価値を高める、それらをより重要にするとはいえ、それは、完全に純粋に人

間的であるかもしれない。宗教を伴わない道徳は、究極の善を明らかにすることができず、またそれ自身の道徳的な価値の存続に備えることさえできない。宗教は、道徳が認め、承認するすべての強化、賛美、および確実な存続に備える。

196:3.28 (2096.4) 宗教は、科学、芸術、哲学、倫理、道徳を越えるが、それらから独立はしていない。それらはすべてが、個人的で社会的な人間の経験において相互に永続的に関係している。宗教は、必滅者の本質における人の最高の経験であるが、限りある言語は、神学が、本当の宗教経験を適切に表現することをどこまでも不可能にする。

196:3.29 (2096.5) 宗教的な洞察は、敗北をより高い願望と新しい決断に変える力を備えてる。愛は、人が宇宙上昇で利用できる最高の動機づけである。しかし、真、美、善が剥ぎ取られた愛は、単なる感情、哲学的な歪み、精神的な幻想、精霊的な欺瞞である。愛は、モロンチアと精霊進行の連続した段階で常に再定義されなければならない。

196:3.30 (2096.6) 芸術は、物質的な環境の美の欠如から逃れる人の試みから生じる。それは、モロンチア段階に向かう意思表示である。科学は、物質宇宙の見た目の謎を解く人の努力である。哲学は、人間の経験統一への人の試みである。宗教は、人の崇高な意思表示、究極現実への見事な到達、神を見つけて、神に似る決断である。

196:3.31 (2096.7) 宗教的な経験の領域において、精霊的な可能性は、潜在的な現実である。人の前向きの精霊的な衝動は、精神の幻想ではない。人が宇宙を空想化する全ては、事実ではないかもしれないが、多くが、非常に多くが、真実である。

196:3.32 (2096.8) 一部の人の人生は、低水準に下がるには立派すぎていて堂々としたものである。動物は、その環境に適応しなければならないが、宗教的な者は、その環境を超え、このようにして、神性の愛のこの洞察を通して、現在の物質的世界の限界を超える。愛のこの概念は、真、美、善を見つけるその超動物の努力を人の魂に生み出す。そして、それらを見つけるとき、かれは、抱擁さ

れ、栄光に輝く。かれは、それらに生きる願望に、正義をする願望に身を焦がすのである。

196:3.33 (2097.1) 落胆してはいけない。人間の進化は、まだ進行中であり、世界への神の顕示は、イエスの中に、そしてイエスを通してなされ、失敗しない。

196:3.34 (2097.2) 現代人にとっての大きな挑戦は、人間の心に住む神性訓戒者とのより良い意思疏通を達成することである。肉体での人の最大の冒険は、全心の努力で精霊意識の境界地に到達—神性臨場との接触—のために胎児の魂意識の薄暗い領域を通り抜け自意識の境界を進める釣り合いの良くとれた、正気の努力にある。そのような経験は、神を知る宗教経験の先在の真実の勢いのよい確証経験の神-意識を構成する。そのような精神意識は、神との子息性の現実性に関する知識に相当する。そうでなくても、子息性の保証は、信仰の経験である。

196:3.35 (2097.3) そして、神-意識は、宇宙との自己の統合、そして精霊的な現実のその最高の段階に等しい。いかなる価値も、その精霊の内容だけが不滅である。人間の経験における真実で、美しくて、良いものさえ死なないかも

しれない。もし人が生き残ることを選ばないならば、生き残る調整者は、愛から生まれ、奉仕で養成されたそれらの現実を保持するのである。そして、これらのすべては、宇宙なる父の一部である。父は、生ける愛であり、そして、父のこの生命が、その息子達にある。そして、父の精霊は、その息子達の息子達—必滅の人間—にある。何と言っても、父についての考えは、依然として神に関する最も高い人間の概念である。